

黒子のバスケ 銀色の疾風

星月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二年前、帝光中学校バスケット部で大いに活躍し、その名を轟かせたものがいた。

今彼は仲間と道を違え、自らを必要とするチームで再び舞台上に上がることを選ぶ。

彼が目指すのはかつての同志である『キセキの世代』の打倒。

『神速』と謳われ、恐れられた男の激闘。その幕が切って落とされる。

目次

第一章 旅立ちの序曲

終わりと始まりのプロローグ | 1

第一話 旅立ちの日に | 13

第二話 新たなる邂逅 | 27

第三話 大仁多高校バスケット部 始動 | 49

第四話 思わぬ誤算 | 65

第五話 力の証明（前編） | 79

第六話 力の証明（後編） | 97

第七話 一軍昇格 | 107

第八話 燃える男達 | 119

第九話 前日を迎えて | 130

第十話 選ばれた者達 | 139

第十一話 因縁の対決 | 157

第十二話 緑間対策 | 167

第十三話 決意のリスタート | 175

第十四話 勝利への執念 | 184

第十五話 新たな好敵手 | 197

第十六話 影との再会 | 209

第十七話 飽くなき挑戦者 | 221

第十八話 共に戦うために | 237

第二章 IH予選編

第十九話 夏の開幕 | 250

第二十話 過去に迷い、今に誓う | 269

第二十一話 かけがえのない日常 | 295

第二十二話	敵は己の心にあり	309
第二十三話	県大会、開幕	325
第二十四話	波乱の結末	340
第二十五話	覚醒の片鱗	365
第二十六話	好敵手に望む	384
第二十七話	明かされた力	400
第二十八話	エース全開	414
第二十九話	一進一退	433
第三十話	人事を尽くした男達	455
第三十一話	天命下らず、そして彼らはすれ違ふ	468
第三十二話	勝敗	490
第三十三話	王者対ダークホース	509
第三十四話	『神速』の定義	529
第三十五話	脆い均衡	556
第三十六話	怒濤の反撃	575
第三十七話	戦いに終止符を	598
第三十八話	誰が為に勝利を謳う	620
第三十九話	似た者同士	638
第四十話	強攻策	656
第四十一話	意地のディフェンス	677
第四十二話	背中を追つて 背中を押されて	698
第四十三話	ラストチャンス(前編)	725
第四十四話	ラストチャンス(後編)	737
第四十五話	ピンチをチャンスに	753
第四十六話	怒りに燃える	775

第四十七話 牙を剥く伏兵

792

第四十八話 支配される心

810

第四十九話 一步前に進んで

834

第五十話 渴望するモノ

853

第三章 猛者集結

第五十一話 全国への挑戦

880

第五十二話 押し寄せる危機

902

第五十三話 学生の本分

923

第五十四話 意地と信念

941

第五十五話 彼らが望むもの

968

第五十六話 ライバルの誓い

985

第五十七話 DF不可能の点取り屋

1005

第五十八話 代表、出揃う

1023

第五十九話 強敵、再び 友の思い

1041

第六十話 キセキの取材

1058

第六十一話 インターハイ

1078

データ集

登場人物紹介

1097

神速が生まれた日

1128

敗北の味

1143

お宅訪問 at 光月

1155

談話&質問コーナー

1168

第四章 IH編

第六十二話 白瀧、健在

1185

第六十三話 二人の関係

1204

第六十四話	開戦 大仁多VS誠凛	1224
第六十五話	策と絆	1243
第六十六話	読み比べ（前編）	1263
第六十七話	読み比べ（後編）	1281
第六十八話	二つのトラウマ	1304
第六十九話	戻ってきた鉄心	1320
第七十話	落とし穴	1338
第七十一話	光、輝く刻	1352
第七十二話	スリーポイントシューター	1369
第七十三話	託された想い	1389
第七十四話	スピード勝負	1407
第七十五話	崩れる均衡	1425
第七十六話	最後の十分	1444
第七十七話	信じるその先	1461
第七十八話	エースとは	1485
第七十九話	嫌悪	1504
第八十話	矛盾 最強の矛VS最強の盾	1525
第八十一話	不撓の決意	1550
第八十二話	友に捧ぐ	1567
第八十三話	目覚めた破壊神	1584
第八十四話	運命の四分間	1604
第八十五話	〇〇、〇〇時	1624
第八十六話	明月、昇る時	1647
第八十七話	存在意義（前編）	1671
第八十八話	存在意義（後編）	1687

第八十九話 希望の代償

第九十話 その背中に希望を背負い

第九十一話 彼に成せること

第九十二話 麻痺した心、止まらぬ想い

第九十三話 銀色の疾風 この一時に全てを賭けて（オールイン）

第九十四話 己を知る者の為に

第九十五話 交わした約束を胸に

第九十六話 終戦

第九十七話 孤独の涙

第九十八話 別れと出会いと

第九十九話 ?がれた仮面

第一百話 君の名を呼ぶ

第五章 国体編

第一百一話 栃木県選抜

第一百二話 主人公

第一百三話 進化する天才

第一百四話 必勝の信念、周到なる計画、渾身の努力

第一百五話 理想の敵

第一百六話 新時代

第一百七話 雲蒸龍変

第一百八話 誇り高き勇者

第一百九話 超攻撃型

第一百十話 夏の延長戦

第一百十一話 到達

21202099207720562038200619801959195019331918

19011880186218521830180917911769 1746173017181702

第百十二話 四強
第百十三話 ニアミス

第一章 旅立ちの序曲 終わりと始まりのプロローグ

——『キセキの世代』。

今となつては神格化されているその名は、中学バスケットボール界で最強と謳われた帝光中学校の中でも頂点に立ち、『十年に一人の天才』と呼ばれた天才プレイヤー達のことを指し示している。

選ばれたのは五人の天才プレイヤー達。黄瀬涼太、緑間真太郎、青峰大輝、紫原敦、赤司征十郎。

誰もが他者を寄せ付けない圧倒的な実力を持っており、才能を誇っていた。そして彼らはその力を大いに発揮し、全国中学校体育大会において三連覇という歴史に残る偉業をなしとげた。

……だが、そんな彼らの活躍中に影となつてチームを支えてきた選手の手存在はそれほど知られていない。

一人は運動神経に恵まれないものの、主将である赤司にその能力を見出され、『幻の六人目』と謳われたパスだけに特化したパス専門の選手。——名前は黒子テツヤ。キセキの世代にも一目置かれていた名プレイヤーである。

そしてもう一人。キセキの世代に認められたもう一人の選手がいた。……いや、もつと正確に言えば、かつては彼らと共に『キセキの世代』と呼ばれていた、かつての栄光を失ったプレイヤー。

天才のために頂点の座を奪われながらも、それでも挫折することなくバスケの道を貫いた男。

選手交代時には真つ先にその名を呼ばれ、時にはキセキの世代よりも長くコートに立ち続けた不屈の闘将……。

その男を、味方選手は親しみと敬意を持って、相手選手は恐れを抱いて『神速』と呼んだ——

「——」

太陽はすでに地平線のかなたに沈み、街灯による人工の光だけが周囲をほんのりと明るく照らしている。昼間の人気もなくなり周囲は静寂を保っている中、一人の学生がとある川の土手で横になっていた。

何か思いにふけつていたのだろうか、銀髪の少年は一つため息を漏らすと綺麗に輝いている夜の空を静かに見つめる。星を見つめるその姿は少しばかり寂しげでどこか脆さが感じられた。しかしそれを本人が気づくことはないだろう。

「……やはり、ここにいたのか」

「……なんだ、赤司か。やっぱりお前には何でもお見通しつてわけか」少年の頭のほうから声がかかる。

振り返らなくてもその声の主が誰なのかは理解できた。常に部活で聞いているのだから聞き間違えるわけがない。彼のチームメイトでもあり主将を務めている天才、赤司征十郎のことを。

どんなことでも知っているような男に少年はどこか諦めたような口調で話している。

「当たり前だろう。これくらいのことはずぐにわかるさ。僕と君が一体何年の付き合いだと思っっているんだ？」

「たった三年だけだろうに……」

「それでも、他人を熟知するには十分な時間だよ」

それに答える赤司の答えは落ち着いていた。

たった三年。共に戦ったのはそれだけの時間だ。長いと言えば長いいし、短いと言えば短い。人によって感じ方は様々であろう。

しかし赤司という男にとっては目の前の男について知るには長すぎる時間だった。その余った時間で彼について余計な思考をしてみようほどこに。

「そのようなことはいい。それよりも決まったのか、お前が進む高校は？」

「そうなんだよなく。……それが悩みどころなんだよなく……」

はあ、と少年は再び盛大にため息を吐いた。一体今の間にどれだけ幸せが逃げたことだろうか。

彼も赤司も今や中学三年生。懐かしい輝きもすでに昔の思い出となっている。彼らが所属しているバスケット部も中学校生活最後の大会が終わり、あとは進学先となる高校を決めることが学生である彼らの最大の目標である。

すでに目の前にいる赤司をはじめとして、帝光中学校バスケット部のレギュラー達はスポーツ推薦による高校進学が決まっている。目の前の少年も今までの活躍からして推薦を受けることはそう難しいことではない。

しかし……

「なにせ桐皇には落とされちゃったからなく。全然テンションが上がらないんだよな」

「……あそこか。大輝の進学先に決まったから仕方がないといえば仕方がない話ではあるが。……向こうの監督もなかなかどうして贅沢だな。チーム方針のために、お前ほどの人材を他所の高校に手放すとは」

「俺もまさか落とされるとは思っていなかったからねえ。まあ桐皇もバスケットの成績自体はまだたいしたことないし」

答える声はどうも頼りなく、明るさは感じられない。

今回彼が第一に進学先と考えていた高校、桐皇学園高校（とうおうがくえん）に落とされてしまったのだ。

桐皇学園は東京都にある中堅校なのだが、最近スカウトに力を入れている高校であり、近々頭角を現すであろうと予測されている。現に今年は帝光中学から最強選手と言われている青峰が進学が決まっている。

少年もその高校への進学を希望したのだが……如何せんそのチーム方針と彼の性格・プレイスタイルが合わないだろうということ、そして桐皇学園がまだバスケット部の成績が芳しくないということ、その推薦枠が青峰で手一杯となってしまうのだ。ここでこの少年まで取ってしまったら校内だけでなく他校からの批判も多くなるだろう。

「ではどうするんだ？ それでもお前は、桃井と同じ高校に行きたい

「んだらう?」

「……そうなんだよ! そうなんだけど……でもっ
「でも?」

「たしかに学力でも問題はないだらうけど、一度落とされたところに
もう一度入るつてのも気乗りしないっていうか。……それに、こんな
ことになって桃井さんにも顔を会わせづらい」

「なるほどな。たしかに一理ある。お前のような男ならばなおさら、
な」

彼は決して頭は悪くない。むしろ帝光の中では上位に食い込むほ
うだ。バスケ部の中でも赤司・緑間・桃井と言った成績上位者達に肩
を並べるほど学力でも力を発揮している。

それゆえに一般試験を受けても無事に入学できるくらいの成績は
残すだらう。桃井が彼女の幼馴染である青峰と同じ高校に通うと聞
いたため、桃井と同じ学校にいたい彼は何としても桐皇学園へ進学し
たい。……だがしかし、一度チーム方針の面から除外された部活にも
う一度入るというのも気が引けるし、桐皇学園側とて対応に困ること
だらう。入れたところでも試合に出れるかわからないという
危険性もある。そして何よりも彼の想い人に何と伝えればいいのか
わからないというのが心境だった。

桃井という女性の名前を出しただけでここまで取り乱している同
僚の姿を見て、どこか面白く感じたのか赤司はうっすらと笑みを浮か
べた。

「ならば一体どうするつもりだ? 我ら帝光が誇る『神速』はどこに向
かって吹いて行く?」

「その呼び方はやめてくれよ、こんな時くらいはさ。……大仁多高校。
そこからスカウトが来てた。今その事で少し考えていたところだよ」

「大仁多高校か。たしか今年のIHにも出場していた高校だな」

「ああ、そこであっているよ。……つてか、さすが赤司だな。情報網が
広いことぞ」

少年を二つ名で呼ぶ赤司。少し照れるように答えた少年の言葉は
苦悩の色で満ちていた。

赤司の情報量に素直に感心するものの、赤司は「それほど大したところでもない」と言う。しかし普段の生活から考えてそれほどではないはずがないということとは誰しもが知っていることだ。当然それを知っている少年はどこか諦めたような口調で返した。

——『大仁多高校』おおにたこうこう

栃木県にあるバスケの強豪校である。赤司の言うとおり、今年のインターハイ

I Hにも出場し、ベスト4まで勝ち残る実績を誇っている。今年から主将に選ばれた小林圭介という選手も全国区のプレイヤーだ。そこから実力を買われているというのだから、決して悪い話ではない。「ならば迷うことはないだろう。お前が本当にバスケをしたいのならば、お前をより必要としている高校に行けばいい」

「……それは俺だって十分わかってる。だけど、」

「これでもお前の気持ちは理解しているつもりだ。それでもそれがベストな判断だ。桃井への恩義と好意に応えたいだろうが、それはこれから先いくらでも機会はあるだろう。桃井とも別に会えなくなるわけではない。だが、今のこの決断は今しか出来ないことだ。

……それに、バスケを続けるならば今の大輝にはお前は近づかないほうがいいだろう。彼と考えが似通う高校にもな」

「……」

赤司の正論に言葉が詰まる。青峰の今の姿、そして過去の記憶を思いだして少年は歯を食いしばった。

バスケがしたい。それは偽りのない本音だ。だがしかし、桃井と一緒にの高校にいたいという気持ちもまた本当だ。だからこそこうして迷っている。どちらか一つしか選べない、そしてどちらがより自分に向いているのか。……それもすでに分かっている。それでも、どうしても迷ってしまうのだ。

「——要。お前はもう一度僕達と同じ場所に立つと言っただろう？ その約束はまだ果たされていない。ならば、お前が選ぶ道はただ一つなんじゃないか？」

「……わかったよ、キャプテン」

要と呼ばれた少年はゆっくりとその場から立ち上がる。

突如強烈な夜風が吹き、彼の銀髪がゆれる。

風が吹き止んだころ、閉ざされていた彼の瞳が開き……彼の瞳からは迷いが消えた。

……二年だ。二年間彼は栄光を失っても腐る事無くここまでバスケを続けてきた。だからこそ、今からは天へ上るときだ。群雄割拠ならば丁度いい。それでこそ自分の力で這い上がったと言える。

「帝光中学バスケット部、白瀧要^{しろたぎかなめ}。大仁多高校の推薦を受け、進学することをここに宣言する！」

高らかに誓いの言葉を告げたのは『神速』と謳われた少年、白瀧要^{しろたぎかなめ}。

かつて仲間と共にいるか高みに立ちながら、現れた天才のためにその座を失った選手。

今一度栄光をつかむために。——白瀧はただ一人、新たな道を突き進む。かつて共に戦ったチームメイト達と、そして彼の想い人とはまた違った道を。……たとえその道が修羅の道だとしても。たとえその先に待っているのが明るい未来ではなかったとしても。

「……ならば次に会うときは、敵同士だな。悪いがそのときはたとえお前であろうとも倒させてもらうぞ」

「それはこちらの台詞だよ赤司。そのときこそ俺は、お前達『キセキの世代』に勝つ！」

お互いの気持ちはもう伝えあった。これ以上語る事はない。その必要はない。それはコートで語ることになるのだから。戦うことではかわかりあえないことだから。

ゴツン、とお互いの拳をぶつけて二人の影は交錯する。きつとこれが仲間として拳を合わせる最後の機会なのだろうと、白瀧は考えた。

最後に赤司に向かつて一礼すると、白瀧は身を翻し全速力でその場から走り去る。まるで試合の時のようなあの速さには誰も追いつけないだろう。それは赤司も例外ではない。その白瀧の背中を見て、赤司は安堵した。

これが、このときこそが『キセキの世代』と呼ばれた男達が、真にそれぞれの道を歩み始めた瞬間だった。

「赤司……」

「見ていたのか、真太郎」

白瀧と別れた赤司は帰り際、背丈の高い眼鏡をかけた緑色の髪の男子生徒——緑間真太郎と出会った。自分と肩を並べることができる数少ない人間の一人だ。

どうやら白瀧との会話は全て見られていたらしい。緑間は赤司に連れ添う形になりながら彼に尋ねた。

「白瀧に大仁多高校に進学するように薦めたのだな？」

「ああ。要のことを考えればそれがベストだと考えたからな。」

それに、僕達『キセキの世代』は全員が同じ立場からはじめたほうがよいだろう」

「お前は青峰と白瀧が並び立つことを警戒したのか？」

『キセキの世代』。たとえ一人でも加入したならばどれだけ弱小校でも一気にトップクラスの实力になる。最強といわれる青峰と白瀧が組んだのならば、それは最大の脅威になるに違いない。

赤司はそれを警戒して白瀧に大仁多に行くよう薦めたのだと緑間は考えた。

「警戒？　僕がか？　まさか。そんなわけがないだろう。理由は先ほども言ったとおりだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「……そう、か」

しかしその考えは違うと緑間はすぐに理解することになった。

一瞬放たれた凄まじき威圧感に緑間は押されて緑間はそれ以上は何も言わなかった。

間違いない。赤司は青峰と白瀧が自分の脅威になるなど考えていない。最初から自分の勝利を確実なものだとそう確信しているのだから。

「だが……」

「むっ？」

そこで赤司は一度言葉を区切る。

不審に思った緑間が赤司の表情を覗き込む。そして彼が見たのは、冷たく何の温情もない、冷徹な仮面であった。

「もしもこれで這い上がれなかったというのなら、所詮はその程度の器だったということだ。僕がああ男について語ることはもはや二度となくなるだろうな」

「ッ……！」

きつと赤司は何の価値もないものだと、一蹴するのだろう。

どこにでもいる平凡な人間と同様に。今まで共に戦ってきた、チームを支えてきたはずの白瀧でさえも。

「道は示された。後は要がこちらまで歩んでくれるか。それとも阻まれるか。全ては彼しだいだ」

もう己が白瀧にとやかかいうことはないのだと、赤司は自ら彼に手出しすることをやめた。

「……やつは必ず来るのだよ」

もう話す事はないという態度の赤司だが、そんな彼に緑間は言う。彼は信じている。白瀧の力を。彼が必ずもう一度這い上がってくるということを。

「ほう。真太郎、お前には確信があるのか？ それとも『キセキの世代』の中ではお前が最も要と親しかったからこそ、同情か？」

「同情などではない。そして確信もあるわけではない。ただあいつが俺に誓ったからだ」

——きつといつか必ず追いついてみせる。必ずもう一度コートに帰る。

——きつと、すぐに追いつくから……！ もう一度、お前達と、共に……必ず!!

緑間の脳内にある記憶が蘇る。白瀧が失意の中で誓った、力強い言葉。

「……そうかい」

赤司も重大であるということ察したのか、それ以上は問わず岐路に着いた。

「ならば僕も見届けさせてもらおうとしよう。

白瀧要。はたして彼が僕達の場所まで元まで戻ってこられるのか、その行く末を」

赤司本人も気付いていなかったが、その時赤司は笑みを浮かべていた。不敵ともとれるそれは、王者の余裕。

白瀧が目指す場所は、打倒する相手は遥か高みに存在しているのだと、そう示しているようだった。

足が軽い。調子が絶好調の時のように。……いや違う。今までよりも、ずっと。まるで自分の身体ではないような感覚さえ覚える。

迷いがなくなつたからなのか、やるべきことが明白になつたからなのか。……とにかく、今が清々しくさえも感じる。今まで悩んでいたことが馬鹿らしくさえ思える。

誰もいない夜道を一人疾走する。明かりも少ないし、何も知らないものが見れば、人が通り過ぎたということにさえ気づかないかもしれない。それだけ俺も全速力で走っていた。

とにかく急がなければならぬ。何せ時間が時間だ。たしかこの時間くらいまでは彼女はいつも友達と図書館で受験勉強をしているはずだが、もうすぐ彼女も家に帰ってしまうかもしれない。できればその前に、今日のうちに話しておきたい。誰よりも真っ先に、彼女にこのことは伝えておきたかった。

スピードを落として曲がり角を曲がり、人がいないことを確認するとさらにスピードを上げる。……上げようとして、その先にお目当ての女性がいることを確認して俺は彼女の名前を呼んだ。

「——桃井、さん——」

「え？ ……白ちゃん？ どうしたの、そんなに走ったりして……」

「急にすみません。ちょっと、今日中に伝えたいことが、あつて……」

彼女——桃井ももいさつきが俺の声に気づいて立ち止まる。桃色の綺麗な長髪が夜風でなびいている。

俺もすぐ目の前まで歩いて向かい合った。

『白ちゃん』という彼女独特の愛称も今となっては呼ばれることは恥ずかしくない。それどころか心地よくすら感じた。俺は乱れた息を整えながら、彼女に対して口を開いた。

「桃井さん、俺は今日決めました。俺は、桐皇学園には、行かない。行けない。……ッ。大仁多高校に、進学する！」

彼女の目の前だとしても決心が揺らぐ。……だが、ここで選択を間違えてはいけない。

俺はたしかに、彼女に向かって敵対宣言をした。あなたと同じ道を歩くことはできないと。

別に桃井さんのことを嫌いになったわけではない。彼女への恩を忘れたわけではない。それでも、俺はこの道を選ぶしかない。

「大仁多高校。……たしか、栃木県の強豪校だね」

「はい」

「……それじゃあ試合で会う時は、今度は違うベンチだね」

「……はい」

赤司の時とほとんど同じ会話であるはずなのに、それなのに先ほどのように胸が高まるのではなく、逆に胸が締め付けられる。桃井さんの寂しげな表情を見るのが苦しい。

桃井さんと青峰、二人と同じ高校に通いたかった、彼女にもそう伝えてあった。……だからだろう、桃井さんはまた一人仲間が減ってしまったと感じたのだろう。彼女に余計な喪失感を覚えさせることになってしまった。その事実が、俺の胸を鋭くえぐる。

「桃井さんは桐皇学園への進学に決めたんですよね？」

「うん。他にも行きたい高校とかはあるけど。……今の青峰君を、一人にするわけにはいかないからさ……」

「……そうだな、その通りだ」

彼女の表情がああ男の名前が出た途端に曇った。それだけあいつの存在は桃井さんの中ではかなりの大ききさとなっているのだろう。

——青峰大輝、桃井さんの幼馴染。俺が共に戦ったチームメイトの一人。キセキの世代の中で最も変わってしまった、孤高の天才プレイヤー。帝光が誇る最強の選手。

たしかに今の青峰を一人にすることは危険だ。何をしでかすかわからない危険性がある。

桃井さんも青峰のことは何とも思っていないと昔言っていたが、やはり幼馴染として感じることもあるのだろう。そんなあいつが羨ましい。桃井さんの中で『特別』な存在でいられるあいつが、羨ましい。「俺は、スタメンから外されてしまったようなやつだ。そんな俺が言うのもなんだけど……」

「うん？ 何？」

「必ずまた、俺も昔のように、皆と同じようにコートに立てるようにする。そして……青峰と黒子と皆と、また一緒に笑ってバスケができるようにしてみせる」

「……ッ」

桃井さんの表情から寂しさが消え、驚愕の色へと変わる。

俺だって自分がどれだけかいかいことを言っているのかは理解している。……それでも、もう俺は決めたんだ。二年前のあの時に、彼女の言葉に救われた時から、もう一度皆と共に戦うと。もう諦めることはしないと。

「だから、待っていてください」

「うん。……また皆一緒に、バスケしようね！」

「……はいー」

最後にはお互い笑顔で別れた。さすがに対戦する時はこういうこととは無理だろうけれど、それでもいつか皆が集まって昔のように笑えればいい、そう俺は思った。

こういうときに何か告白の一つでもすれば良かったのかもしれない。……でも、先ほどの桃井さんの寂しげな表情を見て、その気は完全に失せた。バスケのことしか出てこないのは俺がそういう男だからなのか、それともそれでしか彼女とは向かい合えないからなのだろうか。今の俺にはわからない。

何はともあれ……俺と桃井さんは、ここで進む道が重なることはなかった。一つの些細な約束をして、俺達は正反対の方向へと歩いて行った。きつと次に会うのはしばらく先のことなんだろうと、俺は感

じた。

この時白瀧が感じたように、この先白瀧と桃井が会う事はなかった。

その後、白瀧はスカウトを受けて推薦で大仁多高校への進学を。それからしばらくして桃井は一般受験で桐皇学園への進学を確定した。幼馴染、青峰の姿を追うように。無事に彼女が合格したことを知った白瀧は嬉しそうに、だがどこか寂しそうに笑っていたという。彼も『ひよつとしたら』というあるはずのない淡い可能性を信じていたのかもしれない。

他の『キセキの世代』もそれぞれ別の強豪校へと進むことが決定し……舞台は中学から高校へと移って行く。

かつては共に戦った者達が敵となり、頂点を目指してぶつかりあう。最強の名を懸けて。

果たして彼らは、今度はどのような奇跡キセキを起こすのだろうか……

第一話 旅立ちの日に

時期は三月の終盤。多くの学校では卒業式も終了し、学生達は春休みを迎えている季節。また、新たな学校へ進学するために勉学の、引越しをする者ならば新生活の準備をする時期でもある。

友や家族、親しい者達と共に過ごしている者達もいれば、一人で自由に過ごしている者達もいる。あるいはすでに新天地で新しい生活を送っている者達もいるだろう。

そんな中、朝早くから東京都内の一角では白瀧要が一人走り込みを行っていた。今日は栃木の学生寮への引越しの日だというのにも関わらず、『毎日の心がけであるロードワークを欠かすわけにはいかない』と語って自分の体を苛める彼のストイックさには驚くばかりだ。彼は大仁多高校の進学が決まっただけからトレニングを怠ることはなかった。すでに高校の戦いは始まっているのだと、自分に言いつけるようにひたすら練習に打ち込んでいたのだ。

白瀧は普段から走りこんでいる見慣れた道を呼吸を乱す事無く走っている。

栃木に引越してしまえば、しばらくの間この見慣れた風景を見ることもなくなるだろう。だからこそ、この光景を忘れないように今のうちに脳内に刻みこもうと彼は前を見据えた。

彼のランニングコースにはつい最近まで彼が通っていた帝光中学校側の道路もある。久しぶりにチラリと視線をそちらに向けると、『祝バスケット部全国三連覇』という大きな垂れ幕が目に入った。

「……早いものだな。あれからもう半年もたったというのか」
あの激闘の日、彼らの最後の試合からすでに半年の時間が過ぎている。

その事実を懐かしむのと同時に、悔しさと寂しさが白瀧の胸にこみ上げてきた。

あの時。三年の全中決勝の日、帝光中学バスケット部の優勝が決まった瞬間。白瀧はコートに立っていなかった。ベンチから仲間達が相手を完膚なきまでに圧倒している姿を見ていることしかできなかった。

優勝が決まったというにも関わらず、コートに立っていた者達の顔に笑みはなく、まるでそれが当然のものであり喜ぶものではないと言っているような表情が。そんな彼らに何も声をかけられなかった、共に戦えなかった自分が、悔しかった。

そして、同じようにベンチで味方選手チームメイトを支えていた、自らを『影』であると評していた親友が、仲間の輪から去ってしまったことが寂しかった。あの日以降、バスケット部のメンバーで彼らの影を見つけた者は数少なく、会話をした者となればさらに限られてくる。あの桃井でさえも、彼に理由を聞くことは適わなかったのだ。

白瀧も彼がそこまで思いつめていたとは考えてもいなかった。才能がなくても共にバスケットに励み、チームに貢献していた健気な少年が、それほどにまで追い詰めていたとは思えなかったのだ。まさか彼までバスケットを嫌いになる日が来るとは信じたくはなかった。……だからこそ白瀧自身も気づかぬうちに現実から目をそらしてしまったのかもしれない。

「……黒子。お前は一体、今何を求めているんだ？ 光を見失った影は、これからどうするというんだ？」

ポツリと旧友の名前を呼んだ。これほどまでに弱弱しい声で彼の名前を呟いたことは今までにはなかったことだ。

——黒子。黒子くろこテツヤ。帝光中学バスケット部の影にして、キセキの世代の最高のパートナー。共に最後まで戦おうと誓った白瀧の親友の一人。全中決勝が終わると同時に姿を晦ました選手だ。

結局彼がどこの高校に進学するのかもわからない。全中の決勝以降、まともに会話をしたことさえもないのだ。彼が高校でもバスケットをするのかどうかさえ今の白瀧には予測できない。

今さら考えても仕方がないことだが、もうすぐ東京を去ってしまうということを考えると心残りに感じてしまう。せめて黒子にも最後に一言声をかけられたならば、と後悔の念が次々と浮かんできては白瀧の体を鈍らせる。

「いや、それは無理な話か。ただでさえあの影が薄いやつを、学校でもないのに見つけられるわけがない」

あまりにも最もすぎる考えが想像できて、思わず一人笑ってしま
う。

昔からそうだったのか、黒子は日常生活からなぜか影が薄かった。
同じ教室にいたとしても少し気を抜けば彼の存在を認識できなく
なってしまうほどに。……白瀧も神出鬼没のような彼の存在にはよ
く驚かされたものだ。

そんな彼を、どこにいるのかわからない状態で探し出せるとは到底
思えない。むしろそんな簡単に見つけてしまえば拍子抜けする。一
体今までの苦労は何だったのだと嘆くことになりそうだ。

そんなことを考えながら走っている間に、白瀧は長い石段へとたど
り着いた。

ランニングコースの中では一番の難関である石段昇り。平地では
ない上に段数も半端なものではない。一気に駆け上がったとしても
ここでかなりの体力を費やすことになる。

白瀧は一度石段を目の前にして立ち止まり、ジャンプをしながら石
段の頂上を見上げた。こうして見上げるとやはり相当なものだっ
たんだな、と感じる。だがこの程度で弱音を上げるようでは話になら
ない。

「……よしっ、行くか！」

自らの頬を両手で叩き、気合を入れるとその場で一気に加速。

最初の一步で一気に三段まで跳んだと思ったら、その右足が地に着
いたと同時に地を蹴っている。さらに左足が地面に付けばすぐさま
逆の足を蹴り上げる。その動作をひたすら繰り返された。

瞬間的に発揮される大きな力、——すなわち瞬発力。白瀧があ
の『キセキの世代』からも認められた彼だけの力だ。

しかもスタートだけではない。スピードは衰えることなく、そのま
ま階段を駆け上がっていく。あつという間に白瀧は頂上までたどり
着き、先ほどまで自分が立っていた場所を見下ろしていた。

「黒子……」

もう一度友の名前を呼ぶ。しかしその声に答えるものもない。彼
の眩きは誰の耳にも届く事無く、宙に消えていった。

「黒子。俺はもう立ち止まらない。お前の分まで点を取ると約束したが、その約束をまだ果たせてはいないからな。」

「……お前の分まで戦いぬくとしよう。必ずや上り詰めてみせる。俺にはまだ、やらなければならぬことがある」

その声を聞くものはいない。ゆえに誰かに誓ったものではない。だが白瀧は旧友へ言葉を捧げるように、優しく呟いた。自分の心に刻むように、ゆっくりと呟いた。

『あいつらの目を覚まさせるためにも』という言葉は自分の中にとどめて、白瀧は再び走り出す。もう振り返ることは、立ち止まることはしない。ただ走り続けるのみ。

「あれ？　白瀧君じゃないですか」

「……え？」

「……そう決めたはずなのに、自分の名前を呼ばれた白瀧は簡単に立ち止まった。」

普段、主にバスケのコートで聞きなれた声だった。『そんなことがあるはずない』と疑問にかんじながらも事実を確認すべく視線をゆつくりと横に流してみると、水色の髪がまず視界に入る。さらに視線を下にずらすと、見えてきたのは髪と同じく水色の瞳、どこか今にも消えてしまいそうな存在感を放っている少年の姿。そこには半年前から姿を消していた彼の戦友・黒子テツヤの姿があった。

相変わらず突然姿を現す黒子に、白瀧は思わず『さっきまでのシリアスな空気を返せ』と呟いた。決して八つ当たりではない。気配を消して近づいてくる黒子が悪いのだとそう結論付けた。

「お久しぶりです、白瀧君」

「……黒子。本当に黒子か？」

「はい。こうしてまともに話すのは半年振りになるでしょうか」

「ああそうなるな。お前が姿を消して以来だからな」

「……すみません。皆に心配を、迷惑をかけるようなことをしてしまいました」

自分の非を認め、素直に謝罪する黒子。彼も思うところがあるのだろう。

その姿は、声は、影の薄さは間違いなく彼の知る黒子テツヤだった。影の薄さで人を判断するというのは考えた彼自身も正直ひどい話だと思うが、それも本人だと決定付ける大切な材料であるので問題ない。間違っても本人の目の前で口に出したりはしないが。

「謝らなくていい。何も責めているわけではないからな」

「ありがとうございます」

「こうしてお前に会えたのは幸いか。できればお前とは最後に話しておきたかったからな。……しかし、いったいなぜお前がここにいる？」

白瀧は最もな質問を黒子にたずねた。

帝光中学から少し離れたこの場所は黒子の自宅からは正反対であるはず。この辺りには特にこれと言った娯楽施設はなく、また図書館などの公共施設もない。買い物というのなら話は別かもしれないがそれにしても手ぶらというのはどこかおかしい。

「白瀧君と会ったのはただの偶然です。四月から通う高校の様子見をしようと歩いていたのですが、白瀧君の姿が伺えたので声をかけました」

「……高校の様子見だと？　まて、ひよっとしてお前が通うことになる高校はここから近いのか？」

思わぬ単語を耳にして気が付いたら聞き返していた。『キセキの世代』のメンバーは全員進学先の高校が明らかになっているが、目の前の少年の進路については一切情報がなかったのだ。しかし、今の話を聞く限りでは思ったよりも近くの高校のことを言っているようだ。最寄の駅は方向が違うし、おそらくは東京都内の高校であることは間違いない。

「はい。私立誠凛高校、それが僕が春から通う高校です」

「誠凛、高校。……知らないな。有名校なのか？」

『バスケット部の』という言葉は必要ない。

高校進学にあたり、彼自身もある程度全国の強豪校について調べていたものの、『誠凛高校』というデータはなかった。果たして自分の調査に漏れがあったのか、疑問に感じた彼は黒子にたずねた。

「白瀧君が知らないのも無理はありません。誠凛は設立二年目の新設校ですから」

「そんなに新しいのかよ。それじゃあ、特にバスケの強豪校というわけではないんだな？」

「それでもありません。去年、バスケット部は創部一年目にしてインターハイ都予選の決勝リーグまで勝ち進み、新人戦でも関東大会出場を果たすなどの実績を上げていますよ」

「一年生だけでその結果か。たしかに運が良かったにしても相当なものだな。だが、それでも全国区と呼ぶにはまだ足りない、そうじゃないのか？」

「……確かにそうかもしれませんがね」

白瀧の厳しい指摘を黒子は否定することなくその言葉を受け止めた。

たしかに一年目で結果を出せたことは評価できる。部員数も少ないだろうし、そのような状態で部員をまとめ、勝ち上がることは余程でもない限り不可能だ。誠凛高校のレギュラーたちもそれなりの実力を持っていることが予測される。

……しかし、それだけだ。『決勝リーグまで進んだ』、それはつまり決勝リーグで敗れた、IH出場は適わなかったということを意味する。ただでさえ東京都は出場校が多いのだ。インターハイ出場枠が三校もあるとはいえ、その三校はここ十年『三大自然』と呼ばれる同じ高校で決まっている。そして誠凛はその神話を終わらせることはできず、その力の前に屈したということだ。

それならばなおの事、黒子にはもつと強いところに進んでほしい。それが白瀧の願いであった。目の前の少年は『キセキの世代』に認められた数少ない選手だ。パートナーが強ければ強いほどその威力を発する。だからこそ、その素質を無駄にさせないためにももつと可能性のある強豪校に進んでほしい。

「それでも、僕は決めましたから。あの時とは違う。……僕が僕のバスケで、『キセキの世代』の五人を倒します」

……しかし、白瀧の心配はその一言で拡散した。時間が停止したよ

うに、表情が固まる。だがすぐに我に返ったのか、心底面白そうに笑った。

——なんだ、無駄な心配だったのか。

最悪の想像、黒子がバスケットをやめてしまうということすら考えていたがむしろ逆だった。彼は諦めるどころか燃えていたのだ。自分の力である天才集団を倒すなど、並みの人間なら口にする事さえばかれるというのに。

「残念ながらそれは無理な話だ、黒子。それは、俺の仕事だ」

だが白瀧がそれを黙って聞いているわけにもいかない。なぜならばそれは白瀧が心に決めたことと同じなのだから。『あの五人を倒し、昔のように皆でバスケットができるようにしてみせる』、そう意中の女性に誓ったのだから。

「……わかっていますよ。それにそれだけではありませんから」

「は？ それだけではないって、他にも何かあるのか？」

「白瀧君を倒すことも、僕の目標ですから」

「……はっ！ なかなか言うようになったな、黒子！」

再び笑みがこぼれる。まさか目の前で宣戦布告をされるとは思ってもいなかった。

最弱と呼ばれていた黒子。背丈がなく、力もなく、体力もない。運動神経のレベルは平均以下だ。バスケットプレイヤーとして不利な体格の上にシュートやドリブルのセンスもないという、恵まれない選手。

そのような男が、白瀧やキセキの世代という自分よりも優れた選手達を打倒すると言っているのだ。これほど面白い話はない。

「それならそれでいい。やれるものならやってみるといい。」

……もしも俺達が戦うことになるとしたら、それは大舞台・I H インターハイ のコートだ。そこまでお前達が勝ち残れるというなら、その時は俺がお前達のチームに教えてやるよ。キセキの世代に挑むのは俺だとな」

「はい。必ずや白瀧君を満足させてみせます」

「……そっか。あまり期待せずに待っているよ」

先ほどのような満面の笑みではなく、浮かんだのは寂しげなもの。

……白瀧はこのとき、黒子が勝ち残るのは難しいだろうと感じていた。先ほども言ったがここ十年の東京代表は『三大王者』のみ。しかもその一角である秀徳高校にはキセキの世代の一人・緑間の進学が決まっている。さらにエースであった青峰も東京都の桐皇学園高校に進学。そこに他の三大王者も加わるのだ。これだけの強敵を誠凛が倒すことは難しいだろうと思った。

(……誰か一人、黒子の『光』になれる男がいるというのなら話は変わってくるのだがな)

その現状を変えられるとしたら、黒子という『影』に応えられる『光』が現れることだ。だが今の日本にキセキの世代を倒せるほどの人材がいるとは到底思えない。白瀧は黒子の精神的成長を喜びつつ、彼の未来に一途の不安を覚えていた。

「そういうえば、白瀧君はどこ的高校に進学するんですか？」

「ん？ 俺か、そういうえば黒子には話していなかったっけ。俺は栃木県にある大仁多高校というところだ。去年のインターハイにも出場していて、中々の実績を誇っている。そこから声をかけられたんだ。二つ返事で決定したよ」

「……それは、白瀧君だけなんですよね？」

「ああそうだ。俺の心配なんてしなくていいから、お前は自分の心配をしろ。お前だってそんな余裕はないはずだぞ」

「……はい、すみません。余計なことを」

黒子が気にしているのは桃井のことだろう。白瀧が桃井に抱いている感情、黒子もそれには気づいていた。人間観察が趣味である彼は、戦友の心情の変化にも気づき心配していた。自分に向けられる感情には鈍いというのに、他者のことはきっちりと把握しているというのはどこかおかしな話だ。

しかしその話はどう解決している。白瀧はあの日に桃井と話をし、彼が自ら違う道をたどることを決意したのだから。だから、これ以上彼に余計なことを言うのは彼の覚悟に対する侮辱だ。それを理解して黒子は口を閉ざした。

「……もう今日の午後には栃木に出発する。皆にはちゃんと挨拶でき

たけど、最後にお前にも会えてよかったよ」

「そうだったんですか。それは身に余ることですね。……しかし、そんな日にまで走りこみを行うのはどうかと思いますけど」

「何を言ってるんだよ、トレーニングを一度でも欠かすわけにはいかないだろ。これは俺の日課なんだから」

「……そうですか。白瀧君らしいですね」

どこか諦めたような口調で黒子は呟いた。

昔から誰よりも自分には厳しかった白瀧。おそらくこの性格は生涯変わる事はないだろう。誰よりも向上心がある、だからこそそうして自分に一所懸命になれる。その姿勢は黒子も尊敬していたものだ。……さすがに限度を設けようとは考えたのだが。

「それなら白瀧君、お互い連絡先を交換しておきませんか？」

「別にいいけど。……あれ？ お前携帯なんて持ってたか？」

「誠凛高校の進学が決まったお祝いに、両親が購入してくれたんです」
「どれどれ。……へえ、中々良いやつを持っているな」

そう言つて黒子が懐から出したのは空色の外装で覆われた携帯電話。しかも最新型とはちやっかりしている。今度自分も新しい機種に買い換えようかと、三年間一つの携帯電話を使い続けていた白瀧は考えた。

なるほど、これなら行方のつかめない黒子とも連絡を取れる。……中学時代、突然姿を晦ましたこいつには苦勞したものだ、と白瀧は連絡手段がなかった昔を思い出してため息を吐いた。

お互いの連絡先を交換し、携帯に情報を登録する。無事にその作業は終了した。

「はい、終了。お前も連絡するときにはちゃんと出ろよ？」

「戦うときは敵ですけど、普段は友達でいいんですよ？」

「当たり前だろ。あいつらじゃないんだから、普段からそんなに気を張る必要はない。常にそんなことでは疲れちゃうだろ？」

「わかりました。それならば改めてよろしくお願いします」

友達、それは部活だとか敵味方だとかは関係ない。

白瀧と黒子。二人はお互いを理解し、認めている仲だ。それはこれ

からも変わらない。笑って黒子を受け入れた白瀧に、黒子もまた笑みを深くした。

「ああ。……コートではさすがに手加減はできないからな？」

「当たり前です。そんなことされたら、思わず白瀧君の体にイグナイトパスをさせていただきます」

「うっ!? ……なあ、さすがに冗談だよな？」

「当たり前ですよ、さすがにそこまでしません」
笑顔でそういわれると余計に恐怖が増すというのが戦友にはわからないのだろうか、白瀧は背筋が凍るのを覚えた。過去の忌々しい記憶を思い出してしまったのか、彼の体は震えている。

……イグナイトパス、別名『加速するパス』。黒子テツヤだけが使用できる専用のパスだ。キセキの世代しか取れないというそのパスは、初めて練習で使用された際に白瀧の体を襲い、その威力を知らしめた。速度を増したバスケットボールをその身に受けた彼はしばらくの間床の上で悶絶し、その後保健室に運ばれたという。あれは白瀧にはもはやトラウマである。なぜ味方からあのような仕打ちを受けたのだろうか、今でも甚だ疑問だ。

あの日以来、黒子は練習や試合だけではなく白瀧の脅し文句としてもイグナイトパスを使うようになった。あの黒子が白瀧に対して堂々としているその姿を見て、発せられた『黒子さんマジパねえっス』とは黄瀬の言葉だ。何か色々間違っている気がするのだよ。

——たとえばかつての戦友が相手であろうとも、非情にならなければならぬ。白瀧はたとえ黒子が敵として現れたとしても全力で迎え撃ち、そして倒すことを決意した。決して肉体へのイグナイトパスを恐れたわけではない。

……もしもあれがあの時よりもさらに強化されているとしたら。……考えただけでも恐ろしい。次は男として使い物にならなくなるか、あるいは肉体を貫くのではないだろうか？ 最悪の想像が思い浮かんでしまった。というかもはやパスですらなくなっている。バスケットボールは正しく使いましょう。

「僕も白瀧君に会えてよかったです。……それでもし白瀧君がよろし

ければ一つお願いがあるのでですけど、よろしいでしょうか？」

「何だ？ さすがに出発のこともあるから長居はできないんだが……」

「いえ、そんなに時間がかかることではありません。最後に、僕とLonlワンオンワンをしてください」

「……ああ、いいぜ」

進学の前に話ができただ、それが嬉しいのは黒子だけではない。

だからこそ戦友の願いを、白瀧は快く了承した。きつと黒子とこんなことができるのはこれから先なくなるのだろうか、わかっていたら。

そうして二人は場所を移動し、ストリートバスケのコートへやってきた。

元から動きやすいようにジャージだった白瀧はその場で軽く体を慣らし、黒子も上着を脱ぎ、ボールの感触を確かめていた。

「白瀧君。わかっているでしょうけど本気でやってくださいね」

「わかっている。最後の機会だっていうのに、そんな水を差すような真似はしないよ。……だから、お前も出来る限りのことを精一杯やれ」

「……ありがとうございます」

先攻は白瀧。彼の攻撃に対応できるよう、黒子は腰を落とし、彼の動きを凝視する。

白瀧も彼の動きを見ながらボールを叩きつけドリブルを開始。二回、三回と両手の前でボールが左右に行き来する。

……相手の高さくろこを考えればアウトサイドシュートで一蹴することは簡単だ。だが、その選択肢は最初からない。選んではいけない。そのような決着は黒子は望んでいないし、白瀧とて許せない。だからこそ、白瀧は自分の領域で黒子を圧倒する。

気迫がこもり、白瀧の視線が鋭くなった。

瞬間、白瀧の重心が右へと流れるのを黒子は察した。すぐさま反応するも、彼は右にはじいたボールをすぐさま逆の手へと返す。フェイ

クだと気づき、今にも自分を抜き去ろうとする敵へと体を傾け、ボールへと手を伸ばす。……しかし、白瀧の圧倒的な瞬発力の前にその行動は無意味だった。その手は届く事無く、白瀧はドライブでゴール下へと切り込み、シュートを放つ。ボールはゴールに吸い込まれた。

ネットを潜ったボールがポンポンと音を立てて跳ねる。そのボールを黒子は静かに持ち上げた。

「……やはり、いつ見ても凄いですね。さすがは白瀧君です、衰えた様子なんて微塵もない」

「当たり前前だ。受験で部活がなくなったから力が落ちたとも思っていたのか？ ……本当にそう思っていたのならば見当違いもいいところだぞ」

敗れたものの、今再び彼のバスケットを、そして彼の速さを目の辺りにできてどこか嬉しそうに黒子は呟いた。

そんな彼に白瀧は振り返って、諭すように言葉を発する。

「俺は頂点あいつらに挑む挑戦者だ。一瞬たりとも、弱みを見せるわけにはいかないんだよ」

『キセキの世代』に最も近いと呼ばれた彼は、今もなお変わらず目標を掲げている。そのためならば努力を惜しまないと。

頼もしいことを言ってくれた彼を見て、黒子はまた笑みを深くした。

「それでは白瀧君、今日は僕の我が俤に付き合ってくれてありがとうございました」

ワンオンワン
lon1を終えた二人はしばらく休んだ後、帰路についた。

この後には大切な用事があるというのにも関わらず、文句なく自分に付き合ってくれた白瀧に黒子は感謝の言葉を述べた。裏表のない彼の言葉には白瀧も気持ちを良くする。

「別に構わないさ。俺とてやりたかったという気持ちはあったからな。……それじゃあ次に会うときは、敵同士だな」

「……はい。その時は白瀧君にも、『キセキの世代』にも負けません」
そうしてついに二人は道を別れることになった。

味方として、仲間として接するのはこれが最後だ。ここから先は友達だとしても、もはや味方ではない。もうお互いが敵となる。共に戦うことはあったとしてもしばらく先のことになるだろう。

白瀧の言葉で寂しげな表情を浮かべたが、すぐに黒子は決意を新たに強い意志をその瞳に宿した。……良い目をしていた。その目はとてもバスケットを嫌いになったとは思えない。これならばひよつとしたら大丈夫かもしれない、本当にありえるのかもしれない、と白瀧は戦友であった男に対して期待を持った。

「それならば黒子。一つだけ俺から忠告をしておく。

……たしかにお前がいるチームならば、『キセキの世代』にも太刀打ちできるのかもしれない。だが、それでもやはりお前は選手プレイヤーとしては未熟だ。あいつらには到底及ばない」

「そうですね、それは誰よりも僕が一番理解しています」

「そうだろうな。……だからこそ、一人で強くなるうとは思わないよ。それでは必ず限界がある。

誠凛で新たな『光』を見つけると。お前の影をより濃くする、その光をより際立たせる頼れる仲間を」

「……はい。必ずや」

「俺から言うことはそれだけだな。……じゃあな、黒子」

「……必ずまたコートで会いましょう、白瀧君」

「ああ。そのときを楽しみに待っているよ」

現実を受け入れ、その上での提案。適えることは難しいことだが、白瀧の声に答える声は力強く、自信に満ちている。

黒子は『影』である。影だけでは『キセキの世代』という強力な『光』には勝てない。だが黒子が新たなパートナーを、『光』を見つけられたならば、その光をより輝かせ、影を濃くすることができる。

ならば黒子は見つけるしかない。新たな仲間を。新たな『光』を。道は示した。白瀧は黒子に伝えると、最後に仲間として拳を合わせる。コツン、と合わさった拳はすぐに離れ、お互い逆方向へと走っていった。白瀧と黒子、二人が同じコートに立った試合は数少ない。だがそれでも、これからも関係が続いていく親友であることは関係な

い。たとえ道が違えども、目指すものは同じなのだから。
走り去っていく二人の表情はかつてのバスケット部のように、とても穏やかなものだった。

第二話 新たなる邂逅

——四月。

高校ならば新入生達が入学式を迎え、無事に新たな一步を踏み入れた時期である。咲き乱れた桜の花びらも、新一年生を迎え入れるように踊るように舞っている。

ここ、私立大仁多高校おおにたこうこうでも何事もなく入学式が終了し、早くも一週間がたとうとしていた。

授業も少しずつではあるが本格的に始まりつつあり、生徒間でもそれなりに仲の良いグループが形成され、コミュニケーションが取れ始めてきたころだろう。

「……以上。本日の授業はここまで！ 今日も一日ごくろうだったな。」

なお、今日の放課後は二年以上の先輩方による各部活動の勧誘があるそうだ。皆それぞれ自分の部活動について真剣に考えておくように！ それでは……解散！」

壇上の担任の先生が最後に今日のメインイベントのことを告げ、教室から去っていく。その姿を見届けると、生徒達はそれぞれ親しい友達と話し始めたり、教室から早くも去って行ったりとそれぞれの行動に移っている。

一週間。それは俺達が部活動を決める時期でもある。（しばらくの間は仮入部であろうが）

最も、俺はスポーツ推薦でここに入ったために最初から入る部活は決まっている。バスケ部以外にありえない。むしろそれ以外の部活に入る気はない。そのためにここに進学したのだから。……とか、スポーツ推薦で入ったやつがその部活を辞めたりしたらどうなるんだろう？ 先が恐ろしいからそんなこと間違っても口にはしないけど。

ま、とにかく俺が迷うようなことはない。もう放課後だし早いうちにバスケ部の先輩に挨拶をしておこう。

「おーい、要！」

「ん？ ……ああ、勇か！」

帰り支度を済ませて目的地へ向かおうと立ち上がったところで、丁度声がかかった。

隣の列の前の席から一人の男子生徒が歩いてくる。ツンツンした短めの黒髪——神崎勇^{かんざき いさみ}だ。クラスメートであり、俺と同じくバスケットに入る予定の男。なんでもそこそこ強豪校だった中学の主将^{キャプテン}を務めていたという。ちなみに当時のポジションはS^{シューティングガード} Gだそうだ。

俺の帝光中学時代の話聞いたことがあったらしく、入学式が終了してまもなく勇のほうから声をかけてきた。同じ部に入るということで意気投合し、今ではお互いの名前で呼び合っている。早いうちにこういう親しみのあるやつと出会えたのは幸いだった。入学早々孤立するなんていやだからな。

「これからバスケットに行くんだろう？ 付き合わせ」

「ああ。もとより俺にはそれ以外の選択肢なんてないからな」

「違くない。お前だってそれを望んだからこそここに入ったんだろ？」

「当たり前だよ。俺からバスケットを取ったら何も残らないからな」

「おお、さっすが。バスケット馬鹿の言うことは違うねえ」

「そこはせめてバスケット一筋と言え！」

「あつはつは！」

おかしそうに勇むは笑い出す。まったく失礼な。

バスケット馬鹿とは青峰のような男を——いや、昔の青峰のような男を言うだろうに。

俺はそこまで常識知らずじゃないっての。ただバスケットを好んでやっているだけの人間だ。

「ま、さっさと入部届けを出しに行こうぜ。先輩達の印象も良くなるかも知れないからな」

勇の言うことも一理あるな。

早いうちに入部届けをだすということは、それだけその部活に興味があるということを示すということでもある。先輩達も俺たちに好印象を抱くかもしれない。

最も……

「安心しろ。推薦という時点で俺の印象は最高級だ」

「そっか。それなら安心……できねえよ！ それって要だけじゃねえか！ つつーかそれ卑怯だろー！」

「卑怯とは心外な。向こうから呼んだんだぜ？ 歓迎されても文句ないだろ」

「それもそうだよな。……ああ、そんなところにも推薦って影響するのよ……」

「……ま、十中八九ないだろうけどね」

「嘘かよ!？」

こいつの反応面白いな。盛り上げ役になれるんじゃないか？ 黄瀬とはまた違ったタイプだ。

……実際これだけの強豪校ならば、呼ばなくても来るやつは来るかな。勇だつてそこその実力はありそうだし。何よりも先輩達とレギュラー争いが苛烈になるために俺にはむしろ厳しくなるかもしれない。

それに推薦に選ばれたつてことは認められたつてことなんだろうけど。……どうせ歓迎されたとしても最初だけだ。すぐにその熱は冷めることになる。実力を示さなければ生き残れない弱肉強食の世界なんだから。

「ごめん。お前の反応を見たかっただけ」

「このドSが!」

「ありがとう、俺にとっては最高の褒め言葉だよ」

「だれかこの男どうにかして!？ 俺の心が蝕まれる!」

「これから毎日そうなるよ」

「うおおおおおおお！ 俺の高校生活が早速真っ暗!？」

……超面白え。本気でSに目覚めそうだ。

これだけいじりがあるやつと会うのは初めてかもしれない。『キセキの世代』だったら絶対ありえない人材だぜ。よかったな勇、お前今なら黄瀬に勝てるかもしれないぞ。

「……君達。取り込みの最中悪いんだけど、少し良いかい？」

「ナイスタイミング！ ようやく、俺にも救いの手が……デカツ!!」

「お？ なんだ、何か俺達に用事でも……うわあお」

勇をいじっている後ろから太い声がかかった。どうやら意識が完全に持っていけなかったらしい。

こいつに逃げられないように気をつけて振り返ると……そこにはキセキの世代にも劣らない体格を持つ巨人がいた。

勇ほどではないが、思わず口から感嘆の声が出てくる。それくらいの衝撃だった。

見た感じだが190cm以上はあるんじゃないか？ すごく、大きいです。俺が179cm、勇だって176cm。その差はすぐにわかる。制服の上からだからだかによくはわからないけれど、筋肉も凄そうだ。腕もかなり太い。

……え？ それでそんな人が一体俺達に何の用？ 言っとくけどこれ肉体言語ではないよ？

「君達に聞きたいことがあるんだが……」

「どうぞどうぞ。一体何の用でしょうか？」

「俺達にできることならなんでも！」

やべえ。こいつ自覚あつてかなしか知らないが、こうして向かい合っている今もかなりの威圧感をかもし出している。高い視点から見下ろされているから尚更だ。言葉が丁寧なものも逆に怖い！ これから一体どんな言葉がでてくるのか想像するのも恐ろしい！

「バスケット部に入部したいんだが、一体どこに行けばいいのか教えてくれないか？」

「……へ？」

「……え？」

「先ほどバスケット部の話をしていたらどう？ できれば僕も一緒に行きたいんだけど、良いかい？」

「……あ、どうぞ」

「……うん。全然大丈夫。システムオールグリーン。いつでも行けます」

俺と勇は想像を反する言葉を受けて思わず脱力した。この人、自覚

がないパターンでした。

意外なところで見つけたチームメイト二人目は、異様に存在感が大きい巨人だった。しかも一人称が僕って……

「……なるほどな。明はこの前の説明のときにいなかっただのか。それじゃあ知らなくても仕方がない話か」

俺達三人は先輩達が勧誘を行っているであろう、バスケット部のブース目指して並んで歩いている。

——光月明こうつき あきら。それが二人目のチームメイトの名前だった。見た目に反して……いや、見た目通りなのだろうか？ 大らかな性格で、器が大きい男だった。もちろん色んな意味で。

なんでも明は以前先生が部活動勧誘の説明をしていたとき、他の先生に頼まれていた仕事で席をはずしていたという。あとで何があったのかは聞いたようだが、詳しい内容は聞いていなかったそうだ。

そこで、俺達がバスケット部の話をしていたのを耳にして俺達に近づいたつてこと。……なんだ。全然正論じゃないか。

ちなみに明もバスケット経験者で中学時代のポジションはセンターC。昔はパワーフォワードP Fだったらしいが、去年中学の最上級生になってからセンターに変わったと言う。なにせこれだけの体格だ。動きをマスターすればゴール下でも十分活躍できるだろう。……ちなみに、身長は192cmだそうだ。

「いや、さつきは本当にすまなかつた。おどろかせてしまったかい？」

「全然。勇はすごい驚きようだったけど」

「お、俺は普通だっただろ！」

「ほう。これを見ても……？」

ある程度は自分のことを理解しているようだな。それならばもう少し抑えてほしかったが……

強がる勇には携帯の画面を見せつける。そこにはいきなり明を目にしたことで、驚愕のあまり顔をゆがめて硬直している勇の写真が綺麗に写っていた。

「……ねえ、要君。これいつ撮ったの？」

「お前がビビッているときに」

「本当なのか？ 僕も全然気づけなかったが……」

俺はいつでもシャッターチャンスを狙っているからな！

こんなに美味しい機会を逃すなんて三流がすることだ。それにこれくらいできないようでは『神速』の名が泣くぜ。……『使いどころ違うのだよ』という緑間のツツコミが聞こえた気がするが気のせいだろう。きつと。

「これ、いくらで買う？」

「……要！ 貴様……ッ！」

「ま、まあまあ。白瀧も神崎をいじめるのはそこらへんにしたらどうだい？ やりすぎはよくないぞ？」

「む？ ……たしかに、悪乗りが過ぎたか。すまない」

「……要が素直に退いた。明、マジ心強い！」

明の言うとおりだな。あまりやりすぎると問題に発展する。

ここらでやめてやろうと携帯をしまうと、勇は感動の目で明を見ている。……おい、俺が素直じゃないみたいな言い方するなよ。しかもかなり油断しているけど、データはそのまま保存しているってこと忘れてないか？

「これから一緒に戦っていく仲間なんだ。仲良くするに越したことはない」

「……まあ、それはそうなんだが……」

「ん？ どしたよ要？ そんな真剣な顔して」

「いや、なんでもない」

……こいつら、本当にわかっているのだろうか？

ここはバスケの強豪校。当然実力者が集う場所だ。中学とはまた比べ物にならないほどのレギュラー争いが起こるだろう。いや、レギュラーどころか強豪校ではベンチメンバーに入れるだけでも良い方なんだ。

これから先、誰がそのメンバーに選ばれるかわからないというのに……大丈夫なのか？ ま、楽しむのに越したことはないとはいえ、本質を忘れてもらっては困る。共に戦うって言うのなら、ちゃんと生き

残ってもらおうぜ？」

「それよりも、ほら。もうバスケット部のブースに着くぞ」

「おう」

視線を先のほうへとやると、数個先に『バスケット部』と書かれたブースがあった。

そこには先輩であろう男女一人ずついる。おそらく女子のほうはマネージャーだろうな。

「……ちよつと緊張する」

「いや、今回は入部届けを出すだけだから」

「そうだよ。別にテストだってないんだし、気楽に行こうよ」

先輩を目にしてあせる勇に二人で落ち着くよう諭す。どうせまだ仮入部だし。

この言葉には少しは効果があったようで、勇はすぐにいつもの調子に戻ったので安心した。

「……ようこそ、大仁多高校バスケット部へ！」

「バスケット部希望者か？ 喜んで歓迎するよ」

最も、男の先輩の顔を確認した瞬間再び硬直していたが。

俺も以前月バスの記事で顔を見たことがある。……大仁多高校バスケット部三年生。チームがIH準決勝まで勝ち残る原動力となった、自身も点を取れる長身PポイントガードGゴールキーパー。主将の、小林圭介こばやし けいすけさんだ。

「圭介君、今年は一体何人くらいの部員が入部すると思う？」
時は少しだけ巻き戻る。

バスケット部のブースでは二人の男女が新生を未だ遅しと待っていた。

軽いウェーブがかかったセミロングの髪を揺らし、女性が男性のほうへと振り返って尋ねる。圭介と呼ばれた黒髪の男——小林圭介は手元の紙を整理しながら視線だけを女性の方へ向けて答えた。

「そうだな。去年のIHの結果も考えて、30は越えると思うぞ」

大切な存在だ。彼女も部活は今年が最後の年となる。今まで共に戦ってきた者達と最後の一年。悔いは残せない。

「三年間ずっと一緒にやってきた仲じゃない。いまさら水臭いよ。こういう時は、素直に『ありがとう』って言いなさい」

「……ああ。ありがとう。よろしく頼むよ」

「ええ。小林キャプテン」

バスケット部のブースに明るい笑い声が起こった。

こうして引退の最後の時も皆と笑えればいいなど、このとき小林は思った。

「……さて、それで勧誘組の調子はどうかしら？ 誰か優秀な人材を見つけてきてくれればいいんだけど……」

「そうだな。呼ばずとも来るやつは来るだろうが、埋もれている人材もできれば見つけてほしい」

「うん、そうだね。まあそちらの戦果はあまり期待せずに待って……うん？」

「ん？ どうした葵」

途中で言葉を止めた東雲に小林が疑問の声を上げる。

東雲の視線が自分ではなく、どこか一点でずっと止まっているのだ。

「……向こうから来るの、そうじゃない？」

「どれどれ？ ……ほう。中々でかいやつが来たな。それにあれは……」

見えたのは男子三人組。その中でも頭一つ飛び出している長身の男が目飛び込んできた。

バスケットは体格のスポーツとも言われる。背が高い、それだけで十分アドバンテージになりうる。小林の中で新入生への期待が一気にあがった。

そして、さらに次にその長身の男と共に歩いている銀髪の男へと視線が移った。彼が待ちわびていた存在に。

「ついに来たな。『神速』」

「……あれが、そうなんだね」

小林の高揚した声から東雲も察したのだろう。バスケの推薦で入学した一年生のことは彼らも知っている。

かつては『キセキの世代』と呼ばれていた男。五人の天才と肩を並べていたプレイヤー。……白瀧要のことを。

彼らがバスケ部のブースの前へと立つ。

二人の姿を見て、白瀧や光月と共に立っていた男子生徒は緊張からか固まっていたが、残る二人はついに来た、というように待ちわびたような顔をしていた。

「……ようこそ、大仁多高校バスケ部へ！」

「バスケ部入部希望者か？ 喜んで歓迎するよ」

東雲と小林は一年生が緊張しないよう、明るい声で振舞う。

……これが、新たなスタート地点。ようやくここまで来たのだ。これから始まる、激しい戦いの幕開けだ。

「よ、よろしくお願います！」

「よろしくお願いますー！」

「どうぞ、よろしくお願います」

……勇は緊張しまくりだな。声も落ち着きがない。あくまで挨拶なのだからもっと堂々できれば良いのに。

それに比べると明は場慣れしているのだろうか？ 調子が全然変わらぬ。肝っ玉の持ち主ってところかな？ 精神的に強いやつは今年は重要になる。なにせあいつらがいる以上、心が弱いやつは下手すれば二度と立ち上がれなくなるから……。

「ああよろしく。俺は大仁多高校バスケ部の主将を務めている小林圭介だ。それとこっちは……」

「バスケ部のマネージャーをやってます。三年の東雲葵よ。よろしくね」

俺達が設置してあった椅子に腰掛けるのを確認して、二人が自己紹介をした。

……やっぱりこっちの女の人はマネージャーだったか。しかもこちらも三年生。それは気負う物も違うわけだ。二人とも最上級生というだけあってまとつている雰囲気が違う。

「ここに来たからには君達も知っていることだろうけど、私達バスケット部は栃木の中では強豪校と呼ばれているわ。去年もインターハイベスト4という結果を掴み取った」

「……だがこの現状に甘んじているつもりはない。俺達はさらに上を上ろうと考えている。」

そのためにも実力ある選手を待ち望んでいる。たとえ一年生であろうとも実力さえあればすぐにベンチメンバーに、いやスタメンの一員として使つていこうと思つている」

小林さん達の熱意が痛いほど伝わってくる。言葉一つ一つに気持ちがかもつている。

実力主義であるこの世界、別に一年生がベンチ入りするのは不思議なことでない。しかしスタメンに抜擢すると推薦枠の俺に言い放つとはな。……よほど勝利に固執しているようだ。今の言葉で勇も明の表情も選手のそれへと変わつていた。

「まあまだ部活に正式に入ったわけではないし、君たちは今はそんなに深く考えなくていい」

「そうね。それじゃ、真面目な話はここまでにして。……はい、これに記入してね」

東雲さんが俺達に一枚ずつ紙を手渡ししてくる。……入部届けか。懐かしい。これを書くのは三年ぶりだな。

名前とクラス、学籍番号。それだけではなく出身校や経験者ならば中学時代のポジションなど。結構内容あるな。あらかじめデータをとつておきたいといったところなんだろうが……

一通り書き終えたので、東雲さんに用紙を返却する。……帝光中学出身という記述を見て驚くどころか期待しているような目で見てくるといふことは、俺が推薦で入ってきたということを手で知っているようだ。あとは俺に実力で勝ち取れつてことか。

勇と明も入部届けを書き終え、東雲さんに紙を渡している。

「……うん。確認終了。皆ありがとう。それじゃあよろしくねー！」
「明日から活動は始まる。放課後、授業が終わり次第体育館に集まってくれ」

「よろしくお願いします!!」

……無事に入部(仮)は終了だな。先輩も良い人そうだなによりだ。今日はもうやることはないので、俺達はこのまま帰路に着く。近くコンビニでお菓子やアイスを買ひ、小腹を満たしながら他愛無い話をしていた。

「いやあ、ついに明日から本格的に部活かよ！俺すっげー楽しみだわ」

「まあ明日は本格的にはやらないだろうがな。様子見程度にしか動かないだろう」

「……そうかな？僕はてっきり入部テストでもするのかとも思ったが、そんな心配はいらないのか？」

「うーん、テストねえ。……多分、やるとしても最低3〜4日は日をおくと思うがな」

明日からは始まる部活のことを考えて元気いっぱい笑う勇。それに対して明は心配そうに部活のことをつぶやいた。

明の心配事は最もではあるが、そんな急にテストはしれないと思う。最初は一年生に軽く練習に参加させ、少しずつ動かさせてそれから……という風に俺は考えている。

まだ部活や先輩になれていないというのもそうだが、何よりも体を起こさせるといことが目的だ。

俺は推薦で早めに入学が決まったからいいものの、勇達のような一般受験で入ったやつはつい最近まで勉強に縛られていたんだ。体だって鈍っているだろう。そういった人たちへの配慮があると思う。「でも俺としては皆の力を早く見たいってのはあるな。勇や明だつて、どこまで通じるか試したいって気持ちはあるだろ？」

「……ああ。どこまで通用するかはハッキリしたい」

「僕も。自分の力を早いうちに試したい」

やはり選手としての性さがだろうか。二人とも闘志に燃えている。明

なんかは握った拳が震えているな。

これはテストが楽しみになってきた。小林さんも即戦力ならばタメンも考えるところにいたし、機会はそう遠くないうちに訪れるだろう。

それならば……

「なあ二人とも。少しこれから俺に付き合わないか？」

「え？ 付き合うって何かあるのか？」

「別に早く終わったから時間はあるけど。……一体何を？」

「ちよつと本番前に、ワンオンワンloniやらないか？ お互いの実力を知るために」

それは甘い誘惑。

そして返ってきた答えは……やはり、俺の想像通りのものだった。

「へえ。こんなところにバスケットコートがあったのかよ」

勇が物珍しそうに呟いた。俺達三人が来たのは高校から少し離れたところにある公園。

バスケットゴールにコートも用意されており、ストリートバスケットを行うのには絶好の場所だ。俺も栃木に来てから何度かここで個人的に練習をさせてもらっている。

ボールも持ってきているし、まずは軽い準備運動だな。

制服の上着を脱いで体を少しずつ伸ばしていく。……こうやって誰かと一緒にバスケットをやるのも去年以来だ。

「……しかし、やっぱり明は体つきすごいな」

「だよな。おそらく今年の新入生の中では一番ガタイいいぜ」

「そうかな？ まあたしかにパワーには自信があるよ」

上着を脱いだことよって見えた腕を見たが……凄い筋肉だな。しかもほとんど無駄がない。

この様子なら服の下も相当鍛えたのであろう。インサイドなら俺じゃ絶対に勝てないな。身長とかリーチの長さまでまるつきり違うし。まあポジションが違うのだから仕方がない話か。

味方にするなら頼もしいが、敵には回したくないな。……これから
lonlするわけだけど。

「よつと。……それじゃあ、そろそろ大丈夫か？」

軽いジャンプを済ませ、一通り体を動かすと二人も準備を終えてい
た。

頷いて返された答えに俺は笑って返す。……果たして二人がどれ
ほどの実力なのか。

勇のほうはあまりわからないが、明のほうは相当なものだろうな。
覚悟しておかないと。

「順番はどうする？」

「そうだな。……それじゃまず俺と勇。そのあとに勇と明。そして最
後に俺と明。……でどうだろう？」

「連戦か。ま、別に構わねーよ」

「僕も大丈夫だ。それじゃまず僕が下がっているよ」

「ああ、頼む」

了承を得て、まずは明が後ろへと下がってもらった。

……個人的に明のプレイを見てから戦いたかったという理由が
あったんだ。勇、悪いな。

二人になったことを確認してまず俺と勇のマッチアップ。先攻は
勇だ。

SGというポジション上、基本的に外からの攻撃に気をつければま
ずは大丈夫だろう。ポイントとはとにかく相手との距離を開けないこ
とだ。守備範囲は広いほうだし切り込まれても対応は可能なはず。
問題は勇のボールハンドリングがどれほどのものかだな。

軽くボールをバウンドさせながら勇は俺のことをにらみつける。

勇の視線が一瞬左に流れる。……が、それにはつられない。ドリブ
ルの腕が右から左に流れる。そして流れるように再び右へ。

……フェイントにはだまされない。しかし、それでも警戒は怠らな
い。

さらに2回ドリブルしたところで、勇の左足が大きく斜め前へと踏
み出された。

(来たッ！)

すぐさま俺も体を進路方向へと踏み出す。内側にはいれさせない。手を広げてコースを塞ぐ。

踏み出しといい、切り込みといいそれほど速さではないな。勇はピュアシューターか？ それならば多少は勝負は楽になるんだが、油断は禁物。

「さすが……反応が早いな」

「褒めても何も出てこないぞ」

切り崩せないと思つたのか勇は後ろへと下がるが距離は離させない。さすがに距離をあけると外のシュートが怖いからな。

すぐさま距離をつめるが、その瞬間勇の脚が地を蹴って空中へと飛び上がった。……ッ！ ここでシュートを撃つのか！ しかも、体はやや後ろへと流れている。フェイダウェイジャンパーか！

「だが、させねーよっ！」

俺の瞬発力を舐めてもらつては困る。

最初の一步で一気に距離をゼロにし、すぐさま空中へと飛び上がってボールへと手を伸ばす。

チツ、と指先がボールに触れる音がする。シュートそのものを防ぐことはできなかつたがブロックは間に合った。

想定外の衝撃を受けたボールはその進む軌道を変えて、リングに当たって跳ね返される。跳ね返つたボールは俺の手元へと戻ってきた。

勇の攻撃は失敗で終わった。これで次は俺の番だ。

「……マジかよ。あのタイミングでも触れちゃうわけ？」

「少しだけ危なかつたけどな。悪いけど、そう簡単に負けるわけにはいかないんだよ俺は」

リリース直後のボールを叩くつもりだったが、まあいいだろう。ボールを手に取り、攻守交替する。

勇も膝を曲げて腰を低く構えている。……俺と勇の身長差はほとんどない。インサイドへ切り込むならとにかくスピードとフェイントで振り切るしかないか。

ボールを左右へとバウンドさせる。

そしてまずは大きく左へと踏み出す。そしてすぐさまドリブルしながら右へまた一步。

これに勇も反応して体が横へと流れてきたが、そんなこと関係ない。すぐさま体を360度、左方向へ向けて回転させて勇をいなした。

「……ッのー!」

クロスオーバーからバックロールターンの組み合わせだ。読んだ動きの逆をつかれて勇はその場から動けない。

俺はそのまま勇を置き去りにしてレイアップシュートを放つ。

……ボールはリングを通り抜けて地面に落ちてきた。

「……すげえや。動きのキレが全然違う!」

「どうしたよ勇。手加減はいららないぞ?」

「そんな余裕があったらいいのにな……!」

ボールを俺から受け取って再び勇が攻勢へと入る。

視線を左に向けると、すぐさま右へと切り込んできた。今度は止まらない……? いや、これはフェイクか。

案の定、途中で勇はスピードを緩めて後ろへ一步下がり姿勢をさらに低くする。先ほどと同じパターンかよ!

勢いそのままに俺は地を蹴って空中へ身を踊りだす。さつきと違って今度は確実に止められる!

……しかし、勇はその場でジャンプせず左へと切り替えした。

(しまった、これもフェイクか! 先ほどのフェイダウエイを意識しすぎた!)

今の動きで勇との間を作られてしまった。ここからじゃどうあがいても間に合わない。

3Pラインから勇はシュートを放つ。着地してすぐさま再びブロックに飛ぶが、指先さえボールには届かない。ボールは綺麗な弧を描いてゴールへと吸い込まれていった。

「ナイツシュー!」

「……少しは見直したかよ?」

「少しな」

「ひびくっ！」

そう言いつつも実際中々たいしたものだ。

……安定したシュートフォームだった。相当打ち込んでいるようだな。フリーになったならば基本的にはずさないだろう。良いシューターだ。

マークをはずしたら俺の負けか。3Pシュートをあそこまで綺麗に決められたらな。……だったら、絶対抑えてみせる！

ボールを受け取り、シュートモーションのフェイクをいれて右へとドリブルで切り込む。

しかし、深めに守っていた勇はドリブルコースに立ちふさがり、それ以上の進撃を許さない。

ちっ……！ やべ、手をどんどんボールへと伸ばしてくるせいで中々内側へ切り込めない！

仕方がない。勇とゴールに対して背面で構えていたが、内側へスライドする。

やはりこれにも反応するが、若干距離が空いている。これなら！……俺はすぐさま地面を蹴った。

3Pラインよりも外側ということも勇も油断していたのだろう。反応できずにそのままボールを見送る。

しかし、ボールはボードに跳ね返るとそのままゴールへと吸い込まれていった。

「なっ……嘘だろ!？」

「誰も3P^{スリー}を撃てないなんて言った覚えはないけどな。負けたくないならば一時も油断するなよ、勇」

外では勝負できないなんて、そんなこと言うわけがない。

仮にも帝光の名を背負ってプレーしていたんだ。そして今とてその誇りはある。いくら草試合であろうとも、負けていい理由なんて存在しないんだよ!!

「……そこまで！ 終了！」

ボールがリングを潜り抜けたのを確認して、明が終了の合図を告げる。

「……だー！ 畜生！ 結局3P一本しか決められなかった!!」

「おいおい。まだ体が鈍っているはずなのに、一本決めただけでも誇って良いんだぜ。むしろ喜べよ」

「それを相手であるお前に言われたくはない！」

お互い五回の攻防が終了し、結果は勇がスリー一本、俺がスリー二本と2P三本を決めて決着がついた。

あの子の攻防は俺が勇のスリーをとにかく防ぎきり、得点を重ねていった。向こうは止められないかもしれないが、俺は止められないわけではない。ゆえに優先してスリーを潰しにいった。

実際にやってみて思ったことだが、やはり勇は1on1では不利だな。フィジカルもそれほど強くないためにインサイドはそれほど警戒せずとも、スリーを封じられると弱い。だが試合になって味方のフォロワーもあればフリーになる機会は多くなるだろうし、技術もそこそこある。十分活躍してくれるだろう。

「えーと、それじゃあ次は僕と勇で良いのかい？」

「ああ。ただ……勇、お前は大丈夫か？」

「大丈夫だよ。むしろ今は休みたいくないんだ。……さっさとはじめようぜ」

「おっ。そうか、それなら早速はじめるとしようか」

勇はやる気満々だな。負けず嫌いなやつは好きなんだが……果たして明を相手にどう戦うか。

しかも俺とやった後に明だからな。正直俺と明では完全にタイプが逆に、正反対に感じる。俺がスピードで相手を翻弄するタイプなら、明は自慢のパワーでインサイドゴリ押しと言った印象だ。実際ポジションもセンターと言っていいし。……ああ、違う。そういう元々はパワーフォワードだったんだっけ。

まあ、判断するのは実際のプレイを見てからだ。

見せてもらうぜ、明。お前の実力を、お前のプレイスタイルを。

ガシヤツ！ 激しい音が夜の公園に響いた。

ボールが地面に落ち、遅れるように勇と明の体が地面に着地する。

……俺も勇も、驚きで目を丸くしていた。今起きた、明の一度のプレイを目の辺りにしただけで。

（いきなりダंकをかますのかよ。……しかも、こいつかなりのパワーを持ってやがる）

先行は明。だが、その戦法はなかなかどうして合理的。

勇のマークの内側にドライブで強引に切り込んで、勇の上から難なくダंकをかましてくれやがった。

……これは、俺と勇ではまともにもぶつかっては無理だな。弱音を吐くようだが、完全に体格差で負けている。露骨なまでに差が現れているのだ。一瞬進撃の巨人かと思っただぞ。紫原ほどの力ではないと思うのだが、俺達ではまずポジションが違うもん。勇に至ってはシューターだぞ。

「ごめん、大丈夫か？」

「あ、ああ」

尻餅ついている勇に声をかけて手を貸す明。

……気持ちはわかる。なにせいきなり自分の上からダंकをかまされたんだ、仕方がない。かと言ってリーチが長い上にボール保持能力も高そうだからカットも大変のようだ。これは苦戦するぞ。

勇が明からボールを受け取り、ドリブルを開始する。

これは外から決めるしかないだろうな。インサイドは明の独壇場。そこに勇が挑むのは自殺行為でしかない。

……が、かと言ってノーフェイクのスリーでは無理だろう。ある程度の切り込みは必要だ。明はリーチが長いし、足もそれなりの速さを持っている。となるとあいつが俺のときにやっていたフェイダウェイとか色々組み合わせなければならぬ。

そしてそれは勇も重々理解していることだろう。

視線、シユートモーシヨンのフェイクをいくつかやった後、勇は目の前にそびえる巨大な男へ切り込んでいった。

放物線の軌跡を描いたボールはリングを潜り抜けて地面へと落ちてきた。

やはり勇のスリーは安定しているな。フォームも綺麗だし、今のシュートは放った瞬間に決まったとわかった。スリーの確立は相当だしこれであと速さがつけば一気に成長するぞ。

「1 on 1 終了だな」

「……あ、ああ」

「さすが、だな。僕ももう少し決められると思ったんだけど……」

二人の結果。

勇がスリー一本。2P一本。明が2P三本という結果に終わった。得点で数えても明の勝利と言える。

どうやら明は外からはあまり撃てないようだ。まあポジション的にあまり必要ではないから仕方がないことだ。

だが、インサイドでは確実に決めている。勇が一本ボールをカットしてとめたものの、やはり強引に切り込まれたら俺達では止められない。ボールを奪わない限り、勝利はないということだ。……多分ブルックに飛んでも勇のように吹き飛ばされるのがオチだろう。簡単に想像できてしまうのが恐ろしい。

「それで、どうする？ 最後に僕と要で、やる？」

「うーんどうするかな。……明は、やりたいのか？」

「……正直、遠慮しておきたいけど。明日以降に響きそうだし」

「お前もそう思うか」

明ほどの男を相手にするのならばこちらもそれ相応の力を出さなければならぬ。

……がしかし、明日から部活も始まるというのにここであまり力を使い切ってしまうたくはない。技もまだ見せたくはないし。

それに、目的であるお互いの力量を測ることは出来た。これ以上のプレイは完全に個人的な楽しみとなってしまう。それでは本末転倒だ。

「オツケー。わかった。今日はここまで、お開きとしよう」

「ええ！　なんだお前らやらねーのかよ。俺だけ二試合やってんじやん」

「ま、今回は体を動かすこととお互いの力量を知ることが目的だったからな。その目的を達成できたからいいだろう」

「そうだね。体も少しは思い出せたし、僕にもいい機会になったよ。誘ってくれてありがとう」

「ちえつ。……ま、二人がそう言うなら仕方がないか」

「ああ。次やるとしたら、テストのときに全力でやろうぜ！」

「ああー！」

「もちろんー！」

最後に三人でそれぞれの右手を前へ出し、お互いの拳をあわせる。皆ポジシヨンこそ違えども、お互いの力を認め合った。これから共に戦うかどうかはわからないが、それでもチームメイトであることには変わらない。

制服の上着を着て帰り支度を整えると、それぞれの帰路につく。

「また明日、部活で会おう」と言って二人と別れた。

「……あー！　疲れた！」

学生寮に帰って食事をすませるなり、俺はすぐさまベッドに横になる。

今日は入部届けを出しただけとはいえ、明と会ったり先輩達と会ったり、二人と1on1やったりと内容が濃い一日だった。誰かと一緒にバスケをするのは久しぶりだったせいで、余計に気合が入ってしまったのかもしれない。

「明日からは本格的に、部活の始まりか」

まだ部活間での激しい闘争は起こらないのかもしれないが、安心はできない。少しでも早くレギュラーを取って自分の居場所を確保したいところだ。

人の歓迎は冷めやすいものだ。期待されているうちに成果を残さ

ないと俺はここでは生き残れない。そして、ここで生き残れないようなやつがあいつらに勝てるわけがない。

俺は、絶対に負けるわけにはいかないんだ。必ず、あいつらを越えてみせる。もう一度、あいつらとバスケをするためにも。

「よし！ やってやる！ ……それじゃ、今日はさっそく風呂入って寝よ」

そのためにも、今日は体を休めたら早めに寝るとしよう。

明日に疲労を残さないよう、俺は風呂場へと向かうのであった。

第三話 大仁多高校バスケ部 始動

俺達が 大仁多高校バスケ部に仮入部届けを提出した翌日。

昨日小林さんが言っていたとおり、新入部員である一年生を含めたバスケ部全員が放課後の体育館に集結していた。全員用意したジャージに着替え、バツシュに履き替えてある。準備は万全だ。

……やはり俺も一人のバスケット選手ということなのだろうか。授業中は集中力が普段より散漫だったというのに、今はしつかりとしている。やっぱり部活が始まるとなるとどうしてもこっちに意識が向いちゃうんだよな。勉強はわかるけれど、やはりバスケの方が楽しいと思ってしまう。

体育館のコート半分を埋め尽くすように人が並んでいる。

……帝光ほどではないが、新入部員も結構な人数がいる。ざっと見たところ三十人ほどはいるのだろうか？

俺はその新入生の中では最前列に立っている。そして俺達新入生と向かい合うような形で先輩方が並んでいる。先輩達の顔ぶれを見ている間に人数も全員集まったようで、昨日会った主将である小林さんとマネージャーである東雲さんが中央へ出てきた。

「皆、今日は良く集まってくれた！ 昨日も自己紹介したが、俺がバスケ部キャプテンの小林圭介だ。そしてこちらに立っているのはマネージャーの東雲葵。そして他の三年生も中心にバスケ部は活動していく。今出張のためにこの場にはいない監督も、こちらに戻ってからは指示を頂くことになる。」

——大仁多高校バスケ部の目標はもちろん、昨年逃したインターハイ優勝だ！ そのためにも一年生であろうと実力さえあればどんな試合にも出場してもらおうからな！ だから皆精一杯励んでくれ！」
部活最初の主将としての挨拶。体育館中に響き渡るようなすごい張りのある声だ。やはり熱血漢だな、小林さんは。風格もあるしさすがは主将に選ばれるだけのことはある。赤司とはまた違うタイプだが、リーダーシップが感じられる。

一つ間をおいた後の発言は、本当に熱意がこもっているということ

が伝わってきた。おそらく昨年負けたことの意地、そして主将である責任が小林さんをここまで駆り立てているのだろう。ならば、俺達も彼の思いに全力で答えなければならぬ。自分のためにも、主将のためにも、チームのためにも。……そしてあいつらとの誓いを果たすためにも。

その後、小林さんと東雲さんが現在のバスケット部の状況や今後の方針を話してくれた。

今バスケット部は三年生が十五人、二年生が二十二名、俺達新入生が十三人という人数。まあ一年生はこれから数が減っていくかもしれないが。それでもここには七十人も部員が集まっているという。

ひとまず今日は俺達も普段の練習に加わり、その様子から少しずつ判断していくらしい。そして次の週明けに一年生同士でチームを組んでミニゲームを行うそうだ。そこで先輩達が俺達のプレイを見て、戦力になる人材を探すということだろう。

……ミニゲームが楽しみになってきた。チーム編成は先輩達が決めるということだからひよつとしたら勇や明とは別チームになってしまうかもしれないが、それならそれで面白い。とにかく、俺の力を示すチャンスがすぐそこに迫っているというんだ。胸の高まりを抑えられない……！

「……俺の話はここまでかな。何か質問はあるか？」

小林さんが俺達に質問がないか問いかけるが、自分からは何も聞くことなどない。

それよりもさっさと体を動かしたいくらいなんだ。一体練習はどんなメニューなのかな？

「よし、何も無いようだな。それでは俺からも一つ。今年の一年生の中に、バスケット部のマネージャーに加わってくれた子がいた。今この場で紹介しておこう。……入ってきてくれ」

そう俺が今日のメニューのことを考えていたら、小林さんが付け足すように話を始め、体育館の入り口付近に視線を向ける。

マネージャー？ まあ、すでに東雲さんがいるとはいえもう三年生だし、それにこれだけの学校なんだから新入生の中からも一人や二人

入ってもおかしくはないか。俺達はそのマネージャーの女の子の姿を見るべく横に視線を流す。

すると、黒い長袖のセーラー服を着た一人の女の子が入ってきた。

……風で橙色の腰辺りまで伸びた長髪が揺れている。

髪の毛と同じ橙色の、ぱつちりとした大きなつぶらな瞳。

そして制服の上からでもわかる、男の煩惱を刺激する絶妙なプロポーション。

「おおっ!? なかなか可愛い子が来たな!」

間違いない美女と謳われておかしくない女性だった。事実周囲からは歓喜の声があふれている。勇にいたっては完全に頬が緩んでいる。若干反応が大きさではあるがな。

だがそういう俺も一瞬心を奪われた。……いや、そうは言っても俺が彼女に見とれたのは何も彼女の美しさではない。

「……桃井、さん?」

俺は彼女の姿に、かつて帝光時代のマネージャーを務めていた桃井さんの面影を重ね合わせていた。

髪や瞳の色、まどつている雰囲気など違ってはいる点は多数ある。だが、なぜか一目見たときに俺はそのように錯覚していた。……なんでだ? 似ていないはずなのに似ているとは……自分でもおかしな、矛盾した話だと思う。

「彼女の名前は橙乃茜だ。中学校時代にもバスケット部のマネージャーをやっていたそうだ。」

これから先、君達と行動を共にすることになる。たとえば選手でなくとも共に戦う仲間だ。皆も仲良くするように」

「橙乃茜と言います。今日からよろしくお願いします」

それだけ言うと言は深くお辞儀をした。……違う、やはり違う。きつと気のせいだろうと俺は先ほどの考えを打ち消した。俺は何も桃井さんの外見に惹かれて好きになったわけじゃないんだ。それなのに、少し彼女の面影を感じたくらいで動揺するなんて、桃井さんにも失礼だろう。

「……なあ、今胸が揺れたよな? 俺本当バスケット部に入ってよかった

！」

隣で何事かをぼやいている勇を無視して視線を主将のほうへ切り替えると、小林さんはさっそく練習開始の合図を出す。

いいですよ。とことん付き合ってやろうじゃないですか。あなた達先輩方の夢をかなえるためにもね。

「……あーっ！ 疲れた！」

「大丈夫か、勇。はい、飲み物」

現在練習の合間の休憩時間中。タオルで汗を拭き、マネージャーより支給された飲み物を飲んで水分補給をする。

練習で体力を根こそぎ持っていかれてしまったのか、床に座り込んでしまった勇に飲み物を手渡す。勇のほかにも十数人ほど同じような状態のメンバーが確認できる。体力がないという理由以外にも、やはりまだ体が本調子ではないということだろう。さすがに先輩達は厳しい練習にも慣れていいるからか平気そうだが。

勇はスポーツドリンクを受け取り飲み込むと、その表情に笑みを浮かべる。よほど消費していたようだ。これは少しばかり気を配る必要がありそうだな。脱水症状とかになったら困るし。

「サンキュー要。……はーッ。美味い。」

しかし本当に要は凄いな。息も普通に整っているし余裕そうじゃん。やっぱり体力も違うのかねー」

「まあな。体力は俺のウリでもあるからな。こんなところで弱音を吐いちやいらねーんだよ」

「うっわー、なんとも頼もしいお言葉。言うことがいちいち違うね。惚れ惚れするよ」

「そんなにたいしたことじゃない。大丈夫なやつは大丈夫だし。……それに、どうやら明も平気そうだしな」

「……マジかよ。半端じゃねえな、あいつもさ」

「……ああ。俺も正直、あいつのことを過小評価していたのかもしれない」

視線を遠くで水分補給しているチームメイトへと向ける。勇も俺につられるようにそちらを見た。

流した汗でTシャツが染みているものの、明本人は平然とした顔をしている。やはり身体能力は高いようだ。これでも結構な練習メニューなんだけどな。これに耐えるということは相当な練習量をしていたのだろう。

今日は柔軟、ランニングから練習が始まり、フットワークをここまで一時間半ほど行った。今は次からシユート練習に入るので、それまでちよつとした休憩だ。

脚の疲労は相当なものだろうな。鍛えていなかったら少しばかりきつかったかもしれない。

さすがに強豪校だけあって練習内容が濃い。これは弱音を吐くやつがいてもおかしくないな。

……それにしてもひっかかる。それだけの実力を明が持っているというのならば、俺が少しくらいはあいつのことを知っていてもいいはずなんだけどな。残念ながら俺の記憶には明の情報が一切なかった。

これでも俺は帝光バスケット部時代、数多くの公式戦に参加し、練習試合にも赴いて強豪校と戦ってきた。その中で何人もの強敵と戦ってきたし、桃井さんを通じて情報は入っている。

それなのに明のことは一切覚えていないのだ。これだけのやつが中学時代に埋もれていたとは思えないし。……なんでだろう？ まあ、それは後々調べていくとするか。

(それよりも問題はあつちだ。やはり気になってしまふな……)
俺は顔を上げて、壇上で東雲さんと何事かを話している橙乃へと向ける。

彼女もマネージャーとしての仕事はキッチリしている。部員としての責任感を持っているようだし、それ自体は何も問題ない。しかし気になるのは練習中のあの目だ。比べるのもなんだが――まさに桃井さんの目のようだった。選手のものとなんら遜色ない、バスケットに懸けている目だった。そしてその目で俺を見ていた。まるで俺を探る

ように、俺を値踏みするように。

どうも気になってしまう。一度考えてしまうと、どうしても頭の片隅にのこってしまうんだよな。……俺の悪い癖だ。

「……よし、休憩は終了だ。練習を再開するぞ！」

思考に意識を向けていたら、突然小林さんの鋭い声が体育館に響いた。

ヤベ……ダメだ。今はとにかく練習に専念しないと。俺はこんなところで立ち止まるわけにはいかないんだ。

「何ボサツトしてんだよ要。ほら行くぞ！」

「あ、ああ。悪いな、サンキュ」

俺は勇からボールを受け取り、邪念を振り払うかのようにいつもよりも強くボールを地面へとたたきつけた。

「よしっ！ 今日の練習はここまで！」

「「ありがとうございます!!」」

今日の練習がようやく終了。体は汗でまみれ、あたりもすでに真っ暗だ。

小林さんの挨拶でそれぞれ解散となる。現レギュラーである先輩達は居残り練習をこれから行うようだが……俺は今日はまだやめておこう。まだ部活初日だし、見渡してみると上級生達でコートはほとんどいっぱいだ。ならばそんなに焦る必要は無い。俺は勇と明と合流し、更衣室へと向かった。

「だあーっ！ もう今日は疲れた！ マジ体がいてえし！」

「家に帰ってからストレッチは入念に行えよ。疲労は残しておくものじゃないからな」

ジャージを脱ぎ、上半身裸になった状態で体を伸ばしている勇に一言述べておく。

これから毎日このメニューが続くのだから疲労はその日のうちに可能な限り回復させておかなければならない。選手なんだから自身のコンディションを保つことは当然のことだ。

「わーってるて。心配性だなお前は、まるで母親だ」

「でも本当のことだよ。怪我しないためにも必要だし。」

「けどこの練習量がこれから続くのか。大変だな。これは、……脱落者もでてしまうのかな？」

「……そうかもな」

明が最後の部分をトーンを下げて話した。そう思うのも無理は無い。荷物を整理しながら視線を他の一年生に向ける。それぞれ親しくなっている者と話しているが、中には練習での疲労によって動けずにいる者もいる。

入部者の中には経験者でないものの中にはいるかもしれないし、そうでなくても他者との力の差に挫折したり、ついていけなくなったりして部活を辞める人間も出てくるだろう。

……だがそれでも、それでも俺達には関係の無いことだ。非情な話だが、そういうやつらに俺ができることはない。あるとしたらそれらの分まで戦うということだけだ。

「でも、それは俺達が気にしても仕方が無いことだ。それは各々の自由なんだからさ。」

それにどうせお前達は辞めないんだろう？ だったら、他人の心配よりも自分の心配をした方がいいぜ？」

口の端を上げて二人を見る。俺の言葉を聞いて二人の顔が若干強張った。

まだまだ部活は始まったばかり。……というかまず仮入部だし。それなのに他者の心配をするなんて甘い。甘すぎる。

「……当たり前だろ。誰が辞めたりするかよ」

「ああ。バスケをするためにここまで来たんだから」

「そいつは重畳。そんなにやる気があるというなら問題ない。……それじゃあ、また今からバスケするか！」

「……結局それかよ!!」

「……むっ?」

二人の覚悟を確認し、やる気があるということを確認したからさらに士気を上げるべく提案したのだが……結局ってどういうことだ？

二人と練習したいこともあったから言っただけけど……

まあいいや。さつさと着替えていつもの公園に行くでしょう。あんまり遅くなると寮の門限を過ぎちまうからな。着替えを済ませて、近くのコンビニで小休止を取ると俺達は再び公園へと足を向けるのだった。

以前の1on1をやったときと全く同じコート。

メンバーも気候もほとんど同じ条件だ。ただ、この前と違うことがあるとすれば……それはいくつものカラーコーンがまばらに並んでいるということだろう。

「……ふっ！」

まず俺はフルドライブで3Pラインに立っていたコーンを右に抜き去る。

さらにその先にもう一つコーンがある。ヘルプに來た役のコーンだな。だが、これも抜いていく！

コーンの右側に一歩大きく踏み込み、すかさず左へと全速力で切り返す。——クロスオーバーだ。これでDF二人を抜き去った。守備の内側まで切り込んだ。

「ここから先は……通さない！」

「明……ッ！」

しかし、ここで圧倒的威圧感を放つ本物の選手が、明が待ち構えている。

インサイドでのパワー勝負では俺の勝機は薄いだろうが……だが、そんなの関係無い。ドライブでついた勢いそのままに俺は体を空中へと躍らせた。

「そうは、させない！」

「……ッ！」

明が俺のシュートコースを塞ぐように飛びあがり、手を伸ばす。やはり……高い！ コースが完全に塞がっている。

だけど、それでいい。これでDFは俺に集中した形になった。俺は

シュートを撃たずに、そのままボールを持った右腕を後ろへと振った。

「うっ……!」

「決める、勇!」

「あいあい……きー!!」

ボールは3Pラインギリギリのところ回り込んだ勇の下へとわたり、受け取ったフリーになった勇は綺麗にシュートを放った。ボールは一定の弧を描き、そしてリングに吸い込まれて地面へと落ちた。

……決まったな。俺がインサイドの意識を集められたし、パスもちゃんと通った。勇が一発でしつかり決めてくれたのも大きい。もしこれで勇のスリーが外れてリバウンド対決とかになったら……まあ、まず俺が負けていただろうな。あまり想像したくない。

「……やっぱり、要は違うな。途中までは完全に一人でシュートまで持っていくようにしか見えなかったのに」

「ま、明のディフェンス次第では俺一人で決めるつもりだったからね。お前のディフェンスが俺の想像以上だったってことだよ」

「……そうか。素直に喜んでおこうか」

苦笑いしながら俺に近づいてくる明にそう言って励ます。

……昨日はlonelyしなかったからこうしてコートで向き合うのは初めてではあったが、やはり直接戦わないとこいつの強さははつきりとわからない。ただコート下にいるだけで相当な圧力を感じた。これが他にも選手がいたらどれほどのものになるのだろうか。

今回は練習だったからよかつたものの、本当に戦うとなると……色々と対策を練る必要が出てくるな。それだけこいつは強敵だ。

「おい要、ちよつとまで。これはコンビネーションの練習じゃなかったのか!? それなのに一人で決めるつもりだったとはどういうことだ!?!」

「………なに。ちよつとした冗談だよ」

「今の間は何!?! 滅茶苦茶怪しいんだけど!?!」

「うるさいな勇。結果的に試せたのだから良いだろう?」

「それって結果論じゃねーか! そんなの俺が納得できねーよ!」

「すまん、許せ」

勇の言う通り、今回は二人との息を合わせる練習だ。

主に俺がボールを運ぶ中継役となってどちらかにパスを回し、敵DFを錯乱する。(それでもし余裕があるなら俺はそのまま決めようかと思ったり……)そのためにかくつかコーンを用意して仮想敵を用意して練習したのだ。本当のDFなら動いたりもするが、それでも練習には充分だ。

「まあそう言うなって。戦況に合わせるのは当然だろう。実際……来週チームを組んだときに、最善の状態で息が合わなかつたら困るだろう？」

「それは、そうだけだよ」

なおも突つかかってくる勇を諫める。

俺だって何も意味もなしにこのようなことをしていたわけじゃない。

来週行われるという新入生同士のミニゲーム、そこでもし本当に同じチームとなったときのためのコンビネーションの練習、そして改めて自分達のポジションの確認のために行った。

「勇もそこまで要につつかかるのはやめとこうよ。チームにはそれぞれ役割があるんだし、場の状況にだって左右されるんだ。今回は特に僕だけが動くディフェンスだったんだし、ある程度の意識が他に向いちやうのは仕方が無いよ」

「……わかったよ」

明の言葉を聞いて、それ以上は文句を言わずに素直に勇が下がってくれた。いや助かるぜ明。お前のようなやつがいるとチームもまともりやすくなる。実力もあるし、できればこいつらとチームを組んで戦いたいな。

「……さて、そろそろ良い時間だし今日はここらへんで切り上げるとするか」

俺達が個人的な練習を始めてからすでに30分ほど経過している。これ以上は時間的にも厳しいし、体の問題もある。ここらへんが引き上げ時だろう。明日も授業と部活があるのだから、あまり長くやりす

ぎてしまうのは体に毒だ。

「そうだね。僕もそろそろ帰らないと」

「じゃあ今日はここで解散だな。また明日学校でな！」

「ああー」

使用したコーンなどを片付けて、それぞれ上着を羽織ると今度こそそれぞれの帰路につく。二人と別れた俺も今生活の場となっている寮へと足を向けた。早く体を休めないと。

……そういえば今まで誰にも聞いていなかったけど、誰かバスケットの中にも俺以外に寮暮らしの人とかいるのだろうか？ 他の部活のやつ（特に推薦入学者）と会った事はあるが、実はまだバスケットの人間と会った事は無い。そろそろ誰か寮の中でも親しい人間を見つけたいな。そのほうが気持ち的に落ち着くだろうし。

（……まあ、そう上手い話はないか）

「……ねえ、ちよつといい白瀧君？」

「うん？」

物思いにふけていると、突如横から誰かに声をかけられた。しかも俺の苗字を呼んで。

透き通るように綺麗な女性の声。果たしてこのような声の持ち主が知りあいにならうかと考えながら声をした方向に振り向くと……そこにいたのは、今日からバスケット部のマネージャーとなった橙乃茜だった。

「……えっと、橙乃さんだっけ？」

「うん。それで合ってる」

確認のために問うと、コクリと首を縦に頷かせて肯定する彼女。その幼い仕草がどこか可愛らしく感じる。

そう言う橙乃はセーラー服にカバンを肩にかけた状態であり、まだ帰宅途中であることは明白だ。マネージャーとして部活の後片付けをしていたにしても若干遅すぎるように感じる時間帯、なのにどうして彼女がここに？

「どうしたんだ？ 橙乃さんがどうしてこんな時間にこんなところに？ さすがに女性が一人でこんなところをふらついているのは危険

なんじゃないか？」

「帰宅途中、白瀧君達が熱心に練習をしているのが目に入った。それで、しばらく見学させてもらっていたの」

「……見ていたのか？ 俺達のバスケットを。盗み見とは趣味が悪いんじゃないか？」

自分でも声色が変わっていることがわかった。橙乃もビクツと体を震わせている。

いくらチームメイトとはいえど、勝手に見られていたと思うとどうも気分が悪い。しかも、練習の時のあの目のことを思い出したらなおさらだ。どうしても自然に声が責めるような口調になってしまう。

「そのことはごめん。バスケットに集中している人達に声をかけてその邪魔をするほうが、よっぽど性質が悪いと思った。……気分を害してしまったのなら、ごめんなさい」

「あ、いや。……別にそこまでは言っていないさ。俺が悪かった、気にしないでいいよ」

「……ありがとう」

俺の言葉に言い訳することなく謝罪する橙乃。ここまで素直に謝られるとこっちがむしろ悪さをしているみたいで気が引ける。いや、実際責めてしまったのは俺か。

……しかし、帰り道に見かけただと？ 家がこっち方向ってことなのか？ 駅からは離れているが、けっこう近くに住んでいるのだろうか？

「なあ。帰宅途中にってことは、ひよつとしてこの近くに家があるのか？」

「……ん？ 言って無かった？ 私も寮生活をしているけど」

「……マジで!？」

「うん、本当」

俺の問いに首を傾げながらそう答えた橙乃。

橙乃が寮生活だと？ 今まで見かけなかったものの、まさか女子とはいえこんな身近なところに寮生活をしている仲間がいたとは。

……大仁多高校の男子寮と女子寮は道路を二つ挟んで建ち並んでい

る。ゆえに方向的には登下校の方向はほとんど同じ。たしかに途中で別れることにはなるものの、一緒になってもおかしくはない。それ
での公園を発見できたってわけか。

「東雲先輩から聞いてあなたが大仁多高校こに入学したことは知っていた。見かけたのは偶然だったけれど……やっぱり凄かった。さすが帝光中学時代に『神速』と言われるだけのことはある」

「……それはどうも。君みたいな人にも知られているなんて光栄だよ」

この人にも俺のことは伝わっているわけね。そんな大っぴらに宣伝した覚えはないんだけどな。

どうもその名前で、二つ名で呼ばれるのは気恥ずかしい。他の奴らに言われるのは大丈夫なはずなのに。……相手が女性だからだろうか？ それとも、相手が橙乃このひとだからなのか。

「それで、あなたに一つだけ聞きたいことがある」

「うん？ 聞きたいこと？ なんだ、そんな改まって」

「……言いたく無いことなら、答えなくてもいい」

「あ、ああ」

そこで一つ間をおくと、橙乃は一瞬不安そうな顔になり……しかし、一度瞳を閉じるとまたもとの表情へと戻って俺に問いかけた。

……なんとなくだけど、きつと俺が答えたく無いような内容だということは、なんとなくわかった。

「どうして、あなたが『キセキの世代』と呼ばれていないの？」

「……ッ！」

「あれだけ中学校入学当初から活躍していたあなたが、コートを駆け巡っていたあなたが、どうして？」

「……」

静かな声だった。何の圧力もない、迫力も無い、むしろ不安げな声。それなのに、その声によって俺の体中に強力な刺激が走った。『もう何も言わないでくれ』と、『それ以上何も聞かないでくれ』と、心が弱音を吐いていた。俺の中で一瞬時が制止する。

——『キセキの世代』。俺がかつて呼ばれていた、俺の仲間だった者

達が今も呼ばれ続けている名誉ある肩書き。天才と謳われた選手達の代名詞。選ばれた五人の天才だけが持っている輝かしい栄光、俺が奪われてしまったもの。

空であつた右手を力強く握り締める。……俺が過去に何の未練も感じないような男だつたならばどれほど良かっただろうか。そうすればここまで苦しむようなこともなかっただろうに、いくらかの諦めもついていただろうに。

「……単純な話だよ。俺があいつらよりも劣っていた。ただそれだけの話しだ」

「そんなことは……」

「それが事実だ。現にあいつらは自分達の力で全中三連覇を果たした。きつと俺がいなくてもあいつらならばやり遂げただろう。」

……知っているか？ 今年からの三年間、高校バスケット界の頂点に立つのは『キセキの世代』が進学した高校のどこかだと言われている。たった一人の加入でチームそのものが変わるとな。それほどの天才なんだよ、『キセキの世代』というのは」

できるだけ客観的に、自分の感情を出さないように話す。何も間違つた事は言っていない。

今『キセキの世代』と呼ばれている者達は中学当時からすでに次元を越えていた。そのレベルは高校でも飛びぬけていることだろう。それは俺のような男が太刀打ちできるようなものではない。……いや、違うな。太刀打ちできなくなってしまったと言つたほうが正しいのか。

「だから、俺はもう違うんだよ」

自分にも言い聞かせるようにそう呟く。

それを聞くと橙乃はすこし悲しそうな顔をした。きつと俺の答えは彼女が求めていた答えではなかったのだろう。それくらいはわかる。

「……私は、そんなこと認めない。あれだけ輝いていたあなたがそんな風に諦めただなんて……絶対に認めない!!」

そう強く叫ぶと橙乃は小走りで去っていく。今度こそ女子寮へと

帰るのだろう。

瞳にわずかに浮かべていた雫のことや、まるで俺の昔を知っているような口ぶりだったのが気になるが、それ以上に……

「……あーあ。これは、さすがに嫌われちゃったかな」

誰もいない道で一人寂しく呟く。この小言を聞いている人間は誰もいない。

これから先一緒に行動するチームメイトなのだからできれば仲良くしたかったのだが、そう上手くはいかないか。

「だれも諦めたとは言っていないんだけどなく。……奪われたなら、取り返すだけだったのに」

まあその誤解は今後解消していけばいいだろう。

俺だって今の現状を理解はしても認めたくわけではない、ただ甘んじて受け入れているわけではない。ただ現実を割り切っているだけだ。

俺は今はずただの挑戦者だ。だからこそ……必ずや、もう一度あいつらと同じ舞台に這い上がってみせる。そう決意してこの二年間、バスケに全てを懸けていたのだから。

「……ま、ここで何を言っても意味がない。今日はもう帰るとするか」
メアドでも交換しておけばそういうやり取りもできたのだが、ないものを今考えても仕方がないことだしこういうことは直接会って話したほうがいい。が、男子が女子寮に行つては色々と問題事となる。だから今日はもうこのことを考えるのはやめにする。

俺は先ほどよりも重い足取りで男子寮へと向かつて行つた。疲労以外の何か別なものが、俺の足を重くさせる。……駄目だな。今日はもう何もせずに寝るとしよう。

きつとこういう日はろくな夢も見れないのだろうかなど、俺はどこか他人事のように考えていた。

「はあ、はあ、はあ。……はあっ」

白瀧の姿が見えなくなつたことを確認してから橙乃は足を止めて

息を整え……そしてため息を一つついた。とつさに声が出てしまつて思わず走り出したものの、今我にかえるとらしくないことをしてしまつた、と悔いていた。

「……久しぶりに直で見たから、緊張しちゃつた……かな？」

そう言うものの、橙乃はどこか嬉しそうに微笑を浮かべた。

何度か白瀧のことは話して聞いてはいたものの、こうやって彼の姿を近くで見るのは久しぶりなので思わず言わなくて良い事まで言つてしまつた。しかし、会つて話す事ができたのは彼女にとっては嬉しいことである。

「……今度会つた時はもう少し詳しく話を聞ける、かな？ 昔の事も……」

橙乃の声は不安ながらも少しずつ明るさを取り戻していた。

彼女が夜空を見上げると綺麗に星が瞬いていた。あの星のように今もずっと輝いていられればよかったのに、と橙乃は思った。

「……今日は、もう帰ろう」

ひよつとしたらまた白瀧と鉢合わせしてしまうかもしれない。会いたいとは思うが今は会いづらい心境なので、すぐに帰らなければならぬ。橙乃も女子寮へと一人歩いて行つた。

第四話 思わぬ誤算

帝光バスケット部に入部してからの一年間。その時こそが、俺にとって是最も輝いていた時だった。後に俺達は全中三連覇という偉業を果たすわけだが、それよりも俺にとっては今も追い求めている舞台が中一から中二の時に立っていたコートなんだ。仲間と共に一緒に立っていたコートこそが、俺が立ちたかった場所なんだ。

まだあのころは良かった。俺だって皆と一緒にプレイできたのだから。

入部早々に俺や赤司、青峰、紫原、緑間はベンチ入りを果たし、一年の時からすでに周囲にその実力を認められていた。俺以外のメンバーはまだ今と比べると才能の開花がなかったため、それほどの実力ではなかった。周りの選手達より少し抜き出ているくらいの実力だろう。しかしだからこそ俺達はお互いを高めあい、試合に熱中していたのだと思う。5人全員がそれぞれの目標に向かってライバルに勝つために、練習に励んでいた。

途中で黒子が一軍に昇格してからはなおさらだ。あいつのようにたとえ運動神経に恵まれていなくても、隠れた特技を生かし自分のできることを精一杯やり、健気なまでにチームに貢献するような選手が現れて。……だからこそ黒子の分まで、あいつが俺にパスを渡してくれるだけ点を稼ごうと思った。それがあいつへの誠意に応える唯一の方法だと当時の俺は考えていたんだ。

『試合、終了——!!』

「よっしゃああああ!!」

『帝光中学、ついに念願の優勝をもぎ取りました!!』

審判が笛を鳴らすのと同時に、俺は喜びのあまり力の限り叫んだ。青峰も嬉しそうに駆け寄り勝利を共にわかちあう。もみくしやにたたいてきて少し痛かったものの、そんなこと気にならない。……それどころか、むしろそれが勝った証だと感じて嬉しかった。ベンチメンバーもその場から立ち上がり、体を躍らせて喜んでた。黒子も頬を緩ませている。桃井さんも歓喜の声を上げていた。赤司や紫原、緑

間といった者達もあまりそういった動作は見られなかったものの、どこか嬉しそうな、ほっとしたような雰囲気醸し出していた。

一年の全中。俺達は入部早々に全中優勝という輝かしい栄光を手に入れた。あの日ほど皆と喜んだ日はない。チームメイトと共に騒いだ夜はない。正に最高の日だった。

それからの部活も充実していた。全中が終わってからは黒子が一軍に完全に溶け込み、皆気遣いすることなく大きな問題も無く仲良く接していたのだから。時には喧嘩に発展することもあったが、それは相手を思いやつてのことで、すぐにその関係は元通りに修復した。

幸せだった。ただ、皆と一緒にバスケットができるだけで。それだけで俺は良かった。

だから、まさかあんなことになるなんて。……当時の俺は、想像さえしていなかったんだ。……いや、ひよつとしたら俺はただ考えたくなかっただけなのかもしれない。それまで想像していた、来てほしくない未来が現実になることを、変わらない自分の立ち位置が崩されることを。

全中制覇から時は流れ、俺達は二年生へと進級する。

去年全中を制覇したということでバスケット部の新入部員は急増したものの、俺達を倒すほどの人材がそうそう現れるはずがなく、レギュラーの座は不動のものとなっていた。こんな日がずっと続くのだと……そう当時の俺は思っていた。

「……二年の黄瀬涼太っす。バスケットは経験ないけど、これから学んでいくんでよろしくお願いします！」

——あの男。黄瀬涼太が帝光バスケット部に入部するまでは。

「……夢、か」

眩しいほどに部屋の中に降り注ぐ朝の日差しと、小鳥のさえざりりで俺はいつものように目を覚ました。

上体を起こし、腕を伸ばして残っている眠気を振り払う。いくらか

ストレッチをするとだんだんと脳が覚醒していく。うん、特に体に疲れは残っていないな。

体の状態を確認すると、部屋の中に設置されている冷蔵庫へと向かい、その中から紙パックの牛乳を取り出した。その中身をコップに半分ほど注ぎ、飲み干していく。ゴクツ、ゴクツと喉を鳴らして牛乳は体内へと吸収されていた。

「ふうっ」

飲み終わると自然と口から息がこぼれた。これで一息ついたな。若干乱れていた脈も落ち着いてきた。残った牛乳は冷蔵庫にしまい、使ったコップをキッチンで洗う。

今日は待ちに待ったミニゲームの日なのだから全力で挑めないようでは困る。ただ、体の方は万全なんだが……

「……あんまり、良い目覚めではないな……」

水を止めながら出てきた夢の感想は、やはり良いものではない。

いつものような朝なのだが、先ほどまで見ていた夢のせいかあまり気分は優れない。繊細すぎるのもほどほどだな。

あの日——バスケット部の練習初日、橙乃に昔の話をされてからというものなぜか俺は毎日のように帝光中学時代の夢を見るようになった。俺がまだレギュラーの時代であった、懐かしい栄光の記憶。仲間と共にコートに立った輝かしい過去。

俺も未練がましい。夢にまであんな映像が映し出されるなんて。それほどまでに過去に囚われているということなのだろうか。

……だが、今は忘れよう。たしかにあのころには戻りたい。それでも、今日はこれからの未来のために大切な試験の日なのだから。

「まだ時間は……だいぶあるな。夢にうなされて早く起きてしまったのか？ まあいいや」

時計に目を向けると、いつもよりも30分ほど起床時間が早い。朝食を取るにも十分余裕がある時間だ。

俺は体を完全に起こし、専用のジャージへと着替える。時間が余っているなら有効に活用するでしょう。俺は朝のランニングに出かける事にした。

そして授業も終えて本日の部活。

今日は皆ミニゲームということもあり、新入生は張り切っているように見える。まあ、久しぶりの試合形式ということで張り切っているやつもいそうだな。……主に俺。きつとこれが武者震いというやつだろう。

ロードワークやシュート練習などを終え、時間も頃合い。体も良い感じにほぐれているのでいつでも動ける状態だ。

「よしっ。それじゃあ一年と三年は集合！ 二年はコートでの準備に取りかかってくれ」

休憩中に小林さんの声が響く。指示通りに二年の先輩達は試合の準備に、俺達一年と三年の先輩方は小林さんのもとへと集まった。チーム編成などもまだ特に聞いていないし、これから詳しく話すということだろう。

「これから以前話した通り、一年生同士で五対五のミニゲームを行ってもらおう。ミニゲームとはいえ、今日のゲームの動きを大きく評価するからな。今後のベンチメンバー選出にも関わってくるだろう。皆本気で打ち込んでくれ」

「チーム編成についてはすでに決まっています。今から名前順に1から6までのチームを発表しますので、呼ばれた方から準にビブスを受け取ってください」

簡単な説明が終わると次々と名前と番号が呼ばれていく。人数を考えて合計6チーム。となると単純に考えて勇や明と同じチームになる可能性もチームの数に比例して低くなる。二人とも一緒となればなおさらだ。

……ま、覚悟は決めておくか。敵になるというならば……誰が相手であろうとも容赦なく倒すだけだ。

最後の一人が名前とチームを呼ばれ、そのチームに合流した。

これで全員のチーム分けが終了。ちなみに俺のチームは3チーム

でメンバーは丁度5人。今はそれぞれのチームごとに集まって、挨拶を含めた試合前の交流中だ。

「……まあ、確かにありえないことではない。別におかしいことではない。しかし、だからといって……」

たしかに誰が一緒になっても構わないと思っていたのだが。……だがね、だがよ、だがな？

まさか本当にこんなことになるなんて、一体誰が想像できた？ 目の前の現実が信じられず、俺は驚愕の色を隠せない。

「よう要！ 今日もよろしく頼むぜ！」

「二人と同じチームなんて心強い。あらためてよろしくな」

「……ああ。俺もだよ。こちらこそよろしく」

俺にいつものように親しげに話しかけてくる勇と明。俺も不思議に感じつつも返事をする。

まさかの、俺と勇と明。信じられない話ではあるのだが三人が同チームになるという現象が起こっていた。

一緒に部活に入って行動することも多かったから、てつきり先輩達は俺達のうち少なくとも一人は引き離すと考えていたのだが。……俺の考えすぎか？ 逆に連携のしやすさを優先したのか？

あるいは先輩達はこのチーム分け適当に決めたのか？ いやいや、それってどれくらい確立だよ！ えっと全体が33人だから……3/248くらいの確立か？ 低すぎる、ありえないだろ！ こんなところで無駄に運を使い果たしてたまるか！ 頼むからそういうのは緑間を相手にしたときに使わせてくれ！

「たしかにこのほうがチームとしては機能しやすいが、どうも話が上手すぎる気がするんだよなあ……」

……はあ。まあいい。今はチームの振り分け方についてとやかく考えるのはやめにしよう。どうせそんなことには意味がない。理由はどうあれ見知っている人間の方がやりやすいのは確かなんだ。むしろ喜ぶべきことだろう。

それよりもチーム編成において、ここで俺らのチームには一つ問題が発生している。今はその問題をどうやって解決するかを考えない

と。

「よし、全員チームは組めたな?! それでは、これより10分後に試合を始める。それまで各々のチームで作戦をたてるなり練習をするなり、各自自由に動いてくれ。二、三年はコート of 整備ならびに審判を務める様に。」

試合は前半10分、ハーフタイム5分、後半10分。片面コートで2試合ずつ行う。まず最初に1チームと2チーム、3チームと4チームが対決。ゲーム終了後に5チームと6チーム。そして第1試合の敗戦チーム同士だ。各チーム2試合行う。ポジションなどは自由に決めてもらって構わないし、6人のチームはそれぞれの判断で選手交代してくれて構わない。では、第1試合のチーム達からアップを始め「てくれ」

小林が今回のミニゲームの説明を終えると、1年生はそれぞれのチームにわかれて作戦会議へと移って行く。中にはまだ馴染めていない顔ぶれの者達もいるだろうが、今回のミニゲームは一年生同士の交流を深め、お互いの力を知れるチャンスでもある。

マネージャーの東雲と橙乃にいくつか指示を出すと、小林はもうすぐ3チームと4チームの試合が行われるであろうコートへと目を向けた。

「……あら? ひよつとしてもう試合始まつちやいますか?」

「うん? ……藤代先生! お疲れ様です!」

「ああ、小林さんもお疲れ様です。遅れてしまつてすみませんね、どうも仕事が長引いてしまつて」

肩に届くほどに伸びた金髪の、メガネをかけている中年男性がコートを見ている小林へと近づいていった。『藤代先生』と呼ばれた彼は、小林とは違って流暢な話し方でどこかつかみどころの無いように感じられる。

「皆、藤代先生がいらつしやつた。挨拶を!」

「お疲れ様です!!」

「ああ、いえいえ。皆さんもお疲れ様です。どうぞそのまま各々の仕事を続けてください」

部員全員が監督に向かって挨拶する。大半の一年生達は彼と会うのが始めてなため、最初は誰なのかわからなかったようだが、今ので彼が誰なのか理解したようだ。

ふじしろ ゆういち
藤代雄一

大仁多高校バスケット部の監督を務めている男である。見た目からはとても想像することはできないだろうが、こう見えても高校時代にはバスケット部に所属し、インターハイにも出場していたほどの実力者である。大仁多高校の監督としてもすでに就任してから8年目を迎えている。大仁多高校が県内屈指の強豪校と呼ばれるほどになっっていることから、彼がどれほど優れた指導者であるということは言わずもがな。人は見かけによらないものだ。

「それで小林さん。今日がたしかミニゲームの日でしたよね？」

「はい。これからまさに始まるところです。チームもすでにわかれていますし、……先生のお目当てであろう選手も、もうすぐそこでプレイしますよ」

「ああ、彼ですか。……あの銀髪の子ですよね？」

「はい。彼が白瀧要、期待の新人ルキキですよ」

藤代監督の問いに小林は肯定して白瀧の姿を見た。

白瀧はすでに推薦入試の際に藤代監督と面識がある。だがこうしてコートに立つ彼をこれほど近くで見るのは初めてのことだ。どうしても彼に意識が集中してしまうのは仕方がないことだろう。

「それで、彼のチームはどんな編成になっていますか？」

「3チームですね。以前体力測定で取ったデータもありますが……こちらになります」

小林は手元から一枚の紙を取り出して藤代監督に手渡した。藤代はそれを興味深そうに眺めていく。

渡された紙は3チームに所属している五人のメンバーの中学時代のポジションや、体格測定などで判明した選手の大まかなデータであった。

書かれていること選手データは以下の通り。

白瀧要 しろたぎかなめ ポジション：スマールフォワード S F 179 cm

パワー：3

スピード：5

柔軟性：4

スタミナ：5

光月明 こうつきあきひら ポジション：センター C 192 cm

パワー：5

スピード：4

柔軟性：3

スタミナ：4

神崎勇 かんざきいさみ ポジション：シューティングガード S G 176 cm

パワー：3

スピード：4

柔軟性：2

スタミナ：3

真鍋幸一 まなべこういち ポジション：スマールフォワード S F 171 cm

パワー：2

スピード：3

柔軟性：3

スタミナ：2

渡辺航大 わたなべこうだい ポジション：センター C 183 cm

パワー：4

スピード：2

柔軟性：3

スタミナ：3

以上の5人である。ちなみに記されている選手パラメータは5段階評価であり、東雲と橙乃が体力測定の計測値から判断して一定の基準で数値化したものだ。ある程度のずれはあるだろうが、それでも今彼らの状態を知るには十分すぎるほど正確なものだ。

「……これはこれは。もろにポジションがかぶっているじゃないです

か。おまけにこのチームは……肝心なチームの要となるPポイントガードGがない」

「ええ。全体的に今年の新入生はガードの選手が少なかったことに対し、フォワードの選手が多かったですからね。これからコンバードする選手もいるでしょう」

「たしかにインサイドは強そうですが、問題はゲームメイクにボール運びですかね。どういう試合展開になることやら」

藤代の言う通り、白瀧が所属する3チームは神崎以外の4人の選手が他の選手と誰かしらポジションが重なってしまい、しかもその司令塔となるポイントガードが不在という事態が起こっている。体格がいいセンターが二人、それに加えて白瀧もいるため身体能力はそれなりであろうが、個々の能力が高かったとしてもチームとして機能しなければ意味がない。この試合は選選手個人の動きだけではなく、チームとしての動きも見るのでから。

「大丈夫ですよ。仮にも百戦錬磨の男がいる上に、白瀧を含めて三人は仲がいいようなので、上手いように対応してくれるでしょう」

「……へえ。そうなんですか。それは小林さんが最初からそれを目的として組ませただと解釈してもよろしいのですか？」

藤代が探るような視線で小林を見る。事の真意を知りたくなつたのだろう。とてもPポイントガードGの選手が少ないという理由だけとは思えなかつたのだ。

今回のチーム編成にあたって藤代は何も関与していない。試合形式も含め全て小林や東雲達、最上級生達の間で決められたものだ。

「そうですね。色々と試してみたかっとは思いますが。果たしてあいつがどう動くのかを」

小林の視線の先にいるのは期待の新人・白瀧。彼がチームの中心となつてなにやら作戦を立てている。フォワードとしての実力がとてつもないということはずでに理解している。その上で、白瀧がリーダーシップとして動けるか、またこの困難な状況を打破できるのかを小林は試してみたかっ。

「とにかく今回オフフェンスはインサイド主体でいく。明と渡辺、二人でゴール下を固めてくれ」

「わかった」

「おう！」

3チームは現在作戦会議中。このメンバーの中では俺が一番実力があるだろうということ、俺が指揮を執らせてもらっている。すでに親しくなっている明や勇だけではなく他の二人も文句を言わずに納得してくれたので大助かりだ。

……幸いにも今回は体格に恵まれた選手がチーム内に二人もいる。本来ならば俺もリバウンドに参加したいところではあるが、この二人がゴール下に陣取ってくれば問題なくリバウンドも決めてくれるだろう。外には勇もいるし、十分得点源になる。

「ディフェンスは今回は急造チームだし、無難にハーフコートマンツーマンでいく。抜かれたらすぐにフォロウに回ってくれ」

本来なら今回の試合は片面である上に試合時間も短いからオールコートマンツーマンでもいいんだが……その分選手一人一人の負担が大きくなるし、そこまで徹する必要は無いだろう。先輩達も動きを見ればよいと考えているはずだからな。

「ああわかった。しかし、問題は試合中の細かいゲームプランだ。それはどうする？」

「今回は俺が臨時のP Gとして試合中に指示を出していく。だからそのつど俺に合わせてくれ」

「たしかにそれが無難だろうが……ちなみにP Gの経験はあるのか？」

「いや、一度もない」

「ちよ、それで大丈夫なのかよ？」

「なんとかするさ」

勇の心配は最もだが、俺がどうにかするしかない。別に過小評価をしているわけではないが、正直な話、他のメンバーには荷が思いだろ

う。今までは赤司という絶対的指揮官がいたからポイントガードなんてやったことはないけれど、それでも役割は十分理解している。それにポジションから考えて俺がこの中では適任だろう。他のやつらだとスピードや視野、ボールハンドリングなどのバランスが厳しそう

だ。
「まあ、細かい話はおいといて。……アップ始めるぞ。行こうぜ」

ミニゲーム開始まで残り数分、そんなに時間は残ってない。ボールを持って、五人全員がゴール付近に集まる。最終調整として何本かシュートを放つが……問題なくボールはリングをくぐっていく。ま、大丈夫そうだな。他の面子も気負った様子は見られないし普段どおりにやればいける。

しばらくシュートを撃っていると、コート外に三年の先輩が集まってきた。よく見るとその中には藤代監督や小林さん、さらにはマネージャーである橙乃などの姿も見える。もう一つのコートと比べてやけに先輩達の姿が、しかも重要人物が多く感じられるのは、よほどこの試合に興味を持たれているってことか？

「よし、両チーム集合！」

この試合の審判を務める二年の先輩の言葉を受け、皆ボールを片付けてコート中央へと集合する。

俺も体を慣らしながら歩いていく。……あ、そうだ。試合が始まる前にあいつに言っておくのを忘れてた。

「明、ちよつといいか？」

「うん？ なんだい要？ 何か言い忘れていたことでもあったのか？」

「ああ、ちよつとだけ耳を貸してくれ。お前に一つ言い忘れてたことがあった」

前を歩いている明を呼びとめて、あることをそつと耳打ちする。聞き終わると明も「わかった」と返してくれた。

これでいい。なにせ、このミニゲームが先輩達に見せる最初の試合だからな。そのためには明にひとつやってもらいたいことがある。

「よし、両チーム集合！」

審判役の先輩が声を張り上げてコート上の選手達を呼ぶ。

その声に従って選手達が次々と集まってきた。3チームと4チームの戦い。その中でも私はお目当ての銀髪の男性を探すべく視線を3チームの方へと移す。するとほどなくしてその姿は見つかった。

「……………」

しかし、当の彼はチームメイトである大柄な人——たしか光月君、の耳を借りて何かひそひそ話しをしている。今度の作戦のことを話しているのかな？

ああいうところを見ても、これから試合をやるんだな、って思えてどんだん胸が高まっていく。

「……………」ようやく、白瀧君のバスケットを見られる」

彼がスタメンで出場する試合を見るのは実に3年ぶり。こうして試合開始の挨拶の際に、彼がコートにいる姿、私はどれだけ待ち望んでいたことだろう。最初から最後まで白瀧君がコートで躍動する姿。……………それを見たくて、私はマネージャーになったんだから。

光月君と別れると白瀧君もボールを片付けてセンターラインへと向かう。……………と思つたら、何かに気づいたのだろうか足先を変えてこちらのギャラリィに向かって歩いてくる。そして、私の目の前で止まった。

「……………」えつと、白瀧君？」

「橙乃さん。以前の話で伝えられなかった俺の意志を……………この試合で見せる。俺のバスケットで」

「……………」うん」

「それだけだ。それじゃあ」

予想外の事だったけれど、白瀧君は手短かに用件だけを述べてすぐに行ってしまった。

……………白瀧君の意志？ それをこの試合で見せつける？ どういうこと……………つまり、それはまだ白瀧君が諦めていないってこと？

「どうしたの橙乃さん？ いつの間にか白瀧君と仲良くなっていたの？」

「……いえ、違いますよ東雲先輩」

ニヤニヤと含んだ笑みを浮かべながら尋ねてくる東雲さんには軽く否定しておく。

仲良くなつてなれていない。まだお互いのことさえほとんど理解できていないのだから。むしろこの間の会話では私のせいで嫌な空気にしてしまった。

……だから、白瀧君。もう一度見せて。あなたのバスケットを。私の目に焼き付けさせて。

センターラインを挟んで10人の選手が向かい合う。両チームともメンバーが五人ずつのため、今回はこの選手達が交代することなく最後まで戦いぬくことになる。

3チームは黄色の、4チームは赤色のビブスをつけている。この自チームの色を見て白瀧はなぜか心底嫌そうな顔をしていたが、その理由は本人のみぞ知ることだろう。

お互いの顔合わせの中、やはり警戒すべき体格の良い相手選手に目が行く。……しかし、4チームの選手達にいたっては一番体格の良い光月よりも、その隣の銀髪の男——白瀧要へと注意が行った。

(これが……帝光中学三連覇の原点となった、『神速』か)

(5番もそうだが、それでも警戒すべきはやはりこの男だ)

(こうやって向かい合っているだけで……それだけで伝わってくる)

——『神速』。その二つ名を初めに呼んだのは一体誰だったのだろうか。もはやその名前を聞いただけで相手は警戒するほどになっている。

何度か練習で顔をあわせてはいる。話をしたこともある。しかし、こうやってコートで敵として向かい合うとなると今までとは違った迫力があつた。それは数多くの激戦を繰り広げてきたものだけが

持っている……気迫そのもの。

——帝光の原点。帝光バスケ部が全中三連覇に至る布石となった男。今でこそ天才の影に隠れているものの、当時は他のメンバーの誰よりも評価が高かったのだ。なぜなら彼は一年の大会記録の中、チーム内で青峰に次ぐ得点数、赤司に次ぐアシスト数を記録し、その存在を日本中に知らしめたのだから。

「それではこれより、3チーム対4チームの試合を始めます。……礼！」

「よろしくお願ひします!!!」

今、白瀧の高校での初めての試合が、そして彼にとっても久しぶりのスタメンでフル出場する試合が、始まるうとしていた。たとえ公式の記録に残らなくても人々の記憶には残る。そしてこれからの未来への架け橋となる。

3チーム	スターティングメンバー
#4	白瀧 <small>しろたき</small> ポイントガード P G (臨時) 179cm
#5	光月 <small>こうづき</small> パワーフォワード P F (臨時) 192cm
#9	神崎 <small>かんざき</small> シューティングガード S G 176cm
#11	真鍋 <small>まなべ</small> スモールフォワード S F 171cm
#12	渡辺 <small>わたなべ</small> センター C 183cm

4チーム	スターティングメンバー
#4	牧村 <small>まきむら</small> ポイントガード P G 167cm
#6	青樹 <small>あおき</small> スモールフォワード S F (臨時) 182cm
#7	北野 <small>きたの</small> シューティングガード S G 177cm
#9	山中 <small>やまなか</small> センター C 186cm
#11	本田 <small>ほんだ</small> パワーフォワード P F 184cm

第五話 力の証明（前編）

「さて、それじゃあ明。最初の一仕事しっかり頼むぞ」

「おう！ 任せてくれ！」

この試合においてはチームの主将となっている白瀧から激励を受け、光月が力強く答えた。

試合開始のジャンプボール。両チームとも最も背の高い選手が選ばれた。3チームからは5番の光月、4チームからは9番の山中が前へ出る。二人はセンターサークルの中でセンターラインを挟んで向かい合う。主審も他のメンバー全員がライン外に出ていることを確認してボールを構えた。

「……それでどう思いますか小林さん。この試合については？」

その様子を見て、コート外で椅子に座って観戦している藤代監督が、同じように隣で座って見ている小林に尋ねた。見所はやはり白瀧の動きであろうが、果たして彼がどのようなゲームを作っていくのか、キーポイントを主将としてはどう考えているのか個人的に知りたいたと思ったようだ。

「そうですね。やはり両チームとも最初の立ち上がりが重要だと思います。白瀧のチームはまだポジションに不慣れという心配があるでしょうし、4チームも相手に白瀧がいる以上は一つのミスも許されなない。となるとどちらのチームもまず確実に一本を取りに行くかと」

「はあ、なるほど。……たしかに彼らにとっては高校で初めての試合ですし、私達が見ていますからね。少しでも緊張をほぐすためにも先取点は欲しいところでしょう」

お互い即席チームであるし、まだ完全に力量を知り尽くしているわけではない。相手の実力のこともある。今年初めての試合でもあることも考えると、最初は慎重に攻めて試合の流れを掴み、チームの士気を高めることが最良の手。……というのが二人の考えであった。

「まあどちらにせよ、俺にとっては白瀧のバスケットを見られれば構いませんよ」

そう言う小林は視線をコートへと戻す。

白瀧たちも始まりの時を未だ遅しと待ちわびている。そして今まさに、その試合が始まろうとしていた。

全員の準備ができたことを確認し、主審はボールを垂直に上空へとトスする。そしてそれを見てジャンパーである明と山中は空中へと飛び上がった。

「ッ……!」

ティップオフ
「試合開始!!」

山中がボールをタップし、ボールは味方の本田の下へとわたる。すぐさま渡辺が詰めるが、その前に本田はポイントガードの牧村へとパスする。牧村も危なげなくボールを受け取った。

「始まった。まずは4チームボールでスタートだ!」

「よしっ! ……まずは一本。ここ大事に攻めていくぞ!」

ボールを最初に取ったのは4チーム。

牧村は右手でドリブルをしながらも前線へと上がろうとしている味方に指示を出す。その慣れている姿から、彼がポイントガードとして長い間コートの中で味方を指揮していた事が伺える。

牧村とて白瀧の噂は聞いている。光月など他にも要注意選手もいるが、それでも危険視すべきは白瀧だ。

白瀧がいる以上、先制されるのはまずすぎる。帝光バスケット部の実力から考えて、リードを許してしまえば点差などあつという間に開いてしまうし、勝っていたとしてもあつという間に点差は縮められてしまうのだから。だからこそ、なんとしてもその前に先制して流れを引き寄せる。そのためにもこの一本を確実に決めて味方を落ち着かせよう。

——そう牧村が思っていた瞬間、一筋の風と共に目の前を何かを通り過ぎた。そして牧村がそれが人が通り過ぎたのだと気づいたのと同時に、今度は彼の右腕からボールの感触が消えた。

「なっ……にいつ!?!」

「なにを悠長なことを言っているんだよ。……俺の気はそれほど長くはないぞ」

その言葉を受けて、白瀧のステイールだということを理解する。自

分の横には先ほどまでいなかったはずの銀髪の男が、自分の目の前まで来てボールを奪っていた。

『いつの間に入り出していたのか』と白瀧の接近に気付けずに動揺する牧村をその場で抜き去り、白瀧は疾走する。

(まずい……やられる！)

わかっていたはずなのに、警戒していたはずなのに体が反応できなかった。一瞬で牧村の体が危機感に支配される。

ただでさえボールの支配権を自分達が手に入れたと思いこんでいたせいで、すでに味方二人の選手が前線に上がってしまったている。今自分も抜かれたせいで守りは完全に手薄だ。しかも相手はあの『神速』と謳われた白瀧だ。あつという間にゴールまでたどり着いてしまおうだろう。

「くそっ！ そう簡単に行かせるか！」

だが、まだ一人自陣深くで警戒していた北野がフォローへと回っていた。

先には行かせないと北野が白瀧のマークに当たるが、それでもスピードを追うだけで精一杯の状態。しかも目の前まできたかと思つた瞬間白瀧はロールターンでかわし、あつという間に突破していった。

「ああもう！ (別に特別なことはしていない。プレイそのものは普通なはずなのに……追いつけない！)」

目で姿を追うのがやつとのことだった。北野は白瀧の動きに目を取られて思わず足を止めてしまう。

そうして二人の選手を置き去りにして、白瀧は真直ぐゴール向かって直進していく。

「……ッ!?!」

しかし、そんなとき白瀧の視線が斜め前方へと流れた。そこには自分に接近するようにアウトサイドから回り込みながらも、ゴール下へ走りこんで行く敵チームの選手。

「行かせねえよ白瀧！」

「へえ……。 (こいつ、まさか最初から俺の動きを読んでいたのか?)」

本田がゴール下へと回り込む。彼は白瀧がボールをステイールした瞬間から、いや彼が牧村に接近しはじめたときにはすでにディフェンスへと走り出していた。ゆえに白瀧が二人を抜いている間にできたわずかな時間で、なんとかディフェンスに戻る事ができた。

体格に関しては言うほど大きな差はないものの、パワーなどは本田の方が若干上だろう。

時間をかけずにこのまま突っ込んだほうがよいと判断したのか、一度視線を横へ流すフェイクを入れると白瀧は勢いそのままにジャンプし、レイアップシュートのモーションに入る。

「(これは、フェイクじゃない……?) 俺一人なら問題ないってことか?」だが、そうはさせねえ!」

本田もシュートコースを塞ぐように飛び上がる。これで思うようにシュートはできない。

しかし、白瀧は本田が飛び上がったことを見るとレイアップシュートには入らずに、ボールを持った右腕を真後ろへと放った。

「なっ……パスだど!」

「さあ思いつきり決めてやれ、——明!」

二人の体が重力に従ってゆっくりと地面へと落ちていく。そしてその姿と交錯するように、白瀧の真後ろから巨体が空中へと躍り出した。

走りこんでいたのは光月だった。白瀧からボールを受け取った光月は、一気にジャンプする。そのまま光月は両腕を勢いよく振り下ろしてボールをリングに叩きつけた。

ドガッ!

激しい音が上空で響き渡る。それにわずかに遅れてリングを潜り抜けたボールが落下し、そしてダンクを披露した光月も危なげなく着地した。

「ふうっ……」

「お、……おおおおっ! 試合開始直後に、いきなりダンク炸裂! 光月だ!」

「その前の白瀧のパスもすげえ! なんでシュートモーションからあ

んなパスが正確に出せるんだ!？」

最初から派手なダンクが決まったことで、観客席からは歓喜の聲が上がる。その前の白瀧のプレイもあって周囲は最初から盛り上がりを見せていた。

先制点は白瀧率いる3チーム。二点、スコアボードが開始早々に変わる。しかも白瀧のスピードと明のダンク、相手に強い印象を与えることができた。これは点数以上に大きなものがある。

「相変わらず派手だな、オイ。しかも俺達を飛び越えてダンクを決めるとはな。……そこはどうなの?」

「いや、僕に『初っ端から派手に決めろ』って言ったの要だよね!? パスを出したのも要だし!」

「まあな。……まあなにはともあれ、ナイス!」
「ああ!」

自分の上から決めたことに不満を漏らす白瀧に光月は講義する。最も本気で怒って言っているわけでは無いのですが、白瀧は笑顔になった。ゴール下で二人はハイタッチをかわし、並んで戻っていた。

試合開始前に白瀧が光月に耳打ちしたこと。それは、『試合開始直後に自分がボールを持ったならば、すぐに走り出すこと。そしてもし相手の戻りが早いようならば、自分の近くに回りこんでおくこと』ということであった。

白瀧は序盤はじっくり攻めようなどとは、最初から微塵たりとも考えていなかった。むしろ主導権を握るために強襲を仕掛けるつもりでいた。そこで明に自分が攻めたときにはどんな状況でも対応できるように、指示しておいたのだ。レイアップのシュートモーションに入る直前に光月の姿は横目で確認していたためにパスも安心して実行できた。

その結果、作戦は成功した上に良い印象を敵チームならびに観客の先輩達に与える事に成功。幸しい展開だ。

「いや〜。今年の一年生はなかなかどうして派手ですね〜」

「ええ。しかも絶妙なタイミングで決めてくれました。白瀧以外にも

優秀な選手はいそうですね」

「小林さんの予想、いきなり外れましたね。まあ私もですが。」

開始早々にこれほどのものを見せてくれるとは。……彼みたいな選手、私は好きですよ」

藤代監督や小林も今のプレイは好評だった様子。ドリブルにパスと高い技術を見せた白瀧だけではなく、得点を決めた光月も注目の一人となったようだ。そんな二人の会話をたまたま聞いていた橙乃も安堵の息をつく。頬が自然と緩むのを感じ取れた。

「おっし、DF集中！一本止めるぞ！」

彼女が視線を戻すと、白瀧が早々にセンターラインにまで戻って全体に指示を出している。かつて橙乃が見た彼の姿とはまた違うものの、コートで生き生きとした姿を見れることには変わりない。そのことが素直に嬉しかった。

「ちっ！」

「落ち着け、すぐに取り返すぞ！」

一方、4チームの中では突然の急襲で早速焦りが生じている。

試合は本田からリスタート。ボールを受け取った牧村は悪態をつくく本田に落ち着くよう諭す。たしかに先制されてしまったのは痛い。が、まだ試合は始まったばかり。ここで相手のペースに乗せられるのはまずい。白瀧のお得意の速い展開に持っていられないよう、時間をかけて攻めあげていく。

牧村は前に残っているメンバーの様子を見ながらドリブルを開始するも、センターラインを越えたところまでボールを運んだところで一旦停止する。白瀧が自分のマークについたからだ。

(……相手ディフェンスはハーフコートマンツーマンか。しかも俺に白瀧がついているところを見ると、うかつに進めない！)

見ると他のメンバーにも一人ずつマークがついている。

牧村には白瀧が、北野には神崎が、山中には光月が、青樹には真鍋が、本田には渡辺がそれぞれ相手を好きにはさせまいと張り付いていた。マンツーマンディフェンス、たしかに今回はお互いが即席チームだし妥当な布陣であろう。

特に辛いのはボールを保持している牧村だ。相手は守備範囲も広い白瀧だし、正直分が悪い。悪すぎると言つていい。ドライブはよほどのことでない限り考えないほうが良いだろう。

「牧村、くれー！」

「ッ！」

どう攻めるか牧村が考えていると、青樹から声がかかる。真鍋のマークを振り切って直接ボールをもらいにきたようだ。牧村は白瀧にボールを奪われないように体を動かし、斜めのバウンドパスで青樹へとボールを渡す。

パスは何とかつながった。受け取った青樹はそのまま真鍋をかわり、ドライブで切り込みジャンプシュートを放った。

渡辺がヘルプに入り、シュートを止めるべく跳躍して手を伸ばすが……彼の指先はわずかにボールには届かない。

ガンツ、パシュツ！

ボールはバックボードに一度当たると、計算された角度でリングをくぐり抜けていった。

「4チームもすぐに返した！」

「まだ始まったばかりだ、頑張れよ！」

「……すまん」

「気にするな、それよりも次だ。切り替えていくぞ」

すぐさま同点となった。あつという間に抜かれて失点の原因となってしまうた真鍋が謝るが、白瀧は気にせずリスタートのボールを受け取る。

今度は相手チームも隙をつかれないようにと、戻りが速い。先ほどのような奇襲というわけにはいかないだろう。

4チームのデیفフェンスはゾーン。……しかも陣形はトライアングルツ。山中・青樹・本田の三人のゾーンでインサイドを固め、外の白瀧には牧村、神崎には北野がそれぞれマークについている。

(うちのチームの攻撃力を下げるためか。元々俺のことは知られてたみたいだし、さっきの明のダンクでインサイドはだいぶ印象づけた。となるとここはアウトサイドから攻めたほうがいいのか。……いや、ま

だだ。それはまだ早い。もうちよい中を警戒させるとするか)

想定外のことではあったが、白瀧は落ち着いている。

4チームがとった方針は妥当なものであるろう。たとえば牧村が白瀧に抜かれてもこのゾーンならばすぐにフォローに入る事もできる上にインサイドも固められる。それなりの高さもあるし、十分な陣形だろう。

相手の動きと自陣のポジションニングをしつかりと確認すると、白瀧は突如体勢を低くし、ドリブルのスピードを速める。

「ッ！(来る！……右か！)」

牧村は瞬時に白瀧の動きの変化に反応し、彼の速さについていけるように右後ろへと足を引く。

(反応は中々。だが、残念ながら不正解だ)

しかし白瀧は前進するかと思いきや、前へとはじいたボールを自分の股下を通して後ろに戻し、左サイドへと切り込んでいった。

(そんな……逆!? しまった、抜かれる……)

「悪いな、通させてもらおうよ」

レッグスルー、白瀧が得意としている技術の一つ。

彼の速さに注意が行き、焦ってしまった牧村はこの動きに対応できなかった。体が急速な変化に対応できずにその場でよろけてしまう。

牧村を抜き、白瀧はゾーン内側へと突入する。

「ヘルプー！」

すかさず白瀧に本田がマークにつく。これで牧村も体勢を立て直せば挟み撃ちにできる。

しかし白瀧はそのままシュートへはいかず、フリーになっている真鍋にパスを送った。パスを受けた真鍋はすかさずジャンプシュートを放つ。

「ぬあっ！」

「うっ！(しまった。シュートがそれだ。……これは、入らない!)」

真鍋がそのままシュートを放つも、そのパスに反応して動いた青樹の指がボールに触れた。

当たった場所が指先とはいえ、思わぬ衝撃を受けたボールは描く弧

の形を変えている。これは入るかどうかわからないところ。いや、このままではおそらく入らない。シュートがはずれた場合に備えてゴール下では選手達がポジションを争いながら待ち構えている。

「ゴール下、リバウンド頼むぞー！」

「おう!!」

「ちいつ、こいつ……!!(どつしりと構えてびくともしねえ!　なんだこのパワーは!?　これじゃあポジションを奪えない!)」

ボールの行方を察した白瀧の声に応えるように、ゴール下では光月と渡辺が良いポジションを保持していた。

山中がなんとか光月からポジションを奪おうとするが、光月の体を張ったスクリーンアウトの前に、身動きさえとることができない。

ボールが徐々に落下して行く。

ガツガツ、とボールは二度リングにぶつかり、そして内側をくぐる事は無くコートの方へと落ちてくる。

「おおっ!!」

空中のボールの所有権を巡って光月、渡辺、山中、本田の四人が空中へ舞い上がる。

全員が全力でボールへと手を伸ばす中、最初のポジションで山中よりも内側に入っていた光月が両手でがっしりとボールを確保した。

「くそっ!!　このやろっ!!」

「要ー!!」

オフエンスリバウンドを取った光月は、着地すると自身へのクが厳しくなる前にボールをすばやく白瀧へと回す。牧村がブロックに手を伸ばすが、間に合わない。ブロックを気にすることなく白瀧はジャンプシュートを放った。

シュツ、と何も妨害を受ける事が無かったボールは綺麗な弧を描き、リングにぶつかるともなくリングをくぐり抜けた。これで白瀧の初得点。

「ナイスリバン!!」

「ナイツシュ!!」

4対2。再び3チームがリード。白瀧と光月の活躍に否応でも士気は上がる。先輩達も盛り上がってきた。

3チームの面々がディフェンスに戻ろうとしている中、渡辺のスローインから再開。本田がボールを受け取ると、すぐさまそのボールをハーフコートを超えるような勢いのロングパスを放った。

「やばっ……!」

「速攻!」

そのパスの意図に気づき、すぐさま白瀧は身を翻して一挙に加速する。

振り替えてみると、すでにリバウンドに参加していなかった青樹がハーフライン付近にまで上がっていた。得点直後に油断していた白瀧たちの隙をついた速攻。その場でジャンプし、手を伸ばしてパスを受け取った青樹は、フリーのまま無人のコートを上がっていく。

(さっきのお返しだ……!)

仕返しとばかりに、青樹はレイアップシュートを放つ。

……しかしシュートを放とうとした瞬間、いきなり横から何者かの手が伸びてきて、ボールをはじいてしまった。弾かれたボールはボードへ命中し、コートの中へと戻っていく。

「なっ……白瀧!?(嘘だろ。さっきまでオフセンスに参加していたっというのに。……こいつ、いつのまに帰ってやがった!?)」

「おいおい、俺がお前達の速攻を許すとも思っていたのか?」

白瀧は青樹の攻撃を防ぎ、悠然と語る。仮にも速さを極めた男がそう易々と相手が速攻を語ることを許すはずがなかったということだ。

完全にフリーだと思っていたのに、ブロックに現れた白瀧に驚愕を隠せない青樹。そんな青樹をおかまいなしに、白瀧は着地するや否や先ほどはじいたボールへと向かう。まだサイドラインを割っていない、ボールは生きています。そして全速力でボールを確保すると、白瀧はそのままの速度を維持してサイドラインに沿ってゴールへと向かう。

「そう何度も行かせるとでも……」

「行かせて貰うさ! 勇!」

すかさず牧村がフォロウに入るが、白瀧は相手にせずに斜め前方の神埼へとパスを回す。

「うっ……?」

「行け、要!」

牧村の意識がボールに、そして神埼へと移る。その間に白瀧は牧村を逆方向から抜き去り、ハーフラインを越えて行った。すると、パスを受けた神埼がすぐさま走りこんできた白瀧にリターンする。

「(連携プレーか。しかもこんなスムーズに……対応できない!) まずい、白瀧を止めろ!」

牧村も全力で追いかけるが、白瀧がドリブルをしているというのにも関わらず追いつけない。そう言っている間にも白瀧は再びゾーンへ進入する。このままではまたあのスピードに掻き乱されてしまうと牧村は思い、ディフェンスに戻っている三人に叫ぶ。

だがインサイドを三人で固めるものの、人数は4対3。完全にアウトナンバーだ。これでは止めるのは難しい。

「二本目、もらった!」

「このっ……あまり調子に乗るなよ!」

「……なーんちゃって!」

「……え?」

ここで勢いづかせるわけにはいかないと、本田がすぐに白瀧のチャックに出ようとするが、ディフェンスの間合いに入る前に白瀧はボールを自分の股の下を通してバックパスする。てっきりドライブしてくると思った本田の動きがその場で硬直してしまった。

「外すなよ、勇」

「当たり前だ!」

「いっ……!?(またしてもリターン!? 駄目だ、追いつけない。……やられる!)」

ボールは白瀧の後ろに走りこんできた神崎の手に収まった。

白瀧の声に應えるように、彼の後ろでボールを受け取った神崎の体が飛び上がる。牧村も本田も突然のことで体が反応することさえできない。フリーになっていた神崎はそのまま高い打点でボールを

放った。安定した綺麗なフォームだ。

外れたときに備え、ゴール下では敵味方四人の選手が準備に入るが……無駄なことであった。ボールは静かにリングを射抜いた。

「……っしやあー！」

「3P、決まったー！」

「これで7対2。3チームが乗ってきたぞ！」

ボールの行く先を見届け、神崎はその場で歓喜の声を上げる。初発で決められたのは大きい。

神崎のスリーポイントシュートが決まり、先輩方も一斉に歓声を上げた。試合開始からわずか1分が経過したところでいきなり7対2。流れは白瀧のチームになっている。

「……ふむ。今スリーを決めた9番の彼、たしか神崎君と言いましたか？彼の動きも良いですね。白瀧君と動きを合わせられる彼のとの相性もそうですが、何よりも彼のアウトサイドシュート。シュートフォームが整っていて綺麗なだ」

「たしかに。パスを貰ってからの反応も中々のものでした。うちはSGの層はあまり厚くありませんし、彼にもかなりの期待が持てそうです」

この試合初めてのスリーを決めた神崎にも藤代と小林の注目が集まった。

今の動きを見ても、十分すぎるほどの働きを示してくれた。大仁多高校は去年スタメンであったSGの選手は健在であるものの、現ベンチメンバーにはこれといった選手はさほどいない。そういったチーム事情からも神崎の姿は二人の目にはより濃く移った。

「ナイス、勇！」

「おうー！」

白瀧と神崎が笑顔でハイタッチをかわす。光月もその場に雑じつて互いの手を軽く叩きあう。

……白瀧が上手い具合に周りを生かしている。一人の強力な選手が入るとワンマンチームになりがちだが、この試合ではチームとして機能している。一人一人の個性が出ていてその人の役割もはっきり

して、これならば先輩達も評価しやすいことだろう。白瀧もそれを理解して、その上でゲームメイクしている。

「さあ、ガンガン行こうぜ！」

「おうー」

「おおっ!!」

白瀧の力強く頼もしい言葉に、チームメイトもはつきりと答える。チームの士気も上がってきた。盛り上がった雰囲気のまま続けられればまず問題ないだろう。波に乗っている今の彼らの攻撃力は相当なものだ。

プレイだけではない。こういったチームメイトへの声かけなど、白瀧は精神的な支えとなっている。

もしも白瀧が速さだけの選手だと感じていたような選手がいるのなら、この場で撤回すべきだろう。仮にも彼は帝光中で『キセキの世代』と共に戦っていた男だ。そんな生半可な男であるはずがない。それをその身で証明するかのよう、再び白瀧はコートを駆けて行く。

「……すげー」

本日だけで一体何回目になるかわからない。全く同じ言葉が自然と私の口から再びこぼれた。その原因は全てコートに立っている彼、

——白瀧君。

オフエンスに参加していてシュートも決めていたというのに、一瞬で切り替えて相手の速攻を防いだ。しかも、それだけではない。彼は着地するとそのままボールを奪い、コートを駆け上がる。途中相手ディフェンスのマークにあっても、まるで何もないかのように神崎君との連携でかわし、再び疾走した。

「……ああ」

何も言葉にできなかった。白瀧君があつという間に私達の目の前を通過して行く。その躍動する姿がとても勇ましく映った。その姿

がああ時の白瀧君の動きと完全に重なった。

これで最早相手に止める術はない。なにせ白瀧君がドライブで切り込む上に、先ほどゴール下で圧倒的存在感を放った光月君などもある。人数も4対3。これで止めろと言うほうが無茶だろう。

『二本目を決める』。そう言い放った白瀧君の姿、敵には脅威に見えただろう。だが私は彼の頼もしい姿を見れて、言葉を聞けて嬉しかった。

……しかし、そこで私は再び驚かされる。直接切り込むと思われた彼が、シューターの神崎君へと股下からバックパスをさばいた。ディフェンスの裏をかいたおかげで相手は反応すらできずに、彼のスリーポイントシュートを許してしまう。

私は思わず持っていたスコアボードを落としてしまった。我に返るとすぐさま拾い直して記述する。

フリーだったとはいえ、そのように誘導したのは白瀧君で間違いない。これでアシストパスは2つ目。彼の得点も含めて、今のところチームの全ての得点に関与している。

「さあ、ガンガン行こうぜ！」

「……ッ！」

白瀧君の声コートに響き、私の耳にも届いた。書く手が止まり、味方を鼓舞するこの言葉が私の記憶を揺さぶる。……懐かしい。たしかこれを聞くのは3年ぶり。彼がこうやって仲間と躍動する姿も、笑ってコートに立つ姿も。

試合前に言った彼の言葉が頭の中でよみがえる。

『以前の話で言えなかった俺の意志。……この試合で見せる。俺のバスケで』

……ああ、本当だ。たしかにこの試合で彼の意味がわかった。

彼は、決して諦めてなんかいない。今もまたあの場に立ちたくて、仲間と一緒にコートに立ちたくて……それで今もバスケをしているんだ……

「……ここまで差が生まれるものなのか」

目の前で行われている試合を目にして、小林は思わず驚愕の声をあげた。

前半戦を三分残した状態で、スコアは19対9。白瀧率いる3チームが10点のリードを守っている。

お互いが一年生だけで構成されている、まだ若いチーム。それにも関わらず、一人の選手——白瀧によって試合の流れは一方的に傾いていた。

オフェンスでは味方をサポートしながら自身も得点を重ね、ディフェンスにおいてもその広い守備範囲を利用してステイールを積極的に狙い、敵の攻撃の芽をつぶしている。

「間違いない。白瀧要は本物だ。……これが、帝光中学のユニフォームを着ていた男の実力か」

今回の試合で彼の実力を測ろうと考えていた小林であったが、逆に思い知らされた。フォワードとしての力のみならず、司令塔としてポイントガードの彼の立ち回り、そして味方を支え鼓舞するリーダーシップ。そのどれもが小林の想像を超えていた。

……そして彼への期待と同時に、まだ見ぬ強敵『キセキの世代』への恐怖が胸にあふれた。

この白瀧でさえスタメンでなかったというのだから、彼以上の実力であると言われている、『キセキの世代』の選手達の底が知れない。

(だがそれでも、こいつがいるというのならば去年果たせなかった優勝も夢ではない。共に頂点を目指せるというものだ)

気が付いたら小林は笑みを浮かべていた。これから先、白瀧と共に戦う試合のことを考えていたのだろう。

彼ほどの実力ならばスタメンに選ばれることは当然であろう。きつとすぐに共に戦うことになる。彼ほどの実力を持った選手と共に戦えるということは、一選手として嬉しいことだ。安心して背中を預けられる。

(だからこそ早く上がって来いよ、白瀧)

小林は心の中で白瀧へ激励のエールを送った。
視線を再びコートへ向けると、丁度神崎がシュートを放っているところであった。

3Pラインからのシュート、入れば3点が加わるところだが……マークについている北野がかけているプレッシャーのせいか、体勢がよくない。

ボールはリングにあたり、はじかれてしまう。

空中のボールをめぐるつて再び空中戦が行われるが、流れた方向に恵まれたこともあって今度は渡辺がオフエンスリバウンドを取った。ボールを確保すると、白瀧へ回して立て直しを図る。

「さあ、今度はどう攻める？」

ドリブルをしながらも白瀧は前を見据えていた。相手は変わらずゾーンディフェンスを続けている。インサイドのマークが特に厳しい。

視線を右に移すと……そのまま白瀧は神崎へとパスを出した。

「また神崎に？ 徹底的にスリーで行くつもりなのか……」

「いや、違いますね」

外からの攻めだと予測するも、それを隣で聞いていた藤代が即座に否定した。

見るとパスを出した白瀧がそのまま神崎の方へと走り出していた。その動きに気づいた牧村も白瀧を追うように走り出す。

「勇、戻せー」

白瀧の声に反応し、神崎はボールを持った手を後ろへと流した。

ヘルプに入った白瀧は速度そのままにボールを受け取り、右サイドから攻めるようにフェイントをかけ、逆について神崎の左下へとダツクイン。

「……フェイクか！」

「上手いですね。スペースができて右サイドから攻めるよう見せかけて、インサイドへ。マークについていた4番も引き離せた」

藤代の言うとおりに、牧村もフェイクにかかり白瀧はフリーとなった。

青樹がすかさずヘルプに入るも、白瀧は高速ロールであっさりとかわし、ゴールへ向かって飛ぶ。

「させるか！」

「……ッ!？」

しかし、白瀧の好きにはさせまいと二人の選手がブロックに飛んだ。

「ブロック二人！ しかも、高い!!」

現れたのは本田と山中だった。白瀧よりも背丈が高い彼らはシュートコースを完全にふさぎ、白瀧の前に立ちふさがる。

……そんな中、白瀧はボールを所持していた右腕から左手へと移し、二人の腕をかわすようにそのままボールをリングに向けてふんわりと浮かせるように放った。

「強引にシュートにいった！ ダブルクラッチだ！」

「いや、それにしても体勢が厳しいです。おそらくオフンスリバウンドを狙った上で……」

だが高速で動いていた上に二人のブロックがあつたことで上体のバランスは厳しいものだった。藤代もこれは入らず、味方を信じてリバウンド狙いのシュートだと感じた。

……しかしボールは一度ボードに当たると、パスツと小さな音を立ててリングをくぐった。

「……これはこれは」

「無理やり決めただど!？」

実力者である二人もこれには驚愕した。あれだけ厳しい条件が揃っていたというのにも関わらず、あっさりとした決めた白瀧に対してさらに期待を高めていた。

「ナイツシュ、要！」

ディフェンスに戻りながら、白瀧は神崎や光月と拳をあわせた。

難しいシュートを決めた後とはいえ、その姿に油断は微塵たりとも感じられない。すぐさま全員に指示を飛ばしていた。

「これほどとは。噂以上の選手、ですね」

「あれがかつて帝光中が誇った『神速』。——白瀧要！」

圧倒的な速さ。一つ一つの洗練されたプレイ。チームを支える並外れた精神力。

とてもついこの間まで中学生であったとは思えない彼の動きは、彼の姿は、試合を見ている全ての者達を魅了していた。

第六話 力の証明（後編）

鋭いドライブで白瀧がディフェンス二人を悠々と抜き去り、他の注意も引き寄せたところで出されたパスは光月の手に渡り、彼のゴール下のシュートを許した。今日のこの試合だけで幾度と放たれた同じ攻撃パターンではある。しかしそれを止める術はなかった。

スコアボードが残り7秒を示したところで得点が決まった。4チームはせめてあと一本でも決めて点差を縮めようと、速いパス回しで駆け上がっていく。

牧村から本田へ、本田から青木へ、そして青木から再び牧村へとボールが渡っていくものの……

「……ッ、白瀧か！」

牧村へボールがわたるはずのボールは白瀧によって奪われてしまった。このステイールにより、ボールは再び3チームのものとなる。

ボールを手にした時点で残り時間はあとわずか2秒。もうパスを渡す時間さええない。

それを理解した白瀧は奪ったボールを手に、フォームを整えるや否やその場からすぐさまシュートを放った。

「しまっ……い！」

「……いけっ！」

敵チームからは焦りの声が、味方チームからは後押しとなる声がこぼれる。

ハーフコートというゴールからかなり離れた場所からのシュート。ゆえにその分だけシュートを決めることは難しくなる。それでも白瀧は出鱈目にうつことはなく、ボールは綺麗な弧を描いて空中を飛んでいった。

「……まあ、緑間でもあるまいし。こんなところからでは決まりはないよな」

だがシュートを放った白瀧が逸早くボールの行く末を悟り、旧友の名前を苦々しく呟いた。

そして彼の発言通りボールはリングをくぐることなく、ボードに直撃し地に落ちた。

「前半戦、終了です」

ブザーが鳴り、審判が前半戦の終了を告げる。両チームの選手はそれぞれのベンチに下がっていった。選手達は先輩やマネージャーよりタオルと補給用のドリンクを手渡され、後半に向けての準備をしている。

「よしっ、いい感じで前半戦を終わらせられたな」

「ああ。最後の一本を決められなかったとはいえ、あれはさすがに無茶だったしな」

「ここまでは俺達が完全に押している。このままのペースでいけるぜ！」

前半戦の結果を振り返った神崎の声に呼応し、真鍋や渡辺からも明るい意見が出てきた。

折り返した時点で点数は27対13。ここまでは白瀧の活躍もあり3チームは問題なく試合の流れをつかんでいた。

「だけど安心するのはまだ早いよ。そろそろ向こう側も何か仕掛けてくるかもしれない」

「ああ。点差が開いているとはいえ油断はするなよ。まだ試合は終わっていない」

慎重な光月の意見に同意を示すように、浮かれ始めているチームメイトを諭す口調で白瀧は話した。

ここまでは両チームともタイムアウトの使用もなく、試合中に司令塔であるポイントガードが一つ一つ指示を出すしかなかった。だがこのハーフタイムでチーム内で十分話し合うこともできるし、新たに作戦を変えることもできる。前半戦と同じように試合が進むわけではないのだ。油断していいわけがない。

「……作戦方針に変わりはない。後半戦もディフェンスはマンツウでいく。そのままマークについてくれ。オフフェンスは向こうの出方次第ではあるが、基本的には変わらない。俺がボールを回していき、フリーの状態を作らせる。」

ただ、前半は皆少し動きが硬かったりシュートが消極的な場面がうかがえた。高さは明のおかげでこつちが勝ってるんだ。シュートが外れることを恐れるな、このまま攻め続けるぞ！」

「おうっ！」

試合の区切りとなるハーフタイム。白瀧率いる3チームもこれまでの反省点や今後の展開についての作戦会議を行うことができた。

ここまでの試合は彼らが押しているものの、相手である4チームは前半戦に特に大きな動きを見せなかった。だが後半戦からは3チームの戦力のことと把握し味方選手のことと理解してきただろうから、何かしら動きを見せることが予想される。

白瀧は今一度全員に注意を呼びかけると、士気をより高めるために声を出した。それに呼応するように光月や神崎達も声を上げる。

「それでは、後半戦を始めます！」

「よしっ、皆行くぞ！」

審判の開始の合図を受けて彼らは再びコートへと戻っていく。白瀧続き、他の四人も立ち上がった。

後半戦は試合開始のジャンプボールを取れなかった3チームのスローインからスタートする。審判よりボールを受けとった真鍋が白瀧へとボールを回す。

ボールを受けとった白瀧はいつもどおりドライブで駆け上がろうとしたが……自分の目の前にいる者達の存在に気づき、ドリブルに移ろうとしていた腕を空中で止めてボールを保持した。彼の想像通り、4チームは開始早々にディフェンスのフォーメーションを変えてきていた。

「……ッ！…この……！」

「ダブルチーム！ 白瀧封じか！」

白瀧の顔から余裕が一瞬崩れた。

前半戦は白瀧のマークは牧村だけであつたが、後半戦は北野と本田の二人が彼のマークについている。そして他の3人が光月、神崎、渡辺の3人にマンツーマンでついていて、その分真鍋がフリーになっているものの、肝心のボールを持つている白瀧が身動きできないよう

では話が進まない。

白瀧は二人を抜こうとするものの、よほど彼を警戒しているのか、マークは厳しくなかなか切り込めない。フェイントにつられた北野を抜き去ろうとするが、深く守っていた本田がすぐさまフォローに回り、その間に再び北野もマークにつく。それを見て白瀧は一度後ろへ下がった。

「ちよつと厄介だな。……ふうっ」

白瀧は深く息を吐いた。上手く前線にボールを運べず、白瀧の表情に焦りが浮かび始めている。

マークについている二人は通常のマークよりもやや深めに守っている。その分白瀧のドライブにも反応しやすく、またフォローにも戻りやすい。ただのドリブルではこの二人を抜かすことは容易ではない状況だ。

「……真鍋、ボールを貰いに行ってくれ！」

「あ、ああ。白瀧……」

「来るな!!」

「……ッ!」

「は? ……要?」

このまま攻めあぐねていては無駄に時間を費やすことになるだろう。

その状況を見かねた神崎が代わりに真鍋に指示を出す、そのサポートを他でもない白瀧本人が拒絶する。思いもよらない対応に真鍋や神崎からは疑問の声がこぼれた。

「来なくていい。これくらい一人で対応できないようじゃ、何の意味もないんだよ」

白瀧はあくまでも視線を北野と本田に向けながらそう言い放つ。次第にドリブルのスピードも速くなってきた。

たしかに彼の役割はチームのゲームメイクだ。だがしかし、ここでパスの選択肢はない。それはすでに前半戦でも示しているのだから。

たとえばダブルチームであろうとも一人で突破するだけの力を見せ付けることで選択の幅は増え、より多くの威圧感プレッシャーを相手に与えること

ができる。そう考えた白瀧は真っ先に味方へのパスという逃げ道を封じた。

(それにこの程度のことでは勝負をやめるようでは、あいつら『キセキの世代』に挑む権利などない！)

そして何よりも自分のためにも譲れない。白瀧の目に今まで以上の気迫がこもる。

ドリブルの速度をさらに速め、一步前へと踏み出す。この動きに北野が真っ先に反応したが、白瀧は抜きに来ていない。そのまま体の目の前でボールを左へと切り返す。そしてそのボールを今度は右へと切り替えした。

「うお、おっ!？」

「…………… まだだ!」

北野がフェイントの連続につられて動けない間に彼の横を白瀧が抜き去った。

しかしそれでも深く守っていた本田が一瞬できた時間で回り込む。抜かすまいと待ち構える中、白瀧は右手でドリブルしていたボールを右前方へとはじく。動きの方向から本田も右後ろへと下がるが、白瀧はさらにそこからボールを逆の左手で方向を変えた。

「ちいっ、速すぎるだろ。くそっ!」

「抜いた! 白瀧、ダブルチームを難なく突破した!」

「いや、それだけじゃない。さらにもう一人も抜き去ったぞ!」

逆をつき、本田を抜き去った白瀧はさらにヘルプに出た牧村をもロールでかわし、ドリブルで切り込んでいく。

これ以上の進撃は許せない、青樹がゴール下にいる渡辺のマークから外れてチェックに入ろうとする。……………しかし、白瀧はフリースローラインの手前から飛んでいた。

「……………なにっ!？」

白瀧の予想に反する動きのせいで反応がさらに遅れた。青樹がシュートを防ぐべくブロックに飛ぶよりも速く、白瀧はレイアップシュートを放っていた。ふんわりと浮かんだボールは誰にも触れられることなく、パスツとゴールネットを揺らしてリングを通り過ぎ

た。

「決まった……!?!」

「——ティアドロップ。そう易々と俺のシュートを止めさせはしない」

リングよりもより離れた位置から放つレイアップシュート、ティアドロップ。

誰よりも速く、しかしそれでいて静かに白瀧は得点を決めた。しかも最初から最後まで自分だけで、という相手に多大なプレッシャーを残して。

その後、4チームは本田がなんとか得点を決めて2点を返すものの事態は変わらない。なぜならば白瀧を止めない限りは点差が縮まらないのだから。

再び北野と本田がダブルチームで白瀧のマークにつく。彼らにも疲れが見え始めているものの、それでもなんとか白瀧に食らい付いている。

「いいぜ、負けず嫌いは好きだ。その諦めない姿勢は評価する。しかし……!」

「……チツ!」

「悪いが俺も負けるわけにはいかない!」

「ああ、やっぱり白瀧は止められないか!?!」

……だが、それでも白瀧を止められない。トップスピードで北野の横を通り過ぎていく。北野に苦渋の表情が浮かび、先輩達の観客席からは圧巻の声が出てきた。

再び先ほど同様に牧村がヘルプに出る。しかし白瀧はドリブルで行くかと思わせ、フリーになった神崎へとパスを出した。

「っ、ちくしょう! (まただ。白瀧にはこのパターンだつてあるとわかってるのに、わかっていても止められない!)」

「ナイスパス!」

白瀧の期待^{パス}に応えるように、神崎は声を出した。しっかりとボールを受け取った彼はそのままシュートを放つ。回転がかかったボールはそのままリングを潜り抜けていった。これで今日の神崎が決めた

スリーポイントシュートは3本目である。前半戦でマークが厳しい状況では2本ほど外していたものの、フリーの状態では確実に決めている。シューターとしては問題ないだろう。

「入った、スリー！」

「白瀧がとまらない、このまま突き放すのか!?!」

得点に絡んでいる白瀧の評価もうなぎ上りだ。ディフェンスも積極的に参加し、オフエンスでは自分への注意を集めてその上で自分で撃つか、あるいは味方へパスを出すのか。

今この試合は、彼一人によって動かされている。戦場が支配されている。

第1試合後半戦、その残り時間もラスト二十秒を切った。

ゴール下で行われている激しい戦いの中、オフエンスリバウンドを取った渡辺がそのままシュートを決める。

「いいぞ、ナイスリバン！ ナイツシュ！」

「残り時間短いぞ、最後の攻撃だ！」

追い打ちとなる2点が3チームに加算される。

点差が大きく離れ、残り時間が少なくなっているもの選手達の集中は切れていない。最後の瞬間まで、ブザーが鳴るまでは諦めないという姿勢を示すように白熱していた。

おそらくこれが最後の攻防となるであろう。青樹のスローインから始まり、ボールは牧村へ。

再び白瀧とのマッチアップ。ここまでの対戦の中で幾度となく止められ、ボールを奪われた。それでも、最後に一矢報いたいと、牧村も冷静に機会をうかがった。

「……来い」

しかし白瀧から放たれる気迫にひるんでしまった。何ということはない言葉、叫びでもないというのに。

そしてその一瞬を白瀧は見逃さない。牧村の動きが鈍くなったことを見切り、腕をすばやくボールへと伸ばす。そして牧村の腕からボールの感覚が消えた。

「しまった……！」

「よっし、ナイス要！」

自分の失態を悔やむがもう遅い。ボールはサイドラインを過ぎずに神崎の手へとわたった。

これで最後の攻撃も失敗に終わった。……だが試合は終わらない。ボールを奪われたことを察するとすぐさま全選手がディフェンスへと戻っていく。

ボールを手にした神崎がドリブルで速攻に向かうものの、敵選手の戻りが早い。元からそれほどドリブルが上手いわけではなかった神崎はあつという間に追いつかれてしまった。自分だけでは崩せないと考えると、神崎は白瀧へバウンドパス。

「これ以上点はやらねえ！ 止めてやる！」

「……そうか。だが、俺も止まれない！」

本田がすぐさまヘルプに入った。あくまで諦めないと、そう強く言い放った。そしてその本田に答えるように白瀧もまたはつきりと固い意志を告げる。

白瀧が徐々にドリブルの速度を加速させる。ボールが上下左右に行き来する。

そしてついに一気に切りこむ、と体を前に倒す。その動きに気づいて本田も反応して下がった。

……しかし、白瀧はそこで止まった。ドライブと見せかけて前後に大きく足を開いたまま停止。その足の間をボールが通り彼の逆の腕に収まった。

「……ッ!!」

本田の体が動きについていけずに仰け反り、硬直する。その間に白瀧が一步下がり、距離ができた。

そして――

「また何度でも挑んでくるといい。――今回は俺達の、勝ちだ」

――白瀧の手からボールが放たれた。誰もシュートを防ぐことはできず、そのボールの行く末を見届けた。

「試合、終了――！」

ボールがリングをすり抜けると同時に、試合終了のブザーが鳴る。ブザービーター、試合を締める白瀧の3Pスリーが試合終了間際に決まった。

51対27。白瀧率いる3チームが終始リードしたまま試合は終了した。

白瀧15得点、光月16得点、神崎12得点、渡辺6得点、真鍋2得点。白瀧のアシスト数は8。

牧村2得点、青樹5得点、北野6得点、山中5得点、本田9得点。牧村のアシスト数は2。

攻守ともに3チームが圧倒した展開だった。4チームはインサイドも鉄壁の光月を崩すことができず、また白瀧の速さについていけず、ミスを連発。3チームが終始圧倒していた。しかも相手から合計で6つのファウルも奪った。

だが問題点が全くなかったというわけではない。……肝心のフリースローを光月が全て外してしまうというミスも生じたのだ。また、後半戦から真鍋などの動きが鈍くなっていた——つまり体力スタミナの不足などといった点もある。

このように意外な課題点も見つかったが、テストとしては出来過ぎと言つていい結果だろう。

「51対27で3チームの勝ち。……礼！」

「ありがとうございます!!」

最後に試合開始と同じように、センターラインを挟んで両チームが並び試合終了の挨拶をする。その後はお互いの健闘をたたえて熱い握手を交わす。今回はミニゲームとはいえ、お互い全力で戦った。選手同士感じることもあっただろう。

「うおっしや! やったな、要!」

「うお!!.. ちょ、勇重いわ!」

そして試合が終わると、神崎が白瀧を後ろから肩に手を回し頭をたたく。突然のことで白瀧の体がふらつく。文句を言いながらも、久しぶりに最後まで戦えて嬉しそうな顔をしている。新たな仲間と一緒にバスケができたのもよかったのだろう。そこに明達三人まで加

わってさらににぎやかになった。

「いやー、最後まで上手くいつてよかった」

「マジでお前ら頼りになるな。楽しかったぜ！」

「お、おい。明さすがにお前は……潰れる！潰れちゃう！ねえ、聞いてます!? ちよつと！」

「あははははー！」

……白瀧が皆にもみくしやにされて酷い事になっている。まあ、多分大丈夫だろう。うん、多分。きつと。おそらく。

小林達も、彼らが試合を通じて仲間意識ができたことで安心してその姿を見ている。

「……よかった」

橙乃もその様子を遠目で伺っていた。白瀧が楽しんでいる姿を見ていると、丁度逆側のコートで行っていた試合も終了したようなので、そちらでスコアボードをつけていた人と合流するためにその場を後にする。

だがその前にもう一度白瀧達へと視線を移し、それから立ち去っていった。そのときの彼女は笑顔だったという。

この後の試合でも白瀧達は思う存分躍動し、54対26で勝利を収めた。先輩達の注目度を一気に高め、その日は終了する。果たして一体何人の一年生が、先輩達の御眼鏡にかなったのであろうか……

第七話 一軍昇格

「……はい、皆さん集まってくれましたね。それでは今日の練習の前に、私のほうから皆さんに一つ発表しておくことがあります」

週明けとなる月曜日、部活では久しぶりにチームメイトである仲間達と再会する日。

大仁多高校では毎週この曜日に監督である藤代、ならびに主将である小林達によって開かれるミーティングがある。

今までは藤代監督が出張であったがために彼がこうして部員達を集めてミーティングを開くのは久しぶりのこと、一年生にとっては初めてのことだ。

「今日は皆さんも気にしていたことでしょうか、これより一軍メンバーを発表します。」

この編成については上下関係は含まれていません。純粹に私が判断した選手としての実力によって決められています」

普段はあまり見られない、藤代の真面目な顔。それが事の重大性を示している。それを察した部員達も誰一人として騒ぐ事無く、乱れることなく彼の声を聞くことに集中していた。

一年生達の実力もある程度わかった今、部員が多い大仁多高校でも一軍の編成が発表されようとしていた。

大仁多高校の一軍は合計で二十人編成となっている。ゲームに参加できるメンバー十二人に加え、さらに八人が予備戦力として——ベンチ入りを狙う戦力として配備されることになる。

「——では、上級生より発表させていただきます。選ばれたとしてもこれに驕る事無く、また選ばれなかったとしても今後もメンバーの入れ替えはありますので、皆精一杯練習に取り組んでください」

名前を呼び上げる前に、最後に選手全員に気を引き締めるように呼びかけ、藤代監督は視線を一軍メンバーが記載されている名簿へと視線を移した。

今年度になって最初のチーム編成。一年生が加わった今、誰が名前を呼ばれてもおかしくない。皆自分の名前が呼ばれることを望みな

がら、監督を見つめていた。

「……三年、小林圭介。P G」
ポイントガード

「はいー」

最初に呼ばれたのは主将である小林。その声に答えるように、はつきりと返事をした。

妥当な選抜であろう。全国区の実力を誇っていると呼ばれている彼だ。大仁多高校には彼を超えるポイントガードは存在しない。実力・実績共に申し分ない選手だ。

そして小林が名前を呼ばれたことをきっかけに次々と上級生の名前が呼ばれていく。

副主将を含め三年生からは合計で九人の選手の名前が、二年生からは七人の選手の名前が挙げられた。

そして――

「……一年、白瀧要。S F」
スモールフォワード

「……はいー」

――ついに新戦力、一年生達が呼ばれはじめる。

戦陣を切って第一に名を呼ばれたのはやはりこの男――白瀧要であった。

一年生にとっての初戦であるミニゲームから約二週間の時間が経過した。

部活動の仮入部期間もすでに終了しており、俺達はバスケット部に本入部届けを提出をすませようやく本当の部員になることができた。

……だが、その間に何も変化が起ころなかつたわけではない。

大仁多高校バスケット部に入部した一年生は仮入部当初の三十三人から、二十一人にまで減少していた。

練習についていけないと感じたもの、バスケット部では活躍することが難しいと実感したもの、他の部活に何か別の魅力を感じたものなどなど。辞めた者達の理由は様々なものである。

辞めたやつらの中には俺の知り合いもいた。ミニゲームで同じチームであった真鍋、敵として戦った青樹達といったメンバーだ。さすがに知らない仲でもないやつがいなくなることは寂しさを覚えただものの、そいつらの分までバスケをやろうと強く願った。それに勇や明は健在だしな。まだまだ俺には頼れる仲間がいる。

……そして変わったことと言えばもう一つ。

俺達一年生も含め、バスケ部内で早々に部員全員が一軍と二軍に振り分けられたことだろう。

大仁多高校バスケ部の一軍定員数は二十人。スターターとベンチメンバー、公式試合で登録可能な計十二人の他に八人の選手が予備戦力として加わっている形だ。

選手の振り分けがされてからは練習時も行動が別々となり、同じ一軍の先輩達と行動を共に機会が増えた。今まで以上に激しくまた実戦的なものが多くなってきている。

そして発表から一度だけ選手入れ替えがあり、メンバーも少しだけ変わっている。

今の一軍は一年が五人、二年が七人、三年が八人という状態になっている。その中でベンチ入りをかけて切磋琢磨しているというわけだ。

「ディフェンス、声出していけ！」

「ここ一本きっちり止めて終わらせるぞ！」

コートに先輩達の甲高い声が響く。

現在、一軍メンバーは基礎練習を終えて、四チーム——すなわちA、B、C、Dにわかかれハーフコート5対5を行っている。

A、Bチームに小林さんなど主力であるメンバーが配置されているところを見ると、おそらく一軍の中でも実力ある選手がA、Bで他の入れなかった選手達がC、Dチームということだろう。ちなみに俺はBチームで現在ディフェンスに当たっている。

「神崎、もっと自分から動いていけ！ 足が止まっているぞ！」

「ッ！ は、はい！」

Aチームの主将でありポイントガードを務めている小林さんが、

マークを振り払えずに足が止まっていた勇へと声をかけている。ドリブルしながら的確に周囲を見渡し、指示を出す姿はさすがだ。

……まあ仕方がない話か。勇はシューターとしては優れているものの、言うほど身体能力はまだ高くない。体ができていないことも原因だろう。相手を振り切れないでいる。

「ははは！ いやー相変わらず厳しいな小林は。悪いな、神崎。……そう易々と好きにはさせないぜ」

「……なんとかしてみせますよ、俺だってこれ以上怒られるのはごめんなんです！」

「そいつは同感だな。じゃ、俺の分まで怒られてくれ」

「それはひでえっすよ!!」

爽やかに、かつ勇を挑発するように勇のマークについているBチームのシューティングガードである三年生——山本正平やまもとしょうへいは言い放った。挑発に乗らず、強気で返す勇に山本さんも嬉しそうに笑った。その笑顔が整っている容姿をなお際立たせている。

やはり、まだ勇が正レギュラーである山本さんを倒すのは厳しいか。背丈は若干山本さんのほうが高いくらいだが、スピードで完全に勇が押さえ込まれている。自由にさせてもらえない。伊達に大仁多キャプテンの副主将を任されてはいないか。

「……他人の心配とは随分余裕だな、白瀧。俺が相手では不服か？」

「いえ、少しだけ勇のほうが気になっただけです。気分を害したんならすみませんね佐々木さん」

勇の方に意識が向いていることが悟られたのか、マークについている相手に愚痴をこぼされてしまった。

……Aチームのスマールフォワード、三年の佐々木一ささきはじめさん。去年の冬からレギュラー入りを果たした選手だ。技術はあるものの、それほど体力面で優れているわけではない。このまま動きを読んでマークについたら大丈夫であろう。

「まったく。もう少し本気でやってくれ。俺とて、まだレギュラーの座を諦めたわけではないのでな」

「……わかっています。一瞬たりとも、俺がレギュラーだなんて思っ

「ていはいですよ」

一瞬だけ、闘志とは別の感情が見えた気がした。

おそらく俺が推薦で入ったことを知ってこの前の試合を見て、レギュラー争いがより熾烈なものになったと感じたのだろう。俺がスタメンに選ばれるとしたら、それはすなわち他の誰かが——強いて言えば佐々木さんがスタメン落ちするということなんだから。

右に走りこんでいた佐々木さんの体が突如逆方向へと消える。

そこに小林さんからのパスが通った。ボールを受け取るや否や、すぐさま佐々木さんはシュートモーションに入ろうとして手を上げようとし、

「だけど、俺は誰にも負けられないんです」

……持っていたボールは、俺の腕にはじかれた。

重心の移動から察してすぐにドライブしてこないということはわかった。だから俺は空いた距離を一步で詰め、スティールを狙ったのだ。

「……ッ！」

「俺はもう……迷わないと決めたので」

腕を空中に上げたまま制止している佐々木さん。事態の急変に戸惑ったのだろう。その間に俺はボールを確保した。これで攻撃権はBチームへと移る。

……そうだ。俺はもう迷わない。勝つということは誰かを負かすということだ。それくらいわかっている。ならばなおの事俺は負けられない。

「……ふむ。段々と個人の能力の差がはつきりと出てきましたね」

AチームとBチームの五対五の戦況を伺いながら藤代監督は呟いた。

白瀧の考えているとおり、今回はAとBに主力選手が揃っている。もつと正確に言えば、そのAチームとBチームの配置にもある理由があるのだが、その理由はあくまで参考程度であり、藤代個人の見方で

あつてスターター選出にさほど影響はない。

ちなみにメンバーの分かれ方は以下の通り。

Aチーム：PG小林、SG神崎、PF光月、SF佐々木、C黒木

Bチーム：PG中澤、SG山本、PF松平、SF白瀧、C三浦

このゲームではそれぞれ同ポジションの選手達がマンツーマンでマッチアップしている。それによつてお互いを刺激し、緊張感を持たせることが目的である。

「よし、よくやつたぞ白瀧！」

「ありがとうございます、中澤さん」

ボールを奪つた白瀧がボールを自チームの司令塔——二年のなかざわひでき中澤秀樹に戻しつゝ、答えた。

「……しかし、小林さんの目の前で集中が少しでも切れていたのは駄目だ。お前コレが終わつたら走つて来い」

「え?! いや、ちゃんと集中していましたよ。だからこそ攻撃も防げたんじゃないですか!」

「意識が他に向いていたんだろ、聞こえてたさ。まったく……次も決めるよ」

忠告を一ついれ、最後の言葉は白瀧を見る事無く振り返つて言った。ゆえに白瀧の耳には届かなかつた。

同ポジションである小林を尊敬している中澤だ。そんな彼は小林の目の前で誰かが気を緩ますことを許せない。ゆえにこのように文句をつけたのだろう。……最も、彼の力のことは認めているようだが。

そんな中澤はボールを受けとり、再開の合図を確認すると意識を再び切り替える。

……さすがに目の前の尊敬している小林を前に、真つ向から挑もうとは考えてはいないようだ。体を相手に対して半身の体勢を取り、ドリブルをしながら回りを見ている。

何度か体勢を入れ替えた後、山本が神崎のマークを振り払つたことを確認してパスを出す。

パスはきちんと通り、受け取つた山本の体が少し下がった。……ま

ず間違いなくシュートの構え。それを理解した神崎もブロックに飛んだ。

「……そう焦るなって神埼、よー！」

「クッ!?」

しかし、山本は神崎が飛んだことを確認するとジャンプをやめてボールを横に出した。飛んでいる神崎は当然これを止める術はない。そしてボールはその先にいる選手——白瀧へと渡った。

「ナイスパスー！」

「……白瀧、打たせん！」

佐々木のマークも中々厳しい。一瞬だけ白瀧の動きが止まった。

白瀧はドリブルを続け、右から左へと返しそしてそのまま前進……すると見せかけ、開いた足の間をボールを通してその場で止まった。

「……くっ!?! (フェイクか!)」

その動きを見て佐々木も抜きには来ていないのだと、フェイクだと気づいた。

二度その場でボールを行き来させ、そしてバックステップで佐々木との距離を開ける。そのままシュートを撃つべくジャンプした。

「打たせないと、言ったはずだ！」

だが佐々木もまだ終わらない。この白瀧の動きは以前のミニゲームで何度も目にしたもの。ゆえに白瀧が距離を開けることも想像できたため、すぐさま行動に移ることが出来た。シュートコースを完全にふさぐように佐々木の体が跳躍する。……が、白瀧はシュートを打たずにボールをバウンドパスした。

「なにっ……」

「よっし、よくやったぞ白瀧ー！」

ボールは三年の松平^{まっだらたける}猛の下へわたった。相手をギリギリまでひきつけた結果、無事にパスは通った。

(……『瞬発力』、か。しかも前や左右の動きに限ったことではない。バックステップのような動きまで。とにかく重心の移動が上手い。跳躍力にも優れている。経験から培ったであろう判断力もまたすば

らしい。

これはもはや才能という言葉で片付けられることでは……いや、片付けていいことではないですね。むしろ逆だ。一年生ならばもう少し危なっかしいところがあってもよいのですが、さすがは歴戦の猛者。きつと血の滲む様な練習をしてきたのでしよう。

その一連の動きを見て、藤代は心の中で絶賛した。

一年ならばまだ自分のバスケスタイルを身につけられていないものもいる中、彼は自分のスタイルを押し通している。得点能力だけではなく味方へのサポート、どれをとってもスタメンでもおかしくない力だ。

「くそっ、ここは絶対に守る！」

「まだまだ足りんぞ光月。まだまだお前は気迫が……足りん!!」

「……ッ!」

光月が手を伸ばし、圧力をかける。ただでさえ大きな体だというのにさらに巨大に映った。

……しかし松平の声に、気迫に押されて彼は一步後ずさった。

それを察した松平はすぐさま光月を抜き、ゴール下へと切り込みジャンプシュートを放った。

「ッ、まだだっ!!」

「なにっ!」

だが、追いついた光月のブロックによりボールはリングをくぐらずにボードとリングを行き来する。

二回リングに当たったところでボールはシュートを放った方向とは逆へと落ちていく。

「っしやありバウンド任せろ！」

「……甘いな、隼人」

空中のボールをめぐるつて両センターがリバウンドを取りに行く。

まず先にBチームのセンター、三浦隼人^{みうらはやと}が飛んでボールを両手で確保した。その事実三浦が笑みを浮かべる。……しかし、それは長く続かない。わずかにタイミングをずらして飛んだAチームのセンター、黒木安治^{くろきやすはる}が空中で彼からボールを奪ってしまった。これにより

再び攻撃権はAチームへと映る。

「ぬがああああ！ またお前かよ安治！」

「……現実には、甘くない。お前は、甘い」

「喧嘩売ってんのかテメエ！ 上等だ、次は俺が決めてやる！」

「……甘く見られたものだな」

ボールを確保した黒木は驕る事無く、しかし三浦の闘志を沸き立たせた。

同じ二年生にして同ポジション。色々と感じるものがあるのだろう。寡黙な仕事人と呼ばれる黒木はプレイで、そしてわずかな言葉で語った。

「やはり、本番は彼らの中から選ぶことになりそうですね。これはまた大変だ……」

AチームとBチームの選手達の実力を再確認し、藤代は一人呟いた。

彼は監督として選ばなければならない。誰を起用するのか、大仁多の最強メンバーが誰なのかを。

「皆さん、練習お疲れ様でした」

「お疲れ様でした!!」

練習終了後、藤代監督の終了の合図によって全員が集められていた。

今日もまた一段と疲れたな。ゲームもそうだが最近練習密度が濃い。先輩達に遅れを取らないようにしないとな。

「今日の練習前には言えませんでした……インターハイ予選前に、他校との練習試合を行います。そしてその日時が決定しました」

「おおッ！」

そして藤代監督から重大なことが発表された。全員から様々な声があふれ出す。

……他校との練習試合か。公式戦前にどれだけ高校で通用するの

かを試す機会でもある。何としてもその試合でスタメンに選ばれるようにしないとな。

「練習試合は次の土曜日。——今回は秀徳高校と対戦します」
「なっ!？」

「秀徳高校だと!？」

発せられた対戦相手の高校を耳にして、動揺が一挙に広がる。

俺もその名前を聞いて驚いた。まさかこうも早くあいつがいる高校との対戦が実現することになるとはな。……なおの事試合に出なければならなくなった。

と、俺が試合と対戦相手のことについて考えていると横から肩をつかれた。視線をそちらに向けるとそこにいたのは勇だった。

「どうした、勇?」

「……なあなあ、要。秀徳高校つてどこだ? 強いのか?」

「まさかお前本当に知らないのか? 毎年IHに出るような東京都の強豪校だぞ」

今さら聞くことではないような問いを聞いてくる勇に思わず脱力仕掛けた。

秀徳高校と言えば、東京都にあるバスケの強豪校。正邦、泉真館と並んで『三大王者』と呼ばれ、IH出場をここ数年逃したことがない高校。しかも去年のIHではベスト8まで勝ちあがっていたはずだ。
「これくらいは知っておけ。ただでさえ大仁^{うち}多^ちは、秀徳とは因縁深いんだからな」

「へ? 因縁深いって、どういうことだよ? 何かあったのか?」

「……神崎、それをあまり小林さん達の前で言うなよ」

「中澤さん?」

俺の言っている意味がわからず、なおも深く聞いてくる勇を中澤さんが諫めた。

……そうだ。中澤さんも去年いたんだから、あの試合は少なくとも見てはいたんだよな。だからこそこの人のことだ、あまり言いふらしてほしくなかったのだろう。

「……去年のWC。大仁多高校は秀徳高校と戦い、そして負けたんだ

よ」

「えっ!?!」

「そういうことだ。だからこの練習試合は、ただの練習試合ではないってわけだ」

「……そう、だったのか」

ようやく勇も納得したのか、それ以上は聞かずに引いた。

この試合は調整なんて甘いものじゃない、先輩達にとっては去年とは違うのだと、成長した姿を見せる試合でもある。ならば俺達も少しでも先輩達のリベンジに協力しなければならぬ。

……とにかく今は出来ることをやる。改めて意欲を高めると、もう一度藤代監督の下へ視線を戻して話を聞くことに専念する。

「秀徳高校は皆さんも知ってる通り強豪です。さらに今年は『キセキの世代』の一人、緑間真太郎が加入しました」

「……ッ!」

またしても全員の表情が固まった。『キセキの世代』という一言によつて。

無理もない話だ。なにせ相手は全中三連覇を果たしたチームの正レギュラー。いくら一年といえども恐れるなという方が無茶だ。

「三年生も去年よりはるかに強くなっていることが予測されます。まったく別のチームだと考えてもよいくらいです。」

……しかし、恐れる必要は何もありません。相手だけではない、成長したのは私達も同じですよ」

だが、藤代監督の一言で雰囲気が変わった。

穏やかな表情が、静かな声が、体育館に広がり部員達の暗い雰囲気を持ち消した。……改めて思ったが、本当不思議な人だな。飄々としたつかみどころのない人、気が付いたらこの人のペースにはまっっている。それだけ影響力があるってことか。

「ですから、それまでは練習あるのみです。そして本番で全てをぶつけましょう。……正式メンバーは当日発表します。それまでは皆さん、全員が選手だということを自覚してがんばってください。」

それでは小林さん、最後お願いしますよ」

「わかりました。ありがとうございました。」

——皆、先生の話を聞いていたな!? 残っている時間は多くないが、それまで少しでも強くなるぞ! ……それでは、今日はこれで解散!」

「「ありがとうございます!!」」

最後に小林さんが締めめの挨拶をして解散となる。

ここからは部活は関係なく、個人練習の時間だ。必然的に一軍メンバーはほとんど残って練習することになる。俺も当然残る。小林さんも言っていたが、残り時間は少ない。ならばなおの事練習に励まないとな。

「……明、お前この後残ってやるか?」

「ああ、今日も練習していくよ。やっぱり不安だからね」

俺はお目当ての巨体を捜し、声をかけた。予想通り明も残って練習するようだな。

まあ先ほどの話を聞いたら、大抵のやつは何もせずに戻るというのは無理だろうな。

「それなら明、すまないが今日は俺に時間をくれないか?」

「え? なんで? 何かやるのかい?」

「ああ。……勇、すまんがお前も来てくれ」

「へっ? 俺も?」

「ああ、むしろお前の力が必要なんだ。今日から試合当日までに、明には身につけてほしいことがある」

勇にも声をかけてこちらに呼び寄せた。

……相手もバスケの強豪校。しかも緑間もいる。ならば最善を尽くさなければならぬ。だから明、お前にはさらに上を目指してもらおうぞ。おそらく練習試合ではお前の力が不可欠だからな。

第八話 燃える男達

「明、一番最初に言っておく。俺が今日からお前に身につけてもらいたいことを。……それは、ミドルレンジからのシュートだ」

「ミドルシュートを？」

「ああ。それを今度の秀徳との練習試合までにある程度モノにしてもらいたい」

聞き返してきた明により明白に示すように、俺は明へ進言した。

たしかに明自身にも自主練としてやりたいことはあるのだろうが、それ以上に大切なことではある。明自身にとっても、大仁多高校全体にとってもな。

「お前の場合、 Dank も含めてゴール下のシュートならば当たりにも強いし確立が高い。」

……が、その代わりにミドルレンジ以降となるとお前のシュート成功率は低すぎる。正直言つて弱点だ」

「そういえば、この前のミニゲームでもミドルシュートのほとんどをはずしていたな。フリースローも全然入らないし」

「……うん。あれはごめん。僕もあれはさすがに反省している」

勇もこの前のミニゲームのことを思い出したのか、俺に追従して同意した。こいつも味方のことを結構見れているようだな。まあ、だからこそこいつを呼んだわけだが。

そして明も自分のことを自覚はしているか、いい傾向だな。ある程度危機感を持っているというのなら話は早い。

「勘違いしないでほしいが、別に責めているわけではないぞ？ むしろ下手だというのなら、これからいくらでも修正して上手くなる可能性はあるってことなんだから」

「……しかしそんな簡単に身に付くものか？ 正直な話、時間が十分にあるとは思えないぞ？」

たしかにな、勇の言うことにも一理ある。

なにせ練習試合まであと一週間もないのだ。普段は普通に部活に参加するわけだし、疲労のことを考えるとなおさら時間は限られてく

る。だが、今回はそれで十分だ。

「大丈夫だ、何も『武器』と呼べるほどに上手くなれとっているわけではない。ある程度打てるようになれば、相手に警戒心を持たせられるくらいに上達すればそれでいい。」

俺の理論ではあることだが……手札は多い方が良い。相手に『どの攻め方でくるのかわからない』と考え込ませたならば、それだけで優位に立てるからな」

それこそが俺の戦い方であり、俺の今までの方針だ。今だってそう考えているし、これからも変わらない。

100%決まらないとしても、相手の注意を少しでもそらしてくればそれだけ成功率は上がるというものだ。さすがにゴール下へ切り込んでからしか打てないというのでは、秀徳高校を相手にするには厳しい。

「特に今回の相手、秀徳高校はインサイドが強いことで有名な強豪だ。

今年から主将に選ばれた大坪という選手を中心に、ゴール下が固い。それゆえに、少しでもお前の活躍の場を広げるためにも……それ以前にレギュラーに選ばれるためにも、お前にはがんばってもらいたい。構わないか？」

「……むしろ、こつちからお願ひしたいくらいだよ。頼む、要！」

レギュラーという言葉に刺激されたのか、まだ見ぬ強敵に焦りを感じたのか、あるいはその両方か。明は喜んで俺の提案を受け入れてくれた。……強くなることに対して貪欲か、その姿勢は評価できる。やる気が十分だというのならば、あとはひたすら打ち込むだけだな。

「よしっ、それじゃあ早速今日からはじめよう。そこで勇、お前は明のシユートを見て、アドバイスをしてほしい」

「ああなるほど。どういうことかと思っただらそれで俺を呼んだわけね。だけどそれなら俺よりも要の方が適任じゃないのか？ バスケならお前の専門分野だろ」

「いや、俺は純粋なシューターではないし、シューターにしかわからないこともあるだろう。それに俺も元々アウトサイドは得意だったわけではないからな。説明するのには役者不足だ。」

だから最初に幾つかアドバイスしてくれればいい。後は明にはひたすら習得してもらおうために撃ち込んでもらうつもりだからな」

こればかりは俺だけではどうしようもないことだ。

俺だってシュートが決まらなかつたときは、迷わず仲間を下げ指しを仰いだ。そうして何度も繰り返した結果として今となってようやくシュートが決まるようになったわけだから。

しかし勇だつてレギュラー争いに参加している以上、あまり時間をとらせるわけにはいかない。だから最初にフォームや意識について聞いてからは明には自主的に励んでもらうつもりだ。

「OK。俺もできれば皆で戦いたいからな、協力するよ」

「二人ともありがとう。必ず、身につけてみせる！」

「よしっ、それじゃあ明。試しに何本か撃つてみてくれるか？ 特にマークはつけない、フリーの状態だ。改めてフォームの確認もしたいから、いつもどおりの感覚でやってみてくれ」

「わかった」

了承を得て早速練習開始だ。

ボールが大量に入っているボールかごを持ってきて、それを3Pラインに設置。俺と勇はその脇に立ち、明はペイントエリアの少し外側に立つてもらおう。

俺は一つボールをかごから出すと、そのまま明へとダイレクトにパスをさばいた。

明が両腕でそのボールを確保する。ガシツと力強い音が聞こえてくる。……まず第一段階、シュートを打つためのキャッチング時の動作は問題ない。元々明は体つきもいいし、ボールをしつかりと自分の手におさめている。

ボールを手にとると、明はその場から右足を半歩だけずらし体全体をゴールへと向ける。

ゴールの位置を確認するとそのまま跳躍し、シュートを放つ。……重心が安定しているのか、空中でもフォームには特に進言するような乱れは感じられない。

「……あ」

「……外したか」

「……外したな」

……しかしシュートが決まるかと思ったら、ボールは放物線を描いた後リングに衝突。リングをくぐることはなかった。明の口から苦汁に満ちた言葉がこぼれ、俺と勇からも同じ言葉が出てきた。

うーむ。俺からしてみれば特に指摘することは特にないのだが。ゴールを意識しすぎたか？

「気にするな明、とにかく次いくぞ！」

そうは言ってもまだ一本目だ。これから観察して何かしら見つけていけばいい。

俺は言葉と一緒に再びパスを出した。明が先ほどと同様にパスを受け、シュートまでの流れを繰り返す。……しかし、今度はボードとリングに一度ずつ衝突し、コートへと戻ってきた。

「……ッ！」

「あせるな明！ もっとゴールを見ろ！」

「もう一本、続けていくぞ！」

焦っているのだろうか、表情に余裕がなくなってきたな。勇もそれを感じたのか、初めて指示を出した。

もう一度パスを出し、シュートを繰り返す。その動作を反復するよう何度か続けた。

……その結果、十本中決まったシュートは三本のみだった。

フリーという状況を考えればこれはあまりにも悲惨な結果だな。さすがに成功率が三割というのはまずい。

「……勇、何かお前から言うことはあるか？」

「言うことと言われても。フォームやシュートタッチに特に指摘するようなことはないし。後は距離感か？」

……ただ、距離感については俺から言うことはあまりないぞ？ その人個人が撃ち込んで身につけることだし、『この距離になったならば』って自分でわかるようになっていないと」

「だよな。俺も何か言った方が良いのが……特に見当たらないんだよな」

何か指示すべきなのだろうが特に見当たらない。シューターの勇もダメか。

……俺の場合はシュートフォームのチェック改造から始まったから話が早かったのだが、明は話が別だ。なにせ基本の形はすでにできている。となると後は距離感なのだが……今までCとしてゴール下で戦い続けたせいなのか、掴みきれていないように見える。こればかりは俺達ではどうしようもない。

「……なあ明。撃たなくていいから、シュートの構えをしてくれないか?」

「え? シュートの構えだけを? ……わかった」

俺がこれからのことを考えていると、何か思いついたのだろうか勇がボールを持って明に近づいていった。

ボールを受け取ると、明はシュートをセットしたところで動きを止める。勇はそれを間近で観察している。何かわかったのか?

「お前、そのまま左目を閉じて右目だけで見ろ。……ゴールが見えるか?」

「……見えるよ」

「じゃあ今度は逆だ。右目を閉じて左目だけで見ろ。今度はどうだ?」

「……見えない。隠れている」

「……なるほどな。要わかったぞ、こいつができない理由がさ」
「本当か勇!? 何が違うんだ!?!」

二回質問しただけで、それだけで勇は理解したという。

やはりすごいな、何か今の問答だけで掴んだということか? やはり、こいつはシューターとしては素質を十分すぎるほど持っている。

「ああ。やはり問題は距離感、……だけだと思ってたんだけど、シュートフォームもだ。明はシュートの際、両目でゴールまでの距離を判断できていないんだ。片目だけで判断している」

「……目?」

「……つまりそれは、明が今までシュートを片目だけの距離感で撃っていたということか?」

「ああおそろくな。今のところそれくらいしか俺にはわからない」
「……納得した。それくらいしかと勇は言うが、おそろく間違いないだろう。」

どうりで決まらないわけだよ。両目でゴールを捉えられていないというのに、その状態で決めるといふ方が難しい。それでは当然ながら距離感がおかしくなるわけだから。

「だがそうとわければ話は早い。明すまないがそのままの状態でいてくれ。」

「……もう少し手のひらを上にしろ。そうすれば徐々に見えていくはずだ」

「わかった。……こうか？」

「ああ。手首の曲げ方にも意識しろよ。そのままの体勢を維持。それからあとはシュートの時に……」

そのまま勇は次々と指示を出していく。やっぱり専門分野となると詳しいな。あれだけの確に指示を出せるというのだからすばらしい。俺だつたらおそろく無理であろう。なにせ俺は独学で得たものか、あるいは他人の技術の寄せ厚めだ。それを伝えるというのは難しい。

「よしっ、それじゃあその状態で改めてシュート十本撃つてくか！」

「……ああ、要パスを頼む！」

「おしっ、それじゃあ行くぞ！」

指示を終えたのか、勇がこちらへと戻ってきて声をかけている。明もコツを掴んだのだろうか、先ほどの憂鬱さを感じさせないほど、高揚している。俺もそれに釣られて声を出していた。

そして再び明によるシュート練習が始まる。

その結果。……成功したシュートはなんと六本。成功率六割。先ほどの三本から比べると劇的な飛躍である。すごいな、これ秀徳戦までに九割程度には持っていけるんじゃないか？ ……まあ、あくまでフリーの状態での話だが。

「……あとは自分でやってもらうしかないな。俺からこれ以上はなにもない」

「さすがだな勇。やっぱり頼りになるな」

「本当だよ、どうもありがとう！」

「いや、別にそれほどでもねーって！ ……そんなことよりも練習続けろよ。そういう風に感謝する余裕があるならシュートを撃て！」
気恥ずかしくなったのか、俺の称賛と明の感謝の言葉から逃げるように勇は視線をそらし、連取を促した。

……まあ、たしかにこれなら後はひたすらシュート練習を続けてもらうだけだな。コツは教えたみたいだし、あとは慣れだ。感覚さえ掴んでしまえば、後はなんとかなる。

明は言われるがまま、黙々とシュートを連続で撃っている。素直なやつだな。

それに対して勇も日課であろう3Pの撃ち込みを別のゴールで開始した。あいつもレギュラー争いに必死ということだろう。

「……これは、俺も負けてられないな」

仲間が頑張っているというのだから、俺も頑張らないとな。

俺もまた別のリングへと移動してそこまでの道のりにコーンをいくつも並べていく。規則正しく距離を開けて二列に並んだコーン。それはまるでゴールまでの道のりを示しているようだ。

「……行くぞー！」

誰かに告げるわけでもなく俺はドリブルを開始する。

片方の列のコーンの逆側へと飛び出し、すぐさまそのコーンを横切る。そしてそのまま逆側の足で踏み切り、スピードを殺す事無くまた逆側へと切り込む。それを幾度も繰り返し……そしてゴール下からレイアップシュートを放った。

決まったことを確認するとすぐさまリングを潜り抜けたボールを確保し、逆側のコーンへと移る。

同じ動作によってコーンの間を潜り抜け、最後のコーンを抜けたところで3Pラインへと出た。そのばでターンし、体勢を整えるとそのままシュートを放つ。

……ボールは静かにシュツとリングの中へと吸い込まれていった。その様子を確認し、ボールをとりに行く。とると、歩いて最初のスタート地点へと向かっていく。

「……待っている、秀徳高校。待っている、緑間。

俺は、俺達は……絶対にお前達には負けない！ 勝つのは俺達だ！」

秀徳を、強いて言えばキセキの世代を倒し、反撃ののろしを上げるとしよう。

先輩達の冬の雪辱を果たし、俺の約束を果たし、IH出場のために弾みをつける。

そのためにも……絶対に負けられない！

再びドリブルを先ほどよりも早いペースで開始する。

胸の高まりからか、鼓動の音が激しく聞こえる。

だがそんな音さえもボールが弾む音によって聞こえなくなり……俺はまたコートを疾走した。

一方、時を同じくして——場所は東京都内にある秀徳高校。

バスケの強豪校と歌われているその高校の体育館では夜遅くとなった時間でも選手達による個人練習が行われていた。残っている選手は主力となるメンバーが揃っているためか、そのスキルは誰もが高い。三大王者と言う名を汚さぬよう、さらなる努力を積んでいる。

今日はまた一段とその練習が濃いように見えるのは、練習試合の日程が決まったことが——強豪校との対戦が決まったことが関連しているというのはまず間違いない。

そんな中、一人で黙々とシュートを撃ち続ける選手がいた。

柔らかな深緑色の髪。セルフレームの眼鏡をかけ、整った容姿の持ち主。

しかしながら他者を寄せ付けないとその姿で語っているように、殺伐とした雰囲気醸し出している。

彼は何も言わず、誰とも向き合わずにただひたすら3Pライン外からシュートを撃ち続けていた。

彼の放たれたボールは、恐ろしく感じてしまうほど高く、そして長いループを描いている。長い時間ボールは宙を飛んでいる。普通な

らばこのようなシュートでは距離感さえつかめない。……しかし、ボールは正確にリングだけを射抜いた。

リングを潜り抜け、何度も何度も高くボールがバウンドしている。その様子にも目もくれずに、緑間は再びシュートを開始した。そしてやはり、そのボールは再び先ほどのボールとまったく同じ弧を描きリングを潜り抜ける。

「ひゅー。さっすが真ちゃん、相変わらずえげつねーな。自主練の時からこんなシュートを撃ちまくってよ」

「……高尾か。悪いが今貴様に付き合っている暇はない。気が散るから下がっている」

その姿に感心したのか、あるいは彼のストイックさにあきれたのか、彼を真ちゃんと気さくに呼ぶ男が現れた。真ん中で前髪をわけている黒髪の男。名を高尾和成たかおかずなりと言う。

同じ一年ということで、同じ一軍メンバーということで高尾は目の前の男に気軽に接している。

しかし飄々としたその姿が今は邪魔であると感じたのか、相手は言葉に答えるだけで高尾の顔を見せようとはしなかった。

「堅いねー。いや、俺の方はもう今日は上がるから真ちゃんを誘っただけだよ。邪魔する気はねーって」

「ふん。そのようなことをお前に頼んだ覚えはないが……！」
そう相手の誘いに答えながらもシュートを撃つ手を休めることはない。

しかもそれでも集中力は一切乱れることはなく、やはりボールはリングにかすることさえない。

「つれねーなー。折角俺が友達のいないお前を気遣ってやっているつてーのによ。……それと、今回は相手のことも知りてーしな。お前が注目している、お前の昔のチームメイトのこと。……何って言ったわけ？」

「余計なお世話というものなのだよ。……それとあいつの名前は白瀧だ。覚えておけ、敵のことくらいはな！」

また一発、シュートが放たれる。

……昔のチームメイト。されど今はただの敵。討ち果たすだけの相手だ。そう示すかのように、ただひたすら緑間は努力を積み続ける。

「そうそう白瀧だった。お前が執着しているやつ。だからそんなに熱くなつてんだよね、真ちゃん?」

「黙れ。俺はいつもどおり人事を尽くしているだけだ!」

——いつもどおり。そう、彼は何も今日だからこれだけ熱心にやっているわけではない。

普段から。そう、このシュートの打ち込みは帝光中学在籍時から続けていた毎日の日課だ。だから本人からしてみれば何も変わったことではないのだ。

「……まあ確かにその通りなんだけどね。そのストイックさには驚きだよ)」

『人事を尽くして天命を待つ』。俺は常に最善の人事を尽くす。そうすることで俺は運命に選ばれるのだよ。だからこそ俺のシュートは……落ちん!」

強い意志がこもったボールは持ち主の心を示すかのように、鋭くりングを射抜く。

先ほどから自主練が開始してからの間、一度もボールは外れたことがない。まさに百発百中だ。

「……今回は相手も俺と同じ、人事を尽くす男だ。ならばこそ俺は誠意をこめて、全力でやつを倒す!」

そう言つてボールかごに入っていた最後のボールがゴールを射抜く。……自主練だけで決まったシュートの数はなんと三百本。しかも全てのシュートが精密に放たれているというのだから恐ろしい。

「……あらあら。それは白瀧君も可愛そうに。」

(いや、冗談抜きでうちの天才——緑間は止まらねえよ。果たしてどうするのかね、大仁多は? これじゃあ去年の借りを返すどころか……それ以上にこてんぱんにやられちまうぜ?)」

今年秀徳高校に入った一年生ルーキー。『キセキの世代』No. 1シューター、みどりましんたろう緑間真太郎。そしてその相方である一年生PG、高尾和成。

二人の新戦力を率いて、秀徳高校は歴戦の王者として獲物を——大
仁多高校を倒すべく、その力を磨く。

第九話 前日を迎えて

日が進むのは早いもので、今日はもう金曜日。練習試合の前日となっていた。

さすがにここまでくると一軍メンバーの変更はなく、練習試合に出場する選手は今の一軍に所属している選手の中から選出されると考えていいだろう。

そのためか最近は特に練習でも熱がいつも以上に入っている。監督へのラストアピールというわけだ。そのおかげで油断が続かない日が続いている。

今は昼休み。こうして昼飯を食べているわけだが、こういう時間が数少ない貴重な安らぎの場となっている。……うん、今日もご飯が美味しい。早起きしただけの価値はあるというものだ。

「……お疲れ様です、白瀧さん。隣いいですか?」

「おう、お疲れ様西村。全然構わないよ」

食堂の一角にある長テーブルで一人箸を進めていると、同じ弁当組であるために早くここに來れた同級生が來た。

若干茶髪がかかった黒髪ショートで、愛嬌のある顔が特徴のチームメイト、西村大智だ。にしむらだいち一年生の中で数少ない一軍入りしている選手であり(チームは別でCチームに所属)、そして数少ない帝光中学出身という経歴を持っている。

「あざっす。……はあ。ようやく午前の授業が終了か。」

午後もまだあるわけですけど、部活の前に疲れちやいますよ。授業まで本格化してきてちよつとヤバイっす」

「そうか? ま、確かに徐々に授業ペースも上がってきたからな。テスト前になつたらまた勉強教えてやるよ」

「ありがとうございます。本当に頼りにしています!」

俺の言葉に笑みを浮かべ、テーブルに頭をぶるけるくらいの勢いで頭を下げる西村。

……素直なやつだ。こういうやつは嫌いではない。純粹に頼りにしているのだとわかってしまうからこちらも少し気分がよくなる。

そういえばこいつが大仁多高校を受験する時にも俺が何度か学習指導をしたんだっけか。俺が大仁多高校を受験すると知ったとたん、担任に進路変更の紙を提出したと聞いたときには驚いたものだった。……そのせいで勉強が大変になったわけだけど。

「まあ今はちゃんと授業を受けて、板書を写してくればそれでいいさ。ノートまとめからは手伝ってやれるからさ」

「なるほど。……今度、時間があるときに以前の英語の和訳を写させてもらってもいいですか？」

「マテコラ」

包んでいる風呂敷をほどき、弁当を開きながらお願いしてくる。

今は親戚の家で生活しているという話だが、随分手の込んだ弁当だな。おかずに充実している。

……が、ちよつと待て。悪いがそれだけで今の発言を見逃すほど俺は甘くはないぞ。

「え、何？ 和訳って授業でやったやつだよな？ ……なぜそれを写す？」

「……寝てました」

テヘツ、と相手の背後から聞こえてきそうなほどの満天の笑みを浮かべている。

……背筋が凍る感覚を覚える。正直そういうことをやるのは可愛い女子だけでいい、本気でそう思った。

無言で自分を見続けている俺に気づき、あわてて西村は弁解をしようとする。

「いや、どうも練習のせいかな疲れてて、英語が心地よい子守唄のように聞こえるというか……」

どうやら先生の言葉をBGMとして心地よい眠りにしていたようだ。

「言い訳は以上か。……そうか。ならば仕方がない、自力で頑張ってくれ」

「ちよつと本気で待ってください！」

視線を静かにそらした俺の手を握って、必死に懇願してくる西村の

姿がそこにはあった。

『お願いします』と何度も何度も言い放つ。俺しか頼りになる相手がないのか、手を離すまいと必死だ。できればその情熱は明日の練習試合にまでとっておいてもらいたい。

「はあ。……OK。ただ最低限単語の意味とかは調べておけよ」

「ありがとうございます！」

本日だけです。何度目となるかわからない感謝の言葉をBGMに食事を進める。ふむ、今日のメニューは少し肉が少なかったかな？夜はタンパク質摂取の意味も兼ねて肉中心のメニューにするとうよう。

……そういえば他のバスケット部員は勉強大丈夫なんだろうな？ テスト前になつていきなり焦り始めなければいいんだけど。

「おうおう、今日はやけに賑わっているなお前ら」

「お待たせ。食堂がいつもより混んでてね、時間がかかっちゃったよ」
「あ、勇と明。来たのか。悪いな、授業準備の関係上先に食ってた……つて、あれ？ 橙乃も一緒か？」

聞きなれた二人の男の声が聞こえ、座ったまま振り返る。

……すると、いつもは食事の時は見かけない橙乃も一緒にいた。珍しいな、てつきり他の女子と一緒に食事を取るものだと思っていたのだけど。普段からおとなしい性格のようだし。

「ああ、さつき券売機のところで見かけてさ。俺が声をかけたんだよ。一緒に食うやつもないって話だったからな、いいだろ？」

「……うん。白瀧君、隣大丈夫？」

「別に構わないよ」

ありがとう、と一言お礼を述べて橙乃は俺の隣の席に座った。彼女のメニューはパスタ、女子に特に人気のあるメニューである。

……てつきりお弁当なのかとも思ったが、どうやら違ったようだな。

ちなみに男子二人のメニューはどちらも日替わりの定食メニューである。今日はカツなどのおかずが見える。たまには俺も学食を食べてみようかな？ いつも弁当だしたまにはいいかも。

「橙乃は普段昼飯の時どうしているんだ？ いつも一人で？」

「ううん。友達と食べているんだけど、彼女今日は委員会の仕事があつていなくて……」

「そっか。……もし一人のときは普通に声かけてくれて大丈夫だよ。食事は大勢の方がいいし、色々話したいこともあるからさ」

「……そうだね。ありがとう」

改めて橙乃の姿を見ると、以前練習の時に見かけた時の表情とは違って、おとなしく物静かな感じだな。こっちの方が素の姿なのかもしれない。こちらのほうが可愛らしくて個人的には好きだな。

……うん？ そういえば俺って橙乃とゆつくり話すのは練習初日以来じゃないか？ ミニゲームの後は結局話す時間がなかったし、その後もクラスが違うという事情もあつてまともに話していない。

……あ、全然だ。よく考えたら俺彼女にあまり良いイメージをもたれていない気がする。初めの会話があれだったからな。……さすがにこのままではまずいな。少なくともIH予選までには一度話をしておこう。

「そうだけ、同じ部活仲間で知らない仲でもないんだから。なんなら頼めば弁当だつて白瀧が作ってくれるかもよ？」

「……いや、さすがにそれでは要の負担が大きすぎるよ」

「あ、白瀧君って弁当手作りなんだ」

「ああ、時間がある時にはいつも作っているよ。……今のところ毎日だけだね」

さすがに大会中は厳しいだろうが、今はまだ疲れもピークを迎えているわけでもないからな。

学食でもいいのだが自分で作った方が栄養バランスも管理しやすく量も調整できるから丁度いいのだ。料理は作っていて楽しいこともあるし、今のところ言うほど負担となつてはいない。

「でも、時間とかは大丈夫なの？ 最近は特に練習が厳しいし……」

「俺もそこは同感なんですけど。白瀧さんて寮でも休んでいるイメージがないし」

「西村、お前は俺を何だと思っているんだ!?!」

休まないとかもう人間ではないだろう。さすがに自分でも限界だと感じればすぐに方針は変える。

……しかし、それでも余裕があるうちはできることはなんでもする。それが強くなることへの近道だからな。

「心配には及ばないよ。たしかに練習密度は濃くなっているけど、なにせ練習試合が明日なんだ。そのためにやっているわけだし……ここで弱音は吐いていられない」

「……そうだな。ここ数日ゲーム方式が中心だし、もう少し頑張らな」と。監督も今悩んでいるだろうよ。明日の選手選考をな」

勇の意見に明や西村も同意して首を縦に振った。

……十二人。それが明日の試合における登録選手の人数だ。今の一軍から八人の選手が落とされ、さらにその中から五人の先発選手スターターが選ばれる。

今のところAチームとBチームの中から選ばれるだろうが、それでも半分だからな……

「西村も頑張ってくれよ。お前にだって十分可能性はあるんだから」

「いや、それはわかっているけど。……すでに小林さんと中澤さん、二人の正メンバーがいるんすよ?」

「馬鹿やろう。仮にも帝光バスケ部でベンチ入りしていたような男が、そんな簡単に弱音を吐くな!」

「うっ……」

ビクツと体を震わせ、西村が箸を止めた。

……西村は帝光中学時代、スタメンには選ばれなかったもののベンチを暖めていた貴重な戦力だ。赤司という絶対的支配者がいたためにポイントガードとしてコートに立っていた時間は短いものの、決して西村が不要な人間であつたはずがない。

こいつは努力家だ。

一年の時は偵察部隊、二年でようやく二軍入りを果たし、上の代が引退したのとほとんど同時に一軍入りを果たした。

少しずつではあるが、確実に強くなっていた西村だ。ならばその実績には誇りを持ってもらわなければならない。

「まだ結果は決まっていけないだろう。ミニゲームの時だって、お前は最初から最後までチームを果敢に指揮し勝利に導いていた。……自信を持って。お前が思っている以上にお前は強い。それは俺が保証する」

「……どうも」

気恥ずかしそうに視線をはずし、西村はまたご飯へと箸を伸ばした。……少しは良くなったかな？

西村が不安視しているのは、自分より上がいるということだろう。中学時代どれだけ強くなっても、赤司という正レギュラーの存在によってスターターとして選ばれることはなかった。

ここでも小林さんという絶対的戦力がいる。元々西村は体格がよくないし、ポイントガードとしての実力も小林さんには敵わない。おそらくそれは事実だ。

……だが、だからと言って西村が弱いわけではない。仮にも一年生で一軍入りを果たしているのだ、それは自信をもっていることなんだから。だから頑張ってくれ西村。俺だって皆と悔いなくバスケをしたいんだからさ。

「悪い、食事中だっというのになんだか重たい雰囲気にしちまったな」
「いや、むしろ聞けてよかったよ」

「うん。私少し感動しちゃった」

「……橙乃、こんなことで感動しないでくれ。俺個人の意見なんだから」

大げさに反応を示している橙乃を諭すように諫めた。……そんな大層なことを言ったか俺？

ご飯を進めながら自分の言ったことを振り返る。まあ悪い気分ではないのだが、俺まで少し恥ずかしくなってきた。

「ま、要の言うとおりだよ。今日で決定と言っても練習が残っているんだ。最後まで頑張るとしようか」

「……うん。皆頑張ってるね。私も当日は無理だろうけれど、今日は精一杯フオローに回るから」

言葉と共に橙乃の顔が寂しげな表情へと変わり、視線も下がって

いった。

……そういえば、そうだったな。彼女はマネージャーだ。俺達選手とは違う。当日は、俺らとは違うことになるということ、きつと彼女も知っているのだろう。

「何言っているんだよ。橙乃だってマネージャーとしてベンチに入るんだろう？ だったら……」

「馬鹿、勇！」

「……へ？ え？」

なぜ止められたのかわからない、と勇は疑問の声を上げている。

こいつ、忘れたのか？ ……いや、本当に知らないだけか？ まあ確かにチーム事情によつては問題視されないことではあるのだが……

「どうしたんだ、要。何か問題でもあるのか？」

「お前もかよ、明。……はあ」

「……いや、だから何がだ？」

「……公式戦において一チーム内におけるマネージャーの登録人数、つまりベンチに入れるのは、一人だけですよ」

「……え!？」

……どうやら本当に知らなかったようだ。二人とも西村の説明に驚愕している。

大仁多にはすでに三年のマネージャー、東雲さんがいる。ベンチに入るとしたら、まず間違いなく彼女だろう。部内における信頼、コミュニケーションなど彼女が一番バスケット部のことを知っているからだ。

そしてそうなると橙乃は明日の練習試合でもベンチには入れないのだ。こればかりは、監督もすでに決めているだろうしな……。

「気にしなくて大丈夫。こうなるってことは考えていたから」

橙乃は気丈に笑ってパスタへとフォークを伸ばす。

——『考えていた』か。たとえそれが本当だとしてもやっぱりつらいだろうな。

練習中だってあれだけ真剣に取り組んでいたんだ。何も感じてい

ないわけがない。

「……安心しろよ橙乃。ベンチ入りしてもしなくても、お前がバスケット部に貢献したつてことは変わらないし、チームメイトであるつてことには変わらない。近くで俺達を支えられなくても、見守つてってくれるんだろ？ だつたらその分まで俺達はベストを尽くすさ。」

だから、あまり深く考えるなよ？ どんな形であれ、試合に挑む姿勢は皆同じなんだから」

「……うん」

できるだけゆつくりと、そして穏やかなこえで話しかけた。

選手と同様、マネージャだつてベンチに入りたいという思いはある。当然のことだ。

……なんだか、余計に負けられなくなつてきたな次の試合。橙乃が安心して試合の行く末を見届けるように、奮起しないといかないな。

「さつすが要。言うこと一つ一つが違うね」

「……ちよつと黙つてろ勇」

「へぶしつ!？」

空気をぶち壊す勇の足に一つ蹴りを入れておく。これで静かになつた。

たしかに空気を変える時にはそういう明るさは必要だが、橙乃のような女性が相手の時はこうやつて黙らせたほうが都合が良い。

「……いや、だが確かにお前の言う言葉には説得力があつたぞ白瀧」

「だから今は黙つてと……つて、小林さん!？」

「東雲さんも！ 聞いていたんですか!？」

椅子の背後からどこかで聞いたような声が聞こえてきたと思つたら……小林さんと東雲さんの姿があつた。

「まあな」と気さくに返してくる様子から、大体の話は聞いていたとということが想像できる。

「お前達が揃つて食事している姿が見えたんで、少し気になつてね。」

……だが、真剣に話しているところ悪いんだが。橙乃、残念ながらお前の考えていることははずれだよ」

「……え?？」

「伝え忘れていたことがあったの。折角だから今伝えておこうと思つて」

「……？」

「先ほどまでの空気を壊してしまうようだが、皆で出られるならば別に構わないだろう？」

「……は？」

小林さんと東雲さんの言っている言葉の意味がわからず、俺も含めてテーブルにいる全員が頭に疑問符を浮かべている。

……果たして、一体どういう意味ですか？

さすがの俺も答えが見つからず、小林さんの笑みを不思議そうに見つめるのであった。

第十話 選ばれた者達

「——アシスタントコーチ、ですか？」

勇が東雲さんが言った言葉を確認するように聞き返した。

……アシスタントコーチ。練習や公式戦において、監督の補佐として共に選手に指示を出したりしてチームを支える大事な役職である。

「ええ。私は試合ではマネージャーとしてではなく、アシスタンスコーチとして参加することになっているの」

「去年から葵にはその任についてもらっていてな。今年も橙乃がマネージャーとなってくれたこともあるし、継続して彼女にはコーチとして試合に望んでもらう予定だ。」

「……そんなことが可能だったんですか？」

たしかにその方が喜ばしい。しかし不信感を抱いているような言い方をする西村ほどではないのだが、俺も疑問に感じてしまう。

正直な話、俺には裏技のようにしか聞こえない。マネージャーならともかく、監督やコーチとなると本来は学生が務めるものではない。そんなことがまず認められるのか、とても楽観視はできない。

「問題はないさ。正式な申し出をして通ったことだし、事実去年も東雲は何も通達されていない」

「それに、前例がないわけではないのよ？ コーチとして選手がベンチに入ったこともあるそうだし、今だって東京都では女子高生が監督として出場している高校があるって聞いたことがあるわ」

「漫画の世界だけじゃなかったんですね、それって」
だがいらぬ心配だったようだ。ここまでこの二人が太鼓判を押ししているというのだから俺達が気にすることではないのだろう。

……女子高生が監督として試合に出ているという話には驚いたが。それこそ本当に漫画の世界のようだ。

「ま、よかったじゃんか橙乃。これでお前も何も気に病むことなく、皆と試合にでれるってことだ」

「ああ。だから明日も大仁多のマネージャーとしてしっかり頼むぞ！」

「……は、はい！」

小林さんが肩に手を置いて、彼女への期待をこめて言い放つ。また橙乃もそれに応える様に明るい声で、小林さんの目を見て言った。

……いやー、やっぱり小林さんは凄いな。一つ一つの言葉に重みがあるというか、さすがは主将って感じた。赤司は同年代だったためか、あいつとはまた違ったものが感じられる。頼りになる先輩というのはやはり良いものだと思えて感じる。

「おめでとさん、橙乃」

「あ、ありがとう白瀧君」

「いや、俺は何もしてねえって。……さて、それじゃ俺は次の授業の準備を任されているのでお先に失礼します」

同級生たちに一言言って、先輩達にも挨拶をした後俺は席を立った。

……橙乃が無事にベンチ入りか。だとしたら、肝心の選手である俺らがベンチ入りしないわけにはいかないよな。

まだ午後の授業も残っているし、部活までは時間がある。

しかしいつも以上に俺は早く時間が過ぎてほしいと強く思ってしまうのだった。

そしてその日の午後。

秀徳との練習試合前日、最後の練習が行われていた。

ロードワークや基礎練、コンビネーション練習などを終えて、最近はその日のように行われているハーフコート5対5が繰り広げられていた。

一軍の選手達は誰もが『自分がレギュラーの座を掴むのだ』という意気込みをプレイで見せ付けるように、いつも以上にキレのある動きを見せている。藤代もまた、彼らの動き一つ一つを見逃すまいとその眼光を光らせていた。

その視線の先は現在、AチームとBチームの方へと向けられている。

オフェンス側である中澤がマッチアップしている小林に半身を向けながらドリブルを続け、隙をうかがっている。……しかし、全国区の実力を持つ小林はその些細な隙さえ与えず、常にプレッシャーをかけている。

「……中澤さん！」

「っ！——よしっ！」

そんな中、お得意のスピードで佐々木のマークを外れた白瀧が声を出し、バウンドパスを受け取った。

すぐさま佐々木が詰めるものの、白瀧は受け取るや否やその腕を振るい、ゴール下の光月へとパスをさばく。ボールを持つている時間が短かったがために、佐々木はそのパスに反応できない。光月は松平に背を向けた状態でパスをもらった。

藤代の判断により、チーム交換となった兩名。しかしそれでも彼らが対決するということには変わらない。

「さあこい、光月！」

「……はい！」

光月のポストプレー、第一段階は成功した。

相手を待ち構えるように、大きく手を開きながら松平は声を張り上げる。

しかしその声に威圧されることなく、光月もまた力強く声を出す。

現在ポジション争いが激しい一軍メンバーの中、その中でも未だに勝負が明白にはついていない者同士の対決だ。否でも応でも彼らの気迫は上昇していく。

（光月、たしかにこいつのパワーは俺でも勝てない。純粹なパワー勝負では厳しい。……しかし、その代わりこいつはシュート精度に難があるせいで最初に必ずペネトレイトしてくる。だからこそそこを狙う！）

松平の目が鋭く光る。腰を落とし、いつでも反応できるように体勢を整えた。

今光月がいる場所はペイントエリアギリギリの場所。今までの対戦から、彼のシュート精度が高くないということはすでにわかっている。ゆえに彼のドライブインに最大限の注意を払い、集中力を高めた。

……だが、光月は相手が警戒しているということを察すると、その場で軸足を中心に回転してリングの方向へと体を向け、そのままジャンプシュートを放った。

「なにっ!?! (そのまま直接撃ってきただっ!?!)」

——ターンアラウンドシュート。インサイドでプレーする選手が多用する技ではあるが、今までは一度も使っていなかったがために意表をつくことができた。

驚きながらも、それでも対応を忘れる事無く松平はそのままブロックに飛ぶ。

練習とは比べ物にならないほどの条件だが、それでも光月は迷う事無くシュートを撃つ。

手からボールがリリースされ、松平の指の上空を通過していく。

両チームのセンターである黒木と三浦、さらに白瀧がゴール下でリバウンドを狙うものの……彼らの出番はなかった。ボールはリングを潜り抜け、光月の勝利を示した。

「……よしっ!」

「よくやった、明。ナイツシュー!」

ゴール下で小さくガッツポーズする光月。そんな彼を讃えるように白瀧も声をかけた。

「……くっ!」

「ドンマイ、松平」

「わかっている。(やつにミドルシュートはないと勝手に判断していた。その結果がこれか……!)」

そんな彼とは対照的に松平は自分の甘さに腹が立ったのか、握っている拳が震えている。

チームメイトの小林の声も彼の怒りを静めるということにはならなかった。

「……練習の成果、ですね」

その一連の動きを見て、藤代が呟いた。

放課後光月がひたすらシュート練習を繰り返していることは藤代も知っていた。

今日まで中々結果に現れることはなかったものの、ここで松平ほどの選手を相手に見事に決めたのだ。この一発は藤代の中での光月の評価を一気に上昇させた。

「よし、一本決めていくぞー!」

攻守を入れ替え、ボールを受け取った小林が自チームを鼓舞する。

3, 4回とドリブルを繰り返し……そしてそのままドライブイン。速度を一気に上げていく。

「……くうっ! 小林、さん……!」

マークについていた中澤がすぐさま体を反転させるも、止めることができない。やはりここで身体能力の差が大きく響いたようだ。

すぐさま白瀧がヘルプに入り、小林の行く手を塞ぐ。

それを見て小林はスペースに駆け込む味方選手を確認し、横へビハインドパス。さすがに背中を通すパスは止められず、白瀧が即座に視線をその先に向けると、佐々木がフリーの状態になっていた。

「ナイスパス!」

「……くそっ!」

ボールを受け取った佐々木はそのままフォームを整え、ジャンプする。

……が、そう簡単にはいかない。白瀧は相手が体勢を整えている間に距離を詰め、ブロックに飛んだのだ。

「なに!? ……速い!」

「俺はそんな簡単に点をやらない!!」

「……まだだ!」

このまま撃てば間違いなく叩き落とされる。しかしここで攻撃そのものはやめない。

佐々木はセットしていた右手を下げ、そのまま山形にボールを遠くへ浮かせた。その先にいるのは、チームメイトである神崎。

「よっし、任せろー！」

跳躍し、両手でがっちりボールを確保する。

神崎も最近はあまり良いところを見せられていない。ここで一つ形を残したいと意気込みはばっちりだ。

「いいや、そう簡単にはやらせねえよー！」

「……があっ!？」

しかし神崎が両足で着地すると同時に、彼の体の間から何者かの手が伸びてきて、ボールをはじいてしまった。

ステイールを実行したのは山本。神崎の着地の瞬間を狙つてのステイールであつた。

攻撃でも守備でも要所要所で働いてみせる副主将、見事なものであつた。

「ボールはまだ生きているー！」

ボールの行き先を見た白瀧が叫ぶ。

まだサイドラインを割っておらず攻撃権は移っていない。

小林と中澤が急いで奪取に向かう。……そして再び小林の手に渡つた。

「……まったく。手ごわいやつらだな」

「……同感です」

腰を落として視線を交わす二人。

すでにこの二人の勝負はついているのかもしれない。だがしかし、司令塔としてチームを支える選手として一瞬たりとも力を抜くわけにはいかなかった。

再び彼らの間で火花が散る。

小林が視線をチームメイトへ向けた。

神崎、佐々木の両名はスピードに優れた敵ディフェンスのマークが厳しい。

黒木は技術が優れているということを利用して黒木をpushさえ込んでいる。

そして松平は光月のマークを振りほどくべく動き回っていた。

今のところ確実に得点へと繋げるならばインサイドの二人へとパ

スをさばくことであろう。

「……ならば後は、やるだけだ!」

一度判断したのならば迷わない。

小林は右にボールをはじいた後再び左へと返し、そのまま切り込んでいく。動きのキレの鋭さのためか、中澤がフェイクだと気づいたときにはすでに小林は自分のマークを外れていた。

小林がフリーのままシュートモーションに移る。

すると先ほどと同様、白瀧が反応しこちらに詰め寄ってくる姿が見えた。

「だろっな。そう来ると……信じていたよ!」

だからこそ、小林は飛び上がるとすぐさまボールを斜め下へ打ち出した。

ボールはバウンドし松平の下へとわたる。……再び二人の対決を迎えることとなった。

受け取るや否や、松平は相手に反応さえ許さないといわんばかりにゴールへ体を向けると、やや後方へと飛び、距離を開けながらシュートを放つ。動作が短かった上にフェイダウエイシュートで相手との距離を離れた。これならとめられない。

「させるかっ!」

「な……っ!?!」

しかし、気がつけば松平の視界は巨体で塞がっていた。

光月は松平の動きに反応しブロックに飛んでいたのだ。

跳躍力が凄まじいのか、光月の指がボールを触る。ブロックに成功した。

その結果ボールはリングをくぐることはなく、数回リングとボードに激突する。

「くそっ、リバウンドだけは絶対に……!」

「取れるつもりか? ……甘いな」

ゴール下では両センターの一騎打ちが飛ぶ前に行われていた。

……しかし、黒木の体を上手く使ったスクリーンアウトの前に、三浦はどんどんポジションを奪われていく。

「……ちいつー！」

それでも飛ばなければならぬ。

三浦と黒木が同時に地を蹴る。……しかしやはり最初の立ち位置のせいかな、ボールは黒木の近くへ落ちてくる。

「そうはさせるかー！」

「なにっ!？」

そしてやはり黒木がボールを確保しようと思われた瞬間、予想外の出来事が起きる。

先ほどブロックに飛んだはずの光月が目の前に現れ、二人よりも先にボールを確保したのだ。

「……光月」

「(こいつ、着地と同時に走り出してやがった！ それでも黒木を抑えてリバウンドを取るなんて……)」

二人は驚愕し、表情を固くした。

それは周囲の選手達も同様のようで、藤代もこのときだけは光月一人にのみ視線を注いでいた。

「——本日も皆さんお疲れ様でした。

やれることはやりました。後は明日の練習試合でぶつけるだけです。」

今日までの皆さんの動きを見て、明日のメンバーは決定します。皆さん、期待して待っていてくださいね」

それでは後は頼みます、と小林に言い残して藤代はその場を去っていく。

小林の締め挨拶が終わるとしばらくして再びコートからはボールがバウンドする音とバッシュがコートを蹴る音が聞こえてきた。いつもよりも音が少ないものの、皆最終調整ということで各々やっているのだろう。ならばそれは選手それぞれであるし、気にとめることではない。

「——さて、どうしたものでしょうかね？」

体育館内にある一室、監督室で藤代は呟いた。

誰に向けられたものでもないそれは自分に対する問いであったのだろう。

その先の言葉は言うまでもない。『明日の登録選手』のことである。「少なくとも12人は一軍の中からのみ選抜する。これはすでに確定事項だ」

机の上に20人の選手の名前が書かれた、丸い白い駒が置かれる。書かれているのは全員一軍の選手。これから選ばれる可能性を持った強者だ。

(……そしてその中でも10人はすでに確定。まずこの中から先発選手スターターを選ぶこととなる。残りの2人は……スターターとの相性も考えて、ということになりそうですね)

さらに藤代は20の駒の中からさらに10個の駒を選出した。

AチームとBチームの選手達。藤代が特に目をかけていた、大仁多高校の中でも最強メンバーと言ってもおかしくない10人だ。

「まず一人目。……小林圭介。ポイントガードとしてもフォワードとしても活躍できる彼は間違いなくスターターだ。去年の秀徳のことを誰よりも知っているし、誰よりも雪辱に燃えている」

最初に手にとったのは小林圭介と書かれた駒。

その駒をバスケットが描かれている盤の上へと置く。

妥当な人選であろう。主将としても選手としても一流であり全国区と謳われている彼は選ばれて当然だ。背番号4を背負って戦うにふさわしい逸材である。

「そして二人目。……白瀧要。オフエンス・ディフェンス問わず活躍し、緑間君のことも熟知している。その逆もあるものの、キセキの世代と渡り合える数少ない選手だ」

次に白瀧を示す駒へと手を伸ばし、盤上へ設置した。

期待の即戦力ルーキーとして入部し、その期待に答えて躍動している白瀧もまた当然のように選ばれた。

一度同じポジションである佐々木の駒を一瞥し、何か考え事をする

仕草が見受けられたものの、すぐに思考を選手選抜へと移す。

「三人目。……黒木安治。高い身長と優れた技術の持ち主。大仁多のインサイドを支えるのは彼だ。秀徳の大坪君と渡り合えるかはわからないが、……それでも、センターとしては彼がうちの一番だろう」
続いて黒木安治の駒が盤上へと移された。

同じ2年生センター・三浦と激しい争いを繰り広げ、終始リードしていた黒木だ。義理堅い彼のことだ、三浦の分までゴール下を守ってくれるだろう。

「ここまでの三人はすでに方針として決まっていたこと。

……問題はあと二人。シューティングガード、そしてパワーフォワードだ」

視線を盤上から残っている四つの駒へと写す。

神崎、山本、松平、光月の四人を示しているものだ。

「……本来ならば、SGは山本君だと迷わず選ぶだろう。シューターとしての能力もそうだが、彼はディフェンスも上手い。速さを生かしたドライブもあり、副主将というチームを支える役割からしても彼は適任だ。

だが、彼は波が激しい。調子が良い時はとことん決めてくれるものの、不調の時はまったくといってよいほど入らない。安定性にかけるというのが欠点だ。……現に去年のWC、秀徳戦での彼はひどかった」

山本の長所と短所を客観的に述べ、昨年の姿を思い浮かべるように瞳を閉じた。

WC対秀徳戦。当時レギュラーであった山本はその日も当然ながらスターターとして出場した。

……しかし、今までチームの得点源となっていた彼の姿はそこになかった。

試合開始から4連続でシュートをはずし、結果としてその日の彼の得点はフル出場ながら1得点で終わった。

「それに対して神崎は一年生と経験が浅く、選手としての実力では劣っている。

しかしその分彼は安定感があり、平均して得点を重ねる。……また白瀧君との相性も良い。果たしてどうするか……」

そしてもう一人のシューター候補、神崎のプレイスタイルについても頭を悩ませた。

各々が長所と短所が存在し、どちらを選んでもやはり秀徳を相手にする以上は覚悟しなければならぬ。

ゆえに監督として最も可能性のある選択をしなければならなかった。

藤代は一度視点を元に戻して考え直すため、SGの話は置いておいてもう一つのことを考えることにした。

SG同様に悩みの種となっているポジション、パワーフォワード P Fのことを。

「松平君も今年三年。全国を知っているということもあってやはり彼が適任のように思える。」

しかし光月君もかなりの素質を持っている上に成長が著しい。実戦経験の少なさがあるものの、試してみる価値はあるというものだ」
こちら三年と一年。どちらか一人しか選べないとはいえ、どちらも選んでおきたいところではある。

特に光月については未知数であった。当初こそ実力・経験の面から松平の選出を考えていたものの、最近の様子から実戦で全国区の相手と戦い、彼の進化を見てみたいという思いがある。

「……さて、困ったものですね。これだから監督というものは苦労が絶えないんですよ」

選択肢が多いというのも大変だ、と呟きながら再び思考をめぐらす。

誰かを選ぶということは誰かを落とすということ。そんな簡単に決めて良いことではない。

それを知っているからこそ、藤代は何度も何度も考え直し、大仁多の最高・最強メンバーを選んでいくのであった。

練習試合当日。

俺達はいつもよりも朝早くに登校し、行動を開始した。

軽い練習で汗を流し、感覚を確かめたらあとは会場の準備だ。

パイプ椅子を出したりモップがけをしたりと次々と準備を整えていく。

……そして全ての準備を整え、後は秀徳高校を出迎えるだけとなった今。

俺達は藤代監督によって全員が呼び出されていた。その理由はもうわかってる。

「——これより、今日の練習試合に出場するスターティングメンバーを発表します。

名前を呼ばれた方から返事をして前に出てきてください。東雲さんからユニフォームが配布されます」

藤代監督が真剣な表情で宣告する。監督もかなりの時間を費やして考え抜いたのだろう。

——そう。出場メンバーの発表だ。今日この中で戦える数少ない選手。それがようやく発表される。

橙乃より一つのボードを受け取り、高らかに選手の名前を発表する。

「——4番、小林圭介！ ポイントガード P G！」

「はいっ!!」

名前を呼ばれ、小林さんが堂々と答えて前に出る。

ユニフォームを受け取り、表情を崩す事無くいつもの真剣な表情で俺達と向かい合った。

……まあ、小林さんほどの人がこの程度では浮かれたりしないか。むしろ誇っているように見える。

選ばれなかった中澤さんも、悔しがるところか自分のことのように嬉しそうだ。よほど慕っているのだろう。

「——5番、黒木安治！ センター C！」

「……はい」

ずっしりとした、図太い声を出したのは黒木さん。

同学年の三浦さんとの戦いに勝ったか。練習中では高い技術を持っていたし、妥当な線であろう。

秀徳はインサイドが強いことで有名なチームだが、きっとそれを相手にしても十分通用するはずだ。

「——6番、……山本正平！　シューティングガード　S　G　！」

「……っ!!」

「はいっ！」

山本さんの名前が呼ばれた瞬間、勇の表情が曇る。……ダメ、だったか。

ユニフォームを受け取り、こちら側と向かい合うように立った山本さんは嬉しそうにこちらに笑顔を向けている。

……選手として山本さんの方が上だと藤代さんは判断したってわけか。

「……諦めんなよ勇。試合である以上はベンチにいれば出れる可能性は十分あるんだ。だから、諦めるなよ」

「はっ。何を言っただ要。言われるまでもねーよ」

吐き捨てるように言い放つ勇だが、決して腐った様子は見られない。

覚悟はしていたようだな。ならば出れるということ、まだ名前が呼ばれるであろうことを信じて勇には耐えてもらおう。

「——7番、白瀧要！　スモールフォワード　S　F　！」

「——はい!!」

そして、俺の名前が呼ばれた。

監督の声に負けないように、腹の底から声を出す。

……ようやく最初の階段に足をかけることができた。ならば、後は進むだけだ！

「はい、7番よ白瀧君。……期待しているわ」

「ありがとうございます」

「……応援している。頑張ってー！」

「ああ。頑張る！」

東雲さんよりユニフォームを受け取り、暖かい声援を送ってくれた

橙乃に答え、列に並ぶ。

視線を上げると佐々木さんの姿が見えた。……やはり、どこか寂しげに見える。

俺はその場で一礼し、すぐに姿勢を正した。

……もう後はプレイで報いることしか俺にはできない。皆の分まで戦うだけだ。

俺が呼ばれたことすでに四人の選手が発表された。

残るスターターは一人。——PF。松平さんか、光月のどちらかだろう。

俺が列に並んだことを確認して、藤代監督が最後の一人を読み上げるべく、口を開いた。

「……9番、光月明！ P F！」

パワーフォワード

「……え？」

「光月君？ いませんか？」

「おい、明お前だぞ！」

「あ……は、はい！」

そして呼ばれたのは明の名前だった。

自分が選ばれたということが信じられないのか、明はその場で呆然としている。もう一度呼ばれ、近くにいた勇に促されたことであろう。明は前に出てきた。

感慨深そうにユニフォームを受け取り、こちらへと歩いてくる。

「よろしく頼むぜ、明」

「……要、僕選ばれるとは思っていなかったよ。……もう、嬉しくて」
「馬鹿。まだ試合もやっていないのに喜ぶな。それは、試合が終わるまでとっておけ」

よほど嬉しかったのか、表情が笑みでいっぱいだ。

……練習したかいたがあつた、か。よかつたよ、お前みたいなの努力が報われてき。

だからこそ試合でもきっちりしたのむぞ。お前が今日の試合で活躍することが一番なんだから。

「以上の5人が今日の試合のスターターとなります。現時点で大仁多

高校のベストメンバーと考えていいでしょう。皆さん、頼みますよ」
「……はい！」

藤代監督より奮起を促され、俺達五人は全員揃って答えた。

……ベストメンバー、その名に恥じないような戦いを見せなければ選んでくれた藤代監督にも他の選手にも失礼だ。最初の試合とはいえ、心配することはない。やれることを最大限やろう。

すると突如他の選手の方から拍手が響く。——松平さんだった。

俺達を応援するように響くそれは佐々木さんや三浦さんを初めとした選手達にも伝わり……そして全員へと伝わった。

激しいとさえ感じるそれはしかし心地悪いものではない。

……改めて、ここにいる選手達の重みが伝わってきた。

「……それでは、これより残るベンチメンバー7人を発表します」

拍手が鳴り止んだところを見計らって、藤代監督がさらなる続きのメンバー発表へと移る。

ベンチを温め、いつでも出れるように準備しておく七人の選手を。

「——8番、松平猛！ パワーフォワード P F！」

「はいっ！」

松平さんの力強く、頼もしくさえ感じる声が響く。

ユニフォームを受け取り、こちらに歩いてくる。……と思ったら、明の肩に手をおいて、それから並んだ。

……頼んだぞ、ということだろう。いつもなら言葉で言うことだというのに、こういう時はやけに大人なんだな。

「10番、中澤秀樹！ ポイントガード P G！」

「はい！」

続いて中澤さんが呼ばれた。

並ぶ際に小林さんに一礼してからこちらに並んでいる。

……小林さんのように全国区のPGと呼ばれている選手の2番手のような形だが、それでも司令塔としては他校なら十分スタメンに選ばれるだけの力だ。控え選手としてチームを支えてくれるはず。

「11番、佐々木！ スモールフォワード S F！」

「……はい！」

そして俺とポジション争いを繰り広げた佐々木さん。

「……勝ってくれよ」

「ええ。いざというときは頼みます」

一言、それだけ告げて立ち止まることなく歩いていった。だから俺も敬意を持ってそれに応えよう。

佐々木さんだって去年の借りを返したいという思いはあるはず。

……その代役と言ってはなんだが、勝って雪辱を晴らす！

「12番、三浦隼人！センター C！」

「はい！」

続いて2年生C、三浦さんが出てきた。

ユニフォームを受け取り……やはりと言うべきなのか、黒木さんの目の前で止まった。

「辛くなったらいつでも言えよ。すぐに代わってやる」

「……ああ。頼りにしている」

「っ!? ……ちっ!」

思いもよらぬ言葉だったのか、三浦さんは顔をそらし舌打ちをする
と去っていった。

そんな姿を見て黒木さんはいつもの口癖(?)である、『甘いな』と
呟いている。……本当に仲が良いなこの二人。

「13番、神崎勇！シューティングガード S G！」

「……はいっ!」

そうしてついに呼ばれたのは神崎。

待ち遠しかったと言わんばかりにその声は明るい。嬉しそうにユニフォームを受け取っている。

「……勇、きちんと準備だけはしておけよ」

「ああわかってる。だからそれまでは頑張ってくれ。俺も精一杯応援する」

「そうだな。お前が出ても試合に支障がでないくらいの試合にしといてやるさ」

「……嬉しいんだけど嬉しくない事態だぞそれ」

冗談だ、と笑って返す。勇も最後は笑みを見せて歩いていった。

明とも会話をして、緊張をほぐしているようだ。……それにしても明の表情がいつもよりも少し固いような気がするな。俺の気のせいかな？

「14番、西村大智！ ポイントガード P G！」

「……はい！」

おつ、言っている間にも今度は西村の名前が呼ばれた。

あいつもやはり嬉しそうで満天の笑みを浮かべている。……勝ち取ったんだな西村。だから言ったろ？ お前は強いって。

「……白瀧さん。やりましたよ」

「ああ。だが、本当の勝負はこれからだ。……気を抜くなよ」

「はい！」

力強い返事をして西村は歩いていく。

もう自信の方は大丈夫そうだな。ベンチメンバーに選ばれるくらいにまで成長したんだし、期待して待ってしよう。

「15番、ほんだきようすけ 本田恭介！ パワーフォワード P F！」

「はいっ!!」

そして最後の一人。本田が名前を呼ばれた。

ミニゲームで俺達が最初に戦った相手でもあった。得点能力が高以上に、身体能力もなかなか優れている。……こいつも、ベンチメンバーに選ばれたか。

「よう本田。……よかったな」

「……うるせえ。まだだ、まだ足りねえよ。お前らがそこにいるんだからな」

「そうかい。それじゃあ今日のところはその感情を試合にぶつけてくれ」

「言われるまでもない！」

俺の目の前で立ち止まるものの、俺の目を見る事無く行ってしまった。

……強い目をしてたな。あくまでも俺達と並ぶことは諦めていないようだが、かといって周りが見えていないというわけではない。

松平さんがベンチメンバーにすでに登録されているために出番は

少ないかもしれないが、あれだけの気迫があればベンチ入り選手としてはなんら問題ない。最後まで自分のできることをしてくれるはずだ。

「以上の12名が本日、秀徳高校との練習試合で選手登録する方々です。」

自分がその座を勝ち取ったということを忘れずに試合に挑み、また他の方々も自分達が太仁多高校のバスケット部の一員であることを忘れずに、応援・仕事に励んでください。

……今日もベストを尽くしましょう。皆さんの働き、期待しています！」

そう藤代監督が言って締めくくると再び拍手の嵐が巻き起こる。

選ばれなかった選手の中には不満そうな表情の人もいたが、皆目を逸らそうとはしない。

久しく経験していなかったスターター。その大役に一年生であるにも関わらず選ばれたんだ。期待している人たちも、嫉妬している人たちもいることだろう。

……だが今は一個人としてではなく太仁多高校バスケット部の一選手として戦い、彼らの目に焼き付けよう。新しい太仁多高校のレギュラーの力を。

第十一話 因縁の対決

「うっわー。さっすが大仁多、設備も整ってんなー。うちのあのボロ校舎とは大違いだ」

統一されたオレンジ色のユニフォームを着た集団が大仁多高校の正門を潜り抜ける。その数はゆうに30を超えるだろうか。

どの選手達も皆体格がよく、スポーツに勤しんでいるということは見ただけでわかる。

そんな中、その集団——秀徳高校バスケット部の一人、高尾が周りの建物を見回して感慨深そうに呟いた。

彼が所属することは伝統を重んずる学校であり、そのためか校舎もボロい……もとい歴史あるものである。

そのために大仁多のような設備が整えられている高校がうらやましかったのだろう、自然に出てきた言葉のようだ。

「数字は忘れたが、たしか二年前だかに設立記念ということとで施設を大幅に改築したらしいからな。そりやうちとは比べものにならねーよ」

「うらやまし〜。監督、秀徳もそういうの無いんすか？　うちだって伝統だけならかなりのもんっしょ？」

一年のボヤキが聞こえたのか、金髪と鋭い目が特徴である同レギュラーの三年生、宮地清志が答えた。

変なところで対抗心が出たようで高尾は先頭を歩いている監督の中谷仁亮に一言添えている。

監督も思うところがあつたのか、普段の考えているそぶりで独り言を呟いている。

「ふ〜ん、そうだね〜。……よしわかった。今日の練習試合で大仁多に圧勝したならば、理事長に口添えしておこう」

「マジッすか!?!　よっしや、俄然やる気出てきた!」

監督のこの一言で高尾は小さくガッツポーズを作っている。それを見て隣を歩いている緑間は「単純なやつめ」と呟いた。

『圧勝』という条件が付いている上に、あくまで『口添え』であると

いうことを高尾は気づいていないらしい。

「まあ全ては今日の試合が終わってからだ。あくまで試合中は試合だけのことを考えるように」

「その通りだ。……この試合に勝ち、予選の弾みにするぞ。お前達、準備はいいか!?!」

「おうっ!!」

主将である大坪が皆を引き締めるように大声を出せば、部員もそれに応えてくれる。

去年負かした相手とはいえ、秀徳高校に油断はない。

さらなる力を得た王者は今日も獲物を狩るべく、相手が待っている体育館へと足を踏み入れた。

「……どうやら来たようだぜ、相手さん」

「……そのようだな」

大仁多のベンチ入りメンバーがシュートチェック中に、秀徳高校の到着に気づいた神崎。

白瀧もその言葉でようやく敵が現れたことを知り、視線を相手集団の元へと移す。

「大坪だぜ。東京屈指のセンター。ますますデカくなったんじゃないか?」

「それよりもあいつだよ。あの眼鏡をかけた、緑色の髪をしているやつ!」

他の部員達の間で強敵が現れたことによりざわめきが生じる。

その原因となっているのは秀徳が誇る大型センター、大坪。そして

「あれが『キセキの世代』ナンバーワンシューター、緑間真太郎だ!」

——秀徳が獲得した天才、緑間だ。

一年生の大半は彼の顔と実力を恐ろしいほどに知っており、その経験から。

二、三年生は最後の年の彼の実力を完全に把握していないためか、未知の恐怖からだった。

部員達に波紋が広がる中、代表者である藤代監督と小林が中谷へと歩み寄る。

「どくもく、お久しぶりです中谷さん。去年は随分お世話になりました」

「うん、懐かしいね藤代。半年ぶりとなるか。悪いが今年もいただきますよ」

「それはどうなりますかね。今年は昨年とはまた一味違いますよウチは」

「そうだねー。……だがそれはこちらと同じことだ。それはコートでわかるだろう」

二人の間で火花が散る。

穏やかな言葉とはいえ、これも立派な言葉による戦いだ。試合の前からすでに戦いは始まっている。

「大仁多のキャプテン、小林です。今日はよろしくお願いします！」

「うん、久しぶりだね小林君。こちらこそよろしく。……今年は君が真の意味で率いるチームだ、しっかりと見させてもらおうよ」

「……はい。存分に刻みこんでください。今年、全国を制するチームの姿を！」

「……ふむ。言うようになったね」

藤代と入れ替わるように、小林も中谷に宣戦布告をした。

そんな姿を見て、中谷も立派に成長したものだ和小林を心の中で讃えた。

今年小林が主将。今年は真の司令塔ということでチームを支えなければならぬ。だからこそ小林は逸早くチームを先導するように前に出た。

「藤代監督。秀徳のキャプテン、大坪です。よろしくお願いします！」

「ええ、よろしくお願いしますよ大坪君」

「……大坪」

大坪も代表として藤代と握手を交わす。

小林が振り返ると大坪も彼と向かい合い、無言の圧力がかった。あと少いで二メートルに達するほどの巨体はやはり迫力がある。しかし小林はその程度では動じない。すでに全国では何人も見てきたのだから。

「今日はよろしく」

「ああ、こちらこそ」

お互いが想いをこめて手を握り締めた。

「手加減をするつもりはない。昨年同様、全力で叩き潰させてもらう」
「悪いが大仁多も今年は万全の状態だ。俺もチームも負ける気はないよ」

——去年とは違うのだと、去ろうとする大坪に小林はすれ違いざまに言い放つ。

二人とも三年生であり主将だ。最後の年であると共に背負うものがある。

「ならばコートで見せてもらおう」

そう言つて大坪は案内に従い、進んでいく。他の部員達もそれに従った。

「すぐに見せてやるさ」

背中を向けている相手に小林が言い放つ。強い意志がこもったそれは、短いながらも彼の闘争心を大いに物語った。

「あの、すみません。小林さんですよね？」

「うん？ そうだが、君は？」

練習に戻ろうとする小林であつたが、一人の秀徳生から声がかかった。

少なくとも小林が見たことのない新顔であつた。疑問の声を上げるのは仕方のないことだ。

「俺、高尾和成っていいいます！ 同じポイントガードとして小林さんのこと尊敬しているんですよ！ 今日はよろしくお願いします！」

「あ、ああ。こちらこそよろしく」

差し出された手に小林が応えた。

ここまで敬意を払われると嫌な気持ちではない。小林の頬が若干

緩んでいた。

「何をしているのだよ、高尾。さっさと行くぞ！」

「あ、ちよつとくらい待てよ真ちゃん！……すみません、これで失礼します。また試合で！」

「ああ。また会おう」

仲間の緑間の声を聞き、高尾が駆け出ししていく。

このとき小林は緑間の他にも秀徳ほどの強豪校で一年生が早々にレギュラーを取れるものなのかと、疑問に感じていた。

しかし先ほどの話しぶりから考えると、どう考えても彼が試合に出るようにはか思えない。おそらくは自分が対^{マッチアップ}決するであろう相手のことを小林はじっくりと見つめていた。

「つたく、折角のチャンスだったのに真ちゃん邪魔すんなよな！」

「ふん。お前の都合など、俺が気遣うことではない」

「なんだよそれ。ツンデレにも程があんだろ」

「誰がツンデレだ!？」

「……なんだ。随分仲良くやってるようだな、緑間」

「む。……白瀧か」

「心配して損したぜ」

愚痴を吐く高尾に苛立ちを隠せない緑間であったが、目の前に立つ男を見て表情が一変する。

かつてのチームメイト、白瀧要を目の前にして。白瀧は微笑を浮かべて彼らを迎え入れた。

「心配など不要だ。もとより俺はお前達とは違う。仲間など作る気はないし、その必要はない」

「相変わらず固いやつだな。久しぶりの再会だというのに、全然変わっていないな」

「そういうお前もな。……何か言いたいことがあるのならコートで示せ」

拒絶の意志を含んだ言葉。白瀧もそれを理解して肩をすくめる。

性格がほとんど変わっていないことがわかると「きつと秀徳もこいつの扱いには苦勞しているのだろうな」と人事のように思った。……

事実人事なのだが。

「それならそうさせてもらおうよ。この試合でお前にも戻ってほしいからな」

「……やれるものならやってみるといい。一つ教えてやると、今日のおは朝占いで蟹座は一位だった。どこにも俺が負ける要素はないのだよ」

二人の視線が交錯する。

かつては一度も敵として向かい合うことのなかった二人だが、決して手加減などする気はない。

闘志をむき出しに、お互いがお互いを牽制しあった。

「ああ。……だが、試合前にこれだけは言わせてほしい」

「なんだ？　言ってみろ」

どうしても気になることがあった。緑間の了承を得ると、白瀧は右腕の人差し指を相手の右腕へと向けた。

「……その人形は何だ!?!」

そう、緑間が持っている人形に向けて。

ビシツという音が聞こえてきそうなほどの速さだった。

「決まっているだろう、おは朝が話していたラツキーアイテムだ。ちなみに今日はリカちゃん人形だった」

彼の右腕に収まっているのは、高校男子が持つにはとても躊躇われる可愛らしい人形。……リカちゃん人形だった。

これには他の大仁多高校部員もずっと疑問に思っていたのか、「よくぞ聞いた白瀧!」と心の中で喝采をあげた。その後の緑間の躊躇ない即答ですぐに醒めていったが。

「ずっと前から思っていたけど、お前はアホなのか!?　今日ここまでずっとそれを持ちながら来たのか!?!」

「当たり前だろう!　ラツキーアイテムは常に身につけておく。例外はない!」

「限度があるだろう!　もうお前がただの眼鏡オタクにしか見えないんだよ!」

「誰が眼鏡オタクだ!　俺はただおは朝の指示に従い、人事を尽くし

「ているだけだ！」

再び口論が始まる。おは朝占いを妄信している緑間にとつてはこの程度のことは当たり前であり、とやかく言われる筋合いはなかった。

至極どうでもいいことで激化している二人の戦いを見て、『キセキの世代って一体……』という疑問が広がっていったことを本人達は知らない。

「……し、真ちゃん。……ぷっ」

「何だ高尾。そして話すのか笑うのかどちらかにしろ」

「だって……ぷっ……ぎやはははは！ マジ笑える！」

「笑うな！」

今まで隣で耐えてきた高尾であったが、ついに耐え切れずに爆笑した。

それを侮辱と感じた緑間が声を荒げる。先ほど自分がどちらかにしろと言ったことはもう蚊帳の外である。

「ワリ。だけど俺もそいつと同感。……電車の中、マジ笑えた。真ちゃん、席に座りながらマジ大事そうに人形を抱えているところ、……ぷっ！」

「……高尾」

再び噴出しそうになった高尾であったが、そろそろ機嫌を損ねることを察したのか、緑間の異変に気づいて持ち堪えた。

しかし高校生男子（しかもかなり体格の良い）が集団の中、ただ一人可愛らしい人形を持っていることを想像すると……とてもシユールである。

「何と言われようとも、俺は俺のやり方を変えるつもりはない。……白瀧、話の続きは後だ。そろそろ行かせてもらおうぞ」

「ああ、引きとめて悪かったな。……またコートで会おう」

最後に鋭い視線を白瀧へ向けて、緑間は去っていった。

これ以上雑談に付き合う気はないということだろう。むしろ彼にすればここまでよく試合前にこれだけ話し込んだといったところだろう。

だんだん遠くなっていくその姿を白瀧はただ見つめた。

「……ぷぷつ。いや、うちの連れが悪かったね。えつと……白瀧君、だっけ？」

「ごちらこそ。確かに俺がそうだが、君は？」

「俺は高尾和成。お前と同じ一年だよ」

ようやく笑いが収まったのか、高尾が白瀧に礼を述べながら近づいていく。

「そっか。大変だろ、緑間を相手にするのは」

「まあな。あいつ滅多に表情を外に出さねーし。他人と上手くやっていこうって気がねーからな」

「……やはり、そこらへんは予想していた通りか」

「あ、やっぱりあいつ中学の時もそうだったんだ」

同じ一年で緑間を相手にしているという経験からか、あるいは性格からか。

これから戦う相手でありながらも二人は気にせずに話し出した。緑間本人が聞いたらまた機嫌を損ねるだろうことが予想できる。

「まあな。あいつ頭良いけどバカだったからな。ま、そこらへんあいつのサポート頼むよ、高尾」

「ああ。……だが、緑間じゃないが敵の心配は程々にしといた方がいいーぜ？ あいつ、お前と戦うとわかってから妙に張り切っていたからさ」

「そうか。忠告感謝する。しかし、それはお互い様だろ？ お前も俺の心配よりも、自分の心配をしたほうが良いんじゃないか？」

突如白瀧の声色が変わった。重く、威圧感さえ取れるその言葉に高尾は背筋が凍るのを憶えた。

「……へっ。たしかにな。それじゃ、また試合で」

一瞬高尾の表情が固まったが、すぐにまたいつもの笑みを取り戻し、緑間達を追いかけた。

やはり白瀧は只者ではないという印象を受けたのかその足取りは少しばかり速い。

白瀧もこれ以上は敵と判断し身を翻して練習へと戻っていった。

「……さて、皆さん。そろそろ時間です。問題ないですね？」

「はいっ！」

「当たり前っすよ」

「……当然」

「いつでもいけます」

「……は、はい」

スターティングファイブを集め、声をかける藤代。

朝伝えた通りのメンバーで変更はない。小林・山本・黒木・白瀧・光月。この五人が大仁多のベストメンバーなのだから。

「ま、私の方から特に言うことはありません。……が、練習試合であろうともこれは立派な試合だ。」

出し惜しみなど不要です。情報などいくらでも与えて良い。あなた達の全力を出し切り、王者を倒しなさい」

「「「はいー」」」

「では、行ってきなさい」

五人は背を向けてコートを歩いていく。

その視線の先には同じように並んで近づいてくる秀徳のスターター五人の姿が見受けられた。

去年もいたメンバーが三人、それに加えて緑間と先ほど小林・白瀧と話していた高尾の姿もあった。

強豪校の激しい争いの中、そのユニフォームを勝ち取っただけのこととはあり、誰もがその目は気迫に満ちている。

しかし、それは大仁多も変わらない。

「それでは大仁多高校対秀徳高校の試合を始めます！」

両チームのスタメンが一堂に会し、審判が始まりを告げる。

どちらにとっても今年最初の大事な試合。キセキの世代が高校で初めてプレイする試合だ。

それは今コートに立っている選手達が誰よりも知っている。だから

からこそ、彼らは皆目の前の獲物を狩るべく、目の前の獲物をにらみつけた。

大仁多高校 スターティングメンバー

小林圭介（三年） PG 188cm

山本正平（三年） SG 178cm

黒木安治（二年） C 195cm

白瀧要（一年） SF 179cm

光月明（一年） PF 192cm

秀徳高校スターティングメンバー

大坪泰介（三年） C 198cm

木村信介（三年） PF 187cm

宮地清志（三年） SF 191cm

緑間真太郎（一年） SG 195cm

高尾和成（一年） PG 176cm

第十二話 緑間対策

「試合開始ー」
テイクアップオフ

黒木と大坪が宙に浮かんだボールを巡って跳ぶ。

しかし大仁多高校スターターの中で一番高さのある黒木でも、ジャンプボールを制するには相手が悪かった。

大坪がボールをタップして軌道を変える。ボールは秀徳の一年PG、高尾の下へとわたった。

すかさず秀徳のメンバー全員が前線へと上がるが、大仁多も戻りが早い。

しかも高尾が前線へと上がる味方へと視線を向けるものの、そこで早速一つ驚かされるものがあった。

「はっ……あいつマジかよ!? (白瀧、あいつ試合開始直後からいきなり超密着マンツーマン!? 相手は緑間だぞ!?)」

まるで勝負所のように圧力をかける白瀧。

ひたすら手足を動かし続け、緑間には身動きさせさせない。

(いやいや、緑間は身体能力だってムカつく事に高いつてのに)
(そのあいつが、振り切れないだど!?)

当然のことながら緑間の実力を知る秀徳メンバーに動揺の色が広がる。

シューターでありながらも高い身体能力をも持ち合わせた緑間は、並大抵の者では彼の動きについていくことさえ困難なほどだ。

そんな彼が動きそのものを封じられている、驚かないわけがない。

「良いのか白瀧。最初からそれほどばしてしまっ」

「最初から本気出さないで、後で悔やむよりはましだ!」

「——『人事を尽くして天命を待つ』か。なるほど、その覚悟は潔い。あくまでも譲る気はないのだと白瀧は語る。

緑間もそんな彼に敬意を示して称賛の言葉を述べた。

「……たしかに、緑間に5番黒木や9番光月を当ててしまえばインサイドは完璧に崩壊する。

なるほど。緑間封じにはデメリットが多いものの、効果は十二分と

いうことか」

ベンチでその様子を伺っていた中谷がポツリと呟いた。

たしかにインサイドが強固である秀徳を相手にしている中、黒木や光月を緑間にあてるわけにはいかなかった。

それを考えると高さでは負けているものの、地上戦では互角以上に戦える白瀧にマークを任せたのは妥当な考えであろう。

「まあ、そうは言ってもさすがは『キセキの世代』。完全に抑えられているわけではないというのが、実に恐ろしいですねえ」

藤代が心配そうな目つきでコートを見ている。彼の言うとおり、白瀧が完全に緑間を押さえられているわけではない。

一瞬とは言えども緑間がフリーになるタイミングはある上に、高いパスを出されてしまえばデイナーも意味がないだろう。

「……くそっ！」

「悪いが、相棒の下には渡させない」

そこで出てくるのが小林だ。目の前に立ちただかる小林を悔しそうに見る高尾。

緑間と白瀧のマッチアップ同様、高尾と小林という二人も高さに差があり、経験も違う。高尾はまともにパスも出せない状況であった。

「……」

「地上を白瀧君が抑え、高いパスも小林君が出させない。……ここまでは予想通りで、いいですかね」

「……」

「……」

「……どうですか？ 改めて見た秀徳高校は？」

試合前日。一軍メンバー全員が招集され、藤代がスクリーンに映し出したビデオを見ていた。

録画されていたのは昨年のWC、秀徳高校の試合である。まだ昨年の三年生の選手も見受けられたものの、大半の選手は未だに在籍する

選手達だ。

「やはりインサイド主体のチームですね。センターの大坪とフォワード二人がインサイドを盛り立てている」

「そうだな。俺らも実質、去年はパワー勝負に持ち込まれてやられた感じだし」

「……甘くない」

「ちっ。しかも厄介なのは、主力選手が皆今年もいるってことなんだよな」

「大坪をはじめ、宮地に木村。散々うちらを苦しめてくれた三年生達は健在」

「その代わり外はそれほどでもない。去年の三年生も含めて秀徳はシューターに恵まれなかったからな」

去年の戦いを思い出しながら、二、三年生が思い思いに意見を述べている。

画面上ではオフエンスリバウンドを大坪が制しそのまま得点を決めているシーンが映っている。

秀徳は中がとりわけ強く、全国でもトップクラスの實力を誇っていた。しかしながら外は並であり、警戒するほどではないというのが昨年までの印象だった。

「ええ。皆さんの言うとおり、昨年までの戦力を考えればそれでいいでしょう。

しかしわかっているでしょうが……今年が違う。今年はある『キセキの世代』のSGが加わったのですから」

だが今年の話が違う。

圧倒的な實力を誇るキセキの世代ナンバーワンシューターが秀徳に加わったのだから。

「白瀧君、君の方から彼のことを説明してくれませんか」

「わかりました。……俺の知る限り、あいつには四つの特徴があります」

かつて彼が見た姿を思い出すように、白瀧は語る。

共に戦っていたということもあり、この中では彼が誰よりも緑間の

ことを知っていた。

「まず一つは圧倒的な身体能力。シューターでありながらインサイドでも戦えるほどです。ディフェンスも当然並ではなく、生半可な攻めでは抜けやしない」

「……厄介だな。外でも、中に切り込んでも撃てるってことか」

「第二に、シューートの精密さ。『百発百中』の言葉を体現するように、あいつはシュートフォームを崩されない限り絶対にシュートを決める」
「うらやましいぜ、その正確さ」

「第三にあいつの体格です。190cmを超える体から放たれるシュートはまず防げない。一度シュートモーションに入られたらもう見逃すしかありません」

「……ってことは、明並の高さかよ!?! それじゃあ届かないわ」

「そして最後に……あいつのシュート範囲レンジです。高いループで放たれるその3Pシュートは、ハーフコート内ならばどこからでも決めます」

「……………」

最後まで説明したところで、誰も声を発せなくなってしまった。

こうして聞いていると相手の圧倒的な能力に手も足もでないのではないかと思ってしまうようだ。

「ふむ。厄介、という言葉だけでは片付けられませんね」

「ただ、緑間にも弱点がないわけではありません」

「……何かあるのか!?!」

「あいつは基本的に外れる可能性があるシュートは撃ちません。密着された状況ではまず相手を振り切ってから、無理なシュートはまずないです」

「ダブルチームで当たるなりすれば、数は減らせるわけか」

「はい。それともう一つ、アシストパスがほとんどないということ。先ほど言った状況ならばパスもありえますが、あいつは……『キセキの世代』は普通一人で決めます」

「成程ね。自尊心が高いのか、周りを信頼していないのかは知らねえけど、一番最後は自分でってことか」

白瀧の説得に納得したのか、徐々に部員達の顔も晴れていく。たしかに相手がハイレベルな選手だということはわかったが、やはりまだ一年生で部内でも信頼は薄いはず。それならばまだ対応策は考えられるはずだ。

「……ですが、彼にダブルチームは実行したくないですね。」

ただでさえインサイドに重みを置きたいというのに、彼に二人も割いてしまえば大坪君達が黙っていない」

「そうですね……」

最も問題が解決されたわけではない。

藤代や小林は去年で秀徳の力を痛いほど知ったのだ。緑間という一人に選手だけに本腰を入れるわけにはいかなかった。

「そうですね。……白瀧君、もう一つだけお聞きしたいのですが」「なんですか？」

何事かに思い至ったのか、藤代は白瀧の元へと歩み寄り、その顔を覗き込みながら問いかけた。

「……緑間君を完全に封じ込める自信はありますか？」

——かつての同士を止められるか、と。

中学時代に彼らに勝てなかったというのに、これは重い提案であった。

「……はい、あります」

しかし白瀧は迷いなくその問いに答えた。今の自分なら止められると語るその姿は勇ましい。

決して無謀というわけではない、その顔には自身が溢れていた。ゆえに藤代はその自信を信じ、彼が考えた作戦を実行することに決めたのだ。

大仁多高校はゾーンディフェンスを展開している。

陣形はトライアングルツォー。山本、黒木、光月の三人がゾーンで守り、小林と白瀧がマンツーマン。フェイスガードで緑間にはボールが

渡らないように、警戒を怠らない。

「宮地さん！」

「ツシ！ よくやった高尾！」

ノールックパスでボールが高尾から宮地へ。

ペイントエリアギリギリで貰った彼は得意のペネトレイトでゴールを狙うが、

「……甘く見るな!!」

「——ツ！ 高い！」

山本を抜いたものの、黒木が立ちはだかった。レイアップシュートを叩くと、軌道が変わったボールが宙に浮かぶ。

すかさず光月・木村・大坪がボールに跳びつくが……

「一年が、舐めんな！」

「ぐうっ！」

「っしやあ、ナイス木村！」

光月が木村に押さえ込まれ、そのまま彼に確保されてしまう。

（明がパワー負けした？ ……いや、大坪さんが相手ならともかく、今のは普通にいけたんじゃあ……）

神崎はこれを違和感を感じながら観戦していた。

たしかに経験の差とも思えるが、木村と比べると光月の方が体格もパワーも上という印象があった。

藤代も同じことを思ったのか、今のプレイを見て顔をしかめている。

「おいおい、うちの一年をあんまりいじめてくれんなよ！」

「うおっ!？」

そんな中、木村が着地した瞬間を狙って山本が手を突き出す。

反応できなかった木村の手からボールがこぼれ、すかさず黒木がボールを確保すると小林へとパスをさばいた。

「いけっ、白瀧!!」

それを見て緑間と白瀧が殆ど同時に駆け出した。

——速攻。小林はボールをそのまま右サイドへと駆け上がる白瀧へと投げ、パスが渡ったものの、まっすぐ自陣に戻った緑間がシュー

トはさせまいと立ちはだかる。

「ちいつ、緑間！」

「お前がやってくれたように、俺も好き勝手はさせんぞ白瀧！」

「いいや、突破する！」

瞬間、緑間の視界から白瀧の姿が消えた。斜め方向へのドライブイン。

速さならばキセキの世代にも劣らないそれは、緑間の反応を一瞬とはいえ遅らせた。

「……ッ、まだだ！」

だがそれでも緑間は立ちふさがる。

レイアツプシュートを放とうとしている白瀧の右腕を上から包み込むように、腕を伸ばす。

一瞬遅れたものの、鍛え抜かれた反射神経、そして白瀧よりも長い背丈と手足が彼に味方した。シュート直前に彼のシュートコースは塞がれてしまった。

「ああ、そうだろうよ。……でも、悪いな」

「なんだと!？」

それを悟ると白瀧は右腕を後ろへと振るった。

一度バウンドしたボールは、走りこんでいた小林の元へとわたる。

「ナイスパス、白瀧！」

「小林!？」

「行かせねえ!!」

二人を追いかける形で走っていた小林と高尾だったが、小林の方が速かった。

高尾が回り込んだものの、小林は鋭いカットインから抜き去り、ジャンプシュートへと移る。

「撃たせん、小林！」

それを見た緑間が再びブロックに跳ぶ。高く、広くゴールを守る腕はシュートコースを隠してしまうほどだった。

「跳ぶな、緑間。そっちじゃねえ!!」

「っ!？」

高尾の声が響いた。しかしその時にはもう二人とも宙に浮いており、行動に移すには遅すぎた。

小林が両腕を振るった。パスは外へと走っている白瀧にさばかれる。

高尾が抜かれ、緑間の注意が逸れた瞬間に白瀧は駆け出し、小林にアイコンタクトを送っていたのだ。

今ようやく自陣に戻った宮地がブロックに跳ぶが……その時にはすでにリリースされていた。

安定した綺麗な弧を描き、ボールはリングを射抜く。放った瞬間にすでに入ると緑間にはわかった。

——先制点は大仁多高校。

「ナイツシュ、白瀧！」

「ナイスパス、小林！」

大仁多のベンチが活気溢れる。先制点を上げ、緑間の御株を奪うスリーを決めたのだ。幸先の良いスタートを切った。

コートの中でも小林と白瀧がタッチをかわし、ディフェンスに戻る姿を緑間は苦々しく見ていた。

「……白瀧!!」

「なんだよ。……忘れたわけないよな。俺にアウトサイドシュートを教えてくれたのは、他でもないお前だろう。緑間！」

かつて白瀧が苦手だった3Pシュート。しかし今それが指導を頼んだ緑間の目の前で炸裂した。

これが緑間に与えたダメージは大きい。緑間は歯軋りを止められなかった。

第十三話 決意のリスタート

『なんだよ今日の試合は！ お前、いつまで足を引っ張る気だ!?』
『…………ごめん』

ロッカーで一人の男の声が響く。

怒声の先にいるのは自分よりも大きな巨漢であるものの、一步も引く姿勢は見られない。胸倉を掴み、怯む相手をにらみつける。

その後も他のチームメイトが止めるまで彼の怒りは収まらなかった。いや、それでもなお彼の怒りは向けられたままだ。

『光月。悪いが次の試合からお前には外れてもらう。最後の年くらいとは思ったが、チームの勝利のためだ。…………すまないな』

『…………いえ。何もできなかったのは、僕ですから』

中学三年、栃木県地区予選一回戦でスターターとして出場した光月は力を発揮することが出来ず、次の日にはすでにコートには姿がなくな。

チームもまた三回戦で敗北を喫し、彼の中学でのバスケット生活は終わりを迎えた。

しかし、それでもバスケットを諦めることは出来なかった。——光月は一般受験にて地元の強豪校・大仁多高校へと進学する。

今度こそ自分の弱みを克服するために。今度こそコートで仲間を支えられるように。

大仁多高校対秀徳高校。今は第1Q中盤、試合は序盤からお互いの本領を発揮する展開となっていた。

大仁多は栃木のナンバーワンガード・小林を軸に、白瀧・山本の速さに優れたメンバーが早いパス回しで秀徳のディフェンスを中に外にとかく乱。

さらにディフェンスにおいてもステイールを果敢に行い、白瀧のワンマン速攻により一瞬で切り返すという得意の速い展開で攻撃を盛

り立てる。

「うおおおっ!!」

「——ッ!!」

「とったあ！ 大坪がオフエンスリバウンドを制し……そのまま決めるー!!」

しかし、秀徳もまた負けていない。大坪が外れたボールを空中でキャッチし、そして自分で決める。

オフエンスにおいてもディフェンスにおいてもリバウンドを制しているのは秀徳だ。大坪・木村のインサイド二人が黒木と光月を圧倒し、チームを支えている。

ここまで緑間は速攻と高尾のスクリーンによってできた隙に撃った一本を決めたのみ。それ以外はすべて二点シュートだけではあるものの、試合の流れは変わらない。

第1Q残り4分を切ったところで得点は(大仁多)10対9(秀徳)。

ここで初めて大仁多ベンチの藤代が動いた。

「大仁多高校、選手交代です！」

「光月！」

「……はい」

呼ばれたのは光月だった。

ウォームアップを済ませた松平がコートに入り、代わりにここまであまり活躍できなかった光月がベンチへ。

不満そうな表情はないものの、残念そうな顔つきでベンチへ歩いていく。

「……おい、明」

「え？ なんだい、要」

しかし、その途中で白瀧が光月へと声をかける。時間はないもの伝えたいことがあった。

「この試合、このままではじり貧だ。松平さんが入ったとしても、大坪を抑え込めるとは思えない。」

……もしも勝てるとしたら、お前が本領を發揮するしかない。それまで俺達が頑張るから、お前も頼むぜ」

「なっ……いや、でも僕は……」

「甘えんな。練習の時のお前はもつと強かったぜ。……お前なら、できさる」

そう言うのと白瀧は光月に背を向ける。

光月も審判に促されてようやくベンチへ戻った。橙乃からタオルを受け取り、椅子に腰掛ける。

(ちくしょう……)

疲労もあるが、何よりも相手の木村を相手に何もできなかったという事実が彼に重くのしかかった。

「……光月さん」

「は、はい！」

「一体どうしました？ 調子が出ないようですが」

「いえ、別に何も……」

「それはおかしいですねえ。私の見た分には、君はもう少し強い印象があったのですが……私の買いかぶりでしたか？」

「……」

挑発にも聞こえる口調だが、光月の闘志が燃えることはなかった。

光月は藤代と視線を合わせていられず、顔を沈める。他のベンチメンバーも心配そうに彼を見つめていた。

「……僕、本番になると駄目なんです」

「……ほう」

「中学の時も、それが原因で試合には殆ど出てなくて……三年の時も、一回戦に出た後は一度も……」

「なるほど。やはりそういうことですか。白瀧君から君の様子がおかしいとは聞いていたのですが、納得しましたよ」

本音を打ち明けて、ようやく藤代は満足そうに頷いた。

試合の前から藤代は白瀧より彼の不調について報告を受けていた。しかし確信はなく、試合になれば戻るという可能性もあったためにそのまま彼を起用したのだが……もっと早く話を聞いていればよかった、と後悔の念が浮かんだ。

「光月さん、コートを見てください」

藤代に言われて光月はようやく顔を上げてコートを見る。

今まさに高尾をかわした小林がジャンプシュートを放った瞬間だった。しかしヘルプの宮地の圧力からか、ボールはすんなりと決まらない。

リングを二、三度行き来してボールははじかれた。

「リバウンドオツ!!」

ベンチメンバーが叫ぶ。交代直後の攻撃で取られてしまえば、流れは持ってかれかねない。

ゴール下で大坪がまさに跳ぼうとする。しかし、実行に移す瞬間彼の前より突然衝撃があった。

「なっ……白瀧!!」

「二人とも、頼みます!」

そこにいたのは白瀧。20cmほどある体格差を恐れず、スクリーンアウトに徹して大坪を跳ばせないことに全力を尽くす。

「よっしや頼まれたぞ白瀧!」

「ちっ! (しまった、オフエンスリバウンド……!)」

その間に松平がリバウンドを取り、着地と同時に山本へ。ここをきっちりと沈め、再び三点差とした。

「ナイスガッツ!」

「痛いっす!」

自陣に戻りながら松平が白瀧の頭を叩き、功績を讃えた。

リバウンドが取れない戦況が続き光月がベンチに下がった後に、この成功は大きかった。

「……あなたよりも小さい体でありながらも、白瀧さんは引く事無く大坪君にぶつかっていきますよ。緑間さんの相手をしていたというのにだ」

「……はい」

光月はそれをどこかうらやましそうに見ていた。

白瀧はオフエンスでも緑間のマンツーマンディフェンスを受けていた。

おそらくチームの中で一番運動量が多い。精神的にも厳しいもの

があるだろう。

それでも白瀧は引く姿勢を見せず、見せ付けるように動いている。

「あなたが怖いのは何ですか？ 失敗ですか？ 相手がですか？」

「……どっちもです」

「ならその怖さを捨てなさい」

「なっ。……そんな簡単に捨てられるならば苦労は……」

「そんなに仲間が頼りないですか？」

「……え？」

「あなたの仲間を信じられませんか？」

——苦労はしないという言葉を遮り、藤代の言葉は重くのしかかる。

仲間が頼りない？ そんなはずがない。小林や白瀧はもちろんのこと、この大仁多の仲間が頼りないはずがない。

仲間が信じられない？ それもまたありえない。短い期間とはいえ、部活でも学校生活でも世話になり、頼りになると思った。そんな仲間を信じられないわけがない。

「そんなことはありません」

「ならばもう大丈夫じゃないですか。バスケットは一人で戦うわけではないんですから。」

……今の白瀧さんのプレイだってそうだ。一人で駄目ならば助けしてくれる、フォローがある。失敗しても取り返す。

これでもまだ問題がありますか？ 君を信じて今も戦っている仲間を、ただ見ている理由がありますか？」

「……いいえ、いいえ、ありません！」

だからこそ最後は力強く藤代の問いに答えた。これ以上、自分を信じてくれた白瀧を見ているだけというのは嫌だった。

力はある。ただその前に心が怯んでいてしまった。……だけど、もうそんなことを言っていられない。

もとよりその弱さを克服するためにこの場所に来たのだ。ならば今こそ前に進むときである。

「光月さん。……ラスト30秒、行けますか？」

「……はい、行かせて下さい！」

「わかりました。それではそうしましょう」

藤代が椅子から立ち上がり、選手交代を依頼する。

残り時間20秒でようやく時計が止まり、選手交代のアナウンスが響いた。

「大仁多高校、メンバートチェンジ選手交代です！」

「松平さん！」

「……おう、もう行けるのか？」

「はい、すみませんでした」

「謝る暇があったら、さっさと勝って来い！」

「ッ……はい!!」

強くタツチを交わし、光月の顔が歪むものの気持ちは伝わった。

光月が再びコートに入り、再び試合開始と同じ顔ぶれとなる。しかし、顔つきは試合開始とはまったく違った。

「……要」

「……ああ。もう大丈夫なんだろうな？」

疲労しているものの、白瀧も気を遣うだけの余裕はあるようだ。先ほどよりもいくらか気が晴れた仲間の顔を見て、嬉しそうに笑みを浮かべている。

「おかげさまで。迷惑をかけたね。……でも、今度こそやれる！」

「……そうか。それなら行こうか」

「光月。出来れば最後はお前で決めたい。一発で頼むぞ」

「……はい！」

小林が肩を叩き、光月もそれに頷いた。

残り時間が短いものの、今得点は一点差で大仁多が負けている。できればここで逆転して終わりたい。

山本がボールを入れて、小林がゆつくりと進めていく。

遅攻は本来の彼らの本分ではないが、この攻撃を確実に決めてギリギリで終わらせることを考えると、容易に攻めることはできなかった。

そして残り11秒、小林が白瀧へとパスをさばいた。

「来た！ 両チームエースの1 on 1！ これがラストプレイか!?」
自然とベンチがざわめく。ここまで二人の一騎討ちは勝負はついていない状況だ。

緑間は白瀧の執拗なディフェンスでスリーを一本しか決められず、白瀧もワンマン速攻以外では彼から得点を決められずにいた。

「……ッ！」

——一瞬だった。白瀧のドライブイン、しかしそれに緑間も反応して動き出す。

それを見て白瀧もドライブ↓ロールからの切り返しでかわそうとするも、まだ振りきれない。すると白瀧はゴールに対し半身の体勢のまま、片手でボールを山形に放った。

「——フックシュートか!?!」

「いや、角度が悪い。……外れるぞ！」

しかし無茶な体勢でシュートを撃ってしまったためか、ボールはリングの外側へと下降していく。

「だがそれでいい！」

「お前が決める、明!!」

もつとも、それはもとより狙い通りのことであった。

白瀧の声に応じるように、光月の巨体が宙へ躍り出る。そして空中でボールを掴み、木村のブロックをもともせずにはアリウープを決めた。

「……っしやあー！」

「やりやがったなあいつ」

「おいしいとこだけ持っていきやがって……」

着地し、光月は思わずガッツポーズをした。握っている拳が震えている。

第1Qラスト7秒というタイミングで、大仁多高校はコートに戻った光月が初得点を決め、逆転に成功。渾身のアリウープはまさにチームを勢いづける一発となった。

「ナイス、明！」

「……ありがとう、要」

「気にすんな、それよりもここから先も頼むぞ」

「わかってるー！」

拳をあわせ、二人は並んで自陣に戻っていく。

残り時間7秒、(大仁多) 18対17(秀徳)。第1Qは十分すぎるほどの結果を出せたいえる。

まだ時間があるがすでに全員が戻っている上に、白瀧もセンターラインで緑間を待ち構えている。今の状態ならば相手の最後の攻撃は問題なく止められる、そのはずだ。

「やっべ、最後に痛いもの食らっちゃったな」

「……高尾。ボールをよこせ」

「へ？ ……真ちゃん？ でも……」

「いいから早くしろ」

宮地のスローインでリスタート。

愚痴をこぼしながらもとにかくボールを運ぼうとする高尾であったが、相棒の指示により緑間へとパスをさばく。

……そして緑間は自陣のゴール付近で深く体を沈み込ませた。

「……は？」

白瀧の口から呆けた言葉がこぼれた。試合途中だというのに、よくこのような言葉を出せるものと呆れてしまう。

しかし、事実今まで緑間と共に戦ってきた白瀧でさえ今の彼の行動の意図を理解できなかったのだ。なぜ、そんな自陣深くからシュートを撃つようなそぶりをするのかと。

「本来は本戦までとっておくつもりだったのだがな。……白瀧、そして大仁多高校。人事を尽くすお前達に敬意を示し、俺も全力を出すでしょう」

ボールをセットすると、利き腕である左腕でリリースする。

最初に放った1発よりもはるかに高いループを描くそのシュートは、とても人間業とは思えない。

そしてそのシュートはまるで弾丸のように鋭く、精密にゴールを貫いた。

「なっ……!?!」

「……は？」

「……!!」

「……マジで?」

「まさか、嘘でしょ……」

第1Q終了のブザーが鳴り響く中、逆転により意気揚々とベンチに戻り秀徳高校のメンバー。

それに対して、大仁多高校のメンバーは驚きのあまり微動だにできず、その場で呆然とするしかなかった。

藤代もこればかりは信じられなかったのか表情が固まっっていて、笑みが引きつっている。

「俺のシュート範囲はお前達が考えているほど、狭くはないのだよ。」

このコート全てが、俺のシュート範囲だ!」

大仁多ムードが高まろうとした中、絶望を叩きつけるように緑間は高らかに告げる。

「……冗談きつっいぜ、まったくくよ」

想像していた以上の実力を見せ付ける緑間に、白瀧は苦笑いするしかなかった。

大仁多高校対秀徳高校。第1Q終了。——（大仁多）18対20（秀徳）、秀徳高校リード。

第十四話 勝利への執念

第1Qが終了し、試合は2分間のインターバルを迎える。

両校とも体を休め次のために士気を保たなければならぬのだが、大仁多高校のベンチは暗く沈んでいる。

「……最後の一発はきつかったな」

皆を代表して山本が緑間の最後のシュートを振り返った。

交代した光月が決め、逆転ムードで第1Qを終えられと思つた矢先にあの超ロング3Pシュートが決まったのだ。あの攻撃がもたらしたダメージは予想以上に大きい。

「まさかあれほどまでの力を持っていたとは。」

「……白瀧さん。あのことを、あなたは知っていたのですか?」

「いいえ。俺が知っていた限りでは昨日言ったとおりの限界はハーフラインです。」

撃てたのかもしれないが、練習でも誰かがいるところでは一度も撃っていませんでした」

「——つまり、キセキの世代が予想以上に進化しているということですか」

困りましたねえ、と藤代がどこか他人事のようにぼやいている。

さすがにこれほどまでとは誰も考えてはいなかった。中学時代を知る白瀧も、長年バスケット選手を見てきた藤代でさえも。予想をはるかに上回る敵の力は今後の作戦において最大の障害となる。名将と呼ばれる藤代も頭を悩ました。

「ただ、あれがこの後も来るって保障はないんじゃないか? いくらなんでもあれだけの飛距離を確実に決めるなんて無理だろう」

「たしかにな。最後のプレイが俺達に意識させるためのものだとして、まだ完璧でないとするならば……」

「いや、おそらく間違いなく来ます」

佐々木や三浦が希望的観測のようなことを述べているが、それを白瀧が否定した。

視線が自分に集まっているということを知りながらも彼は顔色一

つ変えずに淡々と述べる。

「コレも以前言ったことですけど、緑間ははずす可能性があるシュートをまず撃ちません。それなのにあのシュートを撃ったということは……決めるという自信があったからでしょう」

「……それじゃあ要は、これからも緑間があつたからでしよう」と？」

「おそらくは。フリーになればすかさず撃ってくるはず」

緑間をよく知る彼の言葉には重みがある。確認するように聞いた光月でさえ、それを彼の口から聞くと黙り込んでしまった。

オールコートでシュートを決めてくる選手など前代未聞であろう。いくら確実に決めてくるといふのなら、常に誰かがマークについていなければならぬ。しかし相手が緑間ほどの選手ともなると、それを実行するというのは不可能に近い。

「……どうする？　いくら白瀧でもオールコートマンツーマンともなれば分が悪すぎる」

「——甘くない」

「だよなー。中が厳しくなるけど、誰かもう一人つけるか？」

ここから彼のスリーを連発されれば点差は開くばかり。

それを試合で実感し、これからを案じた小林、黒木、山本は緑間へのダブルチームを提案した。

「……いや、俺にやらせてください」

そんな中、頼もしげに話したのは白瀧だ。一步も退くわけにはいかないという固い決意を胸に闘志を燃やしている。

「あの男がこの程度で退くわけがないのだよ」

秀徳高校ベンチで緑間がまるで忠告のように呟いた。

あれだけの威力を見せた直後ならば外緑間に意識が向き、ここからはより大坪を中心にインサイドを攻めていくと方針を監督が話した直後にだ。

「なんだよ、今日は珍しく話すじやねえか緑間」

「……事実を述べたままでです。あいつは伊達に帝光のユニフォームを着ていたわけではない」

からかうような口調の宮地には一切視線を向けず、緑間はただコートだけを見つめている。

水分を補給しながら彼の視線は鋭く、選手そのものの目だ。

「だが、さすがの白瀧（やっつ）でもお前を全て守りきるといえるのは不可能だろう。必ずやスタミナ切れに陥る。現に第1Qの時点ですでお前によってかなりの運動量を強いられたからな」

買いかぶりすぎではないかと、諫めるように話すのは大坪だ。主将としてはより勝率の高い戦いをしなければならぬ。

事実彼の言うとおり、この試合で白瀧は誰よりも体力を消費した。オフエンス・ディフェンス問わず緑間と一対一の勝負を繰り返し、一歩も退かない戦いを演じていた。

それがもしもディフェンスがオールコートで行われるとなれば……単純に考えて、彼の体力消費は大きく膨れあがる。

「そのようなことやつには関係ありません。……帝光中において、やつは瞬発力並に優れていたものがもう一つありました。それがあいつの無尽蔵の体力（タフネス）です」

相手のことをよく知るのは緑間も同じことだった。

普段他人を褒めるようなことはしない彼だったが、今回はまるで白瀧のことを選手として認めているような口ぶりだ。

「ってことはなに？ 真ちゃんはいいつが試合終了までずっともたせる気だっけ言うの？」

「いやいや、さすがにそれはねーだろ。いくらなんでもそこまでは……」

「……」

高尾や木村が半信半疑で問いかけるが、緑間は無言だ。——その通りだと態度で示しているようだった。

「……ふーん。緑間、今日のわがまま一回分で手を打とうか？」

そんな彼の心中を察した監督がそう提案する。

当然のことながら他の選手達からは不平不満が募るが、それを聞き流して監督は緑間だけを見つめる。

「はい、よろしくお願いします」

そして緑間もそれに答えた。

バスケット部内において1日に3回だけ許されている緑間のわがまま。その一回を利用して緑間は勝負に出る。この試合に一気にケリをつけるために。

「これより第2Qを開始します！」

インターバルの終了を告げるブザーが体育館に鳴り響く。

その音を聞いて各選手達は椅子から立ち上がり、コートへ出てきた。

「——それでは行って来なさい。怯むことはない、自分達のバスケットを貫きなさい！」

『はいー』

藤代の激を受けて小林達はコートへ足を踏み入れた。

第1Q終了時の重苦しい顔はもう誰もしていない。士気を高めた状態で第2Qに移ることができた。

「信じているぞ白瀧。お前の活躍しだいでこの試合の流れは変わる」

「はい。……ところで小林さん。向こうの10番高尾なんですけど、気づいていますか？」

「お前も感じていたのか。ああ、おそらくあいつは空間認識能力を持っている」

「視野が異常に広いつてやつですか。どおりで。……また面倒な状況ですね」

厄介な能力だと呟く白瀧。小林も同感だと言って高尾をにらみつけた。

——空間認識能力。コート全体を見渡し、状況を把握することができる能力。第1Qで彼とマッチアップした小林や、彼に動きを見切ら

れた白瀧は高尾の能力に逸早く気づいていた。

司令塔であるPGにとつてこの能力は脅威そのものだ。常人離れた視野は味方へのパスなどもより効率よくさばくことができる。敵の位置も正確に把握するその能力は下手に動くことを許さない。

「じゃあ、そちらの方はお願いしますよ」

「ああ任せておけ」

なんとかかしてみせると小林は語り、白瀧と分かれた。

第2Q開始、山本のスローインを小林は受け取り、マークについた高尾にボールを奪われられないように巧みにボールを操る。

(……秀徳も方針を変えてきたか)

だが、それを知っても小林に焦りはない。冷静にコートを見渡し、全体の状況を探る。

第1Qまでは白瀧に重心をおいたボックススワンを展開していた秀徳高校だったが、第2Qからはマンツーマンディフェンスに切り替えている。しかもゴール下では光月に木村ではなく大坪がマークにくくという事態が起こっていた。

余程あの一撃がこたえたのだろう、と小林は思う。なにせ交代直後にあのアリウープだ。向こうにも印象強く残ったことだろう。

(……なら、また中から崩していくか)

ペネトレイトが得意な彼は素早い切り返しで高尾をかわした。スピードには自信のある高尾だったが、それは小林も同じこと。伊達に長年全国を舞台に戦ってはいない。

マークを振り切ると小林は右腕を振り切り、鋭いパスは光月へとさばかれる。

「ナイスパス！」

「……ぐっ!?!」

ゴール下で大坪のマークを振り切った光月はそのままだミドルシュートを沈める。再び大仁多が逆転に成功した。

(……なんというやつだ。どんどんポジションを奪っていくほどの力だけではないのか)

マークについていたものの、大坪はゴール下のポジションを奪わ

れ、しかもその後振り切つてスペースに駆け込んだ光月。ただ力だけの選手だと感じていたが大坪はここで大幅に光月の認識を訂正した。

「……ドンマイ、切り替えていくぞ！」

「ああ、わかっている」

木村に促されて、大坪はボールを受け取つて試合を再開させる。

力勝負で負けたような感覚だが、まだ流れはこちらにあるはず。焦ることはない。

高尾にパスをさばきボールを運ばせるが……ここでやはり試合の流れを変えかねないことが起こっていた。

「……マジかよ。本当にお前、頑張りすぎだろ」

目の前で行われている二人のマッチアップを目にして、高尾はあきれるように呟いた。

第1Q同様、白瀧の超密着マンツーマン。残りの四人は早々に戻つて2-2のゾーンディフェンスを作っている。

今回は小林までゾーンを作っていると見ると、緑間の相手を白瀧に任せて徹底的にインサイドの強化を図っている。

「……勇敢と無謀をはきちがえるなよ白瀧。お前のやっていることはただの無謀なのだよ！」

「——ッ!!」

「白瀧が振り切られた!!」

フェイントを二回連続で行い、左右に切り返せば白瀧のマークははずれ、ディナイも無効化された。

そもそもマンツーマンディフェンスで徹底的にパスを出させないというのは不可能に近いことだった。ディフェンス側は相手の行動を予測し動きを制限するものの、当然のことながら相手の動きを全て見通すことなど出来ない上にフェイントにつられれば反応とて遅れる。それは白瀧とて例外ではない。

「さっすが真ちゃん！」

高尾もその絶好のタイミングを見逃さない。

フリーになった緑間にパスをさばけば、白瀧がスティールできないようにすかさずシュート体制に移り、そして長距離ボールを飛ばすた

めに思いつきり膝に力をこめる。

まさに飛び上がるうとした瞬間、彼の後ろから手が伸びた。

「なっ——!?!」

「……だから、行かせねえ!!」

跳躍し、腕を伸ばそうとしたときにボールがはじかれた。

その腕は白瀧のもの。ブロックが間に合ううちに、打点が最高位にたどり着く前に叩き落とした。

「ファウル！ 大仁多^黒7番！」

「あ……はい」

しかしすかさず審判が笛を鳴らし、白瀧がファウルをとられたことを告げる。

さすがに今のプレイは無理があった。無理に腕を持つていったことは自分でもわかっていたのか、白瀧は特に不満の表情を見せず、きちんと手を挙げ審判に顔を向ける。

「ドンマイ、白瀧」

「むしろ今のはナイスだぜ。ファウルしなければ完全に3点やられたた」

「すみません。次は絶対に止めてみせます」

小林や山本と言葉を交わし、白瀧は緑間をにらみつけながらそう告げる。わざと相手に聞こえるようにと。

「……これで、お前の予定通りだな」

「はい。おそらくここからは……秀徳は大幅にスリーは減るはずですよ」

そして小林と小声で耳打ちした。これは二人だけで、敵には聞こえないようにと。

今のファウルは白瀧の守備範囲の広さをアピールすることができた。これで緑間の性格を考えれば……ここからは緑間は、シユートを撃ちにくくなる。

「悪いな緑間。俺は勇敢でもなければ無謀でもねえよ」

先ほどの彼の言葉を否定するように白瀧がそう呟く。

聞こえはしなかったものの、言いたいことは伝わったのか緑間の表

情が固くなるのを感じた。

そこからの試合はまさに大仁多ペースであった。

秀徳高校は高尾や宮地のペネトレイトでゾーンに進入し、大坪・木村のインサイドプレイヤーに繋げることが常であったが、小林が果敢に指示をだすゾーンディフェンスを破れないまま時間が過ぎていく。

第1Qでこそ制していたリバウンドも、光月が第2Qからは得意のスクリーンアウトを有効に使い、大坪を封じ込めることで主導権を握り返した。

緑間も白瀧を完全に振り切ることができないうでいた。第2Q開始でのあの1プレイ。あれが緑間の脳内に深く刻み込み、彼から積極性を奪っていた。その結果彼がシュートに行く回数は両手で数えて足りるほど。

元々彼はプライドが高く、確実な勝負を選ぶ。おは朝占いを妄信するのも自分の勝利を確実なものにするためだ。それはバスケスタイルにも大きく出ている。

だからこそ白瀧の積極的なディフェンスは有効だった。ファウルも厭わないという彼の姿勢は、緑間に『止められてしまう』という意識を持たせる。そして彼は確実に決める場面でしか3Pは打たない。「……まさに心理戦ですね。今は敵とはいえ、かつての旧友を相手にここまでできるとは白瀧君もなかなかどうして策士だ」

「できれば敵に回したくないやつですよ本当」

藤代の言葉にまったくだと神崎は同意を示した。

第3Q中盤からは白瀧は小林と二人でダブルチームで緑間を防いでいる。とにかく撃たせない、シューターとしての役割を果たさせないとそれだけを目標に二人は緑間のシュートチャンスを潰す。一度モーションに入られては止められないものの、その結果は見事に功を制し今も緑間は単発ばかりである。

「緑間。たしかに選手としては俺のほうが負けているのだろうよ。」

……でもバスケットは個人戦じゃねえんだよ！」

高尾からのパスをスティールし、そのまま白瀧は他者を引き離してレイアップを決める。

シュートを決めた後、その場で膝に手を置く姿は疲労感を醸し出しているが、未だにそのスピードは衰えない。さすがと言うべきだろう。

「——ッ！ よこせ高尾！」

「おっ!?」

叫びながら緑間がスローインを受け取る。

ゴール直後で白瀧が油断していたことが命取りとなった。小林を振り切つてスペースに走りこんだ緑間は、自陣深くから超ロング3Pシュートを放つた。

「——くっそ！」

「俺とて、お前達を調子に乗らせるわけにはいかないのだよ」

(この……化け物め！)

間に合わなかった。反応が遅れた、と白瀧が後悔するがその時にはもう遅い。

もはや天井に届くのではないのかとさえ思えるそのシュートは、綺麗にリングの中を射抜いた。

スリーだけではない。ドライブも並外れたキレだ。底知れぬ実力を見せ付ける緑間に、小林は歯を食いしばり、拳を力いっぱい握り締めた。

「来たぞあのロング3P！ やはり『キセキの世代』の名は伊達じゃない！」

「まだあんなシュート撃つのかよ！ マジえげつねえ！」

観客や大仁多のベンチは彼のシュートが決まるだけで騒然とする。

後半に来ても未だに緑間はあの長距離3Pを一発もはずしていない。単発であったとしても、その威力は測りきれない。

「さっすがー。惚れ惚れとするっすね」

「……は。散々大口叩いたんだ、むしろ足りねーくらいだよ」

「つてか木村。マジ軽トラ貸して。一度あいつ轆くから」

それに対して秀徳側は盛り上がることもなく淡々としていた。

高尾はどこかふざけたように称賛の言葉を述べたが、木村や宮地はむしろ不機嫌そうである。ベンチも似たような反応だ。

それというのも緑間の態度であろう。いくら期待のルーキーとして入部したとしても、まだ日が浅い上に彼は周囲に心開かず、バスケットにおいてもチームプレイはせずに個人技に徹する。この試合でも連携を見せたのは高尾くらいのものであった。

だからこそ周囲も彼の活躍を素直には喜べない。純粹に認めることはできなかつた。

「気にするな！ 一本、きっちり取り返していくぞ！」

『大仁多！ 大仁多！』

『オーフェンス！ オーフェンス！』

それに対し、大仁多はむしろ流れを変えるように士気が上がっている。小林が声を出せば仲間もそれに応じ、ベンチも力の限り後押しする。

小林が声を出せば仲間もそれに応じ、ベンチも力の限り後押しする。

「さて緑間。今度は俺から行かせてもらおうぞ」

小林からパスがさばかれ、白瀧にボールが渡ればベンチの声はより大きくなった。

その声を背に受け、白瀧は緑間と対峙する。今度は自分から勝負を仕掛けると言つて。

「……もしもこれが個人戦だったならば、白瀧君が逆に押し切られたかもしれませんね」

その勝負を、二人の姿を見た藤代が呟いた。

一選手としての実力や能力は間違いなく緑間の方が総合で上回っている。それは誰よりも白瀧がわかっていることだろう。

白瀧はレグスルーからのクロスオーバーで切り返すが、緑間も後ろに引いた足をそのまま横に動かし、その動きに反応している。……しかし、立ちほだかろうとするも突如何かにぶつかった感覚がしたかと思えば、緑間の体はそこで止まってしまった。

(……スクリーン！)

「……ッ！」

「どうも、小林さん！」

小林の体を張ったスクリーン。進路方向に立っている小林により、緑間は白瀧の突破を許してしまう。

すかさず広い視野で予測していた高尾がヘルプに来るが、白瀧はそこでボールを横へと振るう。

「ナイスパス！」

ボールの行く先にいたのは山本。彼は3Pラインの外側からフリーの状況でシュートを放った。

さらにゴール下では黒木と光月が外れたときに備えて、木村と大坪の内側に入り込み、外へ追い出すようにとスクリーンアウトをする。

「くそっ！（またか！ この男……ビクともせん！）」

（それに5番^{黒木}もパワーはそれほどでもねえが、力のかけ方が上手い。目立たないが、ディフェンスがかなり上手くなってやがる！）

二人の体を張ったプレイは秀徳が誇る二人のインサイドプレイヤーを苦しめる。

その結果、山本は外れることを恐れずに堂々とシュートを放つことができた。

邪魔を受けないボールは綺麗な放物線を描き、リングに触れることなくリングを通過していく。

「よっし、今日は調子いいぜ！」

『ナイツシュ山本！ ナイスパス白瀧！』

「珍しく調子がいいな、山本」

「いやいや、いつもどおりだろうって」

すぐさま3Pで返し、ベンチも熱がさらにこもる。

小林とタッチをかわす山本の顔も、普段よりも数割笑顔が増していた。

「……だがバスケットは団体戦だ。選手達はそれぞれその両肩に色々なものを背負っている。」

それはチームの誇りであり、仲間の期待であり、意志である。それら全てが選手達を支えるんです」

藤代が自軍の選手達の姿を見て、誰かに語りかけるように話し出す。

「そして、味方に信頼されないような選手には……その力は決して身につかない」

その言葉はまるでこの試合の行く末を感じ取ったようなものだった。

緑間を一瞥し、藤代は何か言いたげな、悲しそうな表情で呟いた。

第4Qも残すところ15秒。試合は大詰めを迎えていた。

すでに点差は離れており、ここから試合がひっくり返るといことがないとわかってても、誰も諦めてはいない。

リードしている側は少しでも点差をつけるために、リードされている側は少しでも点差をつめるためにと。

黒木のシユートがリングに嫌われ、大坪がディフェンスリバウンドを制する。

そのまま高尾↓宮地とパスがつながり、最後の速攻を決めるべくコートを駆け上がるが……彼のレイアップは小林によつてはじかれる。

「くれ、明！」

こぼれ球を取った光月に指示を出したのは白瀧。

彼からボールを手渡しでもらうように走りこむと、光月の体を盾にするように、逆方向に切り返す。瞬時の切り返しはマークにあたつていた緑間を引き剥がし、彼はそのままドライブでゴールに切り込んでいく。

その途中、高尾・宮地と言つたヘルプが来たものの、彼はものともせず抜き去つていく。一つ一つが鋭く、洗練されており彼らはただ目の前を通過するのを見過ごすことしかできなかった。触れられない速さはどうあつても止められない。

そして最後の壁——センターの大坪が立ちはだかる。

『——ここは止めてみせる』と語るように、威圧感を醸し出していた。

最後の一騎打ち、しかし白瀧はもはや敵に手の内を考えさせる暇も与えないように跳躍、まだゴールとの距離があるにも関わらずボールを大きな弧を描くようにループシュートを放った。

「——なッ!?!」

当然大坪もこれに反応してリングを越えるかのように跳ぶ。しかし、彼の腕は虚しく空を切り、後ろでボールがネットを潜り抜けるのを耳にした。——白瀧が得意としているティアドロップというシュート。

「誰にも俺は止めさせない。どんなパワーも高さも、俺の速さで切り崩す!」

他にも手はあつたであろうにわざわざ自分の得意技で決めたのは、そうすることで自分のあり方を示すためか。試合終了のブザーが鳴り響く中、白瀧がここに反撃の狼煙をあげた。ここからが新たなスタートだとそう宣言する。

90対79。大仁多高校が去年の借りを返し、今年の初陣を勝利で飾った。

第十五話 新たな好敵手

「……大仁多が秀徳を——『キセキの世代』緑間真太郎を、倒した!!」
試合の終了のブザーが鳴り響き、各選手達がチームメイト達と喜びや悔しさを噛み締めている中、この試合を見ていた観客がざわめき始める。

それもそのはずだ。仮にもバスケット界で偉業を成し遂げた緑間という逸材を手に入れた秀徳が、練習試合とはいえ敗北を喫したのだ。それだけにこの試合の結果は多くの者達の心を揺れ動かした。

「昨年のWCで敗れてから約半年、大仁多が冬の雪辱を果たした！」
「今年の大仁多はマジすげえぞ。要注意だ！」

驚愕の色と共に歓喜や警戒の色も伺えた。

大仁多がかつて秀徳に敗北を喫し、その借りを返したことが感動を呼んだのだろう。

そしてその成長が警戒心をも呼び起こした。この練習試合には他校の偵察も来ていることだろう。彼らにはこの試合で多くの情報を与え、危機感をもたらした。

……もつとも、藤代はそれを全て理解したうえで今回の練習試合を組んだのであろうが。

「——半年？ 冬の雪辱？ 何を言っているんだよこいつらは」

共に戦った光月や黒木といった者達と共に喜びを分かち合う中、観客席からの声が耳に届いたのか白瀧がポツリと呟いた。それは彼らの言葉を否定するものであり——

「そんなもんじゃない。俺は二年間ずっと待ち続けたよ。コートの外から、ずっとな」

——そして自身の思いの強さを示すものだった。

白瀧がスターターという座を奪われてから約二年もの月日が流れた今、ようやく彼は自身の居場所を取り戻しコートに立つ機会を得た。それがどれだけ彼にとって喜ばしいことであるのか……おそらく他の誰にも理解できないことだろう。

「……よかった。本当に、よかった……」

「え……茜ちゃん、大丈夫!？」

「……っ、はい。すみません東雲先輩。……大丈夫、です」

理解できるとするならば、この場にいる人間の中では彼をずっと見続けた橙乃くらいだろうか。

試合が終わったことで緊張の糸が切れてしまったのか橙乃は白瀧を見ながら泣き出してしまふ。東雲に支えられて涙を拭い、大丈夫だとどうにか笑みを浮かべた。

「いやはや、今日はどうもありがとうございます。ごさいました中谷さん。おかげ様で……彼らに良い影響を与えることができました」

「……そうだねー。今回はしてやられたよ藤代。だが、次もこうなるとは思わないことだ」

「ええ、それはもちろん。次はさらに強くなったチームも見せるつもりですから」

「ふむ。まあそれはこちらも同じことだ。この悔しきは地区予選にぶつけるとしよう」

監督がお互いの手を握りながら、牽制しあっている。

口調は穏やかで普段どおりのものであるものの、彼らの感情が片方は喜びに、片方は屈辱に満ちていることは周囲の人間はよくわかった。

「——小林。これがお前が率いるチームか。だがもう負けんぞ。IHでは必ず秀徳が勝つ」

「ああ。楽しみにしているよ。……俺達は必ずIHへ行く。そっちも予選でつまずくなよ」

「あたりまえだ。この借りはすぐにでも返させてもらう。お前達がそうしたようにな」

両校の主将も同じように力の限り相手の手を握った。

彼らが次に戦うとするならば、一番早いのはIH本戦。敵ではあるが、戦いたいと思うほどの好敵手であることは間違いない。二人とも

『俺達と戦うまで負けるな』とそう言っているように、鋭い視線を向けている。

「……よっ、緑間」

「……一体何のようだ、白瀧。悪いが俺はお前と話すことなどないのだよ」

一方、この試合の中心となっていたルーキー二人は穏やかなものではない。

気さくに話しかけた白瀧を拒絶するように、緑間は冷たく言い放つ。高尾が「負けたからつてすねんなよ」とフォロワーを入れるも、うるさいの一言で黙らせてしまった。

今の彼には自分が何を言っても駄目だと感じたのか、高尾は白瀧にアイコンタクトを送ると「後は任せた」と手を振って緑間に背を向けた。

「そう言うなって。……どうだ？ 今回の試合、何も感じなかったか？ チームについて何か思うことはなかったか？」

「感じるものなど何もない。試合に負けたという結果が残っただけだ。

チームについてだと？ ……笑わせるな。俺はお前とは違う、仲間頼らずとも一人で必ずや成し遂げてみせるのだよ」

「……そっか。まあお前らしくていいんじゃないか。

だけど俺はやっぱりついこの間までの帝光よりも……今の大仁多の方が、バスケットは楽しいと感じるよ」

「ふん、勘違いするなよ白瀧。俺は楽しい楽しくないでバスケットをやっているわけではないのだよ。

お前が何を言いたいのかわかっているつもりだが……だからと言つて俺が俺のあり方を変える気はない」

ふい、と顔を逸らして悪態をつく緑間。そんな彼の姿を見て白瀧は苦々しく「相変わらず固いやつ」と呟いた。

だが本当に白瀧の話を聞くつもりがないならば、最初から反応など示さなかつたはず。

一途の希望が見つかったことを喜び、白瀧は若干の笑みを浮かべ

た。

「もう話すことがないならば俺はもう行くぞ。

……ああそうだ。白瀧、お前に借りを残したまま去るといいうのも気がひける。お前にとって重要な情報を、教えやろう」

「うん？ 俺にとつて重要？ なんだよ一体」

「……黄瀬のことだ」

「ッ!」

立ち去ろうとしたところで何かを思い出したのか、緑間はもう一度白瀧と向かいあう。

何か重要なことだろうと感じた白瀧だったが、かつての同僚であった黄瀬という男の名前を聞いた瞬間に表情が凍りつく。

そして緑間の口から放たれる言葉の一つ一つが、より白瀧の心を深く抉った。

「よし、それじゃあそろそろ行くぞ」

「ありがとうございます」

緑間は話を終わると今度は本当に去っていく。

そして中谷の指示に従い、秀徳の選手達は一礼すると振り返って帰路に着いた。

大仁多の選手達も秀徳の選手達の姿が見えなくなるまで彼らを見送り、そしてようやく体育館の中に戻っていく。

……しかしそんな中、ただ一人白瀧だけがその場から微動だにせず立ち尽くしていた。

「……白瀧さん？ どうしました？」

それを見て不審に思った西村が声をかける。

「……海常が……黄瀬が……誠凛に、負けた……？」

「……え？」

白瀧の瞳が失望に染まっていた。

かすかに聞こえた、今にも消えてしまいそうな弱弱しい声と白瀧の呆然とした表情で、西村は全てを理解した。

かつての彼らのチームメイトであり、白瀧にとっては宿命の好敵手ライバルであった黄瀬涼太の敗北を。

秀徳との練習試合後、試合会場となったコートや観客席の片付けが行われている。

一年生は特にモップがけなど念入りに行わなければならないことが多くあるのだが……そんな中、俺は監督の許可を貰って更衣室に立てこもっている。

「……っ、いだだだ！」

「つと。大丈夫っすか？」

「ああ、大丈夫大丈夫。続けて」

体に走る痛みに思わず声を上げてしまった。

心配そうに西村が声をかけてくるのが嬉しいが、気にせずに続けるように指示する。

西村は俺の膝を直角に上げて、ふくらはぎに両手の親指を重ねて少しずつ親指をずらしながら押していく。

——っ。やはり、痛いが今は我慢しなければいけない。下手に乳酸をためておくわけにはいかないし。

「また今日は一段と張ってるっすね。頑張りすぎっすよ本当」

「……まあ、緑間が相手だったからな。本気を出すしかなかった……ぐうっ！」

中学時代は今回ほど本気を出す相手が少なかったものの、さすがに緑間が相手ともなるとそうもいかない。元々俺のような瞬発系の選手はそうなりやすいから注意しなければならぬ。

「白瀧君、次はどうする？」

「ああ、腕はもう大分ほぐれたから大丈夫だよ。ありがとう、橙乃」

同じように腕のマッサージをしてくれていた橙乃に礼を言えば、「どういたしまして」と笑って返してくれた。マネージャーの仕事もあるだろうに、嫌な顔を見せずにやってくれる彼女には感謝するばかりだ。

……もう俺以外の選手はすでに回復しているというのに、申し訳な

い。

「今日は白瀧君の負担が一番大きかったからね、仕方がないよ。」

西村君、片足は私がやるから少しずれてくれる?」

「……本当にありがとう」

橙乃が今度は足元の方へと移り、西村がマッサージしている方とは逆足を念入りにほぐしてくれる。

うーむ。やはり今後も『キセキの世代』との試合後にはこうなりそうだな。二人には今度改めてお礼を言っておこう。

「——ところで白瀧さん。先ほど言っていたことは……本当なんですか?」

「……ああ、本当だよ。緑間が教えてくれた」

あいつが嘘を言うわけがない。それを理解したのか、西村は黙りこんだ。

西村も信じられないのだろう、まさかあの黄瀬涼太が練習試合とはいえ敗北を喫するなんて。

「あの、一体何の話をしているの?」

「ああ、悪い。やっぱり気になる?」

「西村君の表情を見ると……うん」

俺からは見れないが、きつとわかりやすい顔をしているのだろうな。

まあ橙乃だけこの話をまったくわからないまま過ごすというのは嫌だろう。……少し彼女のことをまだ気になるけれど、話しても大丈夫か。

「さつき試合の後に、緑間に聞いたんだ。ちよつと前に行われた海常高校の練習試合のことを」

「海常高校。……たしか、神奈川の強豪校」

「そ。しかもそれだけではないんだ」

「今年はキセキの世代の一人、黄瀬涼太を獲得したからつす」

「……え!?!」

高校のことは知っていてもキセキの世代の進学先までは把握していなかったのか、橙乃の驚きの声が聞こえる。まあそんな強豪校にあ

の天才が加わるなんて……敵である身としては考えたくもないからな。

「黄瀬については経歴が少ないから知らないかもしれないけど、あいつは——」

『キセキの世代』のスマールフォワードを務めていた選手。そうだよね?」

「——ってあれ? 知ってたの?」

「雑誌で見たことがあった。モデルもやっているみたいだし」

「……あ、そういえばそうだった」

自分で説明しようとしていて忘れていた。そういえばあいつモデルの仕事もやっていたんだった。

たしかにその一面を考えればある意味では『キセキの世代』の中では一番有名だろうな。特に女性に。……なるほど、それならば橙乃が知っていてもおかしくない。くそ、そんなところでまで俺を圧倒するのかよ。

「まあ知っているなら話が早い。とにかく海常が黄瀬を獲得したんだけど、ちよつと信じられないことがあってさ」

「信じられないこと? それがさっき話していたことなの?」

「正解。……その海常が練習試合で負けたっていうんだよ」

「え!」

「しかも相手は東京の新設校。普通は信じられない話つすよね」
「嘘……そんなことが」

——あるわけない、と俺も橙乃と同意見ではあるが……このようなことで緑間が嘘をつくはずがないし、事実なんだろうな。

海常と戦った高校——誠凛高校。黒子が進学した高校である。たしかにあいつがいるならば可能性がなきにしもあらずだが……それでも、善戦するならまだしも勝利するなんてとても信じられない。

誠凛には黄瀬を止められるほどのエースがいないはずだ。黒子が加わったとしても、キセキの世代を止めない限りは海常ほどの強豪に勝てるはずがない。

「俺も信じられないけど……確かめたいほうがいいかな。西村、俺

のかばんから携帯取ってくれない?」

「ああ、了解つす。……はい、どうぞ」

「ありがとう」

西村から携帯を手渡され、俺はとある人物に電話をかける。

待つこと十秒ほど。すぐに聞きなれたやけに明るい声が俺の耳元に届いてきた。

——私立海常高等学校。

バスケの強豪校として知られる学校の体育館には今日もボールとバツシユのスキル音が響く。

今日は休養日であるにも関わらず、選手の姿が見えるのは少しでも強くなるという意志の表れか。

黄色い髪の高身の選手——黄瀬は目の前に立ちふさがる敵をもともせず、鋭いドライブから高速ロールで切り返しダンクを決めた。

「っしやあー! これで俺の勝利っす!」

「うるせえー! つうか休養日なんだからダンクなんて体力の使うことしてんじやねえよ!」

着地しガッツポーズを決めている黄瀬に文句を言いながら、相手をしていた笠松——海常の主将を務めている選手が蹴り飛ばす。

「俺の扱いひどくないっすか!」と黄瀬が不満を募らせるも、体育会系である彼にそれは通じない。

「ったく。本当なら今日は打ち込みだけで終わらせるつもりだったのによ。何で俺までお前とやってるんだ……」

「いいじゃないっすか別に。それよりもう一本やりましょう!」

「やらねえよ! 少しは休ませろ! 何本連続でやっていてると思ってるんだ!」

なおも退かない黄瀬だが、さすがに笠松の個人的練習の邪魔をする気はないのか、休養にと戻る笠松に連れ添うように後ろを歩いていく。

入部したての時期は先輩である笠松達に反感のようなものさえ持っていた黄瀬だったが、最近はずいぶん先輩達に気遣うようなそぶりも見えてきた。

「……お前も最近やけに練習マジでやるようになったな。この前に試合のせいかな？」

「そうっすね。まあそれもあるけど……ちよつと昔のこと思い出したから、だと」

「昔って帝光中学時代のことか？」

「ええ。俺がまだバスケットを始めたばかりの時に、俺に選手の自覚を教えてくれた人ことっす」

そう語る黄瀬は昔を思い出しているのか、どこか遠くを眺めている。

珍しく感慨にふける黄瀬を笠松はドリンクを飲みながら見守っていた。

「……つと。すみません、俺の携帯っすね」

「なんだよ。練習中は電源切つとけよ」

「いや、モデルの仕事もあるし……それに、ファンの女の子からのメールとかだつたら悪いじゃないっすか」

「死ね」

突如黄瀬のカバンに入っていた携帯が振動する。

他にも仕事がある以上は仕方のないことだが、さすがに後者のほうは笠松の許容範囲を超えたのか、侮蔑を含んだ怒声と共に黄瀬は肘打ちをくらった。

「……あれ？　なんだ、珍しい人から電話だ」

「誰からだよ？　友達かな？」

「ええ。帝光時代のチームメイト、さつき話していた人からっすよ」

そう言つて黄瀬は電話に出る。どこか嬉しそうに笑みを浮かべているのは、彼も電話の相手との再会を待ち望んでいるということだろう。

「もしもーっし。白瀧っちお久しぶりっすね。電話だなんて一体……」

『久しぶり』じゃねーよバカ黄瀬!!』

「——ッ!? ちよ白瀧っち……声デカすぎッス」

思わず携帯を耳から離してそう苦情をもらす。

笠松も今のが聞こえたのか、相手が余程黄瀬と親しかった相手だということとは理解できた。

「本当にどうしたんすか、白瀧っち。第一声がそんな怒声だなんて酷いッスよ」

『黙れシヤラ男。シヤラシヤラと現を抜かしている馬鹿にはこれくらいが丁度良い』

「シヤラ男って何スか!? ……ってああ、もしかして白瀧っちも俺のシングル聞いてくれたんすか!? うっわーマジ嬉しい。初回購入特典とかは? もしも限定版が欲しいなら俺がサイン入りのを直接……」

『はっはっは。冗談はその辺にしろモデル。そして死ぬ』

「ひどっ!? 俺の優しさ全否定ッスか!」

『お前は自慢と書いて優しさと読むのか。ふざけんな』

一人で勝手に暴走する黄瀬に電話の相手——白瀧は冷たく言い放った。

黄瀬はそれに抗議しているが、隣にいる笠松も今のはさすがにうるさいと感じたのか「いや当然だよ」と軽くあしらっている。もはや四面楚歌だ。

『そんなこと今はどうでもいいんだよ。俺がそんなことで電話するんでも思っただのか?』

「いや、それはないっしょ。白瀧っちが俺にわざわざ電話しているんだから、何か余程重要なことッスよね?」

「その通りだ」という白瀧の言葉に黄瀬も満足げに頷いている。

ようやく黄瀬も真面目な顔に戻り、笠松も黄瀬の表情の変化を見逃すまいと観察している。

『……確認したい。お前が、海常が誠凛との練習試合に負けたのは本当か?』

「ッ……! ええ、そっスよ。悔しいけど俺達は一度負けた。しかも

無名の高校に」

「なっ……」

開き直るような言い放つ黄瀬。笠松が他校の選手に自チームの情報をあまり晒すな、と視線で訴えるが、黄瀬は「大丈夫だ」と笠松を手で制する。

『それは、慢心した結果か？ それとも実力で負けた結果か？』

「……前者って言ったら怒るっスよね？」

『その時はもうお前を絶対に許さん。仮にも帝光部員全員の期待を背負った男が、慢心して負けるなど……』

「じゃあ後者っス。……たしかに俺が甘く見ていたところもあったかもしれないけど、それでも向こうの実力は本物だった」

嘘は言っていない。

見くびっていたということもあつたとしても、それでも自分を打ち負かすだけの実力はあつたのだと黄瀬は言う。負けず嫌いの彼が言う言葉には重みがあつた。

『……そうか。なら聞きたい。お前を倒したのは誰だ？』

いくら黒子がいるとしても、海常ほどの高校が負けるとは思えない。誰なんだ、お前を倒したのは……黒子の新しい光は!？」

「……火神大我。かがみたいが誠凛のルーキーっス」

『火神大我？』

「ええ。白瀧つちが知らないのも仕方がないっス。なんでも去年までアメリカにいたとかの話で。誠凛が誇る大型のスコアラっスよ」

聞いたことのない名前だったのだろう、相槌を打つ白瀧に黄瀬は答えた。

『……帰国子女か。納得したよ、どうしてこうも突然お前に匹敵するほどの人材が現れたのか。』

それで緑間もいつも以上に不機嫌だったわけか。まさか同地区にそんなやつがいるなんて……』

「へ？ 緑間つちと会ったんスか？」

『ああ。つうかさつきまで緑間のいる秀徳高校と練習試合をおおおおお!』

「うお!? 白瀧っち!」

「おい、何だ今の悲鳴みたいなのは!」

突如電話先から聞こえてきた白瀧の悲鳴。

乱れはじめた彼の安否を心配する黄瀬だが、返事はない。笠松も急変した事態を感じ取って携帯に耳を傾けた。

『ああっ! 橙乃……そんな……そんな、激し……』

「……えっと、白瀧っち……?」

「おい、お前の友達今どんな状況だよ?」

『痛いのは最初だけ!? 徐々に気持ちよくなるって……いや無理!」

もうやめて……ちよ、そんなところまで……んああ!!』

「……」

そして再び聞こえてきたのは白瀧の悲鳴にも似た、上擦っているような声。

海常二人が黙りこむなか、しばらくしてツイッターという電話が切れた音だけが虚しく木霊する。

「……とりあえず、練習に戻りましょうか?」

「……そうだな」

長い沈黙の後、黄瀬は携帯をしまい、「俺達は何も聞いていない」と笠松と共にボールを手にコートに戻る。

黄瀬の中で白瀧の評価が大幅に下方調整された瞬間だった。

第十六話 影との再会

いくつか電車を乗り換えて、目的地である東京を目指す。

窓から視線を向ければ久しぶりに大都会の町並みに移りだされる。……やはり東京は大都会なんだな。これほどまでに高層ビルが立ち並んでいる場所は他にないだろう。

「……なんだか懐かしいっすね。つい最近までここに住んでいたって、わかっているんですけど」

「俺もそう思っているよ。あいつにこれから再開するってことを考えると、なおさらな」

隣の席で俺と同じように外の景色を眺めていた西村が囁いた。

……本当だよ。本来なら東京の高校に通う予定だったという事情もあるから複雑だけどな。だが、それも含めて懐かしい。

「こんなに早くにここに戻ってくるとは、あいつと再会しようとは考えてもいなかったけどな。」

「だけど、西村。別についてこなくてもよかったんだぞ？ 俺の行動

は決して褒められるものじゃないからな」

「そんな冷たいこと言わないで下さいよ。俺だってこの目で確かめたいし……白瀧さんが無理をしてみましたときに、すぐに助けたいっすから」

「……そっか。悪いな。余計な心配をかけてしまっているようで」

「だから気にしないでくださいって。俺が好きでやっているんですから」

笑ってそう言ってくれるのはきつとこいつくらいだろう。本当に、感謝してもしきれない。

午後の授業を抜け出して、敵の高校を見に行くという真面目とは言いがたいことをしているのに。

……今日は月曜日。試合明けで部活がオフという理由で、午後の授業を仮病を使って早退し誠凜高校——黒子が進学した高校を目指している。

目的は当然情報の確認、そして黒子の光をこの目で見極めるため

だ。

対戦するまでは会わなくてもよいと思ったが……そうもいかない。相手が青峰や緑間だったならよかつたんだけどな。黄瀬が負けたとあっては、黙っていられなかった。

「ま、ありがとな西村。お前がいるというのは本当に心強いよ。」

しかしお前は別に構わないんだけどさ。……なんでお前らまでここにいるの?」

「お前ら? 一体誰のことだ?」

「さあ? 誰のことだろ?」

「お前らのことだよ!!」

わざと呆けた反応を示す勇と橙乃。思わず公共の場ということ忘れて声を出してしまった。

いや冗談抜きでなんでこの二人までいるんだよ? 西村には誠凛を見に行くと言えたが、この二人には何も言っていないぞ。後は明に先生に仮病の理由を伝えるように頼んだくらいだ。

「いや、西村が『白瀧さんと二人で東京に行くー』って言ってたからさ、なんか面白そうだから付いてきた」

「私もそれを聞いてただ事ではないと思って……」

「お前か、西村!」

「あー、すみません。ちょっと早退するとき見つかったやつて」

二人に情報を与えた犯人は思いっきり身近にいた。

このバカ! あれだけ他のやつには言うなと念を押したのに!

俺だってできるだけ怪しまれないよう、全速力で片付けて勢いそのままに校舎を出たというのに台無しだよ。

「ちなみに要。お前がやけに急いでたから不審に思ったんだぜ。西村だけを責めるなよ」

「え!?! 俺かよ!?!」

「でも、本当に体調不良なのかと疑うくらいいきぱきとした動きだったよね」

「……しくじったか」

勇はともかく橙乃にまでそう言われるのなら、そういうことだろ

う。

そう言えば教室を出るときやけにクラスメートに不審な目で見られたような。……てつきり「体が頑丈なのに、珍しいな」くらいに考えていた。

「まあ、来てしまった以上はしようがないけど。お前達は授業大丈夫なのかよ?」

「それはお前も同じだろ?」

「俺は大丈夫だ。幸い月曜の午後は数学の二コマ。丁度新しい單元に入るところで、公式の理解と例題さえやっておけば問題ない。問題のほうはもう問いたから、後で明にノートさえ見せてもらえば万事OK」

授業を抜け出すのだから、当然それなりの準備は済ませてある。

明には後でノートを見せてもらうよう頼んであるし。

「俺も白瀧さんに教えてもらうんで大丈夫!」

「西村のそれは大丈夫とは言わない!」

「……まあ、俺も多分なんとか……」

「やけに曖昧だな」

「私は数学は得意だし……」

「確かに橙乃は大丈夫そうだな。こいつらと違って勉強も出来そうだし」

「あ、ありがとう」

「ちよつと待て（待ってください）! 何この男女差別!!」

「うるさい! 日ごろの行いの差だ!!」

三者三様のツッコミを入れれば返ってくるのは橙乃の呟きと男二人からのバツシング。

冗談抜きで本心なんだけどな。西村は勉強苦手ということ知ってるし、勇も頭良いとは……まあ、うん。橙乃は普段から真面目そうだ。

「まあ、一応授業はそれで各々大丈夫だとして。……じゃあ早退の件は皆大丈夫か? 俺と西村はお腹の調子が悪いつてことで早退したけど……」

「お腹が痛いので帰りますって言うてきた」

「おかしいだろバスケ部！ 何この集団！ 何で皆揃ってお腹の調子崩すんだよ!？」

変なところで意気投合するなよ！

集団食中毒じゃないんだからさ、本当に疑われるだろ。……駄目だ、これ絶対明日何か言われる。

「……ちなみに勇。お前は一体誰にそれを伝えた？」

「明に。なんか『なんだ勇もか』って心配されたよ」

「すまねえ明！ お前に全て押し付けてしまったみたいで本当にすまない!!」

嫌な予感がしたので勇にたずねてみれば……はい、予想通り。

俺の件も含めて明にやけに重責だよ。むしろなんでバスケ部の中であいつだけ無事なんだよって話だよ。

……上手く先生を言いくるめてくれれば良いんだけどな。明、今度何かおごるよ。

「大丈夫だって。心配しなくたって、あいつならなんとかしてくれるさ」

「何すかその他力本願」

「いや絶対おかしいだろ。バスケ部はどれだけ体弱いんだよって話になる……」

勇は楽観視しているが、俺はとてもそんなことできない。

俺と西村は違うクラスだからまだ大丈夫だと思っていたのに……全て台無しだよ！

「まあまあ。過ぎたことは気にするな。それよりもせつかく抜け出したんだから楽しもうぜ。俺一回サボりとかやってみたかったんだ」

「お前は今から何しに行くか本当にわかってんの!? 観光じゃないんだけど!? ってかまさか最後が本音!？」

駄目だこいつ。早くなんとかしないと……!

頭を抱えて黙り込む俺を、気遣うように肩をポンツと触る西村と橙乃の優しさがなんだかとても嬉しく感じる。

……まあ、元々は俺が言い出したこと。後でこのことは考えよう。

それよりも今は目的のことだけを意識するでしょう。誠凛の光、火神大我のことを。

一方、今日の大仁多高校の午後の授業。

当然のことながら授業の開始時に生徒の出席確認を行っているのだが……

「……うん？ 何だ、神崎はいないのか？ 午前中はたしかにいたようだが……」

案の定、神崎の不在は当たり前のように先生が気づいていた。

午前中の授業には参加していたというのに午後になっていないのだから不思議に思うのは仕方がない。

「先生。神崎君はお腹の調子が悪く、早退すると言っていました」

「何だ、神崎もか。先ほど別のクラスの西村と橙乃も早退と聞いたが……体調管理には気をつけろよ。お前達はこの学校の期待の星なんだから」

「わかっています」

光月の話で納得したのか、注意を促して先生は視線を周囲へと移していく。

どうやらそれほど怪しまれずにすんだようだ。そう一安心したところだったが……まだ終わらない。

「む、白瀧もいないのか？ 誰か、知っている者はいるか？」

「先生、白瀧君はお腹の調子が悪く、早退すると言っていました」

「……おいバスケット部。お前達はいったい何をしているんだ!？」

もう一度光月が理由を話す、さすがに許容範囲を超えたのか先生が呆れ半分怒り半分で光月をにらみつける。

……まあ同じクラスから二人、他のクラスからも二人の生徒が同じ理由で、同じ部活動に所属している人間が早退ともなればむしろ当然の反応だろう。

「全員が同じ理由だ?! 一体何を食べたらそんなことになるんだ

!？」

「……多分、練習試合の後の食事が原因かと」

「練習試合の後？」

「はい。藤代監督に連れて行ってもらった、3キロ超のダイナマイト
丼。

二十分以内に完食で無料。食べられなくても先生が支払いますが、
その代わり数字にちなんで練習量が三倍になるという出来事があり
ました」

「……あ、そうなんだ」

「何とか全員食べ終わったので良かったですよ」

懐かしむようにアハハという笑い声が教室に響く。

目を丸くして「ああそういうえば去年もそんな話聞いたなあ」と呟く
のは先生。どうやら納得したようだ。

光月も今度こそ大丈夫だろうと安心して笑みを浮かべている。

思い返されるのはまさにその食事のことだ。

藤代が今回ベンチ入りしたメンバー十二人を率いて入った店の事
件。

テーブルに置かれたのは自分の顔並の大きさのどんぶりに、これぞ
もかと言わんばかりに乗せられた肉とご飯の山。

食べ切れなくても予算の心配がないとは言え、練習三倍は死ぬ。死
ねる。

それを理解したメンバーは力の限り食べ続けた。

『ダイナマイト丼？ ……笑わせるな。この程度の食事、食べ尽くせ
なくて何が選手だ！ 俺を満腹にさせたければこの三倍は持つてこ
い！』

特に印象的だったのは白瀧だった。

まるでどこかの王のように高らかに述べた彼は、次々と肉とご飯を
平らげていく。その速さはまさに彼が『神速』と謳われていることが
納得できるほど。

……いや、食べるスピードは一切関係ないんだけど。というかあま
り急いで食べると体に悪いんだけど。

その速さには誰もついていけなかった。

白瀧はペースを緩める事無く箸を動かし続け、そして三分の二ほどを平らげたところで……

『……無理、でし……た……』

『白瀧が【神速】の勢いで死んだ——!!』

……そこで彼は箸を置き、机に倒れこんだ。食べるのも早かったが、その分リタイアも一番早かった。

気絶した白瀧は一緒について来た橙乃に介抱され（彼女が頼んだメニューは別）、皆が店を出るまで横になっていた。このとき彼女に膝枕をしてもらっていたとかいないとか。……真実は食べることに精一杯だったバスケット部員にはわからない……。が、食事中橙乃は終始笑顔であつたと同じテーブルにいた東雲は後に語っている。

『……だが、さすがにこれはキツイな……』

『悪い、俺も一足先に行くわ……』

『しつかりしろ山本!!』

『……甘く、ない……』

『肉だから甘いわけねえだろ!!』

『マダだ。まだ気合で逝ける……』

『松平さん、ニュアンスが違います!?!』

そして白瀧が倒れたことを境に、次々と犠牲者が出ていく。

レギュラーや三年生までもが屈していき、もはや誰も完食できずに終わるものかと思っていた。

『いやー、ここの店中々良い肉使ってますね。これなら何杯でもいけますよー!』

『……え?』

そんな絶望的な状況下で、とても周囲の環境とはミスマッチの明るい声が聞こえてきた。

皆がその発生元へと目を向ければそこにいるのは光月。いつの間にか自分の分はおろか、すでに倒れてしまった白瀧の分まで食べ始めていた。

『……あ、すみません。要が無理そうだったので勝手に食べちゃいま

したけど……ひよつとして先輩達もおかわり欲しかったですか?』

『……いや、それは構わないんだが……』

『光月。お前そんなに食べれるの?』

『全然いけますよ! ……ひよつとして先輩達、厳しいですか?』

『……頼んでも、いいか?』

『モチロン! じゃあ、厳しい人もつてきてください。全部食べちゃいますので』

その声に応じ、全員が揃って光月の前へとどんぶりを差し出す。

……そこからはもう光月の独壇場であった。

二十分、その間に彼はほとんど肉やご飯を口に入れては次々と消化していき……気が付けば、全てのどんぶりが空になっていた。

『ふー。ぐちそう様でした! 満腹満腹!』

(光月、お前がいて本当によかったよ……!!)

心底嬉しそうな表情の光月を見て、メンバー全員が彼に向かって感謝した。

こうしてバスケット部一堂はなんとか全員がダイナマイト井を平らげ、練習三倍は防いだのであった。

「しかし光月、お前は平気なのか?」

「体が丈夫ですから」

「なんとも説得力のある言葉!」

その一言で、質問した先生は納得せざるを得なかった。

そしてしばし時間が過ぎて……東京都内にある新設校・誠凜高校。建設されて二年目ということだけあって、校舎はまだまだ新築そのもの。

その校舎の一階、下駄箱付近には今二人の生徒が向かっていた。

「ふあーあ。あー眠い。ったく、どうも最近寝ても足りねえ」

一人は赤い髪と長身が特徴の一年生、火神大我。

あくびをして、眠気を覚ますために体を伸ばしているが、それがよ

り彼の体の大きさを表している。

「またですか。授業中だってあれだけ寝ていたというのに」

「うるせーよ！　ってか、なんでお前も寝てたのに素通りなんだよ！」

「それは僕に言われても困ります」

火神は並んで歩いている少年に文句を言い放つが、八つ当たりでしかない。彼が寝ていたというのは事実なのだから。

困った顔で少年——黒子テツヤは新しい相棒を見つめるが、火に油を注ぐことにしかならないように。

どうして自分の光はこうもバスケの時以外はあまり気が合わないのだろうかため息をこぼした。

「……あれ？　これは……」

「あ？　どうしたよ黒子？　何か入っていたのか？」

突如下駄箱を開けた黒子がその場で硬直する。

不審に思った火神が声をかけても何も反応を示さない。

「すみません火神君。はずせない用件ができました。先に部活に行ってください。僕もすぐに向かいますので」

「はっ？　なんのことだよ用件って。……っておい、黒子!？」

火神の疑問も呼び止める声も無視して黒子は外へと駆け出した。

普段は滅多なことでもない限りは真面目に部活に送れることなく参加しているということもあり(他人に気づいてもらえるかは別の問題として)、この彼の行動は異色であった。

「まあ別に構わねえか。俺が考えても仕方がねえ」

そもそもそこまで気にかけてやるほど仲良くねえからな、と呟いて火神は一人体育館へと向かう。

……このときの火神はまだ気づいていなかった。黒子が新たな強敵を呼び寄せてくるということに。

そのころ、誠凛高校のすぐ近くにあるファーストフードショップ・マジバーガー、通称マジバ。

そろそろ学生がそれぞれの授業を終えて、部活動や仕事がない生徒が友達と立ち寄って他愛もない時間を過ごす時間であろうが、その一角に神崎達の姿があった。

四人テーブルにすわり、それぞれの注文を味わっているが肝心の白瀧の姿はない。

「おーい！ 悪い、遅くなった」

「おお戻ってきたか要」

「一体どこに行ってたんですか？ 『先に店に入ってた』だなんて」

「本当よ。いきなり行き先も告げずに走っていつちやうんだから」

「悪かったって。旧友に会うために、少し仕込んできただけだよ」

白瀧が戻ってくるや否や、三人からは苦情が寄せられた。

と言うのも白瀧が突如彼らをおいて、どこかへ走り去ってしまったことが原因だった。

謝りながらもきちんとやることはやってきたと言って腰掛ける白瀧。バナラシエイクを堪能しながら、彼はマジバの入り口に視線を向けていた。注意深く、少しの変化も見逃さないのだとその視線は厳しく、鋭い。

「……あの、白瀧さんは何をそんな真剣に見つめているんですか？」

「ああ、ひよつとしてあの女子高生？ 確かに結構可愛いよな」

「……えい!? そうなの……?」

「違うわ！ ……とにかく、お前達もできるだけ入り口を見張っていてくれ。水色の髪の男子高校生が見えたら、すぐに教えてくれ」

「何で？ 誰かと待ち合わせか？」

「ああ、旧友を呼び出した」

茶化す神崎を一蹴し、三人に指示を出す白瀧。

彼が待っているのはただ一人の少年だった。かつて彼が共に戦ったバスケ選手、黒子テツヤ。

必ずここに来るはず。だからこそ一瞬も油断はしないのだと、白瀧はひたすら入り口を見張る。

「……ねえ白瀧君。たしか水色の髪の男子高校生って言ったよね？」

「ああそうだ。わかったらとにかく見逃さないように入り口を見てい

てくれ」

入り口から視線をはずし、なぜか違う方向を見ながら橙乃は尋ねてきた。白瀧は淡々と受け答えを済ませるとすぐに入り口を見る様に伝えるが、橙乃の視線は動かない。

「……ひよつとして、今レジに並んでいる人、じゃないかな？」

「そうか。それなら好都合……って、え!? 嘘、いつの間に!？」

思わず白瀧は声に出して驚いた。

言われるがままにレジに目を向ければ、たしかに彼が見慣れた存在、黒子テツヤの姿があるではないか。

たしかに入り口を見張り続けていたはずだというのに、一体どうしたことか。中学以上に影を薄め空気に溶け込んでいる黒子に白瀧は驚愕を隠せなかった。

「……あ、黒子さんですね」

「黒子? 誰だそいつ?」

「俺達のかつてのチームメイトだよ。……ちよつと会ってくる」

西村も彼の姿を認識して名前を呼ぶが、どうやら神崎は知らないようで聞き返した。

まあそれも無理もない話だと思いつつ白瀧は簡単な説明だけをしてレジへと歩いていく。

丁度黒子がレジで注文を済ませたところだった。品物が出来るまで待ってしようと、レジのすぐ側に立っている黒子の肩に手を置く。

「よっ。久しぶりだな黒子」

「……白瀧君? どうしてここに……」

突然のことで驚いたのか、勢いよく振り返った黒子を安心させるように気さくに声をかけた白瀧。

それでも黒子はここにいるはずのない存在に驚いていて、言葉に詰まっているようだが。

「ちよつと聞きたいことがあつてな。……話をしたい、付き合ってくれ」

——今日はきつと何か良い事があるだろう。

そう考えながら黒子はマジバへと向かっていた。

放課後、相棒である火神と一緒に体育館へ向かおうとしたら、下駄箱の中に入っていた一枚のクーポンを発見。

それはマジバのバニラジェイク無料券であった。しかも有効期限は今日の17:00まで。部活に参加してはまず間に合わない。善は急げ、黒子はこのクーポンをくれた誰かに感謝を述べてすぐさまマジバへ直行した。

バニラジェイクは黒子にとって大がつくほどの好物である。それが無料で味わえるというのにその機会を逃す理由があるだろうか、いやない！（反語）

レジでは彼持ち前の影の薄さのせいか、危うく順番を抜かされそうになったが、この後の幸せを考えればなんてことはない。未だ遅しと感じつつも、はやる心を抑えていると突如何者かに肩を叩かれた。

自分の存在に気づき、こうして話しかけるなんてこの場にはいないはず。驚きながらも振り返ると……

「よっ。久しぶりだな黒子」

「……白瀧君？ どうしてここに……」

……そこにいたのは、かつて黒子が共にコートに立ち、再会を誓った旧友・白瀧だった。

第十七話 飽くなき挑戦者

「……まさかこんなに早く白瀧君と再会することになるとは、思ってもいませんでしたよ」

購入したバナシエイクを口にしながら、黒子は目の前の席に座る白瀧をまっすぐに見つめる。

彼の無表情な顔からは感情の変化は読み取れないが事実であろう。黒子にとってこの再会は想定外のことであるに違いない。

「俺もだよ。本当ならばもっと先の……一番早くてもインターハイに考えてたんだが、黄瀬の話を聞いたらいっても立ってもいられなくて」

「ということやはり、今日僕を訪ねてきた理由というのは……」

「ああ、お前の相棒についてだよ。どうやら無事に新しい光を見つけられたらしいな。よかったじゃないか」

「……はい。そうでもしなければ、僕が『キセキの世代』を倒すことなどできませんから」

そしてそれは白瀧にとっても同じこと。

言葉では旧友が順調に力をつけていることを喜んでいる白瀧ではあるが、その言葉にはどこか裏を感じ取れた。だからこそ黒子も深くは聞かず、淡々と答えていった。

「だろうな。たしか新しい光の名前は——火神大我といったか？ お

前が期待を寄せるのだからそれなりの実力を持つのだろうが、まさか俺よりも先に黄瀬を倒してくれるとは……思ってもいなかったよ」

「すみません。白瀧君の仕事を奪ってしまったようで」

「なんでお前が謝るんだよ。悪いのは負けた黄瀬だろう？ まあ、そうわかっていても納得できないからこうしてここまで来たわけだけだよ」

「……」

うつむく白瀧のわずかな表情の変化を黒子は見逃さなかった。

——理解することとそれを受け取るということとはまったく別のことである。

きつと白瀧は自分の好敵手の敗北を理解しても、自分以外の相手に——しかも名も知らないような選手に——負けてしまったことを受け入れられなかったのだろう。

だからこそ、事実を確認するためにこうして黒子の元へ来た。彼が迷いなく先に進むために。

「……だからこそ黒子。火神つてやつに会わせてくれ。俺がこの目で見極める」

果たして本当に『キセキの世代』の打倒を果たせるような選手なのかを。真に実力で黄瀬を倒したのかを。

その先の言葉は語らずとも黒子には伝わった。

白瀧から向けられた鋭い、射る様な視線。彼が本気で「敵」と対峙するときの目だ。

黒子がこの目を見るのは数年ぶりだ。それだけ火神という選手に固執しているということが理解できる。

「わかりました。でもその前に、このバナシエイクだけは飲ませてください」

だからこそ黒子も白瀧の要望に是と答えた。

あくまでマイペースを崩さない黒子の姿勢に苦笑しながらも、白瀧は頼みを受け入れてくれた相手に感謝の言葉を告げて、ようやく笑みを取り戻した。

白瀧と黒子が久しぶりに言葉を交わしているその一方で、その二人の様子を伺っている者達がいた。

隣のテーブルに座っている三人の男女。白瀧と共にここまで来た、大仁多高校に在籍しているメンバーである。

「……本当に黒子君つて、白瀧君と仲がよかつたんだね」

そう呟いたのは橙乃。彼女の視線の先には白瀧と談笑している黒子の姿があった。

「ええ。昔白瀧さんが黒子さんにバスケットを教えていたこともありまして、帝光中のメンバーの中でも特に相性よかつたですよ」

「黒子テツヤ、ねえ。俺はやっぱりその名前聞いたことなかつたんだ

けど。……そんなに強いやつなのか？」

二人の関係を知る西村がそう語るが、神崎は黒子が本当に白瀧ほどの選手が気にかかるほどの相手なのかと、理解できなかったのだろうか疑問を口にする。

このなんとも言えない質問にはなんと答えればよいのかと、悩む西村は苦笑しながらも問いに答えた。

「強いのかと聞かれれば強いとは答えられないけど……試合では活躍してましたよ。」

帝光中学に存在した『幻の六人目』シックスマン って噂、聞いたことないですか？」

「あ、それ私知ってるよ。たしかパス回しだけに特化した、目で追えない選手って」

「俺も聞いたことあるな。気が付いたらパスが通っている魔法のパスとか。それがどうしたんだ……って、え？ まさかそれが……」

言いたいことを察して神崎はその先を促す。

「ええ。それこそが黒子さんのことですよ」

そして西村はそう断言した。

橙乃と神崎は再び黒子を一瞥する。今にも消えてしまいそうな薄い存在感を醸し出している。当の本人である黒子には悪いと思ったものの、彼がそのような芸当を出来るとは思えなかった。

視線を戻して西村に本当なのかと今一度問うが、やはり返答はそれを肯定するもので。その後すぐ二人の悲鳴が重なった。

誠凛高校はいまだ歴史の浅い新設校である。バスケット部も去年は中々の成績を残したものの、全国大会への出場は敵わず、現在も部員数は全員がベンチ入りできるほどの少数。

しかし今の彼らにはそれらを感じさせないほどの勢いと自信があった。

その理由は大きく二つ。

一つは今年入った新戦力の存在である。あのキセキの世代とも渡り合った大型ルーキー、火神大我と中学バスケット界で最強と謳われた帝光中学の『幻の六人目』、黒子テツヤの加入。この二人によって誠凛の戦力は倍増した。

そしてもう一つは先の練習試合で神奈川の雄・海常高校に勝利したこと。毎年のようにIHに出場し、黄瀬を獲得したことです。すでに今年このIHの優勝候補とも呼ばれている強豪校に勝利したのだ。この影響は大きい。

運命の決戦であるIH予選は刻一刻と迫ってくる。誠凛高校もその試合のために調整を行っていた。

最近では連携を重視したチームオフENSEの練習時間が増えており、今も試合形式での練習が行われていた。

「火神！」

ボールマンであったPGの伊月がさばいたボールはエースである火神の手に渡る。

マークにつく小金井を振り払うように、左右にフェイントを織り交ぜる。そして突如大きく腕を右に振る。即座に切り返して前進。加速することでさらに勢いを増し、まるでバネのように足を爆発させて高く飛ぶ。

その高さはもう誰にも止められない。センターの水戸部のブロックをものともせず、ボールをリングに叩きつけた。

「——ッしー！」

「ナイス、火神！」

着地と共に拳で小さくガッツポーズを作る。調子を上げることができていることは大切なことだ。彼の好調ぶりを理解して主将の日向も珍しく火神を褒めていた。

「皆特に気負っているところもなく、調子良いみたいね。火神君もどんどんレベルアップしているみたいだし」

練習風景を見ていた誠凛高校の監督、相田リコは呟いた。

彼女自身、生徒でありながらも監督を務めているがゆえに思うところがあるものの、こうして仲間達の本調子を見ていると、今年はなん

とかなるのではないのかと感じてくる。ならば自分は少しでもできることをやるだけだ。

「……それにしても、黒子君は一体どこに消えたのかしら？　これは帰ってきたらお仕置きが必要のようね」

その一方でなぜか今日の練習で未だに顔を見せない黒子のことが気がかりであった。

常に神出鬼没であったとはいえ真面目に練習には参加していたので（周囲の人間が認知していたかは別として）、火神から遅刻するとう知らせを聞いたときは不思議に感じた。しかも理由も言わずに去ってしまったというのだから尚更だ。リコの中で徐々に怒りによってフラストレーションが溜まっていく。

「まず参加していなかった分のフットワーク練習は二倍で設定しましょう。でもその前に軽く海老反りの刑かしら？　ふふふ……」

「……監督。反省していますのでどうかお仕置きはやめてください」

「うわあ！　く、黒子君!?　いつからそこに!?!」

「火神君がダンプを決めたところからです」

一人黒子の制裁について考えていると、突如後方より聞きなれた声が響く。

驚いて振り返ればそこにいるのはまさに話の主題であった黒子本人がそこにいた。一体いつからいたのかと問えば、丁度リコが独り言を呟き始めたときにはすでにいたと言う。

「……ならなんで私に普通に言わないの?」

「話しかけようとしたのですが、タイミングを逃してしまって。……すみません」

どうして今年の一年生はこう人を驚かせることに長けているのか。

八つ当たりのような響きだが黒子には決して悪意があるわけではないようだ。それを理解するとリコはこのことを諦めて、一つため息をこぼした。

「まあいいわ。戻ってきてくれたなら、すぐに練習に参加してもらおうわよ。」

……ああでも、ちょっと待って。その前に一つ聞かせて。どうして

今日は練習に遅刻を——」

遅刻をしてしまったのかと、リコは理由を聞こうとしたがその先の言葉は突如体育館の入り口から響いてきた拍手によって遮られる。

リコは当然のこと、練習に参加していた日向や火神達も何事かと視線を発生元へと向ける。

「すばらしい。天性のバネと圧倒的なパワー。……なるほど、今のプレイだけでも黄瀬が一目置くのも頷ける」

そこには他校の制服を着た男女が四人いた。

その中の一人、銀髪の男子生徒が前に出て火神を見ながらそう言い放った。

「……黒子君、ひよつとして知り合い？」

「はい。というか僕が案内しました。今日は彼に呼ばれて遅刻してしまっただんです」

リコに問われ、黒子は自分が彼を連れてきたのだと答える。そのついでにバニラシエイクの誘惑に負けてしまった責任をちやつかり彼に擦り付けている所業はさすがとしか言いようがない。

「——誰だテメー？ いきなり現れやがって。黄瀬の知り合いか？」

事情を知らない火神は荒い口調で問いかける。先ほど彼が言っていた『黄瀬』という言葉は間違いなく火神が対峙した選手のことを指している。そこから考えられるのは黄瀬の知り合いということだろうが……

「これは失礼した。まずは自己紹介が先か。」

……帝光バスケット部出身。今は大仁多高校バスケット部の一年、白瀧要だ」

「なっ!？」

案の定、知り合いどころか目の前の彼——白瀧は彼らと共にバスケットをしていた選手である。

部員全体に驚愕の色に染まる。大仁多高校といえは栃木の常勝校。

そして帝光出身の一年ということは、それはすなわちキセキの世代と同世代ということだ。

火神の表情が驚愕から歓喜のものへと変わる。それはまさに、彼が

強敵を見つけたときのものであった。

「なるほどな。同じ『キセキの世代』として、黄瀬の敵討ちをしに来たってことかよ?」

「……は? 俺が同じ? ……あー違う違う。お前何か勘違いしているよ」

「あ?」

「残念ながら、俺はそんな大層な名前と呼ばれてない。当時俺ベンチだったからね」

「はあ? ……なんだよそりや」

だが、白瀧がベンチメンバーであったことを知ると火神は残念そうに呟き、視線を彼からはずした。期待が大きかっただけにその反動として失望も大きかったのだろうか。

今の火神はキセキの世代と謳われた天才との戦いを渴望していた。自分を楽しませてくれる好敵手を。

相手が強豪校に所属する選手だとしても、とても自分を楽しませるほどの相手ではないと感じ、火神は白瀧への興味をなくした。

「……おい、お前白瀧さんに対してそんな態度は……」

「やめろ西村。俺があいつらに劣っているのは事実だ」

「しかしそうだとしても……」
「いいんだ。それが俺の今の立場だからな。心配してくれてありがとう」

尊敬する白瀧に対してそんな態度を取る火神を許せず、西村が詰め寄ろうとするが当の白瀧によって制せられた。納得がいけないものしぶしぶ引き下がる。橙乃や神崎、そして旧友の黒子も何か言いたげな様子ではあったが、白瀧の意図を察して言葉を発することはなかった。

「それで、そんな強豪校の選手が一体誠凛まことらに何しに来たんだ?」

「ただ単に黄瀬を倒したという火神のことを見に来ただけですよ。あいつには大きな借りがあったんでね。どんな相手なのかこの目で見たくて……」

日向の質問に答えながら、白瀧は火神を探るように見る。

190cmという大柄な体はバランスよく鍛え上げられていて、高いポテンシャルを秘めていることは容易に想像できる。

「……なあ火神。俺と一度戦ってくれないか？」

「はあ？ 何で俺がお前とやらなきやいけねえんだよ」

「俺がお前を見てやる。これでも俺はキセキあの世代と一番長く共に戦っていたからな。あいつらのことはよく知っている。……お前がここから先、他のキセキの世代と渡り合えるか判断してやる」

そう提案する白瀧であったが、火神はあまり気が乗らずすんなりと答えることはない。

目の前の男が本当にそれだけの力があるとは思えなかったからだ。見たところ白瀧は上背がなく、体つきが良いとは言えない。

（こいつからは……臭いを感じねえ）

そして火神の野生の勘が、相手から強さを感じなかった。

黄瀬と対峙したときにも感じた身が凍るような感覚、今にも押しつぶされそうな圧プレッシャーを感じなかったのだ。だからこそこで相手をする意味を感じられなかった。

「はっ。折角の誘いだが、俺にはお前と戦う気はねえよ。弱いやつと戦うつもりはねえし、お前が本当にあいつらのことを知っているって保障もねえしな」

「……あの、火神君。それについては本当ですよ。現に白瀧君はレギュラーを務めていたころもありましたから」

「は？ そうなのか？」

断ろうとしたものの、相棒である黒子の補足を受けて再び白瀧の顔を見る。

「そういうこと。ま、俺に勝てる自信がないってことならば逃げてくられても構わないけど？」

「……はっ！ 逃げなんてしねえよ。テメーこそそこまで言うんだから、それなりの力を見せてみる！」

——それならばあえてその挑発に乗ってやろう。

クスリと笑う白瀧に、火神も感情を高ぶらせて言い放った。

「要と……黄瀬を破った火神ね。果たしてどうなるのかこの勝負……」

「そんなの白瀧さんでしょ」

「絶対白瀧君」

「……まあ、俺もそう信じてるけどさ。やけに即答だな二人とも。やっぱり怒ってる？」

淡々と答える二人を見て神崎は苦笑した。

何に対して、とは言わずもがな。白瀧に対する火神の態度である。「当たり前ですよ。天狗になってるんでしようけど、白瀧さんのことも知らずにあんな態度を取るなんて」

「私もあの態度は嫌い。白瀧君を甘く見ているにも程がある」

「そういう俺も同感だけどね。ま、本人が一番怒っているだろうけど」「まあそうなんでしようけど。……多分怒っている対象が違うと思いますよ。あくまで自分のために怒る人じゃないですから」

三人は火神への嫌悪感を醸し出しながらも、それをぶつけることなく白瀧を見やる。

表情は穏やかなものだが、きっと内心は穏やかではないのだろう。しかし神崎が考えているようなものではないと西村は言った。

「……」

それを聞いて橙乃はどこか辛そうな表情になる。彼女も西村と同じことを思ったのかもしれない。

「……ねえねえ、あの三人もやっぱり大仁多高校の一年生なのかな？」

「おそらくな。さつき白瀧がタメで話してたし、間違いないだろう」

大仁多勢三人の意識が白瀧に集まるその一方で、誠凛のメンバーはその三人にも注目していた。

小金井と伊月が二人で彼らのことを話していると、日向と黒子もその話に便乗して答えた。

「……俺もあの短髪の男は見たことある。たしか俺らが中三の時に全国ベスト16入りしていたチームのスターターに入ってた、シューターだよ」

「もう一人の茶髪の生徒も帝光出身ですよ。三年の時にベンチ入りを

果たしたPGです」

「マジで?!? すごい、さすがは強豪。一年にも良い選手が集まるんだな……」

白瀧も含めて体格が恵まれているわけではない三人の選手であったが、二人の説明で納得したように頷くのは小金井。これだけの選手達が入るのだから、しばらくは大仁多が栃木の王者であり続けることは間違いない。

「そして一緒にいる女子生徒はマネージャーだろうな。さすがに彼女のことは知らないが……」

日向はそこで言葉を止める。そして視線が橙乃の体のある一点で止まった。他のメンバーも同じところで視線を止める。制服の上からでもわかる、彼女の大きなふくらみ。

彼らは一度視線を橙乃から監督であるリコへと移し、そして再び橙乃へと移して全員が呟いた。

『……いいなあ』

「オイ、オマエラ。一体どこを見た？ 何を比べた？」

口は災いの元。リコはドスの利いた声で日向達に語りかけ、「練習メニュー三倍」という制裁を与える。刑の執行を受けた哀れな男達の悲鳴が絶叫が木霊するが、リコは我関せずと白瀧と火神の方へと移す。

まさに目の前では火神が白瀧よりボールを受け取り、対決を始めようとしていた。

「……まったく。やけに今日はうるせえな」

「悪いな。どうやら俺の仲間が原因のようだ。気が散ってしまったようですまない」

外野の声が聞こえてきたのか、火神は心底嫌そうに視線をコートの外へと向ける。

白瀧はそんな相手の様子を見て、彼のチームメイトが悩みの種に

なっていることを察して謝罪した。……もつとも本当に悪いのは大仁多高校の面子ではないのだがそれを指摘するものはいなかった。

「別にこれくらい支障ねー。それよりも……行かせてもらうぜ」

火神がドリブルを開始。リズムを取りつつ、徐々にその速度を上げていく。

(にしてもこいつやけに深く守ってんな。俺が外が苦手なの知ってるのか……?)

それに対して白瀧は通常のディフェンスよりもやや深く守っていた。

よほどインサイドを警戒しているのだろうか。アウトサイドシュートが苦手な火神にとっては切り込みが反応されやすくなる分、厄介だ。

「……集中力が散漫してるぞ、お前」

「なっ……!?!」

思考をめぐらしている中、突如火神の耳に届いた重々しい声。そしてそれと同時に体が警戒音を鳴らす。

何かはわからない。しかしとにかくボールを守るべく手を伸ばすが、ボールは自分以外の手によって払われてしまう。ボールは転々とコートを転がり、そして白瀧がボールを確保することで火神の攻撃は終わった。

「はい、おしまい」

「……何だ……?」

淡々と事実を告げる白瀧に対し、何が起こったのか理解できなかったのか火神はおそろおそろ呟いた。

白瀧のステイール、それはわかっている。しかしそれが起こるまでの段階を視認できなかった。目の前でディフェンスの構えを取っている男が、そのままほとんど体勢を崩す事無くいきなり接近したのだ。

(いや、本当にそうだとしたらどんな脚力だよ!? 目で追えない速さだなんて……)

黄瀬と同格どころか、今の動きは黄瀬よりも格段に速い。

しかも奪われる直前に火神が感じたのは……まさに彼自身が求めていた、強者の臭い。

「……どうなっている。火神が反応できないほどの速さだなんて……」

「それが彼の持ち味です。そして正確にはスピードだけではありませんよ」

日向が思わずもらした言葉を拾って、彼を良く知る黒子が話し始めた。

「彼は移動の際に重心移動を組み合わせ、より体の動きを小さくしている。彼の本分は、鍛え上げられた『瞬発力』。バネのように瞬間的に放たれる、圧倒的なスピードですよ」

それこそが白瀧が帝光で戦うために選んだ彼の武器。

キセキの世代にも劣らないと称されたその力を前に、火神は切り込むことすらできずにボールを奪われた。

「お前。俺のこと甘く見ていただろ？ 一体いつから自分が最強だと自惚れていたんだ？」

「な、んだとテメエ！」

「……まあいい。それよりも次は俺の攻撃だな。せめて反応くらいはしてくれよ」

火神に背を向けて白瀧は冷たく言い放つ。その姿に火神の怒りは急激に燃え滾った。

先の対決と同じように火神も深めに守る。少しでも白瀧の動きに対応できるようにと、相手の行動の一つ一つを見張る。

……そして何の前触れもなく、白瀧は動き出した。

「——ッ!!」

やはり格段に速い。今までの選手達の動きが遅いと思えるほどに。しかし反応はできた。

大きく腕を振るい、右に切り込む白瀧。すかさず火神もその姿を追う。

……しかしそれはあくまでフェイク。そこで白瀧は止まり、右に左にとボールを素早くたくみに操る。

「このっ……！」

思わず目が動きに釣られてしまう。

そんなことを知ってか知らずか、白瀧の動きはさらには激しさを増す。

クロスオーバーで揺さぶり、逆側へと切り込むと見せかけてバックターンして前進。火神がバックステップで踏みとどまるものの、それを嘲笑う様に膝下からボールを通して再び切り返す。

「——!!」

「残念、はずれだ！」

よろけている体勢の火神には白瀧を止める術はない。

白瀧は用意にペイントエリアに侵入し、レイアップシュートを放った。

火神がブロックショットを狙っても、彼が飛んだときにはすでにボールはリングへと向かっていて……ボールはリングを潜った。

「これで、決着……！」

「バカな！」

「火神が、こんなにも呆気なく敗れるなんて……！」

誠凛のメンバーからは信じられないという驚愕の声が溢れた。

黄瀬を倒し、誠凛のエースとして完全に認められていたというのに、こうも簡単に負けるなど信じられないことだった。

「ま、待てよ！ もう一度だ！ もう一度……！」

「断る。お前のそんな考えでは、何度やったところで結果は変わらない
「い」

「なっ、テメエ！」

「いい加減自分の未熟さに気づけ。そのままではキセキの世代に太刀打ちするどころか……予選で姿を消すことになる」

「ッ……！」

なおも食いつこうとする火神であったが、白瀧の一言で黙らされた。

「お前は勝負の前から油断していたな。俺がどうせキセキの世代に劣る実力と考えていたのだろうが……それならば聞こう。お前はキセ

キの世代以外の人間ならば、誰にでも勝てると思っていたのか？」

「……なんだよその質問は？」

「答えられないならば別に良い。だがもしもそうだとするならば、そんなふざけた考えは捨てる。」

どうやらお前は帝光中のことも知らないようだが……俺達帝光部員は、日々が戦いの毎日だった。部員数は100人以上という環境、少し間違えれば自分の立ち居地さえ危うくなる。油断なんてする暇さえなかった。キセキの世代はどうか知らないけどな」

「……」

今まで噂で聞いた程度であったその話は、ようやく火神にとって実感を感じるものとなった。

……帝光バスケ部は中学バスケ界で最強と謳われていた。当然のことながらその中で熾烈な争いは他とは比べ物にならない。その中で生き残るということは、言葉で語る以上に困難なものであっただろう。そしてその中で戦い続けた白瀧は当然弱いわけがない。

「自分の勝利を信じつつも、強者であるという自覚を持ちつつも、俺達は一度でも自分が最強であると思っただけではない。俺達は挑戦者という立場でもあったからだ。キセキの世代という、圧倒的な才能を誇る者達へのな」

仲間であると同時に敵でもあったと語る白瀧。特にキセキの世代はそうなのだろう。

何せ、その天才五人の存在によって一度も公式試合に出られなかった選手など数多くいる。機会をつかめなかった者達がいる。

その言葉に昔を思い出したのか、西村は強く拳を握り締め、白瀧の言葉を一つも聞き逃すまいと意識を強めた。

「だがお前はそうではなかった。自分の強さを過信して疑わなかった。」

そんなやつがキセキの世代の打倒を目指すなど片腹痛い。お前が倒そうとしている相手は、全国三連覇を成し遂げた最強の存在だと、数多くの選手を打ち負かしてきた相手だと真に自覚しろ。そしてその相手に挑むまで、一つ一つがその挑戦に課せられた試練だと思いき

れ！」

それはきつと白瀧が常に考えていたことなのだろう。

だからこそ容易な考えでキセキの世代の打倒を語る火神を許せなかった。白瀧の怒りはその一点にあった。

「……白瀧君」

「ああ、ここから先はもう何も言わない。わざわざありがとうな黒子。

それと……練習の邪魔をしまして申し訳ありませんでした、誠凛高校の方々。機会があれば……次は大舞台で会いましょう。行く、皆」

最後に黒子に礼を言い、誠凛部員に謝罪の言葉を述べると、火神には視線を向けずに、神崎達に声をかけて体育館から出て行く。

「……ッ！ 待てよ白瀧!!」

「……なんだ？」

だが、扉を潜ろうとしたところで先ほどまで顔を俯けていた火神が呼び止める。

白瀧は立ち止まったものの、顔だけを火神の方へと向けた。

「テメーの言いたいことはよくわかった。……だけど俺はいつまでも挑戦者でいるつもりはねえ！」

次にテメーと会うまでに、俺がキセキの世代を倒して、俺が日本一になつてやるよ!!」

「……その意気は買う。だがそこまで言ったのだから必ず勝ち抜いてこいよ。——インターハイまでな！」

お前に言われるまでもない、と火神は強い瞳で白瀧をにらみつける。

それ以上は言葉を交わす必要はないと白瀧は今度こそ去って行った。

今日新たに白瀧のライバルが出現した。

彼らがかもしも公式の場で戦うならば、お互いが勝ち残ってインターハイかウィンターカップでぶつかるだけ。そこまで本当に彼らは勝ち残れるのか、運命のめぐり合わせはあるのか。

その行方は誰にもわからない。しかしこの時白瀧は火神という男が

必ずや自分やキセキの世代の前に立ちはだかることになるそう確
信していた。

第十八話 共に戦うために

火神を見定めるといふ用件を済ませた今、これ以上俺たちがここに長居する理由はない。黒子とも話したいことは山ほどあるが……今はまだいいだろう。本来はまだ再会する予定ではなかったし、あいつとてインターハイ予選に向けて意識を高めたいはずだ。

誠凛高校の校門を出てもう一度だけ体育館を一瞥すると、後は振り返らずにその場を後にする。

「誠凛高校か。見た感じ火神以外の選手はそれほど感じてなかったけど。……要は本当に、インターハイ本戦まであいつらが勝ち上がってくると思っただのか？」

「可能性はどこ的高校にだってある。それに火神だけでなく黒子もいるのだからなおさらだ」

「ふーん。随分黒子に肩入れしているんだな。お前にしては珍しい」

「いや、妥当な評価だよ。試合を見ればお前もわかるはずだ。あいつの強さをな」

「……まあたしかに黒子さんの本質は……ちよつと、ね。実際に見ないとわかんないっすよね」

俺の先ほどの言葉を思い出して、勇は思ったことをそのまま述べる。たしかに選手層も薄くポテンシャルも高いとは言いがたいが、それが全てを物語るわけではない。強力な選手の影響力というものは、強さ以上に表れることもある。東京都代表に選ばれるのは難しいが、全国制覇経験者にアメリカ仕込みの帰国子女のダブルルキーがいるならばひよつとしたら、と俺は考えてしまう。

「それにしても誠凛の人達ってちよつと情報不足じゃないですか？ 白瀧さんのことも全然知らないし」

「そう言ってやるな 西村。キセキの世代ならともかく、俺が本当の意味で活躍できたのは三年前だけ。全国経験者はいないようだし、黒子以外のメンバーが知らなくても仕方がない話だ。次の対戦相手だとか、そういうわけでもないから尚更だよ」

「俺からしてみれば『無知は罪』、と言いたいところですけどね」

誠凛高校の顔を見回したが、黒子以外の選手は一度も見ることがないような顔ぶれだった。

そんな彼らが俺のことを知らなくても無理はない。西村の怒りもわからないことはないがな。

「……ねえ、白瀧君。今一つだけ聞かせてくれない？」

「え？ どうした橙乃。そんなに改まってさ」

先ほどから……正確に言えば誠凛高校の体育館を出たころから黙り込んでいた橙乃だったが、どうしたのだろう。やけに表情が重苦しいものだ。

「教えてほしい。中学二年生の時、黄瀬君にスターターを奪われてしまったことはわかってる。」

でもそれならばどうして……どうして秋の大会・新人戦であなたは、ベンチにさえいなかったの？」

「は？」

「……なるほど。そのことね」

何事かと思ったら、そういうことか。

ようやく理解できた。なぜ橙乃がそこまで俺のことを知りたがっていたのかを。何を疑問に思っていたのかを。今日のことと余計に彼女の気持ちを煽ってしまったのか。俺も少しばかり言いすぎたかな。

「うーん、どこから話せばいいんだか。……ちなみに、橙乃はどこまで俺のことを知っている？」

「多分、ほとんど全て」

「ほとんど全て？ どういうことだ？」

「白瀧君のことは中学時代に何度も見ていた。私の学校も、何度か帝光と試合をしていたから」

「え!？」

ということとはつまり、中学時代に何度か交流はあったのか？

たしか東京都の中学に通っていたと話していたから練習試合か、あるいは予選で対戦していたのだろうか。……選手ならともかく、マネージャーともなるとそこまで思い出せない。

「……西村。お前は覚えてる?」

「白瀧さんが覚えていないこと、俺が覚えているわけじゃないでしょう!俺の記憶力のなさを舐めないで下さい!」

「それは別に舐めてないよ。十分に理解している」

駄目元で西村にも聞いてみるが、やっぱり駄目か。むしろ知っていたら驚いていたところだ。

「覚えてなくても仕方がないと思う。うちは中堅校だったし、特に目立った選手もいなかったから」

「ああ。そうか、悪いな」

「ううん。……初めて見たのは、中一の夏。予選で帝光と戦った時だった」

心なしか嬉しそうな表情をして話し始める橙乃。

中一の予選なら俺もスターターに入っていたところだな。黒子や西村と言った選手達は未だにその姿を見せなかったものの、帝光というチームの戦力が後の『キセキの世代』と呼ばれる選手の加入に伴って一新したとき。

「一年生でありながらも堂々とプレーをしてて。22得点、5アシストと脅威の数値をたたき出した」

「はっ!? 入部早々でそんなに!?!」

「白瀧さんはその年の全国ベスト5にも選ばれてたほどですから」

「……たしかにそれを考えればおかしくはないのか」
「……」

自分のことではあるのだが、こうして聞いていると……少しばかり気恥ずかしい。

勇ではないが入部早々に試合に出場していたしな。今となっては懐かしい。青峰とかも純粋なバスケバカだったり、俺もまだスリーが苦手であったり、ダブルクラッチとかもできないようなころだった。「数値も凄かったけど、何よりも白瀧君のプレーしている姿がとても印象に残った。」

瞬く間に目の前を駆け上がって、相手選手を綺麗にかわして突破して、得点を決めて。チームの勢いとなっていた。チームメイトにも声

をかけて楽しそうにバスケットをやっている。あの人に似ているな、って思ってた気になっていたの」

「……ん？ あの人が言うって？」

何か嫌な予感がする。恐る恐る呟くと……

「うん。もつと昔——小学生くらいのころに、私がバスケットを知ることになった相手。純粋に、ただバスケットを楽しんでいてね。それを見て私もバスケットで面白くなって思ったのが、マネージャーをやるきっかけだったんだ」

「……そうか」

橙乃は本当に嬉しそうに語る。だがそんな彼女には悪いのだが。……少しばかり残念ではある。

やはり異性から好意的に見られるのは嬉しいものの、それが誰かを重ねてとなると、微妙な心境だ。

まあ嬉しいことには変わりはないからよしとしよう。俺だって初めて橙乃を見た時に桃井さんを重ねて見たこともあったから。だから西村と勇、そんな『ドンマイ、また次があるさ！』みたいに語っているような、哀れむような視線はやめろ！ なぜか悲しくなるから!! 「ちなみにその人は今どうしているんですか？」

「わからない。本当に昔のことと顔も名前もよく覚えていないから。多分今もバスケットはしていると思うけど……」

「そうですか……」

早くその話題から離れたいと思っていたのに、なおも深く立ち入ろうとする西村。

だが橙乃がその相手のことを覚えていないと知るとなぜか俺に向かって親指を立てる。……いつそいつと絶交してやろうか。それも悪くないかもしれない。

とにかく一つ咳払いをして話を変えよう。主題から逸れている。

「こほん。——えっと、橙乃が俺のことを気になった理由はわかった。それで？」

「うん。その後も練習試合で戦ったり、中二の予選でも姿を見たんだ

けど。……その年の秋。対戦したときはあなたの姿がなくて。それに比例して他の選手ばかりが名を上げるようになって……」

「……それが納得できなかった、か」
そう呟けば橙乃は無言で頷く。

ここまで知っているということは余程俺のことが気になっていた、ということだろう。……今話してはつきりとしておいた方が、彼女のためにもなるか。

「わかった。じゃあ教えるよ。どうして俺がその大会にいなかったのか」

「う、うん！」

「……簡単な話だよ。そのとき俺が怪我をしていた、それだけの話」

「え？」

「……怪我？ お前が？」

「……」

そう、それだけ。それだけの簡単な話。

そのはずなのに橙乃は驚き、勇は信じられないと語り、西村は無言で俯いた。

「ねえねえ！ あったよ、白瀧が載っている号の月バス！」

一方、誠凛高校の体育館では明るい声が響いた。

声の主は小金井。練習の休憩中に更衣室に戻った彼は室内を探し回り、いくつかの月バスの探していた。

——月刊バスケットボールマガジン、通称月バス。月に一度発行される有名なバスケの雑誌。バスケット界について幅広く掲載され、それは中学バスケットも例外ではない。

「何々。……三年前の記事。白瀧達が一年の時のものか」

「全中が終わった後で新人戦が始まる前、といったところだな」

日向や伊月も気になったのか、小金井の元に集まる。しばらくは会わないだろうがやはり気になってしまったのだろう。白瀧のように

彼らにとって未知の選手は尚更。

そこにはたしかに白瀧の写真が掲載されていた。

『帝光』と書かれたユニフォームを身に纏い、『8』という数字を背負ってドリブルで敵陣を切り裂く姿。他にもシュートモーシヨンの写真や、表彰式の写真。さらには水着を着て泳いでいる姿も。

「……って、なんで水泳!? バスケ関係ねえじゃん!」

「あ、それたしか白瀧君が取材を受けたときの写真だそうですよ。オフの日で、水泳をしていたとか」

「紛らわしいわ!」

「オフの日はお風呂オフに浸かればいいのに」

「伊月は黙つとけ!」

……余計な疲労を感じてしまったと日向後悔した。

黒子の解説と伊月のポケに的確なツツコミを入れて日向は記事の内容へと目を戻す。

『——帝光中学の全国優勝の立役者。恵まれた体格とは言い難いが、並外れた脚力と技術で敵を翻弄する。試合後半になつても疲れを見せず、スタミナもかなりある。ひたむきな努力型の選手でオフの日でも鍛錬を欠かさず、写真はインナーマッスルを鍛えるために水泳に勤しんでいるもの』

「脚力と技術、それにスタミナ!? 火神との1 on 1で実力はわかったけど、スタミナも十分つてことは試合では本当にその力を破るしかないってことか……」

「次は俺が勝つ! ……ですよ」

「あー、強がりにはわかったから」

先ほど負けたばかりとは思えないほど燃えている火神だが、残念ながら根性論では白瀧には勝てないだろう。なにせその相手が『スタミナ』という一種の根性論で優位に立てるものをもっているのだから。それがわかっていているからこそ、日向は適当にあしらった。

「でもおかしいんだよねー」

「おかしいって、何がだ?」

「いや、部屋にあった他の月バスも見たんだけどさ、白瀧の記事だけは

全然見つからないんだよ。その次の年のにも乗っていないし、黄瀬とか『キセキの世代』が掲載されていた号にもさ」

「……なに？」

小金井が頬をかきながらそう呟く。たしかにおかしな話ではあった。

この記事を見ても白瀧の実力は確かなものだとわかる。キセキの世代と呼ばれていないにしても。それなのに、一つも他に記事がないというのはどういうことなのか。

「まさか黒子みたいに忘れられたのか？」

「んなわけねーだろ！ 黒子の件が異常なだけだ!!」

「……そうですね」

暢気に呟いた伊月に条件反射でツツコミを入れる日向だが、それが黒子の心を深く抉っているということを描する人間は残念ながら誰もいなかった。

「でもさすがに一つも記事がないのはおかしいだろ。何かしら彼についても書いてあるんじゃないか？ ……うん？ これそうじゃないか？」

至極最もな意見を出し、土田が他の号の月バスを見てみると——白瀧という文字を発見した。それは二年前の記事であり、先ほど見た号の丁度一年後ほどの時期に出版されたものだった。

「どれどれ？ ……ん？」

「え？ 少なっ！ これだけ!？」

それを見た誰もが目を疑った。たしかに白瀧という文字があったが、それは次の大会における帝光全体について記者が独自に予想したものであり、他の選手のように特に取り上げられたものではなかった。

「マジかよ、ですか？ それでなんて書いてあるんだ、ですか？」

「ちよつと待て。えつと——『多くの学校では戦力が半減する新人戦だが、レギュラー五人が健在である帝光中学が今年も磐石か。全中で負傷退場した白瀧要（二年生）選手の復活も期待される』」

「……え？ 負傷退場？」

思わずその記事を二度見する。しかしやはり書いてあることに間

違いはない。

「おい、黒子。コレに書いてあることって……」

「……はい。間違いありません」

「ッ……」

そう問えば静かに肯定する声が返ってくる。

その黒子の姿を見て、火神は無意識で戦慄してしまっただけ。落ち着いていると思われた黒子の、まるで怒りで燃えているような表情を見て。

「ああ。その年の全中で負傷退場してね。少しリハビリが長引いちやって新人戦の開始には間に合わなかったんだ」

「そうだったんだ。……その後は大丈夫だったの?」

「そうでなければ今ここにいないよ。たしか新人戦の準決勝あたりには戻ってきてたし。だから心配はしなくていい」

「……そっか」

説明すれば、どこか残念そうだが納得した表情で小さく息をこぼす
橙乃。

これで一つ彼女の心の整理ができたのならば問題ない。予選前に詳しく話しておこうと思っていたところだから、よかった。

「……うん? 待てよ。中二の全中で、負傷退場? ……ああ!!」

「へ? どうした勇?」

物思いにふけていた勇が突如声を荒げる。何か思い出したようだが、どうしたんだ?

「ひよつとして、あの試合中に担架で運ばれていたのって要だったのか!?!」

「担架で……?」

「——ッ!」

「……ああそっか。そういえば勇も全国大会に出場していたんだっただけ。それなら知っててもおかしくない、か」

世間は狭いな。意外なところで俺は交流を持っていたらしい。ちよつとしたアクシデントということでも済ませたかったのに。……これでは無理だな。

「おそろくお前の言っていることで間違いないよ。」

……全中の決勝トーナメント一回戦。それが俺の中学時代で二回目の夏が、終わった時だった」

もうこうなったら明らかにしておこう。橙乃のためにも、真実を。

——二年前。

その当時神崎は二年生ながらもスターターに抜擢され、主戦力として試合で活躍していた。彼の働きもあって彼の中学校は全中予選トーナメントも突破し、見事決勝リーグに進出するにまで至ったのだ。

試合開始の時間も近づき、神崎はチームメイトと共に荷物を持ってコートサイドへと移動する。

そしてそこで神崎は驚かされたことがあった。

それこそがまさに今コートで行われている試合——現在の中学バスケ界では最強と謳われている、帝光中学の試合だ。

第四Q開始時点ですでに120得点。対戦校とのスコアの差は80にも及ぶ。

お互い全国のこの舞台まで勝ち上がってきた相当な実力者同士の対決。それにも関わらず、これだけの大差をつける帝光中学の底知れぬ実力を思い知り、神崎はいつの間にか自分の体が震えていたことに気づいた。

「すげえや……」

口から漏れたのは一言、ただただ帝光のメンバーを絶賛する言葉だった。

そしてそう言っている間にも試合は動く。焦りからか、敵チームに連携の乱れが生じた。ファンブル、パスを取り落とすというミスを犯

してしまう。零れ落ちたボールにすかさず反応したのは帝光の9番。ボールを拾いなおそうとした相手よりも逸早くボールをはじき、ボールは帝光の4番へ。主将は体勢を低くした状態でルーズボールを拾い、そしてその体勢のままボールを前方へ向けてすくい上げた。その先にいるのは、帝光の9番。

「速い!!」

「嘘だろ、なんで……」

チームメイトも驚いていた。

神崎も「なんでお前がそこにいるのか」と本当に疑問に思った。しかしそれを言葉にできなかった。

帝光の9番はボール奪取の際にボールに飛び込む形になり、その後相手選手とも衝突する形になっていたというのに。それなのに今は主将がさばいたパスを受け取り、コートを駆け上がっていた。

そうならもう9番のワンマン速攻は誰にも止められない。彼は誰にも止められることなく、レイアップを楽々と決めてみせた。

「……」

言葉に、詰まる。

噂話で帝光が誇る『神速』のことを聞いたことはあった。しかし実際にそのプレイを見たことはなく、今年の大会開始前に新入りにスターターの座を奪われたという話を聞いて、去年よりも1つ増えている番号を見て侮っていた一面があった。だが現実はどうだ？ この男でさえベンチメンバーということは、それ以上の実力者が五人はいるということ。その事実が神崎に重くのしかかる。

「今は目の前の敵に専念しろよ神崎。気持ちにはわかるが、俺達はまだスタートラインに立ったばかりなのだからな」

「あ、はいキャプテン。……そつすね。それくらいはわかっていますよ」そんな彼の心情を察したのか、主将が肩を叩いて緊張をほぐしてくれた。

彼の言うとおりで彼らのチームはまだ試合も始まっていない。しかも初戦の相手は中学屈指のフォワード、井上を擁する上崎中学だ。それに勝てるかどうかさえ怪しいというのに、今から帝光のことを考え

ても仕方がない。

キャプテンの言いたいことを理解して、神崎も幾分か気持ちに余裕を持つことができた。

「じゃ、ちよつと気分転換も兼ねてトイレに行つてきます」

「む。わかった、だがすぐに戻れよ」

だがそれでもすぐに切り替えることは出来なかったのか、神崎は一度コートを離れようとする。このまま試合に挑む前に、一度張り詰めた気持ちをリセットしようと思ったのだ。

時間はそれほど余裕はない。できるだけ急ごうと神崎が歩き始めたその瞬間。

パチン、と。

試合が行われているコートには不釣合いな指鳴らしのような音が空気を伝わって聞こえた気がした。まるで何かの始まりを、何かの終わりを意味する合図のように。

「あつ……があ、あああああああ!!!」

その直後に木霊したのは、一人の選手の悲鳴。

その選手がリングに嫌われたボールを確保しようと跳躍して腕を伸ばし、まさに両腕で確保したその瞬間だった。マツチアップしていた相手選手の腕は宙に浮くボールではなくそれに伸びている彼の腕にからみつく。そしてそのまま彼の右腕を力がかかっている方向とは逆向きに、強引に押し出した。

二人が交錯したのはほんの一瞬の出来事であった。だが、その一瞬が全てを左右した。

リバウンドを制していたはずの選手は生じた痛みにより着地すらままならず、右肩を底いながら倒れている。それに対して力をかけた相手は痛みを苦しむ彼を、平然と見下ろしていた。

「レフェリータイムツ!!」

「ッ、白瀧!」

「白瀧君!!」

それを見た審判の判断により時計は止まった。

すかさずチームメイトだけでなくベンチから監督やマネージャー

も駆け寄り声をかけるが、それでも彼はまともに動くこともままならない状態で。

「誰か、担架を持ってきてくれ！早く!!」

結局彼はその後担架に乗せられて病院まで運ばれて、試合には最後まで戻ってこなかった。

その試合は予想通り帝光中学の勝利で終わったものの……帝光メンバーにとっては初めて感じた、喜びのない勝利であった。そしてこの試合から彼らの運命は、変わってしまった。

「俺は試合中にマッチアップしていた選手と交錯した。それによつて右肩を負傷し、試合はおろか練習にもまともに参加できなかった時期が続いた」

「肩を……」

「やっぱりそうだったのかよ。……本当に大丈夫、なんだよな?」

「さつきも大丈夫だつて言っただろ? なあ西村」

「……まあ、たしかに回復後は特に怪我はなく、バスケをしていましたね」

「ほらな。西村だつてそう言っているんだから、問題はない。そうだろう?」

西村が同意すれば二人も信じるしかない。不満そうだがしぶしぶ引き下がる。

……余計な心配をかけてしまったな。だが、それでも話すことでお互いを理解できたのならそれで良い。

「わかった。でもその怪我のせいで白瀧君が機会を奪われたと思うと……」

「怪我なんてものはスポーツにつき物だ。それを恐れては始まらない。そして」

それでもなお言いたげな橙乃と視線が合うように向き合つて

「終わったことに対して、『もしも』を考へても意味はない。そうやっ

て立ち止まるくらいなら俺はより先に進む。奪われたものと失ったものを取り戻すために」

今度こそしつかりと、自分の意志を伝えた。

もう迷わないと俺は誓ったのだから先に進むしかない。

「だからさ。心配するくらいなら応援、だけじゃないか。チームメイ
トなんだから助けてくれよ。練習にしても試合にしても。改めて言
うけど。……これから一緒に戦ってこうぜ、皆で」

選手の西村と勇だけではない。橙乃とて共に戦う大切なチームメ
イトなのだから。

そう言っただけで笑えばようやく彼女も笑みを見せてくれて。勇と西村
も同意するように頷いてくれた。

第二章 IH予選編 第十九話 夏の開幕

緑間を擁する秀徳高校との練習試合から時は流れた。

大仁多高校は藤代監督による猛特訓や自主練を乗り越え、各高校との練習試合も経て更なる強化を果たした。

部内でのレギュラー争いもより激しさを増す中、一軍の選手達はそれ以上の実力を見せ付けて自らの席を守り抜く。各々が夢見る高みに上り詰めるために。

そして彼らは今、ついに始まりの時を迎えていた。

「——これより、全国高等学校総合体育大会バスケットボール競技栃木県予選大会を開会します」

会場内に響くアナウンスは、長く激しい戦いの始まりを告げた。各々の意志を胸に秘めて選手達は静かに闘志を燃やす。

栃木県における高校バスケットは、まず各高校が北部・中部・南部の三ブロックにふりわけられ、さらに細かいブロックに分かれる。そしてそれぞれのブロックで勝ち残った上位24校がブロック代表として県大会に選出される仕組みだ。その県大会で最後まで勝ち残ることがようやくインターハイへ出場することができる。

俺達大仁多高校は地区予選では中部地区のAブロックに入っている。……もつともシード権もあるために、一勝すれば県大会への進出は決定となるのだが。

だからと言ってその一勝を甘く見て良い訳がない。どの高校も少しでも長くバスケットをするために、一試合に全てを懸けているのだから。

「足止めるな！ 走れ！」

「時間がない、どんどん回せ！」

「最後まで気を抜くな！ 声出せよ！」

コート選手達、そしてベンチメンバーの声が体育館に響いている。それは真剣そのものだ。

すぐ目の前のコートでボールが早いペースで行き来する。観覧席から見ると、やはりより広い視野で試合を見ることができるので試合展開なども観察しやすい。

海誠高校と矢坂黎明高校の試合。

偵察部隊、そして大会が初めてということで一軍に所属している一年生は明日の試合相手となるこの二校の試合を見に来ている。この試合で勝利した方が俺達大仁多高校と県大会出場をかけて戦うことになる。

試合は大詰めを迎えて、第4Q残り3分。得点は——（海誠）41対69（矢坂黎明）。

「これは、決まったな。明日の対戦相手は」

「……ああ。矢坂黎明が、俺たちと県大会進出を懸けて戦うことになるだろう」

本田の言う通り、おそらく予想は覆らない。だからこそ俺もそう断定した。この残り時間で28点差はとてでもないが逆転不可能な点差だと。

「白瀧さんでもそう思いますか？」

「お前のことだから、『まだわからない』とか言うと思っただけだな」
「今は敵の分析をしている以上、私情は交えないよ」

たしかに自分があの場にいたならばこのようなことは決して言わないだろう。だからこそ西村や勇の言いたいことはわかる。

今俺がこのようなことを言うのは、ただ冷静に第三者として、大仁多高校の一員としてしているからだ。だからこそ客観的に感情に流されずに分析できて、その上で結論を導き出せる。

バスケに一発逆転は存在しない。どれだけあがこうとも、最後まで諦めなくても逆転不可能という状況がある。今この試合はまさにその状況だ。

「つてか、やっぱ矢坂黎明のスターターって高えな。リバウンドも殆

ど確保していやがる」

「うん。ブロックショットも多いし」

「さすがに秀徳高校を見た後なのでやや見劣りはしますが、それでも相当ですよ」

本田、明、西村と順々に意見を述べている。

明日戦う相手、大会前日という緊張はないようで、しつかり試合を見ているようで何より。

「たしかデータを見た限りでは、PG以外のスターターは全員身長が180中盤ほどだったか？ フィジカル重視とは言っても、ここまで揃えるとは驚きだな」

「……マジそういうの勘弁。外だって打ちづらいつての」

最低身長のPGとて俺と同等の身長であつたはずだ。こちらにも黒木さんや明がいるが、二人のどちらかが抑えられた場合は基本的に俺がリバウンドに参加することになる。……ある程度覚悟はしておいた方がよさそうだな。シューターである勇が弱音を吐くのも無理もない。

「それにしても矢坂黎明の10番、よく決めるな」

「……あいつか。黎明のスコアラーだろうな。橙乃、矢坂黎明の10番について、情報はあるか？」

「あ、うん。ちよつと待って」

同行していた橙乃に尋ねると、すぐに調べてくれた。

矢坂黎明はファストブレイクを外した後、外してもセカンドチャンス拾い、その殆どをあの10番が決めている。リバウンドを味方が取ってくれるという自信もあるのだろうが、それにしても成功率は中々高い。

「……あつたよ。矢坂黎明の10番、だよな？」

「ああ。何年生だ？」

「えつと——荻野進^{わぎのすすむ}、一年生だつて」

「え、一年？ タメかよ!？」

「ふーん。……なら、何よりだ」

橙乃の想定外の返答に本田が驚いているが、俺にとってはそれほど

でもない。むしろ対処もしやすくなった、と考えているくらいだ。

「……待つて、今なんて名前って言った？」

「うん？ どうしたんだ明？」

「ちよつと聞き覚えのある名前が聞こえた気がして……」

「荻野進だつてき。知り合い？」

「……ああ、うん。中学時代に少し、ね」

珍しく身を乗り出してまで聞いてきた明。勇から発せられた名前を聞き、表情を曇らせる。

……これは何かあったな。深くは聞かない方が良いのかもしれないが、戻ったら少し話をしよう。

『試合終了——!!』

「お、終わったな」

「明日はインサイド重視の矢坂黎明。それに勝てば県大会だ」

鳴り響くブザーが一つの終わりを、矢崎黎明の勝利を知らせた。

最終スコアは（海誠）43対75（矢坂黎明）。黎明の選手達は明日の試合のこともあつてか、早々に引き上げの準備をしている。疲労はあるだろうが、それを感じさせないように淡々としている。

「……よし、俺らも戻るか」

「うん、わかった。小林さん達には私の方から結果を伝えておくね」

「ありがとう橙乃」

試合相手を見届けたのもうここに居座る理由はない。

少しばかり体も動かしたいし、報告は橙乃に頼んでさっさと撤収するでしょう。

「あ、じゃあその前にちよつとトイレに行つてきても良いですか？」

「僕もそれなら」

「俺もついでに」

「……締まらないな、お前ら」

「まったく。わかった、外で待つてるからすぐに来いよ」

西村に続いて、明と本田もトイレへと直行する。せっかく今明日に向けて良い流れで持つていこうと思ったというのに。

「まあいいか。じゃあ勇、先に出ていよう。橙乃も一緒に戻るか？」

「……そうだね。うん、報告が終われば今日は特に仕事はないし」

「じゃ、ひとまず外に出ようか。ここにいると窮屈だしな」

まだここには他校の生徒も見られる。外ならば余計な気遣いも減るだろうし、一緒に外にいた方が良さだろう。

偵察部隊の人たちに一声かけて、俺たちは観客席を後にした。

「……あー、すつきり」

男子トイレで西村ののほほんとした声が発せられる。

緊張した会場を離れて、ようやくリラックスできたのだろう。表情も緩んでいる。

「明日は俺らが試合か。まあ俺や西村は出れるかわからないが、光月はスターターで出るだろうからな。頑張ってくれよ、秀徳の大坪とも互角以上に渡り合ったお前はきつと注目されるだろうから」

「……うん。ありがとう」

「なんか光月さん、どこか暗いですね。大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、気にしないでくれ。本当に、大丈夫だから」

先ほどから光月は表情が硬かった。今も本田や西村との会話もどこか上の空で聞いているように感じられる。しかし「本人がこう言う以上は仕方がないか」と西村は深くは問わず、先にトイレから出ようとする。

すると突如入り口の扉が開き、入ってきた誰かと衝突してしまっ

た。

「おっと！ すみません」

「あ、こちらこそすみません。不注意だったようで」

（っ！ この人、たしかさつき試合に出てた矢坂黎明の……）
顔を見て、身に纏っているジャージが目に入って西村は固まった。それは先ほど彼らが見ていた試合に出ていた、矢坂黎明の選手だった。

「お……荻野！」

洗面台の方から光月の緊張しているかのような声が届く。

そう。彼らの前に現れたのは矢坂黎明の10番、荻野進であった。

「お？ ……ああ、なんだ。久しぶりじゃねえか、光月」

「え？」

親しげに光月に声をかける荻野。それに対し光月は苦々しく顔を歪める。知り合いではなかったのかと疑問が浮かんだが、西村の疑問は次の言葉で消えてしまった。

「何でお前がこんなところにいるんだ？ まさか、まだバスケットを続けているとか言わねえだろうな？」

冷たく言い放たれた言葉が明を抉る。

おかしなものでも見ているかのように、荻野は口角を上げた。

——矢坂黎明高校一年、荻野進^{おむぎのすすむ} ポジション：SF 183cm

「——はい。はい、わかりました。失礼します」

藤代監督と小林さんへの報告を終え、携帯電話を仕舞う橙乃。

「……報告は終わりか。小林さんは何だつて？」

「うん。今日は午後は自由に過ごすように。体育館は空けておくから、自主練なら好きなように使って良いとも言ってたよ」

午後は自由か。前日に鋭気を養えということだろうが、感覚を確かめておきたいし体育館に戻った方が良いだろう。

「了解。それじゃああいつらと合流したら、戻って少し体を動かすか」

「そうだな。……でも時間も時間だから、その前に昼食を取ろうぜ」

「そういうえばもうそんな時間だったか。うん、西村達が戻ってきたら昼食としよう」

時間は13:30。確かに少しばかり遅いが昼食を取っておきたい。勇の言うとおり練習の前に腹ごしらえだ。

「橙乃はどうする？」

「私も一緒に行っても良いかな？ 後で東雲さんとも打ち合わせがあるし」

橙乃もマネージャーとして仕事がある。その打ち合わせだろうな。断る理由もないし、橙乃とも試合のことで話したいことがある。喜んで頷いた。

「ああ、良いよ。最近は練習でも時間がなかったから、こういう時に話しておきたいし」

「……そうね。県大会の時期になったら、また忙しくなるだろうから」
「俺も聞きたいな。ねえねえ、女子の間での男子の評判とか色々聞いても良い？」

「え？ いや、あの……」

「そこはもうちよつとまともなことを聞けよ。……お？ 何だ？」

困る橙乃を庇い、勇を諫めているとポケットに入れていた携帯がブーツ、と振動する。

電話だな。マナーモードにしておいてよかった。相手は……西村からだど？

三人もいるのだから道に迷うことはないだろうし、見当たらないから電話してきたということだろうかと考えていると携帯は三回目の振動を終えて、四回目の振動が始まろうとしたところで切れてしまう。

「——ッ!!」

西村が、俺が電話に出る前に切った……!

「二人ともここにいてくれ。すぐに戻るから!」

「は？ え……おい要!?!」

「どうしたの白瀧君!?!」

説明している時間も惜しい。二人の疑問を他所に、俺は駆け出した。

これは帝光中学時代に西村と二人の間で決めていたことだ。律儀なあいつは、通話先を間違ったりして俺に電話をかけたとしても絶対に俺が電話に出るまで切らない。だからもしも俺が出る前に西村が切るとしたら、急に電波が届かない場所に移動したか、何かに巻き込まれたが通話が出来ないという状況だ。そしてこの場所を考えると……間違いなく後者になる。

「つたく、頼むから間違いを犯すなよ！」

西村だけならばまだ良かったのかもしれない。しかし今あいつの元には少し気性が激しい本田、力はあるが臆病な一面がある明がいる。大丈夫だとは信じたいが、安心はできない。

愚痴をこぼして、すれ違う人を押し退けて全力で疾走した。

「驚いた。大仁多高校に進学したとは聞いていたが、まさか本当にバスケをやっているなんてな」

「……そうだよ。僕はバスケットだ。次に、荻野達と戦う相手だ」

「ふんつ。自分が強いところに所属したからって、調子に乗るなよ？ どうせまた、お前は何もできずに味方の足を引っ張るのだろうからな」

「うっ……っ……」

黙りこんでしまう光月。それを言い返す言葉もないのだと感じた荻野は笑みを深くする。

その姿を見て、西村は「何か言い返さなければ駄目だ」とも思ったが、自分が口出しして良いものではないとして口を閉ざす。しかし本田はそれを見ていられたのか、光月を庇うように二人の間に割って入った。

「おい、お前あまり俺らの仲間を馬鹿にすんなよ」

「同じジャージ、大仁多高校のバスケットか。そんなやつを庇うとは、何か弱みでも握られたのか？」

「そんなわけあるか。ただチームメイトが、それもうちのレギュラーが馬鹿にされているところを見ていたくないだけだ」

「……レギュラーだと？」

「そうだ。光月は大仁多高校のレギュラーの一員だ。きつと明日、お前達を打ち負かすことになる」

光月を指差し、強く言い放つ。あまり試合前に情報は漏らさない方が良い、それは本田もわかっているが黙っていられたかった。仮にも

本田は光月達とのミニゲームで負けた身。自分を負かした相手が、必ずや借りを返すと誓った相手が馬鹿にされているところを、見過ごせるわけがなかった。

「ふ、ふふふ……」

そんな本田の気持ちを知らず、荻野は突如顔を逸らして口を手で押さえた。こらえようとしているのであろうが、あふれんばかりの笑みがこみ上げてくる。そしてついに嘔き出した。

「ふはっ、ははははっ！ 大仁多高校も落ちたものだな。光月、お前みたいなかいだけで何もできないようなやつを、レギュラーとして使っているなんてな!!」

「まだ言うのか、お前はー!」

「ちよ、待って……」

「やめてくれ、本田!!」

「なっ……光月」

なおも退かない荻野を見て、怒りは増すばかりだった。もう無理やりにも口を閉ざしてやろうという気持ちさえ芽生えた本田であったが、それを止めたのは他でもない光月であった。今まで沈黙していた彼の発言に、動きは止まる。咄嗟に止めようとした西村も驚き、光月の方へと振り返った。

「荻野。たしかに中学時代僕は何もできなかったよ。皆の足を引つ張っただけだった。

でも今は違う。僕は変わった。明日、証明してみせるよ。僕は大仁多高校で、強くなったということを一!」

今までの不安や怯えといった負の表情を全て吐き出したかのように、はつきりと宣言する。

過去の自分の弱さを認めたくえでの言葉。その意図を理解して、西村と本田は笑みを浮かべる。もう大丈夫だと。

「……まだそんな甘いこと言うのかよ」

その雰囲気を一蹴するように、再び荻野は鋭い視線で光月を射抜いた。笑みは消え、無表情ではあるが言葉は重々しい。

「そこまで言うのならやってみな。どうせ何もできやしない。中学の

時もお前は俺らの期待を裏切ったんだ。

……仲間が失望しないうちに言つといてやるよ。そう簡単に人は変わらない。無駄な努力つてもんだ」

「ッ……いー」

無駄な努力。たしかに中学時代はどうあつても駄目だった。今度は大丈夫だと思つても、かつての同僚にそう言われると、やはり心の中で負の感情が生まれてしまう。

それでも、と勇気を振り絞るが言葉が発せられる前に口が閉じてしまう。

「それならばこちらもお前が後悔しない間に言つておこう。明は強い。俺が保障する」

「なっ……!?!」

「か、要!」

『白瀧(さん)!!』

「何でこんなことになっているんだ、お前ら。小林さんがいたら大目玉を食らっていたところだぞ」

そんな光月を助けるように新たな人物が現れた。

いつの間にか入り口には白瀧が腕を組んで立っていた。ゆつくりとチームメイト三人に近づき、愚痴をこぼすと荻野と向かい合う。

「矢坂黎明の選手とお見受けする。うちのチームメイトと何か話していたところ申し訳ないが、こちらも用事があるのでここで失礼させてもらう」

「……あんたも大仁多の選手だな?」

「大仁多高校一年、白瀧要だ。次の試合はよろしく頼む」

「白瀧——なるほど。大仁多に入った帝光の“元”レギュラーか。へっ、バスケットを始めたばかりの新入りにスターターの座を譲り渡した選手と、体格だけで何もできない選手か。お似合いじゃねえか」

「おまえ——!!」

「やめろ西村。言いたいことなら後で俺が聞く」

穏便に、かつ速やかにこの場を収めようとする白瀧だが、荻野はなおも止まらない。

その矛先が白瀧にまで向けられたことで西村は激昂。今にも掴みかかろうとするが、白瀧に手で制せられた。当の白瀧は表情を変える事無く、淡々と言葉を紡ぐ。

「……荻野だったか？ たしかにお前の言うとおり俺は最後まで『キセキの世代』に勝てなかった。光月も中学時代、実力を出せなかったのだろう。それは認める、過去は変えられようのないものだ。

しかし今は違う。個人にやり方によっていくらでも変えられるものだ。それはお前が決めることではない」

「……」

「もうこれ以上話す必要はないだろう。いくぞ、皆」

沈黙した荻野の横を通り過ぎていく白瀧。それに西村と本田も続き、光月も俯く荻野を一瞥し、追いかけた。

「……絶対にお前には負けねえ」

最後に、扉が締まる前に荻野が呟く。

「僕も、負けないよ。僕も要も、大仁多高校もね」

それに習い、光月もあくまで負ける気はないのだと言い放った。個人の勝負は勿論のこと、チームの勝負も。

廊下を歩きながら、三人から事の経緯を聞いていく白瀧。できれば神崎や橙乃にまで話を持ち込みたくはないということもあつた。話を聞いていると徐々に白瀧の表情も曇る。

「……やっぱり明、荻野という選手と何かあつたんだな」

「中学時代、光月に足を引っ張られたとか言ってたぜ」

「ああ。そういえば中学時代は殆ど活躍できなかったとか、この前聞いたな」

「ごめん。僕のせいで皆に迷惑をかけちゃって。……要もわざわざありがとう」

「西村に感謝しとけよ。俺に知らせてくれたの西村なんだから」

親指で西村を指差す。一緒にいた光月や本田は気づかなかつたが、白瀧が嘘を言うわけもない。

「そうだったんだ。ありがとう、西村」

「いやいや。……白瀧さん、俺もあの時は我を忘れそうで、すみません

でした」

「いいよいいよ。むしろあれは俺がいたせいでもある。気にするな」

光月に西村へ感謝するよう伝えようと、自身は西村のことはもう大丈夫だと、気さくに手を振る。重い空気を振り払おうとした気遣いに、三人は再び感謝した。

「それにしても『無駄な努力』、か。……そこだけは気に入らないな」

「え？ 白瀧さん？」

先ほど荻野が口にした言葉を復唱し、頬をかく白瀧。何か考え事をしているのだろう。

「自分の目的のために頑張ったのだから、何かしらそこから得られるものがある。ただそれを有効活用できるかどうかだ。できなかったとしてもそれは無駄とは言わない。試行錯誤した上での結果なのだから」

「……はい」

「やっぱ気に入らないな荻野^{あの男}。本人の性格は知らないけど……言っ
はいけないことを言いやがった」

「……ッ！」

(……怒ってる。白瀧さんが、怒っている！)

白瀧の表情の変化から、言葉にこめられた力から、白瀧の怒りが感じ取られた。

長い付き合いである西村だけではない、光月と本田もそれは理解できた。彼らはここまで一度も白瀧が怒っているような所を見たことがないからこそ、その衝撃が大きい。

「……西村」

「は、はいっ!？」

突如名前を呼ばれ、驚愕で声が裏返ってしまう。しかしそんな西村の態度を気にとめず、白瀧は言葉を紡いだ。

「次の試合、いきなりだけと見せ付けるぞ」

「……はい？ えっと、見せ付けるって何をですか？」

「当然、実力を」

「……え？」

「お、おい白瀧？」

「白瀧、さん……？」

「止められるものなら止めてみるというものだ。無知なあいつに教えやるとしよう。……バスケは単純なものじゃないってな」

本来なら大会予選という早すぎるとも言える時期には、あまり手の内を晒すべきではない。温存していざと言うときの切り札にしておくべきだ。

だがそれを今の白瀧に進言できるほど、三人の肝は据わっていない。だがそれを今の白瀧に進言できるほど、三人の肝は据わっていない。

あまりにもいい笑顔を浮かべる白瀧。それを黙って見ているしかなかった。

(というか、普段怒らないような人が怒ると……)

(いつもの性格を考えてしまうということと、)

(見慣れていないという衝撃が重なってしまっ……)

《余計に怖い!!》

偶然にもこのとき三人は同じことを考えていた。

そうして次の日。大仁多高校対矢坂黎明高校の試合。

矢坂黎明高校のスターターは昨日と変わらず。その中には10番・荻野の姿もあった。

一方、大仁多高校のスターターは秀徳との練習試合の時とは殆ど変わったメンバーとなっていた。

「……なあ、どうなっているんだこれ？」

「小林がベンチスタート？ 余裕ってことかよ？」

矢坂黎明の選手達、そして試合を見に来たギャラリィは大仁多高校のスターターを見て疑問を口にする。前者にいたっては怒りもこもっている口調だ。

なぜなら伝統ある臙脂色のユニフォームに袖を通していているのは、去年までは大仁多高校に存在していなかった、新入生^{ルーキー}達だからだ。背

負っている番号も大きいということが、相手を苛立たせたのだろう。何せキャプテンの小林さんの姿さえなく、見える番号は7・9・13・14・15の五つなのだから。そう、ユニフォームを着て立っているのは白瀧・光月・神崎・西村・本田の五人である。

「……あの、これ何の冗談ですか？」

「言うな西村。俺だって未だに半信半疑だ」

「たしかに俺も、出られるものなら試合に出たいとは思ってますよ」

「まあ、俺たちは練習試合でもベンチスタートだったしな」

「けど……さすがにこれは、どうなっているんですか？」

自分が今ここにいることさえ信じられない西村であったが、それは話しかけられた本田も神崎も同様だった。たしかに三人とも試合出場への欲はあっても、まだ気持ちの整理はできていなかったのだ。

この登用方に疑問を覚えるメンバー。しかしそれは今ベンチにいる小林達も同じであった。さすがに無視はできず、小林はこの意図を藤代に問いかける。

「藤代先生、今日はなぜスターターを一年生で固めたんですか？一年生達に経験を積ませるにしても、途中交代からでもよかったのでは？」

「ええ、たしかに小林さんの言うとおりです。というか私も本当はそのつもりだったのですが。」

ただこれについては私の意向とうよりも、どちらかと言うと白瀧さんの要望と言いますかねえ？」

「白瀧の？ あいつが監督に直訴でもしたんですか？」

白瀧は他人に無茶を要望するようなことは基本的にない。自分が一年という立場をわきまえているということもある。それなのに今回のこの提案、とてもではないが信じられず、山本はさらに聞き返した。

「ええ。昨日、矢坂黎明高校の試合を見た後。私の元に来て、このメンバーで出させて欲しいと頼まれたんですよ。『第1Qだけでいい、もしもその結果第1Qで負けているようなことがあれば、二軍へ降格する』とね」

「はあっ!？」

「……何を考えているんだあいつは」

「わからん……」

「部にとつてもマイナスにしなければならないというのに」

「どうか取引になっていないでしょう」

返ってきたのは白瀧の衝撃的な宣言であった。思わずそれを聞いていた三浦、佐々木、黒木、佐々木、中澤も頭を抱え込む。それと同時になぜそこまでこの試合に懸けているのかと疑問もわいたが、それについては小林もしらない模様であった。

「まあ理由はわかりませんが、これだけ白瀧さんがやる気になったんです。重要なことなのでしょう。……橙乃さんも、そう思いますよね？」

「はい。私も詳しくはわかりませんが、昨日『インターハイまでは誰にも負けない』と白瀧君が改めて言っていましたから」

「ほう。やはり昨日刺激になることがあったようですね。良い方向に転がってくればよいのですが。まずはこの試合の行く末を見届けさせてもらいましょう」

橙乃も詳しい話は聞けなかった。しかし昨日昼食や練習後に話すことができ、白瀧の強い意志を確認できたと言う。その点から見ても彼が慢心や過剰な自信からこのようなことを進言したわけではないとわかる。

安堵し、藤代は白瀧たちを一瞥した。

「それでは、監督」

「ええ。予定の作戦については、指揮は東雲さんに一任します。お願いいたしますよ」

「はい。わかりました」

東雲が藤代に声をかける。手短な会話、しかしそれぞれお互いの言いたいことは伝わったようだ。

「あの、作戦って何の話ですか?」

「細かいゲームプランのことですよ。白瀧さん、それに西村さんの頭にはすでに入っているでしょうが。相手チームのことを考えると彼

らだけに一任させるのは少し可哀相なのでね。白瀧さんの条件を受ける代わりに、こちらも指揮については引き受けさせたんです」

「……そうなんですか」

「まあ橙乃さんも見ていてください。きっと面白いものが見れますよ」

「はい？　面白いものですか？」

何なのか気になったものの、「後のお楽しみにです」と藤代は流してしまふ。これ以上は今言う気はないのだろう。

仕方がないので橙乃は聞き出すことを諦めてスコアブックを開き、いつ試合が始まって大丈夫なよう準備をして、円陣を組んでいる五人を見つめた。

このメンバーの中ではチームリーダーである白瀧を中心に、今日の試合内容について話をしていった。

「そうだ、言い忘れてたけど明。お前今日はゴール下でのオフエンスは禁止な」

「……は？」

白瀧の発言に光月が目を丸くする。他の三人も「何を言っているのだろう」と理解できずに白瀧を凝視している。

「あ、悪い。言い方が悪かったな。禁止と言っても絶対するなってことじゃなくて、カットインからシュートを決めろって意味だ。基本的に可能な限りはハイポストに入ってくれ」

「いや、え？　でもそれって、どちらかというと要のポジションじゃないの？」

「そうだ。今日は俺と本田がポストプレイを務める。だからお前はSFに回ってくれ」

「……はあ!？」

本当に白瀧は何を言っているのだろうか。

本田がポストプレイをする、これは良い。むしろ妥当な考えだろう。PFというポジションから考えても、体格やプレイスタイルから考えても問題ない。

しかし白瀧はどうだ？　たしかに跳躍力はある。しかしパワーに

関しては光月はもちろんのこと、本田にも劣る。体格も良いわけではなく、体のあたりあいでも勝てるとは思えない。そんな彼がわざわざ得意分野を光月に任せ、ゴール下で勝負をするなど、利点があるとは思えない。

「なんで、いきなりそんなことを!？」

「そつすよ。それじゃあこつちが色々ハンデを背負うことになるつすよ」

「じゃないと明が荻野と勝負できないだろ」

「……え？」

「昨日の試合を見たが、相手のディフェンスは1―2―2ゾーンとマンツーマン。だがゴール下にはセンターとパワーフォワードの選手がいるために荻野は45度のポジションにゾーンでは陣取り、マンツーマンでは相手スコアラーについていた。自分の実力への自信だろうな、オフセンスも基本一対一が多かったし」

声を荒げる光月達だが、白瀧は静かに二人をなだめた。

昨日の試合を分析した上での作戦。

この試合をこのメンバーで挑むのは、ただ相手に力を見せ付けるためではない。これには光月をさらに成長させようという意図が含まれていた。

「荻野はお前が倒さなければ意味がないんだ。そのためならばいくらでも協力するさ」

「でも、僕にそんなことできるとは……」

「お前はミドルシュートを散々練習しただろう？ あれはこういうときのためでもあるんだ。1 on 1 だって何度もやっていたからな。今のお前なら一対一であいつには負けやしない」

「……わかったよ。白瀧にここまでお膳立てしてもらって、やらないわけにはいかない」

「よし、その意気だ！ 変わったお前の姿を見せてやれ！」

白瀧の後押しを受けて、自信がついた光月は提案を受け入れた。表情から緊張も取れ、笑みを見せる。

これで準備の方は大丈夫であろう。あとは彼自身が試合で力をど

れだけ出せるかにかかっている。

「……なあ、明のことはそれでいいとしてさ。問題は要、お前が大丈夫なの?」

「うん? 俺?」

「あ、それは俺も同感。光月と二人でならリバウンドだってなんとかなるとは思っていたんだが……」

しかし光月の問題については納得したが、まだ白瀧本人の問題については納得がいかなかった。神崎と本田は白瀧に詰め寄る。

相手は恵まれた体格を駆使する。昨日もリバウンド奪取率が高く、セカンドチャンスをものにしていたチームである。できうるならばリバウンドをものにしたいが、果たして白瀧が光月の代わりを務められるのか。その疑問が未だに強く残る。

「それについては問題ない。昨日も言っただろう」

「え? ……何か言ったっけ?」

『バスケは単純なものではない』って。たしかに俺は相手にタツパでもパワーでも劣る。……だがリバウンドなら互角以上に戦えるだろう。だから勇、西村も安心してシュートを撃ってこい」

「……まあ、お前がそう言うなら何かあると信じるわ」

「了解です。もとより白瀧さんのことは信じてますから」

「ありがとな」

全てを理解したわけではない。しかし、それでも白瀧を見ていると、本当に何かをやってくれるという希望を感じた。だからこそ二人ともその希望を信じる。白瀧もその信頼に応えると決意する。

「じゃ、俺と同じく相手のゴール下を制する仕事頼むぜ、本田」

「……足は引つ張るなよ」

「もうちよつとないのかよ。ま、了解」

この仕事に関しては本田の方が慣れている。その自尊心からだろうが、頼もしい言葉を吐いてくれると白瀧は思った。

「……それじゃあ行こうか。県大会出場を懸けた大切な試合だ。機会チャンスを下さった皆に不甲斐ない姿は見せられない。——勝つぞ!」

『おう!!』

掛け声と共に気迫もこめられる。顔を上げてコートに向かうときの五人の顔は、先ほどとは打って変わって真剣な表情へ変わる。意識の切り替えは上手くいったようだ。

「それではこれより、大仁多高校対矢坂黎明高校の試合を始めます。礼！」

『よろしくお願ひします!!』

こうして大仁多高校の夏は始まった。

白瀧、光月、神崎、西村、本田。大仁多高校の若き五人の尖兵達がそれぞれの思いを胸に秘め、先陣を切る。

第二十話 過去に迷い、今に誓う

栃木県予選二回戦、大仁多高校対矢坂黎明高校の試合。

県予選とはいえども、この試合には栃木県内の強豪校の偵察部隊も観戦に来ていた。この試合は栃木の常勝・大仁多高校の初陣。新しいチームの仕上がりを示す試合である。全国屈指のポイントガード、小林の存在も重なって注目度は高かった。

だが彼らの予測を裏切るように大仁多高校はスターター全員が一年生という異例な面子で試合に挑む。

事情を知らぬ第三者の視点から見れば、余裕とも取れるこの布陣。栃木の常勝校の実力を見定めるためにも他校からも矢坂黎明高校の声援が飛び交う中、白瀧達はこの戦いを切り抜けることができるのだろうか。

「ティップオフ試合開始！」

大仁多のジャンパーは光月。

両スターター内で最長を誇る彼がジャンプボールを制した。

ボールは神崎の手に渡り、さらにPGの西村へとパスを回す。

「さあ、一本決めていこう！」

ボールマンである西村はゆっくりと時間をかけて攻め上がる。

予定通り外に神崎が構え、ハイポストに光月、ローポストに白瀧と本田が陣取り、スペースを作るべく動き回っている。その間にデイフェンスに戻った矢坂黎明の選手達はそれぞれの選手にマンツーマンでデイフェンスを仕掛けた。目当てである黎明のスコアラー、荻野は45度の位置——すなわち光月のマークについている。

「……これは珍しいな。西村がセットオフフェンスを仕掛けるなんて」
そのボール運びを見てベンチの小林は違和感を覚えた。

西村の主体は敵が体勢を立て直す前に攻め寄せるアーマリーオフフェンス。特に白瀧がいるこの現状ならばファストブレイクで早々に先

制点を取るべく動いてもおかしくはないはずだ。まして相手は高さで完全に勝っている。速さで切る崩すことは間違っていない。

それなのに自身の方針、ならびに自チームの利点を無視する試合展開には同じPGとして疑問を抱かずにはいられない。

「理由は単純。様子見、というか確認でしようね」

「様子見、というと相手の動きの確認ですか？」

「ええ。どういうわけか知りませんが、どうやら白瀧君達は光月君と相手の10番をマッチアップさせたかっただようです。それで相手の出方を見たかっただけでしょう」

「なるほど、そういうことですか」

その疑問を解決するように藤代が説明した。

今回白瀧達に与えられた機会チャンスは第1Qの十分間。その間で光月と荻野がマッチアップする機会は限られている。昨日の試合を見てデータはある程度あるものの、矢坂黎明がこの試合も同じゲームメイクをするという保障はない。

だからこそ確実なものにするために立ち上がりは落ち着いているのだらうということだ。

「(そしてやはり向こうの10番荻野は光月さんをマーク。予定通りだ)」

なら、早速行きましようか。光月さん！」

自身のマークを引きつけ、西村は相手の横からパスをさばく。

ボールは危なげなく光月へと渡った。すぐさまターンしてバスケットに、強いては荻野に向き合い、トリプルスレットをとる。

「さあ来いよ、光月！ 見せてみろ！」

「……ッ！」

しかし一時的に光月の体が硬直してしまう。

今ボールを保持した状況で荻野と向き合ったことで、思考が停止してしまったのだ。

相手が因縁の旧友ということだけではなく、公式戦での今年最初の1プレイという自体に緊張せずにはいられなかった。

「い、勇！」

「おう！」

声をかけて外の神崎へとパスを回す。

すかさずスリーを撃たせまいとマークが詰めるが、上手く体を入れてかわしている。

「なんだ？ 俺に違いを見せてくれるんじゃないのか？」

「……」

勝負せずに、ただボールを回す光月に失望したのか、荻野が挑発するように言うが光月はまるで耳に入っていないかのように無反応であった。

その姿は白瀧の目にも入り、チームメイトの心境を察したため息をこぼした。

「初めだし仕方ないか。それなら突破口は俺らが開いてやるよ」

だがそれは決して荻野と同じ失望ではない。むしろ期待から出る心配であった。

白瀧は西村へと向け、アイコンタクトを送る。その意図を察して西村も大きく頷いた。

「ちいっ！」

「持ちすぎです。一旦戻して、神崎さん！」

「おお、頼む！」

マークを外せず、硬直状態に陥っていた神崎に西村が助け舟を出す。

ボールは再び西村へと渡った。

攻撃できる残り時間は9秒。それまでにシュートを撃たなければならぬ。

ショットクロックを視野に入れてから全員の立ち位置を確認すると、白瀧が自身のマークマンの近くまで来ていることを確認。

すぐに西村はドライブで白瀧がいる方向へと切り込む。すかさずマークマンも反応するが、その動きは白瀧によって止められてしまう。

「(スクリーンか!) スイッチー！」

「おう！」

咄嗟のことではあるが、驚くほどのことではない。すぐにマークマ

ンが変わり、西村の行く手を阻む。

「いいのか？ そっちに行っちゃって」

「なにっ……」

それを見て白瀧がポツリと呟いた。

どういう意味だと疑問が浮かぶが、考えている時間はない。突如壁役であったはずの白瀧からかかっていた力が消える。白瀧がディフェンスの体をブロックしながらロールし、ゴール側へと躍り出たのだ。

ピック&ロール。白瀧と西村のお得意のコンビネーションプレイである。

「あっ！ しまった！」

「白瀧さん！」

これで白瀧がフリーになる。その機を逃さずに西村は白瀧へとボールを回す。

シュートモーションに入る白瀧を止めようと黎明のセンターが飛ぶが、白瀧は飛ばずに代わりにフリーとなった本田へとパス。危なくなくシュートを決めた。

「決まった、先制はやはり大仁多高校！」

「……ナイスパス」

「本田もな。チーム初の得点だぜ、おめでとう」

「俺はほとんど何もしてねーよ。お前のアシストパスが効いたただけだ」

そっぽを向いて本田は戻っていく。白瀧も西村達へと声をかける
と最後に光月へと近づいていく。

「表情が硬いぞ明。しかも何ださっきのは？ もっと攻めていけよ」

「……わかってる」

「わかってないから言ってるんだろ！」

握りこぶしを作り、光月の胸へと押し当てる白瀧。

時間がないからこそできるだけ手短かにしなければならぬ。早口でつなげた。

「まだお前がカットされたとか、切り込めないとか判断したなら別に

俺だって言わない。だがお前は勝負すらせずに逃げたよな？ ……
弱いやつはともかく、やる気のない選手にまで手を貸すほど俺は甘くないぞ」

「……」

「ま、そんなに気負うな。少し力抜いていけよ」

そう言つて白瀧は拳を開き、穏やかな笑みを浮かべて肩に手を置く。

「お前が失敗したって、すごい選手だということは皆わかっているから」

「……！」

目を見開く光月。伝えたいことを伝えるとそれ以上は語らず白瀧はディフェンスに戻る。その後姿に少し勇気付けられた気がした。

「おい明、来ているぞ！」

「えっ……」

意志を新たにしたところで、神崎より呼びかけられた。

すぐに意識を試合へと戻すがその時には荻野がPGよりパスを受け、光月の目の前まで迫っていた。

「試合中だというのに余裕だな！」

「荻野！ くそっ！」

「もらった！」

注意力が散漫であった光月をドライブで抜き去る荻野。本来なら光月がマークにつかなければならなかった相手である。

その荻野は光月を楽々とかわすとレイアップシュートを放つ。

「そう簡単には決めさせねえよ！」

「うおっ!？」

だがボールは本田によつて叩き落とされた。

本田も彼らに負けないほどの体格がある。見事ブロックショットを決め、ルーズボールは白瀧が拾った。

「悪いな明。今のは俺が悪かった。……やり返すぞ！」

白瀧は集中力を欠かせてしまったことについて一言光月に謝罪すると、すぐさまコートを駆け上がる。光月や神崎もそれに続いた。

(敵の速^{ファストブレイク} 攻を防いだ分、まだ敵も残っているが関係ない！)

荻野は間に合わないが、矢坂黎明はポイントがードをはじめ四人の選手が戻り始めている。早い展開であったがゆえに、パワーフォワードやセンターはまだハーフラインの位置にいた。

その中を白瀧は切り込んでいく。切り替えし^{クロスオーバー}を巧みに使い、白瀧は二人の選手を悠々とかわしていった。

「さすがは白瀧。切り返しだけで容易く敵を抜き去っていくか」

「——チェンジオブディレクション。高速ドライバーが持つ、方向転換の技術です。白瀧さんは取り分け重心移動の技術も高かった。彼ほどの技術を持つ人ならば、殆ど同速度で切り返しも可能でしょう」

白瀧の技術の高さには見慣れている小林達も関心するばかりだ。

急な切り替えしや鋭いペネトレイトをものにする技術『チェンジオブディレクション』。白瀧がああ緑間を抜き去ることを可能にしたものでもある。

ただそれだけで矢坂黎明の選手達は置き去りにされる。そのまま一人で切り込むとシュートまで持っていた。

「させるか!!」

「おおっ!」

だが残った二人がブロックに飛ぶ。

センターが188cm、パワーフォワードが186cm。数値だけ見ても高い壁である。二枚のブロックを前にして、ゴールは隠れてしまった。

「……いや、他のやつらのこと忘れてるよ」

そこで白瀧はあえてシュートを撃たず、ボールを真上へと打ち上げた。

明らかにシュート狙いの角度ではない。落ちながらもブロックに飛んだ二人はボールの行方を追うが、その時一人の選手が視界に入った。

「——光月!」

「うおおおおっ!」

白瀧より足が速い選手などこのコート内にはいない。しかし白瀧

がドリブルをして、さらに敵選手をかわしながらという条件ならば、真っ直ぐ最短経路で走りこめば光月は追いつける。

溜め込んだ思いをぶつけるように、光月は空中で掴んだボールをリングへと叩きつけた。

「……ひゅーっ。さすが明(まあ、別に普通に決めても良かったけど)」
「あ、アリウープ！ おい、あいつってまだ一年だろ!？」

その威力に白瀧は感心し、初めて目の当たりにした矢坂の選手達や観客は驚愕の色を隠せない。

「あんなやつがいたとはな……」

「落ち着け！ 派手にやってくれたが、それだけだ。高さはうちが勝っている。落ち着いて攻めていけば取り返せないことはない!」

「……ああ。わかった」

黎明内に動揺が広がるが、主将の一括で身が引き締まる。

今度は黎明もポイントガードとシューティングガードの二人が慎重にパスを回し、ステイルに注意しながらゆっくりと攻めて来る。

大仁多高校のディフェンスもハーフコートのマンツーマン。スコアラーである荻野には光月がマークについた。センターとパワーフォワードにはそれぞれ本田と白瀧、外のガード陣には西村と神崎がついているのだが。

「主将!」
キャプテン

神崎の上からパスが主将のセンターへとわたる。

やはり背丈で劣っているがゆえに、高さのミスマッチをつかれると対応しきれない。

本田のブロックをもともせず、確実に一本を決めてきた。

「よっし、まず一本。ここから返していくぞ!」

「はいっ!」

士気を高めながら矢坂黎明は速攻に備えてディフェンスへと戻る。自チームが勝っている部分があつてはいるからこそ、押されている状況下でもこうして落ち着いた攻めもできる。流れはまだ変わっていないかつた。

「ちっ! (やつぱ、本職相手では厳しいか)」

「あつちやー。悪い、皆。簡単にパス通しちまった」

「気にすることはしないで、二人とも。向こうが高さを実いてくることは想定済みだ」

声をかけて回りを落ち着かせる白瀧。しかし彼も早い段階でこれを克服しなければならぬと感じていた。

高さを自信に持っている相手チームはリバウンドも強い。それゆえにまずはその自信を崩さない限りは完全に大仁多のペースで試合を進めることは難しいというのだ。

白瀧から西村へとパスがわたり、試合が再開。

西村は左右に振り、カットインを試みるがシュートまで持つていくことはせず、味方へとパスをさばいた。

「早速二回目のマツチアップか。相当信頼されているな」

「さつきとは違うー」

45。ポジションに立つ光月がボールを受け取った。

はつきりと意志を言葉に出すと、一気に勝負を仕掛ける。

——強引なペネトレイト。荻野も動きに食らいつきその姿を追うが、突如逆方向へとターンで切り返す。

ターンの勢いを足でしっかりと殺すとジャンプシュートを撃った。

荻野は反応することは出来ても跳ぶことは出来ない。

(くつ。……だが、光月のシュート範囲は狭い。ミドルレンジでも成功率は低い。それならまだ……)

力強い動き、勢いを殺す技術。光月の成長に感心する荻野であったが、今までの経験から外れることを予測しボールを見送る。

……しかし、彼の予測を裏切るように光月のジャンプシュートはリングを通過した。

「——ッ！」

「ナイツシュ光月！」

呆然とする荻野。まさか一対一で負けるとは思ってもいなかったのだろう。

大仁多高校が光月を讃え、勢いを強めてディフェンスに戻る中、キャプテンに促されてようやく荻野も動き出した。

「(状況は良くないか。こうなったらより攻撃の成功率が高く、それでいて中心人物から点を取ることが望ましい)」

おい、少しだけ耳を貸せ」

「は、はい」

キャプテンはこの状況を打開すべく、ポイントガードに耳打ちし、ゴール下へと走りこむ。

矢坂黎明の攻撃。

ボールマンであるポイントガードは再び上からパスを通した。先ほどと異なるのは、パスの相手がパワーフォワードの選手ということ。

「ちいっ！」

マークについているのは白瀧。

しかし、力で劣っている分軽々とローポストに入られてしまい、彼の得点を許してしまった。

「……やっぱ力づくで陣取りされると厳しいな」

「大丈夫か要。やっぱり厳しいんじゃないか？」

「確かに。でも構わない。そのままディフェンスはマークを変えずに続行だ。行くぞ！」

今のプレイを見て、やはり変わった方がよいのではないかと思う光月であったが、白瀧はそれを取り入れることはなく走り去ってしまった。何か考えがあつてのことだろうが、果たして力負けしている相手に打つ手があるのだろうかと疑問を覚えた。試合前の「リバウンドなら戦える」という言葉さえ半信半疑になってしまう。

(……いや、要が大丈夫だと言ったのだから信じるしかない)

それでも疑問よりも信頼が大きく、光月は余計な詮索をやめて走り出す。

西村と神崎を軸にボールを回していく中、西村がジャンプシュートを放った。

外をも意識させようという意図が含まれたシュートだったが、ボールはリングに激突、大きくバウンドして宙に浮いた。思わず西村は不満を口にする。

「ウソツ！ 入ってくださいよ！」

「リバウンド！ ……つて!!」

ボールを支配するために、期待を寄せて光月はゴール下にいる二人へと声を出す。

しかし、その場に広がっている光景を目のあたりにして、言葉を詰まらせた。

「ちっー！」

「このっー！」

白瀧も本田も歯を食いしばっていた。

矢坂黎明二人のインサイドプレイヤーのスクリーンアウトにより、完全に押さえ込まれていたのだ。

「やっぱり駄目だった！」

前言撤回。やはり白瀧だけでは無理だ、自分が行くしかない。

光月の中で白瀧への期待は崩れ去った。

もとよりリバウンドはオフエンスよりもディフェンスの方が有利なのだ。高さや跳躍力も必要だが、何よりもポジションを確保することが重要。

秀徳との練習試合で光月が自分よりも背丈のある大坪からリバウンドを取れたのも、空中戦の前の陣取りで勝てたからだだった。

それなのにパワーでも高さでも劣る白瀧に全て任せてしまうのはあまりにも酷な話である。

「……『やっぱり』だと？ おい明、後でその意味を詳しく聞かせてもらうぞ」

もつとも、それは光月が思っていること。

光月の発言に気分を害したのか、白瀧は深い笑みで意味深な発言をする……相手の腕を払いのけ、ゴール側へと躍り出た。

『……えっ？』

——何だ今の動きは。

何が起こったのかを、白瀧のプレイを理解できずに固まる。光月も、マークしていた相手でもある。

一つ確かなことは白瀧が有利なポジションを取り返したということこ

と。

そしてその位置を維持した白瀧は自身の跳躍力を活かし、オフエンスリバウンドを制するとそのままボールを押し込んだ。

「……スイム、だな」

「え？ 安治、お前今何て言った？」

その動きを理解した者も中にはいる。

黒木もその一人だ。『スイム』という聞きなれない単語を不審に思い三浦が相槌を打つが、黒木に代わって東雲と藤代がそれに答える。『『スイム』よ三浦君。水泳のクロールで水を押しだす動きのように手を操り、相手選手の腕を払いのける技』

「しかし効果はある分、慣れぬ者がやろうとすればファウルを取られやすいという諸刃の剣でもある技です。それを初戦からこうも巧みに見せ付けてくれるとは。白瀧さんは本当に底が見えませぬ。一体どれだけの技を持っているのでしょうか」

藤代は興味深い者を見るような目で白瀧を射抜く。

自分が引き抜いた逸材であるとはいえ、その底知れない技術には感心するしかなかった。

「なあ明。今さっきお前の方から『やっぱり駄目だった』とか聞こえたんだけどさ。どういう意味かな？」

「いや、それは……」

とびっきりの笑顔を浮かべた白瀧は光月を問い詰める。

言っていることと表情が一ミリも一致しない姿に、光月は戦慄するしかなかった。

緊迫した状況は西村が白瀧を抑えることでどうにか解決したのだが、後にこのことを思い出した光月は震えが止まらなかったと語る。

「くそっ……！」

その一方で矢坂黎明高校には苛立ちが募る。

過程はどうあれ、流れは大仁多高校へと傾いている。

大仁多のスターターはベストメンバーではない。だからこそ今のうちにリードした状況を作りたいところである。

だが、矢坂黎明高校が勝っているものの一つ、リバウンドがあつさ

りと白瀧の技術を前に制せられてしまい、流れを止めることができなかった。

たった一度であろうとも勝てると思っていた場面で取られるのは痛い。

それでもこの流れを一蹴しようと選手達は声を出し、逆境を覆すべくコートを駆けた。

「頼む、荻野！」

そしてボールは一年生エース、荻野へとわたる。

ここでもしも荻野が負けるようなことがあれば一気に流れを持つていかれる。重要な場面。それは誰よりも荻野が、マッチアップしている光月が理解していた。

コートに緊張が走る。

仕掛けるタイミングを計る中、先に動いたのは光月であった。

「——ッ！」

考えてのことではない、咄嗟の反応で荻野は手首を動かす。

光月はボールを捉えたもののおと一歩及ばなかった。しかしステイルが失敗したわけではない。わずかに指先が触れ、荻野の手からボールがこぼれた。

「もらった！」

「いや、まだだ——！」

荻野は体を反転させると利き手とは逆、左手でボールをおさえる。

その場でロールし、体を入れ替える。ボールへと意識が向いていた光月の体が流れてしまった。マークが外れたことを察し、荻野はジャンプシュートを撃った。

「負けるかあっ!!」

「なっ!?!」

だが、光月の手が背後よりボールを掠めた。体勢を崩しながらも無我夢中だったのだろう。しかしそれが今回は実を結んだ。

軌道がずれたボールは潜りぬけることなく、リングにぶつかり、外へと落ちてくる。

リバウンドを制すべく、先ほど同様四人の選手がゴール下で競り

合っていた。

そんな中、ゴールに近いポジションを取られていた白瀧が、スクリーンアウトをしている相手の右わき腹を触る。

(また先ほどの技か！　だが、その動きは読めた！)

その感触から白瀧が仕掛けてくることを理解した相手は、半歩右へと体をずらした。

『スィム』は自身の腕を搔き、相手の腕を払いのける技。ならば体ごと移動してしまえば良い。その考えは間違っていない。

「残念、バスケはそんなに単純じゃないよ」

「なんだと!？」

だが正解でもない。

その瞬間、白瀧は相手が動いた方向とは逆、左へと移動してスクリーンアウトをかくぐる。

自分が進む方向とはあえて別方向の敵選手のわき腹を触るといふ『タツプ』という技術、フェイクだ。

「そんな……」

「よっし。……あれ?」

場所を確保した白瀧であったが、ボールが浮いた位置は外れた。

白瀧とは逆側、本田達が競る位置へと流れていく。

「白瀧お前だけに……やらせるかよ!!」

「……むうっ!？」

そこで先ほどまで負かされていた本田が奮起する。本職でない白瀧が打ち勝っているというのに、仮にもパワー勝負で勝負する自分が負けられないと思ったのだろう。

本田は黎明のセンターとの競り合いに勝ち、デイフェンスリバウンドを制したのだ。

「ナイスリバン、本田!」

「——まずい!」

大仁多のベンチがさらに高まりを見せる。流れは確実に変わっていた。それを示すように西村が確実にワンマン速攻を決め、点差をさらに広げてみせた。

「……おい、こいつら本当に一年なのか？」

第1Qが始まって七分が経過した。

観客の中の誰かが呟いた言葉はこの会場の中にいる者達の代弁であろう。得点表を見ればそれは明らかだ。

(大仁多) 17対9 (矢坂黎明)。大仁多高校が一度もリードを許さずここまで来ていた。

「どうなってんだよ、どう見ても普通じゃねえだろ!？」

いくら強豪校といえども、一年生だけでここまでできるものなのだろうか。

相手が弱いわけではない。大仁多がワンマンチームというわけでもない。だからこそ観客は誰もが驚いた。

「リバウンドー!」

本田のシュートが弾かれ、ボールが宙に浮かぶ。

ボールを確保するために前提として重要なゴール下の競り合い。スクリーンアウトで相手を外へと押し出そうとするが……

「オツケー、任せろ!!」

白瀧はその腕を払いのけて逆に外へと締め出すと、自身は確実にボールを手にする。

着地と同時にボールを外へ。

コーナーへと走りこんだ神崎がボールを受け取り、スリーを放った。

これで今日神崎は二本目のスリー。そのシュートは一本目同様、リングを綺麗に潜り抜ける。

緑間を目にしたがために印象が薄まるものの、神崎もロングシューターである。高精度を誇る彼のスリーは、敵チームに嫌になるほどのプレッシャーをかけたことだろう。

「……一気に点差が開きましたね」

「ええ。何よりもリバウンドを制している点大きい。この試合は思

わぬ収穫となりましたよ」

立派に試合を繰り広げている一年生達に小林は賞賛の言葉を送った。

嬉しそうに語る藤代だが、それは小林も同様であった。白瀧の幅広い適正、本田や光月の奮闘。西村や神崎の本番での実力。どれもが立派な収穫である。

「……西村君、白瀧君」

「え？」

「はい？」

そんな風にベンチが安心して見守る中、東雲が立ち上がり西村と白瀧を呼んだ。

彼女がこうして指示を出すのは今日は二回目。第1Q五分、光月によるアイソレーションの指示を出した後以来である。

「ディフェンスを変更。陣、タイプは予定通り」

「っ！」

「……了解です」

手短かに、敵チームには気づかれないように指示を出す。

東雲の意図を察した二人は早々にディフェンスへと戻る。

「……神崎さん」

「ん？」

そして西村は神崎に。

「明、本田。東雲さんより指示が出た」

「え？ 何だ？」

「どういう指示だ？ 早く言え」

白瀧は光月と本田の二人に駆け寄り、指示を伝えた。

指示を伝え終えると早々に動き出す五人。その姿を見て、藤代は何かを思ったのか、呆れたように東雲に呟いた。

「……ここでその指示を出すのですか東雲さん」

「藤代監督は不満でしたか？」

「いえいえ。ただ、そこまでする必要があったのかと、そう疑問に思っただけです」

「白瀧君ならこうしたでしょう。彼は出し惜しみはしない性格ですから」

「それはそれは。気前の良い方々だ」

そう言われてしまえば藤代も納得するしかない。

東雲は今回白瀧達に作戦内容を説明され、指示を託されていた。ならば彼らの意志を無下にはできない。コーチとしても、選手達には全力で戦って欲しいという思いがあった。

「……おい、向こうのディフェンス変わったぞ」

「ああ。ゾーンディフェンスに移行したな」

矢坂黎明の選手たちも異変に気づいた。

ここまで大仁多高校のディフェンスはハーフコートのマンツーマンであった。

しかし突如ゾーンディフェンスを展開し、ペイントエリア周辺の守備を固め始めた。

前衛左に西村、右に神崎。

ゴール下の中央に白瀧。左に光月、右に本田が配置し、陣形を作っている。

「2―3ゾーンか？　だが、なんで7番が中央なんだ？　普通に考えて9番が真ん中じゃないのか？」

（いや、おそらくは7番のリバウンド能力を信頼してのことだろう。そしてコーナーからの攻撃を防ぐことにより重心をおいたんだ）

白瀧が中央に配置されていることに疑問を覚えるが、そのメリットを考えると納得し思考をゾーン攻略へと移す。

第1Qはもう三分もない。その間はおそらくこのゾーンディフェンスが続くだろう。早い段階で切り崩すに越したことはない。

「2―3ゾーンはインサイドには強い分、中央や45度からのスリー、それにハイポストに入られると弱い。だが、うちには突出したシューターはいない。となると……」

荻野！　お前も来い！　回していくぞ！

「はー」

ガード二人にさらに荻野も外へ回り、三人が高速でパスを回してい

く。

神崎を引きつけたところで、荻野へパス。荻野はスペースとなった中央よりドライブイン。ゾーンのど真ん中へと侵入を試みる。

「ツ！ 待て、荻野！ これはただの2―3ゾーンではない！」

「え……？」

しかしペネトレイトした瞬間、キャプテンの警告が響く。

荻野がその声に反応してドライブを止めるが、そのタイミングを狙われてボールは奪われてしまう。

「なっ！ お前、白瀧！」

「わざわざ俺のエリアに侵入してきてくれてありがとう」

ステイールを敢行したのは白瀧。味方が中で引きつけたはずの相手であつた。

（遅かったか！ おかしいとは思つた。7番が俺の動きにつられたのかと思つたら、突如配置を変えてきた！ これは2―3ゾーンの派生形！）

囷となつて動いていた矢坂黎明のキャプテンが冷静に分析する。

彼が想像したとおりこれは2―3ゾーンの変則、ハイポストをも視野に入れた2―1―2ゾーン。広い守備範囲を誇る白瀧を中心におきステイールを狙い、コーナーにも対応できる陣形だつた。

それに気づいた時にはもう遅い。

白瀧は荻野を抜き去ると簡単にガード二人もクロスオーバーで突破し、速攻を決めた。

「さーて、第1Qも残り二分と少し。先輩達が楽できるよう、頑張ろうか」

仲間と手を交わしながら、白瀧は明るくそう告げる。

その言葉には仲間の士気を大いに高め、相手の士気を存分に下げる効果があつた。

「これは決まりましたね。五人とも自分の力を生かしている」

白瀧のプレイを見て、藤代は試合の展開を察した。

この五人のスターターは本来予測されていないものだったが、元々彼自身五人を早い段階で試合に出すつもりでいた。理由は当然彼らの実力を測るためである。

近い未来、大仁多高校を率いていくであろう逸材。その五人は立派に試合を進めていた。

「試合作りだけではなく、自身のスピードと白瀧さんとのコンビネーションで敵陣を崩す西村さん」

「クイックネスでは山本さんに劣るものの、安定して確実にスリーを沈めるロングシューター、神崎さん」

「気概があり、自分よりも恵まれた体格が相手でも果敢に勝負を挑むインサイドプレイヤー、本田さん」

「秀徳の大坪さんと互角以上に渡り合うほどのパワーと体格を持ち、一対一でも強さを発揮する光月さん」

「そして……チームオフENSEを機能させ、非凡の^{スピード}と^{テクニック}技術をもって攻守で相手を凌駕するスコアラー、白瀧さん」

今年の一年生はキセキの世代と同世代。

そんな中で白瀧以外にも有望な選手が台頭してくれるのは嬉しい限りだ。

「今年の一年生は、なかなかどうして頼もしい選手が集まったものですね」

だから藤代はこれからの彼らのさらなる成長を願い、笑って試合を見守った。

『第1Q終了——!!』

ブザーが鳴り響き、試合の4分の1が終わったことを告げた。

十人の選手達はそれぞれのベンチに戻っていくが、その表情は完全に異なっている。

(大仁多) 28対9 (矢坂黎明)。完全に大仁多高校が流れを掴んで

いた。

結局矢坂黎明高校はゾーンディフェンスを崩しきれずに第1Qを終えた。白瀧の士気の下、積極的にボールを奪いにくる上に、ゴール下も光月が復帰したことで堅固なものとなった。

無駄に時間だけを費やし、最終的には攻めきれずに24秒が経過し、大仁多高校にボールがわたった。

逆に大仁多高校は攻める手を緩めず、白瀧と光月の二人を中心にチームオフENSEを展開。点差を広げていった。

「お疲れ様でした、皆さん。立ち上がりこそ少し不安もありましたが、最終的には大差をつけて見事な試合展開でした」

「五人ともよくやってくれた。流れは完全に引き寄せた、これ以上ない戦果だぞ」

「ありがとうございます」

藤代と小林は笑顔で五人を迎え入れ、その戦いぶりを讃えた。

椅子に腰掛け体を落ち着かせると、礼を言い水分を補給する白瀧。橙乃からタオルも受け取り、首に巻いた。他の四人もそれに習い、汗を拭いたりと体の休養に努めた。

その五人も含め、円陣を組むように並ぶ大仁多高校ベンチ。藤代は落ち着いてここからの指示を出していく。

「さて、第2Qはオールメンバーチェンジでいきます。……それで構いませんね、白瀧さん？」

「はい。このようなお願いを聞き入れてもらい、これ以上望むものはありません。

……明も、念願の荻野とマッチアップできて大分気が晴れただろう？」

「うん。もう十分すぎるほど、戦えたから」

「そうか。それなら何よりだ」

交代については何も異論はなかった。

白瀧も光月も、この試合で果たしたかったことは果たせた。

だからここそこからは監督の指示に従い、大仁多高校のために行動するのみ。

「それでは次は総入れ替えです。

……小林さん、山本さん、松平さん、佐々木さん、三浦さん。用意
は済んでいますね？」

『はい！』

「可愛い一年生達がここまで試合を作ってくれたのです。先輩の威厳
というものを見せてあげてください」

『はいっ！』

監督の激を受け、上級生達はさらに意欲を高める。

体は既に動けるように温まっている。士気も上々、準備は完全に
整っていた。

『これより、第2Qをはじめます！』

「さあ、存分に暴れてきてください！」

ブザーが再び鳴り、今度は小林達がコートへと出る。

ようやく彼らも今年初めての公式戦がスタートするのだ。その心
に油断は微塵もない。

「19点差か。ここまでリードを残して引き継いでくれるとは思って
もいなかった」

「本当に助かるな今年のルーキー達は。俺も気が楽になって助かる
ぜ」

「おう！ 後輩にばかり良い格好はさせられん。目にももの見せてやろ
う！」

「確かにお膳立てされて下手な真似はできないな。頑張るとするか」

「ツシ！ 燃えてきた、俺達も派手にやりましょう！ ゴール下は任
せてください！」

ベンチから五人を見て、後姿も発言も頼りになると感じられた。

体を冷やささないようにと上着を羽織り、白瀧達は小林達を見守る。

「よく見とけよお前ら。先輩達の戦いぶり」

「……頼りになる」

「……はい。参考にさせてもらいます」

中澤と黒木が視線をそのままコートに向けながらそう語りかける。

誰もが自チームの勝利を信じて疑っていない。そしてそのために

できることをやろうと、声を出していった。

第2Qが始まったも、流れは継続した。

大仁多高校は山本のスリーを口火に、一挙8連続得点で45―9と点差を広げる。

対する矢坂黎明は途中からシューターを入れ替え、中と外を上手く攻め分けて反撃を試みる。しかしターンオーバーの連発が起こり、オフエンスはリズムを失ってしまい、悪い流れを断ち切れないまま前半を終える。

後半戦、第3Q開始直後、小林がインサイド攻めから得点。さらに得意のドライブからレイアップを決めると矢坂黎明高校がタイムアウトを取る。この時大仁多は小林を下げ、中澤が入った。

その後も矢坂黎明高校の選手達の疲労が見え始める中、大仁多高校のディフェンスは厳しさを増し、ヘルプの遅れも目立ち始める。第3Q残り四分、三浦に変わって黒木がセンターに入ってから矢坂黎明のファウルトラブルが増え、リバウンドも完全に大仁多高校が制していた。

第4Q、最初のオフエンスこそ矢坂黎明がスリーを決めるが、残り7分でパワーフォワードが退場^{ファウルアウト}してしまい、流れはますます大仁多高校へと進む。

さらに追い打ちとばかりに残り五分、大仁多高校は小林を投入。さらに残り二分で白瀧と光月を投入し、ベストメンバーで終盤を迎えた……。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

言葉を発することさえ躊躇われる。もはや全力で走ることさえままならない。それほどまでに疲労がたまっていた。そしてそれ以上

に精神的に来るものがあつた。

——早く終わってくれ。もう続けたくない。嫌だ。

そんな心の声が聞こえてきた気がした。それでも、それでもスコアラーターたる彼がゴールを狙うことをやめるわけにはいかなかった。

残り時間20秒。(大仁多) 153対23(矢坂黎明)。残り時間から考えても戦力から考えても逆転は不可能。だがそれは諦める理由にはならない。

荻野は味方を鼓舞するキャプテンの姿を見て、自分も負けじと足に力をこめた。

「全員もつと当たれ！ まだ相手は諦めてないぞ！」

小林も相手の目が死んでいないことを理解し、指示を出す。彼自身もパスを防ぎきるようディナイをしてしている。

最後の矢坂黎明の攻撃、それを理解しているがゆえに慎重に攻めてくる。

だが集中力はもはや散漫していた。パスルートを読み、白瀧がボールを弾く。ボールは転々とし、ルーズボールを巡って選手が競り合うが、ボールは荻野が取った。

「キャプテンー！」

全力のワンドライブ。抜くことはできないものの、それで一時的にディフェンスをかわしパスコースを作るとゴール下のキャプテンへとパスをさばく。

「せめて、最後にこの一発を……！」

試合時間残り十秒。

どう足掻こうとももはやこの試合は覆らない。

それでもまだ諦めきれない、諦められない者はいる。せめて少しでも点を取り、点差を縮めるために。

ボールを持ったキャプテンはシュートを決めるべく残った力を振り絞って高く跳んだ。

「させん！」

「止める！」

「……甘くない」

だがそんな彼の前に立ちをはだかるように、高く硬い壁が三枚出現する。

「うおっ！」

「た、高いー！」

「うわっ。(俺達の時と、第1Qとは完全に立場が逆転している。これは俺だって嫌だよ)」

小林188cm、光月192cm、黒木195cm。大仁多高校ベストメンバーによる、最高の壁三人によるブロック。

完全にシュートコースを塞ぐその姿は、味方である白瀧でさえ呆然とした。

「くそっ！」

シュートさえ撃つことができず、咄嗟に空中で腕を回しボールを放した。

「なっ！」

「へへっ。ありがとな」

だが、そのボールは山本が確保した。

体勢を崩したがゆえにそのボールの軌道は丸わかりであり、山本ほどの選手ならば取ることは難しくない。

「よしっ、走れ白瀧！」

「了解です！」

山本は白瀧へとパスをさばく。

残り時間から考えてこれがラストプレイとなるだろう。それを理解し、白瀧は一気に加速する。もはや疲労で動きが鈍い敵ディフェンス三人をクロスオーバーで軽々と抜き去り、そのままバスケットへと向かう。

「させつかー！」

「うん？」

だが、その姿を追うように荻野が迫った。

白瀧が三人を抜いている間に追いついたようだ。だが、ドリブルをしても白瀧を止めることは難しいのか、並んで走ることが限界のようだ。

「まだ終わってねえ！ 好きにさせてたまつかよ！」

それでも荻野は諦めていないらしい。

息が絶え絶えな状態でなんとか口を開き、自身の強い意志を告げる。

「……そうか。だが俺達は負けられない。これで最後だ！」

意図が伝わったのか、白瀧もそれに答えた。

白瀧は走りながら速さを緩める事無く、セットシュートをリリースする。

「なに!? (まさか、もう撃つのか!? だが、早すぎる。しかもこの角度では……)」

「美味しいところはくれてやる。お前が試合を、勝負を締める。……明」

クローズアップシュート。しかしフリーとはいえ、ランニングシュートを決めるにはあまりにも条件が悪すぎる。ボールをリリースするタイミングが早すぎるのだ。

これは入らない、とそう荻野は思ったが、白瀧の発言で彼は背後より一人の選手が走りこんでくるのを目にした。

「まさか……光月！」

荻野に苦汁を飲ませた相手、光月である。

体を光月に向けても不意をつかれたことで完全に勢いを殺すことはできず、荻野は後ずさる。光月はそんな彼を飛び越えるかのように力強く跳び、リングに当たって宙に浮いたボールを片手で掴んだ。

「これで、終わりだ！」

「させつか！」

『お前には負けられない!!』

最後の光月の得点、それを止めるべく荻野も跳ぶ。

両者とも目の前に相手には負けられなかった。だからこそ、渾身の力で臨む。

この試合を締める最後の空中戦。

それはリングから響く鈍い音が決着を告げた。

「……ナイスダンク、明」

リングにボールを叩きつけた光月。白瀧がチームメイトのシュートを褒め称える。

ただでさえ体力が既に限界を迎えていた上に、荻野は体勢を崩していた。彼のブロックは障害にもならなかった。彼の指先はボールはおろか、光月の肩に届くかどうかの位置にしか及ばなかった。

そして二人が着地し、ボールが転々とする。それと殆ど同時に、最後のブザーがコート内に鳴り響いた。

『試合終了——!!』

「大仁多高校、県大会出場決定！」

最終スコア、(大仁多) 155対23 (矢坂黎明)。

この瞬間、大仁多高校が県大会出場を決めた。

順当な勝利、それを喜ぶように小林は拳を強く握り締め、山本は腕を突き上げ、黒木も笑みを浮かべた。白瀧も光月とハイタッチをかわす。

藤代やベンチのメンバーも緊張が解け、安堵した表情で五人を見る。

「155対23で大仁多高校の勝ち！——礼!!」

『ありがとうございます！』

最後に選手達は整列し、お互いの健闘を讃えた。

選手達が言葉を交え握手を交わしている中、荻野が光月へと近づいていく。

「……荻野」

「信じられねえよ。チームはともかく、個人でお前に負けるなんて」名前を呼ぶ相手には反応せず、ただ淡々と荻野は言葉を紡ぐ。

疲労が溜まっていてためか悔しさや怒りといった類のものは感じなかった。

「そんなに力があるなら、なんで中学の時に出さなかったんだ！どうして俺達と一緒に戦ってくれなかったんだ!!」

だが次の瞬間、感情が爆発した。

肩を掴み、光月を睨み付ける。彼が俯いていた時は気づかなかったが、目頭には涙が溜まっていた。

そんな彼を見て何を言っているのかわからず、光月はただ一言謝罪した。

「……ごめん」

「ツ！ くそ！ くそっ！ ……負けんじゃねーぞ、絶対に!!」

その言葉から逃げるように荻野は宿敵に渴を入れると、立ち去っていった。

中学時代の戦友。わかりあえなかったと言えども、それでも何も感じないわけがなかった。荻野も仲間と共に戦いたいという意味はあったのだろう。

「……荻野」

「明、追ったら駄目だぞ」

せめて最後に何か一言、と思い足を踏み出そうとしたが、白瀧がそれを制するように冷たく言い放つ。

振り向くと彼は視線を向ける事無く、片付けをしながら言った。

「勝者が敗者に言葉をかけても、それはただの自己満足だ。相手のためにならない。」

もしも相手のことを本当に考えるなら……進め。俺達は勝ち続けることでしか、戦って負かした相手に報いることはできない。自分達に勝利した相手は強者だったと、そう示すしかないんだ。そうすることで、敗者は報われる……」

その言葉を最後に、白瀧はバッグを肩に背負って歩いていってしまった。どこか寂しげなその背中には、まるで自分のことを語っているようでもあった。

その言葉が深く浸透し、思考を鈍らせる。

気がついたら荻野も矢坂黎明の選手達と共に引き上げていた。

確かに白瀧の言うとおり、今さら光月が荻野に何かを言ってもそれは荻野のためにはならないだろう。

「……勝ち続けるよ、荻野。君たちの分まで」

だから誰にも告げることなく、その場で誓った。

気持ち新たに、旧友の意志を継ぎ、光月も会場を後にする。

大仁多高校、栃木県予選大会突破。県大会出場決定。

第二十一話 かけがえのない日常

週末の対矢坂黎明戦を終えて、県大会進出を決めた大仁多高校はまた日常の日々へと戻る。

明朝6時、まだ人通りが見られない通りの中、白瀧はジャージ姿で朝の町を走り抜けていた。

「はっ、はっ、はっ……」

一定のリズムで呼吸する。軽く汗を流しているもののフォームに乱れはない。

白瀧の一日の始まりは、もはや習慣と化しているこの走り込みから始まる。

彼自慢の体力を保ち、かつその日の調子を確認、体を慣らすために。走っていると、ある公園を通りかかる。白瀧が光月や神崎達とよく練習するバスケットがある公園だ。

水分補給のために公園に立ち入り、水道で軽く水を口に含むと、白瀧は真っ直ぐにバスケットに向かって歩いていく。

自分の身長よりもはるか高いところにあるゴール。それを一瞥すると白瀧はそのゴールに向かって走り出した。

「……………うおおおお!!」

勢いをつけた助走の途中、さらに力を加えようと言わんばかりに白瀧は吼える。

その速さを殺すことなく白瀧は跳ぶ。空中でボールを掴むように腕を伸ばすと、そのまま左腕をリングへと叩きつけた。

「……………」

バスケットに通じているものならばこの動きを理解できただろう。

着地し、先ほどよりも乱れた息を整えながら、白瀧は無言で自身の左腕を見つめる。

しかし白瀧はこれだけ派手な動きを見せながらも、彼の心は深く沈んでいた。

ランニングを終えて寮へと戻ると、白瀧はすぐに次の行動へと移る。

汗をふき取り制服に着替えると寮の食堂で朝食を済ませる。

そして部屋へ戻り、荷物を一通り準備するとすぐさま学校へと向かった。

もっと言うと目的地は大仁多高校の体育館。バスケット部が使用しているその場所でまさに朝練が行われようとしている。強制ではないものの、暗黙の了解として1軍選手は全員が参加しているものだ。

「ちわす！」

「おう、来たか白瀧」

「おはよ。早かったな」

「あ、小林さん、山本さんちわす。お二人も早いですね」

体育館へと入ると、すぐ近くで小林と山本が体を慣らしていた。

練習時間である7時にはまだ十分ほど余裕があるのだが、最高学年であり、スタメンである二人は試合明けにも関わらずすでに準備をしていたのだ。さすがは主将、副主将といったところだろう。

「まあな。試合明けとは言え、体力が余っていたから少しでも動こうと思っただ」

「何せ試合ではお前達のおかげで出番が思ったよりもなかったからな」

「……あー、すみません」

「冗談だつての。この調子で県大会も頼むぜ」

挨拶を済ませ、軽い冗談を交わすと白瀧は会釈してその場を後にする。

すると神崎、西村、本田、の三人が体を動かしている姿が目に入った。

「おはよ。皆も早いな」

「おう、要。おはよう」

「白瀧さん、お疲れ様です」

「……お前も、今日も早いな」

「まあな。少しでも体を動かしたいし」

三人ともやる気の方は十分のようだ。

矢坂黎明戦では神崎達は第1Qのみの出場だけで後は応援だけだったために、不満も少しはあったのかもしれない。

もつとも白瀧も最初の十分と終盤に少し出たくらいだったために、彼らと疲労はさほど変わらないのだが。

「おや？ ……皆さん早いですね」

「藤代監督、おはようございます」

「ええ、おはようございます。皆さん準備は出来ているようですね」

白瀧たちが他愛もない言葉を交わしていると、藤代も体育館へ現れた。

選手達が各々挨拶し、それに答えながら藤代は一人一人に視線を向けていく。

そして彼らの状態を確認し、満足げに頷いた。

「それでは少し早いです、来ているメンバーからはじめましょうか。

……小林さん、お願いします」

「わかりました。よし、それじゃあ全員集合！」

藤代が小林に声をかけると、小林はその意図を理解して声を張る。

その声の元に、白瀧達はもちろん、用具室で準備をしていた中澤達や丁度今来たメンバーも集まった。

「大仁多——」

「ファイー！」

『オオツ!!』

その声を合図として一気に走り出す。

白瀧や山本、西村をはじめとしたスピードに自信のあるメンバーがやはり軽快に動いている。

そんな姿を藤代は壇上より見つめていた。

「……やはり、皆さん疲れはないようですね」

一通り目を通すが動きが悪い選手は見当たらない。

県大会やインターハイといった大きな大会では試合の連続となるため、この程度で音を上げてもらっても困るのだが。

近づく県大会に向けて十分な仕上がりを見せる彼らを見て納得の表情を浮かべると、いつも通りの動きを見せてくれる選手達に応えるように、藤代も指示を次々と飛ばしていく。

大仁多高校の朝練は7時から8時までの約1時間。

最初にフットワークを行い汗を流すと、残りは個人練習がメインである。

個人練習に含まれるのはシューティング、ドリブル練習、ワンオンワン一対一、などなど。各々のスキルをさらに高めるように汗を流す。

橙乃と東雲はこの間にドリンクを用意し、いつもの場所へと設置する。

朝から体育館にはバツシユのスキル音とボールがネットをくぐる音が響き、部員達の熱気と活気に溢れていた。

朝練を終えると、バスケット部員も他の生徒同様に学生の本分へと戻る。

全国区の部活であろうとも決して勉強を怠つてよいというわけはない。いや、むしろ大仁多の校風を考えればそれを考えることさえ許されないのかもしれない。

「……っぐー。あー、やっぱり少し体が痛いな」

勇は廊下を歩きながら腕を伸ばし、疲労をやわらげている。

朝練がそれほど厳しいものではなかったものの、やはり早朝から運動している分、疲れもあるのだろう。授業に影響が出なければよいのだが。

「ま、それでもしばらくは午後練はマシになると思うぞ。最近は県予選に向けて午後練がハードだったからさ」

「それもそうだな。県大会まではもう少し期間があるし、今のうちに体力もつけておかねーとな……」

「予選は一試合しかなかったからね。出番も増えるだろうから、僕ももつと鍛えないと」

「午後の練習の負担が少し減る分、自主練の時間も増えるだろう。それを感じてか勇も明も次の試合に向けて課題の克服へと意識を向けている。」

特に明の場合は矢坂黎明戦が終えた後、吹っ切れたように清々しい表情をしている。やはり過去から脱却できたことが良い方向に働いてくれたようだ。これなら県大会でも大丈夫だろう。

「俺としては授業もそろそろ本格化してきそうなんで嫌ですけどね」「……確かにそれはあるな。数学とかも完全に高校の範囲になってきやがったし」

「勉強も気を抜くなよ。後で泣くことになるのは自分だ」

「ははは。……あー、それじゃ皆さん。また部活で」

苦手な勉強に対して苦言を放つ西村と本田を応援し、クラスの前で二人と別れた。

まだテストもしばらく先だが……今度西村には理解の度合いを確かめたほうがよさそうだ。

「おはよう」

まあそれは後の話。

二人と別れた後、俺達は扉を開けて教室へと入る。

「——おっ！ 来たぜバスケ部！」

「……うん？」

「どうした要？」

「いや、よくはわからないが……」

挨拶をして教室へと入ると、突如教室内にすでにいたクラスメートの視線がこちらへと集まり始める。

勇の問いかけに上手く答えられず、呆然としていると次々と集団が歩み寄ってきた。

「聞いたぜ、県大会出場。お前らも出たんだろ？」

「あ、ああ」

「やっぱり！ あー、本当だったんだ。見たかったよ」

「一年生だけでも試合に出ていたって聞いたけど、本当!？」

「……なんで、皆知っているんだろ？」

「おそらく、原因はこれだな」

突然の質問に困惑する勇と明。

ふと視線を横に向けるとある紙を目に入り、俺はその紙を手に取り、

二人もその紙を覗き込む。今日出たばかりの学校新聞、その一面にバスケ部の結果が記載されており、さらに写真——明が決めた、試合最後のダンクが張られていた。

「……これなら皆騒ぐだろうな」

「確かに。特に明のことはな。俺ももつと試合に出てれば……」

勇が羨ましがる気持ちもわかる。

ダンクと言えばバスケの花形だ。それを記事にしたとなれば、皆がこうなることも理解できる。

クラスメートの多くはさらに明へと集中する。それを見て俺と勇は一言告げて自分の席へと向かった。

明から助けを求める声が聞こえた気がするが、きつと気のせいだろう。無駄なく朝の授業の準備をする。勇も準備を済ませ、俺の机へとやってきた。

「明も一躍人気者だな」

「ああ。元々性格はよかったから、活躍の場面をみたら尚更だ」

今まではあの大きく、太い体格のせいで逆に怖がられることもあった明だが、こうなればクラスにもより深く馴染むだろう。

耳を澄ませば、他のグループでもバスケ部のことを話しているところもあることがわかる。新聞の効果が大きかったようだ。

「バスケ部としては、話題になって嬉しい限りなただけだな。

でも、そんなに話題になることか？ 大仁多だつて全国常連の強豪校なんだから、県大会出場なんて驚くほどのことではないだろう？」

「……いや、おそらく皆がここまで話が盛り上がっているのは、そういうことではないと思うぞ」

たしかに強豪校ならばこの程度のことでは話題になることはない。

しかし、今回はその試合の内容からここまで話題になっているのだと俺は思う。

「お前の言うとおりに、大仁多はIHにも毎年出場するほどの常勝校。その常勝校で一年生のうちから試合に出るなんて、たとえ実力の世界だとしても普通に考えたらありえないことだ。

それにも関わらずその高校で俺と明、そして勇と同じクラスから三人も試合に出たとなれば、騒ぎにもなるだろ」

「ああ、なるほど」

いくら大仁多のバスケット部が強いということは知っていても、部活が関係ない者達はそれほど興味も示さないことだろう。

だが身近な者達はその試合に出たということならば話題になってもおかしくはない。それが三人もいればなおさらだ。

「ま、今回はあの写真のせいで明に集中したようだがな」

「ちつ。俺らの中で一人だけあんな写真のりやがって。……別にいいし。何も人氣が欲しくて試合に出たわけじゃないし。なー、要」

「そういうことにしておくよ」

強がりだということは明白だが、ここは勇の顔を立てておこう。むしろこれを糧にしてくればそれで良い。

「……あの一、会話の所悪いけど、白瀧君」

「ん？ なんだい？」

勇と話していると、女子生徒二人が声をかけてきた。手にはメモ帳のようなものとシャーペンを持っている。

とりあえず用件を聞いてみると、彼女達はオドオドしながらも尋ねてきた。

「私新聞部に入っているんだけど、この前の試合について白瀧君にインタビューしたいの」

「一年生でスタメン入りした、監督のお気に入り選手ってことだね」

「……へ？」

「ふあっ!？」

突然のお誘いに二人して驚愕した。

まあ確かに推薦で入ったので監督のお気に入りという表現も……間違っではない、のか？

「別に俺は構わないけど……」

「要、お前もか。裏切り者がこんな間近にいたのか！」

先を濁して視線を彼女達から勇へと向けると……恨みの視線で俺を睨み付けていた。

間違いなく嫉妬のものだ。やはり勇も目立ちたいという意識はあったのだろう。なんというか、哀れだ。

「勇……」

「いいよ！俺のことは気にせず行ってこいよ要！知ってたよ、どうせお前も同じだってさ！」

……そう言う彼の瞳に、わずかに雫のようなものが溜まっていたのは見なかったことにした。それも優しさだと俺は思う。

ここにはこれ以上話が進まない。仕方なく、俺は二人にOKと返答して、その場から離れることにした。

「やっぱり『キセキの世代』は個人が優先か。そうだよな」

後ろで勇が呟いたのが耳に入った。だから俺は違うと言っただろうに！

彼女たちもその雰囲気を感じ取ったのか、少し気まずそうに話を振る。

「えっと、わざわざありがとうね」

「でも、よかったの？ 神崎君が……」

「ああ。……その、このインタビューについて俺からも条件、というか頼みがあるんだけど。……いいかな？」

「なに？ 受けてもらうんだから、私達にできることなら」

「細かい編集とかも、先輩達に言えば大丈夫だから何でも言って」

「それじゃあ……」

了承してくれた二人に、俺は一つのことを提案した。

それを聞き終えると二人は顔を見合わせる。

「別に構わないけど……それで白瀧君は良いの？」

「ああ。では、こちらも話を通したいから、また後で大丈夫か？」

「うん。なら昼休みにどう？」

「それで頼む。それじゃあ」

二人にお願いし、俺はその場を後にする。

席に戻ると、やはり勇がそこで黄昏れていた。よほどこたえたようだ。

「おい、元気出せよ勇」

「どうした友達見捨てた白瀧君。目立ちたがりの君に励まされても何も感じないけど」

「ちよつと待て。お前何を勘違いをしている」

いつの間にか完全に気分を害していた。

視線をあわせようとさえせず、ただひたすら苛立ちを放出している勇。

折角話をつけてきたというのに、これでは全然話ができないではないか。

「何のことだ？ 白瀧君が一人で目立っても俺別に何も感じないし？」

バスケはチームプレイだから、個人で目立とうとも思わないし？」

「……そうか。目立ちたくないなら仕方がない。折角皆に名を示す機会だが、今回の用件は勇抜きでやるか」

「ごめんなさい俺が調子こいてました。本気で謝るので、その話というものを聞かせてください」

あくまで引き下がるそぶりを見せない勇であったが、俺が依頼の話をした途端、今までの態度が嘘のように頭を下げた。

最初からそうすればよかったのに。というか勇もやはり目立ちたいという思いはあったんだな。

「今新聞部の彼女達と話をしてきた。インタビューを受ける代わりに一つ条件をつけてな」

「ほうほう。それで？」

「インタビューは構わないが、折角だから一軍の一年生五人、全員でやって欲しいってな。」

今年は珍しく五人もベンチ入りしている、貴重な学年だからな。向こうも快くOKしてくれたよ」

「……要」

俺の話を聞き終わると、勇は頭を下げ、俺の両の肩に手を置いた。心なしか、体が震えているのがわかる。どれだけ単純なんだろう

か、この男。

「信じてた。要が俺を見捨てるわけがないって最初から信じてた。

さすが要、頼れるのはお前しかいない。これから一生ついていく」
「うわー。なに、この熱い手のひら返し。調子がいいやつ。こういうのマジうぜー」

棒読みでしか言葉を発せられない俺は間違っていない。それほど
の勇の変貌ぶりであった。

その日も無事に全ての授業を終えると、再びバスケット部は活動に移
る。

大仁多高校の午後の練習は基礎練習とポジション別の練習、本番を
意識した実戦形式の練習が多い。

さらに細かく言えば様々な制限をつけた練習が多く、オール・ハ
ーフの5対5、2メンや3メン以外にはドリブルを禁止した3対3、速
攻時を意識した2対3アウトナンバーといったものがあげられる。

以前までは試合前ということでナンバープレイやプレスといった
練習もあったのだが、今は県予選を終えたばかりなため、次の県大会
までは期間があるために今日の練習では組みこめられてはいない。

しかしそれでも一軍の練習は所属しているメンバーの実力が桁違
いということもあり、その練習密度も過酷なものであった。

「よっしー。それでは今日の練習はこれで終了とする！ 解散！」

『ありがとうございます！』

小林さんの合図をもってその日の部活動は終了となる。

しかしその後は当然のように自習練習の時間となり、一軍メンバー
——特にベンチ入りしている選手は率先して練習に励んでいる。

「山本先輩！ すみません、今日もいいですか？」

「おう、神崎。やるか？」

「はい、(っ)指導よろしくお願ひしますー！」

たとえばコートの一隅。

同ポジションである大仁多の二人のシューター、神崎が先輩にあたる山本に声をかけて合同練習を行っている。

二人がやろうとしていることは、神崎のドライブの練習であった。朝練の時もやっていたことである。

神崎はスリーこそベンチ入りできるほどの実力者だが、ドライブの技術に関してはまだまだスターターに名を連ねるには厳しい面がある。

しかしこれから先、より高いレベルで戦っていくにあたり、ドライブは必要不可欠。味方のスクリーンばかりに頼るわけにはいかない。そこで神崎が自身よりもドライブ技術が高く、同じポジションである山本に頼み込んだのだ。

山本はスラッシュャータイプのシューティングガード。指導を頼む相手として、これほど適切な人物はいなかった。

「踏み込みが浅い！ もっと反応早くしろ！」

「はいー」

神崎の切り替えしに難なく対応し、その上で指示を飛ばしていく山本。

それに応えるように神崎もボールをコントロールしながら、巧みにゴールを狙っていく。

それを何度も何度も繰り返す。

自分が納得いくまで神崎は何度も山本を相手に切り込んでいった。

「……今日はコレくらいいいだろ。お前もこの後シューティングやるんだろ？」

「はい。やっぱり毎日やらないと感覚鈍ってしまいそうですし。……ありがたいとございました」

「気にすんな。俺でよければいつでも相手をしてやるよ」

山本はボールが大量に入った籠を用意し、シューティングの準備をする。

そんな先輩を神崎はタオルで汗を拭きながら、じっと見つめていた。

「うん？ どうした、まだ何か用事あるか？」

「いえ。……山本先輩、なんで俺にそこまでしてくれるんすか？」

「へ？　なんでって、なんで？」

「いや、俺達だってポジション争いをしている間じゃないですか。それなのにここまで練習にも付き合ってもらって、申し訳ないというか……」

「なんだ。そんなことか。これでも副主将なんだから、これくらい当然だ」

神崎の問いに、呆気なく山本は答えた。

気楽で親しげな性格だが、やはり立场上後輩に対して思っていることはあるのだろう。

「それに、さ」

「え？　他にも何かあるんですか？」

「ほら。俺らが去年、WCで負けたのは知っているだろう？」

「……確か、秀徳に負けてベスト16でしたっけ？」

「ああ、その通りだ」

懐かしむように山本は言葉を紡ぐ。

神崎も余計な茶々は入れずに、その先を促してじっと待った。

「大仁多も全国の常連とは言え、三年生が抜けた途端に弱体化した。

特に俺らの代は小林しか全国でも有数なプレイヤーがいなかったから。……あいつには本当に申し訳ないと思ったんだ」

たしかに、大仁多高校は栃木では最強と謳われている。

しかし全国でも通じるかと言えば、必ずしもそうというわけではない。

特に今の大仁多は司令塔・小林の存在があつてこそのものであつた。それゆえに山本達も自身の不甲斐なさを感じ取っている点があつた。

「だからこそ、小林が主将である今年は、絶対にあいつを優勝させたいと思つた。

俺が手を貸せるのは夏までだから、少しでも今のうちにやれることはやっておきたいんだ」

「え……夏までって、山本さん、冬は出場しないんですか!？」

思いもよらぬ言葉に、神崎は驚愕した。

たしかに去年の三年生は夏で引退したと聞いているものの、山本達まで引退してしまうとは考えてはいなかったのか、動揺は隠し切れなかった。

「こればかりはどうしようもない。大仁多の学校方針は知っているだろう?」

「……『文武両道』、ですか?」

「ああ、そうだ。冬に参加できるのは大学の推薦が決まっている者のみ。それ以外のメンバーは受験のために引退だ。」

「だから今年の三年生は……小林が残るくらいだろうぜ」

「バスケットを続けたいという意思がないわけではない。しかしそれは学校側から許されないこと。」

「三年生の中で全国区の実力を持ち、唯一大学から話をかけられた小林以外は……夏で終わりとなる。つまり……」

「だからもしも負ければ……その試合が俺達の引退試合だ」

「そんな……」

「負けた瞬間、山本達の高校でのバスケットは終了となる。」

「神崎はそれを理解して思わず視線を逸らしてしまう。」

「まだ神崎達がこの部活に入ってから日は浅い。それなのにもう共に戦えなくなってしまうのかと、悔やむ言葉ばかりが浮かんできた。」

「そんな暗い顔すんなよ。試合も終わってないのにそんな顔するな!」

「あつ……」

「その心情を察し、山本は神崎の頭に手を置き、安心させるように声をかけた。」

「俺だつてもっとバスケットがしたい。だからお前も俺達と戦いたいなら、もっと上達して助けてくれよ。」

「まだ夏はずっと続くんだ。……その最後の日まで、ずっと俺達がいられるように」

「……はいー」

「そうだ。夏は負けるまで続く。それならば最後まで勝ち続けられ」

いい話だ。

神崎はようやく顔を上げて笑みを浮かべる。それを見て、山本もいつものようにニツと笑顔を見せた。

「よっし。それじゃあ乗り気になったところで、早速シューティングいくか！ 今日軽く300本くらいにしようぜ」

「今からですか!?!」

「おいおい、『助けてくれ』って頼みに頼いてくれたろ？ だったら別に良いじゃねえか」

「——ああもう！ わかりましたよ！ それじゃあ早速いきましようか！」

そこまで言われてしまつては神崎も引き下がれない。

山本が早速一本目を決める中、神崎も急いでボールを取りに行くために走り出した。

疲労もあり、重い話もあったのだが、自然と足は軽く感じた。

「あ、ちなみに早く終わった方にジューズおごるって勝負な！」

「冗談ですよね!?! 山本さんが先に始めんだから、それ冗談ですよね!?!」

このように軽口を叩く山本に講義をする神崎だが、この時間がずつと続いて欲しいと思った。もつと一緒に競い合いたいと思った。

——やはり、山本さんは何時でも面白い、頼りになる。

小林のリーダーシップとはまた違う頼もしさを感じ取った神崎だった。

「よっし四本目！」

「待つてくださいい！ 俺今からはじめるんですから!!」

——それでも、やっぱり少しは手加減はして欲しい。神崎はそう感じざるをえなかった。

様々な思いを胸に、スリーポイントラインの外からボールをリリースする。二人が放ったボールは長く、綺麗な弧を描き、リングの中心を貫いた。

第二十二話 敵は己の心にある

神崎達が自主練習に励んでいる一方、大仁多のエースとなりつつある白瀧の姿はコートにはなかった。

コートにいないならばすでに帰宅してしまったのだろうか、という疑問が浮かぶが、決してそういうわけではない。

場所はバスケットコートから移り、トレーニングルームへ。

「7……8、……つ、9……10!」

「はい、そこまで。休憩としましょうか」

「ううっ……」

苦しそうにカウントをすると同時に、白瀧は腕を動かす。

うつぶせの状態で横になり、そこからひじを立てて上体を起こす。そして数字を数えると同時にひじを曲げて、一時停止。そこから再び元の体勢まで戻す。つまり腕立て伏せである。

10回ならば、鍛えている者なら練習後でもそれほど負担に感じるものではない。

それなのに、なぜスタミナに自慢のある白瀧が、藤代の休憩の合図と殆ど同時に力尽きたのかと言うと……

「だ、大丈夫白瀧君? ……はい、ドリンクとタオル」

「あり、がとう。橙乃」

……その背中にマネージャーである橙乃を乗せて腕立て伏せをしていたからである。

白瀧はなんとか腕を伸ばし、橙乃よりドリンクとタオルを受け取り、体力の回復に努めた。

「はい、圭介君も」

「ああ。葵もありがとうな」

その隣では小林も同じ状況ではあったとはいえ、白瀧と比べると上半身は鍛えてあるのかまだ余裕があるように見える。表情に余裕を残し、東雲よりドリンクを受け取った。

女性とは言え、人が背中に乗るとなると想像以上の負担となる。

ちなみに橙乃の体重が『放送規制』キロ、東雲の体重が『放送規制』

キロである。……女性の体重を気にするなんて最低だ。知りたがるなんて最悪だ。

「重くなかった？ 平気？」

「大丈夫、全然軽いよ。橙乃は細かいし、丁度良い感じだよ」

「あ、ありがとうございます……」

倒れこむ白瀧を心配し、覗き込むように語り掛ける橙乃。

そんな彼女の不安を一蹴するように、すぐさま起き上がり、腕を振り回して大丈夫とジエスチャーを送る。

あくまで女性に気を配ることを忘れないあたり、さすが白瀧と言ったところだろうか。

(……言えない。実際、2セット目を越えたあたりからすでに腕が限界を迎えていたなんて絶対に言えない……！)

ポーカーフエイスを崩さず、相手に心情を悟らせないところも含めて、白瀧らしいと言えるだろう。

「ご苦労様です。あと一分休憩してもう一セット……と思ったのですが、今日はここまでにしておきましょう」

「……了解です」

「ありがとうございます、藤代監督」

4セット目を終了して5セット目に突入、と移ろうとしたところで藤代は止めた。二人の限界を読み取ったのだろう。

白瀧と小林の筋力トレーニングは県予選の1週間前より行われていたことだ。二人ともポジション上パワー勝負は少ないものの、オールラウンダーとして活躍が期待される選手である。それゆえ藤代が自ら指導を行っていた。

「……ところで話は変わりますが。二人とも、私が筋トレをさせている理由はわかっていますか？」

「え？ 理由ですか？」

「俺達がある程度バスケスタイルが身についているから、というわけではないのですか？」

「小林さんの言うことも間違っていない。ですが、もっと詳しく言えば、あなた達二人が、オールラウンドプレイヤーだからです」

突然の問いに小林がとう答える。

それが正解ではなかったのだろうか、藤代は問いを終えると立ち上がり、二人を見つめながら語り始めた。

「ここ数日、私が鍛えてきたのは主に上半身。特に腕と胸の筋肉です。シュート・パス・ドリブルといった基礎動作は勿論、ハンズアップやボールの取り合い、さらにはポストプレイのために鍛えさせました。」

「……私は今年、あなた達二人を中心とした戦術の構成を考えています。時にはお二人にもインサイドを主体に動いてもらうかもしれませんが。そのためです」

「なっ……!?!」

「藤代監督、圭介君を中心にということはわかりますが、しかし白瀧君までインサイドに組み込むのですか?」

「ええ。白瀧さんについてはシュートに限った話かもしれませんが……これは白瀧さん自身のためでもある」

東雲の問いかけにも動じず、藤代は淡々と説明を続ける。

白瀧は外からでも中でも勝負を仕掛けるスコアラーだが、パワーはそれほどではない。特に長身プレイヤーがブロックに跳んだ際は、今までもかわすかパスの二択であり、無理やり押し込むというパターンは少なかった。

そんな彼にまでパワフルなプレーを求めるのは、かえって逆効果ではないのかという疑問が浮かんだが……藤代はそうは考えていなかった。

「白瀧さん。以前より一つ気になっていたのですが……あなた、チャンスならいくらでもあったはずなのに、なぜダンクシュートをしないのですか?」

「え……?」

「ダンクはできるものにとってはレイアップ並に確率が高く、一度決めるだけでも相手には多大な影響を与える。それなのに、なぜあなたはやろうとしない?」

「ど、どういふことですか監督? その言い方はまるで……」

「どうですか、白瀧さん？」

思わぬ問いに場が硬直する。

橙乃がどうか藤代にその言葉の意味を確かめるが、藤代はただ白瀧を見つめ、返答を促すばかりで中々答ええない。

「……返答はなし、ですか。ならば皆さんにもわかるよう試しにやってみたほうがよさそうですね。皆さん、一度コートに戻りましょう」
このままでは話が進展しないと踏んだのか、藤代は四人を連れてコートへと戻る。

練習終了から時間が経過しているとはいえ、まだ一軍メンバーは残っていた。その中の一角、山本と神崎がシューティングを行っていたエリアへと藤代が先導し、向かっていく。

「お疲れ様です。山本さん、神崎さん。お二人とも、少々付き合ってもらってもよろしいでしょうか？」

「あ、藤代監督！ わかりました」

「仕方がないか。神崎、この勝負はお預けな」

「あれ本気だったんですか!？」

何か勝負をしていたのだろうか、二人は愚痴をこぼしながらも素直にシューティングを止め、ボールを片付けると藤代の元へと集まる。それを確認し、藤代はこれからしたいことを説明し始めた。

「山本さんと神崎さんはディフェンス役をお願いします。小林さんと白瀧さん、二人がオフフェンス役。」

山本さん達とはかく小林さん達にシュートを決めさせないよう
に、そして白瀧さんは……レイアップシュート、ジャンプシュート以外で決めてください。小林さんはシュート禁止です」

『……は?』

その説明に全員が呆然とした。誰が聞いても同じ反応をしたことだろう。それほど今の藤代の話は衝撃があった。

白瀧が得点を決める、それは別に構わない。しかしその方法としてレイアップシュート、ジャンプシュートを封じるとなると、もはや手は限られている。

「えつと……フックはありますか？」

「ああ、フックシュートもなしです」

「ですよー。なんだかわかってました」

自分で聞いておきながら、なぜか否定の返事を納得してしまう白瀧。

この条件に加えてフックシュートもなしとなると……もはや打つ手はダンクシュートくらいしかない。それは白瀧もわかっていた。

「ではわかったところではじめましょうか。小林さん、お願いします」

「え!? 本当にやるんですか!?!」

開始の合図をする藤代。戸惑いながらも神崎と山本もディフェンスについた。

小林はドリブルのペースを変えながら、白瀧の動きを見ている。

(先ほどの質問とそして今回の条件。藤代監督は明らかに白瀧のダンクを引き出そうとしている。

しかし、今まであいつがダンクを決める姿など見たことがなかった。本当にできるのか? ……いや、駄目もとてもやるしかない)

不安も浮かんだが、それは今考えていても仕方がない。

小林は覚悟を決めると突破力を生かし、ドライブを仕掛ける。

反応され、山本を抜き去ることは構わなかったが、小林はそのままボールを空中へと放った。

「なっ!? (速い……というか、早い!)」

「白瀧、やれ!」

リリースするタイミングの早さに山本は驚いたが、少し短い。

リングに嫌われるのではないかと思われたが、小林の声に答えるように、白瀧が跳んだ。

「高い……このっ!」

「——うあああああ!!」

「ッ!? (なんだ、この力は……?)」

その跳躍力に戸惑いながらも、神崎もブロックに飛ぶ。

しかし白瀧は止まらず、神崎のブロックの上からゴールを狙う。

そして空中でボールを掴むと——勢いそのままに、ボールをゴールに叩き込んだ。

「……嘘」

「あ、アリウープ……？」

「やはり、ですか」

外で観戦していた橙乃と東雲は驚くことしかできなかったが、その横で藤代は納得したように、満足げに頷いた。

そのまま藤代はゆっくりとした足取りで着地した白瀧へと近づいていく。

「やはり白瀧さん、ダンクシュートを決めるだけの跳躍力はあったのですね」

「……やったことはないです。でも、たしかにリングを越えることはできました」

「ふむ。……となるとアリウープはできても、ダンク自体はまだわからない、ですか」

ダンクとアリウープでは、また求められるものが違う。

ダンクならばボールを持っていて分より筋力が必要となり、アリウープならばパスとの連携、空中での巧みな動作が必要となる。

ならば今日はアリウープが可能ということがわかっただけよしとしよう、と藤代はそれ以上のテストはやめた。

「しかし白瀧さん、あなたは今までアリウープを決めたことは一度もありませんでしたね。」

それはやれなかったのではなく、やらなかったのではないですか？」

「……」

「ダンクはバスケの花形です。しかしこのプレイは身体への負担が大きく、故障へ繋がることも多い。それは身体が小さければ小さいほど可能性が高くなる。」

……あなたは、まだ無意識に過去の大怪我を気にして、また怪我をすることを恐れて、自身のプレイに制限をつけている。違いますか？」

「たしかに、そうかもしれませぬね」

「要……」

いつもの覇気や明るさはどこかへと消えてしまったかのように、白瀧は小さな声でそう呟いた。それは藤代の問いを肯定しているようなものだった。

それを見て神崎も誠凛高校の見学の際に聞いた過去の怪我の話を思い出し、複雑な心境になる。

彼にも思い当たる点がなかったわけではない。先の矢坂黎明戦でも白瀧はローポストに陣取りをしていながら、積極的にポストプレイをしようとはしなかった。

むしろ味方のサポート、ならびに敵をかわしたりバウンドばかりに重心を置き、相手選手と接触する場面を比較的避けていたようにも思える。

「あなたのバスケスタイルは様々な技と知恵で敵を翻弄し、手札の多さで相手を悩ませる。そして一瞬の隙についてドライブで崩すというもの。」

だが、今のままでは宝の持ち腐れだ。全てを使おうとせず、生かされていけない。……あなたの体はすでに完治している。ここまで何も起こらなかったのだから、怪我が癖になっっているわけでもない。再発もないでしょう。全体を見ても、怪我をしないように十分鍛えこんである。

それでも相手選手との接触は、怪我は怖いですか？ その力は飾り物ですか、白瀧さん？」

「ッ……!!」

『飾り物』、そのようなわけがない。何のためにここまで鍛えてきたのか。

わかっているとしても白瀧は否定できなかった。心のどこかでまだ迷いがあったのかもしれない。

それが悔しくて……ただ拳を力強く握り締めた。

藤代は白瀧を一瞥すると彼に背を向けて歩き出した。

「無理にとは言いません。ですが、あなたのプレイは試合に大きく影響することがあるということ、忘れないで下さい。」

……白瀧さんと小林さん。お二人はもう上がってください。十分

なストレッチをすることをお願いします。……それと、橙乃さん」

「あ、はいー」

白瀧に念を押し、今日の筋トレを終えた2人に指示を飛ばすと橙乃を呼び寄せる。

橙乃は白瀧のことが気になったが、すぐに藤代の元へと歩み寄った。

「この後、白瀧さんのサポートをお願いします。彼が帰宅する時、一緒に帰って相談に乗ってあげてください」

「……へ？」

「彼のような性格は、大抵一人で背負い込む。だから、誰かが側にいてあげなければならぬ。彼が壊れる前に、できるだけ発散させておくほうが良いんですよ」

藤代はそう言うともう一度視線を白瀧へと向ける。

白瀧は神崎に話しかけられていたが、その表情は優れない。彼のよきな選手にはできるだけ早く立ち直ってもらいたいのだろう、期待が言葉にこめられていた。

「はい。……でも、私で良いんですか？」

「丁度お二人とも寮生活なので、途中まで道は同じじゃないですか。それにあなたはマネージャー、選手の白瀧君からは見えないうところも教えてあげられると、そう思ったのです。」

まあ、あなたが嫌なら無理はさせません。他の方をお願いしますが……」

「わ、わかりました。そうさせていただきますー！」

「ではお願いしますね」

了承をもらったことで安堵したのか、藤代は笑って手を振り、その場を後にした。

橙乃は少し不安が残ったものの……白瀧の暗い表情を見て、気持ち
は固まった。

ストレッチを済ませて硬くなった筋肉をほぐすと、その後は運動せずに帰宅の準備を済ませた。

勇や小林さんが声をかけてくれたが、果たして何を言っていたのかはよく覚えていない。

それほどまでに意識が散漫していた。……やはり、大丈夫だと思っ
ていても、無意識にどこかで逃げていたのかもしれない。そしてその
つけが今、回ってきたということだろう。

「……ふうっ」

息をこぼし、空を見上げると星が綺麗に光っていた。

……思えば俺が悩んだ時はいつもこうして空が瞬いていた気がす
る。そして中学の時はなぜか赤司や桃井さんと言った人が毎回のよ
うに声をかけてきた。だが、今はもうそういう相手はいない……

「白瀧君！」

「えっ？」

「いた！ 気がついたらいなくなっているから、探したよ」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

驚いて振り返ると橙乃が小走りながら呼びかけていた。

探し回っていたのだろうか、少し息が荒い。俺の目の前で立ち止ま
り、膝に手を置いて息を整えると、

「ね。……一緒に、帰ろう？」

そう俺に提案してきた。

その柔らかな笑みを見て、なぜか心が異常なまでに落ち着いて。

……気がついたら了承の返事を出していた。

橙乃と並んで帰る道のりはいつもと道筋そのものは変わらない。
しかしいつもよりも長く感じた。

今まで俺が橙乃と一緒に下校したことは一度もない。俺が選手と
して練習、橙乃がマネージャーとしての仕事もあつたし、変な噂を立
てられたら彼女に迷惑がかかるという可能性もあつて、一緒に帰ると
いうことはなかった。

初めて彼女と会った日に公園で遭遇したということはあつたもの
の、少し話しただけな上にすぐ別れてしまったからそれは数には入ら

ないだろう。

だから、これが橙乃と帰るのは初めてなのだが……なぜか、初めての感覚はしなかった。

「大丈夫、白瀧君？」

「大丈夫って、何が？」

「なんだかボーっとしているみたいだから。やっぱり藤代監督の言っていたこと、気にしてる？」

「……気にしていないと言えば嘘になるだろう」

橙乃の問いかけに正直に答える。きつと心配して一緒にいてくれるのだとわかったからだ。

逆に嘘を言ってもばれてしまうだろうし、余計な負担をかけてしまうだろう。だから正直に、思いのままを告げることにした。

「たしかに俺も怪我の可能性があるプレイは怖い。……またあの時のようにコートに立てないというのは、ある意味負けることと同様に辛い」

「……うん。バスケットはチームプレイだしね。皆と一緒に戦えないというのは、厳しいもの」

そう。それが第一の理由。藤代監督も言っていたことだ。

だが、それだけではない。俺は橙乃に相槌を打ちながら、さらに言葉を付け加えた。

「ああ。だが、それともう一つ。もう一つだけ……俺がポストプレイをしない理由があるんじゃないかと、思っていることがある」

「他にも理由が？」

「ああ。……負けると、心の底で敗北を認めてしまっていると思うんだ」

「……え？」

何を言っているのだと、橙乃は疑問に満ちた目で俺を見る。

ああ、俺だってそう思っているわけではない。だが……たしかにあの時感じたことを今も思っているのだとしたら。体が自然に逃げってしまうのだとしたらと、そういう思考に行き着いてしまう。

「俺は黄瀬に負けたということは知っているだろう？」

敗北の要因。それは技術ではない。……基本性能スベックの差だった」

「……つまり、身体能力？」

「ああそうだ。ゴール下というのは撃てば成功率は高いが、それはブロックされなければの話だ。」

だが俺には背丈もない、パワーもない。そんな俺がシュートを狙うというのは、自殺行為のようなものだ」

ダンクに限ればさらに厳しい。

先ほどはまだ練習であつたから決められたものの、試合本番で決めるとなると敵のブロックや他の選手の動きもあり、難易度は格段に上がる。

そのための他の技との組み合わせ、駆け引きがあり、可能になればより戦略の幅は広がるのだが……どうしても、それを実行に移そうとは思えない。

「だから、俺は勝負から逃げているのかもしれない。……自分が勝てるところで、勝っているところでしか勝負をしていないのではないかと。」

秀徳戦とてそうだった。緑間との戦い、あいつのスリーを封じるためにとにかく地上戦に持ち込み、あいつの体力を削り取った。……俺は、負けるのが怖かった」

臆病者と例えるのが正しいのだろう。

自分の長所を生かし、相手の長所を殺し、より可能性の高い勝負を挑む。そして自身が劣っている点は完全に捨てる。

……そうでなければ勝てないと、そう思っていたのだろうか。

「……別に、怖がる必要はないと思うけど」
「なに？」

だが、その俺の気持ちを一蹴するように橙乃が答えた。『怖がる必要はない』と。

「だって藤代監督も言ってたでしょ。『あなたのバスケスタイルは様々な技と知恵で敵を翻弄し、手札の多さで相手を悩ませる。そして一瞬の隙をドライブで崩すというもの』って。」

それに白瀧君も前に光月君にこう言ったよ。『手札は多い方が良

い。相手に『どの攻め方で来るかわからない』と考え込ませたならば、それだけで優位に立てるから』ってね。

勝てなくても、その手札があるだけでも相手は悩む。絶対に勝てる手札だけじゃなくても、それ以外を生かせれば、それで良いんじゃない？」

「……それ以外を生かす……」

「うん。だから勝てるところで勝負するのは間違っていないよ。元々チームはそういうものじゃない？」

それぞれ長所があるからポジションがあるわけだし、その長所を生かしてプレイするから試合が成り立つ。それと一緒だよ」

「しかしそれでは相手を……いや待て」

否定しようとして、その先の言葉は出てこなかった。それを言えば自分を否定することになるから。

たしかに、橙乃の言う通りである。

……ひよつとしたら、俺はいつの間にか完璧を求めていたのかもしれない。

黄瀬という何でも完璧以上にこなしてみせる天才を目にして、そうでなければ勝てないと思って。

だが元々俺は未完のものでも自分のものにしていたというのに、今はそんな簡単なささえも忘れていたのか。

「……悪い、橙乃」

「どうしたの？」

「俺、目が覚めたかもしれない。……ありがとう」

「え、えつと。……どういたしまして」

「ああ、ありがとう」

笑って礼を言うと、橙乃は気恥ずかしそうに視線を逸らした。

そんな彼女が少し可愛らしく感じ、もう一度礼を言う。……本当に目が覚めた気分だ。

「県大会は大丈夫だろうが、IHとなるとたしかに手札は多くないと困る。それまでにはなんとかしないと」

「……うん。きつと大丈夫だよ」

「そうだといいんだがな。ま、できる限りのことはするさ」

「ここまでよくしてくれる橙乃とて、チームの勝利を祈っている。

ならばできうる手段は全て費やして挑むだけだ。それが俺に出来る唯一の方法。」

「県大会か。でも、私少し気になることがあるんだよ」

「なんだい？ 栃木県に誰か知り合いの人でも入ったのか？」

「ううん。そうじゃなくて……すでに知り合いが上の学年にいるの」

「上の学年に？」

橙乃がどこか複雑な表情で語り始める。

「新入生ではなく、上の学年に知り合い、か。となると中学時代の先輩か？ 橙乃は中学時代にもマネージャーをしていたという話だし、そういうことがあってもおかしくはない。」

「うん。今は三年生。だからその人にとっても最後の年。……戦うことになると考えると、少し複雑かな」

「そっか。それは橙乃が悩むのも無理はない。だが、俺はそう言われても戦うとなると手加減はできないぞ？ 向かってくる相手には戦うことでしか語れないから」

「わかってるよ。だから、悔いの残らないよう全力で戦って欲しい。選手皆に」

「……了解した。その願いには全力で応えるよ」

「そう言う橙乃は今まで見たことのないような表情だった。」

「ここまで言われてしまっただけは、こちらも応えるしかない。期待には報いるだけだ。」

「だから俺もはつきりとそう告げた。返事を聞いた橙乃は嬉しそうに笑う。」

「ありがとう。……それと、白瀧君に個人的なお願いがあるんだけど……いい？」

「俺にできることならば何でも」

「橙乃には元気付けてもらったし、断る理由もない。だから静かに彼女のお願いを待つことにした。」

「ちよつと、一方的なお願いだから、言いにくいんだけど……」

相手に聞こえないよう、小声で橙乃へと呼びかけた。

「で、でも待って白瀧君。あの人は……」

「どうした。早くした方が良い。そうでないとどんな手を使ってくるかわからないぞ！」

やはり知り合いなのだろうか、どこか迷っているように言葉を濁す橙乃。

だがいつまでもこの状況が続くわけではないし、できるだけ急ぐよう先を促す。

「あの人は……私の、お兄ちゃんなんだけど」

すると、橙乃の口から信じられない言葉が飛び出した。

「……はい？」

思わず、その場に似合わぬ呆けた言葉が出てきた。

「おお！ 茜、やっと呼んでくれたか！ 何年ぶりだ、お前にそう呼んでもらうのは!!」

「……電話で一昨日呼んだばかりだよ。お兄ちゃん」

「電話と生の声で聞くのは全然違う！ 茜エネルギーが蓄えられる！」

「……意味がわからないよ」

俺を間に挟み、二人の声が飛び交う。橙乃と謎の男の間で会話が成り立つのが不思議なくらいだ。……いや、これは成り立っているとと言えるのか？

まあ、今はそんなことどうでもいい。それよりも大事なことがある。俺は恐る恐る橙乃に質問した。

この時、俺は後悔することになる。どうしてこの時こうも簡単に質問をしてしまったのかと。

「……ってか、ちよつと待ってくれ。橙乃に一つ質問だ。さつきおにいちちゃんって呼んだけど……この人、『おにい』という苗字なのか？」

「そんな苗字あるの？ そうじゃなくて、この人は私の兄、橙乃^{とうのゆうさく}勇作。さつき私が話した、県大会に出る選手よ」

「……え」

その結果、できれば一番聞きたくなかった答えを聞いてしまった。

— 盟和高校三年、
橙乃勇作^{とうのゆうさく}
ポジション：PF
189
cm

第二十三話 県大会、開幕

「こ、この人が……橙乃の、兄……？」

半信半疑の状態で言葉をどうにか繋ぎとめる。一瞬『兄』という単語を国語辞書で再検索しなければならぬと思ってしまった。

目の前の、橙乃に呼ばれただけで幸せな顔をしているこの男が橙乃が話していた、兄。……とてもではないが、信じられなかった。

確かに顔立ちや髪の色など、兄妹と言われても不思議ではないのだが。如何せん性格のせいではつきりと断言することができない。あれか？ 片方が駄目だともう片方がちゃんとした性格になるというシステムか？

「なあ橙乃。あいつに何か脅されているのか？ そうならばつきりと……」

「いや、兄妹というのは本当なんだけど」

「あれと？」

「うん、あれと」

「嘘、だろ……」

万が一のことを、可能性を考えてもう一度橙乃へと問いかけた。

対象を指差し今一度確認するが、しかし答えは変わらず。その事実を受け止めきれず、呆然としてしまった。

「おいおい、お前達何か俺に対して失礼なことを話してないか？」

「ううん。違うよお兄ちゃん」

「そうか。茜がそう言うのならまあ良い。さっきの件も許してやろう」

「ありがとうね」

「……どうも」

こちらのごそごそ話が気になったのか、空気と化していた男——橙乃の兄が語りかけてくる。いっそそのまま空気になってくれれば良かったのに。

だが、橙乃の受け答えに満足したのか表情を緩め、先ほどの橙乃と俺の接触も許してくれたようだ。……元々はお前がいきなり現れた

からだだろうが、と思ったがそれは口に出さない。

「えつと……それでお兄ちゃんは一体どうしてここに？」

「うむ。いい加減そろそろ茜の顔を見たいと思ってな。来てくれないからこつちから出向くことにしたんだ」

堂々と妹の質問に答える兄。……あと数週間待てなかったのかという問いは置いておこう。

県大会に出ると言うのだから、いくらでも機会はあると思うのだがな。

「何せ今年は、最愛の妹のいる高校と雌雄を決さなければならぬからな。どうしても、大会の前に会っておきたかった」

「……随分と大胆な発言ですね。大仁多に勝つつもりでいるんですか？」

「その通りだ。今年こそうちは大仁多を倒し、IHへと出場する」
「へえ……」

この言葉、無謀から来ているものではなさそうだ。

本気で大仁多を倒すつもりか。たしかに三年生ならば意気込みも違うのだろうが、大仁多を相手にここまで言い切るとは余程の自信があるのだろう。

「そこまで仰るとは。余程自信があるようですね。……ちなみにあなたはどこの高校なんですか？」

「茜から聞いていなかったのか？ まあ、先ほどの表情から考えれば聞いていないのだろうか」

「……」

「どうせすぐにわかることだし、構わないか。……盟和高校、だ」
「っ、盟和高校!？」

——盟和高校。その高校には聞き覚えがあった。

一昨年、そして去年と連続で栃木県予選で準優勝を果たし、今の栃木県では実質ナンバーツーの実力校だ。

それはすなわち大仁多高校には敵わなかったということをも現すのだが、ここまで安定して連続で勝ち残るのだから、それほどの実力があるということが窺える。

だからこそここまで発言できたのだろう。最後の年、3度目の正直でIHというその熱は計り知れない。

「ああ。……本当は茜も盟和に来て欲しかったのに！ どうして大仁多につ——!!」

「えっと、ごめんね。まさか推薦が受かるとは思ってたなくて」

突如橙乃のことを思い出して勇作さんは涙を流し始めた。

……橙乃って推薦だったのか。まあ寮生活だし不思議ではない。

「……ってかああ、だから橙乃は大仁多こに来たのか」

今さらだが橙乃が大仁多高校に入学した理由がわかった。

俺や勇のように部活の強豪だから、という理由でもないのにわざわざ東京の中学に通っていた彼女がなぜ栃木の大仁多高校に進学したのか。

それは兄の影響だったのだろう。

すぐに会えるところに頼りになる（本当の意味で頼りになるのかどうかはこの際置いておいて）家族が近くにいるならば、寮生活でもある程度安心できる。だから彼女は栃木の高校へと進学することを決意できたのだろう。

最も、彼女の発言から予測すると、大仁多に合格したということとは計算違いだったようだが。……大仁多は中々偏差値高いからな。西村だって一般受験は苦戦してたし。あれは本当に苦労した。

「それは本当に残念でしたね。最愛の妹と一緒にの学校に通えず——しかも、栃木最強の大仁多に持っていかれるなんて」

「……中々言うな、お前も。先ほどから気になっていたが、誰だ？ 去年まではいなかったはずだが……」

勇作さんの発言に負けじとこちらも挑発する。

戦いの前に舐められるようなことがあってはならない。強者ならばなおのこと。

だからこそ、相手の問いに強気で攻めることにした。

「大仁多高校一年、白瀧要です。今大会で最も警戒しなければならなくなるかと」

「白瀧、要？ ……ああ、そうか。お前があの男か」

「俺のことを知っていたんですか？」

俺の名前を聞いて考え込むとは、これは意外な反応だと思う。

三年生ならば中学時代も俺とは殆ど接する機会もなかったはずなのに、どうして知っているんだろう？

「当たり前だ。——お前か！俺から茜を奪ったのは！」

「……は？」

だが、俺の疑問は相手の怒号で瞬間的に真っ白になった。

すぐに意識が戻るが……何を言っているんだこいつ。俺が橙乃を奪っただと？

「とぼけるな！忘れもしない。俺はお前の魔の手から茜を解放する為にバスケットをはじめたのだから」

「忘れもしないって……あの。俺あなたと昔、会ったことありましたっけ？」

魔の手とか色々ツッコミどころが満載だが、全てには対処しきれないのでまず根本的なことを問いかける。

「俺とお前は初対面だ。だが、俺は確かに茜の口から『もう一度お前と会いたい』と聞いたんだ！」

「はっ？」

「……えッ!？」

……しかし、俺が期待するような言葉は返ってこなかった。

何か、色々と話がおかしい。

橙乃が会いたいと言っていた？ たしかに俺の行方を気になっていた、とは聞いたがそこまで……？

しかもそのためにバスケットをはじめたと言っているが、この人始めたの最近なのか？

とにかくわかったことは……言っていることがまったく、何一つとして理解ができない。とりあえず何か知っているであろう橙乃に聞いてみることにした。

「なあ、どういうことだ橙乃？俺、まったく話が読めないのだけど」

「お兄ちゃんが勘違いしているのかもしれない。私のことになる、あんな感じに周りが見えなくなっちゃうから。」

……今の状況も入れて、白瀧君のことと、他の人のことが入り混じっちゃったのかも。バスケットをはじめたのだって、小学生のころだよ」

「冤罪じゃないか。……なんでこんなことになった」

まったく思い当たる節がないのだが……いや、待てよ。

そういえば以前誠凛高校を訪れた際、橙乃から昔の話を聞いたことがあったな。たしか橙乃にバスケットを教えた相手のことを。

……ひよつとしてこの人、それを俺だと思っているのか？ その話題が出た時に俺に話したこととかとこんがらがって、誤って俺に怒りが……？

「ちなみに一つ聞きたい。お兄さんとの電話で俺のことを何か話したか？」

「うん、何度か話したよ。今年はすごい選手が入ったって」

「まあそういうことは話すか」

それくらいならまだ問題はないはずだ。敵校ということを考えるとか微妙なラインだが、そこまで厳しくはない。

橙乃とて性格が曲がっているわけではないのだから、変なことは言わないだろう。ならば一体どこで食い違いが出たんだ？

「後は……中学のこと、気になっていたことも聞けたとか」

「なるほど、なるほど」

「練習や試合が終わった後、よく体育館で体をまさぐりあっているって……」

「なるほど、なるほど……それだよ！ 120%そのせいだよ！」

思わず流してしまいそうだったが、今自然な流れで変な発言してたよこの子!？」

「白瀧君、いつも溜まっているせいで激しくしないと満足してくれないから……」

「溜まっているのは疲労のことだよね!? 頼むからマッサージをそんなややこしい表現で言葉にしないでくれるか!？」

決定した。今ここに決定した。

すべて橙乃の発言が悪かったと。なぜ『マッサージ』というカタカ

ナ5文字をそんな複雑な表現をするのか、俺には理解できない。

しかし原因は全てそれにあつたということが判明。やはり兄妹か、どこかで変な部分が出ちゃうものだね。

「私がお上に乗って、溜まったものを全て搾り取るように……」

「もういいから！ 乳酸を取る、と言いたいことはわかったから、それ以上喋るな！」

もう問題は理解できたために、これ以上問題発言が出ないうちに橙乃の口を閉ざさせる。

……まさか橙乃にこんな一面があつたとは。

早くどうにかしないと、と考えていると、突如後ろから——勇作さんの方から異常な威圧感を感じた。

「……貴様、俺を差し置いて茜といちやつくとは……」

「今のがそう見えたんですか？ えっと、お兄さんは何か勘違いしているようですが」

「お前などにお義兄さんと呼ばれる筋合いはない!!」

……どうして兄妹揃ってこう会話が面倒なのだろう。

弁論する余地さえ与えられず、一刀両断されてしまった。

この人、熱くなると周りが見えなくなるタイプか？ 一応覚えておこう。

「じゃあ、何て呼べば良いですか？」

「そうだな。……じゃあ、勇ちゃん先輩で」

「そこはフレンドリー!？」

「だって後輩が誰も呼んでくれないんだぞ？」

「……勇作先輩か、勇作さんでお願いします」

思わぬ親しげな呼び名の提案に、声を荒げるしかなかった。

そろそろこの人の性格がわからなくなってきたぞ。何だよこの人、面白いんだけど。そして誰か一人くらい呼んでやれよ。

「で、勇作さん。貴方が考えていることは全て誤解でして……」

「罪人は皆そうやって言い逃れをしようとする。俺は騙されん！ 何も聞かんぞ！」

「……いや、本当の話なんですけど……駄目だこりゃ」

「お兄ちゃん……もう」

現実から逃げ出すように、勇作さんは耳を塞ぎ、目を閉じ、感覚を遮断する。

……橙乃でさえさすがに呆れている。さすがの俺も『諦める』という感情が芽生えてきた。こんなこと初めてだ。

「とにかく！ 俺は大仁多を倒し、お前を倒し、茜の目を覚まさせる！ だから絶対に勝ち上がって来い！」

「あー、はいはい。わかりました、そちらも頑張ってください」

「茜もまたな。食事とかは大丈夫か？ 好き嫌いは駄目だぞ。何かあったら絶対に俺を呼べ。すぐに駆けつけるから」

「うん。バイバイ」

……なんだこの温度差は。

勇作さんは俺に散々言い捨て、橙乃に優しく語りかけ、去っていった。

というか、本当に橙乃に会いに來ただけだったのか。シスコンって恐ろしい。

「ごめんね、お兄ちゃんのせいで変な心配かけちゃって」

「いや構わないよ。少し疲れたけどね」

謝罪する橙乃には気にしないように答え、背伸びをして疲れを取る。

さすがに今回のような精神的な疲労はどうしようもない。

また勇作さんに会うということを考えると、さらに不安が募る。しばらくはあの人のことは思い出さないようにしましょう。

「そういえば、さつき何か俺に言おうとしていなかったか？」

「え？」

「ほら、勇作さんが現れた時。俺にお願いがあるとか……」

「あ、ああ。……えっと……」

先ほどのことを思い出し、途切れてしまった話を元に戻す。

勇作さんのせいでおかしくなってしまったが、橙乃もなにやら真剣な表情だったし、このまま終わりにするわけにもいかないだろう。

しかし橙乃は何か戸惑っているようで、中々口に出そうとしな

い。

「……ごめんね。やっぱり、大丈夫だよ」

「え？ 大丈夫って、良いのか？」

「うん。よく考えたら、お願いするようなことじゃない、って思えたから」

「……そっか。ならいいや」

そう言っただけで、橙乃は笑顔を見せた。

このように言われては俺の方からは何も言えなくなる。依頼者が大丈夫だと言ったのだから、これ以上話を持ち出すのはかえって嫌がられる。

だからそれ以上は何も聞かず、俺も頷いて返した。

「それじゃあ、今日はここで。相談に乗るはずだったのに、私の方こそ心配かけてごめんね」

「そんなことないよ。今日は本当に助かった。……寮の前まで送っていいこうか？」

「いいよ。そんなこととして、白瀧君が不審者扱いされたら嫌だもん」

「……それだけで不審者扱いになるのか？」

男子寮と女子寮の分岐路に差しかかったところで、橙乃が別れの言葉をかけた。

バスケのこと、相談に乗ってくれて助かったことは本当だ。夜も遅いし、その礼もかねて送っていいこうと思っただが……こう言われては。

よくはわからないが、橙乃に言われては無理には言えない。俺もおとなしく引き下がることにした。

「ふふっ。……ありがとう。また明日ね」

「ああ、また明日！」

最後に橙乃の笑顔を一瞥し、橙乃と別れた。

勇作さんとの話とはかく、橙乃のおかげでバスケスタイルについてはもう不安や悩みはない。あとはとにかく鍛えるだけだ。

また一つ、意志を再確認しながら俺は帰路についた。

一方、白瀧と別れた橙乃は少し暗い表情で歩いていた。

「はあつ。……お兄ちゃんのせいで、今日は最悪だよ」

息をこぼし、今はこの場にいらない兄へと愚痴を言う。

おかげで余計な疲労が残り、白瀧にこ心配をかけてしまった。……最も、久しぶりに会えて嬉しいという感情がなかったわけではない。「せめて白瀧君にお願いした後だったなら……ううん、違う。やっぱり言わなくて正解だった」

白瀧との会話を思い出して後悔する橙乃だったが、再考すると首を横に振り、自身の選んだ行動が正しかったのだと認識した。

「……やっぱり、駄目だよね。」

白瀧君を代わりとして見るだなんて、失礼だもん」

そう言つて橙乃は無理に笑顔を作る。

彼女の脳裏に浮かんだのは幼い日の記憶。

もはや顔も名前も思い出せない、それでも楽しかったと確信できる、大切な人との記憶だ。

それを橙乃は誰かに重ね合わせようとしていた。その人物と似ている、白瀧に……

「でも、お兄ちゃんとの試合が終わったらその時は……その時は……」

そこから先は、言葉にすることができなかった。

それから数日後。

練習の前に再び部員が集められた。招集をかけた本人である藤代監督は全員が集まったことを確認すると、東雲さんと橙乃を呼び、一枚の資料を手に話し始める。

「皆さん、今日集まっていたいただいた理由は他にもないです。——県大会の組み合わせが発表されました」

「今からプリントを配布しますので、一枚取ったら隣の方へと回して

ください」

藤代監督の指示を受けた東雲さんと橙乃が手にしていたプリントの山を部員へと渡す。

俺も一枚だけ受け取り、それを横へと流していった。

……トーナメント表の一番左上、Aブロックに『大仁多高校』という文字を見つcker。つまり第1シードということだ。

「大会初日、我々はシード権を持っているため二回戦から開始となり、一回戦の勝者と戦います。」

三回戦は大会二日目、それを終えたら一週間挟んで準決勝、そしてその翌日、最終日の決勝戦です」

つまり、合計4つの試合に勝利すればIHに出場できる。

当然ながら狙うのは優勝のみ。常勝校と呼ばれるうちがそう簡単に負けるわけにはいかない。

それを改めて警告するかのように藤代監督は今一度視線を厳しくし、部員へと呼びかけた。

「IH予選は順当に勝ち上がることが予想されますが、決して油断のないように。」

……特に準決勝、そして決勝に勝ちあがってくることを予想される三校には」

その言葉を受けて、俺は視線を大仁多以外にシードを得たトーナメント表の三つの角に陣取る高校を見る。

準決勝で当たるであろう常盤高校、そして逆ブロックの山吹高校、……そして盟和高校。

大仁多を含めたこの4校が今年の栃木県のIH代表校の有力候補である。昨年もこの4校が一つの代表校を巡って激戦が繰り広げられたと聞いた。結果は当然、大仁多高校の順当な勝利だったわけだが。

「昨年、栃木県ベスト5に選ばれたSG・柘さんを擁する常盤高校。

栃木の古豪であり、かつてはIH出場も経験したことがある山吹高校。」

そして昨年の準優勝校。小林さんに次いで栃木No.2PGと名

高い細川さんと、昨年の栃木ベスト5に選ばれた主将・橙乃勇作さんを擁する盟和高校」

……大仁多と常盤、さらに盟和と昨年の栃木ベスト5に選出された五人のうち、三人は今年も高校に残り、それぞれの高校の主将キャプテンとなっている。

それゆえに戦力は昨年よりも上がっているという可能性がある。特に盟和高校。近年徐々に実力をつけ、今年は過去のメンバーの中でも最強と噂されていると耳にした。

橙乃のお兄さんがどういうプレイスタイルかはまだ知らないが……どちらにせよ、警戒しておくことはない。マッチアップする可能性もあるからな。……主将ということには正直に驚いた。

「……うん？　　『橙乃』？　まさか、いや違うよな。きつと『東野』とかだろ」

「勇。お前が今一瞬考えたことはあってるぞ」
「え？」

「盟和高校の主将は橙乃のお兄さんだとさ」
「マジで!？」

監督が一人だけフルネームで呼んだことで疑問を感じたのだろう。

勇の問いに答えてやると、『信じられない』と言わんばかりに驚愕した。……まあ、普通の反応だな。

「……ああ、一応言っておきますと盟和の主将は橙乃さんの御兄妹です」

『なにっ!？』

俺達の会話が聞こえたのだろうか、藤代監督が橙乃勇作について捕捉した。

当然のことだが部員全員が驚いている。……俺もこの前会っていなかったら、きつと同じ反応していたのだろうな。

「あれ、でも何で要は知ってたんだ？　中学の時に会ってた？」

「それがな、この前たまたま本人と会って少し話をした」

「へえ。どんな人だった？」

「……変人？」

「何で疑問系!？」

何で、と問われても俺自身あの人のことを把握しきれていないためになんとも言えない。

それにあまり勇作さんのことを思い出したくないので、さらに問いかける勇を無視し、藤代監督へと視線を戻した。

一軍も二軍もない、とにかく実力のある者を使うと語る監督の姿にも油断や慢心は見られない。これは俺達もより一掃努力に励まなくては。

「——とにかく、我々に負けは許されません。何としても全てを勝ち抜く。

……今日より再び練習を一段と厳しさを増していきます。普段の三倍は走るようになる」と覚悟してください」

『げえっ!?!』

……お、俺達も、より一掃努力に……励まないと。うん。

藤代監督の激に皆が驚いている中、俺はきちんと意識を高く持つことを心に決めた。

——それから月日が流れた。

県予選から数週間がたち、俺達は市が運営している体育館へと来ている。

更衣室で最後の調整中。皆がそれぞれ体をほぐしたり、栄養を取ったり、集中力を高めたりと体を整えている。

俺も体を温めた後、ユニフォームと同じ臙脂色のレッグスリーブをつけ、バスケットボールを左右の手で行き来させる。

「——ふうっ」

やはり、バスケットボールを持っていると幾分か楽になる。

この感触が、この感覚がこれからの戦いを連想させて。……試合への意識をより高める。

「……さて、そろそろ時間ですか」

「はい。藤代監督」

「わかりました。では小林さん、お願いします」
「はい」

東雲さんに確認すると、藤代監督は主将・小林さんに語りかける。
小林さんもその意図を理解し、大きく頷くと即座に立ち上がり、部員全員へと向き合った。

「——つよし、行くぞ!!」

『おうっ!!』

小林さんの掛け声に答えるように、俺達も声を張り上げる。

そして主将の小林さん、副主将の山本さんに続くように一軍メンバーが廊下を進んでいく。

扉を開けると俺達の前の試合である女子の試合、そして応援席にいるチームメイトの姿が見えた。

そこには大仁多高校バスケット部のスローガンである、『百折不撓』と大きく縁取られた横断幕が会場に掲げられている。

——負けられない。チームメイトの姿と声援が、後押しとなって力が湧く。

「おお、ついに出てきたぞー!」

「燃えるような臍脂を身に纏う、栃木の常勝校——大仁多高校!!」

俺達の姿が目映ったのか、観客の歓声も上がった。

未だ遅しと登場を待ち望んでいたのだろうか、その数は少ないながらも声は大きい。

……まったく、まだ試合も始まっていないというのに。

しばらくの間、目の前の試合が終わるまで俺達は集中力を切らす事無く時間を待つ。

そして試合終了後——俺達の初戦を迎えた。

シユートタツチも問題ない。調整は完全と言えるだろう。

「——さて、今日は最初から全力で行ってもらいますよ」

藤代監督から選手へと声がかかる。

矢坂黎明戦とは違い、今日の試合は最初からベストメンバーだ。

ここまで誰もがそのスターターの座を譲ることのなかった——こ

の大仁多最強のメンバーで。

「頑張れよ、要！」

「俺達は精一杯声を出してきます」

「……おう、行つてくる」

勇と西村からの応援も受けて、俺はコートへと躍り出た。

……小林さん、山本さん、黒木さん。三人に続くように俺と明もセ
ンターラインへと走り、整列する。

「それではこれより、大仁多高校対沼南高校の試合を始めます！」

『よろしくお願ひします！』

コート中央に集まる十人の選手が始まりを宣言する。

ここで、ようやく俺達の県大会が始まるんだ。

「おい、明。今日はちゃんと調子大丈夫なんだろうな？」

「——問題ないよ。いつでもボールを回してくれ」

「よし。それなら頼りにさせてもらうか」

念のためにと、硬くなっていないかと明に声をかけたが……問題は
なさそうだ。

下手に気負っている様子はない。矢坂黎明戦で不安を一蹴できた
ようだ。これならいける。

「お前達、最初からガンガン攻めていくぞ」

「いつでもボールが回ってきてても大丈夫なよう、準備をしておけな」

「——ジャンプボールは、必ず制す」

『はい！』

先輩達三人の頼もしい言葉に俺達も力強く答える。

ジャンパーは黒木さん。相手のジャンパーにも負けていないほど
の長身だし、まず心配することはない。

「——試合開始!!」

「おう!!」

「ぬあっ！」

——そしてボールが宙へ浮かび、試合が始まった。

黒木さんがボールをタップした。ボールはそのまま狙い通り小林
さんの手に収まる。

「よしっ！」

「行くぞ、一気に攻めかかる！」

それを見て全員が走り出した。

沼南高校のメンバーがボールを奪うために詰め寄るが、その動きは散漫すぎる。

小林さんは一人をかわし、すぐさま山本さんへとパス。さらに山本さんはボールを受け取るや否や俺へとパスをさばいた。

俺もマークマンを左右に振り、爆発的な瞬発力を生かして相手を抜き去る。相手は速さに対応できず、立ち尽くすしかない。

「——ぐっ!!」

「先制点、もらった！」

そのまま俺は誰もいないゴールにレイアップを決める。

開始早々、十秒も経過しない間に大仁多高校の得点ボードに得点が刻まれた。

「……まずは二点。県大会初戦とはいえ、俺も暴れさせてもらいますよ！」

まだ県大会なんだ。こんなところで立ち止まっていたではキセキの世代に笑われる。

……だからこそ俺も力で示すでしょう。この戦い、一気に終わらせてやる！

第二十四話 波乱の結末

速いパス回しから白瀧のドリブル突破により、大仁多高校が幸先良く先制した。

沼南高校の選手がボールを拾い、試合が再開される。

センターの選手がスローイン。ボールを受け取り、ゲームを一から組み立てようとガードの選手へとパスをさばくが……そのパスは、臍脂色のユニフォームを着た敵——大仁多の副主将・山本により、叩き落とされる。

「パスコースが見え見えだぜ」

「馬鹿！ 不用意にパスを出すな!!」

それを見た監督が声を荒げるがもう遅い。

山本のステイール。転々とするボールを小林が確保すると、彼は白瀧へとノールックパスをさばく。

ローポストでボールを受けた白瀧は背中に敵選手がいることを体で、目で読み取った。

「——っ!!」

一瞬、左足を外側へと動かすそぶりだけを見せて制止。

すると右足を軸として、リングの方向目掛けて回転、ターンアラウンドシュートを狙う。

「撃たせるか!!」

センターの選手も加わり、二人の選手がブロックショットを狙って跳躍する。

しかし白瀧は伸ばした腕をたたみ、再び膝を曲げて——タイミングをずらして跳んだ。

その意図を理解して敵選手も空中で自分の失敗を悔やむように表情を歪める。

(フェイク——!!)

「——ぐっ!」

その際に白瀧と相手選手の体が衝突。

体が少し傾いている中、白瀧は手首のスナップだけでシュートを

放った。

『ピ・ピーツ!!』

それを見た審判の笛が鳴る。一瞬注目が集まるがしかしシュートは止まらない。

ボールは一度リングに弾かれ、その上をぐるぐる回り——ようやくネットをくぐった。

「ディフェンス、白5番! バasketカウント1スロー!!」

「おおおお! ナイス、白瀧! 連続得点!」

得点を決めた上での、フリースローをもぎ取った。

大仁多のベンチがよりムードを高めるようにと白瀧のプレイを褒め称える。

そんな中、監督である藤代だけはいつも通り落ち着いていて、しかし同時に驚愕していた。

「……突っ込んだ。白瀧さんがブロックをかわすのではなく、3点プレイを狙って一人で……」

それは白瀧の変化が見て取れたためだった。

白瀧は普段から無理な、強引なプレイは滅多にしない。敵選手のブロックはダブルクラッチでかわしたり、跳ぶ前にシュートを切り替えたり、あるいは味方にパスをさばくなど、今のようにブロックの上から強引にシュートを放つことはしなかった。

しかし今、白瀧は二人のブロックがあるにも関わらず、バスケットカウントを狙ってあえてフェイクを使った。

パスの方が安全に点を決められたらう。その点については不満がないわけではない。……しかしこのプレイは白瀧の変化を感じ取れる、決定的なものだった。

(だが、どうなっている? 今のは完璧にシュートの動きだった。それを途中で……?)

沼南の選手達は逆に困惑していた。

たしかに今の動きはシュートの流れであった。それにも関わらず、まるでフェイクへと移行するのが自然の流れであるかのように感じ取れたのだ。

「ワンショット！」

審判はそう言ってフリースローラインに立つ白瀧へとボールを手渡す。

白瀧はゆっくりと体の前でボールをつき、リズムを作る。二回、三回と繰り返し返して手に収める。

準備を整えるとフォームを整え、静かにボールを投じた。

ボールはそのままリングを通過。再びスコアボードに一点が追加される。

「よし！」

「ナイス、白瀧！」

フリースローも無事に決め、白瀧は3点プレイを完成させた。

小林とタツチをかわしてディフェンスに戻る。その間に顔も緊迫したものへと戻り、集中して相手を待ち構えた。

沼南ボール。ガード二人によるパス回しで試合を組み立てるが、大仁多のマンツーマンディフェンスに掴まり、前線へとパスを出せない。

「くそっ！」

スクリーンを使ってもヘルプが速い。

悔しさから焦りも生じた。マークを外せていない中、無理やりシュートを放つ。……しかしそのシュートはリングに弾かれた。

「リバウンド！」

「わかってる！」

白瀧の掛け声に力強く応えるのは光月。

ゴール下の沼南の選手二人を、光月はスクリーンアウトで封じ込めた。

背中を使って無理やり外へと追い出し、ポジションを確保。そのまま相手をボールに近づけることなく、ディフェンスリバウンドを制した。

（こいつ、俺達二人を同時に……！）

「小林さん！」

「よっし！ 行くぞ！」

その圧倒的なパワーに驚いている暇もない。

光月は小林へとパスをさばく。リバウンドを制しての速攻。

中央では小林、右では山本、左では白瀧が疾走する。

「速い！ 大仁多の怒涛の攻撃！」

会場もその姿に歓喜が湧いた。

展開の速い攻撃に、沼南はかろうじてガードの選手が一人戻れただけだ。一対三、完全にアウトナンバーである。

「白瀧！」

「つし、ナイスパス！」

小林は白瀧へとバウンドパス。

小林についていたマークは白瀧へとつく。

これで意識が自分に集中したことを把握すると、白瀧はシュートを撃つそぶりだけを見せ、再び小林へとボールを戻す。

(リターン！)

「うおおお！」

白瀧の動きに惑わされたガードが、その攻撃を止める術を持っていないはずもなかった。

掛け声と共に、小林は勢いよく跳ぶ。右腕にボールをもち、そのまま叩き込む。——ワンハンドダンクを決めた。

「——っ！」

「ナイスです。……ってか、小林さんダンクできたんですね。知りませんでした」

「まあ、普通はやらないからな。だが——チームが勢いづくならば、やってみせる」

そう言っつて小林は視線を敵選手へと向けた。

……今の一発が強く頭に残ったのだろうか、驚愕して表情が固まっている。

(大仁多) 7対0 (沼南)。まだ序盤とはいえ、連続で得点を決められた後に今の一撃は精神的に厳しいものがあつたのかもしれない。

「さあディフェンス一本！ 相手に油断など微塵も見せるな!!」

『おうっ!!』

だがそれでも小林は気を緩めることはない。
常勝・大仁多は些細な弱さとして見せるわけにはいかない。
さらにディフェンスを強固にさせ、果敢に指示を飛ばしていった。

——試合は終盤を迎えても、大仁多の勢いは衰えることを知らなかった。

「リバウンド！」

光月のシュートがリングに嫌われ、ボールが宙に浮かぶ。

両チームがそのボールを巡って跳ぶが……黒木がティップインで無理やりボールを押し込んだ。

「また決まった！ 大仁多の攻撃が止まらない！」

「くそっ!!」

徐々に大仁多がボールを持つ時間が、大仁多の攻撃の時間が長くなる。

それにつれて疲労が溜まり、集中力も乱れてくる。そして焦りから……ミスもどんどん増えていく。

「あつ、やばっ……い！」

沼南高校のファンブル。

すぐに取りこぼしたボールを追うが、それよりも先に白瀧がボールを確保した。

(こいつ、すでに試合終盤なのに……なんでまだこんなに走れる!?)

「山本さん！」

敵が自身のスタミナに驚愕していることも知らず、白瀧は間をおかずに山本へとパスをさばく。

山本はワンドリブルで横に大きくスライド。マークを引き剥がすと、ヘルプが着く前に素早くシュートを放つ。

(……入った！)

ゴール下にも頼もしい仲間がいる。だからこそ心配なくシュートを撃てた。

そして彼の確信通り、山本が放ったスリーポイントシュートは綺麗にネットを潜る。

『——試合終了!!』

「大仁多高校、二回戦も難なく突破!!」

そして試合は終わりを迎える。常勝校の磐石な勝利に、スタンドも歓声を上げて祝福した。

最終スコア、(大仁多) 225対21 (沼南)。

途中でベンチメンバーとの交代もあった。しかしそれでもスターター五人全員が二十得点以上を記録した。

さらに驚くべきは……フル出場した白瀧が驚異的なスコアをたたき出し、その名を再び知らしめたこと。

得点：57 リバウンド：1 アシスト：17 スティール：19
ブロックショット：2

もはや栃木県のNo. 1ルーキーと呼んでも誰も否定しないほどの活躍を、結果を残したのだ。

そして——大仁多高校の勝利を皮切りに、各会場で行われていた試合が次々と終了していった。

『試合終了——!!』

「山吹高校、磐石！やはり強い！」

第三シード、山吹高校。95対62で二回戦突破を決定する。

さらに場所を移し——第四シード、常盤高校の試合。

「くそっ……」

「お前達が負けたのはお前達が弱かったからではない。俺達が強かった、それだけだ」

『……試合、終了!』

悔しがる相手に常盤の主将——柊がそう言い放ち、試合は終わる。

最終スコア、103対69。100点ゲームでその日を終えた。

そして——第二シード、盟和高校の試合。

「……よっし！」

「やったな、勇作！」

「ああ、これで俺達の初戦は快勝！」

主将の橙乃と副主将の細川がハイタッチをかわす。

試合結果、126対54。危なげなく三回戦進出を決めた。

こうして各強豪校が三回戦進出を決めてその日を終える。

そして翌日——三回戦。これに勝てばベスト四、準決勝へと進める。

昨日よりも観客が集まるのは当然のことだろう。なにせ今日からは同じ会場で試合が行われる。——すなわち、勝ち残った全ての高校が会場に集結するのだから。

午前の部。山吹高校、ならびに盟和高校がそれぞれのブロックの勝者と試合を繰り広げていた。

勝ち残った大仁多高校のメンバーは、この二校の試合の偵察へと来ている。

二試合同時に行われている中、小林や山本をはじめとした上級生達は山吹高校の試合を、昨年盟和高校との試合を経験していない一年生達は盟和高校の試合を重心的に観察していた。

山吹高校はラン＆ガンの攻撃重視なスタイルでとことん攻めている。

リバウンド確保後も、すぐに近い選手へとパスをさばき、とことん走ってシュートまで持つていく。速い展開で試合をものにしていく。

「どう見る、小林？」

「……山吹のバスケスタイルはうちと似ているな。だが、特にはスコアラーと呼べる選手がいない。

チームオフエンスで攻める戦術。——戦うならば、とにかく相手のペースをみだすことが必要になる。そしてパスを機能させなくすることも、だな」

「となると戦うとするなら……白瀧がキーポイントになりますかね」
特に突出した選手はいないものの、その代わりチームとしての質が高い。それが小林が見た山吹高校の印象だった。

質問した山本も同じことを思ったのだろう、頷きながら試合を見る。今もパスで敵のゾーンを崩している。

このパス回し、崩すならば遅い展開に持ち込むか——あるいはそのパスを封じるステイルを果敢に行うことが重要。それを聞き、中澤は昨日の試合で活躍した白瀧の名を上げた。小林もその答えに満足げに頷く。

「ああ。平面においては白瀧は『キセキの世代』にも劣らないほどの能力を持っている。やつならば、きつと封じてくれるだろう」

「……だが、それは山吹が勝つたらの話」

「そうだな。現状ではまだ盟和高校が有利、というのが今の印象だしな」

試合を想定して語る小林だが、それはあくまで相手が勝ち残ったときの話。

黒木に追従するように、三浦も語る。たしかにチーム力ならば近年の戦績を考えると盟和高校が上。それが現状だった。

「なにせ二年連続で準優勝、しかも今年の主将は昨年のベスト5ときた」

「それを考えると、たしかに今は盟和高校と当たることを想定していた方がよいだろうな」

昨年の試合を思い出し、佐々木と三浦は苦笑しながら言った。

二年連続で準優勝を果たすことは生半可なものではない。その対策は十分に必要がある。

それには皆も同意見で二人の発言は皆の空気を一蹴する効果があった。

「——研究熱心なのは良いことだが、まずは目先の試合のことを考えたらどうだ？ 昨年ベスト5？ それは何も盟和だけに限った話じゃないだろう？」

しかし、再び場の空気を一変させる発言が生じた。

そちらへと視線を向けると、薄い緑色をベースに白いラインが縁取られているユニフォーム——常盤高校のユニフォームを着た男が目に入った。そしてその男には全員が見覚えがあった。

「……柊か」

「よう。久しぶり、って挨拶はいらないか」

口角を上げて小林の返事に応じるのは常盤高校の主将、去年のベスト5——柊省吾だった。

——常盤高校三年、柊省吾 ひいらぎしやうご ポジション：SG 181cm

「お前達常盤高校も観戦か？」

「まあな。午後の試合までには時間もある、それならば来週戦う相手のことは見ておくに越したことはない」

小林の問いに答えるだけでなく、あくまで自分達が戦うのだと挑発することを忘れない。『必ず大仁多に勝利する』という意味が言葉の裏にあった。

柊も本気で決勝まで勝ち上るつもりだろう。小林の目を真っ直ぐに見て言い切った。その度胸は良いだろう。

「そうか。だが悪いがその願いは叶わない。——IHに進むのは、大仁多だ」

「……ふん。まあ良い、今ここで言い合っても仕方がねえ。ただ覚えておけ、今度こそ大仁多の牙城を崩してやる」

「覚えておく。準決勝を頼みにしているよ」

だがその程度の挑発、小林ほどの相手には意味をなさない。

退くそぶりを見せない小林に、柊は少し威圧されつつもその姿勢を崩すわけにはいかなかった。

柊は『今年こそお前達を倒して見せる』と大仁多の選手達に宣戦布告し、チームメイトが座っている椅子まで戻っていく。

「……準決勝、どうなりますかね？」

「まずは俺達は目の前の試合に集中することだ」

中澤の不安を一掃するように小林は目つきを鋭くして言う。

たしかに柊も良い選手だが、それだけに意識を向けるわけにはいかない。改めて次の試合を考えると、皆の意識を高めた。

「そうだな。……しかしあれだけ言ってくれたのは頼もしいけど、試合でマッチアップするのは俺だよな？」

「……頑張ってくれ」

「そこは他力本願なわけか。はいはい。人使いの荒い主将だぜ、本当」
ポジションの都合上、返答はわかりきっていたとはいえ、山本はため息をついた。

だが柀を止められないようでは全国で戦えない。特に副主将となった今年はなおさらだ。

山本はいつもどおり穏やかな表情を浮かべながら、内心では熱い闘志をさらに燃え滾らせていた。

その一方、白瀧達は少し離れた席で盟和高校の試合を観戦していた。

「おう、また決めたな。橙乃のお兄さん」

オフエンスリバウンドを制した勇作が一端シュートのフェイクをいれ、敵ディフェンスをかわした後ゴール下のシュートを決めた。

無駄が少なく、洗練された動き。同じポジションとして感じるものがあつたのだろう、本田が感心したように言った。

「……本田。間違っても本人の目の前でそう呼ぶなよ」

「は？ 何だよ？」

「……勘違いされるから」

「……は？ どういう意味だ？」

「理由は知らなくても良い。とにかく呼ぶな。命が惜しければ」

「あ、ああ。……わかった？」

だが『お兄さん』という表現が気になったのか、彼の性格を知る白瀧が警告する。

事情はまったくわからなかったものの、白瀧の表情が真剣なもので、とても冗談を言っているようには見えなかった。だからこそ本田も詳しくは聞かず、了承してその場を収めることにした。疑問形では

あつたが。

「お兄ちゃん、ナイツシュ！」

「いや、橙乃。さすがにここからでは声援は……届いてる!? さすが勇作さん。なんとという地獄耳……」

兄のシュートを絶賛する橙乃。

しかしすでに勇作を含め、盟和の選手達は早々にディフェンスに戻り始めている。

ゆえに逆サイドへと走る彼らにはここからでは聞こえないだろうと白瀧が忠告しようとするが、驚くことに勇作は声に反応したかのようになり、振り返ってVサインを作っていた。それを見て白瀧は驚くしかなかった。

「それにしても勇作さんってPFだったのか。リバウンドも中々強いし、ゴール下のオフエンスだけでなく……ミドルレンジからも決めてくる」

そう言う白瀧も勇作のプレイを見て納得したのだろう、冷静に分析する。

ローポストから重心的に攻めているが、中距離からのカットイン、ジャンプシュートも多用している。とにかく盟和の大黒柱となっていた。

「ゲームメイクは、あの五番に一任しているようですね」

「ああ。大抵はあそこからパスが通っている。攻撃の起点だな。小林さんがマークにつくだろうから、そう簡単にはいかないだろうが……」

西村の視線の先にいるのは、盟和高校の五番・副主将の細川。栃木県内では小林に次ぐ実力を持つと言われているPGだ。

身長はそれほど高いわけではないが、試合の流れを読んでパスをさばき、味方を生かしている。

「小林さんとは、違うタイプだな」

「そうだな。あくまで味方を生かす、チームのまとめ役ってスタイルに見える」

同じことを思った神崎も頷く。

小林はパスをさばくだけでなく、自分で切り込み果敢に攻め立てる選手でもある。

しかし盟和の細川はスクリーンなど味方を使ったり、パスを中心としたゲームメイクをしている。そこが二人のPGとしての違いであろう。

「しかも最終的に勇作さんで決めるといふ展開が多い。……となると、勇作さんとマッチアップする選手がキーポイントか」

あくまでも得点を決めるのは勇作、そう感じさせるほどに勇作にボールが集中していた。

となると試合で戦うならば勇作をいかに止められるか、そこがポイントとなる。彼の得点を抑えられれば試合も優位に進めることができる。と白瀧は予想した。

「覚えておけよ、明。お前が当たるかもしれない」

「……え!? 僕!?!」

「当たり前だろ。体格的にもポジション的にもお前が一番可能性が高いんだ。よく見ておけ」

「わ、わかった……」

試合を見ることに夢中になっていて自分が戦うことを想定していなかったのだろう。今まで黙っていたのは、おそらくそれどころではなかったからだ。

光月は驚きつつも、了承の答えを返して勇作の姿を目で追った。

白瀧たちも再び視線を試合へと戻す。この先戦うことになるであろう、強者の試合を。

……その結果、山吹高校は90対71で三回戦も突破。

盟和高校も108対49でベスト四進出を勝ち取った。

午前の試合が終了し——時間は経過して、二日目の最終戦が行われようとしていた。

選手達が入場する。それだけで観客は沸き立った。それほどまで

に彼らの存在は大きかった。

「来た！ 今大会優勝候補の最右翼、大仁多高校！」

「PG小林、そして期待のルーキー白瀧！ 今年も見所満載だ！」

「こっちも出てきたぞ。優勝候補の一角、常盤高校だ！」

「昨年度は4強に入り、ベスト5をも挽ぎ取った柊が今年も主将！
今年こそ！」

大仁多高校と常盤高校。優勝候補と呼ばれる二校。

お互いこの試合に勝てば一週間後に激突する両校である。どちらも注目選手がおり、その選手達に期待が集まっていた。

出てきた4校はそれぞれのゴールで最終練習をする。各々が自分の調整を済ませ、審判の笛がなるとベンチへと一度戻っていく。

「皆さん、今日はこの若松高校戦で終了です。これに勝利すればベスト4、来週までは練習の日々です。」

……ですから、今はただこの試合に集中してください。いつも通りやれば問題はない。ゲームプランは事前に話した通り、変更はありません」

『はい！』

『よろしい。では頼みますよ皆さん。——小林さん』

選手一人一人を見て状態を確認すると、藤代は安心して五人を見送る。

藤代よりチームを託された小林はスターターの五人で円陣を組むと、一つ息を吐いて言った。

「皆。わかってるだろうが、俺達は勝つしかない。」

油断も慢心も一瞬たりとて見せるな。いつも通り、俺達のバスケットを見せ付ける！」

『はい！』

『行くぞ！ ——大仁多、ファイ！』

『オー！！』

力強く声を張り上げ、士気を高める。

意識を切らす事無く大仁多高校のスターターはセンターラインへと歩いていった。

「アップはすんだな？」

『はい！』

「よし。——前にも話したが、今回の相手は留学生が入っている。

間違いなくやつを中心に攻めてくるだろう。ディフェンスはとにかくゾーンを小さく、中を固めろ。いいか!？」

『はい！』

「よっし、では行ってこい！」

一方、その隣のコートでは常盤高校が準備を進めていた。

監督の言うとおり今回の対戦相手には留学生がチームに所属している。身体能力が日本人とはかけ離れた彼らは、間違いなく脅威だ。

ここまでの試合でも留学生が得点・リバウンドの両面において活躍している。

だからこそ選手達に今一度注意を促すと、監督は力強く選手達を送り出した。

「それではこれより、常盤高校対聖クスノキ高校の試合を始めます！」

そして——ベスト4をかけた試合が、始まった。

「くっそ！ 抜かせるかよ！」

大仁多高校対若松高校の試合。

白瀧につく二人の選手は何としてでもこれ以上先には侵入させないと、必死に食らいつく。

昨日の戦いでよほど警戒されたのだろう、ダブルチームによって白瀧もシュートにいく機会は減っていた。

しかし……彼はハイポストから仕掛ける。横にスライドし、一人をかわすと急加速。ゴール下へと切り込んでいく。

もう一人の選手が大きく下がってゴールには近づけまいとコースを塞ぐ。

その結果、攻めあぐねたのだろうか白瀧はついにゴールを横切るような形になった。

(よっしー)

『まず一回目の攻撃は防げた』と、相手の集中が一瞬途切れる。だが白瀧はバスケットがやや後方にある状態で真上に跳んだ。そして背後にあるゴール目掛けてボールをリリースする。

ボールは力にそってバスケットへと放られて……リングを射抜く。

「なっ……!?!」

「バックレイアップシュート。抜かされたくはないとのことなので、そのままシュートを決めてみたよ」

相手に対してニツコリと笑みを浮かべる白瀧。

『俺を止められるものなら止めてみる』。そう語っているようだった。

彼の行動が、言葉が、相手の心に浸透する。もはや次に白瀧が何をするのか、どうすればよいのかわからなかった。

『前半戦、終了!』

そして彼の理解が及ばぬまま——大仁多の42点リードで前半戦は終わった。

「お疲れ、要!」

「ああ、お疲れ。……お。向こうももうすぐ前半終了か」

光月とタツチをかわす白瀧。

チラリと視線を隣のコートへと移すと、常盤高校対聖クスノキ高校の試合ももうすぐ前半を終えようとしていた。

スコア、(常盤) 47対38 (聖クスノキ)。常盤が9点リード。

「常盤がリードしているけど……苦戦してるね」

「ああ。原因はあのセンターか? どうやら留学生みたいだが……」

たしかに光月の言うとおりで安心できる点差ではない。

その理由を考えていると、真っ先に聖クスノキのゴール下に陣取る黒人が目に入った。

対する常盤はとにかく彼に人数を裂いて防ごうとしているようだが……黒人の選手は三人に囲まれながらも強引にターンし、ダンクを決めた。

これで(常盤) 47対40 (聖クスノキ)。7点差となった。

「くそっ！ あと十秒、一本決めて終わるぞ！」

残り時間が少ないことを悟り、柘が声を荒げてチームメイトに指示を出す。

メンバーもそれを理解して一気に攻めかかった。

スリーポイントラインの外で柘へとボールが通る。シュートは撃たせないと二人の選手がマークにつくが、柘は味方選手がスクリーンに来ていることを確認し、大きくスライド。

これによつてチェックが外れてしまった。ヘルプに入るも、その前に柘はボールをリリースする。

(やはり撃つのが早い！)

「入れー！」

柘のクイックネスは止められるものではなかった。

そのままボールはブザーと同時にリングを潜り抜ける。

前半戦終了。(常盤) 50対40(聖クスノキ)。最後に聖クスノキに40点台にされたが、常盤も最後の柘のスリーで50点台に乗せた。

流れも考えると常盤高校が有利であることには間違いない。

「10点差に広げて終わった」

「さすがは栃木の実力者。そう簡単にはやらせないか」

前半戦を見届けて、白瀧と光月も控え室へと戻る。

最後の一本、あれは聖クスノキ高校に大きな衝撃を与えたことだろう。一桁で終わりたい、そう思っていたところで追撃の三点。数字以上に効果が大きい。

「ナイス柘！」

「ああ。このまま後半戦も引き離すぞ！ 大仁多に挑むのは常盤だ！！」

柘はチームメイトと言葉をかわし、さらにチームを盛り立てる。

主将というだけあって彼のチームへと影響は大きかった。

ただ点を取るだけでは駄目だ。チームをまとめ、その上で勢いをもたらす。それこそが柘に求められているものである。

「ちいっ！」

「最後にまた10点差にされた……」

「せつかくまた流れを掴みかけたというのに！」

反対に聖クスノキ高校のメンバーは荒れていた。

控え室に戻ってもその空気は中々変わらない。それだけ最後のプレイに対する後悔が残っていた。

「落ち着け皆。まだ10点差だ。十分追いつける。後半まで集中力を切らすな」

そんな空気を一蹴するために監督は手を叩いて皆の注目を集めると、どうにか落ち着かせようと皆をなだめた。

たしかにまだ諦めるような点差ではない。ならば今はもう一度力を蓄えるべきだとそれぞれ栄養の補給をしたり、休息を取る。

監督もそれを見て満足げに頷くと、チームの柱となっている黒人の選手へと歩いていく。すらっと伸びた体は立っているだけでも周囲に影響を与える。

「どうだ、ジャン。お前から見て今日の試合は」

「大丈夫だ。インサイドは俺の独壇場、相手の外さえ封じれば怖いものはナイ」

まだ少しだけ日本語に慣れていない面があるが、会話には一切支障はない。

しかも言っていることがこれ以上ないほど頼もしい。彼——ジャンの言うとおり、常盤高校は聖クスノキのセンターである彼をまったく止められていない。

たしかにパスコースが制限されているために高いパスでなければスティールも多いものの、フリーになる選手も多く、チームにとってはプラスになるものばかりだ。

「そうか。だが、最後のスリーを止められなかったのも事実。やはり格を優先的に止める必要がある、そうだろうか？」

「……確か二。リバウンドを取らせない自身はあるが、直接決められてしまったては意味を成さなイ」

「それじゃ後半は終に二人つきますか？」

「いや、それでは中央が薄くなる。……第三Qはディフェンスは沖田、

お前が終についてボックスワンを展開する。やつにスリーを打たせるな。

そしてその第三Qの結果次第だが、第四Qでは楠、お前を投入する。準備をしておけ」

ジャンも高さに自信がある。それは本人を含めた誰もが理解していることだ。

しかし今回のように正確にシュートを決めてくる選手が相手では、ゴール下を守るジャン一人では敵わない。

だからこそ、監督は椅子に座っている選手を見て、勝負に出ると告げた。

見た目は普通の選手と変わらないが、日本人よりも肌がやや白い。彼——楠は閉じていた瞳をゆつくりと開けて……

「……わかりました」

楠は落ち着いた声で、しっかりと意志を告げた。

その後、十分のハーフタイムを終えた後、後半戦が開始された。

だが時間を挟んだ後でも、どちらの試合も流れが変わることはなかった。

「行くぞ、走れ!!」

小林の声に応えるように大仁多の選手達がコートを駆け上がる。

相手を置き去りにするかのような早い試合展開。パスを次々とさばき、そしてシュートまで持ち込む。

若松高校の選手たちはついに白瀧へのダブルチームを解いた。

白瀧のダブルチームで、逆に二人が体力を削り取られてしまったのだ。しかも結果を残せないままに。

しかも白瀧に二人つくということは、一人がフリーになってしまう。当然ながら、大仁多高校でスターターに名を連ねるほどの選手をフリーにってしまったては、それこそその選手が黙ってはいない。

だからこそ後半はゾーンディフェンスに切り替え、中を強化しよう

としたのだが……パス回しに対応できなかった。

「ナイスパス！」

白瀧から黒木へとボールがわたる。

相手の裏をかいてパスを受け取った黒木はその場でターンアラウンドシュートを放つ。

シュートチエックが遅れた上に、長身の黒木を止めることはできない。そのまま大仁多に得点が記録された。

「はっはっ……くっ……」

悔しさをこらえきれずに歯を食いしばる。

しかし対抗策はまったく浮かんでこない。

結局大仁多の早い展開に飲み込まれるような形で、若松高校は第三Qを終えた。

そしてもう一つ。常盤高校対聖クスノキ高校の試合。

こちらは逆に、取られたら取り返すというシューティングとなっていた。この拮抗した状況は、そう簡単には崩せない。

「ジャンー！」

「ムン!!」

聖クスノキはジャンの高さを生かし、とことん中から攻めていく。

わかっているけど、一度パスを通されると厳しいものがある。しかもジャンに人数を裂いているために聖クスノキはミドルシュートもどんどん撃ってくるのだ。

ジャンがリバウンドを取ることを信じているのか、シュートに行く回数が多い。外れてもジャンが取り、決めてくれる。それが聖クスノキの攻撃だった。

「頼む、柊ー！」

「わかってるー！」

それに対抗する常盤高校は、柊にボールを集めていた。

とにかく点差を広げるためにも、そしてジャンにブロックされないためにも長距離、中距離からシュートを撃つ。

カットインやスクリーンも利用してマークを外すと、とにかく柊はシュートを決めた。

両者譲らず、お互い決定打には至らない。

しかし点差は徐々に開いていった。

第三Qが終了する。スコアは——(常盤)73対57(聖クスノキ)。終のスリーが徐々に効果を発揮してきた。彼とて必ずシュートを決めていくわけではない。

しかし、チームの総合力では常盤の方が上であった。所々でステールを敢行し、ボールを手にする。攻撃回数そのものは常盤の方が多かった。

その甲斐あって、常盤が16点のリードを保ち、第4Qまで繋げたのである。

「よしよし、勝てるぞー！」

「ああ。後はラスト第4Qのみ」

「大仁多を倒すまで負けられない、絶対に勝つぞー！」

第4Qの開始のブザーが鳴る。

疲労が溜まっていながら、常盤高校の選手達の士気は最高潮に達していた。

あと10分。このリードを維持すれば、準決勝に進出できる。そして大仁多高校に挑戦する権利を手に入れる。間近に迫っている希望が彼らを後押しした。

「では楠——頼むぞ」

「はい。必ずや」

一方で、聖クスノキ高校の選手達は静かにベンチから登場した。

しかもこの時、選手交代メンバーチェンジが行われていた。スターターである11番に代わって8番——楠がコートに入る。

手足の感覚を確かめると、楠は何も言葉を発さずに歩いていく。

「お、何だ。最後の最後に選手交代？ まさか切り札投入とか言わないだろうな？」

「……」

「チッ。だんまりかよ」

終の問いかけにも答えず、楠は彼の横を通り過ぎていく。

その反応に腹が立つ終であったが、『今はとにかく勝つことだけに

集中する』と意識を切り替えてディフェンスについた。

そしてその10分後。

『試合終了——!!』

「大仁多高校、準決勝進出！」

「ようし!!」

大仁多高校が155対41で若松高校に勝利した。

一度たりとも流れを手放すことなく、最後まで相手を圧倒する姿はまさに常勝校という呼び名にふさわしい。

小林たちもようやく準決勝まで進めたことで安堵し、山本達とハイタッチをかわした。

「よかった。これでベスト4だよね!」

「ああ。あと二つだ。それで全国にいける」

「そっか。もう、ここまで……」

「うん。もう少し。もう少しだ。……っておい、どうした明!」

突如笑顔を崩し、目頭を押さえる光月。白瀧は友の身を案じて声をかける。

しかし帰ってきた声は幾分か落ち着いていて。少なくとも彼が心配しているようなことではないとわかった。

「ごめん。ただ……僕がここまで試合に立てるとは思ってたなくて。いつつ、中学では……駄目だったから……」

「……まったく。矢坂黎明戦である程度よくなったと思っただけど、まだまだか」

光月はただ嬉しかっただけだ。ただその喜びを我慢できなかっただけだ。

それがよくわかった。本来ならば『しっかりしろ、弱みをみせるな』と言う所だが、今は少し休ませても良いだろうと白瀧は光月の肩を叩き、落ち着かせることにした。今はまだ、それで良いだろうと。

頭からタオルをかけさせて、ゆっくりとベンチまで歩いていく。

そんな中、観客の声援が一掃大きくなったことを白瀧は感じた。

「なんだ？ ……ああ、ひよつとして常盤高校の試合か？ 向こうもそろそろ終了するころ——!? なにっ!?」

隣のコートへと視線を移す白瀧。

しかし、そのスコアボードを見た瞬間、彼の思考は停止した。

「……嘘だろ。こ、小林さん！」

「なんだ、どうした？」

「コートを、隣のコートを見てください！」

「隣の？ 常盤高校の試合か？」

見たものを信じられず、白瀧はベンチで片付けをしていた小林を呼び寄せる。

彼の口調から何かあったであろうことを察した小林も片付けを中断して常盤高校が試合をしているコートへと顔を向けた。

……そして小林の表情が固まる。スコアボードを目にしたために。

(常盤) 87対94 (聖クスノキ) 残り時間、30秒。

「何だと!？」

「……常盤が負けてる？ しかも、残り時間30秒だぞ！」

「第3Qまでは常盤優勢だったはずなのに、なんで!？」

小林も、山本も……誰もが目を見詰めた。

第3Q終了し、常盤がリードしていたことは知っていた。しかし、それが今や優勝候補の常盤が後のない状況にまで追い詰められている。

残り時間30秒で7点差という、絶望的な状況にまで。

「くっそ！ よっせ！ 早く！」

PGに強くパスを要求する柊。その表情は明らかに焦りで染まっていた。

残り時間がない状況でここから勝つためには、スリーを連続で決めるしかない。それは他でもない柊が理解している。

パスを受けると、柊はマークを振り切るようにクロスオーバーで抜きながらドライブ。

マークが厳しく、外せないがそこで終わらない。さらに真横に流れ

るようにロールターン。ターンの勢いを足を踏み込んで殺すと、しっかりと地面を蹴ってボールをリリースする。

……しかしそんな彼に立ちふさがるかのように、敵選手のブロックが炸裂した。

「なっ……!?!」

「遅い。その程度でかわせたと思うな」

ブロックしたのは第4Qから柊のマークについていた8番、楠だった。

指でボールを弾き、リングに向かって弧を描くはずだったボールは宙に浮かぶ。

そしてそれをジャンが空中でキャッチ。相手の攻撃を防ぐことに成功した。

「柊が防がれた。……あの8番!」

「当たれ、当たれ! 止めてくれ!!」

常盤のベンチから、応援席から悲鳴のような応援がコートへと響く。

残り試合時間は10秒を切った。聖クスノキ高校は相手を煽るようにゆっくりと慎重にボールを回す。

そして残り時間6秒。ボールが楠へとわたる。柊との最後のマッチアップだ。

「くそ、来いよ! せめてお前だけは止めてやる!」

「……それは無理だ」

柊が必死に手を挙げ、足を動かし、最後の抵抗を見せる。

だが、そんなディフェンスはもう楠という選手の前には通用しなかった。

——目の前から消えた。そう誤認してしまうかのような鋭いドライブ。シュートフェイクにつられた一瞬の隙を見抜かれ、柊は彼のペネトレイトを許してしまった。

「なっ!?!」

「くそっ! 撃たせん!」

驚愕で目を見開き、柊はその場から動けない。

すかさずヘルプで二人の選手が楠を止めるように詰め寄るが——楠は突如腕を勢い良く振るい、ボールを地面に叩きつける。

「っ!」

「なんだ……?」

あまりの力に勢いあまったボールは大きくバウンドし、空中へと浮かんだ。

誰もが自然と視線がボールを追う。……そしてその先で、大柄の体を誇る男が空中に身を躍らせるのを確認できた。

「まさか、アリウープ!」

「——これで終わりだ!!」

選手達が動揺している中、ジャンは空中でボールを掴む。そして勢いを殺す事無く、ボールを両手でゴールに叩き込んだ。

その威力に常盤高校の選手が呆然としている。誰もが身動きできない状況で——試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了!!』

「勝った! 勝った勝った!!」

「ウオオオオオ!」

(常盤) 87対96 (聖クスノキ)。ジャンの雄たけびが響き、チームメイトの歓喜の声上がる中、聖クスノキ高校が準決勝進出を決めた。

そして——柊を擁し、優勝候補の一角と呼ばれた常盤高校。彼らは三回戦で姿を消すことになった。

「……な」

「常盤が、負けた?」

「それじゃあ準決勝は……」

「決まりましたか。皆さんよく覚えておいてください。来週、皆さんが戦うことになる相手を」

大仁多高校の選手達も、誰もがこの現状を信じられないと語っている。

そんな中、監督である藤代だけは冷静に彼らに告げた。

「来週、我々は決勝進出をかけて——聖クスノキ高校と戦います」

準決勝の相手は常盤高校ではない、聖クスノキ高校だと。
たしかに試合は何が起こるかわからない。それは誰もが理解して
いる。

しかし、目の前の現状をすぐに受け入れることは、難しかった。

準決勝第1試合——盟和高校対山吹高校。

準決勝第2試合——大仁多高校対聖クスノキ高校。

波乱のベスト4、準決勝は一週間後に行われる。

第二十五話 覚醒の片鱗

県大会三回戦、若松高校との試合を終えた大仁多の選手達は一度学校へと戻っていた。

別にこれから練習をするために戻ってきた、というわけではない。すでに時計の針は五時を回っており、選手達も試合の疲労がある。

目的はただ一つ、敵校の分析である。次の対戦相手となった聖クスノキ高校の分析。

彼らは今空き教室で偵察部隊が撮影した一本のビデオを見ていた。大仁多と同時に行われていたがためにベンチ入りメンバーは見るこゝとができなかった試合——常盤高校対聖クスノキ高校の試合を。

何せ優勝候補と呼ばれた常盤高校を倒した高校だ。相手の実力が高いためか、顔が強張っている。特に気が長くない方である本田は舌打ちさえしていた。

「……留学生か。こいつら日本人としてのプライドはないのかよ」
「俺もあまり良い気分ではないな」

彼の気持ちに共感したのだろう、松平も口を荒げている。

視線の先にいるのは聖クスノキ高校のセンター、ジャン。前半戦、聖クスノキ高校の得点の大半を決めた選手だ。

日本人離れた体格と能力を持ち合わせた彼は、常盤高校のディフェンス人を寄せ付けなかった。

三人のディフェンスのプレッシャーさえものともしないと言う様に、果敢に攻め立てる。

そのプレイを見て、『留学生の力を借りてでも試合に勝つ』という考えに不満が募ったのだろう。

そんな彼らを落ち着かせるように小林や佐々木が宥める。

「たしかにな。だがそれも一つの方法だ。むしろそんなチームに負けてしまうというのが問題」

「留学生が入ったとしても、それだけではただのワンマンチーム。対応策はある。常盤だって序盤は優位に進めていたわけだし……現に聖クスノキ高校は去年もこのジャンという選手はいたが、盟和高校に

敗れている」

「へ？ そうなんですか？」

二人の説明を聞いて、昨年の大会の詳細を知らない神崎が問いかけた。

盟和高校が準優勝したという情報は持っているが、対戦校などの知識は持っていなかったのだ。

それは彼以外の一年生も同様であり、他のメンバーにもわかるようにと山本が後方に座る一年生達の方へと振り返って答える。

「ああ、結構苦戦していたけどな。……昨年の三年生センターと勇作がダブルチームでジャンを封じ込め、最終的にたしか……85対72で勝利していたぜ」

「他の選手達のレベルがそれほど高くないのが幸いしましたね。あと一人、点を取れるエースが、スコアラーがいたら盟和高校とて危なかったかもしれない」

「——でも今年は、その選手スコアラーがいる。そうですね？」

「……その通りです。厄介な選手はもう一人、それが彼です」

中澤の発言を受けて、今まで沈黙を決め込んでいた白瀧が口を開いた。

彼の脳裏に浮かぶのは聖クスノキ高校の八番。第四Qより登場し、終さえをも凌駕した選手だ。

藤代は白瀧の答えに頷くと、少しだけビデオを早送りする。——第四Q、楠のプレイまで。

「こいつ……スラッシュャータイプのSシューティングガードG。山本さんと同じバスケットスタイルか！」

「……速い！」

そう呟いたのは三浦と黒木。しかしそれ以外のメンバーも内心では驚愕していた。

(……しかも、スラッシュャータイプである上に背も高いみたいだからブロックも難しい。

まだ緑間と違って右利きだから癖がわかりやすいものの……地上戦で抑えるのが無難か。おそらくは俺か山本さんのどちらかがマツ

チアアップすることになるだろうし)

楠のバスケを、ビデオに映っている姿を見て白瀧は冷静に分析する。

ビデオを見る限り、楠は緑間や神崎といったアウトサイドシュートを中心としたシュータータイプではない。

どちらかと言うと山本のように自ら中に切り込んで勝負するというスラッシュヤータイプの選手であった。

さらに背丈が高い。マッチアップした柊と比べると10cmほど背丈が高いように見える。

「そこまで詳しい情報はありませんが——聖クスノキ高校の二年生、楠ロビン。父親が日本人、母親がアメリカ人で中学はアメリカだったそうです」

「こいつ、ハーフなのか!?!」

「はい。それで去年、祖父が理事長を勤めている聖クスノキ高校に帰国子女として入学したそうです」

「なるほど。それで苗字が同じだったんですね……」

「少なくとも去年の県大会では登録されてなかったみたいよ」

「理事長の孫ってことで、大切に扱われていたってことか」

敵の情報について調べていた東雲と橙乃が彼についての情報を話していく。

理事長の孫、しかも日本人とアメリカ人のハーフ。楠はかなり特殊な立場にいる。

留学生は1人しかコートに立てないが……帰国子女、ハーフというならば話は別。この数年で聖クスノキ高校は大きな戦力の確保に成功していたのだ。

(……というかそこまで知っているなら、むしろ詳しく知っていると言えるんじゃないのかな?)

一方、マネージャー二人の説明を聞いて光月は思う。

しかし光月の疑問は誰にも届く事無く彼の胸中で消えた。

「だが厄介だな。ジャンだけなら打つ手もあつたが……」

「そうになると楠が黙っていない。おそらく今度は最初から出てくるだ

ろう。同時に二人を止めなければならぬ」

「ああ。強敵だ、聖クスノキ高校」

全員が聖クスノキ高校の戦力を理解して、改めて感じた。

——来週は三回戦までのようにはいかない、と。

聖クスノキ高校との試合の翌日には盟和高校との試合もある。おそらくこの二日間は、ここまでのように大仁多の一方的な試合はなくなるだろう。

選手達の気持ちが引き締まったことを見て理解した藤代は、静かに立ち上がり……そして告げた。

「……今のうちに言っておきます。今日はこれで解散としますが、明日からは練習をさらに本番を——聖クスノキ戦、盟和高校戦を意識したものとします。」

そして、できればI日本戦まではとっておくつもりだったので……小林さん、白瀧さん。お二人を中心に、今までにはなかった練習メニューを組み込みますので、頭に入れといてくださいね」

「はい！」

「わかりました」

「……？」

(二人を中心とした……?)

明日からはさらに大仁多高校は変わることになると。

藤代の意図を理解し、小林と白瀧は大きく頷いた。

「よろしい。それでは今日はお疲れ様でした。ゆっくり休んでください。また明日会いましょう」

他の部員達はその意味を図りかねて首をひねるが、藤代の一言でその場は解散となった。

詳しいことはまた明日聞けばよいだろうと皆次々と教室を後にする。

「なあ、橙乃」

「え？ なに？」

「話がある。ついてきて」

「……え？」

そんな中、白瀧が橙乃を呼び止めた。

彼女の腕を引っ張り、教室から出て、さらに渡り廊下へと移動し、建物の影になっっている場所まで移動した。

誰もいない空間で中々人が来ない場所。二人きりで話をするには丁度いい場所であつた。

橙乃はこのような環境で行われるある場面を創造して、頬を赤く染めた。

「え、つと。……こんなところで、何？」

「二つだけ調べて欲しいことがある。できるだけ早急にだ」

「……調べる？」

だが、白瀧が話すことはまったく無縁のものであつた。それは橙乃が考えたこととは何も関係ない、調べ物だつた……

一方、同時刻。聖クスノキ高校の部員達も同じように大仁多高校の試合を研スカウティング究していた。

テレビにはベンチ入りしていなかった選手が撮影したビデオが移っている。

「といった具合だ。大仁多はやはり選手一人一人の質が高い。ベンチメンバーとて相当だ。」

スターター五人——その中でも特に司令塔の小林、今大会最多得点を記録中の白瀧。彼らがやっかいだ」

監督の言葉に、選手一人一人の顔が引き締まる。

『栃木の常勝校』という呼び名は伊達ではない。ここまで全ての試合で敵を圧倒し、優勝チームとしての姿を示している。とても楽観視はできなかつた。

「面白い。これは骨がある敵でラッキーだ」

「ほう。ジャン、あくまでお前の敵ではないか」

「勿論。またゴール下は俺に任せてくれればイイ」

しかしそんな雰囲気の中でジャンは監督に軽い返事をして、笑っ

た。

豪快な性格で自信家のような発言だが、その言葉は真実である。現にここまで彼を止められた選手はいないのだから。

「ならばジャンにはまたインサイドで暴れてもらおうとしよう。」

だが準決勝は楠、お前にも最初から出てもらうぞ。白瀧——中学時代には『神速』という二つ名で恐れられ、全国制覇を経験した男だ。お前でなければ相手は務まらないからな」

頼もしい言葉に期待を示し、さらに奮起を促す。

さらに監督の視線は楠へと移る。三回戦で終さえ止めてみせた楠。監督が彼へと期待するのは当然であった。

監督の、チームメイトの熱い視線を、期待を向けられた楠は一度ビデオの白瀧を一瞥し……瞳を閉じて言った。

「了解しました。……しかしそうになると、それは残念な話ですね」

「残念？ 何がだ？」

「その二つ名は、準決勝で返上となるからですよ」

「……ふっ。確かにそうかもしれないな」

もう白瀧が『神速』と呼ばれることは、なくなるのだと。

挑戦者とは思えない大胆不敵な姿。

あまりにも頼もしすぎる二人の選手、ジャンと楠。監督もチームメイトも、自軍・聖クスノキ高校の勝利を思い描かないわけがなかった。今度こそ栃木は大仁多高校の一強ではなくなるのだと。

こうして栃木県では苛烈な戦いが行われていたが、当然のことながら熱戦はここだけではない。

激戦区に数えられている東京都でも、戦いの火蓋はすでに切つて落とされている。

その中でも特にバスケットに燃えている男がいた。

——誠凜高校一年、火神大我である。

彼は白瀧との1 on 1を終えてからというものの、バスケットに飢えてい

た。

その日の試合終了後、直帰することはなくいつも使用しているストリートコートへと向かう。

瞳を閉じ、想像するのは自身のマークにつく敵。だが——火神はフルドライブで一閃する。

ダンクを狙おうと勢い良く跳躍、しかし相手もそう簡単にはシュートを許さない。二人の選手がブロックに跳ぶ。

その二人を越えるかのように、高い位置まで跳んでいる火神。相手のブロックなどお構い無しに、ボールをリングへと叩き込んだ。

「——たりねえ！」

思わず不満を叫んでしまう。

まだ足りない。これではまた届かないのだと我武者羅に叫ぶ。

あれから火神は走りこみを中心に自主メニューを大幅に増やしていた。そして今までのバスケの経験から、実戦の動きをさらに極めるためにシミュレーションを。

ここまでの予選、誠凛高校は1回戦を除いて全て100点ゲームで勝利していた。その中で特に勝利に貢献していたのは火神。攻守で活躍し、スコアラーとして十分すぎる結果を残している。

だが、それでも彼は『足りない』と叫んでいた。

「もつとだ。もつと強く！ キセキの世代に勝つためにも——キセキの世代に挑むまで誰にも負けられねえ!!」

彼の目標であるキセキの世代に挑むために、ひたすら強さを求めていた。

栃木県大会三回戦が終わってから数日後。

大仁多高校は新たなメニューを取り入れた練習をも藤代の指導の下で乗り越えた。

そうして次への戦いに向けて準備が進む中、大仁多の主力メンバーを率いる小林が、白瀧・光月・神崎・西村の一年生達を率いて東京へ

と赴いていた。(本田は個人的に体を動かしたいと言って欠席)

準決勝を間近に控えた中、彼らが向かっているのは——IH都予選、Aブロックの予選会場となっている体育館である。

「もう試合は……始まっていますかね?」

西村が自身の腕時計を見て顔をしかめる。

試合開始から最後まで見届けたいという思いが強いためだ。

なぜなら彼らが観戦するのは——東京都が誇る三大王者の試合なのだから。もつとも、さらに言えばその王者に挑む挑戦者の試合も、なのだが。

「まあそれでも第一試合の第二Qからは見れるだろう。そんなに焦ることはない」

「でも、王者の試合だと俺らが行ったところには点差が離れているんじゃないですか?」

「……その可能性も否定できないがな。だが決勝とてあるんだ。それで良いだろう」

歩きながら小林が答える。彼もお目当てのチームの試合を早く見たいという思いがある。最年長者として落ち着いた姿勢を崩さなかった。

たしかに東京都が誇る三大王者は他の高校を完全に引き離している。だからこそ王者だ。

ゆえに神崎の言うとおり、戦力を見極めるためにより長い時間、より選手達のプレイを見たいところだが……もはや今さらではある。

「決勝か。小林さんは決勝の予想は——秀徳と正邦、王者の一騎打ちという予想ですか?」

「そうだ。まさか三大王者の二校が同じブロックとは予想外だが、逆に言えばその二校が決勝で争うということになる。

それがどうしたんだ? 何か気にしている高校でもあるのか?」

「まあ、知り合いがいるので。……どうなるものか、と思いましたがね。あくまで参考として聞いただけです」

並んで歩く白瀧の問いに、小林が不思議そうに聞き返す。

だが白瀧は詳しくは告げずに視線を前方へと戻した。

「知り合いつてことは、要の中学時代の？ それなら気にするのも仕方がないか」

「ああ、元チームメイトだ。……もつとも気にするとか、楽しみというか」

白瀧の表情に穏やかな笑みが浮かぶ。友のことを考えてだろうか、本当に楽しそうな笑顔だ。

それを見て光月も、本当に仲が良かったチームメイトだったのだらうと理解した。事情を知る神崎と西村も、意図を察して一息をこぼした。

「なるほど。それで先ほどの質問か。まあ見ればわかることだ。……さて、どうなっているか」

白瀧を一瞥して小林は観客席へと入っていく。三大王者の試合とだけあって、すでに席はほとんど満席であった。

広く渡っているその空間は同時に行っている二試合のどちらをも見ることを可能としている。空席となっている席を見つけ、五人は腰を降ろした。

まず目が行くのは、小林達がここに来た目的であり、彼らがつい先日対戦したライバル、東京都『東の王者』——秀徳高校の試合。

(秀徳) 24対6(銀望)。第1Qをまるごと一分残していながら、すでに大差をつけていた。

「……圧倒的ですね」

「これが本当に準決勝かよ？」

「……大坪め」

スコアボードが目に入り、西村は称賛し神崎は呆然とした。

とても準決勝とは思えないような、そんな内容であった。ここまでの試合を完全に制すことは簡単ではない。

小林は好敵手からさらに強くなっているような印象を受けた。一瞬感じた焦りを悟られないようにと、前髪をかき分け表情を隠す。

「これはこっちの試合は決まったかな」

「ああ。何せ、もう緑間がベンチに引っ込んでいる。秀徳は余裕を残してこの展開だ。間違いないだろう」

光月の眩きに白瀧が答えた。白瀧が見ているのは彼のライバル、緑間である。ベンチで彼が常時行っている左指のテーピングをしていた。

すでに秀徳はエース・緑間をベンチに下げている。まだ前半はおろか第1Qさえ終わっていないのに下げるといふことは、この後同日に行われる決勝のことを考慮してのことだろう。この試合で出た理由は調整のため、とも思える。

ここまで万全に試合を進める秀徳が負けるとは、到底思えなかった。強敵の変わらぬ安定ぶりに、小林は視線を厳しくする。

「やはり秀徳が一步有利か。大坪だけではなく緑間もいるこのチーム、簡単には止められない」

「そつすね。となると気になるのはもう一試合……あれ?」

「正邦が、負けてる?」

「何!?!」

すると、隣のコートを見た神崎が、つられた西村が自分の目を疑った。

二人の言葉に小林も驚愕してすぐに正邦の試合を見る。

だが、彼らの言うとおり正邦が、三大王者が劣勢に立たされていた。

(誠凛) 19対13 (正邦)。誠凛が6点のリードを保っている。

「誠凛……やはりか」

「え、まさか要の言っていた知り合いつて……」

「ああ、誠凛高校のことだよ」

予想通りだと白瀧は笑った。

誠凛高校、かつての友と新たなライバルが所属する高校である。

誠凛高校一年、黒子テツヤ。同じく一年火神大我。二人のルーキーを引き従える高校、白瀧が注目するのも無理はない。

予想以上の健闘ぶりに神崎も賞賛した。

「でもすげえな。正邦を相手にここまで試合を優位に進めるなんてや」

「本当だよ。王者をここまで……つて、正邦の選手達、何か動きが変じゃない?」

「ああ、そういえば確かに。動きが、何て表現すれば良いのかわからないけど、独特？」

コートに立つ正邦の選手達の動き。それに違和感を感じたのだ。光月が呟くと同じことを思っていたのだろうか神崎もそれを口にする。

(……言っていることはわかる。だが、あの動きどこかで見たような……ん？ まさかあの走り方……)

ただ一人、白瀧だけはその動きに既視感を覚えていた。

心当たりに行き着き思考をめぐらせるが――

「……あれ？ 白瀧つちじゃないっすか」

「あ？ ……ッ！ 黄瀬!？」

突如通路を歩いてきた住人に声をかけられて思考が止まる。

相手の顔を見て白瀧は驚愕した。そこにいたのは白瀧にとっては因縁の敵――海常高校の黄瀬涼太がいたのだから。

「なんでお前がここにいる？ お前達海常は神奈川だろ!？」

「いや、それを言ったら大仁多だって栃木じゃないっすか」

「俺達は偵察だよ。秀徳とは色々縁があるからな」

「俺も同じっす。誠凛には練習試合で貸しを作ったんでね」

「……そうか。そういえばそうだったな」

かつて黄瀬に誠凛高校と練習試合を行ったことを聞いたことを思い出し、白瀧は納得して引き下がる。

自分達とて同じ理由でこの試合を見にきたのだ。共感するのは当たり前だろう。

一方、白瀧の発言で目の前にいる男が『キセキの世代』の一人であることを理解した小林達の顔は強張った。

(黄瀬涼太。こいつが……!)

(帝光中学時代、白瀧さんからレギュラーの座を奪った天才プレイヤー)

(バスケット初心者でありながら、急成長を遂げ続けるオールラウンダー)
(とりあえずイケメンは死ね!)

大仁多のエース、白瀧を中学時代に倒した相手。小林は鋭い視線で

黄瀬を射抜き、西村は苦々しく表情を歪め、光月はただ驚愕し、神崎は嫉妬の炎を燃やした。

「でもこの様子だともう少しゆっくり来ても良かったかもしんないっすね。誠凛が古武術の使い手・正邦を圧倒するとは……」

「……古武術？」

「そつスよ。キャプテンから聞いた話によると、正邦は全国でも珍しい古武術の使い手らしいっす。だから動きも妙というか」

「なるほど。やはりあの動きは古武術だったか。それで誠凛がここまで試合を制していたのか」

「は？ どういう意味だよ？ 何で誠凛が有利って話になるんだ？」

黄瀬の説明に納得して頷く白瀧。

しかし神崎はその言葉の意味を理解できず問いかけた。

正邦が古武術を取り入れたチームということはわかった。古武術の応用により、選手のより効率的なスタイルを確立させた正邦。それなのに、『古武術を取り入れたことで逆に誠凛が有利になった』というのは、果たしてどういう意味なのかと。

「……多分、俺のせいだ」

『……は？』

「そういうことですか」

「いや、全然意味わからん」

その答えに、事情を知っている西村以外は疑問を浮かべるしかなかった。

正邦の10番、津川智紀は焦っていた。

高いディフェンス能力を買われ、敵スコアラーを封じるストッパータイプのSGとして名を上げた。その結果ルーキーでありながらスターターに選出され、ここまで相手を圧倒して来た。

今日の試合相手である誠凛高校とて、昨年三大王者全てに何も出来ずに敗れ去った相手である。それゆえに今年はさらに打ち負かして

やろうと思っていたのに。その思いは呆気なく崩れ去った。

「知っていますよ。それ古武術のくずしですよね」

「——ッ!？」

ドライブから一転、パスへと切り替える。フェイクにしては鮮やかだと呼べるその動きに、初見の相手はまず対抗できない。

しかしそのパスは味方へと届くことはなく、誠凛の11番に叩き落とされる。

ルーズボールを味方が拾い、再びボールが回ってくるが、それでも焦りは消えない。

(……まだ)

一回や二回の話ではない。誠凛の11番、津川のマークについている相手ではあるが、先ほどからずっと翻弄されていた。

まるでこちらの動きが読めているかのように、知り尽くしているかのようにボールを奪いに来る。

ならば、と津川は方針を切り替える。単独でのドリブル突破。トリプルスレットの体勢から、一つ間をおき瞬時に体重を下半身へとかける。

これにより一瞬の爆発力が生まれ、津川は急加速した。

「膝抜き。……でも、白瀧君の方がずっと速かったです」

「あつ、嘘!？」

……だが、それも意味をなさない。

黒子のバックチップ。後ろから伸ばされた腕に、津川はまたしてもボールを奪われた。

「黒子——誠凛の11番のことだけど、あいつはすでに古武術を知っている。」

「というのも、俺が中学時代にあいつと何度も1on1をやったり、試合で俺のプレイを見ていたためだ」

「じゃあ、要が古武術の使い手だったってこと?」

「俺の走り方や重心移動、それに動きの切り替えとかは全て古武術の応用だ。だからこそ体力もより少ない消費でここまで来れた」

「……そうだったんだ」

光月は白瀧の説明に納得する。今までのプレイで、何度か不思議に思っていたことはあった。

走法やドリブルの技術だけではない。白瀧のバスケット——途中までまったく同じような動作で、しかしいきなり分岐するような動き。それが古武術に通じているということなら頷ける。

さらに古武術の動きはナンバ走りに見られるように、体をねじらずに動かすため体力の消費も少ない。だからこそ白瀧は試合でも無尽蔵に動けるのだろう。

黒子の動きは読めない、しかし黒子は相手の動きを把握している。この違いが誠凛にもたらす影響は大きい。

「……あれ？ でも待てよ。お前は走るとき、普通に右手と左足、左手と右足って感じに交差してないか？」

だがここで神崎は一つ疑問に思うことがあった。白瀧の走り方についてである。

古武術の基礎動作である『ナンバ走り』は右手と右足、左手と左足というように同じ方向の手足を同時に出すことで体力の消費を減らす。

しかし神崎の言うとおり、白瀧の動きを今まで見てもそうは見えなかった。少なくとも正邦のように完全に見分けはつかなかったのだ。

その疑問に答えるように白瀧が大きく頷いた。

「ああ。確かにお前の言うとおり、正確に言えば俺の走りは『ナンバ走り』とは呼ばない。何せ出る手足の方向が一緒ではないからな」

「じゃあ、何で？ 別物じゃねえの？」

「感覚的な問題だ。何度試しても癖が強すぎて上手く修正することはできなかった。

しかし『ナンバの動きを意識して、取り入れて走る』ことで無駄がなくなった。より効率の良い走り方を感覚で身につけた。だから俺

は別物ではあるが、『ナンバ走り』と呼んでいる」
「……」

確かに本物ではない、しかしそれに習ったものが白瀧の走法であった。

努力を積み重ねても本物には至らなかったものの、だからこそ今の白瀧がいる。決してその時間は無駄ではなかった。

この白瀧の説明を聞いて、光月の脳裏にある光景が浮かんだ。

——『自分の目的のために頑張ったのだから、何かしらそこから得られるものがある。ただそれを有効活用できるかどうかだ。できなかったとしてもそれは無駄とは言わない。試行錯誤した上での結果なのだから』。

県大会予選、矢坂黎明戦の前日に白瀧が言っていた言葉が鮮明に蘇った。あの言葉は決して嘘ではなかったのだと、そう理解した。目の前に実証済みの選手がいるのだから。

「そんなもんっすかね。あくまで古武術基礎動作って話だし、結構上手くいけると思うっすけど……」

「……お前みたいにな、見れば何でもできるようなやつと一緒にするな！」

良いんだよ。たとえ本物から派生した偽者であろうとも、それを極めれば本物にも劣らない。それすら越えてみせるさ」

「……そっすか。ま、楽しみにしてるっす」

あまり気持ち伝わらなかつたのか、黄瀬が気楽に言う。その態度が腹立たしいと思い、白瀧は声を荒げる。

たしかに言葉で語ることと実際にやることはまるで違う。黄瀬のように、見ただけで模倣コピイできるとような、そんな器用さを白瀧は持っていない。

だからこそ白瀧は言った。たとえ偽者であろうとも、必ず天才ホシモノを越えてみせると。

そう語る白瀧を迎え撃つように、黄瀬も不敵に笑う。その恵まれた容姿も合い重なり、異常なほどに強く映る。

(……白瀧の道も先は険しいか)

そんな二人を小林はうつすらと口角を浮かべて見守っていた。いずれ大仁多の中心となるであろう白瀧も、まだまだ敵は多い。しかしそれを乗り越えたならば、きつとより高みに立てるはず。

後輩の成長を楽しみに思う反面、未だ知れぬ強敵に勝てるようにと心の中でエールを送った。

(だが、今はとにかく目の前の試合だ。たしかに誠凛の11番黒子が活躍しているというのはわかったが、それでも正邦ディフェンスを圧倒するとは……)

白瀧を一瞥し、再び誠凛と正邦の試合を見る。

小林の目に強く印象に残ったのは誠凛の10番——火神大我。

「悪いが、お前達に苦戦するわけにはいかねーんだ!」

津川がマークについている中、果敢に仕掛けていく。

動きを予測した津川が行く手を阻むが、火神は右から左へと切り返す。

「う、ぐうっ……!?!」

「もらった!」

「ッ!」

突然の変化に津川の体がふらついた。

その隙を見逃さず火神はチェンジオブペースからのクロスオーバーで津川のマークを振り切った。

「ヘルプ!」

「来い、叩き落としてやる!」

「邪魔だよ!!」

火神のペネトレイトを止めるべく、センター・岩村が飛び出した。チェックが早い。しかし火神の表情に焦りはない。

火神はその場で停止すると間をおかずにジャンプシュートを撃つ。

岩村がブロックを狙って跳ぶが……届かない。

(なんだ、こいつの跳躍力は?! なんだこの高さは!?)

同時に跳んだが最高点に届かず、自分が先に落ちているという始末。

岩村は結局火神を止められなかった。プレッシャーにもならな

かったのか、火神のシュートがネットを揺らす。

「また火神が決めた!!」

「正邦のディフェンスさえをも打ち破る、誠凛の脅威のオフエンス力!」

「もうこれは止められない!」

観客が誠凛ムードに包まれていく。

今まで王者を保ち続けてきた正邦が、ここまで押されているのだ。

誠凛の挑む姿勢が、その試合展開が観客をも味方につけている。

「白瀧、10番のことは知っているのか?」

「火神ですか? いや、俺は特に。……むしろ知っているのは」

「あ、俺っスか? いやー、俺だってあまり他校に情報を流すのは、ちよつとね。キャプテンも来てるので……そろそろ自分の席に戻るっス」

誠凛のスコアラー、火神について小林が問う。

しかし白瀧も彼については満足に知っているわけではない。ゆえにすでに対戦済みの黄瀬へと視線を向けるが、彼は逃げるようにと自分の席へと戻っていった。その隣には海常の主将・笠松の姿も見える。黄瀬も下手に情報を流してキャプテンに怒られるのは嫌なのだろう。

「さすがに駄目か。俺が知っている限りでは、アメリカでバスケをしていたということくらいですけど……身体能力がやはり、ずば抜けていますね」

「ああ。特にあの跳躍力。正邦・岩村のブロックとて障害としない、あの高さだな」

火神の身体能力には目を見張るものがあつた。

ゴール下に強く、インサイドを守り立てている。リバウンドも強い。

この試合における誠凛の得点はほとんど火神によるもの。誠凛のスコアラーとして覚醒しつつあつた。

「こうなると、正邦は厳しいですね」

「同感。王者といえど……ここから巻き返すのは厳しいだろうな」

「……正邦。王者の一角が、崩れる……」

西村も神崎も、光月もこの試合の結末を感じ取っていた。

正邦のプレイスタイルを知る黒子と、正邦のディフェンスさえ粉碎するスコアラージャー火神。

このルーキー二人が、正邦をこれまでにないほどに追い詰めていた。

そして彼らの予感は的中した。

前半、火神が一人で16得点を記録。(誠凛) 43対31(正邦)で折り返す。

第3Qからは火神・黒子を同時にベンチを下げ、二年生のみで試合に挑んだ。

これには決勝・秀徳戦におけるルーキー二人の温存という意味だけではなく、昨年の敗戦を克服するという先輩達の強い意志もこもっていた。

火神が抜けたことによりインサイドは弱体したものの、先輩達は徐々に古武術の癖を見抜き、正邦の攻撃の芽を詰んでいく。

オフフェンスは主将・日向とセンター・水戸部を中心にチームオフフェンスで得点。よりチームワークの取れた連携で正邦のマンツーマンディフェンスに対応する。

ラスト20秒、ついに5点差まで迫られる誠凛であったが……

「決めろ、日向!!」

「わかってる!」

オールコートを突破し、最後は主将である日向がとどめを刺した。

司令塔・伊月がパスをさばき、日向はスリーを撃つ。小金井のスクリーンによって相手のブロックは間に合わない。

得点を決められて、急いでリスタートすべく岩村がボールを拾うが……

『試合終了——!!』

PG・春日がパスを受け取ったと同時に、最後のブザーが鳴り響い

た。

最終スコア、(誠凛) 95対87 (正邦)。北の王者と呼ばれた正邦高校、準決勝で敗退。

ノーマークであった誠凛は今大会最大のダークホースとして、決勝へと進出する。

第二十六話 好敵手に望む

正邦、敗れる。三大王者の一角に数えられ、インターハイ常連校となっていた正邦がまさかの準決勝での敗退を喫した。この結末は多くの観客の予想を裏切り、波乱を呼んだ。

これにより、インターハイ東京都予選Aブロックの決勝の組み合わせは、誠凛高校対秀徳高校となった。誠凛にとっては北の王者・正邦に続き東の王者・秀徳という王者の連戦となり厳しい現実である。

決勝戦は準決勝から日をおかずに三時間後に行われる。

選手達の疲労は完全には回復しない。ゆえに少しでも体力を回復し、力を温存させることが必要であった。

「——ようやく来たか。待ちくたびれたのだよ」

しかしそんな状況下で、秀徳のエースである緑間は自軍の控え室を離れていた。

準決勝はほとんど出場していなかったとはいえども、彼を知る人間ならば『緑間が試合前にどれだけ念入りに調整するか』ということが頭に入り、疑問に感じることだろう。

徐々に近づいてくる足音に気づき、緑間はゆっくりと顔を上げて目の前の相手へと視線を移す。

「そう言うなよ。こっちだって先輩も一緒にいたんだ。そう勝手に抜け出せないだろ」

「ふん。お前の都合など知ったことではないのだよ。とにかく試合を控えている俺を待たせたのは、大きな問題だ」

「お前から呼び出しという随分と偉そうだな、まったく。……で、一体何の用だよ?」

「誠凛と戦う前に、お前と少し話をしておきたかつのだよ。——白瀧」

自分勝手に物事を進める緑間を笑う相手は白瀧。以前練習試合で秀徳高校が対戦し、苦汁を飲まされた相手であった。

緑間は相変わらず鋭い視線を白瀧へと投げかける。決勝戦の前に、どうしても緑間は白瀧と会わなければならなかったのだ。

「まずは決勝進出おめでとう、と言っておくか。大坪」

「まさかお前達が観戦に来ているとはな。一応礼を言っておこう。……だが、まずは次の試合が終わってからだ」

そのころ秀徳高校の控え室付近の廊下では小林と大坪が対面していた。

お互い強豪校の主将として名の通った選手であり、そして同時に因縁を持っているライバルでもある。

小林が大坪の力闘ぶりを褒め称えようと、大坪も微笑を浮かべてそれに応えた。

しかし頬が緩むのもわずか一瞬。すぐさま次へと意識を切り替えている。まだ彼らの戦いは終わっていない。

「誠凛高校か。たしか昨年はお前達が……」

「ああ、決勝リーグで戦った。あの時は大差で勝利したが、油断はない。お前達のようなケースがあるからな」

「大仁多との練習試合のことか？ まあたしかにな」

そう言われては小林も少し居心地が悪くなる。

何せ小林達が先の練習試合で、昨年の結果——屈辱の敗戦を覆して見せたのだ。

その結果からわかるように、勝負は何が起こるのかまったくわからないのだ。油断など見せるわけにはいかない。まして彼らは王者として勝ち続ける誇りがあるのだから。

「……試合を見たが、また随分と鍛えたみたいだな」

「お前もな。県大会のことは聞いているぞ。大仁多も随分派手に暴れていると」

「もちろん。まだまだみつともない姿は見せられないさ」

準決勝を思い出してそう語る。インサイドを掌握し、相手を圧倒する姿は見事の一言に尽きた。

大坪もまた、小林達の奮戦ぶりを讃える。県は違えども、情報はあ

る程度入っていたのだ。

お互いがお互いの成長ぶりを実感できている。戦うことはできないが、それだけで今は十分であった。

「ふん、いいだろう。……まずは今日、俺達秀徳は必ず決勝リーグへと進む。よく見ておくんだな」

「ああ。存分に見させてもらおうよ」

これで話は終わりだと大坪は小林に背中を向けて秀徳高校の控え室に戻っていく。

小林も大坪ライバルに心の中でエールを送り、彼の背中を見送った。

試合中は敵であるためにそれどころではなかったが、今こうして見るとやはり大きく、そして頼もしい背中だと小林は思った。

「……で？　なんでお前達がこんなところにいるんだよ？」

同時刻、トイレに入った火神の第一声。

その視線の先には彼が見覚えのある制服を着た男子生徒三人の姿があった。

——大仁多高校の一年生である神崎・西村・光月である。

「お、火神じゃん。久しぶりー」

「随分活躍してるみたいじゃないですか。しかも次は決勝戦でしょ？」

「……どうも」

一度面識のある神崎と西村は気さくに話しかけ、初対面である光月は少しおどけた口調で返す。

「たしか誠凛に白瀧と一緒に来てた……えっと……」

「……ああ、そういえば俺達はまともに自己紹介していなかったか。神崎勇だよ」

「西村大智です」

「あ、えっと……はじめまして。光月明です」

「おう、そうか」

腕を組み、思考回路を全力で起動させる火神。

その姿を見て誠凛高校ではほとんど名乗っていないなかつたことを思い出した神崎が名乗り出た。西村と光月もそれに続く。

それでようやく納得して火神は知恵熱になる一歩手前で思考を放棄した。

(こいつも大仁多高校の選手？ この前白瀧たちが誠凛まことに来た時は見なかったが、でけえ。センターかフォワードだろうな。しかも……)そして視線を今一度光月へと向ける。

一人だけ火神が見たことがない選手である。その体格から光月のポジションを予測できるが……

(……)いつは強い！)

この時、火神は瞬時に光月から漂う強者の匂いを感じ取っていた。野生の勘とも言える、火神の鋭い強者への飢えが光月に反応したのだ。

白瀧とはまた別種の——火神がアメリカで幾度も体感した強者の匂いを。

(あれ？ そういえば……)

そこで火神の思考は一度リセットする。

ここにある人物がいないことに気づき、視線を動かすがどこにも見当たらない。

「どうかしましたか？」と彼の行動を不審に思った西村が問いかけることでようやく彼らへと意識を戻した。

「今日はお前らだけかよ？ 白瀧は来てねえのか？」

「いや、一緒に見てたよ。ただ、今はちよつと緑間に呼び出されてここにはいない」

「は？ 緑間が白瀧を？ あの野郎、一体何のためだよ……？」

思わず火神は声を荒げる。

実を言うと火神は一度緑間と会っていたのだ。

秀徳は誠凛にとって昨年のリベンジを果たす相手でもある。それを知った火神がリベンジ相手に名前を覚えておくようにと緑間と接触したのだ。(当然のことながら私情も挟んでいた)

その時火神が感じたのは、緑間の高飛車な性格。常に上から人を見下すかのように話し、こちらの精神を攻撃してくる気に食わない相手。それが緑間の印象であった。

思わず『キセキの世代』にはまともなやつがないのか!』と黒子に問いかけてしまったほどである。「いません」と即答された時にはどうしようかと思ったが。

……そんな緑間が一体試合前になぜ白瀧を? と疑問が残るが、それを解決したのは中学時代から彼らを知っていた西村であった。

「多分プレイのこととかじゃなく、ちよつとした気分転換とかラッキーアイテムとかそういうことだと思いますよ。」

試合前に改めて意識を切り替える、そのために白瀧さんと話をしようとしたんじゃないですか?」

「……待て。気分転換はわかる。ラッキーアイテムって何のことだ?」

「聞いてませんか? 緑間さん、いつもおは朝占いを見て、そのラッキーアイテムを持ち歩いているんですよ」

「んだよそれ!?! 馬鹿じゃねえのか?」

「……本気だからたちが悪いんですよ」

西村がどこか遠い目をしている。中学時代に似たような経験があったということが推測できた。

キセキの世代の思わぬ情報を手に入れてしまい、火神も微妙な表情となる。ちなみに神崎と光月は練習試合でそれを聞いたため、『やっぱりか』とため息をついていた。

「そういえば白瀧は……中学の時の怪我は、もう影響ないんだよな?」

「ツー」

「……聞いたんですか、怪我のこと」

白瀧の名前から彼の怪我のことを思い出し、火神にしては珍しく細々と言う。

神崎も西村も、後から話を聞いた光月も表情が歪んだ。

白瀧から彼の覚悟について話を聞いたものの……やはり、それを聞かれると辛い部分があった。

「全然大丈夫だよ。今となつては当時の話を聞かない限り、誰も信じないくらいだ」

「そうだな。俺も要と再会した時は気がつかなかつたし」

「……そうか。いや、黒子がやけに真剣な表情をしていたから、ちよつと気になつてな」

高校から一緒に練習するようになった光月と神崎がこう言うのだから、本当に問題ないのだろう。

火神は胸を撫で下ろす。白瀧の話聞いた時、黒子の表情がただ事ではなかつた。それゆえにそのことが今でもずつと気になつていた。

だがそれも余計な心配だつたとわかり、火神は安堵した。

「火神さんが気にする必要なんてない。……そんなに気になつてたなら、以前白瀧さんが言つていた言葉をそっくりそのまま送りますよ」
「あ？ 一体何だよ？」

『覚悟を決めた者に対する手加減は、最大の侮辱だ！』
「ッ……!?!」

火神の姿から白瀧への同情やそれに似た感情を察知し、西村が忠告をする。

——白瀧に対する侮辱をさせないために。これ以上白瀧に屈辱を味わせないために。

その言葉を受けて、火神は肝を冷やす感覚を覚えた。

トイレから退出し、廊下を歩きながら西村はさらに言葉を繋げる。

「中学時代にもあつたんですよね。白瀧さんのリハビリ明け、事情を知っている選手はどうしても気にかけてしまう。」

……白瀧さんはそれを望んではいないというのに。むしろそれが白瀧さんを余計に傷つけているというのに」

「つまり要も本気の勝負をお望みだつたつてことか？ たしかにあいつ、今もよくlonerとかするけど……」

「誇りプライドもあつたでしょう。ただでさえ自分よりも強い選手が身内にしたのに、そんな状況下で敵に本気を出してもらえず、しかも逆に心配される」

「……それは確かに誰だつて嫌になるかも」

状況を想像しても嫌な気分になるのだ、それを実体験したとなると、どれだけ白瀧が辛い思いをしたのかわかった。

口を挟まなかったが、火神も同感であった。火神も過去に似たような覚えをアメリカで経験している。そして今も白瀧と初めて会った時にあれだけ言われていたのに。

——危ないところだった。

もう少しで俺はまた同じ過ちを繰り返してしまったかもしれない、と火神は深く自分の失態を嘆いた。

「——それも、白瀧の強さってわけか」

そして同時に納得した。

過去の栄光を失い挫折を経験しても、今でも挫けることなく戦い続ける白瀧の強さを。

「ありがとなお前ら。俺も良い気分転換になったぜ。……白瀧に一つだけ伝えとけ。『俺は緑間にもお前にも負けねえ!』……ってな!」

「……リョーカイ。責任持って伝えとくよ」

「それじゃあ、決勝頑張って」

「おう! よく見とけ、そんでしっかりデータでも取ってる!」

だからこそ、火神は白瀧に敬意を示して言った。

必ず勝ち続けてみせると。その瞳には迷いなど微塵もなかった。強い光を宿し、火神はギラギラと燃えるように滾っていた。

火神と別れ、用を済ませた神崎達は飲み物を買いにコンビニへと向かう。

その道中、彼らの話題になったのはやはりというべきか火神のことであった。

「やっぱり熱いなあいつ。俺はああいうの嫌いじゃない」

「それにやっぱり体格がいいよね。決勝、どうなるかな?」

「良くも悪くもチームのムードメーカーのようなものですから、火神さんの出来次第、ってところじゃないですか?」

三人とも火神に対しては悪い印象ではない。神崎も西村も初対面の時は良い印象ではなかったが、今日改めて話して彼の印象が変わったようだ。

皆決勝戦がどういう結末を迎えるのか、楽しみで仕方がないと議論をかわす。

「でも……それでもやっぱり、試合は秀徳が有利なのかな？」

「だな。大坪さんもいるというのに、誠凛はインサイドが火神くらいだし。少なくともセンター勝負は確実に負けている」

「しかし緑間さんがいるから中を固めたら……」

「即緑間の餌食だ。……うっわ、怖い。マジ怖い。そんなチームと戦いたくないわ」

「……俺らが言うことじゃないですよ」

「まあ、僕らも以前そのチームと戦ったわけだからね」

大方の予想は秀徳が有利という見解である。

選手層の問題もあり、疲労もある。何よりも秀徳がインサイド主体であるに対し、誠凛のゴール下はそれほど強くないという問題もあった。

しかも緑間の加入により、外も恐ろしいほどの得点源である。まさに隙がない。

「俺らが戦った時は要が抑えてくれたからな。ただ誠凛は同じ戦法取ったら……死ぬな」

「そうですね。緑間さんを抑えられるのは火神さんくらいでしょうけど、そんなことしたら」

「インサイドが完璧に瓦解する。ミドルからゴール下まで秀徳ペースだろうね。オフェンスにしたって厳しい」

誠凛高校には優れた身体能力を持った選手は少ない。

その中でさらにキセキの世代と渡り合えるとなると、火神だけであろう。

この戦力の中で戦うとなると、どうしても厳しいだろうと思ってしまうのだ。

「改めて白瀧さんに感謝ですね。本当に助かった」

こうして西村の中で白瀧への感謝は量産される。

一日一日少しずつ信頼度が高まっていくのだ。……なお、すでにマックスである。それでも高まるのだ。

「そうだな。……しかし、俺ずっと前から気になってたんだけどさ」「なんですか?」

「西村って要のこと持ち上げすぎじゃね? 中学の時に何かあったの?」

神崎が西村へと問いかける。

言葉には出さずとも光月も同じことを思っていたのだろう、「たしかに」と頷いて西村を見る。

「そうですねえ」と西村は顎に手を置いて考えるそぶりを見せた。

「たしかにそれもありますよ。バスケットを教えてもらったし、勉強の世話だって見てもらいました。」

……でもそれだけじゃない。というか俺だけじゃなくて、帝光部員全員が多分白瀧さんのことを凄いと思ってますよ」

「どうしてだい? 強さとか実績ならそれこそキセキの世代の方が上なんじゃないのか?」

「そういう問題じゃないですよ。うーん、言葉にするのが難しい……」
「どうやったら上手く伝えられるのだろうか、と西村が頭を悩ませる。」

結局良い言葉が見当たらなかったために一つだけ二人に話すことにした。

「それじゃあ一つだけ言っておきますと……白瀧さんはキセキには成りえなかったとしても、帝光バスケット部の——帝光バスケット部員の『希望』でしたから」

「なんだそりゃ? ほとんど同じじゃねーか」

「全然違いますよ。少なくとも、キセキの世代は帝光部員にとって『絶望』でしたから」

「……?」

そう語る西村の表情はどこか寂しげで。

その発言に、二人は首をかしげるしかなかった。

一方、その帝光部員の『希望』と例えられた白瀧は緑間と向き合っていた。

「話って何だよ？ まさか誠凛のデータについて教えてくれとか言うんじゃないだろ？」

「当たり前だ。そのようなことお前に頼る必要などない。……それにもとより、あのような野蠻人^{サル}を相手にデータなど無意味なのだよ」

「サルって……まさか火神のことか？」

「それ以外にいるのか？」

「いや、いないな。うん」

おかしな例えに思わず苦笑する白瀧。

だが他に心当たりが見当たらなかったのか、白瀧は納得して頷いた。

もしもここに火神本人がいようものなら『誰がサルだ!』とツツコミを入れるだろうが、生憎だがツツコミは不在である。

「じゃあ何だ？ 今さらバスケの技を習得するなんて無理だろ？」

「わかりきったことを言うものではないのだよ。そういうことは常日頃から人事を尽くすからこそ意味がある。

……たしかに俺の言い方が悪かったな。正確に言えば、俺がこうしてお前と会っているだけでも効果はあるのだよ」

「は？ どういう意味だよ？ 俺の顔を見て落ち着く、つてか？」

たしかにこんな短時間で技術を習得することなど不可能だ。

緑間の言っていることがわからず首をかしげる白瀧。

場違いな発言に緑間は大きいため息をつき、呆れたように白瀧を見た。

「馬鹿なことを言うな。……わからないならば教えてやろう白瀧。

今日のおは朝占い、俺の蟹座は一位、ラッキーアイテムは狸の信楽焼。そしてラッキーカラーは銀なのだよ」

「いや誰もお前の占い結果なんて知りたくないから。そんなことより

も早く用件を……って、うん？ ラッキーカラー？ 銀？」

どうでもいいことだと白瀧は今の発言を流そうとするが、気になった単語を発見し、繰り返し返した。

「ふん。ようやく理解したか」

「……ちよつと待て。まさかお前……」

どこか得意げな緑間。

それを見て白瀧は自分の考えたことが的中していると感じ、恐る恐る先を促した。

「その通りだ。試合前にどうしてもラッキーカラー、『銀』を見たかったのだよ。」

お前がいるということとは試合中に高尾が『鷹の目』ホークアイで発見していたからな。都合がよかった」

「お前こそ馬鹿なことを言うな！ 俺はラッキーアイテムの代わりだってか!? てか、お前そのためだけに俺のことを呼び出したの!? ふざけんな！」

そして、高尾！ あいつも能力の無駄遣いをするな！ 使い方絶対に間違っていると断言できるから！」

頭が良いというのに、相変わらずどこか抜けている緑間であった。

白瀧は自慢の体力を生かし息をつかずにツツコミを入れる。お前も必要ないところで体力を使うなどは緑間は言わなかった。

「馬鹿め。ラッキーアイテムではない、ラッキーカラーなのだよ」

「どっちでもいいよそんなの」

「白瀧っ!!」

大事なことだと強調する緑間であったが、興味ないと一蹴する白瀧に怒りを覚えた。

白瀧も雰囲気からそれを察することはできたのだが構わずに話を戻すことにする。

「大体、銀色のものならそれこそいくらでも用意できるだろ？ 鏡とか、ケースとか」

「鏡などの金属類は破損する恐れがある。ケースはかさばる可能性があるからな。却下だ」

「やけに細かい！ ……しかし、それで銀髪の俺を呼び出すとはな。 ……何だろう。なんかむかつく」

どこか納得いかない白瀧であったが、これ以上は言っても無駄だと諦めることにした。

「そう言うな。助かったことは事実なのだよ。おかげで俺の今日の運氣はこれ以上ないほど高まっている。

おは朝占いに外れはない。これで俺のシユートはまず落ちない。 ……後は細かい調整か。残りは戻ってからだな」

「あーそうですか。本当におは朝廚が。これで外れたら笑いもんだな。

…でも、実際誠凛高校のことはどう思っているんだ？ 火神もそうだが、黒子もいるぞ？ 他のメンバーも中々の実力のようだし」

「お前は俺が負けると思うのか？」

相変わらず繊細な緑間である。そのポリシーにどこか呆れを覚えながら誠凛について問うが、無駄であった。

「愚問だな」と言う様に、緑間は言葉を返す。

たしかにこの男には愚問だったかもしれない、と白瀧は心の中でそう呟いた。

「いいや、思わない。 ……というかそんな光景想像できないし、何より俺が想像したくない」

「ほう。意外だな、お前は黒子を応援しているのかと思っただが、そうではないらしい」

「別に。たしかに俺は黒子のことを応援している。けど今日は公平な立場にいるつもりだ。別に会いに行ったりもしない。お前にだって呼ばれなかつたら会う気はなかつた。

俺はただ試合の行く末を見たかっただけだ。ただ……」

「ただ？」

そこで白瀧は一度言葉を区切る。

先を促す緑間に、白瀧は一度目を閉じて気持ちを整理してから続けた。

「ただ、俺は緑間お前にスリーを教えてもらったことを感謝しているし、何

より俺自身緑間^{お前}とももう一度戦いたいと思ってる」

「……ふん。なるほど、あくまで自分のためか」

「そうかもな。でも、やっぱりそれだけじゃない。練習試合の時も言っただろ？」

——今のバスケの方が楽しいと。

それを緑間にもわかって欲しかった。そしてそれは自分の手で果たしたい、約束を守りたいというものが白瀧にはあった。

「……もう話はないか？ ならば俺はそろそろ行かせてもらう」

それ以上の言葉を聞きたくなかったのか、緑間は逃げるように背中を向ける。

……ああ、これは拒絶だ。

やはりまだ緑間には言葉が届いていなかった。

眉一つ動かす事無く、ポーカーフェイスを貫くその仮面が、この時ばかりは嫌だと感じた。

「ああ。……頑張れよ」

だからせめて試合では全力で戦ってくれと声援を送る。

これが後押しになってくれれば良いと。この試合が切欠となって緑間が変わってくれれば良いと。

……だがこの時白瀧は気づいていなかった。

顔を背けた緑間の表情が、殺伐としたものに変わっていたことに。

「遅いぞ白瀧！」

「すみません、飲み物買いに行っって遅くなりました！」

「もう決勝戦、始まりそうだよ」

小林に謝罪を入れつつ席に腰掛ける白瀧。

荷物を片付けていると、光月より声をかけられ、言われるがままコートへと視線を向ける。

たしかに選手が入場し終わり、まもなく試合が始まろうとしていた。

両校の先発は以下の通り。

誠凛高校スターティングメンバー

日向順平（二年） SG 178 cm

伊月俊（二年） PG 174 cm

水戸部凛之助（二年） C 186 cm

火神大我（一年） PF 190 cm

黒子テツヤ（一年） ?? 168 cm

秀徳高校スターティングメンバー

大坪泰介（三年） C 198 cm

木村信介（三年） PF 187 cm

宮地清志（三年） SF 191 cm

緑間真太郎（一年） SG 195 cm

高尾和成（一年） PG 176 cm

両校とも準決勝と同じ前触れが、ベストメンバーが揃っていた。

「……相手が秀徳であるせいか、余計に誠凛が小柄に見えますね」

「ああ。秀徳はインサイドが強い。この致命的なまでの差をどう埋めるか……」

だが最善の状態でも、戦う前にすでに誠凛は高さというハンデがある。

果たしてこれをどう乗り切るか、それがポイントだと小林は考えた。

「さて、決戦だ」

「この試合に勝てば決勝リーグ。一気にインターハイに近づく！」

整列と挨拶を済ませ、ついに試合は始まりを迎える。

センターサークルに誠凛からは火神が、秀徳からは大坪が出てきた。

審判がゆつくりとボールを真上へと上げ――

「試合開始！」

――誠凛高校対秀徳高校。ついに運命の決戦が始まった。

「ぐっ!?!」

「ちっ!!」

熱烈な声援を受けた二人が跳躍し……そして互角に渡り合った。

「互角!？」

「まさか! 大坪とてこの数ヶ月また鍛えなおしたはずだというのに……」

「198センチと互角に競り合った……!」

「あの野郎!」

大坪が制するであろうと予測されていたジャンプボールが、互角であつた。

それだけ火神の身体能力の高さを示しているのだが……当然ながらこれに驚かないわけがなかった。

しかし結果的にボールを取ったのは宮地。彼がコート内で逸早くボールの落下点を予測していた。

宮地は日向に詰め寄られる前に確実に高尾へと送る。

一年生ながら司令塔という重大な役割を任されたその姿は実に落ち着いていた。

「よっしゃ、それじゃあさつそく決めましょうか! ……真、ちゃん!」

「えっ……?」

しかしそれも一瞬。

鋭いカットインで伊月を抜き去るように見せかけ、意識を自分に集中させたところでバックパス。

思わず伊月はその場で硬直、ボールの行く先を見て……緑間がボールを手にするところを目にした。

「悪いが、俺は本気でいかせてもらおうぞ!」

緑間が立っているのは丁度ハーフラインであつた。

リングにはかなり遠い位置である。それにも関わらず緑間はフリーであることを生かし、シュートを放った。

「はあっ!? 何やってんだお前……」

行動が理解できず火神は疑問を口にした。しかしそれでもすぐにゴール下へと駆け出す。

試合開始直後にこのようなことをする理由は奇襲くらいしか思い

つかなかった。

大坪達の空中戦を頼りにして、と判断してのことだったが……違った。

キセキの世代、緑間真太郎がそんな甘い男のはずがない。ボールは誰の手にも収まらずネットを射抜く。

「なっ……!?!」

「いきなり、ハーフコートからのシュートを撃ってきた……!!」

「やっぱりあのスリーえげつねえ!」

長く高い軌道を描き、リングを通過するシュート。

一度目になっている大仁多高校の選手達でさえ、やはりそのシュートには目を奪われてしまった。

緑間が放ったシュートは何ものにも防がれることなく、ただ目的のゴールネットを揺らす。

「勘違いをするな。俺のシュート範囲は、お前達の想像をはるかに超えているのだよ。」

ゆえに俺のシュートを止められない。そして俺のシュートは落ちない。……お前達は俺のスリーによってここで消える!」

呆然とする誠凛の選手達にさらに絶望を与えるように緑間がそう言い放つ。

さすがの火神でさえこの一撃には出鼻をくじかれ、表情が固まり緑間を見ることができなかつた。

「さっすが。いきなり容赦ないな。……計り間違えるなよ黒子。緑間の実力を」

それを目のあたりにして、白瀧は自らの友人に警告を鳴らすようにそう告げた。

誠凛高校対秀徳高校。高尾のアシストと緑間のスリーにより秀徳高校が先制。

(誠凛) 0対3 (秀徳)。秀徳高校の三点リード。

第二十七話 明かされた力

緑間のロングスリーによって始まった試合。

そのオープンングシュートは幕開けには派手すぎるほどの威力を持つシュートであった。

「聞いてねえぞこんなの。だって今のシュートはハーフラインから……」

「しかもノータッチで決めていたぞ！ 決してまぐれなんかじゃない！」

「……！」

当然のことながら、対戦相手である誠凛の選手達の、特にコートに立つ選手のダメージが大きい。

事前にここまでの秀徳の選手達のデータは取っていた。しかし緑間の力量がこれほどとは、想像できなかった。

この緑間の奇襲は誠凛の度肝を抜き、出鼻をくじくには十分な成果を果たす。

「……ハッ！ 上等じゃねえか！」

「火神……？」

最も、その中でも揺れない人間はいる。

ベンチとて驚愕の色で染まっている状況で、火神は笑みを浮かべていた。

「ようやくここまで来たんだ。その程度でびびってられっかよ！」

念願の『キセキの世代』との試合。それが果たせた今、火神の闘志はこれ以上ないほどにヒートアップしている。

むしろ緑間の強大な力を目にして、『ようやく試練を乗り越え、ここまで来た』と改めて感じ、恐怖はおろか嬉しささえ抱いていた。

バスケット馬鹿と思える考えではあるが、しかしその姿はチームメイトを勇気付けるといふ効果もある。最も、火神本人は自覚がないだろうが。

「ちっ。コイツは相変わらず単純というか、何と言うか……」

「まあこういう時に限っては頼もしいがな。……ハッ！ 緑間、秀徳

で新技を習得！ キタコレ！」

「……伊月。さつさとボール回して死ね」

「死ね……ええっ!? まだ第1Qなのに主将が正PGに死の宣告をするか!？」

「いいか。火神の言うとおり、いきなり怯んでたら一方的にやられちゃう。攻めるぞ！」

日向も火神の言葉を耳にして、意識を切り替えた。

つまらない冗談を吐く伊月には毒づき、チームに渴を入れる。

伊月は「仕方がないか」と息をこぼすと表情が変わり、水戸部も力強く頷き、走り出した。

こうして火神の姿に勇気付けられた誠凛であつたが——火神の他にもう一人怯まない選手がいた。

「何を……一体何を焦っているのですか、緑間君」

中学時代から緑間を良く知る黒子である。しかも黒子は火神と違い冷静な状態で。

黒子だけはその会場の中で唯一そのシュートの威力に驚くことなく、緑間が胸中で抱いている焦りを敏感に感じ取っていた。

緑間が得点を決め、誠凛の攻撃へと移る。

秀徳は誠凛の攻撃に対し、オーソドックスなマンツーマンディフェンスを展開した。

選手一人一人の能力を考慮した上でのディフェンス。火神に対しては緑間がマークにつき、エース同士の対決が繰り広げられることになった。

「火神！」

「ナイスパス！」

緑間を背に、ポストアップする火神。

伊月も自分に向けられる視線から意図を感じ取り、高尾のマークをかわしてパスをさばいた。

「止められるものならとめてみやがれ、緑間！」

「ちっ……！」

ボールは火神へ。自慢のパワーを活かし、インサイドへと押し込む。

緑間も何か言い返しその口を塞ぎたいところであるが、この対決は分が悪い。

有利である火神はとまらない。利き足を軸にターンし、ターンシュートを放つ。

(しまった……！)

「王者を舐めるなっ!!」

突如の動きに緑間は反応できなかった。

目線だけ火神を追う。火神はフリーだと確信し、そのままシュートを撃ったが、ボールは秀徳のセンター・大坪に叩き落とされた。

「なんだと!」

——今のは全力で跳んだはずだったのに。

渾身の力を真つ向から捻じ伏せるその姿に、思わず火神は冷や汗をかいた。

「舐められたものだな。力をつけてきたのが自分達だけだとは思わな
いことだ」

ブロックシュートを決めた大坪は言った。勝利に飢えているのは
お前達誠凛だけではないのだと。

ボールは空中に浮かび、いち早く反応した木村が飛びつき、確保する。

「っし、反撃だ。速攻!」

今一度攻撃の機会を得て、木村が声を張り上げて宮地へとパスをさばく。

「——そうは、させません!」

「なっ……!?!」

だがそのボールは黒子のステールによって遮られた。

今まで姿が見えず、突如現れた相手に木村は反応することはできなかった。

「ナイスだ、黒子！」

転々とするボールは伊月の手にわたり、そして再び火神へと渡った。

しかも今度はゴールと正対しているために、体を入れ替える必要はなくすぐにでもシュートを狙えるのだ。

「——撃たせるな、囲め!!」

それを見て、秀徳の監督・中谷は声を張り上げて指示を飛ばした。その声に反応してか、それとも言わずとも理解していたのか大坪・緑間に加えさらに宮地も火神にプレスをかけるように接近する。

ここまでの試合の流れから、誠凛が怖いのは火神という脅威な爆発力を誇る選手がいるからだと言っていた。

一回戦から数えてほとんど全ての試合、誠凛の初得点は火神。そしてその火神が得点してから波に乗ったかのように畳み掛けてくる。

だからこそ火神の得点は何としても阻止しなければならない。

先のポストプレイも強く印象に残っており、とにかく徹底して止めては。そう秀徳の選手は考えていた。

「そうでしょうね。きつとそう来ると——思っていたわよ！」

そしてそれは誠凛も予想していたことであった。

ベンチで監督であるリコがうつすらと笑みを浮かべる。

——すると火神は完全に囲まれる前にパスアウト。外にいる日向へとボールをさばいた。

「日向!?!」

(しかも、スクリーンまで!?)

外から中、そして再び中から外へ。このパスは絶妙であった。

火神に意識が集まり、日向はフリーになっている。

木村がチェツクに入ろうとするも、水戸部のスクリーンによって動きは遮られてしまう。

その間に日向はスリーを放つ。日向ほどの高精度のシューターをノーマークにしてはいけないというのに、秀徳はそれを怠ってしまった。

緑間と同様、ノータッチでリングを潜り抜ける。

「つしやあ!!」

「ナイツシュ、キャプテン!」

「火神もナイスパス!!」

シュートが決まるのを見届けて日向は吼えた。

誠凛ベンチも盛り上がる。これでお互いスリーを決めて3対3となった。

「……なるほど、人事を尽くした良いシュートなのだよ」

同じシューターとして思うところがあつたのだろう。緑間にしては珍しく、日向のスリーを褒め称えた。それだけ日向のスリーは脅威であるということの意味している。

「ぼさつとするな! 取られたならばすぐに取り返すぞ!」

大坪は大きな声で喝をいれる。

高尾に入れてリスタート。周囲を用心深く見て、警戒しながらゆつくりとボールを運ぶ。

センターラインでは火神が待ち構えている。大方緑間を徹底マークするということだろう。

最初のスリーを連続で決められては話にならない。ならば徹底的に緑間をマークする、という誠凛の考えであるのだろうか……

(まあ実際そうしなきゃ無理だって話なんだろうけどさ。秀徳は真ちゃんだけじゃないんだぜ?)

その考えを、高尾は甘いと考えた。

仮にも秀徳は東京都の王者。去年はIHベスト8まで勝ち残り、その実力は明らかである。

緑間がいない状況でそれだけの結果を残したというのに、火神抜きで誠凛で、そのメンバーを防ぎきれとは思えなかった。

センターラインを越え、やはり想像通り火神は緑間の徹底マークにつく。

緑間は外れる可能性のあるシュートは撃たないと知っている高尾は緑間を抜いた戦力でゲームを組み立てた。

高尾のマッチアップは伊月。誠凛もディフェンスはマンツーマンであった。

(やっぱインサイドが貧弱だな。容赦なく攻めさせてもらおうぜ！)

高尾のカットイン。

速さがウリである高尾のドライブは並大抵のものではない。そのスピードに、伊月は反応が遅れてしまう。

中央から一気に崩してやろうという考えであったが、

「——ツと!？」

高尾は突如停止。ボールを自分の体の後ろに回し、ドリブルを続ける。

先ほどボールがあつたところを誠凛の11番——黒子の手が通過したのだ。

「あつぶねえな、お前。危うく盗られるところだった。いきなり音もなくしのびよるとか、タチが悪いんじゃないの?」

「……?」

ステールを見破った高尾は、冗談交じりに語った。

一方の黒子は違和感を抱きながら高尾を見る。

——たしかに、タイミングはバツチりだったのに。

自分の動きはたしかに虚をついていた、その自信があるからこそ黒子にはかわされた理由がわからなかった。

だが黒子のヘルプで切り崩すことが難しくなったことも事実。

「宮地さん!」

高尾は右手を起用に操り、ビハインドパスを出す。まるで見ていないのに見えているかのように、正確に宮地へとわたった。

「ツシ! 任せとけ!」

——一閃。

宮地は一つフェイクを入れただけ。それだけで十分だった。

鋭いドライブで日向を抜き去る。一瞬の出来事に日向は身動きが取れなかった。

(ドリブル上手え! これが王者・秀徳のレギュラーか!)

「水戸部、ヘルプ!」

伊月が指示を出し、水戸部がフォローに入るが、その分ゴール下がから空きになってしまう。

宮地は水戸部が詰め寄ると、すかさず木村へとパス。危なげなく一本を沈めた。

「おっし、まず一本！」

見事な連携で確実に得点を決めた秀徳。

流れは渡さないという堅実なプレーで再び攻撃を成功させた。

誰もがその連携に『さすがだ』と思わず賞賛してしまう中――

「よこせ、黒子!!」

――火神が全力で敵陣へと走り出していた。

「……わかりました！」

相棒である黒子もその意図を理解し、すかさず行動に移る。

ボールを手にすると、その場で勢いをつけて回転。遠心力を利用し、ボールをレーザービームのように打ち出した。

コートを横断するほどの勢い。マークについていた緑間も走るが間に合わない。

火神はゴール下でボールを受け取ると、そのままダンクを決めた。

「なにっ!？」

「何だ今のパスは……?？」

「一瞬で切り替えした?？」

「ビックリシヨールか何かか、コレ?？」

秀徳が攻撃を決めて、すぐ反撃。あまりにも早過ぎる、速過ぎる攻撃であった。

ダンクもそうだが何よりもここまで実現させたパスに――パスをさばいた黒子に、会場にいる誰もが驚愕した。

「黒子ッ……!!」

「これでまた振り出しに戻りましたね、緑間君」

齒軋りして悔しさを醸し出している緑間に、黒子はそう言い返した。

――流れはまだわからない。どちらがとってもおかしくない、それほどどの好ゲームであった。

「……誠凛には派手な選手が多いようだな」

小林がうめく様に呟く。

第1Qが始まったばかりの、序盤だというのにも関わらずだ。

「ゴートの端から端まで貫くかのような鋭いパス。あれは彼以外の選手には真似出来まい」

PGであるからこそ、余計にその威力を理解できたのか。

小林は思わず鳥肌がたった。

もはやあれは速攻とかそういう次元の話ではない。バスケットであるにも関わらず、まるで野球のバックホームを思わせるほどの、矢のようなパス。

それを正確にゴール下に走りこむ選手にさばくなど、少なくとも小林は『自分には不可能だ』と考えていた。

「要は、11番^{黒子}のあれを知っていたのか？」

「……いや、あんなパスは知らない。おそらくあれは黒子が新たに身につけた技だろう。あの緑間も反応できていなかったし」

「俺も初めて見ました。そもそも体全体を使ったパスなんて、今まで実践したこともなかったんじゃないか……？」

中学時代の黒子の同僚である白瀧も西村も知らないという新しいパス。

それをこの大一番で決めるその度胸と実力は計り知れない。問いかけた光月は息を飲み、自分よりもはるかに小さい11番^{黒子}を見つめた。

身体能力も低く、影が薄いながらも自分のバスケットを貫くその姿に感動し、「——あれ!? どこに消えた!」……そしてその姿を見失った。

「それにしても、無名のわりには攻撃が形になってるよな、誠凛」

「……ああ。火神を起点としてゲームを組み立てている。ポストプレイがしっかりしているから、PGもやりやすいだろうな」

火神から他の選手にパスを回し、攻撃を展開させる一連の流れが様になっていた。

パスは外から中、中から外へと組み立てることで効果を増す。

今回は火神が珍しく機能しているおかげか、みごとに秀徳の不意をつくことができた。

「しかも個人の能力も中々高いですよ。」

一発でスリーを沈めた4番、日向さん緑間もちよつと興味を持ったのか、シュート決めた後見つめてましたし」

『キセキの世代ナンバーワンシューター』とまで呼ばれた緑間に注目されるとは並外れたことではない。

その分マークも厳しくなるだろうが、それこそシューターとして認められているという証でもある。

「身体能力は高くない。だがたしかに高精度のスリーは賞賛に値する」

「……そういえば、正邦戦でもとどめさしたあの人だったな……」

インサイド「中の火神、アウトサイド外の日向か」

先の正邦戦の最後の一発を思い出し、神崎は苦笑いした。

当たりだしたらもうその勢いは止められない。ここ一番で決めてくるという恐ろしさが日向にはあった。

中で得点を取るエースが火神ならば、日向は外からスリーを決めるスコアラーにしてチームを引つ張る主将ということだろう。

「それにPG、5番の伊月も良い。的確なパスを、しかも敵選手に取られないよう繊細にさばく。あれはおそらく秀徳の高尾と同じだろうな」

「高尾ですか？ 同じってことは……視野が広いということですか？」

「おそらかな。正邦戦の時も感じたが、あれも空間認識能力だろう」

秀徳の高尾と同じく、伊月もまた空間認識能力を持っているだろうと小林は言う。

それは参ったな、と白瀧は愚痴をこぼした。

立体的に——まるで上空からコートを見ているかのよう、視点を瞬時に入れ替える。

確かに伊月は常に冷静に、敵選手にカットされないパスルートを見

極めていた。

確実に得点を決めるために、パスコースを瞬時に判断し、繋げていく。簡単に見えて、秀徳のディフェンスを相手に、それをこなすのは至極困難なことである。

「そして8番^{水戸部}。黒木と同じ技巧派のセンターだろうが、まさに『ゴール下の仕事人』だ。」

大坪にはとても歯が立たないものの、だからこそ真っ向勝負を諦め、味方を助けることに専念している。

日向のアシストもそうだが、その後も火神と共に素早くスクリーンアウトをしていた。あの熾烈なゴール下でよく働いている」

こう言っつては水戸部に気の毒ではあるものの、大坪とマッチアップするには彼では荷が重すぎる。全国区のセンターと呼ばれる大坪はそれほど実力があるのだ。

しかしそんな大坪を相手に必死に食らい着いている。ポジションを取り合い、時には味方の補助に回り、味方を活かす。

大坪・木村とのゴール下での争いで体力を消耗するであろうに、チームのために動き回るその姿は賞賛ものであった。

「その三人に加えてダブルルキー、10番^{火神}と11番^{黒子}がいる」
「……こう見ると、誠凛もタレントが揃っていますね」

「以前の発言は撤回しなければいけないかもな」と白瀧は誠凛の選手達の邂逅を思い出して呟いた。

小林は感心しているが、白瀧も同意見であった。それだけ誠凛は質の高いチームだと言える。

「ただ、気になることが。10番^{火神}はポストプレイをほとんどしなかったはず。正邦戦でも外やミドルから切り込んでいたのに」
「それはおそらく、相手が緑間だからだ」

火神のプレイに違和感を抱いた光月に白瀧が答えた。
「攻撃を展開する、という理由もあるだろうけど、もう一つはマッチアップしている緑間より優位に立つためだろう。」

緑間はゴール下の動きには慣れていない。ポジションを考えれば当然だが、だからこそそこを狙ったんだろう。得点機会を狙える場所

をな」

緑間がスリーだけではなく、ディフェンスも上手いということは、対戦した大仁多の選手達も知っている。

しかし緑間とて万能ではない。本職ではないゴール下では動きもいつものそれではない。パワーならば火神の方が勝っているという点もあった。

だからこそ火神は本来ならばあまり行わないポストプレイに挑んでいるのだらうと白瀧は推察した。

「まさか火神さんがそこまで考えて……？」

「いや、それはないだろう。おそらく考えたのはあの監督だと思う」

西村の呟きに、白瀧は誠凛ベンチに座るリコを見ながら答えた。

火神がそこまで考えるとは思えないという点もあったが、何よりもチームとしての利点の方が大きいことから、火神ではないと考えた。そうなるに残ったのは当然監督であるリコ。正邦戦でも彼女がベンチから指揮を執っていたし、部員にも実力を認められていることはわかった。

「侮れないな、誠凛も」

これは本当に人材が揃っている、と改めて白瀧は思う。

「だけどそれでも、やっぱり王者・秀徳の方が一歩有利か……？」

試合を見ながら神崎は言った。

高尾のペネトレイトから大坪へとつながり、悠々とシュートを決める。

以前戦った練習試合のときよりも個人の能力はもちろん、連携が上手くなっているように見えた。

元々誠凛高校が圧倒的に身体能力では劣っている分、秀徳の連携に対応できていないようだった。

それに対して誠凛は伊月から黒子を中継とした高速パスを使い、秀徳ディフェンスを崩す。

秀徳もどこから来るかわからないパスには戸惑い、水戸部のシュートを許してしまった。

「いや、黒子さんのパスは止められない……」

「敵に回す分にはやつかいだなあ」

もちろん味方ならばこれほど頼もしいものはないのだけれど、と光月は付け加える。

西村の言うとおり、黒子のパスはわかっているも止められない。だからこそ誠凛も秀徳に食らいつける。

「……だが、それがいつまで続くか」

しかし、その黒子のパスはいつまで機能するのか？ 体力の問題もそうだが、高尾のような視野の広い選手にそう何度もミスディレクションが通用するのかな？

白瀧の不安はそこにあった。そして白瀧の不安を駆り立てるかのように、秀徳の中谷監督が立ち上がる。

「おーい、高尾！ 木村とマーク交代、黒子 11番につけ」

中谷はベンチから指示を出す。

宮地のレイアップが決まり、ディフェンスに戻る高尾達を呼んで指示したのは、マンツーマンのマーク交代であった。

黒子のマークが高尾、伊月のマークが木村と変更される。

「さっすがー、よくわかってますね監督！ ……待ちわびましたよ、ホント」

その指示を聞いた高尾は思わず笑みを深くした。

誠凛の攻撃。

伊月がボールを運び、黒子がカットによりマークを外したことを確認し、ボールを回す。

丁度日向がフリーになっている。そこにパスをさばけば得点できる。

黒子も日向とアイコンタクトを取り、日向にボールを渡すべく右手を振るった。

「悪いが、ここから先お前のパスは通用しねえよ！」

「——ッ!？」

ボールは予想通り日向へと向かっていく。

しかしその途中で、視界から完全に逃れたはずの高尾が立ちふさがり、ボールを叩いた。

「なっ!?!」

(黒子がステイルされた? こんな初めてだぞ!?)

今まで黒子のパスを防いだ者など存在しなかったからこそ、その衝撃は大きい。

誠凛のメンバー内で動揺が広がる。

ルーズボールは宮地が確保。誠凛の攻撃が失敗し、再び秀徳ボールとなった。

(これは、まずい……!)

この1プレイを見て、リコは立ち上がり、タイムアウトを申請した。

第1Qが始まってここまで両チームとも攻撃を決め続けた。

それが今回誠凛は防がれてしまった。しかも切り札である黒子が完全に見破られた状態で。

下手すればこのまま流れを失ってしまうと先を察知しての行動であつた。

しかし――

「よこすのだよ、高尾」

――問題は決してそれだけではなかつた。

緑間が高尾に声をかけて「ボールをよこせ」と語る。

誠凛の選手達は早々に戻り、火神もフロントラインで待ち構えている中、自軍深くで悠然と歩いている緑間に――

「……いいぜ。やってやれ真ちゃん」

――高尾はまるで他愛もない会話をするかのように、気軽にパスをさばいた。

「言ったはずだぞ、黒子。――俺のシュート範囲レンジは、お前達の想像をはるかに超えていると」

体に大きく力を溜め込み、バネのように解き放つ。

ゆつたりとしたフォームだがそこから放たれるボールは大きな弧を描く。

(な、んだよ……そりゃ!?)

火神はシュートを見届けるしかなかった。

いくらなんでもシュートであるはずがない、そう思っただけはいるものなぞか嫌な予感がする。

「そして——俺のシュートは落ちないと」

そして火神の予感は的中した。的中してしまった。

緑間の言葉と同時に、ボールはリングを突き抜ける。

『なっ……!?!』

その威力に誠凛の選手達は呆然とするしかない。

そして呆然としたままタイムアウトが成立し、リコに呼び寄せられてベンチに戻っていった。先ほどより幾分も気落ちした状態で。

第1Q残り四分。

(誠凛) 7対12 (秀徳)。秀徳高校の五点リードとなった場面で誠

凛高校は前半一つ目のタイムアウトを使用した。

第二十八話 エース全開

「誠凛高校、タイムアウトですー！」

リコの判断により試合が一時的に止まった。

誠凛の選手達は重い足取りでベンチへと戻っていく。それだけ先ほどの一撃の衝撃が大きかったようだ。

ベンチに座り込み、日向が苦々しく言葉を吐き捨てた。

「……つたく。レブロン・ジェームズでも相手にしてんのか、俺らは!?!」

「オールコートのスリーポイントシュート。……NBAでも試合中だったらありえないぞ。もう緑間は次元を超えている」

レブロン——レブロン・ジェームズ。NBAで活躍するバスケットプレイヤーであり、最強のSFと呼ばれている選手だ。

緑間のプレイはその選手にさえ匹敵するものだと錯覚してしまう。

しかしかつて彼が決めた動画を見たことがあるものの、それでもこの状況下で行うことではない。もはや緑間は自分達の理解を超えた領域に立っているのだと、伊月は断言した。

言葉に出さずとも考えていることは他のメンバーも同じなのか、言葉に詰まる。

ベンチ全体が暗い雰囲気に含まれようとする中、その状況を打破したのは他でもないリコであった。

「皆しっかりして！今はそんな風に落ち込んでいる時間はないわよ！」

一人一人に渴を入れていく。

完全に立ちなおさせることはできずとも、これで少なくとも意識を切り替えさせることはできた。

今はまだそれで良いだろうとリコは話を続ける。

「確かに緑間君は脅威だけど、もう彼について議論する場面じゃない。大事なのは、とにかく緑間君がそれを決めてきたという現状を、どうにかして打破すること。」

ありえないと考えて何も対策を取らないより、ありえると決めて取

り組む。今はそれだけに専念するの!」

もはや緑間の攻略法を考えるしかないのだと。

現実性の有無について、そのプレイの可否について考えている暇はないのだと。

「……ああ。それはわかってる」

言いたいことを理解して日向達も大きく頷く。

「でも、どうやってあの緑間を止めんの……?」

「そうね。……彼への対策も一応考えている。けど、それよりもまずは第一Qをこのまま秀徳に取られないために、これだけは言わせて」
だが緑間を止める姿が思い浮かばなかったのか、小金井がふとリコに問いかける。

リコとて考えがないわけではない。しかしそれよりも第一に言わないことが彼女にはあり――

「次の私達の攻撃を……確実に決めていこう!」

――スターター五人に、次の攻撃の成功を約束させた。

一方、秀徳高校のベンチ。

こちらは誠凛高校とは対照的に、選手達の間には多少の疲労は見られるもののいくらか精神的に余裕が見られた。

何よりも均衡していた状況を崩せたことが大きかった。

中谷監督も選手達をたたえながら、次の戦略について語り始める。
「ふむ。まあ反省点など色々言いたいことはあるが。……とりあえず次の誠凛の攻撃、必ず止めようか。それでこの第1Qは秀徳が取る」

『はい!』

タイムアウト後、誠凛高校から始まる攻撃を必ず止めるようにと選手たちに命ずる。

お互い連続で得点を決めていたために戦況が読めない展開が続いていた。それを高尾と緑間の個人プレイで一蹴した。

誠凜の監督——リコは流れを完全に手放すわけにはいかない、とタイムアウトを取ったものの、だからこそその直後の攻撃を止められれば、誠凜の勢いは沈下する。

それを理解しているからこそ中谷は選手達の気を引き締めさせる。大坪達が大らかな声で答えると、中谷も満足そうに頷く。

「うん、それでいい。」

……ここから先、緑間のマークがより厳しくなるだろう。

まずオフフェンスはこのタイムアウト後の相手の出方を窺いながら落ち着いて攻めていく。

高尾、それと宮地でボールを運んでくれ。誠凜は高さがそれほどではない。大坪と木村、二人を中心に中から攻めるとしよう」

余裕を見せつつも、しかし手は抜かない。

自分たちが優位に立っているとところからの確に攻めていく。

それでこそ王者。彼らはどんな状況下であろうとも全力で敵を打ち倒す。

「ディフェンスは引き続きマンツーマンを続行だ。」

誠凜の11番黒子は厄介だが、高尾が彼を封じこめている以上、攻撃のパターンは限られてくる。

そうなると攻撃が恐ろしいのは4番日向と10番火神。

宮地は抜かれることは覚悟の上で、きつちりマークにつくこと。とにかく4番日向をフリーにさせるな。

後はヘルプを素早く。誠凜をインサイドへ易々と入れさせるな。10番火神の侵入を抑えられれば、誠凜の攻撃力は半減する」

厄介な黒子を封じた今、得点率の高い日向と火神が狙い目となった。

これ以上誠凜の好きにはさせないようにと厳しく言い放つ。

「誠凜高校は勢いに乗ると強い。彼らを勢いづかせるな、徹底的に叩き潰せ！」

『はい!!』

最後に改めて選手に呼びかける。

集中力が途切れるようなことはない。先ほどよりも幾分か引き締

まった表情で五人は応じた。

そしてタイムアウトが宣告されて一分が経過。——再び試合が再開される。

「タイムアウト終了です！」

「……っし、行くぞ！」

十人の選手がコートへ戻っていく。

送り出すベンチの者達に焦りはなく、また選手達も落ち着いた表情であった。

伊月がボールをゆっくりと運んでいく。

秀徳デイフエンス、ならびに味方の立ち位置を確認する。マークはタイムアウト前と変わっていないなかった。しかし日向への当たりが厳しく、火神も中ラインサイドに侵入できない。

このタイムアウトで秀徳も意識を切り替えてきたのだろう。先ほどよりも幾分か気を引き締めている素振りを窺えた。

(まあ、昨年のリベンジ相手に油断なんて期待してないけどな)

それでも伊月は冷静に、木村のチェックをかわしながら戦況を窺う。

すると黒子が執拗なカットで高尾のマークを外しフリーになって、いることが確認できた。

「……ッ!!」

(よしっ、行くぞ！)

黒子が送るアイコンタクトを受け取り、伊月は黒子へとパスをさばく。

そのボールを見ながら、しかし黒子も冷静にコートを見渡し……火神が宮地に近づいていく姿を視野に入れた。

火神が壁役となり、行き先を塞ぐことで日向を一時的にフリーにする。しかも中から外へと走り出し、チェックに入る緑間から遠ざかるうとした。

(……わかってんだよ、それくらいよ！)

黒子がまさにパスを出そうと腕を振りぬくその瞬間、高尾はパスコースへと駆け出し、腕を伸ばす。

コート全体を見回す、鷹ホーク・アイの眼を持つ彼には黒子の味方を活かすチームプレイは通用しない。

「ええ、そうでしょうね。だからこそ、僕も全力で迎え撃ちます」

それを理解したのか、黒子がそう呟いた。

黒子は空中でボールを持つとそのまま両手で挟み込み、パスを中
断。

高尾の腕が空を切るところを見た後、彼とは逆方向へ向けて腕を振るった。

「なにっ……!?」

パスコースの瞬時の変更。高尾は黒子の動きを見切っていたがために、逆にこれに対応できなかった。

水戸部が大坪のマークをターンで上手くかわし、パスを受け取るとそのままシュートを決める。

誠凛高校、タイムアウト後の最初の攻撃をきっちり決めてきた。

(誠凛) 9対12 (秀徳)。

「ナイツシュ、水戸部！」

「ナイスパス、黒子！」

途絶えた流れを再び渡すわけにはいかない。誠凛も必死に食らいつく。

ベンチメンバーも必死に声を出し、五人を後押しした。

その姿に感心したのか、今のプレイに驚いたのか、高尾は微笑を浮かべて言う。

「あーらら。黒子あの野郎、やっかいなことしてくれんなー」

「おらっ高尾、ボケツとてんな。行くぞー！」

「はいはい、宮地さん。さくつと取り返していきましょーか」

宮地に声をかけられ、高尾もぼやくのをやめてボールを運ぶ。

取られたら取り返す。ただそれだけのこと。

スローインを受け取り、今度はどう組み立てていこうかと考えよう

としたところで、彼は緑間のマークにつく二人を目にした。

(……今度は火神と黒子のダブルチーム？　おいおいおい、誠凛期待のルーキー二人とか。随分真ちゃん人気者じゃねーか)

ま、本人は全然嬉しくねーだろうけどな、と呟く。

どこからでもシュートを撃てる緑間に対し、誠凛は火神と黒子の二人をつけて緑間を封じにきた。

高さのある火神、そして神出鬼没の黒子。たしかにこれ以上ないほど厄介な組み合わせだ。

(でもって残りの三人のゾーンで他を守ると。……まあ練習試合の時に大仁多も使ってきた手だし、別に悪くはねーのかな?)

そして誠凛は伊月をトップとして、伊月・日向・水戸部で三角形のゾーンを作る。

かつて秀徳と大仁多の練習試合の時にも使われた陣。たしかにこれならある程度の攻撃には対応できるだろう。

「でもや……」

しかし、それでも――

「大仁多と誠凛じゃ、選手の差つてもんがあるだろ！」

「ッ！　来るぞ！」

――秀徳のインサイドを防ぐことができるとは……思えない。

伊月が叫ぶ。攻撃が来ることを予測して。

瞬間、高尾はドライブからパスへと切り替えた。伊月を巧みな動きでかわすとローポストの大坪へとパスをさばく。

「来た！　三人とも、ここしつかり！」

リコもベンチから激を飛ばした。

すぐさまマークが厳しくなる。大坪の背後には日向と水戸部の二人。伊月もイーグル・アイで動きを見ている。

ハンズアップをしつかり行い、好きにはさせまいと隙のないディフェンスを見せる。

「悪いが、お前たちでは役者不足だ！」

大坪は振り返りゴールに正対する。

そして同時に視線のワンフェイク。つられて日向と水戸部の腰が

浮かんだ。

「ッ！ 逆だ、そつちじゃない！」

伊月が必死に呼びかける。

その瞬間——大坪のダツグイン。二人を真横から突破した。

「ッ——!!」

水戸部が体を入れ替えて追う。逆側の日向も回りこむ様に続いた。しかし大坪のジャンプシュートを止めるには、至らない。二人のブロックを越えて一本を決めた。

「よおし、いいぞ大坪！」

『大坪！ 大坪！ 大坪！ 大坪！』

中谷も声を荒げた。声援もより大きくなる。

秀徳とて一步も譲らない。(誠凛) 9対14 (秀徳)。

「……好き勝手やらせてたまるか！ 黒子、どんどんボール回せ！」

その光景を見て、また燃える男がいた。

誠凛のエース・火神である。

先ほどとは打って変わり、積極的にオフェンスに参加した。

伊月↓日向↓黒子↓火神と多彩なパスワークを通して火神はボールを手にした。

「また来たか。火神……！」

「当たり前まえだろうが！ あの程度で怯んでいられっか！」

マークにつくのは緑間だが、火神も負けていない。

果敢に仕掛けていく火神。緑間もこれに反応するが——

「俺がお前から決めねえと、意味がねえんだよ！」

急停止からのステッピンシュート。

「ちいっ！」

緑間がブロックに飛ぶ前にボールを放つ。

ボールは二度リングにぶつかった後、ネットを揺らした。(誠凛) 1

1対14 (秀徳)。

誠凛も得点を二桁に乘せてきた。

再び攻守が入れ替わる。すると悪態をつきながら高尾に、緑間が声をかけた。

「よこすのだよ、高尾！」

「おう、行つて来い！」

火神と黒子、二人を単独でかわしてみせたのだ。

高尾も言われるがまま緑間へとパスをさばく。

ボールを取るやいなや、すかさずボールをリリース。

「このやろっ！」

「ッ……！」

シュートを撃つ緑間の背後、火神が追いつき跳んだ。瞬間、緑間の体に悪寒が走る。

火神はブロックショットを狙って右腕を振るった。……しかしブロックは間に合わない。

ボールは再び高い軌道からリングを突き抜けた。(誠凛) 11対1

7 (秀徳)。

「くそっ!!」

「……ふん、その程度か。」

俺を舐めてもらつては困る。そう易々と止められると思わないことだな

その場で立ち尽くす火神を見て、緑間は得意げに言い放った。

そのまま緑間は二人を置き去りにディフェンスに戻る。

「わかっていましたが、やはり厳しいですね」

オフエンスはまだしも、緑間を抑えることは並大抵のことではない。

このままではまずい、という意味も含めて火神に黒子が語りかけるが……

「……厳しいだ？ ったく、テメーは何寝ぼけたこと言つてんだ？」

「え？」

「もう少した。もう少しでいける。……もう少しなんだ！」

返ってきた言葉は予想とははずれ、希望に満ちたものだった。

火神はどこか苦しそうに、しかし嬉しそうに言う。希望に満ちた目で。

(白瀧は前に言つてたな。 “キセキの世代” は最強の存在だって。試

練を乗り越えてようやく挑める挑戦だつて)

脳裏に浮かぶのは銀色の少年との会話。

火神が「キセキの世代」という高みに挑むための、真の理由に気づけた出来事である。

(たしかに強え。なのに、何でだろうな?)

スリーに加え、二人を難なくかわす身のこなし。

現状はとも良くないはずなのに、決して悪い気分ではなかった。

(今まで以上にバスケが楽しく思えてくるのは……!)

ようやく頂を目にして火神は戦慄した。

相手は圧倒的な存在だが、その相手と本気で戦えることがこれ以上ないほど嬉しかった。

白瀧に言われて、火神は無自覚に自分を抑制していたのかもしれない。

『燃えるようなバスケがしたい』。これは火神の長年の思いだった。それを『キセキの世代への挑戦』という形でしばらくの間封じ込め、そして自らを鍛え上げていた。

そしてその結果、ようやくここまでたどり着き――

「俺は諦めねえぞ、緑間! 必ずお前を倒してやる!」

――緑間の全力を目にしても、一度滾った火神の闘志は消えることなくさらに強まる。

今まで溜め込んでいた感情を全て爆発させて、火神は吼えた。

誠凛高校対秀徳高校。

第一Qから激しい試合を繰り広げられ、観客もこれ以上ないほどに沸いていた。

偵察に来ていた大仁多高校の選手達も試合展開を見て胸の高まりを覚えている。

「……やばいな、両校とも。正直どっちが勝つかまったく予想がつかねーや」

神崎が恐る恐る呟いた。

無名のダークホースとインターハイ常連の王者。

押ししているのはどちらなのか、それは誰にもわからない。それほどまでに白熱した試合なのだ。

「タイムアウト後、てつきり黒子さんはオフエンスには参加しないかと思っただのに、普通に貢献してますからね。そのおかげで相変わらず誠凛は高速のパス回しを展開している」

「でも彼の動きはもう高尾に見抜かれているんじゃないのかな？ それなら何で……？」

黒子の変わらぬ技術に感心する西村。

タイムアウト後も黒子は攻撃に積極的に参加している。

そのおかげでパスもスムーズに繋がる。

しかし黒子のミスディレクションは高尾の鷹の目で封じられたはず。それなのになぜ通用するのかと光月が疑問を投げかけた。

「見抜いているよ。だからこそ、黒子もそれに気づいて、一時的にボールを止める動作を入れたんだ」

その疑問に白瀧が答える。

「タイムアウト後の攻撃、誠凛がいきなり黒子を使ってきたらどろ？」

「うん、センターが決めたやつだね」

「あの時黒子はパスを一時的に中断してコースを変更した。」

黒子はボールに触っている時間が極端に短いから、パスを封じたい高尾は逸早く動いてボールをカットしたい。

……だからこそ黒子はその動きを読んでボールを止めた。そしてすかさず他の選手にパス。人間観察に長けたやつだからな、相手の癖を読んだのだろう」

狙われていることを知っているからこそ、その逆をつく。

高尾の性格とプレイスタイルを読んだ上での奇襲攻撃だったというのだ。

「パスのフェイントを入れてきたということか。たしかにそれならば、瞬時にパスを出す黒子を止めることは難しい」

「はい。……ですが、理解はできても到底納得はできません」

黒子の考えを理解して小林は頷く。

しかし黒子の考えに理解を示しながらも、彼の行動に対して批判的に言った。

「どういう意味だ」という小林の問いに白瀧は淡々と答える。

「黒子が普段ボールを持たない理由は、自身の存在感を消すためです。

しかしボールを持つということはそれだけそのプレイヤーに注目が集まる。

一時的には良いでしょうが、このままでは黒子の印象が強くなってしまふ。それこそ高尾が有利になりますよ」

——このままではミステイレクションが意味を成さなくなると。

たしかに黒子は自分から意識を逸らすためにボールを持つ機会が少ない。

しかし今はどうだろうか？ 高尾をかわすためとはいえ、自分に意識を集めるようなプレイをしている。

その一点があるからこそ、白瀧は黒子の動きには納得できずにいた。

そう言われると試合内容としては良くない。

「なるほどな」

「たしかに、黒子さんは試合を通して出れないから尚更ですよね」

小林に続き、西村も納得して追従した。

果たしてこれからどうするのだろうか、という期待も込めて。

「でも、それを抜きにしても誠凛強いぜ？ 開始直後からきっちり決めてきたし」

「うん。しかもあえて得点屋スコアラーの二人を囷こにして、三人で繋げてたもんね」

話題を変えようと神崎が先のプレイを思い出しながら言う。

光月もその一連の動きに感心したように呟いた。

タイムアウト直後の誠凛の攻撃。

日向や火神と右サイドに展開していたものの、誠凛はあえて黒子を經由し、フィンニッシュは水戸部であった。

チームの得点率が高い二人を使わずに連携で得点した誠凛。その

動きは見事であった。

「で、その後はそれぞれ個人プレイでしたけどね」

「秀徳は大坪と緑間を、誠凛は火神を使ってきたな」

「お互いがお互いの防御を破った形だが……少し、心配だな」

「心配って、何がですか？」

不安げな表情を浮かべる小林に、西村が問いかける。

「……大坪のことだ。ただでさえ接触の激しいゴール下で二試合目。そしてあの誠凛の厳しいチェック。

秀徳を封じるためだけのゾーンではないな。おそらく、誠凛は大坪の消耗を狙っている」

一見緑間対策のためのゾーンとも思える誠凛のディフェンス。

しかし小林は観客席から見ているとそれだけとは思えず、好敵手とに厳しい目つきを向けていた。

……そしてそれぞれの思惑を他所に、時間だけは刻々と過ぎていく。

第一Qにおける両校の激しい得点の奪い合いは最終的に（誠凛）18対21（秀徳）と、誠凛が一本差にまで追い上げて終了した。

このまま試合は点の取り合い——ランガン勝負に持ち込まれると予想された。

しかし……

「うーん。あんまり、良くはないかな」

第二Q終了後、控え室に戻った中谷の表情は優れない。

秀徳の選手達を前にして不満を隠そうとしなかった。

「緑間のダブルチーム。10番火と11番神《黒子》についてはまあ、大丈夫だろう」

顎を触りながら中谷は言う。

散々秀徳のエースを苦しめた二人だが、これに対しては特に不安はなかった。

「はい。少なくとも11番は次の第三Qでは下がるはずですよ」

「そうだねー。今までの試合でも、中盤で彼はベンチに下がることが多かったからね。」

第二Qも連続で出場した以上、彼はまず間違いなく次の10分間は出ないだろう」

大坪の言うとおりに、これまでのデータでは黒子は中盤で下がる展開が多かった。

終盤の追い上げのために切り札を取っておくことは当然。誠凛とて例外ではない。

「ただ……問題はそこじゃない。誠凛の潔いほどのゾーンディフェンスの方だ」

それを耳にして、選手達の表情が曇る。

各々が現状を理解しているということを表していた。

「ミドルは仕方がないとして、中を固めてきた。そのせいで第二Qはロスコアになってしまったからね」

視野の広い伊月が全体をカバーし、日向と水戸部がゴール下を徹底的に固める誠凛。

高尾や宮地、そして木村はフリーの状況が多かったものの、その代わり大坪のダメージは大きい。

時には二人の上から決める場合もあったのだが、体力を大きく消耗してしまったのだ。

緑間もダブルチームを突破することは容易ではなく、また黒子のステールもあって、シュートを撃つ機会は殆どなかった。外れる可能性があるシュートは撃たないという緑間の性格も悪い方向へと作用してしまった。

そのせいで前半戦が終わった今、得点は(誠凛)30対34(秀徳)。第一Qの勢いが嘘のように沈黙してしまっている。

「後半は緑間を中心に攻める。10番がいなければダブルチームもそう機能しないだろう。」

「だから緑間、第三Qはもっと積極的に攻めてくれ。遠慮は無用だ」

「……はい。わかりました」

監督の忠告に答える緑間だが、余裕は感じられなかった。

尊大な態度を取る彼にしては珍しい素振り。そのせいか今まで彼中心のプレイは嫌っていた先輩達は声をかけない。

逆に緑間の様子が気になった高尾が声をかける。

「どうしたよ真ちゃん？ ひよつとして全然シュートを撃てなかったから気落ちしてる？」

「黙れ高尾。そんなわけないのだよ。……そんなわけが、ない」

高尾の好意をよそに、緑間はそっぽを向いて高尾を意識から外した。

(何だというのだ。……一体何なのだよ、あの男 火神は!?)

「憎たらしく感じている」という本心を隠すように。苛立ちを抑えながらも緑間は先の試合を思い出す。

第二Q。緑間はたしかにダブルチームを突破することは少なかった。

しかし、何度か突破することはあった。黒子のステイルも受けずにボールを手にしたこともあった。

それでも……それでも彼はスリーを撃つことができなかった。

(俺が、あいつに止められると思った？ あいつのブロックを恐れたとでも言うのか……!?)

原因は誠凛のエース、火神。

たしかに実力はほんの少しは認めていた。しかしあくまで自分には及ばない、気に食わない相手だと考えていた。

それなのに、いざ試合で対面すればどうだ？ 第二Qでボールを持つている時。背後から、真横から追いかけてくる火神が視界に入った瞬間、緑間はボールを高尾に戻していた。

緑間は、火神を脅威と感じ取ったからだ。外れるという可能性が思い浮かんだためだ。

そのせいで攻撃もリズムに乗ることが出来ず、結果的にロースコアに終わる原因の一因となってしまった。

「そのようなことが、あつてたまるか……」

これ以上、不甲斐ない姿を見せるわけにはいかない。

緑間の闘志が再び燃え滾る。そして同時に、ある記憶が蘇ってきた。

（俺が決める。俺が一人で決める。そうでなければ、それを証明しなければ……あいつは、何のために犠牲になったというのだ）

彼の脳内に浮かんだのは、一人の男の姿だった。

緑間と同様に、あるいはそれ以上に人事を尽くした。それでも、それでも天命に選ばれなかった男の姿だった。

「皆、よく頑張ってくれたわね！ 後半戦に向けて、まずは栄養補給をしっかりと！ レモンはちみつ漬け持ってきたわよ!!」

一方、誠凛高校控え室では活発な声が響く。

リコが前半戦の奮戦を讃え、自宅で作ったレモンはちみつ漬けを取り出したのである。

「おお！ さすが監督！」

「ありがとな。これで後半戦も……」

戦える、と言おうとして日向は言葉を止めた。

他の選手達の表情も固まる。監督の言うレモンはちみつ漬けを目にしたために。

「あの、監督。コレ何？」

小金井が指差す先にあるのは……タッパーに広がるはちみつの上にごろりと浮かんでいる、レモンである。カットしていないそのままの大きさのレモンである。

「何って……だからレモンはちみつ漬けでしょ？」

何も間違っていることはないだろうとリコは不思議そうに首をかしげる。

「どうしてレモンはそのままなの!？」

「いっつも『切って』って言ってるじゃん！」

「いや、だって、そのままの方が大きいし、きちんと洗ったから大丈夫かと……」

『駄目だよ!!』

だが、部員一同の反論を食らって、リコはあつという間に撃沈した。「水戸部、持ってきてるか?」

「……」

伊月に問われ、水戸部はコクリと頷き、彼が作ったレモンはちみつ漬けを取り出した。

誠凛高校バスケ内では最も料理が上手い水戸部である。こういった事態にも慣れていた。

次々と水戸部の下に集まり、栄養補給を行うメンバー。それを見て、リコは悲しげに視線を逸らすしかなかった。

しばらく補給の時間が続き、全員が落ち着いたところで復活したりコが全員に呼びかける。

「それじゃあ、後半戦の話に移るわよ!」

メンバーの表情も真剣なものへと変わる。

こうした意識の切り替えはしっかりとできていた。

「まず一つ。……黒子君は第三Qは下がってもらおうわ。最終Qまで体力とミスディレクションの回復に努めて」

「はい」

リコの視線の先は黒子へ。

本人も力のことを自覚しているのか、表情一つ変えることなく頷く。

「秀徳は高さがあるから、黒子君のかわりに土田君を投入。」

そしてゾーンは継続するけど、緑間君のマークには火神君と日向君が入って……」

「カントク! ちょっといいか、ですか?」

「うん? 何、火神君?」

火神は慣れぬ敬語を用いてリコの話を遮る。

彼がマークしている緑間の話をしていたから、何か気になることでもあったのだろうか、リコは勘ぐるが……

「緑間には、ボックススワンでつかせてくんねーっすか?」

「……え?」

さすがに、この返答は想像していなかった。

単独で緑間のマークにつくなど、まだ火神には無理だと思っていたから。

それは当然他のメンバーも同じことで、火神の提案には反論が募る。

「まさか火神。お前、一人で緑間を抑える気かよ!？」

「おい、いくらなんでもそれは無茶だ！ たしかに前半は緑間のスリーの回数は少なかったけど、それは黒子とのダブルチームだったからこそで……」

しかし、そんな中でも……

「今なら大丈夫だと思うんだ、です。今度こそ俺は緑間を止めてやる！」

火神は自分の力を信じ、意志を貫き通す。

「……出てきたか」

10分間のインターバルが終了。

両校の選手たちがコートへと戻ってくる。

泣いても笑っても試合はあと20分のみ。選手達の表情からは闘志があふれ出していた。

「黒子さんは、ベンチみたいっすね」

「……ああ。第二Qまでずっと休む事無く出場していたからな。無理もない」

秀徳高校はメンバーがそのままだが、誠凛は11番黒子が下がり、代わりに二年生の9番土田が入った。

仕方がないこととはいえども、切り札とも言える黒子がない状況下。果たして第三Qを誠凛が乗り切ることができるのだろうかと不安が募る。

「このような状況下でチームを支えられるか。今、お前は真価を問われているぞ。——火神」

白瀧の視線の先にいるのは火神。

果たしてどちらに勝利の女神は微笑むのか、それは誰にもわからなかった。

選手達を見送る中、小金井が心配そうにリコに問いかける。

「……本当に良かったの、カントク？」

「何が」とは言葉にしなくてもわかる。

果たして本当に火神一人に緑間を任せてよいのかと。

『……わかった。緑間君は火神君に任せる』

『カントク!?!』

『ただし、こちらの指示には従ってもらわよ。その時は絶対に個人で動かないで』

『はあ。……カントクがそう言うなら仕方がねえか』

『わかった。それなら俺達も火神の力を信じよう。頼むぞ、火神』

『……はい！ 了解っス！』

——あの時。

結局リコは火神の提案を受け入れた。日向や伊月を初めとしたレギュラーも、判断に従い、火神を信じた。

たしかにボックスワンならば秀徳の攻撃を防ぐ確立も増えることだろう。土田が入ることでインサイドの強化にもなっている。

しかしそれと同時に、肝心の緑間のスリーが増えるようなことになれば……この作戦は逆効果になるのではないかという不安があった。

「良いのよ。私達のエースを信じなさい」

それでもリコの目に迷いはなく、火神をまっすぐ見つめている。

始まる前から緑間と無言の圧力を掛け合っており、集中力の高さを示していた。

「僕も、これでよかったと思います」

黒子も賛同の意を示した。

先ほどは殆ど口出ししなかった黒子であるが、彼にも思うところが

あつたのかもしれない。

「よくはわかりませんが、無謀というわけではないと感じるんです」

それは直感か信頼かはわからない。

どちらにせよ、今の火神なら託しても大丈夫だとそう感じたのだ。

『これより、第三Qをはじめます！』

そして試合の再開を告げられる。

指示に従い、コート中央に選手が集まった。

「……火神」

すれ違う際に緑間が火神に声をかける。

「ここから先の後半戦。俺はもう躊躇しないのだよ。俺のスリーを持って、一気に決着をつけてやろう」

威圧感を醸し出して緑間は断言した。

言葉以上に強みを感じる。伊達に「キセキの世代」という看板を背負ってはいない。

「……いいぜ。そう簡単にやれるもんならやってみろ」

「何だど？」

火神もそれを感じ取り、しかしそれに怯むことはなく――

「俺はテメーらを倒すためにここまで勝ち上がってきたんだ。先輩達のためにも、絶対に勝ってやる」

あえて振り返ることはせず、言葉だけを残していった。

先輩達に無理な提案をしてしまったという負い目もある。

それに対して彼らは無条件で受け入れてくれた。信じてくれたその思いにも火神は答えなければならぬ。

火神は自分の役割を果たすべくより一掃気を引き締めた。

審判よりボールを受け取った木村がスローイン。高尾がボールを手取る。――第三Qが始まった。

第二十九話 一進一退

第三Q開始直後、高尾は前列の二人を揺さぶると、ゾーン内へ侵入することなく緑間へ鋭いパスを出した。

誠凛高校は後半戦開始早々ボックススワンを展開している。前列には伊月と日向が、後列には土田と水戸部が待ち構えており、そして外の緑間に対して火神が一人マークについている。

前半戦では緑間の本領が殆ど発揮されなかった現状から、より大坪や木村といった秀徳のゴール下を意識したように見えるこの布陣である。

ならば、とくと見せ付けるだけだ。

「秀徳の真^{うち}ちゃんを舐めんなよ？ ああ見えて燃えてるんだぜ？」

——王者・秀徳のエースの力を。監督の指示もあつた以上、このまま緑間が黙っているわけがなかった。高尾のエースを信じる気持ちに迷いはない。

「……火神。ここから先、今まで以上に本気で守ることを勧めるのだよ」

「ああつ!？」

一つ、忠告するように呟くと同時に——緑間がドリブルで仕掛けた。

「なっ——くそっ!？」

決して油断したわけではなかった。集中力が途切れたわけでもなかった。

しかしそれでも、火神が気がついたときには彼の横を突破されていた。

「緑間か!？」

己が担当するゾーンへの侵入を凶ろうとする緑間に、逸早く日向が反応する。

緑間はそれを目で確認しながらも、まるで障害になるものなどないかのように、急停止からノーフェイクでシュートを撃った。

日向のブロックは高さが届かず、火神もまた追いつくことができない

かった。

(だめだ、俺じゃコイツのシュートは止められない！)

(しかも今回はスリーポイントラインギリギリだから、タメも短い。追いつけねえ！)

高い打点からタメが短いシュートは一度抜かれたらとめようがない。

シュートは当然のようにネットをくぐった。

(誠凛) 30対37 (秀徳)。

「向こうはいきなり緑間君できたわね」

「なんてキレのあるドリブルだ。あれは黄瀬にも劣らない動きだぞ」

見事な動きを見せ付ける緑間に、誠凛のベンチは感心するばかりだ。

かつて練習試合で対戦した「キセキの世代」の一角・黄瀬のドリブルを彷彿させるかのような、それほど鋭いドリブルだった。

シューターでありながら、後半にきてこれほど鋭いドリブルを見せるところは、やはり伊達の相手ではないのだと再認識させる。

「ふん。止められるものなら止めてみる」

火神を一瞥して緑間はデífフェンスへ戻る。

「……くそつ。すんません、簡単に抜かれちゃって」

「気にすんな。最初から止めようなんてそれこそ無理な話だ」

日向が頭を下げる火神の肩を叩く。「次は止めるぞ」と言って走り出した。

(……といつても、オフフェンスも厳しいんだけどな)

「ボール回していくぞ！」

前半以上にマークが厳しくなっている現状を見て伊月は慎重にパスを回す。

火神に対する緑間のマークも厳しく、黒子も下がっている今、秀徳を相手に下手に動くことはできないのだ。

「……戦力差がある以上は仕方がないことだ。しかし、それではうちには勝てんよ」

誠凛のパス回しを見て敵の心境を悟った中谷が呟いた。

そして彼の眩きが真実であると証明するように、バシツとボールを叩く音が響く。

「ぐっ!？」

「きたー!」 大坪のブロックショット炸裂!」

ボールを回し、連携を活かして誠凛はインサイドから攻めた。

だが土田のシュートは秀徳のセンター・大坪によってブロックされる。

「その程度の攻撃、俺達には通用せんぞ!」

前半戦でかなり消耗したはずだが、その高さは未だに衰えない。気迫のこもったプレイを見せつける。

(全然疲れが見えない! さすがは歴戦の王者を率いる主将!)

「まずい、戻って!」

「ハッ……!」

土田が相手の凄みに押されて一瞬呆然とする中、リコの声が耳に入った。

大坪によって弾かれたボールは木村が押さえており、秀徳のカウンターへと繋がってしまったのである。

「速攻!」

宮地を先頭として、高尾と緑間もコートを駆ける。

「よっし、攻めろ!」

「速攻ー!!」

宮地と高尾が見事な連携でパス交換をしながら走った。

誠凛は途中でボールを奪うこともできず、三人はそのままゴールへと向かう。

「くそっ!」

「戻れ、戻れ!」

誠凛も必死に声を張り上げて全力で走る。だがここで選手一人一人の能力差が出てしまった。かろうじて守備に戻れたのは伊月と火神のみ。

(誰が攻めて来る……?)

三対二と数で負けている上に、個々の能力でも劣っている以上、相

手の動きを先読みするしかない。

伊月は広い視野を活かして冷静に三人の動きを観察した。

「っしー！」

高尾から宮地へ。

そしてフリースローラインで宮地が高尾にボールを戻す。

「フイニツシュは高尾だ！」

動きを読みすかさず伊月と火神が詰め寄る。

伊月は宮地へのリターンも警戒し、パスもケアできるように位置を取った。

「甘い甘い！」

二人のチェツクに対し、高尾は裏をかきビハインドパス。

そこには誰もいないはずだというのに。——否、そこに走りこんでいる人物が一人だけいた。

「ナイスパスなのだよ」

「——違う、緑間だ！ スリー！」

パスを受け取ったのは緑間だった。

落ち着いてボールを手にして腕を上げた。

「させるかよー！」

これ以上の失点は許さない、と火神が跳ぶ。

緑間を意識していたのか反応が早かった。タイミングもあつていた。

「……馬鹿め！ 俺がスリーだけではないと、理解したはずだろう！」

「ッ——しまった!?!」

しかし、緑間はシュートを撃たない。

ただのシュートフェイクに火神はつられてしまった。

先ほど同様に緑間は火神の横を駆け抜ける。こうなっては誠凛に止める術はない。

緑間は確実にミドルシュートを綺麗に沈めた。

(誠凛) 30対39 (秀徳)

「まずいな。前半は大人しかった緑間が、ここにきて本領発揮かよー！」
脅威であるスリーにドライブやフェイントを効果的に混ぜ込み、火

神を翻弄する緑間。

黒子の不在により秀徳の不意をつくこともできず、正攻法で挑むしかない誠凛は一気に追い詰められてしまった。

「伊月先輩、次の攻撃で俺に回してくれ！　じゃなかった、ください！」

焦る伊月に火神が声をかける。

ここを凌がなければ試合は立て直すことができなくなってしまうだろう。

エースとしての意地か、火神は「ここで自分が決めなければ」と気合を入れていた。

「ああ、頼むぞー！」

誠凛の反撃、ボールが火神へと通った。

火神対緑間。再びエース同士の対決である。

「……」

「……」

「……ッ！」

火神がドリブルを始めて数秒後、突如動き出した。

カットインに緑間も抜かれず火神の横にびったりついていく。

「駄目だ、抜けない！」

身体能力はほとんど互角。単なるスピードだけでは緑間を振り切ることはできない。

だがそこで火神は焦らなかった。ボールを体の後ろで切り返し、緑間をいなす。

「なっ——！」

「突破した！」

「行け、火神！」

事前の体の振り、そして小刻みなフェイントに緑間の体勢が一瞬崩れてしまった。

その間に火神はゴール下へと侵入する。

「させつか！」

秀徳のヘルプも早い。

すかさずゴール下には木村が立ちはだかった。

「そんなの知るか、決めるんだよ！」

相手を見ても火神は怯まない。そのまま突っ込む。

先に火神が、遅れて木村も跳んだ。

フェイクもなく一人で攻めるとは、秀徳レギュラーを舐めているのかとさえ宮地は思ってしまう。

「無謀なことを……木村！」

「叩き落としてやる！」

木村が手を懸命に伸ばし、シュートコースを塞ぐ。

……しかし、

(……あれ?)

火神が未だに最高点に達していない状況下で、木村の体は重力に従って落下していく。

(なんで、なんで俺の方が先に落ちてんだよ……!?)

「らあああああ!!」

ここまでの鬱憤を晴らすかのように、火神は木村の上からダンクを叩き込んだ。

(誠凛) 32対39 (秀徳)

「なっ……!?!」

「何だ、今のあいつのジャンプは?!」

たしかに火神の跳び高さはあったものの、これほど高く跳んでいたことはなかったはず。

異常なほどの滞空時間と最高到達点を見せた今のプレイは、秀徳の選手達を揺らがせるには十分であった。

その一方で誠凛の選手達は幾分か気が楽になる。

「いいぞ火神！」

「よく決めた！」

日向や伊月は火神の頭を叩き、彼のプレイを讃えた。

「先ほどのやつのだリブル、バックチェンジか。味な真似を……」

——バックチェンジ。体の後方からボールを通し、ボールを素早く左右に切り替えるドリブルである。

火神もストリートバスケットで鍛えただけあってボールハンドリングが上手い。

その技術を認めつつも、自分を抜き去った火神をにらみつけ、緑間は口をとがらせた。

(あの跳躍力。俺が警戒していたのはやはりあれか)

一連のプレイ全てが緑間にとって忌々しいものだった。

前半戦で緑間が無意識にシュートを止められると警戒していたのは、おそらくあの跳躍力のせいだろう。ここに来てさらなる段階へ踏み込んだと見える。

最も、それを知ったところで退くような人間ではないのだが。一つ息を零すともう一度闘志を滾らせた。

「気にするな！ 一本、行くぞ！」

大坪がボールを拾い、宮地が受け取る。

『……オウー！』

キャプテンの一言により、メンバーも落ち着いた表情で呼応した。派手なプレイを見た後だが秀徳の選手達はいつも通りゲームを組み立てていく。

「火神大我、か。たしかにすばらしい素質を持っている。だがそれでも秀徳は負けないよ」

秀徳のベンチの中谷は敵を評価しながらも、それでも自軍の優勢を信じている。

再び秀徳の攻撃。

ハイポストの宮地からローポストの木村にボールが通った。

「遠慮はいらんぞ！ どんどん攻めていけ、木村！」

中谷が声を張る。

大きく頷くと、木村はドリブルをしながら背中側に立つ土田に背中をぶつけた。

「……うぐっ！」

その勢いは強く、土田が体勢を崩してしまう。

誠凧のベンチメンバーと秀徳のレギュラー、その差は歴然であった。

生まれた隙を見逃さず木村はターンシュート。ボールはバックボードで衝突し、リングを通過する。

(誠凛) 32対41 (秀徳)

「よーっし！ すかさず返した！」

「ナイツシユ、木村！」

ゾーンデイフェンスに対し敢えてインサイドから攻め立てる秀徳。容赦なく攻撃を決めてきた。

「さあ、デイフェンス！」

速攻に備えてデイフェンスに戻る秀徳。

お互い声を掛け合い、隙はみせまいと気迫がこもっている。

(……くそっ。黒子もないせいでパス回しも極端に難しくなったか……！)

PGの伊月がボールを運ぶが、表情は暗い。

前半と比べて誠凛のパスは極端にペースが落ちている。

速攻を決めることも困難であり、後半から個々のマークも厳しくパスコースがほとんどないのだ。

伊月自身も高尾のマークを振り切れない。なんとか隙を見出せないかと思いをめぐらせ、一瞬伊月のドリブルが止まる。

「遅えよ！」

その一瞬をついて、高尾がボールをすばやく奪い取った。

「あっ……しまった!？」

「高尾のステイールだ！」

失敗を嘆いてももはや手遅れ。

高尾は間をおかずしてパスをさばいた。

「——まずい！」

ボールは緑間へと渡る。火神を振り切り、フリーの状態だ。

「よし、もらった！」

「行け緑間——ッ！」

緑間はそのままシュート体勢に入る。

百発百中、その言葉を体現するように、緑間はボールを放ち——

「……させつかあああああ!!！」

「なっ……!?!」

——そのボールは空中で火神に叩き落とされた。

「……馬鹿な!?!」

「緑間のシュートを、叩き落とすただと!?!」

敵も味方もこれには肝を冷やした。

一度シュートモーションに入ったならばとめられない、そう思っていた緑間のシュートを。火神はブロックしてみせたのだから。

ボールは転々とし、サイドラインから外に出てしまう。

「……アウトオブバウンズ! 秀徳^白ボール!」

審判の声でようやく我に返る選手達。

スローワーは木村だ。宮地がボールを受け取り、ドリブルで攻めていく。

皆表情には出さないものの、その心境は穏やかでなかった。

(さっきのオフセンスといい、緑間のブロックといい。なんだ、コイツは!?)

(真ちゃんのシュートは大坪さんだつて止められるものではねえつてのに……)

(全国でもあれほどの高さは類を見ない。常軌を逸した跳躍力だ!)

シュートを止められたのが緑間だからこそその衝撃は大きい。

不平不満こそあるものの、秀徳の選手達は緑間の実力は認めていた。

その緑間を単独で、かつ力づくで止めて見せたという点に驚かないわけがない。

「……高尾。ボールをよこせ」

「え!?! いや、でも火神のブロックは……」

「よこせと言ったのだよ!」

「ツ……!?! あ、ああ。わかったからそう急かすな」

緑間は声を荒げ、高尾に命じる。

シュートを決められた怒りからか、不甲斐なさを感じているのか。何にせよ今まで見たことのないような表情であった。

その気迫に押されて高尾は渋々と頷いた。

秀徳の攻撃。宮地と高尾がパス回しでゾーンの前衛を揺さぶると、タイミングを計って高尾が左45度の位置に立つ緑間へとパスをさばく。

「俺は、勝つー!」

絶妙のシュートフェイクが一つ入り、腕を下げる。

火神はフェイクを見抜いて跳ばなかったものの体の反応がわずかに遅れてしまう。

次の瞬間、緑間は一気にバックステップ。緑間と火神の間にマークが生まれた。

(しまった……!)

一番してはならない、シューターとの距離を開けてしまうという失態。

これならば止められないだろう。緑間は得意げな顔でシュートを放った。

(いや、まだだ! まだ間に合う。跳べ、止めろ!! 倒せ!!)

それでも火神は諦めなかった。

シュートそのものは止められなくても軌道を逸らすことさえできれば構わないと力を振り絞った。

すると緑間がシュートを確信したと同時に、火神の指先がわずかにボールに触れる。

その影響により、ボールはリングに当たって大きく跳ねた。

「ぐっ……!」

「まただ。緑間を連続ブロック!」

驚くことに緑間のスリーを二連続で防いってしまった。

さらにシュートが外れただけではない。

ボールが大きく跳ねたことにより、リング側に陣取っていた大坪・木村達はリバウンドを取ることができなかったのだ。

水戸部と土田は二人を逆にリング側へと押し込むと、水戸部がボールを確保する。

「ナイスだ火神、水戸部!」

「よこせ、速攻!!」

諦めかけていたりバウンドを確保した。この機を逃すことはない。日向が声を張り上げると、水戸部は領き、伊月へとパスをさばく。「もどれ、もどれ！」

誠凛のカウンター。

伊月と火神に対し、秀徳は高尾・宮路・緑間が戻った。

「悪いけど、ここは決めさせてもらおうよ！」

伊月のペネトレイトで高尾をおびき出す。

これによって中央が開き、火神が突入する。

アイコンタクトを受け取った伊月はすかさず火神へとパス。

緑間と宮路が待ち構える中、火神はいきなりジャンプし腕をふりかざした。

「正気か、火神！」

「舐めんじゃねえぞ一年坊！」

正面突破を図る火神に対し、緑間・宮路の二枚ブロック。

「火神！」

「ッ……！」

そんな中、彼らの真横から声がかかった。

火神は迷うことなくリングとは違う、声が届いた方向にパスアウト。

「こっちは一人で戦ってるわけじゃねえからな」

火神が向ける視線の先にいた、先ほどの声の主は——日向。

誠凛のもう一人の得点源、日向だった。

「しまった！」

フリーにしてはいけないとわかっていたのに、意識が火神に集中していた。

日向がスリーポイントシュートを撃つ。高尾が跳ぶが間に合わない。ボールはリングをくぐった。

(誠凛) 35対41 (秀徳)。その差は六点。

「ナイス、です！」

「ああ。お前にしてはナイスパスだぜ。さあ、まだまだ二本差だ！いけるぞ!!」

「おう！ デイフェンス一本とめるぞ！」

火神と拳を交わす日向。

落とすわけにはいかない勝負どころで日向もスイッチが入ったのか、普段以上に逞しく見える。

キャプテンの叫びに答えるよう誠凛の選手達も呼応して身を引き締める。流れは、そう簡単には渡さない。

いつしか、声援はこれ以上ないほど大きくなっていった。

始まったばかりのころは秀徳の応援の方が多かったというのに、今では誠凛を応援する声も秀徳と匹敵するほどになっている。

王者・秀徳を相手に一步も退かないその姿に、観客が誠凛に勝つて欲しいと望むようになった。誠凛が観客を味方につけたということだ。

「……こんなに攻守の入れ替えが激しい試合も、珍しい」

誰かに話しかけようとしたわけではない。気がついたら小林はそう呟いていた。それほどまでに試合に夢中になっていた。

元々バスケは攻守の入れ替わりが激しいスポーツである。しかしそうだとしても、誠凛対秀徳の攻防は激しかった。

「文字通り一進一退。火神さんが緑間さんのブロックを決めてからは、本当に両者互角の戦い……」

「秀徳は緑間のスリーと大坪さん達が個人技でゴール下を攻め、誠凛は火神を主体にミドルから仕掛ける。だが火神ばかりに気を取られてはいられない。外の日向もここの一番で決めてくる」

「かといって攻撃ばかりではないよ。デイフェンスも厳しい。高尾のスタイル、火神のブロック。一体何回攻撃のチャンスがつぶれたことやら」

黒子がベンチに下がったことにより一時はどうなるかと思われたが、その不安は火神の活躍によって消えた。

全国レベルである大坪や小林が驚くほどの跳躍力を活かした火神

のプレイは秀徳のブロックをものもしない。

また秀徳も誠凛の黒子という異例な存在が消えたことにより、チーム全体が動きやすくなり、ステイールが増えた。

「火神、誠凛のエースとして台頭したか。……すごいな、すごいけど」

白瀧は緑間と相対する火神の姿を目に焼き付けた。

自分ではできないプレイで緑間と互角以上に戦う火神を見て、何を思ったのだろうか。

少なくとも驚愕はある。いずれ火神が立ちはだかる相手だと想像していてもここまで早く成長するとは思ってもいなかった。

しかしそれ以上に思うところがありすぎて、白瀧の表情に笑みはない。新たな好敵手の誕生を祝う、目の前の接戦を楽しむ余裕はなかった。

「やつぱり、嫌だな」

なぜかはわからない。しかし胸が締め付けられているように苦しかった。

普通の人間ならば目の前の緊迫した試合を見て、盛り上がることはあってもこのように苦しむことなど何もないはずなのに。

——いや、一つだけ白瀧にはあった。白瀧は抱えている一つの約束が、目の前の現実を受け入れない。

「やつぱり俺は『キセキの世代』に、負けて欲しくない。俺以外の選手に、緑間が負けて欲しくないんだよ……」

これ以上緑間が苦戦している姿を見たくないのだと。

『キセキの世代』の打倒を謳う白瀧にとって、目の前で繰り広げられている試合を直視することは辛いことだった。

中立の立場でこの試合を見届けようと決めていたのに。……ここに至って、白瀧はこの場から逃げ出したくなかった。

（黒子のことは応援している。火神も凄いと思う。でも、緑間にはここで消えて欲しくない……）

どちらを応援してよいのかもわからず、白瀧はただ火神と緑間、二人の姿を視線で追う。

第三Q終了の知らせが響く中、「どうせなら両校とも勝ちあがって

くればばいいのにな」と白瀧は思った。

第三Qが終了。

(誠凛) 51対62 (秀徳)。秀徳が十一點のリードを保っている。だがリードが広がったこの状況下でも、追い詰められているのは秀徳であろう。

第三Q、誠凛は黒子を下げた状況であったというのに最後まで流れを完全なものにすることはできなかった。

誠凛の必死な粘りは点数として現れるだけではなく精神的にダメージを与える。

特に緑間の表情が苦々しいものだ。火神のブロックがこの第三Q内だけでも何度も炸裂した。

当然のことながら対策をしなかったわけではない。

ドリブル突破や高尾のスクリーンを使い、火神をかわした。しかしそれでも火神は食らいつく。

「……第四Q。ここから先も作戦は変わらない。緑間を中心に組み立てる」

「待ってくださいー！」

「なんだ、大坪」

秀徳ベンチでは中谷が選手達を見下ろしながら方針を語る。

しかしその言葉に大坪は賛同できず、乱れた息を整えながら口をはさんだ。

前半から厳しいマークを受け、大坪も疲労が溜まってきている。

特に第三Qは火神という圧倒的にゴール下に強い選手が現れ、リバウンドも苦戦を強いられるようになった。

何度も何度も跳躍し、体力も精神力も削り取られる。これ以上はチームの勝利のため、不利な展開にしたくはなかった。

「10番^{火神}のブロックに加え、第四Qからは11番^{黒子}も出てくるでしょう。そうなれば、緑間のスリーは機能しなくなります」

ゆえに中谷から発言の許可をもらった大坪は進言した。

このまま緑間主体の攻撃は効果がないと。

緑間から視線を感じたが、大坪も鋭い視線を返して黙らせた。

「……その心配はない」

しかし中谷はそれを否定する。

「何故ですか!？」

「あのジャンプはそうそうできやしないさ。10番^{火神}は第一Qから緑間に徹底的にマークしていた。

そこにあの跳躍、しかもそれだけではなく大坪や木村とゴール下での攻防も繰り広げている。おそらく最後まで跳べないだろう」

「しかし……」

「それなら、11番^{黒子}はどうするんですか？」

納得しつつもなおも引き下がらない大坪に代わり、木村が質問する。

「11番^{黒子}には高尾をつける。……もうすっかり見えているんじゃないかい？」

「はいっす。むしろ見えすぎなぐらい？」

視線を投げかけられた高尾は笑みで答える。

前半こそ黒子にしてやられた高尾だが、途中からは黒子の動きのペースを掴んでいた。

第三Qで回復していたようだが、今の高尾には黒子の姿はよく映っている。問題はなかった。

「それでいい。緑間を使い、10番^{火神}を早々に脱落させる。そうして10番^{火神}の爆発力がなくなれば、11番^{黒子}を封じられた誠凛はもう逆転は不可能になる」

その言葉を最後に、中谷は話を打ち切った。

「第四Qからはもう一度黒子君にでもらうわ。土田君と交代。ゴール下の仕事お疲れ様」

場所は少し変わって誠凛ベンチ。リコが選手達を集めていた。

やはり大方の予定通り交代の指示を。第三Qはずっと休憩に務めていた黒子と土田の交代を指示する。

「いやー、本当にすまないな。ほとんど俺の失点だ」

「いいえ。むしろあのゴール下で耐えてくれたわ。次の出番まで休んでて」

頭を下げる土田に気にしないように告げて、リコは視線を戻す。

やはり選手達の疲労は激しい。ゾーンディフェンスでここまで防いでいるものの、秀徳の激しい揺さぶりで誠凛の選手達は走り続けることを余儀なくされたのだから当然だ。

「秀徳をかき回す為にも黒子君の活躍は不可欠なんだけど、大丈夫そう?」

「はい。十分休めましたので」

頼もしい返事にリコも気分を良くする。

まだ誠凛は一度も秀徳から逆転していない。そして唯一逆転する機会がこの第四Qなのだ。黒子には嫌でも活躍してもらわなければ困る。

「それじゃあお願いね。……火神君、足はどう? どれくらいいける?」

黒子との確認を済ませ、リコは次に火神に問いかけた。

「そんなの最後までいけるぜ! ……いけるですよ!」

「ごめん、頼もしいけど今はそういう強がりいらなから」

苦笑しつつ、リコは火神の足を見る。

日向達以上に疲労が蓄積されていた。ロードワークの量を増やしていなければ、すでに限界を迎えていたかもしれないほどに。

「……多分、このままだと最後までもたない」

それを理解してリコは厳しい現実を火神に伝えた。

火神は攻守にわたって活躍してきた。その代償が今こうして響いている。

「火神君はここから先、ディフェンスに集中して。攻撃に参加するのはできるだけ控えて。」

速攻とか、秀徳の不意をつけるというのなら話は別だけど」

「でもそれじゃあー！」

『でも』ではありません」

「うぐっ……!?!」

納得できない火神であったが、突如黒子に頬を押されて口を閉ざしてしまふ。

「何しやがんだテメエ!？」

「火神君が最後まで持たなければそれこそ逆転できないんですよ？」

少しはカントクの言うこと聞いてください」

「いつつも聞いてんだろ！ てか、俺は最後までいけるって言ってるんだよー！」

黒子の頭を握り締め、火神は怒りを黒子へぶつける。

言っていることは黒子のほうが正しく、しかも日ごろの態度から『どの口がそれを言うんだ』と火神には周囲から白い目が向けられた。

「大丈夫です。オフエンスにしても、僕がパスを繋いでいけば火神君の負担も減つてよいでしょう？」

……大丈夫だと言いましたが、それに加えてもう一つ火神君用にと取っておいたパスがあるんです」

猛犬のようにうなり声を上げている火神を抑えるべく、黒子は火神にあることを告げた。

「皆、ここが正念場よ。ラストチャンス、しつかり！」

「ああ、わかってる。……ようし、お前ら！ 泣いても笑って最後の十分だ！ なんととしても逆転するぞ！」

『おうー！』

全員疲労はピークに達している。

そんな中でも誠凛は全員が声を張り上げ、試合に臨むのだった。

『第四Q、はじめます！』

初のIH出場を狙う誠凛。立ちはだかるは十年連続でIHに出場

している王者・秀徳。

試合を決する第四Q、最後の十分が開始する。

攻撃は誠凛から始まった。スローワーの日向が伊月へとパス。

慎重にボールを運ぶ中、視線は黒子へと向いた。その黒子には再び高尾がマークについている。

「よう。また出てきたのか、黒子。けどもうお前の好きにはさせないぜ……」

「……」

「何々、もう話すことはないってか？ つれねえなあ、本当」

「……」

高尾の言葉に黒子はまったく反応を示さない。

余裕がないのかはわからないが、高尾は気分を害することなく黒子を凝視した。

（見えてるぜ？ お前の動きはきっちり……！）

前半中に黒子の観察を済ませておいたことで鷹の目は完全に黒子の姿を視野に入れていた。

位置だけではなく速さ、そして黒子の動きまで把握している今なら、少しタイミングをずらすだけで高尾は反応できる。元より黒子の身体能力は高くない。だから後はこのまま黒子の動きを見切り続けるだけ。

（……あれ？）

しかし、突如鷹の目に違和感を覚える。

（なんだ、距離感がおかしい？）

確実に捉えているはずなのに、いつのまにか黒子との間隔を計れなくなってくる。

おかしい。たしかに自分は今、見えているはずなのに。前半しつかり見ていたはずなのに。

「ありえねえ！ ……どこだ!? どこに行きやがった!」

——気がついた時には、高尾の視野から黒子の姿は消えていた。

第四Q最初の攻撃、誠凛高校は再びコートに立った黒子を利用した。

ディフェンスの裏から通すパスは敵に奪われることなく、大坪の裏をかいた水戸部へ。

水戸部は落ち着いて二点を沈め、第四Q最初の得点を決めた。(誠凛) 53対62 (秀徳)。点差を一桁に縮める。

「……そういうことか」

「何かわかったのか？」

白瀧の呟きに反応した小林が何事かと問いかける。

それに対し白瀧は「前半の黒子のプレイですよ」と説明した。

「前半、黒子は自分の印象を強めていた。なぜわざわざ自分に意識を向けさせるのかと思いましたが、あれは普段していることの真逆。わざと自分に視線を集めさせたんです」

「わざと自分に？ でもそれじゃあ、要が危惧したように高尾の視線を逸らせないんじゃないの？」

「いや、普通の選手ならばそうだが高尾は別だ。高尾の空間認識能力は全体を見回す。だから、黒子はまずその視野を狭めるために自分だけに視線を集めさせた」

「……あつ！ そういうことですか！」

「そこまで聞いて西村は回答に至ったようだ。」

小林も理解したようだが、光月と神崎は未だに頭を悩ませている。

「つまり、高尾の視野を限定させたんだよ。高尾が黒子を防げたのは極端に視野が広いから。黒子一人を見ているわけではないからだ。」

それならば黒子一人に集中させて視野を限定させたあと、今度はもう一度自分から視野を逸らすミスディレクションを入れれば……」

『……高尾のマークをかわせる！』

「ああ」

ようやく二人も理解した。白瀧も大きく頷き、当の本人である黒子を見た。

今までこのような複雑なプレイは考えてもいなかったというのに。

白瀧は複雑な表情を浮かべた。

「絶対に止めるぞ！ 全員、足を止めるな！」

日向の渴が飛び交う。

気迫で負けるわけにはいかないのだと、すでに限界を迎えている体に鞭打った。

「ちっ！」

ボールを持つ宮地は攻めあぐねていた。

第四Q、黒子が戻ってきてから誠凛のディフェンスが変わっていたのである。

緑間のマークに火神という点は変わっていない。しかし大坪を水戸部・日向がダブルチームで封じ、視野の広い伊月と神出鬼没な黒子がミドルをケアしている。

チエツクが早く、また秀徳の二大スコアラーである緑間と大坪への徹底したマーク。中々シュートまで持ち込めない。

時間が過ぎる中、一度立て直そうとフリーの高尾へとパスを出す。

——そのパスを黒子が叩き落とした。

「うげっ!？」

「いつのまに——!？」

(というか、むしろ今までどこにいたんだよお前!?)

高尾でさえ黒子の位置を把握し切れなかった。黒子のステイールにより、ボールは伊月の手に収まる。

「速攻！」

伊月は逸早く反応した黒子へとパスをさばく。

お世辞にも上手いとは言い難いが、それでも中々のスピードで黒子はボールを運ぶ。

すると火神と緑間、二人の選手も追いついていることが確認できた。並ぶように走っているが、おそらく黒子よりも先にゴールにたどり着く。

「……では、頼みますよ火神君！」

ならばと黒子は火神に命運を託した。

ゴール目掛けてボールを山形に放つ。ボールの回転は出鱈目であり、とても入るとは思えない。

……しかし黒子の本分はシュートではなくパスである。彼が放ったボールは、空中で火神がキャッチした。

ボールを持つていない分、若干とはいえ足の負担は小さい。火神は空中で体勢を立て直し、シュートの体勢を取った。

「決めさせてもらうぜ、緑間！」

「させるか！」

緑間も黒子達の意図を理解して跳んだ。

リングにも達するほどの跳躍。緑間もそれだけ本気と言うことだ。お互いが本気を出している。しかしそれでも――

「うらっ!!」

――どちらかの勝利で決着はつく。

緑間のブロックは空を切る。火神のダブルクラッチ、緑間をかわして得点した。この攻防は、火神が打ち勝った。

(誠凛) 55対62 (秀徳)。七点差に詰め寄った。

「――ッ!!」

着地した緑間の表情が怒りのあまり歪む。

止めなければならぬ、勝たなければならない勝負であったというのに。――決められてしまった。

この結果が緑間に大きいのしかかった。

「どうですか、緑間君」

「……黒子！」

「僕だけでは何もできません。でも、こうして火神君を助けることはできる。誠凛^{チーム}を勝利に導くことはできる！」

自分の弱さを認めつつも、黒子は胸を張って緑間と向き合った。

チームメイトを信頼しているからこそできることだった。だからこそ黒子は迷うことなく勝負に出れた。

「……わからんな、黒子。何故だ。何故お前は……いや、お前達はその

ように仲間を思っただけで戦えるのだよ?」

それを、緑間は理解できなかった。

とても低く重い声で緑間は黒子にはつきりと問いかけた。

「俺達には、もはやチームプレイほど躊躇することは無いというのに」
その言葉は緑間のプレイスタイルを、彼のあり方そのものを示している。

「……お前はすでにわかっているだろう! チームのために戦ったからこそ、あのとき白瀧は潰されたのだぞ!!」

——ああ、だからこそ緑間はチームプレイを選べない。個人技に走るしかない。

「え……」

「……白瀧が、潰された?」

「何を言っただあいつ。……あつ、まさか!」

伊月は以前部室内で発見した二年前の記事を思い出した。白瀧が全中で負傷退場したという、あの記事を。

あの話題の最中、黒子の様子はただ事ではなかった。何か裏があったのだらうと思っただけだったが、もしも緑間が言っていることがまさにそれだと言うのなら、たしかに彼の怒りは納得できた。

「誰よりも帝光の仲間達のことを思い、チームプレイに徹した。その白瀧がどのような結末を辿ったのか、それをお前は忘れたとでも言うのか!」

緑間にしては珍しく、怒りを隠すことをせずただひたすら感情を打ち明けた。

第三十話 人事を尽くした男達

——今から三年前、緑間真太郎は帝光バスケット部に入部した。

「二年B組、緑間真太郎です。ポジションはSシューティングガード Gを希望、よろしく
願います」

バスケの強豪と名高い帝光だが、その先輩達を前にして自己紹介をする緑間の声に一切の震えはない。はつきりと強い意志がこもった声であった。

『強豪で凌ぎを削ることこそより強くなれる』。そう考えたのだ。

人事を尽くす己の力を疑うこともなく、緑間は入部テストでその力を発揮し、前代未聞の入部後の即一軍入りを果たした。

「よっし、休憩終了！ 次スクウェアパス！」

「はいっ！」

一軍の練習ともなるとその密度は想像を絶するものであった。それでも音を上げることとはしなかった。

ダッシュの後休憩時間を挟むとパス&ランの練習。ボールを受け、走りこむチームメイトにパス。自分も走り出しパスをキャッチすると再びパス。

さらにスリーメンやディフェンスのメニューなどをこなし、ようやく練習が終了する。

「集合！ ……これで今日の練習は終了とする」

「ありがとうございます！」

監督の解散の言葉を合図に部員達はわかれた。

何人かの部員は仲間の元に駆け寄り、話をしたりしているが緑間は違う。

その年に入部した一年生のうち、緑間の他にも四人の選手が同様に一軍入りを果たしている。しかし緑間はその他の仲間たちには特に興味を示すことはなく、練習以外での必要以上の接触は避けていた。緑間は解散となるとすぐに動き出し、打ち込み練習へと移った。

「……」

黙々とシュートを撃ち続ける。スリーポイントラインから撃って

いるにも関わらず、一本も外れる気配はない。

入部してから緑間はずつこの調子であった。

部活の用事や練習以外では特に他人と触れ合うことなく、ひたすら自主練習に励む。

真面目と言えば聞こえがよい。しかし必要最低限のコミュニケーションしか取らない為に、緑間の周囲にはあまり人が集まらない。

それは自覚しているはずだが、緑間は何も思うところがないのか、何も行動に移そうとはしなかった。

「——なあ、君。緑間君、だよな？　ちよつと良いか？」

「む？　……なんだ、俺に何か用か？」

「打ち込みの途中に悪い。ちよつと君にお願いがあつてさ」

話しかけられるとは珍しいなと思いつつながら、緑間は一度シユートイニングを中断し、後ろを振り返る。

そこにいたのは緑間と同じように、入部早々に一軍入りを果たした選手の一人——白瀧がいた。

「俺にスリーを教えてください？」

「俺がお前にスリーを？　何故だ、他に適任がいるだろう？」

白瀧が頭を下げる。

『何故自分が』と考えるのは当然だろう。

帝光には当然のことながら監督もコーチもいる。それなのになぜ自分に頼むのか、と緑間は疑問に感じた。

「いや、監督は普段練習に来ないし、コーチも忙しくて練習後はあまり時間が取れないって言われちゃつてさ。

そうなるとチームメイトでシユートが上手い選手に頼もう、つて思つたわけ。それで今日見てたら……」

「……俺が目に入った、というわけか？」

「そういうこと」

白瀧は満足げに頷き、緑間の言葉が正しいということを示した。

たしかに彼の言うとおり、帝光の監督は普段は練習を見にこない。通常はコーチが統率して、監督のつなぎ役となっている。しかしそのためかコーチも仕事が多いようで選手全てに時間を裂く余裕はな

かった。特にシューティングのようにアドバイスだけではなく、その選手を見続けなければならぬ練習に至ってはなおさらだ。

そこで白瀧はチームメイトの中でもシュートが上手い緑間に依頼したと言う。

「緑間君のシュート綺麗だし、フォームも乱れないから適任だと思っただ」

(……参ったな)

その言葉を心の底で嬉しいとは思いつつ、緑間は顔をしかめた。

別に付き合ってもよい。しかし自分の練習を遮ってまでわざわざ手伝ってやるほどの義理もないと考えた。

「……断るのだよ」

「あれ、駄目？ やっぱり急すぎた？」

「お前に教える理由が俺にはないのだよ。まして……」

そしてもう一つ、理由がある。

「俺は何の努力もせずに人を頼る人間を好まん。人事を尽くさないものに天命は下らない、近道しようなどと考えるな」

最初から人を頼ろうとする白瀧の姿勢を嫌ったのだ。

たしかに打ち込み練習はフォームをチェックするサポートが必要だ。それは緑間もわかっている。

だが相手の事情がそれを許そうとしない。

今まで緑間も白瀧を見ていたが、居残り練習にしてもチームメイトの100%がメインであり、シュート練習はさほどしていなかった。

その白瀧が、突如スリーを身につけたいからと誰かに頼み込みなど、都合がよい話だと思った。

「……そっか。悪かった、練習続けてくれ」

これ以上言っても無駄だと考えたのだろう。白瀧はその場を後にする。

緑間はそれを気にする素振りを見せず、打ち込み練習を再開した。やはりシュートは落ちない。

——翌日、朝6時30分。

(……酷い雨だな)

雨が降る中、緑間は傘を差して学校を目指す。右手に傘、左手にはラッキーアイテムのチョコレートを手に行っている状況だ。

前日の天気予報が見事に命中し、朝早くから雨が降っていた。

バスケット部の朝練は7時15分。雨だからといって遅れる訳にはいかない、と真面目な緑間はいつもよりも早い時間に家を出た。

その結果、余裕を持って学校に着くことができた。まだ時間があるので十分にストレッチをすることもできる。

更衣室で着替えを済ませて、一軍が使用する体育館へと向かう。

……すると、扉を開けようとしてボールの跳ねる音が耳に届いた。

「誰かいるのか？」

まだ時間は早い。それなのにもう練習に勤しむような選手がいるのだろうか。

疑問を抱きつつ、緑間は音を立てないようにそつと開いた。

……いた。バスケットの正面に立ち、シュートを繰り返す一人の男が。緑間も見ることがある、それどころか昨日話したばかりの男が。

「白瀧……？」

ポツリとその男の名前を呟く。当然のことながら相手の耳には届かない。

緑間が来たことに気づいていないのか、白瀧は打ち込みを続ける。

……だがフォームは安定性を欠き、シュートが決まる確立は定まらない。

「ああっ！ やっぱりまだ駄目か……」

白瀧はボールを回収しながら愚痴を零す。

焦りや悔しさが感じ取れる。しかしそれでも練習を止めることはしない。籠にボールを戻し、再び打ち込みを始めた。

その姿を見ていられなかったのか、緑間は一つ息を零して白瀧に近づいていく。

「はあ。……お前は一体何をしているのだよ」

「え？ あれ、緑間君か。おはよう」

「おはよう、ではないのだよ。何故こんな早くにお前がいるのだよ？」

「緑間君だって早いじゃん」

「俺のことはどうでも良いだろう。それで、何故こいつも早いのだ？」

「何故って言われても……」

昨日の出来事が原因だろうとは想像がついている。それでも緑間は問いかけた。

白瀧は頬をかきつつ、困ったような表情を浮かべて言った。

「今日雨が降っててコートが使えそうになかったから」

「コートだと？ 何を言っているのだよ？」

「ストリートコートのことだよ。近くの公園にあるだろ？ あそこのコート。この雨だから無理だと思って、コーチに電話したら『鍵は開けておく』って言われたんだ」

「ストリートコート？」

確認するように繰り返して問う。白瀧は首を縦に振った。

つまり白瀧が普段体育館だけでなくストリートコートを利用して練習をしているということだ。体育館の使用時間以外にも練習しているということだ。

別に人事を尽くしていないというわけではない。ただ緑間がそれを知らなかっただけ。

「……以前から個人的にシュートの練習をしていたのか？」

「まあね。もつとも緑間君みたいに上手くはいかないけど」

失敗したことに対し気恥ずかしさを覚え、白瀧は頭をかく。嘘ではないのだろう。

しかしそれならばなぜ昨日言わなかったのか。それが緑間には不思議でたまらなかった。

「それならば何故昨日はそう言わなかったのだよ？ お前とて努力をしていたならば、それを言えば良かっただろう」

だから思った事を全て口にした。

「まあ、たしかにそうかもしれないけどさ……」

そこで白瀧は言葉を区切る。言いたげだが、話したくないことなの

か。

わからないが緑間は口を挟むことなくその先を待つ。

「でもやっぱり、自分から他人に言いふらす練習なんて、努力とは呼ばないだろう?」

「なっ……!?!」

そしてその先の言葉を聞いて、緑間は目を丸くした。

「他人に認めて欲しくてやっているわけではない。だから自分から言うのは躊躇った。それだけだよ」

視線をバスケットに移し、またシュートを撃つていく白瀧。

入らずともリングに当たるところを見るに距離感の問題ないのだろう。たしかに練習をしているということとは理解できた。

「……もう一つ、聞きたいことがある」

「なんだ?」

緑間が白瀧に声をかける。白瀧は返事をしつつも今度は振り向かない。ずっとゴールだけを見ている。

緑間もそんな白瀧の姿を捉えながら、質問を投げかけた。

「なぜスリーを身につけようと思ったのだよ? お前にはお前だけの武器があるだろう」

視線の先は白瀧の足へ移る。

白瀧の武器は脚力であった。ドライブの技術もよく、敵陣を切り裂くその姿には緑間も実は感心していた。

そんな彼がなぜ急に思い立ったかのようにスリーを覚えようとしたのか、それが不思議だった。

その問いで白瀧の表情に影が濃くなる。やはり何か切欠があったのだろうか。

「……俺、あまり体格よくないのはわかるだろ?」

「ああ」

白瀧は背丈があまりない。

周囲の体格がよいせいで、白瀧は余計に小さく映ってしまう。

「そのせいで戦える環境が限られてくる。最近は速攻を防がれると全然得点を決められなくなった。」

ドライブが通用するうちはいいけど、
S F なんだしもつと
シュート力があつた方が戦えると思つたんだ」

「それでスリーをか」

「それともう一つ」

「何だ？」

ポジションの都合上、より高いシュートの技術が必要だと語る。それにさらに付け加える形で白瀧は話を続けた。

「外からシュートを決められたら、凄く気分が良くなるか？」

「……ほう」

「遠くから撃つて、そしてリングを通り抜ける瞬間。それが良いなと思つた。緑間君のシュートなんて本当にかすりもしないから、芸術かなにかかと思つたよ」

白瀧にもおそらく実体験もあつたのだろう。その様子感慨深く語る。

その中で緑間のスリーを褒め称える話も手伝つて、緑間は機嫌を良くした。

「なるほどな。……それは良い。それは良いぞ、白瀧」

「ん？ 良いつて、何が？」

「それは良い心がけだと、そう言つたのだよ」

満面の笑みを浮かべる緑間。

「あれ？ ひよつとして何か変なスイッチ入っちゃつた？」と白瀧は呟くが、緑間の耳には届かない。

(ふむ。どうやらこいつにはスリーの価値が通じるようだ)

一人、緑間は考える。スリーの価値を、そして重要さを。

緑間は自分のシュートに——ひいてはスリーポイントシュートに誇りを持っていた。

普通のシュートは二点しかももらえない、しかし遠くから撃てば三点ももらえる。

たかが一点と侮ることはできない。局地的にみればたいしたことではなくても、時間がたつにつれてその意味は大きくなっていくのだから。

そして遠くから撃つことで、当然ループも長くなる。その滞空時間の後、一気にリングを射抜く。そこまでの一連の流れは普通のシュートでは感じることはできない。その流れに緑間は価値を見出していた。

ゆえに自分と同じようにスリーに関心を抱き努力する白瀧を、緑間は認めた。

「えっと。緑間、さん？」

「他のやつらはたかがスリーと侮る者もいたが、いいだろう」

「……ああ、はい？」

疑問符を頭に浮かべる白瀧。突然の変化に困惑している。気を良くした緑間はそんな白瀧の心境に気づく事はない。

「ゆえに言わせてもらう。——やめておけ。それ以上やったところで無駄だ。何の意味もないのだよ」
「なっ!？」

突然出た発言に、白瀧は思わず手にしていたボールを零した。

無駄、何の意味もない。それは今までの努力を否定する言葉だ。それを白瀧が許せるはずもなく、

「ちよ、お前それはどういう——」

「間違ったフォームで打ち続けると悪い癖が身についてしまう。

まずはフォームを直すところからだ。……しかしさすがに今からでは無理か。時間が足りない」

「ことだ——つて、え？」

緑間に詰め寄ろうとしたが、その後の緑間の発言で動きが停止した。

何を言っているのかわからない。白瀧は緑間を見る。その先で緑間は笑みを浮かべた。

「今日の午後練の後からだ。俺が付き添う。お前の動きを見て、指示をだしていくのだよ」

「……本当か？ 本当に良いのか？」

先ほどは頑なまでに反対の意見だったはずなのに。白瀧は恐る恐る緑間に確認するが……

「人事を尽くす者を俺は評価する。しかし俺が教えるのだから中途半端は許さんぞ」

緑間はニヤリと笑みを浮かべて、その確認が間違いないということを証明した。

「それと同学年だから呼び捨てで構わないのだよ。そうでないと不自然に感じる」

「本当か!? ありがとう緑間君、じゃなかった緑間! 今度何かお菓子でもおごるよ!」

気を許し、緑間の頬が緩む。

白瀧も心底嬉しそうに笑い、緑間の肩を叩いた。

その素振りに気恥ずかしくなったのか緑間は視線を逸らす。どうやらあまり友達と接すること事態が少ないようだ。

「……ふん、そんなものはいらん。それではまるで俺がお菓子につられて教えたようなものではないか。お前はただ、試合で活躍すればそれでいい」

「ええ? 紫原とかならこれで何でも解決するのになあ。……でもチョコレート持ち歩いてるし、甘いもの好きなんじゃないの?」

「馬鹿め。これは今日のラッキーアイテムなのだよ。常に持ち歩いてるわけではない」

「ああ、なんだラッキーアイテムだったのか。それなら仕方がないか。……って、ラッキーアイテムって何?」

緑間が手にしているチョコレートが好きなものだと白瀧は思っていた。しかしそれがラッキーアイテムであったという事実を知り、納得することをやめて思わずツツコミを入れた。

「おは朝占いで言っているのだよ。今日のラッキーアイテムがチョコレート、そしてラッキーアイテムは肌身離さず持ち歩くことは当然だ」

「溶けちゃうぞ!」

「ふっ、その程度のこと想定していないとでも思ったのか?」

「え?」

「クーラーボックスを借りる手はずになっている。抜かりはないのだ」

よ」

「そこまでするものなのか!？」

「全力を尽くすからこそ意味があるのだよ」

当然のことだと、堂々と胸を張る緑間。

「……凄いの一言しか出てこないのだよ。馬鹿と天才は紙一重なのだよ」

「なっ、真似をするな! 馬鹿にしているのか!？」

緑間の意外な一面を見て、白瀧は複雑な表情を浮かべる。

口癖を真似て話すことは許せなかったのか、白瀧を問い詰める緑間。だが白瀧ははぐらかす一方で、話しているうちに時間だけが過ぎていく。

——苛立ちを覚えることもあつたけれど、こういう関係があつても悪くはない。緑間はそう思った。

そしてそれから数カ月後。ついに公式戦を迎え、緑間たち一年生も試合に出ることになった。

メンバーは固定されることはなかったが、それでも頻繁に試合に出る。

そしてその初戦で、白瀧はいきなりルーキーとは思えない活躍を見せ付けた。

「ディフェンスが甘いですよ!」

「ぐっ——!？」

素早い動きで敵を翻弄する。やがて相手は細かいフェイクで揺さぶりをかける白瀧の姿を、捉えきれなくなった。

白瀧は敵のマークを外して駆け出す。それを見てボールマンも白瀧へパスをさばいた。スリーポイントラインの外、ノーマークでボールを取る。

「しまった!」

チエックが遅く、プレッシャーをかけることさえできない。

白瀧は悠々とシュートを放つ。放物線を描き、ボールはリングに当たることなくネットを潜る。

先制の三点を決めると白瀧はディフェンスに戻りつつ、ベンチに腰掛ける緑間に声をかけた。

「よっし、どうだ緑間!」

「ふん。それくらい決めてもらわねば困るのだよ。むしろシュートタッチが悪い!」

「決めたのに駄目出し!?!」

得意げな白瀧に、彼の師匠たる緑間は厳しく言い放った。

あれから緑間の指導の下に練習を重ね、白瀧はスリーを武器にしていた。中に切り込み、外からも撃てるようになった白瀧はまさに脅威の存在となる。

その結果。彼は22得点、5アシストという成績を残し、チームの勝利に貢献。その後もその勢いは止まらず、帝光バスケット部が全国制覇を果たす立役者となった。

「『キセキの世代』、か」

「どうした緑間? 何見ているんだ?」

全国制覇から約一週間が経過した。

更衣室で緑間はある記事を目にして呟いた。

彼の呟きが気になった白瀧も背伸びをして、緑間が持つ記事に目を通す。

「……全国大会の記事?」

それはついこの間行われた、バスケの全国大会、中学生の部のものだった。

写真には緑間や白瀧といった一年生のももあり、記事のタイトルには『『キセキの世代』現る!』と書いてある。

「ああ。その中で、俺達帝光の一年を『キセキの世代』という称号をつけたそうなのだよ」

「なんだそれ？」

「俺達一年が五人も全国優勝に関わったのだ。一人ならまだしも、五人も同時に出現したことで、記者が『この世代はとんでもない』と考え、その呼び名をつけたらしい」

「『キセキの世代』ねえ。奇跡とはまた大げさというか、何と言うか」
少なくとも自分は奇跡などというものではないと白瀧は語る。

たしかに五人もの選手が一つのチームに同時に現れたのは奇跡なのかもしれないが、それでも言いすぎだと思う。

「これだけ注目が集まるとは。しかしこの五人のうち誰か一人でも抜けたら、どうなることか……」

「その心配はないだろ」

それに対し緑間はあまりにも五人を注目を集めすぎると苦言を呈した。

このような事を言っては新たな勢力が現れた時、その関係が壊れるのではないかという不安がある。また、もしも誰かに敗れた場合、その敗れた選手は一体どうなってしまうのかわからないという気がかりも。

そんな緑間の苦悩を吹き飛ばすように、白瀧は言った。

「俺達五人でここまで生き残っているんだぞ？　しかも皆成長している。全国で戦ったという実績も自信もある。これでもまだ不安があるか？」

白瀧は堂々と胸を張る。思い悩むことなどないのだと。

言っていることが頼もしく、またどこか面白くて。

「……ふん。お前も偶には言う時は言うな」

『偶に』は余計だろ！

微笑を浮かべて、白瀧に応えた。

普段のやり取りの中でも緑間は徐々に笑みを浮かべることが増えた。固く、慣れないものであったが、白瀧を中心に他のメンバーと過ごす時間も増えて。

ここから先、きつと記者が予想したように『キセキの世代』と呼ばれるような実績をこれからも残していくのだと思った。

——だから緑間も想像していなかった。わずか一年も経たないうちに、白瀧がその座を失うことになるうとは。想像したくも、なかった。

第三十一話 天命下らず、そして彼らはすれ違ふ

緑間達が二年生へと進級し、全中二連覇という目標へ向けて練習に励む中。

帝光中学の、彼らの今後を左右する出来事が起こった。

「二年、黄瀬涼太！ ポジションは多分どこでも行けるっす！ よろしく！」

新たに入学した新入部員とは別に、一人の男——黄瀬涼太が帝光バスケット部に現れた。

彼は類い稀なる才能でバスケット初心者とは思えないほどの成長を見せた。それはコーチ達の目にとまり、黄瀬は瞬く間に一軍に合流し、レギュラーレベルにまで上り詰めた。

そしてある日——

「ちよつと俺と、勝負してくんないっすか？ ——白瀧っち」

黄瀬涼太は一人の男の前に立ち、そう言った。

視線の先にいるのは白瀧。眼差しは自信を帯びていた。

全国大会から月日がたち、〃キセキの世代〃の中でも実力の差が出てきた。そして彼らの中で少し遅れていたのが白瀧だった。

白瀧は良くも悪くも器用貧乏であった。オフエンス・ディフェンスを問わず様々な分野で活躍する一方、中々天才の域に達しない。どんな力をつけていく、〃キセキ同僚の世代〃との戦いに遅れを取っている一面があつたのである。

だからこそ黄瀬は白瀧に目をつけた。少しでも早くレギュラーになるために。

白瀧もそのことは当然自覚している。だが相手がいかに天才であろうとも、バスケット初心者である相手にこのようなことを言われては——

「……寝言は寝て言えよ黄瀬。バスケットをろくに知らないやつが、軽々しく勝負などと口にするな！」

全国制覇を果たした白瀧がその勝負を避けるわけもなく勝負が成立する。

そしてその結果として——白瀧は勝負の後、彼が背負っていた背番号・8を黄瀬に譲り渡した。

「……」

敗北の悔しさが募り、体育館の床に横になる白瀧。

緑間は彼に何も言葉を発しない。声をかけることもなくその場を後にした。

大丈夫だと。白瀧ならばきつと諦めることはない、そう信じて。

さらにそれから数ヶ月後。帝光バスケット部は再び全国の舞台に戻ってきた。

予選大会は“キセキの世代”の圧倒的な力と、神出鬼没の六人目、経験豊富な三年生、データ収集に長けた有能なマネージャー、さらに白瀧の力もあつて勝ち抜いた。

黄瀬との戦いで屈辱を味わった後でも、緑間の予想通り白瀧は諦めなかった。むしろ彼は『いつでも黄瀬にリベンジしてやる』という強い意気込みをもって練習に励んでいた。

おかげでベンチの層が格段と厚くなり、予選は苦戦することもなく勝ちあがった。

そして今日から運命の決勝トーナメント。一回戦から容赦はしない、と帝光はメンバーが変わった新たな“キセキの世代”でスターターを固めることになった。

どんな布陣であろうと、何があろうと人事を尽くすのみ、と緑間は恒例のおは朝を見ながら朝食を口に運ぶ。

『5位は——蟹座のあなた』

「今日は五位か。まずまずといったところだが、油断は禁物なのだよ」己の運勢を確かめ、精神を引き締める。ラッキーアイテムのことをしっかりと頭に叩き込み、食事に戻った。

その後もおは朝占いの放送は続き——

『そして最下位は……残念、山羊座のあなた。』

今日はやること全てが空回りがちです。知らず知らずのうちに、悪い出来事に巻きこまれそう。目立つような行動やそういつたことは可能な限り避けてください』

「なん……だと……?!」

最下位の放送を聞いて、緑間は手にしていた箸を落としてしまった。

「山羊座。12月21日頃から1月19日頃生まれの人間がこれに該当するのだよ。誕生日プレゼントがクリスマスプレゼントやお年玉と一緒にされて悲しく思うこともあるという。つまりまさか……白瀧か!」

1年前に聞いた友のプロフィールと彼の体験談を緑間は思い出した。思わぬ形で友の不運を知り、緑間は焦りを隠すことができなかつた。

だが、驚いてばかりではいられない。緑間は朝食を済ませるや否や自室に駆け出した。

「……あつた!」

しばらく机の中を探し続け、そして目的の物を手に取って笑みを浮かべた。手にしたものと彼の満面の笑みのセットは、おそらく見た者全てを戦慄させることだろう。

——そしてその後。試合開始の時が刻一刻と時間が迫る中、控え室にて緑間は白瀧に声をかけた。

「白瀧、少し手を貸すのだよ」

「は? 何だよいきなり。……って、ウオイ!」

振り返り、何事かと問いかける白瀧だが、緑間が左手に持つものを見て目を疑った。

なぜなら緑間が握り締めているのは……

「いきなりカッターナイフなんて取り出してどうしちゃったの!」よからぬ殺意にでも芽生えちゃった!? あるいはツンデレじゃなくて

実はヤンデレだった!？」

刃物の一種、カッターナイフだったのだから。

「これを肌身離さずもっておけ。一瞬たりともな」

「……へ？ えっと、俺が……？」

「そうだ」

戸惑う白瀧を他所に、緑間はカッターナイフを白瀧に預ける。

当然事情を知らない白瀧は目を点にしている。どういう意味だと、視線で問うとようやくその意味を理解した緑間が語り始めた。

「いいか。今日のおは朝占い、お前の山羊座は最下位だったのだよ」

「……そうなんだ。それで？」

「これほどの不運を振り払うにはもはやラッキーアイテムしかない！

そのために、俺が用意してやったのだよ」

「……で？ まさかお前はこれを試合中もベンチに置いておけども言うのか？」

呆れ顔を浮かべて話を聞く白瀧だが、緑間はさも当然と言うように頷く。

「そうに決まっているのだよ」

「刃物をベンチに持っていけるか!? 出場できなくなってしまうわけ!？」

だが試合中に刃物を持ち込むわけにはいかないと白瀧はカッターナイフを返却した。

「何をしている!?! ちゃんと刃の予備も持ってきたのだよ。ゆえに何も問題はない!？」

「お前馬鹿か、馬鹿か？ 馬鹿なのか!? だからそういうことじゃないよ、刃物の持ち込み自体が駄目だと言っているんだよ!？」

「気は確かか! このままではお前が痛い目にあうのだよ!？」

「お前こそ正気に戻れ!？」

緑間の表情は真剣そのものだった。カッターナイフを持たねば必ずや不幸が白瀧を襲うと。

たしかに普通にものだったならば白瀧も受け入れたかもしれない。しかし今回は物が物であった。白瀧がそれを受け取るわけにはいか

ない。

「まあ落ち着けて。……そういうのは普段から心がけてやっているお前だからこそ意味がある。いきなりやったところでそんなに効果は現れないさ」

興奮している緑間を抑えるため、白瀧は彼の両肩に手を置き、言った。

「あいにく俺は運氣とかそういうのを信じてないんだ。見えないものに頼りたくはない。

……大体、仮に本当にそれがあつたとしても、そんな不幸ごときに俺がやられるとお前は思うのか？ これでも去年より成長していると自負しているんだぜ？ 不幸なんて迎え撃つてやる」

「しかし！」

「それなら、さ。そこまで心配なら俺が不幸に会う前に試合を決めてくれ。俺はベンチスタートなんだから、お前達が決めてくれれば大丈夫だろ？」

「白瀧……」

「な？」

正しいか正しくないのかわからない運勢よりも、仲間を信じているからこそ出る言葉。それを言われては緑間も返す言葉がない。緑間として白瀧の力を評価しているのだから。

「ふん。お前がそこまで言うのなら仕方がない。だが後悔はするなよ」

「わかってる。でもわざわざありがとう。それじゅあ、そろそろ時間だ。行こうぜ！」

「……ああ。今日の試合をさっさと終わらせるとしよう」

結局白瀧はラッキーアイテムを受け取ることなく試合に向かった。

……だが、その試合は誰もが予想していない方向へと進んでいく。

「——馬鹿なっ!?!」

「ステイール、まただ！ 帝光中学、またしても得点に繋がられない！」

ボールマンへのダブルチーム。しかも相手の選手はパスコースを全て見切っているかのような動きを見せ、次々とボールを奪っていく。

「ハハッ！ 甘いな、テメエらの動きなんて丸わかりなんだよ！」

カウンターのレイアップを決めた敵のPG——三年の花宮真が得意げな顔で言った。目にかかりそうな髪型に加えて鋭い目つき、特徴的なまゆげが印象に残る選手だ。『キセキの世代』がいなければ確実に天才と呼ばれていただろうと噂される五人の逸材、『無冠の五将』の一人でもある。

「その程度かよ中学バスケット界最強つてのは！ ぬるすぎてつまんねえぞ！」

悔しがる帝光中学の選手達を花宮はけらけら笑う。

花宮によってパスが封じられ、帝光はボール運びがまったくと言っていいほど機能していない。

緑間はあまり視野が広くなくパスも得意ではないため、ボール運びには向いていない。

黄瀬は経験が浅いためか相手のエースに完全に抑えこまれており、それどころではない。

他の二人も個人技は得意なのだが、彼らはボールをもらってこそ本領を發揮できるタイプだ。

帝光はパスが途絶えたことでリズムを失い、第一Q終了時点で14対21と帝光がはじめて追い上げる形になった。

相手を追いかけるという試合展開、決して予想していなかったわけではないが想像以上に状況が悪い。

これ以上相手のペースに合わせて流れを渡すわけにもいかず……

「第二Qからメンバーチェンジだ。黄瀬に代わり、白瀧を投入する」
監督はここで白瀧の投入を選択した。

そしてこれによってようやく帝光というチームが本領を發揮するようになった。

「もちすぎだ、くれ！」

ダブルチームにつかまった司令塔に代わり、白瀧がボールを運ぶ。手渡しでボールを受け取ると、白瀧は瞬く間にコートを駆け上がった。

相手のエースがマークにつくがドリブルではスピードが勝る白瀧に分がある。

鋭いカットイン。敵の反応が一步遅れて白瀧が突破した。すかさず敵のヘルプが入るが……

「そうなつてくれればこっちのもんだ！」

「よくやった！ 後は任せるのだよ！」

すかさず白瀧は捉まる前にパスアウト。その先にいるのは緑間。外からゴールを射抜く。

「ちっ！」

「この野郎！」

「ナイツシュ、緑間！」

「ふん。これくらい造作もないのだよ。もつとパスを出すがいい」

敵の舌打ちは意識に入れず、白瀧は緑間と声をかわしてディフェンスに戻る。

一対一の形に持ってこれれば、相手の執拗なディフェンスを突破できれば後は帝光が有利なのだ。

そして敵のディフェンスを突破することに関しては白瀧が誰よりも上手い。

スピードとキレがあるドライブに加えてパスもある。さらに古武術の応用により、各動作の動きの違いをなくすことにより花宮の動揺を誘い、相手の包囲網を打破してみせた。

花宮も対応を考えるが、白瀧を意識しすぎると他の四人が黙っていないなかった。

「さあ、こっから逆襲といこうか！」

たった一人の加入によって戦局は変わった。個々の力が折り重なるようになり、チームとなった。シックスマン

さらに帝光は第三Qから六人目・黒子を投入し、さらに多彩なパス

ワークで敵を翻弄。調子を取り戻した「キセキの世代」も彼らの本領を発揮するようになった。

第四Qが始まったときには120対38と相手を圧倒していた。

さらに試合再開早々に白瀧がカウンターのワンマン速攻を決め、試合は完全に帝光のものとなっていた。

(どうやら杞憂に終わったようだな……)

試合が有利に進み、これ以上ないほど順調である。

何事もなくこのまま試合を終われることが出来るだろうと、緑間は胸を撫で下ろした。

「ちっ。つたく、やっぱりあいつ邪魔だな。あいつが出てこなければ自然と壊れていったはずなのに」

「……む？」

「あいつがいる限り帝光は壊れない。白瀧要がいる限り」

駆け出そうとしたとき、敵の4番——花宮の眩きが緑間の耳に入る。声の調子から察するに諦めを口にしたようではなかった。これから何かをしようと企んでいるような、そんな表情だった。

だが緑間にはその真意はつかめない。試合とはかけ離れた、壊れる・壊れないなど、一体何を意味しているのか。たしかに白瀧のチームプレイがなかったならばあのまま帝光は敵の罠に嵌まって自滅していたかもしれない。

しかし『壊れる』などと、そのような深刻な事態のことが何故試合で起こりうるというのか。少なくともこの時の緑間は理解できなかった。

「おい。……次、やっぱりヤレ」

「ああ、ようやくか。いい加減待ちくたびれたぜ」

そして花宮は白瀧のマークについていた選手に声をかける。

短いやり取りでやはり緑間には内容はまったくわからなかった。だが会話が成り立っているところを見ると、事前に何か話していたのだろう。

気にはなるものの、今はこの試合に集中せねばと意識を切り替える。

攻守が入れ替わった。花宮からゴール下へとボールが通る。

PFへと渡り、味方のスクリーンでマークをかわすとシュートを撃つ。

だがドリブルの勢いを殺しきれなかったのだろうか、ボールはリングに激突する。

「リバウンド！」

外れたボールに飛びついたのは白瀧。

すかさずこぼれ球に反応した彼はボールが落ちる位置を予測し、跳躍した。

相手も跳躍するが白瀧がボールを抑える方が早い。

緑間もそれを見て、何事もないということを確認。すかさずカウンターに移ろうと体を反転させて走り出す。

「あーあー」

しかし一歩目で足を止めた。

パチン、と。突如誰かが鳴らしたスナツプが聞こえたのである。

「残念。しゅーりよー——」

視線を音がした方向へと向ける。その先にいたのは、先ほど自チームのエースと会話していた花宮だった。

「まさか……」

「あつ……があ、あああああああ!!!」

「なっ——ッ!?!」

緑間がそれを理解したのと同時に、白瀧の悲鳴が響き渡った。

すぐに声の主を、白瀧を振り返る。——リバウンドを制したはずの彼は、コートに倒れていた。

右肩を押さえ、苦しそうに身を悶えている。口から吐き出されるのも呻き声だけだった。

「あ、ああつ。……ぐつあ……」

「レフェリータイムツ!!」

「ッ、白瀧！」

「白瀧君!!」

白瀧の負傷を知った審判が時間を止める。それによりコート内の

選手だけでなくコートの外からもチームメイトが駆け寄った。

「……馬鹿な。なぜ白瀧が？　なぜ、こんなことに……」

そんな中緑間は何が起こったのか理解できず、その場で呆然と立ち尽くす。すると先ほど指を鳴らして歪んだ笑みを浮かべていた、花宮の眩きが聞こえた。

「あれれれれー？　何だ、どうしちやっただらろう？」

「ツ——!!」

感情がまったくこもっていない声。あまりにもわざとらしいその発言が、今のプレイの真実を物語っていた。

つまり——

「貴様ら、まさかわざと白瀧を狙ったのか……!」

「はあ？　おいおい、言いがかりはよせよ。事故だよ事故。ゴール下での接触なんてよくある事だろ？　そんなに声を荒げるような、たいしたことではないだろ？」

最初から白瀧を狙っての行動だということ。チームの中心のような役割を果たした白瀧を潰すために。

曖昧な答えを返すだけだが、しかしその表情にはやはり歪んだ笑みしかない。……答えは明白だった。想像通り、この男はわざと白瀧を傷つけるために仕掛けたのだと。

「貴様らは——」

「待ってください、緑間君!」

「ぐっ、黒子——!?!」

今にも掴みかかろうとする緑間だが、それを止めたのは黒子だった。

「何をするのだよ!」と講義するが黒子は首を横に振り、そして白瀧が倒れている方向へと視線を促した。

「ここで緑間君が問題を起こせば帝光が不利です。白瀧君の思いまで無駄にするわけにはいかないでしょう!?!」

「ツ……ちっ」

試合半ばで倒れただけではなく、その白瀧の思いまで踏み躪るなど、できるはずもない。

緑間は力をこめた右腕を降ろして歯を食いしばった。仲間が思いとどまったことで黒子も手を離して共に白瀧の元へと向かう。

「よかったな。怪我をしたのがベンチのそいつで」

最後の敵の一言は聞こえなかったふりをして……。

白瀧が負傷交代したものの、試合の勝敗はもはや変わりようがなく、帝光が勝利を収めた。

だが白瀧の怪我は重傷であった。その後の帝光中は白瀧抜きで大会に挑むことになる。

次の試合にて、帝光のエース・青峰が才能の開花により苦悩するも、チーム全体でカバーすることで勝ち進み、見事二連覇を果たした。

そして大会終了後、三年生達が引退する。それに伴って一軍の再編成が行われるのだが……

「白瀧、治療期間中であろうと私はお前を二軍に落とすことはしない。一軍に残り、今後もチームを支えて欲しい」

監督は治療中の白瀧を降格することはしなかった。これまでと同様に一軍にいてほしいと、白瀧にはつきりと嘆願する。

その視線の先にいる白瀧は、右肩を三角巾とバストバンドを用いてお腹の前で固定していた。

——『肩関節脱臼』。これこそがあの忌々しい試合の後、白瀧が診断された症状である。若い者にこれが起きると再発が非常に起きやすく、今回は四週間の固定による保存療法を命じられた。さらに固定が終了しても数週間は運動ができない。当然ながらその間バスケットをすることなど到底不可能である。

それでも、それがわかっていてもなお監督は白瀧を降格することはしなかった。

「今、俺はまともにバスケットをすることはできませんが、それでよろしいのですか？」

「構わない。『キセキの世代』のことを考えてもお前は帝光に欠かせな

い逸材だ。お前は青峰や黄瀬達にはない、チームを支える精神的支柱のような役割を果たしている。

部員はお前のことを頼りにしているのだ。お前はいるだけでも意味がある。外から部を見て、そして部員を支えてやって欲しい。これはお前にしかできないことだ」

「……わかりました。監督のご期待にそえるよう、最善を尽くします」
「そうか。ありがとう」

監督の絶対的な信頼を感じ取れる言葉だった。

白瀧は少しの間だけ目を閉じて考えると、了解の意を返す。

それから今後のことについて細かい話を済ませると、白瀧は部屋を後にした。

（『いるだけでも意味がある』、か）

脳裏に監督が口にした言葉が蘇る。部室まで歩いていく途中、白瀧の表情は優れなかった。

（俺を励ましてくれていたのでしようが、監督。それは俺のことを選手としては期待していないということではないのですか？ もはや『キセキの世代』のことだけを選手として期待しているのではないですか？）

信頼されていることは嬉しいが、できれば違う分野での信頼が欲しかったのだ。

（バスケットをできないバスケットプレイヤーに、一体どれだけの価値がある？ レギュラーの座を失った俺には、プレイでしかチームを支えることができないというのに……）

今白瀧はバスケットをできない。そして今まで白瀧は自身のバスケットチームに貢献してきた。

そんな彼がバスケット以外でチームを支えることなど、監督が話すほどの価値が自分にあることなど考えられなかったのだ。

（俺は選手だ。一人の選手として皆と共にいる。仲間を陰から支えるだけではなく、共に肩を並べて戦いたいんだよ……！）

足取りがどんどん重くなっていく。前を向いて歩いているものの、どこを見ているのかわからない。今の白瀧にはそんな危険性があつ

た。

「……………」

そんな白瀧の後姿を、緑間はただじっと見つめていた。

それから約三週間後。

その日の練習が終わった後、緑間は普段の打ち込みを行っていた。傍には白瀧もいて固定されていない左肩でパスを出し、練習を見届けている。

今は何もしていない方が辛いらしく、少しでもバスケットに関わりたいらしい。

「最近、練習してても活気がないよな」

「……………そうだな。控えメンバー達の空気が重々しいのが気がかりだ」

白瀧が寂しそうに呟く。緑間は短く肯定の返事だけを返し、シュートを続けた。

この頃なぜか練習中にチームメイト内で小さな騒動が起こっているのである。

理由は、レギュラーとそうでないものとの力の差が激しくなったこと。

三年生が引退したことで、「キセキの世代」は完全に帝光の中で最高戦力となった。

しかしその五人があまりにも強すぎる。周りとの差が大きすぎる。

——いや、大きくなってしまった。

切欠はエースの覚醒にあった。突如才能が開花したかのように周囲を圧倒するようになった。

誰も止められない、誰も敵わない。どうしようもない。

相手をするチームメイトはその力の差に諦めるようになってしまい、そしてエースもまた対抗できるライバルがないという現実に絶望を感じていた。

「やっぱり、青峰がいないせいかな……………」

「やつだけに限った話ではないのだよ。黄瀬なども練習を休む日が増えた」

そしてその結果、帝光のエース——青峰が練習を欠席するようになった。何もせずとも勝てるのに、これ以上練習をしたら余計に上手くなり、敵がいなくなることでバスケットがつまらなくなる。そう考えてしまったのだ。

さらに青峰につられるように、同じく急成長を果たした黄瀬を含めた二人のレギュラーも練習を休みがちになった。才能があれば勝てると思うようになったのだらう。

レギュラー不在という現状はチームに大きな影響をもたらす。この現状で士気を維持することは難しいものであった。

「何を考えているのか俺には到底理解できん。人事を尽くさぬやつに、天命が下るものか——!!」

緑間はその三人に怒りを抱いていた。副部長という責任のある立場になったから、というだけではない。努力することの大切さを知る彼が、練習をサボるような選手達を許せるわけもないのだ。

また一発、怒りがこめられたボールがリングを射抜く。

「俺も練習に参加できていれば、無理やりにも勝負を仕掛けて止めたんだけどな」

「……やめておけ。今下手に無理をして、治療期間を長引かせる必要などないのだよ」

「ははっ。まあそうだよな」

乾いた笑いが体育館に響く。

……青峰達が練習に来なくなった後、緑間は白瀧と行動を共にする時間が極端に増えた。

まともに練習に参加しなくなった青峰よりも、バスケットに何も思い入れがない紫原よりも、才能に頼り切る黄瀬よりも、緑間は努力を知る白瀧に感心を寄せていたのだ。

怪我をしても練習には顔を出す上に、チームのために声を出したりマネージャー達と共にサポートに回る。

少しでもチームのためにと、健気に働く白瀧を評価したのだ。チー

ムのために人事を尽くすその姿は見ていて緑間も良い気分になる。「でも本当に皆凄いやな。俺がいない間に、皆がどんどん遠くに行ってしまうような感覚だよ」

仲間が突如強くなる中、練習に参加できない現状に焦りを抱いていたのだろう。

白瀧は胸中の不安を打ち明けた。きっと緑間以外の人間ならば明かさないう本当の心の内側を。

「ふん。人事を尽くさぬ者達が強くなったところで意味はないのだよ。それに、お前ならどうせすぐに追いつくことになるだろう」

「はは。そうだと良いんだけどな」

緑間は白瀧の不安を消し去るようにと励ましの言葉を送った。

決して大げさではないし嘘でもない。緑間は本当に白瀧ならば追いつくと信じているのだ。

そう言う緑間とて、今も彼らに追いつくようにと努力を続けている。また同じスタートラインに立てればという、緑間なりの思いやりがこもっていた。

「そう信じるよ。俺だってまた皆とバスケットをしたい。……だけど同時に、そう言う緑間も俺よりずっと先に進んでしまうんじゃないかって、最近は不安になる」

「俺がだど？」

「ああ。他のやつらがなぜか連続して時期が重なっているし。しかも緑間は才能だけでなく、常に練習シューティングだって欠かさずにやっているんだ。だからもうそろそろ上の段階にも進んでしまうのではないかって」

シューティングを観察しながら、白瀧は冗談半分で緑間に話す。緑間の才能もそろそろ開花するのではないかと。

なぜか「キセキの世代」と呼ばれた者たちの急激な成長は時期が重なっている。ならば緑間にも新たな力を得る契機が訪れるのではないかと、白瀧はふと考えたのだ。

「何を馬鹿なことを言っているのだよ。……ふむ。だが、まあそうだな。確かに俺も少し試してみたいというものがある」

根拠もないその意見、笑って流すのは簡単だが。少し考えると緑間はシューティングを一時中止し、ボールを手に取りハーフラインまで歩いていく。

実は緑間はチャレンジしたいことがあった。自分だけなら実行に移そうとは考えないことを。

「一応聞いておくけど、何をやっているんだ？」

ハーフライン上に立ち、バスケットを見る緑間。

それを不審に思った白瀧が問いかける。緑間がリングよりもずっと遠いところでシュートを撃とうとしているのだから当然の反応だ。

「……これまではシュートの正確性を重視していたため、このようなチャレンジは考えたとしても実行しようとは思わなかったのだがな」「いや、そりゃハーフコートのシュートだなんて誰も思わないって」「お前が言ったことなのだよ。上の段階にも進めるのではないかと」

いたずらが成功した少年のように緑間は笑った。

あくまで冗談であり、まだまだ自分が上に行くのは早いのだと、まだ近くにいとそう白瀧に示そうとした。

それでもやる以上は人事を尽くすと緑間は力を込め——シュートを撃つ。

いつものように、綺麗な放物線を描いたシュート。それは緑間の予想通りの軌道を進む。

しかし——緑間の予想を裏切って、リングを射抜いた。「なっ!？」

……その挑戦は冗談のはずだった。入るとは思っていなかった。しかし現実、不可能が可能となった。

シュートを撃ったはずの緑間が驚愕する。咄嗟に自分の手を見つめ、シュートの感覚を確かめている。

「あつ……あ」

そして隣で見ていた白瀧もまた当然驚きを隠すことはできない。

啞然とし、言葉に詰まる。共に頑張れる相手だと思っていた緑間までもが覚醒したという事実が、心を深く抉った。

——「キセキの世代」は、全員がもはや届かぬところに行こうとし

ている。俺が停滞している間に、はるか高みへと……！

「ハハッ……ハッ、ハハハハ!!」

「……ッ!」

耐えられずに白瀧の口から笑い声がこぼれだした。

緑間もその声で我に返り、白瀧を見る。

「ハハハハ、ハハハハハハハハ!!」

「白、瀧……」

「ハハハハ……アハハハハ……ハハ、アッ……」

壊れた人形のように笑い続ける白瀧。酸素不足で息が苦しくなり、ようやく笑い声が途絶えた。

やがて笑みを浮かべたまま顔を上げ、視線を緑間へ向ける。笑っているのに、ただいつものように笑っているだけだというのに、緑間はその笑顔を見るのが怖かった。何か——いや、今まで共に築いてきたもの全てが壊れてしまいそうに思えたから。

「すごいよ!　すごい、すごいじゃないか緑間!　やっぱりお前達は天才だよ!」

「いや、違う!　俺は、俺はただ……」

「何を謙遜しているんだよ、お前らしくもない。もっと誇っていいんだ。俺にとっても、チームメイトが強くなることは嬉しいことなんだから。だから、だか……ら……?」

緑間は必死に否定しようとするが、白瀧がそれを遮った。

もっとと誇れと、もっと自信を持てと。もっとと余裕を持てと。

白瀧はひたすら緑間を褒め称えた。いつの間にか自分よりもずっと前に走り去っていた友を、ひたすら褒め称えた。

「……あ、れ……?」

だが、突如としてその声は止む。

「あれ?　あれ?　な、んで?」

視界がゆらりと揺れ、声が掠れはじめる。

白瀧は自分でも自分の状態が理解できないのか、頭の上に疑問符を浮かべた。

「何でだろ?　嬉しい、ことなのに。……俺は、喜ばなきゃいけないの

に。……どうしちやっただよ俺?」

「……」

「どうしてだよ? ……どうして涙が、止まらない……!?」

何かわからないものがこみ上げ、とっさに左手で目頭を押さえる。自然と白瀧の目から涙が溢れ出した。

チームを思う白瀧にとっては緑間の覚醒は嬉しいことであるはず。選手が強くなれば自ずとチームも強くなるのだから。しかしそう考えても、堰を切ったように涙が止まらない。

——まさか友の成長を憎むような、そのような醜い男に成り下がってしまったのかと思考がよぎった。

「ごめん緑間。……ごめん、ごめん!!」

「ま、待て白瀧!」

そんな自分を許せなくて、それだけは耐えられなくて、友に今の無様な姿を見せたくなくて。白瀧は体育館から飛び出して行った。

放っておくわけにはいかず緑間もその後を追う。

しかし速さに関しては白瀧の方が上。緑間はやがて彼の姿を見失ってしまう。仕方がなく、緑間は以前主将に聞いた、白瀧が思い悩んだときに頻繁に行くという場所——帝光中学付近の土手へと足を運んだ。

できるだけ急がなければと、緑間も必死に走る。

チームメイトに呼びかけようとも思ったが、今の白瀧の精神状況を考えるとそれは駄目だという考えに至った。ゆえに単独で、土手へと向かう。

やがて目的地にたどり着くと——白瀧が座り込んでいる姿が視界に入った。

体育座りでどこか遠くを眺めている白瀧。瞳から流れていた涙は止まっているが、死んだような顔をしている。

心配になった緑間はすぐ後ろまで歩み寄る。すると緑間が声をかけるよりも先に、彼の接近に気づいた白瀧から問いかけがあった。

「なあ。お前の目には、俺の姿は惨めに映っているか?」

「……」

振り向く事無く、顔を見る事無く問いかけたその問いに返答はない。

「ああ、そうだろうな」

無言。それこそが答えだと察した白瀧は、さらに話を続ける。

「緑間、もう俺のことを気になんかなくていい。お前までこんなところで立ち止まるな。お前も天才だ。もつと先に行ける。」

本当に俺のことを考えてくれるのならばもつと先へ進んでくれ。そうでなければ俺は本当にチームの足かせとなってしまう。それだけは、耐えられないっ」

今白瀧はチームのために戦えない。それなのに仲間の足を引っ張るわけにはいかない。

再び白瀧の目から涙が溢れてきた。悔しさが、絶望か、あるいはそれ以外のものか。一体この涙は何を意味しているのか。

「大丈夫だ。きつといつか必ず追いついてみせる。必ずもう一度コートに帰る。」

だから……今は、もう後ろを振り返るな。立ち止まっている者に手を差し伸べなくて良い。同情や哀れみは、余計に、苦しいんだ……！」

白瀧は下唇を力強くぐつと噛み締め、こみ上げる感情を堪えた。

やはりその涙の意味は緑間にはわからないが、それでも緑間はこの言葉を聞いては立ち止まらない。せめてこの白瀧の願いを叶えてやらなければそれこそ白瀧の道が途絶えてしまう。

結局その夜、緑間は一度も白瀧と言葉をかわすことなく後ろに向き直り、帰路についた。

「……そうだ、それでいい。お前達は勝者だ。進み続けろ。そうすることで敗者が報われる……」

どんどん小さくなっていく足音。それにつれて白瀧の顔も伏せていく。やがて目から滑り落ちた大粒の雫は地面に落ち、不恰好な円の模様を描いた。

「先に行け。きつと、すぐに追いつくから……！　もう一度、お前達と、共に……必ず!!」

彼の心からの叫びを耳にするものはいない。

弱々しく震えた声で。しかしそれでいて力強く白瀧は再起を誓う。
——そしてここから先。白瀧がキセキの世代に追いつくことは、二度となかった。

“キセキの世代”と呼ばれた彼らが覚醒し、全盛期を迎える時期に、白瀧はただ見ていることしかできなかった。

コートの外で練習を見続け声を張り上げる白瀧。だが時間の経過に比例して他の選手達との実力の差が広がっていくにつれ、徐々に彼の瞳に意識の色が消えていく。希望の光が消えていく。声が小さくなっていく。

チームを思うからこそ共に戦うことを選び、チームのために戦ったがゆえに敵に狙われた。

そして他の者よりも力があるからこそ諦めることができず、しかしキセキの世代には及ばないからこそ絶望した。

それでも立ち止まらず、這い蹲つても進もうと、一つの約束だけが白瀧を動かす。

彼のそんな姿勢を見てある者は敬い、ある者は忌み嫌い、ある者は信頼し、ある者は希望を見出した。

そんな中、ただ一人だけ——緑間だけは違った。なぜ他の者達はそのような目で白瀧を見ることができるとか疑問を抱いた。——白瀧の姿が緑間には、哀れに見えたのだ。

——なぜやつがこのような事態に陥ったというのだ？

緑間は白瀧と共に過ごした時間を思い出すたびに悩み続けた。その問いに答えられる者はいない。

なぜ人事を尽くし仲間を思う者がバスケットをできないのか。なぜ才能に溢れ力を持つ者がバスケットに尽くすことができないのか。皮肉としか言いようがなかった。

もしも白瀧が個人プレイに走るような男だったならば、少なくともここまで苦しむこともなかっただろう。それどころかあの負傷とて

なかったはず。……それゆえに余計に滑稽だと思えてしまった。

——何が間違っていたのだろうか。どこで誤ったのだろうか。

後悔の念は何度も浮かび上がってくる。

白瀧がチームプレイに徹したというのに、何故仲間である俺自身の手でやつをさらに追い詰めることになった？

力の成長、そのタイムリングが悪すぎた。何故このような時に、何故今さら起こってしまう!? せめて一人の時に起こっていれば白瀧が本当に挫折することはなかったはず。あるいはあと少し早く、あの試合の時にこの力があれば、白瀧が敵に潰されることもなく勝利を手にすることができたはずなのに……!?

そう考えて、一つの結論に至った。

何が、どこで間違っていたかだと？

……いや違う、それどころの話ではなかった。最初からだ。白瀧の思いが、チームプレイに徹したことが、それこそが全ての元凶。

チームプレイのように『誰かと協力すれば』と綺麗事を並べるからこそ、人は勘違いする。どんな相手にも立ち向かえると。どこまでも共に行けると。

だがそれでは駄目なのだ。それでは越えられない壁に激突する。そして性根の腐った敵に狙われる。

そんなことならば最初から他人を頼ることなど、信じることなど俺達はすべきではないのだ。絶対的な力をもってして相手を黙らせるのみ。一人で全てを打倒する！ それこそが俺達が勝ち続けるための唯一の手段だ！

全て同じであった。

白瀧が緑間を変えようと思っていたのと同じように、緑間もまた白瀧を変えようと思っていた。

しかし抱いていた思いはまったく反対のもの。白瀧が緑間にもう一度チームプレイを思い出して欲しいと望んだことに対し、緑間は白瀧がもう二度とチームのために戦うことはなく、個人で力を発揮して欲しいと望んでいた。

相反する二人の考えが一致するはずもない。そして緑間がその意

見を白瀧を前にして直接口にすることもまた、できるはずがなかった。その一言は下手すれば、白瀧が今までしてきたこと全てを否定してしまう可能性もあったから。

だからこそ緑間は言葉にすることはなく、ただ行動で証明する。己のあり方を、バスケの真髄を。

——『人事を尽くして天命を待つ』。どうか人事を尽くした者に、いつの日か天命が下るようにと。

第三十二話 勝敗

「俺が勝たなければ何も変わらない、誰も変えられない！」

緑間は高尾からすれ違いざまに手渡しでパスを受ける。

交差することで高尾が壁役となり、伊月をかわすことに成功した。

「させるか！」

「……邪魔を、するな！」

しかしマークマンの火神が進路方向を予測して立ちはだかる。

緑間は最高速のドライブで火神をかわし、ハーフラインでストツプ。即シュートを放った。

背後からシュートを叩き落とそうと火神が跳躍するが、わずかに遅かった。彼の手は虚しく空を切る。

「何も知らずに、ただ声高に『日本一』などと叫ぶやつに俺は負けん！」

緑間の悲痛な叫びと共に、ボールはリングをくぐる。

ここに来てもまだ緑間のシュートは落ちない。(誠凛) 55対65

(秀徳)、再び点差は二桁になる。

「……なんだとテメエ!」

自らの目標を否定する緑間に、火神は声を荒げた。

息も絶え絶えで火神の足にも限界が近づき始めているが、それを敵に察せられないようにと。

(一体どうなってやがる? 今のシュートはタイミング的にブロックできたはずだ。緑間の高さでもあの距離ならたしかに間に合ったはずなのに……)

しかし内心穏やかではない。今の攻撃を止められなかったことが気がかりだった。

一度抜かれはしたものの火神はすぐに体勢を立て直しブロックに跳んだ。火神はここまで緑間と対峙して彼のシュートモーションを、シュートまでの時間を把握していた。その上で止められるタイミングだと判断したからこそ跳んだはずなのに。それなのに緑間はその上を行った。

「火神君の高さが落ちたからではない。まさかここに来て緑間君の

シュートモーションが早くなっている!？」

同じことを疑問に思っていたリコが一つの結論に至った。

緑間が長距離のロングシュートを撃ち続けることにより、精密な動きがより精錬されたのだろうか。これまで以上の早さでシュートを撃たれたらそれこそ緑間を止めることは困難になる。

(しかも集中力がいつ切れてもおかしくないこの終盤に、一人でシュートを決めてきた。一体どんな精神力をしていると言うの!?)

第四Qにきても緑間の力は衰えるどころか凄みを増していく。

やはり「キセキの世代」は伊達ではない。伊達に全国を制覇してはいなかった。真に常軌を逸した存在だと感じられた。

「ドンマイ！ 切り替えていくぞー！」

日向のスローインで試合が再開される。

伊月がボールを受け取り、そしてすかさず――

「頼むぞ、黒子！」

「はい！ くださいー！」

マークが厳しくなる前に奇襲をかける。

広い視野で黒子と周囲の敵選手的位置を確認し、チェストパス。

黒子は片手を伸ばしてそのボールを掌に収めると、そのまま右足を軸として大きく回転。生まれた遠心力を利用して、ボールを一気に前方へと打ち出した。

失点后、すぐに走り出した火神に向けてのパス。前半戦も火神に渡ったパスであった。

「そうはさせるかー！」

秀徳の選手達もその勢いに、対応の早さに反応できなかったが、ただ一人――緑間だけは違った。

緑間は火神とボールの間に割って入り、ボールを叩き落とす。

「なっ?! 黒子の回転式長距離パスを」

「叩き落としました!？」

バスケットボールとは思えないほどの球速であったというのに。

黒子の新技さえも力づくで破る緑間の荒業に、誠凛の選手達は息を呑む。

「アウトオブバウンズ。誠凛^黒ボール！」

ボールは転々としコートの外へ。

緑間はボールの行方を確認すると、ディフェンスに戻りながら黒子の姿を探し当て、呼びかけた。

「……当然ながら黒子、お前にもだ」

「緑間君……」

「やつの結末を知りながら、それでも未だに『仲間と助け合えば』などと戯言をぬかすお前に。俺は負けないのだよ」

鋭い視線が黒子に向けられた。

緑間はかつての出来事を後悔し、変えようと思った。しかし目の前に立つ黒子はそれをしようとしない。力がありながら強豪校に進学することさえ怠った。

緑間からすれば、黒子が前から何も変わっていない、何も学習していないように思えた。そのような相手に負けることを許せるわけがない。

反論の余地さえ与えず、緑間は黒子の横を通り過ぎていく。

「……わかっていますよ」

「むっ?」

「白瀧君の事は十分理解しているつもりです。彼を良く思わない相手に傷つけられたことも、圧倒的な力の前に挫折したことも」

声に反応し、振り返った緑間に面と向かって黒子は言った。

苦しげな表情を見せつつも、視線から目を逸らす事はしない。

「知っていてなお、お前は何も思わなかったとでも言うのか!?!」

「ですが僕は、それでも白瀧君が再び立ち上がったことを知っている!」

「なっ——」

「もう一度皆を信じて戦うことを選んでくれたことも知っている!」

緑間の激しい怒りに、黒子もまた強い意志で答えた。

「それなのに、僕達がその道を閉ざすんですか!?! 白瀧君が戦っているのに、僕達が諦めるわけにはいかないでしょう!」

「ッ……!」

一度はチームプレイを狙われ、そして仲間との力の差に絶望した。それでも白瀧は諦めることなく戦い続けた。

だからこそ自分も仲間の為に戦い続けるのだと黒子は緑間に強く訴える。その黒子の姿が、

『これ以上お前はチームのことを考える必要はないのだぞ？ お前はもう十分すぎるほど帝光に貢献した。それが誰もが認めることなのだよ』

『そう言ってくれるなよ緑間。……この前さ。ある人と話して、こんな俺をまだ頼って信じてくれる人がいるってわかったんだ。信頼されているのに俺が諦めるわけにはいかないだろ？』

(白、瀧……！)

緑間には、昔の白瀧の姿と重なって見えた。

かつて白瀧の怪我が治った時に、コートに戻ってきた時に見た姿と一致したのだ。

あの時はその言葉を耳にして余計に痛々しいと思った。

だが今は、違った。言葉が身体の隅々まで浸透する。白瀧の、そして黒子の強い覚悟がただ身に染みこんだ。

『本当にお前達は、何も悔やんではないのか……！』

『走れ——!!』

『やべっ、ぼっとしてんな真ちゃん！』

『ぐっ……！』

高尾に諭されて緑間は呆然としかけた意識を覚醒させる。

ボールをコートに戻した誠凛は突如五人が一齐に走り出した。しかもチーム全体でボールを早く動かし、マークをかわしていく。

——ラン&ガン。誠凛は得点するために速い展開で勝負しに来た。(しかも中々速い。連携の上手さが出たか……！)

全国を知る大坪から見ても、誠凛のオフェンスは見事なものだった。

巧みなパスワークであっという間に誠凛ディフェンスはゴールへと襲い掛かる。そしてついに、ゴール下で火神へとパスが通った。

『やはりフィニッシュは火神か！』

「とめろ、緑間！」

「言われずとも……！」

エースで勢いづくこうとしているのだろうかそうはいかない。

ボールを取り、火神は即シュートフォームに入る。緑間はシュートは撃たせまいと即座に火神との間を詰めた。

だがそれはフェイク。火神は跳ばずにバウンドパス。水戸部に渡った。

「水戸部……！」

「囲め！ シュートを打たすな！」

秀徳デイフェンスが再び動いた。大坪と木村が三戸部に迫る。

「いいえ、まだです！」

だが、それでもまだ誠凛にはパスがある。

水戸部は裏をかいいて伊月へパスアウト。……したはずのボールは黒子という中継を得て、日向へと渡る。

「なっ、外……日向!？」

絶妙のタイミングで日向へボールが渡る。

ボールを受け取るはずだった伊月がスクリーンとなって宮地を引き剥がし、日向はスリーを決めた。

(誠凛) 58対65 (秀徳)。

(なんで黒子があんなところにいるんだよ!?) 駄目だ、もう全然目が追いつけねえ!)

黒子を見逃すという失態を犯してしまった高尾が悔やむ。

もう大丈夫だと思いい込んでいたところに連続で黒子にしてやられた。高尾も精神的に厳しくなっていた。

「まだよー、皆、当たって！」

だが誠凛はここで追撃の手を緩めない。誠凛のベンチから監督のリコが指示を飛ばす。

ここで流れを完全に引き寄せようと勝負に出たのだ。誠凛はオールコートをし掛けた。

「ちいっ！」

木村が悪態をつきながらも、マークをかわしてリスタート。ボール

が宮地の手に渡る。

日向のマークをかわしながらボールを運ぶ。すると高尾が緑間のマークについていた火神をスクリーンで引き剥がした。

「緑間ー！」

その機を逃さず宮地は緑間へパス。

危なげなく緑間がキャッチするはずだったが……そのボールを黒子が叩き落とした。

「なっ!？」

「黒子のステイール！」

秀徳は緑間にボールを集めすぎたがために、黒子にパスコースを讀まれてしまった。

近くにいた伊月がボールを確保する。

誠凛のカウンター。

大坪と宮地の二人が先にディフェンスに戻り、伊月・水戸部との二対二の形になった。

「宮地、五番^{伊月}につけ！俺が八番^{水戸部}につく！」

「わかった！」

敵が攻め寄せる前に大坪が宮地に指示を出す。

その言葉通りドリブル突破を図る伊月に宮地が、ゴール下に駆け込む水戸部には大坪がついた。

伊月はミドルからジャンプシュートを狙う。宮地が後だしで跳ぶ。すると伊月は宮地の股下を通すように、ゴール下へボールを叩いた。

「水戸部ー！」

「なっ!？」

冷静に広い視野を持つてパスをさばく伊月に宮地が驚愕する。

ボールは水戸部へ。水戸部はバスケットに対し半身開いた態勢でシュートを狙う。

(フックシュートか!?)

その動きで相手の狙いを悟った大坪が跳ぶ。

「……ッ!？」

しかし、大坪の指の先をボールが越えていき、ネットを揺らした。

(誠凛) 60対65 (秀徳)。第四Qを7分残り、誠凛が二本差にまで追い上げる。

「くっ……」

「まさか、大坪!?」

「大坪さん!」

膝に手を置き、息を整える主将の下に仲間が駆け寄る。

……ここにかけて、秀徳の大黒柱・大坪の高さが落ちてきた。前半戦から続いた徹底的なマークがようやく効果を発揮してきたのである。ブロックショットにリバウンド、大坪はここまでゴール下で果敢に戦った。だが彼の予想以上に疲労が蓄積していた。今も水戸部のシュートを簡単に許してしまったように。

『秀徳高校、タイムアウトです!』

これを見た中谷はタイムアウトを申告した。

事態の深刻さを敏感に感じ取ったのだろう。流れを止めるために選手達をベンチに呼びよせる。

「……どうですか、緑間君」

「……」

コートに引き上げる途中、今度は黒子が緑間に呼びかけた。

「やはり一人で何もかも背負うなんてできないんですよ。」

僕だって火神君や先輩達と協力することでようやく秀徳と戦える。

これはチームが丸となって戦うからこそできることです」

そう言い残して黒子は背を向け、誠凛ベンチへと歩いていく。

「少なくとも……白瀧君は自分のせいで緑間君が思い悩むことを望んでいないはずですよ」

その一言が、なぜか異常なまでに緑間の心に重くのしかかった。

それくらいはわかっている。白瀧とて言っていた、『俺のことは気にかけなくていい』と。

……それでも、それでも緑間は全てを受け入れることはできなかった。あの結末を後悔せずにはいられないのだ。

タイムアウトにより、1分間試合が中断される。

会場の熱はそれでも冷めることはない。この間試合を見ている者は『果たして試合がどう動くのか』と様々な予想を繰り広げ、試合再開はまだなのかと会場は期待に満ちた空気に包まれていた。

それは小林達も同様で、秀徳の、誠凛の選手達を眺めている。

「……大坪ももちろんそうだが、両チームとも疲労が激しい。

特に誠凛はゾーンディフェンスで相当体力を消耗したはずだ。さらにこの場面でオールコート。もはや気力の勝負だな」

ベンチに戻り、監督の指示を耳に入れつつ補給を済ませる誠凛の選手達の姿は、見るからに疲弊していた。

ゾーンディフェンスはマンツーマンよりも疲れが激しい。体力的にも、精神的にも。

前列は高尾や宮地の揺さぶりに対応し続け、後列とて大坪・木村のインサイドを相手に戦っていた。火神は緑間と一対一。五人とも疲労はピークに達している。

追いつける形で、唯一流れが誠凛に向き始めていることだけが救いではあるが……

「両チームともそれは同じでしょう。ただ誠凛の問題は、残りの時間をどう凌ぐかですね」

その流れが変わらないのだろうかと問われれば、答えは否である。

白瀧は落ち着かないのか、秀徳のベンチ、誠凛のベンチと視線を右往左往した。

一分が経過し。両チームの選手達がベンチから出てくる。選手の交代はない。最後までこのメンバーで戦うという気持ちの表れだろう。

日向は深く息を吸い、一度全ての緊張を空気と一緒に吐き出した。

「一瞬たりとも気を緩めるな！ 当たるぞ！」

そして再び気合を入れなおし、叫ぶ。誠凛はオールコートで当たった。

「宮地！」

スローワーカーの木村から宮地へとボールが渡る。

「負けるものか！ 走れ！」

すると高尾・緑間・木村・大坪が一斉に走り出した。誠凛の選手達も並走してその姿を追う。

あつという間に秀徳のコートは宮地と伊月だけの二人となった。

「ふうっ」

宮地は一つ息をこぼす。ドリブルで伊月を左右に揺さぶる。

タイミングを計っているのであるが、伊月もフットワークを活かし、進路を塞ぐ。

(良い集中力だ。だけどな……！)

しかし、秀徳レギュラーは伊達ではない。

「こつちだつて意地があるんだよ！」

一瞬のクロスオーバーで伊月を抜き去った。

伊月が追いかけて、さらに日向が待ち構えるが、宮地は急停止からレッグスルーで突破しフリーの高尾へ。

宮地の個人技でオールコートを突破する。

「ナイスパス！」

高尾は黒子のステイルを防ぐため、高いパスを木村へと送る。

木村はそのままミドルレンジからシュートを沈めた。

「よっしゃー！」

(誠凛) 60対67 (秀徳)。秀徳はあわてることなく攻撃に成功した。

「落ち着いて！ きつちり返していきましよう！」

「行け行け誠凛！ おせおせ誠凛！」

リコが選手達に激を飛ばし、選手達も声を張り上げる。

まだ時間は残っているのだ。相手が歴戦の猛者だということは周知の事実。焦ることはない。

誠凛は伊月がボールを運ぶ。ドリブルをしながらイーグルアイ驚の目で冷静に

コートを見渡す。

マークの木村をドリブルで揺さぶり、突如トップから誰もいないはずの左45度へとパスを出す。

「まさか、黒子か!？」

「取ってください、火神君!」

左45度にいたのは黒子。掌でボールを押し出すように叩く。大きな音と共に、ボールは打ち出された。

——加速するパス。ボールの方向を変えるだけではなく、急加速がかかったそのボールは高尾が弾くことを許さなかった。バチィツと激しい音を立てて火神の手に収まる。

(なんだよそのパスは!? 速過ぎる……ってか、火神もあれ捕るのかよ!?)

「緑間っ!」

初めて目にした凄まじいパスに戸惑いつつ、高尾は火神のマークにつく緑間を呼ぶ。

「行かせんぞ、火神!」

「うああああああ!!」

手を上げ、火神の前に立ちふさがる緑間。

火神の足はすでに限界だ。オフエンスにも参加は控えるように言われている。

(チームの期待に応えるのがエースだ!)

しかしそれでも、火神は退かなかった。

火神はありったけの力を込めて跳び、ボールをリングに叩きつけた。

ブロックに跳んだ緑間の上から、火神のダンクシュートが決められた。

(誠凛) 62対67 (秀徳)。誠凛、再び二本差に点差を縮める。

「……う、うおおおお! す、凄え!」

「誠凛の10番、あの緑間からダンクを決めやがった!」

一瞬の静寂の後、観客が今まで以上に沸きあがった。

「……馬鹿な」

それに対し、秀徳の選手達は目を見開く。

「……おい黒子」

「はい」

火神は驚く敵を他所に、黒子を呼んだ。

「監督の言うとおりで。足が、厳しい。多分もうさつきみたいに跳べねえ、と思う」

「……はい」

「だから、お前も頼む。俺も監督に言われた通りに動くから」

「わかっています。僕もみんなの皆の期待に応えたいですから」

「そうかよ」

ニツと笑みを浮かべ、火神は緑間のマークにつく。

この時、たしかに試合の流れは変わった。

「緑間の上から、ダンクを……」

「……緑間が吹っ飛ばされるとは、思いもしなかったな」

周囲が湧き上がる中、光月や神崎は呆然として火神の姿に釘付けになった。

練習試合、緑間の——“キセキの世代”の力を身をもって知った彼らにとって、今のプレイは信じがたいものだった。

「でも、ダンクなんてやって、最後までもつんですか!？」

「……少なくとも、もうあれだけの跳躍をする体力は残っていないはずだが」

しかしダンクは体力を激しく消耗するプレイである。

ただでさえ疲労していたというのに、このようなことをして大丈夫なのかと西村は不安げに呟いた。

小林も彼に同意するが、しかし同時に火神のプレイを褒め称えた。

「だが、チームに勢いをもたらすという点では大成功だ」

大坪が疲弊している今、秀徳にとって火神のゴール下は天敵。

しかも緑間を越えてダンクを決めた。これはチームには勢いを、敵

には大きな不安を残すことになった。

秀徳の背中を追う誠凜を勇気付けるこのプレイは、少なくとも無駄ではない。

「……緑間」

白瀧は一人、緑間の姿を視線で追う。ダンクを決められた直後からずっとだ。

幾分か気落ちしている素振りが見られる友の姿を見て、酷く嫌な気分になった。

「緑間で勝負しろ！　すでに火神は限界だ！」

中谷はベンチから選手達に声をかける。

その視線の先では緑間に対して黒子と火神がマークについていた。このままでは緑間に回してもスリーを決めることは容易ではない。しかしそこに大坪が回りこみ、デイフェンスについていた黒子をスクリーンで引き剥がした。

「今だ！　行け！」

「頼むぞ緑間！」

黒子のマークを外せば、今の火神だけでは緑間を止められない。

高尾から緑間にパスが通る。すかさず緑間はトリプルスレットポジションからシュートを放とうとするが……

「させつか！」

「むっ!？」

緑間の左腕を、火神が叩いた。

「ファウル！　誠凜、10番！」

審判に宣告され、火神は右手を挙げる。

デイフェンスファウル、これで一時的にプレイが止まった。

「貴様……」

「俺もあんまり好きじゃねえけどな。でもま、お前を止めるのが最優先だ」

緑間は火神をにらみつけるが、火神はその怒りを流すような素振りを見せる。

おそらく、今のはわざとなのだろう。シュートを撃たれてはとめられない、だからこそシュートモーションに入る前にファウルで止めた。

「くっそ！ いちいちムカつかせてくれるぜ、誠凛！」

攻撃のリズムが悪くなり、宮地は苛立ちを覚えた。

早く点を取り返したいところなのに、攻撃の組み立てさえ難しくなるとは。

(とにかく突き放さねえと、ますます相手を調子にのらせちまう)

高尾からボールを受け取り、宮路は心を落ち着かせた。

宮地は伊月をかわしつつ、再び緑間へパスを出す。……が、そのボールを黒子が叩き落とす。

「なっ……!?!」

「黒子！」

秀徳が緑間にボールを集めはじめたことから、パスコースを黒子が先回りしていた。

しかも先ほどと火神がファウルでとめた時と違って、今度は緑間はスリーポイントライン付近にいた。範囲が狭まったことでステイールもしやすくなったのである。

ボールを確保すると黒子は日向へボールを渡す。

「よっしー！ もう一本行くぞー！」

秀徳からボールを奪い、波に乗る誠凛。

日向から伊月へボールが渡る。再びインサイドの警戒が深まる中、伊月は左45度に立つ火神にボールをゆだねた。

「勝たせてもらうぜ、緑間！」

「……好きにはさせせん。俺は負けるわけには……！」

火神が切り込む。緑間がその動きを追い、必死に食らいつく。

外からハイポストまで侵入するが、高尾のヘルプもあって迂闊に動くことができない。攻めきれないと感じ、火神は一時停止。ドリブルをしつつ態勢を立て直す。

右に左に巧みにボールを操り……そして突如大きく腕を右方向に振るい、ボールを手放した。

「なっ……!?!」

ボールの先にいるのは黒子。そして黒子から水戸部へ、ローポストへボールが渡る。

大坪をかわした水戸部がゴール下から確実にシュートを決めた。

(誠凛) 64対67 (秀徳)。ついに誠凛は1本差まで追い詰める。

「もう少しだ!・このまま攻めるぞ!」

勢いに乗る誠凛は手を緩めない。

得点の喜びもそこそこに、またオールコートでボールに迫る。

「勝つんだ! 絶対に!」

「……誠凛は強いな。攻め時を理解している」

勢いを活かし、怒涛のごとく攻め寄せる誠凛。このオフエンス力もはや脅威だ。

そしてこの勝負強さ。土壇場でここまで力を発揮することは難しい。

「これは、決まったな……」

小林が試合の行く末を察し、静かに目を閉じた。

第四Qに来て、流れは完全に誠凛のものであった。

黒子のミスディレクションは高尾の鷹ホークアイの目を完全に出し抜き、秀徳はターンオーバーが連発した。

さらに執拗なオールコートで秀徳のボールを狙い、良く守り、良く攻める。

「……秀徳が、東京都の王者が……緑間が……」

神崎も最後の攻防を見ながら、恐る恐る呟く。

ボールは高尾から緑間へ。黒子のステイールを食らうも、必死にボールを追いかけ再び手に取る。

残り時間は2秒。無理やり上体を起こし、緑間は自陣から最後のシュートを放つ。

「うああああ！」

「うおおおお！」

そしてそのシュートは——火神の渾身のブロックによって、叩き落とされた。

『試合終了——!!』

「っしやああああ!!」

「やったあ!!」

「勝った、勝った、勝った!!」

この瞬間、勝者と敗者。命運がはつきりわかれた。

試合終了の合図と共に歓喜の声を上げたのは、誠凛。

五人がこの勝利を祝い、満面の笑みを浮かべて抱き合った。

「……負けた、のか……」

緑間は誠凛の喜ぶ姿を見て、自分が敗れたのだという事実を理解した。

しかしその眩きには感情がこもっておらず、咄嗟にでた言葉だったようだ。

大坪は言葉には出さず口を閉ざし、現実を受け入れる。

宮地や木村、高尾は信じられないのか、呆然と立ち尽くす。

中谷やベンチメンバーも立ち上がり、コートを見つめるだけで、動けない。

「……終わった。整列するぞ、お前達」

それでも、大坪の一言で全員が動き出す。

「78対75で誠凛高校の勝ち！」

『ありがとうございまして!』

誠凛が接戦を制し、決勝リーグへと駒を進めた。

Aブロックで大本命と呼ばれた秀徳は、決勝戦で敗北を喫する。

この瞬間、大仁多高校と秀徳高校の夏の再戦は、完全になくなった。

「……行くぞ、お前達」

「あの、大坪さんに声かけなくていいんですか?」

試合を見届け、小林は早々に立ち上がり、その場を後にする。

しかし好敵手が敗れたのに、何も話さなくてよいのだろうか和西村

が小林に問いかける。

「いいさ。一番悔しいのは、俺ではないからな」

小林は今一度秀徳の選手達の姿を見て、その必要はないと判断した。

そう、一番悔しいのは負けた本人なのだから。だからこそ、小林は何も言わない。

「……すみません。ちょっと抜けてもいいですか？」

だが白瀧はそうは思わなかったのか、不安げな表情で小林にそう言った。

体育館から一步外へ出れば雨が降っていた。

おそらく試合中に振り出したのだろうが、雨脚が強い。

傘をささなければ外に出歩こうとは思えない。……そんな中、緑間は一人傘も差さずに立ち尽くしていた。

「……」

何もせず、ただ空を見上げている。

緑間は試合終了後、チームメイトと別れてずっとこの調子であった。

負けて何も思わないわけがない。緑間は心の整理がつかないなかつた。

見上げているため、顔にも雨が次々と降り注ぐ。

ジャージまで濡れてしまおうが、今は別に構わないだろう。そう考えていると――

「こんな雨の中、傘もさささずに外にいたら風邪ひくぞ」

「……」

「ほら、やるよ」

視線の先が、透明なビニール傘に変わった。

そこにいたのは白瀧だった。白瀧は自分がさしている傘とは別のビニール傘を緑間に手渡し、使うように促す。

「……必要ないのだよ」

「馬鹿。らしくないぞ。人事を尽くすなら、こんなところで風邪をひいていられないだろ？」

もはやいつものように言い返す気力もないのか、緑間は言われるがままそつと傘をさす。

「一つだけ聞かせろ、白瀧」

「……なんだ？」

「お前は後悔していないのか？ あの結末について、何も思うところはないのか？」

視線を白瀧に向けることはない。背を向けたまま緑間は白瀧に問いかけた。

試合の最中から、黒子に過去のことについて話をしたときから気になつていたことを。

緑間とて黒子の言うことは理解している。だが白瀧の口から直接答えを聞かなければ、到底納得できなかつた。

白瀧は何があつたのかはわからないが、彼の言いたいことを理解し、口を開いた。

「後悔はしていない。」

たしかにかつての状態に戻りたいという願いはある。皆ともう一度戦いたいという思いはある」

「だけど、とそこで白瀧は言葉を区切る。」

「俺はここまで本気で戦ってきた。その一瞬に対して常にベストの選択をしてきた。」

それでも、それでも結果として失敗したのならば、敗北したのならば。……それは逃れようのない結末だったということだ。

だからこそ、俺はその結末を後悔はしないと決めたよ。過去を悔やむことで、今このときを後悔しないために」

白瀧は怪我のことを悔やんではない。あれはどうしようもないことだったのだと割り切っている。

それよりは今が大切なのだと語る白瀧。その声に迷いは一切なかつた。

「そうか。……それがチームを背負う者の覚悟か」

答えを聞いた緑間はそのまま歩き出す。

表情が窺えず、白瀧は心配になってもう一度呼びかける。

「おい、緑間!？」

「気にするな。問題はない、すでに結論は出たのだよ。……後は人事を尽くすのみ」

緑間は立ち止まり、そう語った。

「……緑間?」

「お前も言っただろう、白瀧。——俺のことは気にするな。お前は先に進め」

「ッ……!」

ようやく緑間は白瀧の方へと振り返り、口角を上げた。

そしてかつて白瀧が緑間に言った言葉を、そのままそっくり白瀧に返した。

「今回は誠凛やっらに譲るとしよう。だが、次はこうはいかないのだよ。

……冬だ。WウィンターCカップには秀徳俺達が進む。必ずな」

表情に浮かんでいたのは殺伐としたものではなく、穏やかな笑みで。まるで中学時代、共に過ごしていた時のようなものだった。

『俺が勝つ』ではなく『俺達が勝つ』と、そう言う緑間の姿は、負けた後とは思えないほど爽やかなものだった。

「……そうか。じゃあ、インターハイでは俺達が代わりに戦ってきてやるよ」

「ああ。お前も精々頑張るのだよ。……次は必ず、このような姿は見せん」

緑間は今度こそ去っていく。おそらくチームと合流するのだろう。

それを見て、もう大丈夫だと判断した白瀧も小林達がいるであろう待ち合わせ場所に向かう。

「誠凛か。まさか緑間を倒すとはな。おかげで秀徳との再戦がなくなった。

黒子に、火神。……待っている。もうお前達は俺達の標的だ。必ずや、倒す……!」

その胸に、激しい怒りと闘志を抱いて。

第三十三話 王者対ダークホース

I H 東京都予選 A ブロックは誠凛高校が秀徳高校を下し、終わりを告げた。

それと時を同じくして他の会場でも同時に行われていたブロック代表を決める試合が決着を迎えていた。A ブロック同様に、見ている者達の心が湧き上がるほどの激しい接戦が繰り広げられる決勝戦。

しかしそんな中で唯一点差がかけ離れている試合があった。決勝戦とは思えないほど点差が生まれている中、それでも観客達は一人の選手のプレイに目を奪われている。

「——遅え」

B ブロック決勝戦。桐皇学園対霧崎第一高校の試合。

黒を基調とした桐皇と書かれているユニフォームに袖を通し、5番を背負うエース。彼が一人で試合を決めていた。

青い短髪で恵まれた体格をもつ、色黒の男。

彼は驚異的な反射速度で相手のドライブを見抜き、後ろからボールを奪い去る。

「——くっそっ!?!」

「悪いな。あまりにも鈍すぎて、話になんねーわ」

己の攻撃を防がれ、表情を歪める相手チームの主将を見て、お前のオフエンスなど眼中にないのだと語る。

桐皇のカウンター。5番にボールが渡ると同時に、会場の雰囲気が変わる。

彼はPGよりボールを手にするや否や、速攻を防ぐべく立ちふさがる敵を瞬く間に抜き去り、ワンマン速攻を決めた。

「クソッ！ クソッ、クソッ!!」

何もできずにただボールを奪われ続ける現実を受け入れきれず、苛立ちが募る。

霧崎第一の4番——つまりチームを率いる主将キャプテンを務めている選手、花宮真は怒りを隠す事無く、マークにつく桐皇の5番をにらみつけた。

「なんなんだよ、テメエは！ なんなんだよその目は——青峰！」

怒りの矛先を向けられた五番——青峰大輝、〃キセキの世代〃の
エースとも呼ばれた彼は、しかし花宮の叫びを聞いても何一つ表情を
変えない。

眉一つ動かす事無く、花宮の叫びや怒りなど自分には届かないこと
だと、興味ないことだと示しているようだった。

だが青峰はその問いに答えない代わりに、ポツリと一人の男の名を
呟いた。

「……白瀧」

「ああ？ 白瀧だ？ ……ああ、なんだ。かつて仲間がやられたから、
その仕返してか？ 敵討ちを考えるだなんて、中学時代は好き勝手
やってたテメエも随分良い子ちゃんになったみてえだな」

かつて帝光時代、青峰と同じチームで共に戦った男の名前を。花宮
にとってはかつて自分がある目的のために潰させた愚かな選手で
あった。

まさか仲間が潰されたからその敵討ちにきたのだろうか。そのよ
うな甘い男になったのかと、花宮はそんなわけないとわかっていな
が、それでも鼻で笑い、青峰を挑発する。

「はあ？ 馬鹿かあんたは？ 俺はテツや緑間じゃねーんだ。仲間が
どうか、そんなツマンネーことに対していちいち腹を立てたりし
ねーよ、メンドクせえ」

「……ハッ。だろうな。そうじゃなきや興醒めだ。たかが控え一人潰
された程度で変わるほど、お前は甘ちゃんじゃねえよな」

「ああ、そうかもな」

そしてやはり、それは違う。花宮の挑発を、青峰は『見当外れもい
いところだ』と言ってため息を吐いた。

やはり青峰はそのような男ではないと認識しつつ、花宮は味方から
のパスを受ける。

トリプルスレットの体勢から、果たしてどうゲームを展開していこ
うかと考えると、

「ただ……」

「ッ!？」

青峰の眩きと同時に、自分の手からボールの感覚が消えた。

「ただあんたは俺からライバルライバルを一つ奪った。ただそれだけのことだ」

先ほどとは打って変わって青峰は厳しい目つきを花宮に向ける。強張った表情は見る者を硬直させるほどの迫力があつた。

「俺にとつちやそれは一番しちやならねーことなんだよ。」

数少ねえ好敵手ライバルとも呼べたあいつを、俺と並んで走っていたあいつをあんたは傷つけた。

だから……だからあの時あいつが受けた屈辱を、今俺があんたにも味あわせてやるよ」

——もつとも、あいつが受けたものとは到底比べようもねえがな。

心中で挫折した白瀧の姿を思い浮かべ、一瞬表情が暗くなる。しかしそれも本当に一瞬のこと。次の瞬間には再び研ぎ澄まされた動きを見せていた。

点々とするボールは桐皇が確保。再び桐皇のカウンター攻撃が始まった。

怒涛のごとくゴールに攻め寄せる桐皇。霧崎第一も必死に走り、ゴールを守ろうとするが——青峰にボールがわたると、彼らの顔に絶望の色が生まれる。

「……くっそ！ 来いよ、青峰！」

「無理だ、あんたじゃな」

青峰のオフエンスは相手のデイフェンスを嘲笑う。

——チェンジオブペース。ドリブルの速度に緩急をつけた変速ドリブル。

白瀧が得意とするチェンジオブディレクションと対をなすバスケの基礎であり、そして同時に青峰が極めたバスケの技術でもある。

「ちっ、ぐっ……!？」

縦横無尽に攻めるその動きに、花宮はタイミングさえ計ることさえ出来ない。

やがて彼の体が先に悲鳴をあげた。青峰についていこうと無理な

動きをしたためにバランスを失う。足がもつれ尻餅をつく形で崩れてしまった。

花宮のマークをかわした青峰はさらに霧崎第一の厳しいマークをかわし、相手のブロックを奇想天外な変則シュート——フォームレスシュート型のないシュートでものともせず得点した。

「くそがつ……！」

床に握りこぶしを叩きつけ、歯軋りし、悪態をつく花宮。

もはや試合をひっくり返すことさえできず、さらに相手に簡単に翻弄されて気分を害したのだろう。

「ははははっ。珍しいものを見せてもらたで」

「……今吉、さん」

そんな花宮に声をかける選手がいた。

桐皇の4番——主将の今吉翔一いまよししょういちだった。かつて中学時代に花宮と同じチームで共に戦った選手である。

糸目で柔和な笑みを浮かべているが、穏やかな雰囲気醸し出す一方で何を考えているのかわからない。そんな印象があった。

その今吉はうつすらと目を開くと、

「お前が尻餅つくところ見んのなんか初めてや。ホンマに青峰にはかなわんなあ。」

なあ、どないな気分や花宮？　ワイも経験がないさかい、教えてくれんかあ？　——惨めに地い這い蹲って、他人に見下ろされとる気分をなあ？

「……ッ!!」

ニヤリと口角を吊り上げて、花宮を見つめた。

露骨に嫌悪を醸し出す花宮の反応でさらに笑みは深くなる。

だが答えは最初から期待していなかったのか、今吉はそう言い残してデイフェンスに戻った。

その途中で青峰に歩み寄り、声をかける。

「あれでえかったんか？　あいつもなかなかええ顔しとったで」

「ああ。俺が言うよりも今吉さんが言った方が効果あるだろ」

「どないな意味やそれ？　ワイを何やと思とんや？　そこらにぎよう

さんおるごく普通の高校生やで、そんな性格悪い男みたいに言わんでもええやんけ」

(……むしろ性格が滅茶苦茶悪いからこそあんたに頼んだんだよ)

楽しそうに語る顔を見て、性格が良いと感じる人間は少ない。

毒を持つて毒を制すとはこのことだろう。と、青峰にしては珍しく脳内に存在する知識をフル活用し、そう思った。

そのまま試合の行方は変わる事無く――95得点。青峰はBブルック決勝戦にて一人で95点もの得点を稼いってしまった。

一時期は桐皇の正センターが負傷で離脱したために心配もあったが、青峰の参戦により試合は終わってみれば一方的なものだった。

試合結果、164対46で桐皇学園がトリプルスコアで決勝トーナメント進出を決定する。おそらく今の東京都最強と言っても過言ではないのだろう。それほどまでに、圧倒的であった。

誠凛と秀徳の決戦を観戦してから数日後。ついに、俺達も運命の日を迎えていた。

控え室に大仁多の登録メンバーが集う。試合開始まであと少し。各々が気持ちを整え、体をならしている。

「……それではもうすぐ私達の出番です。皆さん、改めて今日の試合について説明しますので、集まってください」

藤代監督が控え室の中に入ってきて、メンバーを集める。

――栃木県大会準決勝、大仁多高校対聖クスノキ高校の試合。始まりの時間は刻一刻と迫っていた。

「今日の相手は知ってる通り聖クスノキ高校。常盤高校を破り、今勢いに乗っているチームです。」

スターターに関してはベストメンバーで、小林さん・山本さん・白瀧さん・光月さん・黒木さんの五人で行きます」

スターターの五人を順々に見回しながら藤代監督が言う。確かに相手は優勝候補の一角を倒したチームだ。士気は向こうの方が高い

かもしれない。

県大会に入ってからスターターはこの五人で固定されていた。準決勝でもそれは変わらない。

「それで藤代監督、マッチアップは……」

「はい。これについても事前に説明した通り。」

相手のエース・楠さんには白瀧さんを当てます。いけますね?」

小林さんが詳しい戦術について問う。

聖クスノキには楠・ジャンという二人の厄介な選手がいる。だからこそその対応が気になる。それは全員同じだ。

楠はSGというポジション上、山本さんが相手するという考えもあったが、相手の能力を考え俺がマッチアップすることとなった。

あらかじめ言われていたことだし、覚悟はできている。藤代監督の期待をこめられた視線に対し、

「……はい。任されたからには、全力を尽くして役目を果たします!」俺も精一杯応えようと思った。まっすぐ藤代監督を見て意志を伝える。

「ええ、頼りにしていますよ」

理解してもらえたのか、藤代監督もうつつすらと笑みを浮かべた。

その後表情を改めて全員に向き直る。

「もう一人、センター勝負も厳しいでしょうが、黒木さんにジャンを抑えてもらいます。」

光月さんもすぐにヘルプに動けるようにしておいてください」

「……はい」

「わかりました」

もう一人の厄介な選手、センターのジャンについては同じポジションである黒木さんに一任。

大坪さんよりも背丈がありパワフルな選手だがそれでもやつてもらわねば困る。

黒木さんは落ち着いた表情で、明も言いよどむことなく頷いた。

「頼みます。小林さんと山本さんはミドルを警戒してください。」

楠さんを抑えれば、相手は外の戦力は殆どないと考えても大丈夫で

す。お二人でチームを支えてください」

「はい、必ずや！」

「言われずとも」

そしてミドルは小林さんと山本さん、二人の三年生がケアする。

小林さんも山本さんも気迫がこもった返事をして、とても頼りになると感じられた。

「他の方々もいつでも出られるように、準備は怠らないように。……それではもう少しの間、鋭気を養っててください」

最後に控えメンバーにも声をかけて藤代監督は腰掛けた。

あと少しで試合が始まる。ここまでの予選で戦ってきたとは違い、相手は強豪校を倒した精鋭だ。

そのためか控え室の雰囲気も今までよりもさらに引き締まっている。まるで秀徳との練習試合の時のようだと思ってしまうのは、仕方のないことだろうか。

「……要、大丈夫そうか？」

ふと勇に声をかけられた。こいつも試合を前にして落ち着かないのかもしれない。

「ああ。調子も悪くはない。相手も厄介な選手だが、ここで躓いてはられないからな」

「そっか。いや、相手がまた長身のSGってことで、緑間を思い出すんじゃないかと思ったから心配になったんだ」

ああ、なるほど。俺のことを気にしてくれたのか。

たしかにスタイルこそ違うものの、相手の体格やポジションなどは緑間とよく似ている。

ついこの前秀徳の、緑間の試合を見た後だから、俺がそれを意識しているのではないかと思っただろう。

「……大丈夫だ。今はそれについては考えないことにしている。

それにそんなことを考えていたら、緑間に怒られてしまうだろうか
らな」

だが、今はそのようなことは頭に入っていない。今は目の前の相手に集中するだけ。

勇の心配を拭えるようにと笑みを浮かべて答えた。

「そつか。じゃあ気持ちの面は大丈夫か」

「まあ後は純粹な選手としての問題、になるな」

「……だからこそ、後は実力の勝負になる。」

純粹に俺が楠を抑えられるか否か、勝てるかどうかで試合の展開も変わるだろう。

こんなところで負けるわけにはいかない。俺はまだ約束を果たせていない。そして楠を倒さなければ、それこそ俺はキセキの世代への挑戦など適わない。勝つしかないんだ。

「必ず勝つ。俺も、大仁多も」

この試合の先へと道が続けるために。

先に行われていた女子の部、準決勝が終了した。彼女達が整列し、片付けをする。

少し時間を置き、試合開始前10分前になる。そうしてついに次に行われる男子の部、準決勝に出場する4チームの選手達がコートに入場した。

「出てきた！ ここまで勝ち残った4チーム！」

「うおおおお！ 頑張れよー！」

大仁多、聖クスノキ、盟和、山吹。今年の栃木で最強を決する4校の登場に、会場が沸く。

選手達は歓声を受けつつ、ウォームアップをそれぞれ開始した。

「おおい、茜ー！」

「え？ ……お兄ちゃん？」

そんな中、大仁多の選手達の郡に近づく者が一人いた。

盟和高校の選手の一人であり橙乃の兄、勇作である。橙乃の姿を見つ、彼女の元に駆け寄った。

果たして試合前に何事かと橙乃は首をかしげた。

「一体どうしたの？」

「戦いの前に愛しの茜の声を聞きたくなつてな。応援頼むぞ！」

「私、大仁多のマネージャーなんだけど。……まあ、頑張つてね」

「おう！ もちろんだ！ それと……」

橙乃の問いに胸を張って答える兄の姿に少し呆れつつ、橙乃は兄に声援を送った。

戸惑いが多分に含まれたものであったが、勇作にはそれでも十分だったのか、満足げに頷く。

そして同時に、翌日の決勝戦に勝ちあがることを想定して、こう続けた。

「明日の試合前にも、それをよろしく頼むぞ！」

自分達が優勝するという意志を含めて。

「……駄目。これは譲れないから」

「ちえつ。はあ、やっぱり駄目か」

さすがの兄でも勝負は譲れず、橙乃は笑みを浮かべて兄の願いを否定する。

答えはわかっていたのか、勇作もそれほど悔しい顔は浮かべず、そっぽを向いた。

「あまりうちのマネージャーをからかわないでくれるか？」

「……小林。からかつてなどいいない。ただ妹と戯れていたただけだ」

「少なくとも今この場ではお前の妹ではなく、うちのマネージャーなんだが」

「どうしよう。今からでも大仁多に転校しようかな」

困り果てた橙乃を助けるように、小林が割って入った。

あくまで大仁多のマネージャーだという点を強調し、勇作を牽制する。

その言葉はたしかに正論で、勇作もさすがに強くは出れない。思わず大仁多への転校を考えてしまった。本当にこれで良いのか、盟和のキャプテン主将。

「用件が済んだのならば早く戻ったほうが良い。お前のチームだろう」

「ふん。たしかにそうだが、お前にも一言言うことがあった。……借

りを返すチームが、負けてもらっては困るからな」

先を促す小林を、勇作が視線で射抜く。

そう、勇作達盟和高校は過去に二度、連続で大仁多という壁に阻まれた。

今年で彼らも三年。つまりは最後の機会となる。だからこそ二年分の借りを返す為には大仁多に負けてもらっては困る。自分達の手で大仁多を倒してこそ意味があるのだ。

「なにせ相手は常盤を破り、勢いのあるチームだ。あの攻撃力抜群のチームにお前達が音を上げてもらっては……」

「その心配はない。こちらとて戦力は整っている。それに」

それになによりも、と小林は続けた。

「勢いのある槍ほど派手に折れるものだ」

ニヤリと口角を挙げる。自信に満ち満ちた目をしていた。

負けるつもりは微塵もない。必ず勝つという気持ち伝わってくる。

「ならば俺からは一つだけだ。——決勝で会おう。じゃあな、茜」

だから勇作もそれ以上は問わず、小林に背を向けてチームの方に歩いていく。

橙乃にも手を振って答え去っていった。盟和も彼らと同じように、準決勝で散るつもりなどない。

「……なんか、今日は聖クスノキの応援、やけに多くないっすか？」
「普段は大仁多の方が多いという逆の立場なんだがな。これではこちらがヒールのようだ」

本田が観客席を眺めて呟いた。本来ならば優勝候補の筆頭であり、実績もある大仁多の方が応援も自然と多くなる。

しかし今日は聖クスノキへの声援の方が大きく聞こえるほど、観客が集中していた。

この異例は珍しく、中澤も少し不安な表情で頷く。

「どうやら今日の試合、相手の聖クスノキ高校は学校側が応援団を募って来ているみたいよ」

「学校が？ それだけ聖クスノキがバスケに力を入れてるってことですか？」

「いえ、今まではそれほどではなかったけれど。……常盤を破ったからこそ、だと思っわ」

それほど名前を聞いたことはなかったが、果たして有力な高校だったのだろうか。

疑問に思った西村が東雲に問い返す。東雲は左手で髪をかきあげながら答えた。

「栃木の4強、その一角が崩れた。強敵を打ち破り、しかも次の相手は栃木の王者・大仁多。」

期待するのも無理もない話だと思うわ。ここで大仁多を倒せば、もうIH出場は夢ではなくなるもの」

「それでこんなに観客が集まったのか」

説明を受けて三浦がため息を一つこぼす。別に声援に惑わされるというわけではないが、やりにくくなるという一面はある。

相手の声援だけが大きくなり、敵が点を決めるたびに会場が湧き、こちらが決めても場が静まる。士気を保つことが難しくなるのだ。

(……何も影響がなければいいが)

そして精神的な問題がプレイにも影響することがある。たださえ相手は勢いがあるというのに、これ以上不安要素を作る必要はない。

バスケットボールを握り締めながら、佐々木はコートを見据えた。「まあこちらにも応援がないわけではない。あとは俺達も一人一人が声を出していくことだ」

「……わかってますよ。ベンチが静まり返っては、それこそチームが沈んでしまいますからね」

松平の言葉に三浦が笑みを浮かべて頷いた。

それは誰もが理解している。だからこそ彼らが仲間を信じ、また彼らに応えなければいけない。

「正直な話、楠さんはSGとしての実力は全国区とを考えても良いと思う」

橙乃が白瀧と神崎の前で不安な表情を浮かべた。

相手の強さを理解しているからこそである。理解しているからこそ不安を隠し切れない。

「楠さんはバスケに必要なスキルが殆ど揃っている。

高さ、スピード、パワー、イケメン、テクニク、彼女、イケメン。

純粹にスペックの面では白瀧君が圧倒されているかもしれない」

「……ちよつと待て。今言った中でいくつかバスケに関係ないものなかったか？」

「てか、あいつ彼女いるの!? そこらへん詳しく!!」

「どうやらマネージャーの西條さんと付き合っているって情報があるよ」

「情報網がすばらし過ぎる。そしてやはりリア充だったのか」

楠はバスケに必要なスキルを持ち合わせていた。それは先の常盤高校戦で明らかになっていったこと。

この試合、彼とマッチアップする白瀧の負担は大きいもの。ゆえに橙乃は試合前にあらかじめ白瀧に忠告した。

呆れつつも心の中で対戦相手の評価を上げておく白瀧。神崎は情報の中でただ一点気になったことに対し、怒りを燃やしている。同じポジションという都合上、対抗心を持つてくれるのはいいことだ。

「外角のシュートもあるから、気を抜けない展開が続くと思う。

どちらかというドリブルから仕掛けるタイプだけど、気を抜かないで」

「……ああ、わかってる。緑間や勇とも何度か戦って外への警戒心はついている。だからこそ地上戦だ。ここで何としても勝つ」

「そうだな。緑間と違って、楠は外角はそれほど確立高くないみたいだし、プレッシャーをかければお前のスピードで翻弄できるだろ」

「そのつもりだ」

期待をこめられた視線を向けられ、白瀧は強く頷いた。

気迫は十分。相手への対策もある。あとは全力を尽くすだけ。

「——ついに、ここまで来たか」

聖クスノキ高校に与えられたベンチに腰掛けながら楠は天井を見上げた。

去年はここまで勝ち上がることもできなかった。しかし今はこうして王者に挑もうとしている。

あと二つ勝てばIHへ出場できる。その事実が楠を勇気づけた。

「よし、お前ら準備はいいな。今日は最初から全力で行くぞ。楠、お前もスターターだ」

「……はい」

「頼むぞ、相手のエース・白瀧を抑えられるのはお前しかない」

目の前に立つ監督、石川久則いしかわひさのりの声に応える。

ここまで楠が出場した試合は一試合、常盤高校戦の第四Qのみだった。

その彼が、ついに先発出場を果たす。それだけこの試合が重要かつ厳しいものだということを意味していた。

それをより示すように、男子バスケ部のマネージャー、肩まで掛かる茶髪の女の子——西條奈々が話し始めた。

「相手の大仁多高校は総合力が高く、バランスが取れている隙がないチームです。」

対して聖クスノキちはセンターのミスマッチを利用して得点する、ゴール下が強い。それはこの試合でも変わらないはず。いつも通りいきましよう！」

『おうー！』

西條の言うとおりに、大仁多は今までのチームとは桁違い。おそらく並大抵の戦術は通用しないだろう。

だからこそ、ここまでのように彼らが有利である点でとことん勝負する。

その意見に同意を示すように、スターター五人が力強い返事をした。

「くーっ！ やっと大仁多ですか。楽しみだわー、王者を相手にするなんて！」

決戦を前に胸を躍らせ、明るい声を発したのは、PFの真田。

どうやら彼にはプレッシャーというものはないようだ。活気な声がベンチに響く。

「まさか最後の年にここまで来れるとは思ってなかったじゃん。後は当たって碎けるだけだ。——なあ、山田！」

その真田に追従するように同学年、三年の沖田が独特な口調で言った。

最後だから悔いは残さない、残せない。ある意味良い方向に吹っ切れていた。

「……いや、当たって碎けちゃ駄目だと思えますけど。僕としてはあくまで勝ちたいかなー、なんて」

「あくまで物の例えじゃん！ 本気で捉えるなよなー。それは皆同じ気持ちじゃん」

呼びかけられた二年のPG、山田は控えめに意見を述べた。

冗談のつもりが真面目に捉えられてしまい、沖田は苦笑しつつ、勝利への姿勢を見せた。

その姿が嬉しく思えて、山田もつられるように笑顔になる。

「当たり前だ！ そのためにここまで来ている。……そうだろう、ジャン」

「モチロン。王者だが何だか知らんが、全て蹴散らしてヤル！」

真田の呼びかけに、ジャンは凄まじい気迫を持って応えた。

ここまでの試合の殆どがジャンの独壇場であった。それが大仁多相手でも通用するのか、いや必ず打ち倒す。

今勢いに乗っている。このまま大仁多を倒すのだと、選手達は闘争心があふれ出していた。

「よし。——勝ってこい！」

試合開始30秒前。石川監督が選手達を送り出す。

「……ロビン！」

「うん？」

「ちよつと……」

五人がベンチに背を向けて歩き出す中、西條が楠の名前を呼び、引き止めた。

「どうした？」

突然の呼び出しを不思議に思い、首をかしげる楠。

「……無理だけはしないでよ」

そんな楠を見て、西條は不安げな顔で、細々と言った。

「大丈夫だよ。約束しただろう？ 必ず優勝をプレゼントするって
や」

楠は彼女の不安を脱ぎ去るよう、爽やかな笑みを浮かべた。

それだけ言うと、四人を追いかけるようにコートに走っていく。

「……………」

それでも、西條の不安が解けることはなかった。

センターサークルに10人の選手が集い、それぞれの思いを秘め、向かい合う。

「——それでは準決勝第二試合、大仁多高校対聖クスノキ高校の試合を始めます！」

審判の声で挨拶をかわし、試合の開始が宣言される。

両チームの先発は以下の通り。

大仁多高校 スターティングメンバー

小林圭介（三年） PG 188cm

山本正平（三年） SG 178cm

黒木安治（二年） C 195cm

白瀧要（一年） SF 179cm

光月明（一年） PF 192cm

聖クスノキ高校 スターティングメンバー

真田雪志郎 (三年) PF 182cm

沖田真二 (三年) SF 176cm

ジャン・ディア・ムール (三年) C 204cm

山田明弘 (二年) PG 171cm

楠 くすのきロビン (二年) SG 190cm

チームのバランスは大仁多の方が良いだろうが、聖クスノキはジャンと楠・この二人が飛び出ている。

センターサークルの中心へ歩いていくジャンに、沖田が声をかけた。

「まずは最初景気良く決めるために、ジャンパーは任せたじゃん、ジャン！」

「……沖田、お前ノその話し方、頼むから辞め口。呼ばれたのか呼ばれてないのかわからなくなル！」

「仕方がないじゃん。こういう癖なんだから……」

「まったク。だが、まあ……任せ口！」

沖田の独特な口調に苦言を漏らしつつ、ジャンは彼の期待に応えようと親指を立てた。

(大坪よりも大きい。これは、厳しいか……!)

ジャンと向き合っている黒木は大坪よりもさらに背が高い姿を見て、冷や汗をかいた。

二メートル越えを見たことがないわけではないが、留学生ともなるとやはり印象が違う。

勝負の前に自身の不利を察し、厳しい顔つきになった。

考えたことは他のメンバーも同じであり、白瀧は自分のポジションへと向かう光月に声をかけた。

「おい明。最初の一発は辛いかもしれない。いざという時はすぐに動けるようにしとけよ」

「……」

「うん? おい、明?」

念には念をおき、光月に忠告する白瀧。しかし相手から何の反応もないことに違和感を抱き、彼の顔を覗き込む。

「……あ、やばい。こいつ完全に飲まれてる」

そして光月の異変を感じ取った。光月は表情が強張り、固まっていた。

ベンチでは大丈夫だったはず。しかしコートに立つことで緊張が爆発してしまったのだろう。

特に光月の場合、今までこれほどの歓声の中で、しかも敵の声援が多い中でプレイしたことは一度も経験したことがなかった。

それゆえに本番のこの空気に彼の精神が耐え切ることができず、こうして危機に陥っていた。

(コレは、まず一発決めて落ち着かせないと……)

「小林さん!」

友の心境を察した白瀧は小林に右手を後ろに回し、合図を送る。

小林も意図を理解し、大きく頷いた。隣の山本も同じく首を縦に振る。

(安心しろ。まずは相手の勢いを黙らせるさ!)

「——試合開始!」

白瀧が意志を固めると同時に、試合が始まった。

黒木とジャン、二人の選手が審判が放ったボールにあわせて、ボールを巡って跳ぶ。

(……くっそっ!)

「又ウオラ!!」

最高点に達したボールをジャンが叩く。やはり高さでは大仁多一を誇る黒木でも敵わなかった。

「よっし、ナイスですジャン!」

弾かれたボールは山田の元へと渡る。

そしてすぐさま攻め上げようと顔を上げ、前を見る。

「させねえよ!」

「なっ——!?!」

その瞬間を、狙われた。手からボールの感覚が消える。

白瀧のステイール。低く身を屈め、そして一瞬で相手からボールを奪い去るプレイに、山田は反応できなかった。

「そうだ。白瀧さんの武器は何も瞬発力だけではない。

帝光という——“キセキの世代”という環境を生き残る中で、数多くの強豪校と渡り合った中で培われた、ボールに対する嗅覚。そして執着心！」

この動きこそが白瀧の武器の一つだった。藤代が満足げに頷く。

大仁多バスケット部に入部したときに行われたミニゲームの時と同じ。

たとえジャンプボールを敵に制せられても、白瀧はボールの行き先を瞬時に見極め、ボールマンへと襲い掛かる。相手がボールをもち、油断した隙もついて。

「よくやった白瀧！ ホラー！」

そしてそこから行われるは——大仁多お得意の、白瀧のステイールからのアウトナンバーの速攻！

転々とするボールは山本が確保し、そしてあつという間に山田のマークを振りほどいた白瀧にボールが通った。

（よし！ まずは先制点！）

バスケット目掛け、無人のコートを白瀧が駆け上がる。それに続くように小林や山本達も続く。

こうなればもはや誰も大仁多の攻撃を止めることはできない。

「ッ——!?!」

その、はずだった。

突如白瀧の前に回りこむ選手が現れた。

——楠である。彼は白瀧の右腕からボールだけを叩き、白瀧のドリブル突破を防いだ。

「なっ——に?！」

「その正確性が仇となったな。ボールの行く先を教えてくれているよ
うなものだ」

「やばっ！」

「戻れ戻れ！ 先制点を簡単に渡すな！」

驚愕する白瀧には目もくれずに、楠はすぐに駆け出し、叩いたボールを掴む。

そして聖クスノキのカウンターがはじまった。

藤代もコートから指示を飛ばすが、全員が攻めあがっていたために
そう簡単に戻れない。

楠は光月の横をあつかりと突破し、単独でゴールへと向かう。

「待て、このー!」

小林も含めて誰もがその背中に追いつけない中、白瀧が楠と並走し、戻っている。

「よっし! 白瀧が並んだ! これなら止められる!」

「頼みます、白瀧さん!」

唯一防ぐ可能性を持つ白瀧にベンチの期待の聲が高まる。

(待て、並走しているだど?)

「……そんな馬鹿な」

しかし藤代はどのように安直に二人の姿を捉えることはできな
かった。

「何故だ。何故……何故白瀧さんが、ドリブルをしている相手を追
抜けない!?!」

並走しているということはすなわちスピードが同じということ。

ドリブルにより、幾分かスピードが落ちているはずなのに。それ
で楠と白瀧のスピードが同じなど、信じられない。

(いや、まだだ。それでもわずかに白瀧さんが前を走っている!)

だが同時に、少しずつ白瀧の体が前に出ているように窺えた。やは
り白瀧ならスピードで負けることはない。

ついに体一個分前に出た。もはやゴールは目の前、楠は仕掛けるし
かない。楠はゴール下からレイアップを狙う。

「させるかっ!」

白瀧が跳ぶ。右手を高々と挙げ、楠のレイアップを叩きに行く。

「おし、高い!」

「止めろー!!」

「……無駄だ」

小林が、山本が叫ぶ中。楠は冷静に口角を上げた。

右手から左手に、空中でボールを持ち替え、白瀧の右横からボール
をすくい上げ、白瀧のブロックをかいくぐる。

「なっ!？」

(ダブル、クラッチ……!?)

白瀧は驚愕の中、背中でネットが揺れる音を耳にした。

(大仁多) 0対2 (聖クスノキ)

試合開始早々、聖クスノキ高校が先制点を決めた。

「上手い! さすが、常盤の柵を倒したただけはあるか楠……!」

「あの白瀧のブロックをなんなくかわした!」

スピードだけではない。白瀧のブロックをもともせずシユートを決めるあのテクニック。

準々決勝で常盤高校を、柵を破った実力は伊達ではなかった。

楠は背中に突き刺さる小林達の鋭い視線を軽々と受け流し……

「……その程度か、『神速』」

「ぐっ……!!」

自分よりも背丈の低い白瀧を見下し、そう告げた。

白瀧は無意識に右手を握り締めていた。

第三十四話 『神速』の定義

聖クスノキのオフエンスに対して、大仁多はマンツーマンディフェンスを展開した。

楠には白瀧がつき、事前に藤代に指示されたとおりマッチアップしている。

ハーフコートを超えたところで山田から楠へとパスが通る。白瀧が楠のペネトレイトを警戒して深く守っていると、

「侮るなよ、白瀧」

「ッ——!?!」

楠はスリーポイントラインの外側から、ノーフェイクでシュートを放つ。

白瀧が遅れて跳ぶが、打点が高いためにブロックは間に合わない。放たれたボールはネットを揺らし、聖クスノキに追加点が記録された。

「あー、くそっ!」

天井を見上げ、悪態をつく。楠のスピードを警戒するあまり、シュートへの対応が疎かになってしまった自分の失態を責めていた。(このままでは駄目だ。やはり普通のマンマークではどうしてもシュートの反応が遅れる。)

楠のドリブル突破は脅威だけど、スリーもある以上好き放題やってくれと言っているようなものだ)

わかっていたこととはいえ、楠の最高到達点は高い。ゆえに背丈で劣っている白瀧がシュートを防ぐことは容易ではない。

ドリブルとシュート、両方を警戒しなければいけないこの状況に、白瀧は頭を悩ませた。

「でも、それでもやってやる。こんなところで立ち止まっていられるか!」

しかし白瀧の闘志は戦況とは反比例して燃え上がっていた。

——かつてキセキになり損ねた少年。彼の前に、今再び才能という

壁が立ちはだかる。

「……っつーか今さらだけど。なんで俺まで試合を見に行かなきゃなんねーんだよ?」

「火神君も白瀧君にエールを送ってもらったじゃないですか。それに今療養中だからやることなくて暇だろうと思ったので」

「あいつにはただ喧嘩売っただけだ。あと人のことを暇人みたいな言い方するんじゃないよ」

「まあまあ。何にせよ、レベルが高い選手達のバスケットを見ることは悪い話ではないですよ」

「わかってるよ。だから一応ついて来たんだろうが!」

栃木県大会予選が行われている体育館。そこを目指し、言葉を交わしながら足を進める二人の男子高校生がいた。

黒子と火神、誠凛高校の選手達である。

二人は黒子の提案により、今日行われる大仁多の試合を見にきたのである。

どちらも白瀧とは少なからず因縁もあり、交流があった。丁度休日に行われる都合が良い日程だったので偵察がてら観戦することにしたのである。

特に火神は先の秀徳戦で足を痛めていたため、暇を潰すことができている。良いだろうと思ったのだ。当の本人は頑なに否定しているが。

「で? 黒子、お前さっきからケータイの画面を眺めっぱなしだけど、一体何やってんだ? 調べものか?」

「はい。栃木の高校バスケットの記事です。会場に着く前に、現在勝ち残っている4校について調べようと思って」

黒子が見つめる先、携帯の画面には栃木県大会の予選情報が掲載されている。

4強に名を連ねた四校。それぞれの高校について前評判がそれなりに詳しく載っていた。

——今年のインターハイ栃木県予選男子の部において、波乱が生まれた。4強は確実と言われた常盤高校の敗退である。

果たして今年も大仁多がI H ^{インターハイ} 出場の枠を守るのか。あるいは栃木の王者の牙城を打ち破る高校が現れるのか。準決勝でも物語が生まれるかどうか、今後とも試合の行方に目を離せない。

Aブロック代表は昨年度のI H ^{インターハイ} でベスト4まで勝ち残った王者・大仁多高校。

全国区のP G・小林をはじめ、全国を経験した猛者達が集う。さらに今年は得点王を記録中のエース・白瀧を含む五人の一年生がベンチ入りを果たした。王者は新戦力を伴って連覇に向かって突き進む。

Bブロック代表は常盤高校を破った聖クスノキ高校。今大会注目のダークホースである。

予選ではゴール下にニメートルを越す長身センター・ジャンを据え、インサイドを支配した。さらに準々決勝では柘を圧倒するほどの実力を持つ楠が活躍。この勢いに乗って新鋭は打倒・大仁多を目指す。

Cブロック代表は山吹高校。かつてはI Hに出場したこともある栃木の古豪だ。

チームの核たるエースはいないが、それを補って余りあるチームワークで勝ち進んできた。横山、菅野のガードコンビを中心に相手ディフェンスをかき回すラン&ガンで敵を攻め崩す。

Dブロック代表は二年連続で県大会準優勝を果たし、栃木内で最も王者に近いと噂される盟和高校。

ポイントゲッターの橙乃を主体としたゴール下のオフエンス力が高い。小林に次ぐ司令塔と呼ばれる細谷の落ち着いたゲームメイクも今だ健在だ。今年こそ悲願の初優勝を信じ、必勝を誓う。

準決勝、盟和高校対山吹高校は大仁多の対抗馬と期待される盟和高校が有利だろう。

ゴール下を制する屈強なフロントラインが山吹のミスマッチを狙える。二年連続で味わった敗北に対する雪辱にも燃えていて士気が高い。

山吹高校はどれだけ自分達のペースで勝負を仕掛けられるかにかかっている。立ち上がりでどこまで流れに乗れるかに注目。

大仁多高校対聖クスノキ高校は波乱の可能性がありうる。

ここまで大仁多はすべて100点ゲームで勝利を掴み取り、磐石の態勢で挑んでいる。攻守に隙がなく、バランスが取れた大本命。

一方聖クスノキ高校は強豪・常盤高校を破った勢いがある。ジャン・楠の両大型選手が大仁多を相手にどこまで戦えるかが鍵だ。

「……大仁多が本当に評価高いんだな」

「それはそうですね。ここ数年、栃木の代表は大仁多高校で決まっていますから」

「へえ、東京の三大王者みてえなもんか」

改めて大仁多の強さに感嘆する。

火神も強豪校との話は聞いていたが、前評判でここまで呼ばれるのは並大抵のことではない。

まるで東京都が誇る三大王者のようだと考えてしまった。

(相手の聖クスノキの評判も気になっけど。……まあ、大丈夫だろう)

対戦相手のことを頭に入れつつ、二人は道を抜けてコートが見えるギヤラリーへと入った。

すでに試合は始まっていた。どつと沸きあがる歓声。おそらく試合早々から何か動きがあったのだろう。

「……え？」

「なっ、嘘だろ!？」

だが、得点を記録する電光掲示板を目にして二人は固まった。

(大仁多) 6対11 (聖クスノキ)

試合が始まってから三分と三十秒が経過している中、大仁多は劣勢に立たされていた。

「そんな、どうして……白瀧君？」

まさかどこか調子が悪いのかと、黒子は旧友の姿を捉える。

だが黒子の目から見ても白瀧の動きに特に不調の色は見られなかった。

小林が高さのミスマッチをつき、白瀧へとパスが通る。

中央から右45度へ場所を移し、楠との一対一が始まった。

聖クスノキのディフェンスはマンツーマン。こちらもやはり白瀧には楠がマークについていた。

「また来るか？ いいぜ、来い」

「……つたく。どうしてこう俺の相手には手ごわいヤツばかりが現れるんだ」

——しかも皆背高いし。と白瀧は心中で悪態をつく。

だがそれでも一度やると決めたからにはその意志を貫き通す。

白瀧のクロスオーバー。一瞬で切り返し、ボールと楠の間に体を入れ込み、ハイポストの中央へと侵入する。

他の敵選手も近くにいるいる密集地。しかし白瀧は迷う事無くレイアップシュートを放った。

「なに!？」

「ちよっ!? 撃つの早っ!」

(ブロックも間に合わないじゃん!)

遅れて後を追いかけた楠と咄嗟に動いた沖田が両脇から交差するようにブロックに跳ぶ。

だが白瀧は二人の腕をかくぐるかのように、ブロックの下からボールを放つ。

(——スクープシュート!)

それは相手ディフェンスをかわすために低い位置から掬い上げ、遠くからレイアップシュートを放つスクープシュートと呼ばれる技。

白瀧自身も二人のブロックをかわし、成功を確信する。

「なっ——!?!」

だが、突如大きな影が現れたことで確信は驚愕に変わる。

「させるカ!!」

ゴール下で黒木と競っていたジャンが大きく跳躍し、ボールを叩き

落としたのである。

ボールは力強く床に叩きつけられ、そのままラインの外へ。

「アウトオブバウンズ！ 大仁多^白ボール！」

再びボールは大仁多へと移るが、しかし得点を決められなかったその衝撃は中々大きい。

「白瀧のスクープシュットを叩き落した……」

（たしかにディフェンス二人のせいでコースを制限されていたとはいえ——やはりブロックが高い）

常識離れの高さに山本は思わず冷や汗を覚えた。

審判よりボールを受け取りつつ、どうしても視線は自然とジャンを追ってしまふ。試合開始からずっとゴール下を制している、あの巨体に。

「山本、もたもたするな！」

「ッ！ お、おう！」

集中力が途切れかけた山本に声をかける男がいた。

小林である。小林はライン上にいる山本に声をかけながら接近。手渡しの形でボールを受け取る。

ボールを手にすると小林はマークにつく山田をかわし、ペイントエリアへと侵入。真田をひきつけるとポンプフェイク一つで引っかけ、さらにバスケットに迫る。

ついにジャンが駆けつける。小林がレイアップシュートのモーションに入ると同時にジャンが跳躍。

それに対し、小林はジャンの体の横へと腕をずらし、ボールを軽く放った。

「黒木！ フリーだ！ 撃て！」

パスの先にいたのは黒木。

黒木のマークだったジャンは小林のフェイクにつられた。これならばいける、すぐさまジャンプシュートを撃った。

「ッグー！ まだダー！」

するとジャンも負けじと着地と同時にもう一度跳ぶ。

先ほどの小林が体が流れていたためにあまり高さがでず、ジャンも

それほど跳んでいなかったのだ。

黒木が撃ったボールにジャンの指先がわずかに触れる。それによりボールもネットをくぐることはなく、リングにあたり、逆側へと落ちた。

「ちっ！」

「リバウンド！」

「——明！」

「わかってる！」

（……ヤバイ！ こいつ強い！）

光月と真田がポジションを競り合う。

だが体格もパワーも光月の方が上だった。ベストポジションを取った光月がオフエンスリバウンドを制する。

そして着地と同時に動き出した。

（僕が決めないと……！）

足がつくと同時にスピムムーブ。真田のプレッシャーを背中で受け止めつつ、左足を軸に鋭く切り込んだ。

ゴールはすぐ目の前。マークもかわし、これなら外すわけもないと光月はジャンプシュートを撃つ。

「舐めるナツ!!」

「……！」

だがこれも、ジャンのブロックにより止められてしまった。
「なっ——!?!」

「大仁多が誇るフロントライン、壊滅——!!」

「ジャンの三連続ブロックが炸裂だ！」

これで白瀧・黒木・光月と大仁多のフロントラインが連続でジャンにブロックされてしまった。

ゴール下が強いとは聞いていたものの、ここまでセンター一人に抑えこまれるのは珍しい。それほど留学生の力は凄まじかった。

その派手なプレイは、王者を圧倒する姿は観客を沸かせた。さらに聖クスノキの声援が高まる。

「ちっ、まだまだ！ 手を緩めるな！」

悪循環が生まれようとする中、小林が声を張り上げチームを鼓舞する。

転々とするボールを確保した彼は一度左サイドに構える山本にボールを回す。

（立ち直りが早い。さすが、大仁多のキャプテン……）

自身も少なからず衝撃を受けているだろうに、それでもなお司令塔として冷静にコートを見る小林を見て、山田は素直に感心した。

隙がないのである。たしかに身体能力も経験も劣っているが、それでも隙あらばと観察していた。それでも、連続で得点を失敗した後でもまったく変化がなかった。

山本はシュートフエイクを入れた後、中央の白瀧へとパス。白瀧はいくつかフエイクを入れた後、鋭いパスをゴール下へとさばく。

「あつ……!?!」

しかしこれを光月がとりこぼしてしまう。手で弾いてしまい、ボールはコートから外へ転がっていく。

「くそつ、何をやってるんだ!」

このままボールが出れば聖クスノキへとボールが渡ってしまう。

それだけは防ごうと白瀧が駆け出した。しつこく向かっていき、ボール目掛けて飛ぶ。ライン上でボールを手におさめると、そのまま体を空中で反転させた。

「山本さん!」

駆け寄るチームメイトを頼りにボールを回す。

すると白瀧と山本、二人の間に割ってはいいる選手が現れた。

「なっ!?!」

「ボール、サンキュー」

「――楠!?!」

楠がボールを奪い去り、コートを駆け上がる。

山本をクロスオーバーでかわして抜き去ると、追いかける小林や山本を置き去りにした。

「まずい、楠の速攻をとめられない!」

実力者である二人でもそのスピードに追いつけなかった。白瀧に

勝るとも劣らないそれは、大仁多の選手達を置き去りにした。

「――ふぎけんな、よー！」

だがそれをただ見ているだけの白瀧でもない。

白瀧はボールを奪われたことを理解するや否や、すぐさま走り始めた。

(ここで勢いをつけさせたら、それこそ流れは簡単に取り戻せなくなる！)

古武術の膝抜き、それを連続で行った。重心を足へ移動し、地面を力強く蹴り上げる。右足を蹴り上げたなら左足へと移行し、まるでバネのような瞬発力を発揮した。

そのスピードはついに楠をも上回り、一足早く戻ることを可能にした。白瀧は楠を万全の状態待ち構える。

「よし！ やっぱり白瀧の方が速い！ 頼むぞ！」

ベンチも白瀧の姿を捉え、彼に期待を寄せる。

(……いや、でも膝抜きは使いすぎると白瀧さんにかかる負担が大きくなるはず。それなのに、こんな序盤で連続使用して大丈夫なのかな？)

ただ一人、西村だけは白瀧のプレイに不安を覚えた。

それでも今この流れを止められるとしたら白瀧しかいないのも事実。西村も今は声援を送ることに集中することにした。

白瀧が待ち構える中、楠は止まらなかつた。おそらくここで決めなければ敵がデイフェンスに戻る方が早いと考えたのだろう。

だからこそ、楠は一気に仕掛けた。ドライブから急停止、そしてジャンプシュート。

(大丈夫だ、いける！)

フェイクではない、基礎に忠実なジャンプシュート。最初のプレイと違って不意をつかれた訳でもない。

これなら止められると判断し、白瀧も跳躍する。

……しかし、そんな白瀧を嘲笑うかのように、ボールは白瀧の指先を通過していった。

「なっ!？」

「残念だったな」

(大仁多) 6対13 (聖クスノキ)。再び聖クスノキの得点が記録された。

「白瀧のブロックをもともせず、だど!?」

「今のシュートは普通のジャンプシュートだったよな? だけど、どうして?」

連続で白瀧のブロックをかわした楠。

さすがにこれには味方内に動揺が走った。基本に忠実なプレイだからこそ、違和感があった。

(……いや、違う! 今の楠のシュートは、あいつが最高点に達する前に打ってきた。

つまりただのジャンプシュートじゃない。ジャンプの勢いを利用して相手のブロックのタイミングを外す、ジャンピングシュートの方だ!)

そんな中、対面した白瀧は相手のシュートのからくり気づいていた。

楠のシュートはジャンプの途中にシュートを放つというジャンピングシュート。それゆえに白瀧もブロックが間に合わず、指先を越されてしまったのである。

(そうになると背丈が小さい俺の方が不利となる。……くそっ! ここでもまた身体能力の差が出たか!)

己の無力さが情けなく、白瀧は歯を食いしばった。

「ドンマイ、あまり気負うな! 一本ずつ返して行こう!」

山本がスローインしてゲームが再開する。小林と山本の二人がボールを回していくが、普段よりも攻撃のリズムが悪い。白瀧もフリーになれず、攻めあぐねていた。

(如何せん流れが悪いな。中はジャンが大暴れしているし、敵もひたすらプレッシャーかけてくるからそう簡単にシュートを撃てない。

かといって外から安易に攻めるわけにはいかない。身動きできない白瀧に加え、山本も中が負けているせいで外からの勝負は分が悪い)

選手一人一人の動きを見ながら、小林は戦略を考えていた。

バスケットはどうしても中で競り勝つことが必要なのだ。得点の大半は二点シュートである。さらに成功率が100%でない以上、リバウンドを取ることが重要だ。そして中が安定すれば外も生きてくる。だからこそ、何としても中から点を——二点を取りたいところである。

(そうになるとマークが厳しい白瀧や黒木で攻めるよりも——)

「行け、光月！」

ゆえに小林はローポストの光月へとボールを回した。

今日の動きがあまりよくないものの、一番可能性があるのも彼なのだ。

「……ハッ、ハッ……ハッ！」

ボールを手にした瞬間、光月は心臓の鼓動が速くなることを実感した。汗が頬を伝い、コートに落ちる。

一瞬、視線を後ろでマークにつく真田に向け——そしてフロントターンからシュートを放つ。

ターンアラウンドシュート。光月が何度も繰り返し練習していたシュートだ。

どうやら不意をつけたようで、真田の反応が一瞬遅れる。

「くっ、そっ！」

そして真田はボールを止める事はできず……光月の腕を叩いた。

「え……？」

『ディフェンスファウル！ 聖クスノキ^黒4番！ ツースロー！』

突然の衝撃で光月は力を入れることができず、空中でボールを落としてしまう。

審判はそれを見て、聖クスノキの4番・真田のファウルを宣告した。

「無理やりファウルで止めて来たか。ちよつと、ヤバくね？」

「……ああ。光月が止められたというのが何よりもな」

止められないと察して、それでも何としてもとめようとしての判断だろう。

だがしかし攻撃を成功できなかったこと、そしてフリースローを撃

つのが光月だという点が大仁多にとっては良くない。

苦笑いする山本に、小林も首を縦に振るしかなかった。

『ツーショット！』

大仁多からは白瀧と黒木が、聖クスノキからはジャンと真田、さらに楠が選ばれてそれぞれペイントエリアに沿って並ぶ。

フリースローラインに光月が立ち、審判よりボールを手渡される。シュートに対するファウルであり、シュートも外れたので投じられるのは二回。

光月は深呼吸し、少しでも気を落ち着かせ、ボールを叩いてリズムを取る。そしてボールを撃った。

ボールはリングの手前に当たり、跳ね返る。

「ッ……！」

「……落ち着け」

「ドンマイ、明。焦ることはない。次決めていこう！」

「う、うん……」

表情を歪ませる光月に黒木と白瀧が声をかけた。それでも緊張の色は解ける様子はなく、光月の中では焦りがただ募っていた。

（まずいな。これはひよつとして明がフリースロー苦手なのがばれているか？）

彼の様子を見た白瀧も不安になってくる。

ここまでの試合、光月は五回フリースローを撃つ機会があった。しかしその五回とも失敗している。

光月はフリースローが苦手であった。ゴール下の動きやミドルシュートも上達し、秀徳戦でも活躍するほどになった。

だがそれでも全てが完璧にいくわけではない。特にフリースローに至っては未だに苦手の領域にあった。

試合中のように何かに熱中する状態ならばいい。しかしフリースローのように一時的にも場が静まり返り、そして自分に全ての意識が集まるという状況に、光月は耐えられなかったのである。視界が通常よりも狭くなり、反応も数段遅くなる。正確にシュートを撃つことなどできなかつた。

(僕が、決めないと……！)

そしてもう一つ。これは光月自身も気がついていない、気がつけない理由であった。

今まで経験したことのない歓声、そしてかつて中学時代にトラウマとなった試合展開と似たこの状況に、光月は押しつぶされかけていた。

白瀧が楠に抑えられ、ゴール下もジャンに制圧されている。

この戦況を打破するには自分がなんとかしなければならぬ。自分がやるしかない。……光月の中で悪循環が生まれていた。

「……松平さん、ウオームアップをお願いします」

「りよ、了解です！」

ベンチから選手達を見守る藤代は、静かに決断を下した。

彼の視線の先で光月が二本目を投じる。……だが、やはり入らない。

「ウオオオラッ！」

「くっ!？」

(そして明がもしもフリースローを外したら、リバウンドに参加できないのは俺と黒木さんだけ。そうなると二人ではジャンを攻略できない!)

リバウンドを制したのはジャン。黒木と白瀧が高さで負けてしまった。

スロワーが参加できない条件化ではどうしても大仁多が不利になってしまう。

結果、大仁多はディフェンスリバウンドをジャンに取られてしまい、さらにその後聖クスノキのカウンターを受けることになった。

楠がボールを運び、ジャンがゴール下から決める。瞬く間に失点してしまったのだ。

(大仁多) 6対15 (聖クスノキ)。得点の差が、広がるばかり。

「……辛いな」

一方的な試合展開に、白瀧が思わず愚痴を零す。

苦戦を予想していたがここまでとは想像もしていなかった。

「そう嘆くことはない。これでもお前のことは凄いのと思っただいぞ」
「……楠、さん」

その白瀧に楠が突如近寄り、声をかけた。

「かつて中学時代に日本一を経験したという白瀧。なるほど、たしかにお前の並外れた脚力とドリブル技術はすばらしい。賞賛に値する。

……しかしそれだけだ。他の主な能力は平凡の域を出ていない。

本場・アメリカならお前ほどのスピードで、そしてそれ以上のスベックを有する選手達がいる。仮にお前が向こうのチームでレギュラーを取れたとしても、すぐさま他の天才によつてその座を奪われるのがオチだろうな」

アメリカでバスケットをしていたという楠だからこそ言える言葉だった。

白瀧を評価する一方で、しかしそれでは勝てないと忠告し、その場を去っていく。

「……天才にレギュラーを奪われる、か」

白瀧の脳裏に、かつての帝光中学時代の記憶が蘇った。

『決まった、また黄瀬だ！ 凄いで、あいつの成長度は！』

『たしかにな。あいつ本当にバスケット初心者かよ？』

『とてもそうとは思えねえ！ もうレギュラーにもなれるんじゃないやねえか!?!』

『まさに天才！ これは戦力入れ替えの時が来たぜ!!』

黄瀬が入部したときの、忌々しい記憶が。

「そうだろうな。知っていたさ、そんなことは二年前から。それでも俺はやるしかないんだ」

その忌々しい記憶が、白瀧を奮い立たせた。もっと奮起せよと。

『大仁多高校、タイムアウトです!』

そして藤代が一度時間を止める。王者の意地を見せつけるための、準備をするために。

「凄いな、聖クスノキ。今までノーマークだったんだろ？」

「ああ。やっぱりビギナーズラックで常盤を倒したわけではなかったな！」

「しかし逆に大仁多は情けねーな。一方的にやられてるだけじゃねーか」

「今年は帝光中のやつが入ったんだろ？ それなのにこの様だなんて、〃キセキの世代〃以外のやつはたいしたことねーみたいだな！」

一分間、コート内は静寂に包まれるが、観客席の中では仲間同士で話し合う声があちこちから聞こえてきた。

特に多かったのは聖クスノキの善戦を褒め称えるもの、そしてもう一つが大仁多を——白瀧を侮蔑するようなものだった。

今年、大仁多が帝光中のメンバーを獲得したという情報は流れている。それゆえに、相手に良い様にやられている様が、滑稽に映ったのだろう。

「あいつらっ！ 好き放題言いやがって……！」

「やめてください、火神君。こんなところで暴れないでください」

「テメーは悔しくねーのかよ!! 元チームメイトだろうが!？」

知らない仲でもない火神がそれを黙って聞いていられるはずもなく、拳を握り締め今にも仕掛けようとする。

黒子はそれを必死に止めようとするが、その態度が余計に火神を激怒させた。黒子の方が付き合いは長いはずなのに、何故何も思わないのかと。

「……悔しくないわけがありません。しかし……」

「しかしこれこそが、白瀧の世間からの評価だからな」

「あ……？」

黒子が諭すように言うが、その言葉を遮り口を挟む男がいた。

苛立ちを隠さず火神は視線を声の主へと向ける。

「なっ!!? テメ、緑間!？」

「……お久しぶりです」

「ふん。まさかこのような所で貴様らと再会することになるうとはな。『思いがけない再会』があるとおは朝が占っていたが。……本当

によく当たる占いなのだよ」

そこにいたのは、つい先日戦ったばかりの宿敵・秀徳の緑間だった。緑間もまた不機嫌さを隠そうともせず、眉を吊り上げて火神をにらんだ。

「何でテメエがここにいるんだよ!？」

「敵情視察は当然のことなのだよ。……まして相手が白瀧を凌駕する可能性を持つというのならば、尚更のことだ」

敗退しても、まだ秀徳と大仁多は冬に戦う可能性が残っている。

そして戦う戦わないという以前に、緑間と白瀧には浅からぬ因縁があった。だからこそ、緑間は単身で見にきたのだろう。

完全に納得したわけではないが、火神もそれ以上は聞かず、話を元に戻すことにした。

「……で？ その、白瀧の世間からの評価ってのは、どういう意味だ?？」

「そのままの意味なのだよ。最も、『今の』という条件がつくがな」
「今の?？」

聞き返す火神に、緑間は大きく頷いた。

「……二年前、白瀧が『キセキの世代』の座を奪われた後、やつは評価は著しく下がった。

『初心者に負けたレギュラー』『キセキの名を借りた凡人』『仲間の手を借りなければ何も出来ない弱者』と」

かつて緑間が警戒していたことが実現してしまったのだ。世代という括りで評価を受けていたために、その範囲から外れた白瀧に対する世間の評価は冷たかった。

特に『キセキの世代』という名が広がってからは尚更であった。

『キセキの世代』に対する嫉妬や妬みといった部分までもが集中するようになったのだ。

「はっ!? え、どういう意味だ!? 白瀧が、『キセキの世代』の座を奪われた……?？」

緑間の言葉を理解できず、火神は頭を抱え込む。

火神は白瀧の過去を殆ど知らない。それゆえに話についていけな

かった。

「なんだ、そんなことも知らなかったのか？ やつは中1の時は俺達と同様の立場にいたのだよ」

「ただ、黄瀬君の登場によって入れ替わる形になったんです」

「そういえば黄瀬は中二からバスケットを始めたって……」

かつて練習中に見た「キセキの世代」の記事を思い返す。

たしかにあの記事には黄瀬は中二からバスケットを始めたと書いてあった。つまりそれまでは黄瀬は「キセキの世代」ではなかったのである。

そしてそれまで緑間たちと共に「キセキの世代」と呼ばれていたのが——白瀧だった。

「白瀧が評価を覆そうにも、どれだけ戦い続けようとも変化はなかった。

「キセキの世代」がレギュラーであるという事実が変わらなかったからな。

やつが出場する時は大抵は試合が決まっている時か、体力を温存したいときが大半だった。それゆえにやつの活躍は意味をなさなかったのだよ」

「なんだよ、それ……」

それでは白瀧が認められることがないまま、彼は不名誉のまま高校に進学したということになる。

火神は一度白瀧と戦った時、彼が選手としてのプライドが高いことを理解していた。それなのに、それでも戦い続けたということが、信じられなかった。

「わけわかんねえよ。よくそんな状態であいつは戦えたな」

「……それについては俺も同感なのだよ。どれだけ諫めようとも、やつは諦めてくれなかった……」

珍しく火神の意見に緑間は共感を示した。世間の理解も得られずに平気でいられるわけもない。

緑間もまだ白瀧の考えを完全に理解したわけではない。ただわかるのは、

「あの男はチームのためならばと、己を捨てた一面があった」

白瀧がそれを後悔していない、本望だと思っっているということだけだ。

それを愚かとはもう二度と思わない。それこそが白瀧の選んだ道なのだから。

「選手として諦めない一方で、チームを諦めたくなかった。それがきつと白瀧君が思い描いていたことでしょうね」

きつと、いやまず間違いなくそうなのだろうと黒子は確信する。

かつて白瀧が栃木に引越す前に話をした黒子にはわかる。白瀧が諦めるような人間ではないということ。

「……なんとなくわかる。ただ、それでも納得いかねえ。

あいつだってスピードだけなら最速なんだろう？ それなのに、凡人だとか弱者とか……」

「馬鹿め。何を勘違いしているのだよ」

「ああ!？」

「まったくこれだから単細胞は。……やつは『神速』と呼ばれたことはあっても、『最速』と呼ばれたことは一度もないのだよ」

「……はっ?」

なんだその言葉遊びは？ 火神はポカンと間抜けな表情を浮かべた。

火神の表情を見て、『こいつは何も理解していないようだな』と思った緑間は深くため息を吐き、説明を始めた。

「簡単な話だ。やつが純粹に最速の選手になれるわけではない。現に今あいつが相手をしている楠という選手は白瀧と同等かそれよりも速いようだしな」

「中学時代にも白瀧君よりも速いだけの選手ならいましたしね」

「えーと、どういうことだ？ じゃあ、なんでだよ?」

「だからこそなのだよ。……やつが本当に才能があったのならば、やつはキセキの世代の座を失ってはいなかった」

「っ……」

「だが、それゆえに……今の白瀧がいる!」

確かに純粹な勝負では白瀧が負けるかもしれない。だが試合というものは何も一つの物事で勝負するわけではないのだ。そして才能ちからの差で屈するくらいならば、白瀧は今バスケをしていない。

「……ひとまず光月さんを下げ、松平さんと交代します」

「わかり、ました」

藤代監督が選手達を呼び寄せて最初に言ったことはメンバーの交代であった。

動きの悪い光月を下げ、代わりにウォームアップしていた松平が入る。光月は力なく頷いて応えるだけで何も反論はしなかった。

（こいつ、本当に大丈夫かよ？ 戦意が消失しかけてるんじゃないかね？）

今の光月の姿はとても弱弱しく、本田は声をかけようかと迷ったが、藤代の声を遮るわけにもいかず思いとどまる。

（だけどひよつとしたら、この試合中に戻ることは無理かもしれないな……）

中澤は心中で光月の復活が難しいのではないかと思っていた。

秀徳戦の時とは違う。この試合は最初はまだ動いていた。それをジャンに止められた。

しかも今回はこの大歓声。雰囲気慣れるということとは言うほど簡単ではない。

「相手の動きですが……聖クスノキはジャン・楠以外の三人は、ブロックは無理でも、ひたすらプレッシャーをかけてきます。

センターへの信頼が大きいのでしょうかね。ここまで彼が一人で稼いでいますから」

「……申し訳ありません」

「ああ、決して責めているわけではありません。黒木さんがそこまで深刻になる必要はありませんよ」

今にも土下座をするほどの勢いで顔を俯けた黒木を慌てて藤代がフォローする。

元々相手が留学生で不利な展開になることは予想されていたのだ。むしろ黒木はよくやっている。

「オフエンスも楠とジャンが決めていますね。ここまで聖クスノキの十五得点のうち、二人で十三得点を挙げてます」

「……やはりか」

東雲の説明を聞いて小林は深く頷いた。

聖クスノキの得点源は楠とジャン。他の三人はフォローに回っているように見えた。

自分達で最低限の仕事をし、繋ぎ役に専念している。下手に一人一人動き回るよりも厄介であった。

「まず少しずつ点差を縮めていきましょう。……試合開始後、中から攻めて二点を狙います。」

フィニッシュは——白瀧さん。行けますね?」

大仁多は流れを変えるために、確実に中から組み立てることを選択する。

そして最後の得点はエース・白瀧に託した。白瀧は藤代の問いに頷く。だが、それだけではない。

「……問題ないです、監督。それと俺からも一つお願いがあるんですけど、良いでしょうか?」

「何ですか?」

「楠には、やっぱり勝てないかもしれませんが。なのでディフェンスは、試合前に言っていたことをやってもいいですか?」

白瀧も藤代に一つ依頼した。己の不利を察したのだろう。

「ちよつと、白瀧君何を言っているの……!?!」

『勝てない』と、どこか諦めているようにも聞こえるその発言。

橙乃が皆の気持ちを代弁するように白瀧に問いかけた。

「大丈夫だ、橙乃」

「……え?」

「負けるつもりは、微塵もない……!」

しかし白瀧の気迫に満ちた表情を見て、そのような気持ちは少しも
ないのだと理解できた。

(怖がる必要はない。恐れるものはない。プレイを活かせれば良いん
だ。俺も、チームも……)

「良い、良過ぎるくらいの出来だ！」

監督の石川は満面の笑みで選手達を褒め称えた。彼もここまで大
仁多を相手に善戦できるとは思ってもいなかったのかもしれない。

あまり褒めすぎるのも良くないが、しかし今の戦況はそれに値する
だけの結果がでている。

何せここまで大仁多を相手に先制点を上げられた高校はいなかつ
た。そして大仁多に先にタイムアウトを取らせる高校もいなかった。
ここまで優勢に戦えた高校はいなかったのだから。

「インサイドはもはや聖クスノキが支配している！ 楠が白瀧を抑え
ている今、相手の攻撃力は半減以下だ！」

相手にもっとプレッシャーを与え、フリーでシュートを撃たせる
な。ある程度抜かれる分には構わない、ヘルプを早く。このまま押し
切ってやれ！」

『おう！』

それゆえに、聖クスノキの士気がこれ以上内ほど高まっている。

勢いはもはや完全に聖クスノキだ。このまま攻め立てれば大仁多
であろうとも立ち打ちできなくなるという事実が、彼らを後押しし
た。

「フウツ。……意外ト王者モたいしたことなかつたナ」

「おうおう！ 頼もしいこというねー、ジャン。この調子で頼むぜ!」
「当たり前ダ。ゴール下さえ制すれば、怖いものはナイからナ」

「頼りにしてるぜ、本当」

敵などないと言わんばかりに大言を吐くジャンを、真田は肩をバン
バンと叩いて鼓舞した。

ジャンの強さは大仁多が相手であろうとも通用する。ならばこれを使わない手はない。

ゴール下を圧倒的な力で支配するジャン。味方にとってこれほど頼もしい者もないだろう。

「…………どう、ロビン？　大丈夫そう？」

「君も見てただろう、試合を。今のまま行けば大仁多を倒せる」
「そういうことじゃなくて…………」

西條は不安げな表所を浮かべ、水分補給をしている楠に話しかける。

幾分か得意げな様子のように窺える。だが西條が気にしているのは違うことだったのか、表情は暗いままで。

楠も対応に困り果てる中、隣の席に座っている沖田が助け舟を出した。

「西條ー、彼氏が強敵を相手にしてるからって気になるのもわかるけど、もう少し明るく振舞った方がいいじゃん？」

女にそんな心配そうな顔されたら、男も辛気臭くなるもんじゃん」

「沖田先輩…………」

「まあ、俺もそう思うところはあるよ。君にはできれば笑ってほしいかな」

「…………わかった」

ため息を一つ吐いて、ぎこちない笑みを浮かべた。それでも楠は満足そうに頷く。

余計な心配をされるよりは笑顔を見たかったのだろう。

「カーッ！　ああ、リア充はマジ羨ましー。試合中にラブコメとかマジ止めて欲しいじゃん」

「男の嫉妬は見苦しいっすよ…………」

「うるせー、山田！　テメーも彼女いるからって余裕だな!?　何、ひよっとして彼女応援に来ている感じじゃん？」

「ああ、はい。あそこの最前列にいる…………ほら、今手を振ってくれた！

おーい！

ね？　…………って、あれ？　沖田先輩。何でバスケットボールを振り

かぶっているんですか……ってギャーッ!？」

先輩の無様な姿を見かねた山田が諫めるが、逆効果であった。

山田が彼女に向かって手を振った直後……特に理由のある理不尽な暴力が山田を襲う!

聖クスノキ高校、二年レギュラー二人とも彼女持ち。三年は壊滅状態であった。

タイムアウトの1分が経過する。

「タイムアウト終了ですー!」

選手達がコートに戻る。大仁多は光月の替わりに松平が入り、それ以外の選手変更はない。

大仁多ボールから試合は再開される。スローワーカーの山本から小林へ。

聖クスノキのディフェンス方針は変わらず、マンツーマンでマークにつこうとする。

「……これは?」

そして、異変に気づいた。

(トップに小林、両ウイングに山本と白瀧?)

大仁多のオフエンスが変わったのだ。小林と山本の二人が平行して並んでいたツーガードから、小林がトップのワンガードに。

(なんでワンガードに? ツーガードの方がパス回しもしやすかったはずなのに)

作戦変更の意図が読めず、頭を悩ませる。

「……ここから先、一瞬たりとも油断しない方が良い」

「ッ!?!」

すると山田の耳に、小林の重く低い声が届いた。

小林のペネトレイト。中央からいきなり勝負に出た。

それでも好きにはさせまいと山田がその姿を追う。小林はハイポストまで侵入して停止、間をおかずして体の後ろへ腕を回し、ビハイ

ンドパスを右サイドへ送る。

(パス——!?)

突如の急停止に山田は反応できず勢いを殺せなかった。パスの行く先を見届けるしかなかった。

パスは正確に山本の下に。そして山本も手に収まると同時にパスを前方へとさばいた。

「ナイスパス！」

ボールはゴール下に走りこむ白瀧へ。楠がシュートを撃たせないとプレッシャーをかけた。

(ジャンもいるのに、白瀧がローポストで勝負する気か!?)

「そんなの無謀じゃん！」

「とめろ、楠！」

自殺行為にも思える白瀧の行動。聖クスノキの選手達は理解できず、楠に声をかける。

「いいや、今の白瀧さんならいける」

最も藤代から見れば無謀でもなんでもなく、ただ勝利への一つの道にすぎない。

白瀧はゴールと楠を背にした状態で、右足を軸に素早くバスケットに向き合う。そして左足がついた時にはすでに腕を大きく振っていた。

(ターンアラウンドシュートか!?)

楠がその動きを見極め、シュートチェックに跳ぶ。

「甘いよ！」

そして楠が跳んだ瞬間に白瀧はクロスオーバーで抜き去った。

「なっ——につ!？」

白瀧の動きはポンプフェイクだった。楠は白瀧の動きのキレに吊られてしまった。

否、そうするしかなかった。あまりにも素早い方向転換と、シュートを撃つとしか思えない動きに、跳ぶしか選択肢がなかった。

楠をかわした白瀧はゴールを狙う。真田は松平が体をよせておさえている。黒木をかわしたゴール下の番人・ジャンがヘルプに入るが

……

(……何、だヨ、コイツ？ 動きガ、読めない？ ……いや、これハ……！)

白瀧の低く、そして小刻みに素早く、ジグザグに動くステップに翻弄されてしまった。

勢いは止まらず、白瀧はステップシュートを放つ。ジャンもブロックに跳ぶが、白瀧のテンポにタイミングを狂わされてしまい、彼のシュートを許してしまった。

「——ッ!？」

「馬鹿ナ……」

「ジャンと、楠が……二人同時にやられた!？」

「どうなってんじゃん、コイツは!？」

「あれが、『神速』!」

(大仁多) 8対15 (聖クスノキ)。

点差はまだまだあるものの、白瀧の今のプレイヤー一つは聖クスノキの度肝をぬぐ効果があった。

「……なんですか、今の?」

「アップアンドアンダーか？ だけど、今のステップシュートは……」

黒子は何が起こったのかさえわからなかった。火神も心当たりがある。しかし何かが違うと理解していた。

観客席から見ても、今の白瀧の動きはおかしかった。

——アップアンドアンダー。ディフェンスをかわすステップシュートの一種である。マークにつく相手をポップフェイクで誘い、シュートチェックに跳んだ相手を体勢をかえてかわし、リリースするシュート。

(ステップそのものが、どこがおかしい?)

だが今の白瀧のステップの動きは通常のものとは違う。

「……あれは、まさかジノビリスステップか?」

「緑間君、知っているんですか？ 何ですか、それ?」

「ジノビリスステップ？ たしかアルゼンチンの英雄が使っていたステップのことか?」

「ああ。ジグザグステップとも呼ばれるものなのだよ」

緑間が言うジノビリステップとは、NBAのエマニユエル・ジノビリ選手が使う独特のステップのことだ。

マヌという愛称があり、アルゼンチンの英雄と謳われる彼のステップは変幻自在のジグザグした動きでディフェンスを翻弄する。

白瀧のステップはマヌのステップに匹敵するものだと、緑間は判断した。

「……………ここまでとは想像していなかった。

重心を低く、切り替えしを速く、そして動きを小刻みに。白瀧がこれほどまで進化させるとは……………」

並大抵の技術ではない。

元からあった脚力に加え、古武術の膝抜きで一瞬の爆発力を生みだし、そしてチェンジオブディレクションの応用でジグザグの動きを再現する。

数多くの技術を駆使し、再現する白瀧の姿は、未だに昔と変わらな
い。

「たしかに純粋な脚力では白瀧さんは楠さんに負けているかもしれま
せん。

だが、様々な要素が折り重なった最高速トップスピードならば、白瀧さんは負けな
い！」

一瞬の間発せられる瞬発力ならば、白瀧でも天才に並ぶことが出来
る。

『やはり白瀧さんを獲得したことは間違いではなかった』と、藤代は
白瀧の姿を捉えながら、満足げに頷いた。

それだけの力が白瀧にはあった。

たしかにスペックこそ乏しい。しかしそれを補って余りある技術
を組み合わせ、一つの技と成す。

「……………だからこそ帝光部員は白瀧さんに憧れた。一時でも天才と共に
戦ったあの人に。才能に恵まれずとも天才絶望に負けじと挑み続けるあ
の姿に、俺達は希望を見出したんだ……………」

そのあり方は見る者を勇気付ける力があった。

西村も例外ではない。彼も同じように、中学時代に何度も助けられたのだから。言葉にせずとも伝わるのだ。

(俺の武器はスピードだ。これだけは譲れない！)

“キセキ”のような完全ではない。しかしそれゆえに――

「負けるわけにはいかない。一時の間とはいえ、俺はキセキあの世代いと共に戦っていた。あいつらと戦う前に、こんなところで一人負けるわけにはいかないんだ！」

――それゆえに白瀧は希望を作り出す。己が手で、己が力で。

第三十五話 脆い均衡

(……本当に、どうしよう)

聖クスノキの正PGである山田は内心穏やかではなかった。表情には出さないように努力するが、しかし心の落ち着きは中々取り戻すことはできない。

彼はこの試合、小林という全国区のプレイヤーとマッチアップしており、それだけでも彼にかかる負担は大きかった。

それなのに目の前であるような派手なプレイを目の前にして、自チームの最強ともいえる二人が一挙に敗れる姿を目にして、落ち着けるはずもなかった。

「さあ、ディフェンス！ この一本しつかり守るぞ！」

小林が声をかけることにより、大仁多のディフェンスがより引き締まったように思える。彼自身もハンズアップに加え、厳しいディフェンスをしている。

シュートはおろかドリブルで仕掛けることもできない、隙がないディフェンスだ。パスをさばくのも精一杯の状況であった。

「……楠！」

時間を目一杯使い、山田は楠へとボールを回す。

この試合は楠がゲームメイクの殆どを兼任しているが、それも仕方がないことだった。

楠がボールを手にする。同時にいつでも動けるようにとトリプルスレットの体勢へと移る。

——それと同時に、楠に今まで感じたことがないほどのプレッシャーがかかった。

「お、うおおっ!?!」

おもわず体がよろけてしまう。

勝負所を思わせるように、白瀧が詰めて来た。手を大きく伸ばし、積極的にボールを奪いに来る。

(なんだコイツ?! さっきまで距離を開けていたのにいきなり!)

「だが……!」

突然のプレッシャーに戸惑いを覚える楠。

しかし彼もただではやられない。体を入れ替え、横に大きくスライド。

白瀧もスライドステップで食いつくが、そこから楠はロールターンで切り返し、ハイポストへ侵入した。

「いいや、悪いけどこっから先は行き止まりだ！」

「ちっ……い！」

さらに中へ入ろうとするも山本のヘルプにつかまってしまう。そこに白瀧も追いつき、挟み込まれて二対一の体勢になってしまった。

(さすがに、この二対一ではこちらが分が悪い！)

劣勢を悟った楠が一度ドライブをやめてボールの保持と味方の位置の把握に努める。

皆大仁多のマツチアップに苦戦しているが、山本のマークから外れた沖田がフリーの状況になっている状態が窺えた。

「楠！ こっちじゃん！」

「……沖田先輩！」

すぐさま楠が沖田へとパスを出す。

「させねえよ！」

だがそれを山本が許してはくれなかった。

虚をつかれてパスが甘くなっていた。それを山本が見逃すわけもない。

簡単にパスカットされてしまい、再び大仁多ボールとなる。

「さあこの調子で点差を詰めるぞ！」

小林が時間をかけて外でパスを回す。

浮かれることなく全体を見て指示を出せるその姿は実に様になっていた。

(この攻撃を止めれば流れは変わらない。でも逆に大仁多が決めれば、流れが変わる可能性も出てくる)

それだけこの攻撃が重要ということだろう。山田は冷静に小林の姿を捉えながら、思考を巡らせた。

現在大仁多の得点は八点のみ。しかもそのどれもが単発であり、い

まだ連続得点には成功していない状況だ。

そして今、先ほどのオフエンスで白瀧が決め、ディフェンスで山本がボールを奪った。

この攻撃の結果によっては第一Qの行方が決まりかねない。だからこそ、小林もゆつくりと確実にボールを運んでいるのだろう。

(ならばこそ、ここは止めなきや！)

だがそうはさせない。

再び小林にボールが戻る。山田は腰を落とし、すぐに反応できるよう神経を研ぎ澄ませた。

「小林さん！」

「ッ……!?!」

中より声がかかる。

白瀧が山本のスクリーンで楠をかわし、先ほどのように中へと侵入していた。

(まさか、また……!)

状況があまりにも酷似していたために山田は先ほどのプレイを脳裏に思い浮かべた。

「中を固めろ！ 白瀧を自由にさせるな！」

「おう！」

石川も同じことを考えベンチから指示を飛ばす。

これにより聖クスノキのディフェンスに大きく乱れが生じた。

「……まったく」

その一瞬の隙を小林は見逃さない。

小林のクロスオーバー。キレのあるドリブルで山田を抜き去り、そしてミドルからジャンプシュートを放つ。

「げっ!?!」

聖クスノキの意識が白瀧に集まったばかりにハイポストがから空きになっていた。

誰もプレッシャーをかけることさえできず、ボールがネットを揺らす。

(大仁多) 10対15 (聖クスノキ)。ついに大仁多も得点を二桁に

乗せた。

「二体いつから、大仁多は白瀧のチームになつたんだ？ 一人を止めれば大丈夫などと考えるようでは、俺達を止められないぞ」

いとも簡単にシュートを決めた小林は、山田にそう言い残してディフェンスに戻っていく。

そう簡単に第一Qは渡さないと、そう語っているようにも見えた。

白瀧を囮として小林がそのままドリブル突破、ミドルシュートを放ち得点を決めた。

そこからはお互いオフセンスが点を取り合う状態が続き、一進一退のシーソーゲームの様相を見せた。

聖クスノキはミスショットをジャンが拾い、さらに楠の速攻で一氣に取り返す。

対して大仁多は小林・山本のガード陣が外から仕掛けミドルシュートを沈め、確実に二点を決めてくる。

楠のスリーも白瀧の密着マークによつて格段に回数が減り、両校とも二点を取り合うようになっていた。ゴール下も大仁多が何回に一度はリバウンドを決めるなど気を抜けない展開が続く。

そして第一Qも残り時間は徐々になくなり、大仁多が最後の攻撃を仕掛ける。

「白瀧ー！」

トップの小林から右ウイングの白瀧へ。

やはり楠が立ち塞がる。第一Q終了間際でも気は抜かない。それを見て白瀧も口角を上げた。

「行くぞー！」

「くっ、そっ!？」

白瀧が先に仕掛ける。

ドリブルをする中、凄まじいキレを見せるクロスオーバーで突破を図る。

楠は抜かれるが体勢が完全に崩れることはなく、追いつがる。そこ

で白瀧はさらにボールを後ろから通す——バックチェンジで再び切り返した。

二度の切り返しには楠も対応できず、ドリブル突破を許してしまった。

「待テ、白瀧！」

白瀧がゴール下に迫り、シュートを狙った。

そうはさせまいとジャンがヘルプに入る。手を大きく広げプレッシャーをかける。

「残念、はずれ！」

「なっ!？」

だがそれは不正解であった。白瀧の動きはその実ポンプフェイクであった。

白瀧は頭の高さで腕を横に払う。ジャンの真横を通ったそのパスは松平へと渡った。

（——フェイク!?）

白瀧にはこのようなアシストもあるということを失念していた。己の失態を嘆いても遅い。

ボールを手にした松平はワンドリブルでバスケットに向き合おうと、即ジャンプシュート。駆けつけた楠がブロックに跳ぶが、松平はそのブロック受けた上でシュートを放つ。

『ディフェンス！ プッシング！ 聖クスノキ^黒、8番！ バスケットカウント、ワンスロー！』

シュートが決まった上に、さらにバスケットカウントをもぎ取った。

「よっしやああ!!」

「松平さん、ナイツシュ！」

「おう！ ナイスアシスト！」

審判の笛を耳にすると同時に、松平が雄叫びを挙げる。

アシストを決めた白瀧とハイタッチをかわし、さらに士気を高めていった。

（……やられた！ 二つのミスマッチをつかれた！）

その光景を石川は歯を食いしばりながら見ていた。

ジャンと白瀧というスピードのミスマッチ、そして楠と松平というパワーのミスマッチ。二つのミスマッチを作られてしまった。

ただでさえジャンは白瀧の独特のステップを間近で目にしていたために、余計に翻弄されてしまった。楠もさすがに幾度も強豪校のパワープレイヤーと戦ってきた松平を相手にするほど強いわけではない。

マンツーマンとはいえ、常に同じ相手をマークするわけではない。頻繁に相手は入れ替わる。こうまで分が悪い勝負となると、競り勝つことは難しいだろう。

「ワンショット！」

松平が審判よりボールを受け取る。

両校とも、ペイントエリアに並ぶ選手は光月の時と変わらない。

「……白瀧」

「はい、わかってます」

黒木から短い呼びかけがかかる。それだけで白瀧は意図を理解し、頷いた。

視線を時計へと向ける。——残り時間は十一秒。

外れたとき、このリバウンドを取れば追い打ちとなる追加点だ。最低でも二点詰めることができる。

第二Q以降に良い流れを繋げることもなる。松平のフリースローが外れたとしても、なんとしてもこの機会をものにしたい。

必ず勝ち取る、そう二人が決意して——松平がショットを放った。それと同時に選手達が動き出す。

「グッ、ヌウウッ！」

「……ちいっ!!」

ジャンと黒木が競り合う。だがやはりパワーはジャンの方が勝る。ジャンが黒木よりも内側に入り、黒木を外へと締め出した。

「(こ)は、取る！」

「邪魔をするな！」

「うおおっ!?!」

その一方で、白瀧は真田の腕を払いのける——スイムでポジションを奪った。

真田も負けじと奪い返そうとするが、白瀧の体を張った必死のスクリーンアウトの前に、身動きがとれない。

各々がゴール下で競う中、松平の放ったボールは、しかしリングに衝突する。さらに幸か不幸かジャンと黒木が競り合う方へと浮かんだ。

「ジャン！」

「マカセロ！」

楠の呼び声に応えるよう、ジャンが跳躍する。

ポジションはキープしたままだ。これなら問題ない、確実に取れる。

「……甘く見るな！」

もつとも、黒木もただではやられるはずがない。

力の限り跳ぶ。最高到達点はジャンには及ばない、それはわかつている。

しかし今のジャンは確実に確保しようと両手を掲げている。対して黒木は片腕だけを伸ばし、ジャンが取るよりも先にボールを指先でちよつと突いた。

「ナン、ダト!？」

ボールを確保できず——そしてリング状をクルクルと回転し、ネットを揺らした光景を目にして、ジャンの表情が強張った。

第一Q終了間際、黒木のチップインが決まる。大仁多高校はさらに二点を記録した。

「よし！ ナイス黒木！ フォローサンキュー！」

「さすがです、黒木さん！」

「……当然だ」

松平と白瀧の出迎えに、黒木は微笑を浮かべて応えた。

「急げ！ 一気に攻めろ！」

第一Qの残り時間はわずか。石川が声を荒げ、聖クスノキは最後の攻撃を仕掛ける。

山田から沖田へ、そして楠へとボールが渡る。しかし白瀧の激しいマークのためにシュートを中々撃てない。

「ぐっ……ぐっ……」

「撃て、楠木！ もう時間がねえ！」

体を仰け反り、ボールをキープするしかなかった。

だが真田が言うとおりの時間がもうないということもわかっている。

パスを出せばそれで時間切れ。楠は体が起きている状態で無理やりシュートを放った。

……しかし彼のシュートはリングに嫌われる。

『——第一Q終了!!』

そして審判の笛が鳴り響き、第一Qは終了した。

(大仁多) 20対26 (聖クスノキ)。聖クスノキが六点リード。しかしまだ試合の行方は誰にもわからない。

最後に黒木さんが決めたチップイン。あの効果は大きかったな。

二点を取れたおかげでこちらも二十点に乗せることができた。それも高さに勝るジャンをかわして、だ。

まだ六点ビハインドだが、流れは悪くない上に決して逆転できないような点差ではない。

俺達五人は後の展開に希望を残す形でベンチへと引き上げていった。

「皆さん、よくやってくれました。劣勢ではありますが決して試合展開は悪くありません」

ベンチに腰掛けるや否や、藤代監督が開口一番選手達を励ました。

前半こそ完全に押されていたがタイムアウト後はきちんと盛り返した。その成果は確かに大きい。

「さて、……ここまで第一Qは中を中心に展開していきましたが……そろそろ聖クスノキも何かしら手を打ってくるでしょう」

「ゾーンディフェンスを仕掛けてきますかね？」

「えつ、と。ちなみにここまでの県大会の試合、聖クスノキはマンツーマンと2―3ゾーン、それとボックスワンの3パターンのディフェンスを見せています」

小林さんの問いに東雲さんがデータを見ながら答える。

「無難に考えれば2―3ゾーンですね。中央にジャンを据え、中を固めてくるでしょう」

確かにそれが妥当だろうな。そして楠がゴール下の方に入ると予測できる。

もしも聖クスノキがゾーンに変えてくれば中からの得点は厳しさを増してくる。

……藤代監督はそれをわかっていて第一Qは中から攻めるように俺達に指示したのだろう。

「ですがそうはさせません。こちらも動いていきましょう。——神崎さんー」

「へ!? は、はいっ!？」

藤代監督は突如視線を立ち尽くしている勇へと向けた。

いきなり名指しされるとは思っていなかったのか、勇は戸惑いつつも藤代監督の呼びかけに返事をした。

その様子がおかしかったのか、藤代監督はクスリと笑みを浮かべて、

「第二Q、山本さんと交代であなたに入ってもらいます。期待していませんよ」

山本さんと勇の交代を提言した。

「……悪くはない。悪くはないんだがな」

その一方、聖クスノキのベンチ。タイムアウトの時とは雰囲気が一転していた。

石川は厳しい表情を浮かべてベンチに座る選手達を眺めていた。

「まさか大仁多がここまで勢いづくとはな。過小評価していたわけで

はなかったが、やはり王者か」

第一Q前半は最大で九点差も開いていたにも関わらず、六点差にまで追い上げられてしまった。

それも大仁多の攻撃が外からならともかく、完全に封じていると思っていた中から決めているというのだから尚更だ。

そしてその流れを作ったのが——間違はなく白瀧である。

「タイムアウトの直後、白瀧の派手なプレイを見せつけてこちらの意識をやつ一人に集中させた。」

そしてそこから中をかき回す白瀧を囫として、小林と山本の二人が外から中へと積極的に仕掛けてきた。ジャンを完全に攻略できない現状で、より確実性のある攻撃を選んだと言える」

「はい。たしかにここまでの得点、大仁多は小林さんと山本さん、二人のガード陣に得点が偏っていますね」

あの一回の攻撃で楠とジャン、両選手が同時に突破されたことも大きい。

おかげでゴール下に走りこむ白瀧がよけいに脅威に映った。そしてそれが原因で大仁多を勢いづかせることとなった。

また西條の言うとおり、ガード陣が占める得点が高い。小林六得点、山本六得点、白瀧四得点、松平二得点、黒木二得点、

松平・黒木の二人も奮起しているためにジャンの負担も大きい。得点こそリードしているものの、不利な状況が続いているのだ。

「オフエンスも辛いですよ。正直小林さんを相手にしてボール運びだつて容易じゃないです」

「うむ。やつは栃木最強のPGと言っても過言ではないからな。わかつてはいたが、ここからは沖田も加わり三人でボールを回している」

「了解じゃん！」

息を整えながら山田が苦しそうに言う。彼の負担がこの試合でもっとも大きいかもしれない。全国区のプレイヤーとマッチアップしているのだから当然だ。

石川もそれを理解し、沖田に指示を出すと改めて今後の対策へと話

を移す。

「オフエンスは方針は変わらない。楠も突破できない時はジャンへと回してくれ。それが一番可能性が高い」

「……わかりました」

「うん。ディフェンスはマンツーマンからゾーンに変更。中を固めていこう。2―3ゾーンだ」

オフエンスは楠にもシュートに対して積極的に行動するよう呼びかける。楠も静かに頷いた。

対してディフェンスはここまでのマンツーマンから2―3ゾーンディフェンスへと移行。

「ゴール下にはジャン」

「オウ！」

「その左右に真田と楠を」

「イエッサー！」

「……はい」

「前列に山田と沖田の二人をおく」

「わかりました」

「バッチリじゃん！」

石川は一人一人に視線を送り、彼らと確認の合図を取った。

「大仁多のインサイドは決して油断できん。特に小林と白瀧が中に切り込んだら要注意だ。」

ポイントエリアを徹底的に固めて相手のミスを誘え。以上だ！」

最後に選手全員を鼓舞するように声を発し、ミーティングを終える。

今の大仁多に対して打つ手はこれしかないとそう信じて。

「……どちらが先に切欠を作るか、それによって試合が動くだろうな」
「切欠ですか？」

『果たしてどちらが勝つでしょうか?』という黒子の問いに、緑間は

冷静に両チームの戦力を分析して答えた。

「ああ。現状は両校ともどちらが有利と断言はできないのだよ。それゆえにこの均衡を破る手を打った方に流れが行くだろう」

観客席から見ていると、両校とも歴然とした差があるようには見えなかったのだ。

だからこそこの状況を打ち破った方が有利になれるだろうと緑間は語る。

「……白瀧じゃ、無理なのかよ？」

ならばその切欠を作るのは白瀧ではできないのだろうかと疑問に感じた火神が緑間に問いかける。

緑間も不可能とは思っていないのだろう。少し困ったような顔を浮かべ、口元に手を当ててしばし考えると、やがて口を開いた。

「無理というわけではない。しかしどうやらやつはこの試合、囷となることに専念しているようだからな」

「たしかに大仁多は白瀧君へのパスは少ないように見えますね」

「少ない、というよりもここ一番という時にだけパスをさばいていると俺には思えるのだよ」

タイムアウト後、白瀧は聖クスノキのマークを外し、中を攪乱する一方でシュートの回数は減っていた。

これは大仁多が白瀧を囷として他の四人で攻めるという方針だろう。さらにここぞというところで印象を残すかのように白瀧はオフセンスに関与するために聖クスノキは白瀧をフリーにするわけにもいかなかった。タイムアウト後の最初の攻撃、そして第1Q最後の攻撃がまさにその良い例である。

「聖クスノキのディフェンスを翻弄し、味方のチャンスメイクに務める。アシストとして記録されることはないが、やつが一番オフセンスに貢献しているのだよ」

ただでさえ楠を相手にしていて辛い状況である。だからこそ白瀧はチームを活かすことに専念した。

(……だがそれゆえに、白瀧一人では流れを変えられないのだよ)

そしてその事実には白瀧のマークが厳しくなっているという事実には

も繋がる。

緑間は今の現状下では白瀧だけでは流れを変えることはできないだろうと察していた。

(何よりもこれ以上は中の負担が大きすぎる。何か手を打たねば、大仁多のオフエンスも掴まる。それこそ第一Q前半のようになってしまふのだよ)

あと一枚でいい。何かこの状況を変えるカードが大仁多には欲しかった。

『これより、第二Qをはじめます!』

二分のインターバルが終了。選手達はチームメイト達に送り出され、コートに戻った。

石川も選手達を見回し、そして相手の動きを見ようとして、そして異変に気づいた。

「……うん? 6番がベンチに下がった? その代わりに入ったのはあれは……13番? 一年か?」

スターターであつたはずの山本がベンチに下がっていたのである。そして山本が下がる代わりに13番のユニフォームを纏った選手がコートに入っていた。

「西條、大仁多の13番についての情報はるか?」

「はい。少し待ってください」

副主将であり、この試合でも活躍していた山本を下げるほどの価値が13番にはあるのだろうか。

疑問に感じた石川はすぐに西條へと調べるように促す。西條も気になっていたのかすでに情報を纏めていたため、返事はすぐに返ってきた。

「——13番、神崎勇。控えのガードの選手です。まだ一年生で今大会でスターターに抜擢されたことはないようです」

「二年、か。ちなみに個人としての成績は?」

「二回戦の対沼南高校戦、ならびに三回戦の対若松高校戦では途中出場し、3アシストとツーポイントショット2本を記録しています」
「……ふむ。ドライブ重視の6番山本からパスワークの13番神崎に変えてきた、ということか？」

事前のデータでも神崎の情報は殆どなかった。目立つ活躍は見られなかった。

小林もペネトレイトで自ら切り込む性質のため、よりパスを主体にゲームを組み立てるのだろうと石川は予測した。

疑問が完全に解けないまま、第二Qが始まった。

大仁多ボールから再開。スローワーは交代したばかりの神崎。落ち着いて小林へとボールを回す。

「ようしー。まずは一本、決めていこう！」

小林は立ち上がりはゆつくりとボールを運んだ。

聖クスノキは予定通り2ー3ゾーンを展開。インサイドをより固めた。

対して大仁多は小林トップのワンガードから小林と神崎のツーガードへと移行。

(……やはり、パスを重視してきたのか)

「山田、沖田！ 大仁多のパスワークに注意しろ！」

それを見て石川は前列二人に警告を促す。

まだ神崎のプレイを見ていない為に様子見でもいいのだが、まず最初の攻撃は止めて流れを掴みたいところだ。

山田と沖田はそれぞれのゾーンから相手の出方を窺う。すると小林から神崎へとパスがさばかれた。

(さて、お前はどくくるじゃん?)

じつくりと神崎の動きを見る沖田。

それを知ってか知らずか、神崎はボールを手にすると同時に地を蹴り、ジャンプシュートを放った。

「なにっ!？」

(ちよっおまつ……そこはスリーポイントラインよりももつと手前じゃん!? そんなところから撃つか普通!?)

交代直後にいきなり遠くから撃たれ、沖田は反応することさえできなかった。

いや沖田だけではない。選手達が皆突然のシュートに驚いている。「……ほう」

そんな中、緑間はただ一人感嘆の声をあげた。

「なるほど。人事を尽くした良いシュートなのだよ」

天才に称賛の言葉さえ送られたそのシュートは安定したループを描き——リングを射抜く。

(大仁多) 23対26 (聖クスノキ)。大仁多高校、この試合始めての三点。神崎が交代直後に早々のロングスリーを決めた。

「なっ……!?!」

「スリーポイントシューターとは。今まで隠していたのか……」

ここまでは白瀧が楠の徹底マークを受けていた上にリバウンドもジャンが殆ど確保していたため、山本もスリーを中々撃つことができなかった。

県大会の試合でも神崎がスリーを撃っていないなかったことに加え、大仁多はSGの層が薄いという事実もあったために、なおさら警戒が薄れていたとも言える。

そのスリーポイントシュートが、ようやく大仁多から放たれた。

(……思わぬところに伏兵がいたか)

「よっしやっ! まず一本!」

「ナイツシュー!」

「おう!」

忌々しく石川が思う中、神崎はその視線を向けられている中でガッツポーズし、白瀧と手をかわしている。

(ここまで監督のスリー制限命令もあって全然目立ててなかったからな。今日は俺もトコトン決めてやる!)

「さあ来い、聖クスノキ!」

準決勝まででフラストレーションが溜まっていたのか、神崎も燃えていた。

大きな声を出して堂々と相手を待ち構える。やはり彼も全国を知

る実力者、緊張の色はない。

攻守が入れ替わり、聖クスノキの反撃。

大仁多のディフェンスは変わらず、相変わらず厳しいマークが続く。

「このっ、しつこい……！」

ボールを持つ楠には、やはり厳しかった。白瀧の徹底したチェックの前にして、下手な身動きは自殺行為に等しい。

体力も精神力もすり減らされるほどのプレッシャーがかかっていった。

そんな中、楠はすぐ近くに走ってくる真田の姿を目にし、ドライブで仕掛ける。

白瀧もやはり反応するが、真田のスクリーンにより一時的に距離が開く。松平がヘルプに入るが……

「……沖田先輩……」

楠はその前にジャンプし、空中からボールを逆サイドの沖田へと送る。

マッチアップを見た際、沖田と神崎の身長差がほとんどないことに気づいたのだ。

パスはきちんと沖田へと通り、沖田はすぐさまミドルシュートを放つ。

だが神崎のプレッシャーのためかボールはリングに弾かれた。

「——ジャンプ！」

「後ハ、任せろ！」

そのボールをジャンプが押し込む。黒木も跳躍するが、高さが及ばず得点を許してしまった。

(大仁多) 23対28 (聖クスノキ)。聖クスノキも負けじと得点を決める。やはりリバウンドを取れるか否かは大きかった。

「——っ。走れ、白瀧！」

「はいっ！」

「なっ——!?!」

ボールを取った小林が突如叫ぶ。そしてその命令に答え、白瀧が走

り出した。

小林のロングスロー。聖クスノキが得点後で油断した隙を突き、白瀧の速攻を企てた。

味方も反応できなかったが、ワンマン速攻が決まれば十分。

白瀧がトップで走り、ボールの確保を狙った。

「そうは、させない！」

だがそのボールは楠によってカットされる。

白瀧にやや遅れて追いかけていた楠はその長身を利用し、指でボールを弾いた。

「げっ!？」

「止めた!？」

『アウトオブバウンズ、大仁^白多ボール!』

ボールはサイドラインを割り、速攻の失敗を意味する審判の笛が鳴る。

やはりスピードならば楠は白瀧にも匹敵する。しかも高さ^{タツバ}では白瀧よりも上。それを改めて認識させるようなプレイであった。

「ハッ、ハッ……悔るなよ、白瀧。俺はお前達には負けない！」

乱れた息を整えつつ、楠は鋭い視線を白瀧へと向ける。

凄まじい闘争心が垣間見えた瞬間だった。彼にも負けられない理由があると窺えた。

「……やはり、そう簡単には勝たせてくれないか」

一つため息を零して試合が再開される。

小林が神崎よりボールを受け取り、ボールを運ぶ。

やはりゾーンディフェンスにより中が厳重に守られている中、

「だが、俺達とて負けるわけにもいかない！」

小林のペネトレイト。前列二人の間を潜り抜け、中へと侵入する。

「ぐっ!？」

「行かせるカ！」

中央のジャンが飛び出す。さらに前列二人も反応し、小林を囲んだ。

マークが厳しくなる中、小林は空中で体を回転させて外の神崎へと

パスをさばく。

「神崎！」

「ナイスパス！」

「まさか、また……！」

先ほどのスリーを思い出し、沖田が真つ先に動き出した。

膝を曲げ、大きく手を動かす神崎。シュートはさせまいと沖田が走りながら跳躍する。

「……もーらい！」

「ッ!？」

しかしそれはポンプフェイクにすぎなかった。

神崎はフェイクで沖田をかわすとドライブでミドルに侵入。そして急停止からジャンプシュートを狙った。

「させるかつ！」

陣形が崩れ、ミドルの意識が甘くなる中、楠が駆けつけた。

ブロックショットを狙って跳ぶ。

高さならば楠の方が上。ただのジャンプシュートならば止められないはずがなかった。

しかし——

「えっ……?？」

楠の手は空中で空を切り、ボールは楠の上を越えてリングを潜る。

「残念、でした！」

神崎の体はジャンプの際に後ろへと仰け反っており、楠との距離が開いていたのだ。それもシュートが山形だったために、余計にブロックは困難だった。

——フェイダウェイシュート。神崎が得意としているシュートである。彼はスリーだけの選手ではない。

(大仁多) 25対28(聖クスノキ)。神崎の連続シュートが決まり、再び点差は三となる。

「楠先輩、でしたっけ? 俺の友達のこと甘く見ているのかどうか知りませんけど」

「む?？」

神崎は得点を決め、危なげなく着地をすると目の前に立つ楠へと話しかける。

そして相手が話しかけられたことに気づき、神崎の方を振り向くと同時に口角を上げた。

「要は今のシュートを、初見で止めてましたよ？」

「なっ——!?!」

「いやー、ホントよくあんなに上から目線で言えたもんですよね。相手のことも知らない未熟者が」

「……ッ！」

調子に乗ったのか、ニヤニヤとした笑みを浮かべる神崎。言いたいことだけを言い残し、神崎は相手の返答も聞かずに立ち去っていく。

楠は皮肉を言われて羞恥心が募ったのか、齒軋りして悔しがった。握り締めた拳が彼の怒りを示しているようだ。

(……やるな、神崎^{あいつ}。得点決めた上で楠を挑発しやがった)

(まあ、本来楠とのマッチアップは神崎ではないのだがな……)

一連の様子を見ていた松平と小林は冷や汗をかきながら、『今年の一年生はやはり頼もしい選手が多く入ったものだ』と思った。

だがいずれにしても——神崎という外のカードが一枚出現したことにより、聖クスノキの2―3ゾーンディフェンスは早くも綻びが生じたと考えて相違ないだろう。

第三十六話 怒涛の反撃

聖クスノキのディフェンスは無理なブロックショットやステイールは控え、しっかりと相手をマークし、ミスショットを誘うノーギャンブルであった。

序盤は特にこの策が決まり、ジャンの奮起もあって流れを掴んでいた。ミドル以降を大仁多に圧され始めた後は2―3ゾーンディフェンスによって敵の猛攻を防ごうと必死に逃げ切りを図る聖クスノキの選手達。

しかしそのゾーンディフェンスも神崎というロングシューターの出現により、大きく歪み始めていた。

「ようし！ 真田ナイツシュ！」

聖クスノキの攻撃。沖田から真田へとパスが通り、ミドルシュートが炸裂する。

（大仁多） 25対30（聖クスノキ）。点差がゴール二本差へと広がった。

「二本！ きっちり返して行こう！」

対して大仁多は2―3ゾーンに対応するため小林がボールを運び、外からパスを回していく。

小林から神崎、そして再び小林へとボールが戻り――一挙に仕掛けた。

「まだまだディフェンスが甘いな！」

前列二人の間を小林は瞬く間に突破した。神崎のスリーを警戒し、ミドルが空いていたのも幸いした。

小林のジャンプシュート。ジャンと楠が詰めブロックに跳ぶ。すると小林はシュートの体勢から一転、右手を入れ替え、横へとパスをさばく。

「ナイスパス！」

「イカン！ 白瀧がフリーダー！」

「くっ、そおおお！」

白瀧がボールを受け取り、ジャンプシュートを狙う。

それを見た楠が着地後すぐにもう一度跳躍し、プレッシャーだけでもかけようと腕を伸ばした。

すると白瀧はシュートを撃たずに外の神崎へとボールを戻す。

「また、俺か！ ナイスアシスト！」

（フェイクじゃ、ない！ 駄目だ間に合わない！）

今度は先ほどと違い、神崎が本当にスリーポイントシュートを撃つた。

前列二人が詰める前に放たれてしまい、聖クスノキは神崎のスリーを許してしまった。

「よっしゃあ!!」

鬱憤を振り払うような神崎の叫びが木霊する。

（大仁多） 28対30（聖クスノキ）。その差、わずか二点。

小林がインサイドに入り、中から外へとパスを出して神崎のアウトサイドシュート。最も撃ちやすく、確立が高くなる。

大仁多の連携の為に聖クスノキのゾーンは外へと広げざるを得なくなり、形が乱れていた。

「どうだ、聖クスノキ！ こっからは俺の時代だ！」

「……あまり調子に乗るな神崎」

「イテッ！」

三連続で得点を決め、ついに有頂天に達した神崎は堂々と聖クスノキの選手達を指差し、高らかに告げた。

見かねた小林が神崎をどつきディフェンスへと連れて行く。

（だが本当に助かってるぜ勇。おかげでこちらもそろそろ大丈夫そうだ）

それでも神崎の活躍が大仁多を勢いづけていることは確かである。

小林に注意されて苦笑している神崎を見て、白瀧はクスリと微笑を浮かべた。

（もうあいつは怖くない！）

万全の状態で白瀧はマッチアップしている相手・楠を待ち構える。

「動きが鈍くなってきたんじゃないですか、楠さん？」

「このやろう！」

「勇じゃないですけど、俺だって何も感じてないわけではないんですよ！」

揺さぶりにつられず執拗に密着する相手を楠が睨み付ける。

白瀧のフェイスガード、厳しいチェックの為に楠は無闇に勝負を仕掛けることができなかった。

ドライブで切り込もうにもすぐに神崎をはじめとした選手達がヘルプに入る。そうなれば白瀧との挟み撃ちに会い余計に攻撃を組み立てることが困難になるのだ。

(だが、それでも……！)

それくらいわかつている。それでも楠は攻めた。

変速のチェンジオブペースからのクロスオーバーで白瀧の横から突破を図る。

まだ白瀧は食らいついている。そこで楠はドライブしている左手からボールを後ろへと弾いた。

「ナイスパスじゃん！」

「……させっか！」

ボールは間近にいた沖田へ。すかさずミドルシュートを放つ。

神崎のブロックよりもボールの軌道の方が高い。だがボールはリングに激突する。

「こうなれば後はオレの仕事だ！」

そしてそこからはジャンの仕事であった。

ジャンはオフエンスリバウンドを制し、黒木の上からシュートを沈める。

(大仁多) 28対32 (聖クスノキ)。点差がゴール二本差と広がった。

バスケットにおいてシュートが確実に決まるわけではない。大抵が外れリバウンドの勝敗によって攻撃の成否が決まる。

大仁多は未だにジャンを完全に攻略できているわけではない。まだローポストはジャンの制圧領域下にあった。

「……まったく。どこまでも手ござらせてくれますね」

藤代はため息を一つ零し、相手のセンター・ジャンを見る。

日本人離れた体格を持つ留学生。やはり彼は脅威の存在であった。

「しかしそろそろ彼にもおとなしくしてもらわねば困りますね。――

小林さん、松平さん！」

いつまでも嘆いてもいられない。

藤代はベンチに座ったまま、コート的小林と松平に声をかけた。

二人が自分へと視線を向けたところで、右手の指だけを動かし、二人に指示を出す。意味を理解し、頷いて試合に戻る彼らを見送って、ようやく藤代に笑みが戻った。

「聖クスノキが最も頼りにしているセンター。それを、崩させていた
だきましよう」

もつとも、藤代の笑みにはどこか黒い一面が見られたが。

大仁多の反撃。小林が高さを活かし、山田の上からパスを通す。

ボールはローポストの松平へ。真田のチェックをかわしつつターンアラウンドシュートを放つ。

……しかしボールがリングに嫌われる。

「オオウツ！」

「チツ……！」

リバウンド争いはジャンが制した。大仁多の攻撃が失敗し、再び聖クスノキボールへ。

「いいぞ、反撃だ！」

山田・沖田・楠の三人が外からボールを回す。

すると真田のスクリーンで沖田のマークが一瞬外れた。

この機を逃さず山田から沖田を経由してジャンへとパスが通った。ジャンは体を回転させてリングと正対する。

だがそのジャンの身動きを封じるために三人の選手がジャンを囲んだ。

「ナツ……ニツ!？」

「悪いな、お前は最優先で潰させてもらう！」

「撃てるものなら撃ってみろ！」

「……さすがな」

小林・松平・黒木。三人の選手によるトリプルチーム。ジャンを封じるために藤代は三人の選手をジャンに当てることを決断した。

「グヌヌ。クソッ！」

いくら自分よりも背丈が低い相手とはいえ、三人の同時マークを受けることは並大抵のことではない。しかも相手が王者・大仁多の選手達というのだから尚更だ。

これ以上ボールを持っていても24秒ルールに引つかかってしまう。ジャンは無理やりシュートへと行った。

無茶なシュートだったのか、シュートははずれてしまう。

「リバン！」

「うおおお！」

その上、黒木にディフェンスリバウンドを取られてしまった。

「クソッッ！」

「よっし。ナイス黒木！」

「へい、黒木さん！」

「む……？」

士気がさらに高まる大仁多。

そこで白瀧が黒木へと叫ぶ。黒木がリバウンドを取るや否や、速攻の為に走り始めていたのだ。

「……決めて来い！」

黒木から矢の様な送球が放たれる。白瀧は勢いづいたボールをフロントラインで確保。そのままドリブルで攻めあがる。

普段の試合ならこのまま白瀧がワンマン速攻を決めていただろう。だが、この試合はそうはいかない。

「させるか！」

「……やはり、来たか」

「来い、一対一だ！」

「楠さん！」

聖クスノキのスコアラー、楠が立ちはだかった。

(もう遠慮はしない。ここで俺が決めて流れを一気に引き寄せる！)
エース対エースの一騎討ち。攻める側の白瀧からすれば味方の援護を待つという手もあっただろう。

だが白瀧はその手段を捨てた。

聖クスノキの主力はジャンと楠の二人。これは覆しようもない事実だろう。だからこそこの二人を倒せるかどうかは試合の行方はかかっている。

そして楠を倒すのは白瀧の役割。今こそその役割を果たすときだと白瀧は感じていた。そうすることで試合の流れも大仁多へと向くだろうと。

「——行くぞー！」

白瀧は闘志をむき出しにして勝負を仕掛けた。

体がかがめ、スピードを最高速へと乗せる。

さらに加速を殺す事無く、左から右へのクロスオーバー。

(やはり動きのキレは凄まじい！　しかし俺とて……)

向きの急変化に戸惑いつつ、楠もサイドステップを踏んでコースを塞ぐ。

簡単にはやらせない。だが——直線的に動いていた白瀧が、突如小刻みに揺れ始めた。

「なっ……そんな!?!」

白瀧のラストステップが生んだ急激な方向の連続転換。——ジノビリステップ。

その動きを止めることは不可能であった。楠のブロックを横目に、白瀧はステップシュートを沈める。

(大仁多) 30対32 (聖クスノキ)。スリー一本を決めれば大仁多が逆転する。

「俺は負けません。あなたにも、聖クスノキにも」

「……白瀧」

肩で息をする楠に、白瀧はこの試合の必勝を言い残した。そして神崎達と手をかわしてディフェンスに戻る。

その姿が楠にはどこかうらやましく思えて、

「それくらいわかっている。でも俺だって、負けるわけには……いかないんだ」

楠もまた己の強い思いを言葉という形にして吐き出した。

その後、聖クスノキ高校はタイムアウトを使用して流れを絶とうとした。

だがそのタイムアウトはあまり意味をなさなかった。

聖クスノキ高校には残されている手札がほとんどないのである。ジャンと楠、切札である両選手を序盤から投入し、逃げ切りを考えていた。

しかしそれでも大仁多を完全に攻略することはできなかった。むしろ大仁多の多彩な戦術を前に苦戦を強いられた。

ジャンはトリプルチームの為に得点・リバウンドが一挙に減り、楠も白瀧の徹底したマークを前に得点を重ねることはできなかった。他の選手達もフリーとなればすぐにシュートを撃つが、ヘルプも早くシュート成功率が定まらない。

ディフェンスは神崎のアウトサイドシュートの為にゾーンが崩れ、小林や白瀧の高速ドライブからのパスワークを前に失点の連続。

第二Qを五分残したところで、ついに大仁多の逆転を許してしまう。徐々に大仁多が点差を開いていき、聖クスノキは流れを取り戻せないまま第二Qも終わろうとしていた。

「楠！」

山田から楠へとパスが通る。この試合何度目かわからない白瀧と楠の対決。

第二Q残り十秒、聖クスノキの最後の攻撃である。

「ディフェンス集中！ これを止めて終えるぞ！」

「ハンズアップ！ 声出してけ！」

大仁多のベンチから大きな声援が飛び交う。声援は未だに聖クスノキの方が大きい。しかし士気は明らかに大仁多の方が高い。

疲労も溜まり集中が欠けてしまいそうな中、楠はしっかりとボールをキープし、白瀧の猛烈なディフェンスに対抗していた。

「さあ、序盤の勢いはどうしたんですか!？」

「……………」

挑発、わかっていると言い返せなかった。いや言い返す余裕もなかった。それだけ楠は危機に陥っていた。

白瀧のステイールを防ぐのだけでも精一杯。そんな中、白瀧の後ろから沖田が走りこむ姿が目に入った。

(こつちじゃん、楠!)

「……………ふっ。助かります!」

沖田のスクリーン。おかげで楠はクロスオーバーで突破した。

「スイッチ!」

すかさず神崎がヘルプに入る。だが彼に掴まっては得点できない。周囲へのパスもリバウンドが難しい今、得点に繋がることは期待できなかった。

ゆえに楠は己の手で勝負に出ることを選んだ。

「俺は、勝たなければならんだ!」

「げっ!？」

急停止からのジャンプシュート。否、ジャンピングシュート。

普通のタイミングよりも早く放たれたボールは神崎の指先を越えて——白瀧の腕に叩き落とされた。

「なっ、馬鹿な!？」

「よっしや! 要、ナイスブロック!」

マークをかわし、さらに通常よりも早い今のシュートは白瀧では止められないはず。

それなのに止められたという突然の出来事に、楠は呆然とした。

第二Q終了のブザーが鳴る中、白瀧は神崎とハイタッチをかわし、そして楠と向かい合って言った。

「あんな高さじゃ、止めてくれと言っているようなものですよ!」

もうお前の攻撃は通用しないのだと。

準決勝前半戦、第二Q終了。(大仁多)43対36(聖クスノキ)。大

仁多七点リード。

前半戦を終えて試合は10分間のインターバルを挟む。

両校がそれぞれの控え室に戻り、各々の時間を過ごしていた。

「前半戦お疲れ様です。皆さんよく戦ってくれました。

第二Qで逆転できた効果は大きい。この勢いをなくさぬよう、鋭気を養いましょう」

大仁多は控え室に戻り藤代が選手達を褒め称えた。

折り返しの時点で逆転できたこと、これは後半戦の士気にも繋がる。

選手達が十分な休養を取れるように笑みを浮かべて選手達をリラックスさせた。

「えーっと、今日レモンはちみつ漬けを作ってきたので、よければどうぞ」

「ああ、ありがとうございます。さて……おい、レギュラー陣。栄養補給の差し入れだ」

『おー！』

それぞれが試合で失われた水分や糖質を補給していると、橙乃が自分の持ち物から取り出したタッパーを手にして小林に呼びかけた。

小林の招集により山本や黒木といった出場していた他の選手たちも橙乃の元へと集まってくる。

一人一人が橙乃に感謝の言葉を告げてタッパーのふたを開けると……はちみつの上にごろりと浮かんでいる、タッパー一杯のレモンがそこにはあった。カットしていないそのままの大きさのレモンが。

「あれ？ 白瀧さん、俺意識だけ中学時代にトリップしているんですかね？

なぜか昔とまったく同じような光景が目の前に広がっているんですけど」

「安心しろ。俺も同じだ」

「まったく安心できません、はい」

隙間から様子を窺っていた西村が半信半疑で白瀧へと問いかける。かつて帝光時代、マネージャーである桃井が作ってきたレモンはちみつ漬け(?)とほとんど一致する惨状が目に入ったのだから当然だろう。

何かを諦めたように遠い目をしている白瀧に、西村もため息をこぼすしかなかった。

「……橙乃。ひよつとして料理はあまり得意ではないのか？」

「へ？ えーつと……」

しかしただ一人、小林だけが立ち直り恐る恐る橙乃へと問いかける。

答えたくなければ答えなくても良いと補足すると、橙乃からは意外な返事が返ってきた。

「お兄ちゃんには『茜の料理はいつも上手いな！』って言われましたけど」

「まったく参考にならないぞー、それ！」

松平の鋭いツツコミが入る。さすがはシスコン。妹は絶対だと考えているようだ。

「はあ。おーい、葵！ 持ってきてるか？」

「ええ。はい、どうぞ」

「ありがとう。あとついでに今度橙乃に料理を教えてやってくれ」
「了解。時間がある時にね」

小林はため息をつき、もう一人のマネージャーである東雲に呼びかけた。

彼女はきちんとした料理を持ってきてくれたようで、小林も笑顔でそのタツパーを受け取る。

さらに東雲に橙乃の料理の指導を頼むと、今度こそ栄養補給をはじめた。

「あー、東雲がいてくれて本当によかったー」

山本がうれし涙さえ浮かべながらレモンを口に運ぶ。黒木達も東雲のタツパーへと集まった。

チームメイトがおいしそうに食べている中、東雲は楽しそうに眺め、橙乃は寂しげな表情で見て……自分のバックの元へと歩いていった。

(私のじゃあ、駄目か……)

自分の料理は役に立たないと考え、レモンが入ったままの容器を戻そうとする。

(……まったく、見てられないな)

その橙乃の様子を、レギュラー陣の中で唯一東雲のレモンを食べていなかった白瀧が見て、彼女の元へと歩いていった。

「おーい、橙乃」

「え？ あ、えっと、どうしたの白瀧君？」

突然の呼びかけに少し困惑する。

白瀧はその素振りを気にすることなく、橙乃が持っているタツパを指差して言った。

「それ、全部くれ」

「それ？ って……これ？」

「うん。そのレモンはちみつ漬け」

「……へ？」

橙乃は手にしているタツパーを上へ上げ、質問の意図を問うと、白瀧は笑みを浮かべて頷く。

思いがけない返答に、橙乃は硬直した。

「でも、東雲さんの作ってきたくれたものの方が……」

「んー。俺は橙乃の作ったやつの方が良いんだけど、駄目か？」

「いや、白瀧君がそれで良いなら私は別に……」

「それじゃあ、いただきます」

了承をもらった白瀧は橙乃からタツパーを手にし、早速レモンの一つを口に運ぶ。

さすがに大きすぎるために丸ごとは無理なので少しずつはちみつにつけてから食べていった。

「ど、どう……？」

橙乃が不安げに見つめる中、白瀧は表情はまったく変えることな

く、

(……やっぱり酸っぱいな。全然皮にハチミツの甘味が染みこんでない。それに切つてない分食べにくいという欠点もある)

しかし冷や汗をかきながら咀嚼していた。

まず一つのレモンを完全に食べてから、白瀧は一度食べることを辞めて橙乃と向かい合う。

「うん、全然大丈夫。口に入れば後は変わらないよ」

「……そう?」

「ああ。でもやっぱりレモンを薄く切ってきたほうが食べやすいし皆で摂取するにも丁度いいから、次からは東雲さんのように切つて漬けてくれ」

(男前だ、男前がいる……!)

「そつか。うん、わかった」

中学時代、桃井が作ってきた差し入れを全て一人で引き受けていた(しかも喜んで)白瀧にとってはこの程度のこととはなんともなかった。

橙乃とさらに数名のチームメイトが評価を大幅に上げている中、白瀧はさらに二個目を口に運び、噛み締めていく。

「お、おい白瀧? 無理しなくても、なんなら手伝うぞ?」

「ああ。俺もちよつと食べたくなってきたんで、少しなら……」

その姿を見ていられなくなったのか、三浦と佐々木が白瀧の肩を叩く。

頼れる後輩に変な所で無理をしてほしくないと感じたのかもかもしれない。

白瀧のことを案じての言葉だったが、白瀧は二人の誘いを断った。

「無理ってなんですか? これくらいなら全然負担になりませんよ」

「いや、しかし……」

「それに出ていた分俺の方が消耗していると思うので。補給をきちんとしてほしいんですよ」

(白瀧——!)

あくまで退く気を見せない白瀧に、二人は心の中で涙した。

こうして選手達が栄養補給を済ませていると——藤代が突如大き

く手を叩き、その音によって皆の注目が藤代へと集まった。

「さて、皆さん栄養補給をしながらでも構いません。ですが意識だけはこちらへ向けてください。」

「……そろそろここから先の、後半戦——第三Q以降の話をしていきますよ」

藤代の言葉で表情の緩みが消え去り、顔つきが選手のそれへと変わる。

意識が切り替わったことを確認して藤代は話を続けた。

「第二Qではようやくこちらが流れを掴み始めました。」

しかしまだ気を抜ける展開ではありません。点差は七点、二桁もない今、いつ戦況が変わってもおかしくないと意識してください」

逆転に成功し流れは大仁多だが、完全優位というわけでもない。

少し油断すればジャンと楠の両者のどちらかが再び暴れることになるだろう。

「準決勝で手を拱いているわけにもいかない。後半開始から仕掛けていきます。」

——白瀧さん、小林さん。少々早いですが、新しい型で行きますよ」

「お!?!」

「いよいよか……」

「了解です」

「やるからには、トコトン見せ付けますよ」

藤代の提案に選手達は嬉しそうに頷いた。それだけ期待している面があるということだ。

「今回の相手・聖クスノキ高校は新しい型が最も効果的に働く相手だと言えます。」

「この試合が新しい型の実践投入の初めてですが……やりましょう。第三Q始まりと同時に、聖クスノキの息の根を止める!」

『おうー!』

全力で獲物を倒す。余裕など一切なしで、王者は早々に勝負を仕掛けるための策に出た。

その後さらに細かい打ち合わせをした後、残り時間はそれぞれの選

手達は解散して試合に備える。

白瀧も例外ではなく、レモンを全て片付けたあとは立ち位置に戻る。その途中、光月を見て彼に話しかけた。

「おい、明？ 大丈夫か？」

「……え、ああ要か。大丈夫、大丈夫だよ」

「……そうか。まあ、準備はしとけよ」

放心状態のような光月を見て、白瀧は少し声をかわしたただけでその場を離れる。

(これは、この試合中には無理だな)

光月の復活が厳しいと判断したのである。以前のように切欠があればいけるかもしれない。だが今回は大きな切欠がない。

ならば今は彼自身の手で復活してもらうことを祈るしかないと考えたのだ。

白瀧は何も言わずに静かに椅子に腰掛ける。

「……楠先輩は、どうなるかな？」

すると神崎が隣の椅子に腰掛け、白瀧に問いかけた。

前半白瀧を存分に苦しめた楠。徐々に白瀧が優勢となっていたが、果たして後半はどうなることか。

それを不安に思った神崎だが、白瀧は不安など一切感じさせない冷静な声で返答した。

「どうであるかはわからないけど、少なくとも前半のような脅威はない。むしろ俺がそのようなことをさせない」

「本当、頼りになることを言うよな。けど、本当に大丈夫なんだろうな？」

「当たり前だ。前半戦、散々楠に罫を仕掛けていただろう」

「ああ、以前お前が言っていたことね。まさか本当とは思わなかったけど……」

白瀧は自信を持って答える。

なるほどね、と納得した表情を浮かべつつ、神崎は「こいつが本当に敵にならなくてよかった」と思った。

「おそらく間違いない。去年のデータを調べて、そう確信したからな。」

なあ、橙乃！」

「え？」

呼びかけに驚きつつ、橙乃はなんとなくその場の勢いで首を縦に振った。

そのころ、聖クスノキ高校控え室。

こちらでは土気高まる大仁多とは一転、不穏な空気が流れていた。

「おい、楠!! 大丈夫か、しっかりしろ！」

「ロビン、ロビン!? どうしたの!？」

控え室に到着早々、楠が倒れこんだのである。

エースである楠の突然のアクシデント。当然のことながら石川やチームメイト達が焦るのも当然のことだ。

石川はすぐに楠をベンチに寝かせ、症状を窺う。そして彼の体を見て驚愕した。

「汗の量が尋常ではない。……まさか、前半戦で消耗しきってしまったのか!？」

「……すみません。どう、やら……大仁多の策に、やられたようです……」

彼の体からあふれ出る汗の量。すぐにタオルをあて、さらに楠に水分を含ませる。

意識は問題なくあるようだが安心はできない。それほど楠が弱っていた。

「やはり、まだフル出場は厳しかったのか……!？」

「しっかりするじゃん! この10分、しっかり休め!？」

「……すみません」

先輩二人の応援への返答は実に弱弱しい。おそらく声を絞り出すのも精一杯なのだろう。

「チッ! 前半あいつが大人しいと思ったラ……こういうことだったの力。コレガ狙いだったの力!？」

「あいつ？ あいつって、誰のことですか？」

「決まっているだろう——白瀧だ！」

山田の問いかけに、ジャンは苛立ちを募らせて答える。

何故もつと早く気づけなかったのかと、己を責めながら。

「監督！ これでは少なくとも第三Qは……」

「……ああ。わかっている」

先の言葉は言わなくてもわかった。石川は西條の言いたいことを察し、表情をゆがめた。

「皆。この様子では楠は第三Qは出られない。楠を欠いた状況下で大仁多の猛攻を防がなければならぬ！」

「……これは」

「ちよつと、やばいじゃん？」

ちよつとで過ぎればよいがな、と石川は沖田の呟きに対して心中で答えた。

楠の不在。それは今の聖クスノキの大きすぎるハンデとなる。

しかも逆転され、劣勢であるというのに……あまりにも、痛すぎる現状だった。

「……いえ、待ってください監督」

すると楠が監督の声を遮って言った。無理やり体を起こし、監督を見る。

「俺なら大丈夫です」

「な……」

「ロビン!? ちよつと、あなたは寝てて！」

「大丈夫だ。……10分、それで体を休めます。だから出させてください。俺が、絶対にこのチームを勝たせますから！」

西條の制止を振り切って楠は嘆願する。

無理だとわかっていても、楠は退こうとしなかった。

「楠……」

その覚悟が痛々しく、石川はすぐに決断できなかった。ただ表情を歪ませるしかできなかった。

一週間前、大仁多高校が聖クスノキ高校と戦うことが決まった日。白瀧は橙乃に一つ調べてほしいことがある。彼女に依頼していた。『一つだけ調べて欲しいことがある。できるだけ早急にだ』

『……調べる？ 調べるって、何を？』

『去年の栃木県予選の聖クスノキ戦のデータ。それを調べてほしい』
内容は盟和高校に敗れたという県大会のデータではなく、予選のデータだ。

白瀧は『何故楠が今年になって出場するのか』という点が気になっていた。他のメンバーは『理事長の孫だから一年目は大切にされていた』と納得していたが、白瀧はそれでは納得できなかつたのである。（これが栃木じゃなかつたなら、納得もしたんだけどな）

理由は栃木にはすでに大仁多という王者がいるためである。

本当に打倒王者を謳うならば少しでも早く王者と戦わせその力を実感させるなり、大仁多を倒す機会を増やした方が賢明だと考えた。それなのに一年目は県大会には出ず、二年生の今年になってようやく出場させた。この一点を疑問に感じたのである。

（そして対常盤高校戦。これも違和感があつた。なぜあいつは第四Qまででてこなかつたのかという疑問が）

そしてもう一つは三回戦の試合展開である。

常盤高校ほどの強豪校を相手に、楠を温存していたということ。たしかに大仁多と戦うために隠していたとも考えられる。だが白瀧はこれにも他に理由があるのではないかと考えた。

だからこそ白瀧は橙乃に調査を依頼した。

「いくつか予想していたけど、まさか俺と似たような境遇とはね」
苦笑いし、顔を俯かせる。

橙乃に依頼したデータ。それを見ると楠は去年の県予選大会に出場していたということが明らかになった。

だがその後は出場記録はない。冬の大会にも参加していなかつた。実は楠は県予選大会の際に膝を痛めてしまったという。その後は

治療期間が続き——その結果体力が低下してしまった。

一度落ちた能力を戻すことは並大抵のことではない。それは実体験済みの白瀧が誰よりも理解している。

「エースの体力不足。そして控え選手層の薄さ。……これにつけこまない手はない。徹底的に叩く」

だからこそ白瀧は前半戦、楠の体力を奪うことに専念した。

ディフェンスの密着マークは楠のシュートとパスという選択肢をなくし、彼を動かすため。

オフENSで囷に勤めたのも全てはこのためだった。白瀧はチームメイトの囷であり、同時にチームメイトは白瀧の囷でもあったのだ。

ボールがライン外に出ない限り、ゴールが決まらない限り試合は続く。

もしも白瀧が味方へとパスをさばき、彼らが攻めれば楠の注意はそちらへ向く。突破されればヘルプに出る必要もある。かといって要所所で白瀧が仕掛けるために白瀧への警戒も緩めることができない。

体力だけでなく集中力・注意力までも万遍に発揮しなければならぬ状況であった。それゆえに楠の体力は通常の倍以上消耗していた。

おそらく楠は後半戦のための余力などないだろう。だが聖クスノキは彼を交代することもできないと、白瀧は考えていた。

「もしも楠を変えようものなら、それこそ俺が止めを刺す」

楠は190cmのスコアラ。彼が抜けければ得点源が減るばかりか、一気に高さまでなくなる。そうなればゾーンディフェンスも効果が半減するだろう。

聖クスノキは常盤や盟和ほど選手層は厚くない。だからこそ変えるわけにはいかない。変えれば大仁多の猛攻を止められなくなる。

楠を交代するか、交代しないか。どちらを選べばよいのか。正解などないのかもしれない。おそらく誰にもわからないだろう。ただ、唯一わかることがあるとしたら……

「どちらにせよ、絶対にこの試合に勝つ！」

どう転んでも、大仁多が手を抜くようなことはないということだ。

「……マジ、かよ」

「おそろくな。白瀧の長所は瞬発力だけではない。それを1試合継続するスタミナにもあるのだよ。」

後半戦で一気に決着をつけるために、白瀧はわざと楠の体力を削り取ったのだろう」

「相手は完全に疲労している。でも自分はまだ動ける。これほど有利な状況はないでしょうね」

「その通りなのだよ」

緑間は大仁多の作戦の意図を理解していた。緑間の説明に火神は驚き、黒子は感心する。

ここまでの試合、全てが後半戦の為の布石だった。これほど念入りに仕掛けを施すなど普通できないだろう。

それでも白瀧達は実行した。それもあくまで自分達が優位に進める状態で。

（……だが、今までの白瀧ならばこのようなことは考えなかったはずだ。

たしかに中学時代、体力の低下した相手を圧倒したことはある。だがそれは『結果として』そうだったただけだ。

今回のようにそれを『目的として』プレイをしたことはない。何か、ヤツに心境の変化があったのか？)

このことは白瀧の変化をも意味している。プレイスタイルの拡大、思考の変化。

緑間が知るはずもなかった。これは白瀧とて思い至ったのはつい最近のこと。彼が橙乃と話すまで考えたこともなかったことなのだから。

——絶対に勝てなくてもそれ以外を活かす。己が駄目でもチームメイトを活かす。そしてチームメイトが駄目でも己を活かす。白瀧

は己とチームの相互の利点を計っていた。

「つつーか、あいつ爽やかな顔していなながら、意外とやることえげつねーな。弱った相手を一方的に」

「……それは俺達が言うことではないのだよ」

「は？ 何言ってるんだよテメー」

「お前が言っていることは、お前がダンクをすること、俺がスリーを撃つこと。それらも総じて卑怯だと言っているようなものなのだよ」

「……どういう意味ですか？」

言っている意味を理解できず首をかしげる黒子を見て、緑間はため息を一つついて言った。

「やつにとつて優れているのが体力だったから取った戦法が今回の試合なのだよ。」

だが長所は人によって様々だ。今の白瀧を責めるのは、長身であり跳躍力がある火神がダンクをすることを、弾道が高く確実性のある俺がスリーを撃つことを、それらを責めることと同義だということだ」

「……たしかにそう言えますね」
たしかに印象は悪いかもしれない。だが己の長所を信じて戦うことは皆同じだ。

それは誰かが否定して良いことではない。たとえ理解されずとも、それも一つの戦い方なのだから。

「その上で気になるのは、状況が変わった後半戦で両校がどう動くかだが。……どうやら、時間のようだな」

緑間が選手達が入場することに気づき、視線をそちらへと向ける。

両校とも顔つきはすでに試合のものへと変わっている。しかも聖クスノキ高校の中には、楠の姿も見られた。

「出るつもりですかね」

「ああ。どうやら、どちらも退く気はないようだな」

「……へっ。いいじゃねーか。試合も盛り上がる」

後半戦、果たして試合がどう動いていくのか。観客席で三人は静かに試合の行方を見守る。

第三Q、後半戦の開幕である。

大仁多高校は神崎に代わり、山本が再びコートに入った。聖クスノキの選手交代はない。

(……交代はしない、か。それがあなたの選択ならば、俺も本気で行かせてもらおう)

白瀧の顔が強張る。容赦はしないと言葉にせずとも表情だけわかるようだった。

第三Qは聖クスノキのスローインから再開。

山田が楠へとボールを渡す。すると楠は開始早々、いきなりシュートモーションに入った。

(なっ!?! 何をしている!?!)

白瀧も慌ててブロックに跳ぶ。だがこのシュートはジャンピングシュートの方だ。

タイミングが間に合わず、楠の手からボールが打ち出される。

(ハーフラインを少し超したところから撃つなんて、緑間じゃないんだぞ!?!)

(一体何を考えて……!)

「黒木、松平! 目的はジャンだ、止める!」

大仁多の選手達が驚愕している中、小林が楠の行動の意図に気づき、二人に叫ぶ。

スローインと同時に、ジャンと真田。二人のインサイドプレイヤーがゴール下へと走っていた。

楠のシュートはやはり入らない。しかしリングに当たり、宙に浮く。

「止める!」

「ちっ!?!」

「くそっ……!」

「……ヌツガアアア!!」

真田の賢明なスクリーンアウトで二人の反応が一瞬遅れる。

黒木と松平、二人がリバウンドの確保を狙うも……間に合わず、ジャンが確保。さらに彼のダンクシュートを許してしまう。

(大仁多) 43対38(聖クスノキ)。第3Q、最初に点を取ったのは聖クスノキ高校。

「決まった！ ジャンのダンクシュート炸裂！」

「いいぞ聖クスノキ！ まだ負けてねえ！」

決まったのがジャン、それもダンクシュートというのが余計に観客を沸きあがらせた。

派手なシュートは決まれば周囲に与える影響も大きい。聖クスノキの応援席は士気を取り戻そうとしていた。

「始まりそうそう、派手なことをしてくれるな」

「やっぱり徹底的に潰さないと駄目ですね。……小林さん、やりましょうか」

「ああ、行けるな？」

「はい。一気にケリをつけてしましましょう」

敵の派手なプレイに苦笑しつつ、小林と白瀧は敵に聞こえないような小さい声で会話をする。

黒木のスローイン。小林へとボールが渡る。普段はここから小林や山本がボールを運んでいく。

だが……

「なっ!？」

小林は白瀧にボールを預け、先に前線と走り始めた。

聖クスノキの選手達が驚くのも無理はない。PGである小林が司令塔らしからぬ行動をしているのだから。

その代わり……白瀧と山本が並走するようにボールを運んでいた。

「これはまさか、白瀧がPG!？」

それが意味するのは大仁多のポジションの交代。

白瀧が小林に変わり、PGのポジションに入ったということである。

(何を、何を考えている!?)

聖クスノキの誰もがその意味を理解できない中、

「さて、それじゃあそろそろ決着をつけましょうか。行きますよ、小林さん」

白瀧がこの試合の決着を着ける一手を打とうとしていた。

第三十七話 戦いに終止符を

バスケットにおいてポジションは5つに分けられる。
ポイントガード、シューティングガード、スモールフォワード、パワーフォワード、センター
P、G、S、G、S、F、P、F、C。

それぞれ一人一人が役割を持っておりそのポジションに適した能力が求められる。

もつとも試合中はメンバーチェンジやポジションチェンジが行われる為、一人の選手が複数のポジションを兼任することは決して珍しいことではない。状況に応じてポジションをこなすことがある。P GがSGを、PFがCをするといった例があげられる。

だが、帝光中学バスケット部においては複数のポジションをこなす選手はほとんど存在しなかった。その原因は絶対的レギュラー、「キセキの世代」の存在である。彼らがすでにバスケットを極めていたため、部員数も多いために他の選手達も層を厚くするという目的で一芸に秀でるように鍛えられる節があった。白瀧や西村も当然これに当てはまり、本来のポジション以外でプレイしたことはないに等しい。

だからこそ白瀧の現状は帝光中学の内面を知る者達にとってはなおさら異例のことであった。常に得点源スコアラーとして戦い続けた白瀧。そんな彼が司令塔としてコートに立っているのだから。

「——さて、それじゃあそろそろ決着をつけましょうか。行きますよ、小林さん」

それでも彼の表情に不安の色は見られなかった。

(……やっぱりポジションが違うと見えるものが違うな。全員の姿を捉えるつてのも、かなり難しい)

ボールを運びながら、白瀧は改めてPGというポジションの難しさを実感した。

かつてのミニゲームでも経験したことはあるが、これが本物の試合であるために、敵味方の人員があまりにも違いすぎるためにまるで別

物のように感じられる。

本番で試すことがはじめてのため、緊張を覚えながら白瀧はじつくりと戦況を見た。

そんな彼のボール運びは聖クスノキにとっては不気味な姿にしか映らない。

(7番が^{白瀧}PGなんてデータはない。だけどぶっつけ本番と言ってこんなところで博打をうつわけもない)

(だからこそこれは大仁多にとってはあくまで計算内の戦術のはずじゃん。用心に越したことはない！)

聖クスノキの2-3ゾーンに対し、大仁多は白瀧をトップに据え山本が右ウイングに、小林が左ウイングに展開する。

前列の山田と沖田が腰を落として外からのペネトレイトを重心的に警戒する。

すると白瀧と小林の視線があい、白瀧が右ウイングへと徐々に動いていく。それにつられて山田も動き、結果ハイポストへのコースが空いた。

「松平さん！」

ゴール下からハイポストへ抜け出た松平へとパスが通る。

ボールを掴むと同時に反転。ゴールと正対し即シュート。ジャンはプレッシャーをかけるだけでブロックはできない。ボールがゴールを射抜く。

(大仁多) 45対38(聖クスノキ)。大仁多が確実に二点を決めた。

「ようし！ ナイスパス！」

「いぞ松平！」

PGが交代し、不安視もされていた最初の攻撃を成功させたことで大仁多ベンチも幾分か気が楽になった。

「……どう思いますか？」

「なんというか、まあ今のは普通じゃん？」

「思ったよりも違和感はなかったな」

一方で聖クスノキ高校は大仁多のスタンダードな攻めに、戸惑いを覚えた。

本来のポジションではない白瀧が司令塔を務める。何か奇策があるのだろうかと待ち構えていたのだが、白瀧のパス回しは無難とも言え、想定外であった。

(今のはあくまで試しのつもりか？ 一体何を考えている)

白瀧も小林も特に大きな動きがない。それが余計に彼らを不安を大きくさせた。

「あんまり深く考えすぎな！ とにかく、点差を縮めていこう！」

真田の一喝が飛び、聖クスノキの攻撃が始まる。彼も不安がないわけではないが、だからこそチームを勇気付けようと思ったのだろう。

山田と沖田が前線までボールを運ぶ。だがやはり楠とジャンのマークは厳しく、そう簡単にシュートまでいけそうにはなかった。

「それなら、こつちによこすじゃん！」

突破口が見つからない状況下。ボールマンである山田に沖田が声をかける。

すぐさまボールを沖田へ。沖田はフェイクから一転、ペネトレイトを仕掛けた。中央に立つ山本のマークを切り裂くような鋭い動き。

そして勢いを殺さずに真田へと速いパス。ゴール下へとパスが通った。

「よっしゃ、任せろ！」

真田はワンドライブを入れてゴールを狙う。

「させると思ったか!？」

「まだまだアメイよ！」

「とっ!？」

だが小林と山本がすぐに立て直し、真田の前に立ちはだかった。シュートコースがふさがれて困惑したために動きも止まってしまふ。そして山本のステイールを許してしまう。

「あつ、やつちまった！」

「——白瀧！」

弾いたボールは小林の手に収まり——そして白瀧へ。

「さつすが！ 二人とも、良い仕事してくれますね！」

笑みを浮かべてボールを運ぶ。聖クスノキも大仁多の速攻に備え

て走った。

「さあ、行きますよ！」

攻守が入れ替わって大仁多の速攻。一足先に黒木がゴール下へ入り、遅れて白瀧と山本が駆け上がる。対するはジャン、楠、山田の三人。

敵の態勢が立て直る前に、大仁多が仕掛けた。並走していた白瀧と山本が左右へ別れる。

するとボールを持っている白瀧はそのまま右ウイングから仕掛けるように見せ掛け、突如後ろに向き直り、パスを出す。

「ここですよ、ね！」

「ああー、正解だ！」

白瀧の斜め後ろを追いかけるように走っていた小林へパスが通り、そして速いパスが今度は山本へ送られる。

ノーマークの山本がスリーポイントシュートを放つ。山田が慌てて跳ぶが間に合わない。山本のスリーがこの試合初めて炸裂した。

「よっし、やった！」

「ナイツシュ、山本さん！」

「小林さん、ナイスアシスト！」

（大仁多） 48対38（聖クスノキ）。これで点差は二桁。

「今のが、そういうことか」

「……え？」

観客席で緑間が一人きこちなく呟く。今の攻撃で緑間は大仁多の策の意味を理解したのだろう。冷や汗を浮かべ、大仁多の選手達の動きをじつくりと観察し続けた。

聖クスノキの反撃。山田がボールを運ぶ。楠もなんとか状況をよくしようとするが、前半ほどのキレがない。

「後半戦、あなたにはもう何もさせませんよ。俺が絶対に止めてみせる！」

「……本当に厄介だなお前は」

苦しいはずなのになぜか口角が上がる。前半同様の厳しいチエツクの為に振り切ることもできない。

だが楠がいるからこそ白瀧をひきつけることができている。それも事実であった。

(でも、こつちもジャンがトリプルチームで封じられて、楠もいないんじゃないとても攻めきれない。6番^{山本}に代わってハイポストも厳しいし)

「……っ、コイ！」

「なっ?！」

「コイ!… こつちニ寄越セ!!」

攻め倦み、無駄に時間が過ぎていく中。ジャンが声を張り上げた。迷いながらも山田はパスカットをさけるため、高いパスをさばく。ジャンも跳躍しないと確保は厳しい高さ。これならダイナイも意味がない。

ジャンが空中でボールを掴む。

「させるか!」

すぐに三人がジャンを囲む。完全な包囲網の為に身動きを取ることにさえ難しいが、それでもジャンは跳んだ。

「ウオオオ!」

激しい咆哮と共に巨体が持ち上がる。無理やり腕を伸ばし、シュートを撃った。

ボールがリングに弾かれる。だがジャンはもう一度跳び、リバウンドを確保すると今度こそボールを捻じ込んだ。

(大仁多) 48対40(聖クスノキ)。ジャンの懸命なプレイで二点を返す。

「……いや、今のような攻撃は長く続かない。気にするな。俺達はそのまま点を取り続けるぞ!」

我武者羅なプレイで聖クスノキの選手達が少し士気が高まる。

それを見て、小林は味方の流れを変えないようにと宥めるように、気持ちいを落ち着かせた。

「よし。それじゃあ、また一つ頼むぞ白瀧」

「……了解です」

白瀧に声をかけて小林は走り去る。今まで小林は見送る側だったが、だが今は後輩に指示を託しているためか、少し固さが抜けたようにも

見えた。

失点後の大仁多の攻撃。山本と白瀧が交互にボールを回す。各選手達が動き回り、聖クスノキの2―3ゾーンをかき回す。やがて小林が空いているハイポストへと入り込んだ。

それを見て白瀧も小林へとパスをさばく。

「小林！」

「囲め！フリーにさせるな！」

ノーマークであったために、余計に聖クスノキの陣形も動いた。

山本のすぐ近くにいた沖田を除き、ジャンと楠、山田が小林を囲むように動き、真田は後詰としてゴール下へ回り込む。

「……おう。これはありがたい。ここまで大きく乱れてくれるとは、な！」

「なっ……!?!」

だが彼らの意図に反して小林はすぐにボールを手放した。

ゴールに振り返ることもなくすぐに右45度へ走り出した白瀧へ。そして白瀧もすぐに右コーナーの松平へパスを。さらに松平からゴール下の黒木へ。

あっという間にゴール下まで攻め込むパス回しに、聖クスノキのゾーンは原型を失っていた。

「やばっ！」

「早イ！……ダガ！」

楠もコーナーへおびき寄せられ、黒木がフリーになってしまう。

ディフェンスの裏をかいたパス回し。だがジャンが負けじとブロックに跳ぶ。

「……甘い」

「なにっ!?!」

ジャンが反応したのは黒木のポンプフェイクであった。

黒木は跳んだジャンの足元を通すようにバウンドパス。再び小林へボールが戻った。

「行かせるか！」

「……いいや、お前達では止められないさ！」

真田がチェックに入るが、小林はクロスオーバーで難なく突破。レイアップを沈め、さらに点差を広げる。

「くそっ!!」

(大仁多) 50対40(聖クスノキ)。またしても点差は二桁に突入した。

「ジャン！ 攻めるぞ！」

「ム？ ……オオツ！」

あつという間の出来事で幾人かが集中の糸が切れかける。

このまま流れを完全に渡すわけにも行かず、楠はジャンに声をかけると一気にコートを駆け上がった。

「なっ、楠のワンマン速攻か!？」

それは前半戦も何度か見られた、楠のワンマン速攻。

「しまった」と悔いたときにはもう遅い。ジャンがボールを手にすると、矢のような送球が放たれる。

勢いがあるボール。これは誰にも止められない。楠がボールを取ろうと跳躍する。……そして同じく跳躍していた白瀧の手に阻まれた。

「え…………？」

「言ったはずですよ。あなたには何もさせないと」

呆然とする楠に、白瀧は止めを刺すように言った。

(……………そうか！ 白瀧がPGとなったのは、楠の速攻を止めるためでもあったのか！)

ここにきて石川は白瀧と小林のポジション交代について理解した。

白瀧がトップの位置に入ったことでより自陣に戻る時間も早くなり、楠の速攻を防ぐために待ち構えることができるようになった。

たしかに白瀧はここまで楠を抑えていたが、速攻時には純粋な速度では殆ど互角の為に完全に防げていたわけではない。

だからこそ大仁多は楠をも完全に封じるために、このような布陣を取ったのだろう。石川はそう確信した。

「そしてぼんやりとしている暇も、ないですよ！」

着地と同時に、大仁多のカウンターが始まる。楠も全力で後を追っ

た。

「くそっ！ 絶対に止めるじゃん、山田！」

「わかってますよー！」

決められればこの第3Qはもう取り戻せないと直感したのか、二人はこれまで以上の集中力で白瀧を待ち構える。

「……いいや、まだディフェンスがなっていない」

それでも白瀧を止められるとは限らない。

一つの切り返しだけでスピードに乗り、二人を横から抜き去る。

さらにヘルプに入った真田を、白瀧は自分の背後からドリブルを通して切り返す——ビハインドザバックで突破した。

「は、速い——！」

瞬く間に白瀧は単独で三人を抜き去り、ゴールに迫る。

「行かせる力！」

「白瀧——!!」

最後にジャン、そして楠がゴール下で立ち塞がる。

もはや後はない。何としても止めてみせる。聖クスノキの最高戦力二人が再び白瀧に挑む。

「……そんなこと、知ったことか！」

だが白瀧も負けられない。フリースローラインに至ると同時に、ジャンと楠よりも先に跳ぶ。

「ナニッ!？」

(踏み切り位置が遠い！ レイアップシュートを、そんなところから!?)

驚きつつも遅れて跳躍する。高さは白瀧よりも二人の方が断然高い。

だが白瀧が放ったシュートは二人の腕よりも高い場所を越えて、リングを潜り抜ける。

「誰にも俺は、止めさせない……！」

リングより離れた場所から放つレイアップシュート——ティアドロップ。

軌道が高いそのシュートは白瀧のスピードも合わさって、ブロック

を不可能とする得意技だ。

(……一人で、五人を突破しただと……!!)

(大仁多) 52対40(聖クスノキ)。白瀧の個人技を前に、聖クスノキのディフェンスは脆くも崩されてしまった。

「おう、よく決めた!」

「一人で全部持ってくなんて、無理しやがってこの野郎!」

「ちよっ、痛っ! 入ってます、松平さん!」

「……」

「黒木さんも無言で叩くのやめてください!」

得点を決めた白瀧を待っていたのは山本や松平達の手荒い出迎え。黒木も微笑を浮かべて白瀧を讃える。

それだけ今の攻撃には意味があった。楠の速攻を防ぎ、その上で相手の勢いを立つ五人抜き。白瀧の攻撃が聖クスノキに与えたダメージは大きいだろう。

「白瀧」

「……小林さん」

「さすがだ。ナイツシュ」

「ありがとうございます」

白瀧と小林は手をかわし、満足げに頷く。

元々このスタイルは二人のうちどちらがかけても成り立たなかったのだ。お互い意識するところがあるのだろう。

「……くそ!」

「聖クスノキ高校タイムアウトです!」

たまらず石川はタイムアウトを取った。

後半戦で二つしかない大事なもの。だがそれでも使わざるをえなかった。それほど流れが悪かった。

「ちくしょう……!」

悔しいのは監督だけではない。コート上に立つ選手達も同じ、あるいはそれ以上で。

楠はただ静かに握った拳を震わせて、己の無力さを噛み締めた。

「……ハイループプレイアップ。あれが白瀧の得意なシュートか」
「あのシュートは俺とて止めることは容易ではないのだよ。それだけやつの得点力は高い」

「ドライブも警戒する以上、ディフェンスは深く守りますからね」
火神は先ほどの白瀧のシュートを思い出し、その威力に身を震わせた。

自分よりも背が高い選手二人をかわして決めるということは並大抵のことではない。しかも五人抜きでともなると、尚更だ。

(……黄瀬や緑間みたいに関人頼りのプレイじゃねえ。こいつは全てを最大限に生かすためにプレイを選んでやがる！)

白瀧の強みはプレイの見せ方であろうと火神は感じていた。

チームプレイ重視という点は変わらない。しかし時に自分から積極的に仕掛け、時に味方のひきつけ役となり、状況を踏まえた上で自分のプレイを選択している。

戦況を読み、流れを掴み取るために最善の手を打つ。まるで本物の勝負師のようだった。

「そして、白瀧がPG、小林がFにつくという大仁多の奇策。これは小林を起点に、より高速なパス回しを体現するための陣形だろうな」

「加えてこの試合に関しては相手の速攻を防ぐという役割も果たしているみたいですね」

「ああ、そのようだな」

小林を自由に動かせる位置に置き、白瀧が攻撃を組み立て、全体の指揮をとる。

これにより大仁多は中にも全体を見回しパスをできる司令塔ができ、中へ外へとパス回しがさらに速くなった。

しかも小林が中にいることでインサイドの高さとパワーが大幅に上がる。そして白瀧がトップにいることで楠の速攻を防ぐという役割もある。

聖クスノキを攻め崩すための、大仁多の強力な一手であった。

(……俺は、いや俺達は一つ勘違いしていた)

そしてこの作戦は一つの事実を意味している。

(白瀧の武器は瞬発力だと、誰もが思っていた。だがそれは違う。瞬発力はいくつまでその一つに過ぎなかったのだ)

緑間は無表情で黒子に相槌を打ちながら、しかし内心で冷や汗をかいていた。

(いくつもの技術を組みあわせてオリジナルの武器とする。ゲームの戦況によって戦い方を変える。なれないポジションも無難にこなす。

白瀧の武器はあらゆる状況に対応し、最善の選択を行うことを可能とする適応力、すなわち——『アジャスト』だ！)

白瀧の真の武器、アジャスト適応。それに気づいてしまったが為に。

(だがこれは白瀧が自分で気づいたというのか？ 今までPGなど経験もしていなかったというのに。

……いや、これは一人で結論に至れることではない。藤代監督、あの男が白瀧を仕上げたのか……！)

そして白瀧の力に勘づいたであろう、藤代雄一という監督に対して同じく。

帝光時代ならばきつと誰もその可能性に気づくことができなかつたであろう力を彼は見抜いたのだから。

タイムアウトを宣告した聖クスノキ高校。

だがこの選択は殆ど意味を成さなかった。聖クスノキは最初から全力で勝利を得ようと挑んでいた。

そのため、これ以上戦況を変えるほどの策が、余力が残っていないだったのである。

「あつ、しまった！」

「パスミスだ！」

ゲーム再開後、最初の攻撃。沖田から真田へとパスがさばかれる中、連携のミスが生じた。

真田がボールを取りこぼし、松平に奪われてしまう。再開直後で絶対に決めたい攻撃。それゆえに焦ってしまったのか。

ゴール下に入るところか攻守が入れ替わり、ピンチを招いてしまう。

聖クスノキは速い展開のためにアウトナンバーとなつてしまい、小林のレイアツプを許してしまった。

(大仁多) 54対40(聖クスノキ)。14点差、徐々に点差が開いていく。

「くっそー!」

(ジャンと楠はマークが厳しいし、真田もゴール下は厳しい。ここは、俺が決めるじゃん!)

悪くなりつつある雰囲気をなんとかしよう、沖田が一つの決心をする。

山田にボールを強く要求、ボールをもらおうとノーマークを活かしてペネトレイト。ジャンのマークについていた小林はヘルプにつこうとするが、真田のスクリーンで阻まれている。

邪魔するものはいない。山田はそのままレイアツプシュートを放つ。ボールは無事に手からゴールへと向かい……そして山本のブロックショットに防がれた。

「ぐっ!?!」

「おいおい、その程度のスピードで俺を振り切れたと思ったのかよ?」大仁多のレギュラーを舐めるなど、山本は沖田を挑発した。

ルーズボールを白瀧が取ったことで再び大仁多へボールが移ってしまう。

聖クスノキは2-3ゾーンを継続。なんとしてもここから先への侵入は許さない。そう言わんばかりに前列二人はパスも警戒して深く守る。

「……嫌になるな、まったくきー!」

「なっ!?!」

白瀧はため息を一つ吐き、中央からスリーポイントシュートを放つ。

突然の出来事で警戒していなかったために、ボールを見送るしかない。ジャンや真田のリバウンドを期待するが……ボールは静かにリングを潜り抜けた。

「——スリー!?!」

(この試合、一本も撃っていないかったのに……!)

「警戒しないと駄目ですよ。いつ撃つかわかりませんから」

(大仁多) 57対40(聖クスノキ)。大仁多が連続得点を決めた。

「ふっ。当たり前なのだよ。やつにスリーを叩き込んだのは誰だと思っっている」

スリーが決まったことを確認して、緑間は満足そうに口角を上げた。自分が鍛え上げた技術が功を制している展開を見て、嬉しく思ったのだろう。

急激に調子を良くした緑間を見た火神はおかしいものでも見るかのような視線を緑間へ送る。

「……なんでテメーが得意げになってんだよ」

「ひよつとして白瀧君に外角のシュートを教えたの、緑間君なんですか?」

「その通りなのだよ。よくぞ見抜いたな黒子」

「いや、その反応を見れば誰にでもわかります。あとちよつとその言い方うるさいです」

「うるさい……!?!」

黒子の辛辣なツッコミに、緑間は決して少くないショックを受けた。

「ですが……聖クスノキの巻き返しが本当に難しくなりましたね」

戦況を理解した黒子が独り言のように呟く。

白瀧がPGをすること。それはパスの高速化、インサイドの強化だけではなくアウトサイドの強化にもあった。

小林は外角のシュートはもっていない。それゆえにパスかペネトレイトから攻撃を始めていた。

だが白瀧と交代したことで白瀧のスリーという選択肢も選びやすくなる。ゾーンディフェンスの不意もつける中央からのスリー。大

仁多の攻撃がさらに強烈なものとなっていた。

その後の試合は一方的なものとなった。

大仁多の攻撃は止むことを知らず、次々と点差を広げていく。

聖クスノキも必死に食らいつくが、得点源を封じられ、ゾーンディフェンスも機能しなくなり、連携のミスが増えていく。楠の体力も再び限界を迎えようとしていた。

第三Q残り1分。(大仁多) 79対44 (聖クスノキ)。もはや逆転することは厳しくなってしまった。

「リバウンド！」

山本のスリーがはずれ、ボールが流れる。

リバウンドを制したのは小林。白瀧よりも高さでパワーがある分、真田との競り合いが有利であった。

「ちつく、そおお！」

「ッ……！」

真田が懸命に跳ぶ。ブロックをわかった上で、それでも小林はシュートを撃った。

(シュートが甘い！ 外れる！)

だが態勢が悪かったのか、シュートの方向が悪い。

ボールは反対側のコートの方へと流れている。相手をする松平と黒木は位置が逆。競る相手がいないならば取れると楠は確信し、ボールが落ちるタイミングを待つ。

「……ッ！ 楠、白瀧が行ったぞ！」

そんな時に、山田の叫び声が耳に入る。咄嗟に横目で確認すると、たしかに白瀧がゴールの方へと走っていた。

「白瀧……！」

「もらいますよ、得点！」

ボールがリングを越して二人の方へと落ちてくる。

跳んだタイミングは殆ど同時、いやわずかに白瀧が早かった。

白瀧の伸ばした手がボールを掴み取り、そしてそのままリングへと叩きつける。

(大仁多) 81対44 (聖クスノキ)。白瀧のアリウープが、炸裂した。

「なっ!?!」

「アリウープだと……?」

「こんなの、できたのかよこいつ!?!」

目の前で信じられない出来事が起き、聖クスノキの選手達は目を丸くする。

「……なあ、白瀧って背丈どれくらいだっけ?」

「180前後だったと思います。日向先輩キャプテンくらいだと考えればよいかと。それなのに、こんな……緑間君は知っていましたか?」

「……俺も驚いているところなのだよ。少なくとも中学時代はこんなこと、できなかったはずだ! なのに!」

火神や黒子、緑間も同じ状態だった。

中学時代はできなかった、秀徳との練習試合でも見せなかったこのプレイ。

次々と新たな力を見につけていく白瀧に、三人は脅威さえ抱いていた。

「よし、いい調子だ白瀧!」

「ありがとうございます。でも、やるならちゃんとしたパスくださいよ」

そんな中で、白瀧は小林とハイタッチしながら全員に聞こえるように言った。

「アリウープは結構難しいんですよ? どうせやるなら次はダンクを叩き込むので、俺に直接渡してください」

「ああ、そうだな。無理させてしまったか」

『……ッ!?!』

ダンクもできるという内容だった。あまりにも平然と言いのける姿を見て、恐ろしささえ感じられる。

当の二人は士気が落ちる相手には目もくれずに、ディフェンスへと

戻っていった。

「……すごいな、白瀧」

「つてか、要のやつ。本当にダンクなんてできるようになったんですか!？」

難なく得点を決めた白瀧を本田が称賛する一方、神崎は本当にダンクが出来るのかと藤代に問いかけた。

以前彼が相手をしたときは出来ないと言っていたはず。それなのにたった一週間でできるようになるとは信じられない。

神崎の至極当然な疑問に藤代は笑顔で答えた。

「ええ、できませんよ」

その問いかけを否定すること。

「……え？ でも、今白瀧がそんなこと言っていたような……」

「あれは虚言ですよ。わざとそう言うことで敵の注意をひきつけたのでしよう」

「えー……」

「そもそも180センチもない選手がアリウープを決めるだけでも驚きなのに、ダンクを決めるなんて信じられますか？」

「いや、無理ですね」

「でも事前に決めたからこそその後の言葉が真実味を増す。……精神的に相手を追い詰める気ですね」

真の中に虚を、虚の中に真を混ぜ合わせる。結果としてありもしない虚像をも武器となす、心理的なバスケ。

白瀧は相手に止めを刺すためにさらに相手を追い詰めようと考えたのだ。

「でも、そんなことをする必要はなかったんじゃないか？ 試合はこのままいけば安全ですし……」

「何が起るのかわからないのが試合ですよ。相手が諦めるまでは攻撃の手を緩めない、当然のことだと思いますが」

「うっ……」

光月の疑問を藤代は切り捨てた。

大差であるが、それこそ準々決勝のような例外がある。可能性がな

くならない以上、全力を出すことはおかしいことではない。

(最も、白瀧さんの場合はそれだけではないようですが……)

そしてもう一つ。白瀧が取った行動には理由があるのだろうと藤代は推測した。

藤代はじっくりと楠を見る。今のシユートが効果的だったのか、集中力が消えかけている。

おそらく体力も残されていないのだろう。オフエンスに参加しようとするが、途中で足を引っ掛けて転倒してしまう。

「楠！ おい、大丈夫か!？」

「だ、大丈夫です……」

ふらつきながらも立ち上がり、不安げな表情で見つめる沖田に笑みを見せる。

だが、やせ我慢であることは丸分かりであった。

「……すみません、選手交代を」

これ以上は見ていられず、石川はベンチから立ち上がり、選手交代を申し出た。

「待つてください監督！」

「なっ、どうした西條?」

「……あれを、見てください」

「あれ? ……ッ！」

いきなりの西條の呼び声で石川は振り返った。

そのまま彼は言われるがまま視線をコートへと向ける。

その先で、楠が石川を手で制していた。交代は必要ないと。

「……すみません、やはり大丈夫です」

それを見て、石川は選手交代を取りやめた。

おそらく楠は交代することの意味を理解しているのだろう。白瀧は言葉にせず、心中で彼を褒め称えた。

(やはり、あなたはわかってるんだな……)

今楠が交代すれば、先ほど白瀧との競り合いにも負けたこともあり、楠が勝負に敗れてベンチに引っ込んだように見えてしまう。味方の士気は取り戻せなくなるだろう。

たしかに交代したほうが戦力は増すかもしれない。だがタイムミン
グが悪い。

(これで、決まりだ……)

この試合はこの時点で決まっていたのかもしれない。

少なくとも白瀧はそう感じ、マッチアップする楠に声をかけた。

「一つ、忠告をしておきます。楠先輩」

「……？」

「俺とあなたはバスケスタイルが似ている。だからこそ言わせてもら
います。」

……これ以上は体の負担が大きくなるだけでしょう。まだ本来の
力が戻っていないのならば、この試合はもう下がった方が良いと思
います」

確実な勝利を得るために白瀧は仕掛けた。だがこれ以上目の前の
強敵に無理をして欲しくないという思いもある。

だからこそ白瀧は楠に、自分と似ている敵に下がるようにと言っ
た。

(こいつ、最初から気づいていたのか……)

その言葉で自分の怪我について白瀧が知っていたということがわ
かった。

情報が限られていたというのに、そこまで調べつくしていた。どこ
まで用意周到なのだろうかと思った。

「ハハッ……」

楠の口から笑みがこぼれる。顔を挙げ、白瀧と真正面に向かい合っ
て楠は彼の提案に答えた。

「お前も中々どうして、面白い冗談を言えるんだな」

「冗談？ どういう意味ですか？ 俺が冗談でこのようなことを言う
と思いますか？」

「……聞く前から答えがわかりきっている問いかけは、冗談にしか聞
こえないだろう？」

その返答に白瀧の表情が固まる。拒絶の答え。ありえないわけ
はないと思っていたが、このようなことを言われるとは思っていな

かった。

「ならば逆に聞くが、白瀧。もしもお前が逆の立場だったならば、お前は今の問いかけに頷いたか？」

「……………いいえ」

楠が逆に質問で返す。一度目の問いに、白瀧は少し間を置いて、だが拒絶した。

「もしもお前が俺の立場だったら、俺と同じことをしていただろう？」

「はい、当然のことです」

二回目の問いに、今度は即答で返す。

「そうだろうな。だから、わかったならばそれ以上は言わないでくれ」
悲しそうな目で、継るような声で楠は続けた。

「……………わかりました。ならばせめて全力であなた達を倒させていただきます」

問いかけはもう必要なかった。

白瀧の雰囲気が変わる。いや、変わったのは雰囲気だけではない。

(ハンスアップを、やめた?)

今までの身動き一つ取らせない、全身に力がかかっていた状態から一転。

白瀧は腕を下ろし、脱力したような自然体で。しかし油断なく楠を目で捉え立ち塞がる。

(何を、している? わからないが、これなら突破もできるか…………)

行動の意図はわからないが、これで多少は動きやすくなった。

楠は左手を後ろに回し、山田にパスを送るように指示を出す。程なくして山田からパスがさばかれた。

(絶対に俺は、負けない…………!)

奪われないように腕を伸ばし、ボールを頭上で確保する。

油断は出来ない。いくつかフェイクも織り交ぜて攻めて行こうと、楠はトリプルスレットの態勢から一つポンプフェイクを入れる。

腕を大きく上げ、そして一気に仕掛けようと腕を降ろす。その瞬間、白瀧の腕がボールを弾いた。

「なっ、えっ…………!?!」

——速い。いや、速過ぎる。楠は反応することさえできずに白瀧にボールを奪われていた。

転々とするボールは白瀧が確保し、ワンマン速攻を成功させた。

そして程なくして、第三Qが終了する。(大仁多) 83対44(聖クスノキ)。その差、39点。

「……あれは」

火神は戦慄した。

白瀧の最後のディフェンス。あれはかつて火神が白瀧と1on1した時に感じたものだった。

ひりつくような殺意にも似た集中力を醸し出し、瞬く間にボールを奪い去る攻撃的なディフェンス。

「全身の力を抜くことであらかじめ重心を下げ、そして瞬発力を発揮する」

「……防げない。一瞬の隙を、あんな速さでこられたら……」

足へ重心が掛かっている分、余計に動き始めまでの時間が短い。

一瞬の間も見せることを許さないディフェンス。反応することさえ難しいだろう。

(だから、俺はあの時あいつから感じたんだな)

初めて会った時には何も感じなかったというのに、あの一瞬突如感じた強者の匂い。

(異常なまでの集中力と、試合の流れを読む嗅覚。勝負強さ。——
殺戮本能か)

強者でもないものはない、弱者でもあるものはあるという勝負師がもつ本能、キラー・インステinkt。相手に止めを差す能力。

第三Qの最後の攻撃。正真正銘聖クスノキ高校の最後の得点チャンスだった。

せめて一本、エースで決めて終わりたいという気持ちがあっただろう。そこで、白瀧が止めを差した。

「面白え。この試合来て良かったぜ。こんなにも、見てて面白いと思うのは初めてだ……!」

早くこいつと戦いたい。もう一度勝負したい。

火神の闘志が湧き上がり、体の疼きが止まらなかった。

第四Qが始まった。

大仁多はここで負担が大きい黒木を下げ、三浦を投入する。聖クスノキ高校の交代はない。

点差が大きい中、聖クスノキの選手達は誰も諦めたわけではない。全員が必死にゴールを狙った。

だが流れが変わることはなく。点差は時間の経過と共に大きくなっていった。

「……くっそうっ……」

消え入るような細々とした声で、楠は悔しさを形とした。

(……凄い。あなたは、本当に凄い)

なおも諦めずにコートに絶ち続ける姿に、白瀧は敬意を示す。

「……楠先輩。俺はあなたと戦えたことを、誇りに思う」

「ハッ。それは、光栄だな。おまえほどの選手にそう言ってもらえるとは」

「はい。ですが……」

瞬間、楠の視界から白瀧の姿が消えた。

「……これが、結果だ」

白瀧は楠の横を抜き去り、ジャンのブロックをダブルクラッチでかわす。

ボールがネットを潜り、地面に落ちる。その音を聞いて、楠は清々しそうな笑みを浮かべて、

「……ああ、お前達の勝ちだ」

『試合終了——!!』

——己の敗戦を、受け入れた。

試合終了のブザーが鳴り響く中、糸が切れた人形のように体から力がぬけていく。

床に倒れてしまうその寸前で、ジャンと真田が楠の体を支えた。

「あと少し。整列が終わったら休んでいいから、もう少し頑張れ！」

「……すみません」

「お前が謝るナ。まだ機会はアル」

「……そう、ですネ……」

二人の励ましの言葉に、頷いて答える楠。

だが、ふと視線をベンチに、不安げに立ち尽くしている西條へと向けると、

「……すみません」

謝罪せずにはいられなかった。

「118対51で、大仁多高校の勝ち！ 礼!!」

『ありがとうございます！』

大仁多高校、ダブルスコアの大勝で準決勝を突破。決勝へとコマを進める。

第三十八話 誰が為に勝利を謳う

栃木県大会準決勝第2試合、高校大仁多対聖クスノキ戦の決着がついた。

試合の最後に互いの健闘を讃えるために整列して頭を下げる。

「楠先輩」

「……ああ。IHでも頑張ってくれよ」

「はい。今日は本当にありがとうございました」

白瀧の差し出す手に楠も応じた。

二人がかわす言葉はそれだけ。しかしそれだけで十分だった。すでに試合の中で何度もわかりあったのだから。

最後に一礼して白瀧は仲間の下へと戻っていった。

真田の肩を借りて楠もゆっくりと下がっていく。

「IH出場は、届かなかったか……」

ポツリと呟いた声には悔しさが募っていた。優勝候補の一角・常盤高校を破った時からIH出場はもはや夢ではなくなった。

だからこそ希望も大きかった。そして同時に負けた時の反動も大きかった。前半戦もその精神的な油断を突かれてしまったと言っても良いだろう。

ようやく試合に復帰できたというのに約束を果たすことができなかった。楠は目を瞑り、己の無力さを噛み締めた。

「ロビン！」

「……奈々」

ベンチより駆け寄る小さな人影。自分の名を呼ばれて初めて楠は顔を上げた。

瞳に映ったのは不安げで、悲しそうに表情を歪めている西條の姿だった。

「……お疲れ様」

「ああ。終わったよ」

しばしの無言の後、西條は奮闘を讃え楠はただ敗戦の事実を口にした。

聖クスノキのIHへの挑戦は王者・大仁多の牙城を崩すことはかなわず、準決勝で彼らの快進撃が終了した。

「……ふん。ようやく終わったか。俺は帰るぞ、黒子」
「早ッ!？」

「え、白瀧君に声をかけなくてもいいんですか？」
試合終了を見届けるや否や席から離れる緑間。

激しい熱戦が繰り広げた後だというのに、白瀧に何も話す事はないのだろうかと黒子が呼びかける。

しかし彼の問いに緑間は首を横に振って答えた。

「今は俺がやつと話すときではない。まだ準決勝が終わっただけ。明日の決勝が残っているからな」

白瀧の、栃木の大会はこれが最後ではないのだ。

明日の決勝戦が残っている。緑間は視線を横へと、次の対戦相手を決する試合の方へと向けた。

準決勝第一試合。そちらでも今ようやく決着を迎えていた。

「——103対65で、盟和高校の勝ち！ 礼！」

『ありがとうございます！』

勝者と敗者、明暗がはつきりと分かれる瞬間だった。

大仁多の明日の決勝における対戦相手は、多くの者達が予想した通り盟和高校となった。

順当に勝ち進んだ両校が衝突する。準決勝の聖クスノキ戦と違い、この戦いは予想外の試合ではない。

二年前から続いている同じ組み合わせ。三回目の戦い、一度目から知っている小林や勇作にとっては最後の戦い。ついに因縁に終止符を打つこととなる。

だから決着がつくまでは緑間も邪魔をしない。

「……全ては、明日の決勝戦が終わってからだ」

ただ、明日の試合が終わったならば。その時は白瀧ときちんと話を

しよう。緑間は心に秘めて会場を去っていった。

「すごかったぞー！」

「あの大仁多をよく追いつめた！」

「次こそ勝とうぜ——!!」

聖クスノキの応援席から選手達を励ます声が飛び交う。

前半戦は少なくとも聖クスノキが優勢だったのだ。あそこまで大仁多を苦戦させた相手はそうそういない。

応援席に一礼して選手達は会場を後にする。

「……冬だ。冬に絶対に、もう一度来ようぜ」

「当然じゃん。まーだ悔しいもん」

「このままでは終われん！」

負けたことによる悲しさよりも悔しさの方が大きかった。

聖クスノキの三年生達。夏はこれが最後となった。だけどまだ冬がある。冬こそは必ずこの借りを返そうと、三人は強く誓った。

「俺達も、頑張らないとな」

「……わかってる。次こそこんな惨めな姿は見せないよ」

最上級生達の背中を見た山田と楠、後輩二人も強い熱意にあてられた。

——もう一度、大仁多と戦う。そして今度こそ勝つのだと。

そうして両校の選手達がコートから去っていった。だがそんな中、両校の行方を見届けていた選手が、反対側のコートにいた。

「……おい勇作。向こうの試合も終わってみたいだぞ」

決勝進出を果たした盟和高校の副主将、キャプテン正PGの細谷だった。

先の勝利の余韻に浸ることなく次の対戦相手に気を張っていたようだ。

彼が声をかけたのはチームの得点屋であり、同時に主将キャプテンを務める勇作である。

「やっぱり大仁多が勝ったか。ま、そうでなければ困るけど。……っ

て、どうした?」

「間に合わなかったか」

「は? 間に合わなかったって? ああ、なんだ。早く終わらせて大仁多の試合を見たかったのか?」

肩を震わせて悔しそうに歯軋りしている。

そんなに大仁多の試合を自分の目で見たかったのかと。武者震いをする好戦的な姿を見て、細谷は笑って勇作の肩を叩いた。

「茜に声をかけられなかったーッ!!」

「そつちかよ!? そこはせめて小林とかに宣戦布告できなかつたとかだろ!」

「すぐ近くにいたのに! 何で声をかけてくれなかつたんだ、お兄ちゃんは寂しいぞ!」

「敵だからだろうが! いいから、コートで恥ずかしいことしてるな。帰るぞ!」

「アーカーネー!」

——前言撤回。シスコンこの男にはそんな気持ちなど皆無だった。もはや橙乃妹のことしか頭に入っていない。

いつまでもこの場にはいない妹に呼びかける勇作を、細谷は首根っこを掴み控え室まで引きずっていった。

決勝戦のカードが決定した。——大仁多高校対盟和高校。

栃木代表を——IH出場をかけて、最後まで勝ち残った二校が激突する。

一方で試合が終了し控え室に戻った大仁多の選手達。

勝利に酔いしれることなく、素早く帰宅の準備を始めている。

だがただ一人、白瀧だけは別だった。控え室に入るや否や、橙乃の元へと駆け寄った。

「橙乃。試合後で忙しいだろうけど、今大丈夫か?」

「え、どうしたの?」

「できればアイシングを頼みたい」

「……え？」

用件だけを手短かに伝えて白瀧は近くの椅子に腰掛ける。

「グッ……！」

その瞬間、白瀧の表情が歪んだ。膝を押さえて必死に痛みを耐えている。

「足？ まさか、この前の秀徳戦との練習試合と同じ？」

「ああ。今日の試合。前半戦からとばしすぎたツケが回ってきたみたいだ」

「だから、アイシングって言ったんだ。ちよつと待ってて！」

意図を理解し、橙乃はすぐに準備にとりかかる。

白瀧が頼んだのは試合後のアフターケア、疲労回復を目的としたアイシングだった。

「白瀧さん！ やっぱり、限界だったんですか……」

「……お前は気づいていたか」

「当たり前ですよ。むしろ気がつかないわけがない！」

「それは悪いことをしてしまったな。ごめんよ」

不安げな表情で見つめる西村に白瀧は笑みを返す。

今日の試合、自分と互角以上のスピードを、自分以上の身体能力を誇る楠を相手にしていた白瀧。

相手を止めるために白瀧は何度も無茶をしていた。前半戦から負担の大きい無理な加速を、徹底したマークを続けた。さらに新たに身につけた細かいキレのジノビリストップ。体を酷使し続けた為に疲労の蓄積は大きかった。

後半戦、少なくとも第四Qは交代するという手もあった。そうすれば少しはマシになったかもしれない。

(コートで弱音を吐くわけにもいかなかったからな……)

だが相手が、限界を通り越した楠が奮起していたというのに、白瀧が先に音を上げるわけにもいかなかった。

「大丈夫なのか？」

「……張りが強いわね。それこそ秀徳戦のように」

「無茶をさせてしまったか」

症状を見ている東雲の横から小林が現れる。

相手の実力から考えて白瀧をマッチアップさせた。現に彼でなければ楠の得点はもつと大きくなっていただろう。

しかしそれゆえに白瀧もまた疲弊してしまった。緑間と戦った時と同じくらい消耗したとなると、明日の盟和高校戦は……

「……決勝は、白瀧さんは先発出場をさけてもらいます」

「藤代監督！」

試合に出続けることは難しいだろう。

並みの対戦相手ならばよいが、盟和高校ほどの相手ではそのようなことを言っていられない。聖クスノキ戦以上に疲弊してしまうかもしれない。

全力を出し続けることは難しいだろう。それを理解し、藤代は白瀧の控え起用を明言した。

「大丈夫ですよ！ 俺はやれます！」

「あなたの気は買いますが、しかしそれで途中で倒れてもらっては困ります。」

少なくとも第一Qは様子見。そうすれば第二Qに出てもその後にはハーフタイムが入る」

「そして後半、ですか。たしかにそれならば白瀧が完全に抜けるのは第一Qのみ」

「わかってください。何もあなたを出さないとやっている訳ではない」

「……わかりました」

ここまで全ての試合でフル出場を果たし、勝利に貢献していた。最後まで出場し続けたいという気持ちはある。

しかしここで無理をさせて決勝戦で壊れてしまうわけにもいかない。

それは白瀧も理解している。彼が目指すものはその先にあるのだから。だからこれ以上無理を言うわけにもいかず、大人しく引き下がった。

——アイシングが異常なまでに冷たく感じた。

「……ひとまず皆さんは帰りの用意をお願いします。学校に戻り、本日の盟和高校の試合を見ましょう。西村さんと本田さん、お二人は片付けが終わったら白瀧さんの荷物を用意してください」

「わかりました！」

「……うっす」

いつまでもここに居るわけにはいかない。藤代は片付けの指示を出し、選手達も早急に準備へと戻った。

その後学校に戻り、大仁多高校の教室の一角を借りて選手達は集まった。

偵察部隊が撮影した盟和高校対山吹高校の試合。こちらも熱戦が繰り広げられた。映像を見る選手達の顔も真剣なものとなっている。

「やっぱり全体的にレベルが高いな」

強豪と呼ばれるだけあり選手一人一人の質が高い。

小林の眩きを切欠に各々がビデオを見て抱いた印象を口にした。

「そうですね。聖クスノキはジャンにトリプルチームなんて荒業つかいましたけど盟和には使えないでしょうし」

「となるとエースである勇作をどう抑えるか、だな」

「あいつが活躍するとインサイドが盛り上がるからな。なんとかしない」と

山吹のラン&ガンも得意のゴール下で守りきり、逆に勇作がオフエンスでも活躍し、攻守で盟和が最後まで優勢だった。

特にゴール下は山吹では歯が立たないようで徐々にインサイドからの得点が多くなっていく。その中心となっていてるのが勇作である。身体能力に恵まれた彼を中心に、細谷がゲームメイクをする。まとまったチームであり崩すのは中々難しいだろうという印象だ。

「……明日も安心できるような試合ではないでしょうね」

藤代も内心穏やかではない。相手は二年連続で屈辱を味わった相

手。おそらく死に物狂いで挑んでくるだろう。決して負けるとは思ってはいないが不安がないわけではなかった。

「準決勝もそうでしたが、決勝でもあらゆる手を使っていけます。

控えの方々も出番が回ってくるでしょう。いつでも出られるように準備を怠らずに。」

「……それでは本日は解散とします。明日の為にしっかりと鋭気を養ってください」

だが選手達にその心境を明かさないように勤め、その場で解散を命じる。

藤代は一足先に退出し監督室へと向かっていった。

椅子に腰掛けるとすぐに思考を明日の試合のことに変える。彼の頭をよぎった悩みは、明日の先発選手についてだ。

「……白瀧さんの消耗、そして光月さんの戦意消失。準決勝で得たものはありましたが、代償も大きかったですね」

聖クスノキ戦で一年生ながらもレギュラー入りしていた白瀧と光月。彼らが決勝の前にダメージを負ってしまったことは大仁多にとっては大きな痛手だ。

もつとも白瀧は途中出場が可能なためまだよいだろうが、光月はそうはいかない。勇作とのマッチアップも考えていたという事情もあるのではなおさら悔やまれる。

「今日の会場の雰囲気飲み込まれたというのもそうですが。——ハック・ア・シャック。光月さんの弱点が完全に露呈してしまったことが痛い」

——「ハック・ア・シャック」。NBAのシャキール・オニール選手——通称はシャック——に対して行われたディフェンス戦略である。

フリースロー成功率が低い選手にわざとディフェンスがファウルしてシュートを止めてフリースローを外させるといったもの。

光月にもこのディフェンスが有効だということが明らかになった以上、決勝戦でも同じ対策がされる可能性が高い。

「そしてもしも同じような止め方をされたとき、彼は持ち直せるのか

……？」

準決勝では緊張だけではなく相手の対策の為になおのこと動きが硬くなった。

精神的に強いとは言えない光月。持ち直すどころか逆に止めをさせられてしまう恐れがある。

「……駄目だ。白瀧さんが抜けたというのに、ここで光月さんまで抜けて士気を落とすことはない」

それは監督として許容できることではない。これ以上の士気の低下は避けたいところだ。何よりも光月ほどの逸材を使い潰すわけにはいかない。

出場させるならば光月を立ち直らせる状況で、さらに彼に機会を与えられるであろう人物と共に出す必要がある。

(少なくとも白瀧さんが出るまでは彼もベンチで様子を見るとしよう)

かつて光月を立ち直らせる要因となった白瀧と共に。光月と接する機会が多く、何度も共に戦い抜いた彼が一番可能性が高かった。

光月のことはそれでいいだろうと、藤代は改めて明日の先発選手の選考に移る。

「黒木さん、小林さん、松平さん、山本さん。この四人は決定だ。となるとあと一人……」

大仁多と盟和の戦力、それらを統合して結論を出さなければならぬ。

戦力が限られた条件下。藤代の思考は迷いに迷った。五人の先発選手のうち、四人は迷うことなく選べるのだが、肝心の五人目を選出しきれないのである。

「小林さんがPGをする場合、通常ならばSFには佐々木さんが入る。しかしそうなるとスペックで押される可能性がある。」

今日の試合で小林さんがFに入ったことだし、明日は初めから小林さんをFとして投入するか？ しかしそうなるとPGはどうする？」

佐々木は技巧派のスモールフォワード。そうなるとインサイド重視で次々と押し寄せる盟和と相性が悪い。

それを考慮すると小林をフォワードとして起用し、戦術を組み立てるという考えが良いとも思える。しかしその場合はPGが空いてしまう。

PGの控えは中澤と西村。二人のうちどちらかを選択しなければならぬが、二人とも県大会ではスターターでの起用は一度もなかった。

「二人とも試合の立ち上がり不安が残るが。……さて、決勝戦はどうしましょうかね」

どの選択肢を選んでも不安要素が残ってしまう。

勝利の為に最善の選択をしなければならぬ。藤代はその後何度も思考を繰り返した。

一方、盟和高校も同じように今日の大仁多対聖クスノキ高校の試合を観察していた。

「……といった具合だ。どうだ、勇作？」

盟和高校男子バスケット部を率いている岡田尚志監督は一通りの観察を終えた後、キャプテンの勇作へと声をかける。

問われた勇作はにんやりと口角を上げて答えた。

「いいんじゃないですか？ 白瀧がPGをするなど驚くこともあったが、しかしこうして戦う前に見ることが出来たのだから」

「……あとはロングシューター存在を知れたのも大きい。不意を突かれた時の驚愕がなくなったからな」

大仁多の戦術の幅に驚くよりもその事実を知れたことを喜んだ。細谷もそれは同感で、神崎というシューター存在に関心を寄せた。

準決勝の聖クスノキ戦で大仁多は選手達の多彩な戦術をもって聖クスノキを圧倒した。だがそれにより盟和高校には対戦する前にその情報が行ってしまった。

事前の情報さえあれば試合本番で驚く事無く注意して臨むことができる。対策を練ることも決して不可能ではない。だからこそ勇作

は喜んだのだ。

「それに何も手が出ないわけではないでしょう。誰が司令塔に入ろうとも小林対策の為に練習していたディフェンスをそのまま使うことができる。」

……いや、むしろ小林が大仁多のPG陣の中では一番背が高かった。それ以外の選手は高さがない分、彼らが出てくれば余計にやりやすい」

自分達の戦い方が通用するのだと、それを理解できたから。

大仁多への雪辱に燃えていた彼らが何も対策をしなかったわけではない。

ずっと明日の為に準備を続けてきたのだ。王者・大仁多を倒し、念願であった初めてのIH出場を果たすために。

「そしてインサイドならばうちも負けてはいない。必ず競り勝ってみせる……!」

負けるわけにはいかない。もう敗北の屈辱を味わうことは考えられなかった。

勇作だけではない。細谷をはじめ、選手達の戦意が、闘志が湧き上がった。

(……これは大仁多には感謝すべきだな。やつらのおかげで、こちらの士気はさらに膨れ上がった)

大仁多の奮戦は、敵の士気までも高めてしまった。予想外に選手達がやる気を見せてくれて、岡田は心の中で大仁多に感謝の言葉を告げた。

勇作が立ち上がり、さらに高まった闘志をまとめるために声を張り上げた。

「大仁多を倒し! IH出場を果たし! 妹を取り返し! 二年間の屈辱を倍にして返す! 絶対に勝つぞ、お前ら!」

『おう!』

「……あれ? 今さりげなくチームとは関係ない個人的な感情が、それも私怨が含まれてなかったか?」

細谷の冷静なツツコミはチームメイトの活気によって掻き消され

た。

もはや余計な雑念はなかった。ただ決勝戦で宿敵・大仁多を倒すことだけを考えて、盟和高校の選手達は明日の試合へと臨んだ。

そして翌日、ついに決戦の日を迎える。

大会最終日。今日で栃木県の予選は全て終わり、IHに出場する一校が決定する。

観客数は昨日よりもさらに増えた。今年の代表を決める試合を見るために敗れた高校からも観戦に来る人の姿が見られる。

決勝戦が始まるのは午後。だが午前からすでに人は集まり、歓声が飛び交っていた。

『それではこれより三位決定戦、聖クスノキ高校対山吹高校の試合を始めます！』

惜しくも準決勝で敗れた二校による三位決定戦。

すでに全国への夢は絶たれた者達。しかし己のプライドをかけ、彼らは最後に華を咲かせる為にコートに立った。

「楠、いざって時は頼むぜ」

「それまでは俺達で稼いでおくじゃん」

真田と沖田がベンチに腰掛ける楠へと声をかける。

彼も白瀧同様消耗が大きく、とてもではないが先発出場することはできなかった。

「はい。頑張ってください！出るまでは精一杯声を出します！」

それでもまったり動けないわけではない。いざという時の為に準備を整え、そしてチームに声援を送った。

多くの観客が見守る中、最終日最初の試合、三位決定戦が始まる。

「——試合開始——」

「ウォオオラー！」

ボールをタップしたのはジャン。黒木にも競り勝った彼が負けるはずもなかった。山吹のセンターでは勝負にもならず、ボールは狙い

通り山田の手に渡る。

「ナイスです！ 行きますよ！」

すぐさま聖クスノキの選手達が攻めあがる。

山吹の2―3ゾーンディフェンスの間を掻い潜るように動き回る。

山田も積極的に仕掛け、そしてジャンへとボールを送った。

「ッシー！ 食らえ！」

相手のセンターなど眼中にないのだと言うように、マークをお構い無しに跳んだ。

当然相手も遅れながらもブロックに跳ぶ。しかし彼の腕はジャンの長身にはまったく届かない。ジャンのダンクシュートを、簡単に許してしまった。

「ヌウオオオオオオ!!」

試合開始早々、ジャンの咆哮が響く。昨日の敗戦の悔しさを振り払うかのように力強い叫びだった。

「よっしゃあ！ ナイツシユ、ジャン！」

「今日もゴール下頼みますよ！」

先制点は聖クスノキ高校。敗戦による戦意の低下はない。

ジャンのダンクシュートを切欠に、両校激しい撃ち合いが続いた。聖クスノキがインサイドから積極的に攻め、山吹は得意の速い展開を仕掛け、ラン&ガンで攻める。

第一Qが終了し、第二Qも残すところあと二分弱。(聖クスノキ)35対33(山吹)で聖クスノキが二点リード。

まだどちらにも勝機があり前半戦は一步も譲れない展開が続いた。

「聖クスノキ高校、メンバーチェンジ選手交代です！」
そこで動いたのは聖クスノキ高校。流れを掴むために楠を投入した。

「楠、大丈夫そうなのか？」

「ええ、任せてください。残り二分だ。ここで引き離して、前半を終え

ましよう！」

チームメイトに声をかけられた楠は笑みを見せて答えた。

二分間。それならば問題はないと石川が判断し、試合に出してくれた。その期待には答えなければならぬ。

(それに、最後までいい勝負姿をみせないとな)

そして背中を見守る人に、勝つところを見せなければならぬ。

聖クスノキの攻撃。山田がパスを楠へとさばく。

交代直後の一プレイ。ここまでできて今さら緊張などなかった。楠はいきなり仕掛けていった。

「遅いー！」

「……ッ!？」

山吹高校のPG・横山は身動きがとれなかった。反応が間に合わなかった。

速い切り込みにすかさず後列の選手が飛び出す。ヘルプが早い。だが楠のスピードはそれをも上回った。

ドライブから即ストップ。そしてジャンピングシュート。タイミングの早いシュートは相手のブロックを触れることさえ許さない。

(聖クスノキ) 37対33 (山吹)。その差は4点。

「よっしやあー！」

「ナイッシュ楠！」

瞬く間に得点をたたき出す姿はまさにエースと呼ばれた。

白瀧に敗れたとはいえ、やはり彼も全国区。そう簡単に止められない。い。

「くっ！ リスタートだ！ 早くしろ！」

菅野がセンターに促し、ボールを受け取る。そして同時に山吹の選手達が駆け出した。

(取られたならば取り返す！)

得点されようともすぐに攻勢に転じる。攻撃的なバスケット。

菅野と横山だけではない。全員が走り、パスを出し、敵陣に襲い掛かる。

次から次へと高速でパス回しが行われる。敵にリズムを作らせな

い。

連携には自信があり、このスタイルで勝ち上がった。だからこそ最後までこのバスケを貫いた。

「甘い！」

「げっ!？」

「スタイル！」

「(白瀧がPGの時の大仁多と比べれば……) 獲ることは容易い！」
しかしそれも楠のスタイルによって阻まれた。

準決勝で大仁多を相手に奮戦した楠。特に白瀧とマッチアップしていた楠は目が慣れていた。

ボールを奪うとすぐに前線に走る山田にパス。追い討ちとなるカウンターを決めた。

(聖クスノキ) 39対33 (山吹)。聖クスノキがついに本領を発揮し始めた。

前半戦は楠を投入したことで聖クスノキが流れを掴んだ。

ハーフタイムを挟み、第三Qが始まる。楠は後半も交代せず、コートに入った。

最初の聖クスノキのプレイ。山吹は楠にダブルチームを仕掛けるが、沖田のスクリーンによって菅野が引き剥がされると、横山だけでは対処できなかった。

スリーポイントラインの外側。今度は楠がスリーポイントシュートを決める。打点の高いシュート、とてもではないがとめられなかった。

聖クスノキへと流れが移り、そして楠への声援が高まっていく。

そんな光景を一際高い場所から見下ろす集団がいた。

「……楠のやつ、ピンポイントで活躍していますね」

「そりやそうだろ。白瀧とあれだけ競ったんだ。むしろ決めてもらわないとこっちの株が下がっちゃうさ」

大仁多高校の選手たちだ。中澤の呟きに山本が笑って答えた。

決勝戦は午後から始まる。そのため、試合を前に自分達を苦戦させたチームの試合を観戦しようとする観客席にレギュラーが集っていた。

「楠の参加は得点力の向上だけではない。高さや速さを生かした積極的なディフェンス。並大抵の攻撃では楠を超えられない」

「しかも山吹は核となる選手がいらないから、あいつが出てきたら本当に組み立てが難しくなりますね」

中澤の後ろから小林が「大したものだ」と呟く。誰もがその意見には首を縦に振った。

流れを変えるにはエースの務めでもある。しかし山吹にはその選手がいない。

一気に爆発力を見せ始めた聖クスノキ。この流れはしばらく続くだろう。

さらに楠は横山のジャンプシュートをブロックすると、速攻を仕掛けた。並外れたドリブルスピードに山吹高校の選手達はついていけない。あつという間にカウンターのレイアップシュートを決めた。

徐々に点差が離れていく。パス回しも楠に掴まってしまい、リズムが悪くなってしまった。

山吹の攻撃だが、再び楠のステイルに阻まれる。今度はラインを割り、山吹ボールへと移るが、ここで聖クスノキは楠をベンチに下げた。

「あれ？ どうやら交代みたいですよ」

「楠先輩は体力が戻ってないからな。しかも昨日の試合で疲労が大きい。無理をさせないためだろう。でもまた勝負どころで出てくるだろうさ」

また昨日のように楠に無茶をさせるわけにはいかないのだ。疑問を口にする西村だが、白瀧の推測を聞いて「なるほど」と頷いた。

すでに楠は十分すぎるほど役目を果たした。均衡に保たれていたこの試合を動かすという、エースである彼にしかできない役目を。

(聖クスノキ) 50対35 (山吹)。試合が始まってから最大の15点差が開いていた。

「本当に立派だよ。本当にあの人はエースを名乗るに相応しい」

味方^{チーム}のピンチに颯爽と現れて勝機を掴み取る。最後まで諦めずに勝負を挑み続ける。

長年強敵を見てきた白瀧の目からしても、楠の姿はまさにエースだった。

後半戦、第三Q中盤から山吹も勢いを盛り返した。

流れを取り戻すことは容易ではない。それでも山吹高校は自分達のバスケを取り戻し、積極的にシュートを放った。

お互い攻撃力が高いチーム。後半戦も点の取り合いが続いた。

第四Qになってもその勢いは衰えない。そしてラスト二分を切り、再び楠がコートに戻った。

「ラスト二分。聖クスノキのベストメンバーが揃ったか！」

「……あー、これは決まったわ」

頬をかいて、神崎は苦笑を交えて言った。「どうして」と問わずとも光月にもわかった。

「エースが戻ってきたんだ。これで決まりだろ」

楠も十分休めた。ラスト二分は彼の全力を以て山吹高校に挑んだ。

山吹の選手達も必死にボールを狙う。だが楠とジャンの圧倒的な破壊力によって捻じ伏せられてしまった。

ラスト2秒。楠がスリーポイントシュートを放つ。ボールがリングを潜るのとブザーが鳴り響くのは殆ど同時であった。

『試合終了——!!』

「聖クスノキ高校、三位決定！」

「っしやあー！」

「ウオオオ!!」

（聖クスノキ）107対72（山吹）。大仁多高校が最後の試合を勝利で飾った。

「107対72で、聖クスノキ高校の勝ち！ 礼！」

『ありがとうございます！』

試合後の礼を済ませると、聖クスノキの選手達は疲れを忘れて勝利を喜んだ。

ふと楠が何かに気づいて視線を観客席の一角へと向ける。――その先に大仁多の選手達がいた。

楠の表情から一瞬だけ笑みが消える。そして少し間を置いて彼は無言で拳を突き出した。

明らかに大仁多の選手達に対して向けられたサイン。彼の行動の意味を察し、松平は笑い出した。

「ははっ。あれは、俺達に勝って来いって合図かな？」

「三位決定戦は聖クスノキが勝利した。後は決勝戦で俺達が勝てば、聖クスノキは栃木の中で2番目に強かったと言ってもおかしくはなくなる」

「昨日負けたばかりだというのに応援するとは。『昨日の敵は今日の友』というわけですかね。だけどまあ……」

――言われるまでもない。

全員の心が一致した瞬間だった。元よりここには勝つためにきている。ただそこに聖クスノキの選手達の思いが加わっただけ。

どう転んでも彼らは勝つしかない。王者の椅子を守りきり、IHに出場する。そのためにこれまで辛い練習にも耐えて努力を続けてきたのだから。

「さあ、戻ろぞお前達。すでに三位決定戦でこれだけ会場が盛り上がっているんだ。不甲斐ない姿は見せられないぞ！」

『おうー！』

小林を筆頭に、大仁多の選手達は観客席を後にする。

運命の決勝戦。始まるまであと数時間。数時間後には今年の栃木県代表が決まっている。

果たして最後に笑っているのは王者・大仁多高校か、あるいは挑戦者・盟和高校か――。

第三十九話 似た者同士

「……いよいよ、だな」

決勝戦開始まで残された時間はわずか。

盟和高校の控え室も選手達が集中力を研ぎ澄ましているためか、沈黙が広がっている。

そのため細谷の呟きは部屋中の選手に聞こえた。ここまで長かったと思えるし、ついに目標までたどり着けたとも思える。

「ああ。もうすぐだ」

もうすぐ試合が始まる。因縁を果たす機会がようやく訪れる。

盟和を率いる主将である勇作もその事実^に胸を躍らせて――

「もうすぐ、茜に会える！」

「ごめん。お前に言った俺が悪かった」

「この試合さえ終われば茜も大仁多の呪縛から解放される！」

大仁多^敵に囚われた妹を助けるため決戦に向かう兄！ これは勝つたな！」

「……あー、そうだな。うん」

――踊らせてはいなかった。が、別のベクトルで燃えている。

しかし実際のところ妹は自分の意志で大仁多に進学した模様。

うるさいと感じるほど士気を高めている勇作を細谷はため息を一つ吐き、適当にあしらった。

「センパイイ、マジキモいです。頼みますから静かに寝てもらえませんか？ 未来永劫」

「さりげなくお前も酷いこと言うな、古谷」

「事実を言っただけでーす」

「妹の価値がわからんとは。これだからゆとり世代は！」

「そう言っているお前もゆとり世代だろうが」

勇作を冷たい視線で射抜くのは、二年のSF、古谷。敬語こそ使うものの、勇作への敬意が一切感じられない。

共感を得られなかった為に古谷に突っ掛かる勇作。さすがの細谷もツツコミが間に合わない^と焦りを感じ出した。

「はあ……」

「だ、大丈夫ですか細谷先輩？」

「ああ大丈夫だ。金澤、ありがとう」

試合前に疲労感を漂わせる細谷を見て、一年S Gの金澤が声をかける。

後輩に心配されるとは情けないと思いつつ『大丈夫だ』と気丈に返した。

「勇作のバカっぷりは前からわかっていたことだ。それでも試合中は頼れる存在だからな」

今でこそこのようなふざけた態度（あるいは本質）ではあるが、それでも試合中は最も頼れるという点はわかりきっていること。

だからこそ細谷も呆れ、文句は言いつつも勇作を見放すような真似はしない。

最も付き合いが短い金澤にとってはやはり許容しがたい面があったようで、なおも勇作に厳しい言葉をぶつける。

「でもさすがにここまで妹想いだと異常ですよね」

「それを言ったらお終いだよ。まあ性格は人それぞれだから何とも言えない……」

「やっぱり常識的に考えて姉妹なら姉でしょうに。清楚で凜としていて頼りになる存在に惹かれるものだろうに」

「……本当に何とも言えなくなってしまった」

どうやら許容しがたい面は内容の詳細にもあったようだ。

勇作のシスコン（妹）に続き、金澤のシスコン（姉）という見つけたくもなかった意外すぎる発見に、ついに細谷の脳が理解することを放棄した。

「お子様が何を言うか！ R18が読めるようになってから出直してこい。抱きしめたくなるような可愛らしく、そして守りたくなるような保護欲を駆りたたせるような一面を持つ妹こそ最強だろうが……！」

「変態がほごかないで下さい。姉だって可愛いです！ しかも天然な一面もあつてギャップが感じられる上に気立てがよくて美人なんで

す！ はい論破した！」

「それは違うぞ！ それを言うなら将来的に、かつ長期的に考えても妹の方が良いだろう！ はい論破した！」

「……」

「……」

『ああん!!?? やんのかこらあつ??』

「いいぞーやれやれー」

「駄目だこのチーム。早くどうにかしないと」

もはや手遅れな気がするが。それでも細谷はまだ間に合うだろうと信じている。

つまりらぬ論争から争いになる勇作と金澤。それを煽る古谷。

いつかは悪化した状況も直るだろう。でも今は無理だと戦略的撤退を決めた細谷はレギュラーの中で唯一集中力を高め続ける仲間の下へと向かう。

「神戸。もうお前しかいない。頼む、あいつらをどうにかしてくれ」「うくん？」

三人を指差して細谷は嘆願する。相手は同じ三年生C、神戸だった。

「別に良いんじゃないかな？ 三人とも試合前にコミュニケーションを取れているようだし」

「お前にはあれがコミュニケーションに見えるのか？」

「うん。勇作も上下関係を強制するような人間じゃないし、大事な決勝戦を前に皆が緊張しないようにとわざとやっているんだろう」

「……ごめん。俺が悪かった。俺の心が汚いんだな」

「そんなことないさ。皆がまとまっているのは、副主将の細谷が支えてくれているおかげだろう？」

「……本当に、ありがとう」

人が良すぎる性格の彼は勇作の性格さえも前向きに捉えていた。

盟和の数少ない良心である神戸に、細谷の心は満たされた感覚を覚えた。

「よーし、お前ら準備はできているか!? ……って、何をやってんだよ

オイ。しつかりしろ。もう時間だぞ！」

控え室に監督の岡田が入ってくる。

しかし言い争う勇作と金澤。それを観察する古谷。その近くで神戸に励まされている細谷という光景に、岡田は現状を理解できなかった。

それでもすぐに頭を切り替え、一喝。選手達の気をもう一度引き締めさせた。

「……オツス」

「わかってます」

「リヨ」

「はい！」

「準備万全」

「それでいい。いよいよ決勝戦だ。プランに変更はない。……今さら『できません』なんて弱音は許さんぞ？」

『おう！』

試合の時と同様の顔で、選手達は控え室を出て行った。

会場内には観客が続々と詰め掛けていた。昨日よりもさらに多く、とても高校生の県大会のものとは思えないほどであった。

大仁多高校の応援席には恒例になっている『百折不撓』の横断幕が掲げられており、大仁多高校の勢力の強さを示している。

そしてその光景を見ながら立ち尽くしている一人の男の姿があった。彼はただ一人静かに旗を見つめている。

「おーい、真ちゃん。何やってんだよ。さっさと席につこうぜ」

「……ああ。わかつているのだよ」

連れの同級生である高尾に引き連れられ、彼——緑間は席へと歩いている。

緑間は昨日に続き今日も栃木に出向き大仁多の、強いては白瀧の試合を観戦しに来ていた。

「ボーっとしちまうなんてらしくねえな。夏が終わって緩んでるん

「じゃねーの?」

「黙るのだよ。そんなわけがないだろう。ただ、少しだけ大仁多のことが気になったただけだ」

「気になった?」

「……ああ」

茶化そうとする高尾だが、どこか寂しげな緑間の表情を見て、それ以上問いただすことはやめた。

自信家な緑間にしては珍しい素振りを今まで見たことがなかったからだ。

(もしも俺達の道が重なっていたならば。もしも高校も同じだったならば。果たして俺達の関係は、どのようなものだったのだろうか) 今さらありえないことだとわかっていても、考えが浮かび上がってしまった。

誠凛との決戦後、今度こそ白瀧の考えと真っ向から向き合いたいと思いつき、そして考えずにはいられなかった疑問。

——今も白瀧と同じベンチで共に戦えたならばどうなっていたのだろうか。

(女々しいな。高尾ではあるまいが、本当に緩んでしまったのかもしれん)

自分らしくないと一笑に付すことは簡単だが。緑間はそれを受け入れた。

「——さて、栃木の代表決定戦。大仁多高校はどうなりますかね?」

椅子に腰掛けて無人のコートを見る二人。

高尾は試合が待ちきれないのか、試合予想について口を開く。

すると二人を連れてきた大坪が問いに答えた。

「前評判では大仁多有利との話だった。実力から考えてもそうだろう。だが、秀徳うっちのようなケースもあるからな。何よりも盟和はリベンジに燃えている」

「疲労度も大仁多の方が大きいかもしれません。昨日の準決勝はダブルスコアの大勝だったとはいえ、非常に内容の濃い試合でした」

「あー、そういえば真ちゃんも昨日も見に来てたんだって? 誘って

くれても良かったのによー」

「……ふん。たまたまそういう気分になっただけなのだよ」

「どういう気分になったら東京から栃木まで行くんだよ……」

変わらぬ緑間のつれない態度で高尾は呆れて笑みを引きつらせた。

誠凛との戦いの後、少しは変わるかと思われた緑間だがこういう点はまったく変わらなかったのである。

「まあ理由はともあれ。準決勝で大仁多が大きな動きを見せた話だから、緑間が見てくれたのは秀徳にとってはプラスだな。

俺は決勝戦から試合を見ようと考えていたところだし。そういう点ではよくやったと言っておこう」

「褒められる理由がありません。俺はあくまで自分が見たかったから見に来ただけのことです」

「……変なところで意地はんなよ」

わかりきっていた反応とはいえ、大坪も高尾に同意するように『まったくだ』と言って視線を戻した。

——大坪は元々今日の決勝戦を見に来る予定だった。大仁多と秀徳は、小林と大坪はライバル関係だ。先の東京都・予選リーグ決勝戦でも二人は会っている。

予選で散ってしまったとはいえ、二人の関係は変わらない。それにまだ冬がある。先の為にも今日は何としても見に行こうと決めていたのだ。

そう考えていたところ、高尾から『緑間が栃木の準決勝見に行ったそうっすよ。明日も行くそうです』との報告を受け、二人を連れて会場入りした。

(こいつらにももう一度、大仁多を見せるべきだった。だからこそ都合がよかった)

練習試合で戦ったとは言えども二人はまだ一度しか大仁多のバスケを見ていない。

早いうちに栃木の實力者の力を見せておきたかった。その機会が丁度よく訪れたのだから、主将にとって幸いだった。

「冬にもう一度戦う機会が、リベンジする機会があるかもしれん。よ

く見ておけよ」

「了解っす」

「……わかっています」

主将の呼びかけに、ルーキー二人は了承した。

そして彼らの頷きからしばらくして——ついにコートと廊下を遮っていた扉が開かれる。大仁多高校と盟和高校。両校の選手が入場した。

コートに選手達が入場。その瞬間、会場が一気に沸き立った。

「おおおお！ 来た——！」

「ついに最後まで勝ち残った二校が激突！」

「もはや全国常連と呼ばれ、7年連続IH出場を果たした大仁多高校！ 8連覇でIH出場を決めるか！」

「年々王者に追いつき、2年連続で準優勝まで勝ち進んだ盟和高校！ 3度目にして悲願のIH初出場か！」

待ちに待った決戦。開始の時が近いとなれば観客の勢いも盛んになる。

「……凄い。こんなに声援が送られるのか」

「注目の決戦だしな。敗れた高校の面子もあるだろうぜ」

「いいじゃねえか。これでこそ、舞台が整ってこそ最終決戦だ」

ニヤリと口角を上げる山本。さすがに三度目となる三年生達には変化は見られない。

今までと変わらずウォーミングアップをする先輩達の姿は、神崎や本田達一年生には頼もしく見えた。

「だが、たしかに観客は多いな。おそらく去年よりも多いだろう」

「調べたところ、ほとんど全ての大会で観客数は増えているみたいよ」

「……おそらく、〝キセキの世代〟の影響でしょうね。あいつらの世代の選手が高校に入ったから、世間の興味も湧いたんでしょう」

(だからそういうのどうやって調べるのだろう?)

白瀧が少し複雑な表情を浮かべて言うが、まさにその通りだろう。

例年よりも多い観客。それだけキセキの世代が有名だということだ。小林と東雲も同じ考えに至り、頷いた。

もつとも、話を聞いていた光月は変わらぬ情報網の広さに驚いているが。

「で、栃木に関しては連覇を狙う大仁多と初出場を狙う盟和。物語性は十分ですよね」

「ちなみに盟和ってインサイドが強いと聞きましたけど、チームとしてはどうなんですか？」

「勇作と細谷を中心にまとまった良いチームだ。特に今年は士気が高い。見てみる」

佐々木は反対のコートを指差し、盟和をちらりと見る。つられて西村と光月も盟和の選手達を見た。

「お兄さん、妹さんを僕にください」

「ふざけんな！俺のだ！」

「お前でもねえよ！いやお前の妹ではあるんだけど！お前が言うとなんか意味が違うように聞こえるんだよ！」

「……神戸先輩。どう思いますか、妹という今はどうでもいいことで揉めている面子のこと」

「それだけ大切だったことだろう」

古谷が橙乃の姿を見た後。掌を返して勇作に媚び、勇作はそれを拒絶。

細谷が暴走する勇作にツツコミを入れる。

そんな三人を見て興味がない金澤は神戸に話を持ちかける。神戸はニコニコと笑みを浮かべて三人を温かく見守っている。

「……試合が始まる前からすでに内部分裂しているように見えるのですが」

「まあ、あれだ。喧嘩をするほど仲が良いと言うだろうか？」

「フオローしきれてないです松平さん」

果たして本当にこれでいいのだろうか、誰もがそう思った。

「なんなら私が『私は白瀧君のものです』とか言つてこようか？」

「やめて！逆に敵が一致団結するから！全ての怒りが俺に向けら

れるから！」

平然とした表情でとんでもない発言が飛び交う。

敵を混乱させる為とはいえ『何でそんな大嘘を表情を変える事無く言えるのだろうか』と、白瀧は初めて橙乃のことを恐ろしく思った。(だけど試合前に敵さんが荒れてくれるなら丁度良い。ただでさえこっちはベストメンバーじゃないんだ。このまま喧嘩してくれれば……)

敵を視野に入れつつ、中澤はこのまま盟和が崩れることを祈る。試合開始までこの空気が続いてくれればと。

「ちっ。ここで言っても仕方がない。何しろまだ茜が向こうにいるからな」

「そつすね。このままではなんの意味もない。だから」
(……ん?)

しかし徐々に流れが変わっていくことが感じられた。

まるでタイミングを合わせたかのように勇作と古谷は大仁多の選手達を見て、言った。

『……先に大仁多を倒してからだ!!』

「よし、それでいい！」

「やつとですか……」

「ほらね。ちゃんと仲直りしただろう？」

大仁多への宣戦布告を。他の三人も安堵して表情を和らげた。

「……結局こうなってしまうすよね」

「構わない。こちらも全力で戦うのみだ！」

やはり避けることはできない全面戦争。

小林の言葉に押され、大仁多の選手達も闘志を滾らせて盟和の選手達を迎え撃った。

「2分前!!」

試合前練習を行う中、コート内にブザーが鳴り響く。

——そしてついに、決戦開始の時が訪れた。

「頼みますよ。コート内での細かい指揮は小林さんに一任します。――さあ、行つてきなさい!」

「はい! ……行くぞお前ら。戦う覚悟は十分か!」

『おう!』

「よし! ——大仁多! ファイツ!」

『オー!!』

大仁多高校は藤代の指示が終わると小林を中心に円陣を組み、掛け声と共に駆け出していく。

「もういいな。今さら俺から言うことはない。あとはお前達に託す」

「よっし! じゃあ、勝ちを取りに行くぞ!」

『おう!』

「盟和! ファイ!」

『オー!』

「ファイ!」

『オー!』

「ファイ!!」

『オー!!』

盟和高校も岡田に送り出されると、五人が円陣を組み、中央で手を合わせ、そしてコートに躍り出る。

「それでは決勝戦、大仁多高校対盟和高校の試合を――始めます!」

『よろしく願います!』

こうして、運命の決戦の開幕が宣言された。

大仁多高校 スターティングメンバー

#4 小林圭介 (三年) GF 188cm

#6 山本正平 (三年) SG 178cm

#8 松平猛 (三年) PF 187cm

#5 黒木安治 (二年) C 195cm

#10 中澤秀樹 (二年) PG 175cm

盟和高校 スターティングメンバー

#4 橙乃勇作 (三年) PF 189cm

- #5 細谷武士 (三年) PG 179cm
- #6 古谷周平 (二年) SF 188cm
- #10 金澤良平 (二年) SG 176cm
- #7 神戸直也 (三年) C 191cm

両校のスターティングメンバーがセンターラインを挟み、向かい合う。

だが並んだ十人の姿を見て、コートを眺めていた大坪が違和感を覚えた。

「む？」

「大仁多、ベストメンバーじゃないっすね？ 9番^{光月}だけじゃなく、7番^{白瀧}までベンチスタートっすよ？」

「無理もないだろう。先も言ったが、大仁多は準決勝で疲労が大きかった。その中でも顕著だったのがその二人なのだよ。おそらくは休ませる為だろう」

「そして控えの二年生PGの起用か。これは、4番^{勇作}に小林を当てようという作戦か？」

以前彼らと戦った時とは違ったスターター。面子の違いは緑間の言うとおりでだろう。

しかしPGに控えの選手が入ったということは、それはつまり小林をFとして機能させること、勇作とのマッチアップを考えてのことだろうと大坪は察した。

お互い主将であり、去年は共にベスト5を獲得した。その二人が今決勝戦で、因縁に終止符を打とうとしている。

「白瀧。まさかお前がベンチスタートとはな」

勇作は大仁多のベンチに腰掛ける白瀧に声をかけた。白瀧も顔を挙げ、真っ向から向き合う。

「お久しぶりです勇作さん。俺も本当はコートで挨拶したかったんですけどね」

「あれか!? ベンチで茜といちゃつくためか!? それを俺に見せるためにベンチか!? このムツツリが!」

「……そんなこと欠片も思っていないし、ムツツリでもないです」

「どういう意味だそれは。茜が可愛くないとでも言うのか!？」

「面倒だな本当」

「とりあえず戻ってくれないお兄ちゃん?」

橙乃も諫めようとするが勢いは収まらない。

とんだ言いがかりをつける勇作を白瀧があしらっていると、救いの手は勇作の後方より現れた。

「いつまで呆けているつもりだ勇作」

「……小林」

「お前の相手は俺だ。戯言は勝負の後にしろ」

「いいだろう。お前ともケリをつけたいと思っていたところだ。今ここで倒す!」

「やれるものならばやってみる。俺も大仁多もお前が考えているほど簡単に敗れはしない!」

激しい火花が散る。選手として主将として。二人は負けられない共通の理由がある。

だからこそ『目の前の相手には絶対に勝つのだ』と強く意気込んだ。こうして両校の選手が早くも激突する中、黒木と神戸の二人がセンターサークルに立った。

「今年からは君なんだね。よろしく頼むよ」

「仲良くするつもりはない。そんな甘い関係を築くつもりは、な」

「……始めます!」

審判がボールを構える。

(俺のマツチアップは、こいつか。小林じゃなくてよかった)

(小林さんに託されたんだ。今日は俺がチームを引っ張る!)

(同じ一年の13番神崎ならよかったのに! この人速いから嫌い!)

(一年が相手か。これは負けらんねーな。今日はフルで活躍するくらい意気込みじゃねーと)

(まーた暑苦しそうな人が相手だよ。マジ勘弁してください。俺のライフは0です)

(こいつ、さつき勇作と言い争ってたやつか。去年はいなかったけど……)

選手達がマッチアップする選手と探り合う。

そして、審判がボールを真上へとトスした。

『試合開始!!』
ティップオフ

決勝戦が始まった。

黒木が、神戸が跳ぶ。

「ぬおおあああああああ!!」

普段の彼にはとても似つかない叫びが、黒木の口から発せられる。

黒木の最高到達点は神戸よりも高かった。はるか高みでボールを叩く。

「よし! 黒木さん、ナイス!」

「……ああ」

ボールは中澤の手に渡った。細谷の腕をかわし、ボールを確実に手にする。

「……ほう。5番^{黒木}、俺達が前戦った時よりも迫力が増したな」

「準決勝、あの人は常に留学生を相手にしていましたから。格上の選手と相對して、凄みが増したのかもしれない」

大坪は率直に黒木を称賛した。同じポジションの人間として感じる点があったようだ。

彼も秀徳戦や準決勝で奮闘していた選手。伊達に激戦を戦い抜いたわけではない。

「あっちゃー。すごいな、彼」

「仕方がないか。まずはディフェンス! 一本守るぞ!」

ジャンプボールの勝負に敗北した神戸も、悔しそうな素振りは見せずに黒木を褒めた。

盟和高校の選手達はマンツーマンで各選手達につく。

中澤には細谷が、山本には金澤が、松平には古谷が、黒木には神戸が。

「随分と主将らしくなったな、勇作」

「当たり前だろう。まあ、それだけだと思わないでほしいけどな!」

そして小林には勇作がついた。

味方にしっかりと声を出し、主将として動いていることを小林が触

れると、勇作も笑みを浮かべて答えた。

(……さて、最初の一本はどうしようかな)

ヒートアップする戦況の中、ボールを保持している中澤は落ち着いていた。

勢いに流されることなく静かにコートの中を見渡す。選手達の位置や動きといった情報を。

「やはり、中澤さんをスターター起用して正解でしたね」

時間を使ってゆっくりと攻める中澤。彼のゲームの組み立てを見て、藤代は満足げに頷く。

「彼の得意分野はディレイドオフエンス^攻。普段とは違うメンバーで戦う都合上、少しでも調子を上げるためには確実にゆっくりと試合を組み立てたほうがいい。」

まして今回の相手は士気が盛んな盟和高校。白瀧さんが前半戦は出れない今、少しでもロースコアゲームに持ち込みたい。丁度この試合と彼のスタイルがマッチしてくれた」

限られた条件の中、この五人が現状で最良のメンバーだった。

控えとはいっても大仁多で控えに選ばれる精鋭達。並大抵の実力ではない。他の高校ならばスターターを張れる実力者である。

『中澤、ゲームメイクは任せるぞ。お前に全てを託す』

(小林さんに託されたんだ。必ず成功させる！)

その自信と、仲間の信頼が中澤の心を落ち着かせた。

コート中央、スリーポイントラインよりもやや外側。まさにトップに立っている。

細谷のマークも隙がない。しかし常日頃練習で経験している小林のマークと比べると、数段劣るものだった。そう考えると思考がクリアになる。

(こいつ、いつ攻めてくる……?)

一向に動きを見せない相手に、細谷の焦りが募った。

ボールを持ってはや10秒が経過。だがまだ動かない――。

「ふっ！」

「なっ――」

24秒ルールまで残り10秒。ついに動いた。

突如中澤がドリブルをやめ、トリプルスレットの態勢を取る。

慌ててブロックの態勢に入る細谷。だが中澤はシュートモーショ
ンから右腕を左腕と交差するように振り、右ウイングの山本へパスが
通る。

「よっしゃー！」

「くっ！」

（この人はドライブが上手いスラッシャータイプ。とにかく、抜かせ
ない！）

金澤は間合いを取りながら警戒する。

シュートを撃ってきてもプレッシャーだけはかけようと思ったそ
の時。

「——ッ!？」

空気を切り裂き、一直線にボールが飛んだ。

（パスをさばくのが早い!!）

反応することさえ許さない。山本からローポストに陣取る小林へ。

「ナイスパス！」

「小林！」

「行くぞ、勇作！」

開始早々、両校のエース対決となった。

勇作を背負う小林。勇作のマークも厳しく、張り付くようなディ
フェンスを見せる。

（司令塔ではない。今の俺はスコアラーだ。白瀧のいない今、それは
尚更のこと。だからこそ、ここで決める！）

小林は一步ステップを踏み、そして次の瞬間逆側へと高速ターン。
一瞬で切り替えた。

「来た！」

「——ッ!？」

小林がスピムーブで勇作をかわした。

マークを外した小林はフリーのままレイアップを沈め、先制点を決
める。

勇作も追いつがるが、彼が踏み込んだときには既にボールはリングを潜っていた。

(大仁多) 2対0 (盟和)

「よっしゃあー!」

「決まった! 小林さんナイツシユ!」

「先制点は大仁多だ!!」

不安もあった立ち上がり。しかし小林が決めたことにより、大仁多の不安が一蹴され、応援団の声援も高まった。

「おお。小林さんも燃えてますね」

「……そうね。ようやく、圭介君も一つ重圧から解放されたからかな」
「重圧ですか?」

「うん。今まで責任が大きすぎる立場だったからね」

東雲は感慨深そうに小林を見つめた。

『日本では珍しい長身PG』『自分で点が取れる司令塔』などと小林の評価は高かった。

しかし『主将』『司令塔』『点取り屋』^{スコアラ}、3つの立場を持つ彼にかかる負担は相当なものだった。成さねばならない責任が大きく、負担が常に小林にのしかかってきた。

だが今は違う。今小林は中澤に司令塔という役割を任せてコートに立っている。

二つならば重みが随分と変わってくる。現に今までは白瀧に『点取り屋』^{スコアラ}としての役割を一任していた面もあった。

小林のFとしての起用。それは何も戦術に限った話ではなく。小林本人の精神的負担を減らすという理由もあったのだ。

「小林。普段は司令塔としての働きの多いせいで気づかないが。……やつはスコアラとしても優秀だ」

観客席から大坪はライバルの姿を見た。

長年全国という大舞台で戦ってきた者同士。その相手の強さを改めて実感し、大坪は冷や汗を覚えた。

「さあ、デイフェンス! 一本集中!」

幾分かの重みから解放された小林が、自由にコートを躍動する。

それこそが小林がFという戦法の理由の一角を担っていた。

「へっ。準決勝も見たけれど。やはりFとしてもかなりのものだな。

……面白い」

今までの対戦とは違うバスケスタイルを目にして、勇作は笑みを浮かべた。

「たしかに並大抵の実力者ではないな、小林圭介。さすがの一言だ。しかし……」

先制されたというのに、岡田もベンチで笑みを浮かべてコートを見ていた。

「オフエンスならばうちの勇作も負けていないぞ」

彼の笑みが意味するのは——純粋な選手達への信頼だった。

「一本！ 一本返していこう！」

盟和の反撃が始まる。

細谷がボールを運ぶ中、大仁多もマンツーマンを仕掛ける。マッチアップは変わらない。

中澤が懸命なディフェンスにより、細谷のペネトレイトを防いでいる。

「やられたらすぐにやりかえさないと、な！」

すると細谷は中澤の頭上からボールを放った。ローポストの勇作がゴールに対し背中向きでボールを受けた。

ゴール下、先ほどと同じ組み合わせ。小林と勇作の一騎討ちが展開された。

「さっきのお返しだ！」

「受けてたっ！」

勇作が強引に仕掛けた。小林の体を背中で無理やり押し込んでいく。

（ぐっ……！ この圧力は!!）

「まだだ！」

力に押される小林だが、そこで橙乃はゴールに向かい合うようにターン。

さらにすぐさまジャンプシュートを撃つ。ボールはリングを射抜

いた。

「よーっし！」

「さっそく取り返した！」

盟和は先制点を許したもののすかさず勇作が得点し、同点とする。

(大仁多) 2対2 (盟和)

「ちっ！ 勇作……！」

「言っただろ。今年こそ俺達が優勝する！」

表情を歪める小林。得意げに言う勇作。

両校とも立ち上がりはエースが得点し、チームを湧きたてた。

試合序盤から試合はヒートアップを見せる。試合の流れは、まだ動きを見せない。

第四十話 強攻策

(……昨年よりも上がったのはパワーだけではないか。動きのキレも数段増しているようだな)

先の盟和高校の攻撃。勇作のボールを持ってからの動き。

去年の試合を経て彼を知っている小林はそこから勇作の成長振りを実感していた。

当然のことながら成長しているのは自分達だけではない。相手もまた確実に成長しているということが読み取れた。

(そうではなくてはな。それでこそ決勝戦で戦う相手だ)

「中澤、次の攻撃も俺にボールを回してくれ」

「構いませんけど、大丈夫そうですか？」

「誰に対して言っている？」

「……すみません。愚問でしたね」

顔を伏せて微笑を浮かべる中澤に、小林も『当たり前だ』と笑って返す。

「ならば俺もそれに応えるところでしょう。誰が相手であろうとも勝利を譲るわけにはいかないからな」

視線の先を盟和の4番・勇作へと定める。

今一度なさなければならぬことを自分の中で確認し、小林は闘志を滾らせた。

大仁多のスローインから試合が再開される。

山本がコートの中へボールを入れて司令塔の中澤がゆっくりと時間をかけてボールを運んだ。

「一本！じっくり攻めていきましょー！」

最初の攻めと同じような攻め方だ。センターラインを越えた後も中澤は決して焦る素振りを見せない。

マッチアップしている細谷はもちろん、他の盟和の選手たちもフラ

ストレーションが少しずつ溜まろうとしていた。

大仁多の攻撃が始まってから15秒が経過。ここでようやくボールが動き始める。

「小林さん！」

「――よしっ！」

スリーポイントラインよりもさらに外側。小林へとボールがさばかれた。

「つしややつと来た！ 来い！」

「……あまり調子に乗るなよ！」

上半身のフェイクを入れる。しかし勇作はつられない。

ドリブルをはじめめる。ゆっくりと、かつ相手には取られないように慎重に。そして三回ついたところで戦況が動いた。

(……来た！)

左、中央突破を図ろうとする小林。彼の動きに勇作も瞬時に反応した。

「いや、まだだ！」

しかし小林はボールを強く叩きつけ、強引に逆へとフロントチェンジ。

勢いをさらに増した状態で、斜めに切り込むようにゴール下へと侵入した。

「しまった……！」

突然の出来事で遅れをとってしまった。勇作もすぐに反転し、小林の姿を追う。

さらにゴール下から神戸も反応し、ヘルプに駆けつけた。

「撃たせるか！」

「いや、撃つ必要はない」

「――キャプテン！」

両腕を大きく広げ、ゴールを塞ぐ神戸。

しかし小林はレイアップの構えだけを見せ、ジャンプはしなかった。

神戸と勇作の間を縫うように正確にパスをさばく。

「あつ……やばっ!？」

「ナイスパス！」

ボールは黒木へ。フリーであった彼は確実にジャンプシュートを決めた。

(大仁多) 4対2 (盟和)。

「よっしやあ！」

「おおおおっ！ ナイツシュ黒木！」

「小林さんナイスアシスト！」

コートの中では小林と黒木が手をかわし、味方も連続得点の成功で士気が上がった。連携の鮮やかさにつられてか、観客も盛り上がる。

「ちっ……！」

「あつちやー。やっぱり簡単には行かないもんだね」

「ま、仕方がない。それよりもとにかくオフENSだ。こつちも取り返そう！」

苛立ちを見せる味方を細谷が制する。勇作もしぶしぶとではあるが従った。

たしかに大仁多のオフENSは厄介ではあるが、しかしオフENS力ならば負けてはいないという自信が彼らにはあった。それだけ鍛えてきたという自負があった。

「行くこう。簡単に流れを渡すなよ！」

盟和の反撃が始まる。細谷が金澤と連携してボールを運ぶ。

大仁多の選手達の戻りも早く、速攻には持ち込めない。中央に立つ細谷は確実に外からの攻撃の展開を組み立てる。そして左45度の金澤へとパスが通った。

対する相手は山本。腰を落として相手の動きをじっくりと観察した。

(一対一か?)

「相手になってやるぜ、一年！」

「……いやーすみません。そいつは勘弁、を！」

燃える山本ではあるが、しかし肝心の相手である金澤は易々と攻めることはしなかった。

上半身のフェイクを入れて右手でドリブルを一度つくど、すぐさま左手に持ち替えて中へボールを回した。ローポストでポストアップしている古谷へと。

(インサイドで勝負か……!)

「松平!」

「おう! かかってこいや!」

山本は振り返り、松平へ呼びかける。

簡単には通すまいと古谷の後ろに松平が立ちはだかる。山本も二人で挟み撃ちにしようと迫った。

「だから、暑苦しいのは嫌いだって言ってんだろが!」

「なっ——!?!」

すると二人の思惑を裏切り、古谷はすかさずパスアウトを選択した。先ほどパスが渡ってきた方向と同じ方向——すなわち金澤へと。

「ナイツス!」

このパスを金澤も確実に受け取る。

スリーポイントラインより外側、彼の本分である三点を狙ってジャンプシュートを放った。

「させつか!」

「うげっ!?!」

しかし瞬時に山本が反応した。彼はすぐさま金澤のマークに戻るとブロックに跳ぶ。直接叩くことはできなかつたものの、プレッシャーをかけるには十分だった。

「やばい! リバウンド!」

シュートが外れてボールはリングに激突。ボールの行方はリバウンド争いにかかっていた。

「任せておけよ!」

「……くっそっ!」

黒木や神戸といったパワープレイヤーがひしめく中、リバウンドを確保したのは勇作だった。

小林との競り合いに勝った勇作はリバウンドを獲ることに成功。そのまま自分で決めに行く。小林のブロックは間に合わず、ボールは

ネットを潜った。

(大仁多) 4対4 (盟和)。盟和もすぐに追いついた。

「ようし！」

「ナイスリバン！」

すかさず盟和も取り返し、リズムを崩さない。そう簡単には試合は動きを見せなかった。

「……相手の盟和の攻めも形が出来てますね」

「ああ。インサイドに入れてその後アウトサイドからのシュート。これで決まれば最上だったが、まあそう上手くはいかないか」

観客席から観戦している高尾は素直に盟和を称賛した。

中の強さを活かしたプレイ。確立が高いために決まって欲しいところだったが、そう上手くいかないのが試合である。

「それより気になるのはゴール下ですね。白瀧が抜けた分、高さとパワーが上がっているはずなのですが……」

「大仁多のインサイドは#4小林圭介・188cm、#5黒木安治・195cm、#8松平猛・187cm。

対する盟和のインサイドは#4橙乃勇作・189cm、#6古谷周平・188cm、#7神戸直也・191cm。

たしかにフィジカルは大差ないものの、小林は普段はPGのポジションであるからゴール下の動きは不慣れだ。

逆に盟和はフロントコートを中心に得点を上げてきたから三人とも当たりに強いし、リバウンドも多く奪取している」

「なるほど。それではゴール下も強いわけだ。納得しました」

一つ気がかりに感じるものがあつた緑間だが、大坪の説明に納得した。

ゴール下のポジションはそう簡単に務まるものではない。小林の本来のポジションはPGである。本職の勇作と対峙するとどうしても遅れを取ってしまう面があつたのだ。そういう意味ではフィジカルに強い小林よりも白瀧の方が適任であるという印象はある。

「さあディフェンス！ 今度こそ止めるぞ！」

「……それでいい。その調子だぞ」

盟和も立ち上がりにおいて連続で攻撃を成功させている。加えてエースであり主将である勇作が好調。

運命の決勝戦ということでは不安もあったが、よい方向で期待を裏切ってくれるチームを見て、岡田の頬が緩んだ。

「まあ、だからといって貴方達のリズムに乗るつもりはありませんけどね」

しかし大仁多はこの程度では揺るがなかった。

大仁多は再び時間を使って攻める。中澤と山本、二人がボールを回して時間を潰す。

そして小林のスクリーンにより中澤がフリーになるとそのままスリーを放った。勇作は手を伸ばすことしかできず、ボールを見送る。

「あれっ。入らないか」

「リバウンド！」

「おおっ!!」

「……くっそ。やっぱり強い！」

黒木がオフエンスリバウンドを確保する。着地すると敵に捉まる前にパスアウト。

再び中澤へと渡った。中澤は表情を変えることなく、またじっくりとボールを操る。

そしてタイミングを伺い、ようやくパスをさばいた。

「よし来た！」

「ちいっ！」

シュートが外れてから16秒が経過し、突如スリーポイントラインの外側へ走りこむ山本。彼がボールを手中に収めると素早くシュート態勢に入る。

マークについている金澤が必死に追いかけて、走りながらブロックに入るが……

「残念！」

「ッ——!?!」

「もーらい！」

ポンプフェイクでブロックをかわした山本がミドルに侵入。ジャ

ンプシュートを撃つ。

ブロックは間に合わず、ボールはネットを潜った。

(大仁多) 6対4 (盟和)。確実に得点を重ねていく。

「やっぱり速い——！」

「ナイスです山本さん！」

「おう！ もっと声を出してけ！」

自陣のベンチに声をかけながらディフェンスに戻る山本。

盟和同様、こちらにも調子は良かった。神崎は目標でもある先輩を讃えて、さらに声を大きくする。

「いつまでも調子に乗らせてたまるか！」

「よこせ細谷！」

「っ、お、おう！」

ボールを拾う細谷に勇作が声をかける。

勇作と古谷の二人が早々に駆け出していた。失点後の速攻を決行するために。

盟和の速攻。細谷から神戸を介してロングパスが放たれる。山本が止めようと跳ぶが届かない。センターラインを超えたところで勇作がボールを手にした。

「ナイスパス！」

「決めろ、速攻！」

加速して大仁多のゴールに攻め込む二人。ゴール下に戻っているのは小林と松平、二人のフォワードだった。

「俺は勇作につく！ 6番は任せるぞ！」

「おう！ 任せる！」

「二対二か。……このまま行くぞ！」

「当たり前でしょ。言わせんな」

小林の指示に従って二人はそれぞれの相手のマークについた。

待ち構える王者に、挑戦者は不敵に笑って突撃する。

ドリブル突破を図る勇作。すかさず小林が前に出る。これにより、ゴール下のディフェンスは松平のみ。

「古谷！」

「オツケー!」

すると小林の横をボールが通過し、古谷へとパスが通った。

これで一対一の対決。古谷はその場で停止するとすぐにシュートに移る。

「撃たすか!」

これに反応して松平も跳ぶ。

「なんちゃって」

「なっ……」

だがシュートはフェイクだった。

古谷は松平がブロックに跳んだ姿を見るとドリブルへと移る。

松代の横を抜き去り、レイアップシュートを放つと……

「もーらっ……」

「てねえだろ、このっ!!」

「うおっ!」

掌から放られたボールは松平に叩かれ、バスケットボードを直撃。

衝撃によつてコートに戻ってきたボールを小林が取り、盟和の攻撃を防ぎきった。

「舐めるな。こっちはちよこまかと動き回る後輩を日ごろから相手にしてるものでな。この程度で遅れをとったりしねえよ」

「野郎……!」

「……っていうか、え? ちよこまかとして、ひよつとして俺のことですか松平さん!? ひどっ!」

「いや、多分褒めているんだと思うよ……?」

「首を傾げながら言われてもまったく説得力ないからね!」

自信満々に、相手の鋭気を削るような松平の発言。彼の狙い通り、古谷の笑みが崩れる。

しかし自軍のエースである白瀧の精神まで抉っているということには気づいていないようだった。一応彼にとっては褒めているつもりだったようである。

白瀧の異変に気づいた橙乃が咄嗟にフォローするも、あまり効果はなかった。

「……あの野郎、やっぱり後で泣かす」

そして白瀧も橙乃と話すという自分の行動が一人の男を怒らせているということには気づいていなかった。

「ナイスです！ さあ、反撃しましょうか！」

小林が中澤にボールを渡し、大仁多の攻撃が始まる。

今回も早急に攻めるようなことはせず、時間を潰していく。

中澤からハイポストの小林へ。再び小林と勇作の一对一の形となった。

「時間かけやがって。そろそろ俺も限界だぞ？」

「そうか？ まあ、好きにしてくれて構わないぞ」

苛立ちがはつきりと見て取れる勇作。小林は彼を軽くあしらうと、瞬時に攻めに転じた。

小林のクロスオーバー。右から突破を図る。勇作も反応したが動こうとしてその先から衝撃が加わった。

(スクリーン……！)

松平のスクリーンであった。勇作は動きを封じられてしまい小林の突破を許してしまう。

小林は勇作を振り切るとジャンプシュートを撃つ。

「……ッ！ しまった！」

だがドリブルの勢いを殺しきれず、シュートは外れる。

「よっし、今度こそ！」

「……ッ!?!」

リングに当たり、宙に浮かんだボールを神戸が確保。ディフェンスリバウンドを獲った。

「ナイス神戸！」

「もう一回、速攻！」

この好機を逃すことはない。すぐに勇作と金澤が走り出した。

今度こそ速攻を成立させようと神戸が振りかぶり、ロングパスを放つ。

「——舐めるな！」

「なっ……!?!」

しかしそのロングパスは、小林によって叩き落とされた。

「アウトオブバウンズ！ 盟和ボール！」

「……うおおおお！ 小林ナイス！」

「盟和の速攻を封じた！」

己の失敗をすぐに取り返してみせた主将。速攻を防ぐことができた。できるだけ失点を抑えたい大仁多にとって、このワンプレーは大きい。

逆に盟和の選手達は自分達の思惑が次々とはずれ、怒りばかりが募っていた。

「——ぬああああああ！ まじでイライラする！ すぐに攻めてこねえし、防がれるし！」

「ま、まあまあ勇作」

「落ち着け馬鹿！」

「まあ、気持ちはわからなくてもないですけどね……」

「つうか正直俺もむかっています」

盟和の選手達の気持ちを焦らすような遅攻に、勇作はさっそく怒りを爆発させた。

三年生二人が勇作を宥めるが、他の四人も気持ちは同じなのか強くは言わなかった。

（たしかに大仁多のディレイドオフエンスは調子が狂う。相手のPG中澤が一人だけで15秒近くボールを保持しているし。

他の4人もそれまで大人しいと思ったたら急に動き出したりと。このまま集中力を維持し続けるのは困難か。……特にこの馬鹿勇作が）

バスケットにおいて24秒以内にシュートを撃たなければならぬという24秒ルールという掟が存在する。

それゆえにチームは少しでも余裕を持ったために、可能な限り早く攻撃に持ち込みたいという思いがあるのだ。

だが中澤は決して焦る事無くゆっくりと攻撃を組み立て、時間を潰す。これには相手を苛立たせるという効果があった。

現在、両校が互い得点を決めてリズムがよいように感じられるが、第一Qが始まってから二分三十秒を過ぎようとしている。つまり

第1Qの4分の1だ。

盟和もここまでの試合を全て大量得点で勝利を掴み取ってきたチーム。当然の事ながらその攻撃力は高い。それにも関わらず、未だに両校とも得点が伸び悩んでいるのは間違いなく中澤の遅攻による効果であった。

(このままでは大仁多を切り崩すことは不可能だな。こちらから動いてみるか……)

「おい、細谷！ 神戸！」

試合の行く末を心配し、盟和のベンチにいる指揮官・岡田が立ち上がり、攻めに転じようとしている二人に呼びかけた。

「次、仕掛けていこう。今度はこちらが大仁多のペースを崩すんだ」

「……なるほど」

「了解です」

岡田の意図を理解し、頷く二人。

そして試合が再開される。審判からボールを手渡され、金澤がスローイン。細谷がボールを受け取り、反撃を開始する。

「まず一本決めよう！ 点差を離されないように、追いつくぞ！」

チームを鼓舞し、自らをも元氣付ける。

細谷は一喝すると今度は自ら切り込んだ。

中澤が追いかけてようとするが、金澤のスクリーンによって阻まれる。

「……ッ！ スイッチ！」

すかさずマークが入れ替わる。山本が細谷を捉えた。

細谷も敵の動きには気づき、ジャンプシュートから一転、跳躍した山本の足元を通すようにパスをさばいた。

「ナイスパス！」

「ちっ……！」

(しまった……！)

神戸が背中に構える黒木をかわすようにターン。黒木のマークをかわした神戸がボールを受け取り、レイアップシュートを沈めた。

(大仁多) 6対6 (盟和)。盟和、再び試合を振り出しに戻す。

「よっし！ よく決めた神戸！」

「やっぱりインサイドが強いか……！」

「黒木！ 気にするな、リスタート！」

「ああ……」

失態を嘆く黒木に中澤が励ましの言葉をかける。

黒木もすぐに切り替え、審判からボールを受け取り、試合を再開させようとするが……

「——退くな！ 当たれ!!」

「なっ——につ!？」

その黒木の視界を塞ぐように神戸が現れ、ボールをもらおうとした中澤にも細谷がマークについた。

「これは、まさか！」

盟和の狙いに逸早く気がついたのは小林だった。そして小林の下にも、

「4番オツケー！」

「チツ……！」

いつの間にか勇作がマークについていた。

「6番、オツケーです！」

「こいつら！」

「8番。まあ、大丈夫です」

「おいおい。まさか本気でやってるのか？」

残る山本と松平にもそれぞれ金澤と古谷がマークがつく。

まだ誰一人としてハーフラインすら超えていないというのに、全員が相手のマークについた。

つまりこれが意味するは……

「——オールコート・マンツーマン！」

盟和高校が流れを掴むために勝負に出たということだ。

「マジかよ！ てか、まだ第一Qつすよ！」

「動くのが早いな。だがそれだけ相手を評価しているということだろう」

「……でもしなければ、大仁多を倒すことはできないと踏んだの

だろうな」

体力を使うオールコート。それをこんな序盤から使うことは普通ならばありえない。

強豪の自負がある秀徳の選手達もこれには肝を冷やした。盟和がそれだけ大仁多を強敵だと考え、そして大仁多を倒すために本気だということを示している。

「一度離されたらお仕舞いだ。追いかけて掴まるような甘い相手じゃない。ならば、逃げ切るしかないだろう!!」

試合序盤から強攻策に出る盟和高校。しかし彼らを率いる岡田の目に、迷いはなかった。

「くっ……くっ……いつらー」

厳しいチエツクのために、スローインもままならない。黒木は歯を食いしばりながら必死にパスコースを探るが、盟和のデイナーは甘くなく、すぐに封じられてしまう。

「黒木、こっちだー!」

「……くそっ!」

スローインの際、スローワーは5秒までしかボールを持つことが出来ない。

その焦りが大仁多の選手達を焦らせてしまった。

黒木は中澤の声に呼ばれ、反射的にパスをさばく。

(焦りすぎだ!・パスコースがバレバレだよ!)

だがそのパスに細谷が飛びつき、そのままボールを奪ってしまった。

「あっ!?!」

「しまった……!」

細谷はそのままレイアップシュートを撃つ。黒木がブロックに跳ぶが、彼の指先の上をボールは行き、ネットを揺らした。

(大仁多) 6対8(盟和)。盟和高校、この試合が始まってから初めてリードを奪う。

「まだまだ!・次も止めるぞ!」

だがその喜びに浸る時間は一切なかった。再びオールコート・マン

ツーマンが展開される。

「このっ！」

「いつまでも調子に乗るなよ！」

今度は確実に黒木が神戸をかわし、中澤へとパスが通った。

マークにつく細谷に対し、スローイン後すぐにコートに入った黒木のスクリーンによって突破した。

（よっし！）

「……ッ！ 中澤！」

「え……う！」

関門を突破したことにより安堵する中澤だったが、小林の叫び声で我に返る。

だがその時には遅かった。細谷のバックチップ。中澤は反応することができず、再びボールを奪われた。

「あっ……！」

「よっしや！」

「くそっ！」

こぼれ球を古谷が拾う。すかさず山本がマークにつくが、古谷はそこから横パス。

山本が古谷のマークについたことにより、ノーマークになった金澤へと渡った。

「しまった！」

失敗を嘆こうとも、彼のスリーを防ぐことはできない。

（大仁多） 6対1（盟和）。盟和高校が点差を5点に広げる。

「また決まった！ 盟和高校、3連続得点！」

誰がこの予想していたというのか。

流れに乗っていたはずの大仁多高校が、気がつけば実にあっさりと流れを手放していた。

「……藤代監督。ここは一度タイムアウトを取ってもよろしいのでは？」

苦戦を強いられる味方を見て、東雲が藤代へタイムアウトの選択を提案する。

まだ試合序盤であり、貴重なタイムアウトを使用するような場面ではないということは誰の目から見てもわかる。

しかしこのままではこの第一Qをこのまま相手に渡してしまいかねない。それほどまでに悪循環に陥っていた。

「いえ、まだ早いでしよう」

「しかし監督！ 突然の奇襲で選手達は焦りが生じています。ここで落ち着かせないと相手の思う壺です！」

「……東雲さん」

他の控え選手たちの気持ちを代弁する言葉。皆内心では彼女と同様のことを考えていた。

しかし藤代は決して首を縦には振らなかった。それどころか彼女を説得するように言った。

「ここで立ち直れないような柔な鍛え方を私はしていないし、これ以上で過酷な戦いを積んできたと考えています」

「なっ……」

だから彼らを信じなさいと、藤代は言う。

それでも反論しなければと東雲は考えるが、彼女の思いを遮るように審判の笛が鳴った。

「8秒ヴァイオレーション！」

「げっ!？」

中澤がダブルチーム掴まり、センターラインを越すことができないまま止まっていた。

8秒を越えるまでにセンターラインを超えなければならない。8秒のオーバータイムにより、再びターンオーバー。

大仁多高校、中々反撃に転じることができないまま盟和にボールを受け渡すことになった。

「くっ……!？」

「よくないなこのままでは」

「だよな！ お前もそう思うだろう！」

味方のピンチであるというのに、何もできないという不甲斐なさに唇を噛み締める神崎。

白瀧もこの現状をよくないと察して口を開く。おそらく彼も東雲と同じ考えなのだろうと神崎は問いかけた。

「ああ。このままでは、な」

だが白瀧からの返答が示していたのは、藤代と同様の意味を示すものだった。

そして彼らの目の前で試合は再開されるが、失点後で浮き足だっているのか簡単にローポストへとパスが通り、そして神戸のジャンプシュートを許した。

(大仁多) 6対13 (盟和)。得点差が7へと広がる。

「くっそっ!!」

怒りで表情を歪める中澤。先ほどまでの冷静だった思考も完全に消えている。

敵のオールコートを突破できず、ボールを奪われ続ける現状。間違はなくボールを運んでいる自分のせいであるとわかっている。そしてそれをわかつているにも関わらず相手の思惑に乗っかってしまう自分を心の底から恥じていた。

大事な決勝戦であるというのに。中澤が次々と負の思考へと浸る中――

「――落ち着け!」

小林の喝が響く。

「この程度で慌てるな! 全国ではこれ以上の過酷な戦いが待っているだろう。そして俺達はその中で常に戦っていた。違うか!」

突然の問いかけに、しかし全員が頷く。そうだ。今コートに立つ五人は全員が全国を経験している選手達。

ならばこそ小林の言うとおりのようなところで立ち止まっているわけにはいかなかった。

「それでいい。中澤、俺もボール運びに参加するぞ」

全員の顔が引き締まるのを確認すると、小林は中澤に呼びかけ、返事を待たずにプレイに戻る。

黒木が審判に促され、ボールを受け取る。

やはり先ほどと同様に神戸が立ちはだかる。ボールをもらうため

に動く中澤と小林にも細谷と勇作の厳しいチェックが続いた。

(お前達の気持ちもわかるけど、させねえよ！)

勇作は一瞬も自由にはさせないと厳しく小林に当たる。

先ほどの会話から小林達の重い覚悟も伝わったし、共感も出来た。だがだからといって勝利を譲るわけもなく、そして彼の作戦を成功させるわけにもいかない。

すると小林は突如大きく横に動き、そして細谷にスクリーンをかけた。

「なにっ!？」

(スクリーン!? 馬鹿な、小林がボールを受け取るんじゃないのか!?)

「黒木!」

「ッ、スイッチ!」

小林のスクリーンによって細谷の動きが封じられ、中澤がフリーになる。

先ほどの発言から小林にボールがわたると考えていた盟和の選手たちは呆気に採られ、一瞬反応が遅れた。

すぐに勇作が遅れて中澤を追いかけた。その瞬間、

「甘いな!」

小林が細谷の体をブロックしながら逆方向へとロールターンした。

「なにっ!？」

「……小林さん!」

「おう!」

ピック&ロール。スクリーンを囿として自身がフリーとなった。

黒木もこのタイミングを逃さずに小林へとパスをさばく。

「パスが通った!」

「しかも勇作・細谷をかわして、小林さんだ!」

今度は先ほどまでと違い、確実にボールを入れることができた。

小林はボールを受け取るとすぐにドリブルを開始する。

「行かせるか!」

すぐに古谷が小林に詰め寄り、ボールを奪いかかろうと迫る。

「いいや、無駄だ！」

「オツケー！ 後は任せておけ！」

小林は詰め寄られるまえに横パス——山本にボールを預ける。

「……しまった！」

古谷はただ山本がドリブルで駆け上がっていく姿を見送ることしかできない。

パスを受けた山本は得意のドリブルで盟和のバスケットへ攻めかかる。

神戸、勇作、細谷、古谷の四人はもはや追いつくことが出来ない。ころうじて山本のマークについていた金澤だけがなんとか追いつき、山本のレイアップシュートを叩こうと跳躍する。

「させるかあ！」

「……じゃ、こつちで！」

「なっ……」

そこで山本は空中でボールを手放すことにした。

シュートから一転。ボールは同じく走っていた松平の元へ渡る。

「ナイスパス！」

パスを受け取った松平がジャンプシュートを沈め、ようやく大仁多が反撃の兆しを見せた。

(大仁多) 8対13 (盟和)。大仁多高校は小林の渴によって、選手たちが息を吹き返す。

「よっしゃあ！ 決めた!!」

「ナイツシュ黒木！」

「ナイスアシスト山本！」

「小林さん、さすがの一言！ よくぞやってくれました！」

しばらく盟和の奇策により止まっていた得点。それが大仁多にもたらされたことで士気も上がり始めた。

「……上手いな。さすがは小林。五人全員によるチームプレイで盛り返したか」

「やはり伊達に全国で闘ってはいませんね」

ライバル
好敵手の巧みな戦いぶりに、大坪は笑みを浮かべて讚えた。

スローワ―の黒木、受け取り役であった中澤。そして彼を囿として小林が飛び出し、山本へとパスをさばく。そしてフィニッシュは松平。

五人の選手全員を活かした連携攻撃であった。今の連携は緑間の目にもかなりのものに映っていた。

「やっぱ凄えわ。あの人。普通に上手いってわかるもん」

同じPGである高尾も改めて小林の評価を高めていた。

そしてそれは当然のことながら彼らだけに限った話ではない。

「……小林、圭介！ やはりあの男か！」

盟和を率いる監督、岡田。彼は臍脂色のユニフォームに縁取られた4番を背負う小林の姿を憎らしげに、鋭い視線で射抜いた。

「選手達だけでこの窮地を脱する一手を打った！ またあの男が最大の敵として立ちはだかるのか……！」

せめて大仁多がタイムアウトを取った後ならばわかる。前半二回しか取ることができないタイムアウト。その一回を使って大仁多が勢いを盛り返すというのならここまで怒ることもなかっただろう。それだけ盟和が王者を追い詰めているという証になった。

だが今、大仁多はコートの選手達の力だけで乗りきった。小林の指揮の下、全員の連携によって。

小林圭介。かつて二度盟和の挑戦を退けた司令塔。実は岡田は大仁多のエースである白瀧よりも小林のことを警戒していた。

彼のような優秀な司令塔ポイントガードがいるということが大仁多が長年王者としてあり続ける一因であったことはいままでもない。それだけ司令塔というポジションは重要であり、そして彼はそれだけの精神力を保持していた。

そして今再び彼が盟和の挑戦を挫こうとしている。岡田が怒りを露にするのも無理はなかった。

(だが、いつまでもこちらが挑戦者でいると思うなよ……！)

「古谷……」

「おろ？ はい、なんですか？」

怒りをそのままに岡田は古谷の名前を呼ぶ。

突然の呼び出しに古谷は戸惑いながらも応じた。

「出し惜しみはもう構わない。次のオフエンスで決めてみせろ！」

「……へー、いいんですね。リョーカイ。いい加減あの変態シスコン野郎だけが調子に乗っているのはムカつくんで、丁度よかったです」
「ああ。それでいい」

（今大仁多の中心になっっているのは小林を初めとした三年生。ならばそこから崩そう。……ゴール下を支えるムードメーカー・松平を大人しくさせろ！）

岡田の指示により、古谷の笑みが深くなる。不敵とも不遜とも思える笑みであったが、今はこれほど頼れるものもない。

「じゃー行つて来ますねー」と古谷は軽い足取りでオフエンスに向かった。

大仁多の攻撃が決まり、盟和の反撃が始まる。

金澤からボールを受け取った細谷がボールを運び、士気を取り戻しつつある大仁多に取られないようにとパスコースを探る。

（……なんだあいつ。いきなりやる気になりやがって。まあやる気出してくれる分には構わないか）

すると視線の先で、古谷がパスを急かすように手振りしていた。

先ほどまでは気楽な調子であったにも関わらず急激な変化に戸惑いを覚える細谷であったが、断る理由もなくパスをさばく。

トップの細谷から右45度の古谷へ。スリーポイントライン上でパスを受け取ると、すぐに臨戦体型に。相手のやる気を窺えた松平も腰を落とし、集中力を高めた。

「そーいえば、さつきブロックされた分、返してなかったですよね？」
「お？　なんだ、仕返しに来るか？　いいぜ。また叩いてやるー！」

「いいや、おかわりはいいですよ。それよりもこちらからちゃんとお返しさせていただきますー！」

言い争いはそこまで。表情から笑みが消え——古谷が仕掛ける。

右45度から中央へと鋭く切り込む。キレのあるドリブル。しかし松平もきつちりとついていく。

（盟和でレギュラーを取るだけのスピードはあるか。が、これだけ

じや抜けねえよ！)

たしかにドリブルが上手いものの、捉えきれないレベルではない。
このままシュートも防いでみせようと古谷の姿を視界に捉えてい
ると――

「え……う？」

目の前で切り込んでいたはずの古谷の姿が、突如二・三步ほど後ろ
へと離れていた。

(なっ、今何があった!? 何で距離ができてやがる!?)

「はい。それじゃありがたく、もーらい！」

(しまった! ここからでは遠い! 止められない!)

驚愕している暇を古谷は与えてくれなかった。瞬時にフリーに
なっていた古谷はその場でジャンプシュートを撃つ。

松平はブロックしようにも距離が開いているために止めることが
出来ない。ボールが静かにネットを揺らした。

(大仁多) 8対15 (盟和)。大仁多高校、盟和高校の流れを完全に
止めることができず。再び得点を許してしまった。

「残念ながら流れはそう簡単には渡さない。さーて、下克上の時間で
すよー。王者は大人しくお帰りくださいーい」

古谷が不敵に笑う。相手を見下すような不遜な表情で。

第四十一話 意地のデイフェンス

連続得点の勢に乗った盟和は再びオールコートマンツーマンを展開する。

前線から凄まじいプレッシャーをかけ、大仁多に攻め寄せられる前にボールの奪取を狙った。

「やられっぱなしというわけにはいかないんだよ、俺達も！」

「ツーーまずい！ 小林が行ったぞ！」

しかし大仁多もそう簡単に相手の狙いには乗らない。

山本のスクリーンを使って確実にボールを入れると小林がドリブル突破。一気にフロントコートへ突入する。

「さすが小林さん！ 盟和の守備網をもともせず！」

「くっ、舐めるな小林！」

瞬く間にペイントエリアへ。かろうじて神戸がマークにつく。

「ふっ！」

「ッ!？」

しかし小林はシュートフェイクからゴール下へノールックパスをさばく。

「よしー！」

このパスは逆サイドの黒木に通った。突然のパスに神戸は動けない。

フリーの状態から黒木のワンハンドジャンパーが炸裂する。

(大仁多) 10対15 (盟和)。大仁多も一步も譲らずにこれ以上点差を広げさせない。

オールコートは一度包囲網を突破されると脆い諸刃の剣。小林が確実に盟和を切り崩し、攻撃を展開した。

「よしー！」

「いいぞ黒木！ いいぞ小林！」

「さあデイフェンス！ 点差を縮めるぞ！」

再び小林を起点として攻撃を決める大仁多。

まだ完全に試合の流れは渡さないと、チームの精神的支柱がチーム

を支えていた。

「さすが、と言うべきか。チームが万全の状態でないというのにここまで堪えるのか。でもここは止めさせない!」

細谷は自分と同ポジションである小林の姿勢に敬意を表しながらも、だからこそここで決めなければと決心する。

ボールが入り、盟和の反撃。

細谷は一度中の勇作へ入れ、ボールを戻させると今度は外の金澤へ。金澤はボールを受け取るとすぐにスリーを放つ。

当然、マークにつく山本はこれに反応。ブロックは成功しなかったものの、跳躍してプレッシャーをかけた。

「……短い! リバウンド!」

(こいつドライブはそんなに速くないし、典型的なスリーポイントシューターだな。かといってスリーも確立がそんなに高いわけではなさそうだが。

……ひよつとして何か隠しているのか? それとも本調子じゃないだけか?)

失敗を悟り、ゴール下に声をかける金澤。そんな彼を見て山本は冷静に分析する。

ドライブで切り込んでいくようなスラッシュヤータイプではないよ
うだが、スリーも高確率というわけでもない模様。

ならば一体何かあるのだろうか、と考えるが今考えても仕方がない
だろうと思考を切り替える。

「……負けない!」

「ッ、ああ、もう! やっぱりキミ強いな!」

一方、ゴール下では黒木と神戸が体をよせて競り合っていた。お互いチーム一のビッグマン。

強豪の意地と経験からか黒木がやや優勢である。神戸を押さえ込み、ポジションを確保していた。

そしてボールが落ち、二人は殆ど同時に地面を蹴り、ボールへと飛びつく。

「でも、俺だって負けないよ!」

ポジションを優位に獲得していた黒木の方が有利であった。

だが神戸は左腕だけを伸ばし、肘から先だけを動かしてボールをコートの中へ弾いた。

「しまった！」

「ナイス神戸センパイ！」

「こいつ、またか！」

ボールは味方の古谷へ。すぐに松平が詰める。ハンズアップを行い、すぐにはシュートを撃たせない。

「無理ですよ、あなたじゃ俺を止められない！」

古谷は一つシュートフェイクをいれた後、カットイン。

鋭いキレをもってゴール下へ侵入すると見せかけ——そして再び突如斜め後方へと後退した。

「ぐっ!? またか！」

「もう一本もらっとけ！」

松平が歯を食いしばっても結果は変わらない。松平は背中越しにボールがネットを射抜く音を耳にする。

(大仁多) 10対17(盟和)。大仁多、中々点差を縮められない。古谷が得点を重ねていく。

「マジかよ。あの松平さんが連続で得点を許すなんて。あの野郎、あんな隠し技を持っていたのか！」

同ポジションであり、常日頃の練習から松平の実力を知っている本田は驚愕を隠せない。

1回ならまだしも2回も連続で一対一から得点を決めることは並大抵の実力ではない。

相手の技もわからずただ驚愕するだけだった。

「……あれは、おそろくは」

だが隣に座る白瀧は彼の技術に心当たりがあり、すでに古谷の技を見切っていた。

「——ステップバックシュート、だな」

古谷が駆け出そうと踏み出した瞬間、小林が眩く。

無表情を装うようにと感情を殺す古谷だが、瞳が大きく広がる瞬間を小林は見逃さなかった。自分の推測が正解だというサインを。

「ドライブの最中、マークマンのいる方向の脚を勢いよく蹴り上げ後方に下がるステップ。」

そしてステップによってできたスペースはディフェンスのブロック不可能とする。NBAのキキ選手が得意とすることからキキムーブとも呼ばれている技だろう」

「……へえ」

(こいつ、俺のステップシュートを二回見てもう見抜きやがった。自分は目の前で見てないというのに)

そしてまさにその通りであった。小林は古谷の技・ステップバックシュートを見抜いていた。

あっさりとした技の本性を見抜いた洞察力に古谷は焦りを隠すことができなかつた。

だが古谷は知らないが彼の技を見抜いた選手が大仁多にはもう一人いる。

「ただ、あのステップはかなりのボディバランスを必要とする。俺は正直、あんなに自分のもののようにできないと思います」

今はベンチで控えている白瀧だった。小林と同じ見解に至った彼は藤代と東雲に報告し、情報を共有する。

「なるほど。盟和も随分と厄介な選手を獲得したものですな」

——まあ私達と言えることではありませんが。藤代は笑いながら言った。

そこは笑うところではないだろうと誰もが心の中でツツコムが、藤代は気にも留めず、すぐに表情を元に戻した。

「ですがそれでは松平さんでは厳しいかもしれませんね。やはりここは動くべきか——うん？」

「……盟和、オールコートをやめましたね」

さすがにここは動くべきだろうと藤代が判断した直後。

盟和のデイフェンスに異変が生じた。いや、ここは元に戻ったと言うのが正しいだろう。

先ほどまでオールコート・マンツーマンを展開していた盟和がデイフェンスの方針を変え、全員が速攻に備えて戻っていく。

（一時的なものなのか、それともこれも彼らの作戦でしようかね？ 果たして今度はどうするつもりですか岡田さん？）

試合の様子を見て、まずはこの盟和の行動の真意を察してからの方がよいだろうと藤代は判断した。

そして視線を盟和の監督・岡田へと向ける。彼はどつしりとベンチに身を構え、作戦の行く末を見守っている。

（この第一Qをどのような形で終わるかに試合の行方が懸かっていると言っても過言ではない。確実に大仁多を沈めろ、お前達！）

岡田の心中では激しい熱意が広がっている。

そう、盟和にとってはこの第一Qを含め前半戦が全てであるといってもおかしくない。レギュラーが全員先発出場している盟和に対し、大仁多はまだ余力を残しているのだ。

最大戦力とも呼べる白瀧は勿論の事、不安要素があるとはいえゴール下で無類の力を発揮する光月。さらに準決勝で力を見せ付けたロングシューターの神崎が控えている。

他にも経験豊富な控えメンバーがおり、交代要員の質は間違いなく盟和が負けている。

だからこそ彼らが出てくる前に点差を開き、追いつかれないようにとあらかじめ選手達に厳命していた。

「もうオールコートは終わりか？ それとも最後まで体力が持ちそうにないのか？」

「馬鹿にすんなよ。まだまだ俺達はいけるぜ！ よく見てろ！」

小林の挑発に勇作は強気に返答する。たしかに元気はあり余っている様子だった。

おそらく何か仕掛けてくるだろうと小林は考え、いつきても大丈夫なようにと思考をクリアにする。

大仁多の攻撃。オールコートがなくなったため再び中澤がボール

を保持し、デイレイドオフエンスを組み立てようとする。

「さあ、行くぜお前ら！ 氣い抜くんじゃねえぞ！」

『おう！』

そこで勇作を初めとした盟和の五人が動いた。

「ツ——！ これは！」

「2—3ゾーンか？」

前衛に細谷と金澤。後衛右に古谷、左に勇作、中央に神戸が配置される。

陣形は有名なゾーンディフェンスの一つである2—3ゾーンであった。

（今度は徹底的なインサイド封じか？ ……にしても、やけにパス出しづらい位置にいるなこいつら!?!）

中央の中澤は細谷にボールを取られないようにとドリブルを止め、保持に専念した。

そして同時に敵味方の位置把握も忘れない。

現在大仁多は中央に中澤、右に山本、左に小林、ハイポストに松平が、ローポストに黒木がいる。

だが盟和の選手たちのポジションが中々厄介な場所であった。

細谷は中澤をマークし、金澤が小林と松平のほぼ中間でパスをカバーするようにおり、中澤のドリブルだけでなく二人のパスを警戒している。

さらに古谷もスリーを警戒してか山本のすぐ近くで待ち構え、神戸が金澤と共に松平を挟むように立っている。勇作は一番ゴール下に近いポジションで黒木の動向を観察していた。

そのため陣形が少し斜めに偏っている。パスをさばこうにもすぐにヘルプがついてしまうような陣形になっていた。

（小林さんは——10番^{金澤}の位置取りが邪魔だし、オフエンスが小林さん主体になっていたから一度組み立てなおした方がいいか）

「山本さん！」

「っしー！」

残り十二秒、中澤は思考の末山本にパスをさばく。

ボールを手にしトリプルスレッドを取り、さらに腕のフェイクを入れ古谷を惑わす。

「いかせねえよ！」

「なっ……」

だがそこに中澤のマークについていた細谷がチエック。

仕掛けようとしていた山本は動きを封じられてしまった。

（ダブルチーム!? でもこれで中澤のマークが……）

（……いや、違う!）

己の守備位置を無視したかのような細谷の行動。

しかし動いたのは細谷だけではなかった。細谷が山本のマークについたのと同様に金澤が中澤のマークにつき、さらに細谷の到着を待っていたかのように今度は古谷が流れるようにローポストのカーバーに入る。

（形そのものが動いた!）

全体が動いたことで左ウイングの小林はフリーになったが、神戸が中央に立っているためにスキップパスは出せない。

他の四人も盟和のディフェンスを振り切れていない。

「——ッ、松平!」

中央にボールを入れる。カットされることなく松平にボールは通ったが、安心するにはまだ早かった。

「チエック!」

「詰める!」

すかさず盟和の包囲網が襲い掛かる。細谷・金澤・神戸の徹底したマークが行く手を阻んだ。

（こいつら!）

（ボールが動いた瞬間動き始めてやがる! フリーにさせない気か!）

「それなら!」

これ以上の保持は困難と判断した松平はマークをかわしトップの中澤に戻す。

すると中澤はマークが詰め寄る前に左ウイングの小林にパスをさ

ばいた。

「ナイスパス！」

（小林か！）

「させねえ！」

対するは勇作。ハンズアップによりパスコースを塞ぎ、自由を奪う。

（……黒木は遠いし松平も厳しい。俺が行く！）

パスを出すことが難しいと判断すると小林は仕掛けた。

勇作を左右に揺さぶり、隙を突きゴール下へカットイン。勇作の左横を行った。

「悪いな、そつから先は行き止まりだ！」

「なにっ!？」

だがすでに神戸と古谷が待ち構えていた。

勇作を加えた三人でトライアングルを形成し、小林のドライブを封じる。

「これは！」

「隙あり！」

「しまっ……」

一瞬見せてしまった油断。その間に勇作が小林からボールを奪う。

大仁多の反撃は失敗に終わった。

「よっしゃあ！ 今度こそ速攻！」

先ほどのような失敗はしないと勇作が自ら最前線へボールを放る。

飛び出したのは細谷。中澤も負けじと並走する。

細谷にボールが通る。他のメンバーはまだ後ろを走っている為間に合わない。中澤と一対一の状況のまま細谷はゴールへ一直線に切り込んだ。

（止めてやる！）

先に細谷が跳ぶ。レイアップの構え、フェイントではない。

中澤もこれ以上の失点を防ぐために後退しながら跳躍し、両腕を伸ばした。

真正面のシュートコースが腕に隠される。すると細谷は空中で

ボールを右手から左手へと移すと中澤の右腋を通すように伸ばし、空中に軽く放る。

(くそー・ダブルクラッチか！)

細谷のダブルクラッチ。

ふんわりと浮かんだボールは小さな弧を描いてリングを潜る。

(大仁多) 10対19(盟和)。盟和高校、さらに大仁多を突き放す。

「決まった！ ナイツシュ細谷！」

「速攻を確実に沈めた！ これで九点差だ！」

流れ途切れず。さらに盟和が優位な展開を繰り広げていく。

「ちっ……」

「……中澤、俺が突破しよう。ボールをくれ」

「は、はい！」

敵のゾーンを突破すべく、小林が中澤からボールを受け取る。

今度は小林がトップに、司令塔として盟和のゾーンの突破を図った。

だが、今度は細谷と金澤の二人がダブルチームで侵入を阻む。

「ッ!？」

「駄目だ、捉まった！」

「——山本！」

すかさず小林は山本へとパスをさばく。盟和のディフェンスも反応するがその前に山本はローポストの黒木へ。マークが詰め寄る前に縦に敵陣を裂く。

「つながった！」

「撃て、黒木！」

この機を逃さず即座にシュートを撃つ。

「ッ……！」

「いや、駄目だ」

だがシュートを撃つ黒木の表情が歪む。

ボールの行方は——藤代が悟ったように、リングに嫌われた。

「それが盟和の狙いなんですよ」

「り、リバウンド！」

「任せとけ！」

かろうじて松平が反応し、ボールを奪い取る。

着地と同時にパスアウト。再びボールを回していく。

しかし盟和のディフェンスの攻略法が見つかったわけではない。

「……より0度に近い位置に、シュートが決まりにくい位置に相手を追い込んでいく。

より狭いスペースでのプレイでオフENSEの自由を奪う。

ドリブルは時にはダブルチームで、パスはディナイで封じる。

マンツーマンディフェンスと2―3ゾーンディフェンスを組み合わせたディフェンス——マッチアップ2―3ゾーンか」

盟和のディフェンス——マッチアップ2―3ゾーン。

よほど鍛えこんできたのだろう。選手達の動きも実に精密であり連携にミスがない。

かろうじて中澤のスクリーンを使い、小林がマークをかわしミドルシュートを撃つが……

「決めさせるかよー！」

「……勇作か！」

勇作のブロックショットが炸裂する。得点に繋げることができなかった。

転々とするボールを山本が確保し、中澤に繋げる。ゆつくりと攻撃を再展開するものの突破口は生まれない。

「なるほど。小林さんは体が大きい分あの狭い領域では動きにくい。盟和のインサイドに囲まれたらシュートも困難だ。

かといって中澤さんではあのダブルチーム突破は難しいし、白瀧さんもまだ司令塔は不慣れ。トップであるような徹底的な司令塔潰しをされたら難しいだろう。中に入ってもあのフロントラインに捉まったら対応策も限られてくる。

たしかに有効な策だ。シュートを止めるのではなくボールの供給を止め、そしてシュートの成功率を下げるつもりか」

盟和の目的は少しでもシュートの確立を下げるためにオフENSEを0度に追い込むことだ。

体格の良い小林はダブルチームに捉まり、中にボールを運べない。中澤ではあの包囲網を突破できない。白瀧ならば突破は可能かもしれないが、司令塔としての経験は浅い。オールコート2―3ゾーンのシステムを攻略することができずに盟和のインサイド陣に捉まれば、小林ほどの身長がない白瀧も攻撃失敗する可能性がある。「……オールコートマンツーマン。そしてマッチアップ2―3ゾーン。」

「これがお前達が大仁多と戦うために準備してきた作戦か」

「ああ、そうだぜ。シュートを撃たせない。シュートを成功させない。そしてインサイドで勝つ。」

感謝しろよ。お前を倒すためにここまで考えて、そして練習してきたんだからな」

「そうか。ありがた迷惑という言葉を知っているか？」

「その言葉があるということは知っているぜ？」

小林の指摘に勇作は隠す素振りもなく、堂々と答えた。挑発に乗ることもなく淡々と返し相手の焦りを促す。

思わず舌打ちしてしまう。この現状は決して良いものではない。

再び山本にボールが渡り、右ウイングから侵入。今度は自分でミドルシュートを沈めた。

「決めた！ 山本さんナイツシュ！」

（大仁多）12対19（盟和）。大仁多が約1分の時間を費やして攻撃を決めた。

かろうじてチームの勢いを繋げる山本のオフENS。だが問題は解決しない。

「攻撃は決まったが、逆サイドに攻撃を展開できていない。やはり中央の突破力が必要か」

藤代が不安視しているのは攻撃が偏っていることだ。

盟和のディフェンスはトップから両ウイング、そして0度へのディナイは緩い。その代わりにリターンパスや逆サイドへのスキップパスに対しては厳しくディナイしている。

そのために一度中央からボールを入れると攻撃が偏ってしまうの

だ。この問題を解決するためには中央から突破し両サイドへのボールの供給を可能とすることが必要となる。

「だが、大仁多でもそれは無理だろう。むしろ小林や白瀧という選手がいるだけでも十分以上というものだ。」

小林の司令塔としての能力、そして白瀧の突破力。両方を兼ねたP Gがいれば可能だろうが、それは贅沢な話だ」

岡田は自軍の作戦の成功を確信し、満面の笑みを浮かべる。

大仁多の司令塔である小林と中澤、そして新たにその一端となった白瀧でも無理であろうと考えたからだ。

「よくやった山本!」

「ああ。……なあ、小林」

「うん?」

得点を決めた山本に拳を突き出す。

山本もそれに応えて拳をあわせると、付け加えるように小林に言った。

「まだいけるだろ? ここで踏ん張らねえと、相手に調子に乗られるぞ?」

「……そうだな」

口角を上げ、視線をちらりと勇作に向ける。

たしかに不利な状況だが持ち直さなければこのまま試合を制せられてしまう。それだけは防がなければならなかった。

「――よし! デイフェンス! 一本集中!」

「ハンズアップ! 声出していけ!」

「へっ。……絶対に追いつくぞ! 止めるぞ!」

頬を叩き、集中を高めると小林は声を張り上げ、山本も味方を鼓舞する。

松平も二人に続き全員に声をかける。

今コートに立っている三人の三年生が大事な正念場で奮起を促した。

(だけどこっちも決めなきやばいんだよな)

対し、ボールを運ぶ細谷も心中では熱くなっていた。

ここで点差を放すことができれば優位に立てるだろうという思いが彼の動きを洗練させる。

中央からのドリブル突破。中澤の横を抜き去る。

あつという間にスピードに乗る。大仁多のマークが迫るが、細谷は半身後ろに向け、大きくパスアウト。

外の金澤へ。

(もらった……！)

「させるか！」

「嘘?!」

スリーが放たれた瞬間、ボールに山本の指先が触れる。

予想外の衝撃により軌道が変化。空中で勇作がボールを確保する。

「しつこい！ だが……！」

ローポストの勇作からハイポストの古谷へパスが通った。

「撃たせん！」

「……うるさいなあ。まったく」

松平が素早くチェック。先ほどよりも反応が早い。

そんな相手に嫌気がさしたのか古谷は乱暴にボールを叩くと――

「あんたじゃ止められないんだよ！」

再びドリブル突破からステップバックシュートへ移った。

「ッ!!」

やはり突然距離が開いたために松平は反応できない。

それでもなんとしてでも止めてみせると前進。腕を伸ばす。

その結果、彼は古谷の手からボールが放たれた瞬間――

「うおおおお!!」

仲間の掛け声に少し遅れ、バチツとボールを弾いた音を耳にした。

「なっ――!?!」

「小林！」

「あまり調子に乗るなよ後輩」

「……やってくれるじゃん先輩」

ブロックしたのは小林だった。

相手の動きを見切っていた小林は古谷のシュートを防いだ。

「リバウンド！」

「げっ——！」

「やばい、ゴール下に黒木しかない！」

だが、小林と松平がシュートブロックに向かった為リバウンド争いに参加できるのは黒木だけであった。

さすがに黒木だけでは勇作と神戸に対抗するのは難しい。結果、神戸のスクリーンアウトによって黒木の動きが封じられ、勇作がチップインで得点を重ねた。

(大仁多) 12対21(盟和)。盟和高校が先に20点台に得点を載せた。

「やっちまったな」

「……すまない」

「いや、十分だ。一つ守りやすくなったからな」

古谷に二人もディフェンスを裂いてしまい、手薄になったゴール下から得点を許してしまった。

だがそれよりも古谷を止めたことに意味があると小林は前向きに捉え、味方を励ました。

「……古谷を止めたか。それも失点の後で」

盟和のベンチ、岡田から笑みが消える。

得点源の一人であった古谷の攻撃が防がれたこと。この結果が彼から余裕を消した。

「それに、不利な状況下で決して大仁多の選手達が崩れない。これは、まさか……」

そして予想以上の大仁多の選手達の対応によって。

盟和の思惑通りに試合が運んでいるはずだというのに、大仁多が想像以上に堪えている。

まさか流れが変わってしまうのではないかと、岡田は危惧していた。

そして彼の予感半分の中した。

ここから約二分間、両チームとも無得点という我慢の時間が続いたのである。

大仁多は盟和のディフェンスを完全に攻略することができず点差を縮められない。盟和も大仁多の必死のディフェンスを前に攻撃が防がれ点差を広げられない。

お互いにディフェンスリバウンドを制することで攻撃が終了。均衡状態が続いた。

「……意地と意地の勝負だな」

両校ともディフェンスがオフENSEを圧倒している状態。

第一Qからお互い譲れぬ戦いが続いている。

一瞬たりとも油断を見せることは許されない攻防。

観客席の大坪は先日行われた秀徳と誠凛の試合を思い出しながら口を開いた。

「第一Qも残り時間が少ない中、試合が停滞した。

流れを掴んでいた盟和だったが大仁多が取り返したわけではない。しかしこれ以上の失点を許さない」

「これ、辛いのは大仁多ですよ？ 相手のディフェンスシステムの攻略法が見つかっていないなか、よくやっていますよ」

精神的に辛いのは大仁多高校であるはず。

突破口が見えない中でよく奮闘している。彼らを動かしているのは意地であろう。負けるわけにはいかないという、王者としての意地。

高尾も一年生ではあるものの、秀徳という多大なプレッシャーがかかるチームで戦っているからこそ共感できた。

「……いや、おそらくそれだけではないだろう」

「え？」

「たしかに意地もあるだろう。だがそれ以上に彼らを支えているのは……」

傍観を決め込んでいた緑間が口を開く。

大仁多の選手達の戦う姿を見て、そして大仁多のベンチを見て彼が発した言葉は――

「チームメイトへの、そして監督への信頼なのだよ」

かつて己が持っていた、自分から捨てたものだった。

まだ頼れる仲間がベンチにいるということ。そしてこの突破口から導いてくれる監督がいるということ。

彼らが控えているからこそここまで奮起できるのだと緑間は言った。

「……………へえ」

「な、何なのだよ」

無言でただじっと自分を見つめる高尾に、緑間は反応に困って尋ねた。

「いや、お前の口からそんな言葉を聞くとは思わなかったから」

「どういう意味なのだよ!？」

「今日の占いは『仲間と仲良くすること』とでも言っていたのか?」

「キャプテンまで!？」

「ププッ!」

普段の彼からは到底考えられない発言。高尾、さらには大坪まで加わり緑間を茶化した。

「ワリー、ワリー。別に可笑しかったわけじゃねえんだ。

でも、ちよつともう一回言ってくれない? 『たしかに意地もあるだろう』のあたりからさ」

「……………ふん。誰が言うか」

『チームメイトの、そして監督の信頼なのだよ』。……………ブフッ!」

「たーかーおー!!!」

自分の物まね、それも噴出すほど笑い出した高尾を緑間が許すわけもなく、右腕で高尾の肩をつかむ。

このような場面でも利き腕を守るところはさすがと言うべきだろうか。

「これ以上の侮辱は許さん!」と緑間は高尾の口を塞ごうとするが、高尾の体の震えは止まることを知らなかった。

「……………だが、この均衡も第一Q終了までは続かないだろう。

残りの約二分。試合が動くとするならば——おそらく最初にこの沈黙を破ったチームに流れは傾く」

二人を沈め、今一度大坪は試合へと意識を向ける。

第一Qラスト二分。流れは最初に得点したチームが掴むだろうと。そして試合が動きを見せた。

「リ、バツーン！」

「ちっ！」

「よっしゃあ！ 勇作、ナイス！」

勇作がオフエンスリバウンドを制したのである。

ここにきて盟和のフロントラインが力を発揮し始めた。

「うおおおお！」

「させるかあ！」

着地、そして再び跳躍。勇作の体が空中に躍り出る。

小林も跳ぶ。高さは互角。身体能力では決して負けていない。

なんとしてもブロックしてみせる。——その思いが、小林を焦らせたのだろうか。

審判の笛が、鳴った。

「ッ——！」

体勢を崩すことはできた。しかしシュートを止めることはできなかった。

ボールはリングをくるくると一回転し——リングを潜り抜けた。

「ディフェンスファウル！ 白4番！ 小林 バスケットカウント、ワンスロー！」

勇作が得点を決め、さらにバスケットカウントを獲得した。

（大仁多） 12対23（盟和）。二分ぶりの得点である。

「決めたあ！」

「第一Q二分を切ったところで、再び試合が動き始めた！」

「バスカン、三点プレイ成功！」

我慢の時間はもう終わり。そう告げるように盟和のベンチが盛り上がる。

「……すまん！」

「ドンマイ！ リバウンド頼むぞ！」

仲間に頭を下げ、小林もセットに入る。

（焦りもそうだが、やはりまだゴール下の動きが慣れないか）

彼の様子を見た藤代は悔しそうに顔を潜めた。

普段はゴールから離れたポジションで戦う小林に厳しい仕事を任せてしまったと感じたからだ。そして彼は立ち上がる。

勇作のフリースロー。審判からボールを受け取った勇作は落ち着いて一本を静める。

(大仁多) 12対24 (盟和)。その差、12点。

「よっしゃー！ 一気に畳み掛けるぞー！」

勇作の掛け声と共に、オールコートマンツーマンが再び展開される。

またしても厳しいチェック。パスコースは制限され、突破することも難しい。

ボールを入れることはできたものの、中澤がさばいたパスが金澤に弾かれる。

山本と金澤が追いかけるがボールはラインを割った。

「いいぞ、金澤！ ナイスディフェンス！ その調子——」

『大仁多高校、タイムアウトです！』

「——だ？」

勇作の仲間を讃える声を遮って、ブザーと審判の音が響き渡った。

先にタイムアウトを取ったのは大仁多高校。流れを再び盟和に譲る前に、藤代が動き出した。

「なんだ、せっかく勢いに乗ったと思ったのに」

「久しぶりの得点だったしな。いやらしいタイミングでタイムアウトとるな、大仁多の監督」

神戸も勇作同様このまま攻めようと意識していたため、がっかりした素振りを見せつつベンチに腰掛けた。

他のメンバーも同様で、細谷は横目で藤代の姿を見た。

もう一度流れを取ろうと考えていた矢先、出鼻を挫いた相手を。

「第一Q、よくここまで奮起してくれた。均衡を破ったのも大きい。

ディフェンスはこのまま続行。ただオールコートは控え、状況を見て行え。体力の酷使はまずい。ハーフコートはマンツーマン2—3ゾーンだ」

「はいー」

「それとオフセンス。今日は相手のシューター、山本も好調だからな。前半はもつと中で攻めていこう。」

古谷・勇作・神戸。お前達三人のフロントラインが鍵だ。どんどん勝負していけ！ リバウンドも譲るな！」

『おうー！』

岡田は集中力の乱れが見え始めた選手に一言かけると残り時間の作戦を指示する。

だが基本方針が変わりはなかった。ここまで大仁多を相手に優位に進めている。このまま勝負できると信じているからだ。

彼らが士気を維持している中、タイムアウトを宣告した大仁多では

「そろそろ、攻めていきましようか」

藤代が攻守転換の合図を出していた。

「ディフェンスはマーク交代です。小林さん、あなたは古谷さんのマーク、松平さんは勇作さんのマークをお願いします」

「わかりました」

「うっすー！」

「古谷さんの技のこと、わかっていますね？」

「はい。大丈夫です」

小林に確認するが、問題はなかった。彼も古谷のシュートを見切っている。

たしかに瞬時にスペースができてしまうステップバックシュートは厄介な技術。だが身体能力にすぐれ、高さもある小林ならば止められると確信があるからだ。先ほど実証できたというのは大きかったのである。

「ただ、オフセンスはどうしますか？ 盟和のあのディフェンスを破るのはちよつと難しいですよ」

「ああそのことですが——言い忘れていましたね。タイムアウト後、選手交代です。中澤さん、一度ベンチに下がってもらいます」

「ッ！ はい、すみません！」

「いえ、よく粘ってくれました。当初の目的通り時間を潰しながら攻めた。ありがとうございます。次の出番まで休んでいてください」

ここで選手の交代。試合開始からディレイドオフエンスを繰り返した中澤が交代することになる。

盟和に押されている展開、自分に責任があると中澤は謝罪するが、中澤は自分の役割をきっちり果たしている。ゆえに藤代は彼の功績を讃え、そして次の出番まで鋭気を養うように伝えた。

(……となると、小林を司令塔に戻すか)

山本は視線を小林に向ける。

中澤をベンチに下げるということは司令塔のポジションが空くということだ。

そうなると第一候補は小林である。白瀧を出すのはまだ早いだろうし、西村もまだ一年。彼に任せるのは責任が重すぎる。

ならば小林を本来のポジションに戻すこと。それが第一だと思えた。

それならば交代ではいるのはフォワードの選手だろうか、まさか光月を出すのだろうか。様々な考えが思い浮かぶ。

「そして中澤さんに代わって出てもらうのは——あなたです。大丈夫ですね?」

そんな中、藤代は一人の選手の肩に手を置き、交代の指示を出した。

「——へ?」

「ほう」

「マジですか?」

告げられた選手を含め、皆が少なからず動揺した。

「まあ妥当な判断ですよね」

「ああ。この状況を、乗り越えるためにはな」

白瀧と小林を除いて。

二人はこの状況を打ち破るには彼が最も適任であろうと理解していた。

『タイムアウト終了です!』

丁度一分が経過し、ブザーが鳴った。各チームの選手達がコートに戻る。

そんな中、勇作は大仁多のベンチで先ほどまで出場していた中澤の姿を捉えた。

(10番がベンチ? 中澤 デイレイドオフエンス 遅 攻はやめたのか?)

先ほどまで司令塔として慎重なボールの供給を行っていた中澤の交代。

不思議に思った勇作は周囲を見回す。

すると彼はスコアラーに選手交代を申請している一人の選手を発見した。

「——あいつは!」

「はい。交代お願いします」

背番号から選手を判別する。

彼はスコアラーへの申請を終えると、一言白瀧に声をかけられ、そしてコートに入ってきた。

「さて、と——」

落ち着いた状態で、しかし瞳には闘志を込めて彼は現れた。

——この逆境を突破するために。

第四十二話 背中を追って 背中を押されて

「中澤さんに代わってあなたにコートに入ってもらいます」

タイムアウトによる作戦の指示。大きな指示があったのは当然のことながら大仁多高校の方であった。

藤代は一人の選手に戦況を変えることを期待し、彼に盟和高校のデیفエンス攻略を託した。

臙脂のユニフォームには大きく『14』と縁取られている。そう。彼は一年生ながら小林と中澤に次ぎ、三人目の司令塔^{ポイントガード}として大仁多の一軍の座を獲得した選手。

「頼みますよ、西村さん」

「はい！」

——西村大智である。突破口を切り開くために、西村がコートへの一歩を踏み出した。

その場で深呼吸をして緊張を振り払い、倒さなければならぬ敵の姿・盟和の選手達を見据える。

「……おい、西村！」

「え？ あ、はい。何ですか白瀧さん」

突如ベンチより白瀧に呼ばれ、西村は振り返り彼の元へ歩んでいく。

西村が目の前まで近寄ると白瀧は彼の両肩へと手をあて、無理やり体を反転。再びコートの方へと向けた。

「……あの、一体何でしょうか？」

行動の真意を理解できず、西村は首を傾げる。だが次に耳に届いた言葉で彼は理解した。

「——頑張れ」

「ッ！」

「悪いが今は共には戦えない。だから——頑張れ。戦って来い」

『頑張れ』と。その一言を自分に伝えたかったのだと。

「……はい！ 行つてきます！」

「ああ。頼んだぞ」

一段と引き締まった顔で西村は今一度コートに向かっていく。

後は言うことはない。白瀧もベンチから彼を見送る。表情を窺うことはしなかったが、白瀧にも彼の気迫は十分すぎるほど伝わった。

「なあ、あれでよかったのか？」

「うん？　よかったって何が？」

「いや、お前が呼び止めたくらいだから何か秘策でも教えてやるのかと思っただけだ」

隣に座る神崎が疑問を投げかける。

白瀧は質問の意図を理解できないようだが、神崎にいつては彼の行動の意図の方が理解できなかった。

なぜならば今白瀧はただ応援の言葉をかけたにすぎない。わざわざ呼び止めてまで言う必要があったのかと思っただのだ。

「もつと何か指示してやった方がよかったんじゃないやねえの？」

西村だってプレイの心配だってあるだろうし。お前の口からアドバイスした方が……」

「いや、その必要はない。西村には、あいつには一言かけてやれば——それで大丈夫なんだよ」

「は……？」

苦戦が続く試合の中、神崎はチームメイトの心配が尽きない。

だが白瀧にはそんな素振りは一切見られなかった。神崎の言葉を聞いてなお、白瀧は微笑を浮かべて西村の後姿を見守る。

心配は必要ない。すでに西村は白瀧の言葉で戦意に満ち満ちていた。

「あいつは——14番、ということは——」

(大仁多の五人のルーキーの中で司令塔の選手)

(たしか西村とか言ったか。10番中澤と交代ということは小林のポジションはそのままだろう)

(だけどどうしてこの場面で14番西村が出てくるんだ?)

大仁多の選手交代。勇作をはじめこの交代に五人は驚愕と疑問を覚えた。

「……おい、14番についてのデータはあるか？」

「はい。大仁多高校の一年、西村大智。ガードの控え選手です。」

今大会ではスターター起用は一度もなく、二回戦の対沼南高校戦以降は出場記録はありません」

「やはり。ビデオでも特に彼の活躍は見られなかった。」

……だが、準決勝の13番^{神崎}の例もあるからな。決して侮れない」それはベンチでも同じであった。

岡田がマネージャーの情報を受け、さらに疑問に感じる。

未だに盟和のディフェンスシステムは崩れていない。それなのに交代で入ってきたのは無名の選手。この大会でも活躍したわけでもない。何故と感じるのは当然であろう。

だが準決勝・大仁多対聖クスノキ戦における神崎のような例外もある。決して侮るわけにはいかない。

「——細谷！ 金澤！ ディフェンス、厳しく当たれよ！」

ゾーン前列二人に呼びかける。たとえ一年生であろうとも全力で倒すようにと。

試合が再開する。山本がスローイン。交代して入った西村がボールを受け、運んでいく。

「お前ら！ きっちり止めていくぞ！」

「来た！ 盟和のディフェンス、マッチアップ2—3ゾーン！」

ハーフコートへ移行し、盟和のディフェンスは再びマッチアップ2—3ゾーン。

西村はトップから様子を見る。しかしディナイは厳しく、パスコースが完全に消えていた。

「……」

「おおっと！ 行かせない！」

勢いをつけドリブル突破を図るが、今度は細谷と金澤のダブルチームが彼を阻む。

「……………ふう」

半歩後ろへ下がりが、ドリブルを続ける。

彼のこの後退を細谷と金澤は攻めあぐねている証拠と受け取った。

「悪いな。ここから先には進ませねえよ」

「お前はここで止めてやる！」

笑みを深くしさらにマークを一段と厳しく、ハンズアップでパスコースも塞ぐ。

しかしより身動きが困難になる中で西村は落ち着いていた。彼の脳裏に——彼の帝光中学時代の記憶が思い浮かんでくる。

彼が成長する切欠となった、大切な記憶が。

「——ドリブルを教えて欲しい？」

「はい！ お願いします！」

中学二年生の秋。白瀧が負傷から回復して練習に復帰して数日が経った日のこと。

西村は練習後に自主練習でリハビリを続けている白瀧に声をかけ、彼にドリブルの技術を教わろうと試みた。

「いきなりどうしたんだ？ お前も一軍に上がったばかりで不安もあるだろうが、まずはきつちり体を鍛えた方がいいぞ。一軍の練習は量も密度もとんでもないからな」

突然の依頼に白瀧は焦らぬようにと彼を宥めながら話を聞くことにした。

西村は夏の全国大会後、先輩達の引退による繰り上がりによって二軍から一軍に上がってきた選手である。

だが、この時すでに二人は面識があった。彼らが二年に進級してすぐの二軍の練習試合、その試合に白瀧が同伴した際に二人は共に試合に出ていたのだ。

ゆえに白瀧は彼の能力や性格のことも理解したうえでまずは土台を作るように専念するべきと薦めた。

「わかっています。当然筋トレも続けます。けど、それだけじゃ無理

です」

「無理？ それはどういうことだ？」

「それだけでは俺は、耐えられない。このままでは不安に押しつぶされそうなんです！」

「……なるほど。レギュラー達のことを言っているんだな？」

「はい。だから、俺も何か武器が欲しい。そして一番自分に向いているのは何かと考えて……」

「答えに行き着いたか。……わかった。お前の考えはよくわかった」

だがそれだけでは無理だった。西村の気持ちと焦りに白瀧も共感し、基礎も怠らないうと判断して首を縦に振った。

——レギュラー、〃キセキの世代〃の圧倒的な力を目にし、そして彼らが姿を消したことでただでさえ彼の強いとは呼べない心は折れかけていた。

だからこそ何か支えになる強い武器が欲しいのだと。その考えは白瀧も重々理解しているつもりだった。

「そういうことならば俺も手を貸そう。ただし基礎も忘れるなよ」

「はい。ありがとうございます。リハビリの間で構いませんので……」

「そのことは気にするな」

白瀧が怪我明けで感覚を少しずつ取り戻そうとしていることも知っている。

その上で無理かもしれないと考えての依頼だったが、白瀧は彼の願いを受け入れた。

右腕のトレーニングの為に使っていたゴムチューブを置き、ボールを持って二人はバスケットまで移動する。

「……最初に聞いておくが、ドリブルで相手を突破する時に最も大事なことは何だと思う？」

「それは、純粹にドリブル技術とかボールハンドリングとか、後はスปีドとかじゃないですか」

「たしかにそれも当然ある。だがそれは体で身につけるものだ。じゃあ意識するべきことは？」

「意識？　つまりプレイ中に考えることってことですか？」

「そうだ」

これから習得するドリブルについて、白瀧が問う。

様々な要素が必要とされるがその中でも頭の中で意識することは何かと。

「俺は道を見つけることだと思う」

「……道ですか？」

「ああ。技術や力というものはすぐに身につかない。だからこそ、まずはすぐに効果を実感できるようにお前には『道』を意識してもらおう」

白瀧の答えは道を見つけることだった。コーンをディフェンスに例え、白瀧は説明を続ける。

「ディフェンスは相手とゴールの間に立っているだろう？　だからオフフェンスは突破する為には当然回り道をしなければならない。これはマークが一人であろうとそれ以上であろうと同じことだ」

「まあそうですね」

「だからこそオフフェンスが最も意識すべきはゴールへの最短の道を見つけることだと俺は考える。」

その方が決めやすいからな。それができる選手は下手にスピードが速い選手よりもディフェンスを突破しやすいだろう。そして……」

最短の道。ディフェンス障害のないゴールへの最短の道、それこそが意識するべきことだと。

それだけではない。一度言葉を区切り、さらに白瀧は西村に意識するべきことを伝えた。

「そしてここでもう一つ意識すべきことがある」

「なんですか？」

「お前はオフフェンスがドリブルの際にファウルを取られるのはどういう時かわかっているか？」

「オフフェンスがディフェンスに接触した時、ですよ？」

「まあ確かに認識はそれでも間違っていない。だがもつと正確に言えば『オフフェンスからの接触によってディフェンスが影響を受けたとき』だ」

意識し、同時に注意しなければならぬこともある。

——オフエンスファウル。ドリブルの際に気をつけなければならないことである。

「だから本当はあまり衝撃がないのに、あるいはぶつかってもいないのに、ディフェンスがわざと倒れたりしてファウルを誘ったりするだろうか？」

あれは審判が『ディフェンスがオフエンスの接触による影響を受けた』と判断したからだ」

「ああ、なるほど」

「まあ今はオフエンスの話だからこの話は置いておくとして。つまり逆を言えば——接触してもディフェンスが影響を受けなければファウルは取られないってことだ」

「あー！」

プレイ中のファウルを取られる性質。それをディフェンスが利用してファウルを取ることがある。

だからこそ白瀧はそれを逆に利用してオフエンスがファウルを取られないドリブルを考えていた。

西村もその発想に驚きつつも有効性に気づいて納得している。

「いや、けどそんな簡単な話ですか？」

「そういうものだよ。影響と言っても明らかかなものでなければ問題はない。相手が倒れるとか、相手を吹っ飛ばすとかそういうことでなければな。」

……ここで話が戻るが、俺が言いたいのには『相手に影響を与えないゴールへの最短距離を見つけること』だ」

そして結論を出した。

それこそがこれから西村が意識することであり、身につけることである。そう言つて西村にボールを渡し、白瀧はディフェンスの構えを取る。

「それを無意識でもできるように体で覚えるんだ。もしもこれを意識することができるならば、お前はさらに先へ進めると思う」

白瀧の視線は西村に、そして彼の未来へ^先と向いていた。

こうして西村は白瀧との一対一の練習を積んでいった。そして彼は今――。

「……悔るな」

「うん？」

一言西村が呟く。俯いた状態での発言であったために相對している二人には届かない。

『当然だが相手の重心にぶつかっていけば審判はファウルを取る。しかし肩が当たる程度ならばファウルを取られることはないだろう。』

デイフェンスと軽く接触するくらいが丁度良い。見つける、ゴールへの最短の道を』

今一度白瀧の教えを、言葉を思い返し、西村はゴールへの道を、障害がない最も短い道を探り出す。

――見つけた。相手をおわしつつゴールへと繋がっていく一本の道が西村の目に映し出された。

「そんなものじゃないんだー」

一瞬西村の上半身が左右に揺れる。

さらにボールを股の下を通し持ち手を変える――レッグスルー。

動きにつられ、二人のマークマンにわずかな動きのずれが生じた。

(その程度のデイフェンスで俺を止められるわけがないだろう！俺にバスケを仕込んだのは、あの白瀧要だぞ！)

そのわずかな隙を西村は見逃さない。

レッグスルーからクロスオーバーのコンビネーションドリブル。

ドリブルの勢いを殺す事無く、スピードに乗って突っ込んだ。

「なっ!？」

(こいつ、俺達の間狭い領域を――!)

ダブルチームのわずかな間を中央突破。西村の肩がわずかに細谷の体に触れるがお互いに影響は出ていない。

西村がマークを突破する中、古谷は松平のスクリーンによって動き

を止められている。

「ちいつー！」

やや遅れて勇作がブロックを試みるが、彼が跳んだ時には既にボールは放たれていた。西村のレイアップシュートが決まる。

(大仁多) 14対24(盟和)。大仁多の得点も久々に動きを見せた。

「よっしやあー！」

初得点を記録し、西村が吼えた。

普段は大人しいためあまり見られないが、こちらの方が彼の本分なのかもしれない。

「……俺とのコンビネーションをはじめ、チームプレイが多いせいで勘違いするやつが多いが。」

西村は純粋なPGタイプの司令塔ではない。あいつは、スラッシュタイプPGのPGだ」

一言にPGと言っても選手によって種類は多種にわけられる。

小林のように何でもそつなくこなすオールラウンダータイプ。

一般的に味方へのパスやチームプレーを重視する、中澤などが当てはまるピュアPGタイプ。

細谷のように己も積極的にシュートも沈めていくシュータータイプ。

そして西村はこのどれにも当てはまらない。彼は自らドライブで果敢に切り込んでいくスラッシュタイプである。

「あいつが見ているのは最短の道。速く、無駄のないドライブで敵に攻めかかる」

白瀧さえ認める西村のドライブは、盟和のディフェンスを攻略するには十分な威力を持っていた。

「まだあんな選手がいたのか。細谷と金澤のわずかな隙間を突破するとはな」

「監督。今、データを見て気になることがあったのですが……」

「何だ?」

一瞬で盟和ディフェンスを突破した西村のプレイに、岡田もヒヤリとした。

そんな中、彼の隣に座るマネージャーがデータから気になる情報を目にし、報告する。

「白瀧ばかりに気を取られていましたが、彼も帝光中学出身のようですよ」

「なに——!?!」

西村が中学時代、全国三連覇を果たしたチームに所属していたという情報を。

ベンチにさらなる驚愕が広がる中、プレイは再開される。

ファーストブレイクをブロックされると、方針を変更。細谷のゲームメイクの下、盟和は小林の厳しいマークを受けている古谷を中継とし、中から外へ。

パスを受けた細谷がスリーを放つ。背丈では西村よりも分がある。ブロックを受けず、スリーを沈めた。

「よっし、細谷ナイツシュ！」

(大仁多) 14対27 (盟和)。残り40秒を切り、点差が13に。

「ドンマイ！ 取り返そう！」

おそらくこれが第一Qラストの攻撃となるだろう。

ハーフコートは慎重にボールを運ぶが、盟和のマッチアップゾーンを見るとトップの西村が果敢に仕掛けていく。

(また、中央突破か!?)

わずかに西村の体が沈む。

それを見て金澤はドライブを警戒して後ろに下がり腰を落とした。

すると西村は視線をそのままにボールを体の後ろに、ビハインドパスをさばく。

「あっ——!?!」

(しまった！ パスコースが空いちまった！)

「ナイスパス！」

金澤が動いたことによりディナイも効果をなくしてしまった。

ボールは西村から小林に渡り、小林のミドルシュートが炸裂する。

(大仁多) 16対27 (盟和)。大仁多高校が最後の攻撃に成功した。

「……まさか、本当にこんな選手がいたのか」

岡田は先ほどの自分の考えが目の前で現実となつて起こつたことに驚愕を隠せなかつた。

マッチアップ2―3ゾーンを攻略する突破力と、そして司令塔としての能力。その両方を持つた選手が出てきたのだから。

「――ドッジング。進行方向とは逆の脚を踏み出す細かな方向転換。

フェイクの一種でもありますが、西村のように小さく敏捷性のある選手がやると、どうしても動きにつられてしまう」

「小林、中澤。そして西村。この三人にさらに白瀧も加わることで多種多様なゲームの組み立てを可能としたか」

「厄介ですね。白瀧が司令塔のポジションもできるって聞いた時もやばかつたつすけど、あいつも相当つすよ」

観客席でも大坪が大仁多の隠されていた戦力を目のあたりにして目を丸くしていた。

同じポジションである高尾も彼の脅威を理解し、同じ学年の選手の姿を目に焼き付けている。

「つてか真ちゃん。あいつも帝光中出身つて言つたよな？ その割には俺全然あいつの話聞いたことないんだけど」

「……やつが一軍に上がったのは中二の全中後。丁度キセキの世代が実力を示した時だ。

そういつたチーム事情もあつて知られていなかったのだよ。ただ、一部の人間を除いてな」

「一部の？ というത്？」

同じ中学出身である緑間に話を振る。

彼の事情を知る緑間は隠す事無く事実だけを淡々と述べていく。

西村が世間に知られていない理由を。

「二軍の、公式戦での見せ場が少なく、やつの白瀧を立てようとする性格の為に広がってはいなかつた。

だが二軍の練習試合の際に白瀧がいない状況で西村が同行した際、やつの本来の戦いぶりからこう呼ばれていたという。――『神速の再来』と」

「なっ!？」

そして西村の真の実力を。

『神速の再来』。白瀧の後を追い、そして強さを得た者の代名詞である。

「くそっ！ だけど——！」

「ッ！ まだだ、来るぞ！」

「このままで終わらせてたまるか！ 行けっ！」

ゴールが決まった直後、すぐさま神戸がボールを拾う。

黒木が逸早く反応し、彼の目の前で大きく手を広げてコースを塞ぐも……ロングスローが放たれてしまった。

山形の軌道を描きボールがコートを飛ぶ。

「よくやった、神戸！」

「——細谷だ！ 細谷に通った！」

最前線の細谷がフロントコートでボールを空中で掴む。

残り数秒。最後の得点を盟和はこの速攻に賭けた。

「させるか！」

「っ、西村が回りこんだ！」

「とめろ、西村！」

スピードで勝る西村が細谷より先にディフェンスに戻る。

最後の攻撃を止めて士気を高めようとベンチからも声が飛ぶ。

（決めてやる！）

（止めてやる！）

様々な思惑がコートの中でひしめき合う中、細谷が、西村が跳んだ。

まっすぐにゴールへ向かうレイアップシュート。だがシュート

コースに西村の手が現れた。

その瞬間、細谷は空中で持ち手を変えてダブルクラッチで西村のブロックを掻い潜る。

「あっ!？」

（しまった——!）

（もらった！ 得点！）

ブロックをかわした細谷はシュートを放つ。

「あ——!!」

読み負けた。細谷の冷静さが一歩上だった。

ゴールに向かってふわりと緩やかにボールは向かっていく。

そしてそのボールがリングを潜り抜ける――。

「させるか！」

その前に、山本が叩き落とした。

「なっ!？」

「山本さん！」

ボールはボードに当たり、無人のコートに落ちる。

転々とするボールを古谷と小林、さらに勇作が追うが……

『――第1Q終了です!』

審判の笛が鳴った。第1Q終了を知らせる合図が、コートに響く。

大仁多、最後の速攻を守り抜いた。

「すみません。助かりました！」

「へっ。スピードはお前だけの専売特許じゃねーぞ」

山本も西村と同様に細谷の動きを捉えていたのだ。

彼もスピードを武器とするスラッシュヤータイプ。そう簡単に失点

は許さない。

第1Q、(大仁多)16対27(盟和)という結果で第2Qを迎える。

「……第2Qのディフェンスは、マッチアップ2―3ゾーンとマンツーマン、この二つを使い分けていこう」

試合は二分間のインターバルに突入。

盟和高校の岡田は、ベンチに腰掛ける選手達の前で作戦の変更を指示していた。

マッチアップ2―3ゾーンとオールコートはどちらも強力なディフェンスシステムだが、体力を大きく消費する。

このまま継続しては後半の勝負どころで力を発揮しきれないと判断したのだ。特にオールコートはデメリットも大きい。

「たしかに14番^{西村}の登場で崩れかけたが、ゾーンが完全に意味をなく

したわけではない。

積極的にボールマンに当たっていい。下手に守りに徹するよりも効果的だろう。まだ流れは途切れたわけではない」

それならば所々で仕掛けていく方が効果的だろうという判断であった。

第一Qを最後までリードを保てたという状況もある。ならばこのまま流れを維持しよう。

「そしてオフエンスだが……古谷が小林を誘き寄せてくれた今、お前が一番可能性が高い。

第二Q、ここからはさらに勇作主体のオフエンスでいこう。細谷、ボールを集中させてやれ」

そしてオフエンスでは、エースで畳み掛ける。

相手の一番厄介な選手である小林は古谷のマークについている。今ならば第一Qよりも注意は緩い。

「……さすが監督。これでようやく俺の茜に活躍ぶりを見せられるというものです」

「だからお前のじゃねーよ」

監督の絶対的な信頼を受け、勇作は笑みを深くする。

細谷のツツコミでさえもう耳には届かない。

必ず妹の前で得点を挙げてみせようと、盟和のエースは闘志を滾らせた。

(しかし、西村大智か)

エースに期待を寄せる一方で岡田は視線を大仁多の西村へと向けた。

(なぜ彼ほどの選手が大仁多に来たんだ？ スカウトという話がなかったのなら、彼が大仁多に来る理由はないはず。いやむしろ大仁多を選ばない理由の方があろうに)

西村が大仁多に来た理由が理解できなかったのだ。

今年の大仁多は全国区のPG・小林がいる為にPGのポジションではレギュラーを取ることはとても難しい。それを知っているのなら同じポジションである彼が大仁多を自分から進学先に選ぶことは

しないはず。

さらに帝光中の選手だったならば、東京都内の高校から声をかけられてもおかしくはない。

それなのになぜ彼は大仁多に進学したのかと。

事実、西村は東京都の強豪校である泉真館高校、鳴成高校から声をかけられていた。だが彼はそれらの誘いを断り、一般受験で大仁多高校に進学する道を選んだ。

しかし理由は単純なものだった。彼が大仁多を選んだ理由は——ただ一つ。

一方、大仁多のベンチ。

「まず、もう一度西村さんをお願いしましょうか」

「はいー」

藤代は最初のオフエンスを西村に託す。

いきなりの指示であったが、第一Qで気持ちも高ぶったのか西村ははつきりと首を縦に振る。

「第二Qは盟和の攻撃から再開します。ディフェンスはマンツーマンを続行。敵の速攻を警戒してください。」

オフエンスは西村さんを主体に組み立てましょう。相手の出方によって指示を出していくので、皆さんも準備は怠らないように」

『はいー』

ベンチメンバーにも声をかける。その中には白瀧と光月の二人も含まれていた。

「……まだ白瀧さん達には様子を見てもらいます。それまでは皆さん、頼みますよ」

本当のことを言えば今すぐにでも出したい気持ちがある。だがここで焦って無茶をさせるわけにはいかなかった。

藤代は募る焦りを殺し、監督としての仮面をつけて選手達に指示を出した。選手達も意図を理解し、顔を引き締める。

「西村」

「はい」

水分補給を行う西村の横に白瀧が立つ。悔しさと不甲斐なさが合わさったような複雑な表情が顔に出ていた。

「すまない。お前に無理をさせることになる」

「いえ。任せてください」

「ここからはあのオフセンスも組み立てていけ。あれならば、お前の突破力で得点もできるだろう」

「わかりました」

「——頑張れ」

「……はい！」

今一度声援を受けて、西村は気持ちを高めた。

白瀧の一言が、彼を高ぶらせる。かつての記憶を呼び起こす特別な一言なのだ。

西村のドライブの練習が続く中。彼の技術も増していったある日。

「——ッ！」

「うっ!?!」

わずかなステップに白瀧の反応が一瞬遅れた。

白瀧の右横を、肩がぶつかりながらも突破する。

(今——！)

感覚があつた。上手くいったという感覚が。

上達したという実感が湧いてきた。今ならばできるという自信が生まれた。

自然と笑みが浮かんできた。

「どうですか、白瀧さん！ 今の——」

師であり相手を務めてもらっている白瀧にも出来を尋ねる。

後ろを振り返り、笑みを浮かべて呼びかけるが——すぐさま彼の笑みは消えた。

「——白瀧さん!? どうしたんですか!？」

ボールを投げ出し、右肩を押さええてうずくまる白瀧の下に駆け寄る。

「ま、まさか!」

——怪我の再発。今の接触によって起こってしまったのか。最悪の事態が思い浮かび、西村の顔が真っ青になる。

再発が起こりやすいと聞いていた。それなのに自分の手で再び白瀧を傷つけてしまったのかと、後悔の念が浮かぶ。

どうしよう、どうすればよいのか。ただ焦りだけが増幅する悪循環が生まれる中。彼を救ったのは——

「——大丈夫だ」

他でもない白瀧だった。

右手を西村の背中に回し、ポンと叩いて立ち上がる。

「あっ……」

「ちよつとピクツとなって、あの時のことを思い出したただけだ。大丈夫だ、何も痛みはないよ」

心配を振り払うように笑みを浮かべる。

たしかに痛みはないようだった。どうやらあの時の衝撃を思い出してしまっただけらしい。

——よかった。西村は胸を撫で下ろす。

「さて、今のは切り返しもよかった。どうやら体で反応できるようになったみたいだな。

この調子だ。今の感覚を忘れないように、続けていくぞ!」

「え……」

だが、続けようと提案を受けてその気持ちも消えてしまう。

「なんで、ですか?」

「は? なんであって、こういうのは反復練習が大切だろ」

「そういうことじゃないです!」

何もわかっていない! 気持ちを言葉という形にしてぶつける。

自分を思ってくれての行動。その優しさが、西村には今はただ苦しかった。

「なんでそこまでしてくるんですか!? 俺、白瀧さんには何も返せないのに。世話にばかりなっているのに。」

今だって、また怪我してしまう恐れがあったのに。何も白瀧さんの為にできていない。それなのに、なんでそこまでしてくれるんですか!?!」

西村は、何も白瀧の為にできていない。それどころか迷惑をかけてしまっているという現状が苦しかった。嫌だった。

現に辛いことを思い出させてしまった。いつそ今の衝突を理由に辞めてくれてもいいとさえ思えた。それでも声をかけてくれる白瀧の気持ち理解できなかった。

それを聞いた白瀧はしばし悩み、その後やはり笑みを浮かべて言った。

「馬鹿なことを言うな。俺がお前の力になる理由なら、ちゃんとあるだろ」

「……なんですか?」

「簡単なことだ」

そんなものあるはずもないと、そう思いながらも先を促す。

「お前は俺を必要としてくれたから」

「……………は?」

一瞬、西村は何を言っているのか理解できずに呆けてしまった。

『白瀧を必要とする』。それはきつと帝光の選手ならば多くの者が抱いている感情だろう。むしろ必要としない人間の方が少ないだろう。なのに彼は何故ここまで嬉しそうに笑うのだろうか。理解が追いつかなかった。

だがそうさせた本人である白瀧は彼の変化を気にする事無く続けた。

「それだけで十分だ。それだけで俺は嬉しい。だから俺がお前に力を貸すのに、それ以上の理由は必要ない」

そう言っつて白瀧は笑みを浮かべる。大げさでもなければ嘘を言っているような表情でもなかった。

まるで本当に喜んでいるかのように。彼の言葉が真実であるかの

ように。助かっているのが西村の方ではなく、むしろ助けている側であるはずの白瀧であるというように。

「白瀧さん……」

何か言いたかった。力になれなくても励みになるような言葉をかけたかった。

だが中々言葉は思いつかない。何度も逆境を乗り越えてきた猛者にはどんな言葉が伝わるというのか。

薄っぺらな言葉では意味がない。もっと心に響くような言葉をかけよう。そう思って西村は口を開いた。

「……将来、変な女に騙されなくて下さいよ」

「は？ いきなり何の話だよ？ どうしてそんな心配がいるんだ？」

「女は皆女優なんですからね」

「だからどういうこと?! 女優?!」

——少なくとも、言葉に詰まったとはいえども今言うべきことではないと後悔した。

そしてそれから白瀧と西村の自主練習は続いていった。

技術が向上していく中、だが西村の不安が完全に消えたわけではなかった。どれだけ上手くなろうとも、絶望的なほどに力の差がある。『キセキの世代』に太刀打ちできるのであろうかと。

そんなある日のこと。西村は自分の胸中を白瀧に打ち明けた。

「まだ不安が消えない。またあの時みたいに絶望するんじゃないかって。」

自分ではどうしようもなく思えてしまうんです。……その時、白瀧さんは俺を助けてくれますか？」

女々しい願い、一方的な都合の良い言葉。それは他でもない自分がわかっている。

だがそれでも西村は白瀧の言葉を待つ。救いの言葉を。

「ああ。その時はちゃんと『頑張れ』って一言応援してやるよ」

「……え？ あの、それだけですか？」

もつとないのだろうか、西村は戸惑った。

てつきり『その時は助けてやる』と白瀧の性格から想定していたの

だが、完全に想定外であった。

「助けるとか、駆けつけるとか、そういうのはないんですか?! あれ、ひよっとして俺白瀧さんの中で評価低い!」

「何故そうなる? そういうことじゃなくて、お前にはそれ以上は必要ないってことだよ」

「……すみません、意味わからないです」

思わず適当にあしらわれているのではないかという思考が浮かび、白瀧に問いかける。

「今のお前にはもう目標があるだろう? “キセキの世代”を越えようという立派な目標がさ。」

目標がある人間は、目指す道がはっきりとした人間は、後押ししてくれる人間がいれば先へ進めるものなんだよ。

だからお前が困ったら俺が『頑張れ』って背中を押してやる。……お前はそれで目指す場所まで走っていけないか?」

だが違った。決して自分のことを評価していないわけでも、気にかけていないわけでもなかった。

むしろ理解してくれているからこそ白瀧は『頑張れ』と声をかけてくれる。背中を押してくれる。

彼の笑みを見て、自然と西村の表情にも笑みが浮かぶ。

「……できます! 俺は白瀧さんにも鍛えてもらったんですから!」

「それでよし! 後は走り続けるだけだ!」

そしていつの間にか、西村の目指す先に——白瀧の姿が映し出されていた。

いつか本当の意味でこの人の力になりたいと。そしてこんな風に強くなりたいと。

西村の中で憧れの感情が強くなっていた。

そして——三年の秋。決断の時が訪れる。

「白瀧さん!」

「お、西村かどうした?」

「桐皇、進学辞めたって聞きましたけど、本当ですか!」

「……耳が早いな。ああ、その通りだよ」

白瀧が大仁多の推薦を受けると耳にした西村はすぐさま白瀧の下に向かった。

『一体どこから情報が漏れたんだ』と暢気に不満を口にする姿に、西村は焦りを抱きながらも続ける。

「良いんですか？　だってあんなに桐皇に進学するって言っていたのに……」

「まあな」

「なのに、大丈夫なんですか？　だって大仁多って、栃木の高校じゃないですか！　それじゃ桃井さんとだって会うことは難しくなるのに。それなのに……」

白瀧が桃井に対して抱いている感情は知っていた。そのために桐皇を目指しているということも。

それなのに東京から離れた大仁多高校に進学するという道を選んで本当によいのだろうか。

何度も何度も聞き返す。だが白瀧は決して己の考えを曲げようと思わない。

「後悔しないようにと決めたことだから。確かに寂しくないわけではないが、もう決めたんだ」

その言葉は嘘だと西村は直感した。後悔が言葉の裏に感じ取れた。きっと彼でもまだ完全に割り切れていないのだろう。

それなのに白瀧はそれを表情には出してくれない。笑みを崩さない鉄壁の仮面。

どうしてこの人は自分の前では弱さを見せてはくれないのだろうか。

「だから大丈夫だよ」

「白瀧さん……」

もう一度西村の不安を振り払うように白瀧は言う。

西村が言葉が続ける前に、白瀧はさらに畳み掛けた。

「お前ももう受験生だろ？　人のことばかり気にするな。お前は受験勉強に専念しろ。」

辛いときは声をかけてくれ。俺に出来ることならば、俺も手伝ってやるからさ」

ひたすら悔しかった。自分では力になれないのかと。何も返すことはできないのかと。

辛いのはひたすらに目指していた目標が消えてしまった白瀧の方であるはずだと言うのに。彼にこんなことを言わせてしまった現状がただただ悔しかった。

「——ッ！ あの、白瀧さん！」

「どうした？ 何か他にまだ聞くことでもあるか？」

「……大仁多高校って、一般受験の場合は偏差値どれくらい必要でしたっけ？」

気がつけば西村はそう問いかけていた。

インターバルが終了する。盟和のスローインから第二Qが始まった。

金澤が細谷へボールを回す。細谷がボールを受け取ると——

「行くぞー！ 勇作！」

掛け声と同時に、盟和の選手達が一斉に動き出した。

細谷もボールを受け取るや否や、すぐにマークマンの西村をドリブルで翻弄し、前線へパスをさばく。

(縦のロングパス!?)

「よっしゃあ！ ナイスパス！」

センターラインにあったボールが一瞬で勇作の手に渡る。

勇作は背中を松平を押し込み、ドリブルで中への侵入を図る。

「ちっ……！」

「行かせねえよ！」

だが松平も一歩も退かない。自慢のパワーを活かし、勇作の押し込みを耐え抜く。

(すごい！ パワーではうちでも随一の勇作に真っ向から対抗してい

る！)

「さすが、か。それなら……！」

突破を困難と判断し、勇作はボールをミドルの古谷へ。

「よし来たー！」

小林がマークにつく中、古谷はドリブルで仕掛けていく。

振り切ることができないが彼にはスピードとは別の技術がある。

瞬間、古谷の体が大きく後退。間を作るが――

「いかせん！」

小林が一瞬でその間を埋め、手を伸ばし自由を奪う。

やはりステップバックシュートは見抜かれていた。

「ちっ。忌々しい。けど無駄！」

「なっ……！」

ならばと古谷は腕を強く振るいバウンドパス。

小林がシュートを止めようと、上半身に意識が向いている瞬間をついた。

ゴール下に駆け込む神戸にパスが通る。黒木が追いかけるが、勇作のスクリーンに掴まってしまった。

神戸がジャンプシュートをきつちりと沈める。

「よっしゃあ！ ナイツシュ神戸先輩！」

「まず一本！ 確実に決めた！」

(大仁多) 16対29 (盟和)。

盟和高校、第二Q開始早々の奇襲攻撃を見事に成功させた。

「あー！ やっちまったな大仁多。最初の一本をとめれば大きかったのに」

「第一Qラスト、山本のブロックが決まり良い雰囲気だった。開始の一本で第二Qを良い形で入りたかったところだが……」

止めたいところであったが、先に得点したのは盟和。オフセンスもどンドン仕掛けていき勢いを殺さない。

これで大仁多のオフセンスが止められるようなことがあればますます勢いづくだろう。

「ですが、そう簡単にはいかないでしょう。やつも伊達に全国で戦っ

「いません」

しかし高尾と大坪の眩きに動じず、緑間は西村の姿を冷静に見届ける。

かつてのチームメイトの姿。共に戦うことはほとんどなかったが、しかし彼が努力していたということは知っていた。

「落ち着いて！一本ずつ返していきましょう！」

西村が全体に声をかけてボールを運ぶ。

（……盟和はマンツーマンに切り替えてきたか）

盟和のディフェンスは一時的にマンツーマンディフェンスに。

当然個々のマークは厳しいが、だが先ほどよりも幾分かパスは出しやすく、仕掛けやすくなっている。

「そうだとしてもやることは変わらない！」

西村は左ウイングの山本へとパスをさばく。

そしてすぐさま駆け出す。パスを出した方向とは逆の方向である。

（また西村か!?!）

リターンパスを警戒し、細谷も進路の先を予測して動く。

だが並行するように追かけていた西村の姿が、突如視界から消えた。

「なっ!?!」

斜めに、相手の視界から消えるように沈む瞬時の切り替えし。

細谷の反応が遅れる。さらに行く手を阻んだのは、松平のスクリーン。

その間に西村はゴール下にカットイン。松平を追っていた古谷を含めた三人を抜き去った。

「あっ!?!」

「やべ——」

そこに山本がパスをさばく。がら空きとなった守備の隙間をついた。

フリーの西村はそのままレイアップシュートを決めた。ヘルプは間に合わない。

「ナイッシュユ！いいぞ西村！その調子で攻めろ！」

「山本さんナイスアシスト！」

(大仁多) 18対29 (盟和)。西村、一瞬で相手ディフェンスを翻弄し、反撃する。

「一気に盟和のディフェンスを突破したか」

「…… UCLA カット。帝光時代、西村が特に練習していたオフエンス戦術です」

驚く大坪。関心する緑間。あつという間に得点したオフエンスシステムを目にして、西村に意識をむけないものはいなかった。

—— UCLA カット。PGが積極的にゴール下に切り込んでいく戦術。

ウイングにパスを出した後、トップのガードの選手がハイポストのスクリーンを利用してカットインする。

かつて全米バスケットボール選手権において7連勝を果たした University of California Los Angeles 校が使用し、広がっていったことから大学の頭文字をとって UCLA カットと呼ばれている。

多少のリスクは承知の上で得点を狙う攻撃重視のフォーメーションである。

「それよりも、あの西村の動き……」

恐れさえ抱いているような声。

事実、高尾は冷や汗を浮かべていた。

「まるで、本当に白瀧のそれじゃねえか！」

あつという間に相手のディフェンスを切り崩す西村に、高尾は白瀧の姿を映し出していた。

「西村は俺より体が小さい分、あんな風に動かれたら余計に動きを捉えにくいだろうな。」

……何も小さいことはデメリットじゃない。小さいということが時には優位に働くことがある」

低身長の手が小刻みに、さらに深く切り返す動きを見せる。

これほどマークしづらい相手はいないだろうかと白瀧は言った。

「あれもお前が叩き込んだのかよ？」

「半分な。元々あいつは動きができていたんだよ。中学まではフォワードの方が好きだったらしいし」

「あ、そうなの？」

帝光という強豪校に入るに当たり、西村はコーチにコンバートを提案された。

低身長である西村がフォワードとして戦うのは無理があるとの判断だった。

つまり西村は元々フォワードとして戦っていた経験の下、帝光で司令塔の厳しい練習を受けた。そしてそこに白瀧との特訓を受けた。

「決して悔っていたわけではない。だが——西村大智。まさか第二の白瀧として盟和の前に立ちはだかるというのか!？」

その結果、彼はスラッシャータイプの選手として成長した。

まるで白瀧のようなオフエンスを見せる西村に、岡田も肝を抜かす。

「たとえば、白瀧さんが出られないとしても」

今コートにいるのはただの控えの選手ではない。

『お前が自信を持ってないならば俺がお前を信じてやる。』

一歩踏み出す勇気がないのならば俺が背中を押してやる。

力に押しつぶされてしまいそうならば、俺が力を貸してやる。

だからお前はお前の道を行け。お前が後で悔いなく誇ることができ、己の道を貫き通せ』

——西村の脳裏に、白瀧の言葉が蘇った。

「あの人くれた希望は、意志は俺達が受け継いでいる！」

彼は帝光で絶望を味わいながらも、それでも最後まで諦めることなく戦い抜いた一人の選手だ。

「止められるものならば止めてみる！俺はもう二度と立ち止まったりはしない！」

「……それでいい。お前はもう一人でも十分すぎるほど戦える」
力強く西村は盟和の前に立ちはだかる。

かつての姿を微塵も感じさせない姿を見て、白瀧も胸を撫で下ろした。

背中を追う者に背中を押されて。西村が白瀧に代わって大仁多の道を切り開く。

決して小兵と侮ることなかれ。たかが控えと言えども彼は全国三連覇を果たした帝光を支えた実績を持つ控え選手である。

第四十三話 ラストチャンス（前編）

「まじかつ……！ 一度ならず二度までも、盟和ディフェンスを中央突破した！」

（なんだあの小さいやつ。ビデオで見た白瀧のドライブの方がキレは鋭かった。けど、こいつのドライブは捉えにくい……！）

最初は細谷と金澤のダブルチームを。そして今度は細谷と古谷をかわしてレイアップシュートを決めた。

トップからの侵入を防ぐためにと練習を積んできたというのに。事実あの小林でさえも攻めあぐねていた。

それなのに西村が二度も連続で中央からの攻撃を成功させてきた。この衝撃は盟和にとって決して小さいものではなかった。

「細谷先輩！」

「……おう、なんだ？」

「次、もう一度マッチアップ2―3ゾーンで当たりにませんか？」

さすがにマンツーマンだけではあの突破力は止め切れません」

これ以上好き勝手させるわけにはいかない。金澤が細谷に声をかける。

たしかに彼の言う通り、ただのマンツーマンで西村を起点としたオフエンスを止めきれ自信はなかった。

「そうだな。たしかにパスコースも封鎖しきれてないし、その方がいいだろう」

「それじゃあやつぱり俺も！」

「だけど金澤、お前は次に14番^{西村}が仕掛けてきても、ギリギリまでヘルプには来るな」

「え？ でも……」

「そうしないと小林へのパスコースが空いちまう。それだけは駄目だ」

細谷も彼の意見に同意を示すものの、しかし彼の即座のヘルプを禁じた。

ダブルチームでは先ほどのように西村にかき回されてディナイが

疎かになってしまいう危険性を伴う。

ゆえに細谷は意見しようとする金澤を制して言った。

「14番は、俺が止めてやる……!」

確信はない。しかし必ずやり遂げて見せると。

これ以上ルーキーに好き勝手させるわけにはいかない。三年生としての意地が細谷を沸き立たせた。

「……勇作」

「なんだ？」

ボールを運びながら、細谷は前を走る勇作へと声をかける。

「俺が何としても14番のペネトレイトはとめる。だからそれまでは、頼むぞ。神戸と古谷、お前達三人でゴール下を制してくれ」

本来ならば自分も積極的にオフェンスに参加すべきであろうが、今は少しでもディフェンスに集中したい。

だからこそ細谷はエースとチームメイトに託すことにした。きつと彼らならば太刀打ちできるであろうと、そう信じて。

「……ああ、任せとけ。とにかくボールを俺に集めろ。そうすれば後は俺が決めてやる」

考えが通じたのか、勇作もいつものようなおふぎけはせず淡々と述べた。

(ああ。頼んだぞ)

走り去る背中に声をかけることなく心の中で声援を送る。

気持ちを改め、細谷は思考をクリアにした。

マッチアップしている西村が迫る。やはりマークにつくのが早い。

ボールを取られないようにと細谷は慌てずに外の金澤へ。さらに勇作へパスをさばいた。

「ツ！ まさかこれは……」

最初に小林が異変に気づく。金澤がパスをさばくや否やすぐに駆け出し、逆サイドへと移ったのだ。

右サイドにはミドルで勇作がボールを保持しているだけ。残りの選手はスペースを空けるように移動した。

「アイソレーション！ 盟和はあくまでも勇作で得点を決めるつもりか！」

すなわち勇作のワンオンワン一対一を狙った盟和のアイソレーションである。

盟和はこの第2Qの流れを勇作に全て託した。

（来るか……い！）

松平も相手の動きを察知し、腰を落とす。

そして、先に動いたのはやはり勇作だった。

（来た！）

変速のチェンジオブペースからのクロスオーバー。

突然の切り替えし。だが松平もこれに反応した。

「甘えよ！」

「なっ!？」

すると勇作はボールを膝下から通し、逆の腕に収めてその場で急停止。

ドライブと見せかけてミドルレンジからのジャンプシュートを撃つ。

松平はブロックに跳ぶこともできない。

「撃ってきた!？」

「リバウンド！ 黒木！」

勇作のシュート範囲はそこまで広いとは思えず、すかさずスクリーンアウトへ。

ポジションは譲らないと黒木や小林が体を張るが——ボールはリングを射抜いた。

「入った!？」

「決めた！」

「よっしゃあ！ 勇作、ナイツシュ！」

（大仁多）18対31（盟和）。点差を埋めることができない。

「あそこからも決めてくるのか」

「ビデオで見ていたよりもシュートレンジが広いな。たいした得点力

だよ」

「……とにかく。決められた以上、こつちも決めないといけません。立て直ししよう」

やはり攻撃力が高いチームだと再認識させる動きだった。

点差を縮めたい大仁多にとって勇作を止めることは最重要事項となりつつある。

「来るぞー！ 大仁多のオフエンスだ！ 絶対止めるぞー！」

盟和は再びマンツーマン2―3ゾーンを展開する。

ボールを持つ西村に対し、細谷はしっかりと腰を落とし、鋭い視線で彼を見る。

（またマッチアップからゾーンに戻したか。……というか、ひよつとして状況を判断して変えていくつもりか？）

「でも……無駄ですよー！」

今度は西村が自分から切り込んでいく。

トップから一気に急加速。わずかに体がぶつかるような、ギリギリのコースを見切つて突っ込んだ。

「ツちいー！」

彼の速さを前に細谷の反応は遅れ、突破を許してしまう。

神戸がヘルプに出ると西村は黒木へバウンドパス。フリーの黒木が確実にシュートを決めた。

（大仁多）20対31（盟和）。点差を縮められないが、大仁多もそう簡単には離されない。

「まだ遅いか……」

「大丈夫ですか、細谷さん」

「ああ。大丈夫だ。次だ。次こそは」

今のドライブを含め三回西村のプレイを見ることができた。

少しずつ彼の速さに、そして動きに慣れていくはずだと、細谷は自分を奮い立たせる。

（しっかりしろー！ このまま一年に好き勝手やられるわけにはいかねえだろー！ これが最後のチャンスなんだぞー！）

苛立ちは己の中で力に変えて思考は冷静に。次こそはといきこん

で細谷はゲームを組み立てる。

ボールの供給先は、やはりエースの勇作である。ボールが勇作に渡ると、彼が動きやすいようにと他の四人はコート逆サイドへ集中する。

「よっしゃあー！ もう一本！」

「こんのっ！」

必死に食らいつく松平には目もくれず、勇作がコートで躍動する。

レッグスルーからのチェンジオブペース。鋭くゴール下へ切り込み、そしてすぐに停止。松平がバランスを崩している間に、確実にシュートを沈める。

（大仁多）20対33（盟和）。勇作の連続得点により、再び盟和のリズムが戻ってきた。

「また勇作だ！ エース絶好調！」

（……これ以上はまずいな。松平さんが得意のゴール下から引きずり出されてしまっている）

声援が大きくなる観客。それに比例し、藤代の表情は暗くなっている。

松平は生粋のパワープレイヤーである。ゴール下でこそ強さを発揮するが、スピードはお世辞にも速いとは言えない。

そして今、予想以上のシュートレンジの広さと突破力を持つ勇作により、松平が必然的に不利な状況となっていた。

「まずはディフェンス。エースを止めなければならぬ！」

これ以上相手に流れを渡すわけにはいかず、藤代はベンチのある選手に声をかけた。

「一本！ 確実に取り返していきましょう！」

コートでは西村が組み立てる。

盟和のディフェンスは変わりなく堅固なものであったが、一つだけ変化があった。

「ッ!？」

西村と対峙している細谷が先ほどよりも半歩下がり、今まで以上の集中力を醸し出していた。

(この人、俺を止める気か！)

明らかに西村のドライブを止めようとしている。姿を見ただけでわかった。

逆に外からスリーを撃ちやすい状況でもあるのだが、しかし西村はそれはしない。

「……じゃあ、その誘いに乗りましょうか」

体の前でボールを左右につく。徐々にドリブルのスピードにも緩急をつけていく。

しかし細谷から仕掛けるつもりはないのか、まったく動こうとしない。

「ちっー！」

痺れを切らした西村が仕掛ける。急加速し細谷の右横を貫くように直進した。

(……やっぱり来たな！)

「なっ!？」

しかし細谷はその動きを捉えていた。はつきりと目で追い、突破を許さない。

(距離を空ければ懐に入られることもないし、お前の動きを捉えやすい。

何よりも単独突破の際は動きが直線的。それならどのコースを通るか読むことさえ出来れば……!)

それが出来れば防ぐことは出来る。

この勝負は細谷が読み勝った。ボールを弾き、西村の手からボールが離れた。

「しまったー！」

「ナイステイフエンス、細谷センパイー！」

こぼれたボールを古谷が拾い上げる。

「というわけで、反撃ゴー！」

そしてすぐさまボールを山形に放り投げた。軌道が高いために、小林の手も届かない。ボールは勇作へと渡った。

「よっしやあー！ よくやったー！」

「速攻！ 行け！」

勇作が先行し、金澤が遅れて続く。

マークである松平はそのスピードに追いつくことが出来ず、勇作は楽々ゴールへと向かう。

（あいつ、運動量も半端じゃねえ！）

「もらった！」

前方には誰もいない。勇作はドリブルのスピードを維持してレイアップシュートを放つ。

「いつまでも調子に——」

「ッ！」

成功を確信した瞬間、背後より覆いかぶさるような陰とプレッシャーがかかった。

「——乗るな！」

山本のブロックショットが炸裂する。

「なに!?」

「……うそーん」

シュートは防がれ、ボールがラインを割る。

「アウトオブバウンズ！ 盟和^黒ボール！」

「ふう……」

「と、止めた！ 山本さんナイスブロック！」

それほど高さが出ていなかったとはいえ、10cmほど差がある相手をブロックした。

歓喜し、大仁多ベンチが盛り上がりを見せる。

「……す、すげえ。勇作さんの速攻止められるなんて、滅多に見れないっすよ！」

「ああ。さすが大仁多のレギュラー。三年生ともなれば質が違う」

思わず岡田も冷や汗を覚えた。目の前であのような動きを見せられて、動じない者は少ないだろう。

「だが、それでもうちの勇作は止められない」

唯一動じないものは、エースへの信頼。

リスタート後、再びボールが勇作へと集まった。今度は急停止はな

く、完全に松平を置き去りにする。

「——勇作！」

「やはりお前か、小林！」

小林がヘルプに出る。攻撃が集中していることはわかっていた。当然来るだろうと思っていた。勇作はニヤリと口角を挙げる。

(だけどな！)

だが勇作は止まらない。ドライブの勢いをそのままに跳躍し、腕を振り上げた。

(直接ぶち込む気か！)

「させるか！」

ダンクシュートを狙っている動き。

そう判断すると小林もすぐに対応する。跳躍し、空中で二人がぶつかり合った。ボールを挟んで両雄が激突する。

「なっ!？」

「終わりだ！」

これを止めて流れを引き起こす。小林が完全にシュートを止めていた。

「さすが。……けど、まだ終わりじゃねえ！」

「ヘイ！」

「ッ……う？」

横から声がかかる。勇作はその声の方向へとボールを放った。

その先にいたのは——古谷だった。

「ナイスパス！」

「——またお前か！」

「また俺でした！」

松平がすぐにヘルプに出る。

しかし彼では古谷のステップバックシュートをとめる事は出来ない。

一瞬でブロックを不可能とする距離が空いてしまう。

「ッ！」

「残念！」

余裕の笑みさえ浮かべる古谷。そのままジャンプシュートを放つ。しかしそれゆえに気づけなかった。すぐ近くから忍び寄る相手に。「うらあつー！」

山本の指先がボールに触れた。その衝撃でシュートの軌道が高くなる。

「なっ!？」

「山本さん!」

咄嗟に反応したのは松平だけではなかった。山本もシュートに対応すべく動いていた。

シュートはリングに跳ねて、外へと落ちてくる。

「リバウンド!」

後はゴール下の選手達の務め。

黒木がスクリーンアウトで神戸を外側へと追いやった。

「うおおおお!」

「ぬああああ!」

後は確保するのみ。黒木が両手を伸ばし、神戸も必死に体を入れて手を伸ばす。ボールを手にしたのは、黒木だった。

(取った!)

「よっしや!」

「黒木! よくやった!」

これで攻撃は防いだ。そう皆が思った瞬間、勇作が黒木からボールを奪う。

「なっ!？」

「まだ終わってねえ!」

「こいつ——!」

ボールを奪うと勇作は止まらなかった。着地と殆ど同時に再び跳躍。

ジャンプシュートを確実に決めた。

(大仁多) 20対35(盟和)。幾度も攻撃を止めて見せたが、盟和の勢いは止まらず。

「決まった! 勇作強い!」

「これで15点差だ！　まだまだ続くぞ！」

この試合が始まって最大の点差がついた。

敵エースの活躍によりじりじりと点差が開いていく試合展開。戦況は中々覆らない。

(……まずい。今は山本が上手く対応してくれたが、これ以上勇作にミドルで暴れられると收拾がつかなくなる。

俺が古谷のマークを外れてしまえば今のようにはシュートを撃たれる。だが松平だけでは不利。どうする……！)

小林も打開策を講じるが、案はそう簡単には思い浮かばない。それだけ今の盟和は攻撃力が高かった。

とにかくなんとしてもオフエンスだけでも成功させようと、考えを後にして走り始めた。

大仁多の反撃。盟和はマツチアップ2―3ゾーンを続行する。細谷のマークの厳しさは先ほどと同様、あるいはそれ以上だった。

「へえ。あくまであなたは俺を止めるつもりですか」

「それが俺の役割だ。お前を止める！　絶対に！」

「……そうですか！」

相手がそのつもりだとしても、好き勝手させるわけにもいかない。西村はすぐに左ウイングの山本へパスをさばき、そして駆け出した。

(今度は味方を使うか！)

「大丈夫ですよ、細谷センパイ！」

(よしっ！)

古谷が松平を抑えていることがわかると、躊躇いは必要ない。

今度も確実に西村の動きを捉え、反応することができた。

「……つられたか。いいのですか、それで？」

「なに？」

「UCLAカットは、トップの選手が止められたとしても、問題はないんですよ」

「はっ！」

それはどういう意味だと、聞く必要はなかった。

「小林！」

「任せておけ！」

山本がトップへとボールを戻す。右サイドの小林が駆け込んでいたのだ。

ディフェンスの金澤の動きを予測し、逆方向へと切り返す。金澤を突破し、ミドルへと侵入した。

「うわ、あっ！」

「俺の仕事は、あなたを誘き寄せることでもあるんですよ」

（小林の中央突破か——！）

ディフェンスが上手い細谷をトップから移動させ、そして小林が本来のポジションから攻める。

これでマツチアップ2—3ゾーンを攻略することを可能とした。

古谷がヘルプに出るが、小林にとっては障害にならなかった。古谷のブロックをもともせず、ジャンプシュートを決めた。

「ちいっ！」

（跳んだのに、止められない！）

「悪いが、お前に止められるわけにはいかない」

（大仁多） 22対35（盟和）。大仁多も一歩も譲らない。

「小林のシュート力は変わらないな。プレッシャーを受けようとも、ブロックされない限りは殆ど確実に決めてくる」

「あの人は安定感ありますよね。ピンチであろうとチャンスであろうと毎回出てきますし」

「ああ。それに加えて、今の攻撃の組み立て方……」

「UCLAカットはトップの選手が入れ替わる形で何度でも仕掛けることができます。」

しかも今回の両サイドは小林と山本、二人ともペネトレイトが得意な選手。そう簡単には止められないでしょう」

相手の猛攻に怯む事無く、負けじと攻める姿勢を見せる大仁多。

秀徳の選手達も彼らのプレイに関心を払いながら、戦況を行く末を見ている。

「そうなる問題はやはりこの後。盟和のオフENSEをどう止める

か、だ」

しかし攻撃力が高いのはお互い様である。

またしても盟和は勇作にボールを預け、勝負を仕掛けてきた。

勇作がゴール下に切り込む。ドライブのキレは鋭く、松平の反応が一瞬遅れる。

「……………くそー！」

松平も必死で勇作を追いブロックを狙う。

だが勇作がドライブからシュートモーションに入った時、松平の体が勇作を押ししてしまった。

(ちっ……………！)

「ディフェンスファウル！ プッシング、白8番！ ツースロー！」

ファウルでシュートこそ止めたものの、勇作にフリースロー二本の権利が与えられる。

「ここで動かないと、いけないか」

そして藤代がベンチから立ち上がった。

第四十四話 ラストチャンス（後編）

『ツーショット！』

——ボールが二度、静かにリングを射抜く。

ファウルを受けた勇作はこのフリースロー二本を確実に成功させて再び点差を15点に戻した。

（大仁多）22対37（盟和）。縮まらない点差が大仁多に重くのかかる。

そして試合が再開される前に、審判の笛がなった。

「あ?」

「大仁多高校、選手交代です」

「交代?」

「松平さん!」

「……ああ、俺か」

選手達が戸惑いの声をあげる中、声を張り上げたのは——背番号15番、本田だった。

呼ばれたのは松平。すなわち本田と松平の交代である。

松平もこうなることは覚悟していたのか、文句一つ言わずにベンチへと戻った。

「お疲れ様でした」

「……すみませんでした」

「いいえ、ゆつくり休んでください」

タオルを受け取ると言葉少なくベンチに腰掛ける。

相手に好き放題得点を決められて、何も思わないわけがない。松平は力なく項垂れた。

（15番——つてことは、また1年か）

（松平と交代と言うことは、勇作対策として何かするつもりか。

それがあの1年なのか、そうでないのかはわからないけど）

変わって入ってきた本田のデータも、盟和は殆どない。

一体何をするというのか、何のために入ってきたのか、盟和の選手たちはチームメイトに話しかける本田の姿を観察した。

「そう監督が言ったんだな？」

「はい。これ以上相手がペースに乗るのはまずいと」

「そうか。それならいい。頼むぞ本田！」

「うっす。……任せといてください！」

小林に背中を叩かれ、気合を入れなおす。

そして大仁多が盟和ディフェンスに攻めかかった。

トップの西村は山本にボールを預け、ゴール下目掛けて侵入。彼をフリーにするわけにもいかず細谷が追う。

だが先ほどと同様、山本がトップへと走る小林へパス。すると小林は中央からゴール下の本田へと直接パスをさばいた。

（ぐっ！ 簡単に上を抜かれた！）

金澤は反応ができず、パスを許してしまう。

トップに小林が立つと、このように背丈の優位を活かしたパスができる。

「ナイスパス！」

（早速来やがったな！）

勇作が本田につく。

相手の最初のプレイということで、様子見をかねてじっくりと出方を待った。

本田は勇作を背中越しに観察しながら、一つドリブルを入れる。そしてすぐにスピムーブ。

「おおっ!？」

「もらった！」

上手く勇作の体を回転しながらかわした。

マークを振り切った本田はレイアップシュートを撃つ。

だがそのシュートを神戸に叩き落とされた。

「あっ！」

「残念だったね！ そう簡単には決めさせないよ！」

不意をついたはずだが、高さで勝る神戸のブロックを越えることは難しかった。

勇作がボールを拾い、盟和のオフエンスが始まる。

「おらよ、細谷ー！」

「おうー！」

細谷にボールを戻し、駆け出す勇作。同時に脳裏でマークについた相手、本田のことを考えていた。

(……少なくとも高さは8番松平の方が上。パワーもおそらくそうだろう。)

唯一スピードに関しては15番本田の方が動きが良かった。つまり平面で抑えようってことか？

舐められたもんだな。白瀧ならまだしも、そこらのルーキーに止められてたまるかよー！)

まだ誰が自分のマークにつくかわからないとはいえ、考察は怠らない。

勇作はゴール下へ駆け込みながら、どのように攻撃を仕掛けるかシミュレーションしていた。

するとそんな彼に、本田が詰め寄る。

「へえ。お前が俺のマークか？」

「……絶対に止める！ あんたにこれ以上やられるわけにはいかねえんだよー！」

(なるほど。やっぱり俺を止める為にこいつを出したわけか)

「やれるものならやってみろ、ルーキー」

想像通り、勇作の相手は本田が相手をする。

何か策はあるのか。わからないが先ほどまでと同様に、己の思惑通りに抜けるとは考えないほうがいいだろう。

「キャプテンー！」

「おうー！」

勇作は相手の様子を窺いながら、金澤からパスを受け取った。

これで事実上一対一になる。その瞬間、本田が真にディフェンスに集中した。

「ッ！」

驚愕に目を見開く。勇作は慌ててボールの保持に専念した。隙のないディフェンスだった。即シュートを撃つても、ドリブルで突破を図っても対応されてしまう。そんな予感が勇作を襲う。

(こいつ！ マジで止める気だ！)

面と向き合い、ドリブル突破を図るが、本田のマークは厳しい。シュートフェイクを入れてワンドリブルの後、クロスオーバー。さらに急停止。揺さぶりをかけるが抜くことはできない。本田はしつこくついてくる。

(ッ……！ 抜けない！)

「勇作が、攻めあぐねている!？」

「何をやってんだよ、あのシスコンは！ ヘイ！」

「ちっ！」

古谷が駆け寄り、攻撃を立て直す。これほどまで勇作が突破に手こずるのは珍しいことだった。

「まさか、勇作の動きが読まれているのか……？」

このディフェンススキルの高さ。岡田はデータのない本田を目にして、嫌な想像を浮かべてしまった。

「いけるじゃん、本田のヤツ！ あいつやっぱりディフェンス強い！」

「……ああ。俺達が最初に戦った時もそうだったしな」

神崎に声をかけられて、白瀧は入部早々、本田と戦ったミニゲームのことを思い出した。

試合開始と同時に仕掛けた速攻。本来ならまず反応さえできないはずだった。だが本田は白瀧に迫っていた。

結果的には攻撃を止められなかったとはいえ、あの動きは見事だった。その後も幾度も白瀧達の前に立ちはだかり、時には攻撃を防いで見せた。

彼がベンチ入りした後、白瀧は一度本田に問いかけたことがある。ディフェンスの際にはどのように考えて動いていたのかと。

その問いに対する本田の考えは、あまりにも簡潔で、そして白瀧が理解するには難しいものだった。

『そんなの勘だけど?』

『は?』

『なんだろ。こう、ピンとくるみたいなの? 別に深くは考えてはねえよ』

それを聞いて白瀧は理解した。「ああ、こいつも同じか」と。

かつて帝光のチームメイトにもこのように言っている者がいた。つまりは感覚で戦うタイプである。

たしかに試合勘のようなものは白瀧にもないわけではない。しかしここまでとは想像していなかった。

(なんとというか、あいつのディフェンスは野生の動物みたいなんだよな)

研ぎ澄まされた五感により、相手の動きを予測し、素早く反応する。

だからこそ本田はディフェンス能力が高く、それを買われてベンチメンバーにも選ばれた。

そして今、盟和のエース・勇作を苦しめている。

(……しかも、こいつ全然フリーにさせてくんねえ! マジしつかけ、ストーカーか!)

おそらくこの考えを他の者が知ったら味方と橙乃を含む全員がまったく同じ言葉を返すだろう。曰く「シスコンお前が言うな」。

だがそれほど本田のマークは厳しい。ボールを持っていなくても勇作を自由にはさせず、ボールを持ったとしても身動きがとれない。

徐々に時間だけが過ぎていく。勇作にボールを供給できないと判断すると盟和は広くコートを使い、外からもゴールを狙っていく。

細谷がスリーを撃つ。西村のブロックは届かず——ボールはリングを射抜いた。

(大仁多) 22対40 (盟和)。点差、18点。

「チッ! 黒木、よこせ!」

「おう!」

だが失点の衝撃が響く前に、小林達は動き出す。

黒木がボールを小林に入れると、全員が前線へと駆け出した。

(速攻——!)

「しかも、速い！」

小林がボールを運び、山本、西村、本田の四人が盟和ゴールに襲い掛かる。

（ヤバイ、戻りきれない！）

「西村！」

「はい！」

細谷と金澤はディフェンスに戻れるが、他の三人は難しい。

しかも小林を起点に次々とパスをさばき、余計に止める事を困難とした。

西村から背後の本田へと渡る。すると本田はトップまでボールを運ぶと、一人ゴール下へ駆け込む山本へ。金澤をかわすようにボールをさばいた。

「ナイス！」

「ちっ！」

ジャンプシュートの構え。すぐに細谷が迎撃するために跳ぶ。

すると山本はスペースができた真下を通し、小林へボールを回す。

「あっ!？」

（フェイク……!）

「しまった！」

失敗を嘆こうとも、結果は覆らない。小林のジャンプシュートが決まった。

（大仁多） 24対40（盟和）。大仁多の一次速攻が成功した。

「……速い」

「連携も見事。これで白瀧がいないというのだから恐ろしい」

「あー！ たしかに！」

緑間のツツコミで、高尾は大仁多がベストメンバーでないということ进行を思い出した。

本来ならばここに白瀧という速攻のエキスパートが加わるのだ。そう考えると、非常に恐ろしかった。

（あとは盟和のオフENSEを止め切れれば、流れは……）

これで盟和のオフENSEをとめられれば文句はない。

攻撃は成功している。後は、少しずつ点差を縮めることができ
ば。

そんな中、盟和のオフenseは未だに勇作に集まっている。

ここまで絶好調であるエースの勢いをそのままにしておきたいと
いう意味もあった。

だが……

「させねえー！」

「ごんのー！」

本田の懸命な守りにより、勇作は中々シュートを撃てない。

シュートクロックが残り少なくなる中、なんとか突破を図るもの
の、ボールを本田に弾かれてしまった。

「あ、やべー！」

「うおおお！」

転がるボールを追う。しかし本田の目の前でボールはラインを
割った。

「ちっ！」

「いいぞ、本田！ その調子だ！」

「うっす！」

気迫も十分。実力も通用している。

後はこれを継続することさえできれば――

『盟和高校、タイムアウトです！』

そう考えているところに、審判の笛が鳴り響いた。

「皆さん、お疲れ様です！」

選手達を腰掛けさえ、藤代が労いの言葉をかける。

「オフenseは順調、このままお願いします。何も言うことはありません
せんからね。」

そして問題のディフェンスですが、本田さんのおかげで勇作さんを
追い詰めることができる

「しかし監督、向こうがタイムアウトを取った以上、何か仕掛けてくる可能性がありますが」

「ええ。おそらくはそうでしょう。ですが下手に動くよりも目的をはっきりとして臨んだほうが良い。」

このままマンツーマンを続行。本田さんは勇作さんを、小林さんは古谷さんを、二人のスコアラーを封じてください」

たしかに小林の言うことに一理ある。しかし相手の目的がわからない以上、このまま作戦を続行した方がよいと藤代は考えた。

「三人も変わりはなく。西村さんと山本さんはスリーも警戒してください。」

黒木さんとはとにかくインサイドを固めてください。ここから先、盟和がゴール下を狙ってくる可能性が高い」

「はい！」

「わかりました」

「……………」

「うん？ 山本さん、大丈夫ですか？」

「え？ ああ、はい。了解です！」

気が抜けたのであろうか、山本が一瞬藤代の指示を聞き逃した。

チームメイトが心配そうに覗き込むが、本人は気丈に振舞う。

「しっかりしろよ、副キャプテン。お前がそんな態度では後輩たちに示しがつかないぞ」

「わかってるって。大げさなんだよお前は！」

「どうだかな。普段のお前の生活態度は、褒められたものじゃないからな」

「あ、お前そういうこと言っちゃおう!」

小林の茶々入れに山本が反応し、少々だがチームに活気が湧いた。

これを狙って小林はわざと言ったのだらう。

だが、藤代はそんな山本を不安げに見つめていた。

一方、盟和高校のベンチ。

岡田は選手達の前で一つ疑問を投げかけた。

「一体どうした、お前ら?」

問いの真意を把握しかね、選手達は静寂を決め込む。すると彼らの反応を見て岡田はさらに続けた。

「この決勝戦が始まる前に言ったこと、もう忘れたか? ……おい、細谷」

「はい」

「あの15番^本のデイフェンス、思った以上に厄介だ。平面で勝負するのは分が悪い」

「ちよつと待ってください! 俺はまだ!」

「最後まで話を聞け! 馬鹿!」

話の途中で勇作が講義しようとするが、今は時間がない。頭を押さえつけ、無理やり黙らせた。

「相手は王者・大仁多。わざわざ向こうの得意な状況で勝負をしてやる必要はない、そういうことだ」

「……つまり、俺ら三人でつてことですか?」

「ようやく意味を理解したのだろう。」

古谷の問いに岡田は首を縦に振り、説明を続けた。

「準決勝、聖クスノキと同じ戦法を取らせてもらおう。」

細谷と金澤は敵の速攻に警戒。そして残りの三人。古谷、勇作、神戸。このフロントラインで大仁多を攻める」

エース・勇作が止められてしまうのならば、チームの優位を活かすまで。

再び盟和のフロントラインが暴れようとしていた。

試合再開の合図がなり、選手達はコートへ戻っていく。

『タイムアウト終了です!』

再び合間見える両校の選手達。

その中の一人、山本の姿を藤代はずっと捉えていた。

「……東雲さん」

「はい？ 何でしょうか？」

「今日の山本さんの成績、教えてください」

「は？ わかりました」

記録者である東雲に山本の記録を問いかける。

意図はわからないが、東雲はすぐに調べて藤代へ報告した。

「山本君ですが……今日は今のところ4得点、3アシスト、1スティール、4ブロック。」

ファウルはまだ一度もなく、攻守に渡って非常に良い活躍をしています」

「何かありましたか？ 問題があるところか、とても働いているように思えますが」

「ええ。それどころかむしろ働きすぎなんですよ」

「え？」

橙乃の問いに、藤代は苦笑を浮かべて答えた。

まだ首をかしげている橙乃にさらに説明を続ける。

「……この試合、山本さんは攻守にわたって貴重な存在です。」

司令塔の補佐は勿論、ディフェンスでも良い数値を残している。

しかしこれはオーバーペースだ。あまりにもとばしすぎです」

山本はここまでシューターとしてもPGの補佐としても、副主将としても結果を残している。

しかしそれゆえに体力を使いすぎている面もあった。特に速攻では体力を使う。

「しかも今日はチーム内で最も運動量が激しい白瀧さんが出場していない。」

「そのために山本さんがその代理として動き続けている」

「ツ……いやあ、代えるのですか？ でもせっかく山本さんも調子が良いと言うのに……」

『好事魔多し』と言います。調子が良いからと言って過信するわけにはいかない。楠さんのような例もある」

準決勝で戦った好敵手のような存在を知っているからこそ、余計に気を配る。

「それなら何故先ほどのタイムアウトの時に言わなかったんですか!?!」

「山本さんの性格上、本人の目の前でこのような話をするわけにはいかなかったんですよ」

特に調子があがっている状態で話し、かえって悪化させるわけにはいかなかった。

山本が交代するとしても後半必ずもう一度出てもらわなければならない。ならばこそ、あの場で言うわけにはいかなかった。ただでさえシユーターとは繊細さが求められる。些細な精神の乱れがプレイに影響を及ぼすことは少なくない。

(だが、この第2Q中に交代することを考えなければならぬ)

そうなる重要なのは交代のタイミングである。

チームにも悪影響が出ないように代えなければならない。

そう藤代が考えているなか、試合は再開された。

盟和ボールから試合は再開される。金沢が細谷にボールを回し、試合を組み立てた。

(マークは変わっていないか。それなら……)

相手のディフェンスが変わっていないことを確認すると、細谷は古谷へボールを回す。

そして古谷を経由して、勇作へボールがわたった。

「来たな！ でも、好きにはさせねえよ！」

「ああ、そうみてえだな」

マークが緩くなる気配はない。出場してまだ時間がさほど経っていないのだから当然のこと。

ならばと、勇作も覚悟を決めた。

面と向かって対峙する。そしてすぐさまジャンプシュートを放った。

(即撃ってきた!?!)

驚きはあるが、本田はしっかりと跳ぶ。

ブロックのプレッシャーのためか今までよりもシュートの軌道が高い。おそらくこれは入らない。

「っし、お前ら行くぞ！」

「誰に言っただ、このシスコン野郎」

「オツケー！」

シュートの直後、勇作を含めたフロントライン三人がすぐにゴール下へと集結する。

「ぐっ!？」

(……ちっ、ポジションが！)

屈強な三人がポジションの内側を確保し、体をぶつけ合う。

かろうじて黒木はポジションを奪い返すことができたが、小林と本田は外へ押し出されてしまった。

「リバウンド！」

ボールが落ちてくる中、空中で掴んだのは古谷だった。

良いポジションをキープしていた彼はそのまま一人でシュートを沈めた。

(大仁多) 24対42 (盟和)。得意にゴール下で盟和が取り返す。

「くそっ！」

「こいつら。得意のゴール下で、無理やり押し込む気か！」

シュートが決まらなくても、リバウンドを確保して得点を決めている。

フロントラインに自信の持つチームだからこそできる荒業。単純であるがそれゆえに効果的であった。

(やはり15番はまだ1年。ゴール下での体のぶつけ合いなら俺に分がある！)

経験も体格も、本田よりも勇作の方が勝る。ならばそれを利用しない手はない。

再び盟和オフェンスが大仁多に牙を剥き始めた。

そしてここから再び両校点の取り合いとなった。

お互いの攻撃力がお互いの防御力を上回り、得点を重ねていく。

大仁多は小林と山本、西村が上手くパスをさばいていき、効果的に

得点を重ねていく。

対して盟和はフロントラインがひたすらリバウンドを制し、ゴール下で点をもぎ取っていく。

だがこのような現状になるとエースを欠き、高さで劣る大仁多が不利になっていた。

「うらああっ！」

「ちっ！」

本田と勇作のリバウンド争い。本田も必死に体を寄せるが、勇作も負けじとポジションを奪い返す。

そして空中でボールに触れると、指先で強引に押し込み、ボールはリングを潜り抜けた。

(大仁多) 34対54(盟和)。第2Q残り二分を切り、ついに点差が20点に広がった。

「決まった！ 勇作、この試合二十四点目！」

「盟和の勢い、止まらない！ ついに二十点差だ！」

相手のオフエンスを止めきれず、反撃を試みるが爆発力が足りない。リバウンドも盟和優勢の状況。

ここにきてついに大仁多が追い詰められてしまった。

「なんで大仁多は手を打たないんだ？」

「手を打っても現状は変わらないと判断したのか、あるいは一年生の可能性に懸けたか」

大仁多のベンチへと視線を向ける大坪。

藤代はまだ動いていない。相手のエースも勢いを取り戻している今、現状を覆すためにはコートの外からも指示が必要であるということは明白だ。だがそれが未だにない。

「おそろくはそうでしょうね。8番と交代しても、先ほどのようにミドルから決められてしまう。」

「……ですが、ひよつとしたらもう一つ理由があるのかもしれない」

「はっ？ もう一つってなんだよ真ちゃん」

「このままでは、あの本田という選手が一軍から落とされる可能性も

ある」

「え？」

「彼は盟和のディフェンスを止める為に試合に出たのだ。それができずにこのことベンチに戻るようでは……最悪の結果だ。期待の裏切り以外の何者でもない」

大仁多は県内屈指の強豪校。当然ながら選手層は厚い。

その中で一年生がベンチ入りするというのは非常に珍しい。逆に言えば降格となればすぐに降格となる。

一軍には選ばれなかった三年生達もいる。もしも昇格となれば喜んで戦うだろう。

そうでなくても本田はこれまでの出場機会は殆どなかった。ここで結果を残せなければ降格の可能性は低くない。

「本田にとつても三年生同様、これがラストチャンスとなるかもしれない」

I H本戦が始まれば完全に昇格の機会は消えてしまう。

ならば本田の為に、ここで一つ成長して欲しいという望みがあるのかもしれない。緑間はそう考えた。

「……くっそっ！」

「本田さん！」

苛立ち、自分の足を殴りつける本田。西村が諫めるが、効果は見られない。

（何をやっているんだよ、俺は!? 次々得点決められて、何のために出てきたと思っているんだ!?)

あいつらはいっつもきつちりと戦っていたんだ! 俺も続かなきゃいけないんだよ! しつかりしろ!)

監督に与えられた役目を全うできずにいる自分の無力さに腹がたつ。

同じ1年である四人は試合でも自分の強さを発揮し、期待に込んでいる。ならば自分もやらなければならない。

代わっている松平にも悪いと思い、本田は自分を責め立てた。

(……本田が悪いわけではない。あいつの懸命なディフェンスのおかげ

げで盟和が攻めあぐねる時間が増えたとし、フィールドゴール率も下がっている。

だがそれでも最後は勇作を初めとしたインサイドに押し込まれてしまう。こればかりは選手としての実力で負けているとしか言いようがない……)

小林は複雑な表情で本田の背中を見つめた。

手を打とうにも、身体能力や経験の差はそう簡単には覆せない。流れを掴むことは難しかった。

それはベンチも同じであり、藤代の表情は優れなかった。

「監督」

「はい？ 何でしょうか？」

そんな藤代に白瀧が声をかける。

「ここまで口を挟まなかった彼だが、いよいよ我慢の限界がきたのだろう。」

「これ以上休んでいたら、俺の体が鈍ってしまいそうですよ」

そう言つて白瀧は上着を脱いだ。

西村から山本へとボールが渡る。

しかしそのパスが読まれていたのか、金澤がボールを弾いた。

ボールは転々とし、ラインを割る。

「ちっ！」

「惜しいぞ金澤！ その調子だ！」

ディフェンスも動きがよくなり、さらに士気が上がっていく盟和。

『大仁多高校、選手交代です！』

そんな中、審判の笛が鳴り響く。

「山本さん！」

「……そうか。悪いな、任せるぞ」

「はい！ 任されました！」

山本と代わつて、一人の選手がコートに入る。

その選手を見た瞬間、大仁多の選手達の表情が明るくなり、彼を笑顔で出迎えた。

盟和の選手たちは逆に驚愕し、焦りが生じる。ただ一人、勇作を除

いて。

「……ようやく出てきたか。随分と遅刻だな——白瀧！」
戦いたい、そして倒したいと思っていた相手である白瀧を目にして。

「ええ、すみませんね。でははじめましょうか。劣勢からの逆転劇を」
不利な状況ではあるが、やることは何一つ変わらない。

もとより気にするようなことではないのだ。彼は不利な状況下でも決して諦めることなく、戦い続けるのだから。これまでも、そしてこれからも。

——黒子のバスケ NG集なのだよ——

「監督」

「はい？ 何ででしょうか？」

そんな藤代に白瀧が声をかける。

「ここまで口を挟まなかった彼だが、いよいよ我慢の限界がきたのだろう。」

「これ以上休んでいたら、俺の体が鈍ってしまいそうですよ」

そう言って白瀧は上着を脱いだ。

「……こんなところで脱ぐなんて……白瀧君、大胆」

「ねえ、やめてくれない橙乃!? 上着脱いだけで、ちゃんと下にも着てるからね！」

「おいこらあつ！ 服を脱いで茜に『体が鈍ってしまう』と言うとは、一体どんな激しい運動する気だこらあつ!?!」

「あんたは黙ってる！ てかなんで聞こえてるんですか!?!」

色々と台無しなのだよ。

第四十五話 ピンチをチャンスに

第2Q終了間際、ついに白瀧がコートに帰ってきた。

エースの復帰により大仁多に活気が湧き始めていた。

「白瀧さん。……すみません」

だがそんな中西村の表情は優れなかった。白瀧がいない状況下でゲームを優位に進められず、それどころかここまで押し込まれている。

そんな自分の力のなさを許せず、西村の第一声は謝罪だった。

その西村に対して白瀧はフツと小さく笑みをこぼす。

「何を言っているんだ。お前は十分に役目を果たしてくれた。

それにまだ負けたわけじゃない。お前だつてこの程度の逆境、今まで何度も跳ねのけてきただろう！」

「あ……」

「だから謝るな。俺達には後悔している時間なんてない」

「はい！」

「うん、それでいい」

帝光時代でこれ以上の苦戦を経験してきた。だがそれらを乗り越えてきたという経験が西村に自信をもたらした。

いつもの状態に戻ってくれたと、白瀧は安堵する。事実彼の言葉通り西村は周囲の期待に応えるだけの成果を残している。ならばそれを褒めることさえあれ責める理由は存在しなかった。

「だが、大丈夫なのか？ お前だつて万全の状態じゃあ……」

「どうした本田？ お前の口から俺を気遣う言葉が出るとは、どういう心境の変化だ？ 勇作さんに目の前で暴れられてすっかり弱気になつてしまったか？」

「……ああ!? て、テメエ！ 人が心配してやってんだからもつとな！」

「よし。怒る元気があるならお前も大丈夫そうだな」

「あ？」

ニヤリと蔑みにも似た笑みを浮かべる白瀧。

それを見て、本田は心配した俺が馬鹿だったと、白瀧にくつてかかる。

しかしながら当の本人は本田を軽くあしらい、小林達にも聞こえるように言った。

「問題ないです。点差も20点ですよね？ ……じゃあ、さくつとひっくり返しましょうか！ この点差！」

笑みを深くし、最後は敵にも聞こえるようにとわざと大きな声で。

当然それを耳にした盟和の選手達の心境は穏やかなものではない。特に勇作のような沸点の低い選手は。

「へえ」

「じよ、上等だあつ！ ひっくり返せるものならやってみろ！ 絶対に0点に抑えてやるぞ！」

「……いや、さすがに0点は無理だろ」

煽り耐性のない勇作は簡単に挑発に乗る。他の選手たちも気持ちと同じだろう。

だが発言者の白瀧は彼らの反応を無視し、もう一度四人に対して言った。

「時間がないので簡潔に言いますが、まず最初のうちの攻撃、俺達で決めます。西村、お前の力を借りるぞ」

大事な最初の攻撃。それを決めて反撃の狼煙を上げる。

「山本さん、お疲れ様です！」

「……ああ。ありがとな」

神崎よりタオルとボトルを受け取り、腰掛ける山本。

やはり前半戦の疲れが溜まっているのだろう。彼の声は幾分か気が抜けているように聞こえる。

モチベーションを保つのも難しいのだろうか。そんな不安が過ぎる中、藤代が彼に呼びかけた。

「山本さん」

「はい、何ですか？」

「早いですが今のうちに栄養補給をしておいてください」

「ッ！」

「この試合に勝つためにも、後半戦必ずあなたの力が必要です。」

もう一度試合に出てもらいます。前半戦残りの2分、そしてインターバルの10分。この間に体力を回復させてください。もう休まなくてもよいくらいに」

あくまでも交代したのは体を休ませるため。そしてまだまだ山本の力は必要とされているのだとはつきりと告げる。

わずかではあるが他の選手よりも多く休ませ、前半戦ラストの動きが激しくなると予測される勝負時の時間帯に代えることで消耗を抑える。

しかも運動量の激しい白瀧の復帰により後半戦は負担も大幅に減るはず。これならば大丈夫であろうと、藤代は期待を込めて山本に視線を向けた。

「……元々俺は最後までいきましたけどね。まあ、わかりましたよ」

「ええ。ありがとうございます」

このように指導者から信頼の言葉を投げかけられ、奮起しない人間はまずいないだろう。

山本もまた然り。いつもの彼のように笑みを浮かべ、頼もしい言葉を口にした。藤代も期待通りの返事を耳にして笑みを深くする。

これで彼のモチベーションについては問題がなくなつた。そう確信すると、藤代は改めてコートの手選手達へと意識を注いだ。

「このまま終わろうだなんて考えるな！ 点差を縮めて後半戦に臨むぞ！」

小林がコートの全員に一喝し、ボールを西村へと投げ入れる。

——試合、再開。代わって入った白瀧が山本のポジションに入った。

今日始めてコートに出てきた白瀧も周囲を観察しながら動き回りが、そこに一人の選手が立ちはだかる。

「……やはりあなたですか、勇作さん」

「随分な口を叩いてくれたじゃねえか。お前は早々に潰す！」

「悪いがそういうわけにはいきません。俺もエースの肩書きを背負っていますので」

マークチェンジ、勇作が白瀧のマークにつく。代わって金澤が小林の、古谷が本田のマークにつき、ローポストを警戒している。

西村と小林が外でボールを回し、一度ゴール下の黒木にボールを入れ、そして再びトップの西村へと戻す。

その瞬間、白瀧が動き出した。

(ツ！ 走った！)

右サイドから中央へと加速する。

中央でフリーになるつもりか、そう勇作は判断した。しかし彼の思惑ははずれ、白瀧は途中で動きを中断し両腕を胸の前で交差する。

そして西村を追っていた細谷の進行方向上に立ちはだかり、彼の動きを制した。

「なっ!?!」

(白瀧の、スクリーン!?)

「スイッチー！」

「チッ！」

細谷は西村の動きに、勇作は白瀧にそれぞれ惑わされ、反応が一瞬遅れた。だがすぐに細谷の掛け声によって勇作は立て直し、右サイドから侵入するであろう西村に備える。

「甘いっすよー！」

しかし西村は一瞬で切り返し、細谷のいる中央側からドリブル突破を果たした。

「……………つて、あれ!?!」

「はらっ。」

目の前を来るであろうと思っていた西村が気がついた時には勇作達の横を通り過ぎていた。

完全に虚をつかれ、二人揃って試合中とは思えない間抜けな声を挙げる。

(白瀧のスクリーンを完全に無視!?)

スクリーナーである白瀧を利用した動きであった。おかげで西村は苦勞することなく盟和の主戦力二人を抜き去った。

「あんの、馬鹿どもー!」

中央を突破されては簡単に決められてしまう。やむなく古谷がヘルプに出る。

「それならば!」

ならばと西村も古谷の目の前で静止し、斜め後ろへとバウンドパス。

「よしっ!」

左サイドから同じように走りこむ小林へとボールがわたった。

「小林!」

(駄目だ、俺ではブロックは間に合わない……)

「撃たすかッ!」

「ここは防ぐ!」

目の前の西村が壁となりシュートを止めることが出来ない。古谷が半ば諦める中、勇作の怒声が響く。

彼は小林の動きの反応し、背後からのブロックを狙い、高く跳んだ。さらに金澤も跳び、シュートコースを制限する。

見ると小林の跳躍よりも勇作の方が高さが出ている。これならばジャンプシュートも防げるだろう。

「……おいおい、忘れたのか?」

「ッ!」

だが、彼は失念していた。

「俺は司令塔だぞ?」

目の前の選手の本職が司令塔であるということ。

そして今の大仁多には絶対的なスコアラーが戻ってきているということに。

小林は振りかざしていた右腕を大きく振り下ろし、右サイドへバウンドパスをさばく。

その先へと視線を向けると——中央にいたはずの白瀧が、走りこん

でいた。

「ナイスパス！」

（白瀧——!?!）

スリーポイントラインの外側。丁度先ほどまで彼がいた場所の近く。

そこで今度こそフリーになった彼は安全にスリーを放つ。

天才と称された男にシュートを学んだ白瀧がそれを外すわけもない。ボールがリングを確実に射抜いた。

（大仁多） 37対54（盟和）。白瀧復帰後の最初の攻撃、成功。

「え、エクスポロージョン！ しかも、白瀧のスクリーンで!?!」

「これは、さすがの俺も予想外だったのだよ」

「うむ。今のは白瀧に盟和の選手たちの意識が集まっていたとはいえ、西村もよく決断した」

——エクスポロージョン。

ピック&ロールと同様に、スクリーンを使用した選手達のコンビネーションオフエンスの一種である。ただこのオフエンスの特殊な点はスクリーンをかけたスクリーナーとは逆の方向へとボールマンが切り込んでいくという点にある。

読まれていることを読んで逆を行く。スクリーンに意識が向いたデイフェンスの裏をかき、あえてスクリーンのかかっている方向を突破する。

特に今回は白瀧が復帰したばかりであるという理由もあり、なおさら盟和の選手達は意識が散漫としていた。その油断を西村がつき、エクスポロージョンを成功させたというわけである。

二人の関係を知る緑間からすれば、西村がこのような事をするとは余計に考えもつかず、驚愕した。

（……勝利の為に自分さえも利用させたというわけか）

そのおかげで効果は抜群であった。勇作と細谷が突破されたことで盟和のデイフェンスは崩れてしまったのだから。

「しかもその後小林にボールを預けてさらに中央に意識を向けさせる。そして逆に完全に意識から抜けた右サイド——白瀧で決める。」

エキスプロージョンのせいで盟和の選手たちは気づけない。今のワンプレイに、何重にも伏線が仕掛けられていたというわけだ」

「白瀧のスクリーンは囷。しかし西村の中央突破も、小林のミドルでさえも本命ではない。本命はあくまでも、フリーとなった白瀧のフリー」

完全に中央で点を取る流れであった。だがそこでスクリーナーであったはずの白瀧で点を決める。

彼がスリーを決めることにより、山本が抜けたとはいえどもまだスリーはあるのだと、盟和の選手たちに警戒させることとなった。

スクリーンと見せかけエキスプロージョンで西村が突破。加えて小林もシュートフェイクで敵をひきつける。そして最後にはやはり小林がパスをさばき、白瀧が外から射抜く。

「加えて白瀧、あの男はSGの素質もあったのか」
厄介だなど、大坪が苦々しく呟いた。

以前の練習試合でもスリーを放っていたことはわかっている。だが司令塔の補佐も行うなど、彼なりに山本のポジションを補おうとしている。

ただでさえ司令塔のポジションもこなせると知ったばかり。これ以上面倒事を増やさないでくれと祈るばかりであった。

「それに……地味にこのメンバー、やばくないですか？」

「やばいとは、何がだ？」

「だって今の大仁多、パスを出せる司令塔^Pの素質を持った選手がコートに三人もいるんすよ！」

問い返す大坪に、高尾は焦りを隠す事無く言う。

小林、西村、白瀧。三人ともPGをこなせる選手。それゆえに今のように広くコートを使ってパスをさばき、複雑なオフエンス戦術もこなすことができる。

司令塔がもはや一つの組織のように機能する。ただパス回し要因として他の二人がいるのではない。それぞれが状況を判断してゲームを組み立てる。

同じポジションである高尾には余計に脅威に映ったのだ。

『よっしやあー!』

彼の視線の先で、まさに話題に上がっている三人が手をかわし、攻撃の成功を讃えていた。

「……ッ！ 白瀧！ てめえ、よくも騙したな！」

そんな中、勇作が怒りを露にして白瀧を怒鳴りつける。

完全に裏をかかれたことを悔しがっている。しかも白瀧が出てきた際、明らかに彼が自身の手で得点を決めると匂わせる台詞を口にしていた為、なおのこと腹が立ったようだ。

だが白瀧はその程度の言葉では動じない。涼しい顔で返事をした。「騙す？ 騙した覚えはありませんよ。」

それに俺はさっきこう言いました。『俺達で決める』と。言葉通りに動いたつもりです」

「ぐっ……！」

「ああ、そういえばさっきあなたも0点に抑えるとか言っていましたっけ？」

すみません。……もう、無理ですね。三点入りましたから」

それどころかささらに挑発し、勇作の怒りを煽った。

こめかみにさらなる筋肉の収縮が見られる姿を目にし、白瀧は内心で己の考えが功を制したことを確信した。

(初めて勇作さんと会った時。あの時も俺と橙乃が一緒だったためか、この人は愚直なまでに感情を露呈していた。

つまり頭に血が上ると周りが見えなくなるタイプの選手だ。それならば感情を逆なでしてやれば――)

そうすればきつと、プレイの精密性が失われるだろう。

初めて会った時に勇作の性格を分析していた彼は、確実に勝利するためにと手を打っていた。

そして現に勇作は怒りによって冷静さを失いつつある。これでは先ほどのように上手くは機能しないだろう。

「……上等だ」

「おい、勇作。やめときな」

「そこまで言うなら、いいだろう。やっぱり……！」

「勇作!!」

「ッ……!?!」

完全に怒りに身を任せようとした中、勇作を止めたのは神戸の叫び声だった。

温厚な彼からはとても似つかない力強い声が、勇作の思考をクリアにする。

「神戸……」

「一体君は何をやっているんだい？」

「……つたく。馬鹿、一年の挑発に乗ってるんじゃないやねえよ。」

熱くなるのはお前の良い所でもあるが、キレたら終わりだぞ」

神戸が静かに問いかけ、細谷が勇作の肩に手を置き、彼を落ち着かせた。

「仮にもキャプテンを名乗るなら、少しは抑えてくれませんか？ てか、それが無理なら代われ」

「性格は重々承知してますけどね。けど、今は試合に集中してください」

古谷と金澤も勇作を宥める。チームメイトの言葉を聞いて、勇作の心に余裕が戻ってきた。

「……すまん。俺が悪かった」

一言、4人にそう向けて謝罪する。表情が元に戻っていた。

「それでいいー!」

ベンチで岡田が満足げに頷いた。一瞬最後のタイムアウトを取ることも考えたが、勇作が元に戻ったことでその必要がなくなった。

勇作が盟和の快進撃を支え、神戸と細谷、二人の三年生が勇作の制御役となっている。古谷と金澤の二人も彼らに続き、チームの柱となりつつある。

盟和も確実にチームとしてまとまり、結束していた。

(さすがにそう上手くはいかないか)

雰囲気から白瀧も相手の変化を察知した。

元々成功するかどうかは半信半疑であったために気落ちすることはない。いや、逆に白瀧にとってもこの方がよかったのかもしれない

い。

勝利の為には成功した方がよいが、勝負の為には失敗した方がよいのだから。

(それなら、プレイであなたを黙らせるだけだ)

盟和が反撃を開始する。

細谷と金澤がゲームメイク。他の三人も積極的に動き、フリーになろうとするが、その中でも勇作が特に動きがキレていた。

その勇作には白瀧がマークについていた。本田は古谷のマーク、小林は金澤のマークとそれぞれ代わっている。古谷と金澤はそれぞれディフェンスが上手い選手が相手と言うことで中々振り切れない。神戸もまた、黒木にマークされている。

そんな中、白瀧が勇作に声をかけた。

「随分と動くようですが。先に言っておきますよ」

「……なんだ？」

「これ以上あなたには活躍させない。必ず防いでみせる！」

「ッ……！」

その言葉に一瞬、対抗心が湧き上がった。だが二度も思考を疎かにしてチームメイトに迷惑をかけるわけにもいかず、すぐに冷静になった。

(落ち着け。白瀧の言葉を全て鵜呑みにする必要はない。)

思えば準決勝の聖クスノキ戦でもこいつは奇襲をかけたたり、奇妙な動きを繰り返していた。おそらくは自分よりも能力の高い選手を相手に、少しでも優位に立つためのハツタリだろう)

ビデオで見た準決勝でも白瀧は聖クスノキのエース、楠や主力のジャンと言った選手を相手に意表をつく行動を取っていた。

ならば今の発言も彼のハツタリにすぎないと勇作は冷静に分析する。

(だけどな、もうその挑発には乗らねえよ！ そんな小賢しい心理戦に惑わされてたまるか！)

もう同じ過ちは繰り返さないのだと、勇作は白瀧の発言を無視した。

カットを繰り返し、一瞬白瀧のマークから外れることに成功する。細谷も絶好のタイミングを見逃さない。ついにボールが勇作の手に渡った。

(ん……う?)

ボールを掴み、トリプルスレッドの体勢を取る勇作。

だが、そのまま彼の体は凍りついた。

「……………ッ!!!」

目の前では白瀧が腰を落とす、自然体で待ち構えていた。

そんな彼と向かい合っただけで、勇作は恐怖し体が命令を拒絶した。

文字通り、相手から伝わってきた威圧感が、ここから動けば終わりだそう言っているようだった。

(違う! ハッターなんかじゃ、ない!)

先ほどの白瀧の言葉は決して大げさではなかったのだと、本能が告げる。

(やられる——!!)

この相手には、この勝負は、挑んではならないと。今すぐここから、相手の射程範囲から離れろと。

「ふ、古谷!」

勇作は反射的に逆サイドのチームメイトの名前を呼ぶ。

自分では敵わないと、そう判断しての行動だった。

「——遅い!」

それを白瀧が見逃すはずもない。腕がボールを弾き、前方へと転がる。そのまま白瀧が確保した。

「あっ!?!」

「なっ!」

(何をやってんだお前は——!)

ステイールは白瀧の十八番。そして、そこから起きることも然り。

白瀧は盟和の選手が戻りきる前に、あつという間にワンマン速攻を成功させた。

(大仁多) 39対54 (盟和)。大仁多連続得点。残り時間が1分を

切り、その差は15点に。

「おい！ 何をボケツとしてんだあんた！」

「……悪い。思わずビビっちゃった」

「は!？」

古谷の責める言葉に、珍しく謝罪する勇作。

震えているようにも見えるその姿に、古谷も呆気にとられた。

（俺が古武術から取り入れたのが、膝抜きやくずしのような身体技法だけだとも思っていたのか？）

今のプレイもまた、白瀧の古武術の一端であった。

「……白瀧と正邦の古武術の違いは、大きく二つあります」

観客席で緑間が今のプレイを疑問に思った大坪と高尾に説明する。

東京都内でも正邦が古武術をバスケットに取り入れている。だが、正邦と白瀧では古武術でも違いがあるのだと。

「一つは、正邦がバスケットの為に古武術を始めたのに対し、白瀧は元々古武術を習っていた。それを独自にバスケットの動きに取り入れたということ。」

そしてもう一つ。これが大きいのですが、正邦は古武術の身体的技術のみを動きに組み込んだ。しかし白瀧はそれだけではないということですよ」

元々古武術は本格的に身につけるとなると、稽古の都合もあってそう簡単にはいかない。少なくとも高校から始めたならば、高校在籍中に習得することは難しい。だからこそ正邦は古武術の動きの一部のみをそのままバスケットに活かせるようにと練習をしている。

だが白瀧は違う。元々彼は古武術を小学生のうちから稽古していた為に、身につけていた。最もバスケットとはまったく別に学んでおり、後に動きを取り入れたために完全ではない一面もある。

そしてもう一つ。先ほども述べたように正邦は動きの一部のみを取り入れた。対して白瀧は身体技法に加え、古武術で学んだ心法をも取り入れているということ。

「心法。——すなわち心の修煉です。」

その中でも特に、キラー^殺イン^殺ステ^本インク^能トと重ね合わせた力。やつ

はそれを『気当て』と呼んでいました」

俗に言う『ガンを飛ばす』や『目で殺す』というものである。それを武道で鍛えたもの。

古武術において戦う場合には構えた時に、あるいは構えずとも対峙した時に相手の強さ、その間合いが相手から伝わってくるという。

相手から放たれる『威圧感』にも似たような、強い感覚が相手を襲う。

これは戦う相手も強く、勝負に対して本気でなければ感じることはあまりない。しかし勇作ほどの選手が相手ともなれば、白瀧のキラーインスティンクトも加わって——相当な威圧感が加わることになるだろう。

「白瀧のディフェンスは、攻めるディフェンス。積極的にボールを狙う姿勢。そして相手に凄まじい威圧感を与え、スティールを敢行する。」

……相手のオフENSEを許さず、瞬く間にボールを奪い去り、相手が気がついた時にはゴールに向かい、そして速攻を決める。だからこそあいつは、中学時代に『神速』と呼ばれた」

これこそが白瀧が強敵と戦う為に取り入れたディフェンス。彼は守備であろうと退く事はない。

（世間では『攻撃こそ最大の防御』と言うが、俺にとってはそれではまだ甘い。

『防御こそ最大の攻撃』。相手のチャンスさえも味方のチャンスに一転する。それにより、流れを自分達の下へとひきつける！）

守るときこそ攻め、味方の攻勢に転じる。速攻の速さも相俟つてその脅威は倍増する。

事実今のディフェンスで大仁多が一気に攻勢に移ろうとしていた。

「……本田、少し耳を貸せ」

「あ？ 何だよ？」

さらに盟和に追い討ちをかけようと、白瀧が本田を呼んで耳打ちする。

（まずいな。せめてもう一本を決めないと！）

細谷がボールを運ぶ。完全に大仁多が勢いをつけつつある。ここで決めなければ後半の試合展開にも影響が出かねない。

だからこそこの攻撃を必ず決めようと意気込むが、西村の厳しいディフェンスが彼の行く手を阻んだ。

「ぐっ……い！」

エースの活躍により、大仁多の動きがさらによくなっていく。西村もひたすら脚を動かし、細谷から自由を奪った。

細谷は西村の俊敏な動きを前に、シュートを撃つどころか中途半端な位置でドリブルをとめてしまった。そのためにボールの確保に専念せざるをえなくなってしまう。

（けど、パスコースが……ない！）

ディナイが厳しく、ボールの供給が上手くない。金澤も小林のマークでヘルプに向かうことができなかった。

「……ッ！ 細谷さん！」

「頼むー！」

「よしっ！」

カットでマークを外した古谷が飛び出す。

24秒制限まで時間も少ない。細谷は迷う事無くパスをさばいた。

ボールを受け取った古谷は鋭くカットイン。45度のポジションから中央へ切り込んでいく。

本田も機敏に反応するが――

（まだ、俺のはこっからなんだよ！）

古谷の本命はここからのステップバックシュートにある。

瞬間、古谷は右足を大きく踏み込み、後方へと下がる。

すぐにシュートモーションに入る。だが前進してきた本田が腕を伸ばし、彼の行動を阻止した。

「なっにっ！」

（……マジじゃねえか！）

本田が古谷の動きを読みきり、攻撃を防いでみせた。

『^{古谷}6番のステップについてだ』

『ッ!?!』

この攻撃が始まる前、白瀧の言葉が脳裏に浮かぶ。

『ステップバックシュートはたしかにディフェンスとの距離を作る強力な技だ。』

だがその為の踏み込む足は、決まっている。自分のゴール側の足だ。逆に反対の足は使わない。力が出にくいからな。

足の動きに注目しろ。反応できれば、お前なら止められる！』

ステップバックシュートの攻略法。ディフェンス能力の高い本田は本番で見事に成功させた。

「ぐっ、このっ……！」

身動きが取れなくなった古谷は腕だけを振ってゴール下の神戸へボールを回す。

(これ以上はもう待てない！ 僕が行くしか！)

ゴール下で黒木と神戸の一对一。

時間の問題もあり、神戸はターンから即シュートを撃つ。

「強引に撃ってきた！」

(いや、浅い。これなら——！)

「まだ甘い！」

黒木のブロックショットが炸裂する。

「あっ！」

「ちくしょう！」

(ディフェンスがどんどん厳しくなっていく……！)

ボールはリングに跳ね返り、かろうじて古谷がボールをキープする。

トップの細谷へボールが戻る。だがもはや流れは大仁多にあるとこのだろうか。隙を突くことができない。

ゴール下を攻めようにも、シュートまで持ち込むことさえ困難であった。

「細谷、よこせ！」

一人、勇作が声を張った。古谷と神戸が防がれ、彼が最も可能性が残っているのも事実。

ローポストの勇作へとボールが渡る。

(平面ならお前の方が分があるってんなら、ここを攻めるまでだ!)
上手く体を使いポジションを確保した勇作のポストアップ。
先ほどのように奪われない為に、勇作はパワードリブルでリングへ
迫る。

「ツ！ 重っ！」

白瀧の口から思わず言葉が漏れた。当然だ。

二人の間には体格も強靱さも大きく隔たりがある。勇作が強引に
押し込んでいった。

(やはり、このポジションは不慣れか！)

耐えきれなかったのか、白瀧の横——ゴール側に切り込むスペース
ができた。

勇作は見逃さずにスピนมーブで白瀧をかわしてドリブルイン。
そのままレイアップシュートを撃つ。

「ツ!」

跳躍した勇作。彼を迎え撃つように本田も真っ向から跳んでいた。

「なっ!」

「本田!」

(なんでお前がそこにいる——!?)

まさかこれも読んでいたというのか。多くの者が予想外の本田の
動きに呆気にとられた。

(まったく、あの野郎は人使いが粗いんだよ!)

その本田は心の中でこれを仕組んだ相手に怒りを覚えていた。

『それとな、もう一つ』

『まだ何かあんのかよ!』

『次勇作さんが来るとしたら、多分ゴール下から狙ってくる。』

ポストアップからゴールに切り込んでくることになると思う。俺
じゃ無理だから、頼むな』

『は!?! ちょっと、おい!』

古谷のステップと勇作のオフエンスについて一方的に話すと、時間
がない白瀧はすぐマークに戻った。

おかげで本田は文句を言うことも出来なかったのである。不満は

当然あつた。

だが白瀧にもきちんと考えがあつてのことだつた。

（さつき派手にディフェンスを見せたからな。同じ手は使わないはず。）

そうなると最も自信のある攻撃を仕掛けてくるだろう。即シュートを撃つてリバウンド勝負、という方法は少なくとも俺をかわさない限りしない。じゃないとスティールを受ける危険性がある。

これで自ずと選択肢はポストアップから仕掛けることに絞られる。ならば後は俺がコースを空けておけば——）

勇作をその場所へと誘導することができる。後は本田の動き次第。賭けではあつたが上手くいった。

「それでいい。それでこそ本田さんを出し続けた効果があるというものの」

藤代も成功を確信し、笑みを浮かべた。

試合に出続けたことよつて相手の動きの読みも深くなつている。勘が研ぎ澄まされ、より対応が早くなつていた。

（野生の勘による、高速のヘルプディフェンス——！ 駄目だ、もうボールが！）

「残念ですがこの勝負、俺達の勝ちです！」

すでに勇作の手からボールが放たれている。

今からではシュート切り替えもパスも出すことも出来ない。

「大仁多を、舐めんじゃねえ！」

本田のブロックショットが決まつた。

「さつすが、本田さん！」

「よこせ、西村！」

こぼれだまを西村が空中で拾い、体を回転させて小林へとボールを回す。

「——戻れッ、戻れ！」

「止めろ！ 絶対に守りきれ！」

細谷の、岡田の叫び声が響く。これから来るであろう攻撃の嵐を察したので。

「行くぞ、速攻！」

ボールを持った小林が先頭となって駆け上がる。

古谷が戻りながら小林のマークにつく。だが小林はドリブルで古谷をひっかけると、斜め前へとバウンドパスをさばいた。

誰もいないはずのその場所に、白瀧が飛び込む。

「小林さんナイスです！」

（また、お前か——！）

先ほどまで勇作と同様にゴール下にいたはずだというのに、もう最前線まで上がっていた。

古谷は内心で毒づくが、白瀧を止めることはできない。

「行かせるものか！」

これ以上突破されてはまずい。金澤が白瀧の前に出る。

距離が迫る中、白瀧は減速しなかった。勢いそのままに切り返しを一つ入れる。何もフェイクを入れることなく、スピードだけで金澤を抜き去った。

「な、速っ！」

相手の動きについていこうとして足を引っ掛けてしまい、金澤はその場で転倒した。

もはや背中を目で追うことしかできない。残る細谷に期待を寄せ
る。

「ぐっ……うん？」

そんな彼の目の前を一つの影が通過した。

「ちっ、来い白瀧！」

唯一戻ることができた細谷が立ちほだかる。

文字通り一対一。白瀧は早々に仕掛けた。視線はそのままにフリースローライン上で跳躍する。

（ティアドロップか！）

準決勝のビデオを思い出し、細谷はすぐにブロックに跳ぶ。

「ッ、駄目だ細谷さん！」

そこに金澤の制止の声が届く。当然ながら地に足が着いていない
今では間に合わない。

白瀧は腕を下ろし、ボールを後ろへと放った。

「なんだと!？」

(お前ならばそこにいるだろう——西村!)

ボールは走りこんだ西村の手に。

(あいつならば必ず追いつく。ならば俺はあいつの進路上に——コートへの最短ルートにボールを落とすだけでいい!)

「ナイスパスです、白瀧さん!」

完全にフリーだった。細谷が着地した時、西村のレイアップシュートが決まった。

『よっしやあ!!』

速攻を決め、西村と白瀧がハイタッチをかわした。

(大仁多) 4 1対5 4 (盟和)。前半戦終了間際、13点差まで追上げる。

「まさかお前も目を持っているのか……?？」

細谷が白瀧へ問いかける。

今、白瀧は決して視線を動かさなかった。それにも関わらず背後の西村に迷う事無くパスを出せた。

コート全体を見渡せる広い視野、それを白瀧も持っているというのか。

「目? そんなもの必要ありませんよ」

恐れさえ抱いているその問いに、白瀧は簡単に返事をした。

残念がら白瀧はそのような便利な能力は持ち合わせていない。

「こいつはいつでも、俺の背中を追い続けてきてくれますから」
あるのは仲間への信頼のみ。

『神速』の二枚看板による、セカンドブレイク……!」

「それでも、帝光時代に比べればまだマシに思えるのだよ」

「え? これで?」

これ以上の速攻があるのだろうか、高尾が問う。

「帝光時代は白瀧と青峰の二人が同時に攻めあがったからな」

「……青峰ってたしか、『キセキの世代』のエースとか呼ばれてたやつ?」

「ああ。スピードと得点力に優れた2人のフォワードの速攻。あれは相手が気の毒に思えるレベルなのだよ」

（たしかにマシだ！ 俺だったらまずディフェンスに戻りたくねえ！）

昔を思い出しながら緑間が言った。

白瀧と青峰、たしかにこのコンビの速攻は相手にしたくないだろう。これに主将であった赤司も加わると……想像は難しくなかった。

「そして、まだ終わりじゃない……！」

大坪がコート動きを敏感に感じ取り、警戒音を発する。

その声によって二人も再びコートに目を向けた。

「もう一本だ！ 当たれ！」

小林の声を合図に、オーツコートマンツーマンが展開された。

「なっ!？」

（こいつら、マジで攻めに来てる！）

（前半戦のお返しのつもりか！）

前半戦残り数秒、大仁多が再び猛攻を仕掛ける。

厳しいディナイによってパスコースは制限され、選手達の動きも散漫となった。

「もらった！」

「ぐっ！」

西村が金澤の腕からボールを弾く。そのままボールを確保するとすぐに中央の白瀧へ。

「よし来た！」

「白瀧だ、止めろ！」

「わかってるよ！」

すぐに古谷がヘルプに出る。絶対にブロックしてやると、身を屈めた白瀧の目の前で空を舞う。

「甘い！」

「ッ!？」

しかし、白瀧のシュートモーションはそこで止まった。

（フェイク——!?!）

時間がないというのに、ここでフェイクを入れるのか。盟和の選手達が驚いている中、今度こそ白瀧がジャンプシュートを撃った。

「ふざけんな——！」

「むっ!？」

シュートの軌道上に勇作が割り込む。白瀧のシュートを叩き落としました。

そしてブロックと殆ど時を同じくしてブザーが鳴り響く。

『前半終了——!!』

激しい争いが繰り広げられた前半戦が、終わりを迎えた。

(大仁多) 41対54 (盟和)。第二Qの結果を見ると大仁25得点に対して盟和27得点とリードを広げた結果となった。

しかし第二Qの終盤、白瀧投入後は3連続得点を記録するなど大仁多も負けていない。

(ブザービーターで決めるつもりだったが……)

「まったく。そう簡単には決めさせてはくれませんか」

白瀧は勇作をにらみつける。ディフェンスで圧力はかけたはずだが、未だに闘志は消えていなかった。

「当たり前前だろ！ お前ごときのために全国へのチャンスを逃すわけにはいかねえんだよ！」

「……なるほど。ならば後半戦こそ、徹底的に攻めてみせます」

挑発を受け、白瀧も笑みを浮かべて応えた。

二人ともチームメイトに声をかけられ、その場を後にする。

前半戦の20分が終了。試合は半分を残すのみ。まだ試合の行方はわからない。

——黒子のバスケ NG集ナノだよ——

「こいつはいつでも、俺の背中を追い続けてくれますから」

「それは本当か白瀧!？」

「あ?　なんでそこに勇作さんが反応して……」

「つまり、俺と茜のような関係ということか!」　↑追う側（兄）

「……え?」　↑追われる側（妹）

「全然違う!　あんたと一緒にするな!」

仮に二人がそういう関係になったとして、追う側と追われる側は基本逆のはずです。

第四十六話 怒りに燃える

『第二Q終了です。これより10分のインターバルに入ります』

栃木県予選決勝もついに前半戦が終了。試合はインターバルに入り、選手達は各々の高校の控え室へと引き上げていく。

「41対54、13点差か。大仁多は結構離されましたね」

選手達の姿がコートから消え、観客の話題は前半戦の振り返りだ。

秀徳高校の選手達も然り。高尾の呟きに大坪は前半戦を思い返しながら答える。

「大仁多はレギュラー二人の不在に加え、盟和が大仁多対策に練習してきた奇策を最初から出してきたからな。」

加えて主力であるエース・勇作が絶好調。この勢いを止めるのはなかなか難しい。しかし……」

「第二Qで白瀧が復活し、連続得点に成功した。これで大仁多も大分勢いづくはずですよ」

先の言葉を予測して同じ意見に辿りついた緑間。大坪も首を縦に振って続けた。

「そうだな。エースがいるといたくないではチームの形そのものが変わる。」

ここから先は大仁多も逆転に向け、より攻勢に出るだろう。となると後半戦の注目は」

一度言葉を区切り、盟和の選手達が先ほどまでいたベンチを見つめる。

「大仁多の攻勢に対して盟和がいかに自分たちのスタイルを貫き通すかによる」

少なくとも攻めに転じる大仁多に対し、下手に守りに入ることは得策ではない。準決勝の聖クスノキ戦のような結果に陥る結果となる可能性が高い。

ならば後半戦も攻め続ける姿勢を持つこと。それがこの試合の結末に大きく関わっていくだろうと大坪は予想した。

だが彼がそのように考えている中、当の盟和を率いている監督の岡

田は――

「……………」

控え室で選手達が体を休めている中、一人考えにふけていた。

（後半戦の対策が、まったく決められん！ 相手がどのようなメンバ―を組んでくるのか、全然読めん！）

岡田の悩みの種は、後半戦の大仁多が打ってくるであろう手を、向かってくる選手の面子を読みきれないということにあった。

（いや、正確に言えば全然とういうわけではない。しかし考えが多すぎてまとまらない……………！）

理由は大仁多の選手層の厚さ。一年生も活躍していることにより、どの選手が出てきてもおかしくないという状況である。

いくつかの選択肢の中ようやく三つのパターンまで絞り込んだもののそこからは検討がつかなかった。

一つ目の考えは、第二Qと同じ選手達で後半戦も望むという考え。

P G : 西村

S G : 白瀧

S F : 小林

P F : 本田

C : 黒木

前半戦を良い形で終わらせることができただため、その勢いを続けるためにもこの編成が最も可能性が高いと思えた。

この場合はスリーは白瀧のみに警戒すればよいのでより中を固めるべくボックスワンかゾーンディフェンスが有効と考えられる。

二つ目はS Gに山本か神崎のどちらかを投入し、代わりにP Gを務めていた西村を下げるという編成。

P G : 小林 or 白瀧

S G : 山本 or 神崎

S F : 白瀧 or 小林

P F : 本田

C : 黒木

外からの攻撃を2枚とし、より外角のシュートを狙ってくる。

加えて中に切り込んでくるスラッシュヤータイプの手がいたため対処が難しい。マツチアツプを考えなければならぬが、相手の出方によつては組み合わせも変わってしまう。

三つ目は大仁多がベストメンバーの布陣で臨むという場合。

P G : 小林

S G : 山本 or 神崎

S F : 白瀧

P F : 光月

C : 黒木

山本の消耗が大きいためS Gは神崎の可能性もあるが、それ以外は本来の形に戻すということ。

だが光月は準決勝の聖クスノキ戦で生じた不安も大きく、その翌日ということでも解消されているわけではないだろうという考えから最も可能性が低いと考えられた。

とはいえ、一番厄介であるのがこの五人であるというのも事実。

経験した試合時間が一番長く、選手としての能力が高い組み合わせ。もしも藤代がこのメンバーを選出したならば相応の覚悟で挑まなければならない。

仮に光月が本来の力で挑んできたならば、白瀧も復活している今、止められるだけの余力はほとんどないのだから。

(どれも可能性がある。しかもオフフェンスもディフェンスも対応はまったく変わってくる。

……つくそ！ 勝っているのはこちらのはずなのに、全然そんな気持ちがない！)

リードを保っているとはいえ、相手の実力を考慮すればいつ逆転されてもおかしくない。

追われている立場のプレッシャーは相当なものであり、ここで判断を間違えるわけにはいかなかった。

「——よし！ 聞け、お前達！」

そして、岡田は覚悟を決めた。

「お？ 何です？ 考え事していたようですけど、まとまりました？」

「ああ。後半戦に向けて話しておく」

お気楽な気持ちで聞いてくる古谷に苦笑しつつ、岡田は全員を呼び寄せた。

「後半戦、大仁多は第3Qから逆転するくらいの勢いで攻めてくることが予測される。

しかし情けない話だがどう攻めてくるか、俺には判断がつかない。そこで……ディフェンスはお前達選手の判断に任せる」

結果、岡田はディフェンスの判断を五人のレギュラーに託すことにした。

今結論を急ぎ、その予想が外れたならば精神的にも余裕が消えてしまう。

ならば現場の判断に任せ、選手達の行動を信じようと。それが岡田が出した結論である。

「……本気ですか監督？」

「ああ。細谷、最終的にはお前がチームを纏めてくれ。タイムアウトを取るまでは、お前の判断でチームを動かす」

「あらら。そいつはまた責任重大ですね」

相手が大仁多ということもあり、細谷の表情から笑みが消えた。

前半戦の消耗が激しいのは彼も同じ。そこにさらに司令塔としての重責が増える。

心中で不安と言う闇が濃くなっていく。

「ハッハッハ！ いいじゃないっすか！ そういうの俺好きですよ！」

そんな闇を振り払うかのように、勇作の笑いが響いた。

「難しいこと、今考えても仕方がない。それならばいつそのことその場の勢いで行く。何の問題もない！」

「……お前のその性格、今は本当に羨ましい」

「だろ？ ま、だからあんまり気にしすぎるな」

勇作は立ち上がり、細谷の肩を叩いて言った。

「難しい指示はお前に任せる。その代わり後は任せとけ」

「行動に関しては僕たちの役目だからね」

「その代わり、責任はきっちり取ってもらいますけどね」

神戸と古谷も笑みを浮かべ、細谷を見た。

不思議と重責が随分と軽いように感じられた瞬間だった。

思わず細谷の表情にも笑みが浮かんだ。

「……言ってる。だが俺だって自分でも動くからな。足引つ張るなよ」

強がりと言えるだけの余裕も戻っている。これならば大丈夫だろうと岡田は息をこぼした。

「よし。デイフェンスに関しては以上だ。

オフフェンスに関しては相手がどう出ようと関係ない。……金澤、お前の出番だ」

岡田はずっとビデオカメラを覗き込んでいる金澤へと視線を向ける。

ビデオの内容は当然のことだが前半戦の映像だ。一つの行動も見逃さないと言わんばかりに集中しているようだった。

「前半戦、大分見ることができただろう？ そろそろ仕事を果たしてもらおうぞ」

「……ええ。体の方も大分温まってきました。いけます！」

顔を上げた彼の表情は、溢れんばかりの自信を象徴しているかのよう、に、笑みでいっぱいだった。

大仁多の控え室に戻るや否や、口を開いたのは他でもない藤代監督だった。

「よく聞いてください。後半戦——第三Q、ここからまた選手を交代します」

告げられたのは選手交代メンバーチェンジの指示。

おそらくこのままではいずれ対策を打たれてしまうと考えた監督はその前に動こうと考えたのだろう。

(……やはりな)

俺もその考えには同意見だった。

第二Qで勇作さんを止めて連続得点を挙げらたとは言え、その主な理由は奇襲に成功したからだ。

だが慣れられると盟和も黙ってはいないだろう。そうなる则今の五人は身体能力はあまり高くないために押し切られる可能性もある。第二Q終盤の試合展開が良い例だ。

だからこそ、手を打つならば早い方が好都合であった。

「西村さん、そして本田さん。お二人に代わり、山本さんと光月さんに入ってもらいます」

「ッ！ は、はい！」

「……うす」

「よっしゃあ！ 了解です！」

「え？ あ、はい」

四人はそれぞれ異なった反応を示しつつ監督の指示に答えた。

二人の選手交代。これで大仁多は本来のレギュラーが揃うことになる。つまり、ようやく元々予定していた布陣で盟和と戦うことができるということだ。

「それに伴い、オフエンス・ディフェンス共に方針を少し変えます。

PGに小林さんを戻し、オフエンスをいつもの形に戻す。そしてディフェンスは同じポジションの方とマッチアップです。勇作さんには光月さんを当てます」

エースの勇作さんには同じPFの明に止めてもらう。

……辛いだろうが選手の能力として最も可能性が高いのはあいつだ。俺もさつき対決して強く思った。高さも力も勇作さんは秀でている。

もつとも、明本人はまだ割り切れてはいないようだが。

「監督、いいんですか？ 勇作には白瀧を当てたほうが……」

「いいえ。勇作さんにはシュートレンジの広さだけではなく、ゴール

下の強さもある。

ただでさえ今こちらはリバウンドを確保できていない。こちらが対抗するためには、光月さんが適任です」

「しかし」

小林さんが意見するが、やはり藤代監督は譲らない。

そう、俺では盟和の選手達からリバウンドを取れない。勇作さんが相手ならばなおのこと。そして向こうのゴール下を制するためにも明は適任だ。だからこそ監督の判断は正しい。

まだ納得しきれないのだろうが、小林さんは口を開こうとするが山本さんに引き止められた。

「山本……」

「わかりましたよ。少しでも楽にできるよう、俺らがサポートします」
「ええ頼みます。古谷さんのステップバックシュートは勿論のことですが、抜かれたらすぐにヘルプに出てください。」

この第3Qで一気に点差をひっくり返すくらいの勢いで挑みますよ！」

『はいー』

どうやら山本さんの体力の心配はないようだ。俺も山本さん達の負担を減らせるように動かなければならない。

(……俺は古谷のマッチアップだが、勇作さんの性格上向こうから来る可能性が高い。

いざという時、明が立ち直れないときはマークチェンジしてでも俺が止める！)

指示に背くことになるかもしれないが、今大切なのは勝つこと。

考えたくはないが信じすぎるわけにもいかない。覚悟は必要、か。

「……橙乃！ 悪い、もう一度テーピングをやってもらってもいいか？」

「うん、ちょっと待ってて」

橙乃は呼ぶとすぐに駆けつけ、足のテーピングを巻きなおしてくれた。

レッグスリーブの代わりにつけているこれのおかげでいつも通り

に動けている。

自分のプレイに不安はない。後は自分の役目を果たすだけだ。

「ありがとう。これで後半戦も戦える」

「きつと大丈夫だよ。前半戦は休んでいたんだから、しつかり挽回してもらわないとね」

「……ああ、そうだな。まだ大仁多が負けている状態なんだ。早いうちに——できれば第3Q中にひっくり返して、橙乃も安心してみていられるようにしないとね」

「うん。そのためにも白瀧君も頑張つてね、エースなんだから」

慣れた手つきであつという間にテーピングは終了した。こちらに向けられた表情には笑みが浮かんでいて不安の色は窺えなかった。

よほど信頼されているのか、それとも俺に心配させたくなかったのか。俺には答えはわからないが健気なエールには応えたい。

「任せておけ。IHの出場、さくつと決めてやる」

だから、改めて決意を言葉にした。そう言うとき橙乃は笑みを深くして頷いてくれた。

「応援してる。それしかできないけど、ちゃんと見てるよ」

「十分だ。それだけで十分だよ」

決して嘘ではない。あの頃に比べれば見守ってくれる人がいるだけでどれほど心強いだろうか。

思いが伝わったのか、橙乃が少し恥ずかしげに首を縦に振った。

「……それとね、私からもう一つ言ってもいい？」

「なんだ？」

一つ間をおき、橙乃が口を開く。

どこか恥ずかしげにも見える表情。俺の知らないところで何か試合中であつたのだろうか？

「この試合が終わったら、私……」

「ん？」

「白瀧君に、話したいことがある」

……いけなしいけなしい。一瞬思考がクリアになつて呆然としてしまった。

ちよつと待って、橙乃さんそれは言っではいけない敗北フラグです。大仁多が負けてしまいます。

勿論冗談で言っているのではないだろうが。そう言われては俺も対応に困ってしまう——

「おい、要。今ちよつといいか?」

「どうした? 何かあったか?」

対応に困った俺に勇が助け舟を出してくれた。席を立ち、勇の元に向かう。

よくやった。何も知らないだろうが、今度何か驕ってやる。200円までなら。

「あつ。……逃げた」

背中越しに何か聞こえたが、今は聞こえないフリをした。

悪寒などを感じたが次の勇の問いで全てが吹き飛んだ。

「試合中、本田の調子はどうだった?」

思いもしないチームメイトの名前であった。明ではなく、本田の名前は。少なくとも第二Qであいつの動きに鈍さなどは見られなかった。

それに本田は最後のプレイで勇作さんのブロックにも成功している。監督の信頼に応えた、見事な動きをしていた。

決して不安視するようなことはないと思っっている。

「いつも通りに動いていた。俺の言葉にも耳を傾けていたし、周りも見えていた。」

特に心配するようなことはないと思うけど、何かあったのか? そういえば姿が見えないな」

周囲を見渡しても本田の姿が見えなかった。後半は選手交代とは言っても体を休め、いざという時に備えておかなければならないのに。

「俺もそこが気になってき。いざ声をかけようと思ったらいつの間にかいなくなってる……」

「あ、本田さんなら監督の話の後、すぐにトイレに行くって言っただよ」

「本当か？」

「はい。ただその後は全然戻ってきてませんけど」

話を聞いていた西村が答えを教えてくださいました。

……体調が悪いようには見えなかった。試合前も試合中も軽快な動きを見せていた。

それなのにまだ戻ってきていない？　ちよつと心配になってきたな。

「わかった。ちよつと俺様子見がてらトイレに行つて来る」

本当は明に声をかけておこうと思つたいたが、事情が変わつた。

(ひよつとしたら、自分を責めているかもしれないな)

性格を考えるに本田の自尊心があいつを許さないと思えた。

だから放つて置いては駄目な予感がした。かつての友のように、いつの間にか人が変わつてしまうような事になるのではないかと、いやな予感が。

「白瀧さん！」

「はい？　何ですか？」

すぐに向かおうとした矢先、監督に声をかけられる。

「本田さんを探しに行くのなら、一つお願いがあります」

どうやら俺達の会話が聞こえていたらしい。

監督から一つの依頼を受けて、再び本田の下へ向かつた。

その頃、男子トイレの個室に本田の姿があつた。丁度他に使用している者はなく、本田以外の存在は見られない。

そんな中トイレに響いたのは悲痛な声だった。

「ちつくししょう。出すもの出ないで、余計なものばかり出てきやがる……！」

目を隠すように手で覆う。目頭が熱くなり、あふれ出たものは止まらなことを知らなかつた。

「情けねえ。結局、一人じゃ何もできなかつた！　あいつの手を借り

なきや止められなかった！」

第二Q、ディフェンスを期待されて本田は出場して勇作とマッチアップした。

しかしその結果本田は勇作の得点を許してしまい、リードを広げられる一因を作ってしまった。

たしかに最後の一本を止めて後半への流れを掴むことは出来たが、それも白瀧がいてのこと。一人では何もできなかったのだと、自分の無力を嘆いていた。

(散々越えてやるとか言つときながら、試合では助けられてんだ。これじゃあ本当にただの馬鹿だ)

相手の方が力量が上で、ミニゲームで一度は負けを経験して。それからは常に白瀧に敵対心にも似た感情さえ持っていた。

その相手に試合で助けられた。口だけの人間と思われても仕方がない。

馬鹿野郎と心の中で自分に対して何度も悪態をついていると、トイレの入り口が開く音が聞こえた。

(……ッ！)

咄嗟に口を閉じた。誰であろうとこんなみつともない姿を知られたくなかった。

早く去ってくれと祈る。しかし入ってきた男は扉の前で立ち止まり、呼びかけてきた。

「本田、いるか？」

白瀧の声だった。できれば今一番会いたくない相手の声。

戸惑い反応に困る本田であったが、白瀧は壁越しに話を続ける。

「答えないってことは、やっぱり本田だよな？」

違うならば一言話せば済む話。答えないという行動が、中にいる人物が本田であるという事実を物語っていた。

本田もそれを理解し、問いかけに応じることにした。

「ああ、そうだ。何の用だよ？」

「監督から話があるとのことだ。試合が始まる前に、できればすぐに戻れと」

「監督が？……そうか」

何の用件だろうか、考えるがすぐに答えは出た。おそらくは二軍への降格だと。

先ほども悩んでいたことだが試合に出ておきながら結果を残すことができなかった。一年生であるために実績も少ない。ならば当然のこと。

そう思うと抱いている苦悩も馬鹿らしく感じられ、逆に気分が楽になった。

「……俺からも言いたいことがあるが、いいか？」

「何だよ？」

できればそつとしておいてほしいが、この男は譲らない。それくらいは共に行動しているのだからわかる。

本田は観念してその先を促した。言いたいことがあるなら何でも言えと。

「さっきは助かった。ありがとう」

だが、まさか礼を言われるとは思ってもいなかった。

「は？ 何を言って……」

「お前がいなかったらおそらく勇作さんをとめられなかった。お前がいたからこそ最後の勝負時に失点する事なく繋がられたんだ。」

俺一人ではできなかったんだ。お前は十分に役割を果たしてくれた。後は俺達に任せておけ。以上だ」

続けざまに言葉を放つ。

やめろと言いたかったが口を開くと感情があふれ出てしまいそうだったので言えなかった。

その後白瀧は用件を済ませたのかその場から立ち去っていき、そして途中で立ち止まった。

「それと、監督から言うはずだがあらかじめ言っておく。」

……一軍内定。今後も他の一年生の方々同様、さらに力をつけつつ頑張ってください、だそうだ」

「え……」

「よかったな。お前の奮闘、監督もしっかり見ていたぞ。後半も呼ば

れたならまた頼む。信じているぞ」

今度こそ本当に白瀧は去って行った。再び一人になった空間に、また声が響いていく。しかし先ほどのような悲痛な叫びではなかった。

前半戦が終了して10分。インターバルが終了した。

ついに試合は後半戦を迎え、選手達が再び決戦の舞台へ戻ってくる。

「……どうやら、大仁多はレギュラーに全てを託すことにしたようだな」

「不安要素はあるものの、実力はお墨付き。IH出場はこのメンバーで決める、そういう気持ちの現れでしょうか」

「ま、俺らもこいつらにやられたから、この面子での戦いを見たいというのもありますけどね」

「ああ、そうだな」

大仁多の五人の選手がユニフォーム姿で準備している。面子はこの五人。

PG	：小林圭介	188cm
SG	：山本正平	178cm
SF	：白瀧要	179cm
PF	：光月明	192cm
C	：黒木安治	195cm

最も信頼の置けるメンバーで優勝を勝ち取りに来ている。

かつて自分達も対戦したメンバーが揃う姿を見て、大坪達はどこか懐かしく感じていた。

「後半戦。これで、栃木の代表が決まる」

緑間は大会のプログラムを開き、トーナメント表を覗き込んだ。

この一試合で予選が終了。IHへの出場校が決定される。

王者・栃木か。挑戦者・盟和か。勝つのはどちらか一校のみ。

「……勝つぞ！ 大仁多、ファイ！」

『オー!!』

「優勝するぞ！ 盟和、ファイ！」

『オー!!』

両校のボルテージも最高潮を迎えている。

選手達が円陣を組み、コートに足を踏み入れた。

（……可能性が低いと思っていたレギュラー陣。藤代、勝負に出たな！）

選手の姿を見て、岡田は己の予想が外れたことを察し、藤代をにらみつける。

当の藤代は視線を受け流し、五人の選手を見守っていた。

「勝たせてもらうぞ、小林。今度こそお前達を倒す！」

その先では細谷が小林に宣戦布告していた。

不安がないわけではない。しかしそれよりも勝ちたいという気持ちの方が勝っていた。

相手の思いが伝わったのだろう、小林も言葉に応えた。

「やれるものならやってみるといい。優勝も栃木最強PGの座も、譲る気はない。」

それでも挑むというのなら、受けてたとう」

冷静に、しかし内心では闘志が燃え滾っている。言葉一つ一つに自信が満ち満ちていた。

「そしてもう一つ言っておくが、気をつけた方がいいぞ？」

「忠告か？ 何だよ？」

「前半戦、まさかの13点ビハインドという展開に、怒りを覚えているやつらがいるのでな」

小林の後ろから白瀧が現れる。

横を通り過ぎていくだけであつたが、彼の表情を見て盟和の選手たちの表情が固まった。

（……凄い集中力！ 静かなのに、気迫がかなり伝わってくる！）

（自分が出られない状況下でここまで押されていた現実。インターバルでさらに気持ちが高まったか？）

「……上等！ イラついているのはこつちもなんだよ！」

だが負けられない、負けたくないという思いは盟和も譲れるわけがない。

今度こそ初の栄光を掴み取るのだと、五人の選手は王者の姿をにらみつけた。

「どうだ、光月？ 大丈夫そうか？」

試合再開前から火花が散る中、山本が光月に声をかける。落ち着いた表情で光月は答えた。

「……はい。大丈夫、です」

「そうか。前半戦はしっかり休んでいたんだ。お前にも暴れてもらわなきゃな！」

肩を叩き、奮起を促す。反応は小さく、やはりまだ本調子ではないのだろうと窺えた。

（緊張もそうだろうが、何よりもプレイの不安だろうな。

その不安を表情に出さないようにと必死に隠しているように見える。それさえ振り切れれば大丈夫だと思っただが……）

それが難しいというのが現実。精神面の改善は簡単ではない。

何とか試合中に切欠を掴んでほしいと願うばかりであった。

「……俺もサポートする。共にゴール下、体を張るぞ」

黒木が肩を組み、目を見て落ち着かせるように言う。

「わかっています。それが、僕にできることですから……！」

今自分ができること、それをやるしかない。光月も声を振り絞った。

「さあ、始まるぞ！ 第3Q、決戦再開！」

各々の思いとは関係なく時間が流れ、試合は始まりを迎える。

山本がスローイン。小林がボールを運び盟和デイフェンスに攻め込んだ。

「行くぞ！ まず一本！ 止めて流れを呼び戻す！」

「おうー！」

盟和も細谷の指揮の下、動きを見せた。

「これは……！」

「前半戦も見せていた、マッチアップ2―3ゾーン！」

盟和が大仁多対策にと練習を続け、実践でも効果を発揮していたマッチアップ2―3ゾーン。

再び大仁多の攻めを止めようと、容赦なくプレッシャーをかけていく。

相変わらずパスコースが特に徹底されており、簡単にパスを出せない。

(メンバーが変わろうと関係ない！ 小林であろうと、絶対に！)

「……甘く見られたものだな」

「え？」

細谷が必死のディフェンスを見せる中、小林は一言残して彼の横を過ぎ去った。

「なっ——!?!」

フェイクを使っていない、凄まじいキレのあるクロスオーバー一つで細谷をかわした。

トップからハイポストへ侵入。すかさずジャンプシュートを撃つ。

「くそー！」

古谷がすかさずヘルプに出るが――

「言っただろ？ 怒りを覚えていてるやつらがいると」

彼のブロックは届く事無く、ボールがリングを射抜いた。

「決まった！ 小林さん、鮮やか！」

「後半戦、最初に得点を決めたのは大仁多！ 主将の一発！」

(大仁多) 43対54 (盟和)。

小林の得点により、大仁多が幸先の良いスタートを切る。

「前半戦、苦勞していたゾーンを切り崩した！」

「スピードとテクニックを併せ持つ、オールラウンダーのPG。やはり、衰えんなあいつは」

苦境であろうとも安定した強さを見せ付ける。小林の姿に、大坪は自分が胸を躍らせていることに気づいた。

「何度も同じ手が通用すると思っていたのか？」

「ぐっ……」

「俺が後輩達が作ってくれたチャンスを無駄にするわけがないだろう。」

「さあ、反撃開始だ！ 一気に畳み掛ける！ 行くぞ！」
『おうー！』

頼れる主将、小林圭介ここにあり。エースだけではない。
大仁多が逆襲に向けてまず大きな一歩を踏み出した。

——黒子のバスケ NG集nanoだよ——

「言っただろ？ 怒りを覚えているやつらが……あつ」

ボールがリングに衝突する。三度跳ねてリングの外に向かい……

「うおおおお！」

「させつかああ！」

黒木が勇作のブロックを飛び越え、無理やりねじ込んだ。

「よっしやあ！」

「くそっ！」

「……………」

「……………」

ゴール下で熱い展開が繰り広げられ、対照的に小林の周囲に気まずい空気が流れる。

「……言っただろ？ 怒りを覚えているやつらがいると」

「小林さん、無理してフォローしないでください！ 余計に格好悪く感じます！」

結果が出る前に言っているので、失敗すると滅茶苦茶恥ずかしい。

第四十七話 牙を剥く伏兵

「ディフェンス！ 一本集中！」

チームを引っ張る小林の声がコートに響く。

最初の攻撃を決めさらに士気高まる大仁多のディフェンスが盟和の選手達に強くプレッシャーをかける。

（くそっ！ やっぱりパスコースがない！）

特にボールを保持する細谷に対する小林のチェックは厳しかった。高さもあるというのだから厄介である。

大仁多のマンツーマンディフェンスを前にボールをキープするだけでも難しい。パス一つでも油断するわけにはいかなかった。

（けど、な！）

トップに立つ細谷は緩急で揺さぶると、ボールを左手に移して右へドライブで切り込めるよう重心を傾ける。

すかさず小林も対応して彼を追う。

だが細谷はそこからボールを横にさばいた。誰もいないはずのその場所に、シカットでマークマンである山本をかわした金澤が飛び込む。

「なっ……」

「しまった！」

掌に収まると同時にボールの軌道を変えてゴール下へ。

神戸がロールターンで黒木をかわし、そのボールを受け取った。

「ナイスパス！」

マークを振り切った神戸はそのままジャンプシュートを沈める。

（大仁多） 43対56（盟和）。盟和もすぐさま得点に成功した。

「すまない」

「ドンマイ、気にするな！ ボール早く！」

「山本さんもオフエンス切り替えていきましよう！」

気落ちする黒木に声をかけ、小林がボールを要求する。白瀧も山本に話しかけるが、彼は自分の相手である金澤を見て固まっている。

「あいつ、あんなに早かったっけ？」

「は？ 速いって……それほど動きが急に変わったようには見えませんが」

「いや、動きそのものじゃない。速さじゃない方の、早さ」

今先ほどのプレイ。その動きから金澤が前半戦とは違うことを察知していた。

「やばいな、得点は決めることはできたが。……やはり大仁多のベストメンバーは攻撃力が違いすぎる」

細谷が愚痴を零すように言った。

前半戦と違い、現在は小林が司令塔のポジションに入っている。トップに総合力に長けた選手が入ったことにより、両ウイングの山本・白瀧の両選手も動きやすくなる。

マンツーマン2―3ゾーンも破られるとなると、現状大仁多の攻撃を全て防ぎきるような上手い手はなかった。

「……だがエースさえ止めれば話は別だろ」

そんな細谷の呟きに反応したのは意外にも勇作であった。後半戦開始直後であるためか表情も冷静で、ある意味一番落ち着いている状態だった。

「俺が白瀧にマッチアップする。エースさえとめれば、流れは取り戻せるはずだ」

「意気込みは買うが、できるのか？」

「元々俺はそのつもりでこの試合に挑んでいる」

気迫溢れる強い言葉を受け、細谷は悩む事無く決断した。

「わかった、なら白瀧はお前に任せる。俺もとにかく抜かれないことに専念しよう」

エースに対抗するのはエースしかない。

もう一度流れを引き寄せようと盟和の選手達も気合を入れなおした。

小林と山本が交互にボールを回して迫ってくる。トップに小林が立ち、ボールが彼に戻ったところで一度前進を中断した。

(さっきのでドライブを警戒したか。距離をあけて突破を防ごうとしている)

冷静に細谷の体勢を見て、そして全体にも視線を向ける。

(光月は、やはりまだ辛いか。白瀧には勇作か)

不安視している光月は古谷のマークを外せそうにない。

一方、気になっていた白瀧のマークには勇作がビツチリとマークについている。

(……やはり俺を止めに来たか)

「行かせない！ 今度こそ止めてやる！」

予想していたことなので白瀧にも特に驚きはない。

勇作はフェイスガードを行い、自由にはさせまいと体を動かすが……

「だが、それでは無理だ！」

しかし白瀧を止める為にはまだ足りない。

チェンジオブディレクション。外に一歩踏み出し、すぐに方向転換。一気に加速して勇作をかわし、ミドルへ。

そこに小林がノーモーションからのパスをさばく。細谷の頭上を越えて白瀧に通った。

(ちっ！ やっぱり高さが違う！)

「ナイスパス！」

距離を開けていてもカットは難しい。白瀧はそのままシュートの構えに。

「させつか！」

すかさず勇作が駆け込みながらブロックに跳ぶ。

だがシュートフェイクだった。白瀧はピボットで勇作をかわし、ゴール下へ。

(このやろ、フェイクかよ！ だが、まだ……!?)

それでもすぐに体勢を立て直し、背後からのブロックを狙う勇作。

「無駄だ。あなた達じゃ俺を止められない！」

すると白瀧の体がジグザグに動き、背後の勇作を、さらにヘルプに出た神戸を惑わした。

そのまま二人をかわしてレイアップシュートを沈める。

(大仁多) 45対56 (盟和)。再び11点差に。

「なに!？」

(今のはまさか、彼が準決勝で見せていたステップか……!?)

ジノビリスステップ。複数が相手であろうとも、止めることは容易ではなかった。

「白瀧のジノビリスステップ!? そんな、秀徳うちと戦った時はそんなの使ってなかったはずじゃ!？」

「ああ。どうやらこの短期間で完成させたようなのだよ」

「なるほど。ヘルプに出た相手だけではなく、抜いた相手も死角からのブロックができない。

たしかにこれは白瀧にとって強力な武器となったな」

「……俺は止めてみせます」

練習試合で見られなかったプレイを目にし、高尾が驚愕の声を上げる。

大坪も感心する中、緑間は一人彼への対抗心を強めていた。

(速い! ただ純粋に速い! 動きのキレが良すぎて捉え切れない!)

それはコートに立つ選手も同様のこと。だが一つ違うのは、今ここで止めなければならぬという状況だった。

「……古谷。ちよつと力を貸せ」

「いいですけど。やるならしつかり決めてくださいよ?」

勇作が並んで走っている古谷に声をかける。言いたい言葉を察し、古谷も短く了承の言葉を返した。

盟和のオフセンス。細谷はじっくりとボールを運ぶ。味方が大仁多のマークを外すことを祈りながらボールをキープした。

すると古谷が勇作のマークについていた光月の動きを体で封じた。

(スクリーン!)

(オフセンスでも来るのか!?)

古谷のスクリーンで勇作が光月のマークを外れる。すかさず細谷がパスをさばく。

ボールを受け取ると同時に、彼の前に白瀧が立ちはだかった。

「あくまで俺を倒す、そのつもりですか？」

「当たり前だ！」

ゴールからやや離れているが、ミドルレンジでもシュートを撃てるのが勇作の強み。

トリプルスレッドの体勢から瞬時に勇作の上半体が上がり視線がゴールへと向く。

その動きにつられ、白瀧の動きが硬直。そして勇作が動き出した。

「抜いた！」

シュートフェイクと見せかけ、白瀧の右横から勇作のドリブル突破。

だがそこに白瀧が右腕を伸ばしバックチップでボールを弾いた。

「うっ!？」

「俺が目の前で素通りさせるとでも？」

白瀧のステイールが成功。ボールを山本が拾い、盟和の攻撃を防ぎきった。

(勇作を止めるか！ やはりディフェンスも並大抵ではない！)

エースをいとも簡単に止められて、岡田の表情に曇りが生じ始めた。

再び大仁多の攻撃が始まる。今度は小林は一度中の黒木にボールを入れると今度は外の山本へとボールを回す。

「はいはい、それじゃ俺も行かせてもらいますか！」

(ツ！ 来る！)

重心の傾きから金澤が動きを予測し外角への切り込みに集中する。すると山本はクロスオーバーと見せかけて逆をつき、中への侵入を果たした。

(速っ！ インサイドアウト!?)

ボールをそのまま手首の動きで返し、ディフェンスをかわす——インサイドアウトで金澤をかわす。

さらにシュートフェイクで神戸を引っ掛けると黒木へパス。ゴール下のシュートへと繋がった。

「よっしやあ！」

「ナイスアシストだ山本！」

「黒木さん、ナイツシュ！」

（大仁多） 47対56（盟和）。ついに点差が一桁に縮まった。

「9点差……かよ。やばいな」

とてもではないが守りきることが難しい。細谷の嘆きにも聞こえる呟きが、全員の心境を表していた。

（どうにかしたいけど、でも個人の能力が高くて止められない）
（となるとオフエンスで取るしかないんだが……）

せめて得点に繋げたい。そう思って全員が体を動かす。

「まあ、好きにはさせませんがな！」

そこに大仁多のディフェンスが襲い掛かる。小林が細谷の手からボールを弾いた。

「ぐっ!?!」

細谷自身、思考に浸っている余裕はない。油断すればたちまち持っていられる。

幸運にもボールはラインを割り、なんとか大仁多にボールを奪われることだけは防げた。

『盟和高校、タイムアウトです!』

まだ後半が始まって二分も経過していない。しかしここで岡田はタイムアウトを選択した。

「やはり、厳しいか」

岡田の問いに選手達は声も出なかった。無言で俯いている姿がその答え。

ベストメンバーを相手にして、改めてその実力を思い知った。

「……白瀧に勇作と古谷のダブルチームを当てる。こうなってはある程度点を取られるのは仕方がない」

ならばせめて要所を締める。他が甘くなってもエースが勢いづく

ことだけは避けようとの考えだった。

「ランガン勝負点の取り合いに持ち込む。金澤を基点にして仕掛けていけ」

守りに入れば流れをみすみす失うことになる。ならばリードを守りきるために盟和も攻めにいく。

タイムアウトを取った盟和が方針を決めている中、大仁多高校も同じように今後の流れを決めようとしていた。

「……おそらく、ただ流れを切るだけのタイムアウトではありませんね。」

何か考えがありそれを実行するために。このタイムアウト後、良くも悪くも局面が動く可能性が高いです」

後半戦始まってすぐのタイムアウト。おそらくインターバルで指示を徹底できなかったからこそそのものだと思われた。

そしてそうだとすればこの後、盟和が大きく動くことになるだろうと予測できる。

「それなら大仁多も動いていきますか？」

「それも良いのですが、しかし今うちは流れに乗っている。オフエンスも得点できている今、下手に動きたくない。」

それに加えて岡田さんの考えも読めない今、できれば向こうの出方を窺いたい、というのが心境です」

対して大仁多は点差も縮め、選手達のコンビネーションも上手くいつている。

このまま続けていきたいと藤代は考えており、あえて細かい指示を出すことは避けた。

「点差はありますが、ひっくり返せないような大差ではない。確実に攻めていきましょう」

『タイムアウト終了ですー！』

そして試合が再開される。古谷のスローインから試合が始まった。

細谷が受け取り、ボールを運ぶ。やはり先ほど同様小林が迫るが

……

(ここを決めて、流れを掴む！)

今度は完全に掴まる前にパスをさばく。

細谷から中央へ駆け出す金澤へ。そしてすぐに古谷へパスをさばいた。

古谷は白瀧がマークについていたが、突如バックステップしてかわし、その手元にボールが収まっていた。

(しまった！ こいつは直接ボールを持ってなくてもマークをかわすために……！)

一瞬の反応の遅れ。その遅れが古谷のジャンプシュートを許してしまう。

(大仁多) 47対58 (盟和)。盟和が点差を二桁に戻す。

「ちいっ！」

「やはり古谷のステップも上手いな。慣れないととめることは難しいぞ」

「はい、わかっています」

「あいつ……」

「ドンマイ。切り替えていけ！」

「あ、ああ」

小林が白瀧と山本に声をかけていく。二人とも返事をしているが、山本は相槌を打つにとどまった。

今の動きを見て、金澤のプレイに気が着いたことがあった。

(金澤、あいつはカットが上手い。一步目の踏み出しが早くなっている)

カット、すなわちオフエンスがディフェンスを引き剥がす動きのこと。

ボールを持っていない状態で金澤は山本のマークから外れるためにカットを駆使していた。

(不意をつかれるということ。それに一気に走っていくからディナイが出来ない。さっきもそうだったがこれが盟和の狙いか?)

狙いに気づくものの対処はそう簡単ではない。どうにかして止め

なければと山本は考えながらオフエンスに参加するが、さらに盟和は動きを見せた。

「むっ!？」

「これは、白瀧にダブルチーム!？」

白瀧に対して勇作と古谷がマークにつき、行く手を阻んでいた。

(エースの白瀧に二人、これではパスは出せないか)

長身の二人がついているため、白瀧がマークを外せない限りはパスを出せない。

まず一本、もう一度白瀧にボールを回そうと考えていたために不意をつかれた形となった。

(だがそれならば光月がフリーになる!)

「行け! 光月!」

ダブルチームのために光月には誰もディフェンスがついていない。

小林はドリブルで細谷を引っ掛け、ゴール下の光月へ直接パスをさばく。

ボールを手にした光月そのままジャンプシュートへ。

「撃たすか!」

「ッ!」

「光月!」

「あっ……」

そこに素早くヘルプに出た神戸がシュートコースを塞ぐ。

光月はシュートを撃とうと考えていたが、呼ばれるがまま黒木に軽く放るようにパスを出し、黒木が両手ボイスハンドダンクを決めた。

(大仁多) 49対58 (盟和)。両者一步も譲らず。

「ナイス光月! よく見てたな!」

「は、はい……」

(さすがに理解している分神戸のヘルプは早いか。しかし黒木もいればゴール下も決められる)

白瀧が封じられている分、ゴール下のディフェンスは比較的手薄の状態になっている。

冷静に周囲を見渡せている黒木の助けもあれば、このまま攻めきる

こともできるだろう。

「……大丈夫か、光月は？」

一方、観客席で観戦している大坪は光月に対して不安を覚えていた。

「パスを出したというより、パスに逃げたように見える」

「でも今のは黒木さんもフリーになってたし、それでよかったんじゃない？」

「たしかにな。だが光月は体幹の強さがある。加えて自ら決めにくいだけのパワーがある。」

より確実な選択肢であったかもしれないが、自分を印象付けるためにも決めにいってもよかつたのだが……」

練習試合で彼の手を目標にしたからこそ、余計に残念だと思った。

「決められる分には仕方ない。だけどこっちも取り返す！」

対して決められた盟和の選手たちのダメージはそれほどではない。

失点は覚悟の上。それでも必ず取り返してリードを守りきるのだと。

再び金澤を経由してのパスワーク。金澤から今度はゴール下の勇作へ。小林によって封じられているゴール下へのパスを成功させる。

「……ッ！ 来い！」

「悪いが、白瀧以外のやつに止められるかよ!？」

勇作は体をぶつけながら切り込んでいく。一瞬光月が怯むが、屈強な体格を誇る光月は勇作のパワーに耐えた。

さらに侵入を防ぐべく力を込めて対抗する。……その瞬間勇作は利き足軸にターンアラウンド。ゴール側へ飛び出した。

「なっ！ そんな！」

「勇作の技術が勝った！」

「もらった！」

流れるような動きで光月をかわし、フリーになってからのゴール下のシュート。

「くっ、そおおおお！」

「うっあ!？」

しかし光月は強引に体を回転させ、背後から勇作に迫る。

その結果勇作は倒れこむような形で着地し、シュートを撃つことはできず、審判の笛が響いた。

「ディフェンスファウル！ プッシング！ 白9番！ フリースロー！ ツーショット！」

勇作にフリースロー二本の権利が与えられた。

「大丈夫かい？」

「あ、ああ」

（マジかよ。俺にもパワーには自信はあったが……なんつうパワーだ。軽く接触しただけなのに完全に体勢を崩された）

神戸の手を借りて立ち上がる勇作。彼の視線は光月に釘付けだ。

多少無理でもゴールを狙ってボールを放るつもりだったが、フォームが乱れて実行に移せなかった。自信があった分、勇作には光月のパワーが脅威に移った。

（これは復活されたら、マジで盟和はやバイ！）

不安を抱えつつも勇作は審判よりボールを受け取り、フリースロー二本を沈めた。

（大仁多） 49対60（盟和）。均衡状態が続く。

（状況が良くない。光月さんも心配だが、それ以上に金澤さんのパスを止められない点が痛い）

この戦況を見守る藤代も徐々に焦りを感じ始めていた。

点差を縮めるにはオフエンスを決めるだけではなく、ディフェンスでとめなければならぬ。

だが金澤の自在なパス回しを止められずに簡単にボールを通してしまうと、それも困難だ。

「……今年のレギュラーのうち、金澤は一年生の中では唯一のレギュラーを勝ち取った。

たしかに身体能力は山本の方が上だろうが……何も数値だけが全ての話ではない」

金澤は身体能力では山本や楠といった同ポジションの選手には劣る。

しかしそれ以上の価値を見出して岡田は彼をレギュラーに選んだ。「SGの役割は外の3Pシュートに加えてPGの補佐、すなわちパス回しの役割を担う。

そのためにもより相手をかわして味方選手へボールを運ばなければならぬ」

司令塔を手伝うパスワーク。それを実行するための力を持っているからこそである。

「だからこの金澤だ。前半戦は撮影したビデオを含めて相手とのタイミングを計り、後半戦はカットでかわして細谷からボールをもらう。」

あいつは思い切りが良い性格だ。一瞬で判断を下し、スペースとなる場所に駆け込み、存在しないはずの細谷からのパスルートを作り出す」

ディフェンスは全てのスペースを守ることは不可能。ゾーンディフェンスであろうとも担当外のポジションは生まれ、さらに敵の動きによつては新たにスペースができてしまう。

そのスペースを金澤は見逃さない。その場所を一瞬で見分けると迷う事無く飛び出し、そこから味方へとパスを繋げる。

(しかもあいつは受け取るとすぐにパスに切り替えている。これじゃあ事前に先回りしないと止められない！)

マークする山本もその脅威を感じ取り、止めなければと意気込むが苦戦を強いられた。

(基本的にディフェンスはオフフェンスに対して後出しだ。

相手の動きを予測し、その動きに反応して挑んでいる。当然のことながらそれを全て見切ることは不可能だ。

それに加えて、細谷さんは金澤さんが動いている最中にパスをさばいているから、コースを読むことも難しい)

いくら身体能力が上と言っても、不利な状況から始まる勝負をひっくり返すことは困難だ。

こればかりは対応が難しいと藤代も頭を悩ませた。

「とにかく、こちらもオフフェンスを決めるまでだ！」

小林が細谷のマークを突破。

ヘルプが来る前にバウンドパス。再び黒木のゴール下から加点に成功する。

(大仁多) 51対60(盟和)。白瀧が封じられている分、小林達は動きやすくなっている。大仁多も確実にオフENSESを決めていく。

「……やはり、止めきれないか。だが白瀧のオフENSESは封じることができている。このまま攻め続けろ！」

エースを封じても攻撃の手は止まない。この展開に苛立ちを覚えつつも岡田は選手を鼓舞するべく声を張った。

そして彼の思惑通り、第3Qが始まってから数分間、お互いが点を取り合うランガン勝負が繰り広げられることとなった。

「しつこい！ 今度こそ！」

点を取ろうともすぐに取り返してくる。この流れを断ち切ろうと山本が仕掛けた。

小林とのピック&ロールで中央突破。パスを受け取り、そのままレイアップシュートへ向かう。

「ツ！ 山本さん、ストツプ！ そこは！」

シュートをまさに撃とうとした瞬間。白瀧より制止の声が届いた。だがもうシュートモーションは中断できず、山本はそのままボールを放る。すると彼の背後から古谷のブロックショットが決まった。

「うおっ！」

「よっしゃあ、ナイス古谷！」

ダブルチームについていた古谷のヘルプにより、ようやく盟和が大仁多のオフENSESを完全に防いだ。

神戸がボールを取ると細谷へ回し、確実にボールをキープする。

「大仁多、ついに攻撃失敗。これは痛い！」

「なんとかディフェンスを止めたいところだが……」

だが未だに金澤のパスワークを攻略できているわけではない。

一対一ならとめられないことはないが、彼のパス回しそのものにはまだ対応策が見つかっていないのだ。

「そういやなんか、あいつのやり方は黒子のタツプパスに似ているな」「いや、黒子とこの金澤のパスは決定的な違いがある」

ふと以前戦った相手のことを思い返す高尾。

だが緑間は旧友とこの相手には大きな違いがあるということに気づいていた。

「一つはミスディレクションを使っていないこと。そのために目が慣れるということが起こらない。

もう一つはミスディレクションを使っていないために金澤の姿が目に入っているということ。

後出しとはいえ、金澤を防ぐためにディフェンスは追わなければならない。それにより、逆にそこに再びパスコースができてしまう……！」

金澤が中に切り込んでいくと見せかけ、急遽再び外へ。Vカットで山本のマークを振り切った。

自分を山本が追いかけたことで今度はその場所がスペースとなる。そこに金澤が飛び込み、細谷がパスをさばいたのだ。

フリーになった金澤は今度はパスをさばくのではなく、山本が戻る前に己の本業——スリーを放ち、そして決めてみせた。

「それに加え、あいつ自身尻上がりに調子を上げていくのでな。スリーもここからは得点源となるぞ？」

(大仁多) 57対65(盟和)。岡田の信頼に応える一発が炸裂した。第3Q残り時間6分を切り、点差は八点。徐々に詰まってはいるものの金澤のパス回しにより盟和も大仁多ディフェンスをかわし、加点していく。

(こいつ本当に迷いが無いな。一瞬でも隙を見せればそこを的確についてきやがる！)

一年とは思えない決断力のよさであった。

シューターとしても思い切りの良さは重要となってくる。迷いがなくなればその分シュートの安定性も増して得点の増加へと繋がる

だろう。

後半戦、金澤の活躍により盟和も盛り返していく。

「どうでしょうか、東雲さん？」

「……はい、監督の仰ったとおりです」

そんな中、大仁多のベンチ。藤代の依頼でデータを調べていた東雲が報告に入る。

「金澤君、ここまでの試合細谷君と並んでアシスト数が記録されています。」

それに加えて後半戦の方がスリー成功率が高い。前半戦は20%前後に収まっていますが、後半戦はその倍近くになっています」

「なるほど。正直な話、勇作さんが目立ちすぎることと三人のインサイドプレイヤーに得点が偏っていたので頭がありませんでした。」

ですがやはり細谷さんだけなわけがなかった。彼もまた盟和のレギュラーに選ばれるだけの実力は持ち合わせていたか」

フロントラインの活躍に隠れがちであったが、金澤もしっかりと活躍を果たしている。

こうなると大仁多は早く手を打つべきではあるのだが……

(だがどうする?)

しかし味方の不意をついてくる相手の解決策は、そう簡単には浮かばなかった。

「いつそパスについては諦めて金澤君のマークを外して、他の人にダブルチームを当てるのはどうですか？」

「それは駄目だ橙乃！ 金澤にはスリーもあるし自由に得点を許すことになる！」

「あ、そっか」

思考に耽る中、橙乃が提案するが議論の前に佐々木が却下する。

そう、中澤にはスリーもある。今も目の前で決めたばかり。それなのに彼からマークを外すわけにはいかなかった。

「……いや、その考えが良いかもしれませんが」

「えっ？」

だが、藤代は肯定の意を示した。

それはどういう意味なのか。おそろおそろのほかの選手達が問いかけるが……

「パスコースを全て封じるのは厳しいです。諦めましょう」

「はああああ!？」

思わず選手達は戸惑いの声を上げてしまった。

場面はコートに戻り、大仁多のオフエンス。

小林から二人をかわした白瀧へ、細谷に奪われないようにと高いパスがさばかれる。

「させるか!」

「ちっ……!」

だがボールは空中で勇作に叩き落とされる。ボールは白瀧に渡る事無く、ラインを割っていった。

ボールを奪い返すことはできなかったが、攻撃を止めることができたという点は盟和にとって大きい。もう一本とめよう、選手達がそう士気を高める中。

『大仁多高校、選手交代です!』

再び審判の笛が鳴り響いた。

「山本さん!」

「へ? え、俺!？」

ユニフォームに着替えていたのは本田だった。

交代相手である山本を呼び、選手交代が行われる。

「本田? また出てきたのか。しかも山本と交代? 金澤対策か?」

盟和にとってはこの交代は予想外であり、岡田は頭を抱えることとなった。

「どういうことだ? 金澤にお前を当てて動きを封じるということか?」

当然ながら何も指示を受けていない小林達も同様であった。

小林が皆を代表して本田に問いかける。対して本田はその問いに

首を横に振って言った。

「いや、俺の交代はあくまで伝令としてです。監督がタイムアウトを使うのはまだ早い、終盤に残しておきたいと。」

そのため次のボールデッドで再び山本さんに交代します。山本さんには監督から直々に指示が出ます。それまでの繋ぎです」

本田は四人に指示を伝え、山本に藤代自ら伝えるために代わったのだと。

その趣旨を理解してもらおうと、ようやく本田は藤代より託された言葉をそのまま伝えた。

「……は？」

だが、とても指示とは思えない言葉を耳にして光月達は目を丸くした。

「本田、念のためもう一度言ってくれるか？」

念を押して繰り返すように言う黒木。

そのため本田はまったく同じ言葉を口にした。

「……金澤のパスを読みきることは不可能。なのでいつそパスを出させましょうと」

「ええええええええ!!」

「なるほどー!」

「そしてええええええええ!!」

黒木と光月は思わず声を荒げた。

逆に白瀧と小林だけは納得したように頷き、その二人の反応に黒木と光月は再び驚愕した。

——黒子のバスケ NG集シヤララ——

「……は？」

だが、とても指示とは思えない言葉を耳にして光月達は目を丸くし

た。

「本田、念のためもう一度言ってくれるか?」

念を押して繰り返すように言う黒木。

そのため本田はまったく同じ言葉を口にした。

「……金澤のパスを読みきることは不可能。なのでいつそパスを出させましょうと」

「ええええええ!!」

「なるほど! わからん!」

「そしてええええええ……え!! あれ!!」

わかってないんかい。

第四十八話 支配される心

伝令としてコートに入ってきた本田の指示は、大仁多の選手達に戸惑いを与えた。

「パスを出させる？ 金澤のパスから失点に繋がっているというのに、それを許すというのか？」

真っ先に黒木が本田に尋ねる。

第3Qが始まってからは金澤のパスを止めきれず、そこから盟和の選手達のシュートを決められていた。

ならば真っ先に対応すべきはその根本である金澤。彼を止めてディフェンスに専念するのがベストと考えるのが普通である。だが藤色の指示はまさにその逆と言っていいものであった。

「いえ、正確に言えばその作戦は山本さんが入ってからです。

俺はあくまでも全力で金澤を止めるようにと指示を受けました」

「なに？ お前はあくまで普通にディフェンスを？」

納得がいかない黒木は本田の続く言葉にさらに表情を厳しくした。

折角指示が出たというのに代わって入った本田はそれをしない。少しでも早く作戦を実行した方が有効なのではないかと疑問に覚えただからだ。

理解が難しいと悩む黒木であったが、小林が間に入って話を進めた。

「わかった。それが監督の指示ならば従うまでだ。本田も頼むぞ」

「はい！ 今度こそ！」

「キャプテン、それで良いんですか？」

意図を理解し、本田に奮起を促した。

対してまだ納得しきれしていない黒木には指示が伝わるようかみ砕いて言った。

「ああ、本田も言っていただろう？ 監督の指示は

『パスを出させよう』だと。パスを許すのはまったく意味が違うぞ？」

「ッ！」

それを聞いて黒木も納得し、追従する。

「なるほど。そういうことならば俺達も集中しないといけない、というわけですか」

「そういうことだ。しっかりコート全体を把握しておけ」

「それと、もう一つ監督からの伝言があります」

「おう。何だ？」

ここまで言えば十分であった。納得した黒木を見て小林は満足げに頷く。

すると本田はさらに一言、監督の指示を小林に伝えた。

「白瀧を使って攻めろ、と」

「……そうか」

一瞬間悩んだものの、小林は了承の意を返す。

たしかにここまででは最初の攻防を除き、白瀧以外の四人にボールが集まっている。正確に言えば小林が確実に点数を取れるような勝負にボールをさばっていた。

(だが、少なくとも今は山本が抜けている。そのため白瀧にも奮起してもらわないと中も辛くなってくるか)

今コートにいる五人の中でスリーを武器としているのは白瀧のみ。加えて本田が入った今、さらにゴール下への警戒は強くなるだろう。

ならば白瀧を使って盟和の注意をひきつける。それは無難のようにも感じるが、しかしダブルチームがついている現状で果たしてそれは安全策と言えるのだろうか。

ランガン勝負が続いている今、これ以上の攻撃の失敗は避けたい。小林の中で一途の不安が生じる中、一人の声によって悩みは解決された。

「わかりました。ならやりましょう」

「白瀧、任せても大丈夫か？」

「ええ。そろそろ俺も点を取りたいと思っていたので。……ボールを下さい。俺が盟和を崩していきます」

声の主は白瀧。彼もダブルチームによってフラストレーションが溜まっていたのだろうか。気迫に満ち満ちている白瀧の声だった。

「山本さん、こちらに座ってください」

「はい？ ……わかりました」

ベンチに戻るやいなや、山本は藤代に呼ばれ彼の隣の椅子へ腰掛けた。

『何故今自分が交代なのか』。その疑問を抱きつつ、監督の言葉を待つ。

「この後、タイミングを見て再びあなたに出てもらいます。

ですがその前に、あなたには教えておきたいことがあります」

「なんででしょうか？」

「……金澤さんのパス、それを封じる策です」

「ッ!？」

思わぬ言葉に顔が強張る。

てつきり金澤のパスは本田が対応するものと思っていたが、そうではなく山本が止める為に呼ばれたとは思ってもいなかった。

こうして大仁多ベンチでも動きが見られる中、盟和のベンチも動きはじめていた。

（本田の再投入か。金澤対策と考えてまず間違いないだろう。しかし投入のタイミングが悪かったな、藤代）

予想外の選手交代で岡田は一時的に表情を崩したものの、すぐに冷静になり、そして相手の判断のミスを悟った。

「細谷！ 金澤！ 神戸！」

コート上の三人の名前を呼び、指示を飛ばす。三人もその意図を汲み取り、すぐに指示通りディフェンスへと戻った。

（今お互い攻めに出ている状態だ。その状況でオフセンスの中心であった山本が抜けたならば、こちらが守りやすくなったようなもの）
SGである山本の離脱。これで大仁多は攻めのパターンが限られることとなった。

そして相手オフセンスのパターンが限られるというのなら――

デイフェンスもそれに対応して動くまで。

「むっ?」

(これは――)

ボールを運びながら、小林は相手デイフェンスが陣形を変えたことを読み取った。

盟和は白瀧に対して勇作と古谷のダブルチームを続行。

他の三人は細谷を先頭にトライアングルを形成し、大仁多の選手達を警戒している。

(……やはり山本と交代で本田が入ったことで、インサイドを警戒してきたか!)

大方の予想通り、盟和はゴール下を固めてきた。

先ほどのデイフェンスでも見せたように、勇作と古谷の素早いヘルプもあってミドルも決して安心は出来ない。

ならばこそ、やはりここは――

「小林さん!」

予定通り、白瀧を使う。

カットでマーク二人のディナイをかわした白瀧の呼び声。呼応して小林がパスをさばく。

無事にボールを受け取るものの、すぐさま目の前に長身二人のマークがついた。

(抜かせねえ!)

(止める!)

ドライブを最優先で警戒したダブルチーム。しかも二人とも白瀧より背丈があり、プレッシャーは相当なものであった。

これでは下手に動くことさえ難しい。しかし白瀧は一度視線のフェイクをいれ、すぐにシュートモーションに入った。

「なっ!」

(いきなりスリーポイントシュートか!?)

白瀧はたしかにスリーも撃てる上に確立は高い。しかしそれは彼がフリーの状況を作ってから撃つからであり、逆にいえばマークが厳しい中ではまず撃たない。

その認識があつたからこそ、勇作と古谷は不意をつかれた。ワンテンポ遅れて二人もブロックに跳ぶ。白瀧のシュートは二人の指先を越えていった。

「マジで撃つてきた!？」

(けど、プレッシャーはかけられた!)

「リバウンド!」

スリーをとめられなかったが、入るはずがない。そう確信して勇作がゴール下の選手達に呼びかける。

ゴール下での競り合い。しかし大仁多の選手達にとつても予想外の出来事だったのか、彼らはポジションを取れずにいた。

「ちいっ!」

(くそっ。こいつらスクリーンアウトも上手い)

(……てか、あいつも撃つの早すぎるんだよ! まだこっちはポジション取れてないってのに!)

心の中で本田は白瀧に対して怒鳴り声を上げていた。

味方から見ても強引だと思えるそのシュートは、しかし彼らの考えに反し、ゴールを射抜く。

「なんだと!？」

誰もが驚愕している中、スコアがその事実を認めている。

(大仁多) 60対65 (盟和)。

大仁多も白瀧のスリーですかさず追撃。再び五点差に詰め寄る。

「外れるとでも思ったんですか?」

「ダメエ!」

「俺しか決められないなら俺が決めるだけのことだ! 伊達にあいつに鍛えてもらったわけじゃねえよ!」

今は彼しか外角のシュートを撃てる選手がいないという事情だけではない。

白瀧にとつてスリーは中学時代に彼の友に仕上げてもらった、特別な意味のあるシュートだった。

だからこそ外せないし外したくないという思いが彼にはある。

「……ふん」

そのただごとでない気迫に何かを感じ取ったのか、緑間は一人息をこぼした。

「あいつ、あれだけ厳しい中でよく一発で決めやがったな」

「なにも帝光時代、やつはただ控えに甘んじていたわけではないのだよ。

控えであるが故に活躍の場は限られている。だからこそその少ない時間で点を取れるようにと。

そうやって鍛えられた勝負強さは尋常ではないのだよ。ここぞという時には必ず決めてくる！」

感嘆する高尾に、緑間はかつての記憶を思い出しながら、今の白瀧の姿を目に焼き付けた。

今でも彼が鍛えたスリーは錆び付いていない。むしろ彼の技術が重なってさらに凄みを増しているように緑間の目に映った。

「あの野郎……！俺もやらねえとな！」

あんなものを見せられては黙っていられるわけがない。本田の闘志が再燃した。

盟和のオフエンス。要注意人物となっている金澤には本田がマークにつく。

野生の勘によって研ぎ澄まされた彼の動きは、簡単にはフリーにさせてくれない。

(やつぱりキャプテンが言っていたように、この人デイフェンス上手い。けど……！)

もつとも、金澤もただ相手の思惑通りにさせるわけにはいかなかった。

本田の真骨頂がびつちりとマークに張り付くことならば、金澤の真骨頂は相手のマークを振り切ること。

突如金澤が動きを変え、外からインサイドに向け一直線に走りこむ。

だが本田も負けじと金澤の動きを予想し、対応してきた。すると金澤は再び進路を変えて再びアウトサイドへ。

「ぐっ、くそー！」

本田にとっては自分が動いている最中に、追いかける相手がいきなり向きを変えてきた。当然体勢が崩れてしまう。

これにより、本田のマークも振り切られてしまう。

Vカットで金澤はディフェンスにとって致命的な距離を作り出すことに成功した。

「よし！ 金澤！」

すかさず細谷からパスがさばかれた。

このまま自分が決めても構わないが、しかし相手の力を考えると万が一の可能性もある。

丁度勇作がよいポジションを取れていることもあり、金澤はすぐに勇作へとボールを回した。

「……いかせつかよ！ おらああつ！」

だが、そのパスコースに本田が飛び込んだ。彼の指先がわずかに触れ、ボールが軌道を変えて宙に浮かぶ。

「えっ!？」

「まさか、反応していたのか!？」

「でもボールは渡さねえ！」

驚きつつ、勇作がジャンプしてボールをキープする。

着地と同時に彼はパウードリブルからのターンアラウンドシュート。

押し切ることができなかつたためか、光月の指がボールに触れた。

「くそー！」

「やったー！」

シュートコースが乱れ、ボールがリングを跳ねる。

リバウンドは四人の選手が競り合うが、黒木が古谷の体を張ったスクリーンアウトに捉まってしまった。

（こいつ！ 俺を足止めするために、スクリーンアウトに全力を！）

古谷は自分は跳ばず、黒木を跳ばせないことに専念していた。

そうすれば残りは白瀧と神戸のボールの取り合い。だが体格差が激しく、神戸がリバウンドを確保するとゴール下のシュートも確実に決めた。

(大仁多) 60対67 (盟和)。

まだ盟和のオフエンスを完全に止めることは敵わず。

「うおお！ 盟和もすかさず返してきた！」

「これで7点差！ お互い点の取り合いだ。まだまだわからねえぞ！」

盟和の執念のプレイに会場も盛り上がる。流れは変わってはいない。

「よっしやあ！ いいぞ、神戸！」

得点に成功し勢いづく盟和の選手達。

だが彼らの脳裏に二つの不安が過ぎった。

一つは金澤のパス。今の攻守で本田が止めるには至らなかつたものの、彼のパスに触れていた。まさか次からは止められてしまうのではないかと。

そしてもう一つはディフェンスである。山本が抜けたことで幾分かディフェンスが楽になるとさえ思った。だが、ここから白瀧が勢いに乗るようなことがあれば——そのときは。

「白瀧！」

「白瀧だ！ また大仁多は白瀧で攻めてきた！」

その不安を突くように、もう一度白瀧にボールが渡る。

先ほどのスリーもあつてか、特に古谷の顔が緊張によって強張っていた。

そして再び、先ほどのプレイを思い出させるように白瀧がシュートモーションに入った。

(まさか！ 来るのか！)

もはや反射的なものであつた。古谷は今度こそと先ほどよりも一段と早く反応し、跳躍する。

だが白瀧はそれを見ると両腕を下げ、古谷の方向へと切り込んだ。

(なっ!? しまった、フェイク！)

「あっさり引つかかるなこの馬鹿！」

宙に浮かんだ古谷を勇作が怒鳴りつける。彼はフェイクに引つかからず、白瀧の姿を追った。

「ッ!？」

だが彼が追いかけた逆の方向から、白瀧が勇作の横を抜き去った。

「なに!？」

(こいつ、今のはスライドしただけだったのか!?)

完全に逆をつかれてしまい、勇作は振り切られてしまう。

二人が突破を許したことにより細谷が白瀧に向かっていく。

「残念！ そのディフェンスでは駄目だ！」

すると白瀧は手首のひねりをいれてボールを空中へと放り投げる。

動作が速すぎて細谷は跳躍もできない。ボールはゴール下、黒木が空中で掴み、リングへ直接叩き込んだ。

(大仁多) 62対67 (盟和)。

黒木のアリウープ炸裂。大仁多も攻撃の手は緩めない。

「よっしゃあ！ 黒木さんナイツシュー！」

「ああ。ナイスアシスト」

流れよく得点し、二人はハイタッチしてコートを走っていく。

攻撃の波はもはや止まることを知らなかった。

(……まずい。トライアングルが機能しなくなってしまう！)

ある程度は仕方ないとは言ったものの、完全にディフェンスが崩され、岡田は冷や汗が止まらなかった。

元々トライアングルのゾーンディフェンスはフロアスペースを大きく空けてしまう。それに加えて、白瀧がダブルチームを突破するとトライアングルが完全に崩壊する。

今のように簡単にパスを許せば簡単に失点に繋がる。もはや余裕は残されていないかった。

(それでも！ それでも得点は出来ているんだ！ このまま行く！)

それはコート上の選手もわかっている。だからこそ流れを壊さなため、細谷はオフフェンスに集中した。

大仁多のディフェンスは変わらない。本田の投入後も金澤のマークが変わったこと以外は変化が見られない。

(さっきのディフェンスのせいで本田の動きが気になるが。……それ

でも、金澤が今一番可能性が高いというのも事実だ。それならば迷う必要はない)

勝つためには一度の失敗も許されない。小林のマークをかわしながら状況を分析し、タイムリングを待った。

金澤が本田を振り切り、フリーになる瞬間を。そしてその瞬間が訪れた。金澤がIカットで一瞬パスコースを作り出した。

(もらったー)

ノーモーションからパスがさばかれる。敵の不意をつく高速のパス。

今度こそ止められない。そう確信したそのパスは——本田によって叩き落とされた。

「……は？」

「ば、馬鹿な!!」

手元に収まるはずだったボールはコートを転々とし、そしてラインを割る。

『大仁多高校、選手交代です!』
メンバーチェンジ

前もって藤代が交代の申請を出していたことにより、メンバーチェンジのアナウンスが流れた。

「成程な。やっぱり予想通りだったか」

「え？」

山本に呼ばれ、ベンチに戻る途中で本田が呟いた。

「ようやくわかったぜ、お前のパスの攻略法」

「なっ!？」

「もうお前のパスは大仁多には通じねーよ」

金澤に向けられて放たれたその言葉は、彼に重くのしかかる一言だった。

そう言い残して本田は金澤の前を通り過ぎていく。

「山本さん」

「お疲れ! 後は任せとけ!」

「はい、それと——」

交代の際、本田が何かを耳打ちする。

それを耳にした山本は笑みを浮かべて頷き、コートに戻ってきた。「オツケー。……後は、俺達の番だ！」

こうして再び大仁多のベストメンバーが揃った。

(ここで山本と交代か。こちらにとっては最悪のタイミング。本当にいやらしいことをしてくるな！)

金澤が止められ、流れが切れかけた場面での山本の復帰。

おそらくこれが藤代の狙いだと考えつつ、特に指示を出そうとはしなかった。

(どちらにせよ本田が抜けたのならまた金澤で攻めるのみ。とにかく今動くことはできない……)

山本に変わったならば金澤も本来の働きをできるはず。ならば自分が動くときではないと判断した。

「——と考えているところでしようが。もうしわけありませんが岡田さん、このまま金澤さんには大人しくしてもらいますよ」

しかしその考えは間違いだった。むしろここから藤代の作戦が本当に始まることになるのだから。

動かない盟和に対し、大仁多は次々と手を打ち始めていたのだった。

盟和ボールから試合は再開される。金澤のスローイン。細谷が受け取り、ゲームメイクを受け持った。

本田と交代した山本は先ほどと同様、金澤のマークにつく。

(……交代前と比べてマークに特段と変化はない。となるとやはり流れを変えるための交代だったのか)

やはり本田の圧力が厳しかったためか、圧力はさほど感じない。

むしろよりディフェンスの上手い選手を相手にしていた為か、金澤が相手の動きをより集中してみる事ができた。

『ようやくわかったぜ、お前のパスの攻略法』

「っ!!」

『もうお前のパスは大仁多には通じねーよ』

(……大丈夫だ、きつと大丈夫!)

一瞬、金澤の脳裏に本田の発言が浮かび上がる。しかしすぐにあり

えないと否定し、山本へと意識を切り替える。

細谷は一度中の勇作に入れ、細谷へまたボールが戻る。その瞬間、金澤が動き出した。

「ッ!？」

「突破した!」

動き出しの早さで勝った。山本が金澤の動きにつられたのか、重心が大きく傾いた。その隙に動き出した。

マークについていた山本を振り切り、スペースに駆け込む。そこに細谷からパスがさばかれた。

「よっしや……!？」

「行かせない!」

だが、すぐ目の前に黒木のヘルプが立ちはだかる。

「え……?」

（ヘルプが早い!?)

「ナイス黒木!」

スペースに飛び込んだはずだった。それにも関わらず黒木は目の前に迫り、さらに山本もすぐに後ろから追いついてくる。

前後の挟撃を受け、孤立する金澤。何とかボールを回そうと必死に模索するが……

「もらった!」

白瀧のステイールによって阻まれる。盟和の攻撃が失敗に終わった。

「くそ!」

（ヤバイ! ここに来て得点失敗かよ!）

点の取り合いで勝負しようと考えていた盟和にとっては痛すぎるものだった。

攻守が入れ替わり、大仁多ボールに。何とか一次速攻を止めることはできたものの、ボールを奪うことは出来ないまま白瀧へ再びボールが渡った。

「ナイスパス、小林さん!」

「ちっ、白瀧!」

これ以上の失点は防ぎたい、そう意気込む盟和に白瀧のオフエンスが襲い掛かる。

ドリブルをする白瀧の体が前のめりに沈む。そして右手から左手にフロントチェンジすると見せ掛け、逆へ切り返した。

(インサイドアウト!?)

「けど、まだだ!」

一瞬動きが硬直したが、二人ともなんとかこらえた。すぐさま反応し、白瀧を止める。

しかし次の瞬間、白瀧はもう一度クロスオーバーで切り替えた。

(逆だと——!?)

チェンジオブディレクションの連続により、二人とも呆然と立ち尽くすことになった。

またしても先ほどと同じようなパターン。もう一度パスがあるのではないかという疑念が細谷の反応を鈍らせた。

「遅い!」

そして白瀧のティアドロップが炸裂する。

(大仁多) 64対67 (盟和)。ついに三点差まで迫った。

「ぐっ……!」

「ドンマイ! こっちも得点を決めていこう!」

攻撃失敗からの失点ほど嫌な流れはない。

なんとか攻撃を決めなければならぬ場面だが、それを大仁多が許すはずもなかった。

「いかせん!」

「うあっ!」

古谷から金澤を介して細谷へボールが戻る。だがそのパスが小林のスタイルによって止められてしまった。

『アウトオブバウンズ! 盟和黒ボール!』

運よくボールを奪われることはなかったが、だがこの場面の後半戦の切り札であった金澤のパスが連続で止められている。この事実が盟和に重くのしかかった。

「なんだ、いきなり盟和の10番が捉えられはじめたな。動きが悪く

なったようには見えないのだが……」

観客席から見てもその様子は感じ取れ、大坪は突然の異変に眉を寄せた。

「いや、動きが悪くなったわけじゃないです。問題はそこじゃない」

「む？ 高尾、何かわかったのか？」

「はい。多分ですけどマジだったら……」

コート全体を把握し、分析する力が優れているからだろうか。

今コートで起きていることを理解した高尾は恐る恐る呟いた。

「今、金澤のパスは大仁多によって出させられている。」

盟和のパスをコントロールしているのは盟和ではなく、大仁多であるという事実を。

「パスコースを見切るのは難しい。しかしパスコースを限定すれば、止めることは難しくない」

大仁多のベンチで藤代が口を開いた。

先ほどの選手交代。山本がベンチに戻った際に彼に命じたのは、わざと隙を作ることであった。

たしかに金澤の動きは早い。思い切りがよく迷う事無く動き出す為に止めることが困難である。

そこで藤代は彼の性格を逆手に取った。わざと大きくコースを開けて、そこに金澤を誘導する。

前半戦の終盤、白瀧と本田が見せたものと同じプレイである。相手選手を誘い込み、決まったコースにパスを出させてボールを奪い取る。すなわち、トラップディフェンスであった。

「本当に本田さんは素晴らしい働きを見せてくれました。おかげで想像以上の効果です」

ここまでの考えは高尾の推測と殆ど同じである。しかし藤代の作戦はそれではなかった。

それが本田の投入、そして彼の懸命なディフェンスであった。

藤代が彼に期待したことは何も金澤を止めることではなく、『大仁多が金澤を止めることに専念する』ということを相手に印象付けるこ

と。そしてそれによってトラップディフェンスを相手に悟らせないようにすることだった。

本田のディフェンス能力の高さは前半戦で見せつけた。その彼が金澤のマークにつけば当然彼を止めるために出てきたと考えるのが当然。この役割は伝言役なら誰でもよいというわけではなかった。

加えてもしも本田が善戦すれば、それによって何かヒントを得られるだろう。そう相手に錯覚させることもできる。

ただ、ここで藤代にとって良い誤算だったことがある。

『……いかせつかよ！ おらああつ！』

本田が金澤を止めたことだ。善戦できれば十分であったというのに、見事に止めてみせた。

加えて本田はさらにこのファインプレーをよりチャンスに生かす為に考えた。そして――

『成程な。やっぱり予想通りだったか』

『え？』

『ようやくわかったぜ、お前のパスの攻略法』

『なっ!?!』

『もうお前のパスは大仁多には通じねーよ』

金澤に対して揺さぶりをかけた。

決して攻略法がわかったわけではない。本田が止めることが出来たのは、入部当初のミニゲームを初め、白瀧と相対したことがあるという経験則であった。

相手のマークを外すという金澤の動きには白瀧のスタイルと本質的に似ている部分がある。そう考えた本田は『白瀧ならばここで動く』という経験則に野生の勘を組み合わせ、動いた。

そして結果的に彼の予想が功を制し、金澤を止めるに至った。ゆえに攻略法とはハツタリだったのである。

だがその言葉は金澤に大きく影響することとなり、見事に藤代の術中にハマってしまった。事実、山本と交代してからも防がれてしまい、『本当に大仁多に攻略されてしまった』と思いついてしまった彼は、動きに洗練さが消え――

「ぐっ!？」

「スリーが外れた! リバウンド!」

さらに従来の思い切りの良さも消えてしまった。これによってスリーの安定性もかけてしまう。

藤代の作戦により、盟和は金澤のパス、そしてスリーと二つの武器を失うこととなってしまった。

かろうじて古谷がリバウンドを取った。シュートフェイクから勇作へボールを回し、シュートへ。

(大仁多) 64対69 (盟和)。

なんとか得点を決めることはできたものの、盟和に暗雲が立ち込めていた。

「これ、盟和の監督は動かないっすけど、タイムアウトを取らないんですかね？」

どうにかして決めることはできたけど、このままじゃ選手達も辛いだろうに……」

「いや、それは無理な話なのだよ」

「ああ。なぜなら盟和は第3Q、すでにタイムアウトを一個使ってしまったっているからな」

一度流れを切るためにタイムアウトを取ったほうがよいのではないか。高尾の考えを緑間と大坪が切り捨てた。

すでに岡田は後半戦三回しか取れないタイムアウトの一回を使ってしまったっている。インターバルの時に藤代の考えを読みきれなかった時、岡田はすでに一步出遅れていた。

だからこそ動けない。最終Q、そして勝負時の為にタイムアウトを残しておかなければならない。

それがわかっているからこそ、岡田は歯を食いしばるしかできなかった。

「だが悪いが容赦はしない!」

大仁多の猛攻は止まらない。

小林はポンプフェイクで細谷を引っかけ、山本へリバウンドパス。ボールを手にするとシュートモーションへ。

「くそっ、くそっ！」

金澤もブロックに跳ぶが、動きのキレが悪くなった彼では止めることは難しい。山本は腕を下げ、そして彼の足元にボールを落とす。

(パスか!?)

「ぐっ、ヤバイ！」

そのボールは小林が受け取った。彼のマークについていた細谷は光月のスクリーンによって止められている。

古谷のヘルプも虚しく、小林がミドルシュートを沈めた。

(大仁多) 6対6 (盟和)。盟和高校、大仁多の勢いを止められず。

「来たあっ！ 残り時間1分強、再び三点差！」

「大仁多、盟和にじわじわと食らいつく！」

第3Qも残りわずか。開始時点では13点差だった点差はすでに3点差にまで迫っていた。

「くそっ！ よこせ細谷！」

この戦況を覆さなければと、勇作が真っ先に走り始めた。さらに古谷、金澤も続く。

「むっ!？」

(速攻——！)

「よし、走れ勇作！」

PFといえ、身体能力に優れ足も速い。細谷から山形に放たれたボールをキャッチするとさらに加速してゴールに直進した。

(くらえ！)

マークの光月は振り切った。

ならば後はゴールに叩き込むのみ。勇作は得点を確認して跳躍する。

「ッ！ キャプテンスストップ！ 後ろだ！」

「なっ!？」

その瞬間金澤の悲鳴にも似た指示が飛ぶ。

そして少し遅れて彼の右斜め後ろから白瀧がブロックに跳んでいった。

「白瀧——！」

「馬鹿、よこせ！」

「……おらー！」

ボールを放つ寸前、ギリギリ気づくことができた勇作は古谷に呼ばれるまま手首を返してボールを放る。

しかしそのボールは古谷の手に収まる寸前、山本に弾かれてしまった。

「なっ!？」

「甘いな。うちから速攻決めるのは無理があるぜ？」

『アウトオブバウンズ！ 盟和^黒ボール！』

見るやすでに山本も小林もディフェンスに戻っている。さらに黒木と光月もすぐに追いついてきた。

(戻りも一段と早い！ 速攻でも取れないのか……！)

ただでさえ攻撃が断続的になっている今、この速攻で波に乗りたかった盟和。

それも失敗してしまった。中々流れを断ち切る一手は生まれない。(でも、あと一本は取らなきゃやばい。そしてここで取るのが——)

エースが取ることももう一度チームに勢いを生む。勇作が神戸にアイコンタクトを取る。

しばしコートを動き、そして勇作が走り出す。光月も追うが神戸のスクリーンによって阻まれた。

「くっ、スイッチー！」

マークが入れ替わり、勇作に黒木がついた。そしてその勇作に細谷からボールが通る。

「勇作で決めにきたか！」

「黒木、注意しろ！」

周囲から警戒の色が窺えたが、それと殆ど同時に勇作が仕掛けた。ワンドリブルをいれクロスオーバー。直後、大きく踏み込むと見せかけ、開いた足にボールを通して停止した。

「ッ！」

後ずさる黒木。それを見て口角を挙げた勇作がシュートモーショ

ンに入る。

当然、黒木の上体が浮かんだ。だが勇作は再び体をわずかに沈める。

「フエイクー！」

（もらった！）

今度こそ勇作はジャンプシュートを放った。

「——甘い！」

それを見切られているとは知らずに。

反応してしまったとはいえ、黒木の足は地面から離れていなかった。すぐにもう一度跳び直し、彼の渾身のブロックショットが炸裂する。

「なっ!?」

「止めた！」

「黒木さん、ナイスブロック！」

そのこぼれ球を白瀧が確保し、攻守が入れ替わる。

盟和、得点にすること敵わず。

「——最悪だ！」

岡田が思わず頭を抱え始めた。

第3Q終盤に来て、盟和にとっては戦況は悪化し続けている。

地力の差と一言で済んでしまえば簡単だが、自信のあった金澤と勇作が止められてしまうことはそう易々と片付けられない。

……だが、不安の種があるのは何も盟和に限った話ではなかった。

「光月、決めろ！」

小林から光月へボールが渡る。ミドルレンジからすぐシュート
モーシヨンに入った。

「撃たすか！」

「うっ——!!」

勇作のブロックが目映る。

その瞬間、光月の体が硬直し、直後にシュートを放つ。ボールはリングに弾かれた。

「渡せねえ！」

「いや、俺もいい加減取らせてもらいます！」

古谷と白瀧がゴール下で競り合う。体格の差からここまで古谷が優勢であったが、ついに白瀧がスイムで古谷をポジションの外へと追い出した。

「もらったー！」

「よこせ、白瀧！」

両腕でしっかりとリバウンドを取り、胸元へと引き寄せる。

そして着地すると声に従って外——山本へとパスをさばいた。

右45度から放たれたスリー。このシュートは確実にリングを射抜いた。

「決まった——！ スリーだ！ てことは！」

「大仁多、ついに同点！ 試合を振り出しに戻した！」

（大仁多）69対69（盟和）。第3Q残り三十秒。山本のスリーが決まり、ついに同点。

「っしやー！」

思わず山本がガッツポーズ。それほどこの一発は大きい。

「ちっ。お前ら！ 怯むな！ とにかくあと一本だ！ 一本決めていけ！」

岡田は気落ちする選手達に声をかけた。

せめてあと一本。リードして終わりたい。それが盟和にとっての最善の策。

「……だが同点になっても、大仁多のディフェンスは緩まない」

その望みを断ち切るように大仁多のマンツーマンディフェンスが立ちはだかる。

大坪は知っている。彼らがこのようなことで満足し、気を抜くわけがないということ。

ただ、一つ気がかりがあるとすれば。

「一体、どうしたんですかね。光月さんは」

藤代の視線の先は光月で固定されている。今日も目立った活躍が少ない選手であった。

彼の不調はコートに立つチームメイトも同様に感じ取っていた。

しかし小林達は一つの異変に気づいていた。

(おかしい。不調と言っても昨日の聖クスノキ戦のような状態ではない)

(少なくとも体は反応しているし、連携だつてできている)

(それなのに明の動作がまるで途中で止まってしまふかのよう、突如乱れている)

(不調、というよりもこれは……)

昨日の緊張による不調と今日の不調。それがまったく別のものだということを。

光月は体が鈍っているわけではなかった。むしろその点は大分改善されている。

しかしシュートをはじめ、一連の動作の途中で突如支障が見られ、彼の本来のプレーができずにいた。普通でないことは明らかである。

「まさか、イップスか?」

そしてついに藤代が答えに行き着いた。

——イップス。精神的緊張により筋肉が萎縮し、スポーツの動作に支障をきたす現象である。

この運動障害にかかると自分の思い通りのプレーができなくなり、選手に悪影響を及ぼす。

今光月の心にはかつての失敗の記憶と失敗してはいけないという思い。そしてまた失敗したらという恐れが混在している。

(——くそっ!)

それを簡単に乗り越えることは難しかった。

光月は元々真面目で責任感が強い。だからこそ『自分がやらなければならぬ』と焦りがさらなる混乱を呼んだ。

そして何よりも——彼の従来の優しさが、旧友と今の戦友への思いが、より彼を縛り付ける原因となっていた。

(どういわけか知らないが、こいつはまだ全力じゃねえ! なら!)

「よこせー」

ポストアップに努めながら、勇作が細谷を呼ぶ。

先ほど止められたばかり。普通なら判断に迷うだろう。

(どうせうちのエースはあいつなんだ！ なら決めてもらわねえとな！)

だが細谷に迷いはなかった。金澤のスクリーンで小林を振り切ると勇作へパスが通る。

「くらえ、大仁多！」

勇作の全力のワードリブル。

「ッ——！」

渾身のパワーであったが、光月が持ちこたえる。

パワー勝負では光月に分があつた。すると勇作はそこからスピનムーブで一気に振り切る。

「なっ!？」

(まだこんなキレが!?)

未だにキレを増していくその動きを止めることはできず、勇作のシュートを許してしまった。

(大仁多) 69対71(盟和)。盟和高校、再びリード。

第3Q残り6秒、勇作のシュートが炸裂。そして、

「黒木さん！」

白瀧の叫び声が響いた。すぐにボールを拾い上げる黒木。白瀧はすでに走り出している。

「戻れ——！」

「走れ！ 何としても守りきるんだ！」

細谷が声を張りながら走り、勇作は黒木の前に立ちはだかる。岡田も全力で声を出した。

しかし黒木がボールを放ることをとめることは出来ず、白瀧へロングパスが通った。

「ぐっ——!!」

細谷、古谷、金澤と三人の選手がドリブルで駆け上がる白瀧を追う。

(……なんで?)

「なんで、追いつけない!？」

だが三人の誰一人として彼に追いつくことはできなかつた。

白瀧が無人のゴールにレイアップシュートを沈める。

（大仁多） 71対71（盟和）。大仁多高校、再び同点に追いつく。

『——第3Q終了です！』

そして、激しい点の取り合いとなった第3Qが終わりを告げた。

「さあ、振り出しだ」

「……こいつ！」

得点を決め、不敵な笑みを浮かべる白瀧。

第3Qで追いついた。あとは最終Q——第4Qで最後の決着をつけるのみ。

両校の選手達が引き上げていく。監督や控え選手が出迎える中、しかし大仁多の中で一人、光月だけが暗く沈んでいた。

「おい、明——」

「ああ。ごめんよ」

神崎からタオルとドリンクを受け取り、ベンチに腰掛ける。しかし顔を上げることはない。

他の選手たちも何と声をかければよいか迷い、中々話しかけることができずにいた。

「——何を、やってんだ光月 temeエ！」

すると、観客席より一つの怒声が光月に突き刺さった。

「え——？」

「なんだ？」

光月は勿論、他の選手もその声の主へと視線を向ける。

応援席の最前列に一人の男子高校生がいた。

彼は予想以上に声が響き、他の観客からも視線をむけられて恥ずかしくなったのか顔を赤らめている。

「あれは……」

「たしか俺達が県予選中部ブロックで戦った、矢坂黎明の」

その姿は大仁多の選手達には見覚えがあった。

今年に入って一度対戦し、勝利を収めた相手である。

「——荻野？」

そして光月にとっては、中学時代共に戦ったチームメイトでもあった。

——黒子のバスケ NG集シヤララ——

「光月、決めろ！」

小林から光月へボールが渡る。ミドルレンジからすぐシュート
モーションに入った。

「撃たすか！」

「うっ——!!」

勇作のブロックが目映る。

その瞬間、光月の体が硬直し、直後にシュートを放つ。ボールは—

「あつ。意外とあつさりと入った。いけるかも」

リングにかすりもせず、見事に真ん中を射抜いた。

「決めんなあ!!」

「ええっ!?!」

「これストリー的に決めちや駄目だろ！」

「さっきと言っていることが違う！ 何で得点して文句言われている
の僕!?!」

結果、荻野出番なし。

「……」

実は試合開始からずっと最前列で応援していた。

第四十九話 一歩前に進んで

(——ヤバイ。滅茶苦茶恥ずかしい)

自分の予想以上に声を出してしまい、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にする荻野。

今すぐにもここから逃げ出したいという思いを『これも全部光月のせいだ』と責任転嫁することで押し留め、対象である彼をにらみつけた。

本当なら試合を見るだけで声をかけるつもりはなかった。しかし彼の姿を見ていて叫ばずにはいられなかった。

(お前が大仁多に入ったのは変わる為なんだから！ このままじゃあの時と同じじゃねえか！)

かつての、中学時代に光月と共に試合をした日の記憶が思い出される。その姿はまさに今日の姿と一致していた。

その過去を変えたいという思いから光月は大仁多という強豪に進学した。事実、荻野と対戦した日は成長していたように見えた。

ならばこそここで過去に逆戻りしてもらっては困る。ようやく旧友が変わることができたというのに、こんなところで立ち止まってしまつては意味がないのだから。

荻野は意を決して再び感情を声に込めて爆発させた。

手すりに身を預けて放たれた荻野の声はしっかりと大仁多のベンチまで届いていた。

「情けねえプレーをすんじゃねえよ！ 俺が負けたのは昔のお前じゃねえんだよ！」

『昔のお前』。荻野が言っているのはおそらくは中学時代の明のことだろう。

俺は中学時代のこいつの姿を実際見たわけではないから確信はない。だが以前話を聞いた内容から察するに、今日の明のプレイは中学

時代の姿を彷彿させるものだった。

だから荻野はここまで明に対して怒っている。自分が負けた相手の情けない姿は見たくない、というところだろうか。

「つたく。本当にお前には腹が立つぜ。図体はデカイくせにへたれで根性無しで。」

ようやく一歩進んだかと思えば、また二歩下がるような馬鹿らしいことをしやがる」

でもな、と荻野は言葉を区切った。腕が震えているように見えるのは距離が遠いからというわけではないはずだ。

「それでもお前は進んでみせたじゃねえか。たとえ下がったとしても、普通なら躊躇うような険しい道を、進んでいった！」

だから！ もうお前は、お前の努力は報われていいころだ！ 信じろ！ お前がここまで越えてきた全ての時間を！」

その言葉を最後に荻野は黙り込み、席に戻った。

どうやら苛立ちが募ったというだけではなかったようだな。むしろその逆だ。

明のことを心配したからこそ、荻野はこうして恥を承知で激励しようと思った。

「……荻野」

おかげで明の様子が少し変わった。憑き物が落ちたかのような表情を浮かべている。

きっと中学時代を共に過ごした荻野の言葉だから意味があったのだと思う。それならば――

「よかったな。ああいう友達がいるってのは」

「……うん。少しだけど、身が軽くなった感じがするよ」

「そうか。じゃあ俺からも少しいいか？」

俺も少しでもこいつが力が出るように言葉をかけるとしよう。

『これより、第4Qを開始します！』

最後のインターバルが終了。そして最後の10分間の開始が宣言される。

「いいか！ 第4Qもまず間違いなく点の取り合いになる！」

退いたら負けだ。最後まで強気で行け！ 絶対に走り負けるな！」

『——おうー！』

岡田が選手達を鼓舞して送り出す。

この第4Q、特に大きな指示を出すことは出来ていない。元々逃げ切りを考えていた盟和にとって同点という状況はかなり厳しいものであった。

だが、それがわかっているからこそ今は守りに入ったら負ける。一度波に乗った大仁多を止める術はない。ならば最後まで攻め続けるしか手はないのだ。

「泣いても笑ってもこの10分が全てだ。——勝とうぜ」

「はい。まだこんなところでは終われない！」

細谷の言葉を引き継ぎ、金澤は決意を新たにしてコートへ向かっていく。

「俺も全力で点を取りに行く。だがお前らもフォロー頼むぜ」

「別にいいですよ。元々あんたのことを信じ切っているわけじゃないし」

「こうなったらもうどんな形でも良い！ 点を取ることさえできれば！」

エースである勇作は勿論、古谷も神戸も点を取ることに飢えている。

盟和の屈強なフロントラインは未だ健在。その自信もあつて戦意はどんどん増していく。

「さあ、最後の戦いです。」

今さら私から皆さんに言うことはありません。それだけの練習をしてきたはずです。

——インターハイの切符はすぐそこです！ 皆さん、全力で勝ちに行きましょう！」

『おうー！！』

大仁多も藤代が渴を入れ、選手達を見送った。

同点と言う現状の中でも藤代に焦りはない。何度も激戦を潜り抜けてきた猛者達に敗北の予感はなかった。

あるのは目の前の勝利への渴望のみ。

「もう一度行くぞ！ このメンバで、インターハイへ！」

「ああ。さすがに最後の最後でインターハイを経験できないのは悔しすぎるからな」

去年の県大会優勝を知る小林と山本。二人は今一度思いを確かめ合った。

彼らにとって最後のインターハイへのチャンス。それを見逃すわけにはいかない。

選手としても、大仁多の代表としても。

「……心配するな。一人で戦っているわけじゃない。辛くなったら周りを見ろ」

「はい。もう、大丈夫です！」

黒木の声に光月は力強く頷いた。彼の瞳に強い意志を感じた黒木は「そうか」と息を一つ零す。

決して不安が消えきったわけではない。だがしっかりと自分の意志で前を見ていた。

「——優勝の瞬間を見ているのはもう嫌だからな。ここで決めさせてもらう！」

誰よりも自チームの優勝を経験しているはずの白瀧。だが誰よりもその瞬間を選手として味わいたいと願っているのも彼だった。

瞳を閉じ、脳裏に中学時代のチームメイト達の姿を思い浮かべる。遥か高みにいる彼らの姿。しかし白瀧とてもう見上げているだけではない。

（俺もすぐに行くよ。お前達のところまで！）

様々な思いが交差し、最後の戦いが始まった。

（大仁多） 71対71（盟和）。

「行くぞ！」

盟和ボールから試合再開。金澤がボールを入れて細谷がすぐ様敵

陣へ切り込んでいく。

「やはりか。だがそう上手くはいかないぞー！」

「ッ!？」

まず最初の手として相手のガード陣を崩そうとの考えだった。

しかしその前に最大の障害が立ちはだかる。

「小林——！」

「全国に忘れ物をしてきてしまったんだな。ここで足踏みをしているわけにはいかないんだ！」

勝負所を思わせる徹底したディフェンスであった。ドライブはおろかディナイも徹底しておりインサイドへのパスさえ困難。

「細谷さん——！」

「——チッ！」

仕方なく細谷は金澤へパスをさばく。

「ぐっ——！」

「残念。お前の動きじゃ抜けねえよ——！」

だが金澤も山本のマークに捕まってしまう。

第4Q、さらに厳しくなった大仁多ディフェンスは二人の自由を次々と奪っていく。

（ちっ！。 だったら——！）

（ここだ！）

「戻せ金澤——！」

細谷は古谷にアイコンタクトを入れて金澤に指示を出す。

再び細谷へボールが戻ると同時にカットイン。小林も先読みで動くが古谷が彼の動きを封じる。

「スクリーンか！。 白瀧——！」

すぐに大仁多もスイッチ。だが細谷もシュートまでの流れが早い。

小林を横からかわすとすぐにシュートモーションに入った。

「遅い——！」

「——のはどっちですかね」

成功を確信したミドルシュート。そのボールに白瀧の指が触れる。

古谷によって彼の進路も封じられていたはずだが、現に細谷の

シュートを止めることに成功した。

「くそー！」

(このタイミングでも駄目なのか——！)

「リバウンド！ 黒木さん！」

「おう！」

結果、リバウンドも黒木に奪われ、盟和は最初のオフENSEを失敗してしまふ。

攻守が入れ替わり大仁多ボール。山本がボールを拾い、途中まで運ぶと小林へパスをさばく。

盟和のディフェンスは大仁多と同じくマンツーマンに戻っている。マッチアップの相手は変わらない。

(本当はまた白瀧で幸先よく決めたいところだが——)

「……仕方がない。声援に応えてやれ」

数秒の思考の後、小林はミドルの光月へパスをさばく。ゴールと正対した形でボールを手にした。

(懲りずにまた来たのか。だが止めてやる！)

勇作が腰を落として光月を待ち構える。

相手のエースから滲み出る気迫は相当のもの。一瞬光月に怯みが見え隠れしたが、タイムアウト時に白瀧と話したことを思い浮かべ、平常心を保った。

『お前気負いすぎたよ。肩に力が入りすぎだ。ゴールを狙うあまり意識が散漫になってしまっている』

『……それは僕でもわかってる。でも僕が決めないと！』

『そこがお前の間違いだよ』

『えっ？』

どこが間違っているというのか。そう考えるのは当然のことであるはずなのに。

真意が読めず硬直する光月に白瀧は続けて言った。

『決めなければいけない』だなんてお前が思うのはまだ早い。

それはエース俺の役割だ。お前がそこまで気負う必要はないんだよ。そうじゃなくて『決めたい』、『決まればいいな』と。義務じゃなく

て希望として挑め。その方がお前は割り切れるはずだ』

『……そんなものかな?』

『ああ。たしかにシュート成功率が高いゴールに近いエリアは責任を感じるだろうけど。

可能性が高いから決めなきゃいけないんじゃない。可能性が高いから決まって欲しいと思え。

たとえ入らなくてもシュートが上手くいけば、リバウンドだって取りやすいんだ。しっかりと腕を振り切れ』

そのおかげか、光月の心が徐々に落ち着きを取り戻していった。

(ツ!? こいつ、さっきまでと感じが違う!)

表情から緊張が解けたのを見て、勇作も異変を感じ取った。

そして光月が強引に切り込み込みゴールに接近していく。勇作を完全に振り切ることができない中、光月はジャンプシュートを放った。

「ちっ! リバウンド! 神戸、古谷!」

プレッシャーをかけるに留まり、勇作はゴール下二人の名前を呼ぶ。

入るわけがない。ここまで不調だった人間がプレッシャーを受けた中で決めるなど。

その勇作の確信どおり、ボールはリングを跳ねて——数回繰り返した後、リングに吸い込まれていった。

「なっ、マジかよ!」

勇作が驚愕する中、スコアが動き観客が沸きあがった。

「き、決まった——! 光月、この試合初得点!」

「そしてそして! ついに大仁多が逆転した!」

(大仁多) 73対71 (盟和)。序盤から続いていた盟和のリード。それが完全に消えうせた瞬間だった。

「……………入った」

「よっしやあ、ナイツシュ!」

「見事に良いところ持っていきやがって」

「痛い!」

自身の得点に呆然とする光月達を山本達がねぎらった。

第4Q、大仁多の最初の得点は光月。それも逆転するという景気の良い形であった。

「……ようやく本来の形を取り戻してくれそうですね」

「シュートを成功させることの意識を減らすことで、結果的に力みがなくなつて精神的にも余裕ができたということですか?」

「そのようですね。かえって逆効果になつてしまうと困ったところですが。……万事OKです」

東雲の問いに藤代は笑顔で答えた。

——これでようやく大仁多は本当の形になると。心中で喜びを爆発させていた。

(油断もあつたが、まさか決められるとはな。俺の失敗だ)

「細谷、ボールよこせ」

「え、大丈夫そうか?」

「決めてやるさ」

決まるわけがない。そう一瞬でも慢心した自分が恥ずかしい。

己の失敗を恥じ、これは結果で報いようと勇作は細谷に声をかけた。

もしも光月が復活したならば厄介だが——やるしかない。

盟和のオフエンス。細谷は一度ゴール下の神戸に入れて慎重にボールを回していく。

もはや一度の失敗も許されない。細谷は時間の限界までパスを回し、ついに勇作の下にボールがわたる。

「さつきはよくもやってくれたな。お返しだ!」

「いいえ! 僕もこれ以上やられるわけにはいきません!」

インサイドでポストアップする勇作と光月、二人の競り合い。

真正面からの力のぶつかり合い。お互いパワーには自身のある選手だが、勇作は光月を押し切る事ができない。むしろ押し返されてる。

(こいつ! 第3Qでも感じていたが——マジでびくともしない! けど!)

だが勇作の本領はこれだけではない。敏捷性、そしてシュートレン

ジの広さがある。

ポストアップを囿に右側にロールターン。これでリングと正対してシュートを狙う。

が、これに光月も見事に対応した。

(まだ、追いつくのか！ けどまだだぜ！)

すると勇作はシュートフェイクの後、光月の左脇に潜り込む。

相手の不意をつき、死角をついた動き。今度こそ本当にシュートを撃とうとするが、これも光月に抑えこまれてしまった。

「なっ!?」

「これも見切ったというのか——!」

「……キャプテン!」

「ッ!」

思わぬディフェンスの上手さに勇作をはじめとした盟和の選手達が硬直する。

その中、金澤が左0度の位置に走りこみ勇作を呼んだ。

フリーの位置を読みきり、パスコースを作り出す。金澤は長所を活かして動いていた。勇作も殆ど反射で声の主へとボールを送った。

だがそのボールは山本のスタイルにより奪われてしまう。

「ぐっ!」

「生憎だがそう簡単に仕事はさせねーよ!」

(まずい! また大仁多ボールか!)

「止めるぞ! この一本を死守するんだ!」

再び盟和が攻撃失敗。慎重に攻めて確実に決めようと思ったが、目論見は外れた。

追い打ちとなる大仁多のオフENS。流れを掴みたい盟和にとってここは正念場だった。

細谷が声を荒げ、全員に注意を呼びかける。その中で——山本のスリーが放たれた。

「やべっ! シュート!」

撃った感覚でミスを感じ取った山本がゴール下のチームメイトに叫ぶ。

彼の直感通り、シュートはリングを潜る事無くリングへ衝突。ボールの行方はリバウンドに託された。

体を張る両チームのフロントライン。その中で徐々に、確実に光月が勇作を外へ締め出していく。

(こいつ！ ポジションをみるみる奪っていく！)

(もらった！)

結果、ポジションを奪い取った光月がリバウンドを確保した。

ボールを手元に寄せて確実に自分のものにする、着地してすぐゴールを見据える。

(まさか！ そのまま撃つか！)

その姿勢から勇作は光月のシュートを感じ取った。彼の予想通り光月は跳躍して両腕を振りかぶる。

「くっ——そおおおお!!」

「あっ!?!」

もはや普通にとめることはできない。そう勇作は察するもフィールドゴールを許すわけにはいかなかった。そのため対策通りフリースローを与える事を覚悟して跳躍した。

勇作のファウル覚悟のブロックが炸裂。シュートに対しての強引な接触に審判が笛を鳴らす。

突然の出来事で光月も一瞬思考が停止してしまうが、だが先ほどまでのように混乱することはなかった。

『それでも相手が無理やりとめに来て、怖いと思ったなら。』

どうしても体の震えが止まらないなら。荻野と戦った時の感覚を思い出せ』

なぜならこの状況は、まさに白瀧が想定していたケースだった。

ブロックする勇作の姿が荻野の姿と重なる。それを見て、光月の腕に力がこもった。

『あの時のお前は——迷いなんて抱いていなかったはずだ』

「あ——あああああああ！」

力強い叫びと共に、光月の両腕がリングに向けて振り下ろされる。勇作のブロックなどなかったかのように、ボールをリングに叩きつ

けた。

「なっ——!?!」

「……嘘だろ?」

着地に失敗し、尻餅をつく勇作をはじめ、盟和の選手達は動揺を隠すことができなかった。

圧倒的なパワーを見せ付けたダンクシュート。それに呆然とする彼らに向け、無情にも審判の笛が鳴り響く。

『ディフェンスファウル! プッシング! 黒、^{勇作}4番! バスケツトカウント、ワンスロー!』

得点が認められた上に、さらに勇作のファウルによるフリースロー一本が宣告される。

「……ほら、やればできるじゃねーか」

見違えた姿だった。荻野は安心して息を零した。

「うわああ! バスカンだ!」

「ダンク決まった上に、さらにフリースロー! これは痛い!」

(大仁多) 75対71(盟和)。光月が完全に自身のプレイを取り戻し、勇作を越えてみせた。

(うーむ。なんとも強引な)

チームメイトが力強いプレイを決める中、白瀧は冷や汗を浮かべていた。

それもそのはず。前半戦、自分が一方的にパワー負けしていた勇作を相手に完全に押し勝ってしまったのだから。

(きつと、俺には一生かけてもできないことなんだろうな)

白瀧は羨望にも似た複雑な感情を抱いて光月を見た。

「要。大丈夫だよ」

「うん?」

「もう大丈夫だ。……もう逆戻りはしないから」

するとその視線を光月は違う意味で、心配しているとでも捉えたのだろうか。

彼を安心させるように闘志を込めて口にした。言葉にも震えは感じられず頼もしささえ受け取れた。

「……そっか。じゃ、ここから名誉挽回頼むぜ」

審判の元へ歩いていく彼の背中に、白瀧はそう言葉をかけてプレイに戻っていく。

ボールを受け取る光月。完全に雑念は消えている。荻野との思い出を脳裏に焼きつけ、再現した今、迷いはなかった。

膝を曲げ、しっかりと腕を振り切る。綺麗な放物線を描いた1投は、綺麗にリングに弾かれた。

「あ」

「汚名挽回してどうすんだー!!」

「さっきまでの流れはどこに消えた!」「確かに希望で撃てとは言ったが外していいとも言ってねえ!」と白瀧は心の中でさらに突っ込みを入れる。

だがよくよく考えてみれば光月がフリースローが苦手であることは元からである。緊張とは関係のないことであつたので、ある意味仕方のないことではあつた。

(あの馬鹿! ここは決めてさらに勢いをつけるところなのに!)

しかし流れとして光月には決めて欲しいところであつたことに変わりはない。

もうこうなつては仕方がないと割り切り、黒木と白瀧はスクリーンアウトに徹する。

もつとも黒木は勇作と神戸の二人を相手にしている為、ポジションを取ることができない。

その為リバウンドは白瀧に託された。

「何度も何度もやられてたまるか!」

古谷が白瀧のスィムを読みきり、体を寄せる。

(来た!)

その瞬間、白瀧は古谷を軸に逆方向へ回転し、ポジションを奪い取った。

「なっ!?!」

(タップか!)

「よし! 運も来てる!」

奪い返されないようにと必死に体を寄せながらしっかりとボールの位置を見た。

大仁多にとつては幸運にも白瀧達の方へとボールが流れてきた。最高到達点では相手の方が上。ならば先に跳ばなければならぬ。ボールが落ちてくるタイミングを見計らい、白瀧が逸早く跳躍した。「もらっ……」

「あつー！」

「た？」

「あつ」

両腕をボールへ伸ばし、掴むその寸前。

白瀧は背後より忍び寄る影に気づいた。そして何か不注意を感じ取ったような呟きが聞こえた。

死角である為に白瀧にはわからなかったが、古谷は、他の選手達は理解して事の行く末を察した。

そして——光月が再びボールをリングに叩き込む。不運にも白瀧を吹き飛ばす形で。

(大仁多) 77対71 (盟和)。光月のアリウープ炸裂。

「……あきらあー！」

「ご、ごめん。邪魔だったからつい」

「邪魔!」

「お、落ち着け白瀧!」

味方に吹き飛ばされるという初めての出来事に加え、邪魔と断言されて白瀧は試合中にも関わらず声を荒げた。小林や黒木に諭されるまで怒りは収まらなかった。

『盟和高校、タイムアウトです!』

すると岡田は迷う事無くタイムアウトを取った。

盟和は後半戦に入って二つ目のタイムアウトである。第4Qが始まって時間はそれほど経っていないが、これ以上はまずいと判断してのことだった。

「盟和の監督、迷う事無くタイムアウトを選びましたね」

「当たり前だ。攻撃を2回も失敗してしまったというのに、対する大

仁多は3連続で得点に成功している。

それもここまで不調だった光月が決めたというのが大きい。今、流れは完全に大仁多だ」

早々のタイムアウトに首を傾げる高尾だが、大坪は当たり前だと断定した。

接戦となつていているものの、一度流れが傾くと一気に大差が開くことは珍しいことではない。

だからこそその前に流れを切る必要がある。きっと秀徳でもそうしたことだろう。

「加えて光月はエースである勇作を越え、さらに白瀧を吹き飛ばすことでパワーを見せ付けた。」

これは盟和にとっては大きなプレッシャーとなる」

「……いや、白瀧を吹き飛ばしたのは偶然じゃあ?」

「まあこう言つては何だが。あの男は不運に愛されたような男なのだよ」

「真ちゃん、それ間違つてもあいつの目の前で言うなよ? トドメになるからな」

緑間の呟きに高尾がフォローを入れるものの、『たしかに』とどこかで納得している自分に高尾は気づいた。

第4Qの光月の復調。この展開は大仁多にとっては非常に大きなものであった。

現に盟和のタイムアウトの後も、流れを手放す事無く大仁多が盟和を圧倒していく。

「ちっ、リバウンド!」

細谷のミドルシュートがはずれ、ゴール下での競り合いが激化する。

黒木と神戸、光月と勇作、白瀧と古谷が体を寄せ合い、相手をゴール下から引き離そうと力を込める。

「うおおおー！」

そんな中で光月がディフェンスリバウンドを制した。地上戦で勇作を追いやった彼は確実に小林へとパスをさばく。

「くっっ！」

（やばい！ もう得意のリバウンドさえ取れなくなってきた！）

（光月が復活したことで、勇作でさえリバウンドが取れなくなるなんて……）

盟和にとつてリバウンドは生命線のようなものであった。第3Qまでリバウンドを確保していたからこそ優位に立つことができた。

しかしここに来て経験豊富な黒木、無類の力を持つ光月、技術で相手をかわす白瀧。大仁多のフロントラインによつてすっかりリバウンドを奪われてしまっている。

「……やはり光月の復活は大きい。攻守にわたつて重要なリバウンド。これを取れることでチームも安定感を増すし、シュートの成功率も格段とよくなる」

大坪は冷静に光月の奮闘を観察していた。

迷いのなくなった彼の動きは練習試合の時と同等、あるいはそれ以上だった。

彼のおかげで大仁多もリバウンドを取れるようになり試合を優勢のまま進めている。

「さあ、どうした？ 先ほどもまでの勢いは?！」

もはや体力も底を尽こうとする中、大仁多の攻撃は勢いを増している。

小林のクロスオーバー。瞬く間に細谷をかわし敵陣を切り裂く。たまらず神戸がヘルプに出るがその直後、小林のビハインドパス。右45度の白瀧へ。

「ナイスパス！」

「調子に乗るな！」

古谷もマークにつくが光月のスクリーンに掴まり、白瀧のペネトレイトを許してしまう。

（くそっ！ くそっ！）

「行かせるかあ、白瀧!!」

齒軋りする古谷。吼える勇作。

試合を諦めていない、勝利を目指している二人の姿勢。

だが――

「無理です。通らせてもらいます!」

それでも白瀧のジノビリスステップをとめることは出来ない。

勇作をかわし、誰にもブロックされることなくレイアップシュートを沈める。

「なっ――!」

「来た! ナイツシュ白瀧!」

小林がミドルに侵入して敵のマークを崩し、さらに光月との連携で白瀧がシュートを決めた。

この攻撃を止める術は、盟和にはなかった。

「しかもこれで! ついに!」

「第4Qラスト三分、大仁多がついに盟和を15点差まで突き放した!」

(大仁多) 97対82(盟和)。試合終了の時が近づく中、盟和に重過ぎる点差がのしかかる。

「……試合、決まりましたね」

「ああ。もうここまでくればもはや試合の優位は覆らない」

試合の流れを感じ取り高尾は呟いた。その言葉に大坪は大きく頷き、彼の意見に追従する。

「栃木代表としてIHに出場するのは、この試合の勝者は――大仁多だ!」

決勝戦の勝敗は決したと。大仁多の勝ちだと大坪は断じた。

「大仁多の勝ち……?」

ベンチのチームメイトの中には天を見上げる者が現れ始め、自身も息が途切れ途切れの中。勇作は信じられないと口にする。

その場に立ち尽くし、目の前に迫りつつある現実を必死に否定した。

「は? なに、それ? ふざけんなよ。だってまだ俺達はIHに……」

そこから先の言葉を繋げることはできなかつた。

(また、大仁多に負ける？ 俺達のIHへの道が、途絶える？ 最後の夏が、挑戦が、今までの全てが——終わる？)

まるで走馬灯のように、勇作の脳裏にこれまでの思い出が瞬時に駆け抜けては闇に消えていく。

「ふざけんな、ふざけんな！」

「おい、勇作？」

——そんなことを認められるわけがない。そんなことはあつてはならない。

チームメイトの呼びかけさえ耳に入らなかつた。この現実を拒絶することに一心不乱になっていた。

「ふざけんなああああ!!」

勇作の咆哮がコートに響きわたる。

その強い叫びは盟和がまだ死んでいないということを意味していた。

「まだ、試合の行方はわかりません。……彼らの目は死んでいない」
同僚が試合を決したと判断する中、緑間は一人その言葉を否定する。

勇作は勿論のこと、まだ盟和の五人の選手は勝負を捨ててはいなかつた。

「全員、今一度気を引き締めろ！」

「勝負が決まるのは——最後のブザーが鳴り響いたその瞬間だ！」

小林と白瀧も相手の姿からそれを察し、チームメイトに呼びかける。

あと三分。まだ何が起こるかわからないと。

「お兄ちゃん……」

コートに緊張の色が伝わる中で橙乃は一人、心配そうに兄を案じていた。

——黒子のバスケ NG集シヤララ——

「ふざけんな、ふざけんな！」

「おい、勇作？」

——そんなことを認められるわけがない。そんなことはあつてはならない。

チームメイトの呼びかけさえ耳に入らなかった。この現実を拒絶することに一心不乱になっていた。

「ふざけんなあああああ!!」

勇作の咆哮がコートに響きわたる。

その強い叫びは盟和がまだ死んでいないということを意味していた。

「まだ、試合の行方はわかりません。……彼らの目は死んでいない」
同僚が試合を決したと判断する中、緑間は一人その言葉を否定する。

勇作は勿論のこと、まだ盟和の五人の選手は勝負を捨ててはいなかった。

「全員、今一度気を引き締めろ！」

「勝負が決まるのは——最後のブザーが鳴り響いたその瞬間だ！」

小林と白瀧も相手の姿からそれを察し、チームメイトに呼びかける。

あと三分。まだ何が起こるかわからないと。

「お兄ちゃん……」

「おう、何か呼んだか茜？」

（元に戻った——!?!）

妹のかすかな声に反応し、普段の姿に戻る勇作。

「……なんかこの試合勝てる気がしてきました」

「ああ、楽勝だな」

（白瀧と小林も前言撤回してる!!）

いつそのこと橙乃を勇作のマークにつけばいいんじゃないかな？

「我々の業界ではご褒美です！」

地の文に突っ込むな。というかお前はそれでいいのか。

「茜と戯れるならなんでも！」

そうですか。

第五十話 渴望するモノ

——盟和高校男子バスケットボール部。

この二年連続でIH栃木県予選で準優勝という結果を残し、実質的に大仁多高校に次ぐと謳われている強豪校である。

だがそれまでの実績は決して良いとは言えず、県内ベスト8の壁を破ることができずにいた中堅校であった。

そんな中、盟和高校の命運を変えた転機が訪れる。

「橙乃勇作！ 星栄中出身！ ポジションはSFを希望です！」

当時すでに身長が180センチを越え、将来盟和を支えるエースとして期待された勇作がバスケット部に入部したことであった。

優れた運動能力を持ち合わせた彼は唯一の一年生レギュラーの座を勝ち取り、瞬く間に県内で活躍していった。

「っしやあー！」

「キター！ 盟和高校、再逆転！」

「一年生エースの活躍でついに決勝進出を決めた！」

ボールがネットを潜り、拳を握り締める勇作。湧き上がる歓声。

スコアラーとして頭角を現した勇作の活躍もあり、盟和高校は並み居る強豪を次々と撃破。

ついにIHをかけた決勝戦——大仁多との対戦の日が訪れる。

ここまで勝ち上がったのは偶然ではない。流れに乗っている勢いもある。ひよつとしたらバスケット部設立後初めての全国へ行けるかもしれない。盟和の選手達は、彼らを応援している人々はその希望を誰もが抱いていた。

「なっ——！」

……だが。

「まだまだだな。この程度では大仁多には届かない！」

呆然とする勇作をクロスオーバーで突破するのは、当時大仁多高校で唯一の一年生レギュラー、それも司令塔を務めていた小林圭介だった。

年が同じである上に体格もそれほど差はなかった。だが並外れた

技術とチームワーク、そして戦術。それらが全て相手の方が上だった。

さらにチームメイトにも差があった。大仁多には小林圭介の他にも全国に名を轟かせた強者が揃い、一人一人の実力差が明確であった。

『——試合、終了!』

「大仁多高校! 6年連続のIH出場決定!」

結果、大仁多高校はトリプルスコアという大差をつけて盟和高校を下し、IHへの切符を手にした。

「……ははっ! マジか、ここまで違うもんか」

初めて味わった大敗。しかしそれほど悲観はなかった。差がありすぎたからなのかもしれない。

「上等だよ! 今度こそ絶対に倒してやるよ!」

負けた悔しさよりも次へのリベンジの気持ちの方が強かった。

勇作はこの日から気持ちを新たに、トレーニングを積んでいく。冬は準々決勝で常盤高校に敗れ、リベンジはできなかつた。しかし勇作はゴール下の動きをひたすら練習し、その年の三年生の引退後からはPFにコンバート。

新たな力を手にして——二年生の夏。再び大仁多高校への挑戦への機会を手に入れた。

「……ふうっ」

「緊張してるのか、勇作?」

「馬鹿言え。これは武者震いってやつだ」

「あつそ。ひとまず今日もお前にパスだしてくからよろしくな」

「ああ。任せとけ細谷」

この年から同学年の細谷もレギュラー入りを果たし、勇作もより心強い仲間を手にした。

今度こそ、必ず大仁多に勝とう。そう意気込んで決勝の舞台へ上がる。

『試合、終了!』

「大仁多高校、7年連続優勝! IH出場だ!」

——結果は、準優勝。盟和高校は再び大仁多高校の前に屈辱を味わうこととなった。

「くそっ！ 何でだよ！ 何でまだ届かねえんだよ!!」

試合が終わった後、勇作は一人荒れていた。壁に腕を叩きつけ怒りを露にする。

実力をつけた。負けたくないという気持ちは強かった。……それでも届かない、遥か高み。

さらに追い打ちをかけるように、WC予選も準決勝で大仁多と対戦し敗北を喫する。

彼の不満は徐々に募っていった。そんなある日のこと。彼は耳にしまった。

「やっべ。タオル部屋に忘れてきちゃった」

先輩達が引退し、主将に任命された勇作。仕事と責任が増えたが、トレーニングを減らすことはなかった。

この日も朝早くから夜遅くまで練習を行い、ようやく寮へ帰ろうとしたところ、忘れ物に気づき部屋に戻る。

「冬もあっさり終わっちゃったな。せつかくだから決勝までは行きなかったんだけどな」

「仕方ねえよ。だって大仁多と準決で当たっちゃまうんだもん」

部室内にはまだ部員達が残っていた。彼らの話し声を耳にして、勇作は扉を開けようとした手を止めた。

「それもそうだよな。むしろよくやった方じゃね？」

夏だって準優勝。しかも昨前よりも点差はなかった」

「ああ。WC予選もここまで勝ちあがれるほど実力がついたってことだ。

俺達凄いなと思うぜ？ 今まで盟和がここまで勝ちあがれたことなんてなかったろ？」

「言ってる！ どうせ次の夏も大仁多が優勝だろうけど。向こうと当たるまでは勝ちてるな」

結果に満足しきっている声だった。この現状を受け入れている声だった。

これでは打倒大仁多など叶うわけがない。彼らは大仁多に負ける前にすでに自分に負けている。叶わぬ野心に絶望し、勝利そのものを放棄している。

部員の弱音を耳にした勇作の怒りは尋常ではない。だが今すぐにも殴りこんでやろうという気持ちを、主将という責任感で縛り付ける。

「……根性なしどもが！」

その日勇作は部屋に戻ることもなく、寮へと帰っていった。

翌日、副主将となった細谷、そしてつい最近レギュラーとなった神戸を呼んで事の経緯を説明する。

「ふーん。まあそういうやつらの気持ちもわかるけどな」

「はあ!? お前もそんなことを言うのか!!」

「落ち着きなよ勇作。……別に細谷だって本気で思っているわけじゃない。彼らの気持ちもわかるっただけだよ。そうだろう?」

「ああ。たしかに全国にはいけていないけど、俺らは結果は残せている。

現に世間では俺達が栃木内ではナンバーツーとか呼んでるやつもいるほどだからな。喜ぶやつがいるのも仕方がねーよ」

「馬鹿な! そんな考えで優勝できるわけがねえだろ!」

まるで弱音を吐く者の肩を持つような態度の神戸と細谷に対し、勇作は激怒した。

勇作は椅子から立ち上がり窓から青空を見上げ、誓うように口にする。

「俺はそんなんじゃない絶対! 喜ばない! もう負けるのなんて御免だ!

二番なんて不名誉で喜ぶなんて馬鹿げてる! ……必ず、優勝する! 必ず!」

盟和の中でも、勇作の『勝ちたい』という気持ちは並外れている。一年生のころから味わった敗北は彼の勝利への飢えを成長させた。

「……わかってるさ。いつまでも甘んじてるわけじゃねーよ」

「うん。そうだね。……僕達も来年が最後なんだ」

細谷は一つ息を吐き、勇作を諫めるように言った。神戸も少し寂し

そんな笑みを浮かべ、二人に並び立つ。

——来年が最後。それを逃したらもう機会はない。

「だから絶対に勝とう」。三人が心を一つにした日だった。

「俺をベンチに？ いいんですか？ 正直、俺嫌われているもんだと思いましたが？！」

「本当ですか？ ……はい！ 頑張ります！」

さらに盟和はこれまで先輩への態度の悪さから部内で上下関係の問題を起こし、実力こそあったがベンチ入りできていなかった古谷。

そして運動能力こそ高くはないものの、補佐型のSGとして実力を発揮していた金澤。

この二人の新戦力を抜擢し磐石の態勢を整えた。

チームは完成した。闘志は十分すぎるほど高まっている。後は——勝利を手にするのみ。最後まで準優勝という屈辱でおわるわけには、いかない。

「うあああああああ！」

様々な思いが含まれた叫びをあげ、勇作が全身に力をこめる。

試合も終盤。ここまで常にゴール下で競り合いを繰り返した疲労もある。だがそれを微塵も感じさせないように、勇作は全ての力を持って光月と対峙した。

今までとは比べ物にならないほどの力と気迫を光月に向けた勇作のポストアップ。光月は多大なプレッシャーを受けながらも重心を下げ、持てる力を振り絞る。

「ッ……！ 負けない！ 大仁多が勝つ！ もう後戻りはしない！」

「ふざけんな！ 勝つのは盟和だ！ もう準優勝なんて不名誉はいらない！」

俺が盟和を、茜をインターハイへ連れて行く！」

お互いが譲れぬ信念を武器にぶつかっていく。

一歩も退かないゴール下のぶつかり合いが繰り返されるが、光月

の奮戦の前に勇作はなかなかポジションを取ることができない。

(これだけやってもどかねえか! ……なら!)

それならば勇作は別の手段を探り出す。

他のチームメイトの動きに目を向けて、そして邪魔を受けないように一直線に走り出した。

目指すはゴール下から離れたスリーポイントライン。

「よこせ! 細谷!」

駆け込みながら勇作は司令塔の細谷の名前を呼んだ。

細谷は小林の厳しいマークを受けながらも、なんとか身を動かし彼の横からパスをさばく。

「光月! 気をつけろ!」

「そいつのオフエンスはゴール下だけじゃない!」

(……わかってます!)

勇作の手にボールがわたり大仁多の警戒心が高まった。

先輩達の注意は光月も十分承知しており、若干距離をあけてペネトレイトに備える。

相手のシュートレンジの広さを知っているからこそその対応だった。

しかし――

「邪魔なんだよお前ら!」

勇作はスリーポイントラインの外からシュートを放った。

「なっ――!?!」

(馬鹿な! 勇作がスリー!?)

ありえない。誰もがそう思った。

たしかに勇作が中距離からもシュートを撃てることは知っている。だがスリーともなれば話は別。ここまでのデータにもなく、到底撃つとは思えなかった。

無謀な試みだと大仁多の選手達が考える中、ボールがリングの中心を射抜く。

「決まった!?!」

「嘘だろ……」

(大仁多) 97対85 (盟和)。勇作のスリーが炸裂。

「気にするな。所詮単発では何も変わらない！
相手に飲まれるな！ 優位なのはうちだ！」

突然の一発を受けて生じる気の迷い。それを小林が断ち切る。

「……はい」

「こつちも返すぞ！ 一本集中！」

大仁多のリードは現在12点。選手一人一人の力も勝っている。
ならば盟和のペースに押し切られない限り、負けることはない。

主将の一括により気を引き締め、大仁多は攻撃を開始する。

（だが、先ほどの咆哮でスイッチが入ったのか勇作の勢いが尋常ではない。

もしあいつに止められるようなことになれば……万が一の可能性がある。ここは！）

小林が外の山本へパスをさばいた。

勝負所に慣れている三年生。ここで決めるのは山本がベストだと。

「オツケー。俺も同意見だしな」

「行かせない！」

金澤が体に鞭撃つてコースを塞ぐ。

せつかく勇作が決めたというのにここで得点を取られては意味がない。

流れをもう一度盟和へ。そう願いを込めた必死のディフェンス。

その思いを引き裂くように山本は切り込んだ。

「あっー！」

（もーらいー！）

「撃て、山本！」

加速したドライブを止めることができず、山本の突破を許してしま
う。

金澤を抜き去った山本がミドルからシュートを狙う。

「させつかああ!!」

「うおっ!?!」

そこに勇作の渾身のブロックが炸裂した。

「行くぞ！ 攻めろ!!」

「しまった！ 戻れ！」

さらに盟和にとつては幸運なことにボールは誰もいない前方へと転がっていく。

真つ先に飛び出し、ボールを確保した細谷はすぐさま斜め前へボールを放る。

細谷に気を取られた小林は勇作がパスを受け取る姿を目撃した。

「止めろ！ ここは絶対に守りきれ！」

大仁多のベンチから悲痛な叫びが響く。

「なっ——！」

「やはり最後に立ちはだかるのは、あなただと思っていた！」

「白瀧！」

「勇作さん！ ……止める！」

その叫びに応えるように白瀧が先回りし勇作を待ち構えた。

「……盟和が息を吹き返すか」

「え？」

「この速攻を決めれば点差は10点。残り時間は二分強。なんとか逆転可能な域に戻すことができる。」

だが逆に失敗しカウンターを決められるようなことになれば詰みだ。今度こそ士気は取り戻せなくなり逆転も不可能になる。

盟和が持ちこたえるか、あるいはこのまま大仁多が押し切るか。――

――この勝負で決まる！」

勝負時を感じ取った大坪は一瞬たりとも見逃すまいと目を見開いた。

下手すればこの速攻の結果で試合は決着を迎える。それほど重要度が高い。果たして二人はどう動くというのか。

「ですが……そういう勝負所で勝負を決めるのが、白瀧です」

しかしならばこそ白瀧が止められないわけがない。

勝負師たる力を持つ彼ならば、必ずやこのような場所でこそ真価を發揮するのだと。

彼のことをよく知る緑間は彼の勝利を確信していた。視線の先で敵を待ち構える白瀧は重心を落とし、自然体の構えで勇作を観察して

いる。

「あのディフェンスは！俺との一対一で見せていた——！」

同じく観客席で試合を見ていた楠は白瀧の姿勢を見て昨日の試合を思い出した。

第三Q、楠の最後のプレイ。それを止める為に一度だけ見ることが出来た、彼の本気のディフェンスを。

（……考えろ。相手の動きを。見切れ。相手の手の内を。読め。相手の策を）

勇作の動きを目で追いながら白瀧は集中力を高めている。

ここまでのデータから想像できる敵の打つ手を、それに対応する手段を必死に模索していた。

（先ほどのプレイでスリーも考えられる。だが本職でないためか、やはりシュートを撃つ前に硬直が見られた。

ならば後出しでも反応できる。それよりも困難なのは相手が切り込んできた場合だ）

相手の攻め手が多い以上、完全な後出しでは分が悪い。身体能力では完全に自分が劣っている。

だからシュートを撃たれる前に止めるのがベストだ。そう白瀧が考えている間に、勇作はすぐ目の前まで迫ってきた。

もはや思考する時間はない。

（スリーは必中じゃないしシュートの前に止められる可能性が高い。味方を待つのも得策ではない。……このまま切り込み、そして決める！）

（集中しろ！狙うは突破の瞬間。敵が切り返すその時だ！）

お互いが必勝の策を練り、実行に移す。

勝負は一瞬で決まる。だからこそ迷うことは許されない。

——勇作の右手から左手にボールが切り替わる。

（キラーインステインクト殺戮本能！）

その瞬間、白瀧の瞬発力が解き放たれた。

一歩踏み出し大きく伸ばされた手が、勇作の左手に納まるはずだったボールをはじき飛ばした。

「——あっ!?!」

「獲った!」

白瀧のステイールが成功。突破される前にボールを奪った。すかさず反撃に出ようと白瀧は勇作を横目に走り出す。

「だから言つたろ! 元々あんたのことを信じ切っているわけじゃねえってよ!」

「なにっ!?! ……古谷!」

(ステイールを読んでいたというのか!?! 何で!?!)

予想外の出来事に白瀧は目を丸くした。

ボールを手にしたのは、勇作後ろからを追っていた古谷だった。

彼とて決して勇作を信じていないわけではない。だからといって完全に信じているわけでもない古谷は勇作が失敗する可能性も考え、白瀧がステイールすることを読んで追っていたのだ。

「だから——!」

「まずい!!」

古谷がシュートモーションに入る。

失点するわけにはいかない白瀧は当然ブロックに跳んだ。その足元に、古谷がボールを通す。再び勇作の手に渡った。

(パス、だと!?!)

「ここまでお膳立てしてやったんだ。——さっさと決めて来い、馬鹿!」

「ちっ。……誰に言つてやがる!」

シュートフェイクに白瀧がつけられた今、勇作がフリーとなった。

勇作は生意気な後輩から生意気な命令を受け、うつすらと口角を挙げて跳躍した。

今度こそ盟和復活の一撃を。このままリングに叩き込もうと腕を伸ばす。

「させっか!」

「があっ!?!」

ダンクシュートが決まる寸前、小林が全速力で勇作のシュートを阻止した。

リングが揺れる事無くボールが零れ落ち……審判の笛がなった。

『ディフェンスファウル！ 白、4番^{小林}！ ツースロー！』

フィールドゴールをとめることはできたが勇作にフリースロー二本が与えられた。

「ナイスですキャプテン。今のはファウルしなければ決められていた」

「ええ。正直、助かりました」

（勇作さんを止めることで意識が集中しすぎた。今のは俺の失態だ……）

「いや、白瀧もよく勇作を止めた。古谷のことは仕方がない」

おそらく小林のファウルがなければ確実に決められていたことだろう。

小林は礼を言う白瀧に声をかけ、全員をプレーへ戻るように指示を出した。

審判からボールを受けた勇作がフリースローラインに立つ。

ここで決めなければならぬとエースの意識がある中、勇作は確実に二本のフリースローを成功させた。

（大仁多） 97対87（盟和）。点差は10点に。

「さすがエース！ フリースローを二本とも入れてきた！」

「これで10点差！ まだ逆転がありうるか!？」

予想外の追い上げを見せる盟和に、観客席には立ち上がる姿さえ見えた。

『大仁多高校、タイムアウトです！』

そんな中、藤代が残されていたタイムアウトを使った。

タイムアウトの申告により、大仁多の選手達がベンチに戻り息を整えている。

10点差というリードこそあるものの決して浮かれている様子はなく、それどころか士気が沈みかけているようにも見える。

盟和に連続得点を許し、波に乗らせてしまったことに対し自らを責めているような。

「……皆さん、こちらを向いてください」

五人の選手が汗を拭いたりドリンクを飲んだり体力の回復を行う中。

藤代は彼らの前に立って意識を向けさせる。そして彼らが顔を上げると——何かが、空気が破裂するような音が響いた。

「なっ!?!」

「つとお!?!」

「ぶふっ!」

「うわっ!」

「……ッ!!」

突然の不意をついた猫騙し。それを食らった五人は、緊張が完全に途切れて真っ白な状態となった。

「はい。どうでしょうか、気持ちのリセットになりましたか？」

「な、なにを……」

「皆さん固い様子でしたので。反省はよいのですが引きずるのは無いです。」

さあ気持ちを新たに。残りのこの二分の話をしていきますのでしっかりと聞いていてください」

彼らの反論が出る前に藤代は訴えた。はつきりと流れを区切ろうと。

言葉の真意を悟り、五人の顔の強張りが消える。決して気が抜けているわけではない、しかし集中している。精神的に余裕を持っている状態だ。

これならば存分に力を発揮できるだろう。「それでよいのです」と藤代は改めてこれからの方針を語りだした。

一方、盟和ベンチでは岡田が声高らかに選手を迎えていた。

「よく決めたー! この得点はでかいぞー!」

ベンチに腰掛ける選手達も嬉しそうに耳を傾けている。

「残り時間は短い。しかし勝機が完全に消えたわけではない。なんと

してもこの点差をひっくり返すんだ！」

「はい！」

一時は完全に終戦の雰囲気は漂っていたが、連続得点により悪循環が途切れている。

特に出場中のメンバーの士気は盛ん。勢いは消えていないと感じられた。

「よし。そのためにもまずディフェンスだ。一番厄介なのは大仁多のオフエンスで時間を潰されることだ。

できることならば早い段階でボールを奪い、カウンターを決めたい。その為にも勇作、お前には……うん？ おい、聞いているのか？」

今後の対策を主張する中、勇作が一人うなだれていた。頭にタオルをかけていて表情を窺うこともできない。

「……勇作？ どうした？」

「まさかどこか痛めたのか？」

心配そうに左右に座る細谷と神戸が顔を覗き込む。

「なっ!？」

そして驚愕した。二人の視線の先、勇作の瞳から大粒の雫が零れ落ちていた。

「ちよっ、は!？ 何で泣いてんのお前!？」

「……マジやめてくんないすか？ そういうのイラつくんですけど」

予想外の状態に困惑するチームメイト。

そんな彼らの気持ちを知ってか知らずか、元凶である勇作が口を開いた。

「いや、今こうしてるのが信じられなくて……」

「はあ?」

「……点差が15点に開いた時には敗北を感じ取った。

白瀧に止められた時はもうこれで終わりだと覚悟した。

全てが終わったと思った。なのに、まだこうしてお前らと勝利を目指すことができてる」

それが嬉しいのだと勇作は言う。

彼の場合、かつて部員が弱音を吐いている所を口に出しているのを耳

にしたことがある。

だからこそそれを許せず、勝利を最後まで求めたいという思いがあった。

そして今。まさに彼の思いが繋がっている。何度も切れかけた。だが確かに健在だ。

「馬鹿。そういうのは勝ってから言え」

「うん。まだ僕らの思いは果たされていないよ」

ならばこそ、その思いはまだとっておけと同級生は諭すように言った。

「……ああ、そうだな。悪い」

優勝こそが彼らの本望。だからこの試合をひっくり返して、その後で今度こそ全ての思いを打ち明けよう。

勇作は思いを一時の間封印し、再び選手の顔に戻った。

「頼むぞ。お前の力がなければ逆転など不可能だ」

「わかってます」

「よし、じゃあ話を戻すぞ」

監督の言葉に首を縦に振って答えた。

再び岡田が話を大仁多への対策に移す。

「とにかく重要なことは如何にして得点の機会を増やすかだ。

体力的に厳しいだろうが……ここから先はオールコートで当たっていけ」

オフエンスの回数は限られている。ならばそれを増やしていこうと。

盟和はこの勝負時、最後の賭けにしようとしていた。

そしてそれは藤代の推測どおりでもあった。

「十中八九、盟和はこの後オールコートを仕掛けてくるでしょう。

残り時間が少ない中で十点差。私でもそうする。賭けになりませんが、一番可能性が高いともいえる」

ボールを奪うことができれば一気に点差を縮めることができる。

確かに彼らの言うとおり、今この時こそが仕掛け時であろう。

「なのでこちらも手を打ちましょう。……あまりやりたくはなかった

のですが、攻めますよ」
そんな中で藤代も最後の一手を、勝負を決めるであろう最後の一手を指そうとしていた。

『タイムアウト終了です！』

命運を分ける一分が終了。試合が再開される。

気迫を纏った十人の選手達がコートに入った。選手の交代はない。スローワーは小林。まず確実にボールを入れようと試みるが……

「行くぞー！ 一本！ もう一度取っていくんだ！」

細谷の怒声のような激しい叫びが空を切り裂く。

盟和の選手達が力を振り絞り、最後の賭け——オールコートマン ツーマンを仕掛けた。

(やっぱり！ 藤代監督の予想通りか！)

ここまでは思惑通りに事が運んでいる。そしてその対応策も受けている。

小林が高さを活かし、細谷の指先を越えるようにボールを入れる。受け取ったのは白瀧。

「——ならー！」

「こつちも行くぜ！ 走れ！」

そしてボールが入るや否や、大仁多の選手達が白瀧をバックコートに残して走り出した。

「えっ!？」

(小林まで白瀧を置いてフロントコートに!?)

「まさか！ まずい、戻れ！」

大仁多の奇襲のような動きに戸惑う中、逸早く思惑に気づいた岡田は必死に叫ぶ。

「いや、今からではちよつと遅いですよー！」

すると彼の叫びを切り裂き、白瀧が単独でドリブル突破を果たす。

(これは、PG白瀧のパターンだ！)

知識にあつたはずなのに、ここにきて頭から抜け落ちていた。

この男はただの得点屋ではない。大仁多は白瀧というドリブラーにボールを預けオールコート突破を委ねた。

結果——盟和ディフェンスはボールを奪うことができずに簡単にボールを運ばれてしまう。

オフENS5人対ディフェンス3人。金澤がなんとか止めようと前に出るが、白瀧がドリブルで引つ掛けてミドルの山本へ。

勇作がヘルプに出るも小林のスクリーンに掴まり突破される。山本は神戸を誘き寄せたところで黒木にバウンドパス。彼のシュートを許してしまった。

「決まった！ 大仁多、鮮やかに得点！」

「盟和のオールコートも難なく突破した！」

（大仁多）99対87（盟和）。大仁多、盟和ディフェンスをもともせず。

「ぐっ！」

（折角オールコートを仕掛けたのに……これじゃあ相手の力を見せ付けられたようなものだ！）

「とにかく時間がない！ 細谷さん！」

「ああ……」

奇策に対する奇策。ひやりとしたものの、いつまでも引きずって入られない。

細谷はボールを拾い、金澤へと視線を向ける。

「今だ！ 攻めるぞ！」

『おおう！』

「なに——!?!」

だがその視線の先に、彼にとっては最悪の敵——小林の姿が映し出された。

「こ、これは!? まさか——!」

「オールコートゾーンプレス1—2—1—1!!」

トップに小林、右に山本、左に白瀧、真ん中には光月、最後尾に黒木。大仁多も盟和と同様に攻めにでていた。

「ば、馬鹿な！ゾーンプレスだと!? なぜ大仁多がここで!?!」

——ありえない。岡田は目の前の出来事を信じられなかった。

確かにゾーンプレスは強力なディフェンスだ。ボールを奪うことができればあつという間に得点に繋がる。点差を突き放す強力な武器となりうるだろう。

しかし毎回成功するわけではなく、突破されれば失点しやすいという諸刃の剣。追いかけるチームが実行するならばわかるが、逃げ切りを図る大仁多が実行するにはメリットよりもデメリットの方が大きく、到底実践に移すとは思えなかった。

「……あなた方の勢いは脅威だ。一瞬でも隙を見せれば食われる可能性がある」

彼らは知っている。東京都でも実力では決して負けていなかった。しかし波に乗った新鋭に押し切られた強豪があつたということ。それを知りながら二の舞を演じるわけにはいかない。

「ならばこそ、そのような余裕さえ与えない。最後まで攻め続ける。オフエンスの機会など与えない。——トドメを差す」

油断などあるはずもない。藤代は目の前の勝利を貪欲に求め続ける。

「くそ——!」

細谷は齒軋りが止まらなかった。目の前の小林のディナイはそれほど厳しいわけではない。だがそれゆえに中央へのパスが出せない。間違いなくサイドラインへの誘導を計っている。自分達のマツチアップ2—3ゾーンと同じ目的であろう。

(それがわかっていて、わかっているけど!)

「細谷さん! 早く! 5秒!」

「ちくしょう!」

相手の目的がわかっていながら、細谷はサイドライン付近の金澤へパスをさばいた。

「チェック! 詰める!」

「ちっ!」

(やっぱり動き出しも早いか。これじゃあパスも出せない!)

同時に大仁多も動き出す。山本、そして小林が金澤のダブルチームにつき、白瀧も中央に寄ってパスを警戒している。

(駄目だ！ 動きが封じられた！)

「もらったー！」

「あっ!?」

「金澤！」

小林がボールを弾き、そのまま自分のものとした。

リングはすぐ目の前。細谷がブロックに跳ぶが、何事もなかったようにミドルシュートを沈める。

「決まったー！」

「大仁多のゾーンプレス成功！」

「これは痛い！ 痛すぎる失点！」

(大仁多) 101対87(盟和)大仁多が得点を100点台に乗せた。

王者の背中が遠のいていく。

「もう一回だ！ 当たるぞー！」

それでも攻撃の嵐はやまない。

「こいつら!!」

(まさか、本当に残り時間攻め続けるつもりか！)

再び大仁多はゾーンプレスを展開する。

今度はボールを運べるようにと金澤がボールを細谷へ入れる。

何とか突破して欲しい、そう願うも……小林と白瀧のダブルチームが立ちはだかった。

(……プレッシャー半端じゃねえ！)

県内を探してもこの二人ほどの鉄壁のダブルチームは見つからないだろう。

細谷といえどボールを受け取るものの、ドリブルさえつくことができない。

そしてパスコースを探している間に白瀧がボールを奪い取る。

「ッ!」

「よっしー！」

「……この、一年のくせにー！」

「そう何度も撃たせるか!!」

体勢を立て直すとそのままレイアップシュートを狙う。

だがそう簡単に決めさせられるわけにはいかない、金澤が真正面から、さらに細谷も真横からシュートコースを阻んだ。

二枚のブロック。そう簡単には決められない。ついにシュートを撃つことができないまま彼の体がリングを通り過ぎ——ボールを左手に持ち替え、背後へ山形にリリースする。

「え——？」

バックレイアップシュート。ボールがリングを潜り抜けた。

(大仁多) 103対87 (盟和)。短時間で点差はどんどん開いていく。

「やべえ！　これが大仁多の本気かよ！　あつという間に盟和の反撃の芽を摘んでいく！」

尋常ではない攻撃力。高尾は感激さえ覚えた。

「はじめてだな」

「そつすね。普通なら勝っているチームがゾーンプレスなんてあんまりしないというのに……」

「いや、そつちじゃない」

「え？」

「おそらくは……大仁多が県予選でゾーンプレスを使うのは、これからはじめてだ」

対して大仁多をよく知る大坪は、冷静に現状を分析していた。

「たしかにゾーンプレスは大仁多の得意戦術。しかし本来ならリードを許しているチームが使うディフェンスだ。

そのために県予選で使うということは殆どない。だが今大仁多は盟和が掴んだわずかな勝機を潰すために、点差を短時間で離す為に行っている」

盟和のことを認めているということの意味するのだが、決してそれだけではない。

「それだけの自信と積み上げた練習量がなければ実行しようとはまず思わない。

藤代監督。つかみどころがないような性格だと思っていたが、なんという大胆不敵……!」

大仁多が実行するだけの力をつけているということ。そして監督も迷わず実行させるということ。

「事実、このデイフェンスは相当厳しいのだよ。最前列は高さのある小林、左右にはスピードがありステイールに長けた山本、白瀧。たとえこの三人をかわそうとも……」

緑間の視線の先では、細谷が強引にボールを高く放っている。

ステイールされないためには仕方がないことだった。

「その先に待ち構えているのは光月、黒木。二人のタツパのある選手達」

だが勇作に渡る前に光月がボールを奪い取る。

「あっ!」

(駄目だ、ボールが運べない!)

またしても大仁多のデイフェンスを突破することができず、山本のレイアップシュートを許してしまう。

(大仁多) 105対87(盟和)。短くなっていく残り時間。広がっていく点差。

再び大仁多はゾーンプレスを展開。

(このやろう! こうなったら無理やりにも突破してやる!)

点差が広がれば広がるほど焦りは募るもの。それは司令塔でさえ例外ではない。

細谷は焦りと怒りに身を押しされ、強引にダブルチームの突破を凶る。

「うあっ!」

後方へ倒れこむ白瀧。鳴り響く審判の笛。

「オフエンスファウル! 黒、^{細谷}5番!」

「なあっ!」

(まずい——!!)

強引なドリブルにより細谷がファウルを取られてしまう。

連続のターンオーバー。流れは最悪だった。

その上、大仁多は確実に黒木のゴール下から攻め、着々と得点に成功する。

(大仁多) 107対87(盟和)。ついにその点差は二十点に。

大差がついてなお、大仁多はゾーンプレスを続行する。

(こいつら、どんな体力してんだよ……)

執拗なディフェンスにフラストレーションがたまり続ける盟和の選手達。

それによって集中力にも乱れが生じてしまったのだろうか。金澤のスローインは、山本によって弾かれてしまう。

「げっ!？」

「駄目だぜ。うちを相手に少しでも油断しちやったらー!」

山本はすぐに小林へバウンドパス。

フリーの小林は確実にゴール下からシュートを決めた。

(大仁多) 109対87(盟和)。盟和は一度もフロントコートにボールを運べないまま、残り時間1分となってしまう。

『盟和高校、タイムアウトです!』

そして岡田がついに最後のタイムアウトを申告した。

「……上出来です。このまま行きましょう」

藤代は文句を何一つ言わず、作戦の続行を指示した。

選手達は静かに首を縦に振って了承する。

言葉は少ないが気迫がこもっている。体力にも不安は見られず、このまま押し切ることもできるだろう。

(本来ならここでゾーンプレスを止めるのも手だ。だが折角選手達が勢いをつけている以上、続けておきたい)

他にも勝つ為の手段はあるものの、ここから先の戦いのためにも藤代は作戦の続行を決めていた。

選手達もつらそうな素振りは一切見せていない。ならばこの感覚を維持し、戦い続ける。

「絶望的だな。まさかボール運びさえ容易ではないとは」

反対側、盟和のベンチでは岡田が暗く沈む選手達にただ現実を言い放った。

タイムアウトで完全に戦局は変わってしまった。大仁多のゾーンプレス、完全に予想外であつたとはいえ、ここまで離されてしまつては……勇作でさえ常日頃の明るさが消えてしまつている。

「だが。……お前ら、まさかこのまま負けてもいいと、諦めているわけではないだろうな」

『——ッ!』

すると続けられた言葉に、五人が感化され、悔しさを倍増させる。

「そんな諦めがつくほど、お前らの気持ちは軽くないよな!」

『当たり前だ!!』

もう一度、強く呼びかけられたその問いに、五人が揃って声を張る。

予想通りの解答だつた。「そうでなくてはな」と岡田が口角を挙げて言葉を繋いだ。

「なら、もう一度大仁多を倒しに行くぞ。……お前達の、本来の姿で」

『タイムアウト終了です!』

盟和高校最後のタイムアウトが終了。これで得点できなければ、完全に盟和は詰む。

いや、すでに決着は着いているのかもしれない。もはや観客の中には大仁多の勝利を確信している人達が多かつた。

(……点差が大きくなっているが、選手達はまだ諦めていない)

(むしろ何か仕掛けようって顔だな。ま、させないけど)

だが大仁多の選手達はそうではない。相手の顔振りから戦意を感じ取り、最後まで圧倒することを誓っている。

対面している盟和の五人もそれを理解し、細谷は一つ息を零した。

(やっぱり気を抜いてはくれねーよな。わかつてたから別にいいけど)

これでマークが楽になるならばどれほど難易度が下がることか。本気でなければ意味がないとわかっているからこそ複雑ではあるのだが。

盟和ボールから試合再開。大仁多はゾーンプレスを続行。

スローインは金澤が行うが、目の前の小林に神戸がスクリーンをかけ、ダブルチームを遅らせる。

「むっ!？」

(スクリーン！ しかも早い！)

おそらく前もって全員の動きを定めていたのだろう。スクリーンが綺麗に決まり、小林が完全に出遅れた。

加えて受け取った細谷はドリブルフェイクで白瀧を引っ掛けると、横へパスをさばく。

誰もいないはずの空間。パスミスか、山本が奪おうとするがそこに金澤が飛び込み、前方へ走り込む細谷へと戻した。

(金澤↓細谷↓金澤ときて、また細谷だ?!?)

「たえ動きを読まれていたとしても、このショートパスなら防げないだろう！」

「マジか！ 盟和、ついにゾーンプレスを突破！」

神戸がダブルチームを遅らせる間に、再び金澤がパスコースを作り出し、突破口を切り開いた。これほど距離が短いとパスコースを誘導することができなかった。

数分ぶりに細谷がボールをフロントコートまで運んでいく。

「後は頼んだぜ、勇作！ 古谷！」

ついに包囲網を破ることに成功した細谷はオフエンスをフオワード二人に託した。

「任せとけ！」

「一人でも十分ですけど!？」

ここまでは三人が見事に繋いでくれた。

後は決めるしかない。勇作がドリブルを続けてゴールに迫る。

相手も光月、黒木の二人が残っており、光月が勇作のマークについた。

(悪いが、今の状態じゃ止められねえよ！)

「行かせるか！」

「いいや。通らせてもらうぜ、大仁多！」

光月も必死にマークに着くが、ドリブルの勢いでスピードが増している状態の勇作に分があつた。

——切り返しは一瞬だった。トップスピードで切り返したことで光月の反応が遅れ、突破を許してしまう。

「撃たせんー！」

このままシユートモーションに入る勇作だが、最後の砦、黒木がブロックに跳ぶ。

すると勇作は黒木が跳んだ瞬間を見計らって横にパスをさばく。相手は、同じく得点を狙っていた古谷。

「ナイスパスじゃないっすか！」

「ぐうっ!？」

「でも、まだ——!？」

理想的な攻撃パターン。わかっていたとはいえ、ひつかかってしまった。

それでもまだ防げる、そう確信して光月は走るが、直後古谷の体が後退する。

(バックステップ！)

「もーらった！」

一瞬で距離が大きくなり、詰め寄ることが不可能な距離が開いてしまう。

古谷もフリーであることを確信し、狙いを定めてボールをリリースする。

最高点に到達すると同時に手から放たれた、その瞬間——背後からボールは叩き落とされた。

「なっ!？」

「言っただけだ、大仁多を相手に油断は禁物だ」と

ブロックしたのは白瀧。しかも弾かれたボールを山本が確保し、再び大仁多ボールに変わってしまう。

(戻りが早い！ あのシュートをブロックするなんて……)
突破されても防ぎきるほど戻りが早く、デیفエンスが機能している。

ようやく希望を掴み取ったと思った盟和だったが、大仁多の前に勝機が次々と消えていく。

そして始まる大仁多の反撃。白瀧にボールを戻してあつという間にボールを運んでいく。

「ふざけんなー！」

「こつちにも意地があんだよ！」

カウンターの速攻を許してしまうわけにはいかない。勇作達も必死に走り、デیفエンスに戻る。

白瀧は金澤をバックチェンジでかわすと細谷もフロントチェンジからのロールターンで突破。

その間にフロントライン三人がトライアングルのゾーンでゴール下を固める。外から決める方が確立は高いかもしれない。その間に飛び込むように白瀧は加速した。

(俺達なんて目じゃないってのか!?)

(叩き落とす!!)

切り込んでくる姿が好戦的に映り、二人の闘志に火を灯す。

すると白瀧が本来のレイアップよりもいち早く跳躍。守備範囲であり、反応ができた勇作と古谷がパスに気を配りながらブロックに跳ぶが——白瀧のティアドロップが静かにリングを揺らした。

「入った!？」

「そんな——！」

「誰にも俺は止めさせない！ 誰が相手であろうとも、止められるわけにはいかないんだよ！」

(大仁多) 111対87 (盟和)。盟和の反撃も届かず、再び失点——。

「まだ気を抜くな！ 試合は終わっていないぞ!!」

小林の声と共に、大仁多の選手達が今一度ボールに迫る。

大仁多のゾーンプレス、未だ健在。

誰がこの現状を見ようとも、同じ感想を抱くだろう。

「声出してけ！ 周りをよく見ろ！」

試合の行く末は火を見るよりも明らかだった。

「足を止めるな！ 最後まで走れ、大仁多につかまるぞ!!」

万策尽きた。体力も限界を迎えた。敗北を理解した。

だが納得できない、受け入れるわけにはいかない。

選手としての意地が彼らの体を無理やり動かした。

その姿勢に対して敬意を表してか、相手も最後まで全力でぶつかつてくる。

「甘い！」

「……そんな」

最後の頼みの綱、神戸へのロングパスも黒木によって防がれる。

「くそっ！ 止めろ！ 止めるんだ！」

岡田も必死に声を張り上げ中、白瀧が盟和ディフェンスを引き裂いていく。

「速っ——!!」

細谷を突破し、古谷と金澤が二人でヘルプにでる。

すると白瀧は冷静に二人の足元を通すようなバウンドパスをさばく。

ボールはミドルから走ってきた小林へ無事に収まった。

「ナイスパス！」

「……ふざけんな！ もう同じ思いは、ごめんなんだよ!!」

「決めろ、小林！」

「止めてくれ、勇作！」

キャプテンとキャプテンが相対する。

——この勝負を譲るわけには行かない。お前に勝つ。

最初に跳躍したのは小林だった。狙うのはゴールのみ。高く腕を振り上げる。

わずかに遅れて勇作も跳ぶ。振り下ろされるボールに負けじとブ
ロックを敢行した。

「うあああああ!!!」

「うおおおおお!!!」

残された最後の力を全て振り絞り、思いをぶつけ合う。

殆ど拮抗していた二人の勝負。この激しい競り合いは——小林が
リングにボールを叩き込むことで、決着を迎えた。

そして、最後のブザーが、鳴った。

第三章 猛者集結

第五十一話 全国への挑戦

審判の笛が鳴り響き、力を失ったボールがコートに落ちる。それは一つの長い戦いが終わりを告げる合図であった。

『試合、終了——！』

「大仁多高校8連覇達成！ IH出場だ！」

インターハイ栃木県予選、決勝。

（大仁多） 119対87（盟和）。

勝者——大仁多高校。盟和の三度目の挑戦を退け、栃木の王者の座を守り抜いた。

IH出場の権利を手にし、大仁多の応援団は総立ちとなり歓喜の声を上げる。選手達も念願の勝利を手にした喜びを分かち合った。

「よっしゃあー！」

「やった！ やったぞ小林！ インターハイだ！」

「ああ。もう一度だ！ もう一度インターハイで戦える！」

ついに到達した頂への道。たとえ何度経験したことであろうとも、生じる喜びが減ることはない。

最も大仁多の全国を知る小林、山本の両名もお互いの手を力強く握り締め、喜びを爆発させた。

「……勝った」

「何をぼんやりしてんだよ！」

「うわっ！」

「勝ったんですよ俺達！」

「ついにインターハイだ！ もっと喜べよ！」

「みんな。……うん！」

呆然とする光月に本田をはじめ、同級生が抱きついた。

笑みを浮かべる三人。彼らの顔を見て光月もようやく勝利の実感

が湧き上がった。

試合の疲れを忘れ、仲間と共に騒ぎだす。

「つたく。満足そうにしゃがって。……よかったじゃねえか」

その光月の笑顔を見届けた荻野は早々に席を立ち、出口へと向かっていく。

「やった……！ やったぞ！」

「白瀧」

「黒木さん！ やりましたね！ 俺達！」

静かに、だが珍しく満足げに近づいてくる黒木。白瀧はすぐに意図を理解し、ハイタッチをかわした。

彼らだけではない。ベンチでも喜びは尋常ではなかった。全員が立ち上がってベンチから飛び出し歓声に湧く。

「茜ちゃん！」

「東雲さん！」

マネージャー二人も涙を浮かべて抱擁する。

「……よし、一先ずはよくやってくれました」

藤代は一息ついて選手達の労を労った。

大仁多の選手が、応援していた人達が歓喜する。

だがこれは試合。誰もが笑みを浮かべるわけではない。嬉し涙を流すわけではない。

宿敵が湧く姿を目にして表情が固まってしまふ者達もいた。

「終わ、り？ 負けた？ また、負け……た？」

目の前で繰り広げられている事が、かつて二度味わった屈辱と一致する。

もう二度とこんな思いはしたくない。そう心に秘めて戦い続けたはずだった。だが、その思いが音もなく崩壊していく。

そして勇作は己の敗戦を——三度目の戦いに負けたということ、認めた。

「あ、ああ……！ ああああああ！」

「勇作……」

「ああああ！ あ、ああああ！ ああああああ！！」

胸の内から湧き上がる思いを耐えることなどできなかつた。

膝から崩れ落ちた勇作は腕をコートに何度も何度も叩きつけ、声を上げて嗚咽する。

誰もその行為を止めることはできない。

「……」

両目を瞑り、歯を軋ませ天を仰ぐ細谷。

「終わったか。知っていたけど、やっぱり、悔しいな」

神戸は苦笑し、肩を震わせる。感情を押さえ込んでいることがよくわかる。

「ちっ。本当にやめろって、言ってるのに。……こっちまで、馬鹿になっちまうだろ」

古谷はいつものように悪態をつく。しかし最後の言葉は細々としていて、目頭を押さえながら口にした。

「……ちつくしょう」

力なくうなだれ、金澤は敗北の苦味を噛み締めた。

「ぬうつ……！」

岡田は両の腕を足に叩きつけ怒りをあらわにする。

ベンチメンバーは呆然と大仁多の選手達が喜ぶ姿を目にしていた。

——盟和のIHへの夢が、終わりを告げた。

「……さあ！ 皆さん整列を！ その後でもう一度祝いましょう！」

藤代が声を張り上げ、指示を出す。

ベンチメンバーは一言声をかけてベンチに引き上げ、レギュラー五人はコート中央へゆつくりと歩いていく。

盟和の選手たちもそれに呼応して顔を上げ、整列へ向かった。

だが、勇作だけは立ち上がることができずにいた。

「行こう、勇作」

「あつ……う、あつ……」

「……行こう」

もはや声にもならない慟哭を上げながら、神戸の肩を借りて勇作も歩き出す。

両校の選手達が整列した。審判も十人が揃ったことを確認し、試合

終了を宣言する。

「119対87で、大仁多高校の勝ち！ 礼！」

『ありがとうございます!!』

再びコートは大歓声に包まれた。

「勇作……」

「……ああ」

小林が勇作の元へ歩み寄る。それに気づいた勇作は自分の足で歩いていき、二人は無言で抱擁した。

他の両校の選手たちも握手を交わし、健闘を讃えあう。

「やはり大本命、大仁多がIH出場ですね」

「ああ。盟和も前半は押していたのだがな。……後半の追い上げが凄まじい。特に最後の勝負時は」

観客席、高尾の呟きに反応した大坪は最後の大仁多のプレイを思い返し、ライバルの成長を感じ取っていた。

盟和の執念とも呼べるオフエンスを残酷なまでに粉碎した、大仁多のゾーンプレス。結局盟和は得点を決めることができないまま、大仁多の猛攻を受けることとなった。

相手の矛を打ち破る強靱な武器。これは全国でもきつと通用するだろう。

「さあ、あとは表彰式だ。少し時間がある。それまでは自由にしていぞいぞい」

「わかりました。真ちゃん、どうするよ?」

「そうだな。白瀧に声をかけようと思ったが、それはこの大会が終わってからも……」

構わない、そう続けようとして緑間の表情が固まった。

周りを確認しようとして首を振ったその先で彼が目にした女性。それは彼の注意を引くには十分すぎるものだった。

「はい。白ちゃん、じゃなかった。白瀧君のデータも取れました。はい。……はい、わかりました。失礼します」

内容は聞き取れないが誰かと連絡を取り合っていたのだろう。彼女は携帯電話を切り、視線に気づく事無く桃色の長髪を揺らして出口

へと向かっていく。

「いや、どうやらその前にもう一人。声をかけておくべき相手がいるようだ」

「やはり来ていたのか」、確信を抱き緑間は彼女の後姿を追った。

「……色々思うところがあるだろう。だがこの後には表彰式が控えている。」

まずは荷物の片付けだ。全員速やかに作業に移れ」

気落ちする選手達に向け、岡田は淡々と指示を出した。

彼らの気持ちはわかるがいつまでも愕然としているわけにもいかない。

それを理解している選手たちもすぐさま作業に移る。

大仁多のベンチも同様に行動を始めている。しかし橙乃は相手のベンチの兄・勇作を目にして、手が止まっていた。

「やはりお兄さんが気になりますか、橙乃さん」

「え？ あ、いえ。すみません」

「行っても良いんですよ」

諭すような口調の藤代に謝罪し、橙乃は片付けに戻る。

しかしその手を押さえて藤代は続けた。

「こちらは大丈夫です。行ってあげなさい。大仁多のマネージャーとしてではなく、一人の妹として。」

……表彰式が始まるまでに大仁多のマネージャーが揃っていればこちらは構いません」

声をかけたい、その思いがないわけではない。提案を受けて心が揺れる。

さらに東雲にも「後は任せておいて」と背中を押されて思わず頬が緩んだ。

「ありがとうございます」

頭を下げ、橙乃は兄の下へ向かった。

勇作は頭からタオルを被り黙々と手を動かしている。

「お兄ちゃん」

「ッ!？」

懐かしい響きが耳に入り、手荷物へ伸ばしていた手が止まった。

声の主へと視線を上げる。……今一番会いたくて、同時に会いたくなかった妹の姿があった。

何を言えば良いのか、どうやって妹の呼び声に応えれば良いのか。それさえわからず思考を巡らす。すると黙り込んでいる兄を見かねたのだろうか。

軽い衝撃が起こる。橙乃に抱きつかれたということに気づいたのは、数秒たってからだった。

「お疲れさま」

背中をさすりながら優しく呟いた。

たった一言だったが、その一言によって再び勇作の目から涙が溢れ出した。

勇作も彼女の体を抱き返す。泣いている姿を見られないように力を込めた。

「茜! ……茜!」

「うん、お兄ちゃん」

「ごめんな。ごめんな!」

「大丈夫、わかっているから」

「違う! 違うんだ!」

「……?」

小さい子供をあやすように橙乃は先を促した。

まさか彼女の中でいくつものピースが繋がるとは、思ってもいなかった。

『間もなく表彰式を行います。選手の皆さんは集合場所にお集まり下

さい』

「あ、いけない！」

長話をしてしまい、気がつけばもう表彰式が始まろうという時間になっていた。

兄と別れた橙乃は駆け足で大仁多の集合場所へと向かう。

しかし各校の選手達が一同に会し、中々目当ての場所へたどり着けない。

「……いた！ 橙乃！ こっちだ！」

「え？ あ。白七、瀧君」

「探したぞ。さあ、行こう」

すると彼女を探していたのだろう、白瀧に呼ばれた。

出かかった言葉を飲み込み、橙乃は彼に手を引かれて歩き出す。

試合の後で疲れている事を考えると申し訳ない気持ちで一杯になると同時に、複雑な気分になった。

「勇作さんとは、きちんと話せたのか？」

表情から何事かを察したのか白瀧が問いかける。

変な不安でも感じさせてしまったのだろうか。

「うん。前から気になっていたことも話せたし。多分もう大丈夫だよ」

「そっか。橙乃が言うんだからきつとそうなんだろうな」

「あの人はそういう人だし」と笑って続ける。

きつと白瀧も気にかけていてくれたのだろう。試合の後、誰よりも悲しみに暮れていたエースのことを。

同じ立場でもあるからこそ尚更だろうか。

「そういえば前から気になっていたことを話せたって言うていたけど。……インターバルの時、試合後に俺に話したいことがあるって言うていなかったか？」

「ああ、その話？」

キーワードを耳にして思い出したように問いかけられた質問。若干気恥ずかしそうに見えるのは気のせいではないはずだ。

橙乃は数秒考えた素振りをして、その後笑みを浮かべて問いに答えた。

「ごめん。前に言ってた話なんだけど。やっぱり、なんでもなかったよ」

「……は？」

予想外の答えを受け白瀧が硬直する。

「でも、この前かなり深刻そうに話していなかったか？」

「うん。けど解決しちやっただから、もう大丈夫」

「解決？」

「うん」

白瀧は理解できず首をかしげる。対照的に橙乃は満足そうに頷いた。

てつきり自分に関することだと考えていたため、白瀧も身構えていたものの彼女の笑みを見て、気が削がれるような思いになった。

どちらにせよ問題が解決したならばこれ以上自分が口を挟む必要はないだろう。

「そっか。まあ、橙乃がそう言うなら別に構わないよ」

そう一言述べてこの話題を終わらせようとした。

「……いいの？」

「いいって、なにが？」

「白瀧君にとっても大事な話かもしれないよ。私が意地悪しているだけかもしれないよ。それでも、聞かなくていいの？」

だが橙乃が問いかけた。

白瀧とて気になっていたはず。それなのに聞かないまま終わらせてもよいのかと。

その問いに彼は迷う事無く答えた。

「ああ。それならそれで構わない。橙乃が関することで、そして俺にとつて大事な話でも、橙乃が話したくないと感じたなら。」

俺よりも詳しく知っているんだろうし。……それに意地悪をするような理由なんてないだろ？ 少し抜けている一面もあるけれど、橙乃が大切な時に意地悪するような性格には思えない」

「……そうだね。理由なんてない、ね。白瀧君には敵わないな。あはははは」

「ああ。だからもしも話したくなったら話してくれ」

「わかった。……まあ、抜けているというのは白瀧君に言われたくないけど」

「なんで？」

そんなことないと言いたげな白瀧に、「なんででしょうね」と橙乃ははぐらかす様に口にした。少し表情が柔らかくなったように見える。

「おい、白瀧！」

「あ、悪い。小林さんに呼ばれているから、ちよつと先に行くぞ」

「う、うん」

抗議しようとする白瀧だったが、小林に呼ばれて大仁多の列の前方へと消えていく。

別れた橙乃は遠くなっていく背中を寂しげに見つめていた。

「たしかに意地悪する理由ならないけど。……言わない理由なら、あるんだよ。言いたくないって理由が」

その呟きは誰にも聞こえることなく空中に消えて行った。

『優勝、大仁多高校！』

チームの代表として主将の小林がトロフィーを、副主将の山本が賞状を受け取った。

拍手が湧く会場。再び全国へ挑む強者への激励の思いが込められていた。

続いて準優勝、盟和高校。三位に入賞した聖クスノキ高校と次々に表彰が行われていく。

そして団体の表彰が終わると、続いて個人の表彰へと移る。激戦が繰り広げられた今大会。その中でも特に活躍した選手達へ。

最優秀選手賞^M_V^P 小林圭介 大仁多高校（三年）

最優秀新人賞 白瀧要 大仁多高校（一年）

得点王 白瀧要 大仁多高校（一年）

ベスト5 小林圭介 大仁多高校（三年）

白瀧要 大仁多高校（一年）

橙乃勇作 盟和高校（三年）

ジャン・ディア・ムール^{J a n D i a M o u r} 聖クスノキ高校（三年）

楠ロビン 聖クスノキ高校（二年）

こうしてIH出場を賭けて代表校を決める栃木県大会は終わった。栃木のIH出場権は大仁多高校が8年連続で手にする。

多くの選手達の思いを背負い、戦いの舞台は——全国大会・IHへ。

表彰式の後、取材から解放されようやく自由になった白瀧。

彼はチームの下へ戻る前に、一人の選手へ声をかけた。

「楠先輩！」

「うん？ ……なんだ、IH出場校のエースが、俺に何のようだ？」

「少し、お時間をお借りしてもよろしいでしょうか？」

相手は準決勝で戦った聖クスノキのエース、楠。彼が苦戦を強いられた強敵である。

突然の誘いに「いいだろう」と許可を得ると二人でゆっくり話せるようにと部屋を出て廊下に出る。

楠は柱に背を預け、用件を伺った。

「試合が終わった今さら、俺に何か話すことでも？」

「はい。IHが始まる前にあなたに教えて欲しいことがあります」

前置きはもう必要ないだろう。そう判断すると簡潔に述べた。

「ジャンピングシュートのコツを教えて欲しい。お願いします」

突如頭を下げられ、しかもシュートのコツを教えて欲しいと言われ楠は困惑する。

「いきなり何を言っている。 ……わかっているのか。俺はお前の敵だぞ。」

それに加えて俺はお前に昨日負けた身だ。それなのに何故俺に聞

く？」

「たしかに試合では俺達が勝ちました」

「それならば……」

「しかしシュート技術ならば俺よりもあなたの方が上だからです。」

楠先輩がああ試合でどう感じたかはわかりませんが。俺はあなたのような選手と戦えたことを誇りに思っている。

その相手とプレイについて話を交わすことは、嬉しく思うことはあっても躊躇うことは何もない」

負けたばかりの敵に教えられるわけがない。そう楠は言うものの、白瀧は迷う事無く断言した。

普通ならば敵選手に聞けるようなことではない。しかも負かした相手を「自分よりも上である」と認めるなどプライドが許さないだろう。

だが白瀧はそのようなことを微塵も感じていない。それどころかこうして話ができることに嬉しささえ覚えているという。

「ッ……」

楠が右腕を柱に叩きつける。

「楠先輩？」

(腹が立つな。そんなことを考える自分に)

技術を磨くためならば敵に頭を下げることを躊躇しない。勝利への貪欲さが普通ではない。

その姿勢を目にして、『敵に教えるわけがない』などと考えていた自分が恥ずかしくなった。

疑問に思い名前を呼ぶ相手を制して楠は口を開いた。

「……プレイについて話を交わすことをお前は戸惑わないと言ったな」

「はい」

「ならば先に俺から一つ聞いてもいいか？」

「なんででしょうか？」

「怪我から復帰後。治療期間が長引いて体力が低下した際には、その選手はどういう練習をすればいいと思う？」

それは自分が抱えている課題。楠も怪我に泣いた選手。大会でもプレイに制限がつき、常時活躍することはできなかった。

だからこそ楠は問う。自分も前に進むために、少しでも意見は聞いておきたい。

意図を察したのか白瀧は淡々と思いつく限りの案を出していった。「その選手がどれだけの治療期間を過ごしたのか、また治療中にどのような生活をしていたのかわからないため正確なことは言えません」が。

まずは他の選手たちとは別メニューとなったとしても、軽いランニングや基礎トレ、そして実戦形式のメニューを取り組むべきかと」「チームメイトと同じペースでやるのは得策ではないと?」

「悪いとは言いません。ですが体力はどうしても必要なもの。できれば真つ先に取り戻したい。ならば下手に周囲とペースをあわせるべきではないかと。」

そして先ほど述べた軽いランニングを——できればアスファルトではなく地面が柔らかい場所で長時間やるのが適切です。その後インターバル練習などをいれ、慣れてきたら徐々にダッシュも加える。

同じように試合に出れなかったために失われた試合感を取り戻すこと、それが重要だと俺は考えます。それを繰り返し、徐々に調子を取り戻して来たというのならそこから……」

「いや、もういい」
「え?」

考えられる効率の良い練習法を言葉にしていく白瀧に、「それ以上は大丈夫だ」と楠はとめた。

「まさか本気で答えてくれるとは思わなかった。」

お前は敵であろうとも教わることを躊躇わないだけではない。たとえ敵であろうとも迷わずに教えることができるんだな」

試す意図も含んだ問いに、精一杯答えてくれた。その潔い性格を羨ましいとさえ感じた。

力を込めていた握りこぶしを解放し、楠は笑みを深くして続けた。「……ジャンピングシュートを習得したいならば、まずは体幹を鍛え

ることだ」

「ツー」

それは白瀧が欲していた彼の技術の習得方。

自分だけ相手から教わりながら教えないわけにはいかない。その意図が伝わったのか白瀧も余計な口は挟まずに、彼の言葉に耳を傾けた。

「ジャンピングシュートに求められるのはボディバランスだ。

だが一言でボディバランスと言っても、瞬発力と体幹が均衡していることが重要になる。」

今のお前は瞬発力が強すぎるために、かえって瞬発力が一人歩きしている。

だからこそまずは体幹を鍛えろ。それにより安定性が増せば、シュートの際に体が崩れることもなくなる」

「そうすることで空中での体勢は保てる、と。他にも何か？」

「後は肘と手首の連動性だな。要求されるタイミングと早さを獲得するため。」

この二つを自分のものにする事ができれば、ジャンピングシュートも極めることができるはずだ」

瞬発力に負けないだけの体幹の強さ。

そしてジャンプの勢いを殺さないための腕の動きの連動性。

この二つを鍛えるようにと楠はレクチャーする。

考えて動くタイプであるのか、言葉で伝わりやすく説明したおかげで理解できたのだろう。白瀧も満足げに頷いていた。

「ありがとうございます。IHを前にどうしても身につけたかったので、本当に助かりました」

「礼はいらないさ。先ほど俺もお前に教えてもらったんだから、今回の件は交換条件だ。俺にとっても得はあった」

「いいえ。あなたならば俺に聞かずとも答えを出せたでしょう。自分の力だけでも出来たはず。」

だが俺は違う。元々あなたに聞くためにここに来ました。だからこそ礼を言わせてください。……ありがとうございます」

再び白瀧は頭を下げた。

決して相手に嫌な思いをさせることはない。清々しささえ覚えるほどだった。

一体どうしてここまで我武者羅に強さを求め、相手を尊重することができるのか。その一点が楠にはわからなかった。

「本当に、お前と言う男がわからないな。敵だというのに、正直だというか真っ直ぐというか」

「……理解していただけなくても構いません」

中学時代の三年間、行動を共にした仲間達とでさえ、俺は最後までわかりあうことはできませんでしたから」

白瀧の表情が曇る。「わからない」という単語に過敏に反応した。

それは、中学時代のチームメイトと関係を修復することができず、お互いを理解することができなかったという悔しさからきているものだった。

「——『キセキの世代』、か」

「はい。全国に名を轟かせた本物の天才達です」

「お前が俺に技術を乞わなければならぬほどの敵なのか？」

「それでも勝てるかわかりません。あいつらの前では、どんな強さも霞んでしまいますから」

「それほどか……」

楠にとっては戦ったことはなく、噂でしか聞いたことがない遠い存在。

だが自分達に勝利を収めた白瀧の台詞を聞き、楠は警戒心を強くした。

彼らと対戦し、心が折れてバスケットを辞めるほどに追い詰められた者さえいるという。

果たしてそのような天才達に本当に勝てるというのだろうか。白瀧の強さを知っているとはいえ、楠はそのことが気がかりであった。

「本当に勝てると思うか？」

「勝てる、勝てないの話ではありません。勝つしかない」

もう負けるわけにはいかない。……俺は今度こそ約束を果たす」

だが不安を抱いて聞いた問いに、白瀧は激しい闘志で答えた。意志だけではない。まるでそれが自分の義務だと言わんばかりに。「そうか。たしかにその心意気は立派だ。」

しかし俺が言えることではないが、お前の考え方では……いずれ壊れるぞ」

背負いすぎれば碌なことにはならない。無理をすればその先には必ず限界が待っている。

かつて楠も『自分が戦わなければ』と体を酷使して故障してしまっ

た。

だからこそ同じ思いはしないで欲しいと白瀧に警告する。

「ご忠告、感謝します。ですが俺にはこういう戦い方しか出来ません」

「……ああ、そうだったな」

無駄な発言だったなと楠は心中で察した。

試合中でわかっていたことだった。自分と目の前に立つ相手は似

ていると。

プレイスタイルの話ではない。性格の話だ。

一度戦うと決めたならば誰にも譲らない。もはや執念とも呼べる

揺るがない覚悟の強さ。それを持っている。

ならばこれ以上は止めても何も意味をなさないだろう。

「ならば勝つてこい。結局俺達は戦いの中でしかお互いを本当に理解

することはできない」

「……ええ。わかっています」

「俺達の方まで頑張ってくれ。——応援しているぞ」

「はい、ありがとうございます—」

だからこそ彼の背中を後押しすることにした。

——見てみたいと思つた。果たして『キセキの世代』と呼ばれる者達がどれほどの強さであるというのか。そして白瀧がどのように立ち向かうのかを。

出来ることならば、県予選のように逆境も跳ね除けて欲しい。そう思いを込めて声援を送った。

白瀧から感謝の言葉を受けると、楠は手を振って彼とわかれた。お

互い収穫があり、幾分か気持ちがあがった。

出来ることならばもう一度戦いたい。叶うならば今度は同じチームで共に戦いたいと。

「あー！ いたいた！」

「ん？」

チームメイトの下へ戻ろうと足を進める白瀧。

だが突如背後から誰かの呼び声が聞こえた。

気のせいだろうか、聞き覚えがある声だった。自分に対するものなのかはつきりしないまま、白瀧は振り返る。

「久しぶりだね。白ちゃん！」

「まったく。一体どこで油を売っているのかと思えば。どうせならもつと騒いだりしたらどうなのだよ」

話しかけてくる二人を見て、驚愕のあまり思考が停止した。

「……え!? 緑間に……も、桃井さん!? なんで!? なんで二人が栃木に!」

中学時代同じチームで共に戦った緑間。そして帝光時代のマネージャーであり、同時に白瀧が焦がれている相手、桃井の姿があった。

ここにいるはずのない二人との再会。会うならばIHの会場で、と思っていたという理由があったから尚更だ。

「ふん。ただ偵察に来ていただけなのだよ。夏は無理だが、冬では大仁多と戦う可能性もあるのだからな」

「てことは試合の応援に来てくれたのか。嬉しいよ、ありがとう！」

「何故そうなるのだよ!? 偵察だと言っているだろう！」

「俺が勝つと思ったからこそ見に来たんだろう? じゃあ応援に来たのと殆ど同じじゃん」

「お前は どうしてそういう捉え方ができるのだよ……!」

「今日の決勝戦も大活躍だったよね。まずはIH出場おめでとう！」

「あ、ありがとうございます……」

いまいち話が噛み合わないものの、喜びが見え隠れしている緑間。純粹に祝いの言葉をかけてくれる桃井。

たった二人とはいえ、少しだけ昔に戻れたような感覚を覚え、白瀧

の笑みは絶えることがなかった。

「そうか。二人とも見に来てくれたのか。……なるほど。緑間、ちよつと耳を貸せ」

「む？ なんなのだよ？」

だが二人が来ているという事実からある結論に至り、白瀧の笑みが消えうせた。

桃井に「ちよつとだけ緑間と話があるので」と言っ、彼女に聞かえないように耳打ちした。

「まさかお前、今日の試合桃井さんと二人つきりで観戦してたのか？ 年上好みのタイプとか俺達に言いながらも実は桃井さんと……？」

「違う！ 桃井とはたまたま会場で会っただけだ！ 大体、今日は主将に言われて仕方がなく来ただけなのだよ！」

「あ、そうだったのか。じゃあ大丈夫か」

自分が知らぬ間に緑間と桃井の仲が進展していたのでは？ と考えたものの、緑間に否定されて自分の勘違いだったと思いつた。

元々桃井は緑間の好みのタイプではないし、本当に桃井とは別行動だったのだろう。

「そう言いつつ、誘われなくても偵察には来たんだろうな。こいつ素直じゃないし」とは口に出さず、心の中に秘めておくことにした。口にすればすぐ拗ねてしまうことは中学時代でわかっていることだ。

「……えつと、話は大丈夫そう？」

「ええ。俺の勘違いでした」

先ほどまでの緊迫した表情から一転、顔に笑みを貼り付けて桃井に話しかける。

その変わりっぷりに呆れつつ、やはりあの頃から変わっていないと緑間は感じていた。

「まあこれで俺もようやく全国を決めた。確か、他の高校も……」

「うん。赤司君、むっくん、きーちゃんの三人もIH出場を決めたみたい」

「ゆえに後は東京都代表、桐皇がどうなるかなのだよ。忌々しい話だ

がな」

「……誠凛、がいるからな」

栃木も大仁多が勝ち残ったことにより、IH出場校も続々決まっていく。

数々の強豪校が全国へ名乗りをあげる中、今年最もレベルが高いと噂される、東京都はまだ戦いが残っている。

——桐皇学園高校。青峰と桃井の二人が所属する高校。そして黒子と火神が加入した誠凛高校。

三校が出場できるとはいえ、まだどこが勝ち残ってもおかしくない状況である。

「うん。でも大丈夫だよ。たとえば誠凛がどう戦ったとしても、青峰君が全国で皆と会うことは確実だから」

それは負けるわけがないという自信に満ち満ちた台詞。

だが桃井だけではない。白瀧も緑間も彼女の言葉に頷いた。桐皇が負けるとは微塵も思っていなかった。

「そうですね。俺も今から楽しみにしています。……きつと今日取れたデータも無駄にならないと思いますよ」

もつとも白瀧もただ圧倒されるわけにはいかない。

桃井に「しっかりと対策してくださいね」と言外に語り、口角を上げた。

間違いなく研究されている。しかしそれも越えて見せようと。敵となってしまうった想い人に宣戦布告する。

「やつぱり、わかっちゃおう?」

「当たり前ですよ。桃井さんは敵となったならば誰が相手でも容赦しないでしょう。」

ですがそれで構わない。……それでも俺はあなたと交わした言葉を実現させるまで、負けない」

「……白瀧?」

険しくなった表情を見て、不審に思った緑間が問いかける。

当然だ。知っているのは当事者である白瀧と桃井だけ。

——これからも一緒にバスケットできるよね?

心に蘇るのは中学時代の記憶。白瀧が必ず果たしてみせると決めた誓い。

それを今年こそ成し遂げてみせると言い切った。

「……うん。ありがとう」

桃井もその時のことを覚えていたのだろう。一言礼を言っただけでニコリと笑みを浮かべた。

その二人のやり取りをみて、緑間は中学時代と何も変わっていないのだと感じた。

「なるほどな。やはりお前はあの頃のまま変わっていないようだな」

「どういう意味？」

「いや、以前黄瀬を見た時に思ったのだが。——多くのものは昔と人が変わるものだ。」

元に戻るパターンもあるようだが、しかしお前は変わっていないのだと思っただけなのだよ」

「そうか？ あんまりそういうことはわからないけど」

「……そうだろうな。お前は知らないだろうから」

何か言いたげな素振り。白瀧も彼が何かを伝えようとしていることとは感じ取れた。

（だが、今は言う時ではない、か）

しかし緑間は桃井に視線を向けると言おうとした言葉を飲み込んだ。

桃井がいる前では言いにくく、白瀧も『キセキの世代』の誰かと本当の意味で戦った後でなければ、きつと理解はできないだろう。

そう感じて緑間は『キセキの世代』全員が抱いている思いを言葉にすることはなかった。

「どうした？」

「いや、なんでもない。どうせ俺は全国へは出られない身だからな」

「……ひよつとして仲間はずれになって拗ねちゃった？」

「大丈夫だよミドリ。私達が頑張るからね」

「お土産何か欲しいのあるか？」

「違うのだよ！ 余計な気遣いはするな！」

勘違いも甚だしい。緑間は声を荒げて二人に抗議する。咄嗟に「キヤー。ミドリンがキレたー」と口を揃える姿には本当に怒りを覚えた。

「ふん。今のうちに騒ぐがいい。俺とてこのまま終わる気はないのだよ」

「わかってるよ。その時を楽しみにしているぜ」

「ああ。お前も精々I Hを勝ち上がるのだよ。」

……今日の試合を見てもよくわかった。お前も人事を尽くしているというのを。

絶対にやめるなよ。人事を尽くしたならば、きっと何かあるはずだ」

「……おう」

夏は終わった。だが緑間も冬に向けてすでに動き出している。きっと次戦うときは練習試合の時のようにはいかないだろう。

「人事を尽くして天命を待つ」を信条とする彼は白瀧にも努力を続けるようにと言いつけさせる。

自身が教えたスリーをはじめ、技術は問題ない。ならばそれを続ければ今度こそ天命も下るだろうと。

白瀧も深く頷いて彼の忠告を胸に刻んだ。

「桃井さんも、まずは確実にI H出場を！ 先に待っていますよ」

「うん。全国でまた会おうね。……そして、また一緒にバスケットしようね」

「ええ。……絶対です」

桃井とはもう一度約束を確かにした。

全国の舞台で思いに決着をつける。理想を現実に変えようと、白瀧の思いが一段と強くなった。

すると緑間が「そろそろ行つてやれ」と白瀧の後方を示した。

……白瀧の今のチームメイト、大仁多高校の選手達の姿があった。

「じゃあ二人とも。今度会えたらまたゆっくり話そう。……楽しみにしてる！」

かつてのチームメイトと別れ、白瀧は駆け出した。

「……遅いぞ、白瀧！」

「すみません。つい長話をしてしまいました」

小林に渴を入れられ、素直に謝罪する。

仕方がないやつだと愚痴を零すと、藤代に全員が揃ったことを報告した。

確認を終えると藤代は全員と向き合い、今年一番の笑みで選手達に告げた。

「皆さん今日はお疲れ様でした。これでようやく全国への挑戦を手にしたわけです。

決勝戦で勢いはついたでしょう。——この勢いのまま優勝まで突き進みますよ！」

『——おう!!』

全国の舞台でも暴れることを誓い、選手達は歩き出す。

——大仁多高校、IH出場決定。

——黒子のバスケ NG集——

「お兄ちゃん」

「ツ!?!」

懐かしい響きが耳に入り、手荷物へ伸ばしていた手が止まった。

声の主へと視線を上げる。……今一番会いたくて、同時に会いたくなかった妹の姿があった。

何を言えば良いのか、どうやって妹の呼び声に応えれば良いのか。それさえわからず思考を巡らす。すると黙り込んでいる兄を見かねたのだろうか。

軽い衝撃が起こる。橙乃に抱きつかれたということに気づいたのは、数秒たってからだった。

「お疲れさま」

背中をさすりながら優しく呟いた。

たった一言だったが、その一言によって再び勇作の目から涙が溢れ出した。

（ちよつ、え、何これ。夢？ 現実？ 頬つぺたつねって……痛い。夢じゃない。マジか!? まさか試合で頑張った俺に対する神様のご褒美ですか。神様、マジありがとうございます。一度も信じたことなかったけど。ひゃっはー！ 茜とこうして時間を共有するなんて何年ぶりだよ。最近は電話でしか声も聞いてなかったから滅茶苦茶心臓どきどきしているよ。やばいよ茜に聞こえてないかな？ ……あ、シャンプーの匂い。ちゃんと髪の手入れもしているんだな偉いぞ。……待て、むしろ俺の方がやばくないか。試合の後で汗だけだけど「汗臭い」とか思っていないかな。もし茜に「お兄ちゃんくさい。洗濯物一緒にしないでね」とか言われたら泣く自信あるぞ。大体……（以下略）

勇作はどこまでも通常運転だった。

第五十二話 押し寄せる危機

栃木県予選決勝戦の翌日。

激しい戦いによる疲労と行事の日程を考慮して、藤代は二日間にあたる休養日を設けた。月曜日は夕方にミーティングと大会の片付けを行い、火曜日は完全なオフとなる。

月曜日は学校の創立記念日でもあるため授業も休み。日常茶飯事である朝練もこの日ばかりはなく、選手達はいつもよりも長めの睡眠時間を確保することができる。

午前中をゆつくり過ごし、昼食も済ませてそれぞれの休みを満喫しているであろう午後一時。

大仁多のジャージを纏って大きな公園のランニングコースを駆け抜ける姿が二つあった。

「フツ、フツ、フツ」

一人はリズムを乱す事無く、一定のスピードで走っている。

そして彼の数メートル後方でもう一人が息も絶え絶えになりながら走っている。

「ハアツ、ハアツ……いーし、白瀧……ちよつと、タイム……いー」

膝に手をつきながら本田は前を走るチームメイト、白瀧に声をかけた。

呼び声に反応して白瀧は振り返り様子を見る。その場で膝上げ運動を続けながら彼に声を返した。

「なんだ。まだコースは残っているぞ本田」

「『まだ』じゃねえよ、この体力馬鹿。ちよつと、休憩……」

「……まったく仕方ないな。少し休憩としよう」

声の調子から彼の余裕のなさを感じ取り、二人は設置されているベンチへと移動する。

本田はすぐさま腰かけ水分を口に流し込む。白瀧も軽く体を伸ばして疲れをほぐした。

同じ距離を、コースを走っているはずなのに。ましてや相手は昨日の試合で自分よりも疲れているはずなのに。

それでもこれほど差が出るものなのかと、感心を通りすぎてはや
ため息しかでてこない。

「ああ、駄目だ。まさかここまでとはな」

「何を言っている。元々はお前が誘ってきたんだろ。トレーニング一
緒にしようって」

「普段からこんな風に走る込むなんて思うわけないだろ。マジで化け物
かよお前……」

冗談の意味も込めて本田が呟いた。

息も今だ整わず決して悪意を持っていたわけではない。

だがその言葉に対して白瀧は暗い笑みを浮かべて答えた。

「ああ。化け物だよ、俺は」

「あ？」

「ずっと敵や世間からはそう呼ばれ続けたから」

「ッ……！」

あれだけ乱れていたはずの呼吸が止まった。本田の表情が硬直し、
心臓の鼓動だけが耳に届く。

——化け物。力のありすぎる相手を、人は脅威と認識してそう呼
ぶ。自分とは違うのだと一線を引くということと同義である。

「わ」

「なーんてな」

「ワリイ。……って、あれ？」

気分を害してしまうような事を口にしたことを謝罪する本田。だ
が彼が言い切る前に白瀧は元の笑みを取り戻した。

「冗談だよ冗談。そんなの気にしないって。お前がちよつと疲れてい
ると思ったから気分を変えようとしただけだよ」

的外れだと言わんばかりに口角が上がる。先ほどの表情が嘘のよ
うだ。

まさか本当に演技であったというのか。本田の中で怒りに似た感
情が燃え上がった。

「相変わらずだなお前は……！ ああ、ありがとよ。おかげで疲れな
んて吹っ飛んだよ」

「お、やる気でしたか？　じゃあもう少し休んだらコースに戻るか」
白瀧の提案を受けて、「当たり前だ」と本田は士気を取り戻す。

だが本田は気づいていない。冗談というのは白瀧が周囲の声を気にしていないということであり、彼が『化け物』と呼ばれていることは否定していないということに。

「それにしても今日は一体どうしたんだ？　お前の方から誘ってくるとは思ってもいなかったぞ」

話題を変えようと思ったのか、思い出したように白瀧が本田に問いかけた。

トレーニングの誘い。普段二人は一緒に自主練をすることは少なく、本田が白瀧に対抗心を抱いている一面もあったため、この誘いは意外なものであった。

当然の疑問を尋ねられた本田は視線を逸らし、ゆっくりと話し始める。

「……決勝戦、出場して思い知ったんだよ。俺はまだまだ未熟だ。P Fというポジションである以上、技術は当然だけどそれ以上に身体能力がもつと必要だって」

「勇作さんの戦いか」

「ああ。あの人はシュート力もそうだけどかなり鍛えているんだってわかった。

だから負けられないって思った。ただそれだけだ」

激戦で得た経験は負けず嫌いの男の心を存分に刺激したようだ。

競り合いが多いポジションであるからこそ、もつと鍛えなければならぬ。

部活が休みであろうとも相手が誰であろうとも関係ない。とにかく体を動かしたかった。

今まで以上の向上心が感じ取れ、白瀧はチームメイトの背中を嬉しそうに眺めた。

「そう思えたなら何よりだ。これで落ち込むようだったらどうしようかと思ったよ」

「当たり前前だろ！　ここからIHが始まるんだ。落ち込んでなんてい

「られるか！」

「……そうだな。悩んでいる暇なんてなかった」

「また出場する機会はあるかもしれない。だから……」

「だからその時までにもっと強くなりたい」。それは偽りのない本田の本音だろう。

見据えている先は猛者の祭典、IH。レギュラーでない選手の出番は限られている。それでも出場できないと決まっているわけではない。

ならばその時後悔しないように本田は強くなろうと決心していた。

「頼もしい限りだ。それなら有言実行してもらおうぞ。明に松平さんと、PFはライバルがいて大変だろうがな」

「……まあ、ボチボチ」

「弱気になるな」

レギュラーに選ばれた光月。経験豊富な松平。内のライバルとの争いも厳しい。だが乗り越えて欲しい。大きな期待を彼に寄せ、白瀧は笑い声を立てた。

「——ら！ 一人——えよ！」

「うん？」

息も整い始め、もう一度走り出そうかと思った時。怒鳴り声のような響きが耳に伝わってきた。

「なんだ？ ……バスケットゴールの方か？」

「みたいだな。ってか、なんか一人、絡まれてね？」

声はバスケットゴールより聞こえてきた。白瀧も幾度か利用したことのある施設だった。

そこではおそらくゴールを利用していたのであろう、私服の一人の男が六人の集団に言い寄られている。

「利用時間は守る。だから今はハーフコートで我慢してくれ」

「はあ？ だから、俺達はスリーオンスリーをやるって言ってるの。ハーフコートじゃ狭いんだっての」

「一人でゴールを一個占領してんなよ」

「なんなら俺達の方に混ぜてやってもいいんだぜ？」

「……断る」

複数の男達を相手に、一步も譲る姿勢を見せない。

180センチ以上の背丈を持つであろう長身瘦躯の男だった。髪は短く整えられ、端正な顔立ちをしている。

腋に彼が使用していたバスケットボースを挟み持ち、相対する集団を鋭い眼光で睨み付ける。

すると痺れを切らしたのか、集団から二人の男が跳び出し、彼からボールを奪い取った。

「なっ!？」

「はい、ボールゲット！」

「返せ！」

「おおっと！ ホイ、パス！」

「ナイス！」

突然の奇襲に怒りを覚え、奪った相手に詰め寄る。しかしその前にボールを回されてしまい、奪い返すには至らない。

「せっかくコートにいてボールがあるんだから、バスケットで決めようじゃねえか！」

「……まーでも、6対1じゃあちよつと厳しいかな？」

「お前ら！」

「ホイよ！」

「オーライ！ いよいよしょ！」

多勢に無勢。ボールを取り替えそうと伸ばした腕の先をボールが通過。

ゴールから離れてしまい、ゴール下に陣取る相手にボールが渡った。パスをもらった男はゴールにギリギリまで近づき、シュートモーションに入る。

「ほら、止められるもんなら止めてみる！」

「——ああそうか。じゃあ遠慮なく！」

「あ？」

無理だろうとわかっていながら、嘲笑うように挑発した。

一人で立ち向かっている男はそれを眺めるしかない。

そして手からボールがリリースされたその瞬間、本田が全力で叩き落とした。

「なっ!?!」

「……なんだと?」

ボールを取られた男を含め、全員が突然の出来事に目を見開く。

その間に彼らの横を抜き差って白瀧がボールを確保した。

「たった一人を相手に集団で、か。……とてもではないが見て見ぬフリはできませんね」

「ああ!?! なんだテメエら! コイツの仲間か!?!」

「いや。ただの通りすがりだ」

「だけどこの場では、不利な方につかせてもらいます」

二人は並び立ち、相手を牽制する。面識はないものの、助太刀に来てくれたことを理解したのか、長身の男がこちらに歩み寄ってきた。

「お前達は、わざわざ助けに来てくれたのか? ……ありがたい。他人の俺の為に」

「別に。ただ見てられなかったただけなんで、気にされても困るだけです」

「同意です。……さて、お望みどおりバスケットで決めようじゃないですか。本来ならありえないが三対六でいいですよ」

頭を下げる相手に、二人は気にしないようにと取り繕った。

そして六人の男達に向き直る。とても少数とは思えないような自信を身にまとって。

「たった二人増えただけで、この六人を相手にするってか!?!」

「……良い度胸だ。すぐにぶっ潰す!」

気に食わない態度を目にして男達の闘志が煮えたぎった。

もしも彼らが敵のことを少しでも知っていたならば、結果は変わっていたかもしれない。彼らは知らなすぎた。

彼らの勢いは1分と持たずに消えうせてしまうというのに。

「なっ!？」

「嘘、どこに——!？」

マークについている、いやついていた二人の驚愕の声を背に、敵陣を切り裂く。

三対六と数という絶対的優位を活かし、相手は俺達全員にダブルチームというある意味当然と呼べる策を打ってきた。

本田にボール運びは無理であるし、もう一人の男性も実力がわからない為、俺がPGを務めている。

PGでダブルチームというのはさすがに抵抗がある。……だが遅い。勇作さん達との戦いの後ではもはや次元が違いすぎる。

何もフェイクをいれずともドリブルスピードだけで翻弄できた。

しかも他のメンバーもどうするべきか迷っているのかヘルプが遅い。

敵が足を踏み出した時にはすでに俺がミドルシュートを放っており、ボールがリングを射抜いていた。

これで二本目。優位であるはずなのに劣勢であることに焦りを抱いたのか、相手が先ほど抱いていた余裕は消えていた。

「ぐっ！ なんなんだよコイツら！ 強すぎる！」

そして冷静さを失った時ほど相手の手を読みやすいことはない。

「もらったー！」

「……うおっ!？」

パスコースを先読みし、ステイルを敢行する。

相手が多い以上密集地にボールを集められると困難。だからこそその前に奪い取る。

「速い！ 嘘だろ！」

「ちっ。こうなったらあいつに三人つけ！ 止めろ！」

攻守が入れ替わり、相手が方針を変更して俺にトリプルチームを仕掛けた。

たしかにこれなら幾分か突破するのは困難だが。

逆に突破されれば余計に失点しやすくなるということを意味している。

パスフェイクでマークを引つ掛け、その隙にクロスオーバーで振り切る。

焦って出てきた横にボールを通して本田へ。本田もターンアラウンドシュートでマークをかわし、得点する。

「よっし！」

「オツケー、調子いいじゃん」

「お前ほどじゃねえよ」

「これなら大丈夫そうだな。……あの人も」

動きにも洗練さが見られ、気持ちも吹っ切れたように感じる。

数で負けていようともこれなら負けはしないだろう。

……俺達だけじゃない。視線をもう一人の仲間へと向ける。

本田よりも背丈がある彼の動きはとても素人とは思えない。いや

むしろ、かなり鍛えこんでいるということが窺えた。

「さすがに助けられっぱなしってわけにはいかないな！」

「ぐっ……!?!」

目の前で彼のブロックが炸裂した。

スクリーンを受けて反応が遅れたはずなのに、高さが出ているブロック。

さらに宙に浮かんだボールを自ら確保し、相手の攻撃の芽を摘み取った。

「やりますね。バスケ歴長いんですか？」

「お前達ほどではないよ」

「そうは見えませんか」

謙遜する相手からボールを受け取り、ボールを運ぶ。

線は細いものの服を捲くった間から見える筋肉は相当なもの。おそらく着痩せするタイプだろう。

少なくともポジションはセンターではない。フォワード、あるいはシューティングガードだろう。あるいはその両方か。

……まあある程度スタイルがわかったならばそれでいい。

三人をドリブルでひきつけつつ、真横にチェストパス。45度の彼の元へ。

するとゆったりとドリブルをつき——何事もなかったかのようにドリブル突破。

「え……う？」

「しまったー！」

気づいたときにはもう手遅れ。ミドルシュートが決まり、得点。

俺や小林さんのようなドリブルではない。相手のタイミングを計り、虚をつくようなドリブル。

しかも動きが滑らかでタイミングを取ることができない。……何者だ？

「よっし、このまま行こうか！ 頼むぞ二人とも」

「ええ、勿論です」

いや考えるのは後だ。ディフェンスに戻り相手の出方を窺う。

多人数の優位を活かしたパス回しによりサイドから突破されてしまっても、本田のブロックが決まり、再びボールはこちらへ。

今度は俺から仕掛けて行った。三人のマークをドリブル突破。一気に中央へ侵入。そしてすぐにパスアウト。

「おおっ!?! 凄いなお前！」

男性はプレイを讃えつつ、素早くシュートモーションに。

スリーポイントラインの外からのシュートが綺麗にリングを射抜いた。

(ノータッチでスリーを決めておいて何を)

「ご謙遜を。そちらほどではありませんよ。ナイツシュ」

「いや本音だよ。……ありがとな」

裏表のない笑みを浮かべて男性は言った。

結果は言うまでもなく俺達の圧勝だった。

だが男性も今の試合で満足したのかコートを譲るとの事で、俺達は

コートを後にした。

「今日は本当に助かった。礼を言う」

「いや、俺達も良い準備運動になったんで」

「ええ。それに掴めたものもありました」

「そうか？ そう言ってもらえるとこちらも助かる」

嘘ではない。少なくとも俺にとってはPGのポジションで試合をできたというのが大きい。

（やはり実戦では考えることが多い。）

視野の広さ、ボールのキープ。練習だけでは把握しきれないものがあつた。となると場数を踏むことか）

ある程度の技術はあるとは思っている。となると足りないのは司令塔としての経験。

……それがわかれば練習することも自ずと決まってくる。

やはりやってみないとわからない。一対複数も経験できたし、俺にとって今日の試合は本当に有意義なものだった。

「それじゃ俺達はそろそろ行くか」

「ああ。……あなたはもうですか？」

「俺は待ち合わせがいる。だからもう少し時間を潰すとするさ」

「そうですか。ではこれで……」

「ああ、待ってくれ。せめて名前を聞かせてくれないか？」

夕方のミーティングもあるし、早めに戻っておいた方がよいだろう。

そう判断し足を翻そうと呼び止められた。たしかに助けてもらったのだから名前くらい知りたいのは当然だろう。

「あなたほどの実力者が今日のプレイを見てわからなかったならば、

名乗る程の者ではありません。また会えたならば、その時に」

しかし俺達は彼の問いに答える事無く、その場を後にした。

時間が経過し、バスケットボール部員は体育館に集合していた。

部員が揃った頃を見計らい、監督室から藤代監督が姿を現した。普段から笑みを浮かべている監督だが、いつもよりも笑みが深く見えるのは気のせいではないだろう。

「皆さん、疲れもある中でよく集まってくれました。」

事前に伝えたとおり今日明日の練習はお休みとします。今日は大会で使用した器具の片付けが終わったら、部活動は解散とします。

今後の日程は明後日プリントで配布します。

それでは改めて本当にお疲れ様でした！よくやってくれました。このまま戦い抜きましょう！」

『はー..』

引き締まった声の中、歓喜が十二分にこもっていた。

やはり皆全国を決めたことで喜びの比重が大きくなっている。

……ようやく舞台上に上がることができた。後はここからだ。

「さて、それではさっそく行動を開始してください、と言いたいのですが。」

その前に……皆さん、わかっていますよね？」

「は？ 監督は何のことを言っているんだ？」

「ひよっとしてこれのことですかね？」

監督の言葉の意図をつかめない勇が首をかしげている。

すると思いついた西村が手元に掴んでいるプリントへと視線を落とした。

それは前期学力テストの結果。……おそらく間違いないだろうな。

確認しようと視線を今一度藤代監督に向けると、やはり監督はニコニコと笑みを絶やさずに部員達を見つめている。『わかっていますよね』と表情でも語っていた。

「お前達、大丈夫だろうな？」

「大丈夫って何がですか？」

「まさか知らないとは言わないよな……」

まだ大仁多に慣れていない一年生集団を不安に思った中澤さんが声をかけてくる。

要領を得ない質問に明が問い返すと、佐々木さんが呆れたように答

えを示した。

「大仁多はとにかく試験の結果を重視している。

いくら授業態度がよくても試験の結果が悪いと……」

「え、どうなるんですか？」

想像しがたいことを思い、言葉を濁す。

西村がその先を促すとその先を続けたのは黒木さんだった。

「……夏休み、補習授業だ」

「え!？」

「……あちゃー」

「夏休みに!？」

「あれ? 俺は大丈夫か?」

淡々と残酷な事実だけを口にした。

危機感を覚えたのか西村、勇、明、本田の4人が冷や汗を浮かべ動揺し始めた。

……おい、ベンチ入りしている一年生五人もいるといのに、俺以外全員か。

「ちなみに試験結果が悪いって、どれくらいなんですか?」

「各科目40点以下だ。だから40点でも駄目だ」

「あつ」

「あつ」

「あつ」

「……よかった」

明が恐る恐る基準を問いかけて、そして明を含めた三人が固まった。
嫌な予感がするのは俺だけだろうか?

ベンチ入りメンバー以外は殆ど大丈夫だということがわかり、先に片付けを始めている。

橙乃や東雲さんも先に仕事を始めており、残ったのはベンチ入りしているメンバーだけとなった。

「さて、皆さんなら当然大丈夫ですよね？」

「……」

「まさか『補習のせいでIHに出場できません』なんて馬鹿みたいに馬鹿な発言をするような馬鹿は、ここにはいませんよね？」

「……」

怒っている。満面の笑みで怒っていらっしやる。

そう感じたのは俺だけではないだろう。横では西村たちが冷や汗を浮かべたままだ。

……どうして嫌な予感というものは的中してしまうのだろうか。

「まあさすがに他の方もいる中で結果を知られるのは嫌でしょう。

皆さん、目を瞑ってください。……まずは一年生からです。一つでも40点以下の科目がある方は手を上げてください」

「……ッ」

「……わかりました。手を下げてください」

見えないためにはつきりとはわからないが、横で誰かが手を上げたように感じる。

藤代監督も気落ちしているようだしやはり何人か駄目だったのだろう。

「では光月さん、神崎さん、西村さんの三人は後で残ってください。では続いて二年生です」

『目を瞑った意味はあるんですか!?!』

悪魔だ。悪魔がいる。

三人の怒りは当然のもでもあり、自業自得でもあった。

全員の結果を知ると、藤代監督は呆れを隠す事無く選手達に向けた。

「ひとまず、駄目だった方は明後日の追試までに何とかするように！

合宿棟の使用許可をもらったので、前日泊まって教えてもらいたいという方がいれば言ってください」

「はい！」

「是非ともお願いします！」

「むしろないと死にます！」

「はい、わかりました。とりあえず大丈夫だった人は皆さんと合流してください」

救いの手を差し伸べると、我先にと駆け込む部員達。

コートではあれだけ強さを発揮しているというのに、これだけ見ると凄惨な高校生に見える。

残ったメンバーを複雑な表情で眺めながら俺達はその場を後にした。

「……まさかここまでとはな」

小林さんがため息をつけて元凶を見つめた。

まあ仕方がないことだろう。主将として責任も大きいだろうし。

俺とてここが体育館でなければ怒りを撒き散らしていたかもしれない。

「テスト結果がここまで響くとは……！」

一年、神崎：英語、社会、理科。計3科目。

「面目ないです。また教えてもらわないと」

一年、西村：国語、英語、数学。計3科目。

「一人じゃ辛いもんね。でも追試があつて助かったよ」

一年、光月：数学、理科。計2科目

「仕方がない。こうなったら徹夜でもなんでもやってやらあ！」

二年、三浦：数学Ⅱ・B、物理。計2科目

「いやー、サボつてたツケが来ちまったか。これ追試も駄目だったら洒落になんねーな」

三年、山本：数学Ⅲ、生物。計2科目

「二科目ならなんとでもなる。補習で夏が終了なんて受け入れられるか！」

三年、松平：日本史。計1科目。

計六人の登録メンバーが追試決定とは。頭が痛い。

もし全員落ちようものなら大きな戦力ダウンだ。SGに至っては

誰も残らないのだから。

「まったく情けないやつらだな。一年に関しては五人もいて大丈夫だったの俺と白瀧だけじゃねえか」

「そう言ってお前もギリギリだったんだろ。部分点をもらって41点とか42点とかあつたつて知ってるぞ」

「うるせえ！ 受かればいいんだよ、受かれば！」

まあ本田の言うとおり結果を残せば良い話ではある。

しかしこのままでは今後も同じ問題が繰り返されそうな気がして怖い。何にせよまずは目の前の試練を乗り越えてもらわなければな。

「白瀧、いざという時は俺達も助けるが、お前もすっかりサポートしてやれ」

「はい。西村には以前も勉強教えたこともありましたし、何とかしてみせますよ」

頼むぞ、と佐々木さんは一声かけて倉庫へ向かった。

部活は休みなのだし、今日明日はチームメイトのサポートに徹するとしよう。

責任重大だがあいつらにやってもらわないと俺も困るからな。

「ああ、そうだ白瀧。悪いが橙乃の元に行ってくれないか？」

「別にいいですけど、何かありましたか？」

「近々IHに向けての合宿がある。それについて藤代監督がマネージャーに話しておくことがあると言ってるな。」

多分給湯室で洗い物をしているはずだ。ちよつと呼んで来てくれ「わかりました」

主将の依頼となれば従うまで。

俺は体育館を後にして給油室へ向かった。

「橙乃、いるか？」

給湯室の扉を空けて相手の名前を呼ぶ。すると呼び声に反応して橙乃は洗い物の水を止めて振り返り、柔らかな笑みを浮かべた。

「お疲れ様。わざわざここまで来てどうしたの？」

「俺は用事を頼まれただけ。藤代監督が合宿について話すことがあるんだって。今大丈夫かな？」

「監督が？ そう、わかった。すぐに行くね」

手にしたボトルの水分をふき取り、箱にしまう。

彼女もマネージャーの仕事は板についたのか慣れた手つきだった。

一通りの片づけを済ませると額の汗を拭ってこちらへ歩いてくる。

「あ、れ……？」

「なっ、橙乃!？」

だが突如目眩でもしたのだろうか。

足がもつれ、バランスを失った体は地面に吸い込まれていく。

倒れる寸前のところで彼女を抱き寄せるも、橙乃は力が抜けてし

まっついていて、支えなければすぐにまた倒れてしまいそうだった。

「おい、どうした!？」

「あ、ごめん。ちよつと、ふらついちゃって……」

「……へ？ 橙乃？ ちよつ、ええ!？」

橙乃はそう呟くとそのまま気を失ってしまった。

いや、この状況で倒れられては俺の頭が働いてくれないのだが。

意識がまだ覚醒せずぼんやりとする中、薄っすらと目を開く。

「んっ……」

橙乃が目にした先には白い天井が広がっていた。先ほどまでいたはずの給湯室とは別の場所。そう認識すると何故自分がここにいるのか。記憶を辿るものの中々思い出すことが出来ない。

「なんでだっけ?」

「目が覚めたか?」

「え?」

考えにふけていると真横より声がかかった。

振り返ると白瀧が椅子に腰掛けていた。橙乃の目覚めを確認する

と立ち上がりベッドに近づいていく。

「白瀧君。ここは……？」

「保健室だ。橙乃を呼びに行ったらいきなり倒れこんだから俺が運んだんだ」

「……そっか」

思い出した。そうだ、監督が用事があると言われ、向かおうとしたところ意識が反転してしまい、そのまま倒れこんでしまった。

「ありがとう」

「気にするな。先生は睡眠不足と言っていたよ。最近寝ていないのか？」

礼を言うと、白瀧は心配そうに顔を覗きこむ。

——睡眠不足。たしかに思い当たることがないわけではなかった。

「うん。昨日は……ちよつと体が火照っちゃって全然眠れなかった」

「あー、優勝して嬉しかったということね。頼むから紛らわしい表現はやめてくれ」

頬を紅潮させて細々と紡がれた声。白瀧は心の動揺を隠しつつ冷静にツツコミを入れて制した。

「今は東雲さんがマネージャーの仕事をしているから、少し休むといい。」

本当は同じ女性の東雲さんがここにいた方がいいんだろうけどな。さすがにマネージャーの仕事が俺が代わるよりも、東雲さんの方がわかってるから、そうして欲しいといわれたんだ」

「そうだったんだ。悪いことしちゃったな」

結果的に頼りになる先輩に仕事を押し付けてしまうこととなり、橙乃は複雑そうな表情を浮かべる。

自分を責めているのかもしれない。白瀧にはそう見え彼女を気遣うように話を続けた。

「あんまり無茶するなよ？ 昨日のこともあるだろうけど疲労がたまっていたってことは、普段詰め込みすぎってことだ」

「うん。わかってる。……でもそれを白瀧君に言われたくはないよ」

「何でだよ？」

「だって白瀧君だって試合中に無茶をしているじゃない。後のことは考えずに、プレーして。それこそ聖クスノキ戦のときとか」

思い出されるのは準決勝のこと。

白瀧が楠との戦いで無理をし、その結果体に大きな負担がかかってしまったということだ。

さすがにこれを完全に否定することはできず、白瀧は「ああ、あれか」と話しずらそうに頬をかいている。

「俺は別に無茶しているとは思っていないんだけどな。なんというか……試合中は集中して自分の体が限界だと感じないというか」

「……ああ、鈍感ってこと？ 自覚してたんだ」

「違う！ 何故納得する!?!」

心外だと白瀧が必死に否定する。

「納得するということは、普段俺のことを鈍感だと思っていたということか？」と白瀧は当然の考えに思い至った。

その反応を見て橙乃はため息を吐き適当にあしらった。

「とにかく目が覚めたのなら何よりだ。監督にも知らせてくるよ。ちよつと待っててくれ」

元々の用事を逃げ道にして白瀧が立ち上がった。

だが出口に向かおうと歩き出そうとすると、後ろから手をつかまれ行動に移すことができなかった。

「ん？ どうした?」

「女の子を一人つきりにするのはよくないと思うよ」

「いや、むしろ男女二人つきりという状況の方がよくないと思う」

「なんで?」

「……変な気が起きたりしたら困るだろ」

「大丈夫、信じてるから」

一刻も早くこの状況から解放されたい。そう願う白瀧は適当に理由を繕う。

しかし視線を逸らす白瀧とは対照的に、橙乃は真っ直ぐ見つめて断言した。

その姿勢に白瀧の考えも揺れ動き、

「橙乃、お前……」

「白瀧君はどうせそんなことをする勇気の欠片も持っていないって信じてるから」

「信じてるって言えば何を言っても許されると思うなよ？」

思いとどまろうとした考えが木端微塵に砕け散った。薄い笑みを浮かべ、こめかみをひくつかせる。

余談だが、後にこの話を聞いた東雲は『コートにおいては『帝光の原点』とまで称され恐れられている白瀧君も、女性の前ではただの男』と評した。

「……仕方ない」

一度は踏みとどまったものの、また去ろうとする白瀧を見て橙乃がある行動に出る。

着ているブラウスのボタンへと手を伸ばしそしてその一つをゆっくりと外していった。

「ちよっ、なぜ無言でブラウスのボタンを空けていく!？」

思いがけない行動が繰り広げられ、咄嗟に両手で目を覆い誘惑をふり払おうと努力する。

「見ないぞ俺は！ そんな誘惑に屈するような意志が弱い男じゃないぞ！」

なお、うつすらと目を開けてしまう程度の意志の強さのようである。

「ねえ、白瀧君」

そして白瀧をさらに追い詰めるように橙乃が誘惑する言葉を、

「今ここで私が悲鳴を上げたらどうなると思う？」

「誘惑じゃなくて脅迫だった!？」

——訂正。ただ追い詰めるだけの言葉を口にした。

まったく予想でしなかつた橙乃の思惑に、白瀧は啞然とする。

だが橙乃は白瀧に冷静さを取り戻す余裕さえ与えないように大きく息を吸い、言葉に変えて吐き出した。

「キヤ」

「うわああ！ 止めろおおおお！」

このままでは社会的に死んでしまう。そう判断し、白瀧は反射的に瞬発力を発揮する。

わずか一步で詰め寄ると橙乃の叫び声が響かないように口を押さえ、そして勢いあまってベッドに押し倒してしまった。

「茜ちゃん、何か悲鳴みたいなの聞こえたけどちやんと大人しく休んでた？ 栄養補給ができるもの、持ってきた……よ？」

そして最悪のタイミングで東雲が保健室の扉を開けてしまった。

「あ」

部屋全体の空気が凍り付く。

ベッドには体調を崩し、横になっていた橙乃。彼女の服のボタンがなぜかいくつか外れている。

そしてその彼女の口を押さえ込み、上に覆いかぶさるように白瀧がいた。

橙乃の口角がわずかに上がったように見えたのはきつと気のせいだろう。そうに違いない。

——黒子のバスケ NG集——

「橙乃、いるか？」

給湯室の扉を空けて相手の名前を呼ぶ。すると呼び声に反応して橙乃は洗い物の水を止めて振り返り、柔らかい笑みを浮かべた。

「お疲れ様。わざわざここまで来てどうしたの？」

「俺は用事を頼まれただけ。藤代監督が合宿について話すことがあるんだって。今大丈夫かな？」

「監督が？ そう、わかった。すぐに行くね」

手にしたボトルの水分をふき取り、箱にしまう。

彼女もマネージャーの仕事は板についたのか慣れた手つきだった。一通りの片づけを済ませると額の汗を拭ってこちらへ歩いてくる。

「あ、れ……?」

「なっ、橙乃!」

だが突如目眩でもしたのだろうか。

足がもつれ、バランスを失った体は地面に吸い込まれていく。

倒れる寸前のところで彼女を抱き寄せも――

「んんっ!」

「!!??」

伸ばした手が橙乃の胸に収まってしまった。

白瀧、ラッキースケベ発動。しかもこの後、体調が悪いために息が荒くなつた橙乃を見て、白瀧はそのまま30分間身動きができなくなってしまう。

第五十三話 学生の本分

外部の人間を招き入れる際に利用される応接室。

大仁多高校の応接室も客人を丁寧におもてなしができるようにと応対の家具が適切に配置されていた。

落ち着きのある雰囲気の中、応接室には三人の人間が対面していた。

「お久しぶりです。こうして顔を会わせるのは去年の冬以来でしょうか?」

真っ先に口を開いたのは大仁多の監督である藤代。

客に頭を下げて柔らかな笑みを浮かべた。

「そうだなあ。今年も何度か大仁多の試合を見に行つたが、お前とゆっくり話すのはそれ以来、となるか」

「これはこれは。あなたほどのお方に試合を見ていただけいただけは。身に余る光栄ですね」

「はっはっは。そのような緊張など微塵も感じていないくせになにを言う」

「そんなことありませんよ。私は小心者ですから、今も大学バスケット界を背負っているあなたを前にして気がすくんでいるほんです」

「また心にもないことを言いおつて。お前は相変わらずのようだな。……まあ安心したぞ」

心にもないことを、と藤代と対面している男は豪快に笑った。

冗談だとわかりつつ不快に思っていない素振りに、藤代は改めて頭を下げた。

意気投合している二人。会話を聞いている小林もどこかおかしそうに微笑した。

「ええおかげさまで。——しかしこの時期に椎名さんが訪問されるということは、小林さんのことについてでしょうか?」

「富ヶ谷大学の監督がわざわざいらつしやつたということで俺も少し戸惑っているところです」

二人の当然の意見に、男——富ヶ谷大学男子バスケット部監督、椎名悠

平は小さく息を零した。

「安心しろ。何も小林君のスカウトを取りやめたわけではない。彼の場合は去年から目にかけていたのだ。」

「いやむしろ今年の予選の戦いを見て、MVPを獲得したその健闘ぶりを聞いて、私は君をさらに再評価しているほどだ」

「……ありがとうございます」

「お前もな、藤代。監督としての技量を見せてもらった」

「椎名さんに褒められる日が来るとは。……いやー、感無量です」

「ふっ。その調子ならお前は全国でも大丈夫そうだな」

富ヶ谷大学バスケット部は強豪中の強豪だ。関東一部リーグや全日本でも優勝経験があり、高校で名を轟かせた選手が活躍している。

その大学を指揮する椎名から去年、小林はスカウトを受けた。富ヶ谷大学に所属していた藤代を経由して話を聞き、評価を受けたときには身が震えるほどだった。

そして今、再び実力を認めてもらった。小林はゆっくりと頭を下げ、表情を見られないようにと務めた。

「だからそんなに心配しなくてもいい。今日は一つ忠告に来ただけだ」

「忠告？ 何でしょうか？」

「これは君たちが全国に挑む前に私が言うべきことではないのかもしれないが……」

「どうぞ何なりと仰ってください」

椎名が言いよどむと藤代が「大丈夫です」と先を促した。

相変わらず笑みを絶やさないう彼を見て、椎名は観念して話を続けた。

「今年の冬、私が話したことは覚えているか？」

「はい。『君が経験した壁を——全国ベスト4を越えてみせろ。私の目の前でもう一度壁を乗り越えてみせろ』と」

「そうだ。私はこの前までずっとそう思っていた」

「今は違う、ということですか？」

鋭い藤代の指摘に椎名は頷いた。

昨年の夏、大仁多はベスト4を経験した。それでも椎名は小林ならまだいけると。その先へ達せると。期待を願いをよせて小林に目標を定めさせた。

「……東京都の予選を見て思い知らされたよ。『キセキの世代』の力を」

だが状況が変わった。

椎名は高校に入った『キセキの世代』のプレイを見て震え上がった。いた。

「あれほどの選手は大学でも現れるかどうかわかん。とてもではないが間違いなく高校レベルを超えている。

おそらくIHでも彼らが所属する高校が上位を占めるだろう。番狂わせは起こるまい」

椎名は彼らに最大限の評価を示し彼らの台頭を予言した。

しかしそれは同時に、

「つまり大仁多では『キセキの世代』を擁する高校には勝てない？
そう仰るわけですね」

大仁多が彼らには勝てないと言っているものだった。

「……結論を言えばそうなる。だからこそ君には結果を気にする事無く」

「お言葉ですが椎名監督。俺は今年、最強のチームを率いているつもりです。

その主将である俺が負ける可能性を考えるなどありえない。ゆえにお言葉の撤回は必要ありません」

言葉にわずかな怒りを込めて小林は椎名の意見を切り捨てた。

彼とて主将としての意地がある。そして去年目前にまで迫りつつも果たせなかった優勝を手にしたという思いがある。

だからこそ、首を縦に振ることなどできなかつた。

一切の迷いを抱かず紡がれた決意。思わず椎名の頬が緩んだ。

「そう、か。藤代、お前は良い選手を育てたな」

「私は何も。彼らが立派に育っただけです」

「羨ましいものだよ。本当に良いチームには良いPGがいるものだ。

今年の関東を見ても優秀なPGが溢れている。

神奈川、海常の笠松。栃木、大仁多の小林。

東京都では有力であった花宮、高尾の二人が敗退した今。新勢力として台頭している桐皇学園の今吉。

おそらくはこの三人が、今年の関東最強PGを競っていると云っていいだろう」

予選でも実力を見せ付けた有力PGの名前を挙げていく。

何度か耳にしたことのある選手達ばかり。小林と藤代も相槌を打ち、彼の意見に同意した。

「ならばこそ、君は全国の舞台で自分が一番だと示してくれ。関東、いや日本のPGだと」

「……望むところです！」

小林が大きく頷き、意志を露にする。元よりそのつもりだった。だから負けるわけにはいかない。

「それに椎名監督。大仁多は『キセキの世代』には勝てないと、先ほどは仰っていましたか。」

大仁多にはエースがいます。『キセキの世代』を倒すために今も戦っている、強いエースが」

「……白瀧、だったか」

「はい。彼ならばきつと成し遂げてくれる。俺も共に、最後まで戦い抜いてみせます」

たとえ相手が『キセキの世代』であろうとも。

大仁多には彼らに対して誰よりも勝ちたいと強く願うエースがいる。彼と共に最後まで勝ち抜くのだと小林は言った。

信頼を感じ取れた椎名は「そうか」と一言口にして頷いた。

その後三人は他愛もない会話をして親交を深めていく。

だがこの時彼らは知らなかった。その大仁多のエースが、今まさに危機に陥っているということに。

沈黙がしばし広がり、ようやく状況を把握しようと麻痺した脳みそを再起動する。

1秒にも満たない思考の結果俺は一つの結論にたどり着いた。

二人しかいない密室の保健室。体調を崩した女の子。ブラウスの外されたボタン。隙間から見える健康的な——違う、今はその情報は知らない。

そして最後に、仰向けで寝ている女の子の上にまたがる形で彼女の口元を押さえつける男。

(どこからどう見ようとも、誰がどう考えようとも○○○現場です。本当にありがとうございます！)

東雲さんの冷めた笑顔が俺の考えを肯定していた。

「白瀧君……」

「は、はい！ なんてでしょうか!?!」

地を這うような低い声は、およそ彼女から発せられたとは思えないものだった。

普段からはとても想像できない響きに、俺は身動きできないまま相槌を打つしかなかった。

「私、茜ちゃんの面倒を見ていてとは言ったけど、獣になれとは言っていないはずだけど?」

「誤解です! これには山よりも高く海よりも深い事情が!!」

「……とにかく茜ちゃんを解放してあげることが先じゃない?」

「へ? ……うおおお!!」

鍛えておいた瞬発力で文字通りその場から飛びのく。

危なかった。言われなければ自分の体勢のことを度外視したまま弁明を続けてしまうとところだった。

俺がベッドから距離を取り、橙乃が起き上がったことを見届けてから東雲さんは改めて聞いたのだ。

「それで? 一体どうしてあんな体勢になっていたのか説明してくれる?」

「違うんですよ東雲さん。これには深いわけが……」

「白瀧君には聞いていないよ」

一言で切り捨てられ、東雲さんは橙乃へ視線を向けた。

もう最悪だ。俺の信頼度が地に堕ちている。数値で言うなら100くらい堕ちている気がする。

ねえ何で？俺はただマネージャーが体調を崩したから保健室に運んで介護していただけだというのに。それなのにどうして今こんな目にあっているの？

「一応理由があつたなら聞いておきたいけど……」

「理由ですか。……はい、あります」

おい、橙乃。頼むから変なことば言わないよ。

期待の意志を込めて視線を送ると気持ち伝わったのか橙乃がコクリと頷く。

さすがにこの状況をわかっているのだろう。ならば俺は口を挟まずに静観するべきだ。

「白瀧君も男の子だったということですよ（異性に叫ばれたら勘違いされるから）」

「フォローする気がないなら黙ってる！」

気がついたら脊髄反射で叫んでいた。

うん、駄目だこの子。今この場面でその発言は場の空気を悪くする危険信号以外の何者でもなかった。

「……で、君も言い分があるなら一応聞くけど？」

もはや東雲さんは名前を呼んでさえくれなかった。

ごみ虫を見るような視線で俺を射抜く。やめてください、心が折れる。

（だがどうする？ 一体何と言えばこの絶望的状况から脱することが出来る!?）

前門の東雲、後門の橙乃。もはや逃げ道はなく援軍もなし。敵援軍ならありえるだろうけど。

例えるなら俺一人で「キセキの世代」五人と黒子を相手にするよなものだ。……勝てるわけない。ハードモードも真っ青の鬼畜展開である。

いや、諦めるのはまだ早い。とにかく今すぐに何か言い訳を考えな

いと！

『看病しようとしたら転んでこの体勢になったんです！』

どこのトラブルの主人公だ。

『汗をかいているだろうと思って体を拭いてあげようと思ったんです！』

何で前から拭こうとするのか。口を塞ぐ意味もない。

『むしろはだけていたので直そうと思ったんです！』

橙乃起きてるから俺がやる必要がまったくない。そして口を塞ぐ意味もない。

『フハハハハ。そうだ、僕が獣だ』

こいつは殺さないと駄目だ。

……あれ？ ひよつとして俺、詰んでる？

下手に嘘の理由を言っても通じるところかさらなる疑惑が向けられる気がした。

というか絶対にいつかボロが出る。そう言い切れる。

今まで俺が女性に対して嘘を貫き通せたことが一度でもあったか？ いやない！ 前提としてそのような大嘘をついた記憶がないため考えそのものが間違っている！

ならば、俺が今ここで言うべきは――！

「そう！ 橙乃が悲鳴を上げようとしたから、口を塞ごうと思ったんです！」

ありのままを口にするべきこと。そう判断し、胸を張って答えた。

「……………へえ」

あれ？ 東雲さんの視線が先ほどよりも一段と厳しい。まるで性犯罪を犯した社会の最底辺の人間を見下しているような目をしている。

まさかフォロ―失敗したのだろうか？ 何故だ？ 俺は間違ったことは言っていないはず。ありのままの出来事を証言したはずなのに。

「白瀧君、さすがにその発言はどうかと思うよ」

(まさかの橙乃に諭された!?)

「むしろどうして大丈夫だと思ったの？」

「……何を言ってもおんなじやおんなじや思うて」

「ネタはいいから」

必死の叫びも橙乃によつて残酷なまでに粉碎された。

ねえ、誰のせいで今こんな状況になっていると思っているの？

恨めしい視線を送っていると、東雲さんがスマホを取り出し、三回番号をプッシュして電話をかけ始めた。

「あの、東雲さん。一体どこに電話を？」

「あ、もしもし。警察ですか？ 学校に変質者が現れました。至急、現場に来て助けてください」

「ちよつと、ちよつと待ってください。聞いてください東雲さん！

その電話は一体なんですか!? 変質者つて誰のことですか!?」

「……………」

俺の問いには答えることなく、無言で俺をじつと見つめた。

後ろを振り返る。……誰もいない。東雲さんは俺を見ている。つまり、

「見ている対象は俺！ 射抜いているのは疑惑の眼差し!!」

ささようなら、俺の人生。

「白瀧君。私はね、君のことを信じていたんだよ」

「ならばその信頼を最後まで貫いて欲しかった！」

寂しげに呟いたその言葉は最後通告、いや、別れの一言のようだった。

「ちよつ、タイム！ タイムアウトを要求します！ マジで、マジで待ってください！ 全て俺が悪かったです！ なんでもしますから許してください！ お願いします！」

意地やプライドを全てかなぐり捨て、地面に頭を擦り付け土下座をして懇願する。

何も悪いことをしたつもりはないけど誠意を込めて謝罪し続けた。

「うん、いいよ」

すると先ほどまでの空気が嘘のように、緩い許しの声が聞こえた。

「……………え？」

頭を上げ、言葉の主である橙乃を見ると満面の笑みを浮かべている。

さらに隣の東雲さんを見ると電話を切り、冷ややかな視線が嘘だったかのように、笑っていた。

「……え？」

「なんでもするって言ったよね？」

「え？ いや、あの、橙乃さん？」

「なんでもするって言ったよね？」

「それは言葉のあやであって。というかさつきまでのほまさか」

「ナンデモスルツテイツタヨネ？」

「はい！ 言いました！ 男に二言はありません！」

こんなにも女性の笑みを怖いと思ったことはなかった。笑みが深くなる毎に恐怖が増していく。

俺はただ彼女の問いかけを肯定するしかなかった。

「じゃあいいよ。許してあげる」

よくはわからないが、許しを得られてホッと胸を撫で下ろした。

……あれ？ というか俺は橙乃に何を許されたんだっけ？

まあ解決したならいいか。しかしそれより気になるのは……

「あの、東雲さん。先ほどの電話は大丈夫なんですか？」

恐る恐る問いかける。警察にスマホから電話をかける。とてもではないが普通はすることではないし、下手すれば特定されるのでは。

「大丈夫って何が？」

「いや、だってさつき警察に通報を」

「時報にかけていただけだよ？」

そっかー。時報も117の3桁だったなー。

日が明けて昼休み。昼食を取りながら俺は昨日の出来事を皆にそのまま話した。

「……え？ 何、昨日の夜そんなことあったの？」

(だからあれほど言ったのに……!!)

勇の半信半疑の問いかけに、俺はゆっくりと頷く。

横では昼ごはんのカレーライスの皿にスプーンを刺し付け、悔しがるような素振りを見せる西村がいる。

うん。俺でも未だに本当の出来事だったとは信じられません。

「要は、あれだね。尻に敷かれるタイプだね」

「言わないで！俺今も結構ショック受けているから！」

明の一言は弱っている心をへし折るには十分だった。

ご飯を口に運ぶがいつもよりもしよっぱい気がする。熱いのだろうか、瞳から汗が流れ始めた。

「で？なんでもするって言わされて、お前何することになったんだ？」

珍しく同じテーブルで食事を取っている本田が皆が抱いているであろう疑問を聞いてくる。

……やっぱり気になるよな。俺だって逆の立場だったならばそうしただろう。

「まだ内容はわからないが、今日の夜手伝って欲しいと言われた」

「手伝うって何を？」

「それはまだ聞いていない。ただ、準備ができたら呼びに来るとか」

内容はまだわからない。だが嫌な予感がする。そして俺の場合、嫌な予感ばかりがよく当たる。

何が待ち受けても対応できるように覚悟しておいた方がよいだろう。

覚悟を決め、味噌汁を口に流し込む。……ああ、平和だ。食事だけが俺の平和だ。出来ることならば食事だけは裏切らないでくれ。

「白瀧さん、なんなら俺もついて行きましようか？」

「馬鹿。お前は、いやお前達は今日追試の勉強があるだろう。忘れたのか？」

「……すみません。忘れていました」

大事な出来事を忘れている西村にはため息を一つ。

こいつの心遣いはありがたいが、今は追試の方が重要だ。

下手すればこれによって全国にいけるかどうか決まってしまう。なんとかしてやらんとな。

「あれ？ でもそうするとひよつとして、お前が今日俺達に勉強を教えることは無理なのか？」

「え!? そういうことなんですか!? ちょっと、俺はどうすればいいんですか!?!」

「僕も心配なんだけど。本田一人じゃあ辛いだろうし……」
「うるせえ！ 事実なだけに否定できないだろうが！」

信じたくない結論に至り動揺する男三名。イラつくもの一名。

まあテストが無理だったのに自力で追試というのは厳しいだろうな。

「安心しろ。さつきも言ったが呼ばれるまでは俺は自由だ。その間に教えるよ。」

後は他の先輩達もサポートしてくれるだろうし、佐々木さんとかには言っておいたから頼んでくれ」

「ナイス！」

「これで勝てる！」

「……せめて勉強してから言え」

すでに追試を乗り切った気である勇と西村に淡々と告げて昼食を終えた。

授業を終えて、学生は放課後を迎える。

いつもコートで戦っていたバスケット部員は戦いの場を自習室に移し、ボールを鉛筆に代えて戦いへと挑んでいた。

「いやー、悪いな。副主将なのにこんなことになっちゃって」

「文句を言っている暇があったら手を動かせ！ そして計算間違っているぞー！」

「うわっ。マジかよ」

苦々しい山本さんの愚痴を小林さんが切り捨て、間違いを指摘す

る。

悪態をつきつつもペースは良いようだ。小林さんいわく、「部活が忙しかっただけで追試は問題ないだろう」とのことらしい。

教えているのも小林さんだし、きつと大丈夫だと信じて視線を別のグループへ向ける。

「……大体覚えているはずだがな。テストは何が駄目だったんだ？」

「似たような名前のやつが多すぎて本番でわけわからなくなった」

「名前だけ覚えては駄目だぞ。人物のしたことや年代もセットで、関連付けて覚えなないと」

松平さんは佐々木さんがマンツーマンで教えている。

日本史一科目だけに加えて佐々木さんも成績優秀なのでこの組も大丈夫だろう。

「……手が止まっている。問題を見て意味を理解し、それに応じて公式を使いわけなければ意味がないぞ」

「うるせえ！ わかっているんだよ！ くそ。勉強でも負けるつてのがマジムカつく」

「落ち着け。まずは冷静に何を聞かれているのかを見ろ。この問題だと……」

二年生組では三浦さんに対して中澤さん・黒木さんのダブルチームで教育中。

こちらも二人が優秀なことだし十分仕上げることが可能だろう。となると問題なのは……

「さて、ある程度見直しは出来たか？」

ノートをじつと見つめている三人への呼びかけ。

教える前にテスト範囲内の追試にも出ると予測される範囲を重点的に確認させていた。いきなり問題を解かせても頭に入らないだろうと考えてのことだった。

「まあ、一応」

「多分、なんとか」

「内容は頭に入ったと思う」

「……そうか。ならばじめていこう」

若干気になる三人の返事だが、時間が限られている以上のんびりとしてられない。

三人がノートを確認している間に目を通していたテストの内容を今一度確認する。

当然のことながら科目だけでなく問題点も皆違う。そうすると対応策も自ずと個人によつて差ができる、か。

「まず西村、お前はとにかく基礎を固めるぞ。出来てないわけではないが、密度がうすい。」

テストでも勿体無い点の落とし方をしている。基礎問題を落とさなければ追試は大丈夫なはずだ。

お前の場合はやればできるのだから、しっかり頭に叩き込んでいこう」

「……はい。お願いします」

「次、明は……お前は知識はあるんだよな。ただ本番になると弱いというか凡ミスが多いように見える。自分ではどう考えている？」

「まあ、やっぱり時間の問題とかもあって見直しはできていなかったよ」

「自覚があるなら大丈夫だ。お前はひたすら問題演習を繰り返して復習しよう。小林さんたちに資料をもらったから、この問題集を時間も測つてやっていけ。本田、お前は明について様子を見てくれ」

「おう、それくらいなら任せておけ」
「よろしく頼むよ」

「最後、勇。社会はあと一問解ければ合格だったし、間違つた範囲をしっかりと復習すれば大丈夫だろう。英語は西村と一緒に見るとして、問題は理科か？ 幸いにも範囲は広くないからここに専念しよう」
「助かる。徹底的に頭に詰め込んでくれ」

大まかな方針を伝えると、明は本田と共に離れた机で問題演習を開始。

西村と勇も俺が主導となつて解説をはじめていく。

……どうかこのような形で挑戦が終わらないでくれと、そう願ひながら。

各テーブルでの指導が始まってはや数時間が経過。時計の短針は7時を指している。

「西村、本文をよく読め！ 似たような意味の言葉が出てきるだろ。そういうのは見逃さずに丸をつけておけと言ったはずだ」

「あ、すみません！」

「それと直接的な表現だけでなく抽象的な表現も重要だ。こういうところで人物の気持ちが読み取れることもある」

「白瀧さんは現代の女性の気持ちはわからないのにどうして古文に出てくる女性の気持ちはわかるんですか？」

「教えるの辞めてもいいんだぞ？」

「要、これでどうだ？」

「出来たのか？ えーっと。……また幾つか一般動詞に3単現のsをつけるの忘れてるぞ。それと所有格の表をもう一度確認しておけ」「マジか!? またか！」

「反復して覚えていくことが重要だ。忘れるなよ」

「まだ完全には仕上がってはいない。間違いもあるし考え方を忘れてしまうものもある。」

「だが形にはなっている。おそらくこの調子なら4割は越せるだろう。明も徐々に正答率が上がってきたと本田から報告を受けた。明日までには大丈夫なはずだ。」

「どうだ、そっちの調子は？」

「お疲れ様です小林さん。……ボチボチ、と言ったところでしようか。そちらはどうですか？」

「一区切りついたのでらうか、小林さんが様子を見にきた。」

「まだ確実ではないため言葉を濁し、山本さんの出来を窺った。」

「山本は大丈夫そうだ。たしかにあいつも勉強は得意というわけではないが、時間さえかければ理解できるやつだからな」

「順調というわけですね。良かったです。山本さんは追試メンバーの」

中でも重要な選手ですから」

「まったく。追試があると知ったときには俺でさえ焦った」

レギュラーであり副主将でもある山本さんの存在は非常に大きなもの。いなければ戦力の低下に留まらずチームの士気にも影響が出ることだろう。

良い知らせを聞くことができ安堵の吐息をもらした。

「やっぱり勉強ができる人に教えてもらおうと違う、ってことですか」

「そういえば小林さん達の順位はどうだったんですか？」

「俺か？俺は320人中39位。後はたしか佐々木が36位、東雲が58位だったか。2年は中澤が84位、黒木が101位。この辺りが成績上位者だろうな」

「……皆さんちゃんと半分より上にいるんですね」

予想以上の答えに質問をした西村と勇の頬が引き攣っている。

部活をやっているとはいえきちんと勉強もすれば上位も夢ではない、ということを知ってくれば嬉しいのだけだな。

「ちなみに本田と要は？」

「たしかあいつは、247位と言っていたかな？」

「あれ？追試はないけど意外と低い」

「というか俺と同じくらいだぞ」

「殆どが合格ギリギリの点数だったからな」

追試がないといっても順位が追試ある生徒よりも上位とは限らない。平均点が低ければ当然順位も下がる。

むしろ一年の中では明が俺の次に順位がよい。……これは後期も大変だ。

「それで要は？」

「俺？俺は27位だったよ」

「……お前マジで言ってるの？」

「白瀧さん相変わらずですね」

呆れる勇と感心する西村。対照的な反応だった。

……俺としてはトップ10入りを目標としているからむしろ悔しい思いだ。

帝光時代も30〜50位の位置で成績が固定されていたから10位以内の壁を乗り越えたかったけど、次の機会に持ち越すでしょう。「お前もやるな。安心したよ。お前と橙乃がいれば、お前達の代は安心できそうだな」

「橙乃？ そう言えば俺は彼女の成績は知りませんでしたけど、小林さんは知っているんですか？」

この場にはいない実力が未知数のマネージャー。頭はよさそうだと思っていたが、果たしてどれくらいなのだろうか。

「ああ。3位と言っていたよ」

「そうですか、3位ですか。さすが……………は？」

「さ、3位!？」

「なにそれ怖い」

全員の表情が凍り付く。10位の壁はおろか、五指に入るほどの学力という衝撃の真実を知って。

「ということはバスケ部でぶつちぎりじゃないですか！ 要の順位が霞んでしまうほどつすよ！」

「ああ。俺も『まさか』と思つたよ。だが本当だ。間違つた部分もケアレスミスのようにだし、きつとこの成績を維持するだろうな」

「……………」

「二人とも、もうそこら辺に！ 白瀧さんが気落ちしています！」

二人の言葉が胸に深々と突き刺さつた。西村だけは察してくれたのか止めに入ってくれた。…………俺、馬鹿じゃないのに。

「失礼します。白瀧君いるかしら？」

「うん？ 葵、どうした？」

「あ、圭介君。ちよつと白瀧君に用事があるんだけど、借りていっても大丈夫？」

今まで顔を見せていなかった東雲さんが教室に入ってきた。

小林さんは今一わかっていない様子だが目的はどうやら俺のようだ。おそらくは昨夜話していたことだろう。

「俺は大丈夫ですよ。小林さん、もし時間があるようでしたら二人の勉強を見てやってください」

「そうか？ わかった、後は任せておけ」

小林さんに勉強のことを引き継ぎ、俺は東雲さんと共に教室を後にした。

「それで東雲さん。一体俺は何をすればよいのでしょうか？」

「ついてくればすぐにわかるよ」

「一体どこに？」

まだ何もわかっていない俺の質問に東雲さんは振り返ることなく歩きながら、ただ一言簡潔に答えを言った。

「――調理室よ」

――黒子のバスケ NG集――

「さて、ある程度見直しは出来たか？」

ノートをじっと見つめている三人への呼びかけ。

教える前にテスト範囲内の追試にも出ると予測される範囲を重点的に確認させていた。いきなり問題を解かせても頭に入らないだろうと考えるの事だった。

「まあ、一応」

「多分、なんとか」

「内容は頭に入ったと思う」

「……そうか。ならばじめていこう」

若干気になる三人の返事だが、時間が限られている以上のんびりとしていられない。

三人がノートを確認している間に目を通していたテストの内容を今一度確認する。

神崎：英語0点、社会0点、理科0点

「もうどうすれば良いのか、俺にはわからない……」

「ちよっ、どうしたんだ要!？」

「いきなり泣き始めた!？」
もしもこんな悲惨な結果だったら誰でもこうなる。

第五十四話 意地と信念

東雲さんに連れられ調理室に入ると、そこにはエプロン姿の橙乃の姿がいた。

すでに料理をはじめていたようだ。鍋の中身を確認しながらさいばしで中身を混ぜている。

「お疲れ様」

「あ、東雲さん。白瀧君を連れてきたんですか」

「ああ。お疲れ様」

東雲さんに声をかけられようやく俺達が入ってきたことに気づく橙乃。それだけ集中していたようだ。

格好はとても似合っている。……桃井さんもそうだったが、人は見かけによらないということなのか？ 勿論、悪い意味で。

「料理をしているみたいだけど、一体何故？ 俺を呼んだ理由もわからないんですが」

当然の疑問を二人に投げかける。

部活もない平日のこの時間に二人が料理を作る理由も俺が必要な理由も見当がつかなかった。

すると首をかしげている素振りがおかしかったのか、二人の口元がゆるんだ。

「今日はあくまで練習、と認識してもらえばオツケーだよ」

「練習？」

「そう。夏休みのIHが始まる前に学校に泊りがけの強化合宿があるのだけど、その時は自炊が基本なの。だからそれに向けて、ね」

「それと今日は皆も勉強頑張っているから、私達も皆の手伝いをしようと思つて」

「それで夜食を作ろうつて二人で話していたの」

「……ああ、それで俺も夜食作りの手伝いってことですか」

ようやく合点がいった。

たしかに通常IHに出場する高校は試合勘を衰えさせないためにも大会に出たり合宿を行ったりするのが常だ。大仁多も例外ではな

い。

だからこそ二人はその時の為に練習をしていた。橙乃は料理があまり得意ではないようだし当然の行動だ。そういうことならば俺も喜んで参加しよう。

「ううん。白瀧君を呼んだのは別の理由よ」

「へ？ 別って、じゃあ一体何のために？」

だが俺の呟きは東雲さんに否定された。他に考えが思いつかず、それでは何故なのかと問い返した。

「私の料理を味見して、料理を教えてほしい」

「……え？」

橙乃の頼みで思考は停止した。

『味見』。本来なら喜んで引き受けそうな内容だが、なぜか冷や汗が止まらない。

「前から茜ちゃんに教えてはいたんだけどね。でも私だけでは厳しいから、白瀧君に手伝ってもらおうと思ったの」

付け加えるような東雲さんの説明は俺の心を満たすことはなかった。

（というか、料理を教えてもらった状態でもなお桃井さんと同じレベルだったのか……？）

そしてそれが本当だというのなら厄介だ。話を聞く限りではおそらく桃井さんと同じくらいの腕だろう。果たして本当に上達できるのかと一抹の不安が過ぎった。

「白瀧君は料理もできるって聞いたし、藤代監督も『それなら白瀧さんの限界に挑戦できますね』って賛成してくれたから、大丈夫だと思っ
た」

「俺の限界？ ちなみに、何の？」

恐る恐る、細々と問う。まったくよいことが予想できない、果たして藤代監督は俺に何を期待したのか。

「白瀧君の胃袋の限界に挑戦」

「殺す気か!!」

「大丈夫だよ。藤代監督だって、『白瀧さんの無尽蔵の体力は何のため

にあると思っっているのですか」と太鼓判を押ししてくれたから」

「少なくともこのときのためではないと断言できるよ！」

やはりとても恐ろしいものだった。

しかも勘違いされがちだが、俺の体力は何も本当に無尽蔵というわけではない。

たしかに自分の弱点を克服するために鍛錬に次ぐ鍛錬を積み重ねることでスタミナを得た。さらに古武術の動きを応用し、一連の動作の無駄を最低限までに減らすことによつて運動効率を良くし、スタミナがまるで無尽蔵にあるかのようにまで発展させた。

当然のことながらこれができるのは運動に関することにみであり、食事にまで適用できるかと問われれば——それは当然否、である。

つまり……

(俺、今日死ぬかもしれない)

この瞬間、俺の完全敗北が確定した。

「安心して。時間はある」

「どうやったら安心できるのか詳しく教えてくれないか？ 問題なのは時間じゃないんだよ」

「……今夜は、寝かせないから」

「その台詞を聞いて、ここまで何も色気を感じないのは初めてだ。その台詞はできればもつとちゃんとしたシチュエーションで言つて欲しかったよ」

まあそんなことになったら勇作さんが黙っていないだろうけど。

不満に思つたのか橙乃が頬を膨らませて続けた。

「私では、興奮しない？」

「頼むからもつと言葉を選んでくれ。こんなの勇作さんに聞かれたら絶対殺される」

おそらく『イエス』と答えても『ノー』と答えても殺されることだろう。『イエス』と答えたならば「このケダモノが！」と拳が飛び、『ノー』と答えたならば「それは俺の茜が女として劣っていると、そう侮辱しているのか!？」と拳が襲うことが予測される。

結果がどう足掻いても同じだから怖い。理不尽である。

「ちなみに、どれくらい練習するつもりだ？ 材料はそれくらい用意した？」

「ん」

話を戻し、橙乃に聞くと右手の人差し指と中指、そして薬指を上げて俺に向ける。

「3？ つまり3品分ってことか？」

まあそれなら食べきれないことはない……

「いや、3食分」

「やっぱり殺す気じゃないか!？」

「藤代監督いわく、——特訓、『兵糧攻め』」

「……あれ？ 兵糧攻めって相手に飯を与えずに苦しめるものじゃなかったっけ？ 逆じゃね？」

逆なはずなのだが、ある意味本家以上の破壊力を秘めているように感じるのは何故であろうか。一日ともたずに白旗を上げる城兵達の姿が簡単に思い浮かんでしまう。

「白瀧君がなんでもするって言うから私頑張ったのに……」

「俺の話を聞く前にすでに作ることは決まっていたんだよね？ そこを誤魔化しては駄目だぞ」

困った顔をされても何度も騙される俺ではない。区切りをはつきりつけ、気をしっかり持つように務めた。さすがに二日連続で嫌な思いはしたくないんだ。

「まあとにかく、さっそく始めていきましょう。私たちも時間は限られているんだから！」

「そうですね。俺もわかる限りなら声を挟んでいきます」

「お願いね。茜ちゃん、下準備は出来てるかしら？」

見かねた東雲さんが助け舟を出してくれた。話が脱線しかけていたからとても助かった。

俺に一言声をかけると橙乃へ出していた指示の確認を行う。

「はい。もう一つ作りました」

「……え？」

「……？」

だがやはり予想の斜め上に行くのが彼女だということか。返答は一段階超えたものだった。

「え？ 作ったって、まさか」

「はい。一品目です」

「あの、私下準備だけしておいてって言ったはずんだけどな？」

「はい。だから……白瀧君の舌準備を作っておきました」

「まさかのウォーミングアップ!？」

つまりこれを食べてもさらに厳しさを増した第二・第三の地獄が待っているという。

あの、橙乃さんは一体俺をどうしたいというのでしょうか？

「まずはコーンスープです」

呆然とする俺達を他所に橙乃が配膳を始める。

そして俺の目の前にスープが運ばれてきた。どうやらさすがに液体ですらないというような事態は免れたようだ。だが……

(何ですか？ この地獄沼のように赤く、グツグツとにたっているスープは?)

とてもコーンスープとは似ても似つかないものだった。

まるでマグマのようにぐつぐつと泡が沸き立ち、煮えたぎる姿が地獄への誘いのように見える。俺の知っているコーンスープとは別の何かだった。

「あの、東雲さん」

「……………お願い」

躊躇うことわずか1秒。東雲さんは非情な決断を下した。

願い、届かず。本当に味見した上でアドバイスをすることなどできるのだろうか。

「ちなみに食べる前に聞いておきたいのだけど。これ、何が入っている?」

「愛情がたっぷり入っている」

「……………うん。ありがとう。本当にありがとう」

確認の意を込めた質問は橙乃の穢れ泣き答えの前に散った。

いや、聞いているのはそういうことではなくて成分のこととか。

愛情がどす黒く煮立つほどの憎しみに変わっているのだけとか。色々ツツコミたいところは満載だけれども。そう感じるのは俺の心がにごっているからだろう。

満面の笑みを浮かべて『愛情』と何のためらいもなく言い切る素振りからそう感じられた。こないたいけな少女が嘘をつくはずもない。昨日の出来事もきつと何かの間違いだったのだとそう思うことにした。

(だけど、これは……)

いざ口にしようと思うと手が途中で止まってしまう。簡単にスプーンを受け入れる液状の柔らかい感触がかえって不気味に感じられた。

中々次の一步を踏み出せないでいると橙乃の方から俺に提案をしてきた。

「食べられないなら私が食べさせてあげようか？」

「いや、さすがにそれは」

「早くしないと……白瀧君のお口が皿の形に広がっちゃうよ？」

「皿ごと食わせる気か!?! 何これバツゲーム!?!」

ヤバイ。目が笑っていない。昨日の東雲さんと同じ目だ。

冗談ではない。飲まなければ俺の口は文字通り裂かれることになるだろう。

(しかし、これは——!)

昨日の強い決意は決して嘘ではない。男としての意地もある。女性の願いは聞き入れねばという責任感ももちろんある。

だがそれでもやはりいざ食べようと思うと……

「はい、あーん」

(完食できる気がしないんですけど)

スプーンを掬い、橙乃がスプーンを俺の口へと運んでくる。

ああ、どうやら俺は覚悟を決めなければならないらしい。

「あーん!!」

こうなったら逃げるのは男ではない。死を覚悟して口を大きく開き、スプーンを迎え入れた。……あれ? 『はい、あーん』ってこんな

命がけのものだったっけ？

「……………ッ!!?」

舌がスープに満たされる。

その直後全身に電流が駆け巡り、俺の意識は途絶えた。

「どう？ おいしい？」

目を見開き、硬直する白瀧を不審に思い、橙乃が顔を覗きこむ。

「固まるほどおいしかった？ よかった」

「いや、絶対違う！ 茜ちゃん水を持ってきて！」

見当違いな喜びを抱く橙乃をよそに、東雲は冷静に白瀧の介抱をはじめた。

「どうやら白瀧は料理を教えるために葵たちと合流したようだ」

藤代と連絡を取り、ようやく小林は事の意図を理解した。

「合宿の際の食事、橙乃も作るからその前に身についてほしかったぞうだ」

「…………それは確かにすぐに身につけてもらわないと困りますね」

そうでなければ恐ろしいことになる。以前の差し入れを思い出した神崎が身を震わせた。

「でも要は料理できるんですかね？ できないのに行っても意味ないんじゃない…………」

「それなら問題ありません。夜食はもちろんケーキも手作りで作ったりしていましたから」

「何をやっているんだあいつは」

中学時代を思い出し、西村が感慨深そうに呟くと二人は呆れてそれ以上は言えなかった。

「すげえな。バスケは勿論勉強も出来て料理も作れるって。あいつは

本当に何でも出来るって感じだな」

「そうですね。白瀧さんは中学時代から何でも出来ていましたよ。……ただ、一番にはなれないだけで」

そつと瞳を閉じて紡がれた言葉。それは白瀧の全てを物語っているようだった。

「俺としては羨ましいし頼もしい限りだ。主将としてあいつのような存在は部にとっても貴重なものだ」

「……ただ、それでも気に食わない点もあるけどな」

話を聞いていたのか、松平が不機嫌そうな顔をしている。微笑を浮かべる小林とは対照的な反応であった。

「気に食わないって、何かありましたっけ？ 要ってそんなに誰かを敵に回すようなことはしない気がしますすけど」

「お前らは知らないだろうけどな。……あいつはスポーツ推薦で入学したことは知っているだろう？」

「ええ。スカウトの話聞いて進学を決めたと」

「そういうやつらは普通より早く進路も決まっているし、大抵は入学前から練習に参加したりするんだ。去年もそういうやつはいた。」

……だが白瀧は『春休みから参加させていただきます』と監督に言っていたのに、結局来なかつたんだよ。『入学するまでは構わない』と言っているみたいで俺は嫌だったな」

スポーツ推薦での入学者はすでに顧問の監督とも話がついており、入学を前に練習に参加することは決して珍しくない。部内での先輩や監督との交流、自分の立ち位置の確保などを行うために率先して参加する生徒が多い。

白瀧も当初は参加する予定だったのだが、急遽参加を取りやめ、他の部員達と同様四月から部活を始めることとなった。

(そっさいえばあの時……)

神崎は白瀧と光月と共に入部届けを出しに行つた日の事を思い出した。

たしかにあの時白瀧も小林や東雲とは初の顔合わせのような素振りだった。松平の言うとおりの四月から部活を始めたのだろう。

「……あの、それについては言いにくいんですけど」

「うん？ どうした西村？」

耐えかねて西村が恐る恐る手を上げた。小林が聞き返すと意を決して秘密を打ち明ける。

「実は俺のせいなんです」

白瀧に非はない。自分の為であったのだと。

「は？ どういうことだ？」

「本当は俺、大仁多の入試落ちたんですよ……」

「……はあ!？」

「だってお前現にここにいるじゃねえか!」

まったく話についていけず困惑するチームメイトに、西村は話し始めた。

彼が数ヶ月前にに経験した苦い思い出と、頼もしい思い出を。

大仁多高校の試験当日。

西村は一人、試験会場へ向けて足を運んでいた。

まだ試験が始まってもないのにすでに体は緊張してしまっている。

足取りが重く、どうしても気を強くもてないでいると……校門の前で見知った人物を目にした。

「え、白瀧さん!?! なんでここにいますか!?!」

入試において勉強を教えてもらった心強い存在である白瀧だった。

西村が呼びかけると白瀧は目を逸らして彼の当然の疑問に答える。

「……ただの下見だよ。大仁多に入学することは決まったから、寮や学校の近くといった周りの環境をもう少し見たいと思っただけだ。それで今日入試日だということを思い出したから寄ってみたんだ」

わかりやすい嘘だった。本当はそんなことすでに確認を済ませているはずだというのに。

わざわざ応援に来てくれた。その心遣いが今は非常に頼もし

かった。

「頑張れ。ここまで努力してきたんだ。もう一度同じ学校に通おうぜ」

「……はい！」

また、背中を押してもらった。勇気が体から湧いてきて「今なら受かる」と思うことができた。

（——大丈夫だ）

白瀧にも勉強を教えてもらった。今までで一番勉強した。だから大丈夫。

自信と落ち着きをもってテストに望む。自分のあるだけの力を振り絞り、絶対に受かるのだとテストに望んだ。

そして、試験から10日程が経過した2月の一般受験合格発表日。

「……」

言葉が、出てこなかった。

目当ての番号が、自分の番号が見つからない。

まさかこんな時に見落とすなんてらしくない。そう思っただ度も何度も確認した。

それでも西村は自分の受験番号を見つけることはできなかった。最初から載っていなかったのだから。

「……西村」

「ははっ。結局駄目なのか。……すみません。全て、無駄になっちゃいましたね」

声が震え、白瀧を直視することができず、視線を真下に落とす。

——不合格。もう同じ場所で戦うことはできないのだという事実が、彼の胸を締めつけた。

「ちよっと、歩こう」

手をひかれて西村はその場から離れていく。

背中越しに聞こえる合格者の歓喜の声はただ耳を通り抜けて消えていく。何も考えられなかった。何も考えたくなかった。それほど衝撃が大きかった。

白瀧は公園まで歩いていくとベンチに西村を座らせ、自販機で買っ

たココアを手渡した。

「お前はよくやったよ」

「……よくやったじゃ、駄目なんですよ。それは白瀧さんだつてわかつているじゃないですか!」

「いいや、お前はよくやった」

震える手をギュツと握り締めて白瀧はもう一度繰り返した。

だが震えは止まるばかりか肩にまで広がっていき、心の動揺は収まってはくれない。

泣き叫ぶことはなかったが西村は10分ほど感情を抑えることができず、ようやく落ち着いてから白瀧は話を続けた。

「……これからお前はどうする?」

「ひとまず、今から受験できる東京の高校を目指します。」

元々親の反対があつたのに無理やり受験した身ですから。こうなったら仕方がない」

「そうか」

大仁多に代わる進路の意志を聞くと、白瀧は一言呟きスマホを取り出した。そして一件の電話番号を入力し、その相手へと電話をかける。

「もしもし藤代監督でしょうか? お久しぶりです、白瀧です」

通話先の名前——『藤代監督』。西村も以前耳にしたことのある人物、大仁多高校の監督の名前だった。

「申し訳ありません。春休みに練習に参加させていただく予定だったのですが……どうしても外せない用件が出来てしまい、参加できなくなつてしまいました」

「……え? ちょっと白瀧さん! その電話は何ですか!」

「はい、はい。……ありがとうございます。それでは四月から参加させていただきます。」

本当にすみません。ご迷惑をおかけしますが、これからよろしくお願ひします」

西村の指摘に答える事無く、白瀧は通話を終えた。まるで何事もなかったかのようなすまし顔を浮かべている。『どうして』と問いかけ

る前に白瀧の視線が西村を射抜いた。

「お前に大仁多を指さしたのは俺だ。そんな俺が失敗したお前を見捨てるなんてできるわけがないだろう」

西村に大仁多を、この道を目指させてしまった自分には責任がある。だからこそ俺が助けるのだとそう語っていた。

「……いや、だって白瀧さんは高校でも俺とチームメイトになるかもしれないから教えてくれたんでしよう？ それならもう」

「道が異なった瞬間に崩れるような関係なら最初から仲間だと考えていないさ」

「それならもう助ける理由なんてない」。続く言葉を遮り、白瀧は西村に笑いかけた。

「いいだろう？ これ以上、俺の仲間をなくさせないでくれよ？」
その寂しげな表情を前に、否定することなどできなかつた。

合格発表後、東京に戻った二人は再び勉強に明け暮れた。

時には家や図書館など様々な場所で落ち合い、勉学に励む。

そして時は流れて三月。図書館にて二人で勉強していた時のこと。

「——ん？ あ、すみません。ちよつとメールが来ました」

スマホが振動し、西村にメールの着信を伝える。

勉強中ではあるが今は進路の話などで連絡を取り合うことは必須であるため、白瀧も止めることはしなかつた。

母親からのメールだった。タイトルはなく、添付写真と本文で構成されたメール。

「……え？」

その内容を見て、理解した瞬間——

「お、おおおおおおお!!!」

西村は自分がいる場所のことを忘れ、叫び始めた。

「西村、声を出すな。ここは図書館だぞ」

「それどころじゃないですよ！ 一大事です白瀧さん！」

「だから声を落とせ！」

小声で注意するが興奮している西村には効果はなく、スマホの画面を突きつけて喜びを爆発させた。

「受かりました！ 大仁多、今、通知来たって！」

「……は？ 受かった？ え、大仁多？ どういうことだよ？」

「補欠合格だって！ 俺、大仁多に行けるって！」

「……………マジかよ！ やったじゃん！ 西村！」

「はい！ ありがとうございます！」

「よかった！ これでまたチームメイトだ！ よかった！」

「——お客様、お静かに!!」

欠員による補欠合格。チームメイトの吉報を知り、白瀧の喜びも尋常ではなかった。喜びのあまり二人で騒ぎあい、司書に止められても熱は冷め切らなかった。

「ということがありました。白瀧さんもその後で引越しの準備を始めたので、どうしても大仁多には来れなかったみたいです」

一連の話を終え、西村が顔を上げる。

すると松平がそつと目頭を押さえて軽く俯いていた。

「……そうだったのか。少しでも疑っていた自分が恥ずかしくなってきた」

「それで練習には出られなかったのか。ヤバイなあいつ」

自分ならとてもできない、と神崎はここにはいない友に言った。

並大抵の人間ができることではないだろう。だが白瀧はそうした。彼の尋常ではない思いの強さを少しでも感じることでできた気がした。

「本当によかったな、西村。中学時代から恵まれた仲間に出会えて」

「ええ。本当に、助かっています」

偽りのない本音だった。今も常に思っている。

おそらくこの出会いがなかったならば、きっと今頃バスケさえ続け

ていなかっただろう。白瀧と出会えたことに感謝した。
……その白瀧の命運が風前の灯であるとも知らずに。

「……ハッ！」

「あ、目が覚めた。大丈夫、白瀧君？」

「はい。……夢？ 今西村に呼ばれたような……」

コーンスープですでに尋常ではないダメージを受け、気を失っていた彼だが、友の呼び声を感じ取って目が覚めた。

気のせいか、と意識を切り替えて白瀧は起き上がり状態を確認した。

「ひとまず、また料理を試してみただけど……」

「はい、できました！」

「……アドバイス、できそう？」

「ひとまず、食べては、みます」

一体どこから自信が生まれたのか、橙乃が満足そうな表情を浮かべていた。

無理はしなくてもいいと東雲は気遣うも白瀧は彼女を制して再び食事へ戻る。

「ところで一つ思ったことはあるんだけど、勇作さんは橙乃の料理について何か言わなかったの？」

盛り付けをしている間に白瀧が問いかける。

彼女の兄、勇作ならば彼女の料理を食べたことがあるだろうし、いくら『茜の料理はいつも上手いな』と断言する彼でも将来のために何かアドバイスをしたのではないかと。

「んー、『妹の作る料理に味は問題ではない』と言っていたことはあるよ」

「……そっか」

まったく役に立たない。いやむしろあの男こそが全ての元凶であつた。

妹に対してはどこまでも甘い。本当にどうにかしろよとここにはいない宿敵に怨念をぶつけていく。

「はい、お待たせ」

勇作への怒りが募る間に料理が白瀧の元へ。『待っていません』という言葉を飲み込み、白瀧は料理へと目を向けた。

「……カレー、だよな?」

半信半疑の声。ご飯の上に適度にかけてられたカレールー。しかし色とりどりに輝きを放つ光景が彼の経験とは異なるものだった。

「様々な味を楽しめる……五色のキセキカレー」

「うん。味はそんなに必要なかった」

(というかどの段階でそんなに味が増えてしまったの?)

なお、総合的なうま味は消えてしまった模様。さすがの東雲もはやお手上げで、白瀧に託すしかなかった。

「心身ともに、生まれ変わったような気分が味わえるよ」

「それ死んでいるよね!? 心はともかく体もって、少なくとも一回は死んでいるよね!」

「ちなみに今のは体験できるという意味の味わうと食事としての味わうをかけてみた」

「わざわざ解説ありがとう!」

不安を駆り立たせるような説明と解説に白瀧の心が磨り減っている。

(どうせ俺がやらなければならんだ。それなら!)

だが不安におし負けずにスプーンを口元へ運んでいった。

感触は問題ない。口の中で味わおうと咀嚼を続ける。

「……ッ!?!? ちよっ、なっ、ま、待って! 体が、焼け、体が、ああああああ!!」

「え? 何これ、断末魔?」

だが突如白瀧の身に異変が生じた。スプーンが零れ落ち、白瀧の手が何も無い宙へと伸びる。まるで最期の時を迎えたような叫びの前に、東雲は呆然とした。

「はがあっ!」

「あ、白瀧君の顔が緑色に変わった」

「ぐふうっ!!」

「今度は紫色に染まった」

「ぐうおお!!?」

「続いて黄色に」

「なああっ!!」

「次に赤色」

「ぎやはっ!!」

「そして青色に。……あつ。倒れた」

5度白瀧の顔色が変わり果て、機能を失ったように倒れこむ。

じつと指先一つ動かさない状態がしばし続き、その後いきなり立ち上がった。

「ど、どうしたの白瀧君? 大丈夫?」

きちんと正気を保っているのか。もはやその判別さえできずに東雲は問いかけた。

「ふん。この程度で音をあげるほど、柔な鍛え方はしていないのだよ。俺は常に人事を尽くしているのだから」

「いきなり独特な口調になった! しかも眼鏡をかけていないのに手で押し上げる仕草をしている!」

某おは朝信者のような話し方で受け答える。鼻の食指をクイツと押し上げる仕草はまるでそこに本当に眼鏡があるようだった。

しかし彼は東雲のツツコミを無視すると先ほどのカレーへと再び手を伸ばし、すぐに平らげてみせた。

「それよりも橙ちゃん、次のご飯ちよーだーい」

「橙ちゃんって誰?!」そして自らご飯を要求!「ちよつと、大丈夫なの? 辞めといたら?」

突如橙乃の呼び方を代えて先ほどまで自らを苦しめたカレーのおかわりを要求する。どうやらおかわりはあったようで橙乃は何も躊躇う事無く皿を受け取った。

だが彼の異変の異常に気づいた東雲が彼を止めようと割って入った。

白瀧はそんな彼女の手を優しく包み込み、営業スマイルを浮かべる。

「なに言ってるんスカ、センパイ。」

俺は女性の頼みは今まで一度たりとも断ったことがないセージツな人間ツスよ？ 最後まで付き合うツス」

「清々しい笑みを浮かべているけどどこか言い方が鬱陶しい！」

またしても口調が変わり、しかも今までと調子が変わらないように聞いて聞こえが違う。

思わず東雲は手を無理やり引き離し距離を取って牽制しつつ呼びかける。

……すると彼の気に障ったのか白瀧の雰囲気が変わり、厳しい視線で東雲を射抜いた。

「まったく騒がしいことこの上ないな。……頭が高い。僕に逆らうならば、葵でも泣かすぞ」

「いつの間に名前呼びに？ とうか泣かすって……泣かす!? え!?!」

まるで自分が王者であると誇示するような風格。さきほどまでの彼とはかけ離れた雰囲気思わず東雲は飲み込まれそうになった。

なお、後にこの話を聞いた小林に白瀧が泣かされました。ランニング42・195キロという意味で。小林さん、それランニングじゃない。フルマラソンだ。

「なんなんだよ。俺がこの程度の料理に負けるわけがねーだろ。……俺に勝てるのは、俺だけだ」

「いや食事は誰かとの戦いじゃないから！」

いつまでも注意をしてくる東雲をうっとうしいと思った白瀧が橙乃から皿を受け取りながらそう告げた。

孤高であるが故の憂い顔を作って髪をかき上げる。

一体誰と競っているのか。東雲の疑問は解消されることなく再び白瀧の口の中がカレーで満たされる。

——そして、再び彼の身に異変が生じた。

「……白瀧、君？」

呼びかけるが返答はない。

突如生命力が消えうせた、いや影が、存在感が薄くなったように雰囲気が変わってしまった。何かに絶望しているようにも見える。

心配そうに二人がじつと見つめていると、白瀧がようやく口を開いた。

「今日この時、僕は食事が嫌いになった」

「ついに嫌いになっちゃったー!」

なるほど、食べ過ぎると幻の隠し味シツクスマンが出現するらしい。

「好きで始めたはずだった食事なのに。こんな思いはもう二度としない。舌に染み付いて忘れることさえできないでしょう。だから……もう食事はやめます」

「やめないで! お願いだからそんな切実に生きることが諦めないで!」

ついに白瀧の願い、食事だけは平穏であって欲しいという願いが脆くも崩れ去った。

勉強すると時間が経過するのは早く感じられる。時間は九時を回っていた。疲れが見え始める時間だった。

「……よし。全員一時休憩だ。気を張り詰めすぎても駄目だ。一度休もう」

集中力も限界にならないようにと小林が休憩時間を設ける。

それぞれシャーペンや消しゴムを手放し、体を伸ばしていく。

「あー疲れた。やっぱ勉強は本職じゃねえわ」

「なんとか明日乗り越えてくれればそれいいですよ」

愚痴を零す余裕はあるものの、体は空腹を覚え苦しい状況であった。

何か外で買ってこようかと何人かの部員が考えていると、東雲と橙乃が大きな皿を抱えて現れた。

「皆、勉強お疲れ様! 差し入れもって来たわよ!」

「お疲れ様です！ よろしければどうぞ！」

「おお！ 葵、橙乃。二人とも助かるよ」

おにぎりをはじめ人数分の食事が載せられていた。

さっそくおにぎりに手を伸ばし、皆が食事休憩とする。

「疲れた後だから本当上手く感じるな」

「これは、東雲さんが？」

中澤が感慨深そうに呟くと、一つ疑問に感じた黒木が東雲に尋ねる。

元々今日の食事は橙乃の料理を上達させるため。ではその結果はどうなったのか？

他のメンバーも思い出し東雲に視線が集中する。

「ううん、これは茜ちゃんが作ったものよ」

東雲の一言で部屋全体の空気が変わった。

「なん、だと——」

「え？ まさか遅延性？」

「今までできなかったのにどうして？」

あるものは驚き、あるものは不信に思い、あるものは疑問を呈する。レモン丸ごとはちみつ漬けを覚えているのだから当然の反応だ。

「白瀧君が言うには、茜ちゃんは料理の基本方針で変な方向で覚えてしまったせいで上手くいかなかったんだって。」

だから逆にその基本さえ叩き込めばある程度改善はできる、と」

「おかげでできるようになりました！」

「え、それで何とかなったんですか？」

「あとはひたすら練習。普通の美味しさには到達したよ」

(白瀧すげー！)

そう上手くはいかないだろうと思っただけに、まさかたった一人で解決させてしまうとは信じられなかった。

改めて白瀧が入ってよかったと、部員全員の心が一致した。

「あれ？ それで、その白瀧さんはどこに？」

「……」

「……」

(え?　なんでそこで黙り込むの?　聞いてはいけない質問だった?)

だがその話題の中心である白瀧の姿が見えず、西村が二人に質問した。だが二人は視線を合わせてはくれなかった。

「……白瀧君はね、犠牲になっただよ」

「犠牲!?!」

「要の身に何が!?!」

「ちよつと、胃も限界だったみたい」

「白瀧さんの胃袋がリミットブレイク!?!」

どうやら成功には犠牲は付き物のようだ。橙乃の料理の成功と引き換えに白瀧の体が悲鳴を上げたらしい。

自分の身を犠牲にして健闘した白瀧に部員が涙を流す。

橙乃は彼らを不安にさせないようにと思いついたように話し始めた。

「大丈夫、私達が出かける前に白瀧君が目を覚まして、『俺のことは大丈夫だから、先に行つててくれ』って言っていたから」

「それを世間では死亡フラグと言う気がするんですが!?!」

「ううん。『こんなところで屈したりしない。IHに出るまではな、絶対に勝つて約束しちゃったんだ』って言っていたよ」

「もうやめろ!　それ以上はいけない!」

まったく安心できなかった。

「とにかく橙乃達もご苦労だった。疲れただろう?」

仕切りなおすように咳払いをし、小林は二人の労を労った。

疲れたのはお互い様だと二人も笑って出迎えに答えた。

「たしかに疲れたけど、成功したから大丈夫よ」

「でも本当に大変でした。文字通り血反吐を吐くまで練習しました」

「は?　文字通りってどういうことだよ?　何で料理をしていて血反吐を吐くことになるんだって……」

「いや、私じゃなくて白瀧君が」

「そっちかよ!?!」

『要——!!』

『白瀧（さん）——!!』

冗談はよせと本田が笑うが、橙乃の残酷な宣告で部員の悲鳴が轟くことになった。

やっぱり駄目かもしれない。

だが部員達は散った白瀧の為にも必ず合格しようとして一体になってより勉強に励むことができたという。

ちなみに、少し時間をさかのぼって調理室。

練習を重ねて徐々に上達していく橙乃。少し白瀧の体を休ませ、橙乃と東雲は食器を洗っていた。

「白瀧君って教えるのも意外と上手いんですね」

「そうね。普段は神崎君や光月君にも技術を教えているみたいだし、意外と指導者の素質もあるのかもしれないわね」

ちらつと視線を休んでいる少年へ向け笑みを浮かべた。

たしかに普段バスケットでも同級生に教えている面もある。面倒見も良いようだし、たしかに教える側としても力を発揮するのだろう。

「茜ちゃんと白瀧君を足したら凄いことになるんじゃない?」

「え?」

「ほら、茜ちゃんは3位に入るくらい頭がよかったですよ? その頭脳が白瀧君に加われればもつとすごいことになるんじゃないかなって」

「なーんてね」と東雲は冗談交じりに笑う。

しかし東雲の脳内では実際に足した結果が思い浮かび、その効果を感じ取っていた。

（私と白瀧君を足す。……今の白瀧君が頭も良くなる。凄いことになる!）

それなら迷うことはないし橙乃は考えを伝えるべく白瀧の方へと歩んでいく。

当の白瀧は体調が優れないのか、頭を抱え込んでいるところだった。

「白瀧君」

「うん? 橙乃か? 悪いけど今ちょっと体調悪いからそつとしておいて……」

「私と合体しよう」

「この後滅茶苦茶吐血した。一体なにを想像したのだろうか。」

そして運命の翌日。

午前中は追試があるものは追試を受け、追試がないものは自習となった。

神崎をはじめバスケット部員は前日までに詰め込んだ知識を失う事無くテストに望むことができ、放課後のテスト返却に望んだ。

神崎、光月、西村の三人が担当の先生より結果をもらって職員室を後にする。

すると外で待っていたのか本田と鉢合わせになった。

お互い結果が気になるのだろうが、皆笑顔を浮かべている。きっと良い結果だったのだろう。

「おい、お前達テストは大丈夫だったのか!？」

「お？ 要じゃん」

そこに白瀧も合流した。きつと結果を心配していたに違いない。走ってきて息が乱れている。

その彼に三人は結果のプリントを見せつけた。

——三人、全員合格。IH出場をものにした。

「そうか。やったな！」

「ああ。これでIHも参加できるぜ」

「先輩たちも大丈夫だったみたいだよ」

「だから今のメンバーで挑むことができます」

「マジか。よかった、安心したぜ」

先輩達も追試をクリアしたことを知り、五人は安堵の息を零した。

これでIHは万全の体制で臨める。メンバー一人も欠けることなく追試を終わることができたのはバスケット部にとっては最高の展開であった。

「ところで白瀧さんの方こそ……大丈夫だったんですか？」

「は？ 大丈夫って、何の話だ？」

「いや、ほら。お前俺らに勉強を一通り終えた後、東雲さんたちに連れて行かれただろ？」

「……ああ、そのことか。俺もちよつと聞きたいことがあるんだけど」
ふと西村が昨日の出来事を思い出し、白瀧に問う。

神崎の補足を受けてようやく質問の意図を理解すると、白瀧は険しい表情を浮かべて彼らに言った。

「俺ってあの時なにしてたの？」

「……え？」

「いや、東雲さんと橙乃に話があるって呼び出されたところまでは覚えてるんだけど。……その後何があったのか覚えていないんだよな。なぜか思い出そうとすると、記憶を蝕むように闇が。気がついたらなぜか寮の自分の部屋で横になっていたし」

《記憶飛んでんの!?!》

「具体的に言うと、第五十四話の三百四十五字から先の内容と、橙乃が苦手としていたことが、まったく思い出せない。何故だ。俺は一体何をしていたというのだ」

何も思い出すことができず、白瀧はその場で頭を抱え始めた。

「どうやら昨日の出来事は白瀧にとってはショックが大きすぎたようだ。思い出すことができないほどのトラウマとなり、記憶として残ることはなかった。」

「で、でも一応体とかは大丈夫だったんですよね？ 今もこうして学校に来てますし」

「ああ。それについては問題ない。懐かしい夢も見れたことだしな」

「夢？ 悪夢か？」

気遣う声に白瀧は感慨深そうに答える。

まさかうなされていたのではないかという考えが本田の脳裏によぎるが、白瀧は静かに首を横に振った。

「実はどういわけか俺が小さい時の記憶から辿っていくように映像が流れてな。皆とIHを決めたところで目が覚めたんだが……」

「それ夢じゃなくて走馬灯だよ！」

「は？ 走馬灯？」

……おいおい、どうしてそうなる？ 橙乃と東雲さんに呼ばれて、どうして死にかけてることになるんだ？」

《実際に死にかけてたから言ってるんだよ！ とうかその二人が元凶！（主に橙乃!!）》

理解できないと首を傾げる白瀧に、四人は心の中で揃って的確なツツコミを入れた。

「あ、白瀧君。皆！」

するとまさに話の根本である橙乃が現れた。

「橙乃。丁度良いところに。昨日俺って何をしていたかわかるか？」

「え？ まさか白瀧君、覚えてないの？」

突然の発言に橙乃は眉を寄せて白瀧をじっと見つめた。

「酷いよ。白瀧君は慣れてるかもしれないけど、私は初めてだったのに（料理が成功したのは）」

「……は？」

《うおおおい!? 何を言っているんだ!?!?》

寄り添い、寂しげに呟かれたその言葉は、白瀧を固まらせるには十分すぎるものだった。

四人の心の叫びは白瀧にも橙乃にも届かない。

白瀧が反応できずにいると、橙乃はさらに続けていく。

「さすがにもう（白瀧君の胃に）入らないって私が言っているのに……何度も何度も（食べ物を喉の）奥に突っ込んでいくんだから」

「いや、そんな……」

「実際白瀧君がやりすぎて気絶しちゃうまで続けたからね。それで（料理が）できたんだよ」

おなかをさすりながらそう続ける。上手く行ったことが嬉しくて自分で弁当を作り、食べ過ぎて満腹のようである。

その仕草が白瀧をさらに混乱させた。

（そんなはずがない。しかし記憶がないからそういいきれない。むしろそのようなことをしてしまったからこそ記憶を失ってしまったというのか?）

自分がそんなことをするはずもないと思う反面、だからこそ記憶がないのではないかという考えが白瀧の考えを鈍らせる。

「あら？ 何をしているの皆？」

「あ、東雲さん。丁度いいところに。一つ聞きたいことがあるんですけど」

そこにもう一人の重要人物である東雲が現れた。

現状を把握していない彼女に橙乃が一つ質問を投げかける。

「昨日白瀧君、私が止めても気絶するまで（食事を）やってみましたよね？」

「え？ たしかにそうだけど、それがどうしたの？」

「ッ……!!」

彼女の言葉が決定打となった。

「白瀧さん……？」

「おい、意識をしっかり持て！」

仲間達の呼びかけも脳が認識しない。

この後東雲がようやくやく話を理解し、説得が行われるまで白瀧は復活しなかった。

そしてその後の部活。練習を前に藤代は選手達を一堂に集めた。

ここまで厳しい練習を耐え抜いた強者たちに、改めて告げる。

「IH予選も終わり、これからはI日本戦に向けての練習となります。全国の強豪との戦いは予想できないもの。その為当然練習の密度はさらに上がるでしょう。」

……すでにわかっているでしょうが、我々も全国の強豪です。勝つために全力を尽くす。

のんびりとバスケをしたい方は抜けてもらって構いません。身も心もボロボロになろうとも進む意志を持つものだけが、戦う覚悟があるものだけがついてきてください！」

『はっ!!』

真に戦うことを望む者だけがついてくるようにと。
さらなる激戦に向け、練習もより濃く厳しくなっていく。
だが選手たちも気迫を込めた声で監督の意志に答えた。
……迫る決戦に向け、さらなる強さを求めて彼らは走り出す。

——黒子のバスケ NG集——

(しかし、これは——！)

昨日の強い決意は決して嘘ではない。男としての意地もある。女性の願いは聞き入れねばという責任感ももちろんある。

だがそれでもやはりいざ食べようと思うと……

「はい、あーん」

(完食できる気がしないんですけど)

スープを掬い、橙乃がスプーンを俺の口へと運んでくる。

ああ、どうやら俺は覚悟を決めなければならぬらしい。

「あー」

「させつかああああ!!」

「……あ?」

「あ、お兄ちゃん」

口の中にスプーンが入ろうとしたその瞬間、なぜかついこの間戦つたばかりの勇作さんが叫びを上げて侵入してきた。

「貴様!・俺がいないことを良いことに何を羨まし、じゃない酷いことを茜に強要している!?!」

「いや確かに酷いことだけど強要されているのはむしろ俺、というより何故勇作さんがここに?・不法侵入ですか?」

「話の論点を逸らすな!・妹のピンチならば兄が駆けつけぬわけがあるまい!」

「むしろピンチなのは俺なんです」

「とぼけるな！ 夕食を茜に食べさせてもらおうとしていて何を……」

「これ、作ったのあなたの妹なんですが」

「……………え？」

勇作さんは視線を橙乃へ向ける。「本当なのか」という問いに橙乃は大きく頷いた。

「料理を上手くしておきたいから教えてもらおうと」

「そうか。そうだな茜にはそういうのはまだ早い。邪魔したな、それじゃ俺はこれで……」

「せっかくだからお兄ちゃんも食べていつてよ」

「え？」

安心した勇作さんは一目散に去ろうとするが、橙乃に呼び止められてしまった以上、撤退は拒めなかった。

翌日、大仁多のエースと盟和のエースが揃って倒れているところを発見されたという。「妹の料理には勝てなかったよ」と呟いていたらしい。

第五十五話 彼らが望むもの

I H 出場を手にし、さらに追試対象者も全員が追試という最大の難関を乗り越えた大仁多高校バスケット部。彼らは次の激戦へ向けて再び厳しい練習の毎日へと戻っていた。

大会への日時が限られている中、大仁多高校の練習は基礎練習を朝練に集中させて夕方はコンビネーション練習や実戦練習が主となっていた。

特に実戦練習は一軍メンバー内で様々な組み合わせを選択し、多種多様な試合展開に対応できるように。そして選手達がそのポジションのプレイを身に染み付かせるようにと密度が濃くなっていた。

「うおっ！」

「行つた!!」

視線のフェイクと上体の移動に翻弄され、中澤は白瀧のドリブル突破を許してしまう。

中央からコートを左右に二分割するような鋭い切り込み。スピードは緩む事無く前方へ跳躍する。

たまらず黒木と山本が二人でブロックに跳ぶ。すると白瀧はボールを持っていた右腕を斜め後方へ振り下ろす。地面に叩きつけられたボールはワンバウンドして神崎の手へ。

「あっ!？」

「ナイスパス！」

「おう。お前も調子よさそうだな。ナイツシュ！」

「あっちゃー。やっちゃったか」

フリーとなった神崎は自らスリーを沈める。

悔しがる山本を背に、一年生チームはお互いを鼓舞しながら並んで走っていく。

「皆調子はよさそうですね」

「ええ。やはり目標が定まったことで、皆さん燃えているようです」

その光景を頼もしいと思いつながら藤代はコートの外で満足げに頷いた。隣では東雲が記録をつけている。

最近では白瀧をPGとして実戦形式の練習に参加させることが多くなった。理由としては白瀧にとって不足している司令塔の経験を積ませることにあった。

いくら並外れた技術と豊富な試合経験があるとはいえども不慣れなポジションでは長続きはしない。だからこそ視野を広げさせるため、より確実なゲームメイクを染み込ませるためにPGのポジションを慣れさせていく。

チームも彼がよく知っている一年生メンバーで固めた。一、三年生と比べると総合的な能力では劣っている一面もあるが、ポジションに適している一芸に秀でた強さを持っている。加えて白瀧との距離感も非常に近い。

そういった事情があつて今の形に落ち着いた。結果司令塔として白瀧は着実にステップを踏んでいく。

「IHでも白瀧さんをPGとして起用することはあるでしょうから。今のうちに適正を強めておかなければならない」

全国で通用するのだろうかという不安はあつた。しかし藤代の想像以上に白瀧の適応が早かつた。

嬉しい誤算に頬を緩め、藤代は全体へ指示を出していく。選手達の立派な成長。チームを引っ張る身としてこれほど嬉しく思うことは多くないだろう。

全体の練習が終わると選手達はそれぞれ個人練習へ移る。

ドリブル、打ち込み、走りこみなど内容は様々だが、少しずつ練習の時間は以前よりも増えていく。全員が迫る全国を前に緊張感を覚えていくということだろう。

トレーニングルームでもそれは同じであつた。現在そこでは白瀧・光月・神崎・西村・本田のベンチ入りした一年生五人が練習に励んでいた。橙乃も場所を同じくしサポートに徹している。

「……お前、マジでおかしいんじゃないの？　どんなパワーしてんだ

よ」

「そうかな？ まあ力は自慢だからね。これくらいはやっていかない」と

「くっそ、敵わないってわかるから余計に腹が立つ！」

すまし顔で自分よりも負荷が大きいトレーニングマシンを軽々とこなしていく光月。そんな彼を苦々しく思いながら本田も黙々と力を腕に込めていく。

お互い同じ上腕のトレーニングを行っているが、元々の力の関係で同じ負荷で行うわけにはいかない。それを理解して本田も対抗心は仕舞いこみ、身に合った負荷で続けていた。

「そーいやIHの組み合わせ発表っていつだっけ？」

「たしか来週か再来週だったと思いますよ。大体のところはもう決まっているし残っている激戦区は東京くらいじゃないですか？」

「そっかー。じゃあもうすぐ対戦相手決まるのか。ワクワクするな」

「ええ。できれば序盤のうちには『キセキの世代』とは当たりたくないですけどね」

「確かに。ただ四校もあるのにそんな綺麗に分かれてくれるものなのか。……しかし西村、お前体かなり柔らかいんだな」

「柔軟性は昔からあったんですよ。開脚して体を前の床にくっつけることもできますよ」

「うわ。お前もそういうのでいいのか。俺は体固いから羨ましいよ」

神崎と西村は二人共にストレッチマシンでストレッチを行っていた。

途中、神崎が西村の柔軟性に驚くこともあったが、こちらは衝突することなく会話も弾んでいる。性格が厳しいわけでもなく、ガードコングビでもあるので意外と相性は悪くはなかった。

「ほーら白瀧君。今のままじゃあ到底強くなれないよー」

「ぐっ、わかってる。だからこうして……ずっと体幹を鍛えようと……ハアッー！」

「はい。腹筋五十回終了。それじゃあ次背筋五十回。それも終わったらダイアゴナル行くよ」

「う、ん。橙乃わざわざありがとうな。でも少し休憩を」

「まだ8セット目だよ？ 目標の10セットまで目前、終わったら休憩を挟むんだから頑張ろう？」

一方、白瀧は橙乃の協力を得て体幹のトレーニングに励んでいた。予想以上の厳しさに藤代以上の厳しさを感じつつ白瀧は上体を起こしていく。

逃げようにも体の上に橙乃が乗っている為に逃げることもできない。最も白瀧の性格上、許可をもらえない限り逃げることはしないのだからこの考えは意味のないものだった。橙乃の笑顔を前に頷くことしかできない。

ある意味自主練習の中で一番厳しいメニューである。

「でもよかったの？ 本当なら小林さんと上半身の強化をしていたのに……」

「え？ あの、それを……今、聞くんですか？」

「うん。はい、15秒経過。手足を入れ替えて」

ダイアゴナルの最中、橙乃は今まで行っていたトレーニングを減らしてまで体幹を鍛えることに専念してよいのかと白瀧に尋ねる。

体を入れ替え、トレーニングに励みながら白瀧は彼女の疑問に答えた。

「藤代監督に体幹を鍛えたいって言ったら、グツ。それならIHまではこっち、を、優先してやりましょうと言われたんだ」

「藤代監督が？ 意外」

「ああ。その方が可能性が高い、ってことらしい。やつぱり全国で通用する可能性が高いものを選んだってことじゃないかな？」

「ふーん。監督も何か考えがあるんだろうけど。あつ、15秒経った。次腹筋9セット目だよ」

終了の合図で白瀧の体が崩れ落ちる。多少の疑問はあったものの橙乃は深く聞くことはせず、次へ向けて彼の足を押さえつけた。

終盤になろうとも橙乃が甘やかすということとはなかった。

ついに10セット目が終わり体幹トレーニングから解放されると、白瀧はようやく体を休めることができた。

「あー、しんどい。やることが多いから仕方がないことだが……」

「お疲れ。お前でも相当辛そうだな」

「ああ、ありがと。鍛える点が多いからな。それに上半身の強化は置いておくにしても、他にもやらなければならぬことがあるから仕方がない」

「やらなければならないこと、ですか？」

床に座り込み水分補給をする白瀧に神崎がタオルを投げつける。

額にかいた汗を拭い、白瀧は自分で掲げた課題の重さを改めて思い知っていた。

傍から見ても彼の負担はよくわかる。にも関わらず体幹トレーニング以外にも別に何かあるのかと西村は首を傾げると白瀧は大きく頷いた。

「できればもう一つ、〃キセキの世代〃と戦う為に武器がほしいと練習している」

「え？ ジャンピングシュートの他に、まだ他にもやろうってのか？」

驚きを含んだ神崎の問いに白瀧は頷く。

「でも間に合うんですか？ 本番まで日が少ないのに」

「いや、元々これは中学の時から考えていたことだ。」

ジノビリステップもそうだったけど、偶々先に実戦レベルまで身についたから試しただけ。練習は前からしていたんだよ」

本当にできるのかと言った風な表情の西村に白瀧は笑顔で返す。

元々新たな技については中学の頃からジノビリステップと同様に練習していたものだった。だがジノビリステップの方が白瀧は身につくことが早かった為に実戦で見せていたにすぎない。

「〃キセキの世代〃を相手にするんだ。手札は多いに越したことはない。なんととしてもIHまでには身につけないと……！」

握っているボトルに力が籠る。

「〃キセキの世代〃の強さをよく理解している白瀧だからこそ抱く感情だった。

このままでは太刀打ちできるはずがない。勝利するには、誓いを果たすには更なる強さが欲しい。

だから今は立ち止まる時間なんてないのだと自らの心に鞭を打つ。
(……………いつ、本当に大丈夫かよ?)

その白瀧の姿を前にして神崎の表情が不安に染まる。
(確かにIHまでの日数は長くないけど。けどわかっているにしてもなんか、それとはまた別の焦りがあるような……………)

まるで日程とは別の何かに急かされているようだった。少なくとも神崎にはそう見えて、「オーバーワークにならないよう、後で光月達にも相談しておくか」と判断する。

万が一白瀧に何かあれば大仁多にとっては大きな痛手だ。現状彼は「キセキの世代」に対抗できる数少ない戦力。エースの彼が離脱するようになることになれば士気にも影響が出る。

何よりもチームメイトとして無事でいて欲しい。たとえば「キセキの世代」と戦って、そして勝ったとしても、全員が揃っていないければ嬉しくはないのだから。

「……………いよいよ近づいてきたな」

「ああ、俺達の集大成となる大舞台だ」

体育館の一角で佐々木と松平がシユーティングを行っていた。

さらに近くには山本と小林のベンチ入りしている三年生が集まっている。

彼らは最終学年。同じ時に入部し、今まで共に戦い抜いてきた歴戦の猛者だ。

「去年はベスト4まで行ったけど、今年はどこまで行けるかな、つと！」

「最後まで行くさ。今度こそな」

これは決して驕りではない。小林はそう本気で思っている。

そうでなければここまで勝ち抜いてはいない。昨年も勝利を信じ続けた結果全国ベスト4まで残った。ならば今年はそれ以上の結果を、優勝を掴み取るのだと。

ボールがリングを射抜いたのを見届けると山本は小さく息を漏らした。

「わかってるよ。正直、去年のWCは本当に悔しかったからさ」

「……昨年の三年生が引退した後の全国で、ベスト4から一転。秀徳に敗れてベスト16敗退」

「おかげで俺達の代は小林くらいしかいないって言われたときもあった」

昨年の夏こそ大仁多は勝ち残った。しかし上の代が引退した後の大敗により小林の代は所詮小林だけであると一部では話があった。

「そんなことは……」

「いや、別に良いんだよ」

そんなことはない和小林の否定の声を遮って、三人は続けた。

「だからこそ、このIHで勝ちたいんだ。俺達の代でそう思いこんでいるやつらの鼻を明かすんだよ」

「そうだ。まあ俺や佐々木はベンチだけどお前達と最後まで戦って引退るのが一番いいからな」

「いつでも引退する覚悟はできている。でも、やっぱり最後までくらはきっちり決めようって」

最後の全国大会。出場できる・できないは関係なく、このチームで頂上まで上り詰めるという最上の結果を残して引退する。まさに理想的な目標だ。だからこそ理想を理想のまままで終わらせたくはない。

侮られた世間の声を見返したい。その上で納得して引退したい。彼らが抱いている共通の思いであった。

「できますよ。今の皆さんなら」

そんな彼らの声を後押ししたのは藤代だった。東雲を伴って彼らの元に歩み寄る。

「監督……」

「私としても皆さんは特別な方だ。昨年のベスト4まで勝ち残り、翌年のIH。ようやく昨年のリベンジを果たせるわけですから」

「負けたらすぐ引退。そうわかっているけど、最後はいつもより長い夏にしましょう。負けてではなく勝って引退と言えるように」

全員が揃って頷いた。

I Hの厳しさは知っている。しかしそれよりもこのメンバーでずっとバスケットをしたいという思いの方が強い。

「……勝とう。最後の夏を、勝利で締め括ろう」

たとえどのような強敵が立ちまはだかろうとも倒してみせよう。そう思いを込めて小林は笑みを深くした。

「司令塔としても主将としても小林さんのことは頼りにしています。

松平さん、佐々木さん。お二人もレギュラーに選ばれずともベンチで腐る事無くチームを支えてくれた。本当に感謝しています。

東雲さんはマネージャーとして陰からサポートし、試合ではアシスタントコーチとして引っ張ってくれた」

藤代が最後の戦いへ挑もうとする3年生に声をかけていく。

「そして山本さん」

「はい」

「副主将として常に小林さんをサポートし、チームを活気付けてくれた。た。

そして背番号6を背負って立派に戦ってくれた」

「……それほどでもありませんよ」

「あなたに背番号6を託した理由、覚えていますよね？」

「忘れられるわけじゃないじゃないですか」

「ならば大丈夫です。全国でも活躍を期待しています」

最後に山本に、期待と信頼を込めて激励する。

多くのチームでは5番を背負うことが多い副主将。その中で副主将の山本が6番をつけているのには意味がある。それを理解して戦うのは気負う面が大きいだろう。

だが山本はその重責に沈む事無く、副主将としても結果を残している。

ならばこのまま世間を見返してくれと藤代は言い、山本が応えるように頷いた。

「皆さん、後悔のないようにできる限りのことをしましょう。

ここまでついて来てくれてありがとうございます。そしてもう一

度、IHという全国の舞台で結果を残しましょう」

『はい！』

最後に藤代がそう締めて、その場を後にする。

ここから先は生徒達だけの方が良い、そう判断してのことだった。事実、彼らは最後だという緊張感はなく笑顔を浮かべている。

今の笑顔を引退の時にもさせてあげたい。監督として願い、藤代は歩みを進めていく。

「優勝、しないとな」

「……ああ」

「全国の最終戦で監督や小林さん達を胴上げさせてやろうぜ」

それを見ていた二年生達、次世代の選手達も強く願う。

先輩達を最高の形で見送ろうと。夢の実現の為、再び練習に戻っていった。

「士気は上々。冬のマイナスのイメージはない。となると後は」

「……藤代監督！」

「うん？ おや、どうかしましたか白瀧さん」

監督室に戻る最中、藤代が今後の方針を考えていると白瀧に呼び止められた。

何か相談か、いやそのような顔つきではない。

用件について像もつかない藤代が白瀧の続きを待つと返答はすぐに来た。

「あの時の質問に答えていませんでしたね」

「質問？ 何のことでしょうか？」

「県予選前、監督に『怪我は怖いですか？』とそう聞かれた時のことです」

そういえば確かにあの時の返答は受けていなかったと藤代は納得し、相槌を打った。

思い出してもらえたと理解すると白瀧は彼の意志を伝えるべく続ける。

「……俺はもう何も恐れない。もう二度と怪我が怖いからと逃げたりはしません。だからIHまでの間、どうか俺をもっと鍛えてください

！」

もう弱さは見せないという大仁多のエースの意志の表れだった。まだ恐怖があるだろう。だが勝利の為に一步を踏み出した。

「そうですか。ならば更なる活躍を期待していますよ」

「はい。勿論です」

その言葉を聞き、藤代は満足だった。一つの質問を解決させると二人は別れていく。

選手達はそれぞれ結論を出して成長している。

自分も彼らに応えようと、藤代は願いを叶える勝利を手繰り寄せるべく思考を巡らせた。

そして練習の日々は続き、金曜日。

全ての授業が終わり放課後を迎えるが、この日の大仁多は少し騒然としていた。

「……なんだろう。今日はいつもとより廊下が騒がしいな」

「そういうえばさっきうちのクラスのバスケ部員が急いで教室を出ていききましたよ」

「へ？ 今日練習以外に何かあったっけ？」

予定ならばいつも通り練習に励むだけのはず。それなのに何故身内に理由があるのかと神崎は西村の呟きに首をかしげた。

「正確に言えば、偵察班の部員達だ」

「偵察班？ ということはどこかで試合か？」

「ああ。今日は東京都の予選決勝リーグの初日だ」

「え！ 東京、ってことは！」

白瀧の説明で事情を悟り、神崎の表情が驚愕で染まる。白瀧もゆつくり頷き、彼の考えを肯定した。

「『キセキの世代』のエース、青峰を擁する桐皇学園。三大王者の一角・泉真館。東京都の古豪・鳴成。そして秀徳を破った誠凜高校。今日まで勝ち残った四つの強豪が一堂に会する」

東京都代表の3枠を巡った戦いの幕開けなのだ。

おそらくどこが勝ち残ろうとも全国でも強敵として立ち塞がることが予測される。だからこそ大仁多も偵察部隊を東京へ向かわせ、敵戦力の分析を狙っていた。

「だから今日は偵察部隊に所属する部員達は練習には参加しない。

試合を観たい選手もやすんで良いと監督は言っていたが、先輩達は練習に参加するようだ」

「なら俺達も練習だな。試合を録ってもらえるなら練習したほうがよさそうだ」

「そうですね」

「でも要は、観に行きたいんじゃないのかい？」

「キセキの世代」との対戦を、そして旧友との再会をおそらく誰よりも望んでいる。一刻も早く彼らの姿を見たいことだろう。それなのに行かなくてもよいのかと光月の当然の呟き。だが白瀧は彼の言葉に反発した。

「俺だって当然行きたいさ。だけど、行くわけにはいかない」

「は？ 何でだよ？」

「今日の試合は桐皇と誠凛だ。たしかに青峰をはじめ見ておきたい選手は多い。」

だが、今誠凛の試合を観に行ったら俺は……冷静でいられる自信がないんだよ！」

怒りに満ち満ちた声だった。今にもあふれ出しそうなほど強く激しく、本田はそれ以上口を挟むことができなかった。

（こいつ……秀徳が、緑間が負けた相手を見ると感情を抑えきれなくなるってことかよ）

再戦を誓っていた友を破った誠凛に対する白瀧の怒りは相当なものだった。

白瀧も己の感情を自覚している。だからこそ観には行かない。行くことはできない。ここで自分を見失うということは一番愚かな行為だと理解しているから。本能を理性で抑えこみ、最善の選択を選ぶことにしたのだ。

「……ただ、桐皇学園は大丈夫ですかね？ 予選で青峰さんは決勝を除いて全部遅刻しているという話ですけど」

これ以上この内容を話さないほうが良い。本田達は結論付けるが西村は青峰に抱いている不安を口にした。

誠凛のことを思い出させてしまいかねないものだったが、白瀧はかえって冷静な思考に戻ることができた。

「……青峰、か」

「ええ。ひよつとしたら今日の試合も出ない可能性が」

「それは、ちよつと嫌だな」

誠凛との試合を通じて緑間は変わることができた。ならばこの試合は青峰にとつても何かの切欠になるかもしれない。

少しでも可能性があるのならばその切欠をみすみす失わせてはならない。

白瀧は制服のポケットへ手を伸ばし、携帯電話を取り出すと旧友の番号へかけ始めた。

「あー、ダリー」

桐皇学園高校の屋上。放課後で人影が少なくなった空間に青峰の姿はあつた。

これから決勝トーナメントが始まるうというのに気にする素振りは見られない。むしろ何も知らないと感じさせるほどにだらけきっていた。

もしも緑間との対戦であつたのならば彼も今頃胸を躍らせて集中力を高めていただろう。

だがその相手は敗れた。彼らを倒した誠凛という己の消えてしまった闘争心を取り戻せる相手とは思えない高校との対戦は、彼のやる気を下げることになってしまった。

どうせ結果は同じだ。己の勝利は決まっっていて、燃え滾るものがない。

ならばもう少しやすんでいようと青峰の体から完全に力が抜け、意

識が消えかけていく。

するとその彼の意識を取り戻すように青峰の携帯電話の着信音が鳴り響いた。

「ちっ！ 一体誰だよ、こんな時に！」

眠りを妨げられた怒りを隠す事無く、着信相手の名前すら確認せず、乱暴に応答のボタンを押す。

「誰だよ!? 俺は今から寝る……」

『成程。やっぱり試合に向かっていているわけではなさそうだな』

「……あ？」

懐かしい声。だが今かかってくるとは思えない相手の声が響く。

一度携帯電話を耳から離して相手の名前を確認する。やはり携帯電話は『白瀧要』という主の想像を肯定していた。

「何だよ？ お前から電話とは珍しいじゃねえか」

『かけるかかけないか迷ったんだけどな。……今日の試合、行かないのか？』

手短に本題を白瀧は尋ねてきた。

試合というのは誠凛との試合で間違いないだろう。ならば青峰の答えは決まっていた。彼の質問を笑い飛ばし、吐き捨てる。

「つまらねえからな。緑間ならまだしも、火神とかいうヤツじゃあ足りねえよ。テツがいるとしても、俺抜きの桐皇に勝てるかどうかさえわからない相手とやる気には」

『青峰』

現状の不満を口にする青峰を、名前を呼ぶことで彼の先を遮った。何か文句でもあるのかと言いつ返してやろうかと思っただが、白瀧はそのような会話をするためにこうして電話をかけてきたわけではない。

『試合に出てくれないか？』

「はあ？ 何でお前がそんなこと頼むんだ？ さつきにでも頼まれたか？」

『いいや。俺の個人的な願いだ』

「わからねえな。どうして誠凛と俺を戦わたい？ 俺のデータが欲しいってか？ 生憎だがそんなんじゃない俺には勝てねーよ」

『お前が変われるかもしれないからだ』

青峰の愚痴が止まる。

『変わるかもしれない』。それはすなわち青峰の願いが叶うかもしれないということだ。

『俺に勝てるのは俺だけだ』と考える一方で、自分と対抗できるライバルを青峰は求めていた。そのライバルが現れるのかもしれない。そんなことはありえない。しかしもしも本当だとしたら無視できる話ではない。

「……火神がそうだったのか？」

『緑間を倒したんだ。可能性はある』

「ハッ。テツがいなければ無理だったんだろ」

『そうだな。だが黒子の影を活かしているというだけでも素質は十分だ』

ありえない、そう青峰は断じて白瀧は引きさがらない。

「おい白瀧」

『なんだ？』

「テメエは火神に俺を倒させようって考えてんのか？ お前は俺に勝つことを諦めたってのか？」

それがまるで他力本願のように感じられた。

『青峰より強い存在』という目標を自分では叶えられないから他人に頼もうと。まさかお前がそのような軟弱な選手になってしまったのかと、青峰は問う。

『そんなわけないだろう。だが、青峰。お前は言っていただろう。ライバルが欲しいと』

「ああ」

『だから、少しでもお前の可能性を広げたい。』

俺はお前のライバルと呼べる存在ではなくなってしまったけど。だからこそ、少しでも早くお前と対等な存在を見つけたたい』

「……それで火神か？」

『ああ。たしかにあいつも他の選手のように諦めるのかもしれない。それでも決めつけないでくれ』

もう信じることさえ辛い。青峰の思いがわかっていいる上で白瀧はもう一度頼む。どうか可能性を捨てないでくれと。

「チッ！ たたくさつきといい、どいつもこいつもうるせえな。」

テメエが全国決めたからって俺がお前の評価を変えたとも思っただのかよ?」

『……少なくとも、ようやくお前達と同じ舞台に立てたとは思っている』

「ハッ！ 白瀧、馬鹿かテメエは。変化なんてない、なにも変わってねえよ」

『そう、か』

決して驕っていたわけではない。それでも全国を決めたことで白瀧はかつての仲間になんか近づくことができたとは思っていた。

だが何も変わっていないという青峰の返答を受けて白瀧の表情が曇る。

少しでもライバルとして認めてもらえれば、話を聞いてもらえるかもしれない。そう考えてのことだったが、駄目だったというのか。

「いいぜ。出てやるよ」

『……………え?』

「出てやるって言ったんだよ！ これで火神が雑魚だったら許さねえからな！」

『青峰。……ああ！ その時は、全国で俺が楽しませてやるよ!』

「……………言ってる」

青峰が白瀧の頼みを承諾し、白瀧は笑みを零した。

駄目ではなかった。やはり少しは見直してくれたのかと嬉しさを覚え、全国での再会を約束し、二人は通話を切った。

「本当のバカか。俺以上のバカだろあいつは」

一人、青峰が空に向かって呟く。それは白瀧に告げることができなかった彼の本音だった。

『ライバルと呼べる存在ではなくなった』だと? 何もわかってねえよ」

そんなことはない。変わっていないというのは『ライバルという存

在に戻れていない』ということではなく、『最初からライバルという存在にお前はあてはまっていた』ということの意味していた。

それを理解せず、まるで自分を格下のように思い込んでいる白瀧に、青峰は精一杯の侮蔑を吐き捨てた。

「あの時からずっとそうだったじゃねえか。お前は……俺達は」

屋上から立ち去る際に青峰は昔を懐かしむように、かつて白瀧達と過ごした帝光時代の記憶を思い出していた。

——黒子のバスケ NG集——

「でも間に合うんですか？ 本番まで日が少ないのに」

「いや、元々これは中学の時から考えていたことだ。

ジノビリスステップもそうだったけど、偶々先に実戦レベルまで身についたから試しただけ。練習は前からしていたんだよ」

本当にできるのかと言った風な表情の西村に白瀧は笑顔で返す。

元々新たな技については中学の頃からジノビリスステップと同様に練習していたものだった。だがジノビリスステップの方が白瀧は身につくことが早かった為に実戦で見せていたにすぎない。

「『キセキの世代』を相手にするんだ。手札は多いに越したことはない。なんとしてもIHまでには身につけないと……あっ！」

握っているボトルに力が籠る。しかし激情のあまり力を込めすぎてしまったのだろうか。ボトルが変形し、スポーツドリンクが飛散した。

「……白瀧君」

「あ、いや、その、橙乃さん。わざとではない、です」

「片付けは良いから、ひとまず外周走ってきて。30周くらい」

「30!? いや、もうこんな時間に」

「返事はどうしたの？」

「行ってきます！」

「ダッシュね」

「はい！」

その夜、泣きながら走っているエースの姿が目撃されたとか。

第五十六話 ライバルの誓い

——その二人を止められる者はいなかった。

「くっ。来るな……来るな——!!」

たった一人、唯一ゴールに戻ることが相手校のガードの選手。幾度も彼らの速攻に苦しめられた彼の目にはもはや恐怖しか映っていなかった。

彼の叫びも虚しく二人のスコアラーが迫り来る。

銀髪のドリブルをしている選手が先に突出する。自分で決めようという意志が現れた動きに、すかさずチェックに出るがそれを見た彼は横へバウンドパスをさばく。

「ぐっ!?!」

「よっしやあ! ナイスパス白瀧!」

「ぶち込め。——青峰!」

パスを受けた青髪で色黒の少年、青峰は力強くリングにボールを叩きつけた。

白瀧と青峰。帝光中学入部早々に一軍入りした二人は瞬く間に頭角を現した。

「来たぜ、これで二十得点目!」

「相変わらずだな、本当に」

「へへっ」

「ははっ」

二人は笑みを浮かべて拳を交わす。

恵まれたスピードを活かした彼らの速攻はDF不可能のオフフェンスだった。

時には敵を引き付けてパスを出し、時には自ら得点を決める。それはまさに理想の連携とよべる速攻の形であった。

帝校バスケット部に入部早々に一軍入りという異例の事態を引き起こ

した五人。

しかし同じ学校の出身というわけでもなく、最初からそれほど親しかったわけではない。少ない同僚ということと接してはいたものの親密と呼べるほどではなかった。

その中で最初に交流が深くなったのは実は青峰と白瀧の二人であった。

「おい、お前！ 練習見てたけどやっぱりやるな。なあ、この後1on1やろうぜ！」

最初に声をかけたのは青峰の方であった。

二人はフォワードのポジションで同じスコアラーとして積極的に得点をあげていき、ゴールを狙っていく似た立場の選手。故に青峰は他の一年生の誰よりも白瀧に注目していた。

「ああ、いいよ。俺も早めにチームメイトと戦っておきたかったし。

……俺は白瀧。白瀧要だ。よろしく！」

「おう！ 俺は青峰大輝だ。じゃあさっそくやろうぜ！」

実力はほとんど拮抗していた。並外れた突破力と得点力を持つ二人の戦いはお互い譲る事無く、どちらも大きく勝ち越すことはできない。

だが中々勝利を収めることができない中でも二人は笑みを浮かべていた。

「今度こそもらう！」

「甘えよ、白瀧！」

突破を許したものの白瀧はすぐさま追いつき、青峰のシュートコースを塞ぐ。

だが青峰は白瀧の動きを読みきり、空中でボールを逆の腕に持ち替え、手首のスナップだけでリングへ撃っていった。ボールがリングに吸い込まれていくのを見届け、白瀧は驚愕し青峰は拳を握り締める。

「ダブルクラッチ!？」

「っしやあ！ 今度は俺の勝ちだ！」

「こんなのも出来るのか。……面白い！」

全力でぶつけ合い戦うことができる存在はお互いを刺激すること

となった。

競い合う仲間。連携もよく二人はよきチームメイトでありライバルであった。

その後も二人は勝負こそするものの大きな衝突はなく、練習の後にはよく1on1を繰り返していた。

勝敗は問題ではない。対等の勝負を、純粋にバスケットを楽しむ好敵手の存在に、二人は満足していた。

そして二人の関係が良好であった理由は何もバスケットだけが原因ではなかった。

「おい白瀧。今回のマイちゃんの水着写真やベーズ。ほらこの胸！」

「……勘違いするなよ。俺は別に胸に引かれたとかそういうのじゃ」

「そんな変な意地張らなくていいじゃねーか。この前だってお前さっきの揺れているのを見て目を見開いていたくせに」

「ちよっ!?! 違っ、おい青峰。まさか桃井さんに言っていないだろうな!?!」

焦りを感じられる問いかけに、青峰は『さてどうだったかな』と曖昧に答えて写真集を眺めていく。

グラビアアイドル、堀北マイ。一度青峰が彼女の写真集を部室に持ち込み、それを白瀧に冗談半分で見せた結果、白瀧の健全な心は揺れ動いた。

共通の趣味を持ち合わせたことも二人の関係を強固のものとする一因となった。

さらに桃井から青峰への差し入れをこっそりと白瀧に処理してもらっていたこともあるという裏事情もあり、二人は月日が経つのと比例して仲を深めていた。

だが彼らの世代が二年生に進級し、新入部員も入部して少し日が経過したころ。少しずつ、だが確実に異変が生じていった。

「チツ!?!」

(くそっ、掴まった!?!)

「今日は俺がもらった!」

「……………のっ!」

いつもと同じようにlonelyに興じる二人。

青峰の攻撃。ドリブル突破を見切られ、白瀧を振り切れぬ。フェイクにもつられず次の動作へと繋げることが難しい。

すると青峰は強引にシュートモーションに入る。あまりにも正直すぎる動きに白瀧がブロックに跳ぶ。

だが青峰は上体を強引に後ろに倒し、彼のブロックの上を通り越すようなループシュートを放った。

「ハアッ!？」

シュートミス。そう感じられる動きであるが、ボールがリングを潜り抜けていた。

フォームなど関係なしにシュートを沈める青峰に、白瀧は驚きを隠すことができなかった。

「ちよつ、何だよ今の!?! 何であれが入るんだ?！」

「ハハハッ。どうだ? 最近結構調子よくてな。ある程度体勢が崩れても、感覚でシュート撃てるようになったんだぜ」

「……お前には驚かせてばかりだな。よし、じゃあ次は俺の番だ!」

友の無茶苦茶な考えに呆れを抱くも深くは考えることなく攻守を入れ替え、再び勝負が過熱する。

この時はまだ二人の関係は殆ど変わっていないかった。

だがその戦いを境に、徐々に青峰の勝率が高くなっていった。

「ぐっ!?!」

「甘えよー!」

白瀧のドリブルを看破し、青峰がボールを奪い取る。

オフエンスだけではない。ディフェンスでも青峰が圧倒していく。

対等のライバルと日々戦うことにより、青峰のバスケの才能が開花した。

「くっそー! またやられたか! 本当最近お前動きが別人みたいになっただな」

「……………」

「おい、青峰? どうした?」

「あ? あ、ああ。いや何でもねえよ」

「そうか？」

注意が散漫し、青峰は白瀧の言葉を聞き逃してしまう。

——何時からかもはや白瀧が相手でも負けることはなくなっていた。

「なあ青峰。今日もこの後1on1やつていくか？」

ある日の練習終了後。白瀧は解散と同時に青峰に声をかけた。

もはや習慣とも化していたその誘いに、しかし青峰は表情を曇らせた。

「あー。……いや、ワリイ。実は今日この後ちよつと家の用事があつてな。先に抜ける」

「お？ そうだったのか。わかった、お疲れさん」

「ああ、じゃあな」

快く送り出す白瀧とは対照的に青峰は心苦しく思いながら体育館を後にした。

嘘だった。本当は用事なんて何もない。あつたとしても青峰のようなバスケ馬鹿ならば誘いを受けた時点で頭から抜け落ちた可能性が高い。

(……駄目だ。戦ってもどうせ結果は変わらねえ)

彼が断った理由は、白瀧との1on1をつまらないと感じるようになってしまったからだだった。

青峰は入部当初からは想像出来ないほどの強さを得た。すると白瀧では相手にとって不足だと感じるようになった。

接戦を演じてもそれでも最終的には青峰が必ず勝ってしまう。それがわかってしまったから。

バスケットが楽しいから、勝負が面白いから青峰はバスケットを続けている。だがそれを感じることができなくなってしまうのは嫌だ。

青峰は自分に言い聞かせるように足を進めていく。

「……あれ？ どうしたんすか、青峰っち？」

「あ？」

「こんな時間に珍しいっすね。今日はもう帰宅なんすか？」

そんな青峰に一人の選手が声をかける。

二人の関係は完全に変わろうとしていた。

その後も白瀧は青峰に何度か誘いをかけた。しかしながらこの数日間、青峰はずっと今まで好きであったはずのlonlの誘いを断り続けた。

そんなある日のこと。

「……あれ？ 白瀧さんじゃないですか？」

「うん？ えっと、君は？」

練習後。白瀧は二軍が使っている体育館へ向かっていた。

するとその途中で茶髪の生徒に名前を呼ばれて立ち止まる。どこかで見覚えがあるものの中々名前を思い出すことができない。

悪いと思いつつ問いかけると彼は幼さの残る笑みを浮かべて言った。

「二軍の西村です。同じ二年生です。覚えてないですか？ 以前二軍の練習試合の時に白瀧さんが同行したとき、一緒にプレイしたんですけど」

「……ああ！ あの時のか！ ごめんごめん。敬語使うものだから、てっきり後輩かと思っちゃって……」

「同学です！ ……まあ別に大丈夫ですけど。それで白瀧さん、一体どうしたんですか？ そっちは二軍の体育館しかないですけど」

苦笑しつつ西村は先の体育館へ目を向けた。

帝校バスケット部は複数の体育館にわかれて練習を行っており、自主練でもそれは変わらない。それなのに二軍の体育館に向かう白瀧の真意が読めず、首をかしげた。

当然の反応に白瀧も微妙な表情で頷く。

「桃井さんに用事があってね。他のマネージャーに聞いたら、今は二軍の体育館にいると聞いたから向かっていたんだ」

「桃井さんというと、えっとたしか……マネージャーの一人でしたっけ？」

「ああ。赤司——二年の副主将が『次の試合の為に相手校のデータを取ってきて欲しい』という依頼だつてさ」

「……あの。白瀧さんまさかコキ使われているんですか？」

「赤司は元からそういう男だよ。俺に限ったことではない」

脳裏に用事を頼んだ本人の顔を浮かべながら目的地へ近づいていく。

いつも赤司が何かをするには相応の理由がある。それが相手に求めるものの場合、相手は最初はその理由はわからない。終わってから周囲のものが気づく程度だ。

だからきつと今回も何か理由はあるのだろうと思いつつ、白瀧はその目的を達するべく足を速めた。

「お、いたいた」

「ああ。やつぱりあの人ですか」

「そう。情報のスペシャリストだよ」

入り口の先で桃井が立ち尽くしている姿が見えた。

探す手間が省け、白瀧は早々に用事を果たそうと彼女の名前を呼ぶ。

「桃井さん！」

「え？ あれ、白ちゃん？ どうしたの？」

「赤司から伝言です。次の練習試合の日程が決まったので、データを取って置くようにと。これが相手校の資料だそうです」

「そっか。わざわざありがとう」

「いえ。桃井さんこそ仕事を頼んでしまいすみません。……ところで、何で桃井さんがこの第二体育館に？」

白瀧は用事を済ませると、彼女の居場所を聞いた時から感じていた率直な疑問を口にする。

マネージャーである桃井なら今頃他のマネージャーと共に練習の後片付けをしているはず。それなのに今この二軍の体育館にいる理由が思いつかなかった。

「うん。ちよつと二人の様子を見届けたくてね」

「二人？」

「あれを覚えてみる。凄いものが見れるぞ?」

「はあ……」

「何ですかね?」

隣に立ち尽くしていた主将の言葉を受け、白瀧は視線をコートへと移す。西村も横から顔を出し、コートを見た。

「ッ!」

目に映った光景に、白瀧は目を丸くした。

「……青峰?」

口から出てきた名前は、今ここにいるはずのない選手の名前。

だが何度己の目を疑おうとも、今日の前で熱戦を繰り広げている片割れはたしかに彼が今まで共に競い合っていたライバルの姿であった。

(何であいつがここに? だってあいつはもう帰宅したはずじゃ……)

思考がまったく追いついていなかった。

ここ数日は私用があつて忙しく、残ることはできない。青峰の言葉を信じていた白瀧には、とても信じることができない光景だった。

「お前と並び、一軍のスコアラーとして働く青峰。そしてその青峰に負けじと挑み続けているのが——先日二軍に入った黄瀬涼太だ」

主将はそう誇らしげに語り、この勝負を楽しむばかりで何も疑問に感じてなどいなかった。

まるで二人の勝負はずっと前から行われていたかのような説明に耳を疑い、白瀧は無意識で口を開いた。

「……いつからですか?」

「ん? 何か言ったか?」

「いつから青峰は、黄瀬涼太と練習後に1on1をするようになったんですか?」

「俺も練習を常に見ているわけではないから、詳しいことは知らないが……」

「あ、それなら俺が知っていますよ。黄瀬さんが青峰さんに声をかけて一緒にバスケするようになって。たしか、六日ほど前のことだった

かな？」

「……そうか」

彼が知りたかった答えを西村が的確に教えてくれた。

六日前。それはすなわち青峰が白瀧の誘いを断り始めたのと同じ日だった。青峰はその日からずっと黄瀬との戦いを繰り返していた。知らなかったのは白瀧のみ。親しいと思っていたはずの相手のことをまったく知らないでいた自分が馬鹿らしく感じられた。

(しかも、その相手が最近噂になっている黄瀬涼太とはな)

つい最近緑間が話していたことを思い出す。バスケットを始めたばかりの初心者が二軍で活躍しているという話を。

だが、これが初心者とレギュラーの勝負だと言って一体誰が信じるだろうか。

とても初心者とは思えない動きのキレで黄瀬は青峰のオフセンスに立ち向かっている。

まだ自分と青峰が戦っているという嘘の方がよっぽど信じることができそうだった。

(何でだよ、青峰?)

見ている者まで心躍るような戦いが繰り返されているというのに、白瀧は心が何かに締め付けられるかのような痛みを覚えた。

(何でそんなにも楽しそうに笑っているんだよ)

黄瀬は必死な表情だが、青峰は笑みを浮かべていた。まるで待ち望んでいた相手との戦いを喜ぶように。

最近、白瀧とのバスケットでは笑みが見られなかったのに。むしろ終わった後に寂しそうな表情さえ浮かべていたというのに。

(何でなんだよ、青峰……?)

苦しみが治まることはなかった。これ以上白瀧は見えていられず、元来た道へと振り返った。

「……では桃井さん。後はお願いします」

「え? 最後まで見ていかないの?」

「俺もこの後用事があるので。主将、失礼します」

「えっ、白瀧さん?」

止める声が聞こえないのだろうか、白瀧は逃げるように体育館を飛び出した。

思わず視界が歪む中、迷いを振り払うかのように全力で走る。

(お前はもう、俺と戦ってはくれないのか?)

俺はもう、お前と共にバスケットをすることはできないのか?

俺達はもうライバルと呼べる立場ではなくなったというのか?

本当にそうだと言うのか? ——青峰!!)

己には青峰と対等の立場である資格がないのかと、自分に問いかけながら。相手の領域に達することができない己の無力を責めながら。

「あ?」

「どうかしたっすか、青峰っち?」

何かに気づき、青峰はドリブルを続けながら体育館の入り口へと目を向ける。

「今、そこに誰かいなかったか?」

「へ? 入り口っすか? 今いるのは主将とマネージャー、それと二軍の正PGくらいっすけど」

「いや、多分違う。他に誰かが……まあ、いいか」

立ち去ってしまったならば余程大切なことではないだろう。

そう結論付けて青峰は再び黄瀬との対決に頭を切り替えていく。

……もしもこのとき青峰が違う選択肢を選んでいたらならば、未来は変わっていたのかもしれない。

「はい、青峰君」

「おう、悪いな」

黄瀬との1on1を終え、青峰は桃井よりスポーツタオルとドリンクを受け取り、疲れを癒した。今だ戦いの熱が残る中、先ほど抱いていた疑問を思い出し、桃井に呼びかける。

「なあ、さつき」

「ん? 何、どうしたの?」

「俺と黄瀬が1 ON 1 やっているとき、誰か体育館に来なかったか？」
「誰かって、何か用事でもあったの？」

「いや特にねえけどよ。ちよつと気になってな」

自分でも何故ここまで気になるのかはわからない。青峰がわからないのだから桃井もわかるわけがなかった。桃井は可笑しなことだと笑いながら今日の記憶を振り返った。

「えつとたしか……副主将の松本さんと、三軍の岸君と林君が主将に会いに来たよ」

「それだけか？」

「ううん。あとは白瀧君が私に資料を渡しに来た」

「なっ!？」

それは出来れば今は一番聞きたくない名前であった。この場を見られたくない相手であった。

嫌な予感は何だだったのかと歯を食いしばり、納得を覚えながら青峰は続ける。

「……ッ。あいつ、何て言ってた？」

『次の試合の為にデータを取っておけ』って赤司君に指示を受けたつて」

「そうじゃねえ。俺と黄瀬のバスケットを見て何て言ってたかを聞いてんだ」

何か皮肉を漏らしていたのならば。不満を口にしていたのならば。

それは絶対に自分が受け止めなければならぬことだ。青峰は白瀧の期待を裏切ってここにいるのだから。

そう考えて青峰は彼女の言葉を待った。

「……何も言っていないよ」

「はっ？」

「白瀧君は何も言っていないよ。私に資料を渡して二人のバスケットを見た後、『用事がある』って言ってどこかに走っていつちやった」

だが、白瀧はそれをしなかった。

裏切りにも似た行為を見たというのに、何も言わなかった。

何も感じていないということか。いや、白瀧はそのような性格では

ない。それ以外だとするならば——何も言えないほど余裕がなかったということだ。

「……そう、か」

「伝えることがあるなら私の方から言っておくよ？」

「いや、何でもねえ」

それは他人に頼んでよいことでもない。桃井の好意を青峰は切り捨てた。

「何でもねえよ」

そして自分に言い聞かせるように、何度もその言葉を反芻した。

「くそっ、くそっ！……くそっ!!」

すでに日が暮れ多くの生徒達が帰路につく中、白瀧はひたすら走り続けていた。

走りなれた外周をペースを考えずにただ闇雲に駆け抜ける。

やがて体力も尽き果て、疲れを覚えてようやく白瀧は足を止めた。

「何をやっているんだ、俺は」

馬鹿らしいと自分で思いながら校門をくぐる。

このようなことをしても解決はしない。心が幾分か晴れると思っ
てやったものの、まったく気持ちは好転しない。完全に無駄な行動
だった。

(ただ疲れを覚えて戻るだけ。本当、どうにかしてる)

早く帰って休もう。結論に至って白瀧は着替えや荷物の置いてあ
る更衣室へ向かう。

「おらー！ さっさと帰るぞさっさきー」

「もう、待ってよ青峰君！」

「ッ!?!」

だが、戻ろうとすると青峰と桃井が共に帰路につこうとしている姿
が目映った。

咄嗟に校舎の物陰に隠れてしまう。

(……思わず隠れちゃった)

今青峰とあつたらまともに話せる自信がない。そのせいかもはや反射で体が動いていた。

二人は白瀧の存在に気づく事無く、会話を続けていく。

「もうちよつと手加減してあげたら？　黄瀬君だってバスケットはまだ始めたばかりなんでしょ？」

「手加減？　馬鹿なこと言ってるんじゃないよ。——そんな余裕ねえよ」

青峰の本音を耳にして、白瀧の思考は停止した。

彼らが校門を出て姿が見えなくなった頃、ようやく白瀧は言葉を発した。

「……なんだ、この感情は」

胸に手を当てて問いかける。

怒りや悲しみ、自責、寂しさ、様々な感情が入り混じった思いの渦に飲み込まれていく。

その複雑な黒い感情を、人は嫉妬と呼ぶ。

月日が流れ、黄瀬が一軍入りすると青峰と黄瀬の勝負は一軍でも行われた。

その期間、白瀧と青峰は疎遠関係になっていた。お互い練習や試合で連携はするものの必要以上の会話をすることなく、どちらも自ら積極的に動かない。

だが彼らの関係は変わらずとも、事態は動いていく。

「ちよつと俺と、勝負してくんないっすか？　——白瀧っち」

「……は？　え、黄瀬。お前今、何て言った？」

「勝負してくんないっすか？　言ったんすよ白瀧っち。スタメンの座をにかけてね」

自信をつけた黄瀬がスタメンの座をかけて白瀧の勝負を挑んだのだ。

青峰に求められるほどの才能を持つ彼は一軍でも成長が止まらない

い。そして白瀧ならば勝てると踏み、挑戦を突きつけるほどになった。

しかしいくらなんでもスタメンは早すぎると周囲からは批判的な声上がる。

そんな中、一人の選手が二人の対戦を後押しした。

他でもない青峰だった。

「別に構わねーだろ、やってやれ白瀧。誰がスタメンなのかをここで示してやれ」

「……いいぜ。やってやろうじゃん」

むしろ——見せてくれと。俺に確かめさせてくれと。

果たして俺のライバルたりうるのは誰なのかを。

期待をよせた言葉に、白瀧も頷くしかなく勝負は成立した。

——こうして青峰は一人の逞しきライバルを得る代償に、一人の心強いライバルを失った。

季節が変わり、夏の大会も終えて次の大会へバスケット部が動き出している頃。

青峰は一人、帝光中学の屋上で昼寝をしていた。

夏の大会で青峰はその実力を惜しみなく発揮した。だが彼の力は圧倒的であり絶望的でもあった。

強すぎるが故に敵に勝ち目がなく、相手は勝負さえ諦めてしまう。チームメイトが相手でもそれは同じであり、青峰はバスケットに対する意欲をなくしてしまい、こうして練習に参加しなくなっていた。

彼が望んでいたものは手に入ることがないとわかっている。ならばもう無駄なことはしたくない。そう考えて青峰は瞳を閉ざす。

それからどれほど時間が経過したのか。青峰の耳に屋上の入り口が開かれる鈍い音が届く。

(……またさつきか。今日は一体どんな小言をぶつけることやら)

毎日のように練習に出るように促す幼なじみの姿が脳裏に浮かぶ。

だが何と言われようと練習に参加する気がない青峰は寝たフリを決め込み、近づいてくる気配にも反応を示さなかった。

「青峰」

呼吸が止まる。

彼の予想を裏切って聞こえてきたのは白瀧の声だった。そういえば最近怪我から復帰したという桃井の情報を思い出す。

しかしどちらにせよ今さら何も変わらない。白瀧の呼びかけに対し、青峰は寝たフリを続けることで無視を貫く。

『お前の気持ちはわかる』とか、そういう冗談は言わない。当たり前だよな。当事者でもないのに、同じ立場になったわけでもない人間に気持ちはわかるはずもない」

きつと青峰が寝入っていると判断したのだろう。白瀧は相手の返答を待たずに続けた。

「だから俺はこう言うよ。」

お前の気持ちはわからない。だけど、それでも俺は……また昔みたいに、お前が皆と共に笑えるバスケットをできるように、強くなつてやるよ」

言葉の一つ一つに彼の願いに対する想いが込められていた。

青峰からは窺えないが、このときの白瀧は届かない領域に対する悔しさと表情が歪んでいた。

「ライバルでなくなった、レギュラーでさえなくなった俺の言葉は信じられないかもしれない。」

だけでもしもお前がまだ俺のことを一人の選手として見てくれているのならば」

そこで白瀧は言葉を区切り、一呼吸置いてから口にした。

「今の言葉だけは、嘘偽りのないものだと思わせて欲しい。必ず果たしてみせるから」

白瀧は後ろへ向き直り、屋上から去っていく。

扉が完全に閉まる音が聞こえてからようやく青峰は寝たフリをやめて上体を起こした。

「……馬鹿野郎」

随分と見当違いなことを言ったものだ、立ち去った白瀧に対してため息を吐いた。

「お前が追いかけて続ける限り、お前は俺のライバルだろうが」
どうしてもっと早くに気がつけなかったのだろう。

どうして力の差があるからと諦めてしまったのだろう。

『諦めた相手との勝負など面白くもなんともない』。そう思っていた。

だが、実際本当に諦めていたのはどっちだ？

自分から切り捨てたはずだった。それでも、こうしている今も白瀧は遠く離れた自分の背中を追ってきてくれたというのに。

「本当に、馬鹿野郎が……！」

その侮蔑は、果たして誰に向けられたものだったのか。

青峰の表情は後悔と、そして一途の喜びが混じった複雑なものだった。

その日も青峰が練習に参加することはなかった。

白瀧は仕方がないと割り切り、一人撃ちこみに励む。

そんな中、一人の選手がジャージ姿で体育館に現れた。

「……おい、白瀧」

「え？……青峰！ どうした、写真集でも忘れたか？」

「バーカ。ちゃんとマイちゃんのは保存してあるよ」

何て声をかければわからなかった青峰だが、白瀧がいつもの調子であることを理解し、笑みがこぼれた。

「なあ……ION1、しねえか？」

そしてあの時応える事ができなかった誘いを、今度は青峰の方から提案した。

結果は、わかりきっていたことだった。

覚醒した青峰が怪我から復帰したばかりの白瀧に負けるはずもない。

一本もシュートを外すことはなく、そして一本もシュートを許すこともなく青峰は白瀧を圧倒していた。

(つたく。何をそんな楽しそうに笑っていやがる)

だがそんな一方的な結果とは裏腹に、青峰の心は充実感に満ち満ちていた。

対面している最中、まるで久しぶりに面白いものを見つけることができた子供のように無邪気に笑い続ける白瀧を見て。

怪我明けという事情だけではない。白瀧は普段の練習の後で疲れているのだから、尚更苦しいはず。動きの激しいプレイを続けて痛みさえあるかもしれない。

自分に追いつこうと体を酷使しているそんな中で、それでも疲労感はずかえず、常に笑みを浮かべている。辛そうな、痛そうな素振りなど一切見せることはない。ただ笑っているのだ。

「ハハッ！ いいぞ、もつと来いよ青峰！」

「……ハッ！ 肩で息をしているのに、口だけは達者だな！」

その事実が心を揺さぶった。『やめろ、そんな風に笑うな』と言いたかった。

(こっちまで楽しいと錯覚しちまうだろうが……！)

気がついたら青峰の表情にも、自然と笑みが浮かんでいた。

そして今。

東京都代表を決める大一番の試合の始まりが近づいていた。青峰が所属する桐皇も決戦に向けてアップに励む。

だがその集団の中に青峰の姿が見られない。ビデオでも見られたあの姿を見間違えるはずもなく、不審に思った火神は桐皇の選手の前へと近づいていった。

「あの、すみません。青峰は今日はどうしたんすか?」

「ああ? あの自己中野郎のことなんて知らねえよ。誰も連絡つかねえんだ」

「はっ!?!」

予想外の応えに火神は凍り付く。

青峰は集合時間になっても現れず、桃井が連絡を取ろうにも電話にさえ出ず、行方不明になっていた。

「すまんのう。うちも今必死で探しとるんやが。……ホント困ったやつやで。ま、気にせんといて。そのうち来るやろ。大方道に迷ったとかそでない可愛い理由やろし」

「誰が道に迷ったって?」

「……おっ?」

今吉が適当に誤魔化そうとすると、背後より低く重い声がかかる。丁度試合会場に登場し、ユニフォームに着替え終わった青峰だった。

「なんや、やっぱり来おったか」

「青峰君! もう、今までどうしてたの! 心配してたんだよ!」

「集合時間にも来ない、電話にも出ない! 舐めてんのかテメエは!?!」

「うっせーな。間に合ったんだからどうでもいいだろうが」

「ああっ!?!」

チームメイトの非難の声を完全にスルーし、青峰は火神へ近づいていく。

「よう。テメエが火神か」

「ああ。お前が青峰だな。黒子から聞いてるぜ。わざわざ倒されに来てくれてありがとよ」

「……成程。度胸だけはあるみてえだな。試合後にもお前がその姿勢を貫いているところを願うぜ」

二人の間で火花が散る。性格が似ているのかお互い遠慮する事無く挑発し、相手を牽制した。

余計な会話は無意味と思ったのか青峰はそれ以上は口にせず自軍の元へ戻っていく。

「大丈夫なんやろな？ 言うとかがもう準備する時間はないで？」
「準備？ ハッ、いらねーよそんなもん」

アップの時間はまもなく終了する。

これで調整ができずに力を発揮できませんでしたなどと言いつきはできない。

気をつかった今吉の問いかけを青峰は鼻で笑った。

「もうとっくに出来上がっているんだ。準備なんてしている時間があるならさっさと始めろよ！」

わかりきっていることは聞くなと青峰は闘志をむき出しにした。

桐皇からこの会場まで青峰は走ってきた。体は勿論のこと、気迫もこれ以上ないほどに満ちている。

負ける要素など微塵もない。後はバスケットを楽しむか否か。

そして試合開始の瞬間が訪れる――。

「それではこれより誠凛高校対桐皇学園高校の試合を始めます！」

誠凛高校 スターティングメンバー

日向順平（二年） SG 178cm

伊月俊（二年） PG 174cm

水戸部凛之助（二年） C 186cm

火神大我（一年） PF 190cm

黒子テツヤ（一年） ?? 168cm

桐皇学園高校 スターティングメンバー

今吉翔一（三年） PG 180cm

若松孝輔（二年） C 193cm

諏佐佳典（三年） SF 190cm

桜井良（一年） SG 175cm

青峰大輝（一年） PF 192cm

——黒子のバスケ NG集——

「もうちよつと手加減してあげたら？ 黄瀬君だってバスケはまだ始めたばかりなんですよ？」

「手加減？ 馬鹿なこと言ってるじゃねえ。——そんな余裕ねえよ」

青峰の本音を耳にして、白瀧の思考は停止した。

「だって……あいつ本気でやってくれたら知り合いのアイドルからサインつきの写真をくれるって言ってるし」

「最、低！」

（青峰……）

その後白瀧は滅茶苦茶涙した。

実際エロ峰だったらこの条件を飲みそうで怖い。

第五十七話 DF不可能の点取り屋

——キセキの世代。

中学バスケット界で完全制覇を果たし、十年に一人の逸材と呼ばれた彼らの呼び名を、バスケットに通じる者ならば知らないものはいない。

その天才達と称された者の中でも、青峰は他の4人と一線を画している。『キセキの世代のエース』と呼ばれているその実力は彼の以前の仲間達も認めていた。

誠凛と秀徳の東京都ブロック予選決勝後、夕食の際に偶然鉢合わせた黄瀬と緑間は火神と会話し、青峰の強さを高く評価した。

黄瀬は『己の目標であり、自分がバスケットを始めた切欠の選手である』と。

緑間も『不本意だが間違いなく最強のスコアラーである』と不満げに口にしていた。

二人とも火神が死闘の果てにようやく競り勝つことができた強者。その彼らでさえも絶賛する猛者の存在に、火神は胸を躍らせていた。

確かにまだ見ぬ実力者に対する恐れもある。だが現に火神はここまで『キセキの世代』を擁する高校二校に勝利を収めた。だからこそ今度もきつと勝てるはずだと心のどこかでそう思っていた。

それは火神だけではなく、黒子を含めた誠凛の選手達、監督のリコでさえも同じであった。今回も火神ならなんとかしてくれる。きつと青峰を越えてくれると。

「くだらねえ。やっぱりこの程度か。……お前のバスケットじゃ、勝てねえよ」

そして彼らは知ることになる。

自分たちの考えの甘さを。『キセキの世代のエース』とまで呼ばれた男の圧倒的な実力を。

スターターとして出場した青峰に対し、誠凛は火神のマンツーマン

で対応しようとしていた。これまで同様、キセキの世代に対応できる
としたら火神のみ。そう判断してのことであった。

「緑間に勝ったって聞いてどんなもんかと思えば。やっぱお前じゃ無理だ」

「なんだと……!?!」

「お前の光は淡すぎる。そんなんじや満足にテツの力を引き出すこともできねえ!」

しかし試合開始早々、青峰はその力を惜しむ事無く発揮した。

ゆつたりとした動作から突然目にも止まらぬスピードで火神の横を抜き去っていく。あっさりドリブル突破を果たした青峰はそのままゴールへ向かう。

水戸部と黒子の二人がヘルプにでるが、青峰はお構い無しにシュートモーションに入る。そして二人のブロックをかいくぐる様に上体を無理やり横に倒し、ボールを斜め上空へと撃ちあげた。

「なっ!?!」

(上体が崩れたままシュートを放っただ?!?)

「なんだよ、そのシュートは?!」

フォームレスシュート
型のないシュート。

本来ならばシュートが上手い選手ほどシュート時のループの高さは決まっており安定しているものだ。しかし物心がついた時からバスケットボールと時間を過ごし、大人に混じってプレイをしてきた青峰のシュートには決まった型がない。異常なほどのボールハンドリングと無限のシュートの形を持つ、アンストップパブルのスコアライDF不可能の点取り屋。

従来のセオリーを無視した青峰のストリートバスケのスタイルを前に、誠凛は手も足も出なかった。

「ぐっ!」

「なんてやつだ……」

「とにかく一本だ! 少しずつ返していこう!」

点差は時間の経過に比例して大きくなっていく。悪くなる戦況下、誠凛の選手達は歯を食いしばるしかない。

今誠凛にできることは逆転の目を摘むまで点差の広がりを抑え、堪

えること。まず一本を確実に決めることだ。それを理解している伊月は慎重にゲームを組み立てる。

(しかし……!)

「君らの考えとすることは百も承知や。けど、させんで！」

「こいつー！」

彼の前に桐皇の主将・今吉が立ちはだかる。伊月の思考を読み取り、彼の行く手を阻む。

青峰だけではない。桐皇のレギュラーは一人一人の選手能力が高く、誠凛の選手達を圧倒していた。

ショットクロックの残り時間が10秒と迫る中、伊月は強引に中央へパスをさばく。

(ミスか？ もらった!)

水戸部へのパスルートであろうが、しかしそのすぐ近くに諏佐がポジション取りをしていた。体を反転させ、手を伸ばす。だが直後、ボールが寸前で軌道を変えて外へと向かっていく。

「なにっ!？」

「黒子か！」

「お返しだー！」

マークマンの諏佐の不意をついた黒子だった。

ボールの行く先はシューターである日向。掴むと同時にシュートモーションへ。不意をついたスリーポイントシュートだったものの、マークの桜井の指がボールに触れる。

「ぐっ!?! また……!？」

「リバウンド！」

相手のオフENSEの動きを読むかのように常に桐皇は先読みして動いている。そのために満足にシュートを決めることができなかった。

「っしやあー！ リバウンド、任せろーい！」

「……!？」

(だめだ、ゴール下も強い！ リバウンドが取れない！)

さらに桐皇にディフェンスリバウンドを取られてしまう。

センターの若松はとりわけて身体能力が高く、水戸部はあつという間にポジションを奪われていた。

オフェンスもディフェンスも桐皇は基本一対一。個々の身体技で試合を優位に進めていく。

「……まずいわね。このままじゃ、攻略の糸口を見つける前に試合を決められてしまう！」

バスケットに一発逆転はない。ゆえに逆転が不可能な点差に広がってしまえばもう打つ手はなくなってしまう。

なんとかしなければならぬ。しかし何も出来ない現状を目にして、リコは歯軋りがとまらなかつた。

「すみません！」

「なっ……！」

（こいつ、ブロックに跳ぶ前に撃つてきやがる！ タイミングが取れねえ！

というか、謝るくせにしつかり撃ってくるんじゃないやねえよ！）

今度は桜井のスリーポイントシュートが放たれた。タイミングが早いクイックリリースの持ち主で、日向はブロックのタイミングを計りかねている。

シュートはリングに弾かれたものの、すかさず諏佐がチップイン。再び桐皇の得点となった。

「っ、強い……」

「全員がひたすら個人技で勝負してくる。これが桐皇のバスケットスタイルか！」

桐皇にチームワークという意識はない。むしろチームワークを徹底的に排除し、選手達の個人技のみで勝負するのが彼らのスタイルだ。

選手の質も高いために一対一で押し勝つことも難しい。

加えて、誠凛を苦しめているのは選手の実力だけではなかつた。

「もろたで！」

「しまった！」

「ステイール……！」

日向から伊月のパスコースを今吉が読み取り、ボールを奪い取る。誠凛は得点することはおろかシュートを撃つことが出来ないままボールを奪われてしまった。

「……なるほど。これがあのマネージャーの仕事ってわけね」

「え？ どういうことだよ、カントク？」

「あの桃井って子、ただのマネージャーじゃない。おそらく彼女は諜報部員として情報を収集し、選手達に伝えているのよ」

厄介ね、トリコは相手のベンチにいる桃井をにらみつけた。

桃井は情報収集力に長け、相手選手の力を分析した行動対策、加えて選手の成長まで予測し、対策を練っていた。

彼女の情報を得た桐皇部員達は誠凛の動きを先読みし、攻撃を無力化してしまう。

「どうした？ もう終わりか？」

「うっせえ！ まだだ、まだこれからだよ！」

「……威勢の良さは褒めてやるよ。だがそれだけだ」

今吉からパスをさばかれたのは、この日すでに二桁得点を記録しているエース・青峰。

対峙する火神は闘争心こそ消えていないものの、すでに息は絶え絶えで、疲労が見え隠れしていた。

必ずや止めてみせるという意気込みが見受けられる姿勢だった。

しかしその思いを引き裂くように青峰は彼の横を素通りしていく。

「ぐっ!？」

（くそっ。一瞬の速さならあいつの方が速かった筈だ。それなのに、体があいつよりも早く感じる！）

以前火神は速さに特化した選手の動きを見て、対応できるように体を鍛えていた。だが青峰のスピードはそれと同等、あるいはそれ以上に感じてしまう。

原因は青峰の急激なスピードの変化、すなわちチェンジオブペース。瞬時に最低速度から最高速度にいたる加速力と最高速度から急激に停止する減速力、すなわち敏捷性。

速度差による体感速度は常人とは比べ物にならず、火神はあっさり

と突破されてしまった。

「待てよ青峰！」

だが負けじと火神は青峰の後ろを追う。

青峰が跳んだ後、一瞬遅れて火神は跳んだ。死角である背後から、しかも青峰の腕を大きく越える跳躍だった。

「なっ！ 高っ！」

「とめてくれ、火神！」

「あーあー、確かにその跳躍力はすげーよ、賞賛ものだ。けど、俺には通じねーんだよ」

他の桐皇の選手達が驚愕し、誠凛の選手達が必死に願う中、青峰は冷静に言い放った。

ボールを持っていた右腕を下げて背面へ回し、手首の力で放り投げる。

結果、ボールは綺麗なループを描き、リングの中へと落ちていった。

「なっ……!?!」

(背面からのシュートだ?! しかも火神のブロックもあつたというのに、リングに触れることさえなく決めやがった!)

まるで何事もなかったかのような、鮮やかなシュートの軌道だった。

もはや青峰にとって障害など何もないのかもしれない。そう感じさせるほど、彼はバスケット選手としてはるか高みに存在していた。

「火神君」

「ちっ。わかってるよ、まだ勝負はついてねえ！」

「いえ、そういうことではありません。次、あれをやろうと思います。行けますか?」

「あ……?」

突然の黒子からの提案。一瞬火神は何を指しているのかわからなかったが、すぐに秀徳戦で見せていた切り札のことだと理解する。

「へっ。お前も我慢できねえってわけか。ああ、任せとけ。そのまま決めてやるよ！」

「はい、お願いします！」

理解した後は早かった。火神は笑みを浮かべ、超えなければならぬ青峰の姿を見据えた。

リスタート後、伊月がボールを運び、組み立てを模索していると黒子からアイコンタクトが送られる。

（一発決めようってか？ ……いいぜ、お前達で流れを掴んでくれ！）
黒子の行動が意味するのは黒子と火神の連携、それも一段と強力な物。

前半戦で使ったよいかどうか判断に困るところだが、伊月決断は早く、黒子へのパスコースを選択する。

（イグナイトパス！）

パスの向きに対して垂直に体を向けて右腕を引き、力を溜め込む。帝光時代にも何度も見受けた光景を目にし、青峰の表情が一瞬硬直した。

「……成程、それかよ。変わらねえな、テツ。本当に」

幾度も黒子の相棒としてパスを受けてきた青峰だからこそ黒子の行動を知ることができた。だからこそ、彼の行動の結果も察することができた。

「そんなので勝てると思ったのかよ？ ……お前のパスを一番受けて来たのが誰だか忘れたのか？ 俺はお前のパスなら全て知ってるんだよ」

青峰の腕が黒子と火神のパスコースへ向けられる。

「お前のパスは俺には通じねえー」

そして渾身の力が込められたイグナイトパスが、青峰によって止められた。

「えっ……」

「嘘だろ!？」

「そんな……」

「秀徳・高尾だって打ち破った黒子の切り札が、こうもあっさりど！」

黒子の切り札が破られた衝撃は大きかった。

だが悲観に暮れている暇を与えてくれるほど青峰は優しくない。

すぐさま青峰の速攻が始まった。

まず伊月をクロスオーバーで抜き去ると日向と水戸部を緩急と切り返しを駆使して突破。一瞬で三人を蹴散らしてしまった。

「待てよ、こんのっ！」

「青峰君ー」

最後に火神と黒子のルーキーコンビが立ちはだかる。

すると青峰は彼らの目の前でボールを大きく地面にたたきつけた。

「なっ!？」

「何を……」

「邪魔だ、テメエじゃ俺には太刀打ちできねえ」

驚く二人の間をかくぐり、青峰はゴールに迫る。そして宙に浮かんだボールをリングへと強引に叩きつけた。

「俺に勝てるのは、俺だけだ！」

そして全員に見せ付けるように、己の力を発揮した。

青峰の五人抜き。もはやお前達に勝ち目は無いと言わんばかりのプレイだった。

「……どう思うっすか、緑間っち」

「ふん。聞くまでもないだろう」

桐皇対誠凛の試合が行われている中、観客席にて黄瀬と緑間の二人はその行方を見守っていた。

だが緑間は勿論のこと黄瀬でさえ表情は硬く、試合の厳しさを物語っていた。

「青峰が出ている以上、こうなることはわかっていた。これほどまで一方的では、試合を覆すなど無理なのだよ」

第二Qが始まり、得点は（誠凛）11対30（桐皇）。選手一人一人の力の差がそのまま得点に現れていた。誠凛も必死に食いついてはいる。だが、結果がついてこない。

「しかも誠凛は黒子のパスを使っているというのにも関わらず、だ。イグナイトパスが破れ、火神が青峰に届かない以上は……」

「誠凛に勝ち目はない、ってことっスね」

「ふん。気に入らんがな」

二人とも誠凛には借りがあつた。その借りを返すまでは負けて欲しくない。

そう思うものの、二人の視線の先ではやはり、青峰が誠凛を打ち破る光景が繰り広げられていた。

「まだやる気かよ？ しぶといヤツだな」

「青峰！」

火神の必死の叫びも虚しく、青峰の縦横無尽な足運びに体がついていかない。

気がついた時にはすでに青峰は火神を抜き去り、さらに黒子や日向をもかわしていた。

「くそっ、待てよ！ させねえ！」

咆哮と共に青峰の背を追い、ダンクを放とうとする青峰目指して跳んだ。

今度こそ止めてやるとそう確信して一拍置き、火神の体が大きく吹き飛ばされる。

「グアッ！」

「火神！」

技術だけではない。青峰は力も並外れている。火神の接触を受けなくてもなお青峰は軽々とダンクを決めていた。

日向達が心配そうに火神を覗き込むと、彼らをさらに追い詰めるように笛が鳴り響く。

『ディフェンス、チャージング！ 誠凛 白10番！ バスケットカウント、ワンスロー！』

そして歓声が湧き上がる。青峰のバスケットは誰もが見惚れるほどの領域にあつた。

「思い知ったかよ？ これが実力だ」

火神に一瞬視線を向けると、言い返す前に青峰は視線を戻し、フリースローラインへ歩いていく。そしてフリースローも難なく決め、得点を伸ばしていった。

「これが、『キセキの世代のエース』かよ。青峰は本物だ。アメリカでもこれほどの選手は見たことねえ。マジで化け物だ」

彼の背中を見て、負けず嫌いの火神でさえ一種の羨望を覚えた。

おそらく今の實力ではどう転んでも勝ち目はない。そうわかってしまっても、何故か純粹に悔しがることができない。それほどまでに青峰という選手は高みにいる。

「……でも、そんなことばかり言っていられるわけもねえよな！」

擦り減る闘争心を滾らせるように、火神は口にした。

たとえ勝ち目がないとしても火神は諦めるようなタイプではない。なんとしても青峰を越えてみせようと自分に言い聞かせた。

「舐めるなよ、青峰！ 俺はまだ……」

『誠凛高校、選手交代です』

「火神！」

「え？ ……は!? 交代？ 俺が!？」

ユニフォームに着替えた土田が火神に呼びかける。横にいるリコも厳しい目つきで戻ってくるように目で訴えていた。

「ちよつ、カントク!? どういうことっすか！ 何で俺が！」

「説明は後よ、早く戻って！」

「待ってくれよ！ まだやれるんだ！ 俺はまだ青峰を！」

「戻りなさい！ これは命令よ！」

まだできると叫ぶ火神を、最後は監督命令で黙らせ、ベンチに引き上げさせる。

これほどまで強い口調のリコを目にしたのは初めてで、火神は渋々と従い、ベンチに腰掛けた。

「……やっぱり。火神君、もうこの試合あなたを出すわけにはいかなかったわ。

痛めた足を無意識に庇っていたせいね。そのせいで逆足に大きな負担がかかってしまっている」

「無理はさせられない、つてことつすか？」

「当たり前でしょう！ これ以上はこの先二試合にまで影響するかもしれない。それなのに、出させるわけにはいかない」

「……くそっ!!」

最もな意見に反対する言葉を火神は持ち合わせていなかった。

ベンチで見ていることしかできない己の不甲斐なさを我慢することができず、火神は右足を思い切り殴りつけた。

「……終わり、だな」

悔しがる彼の姿を青峰は寂しげに見つめ、その場を後にした。

火神が交代した後も青峰を止める術は生まれず、得点差はさらに広がっていった。

加えて後半戦はミスディレクションの効果が切れかけた黒子もベンチに下がり、試合はより一方的な展開となっていく。

主力である二人を失い、厳しい試合が繰り広げられる試合展開は、まるで昨年の決勝リーグのようであった。

第四Q、ようやく回復した黒子が試合に復帰。チームの最後の希望を託すものの、もはや観客の誰もが誠凛の勝利を期待してはいなかった。この時既に桐皇は100点を突破していた。

「まだ出てくるのかよテツ？ もうわかっただろ。バスケットに一発逆転はねえ。頼みの光はもう出場は不可能。お前のパスも通じない。点差もすでにかけ離れている」

未だに諦めない黒子を見て何を思ったのか、青峰は淡々と残酷な事実を述べていく。

「どれも否定できない現実。黒子も彼の言葉を遮ることができなかった。」

「俺の勝ちだ、テツ」

高らかに自身の勝利を宣言する。青峰の表情に揺らぎはない。

「……まだ、試合は終わっていません」

「終わっただら？ もう逆転はありえねえ。お前達が勝とうだなんて、そんなのは……」

「諦めない限り、可能性は消えません。僕達が戦う限り、勝機は消えない。」

「どんなに絶望的な状況下であろうとも、自分から諦めたりはしない」

疲労によってどうしても俯いてしまう顔を無理やり上げて、黒子は笑みを浮かべた。

「……少なくとも、僕は帝光時代に、そう教えてもらいました。必ず約束を果たすと……!」

青峰の表情が、揺らいだ。彼の目線の先に、銀髪の少年の姿が現れる。

「……ハッ。どいつもこいつも、馬鹿ばかりだ!」

勝手にこみ上げてくる笑みを隠す事ができず、青峰の表情に笑みが戻った。

直後、黒子の真横を青峰が通り過ぎる。

必死に手を伸ばした。だが届かない。

懸命に足を動かした。すでにシュートが放たれていた。

負けられないと自分にエールを送った。それでも点差が縮まることはなかった。

栃木の大仁多高校の体育館では今日も練習が行われていた。

東京都では代表を決める決戦が行われているが、選手達は気にする素振りを見せず練習に励んでいく。

「……よし、スリーメン終了! 皆さんここで一度休憩を入れます!」

藤代の声により、練習が中断され、選手は各々休憩へ移る。

「あーっ! しんどー! 最近の練習一段と厳しくねーか?」

「まったくだ。実戦練習も多いから全然気ぬけねーし」

神崎と本田が揃って不満を口にし、水分を補給していく。

I Hに向かつての練習は彼らでさえ弱音を吐いてしまうほどの密度であった。

「その点あいつはやはり別格だよな。個人的にもやるどころあってキツイはずなのに」

「……ああ、そうだな」

「どうした？ 難しい顔して？」

「本田。お前、気づいてないのか？」

「何をだよ？」

「——要の様子、だよね」

「ああ、そうだよ」

話を聞いていたのか、光月が答えを言い当て視線を話題の選手、白瀧へと向けた。

今は休憩中であるにも関わらず、いつもの接しやすい雰囲気は消えうせ、闘争心がむき出しになっていた。休憩中でさえこうなのだから、練習中にもっと酷かった。おそらく白瀧自身は気づいていないだろう。それゆえに余計に神崎達は不安に思った。

「……多分、東京都の試合が気になるんだろうな。そろそろ試合が終わってもいいころだけど」

スポーツドリンクを流し込み、今日の試合のことを思い出す。

誠凛対桐皇。白瀧にとってはおそらく因縁のある相手であった。当然ながらそれを気にせずにはいられないだろう。

「……おや？ 成程。皆さん、一度集合してください！」

すると藤代が携帯に目を向けた後、表情を厳しくして選手達を集めた。

「なんだろ？ まさか休憩終了とか言わないだろうな……」

「さすがにそれはないだろう。だが、何かあったのか？」

嫌な予感があったのか、山本は苦々しく呟く。

さすがにそのようなことはしないと監督の性格を知る小林は彼の言葉を否定しつつ、しかし意図を理解できず首をかしげた。

「……皆さん、先ほど偵察部隊の方々から連絡が届きました。

東京都の決勝リーグすなわち代表を決める初日の試合が、全て終

わったそうです」

「なっ!？」

「ついに、終わったか」

それは激戦が終了したという知らせ。

誰もが記憶の片隅に置いていたその報告を耳にして、選手達は硬直した。

「まず先に終わった泉真館対鳴成は大方の予想通り泉真館の圧勝。終盤はレギュラーも温存させて磐石の態勢だそうです」

「三大王者の中で唯一勝ち残った泉真館、か。やはり強豪だな」

「そして少し遅れて終了したという誠凛対桐皇学園なんですが……」

泉真館対鳴成の試合結果は想定していたこともあって驚きはなかった。

続くもう一試合、誰もが気にしていた誠凛対桐皇学園の試合。しかし藤代は中々口にせず、選手たちの疑問が膨れ上がる。

「……154対39。桐皇学園がトリプルスコアで誠凛を破ったそうです」

ようやく紡がれた報告は、大仁多の選手達を戦慄させた。

「と、トリプルスコア!？」

「秀徳を破った誠凛がまさか、そんな!」

「それほどだというのか、『キセキの世代のエース』というのは!」

どちらも大仁多が注目視している学校だった。それなのに桐皇学園が誠凛を一步も寄せ付けなかったという結果で終わった。選手達の衝撃は大きく、どよめきは止まることはなかった。

「……青峰さん、どうやら最初から本気でやったみたいですね」

「そう、か」

「え? 白瀧さん?」

「駄目だったか。青峰……」

西村が心配そうに覗き込むが、白瀧は一人目を瞑り、勝者であるはずの青峰の名を寂しげに呟いた。

気にかけるならば敗者である誠凛のはずなのに、なぜ青峰の名前を語るのか。西村にはわからなかった。

その頃、試合を終えた桐皇の控え室では若松が勝利の雄叫びを上げていた。

「よっしゃー、まずは決勝トーナメント初戦、圧勝——!!」

「……ちーと黙れや若松。うっさいわ」

「っ!? 何で皆そんな普通なんすか!」

煩わしそうに今吉が適当に手を振ってあやす。今吉をはじめ、桐皇の選手達は喜ぶことでも驚くことでもないのだと平然と片付けの準備を進めていた。

それは青峰も同じこと。彼は何も言葉にすることなく、ただ手を動かしている。

桃井だけは試合が終わって緊張の糸が切れたのか、安心して息を零していた。

「海常を倒して三王者を連続で撃破したって聞いたからヤバイと思っただけど、それほどでもなかったな」

そんな中、控えの選手達の対戦相手である誠凛を蔑む耳障りな声が響く。

「ふたあけて見れば圧勝だからな。点で話になってねーよ。向こうの11番とか最後の数分は完全に腕が上がってなかったじゃねーか。それなのに最後まで無様にやってるし」

「さっさと諦めちまえばよかったのにな」

その直後だった。無表情を貫いていた青峰がいきなり会話をしていた部員の首元を掴みあげた。

「なっ!? お、おい!」

「……うっせーんだよ。試合に出てねえやつが偉そうに何を騒いでやがんだ。」

何も知らねえやつがピーピー喚いてるんじゃないやねえよ!」

「ぐっ、が……」

「おい、やめろ青峰!」

殺意を醸し出し、今にも締め上げてしまいそうな青峰を、諏佐達が説得し、ようやく部員は苦しみから解放された。

青峰はその後何も言う事無く荷物を手にして控え室を後にした。

(……青峰君)

桃井は彼の後姿が見えなくなるまでずっと見つめていた。

一方、誠凛の控え室では火神が怒りを抑えられず、壁を殴りつけていた。

「……くっそう」

「火神！ 切り替えろ。まだ終わりじゃねえ……」

「皆！ 確かに今日は負けてしまったけど、まだ決勝リーグは二試合残っているのよ！」

その二試合に勝てばまだIHへの出場の可能性は残されている！
しっかり！」

リコは日向たちに諦めないよう、必死に声を張った。

だが彼女の言葉ではこの場の雰囲気を一蹴することなどできなかった。

（わかってる。今日の試合を引きずってはいけないことくらい。でも！）

（今日の試合もトリプルスコア。昨年を思い出させるような、嫌な印象が残っちゃった）

（しかも青峰には黒子のバスケットも通じなかった。火神も万全じゃない。これじゃあ……）

彼らの脳裏に昨年の暗い影が映し出される。三大王者全てにトリプルスコアで敗れたという悪夢のような試合が。

正邦・秀徳を倒した今年こそ、そう思っていた。

「キセキの世代」に対抗できる火神がいれば大丈夫、そう期待していた。

黒子のパスがあれば勝てる、そう確信していた。

それら全てがたった一試合で全てひっくり返され、彼らの思いは沈んでいく。

「とにかく！ 今は片づけが先！ 火神君も病院に真っ直ぐいくからね！」

「……うっす」

これ以上は無駄だと判断したりコが指示を出し、選手達はそれに従い行動していく。

だが行動はいつもより鈍く、試合の影響が大きいことを表していた。

「なあ、黒子」

「はい？ なんですか？」

ようやくまとめが終わり、他の部員達が先に部屋を後にする中、残っていた黒子に火神が声をかける。

「俺は青峰とも渡り合えると思ってたよ。だけどその結果がこれだ。

……ベンチで見えていたけど。正直、もうわかんねえよ。ここから先、今のままじゃあ、ただ力を合わせるだけじゃ何度やつても勝てないんじゃないか？」

まるで黒子突き放すような言葉だった。

火神はそう言い残して日向たちを追って部屋を後にする。

「……くそっ！」

少ししてようやく黒子は立ち上がり、火神達の後を追う。握り締めた拳を解き放つことは、どうしてもできなかった。

それから数時間後。

大仁多高校の全体練習が終了し、選手達が個人練習に移っている時。

白瀧は今日も体幹のトレーニングを行っていた。

一区切りついたところで休憩を入れていると彼の携帯が振動していることに気づく。

誰かから連絡がかかってきたことを理解し、白瀧が携帯の画面を開くと、その相手を見て目を見開いた。

「……お前か」

だがそれも一瞬のこと。

すぐに表情を戻し、白瀧は相手と通話を始めた。

——黒子のバスケ NG集——

「……成程、それかよ。変わらねえな、テツ。本当に」

幾度も黒子の相棒としてパスを受けてきた青峰だからこそ黒子の行動を知ることができた。だからこそ、彼の行動の結果も察することができた。

「そんなので勝てると思ったのかよ？ ……お前と一番パスを受けて来たのが誰だか忘れたのか？」

「少なくとも、青峰君ではないことは確かですね」

「……え？」

元相棒からの思わぬ裏切りに、青峰の表情が強張った。

「青峰君は中学二年の全国大会の途中からずっとパスをさばいていませんからね。練習にも顔を出していませんし」

「ちよっ、おいテツ!？」

「それまでは圧倒的に青峰君でしたけど、もう違うと思います。ひよつとしたら緑間君とかの方が多いいんじゃないですか？ 緑間君は君と違ってずっと練習に参加していましたし」

「おい！ あんなヤツに負けてるとか嘘だろ!? 嘘だと言ってくれ！

テツ、テツ——!!」

しかし黒子は嘘とはいわなかった。

青峰、一つだけ言おう。こればかりはお前が悪い。

第五十八話 代表、出揃う

「…………お前か」

携帯電話の画面に表示された相手の名前を見て、正直驚いた。何故このタイミングで、そして何故俺に電話をかけてくるのか。試合日程の都合もあって忙しいはずだし、その意図を理解できなかった。

今はあまりこの相手と話したくないという気持ちはあるが、折角の連絡を無視するわけにはいかない。友人として共に過ごしてきたあいつを見過ごしたくはなかった。

一拍置いて通話のボタンを押す。

「もしもし」

『…………お久しぶりです。白瀧君』

「ああ、本当に久しぶりだな。お前から電話がかかってくるとは驚いたよ。ひよっとしてこれがはじめてなんじゃないか？」

『そう、ですね』

程なくして相手からの答えが返ってきた。

いつものように丁寧な口調で、しかしどこか沈んでいるような響きをしていて、大体の事情はわかっているが、俺が考えている以上の何事かがあったのだろうと感じ取れた。

「それで？ 一体何の用だよ……黒子。明日も試合があるんだろう？」

それなら俺と話している暇なんてないんじゃないか？」

『いいえ。その前に一つ、君に聞いておきたいことがあるんです』

電話の相手、黒子の言葉に思わずこめかみが動いてしまうのを抑えて、ただ冷静に己の心を落ち着かせることに専念した。

何を今さら、という思いが募った。しかし感情を言葉にすることはせず、淡々と相手の用件を窺うことにする。

「聞いておきたいこと？ 俺にか？」

『はい。白瀧君にこそ聞いておきたいと思いました』

「ふーん。しかし折角かけてみてもらったのに悪いが……生憎、俺は今お前とは話したくはなかったんだけどな」

そうだ。出来ることならば今黒子とは話したくなかった。自分から余計な感情を持ち込みたくはない。だからこそ誠凛対桐皇の試合だつて観に行かなかつたわけだし、電話の主が火神であつたらならば間違いなく電話に出ることはなかった。

『……わかっています。それでも、駄目でしょうか?』

俺の考えを知っても黒子は引き下がろうとしなかった。

決して強い口調ではない静かな声だったものの、自分から退くつもりはないのだという黒子の意思表示が伝わってくる。

……こういう時のこいつは絶対自分から折れたりはいはしない。中学時代からそれはわかっている。だからこそ自然とため息がこぼれていく。

「はあ。……とりあえず事情を説明しろ。話はそれからだ。一体何があつたんだ?」

『ありがとうございます』

こうなつては俺が折れるしかない。たしかに話すことで感情が湧き出す可能性もあるが、それ以上に友であつた黒子を見捨てることによる自己嫌悪の方が酷くなる気がしたんだ。

そして黒子が一通り説明するまで、俺は一切口出しすることはしなかった。

一通り黒子の説明が終わり、ようやく俺に電話をかけてきた理由がわかつた。

「……火神の負傷か。そして火神のその後の発言でお前もどうすればよいかわからなくなったと」

『悔しい話ですが、そうなります。僕のパスも青峰君には通じず、誠凛も昨年のようにトリプルスコアで大敗してしまった。正直、今までの出来事が無意味だったと言われた様な気分です』

「しかも相棒の火神にまで否定されたらな。お前が悩むのも仕方ない」

今日の試合、桐皇戦の大敗により誠凛は内部崩壊とまではいかないものの、一人一人が

自信を喪失してしまっているという。加えて火神も今までのあり方に疑問を抱き、黒子にその答えを問いかけた。しかし黒子も答えを出せないまま解散してしまった。

『……昔、白瀧君はどう思いましたか？』

“キセキの世代”の力を目にして、彼らが戦う姿を目にして、何を感しましたか？』

だがそれでは駄目だった。

このまま終わりにしたくない。相棒・火神の考えをもっと深く知りたい。そしてもう一度共に挑みたいと。だから似たような経験を持つ俺に聞いてくる。

“キセキの世代”に屈辱を味合わされた者の、ベンチで仲間が戦う姿を見ていることしか出来なかった者の気持ちを経験した俺に。

「はあ……………」

息を一つ零し、少し昔を思い出す。あの時の忌々しい記憶が、今でも鮮明に浮かんでくる。

「覚えているか黒子。俺達が中二だった時のことだ」

『はい。その時は僕もユニフォームをもらったばかりでしたのでよく覚えています』

「ああ。思えばあの年が帝光にとっては大きな変化が起こった年だった」

帝光にとっても、そして俺にとっても言えることだった。あの年は変動の年。おそらくは帝光中バスケット部の全員が何かしらの変化を経た、いや経てしまったことだろう。

「……太刀打ちできずに敗北した時は、俺も何もかもがわからなくなっちゃったよ」

『やはり、自分のバスケットスタイルのあり方が正しいかどうか悩んだということですか？』

「それだけだったらよかったよ。でもそれどころじゃない。むしろ今起こっていることが本当に現実なのか、それさえ信じられずにただ茫然としていた」

敗北の事実を受け入れることさえ難しかった。自分が今まで築きあげたものの全てが音を立てて崩れ去り、当然であつたはずのものが呆気なく両の手から離れていく。

だからこそこれが現実なわけがないと。夢であつて欲しいと。そう望んでしまつていた。

「その後、現実だと受け入れてからは……そうだな。本当に今のバスケットスタイルで通じるのか、自分のやっていることに意味はあるのかと自分に問いただしたよ」

『誰かに相談しようとは思わなかつたんですか？』

「出来ると思うか？ 確かにした方がよかつたのかもしれない。けど、多分それどころではなかつたんだよ」

『どういうことですか？』

「おそらくだが、周りが見えなくなつていたんだろうな。理解が追いついてなくて一人で考えたいとも思つていたし。……何より、変な意地があつたんだろう。理解する一方でまだ諦めたくはないし、負けた時の話なんて基本はしたくないんだ」

『……確かに、選手としては当然のことですよ。すみません』

気まずい雰囲気を感じた黒子が謝罪するが、今となってはもう過去のことだし『気にするな』と一言告げて話を続ける。

「ただ何れにしても、あの時は自信を失つていた。だからこそ誰かが隣で信じてくれたことが嬉しかった」

『……誰かが信じること、ですか』

「ああ。他人にとつては些細な言葉でもいい。それでも自分が求めている声をかけてくれる存在がいることで、見失つた存在意義を確かめさせられたことで俺は立ち直れたよ」

脳裏に浮かぶのは二人の人物。中学時代に心が折れかけて、それでもなお立ち上がることができるようになってくれた二人の顔だった。

きつとあの時声をかけてくれなかつたならば、俺は今バスケをして

いないはずだ。

『火神君も、そうだと良いのですが……』

「……そこを迷ったら終わりだぞ。自分の考えさえ正しいのかどうか迷っているのに、加えて仲間のことまで疑っていたら何も信じられない」

『白瀧君……』

「きつと火神も今のままでは駄目だと思っている。だからこそお前が信じてやれ。」

間違っていることなんてないよ。今はただ足りないだけだ。だから道を曲げるな」

目標や手段を疑ってしまえば到達するまでの道のりを超えることなんてできるはずもない。

力のなさの為に今まで貫いてきた考えを諦めなければならないなんて間違っている。だからお前も逃げるな。

『……わかりました。ありがとうございます』

「ふん。本当に世話の焼けるやつだな、お前は」

『そうですね。君も、相変わらずのようで』

「は？ それ褒めているのか？」

『はい。本当にありがとうございます。それでは火神君と話すことを考えたいので、失礼します』

「……え？ ちょっと、おい!? 黒子!? まだ話が」

何度も呼びかけるが、無機質な音しか聞こえてこない。

……あの野郎！ 用件を終えたらすぐにきりやがった……！

「あいつは人の話は最後まで聞けと習わなかったのか!? まだ話の途中だぞ!？」

練習中などでもこちらが話しかけている間に姿を消していた時のことを思い出す。

確かに『時間はないのだろう』と俺も言ったものの、普通こうもあっさり切るか……? 向こうから電話をかけてきておいてこの始末はあまりにも酷い話だと思っ。

「しかもよく考えたら、”キセキの世代”が戦っている時のことは全

然話せてないし。……まあ、黒子が良いというなら別に構わないか」
ある意味では都合がよかった。俺自身、あの時のことは一番話したくはなかった。個人的には負けた時よりもあの時の方がずっと嫌な
思いをしたから、助かったと言えば助かった。

「……残り二試合。果たして勝ち残れるか、誠凜」

決勝リーグは残り二試合。立ち直ることができなければ全国への
出場は叶わない。

火神というエースを欠いた今、黒子が復活しなければ勝利は得られ
ないだろう。

誠凜を全国で見ることができるとかどうか。……一応楽しみに待つ
ているぞ、黒子。

そして翌日。決勝トーナメント二日目が行われる日である。

昨日の戦いの勝利により桐皇学園と泉真館がIH出場に一步リ
ドしている中、その桐皇学園と泉真館、そして大きく後退してしまっ
た誠凜と鳴成の試合が始まろうとしていた。

「火神君」

「あ？　なんだよ、もうすぐ試合始まるぞ？」

「少し、よろしいでしょうか？」

「……さっさと済ませろよ」

控え室にて黒子は火神を誘い、外へ出た。いつもなら文句が飛び出
しそうな展開だが、火神は大人しく彼についていく。

火神の足にはテーピングが頑丈に巻かれている。昨日の青峰との
試合で足を痛めてしまったためだ。第二Q途中で退いた為に重症と
言うほどではないが、それでも今日のスターティングメンバーには名
前が挙がっていない。

だからこそ日ごろの熱い闘志もなりを潜めており、黒子の提案も
渋々とだが受けていた。

「で？　一体なんのようなんだよ？　先輩達にも聞かれたくないって

ことか?」

「まず始めに、君に謝らなければなりません。……すみませんでした」
「……は?」

事情も伝えず突如黒子が頭を下げてきたため、火神は混乱した。まだ話の用件もわからないというのにいきなり謝罪をしてきたのだから当然の反応であった。

「謝らなければならぬって、何のことだよ? お前俺に何かしたのか?」

「僕が今までついていた嘘のことです」

「……嘘?」

上げられた顔は真剣なもので冷やかす気になどなれなかった。

だが嘘と言われても火神には何を指していることなのか見当がつかない。相槌を打つに留まり、黒子の次の言葉を待つことにした。

「以前、僕は火神君に君を日本一にすると、それが僕の目標だと言いました」

「それが何だよ? シックスマン 六人目としてやっていくと言ったのは嘘じゃないんだろ?」

「はい。ですが肝心な目標こそが、僕の目指しているものとは違うんです」

「どういうことだよ?」

誠凛バスケット部に入部する際にも黒子は『日本一にする』と公言していた。事実、今もかつての仲間であった『キセキの世代』の所属する高校をはじめ、多くの強豪校との勝負において勝利に貢献している。

それなのに、何が違うというのか。火神にはわからなかった。

「中学時代、僕はバスケットが嫌いになった時があると言いましたよね?」
「……ああ」

予選トーナメント、準決勝・正邦戦の開始前に話したことだった。二年の先輩が昨年の決勝リーグで大敗してバスケットに嫌気がさしたのと同様、黒子もバスケットに対し負の感情を抱いたことがあった。

「あの時、僕は仲間とも意見が衝突し、自分の考えが正しいのかどうかさえわからなくなりました。」

……その答えは中学時代に見つけることはできなかった。だからこそ高校では彼らと戦って、僕の考えを認めて欲しかった」

「おい、ちよつと待てよ！ その言い方じゃまるで……」
「その通りです」

先の言葉を察した火神。黒子は頷き、火神が想像していた通りに口にした。

「僕は『キセキの世代』に僕のバスケットを認めてほしかった。それこそが僕の目標だったんです」

火神を日本一にするというのは建前であり、火神を利用して目的を達成しようとしていたということ。

「……ハッ！」

裏切りとも捉えることができる言葉を耳にしておきながら、火神はうつすらと笑みを浮かべた。

「気づいてねーとも思ったのかよ？ 大方想像はできていたつての」

「え？」

「『キセキの世代』のバスケットを否定しておきながら、やつらと同種の俺をサポートする理由なんて限られている。だからこそ今さらそんなの聞いたところで何とも思わねーし、俺は」

「いいえ。火神君は彼らと同種ではありません」

「……あ？」

お前の考えを気にしたりはしない、と火神が続けようとするが彼の声は黒子のバツサリとした意見に遮られる。

「海常や秀徳と戦った時も、火神君は僕を、誠凛を信じて戦ってくれた。」

一人で自分の力を示すためではなく、チームとしての勝利を得るために」

「……………」

「昨日の桐皇戦、青峰君に負けた時はああ言っていたけど、僕はまだ諦めたくない。」

確かに今回こそ駄目でした。ですがまだ終わっていない。今はま

だ力が足りません。でも諦めなければ先へ繋がる。もつと力をつけて、今度こそ勝てるように」

昨日の試合だけでこれからの全てを諦めるわけにはいかない。

まだ機会は残されている。だからこそその時に昨日のリベンジを果たすためにも。

「僕はもう一度一緒に戦う為に、君を信じて戦います。」

帝光中幻の六人目としてではなく、誠凛高校11番黒子テツヤとして」

黒子は今一度火神に誓う。

出会った当初の時とは違う。本当の仲間として、誠凛の一員として。何よりも火神の相棒として。

真の意味で黒子が火神を信じ、彼の影として戦うことを決意した瞬間だった。

「……そうかよ。だが、どっちにしろ俺は今日の試合には出れねえ」

「はい。わかっています」

「けど、俺だつてもう一度青峰と戦いたい。今度こそリベンジを果たしたい」

「僕も同じ気持ちです」

「青峰だけじゃねえ。まだ『キセキの世代』を全員倒していない。日本一にだつてなれてねえ」

「ええ。まだ道は遠いです」

「だから、言いたくねえけど頼む」

黒子の強い決意を耳にして、火神はそれに応えるよう肩に手を置いて口にする。

「決勝リーグ、勝ってくれ。俺はIHであいつらと戦いたい……!」

「任せてください。……必ず、勝ちます!」

火神は黒子を信じ、黒子もまた火神を信じた。

そして時間が経過し、いよいよ重要な戦いの始まりが近づいていく。

火神と黒子もチームに合流してからしばらくして、監督であるリコ

が腕時計を確認して立ち上がった。

「……よしっ！ 10分前！ 皆、行くわよ！」

弱気など一切感じさせない強い口調で選手達に呼びかける。彼女につられて伊月達もベンチから立ち上がり、顔を引き締めた。

「あー。カントク、ちよつと待つてくんねえ？」

「え？」

「日向？ どうした？」

だがただ一人、主将の日向だけはベンチに腰掛けたまま手を挙げて全員が控え室から出て行くのを制止させる。

もうすぐ試合が始まるというのに一体何事かと皆が疑問を浮かべ彼に視線が集まる中、

ようやく日向は立ち上がり、口を開いた。

「始まる前に聞いておきたいけど、お前ら今どうだ？ 鳴成に勝つイメージが湧いているか？」

それはきつと全員が抱いているであろう負の感情。

昨日の大敗によりチームの勝利を完全に信じきれないでいる彼らの不安を的確につく問いかけだった。

リコは何か意味があるのだろうかと察して口を挟むことはせず、他の選手達は日向の言うとおりに勝利の自信を持たずに無言を決め込んでしまう。

「だよな。まあ俺だって正直昨日の試合を気にしてる部分があるよ。」

ようやく予選で去年の借りを返したっていうのに、また決勝リーグでズタズタにされちまつたんだからさ」

ため息を一つ零し、頭をかきながら愚痴を零す。

しかしその直後『だけど！』と再び口火を切った。

「それがどうしたよ！ 去年あれだけ悔しい気持ち味わって、バスケットを辞めたくなくなった。それでもバスケットを続けてここまで戻ってきたんだろうが！ 正邦に勝って、秀徳にも勝った！ あと少しで俺達は目標のIHに行けるんだぞ！」

お前達ももう負けるのは嫌だろうと、二年生に呼びかける。

お前達だって勝ちたいだろうと、一年生に呼びかける。

ようやく彼らは日向が言おうとしていることを理解した。日向は主将の顔で皆に呼びかける。

「鳴成、そして泉真館。この残りの二戦は絶対に勝つぞ！ 勝ってIHに行くんだ！ わかったか!?」

『おうー!』

日向の必死な叫びで目を覚ましたのか、選手達の顔つきが変わった。もはや反射的に喉から声を振り絞っていた。

引きずっている素振りを見せる事無く、主将として務めを果たそうとしている日向の姿勢が、仲間の意識を目覚めさせることとなった。

(……まったく。もう立派な主将じゃない)

——私が言いたいことまで言ってくれちゃって。

リコは少し寂しげに、しかしどこか嬉しそうな視線を日向へと送る。

「よし！ じゃあ、カントク！ 頼むぜ！」

「ええ！ ……皆！ まずは目の前に鳴成戦、全力で取りに行くわよ！」

『おうー!』

一丸となって誠凛の選手達がコートへと向かっていく。彼らの後姿にはもはや昨日の大敗を感じさせるものは何もなかった。

「……聞いたか？ 今日の試合の話？」

「うん。聞いた時はびっくりしたよ」

場所が変わって栃木・大仁多高校の体育館。

土曜日の休日であり、藤代の出張という事情も重なって全体練習は午前中で切り上げ、午後は自主練習に励んでいる中、神崎と光月は先ほどまで小林が話していた話題で盛り上がっていた。

「まさか誠凛がああの火神抜きで決勝リーグに挑むとはな。三大王者ではないとはいえ、相手だって予選を勝ち残ったチームだぜ？ 本当に勝てんのかよ？」

偵察部隊より報告があった誠凛のスターティングメンバー。それはにわかに信じがたい面子となっていた。

伊月、日向、黒子、小金井、水戸部。

エースの火神がベンチスタートという予想外の構成である。

「火神は高さ。パワーもあってリバウンドにおいても重要だった。なのに。下手すれば前半で勝負が決まるんじゃないかね？」

「……そう、かもね」

光月はチラリと視線を横へ、白瀧へと向ける。黙々と、淡々とシューティングをこなしていくだけで東京都の試合を気にしている様子は見られなかった。

すると自分に向けられた視線に気づいたのか、白瀧が撃とうとしていたボールを腋に抱えて二人の下へと歩み寄った。

「どうした？ 俺の顔に何かついてるのか？」

「いや。そうじゃないけどさ。……要は、今日の誠凛対鳴成の試合、どう考えているんだい？」

「ああ、今日の決勝トーナメントの試合か？ それなら決まっているだろう」

光月の問いかけに白瀧はフツと微笑を浮かべて答えた。

「余程の波乱がない限り、誠凛が勝つさ」

「……え？」

誰もが誠凛が不利であるとそう考えている中、白瀧は誠凛の勝利を信じて疑わなかった。

光月の問いかけにあっさり答え、再びシューティングへ戻っていく。

「黒子が本来の姿に戻ったならば、何も心配はない。あいつとて帝光で『幻の六人目』シックスマンと呼ばれた実力者だ。そして他のメンバーも正邦を自力で倒した力がある。負ける理由がないよ」

背中越しに届く声に、不思議と反論の意見は出てこなかった。

「とうっ!!」

「ぬおっ!」

鳴成のパスコースに小金井が飛びつき、ボールを奪い取った。高さこそないものの俊敏性には自信があり、相手の攻撃の芽を詰んでい

く。

「くそっ、こいつら！ 昨日の大敗で消耗していると思ったのに……！」

「むしろ絶好調じゃねえか！」

敵の予想以上の奮闘ぶりに鳴成の選手達は齒軋りした。ベストメンバーでないにも関わらず、前半戦誠凛にリードを許してしまっているのだから当然の反応だろう。

この試合で確実に勝利し、IHへの切符を手に入れようと考えていただけに、衝撃は大きかった。

だが誠凛の攻撃の手は緩まない。伊月が視線を動かす事無く、真横へのバウンドパス。日向の手に渡ると、瞬く間にスリーポイントシュートが炸裂した。

「よっしやあ！」

「まただ！ 今日何本目だよ、あの4番!?!」

「全然外れる気配がねえ！ 連続でスリーを決めているぞ！」

火神がいないこの試合、日向のスリーが誠凛の得点の大半を占めていた。

主将としての意識が変わったことで選手としても一回り成長したのか、日向の背中はいつもとよりも大きく見える。今ならば全国のチームを率いる主将と比べても見劣りしない。そう感じさせるほどであった。

「くそっ！」

「リストアート、早く！ 取り返すぞ！」

悔しさを覚えながら、鳴成のスローインで再開。しかしボールは味方に渡る前に黒子にスティールされてしまった。

「なっ!?!」

「はあっ!?!」

(一体いつから、どこから現れたんだお前!?!)

存在していなかったはずの選手が突如現れ、ボールを奪っていく。二人が目を丸くしていると、黒子が体制を立て直し、シュートモーションへ移った。

「打たすか！ この野郎！」

動揺こそあったものの、反射的に跳躍し手を伸ばす。

だが黒子は突如シュートから切り替えて横へ放るようにボールを手放す。そしてセンターの水戸部へパスが通った。

(パスかよ！ こいつ！)

「させっか！」

今度は別の選手がヘルプに出て、水戸部のシュートコースを塞いだ。すると彼の指先を越えるように、水戸部はフックシュートを放つ。ボールは綺麗な弧を描いてリングを射抜いた。

「フックシューターか……！」

「よっし！ ナイス水戸部！」

小金井が水戸部の肩を叩くと、水戸部も柔らかい笑みを浮かべてコクリと頷いた。

「悪いな！ 俺達もIHの切符を譲るつもりはねえよ！ このまま押し切らせてもらうぜ！」

前半終了の笛が鳴り響く中、日向は声を張り上げて高らかに宣言した。

(誠凛) 47対35(鳴成)。誠凛高校、予選で三大王者を連続で破った勢いは消えていなかった。

日曜日、決勝トーナメント三日目。すなわち最終日である。

今日の試合は桐皇対鳴成と誠凛対泉真館。すでに桐皇は誠凛・泉真館を相手に二勝を上げており、どちらも大勝であったために東京都一位でのIH出場は確実視されている。

残りの二枠を誠凛、泉真館、鳴成の三校が争うことになる。

現状ではまだどの高校にも可能性が残されており、大仁多の選手達は全体練習に励む中、一体どの高校が勝ち残ってくるのか、心の片隅で考えながら練習に望んでいた。

「……………決まった、か」

藤代が練習を眺めていると携帯の振動を感じ取り、偵察部隊の報告を理解した。

「監督、どうしました？」

「いえ。東雲さん、この練習が終わったら皆さんを集めますので、準備をお願いします」

「はい。わかりました」

指示で用件を理解した東雲はすぐに橙乃にも声をかけて動き出した。

「……4対4、終了！ 一時休憩とします！ ——と言いたいところですが、皆さん、集まってください！」

ようやく休憩の合図があり、選手達が安堵したのも束の間。集合の指示を耳にして選手達の表情が変わった。

（これって、昨日一昨日と同じ展開じゃね？）

（ということは……）

（東京都の試合が全て終わったってことか）

声には出さずとも全員がこれから藤代が伝えようとしていることを理解した。

三日も同じようなことが続くのだから当然のことであった。しかし全ての結果が決まったということで選手達の表情には強張っている様子も見受けられる。

選手達が東雲や橙乃から補給を受け取っている中、藤代は全員が集まっていることを確認して口を開く。

「皆さん、よく聞いてください。」

……東京都の決勝トーナメント、全ての試合が終了しました。これでIHの出場校が出揃いました」

そしてやはり内容は東京都の決勝トーナメントの結果。東京都の代表校が決定したということだった。

「まず東京都第一位は桐皇学園。全勝優勝を果たし、万全の状態です」
優勝は青峰を擁する桐皇学園。第二戦以降も青峰をはじめとしてレギュラー陣が相手を圧倒し、予選に引き続き全試合100点ゲームを達成した。

たとえ秀徳が勝ち残っていたとしても桐皇に勝てるかどうかかわからない。それほどの実力を見せて全国への出場をものにした。

「そして第二位は泉真館。三大王者唯一の勝ち残りです。今年で11年連続のIH。チームの完成度も高く、侮れません」

準優勝は泉真館。秀徳・正邦と並ぶ三大王者の一角。

桐皇に優勝を譲る結果になったものの、今年もIH出場を果たすなど未だに実力は健在。

IH出場回数は全国各地の強豪の中でも飛びぬけている。

全国でも活躍が期待されているだけに、厄介な相手であった。

「そして最後、第三位ですが……」

残された最後の東京都の1枠。数多くの強敵を打ち破り、全国への最後の切符を手にしたのは――

「――誠凛高校。正邦・秀徳を破ったダークホースです。今日の泉真館戦もエースがいない中接戦を繰り広げるなど侮れません。初の全国でもあるので想像が一番難しい存在です」

黒子と火神が在籍する誠凛高校だった。

決勝トーナメント二日目、対鳴成戦は89対74で快勝。

最終日の対泉真館戦も敗れはしたものの85対82と最後まで試合の行方がわからない展開であった。

しかも火神抜きでこの強さを発揮した。代表校三校の中でも、最も注目すべき相手ともいえる。

「近いうちにIHのトーナメント表も発表されるでしょう。」

皆さんも思うところがあるでしょうが、今はとにかく練習に励んでください」

以上です、と締め括ると選手達がその場を後にする。

誰もが気にしていた東京都の結果を知り、幾分か迷いが晴れたすつきりとした顔つきになっていた。

「勝ち残ってきたな、向こうも」

「……ああ。秀徳に勝った以上、そうでなければ困る」

山本が声をかけると、小林も嬉しそうに頷いた。

「まだ当たるかどうかはわからないが……おかげで闘志が湧き上がってきた」

「ああ。俺もだ」

宿敵を倒した相手と戦える可能性が残った。先のことではあるが、戦うことになるのならば必ず倒すと意気込み、胸を躍らせている。

それは彼らだけではなく、他の部員達もそうであった。

「……本当に白瀧さんの言うとおりにまりましたね」

「ああ。正直な話、誠凛はもう予選敗退だと思ってたよ」

西村と本田の視線が白瀧に集まる。今彼は神崎や光月と話をしていた。

火神の離脱の話を聞いても誠凛が勝ち残ることを予想していた白瀧。まさか本当にそうなるとは予想外のことであり、確信していた彼以外は誠凛が鳴成に勝利したと聞いた時は驚愕したものだった。

「嬉しそうだな、お前」

「そう見えるか？」

「うん。……君の気持ちはわかるけどね」

「そっか。まあ実際嬉しいけど、駄目だな。中々抑えることができないか」

二人の言葉に首を傾げつつ、白瀧は笑みを深くして続けた。

「勝ち残ったならば倒すだけだ。……海常、桐皇、陽泉、洛山。そして誠凛。」

誰が相手であろう負けるわけにはいかない。今度こそ必ず倒してやる……！

決戦の舞台に立つ強者が決まったことで、より意識が明確になった。

白瀧もまた、ついに目前にまで迫った願いを叶える機会を手にし、胸を躍らせていた。

——黒子のバスケ NG集——

「聞いておきたいこと？ 俺にか？」

『はい。白瀧君にこそ聞いておきたいと思いました』

「ふーん。しかし折角かけてみてもらったのに悪いが……生憎、俺は今お前とは話したくはなかったんだけどな」

そうだ。出来ることならば今黒子とは話したくなかった。自分から余計な感情を持ち込みたくはない。だからこそ誠凛対桐皇の試合だって観に行かなかったわけだし、電話の主が火神であったらならば間違いなく電話に出ることはなかった。

『……そうですか。残念です。もしも話を聞かせていただいたら、以前桃井さんがプールに来た時撮った彼女の水着写真を差し上げようと思ったのですが……』

「よし。とりあえず事情を説明しろ。話はそれからだ。一体何があったんだ？」

前言撤回。たしかに黒子とは因縁がある。だがそれ以前に大切な友である。ならば個人の私情など全てかなぐり捨て、頼みとあらば素直に受け入れるべきなんだ。それが友というものだ。

もう一つ。諸事情により、というかある御方のご命令によりボツになったNG集。

「覚えているか黒子。俺達が中二だった時のことだ」

『中二……つまり白瀧君が自ら『神速』と名乗っていた時のことですか』

「あれは俺がつけたんじゃないよ！ 赤司と一緒にすんな！」

白瀧、後ろ！ 後ろ——！

第五十九話 強敵、再び 友の思い

「……強化合宿？」

夏休みを目前に控えた大仁多高校。

午後の練習後、迫るIHという大舞台に備えて更なる追い込みをかけるべく、藤代が提案した言葉を選手達はそれぞれ復唱していた。

「本来ならばうちのような全国常連校はこの時期に複数の強豪校が集まるカップ戦に出場します。昨年までも東京で開かれる正邦カップに出場していました」

しかし、とここで藤代は言葉を区切り肩を竦めて続けた。

「今年は実質的な主催校である正邦が予選で敗退。三年生が引退し、次期主力である二年生を中心に出場するようです」

「え。……正邦って冬は三年生出ないのか」

「東京の場合は冬の予選に出られるのは夏の上位八校までなんだよ。だから自動的に引退になっちまうんだ」

「そうだったんすか」

東京都三大王者と呼ばれている高校の最上級生引退という事実に驚く本田に松平が彼の疑問に答えた。

各地域によって代表校選抜の方法は違う。現に栃木では再び冬もトーナメントが行われる。上位校はシードが与えられ2次予選から始まるとはいえ、多くの高校が冬も機会を与えられるのだ。進学校など学校側の都合を除けば三年生は冬まで部活に参加できる。

だが東京都は違う。夏に勝ち残れなかった高校はそのまま冬の出場機会まで逃してしまふ。正邦の三年生達も後輩達に後を託すしかなくなってしまうたとうわけである。

「秀徳高校は元からこのカップ戦には出場せず調整合宿を行っていましたし、泉真館も今回は出場を辞退することにしたそうです」

「……泉真館もか」

「予選で桐皇に負けて、誠凛にも苦戦したから色々思うことがあるのかな？」

かつてカップ戦で対戦したことのある強敵。彼らを思い出した山

本の眩きに対し小林もそうだろうかと頷いた。

「そこでもうちにも打診は来たのですが、それならば大仁多も今回は辞退するという旨をお伝えしました。代わって今年は4泊5日の強化合宿を行います」

「合宿か」

（またハードになるのだろうか……）

「泊りがけとかマジ楽しそうじゃん」

さらに厳しさを増すことが予測される練習を想像し、顔をしかめる者が多数現れる一方。神崎など行事イベントを好んでいるメンバーは笑みを浮かべている。まさに対照的な反応だった。

「ただし、今回はただの合宿というわけではありません。四泊五日の合同強化合宿となります」

「合同？」

「てことは、どこかの高校を呼んだということか」

合同合宿とは想定していなかったのか選手達の中から疑問の声が発せられる。

多種多様な反応が見られる中、藤代がそつと口を開いた。

「今回は——聖クスノキ高校、そして盟和高校の二校と合同合宿です」
そして続けられたのは大仁多が予選で苦戦を強いられた二校であった。

「……あいつらか！」

「てことは、今回は三校による合同合宿？」

「栃木上位三校が集うってことかよ！」

あまりにも唐突な、そして衝撃的な内容だった。

当然とも思える選手達の表情の変化を一巡した後、藤代は視線をある一点に向けて言った。その先には大きな紙が貼られていた。

「IHには彼らのような強者が溢れています。万が一にもこの合宿中彼らに遅れを取るようなことがないよう、気をつけてくださいね」

『……はいー』

監督が伝えようとしていることを理解し、選手達は大きく頷いた。

紙には『全国高等学校総合体育大会 全国高等学校バスケットボール』

ル選手権大会』と大きく書かれており、その下にトーナメント表が掲載されていた。

つまり——IHの組み合わせである。

(……すぐ戦うことになるだろう。それまで、待っているよ)

白瀧は親しかった旧友達の姿を思い浮かべ、闘志を滾らせる。

大仁多高校は右下のブロックに入っている。

一回戦の相手は石川県代表・鈴順高校。

二回戦は東京都代表・誠凛高校と徳島県代表・平石高校の勝者。お互いが上手く勝ち残ることができれば、二回戦で大仁多と誠凛は戦うことになる。

そして三回戦も勝ち進んだならば——準々決勝で当たると予測されているのは、秋田県代表・陽泉高校。 “キセキの世代” 最強セクター・紫原との戦いが待っている。

さらに準決勝は “キセキの世代” 主将・赤司を加えた高校最強と呼ばれる京都府代表・洛山高校と戦うことは確実。

決勝は同じく “キセキの世代” を擁する逆ブロックの東京都代表・桐皇学園、神奈川県代表・海常高校が有力視されている。

どこが優勝してもおかしくない。激戦は必至である。しかし白瀧の脳裏には敗北の不安感は一切ない。

そして大仁多高校が夏休みを迎え——ついに合宿開始日が訪れた。

「うわっ。初めて入ったけど、すごいなー大仁多」

「綺麗だし、設備も充実しているね。こういう環境で練習できるのが羨ましいよ」

あたりをキョロキョロ見渡しながら、金澤と神戸は羨ましげに呟いた。やはり施設の充実している大仁多への羨望もあったのだろう。

「あんまりはしゃぐなよ、恥ずかしい」

夏休みに入ったとはいえ、まだ部活動に参加している学生は多くいる。

下手な真似はしないようにと浮かれている同僚達に細谷は注意を促した。

「でも、まさか俺らが大仁多と合宿することになるとは、思ってもいなかったな」

「俺らとしては光栄な話じゃん。全国に出場するところと一緒に練習ができる」

その横では真田と沖田、聖クスノキ高校の三年生達が並んで歩いている。

ここまで盟和高校の選手達と聖クスノキ高校の選手達は揃って来ていた。去年戦ったこともあり、交流がある二校は岡田の指揮下の元、共に行動することになっている。

盟和高校はベンチ入りメンバーが集結しているが、聖クスノキメンバーはレギュラーの五人とマネージャーの西條のみがこの合宿に参加することになった。大仁多という強豪との合宿ということで、他のメンバーはついていくのは困難と判断してのことだった。指揮官・石川の姿もここにはなく、顧問の先生が引率として付き従っている。

「今回、我々は招待された身だ。失礼のない様にな！」

岡田が全員にもう一度気を引き締めさせ、彼らは大仁多の猛者が集う体育館へ足を踏み入れた。

『お願いします！』

盟和高校の、聖クスノキ高校の選手達の声が体育館中に響き渡る。

「おっー！」

「……来たか」

「盟和高校、そして聖クスノキ高校！」

今でも彼らとの決戦は昨日のことのように覚えている。興奮と歓喜が入り混じった表情で大仁多の選手達は彼らを出迎えた。

「お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな藤代」

「お出迎えありがとうございます」

「ご足労いただき恐縮です。今回はよろしくお願いします」

藤代が岡田達へ笑みを浮かべて挨拶を交わす。

今回の合宿は大仁多と盟和、聖クスノキの三校にメリットがある。盟和や聖クスノキ高校にとつては格上の高校との練習で選手達の士気の向上と技量の上昇に繋がる。宿敵と競うことでより効率のよい練習となるだろう。

大仁多はI日本戦に向けてより実践的なゲームをこなすことができる。盟和と聖クスノキ高校には勇作や楠をはじめ、全国でも通用するであろう選手達がいる。彼らとのゲームを詰むことでより実践経験を積み、感覚に慣れることができる。

こうして彼らの思惑は一致し、今回の合同合宿へと至ったのだ。

「先に言っておくが、皆先の敗戦で味わった雪辱に燃えていてな。全国を前に自信を喪失しても知らんぞ?」

「それはありがたい。有意義な合宿にできそうですね」

岡田の挑発を藤代は笑って受け流す。余裕とは違う、選手達への信頼の現われだろう。

「ふん。まあいいだろう。勇作、お前も藤代監督に挨拶を——」

後ろを振り向く。しかし岡田の視線の先に先ほどまでいたはずの勇作の姿はなかった。

「……おい、あいつはどこに消えた?」

「あ、あの馬鹿ならあそこです」

声に苛立ちが含まれていたのは気のせいではないだろう。

古谷はそつと指先を体育館の端へと向けた。その先には橙乃と共に勇作の姿があった。

「久しぶりだな、茜」

「うん。今日の朝も電話で話したけどね。ここまでお疲れ様」

「何を言う。愛する妹に頼まれたら断るわけもないだろう!」

(……誘ったのは橙乃じゃなくて藤代監督だけだな)

(誘われたのもお前じゃなくて盟和と聖クスノキという団体だけだな)

外野から心中で総ツツコミされているとは知らず、勇作は一人自分の世界に入り込んでいた。

「……一応、後で挨拶に行かれますが、改めてよろしくお願いします」

「この合宿で勉強させていただきます！」

「ええ。皆さんよろしくお願ひします」

細谷と真田がチームを代表して藤代に一言述べる。

その一方で、勇作とは別に一人、大仁多の選手の下へ歩み寄っている人物がいた。

「存分に鍛えているか、白瀧？」

「勿論ですよ。……ようこそ、大仁多へ。楠先輩」

「5日間よろしく頼む」

「こちらこそ」

楠の問いかけに白瀧が笑って返すと、楠も口元を緩ませた。

こうしてかつて凌ぎを削った者達が共に同じ場所で汗を流すこととなった。

「……よし、後は配膳だけかな。それじゃあ西條さん、茜ちゃん。先に皆の下に行つて準備しておいて」

「わかりました」

「はいー」

まもなく12時を迎えようとする中、東雲と西條、橙乃は昼食作りを励んでいた。

夏休みに入り大仁多の食堂も休みとなっている。その為今回の合宿では自炊が基本となった。マネージャー達は選手達の食事作りが重要な仕事となり、台所は戦場と化した。

ようやく仕事に区切りがつくと、東雲は西條と橙乃を先に行かせ、様子を窺わせることにした。

その途中で彼女達の話題に上がったのは楠のことであった。

「え？　じゃあ、楠先輩の方から告白したんですか？」

「……まあ、一応、そういうことになるのかしら？」

二人が付き合い始めた当時の話を聞き、橙乃は目を丸くした。西條の方から告白をしたと想定していたのだろう。

西條は居心地悪そうに頬をかいて曖昧に返答する。

「それよりあなたの方はどうなの？ 可愛いし、中学時代から色々話がありそうじゃない？」

これ以上追求されるのはまずいと感じたのか、西條は話題を橙乃へと移す。

決して深い意味はないのだろう。現に橙乃は容姿が恵まれており、好意を抱く相手も少なくないはずだ。

「……中学の時は、お兄ちゃんがいたので」

「あつ。なるほど」

「今も入学したばかりだからそういう話はないですね」

しかしそれらの話はことごとく勇作の手によって粉碎されていた。卒業後も地元で兄の噂は残っており、彼の恨みを恐れて男から声をかけることはなかったという。

「それに、今はIHのことで頭が一杯ですから」

そう言って体育館へ入っていく。

「よっしやあ——！」

「ナイツシュ！ 勇作！」

「いいぞ！ その調子だ！」

体育館では選手達の熱い声援が木霊していた。

「……凄い熱気」

「盛り上がっているわね。やっぱり、ただの合宿じゃない！」

公式戦というわけではない。合同合宿である。しかしそうわかっているとしても、今ここには頂上を駆けて凌ぎを削った猛者達が集っている。

並大抵な者ではついていけない。それほどのレベルであった。

「お返しだ！」

「白瀧——！！」

彼女達の目の前で白瀧と楠、栃木を代表するエースが対峙する。

白瀧がボールを足の下をくぐらせ、ボールを持ち返る。レッグスルーでドリブルの勢いを殺した瞬間、白瀧の体が大きく動いた。

「ぐっ！」

あつという間にクロスオーバーで切り返した。しかし楠もスピードが自慢の選手。これで遅れをとるわけにはいかない。きつちりと白瀧の姿を視線で捉え——彼の体が逆方向へ沈んだ。

「なっ!？」

(逆——ダブルクロスオーバーか!?)

クロスオーバーでディフェンスを崩した後、さらに相手の裏をかいでもう一度クロスオーバーで元の手に戻すドリブル、ダブルクロスオーバー。

中央を突破され、ゴール下から勇作が飛び出す。だが白瀧は勢いを殺す事無くバックロールターンで勇作もかわした。

「クソッ!」

「……よつと!」

「ナニツ……?」

ジャンがすかさずブロックに跳ぶ。すると白瀧はボールを左手に持ち替え、上空へ軽く放った。

そして遅れて跳んだ黒木がアリウープを沈める。ボールが勢いよくリングに叩きつけられた。

「決まった——!!」

「ナイス白瀧! 黒木ナイツシュ!」

「これで三点差だ! このまま押し切れるぞ!」

大仁多のベンチからしきりに声が飛ぶ。

「……え? 三点差って!」

西條はすかさずスコアボードへ目を向けた。

残り二分。(大仁多) 37対34 (盟和・聖クスノキ)

得点と残り時間から察するに前半10分、後半10分のミニゲームだろう。

「よし! このままガンガン行くぞ!」

『おう!!』

小林が櫂を飛ばせばチームメイトもそれに応えてくれる。ユニフォームを着ていないとはいえ、試合の空気はまさに本番と遜色ないものだった。

「うちと盟和のレギュラーを相手にして、それでもまだ大仁多がリードなんて……」

「すごい……」

西條と橙乃は感嘆の声をあげた。大仁多はレギュラーが揃っているとはいえ、相手はそれ以上と言ってもおかしくない面子が揃っている。

PG：細谷、SG：楠、SF：古谷、PF：勇作、C：ジャン。
シックスマンとして金澤が控え、神戸などもベンチで準備をしている。インサイドもアウトサイドも隙のない、長身が揃った布陣。しかしそれでも大仁多は負けていない。

(これが、全国に挑むチームの力……！)

そして、ミニゲームの終了を知らせるブザーが鳴り響く。

「よっしゃあー！」

「勝った——！」

「一回目のミニゲーム、大仁多の勝ちだ！」

その後も流れを掴み続けた大仁多が勝利した。

大仁多の選手達がガッツポーズで喜びを爆発させる。本番を前によい刺激となるミニゲームだった。

「……ふう。負けた。やっぱり強いな、お前達は」

「ありがとうございます」

楠の差し出した手を白瀧が握り返す。本番の試合ではない分、余計な憤りなどはなかった。

「ったく。本当に疲れるな、お前達との戦いは」

「勝ったからいいだろう！ 負けた方の身にもなってみろ！」

「この合宿中、絶対にお前らに勝つからな！」

「やってみろよ！ 返り討ちにしてやるさ！」

小林の呟きに、勇作と細谷が疲労を忘れて叫びだす。

完全に夏の敗戦から立ち直った二人を見て、山本が口角を挙げて口にする。まだ俺達に勝つのは早い、と。

「……凄いですね」

「午前と午後、それぞれの練習終了後にミニゲームをすることにした

んです。実戦を意識して、ね。彼らにもよい薬となるでしょう」

切磋琢磨することで選手達はのびのびと成長する。藤代は満面の笑みを浮かべて彼らの姿を見守った。

「そういえば、お二人が来たということは……」

「ああ、はい」

「昼食の準備は整いました」

「わかりました。ありがとうございます」

思い出したように西條と橙乃が答えると、藤代は選手達の方へ向き直り、集合をかけた。

「皆さん！ これで午前の練習は終了とします！ 各自しっかりクルダウンして上がってください！」

その言葉で選手達は安堵の息を零した。練習とミニゲームですでに身も体も疲れ果てていた。

「……ミニゲームに出てないけど疲れたじゃん」
「ですね」

「この後も覚悟しておいた方がいいですよ」

「うち、合宿の場合は飯最低でも3杯以上食うようにしているらしいので」

「マジ!? 死んじゃう!」

沖田と山田がストレッチで体を伸ばしていると、神崎と西村が二人に死の宣告を告げた。

スポーツ選手は体が資本であるとはいえ、食事でも徹底されると中々辛い面があった。

「まあ女子の手料理が食えるだけマシですかね」

「そうだな。西條や大仁多のマネージャーも作ってくれたみたいだし」

それでも前向きに考えようと古谷と真田が笑って会話を弾ませる。
「……大仁多のマネージャー?」

すると一人、二人の会話が聞こえた勇作が眉をひそめた。

「おい、小林」

「なんだ?」

「まさか、ひよつとして……茜も料理に参加しているのか？」

想像するのも恐ろしい結論にたどり着いてしまった。違つてほしいと思いつつ恐る恐る小林に問いかける。

「当たり前だろう。お前が自慢するうちのマネージャーだぞ」

そして彼にとつて最悪の返答が突き刺さった。

「……総員、退避——!!」

コンマ一秒。もはや反射のレベルで勇作は叫び声をあげた。

全員が突然の叫びに何事かと驚愕する中、勇作は顔に焦りを浮かべ、撤退の準備を始めた。

「おい、いきなりどうした？ 頭のねじでも吹っ飛んだか？」

「馬鹿野郎！ 手遅れになっても知らんぞ！」

「……マジ何事ですか？ ああ、なるほど。妹の手料理を他の男に食べさせたくないってことですか？」

「違う！ いや、それも勿論あるけど意味が違う！」

同僚のツツコミに対して口早に返し、さらに勇作は続けた。

「お前達は知らないだろうが、茜の料理は凄まじい。料理の常識を超えている。一度でも食塊を飲み込んでしまえばこの世のものとは思えない痛みに襲われ、自我は崩壊し、記憶を奪われ、自分が自分でなくなるような虚無感に襲われるぞ！」

「……それ、料理じゃなくて拷問じゃね？」

馬鹿なことを言うなど細谷たちは呆れて彼の言葉を聞き流した。

しかし事実を知る大仁多の選手達は冷や汗を浮かべ、今までの橙乃が作った料理のことを思い出していた。

「まあ、確かにあれは酷かったよな」

「あの時はどうなるかと思いましたよ。……ん？ 白瀧さん？」

何度も頷き勇作の意見を肯定する神崎。西村も同調して苦笑いしている。白瀧の変化に気がつき、顔を覗き込んだ。

「料理？ 痛み？ 自我の崩壊？ 記憶？ 虚無感？ なんだ、頭の中で何かが……」

「白瀧さん!？」

(よくわからないけど、トラウマを引き起こしている!?)

余程あの日の出来事がショックだったのだろうか。白瀧は一人、細々と単語を口にしていく。頭を抱え込み、何かを抑えこむように必死に耐えていた。

「要、しつかり！ 大丈夫なのかい!？」

「あ、ああ。……大丈夫つスよ光月つち。何かが脳裏に蘇ったかと思っただけど、やつぱちげーわ。大体、僕のことを心配するなんて百年早いのだよ。ひねりつぶすよ」

「……………え?」

多分大丈夫じゃなかった。次々と人格が変わっていくかのような変貌振りに、光月は何も口にすることはできなかった。

「はあ。とりあえず安心しろ勇作」

「どうやって安心しろ?! もう出来上がってしまったというのなら早く——」

「その問題なら解決済みだ」

一方、未だに騒ぎ立てる勇作を諭すように小林が立ち上がり、彼の肩を叩いた。

「なん、だと? どういうことだ?」

「橙乃の料理については俺達も知っていた。実は以前からその問題を改善しようと思っていて、丁度この前白瀧が彼女に料理を教えて克服させたところだ」

「……………本当か?」

小林の話を聞いてもまだ信じきれない勇作はもう一度問い返す。小林が大きく頷いてようやく彼の顔から焦燥が消えた。

すると安心したのか元の顔つきに戻ると白瀧の元へ無言で歩み寄っていく。

「白瀧。お前、実はいいやつだったんだな」

「え? あ、はい。ありがとうございます」

(なんか知らないけど仲直りしている!?)

余程この一件については彼も思いつめていたのだろう。勇作の方から和解の握手を差し出し、白瀧も困惑しながらであったが応えた。「でも記憶がなくなるならなんで勇作は覚えているんだい?」

「慣れた」

「それって慣れるものなの!？」

幼い頃から行動を共にしているからこそ適応できたのだろう。並々ならぬ勇作の一途な思いを感じ入り、細谷はひっそりと涙を流した。

「あ、楠さん！」

「うん？　なんだ？」

「ちよつと、いいですか？」

皆が勇作や白瀧の話に夢中になっている中、神崎が楠に話しかけにいく。

そして一つの願いを頼み、二人は別れた。

余談だがこの後全員で食事を取ったが、皆美味しく昼食を味わうことが出来た。

午後の練習も厳しいものであった。

本格的な夏を迎えて熱さも増している中、選手達は汗をふき取り、目の前の出来事に専念する。

そして練習の最後には再びミニゲームが入り、一日の練習が終わろうとしていた。

「……試合、終了!!」

(大仁多) 4 1 対 3 9 (盟和・聖クスノキ)

最後、盟和と聖クスノキの選手達が追い上げるも及ばなかった。

これで大仁多は2連勝という最高のスタートを切ることに成功した。

「ちっ！」

「……あー、しんどー！」

選手達はその場に座り込み、疲労回復に努めている。

「……PG・白瀧か。全国でもこの起用を考えているのか？」

「ええ。十分に通用すると考えています」

「そうか、やはりな」

試合中岡田が抱いていた疑問に藤代は簡潔に答えた。

2回目のミニゲーム、後半戦は白瀧がPGとしてゲームを組み立てた。

トップから果敢に仕掛けてくる攻撃的な司令塔。スリーもあるという厄介な存在に、岡田は楠をマッチアップさせたが、完全に防ぎきることはできなかった。

(この合宿中、白瀧も楠や勇作とマッチアップして経験を詰める。まさか本当に……)

まだ予選の際にはどこか不安定な場面も見受けられた。しかし今や上手く仲間も活かしチームに貢献している白瀧の姿がある。

全国の舞台で彼が司令塔を任される場面もあるのだろうか。岡田は早くも全国の戦いを想像していた。

夕食も彼らは共に時間を過ごした。普段は話さない相手とも話を交え、交流を深めていく。学生としてもこのような関係は大事であり、藤代は積極的に会話に混じるようにと指示していた。

こうしていつもよりもにぎやかな夕食を済ませると、選手達は各々の時間を迎える。

「……白瀧ー」

「あれ？ 楠先輩、どうしました？」

「気になることがあってな」

ボールを抱え、足早に歩いていく白瀧を呼び止めたのは楠だった。

これから彼がやるうこと確信し、その上で白瀧に問いを投げかけた。

「これから自主練習か？」

「ええ。まだやっておきたいことがあるので。そちらは？」

「俺はこの後マッサーを受け休む。まだ本調子じゃないんでな」

「随分良くなってきたと思いますけどね」

買いかぶりでもなく、白瀧は本気でそう感じていた。

楠もこの数週間は体力づくりに専念しており、怪我以前の状態を取り戻しつつある。今日のミニゲームでも金澤と交代する以外は決して衰えを感じさせないプレイで大仁多の前に立ちはだかった。

それでもやはり本人にしか感じ取れない違和感もあるのだろう。楠は無理するようなことをせず、次の戦いの為に休養することを選んでいった。

「では、また明日相手をお願いします。俺はもう少し残って練習していきますよ」

「……いいや、お前も来い」

「え？ うわっ！」

立ち去ろうとする白瀧だが、楠に腕を引っ張られ、制止を余儀なくされる。

「何をするんですか！」

「……頼む。休んでくれ」

「は？ いくらあなたの頼みでも」

「俺じゃない。お前の仲間の頼みだ」

いくら戦いを通じて理解した相手であろうともここは譲れない。そう考え彼の言葉を拒絶する白瀧だったが、楠の真剣な表情を見て、何よりも『仲間の頼み』という一言を耳にして、それ以上強く言うことはできなかった。

「……お前のところのシューター、神崎と言ったか？ 彼に相談されたんだ。お前、ここ最近はおバーペースになりがちだったようだな」

「勇が？」

「お前自身は気にしていないかもしれない。しかし、周りはお前を心配している」

想像していない友人の名前に白瀧が反応する。とめるならば今だと判断したのか、楠はさらに続けた。

「強さを求めるお前の苦しさもわかる。強敵との戦いに焦りを抱いているのもわかる。」

だがな、無茶をするお前を見ている仲間の気持ちも汲んでやれ。弱い自分が嫌であるように、仲間が無理するのを見るのも、嫌なんだよ」それはかつて同じ苦しみを大切な人に味合わせてしまった彼だからこそ出る本音だった。

同じ過ちは繰り返さないでくれと楠は縋るように、祈るように言った。

「……本当に、敵わないな」

一つ、息を零して白瀧は頬をかく。

「わかりましたよ。そんなこと言われて練習するほど凶太い精神はしていないので」

「……そうか」

「後で勇には謝っておかないといけないかな？」

「それがいいだろう。良いチームメイトを持ったな」

「ありがとうございます」

礼を言うと二人は並んでその場を後にした。

その頃、大仁多の体育館ではまだ暴れたりないと自主練習に励む選手達が集っていた。

「うおらああああっ！」

「ぐっ！」

渾身の力が込められたパワードリブル。

光月も必死にこらえるが、勇作が一瞬の隙をついてゴール側へロールターン。

「あっ！」

「もらった！」

光月をかわした勇作がジャンプシュートを沈める。動きに無駄のない、俱ベストラにふさわしい動きを見せ付けた。

「くっ！ もう一本、お願いします！」

「おう、どんどんやるぞ！」

「はいー」

ひたすら1 on 1を繰り返す二人。光月も少しでも上達するようにと実戦経験を詰むため勇作と戦いを続けていた。

「……アイツ、俺達ノ時ハ本調子ではなかったガ、やはりかなりのパワーだな」

「当たり前だ。うちのレギュラーだぞ」

そのすぐ横では黒木やジャン、神戸達屈強な選手達が揃ってゴール下のポストプレイの練習に励んでいる。

他にも小林や細谷、山本と金澤など珍しい面子が共に練習していた。

「まったく、今のままでも十分やばいってのに、こんなにストイックなんだから、困ったもんですよ」

彼らの後姿を古谷は一人、恨めしげな視線で射抜いていた。

古谷は先ほどからドリブル練習に励んでいる。共に練習する相手もなく、かといって自分から誰かと練習するタイプでもない古谷は黙々と一人で練習をこなしていた。

(ま、一人の方が気負わないから別にいいですけど！)

慣れた動きでドリブルからシュートを放つ。リングを潜り抜け、落ちていくボールを見届け、今のままでもいいかと思っていると……

「古谷さんー！」

「あ？ ……何ですか？ 大仁多の、誰でしたっけ？」

「神崎です！ ちょっと、一つ教えてくださいー！」

予想外の出来事であった。神崎が彼に話しかけ、一つ頼みを申し出した。

——黒子のバスケ NG集——

本編の勇作のノリがもはやNG。

「何でだよオイ!？」

第六十話 キセキの取材

大仁多高校、聖クスノキ高校、盟和高校の三校による合同合宿も半ばである三日目に突入していた。

夏の暑さも厳しさを増し、熱と疲労の蓄積により選手達の体力も悲鳴を上げようとしていたころ。それでもなおレギュラーに名を連ねた者の戦いは激しさを増すばかりだった。

「ぐうっ！」

「おら、どうした!?!」

「……このっ!」

ボールを保持しているのは光月。ポストアップからボールを受け取るも、中々マークを外せない。ドリブルでキープしつつ流れるような動きのターンアラウンドで逆方向へ躍り出るものの読まれていたのか勇作の姿が目の前に映る。

「一度戻せ！ 光月！」

「はい！」

時間を潰すわけにもいかず、光月は山本へパスアウトを選択。

ボールを受けた山本はカットイン。古谷のマークを一瞬振り切るとヘルプに掴まる前に外へパスをさばいた。

「うおっ!?!」

「ナイスパス！」

相手は白瀧。スリーポイントラインの外側に立っている彼はそのままシュートを放つ。

「撃たせるか!!」

「ッ!?!」

リリースする直前、190cmの巨体が眼前に飛び上がった。楠のブロック、それでも白瀧は防ぐことを許さなかったが、しかし彼のプレッシャーがわずかなシュートタッチを鈍らせる。

結果、白瀧のスリーはリングに弾かれた。

「しまったー！」

「任せろ！ リバウンドなら、負けヌー！」

「ちっ！」

(くそっ、ディフェンスリバウンド……！)

「よっし！ よこせ！」

ジャンが黒木との奪い合いを制し、ボールを確保する。

大仁多の猛攻を防ぎきると今度は合同チームの反撃。ジャンがボールを山形に放る。細谷が受け取るとたちまち細谷・楠のガード陣がゴールへ迫る。流星の一言に尽きる速攻。だが大仁多もそう簡単にはゴールを許さない。

(……やつぱり無理か)

「ああ、わかっていたけどな！」

「行かせん！」

「速攻なんて決めさせるものか！」

小林と白瀧が真つ先に戻り、二人の速攻を止めた。時間を稼ぐと山本も追いつき、さらに遅れて他のメンバーも合流する。

一次速攻を防がれると、細谷はゆっくりとパスコースを探る。

(……決めるなら、やはりここか！)

ドライブで一瞬小林をひきつけ、ハイポストの古谷へ。そして高さのミスマッチを活かして今度は楠へとパスが通った。

「よし！」

(来るか！)

「させない！」

楠と白瀧の二対一になった。

果敢にプレッシャーをかける白瀧に対し、楠は一度ボールを持つ両手を上へあげ、直後鋭く切り込んだ。

ポンプフェイクからのカットイン。だが白瀧は動きを読みきり、楠のドライブに迫る。

ドリブル直後の油断、それについて腕を伸ばす。——彼の腕は空を切った。

「なっ!？」

楠は足の下を通してボールを逆側の手へ、レッグスルーを行い白瀧のマークをかわす。

一瞬でもフリーになってしまえば楠が優位となる。跳躍しながらその途中でシュートを放つ、ジャンピングシュートが炸裂した。白瀧のブロックは間に合わずボールは綺麗にリングを射抜いた。

「ようしー！」

「決まった……!?!」

ミニゲーム終了間際の得点だった。この影響は大きく大仁多にのしかかる。

「切り替えろー！ 確実に決めていくぞー！」

残り時間を考慮すれば大仁多の攻撃は一回のみ。確実な成功を意識して小林と山本がボールを運ぶ。

トップの小林からゴール下の黒木へ。さらに黒木と交差するように山本が接近する。

(パスか……!)

相手の出方を予測し勇作が先に動き出す。走る方向へ先に動くが……

「ッ！ 馬鹿、そつちじゃねえ！」

叱咤するような古谷の声が響く。

黒木は逆へとパスをさばいた。そこに白瀧が駆け込み、パスを受け取る。

「しまったー！」

「ちっー！」

楠と古谷、二人のマークが白瀧の行く手を阻む。突破は勿論、シュートも許さないようにとハンズアップに努めた。

二人の厳しいチェックを受け、それでも白瀧は二人の間を縫うようにドライブを仕掛け、直後真横へバウンドパスをさばいた。

「え？」

「まさか！ ……小林だ！」

「よくやったー！」

陣形が崩れた中央へのパス。小林が走りながら受け取った。小林は走った勢いをそのままにステップを踏みレイアップシュートを放つ。

「何度も決められて……」

「ッ……!?!」

「たまるかつ!」

手でボールを放ると同時に、勇作のブロックが決まった。ボールは小林の手から離れ、コートを転々とする。

「ヤバっ!」

「させねえ!」

山本はボールを確保するとすかさずシュートに移ろうとするが、細谷が彼の動きを封じ込む。それでも強引にシュートを撃つが……

「――試合終了!」

笛が鳴り響き、ボールもリングに弾かれた。

(大仁多) 39対41 (盟和・聖クスノキ)。三日目午前のミニゲーム、回数にして五回目である。ついに合同チームが初白星を挙げた。

「よっしゃ、キタアアア!!」

「初勝利だー!ー!!」

待ち焦がれた勝利を手にし、勇作が、細谷が、多くの選手達が歓喜の声を上げる。ミニゲームとはいえ、リベンジを誓っていた相手から得た勝利の喜びは大きなものである。しばらくの間彼らから笑みは消えることがなかった。

「……さて、大仁多のベンチ入りしている皆様は集合してください」

その最中で、藤代がミニゲームに参加していた自軍の選手達を呼び寄せた。

日ごろの練習からこれから起こることを察したのか、選手達の表情に冷や汗が浮かぶ。

恐る恐る選手達が藤代の次の言葉を待つと、判決が下された。

「ミニゲームとはいえ、本戦を前にこの敗北はいけませんね。皆さん、食事の前に外周10周。試合の反省点を考えながら走ってきてください」

慈悲はなかった。この猛暑の中、試合で疲労している選手達にとっては拷問も同然だった。

「IHは負ければ終わりのトーナメントです。目の前の試合を勝てな

ければ先へは進めない。皆さん、今一度気を引き締めてください」
『……はい！』

だが誰一人として嫌な顔は浮かべていなかった。選手達の表情は緊迫しているものとなり、そして体育館の外へと向かっていく。

一度でも負ければそこで全てが終わってしまう。だからこそ負けは絶対にはならない。小林を筆頭に、皆が勝利のためにどうするかを考えて走りだした。

大仁多の選手達が外周から戻り、ストレッチも済んだ後。午前中の練習は全て終了し、昼食の時間が始まる。

昼食の際は藤代と岡田の提案により、各高校の選手達が固まらないよう各テーブルに三校の選手が揃うように設定されている。お互いのコミュニケーションの増強、情報の交換、交流を深めるといった目的だ。

その為普段は一緒にならないような組み合わせが実現するのだが――
「なあ。あの組み合わせはどうなっているんだ？」
「いや、どうといわれまして……」
目の前のテーブルを目にした細谷の呟きに、山田は口元を引き攣らせた。

視線の先のテーブルに、白瀧、勇作、楠、光月の4人が集結していた。

(あのテーブル面子ヤベエ!!)

三校の主力選手、それも試合で幾度も激突した強敵が座っていた。

「あそこじゃなくてよかったわ」

「四人が揃っているだけでも凄いプレッシャーっすね」

密度の濃い空間を目にして苦笑する神崎。金澤も同調し、平和なテーブルにつけたことに安堵した。

だが周囲でそのような話が流れている一方で、当事者である四人の

会話は特に棘も見られず平和なものだった。

「いつも大仁多はこんな練習密度なのか？」

「そうですよ。藤代監督ああ見えて練習厳しいので。……最近では藤代監督が次に何を指示するのかまでわかって、言われる前からゾツとしていますよ」

「そちらも大変なようだな」

先ほどの外周10周という指示を思い出し、厳しい練習に加えてペナルティを設ける藤代に楠は思わず同情した。

だが同時にそれだけ大仁多の選手達が練習をこなしているということでもある。それでも弱音をはかない選手達。彼らを越えることがいかに大変なことを思い知らされた。

「加えて、食事の量も大概だが……」

「そうか？ 俺は別にこれくらいならいけるが」

「むしろ普段からそうですよね」

「お前らはそうだろうな……！」

「楠先輩、諦めましょう……」

少なくとも3杯以上食べるように言われており、食事も一種のトレーニングである。

楠の悩みも知らず、当然のような顔をしている勇作・光月の大食いペアに恨めしそうな視線を送るが、二人はビクともしない。白瀧がそつと声をかけるも、現状は改善できなかった。

「今のうちに体力回復しておかねえと辛い。午前の試合はギリギリ勝てたが、あれだって最後決められたら追いつかれていたし」

「……でも、勇作先輩大活躍だったじゃないですか」

「お前だってそうだろうが。何度もリバウンド取ってくれやがって」

今回のミニゲームにおいては大抵が勇作のマッチアップに光月がついている。同ポジションである光月に刺激を与え、少しでも多く経験を積むようにとの判断だが、彼は勇作と直角以上に渡り合っていた。

「それに最後のお前のワンプレイだって、お前が決めたら正直やばかったぜ」

勇作もそれを理解している。幾度も渡り合い、彼の脅威を身で感じ取っていた。

「決められたら良かったんですけどね。リバウンドはまだしも、自分で得点にいくのは中々突破するのが難しくて」

「……あの時もあったんだが。無理してボールを保持しなくて良いんじゃないかねえか?」

「え?」

だからこそ勇作は目の前の強敵に全国でもその力を発揮して欲しいと思いい、口にした。

「二度しか使えないが。——お前には一番ふさわしいものがあるだろう」

各自が昼食を取り終え、しばし休憩の時間が入る。

午後の練習が始まるまでは体を休めたり午前の反省をしたり、あるいは個人練習したりと自由時間となる。その間は特に藤代や岡田が特に指示を出すことはないのだが……

「白瀧さん。申し訳ありませんが、お時間を頂いてもよろしいでしょうか?」

「え? 俺ですか?」

「ええ。お願いします」

食堂を出ようとした白瀧を呼びとめる藤代。

理由もわからず首を傾げる白瀧をつれて二人はその場を後にした。

特に個人的に呼び出しを受けるようなことはしていないはず。それなのに何故、と白瀧が廊下を歩く最中考え事にふけていると、藤代が口火を切った。

「実は月刊バスケットボール——月バスと言ったほうがわかるでしょうか? そこから取材の依頼が来ていまして。是非白瀧さんに出ていただきたいのですが……」

「月バスの? 大仁多ではなく、俺にということですか?」

「その通りです」

月刊バスケットボール、通称月バス。高校や中学は勿論、日本国内のバスケットに関する情報が掲載される雑誌である。大会の時機によっては高校生が表紙に乗ることもある。

本来ならばチーム単位で取材するはずだが、しかし今回は少し事情が違った。

「……どうやら新人特集らしいです。今年は『キセキの世代』が高校に入った初めての全国大会。それで全国各地で開催された予選で優秀な成績を残したルーキーに話を聞きたいとか」

「ああなるほど。それで選手全員ではないと」

今年は全中三連覇という偉業を成し遂げた怪物が始めて高校の舞台にあがる。その上で彼らの特集を組むことになった。白瀧も予選で数多くの成績を残したことで今回の対象に入ったということである。

「突然で本当に申し訳ない。前もって言うては断られると思ってしまったので」

「断るって、俺はそんなに愛想がないと思いませんか？」

「……いえ、そういうわけではないのですが」

言葉を濁す藤代に、白瀧は小さく笑みを零す。

彼も中学時代に取材された経験はある。緊張や羞恥という理由で断ることはない。面倒と思うこともほとんどないだろう。それなのにそのような思われるとは想像もしていなかった。

二人が会話を交えていると応接室の目の前まで来ていた。藤代がノックをし返事を受けると扉が開かれる。

「お待たせしました。遅れてしまいません」

「とんでもない。依頼を受けていただき、ありがとうございます」

部屋の中には記者であろう髭を生やした中年の男性が一人。

「久しぶりっす。白瀧っち」

そして、黄色い髪の白瀧も見知った相手——黄瀬涼太がいた。

「……なるほど。確かに、前もって言われていたならば断っていたかもしれません」

ここに来て白瀧はようやく藤代の言葉の真意を理解した。

藤代監督は挨拶を済ませると部屋を後にし、俺と黄瀬、そして記者の三人のみとなった。

I Hは目前に迫っている中、まさかこうして黄瀬と再会するとは。一体何の因果か。

「誠凛と秀徳の試合であって以来っスね。会えて嬉しいっスよ」

「そうか。俺はできればまだ会いたくなかったよ」

「なんで本人の目の前でそういうことを言うんスか!？」

「嘘はつきたくないからな」

「ついていい嘘もあるっス！」

おそらく裏はないのだろう。しかし生憎試合以外で会いたくなかったというのは本当だ。

黄瀬と会うのはできれば試合で決着をつけてから。そう望んでいたのだから仕方がない。

「もー、何で白瀧っちまでそういう風なこと言うんスか。高校で黒子っちも誠凛で会った時は似たような反応だったし」

「ハハハハ。やはり同じ中学出身ということで仲がいいみたいだね」

「……よくはないですよ。付き合いは短いですから」

記者の言葉にこめかみがピクリと動くのを抑え、笑みを繕う。

今さら断るわけにもいかないし、できるだけ昔のことは意識せずに応対したほうがよいだろう。

「まずは二人とも、時間を割いていただきありがとう。黄瀬君から取材を受けるなら君と一緒にの方が受けやすいと言われてね。こうして同時取材をすることになったんだ」

「……どういうことだ？　というか、何故お前が栃木にいる？」

記者の説明を受け、黄瀬に視線を送る。困ったような顔を浮かべているが知ったことではない。

「いやー、やっぱり取材受けるなら知り合いがいた方が頼もしいじゃ

ないっすか。先輩達は受けないし厳しいし。そしたら白瀧っちも取材受けるって話だから……」

「じゃあ、栃木にいる理由は？」

取材慣れしているのではないかというツツコミはおいといて。ある意味本題でもある、『何故黄瀬が栃木にいるのか』という疑問。神奈川県代表の一員である黄瀬が私用でここに来ているとは思えない。ならば何故……？

「……遠征試合っす。IHに向けて海常は実戦練習を重ねている。今日が山吹高校が相手だった」

「山吹？」

それはつい先日まで耳にしていた高校だ。今年の栃木県予選ベスト4まで勝ち抜いた強豪。決して並大抵の相手ではない。

「試合は151対49で、うちの圧勝だったっす」

「……は？」

その相手に、トリプルスコアを記録したと黄瀬は言う。

果たして大仁多にできるかと言われればすぐに頷くことはできない。い。

少し、侮っていたかもしれない。

俺だけではない。キセキの世代も緑間のように高校でさらに成長を遂げている。その相手に勝たなければいけない……。

自然と握りこぶしに力が籠っていた。

「――上等だ。それくらいやってももらわなきゃ困る。IH、首を洗って待っているよ」

ハツタリでも良い。笑みを浮かべて黄瀬を真つ直ぐ見据えた。黄瀬も好戦的な笑みを浮かべて応える。

「……頼もしい。実に頼もしいことだ。やはり今年は昨年以上の戦いが見れそうだね」

緊迫した空気を裂くように記者の声が響いた。

どうやら少し熱くなりすぎていたようだ。今から周りを見えなくなっているようではいけないのに……後で反省だな。

「改めて私の名前は小川だ。君達二人に集まっていた理由を監

督からも聞いているだろうが。

今日は『ルーキー特集』という企画で他のIH出場校のうち、予選で優秀な成績を残した選手と同じ質問に答えていただくよ」

そう言つて小川さんは懐からビデオカメラを取り出し、再生を始める。

まず最初に移つたのは紫色の髪と巨体が特徴の選手——紫原だつた。

『まずは所属と名前、背番号、ポジション。そして『これだけは誰にも負けない』と思うことを教えてください』

『んー……陽泉高校バスケットボール部1年、紫原敦。背番号は……えっと、9番。ポジションC。あとはまあ、体格で』

取材中であるというにも関わらず、緊張どころか呑気とも窺える姿勢だつた。

陽泉とは勝ち残れば準々決勝で戦うことになる。要注意であることは間違いない。

紫原の紹介が終わると映像が変わつて、今度は東京、青峰の映像が映つた。

『桐皇学園高校バスケットボール部1年、青峰大輝。背番号5、ポジションPF。1on1で負ける気はねーよ』

こちらにも変わらぬ大胆不敵な姿が見られた。誠凛との戦いの後でも様子は変わっていないところだろう。

視線を横に向けると黄瀬が食い入るような目で見ていた。……桐皇と海常も準々決勝で当たる可能性がある。黄瀬も思うところがあ

るのだろうか。

「それでは、二人にも質問に答えてもらつてもよいか？」

「あれ？ 今まで取材したの紫原っちと青峰っちだけっスか？」

「京都代表、洛山の赤司。東京都代表、誠凛の火神や黒子は取材対象ではないのですか？」

名前を挙げたのは選ばれてもおかしくない強敵達。特に赤司に至つては帝光時代に主将を務めていた実力者だ。断るとも思えないし、取材されない理由の方が無いと思うが。

「いや、それが赤司君は予選には一試合も出場していなくてね。それでも取材するべきだという意見もあったのだが、高校で活躍していないのなら仕方がないということとで対象から外れたんだ」

「赤司つち出てないんすか？」

「つまり、洛山は赤司抜きで全国行きを決めたと」

小川さんが頷く。

……洛山。全国大会の優勝回数最多を記録し、高校最強と謳われているチーム。

赤司抜きでも地区予選は楽勝だということか。底知れぬ実力だな。

「それと誠凛の火神君は決勝リーグを第一戦以降出場してなく、その桐皇戦も数値を残せていなかったから、彼も外れたんだ」

「……そうでしたか」

「俺も見ていたっすけど、あれは圧倒的だった。仕方ないっす」

真面目な表情の呟き。実際に見たわけではないが黄瀬が言うのだから相当なものだったのだろう。

……だとすると誠凛は全国的な注目度は低いということか。勿体無いな。

「それと同じく誠凛の黒子君だが……実は桐皇の取材の後担当記者が訪問する予定だったんだけどね？」

「何かあったんですか？」

「まさか断られたとかじゃないっすよね？」

「……担当記者が忘れてしまったんだよ」

以前、帝光中学時代にまったく同じ話を聞いたような気がした。

ようやく全国を決めたというのにこの有様か。切ない、この一言に尽きる。

場に気まずい雰囲気の流れると小川さんが一つ咳払いし、大きくずれてしまった路線を戻した。

「まあそういうわけで、二人にもよろしくお願いするよ」

「じゃあまずは俺からっすね！」

やる気に満ち満ちた表情で黄瀬がウインクする。……殴りたい、この笑顔。

「海常高校バスケットボール部1年、黄瀬涼太っす。背番号7、ポジションSF。誰にも負けないことは、お返しをきっちり返すってこっすかね」

黄瀬も青峰達同様、普段と変わらない顔つきで、声色で答えていく。本当に堂々としている。『お返しを忘れない』という言葉。これが本当に言葉通りなのだから恐ろしい。

一通り終わると黄瀬がこちらに表情を向け、続くようにとアピールしている。

……一つ間をおき、そして口を開いた。

「大仁多高校バスケットボール部1年、白瀧要。背番号は7、ポジションはSF。速さに関しては負けない。どんな相手にも立ち向かっていきます」

その言葉で区切る。反応を窺うと小川さんが大きく首を縦に振った。

「よし、ありがとう。それでは次の質問、この大会で戦いたい相手、注目している相手を教えて欲しい」

質問すると同時に再びビデオが流れる。紫原と青峰の映像だ。

『別に。あーでも、逆の意味だけど赤ちゃんとは戦いたくないかも』

『黄瀬、白瀧、紫原、赤司。ここら辺の面子だな。こいつらなら俺も本気でやれる』

対照的な反応だった。紫原は心底嫌そうに、そして青峰は今も燃え滾っているようなぴりぴりとした雰囲気を出している。

……名前があがって、正直嬉しかった。青峰もまだ俺を見てくれていると嘘でもそう思えて嬉しかった。

「俺は今言われたけど、俺も青峰っちスね。準々決勝で見せ付けてやるっす！」

感化されたのか黄瀬も闘志を滾らせた。この大会ではキセキの世代でさえ全員が決勝の舞台に上がることはできない。それほど緊迫したものとなる。

「白瀧君はどうか？ 誰か相手はいるかい」

「……誠凛、陽泉、洛山、海常、桐皇。組み合わせの都合でこの五校全

てと当たすることはできませんが、とにかく彼らに勝ちたい。贅沢ですが、それが俺の望みです」

質問に答えると感情が顔にも出ていたのか、小川さんが少し驚いた様子だった。

俺はとにかく『キセキの世代』に今度こそ勝つ。そして約束を果たす。無謀に近いだろうが、成してみせる。

「まったく。皆ルーキーとは思えないほどの風格だな。」

……では次の質問だ。君達がバスケットを始めた切欠は何かな？」

呆れも混じった微笑を浮べて小川さんは続ける。ビデオに写る二人は今度は似たような反応をしていた。

『昔ミニバスに誘われて……であとはなんとなく』

『………忘れた。気づいた時にはもうバスケットやってたからな』

紫原は殆ど興味はなかったようで。青峰に関してはもはや当然のことと詳しくは覚えていなかった。あいつらしい、ということだろう。

「俺は中学時代に青峰っちのプレイを見たから。あれ以来、目標ができてから辞められなくなったっス」

「ああ。そういえば黄瀬君は中学からバスケットを始めたんだっただね」

そうだ。今でも鮮明に覚えている。中学からバスケットを始めて、たちまち多くの部員を追い抜いていった黄瀬の姿を。忌々しいほどに覚えてる。

「白瀧君は覚えているかな？」

「俺は幼稚園の頃、兄がバスケットをしているのを見てです。その後一度辞めようと考えましたが、一つ年上の女の子に誘われて続けました」

「え？ 辞めようと思ったって、本当なんスか？」

「まあな」

始めた切欠である兄がバスケットをやめてしまい、俺も相手がいなくなって辞めようと考えた。でもそれを繋ぐ切欠があった。だから今もバスケットをすることができている。俺にとっては重要な出来事だ。

「なるほど青峰君と白瀧君はかなり昔からバスケットに思い入れがあったというわけだ。」

……では次に行こうか。少し答えにくいかもしれないが、好きな女性のタイプは？」

「え？」

「ちよつ……えい！」

戸惑う俺達の反応を他所に、小川さんはビデオの再生を始める。

『そーだねー。背が高い子かな？ あーでも、俺より高いのは流石にやだなー』

『おっぱいがでかい子』

そしてこの二人は平然と答えている。

まず紫原、お前よりでかい女性なんて早々いないから安心しろ。

そして青峰。やっぱりか。

……というかこの質問、芸能人等の『〜に似ている人』じゃなくて、本当にタイプを答えるやつか。危なかった。自爆するところだった。

「えーと。とりあえず、俺はソクバクしない子っス。白瀧っちは？」

「……気配りができて、愛嬌がある女性です」

自分で言っていて少し恥ずかしい。大体この質問、バスケットには関係なくないか？ という質問はアウトなのだろうか？ 多分アウトだろう。

「わざわざありがとう。では……IHに向けて、何か取り入れているトレーニングはあるかな？」

話は戻り、再びバスケットに関する話題に。ビデオが再生されるが……

『別にー。したって無意味じゃん』

『ねーよ。必要ねえ』

二人ともこの質問にはそっけなく答えて終わっている。

特に青峰に至ってはそうだろう。今も殆ど練習に参加していないという話を耳にしたことがある。やはり、まだ変わっていないということだ。

「俺はあるっス。特に青峰っちとの戦いに向けて。ひよつとしたらこの大会で見せるかもしれないっス」

「……特にこの大会に向けて、というのはありません。しかし常に次の戦いに向けて準備は進めています」

そして今も次の戦いの為に鍛えている。流石にこの場で打ち明けられるような馬鹿な真似はしない。見せ付けるのは……全国の舞台でだ。「なるほど。では二人とも相応の自信があるわけだ。楽しみにしているよ。」

……それとそんな二人に聞きたいことだが、いいかな?」

「なんスか?」

「前の二人にはないと言われたから聞かなかつたのだが……バスケットの練習は楽しいかな?」

その質問に一瞬黄瀬の表情が凍りついた。だがすぐに笑みを浮かべて質問に答える。

「楽しいっスよ。まあ前まではただキツイだけでそんなことはなかつたっスけど……最近では海常の皆とバスケットもできるし、楽しいっス」

そして、とても黄瀬が考えているとは思えないような発言が飛び出した。

「……マジかよ」

「え? 何っスか、白瀧っち。その意外そうな顔は」

「いや、お前のことだから『練習なんて退屈すぎてつまらないっス』と言うと思った。変わったな」

「この前の緑間っち見たいなこと言うっスね……」

「緑間?」

「以前も話したんスよ。こんな感じの話を」

「そうか」

緑間も話した、か。黄瀬のこの変わり様は何かあったとしか思えない。い。

ひよっとしたら練習試合で誠凛に負けたというのが響いているのだろうか?

……黄瀬といい、緑間といい。どうも誠凛はキセキの世代に何か因縁がある見える。

「白瀧君は? 藤代監督からはとても練習熱心だと聞いているが」

「監督がそう言っていたんですか? まったくあの人は」

いきなり話を持ちかけたこともそうだが、本当にいつの間にか話を

進めている。

しかし、藤代監督には悪いが……

「好き、というの少し違います。やらずにはいられない、ということ
です。かつて失敗したことがありますから」

「失敗？」

「ええ。今でも夢に見るんですよ。かつて失敗したその光景を」

俺が練習するのは少し理由が違う。

「失敗というのは、どんな話かな？」

「——簡単な算数の問題です。仲間の力が1、俺の力が2だとします。
さて、5の力を持つ新人が現れました。果たしてレギュラーに選ばれ
たのは誰でしょうか？」

「え……」

「白瀧っち。それって……」

二人の動揺が見られる声を他所に、話を続ける。

「純粹に俺の強さが足りなかった。何度も夢の中で挑戦し続けても、
その度に敗れ続ける。そして夢から醒めるたびにもっと強くならな
ければならないと思うんです。

……だからこそより練習に励み、いつその努力をしなければなら
ない」

楽しいから練習をするのではない。かつて味わった敗北の味。夢
を見るたびに覚える吐き気。それがもつと励めと自分を責め立てる。

「楽しいから、正しいからとかそんな価値観はありません。ただやら
なければならぬ、そう思うから。たとえ周囲の目には無様な姿に映
ろうとも」

——それでもやらなければいけない。

「結果が出てしまった後では遅い。後悔しないために、ただ練習する
だけです」

そうすることでしか俺は前へ進めない。何も成し遂げることはで
きないから。

「……なるほど。つまり君もあまり練習は好意的ではないということ
か」

「いえ、勘違いされては困りますが何も練習が嫌いと言うわけではないですよ。」

特に昔はただバスケットが楽しかったし、大仁多の皆も強くなることに貪欲で、一緒にいて楽しいです。

ただ前提はやはり違う。楽しいからというのは結果論でしかありませんからね」

「そうか。わかった、ありがとう」

小川さんは言葉を区切り、さらに続けた。

「では、最後の質問だ。君が考える、バスケットにおいて大切なものとは？」

小川さんの顔が引き締まり、最後の応答へと移る。俺もある意味気にしている質問。ビデオが再生され、二人の答えが届いてきた。

『才能でしょ。結局バスケットなんて才能があるやつが勝つ。それだけだよ』

『……拮抗した勝負。それができるライバル。ま、できればの話だがな』

中学時代にも感じていた、二人の考え。おそらく二人の考えの根本だろう。

だからこそ二人は今のバスケットに対する姿勢を持っている。逆に言えばこの姿勢を何とかしなければ、二人とは分かり合えない。

「二人とも結構シビアっスね」

「どうだい、君達の答えは？」

「俺は……目標っスかね。バスケットは目標みたいに通りにはいかないけど、だからこそ燃えるっス！」

今まで何でもこなしてきた黄瀬にとって、達成困難なことは物珍しいのだろう。これも黄瀬の考えを实によく表している。

だとすれば、俺の答えは……

「——覚悟。どんな苦境に陥ろうとも、戦い続けるという意志。それがないければ勝ち続けることはできない」

大仁多高校バスケット部のスローガンでもある、『百折不撓』。

これこそが俺が考えている、バスケットにもっとも必要なことだ。

「今日は二人ともお疲れ様。おかげで良い記事が書けそうだよ」

「そっスか？ 雑誌楽しみにしているっス」

「全国でも白熱した試合を、期待している」

「はい、ありがとうございます」

全ての応答を終えて小川さんが大仁多高校を後にする。

質問はそれほど多くはなかったが……あいつらの考えを再確認することができたと思う。

「じゃあ俺もそろそろ行くっスかね」

「この後はどうするんだ？」

「先輩達と合流するっス。本当はloniとかしたいところっスけど……キャプテンに釘刺されてて……」

「お前のところのキャプテンも……笠松さんだったか？ 厳しそうだな」

「そうなんスよ！ バリバリの体育会系で、いつも蹴られてるんスよ!？」

「知らねえよ」

G。 一度月バスで目にした海常の主将、笠松さん。全国でも有名な好P

黄瀬を躡けるほどだからリーダーシップにも長けているのだろう。

環境は良いようだし、試合で会ってみたいものだ。

「ま、だから今はお預けにっスね」

「ああ。俺達が全力で戦うのは――」

全国の舞台でだ。

「絶対に負けねえっスよ」

「何度も勝てると思うなよ」

黄瀬が、そしておそらく俺も好戦的な笑みを浮かべている。

制服を片手にかつき、黄瀬は大仁多を後にする。

……再会するのはもう遠くない未来だ。その時には必ず、今度こそ

キセキの世代の打倒を果たす。そしてもう一度――

――黒子のバスケ NG集――

「じゃあまずは俺からっスね!」

やる気に満ち満ちた表情で黄瀬がウインクする。……殴りたい、この笑顔。

「海常高校バスケットボール部1年、黄瀬涼太っス。背番号7、ポジションSF。誰にも負けないことは、ファンの女の子の数っスカね! いやー、最近ファンクラブの会員数が増えすぎて困ってるんスよー」

「……百回死んで来い」

「酷っ!? ちよっ、あんまりっスよ白瀧っち! ……あ、噂だと白瀧っちのファンクラブもあるらしいっスよ」

「嘘!?! マジで!?!」

ちなみに嘘でした。

その後、白瀧は黄瀬に当たっていたという。白瀧、顔はやめときなさい。鳩尾にしておきなさい。

第六十一話 インターハイ

決戦の時は刻一刻と近づいてくる。それは誰にでも等しく訪れる、決して覆すことはできない事実で、彼らに許されている準備の期間は殆ど残っていないかった。

ここから先は個人にできることは調整に勤めるばかりで、今から新技を身につけようとも間に合わない。たとえ修得に励んでいたとしても、未だに完成できていないのならば実戦で使いこなすのは殆ど不可能だろう。

「……………ヤバイ。これは、多分間に合わない」

ゆえに、努力と成果がつりあわない選手には焦りが募るばかり。

三校合同合宿4日目の練習後。一人自主練習に励んでいた白瀧の口からこぼれた言葉は、まさに彼が心中で抱えている焦りを象徴するものだった。

限られた時間の中で精一杯足掻き続ける。それでも必ず上手いくわけではない。人に出ることは限られている。白瀧とて例外ではなかったのだ。

「なっ……………!?!」

「は?」

合同合宿5日目、すなわち最終日に行われる最後のミニゲーム。

細谷が、勇作が、連合チームの選手達が目を丸くし、シュートを決めた白瀧の背中を見つめた。彼ら五人のうち、まだ誰一人としてディフェンスに戻っていない。それなのにすでに得点を許していた。

「よしっ!」

「さすが小林さん! ナイスパス!」

「小林、テメエ今のは……………!」

「俺達があれば何も得ていないとでも思ったか?」

相手の防御さえ許さない速攻を成功させた本人、小林は涼しげな顔で勇作達の鋭い視線を受け流す。

県予選の激闘を経て成長したのは、誰もが同じこと。小林も来る！
Hに向けて着々とその実力を高めていた。

「ディフェンス！」
『おうー！』

オフエンスだけではなくディフェンスも好調が続いている。相手は一人でも点数が取れる能力を持つ選手が揃っているが、簡単に攻撃の機会を与えない。足をよく動かし、前線からプレッシャーをかけていく。

「ちっ……！」

「細谷さん！」

「ッ、頼む！」

トップの細谷から楠と交代で途中出場した金澤へボールがわたる。得意のVカットで山本をかわし、詰め寄られる前に、積極的に仕掛けた。

「行った！」

「山本さん！」

（行かせるかよ！）

山本が進路を塞ぐ。45度から中央への侵入を防ぎきった。

「ぐっ!？」

「舐めんじゃねえ！」

（駄目だ、これ以上は獲られる！）

ボールの保持が困難と察すると金澤はパスを選択。ゴール下の古谷へ。パスを受け取った古谷へ白瀧、さらに光月が寄り——勇作へのパスコースが空いた。

（しゃあない、ゴー！）

ワンドライブで白瀧を引き付け、バウンドパスをさばく。光月とすれ違うように、ボールが勇作へ渡った。

「おっ……！」

「ぶちかませー！」

「ナイスパスじゃねえか古谷！」

ボールを手にし、バランスを整えると勇作は跳び上がる。

全力のワンハンドダンク。右腕を大きく掲げたシュートは、しかし光月のブロックを前に防がれてしまう。

「なっ!？」

(テメ、今体勢崩れてただろ！ それなのに……身体能力だけならマジで大仁多一だ!!)

「ナイスブロック光月！」

すぐさま体勢を立て直してディフェンスに戻り、勇作へのブロックショットを敢行する。パワーは言うまでもなく、ボディバランスをはじめとした基礎能力が非常に高い。光月の働きもあつて合同チームはオフエンスを決めることができないままボールが大仁多へと渡つた。

「ハハハハ！ もはや笑いしか出てこないな！」

「監督……」

ベンチでは合同チームを率いる岡田が笑っていた。押されている現状下で本当に面白いものを見つけたかのように、腹を抱えて笑っていた。

「激戦を潜り抜けてきただけあつて、連携はベンチメンバーも含めて完璧の一言。しかも各個人がどんどん強さを身につけている。さすがに俺達を破ってIHに挑むだけのことはあるぞ！」

敗れた憎き敵であるが同時に栃木の代表でもある。自分達の思いを背負って戦ってくれる頼もしい仇敵の奮闘ぶりは、岡田の心を大いに揺れ動かした。

「……たしかに、そうですね」

同じくベンチで試合を見守る楠も彼の意図を汲み取り、静かに頷いた。

コートでは攻守が入れ替わって大仁多が攻撃中。

小林が高さを活かしてゴール下の黒木へ直接パスをさばいた。

これでジャンとの対一。体格差があり、この合宿中一番苦労しているマツチアツプといって過言ではない組み合わせだが……

「ナニッ!？」

「……いつまでも負けるわけにはいかんのでな」

黒木はジャンのブロックを許さず、得点に成功した。

「よし、黒木！」

「ナイツシュ！ よくあのジャンから得点を決めた！」

チームが沸き、士気は上がるばかり。IHに向け、大仁多はチーム全体がよい形で調子を上げていた。

合同合宿最後のミニゲームの終了を知らせるブザーが鳴る。

(大仁多) 47対38 (盟和・聖クスノキ)

本戦の出場に燃える大仁多の勝利で強化合宿を締め括った。

「ハア……」

「結局、この合宿中は一回しか勝てなかったか……」

毎日メンバーの交代を行いながらミニゲームを行った。しかし合同チームが勝てたのは三日目の一度のみ。終始大仁多が優位にゲームを進め、最後まで大仁多が勝利し、万全の上体でIHに挑むこととなった。

「お前達のおかげで皆一丸となれた。礼を言うぞ」

「ハッ。さすが全国出場校のキャプテンはきっちりしているな。……次に戦うまで負けんじやねえぞ」

小林と勇作が握手をかわす。再戦を誓い合い、お互いにエールを送った。

「皆、お疲れ様！」

「お疲れ様でした！」

「順番に補給してください！」

東雲、西條、橙乃達マネージャーよりタオルとドリンクが配られる。補給物質を受け取り、体を休ませると他校の選手とも話を交え、試合とは打って変わって緩やかな空気に包まれた。

「……これで合宿は終わりか」

「ええ。良い経験になったと思います。今回はありがとうございます」

「礼を言うのはこちらだ。選手達に大きな刺激となったのだから」
選手たちを見守る指揮官もそれは同じこと。藤代も岡田も選手の成長に満足し、顔に笑みを浮べていた。

大仁多高校体育館の外。

盟和高校、聖クスノキ高校の選手達が学生服に着替え、整列している。

大仁多高校の選手達はジャージ姿のまま、二校と対面するように並んでいた。

疲労もある中、選手達の表情は笑顔ばかりだった。

「IHで下手な試合すんじやねえぞ？」

「借りを返すまで、絶対に負けるな」

「お前達も今のうちに力をつけておけ」

「俺達は全国で暴れてくるからよ！」

勇作と真田、両校の代表が手を出すと小林と山本が二人に応えた。

あつという間に過ぎていった5日間。長いようで短かったようにも感じる合宿だった。

これで終わりと考えると寂しさを覚えたものもあり、涙腺が緩む者も現れた。

「白瀧。もしもまた機会があれば、また戦おう」

「……ええ。今から楽しみにしています」

楠が手を差し出し、白瀧も短く答えて握り返した。

こうして五日間におよぶ三校合同合宿が終了した。

盟和高校、聖クスノキ高校の選手達が、大仁多高校を後にし、大仁多高校の選手達は彼らの姿が見えなくなるまで見送った。

ここからIH本戦が始まるまでの間、大仁多は仕上げの段階へと突入する。

全国の舞台は——もうすぐそこへ迫っている。

二校の選手達を見送った後、藤代はバスケット部に所属するメンバーを招集した。

体育館にいる者達は全員顔が引き締まっており、溢れんばかりの気迫を感じさせるものだった。

「皆さん、まずは合宿お疲れ様でした。誰一人として大きな怪我をすることなく、特にハプニングが起こることなくここまで来られたこと、嬉しく思います」

藤代は笑みを浮かべ、周囲を見渡す。

誰一人欠けることなくこうしてこの日を迎えることができた。当然のことのようでは達成することは意外と難しい。選手たちもお互いを見て、今ここにいる現状を喜んだ。

「合宿は終了。ここからはI H本戦に向けての調整期間とします。そして、今年のI H本戦に望むメンバーは……変更はありません。予選と同じメンバーで戦っていきます！」

そして告げられるはI H出場メンバー。合宿中も特に大きな事故がなかった以上、実力・実績確かなメンバーで固まることは殆ど決まっていた。それが今、現実となった。

「ッ……！」

「ふーっ……！」

集団の一部——ベンチ入りを果たせなかった三年生11人が息を零した。I Hへの出場が叶わない今、彼らの大仁多高校でのバスケット活が、今終わってしまった。彼らはI Hでの結果とは関係無しに、この先公式の試合に出ることは二度とない。

非情な宣告を耳にして、それでも選手としての意地が感情を爆発させることをよしとせず、その場で立ち尽くした。

選手達がしっかりと意志を保っていることを確認し、藤代は続ける。

「ここまでよくついてきてくれました。」

ベンチ入りしたメンバーは気を緩める事無く、練習に励んでくださ

い。そしてベンチ入りを果たせなかったメンバーはチームのサポートに励んでください！

一致団結し、共に全国の舞台上で戦いましょう！」

『はい！』

『……はい！』

こうして大仁多高校の最後の追い込みが始まった。

戦うことなく終わってしまった者達の思いも背負い、選手達はさらなる高みを目指す。

「うおりやつ！」

「ぐっ!？」

小林のパスから山本のカットイン。その鋭いドリブルに神崎の反応が遅れた。

中央への突破を許してしまい、たまらず佐々木がヘルプに出る。佐々木の姿が目の前に映ると、山本はパスアウト。45度の白瀧の手にボールが渡った。

「ッ！」

「ナイスパス！」

ノーマークになった白瀧のスリーが炸裂する。連携を確かめるゲームで確実に成果を残していた。

「よっしー！」

「——終了！　そこまで！」

ゴールの後、藤代の声が響き渡る。今日は一度しかミニゲームを行っていないかった為に選手の動きも悪くなく、調整の完成度を示すことが出来た。そのため藤代の笑みもいつもよりも深く見える。

「皆さんお疲れ様です。今日は合宿の最終日でしたので、軽めにここで切り上げようと思います。疲労が溜まっているでしょうから、しっかりストレッチをして上がってください」

五日間の疲労を考慮し、今日の練習はここで終了となった。選手達

も不満はなく、安堵の息を零す。

解散の合図でそれぞれストレッチへと別れていくが……白瀧は一人ボールを手にして光月、本田の下へと歩いていく。

「お前ら、ちよつと良いか？」

「あ？ なんだよ？」

「ストレッチの事かい？ 僕達もこれからやろうと思っただけだ」

「いや、そうじゃない。本当に悪いと思うが、これから練習したいことがあるんだが、二人でディフェンスの役をしてくれないか？」

それはストレッチの誘いではなく、むしろ逆だった。きつと物足りないことがあったのだろう。白瀧は二人に練習の付き添いを頼んだ。

「……二対一でつてこと？」

「そういうことだ」

「どういうつもりだ？ 1 on 1ならわかるが、俺らなら二人でもいけるってことかよ？」

「違う、そうじゃない。むしろこれからやることはまだ使いこなせていない。だけど、少しでも実戦レベルで試しておきたいんだ。だから頼んでる」

言葉の通り、自信はないのだろう。表情は少し暗く、まだ迷いがあるようにも窺えた。

彼の様子で困惑したのか二人は顔を見合わせ、やがて「仕方がないか」と息を零した。

「俺としてはディフェンスの練習にもなるだろうし、別に構わないぜ」「僕も同じく。以前から教えてもらってばっかだったから、少しでも役立てるなら手伝うよ」

「……ありがとう」

二人の承諾を得て、笑みを浮べる白瀧。善は急げとさっそくコートへと戻っていった。

「ただ、やる前に一つ聞いておきたいんだが」

「なんだ？」

「お前は一体何を試そうとしているんだ？ お前のことだ。どうせ何の考えも無しに、つてことじゃあねえんだろ？」

相手をする以上、どうしても気になる疑問だった。

本田も白瀧が最近何かを修得するべく練習に励んでいたことは知っていた。だが詳しい事情は知らされておらず、彼がこうして仲間に頭を下げて試そうとしていることが、それほど必要なことなのかと聞かずにはいられなかった。

しかしまだ確信がないのか、白瀧は表情を歪めた後、一拍置いて本田の質問に答える。

「……簡単に言えば、〃キセキの世代〃、そしてさらにもう一人、正確に言えばヘルプにでたもう一人を同時に相手にしても得点できるようにしたい」

「え？　〃キセキの世代〃と、さらにもう一人？」

「だから二対一を？　だがお前のドリブル突破があればそんなのいらないんじゃない？」

「いや、その考えは甘すぎる」

仲間の力への信頼とも取れる一言を、他でもない白瀧が切り捨てた。

「確かに突破はできるかもしれない。だが〃キセキの世代〃は抜かれなくても一瞬で立て直し、俺を止めに来るだろう。そうなるとどうしても二対一の形ができてしまう時が来る」

「……まあ彼らも身長がかなり高いし、ブロックに跳ぶだけでもしてくるだろうけど」

「ああ。そんな時、パスしかできないようではいざれ止められる。シュートの切り替えも選択肢が限られているかもしれない」

だからこそさらなる力が必要なのだ、〃キセキの世代〃の圧倒的な力を目にしてきた白瀧は力説する。

「二回抜いただけじゃ足りないんだ。何度でも抜いて、そしてシュートを決める。たとえば二対一でも勝てるように！」

最悪の状況を想定し、最善の手を打つ為に、今できることをする。本田も光月も、彼の強い意志を前に口を挟むことはしなかった。

同時刻、東京都誠凛高校。その体育館ではバスケット部員が五対五のゲームに励み、汗を流していた。

練習の仕上げである五対五^{ゲーム}の最中。

伊月が果敢に切り込んで行き——突如視線の真逆の方向へとボールを放り上げる。

「えっ?」

「——うらあっ!!」

見えていないはずの先に火神が跳びあがり、ボールを掴むとそのままリングへ叩きつける。

誰も反応することができず、ボールは力強くコート^{コート}の床へと落ちた。

「よっし、ナイスだ火神!」

「ナイツシュです」

「おうよ!」

着地すると日向や黒子とハイタッチをかわす火神。

かつて決勝リーグ・桐皇戦で負った足の負傷もすっかり完治し、動きのキレは凄みを増すばかりであった。彼の實力は誠凛でも随一を誇り、練習中では常にチームを鼓舞するエースとして励んでいた。

(……IH。キセキの世代と戦えるだけあって火神君の士気は高い。他の皆も初めての全国とはいえ、彼につられるように調子を上げている。あとは、本番でこの力を出せるかどうか、か)

チームを見守る誠凛の女子高生監督、相田リコはその光景を嬉しそうに思うと同時に、一抹の不安を抱いた。

彼女も監督として最善を尽くしている。選手もそれに伝えてくれている。だが心配が尽きることはない。

リコが考える問題とは誠凛が選手層の薄い若いチームであるということ。

決勝リーグでも選手層の薄さを感じることがあった。IHとなればその差は余計に顕著になるだろう。加えて初の全国とあって本番では精神的な面でも不安要素が残っている。

こればかりは練習だけではどうしようもない事もあり、リコは不安を解決することはできなかった。

「……どうしたリコ？ 何か心配事でもあるのか？」

「え？ ああ、いえ別に……」

「そうか？ 今眉間に皺ができていたぞ。こう、くつきりとな」

「あんまり女の子にそういうこと言わないでくれるかしら？」

的確に自分の心中を見抜かれたこと、乙女の気にかざること、ズバツと言われたことに対する八つ当たりをぶつけるが、しかし目の前の巨漢はどこ吹く風で話を続ける。

「あんまり難しい考え事はしない方がいいぞ。俺達^{選手}としても、リコには堂々としていて欲しいと思っっているし。」

それに……何よりも日向達は強い。どんなに辛い状況でもやり遂げてくれるさ」

「鉄平……」

「な？ 暗い顔したって何も良い事は起きないさ。楽しんでいこうぜ」

リコを励ますように茶髪で大柄の男——木吉鉄平は笑う。見るだけで周囲を安心させるような表情に、リコも余裕を取り戻して笑みを浮べた。

「……そうね。鉄平にも期待しているわよ」

「ああ！ 任せろ！」

木吉鉄平——昨年度の都大会予選で負傷し、治療が続いていた誠凛のエース。

誠凛バスケット部創立者として、センターとして、仲間の精神的な支えとして快進撃を演じた“無冠の五将”の一人、“鉄心”が、誠凛に舞い戻った。

誠凛高校二年、木吉鉄平 ポジション：C 193cm

神奈川県、海常高校。

IH常連校として有名なバスケ部は今年も順調にIH出場を決め、本番へ向けて調整を進めていた。

今日も他校との練習試合を組み、一軍メンバーが試合の勘を確かめている。

「甘いぜー！」

「ぐっ!？」

「ステイール! まずい、止めろ!」

海常の司令塔・笠松が相手のパスコースを読みきり、ボールを奪い取る。

すかさず始まる反撃の速攻。笠松が自らボールを運び、黄瀬が続く。

相手チームとの二対二のマッチアップが生じるが……

「きつちり決めろ黄瀬!」

「了解っスー!」

この程度のディフェンスを苦とするような伊達な男ではない。

笠松から黄瀬へバウンドパスが通る。姿勢を崩す事無くパスを受けた黄瀬はマークマンをかわすようにレッグスルーで持ち手を変え、ロールターンで突破する。

「なっ!? 今のはまさかうちの……!」

「もらいつスー!」

相手の動きをそれ以上の完成度で披露し、シュートを沈める。

一度相手のプレイをみただけで完全に模倣し、相手を上回る完成度で圧倒する。黄瀬もまたIHへ向け、着々とプレイの完成度を高めていた。

「絶好調だな、黄瀬のヤツ」

「馬鹿野郎。これくらいやってもらわなきゃ困るわ!」

チームも彼の調子を感じ取り、その背中を頼もしげに見つめた。

スコアラー・黄瀬を中心に主将・笠松が纏め上げたバランスの取れたチーム。

そう簡単に崩すことはできない実力は未だに健在。今日も練習試合の相手に一度もリードを許す事無く、完勝を収めた。

一方、秋田県陽泉高校。

こちらでもIHへ向けた合宿の最中であり、レギュラーに名を連ねている選手達の紅白戦が行われていた。

ゴール下で長身の選手達がひしめく中、PGの選手よりボールが通る。

パワードリブルで強引に相手を押し退けてゴールへと近づいていく。仕上げに相手の体を軸にターンドリブル。ゴールへと正対してジャンプシュート。

確立も高く、決まったと確信したその瞬間。

——その巨体よりもさらに高い場所に、大きな手が立ちはだかった。

「なっ……!?!」

「よーつと」

「うおっ!」

驚愕する相手を他所に、陽泉高校内でも最高身長を誇る紫原が軽々とブロックを決めた。

“キセキの世代”最強のセンター、紫原敦。恵まれている体格から繰り出される強烈なブロックはシュートを放った選手の闘志を奪い取るほどだった。

「な、ナイスブロック敦!」

「はいよー」

仲間の掛け声にも適当に相槌を打つに留まり、依然としてゴール下に君臨している。

彼が一人いるだけでも敵のオフェンスはまったく機能しなくなり、陽泉のディフェンスは全国でも最高クラスに達していた。

「お前も最近やけに動きが良いのう。IH、全国を前に燃え滾っているのか?」

「はあ? 別に、そんなんじゃないし」

茶化すような口調の主将に汗を拭いながら答える紫原。

しかしどこか苛立ちを感じさせるような雰囲気纏って紫原は言った。

「——ただ捻り潰したいやつはいるけどね」

有無を言わせぬ威圧感を感じ取り、主将が一步後ずさる。

I Hの組み合わせが決まり、戦いに燃えているものは多い。紫原もその一人であった。

東京都のあるストリートコートに、一人の男がいた。

帰宅途中なのか、学校のカバンを近くの地面に置き、制服姿のままバスケットボールを手に、トリプルスレットの体勢を取った。

(……右、を読まれて左に切り替えして……そこからもう一回……) 目の前には誰も存在しない。しかし彼は両の瞳を閉じ、脳裏に自分と全力で戦える、最後まで向き合える相手を想像し、一対一の駆け引きを行い、ドリブルを始めた。

もはやボールが体の一部のように前後左右、自由自在に行き来する。

利き足を軸とした体の回転も加えて一步ゴール側へ躍り出ると高く跳びあがる。

空中で右腕を振り上げ、さらにそこから一回転してリングにボールを叩き込む。

ボールが地面に落ち、転々とする中——ようやく青峰大輝は両目を開けた。

「いよいよ、か——」

チームが練習に励んでいる中、青峰は単独行動をしていた。

しかし完全にサボっているかと言えばそれは否であり、こうしてたまに体を動かし、動きのキレを確かめていた。

今までは強敵の不在を嘆いていた。だがI Hではかつて共にキセキと謳われたチームメイトと戦う機会が訪れる。

「さっさと勝ちあがってきやがれ。じゃねえと全力でやれねえからよ！」

青峰は闘志をむき出しにして笑っていた。

そして——京都代表、洛山高校。

洛山高校はIHを決めた全国の強豪校を招待し、その腕試しとも言われる洛山カップに出場していた。

悠々と優勝決定戦まで勝ち残った洛山高校は最終戦でも堂々とした戦いぶりを観客に見せ付けた。彼らの実力は誰もが目を見張るものがある。

「っ、強すぎる！」

「相手は奈良代表、神野高校だぞ！ それを……」

多くの観客が息をのんだ。同じIH代表校同士の戦い。しかしスコアは——

「圧倒的すぎる。まるで大人と子供の試合のように……！」

(洛山) 115対52 (神野)

最終Qの時点でダブルスコア。残り時間を考慮するとすでに試合は決まっており、観客は洛山の選手達の完成されたプレイに目をこらす。

この後、洛山は点差をさらに広げ、洛山カップで優勝を果たした。

「ちっ！ 前哨戦とはいえ、歯ごたえのねえ試合だなオイ！」

「無駄口叩かないでくれる？ 試合が終わったばっかなんだから、もうちよつと大人しくしなさいよ！」

「あー、でも俺ももうちよつと暴れたかったなー。結局俺30得点で終わっちゃったし」

だが試合終了直後、洛山の選手達に笑みはない。

調整の意味が強い試合であったとはいえ、勝って当然であり、むしろまだまだ戦い足りないのだと尽きることのない戦意を抑えきれずにいた。

「無駄話はそれほどにしておけ。試合の反省は後です。——行くぞ」

すると赤髪で小柄な男が彼らを諭すように呟く。

決して強い口調ではなかったが、誰もが彼の指示に従い、無言で後に続いた。

年下でありながら、試合にもまったく出ていないのだが、他の選手達に不満はない。

「キセキの世代」の主将、そして今は洛山高校の主将、赤司征十郎。

高校最強と謳われる洛山高校は万全の状態でIH優勝へと突き進んでいく。

——時が流れた。

その日は雲一つない青空が広がっていた。

「んー。もうこんな時間か。そろそろ始まっているころっすかね？」

「あ？ ああ、そういえば今日が始まりだったな」

秀徳高校の一年生司令塔、高尾が時計を見て呟いた。

IHは敗れたものの、すでに秀徳は次のWCへ向けた激しい練習が続く合宿。

時計の針は11時を示している。昼の休みまでもう少しだが、その前に練習の区切りとして小休憩が挟んでいた。

後輩の発言に、「もうすっかり忘れてしまっていたな」と木村がぼやく。

自分達とは直接関係ないとは言え、今日はバスケットに関わる人間として注目して当然である大会が始まる日。やはり一度脳裏に浮かぶと気になってしまうのは選手の定めだろう。複雑な雰囲気場を支配する。

「前情報だと、やっぱり洛山が優勝の本命らしいっすよ。月バスの特集にも載っていたけど、大本命洛山、対抗馬に桐皇・陽泉・海常。大仁多は「キセキの世代」との戦い方次第。そこで、誠凛はダークホー

スのような扱いでした」

「……誠凛、か」

「カツ！ 当たり前だ。予選で俺達が痛い目にあっただからな」

乱暴にボールを叩きつける宮地。

確かに都予選でも誠凛は正邦・秀徳という強豪二校を撃破した。勝率が極めて低い戦いに勝利を収めてIHへの出場を決めた。若いとはいえ、世間が注目するのも無理はない。

「……ふん。下らん。何れにせよ俺達にはもう関係のないことだ。そのようなことをここで談義しても意味はないのだよ」

「あれ？ 真ちゃん意外と冷め切ってんな。中学の同僚が戦いあうつてのに」

「俺が戦うわけではないからな」

至つて平然とした態度を取り、緑間は逸早く休憩を切り上げてコートに戻る。

未だに周囲との確執が消えたわけではない。しかし言葉の棘が減ったことは確かであり、前よりもチームの練習に積極的になっていた。

（……桐皇、海常のブロックは間違いなくこの戦いの勝者が決勝へと進む。

となると問題は逆のブロック。王者洛山、そして洛山への挑戦権を巡った戦い——誠凛・大仁多・陽泉。この三校の争いがどうなるか。そしてそれによっては、あるいは……）

そして口頭では無関係を装っていても、心の中ではかつてのチームメイトの顔が何度もよぎっている。

数多くの代表校の中でも、やはり見知った相手ばかり想像してしまう。私情を挟まずとも、きつとそうなる運命なのだろうと緑間は思った。

同時刻、秀徳高校が練習に励んでいる中。

I Hの舞台となる会場には、全国から集まった五十九校の選手、ならびに関係者が集結していた。

優勝候補の筆頭である京都代表・洛山をはじめとして、最近注目度が高い桐皇、さらに陽泉、海常、大仁多などI Hの常連校。そして初出場を決めた誠凛の姿もあった。

もはや見知った光景に感慨深そうな表情を浮かべる者もいれば、経験が少ないために強張った表情をする者もいる。

様々な反応が見られる中で、いよいよその時は訪れた。

「これより、全国高等学校バスケットボール選手権大会、インターハイを開会します」

——I H、開幕。

待ち焦がれた戦いの時が、ついに訪れた。

黒子のバスケ NG集

「確かに突破はできるかもしれない。だが『キセキの世代』は抜かれなくても一瞬で立て直し、俺を止めに来るだろう。そうなるとうとうしても二対一の形ができてしまう」

「……まあ彼らも身長が高いし、ブロックに跳ぶだけでもしてくるだろうけど」

「ああ。そんな時、パスしかできないようではいざ止められる。シュートの切り替えも選択肢が限られているかもしれない」

だからこそさらなる力が必要なのだ、『キセキの世代』の圧倒的な力を目にしてきた白瀧は力説する。

「二回抜いただけじゃ足りないんだ。何度でも抜いて、そしてシュートを決める。たとえ二対一でも勝てるように！」

「……一回又いただけじゃ足りないなんて。……やっぱり白瀧君って」

「もうすっこんでてくれないかな、橙乃!!」

最後まで言わせない白瀧だった。

データ集

登場人物紹介

#7 大仁多高校1年

誓いを果たすため、今を走り続ける『神速』 白瀧要 KANAME

SHIROTAKI

身長：179cm

体重：68kg

ポジション：SF (PG、SG)

誕生日：1月5日

藤代のスカウトを受けて帝光中から大仁多高校へ進学した。『帝光中の原点』、『神速』と呼ばれる大仁多のエース。適応力が高く、多様なプレイスタイルで強敵と立ち向かっていく。状況によってPGやSGを務めることも。

栃木県予選では持ち前の得点力と瞬発力を発揮し、最優秀新人賞、得点王、ベスト5のタイトルを獲得した。後に月バスの取材を受けるなど注目を浴びることとなる。

技術が豊富であることに加えて責任感が人一倍強く、面倒見のいい性根の持ち主。その為同学年の光月達に技術を教えたり指導したりすることもしばしば。勉強や料理などバスケット以外のことも一通りできる。西村いわく「何でもできるが一番にはなれない」。

相手が敵であろうとも気持ちを汲む優しい一面を持つ。しかし彼の強すぎる義務感が災いし、周囲の期待を振り切って自分勝手に生きる事がどうしてもできない。

中学一年の時に全国制覇を経験し緑間達同級生と共に『キセキの世代』と呼ばれるも黄瀬の加入により立場は一転。レギュラー落ちを経験し、さらに途中出場した試合で肩に大怪我を負い、数ヶ月の戦線離脱を余儀なくされた。

治療期間中に『キセキの世代』が覚醒し、部員達が絶望する姿を目

にして一度は嫉妬と絶望のあまり心が折れた。しかしもう一度戦うことを選んでからは『かつてのように“キセキの世代”と同じ舞台に立つ』という己の誓いと桃井の『皆とまた一緒にバスケをしたい』という願いを胸に、進み続けた。

#9 大仁多高校1年

内に力を秘めた心優しきビツクマン 光月明 AKIRA KO

DUKI

身長：192cm

体重：104kg

ポジション：PF (C)

誕生日：8月7日

白瀧と同じく大仁多で一年生ながらレギュラー入りを果たした大柄の選手。

恵まれた体格とは裏腹に精神面の弱さを抱え、中学時代の頃から本番では力を発揮できないことが多かった。盟和戦ではイツプスに陥り、本来の自分のあり方を見失うも旧友の荻野と白瀧の声を受けて目覚める。その後はゴール下を制し、大仁多の勝利に貢献した。

体格を活かしたゴール下でのパワー溢れるプレイが得意。盟和の勇作とも互角以上に渡り合う力を持つ。高校入学後は神崎の指導も受けてミドルシュートも習得した。だがフリースローは未だに克服できておらず確立は非常に低い。

中学時代は控えだった事情もあり、他のメンバーと比べるとまだ強敵との対戦経験は浅い。集中しすぎると周りが見えなくなり、決勝戦では味方である白瀧を吹っ飛ばしたこともあった。

#4 大仁多高校3年

常勝軍団を引っ張る熱き司令塔 小林圭介 KEISUKE K

O B A Y A S H I

身長：188cm

体重：82kg

ポジション：PG (F)

誕生日：6月14日

全国区の実力と卓越したリーダーシップを兼ね揃えた大仁多の主将。オールラウンダー型のPGで、ゲームメイクに加えて自ら得点にも絡んでいく。司令塔だけではなくフォワードとして動くこともある。

安定した強さを発揮しチームに勝利をもたらす。県予選ではMV Pに選ばれ、昨年引き続きベスト5を受賞する。決勝戦では白瀧・光月の両名がベンチスタートの中、主将としてチームを支え続けた。

選手としての能力だけでなく精神的な強さを持ち、常にチームを鼓舞する頼もしい存在。藤代監督からも絶対の信頼を寄せられている。

三年生の中では唯一大学の推薦の話を受けている為、冬の大会の出場も決めている。ウィンターカップ

秀徳の大坪とは同じ全国区の選手というだけではなく昨年の冬に戦いあった仲でもある良きライバル関係。また、マネージャーの東雲と交際している非常に仲がよい。

#6 大仁多高校3年

大仁多を明るく支える副主将 山本正平 SYOHE YAMA

MOTO

身長：178cm

体重：66kg

ポジション：SG

小林と共にチームを引っ張る副主将。スピードを武器に切り込んでいくスラッシュャータイプのSG。ディフェンスも上手く、ステールを中心に積極的に仕掛けていく。

明るく気さくな性格で同ポジションを争う神崎にもアドバイスを送っている。

本来なら副主将は5番をつけることが多いが、背番号は6。監督である藤代の意図が入っているとのこと。

勉学もやればできるタイプだが普段は興味が薄いこともあってあ

まりしないため学力テストの追試対象者となってしまう。

最後の年であることに加えて昨年のWCの敗戦の悔しさから、全国制覇への意気込みが非常に強い。

#5 大仁多高校2年

静かにゴール下の攻守を担う技巧者 黒木安治 YASUHARA

U KUROKI

身長：195cm

体重：88kg

ポジション：C

二年生唯一のレギュラーで技巧派センター。寡黙な性格で口数は少ない。チーム随一の体格と技術を活かし、大仁多のインサイドを担う。

練習試合での大坪、県予選準決勝でのジャンとの対戦をはじめ、格上の相手との戦いを繰り広げてきた。常に落ち着いており、冷静に試合に挑む。プレッシャーに弱い光月を助け、共に強敵を相手にゴール下の争いを繰り広げた。

三浦とは同学年・同ポジションともあって交流が深い。三浦は黒木に強い対抗心を持ち、黒木はそんな彼をあしらいつつ共に強くなろうと意気込んでいる。

勉強でも成績優秀であり、二年生の中ではテスト順位が最もよかった。

#8 大仁多高校3年

力でゴール下を制するパワープレイヤー 松平猛 TAKERU

MATUDAIRA

身長：187cm

体重：80kg

ポジション：PF

気迫溢れるプレイをする三年生。県予選決勝戦では光月に代わってスターティングメンバーに名を連ねた。

パワーに自信があり、ゴール下のオフエンス・ディフェンスが得意。同ポジションであり引つ込み思案の光月を励まし、背中を後押しする。

#11 大仁多高校3年

知性に長けた三年生SF 佐々木一 HAZIME SASAKI

I

身長：184cm

体重：75kg

ポジション：SF

三年生の控えSF。攻守共にバランスの取れた能力を持つ。白瀧の加入と小林のフォワード適性の覚醒により自らの出場機会を奪われる複雑な状況になったが、腐る事無くチームを支え、白瀧達をフォローしている。

バスケットだけではなく勉学の成績も優秀であり、追試の際には松平や神崎に勉強の手助けをしていた。

MANAGER 大仁多高校3年

選手達と共に戦うクールなマネージャー 東雲葵 AOI SI

NONOME

身長：165cm

体重：??kg

三年生マネージャー。試合の際にはアシスタントコーチとしてベンチ入りしている。

穏やかかつ冷静な性格で監督の隣でチームを支えている。チームに対する姿勢から選手・監督共に信頼を寄せている。

料理・裁縫なども難なくこなし、勉学にも秀でているなど隙のない女性。橙乃にも料理の手ほどきをした。

主将の小林と付き合っており、名前で呼び合うなど関係は良好である。

#10 大仁多高校2年

静かに確実にゲームを作る大仁多司令塔の一角 中澤秀樹 HI
DEK I NAKAZAWA

身長：175cm

体重：63kg

ポジション：PG

二年生の控えPG。ディレイドオフエンスが得意であり、タイミ
ングを計って落ち着いて試合を組み立てる。

レギュラーの小林のことを慕っており、同じポジションの選手とし
て尊敬している。

決勝戦では小林に代わって司令塔のポジションで試合開始時から
出場。戦力が限られている苦しい試合展開の中、焦ることなく試合を
運んでいった。

#12 大仁多高校2年

友と共にセンターを務める二年生 三浦隼人 HAYATOM

IURA

身長：190cm

体重：83kg

ポジション：C

ベンチ入りしているセンターの二年生。生粋のパワータイプであ
る。インサイドでの体のぶつけ合いが得意。少し血の気が多い。

レギュラーを争っているということもあり、同ポジションである黒
木への対抗心が強い。だが決して嫌っているというわけではなく、あ
くまでもライバルとしての関係。

試合で黒木の負担が大きい際には真っ先に名を呼ばれた。

MANAGER 大仁多高校1年

チームメイトを支える天然マネージャー 橙乃茜 AKANE

TONO

身長：158cm

体重：???kg

誕生日：5月21日

少し抜けている一面がある一年生マネージャー。初対面の神崎達を魅了した美貌の持ち主。スタイルもよく、誠凛を訪れた際には日向たちをも硬直させた。

兄・勇作が盟和高校の主将を務めており、自身も中学時代からマネージャーをしていたこともあってバスケのことは詳しい。中学時代に白瀧の活躍を目にしており、長く活躍の場がなかった彼の身を案じていた。

彼女がバスケットを知る原因となった人物のことを今でも思っているが詳細は明らかになっていない。

校内実力テストで三位に入るなど一見才色兼備のように見えるが上記の通りやや抜けている一面があり、チームメイトを困らせることも。特に料理は壊滅的であり、初めて見た際には誰もが目を丸くした。今は白瀧の教えを受け標準の域には達している。

#13 大仁多高校1年

安定してリングを射抜くロングシューター 神崎勇 ISAMI

KANZAKI

身長：176cm

体重：65kg

ポジション：SG

誕生日：2月27日

白瀧、光月のクラスメイトであり、中学時代に全国大会を経験している実力者。入部直後のミニゲームでも二人と同じチームで共に戦い、勝利に貢献した。その活躍を認められてベンチ入りを果たす。

目立ちたがり屋で周りの目を気にするお調子者である。試合で活躍し、注目が集まると胸が高鳴っていく。全国経験者だけあって実力は確かであり、スリーポイントラインのさらに外側から高確率でスリーを沈めるロングシューター。ミドルでも楠を相手にフェイダウェイシュートを沈めるなど得点力が高い。栃木県予選準決勝では

途中出場し、聖クスノキ高校のゾーンディフェンス攻略の足がかりとなつた。

お気楽者の一面があるが先輩への礼儀はよく、山本とは頻繁に合同自主練習を行っている。仲間への気配りも忘れず、光月にミドルシュートを教え、白瀧の焦りを見抜くなど彼らの支えとなっている。

#14 大仁多高校1年

白瀧を慕い、白瀧も信じた『神速の再来』 西村大智 DAICHI

NISHIMURA

身長：172cm

体重：62kg

ポジション：PG (F)

誕生日：11月27日

白瀧と同じく帝光中出身。中学三年の時には赤司の控えとしてベンチ入りしていた。スラッシュャータイプのPGで、自ら果敢に切り込んでいく。ドライブは勿論のこと、白瀧とのコンビネーションも抜群。決勝戦では盟和のマンツーマンゾーンディフェンスの攻略を担った。

帝光入部当時はフォワードであったがコーチにコンバートを指示されて司令塔に。三軍から始まり最終的には一軍でベンチ入りを果たすなど少しずつ実力をつけていった努力家である。

“キセキの世代”という圧倒的な味方に立ち向かうために白瀧の指導を乞い、現在のプレイスタイルを身につけた。いつでも勇気付けてくれた白瀧のことを慕っており、泉真館などの強豪校の誘いを蹴って彼の背中を追い、大仁多高校へ進学した。

帝光中時代の出来事と白瀧の性格を熟知しているため、彼の身を案じている。

#15 大仁多高校1年

ワンプレイで流れを変えるディフェンスの専門家 本田恭介 K

YOSUKE HONDA

身長：184cm

体重：77kg

ポジション：PF

誕生日：6月12日

大仁多ベンチ登録者のうち三人目のPF。バスケット部入部後のミニゲームでは初戦で白瀧達のチームと戦った。負けん気が強く、この試合で完敗した白瀧に対抗心を抱いている。

ディフェンス能力が高く、野生のカンで相手の動きを察知し、オフENSEを封じることが得意。

盟和との試合ではエースである勇作を抑える為に途中出場。最初こそ彼の得点を封じ込めることに成功するが、身体能力の高さから徐々に押され始めていった。その後は白瀧のアドバイスにより前半最後のオフENSEを封じ込め、後半に望みを繋げた。金澤のパス攻略にも大いに貢献し、大仁多の勢いを取り戻している。

この出来事が切欠で徐々にチームメイトに心を開いていき、当初は他の一年生四人ともあまり深く接してはいなかったが、最近は共に時間を過ごすことが多くなった。

COACH 大仁多高校

冷静に勝負を見極める指揮官 藤代雄一 YUICHI FUZ

I SHIRO

身長：183cm

体重：70kg

ポジション：PG/SG（現役当時）

飄々とした性格でつかみどころのない大仁多の監督。大仁多を8年連続IH出場に導き、小林をはじめ全国に名を轟かせる選手を育て上げるなど監督としての実力は計り知れない。

昨年はWCこそ成績を残せなかったもののIHはベスト4まで勝ち残り、加えて近年は表舞台で活躍することはなかったとはいえ並外れた実力を持つ白瀧をスカウトするなど、確かな成果を残した。

人脈は広く秀徳の中谷監督、富ヶ谷大学の椎名監督などとも縁があ

る。

彼にとって背番号6は馴染み深いものであり、今年は副主将の山本に6番を託した。

今年も的確な采配で予選を指揮し、並み居る強豪校を破る原動力となった。

《チーム力診断》

おおにたこうこう 大仁多高校 所在地：栃木県 主将：小林圭介 監督：藤代雄一

栃木県の強豪校であり、8年連続でIH出場を決めた。今年は白瀧を獲得し、個々の力に抜群のチームワークと多彩な戦術を組み合わせて相手を圧倒する。控え選手も実力を持つ選手が集い、チーム一丸となって悲願の全国制覇を目指す。

横断幕は『百折不撓』。文字通り不屈の魂宿りし歴戦の勇士達。攻守に隙ない万能チーム。白瀧の速攻で流れを変える！

・オフエンス

PGの小林を中心にゲームを組み立てる。アウトサイドは山本、インサイドは光月と黒木の二人が攻撃の中心となっている。さらにスピードとテクニクで敵DFをかわす白瀧、自身も得点力を持っている小林が加わり、隙の無い攻撃が可能だ。さらには白瀧がPGに入るという展開も！

・ディフェンス

光月と黒木の長身二人がインサイドを固め、ゴール下を制する。リバウンド成功率も高く、圧力はかなりのもの。加えて機動力に優れた白瀧、運動能力に長けたガード陣がその守備範囲を生かしてステイールを狙い、一瞬で試合の流れを変える。勝負時にはゾーンプレスで攻撃を封殺する。

COACH 藤代雄一

ASSISTANT COACH 東雲葵

MANAGER 橙乃茜

STARTING MEMBER

- #4 PG 小林圭介 3年 主将
 #6 SG 山本正平 3年
 #5 C 黒木安治 2年
 #7 SF 白瀧要 1年
 #9 PF 光月明 1年
 SUB MEMBER
 #8 PF 松平猛 3年
 #10 PG 中澤秀樹 2年
 #11 SF 佐々木一 3年
 #12 C 三浦隼人 2年
 #13 SG 神崎勇 1年
 #14 PG 西村大智 1年
 #15 PF 本田恭介 1年

・藤代雄一監督による大仁多高校紹介！

「二年前に校舎を改築したので綺麗に整備されています。トレーニングルームの設備も充実しているので生徒達も喜んでいきますよ。勉強も大切に行っている学校なので、進学を目指す生徒は学業にも力を入れてくださいね」

施設は十分。小林や白瀧など、トレーニングを重視する選手には欠かせない環境である。

#8 聖クスノキ高校2年

誰もが認める誇り高きSG 楠ロビン ROBIN KUSUN

OKI

身長：190cm

体重：77kg

ポジション：SG

並外れたスピードとテクニックで白瀧を苦しめた聖クスノキのエース。全国区の実力を持ち、スコアラーとして栃木の強敵を相手に躍動した。

実力は相当なものだが昨年度の県予選で負傷し、その影響で体力が大幅に低下している。この弱点を白瀧につかれてしまい、準決勝は後半戦からスタミナ切れを起こした。

経歴、性格、プレイスタイルなど白瀧とよく似た選手であり、途中で試合を諦めることを拒絶。白瀧もそれを理解し、最後まで全力で戦うことを選んだ。

チームへの貢献を認められて県大会ベスト5に選ばれている。その後は白瀧にジャンピングシュートのコツを教え、IHに挑む彼にエールを送った。合同合宿でも白瀧とよく話をかわしており、彼を諫めるなど友情を深めている。

#6 聖クスノキ高校3年

破壊力に長けた長身センター ジャン・ディア・ムール Jan

Dia Mour

身長：204cm

体重：90kg

ポジション：C

聖クスノキ高校が擁する大型の留学生。背丈とパワーに優れており、ゴール下を一人で圧倒する。エース・楠の出場時間が限られているため、実質チームのスコアラードでもあった。

大仁多戦ではポテンシャルの高さを活かして黒木を相手に優位に戦った。三位決定戦でもチームの勝利に貢献し、県ベスト5に選出された。

MANAGER 聖クスノキ高校2年

楠の身を案じる聖クスノキのマナージャー 西條奈々 NANA

SAIZYO

身長：158cm

体重：??kg

裏方で選手をサポートする聖クスノキ高校の女子マナージャー。楠と付き合っているため彼の体の具合をよく理解しており、試合前か

ら気を使っていた。試合後は項垂れた楠を優しく出迎え、共にその場を後にした。

#4 聖クスノキ高校3年

快進撃を支えた主将 真田雪士郎 K I Y O S H I R O S A N
A D A

身長：182cm

体重：70kg

ポジション：PF

聖クスノキ高校を束ねる主将。対大仁多戦は光月とマッチアップし、わざとフリースローを打たせて彼の動きを封じこめた。

#5 聖クスノキ高校3年

チームを盛り上げるムードメーカー 沖田真二 S H I N Z I
O K I T A

身長：176cm

体重：69kg

ポジション：SF

独特な口癖で話す聖クスノキ高校の副主将。山本や神崎と対峙するも、彼らの実力を超えることはできなかった。

#9 聖クスノキ高校2年

ダークホースの次代を担う司令塔 山田明弘 A K I H I R O
Y A M A D A

身長：171cm

体重：59kg

ポジション：PG

楠と同じく二年生レギュラー。付き合っている彼女がおり、試合には応援に駆けつけていた。

決勝で小林とマッチアップするも全国区の実力を思い知らされ、終始圧倒される。

試合後は三年生達の後姿を見て、次こそは悲願を達成させようと思気込んだ。

C O A C H 聖クスノキ高校

選手の思いをくんだ情にあつい監督 石川久則 HISANOR

I I S H I K A W A

身長：173cm

体重：62kg

ポジション：SF（現役当時）

聖クスノキ高校を率いる監督。ジャンと楠を主体としたチームを作り上げた。

一時は楠の限界を感じ取り、彼の交代を告げようとしたが彼の強い意志を感じ取って交代を撤回。楠を信じ、最後までコートで戦わせることを決意した。

《チーム力診断》

聖クスノキ高校せいくすのきこうこう 所在地：栃木県 主将：真田雪志郎 監督：石川

久則

優勝候補の一角・常盤高校を破ったダークホース。エース・楠と留学生センター・ジャンの破壊力で試合を優位に進める。他のチームメイトも二人に繋ぐスタイルでチームに貢献する。

二人の長身エースによる破壊力が武器！

・オフエンス

長身センター、ジャンによるポストプレイを主体としたゴール下から得点を狙う。外は楠のスリー、そしてドライブで敵陣を切り崩す。シュートが外れてもジャンがオフエンスリバウンドを制し、得点へと繋げていく。

・デイフェンス

基本的に無理なブロックショットやスティールは控え、相手にプレッシャーをかけてミスを誘うノーギャンブル。その後ジャンのデイフェンスリバウンドと楠のスティールで相手のチャンスを摘み取っていく確実な戦法だ。

COACH 石川久則

MANAGER 西條奈々

STARTING MEMBER

#4 PF 真田雪士郎 3年 主将

#8 SG 楠ロビン 2年

#5 SF 沖田真二 3年

#9 PG 山田明弘 2年

#6 C ジャン・ディア・ムール 3年

・石川久則監督による聖クスノキ高校紹介！

「生徒会の活動はもちろん、生徒達の自主性を重んじる私立校だ。どちらかというと文化部の成績の方が優秀だが、現在の理事長が楠の祖父ということでバスケット部には期待を寄せられている。学校で募集をかけた応援団も存在するぞ」

大仁多との決戦の際には学校側が応援団を募って駆けつけていた。その分選手達にかかるプレッシャーも相当なもの。

#4 盟和高校3年

打倒大仁多。気迫と闘志でチームを引っ張る盟和の主将 橙乃勇

作 YUSAKU TONO

身長：189cm

体重：81kg

ポジション：PF (SF)

盟和高校の絶対的エースにしてチームを引っ張る主将。橙乃の兄でもある。

卓越した身体能力とシュートレンジで得点を連発する。ディフェンス能力も高く、自らの活躍で盟和を盛り立てる。予選決勝戦では小林・松平・本田・白瀧・光月など大仁多の実力者達を相手に互角以上に渡り合った。

一年生の頃からスコアラーとして活躍し盟和を栃木ナンバー2と世間に言わしめるなどチームに貢献する。だが同時に大仁多を一度も倒せない現状に誰よりも憤りを感じていた。準優勝でさえも彼に

とっては屈辱でしかなく、IH最後の挑戦である今年の意気込みは尋常なものだった。そのため大仁多に敗れた際には言葉を失い、その場で泣き崩れてしまった。

大仁多のマネージャーである橙乃は妹であり、誰よりも彼女のことを愛している。そんな彼女への姿勢から、他者からはシスコンと認識されている。

合同合宿でもその実力を存分に発揮。同ポジションの光月にアドバイスを送った。

また、ライバル校所属の為に登場回数に限られている中（企画が盟和戦途中から始まったとはいえ）NG集では主人公の白瀧を抑えてメイン登場回数最多を記録するなど本編以外でも活躍した。

#5 盟和高校3年

個性派軍団を指揮する司令塔 細谷武士 TAKESEI HO

SOYA

身長：179cm

体重：68kg

ポジション：PG

盟和高校の副主将で小林に次ぐ実力を誇る司令塔。パスは勿論シュート能力にも長ける。

礼儀正しい性格でリーダーシップが高い。その為勇作をはじめ我が強い選手が集う盟和を束ねるまとめ役を務めている。監督からも信頼され、いざと言う時は彼の判断でチーム方針を決める。

チームとしては勿論、個人としても大仁多への、小林への対抗心は強かった。

#7 盟和高校3年

穏やかにチームを助ける技巧派センター 神戸直也 NAOYA

KOBE

身長：191cm

体重：82kg

ポジション：C

常時丁寧な口調で話す穏やかな選手。センターに抜擢されるだけあり体格に恵まれており、黒木同様技巧派の選手である。指先が器用でチップインなどが得意。

独特な選手が集う盟和の中で数少ない良心。細谷も彼を精神的な頼りとしている。

#6 盟和高校2年

大胆不敵にゴールを狙う盟和フロントラインの一角 古谷周平

SYUHE FURUYA

身長：188cm

体重：79kg

ポジション：SF

盟和高校随一の問題児。部内の上下関係が元で問題を起こし昨年はベンチ入りできなかつたが、勇作に実力を買われてレギュラーに名を連ねた。

身体能力に長け、勇作や神戸と共に屈強なフロントラインを支える。さらにステップバックシュートなどミドルレンジでも活躍する隙のないオールラウンダー。合同合宿では神崎と交流する場面が見受けられた。

#10 盟和高校1年

己の手でパスコースを作り出す補佐型シューター 金澤良平 R

YOHE KANAZAWA

身長：176cm

体重：64kg

ポジション：SG

盟和高校の中で唯一の1年生レギュラーを務めている。

身体能力は高いほうではないが分析力と決断力に長け、細谷と連携しディフェンスの隙についてパスをさばく補佐型のSG。尻上がり調子を上げていくタイプであり、後半戦のスリー成功率が高い。

姉がおり、勇作とは逆の意味でのシスコン。そのため意見の相違から何度か衝突もあった。

COACH 盟和高校

悲願達成へ、選手達を鼓舞し続ける盟和の指揮官 岡田尚志 HI

SASHI OKADA

身長：179cm

体重：69kg

ポジション：CF（現役当時）

栃木の王者・大仁多を相手に善戦を演じた盟和高校の監督。

藤代の監督としての才覚を認めており、同時に対抗心を抱いている。

エースである勇作を主体としたチームを作り上げフロントラインには絶対の自信を持っている。しかし決勝戦では大仁多の戦力と藤代の采配を前に相手の作戦を読みきることができなかった。

《チーム力診断》

盟和高校めいわこうこう 所在地：栃木県 主将：橙乃勇作 監督：岡田尚志

三年連続でIH県予選準優勝を果たすほどの急成長を遂げた強豪。主将・勇作をはじめ我が強い選手が揃っている。中外バランスの取れたチームであり、打倒大仁多の意気込みはどのチームにも負けていない。

統率の取れたフロントラインで敵を圧倒！

・オフェンス

勇作を主体としたフロントラインが得点源。ゴール下の当たりも強く、リバウンドが機能している。さらに後半は金澤のパスワークが加わり、細谷との連携が強くなる。ミドルも勇作のシュートレンジの広さ、古谷のステップバックシュートと隙がない。

・ディフェンス

オールコートマンツーマン、マッチアップ2―3ゾーンなどを駆使

し、積極的にボールを奪いにいく。細谷の指揮の下統制が取れており、そう簡単には崩せない。フロントラインがゴール下を固めるため、ディフェンスリバウンドも強く、相手の攻撃を封じていく。

COACH 岡田尚志

STARTING MEMBER

#4 PF 橙乃勇作 3年 主将

#5 PG 細谷武士 3年

#7 C 神戸直也 3年

#6 SF 古谷周平 2年

#10 SG 金澤良平 1年

・岡田尚志による盟和高校紹介！

「文化祭や体育祭などの学校行事が盛んだ。校則もそれほど厳しくはなく自由度が高い。部活動の参加も活発だがバスケット部は前から強かったわけではなく、ここ数年で成績を伸ばしてきた」

相手に即した戦術で立ち向かっていく。大仁多への執念の強さも、個人の向上心があつてこそ。

#10 矢坂黎明高校1年

光月の支えとなった男気溢れる旧友 荻野進 SUSUMU O

GINO

身長：183cm

体重：70kg

ポジション：SF

大仁多高校が県予選で戦った矢坂黎明高校の一年生エース。光月の中学時代の同僚でもある。

中学時代、光月が実力を発揮せずにいたことを恨めしく思っており、大仁多高校に進学したことが発覚した時には鼻で笑っていた。

試合敗退後は彼の成長を感じ取り、同時に本当は共に戦いたかったという思いを爆発させ、光月に勝ち続けるように声援を送った。意外と義理堅い性格であり、決勝戦も最初から観戦し、イッパズに陥った光月を勇気づけ、彼の戦う姿を最後まで見届けて会場を後にした。

#4 常盤高校3年

栃木の実力派シューター 柗省吾 SYOGO HIRAGI

身長：181cm

体重：71kg

ポジション：SG

昨年の栃木ベスト5に選ばれた選手。クイックネスと精度の高いスリーポイントシュートを武器に持つシューター。今年はチームの主将に選ばれている。

予選では大仁多の対抗馬と称され自身も対戦に燃えていたが、準々決勝で聖クスノキ高校に逆転を許し、敗退した。

COACH 富ヶ谷大学

大学バスケット界を牽引する名将 椎名悠平 YUHEI SINAI

身長：174cm

体重：60kg

ポジション：F（現役当時）

富ヶ谷大学バスケット部の監督。その手腕で大学を多くの大会で結果を残している。

藤代とは以前より交流があり、彼のチームで一際活躍する小林に早くから目をつけて彼に大学推薦の話を持ちかけた。

今年は東京都予選の試合を観戦し、「キセキの世代」の実力を見抜く。彼らの圧倒的な力を思い知り、藤代達の下を訪れた。

#6 秀徳高校1年

信念を貫く孤高の天才 緑間真太郎 SINTARO MIDO

RIMA

身長：195cm

体重：79kg

ポジション：SG

「キセキの世代」ナンバー1シューターと謳われる天才シュー

ター。語尾に「なのだよ」とつけるのが特徴。帝光時代は副主将に任命されていた。コートのどこからでもスリーを決める得点力と高い身体能力を武器に相手を圧倒する。

周囲への接し方から冷血漢と思われる反面で面倒見がよい性格をしており、かつては白瀧にスリーの手ほどきをしていた。何事に対しても手を抜くことが許せず、中学時代は練習に参加しない青峰などの同僚に怒りを燃やしていた。このことは彼の『人事を尽くして天命を待つ』という信念からも読み取れる。

白瀧を評価する一方、結果的に自らの手で彼を追い詰めてしまったことによつて二人の道は別れた。誠凛戦では己の思いを打ち明け、正しい道を示そうと力を尽くすが白瀧の意志を貫いた黒子に白瀧の姿を思い浮かべる。

敗戦後、白瀧との会話により答えを得るとかつての笑みを取り戻した。

#4 秀徳高校3年

東京都を代表する大型センター 大坪泰介 T A I S U K E O

T U B O

身長：198cm

体重：98kg

ポジション：C

東京都三大王者の一角を率いる主将。パワーと体格を活かしたダクシュートは強烈の一言に尽きる。我の強い緑間をも纏め上げる頼れる主将。

大仁多の小林とは全国でも戦い、実力も均衡したよいライバルであり、練習試合でも火花を散らしていた。試合後は全国での再戦を誓い合う。

予選でも主将としてチームを最後まで牽引するが、決勝戦で誠凛高校のリベンジを受け敗北。大仁多との約束を果たすことはできなかった。

#10 秀徳高校1年

鷹ホーク・アイの目を持つ緑間の相棒 高尾和成 K A Z U N A R I T A K A

O

身長：176cm

体重：65kg

ポジション：PG

一年生ながら秀徳高校でレギュラー入りを果たした好PG。視野が非常に広い鷹ホーク・アイの目とスピードで試合を組み立てる。

気さくな性格であり、緑間に対しても『真ちゃん』と呼び、茶化してみせるなど柔軟性が非常に高い。

月バスを愛読しており、記事に掲載される選手に注目している。小林も当然それに当てはまり、練習試合の際には積極的に話しかけていた。

#8 秀徳高校3年

自他に厳しい努力家 宮地清志 KIYOSHI MIYAZI

身長：191cm

体重：77kg

ポジション：SF

秀徳フロントラインの一角を担う三年生。身体能力が非常に高く、ドリブルやダンクをはじめとしたオフエンスが得意。

ストイックな性格で口が悪く、試合中でもしばしばその片鱗が見られることも。

#5 秀徳高校3年

堅実なプレイでチームを支える副主将 木村信介 SHINSU

KE KIMURA

身長：187cm

体重：80kg

ポジション：PF

強豪を支える副主将。スクリーンやレイアップといった基本に忠実なプレイを好む。パワー溢れる選手で秀徳のゴール下を守っている。

実家が八百屋でよく部活に差し入れを持ってくるらしい。

COACH 秀徳高校

I 歴戦の王者の指揮官 中谷仁亮 M A S A K I N A K A T A N

東京都東の王者・秀徳バスケット部の監督。独特な間延びした口調で話す。昨年度はIHベスト4へチームを導いた。

分析力に長けており試合中には小言を零しながら試合を見つめる。緩い性格のように思えるが選手に対しては妥協せず厳しく接している。

藤代とは長い付き合いのようで練習試合前には話をかわしていた。実は元バスケット日本代表メンバーであり、世界を相手に戦った経歴を持つ。

#11 誠凛高校1年

新たな光と共に戦う幻の六人目 シックスマン 黒子テツヤ T E T S U Y A

K U R O K O

身長：168cm

体重：57kg

ポジション：???

帝光中幻の六人目 シックスマン と謳われたパスの名手。基礎能力こそ低いものの、陰の薄さとパス技術を活かしたバスケットスタイルで誠凛の勝利に貢献している。

誠凛で得た新たな光、火神との相性は特に抜群。時には意見が対立するときもあるが試合では抜群のコンビネーションで強豪を次々と撃破する原動力となった。

かつては自分のバスケットをキセキの世代に認めさせるといった目的の為に戦っていたが、桐皇での敗戦以降は意識を改め、誠凛を日本一にするためにチームの一員として戦うことを決意した。

#10 誠凛高校1年

キセキの世代との戦いに燃える天性のスコアラー 火神大我 T

A I G A K A G A M I

身長：190cm

体重：82kg

ポジション：PF

誠凛高校の絶対的エース。中学まではアメリカに住んでいた。日本に帰国した際には日本のバスケのレベルの低さに悲観していたが、今はキセキの世代という強敵を目にし、彼らを倒して日本一になることを決意する。

練習試合で黄瀬、都予選で緑間と互角以上に渡り合うものの、決勝リーグでは青峰に手も足も出なかった。それ以来、今度こそ青峰を倒し、日本一になるのだとリベンジに燃えている。

都予選が始まる前に白瀧と顔を合わせており、彼のプレイを見てからは彼に対しても一目置いている。

#4 誠凛高校2年

誠凛を引っ張る熱い主将 日向順平 ZYUNPE HYUGA

身長：178cm

体重：68kg

ポジション：SG

怒涛の快進撃を続ける誠凛の主将。実力もシューターとしては確かなもので、一度入り始めると止まらないクラッチシューター。その間は性格も普段の温厚な性格から一変、非常に厳しいものとなる。

幾度もの激戦を乗り越えたことで主将としても大きく成長し、桐皇との敗戦で沈むチームを盛り立てた。

#5 誠凛高校2年

コートを見通す鷲の目の持ち主 伊月俊 SYUN IDUKI

身長：174cm

体重：64kg

ポジション：PG

若いチームの司令塔を担う。冷静で確実なパス回しを行う。

視野が広い鷲イーグルアイの目を持っており、些細なことも見逃さない。反面、ダジャレ好きで試合中でもよく口にするため、仲間内からは嫌な顔をされている。

#8 誠凛高校2年

フックシューターを使いこなす仕事人 水戸部凛之助 RINNO

S U K E M I T O B E

身長：186cm

体重：78kg

ポジション：C

何も言葉にすることがない寡黙な選手。技巧派センターでフックシュートを得意とする。

温厚な性格でチームの良心。小金井とは特に仲が良く、彼が水戸部の意思を伝えている。

#6 誠凛高校2年

何事も器用にこなすムードメーカー 小金井慎二 SHINZI

K O G A N E I

身長：170cm

体重：67kg

ポジション：F

高校からバスケットを始めた為経験は浅いものの、テニスで鍛えた身体能力を武器に戦う。

何でもこなす器用貧乏。水戸部の様子には機敏であり、周囲との中継役を担っている。

明るい性格をしており、ベンチでも積極的に声を出してチームを盛り上げる。

#9 誠凛高校2年

リバウンドを得意とする控え二年生 土田聡史 SATOSHI

T S U T I D A

身長：176cm

体重：70kg

ポジション：PF

ベンチでチームを支える二年生。糸目で温厚な性格。リバウンドが得意であり、正邦戦や秀徳戦にも出場した。

C O A C H 誠凛高校2年

大人顔向けの女子高生監督 相田リコ RIKO AIDA

身長：156cm

体重：???

女子高校生ながら誠凛を率いている監督。選手的能力を分析する
アナライザー・アイ
読みとる眼の持ち主で、適切な練習法を提案し鍛えている。

試合中の指揮も見事なもので、多くの名将と渡り合ってきた。

#7 誠凛高校2年

帰ってきたチームの支え 木吉鉄平 TEPPERI KIYOS

HI

身長：193cm

体重：81kg

ポジション：C

花宮達と並び、“無冠の五将”と称される選手。折れることがない
不屈の心から“鉄心”という呼び名を持つ。中学時代には帝光中と
も対戦した。

誠凛バスケット部の創設者であり、チームのエースとして君臨していた
が、昨年霧崎第一との試合で左膝を故障。リハビリ生活が続いてい
た。

都予選後からチームの練習に復帰。共にIHを目指して練習に励
んでいる。

#7 海常高校1年

天才オールラウンダー 黄瀬涼太 RYOTA KISE

身長：189cm

体重：77kg

ポジション：SF

“キセキの世代”の一員にして海常高校のエース。練習試合で火
神に敗れてからは彼にリベンジを誓っている。一度プレイを見ただ
けで大抵のものは自分のものとするコピーが得意技。

自他共に認めるイケメンでモデルの仕事をしている。

人懐っこい性格で実力を認めた相手には好意的な態度を示すが、そ
うでない相手にはたとえ先輩であろうと反抗的な態度を示すなど裏
表が激しい。

中学時代、青峰のバスケットに魅了されてバスケット部に入部。その後わずか2週間という異例の早さで一軍に昇格する。さらに当時レギュラーであった白瀧に勝利し、レギュラーの座を勝ち取った。その為白瀧からは異常なまでの対抗心を抱かれている。

#4 海常高校3年

黄瀬をコントロールする実力者 笠松幸男 YUKIO KASAMATSU

身長：178cm

体重：66kg

ポジション：PG

月バスにも特集されるほどの実力を誇るPG。多くのものが彼のことを見知っており、高尾や白瀧といった直接会ったことのない選手でさえも注目していた。

実力があり、自己の強い「キセキの世代」の一人・黄瀬を上手くコントロールし、チームを率いている。

#5 桐皇学園高校1年

並ぶものがないDF不可能の点取り屋 青峰大輝 DAIKI AOMINE

身長：192cm

体重：85kg

ポジション：PF

「キセキの世代のエース」と呼ばれた最強のスコアラー。緩急自在のチェンジオブペースと予測不可能な型のシューティングシュートがありとあらゆる戦術を打ち砕く。誠凛・火神のバスケットでさえも彼には届かなかった。

対等な勝負ができる好敵手とのバスケットを何よりも楽しみみとしており、中学時代は同じスコアラーとして競っていた白瀧とよく1on1をしていた。だが青峰の才能が覚醒してからは実力がかけ離れてしまい、黄瀬の入部もあいまって二人の関係は悪化。複雑なすれ違いにより話を交わす機会さえ少なくなった。

その年の全中後は練習にも参加しなくなり、バスケットそのものに嫌気がさしていた。そんな折、彼の身を案じた白瀧に声をかけられ、幾分か気が安らぐ。わずかながら二人の関係も回復した。

MANAGER 桐皇学園高校1年

相手の動きを予測する分析のスペシャリスト 桃井さつき SA

TSUKI MOMOI

身長：161cm

体重：???

青峰の幼なじみである桐皇の女子マネージャー。誠凛の黒子に好意を抱いている。抜群の容姿とプロポーションを持ち、誠凛の選手を魅了した。相手選手の能力や性格から動きを予測する情報分析の達人。彼女のデータを受けた桐皇の選手達は相手のオフエンスを先読みし、優位に戦うことが出来る。

帝光中学時代、失意に沈む白瀧を勇気づけ、彼がバスケットを続ける一因となった。この出来事から彼に好意を寄せられている。その後白瀧は彼女に『また皆が一緒に笑ってバスケットができるようにする』と約束した。

#4 桐皇学園高校3年

笑みの裏に隠れた策略家 今吉翔一 SYOICHI IMAY

OSHI

身長：180cm

体重：71kg

ポジション：PG

個人技重視の桐皇を制御する主将。糸目と角めがねが特徴的で関西弁を話す。

常時笑みを浮かべており、何を考えているか想像は難しいが、その実慮深いペテン師。相手の思考を読み取ることに長けており心理戦が得意。

バスケットの実力も確かでゲームメイクとシュート能力が高い。

#6 桐皇学園高校2年

身体能力に長けた好戦的センター 若松孝輔 KOSUKE W

AKAMATSU

身長：193cm

体重：85kg

ポジション：C

感情の起伏が激しい二年生センター。傍若無人な青峰と衝突することが多い。

身体能力が非常に高く、ゴール下ではその力を存分にふるい誠凛を圧倒した。

#9 桐皇学園高校1年

試合の始まりを切り開く特攻隊長 桜井良 RYO SAKUR

AI

身長：175cm

体重：59kg

ポジション：SG

オドオドした性格で謝罪の言葉をひたすら述べる一年生シューター。同級生に対しても強気になれない。

しかし試合中ではリリースの早いスリーポイントシュート、クイックリリースで桐皇の勝利に貢献。特に試合開始直後に奇襲として発揮されることが多く、桐皇の特攻隊長を任されている。

#7 桐皇学園高校3年

高身長の実力派オールラウンダー 諏佐佳典 YOSHINOR

I SUSA

身長：190cm

体重：80kg

ポジション：SF (PF)

元々はPFだったが、青峰の加入によりSFにコンバートした三年生。

実力は確かで他の学校だったら間違いなくエースを張れる実力者。背丈も高く、オールラウンダーとして試合で活躍する。

COACH 桐皇学園高校

桐皇をまとめるイケメン監督 原澤克徳 KATHUNORI

H A R R A Z A W A

青峰をはじめコントロールが難しい桐皇を指揮する監督。
美形で話し方も丁寧な紳士。しかしその裏では計算高い姿も。前
髪を触る仕草がある。

元日本代表メンバーであり、実力は相当なもの。

#4 霧崎第一高校2年

他者を陥れて笑う『悪童』 花宮真 M A K O T O H A N A M I

Y A

身長：179cm

体重：67kg

ポジション：PG

無冠の五将の一人に数えられ、「悪童」と称される選手。主将と監督を兼任している霧崎第一の支配者。

世間の評価を受けるだけあって当然のことながらバスケのセンスは高い。加えて策略深い一面を持ち、選手としての実力は相当なもの。しかしラフプレーを多用し、惨めに負ける相手を見るのが楽しみという歪んだ性格を持つ。中学時代には当時帝光中の白瀧を、去年は誠凛の木吉を負傷させた。その為帝光中出身の多くの選手、誠凛の選手からは非常に厳しい目で見られている。

今年の都予選では桐皇と対決。ラフプレーで若松を負傷させるも、かつてライバルを傷つけられたことへの怒りに燃える青峰に終始圧倒され、トリプルスコアという大敗を喫した。

#9 陽泉高校1年

高校最強の実力を誇る超大型センター 紫原敦 A T S U S I
M U R A S A K I H A R A

身長：208cm

体重：95kg

ポジション：C

最強のセンターと呼ばれた「キセキの世代」の一員。並外れた巨

体を持ち、バスケットは才能があるものが勝つと考えている。

#4 洛山高校1年

キセキをも率いた絶対的支配者 赤司征十郎 SEIZYURO

AKASHI

身長：173cm

体重：64kg

ポジション：PG

帝光中学時代主将を務めていた「キセキの世代」のまとめ役。進
学先の洛山高校でも一年生ながら主将を任されている。

予選では一度も出場せずにベンチで観戦。それでも洛山は悠々と
全国出場を決めている。

中学時代に白瀧が大仁多高校に進学することを勧めていた。

神速が生まれた日

今でこそ『神速』と呼ばれ敵から恐れられている白瀧だが、彼がそう呼ばれる一つの切欠となる出来事があった。帝光中学時代、まだ彼の心も覚悟も幼かったころのエピソード。

——帝光中学校バスケットボール部。

数多くの大会で優秀な成績を残した強豪に、今年新人ながらも入部早々に一軍入りという輝かしいデビューを果たした五人の新人が現れた。

数ヶ月後、世間から“キセキの世代”と称されることとなる彼らも決して圧倒的な強さが最初からあったわけではない。しかし一軍の選手相手にも遅れをとらない身体能力と潜在能力の高さ、そしてルーキーが持つ勢いは彼らを即戦力としてみなすには十分すぎるものだった。

すでにチームの中心人物となって頭角を現していた赤司征十郎。

正確なスリーポイントシュートを連発する緑間真太郎。

恵まれた体格から圧倒的なパワーを披露する紫原敦。

天性のスコアラーとして強敵を相手に得点を量産する青峰大輝。

そして——

「行くぞ、青峰！」

「来いよ、白瀧！」

並外れたスピードと技術でチームの突破口を切り開く白瀧要。

これは彼らが“キセキの世代”と世間から呼ばれる切欠となった全国大会の、少し前の話。

「うっらあっ！」

「あっ!？」

白瀧が得点に成功し、攻守が入れ替わった青峰との1 on 1。

ドリブルフエイクに体が反応した一瞬の隙を見逃さず、青峰がクロスオーバーで中に切り込む。緩急のついた動きから洗練された切り替えし。白瀧も追うが急停止からのジャンプシュートを止める術はない。青峰も負けまいとして得点を成功させた。

「あーつまたか！ お前の緩急滅茶苦茶すぎ！」

「ハハツ。デイフェンス甘えよ、白瀧。そんなんじや大会で使ってもらえるかわからねえぞ？」

「くそっ！ もう一回だ！ 勝ち越すまでやってやる！」

爽やかな笑みの裏に隠れた闘志に当てられて白瀧の闘争心も駆り立てられた。

再び一対一に励む二人。一年でありながらエーススコアラーとしてチームの信を得ている彼らのバスケットに対する熱は止まることを知らなかった。

そんな中、二人の戦いを外から眺めている人影があった。

一人は青峰の幼なじみにして帝光バスケット部マネージャーの桃井。青峰と行動を共にすることが多い彼女はいつもと同様、マネージャーの仕事をこなしながら青峰達のバスケットを眺めていた。

そしてもう二人、こちらはつい先ほど現れたばかりの男達。青峰達同様一年生でありながら一軍で活躍している司令塔、赤司。そして彼の横に立つ巨漢、紫原だった。

「今日もやっていったのか、青峰と白瀧は」

「うん。大会の組み合わせが決まって、大ちゃんが『燃えてきた！ うずうずしていらねえ！』って」

「なるほど。バスケットが好きすぎるのも程ほどだな」

「本当だよー。練習中だけならまだしも、最近は終わってからもうるさいもん」

戦いの熱が止まらないという二人の好戦的な姿勢は赤司と紫原の深いため息を誘った。

練習後でありながら実戦並の動きを見せ付けているのは、おそらく相手が拮抗したライバルだからだろう。スコアボードには白瀧と青峰、二人が一步も譲らず得点に成功しているということを示してい

る。

「しかし青峰はまだしも、駆け引きに長けているはずの白瀧もディフェンスは相変わらずか」

赤い瞳には、白瀧がまたしても青峰のドリブル突破を許している光景が映し出される。

青峰のように感覚でバスケットをするプレイヤーに対し、白瀧はどちらかという頭で考えてバスケットをするタイプだ。ディフェンスならば特に相手の動きを予測しながら対応しなければならぬ。

しかしオフフェンスでは並外れた活躍を残す白瀧も、ディフェンスに關してはさほど結果を残しているわけではなかった。

「みたい。そういえば、白瀧君も以前『やっぱりオフフェンスの方が性に合っている。皆との連携が決まるのも楽しいし。ディフェンスはどうも集中しきれないんだよな。やっぱりバスケットは楽しんでこそだろ』って話してたな」

「ふーん。俺とは逆かな。むしろ攻める方が面倒だし」

「そんなことを言っていたのか。緑間が怒るわけだ」

今ここにはいないシューターの達人。おそらくは今も黙々とシューティングに励んでいるであろう緑間も、彼のディフェンスについてはよく愚痴を零していた。いわく、『何故ヤツはオフフェンスの様なキレをディフェンスで出来ないのだよ。磨けば相応の働きができるというのに今のままでは宝の持ち腐れなのだよ』と。厳しい意見ではあるが、確かに白瀧の現状を的確に捉えている評価ではあった。

「あいつらしいと言えばそこまでだが」

「ん。赤ちゃん、どうしたの？」

「……何れにせよやはり感心はできない」

全中への出場をかけた予選はまもなく始まろうとしている。

予選ならば今のままでは問題ないだろう。しかし全国となればそうもいかない。少しでも勝利の可能性を上げる必要がある。

「ひよっとしたら荒療治が必要かもしれないな」

「えっ？」

そう言い残して赤司はその場を後にした。紫原も彼に続き体育館

から離れていく。

赤司の言葉の意味を桃井は理解できなかった。当然、紫原も。耳にしていない白瀧達は尚更のことだった。彼の真意を理解することは、おそらく誰も存在しなかった。

そして刻々と時は進み、予選初戦の日を迎える。

「大事な初戦だ。当然だがこのようところで躓くことはできない。些細なミスも許さん。スターターは昨日話したメンバーで行く。一年生達も準備はしておけ」

監督を中心に選手が扇形に集合し、指示に大きく頷いた。

今年の公式戦に当たって帝光バスケット部はローテーションを組んで戦っていく方針を決めた。特にプレッシャーがかかることが予測される初戦の前半は二、三年生の経験豊富な上級生。そして後半は公式戦初お披露目となる一年生五人が出場する。

実力、チームワーク共に文句がない面子が揃っている。誰も不満はなく試合へと望んだ。

「わかっていると思うが、点差が離れているとはいえども気を抜くなよ」

「ふん。当たり前なのだよ。言われるまでもない」

「ま、いつも通りやれば大丈夫そうだな」

「さっさと終わらせよー」

「オツケー。それじゃあ行こうぜ！」

地区の中でも実力が飛びぬけている帝光は試合を常にリードしたまま、ついに一年生達が登場することとなった。

一人一人のスキルが高い上に体力にも余裕がある五人は次々と敵のゴールに襲い掛かる。

勢いは止まる事無く、後半戦でリードをさらに四十点近く大きくし、その強さを見せ付けた。

『試合、終了——！』

帝光バスケット部の初戦は危なげない大勝。最高のスタートを切ることに成功した。

「ふう……」

「よっしやあ！ やったな緑間！」

「白瀧か。ああ、そうだな」

「なんだよ冷めた顔して。勝ったときくらいもっと喜ばばいいのに」

「……ふん。行くぞ、整列だ」

「あつ！ おい、無視かよ!？」

顔を背けて歩き出す緑間を追い、白瀧もコート中央へと歩き出した。

そう。帝光の勝利。これで一步全国へ近づいた。より長く試合に出ることが出来る。だからこそとても喜ばしいと思っていた。

「……くそつ。くそつ！」

この時、相手選手の泣き崩れる姿を見るまでは。

息切れを起こしている中、両の膝に手を乗せて嗚咽と悲痛な鳴き声が唇の隙間から漏れている。

「泣くなよ。馬鹿」

「こんなあつさりと終わるなんて……」

「……泣くなよ」

三年生、最後の年だった。様々な思い出が、試合への想いあったのだろう。

仲間に肩を叩かれ、それでも中々立ち上がることができずにいる。

「なんだよ、これ……」

その光景が、白瀧には異常なほど強く印象に残った。

初戦を突破した帝光はその後も順当に勝ち続けた。赤司達新戦力も勝利に貢献し、戦力であることを証明する。

全中はもはや目前にまで迫った決勝戦。そこでも帝光は相手を圧倒し、勝利を確実なものとしていた。

「ゲームプランに変更はない。もはや余計な言葉は不要だろう。——勝つぞ」

『おう!』

最終Q、一年生の実質的なまとめ役である赤司が鼓舞し、コートへ歩いていく。

しかしただ一人、白瀧だけがベンチに座り込んだまま俯いていた。

「ん? おい、白瀧! 何やってんだ!」

「え? 青峰?」

「もう試合始まつぞ!」

「あ、ああ。悪い」

青峰に急かされ、ようやく立ち上がり四人に続いた。

その姿を見て何か考えが湧いたのか赤司は緑間に近づき声をかけた。

「緑間」

「む? 何なのだよ? ゲームプランに変更はないのだろうか?」

「ああ。ただ、もしもボールの保持が困難のようだったら、積極的に白瀧へパスを回せ」

「白瀧に?」

たしかに白瀧は突破力もありパスもさばけるスコアラーだ。いざという時は彼にボールを任せれば問題ないだろう。

しかしわざわざ指示を出さなくても緑間は理解している。加えて赤司と同様の働きをこなせるはず。それなのに何故今このような指示を出すのか。

「……わかった。そうしよう」

真意を理解しきれないまま、しかし緑間は首を縦に振った。赤司が詰めの段階で間違いを犯すとは思えない。故にこれも何か意味があつてのことだろうと。

「脳裏に刻みつけてやるとしよう。——敗北を」

赤司は了承のサインを受け取ると、試合開始へ向けて駆け出した。

既に点差が大きく開く中、帝光の怒涛の攻撃は続く。

赤司から緑間、さらに白瀧へと大外から中央へパスが通る。フロン

トチエンジンからロールターンで切り返し、マークマンを突破するとすかさずレイアップシュートを放つ。リングに触れることなく得点が記録された。

「よしっ！」

「ナイスだ白瀧！」

「おう！」

青峰とハイタッチを交わしてディフェンスに戻る。

「……一方的すぎるだろ」

背中越しに、敵の悲痛な叫びのような声を耳にしながら。

それでも試合の流れが変わることはない。

「おらあっ！」

「ぐっ！」

青峰が長身を活かし相手のシュートに触れる。軌道が乱れ、ボールはリングに弾かれた。

「よいしょっと」

ディフェンスリバウンドを紫原が制し、再び帝光ボールに。

帝光がボールを保持する時間が、攻める時間が長くなる。当然点差も大きくなっていく。

「……これで、終わりだ」

残り時間十秒、赤司が体の後方でボールを逆サイドへ移動する——
ビハインドドリブルからのクロスオーバーで敵のマークを置き去りにする。ヘルプが出たところでパスアウト。フリーとなった白瀧へボールがわたった。

「ッ……！」

「決めちまえ、白瀧！」

青峰の声援に押され、白瀧がジャンプシュートを沈める。

得点が決まり、相手がスローインを始めようとボールを拾い上げた瞬間——ブザーが鳴り響いた。

「よっしゃあー！」

「帝光中、優勝決定！」

「全中出場だああああ!!」

活性が湧く帝光のベンチ。この瞬間、帝光の全中出場が決定した。
「ようやくだな」

「つかれたー」

淡々としている緑間。試合が終わったことに安堵している紫原。
反応はそれぞれだが、しかし勝利の喜びに笑みが揺るんでいないのは彼らだけではなかった。

「……………終わった？」

最後のシュートを決めた白瀧が呆然と立ち尽くしている。何が起こっているのか理解していないような表情をしていた。そしてそんな彼に赤司が冷たい視線を送っていた。

「やったな！ 全国だぜ！」

「うおっ！ 青峰……………」

「なんだよ緑間みたいな仏頂面しやがって。嬉しくねえのかよ？」
「おい！」

「…………いや、そうだな。やったな！」

笑みをつくり、喜びを共にする白瀧。

だが自然と視線は相手チームの方へと移ってしまふ。

「畜生。…………嫌だよ……………」

「俺ら、頑張ったよな？ うっ……………」

聞こえてくるのは、やはり唸るような嗚咽の声。無念を訴える悲痛な叫びだった。

「もっと、お前達と、バスケットをやりたいかった……………最後まで戦いたかった……………！」

それが白瀧の心に大きな影を生んだ。

白瀧は視線を自らの両手に落とし、ただじっと見つめていた。

「……………白瀧が休み？」

信じられないと青峰は赤司の言葉を繰り返した。

全中の出場を決めた決勝戦の翌日。帝光バスケット部は喜びもそこそ

ここに厳しい練習へと戻っていた。

しかし体育館に白瀧の姿はない。決勝戦でも存在感を發揮した彼が、そこにはいなかった。

「珍しいんじゃない？ 白ちん練習休んだことあったっけ？」

「いや、おそらく今日が初めてなのだよ。授業には参加していたはずなのだが……」

「どうやら体調を崩したらしい。監督には腹痛を訴えていたそうだ」

「あー。まさかさつききの料理を食べたとか言うんじゃないだろうな」

それなら十分ありえると青峰は納得し、何度も頷いた。桃井がこの場にいたのならば間違いない文句が飛び出すだろうが生憎彼女はこの場にいらない。赤司に白瀧の欠席を伝え、マネージャーの仕事へ戻っていた。

「なんだよ。大会期間中は時間がなくて出来なかったから久々に10n1しようと思ってたのに」

「お前はそれしかないのか。……しかし本当に腹痛なのか？ 白瀧がそう簡単に休むとは思えないのだが」

愚痴を零す青峰とは対照的に、緑間は白瀧の欠席に違和感を抱き、疑問を口にした。

健康管理を怠る人間ではなく、勝利を喜びこそすれ浮かれる人間ではないと考えている為に、彼の突然の欠席は簡単に受け入れられるものではなかった。

「……そうだな。少し俺が様子を見てこようか」

赤司も同様の考えだったのだろう。

その頃、一軍の同級生4人が行方を気にしていた当の白瀧は、帰路の途中にある土手に腰を降ろし、緩やかに流れる水面を眺めていた。緑間の考える通り腹痛などではない。でっち上げた嘘だった。だが無表情で座り込んでいる彼の顔からは、何かがあったということだけは感じ取れる。

「探したぞ」

「……赤司？」

ふと背後から呼び声がかかる。驚き振り返るとそこには練習に参加しているはずのチームメイト、赤司の姿があった。

「監督から許可をもらった。お前が練習を休むとは信じられない。何かあったのだろうかと考えてね。家に電話したらまだ帰宅していないということだからひよっとしたら近くににいる可能性もあるから、案の定だ」

「そうか」

何故ここに、という疑問は赤司が聞く前に答えてくれた。確かに普段から遅刻も欠席もしない人間が、授業でも変わった様子は無かったのに突如消えたら違和感を覚えるだろう。

「それで、一体何をしていたんだ？」

「……見てみるよ」

「うん？」

白瀧は振り返り、水面へ視線を移した。赤司もそちらへ目を向けるが変わった様子は何もない。

「静かだろうか？ 何もない、ゆったりとした水面を見ていると、落ち着くんだ」

それが白瀧にとっては都合が良かったのだろう。物事を思考する際には余計なものはいらない。ただ落ち着く為にはこの様な静かな環境が丁度よいのだと語る。

「成程な。それでお前は何を思っていた？」

「……考えすぎて、わからなくなったよ」

「どういう意味だ？」

首をかしげて困惑する素振りを見せる白瀧。何か結論が出たのではないのかと問うが、白瀧は首を横に振るばかりだった。

「全中を決めて、勝って喜べると思っていたのに。今となっては素直に喜べない。どうしても敗北した相手の姿が頭の中をよぎる」

「……それで？」

「別にミニバス時代も相手が涙するところを見なかつたわけじゃない」

い。でも重みが違う。やっぱり三年間、学校でも時を同じくしたからこそ絆が強いつてことかな？

わからないけど、その姿を見て——俺が、とんでもないことをしてしまっただんじやないかって」

ただ楽しくバスケをした。もつと勝ち続けた。

純粹な心で試合に臨んでいた。しかしその結果誰かを傷つけることになってしまっている。その事実が白瀧の心を揺るがしていた。

今まで経験したことのない相手の涙。彼らを目にして後悔の念が浮かんで止まらなかった。

「何だ、そんなことか。今さらだな」

「……え？」

「お前はこれまでも多くの選手の思いを、夢を、目標を踏み躪ってきただろう」

思い悩む白瀧に、しかし赤司は優しく手を差し伸べるようなことはない。淡々と事実を客観的に語っていく。

「忘れたのか？ 俺達は帝光バスケ部で一軍入りした。帝光とて、三年生でありながら最後まで一軍に入ることさえ、試合に出ることさえできない選手は数多くいた。そして彼らの代わりに加わったのが俺たちだ。彼らにも敵同様に願いがあった。俺たちはそれらを蹴落としてここにいるんだ」

目を見開き声が詰まる白瀧。

「まさか理解していなかったとでもいうつもりか？」

「……あ、ああ……ああ……！」

呻き声を上げ、目尻に涙がたまる。

赤司の言うとおりであった。

誰かが勝利を掴めば、誰かが敗北に沈む。喜びに満ちる人間の影で悲しみに浸る人間がいる。先へ進むものの代わりにその場で道が途絶える者もいる。

コインの表裏のような、当たり前なこと。そんな簡単なことにも気づかないまま。浅はかにコートに立ち続けた。相手を傷つける覚悟もなしに、ただ勝利を積み重ねていった。

バスケットがしたい。単純な気持ちばかりで。勝ち続けるばかりで、負ける相手の気持ちなど考えてもいなかった。

「だが、お前を気負う必要はない。敗者の思いなど気にかけることではない」

「……………え？」

冷たい声で、しかし救いを与えるように赤司は諭す。白瀧の叫びが止み、顔が上がった。

「勝つということは踏み躪るということだ。勝者は全て肯定され、敗者は全て否定される。俺たちの行動は正しかった。現に帝光を勝利に導いている。お前が悔やむことはない」

「でも……………」

「もしもお前が他者の思いを踏み躪ることに耐えられないというのならば、バスケットをやめた方が良い。ここはお前が望むほど綺麗な場所ではない」

誰もが笑ってバスケットができるような夢物語は存在しない。得るか失うか、二択しかない。

だからこそ相手の行動を否定してでも先へ進むことが出来ないならば、もう道はないのだと赤司は言う。

「お前ならばきつとこの先も——」

「……………無理、だよ」

しかし白瀧は再び顔を下げて、赤司の言葉を遮った。

「彼らの思いを踏み躪るなんて、できるわけがない……………」

あのような叫びを聞いて、暗く沈む姿を見て、それを否定するほど白瀧の心は強くない。彼は人の思いを簡単に否定できるような性質ではなかった。

「……………そうか」

返答を聞いて赤司は失望した。少しは見込みがあると考えていたが、ここで思い悩むような男ならばもう必要ない。チームメイトとはいえまだ出会って半年も経っていない。これ以上義理立てする必要もないと、そう考えた。

「だから……………」

「うん？」

適当にあしらって帰ろうとしたその矢先、白瀧が顔を上げて力強く口にする。

「だから、彼らの思いもすべて背負っていく。彼らの願いは俺が叶える。……最後まで戦い続ける、優勝まで！」

踏み躪ることはできない。だからそれら全てを背負って最後の瞬間まで戦い続けると。

予想外の返答にさすがの赤司も一瞬気後れした。

確かに白瀧は心が強いわけではない。しかし全てを放り投げるような無責任な人間でもなかった。

「……それは、お前にとっては重荷になるぞ」

「構わない。彼らの思いまでなかったことにはしたくない」

もはや迷いはなくなっていた。白瀧の目に強い光が宿る。

「そうか。お前がそう考えるならばそれで構わない」

「ああ。……ところで赤司。さっきお前言ったよな。『勝つということとは踏み躪るといふこと』だって」

「それがどうした？」

「それは違う。——勝つということとは背負うということだ」

相手の願いを、目的を、思いを。たとえそれが恨みだとしても。それでも勝者はそれを全て受け入れなければならない。そして彼らの分まで先へと進む。

「確かに俺達はこれからも多くの人の思いを踏み躪る。でもそれで全てが終わるわけじゃない」

「……それがお前の答えか」

「ああ。俺は戦い続けるよ。これからも」

予選で迷いを抱いていた白瀧が、決意を新たに大きな一歩を踏み出した。

この出来事は彼の思考にも大きく影響を及ぼすこととなる。そしてそれは彼のバスケットスタイルにも大きな変化を与えることにもなった。

全中が始まり、帝光はやはり予選と同じローテーションで試合に臨んでいる。

各メンバーが練習以上の成果を発揮し、帝光は次々と全国の猛者を撃破していった。

特にその中でも、予選から急激な成長を遂げている選手が一人いた。

「——甘い！」

「うおっ!？」

シュートフェイクを見切り、カットインを仕掛けようとした相手からボールを奪い取り、さらに前に弾いたボールを確保する白瀧。

相手がいらないことを確認すると全速力で駆け上がる。相手は横一線で並ぶのが精一杯でレイアップシュートをとめることなど困難だった。

「決まった！ 白瀧のワンマン速攻！」

「いいぞ白瀧！ その調子で攻め続ける！」

得点が決まり、声援が強まる帝光ベンチ。ルーキーの奮闘は他の選手たちに良い刺激となっていた。

「やばいな。白瀧のやつ、全中になってディフェンスまで手がつけられなくなりやがった」

「今まではオフセンスに比べるとそうでもない、つてのが印象だったけど。最近はスタイル数が次々と記録されていくぞ」

話題の的は白瀧に。

予選では得点、アシストに関してはチームでも最高レベルではあったものの、ディフェンスの数値は伸び悩んでいた。

しかし全中ではスタイルが大幅に増え、さらに一次速攻を決める回数も増えた。

積極的に相手のチャンスを潰し、果敢に攻めていくディフェンス。これが相手にかかるプレッシャーは相当なものであった。

「赤司。一体何をしたのだよ?」

「俺は何も。ただあいつの思考が変わっただけのことだ」

急激な変化に戸惑う緑間。全てを知る赤司は予想外の、予想以上の変化を遂げた白瀧をじつと見つめる。

楽しいからこそ白瀧はオフエンスに重きをおいていた。だが自分の状況を再認識し、それだけでは駄目なのだとデイフェンスも相応の練習を重ねた。その結果、生み出したのが今のバスケットスタイル。

「何れにせよ帝光にとってはプラスなんだ。文句は無いだらう？」

そう言われては緑間も不満はなく頷くしかない。

——この後、帝光は全中でも優勝を果たし、快進撃を続けていく。

そしてこの大会を切欠に“キセキの世代”という呼び名とは別に、白瀧のバスケットスタイルからこう呼ぶ者が現れた。——『神速』と。

敗北の味

『大仁多高校を倒し悲願であるIHへの出場を果たす』。

おそらくは栃木県に存在する大仁多以外の高校男子バスケット部全てが共通して抱いているであろう願い。

その中でも一際思いが強かった盟和高校。二年連続で準優勝という結果を残している中、今年は歴代の面子と比べても遜色ない選手が揃っていた。

主将・勇作を筆頭に細谷、神戸など過去の雪辱に、最後の機会に燃える三年生。さらに彼らと同じく優勝を目指す二年生SF古谷と一年生SG金澤。

栃木県ブロック予選を難なく勝ち上がり、県予選でも順当な勝利を収め、大仁多高校が立ちほだかる決勝戦へと駒を進めた。

三度目の正直。再び目前に迫ったIHへの切符。大仁多との対戦に向けて練習は十分すぎる程こなした。選手たちの士気も抜群。今年こそ、そう意気込み試合に臨んだ。

しかし――。

『試合、終了――！』

「大仁多高校8連覇達成！ IH出場だ！」

満を持して挑んだ決勝戦。試合開始直後こそ大仁多への対策も上手く機能し、敵が万全の布陣ではないことも相俟って試合を優位に進めていた。

だが前半戦終盤にエース・白瀧が戻ると大仁多は地力の差で徐々に押し返し、第三Qでついに同点にされた。第四Qも大仁多の大型ルーキー・光月が復調により終始大仁多に流れを掴まれてしまう。

こうなつてはもはや盟和高校に逆転するだけの余力は残されていなかった。昨年同様IH出場の権利を目前で失い、決勝戦で姿を消すことになった。

「はぁー……。部活かー。チクショー」

「どうしたんですか古谷さん。滅茶苦茶長いため息でしたよ」

「当たり前でしょ？ 本当なら今頃、IHへの出場を決めて浮かれているはずだったのに」

「……まあ、その気持ちはわかりますけど」

大仁多との決戦の翌日、盟和高校。敗戦のショックを引きずり、ため息を零す古谷を金澤は苦々しく見つめた。

激闘を終えた後の為に体の疲労や痛みは残っている。しかしそれよりも『敗戦』という心に負ったダメージの方が大きく、何に對してもやる気が起きない状況だった。

重い足取りの中、それでも部室で早々に着替えを済ませて二人は体育館へと向かっていく。

「でも、俺達はまだ良いほうですよ。キャプテンや細谷さん、それに神戸さんに比べたら、俺達はまだ来年もあるんですから」

「……それはそうですねー」

三人の名前を挙げるとさすがの古谷もこれ以上愚痴を零すことはできなかった。

そう、古谷は二年。まだ来年もある。金澤に至っては今年が最初の大会だったのだ。

だが今この場にはいない共に戦った三年生達は昨日の試合が最後の機会だった。IHという大舞台に挑むことができる、残された一回の挑戦権。それをまた同じ形で大仁多高校に奪われた。彼らが感じた悔しさ、無念は二人の比ではないはず。

「せめて普通に振舞いましょうよ。IHは終わったけど、WCはまだ残っているんですから」

だからこそ自分達が弱々しい姿を見せるわけにはいかないと金澤は笑った。

勇作達も冬まではまだ部活に残り、大会に出る。全国の機会は残されている。だからそれまでは頑張ろうと。

「……ったく」

彼とて思うところがあるのだろう。それにも関わらず先輩を立て

ようとする健気な姿を目にして、古谷も自然と口角が上がった。

「ま、確かに気落ちするところを見られるのも癪だし。いつそ落ち込んでる先輩方の背中を蹴飛ばすくらい感覚でいきますか」

その方が自分の性には合っているしと楽しそうにニカッと笑う。

二人が話し込んでいる間に気がついたら体育館の入り口へとついていた。

「さーて、あの馬鹿は今頃一体どんな顔をしているのやら」

きつと今まで見たことがないような顔をしているのだろうなど、古谷は脳裏に勇作の不甲斐ない姿を思い浮かべる。その時はまず一発背後から仕掛けてやろうかと企みながら、そつと体育館の入り口へと手を伸ばした。

「ちわーす。皆さん元気にしてます——」

「うおらああああ!!」

「か——うおお!!」

「な、なにっ!?!」

さつきまでの沈んだ姿勢はどこへ消え去ったというのか。普段と変わらぬ気の抜けた声で挨拶をしようとすると、勇作が彼の声を遮ってダंकを決めていた。

突如目の前で派手なプレイが炸裂し、扉を開けた古谷も、一步後ろにいた金澤も驚愕を隠せなかった。

「……あ?　なんだ、遅いぞお前ら。先輩達より遅くに到着するとは、随分な身分になったもんだな」

「お、来たか。早く体動かすとけ」

「今日も軽くだけどメニューをこなすみたいだからね」

着地をした後、ようやく二人の到着に気がついた勇作が声をかける。

彼の声の調子は昨日までとまったく変わっておらず、背後にいる細谷と神戸も相変わらずのようだった。

「あれれー?　どうなっているんですかこれ?」

「……むしろ俺達の方が気にしすぎていたんですかね」

あれほど思い悩んでいたのが馬鹿馬鹿しく思えてくるほどの光景

が広がっていた。二人は先ほどとはまったく別の意味でため息を零した。

「何ため息なんかついているんだ」と声をかける勇作を見て、二人は少し前の自分に罵声を浴びせることにした。

神戸が話していた通り、その日の練習メニューはいつもよりも軽く、早く時間を切り上げて終了した。

岡田が選手たちの疲労を考慮してのものだったが、かえって体力が余った為に自主練習に励む者もいる。

古谷や金澤もそうだった。古谷はドリブルスキルの向上を図り、金澤は打ち込みに励もうとそれぞれのメニューに取り組んでいく。

「よっしゃ。それじゃあ俺達は先に上がるぞ」

「勇作。この後は……」

「第二講義室だろ？ わかっているよ。さっさと着替えて行こうぜ」

「じゃ、俺も行くかな。お疲れ！」

「え？ あ、お疲れ様です！」

「……おつかれーっす」

バツシユのスキル音とボールの弾む音が体育館に響く中、勇作と細谷、神戸の盟和三年生レギュラー達がその空間を後にした。

「珍しいですね。先輩達が練習せずに切り上げるなんて」

金澤は日課となっているシューティングを一度止めて古谷に声をかけた。同感だったのか彼は頷き、涼しい顔で答えた。

「やっぱり色々と割り切れてないんじゃないですか？ 俺達後輩がいるよ
うなところでは話したくないようなことだっただってあるだろうし」

「……やっぱり、そうなんですかね」

今日最初に会った時はバスケに熱中していたということもあつて彼らが失意に沈んでいる素振りにはまったく見られなかった。

だがそれが古谷達、後輩と顔を会わせることになるからこそではな
いかという考えが二人の頭によぎる。先輩である以上、これ以上後輩

の前では不甲斐ない姿は見せられない。だからこそ彼らは何も言わずにこの場を後にしたのだと。

「でも、このまま放っておくのも何か気が引けるし……追いかけてみます?」

「え?」

「今度こそキャプテン達がへこんでいるところを見れるかもしれないよ?」

ならばこそ、それを知って何もしないわけにはいかない。

古谷は意地の悪い笑みを浮べて金澤に誘いかけた。

「俺は先輩が意地を張るのなら、ちよつかいをかけたくなるタイプなんだね」

「……行ってみますか。第二講義室、でしたよね?」

思いを共有したい。今まで助けられたのだから、少しでも自分が勇気付けられるなら行動したい。その思いに駆られて金澤もボールを手放し、三人の後を追うことにした。

場面は入れ替わり、第二講義室。

普段は授業の講義場所として使用される教室であり、放課後は活動拠点とする部活動も存在しないため、先生の許可をもらえれば誰でも使うことが出来る空間であった。

その場所は今日、バスケット部部长・勇作の申請により、彼を含むバスケット部員三名が占領していた。

三人は教室の中央付近の机に陣取り、スクリーンに映し出されているある映像を真剣に眺めていた。どんな些細なことさえ見逃すまいと彼らの目が真剣に物語っている。

音声も流れていたため、音がわずかながら外の空間にも漏れ出てしまい、扉に耳を当てて様子を窺う古谷と金澤にも聞こえていた。

「……何かビデオを見ているんですかね?」

「そのようですね。さすがに内容までは聞こえないですけど」

さすがに詳細を聞き取ることまでは敵わず、三人が映像を眺めていることだけを把握した二人。しかし一体何を見ているのかはまったく検討がつかず、二人は揃って首を傾げていた。

「ただ、少なくとも三人で慰め会ってわけではなさそうですね」「どうやらそのようですね。ちよっと残念」

三人が予想以上に敗戦を嘆いていないことに嬉しさ半分、悔しさ半分で息を零す古谷。

暗い気持ちになられるよりはマシだが、しかし多少は気にして欲しい部分があったということは言うまでもなかった。

「ま、これ以上ここについても何も起こらないし、早く入りましょう」言うや否や古谷は扉に手をあて、入り口を勢いよく開けた。

「どーもー。先輩達は揃って何をしているんですか？」

物静かな雰囲気壊す場違いな声が講義室に響く。

聞きなれた声に三人が驚き、振り返るのを見て少し満足げに笑う古谷。

「古谷？ 金澤も……」

「なんだ、もう自主練は上がったのかい？」

「ええ、一応は。先輩達はここで一体何をして……え？」

古谷の後ろに立っていた金澤はスクリーンに映し出されている映像を目にし、一瞬呼吸を忘れた。

それは彼らにとってはあまりにも衝撃的で、そして苦々しいものだった。

「……今年の決勝、大仁多との試合映像ですか？」

数秒見ただけで答えを察した古谷は確認の意味で三人に問いかけた。

「ああ。そうだ」

勇作はその問いに無表情で淡々と答えを口にする。

「……とりあえずお前らも適当に座れ。試合が終わってから、まだ見ていかなかったら？」

「ええ、それは、だって……」

「それがキャプテンとしての命令だというのなら、仕方ない」

戸惑いを覚えつつ、勇作に諭されて二人は並んで席に着いた。見ているはずもない。見れるわけが無かった。二人はまだあの戦いを振り返るほどの余裕はできていなかったのだから。それでも勇作達がいるのならばと、少しの安心感を抱いて味わったばかりの敗戦を噛み締めることにした。

『大仁多高校、選手交代です！』

メンバーチェンジ

「……やっぱり流れが変わったのはここかな？」

「ああ、そうだな」

前半戦の終盤、白瀧がコートに戻ってきた場面を目にし、神戸は言葉に悔しさを込めて呟いた。口にはせずとも全員が彼の意見に頷いている。

少なくともここまでは盟和が優位に立っていた。この流れを保てれば勝利は決して夢ではなかった。それほど順調であったというのに。

ここから試合の行方を決める流れは変わっていった。そう五人は確信していた。

「……白瀧もそうだが、大仁多の五人はそれぞれが試合の流れを変えれる力を持っているからな。西村とかに関しては総合力では二、三年の方が上という印象があるが、やっぱりベンチ入りするだけあって実力は相当だ」

脳裏に刻まれている記憶を再現するように、白瀧や西村、本田が連携して奮闘する光景が流れる。悔しいが彼らの実力は認めざるを得ない。負けず嫌いの勇作だが、この時ばかりは敵を素直に称賛していた。

ハーフタイムを挟み、試合は後半戦へ突入。大仁多の選手が入れ替わり、ベストメンバーが集結していた。

「冬はまたこの人達と戦うんですよね」

「いや……山本をはじめとした三年生はいないかもしれない。去年の

WC予選でも大仁多は三年生いなかったし」

「あ、そうなんですか？」

「ああ。ただ小林は大学の推薦が来たとか噂で聞いたからわからねえけどな」

次の再戦を想定して早くも焦りを抱く金澤に、細谷が補足した。金澤もまだ一年生。彼らほど知識が豊富というわけではない。

最も、たとえ三年生が抜けて実力差が簡単に埋るならば苦労しないのだが。

その金澤の活躍により、盟和が次々と得点する場面が流れる。当初の予定通り、後半戦も勢いを殺す事無く点を重ねていった。

しかしここで藤代が手を打ち始めた。

「……やっぱりこの人の存在も大きいですね」

「涼しい笑みで容赦なく勝機を摘み取ってくるからな」

明らかに動きが変わった大仁多の選手達。ビデオで見て彼らの動きの目的が明白に理解することが出来た。そして自然と彼らに指揮を出す藤代へと話題は向く。やはり全国を幾度も経験し、チームを最良の結果に導くだけあり、彼の指揮には目を見張るものがあった。

結果第三Qで大仁多に追いつかれてしまい、最終Qへ突入する。

しかし……

「俺も、少しずつ焦り始めていたんだな」

細谷は自分の表情を確認し、己に反省するよう促した。

第三Qで金澤を封じられ、小林や白瀧といった栃木の名選手との実力差に、余裕がなくなっていた。

「それは自分も同感です」

「少しずつ、地力が出始める苦しい時間帯だから、無理もないよ」

だが彼一人ではない。徐々に点差が開き始める試合展開、反撃しようにも力が届かない。

歯軋りが止まらない選手達がそこにはいた。決して一人の問題ではなかった。

『ふざけんな、ふざけんな！』

『おい、勇作？』

『ふぎけんなあああああ!!』

ついに終了の時間が近づく中、勇作の絶叫が木霊した。

音声はそれほど大きくしていないはずなのに、非常に大きく聞こえたのは、感情的なものの為なのかもしれない。

勇作の叫びを耳にして全員が表情を顰めた。

思いを察して、その結末を知っているからこそ何もいえなかった。

この後も全員が奮起した。試合を引っくり返そうと全員が諦めなかった。

『ふぎけんな！ もう同じ思いは、ごめんなんだよ!!』

『決めろ、小林!』

『止めてくれ、勇作!』

『うあああああ!!!』

『うおおおお!!!』

最後の攻防。この試合を印象付ける小林と勇作、二人の最後の一騎打ち。

しかしこの二人の競り合いも小林が制し、そして試合は終わりを迎える。

(大仁多) 119対87 (盟和)。

大仁多の関係者が沸きあがり、盟和の関係者が失意に沈む。

ここでビデオは録画していた全ての内容を出し切り、会場の光景は消えた。

「……やっぱり慣れないね。何度見ても、負けた試合は」

「ああ、そうだな」

「だからこそと思って試合に挑むのに、それだけじゃ勝てねえんだから、本当酷い話だ」

乾いた笑みを浮べる三年生達。

この一度だけではない。これまで何度も目にしてきた。目標が届かず、屈する光景を。何度も目に刻み、脳裏に焼き付けるように繰り返した。こんな悔しい思いはこれだけで十分だと。それでも最後の挑戦さえも叶わなかったのだ。

「……先輩達は凄いですね」

「あ？ どうしたよいきなり？」

「そりやそうでしょ。だってこんな映像見れるんですもん」

未だにシヨックに打ちひしがれる金澤や古谷は三人の姿が眩しかった。

シヨックがないわけではないだろう。だがそれを割り切れている。自分達には到底出来ないとの心の弱さを実感している二人に、勇作は立ち上がったと言った。

「当たり前だ。見なきゃ気がすまねえんだよ」

窓に近づき、もはや日が沈んで暗くなってしまった外の景色を眺めながら勇作は続ける。

「敗北を引きずってたら勝負には勝てない。だが敗北から何も学ばなければ、やはり勝負に勝つことはできない」

必ず敗戦と向かい合う必要がある。それは決して後悔から来るものではなく、次の勝利を掴むためだった。

「こいつ、普段は勝った試合とかは観ないくせに、大仁多との試合は擦り切れるほど見るんだもんな」

「そりやそうだろ？ 勝った試合はわざわざ何度も味わう必要はねえよ。どうせ喜びは何度でも味わうんだ。だが敗北の苦味は違う。もう二度と同じ経験はしないと誓う為にも、身に染みこませなきゃいけねえ」

「……勇作らしいよ」

「まったくだ」

自然と笑みがこぼれてきた。敗戦を吹っ切れたわけではないのだが、何故か可笑しくて、突如彼らは笑い出した。

「……何いきなり笑い出してんだよ、この野郎！」

「ぐはっ!？」

何故か悔しさがこみ上げてきた古谷は理不尽にも勇作の背中を蹴り飛ばす。幸い怪我は泣く尻餅をつくに留まった彼だが、不意打ちを受けて気分を害さないわけがなかった。

「おいこら!?! 何するんだテメエ！ ここは『良い話だな』って感激するところだろ！」

「うるさい！ 人が親切にも心配してやっていたつてのに、ノンキにも笑い出しているからだよこのシスコン野郎！」

「ふざけんな！ 俺を足蹴にしているのは茜だけなんだよ！ この前のlonerの続きでもしてやろうか!？」

「いいですよ。マジで泣かしてやるから覚悟してくださいね!？」

いつものような衝突が飛び交う。二人の間で火花が散る中、やはりこうなる運命なのか二人は決着を着けるべく再び体育館へと向かう。

「……行っちゃいましたけど、止めなくていいんですか?」

「別にいいだろ。あいつらあなつたら止まらないし」

「それに、古谷も燃え上がっているみたいだし、このままの方が二人にとってもプラスだよ」

「そんなものですかね」

この場に取り残された三人は、いつもの雰囲気に戻った現状に呆れと喜びを抱き、俺達もそろそろ行くかと片づけを始めた。

「さて、意外と時間はあるね。僕たちももう少し体育館で体を動かそうか?」

「そうですね。俺もシューティング途中でしたし。細谷さんはどうします?」

「俺はここの鍵を返さないといけないからな。先に向かつてくれ」

勇作のフォローを勤める副主将の細谷にはまだ仕事が残っている。

だからこそまずはそちらを処理しなければいけないと指示を出す細谷に、待ったと声をかける人物が現れた。

「その必要はない。お前達も体育館へ向かつていいぞ」

「え? ……監督?」

「いつからここに?」

「ついさっきだ。俺も指導者として責任があるのでな。鍵は俺が返しておくから、お前達はもう行っていいぞ」

「本当ですか! ありがとうございます」

礼を言って細谷は鍵を岡田に手渡し、神戸・金澤と共に体育館へと向かった。

しっかりと戸締りを確認し、そして部屋に鍵を閉めた後、岡田は三

人の後姿を見つめた。

「……フオローする必要はなかった、か。本当に頼もしい子供達を受け持ったものだ」

非常に嬉しい。その気持ちに偽りは無い。だからこそ、本当に情けないと思っただ。

自分達だけでも前へ進もうと積極的に動き、努力を続ける選手達。その彼らの夢を叶えることができず、三年もの間彼らを不名誉のままに、悲願を果たせずにいることが、指揮官として非常に申し訳なく感じた。

「いかな。俺がこのままでは選手の士気にも関わる。いい加減藤代の笑みを止めなければな。俺も頑張るとするか」

選手達が前を向いているのに、自分が立ち止まっては行られない。次こそはあの常時笑みを浮かべている表情を崩してやると、岡田は笑みを浮かべて彼らが先に向かった体育館へと足を向けた。

「……あ、その前に鍵を返さない」と

先へと歩き始める前に、少し寄り道をする必要はあったが。

お宅訪問 at 光月

人というものは何か自分が経験していないような壮大なものを目にした時、大抵はそれに目を奪われて呆然とし息を呑む。

今眼前に広がっている光景も、俺達が時を忘れて反応を失うには十分なものだった。

「なっ……………」

「何、これ……………」

眩きは果たして誰のものだったのだろうか。明を除いた俺達四人はその場に立ち尽くし、皆同じ様に視線だけを明へと向ける。

「皆どうしたの？ 早く行こう」

ただ一人平然としている明は送られている視線の意味を理解できないのか、一人歩みを進めていく。その先にあるのは、まさに俺達がこのような状態に陥っている原因である、豪邸と呼べるほどの純和風の広大な屋敷だった。

「ちよつ、ちよつと待て光月！ ここは本当にお前の実家なのか？」

「え？ うん、そうだけど」

「それが何か？」とでも言わんばかりに首を傾げる明。問いかけた本田ももはや何を言っただいのかわからず硬直している。

「…………ちなみに、光月さんのお父さんのお仕事は一体何なのでしょう？」

「えつと、お父さんは警察官をやっけて」

「警察官!？」

「たしか栃木県警察の本部長って話していたかな？」

「本部長!？」

栃木県警の本部長。それが意味するのはつまり、明の父親がとてつもなく高い位に存在しているということだ。

(…………白瀧さん、本部長ってどれくらい偉いんですたっけ?)

(簡単に言っただけしまえば栃木県警察の長だ)

(嘘でしょ…………)

おそらく理解していなかったわけではなく、確認の意味をこめての

問いかけだったのだろう。もはや驚きを通り越し、諦めや呆れの意味が籠ったため息が西村の口からこぼれる。

だがため息をつきたいのは俺達も同じことで。説明を聞いても受け入れることは難しかった。

「つてことはつまり、ここにはその栃木県警察で一番偉い人もこの中にいる、と」

「そっすよ」

「……おい、ヤバくね？ 俺はそんな人がいるところに行くとか聞いてないんだけど。小学生の頃、道に落書きしたことで捕まったりしないよな？」

「素直に罪を認めて自首しておけ。そうすれば罪は軽くなる」

「ちなみに白瀧さん。18歳未満である高校生が18禁の本を持っていることは罪にはならないんですか？」

「——とは言っても人間なんだから一つや二つくらいの間違いなら許されるだろう。だからそこまで気にするな」

「え？」

そう勇をサポートしてから早々に明の後を追う。後方から疑惑の眼差しを感じるが知らない。知ったことではない。大体あれは青峰が面白半分で俺に渡したものであるから断じて俺のせいではない。栃木に持つてきているのも青峰がくれた数少ない友情の証だと感じているからであって不純な理由は一切ないのだ。だから何も問題はない。

「細かい話はどうでもいいが。……同僚の家に遊びに行く感覚だったのに、こんなことになるとは想像もしていなかったぜ」

「まっすよ」

「どうしてこうなっちまんか」と愚痴を零す本田に同意し、俺達は昨日のことを思い出していた。それはとても珍しく、控えめな明の提案によって始まったことだった。

「明の家に？」

「うん、皆でどうかな？」

着替えの最中、明から他の一年生四人への突然の誘い。勇が首を傾げると明はさらに続けた。

「皆栃木出身ということではないし、実家は遠いこともあるだろう？でも僕は地元出身だし、父さん達も一度チームメイトの顔を見ておきたいって言っていたんだ。どうかな？」

それは明が俺達へ家に遊びにこないかという提案だった。たしかに明の言うとおり俺や西村、勇に至っては栃木県外の出身。本田も栃木県内に住んでいるとはいえ遠い場所に実家があるという。

対して明の家はバスに乗れば10分ほどで着くところにある。親の意見もあり、息抜きにどうかと声をかけてみたということだった。「俺は全然いいぜ。高校に進級してからはバスケット以外では殆ど遊んでいなかったし」

「特に予定は入っていないので俺も大丈夫です」

「……まあ一日くらいならいいんじゃないかね？」

「そうだな。部活も合宿が終わってIHまでは休みの日があるし、気分転換には丁度いいだろう」

「本当？　じゃあ親にも伝えておくよ」

四人の賛成を得て、明は早速スマホを取り出しメールを打ち始める。おそらくは親への報告だろう。

それを見て、少し羨ましくもあった。

いくら覚悟をしていたとはいえ、親元を、故郷を離れたことに何も感じていないわけではない。すぐ近くに頼れる居場所があるこいつを少し羨ましく思った。

「でもチームメイトの顔を見たいというのなら、橙乃さんも誘ってみましようか？　彼女もマネージャーとしていつも一軍に同伴していますし」

「やめておけ。いくら橙乃でも女性一人に対する誘いは抵抗あるだろうし……何よりこんなこと勇作さんに知られたら後が怖い」

「あー。……確かに。男からの誘いとなったらあの人普通に切れそう

だな」

「そーいやあの人ってそーいう人だったのか……」

おそらく確実に切れるだろう。橙乃を誘わない理由は後者の理由が大きすぎる。理不尽な面があるので、余計なハプニングの可能性は排除しておいたほうが得策だ。

「うん、OK。父さんも日曜は空いているってことだから、今度の日曜
どうかな？」

「日曜か。部活もないし丁度いいんじゃないか？　なあ？」

「問題ないです」

「モチ！」

「覚えておくわ」

「じゃあわかりやすいように学校集合で。その後は僕が案内するよ」

この時は皆軽いノリだった。いや、日曜の当日も遊び感覚だった為に、皆動揺を隠せなかった。

バスに乗ること10分。歩くこと数分。俺達は驚愕させられることとなる。

先頭の明に案内され、綺麗な廊下を歩く四人。

「……お母さんも随分と綺麗な人だったな」

「育ちがよさそうというか、なんというか……」

話の的となったのは、出迎えてくれた明のお母さん。今はお茶を出すと言って下がっていった。和服に身を包んだその姿はとても気品があり、振る舞いも優雅なものであった。

「家のことも含めて正直な話、羨ましい限りだぜ」

「果たしてお父さんの方は一体どんな人なのか」

皆感じたことは同じようで、果たしてお父さんはどのような人物なのだろうかと頭を悩ます。きつとお母さんが絵に描いたような女性だったからお父さんも立派な人物なのだろうか。

今まで警察の関係者とは面識がないので、人物像がまったく浮かび

上がらない。

ドラマなどのイメージとしては階級を重視するエリート肌、真逆に実力を重く判断する柔軟な人物、堅物などがある。一体どれが当てはまるというのか……

「教育は厳しいけど普通の父親だよ。まあでも」

「——うん？ おお、もう来ていたのか？」

考えに耽っていると、見かねた明が説明しようとして、その言葉を遮る人物が曲がり廊下から現れた。

「なっ……!?!」

男性を見て、息を呑んだ。

筋肉質な肉体に加え、190cmに届くのではないのだろうかという、ボディビルダーを彷彿させるずっしりとした巨体。

日焼けしたのだろうか、やや薄黒い顔。そして右目に斜めに走る大きな傷跡。

初めて明を目にした時も大概であったが、それとは比べ物にならないほどの圧力を受け、四人は恐怖を覚え、混乱した。

(……え？ 何、この人？ 不審者？ というか、暴力団？ ヤクザ？)

(絶対堅気の人間じゃねえ！ 何でこんな男が明の家にいるんだよ!?)

(……逃げるか。逃げ切れるか?)

(こいつ！ ——ヤバイ！)

西村は呆然と立ち尽くし、勇は腰を抜かし、本田は半身を出口へ向け、俺は咄嗟に四人を庇う様に前に出て気当てを發揮した。誰一人としてまともな人間に対する反応をしていなかった。

右半身を前に構え、そして左手を後ろに見えるように回し……そして西村に合図を送る。指示は指と手首を動かすだけの簡単なもの。『5』『お前』『皆』『行け』の四つ。訳すと『5秒だけ稼ぐからお前は皆を連れて行け』というサイン。

しかしそれを実行に移すよりも男が口を開く方が早かった。

「……ほう。いい面構えをしている。澄んだ気迫も中々どうして清々

しく感じるな。最近の若者は温いものが増えたとばかり思っていたよ。しかし」

瞬間、降りかかるプレッシャーが大きくなるのを感じた。

「誰に対して放っているのかな、その気迫は？」

大きく上がった口角を目にして、体が震えた。対峙するだけで押し潰されそうな重みが場を支配する。

武術を極めていくと構えただけで実力差がわかるというが、今の俺はそれを感じ取っていた。時間稼ぎにさえならない程の歴然とした差を。

(制圧はまずムリだ。だがせめて一撃当てる。……膝抜きで一気に踏み込む。後は相手の反応に合わせるしかない！)

敗北を感じ取り、打ち倒される未来が脳裏をよぎる。

震えが止まらない膝に力を込めて、相手をにらみつける。すぐには飛び込まない。一瞬でも隙があればと様子を窺いつつ、警戒している
と――

「何しているの。部屋で待っていてくれるんじゃないのか、父さん？」

明がいつもの声高で男性に問いかけた。

「……は？」

「え……？」

「おお、明か。すまんすまん。どうも今日は朝から腹の具合が悪くてな。そろそろ歳かな？」

「未だに現役で、しかもその豪腕ぶりで犯人を震え上がらせている人が何を言っているの……」

「はっはっは。そうは言っても最近は大事件も減ってきたからな。テレビに出る機会もなくなって少し思うところもあるのだぞ？」

戸惑い、反応を忘れる四人を他所に、明と男性は先ほどまでの緊迫感が嘘の様に気楽に話している。

「……父さん？」

「つまり、この人は……」

「光月の、父親？」

「嘘だろ……」

到底信じられないが、明の行動が俺達の考えを何よりも肯定している。

目の前の男性が明の父親であり、警察官——それも本部長である。

……これ、実はどこかの犯罪組織のスパイであったというオチはないだろうか？ いや、冗談抜きでその方が信じられる。口にすることは憚れるが、この顔は捕まえる側ではないだろう。

その後、部屋に到着した俺達は明のお父さんと向かい合うようにソファに腰掛けた。お母さんより和菓子とお茶を出されて口にはしたものの、正直味など覚えていない。

どこから見ても悪人面にしか映らない男の顔を見て、まるでヤクザか何かの事務所に迷い込み、そしてどんな処分を下されるのかを待っているような気分だった。

「あらら、お口には合わなかったかしら？」

「ふむ。最近の子供はやはり洋菓子の方が好きだったか。すまないね」

「い、いえ。そんなことはありませんよ」

「美味しくいただいています」

緊張した顔つきを見て、見当違いな考えを浮かべる二人に否定し、さらに菓子を口に頬張った。

お母さんは当然だけど、お父さんも口調も丁寧だし普通に接するだけなら優しそうなのだが。顔が全てを台無しにしまっている。

和菓子の甘みも幾分か薄れているように思えた。甘いものは嫌いではないはずなのに。

「今度、皆で全国大会に出るんでしょう？ 全国常連の高校と聞いていたけど、素晴らしい結果ね」

「ありがとうございます。先輩達の活躍が大きいですけど、やはり俺

達も何度か試合に出れて、やはり嬉しいですよ」

賞賛を受けて、勇が心底嬉しそうに笑う。あの激戦から日が経過しているとはいえ、他人に成果を褒められるのはやはり喜ばしいことだ。

「しかも君達はまだ一年生なのだろう。よく厳しい環境の中、耐えぬいて結果を出したものだ。明も君達の存在は非常に大きなものだと言っていたよ」

視線を明へ向けると同調して頷いていた。やはり笑みを浮かべており、嘘を感じられない表情だった。

明の活躍も俺達には大きな安心感を与えてくれたが、まあそこはお互い様ということにしておこう。やはりチームメイトの中でも同級生という存在はそれほど大きなものである。

「後はIHという大きな舞台で頑張りますよ。予選みたいな動きをできれば、きつと勝てると思じているので」

「頼もしいことだ。しかしすまなかつたな、うちの明が足を引っ張ってしまったように」

「いえ、そのようなことは——」

「予選の準決勝でも途中交代、決勝戦でも序盤は殆ど役に立てなかつたと聞いた」

突如、お父さんの顔が強張る。

「あー、いや、確かにあの時はそうだったけど」

「最近たるんでいるのではないか？ レギュラーを取った後から、お前の中で自分への甘えが出たのではないかと心配だ。それがチームに迷惑をかけるというのなら尚更な」

鋭い視線が明だけを捉える。

ただでさえ臆病な一面があった明は冷や汗を浮かべ、どう返答をすればよいのか迷い、口を閉ざしてしまった。

返答がないということを確認と感じ取ったのか父親は続ける。

「お前はまだまだ未熟であるということをお忘れな。少し庭で体を鍛えてきなさい」

「え?! 今から?! いやでも皆もいるし……」

「彼らは私達が接待するさ。私から話したいこともあるし、気にするな」

「いや、でも……」

「どうした？ 何か問題でも？」

「……行つてきます」

有無を言わさない圧力に当てられ、明は渋々と部屋を後にした。

……息子を相手に容赦ないな。しかも俺達が来ているというのにか。

「随分と厳しいっすね」

「というか、庭とかあるんですか？」

「息子だからこそ、だよ。見たいなら君達も案内しよう。昔あの子がバスケットを始めたときにバスケットのゴールも作ったものでね。少しくらいならバスケットの練習もできるはずだ」

「本当ですか!？」

「……すげえな」

予想を超えた環境のよさに、皆が驚いた。ゴールが家にあるというのは本当に羨ましい。バスケットの練習をするにあたり、ボールは買えてもゴールを用意することは中々難しい。それが家にあるというのはかなり恵まれているといつて差し支えないだろう。俺も羨ましさを覚え、少しよつてみたくなつてきた。

「——さて」

お父さんが一つ息を零す。一瞬、明という身内の者がいなくなつてしまったことに気づいたせいで怖さが増大した。

「あの子は、明は部活でもきちんとやっているかい？」

しかし恐怖を抱く必要などなかったらしい。沈黙の後に放たれたのは一抹の不安を抱いている声だった。

「……どういう意味ですか？」

「聞いているでしょうけど、彼も実力を持っているし、試合でも活躍して皆頼りにしていますよ」

「そうか。だが、それはきつとあの子が平常心を抱いている時のことだ」

言葉の意図を理解したものはいなかった。皆首をかしげてその真意を探るが、思い当たることなどなかった。

「私はあの子が本気で怒る姿を見たことがない」

「……ええ、そうね」

その言葉に母親も頷いて、さらに話は続いた。

「人間には様々な感情があり、それが行動の理由となるものだ。その中でも特に怒りというものは凄まじい原理となりうる。……君達は、明が怒っている姿を見たことがあるかい？」

「……いいえ」

「今考える分には一度も」

「クラスの中でもそのような素振りはなかった気がします」

諭されてようやく気づいた。

確かに俺達は明が怒っている姿など一度も見ることがなかった。かつてあいつが中学時代の同僚である荻野と再会して侮辱された時も、奮起こそすれそれを怒ったことはなかった。

「本当に幼いころはそうでもなかったのよ？ でも、昔この人に本気で怒られた時に怯えてしまった様で……」

「ああ。だが明は強い力を持っている。だからこそ、慣れぬ怒りを抱いた時、あの子がそれを制御できるかわからない。それが心配なんだ」

怒りを抱く前に、きっと何かが抑えつけるのだろう。自制心か、臆病な心が。

だがそれでも抑えきれないほどの感情を持ったのならば、無類の力を誇る明を止められるものはいないのではないか。それがきつと父親が危惧していることなのだろう。

「……失礼を承知で聞きますが、お二人は彼が出ている試合を観たことがありますか？」

ならばこそ、この悩みは俺達が解消しなければいけないものだ。

「いいえ。話では聞いていたけれど……」

「私も仕事があつて中々行く機会がなくてね」

俺の問いかけに二人は難しい表情を浮かべて否定した。

大人にも色々事情があるのだからそれを責めるつもりはない。悩みを浮べてしまうことも理解できる。

だが、だからといって俺達までその言葉を肯定したくはない。

「俺達は全員が力を合わせて戦っています。俺達が明を助ける時があれば、逆に明が俺達を助けてくれる時もある。あいつが耐え切れない状況に陥ったならば、その時は暴走する前に俺達が助けます」

チームメイトとして当たり前のこと。助けて、助けられて、先へと進む。元々、一方的に助けるだなんて驕りだ。明は何もできない無能なんかじゃない。

「明を心配する気持ちはわかります。ですがお二人が考えているほど、彼は弱くはありませんよ」

仮にもあいつだって俺達と同じように、実力で今のポジションを勝ち取ったのだから。

「……………ふふっ。君は中々面白い男だな」

安心したのか、父親は表情を緩めて背もたれに寄りかかった。

「先ほど私を前にして四人を庇った時といい、迷いのない性格をしている。あの子も幸せものだな、君達のようなチームメイトに出会えたというのは」

今ここにはいない息子へと向けられていた不安の一部を減らすことは出来ただろうか。

幾分か安堵しているように見えるのは、自意識過剰ではないと思いたい。

「あいつだってレギュラーですからね。やつてもらわなきゃ困りますよ」

「特にゴール下というのは、光月さんみたいな人がいないと話になりませんし」

「俺達にとつては体を張って助けてくれる、頼りになる存在です」

本田達三人もそれぞれが抱えている信頼感を口にした。

明が普段両親に何を話しているかはわからないが、決して頼っているのはあいつだけではないということ、今日改めて感じてくれればいい。そう思った。

「……そうだな。ならば私達からは一つ、君達にお願いしよう」

少し間をおいて、そして父親は告げる。

「あの子と、明と助け合ってくれ。先ほども言ったが、明は力がある。役立つ時もあるだろう。IHでも君達が共に喜ぶ姿を期待している」
「迷惑をおかけするかもしれないけど、よろしくね」

「……はい」

「勿論です」

「勝利の報告をあいつと共にしますよ」

「だから、応援しててください」

二人の頼みに、俺達は全員が頷き、そして改めて全員で勝利することを決意した。

その後、四人は庭に案内されて光月と合流し、共に汗を流した。

夕食もご馳走になり、味に全員が満足すると光月がチームメイトを見送って自宅へと戻る。

「明、少し来なさい」

「え？ あ、うん」

そろそろ明日の準備を始めようと自室へ戻る光月を父親が呼び止めた。

言われるがまま居間へと戻り、二人は真面目な表情を浮かべて向かい合った。

何か問題でもあったのだろうかとかと光月が悩んでいると父親が口を開いた。

「銀髪の少年には、気をつけなさい」

「え？ 銀髪って……要のこと？」

何故、と戸惑う明を見て父親は話を続ける。

「彼は危険だ。迷いが無い。なさすぎる。高校生ならばもつと自分のことを意識してよい時機。それなのに、私と初めて会った時にすぐさま前に出たことといい、他者への考えといい、意識が確固たるものと

なっている」

今日一日の間に彼が見た白瀧の素振りを思い出し、そして彼の性格を分析していた。

「……それで？」

「彼は行動する時に迷いが無い。おそらくは自分の進む道の先が危険だとしても間違いだとしても、目的の為ならば進める、いや進む人間なのだろう。だからこそその考えは強く、そして危険だ」

警察官として多くの人を見つけてきた観察眼が、白瀧要という男が危険であると見抜いていた。きつと白瀧は自らの目的を達成する為ならばどんな犠牲も厭わないと。

「だから、危険だって言うの？ でも僕達は要を——」

「勘違いはするな。だから付き合いをやめろと言っているのではない」

反対の声を上げる光月を制し、父は本当に言いたいことを真っ直ぐ伝えた。

「だから、お前も助けてやりなさい」

「……え？」

「きつと彼もいつかは壁に衝突する場面があるだろう。その時に一緒に戦えるように、強くなりなさい」

進むことしかできないのならば、チームメイトとして彼を助けてやれと、息子に言う。

反対ではなく、むしろ光月の背中を押してあげたいという意味が込められたものだった。

「……うん」

「IH、勝利の報告を待っている」

「うん、頑張るよ」

いつもしているような返事であったが、しかし今は常時のそれよりも気持ちのこもったものだった。

談話&質問コーナー

星月（以下星）「さて、ここからは座談会のコーナーです。ファンブックでは藤巻先生と富樫先生のお二人でしたが、ここでは今作品の作者である私とこのお二人に来ていただきました」

白瀧（以下白）「どうも、皆さんいつもありがとうございます。大仁多高校一年、白瀧です」

西村（以下西）「同じく大仁多高校一年、西村です。皆さんよろしくお願いします」

星「今回はこの三人でお送りしていきます。ちなみに今回キャラクターのデータにはファンブック第一弾を参考にしております」

白「ここまで長かった。本当にこの一言に尽きるな」

星「ですね。もう本編は第六十話を突破。ここまで来るとは思ってもいませんでした」

西「キャラも大分増えましたよね。全国編でさらに多くなるでしょうけど」

星「そのためにもこの話、ということです。前から要望がありましたが、細かいキャラの話などもできますので。それではさっそく話を……」

西「……ところでその前に一つお聞きしたいことがあるんですけど」

白「どうした？」

西「白瀧さんはわかりますけど、なぜもう一人が俺なんですか？」

「キセキの世代」とか小林さんとか光月さんとか、他にも人選があったのでは？」

星「理由ならありますよ。今回は話のポイントとなる帝光のこと、そして小説内容のメインである大仁多のことを知っている選手という点で選考しました。内容的に両方を知っている人において欲しかったのです」

白「たしかにそれならば俺と西村以外に適役はいない、か。帝校中出身で現在は大仁多に所属している」

西「はあ、そういうことならば。わかりました」

星「このコーナーでは小説のことについて話を交えつつ、以前活動報告で募集した皆さんの疑問に答えていこうと思います」

西「じゃあその前に俺から多分読者の方が気になっているであろう質問いいですか？」

星「いいですよ。なんですか？」

西「では早速」

・白瀧の精神力

西「データ集で公表された白瀧さんの精神力、低くないですか？むしろ5あっても良い気が……」

星「強いのと強く見えるのは違うということですよ。これについては緑間の過去編や桐皇対誠凛でも垣間見えますね。トラウマも持っているから決して高くない。ただキラーインステインクトという勝負強さをもっているのです、平均的な3にしました。あともう一つ理由があるのですが……ネタバレになってしまうので控えさせてもらいます」

西「もう一つ？」

白「……」

・白瀧のスタミナ

西「じゃあ二つ目。白瀧さんのステータスの表だけ赤線引いてあつたけど、あれどういう意味ですか？赤線の場合はスタミナの項目が4に表記されていましたけど」

白「以前感想でも聞かれたことか」

星「単純な能力でいえば4。しかし試合にて、総合的なスタミナを考えるならば5ということですよ。彼のバスケスタイルを考えれば理解できるでしょう」

西「ああなるほど。でもどつちにしろ白瀧さんのバスケスタイルなら表記しなくてもよかつたんじゃない？」

星「……まあ、そうかもしれないね」

白「基本的に5と考えてもらえれば大丈夫だ。余程のことがなければ、な」

・総合能力

西「大体俺からの質問は以上です」

白「結構内容多いから大変だな。能力も人それぞれだから説明は必要なんだろうし」

星「そうですね。ちなみに今回紹介した全登場人物中、能力の総合点数が最も高かったのは東雲さんでした」

白「はあっ!？」

西「……すみません、何を言っているのかわからない。何故東雲さんが？」

星「桃井とかは女子力が低かったために総合点数が下がりましたが、東雲さんは5なのでかなり稼ぐことができたので」

白「ああ、たしかにリコ・桃井ペアは女子力で平均点を下げているな」

西「というか、スポーツ漫画のお話なのに選手を差し置いてマネージャーが最高能力値を記録するとは一体……」

星「項目が大きく違いますがね。ちなみに白瀧とかも女子力は高めの設定です」

白「まあ料理とか裁縫とかは一通りできるけど」

星「他で言うと楠、勇作の二人かな。特に勇作は妹の橙乃ができない分、彼が代わりに務めていたということもあって高いという設定です」

西「なんで女子力が高い人の話で男の名前ばかり出てくるんですかね……」

白「まあ、原作でも火神・氷室とか高い選手はいたから」

星「むしろ女子力が壊滅的な女子がいるんですよ……」

西（……あれ？ 女子力ってなんだっけ？）

・登場人物の設定

白「改めて話を聞くと個性豊かな人物が多い様に感じる」

星「そうですね。加えて先ほども述べたように作品内の登場人物は

とても多いですから。ちなみに登場する大仁多のメインキャラのうち設定ができあがるのが一番早かったのは白瀧、遅かったのは橙乃です」

西「まあ白瀧さんは他の人たちに先駆け、短編の時点で登場していましたがからね」

白「むしろ橙乃が遅かったのが意外だ。登場数も多いし早いと思っていたのに」

西「そういえば実際俺より初登場も早かった気がします」

＊＊（橙乃初登場回：第三話、西村初登場回：第九話）＊＊

星「たしかにある程度は出来ていたんです。しかし彼女の性格を決めるのに時間がかかりました」

白「性格？　と言うと？」

星「現在の性格ともう一つ候補があったんです。その場合は血も涙もデレもないような性格でした」

西「デレってその二つと並ぶようなものでしたっけ？」

星「そのため登場シーンや白瀧をはじめとしたチームメイトとの会話場面も当初は違うものでした。最終的にはストーリーや部員との交流を考えて、そして名前が持つ温かい雰囲気から今の性格に落ち着いたわけですが」

白「……まあ、よかったのかな？」

西「微妙ですね」

星「さらにこの性格だった場合、勇作の性格も変わります。今こそ重度のシスコンですが、後者の場合は橙乃に冷たくあしらわれて喜ぶ重度のシスコンになっていました」

西（結局重度のシスコンじゃないですか）

白（むしろ変態度がグレードアップしているんですがそれは。今はまだマシだったのか……）

星「という形で本編は出来ました。——それではここからは以前募集した質問に答えていこうと思います。では、早速一つ目から」

・帝光時代、白瀧は彼女いたんでしょうか

西「最初からけっこうダイレクトな質問が来ていますよ」

白「え？ 何、これ。俺が自分で答えなきや駄目？ 罰ゲームですか？」

星「私が答えてもいいですけど」

白「……ッ！ わかったよ、言えばいいんでしょ言えば！ いませんでしたよ！」

西「白瀧さん……」

星「中学時代から桃井に好意を抱いていたんですけどね。何度か告白したけど失敗し、その後も告白も考えたけど、彼女の寂しそうな表情をみて告白できなかったという」

西「え!? 告白したんですか!？」

白「いや、したというか……」

星「肝心の桃井に告白だと気づいてもらえなかったという」

西「……ある意味フラれるよりも酷い」

星「まあそういうこともあって中学時代彼女はいない設定です」

白「逆に告白されても、意中の女性がいるから受けるわけにもいかなかった」

西「真面目すぎる。試しに少しだけ付き合ってみようと思わなかったんですか？」

白「俺がそんな器用なことできると思っているのか？」

西「無理ですね、すみません」

星「一途な一面がありますからねー。高校では果たしてどうなることやら。ちなみに以前感想で返したのですが、IHとWCにかけて彼の恋愛関係は大きく動く予定です」

・白瀧、茜、神崎、光月、小林の嫌いな生物とその理由

星「これは原作の単行本でもあった質問ですね」

西（俺が入っていない……）

白「黄瀬って答えちゃ駄目？」

星「いじめよくない！」

白「だよな。まあ冗談は置いて」

西「本当に冗談だったのだろうか？」

白「俺はハトかな。……小学生の時、登校中にフンをかけられた」
星（安定の不運）

西「当然の怒りですね。登校の後大変だっただろうな……」

星「ここにいないキャラは私が。茜は虫全般。とにかく子供の時から駄目です」

西「まあ女性なら普通ですよね」

白「……もつと変な生物の名前が出てくるかと思った」

西「え？」

星「神崎は毛虫です。中学時代、外で友達と話している時、壁に背中を預けていたら何匹も背中に張り付いてきたとか」

白「勇でもそれは嫌いになるわ」

西「その後の対処が大変そうです」

星「光月はクモ。寝ようと布団にこもって天井を見上げたらいた」

白「あいつが困惑する姿が目には浮かぶよ」

西「多分、こういうことは苦手ですよね」

星「小林は鶏。小学校時代、彼が生き物係で世話をしようとした際に攻撃され、小屋の中を走り回ったとか」

西「一番想像できない場面ですよ」

白「しかも一番面白そうだな」

星「本人はトラウマなんだからやめてあげて！」

・過去編は短編と同じ設定なんでしょうか？何か役職の変更はありますか？

西「……帝光中に関する質問ですね」

白「ああ。まだ断片的にはあるが各人物の回想で結構描写あるからな」

星「結論を言いますと基本的な流れは同じです。しかし短編の時には登場していない西村がいるなどの変化もあります」

西「あの時はまだ俺の設定もできていませんでしたから」

星「はい。それとあまり詳しくは言えませんが、その流れの段階も

この長編の方が重い展開が多いです」

白「中学時代はどうしても、な。二年生の時なんて皆色々酷かったし」

西「……キセキの世代をはじめ、他の選手達も変化がありました」
星「役職についても変化はないです。白瀧は一般部員として参加していました」

白「ま、副主将が二人というのは特例だったからな。緑間が副主将である以上、何も問題はない」

西「個人的には白瀧さんが代表でもおかしくなかったと思います」
白「俺はそんな器じゃないよ」

・もし花宮戦で白瀧がラッキーアイテムを受け取っていたらどうなっていたでしょうか？

星「これは、緑間が語っていた過去編の話ですね」

西「二年の全中の話。……あの時か」

白「まあ、今考えればあの試合が大きな分岐点だったよな」

西「白瀧さん……」

星「色々思うところはありますが、結論としてラッキーアイテムを受け取っていたら白瀧の離脱はなくなっていました」

白「……はあっ？」

西「何故!? どうやって!？」

星「ラッキーアイテムであるカッターナイフの刃がいつの間にか出ていて、白瀧が指を切ってしまう。思ったより深くて試合に出られそうにないと監督が判断。という形です」

西「ちよつと怪我は負うけど滅茶苦茶よくなっている！ 重症が軽症に変わるほどに!」

白「ラッキーアイテムの内容も重要なキーポイントになっていただと……? ラッキーアイテムってマジで何なの?」

星「小説でも緑間の命を救うほどの結果を見せました。効力は計り知れません」

白「……別に緑間に何か言うつもりはないが、何故か納得できない」

・白瀧ってモデルがいるんでしょうか？

星「これは感想でも似たような質問があったやつですね」

白「まああの時は技に関する内容だったけど」

西「白瀧さんの場合は技術面に関する話題が多いような気がします」

星「ある分野に特化した選手ですからね。一応モデルというか参考にした選手はいます。彼のプレイスタイルの参考としてはNBAのアレン・アイバーソン選手です。ポジションは違うのですが、NBAの中では決して長身ではないが卓越した瞬発力でアシストを記録し得点をあげる名プレイヤー」

西「ジョーダンとも戦った有名な選手ですね」

白「新人王をはじめ数多くのタイトルを取った選手でもある。オリンピックにも出ていたな」

星「あとモデルというわけではないのですが、設定として彼が憧れている選手がいます。これはプレイスタイルというか、どちらかというとな彼のバスケに対する意識に反映されています。後ほど本編で――おそらく第四章のIH編で出てくるでしょう」

・大仁多を決める前は西村の進路先はどこだったんでしょうか？

西「あ、これ俺への質問ですね」

星「そういえば白瀧が桐皇の進学をやめたとは描きましたが、西村のそれまでの描写はしてなかった」

白「結局進路変えてしまったからな。時機も早かったし」

星「変更前は西村も桐皇を一般受験する予定でした。この時点ですでに泉真館なども声をかけていたのですが、やはり彼の意志をひきつけることはなかったのだから」

西「どうせ進学しても俺には意味ないですから」

白「……すまん、西村」

西「謝らないでくださいよ」

・彼女がいる選手を教えてください

西「これはまたストリートな質問が」

白「……でもそんなにいないんじゃないか？ 原作組でも少ないし、俺達もまだ一年生だし」

星「一応現段階で明らかになっっている人物でいきます。小林・東雲、楠・西條、山田、神戸、以上6名です。ちなみに現在も付き合っている人物のみカウントしています」

白「うち二組が同じバスケット部内か」

西「女子マネージャーってやっぱり選手と付き合うことが多いのですかね？」

星「一概にそうとは言えませんが、多い方だと思いますよ。部活で交流する機会がありますから」

・選手の名前の由来があれば教えてください

白「これは設定に関する話か」

西「原作でも誠凛やキセキの世代、氷室さん。さらには無冠の五将など名前に関する話題がありましたね」

星「今回はキャラが多いので具体例として白瀧・光月・橙乃の三人を説明します」

西「お、この作品の中でも登場数が多めの方々」

星「はい。まず白瀧——白瀧要。これは彼の選手としてのあり方を一字ずつ決めました」

白「あり方？」

星「苗字から説明を。まず『白』。これはキセキの世代同様、色関係です。白は全ての基準。白から様々な色に変化、対応していく。アジャストもこの意味が強いです。もう一つ意味があったりしますが、これは後の機会に。次は『瀧』。これは彼の現状ですね。私が読んだ『三国志』という作品の逸話からとりました」

白「中国の歴史物語だな」

星「その通り。その重要人物である劉備と曹操の英雄に関する話です。『龍は実在するか？ありとみればあり、無いと見ればない。龍が

表すのは英雄。龍というものは天に昇る機が熟さん時は頭を埋め、爪を隠し深淵にひっそりと身をひそめ、さざ波さえ立てない。だがひとたび機が熟したとみるや、風を起こし、雲を呼び、一気に天を駆け上がる』

西「龍、英雄か」

星「今はまだ龍は水の中にいる。……ということ、『瀧』です。滝でもよいかと思ったのですが、こちらの場合は水のイメージが強いので瀧にしました」

白「正直身に余りすぎる話だけど……」

西（俺達からみればそうでもないけどな）

星「最後、『要』。これは文字通りチームの中での役割。スコアラーとしては勿論、パス回しや精神的な支えなどチームの要として存在する。今となつては司令塔なども務めるほのです」

西「こう見ると何か尚更凄く見えます」

白「辞めろ、恥ずかしい」

星「桃井を好きという設定は逆に彼女の名前から取り入れました。桃の花言葉、『私はあなたのとりこ』から。桃井は黒子へ感情が向いていますが、逆に彼女へ恋愛感情を抱いている人物がいなかったのです」

西「青峰さんという例外もいますけどね」

星「そうですね。では次、光月——光月明」

白「大仁多のインサイドを担う生粋のパワープレイヤーだな」

星「彼に関しては彼の性質を全ての文字で示しています」

西「白瀧さんとはまた変わった形ですね」

星『『月』は一人では『光』ることが出来ない。太陽の光を得て、『明』るく輝くことができる。彼の性格と力を踏まえた名前にしてあります」

白「月、か。黒子の光と影という話はあったけど、こちらでは太陽と月で示したわけだ」

星「はい。相互関係という点では変わりない。光月も力はあるものの一人では戦うことが難しいので。ちなみに月に関してはもう一つ意味がありますよ」

西「何ですか？」

星「月が本当に明るく輝くのは太陽が沈んでからです」

西「……は？」

白「え？ それってどういう——」

星「では次行きましょう！」

白「無視?!」

星「橙乃——橙乃茜。彼女に関しては彼女の過去からとっついていきます」

西（あ、完全に話を切り替えた）

星『『橙』はキセキの世代や白瀧同様、色関係です。暖かい過去の情景、そして白瀧達との関係を示す。橙色は緊張を和らげ力を出せる状態にします」

白「確かに俺も何度か橙乃には元気をもらったな」

星『『茜』は同じく過去の一場面、夕暮れを意味する。彼女の大切な思い出を表す一言です」

西「以前も描写ありましたけど、やっぱり彼女の過去も何か大きな意味があるんですか？」

星「そうですね。少なくとも今の彼女の、そしてある人物の今を作り上げた原因となっています」

白「こう見ると名前って意味があるんだな」

星「そうですね。ちなみに名前という点では神崎と本田は原作でいう火神、青峰と同様の意味を兼ねていますよ」

西「へえ。何か主人公との関係ですか？」

星「バ神崎とア本田」

西「あっ（察し）」

白（バカ神とアホ峰というやつか。そういえば二人とも学業の成績が……）

星「他に原作同様、共通点で決めたグループもあります。大仁多の三年生は自然に関する事。聖クスノキは留学生のジャン以外は歴史上の天才と謳われた人物の苗字。盟和高校は勇作以外の選手は執筆当時、某球団に所属する選手の苗字となります」

・橙乃や東雲は何カップですか？

星「来るかもとは覚悟していた質問来ちゃったよ」

白「原作にもあったな。これに関しては……俺達は何も答えられない」

西「むしろ答えられたらただの変態ですよ。俺達は知らない方が良
いのでは？」

星「まあまあ。えっと、現時点で登場している人物ですと橙乃・D
カップ、東雲・Bカップ、西條・Cカップという設定です。なのでF
カップの桃井が登場する生徒の中ではスタイルがずば抜けていま
すね」

白「え!?! 桃井さんってFカップもあるの!?! やべえ!」

西「白瀧さん……」

星「うーむ。逃れられない男の本能。悲しいかな」

・白瀧がいなかったら大仁多はどうなっていたんでしょうか？

西「これって原作的な意味ですかね？」

星「おそらくそうですね。大仁多はWCが初登場でIHの描写
がなかったので」

白「ただそうなるのかなり違う気がする」

星「そうですね。まず人材ですが白瀧がいなくなると西村の進学
もなくなってしまう。この場合はSFに三年生の佐々木が入り、PG
も小林・中澤の二枚看板になる」

西「まあ俺の場合白瀧さんがいなければ大仁多目指しませんから
ね。学力的に入れるかわかんないし、PGに正レギュラーの小林さん
がいるし」

星「加えて光月の覚醒がなくなってしまう。これが一番大きいです
ね」

白「たしかに。あいつは誰か同級生に頼れる存在いないと成長は難
しそうだな」

西「下手すれば秀徳との練習試合で立ち直れなくなる可能性もあり

ますよ」

星「はい。他にも一軍に心強い同級生がいないことで神埼や本田にも影響がでるでしょう。そういう問題もありまして白瀧がいない場合、大仁多はIHには出場できないと思っています」

西「え!?! 県予選で敗退つてことですか!?!」

星「その通り。準決勝で楠・ジャンの二人に苦戦を強いられ、決勝で盟和に惜敗、といった感じです。さすがに白瀧・西村・光月三人の戦力低下は大きすぎます。この三人は純粋な戦力としては勿論、流れを変えることが出来る貴重な逸材だと思っています」

西「レギュラー二人、そしてベンチメンバー一人。エースがいなくなるし確かに違いは大きいけどここまでとは」

白「IHには盟和が出場、か」

星「はい。そしてWCで大仁多が借りを返す。原作でも大仁多は昨年のIHベスト4と言っていましたでしたが、今年の話はしていませんので出場していないのでは? と思っただけです」

西「でも結局冬のWCで秀徳・緑間さんに負けてしまうと……」

白「原作では瞬殺だったか。切ないな……」

星「まあ設定ですので。むしろNG集で使おうと思っていた『橙乃が盟和に入っていたら』という設定の方が怖いですよ」

白「ああ。そういうえば橙乃は盟和に入ろうと思っていたんだっけ?」

西「というよりも勇作さんの一方的な願い、ですかね?」

星「色々事情はあるでしょうね。とにかくそうなった場合の大仁多対盟和が、こちら」

「お兄ちゃん。……勝つて!」

橙乃の思いが込められたその一言が、勇作の力を呼び覚ました。

「なっ!?!」

あまりにも唐突で、そして鮮烈だった。

白瀧の視界から一瞬で勇作の姿が消える。マークをかわした勇作は他の選手がヘルプに出ることさえ許さず、ボールをリングに叩きつけた。

——『ゾーン』。試合における余計な思考が全て消え、目の前のプレイだけに没頭する極限の集中状態。

選ばれた者だけが入ることを許された究極の領域。
だが勇作の妹への思いは容易くその扉をこじ開ける。

白「……は？」

西「……え？」

星「勇作、妹の叫びを受けて覚醒」

白「シスコンってすげえ！」

西「いやさすがにシスコンはシスコンでもこれは勇作さんだけでしよう。ちなみにこの後試合の展開はどうなるのでしょうか？」

星「この後は勇作の奮闘により大仁多が逆転負けを喫します」

白「結局!？」

西「つまり白瀧さんがいなくても、橙乃さんがいなくても結論は同じだど？」

星「橙乃がいないことにより白瀧の強化フラグが立たないんですね。考え方も固執したままで成長しきれない。むしろ余計に自分を追い込んでしまう。逆に盟和に入ることによって勇作が覚醒する、と」

白「勝因：マネージャー」

西「マジですか。なんかゲームでいう勝利条件みたいだ。ある条件を達成しないと絶対にゲームクリアできない、という」

星「他に白瀧が別の高校に行ったらどうなるか？ みたいなことを考えたこともありますがね。聖クスノキに入って楠とライバル関係になり下克上。盟和に入って勇作・橙乃と共に王者大仁多を倒してIHとか」

西「……あれ？ ひよつとして大仁多のピンチ？ 俺も多分そっちに行くだろうし」

白「PG：西村、SG：楠、SF：白瀧、PF：真田（主将）、C：ジャン。この組み合わせが何気に一番主人公チームみたいに感じる」

西「盟和の場合は金澤さんがシックスマンに入ってPG：細谷・西村、SG：白瀧、SF：古谷、PF：勇作（主将）、C：神戸、そしてマネージャー橙乃という感じですかね。フロントラインが充実して

いるし戦力的には本当に大仁多にも負けていませんよ」

星「他にもレギュラーのSFがない誠凛とかも面白そうですね。ま、大仁多に入るのが色んな人にとってベストな気がします」

・最後に

星「以上、皆様方から頂いた質問の答えとなります。送っていただいた方々、本当にありがとうございます」

白「これでこのデータ集も終わり、か」

西「ということは……」

星「はい。次回からは新章、IH編へ突入します」

西「そうか。長かったな」

白「初のIH、キセキの世代との公式戦。期待と不安が一杯だよ。緑間が敗退したものの、代わりに誠凛が、火神・黒子が勝ち上がっている」

星「間違いなく激戦になる。その中で誰が勝ちあがっていくのか……」

西「三年生の先輩達の為にも、少しでも長くコートで戦えるよう、頑張らしましょう！」

星「そうですね。では——ここまで読んでいただきありがとうございます。予告が好き、見たいという方だけ先へと進んでください。皆様、本当にありがとうございます」

白「これからも頑張っていくので！」

西「応援よろしく願います！」

——新章、突入！

各都道府県の予選を勝ち抜き、選ばれた猛者が集うI H。その舞台で、ついに彼らの真の戦いが幕をあける。

「自分さえ救えない弱者に、弱者は救えない」

最強と謳われる「キセキの世代」との真つ向からの戦い。

かつては共に戦ったチームメイトと、初めて敵として全国で、公式戦で顔を会わせる。

「今でもお前の考えがわからないよ。なあ、何でだよ？ 何でだよ赤司!？」

「マツ、スルウウウツツ!」

「あらそう？ でも、私はちゃんと覚えているわよ」

「だってもう俺らの方が上ってわけでしょ？」

「……ありました。弱点」

「よーやく出番か。じゃあ景気よく決めさせてもらいましょうか!」

「テメエを倒せないようじゃ、キセキの世代になんて勝てるわけがねえだろうが!」

「今から現れるのは——あの男の、本質だ」

予選よりもさらに厳しさを増す試合。

勝利の笑みがこぼれ、敗北の涙がコートに落ちる。

「既に賽は投げられた。もう誰も戻れることは許されない」

「あいつは俺の期待を裏切らない!」

「まだ始まったばかりだ。楽しんでいこうぜ」

「生憎こんなところで負けるわけにはいかねえんだ」

「決して甘く見ていたわけじゃねーけど。でも、全国はマジで別物だよ」

「それがお前の答えなのか」

「お前が……他でもないお前達があの人のことを否定するな！」
選手達の思いが交錯し心は揺れ動く。

「またですか？ もう聞き飽きたんですよ、そんな戯言は！」

「お願い。どうか行かないで」

「まさか、まさかあの時から？」

「残酷な選択だな。酷い男だ。——だが正しい」

「何をやっている白瀧!!」

「お前達に聞く。希望は尽きたと、そう思うか？」

死闘の果てに待っているものは——栄光か、絶望か。

「そんなつもりで言ったのではないですよ。……申し訳ない」

「ダメ——!!!」

「今さら気づいても遅い。今から手を打とうとも無駄だ。大仁多はもう、終わりだ」

「馬鹿じゃないの？ 諦めれば楽になれるのに、何であがくんだよ？」

「こんの、馬鹿もんが！」

「同情や哀れみはいらない！ 俺が欲しいのは勝利だ！ 勝って約束を果たす！」

黒子のバスケ 銀色の疾風 第四章 I H編

「嬉しかった。俺にはその言葉が、ただ嬉しかったんだよ」

第四章 I H編

第六十二話 白瀧、健在

大会の始まりを告げる開会式が終了した。

I Hに出場する選手達は試合のないシード校を除き、翌日の初戦に向けて準備を進めることとなる。勿論初日に試合のないシード校とて何もしないというわけではない。選手の調整は勿論、他校の試合の偵察、日程の確認などを今のうちにしておかなければならない。

高校最強と謳われた洛山高校も例外ではなく、主将である赤司は慣れた動作で部員達に指示を出し、集合時間と集合場所を確認すると一人その場を後にした。

開会式直後に主将が何故単独行動をするのかと、すれ違う者が彼に気づけば疑問を覚えることだろう。様々な思考が籠った視線を受け流しながら赤司はゆったりとした足取りで歩いていく。

会場の外に出ると待ち合わせ場所である大きな木の下に向かおうとして、そこに待つ一つの人影に気づく。それだけで誰なのかを察すると赤司は少し歩く速度を速めた。

残り数メートルのところまで相手も気づいたのか、銀髪の少年はスマホから視線を上げて赤司へと向ける。

「やあ、待たせようだね」

「——別に待ってねえよ。仮に待ったとしても、お前に主将の仕事があるということくらいわかっているんだから気にしたりはしない」

「そうか。理解を示してくれて助かるよ」

懐かしい相手との会話に赤司は柔らかい笑みを浮かべた。試合時の殺伐とした表情は微塵も感じられないもので、この姿だけを見れば多くの者は勘違いするだろう。

「こうやってまたお前と再会できたのは実に感慨深いな——要。栃木も近年は地区レベルが高くなっていると聞いていたから、少し心配していたよ」

それは赤司が彼のことを——白瀧のことをI Hの舞台まで上がつ

てくるのかという一つの興味対象として見ていたことを意味していた。勝てないのならばその程度の器だったということだが、再び相見えたことで、赤司の中で白瀧が再評価する選手になったことは間違いない。

「酷いな。俺はお前達と戦うまでは負けられないと考えていたぞ。心配ではなく、信頼して欲しかったけどな」

「ああ。訂正しよう、僕はお前のことを過小評価していたようだ」

「お前でも予想を外すことがあるんだな」

「いいや、何も予想していなかったわけではない。ただお前が地区予選で姿を消すということも想定していただけだ」

苦笑する白瀧と、涼しい表情を崩さない赤司。お互いのことを分かり合っているようで、しかしどこか根本がずれている。二人の距離感は今これがベストだということなのかもしれない。

「だったら今の内に再考しておくことを薦める。準決勝で計算外が起こらないように」

「なんだ、お前の方こそ心配しているのか？ ならば不要だ。まさかそれを言うためだけに、僕を呼び出したなどとは言わないだろうか？」

不機嫌を露にするように、赤司の目が見開く。何もかも見通しているかのような視線を向けられて、白瀧の体が強張った。

（……まったく、試合でもないのにこれだけ相手を威圧できるのだから大したものだよ）

中学の時、共に戦った時よりも洗練されている視線に当てられ、それでも白瀧は踏みとどまってもう一度笑みを浮べた。

「そんなわけないだろ。お前ほどの人物を呼び出すのに、そんな些細な話であるわけがない」

「……だろうな。目的を達するまでは余計な選択は全て排除する。お前はそういう人間だ」

「戦う前に、勝つ前に、お前には一度聞いておきたかった事があるんだよ」

強がりて浮べていた笑みを消して、白瀧も真剣な眼差しで赤司に問

いかける。

彼が中学時代から疑問に抱いていた、赤司の行動の真意を。事の真剣さを察すると赤司は口を挟むことを辞め、次の言葉を待った。

「……正直な話、俺はお前に感謝している。お前の一言がなければ、俺は今こうしてバスケットを続けていたかもわからない」

寂しげな表情を浮かべて紡がれた言葉には白瀧がバスケット人生で最も苦しんだ時の感情が籠られていた。今でも想像できる。相手との差が大きすぎて、戦う事が辛くて、自分のやっっていることが正しいのかさえわからなくなって、白瀧にも迷いが生じていた時のこと。

「救われた気がした。ここまで戦い続けることが出来ている。その事は、本当に感謝している」

そう言って今一度白瀧は笑みを作った。

「——だけど同時に、お前のことを恨んでいる」

だが、続いた言葉と同時に表情は一転する。視線は鋭くなり、言葉の端にも棘を感じる。赤司も敏感に彼の変化を感じ取って目を細めた。

「あの時、部長であつたお前なら俺だけではない、青峰達の暴走だつて止められたはずだった。それだけの力がお前にはあつた。それなのにお前はあいつ達を止めることをせずに、かえってあいつ達が孤立することをよしとした」

帝光時代、主将として君臨していた赤司の行動を責める白瀧。言葉尻が強く、怒っている口調でさらに白瀧は続ける。

「今でもお前の考えがわからないよ。なあ、何でだよ？ 何でだよ赤司!？」

「……」

「才能が第一だと考えるなら、どうして俺のことを救った？ 俺のことを救ったのに、どうしてあいつらを止めてくれなかった？ どうしてチームから引き離れた？ どうして俺が進む道を迷った時に、あん

なことを言ったんだよ!」

今にも泣きそうな表情で、赤司に訴えられた叫び。教えてくれと、必死に呼びかける。

「――今はまだ、お前の問いに答える時ではないな」

それを涼しい顔で赤司は受け流した。かつての同僚の苦しむ姿を見ても心が動く事はなく、眉一つ動かない。

変わらない冷静さに、これ以上は無理だと白瀧も察せざるをえなかった。

「……そうか。ならばまだいいさ。お前達洛山の前に立って、もう一度聞くとよ」

頑なに表情を崩さない赤司を見て、かえって振り切れたのだろうか。白瀧も平常心を取り戻し、すれ違い様に赤司に宣戦布告する。次に会う時には答えをハッキリさせてやると意気込み、白瀧は歩みを進めた。

「一つ、忠告しておこう」

立ち去り際、背中越しに赤司の声が届いて白瀧は足を止めた。

呼び出したのは白瀧の方で、赤司はそれに答えただけ。赤司にも何か用件があるのだろうかと疑問に思いながら彼の言葉を待った。

「お前の考え、願いはすでに崩壊している。それに気づかない限り、お前は自らの手で自分を追い詰めることとなるだろう」

「なに? おい、赤司!」

どういう意味だと、そう問いかける白瀧の声には振り返らず、赤司はその場から立ち去っていった。これで話は終わりだと意味しているのだろうか。

「――戯言か。お前の口からそのようなことは聞きたくなかったよ、赤司」

揺さ振りであると判断し、白瀧は深く考えることをしなかった。早く今のチームメイトと合流しようと思っけ出していく。

だが、白瀧は知っていたはずだった。赤司が戯言のようなものを口にするはずがないということ。知っていたはずなのに、深く考えようとはしなかった。

翌日、IH一日目。

今日で一回戦の全ての試合が消化される。つまりシード校を除いた代表校全てが試合をこなし、そのうち半分が一日で消えることとなる。負ければ終わりのトーナメント。その初日、しかも相手も各地区を勝ち残った代表校ということもあつて会場は緊張と歓喜の色で染まっていた。

特に今年は「キセキの世代」が高校に入つて初めての全国大会。その為観客の注目は「キセキの世代」を擁するチームに——Aコートで試合が行われている桐皇学園に集まっていた。

「——さっさと終わらせてもらうぜ」

ジャンプボールを制したのは桐皇。今吉がボール受け取るとフロントコートまで丁寧に運び、そしていきなり青峰へとパスが通った。

「最初から来たぞ！」 「キセキの世代」のエース、青峰のワンオンワン「ワンオンワン」

「これだよこれ！ 俺はこれを見に来たんだよ！」

青峰がボールを持った瞬間、観客が湧き上がる。一体どれほど注目度が高いのかと呆れてしまうが、しかしそれだけ青峰の、「キセキの世代」のレベルは高かった。

マークに立つディフェンスを速さの緩急で惑わし、体が硬直した一瞬の隙を突き、青峰は急加速。がら空きとなったディフェンスの真横からドリブル突破を果たした。

「はっやっ！」

マークマンが思わず口走ってしまうほどの動きのキレイだった。エースを最警戒し、全身系を注いでいたディフェンスを嘲笑うように、青峰はそのまま加速を続けると——高く跳躍し、ボールを持った右腕を振り上げた。

「こんのっ！ 一年が！」

「舐めんじゃねえ！」

行動の先を察したゴール下の選手二人が飛び出し、ブロックを敢行

する。

I Hでも見劣りする事のない体格を持つ選手達を相手に青峰は小細工をしなかった。

うつすらと笑みを浮かべるとゴールへ向けて直接右腕を振り下ろす。

「がつ!?!」

「うあつ!!」

その威力は凄まじく、ブロックに跳んだ二人は空中で蹴散らされ、ボールはリングへと力強く叩きつけられた。

尻餅をつく敵選手へ向け、青峰は好戦的な笑みを向ける。

「ハッ。ブロックしようだなんて十年早いんだよ」

「きつ、決まった! 青峰今大会初 Dank!」

「ブロックなんてお構いなし!」

「なんてやつだよ。おい、あいつこの前まで中学生だったんだろ!?!」

激烈な先制点を叩き出した青峰を目にして、歓声は留まる事を知らなかった。

目を奪われ、無意識に声を上げ、そのプレイだけに没頭するものさえ現れる。

ルーキーでありながら、すでに高校最強のプレイヤーと言っても過言ではない程の実力を発揮していた。

そして桐皇は青峰だけではない。ディフェンスでも前線から積極的にプレッシャーをかけていく。外からボールを回していくものの、ディナイが厳しく、ついにはシュートを撃てないまま諏佐にボールを奪われてしまった。

「ぐっ!」

(駄目だ、シュートまで持っていけない! 俺達の行動を読んでいるみたいに先回りしやがる!)

悔しそうに歯を食いしばる敵選手を誰よりも冷静な視線で見つめる人物がいた。

桐皇のベンチに座るマネージャー、桃井である。彼女は全国大会においてもそのデータ収集力を活かし、チームメイトに指示を出していた。おかげで桐皇はディフェンスにおいても敵を好きにはさせず、再

び自分達のゲームを展開していく。

攻守が入れ替わり、ボールは再び青峰へ。

「くそっ！ 何度も突破できると——」

「できんだよ。テメエらは遅すぎる」

前へ前へとプレッシャーをかけるマークも、青峰の目には稚拙に映った。

制止した状態から目にも止まらぬ速さのクロスオーバー。相手が気づいた時にはすでに突破を許していた。ヘルプが出るものの、青峰の敵ではない。上体を左半身に傾け、左へ切り返すと見せかけ——再び右へドリブル。インサイドアウトで二人目を抜き去る。

ゴールが目前に迫り、シュートを放とうと跳躍すると再び二枚の壁が立ちはだかった。今度は決めさせないと気迫が籠るも、青峰は右手から左手へボールを移し、上半身を左に傾けるとブロックの横腹から上空へボールを放った。

「俺に勝てるのは、俺だけだ」

地に足が着いていない彼らには、もはや抵抗の術はない。彼らは背中側からパスツとボールがリングを経過する音を耳にした。

青峰には全国大会とか初戦とかいった緊張はまったくくない。

一人でこの大舞台を、大人数の意識を支配していた。

「……正直、何て言えばいいのかさえわからねえよ」

第1Q開始直後から絶好調の活躍を見せ付ける青峰。

敵ディフェンスをもものともしない動きに魅せられ、日向は言葉を失っていた。

「予選で戦った時とはとにかく圧倒されるばかりだった。でも今観客席から見ると、『もしもあの場にいるのが自分だったら』という恐怖もあるが、無駄がないプレイに尊敬さえ覚える」

「……すげえ」

日向だけではない。他の誠凛の選手達も、全国の強敵を圧倒する姿

を見て、ただ目を見張っていた。

「——ハハッ！ いいじゃねえか、ねえっすか！ 燃えてくるぜ！
……です！」

誰もが絶句する中、一人闘志を燃やしているのは火神。未だにない敬語で話しながら、視線だけは青峰を見据えている。決勝リーグで散々な目に合わされた相手に、リベンジの気持ちは強く、気後れの気配は一切ない。

「ったく。お前は本当にいい性格しているよな」

「ま、火神のそういうところに助けられるわけだけどな」

呆れて息を零す日向に、木吉は諭すように言う。木吉は決勝リーグに出ていないものの、ビデオで試合の様子は窺っていた。だがやはり実際の目で見ると印象は大きく違うのだろう。彼も少し火神に羨ましそうな視線を送っていた。

「とにかく！ あくまで私達は偵察に来たんだからね！ 気合を入れるのならともかく、落ち込んだりなんてしないように！」

午後の試合、下手な真似は許さないと付け足すリコに促され、全員が視線をコートへと戻すのだった。

そして、青峰達の試合を観戦しているチームは誠凛だけではない。

「……緑間のスリーを見たときも大概だったが、本当、キセキの世代
” っつてのは馬鹿げてるな”

日向の様に、呆れを含んだ呟きを零したのは神崎。

大仁多高校の面子も桐皇学園の試合を観戦に来ていた。中には白瀧の姿もあり、青峰の動きを視線で追っている。

「青峰さんのプレイスタイルに基本的な型はありません。だからこそ
デイフェンスは対処が難しく、止める事はまず不可能」

「……一見出鱈目に見えるシュートも、リングに掠りさえしねえんだ
もんな」

元同僚である西村が冷静に解説すると、改めてその異常な実力を理

解できる。

シュートフォームは勿論、シュートのループさえもばらばら。それでも確実に得点を重ねていく。いつそ何か裏があるのではないのかと山本は考えた。

「そして当然のように身体能力も高い。パワーも、スピードも桁違いだ」

「……どうやって止めろっていうのですかね、まったく」

先のプレイで見せ付けた青峰の身体能力。小林の目からしても、そして多くの選手を見てきた藤代の目からしても尋常ではなかった。

高い身体能力、変幻自在のバスケットスタイル。青峰を倒す事は容易ではないと全員が焦りを抱く。

「そして、今年の桐皇の強みはもう一つあります」

だがそれだけではない。白瀧が呟いた直後、センターの若松がダブルクラッチを読みきり、ブロックショットを決めていた。

「……ディフェンスか」

「はい。桐皇のマネージャー、桃井さん——ああ、彼女も帝光中出身なんです。情報収集に長け、相手の動きを予測し選手たちに伝えていきます」

「そしてそこから対応策を打っていくと」

中澤が確認の意を込めて問うと、白瀧は首を縦に振った。

一見オフェンスに特化したチームだが、桃井の加入によってディフェンスも強い個人技主体のチームが完成していた。身体能力が高い選手が集っているためリバウンドを獲ることも用意ではない。

第1Qが終わった時点ですでに20点差以上のリードを桐皇が作り、試合を自らのものとしていた。

「……どうです、皆さん。燃えましたか？ それとも挫けましたか？」
試合が休憩を挟んだところで、最前列の藤代は全員に向けて問いかけた。

「いずれ戦わなければならない相手です。このような所でへこんでいては、栃木の他の人たちに笑われますよ？」

全員の脳裏に、予選で戦ってきた選手の顔が思い浮かんだ。

大仁多は彼らの代表としてIHの出場校に選ばれた。その認識を藤代が今一度呼び起こす。

「意識は高く。怖気つく必要はありません。私達が戦う為に来たという事だけは、常に覚えておいてください」

そう告げると、返答はいらないと藤代は視線を桐皇ベンチへと向けた。

大仁多の選手たちもそれに倣い、表情を引き締めた。勝つ為に来た選手に、迷いはいらぬ。

その後、桐皇学園は危なげなくダブルスコアという大勝で二回戦進出を決めた。

他のコートで行われている試合も次々と終わりを迎えていき、数が減っていく。

昼を挟んで間もなく午後最初の試合、Aコートでは大仁多高校と鈴順高校の試合が近づいていた。

大仁多高校の控え室では選手達が静かに集中力を高めている。

一方、石川県代表・鈴順高校の控え室では――

「……どうなんだ、今年の大仁多は？」

一人、選手が全員に向かって恐る恐る問いかけた。多くの者の表情は強張っており、緊張している様子が窺える。

「昨日も昨年までのビデオを見たが、やはり強い。伊達に8年連続でIH出場はしてねえよ」

主将が口を開くと注目が彼に集まった。

鈴順高校は石川県の古豪。二年ぶりにIH出場を果たしたが、全国大会という舞台で大きな結果を残しているわけではない。

対する大仁多は数多くの全国大会に出場し、昨年もベスト4まで勝ち残るといふ強豪。緊張するなというものも中々難しいものだった。

「まず主将の小林。昨年もIHに出た。全国区のPGとして名を轟かせ、今年の県予選でもMVPを獲得するくらい今年の仕上がりは完

壁だ」

「……全国区の実力者か」

「そうなる司令塔の負担は非常に大きくなるな」

小林の説明を耳にして、司令塔の表情が曇る。全国でも名の通った実力者、マッチアップする選手にとっては話を聞くだけでも冷や汗が浮かぶ。

「他の選手はどうだ？」

「同じくガード陣の一角を担う、副主将の山本。スラッシュヤータイプのSGで身体能力が高い。ディフェンス面でも活躍している」

「……俺とタイプが逆か。やりづれえな」

鈴順高校のシューターはアウトサイド主体のピュアシューター。インサイドに切り込むことが少ない彼にとってはディフェンスも強い山本と相性が悪い。上手く対応できるだろうかと頭を悩ましている。

「ガード陣は固いか。じゃあフロントラインはどうだ？ たしか三年生レギュラーは二人だけだったよな？」

「いや、ゴール下も厚い。センターは二年の黒木なんだが、予選で2m越えの留学生を相手に互角以上に戦った技巧派だ。リバウンドにも強い」

「ちつ。またうちとは対照的な……」

フロントラインの話題に変わっても雰囲気に変化はない。こちらもセンターはパワー系と技巧派という正反対のマッチアップ。しかも強敵と渡り合ってきたという経験は向こうの方が上だろう。

「……じゃ、じゃあPFは!? 何か無名のやつが入ったとか聞いたが？」

「とんでもない！ あいつはやばい！」

ならばとさらに話を展開するが、大仁多のPF——すなわち光月の話になった瞬間、主将の表情が崩れ去った。

「光月明。一年生とは思えない桁外れのパワーでゴール下を占領する巨漢。噂によると栃木県予選決勝戦で、チームメイトが少し自分のシュートを邪魔したって理由だけで——その仲間をダンクでぶっ飛

ばしたとか」

「……………おい、誰かマーク変わってくれ」

「いやだよ！ お前がマッチアップしろよ！」

「怖いよ！ 何だよ、そいつ！ ダンクで仲間ぶっ飛ばすとか初めて聞いたぞ！」

想像することさえ恐ろしい話を耳にして、全員が戦慄した。

噂には尾鰭がつくもの。間違っではないもの、光月の決勝戦で起こしたことは色々と話が大きくなっていった。

「そして、今年の大仁多のエース、白瀧。帝光中出身の実力者。県予選でも最多得点、最優秀新人賞などタイトルを獲得している。現状、最も『キセキの世代』に近いとも噂されている選手だ」

そして最後に白瀧の話が終わると全員が口を閉ざした。

もはや一人一人の実力差が現れているように感じられ、果たして自分達に勝ち目はあるのかと、自分自身に問いかけるが答えは出てこない。

「……………つたく。何をダルイことを抜かしてるんすか先輩方」

その停滞した雰囲気、一人の選手が引き裂いた。

他の選手の視線が椅子に腰掛ける一年生へと集結する。靴紐を結びなおしているために表情は窺えないが、随分と落ち着いた、自信をもった声をしていた。

「鎌瀬……………」

「あんな連中にそこまでびびる必要ないでしょ？ どうせ『キセキの世代』に比べたら大したことないんでしょし」

視線が上がると同時に、肩まで届く黒髪が静かに揺れた。

中学時代から地元では名を馳せたスコアラーであり、鈴順高校に入っても一年生ながらエースを任されたSF——鎌瀬^{かませけん}犬。チームメ

イトを安心させるようにうつすらと笑みを浮かべ、立ち上がった。

「エース対決を制すれば、相手も黙るでしょうよ。俺がその白瀧とかいうやつを蹴散らしていきます」

「来たぞ！ 両校の入場だ！」

時間が経過し、ついに大仁多高校と鈴順高校の試合が始まる時が訪れた。

長い廊下を潜り大きな扉を超えて両校の選手がコートへと姿を現す。

「8年連続IH出場を果たした栃木の強豪！ 臍脂の炎を身に宿す大仁多高校！」

「対するは石川の古豪！ 二年ぶりにIHの舞台に帰って来た鈴順高校！」

選手の入場と共に歓声はヒートアップした。試合開始が待ちきれないと言わんばかりに増す歓声。その中には桐皇学園の時と同様、他校の選手たちも集結していた。

「……さて、どうなるんやろな大仁多は」

一回戦を終えた桐皇の主将、今吉は椅子深くに腰かけると視線を大仁多へと向けた。敵戦力を分析する目は桃井にも遅れをとらず、ウォームアップを続ける選手一人一人を冷静に観察している。

「総合力に関してはまず大仁多が上と違ってよいでしょう。主将の小林さんを筆頭によく纏まっています。あとはエースの調子次第かと」「せやろなあ。鈴順高校はルーキーのエースを筆頭に勝ちあがってきたチームや。ワンマンチームつちゆうのは良くも悪くも選手の調子に影響される」

「はい、なのでこの試合のキーポイントは両校のエース、白瀧君と鎌瀬君の勝負」

桃井と今吉、分析家と策略家の答えは一致した。この試合、鍵を握るのはお互いの一年生エースであると。特に初戦ということもあって選手の調子を読むことは難しい。興味深そうに選手たちの顔つきや動作に注意を払っている。

「……下らねえ。問題はそこじゃねえだろうか」

だが、その二人の意見を切って捨てるものがいた。

青峰である。桃井の横で退屈そうにコートを眺めている彼は不機

嫌さを隠すことなく口にした。

「なんだよ青峰。珍しく他校の偵察を見に来たと思ったら、何か気になることでもあったのかよ？」

「そんなんじゃないよ。つか、うるせえから話に入ってくんな。黙って見てろよ」

「ああっ!？」

「うわあ！ すいません、若松先輩落ち着いてください！」

先輩への敬意を微塵も感じられない青峰の態度に、若松が身を乗り出すほどの勢いで食いかかった。隣の席の桜井が何とか押さえ込んでいるが、何時爆発してもおかしくない。普段から仲が悪い二人では合ったが、場所など関係ないほどとは余程のことだろう。

「で、問題はそこじゃないと言つとつたな。どういう意味や？」

「ハッ。どうせあんただってわかってんだろ」

どうどうと若松を制しつつ、今吉は青峰に問う。青峰は鼻で笑いつつ、彼の疑問に即答した。

「あいつがこんなところで躓くヤツかよ。問題は、鈴順がどこまで白瀧のプレイについていくか、それだけだ」

勝負はすでに決している。だからこそ問題はそこではないのだと青峰は語る。

言葉の裏に白瀧への信を感じられ、桃井も微笑を浮べて視線をコートへ向けた。

ウォーミングアップも終了し、ついに10人の選手がコートの中央に集結した。

大仁多の先発選手はレギュラーが揃い、小林・山本・白瀧・光月・黒木の五人。鈴順高校も予選と同じメンバーが並んでいた。

始まりの挨拶を告げ、試合開始の時が近づく。ジャンピングボールに向けて各選手がポジションを確認していると、白瀧の元に鎌瀬が歩み寄っていった。

「よう。お前大仁多のエースなんだって？ しかも『神速』とか呼ばれているらしいじゃん？」

話しかけられても、白瀧は一瞥するのみに留まり視線を黒木たちへ

と戻す。

半ば無視されたような反応に苛立ったのか、鎌瀬はさらに話を続ける。

「ハハッ！ 中学時代に『キセキの世代』に助けられたのかなんだか知らないけど、結局全部失った気分はどうだよ？ 高校でエースの名を取り戻したみたいだけど、今日は俺が瞬殺して、その白髪をもっと増やしてやるよ！」

「……あ？」

饒舌に罵り、笑う鎌瀬。

白瀧が視線を鎌瀬へと向ける。彼のこめかみには青筋が立っていた。

（大仁多） 86対49 （鈴順）

「……瞬殺だったな」

「……そうっすね」

観客席から複雑な表情を浮かべる笠松に、黄瀬は心底同意した。

第3Q終了の時点ですでに37点差。終始大仁多がリードを保つたまま最終Qへと突入しようとしている。

白瀧が鎌瀬を圧倒し、得点を連発。チームメイトもその流れに乗り、鈴順を攻略していた。

さらに大仁多は第四Q開始の際に選手を交代する。

小林に代わって中澤を、黒木に変わって本田を投入した。

そして選手が交代しても流れは大仁多のままだった。鎌瀬にボールが回るものの、仕掛けようとした瞬間、白瀧のスティールが成功する。

大仁多のボール支配時間が長くなる中、中澤はインサイドの光月へとボールを回す。

「ひっ！ くっ、来るな——来るな——！」

相手のマークマンの悲鳴が木霊するなか、光月の両手ダンクが炸裂

する。

オフエンスはエースを防がれ、ディフェンスは大仁多の猛攻を止められない。点差は開いていくばかりだった。

(しかし、何故か今日の明のマークマンは開始直後から異様にビビッているよな。何かしたのか？ ひよつとして知り合いか？ 明は初対面と言っていたが……)

光月の相手が異常な程反応していることに白瀧は疑問を覚えるが、彼は知らない。白瀧も彼が恐怖を抱いていることの原因となっていることを。最も、白瀧の場合は被害者ではあるが。

「決まったのう」

「強い……！」

試合の行く末を感じ取り、今吉は一つ息を零した。一方的な試合展開に、桜井は冷や汗を浮かべながら選手のプレイを観察している。

「だから言っただろうが。勝敗はもう決まってるってよ」

だが青峰は当然だと言わんばかりに表情を崩さない。中学時代と変わらぬプレイを見せ付ける好敵手の姿を目にして、満足していた。

「くそっ！ させねえ！」

試合終了の時間が近づく中、鎌瀬が必死にハンズアップを続ける。

「……そういえば試合前に色々言ってくれていたが、訂正してもらおう」

白瀧はドリブルを続けながら鎌瀬へと声をかける。

直後、彼の試合から白瀧の姿が消えた。

「——ッ！」

「くそっ！」

たとえ終盤になっても神速と謳われたスピードが劣ることはない。鎌瀬は反応すらできずに白瀧のペネトレイトを許してしまった。

ヘルプが出るものの、その前に白瀧は早めに跳躍してティアドロップを放った。

ブロックの指先を通して大きな弧を描いた後、ボールはリングを潜り抜ける。

「俺の髪は白髪じゃねえ！ 銀髪だ！」

(キレたところそつち——!?)

「気にしていたのか……」

思わず両チームの選手達が総出で白瀧にツツコミを入れた。

程なくして試合終了のブザーが鳴り響き——勝負の決着を告げる。

(大仁多) 113対65 (鈴順)。大仁多高校、一回戦突破を決めた。

「決まったわね。やはり、前評判どおりといったところかしら?」

「しかも、大仁多はPGとC、司令塔と大黒柱を最終Q温存で勝利。万

全の状態だな」

「エースの白瀧も絶好調みたいだしねー。今年はかなりやるでしょ、このチーム!」

観客席の一角、赤司と共に試合を見ていた選手達、洛山高校の陽気な声が飛び交っている。好戦的な表情をしているのはおそらくは王者の余裕だろう。強い挑戦者の現れに、闘争心を当てられたのかもしれない。

「……たしかにそうだね。だが、最も重要なのはそこではない」

「征ちゃん? どういう意味?」

だが一人、赤司はいつもの無表情を貫き、冷静に大仁多の戦略を観察していた。

意味を理解しかねたチームメイトに問われて赤司は話を続ける。

「白瀧——やつはこの試合、中学までに使えた技だけで勝利を収めた」

「……え? マジで?」

「古武術をはじめとしたコンビネーション、ティアドロップ、ダブルクロスオーバーをはじめとした方向変換。動きのキレは増したものの、新しく身につけた技術は何も見せていない」

「あらそう。まだ私達をはじめとした敵にデータは取らせないってことかしら?」

それは同時に、この相手ならば見せるまでもないという余裕を持っているということも意味している。

予想以上に先を考えた戦略に少し気を当てられたものの、赤司が彼らを手で制した。

「いいや、違うな。確かにそれもあつただろうが、本当の目的は違う」

「じゃあ何でだよ？」

「世間への当て付けだ。中学時代に敗者と蔑んだ者達へ遠まわしに示したんだよ。『白瀧要は健在』だと」

ふとコートに立つ白瀧の視線が観客席へと向けられた。誰かを探しているのか、観客席を一周見回した後は再びチームの輪に戻っている。

（見たか、〃キセキの世代〃。やっとお前達と対等に戦える。ここからが本当の始まりだ！）

もう〃キセキ〃にすぎる弱者はいない。いるのは自ら戦うことを選んだ強者のみ。

胸のうちに湧き上がった闘志の炎は内に隠し、表面は目の前の勝利をチームメイトと共に喜んでいる。だが確かにこの勝利は彼にとつて大きなものであった。

「既に賽は投げられた。今さら敗北も後戻りも許されない」

そしてそれはこの大会に参加しているもの全てに言える。

赤司は口角を上げて、挑戦者を待ち構えるようにコートの選手たちをにらみつけた。

——黒子のバスケ NG集——

「光月明。一年生とは思えない桁外れのパワーでゴール下を占領する巨漢。噂によると栃木県予選決勝戦で、チームメイトが少し自分のシュートを邪魔したって理由だけで——その仲間を Dank でぶつ殺したとか」

「殺したの!? 死人でたの!? なんてそいつ普通に試合に出てるんだよ!？」

「何でも父親が警察の偉い役職について、その事件をうやむやにしたとか……」

「父親怖いよ！ 絶対まともな人物じゃないだろ！」
色々間違っているけど色々あっている。

第六十三話 二人の関係

I H 初日、一回戦。大仁多高校の二回戦進出を皮切りに、同時刻に別コートで始まっていた試合も決着を迎えようとしていた。

場所を移してメイン会場、Cコート。東京都代表である初出場の誠凛高校の試合。対するは徳島県代表の平石高校である。前半戦こそ初出場という理由もあつてか選手達の動きが硬く、リードを許していた誠凛であつたが、第四Q序盤について逆転を果たすと、そのままリードを保っていた。

「伊月！ よこせー！」

「よしっ！」

声を張り上げたのは日向。黒子のスクリーンによつてマークマンをかわしてフリーになることに成功すると、伊月から正確なパスが彼の元に届く。もはや誠凛の主将としても、スコアラーとしても欠かせない人材となつていた彼は全国の舞台でも変わらない。一定のリズムからスリーポイントシュートを放つ。

「日向！ スリーだ！」

「打たすかあっ！」

「ぐっ……！」

負けじと平石高校も意地を見せる。

日向がボールをリリースする瞬間、ヘルプに出た選手がブロックを敢行する。触れることはできなかつたものの、圧力に押されてシュートが力んでしまう。結果シュートは決まらずリングに衝突する。

シュートの失敗を察して焦りを浮べる日向を、ゴール下で体を張っていた一人の選手が救った。

「うおおおおっ！」

「ああっ！」

「くそっ!？」

木吉である。二人を相手にリバウンドを挽ぎ取り、ボールは離すまゝいと懐に入れる。

さらに着地するとすぐさまターンアラウンド。両腕を上げて

シュート体勢に移ると平石の選手達が打たせないとブロックに跳ぶ。それを、待っていた。木吉はブロックの横に腕を通してボールを上空へと放る。

「なっ!?」

(フエイク！)

「しまった!」

意図に気づいたところでもう遅い。彼を止める選手はこのコートにはいない。

リングとは別方向へ向かっていたボールの軌道上に、火神が飛び込んだ。右腕で掴み取ると勢いそのままにリングに叩き込む。火神のアリウープが炸裂した。

「決まった! アリウープ!」

「火神、試合を決定づける一発が炸裂!」

「……ッ! 急げ! リスタート、早く!」

「行かせるな! 最後まで集中しろ!」

沸き上がる観客。平石は残り時間と点差を感じて焦り、誠凛は最後までリードは渡さないとディナイを続ける。

平石高校の司令塔が何とか誠凛ディフェンスをかわしてハーフコートまで運ぶも——その瞬間、終わりの合図が鳴り響いた。駄目もとでシュートを放るも、奇跡は起こらない。無情にもリングに届くことさえできずに、やがて力を失ったボールが動きを止めた。

『試合、終了——!』

「誠凛高校一回戦突破!!」

(誠凛) 98対93 (平石)。誠凛高校、初日の試合を勝ち抜き二回戦へと駒を進めた。

「よっしゃあ!!」

「やった! IH初勝利だ!」

ベンチ全員が立ち上がり、コートの選手が勝利に酔いしれる。

初の全国大会で、誠凛は見事に初勝利をものにした。明日の二回戦

——大仁多の対戦相手は、誠凛高校。

一方、サブ会場にて同時刻から始まっていた試合も同様に終わりを迎えていた。

しかしその一角は異様な空気に包まれていた。

「なんだよこれ……?」

「俺達、バスケの試合を見に来ているんだよな?」

「しかも、全国大会だぞ? それなのに……!」

眩きが誰のものだったのかは定かではない。だが抱いている思いは皆同じだっただろう。

途中から見ては信じられないほど——否、最初から見えていたとしても目を疑う程の試合が繰り広げられていたのだから。

「これが『キセキの世代』の実力だというのか!」

(陽泉) 72対6 (成実学園)

秋田県代表、陽泉高校。最強センターと呼ばれている紫原を擁するディフェンスは並大抵のものではない。

今また、相手の希望を打ち砕く紫原のブロックが決まり——息が詰まる40分間が過ぎ去った。

「……ええ。わかりました。仕事お疲れ様です。すぐに合流しましょう。場所は——」

おそらく相手は偵察部隊だろう。藤代監督がスマホで連絡を取り合っている。

一回戦を終えて、荷物を片付けた俺達は移動を始めていた。

翌日にはすぐに二回戦が待っている。だが、だからといって何の用意もせずに試合に臨むというわけにもいかない。勝利に近づく為の情報を手に入れるため、次の対戦相手を偵察しているチームメイトとの合流を果たさなければならなかった。

話が終わったのか、藤代監督は通話を切り、スマホをしまうと選手

達の方へと向き直った。

「1回戦は全て終了しました。明日、私達が二回戦で戦う相手は——東京都代表誠凛高校です」

対戦相手の知らせを聞いて、「やはりか」と納得する声飛び交う。初日で1回戦27試合全てが消化され、出場校は59校から32校に絞られた。

そして俺達大仁多が次に戦うのは誠凛。秀徳を倒した因縁の相手。予選でも三王者を相手に番狂わせを起こした為、誰もが予想していたことだ。驚くものは一人もない。

しかし、初出場の高校が初日を終えてまだ残っているというのは、本当に凄い話だと思う。

「至急、偵察班と合流しホテルに戻ります。小林さんのビデオも含め、誠凛の戦力を分析しておきましょう」

「はい」

藤代監督を先頭に、俺達は会場を後にする。今日はこのメイン会場で試合をしたが、二回戦は組み合わせの都合上、サブ会場での試合となる。もう一度ここで試合をする為には勝ち残る以外に術はない。皆がここに帰ってくることを決意して出口へと足を運んだ。

「しかし、小林。一体誠凛のビデオなんてどこで入手したんだ？」

興味本位で佐々木さんが小林さんに問いかけている。誰も疑問に感じていた内容だった。

藤代監督が語っていた小林さんのビデオとは、俺達が撮影した秀徳——誠凛戦のものではなく、それ以前の地区予選のビデオだ。当然のことながらノーマークであった誠凛のビデオを偵察部隊が撮影したわけがない。小林さんが監督に直接渡したものだという。

なのに何故小林さんはそのビデオを持っていたのか、と佐々木さん以外も疑問に思っていることを視線で感じ取ったのだろう。小林さんは何かを思い出すように、苦笑して頬をかく。

「まあ、色々と伝手があつてな」

そう言つて小林さんは視線を戻した。

伝手、とは気になるがこれ以上は個人的なことになる。佐々木さん

も「そうか」と一言呟くと話題を打ち切り、また別のことを話し始めた。

ここで話は一度昨日の夜へと巻き戻る。

IHの開会式が行われた日。大仁多はスカウティングをそこそこに切り上げると、以後は選手達は自由時間となった。遠出をしなければ外出を許されており、小林は藤代の許可を得るとホテルを出てある人物と会っていた。

「お前も律儀だな。わざわざこんなものを届けにくるなんて」

小林がビデオの入った封筒を受け取ると、渡した主——秀徳の大坪は小さく息を零した。

「誠凛のビデオか。助かる。初出場ということでデータも少なかったからな」

「……礼なら不要だ。『全国の舞台でお前達ともう一度戦う』という約束を俺達は果たせなかった。そのせめてもの償いだ」

「そうか」

IHへの出場は出来なかったものの、合宿地が近いということで大坪はわざわざ小林のところまで足を運んでいた。

大仁多と秀徳。練習試合でも激闘を繰り広げ、そしてIHで再戦を誓い合ったライバル。

その中でも特に小林と大坪の因縁は深かった。だからこそだろう。申し訳なさそうに視線を落とす大坪を見て、小林も相槌を打つに留まった。

「ああ。それと、合宿地が同じということとで今日は来たが、さすがに試合まで見にいけそうにはない。さすがに俺にも主将としての仕事があるのでは」

当然のことだ。IHの試合は秀徳の合宿練習時間と重なってしまう。

今は自由時間だからこそこうして自由に行動できる。しかし私情

で主将が練習を抜け出すわけにもいかない。

「だから俺ができるのはここまでだ。——勝てよ」

「……勿論だ」

敵討ちを望んでいるわけではない。ただ勝って欲しい。そう言つて大坪は小林と別れた。

小林は改めて必勝を誓い、そして今度こそ彼らと再戦する日を願ひ、その場を後にした。

ホテルに戻った俺達は早々に誠凛のスカウティングを行っていた。今日の誠凛——平石戦の映像がテレビに映し出されている。

「——4番日向さんと10番火神さん。この二人のオフエンスが要注意ですね」

笑みは消え、試合のそれと遜色ない真剣な表情で藤代監督が呟いた。

名前に上がったのは誠凛の二大スコアラ―、日向と火神。日向はスリーの成功率が高いため余計に警戒しなければならぬだろう。火神も緑間を倒しただけあり、並大抵の選手では太刀打ちできない。現に平石高校のダブルチームをもものともせず、得点を重ねている。

監督が話を終えたことを確認し、東雲さんが口を開いた。

「都予選のデータを見ても思いましたが、波に乗った時の強さは新設校とは思えません。秀徳を相手に競り勝ったほどです。11番のパス回しもありますし、オフエンスだけなら全国出場校の中でも上位に入るかと」

「ええ。しかも、問題はそこだけではありませんが」

「え？　そこだけではって、何ですか？」

山本さんが不安そうに聞くが、藤代監督は答えない。

……何だ？　日向、火神、黒子。この三人は誠凛の中でも要注目人物。伊月と水戸部、残る二人のレギュラーが劣っているとは言われないが、小林さんと黒木さんがいればそう警戒するほどではない。ベンチ

メンバーも特にこれと言って突出した選手はいなかったはずだ。

「なあ、要」

考えていると、隣に座る明が俺に問いかけてきた。

「どうした？」

「いや、この前見たときと比べて誠凛の選手、一人増えてないか？」

「は？ 増えてる？」

「うん。都予選リーグの時にはいなかった気がしたんだけど。……あの7番の選手初めて見たよ」

「7番？」

釣られて俺も視線を明と同じ、誠凛のベンチへと向けた。

ベンチスタートだったもののこれから交代で出場するのだろう。ユニフォーム姿で体を温めている7番の選手が目に入った。190cmは越えているだろう恵まれた体格と、少し薄い茶髪。安心感を相手に与えるような柔らかい笑みを浮べた男が立っている。

「なっ……!?!」

この選手を見て、思わず立ち上がってしまったのは仕方が無いことだろう。

「——そんな！ この人は！」

何故ここに、誠凛にいるのかと。予想できるはずもなかった選手がいたのだから。

突然俺が立ち上がったことで驚いたのか、明が不安げにこちらを見上げている。

「ど、どうしたんだ？ 知り合い？」

「……中学時代、〃キセキの世代〃は無敗を誇っていた。だけど当時、一つ上の代にいたんだよ。その五人に渡り合う実力をもった天才集団が。〃キセキの世代〃がいなければ、彼らが〃キセキの世代〃と呼ばれていたと噂される〃無冠の五将〃」

最強の陰に隠れた五人の逸材。その一人、かつて紫原とも戦った選手。

「そのうちの一人だ。無冠の五将の一角。〃鉄心〃、木吉鉄平」

どのような苦境下においても決して折れる事無くゴール下を支え

る不屈の魂の持ち主だ。

「木吉、無冠の五将か。俺も戦ったことはないけど、話は聞いたことがある」

「ただ最近はずっと話を聞いていなかったけどな」

「だが実際そいつがいるとなると、確かに厄介だぞ」

「その通り。彼こそが私が想定している危険人物です」

同世代ということで色々と情報を持っていたのだろう。黒木さんや中澤さん、三浦さんが焦りを覚えると、藤代監督が同調して口を開いた。

「白瀧さん、あなたも彼のことは覚えているのですね？」

「……帝光中時代に一度だけ戦ったことがあります。あの時は俺もまだレギュラーだったし、何よりも木吉さんが紫原を相手に一步も引く姿勢を見せず、最後まで戦いぬいていたことを覚えています」

とても印象深い試合だった。点差がどんどん開き、自身も紫原に圧倒されている中、木吉は一人ゴール下を守りぬいた。彼は肉体的な強さだけではなく、精神的な強さも持ち合わせていたのだ。

「ならば白瀧、お前はこの選手のことをよく知っているだろう。どう思う？」

「それがよくわかりません」

「は？」

「わからない？」

小林さんの問いに曖昧に答えると、当然周囲の視線が俺に集まった。

だが生憎俺自身未だに木吉という選手を完全に理解したわけではないので反応に困ってしまう。

「そもそも、俺も直接戦うまで聞いていた話と全くタイプが違っていました。当初はタツパがある司令塔と聞いていたのですが、試合では開始直後から最後までセンターのポジションに入っていたので」

「……PGとCってことか？ 真逆のポジションじゃねえか」

「その後も強豪相手にはセンターのポジションを任されていたことから、おそらくはチーム事情でコンバートしたのだと思います。セン

ターとしての実力は圧倒的でした。高さやパワーは勿論、ゴール下からパスも出せる異色のセンターというイメージです」

言葉にするのは簡単だが、実際こなすのは難しい。

PGとCという本来なら正反対のポジションのセンスを持つ選手は異例のことである。しかもそれで天才と称されるだけの実力を発揮するのだから尚更だ。

何にせよ、鉄心という強力なセンターが入った今、誠凛のゴール下は大きく強化されたことだろう。

「となると、ヤバイな。ひよつとしたら明日、この人スタートから出るかもしれないだろ？」

「……いや、それはないだろう」

「ええ。そうですね」

「え？　なんで？」

「だって実力なら間違いなくレギュラーだろ？」

勇が最悪の展開を想像して眩くが、小林さんと俺が即座に切り捨てた。

だが勇は、続いた本田は理解していないのだろう。疑問の声を上げる二人に、小林さんが口を開いた。

「おそらく木吉は本調子ではないのだろう。一回戦、彼がスターターに名を連ねなかったのがその証拠だ」

「でしょうね。誠凛は全国大会初出場。帝光出身という11番を除けば全員が初の全国大会の試合だったでしょう。ならば経験者がいるなら間違いなくスタートから出すはず。現に序盤は選手達の動きが硬いですからね」

小林さんと藤代監督の説明に納得したのか、二人は「へー」と頷いている。果たして本当にわかっているのか判断に困る反応だった。

「だからおそらく楠とかと同じ事情だろうな」

「最近名前を聞いていなかったことから想定できますね」

山本さんがそう言うのと西村も続いた。

おそらくこれが答えだろう。楠先輩と同様、何かしらの怪我を抱えていて、それで先発出場できない理由がある。だからこそ誠凛に

とっては今日の一回戦のメンバーがベストメンバーのはずだ。木吉が出るとしたら早くても第二Qと考えるのが妥当だろう。黒子がフル出場できないことを考慮すれば、誠凛の出方がある程度予想することができるとができる。

「……となると、明日の試合は手の探りあいになりますかね?」

どこか言葉の端に裏を感じ取れる。現に藤代監督はうつすらと笑みを浮べていた。

正直な話、読みあいでのこの人に勝てる気はしない。経験はそうなのだろうが、それ以上に別の何かがある気がしてならない。裏をかいたらそのまた裏だった、とかありそうだ。

「では、皆さん。明日の試合、まずは第1Qの入りから話します。よく聞いてください」

そう言つて藤代監督は誠凛の打つ手を予想しながら話を始めた。

俺を含め、何人かの選手の表情が驚愕に染まる。それでも藤代監督は笑みを絶やす事無く、冷静に誠凛を攻略する戦術を語り続けた。

一方、その頃誠凛高校も大仁多高校と同様にスカウティングを行っていた。

リコの友人に撮影を依頼したというビデオを見て、選手達の表情は硬くなっている。

明日戦う相手の実力をこの目で改めて思い知らされたのだろう

「チームの完成度が高いな」

「ああ、それに個々の選手が相当鍛えられている」

日向と伊月が冷や汗を浮べて口を開いた。横では水戸部も無言で頷いている。

試合が始まってから流れは終始大仁多ペース。相手に反撃の機会は一切与えないほどの徹底ぶりだった。

ゴール下から攻めきれず、鎌瀬へボールを戻そうとすると、白瀧が瞬時に反応し、ボールを奪いとる。

「そして、エース白瀧の存在」

「……やはり、彼の存在は大きいですね」

ワンマン速攻を成功させる強敵の姿を目にして火神も惹き付けられていた。黒子はチームの信頼を受けている彼を懐かしげに見ている。敵として戦うことに複雑な感情を覚えているのかもしれない。

「わかっているだろうけど、彼を止められるとしたら火神君しかいないわ。きつと向こうも火神君に白瀧君を当ててくるはず。覚悟しておいてね！」

「——うっすー！」

リコの刺激を受け、火神は力強く頷いた。言われなくてもそのつもりだったのだろう、瞳に迷いは無い。

「よし。とにかく明日も格上との戦いになる以上、最初から飛ばしていくわよ。スターターは日向君、伊月君、水戸部君、火神君、黒子君。この五人で行くわ」

「よしー！」

「ああ！うちのスターとスタートするぜ！」

「了解っすー！あとそのダジャレまじ邪魔なんでやめてくれ、です」

「え」

「わかりました」

五人が気迫の籠った返答（水戸部も力強く頷いている）をみると、リコは満足げに頷いた。

少なくとも変な気負いはなく緊張の色も見えない。後は明日次第だが、初日を乗りこえた今なら大丈夫だろうと確信している。

「ディフェンスはいつも通りマンツーマン。マッチアップは伊月君が小林君、日向君が山本君、水戸部君が黒木君、火神君が白瀧君、黒子君が光月君をマーク。とにかく簡単に相手をフリーにさせないで」

「ああ」

「わかっているさ」

「……マッチアップについては相手の出方によって変わるけど、基本は同じポジションの選手をマーク。最も、相手が相手なだけに、今までどおり予想するのが難しいんだけどね」

「え？ どういうこと？」

不安げな表情を浮かべるリコ。悩みの種を理解できず小金井が問いかけると、リコは重々しく口を開いた。

「大仁多の監督、藤代監督のことよ。あの人、結構策略深い面があるって話だし、選手を効率よく起用するって有名だから」

「確かに。加えて今日も二人のレギュラーを温存して万全の布陣だからな」

「ひよつとしたら、そこにも意味があるかもしれないわね」

「まさか」と日向は笑うが、リコの言う事が的を得ていた。

一回戦、藤代の目的は二つあった。

一つは光月と本田、全国大会未経験者に試合を経験させること。早いうちに少しでも不安要素を取り除いて起きたいと考えていた藤代は、全国の舞台でも彼らが活躍できるのかを考えていた。

そして二つ目は第四Q、最終Qにて選手達の慢心をなくすこと。点差が大きくなると攻撃が単調になる時がある。余裕が生まれれば攻め急ぐ事も出てくるだろう。だからこそ遅行が得意な中澤、さらにデイフェンスが得意な本田を投入する事でその不安を解消させた。

こうして大仁多は不安要素を完全に消し去り、試合に臨もうとしている。しかし誠凛がその真意を知ることにはなかった。

「ところで、少しでも何か情報があれば知っておきたいんだけど。黒子君、白瀧君も何か黄瀬君のような弱点はある？ あるなら、今回は試合の前に聞いておきたいな？」

リコは黒子に視線を投げかけた。部屋中の視線が黒子に集まる。語気が強まったのは間違いなく今でも怒りを覚えているからだ。

「ここままであまり口を挟まなかった黒子だが周囲の気配に急かされようやく口を開いた。

「……弱点と言っているのかわかりませんが、あえて言うのなら白瀧君が自分のスピードを完全に制御できていないということですよ」

「え？」

思わず全員が耳を疑った。

何しろ相手はスピードに長けた選手。それだけで今まで多くの選

手が屈してきたのだ。それなのに黒子は白瀧が制御できていないのだと言う。

「白瀧君は瞬発力が並外れています。『キセキの世代』とも渡り合えるであろうスピードは脅威です。しかしそのスピードを制御するだけの減速力、つまりアジリティはそれほど高くありません」

「ッ……！」

「最も、その分白瀧君は方向転換、チェンジオブディレクションが得意なんです。……その分彼はあらゆる方向に切り込んできますが、逆にその場で止まることはあまりできません」

それは白瀧が抱えていた一つの大きな弱点。

青峰とも匹敵する瞬発力を持つものの、彼ほどの減速力を持っていない。つまり緩急が不得意であるということだ。

「だから、火神君が白瀧君の動きをもし見切ることができれば——とめられる可能性が大きくなると思います」

ならば、火神ならば可能性はある。

黒子はそう信じて火神を見る。期待されていることを理解したのか、火神はニツと口角を上げた。

「よしっ。任せとけ。そう何度も抜かれてたまるかよ！」

かつて白瀧と1 on 1を行い、好き放題されてしまった忌々しい記憶を蘇らせ、もう二度と同じ失敗は繰り返すまいと強く思った。

「……いざという時は鉄平。あなたにもすぐ出てもらうから、準備はしておいてね」

エースが燃え滾っていることを嬉しく思い、しかしそれだけでは駄目だとリコは視線を木吉へ向ける。試合開始から出せない。だがピッチになればすぐにでも起用する。

複雑な思いを浮かべ、申し訳なきように視線を落とすリコ。それを見て、木吉は微笑を浮かべて言った。

「わかっているよ。ま、そういうことだから——皆大船にのったつもりで戦ってくれ！」

その言葉には不思議とチームメイトを安心させる効果がある。

もともとの素質なのか、彼がそういう人間であるからか。わからない

いが、何にせよ誠凛の大黒柱は通常運行である。

スカウティングを終えた後、藤代監督の指示により、選手達は早めに休養をとるようにと指示を受けて別れた。

夜の8時半くらいだろうか。俺は一度部屋に戻ると、同室の西村に一言声をかけて——走り込みを行っていた。

日課だから、という理由ではない。さすがに大会中は制限するつもりではあった。

しかしどうも最近は何見が悪く、目覚めた時に気分が良くないことが多い。少しでも万全の状態に持つていくためにと、駆け出した。

「あら？　白瀧君？」

「え？」

物音立たない夜道によく通る声だった。突然の不意打ちであったというのに、小さな眩きであったはずなのに、声に反応できたのは相手がつい最近まで共に行動をしていたからだろうか。

そこにいたのは、県予選でそして合同合宿でも何度か目にしたライバル校のマネージャー、西條さんだった。

「あなたは確か、聖クスノキのマネージャーの……」

「西條よ。覚えていてくれたんだ、白瀧君？」

そう言っつて西條さんは肩までかかる栗色の髪を揺らして歩み寄ってきた。にこにここと笑みを浮べているその姿は整った容姿と相俟つてとても魅力的に映る。楠先輩と付き合っているということにも頷けるものだった。

「何故西條さんがここに？」

当然の疑問を投げかけると、彼女は人当たりの良い笑みを浮べたまま口を開いた。

「聞くまでもないでしょ？　何故って、あなた達の試合の応援に来てるからよ」

「……大仁多の偵察、ということですか」

「そうとも言うかしら？　でも、応援っていうのが丸っきりの嘘でもないの。あなた達が勝ちあがってくれたなら、私達もそれだけ勝ちあがれたかもしれないって自信になるでしょ？」

「なるほど。ではその通りに受け取っておきましょうか。応援ありがとうございます」

「ええ」

嘘ではないだろう。確かに偵察がメインの理由であるだろう。だが勝って欲しいという願いには俺も共感できるところがある。もし俺が逆の立場でもそう願っていたはずだ。

しかし――

「――楠先輩は、どうしていますか？」

やはり、西條さんがいるとなるとあの人のことを気にしてしまう。彼氏のことならきつと熟知しているだろう。そう思っただけで聞いと何故か彼女は少し不機嫌そうな表情を取り繕うともせず露にした。

「ロビンのこと？　大仁多や盟和との合同合宿の後も練習に励んでいるわよ。大分体力が戻ってきたから、最近トレーニングの量を増やしているみたい。きつと今日も練習しているんじゃない？　知らないけど」

「いや、『みたい』とか『じゃない』とか『知らない』って……あなたは楠先輩の彼女なのでしょう？　いくら本人が傍にいないとはいえ、そんなつれない態度は酷いんじゃないですか？」

素っ気無い態度に惹かれる男性も世間にはいるそうだが、楠先輩がそれに当てはまるとは到底思えない。というかそういう人の気持ち理解できない。俺なら正直傷つく。

だから冗談でもやめた方が楠先輩のためになるだろうと、そう思った。

「彼女？　私が？　――アハハハ！　あなた、本気で言ってる？　だとしたら大仁多の情報網もまだまだだね！」

「……は？」

故にこの反応は予想外だった。西條さんは場所を忘れて笑い始め

る。

……理解できなかつた。事実試合の時だつて二人は親密に寄り添っていたし、合宿でも行動を共にしている場面が多かつた。それなのに、どうして彼女がこのような事を言うのか？

何と声をかけてよいかわからず「どういう意味だ」と視線で問う。しばし西條さんは笑い続け、収まったところによくやくこちらの視線の意図に気づいた。

「確かに私はロビンとは小学校からの付き合いだし、仲も良かつた。でも、付き合い始めたのはその関係がロビンにとって都合が良かつたからなの」

「都合が良かつた？ ……楠先輩がそのような考えをする人間だとは思えませんが」

試合を通して、そして合同合宿を通じて楠先輩が本当にできた人間だとわかつた。選手としてではなく人として。物事に対して誠実であり、尊敬できると思っている。そんな人が自分の都合の為に異性を利用するなどは考えられない。声を荒立てると、彼女は「そうではない」と首を横に振る。

「ええ、そう。だから考えたのはロビンではない。彼の祖父よ」

「え？ 祖父つて、確か聖クスノキ学園の理事長ですか？」

「そこまで知っているんだ？ なら話は早いわ。ロビンって顔も人当たりも良いのは知っているでしょう？ だから、周囲の女は結構彼のことを気にしていたのよね」

「でしょうね。あれほどの人に異性が惹き付けられないとは考えにくい」

現に試合中、楠先輩が活躍するたびに観客席から黄色い声援が飛んでいた気がしたし。俺にとつてはとても複雑だつた。おそらくは黄瀬と良いレベルなのではないだろうか？ 黄瀬と比較するというのは楠先輩に対して大変失礼極まりないことだが。

「でもそういうのはどう考えてもロビンの邪魔にしかならない。だからロビンがバスケに集中できるようにって、彼の祖父が私達をくっつけようと画策したのよ」

「まさか、本当に?」

「こんな事冗談で言えるわけがないでしょう? その時、ロビンは何て言ったか想像できる? 『これからよろしくお願いします』って! 笑えるでしょう?」

何も言う事ができなかった。

きっと楠先輩も悪気があったのではないのだろう。だが、バスケットに打ち込みたいという思いに駆られて祖父の提案に身を委ねてしまった。だからこそ上手い言葉をかけることができなかった。

「その時は私も特に考えずに頷いちゃった。外面も中身もよくて、運動もバッチリということは知っていたから私にとってはステータスになると思っていたし」

「ならば、何故そのような不満を抱いているような言い方を?」

決して西條さんにとつて悪い話ではないはずだ。事実、二人で笑いあっていた場面がいくつもあつた。初めがどのような形であれ、楠先輩は彼女のことを大切に思っていたはずなのに。

「ロビンはバスケットにしか興味ないもの。今まで彼の方から誘ってくれたことなんて一度もないし、私が声をかけないといつてもバスケットばかりしている。キスさえさせてくれなかつたんだもん。これで本当に彼女と言える? バスケしか知らない相手と付き合っているだけなの?」

そして、何故彼女が不満を抱いているのかをようやく理解した。

彼女は楠先輩に何よりも自分の事を見て欲しかったのだ。だからこそ不満を抱いている。

だがおそらく楠先輩は譲れないものが多すぎるのだろう。最も大切な一番を決められない。バスケットか、彼女か、どちらか一方の選択などできないのだろう。

西條さんの質問に、俺は肯定する事も否定する事も出来なかつた。意中の女性と別れることになろうともバスケットを選んだ俺にとつて、この問いかけはあまりにも痛すぎるものだった。

「……ねえ、バスケットって楽しい?」

「……ええ」

「そっか。羨ましいなあ。付き合いの長い私なんかよりも、一回戦っただけである敵の方がよっぽど理解しているみたいなんだもん」

「そんな事は無い」と言おうとして、しかし口が意志に反して動かない。

俺が無言を貫いたことで彼女は何か思い至ったのか、くすりと笑った。

「……ねえ、白瀧君って彼女いるの?」

「いいえ」

「そうなの? あなただっつて顔は良いし、バスケだっつて相当なものなんだから、モテてもおかしくなさそうなんだけどな」

「煽てたって何も出ませんよ」

「……ねえ、付き合ってみない? 別に、今すぐじゃなくてもいいからさ?」

寂しげで、それでいてどこか儂げな笑顔をさせる。それはとても魅力的な提案だった。

「申し訳ありませんが、俺もバスケしか知らない人間ですので」

だが、その提案に答えるわけにはいかない。彼女の寂しさを埋めるのは俺ではない。あの人しかいないのだから。

即座の否定。返答を受け取った西條さんは視線を落として暗い表情を浮かべるも、すぐにまた微笑みへと変えていく。

「あら、フラれちゃった。残念、それでは、邪魔者は退散します」

そう告げると西條さんはきびすを返して、立ち去っていく。

だが二、三步ほど進んだところで彼女の足が止まった。

「……IH、勝ち上がってね!」

もう一度振り返って彼女は言う。ほのかな微笑みで、フツた相手にそう告げた。

また俺に背中を向けて西條さんは歩いていく。今度こそ帰路につくのだろう。

「待ってください!」

このまま行かせてはならない。何か伝えなければならぬ。そう本能的に急かされて、彼女を呼び止めた。

「俺は西條さん達の関係を今聞くまで知らなかったし、あなたの言葉が全て真実であるかどうかの判断さえできない」

「そうでしょうね」

「だがこれだけは言える。楠先輩は、あなたの為に戦っていた！あなたに勝利を届ける為ならば、自分の身がどうなろうとも構わないと。そう覚悟して試合に望んでいた！それが、彼がバスケットに真摯に打ち込んでいた理由だったはずだ！」

決してどうでもいいと思っているわけではない。ただ不器用なだけなのだ。俺も、彼も。それ以外に方法を知らないだけ。

必死の叫びが果たして彼女に届いたのか。表情が窺えないこちらからでは、彼女の機敏な変化を知る事ができない。

時間にして数秒。反応を失っていた西條さんが口を開いた。

「……知っているわよ。痛いほどにね」

今度は振り返らずにそう告げると彼女は本当に立ち去って行った。送っていくべきか迷って、しかし足が動かない。その間に彼女の背中は見えなくなっていた。

言いようのない後味の悪さだけが心に残っている。きつと、今日もまた夢にうなされるのだろうか、他人事のように思った。

——黒子のバスケ NG——

「お前も律儀だな。わざわざこんなものを届けにくるなんて」

小林がビデオの入った封筒を受け取ると、渡した主——秀徳の大坪は小さく息を零した。

「マミリンソロライぶ……あ？」

「あ、すまん間違った。こっちだこっち」

「いや間違ったってどういうことだ!? お前ら合宿にきているんだよ

な!？」

「あ、あたり前だろう。勘違いするな？ 別に押しメンが出るコンサートがあるとかそんな私情は一切挟んでないからな？」

「……大坪」

「……………すまん」

後に小林は「ライバルの知ってはいけない何かを知ってしまった」と語ることとなる。

第六十四話 開戦 大仁多VS誠凛

I H二日目、二回戦。

今日からはついにシード校も参戦する。初日を勝ち抜いた高校を含め、全三十二校が再び目の前の勝利を賭けてコートで激突する。

当然のことながら日を追うごとに勝ち残っている高校のレベルは大幅に上がる。シード校は勿論のこと、一回戦を勝ちぬいた高校も相応なレベルのプレイを会場中に披露していた。どこのコートを見回しても磨かれた技術、鍛え抜かれた力が溢れている。

だが、それでも——全国で名を轟かせる選手が現れる中であろうとも、〃キセキの世代〃を、そして彼らに次ぐと噂されている 〃無冠の五将〃を率いている高校の実力は尋常なものではなかった。

「マツ、スルウウウツツ！」

「ツ……！！！」

(こいつ、なんてパワーをしていやがる!?)

京都代表洛山高校対佐賀代表川電工業の試合。

坊主頭に色黒の肌が特徴の大男がゴール下で力強い叫びを発した。競り合う敵へと体を寄せて次々と押し込んでいく。

その力は桁外れの威力を誇り、大男——無冠の五将の一角である根武谷永吉はただの力技であつという間にポジションを奪い取った。ゴール下を完全に制すると、根武谷は空中へと跳びあがり、ボールを両手で力強くつかみとる。

「リバウンドオツ!!」

「ぐわっ！」

「ちっ！」

「マッスル——パスッ！」

敵選手二人とのボールの取り合いを制し、根武谷がオフエンスリパウンドをものにする。

さらに着地するとすぐさま声を張り上げて味方の6番へ強力なパスを——つまりは力ずくのチェストパスをさばく。

「つつ！ いったいわね、このバカ力！」

(止める！)

「ま、私は別に構わないけど、ね！」

片手でボールを受けた洛山高校の6番、やや紫がかった黒髪の持ち主である実渕玲央はうっすらと柔らかい笑みを浮かべるとボールを大きく振り、シュートを放とうとする。マークマンは必死に実渕を追いかけ、ブロックしようとして跳びあがった。

「駄目よ、そんなに焦ったら」

「なっ!？」

(シュートフェイクだ?!? まさか!)

しかし実渕はシュートを撃たない。肘を伸ばすだけに留まるポンプフェイクでディフェンスを跳ばし、ワンテンポ遅れて今度こそシュートを放った。スリーポイントラインの外側で二人の体が接触し、そして審判の笛が鳴り響く。

「……4点、プレイ?」

「だから言ったでしょ? 焦ったら駄目だって」

根武谷と同じく無冠の五将の一人に数えられる彼のシュートに乱れは無い。呆然とするディフェンスの目の前で実渕のシュートが綺麗に決まった。

バスケットカウントも確実に一本沈め、実渕は一度のオフフェンスで4点を記録する。

「ぐうっ!」

「くそっ! 一本ずつ取り返すぞ! これ以上好き勝手やられてたまるか!」

強烈な個人技の猛攻を凌ぎきれず、時間を追うごとに点差は広がっていく。それでもまずは一矢報いようと確実に外から慎重にボールを回す佐賀代表、川電工業。

「ハハーン! 甘いよ!」

「えっ!?! しまっ……!」

だが、パスは味方に繋がることなく、洛山の7番——大きな猫目を研ぎ澄ました陽気な選手、葉山小太郎に奪われてしまう。彼のスピードは並外れており、ドリブルをしているというにも関わらず、追いか

ける相手選手を置き去りにした。

「ふぎげんな！ これ以上好き勝手させてたまるか！ 洛山！」

猛ダツシュで一人の選手が駆け抜け、先回りして葉山を待ち構える。もう失点するわけにはいかないと、声を張り上げて葉山をにらみつけた。

「ハッ！ じゃあ、行くよ！ 三本！」

最も、気迫においては葉山とて負けていない。鋭い眼光に臆する事無く、葉山はさらに加速する。そして一対一が始まろうとした瞬間――突如葉山の手からボールが消えた。

「……は？」

「もらいつー！」

無冠の五将の一人に数えられる源のスピード。

おそらく相手は何が起こったのかさえ理解できなかったことだろう。認識することさえ許さない葉山の速い切り替えしを前に、身動き一つ取る事さえ出来ず、葉山のレイアップシュートを許していた。

『川電工業、タイムアウトです！』

ボールがラインを割ると、川電工業が堪らず前半戦最後のタイムアウトを申告したことにより、時間が止まる。

未だ試合は前半戦第2Q 4分を過ぎただけ。しかしながら点差は絶対的な力の差を示していた。

(洛山) 52対21 (川電工業)。点差、31点。既に100点ゲームは確実であると断言できるほどの実力を見せ付けていた。

「よくやった。皆、素晴らしい働きだったよ」

ベンチに引き上げる五人に真っ先に労いの言葉をかけたのは、チームの主将である赤司。

全国大会でありながら、未だ試合に出場していない彼の表情は余裕で満ち溢れており、どのような衝撃を受けようとも微動だにしないような自信が滲み出していた。

これが王者の姿。これぞ最強の証。

全国区の実力を誇る選手達でさえ、彼らの前では凡庸な一選手に成り果ててしまう。それほどまでに彼らの実力は一線を画していた。

時間が過ぎて、場所はサブ会場へと移る。

こちらでも三回戦進出をかけて激戦が繰り広げられている中、大仁多の選手達はその試合を観客席から観戦していた。彼らのお目当ては今日の前で繰り広げられている神奈川代表、海常高校と宮城代表、山之江高校の一戦である。すなわち、〝キセキの世代〟の一角、黄瀬涼太のバスケットであった。

「また、このパターンか」

「……だが合理的だ。彼ほどの選手を止められる実力者はまずいない」

何度も目にした攻撃パターンに呆れを覚えるもの、納得するものともわかれた反応。

司令塔の笠松からエースの黄瀬へパスが通り、彼が得意としている一対一が始まる。

デیفエンスがドリブルを警戒して腰を落とすその瞬間、黄瀬はワンドリブルで切り返し、さらにチェンジオブペースでマークを抜き去った。すかさずヘルプが出るが、黄瀬は表情一つ変える事無く跳躍し、デیفエンスをもとめせずダンクシュートを決めた。

「ちっ。軽々ダンクシュートを決めてきやがる」

「しかも、今の動きはやはり」

「ああ。相手選手のプレイをそのまま、いやそれ以上の完成度で……」
黄瀬のバスケットスタイルである『模倣』。かつて白瀧さえをも打ち破った、相手選手の動きをそれ以上の威力で炸裂するというものだ。あっさり相手を上回るバスケットセンスは見ている者を戦慄させる。

「やはり、キセキの世代はこのようなどころでは躓きはしない、か」
佐々木はスコアボードに視線を向け、ため息をついた。

(海常) 48対23 (山之江)。第二Q終盤においてこの点差。海常は一度たりとも相手に流れを掴ませることなく圧倒している。おそらくこのまま後半戦も点差を広げ続けることだろう。

「白瀧がいなくて正解だったかもな。あいつかなり黄瀬のこと気にしていたし」

「あれ？　そういえば要は？」

「小林さん、中澤さん、それに西村と一緒にミーティングだと。今日の試合について細かい打ち合わせがあるとかないとか」

今、おそらく誰よりも黄瀬のことを意識しているであろう白瀧はこの場にはいない。大仁多の司令塔達と共に、今日の誠凛戦に向けての最終打ち合わせを行っているのだ。

白瀧は本職はSFとはいえ、状況によってはPGを務めることもある。本人の強い要望もあり、彼は海常の観戦を避けて次戦の準備を進めていた。

同級生達が彼の動向を気にしているところで第二Qが終了し、選手達がベンチへと引き上げていく。

「海常、か。何か複雑だな」

「ん？　誰か知り合いでもいるのか？」

「いや、俺地元だから」

「え？　そうだったの？」

「ああ。一時は海常への進学も考えていた時もあったから、ちよつとな」

神崎は海常のベンチ傍に立つ一人の選手に視線を向け、目線が遭わないように気がつかれないようにとすぐ逸らす。神奈川出身ということは誰か繋がりもある人物もいることだろう。だが彼の顔は言葉に表しがたい、複雑なものだった。

「まあ何にせよ、海常も順当に勝ち上がりそうだね」

「洛山、桐皇と他の『キセキの世代』を擁する高校も三回戦進出を先に決めたって偵察部隊も言っていたし、波乱は起こらないだろ」

そうだね、と光月は苦笑いしつつ本田の呟きに頷いた。

『キセキの世代』を擁する高校はIHにおいてもその力を思う存分振るっている。誰も彼らを止めることは敵わず、次々と三回戦へ駒を進めていく。

「そつちもちよつとグサツと来んなー。ハー……」

「どうしたんだよ？ そっちにも知り合いか？」

「いや、仇敵」

「……『キセキの世代』のこと？」

「無冠の方だよ。無冠の五将の一角、SGの実測」

暗い顔を浮かべ、俯く神崎。不審に思った二人が問いかけると、神崎は重々しく口を開き、彼が抱いている胸中の不安をさらけ出した。

「中学一回だけ戦ったことがあるんだ。同じポジションだから俺がマントーマンでマークしたんだけど、さ」

そこで言葉を区切り一呼吸置いて話を続けた。

「何も出来なかった。実測に前半戦だけで26得点を許し、挙句の果てに後半3分が経ったところで5ファイルの宣告を受け、退場した」

「はっ!？」

「嘘、そんなことが」

（勇だって相当な実力者だ。それなのに、手も足も出なかったってことなのか!?)

告げられた真実に、二人は思わず目を見開いた。

チームメイトとして鼻肩の目なしにみて神崎の実力は高い。仮にも大仁多でベンチ入りを果たしているのだ。一年生ながらも彼のシューターとしてのレベルは全国でも通用するはず。

その彼が中学時代、何もできずにただ圧倒されたというのだ。驚かない方が無理というものだった。

「……あー、駄目だ」

顔を俯け、肩を震わせる神崎。

何と声をかけてよいか、光月と本田は顔を見合わせるが、よい考えは思いつかない。

すると彼らが迷っている間に、神崎は再び顔を上げ、立ち上がった。彼に表情には笑みが戻っている。

「我慢できなくなってきた。さっさと始まらねえかな、俺らの試合!」
好戦的な笑みだった。雪辱に震え、自分の出番はまだかと燃えている。

「……相手を気にして落ち込んでいるわけではなさそうだね」

「長々と落ち込むタイプじゃねえだろうしな」

ある意味、この性格が羨ましいなどと羨望に似た眼差しを神崎に向ける。

決して何も感じていないわけではないだろうが背負い込んではいない。神崎は過去の記憶に当てられ、闘志を滾らせていた。

「——以上が、今日の試合におけるゲームプランとなる」

小林さんがそう締め括り、視線で『何か意見があるか?』と俺達三人に問いかける。

だが俺を含めて誰も文句があるわけがなく、小林さんは視線を一回りさせると立ち上がり、力強く言葉を発した。

「誠凛戦の立ち上がりはお前達が重要な役割を担うことになる。頼んだぞー!」

「はい!」

「わかりました。お任せを!」

「了解です!」

俺達も力強く返すと小林さんは満足げに頷く。するとここまですまり口を挟まなかつた藤代監督も立ち上がり、微笑んだ。

「第1Q、おそらく誠凛はスタートから奇襲を仕掛けてくることが予想されます。今まで力で押す正攻法で待ち構える数々の強豪を打ち破ってきた。今回もそれは例外ではないでしょう」

ならばこそ、と藤代監督はニヒルに笑い、腕を組む。

「今日は私達も乗ってあげましょう。目には目を。歯には歯を。——策には策を、奇襲には奇襲をもって答えましょうか」

本当にこの人を敵に回さなくて良かった。そう思った瞬間だった。つい誠凛の選手達へ向けて合掌したくなる。

カリスマ性というやつなのだろうか。藤代監督の言葉にはいつも引っ張られ、頷いてしまう。そういえば赤司もこんな感じだったか。「ではそろそろ我々も行きましようか。皆さんと合流しなければなり

ません」

藤代監督の後に小林さん、中澤さんと続き、俺と西村も後を追う。これで今日の誠凛戦に向けての準備は終了した。あとは本番でどれだけ俺達が誠凛という新星を相手に戦うことができるかだが、問題は無いだろう。

戦力は勿論のこと、戦略としても遅れを取る要素は無い。上手く行けば第1Qで木吉を引っ張りだすことができるかもしれない。それだけ思考を重ね、練習をこなしてきたのだから。

「そういえば白瀧さん、聞きましたか？」

「あ？ 何をだ？」

廊下を歩きながら次の試合について考えていると隣を歩く西村が問いかけてきた。西村の言葉の意図を図りかねていると、西村は話すべきか迷ったのか少し頬をかき、間をおいて話を続けた。

「帝光の話です。向こうはもう全国大会は終わったそうですよ」

「全中の話か。懐かしいな」

「そっか。お前らは去年までいたから後輩からもそういう話を聞くのか。で、どうだったんだ？」

感慨深そうに中澤さんが聞くと、西村の表情が沈む。

「……帝光は全中ベスト4で敗退。四連覇はならず、次の世代に後を託して三年生は引退したそうです」

「え……？」

「帝光が負けた!?!」

「そう、か」

中澤さん、そして話が聞こえたのか小林さんは戸惑いの声を上げる。対して俺は一言そう呟くに留まった。息を一つ零し、視線を前へと戻す。

この結果を予想できなかったわけではない。むしろ俺達が世代交代した時から十中八九こうなるだろうと考えていた。

「俺達は後輩を育てる事が出来なかったからな」

「白瀧？」

「残っている選手達は実力こそあれ、二年間大量リードに守られてきました。言わば精神的なゆとりがある中で育ってきました。しかも『キセキの世代』という強すぎる存在もあってレギュラーには一度もなれていません。だからこそ連覇と言うプレッシャーに耐える事は難しい」

かつて中学時代、どういうわけか帝光の首脳陣は『キセキの世代』を毎試合試合に出場させていた。思惑はわからないが、そのせいで他の選手達にとっては出場機会が大きく損なわれる原因となった。

常に『キセキの世代』が大きな点差を生み出し、他の選手達は既に戦意も喪失しかけた相手に追い打ちをかけるような試合をこなすだけ。練習中は逆に彼らがいけないことで選手達の向上心は上手く発達せず、チームプレイを軽視した方針のせいで不協和音が響き渡っていた。

「対して他の中学の選手達は、キセキの世代との戦いを経て、それでもなお折れなかった闘志の持ち主達が残りました。しかも先輩達の思いを引き継ぎこれまでの雪辱に燃えていることでしょう。『せめて今年こそは』と。その心意気は大きく違う」

精神論と思われるかもしれない。だが実戦経験の違いというものは大きく影響するものだ。試合の流れを読み、あるいは断ち切り、勝利を手繰り寄せるには、今残っている帝光の選手達には経験が足りない。連覇という周囲の期待に押し潰されないように振舞うのは厳しいのだ。

「……『キセキの世代』の弱点。後の可能性さえも潰してしまう、というのですか」

「はい。俺達の失敗でもありません」

藤代監督の厳しい視線に射抜かれ、俺は渋々と頷いた。

こればかりは彼らの責任ではないのだから。

時間が経過し、試合開始まで後10分ほどとなった。

選手達は全員控え室に集合し、それぞれ試合に向けて準備を進めている。

「橙乃、試合前に少し足のマッサージを頼んでもいいか？」

「わかった。じゃあ横になって」

「ありがとう」

頼むと彼女は嫌な顔をせずには承してくれた。すぐにうつ伏せになって橙乃に体を預ける。

橙乃の細い指先がゆっくりと右足をなぞっていく。体が幾分か楽になる感覚を覚えた。

ゲームプラン上、最初から大きく動く事が予想される。少しでも万全の状態にもつていこうと思っていたが、本当に橙乃もマッサージが上手くなったな。

そう感心していると、前方から勇が腕を伸ばしながら近寄ってきた。何か思い出したのだろうか、少し楽しそうに見える。

「そういえば要。お前昨日の夜聖クスノキのマネージャーに告げられたけどあの後どうしたんだ？」

「え？ なんだお前あの時」

「……………あ？？」

「見てたのかあがががあああああ！ 折れる！ 橙乃さん、折れる！ 潰れる！ 足が潰れる！」

突如負荷が大きくなり、ミシミシと足が悲鳴を上げる。つられて俺も悲鳴を上げる。いや、俺の足だけ。だが橙乃は悲鳴が聞こえていないのか、聞き届ける気がないのか、力は強まるばかりだった。

「何？ 大会中だというのにチームのエースが鼻の下伸ばして女の人に現を抜かしていたの？ へー、良い身分だね！」

「あぎやああああ違う！ 話を聞いて！ 告白されただけ！ しかも断ってる！ 何も、何もしてないから離して！ お願いだから離してください!!」

「ふーん。そう…………」

必死の訴えに納得してくれたのか、ようやく右足が強大な圧力から解放され、マッサージが再開される。

首を後ろに回すと右足には橙乃が握り締めた後がくつきりと出来ていた。一体彼女の細腕のどこにこんな腕力があるのだろうか。もう少し遅かったら挽肉にされてしまったのではないのかとさえ思えてしまう。

「えと、飲み物買いに行った時にちよつと目にしたから聞いたんだけど。そっか、断ったのか。その、すまん」

「……いや、いい」

涙目になりつつ、勇の謝罪を受け入れた。結果論だが、出来れば今は聞かないで欲しかった。

「え、というか告白されたというのは本当なんですか!？」

「ああ。……楠先輩との間にも色々事情があったようだよ」

「ちゃんと断ることができたんですね」

「状況が状況だからな」

そう言うのと納得しきれないのか西村は首をかしげている。

昨日のことはあまり俺も触れられたくないから、深く聞いてこないのは嬉しい。……しかし話題のせいなのか釣られるように本田まで反応していた。

「しかし出会う機会が少ないとはいえ、現在も大会に参加している時に告白されるとはびっくりだな」

「本当。いくら白瀧君が鈍感で愚直でヘタレで騙しやすそうな男だからと言って……信じられない」

「……ねえ橙乃。お前俺のこと嫌いだろ?」

「そんなことないよ」

いや、絶対そんなことあるって。言葉に棘しかない。

鈍感や愚直はまだ真っ直ぐであるという意味も籠っているから許すとしても、後半のヘタレとか騙しやすそうとかはもはや侮辱の言葉ではない。

大体俺が彼女にそんな場面を見せただろうか? 今思い返してみてもそれらしき点は、それらしき点は——いや、あったな。何時ぞやの保健室や夜食作りの出来事が。

「でも何で断ったんだ?」

「バカか。そんな事、決まっているだろう」

「巨乳じゃないから？」

「ちよつと！　ちよつと待ってください橙乃さん!?　俺のイメージおかしいよ！」

俺の知らない間に彼女の中で酷く屈曲した人物像が出来上がってしまったっている。これではまるで青峰ではないか！　違うんだ。大きい胸が好きなんじゃなくて、好きになった女性の胸が偶々大きかっただけなんだ。そう、偶々なんだ。

「……自分の気持ちに嘘をついている言葉を、信じられると思うのか。本当に楠先輩の事を何とも思っていないなら、あんな雰囲気醸し出せるわけがない」

改めて今思い返してみても、あれはきつと心の迷いだっただろうと断言できる。あの時俺が頷いていたならば誰も満足できる結果を得られなかっただろう。俺も彼女も、楠先輩も。

だからこそ、あの選択は間違っていない。後悔はしていない。

(あの、白瀧が！)

(女心を、察した……?)

「よーし、二人とも今一体何を考えた？　正直に答えてくれよ？」

驚愕する本田と勇。うん、なんとなく思ったことは想像できるけど、とりあえず許さない。

「な、んじゃ、こりゃ……？」

ついに二回戦、栃木代表の大仁多対東京都代表、誠凛の試合が始まろうとしていた。

試合開始の時間が迫りつつある中、大仁多のスターティングメンバーの顔ぶれを見て、火神が怒りで震える。おそらく『何をふざけているんだ』と考えているのだろう。

「一回戦のスターターとは全く違うな」

「よくもここまで面子を変えられるものだ」

「ああ。……白瀧以外、レギュラー全員がベンチスタートとはな」
他の選手達も同様なのだろう。戸惑いと、幾分かの苛立ちが言葉に含まれているように感じられる。

彼らの言うとおり、大仁多のスターターに名を連ねた選手のうち、レギュラーは白瀧だけだった。

中澤、三浦、白瀧、西村、本田の五人が赤いラインの入った白のユニフォームに袖を通し、コートを見据えている。

（どういうつもり？ メンバーだけ見れば一回戦終盤の面子に似ているけど、あの時とは全く状況が違うというのに。まさか……油断？）

コートに座るリコも大仁多の布陣に疑問を覚えていた。レギュラー勢ぞろいで待ち構えていると思っていたからこそ、この編制の意図を理解できない。

まさか誠凛が新設校だから油断しているのかと、そう思い、そしてそれ以外に納得できる理由が思いつかなかった。

（でもそれにしてもPG二人だなんて。外から打てる選手もいないみたいだし、白瀧君にスタートは一任つてこと？）

いくら考えてもリコは真意にたどり着けなかった。

監督がそうなのだから、選手達は尚更の事。

特に沸点の低い火神は考えることも忘れて白瀧の元へと歩み寄っていた。

「よう白瀧」

怒りを隠す事もせず、火神は語気を強めて白瀧をにらみつける。

「レギュラー温存とは、随分舐めた真似をしてくれるじゃねえか。俺達誠凛相手には控えて十分つてことかよ？」

190cmという高さから睨まれたら普通は少しであろうと怯えを感じるだろう。

だが白瀧は薄っすらと笑みを浮かべて彼の怒りを受け流す。

「まさか。そんな慢心は微塵たりともしていない。緑間がいる秀徳を倒したお前達の事は高く評価しているつもりだ」

そう返すと火神の表情が少し平然に帰る。それを見て、今度は白瀧が口調を強めて火神へと問い詰めた。

「むしろ——舐めているのはお前達の方じゃないのか？」

「あ？」

「控えて十分だと？ ふざけるな。ここに居る者達は、他の高校ならばまず間違いなくレギュラーを、エースをはれるだけの実力者が集っている。しかしそんな甘い逃げ道に逸れることをよしとせず、あえて棘の道で己を鍛えることを望んだ者達だ」

その点に関しては白瀧よりもずっと彼らの決心は固いかもしい。推薦を受け、レギュラーの座を殆ど約束されていた白瀧と違い、彼らはベンチに入る保障さえなかった。大仁多という過酷な環境下では三年間一度も試合に出れないかもしれない。そんな不安もある中であえて大仁多へと進学したのだから。

「バスケができるならばどこでも同じだなどと考えている人間とは訳が違う。」

今ここに居る五人がベストメンバーだ。お前に彼らを控えと蔑む資格はない！」

一瞬、火神が気迫に押され、一步後ずさる。彼だけではない。日向、木吉も表情を曇らせた。

この様に言われては、彼らは何も反論することができなかった。

『日本のバスケなんてどこでも同じだ』と考えていた火神。中学の際に勝つことを諦め、バスケから離れた日向。進学の際にバスケのことは考慮していなかった木吉。事情が事情とはいえ、彼らの覚悟を前に口を挟めることではない。

「……さて。お前ら何か言っておくことはあるか？」

「いえ。というかあいつが全部言ってしまった」

「だな。俺達はただ全力で戦うだけだ」

「そうですね。機会をもらえたわけですから——行きましょう」

そして頼もしいチームメイトの言葉に駆られて、大仁多の精鋭が出陣する。

『それでは二回戦第四試合、大仁多高校対誠凛高校の試合を始めます』

大仁多高校 スターティングメンバー

#7 白瀧要 (一年) SF 179cm

#10	中澤秀樹（二年）	PG	175cm
#12	三浦隼人（二年）	C	190cm
#14	西村大智（一年）	PG	172cm
#15	本田恭介（一年）	PF	184cm
誠凛高校 スターティングメンバー			
#4	日向順平（二年）	SG	178cm
#5	伊月俊（二年）	PG	174cm
#7	水戸部凜之助（二年）	C	186cm
#10	火神大我（一年）	PF	190cm
#11	黒子テツヤ（一年）	??	168cm

ついに試合が始まる。

大仁多からは三浦が、誠凛からは火神が中央に出て、ジャンプボールの前から火花を散らす。

「わかってるな、黒子」

「はい。どういうわけかはわかりませんが、やることは一つです」

「よし、ならいい」

黒子の意志を確認すると伊月はその場を後にする。

序盤から出し惜しみをするつもりはない。早速誠凛は仕掛けようと集中力を研ぎ澄ました。

その間にリコは少しでも選手達の状態を探り、作戦の意味を探ろうとして、視線をある一点でとめた。

「……ねえ。白瀧君って帝光出身だったはずよね?」

「え? いきなり何を言っているのkantok!?! 黒子だって言っているじゃない!」

「そう、ね」

（え? でもそれじゃあ、この数値はどういうこと……?）

彼女の視線の先にいたのは白瀧だった。小金井から当然のツッコミを受けても、彼女の考えはまとまらない。どうして、と考えていると——ついに試合が始まった。

『試合開始!!』
テイクアップオフ

ボールが宙高くに放たれた。三浦と、火神。両代表が殆ど同時の夕イミングで地を蹴る。

「もらった!!」

「ぐうっ!」

(話には聞いていたが、マジで高え!)

ジャンプボールを制したのは、やはり火神。大坪とも競った彼の跳躍力は三浦でも対抗することは難しかった。

火神が弾いたボールを水戸部が掴む。近くにいた本田がすぐにチエツクにつくが、すぐさま誠凛は動き出した。

「よしっ! ナイス火神、水戸部!」

「行くぞ速攻!」

火神を含めた全員が駆け上がった。

水戸部はワンドリブルで本田のディナイをかわすと、前を走る伊月へパスをさばく。

イーグルアイでもパスコースに敵の姿がないことは確認済み。すぐに味方の位置を確認しようと伊月が思考をめぐらそうとした瞬間

キラーステイク
(殺戮師の本能!!)

試合の流れを誰よりも知る白瀧が、ボールを弾いた。

「なっ!」

「何だと!」

(あそこからも追いつくというのか!?)

守備範囲外からのステイール。水戸部も伊月も予想はできなかった。ボールは二、三度地面を転々とし、中澤の手に収まる。

「奇襲がお前達だけの十八番とでも思ったか!」

「よくやった白瀧!」

「まずい! カウンターだ!」

試合開始直後の速攻。それは白瀧が得意としているもの。特にこの試合は藤代より立ち上がり特に注意された。なおの事彼が働かないわけがなかった。

突然のステイールで誠凛には立ち直る時間は無い。

「くそっ！　デイフェンス、戻れ！」

「無駄だ。走れ！　反撃だ！」

「よし！　行くぞ、西村！」

中澤はすかさず前線へと駆け出した白瀧へボールを放つ。そして彼と共に攻めようと西村も背中を追った。

「はい！　……ッ?!　白瀧さん、前!!」

「えっ?」

だが、一人異変に気づいた西村は叫ぶ。

既に誠凛は自らの奇策の成功を確信し、全員が走っていた。だから、これより前には誰もいないはず。その白瀧の意識の外から突如黒子が表れ、彼が掴むはずだったボールを奪い取った。

「く、黒子——！」

「もらいますよ白瀧君！」

「逆カウンターだ！」

ステイールに成功すると、黒子は伊月へとボールを戻した。

再び誠凛の速攻が始まる。しかも白瀧と西村が突出してしまった為に戻りが遅い。その間に伊月は日向と連携してボールを運ぶ。

時間を稼ごうと中澤が伊月に当たるが、水戸部がスクリーンで彼のマークを引き剥がす。すると伊月はこのタイミングで火神へパスをさばいた。

「ナイスパス！」

「ちっ！」

「打たせるか!!」

火神が右手を大きく掲げて跳躍した。

好き勝手させてなるものかと、三浦と本田も負けまいとブロックに跳ぶ。

デイフェンス2枚、これは攻め切れない。そう、多くの者が感じた時、火神が空中で体制を入れ替え、左手に持ち替えた。

「なっ!」

「ダブルクラッチ!」

ダンクと思わせ、本命はこちらだった。二人はここから反応する術

を持たない。中澤も間に合わない。

先制点は、誠凜が勝ち取る――

「舐めんなあつ!!」

それを許せる程白瀧は優しい男ではない。

最前線にいたはずなのに、猛ダツシユで追いついた彼は火神の手から放たれたボールを叩き落とした。

「うおっ!」

「つとおっ! 中澤さん!」

驚愕する火神。先制を確信したチームメイトも同様だった。

しかも、弾かれたボールは同じく前線より戻った西村がライン上でさばき、中澤の手に戻っていく。

「おし、ナイスだお前ら!」

確実に懐に収めると中澤は二人の必死の行動を讃えた。

「す、すげえ!」

「試合開始直後から猛烈な攻防! 激しすぎるだろ!」

観客席もいきなりの試合運びに思わず歓声が湧きあがる。

お互いが速攻を仕掛けようとして、そして止められた。

ボールの行方が次々と変わっていくがそう簡単に得点は許さない。

先制点を巡って、両者の序盤から容赦なく攻め始めた。

「……いきなりやってくれるな、黒子」

ようやく追いついた黒子へと声をかける。息を整えつつ、白瀧は黒子の返事を待った。

「信じていましたから。白瀧君ならばきつと開始直後からボールを奪いに来る。そして奪ったならば味方からボールを供給されるだけの信頼を得ていると」

「ハッ。読んでいるのはお互い様、か」

ボールが集中することを読んでいた。

お互いがお互いを知り尽くしているのだ。そう簡単に先制点を譲れるはずもない。

「いいだろう。ならば俺達もさらに攻めの手を強めるだけだ。」

――黒子、誠凜。お前たちの戦略を打ち破った上で、この第1Qは

俺達がもらおう！」

笑みを深くして、白瀧は黒子に告げる。

こうして運命の一戦は序盤から激しいぶつかり合いを繰り広げ、始まったのだ。

——黒子のバスケ NG集——

「中学一回だけ戦ったことがあるんだ。同じポジションだから俺がマントーマンでマークしたんだけど、さ」

そこで言葉を区切り一呼吸置いて話を続けた。

「何も出来なかった。実測に前半戦だけで26得点を許し、挙句の果てに後半3分が経ったところで5ファイルの宣告を受け、退場して、試合後にメールアドレスと電話番号を交換させられた上に、ツーショットを撮らされた」

「はっ!?! ……ハアツ!?!」

(……あれ? 敵選手だよね?)

神崎、実測に目をつけられてしまう。

第六十五話 策と絆

彼らが初めて出会ったのは、帝光中学に在籍して二年目の春のことだった。

その日は帝光バスケット部二軍の練習試合が行われる日であり、一軍に在籍する二人——今回は白瀧と黒子の二人が保険として同伴することになっていた。

「交流戦以来、だな。お前と試合に出るのは」

「はい。最もあの時は白瀧君と共には出れなかったので、僕は凄く楽しみにしています」

「ああ、そうか。そういえば入れ違うように交代だったもんな」

二軍の選手達の先頭を歩く白瀧と黒子は他愛もない話に花を咲かせている。

緊張感はなく、これからの試合を心待ちにしているようだった。

「じゃあ今日は俺達が対外試合では初めて一緒に出るかもしれないってわけだな」

「ええ」

「ま、どうせなら公式戦がよかったけど。誰か二軍に知っている選手いるか？」

白瀧は入部早々に一軍入りを果たしたために二軍や三軍の選手のこととはよく知らない。

つい先日まで三軍にいた黒子なら誰か交流があるだろうか和白瀧に聞かれ、黒子は顎に手を当てて考え始めた。

「僕も二軍には在籍しなかったので特に詳しくはありませんが、そういえば僕が一軍に昇格した時、友人が二軍に昇格したと聞きました。今日の試合でもスターターに名を連ねているはずですよ」

「ほう。三軍からの叩き上げ、ということか。どんなやつだ？」

「……元々は点取り屋だったようですが、帝光バスケット部に入ってからPGのポジションにコンバートしたそうです。非常に真面目でポジションの勉強もしていますし、それに……」

「それに？」

黒子が突如言葉を区切った事に疑問を抱き、白瀧が言葉を繰り返した。

先を促され、黒子は嬉しそうに笑みを浮べて友人の事を再び語り始める。

「とても練習熱心な人でした。司令塔であるからミスディレクションとの連携もたくさん練習しましたし……友達思いな優しい人です」

「……成程な。俺も仲良くなれるといいけどな」

そう言って白瀧は前を見た。目の前には早くも試合会場である体育館が迫っていた。

この時はまだ白瀧は気づいていなかった。後に白瀧の背中を追って大きく躍動する選手が誕生するのは、この半年ほど後の話である。

試合開始直後からハイスピードでボールを奪い合い、ゴールを狙い合う両校。

息も詰まる激しい攻防の中、彼らを観客席から見守る女性の影が一つあった。

栃木に所在する聖クスノキ高校のマネージャー、西條である。昨夜白瀧へ向けた言葉は嘘ではなく、今日も彼女は大仁多の試合を偵察しに来ていたのだ。何度も目にしてきた相手とはいえ、彼女の目にも今日の大仁多の布陣は異色なものに映っている。

（10番^{中澤}が出てくるからつきり県予選で盟和と戦った時と同じようにディレイド^遅オフ^攻エンスを仕掛けると思ったのに、序盤から白瀧君を使つての速攻狙い。PG二人の同時起用はひよつとしてただ攻撃の組み立てが理由ではないということ……？）

彼女の視線の先は中澤と西村、大仁多が誇る二人の司令塔だ。レギュラーでありキャプテンでもある小林を押し退けてスターターとして名を連ねたからには理由があるのだろうか、彼女も藤代の策を読みきることができない。

現状、中澤と西村が二人でボールを運ぶと中央トップの中澤にボールが戻り、左右45度にそれぞれ西村、白瀧が展開するワングードの

陣形を選択する。

(ツーンガードを取らずに両ウイングに白瀧君と西村君を配置。やつぱりこれは……)

徐々に明らかになっていく大仁多の戦法。今は中澤が様子を探っているだけのようだが、おそらくここから動き出していくであろう大仁多のオフエンスを予想し、西條はコートを駆け回る選手達へと意識を集中させた。

「おっと。もう試合は始まってしまっていたか」

「……え？」

聞きなれた言葉が耳に届く。だが試合に夢中になっていたこと、そしてここにいるはずの無い人物の声だった為に、西條は一瞬言葉を失った。

「隣、座るよ？」

「ロビン……」

西條の許可を得る前に楠は彼女の右隣の席へと腰掛ける。

何故ここにいるのか、と意味を含んだ視線で見つめると楠は苦笑した。

「さすがに彼女が他の男に告白して、しかも振られたと聞いては、な。いても立つてもいられなかったよ」

「へ？」

「……白瀧から全部話を聞いたんだ」

「えー？ あの子そういうこと普通に話しちゃうような人だったの？」

人の失恋話を勝手にばらすなんて性質悪いなー」

「本当にそう思っているのか？」

酷い男だと冗談半分で不満を漏らすと、楠は語気を強めて問いかけた。彼の真剣さを悟り、西條は静かに首を横に振る。それを見て楠も頷き返した。

「ひよっとして……怒ってる？」

「当たり前だろう。奈々がそこまで気にしていた事に気づけなかった自分の愚かさが恨めしい」

「あれ？ そっち？ 私に対してじゃなくて？」

西條は不安気に楠の顔を覗き込むと、とても複雑な表情を浮かべて楠が続ける。

「彼女に浮気をさせるのは男の責任だ。寂しい思いをさせてしまったというのに気づこうともしないから他の男に気を許させる。それを責めるのはあまりにもお門違いというものだろう。俺がもつと近くにいれば、少なくともこんな事にはならなかった」

それはきつと彼の心からの言葉なのだろう。白瀧からどこまで聞いたかはわからないが、おそらくは全て、白瀧が感じた事も含めた全てが楠に伝えられ、そして心の底から悔いている。

何故、自分はここまで彼女の気持ちにもつと深く寄り添えなかったのかと。気づけなかった己の鈍感さと、気づこうとしなかった彼女に対する意識を責めていた。

「……ふーん。いつそ嫉妬してくれてたらよかったんだけどな」
「嫉妬?」

「私が白瀧君に告白したこと、それについて何かしら白瀧君を羨ましいとか、ねたましいとか思わなかった?」

楠の馬鹿と前につきそうなほどの真面目さに、西條はどこか面白く感じて冗談交じりに微笑んだ。これで「思った」と、一言告げてくれればもつとからかえる、そう思っただけの言葉を待つ。

「……俺が何も感じない薄情な人間だったらよかったんだけどな」

すると楠はそう言って西條から視線を逸らした。とても遠まわしに言葉を選んでいるところを見ると、どうやら彼の方も余裕があったわけではないらしい。本当に不器用な男だと西條は思った。

「それよりも、奈々の方こそなんとも思っていないのか?」
「私?」

居心地が悪くなった楠は話題を変えようと昨日の話を持ち出した。「折角告白したというのにあっさり断られて、少し気に障ったりしたんじゃないか?」

「別に? ……んー、でもこれほどの美人を目の前にして、あっさりと断ったことは屈辱かもね。」

うん。次に戦うことになったら容赦しない。きつちり落とし前を

つけることにする。あー。あの白瀧君が負け犬として私の前で跪く姿。……今から愉快な想像が湧き出してくるわ。ウフフフフ」

「……白瀧には同情するよ」

突如黒い笑みを浮かべて白瀧を鋭い目で射抜く西條。心なしか一瞬白瀧の体がビクツと跳ね上がったように見える。どうやら彼は気づかぬうちに地雷を踏んでしまったようだ。

親しい間柄であえるとはいえ、楠でさえ今の彼女の表情は見たことがない。少し後ろめたく感じ、コートに立つ戦友のことを哀れんだ。すると白瀧の身を案じる楠の表情を窺って西條はまた一つ愚痴を零す。

「あーあ。いつそ私も男の子として生まれてきたらなー」

「え？」

「そうすれば、私も二人みたいにもっとわかりあえたかもしれないに」

彼女の疎外感を匂わすその一言。どこまで本気であるのか半信半疑だが、楠はフツと小さく口角を上げて彼女を諭す。

「それだけは絶対にやめてくれ」

「えー！ 私とバスケットをするのがそんなに嫌？」

「だってそれだと奈々とこういう関係にはなれなかっただろ？」

さらに文句を続けようとして、楠の純粋な笑みの前に沈黙せざるを得なかった。

裏表なくこのような事を言えるのだから大したものだ。西條は一つ息を零し、彼に合わせるように笑い返した。

「……本当、ロビンって男らしいんだか女々しいんだかわからないね」

「奈々の前だけだよ」

「……これからも、一緒にいてもいい？」

「勿論。奈々がそれを望むなら」

言い終えると楠は西條の手に自分の手を添えた。

突然の出来事に少し驚いて、そして西條はまた笑みを深くする。

その後は二人とも昨日の事は話題に持ち出さずに寄り添い、目の前の試合観戦に熱中していた。

(誠凛のディフェンス。俺には^{伊月}5番、西村には^{日向}4番、白瀧に^{火神}10番、本田に^{黒子}11番、そして三浦に^{水戸部}8番のマンツーマンディフェンスか。ここまでは敵にとっては予想外の出来事があったとはいえ、こちらの予想通りの対応だ)

中澤は相対する伊月の動きに注意を払いながら周囲を見渡した。

誠凛は大仁多オフェンスに対しマンツーマンディフェンスを展開。大仁多のスターターが想定とは外れたものの、各選手は役割を決めて早々に対応を始めている。

特に注目すべきは火神。白瀧のマッチアップを行い、早くも集中力を高めている。

(ま、そう簡単に止めさせてやるつもりはねーけどな)

ゆつたりとボールをつきながら、中澤の視線が三浦と水戸部、ゴール下のポジション争いの様相を捉える。

「……ッ！」

「おら、どうした!? こんなもんか！」

背丈は殆ど変わらない二人であったが、水戸部は苦しそうに表情を歪め、三浦は得意げに水戸部の体を押し込んでいく。水戸部も堪えようと必死に食らいつくが力づくでポジションを奪われてしまった。

「まずは、確実に得点をー！」

好機をみすみす見逃すわけもなく、中澤は的確にローポスト、三浦へと高めにパスをさばく。

ボールを受け取った三浦は背中側の水戸部を軸にゴール側ヘターンしジャンプシュートをきっちり沈めた。

「よっしゃあー！」

「ナイスパス、中澤さん！」

「三浦さんナイツシュ！」

(大仁多) 2対0 (誠凛)

先制点は大仁多。中澤がじっくりと状況を見極めながら有利な三

浦のゴール下で得点に成功する。

(あつさり^と先制。しかもあの10番、神出鬼没の黒子君を警戒したのか高めのパスをさばいた。ただ時間を使っているというわけでもなさそうね。やはり警戒されている、か)

誠凛のベンチではリコが小さく歯を食いしばる。先制点を許した事に加え、開始直後の方が効果の高い黒子のミスディレクションを警戒した大仁多の動きを察しとり、相手が油断しているわけではないとハッキリしたからだ。

「くっ……！ 先制点を取られたか」

「仕方ない、こつちも取り返すぞ！」

日向のスローインを受け取り、伊月がボールを運ぶ。

(大仁多のオフエンス力が高いのはわかっていたことだ。それよりも、相手がスターターの殆どが不在の今、こちらが得点失敗するわけにはいかない！ 火神には白瀧がマークにつくだろうが、それでも……ッ!?)

「なっ!?!」

「ハアッ!?!」

ドリブルを続けながらオフエンスの組み立てを考えると、大仁多の出方を見て伊月は、いや、誠凛の選手達は驚愕に包まれた。

大仁多は誠凛と同様マンツーマンディフェンスを仕掛け、各選手が一对一でプレッシャーをかける。予想していなかったことではない。だがそのマッチアップが問題だった。

「火神のマークが、15番^本!?!」

「それで、7番^{白瀧}が日向のマークに!?!」

伊月に対して中澤、黒子には西村、水戸部には三浦がつく。そして火神の相手は本田、日向の相手が白瀧だった。

(何でお前が俺のマークについているんだよ!?! そこは普通火神にくところだろうか!?!)

一番驚いたのは白瀧とマッチアップする日向だった。嫌な汗が止まらず、胸の拍動が強くなる。

エース対エースの一騎打ちを予想していたというのに、突如目の間

に最警戒する強敵が現れたのだから当然の反応である。日向が混乱の渦にとらわれる中、白瀧は少し距離を離れたまま日向を鋭くにらみつける。

「白瀧、距離空けすぎじゃないか？ スリーがある日向に対してチエックが甘いというか……」

（いや、違う。そうじゃない）

（おそらくは火神とやった時と同じだ。そしてあの距離からでも日向のスリーを防ぎ切れるという自信……！）

シューターである日向に対し、離れた位置で待ち受ける白瀧を見て、誠凛ベンチからは疑問の声があがる。

だがコートに立つ選手達は理解していた。

白瀧がまさに本気で日向を止めようとしており、そして止められる確信を持っていると。

だからこそ、伊月も下手に日向にボールを渡すことができず、ボールの保持に専念した。

「ツ！ くそっ！ テメエら、本当にマジでやってんのか!？」

一方、自身も白瀧と戦おうと思いついてアップしていた火神は水を差された気分になり、顔をしかめていた。

試合開始前に白瀧から本気であるという意思表示を受けたとはいえ、それでも納得がいかず目の前に敵に不満を漏らす。

「マジに決まってるんだろが！ あの野郎に挑発されて、スゴスゴと引き下がるわけにはいかねえんだよ！」

「は？ なっ……!？」

怒声の後、突如本田の気迫が増して火神へのダイナイが厳しくなる。

（こいつ。DF任せられるだけあって確かに厄介だ。下手な動きはできねえ！）

行く先を読み取られているのかまったく自由にさせてもらえず、火神の顔から余裕が消えた。振り切ろうと思っても本田はしつこく迫り火神の前に立ちはだかる。

本田を突き動かせる意地。

これは試合前、藤代より指示を受けたことが原因であった。

『第1Q、この時間は火神さんのマークは本田さんにお任せします』

『えっと。それは決定事項ですか？』

『はい。何か不満でもありますか？』

『いや、さすがに緑間を倒した相手のマークとなると……』

監督に命じられたとはいえ、相手はあの“キセキの世代”と幾度も渡り合った強敵。そう簡単に引き受けるなど無理な話であった。

本田も力をつけてそれなりに自信がついたとはいえ、相手が悪い。エースを勢いづかせてはチームの勝敗にも関わりかねない。そんな指示にそう簡単に頷くわけにはいかなかった。

だが貴重な出場機会であるために強く否定することもできず、本田は言葉を濁して視線を落とす。

このままでは事態は進行しないと見かねた白瀧が一步前へ出て口を開いた。

『ハッキリと言えば良いだろう？ 試合に出たいなら任せてくださいの一言で済む』

『だがいくらなんでも——』

『何だ？ 出来ないと言うつもりか？』

反論しかけようとして、すかさず白瀧は彼の言葉に重ねて挑発するように語る。

『あ？』

『出来ないなら仕方ない。まあお前では力不足だとわかっているだけマシか。監督、火神の件は俺が代わりに——』

『おい！ 勝手に話を進めてんじゃねえよ！』

もはや本田を見向きもせず藤代へ進言する白瀧に、本田の感情が昂ぶった。

『いいぜ。やってやろうじゃん！ 火神の一人や二人、俺が止めてやるよー！』

ここまで煽られてしまつては沸点が低い本田は我慢できない。

もはや先ほどまで抱いていた不安を忘れ、本田は高らかに告げた。

白瀧はそれを耳にして薄っすらと口角を上げる。

『ああ、任せるぞ。ある程度火神を苦しめてくれれば、それで良い』
こうして本田はチームの命運を託され、一番の重責と言っても過言ではない火神のマークにつくことになった。

不安が消え去った彼の動きは俊敏かつ的確なもので、火神でも苦戦を強いられるものであった。

(しっけえ！ 振り切れる気配がない！ ……けど！)
「むっ!？」

火神はそう簡単に相手の術中にはまりはしない。振り切れないならば、真っ向から相手のディフェンスを押し破るまで。

フリースローライン付近に移動してポストアップ。本田を抑えつつ、伊月からのボールを供給させた。

「パスが通った！ 火神だ！」

「ちっ！」

「もらうぜー！」

すこし背中に力をかけた後、流れるように外側へロールターン。火神の巨体が本田を避けていく。

しっかり右足でロールの勢いを殺すと両腕を大きく上げた。

「っ！」

(よしっ！ 釣られた！)

本田の体も呼応して体勢が上へと崩れた。それを確信して火神はシュートを放とうとしていた腕を下ろし、全力で逆サイドへと切り込む。

外へ避けてからのジャンプシュートと見せかけ、中央からの切り込み。成功したとそう思い、火神は右から左へと切り返す。

その行く手に、再び本田が再び立ちはだかった。

「なっ!？」

「反応した!？ 読んでいたのか!？」

先ほどのフェイクに対して本田は反応こそすれブロックにはいっていなかった。

予想外の適応に驚愕しつつ、火神はその場で停止してドリブルを続ける。

「だから言っただろう。ある程度苦しめてくれればそれでいいと！」
だが突破したと思いい込んでいた火神は視野が狭まっていた。ドリブルをしている彼の左腕に、スティールの名手が襲い掛かる。

白瀧がドリブルの隙をつき、ボールをはじき出した。

「ぐっ、白瀧!？」

(……深めに守っていた分、火神が白瀧の守備範囲に入っちまったってことかよ!?)

「やった！ ナイスです！」

支えを失ったボールは西村の手に収まった。

得点を決めるどころかエースである火神が本田に抑えられてしまい、再び大仁多へとボールが移ってしまう。

「よしっ！ 行くぞ西村！」

「はい！」

そして今度こそ大仁多が誇る速攻が始まった。

西村はクロスオーバーで黒子をかわずと即座に白瀧へとパスをさばく。ボールを手にし、目にも止まらぬスピードでコートを駆け上がった。彼の後ろを西村も追う。

「くっ、くそっ！」

「戻れ、戻れ！」

火神は歯を食いしばるものの、体勢を崩し、スタートが遅れてしまった為にディフェンスは間に合わない。

大仁多の一次速攻を防げるかどうかは伊月と日向の二人に託された。

二人は元々ゴールに遠い位置で守っていた為に白瀧よりもスタートが早かった。

走りながら白瀧の位置を確認しつつ、すんでのところでディフェンスに戻る事に成功する。

「無駄だ。そんなディフェンスじゃ俺を止められない！」

だが神速とまで謳われた彼の速攻は止められない。

ディフェンスがドリブルを警戒したのか深く守っていることを確認すると白瀧はフリースローラインに到達すると同時に跳躍し、ボ―

ルをフワリと柔らかいタッチで放った。

(ティアドロップか！)

通常よりも早いタイミングで放たれたために二人のブロックは間に合わない。

(大仁多) 4対0 (誠凛)。

白瀧の一次速攻が決まり、大仁多が追加点を上げる。

(速い！ それに加えて早い！ やはり俺達じゃこいつは止められないか！)

「……日向！」

「何だ？」

汗を拭いながら、日向は白瀧の後姿を捉えていた。

鍛え抜かれたスピード、トップクラスのドリブル技術。そして確実に成功させるシュート力。とてもではないが自分では止められないと相手の実力を認めてしまう。

清々しささえ覚えていると、隣を走る伊月より声をかけられた。

「白瀧の守備範囲は予想以上に広い。しかも黒子のパスルートも殆ど潰されている。それくらいインサイドの警戒は高いようだ。一発、外から欲しいところだよ」

『スリーを決めろ』とそう促されて日向は笑みを作った。

火神を止められ、黒子のパスも機能し難いというのなら、確かに自分の出番。そう言い聞かせて日向は力強く答える。

「よしっ、任せとけ！」

それを聞いた伊月が頷くとそれぞれのポジションへと走っていく。万が一立て続けに火神を止められてしまうようでは士気に関わる。インサイドの警戒が強いことも考えるとこれが妥当な選択であった。

伊月は水戸部にもアイコンタクトを取り、作戦を決行させる。

トップで伊月がドリブルを続けながら様子を見る。

ほぼ反対方向にいた水戸部と日向、二人が同時に頷く。先に水戸部が動き出し、少し遅れて日向も駆け出した。

マークマンである白瀧もそうはさせまいと日向の後を追う。だが直後、彼の体を小さな衝撃が走り、行く手を阻んだ。

「うっ!？」

(スクリーン!?)

「外、日向だ!」

白瀧が水戸部のスクリーンに捉まり、代わって三浦が日向の後を追う。

だがマークが完全につく前に日向はエンドライン付近、ほぼ0度の位置で伊月のパスを受け取ると、そのままシュート体勢に入った。

(そこから撃つ気か!?)

「させるか!」

真正面から三浦が迫りつつ跳躍した。

大きな壁が現れるが気にする事無く日向はボールをリリースする。

三浦の腕を通り越す高いループ。

決まるはずだった。タイミング的にもブロックは間に合わない。

だがそのボールは横から突如現れた腕に叩き落とされる。

「……え?」

「させない」

ブロックを決めた相手、白瀧は短く告げ、日向をにらみつけた。

『アウトオブバウンズ! 黒^{誠凛}ボール!』

ボールはラインを割り、誠凛ボールに。

敵にボールが渡らなかつたものの、スクリーンによって白瀧の動きを止めて必勝を心がけていたというのにまたしても攻撃を防がれてしまい、日向は硬直してしまった。

「……こんなじゃない」

未だに強い気迫を帯びたまま、白瀧は続ける。

「緑間の強さは、こんなものではなかつたんだ。本当なら、あいつとここで雌雄を決するはずだったんだ!」

それは日向がかつて再戦を誓い合つた友と同じポジションであるからこそ抱いている怒り。

白瀧は有無を言わさぬ口調で日向へ言い放つた。

「今この第1Qはあなたを緑間だと思つて潰させてもらおう!

秀徳を、緑間を倒したこと! 思う存分後悔すると良い!!」

行き場のない気持ち爆発した。あふれ出す殺気に当てられ、日向は数歩後ずさる。

誠凛が秀徳に勝ってこの場所に立っていること、それだけで白瀧を奮起させるには十分であった。

「……かなりきてませんか？ 白瀧のやつ？」

「それだけこの試合は彼にとって大きなことだという事でしょう」

大仁多のベンチでは、山本が藤代へと問いかけていた。予想以上に自軍のエースが燃えているということに驚きを隠せなかったのだろう。

「日向さんをこの第1Q無得点に抑えると言ったのです。彼の働きに期待しましょう」

だが藤代は当然のように口にした。エースに対する信頼、それは誠凛だけではなく大仁多にとっても同じ事。過信ではないと信じて彼らの姿を見守った。

コートでは一度伊月がインサイドの水戸部へとボールを入れるがシュートまで持ち込めず、三秒経過する前に再び伊月へと戻す。

火神、日向とマークが厳しいためにそれ以外の場所を突いて攻撃したいところだが……

「黒子！」

ミスディレクションで西村のマークをかわした黒子へ伊月がパスを通す。

彼に呼応して水戸部は突如逆方向へ動き出し三浦の不意をつく。

これで黒子から水戸部へのパスコースが空いた。黒子はすかさずタップパスをさばこうとして、しかし両腕でボールを固定する。

「……ッ!!」

「行かせませんよ、黒子さん」

「西村君！」

「白瀧さんに任せられたんだ。好き勝手はさせない！」

水戸部へと通じるパスコースに西村が立ちはだかったからだ。

確かに彼の注意を振り切ったと思ったはずだったが、それでも彼のマークからは逃げられない。

目立たないが試合開始からずっとこの調子が続いている。黒子はまだ一度も西村を振り切れていない。

（なんでだ？ 確かにスピードはあると聞いていたが、それでも黒子のミスディレクションに対応できるはずがない！ それなのに！）

司令塔の伊月は二人の戦いを見て舌打ちした。実力のある相手とはいえ、仮にも黒子は帝光でシックスマンを任されていた選手。そんな彼を止められるとは到底思っていなかった。

だが事実、西村によって黒子のパスは制限されている。

「黒子、戻せ！」

（もう24秒たってしまう！ 俺が打たないと！）

我慢できず伊月は黒子からパスを要求。受け取ると同時にジャンプシュートを撃った。

だが中澤のプレッシャーを受けた上に24秒という焦りは彼から正確性を奪う。

彼のシュートはリングに弾かれ、そしてコートへと戻ってくる。

「リバウンド！ 任せとけ！」

「ッ……!?!」

「ちっ！」

「ナイスリバン、三浦さん！」

ゴール下では三浦と水戸部。本田と火神が争っていた。ポジション争いを制したのは大仁多の選手二人。空中戦も三浦がボールを手にし、誠凛の攻撃の芽を摘みとる。

「速攻！」

「行くぞ西村！」

「了解！」

地につくと三浦は叫びながらロングパスを放った。

伊月と日向はリバウンドを取られたことを察して逸早くスタートしていた。彼らを追う形で白瀧と西村、速さに長けた両選手が飛び出す。ボールは白瀧が受け取った。

（また速攻か。白瀧の得意なパターンだ。火神と水戸部はリバウンドで競っていたから間に合わないし、黒子では到底追いつけない！）

二対二の形。だが状況は明らかに大仁多が有利だった。

伊月は戻りながら必死に策を練るが、彼らの速攻を防ぐ手立ては思いつかない。

そして対策を立てる前に彼らの速攻が襲い掛かる。

白瀧と西村、並走しているように走っていた二人だったが、デイフェンスを目にすると白瀧は伊月をひきつけるように切り替えし、西村はそのまま直進する。

「日向！・ 14番を——」

「遅い！」

すぐに対応しようと声をはる伊月だったが、白瀧の言葉が彼の指示を切り裂いた。

切り替えしの鋭さにより伊月のマークが半歩遅れてしまった。その隙を白瀧は見逃さず、スペースに駆け込んだ西村にパスをさばく。

「西村！」

「ナイスパスです！」

「くっそ！」

動きに翻弄されてもかろうじて日向は体勢を持ち直し、シュートブロックを行う。

西村のシュートを読んだ動きだったが、すると西村は視線はそのままに腕を横に払い、パスをさばいた。

「フェイク——!?!」

「よくやった！」

（リターンだと！）

白瀧から西村、そして西村から再び白瀧へ。

迷いが無い連携の前に誠凛のデイフェンスは崩されてしまい、白瀧のレイアツプシュートが炸裂する。

（大仁多） 6対0（誠凛）

誠凛、未だに攻撃を成功しないまま大仁多に連続得点を許す。

「……くっそっ！ とにかく攻撃だ！ 何としてもまず一本決める！ そこからだ！」

自身も失意が大きい中、それでも日向はチームを守り立てるべく声

を張り上げる。

皆もその言葉に頷くがだが策なしにはこの劣勢を覆す事はできない。

「勢いは衰えず、か。大したものですね。だがどうするつもりです？

俺達はそう簡単には崩せませんよ」

誠凛の気後れしていない姿勢を見て、白瀧は日向に問いかけた。

「ふん！ そんなの知ったことかよ！ これくらいの戦況、気迫でどうとでも——」

「考えなし、か」

希望だけは持ち続けようと、前を見据える日向。そんな彼の言葉を白瀧は吐き捨てるように言った。

「気迫でだど？ ふざけるな。そんなものじゃどうにもならないものがあるということ、俺達は嫌というほど知っている」

「……は？」

日向は白瀧が言っている意味を理解できなかった。

相手は帝光で名を轟かせた選手。天才の一人。ならば白瀧がそのようなことを言うのは可笑しい。むしろお前は才能でそれらを踏み潰す側だろうと。

結局日向は真意を理解できないまま彼との問答を終える。終えようとして、彼の目に黒子の姿が映った。

「ッ——！」

「言ったでしょ！ 好きにはさせないって！」

黒子のカッターが通用していない。西村の徹底したディナイに頭を悩ましていた。

「……そっちの14番、^{西村}あいつは隠し球か？」

「は？」

「ただの選手に黒子が止められるとは思えない。まさか、あいつも何か目を持っているんじゃないか？」

素直に答えるとは思ってもいないが、駄目もとで白瀧へと問う日向。彼が想像したのは自軍の伊月、そしてかつて彼らが戦った秀徳の高尾が持っていた空間認識能力を西村も持っているのではないかと。

それならば黒子が苦戦するのも頷ける。影の薄さを無効化する視野の広さがあるのならば。

「何を馬鹿なことを。黒子の性質についてはあなた方も知っているはず」

「何だど？」

意外な事に白瀧は日向の疑問に答え、そして彼の想像を否定する。

「あいつの影の薄さは誰でも最初は目を疑う。だがそれでもチームメイトが見失わずにすむのは、何度も同じ時間を共有する事で耐性ができるからだ。ましてや“キセキの世代”の様にあいつを頼る事を辞めなかったともなれば、話は別」

「……まさかー！」

そこまで聞いて日向は理解した。

帝光出身とは言っても今まで戦ってきた“キセキの世代”とは事情が違う。彼らは強いが故に個人プレーに走り、黒子の力を必要としなくなった。共に過ごす時間も少なくなった。

「お前らは、ただ単に黒子のことが見えているのか!？」

だが、それ以外の人間は。三年間同じバスケット部に所属していた選手達は。

見る力があるのではなく、ただ普通に見えているだけ。

日向の表情が驚愕に染まる。もしもこの考えが正しければ、この試合は黒子にとっては完全に分が悪い。

「……少し違うな。俺とて黒子の姿は捉えきれしていない。現に何度も見落としている」

「え？」

だが白瀧は彼の言葉を否定した。彼も黒子と同じ時間を共有し、彼の力を必要としていたはずなのに。

「西村だけだ。西村だからこそできる。あいつは、一年のころからずっと黒子のことを目にした。時にはチームメイトとして、競争相手として、応援として。練習で、試合で。観客席から、コートから。ありとあらゆる場所、状況で見ている」

西村はまた別なのだ。彼は白瀧と違い三軍から這い上がってきた

選手。ゆえに白瀧達よりも長い時間黒子と接していた。加えて彼はコートに入れない時機さえあった。

共に同じコートで見っていた。応援席から眺めていたときもあった。ありとあらゆる場所で、立場で黒子の姿を眺めていたのだ。

「そんなあいつが——司令塔が仲間の姿を見失うものか!」

加えて西村はPG。コート上の監督とも言われるポジションだ。だからこそ黒子との連携の機会も多く、試合では誰よりも黒子の姿を捉えていた。

今もそれは変わらないこと。西村の瞳は真っ直ぐにかつての旧友の姿を捉えている。

「……西村君」

「見失うなんて寂しいことはありませんよ。俺達はいこの間まで共に戦い抜いた仲間なんですから」

だからこそ西村に黒子のミスディレクションは通用しない。

かつて苦楽を共にした心強い仲間が、今最悪の敵として黒子の前に立ちはだかる。

——黒子のバスケ NG集——

なし。

「なし!?!」

西條がやってくれた為です。観客席からでも白瀧のことをひと睨み。蛇に見つめられたごとく白瀧もビクツと体を震わせていたし。書いてて面白かった。

「あれNGではなくてただ単に話の流れでしょ!? 面白がって書いてたの!?! てか、修羅場ルートなくなっただんじやなかったのかよ!?!」

修羅場ルート回避。(もう片方が修羅場にならないとは言ってな

レ

第六十六話 読み比べ（前編）

「……くッー」

（こんなこと、今まで無かった。俺や高尾のように目をもっているわけでもないのに。こんなこと初めてだ！）

「黒子！」

冷静な声を頼りに、黒子はもう一度トップの伊月へとボールを戻す。

執拗なマークを前にパスのエキスパートが手も足も出なかった。黒子は結局パスをさばく事ができないままボールをキープするのが精一杯の状態。

そして黒子が掴まったことにより誠凛の攻撃そのものが停滞してしまう。今まで誠凛は黒子のパスワークを基点にチームオフエンスを展開し得点してきた。その連携が途絶えてしまったのだ。

伊月が直接ゴール下の水戸部へバウンドパス。ロールターンから即ゴール下シュートを放つ。

「舐めんな！」

「ッー」

「うらあッー」

マークを振り切れていない現状ではそう易々とシュートを許してくれない。

三浦のブロックショットが炸裂。

加え、本田がスクリーンアウトで火神を封じている間に、競る相手がいない白瀧がディフェンスリバウンドを制した。

「よっしや！ 白瀧ナイスリバン！」

「はい！」

「さあ、もう一本行くぞ」

ボールを掴んだ左腕をしっかりと体の中に引き込む。今度は中澤にボールを託して大仁多が確実に攻撃の権利を手にした。

「また誠凛、得点失敗。得意のオフエンスが決まらないぞ」

「嘘だろ。大仁多のレギュラー大半が不在の中、もうすぐ2分が経

過しようというのに——未だ誠凛無得点！」

(大仁多) 6対0 (誠凛)

攻撃重視のチーム同士の激突だが、そうとは思えないようなスコアが記録されている。

未だに誠凛のシュートはゴールネットを潜ることができていなかった。

(ヤベエ。早く一本決めて流れを掴みたいというのに、全然崩せる気がしない。せめてディフェンスを止めないと)

「二本集中！ これ以上相手の好きにさせんな！ ここを止めて攻撃に転じるぞ！」

『おおうー！』

流れが傾き始めたことはコートの中でもわかった。日向が全員に檄を飛ばし、奮起を促す。

オフENSEを封じられている今、せめてディフェンスで大仁多を食い止められなければ第1Qで下手すればこの試合の勝敗が決まってしまう。

それだけは許さないと改めて全員が集中してマンツーマンディフェンスを敢行した。

(ふーん。さすがにここまで勝ち上がってきただけあって、まだ持ちこたえるか。それなら……！)

誠凛の選手達の勢いが完全に途切れていないことを目にする、中澤はしばしボールをキープした後、45度のポジションに立つ白瀧へとボールを回す。

「行つたぞ、火神！」

「ウツス！」

「来るか。この試合は初めてのエース対決。——火神と白瀧のワンオンワン一対一！」

トリプルスレットの体勢に入った白瀧を火神の鋭い視線が射抜く。両チームがもっとも信頼を置いている二人のルーキー。この試合での真つ向勝負は初となる。

大仁多が優勢の中、さらにエース対決を制することとなれば殆ど確

実に流れを手にする事となる。中澤は試合序盤を制するべく、切り札を早速投入することを選んだ。

「——行くぞ」
「ッ！」

静かに、だが重い一言が放たれ——直後、白瀧の上体が大きく前に倒れた。同時にボールが両手から放たれコートに叩きつけられて彼が前方へと伸ばした左手に収まる。

その一瞬の出来事に火神も反応して後退する。

大丈夫。速さについていけている。そう確信した。だがそこで白瀧の体は止まった。

「なにっ!？」

「遅い！」

踏み込んだ足で制止し、その反動を力に変えて再び重心を倒すと白瀧は加速した。

不意をつかれた火神は目で追うのがやっとで白瀧の突破を許してしまった。

「突破した！」

「ッ！ 白瀧さん！」

「むっ!？」

ミドルへと侵入してきた白瀧に黒子が飛び出して対応する。白瀧にとっては意識の外からの出現だったが、素早い西村の呼びかけで接近する前に気づくことができた。

さらにゴール下から敵のマークを引きずり出したことを目で確認すると、ボールに手を伸ばす黒子をワンドリブルで引っ掛け、黒子の頭上へとボールを放る。白瀧からフリーの本田へ、無事にパスが通った。

「あっ！」

「ナイスパス！」

本田のレイアップシュートが決まり大仁多に追加点が与えられる。

(大仁多) 8対0 (誠凛)

一回目のエース対決は白瀧が物にし、さらに流れを引き寄せた。

「……伊月」

このままではまずいと誠凛の誰もがそう思う中、日向はある決心をして伊月に呼びかける。

堅い表情を目にすれば深く聞かなくても言いたいことは理解できる。伊月は聞きかえすことなくうなずくと、敵陣地へとボールを運んでいく。

伊月から黒子へパスが通る。だが西村を完全に振り切れない状況下、加えて白瀧が深く守っている今はうかつにパスをさばけない。

3秒経つ前に水戸部そして火神へと回し、そこから再びトップの伊月に戻ると——日向へのパスコースを選択した。

（頼む！ 火神が敗れ黒子のパスが使えない今、突破口を切り開けるとしたら日向くらいしか——！）

（パスを受け取ると同時に、スリーを放つ！ いくらやつでもこのタイミングなら！）

ボールを手にするや否や日向は地を蹴り、シュートを撃った。

白瀧の守備範囲が広いとはいえ他のパスコースをも警戒して深く守っているボールを受けた瞬間なら、勝機はある。

そう考えての素早いリリースだった。

「無駄だ！」

だが白瀧の速さが日向の想像を上回った。異常な早さで最高到達点に達した白瀧の指先がボールをはじく。

「……嘘だろ!?!」

（今のタイミングでも駄目なのかよ!?!）

「県予選ではあなたよりシュートが早い選手がいた。言ったはずだ、一点も決めさせないと」

驚愕に染まる日向に、白瀧は語気を強めて言った。込められているのは戦友への思い。伊達に大仁多のエースと呼ばれてはいない。

日向のシュートはリングにはじかれ、得点が決まることなくコートへと戻ってくる。

リバウンドを取るべく本田と三浦、水戸部が手を伸ばした。

「こんの、舐めんなあつー！」

「え!?!」

「なんだと!?!」

だがその3人よりも高く宙に舞い上がる影があった。
火神である。

誰も届かない領域でボールを掴み取ると、着地することなくそのままボールをリングにたたきつけた。

(大仁多) 8対2 (誠凛)

誠凛、ついに初得点を決める。

「た、たかつ!?! 実際に見るとマジで高い!」

「……ちつ。さすがだな」

(さすがに俺がブロックに跳んだ後では火神を止めようがない)

常識を凌駕する跳躍力を見て目を丸くする本田、軽く舌打ちをして賞賛を送る白瀧。

他の選手達も少し負の方向に感情が動く大仁多とは対照的に誠凛は士気をあげて素早くディフェンスに戻る。

「お前は跳ぶことしか能がないのか! だがよくやった!」

「ナイス!」

「うっす」

この試合ようやく誠凛も得点を決めた。これで幾分か気が楽になることは間違いなかった。

喜びつつも万が一のことを考え、敵お得意の速攻を警戒して敵の様子を探っていると……

「大丈夫だ。所詮は単発。あんなの早々決まらない。こっちも一本決めていこう」

中澤がチームメイト4人に対して静かに呼びかけ、動揺の沈静化を図っていた。

「……冷静だな」

(いっそトランジションゲームに持ち込んでくれた方がこっちにとっては嬉しかったんだけど)

彼の素振りを見て同ポジションの伊月は感心した。

失点を派手な形で許しても、動じず自分たちのリズムを崩さない。

十八番である速攻という手もあっただろうが、中澤はまたゆつくりとボールを運んでいく。

まるで誠凛の決めた得点の喜びをじわりじわりと削っていくような遅攻だった。

ようやくスコアが動き、ここから詰めていこうという誠凛の勢いを止めるような。

5秒、10秒、さらに経過して……動いたのはボールを持つ中澤ではなく、白瀧だった。

火神のマークを振り切り、一気に中央へと駆け込む。

「しまったー！」

「くそっ！」

マークが代わり、日向がスイッチ。同時に中澤からのパスコースをふさぐように手を伸ばす。

すると白瀧は右足を踏み込んだ瞬間、上体を倒すと方向を変え先ほどまで日向がいた場所へと向かった。

「いつ!？」

「外がから空きだ」

「撃て、白瀧」

ベストタイミングで中澤からパスが通った。

日向は追いつけず、火神も西村のスクリーンに掴まってしまう。

誰も彼に追いつけないまま、白瀧のスリーが放たれる。フリーの状況下ではすすほど、彼は柔ではない。

(大仁多) 11対2 (誠凛)

中に意識を集中させ、不意をついてのアウトサイドシュート。

失点後、あつという間に点差を広げる大仁多の猛攻は止まることを知らない。

「……人のスリーを止めといて、直後自分はあるとノータッチで決めやがって」

お株を奪われるような形になり、日向は思わず頬をひくつかせた。

だがノーマークであったとはいえ緑間を彷彿とさせるような精密なシュートタッチ。悔しいと思いつつ、素直に凄いと心のどこかで彼

を褒め称えていた。

『誠凛高校、タイムアウトです!』

ここでリコは早くも前半戦一つ目となるタイムアウトを使った。

試合始まって間もないとはいえ、すでにスコアは9点差。火神の一発があつたもののこちらのオフエンスは滞っている。

仕方がない選択とはいえ、誠凛にとっては苦々しい立ち上がりとなつてしまった。

(まさかこの組み合わせでここまで一方的になるとは思つてもいなかった……)

「黒子君、簡潔に西村君のマークはどう?」

相手のスターターを見て、まず第1Qから大差をつけられるような展開だけは避けられると思つていた。どのような思惑があつたとしてもベストメンバーが不在ならば太刀打ちできるはずと。

そんな自分の考えの甘さを悔やみつつ齒軋りを覚えるリコ。

だが時間は無い。彼女は五人がベンチに戻るや否やすぐに黒子に問いかけた。

「正直言うと厳しいです。カットで振り切れない。そうなると元々スピードに長けている彼に分がある」

監督の問いに黒子は表情を歪めて答えた。

現状、黒子の影の薄さが効果を発揮しないならば身体能力で劣る黒子が不利であつた。

元々彼は特殊な選手。その特殊性が通用しない場合、有利不利は明確に現れる。

黒子も当然自分の立場を理解している。故に事実を認める言葉を口にするしかなかった。

「白瀧もさつき言つていた。付き合いが長い西村にはミスディレクションの効果が薄い。おそらくあいつ自身にもある程度耐性があるんだろう。となると、今大仁多のディフェンスを前に黒子のパスワー

クは通用しないという前提で考えたほうがいい」

「……あの、白瀧君がそう言っていたんですか？」

「ああ。さつき俺とマッチアップしていた時に答えてた」

日向の説明を受けた黒子は何か違和感を感じたのか訝しげに眉を寄せる。

一方、黒子が機能しないという報告を受けたリコは一つの決心を下す。

「わかった。黒子君、悪いけど一時ベンチに下がって——」

「いえ、待ってください」

言い終わる前に、指示の先を悟った黒子が彼女を制した。

「これは大仁多の罠です」

「……え？」

「白瀧君がキャプテンに言ったというのはおかしいと思います」

突然の進言にリコだけではなく周囲の者全員が首をかしげた。

この結論に至る事ができたのは中学時代、多くの時間を共にした黒子だけ。

ゆえに理解することができず、火神は不快げに黒子に質問を投げかけた。

「どういう意味だよ？ 何がおかしいってんだ？」

「……白瀧君は試合では容赦ない性格です。間違っても作戦の内容を敵にばらすような事はしない」

「だが、実際俺に対して話してきたぞ？」

「ええ。だからこそ——それこそが大仁多の罠、交代させてその上で何か手を打つつもりでは……」

「えっ!？」

思いも寄らぬ発言に、目を丸くしたのは日向だけではない。

このメンバーの中では一段聡いリコでさえ表情が固まった。

(……忘れてた。私も昨日考えていたことじゃない。藤代監督が策略深い人だっということくらい!)

些細な事ではあるが、白瀧という中心人物が通常とは違う言動をしたならば、それは大きな変化だ。

黒子の交代を促進してこちらの手の内を読み戦略を展開させる。
この考えが本当だとしたら、もう少しで藤代の術中に嵌ってしまう
ところであった。

寸前で黒子が意図に気づいたのは褒め称えるべきフアインプレー
であった。

「じゃあ、どうする？ 交代するにしてもしないにしても、今の大仁多
を止めるのは用意ではないぞ」

しかしそこまで結論に至っても効果的な一手があるわけではない。

伊月の指摘は尤もであり、水戸部も同調して頷いている。

「……いえ、何も手がないわけではありません」

「え？」

「確かに西村君には通じませんが、他の選手は違います。まだ試合序
盤。目が慣れていない。つまり西村君を引き剥がす事さえ出来れば」

まだミスディレクションは機能する。そう黒子は口にした。

今突破口があるとしたら黒子のパス回しだ。

正確に言えばそれだけではないが……リコはチラリと木吉へと視
線を向ける。

「ん？ どうしたリコ？」

「何でも無いわ」

(さすがにまだ早すぎるか)

第1Qで温存しなければならぬ木吉を出すわけにはいかない。

ならば今は切札の考えに乗るべきだろう。今はそれが最善策。

「よし、わかった。メンバーはこのまま行くわよ。ただしオフエンス
は黒子君を中心に立て直す。ボールを持っていない人はひたすら黒
子君をフォローして西村君のマークを振り払って。とにかく立ち止
まったら向こうの思うつぼよ！ 足を動かして相手をかき乱す！
まずはそこから！」

『おうー！』

「それとディフェンス。白瀧君と西村君の速攻は事前に準備してない
と止められない。伊月君、日向君、黒子君はリバウンドに参加しない
ときは常に警戒していて。大仁多のセットオフエンスにはインサイ

ドを中心的にマーク。白瀧君のスリーが最後決まったけど、彼の最大の武器はあくまでも切り込み。外を意識しすぎないように！」

わずか一分という時間に急かさされ、リコは口早に選手達に告げた。的確な指示を出せたとは思っていない。だがそれでも選手達の意識を改めさせ、考えを絞らせることは出来たはずだ。

相手の思惑に引っかかるわけにはいかない、意識しての采配。

だが、この時リコは気づいていなかった。

それこそが、藤代の策であることなど。

「……皆さん、首尾の方は？」

「俺が日向さんに伝えました。ミスディレクションという一枚のカードを失うのは大きい。まず間違いなく黒子の耳にも伝わるでしょう」「そうでしたか」

場面は変わって大仁多ベンチ。

白瀧の報告を受け、藤代の口角が上がる。

確かに黒子の言うとおり、白瀧が日向に西村のことを打ち明けたのは藤代の指示によるものであった。

ここまでは誠凛の考え通り。

だが、重要であるこの後の展開は全く違う。

「あいつは聡い。こちらの思惑に気づいてくれるでしょう。そしてタイプ的に自分でなんとかしようとする引き続き出てくるはず」

「彼が交代してもしなくてもこちらは対応しますが、ですがジョーカーは早いうちに対処しておいた方がよいですからね」

「弱点はある程度克服できますが性格や癖、個性はそう簡単に変えることはできない。——さて、誠凛はどう動くか」

これは戦いの場から離れた場所で行われる一つの戦い、読み合いであった。

相手を知っているのは黒子だけではない。白瀧も同様だ。

観察力に秀でた友・黒子が白瀧の異変に気づき、そして何かあると考え、自分で活路を見出すと。

そして藤代はそこまで理解したうえで、相手の上を行こうとしている。

思慮深い二人の会話に、周囲には冷や汗を浮べる者さえ現れている。

(これ、俺たちが味方だからいいけど敵としてはマジで怖い会話だよな)

(俺は駆け引きとかには疎いほうだから本当恐ろしく感じます)

(いやー、さすがだなー)

三浦と本田は呆れ半分感心半分で、西村は元々知っていた為に微笑を浮べて頷いている。

「一応、黒子の選手交代でオフENSEの戦術を広げるといふ考えもありませんが……」

「いえ、それは無いでしょう。現状誠凛が持ちうる最大限の火力を發揮する主力で挑んでいます。彼らが未だに得点を挙げることが殆どできていない。何とか調子を上げようとするでしょう。木吉さんをまだ出すわけにはいかないし、他の控え選手達は身体能力が低い。守備範囲が広い白瀧さんがケアしている今、彼らを出すのは難しい」

敵の代案策を中澤が提示するが藤代はそれを否定する。

スコアは(大仁多) 11-2 (誠凛)。誠凛は可能な戦力をつぎ込んでいるが戦況は厳しい。

他の控え選手は彼らに代わるほどのパフォーマンスを發揮することは困難。

「それに、代わったとしても皆さんなら十分に対処できるでしょう?」
加えて自チームへの信頼がある。柔な手で崩されるほど脆くは無
い。むしろ押し返してくれると。

満面の笑みでこのような事を言われては、選手達は奮起するしかなかった。

「おそらく西村さんへの対策です。マークをかわそうと考えるでしょう。黒子さんのパスワークが機能しだせば誠凛のオフENSEは厄介です。なのでその点については事前に打ち合わせたとおりをお願いします」

改まって藤代は五人に指示を出す。

こちらにも選手交代の指示はない。元々第1Qはこの五人で制する

予定だったのだ。試合が順調に進んでいくのならば変える理由は何処にも無い。

「他のディフェンスについては引き続きマンツーマンを続行。先の火神さんのプレイを見てもわかるとおり、彼のリバウンドは厄介です。決してシュートが外れたあとも油断しないように」

『はい！』

「オフェンスも変更点はありません。中澤さん、西村さん、白瀧さん。第1Qはあなた達が主軸となります。ここから先も攻め続けるように組み立ててください」

一通り指示を終えて選手達が生に出して頷くと、藤代も満足げな笑みを浮かべた。

慌ただしい誠凛に比べ、幾分かの余裕さえ感じられる大仁多のムード。

とてもベストメンバー不在とは思えないような雰囲気であった。

「……ふう」

「どうしました、白瀧さん？ 不満げに見えますけど？」

「当然だろ。自分の性格を利用されるのは良い気分ではない。自分で利用するなら別だけど」

ため息を零す白瀧。

西村が不思議に感じて問いかけると、白瀧は不満を隠す事無く話し始めた。

「俺にとって策というのは相手に悟られぬようにこっそりと手を打ち、そして敵が気がついたときにはもう施しようがない、というようなものだ。監督のようにわざわざ自分から情報をさらけ出し、手の内を明かすようなことは趣向に合わない」

「……あ、そうですか」

西村の管轄外のことであり相槌を返すに留まった。

たしかに今回の大仁多の策は彼の考えと反するものであろう。すると彼の声が耳に届いたのか藤代が歩みよって口を開いた。

「確かにそれも一理ありますが、情報を知り、こちらの裏をかこうとする相手の裏をかくことは王道ですよ」

「……裏の裏は表、ということですか。なるほど。確かに俺のやり方は正道ではないですよ」

「そういうわけではないのですが」

拗ねた素振りを見せる白瀧を目にして藤代は苦笑した。

幾分か穏やかなムードで大仁多はタイムアウト終了の合図を迎える。

両校の作戦指示が終了、あとは選手達が結果を示すのみ。

「一本！ 確実に決めるぞー！」

伊月は声を大きく出しながらボールを運んでいく。

コートを見渡すが、大仁多デイフェンスに大きな動きはなく、タイムアウト前と変更がないように映る。

試合の入りからずっとデイフェンスが機能した為であろうと司令塔は判断した。

(なら、頼むぞ黒子！)

タイミングを待ち、伊月と火神、黒子の視線が交錯する。

合図に応じてまず火神が動き出す。マークの本田がしつこく追うが目的は彼を引き剥がすことではない。

逆サイドまで走ると立ち止まり、遅れて動き出した黒子を追おうとした西村の前に立ちはだかって彼の動きを封じた。

(スクリーン！)

「本田さん、スイッチ！」

「くそっ！」

(やっぱりか！)

誠凛の思惑通り大仁多デイフェンスのマークが変わる。

姿を隠そうとする黒子を本田が追いかけた。

本田はデイフェンス能力に長けた選手。そう簡単には好きにはさせないと黒子の姿を目で捉え続けるが……

「——ッ!？」

幻の六人目は意識して抑えきれるような相手ではなかった。

ふと本田が周囲の様子を確認した瞬間、勘に触れないほど突然黒子の姿が本田の視界から消えた。

(消えた？ どこに……!?)

消えてしまった黒子を探そうと辺りを見渡す本田。彼の後方に向け、伊月がバウンドパスをさばく。

誰もいない、むしろ本田の守備範囲内。

パスミスか。相手のミスを感じ取って本田が腕を伸ばしたその瞬間——どこからともなく現れた細腕が本田よりも先に触れ、ゴール下へとバウンドパスをさばく。

「ッ!？」

「行け、水戸部！」

「ちいつ！」

ロールトーンで三浦をかわした水戸部の手にボールが収まった。

黒子のバウンドパスにより、ようやくマークを外したタイミングでゴール下へパスが通る。

受け取ると同時に跳躍する水戸部。三浦も必死にブロックを狙うも、水戸部は半身の三浦とは逆方向の腕だけでボールをリリースする。

(フックシュートか！)

三浦の指先はボールに届かず、水戸部のフックシュートが決まる。

(大仁多) 11対4 (誠凛)。

黒子のパスから誠凛が追加点を上げ、ようやく攻撃のリズムを取り戻す。

「よしっ！ ナイツシュ水戸部——」

「……ッ！ 戻れ！」

伊月が水戸部を讃えようと笑みを浮べた瞬間——日向が全員へ警鐘を鳴らす。

彼の目の前で、最も警戒すべき男が動き出したのだ。

「行くぞ、西村！」

「はい！」

白瀧が西村とともに駆け出した。

さらに本田のスローインでボールを受け取った三浦が前線へ矢のようなロングパスを放つ。

大仁多の速攻。失点を許してもすぐに攻撃に動き出したのだ。

「ぐっ！　まずい！」

逸早く気づいた日向であったが、それでも一足遅かった。

パスの弾道を想定しながら二人を追うが到底追いつけそうにない。

「調子に乗ってんじゃねえぞ！　白瀧！」

このままではやられる。

ようやく掴みかけた機会をまた失ってしまう。

その危機を救ったのは火神だった。

並走するのがやつとの状態ではあったが、それでも二人より早く跳ぶと空中で彼らへのロングパスを奪い取った。

「火神!？」

「……た、つか！」

再び自慢の跳躍力を披露して失点を防いだ火神。

わかっていたこととはいえ、この身体能力には歴戦の猛者である二人でさえ目を見張った。

火神は着地すると同じく速攻を防ぐべく近くまで迫っていた伊月へとボールを戻す。

(危なかった。火神がいなかったら間違いなく速攻を決められていた。カントクに言われていたことをもう忘れかけていたか)

タイムアウト時にリコからの指示を再び思い返し、伊月は次からは必ず二人の警戒を厳重にしようと思がける。それほど大仁多の速攻の威力は大きなものだった。

攻守が入れ替わり、再び誠凛の攻撃。

今度は日向が西村にスクリーンをかけると、黒子はミスディレクションを用いて白瀧のマッチアップをかわしてみせた。

「ぐっ！」

「火神君！」

「よっしやー！」

今度は中央の火神にパスが通った。
すぐさまジャンプシュートを放つ火神。

だが本田と、さらに体勢を立て直した白瀧の二人のブロックは、シュートに触れることは出来なかったが彼の精密さへの妨害に成功する。

シュートはリングに嫌われ、リングの外へと落ちてきた。

「ぐっ！ リバウンド！」

「ウオオオオオ！」

「……ッ！」

ゴール下のパワー対決を制した三浦がディフェンスリバウンドをものにする。

そして三浦がボールを確保した瞬間、誠凛の選手達はすぐさま駆け出した。

「戻れ！ 速攻来るぞ！」

声に出したのは日向。伊月と黒子、火神も呼応して走り始める。

「西村、行くぞ！」

「はい！」

そして彼らの想像通り、白瀧と西村は同時にスタートした。

鷲の目で二人が前線へ向かおうとする素振りを確認した伊月は『やはりか』と確信に至る。

悔しいが火神を除けば身体能力は間違いなく大仁多に分がある。特にガード陣は顕著な差があり、速攻を狙われれば簡単に決められてしまう危険性があった。

だからこそ今度はすぐさま一次速攻に備える。

自分の考えは間違っていない。そう確信に至った伊月であったが、いざ自陣に戻ってみると大仁多の選手達はまだセンターラインを挟んで反対側にいた。

「なっ……っ？」

「よし、こちらもまず一本返していくぞ！」

疑問を覚える伊月に対し、中澤は西村とパスを交えながらボールを運んでいく。

確かに白瀧と西村のスタートは本物だった。だがすぐに走るのを辞め、今チームメイトと併走してゆつくりとこちらに迫ってくる。

(ちっ。フェイントかよ)

火神は苛立ちを必死に隠しながら敵が攻めてくるのを待つ。

だが速攻を想定して急いで戻ってきていたがために、中澤の遅攻が余計に彼らの神経を逆なでしていた。

「……さて、それじゃあ行こうか。もう一度誠凛には黙り込んでもらおう」

そんな誠凛の選手達の心境を知ってか知らずか。

中澤は少しずつ、それでいて確実に誠凛のディフェンスへと迫っていく。

彼の両サイドに並んでいる白瀧と西村、二人の存在も相まって、誠凛には異様な不気味さが漂ったことだろう。

——黒子のバスケ NG集——

「外を意識しすぎないように！」

わずか一分という時間に急かされ、リコは口早に選手達に告げた。

「……ッ！ まさかりコ！」

「鉄平？ どうしたの？」

突如、何かに気づいた木吉が真剣な表情でリコを呼び止めた。

何か可笑しな点でもあっただろうかと疑問に感じながらリコは振り返る。

「そんな急いで、ひよっとしてトイレに行きたいのか!? わざわざ俺に合図を送ってくれたのに気づかなくてすまん！」

「違うわ！ 時間がないだけよ！」

「確かに今試合中だけど、俺達がついているから行って来て大丈夫だぞ？」

「タイムアウトの時間のこと！」

天然ボケ男、木吉。

第六十七話 読み比べ（後編）

「ああ？　おいおい、もう試合始まってんじやねーか」

「テメエがのんびりと単独行動したせいで全員が探し回るはめになったからだろうが！」

「本当だよ！　もう、電話もでないから心配したんだからね！」

「うるせえな。メイン会場からサブ会場までの移動があるなんて知らなかったんだから仕方ねーだろ」

大仁多と誠凛の試合が行われている会場、その観客席の一角。試合が始まって数分が経過した頃に数人の集団が現れた。

遅刻の原因である暴君は反省の気さえ見せる事無く非難と心配の声を適当にあしらひ、一人コートへと目を向ける。

「あ？　……なんだこのスコア？」

（大仁多）　11対4（誠凛）

決して予想していなかったわけではないが、予想以上の得点差が広がっており、色黒の選手――青峰は表情を固くした。

「お、おい！　あいつらってひょっとして」

「ああ。間違いない。青峰もいるぞー！」

突如現れた彼らの姿を見て、観客席の一部ではざわめきが生じる。それほど彼らの知名度は高くなっていった。

「……あれが、白瀧の宿敵か」

それは楠も同じ事。目を細め、強敵の姿をしっかりと目に焼き付けた。

「しかも、大仁多はレギュラーが出てないみたいですね」

「ホンマや。小林も出とらん。それでこのスコアかいな」

サブ会場で行われている関東に所在する高校同士の試合。

後に戦う可能性があるだろうと先に三回戦進出を決めている桐皇学園の選手達は戦力を偵察するべく観戦に来ていた。

彼らの目から見てもこの大仁多の布陣は目を疑うものであり、桜井をはじめ知略に富む今吉も首をかしげている。

「なんや知らんが、おもしろい試合が見れそうやな。来てよかったわ」

そう言つて今吉はさらに笑みを深くした。
笑つているというのどこか不気味さを感じる彼の雰囲気。
知らないと言いつつ、すでに幾通りもの考えを張り巡らせているようにも感じられた。

ゆったりとボールをついているのは中澤だ。

マークマンの伊月の動きを警戒しつつ、常に周囲の動きを探っている。

だがドリブルを続けるものの動き出す気配は無い。

24秒という時間制限が迫りつつある中で焦る素振りを出す事無く、ただ時を待った。

5秒、10秒と徐々に時間を費やす中——その時は訪れる。

残り時間が一桁になったところで両サイドの白瀧、西村が殆ど同時に動き出したのだ。

「むっ!？」

「行つたぞ、伊月!」

火神、日向は二人の姿を追いながら伊月へ呼びかける。

一瞬伊月の意識が二人へと向いた瞬間、中澤は西村へ向けパスをさばいた。

(ついに来たか——!)

大仁多の攻勢が始まったのだと全員が察した。

中澤は西村へとパスをさばくと入れ替わるように走り出し、代わつて西村がトップに立つ。

ワンドリブルをはさんで体勢を立て直し、もう一度切り返す。

日向が対応し、追おうとしたその瞬間、白瀧のスクリーンが彼の行動を阻んだ。

「ぐっ!・ スイッチ!」

「おう!」

咄嗟の出来事だったがこの程度のスクリーンプレーにはなれたも

の。

火神がすぐさま呼応して西村を追う。

だが敵のディフェンスが迫るや否や西村は斜め前方へバウンドパス。

素早い方向転換で日向をかわした白瀧の腕にボールが収まった。

(ピック&ロール！)

「白瀧さん！」

「ようし、任せろ！」

連携で誠凛ディフェンスを引き剥がすと白瀧のミドルシュートが決まった。

(大仁多) 13対4 (誠凛)。

タイムアウト後、大仁多も初得点を挙げ再びリードを広げる。

「本当、動き出したらいきなりだな」

「日向！ とにかく取り替えそう！」

悔しそうに白瀧の背中を見つめる日向に一言かけると、誠凛も反撃を開始する。

伊月がボールを運びつつ黒子の位置を確認。

(2連続で攻撃を成功しているんだ！ 黒子さえ機能すれば得点できる！)

日向のスクリーンで中澤をかわすと、ヘルプに出た白瀧に捉まる前にパスをさばいた。

誰にもいない場所であったはずのパスコースに、突如黒子が音もなく現れ、水戸部へとパスをさばく。彼には西村がマークについていたが、こちらも火神のスクリーンでフリーになっていたのだ。

執拗なカットで三浦をかわした水戸部はそのままゴール下シュートを放つ。

三浦もブロックに跳ぶが間に合わない——しかし、寸前で本田のブロックショットが炸裂する。

「させるか！」

「ッ——!？」

「本田!? ……リバウンド！」

「くそっ！」

シュートはリングに嫌われたが、何とか火神がリバウンドを物にした。

すぐさま本田と三浦が火神に迫るが、火神は強引に手を伸ばし再び水戸部へとボールを戻す。

そして今度こそ水戸部のゴール下シュートがリングの中へと収まった。

(大仁多) 13対6 (誠凛)

誠凛も必死に追いつき、大仁多の背中を捉え続ける。これ以上点差は開かせないと。

「あつぶねー！」

「だがいい。黒子のパスもよく機能している。このまま攻め続けるぞ！」

「うっす。これ以上やつらの好きにはさせねえ！」

7点ビハインドの状況だが誠凛の選手達の士気は高まりつつある。ここにきてようやく攻撃がリズムを取り始めつつあるのだ。当然だろう。

「……問題ない。敵のペースに合わせる必要は無い。こっちは予定通り行こう」

だが大仁多の選手達も揺るぐ事はない。

再び中澤は遅攻を展開。ゆっくりと攻撃を組み立てる。

ただ時間を費やしているだけではない。タイミングを計っているのだ。

今度は先ほどと異なり、ハイポストに陣取る白瀧へとパスをさばいた。

(来やがったな！)

「来い！」

ボールが白瀧に近づき、火神の闘志が滾る。

今度こそ先ほどのリベンジマッチを。そう意気込み。背中から圧力をかける。

対してボールを受け取った白瀧は視線を彼に向けつつ――すぐさ

ま斜め後方へとボールを振り下ろした。

「ハアツ!」

「ナイスパス!」

絶好のタイミングで駆け込んだ西村へパスが通った。

瞬時に黒子がヘルプに出るが西村はレイアップの姿勢を見せると、ブロックに跳んだ黒子をひきつけ、彼のわき腹を通す様に黒子の後ろへボールを放る。

「よっしや!」

ボールを受け取った本田がゴール下シュートを決めた。

(大仁多) 15対6 (誠凛)。

失点してもすぐさま反撃し、誠凛を勢いづかせない。大仁多の猛攻は止まることを知らなかった。

(ちっ、また連携! しかも今のパス、白瀧のボールを持っている時間が異常に短い。……正邦との戦いを思い出すぜ。そういうえばこいつも同じだったか)

一対一の勝負に持ち込めないことに憤りを感じつつ、火神は東京都予選で戦った強敵との記憶を呼び起こした。

かつて古武術を応用した達人集団、正邦との戦いを。

彼らと同じように白瀧もまた古武術の使い手なのだ。洗練された動きはそう簡単に見破ることはできない。

「切り替える火神! こっちもオフENSESを決めればすむ話だ!」
「うす!」

だが今は下手に考えたところでどうにかできる問題ではない。

司令塔に促されて火神も走り出した。

(だがそろそろ、こちらも攻め方を変えるべきか)

このまま黒子のマークを外すことが出来ればよいが、それだけではオフENSESが単調になる。

それは避けたいと判断すると伊月が行動に移すのは早かった。

一瞬だけ黒子にアイコンタクトを送り、彼が頷くとすぐに行動を開始する。

ハイポストの火神へとパスを出す。即座に駆け出し、自らも敵陣の

中へと切り込んだ。

中澤も当然彼の姿を追うが、その時、同じく黒子を追おうと逆サイドから走りこんでいた西村と接触した。

「いっ……!!?」

「つつ……!!」

二人が突然の痛みに顔を歪める中、火神から伊月へボールが戻り、そのままレイアップシュートを沈めた。

（こいつ、広い視野で二人の位置を把握して、西村をスクリーン役にしやがった!）

（しかも白瀧のステイールに引つかからないよう、内の火神を中継的確に考えてやがる）

（大仁多） 15対8（誠凛）。

再び誠凛も得点に成功。敵の動きをも利用し、伊月が巧みに得点を挙げて見せる。

「……俺の視野に入っているのはお前達の死や。キタコレ」

「バ、伊月! 戻れ!」

「え? あ!」

つい得点を決めて格好つけている伊月に、日向の精一杯の怒声が響く。

だが彼が叫ぶのも、伊月が気づくのも少し遅かった。

「行くぞ西村、やり返す!」

「了解!」

三浦のスローインからボールを手にした白瀧が西村と共に速攻を仕掛けたのだ。

スタートが遅れた伊月が追いつけるわけもなく、水戸部もワンドリブルで引つ掛けると瞬時の切り返しでかわして駆け上がった。

（しまった! 俺のダジャレで意識が逸れているうちに、再び速攻!）
誰一人として彼のダジャレに意識を向けてなどいなかったが。何はともあれ二人を止めることは容易ではなかった。

水戸部をかわした白瀧は呼ばれるがまま西村へボールを渡す。潜んでいた黒子に対し、ドリブルに緩急をつけて彼を抜き去り、再び

ボールを白瀧に戻した。

（黒子のステイールも、西村がいる以上は決まらない。だが時間は稼げた！）

「二対二だ、止めるぞ火神！」

「当然っす！」

その間に日向と火神は体勢を整えた。これで数の中では有利不利は無い。

（止める！）

（突破する！）

勢いが途絶えないうちに点差を早く縮めたい誠凛とこのままりードを保ちたい大仁多。

あるいは流れが変わってしまう可能性もあるプレーだった。

徐々に迫る中、ドリブルをしているためか少し西村の方が早くゴールに迫る。それに対し日向が前に出て警戒を強めた。

「火神、白瀧を頼むぞ！」

「わかってるっす！」

視線は逸らさず手短かに用件だけを伝える二人。

対して西村は日向よりもさらに外に切り込むように加速。日向を中央から引き離れた。

そこに白瀧が到着すると全力でボールを叩きつけ、切り返す。

クロスオーバー。ディフェンスを揺さ振る基本的なドリブルだが、彼の切り返しの技術をもつてすれば、それだけで十分だった。

「ッ——!?!」

ただ一度の切り返し。それだけで火神は置き去りにされた。

「なんだと……!! 火神！」

（加速がついた状態で、さらに膝抜きによる瞬時の爆発力が生み出される。白瀧さんのこれはとめられない……!!）

エースがあつという間に抜かされ、呆然とする日向達。

逆に西村は当然のことだと笑みを浮かべ——即座に彼の表情が驚愕に染まった。

「後ろ！ 来てます！」

「させつかああああ!!」

西村が叫ぶと時を同じくして火神は跳躍し、白瀧のレイアップシュートのコースを塞いだ。

確かに反応は遅れた。だが白瀧がシュートに向かっているのはわかっている。

抜かれたと判断するや火神は自慢の跳躍力で視覚である真後ろから迫ったのだ。

「……知ってるよ。西村」

敵味方問わず驚愕した中、一人白瀧は冷静だった。

上空へ掲げていた右腕を降ろして左腕にボールを持ち帰ると、火神をかわすようにリリース、ダブルクラッチを放った。

火神の腕は空を切り、ボールはリングの上を数回転した後内を潜り抜ける。

「ダメエー!」

「緑間達秀徳との試合は見させてもらった。何度突破したところで、背後からのお前のブロックを警戒しないはずがない」

(大仁多) 17対8 (誠凛)。

西村とハイタッチをかわしながら、白瀧はゆったりと火神に告げた。

現状、火神が大仁多に対してどう考えているかは知る由はないが少なくとも白瀧は火神を最大限に評価しているのだ。

万全にシミュレーションを行い、対応策を考えて臨んでいる。そう易々と自由にさせてはくれない。

(中々上手く行かないな。敵は連携が絶好調。対してこちらは外中の得点源が徹底的にマークされてる。そろそろ二人にも一本がほしいけど失敗すればダメージが大きい。……ならば!)

これ以上は一つのミスが命取りになる。ましてやタイムアウトを一つ使っている今、誠凛は少しでも可能性が高く、勢いがつく方法をとりたいかった。

その中伊月が選んだ答えは火神の得点である。

水戸部がスクリーンで黒子のマークを振りほどくと、伊月はそこへ

パスをさばく。

結果彼を中継してミドルの火神へ。

「よっしゃー！」

「させねえー！」

火神对本田の対決へ。

今度は白瀧に取られないようにと位置を確認しつつ、火神がドライブを仕掛けた。

本田が食らいつくものの、火神は切り返しに加えチェンジオブペー
スによって本田のタイミングをずらす。本田の体が崩れた瞬間、火神
は全力で切り込み、ついにマークを突破した。

「ちいつー！」

「よっしー！」

「させませんー！」

「ここまでだー！」

「なっ……!?!」

だがマークを外した彼の前に今度は西村と三浦の二人が立ちはだ
かった。

大きく腕を掲げブロックを狙う三浦とステイールを狙う西村。ダ
ブルチームに引っかけ火神はドリブルをとめてしまう。

(やべっ。シュートを撃とうにもこの体勢じゃ……)

身動きが取れず、ボールをキープするのが精一杯の火神。本田もす
ぐさま水戸部のマークについた為にボールを外に出すことも困難
だった。

「火神君ー！」

「……黒子ー！」

そんな火神の耳に届いたのは相棒の呼び声だ。

何とか二人をかわし、体勢を立て直すべくボールを黒子へ戻す。
しかし黒子はパスを受け取ったものの、身動きが取れなかった。

「……っー！」

表情が硬直する。

周りを見渡しても皆大仁多のマークを外せてなく、パスコースが無

かったのだ。黒子はフリーになっているものの、彼のシュート成功率は到底期待できるものではない。

ゆえに動く事ができなかった。

「止まるな！ 黒子、撃て！ 時間も無い！」

「は、はい！」

だがこれ以上は制限時間に引っかかってしまう。

伊月は一縷の可能性にかけて黒子に叫び、ミドルシュートが放たれる。

結果、ボールは三度リングに弾かれ、ゴールはならない。

「リバウンド！」

「ぐっ、のっ……！」

得意のリバウンドの場面だが、火神は二対一の状況となっており、ポジションを取れずにいた。

よいポジションを確保できないまま跳ばざるを得なくなり、ボールへと手を伸ばすが敵の方がボールに達するほうが早く——それよりも早く、一人の男が指先でボールを押し込んだ。

「なっ……!!？」

「水戸部!？」

たしかに本田もディフェンス能力に長けているが、予選で大坪や若松、全国区のセンターとの戦いを経験した本職の選手に分があった。

(大仁多) 17対10 (誠凜)。

水戸部のチップインにより、誠凜も食らいついて離れない。

「よくやった水戸部！ ナイスファイロー！」

讃える声に水戸部はコクリと頷き、微笑を浮べた。

もう少して点差を広げられてしまうところだったのだ。この攻撃成功は大きい。

「……今のでいいんですね？」

「ああ。それでいい」

「よし。じゃあ続行でいくぞ」

一方、失点してしまったものの大仁多の選手達は悔しむ素振りは見せず、中澤を中心にひっそりと何事かを打ち合わせて気持ちを切り替

えた。

一見何か特別なことをしたわけではないが。

先ほどの火神を捉えた一連の出来事。これは何も偶然ではない。

中澤はチラリと視線をベンチに向ける。それに気づいた藤代はゆっくりと大きく頷いた。

「もしも誠凛の方々が西村さんのマークを引き離し、フリーになるよう動いてきたならば……その時は好きにさせましょう」

「……ん？」

「重要なのはその後。パスを出させた後に相手のシュートをとめることです」

「……んん？」

昨日。対誠凛戦に向けるミーティングの際の出来事。

藤代の説明に選手達の中には首を傾げるものが続出した。

「あれ？」「何かこの話どこかで聞いた気がする」「ていうかまさか」と選手達の中で何か思い当たる節があるのだろう。相談の声があちこちで聞こえ始める。

「ええ。お察しの通り、盟和高校の金澤さんと対峙したときと同じです。

——トラップディフェンス。要は黒子さんのパスコースを制限させます」

記憶に新しい先日IHの切符をかけて戦った強敵、盟和高校との戦いと同じ作戦だった。

今回の敵もミスディレクションを使い、こちらの視界を掻い潜ることを得意とする名選手。

防ぐ事は西村以外の選手は対策をしていない以上容易ではない。しかしこれならばと。

「ただし今回はあくまでもパスコースを制限する事。黒子さんについては特に警戒せず、他の選手への警戒を強めてください」

「何故です？ それでは彼にシュートを許すことになるのでは？」

「それについては、白瀧さん」

説明に納得できず、小林がそう問いかけると藤代は白瀧の名を挙げた。

名指しに返事をして立ち上がると視線が集まる中白瀧はゆつくりと口を開いた。

「理由としては単純明快。黒子のシュートについては警戒する必要が殆どないからです」

「……いや、確かに身体能力が低いとしても、さすがにフリーの状態じゃあ」

「決まらないでしょう」

「え？」

さすがに馬鹿にしすぎだと神崎の眩きを遮ったのは同じく帝光中出身の西村だった。

二人は黒子のことをよく知っている。ゆえのこの対策だった。

「黒子さん、本番だけではなく練習中フリーの際でも、打ち込みの際でも基本シュートは決まりませんでした。よくて2割に届くかどうかだと思います」

「……え」

「高校に入って改善しているのではないかと、と考える人もいるかと思いますが、少なくとも正邦・秀徳戦では一切得点を決めていません。このことから可能性は非常に低いと考えられます。まあ三年間できなかつたことを半年でできるようになることは難しいと思いますよ」

嘘をつく性格ではないということとは誰もがよく知っている。

ゆえに頬をヒクつかせながらも全員が今の説明を飲み込むことができた。

「つまりそういうことです」

未だに納得しきれていないものもいる中、藤代が二人の説明を継いで話し始めた。

「それならいっその他の選手に警戒したほうがよいでしょう。黒子さん

以外のマークを一瞬緩くし、パスを誘導させた後、全力でその選手を対処する」

これが藤代の提案した黒子への対策だった。

多少のリスクを許すことになるが、その分メリットも大きい。成功すれば誠凛が被るダメージは大きいだろう。

相手の力を分析した上での最適な答えと言えるものだった。

「ただし、この手は毎回使ってはなりません。相手のオフエンスに対して多くても二回に一回、できれば三回に一回防ぐ程度が望ましい」
「……なんでです？」

「相手の得点は防げるだけ防いだほうが良いのでは？」

「言ったでしょう。ジョーカーを早いうちに対処すると」

再び多くの者が首をかしげ、頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「つまり悟られないため、ということでしょう」

勿論理解できたものもある。

白瀧もその一人であった。

「何度も防がれば敵として気づく。ならば気づかれない程度に、しかしピンポイントで防ぐ事で相手のリズムを崩す事ができる」

「おお、成程！」

「流石白瀧さん！」

あれだけの説明だけでよくそこまで考えが浮かぶものだと光月や西村から喝采の声が上がる。

その声に当てられ、白瀧も気分をよくして――

「ああ。まあそれもありますかね。本命は違いますが」

すぐさま藤代に切り捨てられることとなった。

一瞬で沈んだ白瀧を橙乃たちが慰めている中、白瀧と同じ結論だった小林が咳払いを一つして話を戻す。

「では、一体どういう目的で？」

「……気づかせない、という点はあっています。黒子さんを機能させ続ける、といえましょうか」

続けられた言葉にすぐに理解を示せたものは殆どいなかった。

「おそろく何か考えてのことでしょうね」

時間は戻って観客席。

大仁多の動きを敏感に感じ取ったのは桃井だ。

分析力に長けた彼女の勘が大仁多のプレーに反応したのだろう。

「ああ。そもそもこのメンバーで挑んでいることから考えられるわ。ここまで周到なこと、よう考え付くもんやで」

今吉も彼女と同じ考えに達したのか何度も笑いながら頷いている。

彼から見えない後方では後輩が「お前が言うな」と手を振っているが、おそろく気づいた上で見逃しているのだろう。

「でもよくやりますよね。ベンチメンバーでこれだけの連携を見せるだなんて」

「……そこらへんは強豪校と普通の高校との違いやな」

「え？」

感慨深そうな若松の呟きに、今吉は少しトーンを低くして答えた。

「誠凛のように人数に余裕があるチームはレギュラー争いがそう激しくない。せやけど大仁多みたいところはたとえ部に入ったところで試合に出れるかどうかからん。下手すれば三年間試合に出れずに終わってしまう。毎日が同僚との競争や。せやから一試合にかける気持ちは、比喩物にならないで」

試合に出れたならば、これからも出られるようにと奮起する。

下手すればこの一試合で出番が終わってしまうかもしれない。そんな危機感が彼らを動かすのだ。

「結果的にそれがええ方向に進んでいるみたいやな。誠凛は練習でも人数が足りへんからどうしてもチーム戦術に対する反応が他より遅れてしまう。火神なんかは今までエースとの一対一ばかりやったから尚更や。白瀧がキセキの世代と違って、二対二や三対三と徒党で挑んでくるとは思ってもなかったやろし……」

そこまで踏まえたうえで、このチームオフエンスを展開しているのなら大したものだと、今吉は不気味な笑みで口にした。

「さあ行くぞ」

大仁多の攻撃が再開される。

今度は中澤のボール運びからオフエンスが始まった。

ゆったりとした手つきは変わらず、すぐに攻めてこない。

(ちっ、何時になつたら攻めてくるんだよ！)

その素振りに沸点の低い火神は苛立ちを募らせる。

ゆっくりとした攻めは早く追いつきたいと願う相手を煽る効果もあつた。

そんな彼の心境を知つてか知らずか、残り10秒のタイミングで大仁多の選手達が動き出す。

今度は白瀧が中澤からボールを受け取り、入れ替わる形でトップに立つ。

「ようやくだ！ 白瀧！」

フラストレーションを爆発させるように火神は叫ぶ。

だが、先ほどと同様クロスオーバーで白瀧が抜きさろうとした瞬間、火神の体に柔らかい衝撃が走る。

「ッ!」

「スクリーンだ！」

(重っ!!)

そこにいたのは西村。体格が大きく違う火神の体を何とか押さえつける。

(てことは……いや、さっきみたいにピック&ロールで——)

火神の脳裏をよぎつたのは先ほどの白瀧の攻撃だ。

先ほどの再現。そう推測が浮かび——直後、西村がいる方向とは異なる方向へと切り込む白瀧の姿が目映った。

(ダブルクロスオーバー!? エクスプロージョンか!)

虚をつかれた火神は一歩行動が遅れてしまい、白瀧のレイアップシュートを防ぐ事ができなかった。

(大仁多) 19対10 (誠凛)。

いよいよ大仁多が20点台に得点を載せるところまで来たのだ。

「やろー！」

自分の思うように動く事ができず、敵には自由にされて火神の苛立ちが最高点に達しようとしていた。

「……あの馬鹿。大仁多に好き勝手やられやがって。このままだとヤバイんじゃないか?」

観客席からその様子を伺い、呆れたように零したのは青峰だ。

「せやな。10番のパスで何とか持ちこたえている今、誠凛は崩れたら持ち直すことは容易やない。せやけど、そろそろオフエンスが耐え切れなくなってくるころやな」

今吉も彼の意見に同調する。

焦り、苛立ちというものは選手にとっては悪循環になる。

こういったものは選手達から余裕を奪い、精密性を奪う。

彼らの言うとおり、黒子のパスを受けた火神のシュートはリングに嫌われ、得点に失敗してしまう。

「あっ!?!」

(しまった……!)

本田の圧力があつたとはいえ、リリースポイントがずれてしまった。

加えてリバウンドを制したのは三浦だ。ディフェンスリバウンドまで取られ、誠凛は追撃の機会を逸してしまう。

「西村、行くぞ!」

「はー!」

失態を嘆くよりも早く、白瀧がスタートする姿が映った。

これ以上好きにさせてたまるかと火神も駆け出すが、しかし今度も二人は最初の数歩で走るのを辞め、中澤にボールを預けている。

(こ、の、や、ろ、う……!)

ついに火神の我慢が限界を迎えた。

中澤がゆったりとボールをついている姿を目にし、火神は白瀧のマークを放り投げ、中澤へ向かって飛び出したのだ。

(どうせ時間を費やすまでは動かねえんだろ! だったらその前に獲ってやる!)

「ば、馬鹿火神! 動くな!」

日向の静止の声を無視して一直線に走る火神。

直後、白瀧がスリーポイントラインに向かう姿が見え、日向がそちらへと向かうが――

「残念だったな」

彼らの思惑に反し、逆サイドへとパスがさばかれた。

ボールを手にしたのは日向がマークしていたはずの西村。

（しまった――!!!）

白瀧の動きは囷に過ぎなかった。それに気づいた時にはすでに西村がミドルシュートを放っている。

（大仁多） 21対10（誠凛）

先に二十点を越えたのは大仁多。再び11点差とし、誠凛を寄せ付けない。

（……くそっ！ だが！）

「走れ！ 火神！」

だが黙っていられる性分ではない。

火神が先頭で走り出すと水戸部からスローインを受け取った伊月がロングパスを放る。

「速攻だ！」

「白瀧！」

「言われずとも！」

先ほどの仕返しだといわんばかりの攻撃。

だがセンターライン付近で火神がボールを受け取ると白瀧は彼の前を走っていた。

時間を稼ぐだけではない。奪ってしまおうと火神に襲い掛かる。

「ッ、白瀧さん！ 右！」

「な……」

（スクリーン！）

（ナイスだ黒子！）

その白瀧に向けて西村の忠告が放たれた。

いつの間にか彼の右横に黒子が迫っており、スクリーンで彼を封じ込めた。

その間に火神は横から白瀧を突破。

これで白瀧は追いつけない。そう黒子や火神は思った。

だが――

「なっ」

白瀧は黒子の体を軸に回転し、彼をかわして再び火神を追った。

「馬鹿な！ 反応が遅れたっていうのに！」

「あの距離でスピードを殆ど落とすことなく、黒子をロールターンでかわした!?!」

（なんてボディバランスだ!）

「ちっ……!」

「残念だったな」

そして白瀧が火神に再度追いつき、時間を稼いでいる間に西村たちも戻ってしまい、誠凛の一次速攻は失敗に終わる。

「……成程。これが狙いだったんだな」

「何かわかったの?」

攻守が一段落つき、一通り大仁多の戦術を理解した楠。

西條に促されて楠は少しずつ大仁多の、強いては藤代の考えを語り始めた。

「白瀧を含め、PG適正のある選手三人の存在。これは大仁多のオフENSそのものに緩急をつけるものだったんだ」

「そのものに?」

「ああ。白瀧と西村、二人の速攻のエキスパート。そして遅攻でゲームを作る中澤。」

時に速く、時にゆつくりと相手のリズムを惑わし、上手くいけば調子を崩すこともできる」

現に先ほどのオフENSがよい一例だ。特に怒りやすい火神には効果が抜群であり、相手の策略に乗ってしまう形となった。

速攻が得意な二人の電撃作戦と中澤の遅攻。正反対の行動は劣勢の敵には嫌に映るだろう。

「レギュラー不在の中、この三人を軸と決め、徹底的に誠凛を追い詰めている。」

特に白瀧と西村の働きが大きい。——とても一年生とは思えないな」

「そうね。この大舞台でここまで活躍するなんて」

「いやそつちじゃない」

予想外の反論に西條が首を傾げると、楠は笑って先を続ける。

「これほどの連携をあの速さで行うことだ。やっていることは基本のプレーも多く決して派手さは無い。凄いのハマるで当然のことであるかのようにあつけなく。そして簡単であるかのようにあつさり決めてしまうことだ。この二人からは尋常ではない信頼を感じる」

そして彼の言葉を体现するように、コートでは黒子からのパスを受け取った日向を白瀧と西村が追い詰めている。

攻撃では赤司がいた為見られなかった帝光時代では見られなかったコンビネーションを展開し、ディフェンスでも二人の連携に乱れは一切無い。

(駄目だ、シュートはおろか身動きが取れねえ！)

「もらったー！」

「あつ!？」

日向の動きが硬直したその時、西村の腕がボールを弾いた。ボールはコートを転々としてコートの外へと跳ねていく。

「アウトオブバウンズ！ 誠凛ボール！」

一時的に時間が止まり、選手達は一息つきながら様子を警戒する。そんな中で、中澤がゆつくりと西村に近づき声をかけた。

西村の様子に感づいたのだろう。第1Qとは思えないほど息は荒くなっていた。

「大丈夫か、西村?」

「は、はい！」

「やはり、辛いかな？」

「いえ、そのようなことは……」

強がりだということは明白。だが無理もないことだった。

攻守問わず黒子をマークしつつ彼を抑え込み集中力を費やし、オフェンスでは白瀧との連携の為に走り続けている。ひよつとしたら

大仁多の中では一番負担が大きいかもしれない。

「西村」

「何ですか」

「まだ行けるか？」

すると二人の様子に感づいたのか白瀧も視線は日向へ向けたまま、背中越しに西村へ問いかける。

「出していただけならば、今度こそ最後まで共に戦えます！」

「……よし、その言葉信じるぞ。ペースを上げる。遅れずについてこい」

白瀧も彼の様子は理解した。理解したうえでそう告げた。

やはり視線を向けることはしなかったが、力強い返事が耳に届き、白瀧は嬉しそうに笑みを浮べた。

「……正気かよお前。黒子の相手をしているんだ、並大抵の疲労じゃねえはずだ」

「敵の心配とは余裕ですね。ですが問題は無い。あいつはそんな柔なやつじゃない。それに」

試合が再開され、すぐさま話しかけてきた日向の意見を切り捨て、彼は続けた。

「西村は俺の言葉に肯定で返した。——あいつは俺の期待を裏切らない！」

二人の間に、根拠や理屈といった確かなものは存在しない。あるのはただ信頼という不確かなもののみ。しかしだからこそ彼らの関係は強く、途切れることがない。

今までがそうだった。これからもそうなのだと。

伊月から黒子へパスが通るが、西村が必死のディフェンスで彼の動きを封じ込める。

「ッ……！」

「止める！ 絶対に！」

その気迫に押され、黒子は水戸部へとパスをさばいた。

だがマークを外せてなく結果的に伊月へとボールが戻る。

(時間がない。でも、もう決めなければ！)

堅牢なディフェンスを前に黒子が一つの決意をする。

日向とアイコンタクトを取った後、彼のスクリーンにより再びフリーになる黒子。

そこへ伊月のパスがさばかれるが白瀧がパスコースを察して立ちはだかった。

「ここは通さん！」

「いえ、通らせていただきますー！」

たしかに普通のパスならとめられてしまうだろう。

だが、一つだけ西村にも白瀧にも止められないパスが黒子にはある。

左足を一步前へ踏み込み、右腕を大きく後方へ引き寄せると——ボールが目の前へ来た瞬間、右腕を大きく突き出し、ボールを弾き飛ばした。

「ツ——!?!」

「あつー！ やばっ、白瀧さんー！」

黒子の得意技、イグナイト加速するパス。

強大な威力が加わり速度が大幅に増したパスを前に白瀧が反応することができず、彼の顔面の真横をボールは通過していった。

「——ツー！ ツシャー！」

痛みを堪えつつ、本田のマークをかわし、ボールを受け取った火神はそのまま思いが籠ったダンクシュートを叩きつける。

(大仁多) 21対12 (誠凛)。

黒子の強烈なパスが飛び出し、再び点差を1桁に戻す。

「ようしー！」

「皆、油断しないで！ すぐに戻って——」

また二桁に点差を広げられた中、粘りを見せて嬉しさを浮べる選手達。

だがベンチのリコは冷静に白瀧の速攻を警戒して声を張り上げ、そして気づく。

今のプレイの、もつと詳しく言えば黒子のイグナイトパスの直後にコートの中で生じた異変に。

「おい！ おい、白瀧!?!」

「どうした!?! どつかぶつけたのか!?!」

何かに恐怖を覚えたのか、白瀧が膝から崩れ落ち、体を震わせている。

当然コートの選手達は何が起こったのか見当がつかず必死に呼びかけている。

西村、そして黒子という例外を除いて。

「……キャプテン」

「あ? どうした黒子?」

「今思い出しました。……もう一つあります。白瀧君の弱点」

その二人の会話を西村は聞いてしまい、そして戦慄した。

黒子の無表情が今までに無いほど怖く感じたのだ。

——黒子のバスケ NG集——

「ここは通さん!」

「いえ、通らせていただきます!」

たしかに普通のパスならとめられてしまうだろう。

だが、一つだけ西村にも白瀧にも止められないパスが黒子にはある。

左足を一步前へ踏み込み、右腕を大きく後方へ引き寄せると——

ボールが目の前へ来た瞬間、右腕を大きく突き出し、ボールを弾き飛ばした。

「ビギヤツ!?!」

「あっ」

黒子の得意技、加速するパス。

強大な威力が加わり速度が大幅に増したパスを前に白瀧が反応することができず、彼の腹部へと吸い込まれていった。

その威力を前に、白瀧は膝から崩れ落ち、口から魂が抜け落ちた。

「白瀧さん——!?!」

「ちよっ、何をやってくれたんだよお前!？」

「すみません。手が滑りました。もう一回お願いします」

「ドラマのNG集じゃねえんだぞ!？」

ちなみにこの後二回の失敗を経てようやく成功した。やり直し一度目は白瀧の顔に直撃し、二度目は白瀧の白瀧に直撃した。しばらく白瀧は動けなかった。

第六十八話 二つのトラウマ

——それは突然起こってしまった事故だった。

「ガアッ……アッ!？」

白瀧を襲う強烈な痛み。

腹部への衝撃は強烈なもので、ボールはその形に添うようにめり込み、強制的に彼の肺から空気を押し出した。

呼吸ができず、息苦しさが全身を駆け巡り、白瀧はコートへと倒れこんだ。

「あっ」

「白瀧——!? 死んだ!？」

「黒子! 一体何をしたのだよ!？」

帝光バスケット部午後の練習、チームを二つに分けての紅白戦。

ミニゲームも中盤に差し掛かり、全員が集中力を最大限に発揮している頃、悲劇は起こった。起こってしまった

赤司から黒子を経由して、フィニッシュの青峰へとつなげようとしたところ、読まれたのか黒子の前には白瀧が立ちはだかった。

「すみません。新しいパスを試してみました」

「どこかパスなのだよ!？」

「白瀧死んでんじゃねえか!」

しかしフリーの青峰へとどうしてもつなげたい場面。

ここで黒子は新パス——イグナイトパスを試そうと考えた。

イグナイトパス。おそらくは今の青峰なら取れる、それでいて白瀧のステイールを上手く防げるかもしれない。

しかし未だにパスの精度は定まらず、方向が逸れて白瀧へと命中してしまった。

犠牲となった白瀧はコートに力なく倒れ、指先一つ動かない。

「……とりあえず、威力の方は問題ないようです」

「何冷静に分析してんだ!？」

「それについては今はいい。それよりも……」

「おい。白ちん、生きてるー？　生きてるなら返事ー」

「……まずは白瀧の介抱が先だな」

主犯黒子、そして彼を問い詰める青峰と緑間を制し、赤司は視線を紫原が手でつついている白瀧へと向ける。

呼びかけに声は返ってこなかった。

「なっ……!?!」

誠凛の攻撃を防ぎ、大仁多にとっては十八番であるはずの白瀧の速攻が展開された。

しかし敵陣まで攻め上がりながらも白瀧から西村へのパスが逸れ、西村が完全に確保する事ができず、ボールはラインを割ってしまう。

(どうしたんですか、白瀧さん!)

「アウトオブバウンズ、黒^{誠凛}ボール」

「速攻ミス、2連続!」

「ここにきて大仁多が勿体無いターンオーバーだ!」

彼らしくも無いミスを犯し、大仁多は連続で攻撃を失敗してしま
う。

案の定ボールは誠凛側に渡ってしまい誠凛の反撃を許すことと
なった。

第1Q途中で生じたエースの乱調は誰も想像しなかった形で試合
の流れを変えてしまっている。

「ちっ!」

ボールを運ぶ伊月に対し中澤が前に出る。

パスをさばく前に対処してしまおうとの考えだったが、伊月は視線
を彼へ向けたままノーリックパスを出した。

斜め横に走りこんだ黒子の元へボールが向かい——再びイグナイ
トパスが放たれた。

「ッ——!?!」

「ッッアアッ!　もらった!」

「火神！」

怯みつつも手を伸ばすが、白瀧の腕は届かない。そして火神が歯を食いしばりながらもボールを手にした。

本田が懸命に跳躍するが火神のミドルシュートを止めるには至らない。

(大仁多) 21対14 (誠凛)。

黒子と火神の連携で誠凛が徐々に点差を縮めていく。

「ナイス黒子！ 火神！」

「ナイツシュです」

「手マジで痛いんだけど!」

「我慢してください」

「お前後で覚えてろよ！」

一時は劣勢のまま第1Qを終えてしまうのかとも思ってしまったが、ようやく誠凛は流れを、雰囲気を取り戻し始めた。

苛立ちをぶつける火神、それをかわす黒子。二年生達がそれをフオローし、デイフェンスへと戻っていく。

「……落ち着け！ まだ点差はあるんだ。一本ずつ決めて行くぞ！」

対して大仁多は中澤が声を張り上げ緊張を沈めようと試みた。

さすがに連続で速攻を失敗した今、得意の一次速攻に頼るわけにはいかず西村と連携してボールを運ぶ。

中澤のデイレイドオフセンス。時計に目を向け時間を考慮しながらも確実にボールを運び攻めあがって行く。

白瀧が調子を崩した今、そう簡単には攻め込まない。

まずは確実にゴール下の三浦へボールを入れる。

その後、シュートまでは行かず一度西村へ戻し、そこから白瀧へとボールが繋がるが……

「ッ!? 白瀧さん！」

「あっ！」

右腕にボールが納まりきらず、弾いてしまった。

(白瀧のファンブル!?)

「よくわからんが、チャンス！」

「日向！ 上がるぞー！」

まさかのファンブルにより、ボールは日向の手に渡った。すぐさま伊月へとパスを出して反撃へと移る誠凛。

「させるかー！」

「むっ!?」

それを止めたのは西村だった。

パスを受けた直後の伊月の動きを見逃さず、彼の腕からボールをはじき出した。

「アウトオブバウンズ！ 黒^{誠凛}ボール！」

西村のステイールが炸裂。

ボールはコートの外へと出てしまったが、誠凛の一次速攻を阻止する。

戻る時間を稼ぎ、流れを区切る事には成功したのだった。

「白瀧さん、大丈夫ですか？」

「……ああ」

「いくら火神さんとはいえ、そう何度もあのパスを取れるとは思えません。黒子さんだつて味方の負担が大きいプレイを連発するはずはない。

俺達もサポートはします。ですから今はしつかり！」

「……わかっている」

少しでも落ち着いてくれればと西村は並走する白瀧に声をかけた。勇気づいた、とは少し違うかもしれないが白瀧は語気を強めて西村に返答する。

これ以上自分が揺らぐわけにはいかないとわかっているからこそこの行動だろう。

「……すみません。そう簡単にこの流れを戻させるわけにはいきません」

そこに誠凛の影が忍び寄る。

日向がスクリーンをかけて西村を引き剥がし、フリーになると黒子は中央へ。

白瀧がマークについた瞬間、伊月からパスが放たれ——黒子は左足

を前へ突き出し、右腕を後方へと引き込んだ。

「なっ!？」

(この構えってまさか、イグナイトパス連発!?)

「鬼かあんたは!!」

まさしく、白瀧が立ち直ることなど許さないといわんばかりの黒子。

敵は勿論だがそれを唯一受けることが出来る火神でさえも表情を凍らせた。

たちまち西村はフォローへと向かう。

だが、黒子はボールが手元へと来た瞬間、ボールを確保するように両手で押さえつける。そして自分が元来た軌道へとパスをさばいた。

「よっしや! ナイスパスだ黒子!」

「しまった……!」

(中ではなく外! 狙いは日向さんのアウトサイドシュートか!)

本命に気づき、戻る西村だが日向がシュートを撃つほうが早い。

そして日向がようやくこの試合初得点を叩き出した。

(大仁多) 21対17 (誠凛)

誠凛のスリーが決まり、その差はわずか4点。シュート二本差、大仁多の背中が目前に迫る。

「なんや、いきなり崩れたのう大仁多」

「ええ。先ほどまでは明らかに誠凛劣勢の状態だったのに」

「あー。……こりゃ、白瀧のやつ思い出しちまったな」

「思い出した?」

観客席から見ても異変は明らかであり、多くの者が違和感を抱く。そんな中数少ない答えを知る一人である青峰は複雑そうに表情を歪め、話を続けた。

「昔帝光時代にテツが初めてイグナイトパスを見せたとき、逸れて白瀧に当たったことがあってよ。それ以来、あのパス苦手にしてんだ。実際中学の時もイグナイトパスだけは連携でやってなかったし」

「……は?」

「苦手って、それだけで調子を崩すようなものですか?」

「それだけならな。ただその後、テツが何かあるたびに脅しに使うようになつてな」

「えっ」

「テツは冗談半分だったんだろうが、そのせいで完全に恐怖の対象になつちまつた。それを半年ほど経つてようやく忘れた頃にやられて萎縮してんだろーぜ」

青峰の傍では桃井が「そういうえばそんなことがあったかも」と彼の言葉を肯定している。

つまり、青峰の言葉は全て事実であり、今白瀧にとつては黒子の姿は悪魔のように映っていることだろう。自分の心の弱みを狙い打つ魔の姿。

観客席でさえ白瀧の異変に気づいているのだから、コートにいる者、ベンチにいる者がわからないはずが無い。

大仁多の指揮官、藤代も当然気づき、行動に移そうとしていた。

「――山本さん、佐々木さん」

「はい！」

「なんででしょう？」

視線はコートをそのまま見つめながら、藤代は二人の選手を呼ぶ。「予定を変更します。すぐにウオームアップをお願いします。次の攻守次第ではありますが……タイムアウトを取り、選手交代を行います。出てもらいますよ」

ここが試合の分岐点であり、動くポイントであると判断したのだ。

もう一度だけ様子を見て立て直すならばよい。しかし駄目ならば動かざるをえないと。

「ッー」

「わかりました！」

山本と佐々木はすぐさま立ち上がり行動に移った。

第1Qの残り時間は多くは無い。だからこそ次の第2Qへと繋げるため、悪い流れは断ち切る必要がある。

戦況の急変により大仁多のベンチは少し慌ただしく動き始めた。

そしてそのコートの動きはコートに立つ選手にも伝わる。逸早く

気づいたのは中澤と西村だった。司令塔という立場上、こういったベンチの動きにも機敏に感じ取れたのだろう。

(山本さんと、あれは佐々木さんか？　ってことは選手交代、あるいはタイムアウトもか)

(ポジションで考えれば俺と白瀧さんの交代。当然か。ある程度黒子さんの動きは把握できたし、白瀧さんが抜けるとなれば外から打てる戦力も必要となる)

(……けど)

(だったら尚更！)

理解できた以上、信頼を取り戻す必要がある。信頼が揺らいでの交代なら、まだ取り返せるはずだ。

中澤と西村の視線が合い、同時に頷いた。

大仁多が許されるシュート権の残り時間16秒、少し早いが中澤は動いた。

西村のスクリーンで伊月を突破。切り込んだところで日向がヘルプに出る。完全に彼に捉まる前に中澤はパスを選択。ハイポストの白瀧へとボールが渡った。

「来いよ白瀧！　さっきまでの勢いはどうした!？」

「……調子に乗るなよ火神」

息を一つ吐いて落ち着かせ……白瀧が仕掛ける。

左腕を伸ばす。パスフェイクを一ついれ、直後一気にロールターンで切り込む。

「ッ!？」

速い。しかし目は捉えている。

火神は体勢を崩しながらもジャンプシュートを撃とうとする白瀧へ向け跳ぶ。

さらにゴール下から水戸部も駆けつけ二対一となった。

「ちいっ！」

視界を阻まれながらも強引に放ったシュート。

二人はブロックこそ失敗したがボールはリングに阻まれている。

「強引過ぎだ！」

「リバウンド！」

普段ならばパスアウトかあるいは他のシュートセレクションも想定できたはず。

しかし普段よりも精密性にかけている今の状態では余裕が多くない。これがベストな選択。

それでも外れてしまい、後は他の選手達に可能性を賭けた。

(いや、だが十分だ！)

「7番水戸部や10番火神がいねえなら、こっちのもんだ！」

ゴール下のポジションである選手二人がブロックに跳んだ今、リバウンドは大仁多が圧倒的に有利。

三浦が体を張って日向を抑えると、本田が反応してチップインでボールをゴールへ押し込む。

(大仁多) 23対17 (誠凛)

意地で堪える大仁多。試合はそう易々と振り出しには戻らない。その差六点。

「……伊月」

「え？」

「くれ。一気に詰めよう」

今、誠凛に流れが来ているのは間違いない。ならばこの勢いを逃す手は無い。

だからくと、日向は背中越しに伊月に伝えて走っていった。

いつもよりも幾分も頼りに見える後姿は彼が乗っているということを示している。

ならば考える必要は無い。

伊月はボールを運ぶや否やスリーポイントラインの外に陣取る日向へとパス。

そしてボールを受けた日向はノーフェイクでシュートモーションに入った。

「撃つ気か!? スリー！」

「白瀧！」

「こんのっ！」

既に何度もブロックされているにも関わらず白瀧との真つ向勝負。一度は決まったとはいえ今度は黒子のサポートも無い。舐められてたまるかと白瀧は跳ぶが、日向は構わずボールをリリースした。

ボールは白瀧の指先をわずかに超えてリングへ向かっていく。

(届かないか。だがプレッシャーはかけられた！ 落ちる！)

「リバウンド！」

「おうっ！」

ブロックは出来ずとも圧力は相当なものだ。

入るはずが無いと三浦と本田がスクリーンアウトを行い——彼の目の前で、ボールはリングを射抜いた。

「——ッ!？」

「入った！」

「日向、スリー二連続！」

「いよいよ調子が出てきたぞ！」

(大仁多) 23対20 (誠凛)

ついに三点差。スリー一本で追いつくほどに誠凛が詰め寄せる。

(……ここまでだ。本当ならタイムアウトは使いたくなかったが……)

そして藤代が立ち上がった。

予定では第1Qでタイムアウトを使うつもりは無かった。木吉という未だ状態を完全に把握していない相手、そして黒子というトリッキーな存在がいる誠凛。そして試合開始直後での予想外の策により敵が浮き足だっている状況下で相手を落ち着かせるような時間をとらせたくはなかった。

しかし今、それ以上に大仁多のエースの状況がよくない。

彼の動きに大きな問題があるわけではない。だがどこか吹っ切れていないような状態。

エースの活躍はチームを活気付ける重要なもの。

まだ試合は序盤なのだ。少しでも早く立ち直ってもらわないと困るが、精神的な問題を自分一人で振り切ることは難しい。

ならばと藤代は覚悟を決める。

「待つてください、監督」

「……なんででしょうか？」

「つまり白瀧君を立ち直らせることができればいいんですね？」
「はい？」

申告をしようとする藤代を呼び止めたのは橙乃だった。

突如の予想外の呼びかけに、藤代は疑問を覚えながら振り返る。

「確かにそうですが、そう簡単な話では……」

「私に任せてくれませんか？ タイムアウトの三十秒、私に下さい」

何か考えがあつてのことだろう。

アイディアを読みきくことは出来なかったが、それでも駄目ならば次の策を打つだけ。

藤代は彼女の提案を了承し、そしてタイムアウトを申告した。

ベンチが動いている一方、勢いに乗った誠凛は積極的に大仁多ボールを奪おうとしていた。

「止めるぞー！ 一気に追いつくんだー！」

「こんのっー！」

三点差に迫り、士気が高揚している今、誠凛の選手達の動きは凄まじいものだった。

トップの中澤もボールをキープしているがそう簡単に仕掛けることができない。

逆に24秒ルールに迫られ、戦略の幅が狭まってしまふほどに。

「三浦ー！」

「……ッ！ 駄目だ、中澤さん！ そこはー！」

強引に伊月を振り切り、ゴール下へとパスをさばく中澤。

異常に気づいた西村の警報が響くが少し遅かった。

三浦がパスを受ける寸前で黒子がボールを叩き落とす。

（ステイール!? 一体どこから?）

「ちいっー！」

弾かれたボールを獲ろうと西村と日向が競り合う。

西村が確保した直後に日向が弾き、再びボールは転々とする。

「よっしー！」

このままボールが外に出れば大仁多ボール。

中澤が安堵して息を吐いたその瞬間、伊月が無理やり手を伸ばし、そして中澤の足元へとボールを叩きつけた。

「えっ!?」

「——アウトオブバウンズ。黒^{誠凛}ボール!」

「よしっ!」

「ナイス伊月!」

頭を活かしたフラインプレーだった。

大仁多の攻撃を防ぎ、しかもボールは誠凛の手に渡る。

誠凛にとつて最高の防ぎ方であった。

『大仁多高校、タイムアウトです!』

そしてここで藤代が申請した一分間の試合の途切れが入る。

タイムアウトにより選手達は其々のベンチへと下がっていった。

「皆さんお疲れ様です」

「白瀧君、白瀧君はこっち」

「……え?」

大仁多の選手達が次々に椅子へ腰掛ける中、一人白瀧だけは橙乃に促され端の椅子へと座る。

「皆! お疲れ様! いい感じよ! この勢いを忘れないで!」

一方、誠凛ベンチではリコが満面の笑顔で出迎えた。

ベンチメンバーからタオルやドリンクを受け取りながら視線をリコへと向ける。

「一気に三点差まで詰め寄せたのは大きいわ。大仁多も間違いなく焦っている。この第1Qで追いつき、追い越すわよ!」

「おう!」

大仁多が焦っている。それは間違いないだろう。

藤代にタイムアウトを使わせたというのがその証拠だ。前半戦二つしか取れないものを優勢だったはずの敵が使っているのだから。

第1Q中盤までは藤代の読みどおりだったが、ここにきて日向のスリーもあつて誠凛が勢いづいている。

ならばこのまま試合を振り出しに戻したい。いや引っくり返した

い。

選手達も疲れはあるがそれ以上に燃えている。力強い返答が響いた。

「よしっ。とりあえずを現状確認。大仁多は白瀧君が攻守でキーマンとなっていたけれど、彼が崩れたことで攻守のリズムも乱れているわ。まずはオフエンス——」

説明を続けようとして、突如響いた乾いた音に遮られた。

「……え？」

「何だ？」

一体何の音かわからず、リコをはじめとして日向達選手が聞こえてきた大仁多のベンチへと視線を向ける。

その視線の先で、今一度橙乃が白瀧の頬を叩き、乾いた音を響かせた。

「ツ!？」

声にならない悲鳴を上げる白瀧。

最初、理解が追いつかなかった。橙乃に言われるがままベンチに腰掛けて前を向いた途端、白瀧の視界は大きく左に逸れ、頬は徐々に熱を持ち始めた。間をおいて痛みを感じはじめ、疑問に感じて再び前を向くと同じ衝撃が今度は逆の頬を襲う。

「な、何を——」

文句を言おうとした瞬間、再び鋭い痛みに見舞われる白瀧。

言葉を遮られてしまい余計な口を挟めばやられると感じざるをえなかった。

「……いやいやいやい！ ちょっと、橙乃さん!？」

「何をやってんだよ、オイ！」

しかし外野が黙ってみているわけもなかった。

呆気に取られるものが多い中、立ち直った西村と本田が橙乃に詰め寄る。

「黙ってて」

それをニツコリと、橙乃は笑顔一つで黙らせた。

「あ、はい」

「どうぞ続けてください」

逆らえば二の舞になると判断し、ベンチに戻る二人。

邪魔がなくなったことを確認すると橙乃は頬を抑える白瀧へと向き直る。

「白瀧君」

「……ふぁい？」

痛みのみならず涙目になり声をかすらせる白瀧へ向け、橙乃は天使のような笑みで告げる。

「次、白瀧君のミスで誠凛が勢いづく度に一回叩くから、頑張つてね」それは今まで見たことがない、比較しようが無いとても綺麗な笑顔だった。だが守りたくないと感じるものだった。できるならば、もう二度と目にしないことを祈るばかりである。

「……ッ!!」

有無を言わさぬ圧力に当てられ、白瀧は口を開いたまま黙り込む。それを了承と受け取ったのか橙乃はコクリと頷くと藤代達の下へと歩み寄った。

「こちらは終わりました。後はよろしくお願いします」

「……え？ いや、その……え？ よろしくって言われましても」

「あの、白瀧は？」

「白瀧君は大丈夫だそうです」

「どこら辺が!? 大丈夫な要素が今一個でもあった!？」

問題はないと藤代に後を託す橙乃。

だが彼女の答えに納得して頷くものは一人もいなかった。

『タイムアウト終了です!』

そして波乱とも呼べるタイムアウトが終了する。

「……よくわからんが、何だ？ 大仁多の内乱？ 内部崩壊が起きたのか？」

「相手のことは気にしない！ とにかくまだうちが攻めている！ 一

気に追いつき、逆転するわよ！」

大仁多ベンチの動向に疑問を抱きつつ、コートへと戻る誠凛選手達。

彼らでさえこの様子なのだから大仁多の選手達は尚更だった。

「大丈夫か、白瀧？」

「……もうベンチに戻りたくないです」

(あかん)

(大丈夫じゃないぞこれ)

切実に泣き言を漏らす白瀧。両の頬はいまだに赤く腫脹しており、彼の痛みを代弁していた。

「キャプテン」

伊月がボールを運ぶ中、黒子は日向に近づき一つ耳打ちする。

「僕もわかりませんが、白瀧君が持ち直すと少しまずいです」

「ああ。流れが再び向こうに行きかねない」

「はい。なのでとりあえず様子見を兼ねて——トドメをさしましよ
う」

「ああ。……ん？」

あれ。何か矛盾してないか、と言おうとして既に黒子の姿は無かった。

誠凛の攻撃から試合は再開。

大仁多のメンバーに交代はなかった。藤代は白瀧の状態を考えて代えるべきと考えたが、逆にいえば白瀧が立ち直るのならばこの面子的のまま第1Qを終わらせたい。

ならばこそこの五人に託した。

(……やる気だな。まあいいぜ。どっちにしろ白瀧は越えないといけない壁だ！)

伊月はその五人を確認し、そして味方の動きを把握して、やる気を察知し笑みを浮べた。

ワンフェイクを絡めて伊月はパスをさばく。

同時に黒子はミスディレクションで西村のマークを一瞬だけかわし、白瀧が陣取るミドル付近へ走りこんだ。

そこで——黒子が放つのは彼の得意とするパス、イグナイトパス。
(またか——!?)

(タイムアウト後、早々に!?)

「白瀧さん！」

構えだけで全員が狙いを理解した。

火神も本田を振り切り、パスを受け取る構えは万全だった。

ゆえにもう躊躇う理由は無い。

今一度黒子が渾身の力を右腕に込めてボールを叩きつける。

「……………ああああああああ!!!」

それはキセキの世代、そして火神しか取れない専用のパス。

現にあの高尾でさえこのパスを防ぐ事は出来なかった。

だが、今白瀧の腕がボールを弾き、軌道をずらす事に成功した。

「なっ!？」

「まさか、水戸部！」

「……………」

火神へとパスは通らず、ボールは水戸部が何とかカバーし、すぐに
トップの伊月へと戻す。

しかしその間に西村も立て直し、大仁多のディフェンスは隙の無い
状態になっていた。

「……………くそっ」

腕に走る衝撃を堪えつつ、白瀧は頭を上げて叫んだ。

「ちくしよおおいやああああ!!!」

力強い叫びとは裏腹に、彼の瞳から滴が零れ落ちたのは決して気の

せいではない。

(^{トラウマ}橙乃でイグナイト^{トラウマ}パス克服しやがった!?)

(…………いや、果たしてこれを克服と呼んでよいのだろうか?)

多分、絶対、よくない。

どうか試合が終わった後、二人の関係が壊れてしまうようなことが
ないようにと西村は思いを馳せた。

そしてタイムアウトで流れが途絶え、白瀧が調子を取りもどしたこ
とにより、試合は膠着状態になる。

誠凛は水戸部が、大仁多は白瀧がそれぞれ一本ずつシュートを決めるが、一進一退の攻防のままお互い譲らない。

(大仁多) 25対22 (誠凛)

三点差を保ったまま激動の第1Qは幕を閉じた。

——黒子のバスケ NG集——

「よしっ。とりあえずを現状確認。大仁多は白瀧君が攻守でキーマンとなっていたけれど、彼が崩れたことで攻守のリズムも乱れているわ。まずはオフエンス——」

説明を続けようとして、突如響いた乾いた音に遮られた。

「……えっ？」

「何だ？」

一体何の音かわからず、リコをはじめとして日向達選手が聞こえてきた大仁多のベンチへと視線を向ける。

その視線の先で、今一度橙乃が白瀧の頬を叩き、ベキツと鈍い音を響かせた。

「ギイアツツ!？」

「あっ」

短い悲鳴を上げて床へ倒れこむ白瀧。何が起こったのか理解する前に彼の意識は途絶える事となった。

「白瀧さんが死んだ!」

「ちよつと! 本当に何をしてくれてんだよお前!」

「……………やりすぎちゃった」

「ちやったじゃねーだろ!」

「テヘツ」

「『テヘツ』ですむかー!!」

こいついつも死んでんな。

第六十九話 戻ってきた鉄心

(大仁多) 25対22 (誠凛)

第1Qは終盤誠凛が追い上げ、三点差まで詰め寄る事に成功した。そしてここで試合の区切りとなるブザーが響く。

『これより2分間の休憩インターバルに入ります』

アナウンスを聞いてようやく選手達は一息をつき緊張の糸を緩めた。

まだ序盤でありながらも選手達の疲労や汗は相当なもの。すぐにベンチに腰掛けて補給へと移り始めた。

「三点差かあ。なーんだ、誠凛やるじゃん」

「大仁多圧倒かと思つたら予想以上に食らいついているわね」

その試合を観客席から見つめている選手達の中には、最強と謳われた者達の姿もある。

高校最強、洛山高校。そのレギュラーに名を連ねている葉山、実渕。既に一足先に勝利を収めた彼らは準決勝で当たると予想される陽泉高校、そして大仁多高校と誠凛高校の試合を観戦に来ていた。

「要の乱調があったとはいえ、第1Qの間に大差を埋められたのは誠凛にとつては大きい。後は第2Qをどちらが取るかだが、両校がどう動くか」

主将、赤司も静かに椅子に腰掛けている。冷静な瞳は両校のベンチへと向けられていた。

「誠凛はさつきと木吉を出すことだな。あいつがいねーと誠凛のゴール下はもたねえぞ」

そんな彼とは対照的にやや苛立ちを覚えているのは根武谷だ。

同ポジションとして、そして木吉に並大抵ではない因縁を抱く彼にとつては木吉がベンチにい続ける現状は腹立たしく思うことなのだろう。

確かに彼の言うとおり第1Qは大仁多がゴール下を制していた。

水戸部を相手に三浦がパワーで圧倒し、本田もリバウンドを数多く決めていた。

火神も要所要所でリバウンドを獲っていたものの、白瀧を相手にしていた為に確実に取れるという保障はない。

リバウンドはバスケットにおいて重要な要素。試合の行方を大きく左右する可能性を持つ。

少しでも優勢に立つには彼の力が必要だと、根武谷は木吉をにらみつけた。視線には気づいていないのだろう、呑気とも取れる彼の笑みが余計に怒りを増幅させる。

「俺としては白瀧の方が気になるかなー。第1Q中盤までは暴れてたし、もっと点取ってくれば面白いのに」

「面白いって、あんた随分と余裕ね。もし大仁多が勝ち上がってきたらあんたがマークするかもしれないのよ?」

「大丈夫だって」

一方、葉山は根武谷とは違う意味でのライバル意識なのか、同ポジションの白瀧の活躍を祈るような無邪気な様子が窺えた。

近い将来戦うかも知れない強敵だ。その敵を彼のように純粹に興味津々で応援するのはどうなのかと実渕は苦言を呈する。

だが実渕の忠告に対し、葉山は挑発的な笑みを浮べてこう続けた。「だってもう俺の方が上ってわけでしょ?」

言葉に宿っているのは自分が最強であるという自信。そう、彼らもはや無冠ではない。

確かにかつて白瀧が『キセキの世代』と呼ばれていたころは白瀧の方が上だったかもしれない。しかしその後は一度も栄冠を掴んでいない。むしろ彼の方がトップから遠ざかっている。

対して葉山達三人は洛山で1年間優勝を経験した。

すでに彼らの立場は逆転しているのだ。彼らは迎え撃つ立場なのだ。

これについては実渕も同意しているのか「ならいいけど」と呟くに留まる。

「……まあ皆がどう考えるのかは其々だが、その闘争心は戦うまでとっておくと良い」

赤司もまた然り。

対抗心などの話については興味を示さず、ただ目の前で作戦会議を続けている選手達へと目を向けた。

「第1Q終わってシュート一本差。二桁離して第2Qに突入というのが理想だったのですがまあよいでしょう」

その頃、大仁多高校のベンチ。藤代は少々の愚痴を含めながら選手達に告げる。

確かに予定通りには進まなかったが決して悪いというわけではない。リードしているのはあくまでも大仁多の方なのだから。

「ええ。白瀧も第1Q15得点と好調のスタートを切れたわけですし、決して悪くはないかと」

「そうですね。無得点に抑えると言っていた日向さんにスリーを二本許すなんて、さすがエースの働きですね」

「橙乃、もうやめて！ 白瀧のライフはゼロよ！」

監督の言葉で少し落ち込んだ白瀧を小林がそう励まそうとすると、橙乃が横から痛いところを的確に突き刺す。グサツと見えない矢が白瀧に突き刺さり、咄嗟に神崎が彼を庇うように橙乃を諭した。

「……良い所、悪い所があったでしょう。それは構いません。何が起こるかわからない試合ですからね。それよりもまずは第2Qについて話しますよ」

話が逸れる前に藤代が呼びかけ、改めて注意を向けさせた。

皆の顔が引き締まったことを確認して藤代は話を続ける。

「まず最前提として、メンバーの話ですが。……予定通り元に戻します。」

小林さん、山本さん、白瀧さん、光月さん、黒木さん。準備は良いですね？」

「はいー」

「当たり前ですよー」

「元々俺は出ていましたから」

「何時でもいけます」

「……お任せを」

奇策はここまで。ここからは正面からの激突。

藤代が最も信を置く選手達、レギュラー勢ぞろいで第2Qへ臨む。五人は皆異なる返事で、同じ気迫が籠った返答をした。

「オフエンスは打ち合わせ通りに。ディフェンスはマンツーマン、マークは白瀧さんと光月さんの相手が入れ替わるくらい——と言いたいところですが、その前に小林さん、白瀧さん。お二人に問います。出ると思いますか、彼は？」

満足げに頷き方針を伝えようとして、途中で藤代は駆け引きに富む二人に問いかけた。

名前を出さずともわかるだろう。藤代の視線は誠凛ベンチ、茶髪で大柄の選手へと向く。

「……8対2で出るかと」

「小林さんに同意です。シュート一本差とはいえギリギリの状態です。手遅れになる前に手を打つてくると思います」

「そうですね。私も同じ意見です」

そして三人の考えは一致した。

誠凛の切札、木吉が動く。

幸か不幸か彼らの予感は的中する。

「……鉄平、水戸部君と交代。第2Q頭から出てもらおうよ」

丁度同じ頃、誠凛ベンチでもリコが選手交代の指示を出しているところであった。

「ああ。任せろ！」

指示を出された木吉が笑みを浮べてそう口にした。

水戸部と視線が合うと水戸部が無言でコクリと頷き、木吉はさらに笑みを深くして彼の意志に応えた。

「第1Q、大仁多は普段とは異なる選手達で私達の動きを封じ込めてきた。けどここからは違うはずよ。きつと万全のメンバーで来る。うちも木吉を投入した最大火力で点の取り合いを制するのよ！」

「おう！」

「……カントク。こっちはそれでいいが、相手がまた同じ選手で挑んでくる可能性はないのか？ 失速があったとはいえ、途中までは完全に相手の流れだった。このまま行くという可能性も」

「確かにそれも手ではあると思うけど、十中八九レギュラーを投入するはずよ」

「何かそう考える理由が？」

選手の中では最も冷静である伊月が他の考えを提示しリコへと問いかけるが、彼女は彼の考えを考慮したうえでそれはないと否定する。

「現状の五人は本来の面子と比べて身体能力は劣っているわ。おそらくは私達の出鼻を挫くための奇策。でもああいう人は同じ作戦を二度も連発はしないはずだから」

ゆえに大仁多も動いてくる。

そして変えるのならばまず間違いなくいつもの五人、レギュラーで挑むであろうと。

リコも藤代の考えを探りながら対抗策を考えていた。

「だから今度は相手の全力を真正面から打ち破るわよ！」

ここからが本当の勝負だと。

お互い攻撃力が高いチーム。本気の選手達が競り合うとなれば点の取り合いとなるだろう。

望むところだと、選手達は意気揚々と試合再開へ向けて志気を高めていく。

『休憩終了です！』

二分が経過してついに試合が再開される。

「よし、行って来い！」

『おうー！』

誠凛は水戸部に代わって木吉を投入。

考えられる限りで、誠凛最強の布陣で第2Qへ挑む。

「ようやく出てきやがったな木吉！」

「テツヤも第2Qまで出場か」

待ちに待った木吉の出場を目にして根武谷の口角が上がる。

赤司は黒子が交代しないことを確認し、少しばかり目を細めた。リードされているとはいえ、ミスディレクションの効果は薄くなり始める時間帯を気にしたのだろう。

「では頼みますよ皆さん」

『はい！』

対する大仁多も白瀧以外のレギュラーも勢ぞろい。

最も長い時間強敵と渡り合った五人が揃ってコートへと足を踏み入れた。

「ここからが本番やな」

「……ハッ。おせーんだよ。さっさと勝負を決めやがれ」

最も見たかった役者が揃い、今吉は笑みを零す。

対照的に青峰は少し退屈そうに呟く。それを聞いたチームメイトは『お前が言うな』と心の中で遅刻ばかりの暴君に突っ込んだ。

(……小林君たち主力不在で彼にボールが集まりやすかったとはいえ、火神君のマークを相手にもう15得点。実にチーム総得点の半分以上、五分の三が彼によるもの。栃木得点王の名は伊達じゃない、か) リコは冷や汗を浮べて第1Q、誠凛を追い詰めた白瀧を見つめる。エースと呼ぶに相応しいスコアをたたき出しており、しかもここからは彼以外にも得点を叩き出してしまいう力を持つ選手が集う。

「第2Qは小林投入もあつて大仁多ガード陣の得点も増えるだろう」

「うちとの試合でもそうだったもんね」

「おそらく第1Q以上に大仁多は攻めの手を強めるはずだ。そうなる」と誠凛は半端な攻めはできなくなる。となると……」

確実に、自チームが有利なポイントを攻める。

楠の言葉が的中し、誠凛を率いる伊月はローポストにポストアップする木吉へとボールを通した。

「いきなり来た！」

「無冠の五将——『鉄心』、木吉！」

事情はあれど信頼は揺るがないということだろう。

伊月に対して小林が、日向には山本、火神には白瀧、黒子には光月、木吉には黒木がマークにつく中、第2Q最初の攻撃は木吉に託され

た。

「悪いな。俺もそろそろ攻めたいと思うんでね」

「む?」

「得点、もらうよ」

爽やかでありながら凄みを感じさせる笑みを黒木に見せて、木吉は一気に動いた。

「なッ!」

（――速い!）

左足を軸に回点、ワンドリブルで黒木を抜くとリングと正対して跳躍した。

（ターンアラウンドシュート!）

「明!」

「わかってる!」

大仁多の対応も早い。

ゴール下で黒子をマークしていた光月が反応し、ブロックを狙う。すると木吉は光月のブロックをかわす様に腕を折りたたみ逆手に持ち返るダブルクラッチを放った。

「あッ!」

「上手い……」

（光月のブロックも読み切った!）

（大仁多） 25対24（誠凛）

第2Q初の得点は誠凛高校。大黒柱木吉の得点が反撃の狼煙を上げる。

「高さもそうだが、それでいてゴール下でのあの動き。」

……成程。お前が言っていたように司令塔を務めていただけはあ
る」

「ええ。黒木さんの負担が大きくなりそうです」

（というか、あの人本当に怪我していたのか? ビデオでもそうだったけど、少なくとも中学戦った時と遜色ない。いや、それ以上の強みを感じる）

小林の呟きに白瀧も同意して首を縦に振った。

そして同時に、かつて戦った時にも勝る凄みを感じ、白瀧は冷や汗を浮べずにはいられなかった。

あるいは、彼の存在が本当にこの試合の優位を引っくり返してしまおうのではないかと。

「センター対決。……誠凛は木吉を中心に攻撃を組み立てる気か」

「あの人、相当な人なんでしょう？ となると大仁多も不味いんじゃないか……」

「いや、この十人なら誠凛にとつて多少有利な一面がある様に、大仁多にとつても大きな有利な点がある」

誠凛のオフエンスもレベルが高くなったことを感じ、西條がそう楠に苦言を呈する。

その不安に楠は冷静に返してコートに立つ小林へと視線を送った。

「くっ!？」

小林のポストアップ。大仁多は伊月と小林、高さのミスマッチを突いた攻めを展開する。

他の選手を見ながらも徐々に近づいていきロータリー一つで伊月を置き去りにした。

「あっ!？」

「小林、抜いた!」

「よしっ!」

(小林と伊月、大きすぎる体格、経験の差。これは埋めることが難しい)

確かに伊月も相当な実力を誇る司令塔だが、全国区と世間の評価が高い小林を防ぐ事は難しい。

そして小林は視線をゴールに向けたまま、左サイドの白瀧へパスアウツ。

完全に敵の意表を突いたそのパスだった。だが、そのボールは突如現れた黒子によって防がれてしまう。

「なっ!？」

「えっ!？」

(さっきまで近くにいたはずなのに、気がついたら消えてた!?)

「ナイス黒子！」

マークされていた光月でさえ気がつけない。神出鬼没の黒子はディフェンスであろうともミスディレクションの効果を発揮する。

「反撃だ！ 速攻！」

大仁多の攻撃が失敗し、ボールは誠凛高校の手に渡る。

すぐにボールを運び相手が体勢を立て直す前に攻めてしまおうと試みるが……

「させねえよ！」

「ちっ！」

「そう簡単に決められるわけにはいかないのだな」

大仁多の戻りは速い。

白瀧は勿論、山本と小林もすぐにディフェンスに戻り、続いて黒木と光月がゴール下を固め、誠凛の一次速攻を完全阻止することに成功する。

「駄目だ、戻り速い！ 誠凛の速攻不発！」

「……だが！」

しかし攻めの手を緩めはしない。

トップに立つ伊月から日向へパスが通る。

すかさず日向が得意とするスリーポイントシュートを放った。

「無駄だ！」

「ぐっ!？」

ここで山本のブロックが炸裂。

指先がボールに触れ、日向のスリーポイントシュートは失敗に終わった。

「外れる、リバウンド！」

そして勝負はゴール下の選手達に託される。

木吉と火神の長身が揃い、誠凛もリバウンドに関しては遅れを取らない戦況になっていたが、ここで光月が奮闘を見せる。

「要！ ここは僕が！」

「……ぐっ！」

白瀧の動きを封じ込めていた火神を、光月がスクリーンアウトで抑

える。

その間に白瀧は火神を突破しポジションを確保。

火神が追おうとするが、光月のスクリーンアウトから抜け出せない。
い。

(コイツ！ 重い、ビクともしねえ！ 情報でも聞いていたが、15番^本_田達を差し置いてレギュラーに選ばれるだけはあるか)

火神も相当なパワーを誇るが、光月はそれ以上であった。初めて会った時にも感じていた強さを改めて感じ取った。

そしてその間にボールは落ちてくる。

二度リングに衝突し、跳ね返ってコートに落ちてくる。

「もらったー！」

白瀧がボールを手にする。

左手を伸ばして掴み取り、体の中心へと呼び込む。

無事に着地まで行い、反撃の速攻へと移ろうと前を向いた瞬間——
再び黒子のステールが牙をむく。

「なっ——!?!」

「もらいます」

(くそっ、まだ か……!?)

白瀧の腕からボールが零れ、しかも木吉が転がったボールを手にした。

「よしっ！」

「木吉！ こっちだー！」

「日向！」

「マズイ！」

すると0度のポジションへ走る日向が声を張った。

木吉は躊躇う事無く腕を折り曲げてパス先の日向へと向ける。

またスリーが放たれる。それだけは防ごうと黒木と白瀧が反応し

——木吉は両腕を伸ばしきりパスを出す瞬間、右手だけでボールを掴んで反転。ゴール側へと躍り出た。

『なっ!?!』

——ありえない。

大仁多の選手達の脳裏をよぎった感想だ。

完全にパスを出すタイミングで、その動きだったはずだ。

しかしその木吉は今、ディフェンス二人をかわしてダンクシュートを叩き込んでいる。

(大仁多) 25対26 (誠凛)。

ついに誠凛が逆転。この試合始まって初のリードを手に入れた。

「……なんだ今の?」

(パスを出す、というか出したタイミングのはず。だから俺も反応したというのに……)

明らかに常人であればパスからドリブルへの切り替えは間に合わないはずであった。だからこそ白瀧達も釣られてしまった。

予想していた以上の強さを誇る木吉。彼の存在が一気に試合の流れを変えようとしている。

少なくとも大仁多の選手達はそう感じていた。

「明。もしも黒子（黒子）が消えたなら声を出してくれ。さすがに俺達もあいつがどこにいるかわからない状態では切り込みにくい」

「わかった。最初の分は取り返すよ」

「……さっきのは仕方ない。頼むぞ」

木吉だけでなく黒子もまだ機能している。

最小限の対処はしなければならないと白瀧は光月に声をかけた。

何の抵抗もなく頼もしい答えが返ってくることに少しの疑問を浮べつつ、白瀧は光月と共にオフENSEスへ駆け出した。

「誠凛が連続で得点に成功、な。これでさらに大仁多のオフENSEを止めるようなことになれば」

「流れが一気に誠凛や。試合が傾くぞ」

「ですがこういう場面でそう簡単に流れは渡さないでしょう。おそろく次のオフENSEも」

小林が攻めてくる。

青峰、今吉が試合の行方について論じる中で桃井は一人冷静に大仁多の次の手を読んだ。

そして彼女の読みどおり小林が今度はダブルクロスオーバーで伊

月のマークを突破する。

「速いっ!?!」

すさまじいキレを前に、伊月は棒立ちであった。

しかも今度は光月がしっかりと黒子の動きを捉えている。

小林は悠々とハイポストへ侵入。ストップからシュートフエイクを一ついれて、火神のブロックをかわした。

「なっ!?!」

(しまった、フエイク!)

「もらった!」

「行け、小林!」

(10番さえ封じれば、小林の読みについていけるやつは誠凛にはいない!)

試合の重要な点で決めるのが主将。

そう示さんばかりに小林が今度こそジャンプシュートを撃ち——突如彼の目の前にもう一枚、大きな壁が現れた。

「そうはさせせん!」

「ッ! ……木吉!」

木吉のブロックショットが炸裂。しかも弾かれたボールは小林の足に当たり、ラインの外へと転がってしまった。

「アウトオブバウンズ! 黒^{誠凛}ボール!」

「なっ……!」

「小林さんが、止められただど!?!」

大仁多の誰もが認めている実力者である小林を、完全に止めた。

しかもこれでボールは誠凛の手へと渡ってしまう。

「……鉄心!」

ギリッと噛み締める力が強まった。

自分が決めなければいけない場面で、止められてしまった。

「さあ、まだまだ序盤だ。楽しんでいこうぜ!」

小林が忌々しく見つめる中、木吉は彼の視線をかわしてチームメイトへと声をかける。

味方にとってはとても心強く敵にとってはこれ以上ない恐ろしい

存在が誠凛に加わった。

「あの小林さんを止めるなんて……」

「鉄心。読み合いにも強いというのか」

（連続得点を許し、主将のシュートが止められた。これで誠凛は一気に勢いづく）

予選で大仁多と戦った西條、楠はこの攻防に驚愕した。

何度も苦しい展開を強いられた彼らは誰よりも大仁多の強さを知っている。その為に衝撃も多かった。

これで誠凛の選手達はこの調子で戦えば勝てると士気が上がる事だろう。

「だが……」

「ロビン？」

「ならば、ここがお前の出番だぞ。白瀧」

チームの柱が止められ、敵は好調の波に乗る。

この流れを変えるならばお前だと楠は白瀧の後姿を見つめた。

「……小林、白瀧」

「どうした？」

「なんでしよう？」

それを感じ取っているのは楠だけではない。

コートでは山本が勢いを敏感に感じ取り、二人を呼び止めて声をかけた。

「ここで止めて、うちも一発決めないとやばいぞ。このままずるずると誠凛に第2Qを取られかねえ」

「……ああ、そうだな」

「一度ゴール下までボールを入れられると辛い。木吉も勿論だが黒子、火神のコンビが活躍しやすくなってしまっ」

誠凛が初のリードを奪った今、このまま長時間敵に主導権を握らせるわけにはいかない。

早々に取り戻す必要がある。

その為にも誠凛が得意な場面で勝負をさせるのは許されない。

「俺達がボールを奪うぞ。シュートなんて撃たせねえ」

「……そうだな」

「わかりました。なら、俺と小林さんで一気に相手を黙らせませすよ」

「おう。やろうか」

語気が強まった提案。二人も同調して、さらに献策を行い僅かに頬を緩ませる。

小林も先の失態を取り返すと意識を改め伊月へと向かっていく。

「ツ！ うおっ！」

スリーポイントライン目前で小林のマークが迫り、思わず伊月は後ずさった。

ドリブルは続けているが先ほど以上に小林のマークが厳しくなり、思うようにボールを運べない。

「もらった！」

「ツ！ あぶなっ！」

隙を突いた小林の指がボールを叩いた。

かろうじて伊月がボールを再び確保するが、体勢は崩れより辛い状態へと陥ってしまう。

「……日向！」

これ以上ボールのキープは不可能と判断し、伊月は一度日向へとパスを出した。

だが山本がパスコールに反応し、ボールを弾いた。

「あっ！」

「よっし、小林さん！」

「走った！ 白瀧だ！」

「火神！」

「わかってる！ つすよー！」

真っ先にルーズボールに反応した白瀧は両の指先で小林にパスし、そのまま走り出した。

第1Q何度も見た白瀧の速攻。

そうはさせまいと火神も一歩遅れて走り出した。

(さっきと同じだ。白瀧にパスが通る前に叩き落とす！)

追いつくことは難しいが、止めるだけならば。火神の跳躍力があれ

ば可能だ。

白瀧を追いながらも火神はロングパスの軌道を視線で追う。

「無駄だ。このパスは止めさせない!」

そして小林が矢のような送球を打ち出した。

火神はしつかりとその行方を目で捉えたが、ボールの軌道を理解したと同時に驚愕する。

「このパスは……高ッ!」

高い。いや、高すぎる。

追いつけない以上、その前にカットしなければならない。火神はそう判断して跳んだが彼の指先をも越えてボールは勢いよく進んでいく。

「なっ!」

「う、おおおおおっ!」

スリーポイントラインはおろか、フリースローラインの上空で白瀧がボールを掴んだ。

彼も勢いが突き過ぎている状況だったが二歩で体勢を立て直すとレイアップシュートを無人のゴールに決めてみせる。

(大仁多) 27対26 (誠凛)。

白瀧の一次速攻が決まり、再び大仁多がリードを取り戻す。

「……嘘だろっ!?! 決まった!?!」

「よっしやあ!」

「白瀧!」

「ナイスパスです、小林さん!」

白瀧にも厳しいプレイであったが、無事に成功し小林と喜びを爆発させた。

厳しい状況下で派手に逆転のシュートを決めたことで大仁多の選手達が活気づく。

「い、今のパスって」

「ああ。合同合宿の最終日。俺達とのミニゲームで放たれたパス」

今のワンプレーは観客も肝を冷やした。

特に一度だけ目の前でパスが決まる瞬間を刻み付けられた楠達は

あの時の状況を思い出し、掌を握り締めた。

「敵の選手にはカットさえ許さない。アメフトのそれを彷彿させる、小林のタッチダウンパス。あれは白瀧でないと取れないだろうな」
火神でさえ跳ぶタイミングが遅れた。

止められる可能性があるかと思えば彼だが、火神は対空時間が長いものの最高到達点に達する速さが並外れているというわけではない。そして白瀧と同じスピードで走らなければ追いつくことも出来ない。追いつけなければ白瀧が決めてしまう。

小林のパス能力と白瀧のスピード、両方がなければできないパスであつた。

「くそっ！ 白瀧！」

「……お前達にリードは許さないよ。俺達が一瞬で取り返すから」
睨み付ける火神に、挑発の意味を込めて白瀧はそう言った。

「またやるかもしれないから、気をつけておけよ」

「——上等！」

白瀧が不敵に笑って背を向けると、火神も釣られて笑みを浮べる。
そう簡単に試合の流れは譲らない。

「伊月先輩！」

「お？ どうした」

「俺も攻めたくなってきた。……ボールくれ。じゃなかった、ください」

あのような挑発を受け、そうでなくても第1Qでもフラストレーションがたまっている今、火神が黙っていられるわけが無かった。
（……木吉を中心に攻めるようにカントクから意見されている上に、火神のマークは白瀧。火神が勝てばでかいが必ず勝てるという保証は無い）

ボールを運びながら伊月は組み立てを考えた。

今のところ誠凛にとっては木吉の動きに大仁多が戸惑っている以上は木吉を起点に攻撃を組み立てたい。

（まあ、あんな風に急かされたら、うちのエースが完全に苛立つ前に発散させたい方がいいか）

火神は後ろ手で伊月にボールを渡すように急かしている。それを見て、伊月もこれ以上彼が不満をためる前に勝負させた方がチームにとってもよいと判断。

日向とアイコンタクトを取り、彼の頷きを経て決断をした。

「むっ……」

「ああ？　ここでかよ？」

「お！　キタキター！」

「……火神と要。エース同士のワンオンワン一対一か」

「ええんか伊月君？　せつかく木吉がおるのに、そつちを使つて」

コート、そして観客席からも疑問の聲が上がる中、パスは火神へと渡った。

第1Qで調子を上げた日向、ここまで第2Qの良い立ち上がりをもたらし木吉ではなく、火神の勝負に賭けた。

「さっそくお返しに来るとは思わなかった」

「そろそろ我慢の限界なんだよ。勝たせてもらうぜ！」

「……いいだろう。来い」

白瀧と火神。両校が誇るエース対決。

二人の間に火花が散る。

時間にして二秒ほど。お互いが静かに勝負の時を待ち——そして動いた。

——黒子のバスケ　NG集——

「要！　ここは僕が！」

「……ぐっ！」

白瀧の動きを封じ込めていた火神を、光月がスクリーンアウトで抑える。

その間に白瀧は火神を突破しポジションを確保。

火神が追おうとするが、光月のスクリーンアウトから抜け出せない。

（コイツ！　重い、ビクともしねえ！　情報でも聞いていたが、自分の

邪魔をした仲間ごとダンプをブチかますだけはあるか！)

「ちよつと待って！ それはただの事故なんだよ!？」

火神の耳にまで届いていたという光月の噂。間違いなく危険人物という扱い。

第七十話 落とし穴

火神がボールを持つ両腕を左へ大きく伸ばす。

あくまでも相手の動きを誘うフェイント。

すかさず逆方向へ切り込もうとして——突如彼の腕からボールの感覚が消える。

「ッ!? う、おおっ!?!」

「ちっ!」

(こいつ何時の間に!)

瞬時の判断でボールの位置を読みきると再び懐へいれ、ボールをキープした。

白瀧のステイール。警戒していなかったわけではない。むしろ第一に気を配っていた。それでも反応しきれなかった。

おそらくリーチの差がなければ取られていたことだろう。

「アブね」と一つ焦りを零すと右半身を白瀧へ向けて距離を開けドリブルを開始。

(ゴイツを相手に、長時間ボールをキープは難しい。一気に決めろしかねえ!)

タイミングを計っているような余裕はない。

ならば、と火神は真つ向からのドリブル突破を狙った。

(フェイク、じゃない!?)

「だが!」

「そつちは外れだ!」

ゴール下へと切り込む火神であったが、逆に光月も動きを読んでいたために挟み撃ちになってしまう。

二対一、火神に不利な場面。

だがここでドリブルを止めることやパスを出すことの方がまづいと感じたのか。

火神はディフェンスを気にすることなく跳躍する。

「舐めんな!」

「叩き落とす!」

二人はパスコースを塞ぎつつ、ブロックショットを狙う。

縦・横共に逃げ場はなくこのままダンクシュートを撃てば確実に防げる完全な体制だった。

不可能と判断したのだろう。

火神は掲げた右腕を下ろし——空中で一回転。

体制を入れ替えて裏からダンクシュートを沈めた。

「そんなんっ!？」

(滞空時間の長さを利用して……? だとしても、今の動きは!)

全国でもこれほどの動きは見られない。驚異的な身体能力。

(大仁多) 27対28 (誠凛)。

火神お得意の空中戦で誠凛が再びリードを取り戻した。

「やってくれる」

「テメエの好き勝手にはさせねえよ」

「……ふうん」

あくまでも退くつもりはない。

この試合でお前を倒して見せると火神は燃え滾っていた。

そしてその熱意に当てられて、白瀧の心も徐々に熱意を増していく。

「小林さん、次も回してくれませんか？」

「……構わないが負けることは許されないぞ」

「あたり前ですよ。やられたらやり返さないと気がすみません」

点差がないこの状況下で、相手のエースを乗せたままにしておくのは後の試合展開に悪影響となる可能性もある。

ならばこちらでもエースをぶつけてみるかと、小林も一度インサイドの黒木を通した後、白瀧へとボールを託した。

「挑発にのらせてもらうぜ、火神」

(来るか!?)

雰囲気の変化を察し、火神が注意を強めた瞬間だった。

白瀧の渾身のペネトレイト。

シュートフェイクはなくタイミングを取る間もなく、瞬時に動き出していた。

「ぐっ!?!」

(真正面から!?)

正真正銘小細工なしの、真っ向勝負。

火神をもつてさえ反応しきれなかったのはさすがの一言。しかし火神もすかさず彼の背を追い、ゴール下からも木吉が即座に飛び出し、白瀧が中へと切れ込む前にヘルプに。

これで今度はこちらが前後からブロックを狙える。

そう木吉達が確信したのと、白瀧が跳んだのは同じタイミングだった。

「むっ!?!」

(ティアドロップかよ——!)

まだゴールから遠い距離で白瀧はレイアップシュートを放った。

木吉も火神も彼のシュートを止める術はなく、ゴールがリングを潜り抜ける光景を見過ごすしかなかった。

(大仁多) 29対28 (誠凛)。

お互い一步も攻め手を緩めず、まだこの均衡は続いていく。

「こんのっ!」

「悪いな。俺もお前達に負けるつもりは微塵もない」

にらみ合うエース達。

両校が誇る選手達の凌ぎあいには、お互い一步も譲る事が無い。

エース二人の一騎打ち。

お互いがオフェンスを成功させ、お前には負けないと闘志をむき出しにして戦う姿は見ているものを魅了した。

「おっ、おーっ! やるじゃん。白瀧も、あと火神、だっけ?」

「今のところ二人の間に差は見られないわね。地上戦は大仁多が、空中戦では誠凛が有利といったところかしら?」

「どっちも得点決め合ってるからなー。こりゃそう簡単には第2Qは動かねーぞ」

「ああ。確かに大まかな見立てではそうだろう。しかし、それだけではない。他にもこの二人にはお互いが相手より有利な一面がある」

観客席の一角。

洛山の選手達はこのエース対決に興味を寄せながらも落ち着きを払って全体を分析していた。

特に赤司は今の戦いだけではなく、これから見られるであろう両者の強みまで見通して。

「上等だ！ 黒子、俺によこせ！」

ここぞとばかりに負けん気を発揮する火神。

一点差という緊迫した状況も彼の気迫を後押ししたのだろう。

黒子がミスディレクションで一瞬光月のマークを引き剥がすと、伊月からパスコース外の場所を通って火神へとパスが通る。

「くそっ！」

(やはり西村がいない今の状態では、タイミングが遅れてしまうか！)

(あの11番、わかっていたがかなり厄介だ！)

虚を突かれてしまつては小林や白瀧でもパスコースを防ぎきれない。

パスを受けた火神は強引に切り込むと、白瀧のブロックをお構いなしにシュートを撃つ。斜め後方に体が流れながらも長い滞空時間を持つ彼には殆ど障害はない。

フェイダウェイを一発で沈め、さらに得点を重ねた。

「火神には相手の不意をつける黒子との連携がある」

これでスコアは (大仁多) 29対30 (誠凛)。

試合はオフェンスが得意なチーム同士の対決らしい、ランガン勝負の様相を見せ始めた。

「さて、どうしましょうか」

「……この状況下では一本でもシュートを外せばそのまま相手に持つてかれてしまう可能性もある」

「ならやっぱ方法は一つだろ」

試合の流れを理解している小林、山本、白瀧の三名は数秒で相談を終えると、すぐにその方針に沿って動き出した。

ボールを運んでいるのは小林だが、フロントコートに入ると伊月がマークについた直後、山本へパスをさばき、ミドルへ駆け出す。

そして光月のマークについていた黒子をスクリーンで引き離し、光月をフリーにした。

「ッ!？」

(黒子を引き離した!?　じゃあ狙いは――)

「木吉、警戒を!」

伊月はスイッチしながらも木吉へ声をかける。

パワー勝負となれば大仁多が有利であることは明白。ゴール下の争いに備えようとして、伊月の視界が同時に行われていたガード陣の動きを捉える。

(こつちもスクリーン!?)

「火神、スイッチ!」

今度は白瀧が日向にスクリーンを掛けていた。連動して動いていたのだろう。おそらくはこれが大仁多の狙い。

山本のドライブ、それを防ごうとして火神が動いた時、白瀧が方向転換。ピック&ロールでマークをかわし山本からパスを受けた。

「違う。白瀧だ!」

「マズイ!」

結果、シュートコースも光月へのパスコースもがら空きのまま、白瀧のミドルへの侵入を許すこととなった。

これでは好き勝手にやらせてしまう。

逸早く状況を理解した木吉が前に出るが、注意は散漫なものだった。

焦ってしまったためか足元を通すパスを防ぎきれない。

白瀧がさばいたバウンドパスは黒木の手に取りまり、彼のゴール下シュートは誰も止めることが出来ない。

「対して白瀧には高速で切り込みながら周囲との動きに連動させる適応力がある」

「よしっ」

「ナイス黒木さん!」

赤司の予想通り大仁多のオフエンスが決まって（大仁多）31対30（誠凛）。

今度は連携で誠凛ディフェンスを攻め崩した大仁多が得点に成功する。

「くそつ、止めきれない！」

「綺麗に決めてくれるな。敵さんは」

（ちっ。スクリーナーを派手な選手がやるせいで、どうしても注意がそっちにいつちまう）

巧みな戦術に翻弄されてしまい、尊敬に似た感情さえ浮べてしまう誠凛。

個人技だけではない。こうした一つながりの動きやチームワークも強豪校の強み。

「4番小林の火神へのパスコースも厳しくなっていくはずだ。黒子のミスディレクションで何時までごまかしきれかわからない。ここからは日向達にも点を取ってもらおうよ」

「おう、任せとけ！」

「こつちも万事オツケーだ。大船に乗ったつもりでパスをくれ」

オフエンスを火神一本に絞るわけにはいかない。

ガード陣の警戒も強い今、少しでも攻撃の選択肢は広げる必要がある。

伊月は口早に日向や木吉に呼びかけ、火神にも付け加えるように告げる。

「火神も白瀧の警戒を怠るな。黒子と連携してパスを出していく」

「……うっす」

「ん？ 火神？」

少しだけ返事が遅れたことが気にかかったが、火神は集中しているようだし、本人が気にする素振りをせずに先に立ち去ってしまったので気にしないことにした。

（——違う）

火神は今のプレイを、今までのプレイを見てある考えに至っていた。

(こいつは今まで戦ってきたキセキの世代とは違う)

彼の脳裏に浮かんでいるのは、目線の先にいる白瀧のことだ。

戦う前は緑間のように冷静でプライドが高く、一つのこだわりを持った選手だと思っていた。だが仕掛けた勝負に真っ向から挑んできたたり、ティアドロップという得意技こそあれ緑間のようにスリーという武器一つに固執しているわけではない。

ならば青峰や黄瀬のようにあらゆる技を持ち、勘の赴くままに力を発揮するのかもしれない。むしろ一つ一つの動きが繋がっており、周囲の動きにも適応した洗練されたものとなっている。

(むしろこいつは、あいつに似ている)

『頭は冷静に、心は熱く』を信条にして常に考えてプレイをしていた、クールかつ熱血漢。火神は一人の人物を思い浮かべた。その姿を白瀧に重ね合わせていた。

「白瀧。改めて思った」

「うん？」

そう結論に至ると、どうしても自分の感情を隠し通すことはできない。

「お前には、負けたくねえ」

「……試合中に馬鹿なことを言ってるじゃねえよ。元々俺達選手に負けていい試合なんてあるものか」

「ああ、そうだな」

火神の感情には気づいていないだろうが、変わらず猛々しい言葉を返す白瀧に、火神は堪えきれず笑みを浮べた。

その後も両校の点の取り合いは続いた。

誠凛は火神、日向、木吉の三人が外中の得点源となりスコアを重ねていく。

大仁多も小林を軸に外から切り込み、より確実なシュートレンジでオフエンスを展開する。

リバウンドも木吉や光月がインサイドで活躍し、互角と呼べる状況。

第2Qはこのまま二校が点の取りあいになるのだろうと予想された中盤になって。

一つの、大きな変化が訪れた。

「……え？」

そう零したのは誰だったのだろうか。

驚愕の原因は、パスの名手である黒子のパスが日向に届く事無く山本に防がれたことにある。

第2Qは西村の不在もあってミラクルパスを連発していた黒子が、ここに来て失敗したのだ。

「ようやく、か」

一人、白瀧は短く呟いて安堵の息を零す。

「黒子君が、読まれた……？」

「アウトオブバウンズ！ 黒^{誠凛}ボール！」

「ああつ。くそっ！」

「ドンマイドンマイ！ 惜しかったですよ！」

驚愕はコートの手選手だけではなくベンチでも同じだ。

大仁多にボールを取られることはなかったが、危険であった事は間違いない。

よりにもよってパスミスをするとは思えない黒子が捉えられそうになって誠凛の選手達には不安がよぎる。

「まだこっちボールだ！ もう一度行くぞ！」

「……ハイ」

日向に背を叩かれ応じる黒子だが、返事に気が入っていなかった。

黒子にも予想外の事だった。

まだ前半戦はミスディレクションが通じるはず。そう信じて疑わなかった。

だから、まさか二度目も完全に止められてしまうとは思ってもいなかった。

「なっ……!?!」

「よしっ！」

驚愕の聲が誠凛からあがり、歓喜の聲が大仁多からあがる。

(まさか、もう黒子君のミスディレクションが大仁多に効いていない!?)

ようやくリコは正解にたどり着いた。

だが、少し遅かった。

「ようやく君の姿が見えてきたよ！」

「ッ!？」

「やばい！ 戻れ！」

「いや、させねえよ！」

光月が弾いたボールは山本の手にとまっていった。

汗を浮べて日向が叫ぶ。この状況で導かれる先の展開は一つ。

白瀧の一次速攻だ。

「ナイスパス、山本さん！」

共通の意識なのだろうか、山本はすぐに白瀧へとパスをさばき、ゴールへ向かっていく。

火神も追うが、このままでは先ほどのようにやられてしまう可能性が高い。

「……………こん、のっ！」

「むっ!？」

ならばせめてと、伊月は体ごと白瀧へ向かっていき、強引に彼の進路を防ぎに行く。

押される形になって白瀧の手からボールは離れたが、直後審判の笛が鳴り響いた。

「ディフェンス！ 黒5番！」

伊月のファウルが宣告された。

あのままでは失点される可能性が高かった。

それなら飛び出す時点で白瀧より前にいた伊月がファウルで時間を止めて白瀧の速攻を防ぐことにしたのだ。

伊月のファインプレーにより、誠凛はミス直後の失点を防ぐことが出来た。

「今のはええ判断やな。黒子君が止められてすぐさま失点となったら大仁多が流れに乗るところやった」

「……それより、直前の何だ？ テツが普通に止められたぞ？」

「桃井。まさか黒子のやつ」

「ええ。諏佐先輩の考えるとおりだと思います」

しかし一連のプレイは観客席から見てもわかるほど明瞭なものだった。

皆が不思議に首をかしげている中、桃井は残念そうに先に送るであろう結論を口にする。

「ここで、テツ君は交代です」

『誠凛高校、タイムアウトです！』

そしてこのタイムミングでリコが申請していたタイムアウトが取られる。黒子が止められた瞬間、リコは誰よりも早く立ち直り審判に申請していたのだ。

両チーム選手達がベンチに下がっていく。

だが誠凛の選手達の脳裏には一抹の不安がよぎっていた。

誠凛ベンチに重苦しい雰囲気広がる中、指揮官のリコが真っ先に口を開く。

「……黒子君。率直に、調子はどう？」

「おそらく、今が限界に達している時だと思います。高尾君や西村君ではない相手に一回だけならまだしも、二回も連続でとめられたとなっては、これ以上は期待できません」

「そう。やっぱりね」

最悪の予想が的中してしまった。

黒子のミスディレクションの効果が切れてしまったのだ。

元々長時間使用すれば相手の目が慣れてしまい、使い物にならなくなってしまう切札のようなもの。これ以上は出場し続けても意味はない。

「でも、何でだ？ 普通なら前半くらいは持つんじゃないのかよ？」

「そうだ。それに今でこそその点の取り合いになっているが、第1Qは大仁多が1-1番のデイレイドオフエンスもあってそうハイペースではなかった。まだ十分いけるはずなんだが」

火神や伊月が問いかける。

そう。本来ならこの試合、ミスデイレクシオンは前半戦までは機能し、効果が切れるであろう後半戦突入時に黒子は交代し回復する時間帯の第4Qでコートに戻る予定だった。

ミスデイレクシオンを使う機会が多いランガン勝負ほど消耗も激しくなり、限界も早まっていく。

だが今回の試合は違うはずだと、二人は首を傾げる。

「おそらく、その第1Qが原因です」

「え？」

「ミスデイレクシオンは使えば使うほど相手の目に慣れられてしまいます。しかも視野が広い相手あるいはミスデイレクシオンが行われている時に外から見ている人には視線誘導ができず、僕の姿が捉えられている為に慣れる時間は余計に早くなる」

「外から見ている？ ……あっ！」

「そういえば、まさか！」

そこまで黒子の説明を受けて、全員がこのカラクリの真実に気づいた。

（大仁多は、第2Qで白瀧君以外の選手全員が交代している！）

つまり大仁多のレギュラーの大半は第1Qの間、『見る』ことに徹して黒子のミスデイレクシオンに目を慣れさせていた。

白瀧も西村には及ばないだろうが有る程度の耐性は持っているであろう。

その為にこの試合はミスデイレクシオンの効果切れが早まってしまった。

「じゃあそこまで計算の上でスターターをあの五人に？」

レギュラーを積極的に使わなかったのは黒子を早々に離脱させる

ため。

種がわかった以上、もう黒子を交代するしかなかった。

しかし、とリコは歯を食いしばってスコアへと視線を移す。

第2Q残り四分（大仁多） 41対41（誠凛）。

黒子のミスディレクションもあって何とか食らいついている状況だ。ここで黒子が抜ければ一気に持つてかれる危険さえあるが、出続けてもジリ貧。

（……この第2Q、落とすわけにはいかない！）

可能性は低いかもしれないが、ここまで競った第2Qを落とせば後半戦にも影響を及ぼす可能性がある。

ならば次善の策を撃つしかない。

リコは決意を固めて全員に指示を飛ばした。

（結果的に誠凛は自分で自分の首を絞めることになった、か）

藤代は一度だけ視線を誠凛のベンチへと向け、すぐに自軍の選手へと戻す。

実は藤代もこれほど早く敵のミスディレクションが切れるとは思っていなかった。早くて第2Q終盤に切れるかどうかと考えていたのだが、その予想を裏切ったのは黒子の行動だった。

（第1Q終盤、11番は白瀧さんの勢いを止める為に活躍した。活躍しすぎた。その結果目立ちすぎることになり、こちらの目が慣れるのが早くなった）

奇しくも白瀧の不調が黒子の奮戦を呼び起こし、それが転じてミスディレクションが切れるタイミングが予想より早くなったのだ。

（災い転じて福となすといったところですかね。白瀧さんが聞いたなら怒るでしょうが）

何も知らずにマネージャーから補給を受け、チームメイトと談笑をかわすエースを見て、笑みがこぼれそうになってしまう。

原因はどうあれ、これで大仁多が優位となった。

ならば指揮官としてやるべきことは、選手達に道を示す事。両手を二度叩いて皆の注意を集めるとこれからの戦略を話し始めた。

「これで1ー1番はまずベンチに下がるでしょう。ミスディレクションさえなくなってしまうえば並の選手だ。下げざるをえない。となればここがチャンスです」

藤代が皆の闘志を湧きたてるように腕に力を込める。

大仁多の選手達にとってこの第2Qは我慢の時間帯だった。

一步も譲れない競り合いの時間が長くなる中、敵の緊張が解ける瞬間が必ず来る。そのタイミングを静かに待ち、機が来たならば見逃す事無く動き出す。

常に集中力を必要とする厳しい戦いだった。

だが乗り切った。好機を物にした。

誠凛の前半戦に取れる最後のタイムアウトまで使わせたことにより、誠凛を限界まで追い詰めたと言えるだろう。

「交代枠は誰を使いますかね？ データでは第1Qも出ていた8番、水戸部他は6番と9番小金井 土田の出場機会が多いようですが」

「おそらく6番が出てくると考えています。センターのポジションには今木吉さんが入っていますし、先に出ていた黒子さんが自由に動き回っていたところを考えると、その穴を埋めるには適応が広い6番が出る可能性が高い」

黒子に代わって出場するのは誰だろうかという山本の問いに、藤代は小金井を予想する。

元々ポジションが特殊な黒子だ。ゴール下は木吉が入って強みを増している分、小金井が出てくる可能性が高い。

そう考えて藤代は作戦を告げる。

「6番は背丈は無いですがその代わり敏捷性には長けている模様です。小林さん、山本さん。インサイドへボールを入れる際には十分注意を」

「はー」

「了解です」

「11番が下がったとなれば、敵のステイールは大幅に減るでしょう。小林さんを軸にどんどん切り込んでください。ディフェンスも敵のパスが甘くなるはず。ゴール下を固め、前線からプレッシャーをかけて積極的にボールを奪うように！」

『はいー』

ここが勝負時だと、藤代は気迫を込めて告げた。

選手達の士気が高く敵は切り札を一つ失った状態。

勝利へ着々と近づいている。

そう藤代は確信していた。

第七十一話 光、輝く刻

もうすぐタイムアウトの時間が尽きる。

そろそろ試合に復帰する。より気合を入れねばと火神が気を引き締めていると、すぐ隣から弱々しい声がかかった。

「火神君……」

「あ？ 何だよ。先に言っとくが、お前がベンチに下がるからって暗いことを言うのはやめろよ？ お前と違ってこっちはまた試合に出なきゃいけないんだからよ」

声の主は黒子だった。

元々力強い存在とはとても言えなかったが、今は余計に小さく見えてしまい、火神は黒子に先んじて苦言を呈する。

彼の意見を聞いて、黒子は一つ間を置いて頭を下げた。

「すみません。思ったよりも早いタイミングで、しかもこの重要な局面で下がる様なことになってしまいました」

「だから暗いことを言うのはやめろって言っただろーが！」

「いたいです」

人の言う事を聞かずに我を通すような者の言葉など知ったことかと火神は何度も黒子の頭を叩き続ける。

黒子の表情が歪む。余り力を加えてはいないものの、線が細い黒子にはそれなりの痛みがあるのだろう。

気が済んだのか、火神が叩き終えたところで黒子はさらに話を続けた。

「……僕が下がる事で、おそらく大仁多のオフENSEはより自由度が増します。外からの切り込みも回数が増えるはず。そしてそういうところへ意識が集中しようとした時、白瀧君が何か動きを見せるはずですよ」

「あいつが？」

「はい。この第2Qの大仁多を見て、一つ気になることがあります」

頷いて黒子が何かを火神に耳打ちする。

「……マジかよ。全然気がつかなかった」

「はい。普通はそこまで意識して気がつかないはずです。でもおそろしく白瀧君なら気づく。そして必ず実行に移すと思います。彼にも特別な思いいれがあるので」

視線を大仁多ベンチへ向ける黒子。

その先には、やはりこちらと同様に試合再開へ向けて集中している白瀧がいる。

きつと彼ならば予想通り動くはずだとそう黒子は信頼していた。

「ですがこの時間帯、白瀧君に本当に活躍されては困ります。なので……」

少し間を置いて、黒子は誠凛のエースに全幅の期待を込めて告げた。

「お願いします。どうか今、ここで白瀧君を倒してきてください」

あれほど苦戦し、少し気を抜けばやられてしまいそうな、互角に渡り合うのが精一杯だった相手を倒せと。

きつと君ならできると真っ直ぐな瞳で黒子は火神にそう言った。

「ハアツ。お前相変わらず無茶苦茶なこと言ってくれるな。こっちは今の状況でも手一杯だぞ」

大胆不敵な発言。しかも内容は全て火神の手にかかっている。

大きく息を吐いて不満を漏らした後、火神は立ち上がって黒子に一言返す。

「……任せとけ。キツチリ倒して、リードした状況で戻ってきてやる」
ポンと黒子の頭に手を置いて、火神はコートに戻っていく。

丁度タイムアウトが終了するところであった。

火神は誰よりも早くコートの中へと戻っていく。

(つたく。情けねーな。アイツにあんなこと言わせるなんて)

心中、火神は先ほどの黒子の申し訳なさそうな表情を思い描いた。

本当ならばあのような言葉を仲間にならなかつた。特に仲間内で最も信を置き、このコートでは最弱とも取れそうな、あんな小さい相棒には。

火神は誠凛のエース。その自覚もある。

だから誰に言われるまでもなく、強敵が相手ならば自分が倒さなけ

ればならない。誠凛を勝利に導くために。

『僕はもう一度一緒に戦う為に、君を信じて戦います。帝光中幻のシックスマン六人目としてではなく、誠凛高校11番黒子テツヤとして』

『任せてください。必ず、勝ちます！』

火神はかつて黒子と交わした誓いを思い返した。

本当ならば、IH決勝トーナメントで火神は黒子達と距離を置くつもりだった。

今のままではとても全国の強敵達と勝てない。今の自分達では力では足りない。そう思ったから。

だが勝った。誠凛は火神抜きでIH出場の切符を手に入れた。

あの瞬間がどれほど嬉しく、そして堪らないほど悔しく思ったことか。

エースである自分がいない状況下で、自分が諦めかけていた希望を繋いでくれた相棒に、感謝してもしきれなかった。

(だから——今度は俺が！)

あの時は助けられた。ならば今こそ俺が黒子を助ける時。

そう決意を固めて火神は立ちはだかるであろう強敵を待ち構えた。

『タイムアウト終了です！』

『よし、行って来い！』

『おう！』

『では、頼みましたよ皆さん』

『はい！』

一分が経過。誠凛が申請したタイムアウトの時間が終了する。

指揮官に送り出されて選手達がコートに戻っていく。

皆先ほどまでと同様変わらない集中した雰囲気だ。ただ一つ、違う点があるとすれば黒子がベンチに座ったまま残り、代わって8番の選手が入った事。

「うん？ 8番？」

異変にまず気づいたのは藤代だ。

木吉が入っている以上は小金井投入と考えていたのだが、誠凛は木吉と水戸部のダブルセンターを選択した。

(8番はディフェンスが上手いゴール下の選手。6番はステイールも多いから11番の穴を埋めるには適任と思っただが。攻めに出るよりは守りに入った方がよいと考えたか?)

理由は様々考えられるが、今重要な事は藤代の予想が外れたということだ。

特にマークマンを務める光月は影響が大きいだろう。

「光月さん！」

「はい？」

「相手は関係ありません。先ほど言ったとおり！」

ゆえに、試合が始まる前に藤代は声を張った。

ただでさえ光月は精神的に不安定な選手だ。余計な負担は減らしておくに限る。

安心するようにと藤代の声かけに、光月は一瞬呆けた顔をして、大きく頷いた。

「大丈夫です。任せてください」

頼もしささえ窺える彼の笑みは、心の余裕の表れにも感じられた。

「……なんと言いますか。今日の光月君は凄く落ち着いていますね」

「ええ。私も驚いています」

東雲も同じ意見だったのだろう。二人は同調して頷いた。

「全国に来てから、彼の調子が上がっているのかもしれない」

事実この試合も光月は出場してから安定した成績を残している。

得点は少ないが要所でリバウンドを發揮し、そのパワーと高さでチームに貢献している。

(この試合で試してみるのも、手か?)

勝ちあがればこれから先、今以上に光月の力が必要になる時が来るだろう。未だ底が知れないキセキの世代との戦いも待ち構えている。

早い段階で試行錯誤しておくに越した事はない。

「一本集中！ 気合入れろ！」

声を張り上げたのは日向だ。

主将の一声でチームメイトは引き締まり、敵への警戒を深めている。

洗練された選手の動きは見事なものだ。伊達にIH出場権を勝ち取っていない。

しかし――

「まだまだ経験が足りないな」

「ぐっ!？」

相手が悪かった。

全国で名を轟かせた小林のドライブは、伊月の目を持ってしてもまだ捉えきれない。

あっさりと横を抜かれ、ペネトレイトを許してしまう。

(速い！)

「そうはけません！」

黒子が抜けたことでステイルへの警戒が緩んだのだろう。

早々にドライブで切り込んでくる小林に、木吉が対応。

ミドルでドリブルを止めてシュートを放とうとする小林へと跳んだ。

「ッ！ 木吉、跳ぶな！」

先ほどと同様にとめようと思って、だが今度は小林の動きが違う。

日向が気づくが静止の声は間に合わない。

シュートフェイクに釣られてしまった木吉。小林はフェイクの後、木吉よりわずかに遅れて跳躍。体を押されるような状態のまま、シュートを放った。

(しまった、フェイク……！)

跳んだ木吉と体があたりながら放たれたシュートは、綺麗にリングの中央を射抜いた。

しかも決まる直前、審判の笛が鳴り響き、木吉のファウルを告げる。

「ディフェンス！ 黒^木7番！ バスケツトカウント！ ワンスロー
！」

（大仁多） 43対41（誠凜）。

得点を決められたばかりか、バスケットカウントを許すこととなつた。

小林はこのフリースローを確実に決めて点差をさらに広げる。

（大仁多） 44対41（誠凜）。

「先ほどのお返しだ。鉄心」

「……参ったな」

手痛い一発を食らう事になってしまった誠凜。

黒子が抜けた直後のこの失点は大きい。三点プレイは大仁多を勢いづけるプレイであった。

「やられたばかりでいられるかよ！ こうなったら、こつちもやり返すんだ！」

しかし敵の主将の気迫に当てられて誠凜の主将も燃え滾っていた。

伊月からパスがさばかれると、日向は即座にシュートを撃った。

迷いがなく、乱れがないシュートは綺麗なスピンがかかっている。

リングにかすりさえせず、その中央を潜り抜けた。

（大仁多） 44対44（誠凜）。

「決まっただど!?!」

「こいつっ！ プレッシャーかけたつてのに！」

（いやいや、黒子が抜けて最初のオフENSなんだから、落ち着いて攻めてもいいだろうに。随分強気だな）

山本のブロックもお構いなし。

息を零して首をコキコキと鳴らし、日向も改めて宣戦布告する。

「ナイツシュ、日向！」

「おう！ フウツ。——まだ誠凜は終わっちゃいねえぞ！ 舐めんな
！」

それは彼が絶好調であるという証。

まだこの均衡は破られない。一進一退の状況、この第2Qは譲れない。

タイムアウト後、黒子の離脱により一転誠凛が窮地に追いやられたと予想されたが、それを裏切って再び両軍は次々と得点を挙げていく。

大仁多は黒子の不在により、小林・山本の両名が切り込み、黒木・光月のフィニッシュへと繋げていく。

誠凛は日向と木吉。早いパス回しで大仁多ディフェンスを掻い潜るとこの中外のキーマン二人で点を重ねていき、スコアを伸ばしていく。

お互いが得意とする戦術を基盤にするオフENSEを展開する。

ならば第2Qは均衡を保ったまま終わるのか。

……否。そうはならなかった。

「——ッ！」

「外れた、リバウンド！」

シュートが外れ、ゴール下の選手達がボールを巡って争うが、制したのは木吉。ディフェンスリバウンドを物にした。

「ようし。ナイスリバン、木吉！」

「おう。伊月！」

着地すると前線の伊月へパスを回す木吉。

ボールを奪う事は敵わず、そのまま誠凛のオフENSEに切り替わる。

「マジかよ。また白瀧のスリー不発！」

「これで白瀧は3連続で失敗だぞ！」

残り二分、スコアは（大仁多）50対53（誠凛）。

誠凛が三点リードを保つ展開となっている。

「東雲さん」

「はい？」

「この第2Q、誠凛は何度スリーを決めていますか？」

「え、えつと……」

突如監督に問われ、東雲はスコアブックを見直す。

スリーの記録を見つけて確認すると彼の問いに答えた。

「日向君の三本——いえ、今ので四本です」

「ええ。では、こちらのスリーの本数は？」

「……………0本です」

（大仁多）50対56（誠凜）。日向が4連続でスリーを成功させ、リードを伸ばしている。

対して大仁多はまだこの第2Q、スリーが一本も入っていないという苦しい状況が明らかになった。

「この得点差、シュートミスもそうですがそれ以上にスリーの有無によって生じています。しかも……………」

藤代がもう一度コートへ視線を移すと、白瀧が水戸部に腕を叩かれ、審判が笛を鳴らしている瞬間が映し出された。

「ディフェンス！ 黒^{水戸部}8番！」

「切り替えようとする白瀧さんの速攻が、ファウルで止められる」

これで白瀧の速攻がファウルで止められたのは三つめとなる。

今大仁多のメンバーの中でスリーが撃てるのは山本と白瀧だ。だが山本はドリブルの方が得意で確率はそう高くない。元々積極的に切り込んでいくスタイルである事に加え、この第2Qは前もってドライブを重視するように指示してある。

ゆえに求められるのは白瀧のだが、その彼が3連続でスリーを外している。

小林にも三点プレイがあるがこの試合一度しか決まっていない。

その為にこのビハインドが生じているのだ。

「こちらのインサイドは#5黒木195cm、#7白瀧179cm、#9光月192cm。

対して誠凜は#7木吉193cm、#10火神190cm、#8水戸部186cm。

ゴール下は8番の加入により互角かあるいは誠凜が優位。そのせいで4番もどんどんスリーを撃ってきています」

「逆にこちらは白瀧さんが試みるもシュートが決まらず。……………この残

り時間、どうか一本欲しいのですが」

だがそう上手くは行かない。

誠凛も必死に策をめぐらし、体を動かして大仁多の攻撃を防ぎに来ている。

「白瀧さんもスリーが欲しいとわかってるから連発しているんでしょうね。しかし決まらず、速攻で気持ちを乗らせることもできない」

未だ自軍が決まっていけないスリー。

決まれば点差を詰めるだけではなく敵ディフェンスの注意を外に散らすこともできる。加えて長身の火神をインサイドから引き剥がし、リバウンド争いに参加させないこともできるかもしれない。

それだけの効果があるとわかっている。わかっているのに。

「……多分、かなり苛立っていると思います。動きがいつも以上にわかりやすいですし」

「そんなのわかるもんなのか？」

「私、今までの試合の動きとか全部覚えてるから」

「はっはっは。まあた澄乃はそんな面白くない冗談を言っ。……冗談だよね？」

「全く。敵に伝わらないためのポーカーフェイスも、時によっては悪く働くのですね」

神崎が冗談半分で問い返すが、返事はない。真偽は不明のままだ。

何れにせよ澄乃の言うとおりで白瀧が落ち着いていないというのは確かだろう。

無表情を貫いているが、この状況はスコアラーにとっては屈辱であるはずだ。

普段の彼ならば一度目は外しても二度目には修正してきっちり決めるはず。それが三度目ともなればよほど追い詰められているか——あるいは、マークの火神がそれほど白瀧の脅威になっているということになる。火神のプレッシャーが、白瀧のオフェンスを完全に防ぎきっている。

(この状況が大仁多にとって悪いものであることは確か。ならば)

「……お二人は、体を温めといてください」

「え？」

「へ？ あ、はい」

藤代は二人の選手に声をかけた後、ベンチから立ち上がって審判団の元へ向かう。その道中で試合を見据えることを忘れずに。

コートでは白瀧から山本へパスが通り、そして黒木へとボールが回るが、彼のシュートは木吉の指先に触れられてしまう。

「リバウンド！」

「う、お、おおっ！」

「……ッ！」

ピンチの中、大仁多を最も支えている存在の一人、光月がここでも奮起する。

水戸部との競り合いを制するとそのままオフエンスリバウンドを堅守。

木吉が着地して近づいてきて挟み撃ちにあうなか、デイフェンス二人をひきつけてパスアウト。外の白瀧へとさばいた。

「要！」

「……わかっている！」

今こそ撃つとき！

白瀧も理解していて角度が殆どないスリーポイントラインの外側でボールを受け取る。

条件は厳しいが不可能ではない。

両腕を掲げて、一度下ろす。

マークの火神が追いついたのだ。しかし火神もシュートフェイクを見切っていたのか上体は浮いても地面から足が離れていない。

直後、白瀧はドリブルを一つついて大きく前進。

スリーと見せかけてのドライブ。これも火神が反応し——白瀧は前に出した右足の間にボールを通して逆側の手におさめる。

(違う！ ドリブルもフェイクだ！)

シュートに続き、二度目のフェイク。

スピード自慢の彼が一連の動作を一挙に行えば読み合いについて

こられるものはまずいない。

白瀧は右足を戻してスリーポイントシュートを今度こそ放つ。

「もらっ——!?!」

シュート成功を確信した次の瞬間。

動けないはずの火神が、宙に躍り出て彼のシュートを叩き落とし
た。

『なっ……!?!』

驚愕したのは白瀧だけではない。

ベンチも含めた大仁多の選手達の表情が皆言葉に詰まる。

エース対決。互角と思っていた対決が、火神優位へと移っていたの
だから。

「反応しきれないタイミングではない。動きの全てが読まれていたって
のか?」

「白瀧が4連続でオフENSEを失敗……?」

「空中戦だけではなく、まさか地上戦でも要と互角以上と? 火神、大
我」

(今この感覚。こいつまさか……!!)

呆然とする選手達。

しかしその時、彼らの耳元に審判からタイムアウトの宣言が成され
る。

『大仁多高校、タイムアウトです!』

藤代も前半戦最後のタイムアウトを使い切ったのだ。

第2Qは残りわずか。だがこのまま試合を進めるわけにはいかな
い。

今試合の流れは誠凛に傾いている。

取り返さなければと、藤代は覚悟を決めて遠地で選手達を待ち構え
ていた。

「いいわ! 皆、よくやってくれた!」

リコは上機嫌で五人を迎えた。

黒子が交代という時はどうなるかと思っただが、逆に誠凛優勢でゲームを作る事ができた。

満面の笑みで選手達を褒め称え、さらなる手を考え始める。

「火神君のデیفエンスのおかげで白瀧君を封じている。リバウンドもうちの方が取ってういる数が多いわ。ガード陣の運動能力は向こうの方が上。少しでも相手にプレッシャーをかけて、シュートを外させて！」

「うつつ」

「オフエンスも鉄平、日向君中心は変わらず。早いパス回しとスクリーンでマークを外すこと。最悪外れても構わない。鉄平もいるんだから、多少強引にでもシュートを撃って行って。攻める気持ちを忘れちゃダメよ！」

『おう』

予想以上に順調だ。いや、順調すぎるといっても良い。

この後何か悪いことがあるのではないかと怖くも感じてしまいが、この流れを逃す手はない。

特に日向の好調ぶりには目を見張るものがある。

この後もどんどん決めてもらおうとリコはさらに機嫌をよくしていた。

一方、気持ち上向く誠凛に対して大仁多ベンチはやや不穏な空気が流れていた。

「白瀧さん、一時下がりましたよ」

「……………はい」

長い沈黙の後、白瀧はゆっくりと頷いた。

ここまでチーム最多の得点をたたき出し、活躍していたエースに対して非情な判断だが、白瀧は反論する事無く監督の指示に従った。

「監督。エースである白瀧を下げるというのは」

「わかっていきます。何も責めているわけではありません。……正直、火神さん相手にスリーを連発するのは分が悪い。彼はスリーポイントシューターにとって天敵と呼べる存在だ」

小林が反論するが、藤代とて白瀧を咎めているのではない。

「ここで落ち着いて、そして後半戦にまた出てもらいますよ」

「……わかりました」

あくまで一時的な処置だと付け加える。

白瀧も幾分か気が軽くなったのか頬の力が緩まった。

「しかしこの点差のままというのはまずいです。何よりも相手のシューターが勢いづいたまま、というのは尚更です。どうやら4番は日向さん波に乗ると強いタイプのようなので。ですから……残りの第2Q、相手を真つ向から打ち破ってもらいましょう」

「えっ」

「じゃあ……」

相手の土俵で、力で相手を上回ってその勢いを止める。

具体的な名前を出さずとも選手達は監督の意図を理解して、視線をある選手へと向ける。

スリーポイントシューター・日向を真つ向から破るとしたら、大仁多で考えられるのはただ一人。

「申し訳ありませんが、山本さんにも下がってもらいます」

そして——佐々木さん、神崎さん。出番ですよ」

「はいー」

「……はいー」

白瀧に代わって入るは佐々木。

そして山本と交代し、日向を倒す作戦を任されたのは、神崎だった。

「佐々木さんはハイポストで全体のサポートを。黒子役に徹してもらいます」

「はいー」

「逆に神崎さん。あなたの役割は単純かつ重要です。スリーを決めてください」

「っしっ、わかりました！」

佐々木は三年生ということもあってか、落ち着いてゆつたりとして構えているが、神崎は少し気を張りすぎているようにも見える。

重要な局面で自分が点を取るようにと指示を受けたのだ。無理もないことではある。

(本当ならこの流れを作らせないために、第1Qで日向さんに白瀧さんをマークさせたんですが。まあ済んでしまったことは仕方ない。彼らに託そう)

藤代も多少の後悔を浮べつつ、神崎に託すのが最善だと、考えを確固なものとして彼の肩を叩いた。

「頼みますよ」

「……はいっ!」

「エース・白瀧さんが下がって別の一年生が登場。ここで決めたらカッコ良いでしょうね」

「……はい?」

「味方のピンチ。エースが交代。窮地でチームメイトであり同級生でもある選手が登場し、相手と真っ向からぶつかり合う。これほど目立つ場面は無いですよ。観客の方々の注目もさぞ集まることでしょうねえ」

「あの、監督?」

功名心をくすぐる言葉を並べていく藤代。

かえって緊張を強めてしまうのではないかと周囲が不安視する中。

神崎の両肩が小刻みに震える。顔は俯いているため表情が窺えない。

やはりやりすぎか。

大丈夫なのかと、皆が声をかけようとした瞬間。

「やっぱりそう思います? よし。オツケーオツケー、任せといてくださいよ! 小林さん、ここから先全部俺に回してください。スリーをバンバン決めてやります!」

「そうか。ではスリーを一本でも外すようなら帰りはホテルまで走ってもらおう」

「勿論! ……つてえええええええ! ああいや、でも今なら何でも出

来る気がする！ よっしや来い！」

「え。マジかよコイツ」

高らかに、声を張り上げ、自信満々に語る神崎。

目立ちたがり屋でお調子者の性格をよくわかつている藤代のコン
トロール術だった。

『タイムアウト終了です』

大仁多の最後のタイムアウトも終了。

其々の作戦指示を終えて、試合は再開された。

（大仁多は選手交代……？ しかも副主将の6番とエースの7番を同
時交代って、それだけの理由が二人にあるってこと？）

大仁多の選手が変化したことに戸惑いを覚えるリコ。

レギュラー五人の中でも攻守に数字を残し中核をなしていると
言っても過言ではない二人が交代したのだ。

不審に思いつつ、しかしデータが残り少ないことから下手に新たな
指示も出せず、選手達を見守った。

大仁多のオフエンスから再会。

神崎がスローインで小林へと投じると、両腕を真上に構える。伊月
との高さのミスマッチを活かして、彼の頭上を通すパスをさばいた。

（高いっ！俺では届かないか！）

たとえ反応出来ていたとしても、後だしでは体格差の為に届かない
ような高さだった。

しかもただでさえ高い小林の位置からさらに高いパス。

火神を背にポストアップする佐々木が跳躍し空中でボールを掴む
と、そのまま地面につく前に神崎へとパスをさばいた。

「むっ!？」

（パス回しが早い！）

これではディフェンスもステイルは敵わない。

加えて神崎も日向のマークを気にしていないのか、ノーフェイクで

シュートモーションに入った。

「よーやく俺の出番か。じゃあ、景気よく決めさせてもらいましょうか！」

(コイツ！ 交代早々に撃つ気か！)

神崎が立っている場所はスリーポイントラインの外側。

決めさせるわけにはいかないと日向もブロックを狙う。

しかし、日向のシュートと同様に神崎も自分のスリーに自信を持っている。

彼のスリーに日向の指先は触れられない。

そしてリングにかすることも無い。

綺麗な放物線を描いた後、狙い通りリングの中心のみを射抜いた。

「ちいっ！」

「よっしやー！」

(大仁多) 53対56 (誠凛)。これでスリー一本差。

大仁多にとって第2Q始まってから初めてのスリーは、反撃の後押しとなる一撃となる。

「さあ、まずは一本目！ どんどん決めさせてもらおうぞ！」

湧き上がる味方と観客の声援を背中に受けて、大仁多のスリーポイントシューターが躍動する。

——黒子のバスケ NG集——

「やっぱりそう思います？ よし。オツケーオツケー、任せといてくださいよ！ 小林さん、ここから先全部俺に回してください。スリーをバンバン決めてやります！」

「そうか。ではスリーを一本でも外すようなら後期の追試験は自力で頑張ってもらおうとしよう」

「勿論！ ……つてええええええええ!! いやごめんなさい、それは絶対

に無理です！ 許してください！」

「それは駄目なんだ!？」

「何で追試験を受ける前提なんだよ」

バ神崎、健在。

第七十二話 スリーポイントシューター

(大仁多) 53対56 (誠凜)。

交代して入った佐々木から神崎にボールが回り、彼お得意のスリーが早々に炸裂。

第二Qに入ってから停滞していた大仁多のスリーが久々に成功し、大仁多に反撃ムードが高まった。

「大仁多はいきなり十三番を使つてきおつたな」

「そうですね。おそらくタイムアウトでオフエンスの指示があつたんでしょ」

「……交代していきなり決めるなんてよほどアウトサイドシューターの自信がないとできないことです。指示を受けただけではなく、元々自分で決めようという意志を持った選手だと思います」

観客席、桐皇の選手達はいきなり得点を決めた神崎に注目していた。

特に同じシューターでもある桜井は神崎の背中に負の感情を含んだ視線を向けている。

スリーは繊細なプレイ。思い切りがなければ決まらないシューターだ。それを簡単に決めルことは並大抵の努力では身につかない。

よほど実力をつけ、自信を持っているのだろうなと桜井は心の中で呟いた。

「私達の時も、彼のシューターのせいでディフェンスがかき乱されたもんね」

「……ああ。スリーに関しては間違いなく栃木随一の実力者だ」

一度対戦済みの西條、楠も神崎の登場にしかめ面になっている。

楠も相当なレベルのシューターであるが、彼をもつてして栃木随一と言わせるスリーの技量。それは今日の前で対峙している誠凜の選手達にも強く感じさせている。

「マジかよ……」

日向は神崎が走り去ったあと、彼が先ほどシューターを放った位置を確認して冷や汗を浮べた。

(スリーポイントラインの外側、どこの話じゃない。ラインから殆ど一メートルくらい離れてんぞ？ 緑間のせいで感覚が鈍りかけていたけど、こいつも相当なシュートレンジを持ってやがる)

神崎がスリーポイントシュートを撃つたのはNBAのスリーポイントラインにも値するのではないかと思わせるほどの遠い位置だった。

当然ながらゴールから遠くなるほどシュート成功率は下がると一般的に言われている。

しかし神崎は最初の一本で難しいシュートを難なく決めた。

自分も同じポジションだからこそ、日向は神崎の脅威をコートの誰よりも理解していた。

だからこそ、彼の意地が負けられないと奮起を促すことになる。

「伊月」

「うん？」

「オフエンス、俺にボール集めろ。あんなの目の前で決められて黙っ
ていられるかよ！」

何も神崎だけではない。日向も自分のスリーには相当な誇りを持つ自信家だ。

同じポジション、それも後輩には負けたくない。

シューターとしての性なのか。どうしても相手を上回りたいという気持ちが湧いてくるのだ。

「……別にいいけど。すぐにはちよつと厳しいかもしれないな。でも行ける時はどんどん行ってもらおうよ」

「おう！ オフエンスは任せとけ！」

司令塔の了承も得て俄然やる気が高まった。

先に待ち構えている神崎の姿を捉え、駆け出す日向。

負けず嫌いな性格も困ったものだど小さく息を吐き、伊月は今一度策を練り始めた。

(確かに敵にもスリーを打つ選手が入った今、日向に決めて欲しいのは山々だ。けど大仁多は白瀧が下がったことでインサイドの高さは逆に向上して外に強くプレッシャーをかけている)

小林のマークに引つかからないようドリブルを続けながら全体を見つめる。

山本⇒神崎、白瀧⇒佐々木の選手交代で機動力は落ちたがその代わり高さは先ほどより上となっている。そのためか先ほどよりもディフェンスの意識が外へ向いているようにも感じられた。

(なら、もつと意識を中へ向けさせる。その為にも！)

「木吉ー」

突破口を開くならばここ。伊月が見定めたのは大黒柱・木吉だ。

黒木を背中に据えてポストアップする木吉。

片足を一步ゴール側へ踏み、上体を高くシュートへ向かう。

「ッー」

これ以上の失点は防ごうと黒木が跳躍すると、木吉は左手を下げてワンドリブル。

マークマンをかわし、光月がヘルプに出たところでバウンドパス。

日向の元へとパスが通った。

「なっー」

「……くそっー」

まだ木吉のバスケスタイルに翻弄され続ける大仁多のインサイド。

そして木吉が引きつけたおかげで外の日向に対する意識は下がり

——彼のアウトサイドシュートが放たれた。

神崎のブロックは届かず、シュートは綺麗にリングを射抜く。

「よっしやー」

「ナイツシュ、日向ー」

「木吉先輩、さすがっすー」

「あらら」

「スリーにはスリーで返すか。強気だな」

(大仁多) 53対59 (誠凛)。

そう簡単に点差は詰めることができない。誠凛も木吉・日向の二枚看板の活躍で六点差に戻す。

「向こうも絶対好調ですね。さすが、激戦区東京を勝ち残ったチームの主将」

「いけそうか。神崎。お前が大丈夫なら、お前に残り時間のオフエンスを託す事になるが」

小林が静かに問う。

無理ならば構わない。あくまでも神崎の意思に任せるという考えだった。六点ビハインドのこの状況で後輩に任せるのは酷と思っただろう。

「——大丈夫ですよ。託してください。あっちが誘いに応えたのに、俺が退いてなんかいられません」

主将の問いに、神崎は不敵な笑みを浮べて応える。

ベンチメンバーである彼にとっては滅多にないチャンス。今さら後には退けない。神崎は自分でこの状況を乗り越えるのだと勝気な姿勢を崩さなかった。

味方にとっては頼もしい一言だ。

監督の指示もある今、神崎を使わないという手はない。

「なら任せる。佐々木、お前にも働いてもらうぞ」

「ああ。白瀧の代わりには力不足だろうが、俺も俺の全力を尽くす」

「……そうか。じゃあ行くぞ」

もう一人の重要人物、佐々木にも声をかけて小林はオフエンスを再開する。

「また、あの子でいくのかしら?」

大仁多の猛攻を察知した実渕が観客席で一人呟いた。

「勇ましいわね。名前の通り。変わらないのね」

「お? なになに、レオ姉あの十三番知り合いな?」

「ええ。中学の時に一度だけ相手をしてあげたわ」

「ふーん。よくあんなの覚えてたね。見た感じシユート以外はパツとしないような感じだけど。他のやつとそんな差はなさそうだし、俺だったらすぐに忘れてそうだけどな」

葉山の無邪気な問い。悪気はなさそうな様子で、おそらく本当に興味がないのだろう。実力のない相手は覚える必要もないということだろうか。周りと一線を画す無冠の五将ならば仕方がないとも感じられる発言だが。

「あらそう？　でも、私はちゃんと覚えているわよ」

しかし実測は違った。かつて一度しか対戦していないというのに、神崎の姿と名前をしつかりと記憶していた。

「中々気骨のある子だったわ。ビデオで見たときも綺麗なシュートフォームをしていて、戦うのを楽しみにしていたの」

それだけ神崎の事を評価していたのだ。当の本人は知る由もないことだが。彼は標的の方からも狙いを定められていた。

「今ここでのぎを削りなさい。より強いシューターはどっちなのか。勇ちゃん、順平ちゃん」

気のせいだろうか。コート上の神崎と日向の体がビクツと跳ね上がる。

おそらく今大会に出場している選手の中では最強と称しても過言ではないスリーポイントシューターが見守る中。

神崎と日向。二人のシューターによる意地のぶつかり合いが繰り広げられた。

ボールを持っている小林が仕掛けた。

ドリブルで伊月とのタイミングを窺っていると、一瞬で急加速。

わずか一度のクロスオーバー。そのキレのよさに伊月の体がついていけなくなってしまう。

「こ、小林……！」

小林の得意パターン。自ら果敢に切り込んでいく彼のペースに飲まれてしまう。

悔しがっても伊月では追いつけない。

火神がヘルプに出ると前進をやめ、半回転。佐々木が回りこみ、ハンドオフパスをさばく。

さらにボールを手にした佐々木は間髪をいれずにパスアウト。外の神崎へと渡し、再びスリーを放つ。

「くそっ」

(このパスは！)

「日向、十三番だ！」

「……こんの！」

小林と佐々木の両名を警戒していた日向のブロックは間に合わない。神崎が今日二本目のスリーを成功させた。

(大仁多) 56対59 (誠凜)。大仁多の追撃、止まらず。

「よっしゃあ！ 絶・好・調！」

「よくやった神崎！」

「このままガンガン決めてやれ！」

ベンチや観客席にアピールするように両腕を高々と掲げる神崎の姿は、味方の士気を大いに高めた。

今まで不発だったスリーが連発。これが大仁多に与える影響は計り知れないものである。

「ちっ」

「ドンマイ日向。今のは仕方ない。それよりも」

「ああ。俺も負けられねえ。何度だって撃つてやる」

悪態をつく日向。気分を害したというよりは刺激を受けたようで、伊月の問いにもきちんと応答している。

周りが見えなくなったわけではない。

ならばこのままこちらにも日向にボールを集めようと意識を切り替える伊月。

「火神、お前もインサイドの対応頼むぞ。大仁多ディフェンスを集中させてくれ」

「……うっす」

珍しく静かに、短くそう呟く火神。オフエンスであまり得点に繋がられないのは彼にとっては複雑なのだが。

どうやらそれ以上に新たにコートに入った敵の存在が気がかりなようだった。

(今のパス、白瀧と同じか)

先ほどの佐々木が放ったパス——ノーモーションパス。

ボールを手にしてからパスを放つまでにモーションがあまり、いや

殆どないままさばくパス。

白瀧と同様、佐々木がボールを手にしている時間が短い。その為に簡単にパスコースを塞ぐことができなかった。

(さつき^{神崎}十二番が最初に出てきたときもパスに徹していたし。こいつはあくまでも中継役ってことか?)

断定はできない。仮にそうだとしても止める事は容易ではない。

しかし一応想定はしておけばある程度対策もできる。

火神は自分の相手を確認し、オフエンスへと向かっていった。

「さあ一本！ この第二Qをこのまま制するぞー！」

攻守が変わって誠凛のオフエンス。

伊月がワンドリブルで小林をひきつけると、ミドルの火神へボールを入れる。

マークマンの佐々木がハンズアップで封じるが、背後に迫る水戸部がスクリーンをかけた。

(スクリーン！)

「スイッチ！ 光月！」

「はい！」

攻め寄せる火神に向かっていく光月。

ゴールが目前に迫ると火神は勢いよく跳躍。右手を大きく掲げ、力を込めた。

(ノーフエイクのダンク！ だけど！)

高さ、パワー。どちらも目を見張るものがあるが光月も負けていない。

両手を大きく上げて火神の右手へ向かい、叩き落とそうと伸ばした。

「っ！」

それを見た火神はシュートを断念。

光月のブロックが決まる直前、左手にボールを当てて勢いを殺すと、背中を通して逆サイドの日向へパスアウト。

ビハインドザバックパスが綺麗に決まり、フリーの状態で日向がボールを手にした。

「悪いが俺もこの勝負を譲るわけにはいかねえ！」

すぐさまシュートモーションへ移行する。

一步反応が遅れた神崎の指先を越え、ボールはゴールを通過する。日向も神崎と同様、スリーポイントシュートをまた沈めた。

(大仁多) 56対62 (誠凛)。両校自慢のシューター対決、一步も譲らず。

「……こんにやろ」

「勇」

「おう。わかっている。問題ねえ、こうなったら外したら負けだ」

光月の呼びかけに、神崎は笑みを浮べて答えた。

文字通り一騎打ちだ。ここで負けるようなことがあればこの第二Q、点差を縮めることは、逆転することは不可能となる。

ようやく掴んだこの出場機会。自分がこの対決を制して流れを引き寄せるのだと。そう意気込み、神崎はもう一度得点を掴み取るべく走り出した。

今度は大仁多の攻撃。

水戸部がボールを弾き、アウトオブバウンズとして時間を稼ぐが、大仁多の攻め気を損なわせるには至らない。

今度は小林が高さを活かし、伊月の真上を通したパスをミドルへ。空中でパスを受けた佐々木は先ほどと同様に素早く外の神崎へ。フェイクはなしの真っ向勝負。ボールを受けとるやすぐさまシュートを放ち……そして決めてみせる。

(大仁多) 59対62 (誠凛)。

神崎のスリーポイントシュートは落ちる気配を見せない。

「ぐっ……！」

「三本目！ キタッ！」

「いいぞ神崎！ ナイツシュ！」

「佐々木先輩、ナイスアシスト！」

途中出場ながらこの活躍ぶりに、見ている人々の注目を一人占めだ。

プレッシャーは確かに受けているはずなのに神崎はものともして

いない。

三連続でスリーを決めての九得点。スリーポイントシューターの本領発揮であった。

「中々引き離せないか。さすが大仁多」

「だがもう第二Qも残りわずかだ。うちも得点を決めて逃げ切ろう」

「おう。とにかく俺にボールを集めろ。このまま点差を縮められてたまるか！」

敵のルーキーの活躍を忌々しく思いながら、木吉達は確実にこの試合の勝機を共にする。

第二Qの残り時間は一分を切った。少なくとも一点でもリードのまま前半を終えられれば誠凛にとっては御の字だ。後半戦へ十分希望を持つて繋げることができる。

だからまずは自分達のオフENSEを確実に成功させようと皆が考えていた。

一方で。

(……ノーモーションパスにタップパス。強豪だけあって随分と洗練された動きだ。もっと早く反応しねえと間に合わねえ)

火神は自分のマークする相手、佐々木のことを考えていた。

予備動作が殆どないノーモーションパスと空中でさばくタップパス。どちらも佐々木の上手いポジション取りもあって一度も止められていない。

だが佐々木を止めることができればその後の大仁多のオフENSE、おそらくは次も神崎でくることが予測されるが、それも止めることができる。

(もつとだ。もつと集中しろ！ もつと！)

今流れを変えられるのは自分だ。白瀧がない今、一気に誠凛に流れを引き寄せる。

これまでの試合を振り返っても、おそらく一番集中力が高まっている。それほど火神の精神は研ぎ澄まされていた。

「どっちもスリーが落ちねえな。この撃ち合い、この第二Q終わりで続くんじゃないか？」

「そのようだな。両校ともフィニッシュはシューターに定めているよ。うだ。先に仕掛けたのは大仁多だが、また大味な展開になったものだ」

「でもそんなにシューターに自信あるならインサイドにボール入れなくてもそのままシューターにボール回せばいいんじゃないの？」

「一々やんなくてもさ」

「小太郎、あんたね。少しは状況を理解して物事を言いなさいよ……！」

外の撃ち合いという珍しい試合展開。洛山の選手達はこの展開が続くのだろうかと思いつながら試合の行く末を見守っている。

一人、葉山はわざわざインサイドを経由して外にパスをさばく流れに疑問を持っているが、洛山のシューターである実渕が愚痴を零しながら彼の疑問に答えていく。

それは同様の疑問を懐いていた西條にも、楠が少し離れた場で彼女に解説を続けていた。

「ディフェンスを中へと集める？」

「そうだ。インサイドにボールを入れればディフェンスはゴール下へと収縮する。ゴール下を一人の選手が守りきるのは難しいからだ。そしてそれは外のディフェンダーも同じ。ヘルプの為にポストプレイヤーの方へと自然と寄って行く」

「つまり、シューターのマークマンを外すために、つてこと？」

「うん。よくインサイドの守備が厳しくて、シューターにインサイドの守備を広げて欲しいと考える時があるだろう。その逆だ。外の守備を中へと縮める」

シューターのマークマンがヘルプに寄れば、ローポストのボールとアウトサイドの選手の両方を視野に入れることが困難になる。マークは甘くなり、そこにパスアウトすることで一気にシュートチャンスが広がるのだ。逆にシューターにとっては中から放たれたパスはゴールと正対した状態でもらうことができる。スリーも決めやすくなる。

ジャンと楠のように、中と外に二人の要注目人物がいると自然と二

人とも成績が伸びていくことになるのだ。

「それに、ローポストはゴールに近い攻撃しやすい場所。強い選手がいれば余計にディフェンスが集まり、ローポストの選手は外にパスを出しやすくなります」

そう。例えば誠凛の木吉のように。

桜井がそう呟くと、まさに彼の言うとおり伊月から木吉へとパスがさばかれた。彼が登場してからというもの、ゴール下で彼を止めることは不可能だ。

ワンドリブルでゴールへ向かう合うように体を流し、左手にボールを収めて右手は黒木との間に置きシュートの態勢に。

(フックシュートか！)

「このっ！」

フックシュートを見切り、叩き落とそうと手を伸ばす。

「悪いね」

木吉は一言詫びると手首を返し、黒木の足元を通すバウンドパス。また日向へとパスが綺麗に通って彼のスリーポイントシュートへと繋がった。

(大仁多) 59対65 (誠凛)。

誠凛もそう簡単に点差を詰めることは赦さない。得意のオフエンスで盛り返す。

「よしっ」

「これでまた六点差だ」

「いける、いけるぞ！」

たとえ失点しても相手と同じように取り返せば逃げ切れる。誠凛の選手達は互角以上に大仁多と渡り合っていることに嬉しさを感じていた。

「点差は六点かあ。あと一本分縮められれば後半戦への意気込みも大きく変わるけど」

「大丈夫ですよ。神崎さんのスリーも外す気配ないし、佐々木先輩のパスも決まってる。これならうちもオフエンスは失敗しないですって。ねえ白瀧さん？」

「……ああ、そうだな」

大仁多ベンチで山本が独り言を零すと、西村がそれを拾って健気に振舞っていた。

白瀧にも呼びかけると彼も力強く頷いた。

「勇は勿論、佐々木先輩だつてそう易々とこの試合展開を赦すわけはないだろう。あの人も相応の覚悟を積んでいる」

かつて、同ポジションである佐々木との会話を思い返ししながら白瀧はそう告げた。

レギュラーを争っているからこそ白瀧は誰よりも知っているのだ。佐々木が懐いている覚悟の重さを。

「……俺のパス、ですか？」

県大会後、佐々木からの申し出を聞き返す白瀧。それは白瀧のパス、ノーモーションパスを自分も身につけたいというものだった。

「ああ。決勝戦の盟和戦、相手の金澤もやっていたように。パスで一気に味方のチャンスを広げることができると証明された。俺も少しでも味方のチャンスメイクに繋がられるなら、身につけたいと思う」

「なるほど。気持ちはわかりますけど、ただ問題点が二つ」「何だ？」

首を傾げる佐々木に、白瀧はゆっくりと口を開いた。言いにくいことなのかその表情は少し暗い。

「俺の場合は古武術の動きを取り入れたものです。正邦戦を観戦したときにわかったのですが、あまり月日が短いとどうしても癖のようなものが出てしまい、試合に出すぎると相手にばれてしまう可能性があります」

「それなら問題はないだろう。うちのSFでレギュラーを張っているのはお前だ。俺はその控えなんだから」

問題点を指摘しても、佐々木はむしろすっきりとした表情でそう語る。

発言者である白瀧としては自分がその問題の中心にいるので何ともいえない表情だ。

だがそれだけではない。まだ問題点はあると話を続ける。

「……もう一つ。元々佐々木さんはパス回しが得意でしょう？ 高さを活かした空中でのタップパスもありますし」

「ああ」

「そこにまた新たなパスを取得となると、どうしてもパスにばかり意識がいつてプレイの感覚が狂ったりしないか。それが心配です」

元々佐々木は高さもありバランスの取れた選手だ。

その彼が新たなパスを身につけたとなれば、パスの機会ばかりが増えて自ら点を取りに言ったりする選択肢が減ってしまうのではないか。攻め気が減ってしまうのではないかと。

S Fは様々な状況に対応するポジションだ。得点の機会も多い。その可能性を減らしたくないと考えるのだが。

「それについては、心配する必要はない」

佐々木に迷いはなく、白瀧の不安を一刀両断する。

「その方が俺はチームの役に立てるだろう。だから、そんな心配は不要だ」

S Fとしてではなく、あくまでもチームの一員として。

佐々木は黒子役に徹することを心に決めていたのだ。

(小林もフォワードポジションの適正が高いことがわかり、そのポジションに回ることも多くなった今。俺がS Fとして求められていることは少ない)

理解しているのだ。

白瀧にも、小林にも実力で劣っている。真っ向から競争しても二人に勝つことは難しい。レギュラーを奪取することは不可能だと。

ただどだからと言って諦めることは、無理だと腐ることはできなかった。

(ならば俺はこの道に行く。仲間の、大仁多の勝利につながるこの道
を)

せめて自分に出来る最大の役割を果たしたい。それが彼の願い。
その為なら裏役に回ることも苦ではなかった。

「佐々木！」

佐々木が走る先の上空。そこに小林から再びパスがさばかれる。

先ほどと同じだ。このままパスをさばけば神崎へとパスをつなげ
ることができる。

「こんのっ、舐めんな！」

だが、今回は少し戦況が変わった。

「ッ、佐々木さん、駄目だ！」

跳躍してボールをさばく寸前、光月から悲鳴のような声上がる。

出方と呼んでいたのか火神の動きだしが先ほどよりも早かったの
だ。神崎のパスコースの方角へ回りこみ、ハンスアップでコースを塞
いでいる。

このまままたパスをさばけば取られてしまう。

ならば。

(だが、勘違いもするなよ)

このままシュートを撃ってしまえばいい。

(何もSFとしての道を完全に諦めたわけでもない！ 伊達に大仁多
のユニフォームを手にしたわけではない！)

佐々木はパスをする事もなく、かといってそのまま着地をすること
もなかった。

パスを手にし、そのままレイアップシュートを放ったのだ。

「はあっ!？」

「なに!？」

(着地せずにそのままレイアップを!?)

(ここでアリウープかよ!)

誠凛も、大仁多も全員が虚を突かれた瞬間だった。

まさかパスを中断するどころか、着地さえせずにシュートを撃つと
は誰も想像していなかった。

ここまで佐々木はパスを続けた為シュートへの警戒は殆どなかった。

アリウープを放った佐々木はシュートの成功を確信し、頬を緩め――突如目前に出現した大きな壁を目にし呼吸を忘れる。

「があああつ!!」

それは火神のブロックだった。誰も身動きが取れない中、彼はただ一人反応して佐々木のシュートを防ぎきった。

「なっ!?!」

「……馬鹿な」

「火神!!」

「よしっ!」

ディフェンスリバウンドを水戸部が手にし、大仁多の攻撃を防ぐ事に成功。

そのまま誠凛は反撃の速攻を繰り出した。

伊月がボールを運び、他の選手達も続く。大仁多の選手も戻るがボールを奪うには至らない。

(くそっ。やはり山本と白瀧が下がると、反応が一手遅れるか!)

ステイールの名手二人の不在が響く形だ。だが愚痴を零しても仕方ない。小林はまずはボールを運ぶ伊月へと襲い掛かる。

「相変わらず戻り早い。でも」

すると伊月はその場で停止すると、自分の両膝の間を通してバックパス。

「速攻だからと即降参するわけにはいかないな!」

「ナイスパスっす!」

火神が受け取り、加速の勢いを殺すことなくそのまま二人を置き去りに中へと切り込んだ。

「突破された!」

「っ、行かせない!」

侵入する火神に光月がマークに着く。

並走しながらブロックの機会を窺う光月に対し、火神は彼の逆サイドへパスをさばいた。

「えっ」

「どうした火神！ ナイスパスじゃねえか！」

「外だ。神崎、止めろ！」

「おうー！」

パスの相手は日向だ。やはり得意のスリーを放つべくすでにシュート態勢に入っている。

これで決められると大仁多にとっては痛手だ。

神崎がなんとか追いつき、力を振り絞って跳躍する。

（——今だ！ 十三番^{神崎}はスリーにばかり意識が行っている！）

すると日向は腕を下ろしてシュートを中断。神崎のブロックをかわして中へと切り込んだ。

「ウソツ!？」

（四番^{日向}はピュアシューターのはずじゃあ……）

（舐めんなよ。こっちだっていっつも練習を続けていたんだ！）

これまでの試合ではスリーの得点のみを記録していた日向。事実ドリブルは得意ではない。

だが東京都予選の最中からずっとドリブルの練習に励んでいたのだ。

敵の注意が逸れた今、ようやくその努力が身を結んだ。

「もらったー！」

「……させない！」

ストップからのジャンプシュート。

確実なシュートのはずだったが、遅れて戻ってきた黒木がブロックを敢行。

彼のシュートを防いで見せた。

「うおっ!？」

「ドリブルも、シュートも、まだまだだな」

「ナイスブロック、黒木！」

佐々木がリバウンドを制し、大仁多も誠凛の攻撃を防ぐ事に成功する。

「さあこれが最後の攻撃です！ 全員、気を引き締めてください！」

残り時間を確認し、藤代が声を張り上げた。

最後のオフエンスを決めて後半戦に望みを繋げる。何としても決めたいこの攻撃。

一気に駆け上がる大仁多の選手達。

カウンターの状態になってしまった選手達は全力で戻ろうと足に力を込めるが。

「くそっ……ッ!?!」

伊月は途中でスピードが落ちてしまい、小林の姿を追うことはできなかつた。

「伊月!?!」

「足を止めるな、日向!」

不審に思った日向が視線を後ろに向けるが、木吉に制せられた。

大仁多の一次速攻を防ぐためには一人でも多くオフエンスに戻らなければならないのだ。彼の考えは正しい。

だが大仁多の速攻を防ぐことは容易ではない。

「佐々木!」

小林から佐々木へ。背の高い選手同士のパスは日向達には止められない。

今度はそのままパスをさばかず、着地後ロールターンで火神をわずかにかわすとゴール下に駆け込む光月へパス。

「そうはさせん!」

木吉が間に合い、ブロックに跳ぶが元々光月はシュートを決めるつもりはなかつた。

位置取りを確認し神崎へパスアウト。再び外へとボールを回した。

「ぐっ!」

(オフエンスが、中に集中しすぎたのか!)

「させるかよ!」

「とめろ日向!」

誠凛にとってもここは防ぎたい場面だ。日向が力を振り絞り、ブロックに向かう。

「……悪いっすね」

「ッ!？」

「俺もやられたらやり返さないと気がすまない性格なもんで」

神崎はシュートを撃とうとしていた腕を下ろし、中へと切り込んだ。

「あつ！… こんのつ……あ?」

「やらせねえっ!」

日向をかわした神崎の前に、最後の門番火神が立ちはだかった。日向も挟み撃ちにしようともう一度足に力を振り絞る。が、彼の足は思うように動かない。

火神を振り切るのとは不可能と判断したのだろう。神崎はジャンプシュートを放とうとする。

当然、迎え撃つ火神は跳躍しブロックを試みるのだが……

「無理だよ。たとえお前でも初見で勇のそれは止められない!」

大仁多のベンチで白瀧が神崎の成功を断定した。

神崎のシュートはただのジャンプシュートではなかった。ジャンプの際、火神から離れるように後方へ仰け反りながら跳躍し、ボールをリリースする。

(フェイダウェイシュート!)

「こいつ、スリーだけじゃなくてそんなのもあんのかよ!」

誠凛の選手達の表情が凍り付く。神崎をスリーだけが武器と思つたのは早計だった。

神崎のシュートはゆっくりとリングに向かっていき、そして——火神の腕によつて叩き落とされる。

「なっ!？」

「馬鹿な」

「神崎のフェイダウェイを止めただと!？」

成功すると信じて疑わなかった大仁多の選手達が驚愕する中。

ボールは転々とし、ラインを割ろうとしたその時。

前半戦の終了を告げる笛がコート上に鳴り響いた。

『第二Q終了です』

(大仁多) 59対65 (誠凛)。

両校のオフエンスが猛威を奮った第二Q。文字通り点の取り合いとなったこの試合は誠凛が六点のリードを保ったまま後半戦を迎える。

「一体、どうなっている」

（佐々木に神崎。完全に不意をついたはずの二人が止められた？）

「白瀧を止めたのは、何もあいつがスリーだけに固執していたわけじゃなかったってことか」

リードを許したまま、ということだけではない。むしろ大仁多が本当に悩んでいるのもう一つ。

この第二Q、白瀧からはじまり佐々木と神崎、三人のオフエンスを完全に防いだ火神の姿は脅威だった。予想以上の強さを見せ付ける火神は、大仁多の選手達の災いの種となった。

「……さつき戦った時、思ったんだ」

「え？」

「思ったって何をだ？」

「あいつの、火神のオフエンスです」

火神の変化を感じ取った白瀧は、その本質に気づき声を震わせる。

「あの感覚、間違いない。東京都の予選でキセキの世代と渡り合い。全国大会という大舞台で強敵と戦い。さらに第一Q、同じスタイルの本田と戦って本能が刺激されたのでしょうか」

今の火神はチームメイトの本田と。さらに言えばかつて白瀧が共に力を高めあったライバルと同じなのだ。

「今の火神のオフエンスは——野生の獣と同じです」

野生の獣のように五感が研ぎ澄まされ、予測をも上回る反応を可能にする感覚。

火神にもその野生が目覚め、大仁多に牙を向けているのだ。

「無理だよ。たとえお前でも初見で勇のそれは止められない！」

大仁多のベンチで白瀧が神崎の成功を断定した。

神崎のシュートはただのジャンプシュートではなかった。ジャンプの際、火神から離れるように後方へ仰け反りながら跳躍し、ボールをリリースする。

(フェイダウエイシュート！)

「こいつ、スリーだけじゃなくてそんなのもあんのかよ！」

誠凛の選手達の表情が凍り付く。神崎をスリーだけが武器と思っただのは早計だった。

神崎のシュートはゆっくりとリングに向かっていき、そして——火神の腕によって叩き落とされる。

「なっ!?!」

「馬鹿な」

「神崎のフェイダウエイを止めただと!?!」

(何か今日の白瀧君が言う事の殆どが外れる気がする！ 日向さんのことといい……)

「いや、わざとじゃないですからね、橙乃さん!?!」

ちなみにもう一人、衝撃を受けている人物が。

(やべえ。ホテルまで走りたくねえ)

神崎が冷や汗を浮かべていた。(第七十一話参照)

なお、約束はあくまでもスリーなので多分セーフ。多分。

第七十三話 託された想い

「前半戦を締め括る第二Q、予想を覆して誠凛が大仁多からリードを奪った！」

「東京都予選でも火神は“キセキの世代”を率いる強豪を相手に互角以上に戦っていた。しかし」

「初出場となるこのIHの舞台で、ここまでやるなんてね」

「あの野郎……！」

IH二日目の二回戦。栃木代表大仁多高校と東京都代表の誠凛高校。

前評判では大仁多が優勢ではあった。だが今、誠凛が六点のリードを保ったまま後半戦へと向かっている。

(大仁多) 59対65 (誠凛)。

特に誠凛のこの奮闘を支えているのは火神だ。幾度となく味方のピンチを阻止し、強敵を相手にその力を大いに発揮している。彼の活躍は観客席から見ても明らかであり、初めて見る者も一度対戦している選手達も多少の差こそあれ皆驚愕を懐いていた。

『これよりインターバルに入ります。後半開始は10分後です』

アナウンスがインターバルの時間を人々に伝える。

ランガン勝負となったこの試合。ようやくコートが静けさを取り戻し、選手達はコートから下がっていった。

「さあ皆さん、顔を上げて。すぐに控え室に戻りますよ」

リードを許す苦しい試合展開。

自然と選手達の視線が下がってしまうのを見かね、藤代が振り返り彼らへ呼びかけた。

藤代にとってもこの流れは予想外だった。誠凛の切札の一人である黒子を第二Qのうちに封じ込めた以上、大仁多の勢いは止められない。そう思っていたところでの火神の覚醒。

指揮を執る監督にとっても忌々しい悩みの種の出現だ。

だが、それでも藤代はあくまでも平然を装い選手達に笑みを振り舞う。

「確かに六点ビハインドだ。しかし今後の予定が狂うわけではありませぬ。――すでに、後半戦への布石は打たれている」

一瞬、誠凛の選手達へと視線を向けてそう呟いた。

確かに今は誠凛が流れに乗っている。

だが大仁多もすでに王手をかけているのだ。勝負を決めるであろう作戦はすでにはじまっている。そして効果を発揮している。

だから、そう悔やむことはない。そう選手達に言い聞かせた。

その後、控え室に戻った誠凛高校の動きは慌ただしかった。

「全員、今の内にエネルギー補給！ 少しでも疲労回復に努めて！」

順番にマッサージしていくからバツシユは脱いでおいて！ アイシングも忘れないように！」

リコが口早に言うのと次々とマッサージをこなしていく。

本来ならば後半戦に向けての対策を早い段階にしておきたいところであったが、そうもいかなかったのだ。少しでも体を休ませないと、と十分というインターバルの時間に急かされ、息も忘れて作業に没頭する。

（皆、普通の試合よりも疲労が溜まるのが早い。特に伊月君と日向君のガード陣。途中ベンチに下がっていた水戸部君まで）

試合に出場している選手達の疲労が尋常ではなかったのだ。これまでの試合と比較しても早い。

中でもガードの二人とゴール下で競っていた水戸部の三人の疲れが目立つ。

このままでは第四Qの試合終盤にはガス欠を起こしてしまいかねない。それだけはならないと少しでも選手達の回復の為にリコは動き続けた。

「悪いね、カントク」

「これくらい大丈夫よ」

「まさかこんなに疲労しているなんて思わなかった。……疲労した体

を披露した。キタコレエツ!」

無言でリコには足を叩かれ、日向には後方から小突かれ、伊月は短い悲鳴を上げる。彼もあまり余裕がないのかそれ以上ふざけた真似はしなかった。

（体の方もそうだけど、何とか疲労感が強い。余計に疲れているような感じだ）

第二Q最後の攻防。伊月は参加することが出来なかった。途中で体が悲鳴を上げ、走り続けることができなかったのだ。

伊月だけではない。日向も神崎のブロックに向かう事が出来なかった。水戸部も流している汗の量が多い。皆疲労が蓄積されている。

理由は前半戦の動き方だった。

特に第一Qは白瀧と西村の速攻、中澤の遅攻に惑わされて走ったり止まったりを繰り返した。セーフティに入る回数が多いPG、SGの二人は直のこと。

この一連の動きが問題なのだ。走った後に突然止まってしまうと、心臓に大きな負担がかかる。体にとつては急に止まるということは急激な運動だということの意味しているのだ。

水戸部も松平、光月という大仁多のパワープレイヤーを相手にしていた。二人ともゴール下で厳しいポジション争いを強いられた敵。その為黒木を相手にしていた木吉以上に疲れている。

（でも、ガード二人を下げてしまえばボール運びもゲームの組み立ても困難になる。ただでさえ大仁多には小林君と山本君、運動能力が高い二人のガードがいるのだから下手な手は打てない。水戸部君の分は鉄平に託すとしてもやはり伊月君と日向君には第三Qも出てもらわないと!）

日向の足を念入りにほぐしながらリコは後半戦の展望を考えていた。

少なくとも伊月と日向の二人は外せない。だが無理強いも出来ない。間違いなのは第二Qのような撃ち合いは期待できないというこ

とだ。

「伊月君、日向君。悪いけど二人を休ませる余裕はないわ。二人とも最後まで頑張ってもらおうよ」

「……わかってるよ。そんなこと言われなくても覚悟している」

「たりめーだ。今ようやくリードを奪ったんだ。こんなところで休んでいてたまるか!」

申し訳なさそうに告げると、伊月達は笑みを浮かべながら強く返した。

本当にありがたい言葉だった。強がりな面が大きいだろうが、本来なら監督である自分が鼓舞しなければならぬのに、逆に勇気付けられている。これほど頼もしいと感じる返事はなかった。

今は彼らの負けん気に感謝し、リコもつられるようにいつもの笑みを浮かべる。

「ありがと。期待してるわ。……でも、だからといって第二Qのような点の取り合いを挑まないでね」

「あれっ!？」

「さつきみたいなのハイペースだと、やはりどうしてもガス欠を起こしかねないの。黒子君も第三Qはまだ休ませたいし、後半戦はペースを落として。そして後半戦のキーポイントは……鉄平、火神君。あなた達二人よ」

日向の強がりや妄信するのは安易すぎる。黒子もいないのでは奇策もそう簡単には決まらない。

ならばと、リコは今大仁多にも通じている木吉と火神、インサイドを支配する二人の活躍に期待する。

「まだ大仁多は鉄平の動きは捉えきれていないようだし、火神君を止めることはそう簡単ではない。あなた達二人で、この戦況を打開して」

「ああ。任せろ!」

「うっす。誰が来ようともぶっ倒す!」

誠凛の中でもこの二人の力は飛びぬけている。前半も敵を脅かした。後半も十分活躍してくれるだろう。強敵との試合に戦いなれて

いるのか気負う様子も見当たらない。やはりこの二人が後半のキーポイントだ。

「それと、水戸部君も下がって休んでいて。代わって土田君に入ってもらおうわ。マークは光月君、一年とはいえ想像できないほどのパワーを秘めているわ。鉄平達と共にインサイド、体を張って！」

「よしっ。やってみる！」

水戸部がコクリと頷き、土田が強く拳を握り締めた。

マークにつく光月が力に長けているということとはわかっていることだ。

相当な覚悟が必要だろうなと土田は今一度勇気を振り絞る。

「六点のリードがあるとはいえ、皆油断はしないでね。大仁多は攻撃力が高いチーム。これくらいのポイントならすぐに引っくり返しに来る相手よ。ディフェンスはとにかく相手のシュートチェックを心がけ、リバウンドを取る事。挑戦者であるということのを忘れずに！ 皆、後半戦も頼むわよ！」

『おう！』

まだ前半戦が終わっただけだ。このリードを試合が終わった瞬間にも持つていなければならぬ。

あくまでも大仁多の方が格上なのだ。経験がはるかに違う。

くれぐれも勘違いしないように注意を呼びかけ、リコは話を締め括った。

「火神君」

「あ？ 何だよ。お前、ミスディレクション切れてんだろ？ 何か対策でも思いついたのか？」

「いえ、それはまだです」

「おい！ お前そういうの多くねえか!？」

ストレッチをする火神に歩み寄ったのは黒子。

前半戦途中で交代することになってしまったがまだ何も良い考えは思いついていないという。肩透かしを食らった火神は呆気に取られた。

「正直こうなるとは思っていませんでしたので。それよりも火神君に

言っておかなければならないと思ひまして」

「何だよ？」

我を通す黒子。こういう時は必ず何か考えがあつてのことだと判断し、火神は口を挟まずに次の言葉を待った。

「……白瀧君、仕掛けてくるかもしれせん」

「あいつが？」

「はい。帝光の時もそうでしたし、栃木予選の時も変わらなかつたのでおそらくは。……彼は味方がピンチの時ほど力を発揮する人です」
黒子は中学時代の白瀧を知っている。だからこそわかることだつた。

「それにまだ白瀧君が予選で見せた切札を見せていません。これまでのプレイを見ても新しいものはまだ。もしも白瀧君が新たな武器を見せるなら、タイミングはこの第三Q」

以前二人が緑間と共に観に行った試合で白瀧が見せていた新技をまだ白瀧が使っていない。新たに身につけたような技術も特に発揮した様子もなかつた。

だが仲間の危機を黙って見ていられないのが彼の性だ。このまま大人しく引き下がっているわけがない。

きつとこの後白瀧は何か動いてくると黒子は予言する。

「何かと思えば、そんなことかよ」

「え？」

「わかつてるよ。それくらい」

(キセキの世代との戦いに燃えているあいつがこのまま黙っているわけがねえ。油断なんかしねえよ)

何も黒子だけではなかつた。

火神も白瀧が積極的に活躍するであろうと感じ取っていたのだ。彼は相手のことを過小評価はしない。ここで倒すべき敵であると認識し、常に警戒をしている。

このまま容易に勝てる相手ではない。

そう考え、火神は集中力を高めていた。

「わかっているなら大丈夫そうね。でも火神君、くれぐれも無理は禁

物よ」

話が聞こえていたのか、すぐ近くで水戸部の足をマツサージしていたリコが二人の会話に口を挟んだ。

「前にも言ったとおり、これはトーナメント。まだ先があるんだから。絶対に忠告は守ってね」

「……うっす」

火神は小さく頷いた。

わかっている。白瀧がそうであるように、火神もまたキセキの世代に勝つ事を目標としてここまで戦ってきた。

この試合が終わりではない。目的に達するまでの道のりはまだまだこれからなのだ。

一方、同時刻の大仁多控え室。

「神崎さん、佐々木さん。疲れ様でした。無事に役目を果たしてくださいましたね。お二人は次の指示があるまでは休んでいてください。そして代わって山本さん、白瀧さん。お二人にもう一度出てもらいます」

こちらは藤代が淡々と後半戦の指示を出していた。活躍した二人を労い、次の考えを話す。

前半戦終盤に交代した四人の選手がそのままもう一度入れ代わり、レギュラーが再び揃う布陣となる。

「よっしやー！」

「はいー！」

「……わかりました」

「あの、監督。まさか俺走って帰れとか言われませんかよね？」

「神崎さんがそれほど走るのが好きだと言うのなら、それでも構いませんが？」

「僕、バス、大好き、です！ アイ・ラブ・バス！」

四人はそれぞれの反応を示した。

皆思うところはありそうだが特に不満はないようなので、藤代は後半戦の細かい戦術の説明へと移る。

「前半戦白瀧さんや中澤さんのオフエンスにより、誠凛のガード陣は崩壊しかけている。これは前半戦最後のプレイで確認できました。よってこのまま予定通りにいきましよう」

そう言つて、藤代は黒木と光月の二人をじっと見つめた。

「黒木さん。光月さん。今度はお二人に働いてもらいます。誠凛のインサイドを捻じ伏せてください」

驚いたことに大仁多もインサイドの二人に後半戦の重要な立ち上がりを託していた。

藤代の期待の籠った視線を受け、二人は揃つて首を縦に振つた。静かだが、力強い返答であつた。

「監督。伊月、日向の両名は身体能力はそう高くありません。疲れているならなおのことそこを攻めるのも手だと思えますが?」

「たしかにそれもそうですが、先ほどの打ち合いでお互いに意識が外に向いています。ここはもう一度原点に帰つてゴール下から攻めたほうが良いでしょう」

小林の提案も最もだが、前半戦の展開から彼の考えは受け入れられなかつた。

先ほどの神崎と日向。二人のシューターの打ち合いによつて両校ともアウトサイドへの警戒が高まっている。状況が変わつてディフェンスが広がる可能性があつた。

ならば今度は逆にインサイドで勝負し、流れを引き寄せる。それが藤代の考えだつた。

「インサイドでの勝負を制することが出来れば、すでに誠凛のガード陣は疲労が溜まつていて攻略は容易な状況です。一気にこちら優位へ引つくり返すことができる。お二人と、そして……あなたにも攻守で働いてもらいますよ。白瀧さん」

今の誠凛はインサイドが強い。ならば先にゴール下の対決を制して、大仁多の有利な状況をより増やしていく。

その為にも、今一度藤代はもう一人の重要人物である白瀧へと呼び

かけた。

「このまま相手のエース火神さんを乗らせてはまずい。あなたの役割は一つ。エース対決で勝利し、流れを引き戻してください」

「はい。必ず、必ず勝ちます！」

火神との戦いでは手ひどい目にあつた。

このまま後半戦まで火神の思うように動かせるわけにはいかない。もしも火神をとめられるとしたら可能性が一番高いのは白瀧だ。それは周囲も、彼もよくわかっている。

だからこそ、白瀧は藤代の命令に力強く返答をした。

それを聞いて藤代は満足げに頷き、表情を戻してさらに説明を続ける。

「ではオフエンスは三人に託します。小林さん、山本さんはサポートを。速攻はないとは思いますが一応セーフティに着く事を忘れずに。デイフェンスは敵もこれ以上ガード二人の負担をかけようとはしないはず。インサイドを固めてプレッシャーをかけるように。まずは同点、試合を振り出しに戻していきましょう。皆さんの働き、期待しています」

『はいっ！』

そう締め括って藤代の説明は終了し、選手は各自次に向けての準備に取り掛かった。

マツサージを受けたり栄養を取ったり、前半のビデオを見返したりと。

皆が其々の反応を見せる中。

ストレッチを続ける白瀧の元に橙乃がゆっくりと近づいていった。

「白瀧君。大丈夫そう？」

「ん？ 橙乃か。うん、大丈夫。今日は休みも挟んだしまだ余裕はありそうだ」

「そうじゃなくて。そっちもそうだけど……」

顔をしかめて言いよぶ橙乃。きつと身体的なことではなく、精神的なことを言っているのだろう。火神が本領発揮し、キセキの世代を彷彿させるような快進撃を続けているのだ。その心配をしているは

ず。

こんな顔をするのは珍しいなと思いつつ、白瀧は静かに笑った。「大丈夫だ。心配されるほど柔ではない。こんなこと、中学時代に何度も経験したよ」

「監督に託されたけれど、何か考えでもあるの？」

「まあそこが問題だね。空中戦は覚悟していたけれど、よりにもよって地上戦にまで対応されるとは思ってもいなかった。俺の速さに慣れるとしても後半戦からと思っていたからな。俺も予想が甘い」

「うん。さつきは佐々木先輩に神崎君まで止められてしまった」

「反応が尋常なほど早い。気性が激しいPFはもれなく野生の動物のような勘でも与えられるのか？」

そう口にして白瀧は自嘲気味に笑う。脳裏に描くのは火神に加え、チームメイトの本田、そしてかつてはライバルと呼べる存在であった青峰の姿だ。

自暴自棄になっているようではない。むしろ何か考えがあるようにも見受けられる。

だが速さは白瀧の真骨頂、代名詞とも呼べるものだ。身体能力が一枚も二枚も上である敵を前に、その唯一無二の武器を封じられて一体どうするつもりなのか。橙乃には思いつかない。

「それで、どうするの？」

「どうするも何も決まっているだろう？」

問いかけるが、橙乃には検討がつかない。

黙りこんだ彼女の様子を見て白瀧は話を続けた。

「地上戦でも辛い中、速さが駄目ならスピード勝負だ。俺が戦うならやっぱりここしかない」

「……………ねえ白瀧君。私の話聞いてた？ 真面目に聞いているんだけど？」

「待って。ちよつと待って。橙乃は一端落ち着こう。せめて話を聞いて」

突如橙乃の機嫌がすこぶる悪くなったのが白瀧でも感じ取れた。

これは絶対何か勘違いしていると思いつつ、説得を始めようとすると。

佐々木が一人、二人の下へと無言で近づいてきた。

「白瀧」

「佐々木先輩。前半、お疲れ様でした」

「いや。悪いな、結局火神を余計に調子付かせる結果になってしまった」

「そんなことは」

そんなことはないと続けようとした白瀧を制して、佐々木は話を続ける。

「こんな事を、一年であるお前一人に言うのは都合が良いということはおわかってる。だが恥は承知の上だ。頼む」

白瀧の肩に手を当てて、佐々木は周囲から表情を隠すようにして言った。

「どうか火神を止めてくれ。大仁多を、小林達を、先へと導いてくれ！」

僅かに、触れられている白瀧にしかわからないほど僅かに。佐々木の手は震えていた。そして彼からは見えなかったが、佐々木は唇を噛み締めながら必死に言葉を繋いでいた。

自分では無理だということをおわかって。託すしかなくて。不甲斐なさど申し訳なさでいっぱいだったのだろう。

そう口にする佐々木は足早に大仁多の控え室を後にした。

「……はい。必ず。必ず」

告げる相手がいなくなった控え室で、白瀧が誰に告げることもなくそう呟いた。

佐々木の後を追う事は、しなかった。彼の機会を奪った自分には何を言っても慰めにはならず、自己満足にしかならないということとは、誰よりもよく知っていたから。

だからせめてプレイで先輩の思いに答えようと。それがエースの務めだと。

白瀧は後半戦が始まる時を待つ。静かに、心のうちに宿る闘志を燃やして。

試合が中断して十分が経過した。

両校の選手達がコートに戻り、いよいよ試合再開の時が訪れる。

『インターバル終了です。これより、後半第三Qをはじめます』

「行くぞ！ 誠凛、ファイ！」

『オオーツ！』

「勝つぞっ！ 大仁多！ ファイツ！」

『オオーツ!!』

アナウンスの終了と共に、両校の円陣を組み、士気を高めるように声を上げた。

日向と小林。二人の主将の掛け声を合図に選手達はコートへと戻っていく。

誠凛は伊月、日向、土田、火神、木吉の五人。対する大仁多は小林、山本、白瀧、光月、黒木の五人だ。

誠凛はリバウンドに強い土田を入れてインサイドを強化した布陣。

大仁多はレギュラーの五人が揃って万全の態勢を整えていた。

(大仁多は佐々木1番と神崎13番を下げてレギュラーで後半戦へ。リードがあるとはいえ、前半戦の勢いがどこまで通じるか！)

(相手はガード陣は交代せず、水戸部8番に代わって9番土田を投入か。層が薄いチーム事情もある。予想通りと考えてよい)

両校の監督が敵の思惑を探る中、試合は再開する。

「さあ始まった！ 後半戦、第三Q！」

「誠凛がこのリードのまま逃げ切るか。あるいは大仁多が逆転するか。運命の後半戦！」

山本からボールを受けとった小林がボールを運ぶ。

最初のオフフェンスは大仁多からだ。そして小林が最初のオフフェンスを託したのは。

「さあ、まずはお前だ。光月」

ゴール下、ローポストに立ち面を取る光月だ。

彼の背中には水戸部と変わって入った土田がいる。体力に余裕の

ある土田に光月を任せようという考えであろうが、考えが甘い。
(ぐっ、重い……!)

ローポストでポストアップする光月が、どんだん力をかけて土田を押し込みポジションを奪っていく。

土田も必死に抵抗するが光月を止められないまま、彼に小林からボールが供給された。

「入った光月だ!」

「行けっ!」

味方の声援を受け、光月が動いた。

カットされないように高い位置でボールを受けると、そのままフロントターンで土田をかわし、ゴールと正対して跳躍。ボールを持つ両腕を大きく掲げた。

「ぐっ!」

「打たせん!」

土田、さらに木吉が反対側からヘルプに出て光月のシュートを防ぐうと試みる。

「うあっ、アアアアっ!!」

だが光月は止まらない。二人のブロックなどお構いなしに、リングへボールを叩きつけた。

「うあっ!」

「があっ!」

光月の渾身の両手ボースハンドダンクが炸裂する。

二人のブロックを吹き飛ばし、リングへ直接シュートを決めてみせた。

『ディフェンス! 黒、誠標7番! バスケットカウントワンズロー!』

さらに審判は木吉のディフェンスファウルを宣告。光月はフリースリー一本の権利までもにした。

「なっ!」

「木吉を、吹き飛ばした……?」

「……桃井。あいつは?」

「それが、中学時代のデータは全然見つかりませんでした。高校、つま

り大仁多に入って急激に力を伸ばしてきたと思われます」

「ハッ！ おいおい、木吉を越えるとはやるじゃねえか。大仁多にもこんな筋肉隆々なやつがいたのか！」

たった一度のプレイで光月が存在感を見ている者達へ示した。

観客席でもあまり知らない選手が鉄心・木吉を吹き飛ばしたということまで話題になっている。

桐皇も、さらには洛山の中にも彼の活躍に目を見張っているものが現れ始めた。

(大仁多) 61対65 (誠凛)。

光月のダンクシュートが決まり、大仁多が幸先良いスタートを切る。

「いぞ光月！ その調子だ！」

「はい！」

山本に褒められ、嬉しそうに頬を緩める光月。

ゆっくりとフリースローラインに入り、追撃の一点を決めるシュートを放つ。

光月の放ったフリースローは、リングに弾かれた。

「あっ」

「せっかく褒めたのに！」

(うーむ。明のフリースロー、中々確率があがらねえな)

大仁多のチームメイトが苦言を呈する中、リバウンドは三人と人数が多い誠凛が手にした。土田がしっかりと胸元に引き寄せると素早く伊月にパスをさばく。

三点プレイは成立せず。これで攻撃は誠凛へ移る。

(助かった。二点で止まったのは大きい)

「よしっ！ じっくり一本取りに行くぞ！」

ボールを運ぶ伊月は慎重だった。ゆっくりと時間をかけてゴールに攻めていく。

披露を考慮してか日向の動きも少ない中、ミドルからインサイドにかけての動きは活発だ。

木吉、土田はどちらも良いポジションを取ろうと体を張り。

火神は白瀧のマークをかわそうと必死に足を動かした。

だが光月の体はビクともせず、白瀧のマークも中々振りほどくことができない。

（くそっ。全然ビクともしない。先ほどのポストプレイの時にも感じたが、パワーに関しては火神よりも上だ！）

「ちっ。白瀧！」

「……いかせねえよ。お前はここで止める！」

どちらも大仁多自慢のルーキー二人の徹底マークを受けていた。この二人をいきなり使ってもオフエンスを組み立てることは容易ではないだろう。

「……木吉！」

ならば、誠凛自慢の大黒柱へ。

伊月から木吉へボールが通った。

パスを受けた木吉はバックターンから流れるようにシュート態勢に。

（くっ！ どっちだ。シュートか、あるいはさつきみたいにパスを？）

黒木が木吉の動きに惑わされながらもブロックに跳ぶ。

仕掛けた木吉は左手だけでボールを掴みなおすと、シュートからドリブルに切り替える。

空中に跳んだ黒木を尻目にドリブルで彼を抜き去るとそのままジャンプシュートを沈めた。

（大仁多） 61対67（誠凛）。

「ぐっ、そっ！」

（読み合いになっていない！ ビデオでも確認したが、こいつのボールが放すタイミングが遅すぎる。そのせいでタイミングが取れない！）

「ナイツシュ木吉！」

「ああ！ ゴール下は任せてくれ！」

ようやく黒木も木吉の強さの秘密を理解していた。

木吉はドリブル・パス・シュートと司令塔のパスセンスを持つ異色センター。だがそれ以上に、彼の大きな手を利用した、相手の出方を

見てからオフENSEの動きを変えろという「後出しの権利」。これが何よりも厄介だった。

そのせいでカラクリがわかってても対策が打てない。

木吉が伊月とハイタッチをかわす姿を、黒木は忌々しく見つめた。

「ッ！ キャプテン」

「どうした黒木？」

「俺も、攻めたいです。ボールをくれませんか？」

「……お前がそう言うのは珍しいな。いいぞ」

同じポジションとしてこれ以上好き勝手されるのは癪に障るのだろう。

そうでなくてもあのような発言を受けて黙っただけでは余計に木吉のオフENSEが猛威を奮う。

その前に自分もやり返す。黒木が珍しく小林にオフENSEの意思表示を示した。

(どちらにせよ監督も黒木を使うことを言っていた。鉄心が相手となるとそう簡単ではないが。うちのゴール下の力、見せてやれ！)

小林も彼の気概を勝って彼のオフENSEを模索する。

もう一度攻守が変わって大仁多のオフENSE。

こちらでもやはり厳しいゴール下の争いが繰り広げられる。だが白瀧が外に火神をひきつけている為に先ほどよりは警戒が薄くなっているようだった。

「やるなら今だな。黒木！」

邪魔が入らない今の内に勝負をさせるに限る。小林は伊月の上を通すように黒木へとパスを供給した。

(またゴール下か！)

「木吉！」

「大丈夫だ！」

伊月が注意を呼びかけるが、木吉の状態も万全だった。

黒木もパワードリブルを仕掛けるが中々切り込めない。

力勝負は不利と判断すると黒木はその場でバックターン。流れるように体を回転し、ゴールへと向かった。

「させるか！」

マークが外れたのは一瞬だ。すぐに木吉が詰める。

彼の両腕がブロックに向かっているのを確認して、それでも黒木は右腕にボールを乗せると左腕は木吉の方によせ、そのまま手首のスナップだけでシュートを放った。

「なっ！」

(フックシュート！)

木吉のブロックは届かず、ボールはリングを潜り抜ける。

(大仁多) 63対67 (誠凛)。

大仁多はゴール下から着々と加点し、誠凛に詰め寄っていく。

「今のシュートは、水戸部も使うフックシュートか」

「やっぱり強豪のレギュラーだけあって技術は高い」

「……いや、ただのフックじゃねえ。っす」

「えっ？」

誠凛の選手達が黒木のシュートに感心していると、唯一違いに気づいた火神が補足するように口を開いた。

「ただのフックシュートとは少し違う。肘は殆ど曲げずに、手首のスナップだけで打つフックシュート。——ベビーフック！」

極限にシュートモーションを小さくし、手首と指先のスナップのみでリリースするベビーフック。水戸部のそれよりもさらに洗練されたものだ。

「あれは中々とめられないだろうな。合宿でも痛い目に会わされた」

「うちのジャンでも、彼のあのシュートだけは止められなかったものね」

その凄みを知る楠、西條は嫌な記憶を思い起こされ、苦笑せざるを得なかった。

「……俺が相手ならばどんな状況でも勝てると思っただか？」

「えっ？」

「甘く見るなよ、鉄心。伊達に大仁多のゴール下を任されてなどいな
い」

そう言い残して黒木は走り去った。

たとえ「無冠の五将」が、「鉄心」が相手だからと言い訳にして甘んじるわけにはいかない。

大仁多を支える大黒柱の一発により、ゴール下の争いはより熾烈を極める戦いとなった。

——黒子のバスケ NG集——

「よっしゃー!」

「はい!」

「……わかりました」

「あの、監督。まさか俺走って帰れとか言われませんかよね?」

「決まっているでしょう?」

「それじゃあ!」

「走りなさい」

「……あああああああ!!!」

上げて落とす監督、藤代雄一。

第七十四話 スピード勝負

「ぬああああああ!!」

「ぐっ!」

小林のジャンプシュートがリングに嫌われた。そして両軍自慢のパワープレイヤーが凌ぎを削る。

せめぎ合いを制した光月がオフエンスリバウンドを確保した。

直後、プレッシャーをかける土田をロールターンでかわしてダンクシュートへ向かう。

右腕に渾身の力を込めて叩き込む、その瞬間。

逆サイドから彼のダンクシュートを封じる大きな手がボールを叩き落とした。

「あっ!?!」

「そう簡単にはいかないよ」

「木吉!」

防いだのは木吉。

落ちたボールも土田が確保した為にボールは誠凛サイドへと渡ってしまう。

攻守が変わって誠凛のオフエンス。

伊月から木吉にボールが入る。

すると木吉はパワードリブルで黒木の体を押しやり、ポジションを奪っていく。

黒木がどうかしてボールを奪おうと策を講じると木吉はパスを選択。

ミドルへ走りこむ日向へとパスをさばいた。

「っ!」

「ナイスパス!」

絶妙なタイミングでさばかれたパスだった。

日向はリズムを崩す事無くレイアップシュートへと移行する。が、そこで今度は山本のブロックショットが炸裂した。

「させねえよ」

「うおっ！」

「舐めんな。そう簡単に決めさせてたまるか」

オフエンスだけではない。ディフェンスもここにきて両校とも引き締まってきている。

試合の命運をわける後半戦。

中々連続得点に繋げることは出来ないまま均衡状態が続いている。
(やはり木吉がいるとなるとゴール下の厚みがまるで違う。しかし！)

だがそれでも小林は方針を変更しない。変わらずボールをボール下へと集め続けた。

山本を経由して、今度は木吉とマッチアップしている黒木にパスが通る。

「——行くぞ」

「ああ。来い！」

黒木が仕掛ける。

ドロップステップを踏み、さらにドリブルでゴール下へと切り込んでいく。

ゴールが見えるや先ほど見せたベビーフックを放つ。

ギリギリまで相手の動きをかわすことに洗練した技だ。

木吉も完全に防ぎきることはできないものの、わずかに指先がボールに触れる。

(指先がかすった！)

(このタイミングではまだ届かないか！)

「リバウンド！」

ゴール下での一騎打ちでは決着着かず。

二人はチームメイトへと声をかける。声に応じ光月をはじめとした選手達がボールを狙う。

真っ先にボールに飛びついたのは、意外にも小林だった。

空中のボールを指で軽く押し込みリングの中へと沈めていく。

「おおっ！」

「さすが小林さん！」

「ナイスフォロー!」

大仁多の得点が記録され、点差を二点に縮める。

(大仁多) 67対69 (誠凜)

後半が始まって三分が経過する。

両チームとも気が抜けない展開が続いていた。

(前半のようなペースにはなっていないとはいえず、やはりこの二点差を保つのが精一杯だな。木吉がいなければ本当に危ないところだ)

伊月は大きく息を吐き、気を落ち着かせる。

誠凜のスローペースなオフェンスに加えお互いのディフェンス、特にフロントラインの活躍もあってリードを保っている状況だ。

リコの考え通りに進んでいると言ってよいだろう。

だがそれも木吉の存在があつてのものだ。過信できるほどではない。

(それに、いくらなんでも大人しすぎる。嫌な予感がする)

伊月はチラリと白瀧の姿を見た。

彼の厳しいマークのせいで火神のオフェンスが封じられているが、かえってオフェンスに消極的になっているようにも見える。

前半戦で勢いが消沈したのか。いや、黒子の発言もある。かえって嵐の前の静けさのように感じられた。

(大仁多は一度点が入り始めたなら止まらない爆発力を持っている。何とか、何とか食い止めないと!)

そうなるとやはり今は確実に得点できるところで勝負したいのが司令塔だ。

伊月は日向のスクリーンで小林をかわすと木吉へパスをさばく。

ボールを受けた木吉はドリブル一つで黒木をかわすと、サイドハンドパス。

ヘルプに出た光月をかわし、フリーになった土田へとパスをさばいた。

「グッ!」

「ウソッ!」

(こっちの動きが読まれた!?)

「ナイスだ木吉!」

土田はそのままジャンプシュートを決めた。

(大仁多) 67対71 (誠凛)。

大きな手を活かし、パスのタイミングを遅らせる木吉のスタイル。大仁多の選手でさえ彼との読み合いに勝つことは非常に難しいものだった。

「よしっ」

「よくやった!」

「ナイスパス!」

柔かい笑みを浮かべて伊月達とタッチをかわす木吉。

彼の存在でチームには安心感が生まれている。彼がいればこの苦境も乗り越えていけると。

「……ふう」

そんな相手選手たちの姿を見て、白瀧は決心する。

「小林さん」

「うん? どうした?」

「そろそろ俺も大丈夫です」

小林に声をかける。火神の姿を真っ直ぐに見据えながら、彼は続けた。

「俺にボールを集めてください。誠凛優位のこの展開にケリをつけましょう」

「……勝てるのか?」

「はい。必ずやもう一度流れを呼び戻します」

流れを変えるのに一番適しているのは、エースが活躍する事だ。

それは白瀧が誰よりも理解している。だからこそ、彼は今一度火神との勝負に挑んでいく。

大仁多のオフエンス。小林と山本が交互にボールを運び、試合を作る中。

「光月、黒木!」

小林が声を張り、ゴール下の二人に呼びかけた。

二人が呼ばれたことに気づいて視線を向けると小林を右サイドに

小さく顔を振る。

それだけで言いたい事を理解できた。その方向に立っているのは彼らが信頼している選手、白瀧なのだから。

小林から山本、さらに光月を経由して白瀧にパスが通る。

「む。これは……」

そして、観客席の選手達は真つ先に異変に気づく。

直後コート上の誠凛の選手達も大仁多の選手達のポジション取りの意味を理解した。

右サイドには白瀧を残し、小林や山本達は逆サイドへと離れている。アイソレーションを取っていた。

「アイソレーション」

「これって、つまり」

「……この状況なら考えなくてもわかんたろ」

「ああ。大仁多の狙いはエース対決。白瀧対火神の一騎打ちだ」

赤司の眩きに驚くものはない。皆確認の意で眩いたのだ。

他の選手ならまだしも、白瀧がボールを持っているのならば一対一以外の答えなどありえない。

「さて。やり返させてもらうぞ火神。先ほどの借り、倍にして返す！」

「ようやくか！ 来いよ！」

後半戦の流れに、あるいはこの試合の結果にさえ影響しかねないエース同士の一騎打ち。

生まればもう戻らない。戻れない。

チームの命運を背負って、二人のルーキーが再び衝突する。

(……キセキの世代は勿論。こういう強い敵との試合では絶対に避けられねえ、ワンオンワン。しかも今はどっちも点差が殆どない状況だ。負ければ痛すぎる。絶対勝つ！)

火神も誠凛の戦況を正しく理解し必勝を誓う。

前半戦は確かに相手を止めることが出来たのだ。返り討ちにして、

もう一度誠凛のリードを広げてやる。

そう活き込んで集中力を高める。

ボールを受けても白瀧はすぐに動かない。

両腕が上がる。違う。フェイントだ。僅かに体が反応するが、見切っている。

前に出ていた右足を一步動かした。違う。これもフェイント。まだ勝負ではない。

もっと、もっと相手の動きに集中しろ。

火神はしっかりと白瀧の姿を目で捉え——直後、彼の体が大きく揺れた。

(来たー！)

反応し、応じて彼も後方へ下がる。

おそらくは全速力のドリブルだが目で終えたならば止められる。

そう判断して、それでも白瀧はあつという間に火神を振り切ってしまう。

「速っ——!?!」

「ヘルプ——」

わかっているでも防ぐ事ができなかった。

火神が抜かれた事で伊月が日向に呼びかけるが、日向のヘルプも間に合わなかった。

敵がマークに着く前に彼は敵陣を突破し、レイアップシュートを沈めている。

(大仁多) 69対71 (誠凛)。白瀧、後半戦初得点を挙げた。

「遅いぞ。もっと集中しろ」

「……うっせっ!」

短く挑発してディフェンスに戻っていく白瀧。

そんな彼の様子に負けず嫌いの火神が黙っていられるわけがない。

「伊月先輩!」

「お前も、やりたいってか?」

「うっす。やられっぱなしで黙っていらねえ! こっちもやってやる!」

「オツケー。さすがに木吉一辺倒も不味いからな。任せるよ」

火神の闘志を消してしまうのは勿体ない。攻撃が木吉に集中しすぎていたこともあり、一度相手の意識を散らしたほうがいいと考え、伊月は彼の提案に応じることにした。

ならばやるべきことは単純。確実にエースの下へボールを届ける。相変わらず小林達のマークは厳しいが、イーグルアイを使い、ドリブルで相手を左右にふりながらノールックパスをさばく。

ボールは無事に火神へ渡った。

「負けねえー！」

「……勝つ」

タイムリングを計った白瀧とは一転、火神は一気に仕掛けた。

平面の勝負は白瀧に分がある。ならば時間をかけない方が良くと判断したのでだろう。

鋭いキレのクロスオーバー。右から左に切り替え、白瀧を抜きにかかった。

だが白瀧は彼の動きに難なくついていつている。進路方向に立ちはだかり、ボールを奪おうと狙っていた。

「わかってんだよ。そんなことは！」

しかしそう簡単にはやらせない。平面勝負は不利。ならば得意の勝負に持ち込むのだ。

火神はその場で大きく跳躍。突然の動きで体が流れてしまっているが、彼の誇る対空時間は空中で態勢を立て直すことを可能としている。これで白瀧にボールを奪われることはない。

（……ア？ 跳んでねえ？）

ふと違和感に気づく。

彼と同じように跳んでいるはずの白瀧がブロックに跳んでいなかったのだ。

まさか空中戦では勝てないと諦めたのか。そんなわけがないと思いながら、他の理由も思い浮かばず、ならば今のうちにと火神はジャンプシュートを放り。

「させないー！」

シュートを撃つその瞬間。白瀧が勢いよく空中へ躍り出た。「ッ!?!」

届いてはいない。火神の持つボールに腕は届いていない。しかし一瞬で何もなかった視界に敵の腕が映し出され、手元が狂った。

「しまった!」

「リバウンド!」

シュートが短く、リングを跳ねる。

二転三転としたボールを手にしたのは、やはり木吉だった。

「くそっ!」

(やはりセンターとしては、こいつの方が上か!)

さらに木吉はジャンプシュートのフェイクで黒木を欺くと、逆の手に持ち替えて強烈なダンクシュートを決めてみせた。

(大仁多) 69対73(誠凛)。誠凛もそう簡単に点差を縮めることは許さない。すぐに点を取り返す。

「さすがは木吉。なんという威力だ」

「……すまん白瀧。折角お前が止めてくれたというのに」

「気にしないで下さい。大丈夫です。また取り返せばいいんですから」

黒木が頭を下げる中、白瀧は静かに笑った。

得点を取る。それはエースの仕事だ。チームメイトのフォローをするのも同じこと。

だから任せてくださいと、白瀧は語気を強めて口にした。

「あつぶね」

「……火神、気をつけろ。前半戦の時にも感じたが、あいつは地上戦だけじゃねえ」

「うっす。今のだけでもわかつたつすよ」

一方、得点に繋げることができたとはいえ、誠凛の選手は内心冷や汗を浮かべていた。

リバウンドの前のプレイ。火神が白瀧のプレッシャーを受けた時のことだ。

普通ならばあのタイミングでは火神のシュートを撃った直後に最高到達点に達するはずだ。だが白瀧は火神のシュートをずらすように、信じられないスピードで跳んでいた。

(地上戦だけではなく、空中戦でも同じ瞬発力。長く宙にいる俺とは真逆。あつという間にコイツは最高到達点に達するんだ)

(第一Q、俺のスリーを止められたのもあれが原因だな。普通では間に合わないタイミングでもアイツは間に合わせてみせる)

「まったく。嫌になってくるぜ」

一口にジャンプ力と言っても二種類存在する。

火神が得意とする滞空力。そして白瀧が得意とする瞬発力。

いわば初速が速いのだ。先ほどのように普通より遅く跳んでも一番先に最高到達点に達することができる。

デیفエンスの役目は止めるだけではない。プレッシャーをかけてシュートを外させ、味方に託すのも重要な役割なのだ。

「とにかくデیفエンスだ。火神、また来るかもしれないねえから気をつけろよ」

「おう！」

短くそう返して火神は走り出す。

わかっている。あの男は一度火がついたらトコトン攻めて来る。

油断できるはずもない。

常に警戒し、集中力を高めておこう。

そう考えて——やはり彼らの予想通り白瀧は動いた。

「白瀧！」

「ナイスパス！」

伊月をかわした小林から白瀧へパスが通る。

そしてやはり、他のチームメイトは場所を空けるように反対側に寄せている。

再び白瀧が対一を挑んできたのだ。いやでも火神のやる気がわきあがった。

「今度はさっきみたいにかせねえ！ 止めてやる！」

決して強がりではない。先ほどのワンプレイで火神は感覚を再確

認した。その上で止められると判断した。

最初の動きを捉える事が出来れば、後は止めることは不可能ではない。今までの経験から、相手の動きに対応できるだけの自信はあった。

だから来てみる、そう目で相手を威圧する。

その気持ち伝わったのだろうか。今度は白瀧もそう時間をかけることはしなかった。

(よしっ！)

フロントチェンジからのクロスオーバー、とみせかけてのダブルクロスオーバー。

あまりにも複雑な連続した動きに普通ならば呆気にとられるところだったが、火神は見切った。

やはり野生に目覚めた今、火神のデイフェンス能力は白瀧にも遅れを取らない。白瀧の行く手を阻み、ステイールしようと手を伸ばす。

「やっぱりな」

「ッ!?!」

直後、白瀧はその場で速度を緩めてドリブルを続行。

伸ばした右足の真下にボールを通し、火神のステイールを防いだ。

突如敵の速度が変わったことに火神は反応しきれなかった。態勢が崩れた相手を目にし、白瀧は再び前進。

火神は地に着いている左足を強引に蹴って後ろに下がると、白瀧はそこで速度を緩めながらロールターン。逆側へ躍り出ると、全速力でクロスオーバー。身動きの取れない火神を完全に抜き去った。

「なっ!?!」

「え?..」

「.....はっ?..」

「まさか.....」

驚いたのは火神だけではない。

誠凛のチームメイト、黒子を含むベンチメンバー、観客席の楠やキセキの世代といった面々が、皆呆気にとられていた。

その原因である白瀧は土田と伊月のブロックをダブルクラッチで

かわし、得点を重ねている。

(大仁多) 71対73 (誠凜)。誠凜の逃げ切りを阻む、追加得点。

「そんな。だって、白瀧君はアジリティが低いはずじゃ」

「はい。そのはずです。しかし今のは間違いなく」

(青峰達を使う、チェンジオブペースそのもの……?)

「おいおい。話が全然違うじゃねえか黒子」

全員が今の白瀧の一連のプレイに驚愕していた。

少なくとも試合前、彼は減速力に欠けており緩急を含んだ動きは苦手であると昔からよく知る黒子が語っていたというのに。黒子の話とは打って変わって、白瀧は切り返しに速度の変化を加えた変幻自在なドリブルを見せてきた。

ただでさえ最高速度を見切れることも難しいのだ。それなのにこれ以上彼が力を見せるとなればとても余裕はなくなってくる。

火神は好戦的なものとは違う、苦笑のような笑みを浮かべていた。

「……ああ。まったく。俺はライバルを必要以上に強くしてしまったらしい」

「ロビン?」

「まさか、お前がここまで仕上げてくるとは思ってもいなかったよ」

ただ一人、白瀧の成長の原因を理解した楠は大きく息を吐いた。

気にかけて西條が彼を見るが、反応はない。

楠は自分を破り、自分がアドバイスし強くしたライバルをまじまじと見つめていた。

同時に、かつて県大会の後に白瀧とかわした会話を思い出しながら。

『ボディバランスと言っても、瞬発力と体幹が均衡していることが重要になる。』

今のお前は瞬発力が強すぎるために、かえって瞬発力が一人歩きしている。

だからこそまずは体幹を鍛えろ。それにより安定性が増せば、シュートの際に体が崩れることもなくなる』

それは白瀧が楠にジャンピングシュートのコツを教わりに行った

時のことだ。

あの時はジャンピングシュートを身につける為に指導を願った。だが白瀧はそれだけでは止まらなかったのだ。身につけた力を、何か他にも活かせないかと。強くなった今なら、他にも出来るようになったことがあるのではないかとそう探求したのだ。

(体幹を鍛えた事により、最高速度から最低速度へ移る際に生じる体のブレに耐えられるようになった。ボディバランスを身につけたこととより上達した体の使い方が出来るようになってる)

楠の語ったとおり、今までは白瀧は身体のバランスを取る事が難しかった。

そこで彼の指示通りに体幹を鍛えることで姿勢の維持する為の筋肉が鍛えられた。

結果、白瀧は今まで苦手としていた緩急を駆使し、元々得意であった方向転換と組み合わせることに成功していた。

「そうか。そうだな。お前はそういう男だった」

赤司は冷静にそう呟いた。

一つを得ただけでは満足しない。そこからさらに自分の持っているものと混ぜ合わせ、一つの武器とする。

白瀧のことを理解している赤司は、すぐに彼の成長を正しく読み取った。

「……いいぜ白瀧。それでいい！ それでこそ戦いがいがある！」

一方、赤司とは対照的に青峰は不敵に笑う。まるで獲物を見つけた獣のような表情だった。

隣に座る桃井などは彼の勢いに飲まれ、気圧されている。そんな周りの様子に気づかないほど、青峰は白瀧の成長を嬉しく思っていた。

(これで白瀧が後半二連続得点じゃねえか！ やべえ。もし一本でも止められようものなら、一気に持っていかれる！)

真っ向から挑んでいる火神は焦りを覚えていた。

先ほどのオフENSは何とか得点を決めることができたが、あれは木吉の助けがあったからだ。次も上手くチームメイトがフォローしてくれるという確信はない。

白瀧が調子を上げ始めた以上、火神も遅れを取るわけには行かない。だがかといつてエース対決から逃げて相手をさらに勢いづかせるのも不味い。

今度こそ白瀧を制して誠凛に勢いを取り戻す。火神は覚悟を決めると後ろ手で伊月にボールを渡すようにアピール。

細かい動きを繰り返して白瀧をかわしつつ、その時を待つ。

伊月からパスがさばかれた。

すぐにドリブルに望もうと大きく手を伸ばした。

その先で、白瀧の手がボールを叩き落とす。

「なっ!? しまった!」

(ステイール!)

「甘い!」

「パスコースを空けたとはいえ、パスがわかりやす過ぎだ」

「こいつらっ」

(まさか、わざとパスコースのデイナーを甘くして火神へパスを出させたのか!)

小林の言葉を受け、彼の隙が罠であると理解した。

データで白瀧がステイールの名手だとわかっていたはずなのに。

そう何度も小林を出し抜けるわけがないとわかっていたはずなのに。

今まで何度か成功していたからこそ、油断してしまった。

「戻れ、戻れ!」

日向が叫ぶ。

ステイールしたのは白瀧だ。間違いなく隙を狙って速攻を仕掛けてくる。

前半戦これで何度もやられたのだ。同じ過ちを繰り返すわけには行かない。

日向に応じて他の選手も駆け出す。

しかし、彼の予想を裏切つて白瀧は山本にパス。ボールを預けるとゆっくりとオフセンスに向かっていく。

「なっ。仕掛けてこない?」

「今は白瀧がステイールに成功して隙だらけの状態だったのに。何

で」

(あくまでも一対一ってことか?)

「……上等だ」

相手の真意を完全に理解できぬまま、誠凛の選手達は待ち構える。再び大仁多の攻撃。ここで得点を決めれば同点。三点が決まれば逆転となる重要な場面だ。そのためか小林と山本はいつも以上に慎重にボールを運ぶ。

小林から山本、もう一度小林に戻って黒木へ。

再びゴール下の勝負に持ち込むのかと、そう考えてボールは外の白瀧の手に渡った。

(大仁多は三連続で白瀧にー)

「火神！ 絶対に止めろ！」

「うすっ！」

止められなければ大仁多は勢いに乗り、誠凛の士気が下がることは間違いない。

これ以上相手に得点を許すわけにはいかない。

火神が気合を入れなおして白瀧を見据える。

「悪いな。俺もこんなところで敗退するつもりはない！」

だが白瀧の動きを止めることは難しかった。鋭いキレの方向転換に、リズムの変わる速度変更。野生を取り戻した火神であっても、彼の動きに対応しきることは出来なかった。

「ぐっ、あっ！」

(感謝しますよ楠先輩。緩急を混ぜることで、俺の速さがより活きる！)

仕掛けてきたかと思えば、目の前で減速しながら方向転換。

火神の態勢が崩れたところで全速力の切り返しを行う。これにより火神のマークをあっさり引きちぎった。

(マジで青峰のそれだ。最低速度は青峰の方が遅かった。だが白瀧は元からの瞬発力で、最高速度への切り替えを一段と早くしてやがる！)

今までの最高速度だけのドリブルではなくなった。緩急を混ぜ合

わせる事で白瀧のドリブルは真の意味で速度に特化したものとなる。
『速さが駄目ならスピード勝負だ。俺が戦うならやつぱりここしかない』

最終的な結論がスピードへと行き着いてしまうのは、実に彼らしい。

苦戦した火神を封じられていた得意分野で越えていく白瀧を見て、
橙乃は小さく笑った。

「このやろう！ 行かせるか！」

火神が突破された。それでも得点は許さないと日向がヘルプに出る。シュートをさせる前にボールを奪おうという魂胆の元、必死に手を伸ばすのだったのだが。

「いや。あなた方に止められるわけにはいかない」

さすがに白瀧がそれを許さない。

火神を突破した直後、白瀧は小刻みにジグザグの軌道を描くようにステップを踏む。

従来のステップとは違う、変幻自在のステップ。複雑な動きを目にした日向は惑わされ、白瀧の突破を許してしまった。

「ぐっ！」

(ジノビリスステップかよ。駄目だ。動きが読みきれねえ！)

「打たすかあつ！」

ゴール下まで切り込んだ白瀧に、誠凛の最後の砦である木吉が立ち
はだかった。

確かにこのジノビリスステップを見切れることは普通なら難しい。それでも木吉ならば。読み合いに長ける彼ならば予測も不可能ではない。

木吉は白瀧のステップの踏み切り場所とコースを読み取り、そして
彼がジャンプしたのを見て大きく跳び上がった。

「……そうでしょうね」

「ッ!？」

声と同時に、違和感に気づいた。白瀧は木吉が予想していたコース
からずれたステップを踏み。彼との距離がなくなっていく。

(距離が、近い!? これはまさか——!)

木吉が白瀧のプレイの意図に気づくが遅かった。

二人の体が軽い衝突を起こし、それを見届けた審判が笛を鳴らした。

驚愕に目を見開く中、白瀧は手首のスナップでシュートを放つ。ゆったりと山なりに跳ぶボールがリングの中を潜り抜けた。

その後、ボールが転がり落ちると審判が木吉に宣告したのは殆ど同時だった。

『ディフェンス! 黒、^{誠凛}7番! ^{木吉}バスケットカウント! ワンスロー!』

(大仁多) 73対73 (誠凛)。ついに大仁多が試合を振り出しに戻す。

白瀧の得点が認められた上に木吉がディフェンスファウルを取られてしまった。しかもそれだけではない。フリースロー一本は勿論だが、それ以上に大きなことがあった。

審判席の旗が上がる。『3』とかかれた数字が意味するのは、木吉のファウルが三つ目であるということだ。

「み、三つ目! 木吉のファウルが三つ」

「やられた!」

「嘘だろ、おい」

選手が許されているファウルは四つまで。五つ目を取られれば退場となる。

それなのに今、木吉が三つ目のファウルを取られてしまった。

まだ第三Q途中。接触も多いゴール下で体を張っていた木吉に痛すぎるファウルとなってしまうた。

「読み合いはあなただけの専売特許ではないんですよ、木吉先輩」

「……さすがだな。本当に凄いよ」

(直前で踏み出しをずらしたのか。重心が低いせいで気づけなかった。見事な切り返しの速さだ)

ある意味、実力以上の評価をしてくれているとも木吉は思う。

まさか自分の切り札を止められると考えその上でフェイントを混

ぜ合わせてくるとは思ってもいなかった。

これで木吉は前半戦までのように積極的に動く事が難しくなった。

「最悪——！」

リコは唇を噛み締めながらテーブル・オフィシャルのスコアラーの元へと向かう。

タイムアウトの申告だ。後半戦最初のタイムアウトは誠凛となる。あまりにも流れが悪すぎる。タイムアウトを取らなければ、一気に大仁多に大量得点を許してしまいかねない。

それだけ今の白瀧の得点は大きかった。

火神を三連続で打ち破り、木吉を三ファウルに追い詰めた。その上でシュートを沈めた。

誠凛の主力選手が揃って敗れた。しかも二人ともリコが後半戦の望みを託していた選手。

この敗北がどれだけ大きなものか、言葉で表すことは難しい。

これ以上ないほど悔しさを募らせながら、リコは白瀧が放った放物線を静かに見届けた。

綺麗な放物線を描いたボールはリングに掠りさえしない。

(大仁多) 74対73 (誠凛)。白瀧の連続得点でついに大仁多が逆転に成功する。

『誠凛高校、タイムアウトです！』

この試合を通じて誠凛にとっては一番の正念場と言えるだろう。

誠凛は満身創痍。大仁多は余力を残してエースが大活躍。

白瀧の復調によって誠凛はついに後がなくなってしまった。

——黒子のバスケ NG集——

「……ああ。まったく。俺はライバルを必要以上に強くしてしまったらしい」

「ロビン？」

「まさか、お前がここまで仕上げてくるとは思ってもいなかっただよ」
ただ一人、白瀧の成長の原因を理解した楠は大きく息を吐いた。
気にかけて西條が彼を見るが、反応はない。

楠は自分を破り、自分がアドバイスし強くしたライバルをまじまじと見つめていた。

同時に、かつて県大会の後に白瀧とかわした会話を思い出しながら。

『——そうなんだよな。女性の本音と言うのは中々わかりにくい』

『楠先輩達みたいにつき合ってもそうなんですか？ こっちなんで本当酷いですよ。最近では何故か気分が良いときでもかなり厳しくなるマネージャーですし』

『態度に出ている分はまだいいぞ。本当に困るのは拗ねて何の反応もしなくなる時——』

「ねえロビン。今何を思い出しているの？」

気持ち顔にまで出ていたようだった。

結局内容を全て自白させられた挙句、橙乃にまで内容が伝わった。

南無。

第七十五話 崩れる均衡

後半戦初のタイムアウトを取ったのは誠凛高校。

第三Q開始まで保っていたリードをついに大仁多に奪われ、リコはタイムアウトを取らざるをえなかった。

だが、彼女にはこの逆境を覆すほどの名案が思いついているわけではない。それどころかこの試合を最後まで保たせる為にと多少のリスクを背負う選択肢を選手に告げる事になっていた。

「鉄平。ここまで十分戦ってくれたけど。……このタイムアウト後、うちのオフェンスが決まったらすぐに下がってもらおうわ」

「なっ。ちよつと待ってくれリコ。俺はまだやれる！」

「いいえ。休んで。三つめのファウルを抜きにしても、この試合では予定より早くあなたを出してしまった。試合の残り時間が短くなつた時に、最後の勝負時にあなたに抜けられては困るのよ」

強く抗議する木吉だが、リコはその願いを聞き入れない。

木吉は本来なら前半戦は温存するつもりだった。

しかし第二Qから出すしかなかった試合展開に加えて、大仁多の黒木・光月というインサイドプレイヤー達の予想以上の奮闘によって負担が大きなものだった。

これ以上彼に負担を強いるわけにはいかない。ケガ明けの彼に無理は禁物だ。

強引に木吉の発言を押し切ってリコは次の話題を選手達へ振った。

「鉄平が下がったらもう一度水戸部君に入ってもらおうわ。申し訳ないけど、これといって大きな打開策があるわけではない。白瀧君が連続得点を重ねた以上、流れは向こうにある。おそらくは、このタイムアウト後も」

言いにくいことだが、あえてリコはハッキリと断言した。

選手達も覚悟はしているのだろう。大きな反応はなく、これといった反論もない。皆今の状況を正しく理解して受け止めていた。

「だからこそ。お願い——火神君。この状況を打破できるとしたら、今はあなたしかいないわ。第四Qまではミスディレクションが回復

していない黒子君を出せない。あなたに託す」

「……うすー！」

「皆には火神君を最大限フォローしてもらおうよ。リズムを狂わせることができれば、あるいは流れも変わるかもしれない。中を固めて相手の速攻を十分警戒。万全とは言えないけれど、今はこれしかない！」

限られた戦力の中で确实とは呼べない作戦だ。

だが火神以外にこの流れを変えられるような選手はいない。

今までのように、やはり強敵を相手に託すのはエースである彼しかないのだ。

もう一度誠凛はエースである火神に全ての命運を託す。

その一方で。大仁多ベンチでは。

「予定通り、と言えるでしょう」

「はい。インサイド勝負がメインとなったこの第三Qで火神、木吉の両名を沈黙させたのは大きいですね」

「ええ。これで誠凛の勢いは消えた。——流れを引っくり返しましたよ。小林さん、山本さん」

「はい」

「何ですか？」

「ここからはあなた方にも積極的に動いてもらいます。どんどん切り込んでください。誠凛がどのような手を打ってこようが関係ない。お二人で相手のディフェンスを攻め崩してもらいます」

藤代が望みどおりの結果が得られたならば計画を変える必要はない。

インターバル中に予定したのと同様に、ガード陣が次の一手を担うこととなる。

「了解です」

「望むところ！」

二人の三年生は意気揚々と監督の信頼に答えた。

(誠凛のエース級の相手と真つ向から戦い、打ち破ったことで士気は上々。最良の展望と言えるだろう)

五人の頼もしい姿を目にして藤代は満足げな笑みを浮かべた。

第三Qは小林が話していたように最初からガード陣を主体に攻めれば誠凛を攻め崩すのはもっと早かったかもしれない。しかし相手の弱点を狙うばかりでは後々に繋がらない。これから先も勝ち上があれば弱点がない敵と戦うかもしれない。世間にキセキと謳われた強敵達との戦いが待っている。

その時の為に、今ここで相手の弱点を狙うような戦術を取りたくは無かった。勝てる勝負に勝つてもあまり意味はない。強敵と真っ向から渡り合ってきた。強い敵に勝ってきた。その自信を選手達に植え付けるために。

現に大仁多のフロントラインが誠凛の主力選手たちを打ち破ったことが、選手達の自信となっていることは見ているだけで感じ取れる。

「誠凛は攻撃力が非常に高いチームです。木吉さんが出続けるにしろ、交代するにしろ、点差が大きくない以上、流れを一度でも敵に与えると何時引っくり返ってもおかしくありません。油断する事無くこの第三Qで勝負を決めるくらいの気持ちで望んでください！」

『おうー！』

逆転し、優位に立っても驕る事はない。

選手達に注意を促して必勝の策を託す。

流れが変わったこの第三Q。最後に笑うのはエースに託した誠凛か、全員で勝負に臨む大仁多か。

両チームに与えられた一分が経つ。

誠凛の選手達は緊張が張り詰めた顔つきで、大仁多の選手達は気を引き締まった表情で試合へ望んでいく。

『タイムアウト終了ですー！』

「よしっ。行くぞー！」

試合が開始すると伊月が今まで以上に慎重にボールを運んでいく。

タイムアウト後、最初の攻撃。外したくない重要な局面だとわかっている。

そしてそれを理解しているのは誠凛サイドだけではない。

「ッ！」

「悪いな。決めさせない」

小林が積極的にプレッシャーをかけていく。ボールへと腕を伸ばして伊月を自由にはさせない。

全国区が見せる圧力は相当なものであり、ついに伊月はドリブルを中断。ボールの保持が精一杯な状況となってしまった。

「くそっ」

（小林、全国屈指の司令塔。やはりディフェンスも俺よりはるかに上か！）

「伊月！」

「ッ、日向！」

声の主である日向へとパスをさばく。パスは何とか通ったものの、パスコースが読まれてしまっただけはピュアシューターである日向が次のプレイに繋げることは難しく。

案の定、トリプルスレツドの体勢に入った瞬間、山本のステイールを許してしまった。

「うおっ」

「甘いよっ」と

零れ球をすぐに拾い上げる山本。

シュートまで持っていけないままボールは大仁多の手に渡った。

やはり流れはそう簡単には変わらない。

大仁多の反撃。

山本から小林へボールが通り、敵陣へと攻めあがっていく。

速攻を仕掛けはしなかった。タイムアウト後、敵の出方を窺う目的があったのだ。そして彼の目には、先ほどの誠凛ディフェンスとは異なる変化が映る。

（ゾーンディフェンス、か？ いや外の白瀧には10番^火がマンツーマン^神でついている。ボックスワンということか）

誠凜のディフェンスがマンツーマンディフェンスからボックスワ
ンへと移行していた。

エースである白瀧には火神がマンツーマンでマークし、前列を日向と伊
月の二人が、後列を土田と木吉が配置して守っている。

「白瀧封じか。なるほど。……甘く見られたものだな」

トップに立つ小林が日向と伊月の間から中央突破。

鋭いキレを持つペネトレイトで誠凜ディフェンスを切り裂く。

「アッ！」

「やべっ」

(司令塔としては異例の凶体をしているのに。こいつも、何て速さを
してやがる！)

前列を突破した小林がジャンプシュートに移る。

「撃たせない！」

「ここは守る！」

(捉まえた。白瀧は火神がマークしている！)

「いいぞ！ 止める！」

小林の正面に木吉と土田、二人のブロックが立ちはだかった。

ゴールを目前にディフェンスに囲まれる小林。彼は視線をそのま
まゴールへと向けながら、左サイドへノーブルックパスをさばいた。

「ナイスパス、小林！」

白瀧とは逆サイドの位置にいたのは山本。

ワンバウンドでボールを掴むと膝を大きく曲げてシュートを狙う。

「なんてね」

「っ！」

動きにつられた日向が山本の前に飛び上がる。

日向の脚がコートから完全に離れたのを確認して山本はバウンド
パス。

ゴール下の黒木へとパスを通した。

黒木はワンバウンドでゴールに正対し、ゴールから離れている右の
腕を大きく掲げた。

(ベビーフックか！ だが……)

ディフェンスをかわすシュート。

木吉もそれを読みきることは出来たが、ファウルを気にして深くブロックに跳ぶ事が出来なかった。

ブロックはボールに触れる事はなくベビーフックが成功する。

(大仁多) 76対73 (誠凛)。大仁多のリードが三点に広がった。

「大仁多は白灌だけのチームではない。舐めてもらっては困る」

「……くそっ」

「わかつてはいたが、やっぱり強いな」

対策を打とうとも大仁多は経験を生かしてすぐに対応してくる。得点力が高い選手が揃っているのだ。これを防ぎきることは簡単なことではない。

(ディフェンスで流れを呼び戻すことは難しいか。だが第四Q、黒子の復活の可能性も残っているんだ。ここは我慢の時間帯。点差を縮めることは難しくても、なんとしても食らいついてやる！)

リコが不安視していたように誠凛の戦力は限られている。一気に不利な戦況を覆すことは難しい。

どうにかオフェンスを決めて活路を見出そうと、伊月は小林の守備範囲外からパスを回していく。

伊月から日向を経由し、土田へとパスが通る。

パワー勝負では光月が圧倒的に有利だ。

ならば平面で勝負と土田はワンドリブルで光月を引っ掛けて即座にジャンプシュート。

「させるかっ！」

これに光月が反応。指先が触れ、シュートはリングに嫌われた。

(これは。外れる！)

『リバウンド！』

シュートが決まらずにリバウンド勝負となった。

これで防がれれば誠凛にとっては致命的だ。なんとしても取ってくれと日向と伊月が悲痛な叫びを上げる。

「ッ。うおおおおおおおー！」

そして、その声に呼応して木吉が吼えた。

黒木の厳しいチェックを受けてポジションを殆ど奪われる中、強引に片腕をボールへと向けてリングに叩き込む。

(大仁多) 76対75 (誠凛)。木吉の気迫のプレイで誠凛が踏みとどまる。

「つつ。木吉!」

「うわっ!」

その威力、迫力に声が漏れる黒木と白瀧。とてもファウルを恐れている選手とは思えないプレイだった。

(あの程度で完全に怯む事はないか。ならば、こちらも!)

「——白瀧!」

「了解です」

相手が不屈ならばこちらもこの程度では怯まない。

黒木はすぐさまボールを拾い上げ、白瀧へと放る。

大仁多の素早いリスタート。相手の不意をついた、久々の速攻。

もう一度誠凛の勢いを削ぐべく白瀧が駆け上がるべくドリブルを始めようとして。

「行かすか!」

「ッ!」

土田が白瀧に接触する。

「ディフェンス! 黒、^{誠凛}九番!」

ファウルで白瀧の速攻を防ぐ事に成功した。

(またファウルで止めてきた。しかも今回は不意をついたのに対応が早すぎる。まるで予定していたみたいに。確実な失点は許さないとということか?)

虚を突かれたというのに的確な処理を見せた土田に、白瀧は首をかしげた。

まさかファウルゲームに持ち込んでフリースローが外れることを祈るつもりか。

馬鹿馬鹿しいと考えて、誠凛ベンチ側で動きがあったことに気づく。

『誠凛高校、選手交代です!』

「……水戸部。頼んだぞ」

そつと水戸部の肩を叩く木吉。水戸部はコクリと頷き、コート内の味方の輪に入っていく。

「なるほど。どうやら最初から木吉先輩はワンプレイで下げるつもりだったようですね」

「復活したばかりで体力の問題もある。一発決めて望みを繋げたかった、というところだろうか」

そんな誠凛の動きを目にして白瀧や小林をはじめとした大仁多の選手達は気づいた。

誠凛は最初から木吉を下げるつもりだったということに。

「ということとは、つまり」

「やはり誠凛には余力が残っていない。今いる五人の地力でこの第三Qを持ちこたえるつもりだろうか」

「それがわかったなら、相手の迷惑通りにさせるわけにはいかねー」

誠凛の打つ手が殆どないということに。二人に同調して山本も笑みを作った。

木吉をすぐに下げたということは、温存させたいがタイムアウト中に変えるのはよろしくないという事だ。もしも何か策があるのなら最初から変えておく可能性が高い。水戸部に交代して何かするとう可能性もないわけではない。しかし木吉は水戸部よりもセンターとして優秀だ。彼が木吉以上の働きを示すのは難しいだろう。

ならば大仁多の力で押し切ることも可能だ。

山本のスローインで試合が再開。

小林と山本でボールを運ぶと、誠凛は再びボックスワンを展開。白瀧を火神がマークしつつ、他の四人をゾーンディフェンスで阻止しようとしてプレッシャーをかける。

（先ほどの一発だけで方針を変えたりしないか。あるいは後半戦はこのままゾーンを敷くつもり可能性もある）

「どうした？ マンツーマンはもう終わりか？」

「さて、どうかな？ 上手くそつちを封じられればこのまま続けるだろうか」

「……なら、ボックスワンの一番効率のよい突破をさせてもらおうか」「なに?」

呼びかけに曖昧に答える伊月。このポーカーフェイスから読み取るのは難しかった。

ならば正攻法で攻めるのみと小林は右サイドに立つ白瀧へとパスをさばいた。

「ッ! 白瀧!」

(火神のマークも関係なしにか!)

「勝てよ。白瀧」

ある意味では最も厳しいマークを受けているはずなのに。それでも小林はあえてエースの得点能力を選んだ。

「了解!」

「止めてやる!」

再びエース対決が勃発する。

白瀧はドリブルに緩急をつけるチェンジオブペースで火神を惑わし、そこから勢いをつけたクロスオーバー。

「……ま、まだだ!」

火神の体が硬直しかけるが、踏みとどまった。追いすがり進路を阻む。

しかし白瀧も止まらない。フロントチェンジからのロールターンで瞬く間に方向転換。

鋭い動きで火神の横を抜き去っていく。

「ぐっ! くそっ!」

「嘘だろ」

(速い。あの火神を相手に単独でドリブル突破かよ。青峰並じゃねーか!)

「もらった」

マンツーマンを突破され、誠凛のディフェンスが崩壊した。

伊月の後方からゾーン内へと侵入した白瀧。

敵全員の意識を集め、ボックスに跳ばせるとレイアップからパスに切り替える。

手渡すような柔かいパスの先は、インサイドの光月。

「うおおおっ！」

ボースハンドダックが炸裂。

木吉のものよりも強い力が籠ったシュートが放たれた。

（大仁多）78対75（誠凛）。白瀧と光月の連携で大仁多、連続得点に成功する。

「っ、強い」

「なんて威力してやがんだ。この野郎」

（本当に一年か!?!）

「ナイスパス、要！」

「おう。ナイツシュ！」

呑気な声でハイタッチをかわしている白瀧と光月。そんな二人の並外れたプレイから大きく変わった様子を見て日向達は頬をひくつかせた。

（ただ、ヤバイな。小林が言っていた様にボックスワンの弱点が明らかになってしまった）

伊月はさらなる問題に頭を悩ませていた。

ボックスワンの弱点。それはマンツーマン（今回の場合は火神に当たる）の選手が抜かれると弱いということだ。突破された場合、大抵が失点につながってしまう諸刃の剣。

火神も当然抜かれないということに最大の注意を払っている。

だが相手はドリブル技術が卓越している白瀧だ。わかっているも止めることは困難な状況となっている。

「さすがの速さ、やな。誠凛もこれには困ったやろな」

「はい。しかし気になります」

「あ？ 何がだよさつき？」

一方、観客席では桐皇の選手達の中では唯一変化を読み取った桃井が驚きを隠せずにいた。

青峰達が詰め寄る中、桃井は恐る恐るデータから読み取った事実を明らかにする。

「確かに緩急の使い分けで体感速度も上がっているはずです。でもそ

れだけではありません。四肢の筋力はそれほど上昇をしていないはずなのに、動きの速度そのものが県大会よりも向上している……？」
帝光で白瀧の姿を見続け、県大会でも偵察に行った桃井だからこそ読み取れた違和感。

四肢の筋肉を鍛えに鍛えたわけでもないのに白瀧が更なるスピードを得ていたということ。

そんなことがありえるのかと桃井は肝を冷やし、青峰達はそんなわけねえだろと相手にしない。

一方で、同じく観客席に座る楠は真実へとたどり着いていた。

「伝わるのが早くなった？」

「ああ。体幹を鍛えた事によって力を伝えるのが早くなっている。それが、あいつのドリブルスピードをさらに上昇させているんだ」

体幹とはすなわち頭部と腕、脚を除く胴体全ての筋肉の総称である。近年ではこの体幹を鍛える事が注目されている。体幹を鍛える事で運動時の体勢の安定性が向上し、より強い力を発揮することへとつながる。また脚の力を腕へと伝達するなど伝達機能も向上する為にプレイパフォーマンスの向上がはかれるのだ。

「……本当に、俺が教えた事を取り組んだんだな」

十分に、十二分に教えを活かしていると楠は感じていた。

体幹を磨き連動性をさらに上げ、より洗練された動きを身につけている。

全て楠が話したことだ。それをしっかりと仕上げそして試合に応用する。

高い学習性と勤勉さ。この両方が存在しなければ成し遂げられない代物だろう。

『シユート技術ならば俺よりもあなたの方が上だからです。楠先輩があの試合でどう感じたかはわかりませんが。俺はあなたのような選手と戦えたことを誇りに思っている。』

その相手とプレイについて話を交わすことは、嬉しく思うことはあっても躊躇うことは何もない』

あの時の言葉を思い出し、今一度白瀧が神速と呼ばれた所以に納得

する楠。

もはやあのドリブルを止めることが出来る選手は全国を探しても早々見つからないだろう。

「わかってんだよ！ お前が強いってことくらい！ でも、俺だって負けられねえんだ！」

だがそうだとしても火神は止まれない。

チームの命運を背負っているのだ。負けず嫌いな性格を抜きにしてもそう簡単に諦めるわけがなかった。

日向からパスを受け取ると、白瀧のマークがつく中強行突破。

マークを振り切ることが出来ない。如何なるフェイントにもついてくる。

抜けないということを知ると火神は強引に右足を踏み込んだ反動で跳躍。左手を高く掲げるとゴール目掛けて真っ直ぐに突っ込んでいった。

（ノーフェイクでシュートかよ！）

「舐めんな！」

確かに高い。止めることは難しいだろう。

しかしタイミングさえ合わせることが出来れば。

白瀧はあえてすぐに跳ばない。数泊間を置き、そして跳躍。

タイミングをずらしてからの瞬発力を活かした跳躍。あつという間に最高到達点へと至った。

「どうだ……!?!」

これならば、そう確信を懐いたのはほんの一瞬。

（は？ どうして？ どうして、お前はまだ跳んでいる!?!）

「うらああああああ!!」

タイミングをずらして、それでもなお火神の姿は空中にあった。

白瀧が一足先に地面へと落ちていくなか火神の渾身のダンクシュートが炸裂する。

（大仁多） 78対77（誠凛）。火神、意地を見せ付ける一発をお見舞いする。

「……あれで止められないのかよ」

「なんていう滞空力。というか、滞空時間が長くなってねえか？」
（不味い。これは本当に不味い。火神とて Dank シュート以外のシュートバリエーションを持っているだろう。今ので Dank に対するブロックのタイミングは修正できそうだけど、もし Dank シュート以外の多彩なシュートが出てきたら）

それこそダブルクラッチのような切り替えをされれば、本当に火神をとめることは出来なくなる。

空中戦は火神の十八番。これを防ぎきる術はなくなるだろう。そして火神が波に乗ればどうなるかは秀徳の敗戦が物語っている。白瀧の脳裏に焦りが浮かび始めた。

「白瀧君！」

「あ？ ……橙乃？」

白瀧が対抗策を考えようとした瞬間、ベンチから白瀧へ声がかかった。

呼び声はマネージャーの橙乃から。白瀧が振り返った事を確認すると、橙乃は何やらジェスチャーのような動きを始めていく。

右手を開き、ヒラヒラと揺らしながら上へ上げていく。

その後、左手を真上に上げて振り下ろし、続いて右手の人差し指を突き上げた。

一連の動きを終えると橙乃はベンチに座り二、三度頷いた。

「いや、何だ今の動き!？」

「え、何。何か伝えたかったの？ 伝わったの!？」

「はい。多分伝わりました」

「マジでか!？」

同じくベンチで座っていた同僚から激しい指摘を受ける。

しかし橙乃は白瀧ならば今のだけでわかってくれただろうと、満足げな表情だ。

そう言われてしまえば一対一のコミュニケーションだ。チームメイトは引き下がり、試合の方へと視線を戻す。

そして、橙乃に期待された白瀧の方は。

「——わからねえ！ 何だ、今の動き!？」

全く理解ができていなかった。特別なやり取りを決めているわけではない以上、動作だけで読み取る事は難しい。白瀧もベンチメンバーと殆ど同じような疑問を懐き、面に出さないようにと表情筋に力を込めていた。

「白瀧。通じたか？」

「……次のオフエンス、時間を下さい。ちよつと考えます」

「あー、だよな。多分あれベンチメンバーもわかってねえぞ」

「わかった。二十秒やる。火神を引き付けといてくれ。そうすれば、後は俺達が決める！」

そう言うのと小林と山本が先ほどのオフエンスと異なり、時間をかけてボールを運んだ。

誠凧のデイフェンスは引き続きボックスワン。白瀧のマークに火神がついている。誠凧に取っては火神が派手な技を見せた直後だ。なんとしても止めて逆転したいところだろう。

（何だ？ 橙乃が俺に何を伝えたかったんだ？）

小林達がオフエンスを組み立てている間、白瀧は火神に視線を向け細かいフェイントを繰り返しながら先ほどの橙乃の動きを振り返っていた。

（タイムアウトや選手交代を使わずのメッセージ。ということは藤代監督の指示じゃなくて橙乃の独断だろう。さすがに橙乃とて試合中に関係ない話をするわけがないから、おそらくは直前のプレイで何か気づいた。そして俺に伝えるということは、火神のプレイで何か気づいたってことだろうな）

指揮官の方針、橙乃の性格から少しずつ情報を読み取っていく白瀧。

（たしか最初は右手を開いて、何かゆらゆら手を揺らしながら上げてたな。ゆらゆら。上がる？ 燃える？ 火、火！ 火神か！）

温度差から生じる光の屈折による陽炎。すなわち、火。

先のプレイも火神のものだったのでまず間違いないだろう。

（やっぱり火神のことか。後は……左手を上げて、下ろして、右手の人差し指だけを立ててたな。何で二番目だけ左手？ 左手ってこと？）

対象がはつきりし、後は火神について気づいたことを解読するのみ。

残り二つのメッセージ。何とか解読しようとするさらに白瀧は想像力を膨らませる。

（左手で、人差し指。一番？ いや、意味がわからない。……あるいは振り下ろした動作って Dank ということか？ さつき火神は左手で Dank してたし）

おそらくは間違いないだろうと二番目のメッセージも検討をつける。

後は一つ。最後のジエスチャーさえ解読すれば全て当てはまるはず。

（火神、左手の Dank、一番？ うん、何か違う。一番も意味が違うのか？ 人差し指の意味。一番。長い。喜び。……違うな。一番？

一？ 一つ？ オンリーワン？ ……ッ！）

「あっ！」

（そういうことか。まさか。いや、そうだ！）

そうして、白瀧は橙乃が伝えようとしたメッセージに気づく。

そして彼が答えにたどり着いたのと殆ど時は同じく。

二十秒が経過し、大仁多のオフエンスもフィニッシュを迎えていた。

「山本さん！」

「ちっ！」

「オツケー！」

黒木がドリブルで水戸部を抜き去った後、パスアウト。

アウトサイドの山本へとパスが通りスリーが放たれた。

日向のブロックは僅かに届かず。シュートが綺麗にリングを射抜いた。

（大仁多） 81対77（誠凛）。得点差がシュート二本分に広がる。

「やられた！」

（火神が白瀧のマークの為に、外に広がりすぎたか。大仁多のオフエンスがフロアを広く使ってきてる。これ以上はボックスワンを続け

ても意味がない)

マンツールの火神がコート隅の隅で動いていたため、大仁多の選手が動くスペースが広がり、攻めやすい状況が整ってしまった。たとえば白瀧がない状況であろうとも大仁多は次々と幅広い戦術で誠凛、ディフェンスを攻略していく。

「よっしー！」

「よくやった！ ナイス！」

ここでスリーが決まったことは非常に大きなものだ。

小林と山本が速攻を警戒しながらもオフENSEの成功を讃えあっている。

「明。黒木さんも」

「え？ 僕？」

「どうした？」

「数秒耳を貸して下さい。火神のプレイについてです」

その頃白瀧はインサイドの二人を呼ぶと、耳元で何かを伝えていた。

内容は先ほど読み取った橙乃のメッセージ。

最後まで説明を耳にすると、二人の表情が驚愕に染まった。

「……それは本当、なのか？ 間違いないのか？」

「はい。ビデオで見た内容も言われて見ればたしかにそうでした。橙乃が気づいたことですし、間違いないかと」

「というか、あれ本当にそういうことだったの!? よくわかったね」

「いや、最初は全くわからなかった」

内容を全て伝え終えると、対策について短く打ち合っつて其々のポジションへ戻っていく。

誠凛のオフENSE。ガード陣に対するマークは非常に厳しいもので、伊月や日向は長時間ボールを保持することを嫌い、インサイドへとボールを入れていく。だが土田や水戸部もシュートまで持つていくことができず時間だけが過ぎていく。

(先輩達も格上の選手を相手に苦戦している。黒子も木吉先輩もいねえんだ。ここはもう一度俺が！)

「へい！」

「頼むぞ」

火神が見かねて声を張り上げた。

土田が火神へとパスをさばく。

火神と白瀧のワンオンワン。しかもゴールに非常に近い位置だ。

(この状況なら助走は殆どいらねえ！)

「ぶちかますー！」

「調子に乗るな！」

再び火神の右足が異常なまでの跳躍を生み出した。

白瀧が先ほどと同じタイミングで跳ぶ。

やはり、まだ火神の跳躍はまだ続いていった。

(ツ。連続で長い方の跳躍か！)

「もらったー！」

白瀧の体は重力に逆らい落下していく。

これで障害は消え去った。

火神はボールを持った左腕をリングへと振り下ろす。一直線に振り下ろされたダンクシュートだ。だが、そのシュートは炸裂する直前で、ゴール下から現れた黒木によって叩き落とされた。

「はあああつー！」

「なっ!?」

ボールが火神の手から零れ落ちる。そして真つ先に反応した小林が手にし、誠凛から攻撃権を奪い取った。

「そんなー！」

(火神の超跳躍が止められた！)

(ゴール下とのタイミングを凶った連携で？ まさかやはりさっきの

伝令は——！ だとしたらまずい！)

誰にも止めることは出来なかった火神の高さを攻略した。

リコは逸早く先ほどの橙乃の叫びから大仁多が何かヒントを得たのだと推測し、再びオフィシャルのスコアラーへタイムアウトの申請を行う。

数少ない希望であったエースの敗退。そこから始まる敵の猛攻を

感じ取ったためだ。

「よくやった黒木！」

「さすがです。黒木先輩！」

（そして、今のでハッキリした！）

また誠凛ベンチの動きが慌ただしくなる中、大仁多の勢いは増すばかり。

火神のオフエンスを防ぎ、誠凛の連続得点を阻止した。そして何よりも大きなことがある。

これまで苦戦していた火神の跳躍力。そのカラクリが明らかになったことだ。

（火神は確かに跳躍力が高い。高いが、その中でも二種類ある。右足で跳んだ時と左足で跳んだ時で異なるんだ。加えて右足の方が滞空時間は長く、その際に頻繁に使うこととなる左手ではダンクしかできない！）

利き脚の存在。火神の利き足は右脚であり、左足よりも長い時間空中へ跳び続けることが出来る。だが右脚で跳ぼうとすればボールを手にするのは基本的に逆側の手、左手となる。ここで問題なのは火神が左手の扱いに慣れていないということだ。

ボールハンドリングが未熟となれば複雑な動きが出来なくなり、火神はダンクシュートしかできないというリスクを抱えることとなる。

推測の段階でありまだ断定する事は出来なかった。

よって事実を明らかにする為に、白瀧はあえて左脚のタイミングで跳び、跳躍時間の差を測った。

そして黒木がブロックに成功した事で。推測は、確信に変わった。（種さえわかってしまえば、黒木さんや明の力を借りれば止められる！）

「さあ終わりにさせてもらうぞ火神。お前達を倒して、秀徳の敵討ちをさせてもらう！」

敵の一番の武器を見破った。仲間力を借りれば止めることは不可能ではない。

ここまでわかったならば、もう恐れる事はない。

第三Qで勝負を決めるべく、大仁多はさらに攻勢を強めていった。

——黒子のバスケ NG集——

(何だ？ 橙乃が俺に何を伝えたかったんだ？)

小林達がオフェンスを組み立てている間、白瀧は火神に目線向け細かいフェイントを繰り返しながら先ほどの橙乃の動きを振り返っていた。

(タイムアウトや選手交代を使わずのメッセージ。ということは藤代監督の指示じゃなくて橙乃の独断だろう。さすがに橙乃とて試合中に関係ない話をするわけがないから、おそらくは直前のプレイで何か気づいた。……………いや、待て本当にそうか？ 実はそう思わせたいベンチで『ヤダ。本当に騙されてる。白瀧君チヨロすぎ』とか笑っているんじゃないのか？)

「ああああありえそうで嫌だああああ！」

「ッ!? 何が!？」

保健室での一件以来、女性不信になりつつある主人公。

第七十六話 最後の十分

一度崩れかけた均衡を立て直すという事は非常に難しい。しかも、タイムアウトを使用してそれでも流れが変わらないというのなら尚更だ。

大仁多の猛攻は徐々に勢いを増していく。

県大会でもその攻撃力で数多くの強豪を真っ向から打ち倒してきたのだ。その威力を、誠凛は身をもって味わう事となる。

「よしっ！」

「決めた。ナイツシユ小林さん」

「おう。さあ、デイフェンス！ このまま突き放すぞ！」

小林のジャンプシュートが炸裂した。第三Qの残り時間が少なくなる中、点差は徐々に開いていく。

少しでも失点を抑えたい、それが誠凛の願いだ。引き続きデイレイドオフェンスを展開するが、得点に結びつかなければ結局差は広がる一方である。

「させねえ！」

「ッ！」

『アウトオブバウンズ！ 黒^{誠凛}ボール！』

「こんのっ、くそっ！」

アウトサイド、日向のスリーポイントシュートは山本のブロックによつて失敗に終わった。

ボールがラインを割つて再び誠凛へ。

相手にボールを奪われず、再び攻撃権を手にしたという事はある意味リコの方針に沿っているとも言える。それでも誠凛の選手達は中々得点が決まらない、差が広がるという試合展開に焦りを懐いている。

我慢の時間帯ということにはわかっていたが、やはりどうしても感情というものは制御し難いものだ。

「火神！」

「おう！」

伊月から中の土田へパスが通り、再び伊月に戻って今度はハイポストの火神へ。

第三Q、数少ない得点源。これまで何度も繰り広げられたエース対決の場所だ。今のところ火神の勝率は低い。だがそれでも他の局面に比べれば高い。勝負するならここしかないかった。

「まだ挑んでくるか。受けてたとう」

「……絶対に、勝つ！」

チエンジオブペースからのクロスオーバー。白瀧を左右に振り、切り込もうとするがまだ引き離せない。そこで火神は反対側の手へと持ち返るレッグスルーでもう一度切り返し、白瀧のスティールを阻止。敵のデイフェンスが届かない所へ持ち替え、右足を踏み込んだ。

他の選手と一線を画する超跳躍からのダンクシュート。

火神にとつての切り札であるそれは、ゴールに叩きつける寸前で白瀧に叩き落とされ、失敗に終わった。

「なっ!?!」

(また、止められた! やっぱりこいつら俺のダンクを見抜いているのか!?)

「バレバレなんだよ。確かにお前の跳躍力は脅威だ。だがダンクが来ると分かっていれば、止めることは可能だ」

「ッ!」

火神の嫌な予感的中していた。「やはりか」と火神は思わずポツリと言葉をこぼした。

右足の桁外れな跳躍力、そしてまだ慣れていない左手のボールハンドリング。それらの弱点が敵に見透かされている。これまでの戦いでは敵に気づかれることがなかった為に何とかなっていた。明らかになった以上、これ以上オフフェンスで跳躍力だけに頼りきるのはい。い。

(それでも、やるしかねえ!)

だが残り時間が少ない以上、ここで攻め気を失ってしまうわけにはいかない。

エースである彼が最後に奮起しなければ、第四Qの希望が薄れてし

まう。

ブロックされたボールは水戸部が取っていた。

またゆつくりと伊月が攻撃を組み立て、フィニッシュは火神に託す。

せめて後一本決める。第四Qへと望みをつなげてみせる。

キラーインステインクト
(殺戮本能！)

そういう勝負時でこそ白瀧という男は力を発するのだ。活路を見出そうとした火神に止めを刺すステイールが決まった。

「あつ!？」

「もらうぞー!」

しかもこぼれ球をそのまま白瀧が拾い上げた。

誠凛の攻撃の芽を摘み取り、追い打ちとなる速攻を仕掛けるべく駆け上がった。

(白瀧!)

「そう簡単に決めさせるか!」

(せめてファウルでリズムを狂わせる!)

このまま二点を献上するわけにはいかない。伊月がファウルをしてでも止めてやると白瀧の前に出た。

「舐めるな」

だが高速ドリブラーとして更なる段階に達した白瀧がそれを許さない。

前進から一転、接近して腕を伸ばす伊月をかわすように一歩後退、バックステップで距離を開けるとクロスオーバーで切り返した。

阻もうとする伊月の横から軽々と突破していく。

「なにっ!？」

(かわされた? ファウル覚悟で突っ込んだのに)

(マジかよ。前半戦では通じていたはずのファウルによる速攻阻止。それさえも通用しなくなりやがった!)

もはや彼に前半戦までと同じ手は通用しなかった。

伊月が突破されては彼よりも前に上がっていた日向達は追いつけない。追いつけるとしたらただ一人、身体能力に恵まれた火神のみ

だ。

「行かせねえ！」

「火神！」

伊月が白瀧の進行を止めていた間に火神は白瀧よりも前に出ていた。

一次速攻なんて許さない。

ここを止めて、今度こそ反撃に移そうと。

——火神の野生が力を滾らせた。

(集中しろ。一瞬も見逃すな。やつとて隙がまったくないわけじゃねえ！)

感覚を研ぎ澄ましていく。

白瀧のドリブルを、手足の動きを見て、そこから次の手を予測。

ボールを突く手が右手から左手に移る。直後彼の重心が右へと傾いた。

(ここだ！)

「もらった！」

フロントチェンジからのクロスオーバー。

彼が得意としている方向転換を読み切り火神は手を伸ばした。

止めれば反撃へと移れる。誠凛の命運を託された彼の右腕が、空を切った。

「なっ?！」

「ナイスパス白瀧！」

逆手に行くはずだったボールは、白瀧が火神の予想した方向とは逆方向へと放ったことで山本の手に渡る。

何も速攻を得意としているのは一人だけではない。白瀧と同様、速さに長けた彼も速攻の為に走っていた。当然体勢が崩れた火神も、他の選手もこれを止められるすべはない。

山本のレイアップシュートが綺麗に決まった。

「馬鹿が。あいつに読み合いで勝てるやつなんて中々いねえよ」

一連の流れを理解した青峰は、敵の土俵で挑んだ火神に厳しい評価を下した。

白瀧を相手に読み勝つことは並大抵の人物では適わない。それは誰よりも彼とワンオンワン一対一を繰り返した青峰が、誰よりも知っている。

「同じ動作から異なる分岐したプレイを繰り返す。やつは常の動作からいくつもの選択肢を持っている。その中から一つ一つ選んでいくことで動きを読ませない。しかも高速で切り込んでくる以上、ディフェンスは対応が追いつけなくなる」

ゆえに、彼は止められない。身体能力以外で止められるとするならば、完全に未来を読む自分くらいだろうと赤司は白瀧の姿を見据えていた。

（これまでの動きが、次の手を惑わせるフェイクにもなるってのかわ……！）

「白瀧、テメエ！」

「野生に帰った獣を、何時までも野放しにしておくわけにはいかない」
白瀧と山本の連携で一次速攻が成立。大仁多の連続得点が記録され、点差がまた広がった。

（木吉先輩とベクトルは真逆だが、本質は同じだ。こいつのバスケツトスタイルには読み合いが通じない！）

「……つくづく帝光にいたやつらってのは。生意気なやつばかりだな」

息も整わない。勝機も見えない中。

火神は強がりて笑みを作った。

王手をかけられた苦境の中でも、せめて希望だけは見失わないようにしよう。

『第三Q終了です！ これより2分間の休憩インターバルに入ります』
アナウンスが入る。

拮抗していた両軍の力のバランスが崩れ、戦局が大きく動いたこの第三Q。

（大仁多） 87対79（誠凛）。

始まった時には誠凛が六点のリードを持っていた。だがついに大仁多が逆転。八点の点差をキープして最後の第四Qへと臨む形となった。

誠凛が時間を可能な限り潰していた為に点差は最悪と呼べるほどのものではない。だが内容を見てみれば点差を離された方がよかつたかもしれないとリコは思った。

木吉の交代、火神の敗北。第四Qにも響いている精神的ダメージを受けた現在の状況。

もしもここで逆転ができるような可能性があるとするならば――

「……黒子君？ 行けそう？」

リコは黒子へと視線を寄せた。

こんな窮地に後輩に託すしかないというのは心苦しい。

しかし木吉もすぐに出す事ができないとなってはこうするしかない。この状況を再び覆す事が出来るとしたら彼しかないというのが事実なのだから。

「はい。十分休めました。行けます」

その懇願を彼はすぐさま受け入れた。

誰よりも弱く薄い存在であるはずなのに、このような時には頼もしく見えるのだから不思議なものだ。

「そう。なら、黒子君には第四Qの頭から入ってもらおうわ。土田君と交代。休んだ分小林君たちへのミスディレクションの効果は戻っているはず。攻守でもう一度リズムを作っていきましょう」

「わかりました」

「……よしっ。まずは立て直さないと」

「第三Qはうちがゆっくり攻めることとなったけど、ここからは元通りよ。皆、トコトン攻めて。何時も通りのうちのやり方で！」

第三Qはガード陣を休ませ、黒子達の投入するまで耐える為の凌ぐ時間だった。

だがここからは違う。最後の十分は誠凛も本来の攻めの姿勢を取り戻す。

伊月、日向の二人もこの時間帯でのいつも通りの動きができるくら

いの消耗で済ませている。黒子の効果も戻った。今こそ誠凛のオフェンスで同点、逆転まで取り返す。

「それと、鉄平」

「うん？ どうした？」

「あと三分だけ休んでいて」

もう一人、逆転に必要な人物。木吉にリコはもう一度念を押し
た。

「第四Qの三分の一が終わればあなたに出てもらおう。うちもまだタイムアウトは後一回分残っているし、大仁多もタイムアウトは三つ残っているからどこかで使うはず。その時間をあなたの回復に当てるわ。そうすれば残りの時間は全力で戦えるはずでしょ？」

まだ体力の心配はある。ファウルへの警戒もある。

ゆえの時間制限だ。限られた時間の中で、それでも全力を出せるように。リコの最大限の配慮だった。

「……ああ、そうだな。ありがとう」

「お前はドツシリ構えておけばいいんだよ。第四Qの入りは俺達は何としても乗り越える。だから、後は頼むぜ」

「日向もな。失敗するなよ」

「誰に言ってるんだ」

日向からも手荒い言葉をもらって、木吉は笑った。

誠凛が最大の火力を発揮することが出来るのは第四Qの途中から。

それまでは木吉抜きでも大仁多に食らい突こうと選手達は覚悟を決める。

「……火神君」

「何だよ？ 心配なら不要だぞ。青峰と戦った時だってコレくらい
の感覚だったんだ。今さら怖気ついたりしねー。それよりも黒子、お前
の方こそ大丈夫なのかよ？ 本当にミスディレクション回復してん
だろーな？ これでまた止められたらどうするつもりだ？」

「新しい案は思い浮かんでいません。今までどおりにやるとしか」

「おい！ またそれかよ!?!」

一年の新人コンビはお互いがお互いの心配をしあっていた。

最も火神は今までも似たような逆境を体験しているために気の落ち込みはそれほどない。

黒子も全国経験者ということもあってか落ち着きを払っている。その様子が却って不安を煽るのだが、黒子は静かな口調で続けた。「少なくともミスディレクションの方は問題ありません。大仁多がどのような手で来ようとも、今僕が持っているものを最大限に活かし、今までの様に動ければ乗り越えられるはず。そう考えています」

無策とも樂觀視とも違った。黒子にも何か考えがあるのだろうか。核心についているような響きをしていた声だ。

「そうかよ。なら頼むぜ。——さすがにあいつを止めるとなれば、俺一人じゃ足りないところもあるかもしれないからな」

ならば火神もそれ以上深く追求することはしない。

相手の力量を理解し、今度は二人で強敵に挑もうと黒子に告げる。桐皇戦の後に誓った信頼。それをこの試合で発揮しよう。

こうして誠凛の最後の十分へと臨む方針は決定された。

同時刻。大仁多のベンチでも最後の十分に臨む戦略が監督から選手達へと伝えられていた。

「……黒子さんは、出てくるでしょうね」

藤代が短くそう呟くと、白瀧が頷きを返した。

問いかけてというよりも独り言のようなものだったが藤代の意を読み取ったのだろう。

「誠凛はここぞという場面、試合終盤での追い上げがすさまじい。特に黒子さんが入るとなると余計にその威力は高まるでしょう。……ならばそこを封じます。西村さん」

「はいー」

「あなたに入ってもらいます。小林さんに代わって司令塔を任せましょう」

チームの主将であり、信頼の厚い小林を下げる。普通のチームならばあまり出来ない選択だ。統率の問題もそうだが終盤におけるチームの支えという役割もある。主将に代わって一年生を投入するというのはよほどの理由がない限りは行われまいだろう。

だが大仁多はそれをする。監督に迷いはなく、選手達に疑問もない。そういうチームなのだ。全員が方針を理解し受け入れている。

「黒子さんを封じることが第一に考えてください。攻守ともに彼の存在は大きなものだ。早めに対策するに越した事はない」

「——了解です」

「頼んだぞ、西村」

「任せてください」

「ケアは俺達が受け持つ。お前はお前の仕事に専念しろ」

「はい。お願いします」

藤代に任され、小林に託されて、白瀧に背を押されて。

幾分か気持ち became 楽になった気がした。帝光時代のように、レギュラー達の体力温存の為に出るのではない。役割を与えられて、信頼されて戦うことがどれだけ喜ばしいことか。西村はただ純粹に嬉しく思い、顔をほころばせた。

「おそらく木吉さんはまだでて来ないはずですよ。勝負所を読んで投入することでしょう。ここからはランガン勝負が予想される。しかしそれはうちにとっても得意な展開だ。恐れる事はない。こちらも真正面から受けてたちましよう！」

「おうー！」

相手の手を予想して、あえて藤代はその策に乗ることにした。

誠凛がオフセンスに長けているチームだとしても、それは大仁多にも言えることだ。それならばどちらがより高い攻撃力を持っているのか証明してみせる。あえて大仁多は同じ土俵で立つことを選んだ。

さらに細かいオフセンス、ディフェンスの指示を出し終わると選手達はそれぞれ再開へ向けて補給を始めていく。

白瀧も橙乃からタオルとドリンクを受け取り、鋭気を養っていた。

「はい」

「ありがと。——さっきの、火神の情報も助かったよ。おかげで第三Qを優位に進めることが出来た。ありがとな」

「ううん。これくらいは。白瀧君もすぐにわかってくれたみたいでよかった」

「……………まあ、うん。それはね。何だかんだ言って結構長い時間一緒にいるわけだし。見ればわかったよ」

どうやら橙乃が良い勘違いしてくれているようなので、白瀧は訂正せず、その場を繕った。隣で光月が「え、でも」と指摘しようとするのを目で黙らせる。言外に「絶対に話すな」と語っていた。

(問題はその後だな。火神と黒子がどう出てくるか)

白瀧は目を閉じて体を休めるのと同時に第四Qの展望を脳内で想像する。

(あいつも新たな新技を身につけていた場合。そして、黒子が何らかの形で西村を突破した場合。前者は第三Qで見せなかった以上可能性は低い。後者はどうだかな。あいつの動きは読みにくい)

もしも火神も新技をもっていたとするならば、追い上げの源になるだろう。それならば第三Qのうちに使っていたはず。よって可能性は限りなく低い。

だが黒子の方とは言われると想像がつかなかった。

白瀧も神出鬼没の彼のことは完全には分析できていなかった。ひよつとしたら何か企んでいるのかもしれない、と。彼のポーカーフェイスに警戒心を懐いていた。

(いざという時は俺がまた流れを変えるしかない。……その為にも)

覚悟を固める白瀧。

決して仲間を信頼していないわけではない。むしろ誰よりもよく知っているし、頼りにしている。

だが疑うのは良くないが信じすぎるのも禁物だ。万が一、仲間が助けを必要としたときに助けられるように。白瀧は最悪の展開を想像し、最善の策を模索していた。

『休憩終了ですー!』

ついに第四Q、最後の十分間の始まりが宣言された。

「では皆さん。後十分です。——頼みましたよ!」

「はい！ 行くぞ、お前らー！」

『おう！』

小林の代役として、山本が声を張り上げた。

彼に続いて四人もコートの中へと入っていく。

「行くぞー！ 誠凛——ファイ！」

『おおっ！』

先に大仁多の選手達がコートへ入る中、誠凛は円陣を組み、全員で気合を入れなおしていた。

「俄然士気は高いまま、か」

「八点差ですからね。第三Q見れば大差でしたけど、全体ではまだ取り返せる範囲。当然でしょう」

（まして、幻の六人目が再登場となれば）

黒木と受け答えをかわした後、白瀧は先ほどはいなかった黒子の顔を見た。

やはり無表情を貫いており彼の考えを読み取る事は難しい。今は西村に託すしかないかと考えを切り替えた。

「さあ命運を隔てる第四Qだ。誠凛にとっては黒子の復帰ともなつてまずはしっかりとセットプレイを決めたいところ。どう出るか」

誠凛のスローインから試合は再開。

おそらく最初のプレイは誠凛も確実に点を取りに行くだろうと観客が予想する中。

誠凛の五人は試合再開と同時に一斉にゴールへと襲い掛かった。

「むっ！」

「これは！」

「まさか、いきなり？」

誠凛の走力とパスの連携を活かしたラン&ガンによるスピードバスケット。元々得意としていたオフェンス戦術だ。

滞りのない高速のパスワークで大仁多のディフェンスを翻弄し、あっという間にゴールに迫る。開始直後、敵の意表をついたプレイだった。

（いきなりかよ。様子見とかしねーのか！）

「っ!？」

突然の猛攻に驚いている山本に軽い力がかかる。

黒子がスクリーンをかけ、山本の進路を塞いでいたのだ。

(スクリーン！)

山本がスクリーンにかかっている間に火神から日向へとボールが渡り、スリーが放たれた。

マークにつこうとした西村はタイミングが間に合わず、跳ぶことが出来ない。

シュートはリングをくぐり、第四Q最初の得点が誠凛に記録された。

「おおっ!？」

「いきなり誠凛スリー決めてきた！」

「何て強気だよ。さすが主将」

(大仁多) 87対82 (誠凛)。

誠凛は一気に五点差に詰め寄り、大仁多の背中を捉えようとしていた。

「……最初はミスディレクションの確認も含めて慎重に行くと思ったんだけどなー」

「どうやら大丈夫だと確信を持っているようですね」

「ええ。そうでなければこんなことは出来ない」

(あるいは木吉さんが不在だから早く攻めようと考えているのか?)

「大方そうだろう。ま、向こうが点の取り合いを挑むつてのは予想通りだ。——やり返すぞ」

不意を突かれて五点差に詰め寄られたが、そう大きく予想が外れたわけではない。

こちらもあり返そうと山本が白瀧と西村に呼びかけた。

大仁多の反撃。

司令塔に入った西村が全体を窺いながらボールを運んでいく。当然黒子の居場所も確認したが、彼は光月のマークについていた。スティールの心配はない。

(向こうが強気ならこっちも攻めの姿勢を貫き通す。そして、その為

にもまずは！）」

西村は白瀧とアイコンタクトを取る。言葉は必要ない。意を汲み取った白瀧が西村のマークについていた伊月にスクリーンをかけるのと、そこからフリースペースへ移動するピック&ロールで西村から白瀧へパスが通った。

白瀧がシュートに跳び、釣られた火神もブロックに跳ぶ。

その時、白瀧は動きを切り替えてバウンドパスをアウトサイドの山本へとさばいた。

「むっ！」

「山本！」

お返しと言わんばかりに大仁多もアウトサイドから攻めてきた。

ペネトレイトを警戒していた日向は対応できない。

(大仁多) 90対82 (誠凛)。

大仁多のスリーポイントも決まり、九十点台に突入して再び八点差に。

「ナイツシユ山本さん！」

「さすがです！」

「お前らだけに攻めさせるわけにはいかねーからな」

得意と断定することはできないが、フリーの状態を作ってくれば高確率でスリーを沈められる。そう簡単に点差を縮めることは許さなかった。

「くそっ。やられたな」

「気にするな。切り替えよう」

失態を嘆く日向に声をかけ、伊月は試合を再開させる。

「火神君」

「あ？ 何だよ？」

一方、黒子は火神を呼び寄せて彼にだけ聞こえるように耳打ちした。

「白瀧君と一対一は辛いようなので。これから僕が彼の注意を引きつけます」

「ッ！ 何か手があるのか？」

「はい。しかし……」

黒子は何故か途中で言いよどみ、苦笑のような表情で話を続ける。

「おそらく、火神君は苦手なことをやります」

「は？」

全く意味がわからなかった。

しかし自信ありげに語るので聞いただすことは出来なかった。

時間も限られている。自分も先輩たちに続こうと四人の後を追った。

「行くぞ！ 攻めろ！」

再び誠凛は高速のラン&ガンを展開する。

(速い！)

生半可な攻めは通用しないと考えたのだろう。

次々とパスをさばいていき、的を絞らせない。

そして黒子のタップパスからフィニッシュの水戸部へと渡った。

左手を黒木との間に添えてブロックを受けないようにと距離を開けるフックシュートを放つ。

「撃たすか！」

「ッ！」

しかし木吉とも渡り合っていた黒木がそう簡単にシュートを許さない。

手から放たれるや否やボールに手を伸ばし、フックシュートを叩き落とした。

「っ」

「行かせないですよ！」

コートに落ちたボールは黒子が手にした。

すぐさま西村がチェックに詰める。

パスなんて出させない、そういう様にハンズアップで圧力をかける。

すると黒子は視線のフェイクを入れると——西村の横を潜り抜けるようにドリブルを仕掛けた。

「はっ！」

シュートの直後でディフェンスが移動していたというのに、パスコースがあつたはずなのに。黒子が即座にドリブルを選んだ。

予想外の出来事に呆けた声が飛び出した。

慌てて追いかけるが西村はまだ理解が追いついていないのだろう。

黒子がドリブルからレイアップシュートに跳んだというのに、反応ができなかった。

「はあっ!？」

(黒子さんが、レイアップ!?)

「つて、やべっ」

驚き、見ているだけでは駄目だというのに。

連続で裏をかかれてしまった為に足が動いてくれなかった。

「こんのおっ!」

代わりに、守備範囲の広い白瀧が追いついていた。

自慢の瞬発力で瞬時に黒子のレイアップシュートの前に立ちはだかる。

完全に阻止する事は出来なかったが彼の指先がボールに触れる。

これにより余分な力が加わったボールはリングを転々とし、最後は火神が押し込み誠凛の得点となった。

(大仁多) 90対84 (誠凛)。誠凛の連続得点、成功。

「よっし。ナイスフォローだ火神!」

「うっす!」

得点を決めて誠凛はハイタッチをかわしてディフェンスに戻っていく。

点差を縮めたい誠凛にとって攻撃失敗を防げたのは大きい。このまま波に乗れるという意識も高まった。

それに対して、大仁多の選手達は。

「すみません、白瀧さん」

「気にするな。それよりも、今の」

「はい。黒子さんが一対一を仕掛けてきました」

「……どういふことだよ。あいつ、シュートとかは出来ないんじゃないのかよ?」

「そのはず、だったのですが」

山本に問われて、二人は黙り込んでしまった。

白瀧と西村は帝光中時代の黒子をよく知っている。過去の練習、試合を見ても彼が得点を決めるようなシーンは見られなかった。高校でも彼が得点を挙げるといいうデータからもまずないだろうと判断していた。

だが今、黒子は間違いなく自分から積極的に仕掛けてきた。パスコースが完全に封鎖されていたわけではないのに、だ。

「……何を考えているかわからない。しかしあいつは考えなしに行動するようなやつではありません」

「同感です。自分の役割を誰よりも理解しているからこそ普段はパスに徹する『影』であるというのに」

「じゃあ、今のは？」

「それは……」

「まさか、白瀧さん」

となれば、最も先に思いつく考えは一つだ。

黒子も高校で新たな技を身につけてきたということ。パスだけではなく、自分で得点を決めるだけの力をつけてきたということだ。

「白瀧君」

「あ？」

本当にそうか、と考えを続けようとした白瀧に、悩みの種である黒子本人が声をかけた。

「くれぐれも気をつけてください。状況が状況なので、僕も本気で君たちを倒しに行きます」

改めて、宣戦布告をしたのだ。

返答は待たずに黒子は火神達の背を追って走り去っていく。

思いもしない相手のプレイを目にし、さらにこのように挑発され。

白瀧は込みあがる感情を抑えきれずに笑みを浮かべた。

「……ったく。お前は、本当に何をしてくるかかわからないやつだな」

同感です、と西村も頷く。

真偽は不明のままだ。だが誠凛が得点を重ねてきている以上、大仁

多も負けられない。

オフェンスを何としても成功させるため、白瀧達も駆け出して行った。

——黒子のバスケ NG集——

「野生に帰った獣を、何時までも野放しにしておくわけにはいかない」
白瀧と山本の連携で一次速攻が成立。大仁多の連続得点が記録され、点差がまた広がった。

（木吉先輩とベクトルは真逆だが、本質は同じだ。こいつのバスケットスタイルには読み合いが通じない！）
「……つくづく帝光にいたやつらってのは。生意気なやつばかりだな」

「ん……？ 待ってください火神君」

「あ？ 何だよ黒子」

「その理屈だと、僕も生意気なやつ分類に入ってしまうような気がするんですが」

「お前も大概だろうが！」

「えっ」

多分、火神が帝光出身の面子に懐いている印象ってかなり悪い。

第七十七話 信じるその先

（——おかしい）

コートの中では誰よりも弱々しく、バスケットプレイヤーとしては心もとない。しかし独自の技術で仲間の信頼を得た頼もしい存在。それが黒子テツヤだ。そうであるはずだ。

（それなら、どうして）

白瀧はもう一度頭の中で黒子という選手について考えていた。

知る限りにおいて彼は一対一において全国で通じる選手ではない。少なくとも白瀧の中では影に徹する事でしか真価を発揮できない裏方の存在なのだ。

同時に個人としては、黒子テツヤは何か信じられないことを成し遂げるといふ人物でもある。自分では想像も出来ない方向で、確実に結果を残す。どんな遠回りをしても最終的に何らかの形でチームに最大限の貢献をする。そういう素晴らしい人物だと認め、信じている。

（今度は何を企んでいるんだ、お前は）

だからこそ、今回もまた何か理由があるのだろうと白瀧は想像した。

ただ出てきたわけではない。きつと何か目的があつて——そして、きつとそれを果たしてしまうのだろうと。

白瀧は自身よりも小さく、恵まれない相手を羨ましく思いながらコートを駆けた。

「火神君」

「あ？ 何だよ」

「この後のことについてももう少し話しておこうと思ひまして」

デイフェンスに戻る最中、黒子は火神に考えを耳打ちする。

彼が言っていた自身が活躍して白瀧や西村をかわすためのものだ。

その内容を聞いた火神は大丈夫なのかと顔をしかめる。

「……いけるのかよ。だってそれって」

「はい。僕だけの力では意味ありません。ある意味彼らの出方次第でもありません」

「じゃあもし向こうがお前の考え通りに動かなかつたら」

「いえ、それは大丈夫です」

「何故だ」とまだ納得のいかない火神に、さらに黒子は説明を続けた。

そして黒子がそこまで言いきれぬ理由に納得し二人はその場を別れた。

確かに、黒子が機能すれば状況は好転する。

なら託すしかない。黒子に。信じるしかない。相手を。

(マツチアアップは——殆ど変わらない。少なくともディフェンスで大きく仕掛けてくることはなさそうだ)

ボールを運ぶ西村は自身のマークにつく伊月をはじめ、誠凛の選手達の動きを見極める。

特に彼が意識していた黒子は光月のマークについており、それ以外の選手も特にマークの変更は見られなかった。

ならば今は深く考える必要は無いだろうと攻撃を組み立てていく。

勢いをつけた前傾姿勢からの前進。そして伊月がコースを警戒すると同時にフロントチェンジで逆を突き、コースが空いた空へとボールを放った。

「ナイスパス！」

光月が上空へ腕を伸ばし、ボールを受ける。

そのままボールを降ろさずに体をゴールへ正対させてジャンプシュートを放つ。

黒子の腕は届かず、光月が得点を決めた。

(大仁多) 92対84 (誠凛)。

大仁多も負けじとすかさず反撃。確実性のある光月が得点を決める。

「ナイツシュ！ ……明、どうだ？ 黒子の方は？」

「うん。マークについては前半戦と同じと考えて良いと思うよ。少な

くともステイール以外についてはやっぱりそんなにプレッシャーを感じない」

「了解した」

(……となると、黒子を警戒すべきはやはりオフエンスか。デイフェンスはあいつのパスコースに捕まらないようにさばればいい)

白瀧と光月が短く意見を交わす。

最初の攻撃は高いパスさえさばけば黒子のステイールは防げると光月を狙った。確実性と、そして黒子の動きの変化があればそれを観察しようとのものだったが。

デイフェンスについては大きな変化は見られない。

ならば黒子のオフエンスを見極めようと誠凛の動きを警戒する。

「もたもたするな！ 走るぞ！」

『おう！』

一方、誠凛は日向の掛け声に駆られるように全力でコートを上がっていく。

最初の攻撃と同様に早いパス回し。誠凛が得意なラン&ガンだ。

伊月や日向は勿論のこと、水戸部達も積極的にパスを回し、大仁多にコースを搾らせない。

(ちいつ！ さすがにこれだとステイールも——)

「ッ!?!」

白瀧が止めようと足を動かすと、柔かい衝撃が行く手を阻んだ。

それは黒子のスクリーン。西村がマークについていたはずの彼がスクリーンを行い、その間に火神が自由になるべく走り出す。

(黒子——！)

「西村っ」

「オツケーです！」

即座にスイツチ。火神の後を西村が追い、白瀧も一步下がってインサイドを警戒して。

そして黒子にパスが回り、彼はパスの供給を止めた。

「ッ!?!」

(パスを出さない?)

ラン&ガンで攻めるのではなかったのか。思わぬ展開に白瀧はさらに混乱を深める。

「……お前は一体何を考えている？」

「何だと思えますか？」

「テメエ」

気を削ぐような受け答えに、白瀧の口元が一瞬歪む。

直後黒子の手首だけが動き白瀧の上空をボールが通過した。

「あつ」

「よっしやあ。ナイス黒子！」

そこに火神が駆け込み、パスを受け取る。

助走の勢いを殺す事無くそのままレイアップシュート。

フォロワーは間に合わずにボールがリングをくぐった。

(大仁多) 92対86 (誠凛)。

誠凛高校、連続得点に成功する。

「……やられた」

(相変わらずパスまでの動作が短すぎる)

「白瀧」

「はい、大丈夫です」

ノーモーションからの高速パス。しかも視線は全く動かす事無く精密にパスを出せるのだ。わかっけていても備えを完璧にしておかなければとめる事は白瀧でも難しい。ましてや黒子の個人能力を探っていた今は尚の事。

山本に肩を叩かれ、「次は気をつけよう」と反省もそこそこに反撃へと移って行く。

(取られた分は取り返すしかない！)

誠凛がオフフェンスに長けているように、大仁多もオフフェンスに長けている。

西村は果敢に切り込んでいく。

一度中にパスを通し、インサイドを意識させた後ペネトレイト。

キレの良いクロスオーバーで中へと侵入し——まだ、伊月が食らいつく。

「なっ！」

「舐めるなよ。無警戒なんては言わせない」

(もうこれ以上好き勝手にさせるものか！)

伊達に小林や西村といった優れた司令塔を相手にしていたわけではない。
はい。

イーグルアイ
鷲の目を持つが故にスピードに目が慣れてきたのだろう。

ついに西村のドリブルを捉え始め、体がそれに追いついてきた。

「鷲のマークはワシ、ノーマークってね」

「……………は？」

伊月の咄嗟のダジャレに気づく事無く、西村は足の下からボールを
通してドリブルを継続。

だが位置取りはあまりよくない。

白瀧は遠い位置だし、黒木はマークを外せてなく、黒子が見えない
為に光月へのパスも危うい可能性がある。

「西村、止めるな！」

「——うすっ！」

ならば、ボールはこの人に託す。

サイドから走りこんでくる山本へ。

位置取りが変わって山本が中央から突進。

横から日向、さらにゴール下から水戸部も出てくる中、お構いなし
にレイアップシュートを撃った。

「強引に撃ってきた!？」

(入るわけねえ！ でも！)

「いいんだよ。入らなくて。そっちのセンターまで飛ばせたんなら十
分だ」

もうゴール下で、彼らを制してリバウンドを取れるものなどいない
のだから。

火神も白瀧が引き付けている以上、ゴール下は大仁多の独壇場。

がっしりとボールを掴み取った光月がそのままの体勢で着地。黒

子の位置取りを確認してから腕を下ろし、西村へとボールを戻す。

「ナイスリバン！」

「うん、さあもう一回！」

たとえ攻め切れなくてもゴール下で負ける筈がない。
大仁多にとってこれほど心強いものはないだろう。

その後、西村と白瀧の連携で突破すると最後は黒木のフックシュートで得点。無事に二点を追加した。

(大仁多) 94対86 (誠凜)。

「誠凜も追いつがるが大仁多も譲らない！」

「……ゴール下にあんな野郎がいたのか。あれどこぞの若松とかいうセンターより強いんじゃないの？」

「喧嘩売ってんのかテメーは！」

殆ど直接的に自分の先輩を指摘している青峰に、当の若松はブチ切れる寸前だ。いつものことながら今吉や桜井が何とか押さえ込むものの、消化不良で若松の中で苛立ちが募っていく。

(わかってる。たしかにあいつの力は相当だっということくらい)

「……これは誠凜が崩すのは容易じゃねーだろうな」

相手の実力を認めているからこそ、余計に腹が立つ。

白瀧やガード陣の警戒を激しくすればするほどインサイドの脅威は増す。その逆も然り。

この布陣を崩すことは難しい。

何か、切欠を作る事ができれば。その何かを作れるか。

「まだ逆転できるぞー。攻めろー！」

攻め続けなければ突破口は見出せない。

日向は渾身の力を声に籠める。

再び誠凜はラン&ガンを展開。

全力で相手のゴールへ向かって走り、パスをさばっていく。

高速のパスワークは確かに大仁多デイフェンスも捉えきれない。

そして再びボールは黒子へと渡り、彼は切り込んでいく。

「ぐっ。またっ！」

「このっ！」

西村の一瞬の遅れで黒子はレイアップのフォームに入ってしまう。

何とか西村が追いつき、さらに白瀧も横から跳ぶ。

が、そこで黒子はパスアウト。近くの火神へとボールを放った。「ナイス！」

ドリブルで歩数を合わせるとダンクシュート。

黒木や白瀧がとめようとするが、火神は容赦なくリングへ叩き込んだ。

(大仁多) 94対88 (誠凛)

誠凛、点差をこれ以上広げさせない。

「つられちゃったか。おい、西村」

白瀧は得点を決めた敵を苦々しくにらみつけ、声で西村を呼ぶ。

「もう調節できそうか？」

「……あと三回。いえ二回ください」

「よしっ。分かった。頼むぞ」

深い説明は必要ない。

それだけで情報を共有し、やってくれると信じて会話を終えた。

黒子の動きに惑わされるのはもう終わりだと。

「……なーんか誠凛の11番を止められないな。そんな大した速さじゃないし、大仁多の選手なら止められてもおかしくないはずなんだけど」

「いや。これはおそらく相手が西村だからこそ止めることが困難になっっている」

「征ちゃん？ どういうことなの？」

観客席で一人、葉山が疑問を呈するとそれに答えたのは彼らをよく知る赤司だった。

実斑に捕捉を求められてさらに彼は話を続ける。

「元々西村は黒子の影の薄さに耐性があったようだが、それでもなお黒子の高速パスについていくのが精一杯だった。黒子はボールに触ってる時間が異常に短く、視線や表情からコースも読むことも難しい」

集中力を最大限に高めて、ようやく黒子のパスを止められている状態だったのだ。

そしてそのパスを止められたからこそ、止める為に躍起になってい

たからこそ今黒子の動きに翻弄されている。

「パスを止める為にはひたすら黒子の動きについていき、周囲のパスコースを探っていくしかない。それで西村はパスの直前までは黒子を目の前で追い続け、パスの瞬間はその方向に上体だけ動かして黒子を封じていた」

「……それで？」

「だがそれは黒子に『パスしかない。パスが失敗すれば保持する』という前提があったからだ。それが今ドリブルに切り替わった事で前提が崩れた」

黒子が切り込んでくれば反応が遅れ、さらに動かそうとしていた上体も硬直する。

高速パスに対応するため今まで一瞬で動作の判断をしていた。

その一瞬の不意をつかれることで二重の硬直が生じ、西村は黒子に対応できなくなっていた。

「じゃあ、あいつじゃあ黒子を止めきれないってことか？ 今は白瀧も来ている様だが」

「……いや、おそらくもうすぐ西村がその動きに対応するだろう」

伊達に帝光という環境下では生き残っていないのだから。

その言葉で締め括り、視線をコートに戻す赤司達。

直後の攻防は大仁多、誠凛共に攻撃を二本ずつ外して少し落ち着きを取り戻すかとも思われたが。

「黒木先輩、くださいー！」

その場を活性化したのは白瀧だった。

ディフェンスリバウンドを取った黒木からパスが通る。

久方ぶりの白瀧の速攻。

ドリブルしているとは思えないほどのスピードでコートを走っていく。

彼に追いつけるのは火神がやっとであり、その彼もシュートフェイクに釣られてノールックパスを許してしまう。

その先に駆け込んだ西村がボールを手にし、レイアップシュートを綺麗に沈めた。

(大仁多) 96対88 (誠凛)。

西村と白瀧がタツチを交わす。二人の速攻、今だ止められず。

「よしっ!」

「……白瀧さん」

「あ? どうした?」

「もう大丈夫です」

「……そっか。わかった。頼むぞ」

息を整えながら白瀧は西村の背中をポンポンと叩いた。

大丈夫。こうして背中を押してやれば、きつと黒子を相手でもやっ
てくれる。西村はそういう選手だとそう信じている。

「くそっ」

「キャプテン!」

「何だよ、黒子?」

すぐに試合を再開しようとする日向に声をかけたのは黒子だ。

「……そろそろいけそうなので、試したいことがあります」

頃合だと感じていたのは西村だけではなかった。

黒子もまた決意を決めて進言する。

幻の六人目の真意を発揮するのはこれからだと。

「考えがあんだな? じゃあ任せる」

それならばこれは必要ない、と日向は伊月にボールを預けてゆつ
りと走り始めた。

「あ? 何だ?」

「ラン&ガン終わり?」

(……むしろ速攻決められたからそのテンポにのってくるかと思っ
たけれど)

「お前ら、気を緩めるな! 強襲がくるかも知れない! 一本止めて
点差を広げる! ここで決めるぞ!」

『おう!』

早い攻めを終えたのかと、選手達に息を零す者が現れ始める。

すると緩んだ空気を一蹴すべく山本は声を張り上げた。

ここで得点を広げられれば大仁多優位の態勢を覆す事はより難し

くなる。

今は小林がコート不在だ。自分が纏めなければならぬ。山本は日向をマークしつつ、チームメイトへ檄を飛ばした。

「もう好き勝手はさせないですよ」

険しい表情で西村は黒子をにらみつけた。

「立て直しはすみませんでした。二度と先ほどと同じような手が通じるとは思わない方が良いでしょう」

最初は黒子のパス回しだけを警戒していたからこそ、周囲へ目を向けすぎたからこそ反応が遅れてしまった。

ならばあくまでも動き出しは敵の手を見てから。

腰を深く降ろしすぎないように注意し、適度に黒子に注意を払えば遅れを取る事はない。

「これ以上白瀧さんの負担を強いるわけにはいかない」

そうでなくても火神との一騎打ちを繰り返して消耗が大きいのだ。

余計な負担は少しでもなくしたい。なくしてみせる。

「……よかったです」

「はっ」

「やはり、君も彼も変わってなんていなかった」

もう一度西村は息を零した。

どういう意味だと、そう呟いて——黒子の姿が視界から消えた。

「——ッ!？」

消えた!

これはまぎれもなく黒子の視線誘導ミステイクレクションの効果だ。

西村なら対抗できると思っていたはずの、彼の技術。

「な、んで!？」

「……ありがとうございます」

相手には聞こえないだろうが、それでも黒子は西村と、白瀧へ向けて礼を告げた。

「火神君」

「あ？ 何だよ」

「この後のことについてももう少し話しておこうと思ひまして」

話は第四Q開始直後、黒子と火神の会話に遡る。

「しばらくの間、僕は先ほどと同様わざとドリブルやシュートを狙っていきます」

「はあっ!? お前、そんなのできねえだろ！ これからも続けるのか!?」

「はい。できません」

「ふざけてんのか teme エー！」

とても正気の考えとは思えない。

当然納得できるはずもない火神は声を荒げたが、黒子は構う事無く説明を続けた。

「確かに出来ませんが、彼らの中での僕は違います」

「……は？」

余計に意味がわからなかった。彼らの中でのとは、一体どういう意味なのか。

「白瀧君や西村君は僕の事を何か裏があると考えるはずですよ。あるいは出来るようになったのかのどちらかを。ゆえに西村君だけではない。彼を抜ければ白瀧君もフォローに来るはず。そうすればきっと僕を止めてくれます」

「止められてどうすんだよ!？」

白瀧の守備範囲は前半戦でも痛い目にあつたのだから重々承知だ。間違いなくヘルプでも黒子をとめられるはず。

しかしそれでは得点できないではないかと火神は苛立ちをぶつけていった。

「目的は得点ではありません。むしろ僕に意識を向けさせることにあります」

「……意識？ それでミスディレクションが機能するようになるのか？」

「正確に言えば、ミスディレクションを機能させるために彼らの僕に

対する存在感を高めます」

西村は影の薄さに耐性があり、その動きに慣れているからこそパスを封じること成功していた。

ならばその前提を引っくり返す。

黒子はある程度普段はしない通常のプレイを行って自分への視線を集めた。そうすることで再び影の薄さを取り戻す為。

明るい環境から暗い環境に行けば何も見えなくなるように。

一度そうなれば明るさに慣れた西村は影の薄さに対する耐性も薄くなり、その後もミスディレクションが機能し続けるかもしれない。

「……いけるのかよ。だってそれって」

「はい。僕だけの力では意味ありません。ある意味彼らの出方次第でもあります」

「じゃあもし向こうがお前の考え通りに動かなかったら」

それこそ白瀧達がとめにこなかったら。

黒子が決められるはずがないとわざと放置したら。

「いえ、それは大丈夫です」

その心配を浮かべて当然なはずなのに。

黒子は一切の迷いを浮かべずに断じた。

どうしてそう言いきれ、と火神が問うと。

「彼はどんな時でも味方にとっての最善を尽くす。何より最悪のパターンを嫌う。白瀧君は、彼を信じた西村君はそういう人達です」

一番ディフェンスがやってはいけないことは敵にフリーでシュートを撃たせることだ。

プレッシャーもかけなければ成功率は格段に向上してしまう。

白瀧達はそういうのを嫌う人間だ。

どんな時でも、どんな状況でも全力を尽くして勝利を目指している。

「それは僕に対しても変わりません。それは、三月に既に確認済みです」

たとえば相手が黒子だとしても白瀧は全力を尽くす。

かつて彼が栃木に引越す際に黒子はそう確信を得ていた。白瀧は黒子という選手を対等であると認め、全力を尽くしてくれると。

そして白瀧がそうするならば、彼を信じる西村もまた、同じように動く。

「ありがとうございます。白瀧君、西村君。僕を信じてくれて」

だからこそ。こんな弱い自分を信じてくれたかつてのチームメイトに、黒子は最大の礼を述べた。

西村のマークをかわし、フリーになった黒子は敵に気づかれることなくその懐へ飛び込む。

伊月から水戸部へと渡り、再び伊月へと戻るはずだったボールが。ペイントエリアの中央で方向を変えた。

「なっ!?!」

「え?」

「黒子!」

その瞬間、黒子の姿を認識した大仁多の選手達に動揺が浮かぶ。

何時の間に。いや、どうやって西村のマークを振り切った?

そう彼らが考える隙も与える間もなく。火神が渾身のダンクシュートを決めた。

「ぐうっ!」

「ああああっ!」

白瀧のブロックを吹き飛ばした火神が吼える。

(大仁多) 96対90 (誠凛)。

黒子の本領発揮。ついに誠凛も九十点台にスコアを載せる。

「っしやああ!」

「ナイスです」

「おう! それよりも——ッ!?!」

黒子が復活し、白瀧を吹き飛ばした火神のダンク。これで勢いは誠

凛が勝る。

讚える言葉は良い。それよりも攻めようと、つなげようとした火神が違和感を覚えて顔をしかめる。

たまらずその原因である右足を見つめ、悔しそうに齒軋りした。

「くそっ！」

「大丈夫ですか！」

「ああ。……黒子の事は」

「……すみません」

「そうか。気にするな」

元々最後まで封じきるなんて無理があつたのだから、と西村の手を借りて白瀧は立ち上がる。

失敗を責めるよりも次の成功を求めろべき。

そう前を向いて——誠凛の猛攻が襲い掛かる。

「手を緩めるな！　ここで逆転するんだ！」

誠凛は残る力を此処に注ぎ込む。

決死のゾーンプレスを展開した。

「なっ！」

「うおおっ！」

（ここでオールコートで当たってくるか！）

ボールを入れようとした山本の前に水戸部が立ちはだかり、各選手たちがボールを奪わんと大仁多の選手の行く手を阻む。

（……仕掛けてきたか）

「すみません。タイムアウトはやはり辞めます」

その時、テーブルオフィシャルのスコアラにタイムアウトの申告を行おうとしていた藤代は、申告を取りやめた。

黒子の復調とそれによる誠凛の猛追を警戒してのことだったが。

（ゾーンプレスは諸刃の剣。奪取率は高いが失敗すれば即失点に繋がる）

逆に大仁多が再び勢いを取り戻す可能性もあるならば。

賭けにのるのも一つの手。

ましてや、このコートにおいては突破力に長けている選手が大仁多

にいるのだから。

「ぐっ、こんのっ！」

どうにか山本からボールを受けた西村だが、水戸部と日向のチェツクに捉まり、中途半端にドリブルを中断してしまう。

パスも容易ではなく、先にも進めない後にも引けない状況下に陥った。

(よこせっ！)

そこに駆けつけたのは白瀧だった。西村の後ろに回りこむように急接近した白瀧は西村から直接ボールを受け取り、即座に方向転換。逆方向へ低く沈み込み、二人のマークを突破した。

「うおっ！」

「ッ……！」

「誠凛のゾーンプレス、最前線を突破した！」

「行かせるかっ！」

「白瀧！」

だがそれで黙っているわけがない。

すぐさま火神が立ち上がり、伊月も戻りながら白瀧へと接近する。

「邪魔だあああっ！」

クロスオーバーで切り返し、後ろに下がるドリブルで二人を引きつけ——トップスピードで二人の間を抜き去った。

「なっ!？」

(まだ、こんな速さが!?)

火神の野生も、伊月の驚の目も反応が僅かに遅かった。

これで四人を抜き去った。後はパスさえ出してしまえば、白瀧の勝ち。

「白瀧さん！」

「ッ!？」

再び白瀧の気を引き締めさせたのは西村の声だった。

前傾姿勢で殆ど身動きの取れない彼の真横から、黒子の右腕が伸びてくる。

「っ、がああああ!!」

強引に体を引き寄せて体を横に回転させる。黒子のスティールをロールターンで流れるようにかわし、白瀧はボールをキープし続けた。

(これも防ぎきった!?)

(白瀧の突破力が、誠凛の猛威を振り切った!)

信じられない。誠凛の五人が前線から常にプレッシャーをかけたづけ、さらにミスディレクションを取り戻した黒子が不意をついたのに。

それでもまだ白瀧はボールを守りきった。

「……やはりこれでも駄目ですか。でもこの勝負はもらいます」

「ッ!」

誠凛の最後の砦は黒子だ。もう前に彼を止められる存在はいない。だが黒子をかわすために体勢を崩した隙を、鷲の目は見逃さなかった。

白瀧の死角である後ろから、伊月がボールを掠め取る。

「なっ!」

「伊月!」

「あっ!… こんのっ!」

勢い余った白瀧は数歩先へと進んでしまい、その間にルーズボールは黒子が確保。

すぐに火神へとパスをして誠凛の速攻が始まった。

(まずい!)

ボールを運んでいた白瀧に加えて黒木も光月も戻れない。大仁多のディフェンスが戻れるとしたら西村と山本しかないだろう。それに対し誠凛は日向と水戸部がすぐに戻れる位置にいて、さらに残りの三人もボールを持ってゴールへと押し寄せる。

このままでは確実に失点してしまう。敵の速攻を許してしまうわけにはいかない。

「くっそおっ!」

西村はドリブルを続ける火神を追いながら、何とか防ごうと横から

手を伸ばす。腕は火神の体と接触して、それを見た審判の笛が鳴った。

(ファウルで止めたか。良い判断だ)

「よくやった。西村——はっ!?!」

「えっ!?!」

自分も間に合ったかわからない。あのままでは決められた可能性の方が高いだろう。山本は西村を称賛して——審判を目にして、山本を含む大仁多の面々が凍り付く。

審判は右腕の手首を左手で掴み、両腕を挙げていた。これが意味することは、つまり——

「デイフェンス! アンスポーツマンライクファウル! 白、^{大仁多}14番^{西村}!」

西村のアン스포ーツマンライクファウルが宣告された。スポーツマンらしくないファウル。それを西村が犯したと。

「う、わああああ! 嘘だろ。大仁多、このタイミングでアンスポ取られた!」

「痛い。痛すぎる。よりもよってここぞ!?!」

予想外の出来事に会場が騒然とした。

西村をはじめとした大仁多の選手達は驚愕の余り、何も言葉を発せない。

「……今の、マジ?」

「審判は誰もデイフェンスに戻れていないと判断したようだな。6番^{山本}が一足先に戻っていたようにも見えたが」

「審判の見るタイミングが悪かったかもしれないわね。特に中高生の試合では教育的指導の為により厳しく取ることもあるって話を聞いたことがあるわ」

アン스포ーツマンライクファウル。オフエンスの速攻において、デイフェンスがオフエンスチームのプレイヤーとバスケットの間にデイフェンスチームのプレイヤーがいない場合、速攻を止める為に後方あるいは横から接触を起こした際にアン스포ーツマンライクファウルと判定されることがある。

「これで、流れは完全に誠凛だ」

もしもアンスポーツマンライクファウルが宣告された場合、相手チームに二本のフリースローが与えられ、その後センターラインからフリースローを行ったチームのスローインから再開される。

二本とも決めれば四点差。しかもさらにオフェンスを成功させればもう逆転は目前だ。

まだリードはある。だが流れは誠凛に移行したと赤司は冷静に断言した。

『大仁多高校、タイムアウトです！』

ここで藤代が取ったタイムアウトにより、試合は中断した。

(賭けに負けた。一手、あと一手遅かった！)

藤代は自分の決断を悔やむしかなかった。

突破できると信じていた。現に一度は敵の包囲網を突破した。

最後の最後に相手の執念が上回っただけだ。誰も責めることは出来ない。

これまでも何どもオールコートで突破してきた白瀧に託した事は妥当な判断だし、彼自身誠凛の選手達を完全に置き去りにしていた。西村のファウルも失点を防ぐための最良の選択で、藤代もアンスポを取られるとは思っていなかった。

「……私のミスですね」

責めるとするならば、あの場で決断を下した自分自身。

結果論であるとは言え先ほどのタイミングでタイムアウトを取るべきだった。そう考えるばかりであった。

第四Q残り六分。試合終了の時間が近づく中、試合の行方はまだわからない。

「皆、ここに正念場よー」

リコは称賛の言葉を手短かに述べ、すぐに気を引き締めるように強く言い放った。

彼女の声に当てられて選手達はすぐさま真剣な顔つきへと変貌する。

ここまで追いついてきたのは十分な結果だ。
だがまだ追いつけてはいない。追い越せていない。

最後までリードを奪えて、ようやく誠凛は本当の喜びを手にすることが出来る。

「残り六分。向こうもこうなった以上はさらに点を取りに来るはず。その為にもインサイドを固めるわ。——鉄平！ もう準備はできてる?!」

「ああ、勿論」

「水戸部君と交代で入ってもらおうわよ。残り時間、全力で暴れてきなさい。ただし退場は許さないから!」

「わかっているよ。その上で、任せておけ!」

勝利の為には欠かせないのが木吉だ。

彼が復活すれば誠凛のインサイドは完成する。これで幾分かリバウンドを取れる回数も増えるだろう。

攻守の要として、日向と共にチームを引っ張る。彼にしか出来ない事だ。

「ここからは木吉を起点に黒子君のパスを活かしていく。そこで確認したいのだけれど、火神君?」

「うす。なんすか」

「あなた、もう限界?」

「ッ!?!」

突如先ほど感じた違和感を言い当てられ、火神は表情に出してしまった。リコが見逃すはずも無く「やはりか」と息を零した。

「いや、待ってくれ! ですよ! 別に痛みがあるとかそういうのじゃなくて!」

「……でもこれからずっと、は無理でしょう。忘れないで火神君。まだこの大会は続いていくのよ」

「ッ」

「下がって、とは言わない。でも超跳躍のような無理はこれ以上しな

いで。勝ち上がっていくためにも」

そうだ。火神の目標は全国制覇であり、この二回戦はまだ途中段階でしかない。

本当に戦いはこの試合の後もずっと続いていくのだ。

その為には今力を使い果たしてしまうわけにはいかない。

火神は渋々と納得しそれ以上口を挟む事はしなかった。

「……………すみませんでした」

ベンチに座りこんでから、西村は頭を上げる事ができなかった。

東雲から受け取ったタオルを頭からかぶってひたすら謝罪の言葉を並べていく。

誠凛を勢いづかせる失態。それを一年であり本来ベンチメンバーである自分がやってしまった事に、西村は責任を強く感じていた。

「謝らないで下さい。これはあなたが背負う必要はない。まだ終わってわけではないんです。皆さん、頼みますよ！」

本当なら指導者として西村の気持ちを落ち着かせたい。だが一分という時間上、彼だけに時間を費やすわけにはいかなかった。

手短かに西村を励ますと藤代は口早に今後の方針を語りはじめた。

「まず、小林さん」

「はい…」

「西村さんと交代で入ってもらいます。……西村さん、しっかり休んでいてください。小林さん、立て直しをお願いしますよ」

「はい…」

「……………はい」

監督の指示に小林ははつきりと、西村は今にも消えそうな掠れ声で応じた。

「誠凛のスローインは二本とも入るとして四点差。さらに誠凛の攻撃から試合は再開されます。そしておそらく、そろそろ木吉さんが戻ってくるでしょう。そうになると、誠凛はゴール下も厚くなる」

「ええ。残り時間が少なければ、木吉もさほどファウルを気にせずに攻め込んでくる可能性が高い」

「加えて日向さんや火神さんの個人技に長けた選手もいる。彼らに好き勝手にさせるわけにはいきません。——山本さん、白瀧さん」

「はい！」

「はい」

誠凛の得点能力が高く、この試合でも得点を重ねている二人の選手。彼らを止めることを最優先事項と定め、藤代は地上能力に長けた選手達の名を呼んだ。

「残り時間、あなた方二人に彼らを止める事を一任します。何としても止めて下さい。一瞬もフリーにさせない覚悟をお願いします！」

「勿論」

「言われずとも」

たとえ黒子が復活したとしても関係ない。

この緊迫した状況下で、敵の得点源を自由にさせてなるものか！

チームメイトが沈む姿に当てられて気迫は倍増した。

「小林さん、光月さん、黒木さん。三人はペイントエリアの守備を固めてください。黒子さんが自由自在に動く事が予想されますが、決して惑わされずに。お互いフォロワーしてください。そしてリバウンドを死守！ 何が何でも取ってください！」

残る三人にはゴール下を託した。

木吉が戻るとなるとこのエリアの負担は非常に大きくなる。

無冠の五将、ファウルを気にしなければこれ以上ないほどの脅威だろう。しかも誠凛は勢いに乗っている。積極的にシユートを狙ってくる可能性が高い。

ゆえに小林達にどうしてもこのエリアを固めてもらう必要があった。

さらに細かい説明を行って、ディフェンスの話を終えると次はオフエンスだ。

「オフエンスは、まず誠凛がオールコートを仕掛けてきた場合には小林さん、山本さん、白瀧さん。三人で連携してボールを運んでくださ

い。全員で声をかけあつて敵の——特に黒子さんのポジションの確認を。火神さんや木吉さんがいる今、ロングパスはくれぐれも控えてください」

「白瀧君専用の、タッチダウンパスもですか？」

「ええ。あのパスは精密さが重要視される。オールコートで迫られれば小林さんでも狙つて放つのは難しいでしょう」

先ほど白瀧が集中的に狙われた事から、藤代はオールコートの対策はボール運びが得意な選手全員で行うように指示した。

東雲から小林達の新技なら、との意見もでたが確実性を重視してこの意見は採用されず。

残り時間が少ないことから藤代は少しでもリスクを避けるためにこの方法を選択した。

「オフエンスは——黒子さんのスティールが厄介なうえに、伊月さんもドリブルへの反応性が増している。ゆえにパスとスクリーンプレイで敵のディフェンスを崩す。低い場所ではいつ黒子さんが出てくるかわかりません。それを常に意識するように」

『はい』

誠凛はスティールの名手黒子に加え、野生に目覚めた火神、鷲の目でスピードに慣れてきた伊月と地上戦も隙がなくなってきた。

大仁多自慢のガード陣なら大丈夫だと気を抜くことは出来ない。誠凛のディフェンスを突破するため、藤代は選手達にいつもよりも幾分か語気を強めて指示を飛ばした。

「皆さん」

そして一通りの指示を伝えた後、藤代は改めて告げる。

「——絶対に勝ちますよ」

やはり笑みは消して、真剣な表情でそう口にした。

タイムアウト終了まで残り十五秒ほど。

一足早く大仁多の選手達は立ち上がり準備を始めた。

白瀧も当然同じように席から立ち、橙乃達にボトルやタオルを預け――彼の視線は未だに顔を伏せたままの西村へと自然に移って行った。

「おい、西村」

「……すみません」

「お前はいつまで謝ってんだよ」

「俺のせいだ」

「馬鹿か。そんなの結果論だろ。速攻を防ごうとするのは当然だし、責任とか言い出したらその前にボールを取られた俺の責任だ」

時間はないがまだ西村の顔は上がらない。

説得を続けようとも、自分のせいだという自責の念を打ち消すのは容易ではない。

「また、余計な負担を――」

「……西村。お前もう余計な事を考えるな。お前の中でこの試合は終わったのか？ 大仁多はもう負けたのか？」

「へ？」

そんなはずがない。まだ続いている。あたり前だろう。――と、ようやく西村は顔を上げて白瀧の顔を見た。

「責任を背負うのは負けた後だけでいい。負けなければ責任じゃなくてただの反省点だ。俺達はお前の言う責任くらいで潰れるほど頼りなくはない」

だから俺達を信じろ。俺達に託せ。

ブザーが鳴る。

先にコートに戻った四人に続いて白瀧も歩き始めた。

「十分後くらいにはお前の反省点を、笑い話にできるようにしてやるよ。俺の分も含めてな」

背中越しに西村へ告げて、白瀧は表情を引き締めた。

負けられない理由がまた一つ増えた。

——黒子のバスケ NG集——

「白瀧さん！」

「ッ!？」

再び白瀧の気を引き締めさせたのは西村の声だった。

前傾姿勢で殆ど身動きの取れない彼の真横から、黒子の右腕が伸びてくる。

「っ、がああああ!!」

「あっ」

強引に体を引き寄せて体を横に回転させる。黒子のステイールをロールターンで流れるようにかわし——黒子の右腕は、白瀧の脇腹を直撃する。

「白瀧さんが死んだ！」

「すみません、手が滑りました」

「またこのパターンかよー！」

白瀧の声が叫び声ではなくてただの悲鳴。

黒子は大変なものをステイールしていきました。白瀧の命です。

第七十八話 エースとは

「俺達はお前の言う責任くらいで潰れるほど頼りなくはない」

その言葉は西村に向けられたものだった。

だが、それに感化されたのは何も彼だけではない。

先にコートに戻っていた光月は、彼の台詞を耳にしてかつて秀徳と行った練習試合の事を思い出した。

(……ああそうか。なるほど。こういう感覚なんだ)

かつて藤代に指摘されるまでは中々立ち直る事ができなかった。

頼れる者の存在。チームメイトが困ったときに、助けることが出来る。それはごく限られた者にのみ与えられたものだ。

あの時は助けられるばかりだった。でも今は違う。

(ならば、僕も——)

今度は僕も助ける立場だ。同僚の為に力を振るおうと、太い拳に力を籠める。

タイムアウトが終わり誠凛は木吉を、大仁多は小林を投入する。

両校ともこれで再びベストメンバーが揃った布陣だ。お互い最強の面子をそろえて、試合は最終局面を迎える。

審判からボールを受け取った火神がフリースローを二投放った。

おそらくこの結果が後々の展開に大きく響くであろう、大事な場面。

——火神はこれを二本とも沈める。

「よっしゃあ！」

「よくやった火神！ これデカイぞ！」

二点を決めた火神が吼えた。

(大仁多) 96対92 (誠凛)。

これで得点差は四点、シュート二本差となった。大仁多の背中が目前に迫る。

「すげえ。残り時間が少ない中、あの栃木の強豪大仁多を相手に四点差だ」

「やっぱり都予選で秀徳を倒したのはまぐれじゃない！」

「行けるぞ誠凛！ 頑張れー！ まだ逆転できるぞー！」

格上を相手に奮闘し、逆転せんと勢いを取り戻した誠凛に、歓声も熱を帯びていく。

徐々に誠凛を後押しする声が増えていく。

タイムアウトにより流れが一時的に途絶えはした。しかし、やはり二点縮まったことで再び誠凛が勢いづく。

「やはり、まだ流れは誠凛にあるか」

誠凛の選手達が笑みさえ浮かべているこの状況。赤司は試合の空気を感じ取り、そう断じた。

「……お前ら。集中しろ」

対する大仁多は静かだった。主将・小林の呼びかけに四人は無言で頷く。

逆境に熱くなりすぎず、危機に慌てることもなく。ただ静かに誠凛の姿を見据えていた。

「……ッ」

（さすがに動揺はない。落ち着きすぎてかえって怖いくらいだ）

こういう状況にも慣れてるのだろう。

彼らの姿が誠凛には異様に映る。自分達がさらに勢い盛んになっているというのに、迎え撃つ敵がこうも静けさを払っている。不気味さを感じるのは仕方が無いことだった。

（ディフェンスは——日向と火神にそれぞれマンツーマンがつくトライアングルツー。二人の一对一と、木吉の動きを警戒してのことか）
ならば自分も冷静にならなければと敵の動きを分析する伊月。

藤代の指示を受けた大仁多の布陣をしつかり確認し、トライアングルの合間を突くように仕掛けていく。そして小林のディフェンスに捉まらないよう逸早くシュートを撃った。

「ちいっ！」

（やはりチェックが厳しい。だが、シュートさえ撃てれば！）

「木吉！」

先ほどまでならどうしても大仁多がインサイド有利の展開だっただろう。だが今、誠凛には木吉がいる。

「おおっ！」

黒木とのポジション争いに勝っていた木吉がオフエンスリバウンドを死守。

両足で着地し、視線をゴールへと向けて上体を挙げた。

「の、撃たせるか！」

シユートは撃たせない。そう強く決めて黒木が跳んだ。

するとブロックを読んでいたのであるか。木吉は両腕を畳んでボールを懐に戻し、スピナムーブで空中の黒木をかわす。

「ぐっ！」

(また、途中で動きを変えたのか)

「もらった！」

黒木をかわすと木吉は今度こそダンクシユートへ。

跳び上がり、渾身の力を籠めた右腕をリングへ叩きつける。

——その直前で光月のブロックショットが木吉を阻んだ。

「うあっ!？」

「させるか！」

ゴール下が長けているのは誠凛だけではない。好きにさせてたまるか。

光月が力強いプレイを見せて追加点を阻んだ。

「まだだ！ まだ続いている！」

止められたがボールはラインを割っていない。日向がボールを何とかキープし、プレイの続行を呼びかける。

「ッ」

「行かせねえ」

「……ちっ」

(今までよりもマークが一段と厳しくなってる)

「隙あり！」

「あっ！」

だが山本のマークは振り切ることは出来なかった。
シュートはおろかドリブル一つつけず、身動きが取れない。
わずか数秒で山本のステイールを許してしまった。

「アウトオブバウンズ！ 黒^{誠凛}ボール！」

幸いにもボールはラインの外へと出た。

大仁多に奪われることなく、再び誠凛ボールでスタートされる。

（あつぶね。危うく獲られるところだった）

「日向！ リスタート！」

「おう」

伊月に声をかけられ、ボールを入れる。

生半可な攻めでは通用しない。

そう考えた伊月は今度は火神へとボールを回した。

高いパスをさばいたおかげで難なくボールは通った。

だがこちらもマークが厳しい。

白瀧がどンドンプレッシャーをかけて来て振り切ることは困難。

無理やり中へと切り込み、シュートを放つも――

「白瀧……ッ！」

「負けねえ！」

直前まで白瀧はついてきた。瞬時にブロックに跳ぶ彼のプレッシャーは想像を絶するもの。

プレッシャーを受けたシュートはまたリングに嫌われ、得点に至らない。

「もらった！」

「黒木！ ナイスリバン！」

しかも今度は黒木がディフェンスリバウンドを取った。

光月が木吉のポジションを抑えていてくれたおかげで黒木は難なく手にした。

これで大仁多の反撃。何とか凌いだ大仁多に――再び誠凛の影が忍び寄る。

「むっ!?!」

「あっ！」

(黒子か……！)

斜め後ろから、黒子の細腕がボールを叩き落とした。おそらくは得意の観察眼で位置を読み取っていたのだろう。

さらに大仁多にとっては運が悪い事に、ボールは伊月の足元へと落ちた。

「今度こそ決めてやる！」

ボールを手にした伊月はドリブルからレイアップシュート。大仁多の不意を突くべく、すぐさまシュートを撃った。

「舐めるな」

「えっ？ ……つつ！」

「アウトオブバウンズ、黒^{誠凛}ボール！」

「よっし！ ナイスブロック小林！」

「さすがです！」

それに対し今度は小林が背後からブロックを決める。

高さのある彼だからこそ出来るプレイ。

再びボールはラインの外へと転がっていく。

「ちっ」

(この局面で、この堅いディフェンス。向こうもこの一本に全てを注ぎ込んでいる。だからこそこの一本を取る事ができれば)

そうすれば誠凛にさらなる追い風を呼び起こすことができるはず。

だからどんな形であれ、あらゆる手段を講じてでも得点に結び付けなければならぬ。

「ならば」

伊月のスローイン。しかし、その先にいるのは敵選手である小林だ。

「はっ？」

予想もしないコースに、一思わず小林は呆けてしまう。

突然の出来事に両手でハの字を作って受け取る構えを取って。

その横では、黒子が大技を放つ準備を整えていた。

「頼みます」

「うおっ!？」

小林がボールを手にするより早く、黒子は右の掌から加速するパスを打ち出した。

突如ボールはパスコースを変えてすさまじい速さで火神へと向かっていく。

完全に不意を突いたプレイだ。

しかもこのパスを取れる選手は、このコートに火神しかない。

「させないって言ってるんだろ！」

否、もう一人。白瀧がいた。

後出しながらも火神のカットについていった白瀧は彼へのパスコースを読み取り、黒子の加速するパスをも防いだ。

「ツ——ツツテ！」

「白瀧君……」

（やっぱりこのパス何回も止められるようなものじゃなさそうだ。でも——）

「お前達の思うようにはさせないよ。ここで取られようものなら、俺の背中を見てくれるやつに顔向けできなくなっちゃうんでね！」

強烈な痛みにも顔を歪めても、敵の好きにはさせなかった。黒子と火神の奇襲をも読みきり、大仁多が誠凛の猛攻を防ぎきる。

「まただ。また大仁多が誠凛の攻撃を防ぎましたよ」

「……誠凛が押してるはずだ。だが大仁多も自由にシュートは撃たせてねえ」

「お互いあと一手やな。あと一手が足りたらん」

どんどんシュートを撃っていく誠凛。その機会を潰していく大仁多。

攻守が入れ替わる局面はなく、一進一退の局面が続いていく。

今吉の語る通りどちらもう少しのところまで攻め切れず、反撃に転じられない。

ストレスが溜まる時間帯は、驚くことに一分もの間続くこととなった。

（木吉や黒子のおかげで、何とかボールを保持できているけど。この展開は不味い）

我慢しなければいけない。なんとか耐えて、最後の得点を決めなければせつかく誠凛に再び訪れた好機を逸してしまう。そうなれば逆転する可能性は大きく下がるだろう。

その為緊張感是非常に高まっていた。それが、疲労をより強くさせてしまったのかもしれない。

「日向！」

「おう！——アツ！」

「なっ!？」

伊月から日向へとパスがさばかれる。だが、日向はボールを取り損ねてしまった。

体力も残り少なく集中力も切れかけなのだろう。掌で弾いてしまい、ボールが彼の手から零れ落ちる。

（しまっ——!）

「やべえ！」

重要な局面でのファumberland。このままボールが出てしまえば折角保っていた攻撃を失う事になる。

幸いにもボールの勢いは弱いく全力で走れば追いつける。

そう言い聞かせて日向は限界の近い脚に鞭打った。——その彼の横を、さらに早く山本が駆け抜ける。

「いーよつとー！」

「うおっ！」

前に出た山本はボールを日向の足元へと落とした。日向の足元へと当たったボールは、今度こそラインの外へと転がっていく。

「アウトオブバウンズ！ 白^{大仁多}ボール！」

「ナイス山本さん！」

「よくやった！」

ついに拮抗した時間が終わる。我慢の時間帯を制したのは大仁多。下手すれば逆転を許しかねない場面を、凌ぎきる事に成功した。

「くっそっ！ すまねえ！」

「ドンマイ日向。それよりも戻るよー！」

目を瞑り、頭を下げる日向を伊月が宥め、大仁多の速攻に備える。得点出来なかったのは仕方が無いが切り替えなければならぬ。こちらでも防ぐことが出来れば点差が変わらない。もう一度好機は訪れるはず。

限界が近いのは日向だけではないが、誠凛の選手達は歯を食いしばって力を振り絞る。

(だが、藤代監督も言っていたように、11番黒子の存在は厄介だ。やはり、ここはスクリーンプレイをメインに組み立てるか)

大仁多に攻撃権が渡ったものの油断は出来ない。特に神出鬼没の黒子は対処に困る相手だ。

小林は慎重にボールを運び、中外にパスを入れて誠凛のマークの注意を引きつける。

そしてトップの小林にボールが戻ると、山本が伊月へスクリーンをかける。

だが、伊月はスクリーンに引つかからないよう山本の体をかわして小林の突破を阻んだ。

「なっ!？」

「まだまだ!」

(スクリーンを読まれた? いや、イェグルアイの目で位置取りを読み取ったのか!)

広い視野で自分に迫る山本の場所がわかっていたのである。

光月へのパスコースが封じられ、小林の手が鈍る。

「キャプテン!」

「ッ——! ああ!」

そこへ白瀧が声を張り上げた。

ミドルの白瀧へパスが通る。ここで彼はすぐにパスを出さない。トリプルスレッドを取って火神と一対一の体勢となった。

(……来るのか?)

火神が白瀧の動きを警戒する中、白瀧は火神だけではなく黒子への対策を講じていた。

(確かに黒子のステイールは厄介だが、それを攻略できれば大きな躍

進となる)

長く共に戦った今までの経験からわかることがある。

それは神出鬼没と言われる黒子だが、仲間との接触など姿が見えないからこそその連携ミスを犯したことがない、ということだ。

つまり黒子は仲間の動きまで邪魔する事は無い。ならば大きく切り込まなければ、味方の位置取りによつては黒子のステイールを防げるのではないかと。

考えるや彼の行動は早かった。

左脚を一步踏み出し、腕を挙げてシュートフェイクを一つ入れる。野生の勘で読み取ったのか火神は釣られない。

両腕を下げる。まだ火神は動かない。

——直後、白瀧の体が突如沈む。火神は大きく斜め後ろに下がり、彼のドライブを防ごうとして、異変に気づいた。

「違う！ ドリブルじゃねえ！ シュートだ！」
「ちっ！」

火神は完全にオフェンスの動きを読み取ったのだろう。

白瀧のドリブルは動き出しが早かったものの、ドリブルを一つついた時にはすでに減速して、両手でボールを持ち直していた。ゴール下まで切り込めば黒子に捉まる。その前にシュートしようと考えていたのだ。

呼びかけにより、ステイールを狙っていた黒子もブロックを狙う。火神もまた可能な限りの力で跳んだ。そして、二人と白瀧の距離が少しずつ遠くなっていくことに気づいた。

(これって、さっきあいつのチームメイトがやっていた！)
(フェイダウェイシュート！)

白瀧はシュートの際、後ろへ仰け反るように跳んでいたのだ。

さらにそれだけではない。ジャンプした後も限界まで敵を引きつけ、普段よりも高い放物線を放った。火神の指先も越えて、白瀧のフェイダウェイシュートがリングを射抜いた。

「よっしゃああ！」

尻餅をついても、白瀧はすぐに立ち上がって力の限り叫ぶ。

(大仁多) 98対92 (誠凜)。

約二分ぶりに動いた得点は、誠凜の猛追を阻む追加点となった。

「西村あつー!」

「え」

得点を決めた後、白瀧は大仁多ベンチの近くまで駆け寄り西村の名前を呼ぶ。

「二点で誠凜の攻撃は終わったぞ! もうお前のせいだなんて言わせねえ! わかったら声出せ!」

「……ハ、ハイッ!」

二点。先ほど西村がいなければ誠凜の速攻で取られていたであろう得点だ。大仁多の失点がそれだけで終わり、しかも今また取り返した。これで誠凜の勢いも元に戻るはず。

故に彼が背負うべき責任はなくなった。

そう強く訴えて、言葉を受けた西村の顔に笑みが戻った。

(不味い!)

今の得点で大仁多の士気が大きく上がったように見える。

リコはタイムアウトを使うか迷った。

誠凜に残されているタイムアウトは一回のみ。できればせめてあと一分。残り時間二分から三分くらいの時間帯に使い、集中力と体力を少しでも休ませ、英気を養いたかった。

だが今の攻撃失敗に続く失点は、ひよつとしたら大仁多の逃げ切りを呼ぶプレイになってしまうのではないか。

そう考えて、リコはタイムアウトを取るかどうかの狭間に揺れた。

同じように木吉もこのままでは不味いと思い、伊月に声をかけた。た。

「伊月。……日向も辛いようだし、火神もマークが厳しい。俺にくれ」
トライアングルで中の警戒が厳しい。それでも木吉はオフエンスを引き受けた。

確かに今最も頼りになるのは、体力も残されている彼だ。

ここは託してみよう。伊月は木吉へとパスを通す。

ゴール下でボールをもらった木吉はパワードリブルで黒木を押し

込み、スペースを作ったところにターンしてワンハンドダンク。押し込まれた黒木は動けず、光月と小林がブロックに跳ぶ。すると、光月と木吉が強く接触した。

「ッ！」

審判の笛が鳴り、光月が視線を審判へ向ける中、木吉が手首のスタップを利かせてボールを軽く放った。

「ディフェンス、大仁多光月白9番！ バスケツトカウント。ワンスロー！」

木吉の得点が認められ、さらに光月のファウルが取られた。

このフリースローを木吉がしっかりと決めて三点プレイを成立させる。

（大仁多）98対95（誠凛）。スリーポイントシュートを決めれば同点という点差だ。

「皆！ もう少しだ！ 一気に行こう！」

そして、木吉はまだ攻める。

最前列でボールを入れようとする山本の前に立ちはだかり、ボールを奪うべく手を掲げた。

皆が辛いのはわかっている。だが、ここで取らなければやられてしまう。もう一度流れを誠凛に！ 今度こそ逆転を！

「おおー！」

「勝てるぞ！ 絶対に負けんな！」

その木吉の熱気に当てられて、誠凛の選手達に力がわきあがった。ゾーンプレスが大仁多の選手達にプレッシャーをかけていく。

「舐めんなよ。同じ失敗は繰り返さねえ！」

「山本！」

山本は大きく横に踏み込み、すぐさま小林へパスをさばいた。

高いパスで黒子のステールをできないようにすると、すぐさま山本は走り出した。同時に続いて白瀧にパスをさばいた小林も即座に走り出し、リターンパスを受ける。そして再びパスを山本へとさばき、今度は白瀧へ。

（パス回し早い！）

（ギブアンドゴー。黒子のステールを警戒して、得意のドリブルは

辞めてパスと走力で突破しに来たか！)

ギブアンドゴー。パスアンドランともよばれるプレイのこと。ボールを持つ選手が味方にパスをさばいてすぐさま走りディフェンスを振り切り、再びリターンパスをもらおうプレイだ。走ってディフェンスの不意を突き、ノーマークを作り出していく。

しかも今回はボール運びが得意な三人で行っているのだ。

運動量が豊富な三人のパス回しの前に、誠凛ディフェンスはあつという間にボールを運ばれてしまう。

「くそっ！ くそおっ！」

「無駄だ」

白瀧から小林へリターンパスが通り、そして小林はリングへと緩やかに放った。

シュートではない。これもパス。

それを空中で受け取ったのは、ゴール下へと駆け込んだ光月で――

「うおおおおおっ！」

凄まじい衝撃を起こす、光月のアリウープが炸裂する。

(大仁多) 100対95 (誠凛)。大仁多、ついに三桁得点。

「……ッ！」

「そん、な……」

「ナイッシユ、明！」

強烈な一撃は、両校に多大な影響を及ぼした。

誠凛はゾーンプレスを破られたこともあつて意気消沈。

大仁多は100点台にのせる連続得点ということで、得点を決めた光月を讃えるなど士気が大いに上がっている。

タイムアウトの前とは正反対の反応であった。

『誠凛高校、タイムアウトです！』

そしてここで誠凛は最後のタイムアウトを使い切った。

出し惜しみをしていられる場合ではない。精神的ダメージは体力にも大きく害を及ぼす。

リコの、苦汁の決断であった。

タイムアウトの指示は両校とも積極的な指示はなかった。

誠凛は選手達の体力が少ないという事があってゾーンプレスを中断。マンツーマンディフェンスを指示し、逆転できるだけの体力を温存するよう命じる。

大仁多はまだタイムアウトを残しているが、使えば誠凛の選手達を休ませることとなる。故に使うことは無い。攻守ともに方針は変わらずこのまま攻め続けようと指示を飛ばした。

そして、残り時間は二分を切る。

「ハッハッ。……くそっ！」

(大仁多) 103対97 (誠凛)。

タイムアウト後、誠凛が何とか木吉のオフエンスリバウンドから得点したものの、大仁多は山本のスリーポイントシュートが決まって点差を広げていた。

点差が縮まらず、体力も限界。徐々に木吉への対応も厳しくなっていく。誠凛の選手達に嫌な予感が浮かび始める。

だが突破口を開こうにも大仁多の堅実なプレイを破るのは困難で。火神は歯を食いしばるばかりだった。

「どうした。火神。もう諦めたわけではないだろ」

「あたり前だ！」

白瀧の煽りとも取れる言葉に強く言い返す。

気迫だけは消してはならない。まだ逆転の可能性は残っているはずだ。

「そうだよな。——なら、どうしてお前は本気で来ない?」

「あ?」

「とぼけるな。お前、さっきまで俺達に見せていた跳躍力はどうした?」

「ッ——!?!」

凶星を突かれ、動揺が表情に出てしまった。

「やはりな」と白瀧が小さく零し、呆れを隠す事無く露にした。

「この試合であれだけの力を発するだけの余力が無いのか？ あるなら見せてみる。そうでなければ、このまま負けるぞ？」

ああ、事実だろう。

このままでは誠凛は負けてしまう。ゾーンプレスも突破された現状では、火神が残る力を振り絞らなければ敗北は免れない。ならばやはり、今ここで全力を出し切るのが最も勝率が高い。

「ハッ。今全部出し切るわけにはいかねえよ。力を残してお前を乗り切るくらいの力がなきや、キセキの世代には勝てないだろう！」

だがそれはできない。たとえここで白瀧を倒すことができたとしても、代償としてキセキの世代と対抗する術を失うことになってしまう。

タイムアウト時にリコとも約束をしたのだ。今さら彼女の指示に背くことは出来ない。

火神の目的はあくまでも全国制覇。ここで負けることも、次で負けることも彼にとっては平等に意味がない。故にここで力尽きるような手段を選ぶわけにはいかないのだ。

そう強がり浮かべて敵の提案を拒絶する。

「……お前は、目の前の出来事に本気を出さずに挑んで、後悔することを受け入れるつもりか？」

一瞬体の疲労が全て吹き飛んだ。静かな口調であったにも関わらず。火神がそう錯覚してしまうほど、白瀧の言葉には彼の強い意志が込められており、耳にした火神の思考をリセットした。

『目の前の出来事に本気を出さずに挑んで、後悔することを受け入れるつもりか？』

そんなつもりは毛頭ない。

たしかにこのままでは大仁多を、白瀧を倒すことは敵わない。そしてそれでは試合の流れも変わってしまった現状、逆転は不可能となる。結果としてもしも本気でない状態でそうなれば、自分は満足などできるはずもないとわかっている。

この試合に、白瀧に勝つためには今以上の力を出す必要がある。そして火神には先の戦いの為に——キセキの世代との戦いの為にと

取っておくようにと指示された力がある。その力、跳躍力を出し切る
ことができれば、あるいは――。

「お前が封じられればチームは沈黙する。逆にもしもお前が俺を越え
ることができれば、チームは勢いづく。日向さんや木吉さんを中心に
試合をひっくり返すこともできるかもしれない。都大会予選、秀徳と
戦った時のように」

「お前、何を言ってる」

「火神が本調子を出せないと言うのなら、誠凛は他の四人で大仁
多に挑むしかなくなる。それで勝てると思ってるのか？」

「それは……」

答えるまでもない。答えは不可能だ。誠凛は木吉が復活したと
はいえ、火神の得点力がなければチームとしての力は全国で戦うには
心細い。体力が尽き掛けて、相手が大仁多のような強豪校ともなれば
なおさら。

しかし火神が大仁多のエース、白瀧を越えることができたなら
ば。かつて秀徳と戦った時のように、誠凛は。

「決して誠凛の先輩達は弱くない。勢いにのれば強敵を打ち破るだ
けの力を持っている」

あるいは勝機を見出すこともできるかもしれない。

火神の力によつてチームに勢いをもたらすことができるならば、黒
子や二年生も応えてくれる。

それには白瀧を越えるという前提がつく。この窮地を脱する為に
火神は白瀧を倒さなければならぬ。その為には力を振り絞る必要
がある。

「白瀧。なんでお前はそんなことを言うんだ？ お前にとってはこの
ままの方がいいんじゃないやねえのか？」

「……俺は、もう誰にも後悔してほしくない」

だがわからない。なぜ自ら敵に塩を送るような真似をするのか。
このまま火神が余力を残したまま戦ったほうが大仁多にとっては有
利なはずなのに。

火神の問いに、白瀧は静かに答えた。

「絶対なんてものは存在しないんだ。どれほど強く望もうとも、どれほど信じようとも、時には非常な現実を叩きつけられる。夢物語は所詮夢物語なのだ。ならば、絶対ではないなら全力を持って取りに行くべきだろう」

かつて彼は失った。一度は大丈夫だろうと、これからもずっと続いていくであろうと思い、信じていたもの。それさえあつけなく失われた。その時に思い知らされた。絶対なんてないということ。

「今を勝てない者には未来なんて訪れない」

そして未来は決して待っているだけでは訪れない。今を勝たなければ全てを失ってしまう。

だからこそ白瀧は問いかけたのだ。自分だけではない、同じ思いをもう二度と誰にもして欲しくないから。

「——なあ。お前にとってエースはどんな存在だ？」

さらに白瀧は火神に問う。エースである彼に、何故エースである意味があるのかを。

「チームを勝たせるやつだろ」

火神は短くそう答える。

得点を取り、味方に勝利を届ける。なるほど、確かにそれがある意味正しい意味でのエースなのかもしれない。

「そうだな。だが俺の考えは違う」

「何だよ？」

「仲間を奮い立たせるような存在だ。どんな強敵が相手であろうとどんな絶望的な状況下であろうとも。むしろそんな状況だからこそ奮闘し味方を盛り立てる。だからこそ誰もがエースと言う存在を信じて託してくれる。ゆえに俺達は勇敢に戦いチームを勝利へ導かなければならない。この戦いを見守り、背を押してくれる全ての者の為に！」

そうすることで見ている者は奮い立ち、その姿に憧れて、新たな希望を見出すことが出来る。

「白瀧」

「それとも……お前にとっても、俺はとるに足らない存在だったか？」

本気で戦うには相手にとって不足か？」

そして彼自身が、強敵と全力で戦いたいという思いがあるからこそ。

好敵手と対等に争う資格さえも失った彼が誰よりも、目の前の男とは全力で決着をつけたいとそう望んでいるから。

「……悪いな、カントク」

小さく、火神はベンチに座るリコへと謝罪する。

あれだけ強く約束したというのに、その約束を破ることになってしまふ事への謝罪だ。

オフェンスリバウンドを制した木吉は一旦伊月へ戻す。

直後、火神は駆け出した。

伊月はそれを見て、黒子を経由して火神の元にボールが届いた。

「ちいつー！」

「うおらああああー！」

ゴール下へ走りこんだ火神は、振り切れていない白瀧も、ヘルプにでた黒木の存在もお構いなしに跳んだ。

それは彼が出せる全力の、超跳躍。さらに勢いをつける為に後ろへ回したボールに右腕も合わせる。今までとは比べ物にならないだろう威力を誇るボースハンドダנקは、白瀧と黒木の二人を吹き飛ばした。

(大仁多) 103対99 (誠凛)。火神、己の最大限の力を発揮する。

「あの馬鹿……！」

「ここまで言われちゃもう抑えきれねえ。俺に全力を出させたこと、この試合が終わった後で後悔させてやるよ、白瀧！」

「そうだ。それでいい。来い、火神。それでこそお前と戦うことに意味がある」

ベンチでリコが歯がゆい思いを懐いている中、火神は己を焚きつけた相手に今一度宣戦布告する。それを聞いた白瀧は嬉しそうに頬を緩めた。

「お前が叶えたい夢があるというのならば、全力で突き進め。たとえ、俺達の夢を踏み躪る覚悟があるというのならば——！」

本気の好敵手と凌ぎを削る。その先にある勝利にこそ、本当に意味がある。そうでなければ、必ず誰かが後悔することになってしまうのだから。

大仁多のオフセンス。

ボールを運んだ小林は、一度光月へボールを入れ、彼から白瀧へとパスがさばかれた。

直後、黒木が黒子へスクリーンをかける。これで彼のステイルの危険性がなくなった。

それを確認して白瀧は勢いよく切り込んだ。

試合終了間際でも彼のスピードは維持されている。そのトップスपीドに火神は野生の勘でコースを先読みし、何とか食らいついた。

すると火神が横で並走する中、白瀧もそのまま跳躍。

得意のレイアップシュートだろう。そうはさせるかと、火神は負けじと超跳躍を發揮。

だが、白瀧は中々ボールを手放さなかった。すると縦に高く跳んだ彼を嘲笑うように、リングの下を潜り抜けてから、背面の姿勢でボールをリリース。

白瀧のバックレイアップシュートが静かに決まった。

「それでも、俺達はお前達の覚悟も超えて、お前達に勝つ！」

「——上等だ！」

(大仁多) 105対99 (誠凛)。

最後の最後で、両校が誇るエースがぶつかり合う。

味方を勝利に導くのは火神か、白瀧か。

最後に笑っているのは誠凛か、大仁多か。

——黒子のバスケ NG集——

「ならんば」

伊月のスローイン。しかし、その先にいるのは敵選手である小林

だ。

「はっ?」

予想もしないコースに、一思わず小林は呆けてしまう。

突然の出来事に両手でハの字を作って受け取る構えを取って。

その横では、黒子が大技を放つ準備を整えていた。

「……あっ」

「うおっ!?!」

黒子の加速するパスが、小林の体を直撃した。

「小林さん!?!」

「すみません。手が滑りました」

「お前、一体うちの選手を何人殺す気だ!?!」

驚愕ではなく悲鳴。白瀧に続く第二の犠牲者発生した。

第七十九話 嫌悪

第四Qの残り時間も後わずか。

間もなく試合を決する瞬間が訪れようとする中、試合の得点板は次々とその数字を更新していった。

「らああああああー！」

火神が自慢の跳躍力を活かして白瀧のブロックを掻い潜れば――

「うおおおおおおおー！」

白瀧が得意の瞬発力を発揮して火神のマークを振り切った。

両チームのエースがお前には負けないと得点を重ねていく。どちらにも一歩も譲る気配がない。優れた矛が敵の盾を粉碎する。

「負けつかよー！」

一度でも得点に失敗すればそのまま試合を終えることになってしまふ。

それだけはなるまいと火神はどんどん積極的に仕掛けていった。

ステイールをかわし、ワンドリブルで一気に切り込むとミドルレンジからジャンプシュート。

だがただのジャンプシュートではない。

ドリブルでついた勢いを空中で削いで体を立て直し、態勢を整えてからシュートを放つ。

長い跳躍時間も相まって白瀧のブロックは届かなかった。

再び誠凛に得点が記録される。

「絶対に、勝つー！」

続く大仁多の反撃でボールが渡ったのはまたしても白瀧だ。

ボールを受けてない状況下でも野生を得た火神の厳しいマークが厳しい中、執拗なカットとスピードで振り切った。

山本のバウンドパスでボールを受け取るとさらにドリブルで加速。ミドルレンジへ鋭く切り込んだ。

数歩でタイミングを合わせると跳躍。

ブロックに跳んだ火神のタイミングをかわす、早いティアドロップを放ってシュートを沈める。大仁多もすぐさま得点を挙げることに

成功した。

「白瀧い！」

（まだ止められねえ！ 反応は出来てるはずなのに、さっきフェイントにつられたせいでどうしても一歩遅れちまう！）

「火神ッ！」

（高さに加えて滞空時間の長さが非常に厄介だ。向こうは空中で立て直しができるから強引に攻めても決められる！）

拮抗した実力を持つ二人。目の前の敵を厳しい視線で睨み付ける。

（駄目だ。エース同士の一騎打ちだけじゃ点差が縮まらない！ ここは！）

「木吉ー！」

終わりの時間は刻一刻と迫ってくる。それなのに得点差は埋らない。

なんとかしなければいけない。この状況下で伊月は方針を変えて木吉へとパスをさばいた。

「おう。任せろー！」

パウードリブルで背中の黒木を押し込み、ゴールに近づくと瞬時のピポットターンで彼を置き去りにする。

何とか光月と黒木がブロックを試みて木吉のダンクシュートコースを塞いでいくが。

そこから木吉は右手を下ろし、0度の位置に走りこむ日向へとバウンドパス。

パスはワンバウンドして日向の手元におさまるはずだった。

それを、白瀧がバウンドの直前に弾き飛ばす。

「なっ!？」

（木吉の後出しの権利が読まれた!？）

「ナイス、要！」

宙に浮かんだボールを光月がしっかりと確保し、転じて大仁多のオフセンスに。

黒子のステイールを三人がかりでボールを運んで誠凛の包囲網を突破。

ハーフコートオフエンスに移行すると、こちらも今度はエースではなく、小林が攻めて行った。

パスを警戒していた伊月の真横をクロスオーバーで瞬く間に突破する。

「しまった——！」

(くそっ。一瞬、反応が遅れてしまった！)

鷲の目で何とか食らいいていたものの、こちらも体力が限界だったのだろう。小林を止めることは敵わなかった。

マークをかわした小林はドライブからのミドルシュート。高さと速さ、この二つを両立した彼の得意技を放った。

「っ。駄目だ、小林さん！ その位置は！」

「むっ!？」

リリースする瞬間、白瀧が警告を発したが少し遅かった。

小林にとっては死角となっている斜め後ろから、火神がブロックに跳んでいた。

並外れた跳躍力が小林のミドルシュートを叩き落とす事をも可能にする。シュートは腕に弾かれ、これを黒子が手にした。

「あの位置で、届くのか！」

「マジかよ——！」

(野生による先読みと、超跳躍力によるブロック。他へのフォローも万全ということか！)

得点が次々と加算されているからといって、並大抵の得点を許すほどデイフェンスが柔というわけではない。絶対に自分達が勝つのだという気迫溢れるプレイで目の前の得点を競い合っている。

「伊月センパイ！」

「おう、どうした」

「今までの攻防でもわかっていたことだ。あいつの守備範囲は滅茶苦茶広い。俺に、やらせてください！」

絶対に点を取ってやるから。

そう火神は伊月に懇願して。

「小林さん！」

「……ああ」

「もはや火神はヘルプディフェンスに關しても完璧です。やつを完全に振り切らないと得点は難しいでしょう。残りのオフフェンス、俺に任せてください」

必ずや勝つて見せます。

白瀧は小林にそう進言した。

「わかった。任せる」

「なら、お前に託そう」

エースの意地に、両校の司令塔は首を縦に振って応じた。

この試合。最後の勝敗を決めるのはエース対決しかない。両校の決断は同じものであった。

「行かせねえ！」

火神がボールを持つや、白瀧のプレッシャーは格段に強くなった。

まだスリーポイントラインであるというのに一歩も通すものかと身動きが取れないほどに手を伸ばす。

「……ッ。ラアッ！」

「はっ!？」

しかし、火神は切り込まなかった。それどころか、一歩下がってスリーポイントラインの外側からシュートを撃った。

(アウトサイドシュート!?! あいつ、そんなに得意ではなかったはずじゃ!?)

(何れにせよ、俺達がやるべき事は!)

(変わらない!)

苦手であるはずの外からのシュート。

入るのか、そんな疑問が湧いても黒木や光月はリバウンドに供えてポジションを取りに動く。

「ハッ。それだけじゃねえ！」

(まさか!)

「明! 黒木さん! 本命は別だ! 火神が行く!」

撃った直後、すぐさま駆け出した火神を見て白瀧は声を張り上げた。

火神は一直線にゴールへ向かっていき——リングに跳ね返ったボールを、直接リングへ叩き込む。たった一人でアリウープを決めていった。

「——まだだ！ 当たれ！」

さらに、日向達は得点を縮める為にゾーンプレスを展開。

この試合を引っくり返そうと最後の賭けに出た。

「そう簡単に捉まってたまるか！」

誠凛が必死に追いつがるが大仁多もそう簡単に思惑通りには事を運ばせない。

山本と小林のピック&ロールで前線のプレッシャーを凌ぐと白瀧も加わって三人のパスワークでゾーンプレスを突破。

黒子のステイールもかわしてハーフコートオフエンスへと移行する。

(くそっ、くそっ、くそっ！)

「駄目！ 絶対に止めて！」

日向の戻りが遅れて、四対五の形となってしまうた誠凛ディフェンス。ここで止められなければ試合は決するだろう。それを察してリコはこれ以上ない程の声を張り上げた。

残りの四人がゾーンを作って大仁多を待ち構える。足を動かし、ハズアップで敵の行く手を阻んでいく。

「俺達も、負けられない！」

そのゾーン内に白瀧が切り込んだ。

チェンジオブペースからのカットイン。火神の体が硬直した一瞬をみのがさず、仕掛けていった。

木吉や黒子が彼に反応したが、突如白瀧の踏み込みが変化。

ゴールへ向かってまっすぐ進んだと思えば一歩で横へ踏み込み、そして二歩目で再びゴールへ向き直りながらシュートを放つ。木吉と黒子のブロックの間を通すようにジノビリストップでかわした白瀧。そのシュートが外れるわけがなかった。

誠凛、最後の仕掛けが通じず。

「ああっ……！」

「……そんな！」

思わず、誠凛のベンチでは何人もの選手がコートから視線を逸らした。

天井を仰いだり、手で顔を覆ったりと。試合の結末を悟ってしまっただが故の行動だった。

「よしっ！」

「やった！」

対して大仁多のベンチは皆笑みを浮かべていた。

藤代でさえガッツポーズを取り、試合を制したと確信した。

大仁多の応援席では残り時間のカウントを始める声まで上がり始める。

大勢が決した瞬間だった。

「まだだ！ ボールよこせ！」

そんな中、火神が一人気を吐いた。

このまま終われない。終わってなるものか。

最後の一瞬まで白瀧に勝負を挑み続けた。

「ああ！ 試合時間は残ってる！ 走るぞ！ 攻めろ！」

彼に続くように伊月や日向達も大仁多のディフェンスに攻め込んでいった。ブザーが鳴るまでは絶対に自分から勝負は投げ出さないと。

その姿に釣られて、誠凛のベンチメンバー達も気力を振り絞って声援を送り続けた。

（諦められないよな、火神。逆の立場だったならば俺だって諦められない。もうここまで来てしまったのだから）

（もう時間も策もありはしねえ。でも誰一人試合を投げてないんだ。俺だって折れてはいねえぞ白瀧！）

最後の勝負も火神に託された。

白瀧のマークを、幾重ものフェイントを織り交ぜ、緩急も加えて揺さ振る。だが白瀧は動じない。

あと数秒。まだ白瀧の集中力は途切れない。火神はマークを振り切れない。

強引にクロスオーバーで中へ切り込む。しかしフリーになれないためか、ゴールへと中々近づけない。

一度ビハインドザバックで引きつけ、前進。これにもつられない。ならば、とアイコンタクトを取った黒子へとパスをさばき、すぐさま走り出す。

リターンパスを受け取ろうとして手を伸ばし——そのボールが、白瀧に叩き落とされたのと、ブザーが鳴り響いたのは全く同時であった。

『試合、終了——！』

大仁多の応援席、ベンチメンバー、出場選手達が歓喜に湧く。

誠凛の関係者やリコ達、日向等戦った選手達の表情が悔しさにあふれかえる。

(大仁多) 111対105 (誠凛)。

両校三桁得点という、お互いの高い攻撃力を示したこの試合。

大仁多が六点差のリードを最後まで守りきり、三回線進出を決めたのだった。

初出場で全国にその存在を示した誠凛、惜しくも二回戦で姿を消す。

「……………負け、かよ。くそっ」

「火神!？」

終わった瞬間、緊張の糸が途切れたのだろう。

火神の体がフラフラと大きく揺れる。ついに自分でバランスを保つことさえ出来なくなり、その場に倒れこみそうになる。

そんな彼を、白瀧が支えた。

「しっかりしろ。あと少し立っているだけでいいんだ。もう少し頑張れ」

「白瀧。ハッ…………」

二、三步よろめきながらも、しっかりと火神の体を支えている敵の

姿を見て、思わず笑みがこぼれた。

自分はこれほどボロボロだというのに。この男は最後まで選手であろうと務めている。そんな姿が負けた相手であるというのに何処か誇らしげに見えてしまうのは、彼のおかげで負けても後悔が小さいためであろうか。

「——テメエ、俺を挑発なんてしやがって。あれでもしお前らが負けたらどうするつもりだったんだよ。あるいはお前のせいで大仁多が負けるかもしれないかったんだぞ」

「馬鹿か。お前は此処をなんだと思っているんだ」

負け惜しみではない。ただ純粹に不思議に感じていた疑問を投げかける火神。

すると白瀧は「何を言っている」と当然だと言わんばかりの言葉を返した。

「此処は全国の猛者が集まる舞台、IHだぞ。敵一人に本気出された程度で負けるようなら、この先戦っていけるものか。そもそもそんな事で責めるようなやつがこんな所にいるわけがないだろう」

自分達の高めた力を競い合う。

その中でたった一人を本気にさせた程度で屈するようではその先の試合を戦ってはいけない。

藤代が指示を出したように、白瀧もまた同意見なのだ。たとえそのせいで負けたとしても、それを誰かのせいにするような賤しい人間などこの場に存在しない。もし白瀧が違う立場であったとしても同じ反応をしたことは間違いない。

「だからそんな事は二度と言うな。目の前の勝利を心の底から欲しがっているのに、それを争う相手に真っ向からぶつかってもらえないのは、選手にとって最大の侮辱だ」

「……ああ、強いわけだな。ちくしょう」

本当に、負けても後悔は中々浮かんでこない。

敵にこれほどまで強い影響を受けたのはおそらくこれが初めてだ。

ならばせめてと、最後の意地で彼の手を払い、自分の力でコート中央へと歩き始める火神。十人全員が整列し、審判がこの試合の終わり

を告げる。

『111対105で大仁多高校の勝ち。礼!』

『ありがとうございます!』

最後まで点の取り合いとなった試合。

一礼後、各選手達は握手をかわして互いの健闘を讃えあう。

「今回は負けた。でも、すぐに借りは返してやるからな」

「ああ。そうだな。来年の夏、また返しに来い」

「はあ? そんな待ってられつかよ。冬に絶対に挑んでやる!」

「……どうかな。桐皇に秀徳、この二校がいる中、お前たちが勝ち残れるか」

「勝つ! あいつらにも、お前らにも!」

東京のウィンターカップの出場枠は二校。白瀧はその枠に入ることは難しいだろうと挑発気味に語るが、火神はそんなの関係ないと声を荒げる。

「ならやってみろ。俺も、お前との戦いは勝ったとは思っていない。叶うならばもう一度戦ってみたいと思っっているからな」

「……その前に、お前らはキセキの世代との試合だろ。負けんじやねーぞ」

「当然だ」

最後にもう一度強く手を握り締める。再戦を誓い、そして勝った者がさらなる飛躍を期待して、二人は笑みを浮かべた。

「白瀧君」

「黒子か」

「負けたのは残念ですが、しかし僕も火神君と同じです。必ずリベンジします。ですが今はただ、君と戦えてよかったです」

火神達の会話に、黒子も入ってきた。この試合、戦う事ができてよかったと手を伸ばす。

「……俺も、秀徳を破ったお前達と戦うことが出来たのは本当によかったと思う。気がかりの一つを削ぎ落とせし、今回のような接戦を乗り越えられたのは大きな収穫だった」

「はっ」

「だが、悪いな黒子。俺はその手には応えられない」
「えっ——」

相手の事を認めつつ、しかし白瀧は黒子の握手に応じようとはしなかった。

「確かにお前の事は選手として認めている。素晴らしい、立派な選手だ。だが——俺はただ一点において、お前を男として許せないでいる」

そう言い残して、白瀧は彼の横を通り過ぎて行った。

(ただ一点？ 男として許せない？)

彼が栃木に引越す際、別れる時に何も言わなかったのはおそらく当時の黒子の心情を気にしてなのだろうが。

しかし彼がそこまで許せない点とは。果たしてそれが何を指しているのか。黒子にはわからず考えてみるも中々見当がつかなかった。

「なんだあいつ？」

「……わかりません。ですが」

おそらく、僕は彼の怒りに触れるような何かをしてしまったのかもしれません。

そう続けて黒子は遠くなっていくかつてのチームメイトの姿を見つめた。

「ほら！ 何ボーっとしてんの！ さっさと撤収するわよ！ 特に火

神！ あんた、さっさとこっちに来なさい！」

「っと！ ヤベ。黒子、行くぞー！」

「そうですね。わかりました」

リコの怒声（特に火神に向けたもの）が耳に響き、二人はベンチへと戻っていく。

誠凛の選手達はコートを去る前に何度か振り返り、そこからの光景を目に焼き付けた。

——初出場で終わらない。必ずこの全国の舞台に戻ってくる。そして今度こそは。

強い決意を宿して、誠凛高校は舞台を後にした。

誠凛高校。初のIHで二回戦まで勝ち残る。創部二年目とは思え

ない活躍は、多くの人々の記憶に刻まれた。

翌日。

三回戦へと駒を進めた大仁多は、ベスト8をかけた試合へと臨んでいた。

相手は福島県の勇・鎌倉ヶ丘高校。堅実なディフェンスと速攻が武器の強豪校だ。

前評判では昨日の誠凛との試合で大量の点を取り合った後の疲れを不安視されていた大仁多だったが。

速攻を武器とする相手に、それ以上の速さで小林・山本・白瀧の三名が速攻を連発。さらに光月、黒木が二人あわせて二十リバウンドを記録するなど安定感を見せた。

特に白瀧が三十六得点を挙げるなど、マークが厳しい中この日もエースの役割を存分に発揮した。

最終スコア（大仁多）109対68（鎌倉ヶ丘）。

この日も百点ゲームで試合を制し、準々決勝へと駒を進める。

次の試合の相手は、一足先に三回戦突破を決めていた秋田県代表――陽泉高校。キセキの世代の一角、紫原を要する高校である。

その日の夜。

大仁多高校の選手達はホテルの一室でビデオを見ていた。

映像の内容は偵察班が撮影した、陽泉のこれまでの試合。それは全国の舞台をここまで勝ち上がってきた彼らでも、信じられないようなものだった。

小林も、白瀧も、藤代でさえ例外ではない。誰もがその光景に目を奪われ、呆気にと取られていた。

「……これ、本当にバスケの試合なのか？」

「とてもじゃないが、信じられない」

「IHという全国の舞台でこんな事出来るはずがないのに」

それでも、陽泉高校はそれを成し遂げていた。

誰かの眩きを切欠に選手達は動揺に溢れた声をこぼす。

「此処までの全試合。陽泉は一度も二桁失点を許していない」

「全ての敵の得点を一桁に抑えている。これ以上ない程の完璧なディフェンスだ」

「しかも敵が得点できているのは、スリーポイントやフリースローの得点ばかり。中からは全然得点出来ていないってのが恐ろしい」

「二メートルが三人という超大型の布陣。これが、陽泉高校——！」

三試合ともに陽泉は敵に得点を二桁まで載せていない。最小失点で勝ち上がってきている。本来のバスケットはかけ離れた試合結果だ。

二メートルの長身を持つフロントライン三人が固めるゴール下。

しかもその中心であるセンターを勤めているのはキセキの世代の中でもディフェンスは最強と呼ばれる紫原だ。並大抵の攻撃では攻め切れることは不可能である。

「……正直な話。此処まで圧倒的となると対策といった対策もあつたものではないですね」

一通りのビデオが流れた後、藤代が重々しく口を開いた。

数多くの試合を目にしてきた彼であるが、藤代も打開策を見出すことは出来ていない。それほど次の相手は一線を画している。

「次の試合、皆さんがいつも通り、いつも以上の力を発揮してもらおうしありません。しかし——ひよつとしたらこれまでの試合とは比べ物にならないような結果が待ち受けているかもしれない。それだけは、覚悟していてください」

全員が息を飲む。

藤代の言葉は非常に苦しいものだった。だがそれに反対する声はない。皆意見は同じであった。とてもではないが『なんとかかなる』と楽観視できない。

これがキセキの世代を擁する高校との初めての公式戦。選手達の間には緊張が走った。

その後、細かい話し合いを終えてその日は解散となる。

皆明日に備えて少しでも英気を養おうと自室に戻る中――

「本田、明。この後、少しいいか？」

「あつ？」

「僕は構わないよ。なんだい？」

「明日の試合に備えて。少しやっておきたいことがある」

白瀧は一人、部屋に戻らずにチームメイト二人にそう頼んでいた。かつての仲間である紫原と渡り合うために。最後の足掻きをしようとしていたのだ。

一方、同時刻。

陽泉高校もまたホテルに戻ってスカウティングを行っていた。

「――という感じだが。お前の目から見てどうだ、岡村？」

ビデオが一時停止される。

陽泉高校を率いている女性監督、荒木雅子。かつては女子バスケットの日本代表にも選ばれた名プレイヤーで、長い黒髪と凛とした表情が映える美人監督だ。

荒木は大方の分析を終えると主将である岡村へと話を振る。

「――いいと思いますよ。さすがに全国常連校というだけあって選手層が豊富。ことオフェンスに関しては全国随一と言っても過言ではない。明日は面白い事になりそうじゃない。超ディフェンス特化型のうちと、超オフェンス特化型の大仁多。最強の矛と最強の盾がぶつかるという矛盾。さて上回るのはどっちかな？」

陽泉高校三年主将、岡村建一 ポジション：PF 200cm
ずっしりとした物腰で岡村はゆっくりと口角を挙げた。

二mという長身を有する選手三人がインサイドを固める陽泉。このディフェンスは間違いなく全国一だ。

果たして敵の攻め気さえ奪い取るこのディフェンス力。明日は如

何なる猛威を振るうのか。

(……ふーん)

岡村達が敵に向けて興味津々といった表情を浮かべている一方で。陽泉高校の中でも最高の身長を誇る紫色の髪の手選手はつまらなさそうに頬杖をついた。

キセキの世代の一角、紫原である。

陽泉高校一年、紫原敦 ポジション：C 208cm

紫原の視線の先にいるのは大仁多のエース、白瀧だった。彼の映像を見た紫原は不満気に視線を細める。

(まだ足掻いているんだ。本当に、うんざりする)

彼の姿を見て紫原は嫌悪さえ覚えていた。

目障りだと。叶うことならば、次の試合で全てひねり潰してやりたいと思うほどに。

かつての級友にそう思われているとは知る由もなく。

白瀧は本田と光月をつれてバスケットのゴールがある広場を訪れていた。

今日の試合の疲れもあるはずなのに。そんな披露は微塵も感じさせないキレで動いている。

本田と光月。彼らをディフェンス役に見立てて。——白瀧は新たに練習していた技術で二人のブロックを掻い潜り、シュートを打つことに成功した。

「おおっ！」

「……まさか」

(マジでこいつやりやがった！　これがあれば、陽泉戦もあるいは……！)

かつて彼が想定していた、二対一の場面。

平面におけるディフェンス能力が高い本田、高さとパワーに優れた光月。仮想陽泉としては十分すぎるほどの相手だっただろう。その

二人をかわせるという事がどれだけ大きな可能性を生み出すことか。だからこそ、本田も白瀧がシュートを撃った瞬間に希望を感じ取り――ボールがリングに弾かれたのを目にして、絶句した。

「え……う？」

「なっ!?」

リングをくぐる事無く、コートを転々とするボール。シュートを撃った白瀧も音で行く末を感じ取ったのか、視線を動かす事無く項垂れた。

「失敗だ……」

「おいおい。別にそこまで決め付けなくてもいいだろ。形になってないわけでもないだし」

「次に戦う相手はディフェンス最強の陽泉だぞ。試合となれば成功率はさらに下がる。元々これは切り札に使うつもりだったんだ。だが練習でまともに決まらない、本番で決まる可能性が低いものを切り札と考えることはできない」

もはや練習の期間などないというのに。明日にはもう試合だというのに。

白瀧は結局、最後まで新技を完全にモノにすることができなかった。

その後も何度か繰り返したものの成功率は安定しない。

試合前日の最後の足掻き。しかし、白瀧は完成には辿り付けていない。切り札を一つ欠く状況で明日を迎えることとなってしまった。

「ッ。くそっ！」

苛立ちを隠そうともせず、地面を蹴る。

それだけ期待していたのだ。これを切り札としてキセキの世代と渡り合おうと。

だが現実、それは叶わなかった。成し遂げられない己の無力さと至らない不甲斐なさを嘆くばかりだ。

「おい、落ち着きなよ。出来なかったのなら仕方が無いよ。精一杯努力していたんだから」

「……それじゃ駄目なんだ。仕方が無いじゃ駄目なんだよ！」

「え？」

「努力しても、結局出来ないのならば意味がない。この程度のこと、あの男ならば——黄瀬だったならば、一度見ただけで全てものにしていくのだから！」

「え？」

「なっ——！」

ギリギリ、と白瀧は歯を食いしばる。怒りと妬みの感情で満ちている声は、彼の心を正しく反映していた。

彼の説明を受けて、二人はようやく白瀧が懐いている一つの悩みを理解した。

（そういう、ことだったのか）

（前に神崎達が言っていた、こいつが抱えているかもしれないという不安。それは試合までに残された時間だけじゃなくて、かつて負けた敵への想いがあつたってことか）

かつて彼が敗北を喫した、黄瀬への負の感情。彼へ懐いている焦りが白瀧を急かしていた。

無理も無い話した。なぜならば白瀧は、努力した時点で黄瀬に既に大きな遅れを取っている。彼が努力して、ようやく何かを成せるようになった時には、黄瀬も同時にそれを成し遂げているのだから。それも相手以上の完成度で。

言わばスタート地点が違う。

圧倒的な才能を誇る天才と呼ばれた者に追いつこう、追い抜こうという想い。二人が考えている以上に白瀧の中では強くなっているだろう。

それを知って、しかし光月達は彼に慰めの言葉をかけることはできなかった。

今ここでありふれた言葉を発したとしても、それが彼の心中を改善できるとは到底思えないからだ。その程度で軽くなるほど彼が背負っているものは柔ではない。

「……………すまん。苛立っていた。忘れてくれ」

「構わねえよ。お前も人間だつてことだ」

「うん。むしろ下手に隠されるよりは、こうして外にぶつけてくれた方が嬉しいよ」

「そうか」

一通り感情を発散して自分で落ち着いたのだろう。白瀧は小さく頭を下げる。

彼の謝罪を手短に受け取ると、二人の言葉に少し安堵したのかわずかに笑みが戻った。

「さて、そろそろ戻るか。さすがにこれ以上は明日に響きそうだ」

「そうだね。しっかり体を休めて備えておかないと」

「ああ。——ああ、ただその前に」

時間も遅い。もう戻ろうと本田がホテルへと足を向ける。すると白瀧がもう一度、光月を呼び止めた。

「明、最後に、少しいいか?」

「え? 僕? 別にいいけど」

「ああ。本田は先に戻っていてくれ。監督達が探しているとまずいな。疲れているのに悪かった、助かったよ」

「だから構わねえって言ってんだろ。お前が活躍しねえとさすがに次はやばいからな。早めに戻れよ」

本田は一足先にホテルへと戻っていく。

彼の背中を見送って、そして白瀧は話しはじめた。

明日の陽泉戦。いざという時の対策を光月に話しておくために。

「……………え?」

だが、彼の説明を受けた光月は目を丸くして驚愕した。

「どういう意味だよ、今の言葉は!?!」

「……………疑問に思う気持ちはわかる。確かに紫原の実力を考えれば、一見難しいと感じるだろうが……………」

「違う! そっちじゃない!」

『信じられない』『何を言っているんだ』と光月にしては珍しく言葉を荒げて、白瀧に問い詰める。

『『もしも俺がいなくなったら』って、どういう意味だつて聞いている

んだよ！」

まるで白瀧が試合中にいなくなる可能性を、自分で示唆するような話しぶりだからだ。

大仁多のエースであり、チームの攻守の要となっている。帝光をよく知るといふ点も欠かせない要因であろう。

その彼が、何故そのような事を告げるというのか。

友の当然の反応に白瀧は小さく息を吐いて、説明を続ける。

「……俺は帝光中時代、キセキの世代とチームメイトだった。だからこそあいつらと何度か一対一で戦ったこともあるし、全力で力を競い合っていた」

かつてはライバルであった青峰。

スリーポイントシュートを教わった緑間。

ポジションを競い合った黄瀬。

主将であり常に頼りにしていた赤司。

皆様々な形で幾度も本気でぶつかり合い、その力をよく知っている。

「だが紫原と戦ったことは一度もない」

例外が紫原だ。

彼は練習を嫌い、練習中に本気を出すようなことは殆ど無い。自主練習を嫌う節も相まって、白瀧は彼の力の底を全く知らなかった。

未知のものに対する恐怖。それが紫原にはある。それが一点。

そして、もう一つは。

「加えておそらく俺にとって紫原は最悪の敵だ。緑間にとって火神がそうであったように。そして紫原はいままで強大すぎる力で多くの選手のへし折ってきた。もし俺が紫原と対峙して、万が一心が折れるようなことになれば、大仁多にはお前しか太刀打ちできるものはいないだろう」

予想される最悪の相性。実力差。力に屈して、もし白瀧まで心が折れるような事があれば。

決して小林達のことを過小評価しているわけではない。彼らのことは十分すぎるほどに信じている。

だがキセキの世代は普通ではない。まともに戦って太刀打ちできる選手など、そう簡単に見つけられるものではないのだ。それはこれまでの試合で明らかになっている。全国の猛者でさえ呆気なく敗れているこの現状が示している。

「だからこの保険だ。俺達が一番してはならないのは、勝機を完全に失うことだ。もし俺がいなくなったなら、その時は頼む」

おそらくエースが考えるべきことではない。だが考えなければならぬ問題でもある。

ゆえに白瀧は恥を承知の上で頭を下げた。もしもの時は、後は頼むと。

「なんで、そこまでわかるんだ？」

「わかるよ。あいつらがどう感じているのかはわからないけど、俺達は中一の頃から全国という舞台で共に戦ってきた、大切な仲間なんだから」

三年間、大舞台で共に戦ってきた仲間だ。全てを理解することは出来なくても大体のことは把握している。誰よりも大切に思うからこそ——見栄を張ってはられない。必要とあればいくらでも継りつく。

「……わかったよ」

「そうか。助かるよ」

「でも、その時は君がもう一回僕に言ってくれ」
重々しく了承する光月。

それを聞いて白瀧は安堵して、続いた言葉で今度は彼が目を丸くした。

「戦う時は一緒だよ。潰れる時も、勝つ時も」

「……潰れないさ。まだこんなところで潰れてなるものか」

本当に頼りがいがある選手に成長したものだ。

笑みを浮かべる光月につられて白瀧も笑う。

そうだ。まだ。

約束を果たすまでは。

絶対に負けられない。

こんな所で力に、絶望に屈するわけには潰れるわけにはいかない。

その、はず、なのに。そう、わかって、いる、はず、なのに。

それは何度も何度も繰り返し返された光景だ。

あらゆる技術を駆使して。あらゆる策を講じて。あらゆる可能性を模索して。

これ以上ない、最良の手を尽くして挑んでいる。

(何故だ。何故、まだ届かない——?)

それでも目指している領域には届かない。

誰よりも倒したいと勝ちたいと想うその気持ちに偽りは無い。その為の努力をしているという自負もある。

だが敵わない。

今日もまた同じだ。白瀧はもはや数える事も億劫になるくらい挑戦して、それと同じ数だけ敗れている。自分は成長の限界さえ考え始めたというのに。相手はどんどん成長していく。見れば見るほど次々と吸収していく。

何が駄目だというのか。考えても答えはでない。

だって間違っていないはずなのだから。きつと叶うと、そう信じた夢を叶えようとやってきたのだから。

(ならば、何故——!)

遠くなつていく背中へ精一杯手を伸ばす。

伸ばすけれど、その背中は遠くなる一方で。彼の手はむなしく宙を掴んだ。

そして、ようやくそれが夢だと気づき目を覚ます。

「カッ——ハアツ！ ハアツハアツ、ハッ。ハッ！」

一通りのものを吐き出し、口の中を洗って息を整えようと試みる白瀧。

時間はまだ朝の五時。夢にうなされて起きた彼は、身を襲った不快感に耐え切れず、洗面所で息を荒げていた。

「ハアツ。うっ、ううう……くっ、そ」

気分は好転せず、地面に膝を突くように体が沈む。

もう試合はすぐそこだというのに。仲間の前で表面上取り繕うことは出来ても、内面まで誤魔化す事は出来なかった。

「気持ち悪い……」

試合当日の早朝。大敵との決戦を目前にして——白瀧の心が、悲鳴を上げていた。

——黒子のバスケ NG集——

「確かにお前の事は選手として認めている。素晴らしい、立派な選手だと。だが——俺はただ一点において、お前を男として許せないでいる」

そう言い残して、白瀧は彼の横を通り過ぎて行った。

(ただ一点？ 男として許せない？)

「ひよつとして、白瀧君が恋い焦がれてやまない桃井さんが僕に好意を寄せているからですか？」

「……今一つに増えたよ」

地雷原を容赦なく踏み抜く黒子。

第八十話 矛盾 最強の矛VS最強の盾

——心的外傷後ストレス障害、PTSD。

大きなショックあるいは精神的にストレスを受けた際に、その時に覚えた恐怖感が中々消えず、その出来事が鮮明に思い出されたり夢に見たりしてしまう疾患。特に非常に恐怖を感じることを体験した後は、悪夢を見やすくなってしまうという。症状は出来事の数週間から数カ月後、時には数年後に蘇る事もあるといわれている。

疾患の特徴として、恐怖心が続く事により精神が疲弊し不安定になるということが挙げられる。出来事の恐怖や絶望といった感情がふと蘇ると過敏に反応しがちになることも。

白瀧もまた、かつての恐怖に悩まされ心が擦り減っていた。

「……なんで。こんな時に」

今日がキセキの世代の一人、紫原と雌雄を決する大事な日なのだ。万全を期さなければならぬ試合。なのによりにもよって何故こんな時に。

「うっっ。どうしたんですか、白瀧さん。まだ時間早いですよ?」

「ッ!」

開けたままであった扉の先から、同室である西村の声が聞こえてきた。

流し続けていた水の音。そして先ほど声を荒げた時にこぼれてしまった声で起こしてしまったのだろう。西村は眠そうに目をかけながら白瀧に近寄り――

「――え?」

彼が弱々しく膝をついている姿を見て、凍りついた。

「西、村」

(見られてしまったか……)

「ちよっ。ちよっと!? え。大丈夫ですか!? 体調悪いですか!?」

「何ともない。ちよっと気持ち悪かっただけだ。すぐに戻る」

流しの水を止めて、どうにか立ち上がる。しかし顔色は決して良くはなく、無理をしているということは一目瞭然であった。

「何を言っているんですか。調子が悪いなら監督達に」

「駄目だ」

不調を他の者達にも知らせようと焦る西村を、白瀧が制する。

「誰にも言うな。誰にも知られるわけにはいかない。敵にはもちろん審判にも、監督にも、他の仲間にも」

「そんな……」

そうなれば、間違いなく戦うことさえ出来なくなってしまう。

それだけは駄目だ。

だからこの事は絶対に他言無用だと白瀧は強く口止めをした。

しかしそんな事で西村が納得できるはずがない。中学時代からのチームメイトであるからこそ、仲間がこのように苦しむ姿を見ていられるはずもなかった。

「白瀧さん。お願いですから無理しないでください。そんな無理して戦わないで良いんですから」

「戦わないで良い？」

「ここで無理して何になるっていうんです。まだまだ先があるんですから、今は——」

どうかご自愛ください。そう続けようとした西村は言葉に表すことができなかった。

突如白瀧が彼の胸倉を掴み、睨み付けるような視線を彼にぶつけたからだ。

「お前は本気で言っているのか!? よりにもよって、あの地獄を知っているはずのお前が、それを言うのか!?!」

「え?」

「その今を乗り越えることさえ敵わず、次々と部員が消え、皆が絶望していった。あの光景を見ていた、味わっていたはずのお前が!」

「——ツ!?!」

それは帝光時代、キセキの世代が覚醒を迎えていた時の話だろう。

あの時の帝光時代に挫折を味わい苦しんでいた部員。西村もその中の一人だ。

だからこそ白瀧は西村がそのように楽観的に発言したことを信じ

られなかった。あれを知っているのならば、そんな事をいえるはずがないと。

「……すまん。苛立っていた。忘れてくれ」

「い、いえ。俺の方こそ」

感情をぶつけて冷静に戻ったのだろう。握り締めた手を開いて西村を開放する。

それでも決して意志を曲げる事はしない。背を向けて、白瀧はさらに話を続けた。

「だが、頼む。戦わないで良いなんて残酷なこと、俺に言わないでくれ。——戦えないのならば俺に価値はない」

だからどうか、せめて俺からバスケを奪わないでくれ。

白瀧の苦痛の叫びを前にして西村はそれ以上反論することができなかつた。

二人は再び床につき、朝食の集合となっている時間まで寝ようと目を閉じる。

しかし、意識は覚醒したままで。結局その後一睡もすることができなかつた。

I H 四日目、準々決勝。

残る高校も八校にまで絞られた。この日が終わるまでに四強が出揃う事となる。

この日は今まで以上に注目を集める組み合わせとなっていた。

勝ち残った全チームが再びメイン会場に戻ってくるといふ事情もある。だがそれだけではない。優勝候補と目されていた高校同士の試合が、二試合も行われるためだ。

東京都代表、桐皇学園と神奈川県代表、海常高校。

栃木県代表、大仁多高校と秋田県代表、陽泉高校。

前情報では洛山、桐皇、陽泉、海常、大仁多、誠凛が優勝候補として名が挙がっていた。

このうち誠凛は二日前に姿を消して残るは五校。そのうちの少なくとも二校がまた、今日一日で消える。

キセキの世代、あるいはそれに近い実力を持つ高校が凌ぎを削るとあり。観客席が強すぎるほどの熱気を帯びていた。

「……おおー。これがIHの舞台か」

「人多いな。これ席取れるか？」

「二人ならどこか空いているだろ。おっ。あそこか空いてそうだ」

午前中で女子の全ての準々決勝が試合を終えて。後は男子の準々決勝。

その準々決勝を見ようとメイン会場の観客席に姿を現したのは、勇作と細谷。大仁多高校が県大会決勝戦にて戦った二人だった。

座れる席はないものか、視線を一周させて細谷が丁度二席連続で空いている席を発見。

二人が揃って移動を開始する。

「すいません。ここ席いいですか……つて、ん？」

「ああ。はい、別に構いませんよ……つて、あら？」

「どうした細谷？ あ？」

「知り合いかい、奈々？ え？」

先に話しかけた細谷が、続いて声をかけられた茶髪の女性——西條が気づく。

次いで隣の勇作と楠木が揃って相手に気づいて互いに戸惑いの声を上げた。

「盟和高校の主将と副主将！」

「モテそうなエースとマネージャー！」

「……それは俺のことか？」

栃木県で何度か顔を合わせたこともある強敵との再会である。

「合同合宿以来だな。久しぶり。そっちも今日の試合を見に？」

「お久しぶりです。私は大仁多高校の試合を一回戦から見ました。」

「何だそうだったのか。こんなところで見知った顔に会うなんて思ってもなかった」

「こちらですよ。西條は気さくに笑って細谷に返す。」

予想していなかった思わぬ再会に、ただただ驚くばかりの四人だった。

「やはり、『キセキの世代』の試合を？」

「そりやな。最強だなんて呼ばれてるやつら同士の試合なんて中々見られるもんじゃない。しかも今日はあいつらもその一人と戦うんだろ？」

「ああ。……大仁多対陽泉。正直、鼻肩目に見ても勝つのは厳しい、という感想しかない」

「なら見るしかねえ。俺達に勝つたんだから、不甲斐ない姿を晒してもらっちゃ困る」

楠も、勇作も考えていることは同じだ。

一年生ながらすでに全国でも敵なしとされる天才達の試合。それに挑む好敵手の試合。それを見届ける為に。

今は見ることにしか出来ないが、いつかは戦うときが来るかもしれない。

ならばその時に備えて敵の実力をしっかりと身に刻む。そして自分達を破った敵がどのような戦いを見せてくれるのか。その勇士を目に焼き付ける。

そうお互いの意志を確認し、四人は試合開始の時を待った。

こうして栃木の選手達が合流して観客席についた頃。

同じ観客席の反対側のエリアでは、こちらも大仁多と対戦した選手達が訪れていた。

「もうすぐね。まずは桐皇と海常の試合。その後は陽泉と大仁多の試合」

「洛山も最初にやるが、そっちは問題ないだろうし気になるのは桐皇のほうだな。たしかお前達はどっちとも戦ったことがあるんだろ？」

リコの発言に続いて木吉が隣りに座る火神達へと話題を投げかけた。

「ああ。桐皇とは決勝リーグで戦ったし、海常とは練習試合で戦ったぜ。です」

「といっても海常には辛勝だった上に桐皇には大敗を喫したので参考

にできるかどうかは微妙です」

「どれくらいの強さなのかを知れたなら問題ないよ。戦力分析において参考にならないなんてことは殆ど無い」

リコ、木吉、火神、黒子。

監督に加えてキセキの世代に関わりが深い選手達が集まっている。ちなみに火神の脚には厳しくテーピングが施されている。少しでも脚の負担を減らすためだ。幸いにも運動ができないようなケガはしなかったが、消耗が激しかったということには変わりない。

彼らは一度東京に戻り、昨日から練習を開始していた。

しかし今日は土曜日。加えて今日は組み合わせが非常に気になるものだったため、木吉の提案に乗った四人が観戦に来ていたのである。

「黒子、お前はどうか見る？」

「……わかりません。ただ、帝光時代では青峰君と黄瀬君はよく1001をしていましたが、いつも青峰君が勝利していました。それを考えると、桐皇有利だと思います」

『キセキの世代のエース』か。まあ確かにエース対決で圧倒されるようなことがあるれば確かに海常は辛いだろうな」

エース対決の結果がどれだけ試合に影響するかは先の大仁多戦でも痛感した。

もしも青峰が黄瀬を圧倒的に打ち負かすようなことになればそのまま試合が決することもあるだろう。

果たしてまず最初の準々決勝、真つ先にベスト四を決めるのはどこ
の高校か――

「……あれ？」

ふと、火神が観客席の一角に何かを見つけて突如立ち上がる。

「どうしました？」

「いや、今あそこに……気のせいかな？」

知り合いを見つけた気がしたのだが、いつのまにか人ごみにまぎれて見失ってしまった。

ひよっとしたら気のせいかもしれない。

そう判断して火神はそれ以上気にすることはしなかった。

まず準々決勝第一試合、第二試合が始まった。

京都府代表、洛山高校対大分県代表、山名商業高校の試合。

洛山高校は主将・赤司が不在であるにも関わらず無冠の五将の活躍もあつて序盤から山名商業を圧倒。前半が終了した時点で51対27と大きくリードする。

一方、桐皇高校対海常高校の試合は。

「今日こそ勝たせてもらおうっス、青峰っち」

「悪いがそれは無理だ。舐めんじやねえ！」

やはりと言うべきなのだろう。

第一Q序盤から青峰と黄瀬、エース対決が熾烈を極めていたのだ。最初は黄瀬が青峰の動きに食らいつき殆ど互角の勝負を演じていた。

その為殆ど得点差がない状況下で試合は進行していた。

しかし第二Qに入ると青峰のエンジンが徐々にかかりはじめ、猛威をさらに増していく。ついに黄瀬でさえ青峰を止めることさえできなくなってきた。

「やっぱ、強いっすね。でも、だからこそ……」

「あ?」

「憧れるのは、もうやめる」

そんな中、黄瀬は一つの決断を下した。

それは青峰の模倣。それも技単体ではなくスタイルそのものの模倣。

今まで青峰に憧れ、バスケットを始めた彼がするとは到底思えない行動だった。

それでも今ならば出来ると信じてチームの勝利のためならばやるしかない。決意を固めた。

第二Q終盤から第三Q中盤にかけて黄瀬は青峰の動きに徹した。

その間、青峰が得点を重ねてどんどん海常を引き離しにかかるが、笠松を中心にオフエンスを組み立てて海常も食らいつく。

何とか黄瀬が模倣を完成させるまで。それまでは絶対に勝機を掴み続けてみせる。

『俺に勝てるのは俺だけ』なんすよね？ ——じゃあ、もしオレが相手になったらどっちが勝つつすか？』

「なっ！」

そして、ついに黄瀬がチームの期待に答える時が来た。黄瀬が青峰の模倣を完成させたのだ。

青峰が得意とするチェンジオブペースに加えてフォームレスシュートまで完全に自分のものとし、青峰を困惑させる。

さらに青峰のデイフェンスファウルを誘って四ファウルまで追い詰めることに成功した。

「ふざけんな。調子に乗んじゃねえ!! 舐めんな！」

だが青峰もそこで終わるほど並大抵な選手ではなかった。

四ファウルに追い詰められても、青峰は怯む事無く積極的にプレイを続行。

攻守で黄瀬と互角以上の戦いを演じ——試合の行方は、両校のエースに託された。

最終Qの九分間、青峰と黄瀬は一本もシュートを落とさず得点を獲り続け、残り時間一分で点差の場面。

おそらくこの試合を決するであろう瞬間が訪れた。

桜井のファンブルから黄瀬がボールを奪い、すかさず速攻に移る場面。青峰が一人戻ってデイフェンスに備える。

ここで黄瀬が速攻を決めればまだ逆転は可能。青峰がとめればタイムリミット。

事実上最後のエース対決であった。

(ここを決めて、反撃を！)

(ここで、終わらせてやる！)

ドリブルで駆け上がる黄瀬。青峰のデイフェンスが目前に迫る。

あらゆる駆け引きが交錯する中、黄瀬は視線のフェイクを一ついれ

——いきなり跳躍。右腕を大きく掲げるフォームレスシュートを見せた。

「ツ！」

それを見て青峰も跳んだ。

タイミングは完璧だった。黄瀬のシュートコースを悠々ブロックできる、ベストタイミング。

どのような変化を見せようともシュートなら防げる。

そこで、黄瀬は右腕を下へ降ろした。

「なっ、パス!？」

「笠松だ！」

その腕の先にいたのは海常の笠松。

シュートと見せかけて敵の意表をついたパスだった。

これには桐皇の選手たちも反応できない。黄瀬はゆつくりとボールを放り——空中で体を強引に捻った青峰の腕が、ボールを叩いた。

「なっ……!？」

「えっ」

(パスが、読まれた……?)

弾かれたボールを今吉が拾う。

海常の最後の勝機を託された速攻が、失敗に終わってしまった。

(何で、読まれた……!?)

後出しでは絶対に気づけないプレイだったはずだ。

ならば何故、いつ気づかれた？ 黄瀬の脳内に疑問が次々と浮かび上がる。

彼の悩みに答えたのは、それを実行した青峰だった。

「残念だったな。俺のバスケットをコピーしたつもりだったんだろうが、俺ならあそこで視線のフェイクはいれねえ。つまり、あれは俺のバスケットにはないもつとも読みやすい動きだ」

「なっ……」

「俺のバスケットは仲間を頼るようにはできてねえ。仲間に頼ったお前の負けだ」

青峰は決して誰か他のチームメイトを頼ることはない。彼のバス

ケスタイルは敵に決して動きを読ませないディフェンス不可能なオフエンスこそが本質だ。しかし黄瀬はその青峰の動きに独自のプレイを混ぜ——結果、青峰に読み取られてしまった。

最後の最後で黄瀬は仲間へと思いを託し、それによって逆転の希望を逸することとなった。

「……それでも、それでも俺だけじゃここまでではできなかった。だから——俺だけ諦めるわけにはいかないっす。今はまだ青峰っちを倒すほどの力が足りなかった。ただそれだけっす」

「——フン。あたり前な事を言ってるじゃねえ」

しかし敗因は仲間を頼ったことではない。まだ未熟だっただけ。そう言って黄瀬は最後まで青峰にぶつかっていく。

試合を締める青峰のダンクシュート。

黄瀬がブロックを試みるも、青峰の力に吹き飛ばされ、そして試合は終わった。

桐皇学園、十二点差をつけて海常を撃破。

さらに時を同じくして洛山高校もダブルスコアの快勝で準決勝進出を決めていた。

「海常が負けた。黄瀬でさえ青峰を止め切れなかった」

（青峰のコピーをものにしてからは殆ど互角の勝負だった。どちらも他のプレイヤーが介入する隙間も無いほどの高いプレイ。展開次第ではどちらが勝ってもおかしくなかったかもしれない）

「僕達は、冬にもう一度彼らと戦い勝たなければならぬですね」

「洛山の方もダブルスコアの大勝。他の高校との実力の差を見せつけているわ。しかも最後まで赤司君抜きで」

「……まだ差は大きくある。また強くならなければならぬな」

試合を見ていた誠凛高校の選手達は選手達のハイレベルなプレイに圧倒されるばかりだ。

誠凛は二回戦で大仁多に敗退した。だが、あの試合に勝ったとしてこのチームとの実力差を今実感してしまえばその先がどれだけ厳しいものだったかは明らかだ。

冬に再び全国制覇へ挑戦するならば、それまでに彼らの力を超えな

ければならない。

再認識した強豪校との力の差。圧倒されると同時に、今ここで知る事ができてよかったと思う。

自分達が挑戦者であり、まだまだ弱い位置にあるという立場を改めて思い知ることができた。

今はこの悔しい思いをしっかりと噛み締めて力に変えよう。思いを一つにし、新たな決心を固めていた。

「これがキセキの世代。そして無冠の五将」

「……一言で言えば化け物だな」

一方、楠や勇作は初めて目にした実力者達のプレイにただ驚くばかりだった。

覚悟はしていた。予想もしていた。敵がどれほど強力な選手達であるかということくらいは。

しかしそれでも彼らの力をはるかに上回っていた。

「こんなやつらに勝たなきゃ全国の頂点には勝てないというのが恐ろしい」

「そしてその中の一人がいる高校と大仁多はこれから戦わなければならぬんですよ」

(勝てるのか、白瀧……?)

そんな相手に挑むこととなる好敵手は、果たして本当に打ち勝つ事ができるのだろうか。

楠の脳裏に不安がよぎった。

かつて白瀧もキセキの世代の事を『本物の天才』彼らの前にはどんな強さも霞んでしまう』と例えていた。

——ならば、白瀧自身はどうなるのか？

ライバル達が出番が迫るかつての敵を心配している中。

「……皆さん。そろそろ出番です。行きますよ」

『おうっ！』

「お前達。時間だ。行くぞ」

『おうー！』

ついに、今日最後の試合が始まろうとしていた。

「さあ、出てきたぞ。優勝候補同士の決戦だ！」

「年々レベルが上昇している群雄割拠の栃木県代表。多彩な戦術オプションと攻撃的バスケットにより、予選を含めこれまでの試合全てを100点ゲームで攻め勝って来た、大仁多高校！」

「対するは今大会最高平均身長を誇る秋田県代表。キセキの世代最強センター紫原を擁し、前代未聞の全試合わずか一桁失点と相手を寄せ付けずに守り勝って来た、陽泉高校！」

「最強の矛と最強の盾の対決だ。どっちが勝つんだ!？」

準々決勝、大仁多高校対陽泉高校。

この試合を制した高校が先に準決勝へと勝ち進んでいる王者・洛山高校への挑戦権を得る。

最後の四強進出を決める一戦の一つ。

しかも二校とも優勝する可能性が高いとされる強豪ともなれば、観客の熱気はすさまじいもの。

「出てきたか」

「小林、白瀧……」

「片や全試合百点ゲーム。もう一方は全試合失点がわずか一桁。正反対すぎる組み合わせですね」

「その二校がぶつかる試合。一体どう動くんだ、この試合は」

観客席。大仁多の力を知りキセキの世代の才能を理解した者達は不安と期待が入り混じった声を呟き、コートに入る選手達を見守る。

「……黒子。お前はどよう見る?」

誠凛高校の選手達も試合展望が予想できず、火神はおそらくもつとも詳しいであろう黒子へと疑問を投げかけた。

「正直予想ができません。しかし、やはり陽泉が優位だとは思いますが」

「やはり紫原の方が上だと?」

「あくまでも僕の主観からすればです。紫原君は調子にムラがありませんが、事才能に関してはキセキの世代の中でも随一といわれています」

た。それに」

「それに？」

かつて帝光中時代の事を思い返しながら淡々と語る中、突如黒子の話が途切れる。

ふと疑問を感じて火神が顔を覗き込むと、どこか暗い顔つきとなつて再び話を続けた。

「おそらく、白瀧君が抱えている弱点が露になると思うので」

「弱点？」

「だ・か・ら！　そういうことがあるなら戦う前に言っておけつて言つたじゃないの？」

「……すみません。戦えばわかることもあることでしたし」

それに、と言葉を区切る黒子。

「少なくとも、僕達が自分からそれを口にするわけにはいかなかったんです」

（僕達？）

黒子だけではなく、他にも当てはまる者がいる様な言い方だ。

深い意味を含んでいてしかも言い難い内容なものであるということを感じ取り、リコ達はそれ以上問い詰めることはしなかった。

「お久しぶりです」

「ああ。久しぶりだな。こうして戦うのはこれが初めてか」

「そうですね。今まで中々機会に恵まれていませんでしたから」

「……容赦はしないぞ。全力で潰させてもらう」

「ならば胸を借りるつもりで挑ませてもらいます」

「相変わらず軽い男だ」

「超重量級のチームに挑むのです。これくらいが丁度よいかと」
「ぬかせ」

試合前、両監督の間でも小さな衝突があった。

真面目な性格のためか厳しい視線をぶつける荒木。

それに対して藤代は常の柔かい笑みを纏ってその勢いをかわす。二人はしっかりと握手をかわし、お互いのチームメイトの元へと戻っていった。

「監督、知り合いなんですか？」

「なに。昔ちよつとした縁があっただけのことだ」

岡村の当然の疑問を適当に返し、「それよりも」と荒木は選手達に激を飛ばす。

藤代も同じように試合に挑む選手達へ指示を出し始めていた。

「皆さん。昨日のビデオでわかったように、相手は並大抵のオフENSは通じません。試合開始からどんどん攻めて行きますよ！」

「はい！」

「つまり、いつも通りってことで」

「まずは点を取らないことには始まらない」

「うちの攻撃力見せつけてやりましょうか」

「いつでもいけます」

「いくぞ！ 大仁多——ファイツ！」

『オオーツ！』

小林の掛け声に続き、ベストメンバー五人がコートの中へと入っていく。

今大会出場校の中でもオフENSは随一。全試合百点ゲームを成し遂げた勢いは今日も健在だ。

「敵は数多ある高校の中でもオフENSに長けている。だがそんなことは関係ない。お前達の力で全て撥ね退ける。行け！」

「おう！ そんじゃ、行こうかい」

「相手がどんだけ攻めてこようと同じだ」

「今までの相手と同じように、だな」

「全部止めるだけのことアル」

「オツケー」

淡々と、静かに陽泉の選手達はコート入りした。

歴代の記録を見ても前例が無いわずか失点一桁試合を連続で成し遂げた陽泉。そのびくともしないディフェンス力、この試合でもまた

見せ付けるか。

「それではこれより、準々決勝第三試合。大仁多高校対陽泉高校の試合を始めます」

「礼！」

『よろしくお願いします！』

大仁多高校 スタートティングメンバー

#4	小林圭介 (三年)	PG	188cm
#6	山本正平 (三年)	SG	178cm
#5	黒木安治 (二年)	C	195cm
#7	白瀧要 (一年)	SF	179cm
#9	光月明 (一年)	PF	192cm

陽泉高校 スタートティングメンバー

#4	岡村建一 (三年)	PF	200cm
#5	福井健介 (三年)	PG	176cm
#6	宮崎悠平 (三年)	SG	184cm
#11	劉偉 (二年)	SF	203cm
#9	紫原敦 (一年)	C	208cm

そして、試合開始の時は訪れた。

「よろしく」

「ああ、よろしく」

(さすがに風格あるのう。全国常連と呼ばれる大仁多の主将だけはあ
る。この程度で怯んだりはせんか)

(二メートルが三人。さすがにここまで長身が集う敵と戦うのはこれ
が初めてだ。しかも紫原は一年でありながら予選で戦ったジャンよ
りも高い)

小林と岡村。両校の主将が握手をかわす。

どちらもここまで勝ち上がったただけあって纏う雰囲気の違いが違

お互い楽に勝つことは難しいだろうなと同じ事を考えていた。

「よう紫原。久しぶりだな」

「うん。そうだねー」

一方、こちらは見知った関係。

白瀧が紫原へ軽く声をかけていた。

気さくに話しかけるが紫原の反応はどこか淡泊としていた。

その様子から、やはり性格はあまり変わっていないのだろうかといかける。

「反応薄いな。ここまで生き残って続けていても、バスケットは楽しくないか？」

「まだそんなこと聞くの？ ——楽しいわけないじゃん。こんな欠陥スポーツ」

「そうか」

そしてやはり、望んでいた答えが返ってくることは無い。

紫原の考えは中学時代から全く変わっていないかった。一言でわかる問答だった。

「そうだよな。お前は今まで多くのバスケット選手を否定してきた。才能がない、向いていないと。そんなお前がこんな短時間に変わるはずもなかったか」

わかっていたはずなのに。それでも聞いてしまうのはどこか心のそこで期待をしていたのだろう。無理だとわかっている、ひよつとしたらと希望を懐いてしまっていた。

「俺はおまえの、そういうところが嫌いだったよ」

相手はその希望を幾度も摘み取ってきた相手であるというのに。

ゆえに白瀧は紫原のそういった一面を嫌っていた。紫原が白瀧を嫌うように、彼もまたあまり好ましくない感情を懐いていた。

「この戦いに、彼らの無念も込めさせてもらう」
だからこそこの試合で勝つ。

今まで紫原に敗れてきた者、すでにここまでの試合で消えてしまった者の思いも籠めて戦う事を白瀧は誓った。

「別に。好きにしたら。でも、それを白ちんが言うのはおかしいよ」
そんな白瀧に、紫原は吐き捨てるように言った。

どちらもお互いを認める事ができない。結局二人は考えを改めることができないまま試合開始を迎えた。

話してわかりあえないならば——あとはぶつかるのみ。

『試合、開始！』

ジャンパーの紫原、黒木がボールを巡って渾身の跳躍を見せた。
「ぐっ!？」

(た、かいっ！)

黒木は大仁多の選手の中でも最高身長を誇る。

その彼をもつてしても、紫原の高さに匹敵することはできなかった。

紫原は軽々と黒木よりも高い位置に達し、上昇途中のボールを叩く。

「あっ」

何かに気づいた福井が小さく声を零す中、そのボールが彼の手元に向かう。

陽泉ボールで試合開始——となる場面で。いきなり審判が笛を鳴らした。

『ジャンパーヴァイオレーション！ 陽泉^黒九番！ 大仁多^白ボール！』

「あっ」

「あの馬鹿！ またやったか」

ジャンプボールの際、ジャンパーはボールが最高点に達するまでは触れることができない。

しかし紫原がまだ最高点に達するまえに触れてしまったことで、ボールは大仁多へと移った。

「あつしいー！」

「ごめーん」

「ちっ」

(まあ、ある意味助かったけどな)

失態を犯した紫原をにらみつけた後、福井は審判へボールを戻して横目で背後に立つ白瀧の姿を捉えた。

(この野郎、審判の笛がならなかったら俺からボールを奪うつもりだったな。監督から聞いてて分かっていたはずなのに。全然気づかなかった)

審判の笛がなった瞬間、白瀧の動きは硬直していた。

手の先は福井へとむけた状態。福井がそれに気づいたのは審判の笛が鳴った後だった。

あのままでは間違いなくボールを奪われていた事だろう。下手すればいきなり大仁多が速攻の機会を掴んでいたかもしれない。

そういう意味では、紫原のヴァイオレーションはディフェンスに戻る時間を作る好プレイとも言えた。

「……見たか？ 今の紫原」

「ビデオを見て、分かっていたはずなんだけどな。本物はやつぱ違えよ」

だが、今のワンプレイで衝撃を覚えたのは何も彼だけではない。

むしろ衝撃の大きさから見れば大仁多の方がはるかに上だろう。

「高すぎる。間違いなく、最高到達点が火神よりも上！」

紫原の高さは、二回戦で戦った火神をも上回るものだった。

実際に見てみるとその脅威はより強く感じ取れる。

いきなり敵の計り知れない力を見せられて、光月達は心臓の鼓動が勝手に高まっていく事を感じていた。

「仕方が無いのう。まずは一本、止めていくぞ」

その紫原をゴール下中央に置いて福井と宮崎が前列を固める、2-3ゾーンを陽泉は展開。

すさまじい威圧感を大仁多へと向けて鉄壁のディフェンス力を発揮しようとしていた。

（くそっ！ やつぱり圧力強い！）

山本のスローインから試合が再開され、小林と山本がボールを運ぶ。

パスを駆使してゾーンを崩そうとするが中々上手くは行かなかつた。外へのマークも厳しく、山本のスリーも簡単には打てない状況。

「しかし攻めないことには始まらない！ 黒木！」

突破口を見出すとすれば、中から決めることが一番だろう。

そう決断して小林はインサイドの黒木へとボールを入れる。

「行かせんぞー！」

(ツ！ 重い！)

ゴール下へと切り込みたいところだが、岡村がそう易々と侵入を許さない。

ならば、黒木はバックロールターンで岡村の体をかわしてゴールに正対する。

「舐めるな！」

そのままシュートを撃とうとする黒木へプレッシャーをかける岡村。

すると黒木はその岡村から遠ざかるようにゴールと反対側の手首のスナップだけでボールを山形に放る。

「むっ!？」

(これは、誠凛戦で見せていた！)

黒木が新たに身につけていたベビーフックシュート。

よりシュートモーションを小さくしたテクニックだ。

二メートルの高さを持つ岡村でも突然のシュートには抵抗できない。

彼のブロックの指先を僅かにシュートは超えて。

「ッ!？」

今度は黒木が驚愕する番であった。

岡村のさらに後ろから、彼よりも高い長身がベビーフックシュートを叩き落とす。

紫原が、黒木の新技を完璧に防いでみせたのだ。

「なっ!？」

(黒木のベビーフックが!？ あれを初見で!?)

「おおっとー！」

防がれたボールは山本が手にした。

何とか奪われずにすんだ大仁多だが、確実に先制点を挽ぎ取るために行った強襲が容易に防がれて、わずかだが選手達の間で動揺が走る。

「これがキセキの世代最強のセンターか。ゴール下では厳しいかもな。ならー！」

それならば、この空気を一新するには。

「俺が行くー！」

エースである白瀧がこの張り詰めた空気を切り裂くのみ。

小林と白瀧が同時に走り出しポジションを入れ代わる。

トップに立つ白瀧へと山本がパスをさばいた。

そして陽泉の敷く2―3ゾーン、その前列二人の間を――白瀧は一

閃。最高速に乗るクロスオーバーで二人を抜き去った。

「速っー！」

「何!?!」

瞬く間に置き去りにされた福井と宮崎が驚愕し、振り返る。

その視線の先で白瀧はもう宙に跳んでいた。

(踏み込みも早い。ティアドロップか!)

「よっしやあナイス、白瀧――!?!」

リングから遠い位置から、高い弧を描く白瀧の得意技。

常人ならばこのシュートに反応することも難しいはず。

だからこそ、山本達はこのシュートの成功を確信して、先制点はも

らったと考えたというのに。

さつき黒木のブロックに跳んだ紫原が、白瀧のブロックに跳んでい

た。

(白瀧のティアドロップまで読んだのかよ!?!)

(しかも高すぎる! 駄目だ。これは、ティアドロップでも止められる!)

コースもタイミングも完璧だった。

まるでわかっているかのように白瀧の前に立ちはだかった紫原。

これではいくら白瀧でもシュートを撃っては防がれてしまう。

「――つられたな。紫原」

が、白瀧もこれだけでは終わらない。

敵がブロックに飛ぶのを見てボールを持つ右手を下に下ろす。

下ろした勢いでボールを地面にたたきつけて、紫原の足元を通すバ

ウンドパスをさばいた。

「ッー！」

(本命はこっちか！)

パスを受けるのは光月。

白瀧が紫原をゴール下から誘き寄せて、光月がインサイドから攻める。

「ナイスパス！」

「行かせないアル！」

劉がすかさず警戒する。

対する光月は劉のディフェンスがゴール側へと寄つたのを見て、左脚を軸に反時計回りに回転。ターンアラウンドからジャンプシュート。

「こんのー！」

「もらつたー！」

抜かれた劉が食らいつくが、相手は打点が高い光月だ。

今度こそ、決まるはず——シュートを撃つた彼の斜め後ろから迫る、巨大なブロックさえなければ。

「——え？」

「ああつ！」

再び、紫原のブロックが炸裂する。

「ハアツ？」

「光月が、劉を抜いた一瞬で追いついたのかよ！」

「このっ！」

白瀧がボールを拾って、もう一度大仁多がオフENSESを展開する。

一旦トップの位置に戻つた小林へとボールを返し、再びハイポストの白瀧へボールを戻した。

劉を後ろに、ゴールを背にボールを保持する白瀧。

何とかこの陽泉のディフェンスを突破しようと思つていた。

(正直今のは決まると思つていた。あれでも決まらないとなると、この先得点を重ねる事は本当に難しいぞ。……ん?)

辺りを見渡し、攻略の糸口を探そうとして白瀧は光月の不自然に硬直しているような様子に気がついた。

(何だ、こいつは……? まさか高さだけでなく、速さも?)

光月が紫原の姿に威圧されていたのだ。

ただ高いだけではない。

先ほどのオフエンスでは白瀧が紫原を引きつけて、光月もできるだけすぐにシュートを撃とうと考えていた。だが、紫原は白瀧のフェイクも光月のシュートも守り抜いた。その時に見せた高さ・速さは共に今まで見てきた選手の中でも類を見ない。

ひよつとしたら、自分達も二桁得点に乗せることさえできないまま終わってしまうのでは。

目の前で圧倒的な力を見せ付けられ、光月の心が怯み始める。

「——アキラッ！」

「ッ!？」

そんな光月を見かねたのだろう。

思わず体がビクツと反応してしまうほどの声量で白瀧は光月の名前を呼んだ。

「しっかりしろ。相手の守りが堅いってことくらい覚悟していただろ！ この程度で怯えてるんじゃないやねえ。一度立て直すぞ！」

右の人差し指を天に掲げて力強く、光月を安心させるように白瀧は言う。

「むっ」

「ほう」

(……落ち着いてるなこいつ。大抵のやつらは最初の紫原のプレイで9番みたいに萎縮するもんだが)

(気持ち之急いて自滅。というパターンも多かったというのに。試合慣れしている)

あるいは、こういった苦境なれしている、といった方が正しいのだろうか。

まだ同じ一年生であるはずだというのに。

動揺するどころか仲間の気を引き締めさせる白瀧の姿に、陽泉の選手達は嘆息した。

「小林さんー！」

そして白瀧は発言通りに小林へボールを戻してオフエンスを立て

直すよう視線を向ける。

両腕を小林へと向けて、そして伸びきつたと同時にボールを保持したまま右方向へ折りたたみ、劉の横へと躍り出た。

「なっ!？」

「あっ!？」

パスと見せかけての切り込み。味方も敵も欺いた瞬時の判断だ。

皆の注目が白瀧のオフエンスから逸れたのを見て、白瀧は奇襲をかけた。

劉が意識を切り替える間もなく白瀧はジャンプシュート。

今度こそ決めてやると意気込んだそのシュートは。

「ッ!？」

ただ一人。白瀧の動きについてきた紫原によって叩き落とされた。

「……嘘、だろ?」

これには白瀧でさえ動揺を隠す事ができなかった。

いくらなんでも、意識の不意をついた高速の動きは止められるはずがない。

それなのに。

またしても、紫原はそれを封じてみせた。

「たいした選手だ。敵味方共に騙しぬくとは。だが、甘い」

彼女自身も小林へとボールへと戻すものだとしつかり騙されていた。

だが、その程度で紫原をかわすことは出来ないと言わんと荒木は冷たく談じる。

「どれほど早く動こうと関係ない。紫原は手も足も長いことに加え、反応速度はアスリートの限界にも達する。あいつは、スリーポイントラインから内側の領域。全てを守りきるんだ」

長い手足、そして反射神経。通常は0.2秒から0.3秒とされる反応速度だが、紫原は0.1秒に近い。

人間の限界とされる反応速度をも持つ紫原は、圧倒的な守備範囲をもつて大仁多のオフエンスをも完全に封じることが可能としているのだ。

奇襲も強襲も、彼の前には意味をなさない。白瀧も例外ではない。「何度も何度もむかつくなあ。大体、元々の始まりは白ちんだつたんだよ?」

「なん、だと……?」

執拗に向かつてくる白瀧に、紫原は苛立ちを隠す素振りも見せず話を続ける。

「だって白ちんが、才能が全てだって証明したんじゃん。あの時白ちんが黄瀬ちゃんに負けたせいで、他のやつらは皆絶望したんだよ」

「なっ!?!」

紫原にとって、白瀧は忌み嫌う存在だ。何故なら紫原の中で彼は『才能が全て』という己の考えを結果で示した存在。そのせいで彼が言う、他の部員達は諦めかけたというのに。

最後まで現実を覆す事が出来なかったというのに未だに足掻き続ける姿は理解に苦しむものだった。

何故黄瀬^{オノ}に屈した男が、まだ抗い続けるのかと。

「お前の時代は二年前にとつくに終わっているんだよ。敗北を知り、自分の限界を理解し、現実を受け入れたような男が、未だに頂点目指して戦おうだなんて身の程知らずにもほどかある」

既に終わっているのだから。

白瀧の道は絶たれ、願いは叶わないということとはわかりきっているはずだ。

幾度も挑み続け、敗れ続けたのは他でもない彼自身。

それでもなお戦おうとする過去の遺物が自分に向かつてくる光景。紫原の目には腹立しいものに映っていた。

「お前のようなやつが諦めようが諦めなからうが、結果はもう決まっている。——勝てるわけがない。弱いやつがどれだけ足掻こうとも、才能の前にはただひねり潰されるだけだ」

努力が報われるとは限らない。むしろ多くの者は報われない。

そう。十年以上もの長い間、ただバスケだけをやってきた男が、バスケを始めてたった一ヶ月の天才に敗れたように。

「俺は、俺は……!」

「それでもまだ向かってくるって言うなら、来なよ。白ちんが今まで築いてきたもの、全てひねり潰してやるからさ」

白瀧の返答を待たずに紫原は感情の籠っていない声でそう呟いた。絶望が、牙を向く。

——黒子のバスケ NG集——

「何度も何度もむかつくなあ。大体、元々の始まりは白ちんだったんだよ?」

「なん、だと……?」

執拗に向かってくる白瀧に、紫原は苛立ちを隠す素振りも見せずに話を続ける。

「だって白ちんが、桃ちんの料理は食べられるって証明したんじゃない。あの時白ちんが桃ちんの弁当を食べきったせいで、他のやつらは皆絶望したんだよ」

「いや、ちよつと待て! それ俺のせいじゃねえ!」

「まだ言い訳をするって言うなら、来なよ。白ちんが今まで築いてきたもの、全てひねり潰してやるからさ」

「理不尽すぎるだろ!」

食べ物への恨みは恐ろしい。実は紫原も桃井の料理の犠牲者。(詳しくは原作単行本のNG集)

第八十一話 不撓の決意

目の前に映る巨漢は、間違いない最強の一角にして最悪の敵だ。

「キセキの世代」と謳われた天才達の中でも彼の才能は一層際立っている。

実力を持つからこそ白瀧の本能が察した。己には真つ向から挑みこの男を越える術はないのだと。相手は文字通り次元が違う。勝てるわけが無いと心の中に潜む何かが理性に告げた。

だがこの試合において彼が挑まないわけにはいかない。勝利を諦めるなど許されない。

ただ一つ。ささやかな願いを叶える為に、その為ならばと希求の思いが胸の内で火の塊となり、導火線を燃やす火種と化す。

「――上等だ。どんな手段さえもひねり潰すのがお前だというのならば、どんな苦境からでも突破口を切り開くのが俺だ」

闘志が滾る。この戦いに勝つ為に、苦悩した月日を経てこの舞台へと戻ってきたのだと。

脳裏に浮かんだ絶望という二文字をかき消すほどに思考を巡らせて白瀧は紫原と対峙した。

白瀧は今一度、ありとあらゆる策を練り、堅牢なディフェンスに向け突撃していった。

彼は再びキセキに抗い、絶望に立ち向かう。

「……………どうなってんだよ、これは」

色黒の男が乱暴な口調で口にする。

「ある程度は仕方ないとは考えていたが。やはりこうなってしまったか」

オッドアイの少年が淡々と目の前の試合を評価する。

「こ、こんな。こんな事が……………」

眩きは誰のものであっただろうか。あるいは誰もが思わず口にしてしまったものかもしれない。

大仁多対陽泉。ベスト四の椅子をかけた大事な一戦である優勝候補同士の戦いは、あまりにも一方的な立ち上がり呈していた。

「ちっ」

「白瀧！」

山本がボールを奪い、光月を介して小林に戻ったボールが、再び白瀧の手に渡る。

陽泉が敷いた2―3ゾーンの前列と後列の間を斜めに切り裂くような鋭いドライブ。最高速に乗った彼の切り込みは陽泉高校の選手でさえ反応はできなかつた。そしてミドルに切り込んでから急制止し後ろに跳ぶフェイダウェイシュート。緩急を新たに身につけた今はかつての物よりさらに動きのキレが増していた。

「ッ——」

「よっと」

「紫原！」

だが紫原は軽々と彼のシュートを封殺する。触れることさえ困難であるはずの白瀧のシュートを呆気なく叩き落としたのだ。

（畜生。陽泉のマークを振り切ることはできなくもねえ。けどそこまです。シュートにまで持ち込めない！）

（俺達のコンビネーションでの攻撃は勿論、白瀧でさえ得点できない。ディフェンスが堅すぎる！）

試合が始まってすでに四分以上が経過し、もう少しで第一Qが折り返しを迎えようとする中、大仁多高校の選手達に焦りが生まれていく。

未だに大仁多高校は無得点。

オフェンスは全国随一とも謳われた彼ら自慢の攻撃力が、陽泉に完全に抑えられているのだ。

「マジかよっ」

「こうなると少し可哀相だな。もう少し善戦すると思っと思ったけど」「強い！」

桐皇の選手達が、陽泉の圧倒的なディフェンスに感服さえ覚えている。

「オイオイ。大仁多のやつら全然シュート決まらねえじゃねえか」

「要ちゃんも止められているのが痛いわね。普段は彼が何度も流れを変えていたのに、今はそれが出来ない」

「すっげー。紫原ってあんなに守備範囲広かったっけ？ スツゲー！」

洛山の選手達が、一方的な試合展開を飄々とした態度で会話をかわす。

一足先に準決勝進出を決めている桐皇と洛山高校の選手達もこの試合を観戦していた。

この後戦う可能性のある高校の実力を見るためにこのことであったが、その試合は早くも試合が決まりかねない状態であった。

「ナイスだ敦。さあさらに引き離すぞ」

大仁多の攻撃を凌いだ陽泉高校の面々はさらに士気を高めていく。

福井はルーズボールを確保するとチームメイトに呼びかけて敵陣へ向かった。

試合序盤を制して優位な展開を進められているのだ。このままいけば思惑通り敵の動きを防ぎきることができよう。こうなるとオフェンスもリズムよく展開できるようになるものだ。

「くっ」

(オフェンスの組み立てが出来ないならば、せめてディフェンスで敵の勢いを削ぐ！)

「……焦ってるのか、小林？」

大仁多は2―1―2ゾーンを展開中。

前列の小林がボールを運ぶ福井からボールを奪おうとプレッシャーをかけるが、少し攻め気になりすぎている。

「舐めんな」

ボールをつきながら、揺り籠のように身体を前後に揺らす福井が得意とするロッカーモーション。前進とみせかける縦のドリブルで小林を惑わし、彼の横を突破した。

「あつ」

「よし」

「行かせねえー！」

「……つと!?!」

小林を抜き去ったものの、中央で守っていた白瀧がすぐにヘルプに出た。

ドリブルに長けた彼は福井の動きを見抜いていたのだろう。

福井のドリブル突破を封じて彼のドリブルを制止させることに成功し、さらに立て直した小林と前後で挟み込む。

(相変わらず反応早いなおい!)

「このつ、おらっ!」

「なっ?」

(強引に撃ってきた!?)

このままではただボールを奪われてしまうと考えたのだろう。福井は空中に伸ばした両腕を強引に振り、シュートを放つ。

苦し紛れの行動だ。普通ならば得点には繋がらないプレイだろう。

しかし陽泉高校を率いる荒木は表情一つ変えず、得点の成功を確信していた。

「大仁多は実にバランスの良いチームだよ。フロントラインを見ても技の黒木、力の光月、速の白瀧。一人一人が優れた武器を持ち、全国の間でも強豪を相手に渡り合えるだけの術を持っている。しかし」

冷静な実力の分析だ。荒木は相手を評価しつつ、その上で残酷な結論を下す。

「うちのゴール下を崩すには足りない」

「うおおおおおお!」

リングに弾かれたボールを、最も高い位置に跳んだ岡村が掴み取った。

力の籠った叫びが上がったオフエンスリバウンド。たとえシュートが外れても、ゴール下の長身選手達が取ってくれる。絶対の信頼が陽泉高校にはあった。

「くそっ!」

「そんな……」

黒木と光月が悔しげに表情を歪める。

決して力を振り絞っていないわけではない。光月に至っては相手のパワープレイヤー達相手に何度も有利なポジションを確保し、最善を尽くしている。

それでも二メートルを越える長身を相手にリバウンドを取る事は難しかった。

オフエンスリバウンドを制した岡村がそのままジャンプシュートを沈め、得点差をさらに広げる。

(大仁多) 0対8 (陽泉)

第一Q残り半分を切って八点差。大仁多にとっては厳しい状況となっている。

「……この野郎」

何とかしなければならぬのに、中々好転しない戦況。

白瀧はオフエンスであるというのに敵陣深くでじっと立ち尽くしている紫原の姿を厳しい目つきで射抜いた。

「そんな風に睨んだって無駄だよ。白ちん得意の速攻だって、俺がここにいる以上できっこないでしょ?」

白瀧の呟きは聞こえていないはずだが、心境は理解できるのだろう。紫原が冷たく断じる。

紫原は陽泉の攻撃中、一人だけ攻める事無くずっと他の選手達の動きを見ていた。

元々彼はオフエンスを面倒に感じている一面があつたが、高校に入ってより顕著になったのだろう。

(あんな風に紫原が待ち構えていたら、普通の速攻は勿論タッチダウンパスだって使えねえ。トランジションゲームに持ち込むことはまず不可能だ)

(普通のオフエンスを防ぎきるだけじゃない。白瀧の強みを完全に封じられている)

今までの試合でも白瀧は何度も自慢の速さを生かした速攻で好機を生み出してきた。

しかし彼の動きに完全についてくることが出来る紫原が最初から備えているとなれば、小林との新技でさえ突破は不可能だ。

「これが、要の言っていた『最悪』なのか——！」

デیفエンス最強の名は伊達ではなかった。大仁多のエースの力も完全に意味をなくす実力者。

紫原の為に、大仁多は強みを失う苦しい戦いを余儀なくされていた。

「あの大仁多でさえ、キセキの世代には手も足も出ないのか？」

「皆全力でやっているはずだ。最初から予選では見せていない新技も見せていた。しかし」

「……まだ、得点に至らない」

完璧と言える陽泉のデیفエンス。彼らの力は見ている人々を戦慄させた。

特に大仁多に敗北を喫した選手達の衝撃は強い。ここまで一方的な試合になるとは誰も予想していなかっただろう。

「このままでは大仁多は何も出来へんまま終わってしまう可能性もあるのう」

「常ならば白瀧君が何とかするところなのでしょうが、今は彼のスピードが通用していません。おそらく、優れた反射神経に加え中学生代、そしてこの全国の試合で見てきた経験で彼の速さを完全に掴んでいるのだと思います」

「そりゃな」

「何をやってんだ。早くどうにかしろよ」

反射神経に加えてチームメイト時代とこの予選で見てきたという経験が紫原に味方していた。

挽回は難しいだろうと桃井は今吉に告げる。

彼女の話聞いて、青峰は苛立ちをぶつけるように舌打ちをした。だが彼が望んでも戦況が変わるわけではない。

(駄目だ！ 外のプレッシャーも厳しい。スリーを撃てねえ！)

「そう簡単に外から打たせはしない」

「こんのやろっ！」

中だけではない。むしろ中の防御が完全となれば外への警戒も厳しくなる。

山本は宮崎のマークを突破できず、横に走り込む白瀧へとパスをさばいた。

「突破する！」

「行かせないよー」

角度の無い位置からゴール下へと切り込む白瀧。

ヘジテーションで一瞬劉の動きを惑わすと、即座に急加速。ゴール下に潜り込み、紫原と一対一の形に。

そしてそのまま跳躍。レイアップの姿勢に入ったのを見て、紫原も跳躍し——彼の足が地面から離れたのを見て、白瀧はサイドハンドパスを小林へとさばく。

「ッ？」

「狙いはこつちか！」

「ナイスパス！」

「小林！」

瞬時に福井を突破した小林がボールを手にした。

打点の高い小林だ。斜めからブロックに跳んだ福井ではブロックは届かない。

ボールは敵に捕まる事無く綺麗な放物線を描く。

「えっ」

そして最高点に到達しゆっくりとリングに落ち始めたその時、最後の壁が再び得点を阻んだ。

「ラアッ！」

紫原の渾身のブロックが炸裂。小林のジャンプシュートを叩き落とした。

(まさか、さっきの白瀧のブロックでは殆ど跳んでいなかったのか!?)

(こちらの動きまで読み取られ……)

「や、やばい！」

相手のフェイントさえ読み取り、ブロックを成功させる。

次々と対策を講じてても次々と破られていくという困難の中、目を逸らしたくなりそうだが、それでもこのままボールを奪われるわけにはいかない。

ルーズボールへ小林が手を伸ばし——届く前に、審判の笛が鳴り響いた。

「ゴールテンディング！」

「なっ——」

「あれれ。やっちゃった」

紫原のバイオレーションが宣告され、大仁多にようやく初の得点が記録される。

ゴールテンディング。オフエンスがシュートしたボールがバスケットゴールよりも高い位置にあり、さらに既に落下している状態でディフェンスの選手が触れてはならない。触れた場合は得点が認められるというバイオレーションである。

今回の場合は小林のシュートが既に落下状態であった為にこのルールが適応された。

（大仁多） 2対8（陽泉）

「ナイス、小林」

「あ、ああ」

得点を讃えて山本が肩を叩くが、小林の顔は優れない。

確かに大仁多にとって初の得点とはなったもののゴールテンディングによつて紫原の高さ、身体能力をさらに強く見せ付けられたためだ。

（いくら最高到達点が高いと言ったって限度があるだろう。なのに、あのボールにさえ触れられるなんて）

予想よりもはるかに高い“キセキの世代”の実力。全国区と呼ばれた彼らでさえ怯んでしまう程の力であった。

『大仁多高校タイムアウトです！』

ここで藤代は流れを変えるべくタイムアウトを取る。

アナウンスにしたがって選手達が各チームのベンチに下がっていき。

まず試合の立ち上がりを制したのは陽泉高校。得意のディフェンスで相手の持ち味を封殺したことは十分な戦果だろう。

一方で巻き返しを図りたいのは大仁多高校だ。果たしてこのタイムアウトで流れを変えられるか。

「よくやった。あの大仁多の猛攻をたった二点に押さえ込み、大仁多にタイムアウトを取らせたのは大きい。これでうちが大きく優位に立つ事が出来た」

荒木は静かに陽泉の選手達の奮闘を讃えた。感情こそ感じ取ることは難しいが、彼女の言葉の端々から彼らへの信を感じ取る事ができる。

「向こうはどう出てきますかね？　こんだけインサイドで点を取れないと、外から無理やり決めてくるという可能性も有りますけど」

「藤代の性格上それは考えにくい。現在のメンバーでうちの攻略を図るならばまず中から得点を取れるようにしてくるはずだ」

陽泉のような鉄壁のチームを相手にすると一か八かで外角のシュートを狙ってくるという考えもある。福井の発言は最もだが、藤代を知る荒木は彼の疑問を否定した。

おそらく大仁多は今度こそ陽泉の紫原の鉄壁を攻略しに来る。

「その時の対応は今と変わらずでよい。ゴール下を固めれば向こうも容易に攻められまい。だが小林と白瀧の両名への警戒を怠るなよ。小林は先ほどのように高さのあるシュートを撃ち、白瀧は外からも切り込んでからも選択肢がある。簡単にシュートを撃たせるな」

「おうっ！」

「……方が一、外角のシュートを狙いに来た場合。おそらくは神崎^{13番}が出てきた場合だが。その時は福井、宮崎。お前達が対処しろ。やつは高確率でスリーを沈めるシューターだ。多少切り込んでくる事は許

しても良い。絶対に自由にさせるな」

「はい」

「了解です」

どちらにせよ陽泉のやることは変わらない。

今までどおり圧倒的なディフェンス力で敵の攻撃を封じきる。相手の勢いを全て受け止めて、跳ね返すのみだ。

「——困りましたね」

対して大仁多を指揮する藤代の第一声は苦言を呈するものだった。

各選手達は東雲や橙乃達から受け取ったタオルやドリンクを受け取りながら、僅かに頷くに留まる。負けず嫌いな選手達だが、強い反対の声は出てこない。彼らが誰よりもよく理解したためだ。陽泉の、紫原の圧倒的なディフェンスを。

敵のバイオレーションがなければあのまま無得点で終わっていたのだ。とてもではないが強がりな発言は出来ない。

「彼らから得点を取る事は難しい。しかし点を取らないことには始まりません。攻撃のリズムを作ることが出来ない、というのもそうです。が、無得点の状態が続けば精神的に徐々に追い詰められていく」

「……ええ」

淡々とした指揮官の呟きに、選手達は苦々しく同調する。

「まずは一本取って行きましょう。敵は特にゴール下が厳しく、紫原さんのヘルプも早い。その為まず外からゾーンの前列を崩し——」
「どうにかしてこの苦境を打開しなければならぬ」

確実な策は無い。すでに全員が全力で敵のディフェンスを突破しようとして挑んでいたのだ。並大抵の戦略では通用しないだろう。

だが無策で臨ませるわけにはいかないと藤代は指示を飛ばして。

「藤代監督」

「——はい」

彼の言葉を白瀧が遮って、強く意見した。

「以前言っていた事。やらせてください」

「……まだ試合の序盤の序盤、第一Qです。ここで切り札を切るのは」
「監督も分かっているでしょう。このままではただただ追い詰められ

ていっただけです」

『まだ早い』というもつともな考えを白瀧は一刀両断する。

切り札を取っておかなければ後々厳しくなる。藤代の考えを理解できていないわけではない。それでも、今此処で自分がやらなければ藤代の予測する展開にたどり着く事さえ出来ないだろう。

だから白瀧は決断する。

今こそ切り札を切る時だと。

『タイムアウト終了です！』

両校の作戦会議が終わり、選手達がコートに戻る。両校とも選手の交代はない。

(ベストメンバーのままタイムアウトを終了。やはり中から崩しに来たか)

そう簡単に下手な策に逃げることはしないでであろうと予測はしていたが、確認して改めて息を吐く荒木。ここまでは彼女の予想の範囲内だ。

「せやかて陽泉の守りを突破するちゅうのは簡単な事やない。今まで多くの高校が攻め崩そうとしてできひんかった」

「未だにフィールドゴールは無しの大仁多。もしも可能性があるとなれば——」

「……………」

今の五人で突破する事は非常に困難だろう。

果たしてどうするつもりなのかと今吉は不敵に笑い、桃井は少し不安げに表情を歪め、青峰は僅かに眉を寄せて最も期待値が高い白瀧の姿を捉える。

「だがある意味一番危険な策とも呼べる。紫原は高さだけではない。要の速さを無意味にする程の反射神経を持つ。これが厄介だ」

「完全に彼のスピードを捉え切れているというのが大きいわね。確かに少しは県大会よりは速くなっているようだけど大幅な上昇ではな

い。それなら「キセキの世代」と呼ばれた彼なら止められる。まさに「神速」のお株を奪う「神速のインパルス」と言ったところかしら？」

一番紫原に近い実力者だが、同時に一番戦わせるのは危険とも呼べるマツチアツプだ。

桃井の予測通り紫原は中学時代の経験と反射神経が相まって白瀧を完全に止められる。

三十cmという身長差——小学生と高校生並の身長差に加え、彼の得意技もとめられている。

このままでは白瀧が勝てる可能性は限りなく零に近い。

(だがやらなければならぬ！)

もつとも、たとえそうだとしても白瀧の熱意は変わることはない。

攻守が入れ替わって陽泉の攻撃。ガード陣が必死に前線でプレッシャーをかけて、さらに白瀧が宮崎のシュートをブロック。指先が触れ、敵のシュートは大きく逸れたのだが——

「残念だが、その高さでは届かないアル！」

「ちいっ！」

劉がリングで大きく跳ねたボールを指先で押し込んだ。黒木が必死に手を伸ばしたが、彼よりもさらに高い位置のプレイは止め様が無い。

(大仁多) 2対10 (陽泉)。陽泉が二桁得点に載せた。

大仁多の必死なディフェンスで陽泉も攻めあぐねる時間が増え、もう少して止められるという所まで来たものの、あと少しが詰められない。

「また、八点差……」

(折角タイムアウトを取ったのに、次の攻撃で止められなかったら今度こそ十点差に……)

「そんな顔すんなよ、明」

自然と暗い顔になってしまいう光月に気づいたのか、白瀧がコツンと彼の腕を軽く叩いた。

「大丈夫だ。俺がどうにかする」

『だから心配するな。しっかり見ている』と、そう白瀧は優しく諭した。

「小林さん」

そして主将に、決意を籠めた瞳で意志を伝える。

「悪いな。またお前頼りになつてしまう」

「頼ってくださいよ。頼つて託してくれれば、俺はまだ戦えます」

「……わかった。お前に託そう」

手短に意見をかわして二人は別れる。

再び攻守が入れ替わつて大仁多のオフェンスに移る。陽泉のディフェンスは変わらず2―3ゾーンディフェンスだ。やはり紫原の存在が大きいのか外にも厳しくプレッシャーをかけて好きにはさせない。

そんな中で、大仁多が命運を託したのは――やはり、エースの白瀧。

「行けー！」

(勝て、白瀧！)

瞬時の方向転換で前列と後列の間に走りこんだ白瀧は、もう一度宮崎と劉の間を瞬く間に突破する。

「あっ!？」

「ごいつつ。またチビ助アル！」

最高速に乗った彼のドリブル。ついてこれるのはただ一人、紫原のみ。

「だから無駄だつて言つてんじゃ――っ!？」

白瀧のドリブルに反応した紫原は即座に動いた。

すでに紫原は白瀧の動きに対応している。元々彼は速さこそあるが青峰のように自由奔放な型のないバスケスタイルではない。組み合わせこそ違えど形は決まっている。ならば組み合わせさえ読めれば止められる。

白瀧が下手な真似が出来ないようにとゴール下から出て、彼の動きを追いかけようとして、そして紫原の動きを光月がスクリーンで一時的に止める。

「紫原！ スクリーンじゃ！」

(よしっ。今だよ！)

「ふーん。で？ そんなので決められると思ったの？」

一気に中央に突入した白瀧に対し、逆サイドから岡村が反応してさらに紫原に呼びかける。

すると紫原はその場で素早く片足を軸に回転。光月の体を流れるようにかわし白瀧を追った。

「えっ!？」

(光月のスクリーンも難なくかわした!?)

(瞬時に反応できる反射神経。スクリーンも殆ど意味がねえ!)

連携で紫原をかわそうとしていた白瀧はもうレイアップシュートの態勢に入っている。

そこに岡村と紫原、二人の長身ブロックが立ち塞がった。

「……ッ、まだだ！」

横目で敵が立ち直った事を確認した白瀧はシュートしようとしていた右腕を下ろし、左腕にボールを移す。そして空中でゴールを横切ると、後ろ向きにボールをリリースした。

(バックレイアップシュート!)

レイアップシュートと見せかけてバックレイアップシュート。これで強引にシュートコースを作り出すことに成功した。

「だから、何回やったって同じだよ。勝てるわけがないって、何度やったらわかるんだよ!」

しかしまだ「キセキの世代」は超えられない。

「あああああ!!」

紫原は強引に上半身を回転させて腕を回し、白瀧のシュートを叩き落とした。

「なっ、つと、うおっ!」

(あのタイミングでも間に合うというのか!)

(バックレイアップも白瀧が前から得意としていた技だ。やはり、すでに紫原が知っている白瀧の技では届かないか!)

勢いよく弾んだボールは山本が掴み取った。

だが連携で、さらに白瀧の得意技でも止められないこの現状に、大

仁多は――

「だからどうした？」

それでも、もう一度白瀧に託す。防がれた白瀧は素早く駆け出し、スリーポイントラインの外に立っていたのだ。

（しまった！ やつの動き出しが速かったのか！）

「むぐうううう！」

パスを受けシュートモーションに入った白瀧を見て、岡村は走りながらブロックに跳ぶ。

「な、跳ぶな岡村！」

福井が敵の意図に気づいて警告するが遅かった。

岡村がブロックに跳ぶと白瀧は腕を下ろし、彼をかわして再び切り込んでいく。

（ドライブか！）

「紫原！」

「言われなくても問題ないし」

名前を呼ばれても紫原は特に警戒を強めたりはしなかった。

目前に白瀧が迫っているが、紫原は白瀧のこの先のプレイに対応できる。

おそらく一連の流れはシュートフェイクからのカットイン、そしてゴール下に切り込んでからは基本となる彼のプレイとなる。

そして紫原の予想通り白瀧は最高速のドリブルから一転、急停止してシュートモーションに。

（ほらね）

ドリブルからのストップアンドジャンプシュート。

ここからパスに切り替わるかもしれないが、無駄だ。そうだとしてみ対応できる。

紫原はわずか一歩で白瀧との間合いをなくしてブロックに跳ぶ。

「遅えよ、紫原」

「っ!？」

しかし彼の腕がボールを防ぐ事はなかった。

紫原が跳躍して高さを出す前に、彼の指先を越えてボールはリング

へと向かっていった。

「……は？」

(そんな、馬鹿な……)

(大仁多) 4対10 (陽泉)。ついに大仁多が得点。白瀧が紫原からシュートを沈める。

ボールが静かにリングを潜り抜ける光景に、紫原は驚愕を覚えた。そんなわけがない。何故なら白瀧の動きは完全に対応できるはずだったのだから。現に彼の速さにもしつかりついていけたというのに。

「馬鹿な。紫原が、シュートを許した……?」

(いくら岡村が抜かれて一対一だったとはいえ、普通は遅れを取るわけがねえ)

(動きが何か特別であつたわけではない。ドライブも常のものと同じじゃった)

(問題なのは、むしろその後の動きアル)

(今のジャンプシュート。白ちゃんはまさか、最高到達点に達する前に撃ってきた?)

まさか白瀧は、紫原が反応できない早さでシュートを放つたというのか。

ジャンプの途中でその勢いを利用して放つジャンピングシュート。白瀧の新技が、ここで炸裂した。

「紫原。お前さつき言ったよな。『俺のせいだ他の皆が絶望した』って」

まだ失点の衝撃を受けていた紫原に、白瀧は静かに問いかけた。

先ほどの紫原の意見に対する答えをかつての仲間達に、「キセキの世代」にぶつけるために。

「わかっているさ。そんなことは誰よりもわかっている」

他でもない白瀧が理解していた。

自身の敗北が味方に、他のチームメイトに与えた影響は大きなものだということ。

必ずしも努力が報われるとは限らない。それが中学時代、白瀧も味

わった現実なのだから。

「——だから俺が戦うんだろうが！ 同じ思いを繰り返さないために、今度こそ俺は！ キセキの世代前達を越えていく！」

ゆえに白瀧は戦う事を選んだのだ。

もう二度とあんな思いはしたくない。仲間にもさせたくない。必ず勝って、そして守ってみせる。

もう一度あの時を取り戻す。仲間には涙を流させたくない。必ず勝って、そして叶えてみせる。

それこそが、白瀧が中学時代に彼自身の心に刻んだ誓いなのだから。

——黒子のバスケ NG集——

「紫原。お前さつき言ったよな。『俺のせいで他の皆が絶望した』って」

まだ失点の衝撃を受けていた紫原に、白瀧は静かに問いかけた。

先ほどの紫原の意見に対する答えを紫原に、“キセキの世代”につけるために。

「わかっているさ。そんなことは誰よりもわかっている」

他でもない白瀧が理解していた。

自身の敗北が味方に、他のチームメイトに与えた影響は大きなものだということ。

必ずしも努力が報われるとは限らない。それが中学時代、白瀧が味わった現実なのだから。

「——だから俺が食べるんだろうが！」

悲報。白瀧、責任を取るため自ら死を選ぶ。これは漢ですわ。

(第八十話のNG集参照)

第八十二話 友に捧ぐ

「決まった……!」

「大仁多、ついにあの陽泉ディフェンスから得点!」

試合開始直後から完璧な防御を強いていた陽泉。

その完全防御を突き破り、大仁多が得点に成功した。

ようやく持ち前の攻撃力が発揮されるのかと会場が大いに湧き上がる。

「今のって、ロビンの?」

「ああ。俺が教えたやつだ」

「……そういや合宿中にも練習してたな」

「あいつが普段やっているツーモーションシュートではなく、ワンモーションシュートで紫原のブロックをかわしたってことか?」

「ええ。ただおそらくは」

ジャンピングシュートあるいはワンモーションシュートとも呼ばれる、ジャンプしたと同時にボールをリリースするシュート。

県大会後、楠からアドバイスを貰って白瀧が練習に励んでいた技だ。

やはり見覚えがあるためにすぐに気づいたのだろう。教えた楠だけではなく、西條や勇作、細谷もその原理に気づく。

ただ、楠だけは白瀧のシュートの正体に気づいただけでなく。

「あれはおそらく、俺のシュートよりも早い」

さらに白瀧が独自に適応させた彼の技術まで見抜いていた。

「一拍子?」

「はい。武術——白瀧君の場合は古武術に当たりますが、その世界で使われている言葉だそうです。一拍子とも呼ぶそうですが、彼は一拍子と呼んでいました」

見抜いていたのは彼だけではない。データ収集に長けたかつての白瀧の同僚である桃井も本質のスカウティングを終えている。

「二つの動作をそれぞれ段階的に行うのではなく、同時に行うというもの。今回白瀧君はドリブルをやめ、セットポジションにまで移る動

きと膝を曲げる動きを同時に行っていました」

「なるほど。それで余計に動きが早まったんやな」

「それだけではありません。シュートのタイミングで膝を伸び始める事が可能になるため、より力を伝えやすく、力が逃げない動きになっています」

「——動きの最適化。あいつが得意としていた事だ」

ただ楠の技術をものにしただけではない。既に持つ己の技術を適応させることで最良の武器と化した。

これだけでも十分厄介なものではあるのだが。

桃井の説明を引き継いで青峰が語り始める。彼にしては珍しく、目もギラギラと好戦的なものに変わっていた。

「無駄を最大限排除したシュート。あくまでも早さを追求するのはやつらしいが、まだだ」

「え?」

「あいつがこの程度で切り札にするわけがねえ。これにはおそろく、まだ別の使い道がある」

あの男は強さに貪欲だ。たった一つで満足するはずがない。一を学べばそこから次々と発展させる。

ならば、このジャンピングシュートにもまだ隠された秘密があるはずだと青峰は言った。

「うっ、お、おおおおお!」

山本のブロックが炸裂。

岡村からパスを受け、レイアップを決めようとした宮崎のシュートを阻んだ。

「ちいっ!」

(ディフェンスも厳しくなってきた。白瀧のシュートで勢いを取り戻したか?)

「アウトオブバウンズ。陽泉^黒ボール」

攻撃成功でディフェンスも調子を良くしたのだろうか。大仁多の選手達も動きが機敏になったように見える。

「このっ！」

（びくともせん！ こいつ！）

「……ッ！」

ガード陣だけではない。ゴール下では光月も岡村を相手に体を張り、中に入れさせない。

「まだじゃ、小僧！」

だが岡村も負けてはいない。

福井のさばいたパスを受け取ると、光月の押し返してきた力を利用してスピムーブ。光月をいなしてゴール側へと回転する。

「な!？」

（力や高さだけではなく技術も。まるでセンターの選手みたいに！）

「撃たすか！」

センターと思わせるような動きで岡村はマークを突破。

すかさず中央から白瀧がヘルプに出てブロックを試みるが――

「ふん、ぬううう！」

「がっ!？」

岡村は白瀧を軽々と吹き飛ばしダンクシュートを決める。

（大仁多） 4対12（陽泉）。

「なんじゃ？ ブロックでもするつもりだったのか？」

「何？」

「怪我する前に引っ込んどれ。あまりに軽すぎて潰してしまいそうじゃ」

「……ほう」

見下ろしながら、岡村は白瀧を挑発する。

大仁多に勢いをもたらす彼から冷静さを奪おうという思惑があったのかは不明だが、白瀧は静かに敵の言葉を聞き流した。

「ごめん、要」

「謝るなよ。お前の力は通用しているんだ。挽回しなおせばいい。――ま、このまま引き下がるわけにもいかないから。この第1Q中に二

人で、やり返すぞ」

もつとも何も感じていないというわけではない。

謝罪する光月を宥めると白瀧は意地が悪そうな笑みを浮かべて耳打ちした。

「とりあえず、また行くか」

大仁多のオフエンスに移る。

先ほど得点を決める白瀧に陽泉の警戒は強まっている。

このデイフエンスを掻い潜るのは困難だと思われるが、小林はまた彼にパスをさばいた。

「行かせねえ！」

宮崎がドライブを警戒し、素早くプレッシャーをかける。

マークを見ても白瀧は気にしない。左45度から中央へとドライブ。彼の姿を追いつつ、宮崎はパスをさばいた小林が腕を組んで待ち構えていた事に気づいた。

(スクリーンが狙いか)

動きを見抜いた宮崎は小林の位置を見て、彼の前に出るように方向を変えて——その瞬間、白瀧が逆へと切り替えした。

「うっ——うあっ?」

鋭い切り替えしに宮崎の体は追いつかなかった。勢いを殺しきれず転倒し、白瀧の突破を許してしまう。

さらにヘルプに出た福井をバックロールターンでかわして紫原が動き出す前に制止。視線を上げてシユート態勢に入った。

「こんのっ！」

今度は紫原の動き出しも早かった。白瀧が止まるやいなや跳躍した。

そんな宙に浮いた彼の横を通して白瀧はゴール下の黒木へとパスをさばく。

「ッ！」

「ナイスパス！」

全力で跳んだ紫原は追いつけなかった。黒木が劉のブロックを越えてベビーフックを沈める。

(大仁多) 6対12 (陽泉)。

試合開始直後は決められなかったシュートを今度は決めて、大仁多が追加点を挙げた。

「よし。ナイツシュ黒木!」

(白瀧のおかげでオフエンスも形になってきた。紫原もジャンピングシュートを警戒していつものように考える時間を奪われている。今なら!)

あの陽泉から中で点を挙げることが出来ている。これが大仁多に与える影響は大きなものだ。攻撃も組み立てやすくなる。

「だが、まだゴール下はうちの領域アル!」

大仁多が奮闘を見せる中、陽泉も負けてはいない。

宮崎のスリーポイントシュートが外れるものの劉がオフエンスリバウンドを制するとそのままゴール下からシュートを決めた。

(大仁多) 6対14 (陽泉)。陽泉、得意のゴール下から得点に成功する。

「ッ……!」

「くそっ」

リバウンド争いに負けた黒木と白瀧が歯を食いしばる。

そう、バスケットにおいて最も重要とも言われるリバウンドは未だに陽泉が優位に立っていた。

「大仁多は全然リバウンドを取れないみたいだね」

「無理もねえだろ。何せ高さが違いすぎる」

「大仁多は#7白瀧・179cm、#9光月・192cm、#5黒木・195cm。対して陽泉は#4岡村・200cm、#11劉203cm。さらにディフェンスは#9紫原208cmが加わる。陽泉全ての選手が」

大仁多を上回っている」

「これでは全くシュートを落とせないし、シュートを撃たせないしかない。大仁多も困ったものでしょうね」

まったくだと洛山の選手達は少し気楽な様子で大仁多に同情を寄せる。あるいは自分達が次に当たるかもしれないのに、心配は必要な

いと考えているようだった。

「……明、黒木さん」

もう少しで第一Qは終わってしまおう。早くどうにかして第二Qへの弾みにしなければ折角の勢いも弱まるかもしれない。そう考えて白瀧は光月と黒木を呼んで、考えを打ちあけた。

(早めに切り札を切ってしまった以上、この程度で終わるわけにはいかない。こんな中途半端な形では先まで続かない。この第一Qで一気に点差を詰める)

元々ジャンピングシュートは第二Qまで、可能ならば後半戦まで取っておく予定だったものだ。

しかし温存する余裕が無い為にこの第一Qから使わざるをえなかった。

監督の判断を斬り捨ててまで秘策を使ってそれでも負けているようでは話にならない。

白瀧は第二Q以降の弾みをつける為、決断を下す。

「小林さん、山本さん」

二人と話を終えた後、今度は小林と山本に声をかける。彼らは白瀧の話を聞いて少し驚いた顔をして、そして頷いた。

「さすがに試合でやるとなると些か不安が残るが」

「やるからには——決めるよ」

「……わかっていきます。ずっと前から、ずっと」

誰かに言われるまでもない。

何故なら白瀧が初めて友から教わった時から教わった、友の誇りなのだから。

百発百中。些細なミスさえ許さない、完璧主義者の変人に耳が痛くなるほど厳しく指導された武器なのだから。

「むっ?」

(これは……?)

陽泉の選手達が異変に気づく。

ボールが大仁多に渡って攻撃が再開されたのだが、先ほどまでと異なり小林と白瀧が並列してボールを運んでいるのだ。

山本は黒木、光月と共に一足先にゴールの方へと走っている。

(これは、白瀧のポジション変更か?)

(そういうえば県大会予選であいつが司令塔のポジションをやっていたという噂もあったが、ひよつとしたらそれを?)

陽泉の動揺を誘う動きとは思えない。まさか人伝いに聞いた司令塔白瀧のパターンなのだろうかと考えを巡らす。いざという時は2―3ゾーンを変更してでも向こうのオフエンスに対抗しなければならない。

あらゆる可能性を考えて、敵が集中力を高めている中。

小林と白瀧の二人がセンターラインをこえる。

白瀧は小林へとボールを回し、大きく息を吐いて呼吸を整え――小林にアイコンタクトを送った。

「行くぞ陽泉」

センターサークルを少し越えたほどの位置で、小林から白瀧へとボールが返った。

軽く跳んでパスを受けた白瀧は空中でフォームを整えるとゴールだけを見据えて。

「行くぞ紫原!」

着地と同時に、地面を蹴ってシュートを放った。

「……はっ?」

「はあっ!」

(馬鹿な。何を考えている?)

当然陽泉の選手達は、ベンチの選手達も含めて表情が驚愕に染まる。

ゴールから10メートル近く離れているであろう場所から白瀧がジャンピングシュートを撃ってきたのだ。とてもではないがまともな判断であるとは考えられない。

「っ、ボケッとしてんじやねえ。あんなの入るわけねえだろ! 紫原、

岡村、劉!」

「もうやってるし」

「お、おう!」

「わかってるアル！」

いち早く立ち直った福井がゴール下の三選手に檄を飛ばす。

そうだ。こんな出鱈目なシュートが入るわけが無い。向こうがわざわざ絶対外れるようなシュートを撃ってくれたのだ。確実にリバウンドをものにしようとパワープレイヤー達が体を張ってポジションを取る。

『「入るわけない」だと？ 馬鹿なことを言うな。言っただろう。』すでにここまでの試合で消えてしまった者の思いも籠めて戦う』と。俺にスリーを教えたのが誰だと思っている？」

だが白瀧は入るといふ確信を懐いている。

白瀧にスリーポイントシュートを叩き込んだのは、全国に名を轟かせたスリーの名手である緑間慎太郎なのだから。今となつては、このシュートこそが彼との間に残されたわずかな絆の象徴。

「だから——俺のシュートは、落ちん！」

ゆえに、このシュートが外れるわけがない。外すわけにはいかない。

白瀧が放ったシュートはリングに掠りさえせず、中央を綺麗に射抜いた。

(大仁多) 9対14 (陽泉)。白瀧のロングシュート、炸裂。

「なんだと……?!? 馬鹿な！」

思わず荒木は冷静さを失って立ち上がった。

スリーポイントラインよりもはるかに長いシュート範囲。今はまさに緑間慎太郎のシュートを彷彿させるものだった。そんなシュートが、白瀧から放たれた。

「……いい、今のつて。まさか」

「秀徳、〃キセキの世代〃の緑間がやっていた超スパー長距離3Pシュートか？」

「うっそー」

これにはさすがに歴戦の猛者達も肝を冷やした。

陽泉の選手達は勿論、観客席で試合を見ていた選手達も驚きを隠せない。

すでに緑間は東京都予選で姿を消した。ゆえにあの長距離シュートはこの大会では見られないと思っていたのに。まさか、このような所で見られるとは。

「あ、あいつは、狙って決めたんだよな？」

「ジャンピングシュートでシュート範囲を伸ばしてきた？」

「ああ。ジャンピングシュートの本来の使い方までここまでの技にするとはな。驚いた」

「え？」

かつて県大会で戦って来た者達も、未だに成長し続ける好敵手の技量に震える。

楠も、教えた相手がここまで昇華してきたという事実には驚き、同時に感動を覚えた。

「ジャンピングシュートはジャンプシュートよりも打点が低いシュートだ。その為シュートのスピードが上がってディフェンスのタイミングがずれるというものもあるが、それだけではない。打点が低くなることで大きな力を使わなくてもボールを軽く飛ばせるようになる」

より早く、最小限の力でシュートを放つ事が可能になった。

これにより白瀧は前よりもさらに広いシュート範囲を獲得する事が出来るようになったのだと楠は語る。

「加えて、彼の古武術の適応ですね。力が逃げず、最小限の力で放つことが出来る」

「早く、そして長く。緩急も手に入れた今は速さも自由自在。……面白いじゃねえか」

離れたところで桃井や青峰も、そして赤司も仕組みに気づいていた。

(緑間のように撃てば止められないという高打点から放たれる超ロングシュートは実現できなかった。しかしその代わりあいつのシュートに存在するタメの時間をジャンピングシュートの応用により極限に削減した。早いリリースを可能とした長距離砲。言わば——高速で動く移動砲台)

「これが、お前の導き出した答え、新たなバスケスタイルなんだな」

桃井は驚嘆した様子で、青峰は満面の笑みで、赤司は無表情で白瀧を見つめる。

「……すげえ」

一方で、火神は一言だけ呟いて、白瀧から目を離せなかった。

正直な話、彼は今までキセキの世代の技を自分のものにしようにして出来るものとは考えられなかった。常識から逸脱した異常な動き、到底普通の人間が真似できるものではない彼ら唯一のものだと。

現に黄瀬でさえものにすることは出来なかったという黒子の話を聞いた。あの模倣の天才でさえ出来ない技だ。常識的に考えれば出来るわけもない。

しかし白瀧は、火神や黄瀬よりも身体能力スベックで大きく劣るというのに自分の武器を活かしてものにしてている。

白瀧が元々持っていた古武術。緑間より教わったスリーの基礎。楠に助言されたジャンピングシュート。持っているものからあらゆる可能性を模索し、適応させている。

こんな事、他の誰が出来ようか。

「信じられません」

「ああ。形こそ違うけど、まさかここまであの野郎緑間のシュートを再現するなんて」

「いえ、そういう意味ではありません」
「え？」

火神の横に座る黒子も、目を丸めていた。だが、彼が懐いていた驚愕は、他の者と懐いている意味が全く違う。

「信じられません。ありえませんが。白瀧君がやるはずがない。たとえ出来たとしても、彼は絶対にやるわけがない。だって、だって彼にとつてあの技は——」

中学時代の白瀧を知る黒子だからこそ懐く感情だった。

白瀧はあのシュートを仮に身につけることができたとしても、絶対に自分ですることには無い技であるはず。かつて緑間から聞いた、彼らが袂を分かつ原因となったというものなのだから。

『なっ！』

『ハハハハ、ハハハハハハハ!!』

『白、瀧……』

『何でだろ? 嬉しい、ことなのに。どうして涙が、止まらない……!?!』

中学時代、白瀧を失意のどん底へと突き落とす、最後の一押しとなった絶望の象徴。盟友との絆を引き裂くこととなった元凶。

あの日から緑間は白瀧と時間を共にすることは無くなったと言っていた。

白瀧にとっては最後の頼りであった大切な存在を失ったというのに。どうしても思い出したくも無いはずの技を、自らぶつけるのか?

黒子には理解できなかった。

(見てるかよ緑間? ……まあお前の事だから、たとえ見ていたとしても『見ていないのだよ』とか恍けるんだろうけど)

かつての友が思い悩んでいる中。

白瀧は心中で緑間の事を考えながらプレイを続行していた。

(俺も先に進んでるぞ。約束どおりお前達の代わりに戦っている!)

決してかつての別れを悔やんでいないわけではない。むしろ誰よりもあの日の悲しみを深く覚えている。

しかしそれ以上に、友との誓いが大切だった。『俺のことは気にするな。お前は先に進め』、東京都予選の誠凛―秀徳戦後に彼と誓った成果を示すということ。

誠凛戦で秀徳の仇を取った。あとは約束通り戦うのみだ。『自分はきちんと前に進んでいる』と。『お前達の方も戦っている』と。旧友に恥じない姿を見せる為に。

精神的に追い詰められてもなお、白瀧は昔の友情を忘れてはいなかった。彼はあらゆる者の思いを全て背負って戦う事を選んだ人間なのだから。

ゆえに彼は躊躇わない。

自らの活躍で今の仲間を滾らせ、ディフェンスでも容赦なく圧力をかけていく。

(くっそおっ!)

福井は悔しさを隠しきれなかった。

小林達の圧力が強くなった為に簡単にパスをさばくこともできず、かといって自ら切り込むということも躊躇われるからだ。

(どうなんだ。白瀧のロングスリーポイントシュート。こいつのシュート範囲は一体どこまである?)

原因は先に驚愕の一撃を見せてくれた白瀧だ。

彼は先ほどハーフコートからのシュートを見せてきたが、その限界はどれほどなのか検討がつかない。

普通ならばさすがにそれ以上はありえないだろうと考える。しかし都予選で緑間という例外がオールコートでシュートを放ったという確かな情報があった。

そして白瀧は緑間を彷彿させるシュートを見せた。ならば彼も先ほど以上の距離で撃てるのかもしれない。その場合、セーフティに二人は必要となり、中に切り込むことが出来なかった。

(しようがねえっ!)

「取れよお前ら!」

第一Qの残り時間十五秒でショットクロックが残り三秒。

これ以上はヴァイオレーションとなってしまう。

ならば外れることは承知の上でゴール下に託すのみだ。福井は小林のマークを外せないまま、強引にスリーを放った。

小林のプレッシャーを受けてかシュートは決まらなかった。

リングに衝突し、インサイドの選手達には託された。

「任せておけい!」

「負け、るかあっ!」

ボールは岡村と光月が凌ぎを削るサイドへと落ちて来る。

ポジションでは光月が優位だ。岡村より中のポジションを陣取り、相手を中へ入れさせない。

だが高さでは岡村が10cm近く上だ。多様の優位差は引っくり返す事が出来る。

「もらった!」

そのアドバンテージの為か、岡村は勝利を確信して跳躍した。

対して、光月は岡村が跳んでも跳ぼうとはしない。

「むっ?」

ふと光月が跳んでいないことに気づいた岡村。

理由はわからないがおかげで簡単にボールを取る事ができる。

岡村は両手でボールを掴み取る。このまましつかりと手元に手繰り寄せる——その前に、彼の目の前に巨体が立ちはだかる。

「なんとっ!?!」

「光月!」

ポジションを取り合っていた光月だった。

岡村よりも遅れて跳んだ光月はタイミングを遅らせることで最高到達点に達する時間をずらすと、片腕を伸ばして高さをカバーして相手の腕からボールを弾き飛ばした。

「うおおおおっ!」

そして、真上にはじかれたボールを白瀧が確保する。

即座に最高到達点に達するという瞬発力が発揮。ようやく大仁多がりバウンドを手にした。

「よしっ。取った!」

「ならば」

「行くぞ!」

これだけでは終わらない。

ボールを手にした白瀧はそのままドリブルで駆け上がり、さらに小林と山本も彼の前を行くようにと走り始める。

「しまった!」

(ここで最後の速攻を仕掛けてきたか)

「やらせねえよ!」

負けじと福井と宮崎もスタートした。速さとポジションの問題で黒木や光月、岡村や劉は間に合わないだろう。第一Q最後の攻防は五人と、そしてオフセンスに参加していなかった紫原に託された。

(絶対に決める。第二Qの流れに繋げる!)

ボールを持っているのは白瀧だ。

対して白瀧に張り付くよう、宮崎が並列して走っている。警戒すべ

きは先ほどのロングシュート。詳細な情報が無い以上、徹底して警戒する必要があると考えて白瀧を観察する。

速さについていくだけでも精一杯だが、なんとか食らいつき、ハーラインに到達した直後、白瀧は半歩後ずさり、視線と上体が上がった。

(ここから撃つ気か！)

「このっ！」

跳んでからでは間に合わないと判断してすぐにブロックを狙う。

しかし白瀧はそんな宮崎の真横へと切り返し、あつという間に彼を抜き去っていった。

(フェイントかよっ！)

「何やってんのー。ったく」

味方が白瀧のフェイントにつられたのを見て、紫原は心底面倒そうに息を吐き、前に出た。

紫原もロングシュートを意識しているのだろう。彼も高さを活かしてブロックを狙っている。

「止めさせねえ。この攻撃も決める！」

アイコンタクトを山本に送る白瀧。返答も頷きも無いが意志は通じた。

白瀧がチェンジオペスからのレッグスルーで切り返す。紫原はわずかに緩急に揺さ振られたが、追いつがる。さらに鋭いキレのクロスオーバーで切り返すが、紫原は動きについていき、ついていこうとして山本のスクリーンに捕まった。

「あのさあ。さつきそれは通じないってわかったじゃん」

紫原は先ほど同様、山本の体を回り込むようなターンで彼をかわし、すぐさま白瀧の姿を追う。直後、白瀧がドリブルを停止。フォームを立て直すと同時に膝を曲げた。

「このっ。……いや」

反射で跳ぼうとした瞬間、彼の動きが変化した事に気づいた。

紫原が半分ほどの力で跳んだ直後に白瀧はゴール下へとパスをさばく。逆サイドから走りこんだ小林へとパスが通った。

「ナイスパス！」

(連続でシュートと見せかけてのフェイクか！)

「小林っ！」

追いついていた福井がブロックしようとするが、高さで唯一劣っている組み合わせだ。小林がゴール下からジャンプシュートを放とうとする中、福井の手は届いていない。

「終わりだよ」

「ッ、後ろ来てるぞ小林！」

——だが、紫原が追いついた。スリーポイントラインの内側ならすぐに対応できる。白瀧のシュートフェイクに気づき殆ど跳んでいなかった為に追いつけたのだろう。

小林のシュートコースを塞ぐ、完全なブロックを見せた。山本が必死に叫ぶが、既に小林は宙に跳んでいる。今から中断は出来ない。

「お前がな」

中断は出来ないが変更は出来る。小林は真っ直ぐ、ゴールへ向けてではなく、斜め後ろへとボールを放った。

「え……」

「なっ」

シュートを止めようとしていた二人、紫原と福井は目を見開く。

「……白瀧のジャンピングシュートで、紫原を含む陽泉の選手達はワントempo反応が遅れた。そうでなくても山本のスクリーンから始まった連続攻撃で対応は後手に回ることになった」

楠が冷静に分析する。視線の先で、白瀧が助走をつけて走っている。

「さらに長身PGである小林のジャンプシュートを止めようとするりや、紫原は全力で跳ぶしかねえ。着地はその分遅れることとなる」

青峰が珍しく真面目に語る。彼の視界が捉えている好敵手は、利き足で踏み切っていた。

「対して白瀧の瞬発力が——真っ先にあいつを最高到達点に達することを可能とさせる」

赤司が無感情に事実を告げる。彼の両目に映っている白瀧が、左手

で宙に浮かぶボールを掴んでいた。

「確かにキセキの世代の名前こそ失った。だが、もう一つの名前まで失った覚えはない」

白瀧の左手がボールを掴んだ。

(駄目だ。着地にはまだ——追いつけない)

(トップスピードならば天才にも引けを取らなかった、瞬発力を持つという「神速」)

誰も白瀧には追いつけなかった。紫原は勿論、皆白瀧の動きを目で追うことしか出来ない。

まともに戦えば敵わないかもしれない。だが一時の輝きならば今でもキセキの世代相手にも戦える。

「神速を、大仁多^{俺達}を舐めるな！」

左腕が勢いよくゴールに叩きつけられた。白瀧のアリウープが炸裂する。

(大仁多) 11対14 (陽泉)。ついに自慢の速攻が成功。白瀧の思いが籠った渾身の一発で、第一Qは終了した。

大仁多が陽泉高校から今大会初となる二桁得点を挙げて、その点差はわずか三点。

——黒子のバスケ NG集——

(見てるかよ緑間? ……まあお前の事だから、たとえ見ていたとしても——)

(それくらい出来て当然や)

(とか恍けるんだらうけど……!?)

「んん!？」

(脳内に直接、てか誰!?)

原作で既に白瀧と同様のロングシュートを放っている今吉とかいう妖怪サトリ。

「聞ーこーえーたーでーさーくーしやー」
……ッ!?

第八十三話 目覚めた破壊神

「ふうっ」

リングに叩きつけられたボールが音を立てて地面に落ちる。直後にダンクシュートを決めた白瀧も着地し、大きく息を吐いた。

第一Q最後の攻防を制したのは白瀧だった。大仁多がガード陣三人のコンビネーションにより陽泉の防御を突破し、第二Qへと繋がる速攻を成功させた。

「ッ。白ちん」

「やってくれたな」

得点を決められた衝撃からだろう。紫原は小さく噛みしめを行い、福井は苦笑を浮かべて小林達の姿を見据えた。

「さて。これでまだ立ちなおせる」

『これより2分間の休憩インターバルに入ります』

当の小林は笑みを浮かべてチームメイトと共にベンチへと引き下がっていった。

得点は第一Qを終えたところで（大仁多）11対14（陽泉）。試合開始直後から大仁多は無得点の時間が続き、一時は八点という点差が開いた状況をよく打破し、盛り返した結果と言える。

「皆さんよく働いてくれました」

藤代をはじめとしたメンバーが奮闘した五人を迎える。最初のタイムアウトを選択した時とは違って変わって雰囲気は明るい。

各選手はそれぞれボトルやタオルを受け取り、ゆつくりとベンチへ腰掛けた。

「はい。白瀧君も」

「……………」

「白瀧君？」

「おい、白瀧。どうした？」

流れるように選手へ補給を渡して行く橙乃。

当然白瀧にも同じようにドリンクを渡そうとして、だが頭からタオルを被っている彼から返答はなく、反応もない。

「え？ 何だ——ああ、橙乃か。悪い。ありがとな」

もう一度本田にも名前を呼ばれてようやく白瀧はボトルを受け取った。

直接手渡しして、そして橙乃は白瀧の異変に気づいた。

顔を上げた白瀧だったが彼がかいている汗の量が尋常ではないということに。

(……いつもの試合以上に消耗が激しい。やっぱり「キセキの世代」が相手だから?)

(いや、それだけではない。陽泉ほどの高身長が揃っている選手達を相手にしているんだ。体格が一回り以上勝っている相手と常に競り合っていることでやはり体力の消費が著しいんだろう)

(いくら古武術によって消費を抑えることが出来たとしても、ゼロにすることは出来ない。やはり今日の試合は苦しい展開になるか)

状態を察したのは橙乃だけではない。チームメイトや藤代も白瀧の異変に勘付いていた。

大仁多と陽泉の両校のインサイドを担う選手達の中では最も身長・体重共に劣るのが白瀧だ。しかも今回の試合でも彼は攻守に渡って大事な役割を担っている。他の選手と比べて彼が受ける疲労は倍に近いと言える。

シュート一本差にまで迫ったとはいえ、まだまだ安心できるような状態ではないということを確認だった。

(だが、例えそうだとしても)

「皆さん。第二Qの出方について話しますよ」

ならばこそまだ白瀧には奮起してもらわねば困る。

現状では陽泉のディフェンスを突破するには白瀧の突破力が必要不可欠だ。一瞬でも抜けてもらおうわけにはいかない。

苦汁の決断であることは承知の上で、藤代は選手達へと指示を飛ばし始めた。

「まだ陽泉は白瀧さんのロングスリーには対応しきれいていません。公式戦で見せたのは初めてなのだから当然のことですが、だからこそこれを使わない手は無い」

荒木が対策を打とうとも白瀧の機動力を捉えて押さえ込むことは並の選手には難しい。相手は全国でもディフェンス随一の陽泉だ。点を取れる時に取っておこうと藤代は告げる。

「ポジションは第一Q終盤のまま。白瀧さんは小林さんと共にボールを運んで隙を見て撃つてもらいます。乱発は危険ですが、撃つ素振りを見せるだけでも効果はある。インサイドは——」

小林と白瀧。この二人に試合の組み立てを任せておけばまず安泰だろう。

問題となるインサイドについても方針を伝えようとして突如大きく、鈍い音が響き渡る。

「——ッ?。」

「なっ」

「何だ!。」

試合会場には好ましくない音が聞こえてきた事に選手達は驚き、その原因の方へと視線を向ける。

音源は陽泉ベンチであった。

「……紫原か」

他の選手よりも遅れてベンチに戻ってきた紫原が陽泉ベンチを勢いよく蹴り上げたのだ。力の限り、感情を爆発させた結果ベンチは大きく飛ばされた。

「お、おい。紫原?。」

「落ち着けて」

「このっ。馬鹿!。苛立ちを物にぶつけるんじゃないよ!。」

「イテッ」

「いいから席につけ。まだ感情的になる時ではない」

チームメイトが紫原の鬼を髣髴させるような形相に怯む。

そんな中、ただ一人怯える素振りがなかった荒木はどこからか竹刀を取り出して彼に渴をいれる。彼女の気の強さの表れと言えるだろう。

「確かに第一Qで十一失点というのは考えてもいなかった。さすが大仁多の攻撃力と言えるだろう。だがうちのリードが消えたというわ

けではない」

強引に紫原を鎮めた荒木が作戦会議を始めた。

陽泉はこれまでの試合、一度も敵に得点を二桁に載せたことはなかった。それなのに第一Qのみでここまで得点を許してしまうというのは計算違いだが、まだ形勢逆転とまでは至っていない。

あくまでも冷静に、荒木は善後策を選手に伝える。

「第二Q、オフフェンスは岡村と劉の二人に任せる。うちが得意のインサイドで大仁多を捻じ伏せる。福井、宮崎はセーフティに徹して敵を勢いづかせるな」

大仁多は勢いづくると一気に得点を連発する。このまま敵を奮い立たせてしまつては下手すれば逆転にまでいたることだろう。それは絶対に避けなければならない。

「ディフェンスに関しても同様だ。たしかに敵のオフフェンスは強力だが——こちらには紫原もいる。これ以上大仁多に好き勝手をさせるな」

静かに、反応も示さない紫原。

不気味だがこれ以上味方にとって頼りになり、敵にとっては恐れとなる存在は少ないだろう。

僅か三点差のリード。されど、これ以上は一点も詰めさせはしない。今一度鉄壁の防御が大仁多の前に立ちはだかる。

『休憩終了です』
インターバル

インターバルは終了し、第二Qの開始が宣言された。第一Qを戦い抜いた十人がそのままコートに入り試合に備える。

「試合再開だな」

「どーかな。第一Qでかなり点差はつめたけど、まだ陽泉は手のうち残っているだろうし。なのに大仁多の方は白瀧の切り札っぽいを見せてようやく背中を捉えたって感じでしょ？」

「普通に考えれば、陽泉優位のままなのだけけど」

洛山高校の主力選手である無冠の五将に数えられる三人は、陽泉が有利であるという見方を崩していない。

劣勢を覆した大仁多の姿勢は見事だった。だがそのために手の内をほとんど晒してしまった。対する陽泉はまだ紫原が底を見せていないなどアドバンテージが大きいように見える。

あるいは再び陽泉が点差を開いていくのではないだろうかと予測する中、赤司は無言で紫原と白瀧の姿を捉える。

『手の内をほとんど見せちゃった』だ？ はっ。馬鹿じゃねーかお前」

「ああっ!？」

「落ち着いてください若松さん!」

「お前ら今日何度目や？ 若松も一々つつかかるな」

一方、洛山高校の選手達とはかけ離れた位置の観覧席では同じような発言をした若松を青峰が鼻で笑っていた。なれた光景に周囲の人間が若松へ静止を促す中、青峰は我関せずと視線をコートへ向けたまま話を続ける。

「そんなの関係ねーんだよ。むしろ、手の内を明かしたここからがあいつの見せ場だろうが」

大仁多は、強いて言えば白瀧は彼が考えるような事で躓く人間ではないと。

様々な人間の憶測が交錯する中、試合が再開される。

ボールは陽泉。福井と宮崎がゆっくりとボールを運んでいく。相変わらず紫原は自陣で立ち尽くしているままだ。

ゴール下に岡村、劉の二人がポジションを取る。
「ちっ」

出来れば荒木の指示通り一気にゴール下へ攻め込みたいところだが——福井は敵のゾーン中央に構える白瀧の姿を見て舌打ちした。(やっぱりあいつがいるとどうしてもパスコースに制限がかかる。瞬発力の高いやつが中央に立っていると、守備範囲は紫原と同等と考えねえと駄目だ)

大仁多のディフェンスは2—1—2ゾーンディフェンス。中央の

白瀧は紫原と同じような役割を果たしている。元々2―3ゾーン
デイフェンスの派生形なのだからあたり前と言えば当たり前だが、彼
の場合より前に出ている分ハイポストや他のパスコースをケアして
いる。

(それならば)

(やつの守備範囲の外、大外からパスを出すしかねえ！)

福井と宮崎がアイコンタクトを取る。直後、宮崎は中央へと切り込
み、捉まる前にパスアウト。コーナーへと走る宮崎へパスをさばき、
宮崎もすぐさま劉へとパスをさばく。

「ナイスアル！」

「むっ」

劉は高い位置でボールを受け取ると両腕を強くつくパワードリブ
ル。黒木をゴール側へ一度で押し込むと同時にゴール側へターンし
てジャンプシュートを撃つ。

「もらった！」

「させねえ！」

「おおっ——!?!」

劉の視界を白瀧の腕が遮った。

予想しなかった障害にかすかにシュートが力む。

だが指先は僅かに届かず、ボールはリングに衝突したが何度かリン
グの上を跳ねた後に潜り抜けた。

「ちいっ」

(反応が少し遅かったか)

「こいつ」

(このチビ。一瞬でブロックに来たのか。なんて目障りな速さアル
！)

白瀧が小さく舌を噛み、劉が苦々しく表情を歪める。

(大仁多) 11対16 (陽泉)。

第二Q最初の得点を決めたのは陽泉。とは言え、得点を決めたもの
のもう少しで止められたであろうことは明白だ。劉は不快感を隠そ
うともせず白瀧をにらみつけた。

「ナイツシユじや劉」

「よしっ。急いで戻れ。速攻に備えろ！」

そんな劉の肩を岡村が叩き、福井は声を張って敵のオフENSEを警戒した。

得点を決められた大仁多は白瀧のスローインで試合を再開。小林と白瀧がボールを運んでオフENSEの展開を試みた。

その白瀧の前に福井と宮崎の二人が立ちはだかった。

「おおっ!？」

「なっ。——白瀧にダブルチームか！」

二人はセンターライン近くからと早めに仕掛けた。おそらく白瀧のロングスリーを警戒してのことだろう。二人がかりで白瀧にフェイスガードを行う。

陽泉は得点能力が高い白瀧を二人で防ぎ、そして劉と岡村の二人が前、紫原はゴール下で構えて三角形のゾーンを組んだ。

(陽泉は白瀧にダブルチーム、そして三人のゾーンのトライアングルツー。しかも普段とは異なる逆三角形のインバーテッドトライアングルツーで来たか)

得点能力の高い選手を封じ込め、外からのオフENSEにも強い。ゴール下が弱くなる欠点は存在するが紫原という優秀なセンタープレイヤーによって完璧に補っていた。陽泉の奇襲に白瀧は勿論小林も動揺した。

予想よりも早い敵の動き出し。絶対にこれ以上の失点は許さないという姿勢が感じ取れた。

「ッ」

白瀧が仕掛ける。

だが多少の揺さ振りでは二人は動じなかった。白瀧の利き腕側である右側に構える福井はより近くで守って彼のスリーを封じ、宮崎は少し遠い位置で腰を落としドリブルを警戒している。敵のスリーとドリブル突破を同時に警戒したディフェンスだった。

「厄介だな。——だけどー！」

これ以上敵に止められるわけにはいかない。

白瀧は大きく前進。二人の間を突破しようとして大きく足を踏み込んだ。敵に近づいたと同時にクロスオーバーで切り返し、すぐさまボールを体の後ろを通して逆側へ戻す。

「あっ!?!」

「この!」

緩急も加わったバックビハインドドリブルは二人にボールが一瞬消えたような錯覚を植え付け、対応が遅れた。

福井達が怯んでいる間に――ボールは再び白瀧の背中を通って彼の逆側へ、小林の元へ一直線に放たれた。

「なっ!」

「ナイスパス!」

ビハインドザバックパスがさばかれる。二人の姿勢を崩した白瀧も彼らをかかわして小林達の後を追う。

先に駆け上がる小林は山本のスクリーンで前列の岡村をかかわすと、即座にジャンプシュートを仕掛けた。

「はー? そんなの決めさせるわけないでしょ」

「ッ」

打点の高い小林のシュートコースを紫原が完全に封じた。

小林も撃つ直前に自分のシュートが止められることを理解し、リリース寸前でゴール下へ走る光月へとパスをさばく。

「おっ」

(冷静だね)

「よし!」

パスは紫原の横を通って無事に光月へと渡った。光月はそのまま加速の勢いを緩めず飛び上がり、右腕を大きく掲げた。

「無駄だよ」

「うおっ!?!」

そのダンクシュートも、またしても紫原に封じられてしまった。光月がダンクシュートを決める前に、紫原がボールをはじく。

加えて光月の手からこぼれたボールは劉が確保。高い位置でキープする事で白瀧のステールも回避した。

「白ちんでもないのに決めさせるわけないじゃん」

「紫原！」

あまりにも簡単に大仁多の連続攻撃を封じる鉄壁。ここまで挑んだ全国の強豪選手達を圧倒したディフェンスは健在だ。悔しがる敵を上から威圧する紫原の姿は、あらゆる選手の心に大きなダメージを与えていく。

「あまり気にするなよ」

「要……」

「気にしすぎてオフフェンスに消極的になる方が不味い。攻め気を失うと余計に敵が守りやすくなってしまいうからな。お前は気にしないでプレイしてくれ」

だから光月がそうならないようにと白瀧は彼へと声をかけた。

ディフェンスへと戻る最中、動揺を残さないように彼の肩を叩いて笑みを見せる。

「安心しろ。突破口なら俺が切り開いてやる」

まるでそれこそが『己の成すべき事だ』と言わんばかりに。その為にはまずはディフェンスから。これ以上得点を引き離されては追いつくことが難しくなる。

白瀧の自慢の守備範囲を活かし、ピック&ロールで中へと侵入してきた宮崎のボールをはじいた。

「ぐうっ！」

「これ以上の得点は許さない」

「よくやった！」

黒木がボールを掴み陽泉の二次攻撃も防ぎきる。攻守が入れ替わって大仁多の反撃が始まった。再び小林と白瀧がボールを運ぶ。対する陽泉はやはり早めにダブルチームが襲い掛かった。

（得点を許せないのはこっちも同じだ！）

（絶対にあのスリーは撃たせねえ！）

今得点差は五点。大仁多がスリーを決めれば同点も目前だ。ゾーンディフェンスを展開し、岡村と劉の長身二人が前列で守っている今、山本とてスリーは容易には撃てない。ならば後はこの男を徹底的

に止める。

福井と宮崎が渾身のディフェンスで白瀧をマークした。

「通させてもらおう！」

白瀧は二人の間に向かうように走った後、鋭く横へ動くLカットを行う。動きのキレ、スピードに長けた彼のプレイは敵の対応を許さない。前進を警戒しすぎた宮崎は反応が遅れ、かろうじて食らいついた福井も山本のスクリーンによって動きを阻まれた。

「あっ！」

「ごんの！」

これで白瀧はフリーになった。直後、小林とアイコンタクトを取ると小林からパスがさばかれる。空中でボールを受けた白瀧は両腕を下ろし、リングを見据える。

「撃たせるか！」

斜め後で宮崎が飛び上がった。白瀧の動きからシュートを読み取ってファウル覚悟で強引に踏み切ったのだろう。

「甘い」

「ッ!？」

しかし宮崎の予想に反して白瀧はシュートを撃たなかった。体を捻らず、上体を倒した力を利用して前方へと突き進む。ドリブルで宮崎のブロックをかわすとどんどん加速してゴールへ向かっていった。

（フェイク！）

（ドライブの予備動作もなしにシュートから切り替えやがった！）

切れ味が鋭く、敵に動きを読ませない白瀧のドライブ。宮崎も福井もこの動きを読みきることは出来なかった。

「本来ならどんな動作にも必ず移行する為に必要な動きがある。ドライブにしたって足に力を籠めたり相手をかかわそうとして体を捻ったりもする。だがあいつはその動作を必要としねえ。くずしによって初動を読まれずに最初の動き出しを行う事ができる。ロングシュートを警戒している状態じゃまず反応できねえ」

かつて同じチームであった時、彼のプレイについて何度か聞いていたことを思い出し、青峰は冷静に語る。

力を必要とせず最小限の動きで踏み込む白瀧のドライブは、彼のスピードと相まって最大の効果を発揮している。

第一Q、白瀧はあらゆる手段を講じた。これにより陽泉ディフェンスは彼のオフエンスを強く警戒している。ゆえに、警戒しているからこそ彼を止めることは出来ない。

「白瀧っ！」

侵入を防ぐべく、岡村が前に出た。腕を大きく掲げている為にスリーも容易には撃てないだろう。

白瀧は立て直すべく一度後に下がって——つられて前進した岡村の足元を通すバウンドパスをさばいた。

「むうっ！」

(狙いはインサイドの黒木か！)

「紫原！」

「わかってるよ」

白瀧からポストアップする黒木へとパスが通った。

ゴール下で同じセンター相手に好きにはさせられない。紫原は黒木の動きをしっかりと捉える。

「黒木さん！」

「ッ！」

だが、紫原の視界に白瀧の姿が映った。パスをさばいた後、そのまま岡村をかわして切り込んだのだろう。

黒木は紫原へと背中を向けたまま、ボールを持つ左手を白瀧へと伸ばす。するとリターンパスを警戒した紫原の体が白瀧へと流れた。

その隙を黒木は見逃さなかった。

白瀧へとボールを手渡さず、逆側へロールターン。紫原のマークをわずかにかわすと、彼の指先を越すべビーフックを放った。

「よしっ」

「さすが黒木さん！」

「よくやった！ ナイツシュ！」

(大仁多) 13対16 (陽泉)。黒木の今試合四得点目で大仁多が陽泉の逃げ切りを許さない。持ち前のオフエンス力で三点差をキープ

した。

「まるで白瀧が最初に撃とうとしたシュートの再現やな」

「白瀧君よりも5番の黒木さんの方が背丈も大きいし、シュートもブロックが難しいフックシュートでしたね。さすがにこの連携では紫原君でも止めるのは難しかったですでしょう」

「それもそうだが紫原が白瀧を警戒しすぎたつてのがデカイだろ。中学の時から元々嫌いだつたみたいだし、体がとっさに動いていた。やつはとことん陽泉に的を絞らせないように動いてきやがる」

試合開始直後のプレイを彷彿させるような動きに今宮は笑いながら口にした。

敵の強まった警戒と自分が嫌われていることまで利用した白瀧達の動き。徐々に白瀧の本領が発揮されていくと青峰も面白そうに笑った。

「——ッ！」

「落ち着かんかい紫原」

「ダブルチームとゾーンであのロングシュート封じは出来てんだ。お前がすっかりインサイドを固めていればこれ以上点差は縮まらない。頼むぞ」

「そんなことわかってるし。そつちこそしつかりやつてよ」

得点を決められた紫原は怒りをどうにか抑えているものの、今にも爆発しそうなほどの形相であった。

しかし今は試合半ば。このような所で我を忘れてもらっては困ると岡村達が必死に諫める。

紫原も現状を正しく把握しているのだろう。

大きく息を吐いて呼吸を整えると、静かにゴール下で味方が攻めに行く姿を見送った。

(とはいえ、大仁多のディフェンスを崩すことは容易じゃねえ。向こうもインサイド中心にオフェンスを組み立てることは分かっているだろう。オフェンスが失敗しても大仁多のファーストブレイクは防ぐようにしねえと)

(得点は決まったが、陽泉ディフェンスを攻め崩せたわけではない。

まだ点差を保っているだけだ。これ以上失点するとこちらが不利になる。何としても防がなければ)

第二Qが始まって両校とも得点を重ねたが、お互い守りが厳しい。おそらく大量得点は難しいだろう。となると少しの失点も抑えたい。

福井と小林、両校の司令塔の考えは一致していた。

そして彼らの予想は的中する。

まず陽泉のオフセンス。福井と宮崎が外から慎重にボールを供給するも、山本のステイールによって阻まれ、シュートまで持つていくことは出来なかった。

続く大仁多の攻撃も宮崎がファウルで白瀧を止める事で一次速攻を防いだ。その後のオフセンスも紫原が山本のレイアップシュートをブロックすると劉がディフェンスリバウンドを手にした。

両校共に得点できないまま二分が経過する。

「うおおおっ!」

「ごんのっ!」

岡村のパウードリブル。光月を強引に押し込もうとするが、彼も必死の抵抗を見せた。岡村を中へは入れさせず、動きを封じている。

「小僧、舐めるな!」

すると岡村は右足を軸に回転。光月をかわしてターンアラウンドシュートを試みた。

(抜かれ——いや、まだだ!)

「うおおおっ!」

ゴール下ならばやはり岡村の方が上だった。しかしパウードリブルを耐えていたためか岡村とゴールまでとの距離は遠い。

光月は後方から跳んで岡村のシュートを叩いた。

「ぐっ、うおっ!?!」

『ディフェンスプッシング! 大仁多^白9番^{光月}!』

「なっ……」

「フリースロー、ツーショット!」

ブロックは成功したが光月が岡村の体を押したと見なされファウルが宣告された。シュート時のファウルということで岡村に二本の

フリースローが与えられる。

「決めるよ」

「わかっとなるわい」

(……ドリブルが浅かったか。インサイドへ押し込めなかったのが大きかった)

「ドンマイ。むしろよく止めたよ」

「あのままだったら確実に二点入ってた。切り替えてリバウンド頼むぞ」

「うん、わかってるよ」

宮崎が岡村の肩を叩き激を送る。光月のパワーを改めて感じさせられたワンプレーだった。何れにせよフリースローをもらえたことは大きい。ここで点差を広げようと岡村は静かにルーティンを行う。

一方の大仁多は光月と白瀧が共にリバウンドに備える光月を励ました。まだ二点が決まったわけではない。それよりも今度は大仁多が三対二と数的に有利な場面だ。外れたときに備えようと三人は集中力を高める。光月もこの緊迫した戦況を理解し、すぐに表情を引き締めた。

一点を争う重要な場面。岡村はゆっくりと自然体で構えてボールを放った。

しかし一本目二本目ともにリングに嫌われ、陽泉は確実な得点の機会を逃してしまおう。

「……………ッ！」

「このアゴリラー！」

「もうそのモミアゲ剃れアル！ ゴリラに失礼アル！」

「反論できないのはわかっとなるが、主将に対する発言酷すぎるじゃろ!?!」

当然のように二本も外した岡村へ味方の批判は殺到した。主将と思っていないような発言の連発で岡村は心の中で号泣する。

「うおおおおっ！」

そんな中、光月が劉との競り合いに打ち勝ち、デイフェンスリバウンドを制した。

「よっしや。ナイス明！」

「うん！」

陽泉の追加点を再び防ぎきった。

二点、少なくとも一点は仕方ない場面を無失点で乗り越えたのは大きい。

このままカウンターで大仁多が得点できれば非常に大きな局面――

「馬鹿にしないでよ。これ以上得点なんて決めさせない」

「っ！」

「紫原！」

そんな大事な場面で大人しく失点を許す相手ではなかった。

宮崎は早々にリバウンドを諦めたのか、地上でポジションを取り合っていた白瀧から距離を開けて速攻を警戒しており、白瀧は速攻を決められなかった。

その後、小林が中の光月へとボールをいれ、光月から外の山本へ、そして中へと切り込んだ白瀧がチェンジオブペースからのダブルクラッチ。ボールを持ち替えて紫原をかわそうとしたが、紫原のブロックが間に合った。指先がボールに触れて、劉がボールを保持する。

「くそっ！」

（やはり陽泉のディフェンスは堅い。どれだけ揺さ振ろうともブロックにしつかりついてくる。だがこれ以上無得点の時間が続くのは厳しい！）

何とか踏ん張っているが、得点に繋げることは出来ない。試合開始直後のような流れになつては拙い。紫原という鉄壁がいる以上、先に状況が悪くなるとしたら大仁多のほうだろう。

その前に打開策を講じなければと小林は模索して。

「白瀧さん、小林さん！」

「ッ！」

「おっ！」

考えている最中、藤代が小林と白瀧の名前を呼んだ。

具体的な指示は先ほどのインターバルで話していたことだ。名前

を呼ばれただけで二人は監督の伝えたい事を理解してディフェンスに備える。

攻守が変わって陽泉のオフセンス。やはり福井と宮崎がボールを運び攻撃を組み立てようと試みた。するとボールを保持する福井に小林と白瀧の二人がハンスアップを行い、彼の身動きを封じた。

「なっ!？」

「大仁多、ここでいきなり仕掛けてきた!」

(ゾーン中央に構えていた白瀧をボールマンの福井に当てた。供給源を封じるつもりだ!)

あまり動きを見せていなかった大仁多ベンチが突然動き始めた。しかも小林と白瀧のダブルチーム。大仁多の最高戦力とも呼べる二人のディフェンスが福井に当たったとなればその衝撃はとても大きなもの。

(無得点はうちにとつて好ましくない展開だ。このままじりじりと時間を費やすわけにはいかない)

「もらった!」

「ぐっ!」

そして藤代の期待通り、白瀧が福井のボールをはじいた。しかもボールは山本の手に渡る。

「今だ!」

「攻めるぞ、山本!」

「分かってる!」

今こそ反撃の時。山本はすぐさまボールを前方へ山形に放った。小林が、次いで体勢を立て直した白瀧も駆け出した。

「マズイ、戻れ! 二人を止めろ! 福井、宮崎!」

「ちいっ!」

「くそおっ!」

荒木が必死に声を張る。紫原の守備範囲まで防げば陽泉は防ぎきることは可能だろう。

福井たちもそれを理解しているが、この二人を止めることは並大抵ではない。

何とか福井が山本からパスを受けた白瀧に追いついた。白瀧はレッグスルーでボールを持ち帰ると真横にパス。そこに走りこんだ小林へと綺麗にパスがさばかれた。

「なっ——！」

（さつき同じパターンを見たはずなのに。引つかかっちゃまった！）

「だが、ここで小林も止めれば！」

パスは通ったもののここで小林の足を止めれば敵の速攻を防げる。宮崎は小林のパスコースを塞ごうと手を伸ばした。——すでに小林はパスを放っていた。

「えっ——」

「ナイスパス、小林さん！」

（リターンパス！）

「そんな、まさか！」

小林は白瀧からボールを受けたと同時に白瀧へボールを戻していたのだ。

白瀧は両足で地面を強く蹴りジャンピングシュートを放つ。

ゴールからかけ離れた距離から撃たれたにも関わらず、彼のシュートはリングの中央をしっかりと捉えていた。

「さあ追いついたぞ、陽泉！」

（大仁多） 16対16（陽泉）。

第二Qが始まってから三分が経過。ついに大仁多が陽泉に追いついた。この試合始まって以来、追いつけなかった戦況を引っくり返した。

『陽泉高校、タイムアウトです！』

たまらず荒木はタイムアウトを取った。同点に追いつかれた勢いをそのままにしておくのは危険と判断したのだろう。選手達はそれぞれのベンチへと戻っていく。

「よしっ！」

「追いついたー！」

勇作達は自然と握りこぶしを作って感情を露にしていた。十三分かけてようやく試合を振り出しに戻す事が出来た。

大仁多の追い上げを見た観客達は盛り上がりを見せる。

「……………」が、分岐点となる」

そんな中で赤司は冷静にそう呟いた。彼の視線の先で紫原は静かに表情を暗くしている。

「追いつかれたか。こうなってしまったのは仕方ない。まだ大仁多はインサイドでの得点は簡単にはできていない。やはり白瀧のマークを」

「あー、まさ子ちゃん。それなんだけどさー」

「なっ。お前は話の途中で！ 監督と呼べ！」

タイムアウトを取った荒木が選手達へ向けて作戦会議を始めた。今陽泉の失点の原因の大半は白瀧だ。彼によって陽泉はこれまでにない失点を強いられている。

まず白瀧の対策を話そうとした荒木だが、彼女の話の最中で紫原が横から口を挟む。

「さすがにもう見てらんないんだよねー。頼みがあるんだけど」

「…………ツ。なんだ？」

思わず荒木でさえも一瞬すごんでしまうような静かな殺気に当てられて、口籠る。彼女が話を聞いてくれる姿勢になると、紫原はこの状況を根本から破壊する案を自ら提示し始めた。

「皆さん、よくやってくれました。すぐに補給を」

一方の大仁多ベンチでは藤代が東雲達へ補給を急がせていた。選手達、特に白瀧の体力の消費は激しい。相手がスペックに長けた選手達であるのは勿論のことこの緊迫した試合で精神的にも負担を強いられているためだ。

補給を済ませつつ、藤代は五人の選手達へと試合の話始めた。

「ディフェンスは2ー1ー2ゾーンに戻します。引き続き白瀧さんが中央を固めてくれれば敵も容易にはパスを出せない。速攻を警戒してガードの選手達も深くは切り込んでこない。逆にオフフェンスは中を重心に攻めていきましょう。最後にスリーを決めたことで敵の注意は外へと向かれてゾーンは広くなる。中から攻めやすくなるはずだ。パスで敵を引き付けつつ敵のディフェンスを掻い潜る！」

「了解です」

「同点で満足しないように。このまま第二Qで逆転まで行きましよう」

藤代の言葉に選手達は勢いよく頷いた。同点に追いつけたことで選手達の士気は高い。必要以上に浮かれもしない。実に良い雰囲気であった。

『タイムアウト終了です！』

「さあ行くぞー！ このまま逆転まで突き進む！」

『おう！』

一分が経過。小林の喝も入り、大仁多は勢いを保ったまま試合に臨む。

「さて、どう来る陽泉」

タイムアウトで敵には一体どのような指示が入ったのだろうか。

あらゆる戦術を考慮して敵の様子を観察。——そして、大仁多の選手達は明白な変化を目にして表情を凍らせた。

「……もう、駄目だ。気持ち悪い。これ以上見ると吐きそうだよ」

試合が始まる前から大仁多がひよつとしたら考えていた最大の恐怖。

今までの試合、一度も起こらなかったからこそないまま終わるのではないのかとも考えていた予測。

それは、紫原のオフセンス参加である。

彼はゆっくりと一歩ずつ大仁多のゴールに近づいてくる。

「何もかも下らない。お前らが何時までも調子に乗って向かってくるのは見るのもうんざりだ」

相手はまだ何もしていない。ただゆっくりと歩いているだけだ。それなのに、敵の姿を見て選手達の心臓の鼓動は強くなり、頬を冷や汗が伝う。

（おい、おい。こんなの、止められるのか!?!）

（ついに来やがった!）

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ……!」

徐々に距離が縮まり、白瀧は自分の呼吸がどんどん荒くなっていく

ことに気づいた。

「意志だの、想いだの、覚悟だの、信念だの——何もかも、捻りつぶしてやるよ！」

紫原がついに自陣のゴール下から動いた。本気で大仁多の蹂躪を開始しようとしていた。

——黒子のバスケ NG集——

「……もう、駄目だ。気持ち悪い。これ以上見ると吐きそうだよ」

試合が始まる前から大仁多がひよつとしたら考えていた最大の恐怖。

今までの試合、一度も起こらなかったからこそないまま終わるのではないのかも考えていた予測。

それは、紫原のオフエンス参加である。

彼はゆっくりと一歩ずつ大仁多のゴールに近づいてくる。

「何もかも下らない。お前らが何時までも調子に乗って向かってくるのは見るのも——うっ」

「ん？」

「やべっ。マジで気持ち悪い。吐きそう」

「ちよっ！　ここで吐くな！」

「試合前のお菓子食べ過ぎたかも」

「なんで試合前にお菓子食べてるんだよ!？」

紫原が感じた気持ち悪いは本当の体調不良だった説。

第八十四話 運命の四分間

ここまでディフェンスのみに参加していた紫原がついにオフENSに加わった。キセキの世代の中でも才能は最高を誇るとまで呼ばれていた最強のセンターだ。今さら彼の強さを疑うことはない。ゆっくりと歩みを進める巨人を目にして大仁多の選手達に緊張が走る。

(まだ第二Qだ。こんなにも早くあいつが自ら積極的に動き出すとはな。感謝するよ、大仁多。あの怪物を呼び起こしてくれて)

予想外だったのは大仁多だけではない。

陽泉を指揮する荒木にとっても紫原のオフENSは予想外の出来事であつたし、何よりも喜ばしい事だった。

気分屋な一面を持ち、面倒を嫌う扱いが難しい選手の紫原が早くも敵を蹴散らすために動き出した。同点に追いつかれて大仁多の士気が最高潮に達しようとしていたこのタイミングで生じた彼の心境の変化は大きなものである。

「さんざん点を取ったんだ。もう満足でしょ？ 終わらせてやるよ！」

この試合も、お前達の希望も！ 全て！」

強張った表情で紫原はそう言い放った。長身からの言葉には音量以上の凄みがある。

ようやく陽泉のオフENSも五人、守る大仁多と同数になることで早速オフENSにも変化が生じる。

福井は中央のポジションに立って四人がそれぞれのポジションに入るのを待つて、左サイド45度の外に陣取った紫原へとパスをさばいた。

「外でパスを受けた!？」

「あいつ、センターの選手じゃねえのかよ!？」

ボールを貰った紫原はそのままドリブルを開始。すぐ近くで腰を低くして身構えている白瀧を観察しつつ、突破を狙っている。

紫原はセンターのポジションで登録されている。それなのに得意のポストプレイではなくアウトサイドからオフENSを展開しよう

とする彼のプレイに観客も、大仁多の面々も驚きを隠せない。

「西村、やつのオフエンスはどうなんだ？」

大仁多ベンチでは神崎が紫原をよく知る西村へと問いかける。

紫原がオフエンスを得意としていないのならばまだ希望はあったのだが。やはり現実はそう上手くはいかない。

西村は暗い顔つきでゆっくりと説明し始めた。

「……本職は当然ゴール下からのポストプレイです。ですが外から1 on 1を仕掛けても無双の強さを発揮するでしょう。中二の時、一度だけ赤司さんと二対一で戦っていた光景を覚えています」

「赤司ってキセキの世代の主将か!？」

「はい。あと少しのところまで追い詰めていました。この1 on 1の能力と、センターとしての実力によるオフエンス能力は脅威です。かつて一試合で100得点を記録したという話もありました」

「一試合で100、得点……!?!」

「馬鹿な!」

紫原の予想をはるかに凌駕する実力に、彼の話を聞いた選手達は動揺を隠せなかった。

そしてその相手をするとなればどうなってしまうのか。不安が募る中、それでも彼らは彼らが信じるエース、白瀧へと視線を向ける。

大丈夫。きっと今までみたいに突破口を見出してくれるはず。

（ゾーンが崩れてしまうが仕方ねえ! 紫原をとめることが最優先だ!）

白瀧は紫原のチェックを強めてドリブルを警戒する。他のパスやシュートへの対応は疎かになってしまいが、今は紫原をとめることに専念することにした。

「ふーん。白ちん、俺を止める気?」

「あたり前だ!」

「じゃあ——やってみろよ!」

怯んでいないわけではない。だが表面上は勇敢な姿勢を取り繕っている白瀧の姿を見て、紫原はさらに苛立ちを強くした。

そして紫原は白瀧が接近した事によって出来たコースにパスをさばくのではなく、やはりIronyを仕掛ける。

彼の長い手を活かした切り返し。一度ボールをついただけで大きな加速が生まれた。

(速い！・しかし！)

巨体とは思えない切り込みだったが白瀧はきちんと対応した。腕を伸ばして紫原と並走する。

すると紫原はロールターンでさらにもう一度切り返す。流れるような素早い動きに白瀧が虚をつかれた。

「……ッ！」

「あのデカさでこの身のこなし！」

「な、めるな！」

振り抜かれたのは一瞬だ。白瀧はすぐに肉薄し、ゴールへ跳んだ紫原をブロックする。

「ふーん。だから何？」

だが、追いついた白瀧を嘲笑うかのように紫原はボールを掴んでいる右手をリングへ叩きつけた。

衝撃は異常な強さをほこり、ブロックを狙った白瀧を軽々と吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

「白瀧！」

陽泉が再び二点を勝ち越した。

乱暴にコートに叩きつけられた白瀧は苦痛に顔を歪める。チームメイトが心配そうに声をかける中、紫原は興味を失ったのかすぐに視線をそらした。

「やつを力だけの選手と思ったか？ 強さとデカさは語るまでもなく。俊敏性も長けているんだよ」

これが陽泉のエースの力だ。

呆気なく大仁多のエースに打ち勝った紫原の力を荒木は力説する。

力、大きさ、速さ。あらゆる面で優れる陽泉の天才を打ち破ることは不可能だと。

「しかし、紫原がオフセンスに参加したというのならば!」

「こっちが得意の展開に持ち込める!」

しかしながら紫原のオフセンスを見た後でも大仁多の気迫はそれがいていなかった。紫原が自陣のゴール下から出てきた今ならば、第一Q中常に封じられていた大仁多の得意パターンを実行することが出来るからだ。

黒木がすぐにもリスタート。小林へボールを出すと同時に転んでいた白瀧が勢いよく前線へ駆け出す。

「むっ?」

（白瀧が走り出した? まさか!）

「走れ、白瀧!」

「了解!」

岡村達が大仁多の目的を悟ったが遅かった。小林は矢の様な送球を高い弾道で打ち上げた。

その高さは劉が咄嗟に腕を伸ばしても届かない。

先に一人敵陣に向かっていく白瀧へと放たれた、二人専用の新技タツチダウンパスだ。

（紫原の突然のオフセンス参加だったというのに。全く臆する気配はなしか!）

陽泉の奇襲に怯む事無く、好機を逃さない。大仁多の選手達の姿勢に荒木は素直に感心した。

「素晴らしい。きつと成功していたのだろうな。——相手が紫原でなければ」

結末を悟った事から懐けた冷静さの為に。

先頭を走っていた白瀧だったが、彼のすぐ後ろに紫原はついて来ていた。

「なにっ!」

（俺の後ろに、追いついて来たと言うのか!?!）

「何驚いてるの? もう好きにはさせないよ」

敵の意表を突いたはずだ。ところが紫原は白瀧の速攻に呼応し、迫っている。

「で。えーと、ここら辺かな？」

そして先に跳んだのは紫原だった。

白瀧が跳躍してパスを受け取るよりも早い位置で跳んだ紫原。彼は火神をも越える最高到達点で小林からのパスを叩き、自分の懐にボールを呼び込んだ。

「た、高いっ！」

「嘘だろ……！」

（火神でさえ止められなかった新技をこうも呆気なく）

（止めやがった！）

合宿中、キセキの世代との試合の為に何度も何度も練習した小林と白瀧の新技。火神も止められなかった白瀧と小林の速攻は、紫原によつて一回目で失敗を記録した。

「ナイス敦！」

「んー」

ボールを奪った紫原は追いついた福井へとボールを戻した。

これで再び陽泉のオフENSに移る。

ゆつくりとボールを回す陽泉。紫原が今度はハイポストに入り、白瀧に背を向けて面取りを行った。

（今度は中から！ くそっ！）

紫原はしっかりとシールして白瀧を前に出させない。

（スティールが出来ないなら、せめて時間を稼いでコイツを止めなければ！）

前に出られないならば紫原の動きを制限し、味方のフォローを待つしかない。

白瀧はしっかりと腰を落として紫原へ向けて力を籠める。

「ん？ もしかして今、俺を止めようとしてる？」

必死に力を振り絞っている事を感じたのか、紫原が背中越しに声をかけた。

「無駄だよ」

そんな彼の抵抗など無意味だと言わんばかりに、紫原は全身の力で押し返した。

「うぐっ！」

(だ、めだ。押し込まれるー！)

彼の力は太刀打ちできるものではない。白瀧は時間稼ぎさえ出来ずあつという間にポジションを奪われていき、紫原がゴールへ近づいていく。

すると福井は宮崎のスクリーンで小林をかわすと紫原へパス。

高い位置でボールを受けた紫原はそのままターンアラウンドシュートを撃った。

白瀧は身動き一つ取れず、彼のシュートを見送るしかなかった。紫原、連続得点。

「圧倒的だ……」

(2―1―2ゾーンディフェンスは紫原さんがオフフェンスに来ないのを想定してのものだ。今までは小林さんが高さを活かしてインサイドへ直接ボールを供給できなくし、白瀧さんの瞬発力でパスコースを封じていた。だが紫原さんがいて、しかも速攻も止められるとなるとガード陣も切り込んで来る。パスもしやすくなる)

たった一人。超越した力を持つ選手によって大仁多のディフェンスは変更を余儀なくされていた。

紫原が出てくるまでは高さのミスマッチをつけた小林が頭上を越すパスを不可能とし、さらに白瀧のロングスリーの影響もあって敵のガード二人がドライブを容易にしそこなかつた。

だが紫原が先ほどタッチダウンパスをとめた事で状況は一転。福井と宮崎もオフフェンスに参加しやすくなり、パス回しが活発となる。

藤代は早々に作戦を変更し紫原に備えるべく動く事を決断した。

「とにかく取り返すしかない」

「頼むぞ、白瀧」

「ええ。わかっています」

大仁多のオフフェンスは作戦をそのまま続行することとなった。

小林と白瀧がボールを運んでいく。機会を窺って白瀧のロングス

リーをちらつかせれば敵の注意も散漫となるだろう。

「っ!？」

「なっ、えっ!？」

だが。

「来なよ、白ちん」

紫原がセンターライン近くで立ち尽くしている姿を見て、大仁多の選手達は再び驚かされることとなった。

他の四人は先に自陣に戻り、ゾーンを組んでいる。前列は福井と宮崎が、後列は岡村と劉が備える四角形の2―2ゾーンだ。

紫原は白瀧の姿を見据え、警戒している。

「これは、ボックススワンか？　しかしー!」

「まさか紫原が白瀧をマンツーマンでマークするつもりか!？」

陽泉のデイフェンスは2―3ゾーンデイフェンスからボックスワゴンに変更されていた。

たしかにこの戦術自体は理解できるものだ。対一の能力に長け今は長距離シユートをも持つ白瀧にマンマークをつけるのは領ける。しかしセンターの選手が白瀧をマークするとなれば話は別だ。

「紫原は徹底的に白瀧を潰すつもりだな」

観客席、紫原の意図を読み取った赤司が機械的に呟く。

「今、紫原はおそらく彼を倒す事だけを考えている」

「木吉先輩?」

「……かつて俺が戦った時と同じだ。対一で圧倒し相手の希望を摘み取っていく!」

同じ事を感じた木吉は震える声で呟いた。彼が懐いた感覚、かつて一度真っ向から戦った際に何も出来ないまま捻り潰された自分の姿を白瀧に重ねて。

(紫原……)

岡村は先ほどのタイムアウトの時の様子を思い浮かべながらエース二人の姿を眺めていた。

『白ちんは俺一人で任せてくれればいいよ』

『一人って、大丈夫なのかよ?』

『あいつはドリブルだけではなくさつき見せていたロングスリーもあるんだぞ?』

『大丈夫だって言ってるでしょ。全部止めてやるよ。白ちゃんには致命的な弱点があるし』

まるで今までの白瀧の活躍など気にも留めていないような口調であった。淡々と敵の弱点を語った紫原。

常人ならばエースを封じ込めることは至難の技だ。しかし、威圧感を醸し出している紫原からは一切の疑問も迷いも感じられない。

「ッ……」

あくまでもハーフラインからは動かないのだろう。白瀧がそこに達するまでは距離を保っている。

白瀧は一度ボールを小林へと戻してから共にコート半分を超えた。

すぐさま紫原がチェックにつく。スリーとドライブを同時に警戒してわずかに距離をあげながら白瀧を追う。白瀧が幾度もフェイントをかけるがまったく揺さ振られない。

「こんのっー」

「一点もやらないよ」

カットで振り切る事も出来なかった。フリーになることが出来ず、小林はすぐに白瀧へパスを出す事が出来ない。

「弱点の一つ目。スピードを封じられると、白瀧は一気に弱体化する」

荒木は紫原が晒していった白瀧の弱点を改めて確認するように口を開いた。

「やつは多種多彩なバスケスタイルを持っているが、その根本にあるのはスピードだ。自慢のスピードを土台に様々な技術を詰め込んだと言ったほうが正しい。しかしそれゆえに自慢のスピードが通じない相手と戦うとき、彼の实力は半減されてしまう」

確かに白瀧の速さは脅威だ。古武術の組み合わせやあらゆるテクニクを持ち合わせているが、彼が得意とする速攻をはじめとして、彼の一番の武器と問われればやはり速さとなるだろう。

だからこそ、その速さについてこられる選手が敵となれば白瀧の戦力は半減されてしまう。

「俺と戦った時もそうだった。はじめはドリブルだけでは突破が困難であったはず。だからこそ様々なステップやシュートで翻弄していたのだが……」

今回は突破口を切り開く事は難しい。

楠はかつて自分と戦った時のように白瀧が何かしらの技術で攻略法を見出すだろうと願うものの、彼の視線の先で白瀧が放ったティアドロップは後方で跳んだ紫原のブロックによって阻まれる。

「くっ！」

「その程度で抜いただなんて思わないですよ」

『アウトオブバウンズ！ 白^{大仁多}ボール！』

かろうじてパスは通せてもシュートを決めることは出来なかった。

白瀧は紫原のブロックをかわせず、攻撃は失敗に終わる。

引き続き大仁多のオフエンス。

山本が小林へボールをさばき、白瀧と連携してゲームを組み立てるが、やはり紫原のマークを振り切れない。

(……駄目だ。シュートは撃てない)

(マジかよ。あの白瀧がここまで封じられるなんて)

「白瀧！」

(こうなったら俺達が！)

シュートまで仕掛けることが出来ず、白瀧は小林へボールを戻す。

すると小林はトップからハイポストへ高速のドライブで切り込んだ。福井のマークを突破し、レイアップシュートを撃つ。

「儂らを忘れてもらっては困るぞ。小林！」

「ッ。岡村！」

だが小林のシュートは岡村のブロックに阻まれた。長身の小林よりもさらに高さを持つ岡村だ。はじかれたボールは劉がディフェンスリバウンドを制し、陽泉の手に渡る。

連続で攻撃を失敗してしまった大仁多。さすがに一本止めて嫌な雰囲気を一掃したい。

「……黒木さん！」

そう考えた藤代は黒木の名前を呼んだ。これ以上の失点は防ぎた

い。敵が新たな動きを見せる前に大仁多が一足早く動き出した。

再び陽泉の攻撃。

またしても紫原は白瀧が守るハイポストの位置に入った。多くの人間が考えるように紫原は彼の打倒を考えているのだろう。

すると、白瀧だけではなく黒木も現れて二人がかりで紫原のマークについた。

「おっ」

「白瀧と黒木のダブルチーム！」

（ゴール下が手薄になつてしまおうが）

（まずは紫原を止めないと話にならない！）

岡村と劉、二人のポストプレイヤーどちらかがフリーになつてしまふ。その危険性よりも紫原の方が脅威であるとの判断だ。

これ以上紫原が中に侵入できないよう、黒木と白瀧は全力で紫原の押し込む力に対抗する。

「本当、わかつてないな。一人が二人になつたところで何も変わらないんだけど」

「なっ!？」

（嘘だろ。まさか）

そんな二人の抵抗さえ無駄だと紫原は一笑に付した。宮崎からボールを受けた紫原は右手でボールを力強くつきながら、二人を背中で押し込んでいく。パワードリブル。

大仁多が二人で挑んでいるにも関わらず紫原はあっさりと押し勝つと、そのままジャンプシュートを決めていった。

（二対一、しかも黒木さんがいたというのに止められない。なんてパワーだ）

あっさりと対策を打ち破られた。徐々に大仁多は厳しくなつていく。

何とかオフエンスを成功させたいところだが、再び紫原はハーフライン付近で白瀧を待ち構えていた。

（このっ！）

「……いいのかよ紫原。その位置で。そこからだとハーフラインより

手前で撃たれたら止められないんじゃないか?」

白瀧は僅かに口角を挙げて紫原に問いかける。

必死な強がりだろう。これで少しでも紫原が警戒を強めて隙が出来ればと挑発した。

たしかに彼の言うとおり陽泉側はまだ白瀧のロングスリーの限界を知らない。さらに広いシュート範囲を持つていたら脅威は増す。

「必要ないよ。だって、白ちんハーフラインより手前からじゃ撃てないでしょ?」

「……………」

だが紫原は挑発に乗らなかった。冷静にそう断じて姿勢を崩さない。

白瀧は表情こそ変えなかったものの、敵に凶星を突かれて内心穏やかではなかった。

「あのロングスリーはハーフコートが限界? なんでもそう言い切れるんだ?」

「たしかに緑間君の前例があるから惑わされそうですが、白瀧君の考え方を想定すると、あれが限界です」

桐皇の選手達は桃井も白瀧のシュート範囲はハーフコートまでだと分析し、断言した事に質問していた。

「青峰君の言うとおり、白瀧君は強力な技を見せる事で敵に警戒させ、その裏をついていく。もしも彼が緑間君ほどのシュートレンジを持つならば最初からそうすることでより信憑性を増やし、警戒心を強めさせたはず。ですがそうしなつた。これが理由です」

本当に白瀧が緑間に匹敵するオールコートシュートレンジを持つならば最初にロングスリーを放ったときに見せていただろう。彼の性格、戦術ならばそうしていた。

だがハーフコートから撃つてきたということは、すなわちそれが彼の限界であると桃井は語った。

(元々バスケットボールをコート半分から撃つただけでも難易度が高すぎるんだ)

(練習でもハーフコートが限界だった。それ以上となれば、緑間のよ

うな選手でなければ無理だよ！)

敵は白瀧の動きを完璧に封じている。ロングスリーも決まらないとなると、立て直しは非常に困難だ。

このままではまた第一Qのように無得点の時間帯になってしまうのではないか。大仁多の選手達の顔に焦りが生まれた。

小林は高さを活かし、ローポストの光月にボールを入れる。直後、中央へと走り逆側から走ってきた山本と入れ替わる。さらに山本を追ってきた宮崎をスクリーンで封じた。

「あつ？」

「チェック！ 山本だ！」

フリーになった山本へ光月がパスアウト。トップの位置で山本がフリーでボールを手にした。

「山本さん！ 駄目だ！」

「え？」

山本がスリーを放とうとした瞬間、彼の背後にいる白瀧から警告が飛んだ。

「うらあああああ！」

その叫びの後、同じく背後にいた紫原が山本のスリーを叩き落とし、

「うわっ！」

『アウトオブバウンズ！ 白^{大仁多}ボール！』

紫原のブロックショットが炸裂。ボールはラインを割ったため、何とか大仁多は攻撃を続けられることとなった。

(頭から抜け落ちていた。そういえばこいつはスリーポイントラインの内側全てを守る守備範囲を持っていた)

(たとえ白瀧のマークについていたとしてもボールを持っていなければヘルプには出れる。加えて背後からブロックされれば反応も出来ない)

しかしボールをキープしたとして、陽泉のディフェンスを突破することは難しかった。

今度はインサイドからシュートを狙うものの光月のジャンプ

シュートは岡村の指に当たって決まらない。ボールはリバウンドの結果にゆだねられた。

「うおおおおっ！」

「……………んのおっ」

(ヤバイ。この密集地帯では技術で挽回どころではない)

ゴール下は二メートル三人が集う激戦区だ。白瀧がなんとか合間を縫おうとしてもどんどん外側へと押しやられてしまい、結果紫原がボールを掴み取った。

「……………くっそっ！」

「残念だったね白ちん」

「紫原！」

ボールを宮崎に預けた後、悔しがる白瀧を見下して紫原は言う。

「そろそろ現実がわかった？ バスケは結局でかくて強いやつが勝つ理不尽なスポーツだって。ま、白ちんにもあと10センチ、せめて5センチ背丈があったなら。もしくはフィジカルの強さがあったなら。少しは変わってたかもしれないね」

「そ、それが。それができたなら！」

「だよ。それが無理だったから、そうしなかったから。白ちんは勝てなかったんだよ」

残酷なバスケというスポーツの真実、身体能力に欠けたお前では勝ち目はないと。かつて身体能力を手にする為に動けなかった、動かなかったお前では太刀打ちできないと。

「……………おい黒子。まさかお前が言っていた白瀧の弱点って」

「はい。おそらく火神君が考えた通りです」

「でも弱点と言うほどなのか？ 確かに長けているとは到底言えなかったけど、弱点って言うほどではないんじゃない」

「いえ。確かに弱点よ。私も見たから」

彼らの戦いを目にして火神はようやく黒子が話していた言葉の意味を理解した。

しかし弱点と呼んでよいものなのかわからず、口を濁す火神にリコも黒子に同調して続けた。

リコも二回戦が始まる前に目にしていたのだ。白瀧が全国区のS Fとして戦うには劣っている一面を。

「――非力。全国制覇を果たしたチームのインサイドを任されていたとは思えないポテンシャル。おそらく今の状態でようやく平均くらいよ。技術で上手く振舞っていたけれど、パワー勝負ではまず絶対に勝てない。パワープレイヤー相手に限ったことじゃない。おそらく同じポジションの相手でも厳しいわ」

パワーのなさだ。

これまで勇作や火神、岡村といったパワー自慢の選手達とのマッチアップも多かった事に加え、リバウンド等のパワープレイでも技術を駆使してこなしていたから弱点と呼べるか曖昧だった。リコも分析が衰えたのではないかと疑った。しかし今日の試合を見て、黒子の話を聞いて確信に変わった。

「そんな。……でも何でだ？ 身長の方ならまだしも力が弱点というのなら」

「なんで弱点を克服しなかった、ですか？」

「あ、ああ」

ならばなぜ克服しなかったのか。

白瀧くらの背丈でも力に長けた選手はいる。彼も帝光中に所属していたのならば鍛える環境も整っていたはずだ。それなのに何故？

そんな火神の疑問に答えたのは黒子だった。

「それは違います。正確には克服しなかったんじゃないやありません。克服できなかったんです」

黒子は重々しく語る。

全てはあの日から始まった。

あの時、白瀧が壊されたときから、全ての歯車は狂っていた。

「以前に話しましたが、白瀧君は中二の時に肩の脱臼を経験しました。結果四週間の保存療法を余儀なくされて筋肉は萎縮した」

「ああ。前に聞いたけど」

「その後当然病院で数週間ハビリが行われました。ですが病院で行わ

れるりハビリはあくまでも日常生活に戻るためのりハビリです。衰えた筋肉が完全に戻るわけではありません。もつとも初回であったこともあり一般の方ならば日常生活に支障が無くなる為にリハビリには通わなくなるそうです」

「だがスポーツ選手ならば話は別だ。筋力の回復などに努める為にまた通う必要がある」

「その通りです」

自身も怪我の経験があるからだろう。木吉が黒子の話を引き継いで口にする。

本来ならば何も問題がないはずだが、やはり何かあったのだろう。黒子は話を続ける。

「ですが白瀧君はそうしなかった。リハビリのメニューは貰ったものの、病院には通わず個人で行いながら帝光の練習に少しずつ参加していききました」

「はっ？ そうしなかったって、どうして!？」

何故理想的な流れから外れてまで帝光に戻ったのか。火神は納得できなかったが、理由は単純なものだった。

「そうしなければあの時帝光は崩壊していた!」

そうしなければ、それはもう白瀧要ではない。

紫原に『どうして一人で鍛えようとしなかったのか』と問われた白瀧は、感情を爆発させた。

「ならば他に誰が救うことができた!？」

もはやあの時、白瀧にはそれを選ぶしかなかった。

「誰が彼らの嘆きに応えられた!？」

圧倒的な力を前に、失意に沈む仲間の声を無視することはできなかった。

「誰が彼女の涙を、止めることができた!？」

離れてしまった仲間を想い、涙する桃井の痛々しい姿を見て見ぬふりはできなかった。

慟哭が響く絶望の中、彼の耳に届いたささやかな願い。全ては悲劇の連鎖を断ち切るために。

頼りとしていた監督は病に倒れ、代わって監督の座に座ったコーチは話を交わしても「キセキの世代」の特別扱いをやめることはしなかった。「キセキの世代」は力が強すぎるが故に離れていき、他の部員達は力が届かないが故に挫折を味わった。外から見ていることしかできないマネージャーは自らの手では変えられない現状に涙を流した。

誰も負の連鎖を断ち切ることはできないまま時間が過ぎていく。一度狂った歯車は自然に治ることはない。徐々に溝は大きくなっていき、チームの形は跡形もなくなっていく。

——それを、許せるはずがない。

自分が戦わなければ、一体誰が帝光を支えるというのか。

今も仲間が戦い傷つき絶望し壊れていく様を眺め、自分だけが一人のうのと離れた場所で声援を送り力をつけるなど。

そんなもの願い下げだ。

(足掻く事さえ諦めて、目の前の仲間を見捨てて、何が選手だ。何が仲間だ)

白瀧の心は強かった。仲間を絶対見捨てない程に。

白瀧の心は弱かった。仲間を決して見捨てられない程に。

だからこそ、仲間の為に戦った。己の選択に後悔はない。自分がなさなければならぬという想いがあつたから。どれほどの苦境に陥ろうとも、どのような困難が待ち受けようとも、大切な人達が助けを求めていればその力になろうと駆けつける。たとえ自分の身がボロボロになろうとも。

これがキセキと対等の立場を取り戻そうと、同じ場所に立ちたいと思いつながらも、彼らのように一途に強さを追い求めるにはあまりにも優しく、そして真面目すぎた男の本音だった。

良くも悪くも真面目すぎた彼は誰かに悩みを打ち明けることもできず、一人で背負い込み、そして潰れていく。

「だけど再発はしなかったんでしょ？　なら結構鍛えられてもおかしくはなさそうだけど」

赤司から白瀧の過去の動向を聞いた葉山はふと疑問を懐いて聞き

返した。

そう。かつて西村も言っていたように白瀧の怪我は再発していない。ならばもつと鍛えられても不思議ではない。

「再発していないだけで怪我の影響が無いと思うか？ やつの怪我は9割の確率で再発するというのには？」

「きゅ、九割?！」

「あいつは賢いからな。現実を正しく理解していたよ。もし再発すれば、今度こそ仲間を救う手段を完全に失ってしまう。だからこそ、無理に筋力を鍛える事さえできなかった。——再発の恐怖を蘇えさせられた後はなおさらな」

再発すれば今度は半年ほどチームから離脱するかもしれない。しかも再発の可能性は非常に高い。己の怪我の深刻さを理解していた白瀧は負担を強いることは出来なかった。

『——ッ!』

『うっ!?!』

『どうですか、白瀧さん! 今の——』

特に西村との特訓で怪我を呼び起こされた後は余計に意識することとなった。

「確固たる信念を持った生真面目な男が、理不尽な現実と折り合いをつけられるわけがない」

確かに捨てることができれば楽だったのだろう。このような苦しみを味わうくらいならば、悲劇から目を逸らして前へ進めばいいのだと。

だが、どうしても捨てることなどできなかった。簡単なことなのに、自分の治療のことがあるからと名分もあるはずだったのに、それなのにどうしても白瀧は彼らの希望を捨てることができなかった。

諦めようとするたびに、仲間の顔が次々と浮かんで彼に問いかけた。『それは本当に正しいのか、本当にお前は後悔せずに進めるのか』と。

こうして多くの者に手を差し伸べ力を尽くした白瀧は——自分を救うことはできなかった。

一番良い結果を求めての選択は、決して彼が望んで選んだ選択ではない。利害ではなく、善悪の判断で動いてしまった代償。

普通の選手だったならばあの環境下では耐えられなかったかもしれない。だが白瀧は過酷な、劣悪な状況にさえ適応してしまった。だからこそ途中で投げ出すこともできなかった。

（そうだ。俺達だってわかってた。白瀧さんが無理をして戻ってきてくれたことくらい。なのに、わかっていながら、俺達はさすがのしかなかった）

西村も理解していた。あの時も白瀧はリハビリの最中であつた。皆もわかってた。

もしあの時彼がいなかったならば、きっと西村は今のようになつてはいなかっただろう。それどころかバスケットを辞めていた可能性さえありえた。

それほどまでにあの時の帝光バスケット部は限界を迎えていた。そして目の前で絶対の象徴である『キセキの世代』に晒された彼らにとつては、白瀧の悲しいほどに強い決意だけが救いだつた。

「なんだよ、それ」

一通りの話を聞いた火神は内にこみ上げた感情を抑えられなくなった。

周囲の環境や人の変化に希望を見失つた。原因こそ違えどもまるであつての火神、そして青峰と同じような状況ではないか。

決定的に違うのは彼が失意のうちから仲間へと目を向けたこと。当時の二人は自分のことしか見えていなかった。だからこそ孤独の道を選んでいた。

「じゃああいつはそのためだけに、コートに戻つたつていうのか？ただそれだけを思って、戦つていたつていうのかよ!？」

だが彼は周囲の者達の為に立ちあがつたというのか。とてもではないが理解できなかった。

「要は彼の選択が間違つてたというわけ？」

「別に間違つてたとは言わないさ。事実あの男がいなければ確実に帝光というチームは跡形もなくなつていただろう。——だからこそ

愚かだ。正しさを武器にできるのは強者のみ。弱者はその重みに耐え切れず自然と押し潰されていく」

仲間を思つて戦う勇敢な男だった。希望を信じて疑わない純粹な選手だった。それゆえに、愚かだった。

実測の問いに赤司は否定しつつも白瀧の考えを冷たく批判した。力が足りない現状で彼の選択は何も成すことが出来ずに消えていくだけだ。

紫原のオフエンスを止めることが出来ず、ドリブルで切り込んでからのジャンピングシュートも紫原に阻まれた。

「ぐっ！」

「よっし。行け紫原！」

こぼれ球を拾った宮崎が前線へロングパスをさばいた。

紫原がそのボールを掴んで敵陣へ突き進む。突然の陽泉速攻に大仁多の反応が遅れる。白瀧もブロックされた為に僅かにスタートが遅れた。何とか追いついたものの、紫原はヘジテーションで緩急をつけクロスオーバーで白瀧のマークを突破する。

「ッ！」

「よっし！」

「行かせない！」

白瀧の横を突破した紫原だったが、その間に光月が辛うじて追いついた。ドリブルしている敵に追いつくのがやっとだが食らいつついている。

敵が追いついてきている中、紫原は構わず跳躍。右手を振りかざしてシュートを狙った。これに光月も呼応して横から精一杯手を伸ばした。

「邪魔だよ」

だが止められない。光月の懸命なブロックを紫原がダンクシュートで蹴散らした。

「ぐあぁっ！」

「明！」

最早ディフェンスは何の用もなさない。コートに倒れてしまう光

月。白瀧が無事を確認するため近寄っていく。

「光月さんを、吹き飛ばした……？」

（白瀧さんに匹敵するスピードと、光月さんを吹き飛ばすパワー。天は二物を与えたというのか！）

圧倒的だった。藤代でさえ天才と称された才能を目の当たりにして動揺を隠せない。

「ほら。守ってみたら？ 大切な仲間なんですよ？」

どうせ守れるわけがないと確信を抱いて破壊者は告げる。

お前達がやっていたのはただの友情ごっこだったのだと、ワンマンプレイヤーに嗤われた気がした。

——黒子のバスケ NG集——

黒子は重々しく語る。

全てはあの日から始まった。

あの時、白瀧が壊されたときから、全ての歯車は狂っていった。

「以前に話しましたが、白瀧君は中二の時に肩の脱臼を経験しました。

『クツ。痛すぎて右肩が疼く！ 危険だから皆今すぐ俺から離れ—

—』

「いやそれ中二病—」

壊された（精神的）。

第八十五話 〇〇、〇〇時

「ハッ、ハッ、ハッ……ハッ！」

呼吸が早まった原因は疲労から来るものだけではなかった。

『ほら。守ってみたら？ 大切な仲間なんですよ？』

かつてのチームメイトから挑発とも取れる言葉を告げられて、白瀧の脳裏には無数の記憶が蘇っては彼の心に大きな負担を与えていた。それは帝光中時代、白瀧が守りたいと思いつながら何も出来なかったときの記憶。

その時の仲間の顔が、今の太田のチームメイトの姿に重なった。

「やめろ。——やめろ、紫原！」

また仲間を失うわけにはいかない。あんな思いは二度と、誰にもさせるわけにはいかないのだから。

前人未到の全国大会三連覇。

圧倒的な強さは他の追随を許さない。頂点まで常に走り続けた結果は何よりも素晴らしい。最強たれと強さをひたすらに追い求めた理念は確かにまたとないキセキを生んだのだろう。

しかしその輝かしい栄光の裏で、傷つき絶望し部を去った者達がいたことを。チームの輪が乱れる光景を目にした果てに涙を流した少女がいたことを。

彼は絶対に忘れない。彼が忘れてはならない。

二年前、東京都内の病院。

「——よしっ。経過も順調。もう大丈夫だろう。今までよく頑張ったね」

「はい。ありがとうございます、先生」

受診していたのは全国大会で右肩を負傷した白瀧だった。負傷からしばらくの間保存療法を義務付けられていた彼であったが、ようやく

く損傷部の組織が生着し、肩部周囲のリハビリを重ねる事で日常動作も支障がない程に回復していた。

全国大会まで勝ち残るほどのチームに所属する彼が長期間バスケットボールという競技から離れていたのだ。そのストレスは常人以上であつただろう。検査が一通り済むと医師は不満を漏らす事無く回復に務めた患者を褒め称え、白瀧もそれに応えた。

「辛かつただろうが、これにて治療は終了となる。——だが、治療を始める時にも言ったように、今回の君の怪我は再発が懸念されるものだ。ひよつとしたら今後スポーツを続けるにあたって常に付き纏うものかもしれない」

「……はい。わかっています」

「再発を防止するためにも、私は術後のリハビリをお勧めする。監督からも君の事は聞かされているからね。万全にしておいた方が良いと思う」

「リハビリですか。これまでのものとはまた別に？」

「ああ。固定器具装着時は肩関節を動かすことが出来なかったからあくまでも現状維持の運動を行っていただろう？ だから今後は関節の動きを取り戻し、筋力の回復を行っていくんだ。特に回復直後は肩関節が硬くなっていることがある。関節をほぐすストレッチは一人では難しいから理学療法士や作業療法士が行っていくんだ」

前から分かっていた事だが、やはりまだ自身の体は万全ではない。すでに何度もリハビリを行っていたが、医師が言うように肩関節を動かしたりハビリは一度も行う事ができていなかった。そのためにスポーツ復帰を目的としたリハビリはここからが始まりと言えるだろう。

考えるまでもなく、これからも続けることが最良の選択だろう。白瀧も理解できないわけではない。バスケットを我慢できないというスポーツ馬鹿というわけでもなかった。

「一つ質問があります」

「なんだい？」

「もしもリハビリを受けるとすれば——やはり、しばらくは部活には

通えなくなるでしょうか？」

それにも関わらず白瀧が即答できない理由はただ一つ。懸念材料があるからだ。

もしもリハビリを続行することとなれば、その分帝光バスケット部の練習には参加できないのではないかということ。

おそらくはそうなるだろうと予想はしていて、そして医師の返答はやはり想像通りだった。

「……ああ。先も言ったように一人で行うのは難しい。だからまたしばらくは通ってもらおうことになると思う」

「そうですか」

「だがこれは回復を促進するだけでなく再発の予防にもつながる。君が今後もバスケットで活躍をしたいならば、リハビリを行っておいた方が良いでしょう」

「はい。わかっています」

何も一時的に、今の状態のためだけではない。再発が起こりやすい疾患の予防にも繋がることだ。

だから医師も白瀧の未来を考慮して進言してくれている。白瀧もそれは痛いほど理解していた。

「……少し、考えさせてください」

だが、理解していながら白瀧は答えを出す事が出来なかった。結局その日は担当医に肯定も否定も出来ないまま病院を後にした。

(わかっている。今無理をすれば俺は自分で自分の首を絞めることになる)

病院から自宅までの帰り道で白瀧は物思いに耽っていた。

この時帝光バスケット部は迷走していた。三年生が引退して新体制に入ってからというもの、部の雰囲気は一変していた。『キセキの世代』という絶対的レギュラーは力を確固たるものとしながら、彼らの半数以上は練習に姿を見せていない。参加している赤司と緑間も移行前までとは比べ物にならないほどの変わり様となっていた。他の部員達もその力に当てられて多くがバスケットを去っていった。

これ以上は見ていられないという思いが強かった。しかし今すぐ

に皆の下に戻りたいと願いながら、今ここで無理をしてはならないという警告がある。下手なことをして、また治療の日々に戻るようなこととなれば――。

(それは、絶対に駄目だ！)

最悪の展開を予想して、白瀧は大きく首を左右に振った。

皆とあの頃の様子に戻るためにも。今は、堪えなければいけない。

(大丈夫だ。きつとあいつらなら折れずに戦ってくれる。きつと皆いつかは前みたいに戻ってくる。そう仲間を信じるんだ！)

だから自分に言い聞かせるように、仲間を信じようと何度も何度も繰り返した。

大丈夫。きつと。信じよう。

己の目標を押し殺して、白瀧はそれらの言葉を反芻した。この先には、また以前のような笑みが戻ってくると願って。

(明日、もう一度病院に行こう。今後の日程を確認して、予定が決まったら監督や皆にも報告して……)

「ん？ あれって」

こうして一度は術後のリハビリに参加することを決意した。

きつとそれが自分にとっての最善策。明るい未来の為に大きな決意を固めた。

結論が出ると少し気持ちが楽になった。

白瀧はその気持ちに沿ってか視線を自然に上げて、明日の事について考え始めて。彼の視線が見知った顔を二つ捉えた。

「黒子に、桃井さん？」

チームメイトの黒子と桃井の二人だった。

車道をはさんで反対側を歩いている二人はおそらくそこが別れ道だったのだろう。黒子が小さく礼をして桃井と別れた。

黒子はゆっくりと帰路について、何故か桃井はその後姿を見つめるばかりでその場から離れようとしなない。

(どうしたんだ？ リハビリのこともあるし、声をかけておくか)

桃井の様子を不安に思っただけで白瀧は小走りで桃井の元へと向かった。桃井はマネージャーだ。今後の練習にしばらく出られないというこ

とを予め打ち明けておいた方が良いという思いもあった。それに最近彼女の幼馴染が練習に参加しなくなつて、寂しげな表情を浮かべることが多くなつたという側面もある。

何か悩み事があるならば聞いておこうと思つて白瀧は桃井へ声をかけた。

「おーい。桃井さん」

「ッー」

「こんな所でどうしたんですか？ 黒子と何か話でも……」

気軽に声をかけると桃井がようやく白瀧に気づいたのか顔を白瀧へと向ける。そうしてようやく気づいた。桃色の長髪で表情が隠れていたため、白瀧は予想もしていなかった。

「白ちゃん……！」

桃井が大粒の涙を浮かべていたなど、どうして予想できただろうか。

軽い衝撃が胸に伝わる。鼻に伝つたほんのりとした甘い香りを感じて、白瀧はようやく桃井が自分の胸に飛び込んできたということを理解した。

「……えっ？」

突然の出来事に困惑を隠せなかった。

ただ、これ以上彼女の涙を見たくないということだけは確かだった。

肩を震わせて泣き続ける桃井を宥めながら、ゆっくり出来る場所を求めて近くの公園へと歩みを進めていく。

公園のベンチに桃井を座らせて、白瀧は二人分の温かい飲み物を購入し、一本を桃井へと渡した。

「どうぞ」

「……うん。ありがとうね」

「いえ。とにかく、まずは気持ちを落ち着かせましょう」

コクリと頷いた後、桃井はゆっくりとココアを口に運んだ。

甘くて温かい飲み物で幾分か不安は和らいだのだろうか、表情の緊張が少し緩む。

「——何か、あつたんですね？」

自分も少しだけ飲み物を口にした後、桃井へ問いを投げかけた。彼女の隣に腰掛けてその表情を眺めている。

少しずつでいいから何でも相談して欲しいと言うと、桃井はようやく話し始めた。

「今日ね、テツ君と一緒に帰ったんだ」

「ええ。さつきチラツと見えました」

「うん。それで、最近皆が部活に参加しなくなったり、空気が変わったな。ちやつたなつて話をしたんだ。青峰君も、他の皆も、話す機会も、少なくなつちやつて……」

「……はい」

「それで、少し寂しくなつたねつて」

「皆が部活に参加しなくなつた」という点に、白瀧は自分の事も氣になつて眉を寄せる。だが余計な事で口を挟まないようにと考え、彼女の話を聞くことに専念した。

「実は前にも、テツ君とこんな話をしたことがあつたんだ」

「前にもですか？」

「青峰君が部活にでなくなるようになった前くらいかな？ みんなずつと一緒に、皆バスケットのことが大好きで……これからもずつと、仲良く一緒にバスケットが出来るよねつて話」

「……あたり前ですよ」

ここまで思いつめていたなんて気づいてもいなかった。仲間の手を想つてこんな苦しい彼女に気づけなかつた自分に腹ただしさを懐きながら、白瀧は桃井の考えを肯定する。

「テツ君もそう言つてくれたんだよ。ずつと一緒だつて」

「ええ。黒子なら同じ思いでしょう。あいつは青峰とも仲が良かったわけだし」

きつとあいつならばそう言ったのだろうなという姿が容易に想像できた。

人の感情に機敏な黒子はどういうわけか女性に対する姿勢もしつかりしている。黄瀬など一部のチームメイトに対する厳しさが嘘の

ように。

多くの者が変わってしまったが黒子は変わっていないなかったのだと白瀧も安心して小さく笑みを浮かべた。

「それで、今日も一緒に帰った時に、その話をしたんだけど……」

「ん？　そこで何かあったんですか？」

大きく間を置いた桃井に疑問を浮かべて、白瀧はその先を促す。

「テツ君はもう、覚えてないって……」

ようやく続けられた桃井の言葉を、白瀧は理解できなかった。

「——はっ？」

とてもではないが信じられなかった。

覚えてない？　そんなわけがない。黒子がこんな大切なことを忘れるような男ではない。

黒子は仲間を大切に思う存在だ。桃井の事も例外ではない。青峰達との交流が減った中ではむしろ彼女は特に大切な人になるだろう。

そんな彼が桃井と交わした言葉を、忘れられるわけがない。それなのにまさか黒子は、彼女の思いに返す言葉が無かったから嘘をついたとでも言うのか。

白瀧は初めて黒子に嫌悪と呼ぶ感情を懐いた。本人がいたならば間違いなく問い詰めていただろう程の怒りを覚えた彼の意識を現実と呼び戻したのは、隣に座る桃井が白瀧の制服を弱い力で引いた感触だった。

「私が、間違っていたのかな？」

想い人に忘れられたという心のダメージが大きかったのだろう。桃井は再び瞳に涙を貯めて白瀧に訴える。

「もう皆、いなくなっちゃうのかな？　もう、皆で仲良く一緒にやっていけるなんて、できないのかな……？」

それは、仲間の事を大切に思う桃井だから浮かんだ感情で。次々と仲間が離れていく光景を見ることしか出来ない彼女だからこそ発せられた言葉だった。

「！！！！」

刹那、その身を貫いた衝撃を表す言葉を白瀧は知らなかった。黒子

へ懐いた感情さえ忘れてしまうほどの強い感覚に白瀧は襲われた。

涙にぬれた桃井の目は、震えた言葉は、白瀧の決意を揺るがすには十分すぎるものだった。

（俺はこれまで何をしていた？俺は、これから何をしようとしていた!?!）

白瀧は自分へ問いかけた。桃井がここまで苦悩しているというのに、知らずにやってきたことを、やろうとしていたことを。その決断に至った己の考えの甘さを。

（ここまで追い詰めていたというのに、あんな綺麗事を並べていたというのか!）

俺は『信じる』という綺麗事を自分にとって都合の良い解釈をしているだけではないのかと。『治療の為』という大義名分を免罪符に仲間から目を逸らすという行いから逃げているだけではないのかと。

そんな不甲斐ない自分を許せなくなった。

帝光の仲間達と、あの頃に様に戻る。白瀧にとって大切な存在とはキセキの世代だけではない。他の部員達も、桃井達マネージャーもみな等しく大切な仲間だ。

確かに今ここで一人リハビリに励む日々を選べば、キセキの世代とまた肩を並べるチャンスは高くなるかもしれない。だが今ここで彼らを見捨てれば、もう二度とキセキの世代と胸を張って戦うことは出来ない気がした。二度と自分を許せなくなるような気がした。

だから——白瀧は桃井の震える両手を包み込むように握り締めて、力強く言う。

「間違っってなんかいない。あなたは何も間違っってなんかいない!」

純粋な彼女の思いが間違いであるはずがない。それを肯定する為に、白瀧は決意を新たにす。数年先まで影響する大きな決断を下す。

「俺は桃井さんに救われた! あなたの言葉を受けたから、俺は今もバスケットを諦めていない。」

あの時の俺は突然の環境の変化に我を失いかけていた。きっと皆も同じだ。皆どうすればよいかわからないだけだ。突然周囲より強

くなつてしまつて、どうすればよいかわからなくなつてにすぎない。

だから、俺がなんとかしてみせる！ あなたの想いは間違つてなんかいないのだと——俺が、証明してみせる！」

白瀧の精神は決して強くない。誰よりも怖がりで傷つきやすい、常人と変わらぬメンタルだ。

ただ、大切な誰かの為ならばありとあらゆるものを背負い、我慢して戦う。そういう男なのだ。

「無駄だよ」

「ッ！」

紫原のブロックが再び炸裂する。白瀧のレイアップシュートを叩き落とした。

「……くっ、そおっ！」

未だに大仁多は無得点の時間が続いている。

紫原が光月を吹き飛ばしたダンクシュートを決めた後、大仁多はタイムアウトを取ったものの流れは変わらなかった。白瀧の一对一も、小林や山本達の連携も得点に繋がらない。

負けじと挑んでいくも大仁多の得点が変わることはなく——そしてついに、白瀧のロングスリーまでもが紫原によって防がれてしまった。

「なっ!? 馬鹿な！」

「何時までも決めさせろわけないじゃない。いくらみどちんと同じ技と言ってもさ——みどちんが厄介だったのはリリースポイントに入つたらもう止められないっていうことだったのに。それがない以上最後までもつわけないじゃん」

この戦いの為に習得した技さえも攻略され始めた。

緑間という本物に勝るとは言わないものの、匹敵する脅威になるほどに身につけてきたというのに。

放たれたボールは紫原の指先に触れ、リバウンドも岡村によって取られてしまう。

「一体何時になつたらわかるの？　こんなもの、いくらやっても意味無いんだよ」

「なんだと……！」

「白ちゃんがやってきたことは何て言うか知らない？　いい加減うんざりするからはつきり言うけどさあ——無駄な努力だつて言うんだよ！」

直後、紫原は俊敏な動きで白瀧を振り切り、走り出した。

「ッ！」

「よしっ。行けい、紫原！」

するとリバウンドを制した岡村が前線へ走る紫原へと矢のような送球を放つ。山形に放たれたボールは途中でカットすることを許さない。

何とか山本が追いついて止めようとするも、紫原はクロスオーバーで軽々と突破する。

「うおっ！」

（嘘だろ。本当に速い！）

「させるか……！」

だがその一瞬の間に白瀧が自陣に戻っていた。

接近する紫原に対して白瀧が自然体で待ち構える。全身の力を抜き、鋭い視線で敵の一举一動を観察した。

（あの構えは、白瀧の超攻撃的ディフェンス！）

（スティールに特化した構え。シュートの前に弾き飛ばすつもりだ！）

県大会の要所などで彼が見せていたディフェンスだ。楠や勇作は自分たちを呆気なく防いだ彼のプレイを思い出し、決着の時を緊迫した状態で見守った。

紫原が白瀧を見る。直後横へ視線を動かし、右から左へと切り替えした。

その切り返しの時を勝負時と見て、白瀧は必殺の一步を踏み込ん

だ。

(キラースティンクト！)

一気に瞬発力を爆発させる、まさに一瞬の攻防。

敵の反応を許さない白瀧のスティールを——紫原はロールターンで逆側へと切りかわし、かわしてみせた。

「なっ——!?!」

前傾姿勢の白瀧はもう間に合わず、彼が突破されては大仁多のゴールを守る者はもういない。無人のバスケットにボールが叩きつけられた。

(白瀧がスティールするタイミングを見破ったっていうのか？ でも)

(何で……)

必ず止めて流れを呼びよせるはずのプレイが打ち破られた。何故破られたのか大仁多の選手達は誰も理解できない中、紫原が白瀧にその攻略した術を打ち明けた。

「白ちん、踏み出しの直前に上体がわずかに沈んでたよ」

「なっ……」

「しかも抜かれた後は反動が大きすぎて無防備。ブロックに戻ることもできない。残念だったね」

当然のように話すが、そんな単純な話ではない。普通ならたとえ白瀧の癖がわかったとしても、反応できるスピードではないのだから。

「そん、な……」

一瞬の出来事だったはず。だがそれを可能とする超人的な反射神経とボールを操る長い手、ガードに匹敵する身のこなし。あらゆる要素が紫原に味方していた。呆然とする白瀧には、反論するだけの余裕はなかった。

「こんな、こんなことって」

一方的な戦況を見て、ベンチに座る橙乃は思わず涙を流しそうになった。

今まで数多くの強敵を相手に互角以上に渡り合い、どんな相手にも立ち向かってきた。その白瀧が足元にも及ばない。キセキの世代

という存在はそれほど他の選手と一線を画している。歴戦の勇士が凡庸と変わらず霞んでしまうほどに。

白瀧が「キセキの世代」と渡り合うために磨いてきた技術が——
「キセキの世代」に届く事無く崩れていく。

続く大仁多のオフエンス。白瀧がドリブルで紫原をひきつけるも、小林のシュートは福井と劉のブロックに捕まった。光月が何とかオフエンスリバウンドを確保するも、シュートまで持ち込むことが出来ず、宮崎の手に弾かれたボールはサイドラインを割った。

「アウトオブバウンズ！ 白^{大仁多}ボール！」

かろうじて大仁多は攻撃を続けることが出来る。

だが少しずつ得点からかけ離れていく感覚に、選手達の闘志も鋭さが消えていった。

「ハッ。ハッ、ハッ……」

それは白瀧も同じだった。

次々と手を講じてもその度に敗れ続ける。白瀧の脳裏にかつて味わった敗北の、喪失の記憶がよぎり始めた。

このままではまた繰り返されてしまう。もう二度と起こしてはいけないと恐怖を懐いていた負の連鎖が。

「か、要……」

「明？」

そんな白瀧を呼ぶ者が一人いた。光月だ。

試合の時のものではなく、かつて何かに怯えていた時の声の響きだった。

視線を光月に向けるとやはり彼の表情は不安一色に染まっっていて、不安を懐いているということは明白だった。

きっと、自分も同じような表情を浮かべているのだろうと白瀧は他人事のように思った。

（駄目だ。感情を表に出すな。焦りを、悟らせるな。皆が動揺する。落ち着きを払え。冷静さを装え。エースを演じろ！ 役割を、果たせ！）

「——大丈夫だ。安心しろよ。まだまだ、行ける！」

だから、無理やり白瀧は笑みを作った。

声が震えないように、体が怯まないように。恐怖を悟らせないように。

今すぐにも叫びたい気持ちを必死に抑え込み、彼は己の意義を全うする。光月の肩を叩いて安心するように言った。

そのやり取りを遠めに眺めていた紫原は試合再開後、白瀧のマークについてある考えを口にする。

「赤ちゃんが白ちゃんにこだわる理由が少しだけわかったかも」

「は？」

(赤司……?)

突然名前が出てきたのはこの場にいない、かつて彼らのチームのキャプテンであった赤司だった。

赤司は白瀧も彼の考えを正確には把握していない人物だ。

一体何を理解したのかと、白瀧は若干の興味を懐いて紫原の言葉に耳を傾ける。

「常人なら折れてるはずのこの苦境を、目を逸らすはずの恐怖を、投げ出すはずの絶望を。全て強引に抑えつけて、現状を打破する為に足掻く諦めの悪さ。」

そういうやつを捻じ伏せて諦めさせるのは——たしかに、遊びにしては十分すぎるかもね」

その言葉に、白瀧の思考は凍りつき、全身から汗が吹き出てきた。

(遊び、だと……?)

今、目の前に立つこの男は何と言った？

とてもではないが信じることができず、最初に耳を疑って、続いて自問した。

(こいつは、遊びと言ったのか?)

紫原にとってはこの戦いさえも遊びにすぎないというのか。白瀧が仲間の思いに応え、想い人の願いをかなえ、己に刻んだ誓いを果たそうと全力で挑んでいるこの試合さえ、等しく遊びにすぎないと。

「ふ、ふざけるなよ。ふざけるなよ紫原！俺が、俺達が全力を尽くして、努力してきたことをひねり潰すことが、力で捻じ伏せることが、お

前にとつてはただの遊びだというのか!？」

湧き出てきた感情はともではないが抑え切れなかった。怒りを爆発させて、白瀧は思いのまま紫原に訴える。

「お前にとつては相手を潰す遊びだとしても、俺達にとつてはすべてをかけたかけがえのないものなんだよ!」

死力を尽くして戦う相手を倒すことを遊びと例えるなど。それは強者の驕りでしかない。その驕りを認めるわけにはいかない。

小林からボールを受けた白瀧が一对一を仕掛けた。

45度の位置からダブルクロスオーバーで突破を図るが、紫原を振り切れない。動きについてくるものの、白瀧の本領発揮はここからだった。

大きくゴール側へ踏み込んだ直後、二歩目は左側に大きく踏み出した。

「っ!？」

「むうっ!？」

(このジグザグの動き、まさか!)

(ジノビリステップか!)

紫原だけではない。陽泉のゾーンディフェンスを斜めに割くような切込み。

加えて白瀧は二歩目の踏み切りで角度を急にしてブロックする陽泉ディフェンスを翻弄した。

(しかもこれは俺の時と同じ。二歩目の踏み切りの位置をずらしたステップだ!)

木吉のファウルを誘ったときと同じプレイだ。これならば防ぎようが無い――

「ッ!？」

「ラァッ!」

必勝の技でさえ、紫原のブロックショットは止めてみせた。

「なっ!」

「アウトオブバウンズ! 大仁多 白ボール!」

ボールがラインを割った。

陽泉にボールが渡るといふ最悪の展開は免れたものの、大仁多が受けた衝撃はある意味、攻撃失敗に終わったものよりも大きかった。

あらゆる強敵を打ち破ってきた切り札がこうも簡単に破られたという事実が、大仁多の選手達に大きな動揺を生み出した。

「嘘だろ……」

一人、後方からプレイを見ていた山本は白瀧の動きを止めることが出来た原因を知って、表情を凍らせた。

（今紫原は白瀧が二歩目を完全に踏み切った後でブロックに飛びやがった！）

とめることが出来たのは紫原が跳んだタイミングだ。彼は白瀧が跳んで、その後のコースが決まってからブロックに跳んだ。決して彼との読み合いに勝ったのではない。スリーポイントラインより内側は全てを止められるという出鱈目な守備範囲を活かして強引にとめたのだ。

「あつれー？ どうしたの、そんなビックリして」

驚愕し、その場に立ち尽くす白瀧を不思議に思ったのか紫原が問いかける。

「あー、ひよつとして今の白ちんの切り札とかだったりした？ だったらごめんねー、気づけなくて。弱すぎてあっさりと破っちゃった」
「……ッ！」

きつと紫原は挑発といった悪意を持つてはいないのだろう。

純粹に思うがままを口に行っているにすぎない。

だからこそ、彼の言葉が余計に深々と心に突き刺さった。

「最悪だ！ あいつの言っていた事が、本当に起こっちゃった！」

大仁多のベンチで言葉を荒げていたのは本田だった。白瀧との特訓において彼が話していた最悪の展開が起きてしまったのだから。

『確かに突破はできるかもしれない。だが、キセキの世代あいつら』
は抜かれても一瞬で立て直し、俺を止めに来るだろう。そうなるとうしても二対一の形ができてしまう時が来る』

彼の言葉通り紫原は一瞬で立て直し、そして止めて来た。頼みの技さえまで防がれてしまったとなれば、もう彼に打つ手はなくなっ

まう。

「……佐々木さん。中澤さん。西村さん。神崎さん」

「えっ」

「はいー」

危惧の念を抱いたのは本田だけではなかった。

一連のプレイを見届けた藤代は、ベンチに腰掛けている四人の選手達の名前を呼んで、重々しく指示を出した。

「至急ウォームアップを。皆さん誰でも、何時でも出られるように準備してください」

「……ッ」

「は、はいっー」

この戦況を打破するだけの策が思い浮かんだだけではない。おそらくは選手達の精神的負担を減らすための次善の策だろう。

選手達も監督の様子に薄々とそれを感じながら、すぐに動き始めた。

こうして大仁多ベンチが慌ただしく動き出した中、やはりそう簡単には得点は決まらなかった。光月のターンアラウンドシュートが岡村によってブロックされると、劉が白瀧とのリバウンド争いを制してボールを手にする。

「取ったアルー！」

「くそっ！」

「ナイス劉ー！」

すぐに福井にボールを託して大仁多の攻撃の芽を摘んだ。

またしても大仁多のオフENSは失敗に終わった。

流れを止めることが出来ないまま、陽泉オフENSが大仁多に襲い掛かる。

（くそっ。くそっ。くそおっ！）

紫原ががちりとシールして、ポジションをどんどん奪っていく。白瀧は黒木と共に歯を食いしばって必死に力を籠めるが押し返されてしまう。どんどん敵がゴールに近づいていく現状に、白瀧は心の内で悔しさをぶつけていた。

(勝てないというのか。叶わないとでも言うのか。また守れないのか。あの決断から二年。この時の為に努力を重ねてきたというのに。紫原の言うとおり、無駄な努力だったと言うのか!)

止めるどころか時間稼ぎにさえならない。状況を好転させることが出来ない。

すると二人が必死に力を籠めるのを嘲笑うかのように、紫原は時計回りにターンをはじめ、白瀧から離れていく。

「——ッ!」

(違う! 俺は、そうさせないために戦ってきた!)

「うおおおっ!」

ゴールに正対する紫原へ、白瀧は黒木と共にブロックに跳ぶ。諦めるものかと懸命に力を籠めた。

「本当にまだわからないんだね。——無駄だよ」

「……ッ!」

そんな二人の足掻きを一掃する紫原のダンクシュートが炸裂した。白瀧と黒木はシュートを止めることが出来ず、揃って吹き飛ばされてしまう。

「ガアッ!」

「ぐうっ! ——ッ!? アっ!」

黒木の苦痛に歪む声が響き、次いで白瀧の痛みに堪える声が発せられ、直後唸り声のような短い声があった。

「黒木! 白瀧!」

「大丈夫か!」

「は、はい。白瀧、お前も……!」

逸早く立ち上がった黒木が小林達の心配する声に答えた。黒木は同じく吹き飛ばされたチームメイトの身を案じて、そして白瀧が立ち上がることが出来ないまま右足を押さえてうずくまっている事気がついた。

「白瀧!」

「どうした!」

(右足を押さえて。まさか、着地の際に足を痛めたのか!)

様子がただ事ではない。顔を歪める白瀧の表情から、痛みが生じているということは明白であった。

「……監督！」

白瀧の性格上、すぐに立ち上がれないならば何事もないと言う事は無いだろう。呼びかけにすぐに答えないとすればなおさらだ。

小林は数歩ベンチ側へ走って両手でバツの字を作った。

——白瀧はプレイ続行不可能という合図だった。

藤代も小林の意図を理解してベンチから立ち上がった。同時に、白瀧が両手をコートについて上体を起こそうとしていた。

「えっ……」

(まだまだ。まだ、倒れはしない。こんな所で倒れるわけには。約束を果たすまで、俺は……！)

「要！」

未だに白瀧の闘志は完全に消えてはいなかった。体に鞭打ち、心を焚きつけて立ち上がろうと腕を伸ばした。

「無様だね、白ちん」

そんな白瀧の背中から無情な声がかかる。

振り返らなくても、白瀧にはこの声の主がすぐにわかった。

袂を分かったとはいえ数年間行動を同じくしていた盟友の声を聞き間違えるわけがない。何より、ここまで彼の意見を根本から否定する人間など、紫原敦以外にこのコート上には存在しないのだから。

「結局これが現実だよ。今回もまた何も成せなかった。オフフェンスは俺を突破できないし、ディフェンスも俺からボールを奪えない。挙句の果てに自慢の足を負傷。それじゃあお得意のスピードに足が耐えられないでしょ？」

事実だ。すべて事実。否定したい、それなのに否定することができない真実だ。

淡々と示されていく現実が、白瀧の心を暗く染め上げていく。

「おいー・紫原ー・やめろー！」

光月の制止の呼びかけに対して一瞥するに留まり、紫原はさらに続けた。

今もなおコートに膝をつき顔を伏せている白瀧の心に容赦なく絶望という名の槍を突きつけていく。容赦なく、深々と彼の傷を抉っていった。

「わかりきってたことだよ。最後まで『キセキ』には成りきれずに何もかも失って。拳句の果てには雑魚に気を許して仲間ごっこをして、そんなやつらの為に強くなる機会さえ自分から捨てた。その結果、こうして這い蹲っている。本当に無様だよ」

白瀧が必死に紡いできた絆も、これまでの努力も、全てを踏み躪る。お前のやってきたことは無駄だったのだと。仲間遊びに過ぎないのだと。努力を嫌う天才は白瀧のこれまでの全てを一笑に付した。

「自分さえ救えない弱者に、弱者は救えない」

お前では何も救うことはできないのだと。彼の考えが間違いだったと、そう告げたのだ。

そこにはかつての仲間に対する優しさは微塵も感じられなかった。ただ敵意をむき出しにした、白瀧を傷つけることだけを目的とした行為。

「何か反論があるなら聞くよ？ まあでも、バスケットが好きとか言っただけやってたやつが、バスケットに何の面白味も感じないやつに負けて、それでも言い返せるならだけどね」

『否定できるものならしてみろ』と。できないとそう思っていないながらも紫原は問いかけた。

案の定、白瀧から答えは返ってこなかった。

(なん、で……)

理由はわからない。何故か、全身に力が入らなかった。

何か言い返さなければならぬ。今すぐに立ち上がり、この強敵に立ち向かわなければならぬとわかっているのに。紫原に、『キセキの世代』に立ち向かうのは自分の役目とわかっているはずなのに。白瀧はどうしても言い返すことが出来なかった。

『勝者は全て肯定され、敗者は全て否定される』

ふとかつて赤司が口にした言葉が脳裏をよぎり、鈍る体をさらに重くした。

声は喉元でつまり発することさえかなわず。腕も立ち上がる方法を忘れてしまったかのように硬直してしまった。

まるで無意識に白瀧の本能が紫原の言葉を肯定し、認めてしまっているかのよう。

自分のものではなくってしまったのかと錯覚してしまうほどに体が重く感じ、白瀧は立ち上がることができなかった。

（紫原の考えが、事実だというのか……？ そんなの、ありかよ……！）

一度弱気になってしまった心を立ちなおすことができなかった。突如、白瀧の思考がこれまでの記憶の波に飲み込まれていく。

（――彼らの嘆きが、）

『まだ不安が消えない。またあの時みたいに絶望するんじゃないかって。自分ではどうしようもなく思えてしまうんです』

（――彼女の涙が、）

『もう皆、いなくなっちゃうのかな？ もう、皆で仲良く一緒にやっていけるなんて、できないのかな……？』

（――全て間違いだったと言うのか!?!）

それを認めるわけにはいかないと、思いを無下に出来ない。頑なに誓ったはずなのに。

決意は揺るぎ、思考は止まる。戦うどころか平然さを保つことさえできなかった。

（――ごめん、みんな）

かつて中学時代共に戦い抜いた帝光バスケット部の者達の顔が浮かび上がる。

ここまで白瀧が倒してきた相手選手たちの顔が次々と浮かび上がってくる。

（――ごめん、みんな）

緑間と、青峰と、黒子と、〃キセキの世代〃と呼ばれた者達と共に笑いあっていた時の記憶が蘇る。

（――すみません、桃井さん）

あの日、中学時代桃井と決別した日の、彼女の笑みが思い返される。

（——ごめん、みんな）

光月、神崎、西村、本田、橙乃達同級生を初めとして、小林や山本など大仁多のチームメイトと過ごした日々が脳裏に浮かび上がる。

そしてそれらの映像は音もなく崩れ去り——白瀧の瞳には暗い闇だけが残った。

（——俺は皆の希望には、なれなかった……）

期待に応えられなかったことに対する、誓いを果たせなかったことに対する謝罪を、心の中で何度も何度も繰り返して、意識が薄れていく。

ついに体を支えていた両の腕が力を失い、白瀧はコートに倒れこんだ。

希望は尽き果て、闘志は掻き消され、光が沈む。

「か、要！・要！」

力なくコートに伏した同僚を呼びかける光月。だが、白瀧からいつもの頼もしい答えが返ってくることはなかった。

「白、大仁多メンバートチエンジ選手交代です！」

小林と山本の二人の肩を借りて、白瀧はゆつくりと大仁多のベンチへと下がっていく。

二人の力を借りなければ歩けない。顔を上げることさえ出来ない。

これほど彼の弱々しい姿を見るのは、西村を含め大仁多の面々は初めてだった。

「……悪夢だ」

エースの姿を目にして、思わず弱音を零してしまったのは誰だったのだろうか。その呟きを責めることは出来ない。

第二Q残り三分で（大仁多）16対31（陽泉）。

ようやく同点に追いついた大仁多は、紫原がオフェンスに参加したたった四分間で十五点も引き離されてしまった。白瀧は挽回の余地もない全面的敗北を喫してコートを去った。

白瀧はこれまでエースとして申し分のない働きをどんな試合でも見せてくれた。どんな窮地に至っても活路を見出し、得点を重ねた最強の牙。それを失った今、大仁多の選手達に絶望という重圧がのしかかる。

ベンチも、コートに残る小林も、山本も、黒木も。皆一様に暗い表情を浮かべている。

「紫原。一つ聞かせてくれ」

「ん？ なに？」

そんな中、光月はベンチへと下がった白瀧の姿を見つめながら、背中越しに紫原へ話しかける。

「何故だ？ 何故、要をあそこまで追い詰めた？ 君にとっても要は、中学時代共に戦いぬいた大切な仲間だったんじゃないのか？」

白瀧に話を聞いていたからこそ、紫原は理解できなかった。

以前、白瀧はキセキの世代を指して大切な仲間と語っていた。だからここそこまで無理をして、必死に強さを追い求めてきた。

それなのに、そのキセキの世代の一人である紫原が、どうしてあそこまで非情な言葉を投げかけることが出来るのか。光月は到底納得できずに紫原へ問いかける。

「どうか、敵対した今だから、決して悪気があったわけではない。そう答えて欲しいと願って光月は紫原の返答を待った。」

「仲間？ 俺と白ちゃんが？ ——何そのつまらない冗談」

しかし紫原の答えは光月の期待を裏切るものだった。光月の疑問を鼻で笑い、さらに白瀧を否定する言葉を口にした。

「ただ同じ中学のバスケット部だったってだけだし。まあ、無駄な努力だっていうのにいつまでも足掻いているのを見ているのは、正直苛々していたけどね」

まるで旧友の存在を歯牙にもかけないような口調だった。あれ程仲間の為にと奮戦していたチームメイトの戦いを『無駄な努力』と冷たく断じた。

「そうか」

紫原が光月の表情を見ていたならば、あるいは返答は変わっていた

のかもしれない。

「それがお前の答えなのか紫原」

「ん？」

「……光、月？」

地の底から響くような冷たい声が鼓膜を振動する。チームメイトでさえ今まで聞いたことが無い、初めて耳にした声色だった。

突然の豹変振りに黒木が恐る恐る光月の名前を呼ぶ。先輩の呼び声に、光月は微塵も反応する素振りを見せずに、紫原と向き合った。

光月は表情こそ無表情だったが、彼の目は怒りに染まり、こめかみには血管が浮き出ている。

「もういいよ。弱いままじゃ何も守れないというのなら、僕は——俺はもう弱さは見せない！」

大切な友の誇りは汚され、思いは踏み躪られた。

その惨劇が、優しき巨人の心に眠った憤怒を呼びさします。

「紫原！ お前は俺が、倒す！」

チームを明るく照らす光は沈んだ。今、彼の光によつてその存在を輝かせた月が真に昇り始める。

——黒子のバスケ NG集——

なし。

というかごめん。無理。

第八十六話 明月、昇る時

エースである白瀧の戦線離脱。

白瀧はこの陽泉戦でも大部分の得点を上げ、チームを盛り立てた力強い存在だ。その彼が小林と山本に連れそられてようやくコートを後にする姿はベンチメンバーに大きな衝撃を与えた。

「白瀧さん……！」

その中でも特に影響が大きかったのは誰か。

おそらくは帝光時代からの親交があった西村だろう。他の選手達よりも尊敬の念を懐いているからこそ西村はウォームアップを切り上げて真っ先に白瀧へ駆け寄った。

名前を呼んでも返答はない。不安に思った西村は未だに俯いている白瀧の顔を不安げに覗き込む。そして、彼の目を見て西村は背筋が凍る感覚を覚えた。

（この目。知っている。この目は！）

本来ならば白瀧がするとは到底思えないような瞳だ。

人形のような虚ろな目で覇気が消えた様子は、かつてのある者達を彷彿させるものだった。

（あの時の、俺達だ！）

帝光中時代、キセキの世代が圧倒的な力を示してからの、西村自身を含むほかの部員達の姿だ。何をやっても敵わず、ただ圧倒される日々を経て、そして後に白瀧という光明に救われたもの。

その救ってくれた白瀧が今、同じような状態に陥っていた。

「ッ！」

声をかけようとしていた言葉を飲み込んだ。そもそも自分は何を言おうとしていたのさえ忘れてしまった。それほど衝撃的だった。

「……本田さん。白瀧さんを医務室へ連れて行ってあげてください。運んだ後はすぐにこちらに戻ってきてもらいます。橙乃さんは一緒について行って、白瀧さんを見ていてください。お願いしますよ！」

「う、うっす！」

「わかりました」

藤代の指示により、本田が小林と山本に代わって白瀧に肩を貸して彼を医務室まで運んでいった。橙乃もついていって白瀧の表情を窺っている。

本来ならばベンチの横に白瀧を寝かせて怪我の処置をさせるという手もあっただろう。戦況がまだ好転していない今はむしろその方が他の選手達にとつてもよかったかもしれない。

(これ以上、うちの生徒を傷つけさせるわけにはいかない!)

だがコート近くに残す事で白瀧にこれ以上の精神的負担をかけるわけにはいかなかった。藤代の目から見てもう彼は戦えるような精神状態ではないという判断だった。監督としてチームの勝利以上に選手のケアを優先したのだ。

本田達がコートを後にする事を見送って、藤代はこの試合の善後策について思考を再開する。

(白瀧さんが抜けた今、うちの得点源は大きく制限された。だがここで受け身になっては完全に士気を失う事となるだろう。小林さんにチームの立て直しを頼むとして――ならば)

相手は鉄壁の陽泉。今も大仁多は得点からかけ離れた状態で、敵の土俵に乗って守りに入っては大仁多の攻め気は失われてしまうと思われた。

陽泉はこれまでの試合でもその圧倒的ディフェンス力で敵の戦う気力を奪っていった。相手はプレイに時間をかけた慎重な攻めにならざるをえなくなり、どんどん攻撃の機会を失っていく。陽泉高校自体もまだ百点スコアがないのもその影響だろう。

ゆえに藤代はここで積極的に、攻撃の姿勢を崩さないようにと決断を下した。

「西村さん！ あなたに入ってもらいます！ 準備を！」

「えっ……」

声の先は西村だ。オフセンスに力を入れ、加えて白瀧の抜けた穴を塞ぐ為には彼が適任だった。

インサイドが再び活発化したことにより陽泉は外への警戒が強まっている。外からのシュートを狙う神崎は選出する時ではなく、先

の理由で中澤も外れた。佐々木と西村の選択で迷ったが、よりオフェンスを重要視するならば突破力が長けて白瀧にプレイスタイルが近い彼だろうという結論だった。

「……ッ」

呼ばれた西村は藤代の声にすぐに応えられなかった。その代わりに藤代とは逆方向、本田達が歩いていった方向へもう一度向き直る。

徐々に遠くなっていく白瀧の背中を見て、西村の背筋が凍る。

『その時はちゃんと『頑張れ』って一言応援してやるよ』

『お前が困ったら俺が『頑張れ』って背中を押してやる』

ふと西村の頭をよぎったのは、勇気付けてくれた白瀧の頼もしい言葉だ。あの後も何度も彼に背中を押してもらったからこそ諦めずに頑張れて、ここまで戦ってこれた。

先もわからない絶望下で、その暗闇を照らしてくれた光。その存在が、もうここにはいない。

「……ッー」

西村の心に、ドロドロとした感情が生まれた。

「おい、西村?」

未だに監督に返答せず、反応を示さない西村を不審に思った松平が声をかける。

「う、おお……」

「……西村?」

「おっ……」

他の仲間の声にも応じない。

おそらく先輩の呼びかけが耳に入っていないのだろう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

西村のものとは思えない、怒りに満ちた叫びが木霊した。

彼には白瀧のような強い正悪の概念はない。

ただ、これまで彼は白瀧を信じて戦ってきた。

ゆえに信じている存在を否定されることは許容できなかった。

「……こうなってしまったわね」

「あたり前だろう。やつは考えなしで特攻するような馬鹿ではない。この状況でまだ勝利を信じて疑わないような目出度い思考は持っていない。それどころか、賢明だからこそより明白に叩きのめされた事だろう」

白瀧がゆつくりと退場していく光景を見て、実測が苦々しい表情を浮かべた。

彼の考えを肯定するように赤司も白瀧の性格を思い返した。火神のようないわゆる熱血馬鹿のような性格だったなら、あるいは耐えられたかもしれない。だが白瀧はしっかり物事を考えて行動できる冷静な性格の男だ。

ただ、誰かの為に自分が戦わなければならない時には無理をしても戦うという覚悟を持っているだけで。かつて桃井達を救う為に行動したときなどにこの性格が現れている。

熱血馬鹿でないからこそ周囲の感情の機微にも敏感に反応してしまう。戦わなければならぬと理解していても、勝ち目が無いという結論を理性が先に告げている。

どんな手段を講じても紫原にかかれれば捻じ伏せられる。この状況でまだ勝てると無心に考えられるほど彼は壊れていない。

『鉄心』と呼ばれた男でさえ心が折られるほどだ。どんな選手であろうとも同じ結果を辿っていただろう。諦めないほうがむしろ破綻しているというものだ」

「っ」

誰であつてもこうなっていただろう。現にバス界では何者にも劣らない、屈強な心を持つ鉄心でさえも紫原を前には絶望に落ちることを余儀なくされたのだから。

木吉の通り名を使ってそう語る赤司に根武谷が反応し舌を打った。「でもそうなると大仁多はやばいんじゃない？　ただでさえ無得点の時間が続いていたっていうのに、ここで離脱となると」

「良くも悪くも影響が出るだろうな。特に、親しかったもの達ほどその影響はより顕著に現れる」

葉山が問うと、赤司は交代で入った西村を指して言う。

小林と変わって司令塔のポジションに入った。山本と二人でボールを運び、代わりに小林は白瀧のポジションであつたハイポストに入つてオフエンスを展開する。

(ポジション変更。確かに県大会で白瀧と小林が入れ替わつたつて話は聞いたが。ここで使ってくるかよ)

福井は後目でチラツと小林の姿を捉えた。

高身長オールラウンダーは劉を背中で抑えてハイポストの位置でポストアップしている。

高さ・身長・パスとあらゆる面に優れた選手を中心に据えて広くコートを使うつもりだろうか。

いずれにせよ交代直後で慎重に攻めて来るはずだ。

落ち着いて対処しようと考えて、すぐに視線を西村に戻す。

「——ッ!？」

その福井の顔面のすぐ横を鋭いパスが通過していった。

「なっ!？」

「ナイスパス!」

「ちいっ!」

そして中心に立つ小林へとボールが渡る。

小林は内側へ半歩足を踏み出し、視線をゴールへと向ける。

すぐに単独でシュートへ行くように劉を錯覚させ、ボール持つ両手を逆側へ伸ばす。

直後、先ほどパスをさばいた西村が福井をかわして小林からボールを直接受け取った。

(速い!)

「スイッチ!」

「見えてるよ」

「わかっとなるわい!」

ボールを受け取り一步步いて距離を調整すると、すぐさまシュート

を撃とうとする西村を見て、福井が叫んだ。

これに紫原と岡村が反応し、高い跳躍で西村のシュートを阻む。

「邪魔だ！」

だが、西村はシュートを撃たなかった。

両手を降ろして宙に浮かぶ二人をかわすようにドリブルで抜いていき、ゴールを過ぎたところでバックレイアップシュートを放ち、リングへと沈めていった。

「はあっ!？」

「なんとっ！」

(動き出しが早い。なんとという素早さじゃ)

(加えてパスを受け即シュートすると見せかけてのバックレイアップ？ 今の動きはまるで……)

「神速の、再来？」

西村がまるで白瀧を彷彿させるようなプレイで大仁多が久々の得点をあげた。

第二Q残り三分で (大仁多) 18対31 (陽泉)。

交代直後の油断、何より紫原が執着を示す相手ではないという事情があったとはいえ、紫原が再び跳躍する前にシュートを決めた西村の小回りのよさとプレイを見て、岡村は白瀧の戦い方を西村から感じとった。

「お前が、キセキの世代お前達があの人を否定するな」

敵が突然の猛攻に驚愕している中、着地した西村は紫原へ怒りを露にする。

「あの時。お前達レギュラーが姿を消し、誰も帝光の壊れた歯車を止められなかった中。白瀧さんだけが助けに戻って来てくれた」

かつて西村達を救ってくれた白瀧を、自分の事を顧みずに助けてくれた大切な存在を想って。

「どんなに小さくても、細い光でもいいから、望みが欲しくて。だけどそれが叶う事はなかった絶望の中であの人が希望の光となってくれた！ そんな人が、誰もが希望を寄せていたあの人が、否定されないわけがない！」

絶望に陥った時ほどより欲する頼りになるもの。皆が求めた役割を果たしてくれた白瀧を侮辱されたからこそ、西村は激怒した。

「だから？　だから何？　そんな事言った所で白ちゃんは――」

「あの場を去った何も知らないお前が、白瀧さんを語るなあっ！」

これ以上の暴言は許さない。かつて圧倒的な力で叩きのめされた相手に、西村は語気を強めて言った。

「……駄目だ。焦ってはいけない西村さん。司令塔であるあなたが、冷静さを失っては」

だがその感情は、PGである選手が懐いてはならない感情だ。

常に冷静にコートを観察する必要がある西村は平常心を失ってはならない。藤代は警告するが、ベンチからではコートに立つ西村には届かない。

ボールが陽泉に渡り、福井と宮崎がボールを運ぶ。

福井は確実にボールを受けてパスの供給を図ろうと試みた。

「――ッ！　このっ！」

そんな福井に、西村が積極的にプレッシャーをかけた。

攻めの姿勢を崩さないという藤代の考えに知ってか知らずか応えている彼の動きは、さすが一時は赤司の控えを任されていただけのことはあった。福井に身動きさせようとせず、彼から行動の選択肢を奪っていく。

福井も懸命に西村をかわそうと腕を伸ばすが、一瞬の隙をつかれてボールを弾かれた。

「ぐっ！」

「もらった！」

前にこぼれたボールを西村が確保した。

勢いそのままに西村が駆け上がっていく。

敵は突然の攻守の切り替えに対応できない。このまま無人のコートに向かっていく。

「はいー？　速攻？　今度は油断なんてしないよ？」

「ッ！」

全速力でドリブルを行う西村の目の前に、紫原が回りこんだ。彼よ

り先にゴール下へと走りこみ西村の一次速攻を防ごうと身構える。

(やはり、紫原に速攻を決めるのは難しいか！)

「止まれ西村！ 立て直せ！」

それを見て小林は西村へ制止を呼びかける。

さすがに一对一では勝ち目が無い。

西村もわかっているのだろうか、ドリブルを続けながらもその場で立ち止まり——突如一気に前進していった。

「なっ!？」

「ハアツ？」

「ぼっ、馬鹿！ 一人で突っ込むな！ 西村！ 西村！」

無謀としか取れない行動だった。

勝ち目があるとは到底思えない。チームメイトが必死に彼を止めるが、西村は構わずシュートを放った。

「我を忘れて特攻か。若いな。やはりまだ一年か」

西村の逸る気持ちを抑えられない行動に、荒木は勝負の先を理解してそう呟いた。

「一度決めたくらいで、調子に乗るなよ！ 雑魚が！」

そしてやはり、皆の想像通り紫原のブロックが炸裂する。

「ぐうっ！」

「舐めないでくれる？ 止めようと思えばいつでも止められるんだよ！」

先ほどとは違って紫原も完全に西村を意識しているとなれば、シュートが決まる可能性は限りなく低い。大仁多の攻撃は失敗に終わり、遅れて戻ってきた宮崎がボールを確保して陽泉にボールが渡ってしまふ。

「ナイス、紫原」

「別にー」

「くっそっ」

「落ち着け西村！ 冷静になれ、また陽泉のオフエンスが来るぞ！」

「わかってますよー！」

宮崎が気軽に紫原に声をかけるのに対し、小林の呼びかけに反応す

る西村の反応は堅いものだった。表情の強張りも消えることはなく一言返すとすぐさま自陣へ戻っていく。

陽泉のオフエンス、パスコースを探す福井にやはり西村は積極的にプレッシャーをかけていく。

(とにかくボールを奪う気か。確かにこの平面ディフェンスは厄介だが――)

執拗なディフェンスは脅威だが、感情的になって視野が狭まっていくならば打つ手はある。

福井はアイコンタクトを岡村へ一度送ると、彼の前進に呼応して中へと侵入する。西村が追おうとするも、岡村のスクリーンによって行動が阻まれた。

「うっ！」

「大方そっちの事情は理解できる。が、だからと言って好きにはさせてやらねえ」

「スイッチー！」

西村をかわした福井は囲まれる前にパスをさばいた。

パスの相手はローポストに陣取る劉だ。劉はボールを受けると背に立つ小林にパワードリブルを仕掛けていく。

「ッ――！」

「残念だけど、ここはうちの領域アル！」

いくら小林といえど劉のなれたポストプレイを防ぎきけることは出来なかった。

ゴール下へ押し込んでいった劉はそのまま自らシュートを沈めて見せた。

(大仁多) 18対33 (陽泉)。陽泉の得意とするパワープレイで追加得点を挙げる。

「よっしゃあー！」

再び点差を引き離す陽泉。順調に試合を運んでいる展開に、選手の士気は上がる一方だ。

「皆、落ち着いて一本取りに行くぞ」

対する大仁多は小林がチームメイトを静かに鼓舞して試合を再開

する。

陽泉に対して今の状況では大きな現状の打開は期待できない。ならばせめてこれ以上失速せず、この状況を少しでも維持しようという意志を籠めたものだった。

「撃たせんー！」

「ッ——」

「ナイスブロック岡村！」

しかし西村のミドルシュートが岡村のブロックに捉まり、大仁多は得点出来ないまま陽泉にボールを奪われてしまう。

ガード陣の切込みで何とかシュートまで持つていけてはいるものの、得点には至らない。再び陽泉の屈強なディフェンスを大仁多は身をもって味合わされていた。

(ふざけるな！ これ以上点差を離されてたまるか！)

それでも西村は胸に湧いた感情に従っていく。より福井への警戒を強め、ボールの奪取を試みる。ドリブルでの突破は勿論、横からのパスもそう簡単には出させないようとコースを制限していく。

(——確かに一年でベンチ入りしただけの力はあるようだが)

「相手が小林じゃねえなら、いける！」

ドリブルを止めたかと思うと、福井は西村の頭上を通してボールを直接ゴール下へと入れた。

「アッ!？」

(しまったー！)

ここまでの前半戦では福井よりもはるかに高い身長を持つ小林がマークマンであったため、福井からゴール下へ直接ボールを供給する機会は少なかった。

だが相手が変わったなら話は別。敵も高さの警戒はあまり強くなかったため、福井は悠々とパスをさばいた。

「だらうな。そろそろ来ると、思ったぜ！」

されど大仁多も易々と陽泉の好きにはさせなかった。ゴール下へと届く前に、コースを読んでいた山本が空中でボールを弾き落とす。

「おっー！」

「山本！」

（——ッ。マジか。そうか、白瀧不在とはいえ、まだまだカットが得意なやつがいたか！）

『アウトオブバウンズ！ 黒^{陽泉}ボール！』

「あつ、くそつ。無理か」

さらにボールを追うが、山本が追いつくよりもボールがラインの外に出る方が早かった。ボールを奪うには至らなかつたが攻撃失敗の空気の一区切りつけた点は大きいだろう。

『大仁多高校選手交代です！』

ベンチの判断を実行に移す機会を作れたという意味でも。

ウオームアップを済ませユニフォームに着替えた佐々木が、声を張り上げて一人の名前を呼ぶ。

「西村！」

「なっ!? ちよつ、交代つて、俺ですか!? だってさつき出たばかりで」

「いいから戻れ」

「待ってくださいいよ！ 俺はまだ——」

「西村」

突然の指示を受け入れられなかつたのだろう。

西村は必死に佐々木に反論するが、最後まで言い切る前に山本が静かに彼を諭す。

「戻れ。監督の指示なんだ。ここで文句を言っても意味がないのはわかっているだろ」

「——ッ！」

「……俺達だつて皆気持ちは同じだよ」

肩を叩き、そう付け足して山本は離れていった。

気持ちは同じ。大切な仲間を傷つけられて怒っていないわけがなく、その仇を取りたいという思いは誰もが懐いているもの。

だからそれ以上は言うなど、副主将からの訴えだった。

「……すみません」

最後に一言謝つて西村はベンチへ足を向ける」

「大丈夫だよ。後は俺がやる」

「……え？」

横を通る際、光月から彼らしからぬ声色で告げられて西村は視線を彼へと向けた。

だが光月は紫原を見たまま動かないため、その表情は窺えない。

仲間の変化に疑問を感じながら西村は佐々木と代わりゆつくりとベンチへ戻っていった。

「西村さん」

「はい」

東雲からタオルを受け取り、ベンチへ腰掛けた西村。そんな彼に藤代が背を向けたまま声をかける。

「PGはいわばコート上の監督です。誰よりも冷静に物事を見極め、広い視野を持ってチームを導かなければならない」

「……はい」

「私は、無策のまま感情に流されて無闇に突撃するような選手を司令塔に置くつもりはないですし、そんな選手をそのまま試合に出させるわけにはいきません」

「……はい」

「少し頭を冷やしてください」

最後まで藤代は西村に視線を合わせることなく話を終えた。

西村は反論する事無く指示を受け入れて、もらったタオルを頭からかぶり、視線を落とす。

頬を伝って幾つもの滴が床へと落ちていった。

「……先輩方、お願いがあります」

一方、佐々木が入ったコートでも大仁多には大きな動きがあった。

真つ先に口を開いたのは、こういう時に滅多に自分の意見を積極的には出さない光月であった。意外な提案に、小林は「どうした」と先を促し、次の言葉を待った。

「紫原は俺に任せてください」

そして光月の示した意志は、さらにチームメイトを驚かせることとなった。

「任せるって、一人でか？」

「はい」

「わかっているのか？ 一人でやれると？」

「倒します。攻守どちらでも。——そろそろ試合を再開しないと不味いです。駄目でしようか？」

微塵も臆する気配を見せない光月の表情は別人ではないのかと疑問を懐くほどの変貌だった。突然の後輩の訴えに、チームメイトは困惑を隠せない。

「……どうする、小林？」

「判断は任せるぞ」

「どちらにせよ簡単な道ではありませんが、ご決断を」

佐々木より告げられた藤代の指示は、デイフェンスは紫原には黒木と光月のダブルチームをあて、オフフェンスは小林、山本の両名が外から仕掛け、佐々木のパスを使って広く攻撃を展開するというものだ。光月の提案に乗るならばその案に逆らうということになる。

二つの提案は大きく違う。光月の意見は果敢に敵の土俵で戦いを挑む、ハイリスクハイリターンの積極的な方針。一方で藤代の作戦は大仁多の傷口を小さく抑えようというローリスクローリターンだ。

時間も無い中の難しい選択に、山本達は最後の判断は小林に託した。主将であり、コート上の監督でもある小林に。

(常識で考えるならば、光月の作戦はありえない。白瀧がない今、危険な選択肢を選んで点差を広げるわけにはいかない。監督の指示通り着実な手を取るべきだ。——だが、それは同時にうちの得意スタイルを棄てるという事にもなる)

大仁多は攻撃を得意とするチームだ。今回の藤代の意見は攻めに消極的で、堅実と感じるが大仁多らしくないとも取れる。

確実に監督の指示を取るか。あるいは仲間の力を信じるか。

「——わかった。責任は俺が取る。光月、お前に託そう」

小林は決断を下した。

選手交代が終わり、陽泉ボールで試合が再開された。

宮崎が福井にボールを入れて大仁多の出方を窺う。

するとやはり大仁多の選手達は先ほどと異なる動きを見せた。

「なっ!？」

「紫原に光月のマンツーマン!？」

(ダブルチームじゃない?)

この大仁多の仕掛けには陽泉も、味方である大仁多のベンチも驚かされることとなった。

「……か、監督! どうして、まさか佐々木君から話が行ってないんでしょうか?」

「それはないでしょう。先ほど少し話している素振りが見えましたから。となると、小林さんが最終的な決断を下したのでしょ。――ならば構いません」

「えっ」

東雲が疑問を呈するが、藤代はすぐに表情を戻して彼女を静かに宥めた。

己の意見と食い違う動き。だが小林が決めたことならば構わない。他にもない多大な期待と信頼を寄せる小林の判断を尊重した。

「それよりも私が気になるのは、誰がこの考えを出したのかですね」

「え? 誰って」

「小林先輩じゃないんですか?」

「彼はこういう作戦を立てませんよ。正直な話、あの五人の中でこの作戦を立案する選手が思い当たらないのですが」

(あるいは、まさか光月さん自身が、か? 今までの彼ならばそんなこと出来ないはずだが。もし本当にそうだとしたならば――)

「ひよつとしたらこの試合で大仁多は大きく変わるかもしれませんね」

何故か少し嬉しそうに藤代は笑う。松平や中澤はその意図を深く理解できず、首を傾げるしかなかった。

「……はー? 本当に一人でとめるつもりなの?」

一方、コートの方では単身で自分を止めようとする光月を見て、紫原は気分を害していた。

「理解できないなー。白ちんがやられるところ、見てなかったの？」

「見ていたさ。だからこそ、俺が要に代わってお前を倒す！」

「あつそ。しぶといね。……名前は？」

「光月明だ」

「ふーん。光月ね、覚えてたよ。試合終了まで覚えているかは知らないけど」

諦めの悪い敵は紫原が嫌うものだ。しかも彼らの最大戦力である仲間が敗れたというのに向かっているとすれば余計に苛立ちが強くなる。

早々に決着をつけてやろうと紫原は光月を背にポストアップを行う。

「ッ!？」

「ううっ！」

（こいつ、重い！ 動かない！）

（絶対に、行かせない！）

「……のっ！」

紫原は中に押し込もうとするが、光月は紫原の力に対抗していた。二人がかりでさえ圧倒するはずの力に、微塵も引かずにポジションを保っている。

「舐めるなー！」

スクリーンプレイで宮崎からパスを受けた紫原は一度ワンドリブルを仕掛けて光月の反応を誘い、力が籠ったと同時に受け流すようにロールターン。光月の巨体を交わしてジャンプシュートを沈めた。

「ぐうっ！」

「ふんっ」

（……俺の力に耐えた？ 何だこいつ）

（大仁多） 18対35（陽泉）。陽泉の連続得点が記録されるが、紫原がわずかにではあるが攻めあぐねる形となった。

常人離れした力に対抗できる相手など今まで戦った相手でも一人

しかいない。こんな感覚は久しぶりであった。紫原は鼻を鳴らして光月の横を通り過ぎるも、その後も彼を横目で見るなど注意を集めていた。

「ドンマイ、光月。切り替えよう」

「はい、すみません。次こそは……」

黒木に肩を叩かれ、光月はより気迫を前面に押し出してそう口にした。

常の弱気の彼からは考えられない姿勢だ。話かけた黒木だけではなく、他の選手も思わず気後れしてしまう。

「それよりも、キャプテン」

「うん？」

「ここからのオフエンス、お願いします」

仲間の気持ちを知ってかしらるか光月は小林に進言する。

そして直後の大仁多の攻撃。

光月はゴール下を守る紫原を相手にポストアップを行い、真っ向から挑んでいく。

「なっ！ ちよっ」

「光月、紫原を相手にポストプレーで勝つつもりか!？」

紫原は間違いなく高校最強のセンターだ。ゴール下において彼に敵う選手はいないだろう。

その紫原が得意としているポストプレーで勝負しようなど正気の沙汰とは思えない。

「いや、それでいい」

ただ一人。観客席で観戦している勇作だけは光月のこの試みを後押ししていた。

「何？ 小細工なしで俺を倒すって言うの？」

「倒すよ。お前を倒さなきゃ皆を守れない。だから俺は勝つ！」

「——守るとか勝つとか、あんな光景を見てまだ無意味なこと言えるなんて。本当、お前ら馬鹿だよ！」

光月と紫原、何もしていないときならば決して気性が悪いわけではない二人が激しく闘志をぶつけ合う。

その二人がポジションを奪い合う光景を見て、小林は福井の一瞬の隙を突いて彼の頭上を通して光月へパスを通す。

ボールを受けた光月は右手に力を籠める。紫原を中へ押し込んでいくパワードリブルを仕掛けていった。

「ッ!?!」

押し込む力が大きくなり、紫原の体が僅かに下がる。

直後、光月は真下に下ろしていたドリブルを股の下へと移し、両手で掴むとステツプインでゴールに向かい合いシュートを撃った。

「ふぎ、けんな!」

だが紫原が怯んだのはわずか一瞬だけだ。その一瞬の間で紫原は立て直し、光月のシュートを左手で叩き落とす。

「ぐうっ!?!」

「調子に乗るなよ、光月!」

空中に浮いたボールも岡村がリバウンドを取り大仁多の攻撃を阻止した。

連続得点に成功ししかも敵の動きは封殺する。陽泉の流れは止まらない。

「……まだだ」

「あ?」

「まだだ。何回でも挑んでやる。お前に打ち勝つまで」

その流れは理解しているはずなのに、光月は一步も引く姿勢を見せない。

「ねー。次のオフエンスも、俺のボール集めてよ」

「紫原?」

「またムカついてきた。光月も捻り潰さなきゃ気がすまない」

「お。おう」

光月の氣に当てられたのか、紫原も白瀧と戦った時のように殺意を剥き出しにした。

一年生らしからぬ気迫に福井達も押されて彼の提案に乗る事とした。

陽泉の攻撃。また紫原と光月の一対一という形になった。

紫原はゴール下に陣取り、力で光月のポジションを奪い取つていく。光月も必死に対応するも、徐々に押し込まれて彼のゴール下のシュートを許してしまった。

「くそっ」

（まだだ。まだ力を十分に籠められていない。もつと、もつとだ！）

（大仁多） 18対37（陽泉）。

徐々に得点差が開いていく中、光月は何か手がかりをつかんでいく感覚を覚えた。その感覚を忘れないまま、攻撃でもまた紫原に仕掛けていく。

だが紫原を破ることは簡単ではない。

少しずつ押し込むことは出来るが、彼の体勢を完全に崩すことはできなかった。光月のジャンプシュートは紫原に阻まれ、ボールはラインの外へと跳ねていく。

「アウトオブバウンズ！ 白^{大仁多}ボール！」

得点できないまま、少しずつ第二Qの残り時間が少なくなってきた。

このまま光月が単身で挑んでいくのは不味い。何か攻略の手がかりを見つけられればよいが、それが出来なければ大仁多に降りかかりダメージは深刻なものになるだろう。

「小林」

「ッ！」

そう考えた佐々木は小林へアイコンタクトを送った。彼の言いたいことを理解すると、言葉は返さず大きく頷く事で同調を示した。

黒木のスローインで試合は再開。小林がボールを受けると、ドリブルで斜めに切り込み、すぐさま中へとパスをさばく。

今度の相手は佐々木だ。上空へとパスをさばくと佐々木は大きく跳躍してボールを掴む。

そして着地しないまま、直接シュートを放った。

「むっ!?!」

「なっ！」

（これは誠凛戦で見せていた、アリウープレイアップ!?!）

「このっ！」

突然の奇襲にマークについていた劉は反応が遅れてしまった。全力で跳んだものの、指先さえ届かない。

劉のブロックを越えた佐々木のレイアップは、だがリングに届く前に紫原が完璧なタイミングでブロックを決めた。

「何っ!？」

(今のタイミングでもとめるのか!?)

「はあー。あのさー、そんなシュートどんな場面で撃とうが無駄だよ。俺には通用しない」

「——っ！」

交代して初めてのシュートで、虚を突いた。データも少ない。それでも届かない壁。

たった一発で実力差を見せ付ける紫原に佐々木は反論することも出来なかった。

「ちいっ！」

(不味い。佐々木のあのシュートも止められるとは。やはり白瀧がない以上、ミドルでのシュートは紫原を超えられないか!)

自分よりもさらに後方へと飛ばされたボールを確保しながら、小林は戦略を思案する。

「大丈夫です。佐々木さん」

「光月?」

「俺がやります。今は任せてください」

そんな中、光月は佐々木へ声をかけた。

短いやり取りですぐにポジションに戻っていくと、ボールをキープしている小林へ視線を送る。

(——やはり、そうなってしまっうか)

スクリーンプレイも通用しない今、ルーキーの意気込みに乗るしかないだろう。

小林は福井のマークをクロスオーバーでわずかにかわすとすぐさま光月へパスをさばいた。

「うおおおおっ！」

「……ッ！　らあああ！」

プレイを重ねるごとに、光月の押し込む力が増していった。紫原の体が大きく後退する。確実に光月はゴールへ近づいている。それでもシュートだけは許さない。

光月がボールを放つ前に、紫原が彼の右手からボールをはじいて行く。

(……どうなってんだ、コイツ。さっきよりも間違いなく力が強くなってる)

(まだ駄目か。もつと、もつと強くだ。もつと低く！)

「……ッ！」

敗れているというのに、光月の気迫は衰えていない。彼のそんな目を見て、紫原は怒りを増幅させた。

「いい加減に、諦めろよ！」

陽泉の攻撃。紫原はどんなに抗っても無意味だと示すように、光月のブロックの上からダンクシュートを決めて行った。

「くそっ！」

(もう少し、次こそ！)

(大仁多)　18対39 (陽泉)。これで21点差が開いた。試合が始まってから最大の得点差となる。

このまま第二Qさらに点差が開かれるようなこととなれば、大仁多の勝機は潰えるだろう。

そんな状況下に追い詰められても、光月はまだ挑戦の意志を消していない。

「……何でそこまで向かって来るんだよ？」

挑発ではなく、純粹な疑問だった。

いまだ片膝をつきながら目を逸らさずに自分を見ている光月に、紫原は問いを投げかけた。

「エース白ちゃんはもういなくて、自分だってここまで負かさされて、得点差も絶望的だ。無意味だと思わないの？　勝てるわけないって思わないの？」

今までどんな選手だってここまで打ち倒せば諦めていた。試合を

投げ出し、戦うことさえ放棄している選手だった。

それにも関わらず、ここまで向かってくる理由がわからない。

「——思わない」

「ツ！ 馬鹿馬鹿しい。最後まで挑めば勝てるって？ 確かにお前はそれなりにバスケットに向いている体はあるようだけど、それでも俺は倒せないよ」

「その考え方がそもそも違う。僕がこの高校で得たものは、そんなことじゃない」

勝機を見出しているから戦っているわけではない。恵まれた体型を持つ自分ならあるいは、と考えているわけではない。

光月は自分のポジションにつくと、先ほどの紫原の問いに対する答えをさらに続ける。

「僕達は勝てる勝てないで、向いている向いていないでバスケットをしていない。一度勝つと決めたならば、戦うと決めたのならばもう迷わない。共に立つ仲間のためにも、負かしてきた敵のためにも戦い続ける。それを教えてくれたのが要だ！ 要はそのあり方を僕たちに示してくれた」

この強敵を前にまだなお挑むことが出来る答えを教えてください大切な戦友。その名前をだして光月は紫原へ訴えた。

「力が足りないならば策をめぐらし」

「技術が足りないならば人に乞い」

「才能が足りないならば仲間にすがりついた」

「世間の理解を得られずとも、戦う過程でどれだけ傷つくことになるうとも。ただ約束を果たすために。成し遂げる為の覚悟を手にした！」

世間に名を轟かせた彼でさえ、不足があるならばあらゆる手を講じて勝利を望んだ。

数多くの強敵との戦いで苦しもうとも誰かの為に戦う姿勢を貫いた。

——そんな彼に助けられた自分だからこそ、彼の言葉を信じて、彼の代わりに戦うことができる。

「——ッ!?!」

瞬間、紫原は突如大きくなった光月の力を感じ取り目を丸くした。

「……そうか」

異変を感じ取ったのは彼一人ではない。ベンチに座る藤代も僅かな変化を理解した。

(今まではドリブルを強く突こうとするあまり、腕に力をこめようと上半身が少し前のめりになっていたのか)

強くドリブルをしようとするとなってしまう癖のようなものだ。これではバランスも悪くなり、最大限の効果を発揮できない。

だが今の光月は胸を張りながらもしっかりと腰を落とし、低い姿勢を保っている。

「そうだ！ 行け！」

思わず勇作は観客席から立ち上がり、声を張り上げて光月を後押しする。

『一度しか使えないが。——お前には一番ふさわしいものがあるだろ』

相手ディフェンスを押し込むため、バスケットでは一度だけ突くことを許されたドリブルを。

「うおおおおおおおっ！」

『——いいか、明。もしも俺がいなくなったら、その時はポストプレーで勝負しろ。紫原は二メートルを優にこす長身だが体重はそれほどではなかった。それは今でも大きく変わっていないはずだ。そしてこの重さの差が、お前に有利なポイントとなる。スピードによる運動エネルギーが加わっていない状況なら、お前ならきつと！』

(両手^{ボースハンド}パワードリブル！)

光月の全力が籠められた力強いドリブルが炸裂した。光月が紫原に勝っている体重をエネルギーに変えて最大の効果を発揮する。

試合前に、白瀧も太鼓判を押しした光月の両手で突くドリブルは——

「なあっ!?!」

紫原の体を押し込み、強引にスペースを作っていた。

「紫原が、押し負けた!?!」

(今だ！)

敵の体勢が崩れた今ならばいける。光月は空いたスペースにターンで潜り込むと、素早く跳躍する。

「ふぎっ、けんなー！」

その光月の前に、再び紫原のブロックが立ちはだかる。

「ハアッ!？」

「何で。光月が押し勝ったのに!？」

(一瞬で立て直しやがった!)

隙を見せたのはたった一瞬。たとえ押し負けたとしてもすぐにブロックできる速さも持っている紫原。高校最強のセンターの名は伊達ではなかった。

「——ッ!」

だが、たとえ最強が相手だとしても。

「らあああああああッ!」

この勝負に負けるわけにはいかない。

紫原のブロックを吹き飛ばす、光月の両手ボースハンドダンクが炸裂した。

「なっ!」

「にいつ!？」

「ッ!？」

「……あいつ」

「やりやがった!」

両校の最強の力を誇る二人の対決は、初めて光月に軍配が上がった。

(大仁多) 20対39 (陽泉)。ついに光月が紫原を正面から力で打ち負かす。

「言っただろう。お前は俺が倒す!」

「——光月、明!」

尻餅をつく紫原を見下ろす形で光月は宣言する。

初めてこの試合で味合わされた敵を見上げる光景に、紫原は噛み締める力を抑え切れなかった。

まだ第二Q終盤。試合の勝敗は、まだ決まっていない。

——黒子のバスケ NG集——

(この目。知っている。この目は！)

本来ならば白瀧がするとは到底思えないような瞳だ。

人形のような虚ろな目で覇気が消えた様子は、かつてのある者達を彷彿させるものだった。

(桃井さんや橙乃さんの料理を食べた時と同じ目だ！)

「いや確かにそれもそうだけど、そうじゃない！」

キセキの世代と戦った時の絶望度ニマネージャーの料理を食べた時の絶望度。

第八十七話 存在意義（前編）

——初めてバスケットを辞めようかと考えたのは、俺がバスケットを初めて半年ほどが経ったときだった。

兄がしているのを見て楽しそうだと考えて始めたバスケット。まだ小学生にもなっていないかった未熟な体は、両手を使って全力でボールを放つてようやくゴールに届くかどうかで。ドリブルもシュートもまだ形すらできていない、ただ誰かと一緒にボールを使って対面するのが楽しかった頃だった。

だからこそ始める切欠である兄がバスケットを辞めると聞いて、相手がいなくなった時にはバスケットに何の面白みを感じなくなった。

勢いよくボールを地面に叩きつけ、そして両手を下からすくい上げて放ったボール。かろうじてネットを潜り抜けた感触は俺を満足させるには至らなかった。

（バスケットって、こんなにつまらないものだったのか）

一人になっただけで何も面白みを懐かなくなつた。コートに自分しかない環境下では誰かと笑うこともできない。それが嫌になつて、俺はバスケットを辞めようかと考えるようになった。

視線を落とすと影が長くなつていくという事に気づく。

季節は秋で夕暮れも早くなつていた。もう今日は帰ろうと思ひ、転がっているバスケットボールを追いかける。

「ん、しょつと。わつ。結構重いんだ」

「え？」

「すごいね君！ こんなボールをあんなに綺麗に投げるんだ！」

そして拾おうとしたボールを俺より先に同い年くらいの少女が両手で抱え込む。

「ねねっ。もう一回、今の見せてくれない？」

そう言つて初対面の女の子は無邪気に笑つていた。

今となつてはもはや顔さえよく思い出せないけれど。街が夕焼けに染まる中、俺を元氣付ける太陽のように笑つていた笑顔だけは覚えてる。

（――何故、こんな事を思い出している）

随分と昔の話だ。もはや遠い記憶となっている幼い頃の出来事をどうして今になって掘り起こしているのか。

いや、理由は考えるまでも無い。きつと今心が折れているからだろう。折れて、先へ進む勇気が消えてしまったから。理由を信じられなくなってしまうたから過去を振り返っている。今と同じように、俺が以前バスケットに嫌気が指したときのことを。

だがこの記憶は参考にはならない。あの頃はバスケットが楽しくないと感じたからだ。辛いと感じて辞めようかと思つたわけではない。

バスケットが辛いと思つた時、自信を喪失した時。その時俺はどうしたらもう一度立ち上がれるのか。答えが欲しい。

俺は知っているはずなんだ。あれは、帝光中時代。俺が本当にあらゆるものに苦痛を感じた時。あの時確かに答えを得た。

『そうか。ならば答えは簡単だ』

――そうだ。俺があの時もう一度戦えるようになったのは。

『どちらでもないさ。俺はお前を――』

――単純な言葉であつたけれど。あいつが、俺が欲しかつた答えを示してくれたから。

「……ああ。こんな事を、忘れていたのかよ」

大切なことだつたはずなのに。それさえ忘れるほど周りが見えなくなつていた自分が恨めしい。紫原の言葉の重みは希望をかき消す程の脅威だつたということか。

だけど思い出せたおかげで、何とか自分を取り戻すことが出来た。意識が現実に戻る。

両目を開けると、目の上にタオルがかかっていることに気づいた。右手で払おうとして、その右手が誰かに握り締められていて動かない。代わりに左手でタオルを取り除く。するとベッドで横になっている俺の右横に、橙乃が椅子に腰掛けて手を握っていた事を知った。「橙乃、か」

「うん。大丈夫？」

「ああ。大丈夫だよ」

本当だ。虚勢を張っているわけではない。紫原に精神的に打ちのめされたのは事実だが、今は自信を、理由を明白に保っている。

足の痛みもない——視線を下にずらして、右足にテーピングが施されていた。右足は小さな台の上に載せられ、テーピングの内側から少し冷たさを感じる。氷袋を当てているのだろう。おそらくはR I C E処置が行われている最中だ。

(ということは、捻挫とかその辺りだろうな)

対処法から大体の状態は察することができる。

捻挫となると症状の度合いにもよるが、悪化を防ぐために今後の運動は禁じられるはず。

「……なあ、橙乃」

「何？」

「頼みがあるんだ」

だから、これから俺が言う事はきつと彼女に、他の仲間にも負担をかけることだろう。わかってはいるけれど現状を考えればこのままじつと安静にしていようとは到底思えなかった。

俺は橙乃に自分の意見を隠す事無く打ち明けた。

怖い。一步踏み出すことが、怖い。

何も勇作や白瀧の言葉を信じていなかったわけではない。凌ぎを削り、共に励んだ大切な経験豊富な仲間の言葉だ。ある意味では自分の心情よりもよっぽど信頼できる。

しかし試合開始直後にコートで紫原と相対した時光月は萎縮してしまった。大仁多という強豪校の中で見ても体格は優れていると自覚していた。そんな自分よりもさらに10cm以上も大きく、大仁多のエースである白瀧さえをも圧倒するほどの才能を誇る紫原に、彼は恐れを抱いてしまった。

(——でも、弱さは捨てた！)

だが光月は勇気を振り絞り一步踏み出した。

「うおおおおおおおっ！」

声を張り上げ、全身に力を籠める。

福井のシュートが外れ、ボールの行方はリバウンド争いに託された中、光月が躍動していた。ゴール下のポジション争いで光月は重さを活かし、紫原を有利なポジションには入れさせない。

「ぐっ、こんのおっ！」

それどころか、敵の体をさらに外へと押し込んでいく。

確かに紫原の高さは厄介だ。彼の最高到達点にはたとえ光月ほど体格が恵まれた相手であろうとたどり着くことは出来ないだろう。

ならば、彼の得意な空中戦に持ち込ませない。

相手の身動きを完全に封じ込め、そしてボールが落ちてきてから――

「おおおっ！」

「よしっ、ナイスリバン光月！」

確実に自分の腕にボールを呼び込む。紫原を相手にディフェンスリバウンドを制し、ボールは大仁多へと渡った。

(スゲエ。パワーがあるのは知っていたけど、あのキセキの世代を相手に！)

(……彼は元来気が弱い、選手には不向きとも取れる性格だった。だからこの試合でも自分のポジションを確保するという事に留まっていたのだが)

この戦いで光月は自分が有利なポジションを掴み取るというだけではなく、紫原を戦いの外へと追い出すように押し込んでいる。これまでの彼からは信じられない攻撃的な姿勢で相手の出方を阻止していた。I Hが始まってから予兆があったとはいえ、この変わり様は藤代も驚きを懐くほどだった。

(こやつ。あの紫原を力で抑え込んでおる。信じられん)

(今まで紫原が力負けしたところなんて一度も見たことがねえ。あの怪物が初めて、自分より力がある敵に出会っちゃったのか！)

驚くのは当然陽泉の選手達でもある。先ほど紫原が吹き飛ばされた。プレイは偶然ではなかった。地上戦でしつかりと紫原の体を抑えて陽泉の追撃を抑えこんだ。

これにより陽泉の連続得点は一先ず凌ぐ事が出来た。点差を縮めたい大仁多にとってこのプレイは大きなものである。

続く大仁多のオフエンス。小林はもう一度光月にボールを託した。

「倒すー！」

「潰すー！」

パワープレイヤー二人のぶつかり合い。光月は視線のフェイクを入れた後、全力の両手パワードリブルを仕掛けた。紫原も対抗して彼の力に耐えている。

(ッ。やはり、完全には押し切れないか。でも！)

先ほどと異なり紫原は自分の位置を保ったまま崩れない。押し込むことは出来なかった。

それでも、紫原が耐えることに専念している状況下ならばこの先に展開に繋げることが出来る。光月はドリブルの直後、ロールターン。ゴール下へと回り込んだ。

「ちいっ」

シュートを撃とうとする光月に、紫原も意地を見せる。先ほどよりも立て直しが早い分、完全な体勢で跳躍していた。

「まだ食らいつくのかっ」

「でも、余裕はなくなった」

ブロックが間に合ったものの先ほどまでの他の対処が可能なほどの余裕を保てない。

光月は跳躍後、右手首を動かして真横へパスをさばいた。その先にいるのは黒木。パスを受けた黒木はベビーフックで岡村のブロックをかわし、得点を決めた。

(大仁多) 22対39 (陽泉)。大仁多は連続得点に成功。少しずつ点差をつめていく。

「よしっ！」

(光月が攻め切れなくても、紫原の動きを封じてくれるなら何とかオ

フエンスを展開できる！)

何もシュートを決められなくても、あの紫原の驚異的なディフェンス力を封じてくれるのは大きな戦果だ。これまで幾度も決められた紫原のショットブロックが無くなるだけで大仁多のオフエンス力は十分に発揮する事ができる。

「こっのおっ！」

「負ける、ものか！」

一方、陽泉のオフエンス紫原は強引にポジションを奪おうとするが、光月の必死なディフェンスの前に優位な位置を取る事ができない。

「チィッ！」

三秒経つ前に紫原はボールを福井へと返した。あの紫原がゴール下で攻めあぐねるといふ信じ難い光景。第二Q終了間際で光月が真価を發揮していた。

「何なんだよ一体。自分だって俺に吹き飛ばされたつてのに。そんなに仲間がやられたのが許せないつていうの？ よくわからないな」
「……本気でそう言っているのか？ だったら尚更負けられない」

まるで仲間の価値を理解していないような紫原の口調に、光月はさらに闘志を燃やす。

「要は、お前の事も大切な仲間だと。また一緒に笑い会えると、そう信じているんだよ！」

「——白ちんだけだよ。そんな事考えてるの」

友の気持ちを代弁する光月。だがそれを聞いてもなお紫原は顔色一つ変えず理解を示さない。

「むうっ。ゴール下でこれ以上大仁多に勢いづかせてはよくないのう」

紫原が苦戦するのを目にして、岡村は今一度優位を取り戻そうと勝負に出た。

福井とアイコンタクトを取ると、間もなくして宮崎とのスクリーンプレイで小林をかわした彼からパスが通る。

「ゴール下は何も、紫原だけの専売特許ではないわ！」

「ぐうっ！」

そしてマークについている黒木をパワードリブルで強引に押し込んでいく。黒木は全力の仕掛けに耐え切れなかった。

スペースが出来るとすかさず岡村はゴールの正面に立つ。

「もらったー！」

そして両手でボールを掴み、ダンクに跳んだ。

「ッ!？」

「ああああっ！」

「なっ!？」

両腕を振り下ろそうとした瞬間、斜め横から光月がブロックに跳んだ。岡村の渾身の力が籠められたダンクシュートを押し返し――そして彼の手からボールを叩き落とす。

「お、うおっ！」

その威力、威圧は計り知れないものだった。ボールを失った岡村はバランスを崩して尻餅をつく。

「こやつ！」

(紫原に対抗するだけではない。集中力も極限に高まっておる！)

『ファウル！ 白九番！ フリースロー、ツーショット!』

デイフェンスファウルを取られてしまったものの、光月が紫原だけではなく岡村のシュートをも封じたという強い印象をつけられたのは大きい。陽泉の選手達に光月の脅威がより強く認識される。

「大丈夫アルか」

「う、うむ」

駆け寄った劉の手を借りて岡村は立ち上がった。

審判よりボールを手渡されてセットする。

劉や紫原、光月、黒木、佐々木がリバウンドに供える中、一投目を惜しくもリングに当てて外してしまうものの二本目はしっかりと沈めて一点を追加する。

「よしっ。最低限」

「さっきよりは進歩したアル」

「お前らもう少しかける言葉ないんかい!？」

(大仁多) 22対40 (陽泉)。ゴール下の選手はフリースロー成功率があまりよくない中、岡村は一本を沈めた。これで陽泉は40点台にスコアを乗せる。

残り時間もわずかだ。おそらく次の攻撃が大仁多は最後となるだろう。

そんな大切な時間帯で小林がボールを託したのは――

「光月―!」

「はい―!」

絶好調の光月だった。

小細工などない。自慢の力を全て振り絞り、パワードリブルを仕掛けていく。

「ッ、何度も、同じ手が通用するか―!」

だが、紫原も堪えた。いつもよりも深く腰を据えて光月の力に対抗し、一歩も後ずさらない。

「ッ!?!」

「押し込めない―!」

(マジかよ―! 最後の最後に、やはり立ちはだかるのか!)

互角の力を見せ付け最後の希望を摘み取る。このままではゴール下でのオフエンスを展開する事は難しい。

「いや、問題ない」

光月一人の戦いならば。だが、これはあくまでもバスケットだ。

敵が味方のチャンスを潰そうとする中、藤代は不安を懐く事無く選手達の姿を見届けた。

「胸を張る事でフォームが改善されてバランスがよくなっただけでは。これまでよりも視界が明白に確保されているはずだ」

拮抗状態の今、視野が広がっている光月だからこそ取れる選択肢があった。

光月はゴールとは真逆のハイポスト上空へとボールを放った。

トップの小林に戻すのか。そう思われたパスは上空で佐々木が真横へとタップパスをさばく事で軌道が変わる。

「佐々木―!」

(ようやくコートを広く使うことが出来る)

「ナイスだぜ！」

さらに小林が宮崎をスクリーンで山本のマークを外し、フリーになった山本がパスを受け取った。シューターがスリーポイントラインより外でボールを受け、マークがなくなればすることは一つ。

(ここでスリーかよ！)

「撃たすか！」

「うおっ!？」

スリーポイントシュートしかない。

シュートを撃つ直前、福井は強引に飛び出して山本の軸をずらし、失点を阻止した。

「プッシング！ 黒5番。フリースロー！ スリーショット！」

みすみす敵に三点を献上するわけにはいかない。スクリーンプレイで対応が遅れたものの、福井が体を張って凌いだ。大仁多の第二Q最後の得点は山本のフリースローに託される。

「よくやった福井。あのままだったら三点は取られてた」

「シュート自体は止められなかったがな」

「仕方ないじゃろ。外れるのを祈って任せておけい」

最初の二本は仕方ない。だが三投目、最後の一本は外れたら必ず取るようにと劉と岡村、紫原の長身三人がセットする。

「……マジかよ。久々にスリー決められると思ったのに」

「ドンマイ。フリースロー頼むぞ」

「おそらくはこれで第二Q最後の得点チャンスだ」

「最後は俺達と光月が全力でケアします」

「なので、気負いすぎずに撃ってください」

フリースローを与えられた山本は、久々のスリーを決める機械を失って苦言を呈した。

インターバル前の攻撃は最後になると予測される中、少しでも気持ちを軽くさせようと四人は声をかける。

「まあそうだな。いつも通り撃つけど」

そこで言葉を区切って山本は審判の元へと歩いていく。

「最後はしっかりと締めてやるさ」

ボールを手渡された山本。光月と黒木もリバウンドに備える。

少しでも点差を縮めたい大仁多は一本でも決めて欲しい。チームメイトが声をかけつつ、そう願う中、山本は落ち着きを払ってシュートを撃った。

「まず一本」

ボールは綺麗にリングの中心を射抜く。

(大仁多) 23対40 (陽泉)。山本の一投目、成功。

続く二投目。深呼吸をしてドリブルを二回つき、流れるようにシュートを放った。

「二本目」

ボールはリングに当たる事無く潜り抜ける。

「うっ！」

「いいぞ山本！」

(大仁多) 24対40 (陽泉)。連続で成功し、陽泉の選手達は息を飲み、大仁多の選手達は歓声に湧く。

次が最後の一投だ。選手達がすぐに動けるように集中力を高めて

——最後のフリースローが放たれる。

三投目、これも山本は無事に決めてみせた。

「入りおったかっ！」

「ようっし！」

「よくやった！」

「さすがです！」

(大仁多) 25対40 (陽泉)。15点差まで大仁多は詰め寄った。

いくら光月が凄まじい働きぶりを見せているとはいえ、最後リバウンド争いになっていれば数的不利もあって厳しかっただろう。山本の素晴らしい働きぶりだった。

「くそっ！」

もはやボールを運ぶ時間もなく、陽泉は宮崎がロングシュートを放つのもリングに届かない。

すぐに審判の笛も鳴って第二Qは終了となった。

『これよりインターバルに入ります。後半第三Q開始は十分後です』
スコアは（大仁多）25対40（陽泉）。大仁多にとって苦しい展開となった第二Qだが、まだ逆転の余地は残されている。

「十五点差か」

「絶妙なラインだな。離れているけれど、第二Q終盤の勢いならば逆転も不可能ではない」

「最後の三点決めたのが大きいわね。スラッシャー型と聞いていたけれど、綺麗なフォームだったわ」

観客席ではまだ逆転は可能な点差だろうという事で盛り上がりを見せている。

洛山の選手達も、先の展開は読めない緊迫した展開であることを察して淡々と試合の様相を語っていた。

「だが、まだ十五点差とも取れる。あれだけ光月が奮闘したとはいっても、最後は紫原も対応してたし厳しい状況には変わらない」

「出来ることならばあと一手欲しい。だが、その戦力がもう大仁多にはいない」

よく大仁多を知る勇作や楠はこの勢いを後押しできる選手が現れないかと考えると共に、すでに彼は負傷してしまった事を思い返して表情を歪める。

「……ま、あいつの性格なら出るんだろうけどな」

「えっ？」

やはり陽泉優位か。チームメイトが話し合おう中、青峰は一人ある選手が再びコートに戻ってくる事を直感していた。

「後半戦。第三Q、光月は俺に任せてよ。捻り潰してやる」

陽泉控え室に戻った紫原は、早々に荒木に提案した。

今は落ち着いているものの腹の底が煮え立っているのだろう。声量は変わらないが、表情は固いものだった。

目障りな存在さえ排除してしまえば後はいつものように敵を捻じ

伏せるだけだと思っていたのに。予想外の強敵の出現は紫原の機嫌を損ねるには十分だった。

「……確かに今の光月をとめられるのはお前だけだろう」

（だが、本当にそれで良いのか？ 最後の攻防は互角ではあったとはいえ、紫原が吹き飛ばされたのは事実だ。最悪やつに二人つけて対応する手もあるが）

選手の提案に荒木はすぐに返答できなかった。

現状では光月が大仁多の最大戦力となるだろう。陽泉のインサイドに対抗できるあのパワーは脅威だ。総合力でいえば紫原が上回るがパワーだけに限って言えば光月が上と言っても過言ではない。彼に対してはダブルチームで対抗するという作戦もあるのだが、突然の敵の覚醒に、早急な決断は危険と考えたのだ。

「……いや、ちよつと待つてください。監督、紫原も」

「岡村？」

「何？ 邪魔するって言うの？」

そんな中、一人今までの大仁多のデータを再度見直していた岡村が手を上げて二人の間に割って入る。

自分の邪魔をするならば容赦はしないと紫原は岡村を睨みつける。

一年生とは思えない、味方に見せるようなものではない視線だが、岡村は怯む事無く話を続ける。

「何もお前の目的を邪魔するわけではないわ。結局お前は光月を黙らせられればそれでいいじゃろ？」

「はあ？ 自分なら止められるって言うの？」

紫原でさえとめられなかった相手だ。岡村単独でとめられるはずもないだろうと紫原は声を荒げる。

「何も儂だけに限ったことではない」

「どういう意味アルかアゴリラ」

「その呼び方定着しとるの!?! —— 難しい話ではない。正道とは呼べん方法じゃがな」

同時刻、大仁多の控え室でも作戦会議が行われていた。

医務室にいる白瀧と橙乃、二人の様子を見に行かせた本田以外の面々が揃っている。

「皆さんお疲れ様です。最後十五点差まで詰め寄れたのは十分な戦果です。後半戦の逆転に備え、今の内に休んでください」

藤代は皆の奮闘を讃える。その間、東雲達は小林などの試合に出続けた選手達に補給物質を渡している。

「後半戦はどうしますか？」

「この勢いを継続することが何よりも求められます。その為にも選手は変更無のまま——開始早々の一本、光月さん。あなたに攻めてもらいますよ」

「はい、わかりました」

飲み物を口に含んだ後、小林が問いかける。

藤代は先ほどの流れを維持するためにも光月に後半戦最初の攻撃、勢いをつける役割を託した。大役だが、指示された光月は落ち着いて首を縦に振る。

「その後も光月さんを起点にしますが、ここからは皆さんに働いてもらいます。紫原さんの最も厄介な点は、あの異常な守備範囲だ。それを光月さんが体を張って押さえ込んでもらえれば大仁多の攻撃力ならば突破できるはずですよ」

確かに紫原抜きでも陽泉のディフェンス力は厄介だが、大仁多のオフENSス力も並大抵ではない。それ程の信頼がある。

「ディフェンスも同様です。小林さんに福井さんからゴール下への直接的なボールの供給を防いでもらう。そうすれば後はマンツーマンで上手く対応できるでしょう。ただ、もしも紫原さんが先ほどのように外から仕掛けてきた場合——佐々木さん、黒木さん」

「はい」

「はいー」

「その時は、お二人がダブルチームが仕掛けてください。おそらくスリーはないはず。深く守り、切り込まれても光月さんと挟み撃ちで対

処できるように心がけてください」

ディフェンスも先ほどと同じ対応をすれば上手く機能するはずだ。ただし、紫原が先ほど一度だけ見せた外から切り込んで来るパターンを除いては。

光月では紫原のスピードにはついていけない。ならばせめて二人がかりで行動を妨げ、挟み撃ちで処理するしかない。ダブルチームでも止めるのは難しいと予測される苦汁の判断だが、託すしかなかった。

「得点差は十五点。大仁多なら逆転できる範囲内です。皆さん——ここが正念場ですよ」

『はいっ！』

今一度選手達の気を引き締めるように語気を強めて言う。

選手達が揃って大きな声で返事をした。

キセキの世代が所属する相手を追いかける展開だが士気は高い。流れもこちらに來ている。

第三Qもきつと乗り越えられるだろうと確信し、藤代が一番役割が大きいであろう光月へと声をかける。

「光月さん、第二Qはお疲れ様でした」

「いえ。出来る事をやりましたまでです」

「……一つお聞きしたいことがあります。紫原さんと一対一で戦ったのは、自分の意志ですか？」

「監督、それについては」

「自分の意志です」

監督の指示に反する行動についての問いかけ。小林が助け船を出そうとしたが、最後まで続ける前に光月がハッキリと肯定した。

「それなら構いません」

藤代も決して責めるつもりで口にしたわけではない。安堵の表情を浮かべて、話を続けた。

「正直な話、助かったというのが事実です。あのままでは紫原さんを止めることは困難だったでしょう。あなたがこんなにも早く、大役を果たしてくれるとは予想外でした」

本音だった。紫原という才能の塊を確実に止める手段はなかった。もしも光月がいなければ、今の倍の点差がついていたかもしれない。光月が力を秘めていたことは理解していた。だが試合中に、一年生のうちにキセキの世代に対抗できる程の活躍をするとは思っておらず、感謝してもしきれない。

「それは、違いますよ」

「はい？」

だが光月は監督の言葉を否定する。

「早い、何てことはありません。むしろ——」

『お前が思うのはまだ早い。それはエース俺の役割だ』

「——遅すぎたくらいです」

県大会の決勝戦、白瀧に言われた言葉を思い返して光月は語る。

（あんな小さい背中に、これほどの重圧を背負わせていたなんて）

紫原と一対一で戦って初めて理解できた。自分が託していた重荷の重さを。

自分よりも小さい体にこれ程の覚悟を秘めていたとは予想はしていても、実際に同じ立場に立てば感じ方は変わる。

「任せてください。俺が要が変わって、エースの役割を果たします」

だからこそ、光月は改めて紫原を倒すことを宣言する。

「——頼みます」

別人かと一瞬疑ってしまうほどの光月の頼れる姿だった。

これなら本当に第三Qも上手くいくかもしれない。甘い考えが脳裏をよぎる。

「か、監督っ！」

「ッ。ああ、橙乃さんですか。どうかしましたか？」

そんな藤代の思考をクリアにさせるような叫びが響いた。

扉を乱暴に開け、橙乃が息も整えずに訴えてくる。彼女らしくない反応だ。一体何事かと橙乃の言葉を待って——

「白瀧君を、止めて下さいー！」

彼女の発言に目を丸くした。

——黒子のバスケ NG集——

「ッ!？」

「ああああっ！」

「なっ!？」

両腕を振り下ろそうとした瞬間、斜め横から光月がブロックに跳んだ。岡村の渾身の力が籠められたダンクシュートを押し返し——そして彼の手からボールを叩き落とす。

「お、うおっ！」

その威力、威圧は計り知れないものだった。ボールを失った岡村はバランスを崩して床に叩きつけられた。

「ッ!？」

「岡村——ッ!？」

「ご、ごめん」

力入れすぎた。

第八十八話 存在意義（後編）

「いいから大人しく安静にしてろって言ってんだろ！」

「お前らしくない気遣いだな、本田。いつもなら『この程度でへばってんじゃねえ』とか言う所じゃないか？」

「ふざけんな！ 今の状態でそんなこと言えるか！」

医務室では本田と白瀧の激しい口論が続いていた。もともと、白瀧は本田の荒々しい口調を受け流している状態だが。

落ち着きを取り戻している白瀧の様子は、彼が立ち直っているという証だ。だが精神は回復したとしても、足の怪我はすぐに治るはずがない。本田はこれ以上の負担はかけないように制止を呼びかけるが白瀧は領こうとしなかった。

「何事ですか？」

「あつ、監督！」

「先ほどは……すみません。試合の最中であるというのに、ご迷惑をおかけしました」

「そちらは仕方のない事です。むしろ今の方を私は気にしているので」

藤代が橙乃を伴って医務室に入る。入室に気づいた白瀧が先ほどの離脱について頭を下げるが、不慮の負傷について責めるつもりはない。怪我をしてしまったならば選手はその時点で下げなければならぬのだから。それよりも何故今白瀧が抗議しているのかが問題だった。

「橙乃さん、白瀧さんの症状は？」

「……右足の捻挫。全く歩けないわけでは無いようなので軽症みたいです。しかしRICE処置を済ませたとはいえ、これ以上の運動続行は不可能です」

「よくわかりました。——本田さん、あなたは先に控え室に戻ってください」

「え。あつ、了解です」

怪我の程度を聞くと、藤代はまず本田を控え室に戻るよう促した。本田が退出すると藤代は白瀧の真向いの椅子に腰掛けて話を聞く。

「橙乃さんから怪我については聞きましたか？」

「はい」

「賢みなあなたならば理解しているはずだ。冷却によつて痛みはマシになっているかもしれないませんが、これ以上試合に出続ければ怪我の悪化は避けられない。捻挫とはいえ甘く見れば一、二ヶ月は運動できなくなるかもしれない。それなのに何故『試合に出させてくれ』なんて無茶を言うのですか？」

白瀧は理解が悪いわけではない。自分の怪我を知れば、無理が禁物であるという事はわかるはずだ。

それにも関わらず白瀧が頑なに出場するという無理を押し通すのか納得できなかつた。

「本田から聞きました。俺がいなくなつてからの第二Qの動向を」

「聞いたのですか？ ……ですがそれならわかつたはずだ。光月さんが紫原さんと互角に渡り合えるようになり、大仁多の士気は高い。大きな不安は」

「ありませんよ」

第二Qの内容を知つた白瀧は余計に試合に出なければならぬという思いを強めたという。

「まだ十五点差。紫原も完全に打ち倒せたわけではない。加えて——このままでは明は第三Q終盤近く、あるいはもつと早くに崩れる」

第二Qの躍進の源となつた光月が、後半戦で危機に陥ると察した為に。

「崩れる、ですか？ どういう意味です？」

「俺も確信はないので詳しくは。ですがもしそうなれば紫原に対抗できる選手はいなくなる。そもそもの話、キセキの世代を相手に戦力を欠いたまま挑むのは下策でしょう？」

「何を言うのですか。どんな状況下であろうとも、怪我が悪化する恐

れのある選手を試合に出すなど——」

「監督。説得は無駄ですよ。俺は退きません」

認められるわけがない。藤代は白瀧を止めようとするも、監督の言葉を遮って白瀧は自分の意志を告げる。

「俺は県大会の後、藤代監督の問いかけに対する答えを出しました。もう怪我を理由に逃げたりはしないと答えたはずです」

「それとこれでは話が全く異なるでしょう。すでに足を負傷した今、これ以上の負担を強いるわけにはいかない。……何もエースの役割は点を取るだけではありません。あなたのその気持ちだけでも十分です。そこまで試合が気になるならベンチで応援してください。あなたがいるだけでも他の皆はきつと勇気づく」

白瀧が語るのはかつて藤代とかわした問答のことだ。しかしその内容は、あくまでも通常から怪我を恐れてはならないという意味のものであり、怪我の悪化について語ったわけではない。

チームの心配をする気持ちは理解できる。彼の責任感についても納得できる。だからどうか応援に徹して、戦う以外にも役割はあるのだと——藤代は再び絶対に口にしてはならない言葉を言ってしまった。

「違う！ それは違う！」

「白瀧さん……？」

突如体全体を震わせて、白瀧は強い口調で藤代を否定した。

ただ事ではない反応だった。腰掛けているベッドを両手で握り締めて、視線を落として、白瀧は己の感情を静かに爆発させる。

「俺は、監督が考えるような優れた人間じゃない。いるだけで何か役に立てるような大層な人間じゃない。同じように後を託されておきながら何も成せず、何も果たすことは出来なかった」

「……は？ 何を、言ってる」

「あの時ほど自分の無能を憎んだ事はない。自分の不能を呪ったことは無い」

知る者だけが知る、帝光中時代の話だった。指導者に期待されたものの仲間が苦しんでいる中支えの役割を果たせない。しかも怪我の

再発を防ぐ為という理由でもう少しのところで仲間を完全に見放してしまふところであつた。

あの頃に懐いた暗い思いが、白瀧の心に渦巻いていた。

「わかつたんです。俺は、戦力としてでしかチームの役には立てない。俺が仲間の為にできるのはその一点だつた」

「そんなことは！」

「お願いです。俺は選手です。コートに戻してください。仲間の元に」

ようやく顔を上げた白瀧の目には涙が溜まっていた。

白瀧は仲間が傷つく中、黙ってみている事しか出来ない状況を耐えられなかった。もう誰かが傷ついていると、傷ついてしまふと気づいたならば、放つてはられない。自分の状態なんて関係ない。

「それとも……また俺を、飾り物にするつもりですか？」

そうでなければ自分に価値は無い。ただ存在するだけで役に立たないものに成り下がるだけ。

「——ッ!? まさか」

ここまで言われてようやく藤代は気づいた。

「ずっと、気にかけていたというのですか？」

『飾り物』——この言葉はかつて藤代が白瀧にかけてたものだった。かつての発言が、白瀧をさらに追い詰めてしまったのではないかと理解したのだ。

「確信を持ったにすぎません。戦わなければ意味なんて無いんだと」

「ちよつと、白瀧君！」

「戦わなければ誰も救えないし何もできない。——あの時の俺のように」

言いすぎだと橙乃が指摘するが、白瀧は止まらなかつた。

帝光中時代の事を思い出しながらさらに話を続けていく。

「監督、あなたにわかりますか。大切な人が無力を嘆き、縋ってきた時、この身に突き刺さつた重みと辛さ。戦えないから懐く悲しみを。

——俺はあの選択を後悔していません。誰に何といわれようとも、誰かを救うという選択を間違いだなんて思わない。その為に戦うとい

う行いを間違いだなんて言わせない！」

どんな言葉を並べられても、自分を頼って目の前で涙を流した女の子の姿を忘れることは出来なかった。

「だから、俺からバスケを奪わないで下さい」

ゆえに戦う道を奪わないでと、否定しないでくれと切実に頭を下げた。

涙が頬を伝ってベッドの上に落ちる。

ただひたすらに仲間の事を思つての発言に、藤代は直視し続けることが出来なかった。視線を背後の入口へと向け、最終的な決断を下す。

「……………ッ。しばらくの間はここで休んでいてもらいます。まだ大仁多に流れがあるのは確かだ。万が一、貴方の予想通りに光月さんに何かあつたならば、その時は伝令を出します」

「監督!？」

「あくまでも私が必要と判断したら、です。私は貴方の予想が外れることを願います」

精一杯の妥協案だった。確かに光月の働きがなくなつてしまえば紫原を止められなくなるのは事実である。

ならばせめて出来る限り白瀧の負担を減らそうと考えられる中では最も配慮した意見を述べた。

「はい。ありがとうございます」

「……………橙乃さん。それまでは頼みます。足の処置をしつかり行っておいってください」

最後に礼を言われたものの藤代は返す言葉が思いつかず、橙乃に処置を任せて医務室を後にした。

扉が閉まると、近くの壁に背中を預けて天を見上げる。

「十五歳で、あれ程の覚悟を持っていたというのか」

とてもついでこの間まで中学生だった者の発言とは思えない。悲しくも強い確固たる意志。そんな彼を追い詰めてしまったというのが、たまらなく悔しい。あんな事を言わせてしまった自分が恨めしい。

「そんなつもりで言ったのではないですよ。——申し訳ない。」

藤代もわかっていた。白瀧がかつての出来事を引きずっているということくらい。だからこそ練習メニューを上半身の強化からインナーマツスルの強化に変え、少しでも全国で戦ってもらえるようにと配慮もした。しかしあの言葉だけは、言ってはならないものだった。白瀧に悲しい決断をさせる最悪の引き金の一因となってしまうた。「大きな悩み事を抱えているようだな、藤代」

藤代がかつての己の選択を後悔していると、廊下を歩いている人物から声をかけられた。

「……白金さん。お久しぶりですね」

高校からの見知った人物、藤代と同じく監督を務めている白金だった。

洛山高校監督、白金永治。

「医務室から出てきたことを考えるに、そちらのエースの事か」

「ええ。——試合に出すようにと頼まれましたよ」

「怪我をしたかと思っていたのだが、了承したのか？」

「彼の意志に折れたという形ですね。情けない話です」

監督としては決して正しい判断とは思えない。いくら苦しい試合であろうとも負傷者を出場させるということは認めてはならないことだ。

「白金さんならば、試合に出しましたか？」

答えはわかりきっているがあえて藤代は白金に問う。

「私がお前の立場だったならば、きつと強引にでも止めていただろう」

「そうでしょうね」

「だがもしも私がお前だったならば、おそらく出していた」

予想通りの返答に納得し、だが続けられた答えに驚愕した。

似たような意味合いだ。言葉遊びと取れなくも無い。藤代の過去さえ知らなければ。

「……高校時代、プロチームでも活躍し日本代表に選ばれながら、その日本代表の試合で膝を負傷。それでも無理して試合に出続けた結果、最後まで日本代表としては戦えなかった『悲劇の天才』、藤代雄一ならば」

白金は胸元にある手帳から一枚の写真を取り出し、その写真を眺めた。

写真に写っているのは当時の日本代表で共に戦った面々だ。世界大会後、日本代表として共に戦った面々が映っている。

4番、白金。5番、中谷。7番、相田。8番、原澤。9番、武内。そして女子の日本代表として出場していた荒木。

今でも強豪校の監督を任されている者達の若かりし頃だが、6番のユニフォームを着ていた藤代はいない。途中で怪我をしまい、最後は選手として出場できなかったためだった。

「……代表の際に背負った背番号である6番。この番号を毎年主将以外の頼れる存在に託しているのは、お前が自分の意志を託しているからだろう。お前とて、過去の自分の選択を否定していないからだ」

今年ならば山本がその対象となる。副主将であり、昨年の悔しさの雪辱に燃えている彼に、自分の意志も託していた。

「だからこそだ。お前は自分の判断は間違いであったと、自分で決め付けるというのか？」

あの時の藤代も今の白瀧と同じ考えだった。

チームの為に、仲間の為にと体を張った。その選択を今でも間違いであったとは思っていない。

ならば同じ立場の選手を否定するなど。白金は遠まわしに言っつてその場を後にした。

「橙乃。改めてテーピングを頼む。動けるようにキッチリ固めてくれ」

強引ではあったとはいえ藤代の許可は貰った白瀧。藤代が部屋を去った後、橙乃にテーピングの巻き直しを頼んでいた。監督の采配次第ではあるものの、出番はあるだろう。そう考えてのことだったのだが。

「……嫌だよ」

「ん？」

「だって、そうしたら試合に出るでしょう？」

だが、橙乃はその白瀧の頼みを拒絶する。白瀧がふと橙乃の顔を見ると、彼女は今にも泣いてしまいそうな表情を浮かべていた。

（ああ。まあ、そうだよな）

先ほどは監督を説得する事に精一杯で彼女を気遣う余裕さえなかった。少しでも考えれば、先の問答がどれだけ仲間心配をかけるようなものであるかはわかるはずだというのに。

「さつき監督も言っていた様に、今無理に出れば怪我が悪化しちゃう。それなのに送り出せるわけないでしょ？」

「そうだな」

「ただでさえ相手はキセキの世代。もしも出たなら、白瀧君はきつと無理をする。だから、送り出した時点で、あなたの怪我は悪化すると決まっている。違う？」

「……可能性は高い」

橙乃の的を射た指摘は否定できない。可能性は高いどころではない。もしも白瀧の予想通りの展開となれば、それは無理をしなければならぬ状況だ。

だから橙乃の言うとおり、白瀧が出る時点で怪我の悪化は避けられない。これ以上傷ついて欲しくない橙乃にとってはここで白瀧を止める行為は最善の選択だ。

「お願い。皆を信じて。大丈夫。皆ならきつと白瀧君の思いも背負って戦ってくれる」

「確かに。明も今の状態が続いてくれるならば可能性はあるだろう」

「それならー！」

「だけど絶対が続くなんて幻想はありえない」

聞く限りでは第二Q終盤の流れは悪いものではない。特に光月の活躍が続けば大仁多は陽泉に、紫原に食らいつくことが出来るだろう。白瀧の不安も必ず的中するわけではない。だからあるいは彼の不安は無用のものになるかもしれない。——それも絶対ではないが。「悪いが俺は絶対なんてものはもう信じられない。そして絶対が存在

しない以上は備える必要がある」

白瀧は昔のように、甘い理想は信じられない。だから彼は準備をすると聞かなかった。

「頼む。行かせてくれ。俺はこういう時の為に戦えるように、練習してきた」

「こういう時の為にとって、自分が怪我をしたとしても？」

「……なあ、橙乃。ジェリー・ウエストという選手を知っているか？」

「え？」

両者共に必死の説得を続ける。お互い一步も譲らない中、白瀧はかつてNBAにその名を轟かせた選手の名を挙げる。

「俺がもっとも尊敬する選手の一人だ。といっても、現役の選手ではないけれどね」

ジェリー・ウエスト。レイカーズで活躍し、殿堂入りも果たしているNBA屈指のクラッチシューターである。選手引退後もバスケット界の役職に就き業績を挙げている。

「彼はファイナル最終戦、それまでの試合で痛めた足を引き摺って強行出場。チームが劣勢の中、トリプルダブルを達成する活躍で味方を盛り上げ、MVPに選出された」

※ファイナル：NBAでシーズンのイースタンカンファレンスの王者とウエスタンカンファレンスの王者が対決し、チャンピオンを決定するシーズン最後のイベントの事。

ウエストがかつて偉業を成し遂げた話をはじめた。最高の舞台上で見せた、最大の働きを。

「その話を聞いた時、俺は『エース』というものはどんな存在なのかと思っただ」

白瀧は彼の活躍に感銘を受けた。そしてその試合で今懐いている役割を自覚できたと言う。

「怪我に屈したりはしない。どんな強敵が相手であろうとどんな絶望的な状況下であろうとも奮闘し、味方を奮い立たせる」

「だから出るって言うの？」

「そうだ」

即答だった。迷う事も無く、当然のような反応だ。

橙乃が察した。これ以上白瀧を言葉で説得する事は不可能だとお互いが望んでいること、正しいことを思っていることをしているのだ。その思いは強く、折れることはない。

理解した橙乃は大きく息を吐き、呼吸を整えてから、話を切り出した。

「……こんな時、女の子は素直に応じて『頑張って』って言うのが正しいのかな？」

「は？」

「でも、今は正しいとかどうでもいい」

白瀧の目の前でしゃがむと、ゆっくり白瀧の両手を包み込むように握って、彼の顔を見上げる。

「お願い、行かないで」

そう言った橙乃の頬を涙が流れた。正論で彼の意志を止められないならば、せめて彼の心を揺るがすことができれば。

「——己の不幸を嘆いて立ち止まる時間は中学で終わらせたんだ。俺はこれ以上立ち止まるわけにはいかない」

だがそんな女性の涙さえ無視して白瀧は戦うという事を選択する。

感情に訴えても効果は無い。もはや彼は機会が来れば必ず出るのだろう。

普段ならばこのような女性の願いには率先して力になるというのに、こういう時に限って聞き入れてはくれない。変なところで意固地な彼の生真面目さが、今は嫌になつてしまう。

「……白瀧君のそういうところ。私、嫌いだよ」

「ッ——」

橙乃は懐いている感情とは真逆の言葉を告げる。彼女の涙ながらの訴えに、白瀧は寂しげに表情を歪めた。

わかっていたはずだ。自分の考えや行動は万人受けするものではない。王道とは外れた、色んなものを犠牲にする棘の道であるということくらい。たとえそうだとしても前に進もうという決心をしたはずだった。

それでも、親しいものに拒絶されたとなれば白瀧の心は痛んだ。

(何を一丁前に傷つけているんだよ、俺は)

目の前で女の子を泣かせておいて傷つく資格もないというのに。

(これでは黒子を責められないな)

橙乃が無言でテーピングの巻き直しをしてくれる中、白瀧の脳裏にかつて同じチームメイトであった、一人の選手の顔が浮かぶ。彼は大切な女性に涙を流させた。その理由から無二の友達に嫌悪の念を懐いていたというのに、今自分も同じように親しい女性に涙を流させている。もう大切な人の涙を見たくないと願っていたはずの自分が。

今すぐにも涙を止めてあげたい。そう願いながら、だが白瀧は感情を口にはしなかった。

(俺は知っている。力が及ばなくなった時に懐く苦痛を。危機に陥った時に襲い掛かる絶望を。そんな時に救ってくれた仲間の温かさを。俺は知っている)

「待っている皆。すぐに俺も戻る」

——もうお前達を一人で戦わせはしない。

やって来るであろう危機に備える白瀧。決心は誰にも変えられない。

『休憩終了です。これより第三Qを始めます』

「ようし、行くぞっ！」

『おう！』

第三Qが開始した。

大仁多の面々の土気は高い。選手の変更もなく、このまま勢いを持続させたいところである。

「光月さん」

「はい？」

選手がコートに入ろうと立ち上がった中、藤代は後半戦の鍵を握るキーマンの光月を呼び止めた。

「……先ほど言ったようにもしも戦況が厳しくなるようならば白瀧さんを出します。いや、彼は自分から出てくるでしょう」

「わかっています」

「ゆえに頼みます。今、紫原さんを倒せるのはあなたしかいない」

インターバル中に藤代は後半戦で白瀧を出す可能性を選手達に示唆した。彼との会話の詳細を省いたとはいえ、選手達も白瀧が自分の意志で監督に進言した事は感じ取った。

「はい。大丈夫です」

だからこそ無理はさせない。

今までの光月ならば緊張し、体を強張らせていただろう言葉に、光月は力強く頷き、コートへ入って行った。

「さあ始まったぞ！ 後半戦、第三Q！」

山本が小林へとスローインし、後半戦が始まった。

大仁多ボールからの試合再開。陽泉のディフェンスが変わらず2-3ゾーンを展開している事を確認し、小林はオフENSEを組み立てた。

二度、ボールをインサイドの黒木、ハイポストの佐々木へと入れた後——本格的に仕掛けた。ドリブルで福井を引き付けてゴール下へボールを供給する。

開始早々、光月と紫原の一騎打ち。

「……ッ！」

「——イッ！」

光月は片手でドリブルをつきながら紫原を押し込む。先ほどまでならば押し勝てなかっただろうが、今は少しずつではあるがゴールに近づいていく。

(力を一切逃さない、100%のパワーを発揮するフォームだ。無駄が無くなった状態ならば、両手でドリブルをつかなくても押し込める！)

フォームを意識した事によって光月の真価が発揮された。藤代が目から見ても光月の姿勢は洗練されたものだった。制限区域内へ入ると、ゴール側へとロールターン。両腕を上げて紫原のブロックを

誘った。

「このっ！」

(いける！)

シュートフェイクを見破ったのか跳躍は浅い。きつとすぐに立て直すだろう。だが二度目のブロックならば押し勝てる。光月は一度下げたボールを右手に持ち替えてダンクシュートを狙った。

「させんぞー！」

「なっ!？」

すると、真正面の紫原ではなく横から跳んできた巨体が光月のシュートを阻んだ。

ブロックしたのは岡村だった。光月の腕ごと叩いて強引にシュートを防ぐ。

当然ボールは零れ落ちるが、誰かが確保する前に審判の笛がなった。

『ファウル。黒4番！ フリースロー、ツーショット!』

岡村のデイフェンスファウルが通達される。これによって光月にフリースロー二本の権利が与えられたものの、光月以外の大仁多四人の選手達に嫌な予感がよぎった。

(コイツ、今のわざとか?)

「小林。まさか陽泉は」

「おそらく、な」

「……ハック戦術ですか」

黒木の問いかけに、小林は小さく頷いた。

(最悪だ。陽泉にとってこれほどうち^{大仁多}に有効な手はないだろう)

ハック戦術あるいはハック・ア・シャック。かつて県大会予選でも光月への対策として敵チームが行ってきた戦術だ。フリースローが苦手な敵がシュートを行う際に意図的にファウルを行うことで敵にフリースローを外させて失点を抑えるという戦術である。

(光月のフリースロー成功率、さらにリバウンドに参加する人員を考えると、確かに陽泉の失点する可能性は限りなく低い)

光月は誠凛戦などIHでもフリースローを決めることが出来てい

なかった。そして光月がフリースローを撃つとなれば当然彼はリバウンドに参加できず、しかもオフエンス側は二人しかセツトできない。対する陽泉側は紫原、岡村、劉の二メートル以上の選手達が全員備えることができる。圧倒的に陽泉に有利な状況だった。

「……光月、リバウンドには俺と黒木が入る。お前は気負わずにな」
「思いつきり撃て。それ以外は考えなくていい」

佐々木と黒木が光月へ声をかけた。彼自身も苦手な場面、不利な状況だと理解しているだろう。少しでも気を紛らわせようと肩を叩く。

「はい。万が一の時はお二人にお願いします」

「——ん？」

ふと、これまでのフリースローを撃つ時の彼とは様子が違う事に二人は気づいた。

全員が準備を整えると審判が光月へボールを手渡す。

ゆっくりと二回、三回とドリブルをついてリズムを作り、丁寧にボールを放った。光月が放った一投は綺麗にリングを射抜いた。

「なっ——！」

「入った！」

「……まぐれじゃ、まぐれ！」

「ナイス光月！」

（大仁多）26対40（陽泉）。予想を裏切る成功で敵味方に衝撃が走る。

そんな中、光月はもう一度審判からボールを受け取ってゆっくりと先ほど同様のルーティンを行った。

（何でだろう。要と同じようにやると、入る感じがする）

このルーティンは白瀧がフリースローの前にやっていたものと同様のものだった。光月にとって彼は『最もバスケが上手く頼れる同僚』という存在。『彼のように撃てばきつと入る』と考えて実践することにより、フリースローに最も必要である落ち着きと成功するイメージを手にすることが出来た。

フリースローのキーワードを見つけた光月の二投目も、先ほどと同様に決まった。

「……ッ！」

「おい。二連続はさすがにまぐれじゃねえんじやねえか？」

「弱点が、一つ消えた？」

「ナイス光月！」

「二本とも決めるなんて初めてじゃないか!？」

(大仁多) 27対40 (陽泉)。点差は十三点。

試合再開の早々に対策変更を考えさせられる陽泉は冷や汗を浮かべ、思わぬ味方の成長を感じ取った大仁多は歓喜の声を上げて光月を讃えた。

「そうですね。今なら、何でも出来そうです」

——光月、止まらず。

——黒子のバスケ NG集——

「……こんな時、女の子は素直に応じて『頑張って』って言うのが正しいのかな？」

「はっ。」

「でも、今は正しいかどうかどうでもいい」

白瀧の目の前でしゃがむと、ゆっくり白瀧の両手を包み込むように握って自分の胸元に押し当て、彼の顔を見上げる。

「お願い、イカないで」

そう言つて橙乃は妖艶な表情を浮かべる。正論で彼の意志を止められないならば、せめて彼の心を揺るがすことができれば。

(己の不幸を嘆いて立ち止まる時間は中学で終わらせたんだ。俺はこれ以上立ち止まるわけにはいかない)

「はわわわわわわ」

橙乃が手段を選ばない場合。白瀧の決意が震度五で揺らいだ。これでも気絶しないよう堪えている。

第八十九話 希望の代償

岡村発案のハック戦術が早々に外れ、紫原は深く息を吐いた。

「はあ。もういいでしょ。やっぱり所詮はゴリラ知恵だったって」

「何その猿知恵みたいな表現!?!」

「そんな小細工、どうせそのうち攻略されるでしょ。……もう余計な事はいい。やっぱり、あいつは俺が捻り潰す」

紫原はそう言うのと岡村の反論を無視して光月を睨みつける。未だに闘志を燃やしている姿は彼にとっては忌々しいものだ。

自分が全て粉碎して見せようと、とても一年生とは思えない覇気で紫原は味方に告げる。

敵の変化を感じとったのか、光月も一つ深呼吸をして気を引きしめる。

(要はきつと——必ず戻ってくる。それまでは、俺が大仁多を守る!)
先のタイムアウト時の藤代の台詞を思い返す。

仲間の性格を考えればきつと彼はこの試合中には戻ってくる。ならばそれまでは彼に代わって自分が皆を守ろうと気迫を前面に押し出した。

(信じられねえ。あの紫原の力に対抗できるなんて。ただ、そうだとしても)

現在の陽泉にとって光月が一番の障害だ。紫原の力と対抗するパワーを持ち、リバウンドも互角に持ち込むとなる彼は何とか攻略したい。

岡村の作戦も効果が見られるのか不明となった今。福井は小林のマークを振り切れないまま強引に山形にボールを放った。

「ッ!?!」

(シュート、ではない。これは!)

「そうだとでも関係ねえ。ゴール下で最強は、紫原だ」

たとえ敵がどれだけの強さを誇ろうとも陽泉のエースが負けるはずがない。福井から紫原へとパスが通る。

「前にも一人だけいたんだよね。俺と力で対抗できるやつが」

「む?」

「無冠のなんとかって言ったっけ? でも、所詮は力が少し強いだけ。結局、俺に勝てるわけがないんだよ!」

紫原は語気を強めて光月を睨みつける。

全力を籠めた両手のパワードリブル。これまでのどんなプレイよりも力強い動きで光月の体が揺らいだ。

(ツ——!?! ま、だ!)

だが体重があつたおかげか下半身は崩れない。すぐに衝撃から立ち直ると再びプレッシャーをかける。

そんな光月の踏ん張りを嘲笑うかのように、紫原はそのまま上空へ飛び上がりながら体を半転させる。

「なにっ!?!」

(ターンせずに、空中で体を回転?!)

光月は驚きながらもブロックに跳んだ。

彼は知るよしもなかったのだがこれこそが紫原の得意技。回転しながらの両手持ちダンクボースハンドを繰り出す、破壊の鉄槌トールハンマーだった。

その衝撃は尋常ではなく、シュートを阻もうとした光月さえも吹き飛ばした。

「ぐうっ!」

「光月!」

(大仁多) 27対42 (陽泉)。紫原のパワープレイで陽泉もすぐさま点を取り返す。

(強烈な衝撃。まるで竜巻と戦っているみたいだ)

(まだこんな技を持っていたのかよ!)

何か特別なテクニクを使っているわけではない。紫原の持つパワーが回転によってさらに凄まじくなり、まるで竜巻を彷彿させるほどのエネルギーとなる。

「負けるな! こっちも取り返すぞ!」

新たな技に動揺している余裕は無い。

すかさず小林が試合を再開させる。

福井をドリブルでひきつけると彼の横にバウンドパスを通す。

ボールの行く先はゴール下の光月だ。

(また光月の所に)

(大仁多は後半戦、光月を基点にオフENSEを展開するつもりか!)

最初のプレイ同様、ボールが集中する光月に陽泉のディフェンスの警戒が強まる。

「もう負けるものか!」

パウードリブルからゴール下へとターンし、そのままシュートへ向かう。

だが紫原は光月のパワーに耐え切り両手で彼のシュートを阻んだ。

「ッ!」

「終わりだよ」

(俺の力に耐えた?! 前半よりも紫原の力が増している!?)

完璧な対応だった。紫原の力が増しているのではないかという感覚を覚える。

もしも力で押し切れないとなれば、反射神経とリーチに長ける紫原が優位であった。光月のジャンプシュートを完璧に防いでいる紫原に対して、光月は。

「まだ、だっ!」

シュートが防がれると判断すると、上半身を横に倒して強引にリングへとボールを放った。

「ッ!」

(重さがあるということは、すなわち重心がぐらつかない。安定しているということだ)

ブロックの威力に耐えてのダブルクラッチ。リングに衝突するが、このシュートはかろうじて成功する。

(大仁多) 29対42 (陽泉)。大仁多も連続得点に成功。流れを崩さない。

「無駄だよ。俺を止められないなら、その反撃だって無意味だ」

直後のオフENSE、ゴール下で陣取ると思われた紫原が外に出た。前半戦に白瀧との戦いで見られたlonerを仕掛ける。

(光月をゴール下から引き摺りだすつもりか!)

(そうはさせない！)

その紫原に対して大仁多は藤代の指示通り黒木と佐々木がダブルチームをかけて彼のオフENSEを封じようと試みた。

「……白ちんで止められないってのに、二人がかりで止めるつもり？ 舐めんなよ」

紫原は一步のドリブルで二人の間に切り込むと、流れるようなロールターンで黒木の左側へと切り返す。あまりの速さに二人のマークは一瞬で置き去りにされてしまった。

「ッ!？」

(やはり、速い！)

「うおおおっ!」

マークを振り切った紫原が跳躍する。両手でのダンク、光月がこれを止めようとブロックに出た。

「邪魔だよ」

「がっ!？」

再び紫原が光月を吹き飛ばしてシュートを決めた。

(大仁多) 29対44 (陽泉)。陽泉も紫原の1on1で着々と得点を重ねていく。

(……ッ。力だけなら止められるかもしれない。だけど、要と同等のスピードが加わるとなると、俺でも支えきれない！)

今の光月は、これまでのどの試合よりも活躍しているという自負があった。

だからこそ余計に強く感じてしまう。己と紫原の間に存在する、明確な力の差を。パワーとスピード。この二つを持ち合わせる最強のエネルギーは止める術がないのではないかと。

(こいつは、次元が違う！)

「ふん、ぬおおおおおっ!」

「ッ!」

「ナイスリバン、岡村！」

山本のスリーが外れると岡村がディフェンスリバウンドを制した。大仁多のオフエンスが失敗に終わり攻守が入れ替わる。

「さあ反撃だ」

陽泉の攻撃、福井から宮崎へとボールが渡り、ワンドリブルで山本をひきつけると、彼の足元からパスをさばく。

ボールはゴール下の岡村へ。ジャンプシュートを放つが、これを黒木が指先で触り、シュートを阻んだ。

しかし直後、劉が佐々木を押しやるとボールを直接押し込んで得点を決める。

「ッ！」

「ナイスフォロー、劉！」

（駄目だ。止め切れない！）

この加点で第三Qは二分と少しを経過して、得点は（大仁多）33対52（陽泉）。十九点差となり、少しずつ得点差が離れていく。

「くっそっ」

（こつちも得点が出来ていないわけではない。だがギリギリと得点差が出来ていくこの展開は少し辛いかな）

決して大仁多が大きく崩れたわけではない。光月の奮闘によって紫原のディフェンスから得点できているのがその証拠だ。

しかし紫原は後半戦一度も止められず、リバウンドも光月は互角の勝負を演じられても全体的に見ればまだ陽泉が有利だ。この差が少しずつではあるが試合に影響しつつある。

「だからといって、諦めるわけにはいかない！」

そんな中で大仁多の選手達は辛い表情を見せようとはしない。

光月は体を押し込んで紫原の注意をひきつけると、ゴール側へ一歩踏み、シュートをするとみせかけてトップの小林にボールを戻す。

ミドルに走りこんでいた小林はパスを受けると、福井のブロックをものともせずにはジャンプシュートを放った。福井の手の上を通るシュートは綺麗にリングを射抜いた。

「ようっしー」

光月と小林が手を交わす。

(大仁多) 35対52(陽泉)。厳しい状況になろうとも攻撃の意志は緩めない。

(とはいえ、紫原のマークが厳しくなってきた)

(最初の時みたいに光月が紫原を力で押し勝つ機会は少ない。やっぱり紫原の力が増しているとしたか思えない)

士気を保とうと必死に足を動かす一方で、大仁多の選手達は冷静に紫原の力を分析していた。

徐々に光月の1on1で攻め切れる回数は少なくなってきた。光月のオフエンスに対する紫原の対応が早くなっているためだ。

「……緊張の糸、切らすなよ。この状況だと一度でも崩れると陽泉にそのまま持つていかれる」

勇作が静かに口を開いた。

敵が力を増している中で一回でも気を緩めると、有効な策がなければ立て直すのは困難となる。

どうにか持ちこたえて反撃の時を待ってくれと祈る。

「じゃが、ワシ等も負けてはおれん！」

シユートがリングに嫌われるも、岡村がオフエンスリバウンドを確保。黒木がすぐにマークにつくが、ターンアラウンドでかわしてゴールへ向かう。

「ッ！」

「撃たすか！」

止めて流れを掴もうと、紫原のマークについていた光月がヘルプに出る。せめてプレッシャーだけでもかけようと懸命に手を伸ばした。

「……ようやく来おったか」

「なッ!？」

(フェイク? まさか!)

ターンアラウンドシユートのブロックを狙ったが、両手を伸ばしていた岡村の体が直後沈みこんだ。

光月が誘いだった事に気づくが遅かった。空中で身動きが取れない無防備な光月に岡村はぶつかり、強引にシユートを放つ。

シュートが決まり、さらに審判の笛が鳴り響いた。

『ディフェンス、プッシング！ 白九番！ バスケットカウント、ワンスロー！』

審判より光月のファウルが宣告される。審判席からは三の数字が書かれた旗が掲げられた。

「ディフェンスファウル」

「光月が三つ目？」

「マジかよ。よりによってこんな時に！」

光月の存在でどうにか持ちこたえている大仁多に痛手となる通達だ。試合はまだ第三Q。ここで光月が抜けるようなこととなれば非常に苦しい展開となる。

直後、岡村はフリースローも沈めて得点をさらに重ねた。（大仁多）
35対55（陽泉）

「……本田さん」

「はい？」

「医務室へ向かってください。白瀧さんの招集をお願いします」

「ッ！ 了解です」

事態の急変を見て、藤代が本田に指示を飛ばした。

白瀧も言っていた光月が崩れるという予想はおそらくこの事を指していたのだろう。攻守の中心になっていた光月に負担が集まりすぎていた。

もしも次にファウルをもらうようなことがあれば大仁多は立ち直れる可能性が出てくる。

その時に備えて藤代は白瀧を呼ぶ事を決断した。

すぐに本田は動き出した。駆け足で通路を走りぬけ、しかし彼の足は医務室に辿りつく前に止まる。

「……本田か」

「お前、何で」

「どうも嫌な予感が止まらなくてな。試合、何か動きがあったんだな？」

本田の視線が捉えたのは、まさに彼が呼び寄せようとしていた相手

だった。

「……光月。ここからは攻守共に慎重にな。今お前がいなくなるとうちは高さもパワーも共に厳しくなる」

「は、はい」

小林がボールを運びながら光月に声をかける。

現在大仁多の中で最もボールが集まっている光月がもし四つ目のファウルを取られれば最悪の状態だ。拮抗している状態も崩れるだろう。

少しでも長い時間コートにいてもらわなければ困る。そう忠告する小林に、光月はいつもの口調で答えた。

大仁多のオフセンス。光月はやはりゴール下のポジションに入るが、その集中力は先ほどまでの状態が嘘のように途切れかけていた。(あとファウル二つで、退場。もう出られなくなる？ いや、それどころかあと一つでベンチに下がる事に。あるいはその前に……！)

光月にとって不運な事は、二回戦で誠凛と戦っていた事。あの試合においても彼と同じくゴール下で果敢にプレーをしていた木吉は三ファウルを貰ってしまいベンチに下がることを余儀なくされた。しかもこの試合は誠凛戦よりも時間が残されている。

これ以上のファウルを恐れてプレイにも影響される。特に試合経験が浅い光月には大きなものだった。光月は引き続きプレイを続行するも、佐々木がさばいたタツプパスをファンブルしてしまった。

「あっ！」

「なっ」

「よしっ。貰ったぞー！」

大仁多らしくない攻撃のミス。これがターンオーバーとなり、岡村が福井へボールを戻すと再び陽泉の攻撃に。

「これで終わらせてやるよ、光月！」

「ぐうっ！」

福井から岡村、宮崎とパスが通り最後は紫原へ。

パウードリブルで光月の体を押す。光月が堪えるも、中へ押し込まれてしまう。

すると紫原は出来たスペースに片足を踏み、光月に対して半身になる。そして彼から遠い右腕にボールを構えた。

(フックシュートか！)

「撃たせるか！」

ここで失点すれば流れは陽泉のものだ。自分のミスは自分で取り戻そうと光月は必死の思いで飛び上がった。

「言ったでしょ。終わらせるって」

「ッ!？」

(フルパワーで捻り潰してやる！)

「食らえ！」

光月が跳んだ直後、紫原はリリースしようとしたボールを両手で掴む。胸元に呼び寄せると回転しながら跳躍した。

(これって、さっきの……しまった！)

大きな掌と桁外れの反射神経を持つ紫原だからこそ出来たフェイント。

光月も敵の思惑を悟ったが空中では何も出来ない。

全てを破壊する巨体が目前に迫る。衝撃の恐怖を感じ取り、光月は思わず目を閉じた。

「——光月——」

目を瞑ると横から聞きなれた仲間の声が聞こえた気がした。

声の直後、軽い衝撃によつて体が後ろに押され——そして一瞬遅れて激しい力が加わり体が後方に吹き飛ばされる。

「ぐうっ……い——」

紫原のツールハンマーが炸裂した。

床に倒れこみ、体に走る痛みを歪める光月。だが痛みはそれほどのものではなく、突然の転倒による痛みだけが残った。

「くそっ」

すぐに現状を確認しようと上体を起こす。しかし彼が確認するよ

りも早く審判の笛が鳴り響いた。

「デイフェンス！ プッシング！」

「なっ……！」

審判が告げたのはデイフェンスファウルだった。

——まさか。四つ目のファウルか？

光月の思考が完全に停止した。あつてはならないこと、その失態を自分は犯してしまったのかと。だがその思考を復活させたのも審判の次に発せられた言葉だった。

「白、五番！ バスケットカウント、ワンスロー！」

大仁多の五番——すなわち黒木のファウル。自分ではなく先輩によるファウルであるという事実が。

「え？ ……黒木さん？」

動揺しながらも視線を横へと動かす。すると、黒木も自分と同様にコートに倒れていた。

「黒木！ おい、黒木！ 黒木!？」

「しつかりしろ！ 大丈夫か!!」

「なっ……」

だが光月とは完全に違う点が一つあった。

黒木の体がピクリとも動かず仲間の声にも一切反応していないという彼の現状である。

「動かすな！」

「ッ！」

「動かさないで下さい！ 頭を打っている可能性があります！」

「レフェリータイム！」

必死に声をかけ続ける山本達を藤代が声を荒げて制した。珍しい怒鳴り声に選手対はひるみ、距離を取る。

続けて異常を知った審判が笛を再び鳴らす。これによりベンチの藤代達もコートに駆けつけた。だが黒木の意識は戻らない。

「まさか、黒木さん。俺を庇って……？」

先ほど紫原と接触する前のかすかな衝撃。

あれが黒木のものであると理解して、光月の意識は凍りついた。

「あの男、光月がフェイクにつられたことを察したようじゃな」

「……全部わかってやったつてのかよ。あんな一瞬で即座に判断を下し、動けるなんて信じられねえ」

陽泉の選手達は黒木が短い間に行った流れを理解して衝撃を受けていた。

先ほどの攻撃では陽泉は中外にボールを散らして大仁多の意識を逸らしていた。同じくゴール下で守っていたとはいえどもそれでも誰よりも早く陽泉の、強いては紫原の動きを理解した洞察力。そして光月さえをも吹き飛ばす威力の大技に飛び出せた勇氣。どれも並大抵のものではない。

「バスケットは二人同時に同じチームの選手がファウルを取られることはない。先にファウルを犯した選手が審判に宣告される。すなわち、自分が先にファウルをすれば光月が取られることはない。そして自分と光月、どちらが勝利に必要なかを瞬時に判断して庇った」

仮に自分が怪我をするようなことになろうとも、光月がベンチに下がるのと黒木が不在になるのでは戦力の差が大きく異なる。

「文字通りその身を盾として仲間を、^{光月}チームを救いおった。たいした男じゃ、黒木」

マッチアップに当たっていた岡村は黒木へ惜しみない賞賛を送った。

彼の視線の先で、黒木は結局復活する事はできず、タンカに乗せられてコートを後にする。

「安、治……」

力なく横たわり、運ばれていく黒木の姿を三浦は悔しげに見送った。

「終わりやな」

「はあ？ まだ時間残つてんだろが」

「青峰。お前も理解しとるやろ。——所詮一時的に凌いだにすぎん。大仁多の勝ち目が今潰えた」

黒木の離脱。これを見て観客席で試合を眺めていた多くの者が大仁多の敗北を悟った。

今吉も陽泉が勝ちあがる事を確信する。青峰が食ってかかるも、彼の意見を受け流して話を続ける。

「これで大仁多はフロントラインが壊滅だ。陽泉と戦うにあたり、これはあまりにも痛すぎる」

「光月がファウル避けたとはいえ、三つには変わりないしねー」

洛山の選手達も戦況の見方は同じであった。

白瀧に続き黒木も負傷交代。光月も三ファウルの状態で、無事なのは小林と山本だけだ。

そうでなくても大差をつけられないように耐え忍ぶ戦況であった大仁多には辛すぎる現状。

「だが——」

「ん？」

「あら？」

しかし、それでもまだ終わったわけではない。

突然言葉を区切る赤司。大仁多のベンチをじっと見つめている。つられて彼の視線を追うと、二人の選手が準備を進めていた。

一人は黒木の突然の離脱で入ることとなったであろう、同ポジションの三浦。そしてもう一人は前半戦で負傷したはずの——

「言ったろ。あいつは必ず出てくるってよ」

青峰も赤司と同じ考えだったのだろう。荒々しい口調で、今もなお好敵手と考えている彼が出てこないわけがないと告げる。

『大仁多高校、選手交代です』

黒木が運ばれていくと再びアナウンスがなった。大仁多のベンチから二人選手がコートに入る。

「あっ」

「……来ちゃったか」

光月が入ってきた一人を見て目を丸くした。

予想よりも早すぎる投入に山本は苦笑を隠せない。

「すみません。長らく試合を離れてしまって」

「——白瀧。後は頼む」

「はい。休んでいてください、佐々木さん」

黒木、そして佐々木に代わって白瀧と三浦が試合に臨む。

「……要」

「悪かった。俺がいなくなった後、よく戦ってくれた」

「ごめん。ごめん。結局、守れなかった」

「いつまで泣き言を言ってるんだテメエは」

「イテツ！」

未だに落ち込んでいる光月。見かねて白瀧が声をかけた。それでも立ち直る様子が見えない光月を見かねたのか、三浦が彼の肩をど突いた。

「いい加減にしろよ。黒木はお前を助ける為に倒れたんだ。これ以上縮こまっていたら、その黒木の行為が無駄になるんだぞ」

「……はい」

「わかってんならそんな姿見せるな。黒木に良い報告できるように振舞え」

「……はいー」

先輩の檄を受けて少しは立て直したのだろう。光月の表情から緊張が剥がれ落ちた。

光月が立ち直ると、彼らは紫原のフリースローが外れた時に備えてセツトする。紫原のシュートは綺麗に決まり、一点を追加した。(大仁多) 35対58 (陽泉)。

「何で戻ってきたの」

「ん?」

「あのまま寝てたらこれ以上苦しまなくてすんだのに。何で自分から傷つくために戻ってきたの?」

シュートを決めた紫原はすれ違い様に白瀧に問いかけた。

負傷交代したまま戻らなければ、これ以上精神的にも肉体的にも苦しまなくてすんだ。怪我という逃げ道もあった。それにも関わらずコートに戻ってきた白瀧の考えを紫原は理解できなかった。

「……思い出したからだよ。俺が戦える理由を」

旧友の問いに、白瀧はそう返して小林の元に駆け寄った。

攻守が入れ替わり大仁多の攻撃。前半戦同様に小林と白瀧がボー

ルを運んでいる。

「どう思う？ 白瀧の足は」

「怪我したのは間違いないじゃろう。あの足ではあのロングスリーやゴール下での動きはできんはず。味方を盛り立てつつ少しでも負担を減らすために外の動きに徹していると考えるのが妥当じゃな」

「ならいつものうちのディフェンスで問題ないアル」

「……まあ、いいんじゃない。何も出来ないっていうならそれで」

大仁多の動きを見て陽泉は2―3ゾーンを展開した。前半戦は白瀧のロングスリーを警戒してゾーンを崩したが、あの時と同じ動きでも目的が異なれば話は別。

白瀧のロングスリーは跳躍の勢いを箆めなければならぬ分、足の負担も大きくなる。先ほど足を怪我した状態ではもう撃つ事は難しいはずだ。

パワープレイも出来なくなる。

おそらくは士気が最悪になったこの試合で流れを少しでも変えようとしての投入だろう。そう判断して陽泉は大仁多のオフENSEを待ち構えた。

「陽泉のディフェンスはいつもの2―3ゾーンか。――舐められたものだな」

そんな敵の方針を見た白瀧は小さく愚痴を零した。

小林にアイコンタクトを送る。意図を理解した小林はかすかに口元を歪め、そして白瀧に鋭いパスをさばいた。

ボールを受けた白瀧はそのまま着地し、タイミングをおかずに勢いよく地面を蹴り上げた。緑間のそれを髣髴させる、ロングスリーを放った。

「ハアッ!」

「なんじゃと!」

(馬鹿な。確かに怪我したはず。それなのに!)

陽泉の選手達が戸惑いを隠せない中、白瀧が放ったボールが綺麗にリングを射抜いた。

(大仁多) 38対58 (陽泉)。白瀧が復活早々のロングスリーを沈

めて点差を縮める。

(本当に決めおった!)

「……おい。あのロングスリーはもう出来ねえって言ったのは誰だったっけ?」

「あそこのゴリラアル。タコの占いの方がもつと言い当てるアル」

「お前さんも同意してたじゃろ!」

予想外の白瀧の得点。けが人とは思えない、前半戦と同じ動き。

あるいはまだまだ動けるのではないのかと敵に思い込ませるには十分な威力であった。

「……ッ!」

着地後、何かを堪えるように白瀧は歯を食いしばった。そして得点板が更新されたのを確認すると笑みを深くして声を張り上げる。

「さあ、どうした紫原!?! 俺をひねり潰すんじゃないのか!」

敵の陣地深くで立ち尽くしている紫原へ向けて。

「俺はここにいてぞ!」

改めて宣戦布告する。未だ自分は健在であると示した。

(俺に注意を集める。そうすればまだ大仁多は戦える)

紫原が三ファウルの光月を最も警戒している状態ではすぐにまたピンチに陥るだろう。

ゆえに白瀧はわざと紫原を挑発する。前半戦、完膚なきまでに叩きのめれた敵に一对一で戦う為に。

「……はあ。どいつもこいつも諦めが悪いよね」

叫びを耳にした紫原は面倒くさそうに頭をかいた。

「じゃあ望みどおり、ひねり潰してやるよ」

厳しい目つきで白瀧を睨みつける。

今度こそ再起不能になるまで徹底的に叩きのめす。

再び白瀧と紫原の戦いが始まろうとしていた。

——黒子のバスケ NG集——

すぐに本田は動き出した。駆け足で通路を走りぬけ、しかし彼の足は医務室に辿りつく前に止まる。

「……本田か」

「お前、何で」

「どうも嫌な予感が止まらなくてな」

本田の視線が捉えたのは、彼が見知った相手だった。

（なんで盟和の主将が？ てか見に来てたのか）

「ベンチに茜の姿が見えなくてな。まさかどこぞの男の毒牙にかかっているのではないかと心配になって」

まさかの勇作説。

なお、橙乃本人は毒牙にかけている模様。

第九十話 その背中に希望を背負い

——バスケなど欠陥競技にすぎない。

圧倒的な実力を持ちながらも、紫原がバスケに強い関心を懐かないのはこの思いがあるからだ。どれだけ努力を重ねようとも最後は大きく、そして強い力を持つ者が勝つようにできている。天才だから抱いた苦悩。結果がわかりきっている現状に嫌気がさしたがゆえに。

たとえ共に全国制覇を成し遂げたものでさえ、才能の開花がなかったが故に他の凡人と変わらない敗北と言う結末を迎えたのだから尚更だ。彼のこの考えが覆ることはないのだろう。

それにも関わらず、先ほども徹底的に叩き伏せた敗北者がまたしても自分に向かってきた。この事実は紫原を苛立たせるには十分すぎるものだった。

「じゃあ望みどおりひねり潰してやるよ」

自ら向かってくるといふのならばその通りにしてやろう。

空の拳に力を籠める。今度こそ、もう二度と這い上がって来れない程に実力差を見せ付けてやろうと。

「まあ待て。落ち着け敦」

「ん？」

今一度徹底的にひねりつぶす。

紫原が強く意識を固める中、福井が待ったをかけた。

「そう易々と向こうの挑発に乗るな。さっきやつはもう出来ないと思っていたロングスリーを見せ付けたばかりだぞ。まだ何か考えがあるかもしれねえ」

「だから？ そんなの関係ないし」

「お前がそう熱くなるのがおそろくはやつの狙いだ。一対一で仕掛けるよりも今はゴール下を狙うのが先決だ。そうすればそもそもやつの体型じゃ手も足も出ねえ。お前にとっては別に不都合ではねえだ

ろ？」

闘志を燃やす紫原を制する福井。

確かに彼の言うとおり、白瀧が折角出てきたとしても彼が出来ることは限られている。インサイドの勝負では従来の活躍は難しいだろう。

ならば白瀧の発言を無視して光月等を狙えば、敵の思いを打ち砕くにはむしろちよいどいいかも知れない。せっかく出てきたにも関わらず、自分では何も出来ない戦況で味方を蹂躪されるというのは、彼が最も嫌う状況であるはずだ。

「……わかったよ」

結論に至ると、紫原の怒りは程ほどに冷めた。福井の意見に従ってゴール下から大仁多を攻めようと方針を変える。

「チツ」

(乗ってこない、か。くそっ)

紫原が冷静さを取り戻した様子を見て白瀧は小さく舌打ちをした。福井達の予想通り、白瀧の狙いは紫原の意識を自分へと向けることであった。3ファウルの光月は勿論、黒木が抜けたセンターも付け狙われれば崩れやすい。だからこそ陽泉の最大戦力である紫原の相手を引き受けようとの考えだったが、彼の狙い通りに事は運ばなかった。

「明」

「うん？」

「こうなれば方針変更だ。——俺の動きに惑わされるな。お前は全力で紫原を止めることだけを考えろ」

ならば善後策を取るしかない。下手に意識しすぎないように光月へと声をかけて、白瀧は動き出す。

陽泉の反撃。大仁多の選手交代後、初めての攻撃だ。福井と宮崎で慎重にボールを運びながら大仁多の出方を窺う。紫原達がゴール下のポジションを取る中、やはり大仁多のディフェンスが動きを見せた。

「ッ！」

「お前だけは止める！」

「これ以上好きにはさせない！」

インサイドの紫原に対して白瀧と光月、二人がかりのダブルチームで彼のオフエンスを防ごうと試みていた。

(光月と白瀧のダブルチーム。力には光月で拮抗し、平面のディナイは白瀧に一任し紫原をとめるつもりか)

(その代わり劉はフリーになるが、しかし)

確かに紫原をとめるためにはこれが一番よい手であるかもしれない。他の守りが薄くなろうとも、紫原の脅威に比べればまだマシであると考えられる。

加えて下手にゴール下へと直接パスをさばこうとしても――

「そう簡単にはいかせてくれねえか」

小林や山本のマークは厚かった。特に小林は高さに優れているため、彼の上を越えてパスをさばくことはやはり難しい。しかもゴール下の戦力が下がったことを考慮してなのか、先ほどよりも幾分かマークが厳しくなったように感じる。

(確かに司令塔としてはお前の方が上かもしれねえな。けど)

「フリーになったからには好きに動かせてもらうアル！」

「小林！ 後！」

「むっ！」

ならばとハイポストの劉が小林の動きを阻んだ。スクリーンで彼の行く手を塞ぐと、さの間に福井が中央へと侵入する。

「ああ、だろいな」

「ッ!？」

「もらった」

その福井の動きを読んでいたかのように、白瀧が一瞬のうちに彼の手からボールを奪い取った。

「なっ!？」

(馬鹿な。やつは紫原のダブルチームについていたはずなのに！)

(動きを読んでおったな。劉がスクリーンに出れば、スペースとなっ

た場所に切り込んで来る可能性が高い。自身が復活したばかりで、紫原を止めると敵に意識づけさせた意表も突いて)

「白ちゃん……!」

「ナイス白瀧!」

敵の動きを読み切り、裏をかいいた白瀧の働きで大仁多はディフェンスに成功した

一方で自分へのマークを利用され半ば無視される形となった紫原はこめかみに力がこもる。

「どこまで苛立たせてくれれば気がすむんだよ!」

「紫原」

「もう意見は聞かないよ。これ以上調子に乗せられない。俺が一对一で止めてやる」

「ああ、それならいい」

歯を食いしばって告げられた言葉には絶対の自信が含まれていた。

調子の変動が大きい紫原だ。下手に刺激してやる気を削がれては困る。ロングスリーもあるとなれば、現状で白瀧を止められるのは彼しかない。ゆえにこの言葉を信じようと福井は了承してディフェンスにつく。

大仁多の攻撃。今度は突然のシュートにも対抗できるようにと紫原が白瀧にピツタリマークについた。

「陽泉は白瀧に紫原を当ててきたか!」

「先ほどのような奇襲は二度も通じないだろう。そんな甘い相手ではない。ならば真つ向から打ち破るしかない」

「連続で決められれば勝機は大きくなる。だが止められればまた前半戦のように勢いを奪われかねえ」

「勝て……!」

白瀧がリベンジを果たすのか。あるいは再び紫原が圧倒するのか。観客席、ベンチ、コートの人々の意識が二人のマッチアップに集まる。

すると、白瀧は紫原を視界に捉えるや否や、彼の守備範囲の外を通して小林にボールを戻す。

「あ?」

(勝負しない？ やはり無理するのを嫌ってあくまでもSGの役割を果たそうってか？)

(……いや違う！ 凶っているんだ。勝負を仕掛ける時を)

慎重な動きを見て勝負を避けたのかと考えがよぎったがすぐに否定する。デイフェンスに成功した直後の大切な場面。動き出すタイミングを狙っているのだ。

(ここで止められようものなら大仁多の勢いは取り戻せない。もう負けられない。——大丈夫だ。いつもと、何ら変わらない！)

先に大敗したばかりの、勝ち目の薄い戦い。されど挑む白瀧の闘志に濁りはない。勝機の小さい戦いなら今までも何度も挑んできたものなのだから。

小林を中心に大仁多はパス回しを続け、中の光月に渡り——その時は来た。

トップに立っていた小林が急に方向を変えて走り出す。逆サイドから走る白瀧と交差するように入れ替わり、光月からのパスが通った。

(来た！)

「こんなんで振りきれたと思ってるなら大間違いだよ？」

「わかっているさ。だから——」

後から追いかけていた上に巨体な分、小林やそのマークについていた福井が障害であったはずなのに意にも介していないような紫原のそぶり。もはや細かい小細工では動揺させないだろう。

「——行くぞ」

ゆえに、白瀧は一気に仕掛けた。

純粹に自分の出せるスピードを發揮したクロスオーバー。常人ならば反応さえ難しい白瀧の切り返しに、紫原は見事に食らいつく。

「ッ」

「これで終わり？」

「いや、まだまだ！」

得意のスピードを封殺する。

これでもう打てる手は限られるだろう。そう紫原が考えた直後

だった。

白瀧の上半体が突如前上方に上がった。

(ティアドロップか！)

「知ってるよ！」

まだゴールから遠い位置でのゴールに向かう跳躍となれば、得意技のティアドロップだろう。わかってしまえばなんてことはない。紫原は反射神経を活かしてすぐにジャンプして、シュートに触れることを意識し手を伸ばした。

「もらったぞー！」

「なっ!？」

——そんな紫原をかわすように、彼の足元をすべるように白瀧が駆け抜けた。右手に掲げたボールを胸元へ引き寄せるように体の上を通して回転し、紫原の横を過ぎた辺りで両手で掴みとる。

(何、これ。跳躍と呼ぶにはあまりにも低すぎる——!)

「ちいっ！」

空中で白瀧の動きに目を奪われていた紫原は、両足で着地した白瀧が劉のブロックをかわしてジャンプシュートを決める姿を見て、さらに驚愕する。

「そんな馬鹿な……！」

(大仁多) 40対58 (陽泉)。もう決めさせないと考えた直後の失点。紫原は納得できずに審判に詰めより抗議する。

「ッ。ちよつと、どこ見てるんだよ！今の白ちゃん歩いてたじゃん！」

「いいや。歩いていないよ」

「ハアッ!？」

「落ち着け！」

意見は通らず、得点が覆る事はなかった。審判に手を出しかねない形相の紫原を岡村が体をはって止める。

受け入れられない。間違いなく白瀧はドリブルの後とんだはずなのだ。ダブルドリブルを取られるはずのプレイ。確かに跳躍にしては高さが低かったものの……

(待てよ。まさか、白ちゃんは本当に跳躍していなかったのか？あれ

はただの跳躍じゃなくて、ステップの一種か？)

考えを巡らせて、紫原は早くも正解に辿り着いた。

「今のプレイは……」

「……まだ手を残していたのか」

答えにたどり着いたのは彼だけではない。青峰や赤司、この試合を見守る好敵手たちも導き出していた。

一度目の挑戦で紫原をかわせたという事実は大きい。これならばオフェンスを立て直すことは可能だろう。

「これが通用するならば、あるいはいけるかもしれない。だが……」

しかし、ディフェンスで止めきることができなければ逆転することは難しい。そして今の太田では陽線のインサイドプレイを止めることは困難だった。

赤司の予想は的中する。

フリーとなっている劉を中心に、福井達はゴール下へとボールを集めた。かろうじて三浦が岡村のシュートをプレッシャーをかけて外させるも、その後が続かない。

「いつまでも、お前たちの希望通りにいくと、思うな！」

紫原が光月、白瀧の二人のポジション争いに勝利し、リバウンドを確保。さらに連続で跳躍すると、二人のブロックをお構いなしにダンクシュートを決めて見せた。

「ぐあっ！」

「ッ」

「白瀧！ 光月！」

(太田) 40対60 (陽泉)。紫原が得意のパワープレイで再び太田多を突き放す。

二人が揃って吹き飛ばされ、やはり同じ条件の戦いでは相手にならないという事実を突きつけられる。

「これ以上怪我しないうちに引っ込んだら？ ゴール下に白ちんの居場所なんてないんだよ」

「紫原！」

痛みに表情をゆがませる白瀧に、紫原は淡々と告げて去っていく。

「ただでさえ陽線の方がインサイドは強いというのに、黒木が抜けて余計に差が広がっていく」

「白瀧が復活したとはいえ、リバウンドの奪取にはそれほど貢献できない。どこかで止めないと勝てないのに……！」

力も高さも、紫原のほうが上。とてもではないがゴール下での勝負では勝ち目が薄すぎた。陽泉は今後もゴール下を中心にオフェンスを組み立てることが予想されるだけに、この展開は大仁多には苦しい展開となった。

観客席、ベンチの選手たち。多くの者が焦りを募らせる。

「要……」

「大丈夫だ。まだ、手はある。心配するな」

ただ、白瀧はまだ希望を捨ててはいない。光月が不安げに声をかけると、彼を勇気づけるようにそう答えた。

（勝つんだ！俺が紫原に勝って希望を繋ぐ！）

少しずつ感覚が強くなってきた右足の痛みを振り払うように、白瀧は心の中でつぶやいた。

大仁多の攻撃。小林から山本のスクリーンプレイを仕掛けるものの、岡村のブロックに防がれ、光月がリバウンドを確保した。

やはり陽泉のディフェンスは堅い。紫原のヘルプがなくても相当なものだ。

一度三浦へ預け、再びトップの小林に戻すと……再び、白瀧にパスを供給する。

「通らせてもらおうぞ、紫原！」

「させないしー！」

避けては通れぬ一対一。

左右の揺さぶりでは突破できない。ロツカーステップで不意を突き、ゴールに迫るも紫原はまだついてくる。くわえて山本のマークについている宮崎も近く、突破は難しい状況となった。

（決めてやる！負けてなるものか！）

状況を理解して白瀧は再び先ほど同じ動きを繰り返した。

（来るか！）

「……ドライブの最中、ディフェンスを空中でかわしながらゴールに迫るステップ」

『ギャロップステップ』。馬が走り抜ける姿を彷彿させることから、そう名付けられた技だ」

敵味方が混在する密集地帯を、白瀧は潜り抜ける。右からは紫原が大きな手を掲げてブロックを狙い、左からは宮崎が隙を伺う中、ギャロップステップでその間をかわしていった。

「決まった！ 突破した！」

(はじめのうちはどうしてもボディバランスが乱れ、身体が流れがちなステップだ。それをここまで！)

「行け！ 白瀧——!？」

勇作が、楠が、白瀧の新技の成功を確信して思わず声を張り上げた。

また自分たちも気づかないところで成長していたライバルへの嫌気も抱かぬまま、ただ得点を決めろと叫んで——そして驚愕する。

かわしたはずの紫原が、もう白瀧のブロックに跳んでいた。

「なっ!？」

「にいつ!？」

(馬鹿な！ いくら紫原の反射神経でも、ギャロップステップのタイミングでブロックしようとした状態では追いつけないはず！)

(まさか、二度目でもう白瀧の技を読み切っていた？ さっきの跳躍ではほとんど跳んでいなかったというのか！)

見たばかりの技であるというのに、紫原は完全に反応していた。しかもゴール下にいた岡村もブロックに跳び、長身の二人が白瀧のシュートを叩き落とそうと立ちはだかる。

「終わりだよ、白ちん！」

絶望が迫る。

(——化け物め)

白瀧でさえかつての味方に恐怖を覚えた。本音が思わず零れ落ちそうだった。

この戦いの為にと励んでいた必殺の技を、紫原はたった一度見ただけで既に対応し、防ごうとしている。これだけの理不尽な力を示す敵

をそれ以外に何と例えればよいのか。

「だが、悪いな紫原」

しかし、それも全て承知の上。化け物でなければ、これくらいのことをしてこななければここまで励んできた意味がない。最終手段としてとっておいた意味はない。

「お前ならきつとそう来ると思っていたよ」

白瀧はキセキの世代を過小評価などしていなかった。一度突破さえすれば得点が容易など、甘い考えは一切無い。

ドリブルでは突破できない。新たなステップでも読みきられるだろう。ならばその次を模索し、追い求める。これが白瀧の強みである。技術を磨き、己のものとし、昇華させ、自身のプレイスタイルに適応させていく。

「この一本は取らせて貰う！」

「なっ!？」

ボールを持っていた両腕を下げ、左手へ移す。

動作を見て白瀧の意図を察したのか、紫原の表情から余裕が消えた。即座に空中で体を回転させ、右手をシュートコースの間に伸ばす。

常人離れした反射神経とウイニングスパンを持つ紫原の必死のブロック。完璧な対応であった。それでも、彼をもつてしても白瀧の放ったシュートに触れることはできなかった。

(そんなんっ。まさか——!)

「ギャロップステップからの、ダブルクラッチ！」

(しかも、ループが高い!?)

指先を転がすようにリリースされたシュートはスピンの加えられ、ほとんど直角に近い角度で上空へと放たれた。予想したシュートコースから外れたために紫原も止められない。

選手達が驚愕する中、ボールが回転しながら高いループを描く。そしてバックボードに衝突すると軌道を変えてリングの中央に吸い込まれていった。

「やった……!」

「やりやがった！」

「白瀧、陽泉の長身包囲網を突破！　これは大きい！　大きな得点だ！」

（大仁多） 42対60（陽泉）。

勢いが衰えることはなく、大仁多が連続得点を記録。白瀧が次々と得点を重ねていった。

「長身二人のブロックをものともせず」

「ギャロップステップだけではなかったんだ。そこから体勢を入れ替えて、フィンガーロールからのハイループレイアップ——いや」

「あれはヘリコプターシュートか」

ボールをリリースする際、指の腹を転がすように放つフィンガーロール。これによりボールには回転がかかり、シュートコースやボードに当たった際に跳ね返る角度を調節する技術。ボールを制御する時間が長くなり、ディフェンスを見極めたうえでのショットが可能になるが、優れたハンドリング能力と体幹が必要となる。

これに加えて白瀧は常のハイループレイアップシュートよりさらに放物線が高いヘリコプターシュートを打つことによって、己よりもずっと高いブロックを突破していた。

「練習で成功率は高くなかったって聞いていたのに、一発で……」

「あいつ、シュートの角度変えやがった」

「え？」

「多分、俺や光月より陽泉のブロックの方が高かったから、かわすためによりループを高くしたんだろ。ゴールに入る角度が90度に近くなるほど入りやすい」

これは練習中、何度もこの戦いで使えるようにと仲間の力を借りて試み、そしてものにできなかつたものだ。

それを本番で最初の一発で決めた。

本田や光月よりも紫原をはじめとした陽泉の選手たちの方が背は高い。そのため彼らをかかわそうとより角度を厳しくした結果、よりループが高くなりゴールに入りやすくなったのだと、練習で何度も目にしてきた本田は変化を感じ取っていた。

「ただそうすると滞空時間が長くなるからずれも大きくなるし、もしリングに当たれば大きく跳ね返る危険性もあるはずだ。それを土壇場で調整するなんて……」

決めやすく、しかし外れやすくもなったシュート。これを成功させることは難しい。だが練習よりも厳しくなった条件下で決めた。

ふと本田は特訓の前に白瀧が語っていたことを思い出していた。

『“キセキの世代”は抜かれても一瞬で立て直し、俺を止めに来るだろう。どうしても二対一の形ができてしまう時がある』

『たとえ二対一でも勝てるように！』

あの時は難しいと思っていた。彼の意志を感じ取ったために口をはさむことはできなかったものの、可能性は低いと考えていた。

だからこそ目の前で不可能を可能にする姿はより鮮明に映ることとなった。

(地上戦で互角のキセキの世代を相手に空中で……)

「……そうか」

(ただ速いだけのドリブルではなく、相手の意表をつくステップなどの応用)

「」

「火神？」

「黒子君？」

そして、彼のプレイに感化された人物は他にもいた。

「これだ」

「これなら」

火神と黒子。先に大仁多に敗れた選手たちも、己の新たなバスケットスタイルを見出していた。

第九十一話 彼に成せること

「ちいっ！」

(勢いづきやがって！　だがまだリバウンドでうちが優位なのは変わりねえ！)

連続得点により流れが大仁多に傾きかねない戦況だ。それほど白瀧の活躍は著しい。

されど、まだ戦況が完全にひっくりかえったわけではない。パスコースが厳しいとはいえまだ陽泉のゴール下の厚みは健在なのだから。

陽線の攻撃。宮崎からトップの福井へとボールが戻ると、福井が果敢に切り込んでいく。マークの小林を突破することはできないものの、フリースローライン近くまで侵入すると、レッグスルーで切り返し、そのままフェイダウェイシュートを放った。

「ッ！」

(弾いたものの、止められないか！)

(触れやがった！　だがこれでいい！)

『リバウンド!!』

小林はシュートに触れたものの、ボールはしっかりとゴールに向かっていている。

得点の行方は両チームのゴール下の選手たちにゆだねられた。

「ぐっ、こんのっ！」

(……こやつ。5番黒木に代わって入っただけあつてパワーはある。しかしまだ儂の方がパワーも背は上。負けるわけにはいかん！)

「むんっ！」

岡村と三浦が競り合う。さすがは陽泉の主将というべきか、岡村が優位にポジションを確保していた。

フリーであった劉もベストポジションを確保し、紫原も光月を外に押しやり、リバウンドに備えていた。

(結局こじや話にならないじゃん。まあわかりきっていたこと——?)

力を籠めつつ、紫原は視線を後ろへと向ける。

忌々しい相手だがこれで圧倒できるならばまあ構わないだろう。

——そう考えて、白瀧がいないことに気づいた。

白瀧はポジション争いには参加せず、フリースローライン近くまで後退し、ボールの軌道を観察していた。

「なにっ?」

(白瀧がリバウンドに参加しない?)

(ディフェンスは諦めて速攻に備えるつもりか?)

「……それでいい。引っ込んでなよ。速さしか能がないやつは」

(どうせ速攻だつて決めさせないし)

陽泉の選手たちは誰もが白瀧はこの失点を認めたものだと判断した。

こうして陽泉が完全な状態でリバウンドに備えている状態で、ボールはリングに衝突、大きく跳ね返った。

「そこか!」

その瞬間を白瀧は見逃さなかった。

跳ね返ると同時にボールの方向へと駆け出した。ボールが跳ね返ったのは紫原と光月が競り合っている場所だった。

紫原がポジションをキープしたまま跳躍。それにわずかに遅れて白瀧が跳躍の勢いそのままに飛び上がった。

先にボールに触れたのは白瀧だった。彼の左手がボールを叩き、真上へと押し戻す。

「はあっ!?!」

「白瀧!」

(紫原からボールを奪っただど!? いや、それよりも!)

「——まだまだ! ボールは生きている! 確保しろ!」

突然の出来事に驚きながらも、荒木は適切に指示を飛ばした。

ボールはまだ誰の手にもわたっていない上空にある。これ以上大仁多にボールを渡すなど声を張り上げた。

「渡さねえよ。言っただろ。速さで負けるわけにはいかないんだ!」

ただ、二度目のチャンスを制したのも白瀧だった。逸早く着地した

彼は連続で跳躍。持ち前の瞬発力で真つ先にボールに食らいつき、腕の中へと抱き寄せた。

「なっ、馬鹿な！」

「山本さん！」

「よっし。ナイス、よくやった！」

ボールを手にするや、すぐに山本へとパスを回し、攻撃権を手にする。

陽泉、ここで痛恨の攻撃失敗。しかも得意であるはずのリバウンドをとれないという結果は大きな痛手であった。

「飛び込みリバウンド」

「本来はオフエスがディフェンスのスクリーンアウトをかいくぐるための技。あえてセットには加わずに、ボールがはねてからその場所へ」

「そうか。自分だけ助走があるという条件に加えて、片手だけ伸ばして手を伸ばすとなれば、白瀧の瞬発力なら競り勝てる」

「そして、空中に浮かんだボールを確保するのは白瀧だ。やつは瞬発力が高い。一方で紫原達の方が滞空力が高いからすぐ二度目の跳躍に移行できない」

「なんてやつだ。力と高さが支配するこの領域に、速さ一つで飛び込んでいったか」

紫原をはじめとした選手たちには簡単にポジションを奪われてしまふ。そのまま奪い返すことも難しく、そうなればリバウンドをとることは困難だ。

ならば最初から同じ条件で勝負をしない。あらかじめ自分が得意とする場所で勝負する。

「最速の領域に至らなくとも、自身の瞬発力をもってあらゆる苦境を打破し、幾度も窮地を乗り越えてきた。ゆえに——神速」

たとえ不利な場面でも打開していく。彼の戦う姿に、改めて与えられた二つ名の意味を知った楠。

「チッ。気にくわねえな。速さに逃げるとは面白くもねえ。だが——その一辺倒な考え方は嫌いじゃねえ」

「……彼だつてあんたみたいな馬鹿と一緒にされたくはないでしょうに」

一方、力を信条とする根布谷は白瀧の考えにわずかに嫌悪を抱きながらも、一つの事を貫きとおそうとする姿勢を感じ取ってニヤリと笑みを浮かべていた。

「西村。県大会でお前が言っていた言葉の意味。ちよつとわかった気がするよ」

「……はい」

神崎は隣に座る西村へと声をかけた。幾分か気持ちが上がった西村も、今一度勇気をもたらしたのだろう。何度も紫原に挑み続け、そして勝機を呼び寄せた姿に希望を見出して。

「速さしか能がないと言ったな紫原。ああ、そうだろう。お前からしてみれば、俺はとるに足らない存在なのかもしれない。だが侮るな」その白瀧は紫原と真っ向から向き合つて強く言い放つ。

「今お前の目の前にいるのは、その速さを武器に、かつてお前たちと共に全国の頂点に立った男だ！」

「……向いてないわかつて、なんでそれを受け入れない。どうしてお前はそこまでして挑んでくる！」

かつての絆を信じて戦う白瀧と。すでに才能の世界しか認められない紫原。

二人の対立は、より熾烈を極めることとなった。

再び大仁多の攻撃。

またしても白瀧と紫原の対一の形になると、白瀧が中央へ切り込んでいく。そしてドリブルだけでは困難とみるや、先ほどと同じく低い軌道で跳躍した。

(またギャロップステップか！)

「このっ！」

この動きを見切った紫原はつられずに後方へと下がる。ゴール下へと切り込む相手に万全の体制をとった。

白瀧はその裏をつく。

ボールを持った右腕を左腕と合わせることなく、そのまま体の後方

からリリースする。

「ッ!？」

「ギャロップステップと見せかけて、ランニングフック!？」

すでに後方に跳んでいた紫原はこのシユートを止められない。

再び白瀧が二得点を挙げ、追撃ムードを高めていった。

(大仁多) 44対60 (陽泉)。

「……同じフォームから、異なる分岐した動きを高速で叩き込んできやがる」

「紫原を相手にここまでやるなんて。もはやあいつは、青峰と同等のオフエンス力じゃねえか」

日向や火神は、直接戦った時の脅威を思い起こされ体を震わせた。並大抵の攻撃力じゃない。もはやキセキの世代最強と呼ばれた男にも匹敵するのではないかと考えずにはいられなかった。

(やつめ。技術だけならばキセキの世代と同等、あるいはそれ以上だと言うのか!?)

試合を指揮している荒木もその力を脅威と認識し、作戦の練り直しを考えることとなった。

「これはあるいは」

「あいつが、勝つのか?」

何も火神たちだけではない。

赤司もこの流れは本物であると表情を硬くし。

青峰は顔がにやけるのを抑えきれず、身を乗りだすようにしてコートに視線を送った。

「——ひねりつぶす」

そんな状況下で、紫原の中で何か切れた。

陽泉の反撃。執拗なダブルチームでついに立ちをこらえきれなくなったのだろう。

紫原が外へと駆け出し、直接ボールを受け取りに行った。

(よこせっー)

「っ。お、おっ」

(まづいー)

「俺が出る。明、お前は備えている！」

味方でさえ下手すれば蹴散らしてしまいかねないような威圧感にあてられて、福井は紫原へボールを預けた。

敵の変貌を感じ取ったのだろう。白瀧も光月へ指示を出すと、すぐに彼の後を追いかける。

「目障りなんだよ。お前らみたいなのがいつまでも向かってくる姿は！」

紫原はそう言うと、今までで一番鋭いキレで切り返す。

「くっ！」

(速い！ まだ、速くなるのか！)

巨体が一瞬で消えるような錯覚を覚えるほどの動きに、白瀧の反応が一瞬遅れた。その間に紫原は中へと侵入する。

「ヘルプ！」

負けじと山本が対応する。ボールを奪おうとプレッシャーをかけると、紫原は右足を軸にターンアラウンド。山本をかわしてゴール側へと向かっていった。

(ぐっ。なんでその体でこんなにも速く動ける!?)

「紫原あつ！」

これ以上の突破は許せない。光月が今度は負けるものと気迫を盛り立てた。

「お前もまだ足りないっていうなら、もう一度味合わせてやるよ！」

光月の様子を理解した紫原は、ターンした左足に力を籠めた。

そしてゴールに半身を向けたまま跳躍。空中で回転しながらゴールを狙う。

(これはさつき吹き飛ばされた技！ ……だけど！)

「負けるものかああああ！」

光月を吹き飛ばし、黒木を負傷させたツールハンマーが再び猛威を振るおうとしていた。

自然と力がこもる。またあの惨劇を繰り返してはならない。今度こそ守ってみせると、光月は全身の力を振り絞り、ブロックに跳んだ。「いっっっ！」

「あつつつ！」

ダンクを決めようとする紫原、防ごうとする光月が空中で衝突する。

二人の力は互角に見えた。

ボールは二人の腕の間で均衡し——直後、光月の腕が後ろへ押し込まれる。

（そんな。これでもダメなのか!? まずい。押し切られる——）

スピードとパワー。この二つを両立する紫原のエネルギーを前には、光月でさえ止めることは敵わない。

「大丈夫だ明。俺もいる」

光月一人ならば敵わない。

しかし、大仁多にはまだ紫原の対抗できる選手がいる。

二人の後ろに回りこんでいた白瀧が一拳に跳躍、光月を後押しするように続いてブロックを敢行した。

「なっ!? 白ちん!」

（紫原が山本と光月を相手にしている間に、回り込んでいたのか!）

「こ、これは!」

「最高のエネルギー対大仁多一のパワーと、大仁多一のスピード!」

二人とも一人では紫原に圧倒されていた選手だ。どちらとも得意とする領域で紫原に並ばれ、蹴散らされた。

だから今度は二人で。

大仁多が誇るフォワード兩名が紫原に真っ向からぶつかっていく。

「こ、んのおおおおっ!!」

『うおおおおおおお!』

白瀧が加勢することで再び拮抗するエネルギー勝負。

やがて一方へと勢いは傾いて、光月と白瀧が紫原からボールを叩き落とした。

「ぐうっ!」

「よしっ!」

その勢いは大きく、紫原はバランスを失ってその場に片膝をついた。

しかもボールは小林の足元へと落ち、福井に奪われる前に胸元へと引き寄せる。

(紫原が体勢を崩した、今なら！)

「小林さん！」

「ッ。……行け！」

強敵が動き出せない今が好機と考えたのだろう。着地した白瀧はすぐさま前線へと駆け出した。

掛け声で彼の意図を読んだ小林は齒を食いしぼりつつも、ボールを長距離飛ばすタッチダウンパスを放った。

(こいつ、不死身か!?)

「速攻だ！」

「戻れ！」

荒木が指示をだすが、いくら福井達が全力で走っても間に合わない。今度こそ速攻が成功したと、大仁多の選手たちは息をこぼした。

「……何、調子に乗ってんだよお前ら」

ただ、予想外の出来事があった。彼らの予想に反して紫原の動き出しが早かった。

白瀧の速攻の動きを見るや、彼の背中をすさまじい速度で追い上げていく。

「なっ」

(紫原。あいつ、片膝ついてたのに、一気に白瀧との距離を詰めてる！)

完全に追いつくことは難しいだろう。だが徐々に紫原は白瀧との距離を詰めつつあり、背中越しに敵の様子を確認した白瀧は、焦りを隠せなかった。

(まずい。これは、取ったら止められる！)

このパスをとってしまえば、すぐさま速攻を止められてしまうだろうという予感を抱いてしまったがゆえに。

「この距離ならば途中でカットされることはないだろう。しかし、問題はその後だ」

「白瀧の身長ではこのパスは跳ばないと取れない。そうなるとおそら

く、跳んで着地するまでの間に紫原に追いつかれる」

「ただでさえパスをとるだけでも手一杯なんだ。その間に追いつかれようものなら、紫原を相手に一対一で決めることは難しい」

赤司や青峰、楠もこの速攻は止められると理解した。

紫原の動き出しが遅いと判断したからこそ決行したこの機会だ。前提が崩れれば決めることは難しい。

「全員、走れ！」

「二次速攻に備えて！」

荒木と藤代の指揮官達もそれを理解し、選手たちに備えるようにと声を荒げる。

「ッ。——くっ、そおっ！」

すぐに結果は出る事となった。

ほかにすべはなく、白瀧はスリーポイントラインを超えたところで跳躍する。

(止められる方を選んだか)

「着地の間に止めてやる」

跳ばずにボールを見送る選択肢もあつただろうに、あくまでも攻め続けるつもりようだ。ならば望み通りシュートを阻む。もう一度得意の速攻を止めてやろうと紫原はブロックに備えた。

「すみません、佐々木さん。技お借りします」

——皆の予想を裏切つて、白瀧は着地の前に動き始めた。

両手でボールをつかむと彼はそのままリングに向かってボールを放った。

「えっ……」

「嘘！」

「これって佐々木のアリウープレイアップ!？」

パスを受けたまま、空中でレイアップシュートに移るアリウープレイアップ。

佐々木が得意とする技が、白瀧の手によってようやく大仁多に二点をもたらした。

(大仁多) 46対60 (陽泉)。流れを決め付ける一発となった。

「……ッ」

『そんなシュートどんな場面で撃とうが無駄だよ。俺には通用しない』

「嫌味のつもりかよー！」

皮肉にも、紫原が前半戦で止めて通用しないと発言していた技の組み合わせが紫原の予想を上回り、得点を奪うこととなった。白瀧はその発言を聞いていないが、紫原には関係ない。もはや彼の怒りは冷めることはない。

「よくやった白瀧ー！」

「さすがの働きだぞー！」

「……はい」

遅れて駆け付けた小林や山本が肩を叩いてほめたたえた。ただ、当の白瀧は彼らの声をどこか上の空で聞き、意識を右足へと向ける。

(くそっ。頼む。まだ、持ちこたえろ！)

明らかに休憩時よりも痛みが増強している。力を籠めようとするよりも痛覚は強まった。

ここで抜けるわけにはいかない。どうかもう少しもってくれと自分の体に願うばかりだった。

「何を呑気に話してんの？」

小林達三人が笑う姿を不服に思ったのだろう。

宮崎から福井へスローインが渡ると、すぐに紫原がパスを要求。そして大仁多の不意を衝くカウンターを仕掛けた。

「おい！ 紫原が来るぞー！」

「ッ！」

三浦が全員に注意を呼び掛ける。

すぐさま山本と小林、すぐ近くにいた二人がプレッシャーをかけるが、紫原は何事もなかったかのように二人の間を中央突破。

さらに白瀧と光月が防ごうとするも、レッグスルーでペースを変えると直後ダブルクロスオーバーで光月の横を抜き去っていく。

「ぐうっ！」

(だめだ。白瀧並のこいつの突破力は、反応できない！)

三浦も劉のスクリーンに掴まり、紫原を止めることは敵わず。追いつこうにもドリブルをしているにも関わらず、紫原に追いつけるものはいなかった。

「絶対に、行かせねえ！」

ただ一人、白瀧を除いては。

「まあ白ちゃんならそうだろうね。で、一人でどうするつもりだよ」「ツ！」

三浦が突破している間に、紫原よりも速く自陣に戻った白瀧。

何とか紫原を止めようと考えるも、確実に止めるような手段はなかった。

先ほどのように光月との連携も望めない。そもそも紫原と同じ土俵に立つためのスピードを持っているのが白瀧だけなのだから当然だ。

(……先ほども紫原を止めようとして失敗したんだ。同じ手でやっても突破されるだろう。ならばどうする。接近する前にステイールするのをあきらめて、紫原と平行して走りながらボールを狙うか。あるいはシュートの時に一気にブロックを狙うか)

チャンスのある選択肢を想像する。紫原がドリブルの最中に隙を伺うか、あるいは瞬発力を生かしてブロックのタイミングを計るか。

そう考えて、白瀧はすぐさまその考えをすべて否定した。

(駄目だ。退くな。考えろ。俺では力や高さで紫原を止められない。シュートの前にボールを弾こうにもリーチの差が大きすぎる。ダンクシュートで来られようものなら確実に俺が負ける。かといって得意とする必殺のステイールも既に始動の癖を紫原に見切られている。だが、そうだとしても今紫原からボールを奪うしかとめる手段はない。今俺が持っている手札で——白瀧^俺要に出来ることは何だ！)

浮かんできたのはあくまでも妥協策だ。とても紫原を止められるとは思えない。

何としても紫原を止める。敵が近づいてくる中、白瀧は決意を固めた。

鋭い視線を紫原に向け、腰を低く構えて紫原を待つ。

「白瀧。その構えは——」

「無理だ。紫原は、あいつの癖を見抜いている。瞬発力にも反射神経で反応できる」

「瞬発力が反射神経を上回ることを期待して、か？ だが」

同じ手で止めることは難しいだろう。紫原はリーチの長さもあるためすぐにボールを動かせる。

「——結局凡人はそうだ。同じことを何度も繰り返す。それで何時かは勝てるだなんて、夢物語でしかねえんだよ！」

紫原は今度こそひねりつぶそうとさらに加速した。

二人の距離が縮まる。紫原が白瀧の守備範囲に入った瞬間、白瀧の体がわずかに浮かんだ。

（読んでるんだよー）

白瀧の瞬発力が発揮される際に出る癖だ。動きを見破った紫原は、白瀧が絶対に手出しできないようにと、自分の体の後ろを通して方向を変えるバックロールターンで右に切り返した。

流れるように、突出した敵をかわしながらゴールにも近づく方向転換。

切り返した紫原はゴールを見据えて、しかしその間にいる白瀧の姿を目にして驚愕した。

「……ッ!？」

（なん、で?）

突撃してきたはずの白瀧が変わらない場所に。否、先ほどよりも後方にいる。自分が前進した距離とほとんど同じ距離後退して、立ちはだかつていた。

「癖というものは指摘されてもそう簡単に直せるものではない」

「だからこそ——白瀧は敵に読まれている癖を、一つの動きとして取り入れたのか」

「同じ動作からあらゆる動きに変化するという古武術の達人。方向変換に長けたこの動きは紫原でも見切れない。この短時間で自分の弱点に適応しやがった！」

動き出しの癖がわかりきっているならば、その動作から新たな動き

を組み込んでいく。

紫原に向かつて前進すると見せかけ、白瀧は半ステップ後ろに退いて紫原の次の手を防ごうとしたのだ。紫原は癖を見た瞬間に反射神経により動き出していた。そうでなければ対応できなかったのだが、その為に白瀧の動きを最後まで読み取ることができなかった。

狙いがわかったのならば話は早い。着地と同時に今度こそ止めようと白瀧は力を籠めた。

「がっ!？」

「ッー」

同時に、白瀧の右足に強烈な痛みが走った。思わず力が抜けそうになるのを必死にこらえる。

そんな彼のかすかな表情の変化を見逃さなかったのか、橙乃が不安げな表情を見せる。

「ぐっー」

「ダメッ」

再び右足に力を籠める。痛みが強まる。

これから起こる事を察したのだろう、橙乃が我慢できず立ち上がった。

(まずい。まだターンの衝撃が、殺しきれない！)

「白、ちんー」

「ああああああ!!!」

「ダメ——!!!」

そして白瀧は、痛みを押し殺した。

橙乃の悲鳴にも似たような声が木霊するなか、白瀧の瞬発力が発揮された。

体格が大きければ大きいほど、切り返した時に生じる反動は大きくなる。紫原が立て直すことができない間に、白瀧はステイールに成功。ボールを弾き落とした。

「よしっー」

ボールを確保したのは小林だった。小林はボールをとるや、すぐさま振り返り、前線へとボールを送る。

「行け、山本！」

「任せろ！」

パスの先は山本。ボールを受けると、鋭いドライブで中央へと切り込む。宮崎、劉が山本を阻むが、三浦が宮崎にスクリーンをかけて突破。

「撃たせん！」

「チッ！」

最後の番人、岡村が山本の前に立ちはだかった。

その壁は非常に高く、レイアップに向かおうとした山本のシュートコースを完全に封じていた。

ならばと山本は右手の手首を返し、ボールを彼の右横へと放る。

シュートからパスへと切り替えるとすぐ近くに駆け込んだ光月へとボールが通った。

(ここで光月か)

「ナイスパスです！」

「させないアル！」

「止めるぞ！」

光月が跳躍する。

直後、劉とさらにもう一度跳躍した岡村の二人がブロックに跳び、二人がかりで光月のシュートコースをふさぎに来た。

紫原がいけないとはいえ、陽泉自慢の長身選手二人が相手。パワーもあって突破することは容易ではない。

(ブロック二人！……ッ)

「邪魔だっ！ どけえっ！」

だが光月は退かなかった。岡村、劉の二人をもものともしない豪快なダンクシュートを決める。炸裂した威力は相当なもので、二人は同時に吹き飛ばされた。

「ぐうっ！」

「があっ！」

紫原にも匹敵する威力。ファウルトラブルにも怯まず、その力を存分に振るうことで陽泉には多大なプレッシャーが降り注ぐ。

「二人のブロックの上から決めた！」

「三ファウルでもここまで動けるのを示したな」

「光月も強さをもう一度印象づけた。得点以上の重みがある」

（大仁多）48対60（陽泉）。スリーを一本決めればついに一桁差。大仁多が一挙に追い上げてきた。

「どうだよ。まだ大仁多は、終わってはいねえぞ」

「白ちゃん！」

「速さで並べようが、動きを読まれようが、そんなの関係ない。

俺と同じ速さだというのなら、より速く。

俺の動きの先を読まれるというのなら、より先へ。

破られたなら次の手を打つ。何度でも挑み、そして突破しよう！

もう敗北はいらない！」

呆然とする紫原に、白瀧は己の意志をぶつける。

得意分野で負けようと、分析されようと、打ちのめされようとも関係ない。

絶対にこの勝負は譲らないと笑みさえ浮かべて白瀧は口にする。

（ああ、終わった……）

自分の状態を、敵に悟られないように。

（痛みが押し上げてくる。ちくしょう、動いてなくても痛む。……だめだ。せつかく流れをつかんだこの状態で。敵に悟られるな。俺はまだ行ける。笑ってそう示せ）

紫原の速攻を止めるために使った瞬発力がとどめとなった。

痛みの強さも、痛む頻度も増していく。どうか敵にはバレない様にと必死に笑みを作る強がりを見せるも余裕は残されていなかった。

『陽泉高校、タイムアウトです！』

ゆえに自分の状態を隠すことに精一杯だった白瀧は、荒木が自分に冷たい視線を送っていたことなど、気づくはずもなかった。

——黒子のバスケ NG集——

特に悪いことをしていないのに数日の間に3人もの女性（橙乃、西條、荒木）に厳しい目で見られる主人公。

「俺が一体何をした!?!」

桃井には見られていないからまだセーフ。

第九十二話 麻痺した心、止まらぬ想い

ゆつくりと一枚のページを捲り、目的である特集の項目へと目を通す。

月間バスケットボール。世間に月バスの愛称で知られる雑誌だ。今月号ではIH直前の高校バス界における新人特集が組まれている。大仁多高校でもエースである白瀧がインタビューを受けており、彼の写真と一緒に担当記者・小川との受け答えの内容が書かれていた。

こういった受け答えからも選手の性格や思考というものは読み取れる。

藤代は一字一句見逃さぬようにと目を通し、そして教え子の答えを見て目を細めた。

「おや。藤代監督。それはうちの生徒のものですか」

「ええ。以前、学校まで記者の方がいらっしやいますね。うちの選手がインタビューを受けたんです」

「そうですね。なんでも今年の高校バスケットは例年にも見ないほどの人気を誇るとか。大仁多もその一角の選手を獲得したとあって期待度が高いのでしょうか。うらやましいものです」

同僚の教師が羨ましそうな笑みを浮かべてそう言った。

確かに推薦枠で白瀧を確保したことでバスケット部へ向けられている信頼は例年よりも大きなものだった。それだけ彼が中学で残り、そして高校でも見せた活躍は大きなものだった。今年だけではなく先三年間、バスケット部の全国での活躍が期待されている。

「……本当に、そうですね」

「はい？」

「いえ、なんでもありません。独り言ですよ」

しかし藤代は楽観視することができずに、一人口をこぼす。

記事の内容を今一度見る。質問は決してそれほど重苦しいものではなかった。だがその問いに対する答えは藤代にとっては決してすべてが好意的なものではなかったのだ。

（白瀧さん。あなたは大仁多の皆と一緒にいることは楽しいと語ったが、バスケットをすることが楽しいとは答えなかった）

『昔はバスケットが楽しかった』と言っていた白瀧が、今はそう語らなかった、語る事ができなかったその原因を藤代は察した。

（ああ。きつと今のあなたは、もうバスケットを好きではないのですね）

バスケットが楽しいのではない。バスケットを好きなのではない。

むしろその逆。皆とするバスケットはおそらく好きなのだろう。そうすることで仲間と一緒にいられることができる。

バスケット選手ならば誰であれ根本にはバスケットを愛する気持ちがあるはずだ。しかし今の彼は違う。白瀧はバスケットそのものを嫌っている。

彼の感情は十分に理解できる。彼は長年バスケットで築いてきたものをわずかな期間で失ったのだ。

そんな彼を残念に思い、そして同時によかつたとも思った。誰もが挫折すればそういう感情を抱くものだ。それでも、彼がまだバスケット好きであると、達観したことを語る子供でなくてよかつたと思った。

（ならば、いつかその感情がかつてのあなたの物に戻るように――）

まだ高校生だ。負の思いが渦巻くことはどうしてもあるだろう。

ならばせめて、彼の心が真に望まれる形になってほしい。そうなるように、彼に悔いだけは残さないように指導しよう。改めて藤代は期待している選手を理解し、彼をサポートしようとして心に決めた。

「よしっ。連続得点だ。まだいける！」

「いいぞ皆！ さすがだぜ！」

大仁多対陽泉、得点差は十二点。大仁多はまだリードを許しているとはいえず、陽泉に後半戦初となるタイムアウトを取ることを余儀なくさせた。この試合状況は決して悪いものではない。

あつという間にもう一度流れを引き寄せた選手たちを、大仁多のベンチメンバーは笑みを浮かべて出迎える。少しでもこの休憩時間の間に彼らの疲れを軽減しようと、橙乃や東雲も補給の準備を整えて彼

らに手渡した。

「橙乃」

「え？」

そんな中、ゆつくりとベンチに戻ってきた白瀧はボトルを受け取りながら橙乃を呼び止めた。

「至急、右足のアイシング、準備を頼む」

「アイシング？ 右足ってまさか……ッ！」

「頼むよ」

言われて橙乃は白瀧の右足へと視線を向ける。彼の足はわずかに揺れていて、まるで何かを必死にこらえているようだった。

彼のただ事ならぬ様相を察したのだろう、橙乃の表情がゆがむ。

心当たりはあった。先ほどの紫原の速攻を防ぐプレイだ。あの動きで足の状態が悪化したのだと。

「じゃあやっぱり、さっきのプレイで？」

「いや、ちよつと気になる程度だ。悪いが時間がない。急いでくれ」

「……靴を脱いでおいて」

あくまでも白瀧は認めようとしなない。きつと彼は最後まで本当のことを隠して戦うのだろう。そもそも先ほどのインターバルの時間に止められなかった時点で彼の歩みは止まらない。

白瀧の意志を察した橙乃はすぐに準備を整え、藤代たちが作戦会議を始める中、白瀧の足が回復するようにと努めた。

「これで陽泉に白瀧さんの脅威を印象付けることができました。加えて最後に光月さんが決めてくれたことも大きい。敵は必ず動きを見せるはず。——白瀧さん、まだ行けますか？」

「何をいまさら、ですよ。最後まで必ず戦い抜いて見せます」

「……おそらく陽泉は間違いなく白瀧さんを止めに来るはずだ。しかし光月さんの力強さも無視できない。白瀧さんに引き続き紫原さんを当て、ゴール下を固めてくると予測されます」

この後も間違いなく戦況の鍵となるであろう白瀧に藤代は問いかけた。

指揮官の問いに、エースは無論だと笑みを浮かべて口にする。

藤代とて彼の状態が万全ではないということくらい理解している。しかしチーム事情とインターバル中に聞いた彼の本音を思い返し、それ以上彼に質問を投げかけることはしなかった。

「ええ。ひよつとしたら光月にダブルチームを当ててくる可能性もあります。プレッシャーを与えてファウルを誘発させる可能性も」

「その展開ならば、むしろ好都合です。白瀧さんの新技ならばたとえ密集地帯であろうとも強さを発揮できる。加えてそうなればパスコースも自然と見えやすくなるでしょう。オフェンスは最初にどれだけ動けるかで決まる。白瀧さん、敵の引き付けを頼みますよ」

「わかっています」

「その後は白瀧さん、光月さんに敵の意識がつけられ次第、小林さんたちにも動いてもらいます。ディフェンスは引き続き今の体制を続行。どのような状況であろうと紫原さんが最大の脅威であることは変わりない。皆さん、できるだけ白瀧さんと光月さんの負担を減らすように心がけてください」

『はい！』

現状、大仁多のオフェンスが陽泉に強い負担を与えているのは白瀧と光月だ。だからこそ彼らがこの後も活躍することがあれば、敵がどう動こうとも意識はかならず二人に集中する。

ゆえにまずは二人に陽泉の意識を向けさせ、そして上級生達の活躍へつなげる。こうすればたとえ陽泉がどのような作戦を展開しようとも対応できるだろう。

気がかりなのはその二人がどれだけ動けるかだが、こればかりは未知数な問題だ。だから他の上級生にしっかりとフォローするようにと伝え、藤代は作戦会議を終える。

大仁多が第三Q終盤、最後の追い上げに向けた討論を進めているころ。陽泉でも同じように作戦会議を行っていた。

「——引き続き、白瀧に紫原を当てる。やつの突破力は邪魔だ。何としても叩きのめせ」

荒木は強い口調で紫原に命じた。敵の最大戦力を警戒してなのだろう、いつもより表情も硬い。

そんな指揮官の心情を知ってか知らずか紫原は常の調子で返事をする。

「わかってるし。これ以上好き勝手はさせない。……あつ。ねえちよつと、ドリンクちようだーい。あと他の補給のやつも」

「おい紫原ー」

「いや、今は構わん。好きにさせろ」

自分の方針だけ耳にして、紫原は補給物資を求め他の部員達のもとへと足を運ぶ。

自由気ままなルーキーを福井が怒鳴るも、彼を止めたのは珍しく荒木であった。

「むしろこのことはあまりやつの耳に入れたくはなかったことだ」

「は？ どういうことアル？」

「やつが聞くと面倒なことでもあるので？」

「……引き続きここから先の作戦を告げる。先に言っておくが容赦はするな。敵がどんな状態であろうともな」

劉や岡村が首をかしげる中、荒木は話を続ける。

あくまでも陽泉が優位であることは変わらない。それを理解しているのだろう。確実に勝利を収めるように作戦を告げた。

『タイムアウト終了ですー！』

そしてタイムアウトの終了の時が訪れた。

各選手達はそれぞれ準備を終えて、再びコートへ戻っていく。

（さすがに一分だけでは焼け石に水か。だが、残り時間もそう長くはない。何とか持ちこたえれば行ける！）

「ありがとう。行ってくるよ」

アイシングを受けたとはいえ、右足にはまだ痛みが残っていた。

紫原を相手にするにあたってあまりにも大きすぎる不安だが、文句を言っても仕方がない。

橙乃に一言礼を言うと、白瀧は靴を履きなおして立ち上がり——
「んっ?」

コートに向かおうとして、右足を橙乃に押しえられたことに気づいた。

(……余計な心配を増やしてしまったか)

無理をしたことでインターバルの時以上に彼女に負担を強いてしまった。それを理解すると白瀧は薄い笑みを浮かべて彼女の手に両手をかざした。

「ごめんな。橙乃」

「謝るくらいなら、最初から無理しないでよ」

「……ごめんな」

「ッ……」

そう言つてゆっくりと彼女の手を足から引き離し、コートへと向かっていった。

(畜生。白瀧要、この偽善者め)

最後まで心配してくれた相手にそう告げることしかできなかった。謝らないでと継る女の子に謝ることしかできない。そんな己の不甲斐なさを呪った。

「要、大丈夫か?」

「おかしなもんだよな」

「えっ?」

二人のやりとりを見ていた光月が声をかけると、白瀧は自嘲気味に続ける。

「もう目の前で女の子が泣く姿を見たくない。そう思ったからこそ戦う事を選んだはずなのに。まただ。……泣かせてばっかりだよ、俺は」

かつてはその理由から親友さえ許せないと感じていたはずの己が、だ。

(だけど、たとえ仲間を泣かせることになろうとも、俺は——)

それでも白瀧は戦い続ける。たとえ、誰かを傷つけることになろうとも。

試合が再開。陽泉ボールから始まった。

やはり陽泉は紫原を起点にオフENSEを組み立てる。容赦ない力がデイフェンスに向けられるが、光月と白瀧のダブルチームが辛うじて拮抗していた。

「こんのっ！」

「ッ——！」

「そこだっ！」

パウードリブルに対抗している中、瞬時にできた隙を見逃さず、白瀧がボールをはたいた。

紫原の手元からボールがこぼれるも威力は弱かったのかすぐにかみなおす。

そして二人の真ん中に足を踏み入れると、今度は紫原の上体が後上方へと下がった。

(フェイダウェイシュートか！)

「撃たすかつ！」

「止めるぞー！」

ただでさえ打点が高い紫原だ。反応が遅くなつてはまず止められない。白瀧と光月、二人はすぐさま飛び上がりシュートコースをふさぐ。

——そんな二人をあざ笑うかのように紫原はゴールへ向かってステップイン。

二人のマークを掻い潜ると無人のゴールにダンクシュートを叩きこんだ。

「なっ!？」

「うそっ！」

読んでいたはずが、完全に裏をかかれてしまった。

(大仁多) 48対62 (陽泉)。タイムアウト後、最初の得点は陽泉高校。見事に大仁多に向きかけた流れを断ち切った。

「……アップアンドアンダー。要の得意技か」

「やってくれる」

「やはり力や高さだけの選手ではない。速さも技術も全国随一だ」

ドロップステップからシュートフェイクでマークをひきつけ、ゴール下へ切り込みシュートを決める。一連の流れが大型センターとは思えない素早さを誇る。敵のお株を奪うプレイで、大仁多に改めてその脅威を知らしめた。

「だからどうした。お前が天才だってことはもうわかっている！」

それでも白瀧はひるまず、再び紫原へ挑んでいく。

大仁多の反撃。

小林と共にボールを運んでいた白瀧は、中の光月からボールが戻ると、果敢に切り込んでいった。

クロスオーバーからビハインドザバックでもう一度切り返し、そして再び逆へ切り返す。

紫原のマークが並走する中、白瀧は視線を一瞬ゴールへ向ける。シュートを打とうとして、そこからギャロップステップでゴールへと迫った。

「ぐっ！」

(つられたか！)

「よしっ！ ツ？」

先ほどシュートを見せたたえに紫原も対処を考えてしまったのだろう。シュートを警戒して跳んだ紫原の横を白瀧は駆け抜ける。

着地すると白瀧はシュートを狙う。

だが、視界に映る劉が自身を見ながらもブロックに跳ばない姿を見て違和感を覚えた。

「まだ、だよ！」

「うおっ！」

ジャンプシュートを放つが、後方から追いついた紫原の指がボールに触れた。衝撃でシュートコースがずれた為にボールはリングに衝突する。

「リバウンド！」

大きく真上に跳ね上がり、再びリングへ向かう。

おそらく次のバウンドでコートへ落ちてくるだろう。そう考えて選手たちはポジションを取り合う。白瀧も先ほど同様に落ちてくる

瞬間を狙って集中力を高めていく。

「——うッ!？」

そしてボールが衝突すると同時に動き出そうとして、白瀧の目の前に福井の背中が立ちはだかった。

(しまっ、ヤバい！)

これでタイミングをずらされた白瀧はリバウンドに参加できない。

「うおおおっ!」

「ちいっ!」

リバウンドをとったのは劉。大仁多の追撃を阻むディフェンスリバウンドを獲得し、攻守が入れ替わった。

「よしっ、ナイスじゃ劉!」

「当然アル」

(それでいい。飛び込みリバウンドは何よりもタイミングを求められる繊細な技だ。少しでもディフェンスがタイミングをずらしてやれば、もはや奴はリバウンドをとることは出来ない)

思惑通りに選手が動いたことで、荒木も納得したようにうなずいた。

白瀧のリバウンドは驚きはあったものの来るとわかっていたれば対処できないものではない。次の布石も伝えてある。インサイドは陽泉優位に変わらない。

「やつの挙動に惑わされるな。メッキさえ剥がれてしまえば、所詮やつは179センチの非力なプレイヤー。ゴール下でお前達に敵うはずもない」

これでしばらくは大丈夫だろうと荒木は肩を下した。

そして続く陽泉の攻撃。今度は外から仕掛けていく。福井から劉、福井、そして宮崎にボールが渡ると強引にミドルシュートを放つ。

このシュートも直接決まらなかったが、ゴール下の信頼感が違った。

紫原が光月を、岡村が三浦を抑え、さらに白瀧にも劉がついている。

「ぐうっ!」

「……っ」

「くっ、そっ！」

後半になっても変わらぬ圧力。大仁多の面々が成すすべなく抑えられている。

「つぎけんな！」

「むっ!？」

だが負けじと三浦が強引に体を入れて岡村の内側を陣取ると、全力で岡村を背中で抑えてポジションを確保し続けた。

「こやつっ！」

(あいつの代わりに出て、何もできませんでしたじゃ、顔向けできねえ！)

「うらああああっ！」

思い浮かんだのは後輩を庇って倒れた友の顔だった。彼の代わりに出ている自分がこのまま引き下がるわけにはいかないと、力を振り絞る。

すると、ボールが彼の方へと向かってきた。これを見逃すわけもなく、三浦がそのままボールをつかむ。大仁多もディフェンスリバウンドを取り、陽泉の追撃を封じ込めた。

「おおっ！」

「三浦先輩、ナイスです！」

「たりめえだ！ インサイド守ってるのはお前らだけじゃねえぞ！」

後輩たちを鼓舞して三浦は小林へとボールを戻す。

まだ突き放されるわけにはいかない。意地のディフェンスで食らいついていく。

もう一度大仁多のオフエンス。

今度は小林は三浦にボールを預けてゴール下から得点を狙うが、岡村のブロックに阻まれた。ボールは山本が確保すると、光月へ渡す。

やはりインサイドから攻めると言わんばかりのパワードリブル。劉を内へ押し込み、シュートを狙うと見せかけてパスをさばいた。

「ナイスパス！」

パスを受けたのは白瀧。視線をリングへ向けたままボールを持つ両腕を下ろす。すると両腕を再び上げることなく、手の力だけでボ―

ルを押し中へと切り込んだ。

「ッ」

（俺にとってお前が最も厄介だったのは、反射神経と体格によって可能とされた守備範囲だった。俺のスピードにも追いつかれてしまう身体能力が。それを遅らせる為のフェイクは単純なものでいい。下手に小細工を重ねればかえって罠だと気づかれてしまう可能性が高い。一度罠にかければ相手は一瞬その罠を警戒してしまう。その一瞬でいい。一瞬でも反応を遅らせてしまえば、俺は突破できる！）

シュートフェイクにつられ、紫原は上体があがっていた。

その隙について白瀧は中へと侵入する。だが今回もやはり陽泉の反応が遅かった。マークを突破したにも関わらず、今までのようにすぐにマークに出てこない。

（なぜ——？）

「調子に乗りすぎじゃないの、白ちん！」

「っ！」

その理由を考える間に、紫原のブロックが迫った。

白瀧のティアドロップにも指先を当て、強引にシュートコースをずらす。

「ちいっ」

（リバウンド——）

こうなってはシュートは決まらない。今度こそリバウンドを取ろうと意気込む白瀧に、今度は宮崎が最短進路上に現れた。

「ッ！」

突然の事で急ブレーキを踏むが、右足が悲鳴を上げる。

「こ、んのおおお!!」

だが痛みに負けていられない。ブレーキを踏んだ右足を軸にして、白瀧は強引に体をねじって回転。宮崎の体をよけてボールに向かっていく。

「なっ」

（勢いを殺すことなく宮崎をかわしやがった！）

本来の予定よりほとんど遅れることなく走り込んだ白瀧。岡村、三

浦、劉が迫るポジションへと駆け込み、跳躍。

岡村、三浦が跳び、白瀧も続く。そして白瀧は気づく。劉がそのままの位置を確保して跳躍していないことに。

「何っ」

（空中へ弾いてタイミングをずらすというのならば、対処は簡単。こちらもわざと飛ばずにタイミングを遅らせればいいアル）

「——ッ！」

白瀧は一回目のリバウンドでは指先で弾くのが精いっぱい確保までには至らない。得意の瞬発力で二回目をとるために弾いているのだ。

ならば自分が跳ばなければそれも失敗に終わる。このまま白瀧がとらなくても岡村が取る。陽泉は二重の対策で白瀧のリバウンドを封じ込めようとしていた。

「うっ、お、おおっ！」

敵の狙いに白瀧は気づいた。このままでは敵にボールを奪われてしまう。

そう結論付けるととっさの判断で彼は後上方の空中へ目掛けてチップアウト。ボールを無理やりゴール下から弾いた。

「なっ!?!」

「これなら密集していたお前たちでは取れないだろう」

（そして弾いた先には）

「よくやった白瀧！」

ガード陣最高身長を誇る小林が確保する。長身司令塔の立ち位置がここでも活きた。小林はもう一度光月へと預けると、彼のダンクシュートが炸裂。

（大仁多）50対62（陽泉）。ついに大仁多も五十点台に得点を乗せた。

「よっしやあ！」

「いいぞ光月！」

得点を決めた光月が吠える。久々の得点ということで大仁多ベンチも勢いを取り戻していた。

(……おかしい。どうなっている)

そんな中、白瀧は一人考え込んでいた。タイムアウト後、明らかに変化を見せている陽泉のディフェンスが気になったのだ。

(俺のリバウンド対策はわかる。だが他のディフェンスはどうだ？)

少なくともゾーンディフェンスではなくなって、どちらかというところマンツーマンに近いがそうだとしてもヘルプが遅すぎる。紫原を信頼して？ あるいは俺がパスをさばくのを警戒してか？)

いくつか考えは浮かぶが、相手は今まで最小失点で試合を圧倒していた陽泉だ。どうも納得がいかない。

ならば、逆にこのように動くことが最終的に陽泉にとっては失点が少なくなるということなのか――。

「まさか、お前ら」

当事者であるからこそ気づくタイミングも早かった。白瀧は一つの結論に至り、敵のベンチに座る荒木を視界にとらえる。彼女は冷たい表情で、静かに試合を見据えていた。

「……そういう、ことかよ。畜生。綺麗な顔して、えげつないことを考えやがる」

おそらく間違いないだろう。敵の真意を知り、白瀧は苦笑するしかなかった。もしも自分の考えが正しいならば、例えわかったとしても、何もできないのだから。

そして試合は思惑に関係なく続いていく。徐々に選手達も疲れの色が強くなる中、藤代も違和感を抱き始めていた。

「おかしいですね。陽泉ディフェンスらしくない」

「らしくない、ですか？」

「明らかに紫原さん以外の四人が白瀧さんへの警戒が薄いですね。ヘルプディフェンスもそうですが、パスコースも制限が甘い。タイムアウトの前後にも得点があつて、最も警戒するべき選手であるはずなのに？」

本来ならばむしろ逆の展開になるはずだった。得点が多い白瀧、光月の両名にマークが集中する。そのタイミングを見て全員で攻めるつもりだったが、むしろ白瀧のマークは甘くなっている。そのため白

瀧が一人で攻める機会も増えていた。

「どうということなのか。」

藤代は冷静に選手を一人一人動きだけでなく表情まで見ていく。すると白瀧へと視線を移したところで、彼の動きは止まった。

「——まさか!」

異変に気付くと、藤代も白瀧と同じ結論にたどり着く。

「そろそろ気づいたか、藤代? だが今さら気づいても遅い。今から手を打とうとも無駄だ。大仁多はもう、終わりだ」

だが遅かった。荒木はこの試合は陽泉が制したと断言する。

「……この試合、まずいぞ」

「え?」

「陽泉は白瀧にボールを集めてあいつの足をつぶすつもりだ」

目を細めて、青峰は苦しそうにそう言った。彼も陽泉が変化した意味に気づいた一人だった。

「味方からすればパスコースが甘い得点源にパスを出すのは当然だし、逆にそのパスをうけた奴は、敵がマークに張り付いている中パスは出せねえ。そうなるとうしてもプレイに関わる時間は増える。自然と足にかかる負担も大きくなるだろう」

ドリブルからシュートに至るまで、チームメイトへのパスも防がれたとなれば当然選手の負担は大きくなる。そうなればただでさえ負傷中の白瀧だ。間違いなく彼の足の限界は早まるだろう。

(しかも、おそらく問題はそれだけじゃねえ)

加えて問題はもう一つ。ある意味この問題以上に苦しい痛手が存在していた。

「スタミナ切れ!」

火神はリコが話した言葉に戸惑いを隠せずに彼女の説明を反芻した。

「ええ。明らかに白瀧君のスタミナの消耗が早まっている。彼の元々の体力を想定すれば、おそらくこのままだと最後までもたないわ」

「もたないって、何でだよ!? だってあいつは体力に関しては中学の時から凄かったって」

「いいえ。それは違います」

「黒子？」

白瀧の体力消費が大きくなっており、このままでは最後まで戦い抜くのは不可能という分析だった。だがかつて記事でみたように白瀧は体力自慢の選手であるはず。そんな彼が怪我があるとはいえスタミナ切れを起こすのだろうかと疑問を呈する火神。

すると黒子がリコの話を引き継いで説明を続けた。

「そもそも白瀧君が優れているのは体力ではなく、体力消費の効率性です。古武術の『最小の力で最大の効果を発揮する』という特性が高いパフォーマンスを維持していました。ですが、今はおそらく怪我の痛みを堪えるためか無駄な動きが増えている。その為に体力消費が大きくなっているんです」

体をねじるなど普通の動作には存在するが、古武術においては省略された予備動作。これが痛みによって一時的に生まれる隙を無くすために行わずをえなくなっており、それが白瀧の体力消費を大きくしていた。

「その特性があつてこそそのスタミナです。それがなくなったとするならば、白瀧君のパフォーマンスは大きく低下する」

「そんなんっ。おい、ただでさえあいつはあの長身が集うゴール下で他の選手以上に消耗が大きかったんだぞ！　なのに……！」

火神はまるで自分の事のように悔し気に唇をかんだ。

己よりも小さな体で、己よりも大きく重い敵に挑んでいた好敵手が、こんな形で追い込まれる事が、悔しくてたまらなかつた。

「かといって、簡単に白瀧を下げることもできないだろう。なにせ、陽泉の狙いは白瀧だけではないからな」

冷たく断じたのは赤司だった。

陽泉のオフセンス。紫原はパウードリブルで背中に陣取る光月と白瀧の両名を押し込んでいった。

「ッ」

「ぐっ——っ!？」

「要!？」

突如白瀧の体が崩れ落ちた。足の限界が近づいていたのだろう。すると、中央のパスコースの注意がなくなり、宮崎から劉へとパスが通った。

「よしっ！」

「くっ、そおおっ！」

これ以上引き離されてたまるかと光月が飛び上がる。そして光月は空中で劉の動きがポンプフェイクであるということに気づいた。

「しまった——!?!」

（これは、ヤバい！）

「きつと来ると思っていたアル。もらった！」

「チイツ！」

陽泉の狙いは光月の四ファウルにもあった。白瀧が動けなくなれば、光月の負担が増え、ファウルを狙い機械も増える。

光月をおびき寄せることに成功した劉は今度こそ本当にシュートを狙う。

だが跳ぶ寸前で、横から手を伸ばした三浦が彼の腕をはたいた。

「むっ!?!」

『ファウル！ プッシング！ 大仁田 白12番！ フリースロー、ニシヨツト！』

かろうじて三浦の動きが先だった。フリースローを敵に与えることになったものの、大仁多は光月のファウルという最悪の展開を免れることとなった。

（危なかった。三浦先輩が来てくれなかったら、四つ目のファウルになるところだった）

「三浦先輩、すみません。助かりました」

「気にすんな。あんまりファウルを恐れすぎるなよ。それこそ敵の思うつぼだ」

「はい」

ファウルを恐れては何もできなくなってしまふ。いざというときは助ける。だから恐れるなど三浦は光月の方を叩いた。

だが、一時はしのいだものの大仁多のピンチは終わらなかった。

劉のフリースローは二本とも決まり、点差は再び大きくなる。一方の大仁多はリバウンドが再び陽泉優位になり、白瀧以外の四人で攻めようと試みるが……

「くそっ！」

光月のシュートも岡村のブロックに掴まり、小林や山本の連携も阻まれてしまう。

(陽泉ディフェンスがマンツーマンになったことで、一対一のマークが厳しくなった)

(光月もマークを抜くことは出来るが、やつらの長身で止めることは出来なくてもシュートに触れてきやがる)

(加えて紫原のヘルプディフェンスは健在だ。どうしても一手が足りない)

この終盤で陽泉の堅い守りが重くのしかかった。リバウンドを信じてブロックも触れる事を意識しているのか、シュート時のプレッシャーが厳しくなっている。

時間が無くなる中、大仁多の得点が変わらない。

「詰みだ、白ちん！」

「うおっ!？」

「があっ！」

そして、試合を決定づけるかのような紫原のアリウープが炸裂した。

白瀧と光月の二人のブロックを吹き飛ばし、二点をもぎ取っていく。

「どうやら足の痛みも限界みたいだし。これで、勝ち目はなくなったね」

「……紫原」

吐き捨てるように言っつて紫原は立ち去っていく。彼がそう考えるのも無理はないだろう。

第三Q残り一分。得点は(大仁多)52対68(陽泉)。点差は大きくなっていった。紫原も白瀧の怪我の度合いには気づいていた。あの足ではもう今まで通りの動きは出来ないだろう。

ゆえに、ここで彼らの勝機は消えたのだと、わざと聞こえるようにそう告げた。

「いつまで勘違いしているんだよ」

立ち去った紫原へ向け、白瀧は静かな口調で言葉を綴った。

「勝ち目なんて知るか。今までの試合だって必ず勝てる保障なんてなかった。ただ、勝たなければならぬ戦いだから勝ってきた。どれだけ厳しい状況だろうと関係ない。お前に勝たなければならぬなら、勝っただけだ」

まだ諦めてなどいなかった。確かに紫原の言う通り、ここから勝つ望みは薄いのだろう。

だが、例えそうだとしても絶対に勝ってみせると己を鼓舞するように白瀧は言う。

「……だめだ」

「監督？」

残り時間が少ない中、藤代が立ち上がる。

目的は選手の交代。白瀧をベンチに下げることだ。これ以上はただ怪我が悪化するだけという判断だ。藤代の目にも先ほどの紫原のアリウープが決定打に見えたのかもしれない。

もしも機会があれば一刻も早くベンチに下げようと藤代は申請に向かう。

「監督！」

「ッ。白瀧さん？」

だが、申請する前に白瀧が呼び止めた。コートから動く姿が見えたのだろう。片手を藤代へ向けて伸ばし、首を横に振る。

まだ行けると目で訴えて——直後、彼の瞳に黒い光が宿った。

「ッ!？」

キラインステインクトとはまた違う。ヒリつくような威圧感を醸し出していないながら、寒気がするほどの静けさがあった。

彼の様子からただ事ではない状態に気づき、藤代は結局申請を告げぬままベンチへと戻っていった。

「まだやる気——？ 向かってくるなら、とことん捻り潰すけど、いいよ

ね？」

パスを受けた白瀧をにらみつけて、紫原は面倒くさそうに告げた。紫原はすでに試合は決したと考えている。これ以上は敵の体力が尽きるまでの足掻きでしかない。どこかにそういう甘い考えがあったのかもしれない。

だが、たとえ慢心があったとしても。

紫原が反応さえできず、棒立ちで白瀧の侵入を許すとは誰も想像していなかった。

「なっ!？」

「はっ!？」

敵味方全員が驚く中、白瀧のミドルシュートがリングを射貫く。

(大仁多) 54対68(陽泉)。大仁多に久々の得点をもたらしたのはエースの一発。紫原を一对一で突破し、得点を動かした。

「なんだ？ 紫原が動けなかっただど？」

「監督。今のあいつの動き、今まで一番速かったように見えました」「そんなわけがあるか！ やつは負傷している上に残りの体力も少ない！ ここにきて動きが良くなるはずがない！」

紫原が得意のディフェンスでも何も出来なかったという事実には、陽泉のベンチが少し動揺を見せる。荒木はそんな選手達を鎮めようと一喝する。

間違っていない。ここまでの作戦は間違っていないはずだ。敵が力を温存していたとも思えない。だから問題はないと考えた。

「守って、みせる」

一方、試合は陽泉オフェンスに移る中、白瀧がディフェンスでも変化を見せていた。

パスコースのケアだけではない。光月と共に紫原のゴール下への侵入を防ぐ。その力は先ほどよりも大きくなっており、紫原は中へのポジションを取れずにいた。

「ごんのっー!」

(どうなっている？ 白ちん、スピードだけじゃない。明らかに力も上がっている！)

(怪我をしている選手の動きじゃねえ。鈍るところか今までで一番の動きじゃねえか)

紫原のようなパワープレイヤーのポストアップに対抗しようとなれば、足の負担は大きい。今の白瀧ではこらえきれないはずなのに。(痛くない。この程度の痛みなど、あの時の痛みと比べたら……!)

当の白瀧は痛がる素振りさえ見せなかった。いや、それどころか。「くっはっ」

(これは俺が望んでいた戦いだろう。だから)

「くっく、くはははは!」

(笑え)

心底楽しい事をしているかのように、狂ったように笑う。

何色にも染まる始まりの白が、黒に染まりゆく。

「……ッ!?!」

「か、要?」

紫原も、光月も、白瀧の変貌に恐怖を覚えた。

おかしい。今の彼は、何かがおかしい。

まるで目の前の試合の事しか見えていないようだった。

「——そうか。今思えばあの時から、お前は扉の目の前に立つ資格を得ていたんだな」

「えっ?」

一人、青峰は納得したようにつぶやいた。

前兆はあった。中学二年の全中後、白瀧が復帰してから行っていた一対一。

怪我の痛みや激しい疲労があり普通ならば満足には動けないはずなのに、そのような姿勢を見せることなく戦っていたあの状態だ。

「まさか」

橙乃はあることを思い出して呆然とした。

県大会予選後、白瀧とかわした些細な会話を。

『俺は別に無茶しているとは思っていないんだけどな。なんというか……試合中は集中して自分の体が限界だと感じないというか』

あれは言葉遊びなどではなく、本当に言葉通りの意味だったとした

ら？

「己が戦わなければならぬ。強すぎた義務感と摩耗した心が、あいつに限界を超えさせたか」

「赤司？」

「どんな強敵が相手でも立ち向かう『鉄心』と呼ばれた木吉でさえ、キセキの世代と戦った時には心が折れ絶望を味わったというのに。長年圧倒的な力を見せ付けられたあいつの心が健常だと思うか？」

「じゃあ、それって……」

「よく見ておけ。今から見えるのはあの男の本質だ」

すべてを知る赤司はチームメイトにそう告げる。

白瀧の本質。今を苦しむ仲間のために、目の前の戦いに挑むことだけに専念した男の結末を見届けるようにと。

「うおおおっ！」

陽泉は完全に攻めあぐねていた。そうでなくともガード陣のマークが厳しい中、白瀧のデイフェンスがより厳しさを増す。

一度山本のステイールを許してしまう。何とかボールはラインの外に出たが、これで時間がつぶれる。

おそらくこれが第3Q最後の攻撃になるだろう。

そう考えて慎重にパスを回して動きを探る中、白瀧が宮崎から劉へのパスを叩き落とした。

「なっ!？」

(嘘だろー！こいつ、守備範囲が広すぎるー！)

「よくやったー！」

最後の攻撃になると思われたこのボールを取れたことは大きい。

小林はボールを確保すると福井に取られないようにと胸元に寄せ、そして山本へパスし、二人で速攻へ向かう。

「小林さんー！」

山本からパスが戻ると、横から白瀧の声がかかる。今までよりも速い戻りだった。今ならば彼のオフエンスも成功すると考えてパスをさばいた。

ボールを受けて着地する。そしてそのまま地を蹴った。

だがすぐ後ろに紫原が迫る。

(止めてやる！)

「白瀧、後ろだ！」

死角である後ろからのブロックだ。小林が声をかける。

シュートを中断するには声をかけるのが遅かった。

シュートを止めるにはブロックが遅かった。

白瀧のロングシュート。放たれたボールは、今までよりも早いタイミングで打ち出され、紫原の指が触れることさえ許さなかった。

「なっ!？」

「えっ!？」

(紫原に止められていたシュートが！)

(早くなってる!?)

高々と打ち上げられたボールがリングを射貫く。

そして第3Q終了の笛が鳴り響いた。

(大仁多) 57対68(陽泉)。残り一分、藤代もこれ以上の得点は厳しいと考えた中、大仁田が五点を獲得し、十一點差で最終Qを迎える。

「守って、みせる」

白瀧は紫原へ再度告げた。

——フロー。

痛みやストレスから解放され、目の前の出来事に没頭する。とある極限の集中状態の前段階にあたる、極限の没頭状態。

本来、人間は80%前後しか実力を出せないように制御されているが、フローに入っている白瀧はその90%近くの実力を引き出すことができる。

「守ってみせる。たとえば、仲間を傷つけてでも。俺が、仲間を守ってみせる！」

かつて心に深い傷を負った彼にとって、没頭状態に入るのは当然のことだった。気を紛らわせ、感情を麻痺させて精神的な苦痛に対処する。そうすることで彼は彼の心を守っていた。

心身ともに傷つき、矛盾した道へと足を踏み入れた白瀧。それを理

解していながら、正しい想いは止められない。

——黒子のバスケ NG集——

紫原のようなパワープレイヤーのポストアップに対抗しようとなれば、足の負担は大きい。今の白瀧ではこらえきれないはずなのに。

(痛くない。この程度の痛みなど、あの時の痛みと比べたら……！)

『食べられないなら私が食べさせてあげようか？』

(あの時の……)

『はい、あーん』

(い、痛くな)

『どう、おいしい？』

(痛……)

「あああああああ！」

「どうした!？」

「本当に壊れた!？」

多分、彼が今まで生きてきた中、最もひどかった痛み。

第九十三話 銀色の疾風 この一時に全てを賭けて
(オールイン)

『第三Q終了です。これより二分間の休憩インターバルに入ります』

第三Qは終盤に大仁多が猛追し、(大仁多) 57対68 (陽泉)で終了した。

点差は十一點。この数値だけ見ればまだ逆転が可能な領域である。この戦果をもたらした最大の功労者である白瀧は、味方の目から見ても尋常ではない威圧感を保ちながら、ゆつくりとベンチに戻ってくる。

(……すげえ)

(こんな状態、今までの練習でも見たことがなかった)

(本当にこの試合をひっくり返せるかもしれない)

彼の姿を見て、大仁多の選手達に楽観的な考えがよぎった。

まだ今日の試合が始まってから一度もリードを得られていない。キセキの世代を相手に、つい先ほどまで敗北の予感さえ覚えていたのに。

——だからこそだろうか。白瀧の突然の変化に気づくのが少し遅れた。

「ん？」

最初に気づいたのは西村だった。

こちらに歩いてくる途中、白瀧から感じていた寒気がふと消えたように感じた。

「白瀧さん、大丈夫ですか？」

「……ああ。西村、か」

嫌な予感がして西村は彼のもとへと歩み寄る。

怪我の度合いの事も確認しようとしてさらに問いかけたその時。

白瀧の体が崩れ落ちた。

「ッ!? 白瀧さん!? 白瀧さんー!」

地面に倒れこむ寸前、西村は白瀧の体を支える事で事なきを得た。

だが、この時すでに白瀧は限界を迎えていた。躍進の源となったフ
ローの状態を保つことが出来ないほどに。

彼には理由があった。戦い続ける理由が。
彼には覚悟があった。勝利を掴む覚悟が。
彼には約束があった。果たすべき約束が。

(足が、すごい熱を帯びている！)

橙乃は白瀧のアイシングを行い、彼の限界を悟った。

怪我という事だけではない。あの陽泉を、強いては紫原を相手に一
瞬たりとも油断できない時間が続き、足を酷使し続けた。体力、精神
力、足の状態。すべてが万全の状態からかけ離れてしまった。

(彼のあの没頭状態は、おそらく極限の集中状態よりは元々解けやす
い状態なのだろう。それを維持するには無理があったか)

頭からタオルをかぶり、力なくうなだれる白瀧。彼を見た藤代も表
情を曇らせた。

例えるならば勉強をひたすら続けている途中、突如他人に話しかけ
られることで気が逸れる時だろうか。目の前の出来事に専念してい
たものの、ふとしたタイミングで途切れる。そうだったものだ。

白瀧にとっては第三Qの終了がその時だった。常の彼だったらそ
れでも保ち続けたかもしれないが、今は負荷が大きすぎた。

(いずれにせよ、白瀧さんはもはや長く戦えない。どうするか……)

エースの状態を理解し、藤代はもう一度思考を活性化させる。

藤代には三つの考えがあった。

まず一つは現状維持。今出ている五人にそのまま最終Qを託し、白
瀧には積極的なプレイは避けさせるといふ事である。流れから見
ても今のメンバーを変えたくない。勝利を諦めず、最悪の展開を避ける
という考えだ。

二つ目は白瀧と光月の交代。負担が多い二人を下げ、佐々木と松平

を投入するという作戦だ。

(白瀧さんを下げるならば光月さんも下げなければならない。間違はなく陽泉は白瀧さんだけではなく光月さんも狙っている)

先ほどのプレイでもわかった。陽泉は白瀧の消耗だけではなく光月の5ファウルをも狙っている。もしも4ファウル目をもらうようなことになれば、すぐに下げるしかなくなる。故に二人を出すか、二人を下げるかしか考えられなかった。

(だがこれはおそらく、最も可能性が低い)

もしも二人を同時に下げたとするならば。これは大仁多の勝機が最も低いものだと考えた。

これはあくまでも負担の低い選択肢。リスクが少ない分、あの陽泉デイフェンスから得点する期待はあまりできない。それほど陽泉のデイフェンス力は脅威であった。

(もしも、ただ勝利だけを目指すならば――)

その一方で一番勝機があるのであろう三つの選択肢がある。

可能性が高い反面でこれは二つ目とは正反対のハイリスクハイリターンの作戦だ。少なくとも今の彼らにそんな強要は出来ない。

「監、督」

「はい？」

考えが纏まらない中、白瀧が藤代を呼んだ。顔をうつむけたまま彼は己の考えを、藤代の背中を後押しする言葉を紡いでいく。

「お願い、します。俺はまだ戦えます。だから、どうか、諦めないでください」

願い事のように、呪いの言葉のように。

「俺は戦力外なんかじゃない。まだ戦えます。だから、どうか、どうか」

やっと聞き取れるくらいの声量で、まるで今にも泣きそうな、震えた声だった。

かつて三度、他人に求められなくなった彼は、誰かに必要とされなくなることを酷く恐れていた。

「――ええ。わかっています。今からこれからの事を話します。あな

たにもしつかり働いてもらわないと困りますよ?」

そんな彼の心情を理解したのだろう。藤代も覚悟を決めた。

もう二度と教え子の心を裏切るわけにはいかない。

残酷な判断と理解して、藤代は第三の選択を取ることにした。

「……はい」

その答えはまさに彼が望んでいたものだった。

呆然とした表情をしながらも、ようやく白瀧は顔を上げて藤代の笑みを見ることが出来た。

(認めよう白瀧。体力切れなどと甘いことを言わず、先にお前を潰しておくべきだった)

一方で、陽泉ベンチでは荒木が自らの考えの甘さを悔やんでいた。あわよくば第三Qで白瀧と光月の両名をつぶし、勝利を確実なものにしようとしていた。だが結局それは叶わず、大仁多に反撃の余地を残すこととなった。

仮にもかつては全国制覇を果たし、その名を轟かせた選手に対する認識の甘さがこの展開を呼んだ。

確かに追い込むことは出来たが詰みの状態ではない。相手はオフェンス力が全国随一の強敵だ。万が一の事があってはならない。

「おそらく敵は引き続き白瀧と光月どちらも出してくるだろう。二人とも下げるようなことも考えられるが、それならば好都合だ。十分押し切れる」

先の陽泉の動きを見た以上、藤代が光月の5ファウルを警戒して白瀧だけを下げる可能性は低い。もしも二人とも下げれば陽泉のゴール下を攻略することは難しい。

ならばおそらくは二人とも投入し、勝機を繋ぐ。これが大仁多の考えのはず。

「敵がどのような策を立てようとも、まず白瀧を止めなければ勢いは収まらないだろう」

「なら俺にやらせてよ。あのまま引き下がってなんていられない」

「いや、紫原。お前には別の役を担ってもらおう」

「はあっ!？」

「そう熱くなるな。紫原、お前らしくもない。やつの熱気にあてられたか?」

怒りの表情さえ浮かべる紫原を、荒木は動揺一つ見せず論じた。確かに紫原を当てるのも一つの手だが、まだ敵がどのような動きを見せるかはつきりしない以上、白瀧一人に固執させたくはなかった。万が一敵が交代するようなことになれば機嫌をよけいに害する危険性もある。

だからこそ、紫原にはある程度自由に動かせるように別の役割を託すことにした。

「現在うちの十一ポイント。大仁多の得意戦術が最大火力でできない以上、ここで白瀧さえつぶれてしまえば詰みだ。たとえ諦めなからうと、どうしようもない」

「……ふん」

「それでいい。依然こちらのリードとはいえ、気を許せる状況ではない。この第四Q、早々にとどめをさして来い」

荒木も白瀧が限界に近いことは理解している。だが彼が敵の最大戦力であることは明確だ。ゆえに万全ではない白瀧を止めるために、陽泉は万全を期すこととなった。

「カントク、どうなんだよ」

「え? どうって?」

「あいつは、白瀧はあとどれくらい動ける?」

先ほどの会話を思い出したのだろう。

火神はリコに問いかけた。

観客席から白瀧が崩れ落ちかける姿は確認できた。確かに彼が限界間近であることは間違いない。

ならばあとどれくらいコートに立っていられるのか。何度紫原と戦うことができるのか。分析の専門家に意見を聞きたくなかった。

「……遠目だし、ユニフォームを着ているから正確なことは言えない。だけどこれまでの運動量や怪我の度合い、相手の強さから考えれば」「ああ」

「おそらく、もっても7、8分。それも激しい動きを控えればの話。もしもさつきみたいに積極的に動いていけばさらに短いかもしれない」
リコは白瀧が最後まで戦う事は不可能だと語る。

しかも動きを制限しても届かない。無理をすれば下手すれば最終Qの半分ももたない。

「それじゃあ、とても大仁多に勝ち目は……」

この話が本当ならば大仁多に勝機があるとは思えない。

白瀧抜きでは光月が本領発揮する時間も限られるだろう。残りの選手で陽泉デイフェンスから逆転まで得点するとは考えられない。

「ええ。奇跡でも起きない限り、逆転は難しいでしょうね」

ふと火神が漏らした言葉を引き継いでリコが言う。

確かにこの状況で逆転はほとんど不可能。ならばそれを覆したなら。それはきつと奇跡なのだろうと。

他の観客席でも同じような会話が見受けられた。

大仁多の奮戦を期待しつつも、逆転する光景が浮かばない。

「——」つだけある」

「えっ?」

ただ一人、赤司を除いては。

「大仁多が逆転する手立てはある。だが、その手段を取るには覚悟が必要だ」

彼だけは大仁多が勝利するであろう道筋も見えていた。

同時に、その道が非常に険しい棘の道であるということも理解している。

その道を進むには白瀧の力が必要不可欠であった。

「そろそろ、行くよ」

「——うん」

「ありがとな」

「うん。ちゃんと、見てるから。だから——勝って」

「ああ」

そういえば前にも橙乃にこんな事を言われたな、と少し前の事を思い出しながら白瀧は立ち上がった。

きつとまた止められるかとも思ったが何も言わずに送り出してくれるとはありがたい。

一言橙乃に礼を言っ、他の四人と一緒にコートに向かおうとする。

「あの、白瀧さん」

「西村？」

だが、他にも心配するものはいた。帝光時代の事を知る為におそらく誰よりも心配し、そして自分を責めているであろう選手、西村だった。

(元はといえば、俺の練習なんかにつき合ったりしたから余計に……) 呼びかけたが、何と云えばいいかはわからなかった。

第二Q、紫原との戦いを見て今一度思い出すこととなった、過去の失敗。

自分のせいでこのような苦しみを味合わせることになってしまったならば。必要とするばかりで何も返すことができない。

そんなふがない気持ちばかりが募って。言葉をかけたかったのに、かける言葉が見つからなかった。

「おい、なんて顔してるんだ」

気持ちが表情に出ていたのだろう。

白瀧は西村の肩を叩いて、彼をなだめるように口にする。

「勘違いするなよ。お前たちのせいで俺は戦ってるんじゃないやねえ。お前たちのおかげで俺は戦えるんだ」

「……何を、言っ」

「そんな顔するな。大丈夫だ。絶対、勝つ」

試合再開の笛が鳴り響いた。

最後にその声をかけて白瀧は西村と別れた。

(今度こそ成し遂げてみせる)

あの時果たせなかった救う道を。叶えられなかった勝利という願いを。

強い決意を抱いて、白瀧は決戦の舞台へと戻っていった。

第四Qが始まる。

大仁多対陽泉。準決勝進出をかけた最後の時がいよいよ訪れる。

逃げ切りたい陽泉の選手に変更はなく、荒木がレギュラー五人に命運を託す。

一方で追い上げを狙う大仁多はここで動きを見せていた。小林、山本、白瀧、光月。そして神崎の五人がコートに出てくる。

「むっ！」

(三浦^{12番}と交代で、神崎^{13番}の投入？ たしかにこいつの出場は予想されていたが、こいつシューターだろ?)

(これで大仁多は白瀧、神崎、山本とスリーを打てる選手が三人。外からの攻撃力は確かに高まるだろうが)

(しかしインサイドに限って言えば貧弱でしかないアル！)

試合は陽泉ボールからスタート。福井や宮崎がボールを運ぶ中、神崎の姿に違和感を抱く。

力自慢の陽泉を相手にこの布陣。ゴール下を諦めたと考えるしかない動きだ。

福井は一度荒木に視線を送る。荒木は大きくうなずき、作戦に変更はないと伝えた。

(ここでの神崎^{13番}の投入は予想外だったが、問題ない。スリーさえ封じてしまえ)

ば、奴はさほど脅威ではない)

神崎のスリーは確かに目を見張るものがあるが、それほど警戒する必要もないと考えた。

「勇ちゃんの登場？ 征ちゃん、あなたの言う手立てってこれのことだったのかしら？」

神崎の登場を見て実渕が赤司に問う。

確かに彼の事を評価しているが、実測も神崎が逆転の原動力になれるとは考えにくかった。

「いや、違う」

「え!? 違うの! ダメじゃん大仁多」

「そもそも話している次元が違う。僕が言ったのはそういう戦術の話ではなく、戦略の話だ」

やはり赤司は否定する。

ならばどうするのだと葉山が声を荒げると、赤司は補足するように付け加えた。

選手交代だけという単純な話ではない。問題はここからどう動くかで試合の結末は変動すると。

観客席で議論が起こる中、作戦続行の形で福井はオフENSEを展開する。

大仁多はメンバー変更に伴い、ディフェンスも前列を山本、神崎。後列中央に光月を据えた2-3ゾーンを敷いた。

「うちと同じ形かよ。マネのつもりか? だが」

「ぐっ!」

（くっ、そっ! 押し切られる!）

「光月はまだしも、他の二人じゃ力不足ってやつだろ」

ゴール下では岡村が白瀧、劉が小林を相手に有利なポジションを確保していた。

やはり力自慢の選手が集う陽泉。二人を相手に圧倒している。

岡村がポジションを取ったのを見て、福井はパスをさばく。小林がマークから外れた分、ゴール下へボールを供給しやすくなった。

ボールを受けた岡村は利き足を軸にターンアラウンド。白瀧を抑えつけたままシュートへ持ち込んだ。

「ぐっ!」

（くそっ。やはりパワー勝負では話にならないか!）

（大仁多） 57対70（陽泉）。

第四Q最初の得点は陽泉。得意のゴール下で敵を押し込んだ。七十点に到達し、勝利に少しずつ近づいていく。

(やはりオールラウンダーとはいえ、陽泉ほどのチームの専門選手相手には厳しいか)

藤代が唇をかみしめる。

県大会が始まる前からこういった事も予想して小林と白瀧を鍛えてはいたものの、陽泉のようなパワープレイヤーが多いチームに対抗するにはつらかった。

だがこの五人のディフェンスが真に機能するのは今ではない。

まずはオフセンスでしっかりと得点することに期待して、選手達へ視線を送る。

「要！ 大丈夫か？」

「問題ない。それより、勇も頼むぞ。お前の力も必要だ」

神崎が声をかけると、白瀧はうなずいて、彼にそう言った。

陽泉ディフェンスを攻略していくには神崎の力も必要になってくる。だから頑張れよと。

大仁多のオフセンスが開始。

山本からのスローインを受け取って、白瀧が一人でボールを運んでいく。

(白瀧がボール運び……)

(ということは、やつを起点とするPG白瀧のパターンか！)

ここまでSG、SFとして活躍しながらもいつかは来るであろうと予想されていた白瀧の、大仁多のオフセンス。司令塔に白瀧を据えたオフセンスであった。

「ここでそう来るか。なるほど。——ありがたい」

最終Qでこのような奇策に出るとは予想外だった。

荒木は驚き、そして感謝する。

「ッ!？」

コート半分を超えたところで、白瀧に岡村、福井、劉三人のマークが張り付いた。

「なっー!」

「白瀧にトリプルチーム!？」

陽泉は白瀧に三人つけ、神崎には宮崎がマンツーマンにつき、そし

て中央に紫原が陣取り他のすべてのオフENSEを警戒するという大胆な作戦を敢行した。

(やつがボールの供給源であるならばなおの事、このディフェンスは有効だ。中は紫原がケアする。神崎もマンツーマンでつければ問題ないだろう)

手薄な場所が多いように見えるが、ディフェンス最強の男がすべてを補ってくれる。紫原を信用しての作戦。敵がどのように動こうと、荒木は下手に作戦は変えずにどっしりと構えていた。

(くそつ。やべえ、視界も封じられて……)

突然の出来事にドリブルを中断したものの、何とかボールを奪われないようにとキープし続ける。

だが長身の選手が二人もいることで視界の一部も遮られてしまった。

自由に動かせる右足を使って現状を打破しようと試みる白瀧。

「ッ！」

そんな彼に痛みが襲い掛かり、一瞬の隙を作りだした。

「もらった！」

「うっ！」

(しまった！)

福井はその隙を見逃さなかった。白瀧の手からボールを叩き落とす。

ボールが零れ落ちると、劉が確保。がら空きの敵陣へ速攻を仕掛けた。

「くそつ！」

「戻れ！」

劉、岡村、福井が駆け上がる中、大仁多も小林、山本、白瀧がすぐに戻った。

だが劉に小林がマークにつくと完全に掴まる前にパスアウト。

福井にボールを戻すと、またドリブルで切り込み、そして山本を振り切れないままレイアップシュートを放った。

(強引に打ってきたか！)

「別に外れようが関係ねえ。——決めてこい」

「わかつとるわい！」

ボールはリングに当たり、大きく跳ね返った。

すると後方より走りこんできた岡村が跳躍し、空中でボールをつかむ。

「このっ！」

「どけい！」

「イツ!？」

白瀧が懸命にブロックを試みるも、岡村のアリウープの前に蹴散らされてしまった。

(大仁多) 57対72(陽泉)。陽泉が連続得点を決めて再び十五点差。第四Q開始早々に、大仁多は危機に追い込まれる。

「くっ、そ。まだ、だ」

痛みに顔をしかめながら、白瀧は地面に手をついた。まだここで終われるものかと自分を奮い立たせる。

「……いい加減にせえ」

「え？」

「もう十分じやろう。交代しておけ」

そんな彼を痛々しく思ったのだろうか、岡村は彼に手を差し伸べて言った。

「自己犠牲をしたところで、この戦況は覆せん。お前にはまだ先がある。——ここで終わりにせい」

年上の選手として、チームは違えども主将として思うところがあつたのだろう。あるいは彼元来の性格によるものなのかもしれない。

何れにせよ、岡村もこれ以上の白瀧の奮闘は望むものではなく、彼にそう言っただけで立ち去って行った。

「……自己犠牲、だど？」

それを耳にして、かえって白瀧の中で闘争心が燃え上がった。

「馬鹿にするな」

言葉に怒りさえ籠めて、そうつぶやく。

山本からスローインを受け取ると、先ほどと同様にボールを運んで

いく。そしておそらくは再び立ちはだかるであろう敵の選手達をにらみつけた。

（俺は自分を犠牲になどしていない。ただ自分のすべてを賭けただけだ。また皆と同じ場所に帰る。その為に、戦う以外の選択肢をとうの昔に捨て去った！）

自己犠牲などという認識は白瀧には毛頭ない。なぜなら、彼が望むものは自分を犠牲にしては手に入らないものなのだから。

山本とボールを交互にパスしながら駆け上がったいく。

そしてやはり、白瀧にボールが渡るや、三人のマークがついた。

「ツッ」

だが今回は敵が来るのをわかっていたためにドリブルを中断しない。

相手の動きをしつかり見極めながら、ボールを取られないようにとドリブルを続ける。

「ちっっ！」

（普段ならまだしも、今のあいつじや突破は無理だ。ここは俺が！）

消耗が激しい状態であるの三人がかりのマークは厳しい。神崎はすぐさま駆け出し、白瀧のフォローへと向かう。

「来るな勇！」

「えっ」

すると彼の走る姿が見えたのか、白瀧から静止の声がかかった。

（負けるわけにはいかない。ここで俺が止められてしまえば陽泉のディフェンスは再び強固なものとなる。何よりこの先の展開を考えれば五人でのオフENS展開が必須だ。ならば俺がここを突破する）
第四Qに入ったばかりのオフENS。敵に強い脅威を抱かせるためにも、どうしても五人でオフENSを展開させたかった。

そうなるここで下手に人員を割くよりも、自分が突破することで先のオフENSにつなげたかった。

（——あと三つなんだ。あと三つさえ勝てば、約束を果たせるんだ。きつと皆が、あのころのように戻れるんだ。また、バスケができるようになるんだ。だから！）

ここまで来て負けていられない。何としてもこの試合で勝利をつかむために、白瀧は再び限界を超える。

(フロー、強制解放！)

すべての力を振り絞る、極限の没頭状態に入ってしまった。

(ツ！ この感覚！)

(まさか、このタイミングで)

(まだ入れるというのか!?)

マークについている三人は白瀧の変貌を肌で感じ取って身を震わせた。

先ほど紫原にさえ反応を許さなかった力だ。何としても突破は許さないと気を引き締める。

「邪魔、すんなー!!」

敵が警戒心を強める中、白瀧は叫ぶ。

そして彼の叫びの直後——銀色の疾風が吹き荒れた。

『ッ!?!』

一瞬の出来事であった。

好き勝手させまいと十分意識していたはずなのに。

気が付いたら白瀧の突破を許していた。

「なっ!?!」

「馬鹿な!」

(反応すら、できなかった?)

三人は呆然として、自分たちを抜き去った男の背中を見るしかなかった。

「三人のマークを一掃した? ドリブルを最も警戒していたはずなのに」

(別に何か新しい技をしたわけじゃねえ。動きは基本的な、奴の得意な速さと動きを変えた切り返した。ただあまりにもキレが良すぎる。下手すれば……)

下手すれば、常の自分でさえ反応する事が難しい程に。

隣で桃井も驚いている中、青峰も目を見開いて——そして嬉し気に口角を挙げた。

「行け、白瀧」

口が勝手に心を声をつぶやいていた。未だライバルと信じている相手に、勝ちあがって来いと声援を送る。

聞こえてはいないだろうが、その相手は三人をかわすとスリーポイントラインのうちへと切り込む。紫原の守備範囲へ侵入すると、やはりゴール下から紫原が飛び出してきた。

「紫原ー」

「潰すー」

立ちほだかる難敵。

時間をかけては不利と考えた白瀧は、紫原を見るやすぐに動いた。視線を一度左に向けると、フリースローラインの近くで跳躍。レイアップシュートと見せかけ、空中でボールを持つ手を右から左へと移すと、その左手を体の後ろ側に通した。

（チツ、ビハインドパスか！）

「通すかよー」

シュートにつられて体が泳いでしまったが、紫原は宙で体勢を立て直せる。

空中で腕を回転させるとそれを勢いに向きを変えてシュートコースへと手を伸ばす。

白瀧の先、左45度の位置には山本がいた。そのパスコースを長い腕が完全に封鎖する。

「逆だよ」

「ッ!?!」

だが紫原の手がボールに触れることはなかった。

白瀧は右肘を曲げると、その右肘にボールを当てて、パスの方向を変えた。

「なっー」

（エルボーパスか!?!）

肘にボールを当てる事でパス先を変更するエルボーパス。

紫原は己のデیفエンス失敗を悟った。

そしてその先にいたのは小林。小林はボールを受け取ると、今度は

逆サイド0度の位置に走る神崎へと鋭いパスをさばく。

「PG白瀧の鋭い切り返しとパスワーク。これに加え、小林さらに広くオフエンスを展開する」

「……嫌な事を思い出したね」

目にもとまらぬボールの行き来。このオフエンスが初めてお披露目された相手であつた楠、西條は敗北を思い出し表情をゆがめた。

「ナイスっ！」

（スリーか！）

「うっ、おおっ！」

ボールを手にした神崎の上体が沈んだ。

宮崎はフリーで打たせまいと、走りながら跳躍した。

（かかった！）

「もらった！」

だが神崎は跳ばずに宮崎をドリブルでかわした。ミドルレンジに突入し、ジャンプシュートを放つ。

（シュートフェイクかよ。くそっ！）

「いや。これ以上、俺のエリアで雑魚が好き勝手やってんじゃねーよ！」

宮崎はブロックには間に合わない。

しかし、紫原が一步で距離を詰め、ブロックに跳んでいた。

「ハッ！」

（ちよっ、嘘だろ!?!）

味方が気を引き付け、速いパス回しで翻弄していた。

それなのに追いつき指先でボールに触れている。

神崎にとつては初めての対面ということもあり、わかっていたはずなのに驚くしかなかった。

ボールは軌道が逸らされた為に、リングに弾かれる。

「入れっ！」

するとそのボールを光月がゴールへ叩きつけた。

力強いアリウープでリングが上下左右に揺れている。

（大仁多） 59対72（陽泉）。大仁多がこのQ初の得点に成功した。

「よしっ！ よくやった！」

「うおおおおっ！」

「ナイス、光月！ 勝てるぞ！」

光月が力強い彷徨を上げる。小林達も士気を高めて彼を讃えた。

そんな彼らの『まだ行ける』という姿を見て、白瀧はまぶしい物を見るかのように目を細め、笑みを浮かべた。

「そうだ。叶うんだ。きつと、叶う。多くの強敵を打ち倒し、激闘を乗り越えて、その果てに栄光を掴み取ったならば。きつと——彼女の声も、届く。願いが、叶う」

脳裏に蘇るのは、三年前に帝光中学が優勝を果たした時の光景。

白瀧は盲目的に信じている。当時、誰もが笑いあっていたはずの姿を。頂点に立てば、優勝すればきつと願いは通じるのだと。もう一度あの日の笑みを取り戻せるはずだと。

(そうだろう、楠^友先^輩)

そして、心の中であつて雌雄を争った強敵に呼びかけた。

あの時白瀧は楠の問いに頷いた。『たとえ自分が同じ立場であつたとしても、同じことをしていただろう』と。

ならばこそ白瀧はここで戦いをやめるわけにはいかない。彼の思いを無碍にし、かわした言葉を偽りにしないためにも。

「光月い！」

「落ち着け！ まだ点差は十分ある。加えて向こうはオフエンスはまだしも、インサイドが薄いんだ。いくらでも隙がある」

「そうじゃ。うちは中を固めればいい。そうすればここから逆転などという奇跡は起こらん」

得点を許した紫原が齒軋りをした。

だがまだ陽泉優位という戦況は変わりない。それを理解している福井や岡村は紫原を宥め、一度立て直そうと宮崎が審判からボールを受け取った。

「……奇跡は起こらない？ 馬鹿な事を言うな。俺たちは、俺たちが奇跡を起こしたからこそその名で呼ばれた！」

すると会話が聞こえていた白瀧が叫び、敵に圧力をかけていく。

ボールを受け取った宮崎が試合を再開しようとする、目の前に白瀧の姿が映る。さらに彼に続き、山本や神崎も前線からプレッシャーをかけてボールを奪おうと陽泉へ牙をむけた。

「なっ!？」

「まさか、これは。大仁多の得意戦術!」

「オールコートゾーンプレスだど!？」

突然の猛威に陽泉の選手たちが驚愕の色に染まった。

ディフェンスでありながら、積極的にボールを奪いにいく、抜かれればもろ刃の剣であるゾーンプレス。最前線に白瀧、右に山本、左に神崎、真ん中には小林が、最後尾に光月が並び、陽泉に襲い掛かる。「そうだ。おそろく普通に戦っても白瀧はもたない上に逆転は不可能だ。ならば第四Qを最初からオフフェンスに特化。白瀧がいる間に逆転し、逃げ切る」

「だ、だけどこれって……」

やはり、赤司は納得して頷いた。彼の目から見ても大仁多が逆転するにはこれしかないと考えたのだろう。

だが理解できない。周囲では疑問の声が次々と上がる。

(正気か藤代! 貴様はこの試合で、白瀧を使いつぶすつもりか!)

荒木は怒りのあまり立ち上がり、藤代をにらみつけた。敵は視線に気づいていないがそれでも続ける。

休憩中、荒木は大仁多がこのような戦術を取るとは微塵も考えていなかった。白瀧がコートにいる間は、絶対に。

何故ならこれは確かに攻撃力は高いが、その分運動量も増えて消耗も激しくなる。白瀧がもつはずもない。それどころかこの激しい運動は先にも影響するだろう。勝とうと負けようと彼の夏はここで終わる。

指揮官として選んではいけない禁忌肢であるはずだ。

だが、そう指揮した指揮官に、戦っている選手達に迷いはなかった。

『オールコートゾーンプレスって、本気ですか監督!？』

『いくら何でも、それは白瀧がすぐに力つきますよ!』

当然のことながら、作戦を話した時は選手達からも反対の声が上

がった。

皆も無理がすぎると考えたのだ。当然の反応だろう。負担が大きい上に、あるいは逆転することが出来ないまま白瀧が離脱するかもしれない。

『わかっています。おそらく今ゾーンプレスを行えば、おそらく白瀧さんは五分ともたないでしょう』

『いえ、監督。俺は……』

『ですが最低でも四回の休憩するタイミングがあつたならばどうですか？』

それくらい藤代も理解している。

だが、その上で藤代は話をつづけた。

『四回の休憩？』

『ええ。白瀧さん。少なくとも私が何かしら指示を出すまでの間、動き続けてください。そうすればおそらく、陽泉がタイムアウトを取るでしょう。そうなれば、成功する確率が大きく上がる』

休憩、というのはタイムアウトの事だろう。大仁多には後半戦残していた三度のタイムアウトの権利が残されている。

さらに藤代は白瀧の奮闘次第では陽泉もタイムアウトを取ると話すが、選手たちは懐疑的だ。

『陽泉がタイムアウトを取るでしょうか？ 向こうもタイムアウトを取れば白瀧を休ませることになるとはわかっているはず。そう簡単にとるとは思えませんが』

『いえ、大丈夫です』

小林が皆の意見を代表して藤代に進言した。

だがその声も藤代は一蹴する。

さらにその理由、他の動きの事も説明し、藤代はすべてをこの作戦に託していた。

「残酷な選択だな。酷い男だ。——だが正しい。何の覚悟も持たずに、奇跡は成し遂げられないだろう」

褒められる選択ではない。多くの者が反対する中、赤司はこれを認めた。勝利を求めるために非情な選択肢を取った指揮官の行動を。

「……陽泉に勝つために、全てをかけるつもりかよ」

「少し、理解しがたいわね」

「あいつ自身はまだ一年だろ？　ここから先キセキの世代と戦う機会だってあるんだし、何もここまでしなくてもいいんじゃないの？」

赤司の説明に、無冠の五将の面々は半信半疑であった。

確かに他の三年生にとっては最後のIH。彼らと長く戦いたいという気持ちはわかる。だが白瀧はまだまだ先がある選手なのだ。IHも、WCも、キセキの世代との試合も。

確実であろう未来を捨ててまで、無謀である挑戦だとわかっている戦いに全てを注ぐという白瀧の魂胆が理解できなかった。

彼の考えはこの先も共感できないかもしれない。無冠の五将と白瀧は、キセキの世代という存在に隠れがちであったという近い点があるが、大きく異なる点が一つある。白瀧の行動理念を決定づける、最大の要因が。

白瀧の心に潜んでいる暗い感情が、逃げる事を許さず、勝利だけを求めさせる。

(敗北した先に、待っていたものは何だ?)

彼を待ち受けていたのは、喪失。

(未来を信じて戦わずに見えていて、その先にあったものは何だ!?)

彼が経たのは、崩壊。

(来ない。負けたら、戦わなかったら、その先に俺が望むものは来ない!)

白瀧にとって最高の幸運は、中学時代に全国制覇を経験したこと。

白瀧にとって最大の不運は、中学時代に全国制覇を経験してしまったこと。

頂点にまで登り詰めたからこそ諦めることもできなくなってしまうった。

希望を抱いてしまった。再び最高の結果を残したいと。信じてしまった。一見不可能な事も成し遂げられると。

望んでしまった。大切な者の願いを自分が叶えたいと。

(先があると誰が決めた!?　そんなもの、あるはずがない。己の手で

先へと進まなければそこで道は途絶えてしまう)

——あの時俺が負けたから、俺は栄光を失った。

——あの時俺が戦えなかったから、俺はあいつらを止められなかった。

——あの時俺が弱かったから、俺は彼らの嘆きを、彼女の涙を、止められなかった。

(次があるは、敗北を正当化する言い訳だ。先なんてものは誰にもわかるはずがない。そんなものの為に今を投げ出すなんてできるはずもない。今を戦えないものに明日が来るものか！)

何故今さら信じられるというのか。

ライバルでさえ先を行ってしまったというのに。

頂きさえ経験した居場所を失ったというのに。

監督の信頼さえ失ったというのに。

共にいられると思っていた友さえ離れていったというのに。

何故、信じる事が出来ようか。

彼にとつての絶対が砕け散ったとき、未来は信じるに値しないものと成り果てた。

だから、白瀧は未来などと曖昧なものを信じる事が出来ない。

不変の過去にすがって立ち止まるをよしとせず、不確かな未来を夢見て突き進むを拒絶した白瀧は、目の前の戦いに勝つ事だけに没頭した。悲壮な決意を固めて一心不乱に再起の道を突き進む。

「同情や哀れみはいらない！俺が欲しいのは勝利だ！勝って約束を果たす！」

ゆえに彼は敗北を拒絶するために、帝光の理念^{勝利}を肯定する。

「——こんの、馬鹿もんが！」

勝利しか目に見えない。そんな悲しい事しか口に出来ない選手に、岡村はただそう言うしかなかった。

——黒子のバスケ NG集——

ボールは軌道が逸らされた為に、リングに弾かれる。

「入れっ！」

するとそのボールを光月がゴールへ叩きつけた。

力強いアリウープでリングが上下左右に揺れて……ゴールが音を立てて崩れ落ちた。

「えっ」

「ゴールが、壊れた？」

「ちよっ。ええええっ!？」

「そうだ。おそらく普通に戦っても白瀧はもたない上に逆転は不可能だ。ならば光月にゴールを破壊させ、ゴール交換の時間を白瀧の休息に当てる」

「嘘だろ!?! お前こんな未来まで見えるのかよ赤司!?!」

ゴールを破壊する光月も、それを予知していた赤司もヤバイ。

第九十四話 己を知る者の為に

大仁多の得意戦略であり、通常は劣勢のチームが逆転を狙って使用するゾーンプレス。この試合に関して言えばこの戦略を展開している間に逆転し、逃げ切りを図ろうという苦肉の策であった。

不安要素が多い状況に加えて時間制限もある中、鉄壁の陽泉を相手にこの戦略は十三点差ビハインドからのスタートという絶望的状况だ。されどここから逆転勝利を収めるためにはこれしかない。

大仁多の選手たちがボールを奪おうと陽泉オフENSEを襲撃する。

「ぐうっ！」

（このタイミングでゾーンプレス！）

（しかも最前線に守備範囲が広い白瀧だ。スローインもままならない！）

予想外の奇襲。しかもファーストラインに機動力に優れた白瀧がいた。他の選手たちにも厳しいマークがへばりつき、宮崎は容易にパスを出す事ができなかつた。

（だが、今の大仁多は身長はうちには到底及ばない。この前線さえ超えてしまえば）

「ならばー！」

機動力は大仁多が勝り、身長は陽泉が圧倒的というのが今の戦力図だ。

つまりこのマークを突破するには相手の上を通すしかない。ゴール近くの敵をかわすことが出来れば得点できる。

そう結論付けると、宮崎は白瀧の上を通すロングパスを放った。

「させるか。読んでいないとも思ったか！」

だが、宮崎の手から放たれた鋭いパスは白瀧の手によって弾かれる。

「なっ!？」

（防いだ？ 速いパスを出したはずなのに）

（飛びつくまでが早い！ やつの瞬発力が勝ったか！）

彼自慢の瞬発力が相手のオーバーヘッドパスを封殺する。軌道が

変わったボールは、デイフェンスが取りやすい山なりの軌道を描いていく。

「もらった!」

「ナイス小林!」

そしてそのパスは中央の小林が奪い取った。

これで陽泉はターンオーバー。ボールを奪った大仁多の攻撃が始まった。

素早くドリブルで駆け上がる小林。ミドルレンジに侵入し、福井を引き付けると素早くパスアウト。スリーポイントラインの外にいた神崎へとパスをさばく。

「うおっ!」

(また外からオフエンスを展開するのか!)

(今度こそ!)

「撃たすか!」

「っっ!」

今度は正真正銘、神崎が得意のスリーを放った。だが撃つ直前、宮崎のプレッシャーが神崎の感覚を鈍らせた。

触れる事は出来なかったものの、神崎のシュートはリングに嫌われる。

(……くそっ。外れた!)

(神崎がスリーを外した!?)

「もらったアル!」

スリー成功率が高い神崎らしからぬ失敗。スリーで陽泉の意識を外に向けさせたかった大仁多にとっては痛い場面であった。加えてリバウンドも戻ってきた劉が確保した。

「そう簡単に渡すわけにはいかねえ!」

「うおっ!」

「アウトオブバウンズ! 陽泉ボール!」

だが大仁多もただでは終わらせない。着地した劉が胸元へボールを呼び寄せた瞬間を山本が狙っていた。彼の手からボールを叩き落とし、敵のカウンターを防ぐ。ボールはエンドラインを割り、再び陽

泉ボールに。

今度は劉がボールを受け取り、スローインを試みるとやはり大仁多はもう一度ゾーンプレスで圧力をかけていく。

（仕掛けが早い！ 大仁多はこの先ずっとゾーンプレスをするつもりか！）

（だがさつきみたいにはいかないアル！ さすがに俺が投げれば頭上のパスは取れないはず——）

攻撃失敗の直後でありながら大仁多の動き出しは早かった。今度こそ得点を奪ってみせようと力を注いでいる。

対して陽泉はスローワーが変わって長身の劉だ。この身長差ならパスを防ぐことは出来ないはず。そう劉が考えていたところに。

（死んでもここから先は通すものか！）

白瀧の気当てが、劉の全身を襲った。突如全身に走る悪寒が彼の集中力を鈍らせる。

「うっ」

（まさかこいつ。本当に止めるつもりアルか!?!）

パスを出そうとした瞬間に訪れた警告音により、劉はパスを中断。他のパスコースを探そうとするも、宮崎や福井も神崎と山本のマークを振り切れない。パス先を悩んでいる間に時間は少しずつ過ぎていく。

「5秒オーバータイム！ 大仁多^白ボール！」

ついに劉がパスを出せないまま5秒が経過。5秒バイオレーションに引つかかかってしまい大仁多にボールが渡る。

「また大仁多が攻撃権を確保したか！」

「なんてプレッシャー。パスさえ出させないのか」

「……お前らにはわからねえかもしれねえけど」

「勇作？」

「本当に、眼で殺すんだよあいつは」

ディフェンスの立場でありながら、相手のオフENSEを許さない大仁多の仕掛け。特にかつて白瀧と同じ目に合わせられた勇作は、その時の事を思い返して苦笑いを浮かべていた。

「まして今はフロアに入っているんだ。もはや殺意の塊だな」

特に今の彼は極限の状態にいる。赤司は彼をそう例え、その脅威を物語った。

「くそっ」

「ドンマイ劉。あまり気にしすぎるな」

審判が白瀧にボールを渡す中、彼と入れ違うようにコートに入った劉は悪態をついた。福井は彼を宥めようと一言声をかける。

『ここを防いではまえば問題ない』と続けようとして。

話しかけていた劉の背中に、ボールが当たった。

「えっ?」

「はっ?」

（今のは、一体何が?）

（ボール?）

突然背中に起きた軽い衝撃に劉は理解が追いつかなかった。それは福井も同じ事で、白瀧がそのボールに向かって動き出したことを目にして、ようやくそれが白瀧のスローインであったという事に気づいた。

（まさか!）

「試合始まつてる! 白瀧だ!」

「なっ。そんな。……うおおお!」

白瀧はボールを見ていない劉の体に当てる事で即座にプレーを再開していたのだ。即座にボールを確保すると、ワンドリブルでゴールとの距離を開けると、そのままシュートを狙う。

敵の狙いに気づいた福井、劉は二人そろってブロックに跳んだ。

「もらった」

敵の動きを見るや、白瀧が空中で体勢を変える。福井の右側へと上体を倒すと、右手だけでボールを山形に放った。

（ダブルクラッチアルか!）

（この一瞬で入れ替えやがった! なんてやつだ!）

二人とて瞬時に判断して動いていたというのに、白瀧はその上を行った。彼の冷静さに驚くばかりであった。

「俺の事忘れてんじやねえよ、白ちん！」

だが陽泉にはまだ最後の砦がいる。

戻ってきた紫原が白瀧の背後からボールを叩き落とした。

ボールは転々とし、サイドラインの外へと落ちていく。

「アウトオブバウンズ、大仁^白多ボール！」

「させないよ。そう簡単に得点は許さない」

「……勘弁してくれ。まだ止めるっていうのか」

またしても攻撃が失敗。すでに何十点もの得点を防いでいる中、紫原はブロック数を増やしていく。強すぎるかつての味方に、白瀧も愚痴をこぼした。

大仁多ボールが続くとはいえ、厳しい時間が続く。

今度は小林のスクリーンからマークをかわした山本がジャンプシュートを狙うも、岡村のブロックに掴まった。ボールはゴール下、屈強な選手たちのリバウンド争いに託される。

「うおおおっ！」

すると、この戦いを制したのは光月だった。紫原とのポジション争いに勝った光月はリバウンドを確保し、すぐにパスアウト。外の神崎へボールを託す。

「ぐっ！」

（光月！）

（こやつもまだ、これほどの力があるというのか！）

「ナイス！」

ボールを受け取った神崎。彼がスリーを打とうとするも、やはり神崎のブロックがこれを阻もうとする。

（くそッ！）

「キャプテン！」

失敗すると判断したのだろう。神崎はシュートを中断し、トップの小林へとボールを戻す。

「——あの子、下がっちゃったかもしれないわね」

そんな神崎のプレイを見て、同ポジションの実測は残念そうな表情でそう言った。

「多分、最初のシュート失敗で紫原のブロックを強く意識してしまっただけでしょうね。取り返そうとしたスリーも失敗。敵のマークを引きがせない中、突破しても中にはキセキの世代がいる。強気の姿勢が失われているわ」

「そうなると大仁多つらくない？ シューターがオフセンスに消極的になると、中がかなりの密集地帯になるじゃん」

ドリブルで切り込んで紫原のブロックが待っている。それを知っている宮崎はスリーを徹底的に防ごうとしている為に神崎がスリーを打つのも容易ではない。

そうなると厳しいのは大仁多であろう。よりインサイドのディフェンスが厳しくなると葉山は予想した。

「――ならばこの密集地帯、俺が突破する！」

だがその厳しい領域に白瀧が切り込んでいった。

小林からパスを受けると、その小林と交差するようにポジションを入れ替え、彼をスクリーンとしてまず岡村をかわす。

さらにクロスオーバーで一度切り返した後、ゴールへ向かって幾度もの方向転換。動きが読みにくいジグザグのステップで敵のマークを引きはがす。

（これは、やつの得意技！）

（しかも今までで一番速い！）

「……ッ。させない！」

フロアに入っている今では紫原でさえ動きを読み切る事が困難だった。

しかし先ほど防いでいるという経験から紫原は動きを予測し、白瀧が跳んだ瞬間に合わせて跳ぶことに成功した。完全にシュートを止めることは出来なかったものの、彼のシュートコースを右手でふさいでいる。

「いいや。譲らない！」

対する白瀧も負けてはいなかった。指でボールに回転をかけ、紫原の手をかわすようにシュートを放つ。するとボールはボードに衝突して軌道が変わり、リングの内側へと吸い込まれていった。

(そんなっ。ジノビリステップからのヘリコプターシュートだど！)

(大仁多) 61対72 (陽泉)。

彼の得意とする連続技により、白瀧が得点に成功。久々に得点板が動きを見せた。

(やはり厄介だぜ。だが、こつちだつて負けていられねえ！)

「来るぞ！ こつちも早く突破するんだ！」

今度は陽泉の反撃。先の失敗を考慮して、宮崎と福井がすぐさま行動に移っていた。

敵に完全に掴まる前に前線を突破する。

まず宮崎がボールを受け取ると、その間に福井が山本にスクリーンをかける。これで劉をフリーにし、左右の揺さぶりで白瀧を振った宮崎がスローイン。劉にパスを通す。

(ぐっ。まずい！)

(横にパスが通ったか！)

(これは、突破される！)

前線の三者は敵がこの包囲網を突破することを察し、すぐにカバーに動くが遅かった。福井がすぐに動き出すと劉からのリターンパスを受け取り、ドリブルで駆け上がったいく。

すでに岡村と紫原は走っている。小林が時間を稼ごうとするも、ロツカーモーションで揺さぶると、横から抜き去る。

最後に光月が止めようとするが、岡村がスクリーンで彼の身動きを許さない。白瀧、山本達が追いつく前に宮崎がボールを放る。これを紫原が受け取り、ダンクシュートを決めた。

(大仁多) 61対74 (陽泉)。

あつという間に陽泉も得点に成功。そう簡単に点差を縮める事は許さなかった。

「——くそっ」

ようやく得点できた直後の失点。白瀧は突破を許してしまった事で、嫌な予感を抱いていた。

(まずい。予想以上に消耗が大きい。今のだって、普段の体調ならそう簡単にはパスを出させなかったはずなのに)

先は宮崎の動きに後出しで反応したとはいえ、フローに入っている状態ならば遅れを取らないはずだった。しかし消耗が重なっている今、シュートの直後という事もあって反応が遅れてしまった。

このままの状況はまずい。何か、流れを変える一手が欲しい。

「なあ、要」

「あ？ 勇？」

白瀧がどうするか考えている中、神崎が声をかける。神崎らしくない、どこか不安を覚えている声色だった。

「悪い。今、シュートが決まりそうにねえ。次のオフエンス、俺にはパスを出さないでくれ。スクリーンとか皆のサポートに徹するわ」

下手にシュートを狙って敵にボールを奪われることを危惧したのだろう。神崎は自分が得点する事は一旦諦め、味方の支援に徹すると白瀧に進言した。

「……だめだ」

しかし白瀧は拒絶する。中に注意が集まっている今、どうしても神崎の力は必要不可欠だった。ここで彼に攻めに消極的になるのは大仁多に望ましくない。神崎のこれからの成長にとっても、ここで一つ勇気を振り絞る必要がある。

「いや、でも」

「諦めるな。負ける前に諦めてしまったならば、お前はきつと後悔する。だから、諦めるな勇。お前はこういう時の為にやってきたものがあるだろう」

なおも引き下がらない神崎に、白瀧は話を続ける。

今の神崎は、これまでキセキの世代に圧倒される選手に似ていた。自分のバスケスタイルを見失い、消極的になり、ついには絶望してしまった選手に。

だが白瀧は見てきた。神崎もまた、この試合のような苦境を乗り越えるためにしてきた努力を。今こそそれを見せてみると。白瀧は彼を信じてそう口にする。

「……悪い。わかった！」

気を引き締めて、神崎は了承の意を返した。

彼とて目の前の同僚が限界に近い事を知っている。それでもキセキの世代にたち向かっているのだ。

なのに、彼より先に音を上げてどうする。

弱気な自分を捨て、今度こそ決めてやろうと神崎は気迫をたぎらせた。

審判からボールを受け取ると、スローインし試合を再開させて走っていく。

「あのさあ。白ちん、何でそんなこと言うんだよ」

「はっ？」

すると、彼らの会話を聞いていた紫原が白瀧に問いかけた。

「もう十分だろ。これ以上、やつらの為に戦う理由があるの？」

白瀧がチームメイトを気にかける理由がわからない。彼がフロアに入り、自分たちにも匹敵する力を見せている今となってはなおさらその考えは強まった。

「一体あいつらが俺たちに何をした？ ただ力を求めるだけ求めて、強すぎるとわかれば掌を返して嫌悪して、勝手に諦めた。そんな奴らが、白ちんがそこまでして戦うほどの何かをしたっていうのかよ!」
自分がボロボロの状態になっているというのに、味方を勢いづけようとしている白瀧は、紫原からしてみれば考えられない存在だった。

これは彼がバスケットを始める切欠に、バスケットを続けてきた結果に起因する。

もともと紫原は自主的にバスケットを始めたわけではない。体が大きいからと、ミニバスに誘われて打ち込むようになった。そして長身の紫原に誰もかなわず、誘ってきた相手でさえ紫原には対抗できなくなる。帝光に入っても同じことだった。皆口をそろえて『敵うわけがない』と言って、紫原のバスケットに対する無関心は強まった。

どうせ誰もが同じように最後は諦めるのだ。だから無駄な足掻きを嫌う。足掻こうとする敵をつぶしたくなる。

それなのに、どうして自分と互角に渡り合うまでになった白瀧が、彼らを支持する？

「……ああ。そうだよ」

紫原の問いかけを聞いて、白瀧はうなずいた。

「言っただろ。俺は思いだした。仲間はもちろんの事、お前だってよく知るあいつが」

理由ならあると。白瀧が仲間の為に戦う理由なら確かに存在する
と。

「赤司が俺に向けて言ってくれた言葉をな」

他にもない、帝光時代主将を務めていた赤司が道を示してくれたのだと。

「いい加減にしろよ黄瀬！」

「うるさいっスね。いいじゃないっスか。どうせ青峰っちや紫原っちだつてもう練習にきてないんだから」

「ふざけるな！それが自分も練習に参加しないでいい理由になるとでも言うのか！」

時は二年前にさかのぼる。中学二年時、まだ白瀧の怪我が癒えていない時だ。

放課後、部活に参加せずに帰宅すると言い放った黄瀬に、白瀧は憤りを覚えていた。

この時すでに青峰と紫原は部活の姿を見せていなかった。青峰はコーチに諭されて、紫原は赤司の許可を得て。理由は異なれ、すでにレギュラー二人が不在という異常事態。ここで黄瀬までいなくなることになれば、バスケット部は完全に崩壊するだろう。

これ以上自分の目の前で勝手な行動は許せない。ましてや黄瀬は白瀧に代わってレギュラーの座を手にした選手だ。なおさら引き下がる事は出来なかった。

「あーもう。何で白瀧っちにそこまで言われなきやいけないんスか」

「何で？ そんなの、お前が」

「正論はいいっスよ。大体、何を言われようと何とも思わないし」

「なんだと？」

まるで白瀧の存在を歯牙にもかけないような態度だった。どういう意味だと白瀧が食いつくと、黄瀬はため息を一つはいて続ける。

「勘違いしないでほしいっす。確かに白瀧っちのバスケに対する意気込みは認めているし、尊敬だっしてしてる。だけど……あんたに負けるなんて思っていないっすよ」

「なっ」

「もういいっすか？ ま、白瀧っちも今は怪我を治すの優先だろうし、お互い自分の事を最優先に考えることにしましょうよ」

最後に、それじゃと軽く言って黄瀬はその場を後にした。

その背中を見て白瀧は何も言えなかった。左手が痛む程に握りしめて、視線を落とす。結局、白瀧は黄瀬を止める事は出来ず、帝光は三人目のレギュラー不在となった。

そしてその日の夜。

白瀧はベッドに横になろうとしても眠ることは出来なかった。上体を起こし、左手で前髪をかき上げる。

「何が、キセキの世代だ」

他に誰もいない自室で、白瀧は悔し気につぶやいた。

キセキとは笑わせてくれる。奇跡は起こらず、希望は消え失せ、理想の夢は次々と崩壊していく。

「俺は、敵としてさえ求められないというのかよー」

何も出来ないどころか、競争相手である相手に敵としてさえ見られていない。

「あ。……ハハッ。そうか。」

そうして、ある考えに至った白瀧は自らをあざ笑うように口角を上げる。

「青峰。お前も、そういう、ことだったのか？」

かつて共に凌ぎを削っていたライバルの存在が思い浮かぶ。

彼の力が覚醒し、突如白瀧と過ごす時間はなくなった。その後青峰は黄瀬とバスケをする時間が増え、そして「手加減なんてする余裕はない」と語った。白瀧に対しては無感情な様子でバスケをしていた彼がだ。

こうして黄瀬に対して抱いた劣等感が、同時に青峰との間に長くに渡って続く確執を生み出すこととなった。

「くそう。くそう……！」

目から涙があふれだす。

決壊した感情を止める術を白瀧は知らなかった。

誰かに求められなくなるのはこれが三度目だった。一度目は青峰に戦う相手として。二度目は監督に選手として。三度目は黄瀬に競争相手として。

それが悔しくて、悔しいのに現状を打破できない自分の無力を呪った。

この日以降、白瀧は悪夢に悩まされることとなる。

そうして、さらに月日が流れ、白瀧が練習に復帰するようになったある日。

全体練習後に白瀧は赤司に呼び出されていた。

「……白瀧。調子はどうだ？」

「本調子とまではいかないが、プレイは問題ない。少しずつ感覚を取り戻していくよ」

体育館につながる廊下で二人は話していた

やはり長い期間体を動かさなかったためか、鈍く感じるところはある。しかしそれを言い訳にすることはできない。白瀧が軽く右肩を回して無事をアピールすると赤司はフツと口角を上げた。

「そうか。頼りにしているぞ、お前は貴重な人材だからな」

貴重な人材。きつと赤司は誉め言葉で言っているのだろう。白瀧も理解はしていたが、しかしどうしても引つかかってしまい、赤司に質問した。

「なあ。一つ聞いても言いか？」

「なんだ？」

「お前は俺のことを貴重だと言うけれど、それはどういう意味で言っている？」

「質問の意図が読めないな。では逆に聞くが、お前は何だと思ってそう尋ねる？」

白瀧の問いに赤司はわずかに目を細めた。言葉の通り質問の真意を図りかねたのだろう。

そんな赤司に、白瀧は本当に聞くべきなのか迷いながらも問いかけを続けた。

「それなら言わせてもらう。赤司。お前は俺をチームのまとめ役として欲しているのか？ それとも、いざというときのベンチ要員として欲しているのか？」

「……なるほど。そういうことか。だが、それならば答えは簡単だ」
理解したのか、赤司が納得の表情を浮かべた。

このような質問、卑怯だと思ったものの白瀧は聞かずにはいられなかった。

赤司の言葉にかつて監督とかわした話が思い浮かんだのだ。仲間を支える役割として部にいてほしい。戦力としてでしてではなく、支柱としての役割を赤司も望んでいるのではないかと考えたから。

「もしも前者だというのならば。俺はもう、赤司征十郎の指示に従うことはできない」

白瀧にも選手としての意地が、誇りがある。

今でも皆とともに戦いたい。桃井の願いを実現させたいという願いがある。

だがそれらが赤司の中ではすべて無視されるというのならば、いくら主将といえど従う気はなかった。

ゆえに白瀧はそう口にして、赤司の答えを待った。

「……どちらでもないや」

「えっ」

すると彼が期待していた、予想していた答えとはまったく違うものが赤司の口からこぼれた。

意味を理解することができず、呆然と赤司を見据えるとさらに赤司は続ける。

「俺はお前には、帝光の戦力としてここにいてほしい。そう思っている。今までも、そしてこれからも」

瞬間、白瀧の中で何かがあふれ出したような感覚を覚えた。

喜びに震える。

何もかも失った。希望さえも見失いかけた。だからこそ、あの時交わした問答が白瀧の心を支配した。

その言葉が嬉しかった。ただ、嬉しかったよ。

黄瀬という戦力が入った以上、なおさら価値は下がったはずなのに。監督にさえ選手として見てもらえなかった俺を、赤司は『戦力』と認めてくれた。一人の選手として扱ってくれた。

いつかこの関係さえ壊れてしまうかもしれない。

今日か、明日か、もう少し先のことか。目の前で、俺の知らないところで。予想は出来ない。だがきつと終わりが来る。

でも、それでもいい。あの時戦い続ける勇気が出来たからきつと俺は戦う事ができる。

彼らが失意に落ちてもバスケットをやめなかったように。

彼女が涙を流しても仲間を見放さなかったように。

俺も、『終わりがあるから』『限界があるから』なんて言わない。求めてくれたもの達の為にも最善を尽くす。

ゆえに紫原。俺は何度でもお前の疑問を否定する。

『求めるばかりで何もしない』？ 違う。断じて違う。

彼らが求めてくれたのだ。何もできなかった俺を必要としてくれた。それが俺の希望になった。

ゆえに、仲間が助けを求めている。それ以上に彼らと共に戦う理由は必要ない！

「うおおおおおー！」

白瀧が吼えた。

3人の厳しいマークがつく中、大きく切り返すと中央のわずかな隙

間を突破する。かろうじて劉と福井が追いかけてくるも、白瀧はミドルレンジに侵入すると紫原も引き付けてからパスアウト。

そのパス先は神崎。今度は小林のスクリーンで宮崎のマークも振りほどく。

「ナイスパス！」

（まずい！ スリーだ！）

「おのれ、撃たせんぞ！」

すると白瀧のマークについていた岡村が反応し、ブロックに跳んだ。

二メートルを超える長身が神崎に迫る。

「ッ。まだだ！」

だが神崎はきちんとこれに反応していた。

放とうとしていたボールを両手で保持すると、シュートを中断。岡村をかわして中へ切り込んでいく。

（ドライブか！ しかしそっちは）

「懲りない連中だなー。捻り潰す！」

再び紫原が神崎へと意識を向けた。

先ほども交代直後にミドルシュートを止めたのだ。今度も止められる可能性が高いだろう。

（決めてやる！ ここしかねえ！）

それでも、神崎は今度はひるまなかつた。今こそ自分の進化を發揮する時だ。

斜め45度の位置から真つすぐゴールへ、紫原へと向かっていく神崎。

そろそろ踏み込むであろうと思われたその時。突如神崎の体が斜め後方にはなれていった。

「なっ!？」

（なんだ。急に距離が！）

「まさかあれは、うちの古谷がやっていた」

「ステップバックシュートか！」

ドライブの途中で敵との距離をあけるステップシュート。見覚え

があつた盟和高校の選手たちはすぐにその答えに至つた。確かに合宿で共に練習していたことを思い出し、そしてこのシュートの成功を確信する。

「このっ！」

一步距離を詰める時間が惜しい。敵はすでに跳んで、シュートを打とうとしている。

だが紫原の高さならここで思い切り跳べば少なくとも弾くことは出来るはずだ。そう考えて紫原は勢いよく飛び上がろうと膝に力を籠めた。

「ッ!」

「むっ！」

しかしながら実行に移すことは出来なかつた。紫原はブロックに跳べず、その場で立ち止まって神崎のシュートの行く先を見る。

そして、彼の視線の先で神崎のこの試合初得点の瞬間が映し出された。

「よっしやああああ！」

歡喜の声を上げる神崎。ようやく彼らしい姿が戻ってきた。

(大仁多) 63対74 (陽泉)。

神崎のミドルシュートが決まり、大仁多が連続得点に成功する。

「やったぞ要！」

「あつ。馬鹿。ちよつと待——」

「……あつ。悪い！ 忘れてた！」

励まして、敵を引き付けてくれた白瀧の肩を思い切り叩く。彼が限界であるという事を忘れて加減をしなかつた為、衝撃で体が大きくふらつた。何とか体を支える事で最悪の展開は避けられた。

「おい、紫原。どうした？ まさか——」

「……くそっ」

一方、陽泉サイドでは不穏な空気が漂い始めた。

紫原の反射神経ならブロックは無理でもプレッシャーをかけることは出来たはず。それなのにブロックできないばかりか、その後のリバウンドの備えにも動かず、その場で立ち尽くしていた彼にチームメ

イトは違和感を覚えていた。

「……まさか」

両膝に手をつけて悔しがる紫原。その様子を見て、チームメイトは事態の急変を察する。

「そうか。やつと、か」

『陽泉高校、タイムアウトです！』

紫原の異常を感じ取ったのはチームメイトだけではない。白瀧なども彼の状態を理解し、荒木はすでにタイムアウトを申請しており、一時的に試合が中断される。

(白瀧だけではない。あいつも限界が来たということか！)

荒木は歯を食いしばる。白瀧を休ませることもなるが仕方ない。

紫原はこれまでの試合とは比べものにならないほどの跳躍を連続で行っていた。白瀧達のオフENSEを止めるためには仕方のないことではあったのだが、その負荷が今紫原の体に重くのしかかっている。

特に今回は早い展開でオフENSEにも参加していたのだ。限界も早まったのだろう。

「どうやら、お前も限界が近そうだな。監督の言った通りだ」

「白ちん……」

敵の状態を知った白瀧は、ゆっくりと紫原に近寄っていく。

「根比べと行こうか、紫原。体力勝負は、嫌いじゃない」

「……本当に馬鹿だよ。俺がいつまで戦えるかなんてわからなかっただろうに。こんな作戦で来るなんて」

「馬鹿で結構だよ。約束を忘れて一人楽な道を選ぶ卑怯者より百倍マシだ！」

両エースは本調子からほど遠い。されどお互いに言い分は曲げることはいらない。

残り時間八分を切って十一分差。勝負時となったこの時間帯、まだ両チームに勝機は残されている。

——黒子のバスケ NG集——

「……………どちらでもないさ」

「えっ？」

すると彼が期待していた、予想していた答えとはまったく違うものが赤司の口からこぼれた。

意味を理解することができず、呆然と赤司を見据えるとさらに赤司は続ける。

「俺はお前には、桃井の手料理の処理係としていてほしい。そう思っている。今までも、そしてこれからも」

「……………うわあああああああああ!!!」

桃井の料理を食べることは苦しいけど嬉しい。しかしやはりこんな求め方は嫌で、白瀧は叫ぶ事をやめられなかった。

第九十五話 交わした約束を胸に

「……作戦を一部変更する」

タイムアウト中の陽泉ベンチ。

荒木が重々しく語る姿は、試合展開が彼女の思惑通りに運んでいない証拠であった。

白瀧、光月を追い詰めるどころか、自軍のエースである紫原の限界が近づいたことが明らかになった現状で、今の方針を続行することは不可能と結論付けた。下手すれば紫原が彼らよりも先に離脱してしまう可能性もある。

「紫原、お前は守備範囲を狭めろ。ペイントエリアを固めてくれればそれでいい。白瀧には福井、劉が引き続きマークに付き、岡村はミドルを守れ。宮崎は神崎のマンツーマンを続行だ。下手すればこの試合がひっくり返されない。限界が近い相手だからと侮るな。お前たちの守備力を見せてやれ！」

「おう！」

ここで紫原が抜けるような事があってはならない。

多少インサイドの守備が甘くなることは覚悟のうえで、荒木は紫原の負担を減らすことを優先した。

これならば少なくとも相手の消耗の方が激しいだろう。守りに徹すればそう崩れることはない。相手の勢いに乗らないように、乗らせないようにと選手たちに言い聞かせてタイムアウトの指示を閉めた。

一方、同時刻の大仁多ベンチでは。

「ここが分岐点ですかね。——白瀧さん。山本さん。ポジションチェンジ、行けますか？」

「こちらも陽泉と同様に作戦の変更を藤代が示唆していた。

「えっ。ちよつと待ってください監督！」

「現状、白瀧さんに司令塔の役を続行させるのは負担が大きい。十分陽泉の意識を引き付けることは出来ました。ならばその役割を山本さんに引き継いでもらいたい。小林さんには引き続き中での高さの維持、パス回しに努めていただきたい」

「しかしー」

エースの消耗が激しいのは大仁多も同じこと。特に白瀧は敵のトリプルチームを受けながらPGを務めていた。このポジションではどうしてもボールに触っている機会が増えている。その分消耗も大きいだろう。

それを考慮して藤代は二人に変更できるかと問いかけた。だが白瀧は山本がそのポジションには不慣れであろうことを考慮して反発する。自分を配慮しての提案という事も促したのでだろう。

「白瀧ー」

「ッ!」

退こうとしない白瀧であったが、その時山本が一喝した。珍しい怒声に白瀧も怯み、それ以上先の言葉が続けることはなかった。

「わかってんだろ。お前自身が限界をよ。……あとは任せろ。お前達のところまでボールは俺が供給してやる。今まで小林やお前をサポートしていたのは俺だろうが！ こういう時くらい任せろー」

これまでの試合、小林や白瀧など司令塔を務めてきた多くの選手をサポートしていたのは、一番は山本だ。SGとしてPGのサポートを任されていた。その実績と、レベルの高い選手達のサポートをしてきたからこそ身についた自信もある。

不慣れなポジションであることはわかっている。同時に、今の面々でよりオフセンスに特化する為には己がボールを運び、神崎や白瀧に外からの攻撃を任せた方が効率が良いという事も。

故に山本は強い口調で逸る後輩を諭した。

「……はい。ありがとうございます」

彼の心境を理解したのだろう。白瀧もおとなしく引き下がり、そして役回りを引き受けてくれた先輩に礼を告げた。

そしてタイムアウトの時間が過ぎ、第四Qが再開された。

陽泉ボールから試合が始まると大仁多がゾーンプレスを続行。

ボールを奪おうと試みる。

対する陽泉はこの強襲に一度はボールを奪われかけるも、福井・宮崎・紫原の足の速さに優れた面々のドリブルとパス回しで突破。第一線を突破すると、そのまま先に走っていた岡村・劉へとボールを託し、そのまま手薄となつているゴール下から得点を決めた。

(大仁多) 63対76 (陽泉)。タイムアウト後、初の得点は陽泉が獲得する。

「問題ない。これでいい。もはや大仁多に、うちのゴール下を止められるだけの戦力はない。うちは守備力が強みのチームだ。大仁多の破壊的なゾーンプレスをどこかで突破できれば——必ず守り勝つ」

試合終盤、敵の激しい守備が続いても荒木は動じない。切り札である守備力は今だ健在。最強の攻撃チームである大仁多を、最小失点で抑えられれば、必ず勝てる。

(やはり、一度でも抜かれれば大仁多が不利だ。中で競り勝てるのが光月しかない以上、途中でボールを奪えなければ即失点となりかねない)

「だが関係ねえ。取られたならそれ以上の点数を取り返す！」

失点がどうしたと、叫んだのはポジション変更となった山本だ。神崎からスローインを受け取ると一人でボールを運びながらコートを駆け上がる。

(6番がトップのポジションに?)

「むうっ！」

トップのポジションでボールを伺う山本を見て、岡村は警戒心を強めて前に出た。

現在の大仁多は山本がトップのポジションに立ち、神崎・白瀧の両名が左右のポジションに位置するワンガードを取っている。二人にはそれぞれマークがついているものの山本のマークは岡村がケアするしかない。

外からのシュートもある以上、そう距離を離すわけにはいかないと考えて指示よりも前の位置取りで山本の出方を窺った。

(白瀧はダブルチームがついている。三人よりはまだマシだが、すぐ

攻撃に参加は出来ない)

「なら、俺は俺らしく行かせてもらおう！」

陽泉の守備は岡村が白瀧のマークから中央へと移ったのみ。それを確認すると、山本は彼の懐へ飛び込むように鋭く切り込んだ。

そして対応しようとした岡村へ神崎がスクリーンをかける。これでマークを突破すると紫原が反応する前に光月へとパスをさばく。すかさず紫原が詰めるも、光月は無理に攻めずに中央へとボールを戻すと、これを小林が受けて横へと素早いパスをさばいた。

誰もいないはずのパスコースに、白瀧が飛び込んでいく。

「こ、んのー！」

(わかってはいたが、こいついきなりスピード上げやがる！)

「撃たすかー！」

警戒していても、白瀧の瞬発力に対応しきるのは難しかった。

それでも意地で手を伸ばす福井、さらに中央からヘルプに出た岡村が左右からブロックを試みる。

すると、その二人の下を潜り抜けるギャロップステップで白瀧は突破。着地すると同時に飛び上がりすかさずシュートを撃っていく。

「なっ!？」

「速い。しかも早い！」

紫原が距離を詰める前に放たれたジャンピングシュート。跳ぶ前に撃たれたのでは止めようがない。

「こんなところで、負けるわけにはいかねえんだよ」

白瀧のミドルシュートが炸裂する。

(大仁多) 65対76 (陽泉)。大仁多もすかさず反撃し、陽泉の逃げ切りを許さない。

「……これでいいのです。確実に陽泉を止める術がない以上、陽泉より点を取るしかない。うちは攻撃力を強みとするチームだ。たとえどれだけ失点しようとも、どこかでボールを奪う事が出来れば——必ず攻め勝つ」

紫原の守備範囲が狭まっても脅威であることは変わりない。それでもうちの攻撃力が通じている。最強の守備チームである陽泉から、

一点でも多く得点することが出来れば、必ず勝てると。

「行くぞ！ 全員で奪い取れ！」

それを示すように、再び大仁多はゾーンプレスを続行。最前線に山本が立ちプレッシャーをかけていく。

「失敗しても、リスクは承知で続行か！」

「うざい奴らアル！」

守備とは思えない攻撃的な戦術。突破は難しいが、しかしただ黙つてもいられない。

陽泉は福井と宮崎のスクリーンプレイで最初のマークをかわし切ると、中央の紫原へとパスをさばく。

「まずいー！」

(行かせねえ！)

サイドラインの突破は防げても、中央から崩されては結局意味をなさない。

紫原に白瀧がすぐさまプレッシャーをかけて立ちはだかる。

「邪魔だよ、白ちん！」

「紫原！」

火花を散らす両名。

約1秒。にらみ合いが続くと、突如紫原の巨体が動いた。

鋭いクロスオーバーで切り返すと白瀧の体を置き去りにする。

「ぐっ……！」

真横を一直線に抜き去る紫原。まだ一対一の戦いでは紫原は負けない。

「させ、ねえ！」

だが白瀧も負けてはいない。

横から抜いた紫原に白瀧がバックチップ。後ろから紫原が持つボールを弾いた。

「なっ!？」

「獲った！」

「……おおっ！」

手からこぼれたボールに選手達が集まる中、これを小林が確保す

る。絶対に渡してなるものとボールを胸元へ引き寄せた。

「おおおおお!!」

負けている大仁多には一度でも攻撃の機会が増える事は大きい。再びボールが巡ってきた事で大仁多のベンチが歓喜に湧く。

「……なんなのよ、あの子」

攻守が激しく入れ替わる試合。

その試合を観客席で見ていると、実測が恐ろしいものを見るかのような目で白瀧を凝視していた。葉山は自分たちの方が上であると語っていたが、少なくとも実測はまるで化け物を目にしたかのような心境で。

「まるで消える直前の蠟燭のように、この極限の場面でより凄みを増している!」

すでに疲労も痛みも蓄積しているはず。それでも格上であるキセキの世代に渡り合っている。彼はすでに常軌を逸している。

「最終Q、もはや気力の勝負となる時間帯での真っ向勝負。攻撃と守備、正反対の頂上チームのぶつかり合いだ」

「ここから先は、一つでも取りこぼせば命取りとなりかねえ。気を緩める時間なんて残ってねえぞ」

ただ、赤司や青峰は驚きはしなかった。

キセキの世代と呼ばれた経験を持つ者同士の戦いだ。この終盤においては当然の事。そうでなければ勝機は得られない。

第4Q、最強の守備チームと最強の攻撃チームの真っ向勝負。両極端の二チーム、必ずどちらかがこの試合で消える。果たして軍配はどっちに上がるのか、それだけは二人にもわからない。

「皮肉な話ですね。この試合はもう白瀧さんは出したくないと思っていたのに。今紫原さんと最も渡り合っているのは、他でもない白瀧さんだ」

「……『キセキの世代』を擁するチーム同士が戦うと、必ずこのような状況に一度はなるという噂があります。白瀧も一度は『キセキ』の看板を背負った選手。こうなるのはもはや宿命なのかもしれない」

「バスケの神様も本当に酷いことをする。この展開は、あまりにも……」

一方で、試合に出させたのは自分であるとはいえ、藤代はこの戦いの巡り会わせを嫌悪した。選手に無理を強いるこの試合は指揮官には辛いものであった。中澤は『宿命』であると例えたが、その二文字で片付けるには、あまりにも非情すぎる。

「正直、あの場にいる四人がうらやましい。俺もあそこで一緒に戦いたい……」

「監督に言ってもいいと思うぜ。お前のことは色々聞いているんだからさ」

「今俺がそんなことしたら、俺はどうやって他の方々に謝罪すればいいんですか？」

辛いのは藤代だけではない。思わず西村は胸中の苦悩を吐き出した。

つぶやきを聞いた本田が提案するも、西村はすぐに彼の案を拒絶する。

西村は知っている。今何もしないこと、それが大仁多にとって最善であるということ。知っているからこそこの現状が、何もできない自分の無力さが、嫌に感じてしまうのだ。

「俺は一体、何のために大仁多に入ったんだ……！」

今のような状況の際に白瀧を助けられるようにとそう望んでいたのに。結局、ベンチから声を張ることしかできない。あの時と何も変わってなどいなかった。

多くの人間のあらゆる感情が渦巻く中、それでも試合は進んでいく。

そして、試合の命運を分けるであろう出来事がついに起こった。

残り時間7分に迫ろうとしたところで藤代がタイムアウト。これは何も作戦の変更を行うためのものではなかった。白瀧の負担を考

慮し、少しでも疲れを無くそうと判断してのタイムアウトである。

故に作戦は引き続き陽泉、大仁多ともに大きな動きはなく試合は再開された。

ただ、その試合再開から一分もたたないうちに、それは起こった。
『ディフェンス、プッシング！ 白九番！ フリースロー、ツーショット！』

ゾーンプレスでボールを奪う事が叶わず、ハーフコートディフェンスに移行した大仁多。しかし神崎と白瀧が戻れず、アウトナンバーとなり中央から崩されてしまう。

なんとか防ごうと光月が劉のシュートをブロックしたものの、これがファウルを取られてしまう。

これが彼にとつて4つ目のファウルだった。

「4ファウル！」

「マズい！」

「ここで唯一ゴール下に対抗できる光月が4つ目かよ！」

大仁多のベンチ、観客席に動揺が広がった。

一試合の間に選手が許されるファウルは4つまで。5つ目を宣告されれば退場となる。これで光月はファウルをもう一つも許されない状況に陥った。派手に動くことは難しいだろう。

当然のことながら、光月をはじめ選手たちに暗い空気が広がる。作戦の見直しもしなければならない。

そんな流れを断つべく、藤代がタイムアウトを取った。

「皆さん。——作戦は続行です。このまま攻め続けますよ」

ただ、藤代はここで選手の交代も作戦の変更も指示しなかった。

光月を下げる事で士気が下がる事、攻め気を失う事を嫌つての判断だ。彼に出来るだけ接触を控えるように指示を出し、あとは気にせずプレイするようにと軽く声をかけただけで。

「大丈夫だ、光月」

「キャプテン……」

「お前が長い時間チームを支えてくれたんだ。これくらいで揺らいだりしねえよ。安心しろ。まだ俺たちは負けていない」

この五人で逆転まで行ける。最初からそう考えていたのだから。4ファウルもあり得ると考えていた。

それでも信頼は揺るがない。小林が光月の背中を押すように語りかけた姿を見て、それは確信となる。

「行くぞ、陽泉！」

フリースローの二点を取られた直後の大仁多の反撃。

今度は外からパスとドリブルで切り崩すと、ボールは中央の小林へ。

岡村の接触を受けながらも体の軸はぶれずにシュートを放つ。

「ファウル！ ディフェンス、プッシング。黒4番！ バスケツトカウントワンスロー！」

体幹に優れた選手であるからこそできたプレイ。小林がフリースローも決めて大仁多は三点を返す。

「うちのオフェンスは、要や明だけじゃねえ！」

さらに大仁多の猛攻は止まらない。外からの攻撃に長けたこの男、神崎がいる。

外でボールを受けた神崎はワンドリブルで切り返すと、ボールを掴み直してシュートを放った。

スリーポイントラインよりも外の位置。しかも切り込みも意識して少し深く守っていた宮崎のブロックは届かない。

神崎のスリーポイントシュートがゴールネットを揺らす。

「決まった！」

「相変わらずだな。あいつは」

「やはり先ほど神崎が中から得点したのが大きい。紫原の守備範囲も狭まったから敵の選手はどうしても中を意識してしまう」

「……前からあったスリー。そして山本から教わったドリブルに古谷のステップバックシュートが加わった。小林や白瀧がミドルで得点を決めてるし、神崎のシュートは止まらないだろう」

西條や楠達は、ライバルであった選手達の猛攻ぶりに息を飲んだ。以前でさえ厄介だったが今はそれ以上の脅威を示している。

神崎を見ても、もはや外からのシュートだけではない。切り込んで

相手をかわず技術もある。加えて他の選手たちも暴れているとなれば、防ぐことは困難だ。

第4Q、大仁多はあらゆるオフENSEを展開し、陽泉の背中に迫っていく。

「いずれにせよこれで」

「6点差。ついに大仁多が射程範囲に捉えた」

この神崎のスリーにより得点は（大仁多）74対80（陽泉）。6点差、スリー二本で同点となる点差となった。

もう少しで同点、うまくいけば逆転も狙える。

大丈夫。行けると。多くの人の期待が高まる中で。

「ハア、ハアッ……」

白瀧が限界を迎えていた。

すでに息は絶え絶えで、顔を上げているという事さえままならない。

それでも攻め続けようとゾーンプレスに参加する。

「……くっ、そっ……がー」

だが、体が思うように動かない。

福井と宮崎が連携で白瀧の横を突破する。

手を伸ばしてもパスを弾けない。このままでは失点は免れない。

アウトナンバーを防ぐため、ディフェンスに戻ろうと切り替えた。

「ッー」

「白瀧!？」

されどその思いは敵わない。

コートで足が止まってしまった。白瀧は膝をついてその場から動けない。山本が声をかけるが、それに返す事も出来なかった。

「マズいー」

「完全に限界だ」

「無理もない。一番負担が大きいゾーンプレスを続行していたんだ。白瀧と紫原、どちらが先に限界を迎えるかなど、火を見るよりも明らかだ」

誰もがもう白瀧は動けないだろうと考えた。

そしてこうなってしまうえば、陽泉のカウンターを止めることは大仁多には不可能であった。

数的不利な上に、光月が積極的なプレイが出来ない。

外から切り崩されるとフィニッシュは紫原。レイアツプシュートを軽く決めて得点する。

(大仁多) 74対82 (陽泉)。点差は8点。ゾーンプレスを突破した陽泉の攻撃が決まった。

「よしっ!」

(決まった。これで大仁多は選手交代か、少なくともタイムアウトを……)

この得点が決定打になったと、荒木は口角を挙げた。

敵の主力をついに追い詰めた。さすがにこれで藤代も動くしかない。

そう思って反対側のベンチを窺った。

しかし藤代は立ち上がらない。その為に試合も止まらない。

「……なにっ」

何故だ。ここで試合を止めない理由がわからない。タイムアウトを取っておきたいならば、せめて選手交代をするはずだ。

荒木がその理由を考えていると、山本が小林にスローインしてボールが再開された。ボールを受けた小林は、その場で右半身を後ろに引き、大きく振りかぶる。ロングパスの姿勢を取った。

「え?」

「はっ?」

(何をしている小林!? まだ誰も上がっていない。白瀧だっ……)

陽泉の選手達が皆驚愕し、目を見開いた。

速攻を仕掛けようとする動きだが、まだ小林以外の三人もすぐ近くにいる。最後の一人、速攻の得意な白瀧もまだ膝に手を付いて動けないでいるのに。

「ッ!」

(膝に手を付いて。——重心がすでに走りだせる状態に!?)

「まさか」

まさかまだ走れるのか。突如脳裏に嫌な予感が浮かぶ。すぐに劉がパスを防ごうと手を伸ばしたが、小林の出だしの方が早かった。「キセキの世代を倒すんだろ白瀧！ だったら、自分の限界なんかに負けるな！」

そして二人専用のパスであるタッチダウンパスが放たれた。

「——ええ。わかって、います！」

矢のような鋭い送球に白瀧も負けじと走り出す。

主将の櫓を受けたエースが奮起した。フリースローラインでボールを受け取ると、紫原達が戻り切るより先にレイアップシュートを沈めた。

(大仁多) 76対82(陽泉)。再び点差は六点。そう簡単に譲らない。

「嘘だろ。完全に足止まってただろ」

「信じられないアル」

「白ちん……」

「……舐めんなよ。10秒近く休んだんだ。十分すぎる休息だ」

驚き、呆れた表情を浮かべる福井達。

ふと紫原に名前を呼ばれると、白瀧は不敵に笑った。まだ自分は動ける。そう言っているようだった。

限界のはずだが、先ほどの速攻を見て本当に動けるのではないかと疑惑は広がる。

その悩んでいる最中にゾーンプレスがまた襲い掛かり、陽泉の選手たちの動揺は大きなものとなった。

「くそっ！」

(まずい、このままだと……！)

「怯むな！」

「ッ!？」

スローインもままならない中、荒木のコートを引き裂くような声が響き渡る。ベンチから立ち上がった彼女は選手達を落ち着かせようと強い語気で活を続けた。

「言ったはずだ！ 挙動に惑わされるなど！ すでに敵は限界だ！ トドメを刺せ！」

まさに選手達の迷いを振り払うような言葉だった。

敵の言動を真に受けて惑わされてはならない。白瀧が動けないのは間違いがないのだ。

今こそ大仁多の反撃に終止符を打つ時だと、荒木はあえて白瀧の所から突破するように指示を飛ばした。

「……ちくしように」

敵の指揮官の言葉を耳にした白瀧は、悔しそうに表情をゆがめた。その通りだ。限界などもう超えている。それでも何とか敵と渡り合おうと必死にふるまっているというのに、見切られてしまった。

(やはり、紫原は最悪の相手だったか)

紫原が最悪の相性の存在であることは当然だが、白瀧にとっては陽泉というチームそのものが天敵であった。

相手がどんな手を打とうとも動じない、大木のようなチームが陽泉だ。力が届かないならば策を弄して立ち回ろうとする白瀧にとってこれ以上ない程の最悪の組み合わせだ。

こうなってしまうえば白瀧に出来る事は多くなかった。

宮崎からパスを受けた福井が迫ると、彼の縦に変化するドリブル・ロツカーモーションに揺さぶられてしまった。動きについていこうとして足がもつれ、その場で崩れ落ちる。

「ア——」

「要！」

(駄目だ。もう、走るのもやっとで……)

「——ッ！」

「監督？」

神崎が倒れた白瀧に呼びかける。だがそれ以上の事は出来ずに彼もディフェンスに戻っていった。

そんな選手の動きを見て、藤代がベンチから立ち上がった。

「タイムアウトを取ります」

「ですが、もう次で後半最後の」

「わかっています！」

後半三つ目のタイムアウト。勝負時に取っておくべきではないか

と東雲が意見するが、今はそうも言っていられなかった。藤代は真つすぐタイムアウトの申請に向かった。

本当の事ならば、時計を止めるにしても次のプレイで大仁多がボールを奪ってラインの外に出す。あるいは攻撃に成功した後にと思っていた。そうすることでより白瀧の印象を陽泉に見せることが出来る。

だが、その前に荒木が陽泉の選手達の落ち着きを取り戻した。こうなってしまうばもう善後策に移るしかない。苦渋の決断だった。

(……畜生)

コートに倒れこんだ白瀧が、ゆっくりと顔を上げた。

味方のベンチでも監督が申請を行おうと振る舞う姿が見える。他の選手達もその監督の姿や、先に走っていく仲間の姿を不安げに見守っている。

自分のせいでこんな事になってしまった。

悔しい。申し訳ない。様々な負の感情が浮かんでくる。

――

そんな中、ただ一人だけ。このような状況下になってもただ一直線に自分を見つめる存在と、目が合った気がした。

《ちやんと、見てるから。だから――勝って》

彼女、橙乃と交わした約束が脳裏によみがえる。

何故かまた少しだけ力が湧き出てくるような錯覚を覚えた。

「死守しろ！ 何としても守り抜け！」

ここで失点してはならないと小林が気を吐いた。

チームメイトに指示を飛ばし、自身も突破を防ごうと腕を上げ続けた。

4対5。数で有利な陽泉は確実に点を取ろうとゆっくりとパスを回していた。

シュートを撃たれる前に獲りたい大仁多だが、どうしても隙が出来てしまう。

せめてボールを弾いてラインの外に出す。劉からボールを受けた福井がドリブルで切り込もうとした瞬間を狙って手を伸ばした小林。だが、読んでいたのか福井は小林をかわすように、体の後ろ側から横へとパスをさばいた。

「なっ!?!」

「うっ!」

(ヤバッ!)

すると、宮崎を警戒していた神崎も岡村のスクリーンに掴まってしまふ。

フリーになった彼はトップの位置に走ると、福井のパスをスリーポイントラインの外で受け取った。

「しまった!」

(宮崎。ここでスリー!)

「……八点差と九点差では、大きく意味が違う」

「ああ。スリー三本でようやく逆転できる点差と、それでも同点にしかならない点差。ここで陽泉は本当にトドメとするつもりだ」

「止めるおおお!!」

ここで加わる三点の重みは大きい。

ようやくここまで追い上げたのに、再び三点離されれば勝利は大きく遠ざかるだろう。

故に『誰でもいいから止めてくれ』と応援席の悲痛な声が響いた。

しかし、止められる位置に選手がいない。光月はゴール下、山本は中央にいて、神崎と小林も間に合わない。

そんな時に。

「お、おお!」

白瀧の叫びが響いた。

(勝つんだよ、今度こそ!)

「うわああああああ!!!」

(もう嫌なんだよ! 仲間が傷つき苦しんでいる姿を、見ていることしかできないのは!)

あの時とは違う。まだ動ける。まだ戦える。もうあんな思いはし

たくない。誰にもさせたくない。

そんな想いが、白瀧の体を強引に突き動かした。

倒れた場所から全速力で走りだした白瀧。宮崎のスリーが放たれた瞬間、彼の後方からそのシュートを叩き落とした。

「なっ！」

「……馬鹿な」

「白瀧！」

「ッ！ マジかよおい！」

本当に間一髪の出来事だった。あと一步でも遅れていれば間違はなく決められたであろう。

ありえないと思われた攻防に多くの者が目を疑った。

その間に、コートに落ちてきたボールを山本が確保。陽泉の追撃を振り切った。

「裏切って、たまるか」

白瀧はボロボロの状態になりながらも胸中の思いを声にして、その覚悟をさらに強くする。

「これ以上、俺を信じる人を裏切ってたまるか！」

裏切り。白瀧は今まで期待に応えられなかった自分の行いをそう例えた。戦いたいときに戦えず、救うべきものを救えなかった。そんな己の裏切りを、他ならぬ彼が許さなかった。

絶対に負けない。彼が絶望に耐えてきたのはここで立ち止まる為でも、負けを受け入れる為でもない。そんな現実に屈する為ではないのだから。

（まさに『百折不撓』か。やはり、大仁多のエースはあなたですよ）
「監督。どうしますか、タイムアウトの申請を今なら変更もできますが」

「いいえ。少しでも休ませられるなら、やはり休ませましょう」
「……そうですね」

誰にも負けない精神で志を貫く姿は、まさに大仁多のスローガンである『百折不撓』を体現しているようだった。

藤代は目を細め、エースの姿をじっくりと見つめる。東雲が申請の

変更も可能であると助言するが、今は少しでも休養が必要だ。だからその必要はないと彼女の提案を断った。

これでタイムアウトをいつでもとれる状態での大仁多の攻撃が始まる。この一連の攻防の結果は大きかった。

今回も山本がボールを運んでオフエンスを組み立てる。

外の神崎、中央の小林がフェイクを織り交ぜて敵の意識を集中させた。そして一度トップの山本へとボールを戻すと……

(くれっ！)

「よしっ。いけっ！」

山本の後方から白瀧が接近し、彼と入れ替わる形でボールを直接受け取った。これで山本がスクリーン代わりとなり、マークを外す。

直後、白瀧は中に切り込むと敵が接近する前にティアドロップへと移行する。

「よしー！」

「このっ。小癩なー！」

リングの遠い位置から放たれるレイアップシュート。これは守備範囲が限定されている今の紫原では止められない。

ならばと岡村が無理やり体を寄せて、白瀧に向かって跳躍した。

「ぐっ！」

巨体が白瀧に衝突する。その衝撃は大きく、白瀧は姿勢を保つことが出来ない。シュートは中断されボールが彼の手から落ちた。

「——アッ」

白瀧は少し遅れて、背中からコートに叩きつけられた。短い悲鳴が空気と共に口からこぼれた。これを見た審判の笛がすぐに鳴る。

「ディフェンス、黒4番！ フリースロー、ツーショット！」

「大仁多高校タイムアウトです！」

岡村のこのQ二つ目のファウルが宣告された。そしてすぐに藤代の要請によるタイムアウトが成立する。

陽泉にとって反則を取られたとはいえ、確実な失点を防ぐことが出来た。賢明な判断と言えるだろう。

「止められたか。まあこれでフリースローを二本獲得ならいけんだ

ろ」

「……いや」

「えっ？… なんで？」

大仁多にとっても小休憩をはきみたかった。その中でのフリースロー獲得してのタイムアウトならばよい展開だろう。

そう根武谷は楽観視していたが、赤司は同じようには考えられず彼の意見を否定する。

根武谷と同じ意見であった葉山は何故だと赤司に問いかけるが

……

「最悪の展開だ」

「どういう意味や、青峰？」

「おそろくだが、ファウルの衝撃で……」

赤司と同じく嫌な予感がよぎった青峰は、今吉の疑問に重々しく答える。

「要のフローが切れた」

「それも突発的にな」

二人は同じ結論に至っていた。岡村のブロックの衝撃により、白瀧の没頭状態が途切れてしまったと。

「おそろく切れ方としては最悪だ。ただでさえ痛みや疲労を没頭する事で抑えていたというのに」

「それがなくなつたとすれば、今度こそ耐えられねえ。もう一度フローに入ろうにも、抑えていたものが邪魔をする。他の何かで抑え込もうとしても、無理だろうよ」

思いがけない、外からの衝撃。没頭状態を掻き消すには十分すぎるものだった。加えてもう一度フローに入ろうにも、反動が大きすぎる。最悪の解け方だ。

(……嘘だろ。ヤベえ。こんな時に。)

「おい、要？」

(フローが、切れた。来る。押し上げてくる。痛みが……)

倒れたまま動けない白瀧。神崎達が駆け寄り、声をかけるが返事をする余裕もない。

赤司や青峰の考えが的中していた。

白瀧のフローは切れていた。途端に今まで感じないでいた苦痛が次々と込みあがる。

（ふぎけるな。まだ、6点差で。俺は勝ってない。なのに、こんな所で）

強引な快進撃の反動が、体を縛り付ける重圧となり白瀧に襲い掛かった。

だが今はまだあの日交わした約束の途中。まだ倒れることはできない。

お願いだからまだ戦わせてくれと祈るが、雑念痛みを振り払うことが出来ない。

（終わり、なのか……）

立ち上がる事さえままならなかった。

完全に集中力が切れた。白瀧の胸中に敗北が過ぎる。

「——何をやっている白瀧!!」

そんな重苦しい空気を引き裂くような、甲高い咆哮が木霊した。

「あつ?」

「……来ていたのか」

「まさか」

「あいつ! やっぱり来てたのかよ!」

突然観客席から響いた叫びに、多くの者がその発生源へと首を向ける。

帝光の出身者は見慣れた姿を見てそれぞれ驚き、納得し、試合開始前に彼の姿をチラッと見ていた火神は苦手意識をもつて彼をにらみつけた。

そして呼ばれた本人である白瀧も、何とか体を起こして声の主を見る。

「……緑、間?」

そこにいたのは友であり、かつての仲間であった緑間慎太郎。

緑間は高尾や大坪など秀徳の面々と共にこの試合を観戦に来ていたのだ。緑間は席から立ち上がり、白瀧を一心に見て彼への活を続け

る。

「これで終わりと言うつもりか？　ふぎけるな！　俺の代わりに戦うと語ったのを忘れたか！　俺はこんな事で倒れる男ではない！」

「ここで終わるなど許さない。」

敗戦後、緑間と誓ったのは他ならぬ白瀧なのだから。

だからこそこんなところで終わりを受け入れるなど。

「誰かに倒されて終わるな！　勝って終われ！　その為にお前は戦ってきたのだろう、白瀧！」

力尽きるなら勝って終われと。お前のやってきた意味を思い出せと。

緑間は弱音を許さない、強い口調で白瀧へ発破をかけ続けた。

「……まったく。あいつは、いつも厳しいな。少しくらい、優しくしてくれたっていいだろうに」

緑間の声掛けは昔から変わらないものだった。

そういえば最初からそうだったと白瀧は昔を思い返した。スリ―を決めてもタツチが甘いなどと注文を付けて、少しでも気を緩めれば叱るような厳しい存在だった。

「でも今はありがとうな。緑間」

だからこそそんな彼をいつも頼もしく思っていた。

「そうだ。あの紫原だってまだ戦ってるんだ。もう少し、足掻いてみるよ」

気持ちが出来になった。ゆっくりと、しっかりと白瀧は立ち上がった。

そうだ。まだ役割を果たしていない。紫原より先に倒れてなどいられない。

残り時間4分30秒。理想^昔を思い返し、もう一度白瀧は力を振り絞る。

——黒子のバスケ NG集——

突然観客席から響いた叫びに、多くの者がその発生源へと首を向ける。

帝光の出身者は見慣れた姿を見てそれぞれ驚き、納得し、試合開始前に彼の姿をチラッと見ていた火神は苦手意識をもって彼をにらみつけた。

そして呼ばれた本人である白瀧も、何とか体を起こして声の主を見る。

「……緑、間？」

(声は聞こえるけど、何処!?)

大勢の観客+極限に疲労している中で緑間を見つける難易度：EX

P E R T

第九十六話 終戦

「珍しいな。緑間、お前があのように大きな声で叫ぶとは思わなかったぞ」

観客席では突如声を張り上げた緑間に大坪が茶化すように話しかけていた。

「見るに堪えなかっただけです」

「なんだ？ 言った後になつて恥ずかしくなつちやつたか？」

「黙るのだよ高尾。——ふん。もう同じ事はしない。おそらくは、今度こそ最後になるのだから」

先輩や同級生のたわいのない言葉を適当に流し、緑間はじつとコートを見る。

タイムアウトから一分、両校とも大きな指示は出ずに休息にあてた時間が過ぎて選手たちが戻ってきた。

その中でも負担が大きい白瀧へと視線を向ける。おそらくは次に倒れるような事があれば今度こそ終わってしまう。そう緑間は予感していた。

現に白瀧の足取りは非常に重く、審判のもとへと向かう途中で足を引っかけて転倒してしまいそうになった。

「大丈夫か要?」

寸前、白瀧は光月の肩を借りる事で転倒はさけた。

「……明。少しそのまま耳を貸してくれ」

「え?」

白瀧は顔をうつむけたまま、小声で光月に話を続ける。

少しだけ彼と話すと彼の肩から手を下ろして審判のもとへと向かう。

「ツーショット!」

審判から白瀧へとボールが渡った。タイムアウト後の再開は白瀧のフリースローから。

「大仁多にとつては二本とも決めたい。決めないときついところだ」

「現状6点差。二本とも決められればシュート二本分だが、一本外せ

ばスリー一本を決める必要が出てくる。この差は大きい」
「疲労がたまっている中で集中力も限界だろう。だが、ここが正念場だぞ」

多くの者の意識が白瀧へと集まる。フリースローの得点は一点とはいえそれが二本行われるのだ。この成否は大きく影響するだろう。点差の問題だけではない。リバウンドに備えてセツトしている面々を見れば、二本目を外してしまえば間違いなく陽泉にボールが渡る危険性が高い。下手すれば速攻を受けるかもしれない。

だから二本とも決める事が求められる。

『決まれ』、『外せ』と皆が念を送るように祈りながら白瀧のシュートを見届ける。

その一本目は、きれいにリングの中央を射貫いた。

「よしっ！」

「まず一本！」

(大仁多) 77対82 (陽泉)。最初の一投が決まり、これで5点差に。

決めた白瀧は審判からもう一度ボールを受け取るといつものようにボールを付いて自分のリズムを作った。

そしてボールを両腕に構え、最後の一投が放たれた。

同時に岡村、劉、紫原が。光月、小林が飛び出してリバウンドに備える。

外れても絶対に取ってやるとポジションを競り合う5人。

激しい地上戦が行われる中——ボールがリングに弾かれる。

「なっ!？」

「白瀧がフリースローを外した!？」

「マズイ! リバウンド! 取れ!」

決まる可能性が高いと思っていた中、大仁多にとっては最悪の事態となった。

周囲から悲鳴のような叫びが木霊する。

攻防の行方はゴール下の選手達にゆだねられた。

リングに衝突し、大きく外にはねたボール。それを手にしたのは、

岡村だ。両腕でガツシリとボールを掴みとっていた。

「ああっ！」

「ナイス岡村！」

大仁多から失意の聲が、陽泉から歓喜の聲が上がる。

攻守の交代。誰もがそう考えて意識を切り替えた。その瞬間、すぐ横から伸びた光月の右腕が、岡村の腕からボールを強引に奪い取る。

「なんじゃと!？」

「なっ！」

「光月！」

起死回生の一発となるリバウンド。岡村からボールを奪った光月は懐に両腕をボールを呼び込んで着地する。そのままリングへと視線を戻すと両腕を挙げて膝を伸ばした。

「このっ！」

「させないアル！」

「潰す！」

だがすぐに陽泉ディフェンスが光月に迫った。

近くにいた岡村と劉だけではなく、反対側にいたはずの紫原までもが距離を詰めるとブロックに跳ぶ。

完全にシュートコースを防がれた光月。

すると、光月は視線をそのままリングへと向けたまま、紫原の足元に落とすようにボールを弾ませた。

「えっ?？」

「馬鹿な！ パスだど!？」 大仁多の選手達は全員カバーしているというのに、誰に!？」

バウンドパスだが、誰に対してやったものなのか、陽泉の選手達はすぐに理解できなかつた。

逆サイドの外へと向けられたパスだが、神崎は光月と同じ側にいて、山本は中央で宮崎がカバーしている。小林もリバウンドを行おうとしていたためすぐ近くにいた。

だから誰もこのパスを受けられないはず。

パスミスかと疑われたそのパスを受け取ったのは、フリースローを

放った白瀧だった。

「し、白瀧!」

(まさか光月がリバウンドを取ると信じて走っていたのか!? フリースローを放った直後、自分から注意が外れた事を理解して!)

疲労している。フリースローを放った直後である。意識が逸れる要因が多くある状況を利用した動きだった。

再び陽泉の意表を突いた光月と白瀧のプレイ。白瀧はスリーポイントラインの外で光月のパスを受け取った。

「決めろお!」

「止めろっ!」

再び両軍の叫びが響く。

だがオフエンスリバウンドの獲得により、光月に全員の意識が注目していたのだ。いまさら白瀧に追いつける者はいなかった。

「——見たか、緑間。」

白瀧のスリーが炸裂する。(大仁多) 80対82 (陽泉)。

ついに、大仁多が陽泉の背中を目前に捉えた。

「嘘だろ。2点どころか、一気に4点詰めやがった。」

「なんて強欲なのよ! 味方がリバウンドを取れる確信なんてなかった。下手すれば速攻で二点を失っていたかもしれないのに!」

光月がリバウンドを取ると信じていなければ成立しなかったであろう一連の流れだ。

とても共感できないと根武谷も実渕も驚愕を露にした。

「……信じるものを失い絶望に陥った時。やつが何を信じようと考えたかわかるか?」

そんな彼らに諭すように口を開いたのは赤司だ。

「あいつは、『信じる』という行為そのものだけを信じると、決めただ」

信じたものに裏切られ、失意に沈んだ白瀧。そんな彼が、それでも理想を貫けた理由は、その信じるという概念その物を信じるという妄信とも捉えられる考え故だと。

「よしっ! ナイツシュ! これで二点差だ!」

得点を見届けた光月は笑みを浮かべ、すぐに白瀧のもとへと向かった。

しかし数歩手前で彼の足は止まる。

肩で息をし、うつろな表情を浮かべる白瀧。

一喜一憂する体力さえ残されていない。タイムアウトの一分は焼け石に水だった。今すぐにも倒れてしまいそうな友の姿を見て、光月は掛けようとした声を飲み込んだ。

「要……」

(もう立っているのもやっとの状態で、君はまだ……)

「無理だと、思うか？」

「え？」

光月が呆然と立ち尽くすと、白瀧が彼に問いかける。

「限界だと、思うか？ 俺はもう、戦えないと。お前はそういうのか明！」

「……そんなことはない。大仁多のエースは、まだ健在だ！」

「ああそうだ。その通りだとも！ 休んでいる暇なんてない。必ず追いつき、逆転するぞ！」

友を、己を焚きつけるように白瀧は言う。

無理ではない。限界ではない。まだ戦える。

たった二点差だ。監督の逆転するという指示もまだ達成できていない。それなのに休んではいられないと自分に鞭を打つ。

必死の覚悟で白瀧はゾーンプレスに参加した。

「……これが最後だ。俺はもう、お前を倒すまで解除しない」

紫原をマークしながら、白瀧は彼に向かって話し始めた。

白瀧は馬鹿ではない。光月にあのように発言しても、自分の状態をきちんと理解している。おそらく次に倒れるような事があれば今度こそ自分は終わる。この試合で戦う事は出来なくなるだろう。

そしてその次は数秒先に訪れるのか。あと何回戦えるのかかわからない。だから、白瀧はそれまでは全力を尽くして戦う事を誓った。

「……立ってるのも辛いんでしょ？ 見ればわかるよ。それでもや

るっていろいろ？」

「やるさ。まだ戦う事が出来るなら、1%でも可能性が残っているというのならば、俺は最後まで勝利を追い求めるさ。だから！」

（俺は守る。俺が戦う。今度こそ……！ フロー、強制解放！）

「そう。ただ、俺も負けるのは嫌なんだよね」

（……初めてだよ。こんなにしぶとい敵は。さすがにここまでくると、呆れるどころか尊敬さえ覚えてくる）

「だから勝つ！ 捻り潰してやる！」

白瀧は三度没頭状態に突入する。

その彼のあり様を見た紫原は、初めて敵に尊敬の念を抱き、負けられないと集中力を高めた。大きく息を吸い込み、力を籠める。紫原もこれまでの試合の中でも一番精神的に最高の状態になっていた。

二人のエースが放つ気迫にあてられたのか、両校の攻防は激化する。

第4Qが始まって以来、最も点差が縮まった大事な局面での攻防で。

大仁多は6秒間、陽泉オフエンスをバックコートの中に押しとどめた。

（くそっ！ マズイ！）

もうすぐ8秒ルールに接触してしまう。ボールを保持したチームは8秒が経過する前にボールをフロントコートに運ばなければならぬというのに、前線から激しいプレッシャーをかける大仁多を陽泉は突破できない。福井はボールを保持するのもやっとの状態だった。

「よーせー」

すると紫原が横から駆け込みながら声をかける。

残り時間を考えても彼に託すのが最も可能性が高いと判断すると、福井は彼にボールを預けた。

ドリブル突破を図る紫原。そんな彼に、白瀧が迫る。

「行かせない！」

「勝つ！ トドメを刺してやる！」

これを止めれば間違はなく流れは大仁多だ。

緊迫した二人の戦い。その決着は、一瞬だった。

紫原のこれまでで一番キレのいい切り返し。その速さはフローに入った白瀧に勝るとも劣らない動きで。

白瀧の反応が一瞬遅れをとってしまった。

「うっ!？」

(馬鹿な！ いくらなんでも速すぎる！)

「行け、紫原！」

この勝負所で見せた紫原の最高のドライブ。時間ギリギリの所でフロントコートに突入すると、さらに小林、光月二人のマークも一人で突破した。

(嘘だろう。ここにきてまだ速くなるなんてあり得るのか!?)

(やはり化け物か！ ドリブルをしているというのに、紫原の速さに体が追いつけない！)

「させねえ！」

最後、紫原が三人を突破する間に戻ってきた山本が立ちはだかる。

「邪魔だよ。白ちん以外の奴に、止められるものか！」

「ッ！」

ただ紫原は彼を歯牙にもかけなかった。ドリブルで目の前に迫ると、一回の切り返しで彼の真横を突破する。

「白瀧！ 今だ、取れ！」

「ッ!？」

通り過ぎようとした瞬間、山本の白瀧への呼びかけが紫原の耳にも届いた。

紫原はすぐにドリブルを中断。ボールを胸元に寄せてステイールを警戒する。自分とて先ほどもボールを後ろから取られたのだ。周囲を見渡して白瀧の位置を確認する。

「…………へっ?！」

「え?！」

しかし、白瀧は近くにいなかった。確かに紫原を追いかけてはいたものの、ステイールするにはあまりにも遠い位置で紫原を追いかけている。

呼ばれた白瀧が、紫原も呆然としていると。

山本が紫原の両腕からボールを叩き落とした。

「なっ!？」

「悪いな。もううぜ」

「……止めた! 獲った!」

奪ったボールを山本が自分で手にする。これで大仁多は連続で攻撃権を確保。まだ攻める時間は終わらない。

「白瀧の執念を活かしたか。うまいな、山本」

「先も突然後方からのステイールやブロックを実際に見せていた白瀧だ。陽泉にとってはいつ現れるかわからない、もっとも警戒しなければならぬ相手となってる」

「だからこそ、その場にいなくてもそう見せるだけで意味があるってことか!」

観客席ではわかりにくかった攻防であったが、勇作達は今の数秒の出来事をしっかり理解していた。

これまでのエースの働きがあったからこそ、陽泉に出来た警戒心。それを利用して一瞬の隙を作り出した。単純ではあるものの誰もがとっさに出来るような事ではない。山本のフラインプレーだった。

「今だ! 攻めるぞ!」

「行けっ!」

そしてその山本の働きを活かさない手はない。

すぐに大仁多はカウンターに移行する。山本から小林にボールが渡ると、劉がマークにつくまえに白瀧へパス。すると今度は岡村が迫るが、これを光月のスクリーンでかわした。

「ヤバイ!」

「誰か止めろ!」

陽泉ベンチが必死に叫び声を上げた。

同点どころか逆転まであり得る大仁多の反撃だ。何としても止め

なければならぬ。

ただボールを運んでいるのが白瀧となれば、誰にでも止められるわけではない。

止められるとするならばただ一人。その唯一の男である紫原が、ベンチの前を横切つて一気に自陣へと戻り白瀧の速攻に備えた。

(馬鹿な！ もう戻つただと!?)

先ほどまで誰よりも敵のゴールへと攻めていた紫原の早すぎる戻り。突然の脅威の出現に、今度は大仁多が驚かされる番だった。

(まさか、こいつ!)

そしてこの時、対峙する白瀧。さらに青峰と赤司、緑間は紫原の異変に気付いた。

(紫原も俺と同じ……!)

紫原も白瀧と同じ没頭状態、あるいはそのさらに上である集中状態に入りかけている。

集中力が徐々に高まり、まもなく最高潮に高まるであろう直前の状態だ。おそらくこの攻撃が止められるような事になれば間違いなく紫原は戦意がさらに高まり、突入するだろう。

(どうする？ 考えろ!)

容易に攻めては間違いなく止められる。白瀧は頭の中の思考回路を全て回し、考えを巡らせた。0.1秒さえ惜しい、刹那の戦いだ。

(このまま攻める？ 右、に切り返すとみせて左。あるいはダブルクロスオーバー、はたまたギャロップステップやジノビリスステップで……)

一番可能性が高いオフENSESを考える。

紫原のマークを突破できるであろうドリブル、自分の手札を全て考えて。

(——止められる)

それらすべてが、成功する確率が0%であると理解した。今の紫原はあらゆる攻撃を完全に無効化する。切り札でさえ意味をなさないだろう。

(ならパスか？ だが前には勇しくない。宮崎の注意もそれでない

い中では攻撃は失敗する)

味方の助けも今は期待できない。いくら神崎のドリブル能力が上がったとはいえ、限界まで力が高まっている紫原から攻撃を決める事は不可能だろう。スクリーンプレイとて今の紫原には通用しないはずだ。

(二次速攻に移行するか？ 俺の方が限界が近いというのに？ しかしその間に紫原の調子は最高潮に達するだろう)

小林達が上がってくるのを待つという手も、現在の戦力を考えれば成功する確率は非常に低い。ただでさえ長期戦は不利であったというのに紫原の力が上がるのを待っていてはすべてが手遅れになる。

(0%。止められる。どんな手も。紫原が早すぎるんだ。どう攻めようともすぐに――)

あらゆる戦術を練っても答えは同じだ。飛びぬけた反射神経によつて一瞬で対応する紫原の前に、成功する確率は無であると白瀧の本能が訴えていた。

どうする。どうする。同じ悩みだけが何度も反芻する。

(……早すぎる?)

そんな中、白瀧は一つの言葉に違和感を覚えた。

(それならば、あるいは)

思考の末、白瀧は一つの結論に至った。おそらくは唯一の紫原を突破する可能性を見出した。

(――やるしかない!)

これ以上悩んでいる時間もない。

決意を決めると、白瀧は紫原に向かって一直線に突進する。

「加速した! 二次速攻ではなく、ここで勝負をつけるか!」

「勝敗が大きく影響するエース同士のワンオンワン一対一。一度仕掛けたらもう戻れねえぞ!」

同点か、逆転か。あるいは守り切るか。

この勝負の行く末によっては試合の結果も変わるだろう。観客席にどよめきが広がる。

二度とは戻れない二人の戦い。

先に仕掛けたのはやはり攻める白瀧だ。

紫原が近づくと、彼をかわそうと緩急をつけて右から左へと切り返す。

「獲った」

すると彼が切り返し、左手にボールが渡った瞬間、紫原の長い腕がボールに迫った。

（速い！）

（先に仕掛けたはずの白瀧の動きを完全に捉えている！）

「ぐっ！ あっ、ああああっ！」

スティールが決まる寸前で白瀧はビハインドザバックでかわす。

体の後ろにボールを通し、体勢を立て直すとすぐに前進。ゴールに近づこうとするが、やはり紫原が立ちはだかる。

ならばと白瀧はクロスオーバー。もう一度左右に切り返す。まだ紫原もくらくいつく。ここで白瀧の視線が右へ移った。直後、彼の体が左へ傾く。

（また切り返しか！ だが読んでるんだよ！）

彼自慢の方向変換だが、これも紫原が読んでいた。視線のフェイクにつられず、すぐに紫原も進路方向へと足を運んだ。

だが紫原の読みを裏切って、白瀧は右手首を返すと逆の右方向へと切り込んだ。

（逆！）

（インサイドアウトか！）

（重心移動の達人！ 本当に左に切り返すようにしか見えなかった！）

右手から再び右手に収まったボール。白瀧はインサイドアウトによつて紫原の裏をかくことに成功した。

「だからどうした、そんなの——!?!」

されど紫原の反射神経は並ではない。逆をつかれたものの、紫原の体は白瀧が方向を変えたと同時にすでに反応している。

「だろいな。だから」

「なっ!?!」

「俺の勝ちだ、紫原」

「そんな、馬鹿な——」

止められるはずだった。だが動きだそうとしていた紫原の体が、膝から崩れ落ちていった。

「紫原!？」

「マズい!」

突然の紫原の転倒により、白瀧がフリーとなった。

撃たせてはならないと福井と宮崎がレイアップを打とうとした白瀧にブロックを行う。

「もらった。——あ」

右足で跳躍しようとした白瀧。

すると跳ぶはずだった彼の体が前方に傾く。右足が地面から離れないまま、彼は右方向へとバウンドパスをさばいた。

「何っ!？」

「まさか!」

その先は、スリーポイントラインの外へと駆け込む神崎。

福井と宮崎は、宙に浮いた状態で、彼がボールを手にした瞬間を目にした。

「ナイスパスだ、要!」

岡村も、劉も間に合わない。

神崎は完全にフリーの状態でスリーを放った。障害が何もない状態で彼が外す事はなく、彼のシュートがリングの中心を撃ちぬいた。

「決まった!」

「神崎のスリー。つてことは!」

「逆、転だ。大仁多がついにこの試合初めて、試合をひっくり返した!」

（大仁多） 83対82（陽泉）。ついに大仁多が陽泉から初となるリードを奪う事となった。

「……アングルブレイク。お前と同じじゃん、赤司」

「常人が相手ならばむしろこれは起きなかつただろう。反応できずに棒立ちしていたはずだ。ただ、紫原は早すぎた。結果的に要のあの速

い方向転換に反応できたがために、軸足に重心が乗っている状態で反応してしまった」

高いドリブル技術を持った選手が相手を転倒させるというアンクルブレイク。

白瀧は紫原が自分の方向変換に対応する事を読んでいた。異常な反射神経の高さ。だからこそ、無理な切り返しにも反応してしまうと。

「突如紫原の動きが良くなり、余裕がなかったあの勝負所で。敦のディフェンス能力の高さに対応してプレイした。要の方向転換、ドリブルスピード、^{アジャスト}適応力。すべてを活かした見事な攻めだ」

技術、スピード、アジャスト。白瀧が自身の強みすべてを活かして紫原を突破した。

紫原相手に自分と同じ技を『目』を持たずに成し遂げたかつての旧友に、赤司は称賛の言葉を贈った。

「く、そっ」

「大丈夫か紫原！」

「レフェリータイム！」

一方、コートでは不穏な空気が流れていた。転倒した紫原がそのまま立ち上がれないでいるのだ。

体が大きい選手ほど体にかかる負担は大きい。特に足の消耗が激しかった状態で、突然膝から崩れ落ちた。これにより下半身にかかる負荷は大きなものとなっていた。

「紫原離脱か？ ならば逆転以上に大きな戦果だぞ！」

「ああ。ただ——代償も大きかったけどな」

「えっ？」

紫原の動けないそぶりを見て、若松が声を荒げた。本当ならば陽泉は一気に不利となる。

ただ、隣でチームメイトが騒ぎ立てる中で。青峰は大仁多に、強いでは好敵手に降りかかった大きすぎる代償を一人悟っていた。

「おい、要！」

動けないのは紫原だけではなかった。

白瀧も神崎にパスを出した直後、コートに倒れこんでいた。神崎は何度も声をかけるが答えは返ってこない。

(嘘、だろ……)

彼は痛みを我慢して口を閉ざしていた。すなわち、フロアが解けている。

先ほどレイアップシュートを放とうとしたタイミングで解けた。ボールだけは渡すまいと神崎にパスを回したものの、すでに彼は限界をとうに超えている。

(どうして? やつと、逆転したんだぞ。時間だつてあと数分だけなんだ。なのに、どうして、どうして今なんだよ……)

流れは大仁多にある。残り時間もわずかだ。勝利に大きく近づいているというのに。思いに反して体は言う事を聞いてはくれなかった。

「よくやった、白瀧。もういい。よくやってくれた」

そんな白瀧の肩を、小林が優しくたたいた。主将もエースの離脱を受け入れた瞬間だった。

結局、消耗が激しい紫原はベンチに下がった。一プレイで全てを破壊してしまいかねない彼の離脱は、大仁多には大きな希望を生み出す。一つの死地を乗り越えたことと同義であった。

だが、その戦術的な成功よりも大きなものを失ってしまう。

—— 神速墮つ。圧倒的な絶望を回避する代償は、絶対的エース・白瀧。ここまで多くの得点をたたき出し、大仁多を盛り上げてきたルーキーがついに真の限界を迎えた。

得点：36 アシスト：4 リバウンド：3 ステール：8 ブ
ロック：3

紫原のマークやトリプルチームなど厳しい対応を受けながらも、実にチーム総得点の四割を超える得点をたたき出し、白瀧の陽泉戦は試合終了より一足先に終わりを迎えた。

「……っ、うっ」

ベンチの隣で、天井を見上げるような形で横たわる白瀧。

橙乃が足の手当をしていると、彼の口から痛みを堪えるような声がこぼれた。

「大丈夫？ 足が痛む？」

「足なんか、痛くない。痛むのは、体なんかじゃない……！」

橙乃が心配して聞くと、白瀧は彼女の問いを否定し、前髪を掻き上げた。

確かに足が全く痛まないわけではない。ただ、それが感じないほどに、精神に刻まれた痛みが大きすぎた。

「どうして、だ」

橙乃に対してではない、己自身にでもない。ただ、不条理を納得できずに問いを宙に投げかける。

「どうして俺は、最後まで戦えない？」

結果的にまた過去と同じような光景を繰り広げる事となってしまった。仲間が戦っている中、最後までその輪に入ることが出来ずにコートの外にいるしかない。

こんなはずではなかった。こうならない為にずっと努力を続けてきたのだから。

「せめて、信頼に、応えたかった……！」

「ッ」

涙は出てこない。心が悲鳴を上げているというのに。試合が終わっていない中、一人泣くわけにはいかないという選手としての意地か。白瀧は感情を殺して、己の無力をただ嘆いていた。

「あなたは——」

あなたはまだ足りないと言うのか。

文字通り体がボロボロになるまで戦って、それでもなお足りない。周囲の信頼に応えられなかったと言うのか。

《俺達は勇敢に戦いチームを勝利へ導かなければならない。この戦いを見守り、背を押してくれる全ての者の為に！》

いや、彼ならば言うのだろう。『勝利こそが全て』という環境で心を

すり減らし、全てを否定された彼ならば。たとえ監督の作戦を達成しようとも、大仁多の勝利までもたらず事が出来ないのならば、結局彼にとつては同じ結論に至るといふことだ。

橙乃はそれ以上は何も言わず、何も聞かなかつた。ただ黙々と足の処置を続けていく。

下手に優しい言葉を賭けられるよりも、白瀧にとつては有りがたいものだった。

（……なんなんだよ、このいら立ち）

一方、白瀧と同じくベンチに戻つた紫原は、謎のいら立ちを覚えていた。

別にバスケットを好んでいるわけではない。つぶしたいと思つていた白瀧も倒れた。確かに負けたくないと思つてはいるが、終わった事はすぐに忘れようとするはずなのに。

（意味わかんねえよ。なんなんだよ一体）

心のどこかでベンチに下がつてしまつた事を悔やんでいる自分がいる。

これではまるで、自分がもう少しバスケットをしたかつたようではないか。

「……終わりか。最後、白瀧のフローが切れたようだけど、体力切れつてことだったのかな」

「その可能性もあるだろう。あるいは——あれ以上戦えば、足の怪我がさらに悪化するという、体のサインだったのかもしれない」

「はあ？ なんだそりゃ。そんなのあんのかよ？」

「元々体というものは体を守るような作りになっている。あり得ない話ではないさ」

葉山と根武谷の質問に、赤司自身も半信半疑の様子で答えた。

結局原因なんて完全にわかるものではない。ただ白瀧がベンチに下がったという結果だけが確かなものなのだから。

「いいのかよ真ちゃん。もう一回何か声をかけなくてさ」

「馬鹿を言うな。……あのように言って、また立ち上がれなくなったというのならば、そういうことなのだよ」

高尾の提案を緑間は即座に否定した。白瀧は緑間が発破をかけて奮起しない選手ではない。無茶な提案にも最後までついてきて自分の力としてきたのが彼なのだから。

だから緑間には白瀧の状態もよくわかった。ならばこれ以上声をかけることはしない。もう十分すぎるほど、自分の分まで活躍する光景を目にしたのだから。

「……あやつも、ついに限界か。よし、これで大仁多の得点源は限られた。こちらでも紫原が抜けたが、ゴール下の優位は変わらん。一気に攻め立てるぞ」

「意外アルな」

「何がじゃ、劉？」

「さつきお前が白瀧のことを気にかけてるような素振りをしていたから、てつきり幾分か気落ちするかと思っていたアル。モミアゴリラとは思えないほどの切り替えの早さアル」

「茶化すな！ モミアゴと切り替えの早さは関係ないじゃろ！」

紫原と白瀧が抜けた事で戦況は大きく変わった。

岡村は手を叩くと、チームをまとめるべく指示を出す。

第4Qの序盤、白瀧を気遣っていた彼にしては冷めた反応だなと思いつつ、劉は岡村に遊び心を忘れずに問いかけた。

「……別にやつに限ったことではあるまい。誰もが皆、勝利に必死じゃ」

理由は単純だ。何も特別な事ではない。だからこそこれ以上の余計な感情は抱かなかった。

岡村もまた全国区の選手。今まで数多くの選手達を打ち負かしてきた。ゆえに慣れている。

全力を尽くしても敵わなくて、だけど諦めることができずに自分の

限界を超えて挑み続ける。それでも、そこまでしても届かない領域に、ただ仕方なく膝を屈する。それを岡村は何度も目にしてきた。

勝負とはこういうものだ。どれだけ努力しようとも、どれだけ力を尽くそうとも、どれだけ犠牲を払おうとも勝てるとは限らない。時には越えられない壁に阻まれる。試合である以上、勝てるのはただ一方のみ。誰もが勝利を追い求めるからこそ敗北が生まれ、その果てに生まれる勝利はより貴重なものとなり、さらに追い求めたいと願うようになるのだから。

「これがやつを選んだ結末なら、わしが何を言おうとも無駄じゃろ。さあ、あと残り4分じゃ。点差はたったの一点。すぐに逆転するぞ！」

大仁多は白瀧に代わって三浦を投入し、さらに神崎を下げて佐々木を投入した。少しでも攻守のバランスを整えようという判断だった。対する陽泉は紫原に代わり三年生の195cmPF、松坂を投入する。

大仁多は機動力が落ちて作戦の変更を余儀なくされる一方、陽泉は未だ高さ・力で大仁多を大きく上回っている為に基本的な戦略は変わらなかった。岡村がセンターのポジションに入り、引き続きゴール下を攻め立てる。対する大仁多は機動力が落ちたことに加え、小林達の消耗も大きい事を考慮してゾーンプレスを解除。ゾーンディフェンスで攻撃を防ごうと試みた。

点差はわずか一点。どちらに転んでもおかしくない状況だ。

「ディフェンス！ 白9番！ フリースロー、ツーショット！」
「ッ！」

そんな中、ついに光月の5つ目のファウルが宣告された。

やはりゴール下で陽泉が優位なのは変わらない。リバウンド争いに勝った岡村のシュートを止めようと体を張ったが、これをディフェンスファウルと判定されてしまう。

紫原と白瀧がベンチに下がってからわずか40秒後の出来事であつた。

「ドンマイ、光月！ あとは任せろ！」

「すみません。……あとは、頼みます」

白瀧に続き光月も5ファウルで退場。三浦が肩を叩いて励ます中、光月は顔をうつむけたまま先輩に後を託し、コートを去る。

変わって松平が出場するが、この時点で勝負は決したと多くの者が考えた。

「決まりやな。行くで、明日もあるしの」

桐皇も同じであつた。キセキの世代とそれに近い実力が去つた今、これ以上の収穫は見られないだろう。明日の準決勝に備える必要もある。

今吉は先に立ち上がり、皆にホテルに戻るように指示を出した。

「うるせえ」

「ん？」

「戻りてえなら勝手に戻つてろ。俺は試合を見ていく」

ただ、青峰だけはその場から動かなかつた。最後まで見届けると言つて試合から目を離そうとしない。

「テメエ、いつもは勝手に帰つたりするくせになんなんだよ!」

「ちよいうるさいで若松。……まあないやろが、番狂わせがあつても困るしの。なら、青峰には残つてもらおか。子守り頼むで、桃井」

「えっ？ はい」

「誰の子守りだ、コラ」

青峰の目は真剣なものであつた。それを感じ取つた今吉は若松を宥めると、桃井に青峰の事を託して会場を後にした。

他にも去らずとも悲嘆の声がこぼれる中、岡村が二本のフリースローを無事に決めた。

(大仁多) 83対84 (陽泉)。再び陽泉がリードを奪う。大仁多にとっては厳しい状況となつた。

「みんな。まさかこの中に、負けてしまうと思つたものはいないな?」
危機に陥つた大仁多。嫌な雰囲気を感じ取つたのか小林が4人へ

と問いかけた。

「——まだまだ！ まだ一点差だ！ 何十点も離れているわけではない！ 勝つぞ。準決勝に進むのは俺たちだ！」

『おおっ!!』

自分も不利を感じ取っているが、不安を完全に消し去るように小林は語気を強め、チームの士気を高める。

そんな主将の意気込みにチームメイトも声をそろえて肯定する。まだ逆転されただけ。得意のオフセンスで取り返すだけだ。たとえば本当に不利だとしても奇跡を起こして見せると。

——誰もが諦めずに戦った。

陽泉がインサイドを完全に制圧し、それにより外の守りも厳しくなる中、必死に守備の隙間を縫い、攻めていく大仁多。

しかし、小林と山本の体力も既に限界。

フィジカルで勝る陽泉はリバウンドを全て確保し、大仁多の反撃の芽を摘んでいく。陽泉のとてつもなく堅いインサイドに大仁多は手も足も出なかった。

残り時間1分30秒を切った頃、大仁多はゾーンプレスを再開。しかし白瀧を失った今、先ほどまでの破壊力は残されていないかった。こうなればジリジリと押し込まれていき失点するのも時間の問題。

残り時間も少なくなり、ボールを奪う事すら叶わない大仁多は時間をつぶされる前にファウルで強引に時間を止める。しかしそれもギリ貧で、ハーフコートディフェンスに移ろうとも福井や宮崎の慎重なゲームメイクを前にボールを奪取する事が出来ずじまいだった。

ゆっくりと時間をかけて確実に攻め、確実に守る陽泉。まるでそれは迫り来る無敵の盾。

その盾を貫く最大の武器を失った大仁多は太刀打ちできず、点差がじりじりと引き離されていった。

タイムアウトを取る機会もなくなつた今、流れを変えることは出来ない。

残り時間15秒。オフエンスリバウンドを確保した岡村がトドメとなるダンクシュートを決める。点差は8点。残り時間を考えればどうあっても逆転は不可能な状態となった。

「まだだー！」

「諦めるな！ まだまだ行けるぞー！」

しかし、諦めない。

大仁多の選手達はベンチに座る者も含めて誰も諦めていなかった。気迫が消える事はなく最後までゴールを狙っていく。

小林と山本が素早くボールを運び、一度中の三浦へボールを入れると、佐々木の中継を介して山本へパスが通った。

マークが完全には外れていないが時間がない。山本はすぐにスリーを放つ。しかし、このシュートは宮崎のプレッシャーによる影響もあつたのだろう。虚しくリングに弾かれ、得点には至らなかった。

「ッー！」

「よっしやあー！」

またしてもリバウンドを陽泉の松坂が確保。最後の最後まで陽泉の屈強なゴール下が大仁多に牙を向いた。

「ナイスっー！」

「これで終わりだー！」

残り5秒。リバウンドの確保を見た福井がスタートを切つて速攻を仕掛けた。ロングパスによって時間もつぶれるだろう。陽泉がこの試合を締める攻撃を繰り出す。

「終わってねえ！ 終わらせるものか！」

「なっ!？」

「松平ー！」

だが、最後まであきらめない大仁多の意地がここで勝る。ロングパスが放たれる寸前、松平がこの動きを読みボールを弾いたのだ。

ボールが宙に浮かぶ。するとこれを小林が取るや佐々木へと回し、タップパスが再び山本の手に入った。

慌てて宮崎はマークに向かおうとするが、三浦のスクリーンにかかり、追いつけない。

残り時間3秒。会場内には陽泉ベンチや応援席からのカウントダウンが木霊している。

「入れっ！」

その空気を切り裂くようなスリーが、今度こそリングの中に吸い込まれていった。試合終了間際、大仁多が全員の攻撃で三点をもぎ取った。

「まだまだ！ 奪えー！」

すぐに小林が声を荒げ、相手にプレッシャーをかけにいく。最後の最後まで、諦めずに、全力で、全員で、勝利を追いかけた。

しかし。

『試合、終了——！』

勝利の女神は大仁多に微笑むことはなかった。

大仁多のゾーンプレスの展開が完了する前に、試合の終わりを告げる無情のブザーが、鳴り響いた。

(大仁多) 88対93 (陽泉)。

大仁多が初めて三桁得点を逃した試合。

陽泉が初めて二桁失点を喫した試合。

最強の攻撃チームと最強の守備チーム。譲れぬ誇りのぶつかり合いは、最強の守備チームに軍配が上がり、ここに決着を迎えた。

白瀧はチームが負ける瞬間を倒れた状態で目にする。

そんな彼の目から。

——涙は出てこなかった。

第九十七話 孤独の涙

何度も聞きなれたはずのブザー音が、この時は初めて聞くような、受け入れられないような喪失感を伴って脳裏に響く。

「試合終了——！」

歓喜に湧く陽泉の選手達。そんな彼らを小林達は呆然とした表情で見つめた。

「……行くぞ。整列だ、みんな」

自分も思うところがあるだろう。それでも主将という立場が小林を凜とさせる。

真っ先にコート中央に向かう小林に遅れて他のメンバーも整列する。

5人が並ぶと、ただ一人の二年生である三浦は先輩たちの様子が気になり、視線だけを横に向けた。

「——」

（終わった、のか）

（……終わった。終わったんだ）

（何もかも、全部！）

「ッ！ うっ！」

そして彼らが無言で涙を流す姿を目にして言葉を失った。

わかっていたことだ。小林以外の三年生、推薦枠をもらっていない選手はIHが終われば引退する。すなわち負ければその時点で彼らの高校バスケットは終わる。

その時が来てしまった。

わかっているとしてもその現実直面した時、引退する者達も、そんな先輩を目にした者達も、涙を我慢することは出来なかった。

「88対93で陽泉高校の勝ち！ 礼！」

『ありがとうございました！』

優勝候補に数えられた高校同士の対決は陽泉に軍配が上がった。

最後までインサイドで大仁多を圧倒し続けた陽泉高校。改めてそのデイフェンス力を全国に示す形となった。

その陽泉に敗れた大仁多高校。戦う前に整列したレギュラー三人、それもフロントライン全員がベンチに下がる事を余儀なくされた。そして代わって戦った三年生全員が最後の時をコートで迎えたという、皮肉な展開となってしまうた。

挨拶を終え、両軍の選手達が握手を交わして互いの健闘をたたえ合った。

そして勝者である陽泉の選手達は笑顔を浮かべてベンチへと下がっていく。

対して大仁多の選手達はすぐに切り替えることは出来ず、顔を俯け、涙をこぼすばかりであった。

「皆さん。下を向いてはなりません」

そんな選手達を藤代が静かな口調で、されど厳しく諭す。

「あなた達は栃木の代表校としてこの場に来たのです。ならば格好悪い姿を見せてはなりません。しっかりと背筋を伸ばして、この舞台を去りましょう」

退場する最後の瞬間まで弱い姿を見せてはならない。教え子にそう言つて表情を毅然とさせた。

「――よし。全員顔を上げろ。まだ俺達の出番は終わっていない。応援席の前に並べ！」

それを耳にして真つ先に立ち直った小林は部員達を率いて応援席の方へと向かう。

戦ったのは自分たちだけではない。コートに立つ皆を応援し、背中を押してくれた人達のもとへ最後の報告をしに行った。

「礼！」

『応援ありがとうございます！』

精一杯の感謝の思いを込めて選手達は頭を下げた。

そんな彼らの奮闘を讃えて観客席から拍手がわく。

一礼して頭を上げると、今度は誰も俯くことなく前を向いてその場

を後にした。

「……」

大仁多の選手達が、自分たちを打ち負かした強敵が勝ち進むことなく姿を消した光景を目にし、誠凛の選手達は息を飲んだ。

（白瀧君……）

（改めて思い知ったぜ。これがキセキの世代の実力か）

（俺たちが負けた大仁多でも、陽泉に最後は押し負けた）

（第4Qだけで31得点を取った大仁多の猛攻。それを受けても最後は陽泉が粘り勝った。あの爆発力をもつてしても完全に崩すことは出来なかった驚異的なディフェンス。今の俺達では崩せないかもしれないな）

「……試合は終わった。皆、行きましょう。帰って情報の整理もしなきゃ」

「おう」

キセキの世代の力を目の当たりにし、もしも自分たちが戦う事になつたらどうなってしまうのだろうか。

明るい未来は浮かばず、皆が口を閉ざしていた。

だがいつまでも立ち止まってはいられない。リコは素早く撤収の準備を済ませると、選手と共に会場を去っていく。

何もせずには呆けてはいられない。次の戦いまでの時間は限られているのだから。

「なんか、悔しいな」

「ああ。同感だ」

一方、県予選で大仁多に敗れた楠は、ある意味自分が負けた時以上の悔しさを覚えていた。それは彼だけではなく勇作達も同じであった。

「俺たちが勝ち上がったとしても、到底キセキの世代に立ち向かえたとは思えない。けど、だからこそ俺たちを下した大仁多に勝ってほしかった」

「……そうですね」

細谷が苦々しい顔つきで呟く。

自分たちなら勝てたと驕るつもりはない。それどころか二試合キセキの世代の試合を見て、膨大すぎるほどの力を差を実感した。

ただそうだとしても好敵手に勝ってほしかったという思いは本物だった。だからこそ大仁多が敗れる瞬間は、以前味わった敗北に匹敵するほどだった。

「さて。行こうか、奈々」

「大丈夫なの？」

「ああ。さて、それでは次に会うのはいつ、どのような形になるかはわからないけど。どちらにせよ負けるつもりはないですよ」

「ふん。言っとけ」

最後に、楠は勇作に宣戦布告にも似たつぶやきを残し、一足先に席を立った。彼らの姿が見えなくなってから勇作達も帰路につく。

悔しさを覚えて力の差を味わった。

ならばこれを糧にしなければならぬ。今度こそ最後まで勝ち上がり、栄光を手にするために。

(……届かなかったか、小林)

そして去年のチームを知り、ライバルであった大坪は、彼らが去年の壁を越えられなかった事を残念に思っていた。

今年のチームは良い仕上がりだった。最終学年の最高の舞台。

勝ってほしい所だったが、現実は厳しいものだった。

「終わりましたね。帰りましょうか。キャプテン」

「速えよ!? 真ちゃん冷静すぎね? なんも感じねえのかよ?」

「……黙るのだよ高尾」

対して後輩である緑間はさっさと去ろうと動いていた。

そんな緑間をおちよくるように高尾が話しかけると、緑間は少しのいら立ちを含めて返答する。

「これ以上ここにいてはさすがに、天を恨みたくなくなってしまふ」

人事を尽くして天命を待つ。

その言葉に偽りはないと信じているものの、疑問を感じてしまいかねないような親友の結果に、緑間は憤りを覚えていたのだ。

「……行くぞ、さつき」

「えっ。いいの？ 何か声をかけなくても」

「馬鹿。つまんねえ事聞くんじゃねえよ」

同じころ、試合を見届けた青峰はすぐさまこの場を後にしようと立ち上がった。

行われていたのはかつての同僚同士の試合だ。特に白瀧には桃井も青峰も強い関わりを持っている。

一言でも会話を交わしておくべきではないかと桃井は青峰に静止を呼び掛けるが、青峰は彼女の提案を一蹴した。

「俺は試合に勝ってんだぞ。敗者にかける言葉なんて、何もありません」

背中越しに冷たくそう言い放ち、青峰はそそくさと出口へと向かう。

ただ言葉では無関心を装いながらも彼の行動や声色にはどこか寂しさに似た感情が籠っているようだった。

「終わったかー。俺達の次の相手は陽泉かー」

「あのディフェンス力はさすがに少々厄介ね。ま、うまくかき乱してあげましょう」

「ハッ。面白え。パワー勝負なら受けてたつてやる！」

試合終了後、観客席の中で盛り上がりを見せていたのは洛山高校だ。

すでに彼らの関心は次に戦う事となった陽泉の事だけであり、そこに不安など一切ない。あくまでも次に下す獲物を見つけたことで、戦意を高めている。自分たちの勝利を信じて疑っていなかった。

「……お前たちは先に出ていてくれ。僕は少し用事があるから遅くなる」

そんな彼らを一瞥して赤司は小さく笑みを浮かべた。

直後、視線を陽泉——紫原へ向けると何かを思い至ったのか赤司は笑みを消してチームメイトに指示を飛ばす。そして彼らの返答を待たずに赤司は動き出した。

「よしっ。全員荷物整理は終わったな。ならば出るぞ。……黒木にも、報告しなければならぬいな」

『はいっー』

全員の片づけが終わったことを確認し、小林が号令を出す。

悔しきは残っているが落ち込んでいても仕方がない。加えて試合中に倒れ、医務室に運ばれた黒木にも結果を伝えなければならぬ。監督から怪我の心配は無用と聞いたが、本人に確認を取る必要もある。

大仁多の選手達は素早く荷物を手に取ると、医務室の方へと向かっていった。

「ん？ おいどうした、白瀧？」

「……ああ悪い。ちよつと右足のテーピングが気になってな。すぐに追いかけるから、先に行っててくれ」

そんな中、一人椅子から立ち上がれずに右足を見つめていた白瀧の存在に本田が気づいて声をかける。

「やっぱりまだ痛いのか？ 歩くのが厳しいようなら」

「いや、そんなに痛みがひどいわけではないんだ。大丈夫だから」

「でも——」

「わかりました。なら先に俺たちは言ってますよ。……5分経つても追いつかないようなら、戻ってきます」

「ああ。悪いな、西村」

白瀧は無事をアピールするが、怪我の影響があるのではないか。光月は不安を覚えて彼を気遣った。

ただそれでも白瀧は聞き入れようとしなない。もう少し説得をつつけようとするが、西村が横から割って入り、妥協案を提示して光月達と共に先輩の後ろを追いかけていった。

「……………ふう」

扉が閉ざされ、部屋に白瀧一人だけの空間となった。静寂が響く中、白瀧は大きく息を吐く。

「負けた、のか。終わったのか。——なんだよこれは。なんなんだよ

この結果は」

誰もいなくなったことでようやく白瀧は感情を少しずつ吐き出せる。

「監督に無理言つて、女の子泣かしてまで試合にでておきながら、この始末。本当に何がしたかつたんだよ？」

氣遣う必要もなくなると同時に心の余裕もなくなった。

「はっ、ハハッ。はっ——」

次々と湧き出る感情の波を抑えきれず、乾いた笑みが噴出して——彼の両頬を涙が伝った。

「あ、ああっ、ああああああ!!」

決壊した負の感情を止める術はもはや存在しない。人目をはばからずに嘆く白瀧。密室の空間に彼の慟哭が響き渡る。

——何がしたかつた？ そんなの考えるまでもない。勝ちたかつた。ただ勝ちたかつた。それなのに。

「ふぎ、けるな。ふぎけるなあっ！ ちくしょう。白瀧要の大馬鹿やろう！ なぜあと四分さえもたなかつた！ この試合は俺が今まで待ち望んでいた試合だったというのに！ なぜ力尽きた！ 何のために鍛えたと思つていいる!? 何のための力だ！」

最後まで戦う事さえできなかつた自分へのいら立ち。また同じ悲劇を繰り返した己自身に怒りは留まることを知らない。

天を仰ぎ、声を荒げ、苛立ちを拳に籠めて腕を振り上げる。

「……ッ。くっ、そ」

振り下ろした拳が足に当たる直前、理性による制止の呼びかけが間に合い、衝撃が足を襲う事はなかつた。

力を抜いた右腕がだらんと下がる。

怒りを発散する事も出来ず、次は大切な人たちへの申し訳なさが心をよぎる。

「ごめん、なさい。ごめんなさい。……次は、必ず！ 今度こそ！」

退路を自ら捨て、勝利を求めて立ち上がった。だが負けられない試合に負けた。その傷はあまりにも大きかつた。

ただ、嘆いてばかりもいられない。

この悔しさも悲しさも忘れない。叶えられなかった約束を次こそ果たして見せると、齒を食いしばった。

「あの、馬鹿が」

そう愚痴をこぼしたのは本田だ。

白瀧が涙を流す部屋を出てすぐの廊下に、白瀧と橙乃を除く大仁多の一年生四人の姿があった。橙乃に後から追いつくように伝えてほしいと依頼し、彼らはずっと部屋の前で待っていたのだ。

本田は壁に背を預けて腕を組み、神崎は両手で目を覆い、西村はその場に座り込み、光月は目を伏せている。部屋の中から声は届いていた。仲間の前ではこぼせない弱音を聞いて、皆思うところがあった。

「俺らの前じゃ泣けないって格好つけやがって」

「……耐えられなかったんでしよう。これ以上情けない所を見られるのは」

「そこまで背負う必要はないだろうに」

「あれだけ働いて駄目って言うなら、なんて声をかければいいんだよ」
弱さを見せたくない。その気持ちはわかる。

ただ、やはり頼れないという考えには少し悔しく感じる所もあった。

「あいつばかり気負わせていられねえ。俺達ももっと強くなんねえとな」

「ああ。こんな思いは一度で十分だ」

「……うん。うん！」

「はい。次は、喜びを一緒に噛みしめられるように」

ゆえに今度はそんな強がりの仲間にも負担を強いらぬように。もっと強くなろうと四人は立ち上がり、共に誓いあった。

今度はチーム全員がそろって笑いあう為に。

一方、そのころ医務室では小林から黒木に試合の結果が伝えられていた。

「……そうでしたか」

ベッドから体を起こして話を聞いていた黒木。

すべての報告が終わると、短く返答して寂し気な笑みを浮かべて頬をかいた。

「体調は、もう大丈夫なのか？」

軽い脳震盪と聞いたけど、と三浦が付け加えて黒木に問う。

何せあの紫原に吹き飛ばされたのだ。どこか体が痛む事はないのだろうかと心配があった。

「ああ。大丈夫、と言いたいところだけど」

そんな友の声に、黒木は肯定をしようとして突如言葉を区切った。

「……ちよつと駄目かもな」

すると黒木は両手で顔を覆い、表情を隠すようにして話を続ける。

「頭が痛くて、涙が出てきてしまう」

流れてきた涙は、頭が痛むせいだと口にした。

黒木もアクシデントのせいとはいえ、陽泉のようなチームを相手にセンターが途中離脱してしまうという事への責任を感じていたのだろう。そんな彼の心情を理解し、小林がそつと肩を叩いた。

敗北した大仁多の面々が、多少の反応は異なれど悲しみに暮れている中。

勝利した陽泉の選手達は喜びを分かち合っていた。

これでベスト4入りを果たし、優勝まであと二勝とした。次は王者・洛山という最大の難敵だが、今はただこの勝利を祝福しようと歓喜の声は続く。

「……ああ。たしかにおるが」

そんな中、突然の来客を目にした岡村は彼に呼ばれてその要件を確

かめていた。

どうすれば良いか判断に迷ったが、無碍に扱うわけにもいかない。彼の提案を了承することにした。

「紫原―」

「うん？」

「お前に用事があるとのことじゃ」

「は？ ……赤ちゃん？」

岡村に呼び出されたのは紫原。依頼主は赤司であった。

二人で話がしたいという赤司に、紫原もうなずいて彼に続いて部屋を後にする。

そしてこの話し合いの結果、翌日のIH準決勝は誰もが予想しなかった展開を迎えることとなる。

IHも日が進み、出場校もわずか4校に絞られた。

その四校によるさらに激しい試合が繰り広げられた準決勝、決勝戦。だが、これまで多くの衝撃を残してきたキセキの世代全員が試合に出ないという異例の事態となった。

それでもキセキの世代が所属する高校は彼らばかりではないという意地を見せる。

結果、優勝は洛山高校。準優勝は桐皇学院。三位は陽泉高校と前評判通りキセキの世代が在籍する高校が上位を占めて大会は終わりを告げた。

しかし夏が終わったとしても、全てが終わったわけではない。ここからまた、新たな激闘が始まる。

様々な感情が生まれ、残された選手達はここから新たな挑戦へ走り出していく。

第九十八話 別れと出会いと

昨年のIHでベスト4入りを果たした栃木の強豪校、大仁多高校。今年も白瀧、光月の大型ルーキー二人をレギュラーに加えるなど新戦力を伴い、昨年のベスト4という壁を乗り越える事。そして高校バスケ界に旋風を引き起こしたキセキの世代を打倒し、全国制覇を果たす事を目標に、再びIHの舞台へと駒を進めた。

しかし準々決勝でそのキセキの世代の一人、紫原を率いる陽泉高校との接戦の末に敗北。IHは前評判通りキセキの世代を有する高校が上位を占める結果となり。

大仁多高校は全国ベスト8で姿を消す事を余儀なくされたのだ。た。

IHの激闘から四日が過ぎた。

栃木に戻っていた大仁多の選手達はしばしの休養を経て英気を養うと、この日の午前の藤代監督の呼び出しにより久々に学校の体育館へと向かっていた。

「……なんかまだ実感わかねえよな。このの前まで全国大会で戦っていたってのに」

「そうですね。ちよつと、信じたくないです」

「なあ。まさか、本当に今日で山本先輩たちが引退しちゃうなんて」

通学路を歩いているのは神崎と西村だった。

二人は登校途中に偶然出くわすと、共に今日の要件について語りながら学校を目指す。

今日は特別な日だった。山本達多くの3年生が引退する日である。入部から半年程度とはいえ寝食を共にし、競い合い、教えを受けた先輩たち。そんな人がいなくなってしまうという事実は信じがたいものだった。

「まだまだ一緒にバスケットしたかったよ。……そういえば要の怪我につ

いて何か話聞いているか？ 試合の後は会ってないから何も知らないんだけど」

「俺も聞いてませんよ。すぐに病院には行ったそうですが、その結果については知りません」

「そっか。あいつも多分しばらく部活に参加できないだろうからな。こりや新チームの悩み事が増えそうだ」

「できるだけ軽症であればいいんですが。——ん？ あれって」

そして3年生の事だけではない。あの激闘で負傷した白瀧の事も気がかりだった。

試合の途中ですでに怪我を負って、それでもなお試合に出続けて天才に挑み続けた彼だ。酷使した足に蓄積されたダメージは相当なものだろう。

叶うならば、少しでも傷が軽いものであつてほしい。

そう西村たちが祈ると、その祈りの先である白瀧の後ろ姿が目に移った。

「……えっ?」

「はっ!」

一足先に体育館へ向かっているのだろう、彼の後ろ姿。その彼の左脇下にある松葉杖を見て二人の表情が凍った。

「まさか!」

「うそでしょ。白瀧さん!」

「えっ? ああ、西村、勇もか」

驚き、名前を呼びながらすぐに駆け出す二人。すると声が届いた白瀧が彼らの方へと振り返る。

松葉杖の力を借りて体を支えている白瀧に表情の異変は見られない。特に不安を隠すような素振りはなかった。

「どうしたんですかそれ? まさか骨に異常が!」

「ああ、違う。これは少しでも治すのを早めるためにと負担を減らすためだよ」

「なんだ、よかった。じゃあそんなに大した怪我ではなかったんだな」
焦りを隠せない質問に、白瀧は手を振ってその心配を一蹴する。

大丈夫だと笑う白瀧。そんな受け答えで神崎は安堵の息をこぼした。少なくとも最悪の想像は避けられたようだ。

「いや。ちよつと、大したことはあつたかな」

「えっ?」

しかし、続けられた言葉に二人は再び息を飲む。

「……全治一か月だつてさ。やつぱり無茶のしすぎはよくないつて」

それは無理な躍進の代償だった。

やはり足の怪我の重症化は避けられなかった。一週間はおろか、その倍以上の一か月という治療時間を要することになってしまったのだ。

「い、一か月ですか?」

「マジ?」

「あんまり気にするなよ。それ以上の戦果を求めて戦つたんだ。むしろ短いくらいだ」

呆然とする二人を見て、白瀧は再び柔らかい笑みを浮かべる。

そんな彼の姿が痛々しく思えた。自分たちを気遣つているとすぐにわかる反応だからだ。

「……他の人には話してあるのか?」

「ああ。監督とキャプテン、それに中澤さん。あと世話になつた橙乃にも一応話してある。——つと。噂をすれば、だな」

この事はすでに皆にも伝えてあるのか気になり、神崎が問いかけた。

白瀧が口にしたのは大仁多の中でも中心を担う人物たちの名前だ。たしかに彼らならば下手な不安を広げないようにと周囲に情報を漏らさないのも頷ける。

すると、そんな噂をかぎつけたのだろうか。橙乃が校門をくぐる姿を白瀧がとらえた。

「おおい、橙乃!」

「えっ? — ツー!」

白瀧が名前を呼び、空いている左手を振る。

するとその声に反応した橙乃の視線が彼らへと向き、その存在に気

づくと歩くスピードを速めて近づいていく。

「あの時は、悪かったな。橙乃には随分と世話になっぶっ!?」

「えっ」

「えっ」

会話ができる距離まで近づくと、白瀧が謝罪の言葉を並べていく。多くの人に心配をかけたが、その中でも最も負担をかけたのが彼女だという自覚はあった。

だから本当に申し訳ないと頭を下げた白瀧だが、その謝罪は最後まで続くことはなかった。

突然横から白瀧の左頬を襲った衝撃。橙乃の容赦ないビンタが炸裂し、バランスを失った白瀧はその場に崩れ落ちた。

「…………いや、ちよつと待て!」

「橙乃さんその人重症者! けが人です!」

相手の状態など知らないと言わんばかりの攻撃。

一瞬の出来事に呆けてしまった神崎と西村だが、すぐに我に戻ると彼女を制止する。

しかしそれでも橙乃は何も反応を示さない。それどころか仰向けに倒れた白瀧の上にまたがると、今度は逆の頬をはたいた。

「えっ、聞こえてない!?!」

「お願いですから、一度止まって——」

「やめろ!」

神崎と西村が何とか止めようとする、白瀧の怒声が響く。

その声は衝撃を与えた橙乃に対してではなく彼女を止めようとした二人に向けられたものだった。

背中側にいる神崎達には見えないが、白瀧には見えていたのだ。

「……………バカ」

橙乃が涙を流し悲しんでいる表情が、しっかりと目に映っていた。

「…………ごめん」
すべての原因は自分にある。だから罪に対する罰は甘んじて受けようと考えたのだ。

ゆえに白瀧は下手な言い訳はせず、謝罪するばかりだった。

「許さない」

ただし許しは得られなかった。再びその場に乾いた音が何度も響き続く。橙乃が泣き止むまで、この光景は繰り返され続けた。

「えっ。お前が怪我したの顔だったっけ？」

「数分前までは無傷だったぞ」

「夏の途中なのに紅葉が咲き乱れているよ……」

「うん。言わないでもわかっている。だから深くは聞くな」

その後、体育館で合流した合流した本田と光月は、白瀧の変わり果てた顔を見て、呆然とした。

一発や二発受けただけではありえない顔の発赤。実は負傷とは顔の傷だったのではないかと疑うほどだった。

「おい、お前達。面白い話はそこまでしておけ。——監督が来たぞ」
そんな彼らの姿を見かねた中澤が声をかけた。

たしかに彼の言う通り、藤代が山本達三年生を連れて体育館へと姿を現した。

後ろに続く先輩たちの姿は落ち着きを払っているようで、どこか寂し気にも見える。

やはりこれが別れの時なのだとわかってしまう光景だった。

「集まっていたいただきありがとうございます。まずは、皆さん大変お疲れさまでした。ベスト8と優勝には届きませんでした、大仁多の名に恥じない戦いであったと思います」

藤代は最初に戦いの労を労い、その奮闘を讃えた。

昨年の結果には劣るとはいえキセキの世代と渡り合ったのだ。その言葉に偽りも過剰な評価もない。

「ここからはまた新たな戦いに向けて励んでいただきたい。ですが今日はその前に——皆さんご存知かもしれませんが、先のIHで山本さんたち3年生は最後の戦いとなりました。小林さんはチームに残りますが、WCまで残るのは彼だけです。今日からは1、2年生を主体

とした新チームで活動することになります」

そして、この日集まった最大目的である3年生の引退が藤代の口から告げられた。

予想されただけに動揺はない。しかし幾分かの悲しさが選手達に広がる。

「代表として、山本さん。皆さんに声をかけてください」

「はい。――まずは皆IHと一緒に戦い抜いてくれてありがとう。頼りない副主将だったかもしれないけど、とても充実した三年間を贈ることが出来た。俺はWCには出れないけれど、WCではみんなが、今度こそ、全国制覇を、成し遂げて、欲しい」

3年生の中でもまとめ役であった山本が藤代に託されて皆の前に出た。

途中言葉に詰まりながらも、最後まで上級生としての顔を保ち続けた。彼のスピーチが終わると拍手が沸き上がる。

「本当に、引退しちゃうんですか？ WCまで残っても……」

すると最前列に立ち、そして関係が特に深かった神崎が山本達に続けないのかと質問する。

「学校の方針でな。俺とかに至っては成績も優秀というわけではないし仕方がない」

「それに佐々木達にいたっては、WCの前に入試となるからな」

「えっ!?! 嘘。早っ!」

「本当だよ。医学部を受験しようと思っててね、国立の推薦という事もあつて時期が早いんだ」

「国立の医学部ですか!」

「すげえ」

ただその問いに満足した答えは返ってこなかった。

学校の方針だけではない。成績優秀者は受験の時期も早い可能性もあるという事で、なおさら部活を続けられないという。

だからこそ、これが本当に引退の時なのだった。

「皆さん。本当に3年間お疲れさまでした。誰もが後輩の良き手本になったと思います。皆さん、今一度拍手をお願いします」

自分の誇りだと語る藤代は惜しめない言葉を贈り、そして送別の拍手を全員で送った。

最後、3年生は1、2年生に声をかけていき、共に競い合った体育館を去っていく。

「後は頼むぞ。小林を支えてくれ」

「……はいっ！」

山本はすれ違いざまに神崎の肩を叩いた。

「俺達が果たせなかつた夢、叶えてほしい」

「もちろんです」

佐々木は少し寂し気に笑ってそういい、白瀧は引き締まった表情で頷いた。

「お前は自分が考えている以上に立派な戦力だ。陽泉戦でそれを示した。頑張れよ」

「はい。ありがとうございました」

「本田。お前もこれから出番が増えるだろう。……光月と一緒に頼むぜ」

「うす。お疲れさまでした」

松平は光月と本田、二人で励めとエールを送った。共にポジションをしのぎ合った先輩に、二人も労いの言葉を贈った。

「ごめんね。あとはお願ひ。しつかりね」

「……はい。お疲れさまでした。ありがとうございました」

東雲が橙乃の頭を優しくなでた。

「さて、それではこれより新チーム体制について説明を始めます」

そして3年生が姿を消すと、藤代が改めて新チームの説明を始めていく。

「まず第一にですが——今日をもって主将を交代します。小林さんに変わって中澤さんを主将に任命します」

その第一歩として、最も大きな変化である小林から中澤への変更を皆に告げた。

「へっ?」

「嘘!」

「マジ？」

突然の知らせだった。大きな衝撃が走り、白瀧を除いた一年生全員に動揺が広がる。説明と相談を受けていた二年生はあらかじめ知っていた為に驚きはなく、対照的な反応であった。

「小林さんは残るって聞いてたから、キャプテンは続行だと思ってたよ」

「まあ新チーム移行なら珍しい話ではない」

「……えっ。てか、お前全然驚いてないな」

「俺は別件で中澤さんから話を聞いていたんだ」

部に残る小林が引き続きキャプテンを務めると思っていただけに、この任命はすぐには受け入れられなかった。

ただ一人、新キャプテンから話を聞いていた白瀧だけは別だったが、他の面々はしばらく声がやむことはなかった。

「皆さん驚きの連絡だとは思いますが、これも新チーム結成に必要な事です。小林さんはよくやってくれました。これからは中澤さんがチームを率い、戦ってもらいます」

そんな彼らを鎮めるべく、藤代は今一度彼らに告げた。

これはすでに決定事項。ここから大仁多の主将は中澤なのだ。

「頼むぞ、中澤」

「はい。……よろしいんですね？」

「ああ。俺も去年そうだったし、新チームになれるためにはこれがない。頼むぞ、キャプテン」

「わかりました。ならば、小林さんには一選手として働いてもらいます」

「おう。俺も肩の荷が下りた」

新旧キャプテン、中澤と小林が軽い口調でそう話す。

去年も冬から小林が新キャプテンとしてチームを率いてWCを戦った。以前から大仁多は新チームに移行する時はそう決めていたのだ。小林が残るとしても変わりはない。

これで小林も一選手としてプレイに専念できると気を高める。3年生引退により雰囲気が一変する中、チームとしてだけでなく、選

手個人としてもこれがよいという藤代の考えだった。

「それでは連絡事項を続けます。3年生の引退に伴って、一軍と二軍のメンバーの振り分けを今一度行います。これより一軍メンバーを発表します。呼ばれた方は返事をしてください。まずは中澤さん」

「はいー」

そして藤代からの通達は続く。

キャプテン変更が続いて発表されたのは一軍メンバーの再編成だ。まず名前を呼ばれたのは中澤だ。そこから聞きなれた名前が続き、さらに新たに加わった選手の名前が続いていく。

「——西村さん」

「はいー」

「以上の19人となります」

「えっ？ ちょっと、待ってください監督！」

「どうかしましたか？」

「いえ、その。白瀧の名前が呼ばれていない気がするんですけど。その、俺の聞き落としでしょうか？」

最後に西村の名前が呼ばれて発表は締めくくられた。

しかしその内容に納得できなかった本田はすぐに藤代に聞いた。だした。

間違いなく選ばれるはずの白瀧の名前が呼ばれなかったのだ。陽泉戦でもあれだけ活躍したエースが一軍から外れるのはおかしい。他の者たちも同じ考えだった。当然の疑問なのだが、藤代は彼の疑問を否定する。

「いいえ。白瀧さんは今一軍には入れていません。彼には約2週間、病院に通い治療に専念してもらいます」

「えっ？」

「病院に通うって、お前捻挫なんじゃないのか!？」

「その通りだよ。ただ、速く治したくてな。——心配するな。すぐに戻る」

ただしそれは白瀧を戦力に数えていないわけではなかった。

むしろその逆。彼を重要な選手として考えているからこそ藤代は

一軍のメンバーから白瀧を一時的に外したのだと語る。

その意志が伝わっているのだろう。当の白瀧も一切迷いを浮かべてはいなかった。

「そしてその代わり、といつてはなんです。白瀧さんに代わって彼を新たに一軍に編入し、さらにもう一人マネージャーの方に加わっていただきます。——入ってください」

そして白瀧と東雲の穴を埋める人材も、藤代は確保に成功していた。

監督の許可を得て、今まで体育館の入り口で控えていた一人の選手が監督の傍へと歩み寄る。

「……あつ!? あの人!」

「ん? 知り合いなの?」

男子生徒の顔に見覚えがあつた本田が真つ先に声を荒げる。

「あいつ!」

「バスケは辞めたんじゃないのか?」

そして三浦や黒木、二年生達もかつて共に汗を流した男の顔を見て、多種多様の反応を示した。

「紹介しましょう。去年夏のI H本戦が始まるまでバスケット部に所属し、そしてこの度部に戻る事を決断してくれた、二年の加賀さんです。そして彼女は新入部でマネージャーの仕事を引き受けてくれた同じく二年の北条さんです。お二人とも、自己紹介を」

「はい。……えー、監督から紹介を受けた加賀一護かがいちごといいます。事情があつて去年の県予選の後バスケット部を退部しましたが、新キャプテンとエースの説得を受けて戻る事を決めました。身勝手だとは思いますが、また精一杯頑張りますのでよろしくお願いします」

大仁多高校二年、加賀一護 ポジション：GF 183cm

昨年、大仁多高校がI H出場の切符を手にした瞬間を共にしながら、本戦に参加することなく部を去っていった男がバスケット部に戻ってきた。

「私は北条日奈ほっじょうひなです! 加賀君が部に入ると聞いて、私も参加したいと思ひ、途中参加ですが加わることにしました。慣れない事も多いで

すが、よろしくお願いします！」

大仁多高校二年、北条日奈 ほうじょうひな マネージャー 163cm

アイスグリーンの髪に、髪と同じ色の丸く大きな瞳の特徴の女性。東雲が去り、大きな損失となったマネージャーの柢を埋める存在も同時にバスケット部に加入したのだ。

「一学年上の先輩みたいだけど、何で本田は知ってるの？」

「あー。俺はたまたまあっただけなんだけど……」

「俺と本田がランニングしている最中に鉢合わせたんだよ。その時に少しだけ話をしたんだ」

「そうそう。……あれ。そういえばさつきあの先輩お前に説得されたって言ってなかったか？」

「ああ。まあ、な。色々事情があるんだよ」

光月に当然の質問を投げかけられた本田。答えに思い悩んでいると白瀧が助け舟を出す。

その白瀧は、加賀が語るように彼が部に復活する原因となった一人であった。その時の事を思い返し、白瀧は苦笑を隠せなかった。

話は二日前にさかのぼる。

「悪いな、白瀧。怪我の事は聞いていたんだが……」

「いえ、構いませんよ。新キャプテンの依頼となれば断れません」

「いつも通りの呼び方で構わない。それにまだ任命されてないしな」

まだ新体制に移行する前の時、白瀧は中澤に呼び出されて学校を訪れていた。

松葉杖で歩く姿を見て申し訳ないが、これから行うためには白瀧の存在も必要と考えるのことだった。だからこそ素直にに応じてくれたことは本当に助かった。

「ですが、どうしたんです？ 俺に会ってほしい人がいるとのことでしたか」

「その前にまず聞きたい事がある。お前は、先輩たちが引退するとし

て、もつともポジションとしてマズイと思うのはどこだと思う?」

廊下を歩きながら二人は今回の目的について話していた。

中澤に問を投げ返されると、白瀧はしばし悩んでその答えを結論付けた。

「やはり、俺のSFと勇のSGですかね」

「俺も同感だ。お前たちの実力を疑うわけではないが、単純に層が薄くなる。二軍から入ってくる選手も一軍と比べると経験は薄い」

二人の結論は同じだった。

3年生が抜けると仮定すると、山本と佐々木が抜けてベンチ登録メンバーの中では一年生一人しか残らないSGとSFのポジションが弱くなる。

ここから先戦い抜くとなればせめてもう一人即戦力が欲しい。そう考えるのは当然の事だった。

「そこでだ、実はそのポジションを埋めるあてがあるんだ」

「そうなんですか!」

「ああ。あるんだが、ちょっと問題がある」

「問題?」

「実は、そいつは去年バスケットをやめてるんだよ」

「バスケットですか?」

コクリとうなづく中澤。

大仁多バスケットは強豪だ。その為練習も厳しく、やめる選手も多い。しかし中澤が注目するほどの選手がやめるとは想像が難しい。

(それは、期待して良いのだろうか?)

退部したという話を聞き、白瀧の表情は硬くなる。

強豪校の部をやめるといふ話は珍しくない。しかし、その部活を辞めた人間が部に戻るといふ事は非常に珍しい。

かつて緑間は「続ける者は続けるし、戻ってくる者は戻ってくる」と語っていたがその通りだと思った。一度辞めるには相当な覚悟がいるし、戻ってくる時も同様だ。

その選手が一年間戻ってこなかったことを考えるとよほどの理由があったに違いないのだろうが、果たしてその考えをひっくり返せる

のか疑問に覚えた。

「何か怪我か病気でしようか？」

「一切わからない。監督は説明を受けたらしいけど、プライバシーの問題だから話せないの一点張りだった。今まで本人に聞いても答え得られないとしか言わなかった」

「そりやそうでしょうけど、その言い方だと練習が厳しくてやめたわけではないんですかね？」

「おそろくな。やめた時期を考えても、IH県予選の後と色々おかしい」

「えっ!? IHの直前じゃないですか!」

「その通りだ」

だからおかしいんだよと中澤はそこで言葉を区切る。

納得できないのは中澤も同じだった。実力もあり、IH出場も決めていた。それにも関わらず大会直前にやめるなど考えられない。

ただ、そんなよくわからない人物でも力はあると中澤は考え、今はそれが必要だと信じている。

そして二人は目的の場所にたどり着き、足を止める。二年生の教室だ。藤代から今日はここにいるだろうと情報を受けていたのだ。

「どうやらこの教室にいるらしい。先に言っておくが、別に悪いやつではない。むしろお前と気も合うだろう——」

「失礼しました! ……よし! 終わった!」

例の人物について中澤が説明を続ける中、彼の声を遮るような叫びが響く。

教室の中から出てきた声の主は、短く整えられた黒い髪に、恵まれた長身? 軀の体つきをしていた。顔も女性受けするであろう端正な顔立ちだ。

「ん? あれ、中澤か。久しぶりだな」

「ああ。久しぶりだな加賀」

「今日は部活ないのか? そういえばそろそろIHじゃなかったわけ」

「それがこの前終わったところだ」

中澤と話を交わす男性。どうやら目的の人物で会っているようだ。白瀧は中澤に加賀と呼ばれた人物の特徴を目にして、記憶を思い返し、そして該当する情報に思い至った。

「あなたは、あの時の！」

「はっ？ 誰だ君。……あつ？ ああ、あの時加勢してくれた選手Aか！」

「は？」

（選手A？ 俺の事？ いやあ本田が選手Bか？）

加賀一護。彼は今年の県予選の後、白瀧がストリートバスケットで少しの間共にプレイした選手だった。

「お前達知り合いか？ ならば丁度いい。加賀、お前に話がある。ちよつと時間をくれ」

「……というわけだ」

「そうか。そういえば今年はキセキの世代ってやつらが加入してくる年だったか。白瀧、君ほどの実力者なら問題ないと思っただけだ」

「買いかぶりすぎですよ」

空き教室へと場所を変え、議論を交わす三人。

中澤と白瀧から今年の成績とキセキの世代の話聞き、加賀の表情は真剣なものとなっていた。

加賀はわずかな時間とはいえ、一緒に戦った白瀧の力を評価していた。間違いなく全国でも屈指の実力者であり、きつとIHでも勝ち上がるだろうと。

そんな彼をもつてしても全国では勝ち残る事は難しい。この事実是非常に大きなものだった。

「それで、キャプテンは俺に何を望みだ？」

「……お前の力が必要だ。去年、一軍でIH出場にも貢献したお前の実力が」

「それこそ買いかぶりというやつだ。俺はバスケット部をやめたんだ。もうあの頃の力なんて」

「いいえ。俺があなたが今も衰えていないと知っている。今もバスケットをやっているんでしよう?」

「……そうか。見られていたな」

白瀧の鋭い指摘が入り、加賀は気恥ずかし気に頬をかく。

事実、白瀧の目からしても加賀の実力は大したものだった。大仁多の一軍に名を連ねるのもうなずける程。

(白瀧を連れてきて正解だったな)

一連の流れを見て、中澤は自分の判断が正しかったと確信した。

元々はエースであり、そして言葉にも説得力を持つ、カリスマ性のようなものを持つルーキーを連れていくことで自分の説得力を増そうと考えていた。

まさかそれが知り合いであり、加えて今の相手の力を補償までしてくれるとは嬉しい誤算であった。

「……わかった」

しばし無言で熟考すると、加賀は参ったと言うように両手を上げて彼らの提案を受け入れた。

「本当か?」

「俺だって完全に未練がないわけじゃない。それに、小林さんだって残ってるんだろ? 去年はI日本戦で申し訳ないことしたし、少しでも返せるなら返したい。こっちの問題も片付いたしな」

「ならば」

「ああ。よろしく頼むよ」

そう言って加賀が右手を差し出すと、中澤も右手を前に出して握手を交わした。

これで戦力については改善の兆しが見えた。大きな進歩と言える。主将としてまず大きな仕事を果たすことが出来た。

「でも未練があるって事は、嫌になって辞めたわけではないんですね? どうしてバスケット部をやめたんですか?」

「えっ!?!」

「さつき問題が片付いたとか言っていましたか……」

二人が握手を交わす中、白瀧の問いが加賀に突き刺さる。

「いや、その……」

「えっ。何か言えない事情ですか？ やはり怪我か病気ですか？」

「そういうわけではない。ただ言えないというか、恥ずかしいという
か」

突然口ごもる加賀。口に出すのも恥ずかしい、そんな秘密を抱えて
いるような反応だった。

「……絶対誰にも公言しないと誓えるか？」

「ああ」

「は、はい。それほど大事な事となれば」

「そうか。なら、まあ。うん。お前達だけには打ち明けといた方がい
いか。いいの？」

秘密にすると約束し、加賀は言葉につかえながら、なんとか退部し
た理由を口にする。

「実は——」

「ああ」

「はい」

今まで他の誰にも言えなかった、バスケット部を辞める原因。それは――
。

「赤点取りすぎちゃって補講を避けられなかったんだ……」

斜め下すぎる解答に、中澤も白瀧も開いた口が塞がらなかった。

加賀一護。彼はバスケの実力者であると同時にバカだった。

※大仁多は赤点を取るとIHには出られない。

「このバ加賀！ じゃあ何か!? お前は補講でIHに出られないか
らって、恥ずかしくなってバスケット部やめたって言うのか!?」

「……はい。その通りです」

「ああなるほど納得した。だから今年は藤代監督は追試前に皆を集め
て勉強させたんだな。そりゃこんな理由だって言えないわけだ!」

「去年はなかったんですね……」

それじゃあ他の人が知らなくても仕方がないか。白瀧は無理やり

納得し、そしてこの事は他言無用にしようと思心に誓うのであった。

「ただそうなるのであれば先も問題になるのでは？ おそらくWC前にもありますよね？」

「ああそれなら問題ない。今勉強は——」

「あ————！」

「え？」

ただ学力が不安ならばこの先も同じ問題に向き合うことになるだろう。当然の悩みを白瀧が問うと、加賀は不要だと返し、その途中で彼の声は女性に叫びに掻き消された。

突然の声に全員が視線をその発生源へと移す。すると入口の教室に透明な青緑色の髪をした女性が立っていた。

「こんなところにいた。イツチー遅い！ 終わったら連絡するって言ったから待ってたのに！」

(イツチー!?)

「ごめんごめん。ちよつと話があるって呼ばれちゃって」

その女性に愛称で呼ばれた加賀は、片手で謝罪のポーズを作りつつ、苦笑を浮かべて彼女に近づいていく。とても親し気な様子で二人の仲が非常に良いという事が初見でもわかった。

「ん？ この二人はどちら様？ 話があるって何か用事？」

「ああ。バスケ部の選手だ。ちよつと昔の事でね」

「加賀先輩。この人は？」

「簡潔に言えば……俺の彼女。勉強も教わってて、おかげで今回の補講も乗り切った」

「北条日奈です！」

「お前、彼女まで作っていたのか。まあそれなら説明しておいた方がよさそうだな」

加賀の説明を受け、北条が明るい声色で二人に名を名乗る。

反応を見ても彼女であることは間違いない。

ならば、彼氏の事情が変わるといふ事は早めに伝えておくべきだ。中澤は結論づけると、北条にも加賀の入部経緯について説明を始める。

「……なるほど。それで、イッチーはバスケット部に戻るって？」

「ああ。突然相談もなしに悪い。だけど俺は」

「じゃあ私もバスケット部のマネージャーに入る！」

「バスケットを今度こそ、って、はい？」

「軽っ!? あ、そんな簡単に決めて大丈夫ですか？」

真剣な表情で、バスケットを今度こそ最後まで続けたい。そう語ろうとした加賀の発現の最中、北条の爆弾発言が炸裂した。

「うん。イッチーがそこまで言うなら本気なんだろうし、全国大会とか面白そうだもん」

「……北条先輩は、部活には入ってないんですか？」

「入学してすぐのころいくつか入ったけどね、どれもつまらなくてやめちゃった」

（あ、この人絶対に天才型だ）

面白そう。この一言ですべての悩みを一蹴する北条。

最後まで屈託ない笑顔を浮かべる新マネージャーの姿に、白瀧はただ威圧されるばかりであった。

——黒子のバスケット NG集——

赤点取ったせいでIHに出れないとかもはやNG。

「あれNGじゃなくて事故だろうか!？」

第九十九話 ？がれた仮面

加賀と北条。二人の新入部員の紹介も終わると、藤代は今日の日程についてさらに話を続けていく。

「それでは今日は新体制初日という事で軽めのメニューで終わろうと思います。各自自主練を行いたい場合は鍵を開けておきますが、あまり無理はしないように。中澤さん、頼みますよ。そして——白瀧さん」

「はい」

最後に藤代が中澤へ練習メニューを託し、次いで白瀧の名を呼ぶ。

「全体の連絡事項はこれで終了です。あなたは病院に向かってください」

「わかりました」

「こちらの方は気にしなくて大丈夫です。今はゆっくり休んでいてください。皆あなたの復帰を待っていますよ」

「……はい」

早く治し戦力として復帰してほしい。藤代の願いが籠った呼びかけだった。チームにとっても、彼自身にとってもこれがベストな選択と考えている。

白瀧も監督の願いを理解し、その信頼に応えるべく自分のなすべき事をなそうと決意して体育館を後にした。

「ん？」

そして体育館から下駄箱へと向かう途中で彼は目にする。

「」

「」

「」

東雲や山本、佐々木に松平。引退した三年生たちが涙を流し、両手で顔を覆っている姿を。

声は聞こえなかった。だが彼らが悔しさや悲しさを感じている事は間違いない。

「ッ……！」

(止まるな！俺には、何かをできる資格なんてない！)

しかし、そんな彼らにかける言葉を白瀧はもっていなかった。

先輩たちの姿を脳裏に焼き付けて一歩でも早く前に進もうと足を動かす。

もう二度と立ち止まる事は許されない。彼の心中に暗い色の炎が滾り始めていた。

白瀧が病院に向かい治療に臨む中、大仁多の選手達は軽いメニューをこなした後自主練習に励んでいた。

「よしっ」

黙々とスリーポイントラインの外から打ち込みを行っていたのは加賀だった。

時に外れる事はあるものの高確率でリングに触れることなくシュートを決めていく。

「……どうやら衰えてはいないようだ」

「あんなに強い人がいたなんて聞いてないっすよ」

「去年のIH県予選ではスコアラーとして活躍していたんだ。俺が勇作のマークに当たっていたのもあるが、中に外にと大暴れしていたよ」

「スコアラーですか。うーむ。嬉しい悩みですね」

小林が感慨深げに彼のシュートの動作を観察する。

一方で横に立っている神崎は複雑な表情だ。何せ加賀が入るポジションはおそらくはSGかSF。自分が競争相手となる可能性が高いのだから。加えて練習での基本的な見る限り、加賀は攻守に秀でた選手であるという事を明確に理解できる実力を誇っていた。

(スリーだけなら確率も距離も負けるつもりはねえ。ただ平面勝負となるとかなり厳しいな。この人は何というか、うまい)

神崎が得意とする外角のシュートならば分はある。全国でも通用したのだ。実績も自信もある。ただ違う分野に関しては難しいと自

己分析をしていた。他に例える言葉が見つからず、神崎は加賀の強さを『うまい』と簡潔に評した。

(速さに関してはおそらく山本さんと互角、あるいは山本さんの方が上。でもこの人はかわすのがうまいんだ。相手のタイミングを計る。要のチェンジオブペースに似ている。加えて高さとパワーもそれなりにある)

「……どうなるかな」

柔のバスケ、とでも言うべきか。鋭さの中に相手をいなすうまさをもつ、一対一で相手にしたくないと思える強さだった。以前一度だけ目にした正邦の春日に似ている。

果たして自分はポジションを確保できるだろうか、と、神崎は複雑な笑みを浮かべて打ち込みへ戻っていく。

「そういうえば監督。白瀧の話なんですけど、治療って何をするんですか?」

「あ、それは俺も気になりました」

一方、本田は白瀧の状態が気になり監督に問いかけた。西村も追従し話に混ざる。

保存療法ならば安静にしていればそう頻繁に病院へ通う必要もなくなるはず。それなのに病院に毎日通い続けて何をするつもりなのだろうか。

「白瀧さんは全治一か月の怪我と診断されました。しかし少しでも早く治したいというのは私も白瀧さんも同意見でした。その為、先も言ったように二週間病院に通う事で、その期間で怪我を治す処置です」

「えっ。じゃああいつは二週間で復帰するんですか?」

「処置ってまさか手術じゃないですよ? 一体何を?」

「なに、簡単な事です」

半分の期間で復帰する必要があるのだと藤代が語る。一体どんな治療法なのだ、と二人が追及する。すると藤代は軽い口調でその疑問を解決した。

「酸素を吸わせて電流を浴びせます」

『治療じゃないんですか!?!』

まるで治療ではない事を白瀧にさせるような物言いに、二人はそろって声を荒げた。

「……つまり酸素カプセルと低周波療法の併用ですか?」

「その通りです」

「へ?」

「酸素カプセルはわかりますけど低周波療法?」

すると話を聞いていたのだろう、橙乃が藤代の後を継いで補足する。

「要は微弱な電流を体に流し、電気刺激によって筋肉をマッサージする治療です。酸素カプセルと共に自然回復を促進させる治療ですよ。この治療を一週間続け怪我の回復を待つ。さらに一週間この治療を続けながらリハビリを行う事で復帰を目指します」

「つまりあいつ自身の回復力を高めて期間を短くすると?」

「そんな簡単な話なんですか?」

「実例が何件もあるものですよ。例えば足の靭帯を損傷した選手がこの治療により、一週間後の試合に出場したという前例も」

「靭帯損傷したのに!?!」

「科学の力ってすげー!」

人間が持つ治癒力を高めて治すという治療。特に高校生のような若い選手ならば元々回復も早いこともあってより効果を発揮するだろう。

実際の治療で効果を発揮しているという話を聞くと西村も本田も驚きを隠せない。

それならば白瀧も本当に早期復活が可能かもしれないと希望が湧いてきた。

(そうだ。彼は早めに復帰させる必要がある)

これは監督としてではなく指導者として必要な方針だった。決して戦力を確かなものとしたいからではない。

『俺は、戦力としてでしかチームの役には立てない』

『お願いします。俺は選手です。コートに戻してください。仲間の元

に』

『戦わなければ誰も救えないし何もできない』

戦うことが救いであると語る少年を、コートの外でじっと見ていさせてはならないと考えたのだ。

『白瀧さん。あなたには病院に通い早期復活を目指してもらいます』

『わかりました。俺にとってそちらの方が都合が良いと思います』

『皆、あなたを戦力として必要としているのです。だから、早く皆の下に戻ってきてください』

『ツ……はいっ！』

だからこそ藤代はあえて白瀧を一時的に部から遠ざけたのだ。戦えない期間を少しでも減らし、そしてかつてのように仲間の姿をただ見ていさせる時間を作らないように。

すべては彼の心の負担を少しでも減らし、彼の苦痛となる過去の出來事を思い出させない事を目的としたものだった。これで藤代はひとまずは大丈夫であろうと判断した。時期を見計らって様子見をし、そして彼が何か没頭できるものを提供すればよいだろうと。

「監督ですか？ ええ、順調に回復しています。——わかっています。大丈夫ですよ！」

——大丈夫。

「もちろんですよ、先生。こう言っただけですけれど、俺は怪我にも慣れているんです。問題ありません」

——問題ない。

「西村か。最近そっちはどうだ？ ——そっか。俺か？ ああ、すっかり痛みもなくなつたよ。わかってるよ。心配なんていらないうつて」

——心配なんていらない。

誰に対しても笑顔で、明るい口調で返す。指示にはしっかりと従い、仲間への気遣いも忘れない。

そうでなければならぬ。もう無駄な時間なんて存在しない。

いつも通りに過ごせばいいのだ。いつものようにエースとしての役割を今でも果たせばいい。そうする事は得意だったから。それを日常でも行うだけの簡単な事のはずだ。

新体制に移行してから一週間が経過した。

白瀧の治療経過は良好であり、足の痛みや腫れは収まり、治療を継続しながらであるがリハビリも始まった。

おそらくあと一週間程で練習にも参加できるだろう。希望通りの経過をたどっている。

しかし、白瀧の気分はすぐれなかった。

「ふうっ、ふうっ！」

学生寮の自室。重さ10kgのダンベルを其々両手に持ち、ゆっくりと上下に何度も行き来させる。

以前は少し厳しいと思っていたこの重さも最近には慣れてきた。

ダンベルだけではない。懸垂やチューブトレーニングなど上半身を鍛える様々な運動を最近に取り入れて実践している。

（力が、欲しい。もつと力が！）

額を流れる汗など気にも留めず、黙々と腕を振り続ける。

この一週間、白瀧はただ治療に励んでいるだけではなかった。

むしろその逆だ。チームメイトと離れている間、彼は今までは積極的に行っていなかった上体のトレーニングを通常の二倍、時には三倍の密度で行い、一日の休憩をはさむというローテーションを組んでいた。

すなわち超回復。筋力トレーニングで傷ついた筋肉を休ませることとで、これまで以上の筋力を手にするというトレーニング法を取り入れていた。しかも今回は治療により自然回復力が高まっている。より効率的にトレーニングを続けることが出来た。

足は負傷している為に運動は出来ていないが上半身は違う。今できる最善の研鑽を積もうと一心不乱になっている。

（キセキの世代を倒すための力が必要だ。力がいる。もう無力だなんて言わせてなるものか！ 今度こそ勝利を！）

ただしそれは白瀧の力を高めると同時に、彼から余裕を奪っていつ

た。

常に一人で行う練習。仲間と会う機会もないゆえに彼の心情に気づく者もない。

I Hの敗戦で彼は自分の非力さを改めて思い知らされた。それを改善しようとする方針は間違っていない。白瀧の精神的な負担を考慮しなければ。

(もう二度と、あんな思いだけは！)

勝てず、救えず。されど勝利の渴望は、救済の願望は強まるばかりだ。

トレーニングの効率性を考えるならば学校でチームメイトと共にやった方が良くもしいれない。監督から練習には参加しないで問題ないと言われているが、自主練習で上半身だけ鍛えるというのならば否定されることもないだろう。

ただ白瀧自身がそれを拒んでいた。今誰かと一緒にいては弱い自分を見せてしまう気がしたのだ。

そう、過去の緑間との一件のように。陽泉との敗戦直後に、仲間になんな姿を晒したくはなかった。

だからリハビリが終わるまでに弱さを捨て、一人で強さを磨かなければならないと考えた。

三年生の姿を見た事で余計に彼の責任感は強くなっていた。もう失わない。残ったものを何としても守り抜く。だから力を求めるのだと。

「ハアツ。……ふっ。少し、外の空気を吸ってくるか」

メニューに一区切りがつくと両手のダンベルを床に下ろす。

首に巻いたタオルで汗を拭いて、小休憩を入れようと白瀧は部屋の外へと向かった。

「あつ。ちょうどよかった」

部屋を開けると同時に、見慣れた橙色の髪の子が視界に入る。すると白瀧はすぐさま扉を閉ざしてこめかみを抑えた。

「……疲れているのかな俺？」

何故かこの場にはいない、いてはならない橙乃の姿が見えた気がする

る。声まで聞こえてきた。

ここは男子寮だ。女子生徒は入る事は出来ないはず。つまり今見えたのは幻覚か。うん、そうに違いない。しばらく仲間と会っていない事の弊害だろう。

まったく自分の寂しがりやな性格も困ったものだ。今度違う診療科にも通った方がいいのかなと現実逃避して、もう一度扉を開ける。「どうしたの？　すぐに戻っていったけど」

やはり先ほどと同じく橙乃の姿がそこにはあった。

(フロー強制解放！)

これはあつてはならないことだ。そして同時に出会ってはならない邂逅だと心の警告が脳をよぎった。きつとこのままでは自分がひどい目に会おうと。

白瀧は瞬時に没頭状態に入ると、上昇した反射速度をもつて扉を引き寄せる。

しかし扉が閉まる前に橙乃の足が扉の進路方向上に伸びた事で、彼は制止を余儀なくされる。

馬鹿な。大仁多のマネージャーの反射神経は紫原にも匹敵すると言うのか。

「どうして閉めるの？」

「……どうしてここにいるの？」

「藤代監督に用事を頼まれたから」

「ここ男子寮なんだけど」

「マネージャーで、選手のケアに来たって言ったら通してくれたよ。藤代監督からも口添えがあつたみたいだし」

女子に甘すぎではないだろうか。もしもこれが男女逆だったら下手すれば通報沙汰だろう。あるいはこれが全国出場する部への信頼なのだろうか。

色々納得しかねる説明だったが、白瀧はそれ以上深く考えようとはしなかった。

「えっと。用事なら場所を変えよう。ここだと都合が悪いだろう」

「部屋の中でいいよ。まだ足も本調子ではないならあまり歩かない方

が良いし、それに気になる事もあるから」

「いや、ほら。今部屋の中片付いてないんだよ」

「私は気にしない」

「俺が気にする！」

何とか違う場所で話そうと説得を試みるも、橙乃は頑なに頷こうとしなかった。

ここは男子寮。何か問題が起きれば間違いなく自分に非があるとみなされる。だから場所を変えたいというのが白瀧の本音だ。なぜか橙乃とは不利な場所で話すと後々面倒な展開になるような気がしたのだ。主に兄の事で。

「……あまり時間もない。そこまで反論するようなら実力行使するけど」

「え？ 何、実力行使って。まさか監督権限とか言うつもりじゃ」

「ここで悲鳴を上げる」

「またその脅しか！」

権力どころか、社会的な制裁が白瀧の背後に迫る。

「……いやちよつと待て。橙乃、残念ながらもうその脅しは通用しない」

「どうして？」

ただしこれが二回目という事もあつてか、白瀧はこれを冷静に対処した。

首をかしげる橙乃。きつとこの一言で屈すると思つたのだろう。

だが俺はそう簡単に脅迫なんかには屈したりはしないと口角を上げる。

「普段からの周囲の信頼度だ。自分で言うのもなんだが、俺は学校・寮・部活とどれも模範的な行動をしているし、違反も何も無い模範生だ。だから何かあろうとも周りの人間はきつと俺を信じて——」

「つい先日と同じ女の子を泣かせてたかー。これは説得力あがるだろうなー」

「たった一度の過ちが俺の全てを台無しに!?!」

「普段は模範的な生徒が裏では健気でか弱いマネージャーをねー。世間はどつちを信じるんだろうねー」

「おのれー！ 過去の己ー！」

マネージャーには勝てなかったよ。

か弱いとは一体何だったのか。橙乃の暗い笑みから発せられた言葉で、白瀧の自信と実績が呆気なく崩れ去った。

「大丈夫。何もしなければ、私も変な真似はしないから。だから、ね。」

『だから裏切らないでね』と台詞の裏に隠れた橙乃の意図は、しっかりと相手に伝わる。

「うん。手早く、どうぞ」

さすがにごゆつくりどうぞとは言えず、しゅしゅと彼女の提案を受け入れる白瀧であった。

彼に促されるまま部屋の中に入る橙乃。突然の来訪という事でそのまま放置されていた筋力トレーニングの器材が真っ先に目に映った。

部屋の様子を一通り見まわすと、橙乃は視線を白瀧に戻す。汗をかき、室内で休んでいたとは考えられない呼吸の乱れを観察できた。

彼の様子を見ただけで白瀧がこの一週間どのような時間を過ごしていたか、容易に想像できた。同時にそうせざるを得ない心境を敏感に感じ取り、橙乃は目を細めた。

「……やっぱり」

「何が？」

「いや、やっぱり片付いてないなって」

「だから言ったじゃん！」

橙乃の茶化す言葉に必死に反論する白瀧。とりあえず器材を簡単に片付けると、橙乃を椅子に座らせて自分はベッドに腰掛ける。

「それで、監督に用事を頼まれたというのは？」

手短に済ませようと、率直に本題に入る。すると橙乃は背負ってきたバッグから透明なファイルを取り出して話始めた。

「一つは、白瀧君の状態を確認する事。治療の経過が順調なのかの確認してほしいって」

「それなら問題ない。当初の予定通りリハビリも始まったから大丈夫だと伝えてくれ」

「そう。二つ目は、足の処置。まだ痛みが残るようなら私にサポートしてほしいとのことだったけど」

「そっちも大丈夫だ。すっかり痛みもなくなってるし、動ける状態になってる。ありがとう」

二つとも足に関連する事で、おそらくは二つ目が橙乃を指名した理由だったのだろう。テーピングなどの処置に一番慣れているのは彼女だ。

だが今は支えが必要な状態ではない。だから問題はないと彼女の提案を断った。

「じゃあ三つ目。これからの日程の資料。そしてこっちは自作のものだけ」

「手帳？」

橙乃から白瀧に二枚のプリントと一冊の手帳が手渡される。

プリントは日程や連絡事項が記載されたもの。一方、手帳には手書きで手や指の動きの絵、そしてそれに呼応する文字の羅列が記されていた。

彼女の言う通り、手帳の方は自作のものなのだろう。

「ほら。誠凛戦で手振りでサインを伝えようとしたことがあったでしょ？ あの時は咄嗟の事で手間取ったから、前もって準備しておけば伝わるかなって」

「なるほど。確かに今の俺は空いている時間もあるし丁度いいか」

思い返すのはIH二回戦、誠凛との試合だ。タイムアウトも伝令もなしに指示を伝えようとした一件。たしかにあれが今後有効に使えるならば試合で有利に立てるかもしれない。そして試合に出る回数が多く、現在は時間に余裕もある自分が適任であった。

「了解。それじゃあこれからこの手帳のハンドサインについて少しずつ覚えていけばいいんだな」

「これからというか今からね」

「……ん？ 今から？」

「うん。今から」

ではこれから少しずつ覚えていこう。そう楽観視する白瀧に橙乃

は厳しい指摘を贈る。

「善は急げって言うし。藤代監督からの伝言もあったから早めにやっておいた方がいいでしょ?」

「待って。伝言って何?」

「暗記が出来ないほど疲れているようならば、疲れが取れるように間違った回数だけ手料理をふるまってあげてください」って」

「連続殺人事件!」

前言撤回。ひよつとしたらこちらの要件が橙乃を派遣した理由なのかもしれない。

「七割以上正解すれば問題ないって言ってたけど」

「満点取ります!」

そう言うのと、白瀧は突如手帳を鬼のような形相で凝視し始めた。

「別にそこまで必死にならなくても」と橙乃が口添えするが、白瀧にとっては必死にならなければ駄目らしい。いつの間にかまた没頭状態に入り、内容を頭に叩き込んでいた。

そしてこの約10分後。本当に確認テストは行われた。出された問題は合計で二十問。これを白瀧は何とか全問正解し、最悪の展開は免れたのだった。

「今日は大丈夫みたい。それじゃあ毎日続けていくね」

「……一日くらい開けないか?」

「毎日の積み重ねが大事なの」

「うん。そうだね」

どうやら橙乃には超回復理論は通じないらしい。

正論だけに反論が見つからず、白瀧は素直にうなずくのだった。

「じゃあとりあえず、今日の所はこれで要件は終わりかな? なら送っていくよ」

「……最後にもう一つだけ」

「ん? 何? まだ何かある?」

仕事が終わるならばこれでお開きとしよう。問題が起こるリスクは避けなければ。白瀧はそう考えたのだが、橙乃はまだ要件が済んでいなかった。

「動かないでね」

「は、はい」

真剣かつ静かな口調でそう言われ、白瀧は姿勢を正す。

すると橙乃は「よし」と小さくつぶやいて白瀧が腰掛けるベッドの傍らに場所を移した。

「一体何を」と白瀧が疑問を呈する前に、彼の側頭部が横に引っ張られる。

理解が出来なかったために抵抗は間に合わず、体は力に従って真横に倒れて、柔らかい何かに頭が乗せられた。

(……は?)

未だに自分がどういう体制になっているか理解できない。真上には橙乃の顔が90度回転して見える。この光景が、自分が膝枕をされているのだと彼に答えを示した。

「おい、橙乃。何をやっているんだ？　だからここで変な真似はマズイと……」

「——お疲れ様」

抵抗を示す白瀧に、橙乃は短くそう伝えた。

「……は？」

「頑張ったから疲れたでしょ。——お疲れ様」

もう一度同じ言葉が紡がれる。

今度こそ本当に白瀧は理解できなかった。

慈愛の感情が自分に向けられる意味がわからない。

だって自分は疲れてなどいない。何も頑張っていない。何も果たせていない。なのに疲れるはずがないだろう。そんな甘い考えが自分に許されるはずがない。

「何、言っただよ」

頬が勝手にひくつく。白瀧は必死に感情を抑え込んだ。無理やり笑みを作って、橙乃の気遣いを否定しようと試みた。

「俺は今休部中なんだよ。ただ治療を受けて休んでいるだけ。それなのに」

「嘘」

「嘘なんかじゃないって。本当に」

「あなたが誰かを気遣って虚勢を張るときは、顔は笑っても目が笑わない」

「……は、あつ？」

全てを見透かされた気がした。

この指摘さえそんなことないと否定すればいいはずなのに。心の中にたまった激情が噴出しそうになって、抑え込む事で精一杯になつてしまう。

「何度でも言うよ。私は見てるって。あなたの頑張りも、気遣う姿も、疲れた心も」

「……どこを見てるんだよ。そんなの、違う。そんなの、嘘だ」

「それが本当に解らないなら、あなたは今自分の状態が見えていない。それくらい疲れてる」

頭をゆっくりとなでられた。

白瀧は橙乃の手をはねのけようと、それは違うと否定しようとした。

ただ、行動に移そうとすると手は途中で止まり、言葉は思うように喉を通過しない。

今まで耐えてきた感情をだましかれない。強くならなければならぬ。強くあろう。自分に言い聞かせてきたものが揺らいでしまう。やめてほしい。何かに没頭する事でようやく耐えてきた。それを今さら指摘するなんて。

「……辛かったね」

最後、この一言が白瀧の内にある堤防を決壊させるトドメとなった。抑え込んでいた感情が湧き出した。

「……ッ！」

ずっと強さを求められてきた。指導者にも、仲間にも。「頑張ってくれと」、「助けてほしい」と。そんな彼らの言葉で何とか自分をだまし続け、まだ戦い続けようと思っていた。

なのに、こんな甘えを許す言葉をかけられて、今まで作っていた強い自分が呆気なく崩れ去る。エースの仮面にの下に隠した本当の感

情がさらけ出されてしまう。

「俺は、やれるだけの事をやった。ずっと、頑張ってきた。他に上手いやり方だつてあるはずだつて、わかつてたはずなのに。俺にはそれしか、なくて。そうしなきゃ、駄目で。でも届かなくて。辛かつたよ。辛いと思うくらい、やってきたんだよ!」

「うん。知ってる」

「休めるなら休みたい。でも、そんなことしてる時間なんてない。もう失いたくない。もう裏切りたくない。だから失敗しないように、そんな自分を見られないように、必死にやってた」

「うん。わかってる」

「それが余計に辛かつた。何かに没頭しなければ、すぐにおかしくなりそうなの……そんな自分の弱さが!」

何を言っている。なぜ今まで必死に隠し通してきた感情を暴露している。

やめろ。止まれ。

情けないにもほどがある。女の子の膝の上で涙を流し、声を掠らせ、弱い心の声を打ち明けるなど。

聞いている橙乃とただ相槌を打つだけ。本当に理解しているかどうかはわからない。実際はただ話に合わせて頷いているだけで、真意を読み取れていないかもしれない。

それなのに彼女の反応に白瀧は安心感を覚えていた。

もう何もわからなかった。ただ、どうしてか幾分か心が洗い流されたような、救われたような気がした。

これ程人目をばからず泣いたのはこれが初めてだった。

「同級生の女の子に膝を借りて、その上で頭を撫でられながら泣き出す。……ハアツ。ダメだ、カツコ悪い。情けねえ。恥ずかしくて死にたくなる」

白瀧は決まりが悪そうに小さな声で呟いた。

学校の体育館、両腕で筋トレを続けながら何度もため息をこぼし、

顔全体を赤く染めて。

「なんで俺は抵抗できなかったんだ。泣くだけならまだしも、思いつきり泣き叫んで慰められた。……だめだ、もう。これ以上ない程駄目なところ見られた」

一昨日の感覚は今でも覚えている。橙乃の膝の感触も、なでられた頭の心地よさも。

そう、白瀧が橙乃に諭された二日後、白瀧は通院を追えると学校を訪れていた。

一度藤代に声をかけて許可を得ると、他の筋トレのメンバーと共に汗を流している。昨日、壊れた筋線維が回復するのを待ちながら、白瀧は決意したのだ。まだ復活出来ない間も、仲間達と時間を共にしよう。

当初藤代は彼を見学もさせずに休養にあてようと考えていた。それがかつての彼の負担を引き起こすと考えたからだ。しかし今となっては白瀧に不安の色はなく、筋トレも密度は変わらないとはいえ、チームメイトと共に汗を流すことで気が楽になっているようだ。

そうするようにした理由は決して誰かに誘われたわけではない。橙乃が提案をしたわけでもない。

ただ、どうしてか白瀧がもう仲間と一緒にいても大丈夫だと考えたのだ。たとえ弱さを見られる事になっても、大丈夫と。自分の素顔を誰かに曝け出した事で踏ん切りがついたのかもしれない。

——もつとも気恥ずかしさの為に、橙乃と面と向かって話す事は難しくなってしまうが。

「別にいいじゃない。休めたでしょ？ 格好良い所だけ見せようなんて、白瀧君には無理だろうし」

「そんな事ないだろう。俺今まで橙乃の前で駄目な姿とかさらした時があつたか？」

「なりふり構わず土下座した事とか？」

「……あれはカウントしては駄目なものだと思います！」

下手な強がり口をすれば一掃されてしまう。白瀧が汗を流す姿

を見ている橙乃には厳しくも親し気な、不思議な雰囲気があった。おかげで白瀧は深く考え込む事も出来なくなり、結果として負担が減っている。

「一つも二つもそんなに大差はないから良いの。本当に男の子って変なところで意地を張るんだから」

「いやいや、意地の問題じゃない。これは色々深い、そう。プライドの問題であってね?」

「似たようなものでしょ? ……いいの。相手に本音を打ち明けてもらう事で満足する事だつてあるんだから。私がそうして欲しかった事だし、そうしてあげたかつた事なんだから」

片側の目をつぶって、笑みを浮かべる橙乃。

心底楽しそうな表情を見せる彼女に、白瀧は「ああ、勝てそうにないな」と早々に白旗を上げるのだった。

「そういうえば、マネージャーの仕事は大丈夫なの? 普段より早めにな上がったように感じるけど?」

勝ち目がないと悟った白瀧は話題を変えつつ気になった事を橙乃に問う。

練習が終わった後でも片付けを始めとしたマネージャーの仕事は残っている。普段なら今はその仕事をしているはずなのだが、自分の補助をする彼女を少し心配に思ったのだ。

「それなら問題ないよ。北条先輩のおかげで仕事も減ったから」

「そっか。まだあまり慣れていないかとも思ってたけど、結構早かったな」

「……あの人は天才だよ。仕事を一度説明しただけで全部覚えてた」

「あ、やっぱり?」

「聞いた話だとテストも満点ばかり取って『つまらない』って言ってるとか」

「……さすがにそれは嘘だよな?」

黙り込む橙乃。おそらくは本当なのだろう。

初めて会った時に天才だとは感じていたが、まさか本当だったとは。予想をはるかに超える才能を發揮する先輩の噂に、白瀧も言葉を

失った。

「マジか。そういえば、その北条さんは？　仕事終わって加賀先輩の方に行っているのか？」

「うん。打ち込みやってるって言った」

「ああやっぱり。加賀先輩スリーもうまいからな。その手伝いなら喜ぶだろう」

北条が加賀の打ち込みの手伝いをする姿を思い浮かべ、白瀧は柔らかい笑みを浮かべる。

二人が付き合っているという話は入部の時に聞いていた。

なるほど。意中の女性に手伝ってもらうとなれば、練習の効率も上がるだろう。うらやましいなど、競争相手の姿を思い浮かべて。

「ううん。北条先輩自身も一緒に打ち込みやるって言った」

「……ハッ？」

直後、橙乃の補足に再び驚かされることとなった。

「えっ、どういうこと？　パスを出したりボールを取ったりとか、サポートじゃなくて？」

「うん。どれだけシュートが入るかの競争をするんだって」

「まあ、それはそれでやる気出るんだろうけど」

「しかもすごく上手だった」

「むしろあの人がバスケット部入るべきだったんじゃないのか？」

「一度バスケット部に入ったけど、『どうして皆出来ないんだろ？』って言うってやめたって」

「……もう、何も言えねえ」

そういえば白瀧と本田が初めて加賀と会った時も、彼はストリートのコートで誰かを待っていると言っていた。まさか、あれは北条を待っていたのではないか。二人でバスケットをするつもりだったのではないだろうか。

新たなマネージャーの計り知れない才能に、白瀧はかつての大敵の姿を思い出し、現実逃避を始めるのだった。

こうして白瀧がチームの輪に戻るようになってさらに時は流れた。新体制に移行してから二週間。リハビリを終えた白瀧がついに完全復活を果たす。

全体練習に参加した初日から、目を見張る程の活躍を見せた。

「よっしナイツシュ！」

「もう一本！」

怪我明けとは思えない動きのキレを見せる白瀧。それどころか以前よりも力強ささえも感じられるプレイを連発する。彼の動きを見たチームメイトは皆安堵の息を漏らした。

「絶好調だな要」

「問題はなさそうだね。僕も安心したよ」

「ああ。心配かけたな。もう万全だ」

白瀧が屈託ない笑みを浮かべて、神崎と光月がかわした拳を重ねる。

3年生の引退から日も経って、皆も環境の変化に慣れてきた。その頃にエースの帰還となつて士気は高まることとなる。

「やっぱお前がいると引き締まるよ。二軍から人が入って、ずいぶん環境も変わった感じだったからな」

「そっか。新たに一軍の面子が決まって二週間。まだ完全にはなじまないか」

「あまり接点のなかった人もいたからね。IH終わったばかりで少し気が抜ける場面もあった気がするよ」

「大きい大会だったからな。まだレギュラー争いも激しくなっていない仕方がないか」

「うん。……ただ、レギュラーに関してはそうかもしれないけど」
「どうした？ 何かあったか？」

すると、何かに気づいて光月が言葉を濁す。神崎に先を促されて、「ちよつとしたことだけ」と付け足して話を続けた。

「要が復帰したわけだけど、これで一軍って二十一人だよ？ 誰か代わりに二軍に行くってことなのかな？」

「確かに。練習始まる前は何も言われなかったが、何かありそうだ」

光月が疑問に感じていたのは一軍の編成についてだった。

常ならば一軍に入れるのは二十人。今日は白瀧が復帰して一軍に加わった以外の変更がないので二十一人が練習に参加している。

このままの人数で続けるのか。あるいは規則通りやはり誰かが枠から外れるのか。これは白瀧も考えていなかった。想像がつかなかった。

「んー。わからないし考えても仕方なくね？ それに俺達元々一軍にいたメンバーは大丈夫だよ。新しく加入した選手達にだってそう簡単に負けはしねえ。だろ？」

「単純だが、その通りだ」

「……うん。もちろん」

そんな悩みは神崎が蹴散らした。皆の実力ならば問題はない。

きっとこれからまた、今までのように皆でバスケットができると二人も追従する。

そう、誰もが思っていた。

「俺も頑張るさ。加賀さんとの競争は厳しいだろうけど、お前達レギュラー確定組みに繋がるぜ」

「僕はまだそう思っていないけど」

「自信持てて。……そういえば、お前自分の事はやっぱり僕って呼ぶんだな」

「えっ？」

「紫原と戦っていた時は俺って言ってたぜ。てっきり意識が変わったのかと思った」

「……そうっ？」

「たしかにそうだった」

「そっか。全然意識してなかったな」

ふと神崎は光月の口調が気になり、小さなことだが聞いてみる。彼の言う通り、光月は陽泉戦では強い口調で敵と対峙していた。

あるいは性格が変わったのかとも思われたがどうやら今までの彼と相違ないようで、本人も自覚はなかった。

「ま、どうでもいいんじゃないか。あの時は敵と戦ってる時だったわ

けだし、普段はそんな緊張感を持つ必要ない。気に掛けることじゃないよ」

「……うん」

「そっか。まあそうだな」

だが意識する必要はないと白瀧が諭す。小さな心配りだが、いつも通りあればいいと仲間を諭す様相は、彼が苦悩から解放されているという事の証明だろう。

「自信を持った方が良いつていうのは俺も同感だけどな。言葉にしたって、その人の強気とか関係とかが反映される時もある。……呼び方は特に、な」

そう言って、白瀧はある事を思い返して小さく笑みをこぼす。

「どうしたよ？ 急に笑って？」

「いや、少し違うけど呼び方でふと思い出したことがあつてさ」

「呼び方？」

「お前達も覚えてないか？ 以前、山本先輩に聞かれたこと」

「……ああ、そんな事あつたな」

「あつたね。確かに、呼び方は関係性とかも表しているか」

説明されて二人も納得して、懐かしい記憶に微笑んだ。

思えばあれも確かに人と人の呼び方に関する話題だったか。

三人の仲について自覚し、そして残る同級生二人——西村と本田との関係性について触れられた記憶がよみがえる。

——黒子のバスケ NG集——

「……どうしよう。寝ちゃった」

白瀧が泣きつかれて眠ってしまった場合。近づく門限。近づく社会的危機。

第百話 君の名を呼ぶ

「そういえば、何でお前らって三人だけ名前呼びあってるんだ？」
「え？」

ある日、練習が終わって選手達が各自が片づけをしている最中。

白瀧と光月と神崎。三人がたわいもない会話を交えつつ次の試合の事についてはなしているのと、当時の副主将であった山本が三人に問いかけた。

「いや、一軍にはお前達も含めて五人の一年がいるが、お前ら三人は名前で呼び合っているけど他の二人は違うなってふと思つてな。何かあつたのかなつて気になつたんだ」

三人の他に、大仁多の一軍に登録されている一年生は西村と本田がいる。だがこの二人は最初に上げた三人と異なり苗字で相手呼び、その逆も然りだ。

同級生で同時期に一軍に選ばれたのにこの違いは何なのだろうと気になつたのだろう。

「僕達は勇の提案からそういう風になつただけですけど」

「ええ。初めて会つた時、まだ入部する前にですね」

「高校に入ったばかりで全然知り合いがいなかったんで。それで同じバスケットに入るなら余計に仲良くなつておきたいなつて事で、まずは呼び方から、と」

「……あつ、そつか。そういえばお前らクラスメートでもあるんだつたな」

その説明で合点がいく。

同じ部活であるという前に彼らは同じクラスに所属している。バスケットに入る前から交流があつたのだ。その点で他の二人よりも交流が深いのだろう。

「そうなんですよ。西村は一軍に入ってから知り合つて既に雰囲気出来てましたし……」

「本田に至つては最初は敵として戦つたからな」

「そんなミニゲームもあつたね」

「懐かしい」と光月が昔を思い返して呟いた。入部直後、新入生の力試しに行われたミニゲーム。

あの時は三人同じチームで本田の属するチームと戦った。期間が少し空いた事に加えて敵としての邂逅。これが三人と二人のちよつとした違いだったのだ。

「……まあ、俺は仮にクラスメートであったとしても、本田や西村を名前で呼ぶ事はなかったかもしれないな」

ただし、白瀧はたとえ出会いが異なっただとしても同じ結果になっていただろうと語った。何故と疑問の視線が彼に集中する。

「どうしてだい？」

「あいつの性格だよ。本田は負けん気が強いからな。多分ミニゲームの結果と関係なく突つかかかってきただろう。加えて俺は今もあいつに1対1の相手をやってもらっているが、そっちの方が都合もいい。容赦なく向かってきてくれる」

「あー。確かに。なんとなく想像できた」

「でしよう？ 本当に隔たりなくお互いの力を必要となつたならば話は別かもしれないですが。そんな時は来ないかもしれません」

「なんだかんだ言って張り合っているもんね……」

「お前ら二人、練習からガチすぎるんだよ」

キセキの世代対策としてやっているのだから、ある意味嬉しいことではあるけれど。

事実、白瀧と本田の戦いは常に激しい。練習であろうと、試合であろうと。この時はまだ行われていなかったが、後に行われる盟和戦や誠凛戦でも協力はしつつ衝突があったのだ。

本田は譲ろうとしない。白瀧もそれを引き受け、そして煽るような節があり止まる事はない。ひよつとして、白瀧は全力で自分と戦ってくれる相手の存在を嬉しく思っているのだろうか。ならば確かにこの二人が隔たりなく接するというのは難しいかもしれない。

「じゃあ西村は？ あいつはそんな性格じゃないだろ？」

「あいつは同中だったからじゃないですか？」

「そういえば中学の時から敬語だったって話を聞いたよ」

ならばもう一人、西村はどうなのか。山本が最後の一人の名前を口にした。

西村は誰に対しても丁寧な姿勢で接し、礼儀正しい人物だ。本田のような心配はないだろう。

ただし彼は白瀧と同じ帝光中。中学からの付き合いという事で、高校から変える事はないだろうと神崎が代弁する。

また、光月も言う通り以前から彼の敬語は続いていた。白瀧に対しては言わずもがな。ならば彼もこの理由で名前を呼ぶ事はないのだろうと光月は考えた。

「……いや、西村に関してはちよつと違う理由だ」

ただ、白瀧は三人の意見を否定した。中学からのつながりであるとか、自分への口調といったものとはまた別の理由があるのだと彼は言う。

「違うって、じゃあ何で？」

「あいつが俺を目標としているからだよ。中学の時からそうだった。目指してくれるのは嬉しいことではあるが、やっぱりそれじゃどうしても憧れが真っ先に入るだろう？」

理想とされるのは嬉しいことだ。ただ、それだけでは駄目だ。

憧れてしまえば、それを気高いものと考えて必要以上に大切にしてしまう。真に理解する事も助け合う事も出来なくなってしまうかもしれない。ましてその理想を越えようという考えも薄れてしまうだろう。

「……それは仕方がないんじゃない？」

「ああ仕方がない。だから、もしも俺があいつの事を名前で呼ぶとしたら」

ゆえに白瀧は異なる関係を望むのだ。

憧れとはまた違う。自分とはまた違う。

「——あいつが、西村だけの強さを手にして、俺と真っ向からぶつかつてきてくれた時かな？」

追いかける立場とは違う、独自の武器を手にした一選手として確立する。

そんな強さを西村には身に付けてほしかった。対等な立場に立つてほしかった。そしてその時が来たならば、二人は真に仲間と呼べる関係になれるだろうと考えていた。

その日の練習が終了。各選手は個人練習に励むことになる。

「西村さん、白瀧さん。お二人とも時間よろしいでしょうか？」

「え？」

「構いませんが」

「お話があります。監督室にきてください」

すると藤代は二人から了承を得て、背を翻し監督室へと向かう。

西村たちは何の要件なのかわからず視線を合わせるが、どちらも心当たりがなかった。

従わない理由もなく、監督に続いて監督室に入る。藤代監督が椅子に腰かけると、いつもよりも真剣な声色で話し始めた。

「まずは練習お疲れさまでした。今日は白瀧さんの復帰初日でしたが、問題なく動けていたと思います」

「ありがとうございます」

「これで新体制の全戦力が揃ったと言えるでしょう。ここからが真のポジション争いも始まると言える」

「そうですね。これからは実践に向けての練習が本格化するでしょうし、加賀先輩たちもレギュラー争いは激しくなりそう」

その通りです、と西村の予想にうなづく藤代。いつもならばここで笑みを浮かべてもおかしくないのだが、今はずっと無表情のまま。変化のない様相が、白瀧には嫌に思えてきた。

「ですがその前にまず一軍の編成をしっかりとしなければならぬ。現在は白瀧さんが補充の形で入って一人あふれている状態。人数を合わせておきたいですからね」

「ええ、そうですね」

「そこで今回、お二人にこの場に来ていただいたわけです」

ここで一度藤代は言葉を区切った。

西村はまだ監督の意図を理解できないようだが、白瀧は嫌な予感が確信に変わり、冷や汗が頬を伝う。

「単刀直入に言いましょ。西村さん」

「はい」

「……監督！ まさか！」

藤代が西村の名前を呼んだ。その先を言っただけなら白瀧は声を荒げるが、藤代の言葉は最後まで紡がれた。

「あなたには、明日から一軍の編成を外れて二軍に加わっていただきます」

「……えっ?」

「ッ！」

それは、西村への二軍落ちを告げる非情な宣告。

呆然とする西村は、返事をする事が出来なかった。

白瀧は鋭い視線で藤代をにらむ。歯を食いしばる形相は監督に向けるようなものではない。

ただ、それを受けても藤代はすまし顔を崩さない。

監督の残酷な決断を覆すすべは、この場にはなかった。

「お、俺が二軍に?」

息を飲む西村。監督の指示をすぐに受け入れられず硬直する。

突然の二軍行きの命令だ。こうなってしまうのも当然の反応だろう。白瀧とてすぐに言葉を繋げることが出来なかった。

「白瀧さん。新たに一軍が編成されて、最も負担が小さかったポジションはどこだと思いますか?」

二人が黙り込んでしまうと、藤代が話を進展させようと口火を切る。

話題を振られたのは西村ではなく白瀧だ。

三年生が引退して、それでも変化はあまり見られなかったポジション。この質問の意図をすぐに理解したからこそ、白瀧は重々しい口調で藤代が望む答えを返す。

「あえていうのなら。おそらくはセンターと。……そしてポイント

ガードです」

「ええ。センターは元々二年生の黒木さんがレギュラーでした。三浦さんも健在。そしてポイントガードも小林さんが残る上に主将の中澤さんもいる。加えて白瀧さんが復帰となればあなたは司令塔を担う事もあるでしょう。そう考えれば、ポイントガードが最も安泰であると言える」

藤代は淡々と事実を述べる。

二人の言う通り、大仁多の中で変化が少なかったのはこの二つだ。他のポジションはどこも一軍に名前を連ねていた三年生が引退し、変動が生じた。

ただセンターとポイントガードだけが例外。しかも後者に至っては人数も多い事に加えて、大仁多の最高戦力と考えられている白瀧や小林が務める事が多い。万全の体制と言えるだろう。

「ま、待つてくださいー！」

それくらい西村だつてわかっている。わかっているが納得は出来ず、どうにか気を振り絞ると、指揮官に反論した。

「確かにその通りかもしれませんが、白瀧さんの本職はスコアラーです。試合の頭から出るケースは少ないでしょう。大仁多の色である攻撃性を重視するならば、バスケスタイルが異なる中澤さんよりも俺の方が向いているはず。加えて今の三人を除けば、一番可能性があるのは俺のはずだ！」

この先の戦いの為に外す事は出来ないだろう。珍しく西村は声を荒げていた。

西村にも実績と自信がある。そう簡単にこの勧告を受け入れるわけにはいかなかった。

ようやく白瀧が復帰してもう一度バスケをできると思ったのに、黙っていられない。

ただ、西村がどれだけ力説しようとも藤代は眉一つ動かさなかった。

「たえそうだとすも駄目ですよ。こちらの期待から外れた行動をとる司令塔は、邪魔だと言っているんです」

「なっ！」

冷たく、突き放すような言葉だった。思わず西村は反論する言葉を失った。

「ポイントガードはコート内の監督であり司令塔だ。チームをまとめ、プレイを組み立てねばならない。たしかにあなたは自ら切り込むプレイが得意だが、それでもその役目を放棄することは許されない」「それは……」

「あなたは陽泉戦で怒りのあまり視野が狭くなり、その役割を忘れていた。私は、チームのために戦えない選手を一軍におくわけにはいきません」

反論など許さないと言わんばかりに藤代は話を続ける。おそろしく、西村がポイントガードの選手であるからこそここまで厳しい言葉を選んでいるのだろう。

(懲罰降格ということか)

白瀧は客観的に藤代の意志を探り取る。彼は陽泉戦で自分が負傷した後の試合の動向はビデオで見っていた。西村が独断で紫原に挑み、そして敗れて反撃を受けた結果も。

藤代はこの事を指しているのだろう。

一試合の結果で選手にこのような宣告を告げる結果は決して珍しくない。帝光でもかつて黒子が結果を出せなかったという事から降格を命じられかけたという噂もあったし、青峰も一度練習中に部活を抜け出したという事で降格するかもしれないという予想がたった。それだけ強豪校では規律を重んじるのだ。

ましてや西村の司令塔はそもそも試合の組み立てに関わる役職である。その分他の味方への影響も大きい。だからこそ藤代はこの決断に至ったのだろう。

「——監督——」

それでも西村は引き下がらない。監督への必死の訴えを続けていた。

「しつこいですね。まだ納得がいきませんか？

「あたり前です！　ようやく白瀧さんだつて戻ってきて、これからと

「いう時に！」

「ならば、いいでしょう。あなたにもチャンスを差し上げます」

すると、彼の姿勢に痺れを切らしたのか藤代が立ち上がる。

「元々あなたの降格は白瀧さんの復帰による人数調整の意味も籠めていた。あなたが自分が大仁多の戦力になるというのなら、実戦で証明してもらいましょう」

「どういう事ですか？」

実戦で証明。まさか練習試合でも組んでその実力を試すつもりか。だがそう簡単に他校と試合を組む事が出来るはずもない。その間この問題を放置するとも思えない。

西村は監督の真意を読み切れず、次の説明を待った。

「受け入れていただけなければ、残りの一つの椅子をめぐるお二人に戦ってもらいます」

「……ハツ？」

「えっ？」

すると藤代は二人へ視線を向けて、非情な戦いの幕を開けた。

ありえない提案に二人は目を丸くした。その間に事態はどんどん加速する。

「西村さん、白瀧さん。一軍の残る椅子は一つです。1対1、十本勝負。勝利した方が一軍に残り、敗北した方が二軍へ去る。さあ、今から始めてもらいます」

西村と白瀧。望まぬ師弟対決が始まろうとしていた。残る椅子はただ一つ。残るのは一人のみ。

「おい、お前らすぐにコート開けろ！」

「えっ？　なんで急に？」

「白瀧と西村が一軍をかけて戦うんだって！」

「ハアッ!?　ど、どういうこと?　どうしてあの二人が!？」

「わからないけど監督の指示だ!　急げ！」

藤代が宣言するや、行動は早かった。

自主練習中の選手に命じてすぐにコートを開けさせると、白瀧と西村の決戦の場とした。

いきなりの知らせに二人だけではなく他の選手達の間にも動揺が広がる。

二人とも入部直後から一軍の座を勝ち取った期待の新人だ。しかも同じ中学出身で仲も良い。そんな二人が最後の一杯を巡って争うなど誰が考えられようか。

仲間たちがコートの外に出る。注目が集まる中、西村と白瀧が向かい合った。しかし少なくとも西村の表情は困惑一色で、とても今から戦うような状態ではなかった。

「嘘、ですよね」

「……西村」

「さすがに、本当にこれで降格とかないですよ？ いや、もし本当だとしても。適当に得点を合わせて引き分けとかなれば！」

まだ二人とも一軍に残っていられる可能性はあるはずだ。いつもの調子を崩さずに笑いかける西村に対して、白瀧は。

「構えろよ。西村」

「ッ！」

「行くぞ」

烈火の如き視線を。倒すべき敵に向ける目を西村に向けていた。背筋が凍る。

白瀧の殺気にも似た圧力に当てられてようやく西村は腰を落とし、オフェンスに備えた。

ようやく戦いの姿勢を取った西村。

そんな彼の横を白瀧は一閃する。ワンドリブルで勢いよく切り込むとドライブのスピードだけで西村を抜き去り、レイアップシュートを沈めた。

「本、気で？」

手加減なしのプレイ。信じられず、西村は呆然と背後の相手に問いかける。

「監督がそんな甘い事を許すはずがないだろう？ 来いよ、西村。お前も一選手なら、今の座を守りたいなら、俺を倒してみろ」

白瀧は未だに戦意を宿せぬ西村を煽るように、指をクイッと自分に向けて動かしてディフェンスに移行する。

まず一本目を白瀧が先取。残りは九本。

二人の戦いが進む中、体育館へつながる廊下を駆ける二つの影があった。

「どうしてもとも一軍だった二人が戦ってるの？ ひよっとして仲が悪かった？」

「そんな事はありません。少なくとも、一年生の中では最も親しかったし、付き合いの長い二人だったと思います」

「んー。じゃあ何でそんな二人で？ 監督は何を考えているんだろ？」

「それがわかれば苦労はしませんよ」

北条と橙乃である。

二人は練習で使用したタオルやボトルを片付けていた為に体育館にはいなかったのだが、白瀧と西村が戦うという知らせを聞いて急いで向かっていた。

部に入ったばかりで事情を知らない北条は呑気に考えているものの、橙乃は気が気ではない。よりによってあの二人が戦っているのかと、戦いの行方とそれがもたらす結果が気になり、いても立ってもいられなかった。

(本当に、どうしてあの二人が?)

考えても藤代の意図を読むことは出来ない。そもそも二人はポジションも違うというのに、どうしてこのような戦いを強いるのか。

ようやく体育館の入り口に立つ二人。すぐにボードの途中経過へと目を向ける。

「……白瀧君」

終盤戦に突入している中、その戦績は一方的なものだった。

白瀧 8 本、西村 0 本。白瀧が一本も外す事なく、一本も許す事もなく勝負を優位に進めていた。

さらにもう一本。

白瀧が放ったヘリコプターシュートが西村の指先を超えていく。ボールはリングに吸い込まれていき、白瀧の 9 本目の成功を記録した。

「……………どうしてですか！」

西村は悔しさのあまり歯を食いしばらせ、悲痛な叫びをあげた。負けているからではない。手も足も出ないからではない。

「俺はあなたと戦うために強くなったんじゃない！」

強くしてくれた白瀧と戦う事になってしまった、この運命を呪ったのだ。

「ならばお前はここで立ち止まっている。先へと進めるのは、今を戦う覚悟がある者だけだ！」

これが西村と白瀧の決定的な違いなのだろう。怒り、悲しむ西村に、白瀧は表情を崩すことなく突き放すように、冷静に告げる。

——たとえば相手のことをどれだけ思っているようにも。願いを果たすためならばその相手でさえも倒してみせる。

想い人でさえ敵に回すと覚悟した白瀧だ。たとえば西村を相手にしようと揺らぐ事はない。

大切な相手だから戦えない。大切な相手であろうと戦う。この二人の違いは明白だった。

「ッ……………」

ここで戦う覚悟がなければ、共に戦う機会を失われてしまうというのか。

自然と歯を食いしばる力が強まる。

「し、白瀧……………!!!」

追い詰められた焦りが西村の戦意を目覚めさせた。

獣の如き気迫と咆哮を上げて、西村は今日一番のキレで切り返した。

スピード、タイミング、コース。すべてが咬み合った絶妙なドライブはまさに白瀧が指導した動きだ。

「悪いな」

だからこそ白瀧も読んでいた。

完璧であるからこそ、読み合いに長けたこの男が見逃すはずもない。クロスオーバーでボールが収まり、そのまま直進しようとした左手に白瀧のステイールが牙を向く。

「——アツ、アアツツ！」

瞬時の判断だった。ボールを奪われると本能で察した西村。決して考えての事ではない。しかし、彼の意地が白瀧の読みを上回った。

白瀧の手が空を切る。西村がもう一度逆に切り返し、白瀧のディフェンスを突破した。

「えっ……っ？」

「なっ!？」

「白瀧が読み違えた!？」

「まさか、西村が白瀧の動きに対応したのか!？」

(違う! 読み違えたんじゃない! かといって今のは瞬時に切り替え出来るタイミングでもなかった! まさか!)

誰もがこの結果に驚き、声を荒げた。

一対一の対決ならばまず遅れを取らないであろう白瀧が突破を許す。誰がこれを予想しただろうか。

そしてステイールを失敗した今、ゴールはがら空きだ。西村は突破の勢いを利用してそのままレイアップシュートを放った。

「ッ！」

得点を確認した瞬間、西村の横に白瀧が飛び上がる。

瞬発力に長け、誰よりも早く最高到達点にたどり着くスピード。意地があるのは白瀧も同じだ。瞬く間に追いついた白瀧はこの戦い初めて放たれたシュートを叩き落とした。西村の攻撃は白瀧のブロックを前に失敗に終わる。

「……くっ、そっ」

衝撃に視線を落とす西村。

やはり届かなかった。

最後の白瀧のオフエンス。一気にゴール下まで切り込む白瀧。負けじと西村も追う。大きく足を踏み込み、背後から彼のボールへと突き刺すほどの勢いで手を伸ばした。

だが届かない。

白瀧はドリブルを中断し、ボールを体の中心へ引き寄せると、ジャンプシュートを決める。

これが10本目だった。

「決着、か」

白瀧10本。西村0本。

終始エースが圧倒し続け1対1は終わりを迎えた。

ただ、敗れた西村も一矢報いた。一度だけ白瀧のステイールをかわしたあの動きは、今までの彼にはなかった動きだった。

(さっきの動き。あれはまさか、あの人の?)

バスケットを教えた白瀧のものでもない。

「ひよつとしたら」と白瀧は親友が見出した新技に心当たりを思い出し、この土壇場で発揮した彼を嬉しく思った。

「……西村。これだけは言っておくぞ」

試合が終わって地面に手をつく西村に、白瀧は背中越しに呼びかける。

「俺はな、与えられた勲章に対して誇りを持っている。『キセキの世代』という大層なものだけじゃない。お前でなければ、俺個人の呼び名を他のやつらに呼ばせることなんて許しはしなかった。お前だからこそ許したんだ」

神速の再来。

かつて西村の活躍を見て人々が呼んだそれは、誰であろうと許したわけではない。一所懸命に努力し、強くなろうと努力し、自分を追いかけてくれたお前だからこそ許したのだと。

「だから、もう一度這い上がって来い。——大智！ お前がもう一度俺達のところに戻ってくることを、もう一度共に戦うことを、俺は心の底から待っている！」

かつて帝光の三軍から一軍まで駆け上がった時のように、強くなれ。願いを籠めて白瀧は西村の名前を呼んだ。

白瀧は西村にそう言い残して決戦の場を後にする。

「あつ、白瀧君！」

無言で体育館を去る白瀧。そんな彼を見て橙乃はすぐに追いかけていく。

「……どうした？」

「大丈夫なの？ 復帰して初日でしょ？」

「問題ないよ。休んでいた体を起こすのには丁度いいくらいだ」

「本当に？ どこか痛むところかあるなら」

「大丈夫だ。本当に」

白瀧は復帰初日から練習後に激しい勝負をする事となった。

いきなりの消耗を心配して声をかけたであろう橙乃に、白瀧は問題ないと手を振った。そして即座にその場を離れようとする彼に、橙乃が後ろから両手を回し、拘束する。

「……本当に？」

「ッ」

もう一度同じ問いかけを投げかけた。

すると痛い所をつかれたのか、白瀧は小さく舌を鳴らして立ち止まる。

「ああ、くそっ。どうしてだ。ちよつと休んでいた間に、こんなに弱くなってしまったのか、俺は？」

「いいでしょ。こういう時くらい弱くたって」

「——痛い。ああ、痛いよ。守るだなんて言っておきながら、いつも俺は大切な存在を傷つけてばっかりだ」

すでに弱い姿を見せてしまったからなのか。白瀧の心はあっさり和白旗を上げた。

大丈夫なわけがない。体が無事であったとしても、長年の付き合いであった相手を容赦なく打ち倒して、心が悲鳴を上げている。

「本当に弱くなってしまったな」と白瀧は自虐的に笑った。表情はうかがえないが、橙乃は彼が落ち着くまで後ろから支え続けた。

「それで、わざわざあの二人をぶつけた意図はなんだったんですか？」
すべてが終わった後、中澤は監督室を訪れて藤代監督に疑問を呈した。主将としてすべてを把握しておきたい。そんな思いがあったのだ。

「一つは、彼らに説明した通り司令塔として反省してほしいという事です」

「それならば別にあそこまでしなくても」
「もちろん。二つ目は、彼らだけではなく皆に緊張感を持ってもらう為。もともと一軍であった方の中に気の緩みがみられましたからね。加えて西村さんは中学時代、一年のころは三軍。それから少しずつ伸びてきてここまで来た。成長が著しいと言えば聞こえはいいですが、悪く言えば彼はまだ落ちることを経験していない。最後の年もキセキの世代の控えとしてあり続けたそうですからね」
「皆の競争と、西村の向上心を煽る為、と？」

藤代が大きくうなずいた。

自省の為だけではない。実力があっても駄目だと部員の気を引き締めさせ、西村にもう一度這い上がらせて実力をつけさせる。いくつもの思惑があったのだと言うのだ。

「そして三つ目。彼に、白瀧さんを頼らずに戦ってもらいたいと思っただけです」

「……それはチームプレイの事ですか？」

「違います。西村さんのバスケスタイルは白瀧さんに準拠している面がある。ただ、彼の事を考えれば、その考えに捉われてはいけません。だからこそ一度白瀧さんとぶつけ、そして新たな道を発掘してほしい」

「それで、監督の台本通りというわけですか？」

「そんなものではありませんよ」

中澤の茶化すような台詞に藤代は微笑を浮かべる。

藤代は西村に、新たな強さを身に付けてほしかった。その為には一度憧れから脱却する必要がある、その為に憧れの対象である白瀧と戦わせる必要があった。

「わかりました。一応納得しておきます。ただ、西村はそれでもいいかもしれませんが、こうなると白瀧が貧乏くじを引きすぎではありませんか？ あいつらの仲は監督も知っていたでしょうに」

確かに荒療治ではあるものの西村にとっては良かったのかもしれない。

では、白瀧はどうなる？

復帰したばかりなのにこれ程心身に負担を強いるような展開はあまりよろしくないのではと中澤が眉をひそめた。

「そのあたりは橙乃さんにしつかりサポートをするようお願いしています。それに、彼の調子が万全であるという事を皆さんに示しておけば、文句を言う人も出ないと思いましたが」

「文句？ あいつが一軍に入るといふ事にですか？」

「いえ、そちらではありません。下手すればそれよりも重要な、他校の選手に対してですよ」

「他校の選手？ ——ああ、なるほど」

ただ、藤代は白瀧の為でもあると語った。書類の中から一枚の紙を取り出し、その中に記載された選手の名前を見つめながら説明を続ける。

中澤もその紙を目にしてようやく監督の考えを理解した。

「——国体出場メンバー。IHで負傷したエースがここで完全復活すると示せたという事です」

プリントには『国民体育大会バスケットボール競技』と記されていた。

—— 次章予告 ——

「あんたじゃ俺に勝てないっすよ。白瀧っち」

秋の全国大会、国体。

立ちほだかるのは彼の過去。避けられぬ因縁。

かつて敗れた大敵に白瀧は好敵手達と共に立ち向かう。

絶望と焦りが渦巻く激戦の中、エースが再び反撃の狼煙を上げる。

黒子のバスケ 銀色の疾風 国体編

「俺は全てに勝って願いを叶えてみせる。そう誓ったんだ！」

「ただ正しいだけの選択肢に、何の意味がある？」

WC予選開幕。

もう一度全国の舞台へ進むため、志を一つにする大仁多高校。

そんな時響く不協和音。突如もたらされた悲劇の真実が容赦なく
摩耗した心を打ち砕いた。

連戦の中で孤立する白瀧。その姿はキセキの世代を彷彿させるも
のだった。

黒子のバスケ 銀色の疾風 WC予選編

「——皆、ごめん」

第五章 国体編

第一百一話 栃木県選抜

ある日の放課後、盟和高校の体育館。

「キターーーーーー!!!」

岡田監督から一通のプリントを手渡され、その内容を目にしたバスケット部の主将である勇作は歓喜を露わにした。

「いつも以上におかしくなってるね」

「細谷先輩達も渡されてましたけど、そのプリントは何なんですか？」
そんなチームメイトの騒ぐ姿を微笑ましく見守る神戸。

一方、金澤は彼がこれ程取り乱す原因となったプリントが気にかかり、勇作と同様にプリントを受け取った細谷・古谷の両名にその内容を問いかけた。

「ああ。これですか？ ま、あのバカがバカ騒ぎするだけの内容でしたよ」

「まさかこんな形で選ばれるとは思ってなかったからな。——国体出場選手の招集だって」

古谷は小さく息を零し、細谷は微笑を浮かべてそのプリントを二人に見せる様に出す。

これは藤代が持っていたプリントと同じ、国体出場選手ならびに関係者に渡される用紙であった。

「浮かれるのも良いが、お前たちにとっては初めての全国大会だ。この大会は多くの経験を積むチャンス。俺もコーチとして大会に参加する。後のWCの為に、ここで強くなれ！」

「はいー」

気をよくする選手達を見て、岡田は彼らの気を引き締めるべく活を入れる。彼も今回はコーチとして招集を受けていた。

この大会はWC前の最初にして最後の機会。初の全国大会ではあるが出場するだけでは意味がないのだと語気を強める。

「やってやろうぜ。勇作、お前も選ばれて嬉しいのはわかるけどさ。」

もう少し皆と、」

「違う！ 確かにそれは嬉しいがそっちじゃない！」

「は？ そっちじゃないってじゃあ一体何をそんなに喜んでるんだ？」

未だに体育館の端で一人喜んでる勇作を細谷が呼び寄せようと肩を叩く。

しかし彼がここまで心を躍らせているのは国体のメンバーに選ばれたからだけではなかった。理由を問う相手に、勇作は「これを見ろ」とプリントのある部分を指し示す。

そこにはマネージャーの項目に『西條奈々、橙乃茜』と記されていた。

「茜と同じチームキターーーーーー！！！！」

「あ、はい。そっちね」

ああ、そういえばこいつはこういふ奴であった。全員が同じ感想を抱き、残念なエースを見るのだった。

橙乃勇作、細谷武士、古谷周平、岡田尚志。以上4名、栃木県代表に選出。

「あー。羨ましいな。まあ俺たちじゃ流石に実力差が大きすぎたから仕方がないけど、さ」

「バスケット部から初の全国大会出場者となれば、仕方がない話じゃん。むしろ二人も出たんだから十分」

「西條も選ばれますからね。今までは栃木代表は大仁多の独占だったから大戦果ですよ」

同時刻、聖クスノキ高校。

こちらでも石川からジャン、楠、西條の三人に栃木代表選手への要項が手渡されていた。

選ばれた三人を羨ましく思う他の面々。しかし沖田の言う通りこれまでには常に大仁多の選手達だけで栃木県代表は大会に臨んでいた

のだ。三人も選出されたのは喜ぶべき事である。

「フン。大仁多ヲ倒シテカラガ良カツタガ仕方ナイ」

「先輩たちの分まで戦ってきますよ」

「私も選ばれてると言うのが驚いているんだけど……」

ジャン、楠の選手二人は代表に選ばれ嬉し気に、誇らしげに胸を張った。一方マネージャーとして参加する事になった西條は自分が選出されているという事に半信半疑に状態であったが、そんな彼女を諭したのは石川だった。

「俺の方から藤代監督に提案したんだ。最初は県大会三位のチームという事で俺にスタツフとして参加しないか声をかけられたが、藤代・岡田の両指揮官と比べれば指揮は劣る。船頭が多すぎても仕方ない。ならばサポートとしてうちの西條はどうか、ってね」

「そうなんですか？ よろしかったんですか？」

「構わないよ。それに、お前達選手だって華があった方が良かっただろ？」

（それを言うか……）

楠の質問に石川は軽い口調で返した。指揮官とは言え、全国大会の空気には触れたかったであろうに、それを感じさせないような態度だ。残念に思う気持ちがないわけではないだろうが、それよりも教え子達の経験を重要視しているのだろう。

「滅多に味わえない貴重な体験だ。みんなの分まで、三人は頑張ってきてくれ！」

「はいー」

最後に指揮官から笑顔で送り出され、それに応えるよう三人も力強く頷いた。

ジャン・ディア・ムール、楠ロビン、西條奈々。以上三名、栃木県代表に選出。

「国体、要はオールスターというわけだ。……出たかったな」

同時刻、大仁多高校体育館にて。

ボツツと小さく呟いたのは本田だ。先輩達や同級生が代表に選ばれたという話を聞き、羨まし気な視線を送る。

県大会を制したとはいえ、大仁多高校の選手とて全員が選ばれた訳ではない。これまでの国体では大仁多のみの選手で固めていたものの、今年は違う高校の選手も呼ぶという事で一軍の中でも選出外となった選手が現れた。

「今年は例年よりも県大会で力を発揮する他校の選手が多かった。加えてキセキの世代という勢力が出てきた事で、より個々の力が必要になったのです。選ばれなかった方には申し訳ありませんが、その分選ばれた選手が活躍できるようにサポートをお願いします。代表に選ばれた皆さんは、彼らの分まで精一杯戦ってください」

気落ちする生徒、歓喜に湧く生徒の両方へ向けて藤代は発言する。今年是新勢力・キセキの世代の登場もあって藤代が他校の有力選手を招集する事を決断した。それだけIHで受けた衝撃は大きなものだったのだ。

そんな彼らに負けないよう、引き続き代表を率いる指揮官は各選手に努力を続けるよう奮起を促す。

「頑張つて来いよお前ら！ キセキの世代つてのがどれくらい強いのか知らないが、お前達なら大丈夫だ！」

監督の話が終わると、加賀は同ポジションであり代表選手となった白瀧、神崎の肩を叩いて応援した。

「ありがとうございます。IHの借り、返してきますよ」

「というか、個人的には加賀先輩が選ばれてないのが驚きです」

「ああ、俺？　そもそも今回みたい色々な高校の選手を呼ぶ場合は県予選の記録を主に見て選ぶらしいぞ。だから予選に出てない俺はそもそも選出外つてわけだ」

「そういう仕組みなんですか」

神崎の疑問はもつともだが、加賀は「最近試合にでてなくて勘も鈍ってるだろうしな」とあまり気にしていない様子であった。

確かに県代表として戦うならば参考にするのは県予選のデータと

なる。なるほどなと神崎は納得し、加賀が受け入れているという事もある。あつてそれ以上追及する事はなかった。

「国体か」

「すみませんね、小林さん。主将を引退したばかりのあなたに任せるのはどうかと思つたのですが、やはりこういう連合チームとなれば4番を背負うのは貴方しかいないと判断したのです」

「構いませんよ。確かにあいつらもいるとなれば、中澤では少し辛い所もあるでしょう」

「否定しにくいのがなんとも言えない。俺からもお願いします」
「任せておけ」

オールスターの主将には小林が選ばれていた。大仁多の主将を中澤に譲つたばかりだが、国体という県の代表試合の主将は彼以外考えられないという総合的な判断であつた。藤代も中澤も任せられた小林もそれを良くわかつている。反論する者は誰もいなかった。

「IHでは最後まで戦えなかつたからな。今度は絶対に、戦いぬぐぞ」
「……はい」

再びの全国への挑戦となり、特に先のIHで悔しい思いを抱いた者たちの決意は強い。黒木は雪辱を果たすと誓い、光月も彼と同じ思いを同じくした。

「皆。頑張つてね」

「橙乃も引き続きサポートよろしくな」

「今回は勇作さんもいるって話だしな」

「任せて。お兄ちゃんの手綱はしっかり引いておくから」

（妹に制御される兄って一体……）

「だから、国体ではもう悔しい思いをしないように、ね」

「……ああ」

マネージャーとして参加する橙乃もチームメイトに声援を送つた。彼女もサポートする側として苦しい思いを味わい、そして仲間が涙する姿を目にした。

だからこそ今度はそうならないようにと選手達の背中を押す。

小林圭介、黒木安治、中澤秀樹、白瀧要、光月明、神崎勇、橙乃茜、

藤代雄一。以上8名、栃木県代表に選出。

国民体育大会バスケットボール競技

チーム名：栃木県

監督：藤代雄一（大仁多）

コーチ：岡田尚志（盟和）

マネージャー：西條奈々（聖クスノキ）、橙乃茜（大仁多）

#4 小林圭介（大仁多） 3年 PG

#5 橙乃勇作（盟和） 3年 PF

#6 細谷武士（盟和） 3年 PG

#7 ジャン・ディア・ムール（聖クスノキ） 3年 C

#8 中澤秀樹（大仁多） 2年 PG

#9 黒木安治（大仁多） 2年 C

#10 古谷周平（盟和） 2年 SF

#11 楠ロビン（聖クスノキ） 2年 SG

#12 白瀧要（大仁多） 1年 SF

#13 光月明（大仁多） 1年 PF

#14 神崎勇（大仁多） 1年 SG

かつて県大会でしのぎを削ったライバルが、今度はチームメイトとしてコートに立ち、全国の猛者達との戦いに挑んでいく。

日が進み、代表選手達の合同練習日。

合同練習は県大会を制した大仁多高校の体育館で行われる。

そのため大仁多の選手達はいつもよりも少し早めに体育館に集合し、他校の選手達を迎えられるように準備を進めていた。

そして集合時間の十分前。

「ちわーすー！」

「おっ！」

「来たか」

「これでようやく、選拔選手が勢ぞろいですね」

「敵としては厄介だったが味方となれば心強い」

盟和高校、聖クスノキ高校両校の選ばれた選手、関係者が体育館を訪れた。

一瞥しても緊張した様子は誰からもうかがえず凜とした表情で構えている。気迫十分といった印象であった。

「お待ちしていました。歓迎しますよ」

「……白瀧か」

「お久しぶりです。県大会以来ですね」

「ちようどいい。お前には一つ頼みがあったんだ」

「俺に頼み？ 一体何で——」

すると白瀧が側に駆け寄り、競いあった相手を出迎える。

気さくに話しかける相手を見るとまず前に出たのは勇作だった。頼みがあると言つて白瀧を呼び、そして彼の返答が終わる前に、彼の右頬に拳を振り下ろした。

「なっ!？」

「はっ?？」

「おい!？」

突然の暴挙。さすがに白瀧でも無防備の状態では反応する事さえできず、コートに尻もちをつくこととなった。誰もが予想できなかった行動に、全員が目丸くする。

「ちよつ、何ですか!？」 頼みがあると言つたのに!？」

「一発だけ殴らせろ」

「殴ってから言うな！ あんたは本当に何なんだ!？」

勇作が発したのは理不尽なものだった。当然納得できない白瀧は反論を述べるが、その間に盟和の選手達が割つて入る。

「何考えてるんですか！ いきなり何やってんすか!？」

「すまない、許してくれ。こいつアホなんだ!？」

「アホなら直さなければいけないでしょう！ フォローになつてないんですよ!？」

「くそつ。その通りだ!？」

残念ながら仲間のフォローは助けとはならなかった。むしろ怒りを助長させるばかりで解決には至らない。

すると、この問題の元となった勇作が白瀧に向け再び話し始める。

「テメエ、よくも茜を泣かせやがったな」

「ッ！」

それは白瀧自身が今でも悔やんでいる事だった。兄としてなおさら許せることではなかったのだろう。

「これだけは絶対に許せなかったんだ」

「……はい」

そうと分かれば白瀧は反論する気持ちはない。だから責める言葉はすべて受け入れるつもりであった。かつて自分がそれを許せないと行動に走ったのだから当たり前前の事だ。静かに勇作の話に耳を傾ける。

「故に、感情を力に変えられない優しい茜に代わって、俺がお前を殴る！」

「ちよつと待て。やっぱり殴り返させろ」

橙乃の分であるというのならば話は別である。その優しい妹にタコ殴りにされたんだと白瀧は抗議した。が、勇作は聞く耳を持たず、要件が済むとすぐにその場を後にした。

「大丈夫か白瀧？」

「楠先輩……」

倒れる白瀧に、楠が手を伸ばす。

白瀧は少し表情を歪めながら手を借りて立ち上がり、そして彼に問いを投げかけた。

「あなたも、俺の行動を批判しますか？」

全国大会での陽泉戦を観戦したいたという話は聞いていた。だからこそ試合を見てあなたはどう思ったのかと質問する。

「わかっていましたよ。誰かに言われるまでもない。俺がやろうとしていた事は、決して褒められたものではなかった」

自分でもわかっていた。身近な存在を泣かせてしまうようなやり方を実践しようとした時点で、己の行動が決して正しいものではないという事を。

「それでもああするしかなかった。味方が窮地に陥った中、これ以上

絶望を味合わせない為には、戦うしかなかった。少しでも勝利に近づくためならばと」

たとえ責められる方法でも、正しい目的の為ならばと。そう思って彼は戦い抜いた。

「……安心しろ」

「え？」

「きつと俺も、同じことをした」

《もしもお前が俺の立場だったら、俺と同じことをしていただろう？》

「——ああ。そうですね。あなたは、そういう人だった」

しかし楠は彼を責めなかった。だから気に病むなど後輩を諭す。

短いやり取りではあったが、白瀧はかつて戦った時の事を思い返し、やはりこの人は自分と似ているのだなと改めて理解した。

「皆さん、お忙しい中集まっていたいただきありがとうございます。私が栃木県代表の監督を務めることになった藤代です。よろしくお願います。今年は例年と違い、各校から選抜した混成チームとなりました。皆さんすでに合同練習で顔を合わせていると思いますが、やはりチームとしての連携はまだ不十分な点が多いでしょう。個々の力は十分と考える為、まずはその向上が求められます」

全選手がユニフォームに着替え終わると、藤代が選手達を整列させて話し始める。

今年から始まった混成チーム。普段は違うチームで練習している為にそれよりは連携の質は劣る。合同練習で何度か共にプレイしているとは言え、連携の確認は必須課題だ。

「そのためしばらくは試合形式の練習を重視していきます。また、今回のチームでは特にレギュラーを固定するつもりはありません。誰であろうとも調子が良ければ、相手との相性が良ければスタメンとして起用するチャンスを与えるつもりです。そのつもりで練習に励んでください」

「おつ。これはありがたい」

「一人一人の力は十分。競争は激しくなりそうだ」

続く言葉で選手の間で活気がわいた。

やはり県大会を制したために大仁多の選手が多い。その中であらゆる選手にもチャンスが与えられるとなれば、必死になるのも当然の事だった。

大仁多の選手たちは全国に出場したという意地を、他の選手達は今回こそは自分がという思いが強くなる。

「まずは国体の予選からだよな。そういえば、予選っていつからだっけ？」

「あれ。そういえばもう始まる時期なんじゃないっすか？」

「……まさかお前達知らないのか？」

「えっ？」

ふと国体予選の事が脳裏をよぎり、勇作がボソツと呟いた。言われてみればと神崎も同じく疑問を呈する。二人が首をかしげていると、横から小林が助け舟を出した。

「俺たちに予選はない。国体は毎年成年男子・成年女子・少年男子・少年女子の4種類が行われるが、そのうち一つだけは47都道府県すべてが参加する。今年は少年男子、すなわち俺たちは本戦から出場になるんだ」

「そうなのか！」

「知らなかったっす」

「……要項に書いてあったはずなんだが？」

「ああ。やっぱり何処の高校にもいるよな。渡されたプリントを一部しか読まなくて、重要な所を見逃すやつ」

今年は少年男子が本大会からの出場となり地区予選が免除となる。その為本番までの期間に余裕が出来ている。

知らせに記載があったのだが、それを見逃していた者がいた事で、小林や細谷など真面目な面子は頭を悩ませていた。

「ただ、別に良い事ばかりではない。その分登録可能選手は他の種別より少ないし、本戦も後半は一日二試合が組み込まれていたり試合

は厳しいものとなる」

「そうですね。だからこそ、余計に一人一人の奮闘が必要となる。特に日程が進んでいけば……」

そこにはもはや、全国の中でも屈指の実力者しか残っていないのだから。

楽観する者が現れる中、楠と白瀧が気を引き締めさせるよう、真剣な表情で彼らを諭す。

予選がなくなった分、彼らにも負担が課せられたのだ。

だからこそ油断なんてしてはならない。そもそもIHではキセキの世代が所属する高校が世間の評判通り表彰台を独占した。今回も彼らが所属する県が優勝候補に挙げられるだろう。

ならば彼らは挑戦者の立場だ。キセキの世代に挑む、最強の挑戦者になる必要がある。

さらに日が進み、各選手達のプレイにもキレが上がって連携精度も上がってきたころ。

ついに国体のトーナメント表が発表された。

一回戦の相手が明らかになり、より明確な目標が出来て燃え上がる選手が多くなるであろう時期。しかし、栃木県代表の中には暗い空気も流れていた。

「……嘘だろ。よりにもよって、初戦で？」

神崎が珍しく苦笑いを浮かべて呟いた。

あまりにも悪すぎる運命のめぐりあわせだった。

当たるとしてももつとしばらく先であると思っていた。予選がなくなつた以上、下手すれば当たらない可能性もあるのではと考えた。だが、そんな甘い期待はあっさりと裏切られた。

「バスケの神様はよほど俺の事が嫌いらしい」

そして、彼よりもさらに大きな衝撃を受けた選手がいた。

白瀧である。

休憩時間、彼は一人で外に出ると嫌になるほど綺麗な青空をにらみつけた。

「初戦の相手がまさか、神奈川県代表だなんて」

国体一回戦、栃木県対神奈川県。関東勢同士の対決が初戦で繰り広げられる事となる。

「神奈川県代表。つまり」

「キセキの世代の一人、黄瀬涼太か」

「神奈川県に限らず、キセキの世代が所属する県はそのままIH出場校で選手が固められた。神奈川県ならば海常の選手達との全面戦争となる」

「IHベスト8の実力者達。大仁多もベスト8だったわけだから、初戦でIHベスト8まで残った選手達のどちらかが消えるわけだ」

「キツいな。大仁多つて結構くじ運悪いんじゃないやねえの？ IHだつてよくはなかっただろ」

「……俺達の全国デビュー戦、面白い事になりそうですね」

他の面々も緊張と意気揚々の半々という印象であった。

国体は混成チームが多い中、キセキの世代が所属する県は各県を制した高校の選手がそのまま代表として出場する事となった。神奈川県も同じ。その為実質栃木県対海常という形である。

全国8強の強敵が初戦の相手だ。そう簡単にはいかないだろう。難敵との対戦が決まり、各々準備を進めながら気持ち固めていた。「さて、いきなりキセキの世代との激突になったわけだが、指揮官はどうお考えで？」

「あなたに言われると少しくすぐったいですね」

初戦の敵にどう対処するのか、コーチである岡田は藤代に視線を向ける。

「——神奈川県、強いては海常は黄瀬さんを中心に総合力が高い選手が集っています。特に黄瀬さんの力を考えれば、彼の攻略法を見出せない限り勝ち目は薄いでしょう。前半の間に何とか突破口を見出すのが最低条件となります。この試合のキーパーソンはやはり」

「そちらのエースか」

「ええ。因縁の相手でもありませんからね。あとで詳しくミーティングを行いましょう。特に彼からの情報が必要です」

その言葉で会話を締めて、藤代は全体への指導へと戻っていく。

黄瀬は強敵であり白瀧にとつては因縁の相手。かつて彼からレギュラーのポジション、そしてキセキの世代の名前を勝ち取った相手だ。

ならば彼を止めるのは、白瀧しかいないだろう。経験、能力、ポジション、二人の関係。この試合は彼にとつては越えなければならぬ相手となる。それが結果的に栃木県の勝利にもつながると藤代は考えた。

時間が流れるのは早かった。

まずは初戦を乗り越えなければ始まらない。栃木の選手達は打倒海常、打倒神奈川を目標に練習に励んでいく。

徐々に残り期間は少なくなり、気が付けば試合前日の夜。

「おーしっ！ 戻ったぞー！」

会場近くのホテルの一室。神崎と光月はホテルの温泉に浸かって疲れを癒すと、自室へと共に戻っていた。

今回の国体では白瀧、神崎、光月の3人が同じ高校、同じ学年という事で部屋を振り当てられている。

本当は3人で行動を共にしようと思ったのだが、白瀧が一人で考え事をしたいと断ったので、二人で先に温泉に入っていた。長めに湯に浸かって鋭気も養えた。神崎もすっかり本調子になっている。

「おっ？ 大丈夫か要？」

「もう寝てるの？」

返事がない様子を不審に思い、覗き込むと白瀧の姿はなかった。代わりに彼のベッドが膨れ上がっていて、頭まですべて布団の中に被さっているようだ。

「疲れている、のとはまた別か」

「明日は黄瀬との戦いだからね」

仕方がないことかと二人は息を吐く。

一回戦の相手は白瀧にとつては実力、精神どちらを見ても厳しい相手だ。序盤からエース同士の一騎打ちとなるゲームプランを聞かされている。

白瀧と黄瀬の関係は皆聞いていた。これを考慮すれば不安に思うのは仕方がないことだろうと理解できる。

「んー、でもさすがに風呂ぐらいは入つといたほうがいいだろ。そろそろ本格的に寝てしまいそうだし」

「そうだね。一応起こしておこうか」

「おう。おーい、要！ 眠いかもいけないけど、一回起きろー！」

それでもさすがにお風呂ぐらいはすませておくべきだろうと、神崎は勢いよく布団を捲り上げた。

「——えっ?」

だが、そこにあつたのは白瀧が持ってきた鞆と鞆に張り付けられたメモ用紙だけ。白瀧の姿はどこにもなかった。

「ハアツ!」

「えっ、要が消えた!」

突然の失踪に、二人は驚きのあまり声を荒げる。メモ用紙には「少し夜風に当たってくる。明日までには戻る」とだけ記されていた。

同時刻、ホテルから五分程離れた川沿いの高架下。

《あんたに負けるなんて思ってたないっすよ》

「——」

《あんたじゃ俺に勝てないっすよ、白瀧っち》

そこに白瀧はいた。無言のまま膝を抱える形で座り込んでいる。

決戦の前日。白瀧は己の過去に打ちひしがれていた。

——黒子のバスケ NG集——

「テメエ、よくも茜の膝の上で寝やがったな」

「ちよつと待て！ あんたがどうしてそれを知ってんだ!？」

多分橙乃がばらした。

第一百二話 主人公

分かっていった事だった。納得していたはずだった。

帝光中は完全な実力主義。たとえレギュラーに名を連ねる者であろうとも、どれだけチームに貢献した者であろうとも、さらに力があ
る者が現れたとなればより強い者が優先される。

だからこそ俺達だって入部したばかりである一年の時からベンチ
入りを許されていたのだから。

《二年の黄瀬涼太っす。バスケは経験ないけど、これから学んでいく
んでよろしくお願いしますっす!》

故にその逆もまた例外ではない。そして同じポジションにその存
在が現れた以上、続く展開は当然の事であった。

全国に名を轟かせようと、全国を制覇しようとそんな事は関係な
い。ただ勝者だけがチームを背負う事を許される。勝者が全ての世
界。だからこそ帝光は全国の覇者と呼ばれていた。

《ちよつと俺と、勝負してくんないっすか? 白瀧っち》

《白瀧。スタメンの入れ替えだ。背番号8は、今日この時から黄瀬の
ものだ》

それくらい俺だつて受け入れていたはずだった。そして勝負に敗
れた以上、俺が彼らの言動について何か文句を言える立場でもない。
ただ、それでも。それでも俺は――

むにゅっ。

「……むにゅっ?」

何だ? 今までの雰囲気を入れて台無しにするような、変な感触は?
突然の背後からの柔らかい衝撃は経験のないものだった。心当た
りが思いつかず、そつと顔を上げて視線を後ろへと移す。

するとそこにあつたのは大仁多の、今は栃木県選抜マネージャーの
橙乃の姿で。そして彼女が背中から抱きついた為に彼女と体が密着
し、たわわに実った胸部が俺の背中との圧力で変形を――

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」
驚きのあまり、思わず男らしからぬ悲鳴が俺の口から木霊していた。

「なっ。なっ。なあっにつ!？」

慌てふためきながら白瀧は橙乃の拘束を脱出する。すぐさま振り返って突然現れた彼女に要件を尋ねた。本調子ではない、裏返っている声色で。

「ビツクリしたよ」

「いや、ビツクリしてるの俺!」

「いきなりいなくなっただって聞いたから」

「いきなり後ろから抱きついてくるから!」

「大丈夫? 何かあった?」

「まさに今大丈夫じゃない出来事があつただけ!？」

あまり咬み合っていない問答が続く。

未だ心の騒めきが止まらない白瀧に対し、橙乃は何事もなかったかのように落ち着いていた

物腰であつた。

一度冷静になろうと遠ざかろうとする白瀧。しかし、その行動は橙乃が彼の袖を引っ張る事で中断する事を余儀なくされた。

「座つて。何が、あつたの?」

今一度、橙乃は真剣な視線で白瀧に問いかける。

「……はあ。わかった。確かに心の整理をするためには、話した方がいいかもしれない」

「うん。話して」

観念したのだろう。前にも同じような事があつたため、白瀧の抵抗も少なくなっていた。大きく息を吐いて呼吸を整えると、白瀧は落ち着きを取り戻し、橙乃に話し始める。神奈川代表、黄瀬との戦いに当たって彼が抱いていた負の感情を。

「別に何かあったわけじゃない。ただ、明日の試合に対する不安が止まらなかつた。眠れそうにもない、何かをしても集中できない。それをどうにかしようと思ったただけだ」

「不安？　ずっと明日の試合に向けて練習してきたのに？　ミーティングでもきちんとゲームプランをみんなで立てて練習してきたのに」
「そんなの関係ないんだよ」

心からの本音を打ち明けていく白瀧。橙乃はそんな彼をフォローしようとしたが、白瀧は少し語気を強めて彼女の意見を否定する。

「じゃあ聞くけど、橙乃。明日俺が黄瀬に勝つ可能性はどれくらいあると思う？」

そして白瀧は自分と黄瀬、明日激突するエース対決で勝算はどれほどあるのか意見を求めた。橙乃はしばし考え込み、そして彼への信頼も込めて答えを出す。

「……50%くらい？」

相手はキセキの世代、全国に名を轟かせた実力者。ただそれでも栃木のエースならばと、大きめの数字を示した。

「高くて5%程度だ」

「はっ？」

しかし、質問した白瀧はその1/10しか勝率はないだろうと彼女の意見を切り捨てる。弱音と捉えられる彼の言葉に、橙乃は励まそうとしたが白瀧がさらに話を続けた。

「これでも高く見積もってる数字だよ。なにせ、何百戦と挑んで一度も勝てない相手に、0以外の数字を出してるんだ」

「どういう事？　いくら何でもそんなに勝負したわけではないんでしょ？」

「したよ！　毎夜、眠りにつく度に。何度挑んでも、その度に負け続けた！　もう数えるのも馬鹿らしくなるくらい！」

そんなわけないだろうと否定する彼女の発言に、白瀧は言葉を荒げる。

彼の手は震えていた。夜の寒さのせいではない。心の奥からよみがえる恐怖のせいだった。

決して冗談でも過剰表現でもなかったのだ。眠れない夜、繰り返されるフラッシュバック。本当に彼が毎日のように苦悩する事になる原因であるのだから。白瀧は貯まり切った心の内を全て彼女に向けてさらけ出す。

「ゲームプラン通りに事が運ぶとして、俺達の狙う試合展開では第一Qは確実に落とす事になる。下手すれば15点差は離されるだろう。第二Q以降にかけて逆転し、逃げ切る必要がある」

「うん。そこは監督もそれが出来ないと厳しくなるって」

「ああそうだよ。だからこそだ。もし少しでも計画にずれが生じれば栃木は厳しくなる。第1Qで予想以上の大差をつけられる、あるいは逆転したとしても再逆転されるような事が起こったなら、キセキの世代の底力を考慮すれば一気に試合を持っていかれるだろう」

「確かに厳しい展開かもしれない。特に黄瀬君とはあなたが戦うのだから心配に思うのは仕方がないと思うけど」

「……嫌な予感があるんだ。もしも黄瀬と戦い、試合に敗れるような事があれば——おそらく、俺はもう二度と立ち直れなくなる」

「えっ?」

指揮官と立てた試合計画は、どこか一つでも流れに異変が起きれば致命傷になりかねない。そしてキセキの世代は常に予想以上の進化を遂げてきた。彼らが誇る才能は底知れない。

その黄瀬と戦う白瀧は『もしも黄瀬に敗れるような事になれば再起不能に陥るだろう』。そんな直感が働き、結果として彼の恐怖をより強く鮮明に呼び起こしていた。

そして——今まで抱え込んでいたものすべてが、堰を切ったようにあふれ出す。

「わかってるよ。俺だってわかってる。俺はエースとしてチームの命運を託されるんだ。だからこそ誰よりも勝利を信じなければならぬ。今までの試合だって仲間達に信じろって言って鼓舞してきたんだ。わかっているはずなのに、他でもない俺が勝利を信じられない。本当に馬鹿げている話だ。勝ちたいと願う程、勝つ方法を考える程、勝とうと努力する程、余計に勝てないと思うようになるなんて!」

だって仕方がないだろう？ 俺がずっと頑張つて、ようやく身に着けた技術も、結局やつの目の前では殆どを倍返しで見せつけられた。俺がやってきた事をあいつは出来て当然みたいにあっさりと越えて行つたんだ！ 俺よりもずっと高い完成度の天才ぶりで！ ……何なんだよ模倣コピーつて。何も俺だけに限つた話じゃない。選手は皆時間を費やして、思いを込めて集中して、ようやく自分の物にしてきたつていうのに。あいつはそれをただ見ただけで完全に真似をする。まるで努力する事の意味を完全に否定されているようだったよ。別に誰かに努力を認められたく頑張つてきたわけじゃない。少しでも強くなれる様にと考えたからずっと続けてきたんだ。それでも、眼前であんなにあっさりと見せつけられて、何も思わないわけがなかった。だってこれじゃあ努力している奴がバカみたいじゃないか！ まだあいつが長年バスケットをやってきたというなら納得もできただろうさ。でもあいつは中二からバスケットを始めたんだぞ？ それなのにやつは何十倍、何百倍とバスケットをやってきた選手達を一瞬で抜き去つていった。悔しかった。何とかしたかった。でもそれ以上にこんな化け物をどうやって止めればいいんだって思いが強くなってしまふ。勝てないんじゃないかって思つてしまふ。明日の試合だつてそうだ。別に勝ちたくないだなんて思つてない。勝ちたいさ。今まで何度も黄瀬に勝とうと必死に対抗策を練つてきたんだ。考えうる限り最善の提案が出来たと思つてる。でもあいつはいつも俺の先を行つてきた。俺のライバルも、立ち位置も、誇りも、全て手にしていった。そして明日もまた俺は皆失つてしまふんじゃないかって考えてしまふ。わかるか？ 戦うのが怖いんだよ。戦いたくないんだよ！ 勝ちたいのに勝つ姿が思い描けない。次第に余計な考えが生まれてくる。――何度も夢を見るために考えた。どうして、どうしてあいつなんだ！ どうして俺じゃない!? どうして俺はあいつ程強くなれないんだ！ 俺達の努力なんて歯牙にもかけない進化する天才に！ どうして勝てるだなんて信じられるつて言うんだよ!？」

胸中に渦巻いていたのは怒りや焦り、嫉妬、悔しさといった負の連鎖だった。それらを涙交じりに吐き出して、白瀧は荒い息をつく。

白瀧とて勝利への渴望は当然あった。ただ、試合が近づけば近づくほど彼の心に巣くう闇が精神をむしばんでいく。絶望した時から多くの時間、そして体験を経て酷く歪になった感情になり果てていた。全てを言い終わって、白瀧は我ながら酷い男だ自己嫌悪する。勝手にいなくなつて、勝手に自己弁護の声を上げて、それでもまだ心が晴れる事はない。ため込んだものを吐き出したはずなのに気が楽になるどころか己の浅はかさを自覚しただけだ。

加えて先にも傷つけてしまったばかりの相手の事を、頼ってしまった相手の事さえも気にかけれない程の心の弱さが心底嫌になった。自分でさえ弁明のしようがないくらい的情けなさだと思う。これではそんな声を聞いた橙乃は尚の事、

「——大丈夫。あなたは、戦える。あなたは、勝てる」

否。それでも彼女が、橙乃が白瀧を見放す事はなかった。

「……なんで。今の話、聞いてただらう？」

「だって、あなたが昔もう一度立ち上がった時だって、勝てると思ったからではなかったんでしよう？ あなたは自分の為に戦えるような強い人ではないかもしれないけれど、誰かの為に戦える優しい人だから」

「ッ」

何故だ。あれだけ自分勝手に負の感情を曝け出したというのに、どうしてまだ見放さないのか。

「……戦えた、として。それで勝てると言い切れるか？ 今まで一度も勝てなかった俺が、ずっと進化し続ける天才に？」

「うん。あなたは勝てる。白瀧君が黄瀬君に負けるわけがない。……知ってる？ 私が好きなのはお約束展開なの。鉄板とかご都合主義みたいとか言われる、主人公が最後に大団円を迎えるようなハッピーエンドが好き」

「はあ？ 何の話をしてる？」

「敗北を味わって、怪我をして、でもバスケットを諦められないって思い悩んで泣き叫んだ。そうして今ここに居るのは誰？ そんな白瀧君が物語の主人公じゃないなかったら嘘でしょう？ だからあなたは絶

対に負けない。主人公が因縁のライバルに負けることなんてないんだから」

橙乃の言葉は全てがきれいだ。

白瀧にとつて都合のよい解釈を取る甘い密。そんなものにすがつたところで何かが変わるわけではない。

それくらいはわかっている。

それなのに。

——ああ、駄目だ。どうも口論で彼女を上回れる気がしない。

勝利を信じて疑わない彼女の言葉が白瀧の心を震わせた。

やはり彼は誰かの想いに応えたいと願う人だった。

「……面白いことを言うな。たしかに主人公が負けてしまったら締めが悪くなるか」

「うん。だからあなたの勝利を信じて応援している」

「考え通りに行くとは限らない。努力が無駄になるかもしれない」

「でも実らないとも限らない」

「ああ、その通りだ」

信じている人の前でその信頼を裏切ることなんてできるわけがない。

「それじゃあ、主人公はその期待通り勝利をヒロインに届けるとするか」

(だから、橙乃。俺は今ここで誓うよ)

——必ず勝つ。黄瀬に勝って、俺は今度こそ過去を乗り越えよう。よう。

そして翌日。決戦の日が訪れた。

国体一回戦、集結した少年男子の代表である47都道府県のうち多くの県が初戦を行う。

I Hと同様に各県の代表とあつてレベルの高い選手が集つた。どの試合もどちらが勝つてもおかしくない接戦が繰り広げられる。

——その中でも、やはりキセキの世代が所属する県は相手を圧倒していた。

「マッ、スルウウウウ!!!」

「ごめんなさいね」

「無駄だよー」

京都府代表対長野県代表。京都府はIHを制した洛山の選手達が多分代表として選考され、前評判通り長野県の選手達を打ちのめす。

無冠の五将と呼ばれる根武谷、実渕、葉山の三人が個人技で圧倒。皆二十得点以上を記録し、98対43というダブルスコアの大勝を収めた。

「よくやった。行くぞ、すぐに引き上げだ」

この試合でも赤司の出場時間は無し。まだ彼は高校に入ってから公式試合で一度もプレイしていない。それでも彼が所属する高校王者・洛山高校は無敵であった。

「どっせーいー!」

「すみません!」

「あらら。入ってもうたわ」

そしてさらにもう一つ。キセキの世代が属する県で同じ時間帯に行われていた県があった。

東京都である。

こちらでもIH準優勝した桐皇学園の選手達が試合に臨む。

若松、桜井、今吉の三人を得点源に、前半から猛攻を仕掛けた。

「——知ってますよ。そう来ると思っていましたから」

オフエンスだけではない。ディフェンスでもマネージャーである桃井が活躍。彼女の選手成長予測により、相手選手の動きを先読みし、攻撃を封殺する。

香川県代表を攻守で圧倒し、104対57の100点ゲームで勝利。二回戦へと駒を進めた。

「ちっ。つまらねえ」

試合が終わり、悪態をついたのは東京都のエース、青峰だ。

彼も赤司と同様にこの試合には出場する事はなかった。最後までベンチに座り、そのままコートを後にする。

I Hで優秀な成績を残した強豪達。彼らはまだ余力を残したまま、一足早く先のステージへと昇っていく。

「皆さん、時間です。行きますよ」

「よしっ。全員準備はいいな！ 勝ってこい！」

さらに息をつく間もなく、次の激闘が始まる。

おそらくは国体初戦の中で最も注目を集める試合。

栃木県対神奈川県。

I Hでベスト8に残った選手達が集う。加えてどちらもキセキの世代に敗れての8強だ。本来はさらにもっと勝ち残っていたかもしれない。

その為か、観客席である者がこう呟いた。

「キセキに敗れたキセキ」、同じ境遇の者たちがしのぎを削ると。

「来た！ 一回戦の中でも屈指の好カードが始まるぞ！」

「エース白瀧を含め、大仁多高校を中心に集められた混成チーム、栃木県代表！」

「対するは海常高校から全員選抜。スコアラー黄瀬を始め万能選手が揃う、神奈川県代表！」

「決勝戦でもおかしくない組み合わせだ。どうなっちゃうんだ、この試合?！」

国体一回戦、栃木県対神奈川県。

両県代表の選手がコート入りする。

初戦でありながら観客席から響く声は相当なものであった。

「始まるか。これはただの代表戦ではない。涼太と要、かつてはレギュラーを争った者たちの再戦でもある」

「正直、分があるのはどちらかと言えば総合力で勝る黄瀬の方だ。ただ……」

(白ちゃん、キーちゃん……)

観客席の中にはすでに二回戦進出を決めている赤司や青峰、桃井の姿もある。

赤司は変わらず冷静に選手達を見つめ、青峰は複雑そうに眼を細め、桃井は心苦しそうに息を吐いた。

帝光の選手達にとって二人のエースの勝敗はそれだけ関心のあるものだ。これから対戦する、しないは関係ない。キセキの世代の中で最も因縁深いであろうこの戦いがどのような結末を迎えるのか。彼らの過去を知る者たちは目を離せなかった。

様々な思いが渦巻く中、時間は止まることなく流れていき、いよいよ試合が開始する時となった。

「相手は全国の雄・神奈川県。しかし恐れる事はありません。皆さんの力は彼らにも匹敵する。それをここで示しましょう！」

「厳しい戦いになるだろうが、気後れはするな。お前達の力を発揮すれば必ず勝てる！ 栃木代表の力を見せつけてやれ！」

『はい！』

藤代と岡田。二人の指導者が声に力を籠め、選手に飛ばす。その声に負けないようにと選手達は声を返し、最後に整列の前に選手達が円陣を組む。全員が集結した事を確認し、主将・小林が活を入れた。

「俺たちは元々は敵同士だった。ここににいる者の中には思うところがある者もいるだろう。——だが、今はお互いを信じ、背中を預けろ！ 敵は全国ベスト8の強豪だ、相手にとって不足はない！ 俺達が競い、戦ったその力を全国に轟かせるんだ！ 行くぞ！ 栃木——ファイツ！」

『オオーツー！』

いつもとは異なる面子、元々のライバル達へ向けて小林が叫ぶ。彼に続いて五人の選手が入場。決戦の舞台へ向かっていった。

「オールスター、そんなものは関係ない。うちがうちだ。いつも通りやれば問題ない。勝てるだけの練習をお前たちはしてきた！ 行けっ！」

『おうっ！』

対する神奈川県代表は監督の武内が厳しい顔つきで選手達を鼓舞する。

皆見知った面子とあつて息もぴったり合っていた。そしてこちらも笠原を中心に選手が集まり、試合開始前に最後の気合い入れを行う。

「監督の言う通りだ。混成チームが相手であろうと、俺達の実力が劣っているなんて事はねえ。いつも通りに叩き潰すだけだ。行くぞ！ 神奈川県、ファイ！」

『オウっ！』

I Hと同じ、海常のレギュラーが笠原を先頭にコート入りした。気迫は十分。あとは試合で決着をつけるのみ。

「それではこれより、一回戦第八試合。栃木県対神奈川県の試合を始めます」

「礼！」

『よろしくお願いします！』

栃木県 スターティングメンバー

#4 小林圭介 (三年) PG 188 cm

#5 橙乃勇作 (三年) PF 189 cm

#7 ジャン・ディア・ムール (三年) C 204 cm

#11 楠ロビン (二年) SG 190 cm

#12 白瀧要 (一年) SF 179 cm

神奈川県 スターティングメンバー

#4 笠松幸男 (三年) PG 178 cm

#5 森山由孝 (三年) SG 181 cm

#7 黄瀬涼太 (一年) SF 189 cm

#8 小堀浩志 (三年) C 192 cm

#10 早川光洋 (二年) PF 185 cm

神奈川県はI Hと同じ選手が並ぶ中、栃木県は様変わりした編成が組まれていた。

「えっ？ 神奈川県はいつも通りだけど、栃木県は大仁多の選手が二人だけ？」

「後は知らない選手だな」

「この5人は栃木県予選でベスト5を獲得した人たちです。一応予想の一つとして考えてはいたものですね」

「ふーん。つまり、混成チームらしく個人技重視で固めたってわけやな」

栃木を制した大仁多の選手が少ないことで、疑問に思う観客は多かった。特にI・Hで活躍した光月もベンチスタートというのが驚きだったのだろう。

情報を持っていた桃井だけはあまり驚いた様子はなくチームメイトに説明をしていたが。

「――悪手やる。神奈川、黄瀬君を相手にこの布陣は」

彼女の発言を聞いた今吉は、栃木の取る戦術は自分たちを追い込むだけだと批判する。

「勝たせてもらうぞ、黄瀬」

「ん？ ずいぶんと好戦的じゃないっすか、白瀧っち。でもそうはさせないっす。俺にだって負けられない理由があるんで。悪いけど――またあんたを倒す」

「……俺も同じだ。そして、今度こそ俺がお前を倒す」

白瀧と黄瀬、両校のエースがさっそく火花を散らした。白瀧は昨夜こそ不安げな素振りがあつたが、今はそれが考えられない程凜とした表情で。迎え撃つ黄瀬も戦意が高まった様相でいる。

二人ともI・Hの敗戦を経て余計に背負うものが増えたのだろう。最後まで互いの想いをぶつけて、そして言葉を交える時は終了。今度は戦いで語る時間となった。

「試合開始！」
ティップオフ

栃木県のジャンパーはジャン、神奈川県は小堀だ。どちらも精一杯ボールへ向けて手を伸ばす。

「モラッター！」

「うっ！」

（さすがに、高い！）

背丈で勝るジャンがジャンプボールを制した。ボールは楠が確保

し、まずは栃木が攻撃を開始する。

「ナイス！」

「よしっ！」

「——行くぞ」

ここからの攻撃は速かった。

ボールを手にした楠は即座に行動を開始する。白瀧に勝るとも劣らないドリブルで神奈川へと襲い掛かった。

(ツ!? こいつ!)

(ドリブル速え!)

「止めろ！」

鋭い切り返しとスピードだった。途中でボールを奪う事は敵わず、神奈川は何とかブロックで止めようとマークにつく。

しかし試合開始直後の奇襲とあって、対応は後手に回ってしまった。いた。

(マークは散漫)

「ならば！」

「やはり最初はお前だ！」

完全に神奈川が体勢を立て直す前に栃木は動いた。

楠が敵味方の動向を確認すると、右サイドを走る小林へバウンドパス。さらに小林が素早く後ろへとボールを回し、白瀧の手に渡った。

「させねえっすよ！」

「いいや！ 先も言ったはずだ。俺が、勝つ！」

他の味方の動き出しが悪かった中、黄瀬は完全に白瀧をマークしていた。スピードに優れる白瀧を振り切らせない。

さけれど、勢いがついたクロスオーバーは黄瀬でも反応する事は難しかった。

白瀧が得意の切り返しで黄瀬のマークを突破する事に成功する。

「ッ！ こんのっ！」

それでも身体能力に優れる黄瀬だ。すぐに白瀧を止めようと意識を切り替える。

すると白瀧がブロックさせまいと、フリースローライン近くで跳

躍。黄瀬が戻り切るよりも早くレイアップシュートを放った。

「おおっ!？」

(ティアドロップか!)

高い弧を描くこの軌道は、白瀧の得意技であるティアドロップだ。一度抜かれた黄瀬はもちろん、他の選手もヘルプが間に合わない。

(栃木) 2対0 (神奈川)

試合開始からわずか8秒。早々に白瀧が先制のシュートを沈めた。

「先制は栃木!」

「いきなりエースが決めた!」

いきなり試合が動いて観客席も湧きあがる。特に得点が期待される選手が決めたという事でこの先の期待度も大きく上昇した。

「あっちゃー。さすがっスね」

「当たり前だろう。俺は勝つために来たんだ。あの時と同じだと思うなよ」

「ふーん。まあ——それなら俺も全力でやらせてもらおうっス」

得点を決めた白瀧は、軽口を叩く黄瀬に淡々と告げる。目つきからも彼の勝利に対する執念がうかがえる程の熱がこもっていた。無駄話はいらない、ただ倒すという意味表示だろう。

その熱に当てられて、黄瀬も一段階力を入れようと集中力を高めた。

「キャプテン!」

「あ? 何だよ?」

「悪いっスけど、俺も一発いいっスか?」

「……ああ。どうやら向こうもそれをお望みのようだ。なら、お返しは早めにしておけ」

黄瀬が笠松に次のオフENSEを任せてくれと頭を下げる。笠松も二人の因縁を少なからず聞いていた上に、先の攻撃もあってこの提案を了承した。

神奈川の反撃が始まる。

笠松、森山の二人がボールを運ぶ。

栃木のディフェンスはマンツーマン。笠松に小林、森山に楠、黄瀬

には白瀧、早川に勇作、小堀にジャンと同ポジションの選手がマークについた。

笠松はゆつくりとボールをキープし続け機会を待ち、そしてその時が来ると一気に動き出した。

「行かせてもらおうぜ！」

「ッ！」

笠松が全速力のドライブで小林の横を突破する。中央へ侵入するとこれによりできた一瞬の隙を見逃さなかった。

ヘルプに捕まる前にすぐにパスアウト。外の森山へボールを回し、森山もすぐに近くに駆け込んだ黄瀬へと攻撃を託した。

「こっちもお返しするっスよ！」

「ッ!?!」

(来るのか!)

力強い叫びと共に、黄瀬の体が大きく沈む。

黄瀬のクロスオーバー。一瞬で切り返すとマークにつく白瀧の横へ切り込んだ。

「なっ、めるな！」

だが白瀧はスピードに長ける選手だ。そう簡単に突破は許さず、黄瀬の横を並走する。

「いや、もらうっスよ！」

突破は出来ない。それでも黄瀬はお構いなしと言わんばかりであった。

白瀧のマークが残る中、黄瀬はフリースローラインの手前で跳び、山なりにボールを放り投げる。

「ぐッ!?!」

「まさかこれは、さっき白瀧が見せていたティアドロップ!?!」

(本当に、見たばかりの技を——!)

高い軌道には白瀧のブロックも届かない。

先ほど自軍のエースが見せた技を相手がすぐさま披露した事により栃木の選手達が驚く中、黄瀬が撃ったシュートがリングを射貫く。

(栃木) 2対2 (神奈川)

幸先よく先制した栃木であったが、神奈川もすぐに同点に追いついた。しかも、相手に多大なプレッシャーを与える形で。

「これが、黄瀬の模倣か！」

「本当に白瀧と同じ技を同等のレベルで決めやがった！」

「……同等？ 本気ですか？ 冗談でしょう？」

「えっ？」

ベンチでも選手が皆騒然とした。相手の能力は知っていたが、眼前でみた事でさらにその脅威が明白に映る。

ただ、そんな彼らよりも藤代が抱いた感情は強いものだった。

「同等なんてレベルじゃない。高さ、シュートタッチ、ボディバランス。技の完成度が黄瀬さんの方が上だ。あれはもはや——オリジナル原点を超えた、天才」

同じシュートでもその熟練度で優れていたのが、真似したはずの黄瀬の方だったからだ。

技の持ち主よりさらに勝った力を発揮する天才。

事前に選手から話を聞いてわかっている、常識を容易に上回る存在を目にし、藤代の冷や汗は止まらなかった。

「勘違いしないで欲しいっす。確かに白瀧っちのバスケットに対する情熱とか、絶対にやるんだって覚悟は認めてる。だけど……」

黄瀬は自分に向かってくる相手に敬意を示しながらも、一度言葉を区切ると残酷な真実を告げる。

「あんたに負けるだなんて思っていない」

「ッ！」

「あんたじゃ俺に勝てないっすよ、白瀧っち」

「黄瀬テメエエツ!!!」

——ただの思いや信念では才能は越えられない。

冷たい視線が白瀧を射貫いた。

まるで過去の再現であるかのようなプレー、言葉の連続で。白瀧は怒りに染まった咆哮を上げた。

——黒子のバスケ NG集——

「……むにゅ？」

何だ？ 今までの雰囲気全てを台無しにするような、変な感触は？
突然の背後からの柔らかい衝撃は経験のないものだった。心当たりが思いつかず、そつと顔を上げて視線を後ろへと移す。

するとそこにあつたのは大仁多の、今は栃木県選抜マネージャーの
橙乃が二つのゴムボールを俺の背中に当てている姿で。

「かわいい女の子だと思った？ 残念——」

「裏切ったな！ 俺の気持ちを裏切ったな！」

「えっ」

「返せよ！ 純粋な少年の期待を！ 返せよ！」

「よくわからないけどごめん」

期待してたんかい。

第百三話 進化する天才

「ツ！ 黄瀬テメエツ!!!」

黄瀬の挑発を受け、白瀧が叫ぶ。

今にも飛び掛かりそうな激情が籠った声色だった。開始直後にかつての厳しい思い出を再現させられたのだ。無理もないことだろうと誰もが考える。

——されど体ではこれだけ強い反応を見せても、白瀧の頭は冷静さを保っていた。

攻撃に成功した神奈川の選手達が速攻に対処するために自陣に戻ってから、白瀧は栃木ベンチに向けてハンドサインを飛ばす。

「……橙乃さん」

「はい。続行、問題なし、です」

「そうですか。よかったです。黄瀬さんが予想通りに予想を超えてきたのでどうなるかと思いましたが。彼が無事ならばタイムアウトは問題なさそうですね」

藤代が橙乃に聞くと、白瀧は試合前と変わりないと報告した。

それならよいと藤代は息をこぼす。もしも彼が苦しい様子ならば一度試合を止めようかとも考えていたが、その必要はないと判断したのだ。

「では橙乃さん、ここから先は」

「わかりました。西條先輩、しばらく記録の方などお願いします」

「ええ。こっちは任せて」

「お願いします。私は見る事に専念します」

ならばと栃木は作戦を続行する。監督の指示により、橙乃は集中力を高めてコートへと視線を戻した。ワンプレーも見逃さないと神経を注ぐ。彼女の視線の先には海常の強いては神奈川のエース、黄瀬の姿があった。

黄瀬がいきなり見せつけた彼の力、模倣。彼はどんな技であろうとも、たとえ今見たばかりの技であろうともそっくりそのまま見舞いする。

例外はキセキの世代のように真似する事が困難な選手のプレーくらいだ。そうでなければ黄瀬は相手よりもさらに高い威力でお返しする。相手が自分の技を自分よりも上回るレベルで繰り出す為に、対戦相手が受ける精神的ダメージは大きなものとなる。

これを攻略するためには黄瀬が真似できない技を見せるか、純粋に基礎能力で上回るくらいしかないのだが。

——相手はキセキの世代。全国最強の一角。そのように単純な話ではなかった。

「全国デビューだ。遠慮なくやらせてもらおうぜ！」

「んがっ!？」

ゴール下、勇作がパワードリブルで早川を押し込んでいく。

強引な攻めに早川も堪えようと力を籠めるも、勇作はタイミングをうかがってロールターンから即シュート。早川の指先を超えてシュートを沈めた。

「ああっ!？」

一対一の仕掛けならば負けないと、初の全国とは感じさせない動き。序盤から栃木は攻める姿勢を見せていく。

(8番^{小堀}。ポジション取りも含め、ディフェンス厄介だな)

「ナラー!？」

「よしっ!？」

彼だけではない。ジャンがインサイドでディフェンスを引き付けると、外へパスアウト。走り込む楠へとボールを回した。

パスを受けた楠が森山のブロックを受けながらシュートを放つ。普通のシュートよりも早いタイミングで放たれたボールは、相手のブロックを寄せ付けなかった。

(くそっ! シュートモーションが早い!)

森山が後ろを振り返った先で、楠のスリーがリングを潜り抜けていく。

全国でも名の知れた神奈川を相手に、栃木の個人技に優れた選手達
が、それぞれの武器を活かして活躍していた。

「させないっすよー！」

「ッー！」

対する神奈川もやられてばかりであるはずがない。

黄瀬が白瀧のレイアップシュートを叩き落とすと、ボールを拾って
反撃に移る。笠松から始まった速攻。栃木は笠松に小林が当たると
彼の切り込みを防ぎ、シュートも指先で触れて一次速攻を防いだ。

(さすがブロックの高さもありやがる！)

「だが、リバウンドならうちには奴がいるんだよ！」

攻撃を防がれた笠松だが焦りはない。神奈川のインサイドにはリ
バウンドならば全国でも随一の男、早川がいるのだから。

「んがああああー！」

「ぐっー！」

(こいつー！ 抑えていたのに！)

(クソッ。オフエンスリバウンド！)

勇作、ジャンという栃木の屈強な男達とのリバウンド争いを制した
早川。着地すると、同じくリバウンドを確保しようと近くにいた黄瀬
へとパスをさばく。

ゴールに近い位置から黄瀬はピボットによる方向転換をした。白
瀧をかわしてゴールに正面を向いて跳躍し、右腕を大きく振りかざ
す。

(今度はジャンのピボットターンからのワンハンドダンク!?)

「このっー！」

「舐メルナー！」

これも先ほどジャンが見せていた一連の流れだった。

見せたばかりのプレイだ。そう簡単にダンクなんてさせるものか
と、勇作とジャンが再び跳ぶ。

そして長身二人のブロックを吹き飛ばす黄瀬のダンクシュートが
ゴールを揺らした。

「なっ!?!」

「馬鹿ナ！」

二枚のブロックをもつしめない。技術だけではない。パワーも元々シュートを放ったジャンよりも強いものだった。

「……あかなあ栃木。今のところは五分五分かもしれないが、そろそろキツくなるやろ」

「栃木の選手達は個人技で得点を重ねていますが、その個人技を見せれば見せる程きーちゃん——黄瀬君に吸収されていきます。このままではジリ貧でしょう。加えて、インサイドも栃木は7番こそ圧倒しています、他の二人は神奈川の方がリバウンド争いでも活躍します」

「特に神奈川は10番がな。あいつは俺達の時もリバウンドで荒稼ぎしやがった」

ここまでの第1Qの流れを見て、厳しいのは栃木の方だろうと呟いたのは今吉だ。桃井や若松も同じ考えのようで彼の意見に同調する。

栃木、神奈川はどちらもマンツーマンで同じポジションの選手が相手をする形となっている。現状は高さのある小林が笠松からゴール下へのボールの供給を難しくしているおかげである程度神奈川の攻撃パターンを限られている状況だ。

しかしリバウンドを得意とする早川が存在が厄介だった。多少攻撃が厳しくてもシュートを撃てば彼で立て直す事が出来る。加えて一対一の攻撃が主になっている栃木は、次々と黄瀬に模倣されていく。白瀧以外の選手も例外ではなかった。

「だが、さすがにそのまま見過ごすような監督ではないだろう」

確かにこのままの流れでは第1Qは神奈川が制する可能性が高い。ならばここで動くだろうという赤司の読みが当たった。

序盤から4点のリードを許す栃木がこの試合初めてのタイムアウトを取る。一度選手達の熱くなりすぎた熱を冷やし、作戦の練り直しを図る。特にこの試合のように選手が一対一のオフエンスが多く、単調になりがちな試合展開ならばなおさらだ。

作戦会議の一分が経過。

選手達が再びコートに戻り、栃木の攻撃から試合が再開される。

さすがにここからはワンマンプレーは減る。そう観客は思っていた。すると彼らの予想を裏切るように、パスを受けた白瀧が果敢に切り込んでいく。

「なっ!?!」

「白瀧?」

「また黄瀬に真っ向勝負を挑んだ!?!」

腕の振りのフェイクを交えて黄瀬を揺さぶると、斜め45度の位置から敵陣を切り裂くようなドリブルを見せた。

慎重に試合を作り直すと考えていた観客は驚きの声を上げる。

「俺は必ず勝つ!」

そんな中、白瀧は止まらない。さらに前進し、黄瀬が追いついた直後高速のバックロールターン。もう一度マークを振り切ってレイアップシュートを沈めた。

「決めた。が……」

「あのバカ。まさか黄瀬との試合って事でヤケになりやがったのか?」

得点こそ上げたものの、再開直後の白瀧のワンマンプレーと映る光景に、青峰が舌打ちする。

ただ闇雲に挑むだけでは駄目だ。何かしら對抗策を打たなければ倍返しを受ける。これはこの試合でも明らかになっている事なのだから彼とてわかってはいるはず。それでもまだ黄瀬に一人で挑んでいく白瀧の行動は、青峰の目には無謀な挑戦に見えた。

「らしくねえな、小林」

対戦相手も同じ考えなのだろう。ボールを運ぶ笠松はドリブルを続けながら、対面する小林に告げる。

「確かに仕方ねえ事なんだろうな。普段のチームと違って、敵だった選手も集めた混成チームとなれば選手間のコンビネーションもまだまだだ。どうしても連携に穴が出るだろうから各々が得意のプレーをした方が良い結果になるって考えか? だがな——」

「ッ!」

そこで笠松は言葉を区切り、大きく切り返した。

(やはり速い！ しかし——!?)

全国でも屈指のドリブルスピードを誇る笠松だ。すさまじい動きであった。

侵入させるものかと小林がついていこうとするも、進行先で森山がスクリーンを仕掛ける。

(スクリーン！)

「スイッチー！」

「任せろ！」

奇襲を受けたものの、勝負慣れしているだけあって栃木の対応も速かった。即座にマークが入れ替わり楠が笠松を追う。

「かかったな！」

「ッ!？」

「悪いな」

(最強の選手達を集めたチームが最強とは限らねえ！)

直後、スクリーナーであつた森山が外へポップアウト。フリーの状態でスリーポイントラインの外へ出た。

(ピック&ポップ！)

「くそっ！」

小林は全力で駆け出した。長身を生かしたブロックを試みるも、森山は独特なシュートフォーム、回転の悪いシュートを放つ変則シューターだ。タイミングを乱されてしまい、彼のスリーが炸裂する。

(どうしてこのシュートが入るんだ!?)

上手いとは言い難いシュートだ。だが三点という大きな成果を生み出した。全国に何度も出場している小林でさえ、このようなシュートは見た事ないと目を疑う。

笠松と森山、綺麗な連携を見せる神奈川。個人技で挑む栃木とは対照的な得点の場面であつた。

「決まった！ 黄瀬だけじゃない。今度は連携で得点した！」

「いいぞ、森山。ナイツシュ！」

観客席と神奈川ベンチが得点に湧き上がる。

士気が高いのも神奈川であった。先制こそ栃木に許したものの、その後は神奈川がリードを保ったまま第1Qを戦い抜いている。エース黄瀬を主体に選手が活き活きとプレイしており、試合を優位に進めていた。

「これで決めるっスよ！」

「このっ！」

そして残り時間10秒。おそらくは第1Qのラストプレイとなるであろう時間帯。

ボールを持ったのは黄瀬だ。小堀からパスをもらうと、シュートフェイクを交えてインサイドへ切り込んだ。

鋭いキレのクロスオーバーで切り返すドライブ。白瀧は突破こそ許さないが、ボールを奪う事は出来なかった。黄瀬はゴールに直進し、そのままダンクを狙う。

「させるか！」

得点は許さないと白瀧の懸命なブロックがシュートコースを塞いだ。

「邪魔っス！」

「ぐうっ！」

しかし、勇作の動きよりもさらに威力が高まったダンクは白瀧を容易に吹き飛ばす。

第1Q終了のブザーと同時に黄瀬のダンクシュートが炸裂した。

「ブザービーター！ 黄瀬が最後にもう一本決めた！」

「強いぞ神奈川！ あの栃木を圧倒にしている！」

「これは早くも試合が決まったか!? エース対決、黄瀬が圧巻すぎる！」

最後の派手なプレーはこの第1Qを象徴するかのようで、この試合始まって一段と大きな歓声上がる。

第1Qが終了し、(栃木)15対25(神奈川)。得点差は10点。試合が進むにつれて得点差は大きくなっていった。

白瀧と黄瀬、両校のエース対決の勝敗がそのままチームの得点に現れている内容だ。

この時点ですでに黄瀬は12得点を挙げていた。一方の白瀧は6得点と黄瀬に二倍の数字を離されている。

黄瀬のダンクにより蹴散らされた白瀧はいまだに立ち上がれず、コートに視線を落としていた。彼の苦しい現状を表しているようだった。

「悪いっスね。もうこの試合はもらったっス」

「……何だと?」

すると、そんな白瀧に対して得点を決めた黄瀬が淡々と告げる。

「確かに中学の時より白瀧つちの技術は上がってる。けど俺はそれをすぐに倍返しできる。加えて、俺の方が基本性能スベックが上だ。……紫原つちの時のようにはさせないっスよ。白瀧つちに勝機はない。悪いけどこれが才能の差つてやつっス」

まさに昨晩に白瀧が不安視していた事をそのまま口にされているようだった。

黄瀬に悪気はない。ただ彼が考える正論を告げている。だからであらうか、白瀧も言葉を返す事はなく再びその場で俯いた。

「白瀧」

「残念だったな小林。悪いがもうこの試合、白瀧の出番はねえよ。うちのエースの勝ちだ」

そんな白瀧を気遣おうと歩み寄る小林に、笠松が意気揚々と語る。

笠松もこの時に勝利を確信していた。これだけ互いの最強選手の間には差があるとすれば、神奈川の勝ち揺るがない。相手の戦意をへし折るように告げ、ベンチに引き上げていく。

「おい白瀧。この試合のお前の出番はもうないそうぞ」

「……そうですか」

敵の主将に告げられて——小林と白瀧は不敵な笑みを浮かべた。

「どうでしたか、橙乃さん」

「はい。やはり事前に話していた通りでした」

「そうですか。ならば——決まりですね。第二Qからは反撃と行きましょう」

そして栃木ベンチでも似たような反応が起きている。

藤代はここまで試合を見ていた橙乃に問うと、彼女が観察していた選手——黄瀬の動きが試合開始前に考えていたものと同じであったと結論づけた。

すると藤代もいつも通りに笑う。

まだ試合の行方は決まっていない、ここからが栃木の本領発揮だと、そう語っているようだった。

——黒子のバスケ NG集——

「おい白瀧。この試合のお前の出番はもうないそうぞ」

「……そうですか」

敵の主将に告げられて——小林と白瀧は不敵な笑みを浮かべた。

《相手が自分から負けフラグを立ててきた！》

そういう事を言うのはやめなさい。

第四百四話 必勝の信念、周到なる計画、渾身の努力

「よおーし、お前ら良い調子だぞ！ よくやった皆！」

神奈川の監督である武内が上機嫌で五人を出迎えた。満面の笑みを浮かべて手を叩く素振りはあまり見られない光景だ。それだけこの試合を優位に運んでいる事を喜んでいるのだろう。相手が強豪という事もあつてご機嫌な様子であった。

「白瀧を抑えて第1Qで10点差つけたんだ。これなら……」

「そつスね。白瀧うちには悪いっスけど、IHでの借りを返しに来たんだからこんな所で苦戦してなんていられないっスよ。このまま試合を決めるっス」

森山はタオルで汗を拭く。そしてこのリードをもたらした最大の貢献者である黄瀬を讃えて肩を叩いた。

先輩の言に黄瀬も頷き、さらに意欲を高めていく。

黄瀬はIHで青峰に敗れてからというもの、次こそはリベンジを果たそうと強い決意を抱いていた。この国体でも勝ち上がれば青峰を擁する東京都と戦う可能性がある。

それまでは負けていられない。この試合は黄瀬にとっては通過点の一つにすぎないのだから。

「神奈川10点リード。これ程とはね」

「ああ。エース対決が黄瀬に分があるとは思ってたが、ここまで露骨に結果が出るとは予想外だったな」

その頃、観客席。

葉山が意外そうに呟くと根武谷も彼の発言に追従した。

彼らも白瀧と黄瀬が1対1の形になれば黄瀬が勝つだろうと考えていた。しかし第1Qでここまで引き離すとは予想外の事だ。IHで大仁多が陽泉を相手に善戦していたイメージがあるので得点差が現れるとしてももう少し先と考えていたのだ。

それがまさか序盤で二桁差になるとは。

流れも神奈川が握っている。この状況をひっくり返すのは簡単ではないだろう。

「征ちゃん、あなたはどうかしら?」

一方実測は沈黙を決め込んでいる赤司に意見を求めた。ジツと選手達を観察している彼の様子が気になったのだろう。

「確かに皆が言う通り、僕も涼太の方が有利とは考えていた。しかし……」

「しかし?」

「要の様子が、どこか気になる」

一度言葉を区切ると、赤司は白瀧を見てそう口にする。

彼の目には白瀧の動きが彼らしくないと映っていた。白瀧にとって黄瀬は因縁の相手。それは誰よりもわかっている。しかしタイムアウトの後まで一対一を仕掛けていたのが気になった。彼にとって非常に意味のある敵ではあるが、それでも彼が戦う理由を考えればここまで暴走する事はないはずなのに――。

「まさか」

そう考えて赤司は、そして桃井は白瀧の、強いては栃木の戦略に思い至る。

「ひよっとして白瀧君は、わざと第1Qを捨てた……?」

半信半疑のつぶやき。彼女の視線の先で白瀧がコートにゆっくりと入っていった。第1Q終了後の休憩は終了する。彼の表情には気負った様子は見られず、常の冷静さを保っていた。

「やっぱり引き下がったりはしないっすか」

すると同じくコート入りした黄瀬が白瀧に近づき、声をかける。

「なら俺もこのまま行くっすよ。容赦はしないっす!」

得意げな口調で、黄瀬らしいなど白瀧は思った。

自分の勝利を信じて疑わない。

――やはり黄瀬は俺の事を倒すに値する敵だと思っていない。倒して当然の相手だと思っている。

そう考えた白瀧の胸中に、悔しきは浮かんでこなかった。

「そうかよ。だが勝つのは俺だ」

白瀧は拳を力の限り握りしめて黄瀬に反論する。

「誰かが信じる俺を、これ以上裏切るわけにはいかない!」

これはもはや彼一人だけの戦いではないのだから。弱い自分を信頼してくれた人の為に、今こそ誓いを果たそうと語気を強めた。キセキの世代。

最強のSF、最高のオールラウンダープレイヤー。

どのような技も見て模倣するという天才。

何度も挑んでいるというのにその度に強くなり、こちらを上回る十年に一人の逸材。

——だからどうしたというのだ。

もはや覚悟したことだ。

その天才に勝つために、俺はここにいる。

第二Qは栃木のスローインから再開する。

「行くぞ、黄瀬！」

10点差を追いかける最初の攻撃。確実に決めたい攻撃、ボールは小林から白瀧に渡った。

鋭い切り返しで中に切り込む。

黄瀬が辛うじてついていくと、白瀧はレイアップシュートの構えからビハインドパス。マークを躲してジャンプへ回した。

「ヨシッ！ オラアッ！」

小堀のマークを外れたジャンプがワンハンドダンクを叩きこむ。

第二Q、まずは栃木が攻撃に成功した。

「落ち着け！ まずは一本、きっちり返していくぞ！」

ダンクシュートという派手なプレイにより会場が湧く。敵が勢いづきかねない雰囲気の中、笠松は冷静に声を出した。

笠松はボールを運びながら敵味方の位置を見る。

両県とも選手交代はない。やはり栃木県は個人技に長けた選手が集まっているだけあり、皆簡単にマークは外せない。

ならば一番得点できる可能性が高いのは——。

「キャプテン！」

黄瀬が笠松を呼ぶ。

そう。このマッチアップで勝率が高いのは間違いなく彼の所だ。すぐに笠松も小林のマークを警戒しつつ、黄瀬へバウンドパスをさばいた。

「ッー」

ボールを無事に手にした黄瀬。先ほど同様に一対一を仕掛けようとすると、眼前で敵対する白瀧の様子を察し、彼の表情はこわばった。「来いよ、黄瀬」

(この感じ……！ 間違いなくこの試合一番の集中力っすか！)

体から滲み出る気迫に冷や汗を覚える。

間違いない。白瀧がおそらくここを勝負時と睨んで挑んでくるだろう。

——ならば尚更勝つ。ここで勝てば神奈川の勝利はグツと近づくはずだ。

そう考えて黄瀬はすぐに仕掛けた。

ミドルレンジまで侵入すると勢いをそのままに跳躍。ゴールに左半身だけを向けて、体の後ろから右手でボールを放つ、レイアップフックシュートを放った。

「舐めるなー」

「なっ!？」

止める事は難しいシュート。だがこれに白瀧は反応し、彼の指先がボールに触れる。

瞬発力に長けた彼ならば不可能ではないかもしれない。しかしそれでも反応が早すぎる事に黄瀬は驚きを隠せなかった。

「うおおおおっ！ (リ) バウンドおおお！」

シュートは白瀧が防いだが、安心するのはまだ早い。ボールがリングに弾かれると、早川が真っ先に飛びついた。

何故かう行の発音が覚束ない奇妙な叫びをあげながら、それでも両腕でボールを把持して着地する。

「させねえよー」

「ンガッ!? ああっ！」

すると、着地を狙っていた勇作が早川の手からボールを叩き落とした。

零れ落ちたボールはすぐ近くにいたジャンの下へ。

すかさず小林へとボールを回し、再び攻撃の権利を手にする。

「ナイスです勇作さん！」

「おう。——しっかり止めやがって。行けそうだな」

「……はい」

白瀧がボールを奪った勇作と拳を重ねた。

そして敵には聞こえないように小さな声で会話を交わす。

先ほどの黄瀬の技、あれは元は勇作が第1Qで見せたものだった。それをしっかりと理解しているという事を確認し、勇作は白瀧と共に攻撃に参加していく。

「笠松」

「ん？」

二回目の攻撃を組み立てている中、小林はドリブルを続けながら笠松に語り掛けた。

「さつきお前は、混成チームだから連携に穴が出てしまうとっていな。残念だが——それは違う」

その言葉で話を終えると、ワンドリブルで中へと切り込んだ。

突然の事だがしっかり反応する笠松。

直後、小林はサイドハンドパス。彼が元いた場所目掛けた軌道に、楠が駆け込んだ。

「行かせるか！」

「いや、通らせてもらう」

森本が警戒をする中、楠が素早く切り返す。何とか森本が食らいつこうとするが、追いかけてしようとした直後、彼の行く手に白瀧が立ちただかる。

（スクリーンか！）

「黄瀬！」

「わかってるっす！」

すかさず黄瀬がスイッチ。中に侵入する楠に対応した。

すると今度は白瀧が動き出す。森本から離れるようにターンし、フリーの位置に走り出した。

（ピック&ロール！）

「しまったー！」

「白瀧ー！」

「ナイスパスー！」

小林から楠、そして白瀧へ。パスを受けた白瀧は素早くミドルシュートを放つ。森山のブロックは間に合わず、楠木が連続得点に成功した。

「チツ」

「先ほどのお返しと言わんばかりのプレイだな」

「ああ。向こうを勢いづかせちまっては駄目だ。次は決めるぞ」

第2Qに入って間もない時間帯だが、神奈川が最初の攻撃に失敗した中で、楠木は二連続で得点し、点差を詰めている。

次も得点失敗となれば、楠木にこの第2Qの流れを掴まれてしまいかねない。笠松はチームを盛り立てようと小堀からボールを受け、試合を組み立てる。

——だが、笠松の思惑通りに試合が動かない。

黄瀬にボールが集中しすぎて動きを読まれるのを嫌い、笠松は自ら敵陣を崩しに行くも、小林のブロックに捕まってしまった。

「ヌオオオオオー！」

「ぐっー！」

加えてジャンガリバウンドを確保。小堀との争いに打ち勝ち、攻撃の芽を摘む。

「よしっ。反撃だー！」

「マズイ。止めるぞー！」

さらに勢いづいた楠木。

今度は小林が白瀧にボールを預けると、勇作のスクリーンで笠松のマークをかかわす。

（このやろうー！）

「スイッチー！」

「おおっ！」

すかさず早川がスイッチ。小林の行方を追う中、白瀧から小林ヘリターンパスが通った。

シュートはさせまいと早川が迫る中、彼の注意が疎かになった足元へ小林がボールを落とす。

「あっ！」

「まさか！」

その先に駆け込む勇作。しっかりとボールを掴むと勢いそのままにレイアップシュートを放った。笠松が果敢にブロックを試みるも、身長差もあって触れる事は出来ない。

再び栃木の得点が記録される。

（スクリーンでマークを外し、外から中へか！）

「あいにくと俺達は夏の時から共に同じ練習を重ねていたんだよ」
「なっ」

「加えて、敵だったからこそお互いの動きは手に取るようにわかる。それだけ研究してきたからな」

第1Qの動きからは信じられないくらいに洗練された連携を見せた栃木に、神奈川の面々は驚きを隠せなかった。

彼らが考えている以上に栃木の選手達は長い時間を共にし、そしてお互いを理解している。

先の笠松に反論した小林の言葉には敵への絶大の信頼がこめられていた。

「くそっ」

（マズイっスね。先輩達もオフENSは苦勞しているから、俺が得点したいところなのに）

笠松達の抱く焦りを黄瀬も敏感に感じ取っている。

だからこそ自分が何とかしてオフENSで反撃の糸口をつかみたい。黄瀬はそう考えた。

「撃たせねえ！」

「ッ!？」

しかしパスを受けた直後、敵の不意をついたジャンピングスリーを

白瀧のブロックに阻まれてしまう。

——ありえない。

最高到達点に達する前に撃った為に高さはいつもよりはでていなかっただろう。反面、撃ち出しまでの速度は今までの比ではないはずだ。

それなのにどうして、相手はこれに反応できたのか。黄瀬は思わず目を見開いた。

「アウトオブバウンズ。神奈川黒ボール」

ボールがラインを割って時間が止まると、白瀧が黄瀬に歩み寄る。

「わからないのか？ どうして俺がお前と対等に戦えているのか」

「はっ？ いきなり何スか。そりゃいきなりここまで対応されたらわかるわけないじゃないっスか」

「ああ、お前にはわからないだろうな。それだけの力を持ちながら、俺の立場に立ちながら、苦しむ仲間の姿を見て見ぬふりをしたお前は！」

飄々と言葉を返す黄瀬に、白瀧は複雑な感情が入り混じった声をぶつける。

「だからお前はここで、格下と侮った相手に負けるんだ！」

白瀧がここまで黄瀬と渡り合える理由。それは、かつて彼が敗れてから常にリベンジを果たそうと勝利を誓い、研究を続け、必死に努力を重ねて来た事だった。

時間はさかのぼり、神奈川との対戦が決まった翌日のミーティング。

藤代から海常の選手——特に黄瀬の強さを説明が行われると、さらに監督から補足を促された白瀧が立ち上がり、口を開いた。

「黄瀬の力は、相手の技を倍返しするという模倣コピーです」

そして話を引き継いだ白瀧が藤代の説明を繰り返し、断言する。

「いや、それはさつき藤代監督から聞いたわ！」

「何度も繰り返し返さなくてもわかっている！ そうじゃなくて、何か新しい情報だ！」

「他に何かないのかよ!? 特徴とか、弱点とか！」

先も聞いたばかり、実際の試合でも見たから十分わかり切っていることだ。そんな事は良いからと集まった選手達は先を促した。

「おかしいとは思いませんか？ 相手の力を倍返しする程の威力なのに、習得マスターではなく模倣コピーと呼ばれている事に。」

「……はあ？」

「どういう意味だ？ それって何か違いがあるのか？」

ただ、白瀧は冷静に話を続ける。しかし言葉遊びのような意味合いで皆納得できない様子であった。何人かの例外を除いては。

「つまり、本当にそっくりそのまま自分のものにするという事か？」

「あくまでも相手の技を使っているだけだど？」

「え？」

「はい」

理解した一人である小林と楠が問いかけると白瀧が大きく頷く。

「例えば、俺のティアドロップをコピーしようとするなら、あいつはシュートだけではなくそれまでの流れをそのまま繰り返します。これが習得との違い。ドライブからシュートの動きは高さや速さは違えど動き自体は同じという事です」

練習の成果として習得したならば、選手は自身のバスケスタイルや状況に応じてドリブルやシュートの組み合わせを変えていくものだ。しかし超人的なセンスと体格を持ち合わせた黄瀬は変えずとも決めてしまう。だからこそなのかあるいは彼の性格の為か、相手の技をそのまま相手に返していく傾向にあった。

「ということとは？」

「たとえコピーされたとしても、動きを読めるという事か？」

「俺達と完璧に同じ動きならそれもできるぞ！」

ならば勝ち目もあるだろう。皆の表情に希望が湧く。

「無理です」

『なんでだよ!?!』

だが、説明をしている白瀧が彼らの考えを打ち砕いた。納得できないと反論が湧くが、白瀧は変わらぬ調子で話を続ける。

「基本的にディフェンスはオフフェンスに対して後出しです。どうしても後手に回らざるをえない。しかも相手はキセキの世代。そのスベックは桁外れです。おそらく気づけたとしてもそれはシユートを放つ直前となるでしょう。そうなるのと止める事は困難です」

「……マジか」

「言われてみれば、確かに」

「相手の出方を絞れるなら話は変わるかもしれませんが、あいつが何を仕掛けてくるかなんて読めませんよ。一応特徴として挙げましたが攻略法と呼ぶには厳しすぎます」

相手が何の技を放つかを気づいた頃にはすでに手遅れなのだ。身体能力で勝る黄瀬に押し切られてしまう。だからこの癖から攻略する事は難しいのだと白瀧はため息を吐いた。

(桃井さん並の予測力か、赤司の目、あるいは紫原の反射神経があれば話は別なんだろうが。残念ながら俺には不可能だ。結局、ここまで種がわかっていても俺では対応が追い付かない)

情けない話だと白瀧が自嘲気味に笑う。ずっと黄瀬のプレイを見続け、分析してきたというのに対抗策を見いだせないまま試合となつてしまったのだ。やはり自分では届かないのだろうかと不甲斐なさが脳裏をよぎった。

「——ねえ。白瀧君」

「うん？ どうした？」

すると、黄瀬が出場しているビデオをじっと見続けていた橙乃が、視線はそのまま映像に固定して白瀧を呼ぶ。

「たとえばだけど、黄瀬君が仕掛ける時点で選択肢を絞れたならどう？」

「……はっ？」

思いもよらない人からの、予想外の提案に白瀧は目を丸くした。

「いや、それが出来たならだいたい話は変わってくるが、出来ないから無理だと言っているんだぞ？」

「まさか最初の動きだけで見極めろって言うんじゃないだろうな？」

白瀧だけではない。皆不可能であろうと彼女に言う。バスケットでは数え切れないほどの戦術が存在するのだ。予測するのは桃井程のスペシャリストでなければ無理だ。

「同じなのは動きだけじゃないみたい」

「……何？」

「と、言うとは？」

「一体何が同じなんだ？」

他にも癖はあるという指摘だった。誰もわからず、先を促すと橙乃はゆっくりと話を続けた。

「仕掛ける時の、動き出しの位置。要はポジショニングかな。それもまったく同じ」

「えっ？」

驚き、白瀧もビデオをじっと見つめる。

観客席から取っている映像だ。攻守ではコートが入れ替わる為に左右が逆に映って幾分かわかりにくいだが、確かに橙乃の発言している通りに見える。

「そう、なのか？」

「うん。ごく稀に違う場所もあるみたいだけど、その例外を除けば同じ」

「……んん？ 言われてみれば、うーん？ わかりにくいですが確かに」

「というか、よくわかったな。左右反転しているから全然気づけなかった」

皆半信半疑の状態だが、そのように見えるのは間違いない。特にリプレイをしたわけでもないのに誰も指摘できなかつた点に気づいた橙乃に驚きの視線が集中した。

「はい。記憶していたものを整理したら一致したので」

「記憶って。よくまあそんな」

「本当だぞ」

「えっ？」

こんな短時間でできるものかと、古谷が笑い飛ばす。

すると彼の横に座っていた勇作からフォローの声が上がった。

「茜は記憶力が並外れていてな。本とか一度読んだら内容を全部覚えてるぞ」

「ガチなんですか!？」

「なんだよそれ!? 天才か!？」

(そういうえば誠凛戦でそんな事を言っていたような……)

そして衝撃の事実が発覚する。橙乃が持つ恵まれた記憶力。兄の保証もあってより信用性があがった。神崎も過去の記憶を思い返し、確かに彼女自身も発言していたなど呆れ、感心する。

「これが本当なら、可能性はある」

(問題はその例外のパターンか。それをどうするかだな)

「でもそう上手く行くか? あいつが何を仕掛けてくるか絞るのなんて難しいぞ。そもそもこの試合以外の技をやってくる場合だってあり得るだろう」

「いえ、その可能性は限りなく低いです」

「へっ?」

希望が見えた。橙乃の分析通りならば『ひよつとしたら』が起こる可能性は十分ある。

一方、確かにこの試合のみの技ならば良いが、これまでの試合で模倣した技の対応は難しいのではないかと細谷は疑問を呈した。

だが彼の問は白瀧が即座に否定する。

「もう一つ、黄瀬のプレイには特徴があります。基本的にあいつが模倣する技はその試合で敵味方、特に敵が見せたものが大半です」

「そうなのか?」

「確かにさつきから模倣は対象選手の直後にやっではいるけど……」
「おそらくあいつの性格でしょう」

黄瀬の模倣する物はその試合限りのものばかりだった。ビデオでも白瀧の発言通りになっている。その理由に白瀧は思い至る事がある故に、確信があった。

「あいつは見れば何でもできます。——昔言っていました。『何で出来ないんすか?』って」

「……ほう」

「あいつは興味あるものに対しては熱心になりますし敬意も払いますが、それ以外の物に対しては無頓着です。選手に対しても実力あるものは認めますが、そうでない者は侮る傾向がある。おそらく俺も含めてこの場にいる全員の事を何とも思っていないでしょう」

「ハッ？」

「随分と舐められたものだな」

「そしてそういった選手の技に関しては基本その場限り。よほど手数に困ったならば引つ張り出すかもしれませんが、通常はその試合で模倣した物で来ます」

「努力が不要な天才、その為技術にかかる時間もない。だから技に対して思うところもない。」

黄瀬にとってはあらゆるものが出来て当然の事なのだ。それ以上でも以下でもない。

自分と対等以上の選手には憧れや関心も抱く。力が及ばない選手には年上であろうと興味を示さない実力主義者。だから相手に対しても特に思いは抱かない。

（あいつが認めているのはキセキの世代レベルの選手だ。だが青峰の模倣でも体に負担が大きかった事から使う事はまずないだろう。後にはもう一人いるが、それは俺が対応するしかない）

例外であるキセキの世代の模倣は不可能だ。青峰のバスケスタイルはIHで模倣していたものの、体にかかる代償が大きすぎる為にこの試合で模倣するとは考えにくかった。そして他に一人だけ黄瀬が認める選手がいるが、それも白瀧は自分で対処すると活きこんでいた。

「——わかりました。では、お二人の考えを採用してゲームプランを立てます」

そして白瀧と橙乃、二人の意見を聞き終えて藤代が決断を下す。

「まず第1Q、試合の入りになりますが。これは捨てましょう」

『はっ？』

一体何を言っているのかと、藤代の第1Qを捨てるという言葉に全

員が目を丸くした。

試合開始直後、下手すればその後の流れにも関わる重要な立ち上がりだ。その第1Qを捨てるなんてとてもではないが信じられない。

「その第1Qを情報収集、そして黄瀬さんに対する模倣対象に制限をかけます。橙乃さん、後で例外について教えてください。その点について詳しく考慮しつつ、作戦に組み込みます。基本的にはスターターを一对一に特化した選手で固め、個人技でオフェンスを組み立てます」

「つまり黄瀬の特徴を確認しつつ相手の技に制限をかけるか？」

「ええ。相手が仕掛ける位置まで同じであるというのなら、こちらもその位置をあらかじめ選手ごとに決めておけばある程度の予測はつくでしょう。そして第2Q以降は出来るだけコンビネーションを重視したものの、何か黄瀬さんがコピーしにくいもので仕掛けていきます」

藤代の狙いは、ミーティングで明らかになった黄瀬の特徴を完全につかみつつ、第2Q以降の攻略につなげる事であった。

中途半端に黄瀬を止めようとすれば黄瀬の万能性に圧倒されてしまう危険性もある。ならばいっその事最初の10分を捨てて完全に倒す術を探そうと。

「黄瀬さんの強みはやはりこちらの強みを吸収される模倣です。この攻略を最優先にしなければならぬ。多少のリスクは承知の上です」
こうして作戦計画はなされ、栃木はハイリスク・ハイリターンの戦いに挑む事になった。

(正直、分の悪い賭けだった)

今でこそ黄瀬と対等に戦えている。だからといって白瀧が不安を抱いていなかったわけではなく、むしろ多大なプレッシャーを感じながら試合に臨んでいた。

そもそも黄瀬の分析が間違っているような事になれば、栃木は第1

Qの流れを相手に許した上に、強化された黄瀬を敵にしなければなら
ない。正解だとしても黄瀬を攻略できる可能性は高くはない。

故にミーティングの後から、白瀧は毎日仲間たちと1on1を繰り返
し、その特徴を掴んでいたのだ。

そして今、彼の努力が実りを迎える。

白瀧が第1Qで放っていたロングスリーを模倣した黄瀬のシュー
トに、彼の指先が触れた。

「そんな!?!」

(他の選手の動きだけじゃない。白瀧つち自身のシュートにも対応し
ている!)

「……お前達が姿を消した中、俺達はただくすぶっていたわけじゃな
い」

(その距離からシュートを撃つのは俺しかいない。海常の選手はフェ
イクからパスをやっていたが。やはりお前は、パスで終わるプレイは
しないんだな)

仲間だけではない。自分のプレイも完全に把握している白瀧。完
全に黄瀬の強みを消し去っていた。

他にも黄瀬の癖で感じていた事はあったのだ。

黄瀬が様々なプレイを模倣する中、フィニッシュがパスの物は模倣
しないと。

キセキの世代はパスを出さない。自分で決める。そういう自負が
ある。IHの桐皇戦では最後にパスを出そうとしていたが失敗して
いた。だからこそやはり自力で決めようとするだろうという白瀧の
読みは当たっていた。

このおかげで栃木はよりパスを重視した方針を取っている。

(橙乃の感じていた例外。あれも第1Q中に分析出来て助かった。本
当に、ありがたい)

もはや栃木の黄瀬対策は万全だった。

試合前に橙乃が例外があると言っていたが、それもすでに解決済
み。

例外とは、即座にシュートを撃つもの。つまりシュートだけを模倣

した状況の事だった。

桐皇戦のビデオなどを振り返っても桜井のクイックリリースを真似した時はシュートの位置が異なっていた。技単体での模倣ならば位置は問わないと。

ゆえに白瀧は五人の中でスリーを放つ楠と自分、同じジャンピングシュートでスリーを放つ事への対策を行っていた。

(ありえねえー！ どうなってやがる。黄瀬の動きが完全に読まれているんじゃないか!?)

「どういう事だ」

「む?」

辛うじて早川がリバウンドを制し、自らジャンプシュートを沈める。

直後の栃木の攻撃を何とか防ぎきりようやく一息つけるものの、思考がうまくまとまらなかった。

エースが連続で止められている。しかも動きを読まれているとは思えない状況だ。納得できず、笠松は言葉を荒げる。

「俺達とお前達が戦うと決まって二十日程度だぞ! どうしてここまですぐ黄瀬の動きがわかる!」

栃木と神奈川の対戦が発表され、試合が始まるまでの期間はごくわずか。桃井のような情報の専門家がいるわけでもない。そんな状況で黄瀬の動きをここまで把握できるとは到底信じられなかった。

「二十日? それは違うな、笠松」

「何?」

「……二年だよ。あいつが黄瀬に勝つと決めてから」

それも仕方がないことだろう。

少なくとも白瀧にとって黄瀬は倒さなければならぬ敵。だからこそ常に機会を窺っていたのだから。

(まさか、この試合の俺の癖を見抜いたって訳っスか?)

「……ならー!」

「むっ!」

黄瀬も白瀧が自分のプレイを分析しているという事を理解し、仕掛

けを変えた。

笠松から小堀を経由してパスを受けると、全速力のドライブ。白瀧の左側へ突撃し、突如バックロールターン。

逆側へと切り返してシュートを狙う。

「これは―」

(この試合の物ではない！ まさか！)

栃木の選手が披露したプレイではない。これは白瀧も可能性を考えていた、黄瀬が認めている強敵、火神のものだ。

「――残念だったな」

今日初めて見る動き。それでも白瀧はそう易々と得点は許さなかった。

ドリブルで抜かれた白瀧がすぐに体を捻り、ボールを捉える。

(バックファイア！)

直後、白瀧の瞬発力が発揮された。オフセンスに抜かれた後、後ろからボールを奪うバックファイア。瞬時にボールを叩き落とし、黄瀬の攻撃を封殺する。

「なっ!？」

(背後からのステイール！)

「――見えない位置からのプレイ、果たしてこれを模倣できますかね?」

見れば何でも模倣できる。ならば、見えない位置からの技はどうだ。敵が突然の奇襲に戸惑う中、藤代が口角を上げる。

「バックファイアか。陽泉戦でも見せていたが」

「司令塔のポジションも経験した事で視野も広がって、完全にものにしてやがる」

ファウルを取られやすい危険な技だ。それを完全に自分のものになっている。彼の成長が感じられる一プレイに、赤司や青峰は感嘆した。

「まだまだ。お前への対策は、これで終わりじゃない!」

「うっ!」

さらに白瀧の躍動は止まらない。ボールを勇作が確保するのを見

て、白瀧が迷わず走り出した。勇作から小林にボールが渡ると、二人専用のロングパス・タツチダウンパスが放たれる。

その速さ、軌道はまるで矢の如く。

黄瀬でさえこのパスを防ぐことが出来ず、白瀧が得意とする速攻が炸裂した。

「速い！ あつという間に得点した！」

「この攻守の切り替えは、相変わらずやのう」

「……そっか。このタツチダウンパスはきーちゃんでも模倣できない。いえ、たとえ模倣出来たとしても意味がない！」

すかさず反撃した栃木の動きに皆が肝を冷やす。

そんな中、桃井は白瀧達の技の真意に気づき、恐る恐る呟いた。

このタツチダウンパスは前提として二人の選手が必要となる。パスを放つ選手とシュートを決める選手だ。

模倣しようとしても、笠松達では距離・精度を必要とするパスは出来ないだろう。黄瀬が模倣出来てもそれを受け取れる選手がいない。仮に間に合ったとしても白瀧に防がれる。

ゆえにこのタツチダウンパスは黄瀬が模倣不可能な技の一つであった。

「ッ」

黄瀬もこの技を放った意図を察し、息を飲む。

そんな相手に、白瀧は先の彼の言葉を否定するように声を荒げた。

「才能？ 勝機？ そんなもの俺は知らない！ 俺達は今ある己の力を武器にし、先に待つ目標を頼りに、仲間達との絆を信じた。苦難の中自らの力で活路を見出し、共に進む者達と戦い抜いた。道を自ら切り開いてここまで来たんだ！ それが選手の戦う意義であり、エースに託された希望だ！」

才能も勝機も不要。自らの手で仲間達と一緒に前を倒すと、そう言い放つ。

（マジでヤバいっすよ！ エース対決の勝敗は試合にも大きく影響する。そうでなくても先輩達だって厳しいマッチアップだったのに！）
「……でも、関係ない！ 勝つのは俺っす！」

勝ちたいのは黄瀬も同じだ。危機的状況を理解すると、白瀧の力を認め、それでも勝つのは自分だと気迫を籠めた。

(黄瀬さんもようやく白瀧さんの事を認めた、のですかね?)

「ですが、まだです」

「ッ!?!」

「少々早いですが、ここで取り返しておかなければ厳しくなりますので。故にここで決めさせてもらいますよ」

そんな黄瀬に、栃木が立ちはだかる。藤代が神奈川の猛攻を察し、早めに計画を進めていた。

(フロー、強制解放!)

白瀧の全身からヒリつくような威圧感があふれ出す。

最大の切り札である没頭状態、フローに突入した。

「何、スか? これ?」

冷や汗が止まらない。気づけば勝手に口がそうつぶやいていた。

黄瀬は白瀧のこの状態を理解していなかった。そもそも彼が初めて公式戦でこの状態を見せた陽泉戦はビデオでしか見ていなく、紫原と互角に戦っていたのも途中で適応したためであろうと考えていたのだ。

だからこそ、黄瀬にとって白瀧のフロー突入は想定外の事であり。そして技術で説明できるものではないこの状態を、模倣出来なかった。

「隙ありだ、黄瀬」

この驚愕によりできた一瞬の隙を白瀧は見逃さない。黄瀬の腕からボールを叩き落とす。一瞬の出来事に黄瀬は反応すらできなかつた。

「あっ!?!」

(速い! 動きがさっきの比じゃない!)

明らかにキレがよくなったスピード。しかもボールは小林の足元へ落ち、神奈川はどんどん勢いを失っていく。

そんな中、栃木の猛攻が襲い掛かる。小林を先頭に速攻を仕掛けたのだ。

何とか神奈川も食らいつく。

必死に笠松が追いつくと、小林は横の白瀧へとパスをさばいた。ボールを受けた白瀧はそのまま前進。黄瀬のマークがつく中、クロスオーバーで切り返す。

「ぐつ、こつんのおっ！」

負けじと黄瀬も食らいつく。

白瀧がレイアップシュートを放とうと飛び上がると、そのコースを塞ぐように勢いよく跳躍した。

「外れだ」

「ッ！」

白瀧の上腕が後方へと振るわれ、後ろを走る楠へとパスが通った。白瀧の速攻を防ぐことに必死だった黄瀬も、他の選手も間に合わない。楠のレイアップシュートがリングを射貫く。

栃木の速攻が綺麗に決まった。

「ナイス、楠先輩！」

「ああ、ナイスパス！」

『神奈川県、タイムアウトです！』

白瀧と楠がハイタッチで喜びを分かち合う。

直後、神奈川はこれ以上の展開は見過ごせないとタイムアウトで時間を止めた。

しかし黄瀬を止められて敵は序盤は見られなかった連携も万全。今、流れは完全に栃木にあった。

『俺ではお前に勝てない』、お前はそう言ったな。ならば聞こう。そんなこと誰が決めた？ お前か？ バスケットの神様か？ ——上等だ。全部まとめてかかって来い」

ないものねだりをする事は止めた。身に着けた自分の力で仲間達と願いを叶える。

無暗に楽観的な考えを叫ぶ事はしない。勝ち目が薄いならその突

破口は自ら作りだす。

「俺はそれら全てに勝って願いを叶えてみせる。そう誓ったんだ」

第2Qの最後を締めくくる白瀧のティアドロップが炸裂した。遅れて前半戦終了のブザーが鳴り響く。

(栃木) 41対41 (神奈川)。

第2Qが始まるまでは10点もあつた点差がなくなっていた。

試合は再び振り出しに戻り、後半戦へと続く。

——黒子のバスケ NG集——

「ッ」

黄瀬もこの技を放った意図を察し、息を飲む。

そんな相手に、白瀧は先の彼の言葉を否定するように声を荒げた。

「才能? 勝機? そんなもの俺は知らない! 俺達は」

「マジっスか、白瀧っち!」

「あ?」

「才能も勝機も知らないって、青峰っち以上のアホっスよ!? 大丈夫

夫っスか!」

『誰かアホだ黄瀬テメエ!』

白瀧と青峰の二人が数年ぶりに息があつた瞬間。

第百五話 理想の敵

『これより休憩に入ります。後半戦第3Q開始は10分後です』

「第2Q終了！」

「第1Qこそ劣勢を強いられた栃木が、第2Qで黄瀬を攻略して猛追！」

「ついに振り出しに戻しやがった！」

「行けるぞ栃木！ 頑張れ！」

10分間の休憩を知らせるブザーが鳴る中、観客たちは選手達を鼓舞すべくむしろより一層声を大きくした。

試合の流れは栃木にある。そう言うように声援は栃木を押す者が多い。

「よくやった白瀧！ ナイツシュ！」

「うっす！」

コートでもラストシュートを沈めた栃木は歓喜に湧き、皆笑顔を浮かべていた。

「ちっ！」

「ふんがーっ！」

「落ち着け。休憩だ、戻るぞ！」

一方の神奈川は引き離すどころか同点に追いつかれた事で皆気が立っている様子だ。

「――」

それは黄瀬も同じこと。

言葉は発しないものの、歯を食いしばって悔しさをかみしめている。

黄瀬がここまで追い詰められたのはキセキの世代を除けば非常に珍しい事だった。

「さて、どうするっ？」

控え室に戻った神奈川代表の一同。真っ先に口を開いたのは森山だ。

彼が言わんとしているのはもちろん栃木の対策の事だ。

理屈は不明だが、間違いなく敵は黄瀬の動きを読んでいる。今までならば絶対にありえない事だったがそれが現実を起こっているのだ。

初めての出来事に、皆どうすれば良いのか判断に悩み、中々提案は生まれてこない。

「黄瀬、お前は どう思う？」

停滞する状況の中、武田が黄瀬に問いかけた。

黄瀬は手に持つビデオカメラの映像を眺めながら、ゆっくりと口を開く。

「——多分このまま続行しても白瀧たちは俺の対策をしてくると思うっす。そうなると正直、第1Qの時のように点を重ねるのは難しいかも」

「やはりそうか」

「そうなると正直打つ手がないぞ。唯一手があるとしたらIHの時に使った青峰の模倣だが、あれはお前の負担が大きすぎる。もっても5分が良い所だろう」

「そっすね」

冷静な分析は正しいものだった。もはや敵は今までの相手とは違う。黄瀬も白瀧を性格や姿勢だけではなく、力も認めていた。

黄瀬だけではない。

他の面子も皆意見は同様のようで、突破口は中々見出す事が出来なかった。

「だから、監督」

「うん？ どうした？」

「頼みがあるっす」

ゆえに、この逆境をどうにかしようとして黄瀬が口火を切る。

同時刻、栃木県控室。

選手達の補給を済ませながら、藤代は後半戦の方針について説明していた。

「第3Qは選手を入れ替えます。そしてその選手主体で攻めていきます」

前半戦を互角以上に戦ってきた栃木は、その五人を入れ替えて後半戦に臨む。

「この20分で神奈川は白瀧さんの黄瀬さんに対する対策をしているという事はもうわかっているでしょう。これを突破するとなればキセキの世代、青峰さんの模倣でしょうが——白瀧さん」

「はい。おそらくですが青峰の模倣は黄瀬の体がもたない。出来ても良くて5分。となると使うとするなら試合の終了間際に使うはず」

藤代の言葉を引き継ぎ、白瀧が説明した。

I Hの試合を見て、彼らは黄瀬の青峰の模倣についても理解し、分析をしていた。その上で神奈川の関係者と同じ結論を下している。

キセキの世代の模倣は出来ても体の負担が大きく、続けられても5分が限度であると。

「後半戦に入ってしばらくは黄瀬さんよりも他の4人で動いてくるはず。ならばこちらはそちらを抑えたい。加えて白瀧さんの負担を減らすという意味もあります」

「え?」

「終盤間際、敵の反撃を警戒してって事ですか?」

敵の動きを予想したうえで、対処する。それは理解できる。だが白瀧の負担を減らす必要まであるのかと疑問が湧いた。

「それもあります。……正直に言えば、フローの状態に入った時は体力の消耗が大きくなるんです」

「ええ。流れを取りに行くために前半戦から使用しましたが、本来は避けたいもの。ゆえにここからは白瀧さん以外の4人を主体としたオフェンスに切り替えていきます」

白瀧が悔し気にそう呟く。

没頭状態に突入すると能力を存分に震える代わりに、体力消耗も大きくなるのだ。体力消費の効率に長ける白瀧でもそれは変わらない。ゆえに後半戦は少し方針を変えようと藤代は試合方針を決めていた。

「ですが、だからと言ってやる事は変わりありません。青峰さんの模倣ができれば対処は難しい。それまでに点差を引き離しておく必要があります。故に——ただ攻めあるのみ！」

『おうー！』

選手の気を引き締めるよう、藤代が活を入れる。

栃木は前半戦の良い流れを維持したまま後半戦に臨むこととなった。

問題ない。

たとえ敵がどのような手を打とうとも、栃木も対抗するだけの戦力がある。対策もある。何より黄瀬打倒に燃えるエースがいる。

誰もがそう思っていた。

『休憩終了です。これより後半戦第3Qを始めます』

休憩の10分が終了する。

アナウンスに従って各々選手5人が入場した。

ただ、前半戦と比べその陣容は少し変化を見せている。

楠out神崎in

勇作out光月in

栃木は前半戦で攻守に貢献した楠・勇作の両名に代え、神崎・光月の一年生二人を投入。

黄瀬out中村in

対する神奈川はエースである黄瀬をベンチに下げ、二年生の中村をコートに向かわせた。

中村真也（2年） SG 181cm

「おっ。両チーム選手交代か」

「栃木は大仁多のルーキー二人を入れましたね。でも」

「神奈川は黄瀬を下げた？」

この動きに観客席では首をかしげるものが多い。

栃木の選手交代はまだ理解できるが、神奈川が攻守の要である黄瀬をベンチスタートさせる理由が不明だったからだ。

栃木も黄瀬がコート入りしないとは予想していなかった為に、皆懐疑的な反応を示している。

「黄瀬がいらないとなると随分話は変わってくるぞ」

「僕たちにとつてはやりやすくなりそうだけど……」

「気にするな！俺たちがやる事に変わりはない！いつも通りいくぞー！」

『ハイ！』

敵の動きに惑わされるなど小林が声を張り上げた。

主将の檄を受け、他の4人も一気に表情が引き締まる。

こうして両校に動きがみられるなか試合が開始された。

後半戦は神奈川ボールで再開。

ゆつくりと笠松がボールを運んでいく。

栃木のマークはマッチアップが多少変わったものの、基本的に前半と変化はなかった。笠松には小林、森山に神崎、中村に白瀧、早川に光月、小堀にジャンがついている。

前半同様に小林の厳しいチェックが付く。だが笠松は冷静にボールをキープし続けて。

そして仕掛ける時には一気に動いた。

「ッ！」

(速い！)

おそらくキセキの世代を除けば一番と言っても過言ではない全速力のドライブ。

一瞬反応が遅れるが、小林も負けてはいない。すぐに笠松の後を追いついて、ジャンプシュートを放とうとしたコースを塞いだ。

「撃たせんー！」

「チッ！」

(やはり高いか！)

「小堀！」

シュートが不可能と察すると笠松は小堀へのパスを選択。ゴール下へパスをさばく。

ボールを手にした小堀がターンアラウンドシュートを放った。

だがこれもジャンのブロックによってリングに弾かれる。

「オオオツ！」

「くっ！」

「リバウンド！」

ボールが宙を舞い、その行方は残ったゴール下の選手に託された。

「うっ！」

(早い！ いつの間にも！)

「ふんがっ！」

厳しい争いを制したのは、神奈川の早川だ。

素早く光月の前に回り込むと彼の動きを封じつつボールに飛び込む。そして指先でリングへと押し込み、得点を決めた。

「入った！」

「後半戦、先制は神奈川だ！」

「簡単に逆転は許さない！」

気迫で得点へと結びつける神奈川。エース不在とはいえど、そう易々と流れを渡さないと示すようなプレイだ。

「よっしやあ！」

「ナイツシュ！」

声を精一杯出す神奈川の選手達。後半戦開始直後とあって勢いは盛んであった。

「ふうっ。やはり笠松のマークは疲れるな」

「でも小林さんの高さでスリーを抑えられるのは大きいですよ。やはり外からの攻撃を決められるのは厄介ですからね」

「ああ」

「おーい、それなんだけどさあ」

「うん？」

小林が厳しいチェックについているおかげで笠松はスリーを打ちにくく、ドライブの選択肢が多くなっている。栃木にとってこの効果は大きいものだ。

すると小林と白瀧が会話をしている中に神崎が割って入ってきた。「黄瀬もいないって事ならさ、俺と要のマーク変えてくれないか？」

俺が中村先輩のマークにつく」

「……ああ、そうだな。確かに5番森山のスリーを警戒するという点でもその方がよさそうだ」

戦力としても、因縁としてもその方が良いだろう。神崎の言いたい事を理解して白瀧は彼の提案を了承した。

直後、栃木の反撃。

栃木の攻撃に対し、神奈川は大きく方針を変えてきた。

まず白瀧に対して笠松が、神崎に対しては中村がマンツーマンでマークにつき、残る3人は森山をトップに中を固めるトライアングルツィーフエンスを敷いている。

(神奈川は白瀧と神崎。外を警戒してきたか)

小林は横目で自チームの一年生二人のマツチアッパを観察した。

「前半はうちの馬鹿がだいぶ世話になったな。俺がその礼をしてやるよ」

「……礼なんていりませんよ。俺も昔に随分と世話になりましたので」

笠松と白瀧の組み合わせは勝負慣れしれいる者同士の対戦とあつてか、緊迫した雰囲気の流れているように見える。

「久しぶりだな、神崎」

「ええ。こんなに早く当たるとは思っていませんでした。中村先輩」

一方、複雑な関係を示しているのが中村と神崎の二人だった。

同じポジションの組み合わせであるこの二人、実は高校よりもずっと前からの知り合いである。

小林は試合前、神崎が大仁多のチームメイトに打ち明けた話を思い返していた。

『知り合い?』

『はい。ミニバスをやっていた頃なのでだいぶ前になるんですけど、その頃のチームメイトだったんですよ』

ミニバスケットボール、通称ミニバス。小学生のみで構成されたバスケット競技であり、学校や地域のクラブチームなど様々な団体が存在する。

神崎はそのミニバスで当時神奈川にあったクラブチームで中村と同僚だったというのだ。

『当時から二人とも同じポジションでレギュラーを競い合っていたんです。ただ、攻撃を重視するというチーム方針もあって、中村先輩が最後の年の大会でレギュラーとして出場したのは俺でした』

『そうか。そういえばお前の出身地は神奈川だったな』

『中学は別なのでチームメイトとしてはそこで終わっただけですけどね。でも、俺が全中ではベスト16で敗退したのに対し、中村先輩は中3でレギュラーとして活躍してベスト8まで勝ち残って。そして地元の強豪である海常に進学した』

『——立場が逆転した、ってことか』

『ああ』

共感したのか、白瀧が悔し気にそう呟くと神崎が頷く。

『海常には入りたくなかった。悔しかったのもそうなんだろうけど。』

……何でだろうな?』

様々な思い入れがあるのだろう。うつすらと笑みを浮かべて首をかしげる神崎。皆静かに口を閉ざし、彼の言葉に耳を傾けていた。

『同じポジションの先輩として尊敬していた。けど負けたくもなかった。だからこそ勝敗がつきにくい味方じゃなくて、敵として戦いたかったって事なのかな?』

『それはきつと誰にもわからない。戦わない限りはな』

『——ハッ。それもそうだな。まあ、だから頼みがあります。もし俺が試合にでて、そして中村先輩も試合にでるって状況があるなら。その時は俺に任せてください』

白瀧に諭され、神崎にいつもの強気な姿勢が戻ってきた。

最後に仲間に頭を下げて頼み込む。

この試合で超えるべき壁を持つのはエースだけではない。自分も過去を超えたいのだと神崎の想いが籠められた一場面であった。

「……くっ！」

「自由にはさせないぞ、神崎！」

場面は現在に戻り、神崎と中村の対戦に。

中村はディフェンス力に長けた選手であり、その実力は全国でも目を見張るものがあった。

スリーが最大の武器である神崎にぴったり張り付いて自由にはさせない。ボールを手にしたものの、神崎は身動きを取る事が出来なかった。

「戻せ、勇！」

そんな仲間を助けるべく白瀧が横から駆け付ける。

神崎の後ろへ向かうと、後ろから白瀧へ手渡しでボールを預け、そのまま外へ切り込もうと加速する。

何とか彼を阻もうと笠松が全力で後を追った。

すると白瀧はボールを手にしたと同時に逆に切り返す。笠松の不意を突き、中央へと切り込んだ。

「ぐっ！」

（しまった！）

「うおおおっ！」

フリーになり、レイアップシュートに移行する白瀧。すかさずゴール下から小堀が出てブロックに跳ぶ。

ならばと白瀧は小堀の横からパスをさばいた。

その先にいるのはジャンダ。マークが存在しない状態を確認すると、勢いよくワンハンドダUNKを沈める。ゴールは大きく揺れ、その威力の大きさを示していた。

「ナイッシユ！」

「当然ダ」

「白瀧もナイス！」

やはり栃木のオフフェンス力は高い。一人を封じようと、他の4人が補えるだけの力を持っている。

黄瀬のいない現状ではしのぎ切る事は難しかった。

(どうだ、黄瀬。何の目的でベンチに下がっているかは知らないが、それならそれでいい。この間に俺達はどんどん得点を――)

得点をアシストした白瀧は『どうだ』と言うように神奈川のベンチ、強いては黄瀬をにらみつける。

すると、白瀧は黄瀬がベンチに座ったまま、何かを熱心に見つめているのに気が付いた。

(あれは、カメラか？ やはり青峰の模倣を今一度観察し直しているのか?)

両手に抱え込んでいるのでわかりにくいがおそらくは試合を記録しているビデオカメラだろう。

やはり青峰のバスケスタイルそのものを模倣しているのか。

なおさら攻めの手を緩めるわけにはいかないと白瀧はよりプレイに熱を籠める。

直後の神奈川のオフエンス。中村から早川へのパスに白瀧が反応し、ボールを奪った。

「あつー！」

「ステイール！」

「まずい！」

「チイツー！」

すぐさま反撃しようと走り出す白瀧の体に笠松が手を当てる。

これを見て審判の笛が鳴り、試合が一時中断された。

『ディフェンス、プッシング。黒4番！』

栃木の速攻を防ぐにはこれしかない。笠松の冷静かつ的確な判断だった。あのままでは確実に速攻を決められ、逆転されていた事だろう。

『栃木県、タイムアウトです！』

「えっ？」

「タイムアウト？ しかもうちが？」

そしてこの試合中断と同時に、藤代が取ったタイムアウトが行われた。

後半戦開始してすぐのタイムアウトに神奈川はもちろん栃木の選手達も疑問を抱く中、すぐさまベンチに引き上げていく。

「白瀧さん。一つお聞きします。もしも黄瀬さんがしばらく休むとしたら、青峰さんの模倣が出来る時間が伸びるような事はあるでしょうか？」

「なっ!？」

「は、ハアッ!？」

5人が戻るや否や、藤代が白瀧に問いかける。

藤代も黄瀬がベンチに下がる意味を考えていたのだろう。突然の指揮官からの問いかけに、白瀧は少し考えた後に口を開いた。

「……ありえない、とは言えません。確かに5分というのは試合にフル出場した疲労も考慮しての事。もしも黄瀬が今下がつている理由が休養の意味もあるのだとしたら、間違いなく5分はもち、さらに時間が延びる可能性も出てきます」

中学時代の事も振り返って冷静に言葉を綴った。

自分でも恐ろしい事だとは思う。しかし昔も黒子や自分を始めた控え選手との交代の後は変わらぬ調子で、時にはさらに調子上げて試合に臨んでいた。

ならば今回も予想を超える事は十分にあり得る。相手は進化する天才だ。万が一が十分起こり得る。

「なるほど。ならば少し方針を変えましょう。敵がインサイドとスリーを警戒しているので、そこを突く。白瀧さん、あなたにはしばらくパス回しと味方のフォローに回ってもらい、隙があれば外から狙ってください。また少しだけ入れ替えを行います」

故に栃木は先手を打つ。

白瀧が終盤で青峰の模倣を振るうであろう黄瀬を攻略するだけの体力を残しつつ、この第3Qで優位に立つべく藤代が手腕を振るった。

『タイムアウト終了です！』

一分の作戦会議が終わり、試合が再開される。

神奈川は敵に予想とはずれるような動きがなかったために特に作戦変更はなかったが、栃木はここでさらに動いてきた。

小林out勇作in

司令塔である小林を下げ、代わりに前半戦でも活躍していた勇作をコートに送る。

「そちらの小林を下げてうちの勇作を投入するとは。普段ならば絶対に見られない光景だな」

「ええ。国体ならではです」

二校の主将を務めた事があるもの同士の交代。あり得ない光景に岡田と藤代は面白そうに笑った。

そんな中、小林が抜けた事でできた司令塔の穴は白瀧が埋める。

「さあ一本！ じっくり決めていこう！」

先の速攻とは打って変わってゆっくりボールを運ぶ白瀧。

このタイムアウトで神奈川に何か変化があるかの確認しようという動きだ。

しかし神奈川に特に戦術の変更がないと理解すると、すぐに仕掛けていく。

ワンドリブルで笠松を振り切った白瀧。速さに長けた敵とはいえ、それは白瀧も同様だ。そして黄瀬に対抗しようとしている今、白瀧が負けるわけにはいかない。笠松のマークが外れると素早くゴール下へパスをさばいた。

その先にいるのは光月。早川が背に立っている状態でボールを手にする。

「行け、明。真っ向からの力勝負で、お前の力に対抗できるやつなんていない！」

相手がいようと光月には関係なかった。

白瀧は自信をもって光月にボールを託すことが出来る。

あの力自慢の陽泉を相手にパワーで挑んでいたのだ。海常であろうとも、光月を止める事は不可能だと。

「うおおおっ！」

光月のパウードリブル。異常な力を前に、ディフェンスについていた早川は呆気なくポジションを奪われていく。

「なっ!? おっ、おおっ!?」

「早川！」

「くそっ！」

その力を前に早川はあっという間にゴールに近寄られ、光月は素早くゴール側へとターンした。

ジャンプシュートを放つと、小堀が辛うじて指先で触れる。

ボールはリングに弾かれた。だが問題はない。

「さっきのお返しだー！」

勇作がチップインで得点した。彼の投入によりゴール下の厚みは強まっている。

リバウンド争いも白瀧が参加する必要がなくなったものの、光月の存在もあって栃木がインサイドを支配しようとしていた。

その後の神奈川の反撃。

今度は外からシュートを狙っていく神奈川だが、森山のスリーが白瀧に阻まれてしまう。

「うおおおっ！」

「ぐっ、うっ、おっ！」

早川が動きだす前に、光月が背中で彼を抑えつけた。

こうなれば体格で勝るのは光月だ。早川は身動きが取れず、光月のディフェンスリバウンドを許してしまう。

「また栃木がボールを手にした！」

「インサイド、一気に栃木が優位に立ったのう」

「早川さんの存在を光月君が抑えているのが大きいです。加えて神奈川は黄瀬君が下がって高さが下がったのに対し、栃木は橙乃（勇）さんがSFのポジションに入ってインサイドが強くなっている。これは厳しいでしょう」

前半戦こそ早川がリバウンドを手にしてきたから神奈川はゴール下で力を発揮していた。

だが今は栃木に光月が入り、ジャンと勇作も引き続きリバウンド争いに参加する事で形勢は大きく変わっている。

桃井はこの戦況を覆すのは黄瀬がいない限り不可能であろうと、試合の流れを察した。

(……皆越えて行く。要も、明も。キセキの世代という化け物みたいなやつらと戦って、それでも心折れずに強くなっている)

キセキの世代と渡り合い、成長するチームメイトの二人を羨まし気に見る神崎。

二人と比べれば自分はどうか。相手は紫原でも黄瀬でもない。なのに自分だけが指をくわえて現状を維持するのか？

——冗談ではない。

神崎も一人、覚悟を決める。

「中村先輩」

「ん？」

「俺だけこのまま負けっぱなしってわけにはいかないですよ。俺はここで、あんたを倒す！」

自分だけの戦いではない。すでに引退した山本、他のチームメイトの想いも引き継いだのだから。

白瀧からパスを受けた神崎。

大きく上体を動かしてシュートモーションに入り、中村を引き付ける。

そして素早く中へと切り込んだ。山本のドライブを彷彿させる速さは中村のマークを一瞬引き離す事に成功する。

「ぐっ！」

(神崎、ビデオでも見ていたが、やはり良いスピードを手に行っている！)

「だが」

「残念だな。行き止まりだ！」

しかしドライブを読まれていたのか、ゾーンのトップに立つ森山が詰め、中村との挟み撃ちの形となってしまった。

パスコースも厳しく、これではまたボールをキープするのも精一杯

だろう。

「いや、負けない！ オフェンスこそが俺の武器なんだ！」

否。相手がディフェンスに長けた選手ならば、神崎はオフェンスに長けた選手。ただで終わるわけがなかった。

森山が迫る中、神崎は森山に対して右足を一步踏み込み、そして勢いよく床を蹴って二人から遠ざかる。

「なっ!？」

(距離が遠い。ステップバックシュートか！)

(だがそれも陽泉戦のビデオで見ている！)

「撃たせない！」

神崎がIHで新たに手にしていたステップバックシュート。

ディフェンスとの距離を空ける技だ。

されどこれも二人はすぐに反応する。距離を空ける神崎との間を一步で詰めてブロックに跳んだ。

「言ったでしょ。俺があんたを倒すって！」

「ッ!？」

だがブロックは届かない。

確かに距離を詰めたはずなのにまだ距離が出来ていた。後方に下がりがながら放たれた神崎のジャンプシュートが、静かにリングの中央を射貫く。

「なにつ!？」

「決まった！」

「今のは……」

「ステップバックフェイダウェイシュート？」

神奈川の選手達が驚愕に目を見開いた。

今のはステップバックシュートと彼が得意とするフェイダウェイシュートの組み合わせだ。ステップバックで一度相手との距離を空けた後、さらにフェイダウェイシュートでさらに相手を置き去りにする。一步詰めただけでは間に合わない。卓越したボディバランスがなければできない技だ。

「よっっー」

力強くガッツポーズをする神崎。
彼もようやく、新たな一步を踏み出そうとしていた。

その後も栃木の猛攻は止まらなかった。

「さあ、どんどん行くぞー！」

神崎はワンドリブルで中村を揺さぶると、そのままスリーを放つ。
切り込みも警戒していた中村のブロックは少し遅かった。神崎の
スリーが炸裂する。

「うおおっ！」

「ちいっ！」

（こいつ。まだタイミングが取れていないはずなのに、瞬発力で強引
にコースを塞いでくる！）

「ナイス！」

ディフェンスでも勢いは止まらなかった。

森山の変則シュートに白瀧が触れると、リバウンドを制したのは
ジャン。この後一次速攻こそ防がれるものの、ゴール下の光月を起点
に攻めて得点に成功した。

栃木が攻守で圧倒している。この勢いを止める術は、黄瀬を欠く神
奈川には存在しなかった。

第3Q残り2分を切り得点は（栃木）66対51（神奈川）。

前半戦までは同点だったが、ここまでの戦いで栃木が15点も引き
離していた。

「……監督。大丈夫っす。行かせてくださいー！」

「ああ。頼む。この流れを変えてくれ」

これ以上はもう見ていられないと判断したのか、あるいは仕込みが
完了したのか。

黄瀬がベンチから立ち上がり監督に頼む。武田も戦況を理解し、そ
れしかないと許可を出した。ついに黄瀬が選手交代を告げに行く。

「藤代監督！ 来ます！」

「黄瀬さんですか？ わかりました。小林さん、行けますか？」

「はい、任せてください！」

「お願いしますよ。またあなたに司令塔を一任します」

すると相手の動きを観察していた西條がすぐに神奈川の動きを藤代に報告した。

相手に呼応して藤代もすぐに小林の状態を確認し、指示を出す。黄瀬が入るならば相手をするのは白瀧だ。その彼に引き続きPGを任せるのは重荷だろう。ならばこの場面で司令塔は小林以外に務まらない。

小林もすぐに着替えて選手交代に向かう。

『選手交代です』

そしてボールがラインを割った後、アナウンスが流れた。

指示に従いつつ栃木は勇作が、神奈川は中村がそれぞれベンチへと戻っていく。

勇作out小林in

中村out黄瀬in

「よくやってくれた」

「ああ。気を緩めるなよ」

「後は頼むぞ、黄瀬」

「はい。休んでてください、中村先輩」

皆一言告げて入れ替わる。小林と黄瀬、二人とも気迫に満ち溢れた表情をしていた。

(問題はないはずだ。15点差まで離れたこの戦況。仮に青峰さんの模倣が伸びたとしても10分丸々できる程伸びるなんて事はないはず。間違いなく栃木が有利だ)

敵のエースが戻ったとはいえ流れはまだ栃木にある。得点差も十分だ。余力も残っている。栃木の優位は変わらないはずだ。

(なのにな何故こうも胸騒ぎがする?)

だが、長年指導者を務めていた藤代は嫌な予感が止まらなかった。

「よしっ。行くぞお前たち。反撃だ！」

「気を引き締めろ。第3Qは残り僅か。さらに点差を広げるつもりで

いけ！」

いずれにせよ、ここは大きな分岐点となる。

両県の主将がチームに活を入れた。時間は少ないが、おそらくは第4Qにつながる時間帯となるだろう。

まずは神奈川ボールで再開。

何としても攻撃を成功させたい神奈川が命運を託すのは、やはりエースだ。笠松から黄瀬へとボールが渡る。

(ああ。俺が勝つ。もう負けない。負けさせない！)

ボールを持った黄瀬は冷静に、かつ闘志を燃やし対面する敵、白瀧を睨んだ。

「白瀧つち。さつき言ってたっスよね。全部に勝つって」

「あ？」

「——じゃあその全部に、白瀧つち自身は含まれているんスかね？」

「えっ?」

突然の問答に白瀧はすぐに答えられなかった。

そして彼が考えるよりも先に、意味は明らかになる。

——黄瀬の体から殺意のような気迫があふれ出した。

冷や汗が白瀧の頬を伝う。

「まさか」と脳裏にこの先の未来が過ぎり、そして現実と化した。

突如大きく切り込んだ黄瀬。

右横を突破せんとするドライブに白瀧も食らいつく。すると黄瀬は白瀧のマークを振り切れないままレイアップシュートを撃とうと前に跳ぶ。すかさず動きを呼んだ白瀧が跳躍するが、ここから黄瀬は彼の足元をすべるように駆け抜けた。

「なっ!？」

(これは、ギャロップステップか!?)

「チイッ！」

跳んでしまった白瀧では間に合わない。黄瀬がジャンプシュートを撃つのを見て、ジャンが代わってブロックを狙う。

「無駄っスよ」

「ッ!？」

そのデイフェンスに対し、黄瀬は指先を転がすようにボールにスピンをかけてリリースする。回転がかかったボールはバックボードに当たって軌道を変え、リングを潜り抜けていった。

（これは、ヘリコプターシュート!?!）

（間違いない。今のは、俺の技だ。だけど、今日俺はこの技を見せていないはず!）

今の一連のプレイは白瀧の技そのものだ。しかし今日黄瀬の前では見せていない技の連続を目にして、白瀧は焦りを抱く。

「気にするな! 一本決められたただけだ! こつちも攻撃を決めていこう!」

ただ恐れすぎてはならない。小林はドリブルを続けつつ、指示を飛ばした。

まだこちらがリードしている状況だ。一本ずつ決めていけば問題ない。

（とはいえ、さすがに黄瀬に活躍されすぎてはマズイ。ここは確実に攻める!）

「光月!」

小林は勝率が高い場面を選び、ゴール下の光月へとパスをさばいた。笠松の頭上を越えるパスは敵も反応できなかった。難なく光月はパスをもらおうと、パワードリブルで中へと攻めていく。

「ぐうっ!」

（今だ!）

早川が押し返すのに必死な状況でいると、光月が隙を見てスピンドライブ。ゴール側へと躍り出てワンハンドダンクを放った。

「させないっすよ!」

「なっ!?!」

（いつの間になんて瞬発力!）

彼のこのシュートを横から黄瀬のブロックが阻んだ。ダンクが決まる寸前、光月の手からボールを叩き落とす。

「…………このッ! 何時までも好き勝手にやらせてなるものか!」

ならばと今度は白瀧がゴールを狙っていく。

小林からパスがさばかれるや、一閃。すさまじい切り返しで黄瀬の横を突破する。

「無駄っスよ。今の俺に隙はない」

（バックファイア！）

「ぐっ!?」

「よしっ！ ナイス！」

だが抜かれた黄瀬は背後からステイルを敢行した。ドライブで切り込む白瀧のボールを叩き、攻撃を封殺する。しかもボールは森山の手に渡り、栃木は機会を逃してしまった。

（マズイ。このままだと！）

「うおおっ！」

「うっ！」

このまま神奈川に流れを渡しては駄目だと神崎が奮起する。

森山が外からシュートを狙うと、指先は触れないもののプレッシャーをかけたおかげでこのシュートはリングに弾かれた。

ボールはリバウンドを任された選手達にゆだねられる。

「ここ、っスね」

「うっ！」

すると、そのボールにいち早く飛びついたのは黄瀬だった。

あえてポジション争いにセットしない飛び込みリバウンドで瞬間にボールを掠め取っていく。

（こいつ！）

「間違いない。黄瀬さんがベンチにいたのは休養の為ではない。——白瀧さんのバスケスタイルそのものを、模倣していたんです」

攻守に躍動する黄瀬。彼の活躍を見て、白瀧が、藤代が確信に至る。

今黄瀬が模倣しているのは、かつてIHで彼がやっていた事と同じ。白瀧の技ではなく、バスケスタイルそのものを模倣している。その模倣を完成させるために、あえてベンチに下がり、ビデオでも彼が観察できなかったものを目にし、自分の物にしていたのだろう。

「もしも本当なら最悪の展開やな。青峰と黄瀬君が互角だったのは、二人に身体能力に差がなかったからや。せやけど、今は違う」

今吉が残酷な事実を告げる。

青峰と黄瀬の対戦とは話が全く違う。何せ白瀧は黄瀬にスペックで圧倒的に劣っているのだ。もしも全く同じバスケスタイルで挑まれたならば勝ち目はないだろう。

それを示すように、今再び黄瀬にボールが渡ると果敢に切り込んでいく。

白瀧が必死に食らいつき、自由にはさせない。すると黄瀬はレイアップシュートの構えから持ち手を入れ替えると、ボールを持つ左手を体の後ろへと回す。

(ビハインドパスか！)

「させねえー！」

読み合いで勝てれば勝機はある。白瀧は懸命に手を伸ばし、シュートコースを塞いだ。

そんな彼をあざ笑うかのように、ボールは黄瀬の右ひじに当たって逆側へと向かっていく。

「なん、だと……!?!」

(エルボーパス！)

パスの先に笠松が走り込んだ。スリーポイントラインの外側でボールをもらい、そのままスリーを放つ。

「撃たせんー！」

そうはさせるかと小林が跳んだ。

長身を活かしたブロックだ。触れる事こそ出来なかったが、そのプレッシャーは非常に大きなものだ。これは落ちると小林は視線をリングに向ける。

そして小林は、笠松が放ったシュートがリングを潜り抜ける瞬間を目にした。

「なっ！」

「悪いな。ここで決めなきゃ、主将の立場がねえんだよ」

まさに執念の一発だった。エースが繋いだチャンスを主将が決める。神奈川をさらに勢いづかせるプレイだ。

「要のバスケスタイルを模倣したならば、第1Qのような分析も難し

い」

「パスだつて出すし、そもそも奴の動きは変幻自在だ。止められねえ」
「しかも青峰の模倣と違い、これなら残り時間すべて模倣しても体力が持つ。考え得る限り最高の手だ」

「これならまだ他のキセキの世代の模倣の方がマシだつたかもしれないわね。違う戦術なら対抗する術だつてあつたでしょうに、上位互換となれば話は全く違うわ」

赤司は当然の結末だろうと表情一つ変えずに呟いた。根布谷達もこれは厳しいだろうと結論を出している。

「嘘だろ」

（あんなパスは司令塔並の視野がなければできないはずだ。そしてそれを得るためには司令塔としての修練が欠かせない。一朝一夕でできる事じゃないだろ）

一方、敵の鮮やかな動きを目にした白瀧は頭を抱えていた。

あれほど完璧にこなすには司令塔としての長い日数が必要となるはずだ。いくら黄瀬でもそう簡単にはできないと思つていたのに。

それすらも、奴は自分の物にするというのか。

「——ッ。主将！」

「白瀧？」

「このまま終わらせませんよ。俺が、決めます！」

それでも負けてなるものかとい自分に言い聞かせた。

小林にボールを要求し、絶対に勝つんだと闘志をたぎらせる。

まだ白瀧には切り札が残っている。それならば勝ち目はあるはずだ。

（フロー強制解放！）

今一度、彼は没頭状態に突入した。

「ッ!?!」

その直後、彼はこの試合で一番の驚愕を覚える。

「——残念だったな白瀧、藤代。お前たちが想定している以上に、黄瀬涼太は天才だ」

武内が冷たい口調で断じた。これが神奈川のエースだと、示すよう

に。

(フロー強制解放)

黄瀬も白瀧と同じ没頭状態に突入する。

「……ばかな」

思わず白瀧はそう言葉をもらした。

いくら黄瀬が自分のバスケスタイルを模倣したとしても、これだけは無理だと思っていた。

何故ならフローは白瀧が自分の力だけでは到達できなかつたものだ。帝光時代に偶々彼が追い詰められた精神状態がうまく適応し、解放する条件を満たしたから入れた没頭状態。本来ならば入れたとしてももう少し先の事であつただろう。

自分だけでは入れなかつたのだから、相手とて自分を模倣しても入れないはずと考えていた。

(見たもの全てを模倣する。凡百の努力などすべて一笑に付す、進化する天才)

——何故思い至らなかつたのだろうか。

もしも相手の力量を上回る存在が自分を模倣したならば、たとえ自分の力だけでは至らなかつた領域にさえも、届いてしまうだろうと。

「隙ありっス！」

「ッ！」

『アウトオブバウンズ、白ボール！』

白瀧の腕からボールをはたく黄瀬。辛うじてボールはラインを割つたおかげで攻撃の機会は続くが、白瀧は目の前に広がる現実に打ちひしがれていた。

(ああ、改めて実感させられる。俺がどうしてこれほど黄瀬に怒りを覚えているのか、恐れを抱いているのか。——理想なんだ。俺にとつて黄瀬は理想そのものなんだ。俺が追い求めた俺そのものなんだ)

背が高く、力もあり、何でもこなすことが出来る完璧な万能選手^{パーフェクトオールラウンダー}。

それは紛れもなく白瀧が追い求めていた目標の選手、模範のSF、夢見た自分だ。

その理想の相手が理想の自分を体現している事に、白瀧は大きな衝

撃を覚えていたのだ。

(キセキの世代は他のやつの強さを敬い、認めこそすれど、そうなりた
いと思う事はないだろう。俺だけ違うんだ)

『どうしてあいつなんだ！ どうして俺じゃない!? どうして俺はあ
いつ程強くなれないんだ!』

(俺だけが、その存在を憎らしく思っているんだ)

これがおそらくは白瀧とキセキの世代の違い。皆が自分の方が強
いと思いつつ、嫉妬の感情を抱く事をやめられない。

(俺はお前のようになりたかった)

声にもならない悲痛な叫びは、白瀧の正真正銘偽りのない想いだ。
かつて彼が初めて黄瀬のプレイである模倣を目にした時から抱いた
もの。

ただひたすらに強く、何をも救えるだけの力を手にしたかった。白
瀧は黄瀬を羨ましく、そして同時に憎らしく思っていた。

叶えたくて、されど実現には至らなかった理想の自分。それが今最
高の形で、最悪の敵として白瀧の前に立ちはだかる。

「……まずいぞ」

何とか小林のジャンプシュートが決まり栃木に得点が記録された。

しかし栃木が得点を決めたにも関わらず、青峰は栃木のピンチは続
いていると警告する。

「ここで負けたらおそらく、白瀧のフローが切れる。しかも最悪の切
れ方だ。試合の切れ目として途切れるんじゃないやねえ。全力を出して通
用しないとなれば、集中力も戦意もゆらぐだろう」

次の攻防ですべてが決まると青峰は言う。

残り時間を考えればおそらく次が第3Q最後のプレイだ。そして
その戦いでもし白瀧が黄瀬に敗れるような事になれば、立ち直る事も
難しくなる。

「絶好調から一転、絶不調だってあり得る」

試合の行方が決まりかねない大事な局面。

それを理解しているのか、ついに黄瀬へとボールが渡る。

「——黄瀬！」

絶対に勝つと白瀧が叫ぶ。

「悪いっスね。もらうっスよ、この勝負！」

負けてなるものかと、黄瀬が吼える。

ピツタリマークにつく白瀧をチェンジオペースで揺さぶり、一気に加速。

白瀧が追いつがるも、黄瀬はフリースローラインに到達すると跳躍。軌道が高いティアドロップを放った。

「ッ！」

背丈で劣る白瀧はこのシュートに触れる事さえできなかった。

自分の得意技が綺麗に決まる瞬間を、第3Q終了のブザーと共に目に刻む。

『第3Q終了です！』

「ぐっ！」

(強い。強すぎる。俺よりも、ずっと完成度が高い俺そのもの……！)

「おい、白瀧！」

「マズイ！」

体を震わせ、両の拳を力の限り握りしめる白瀧。

そんな彼の異変を察して小林や藤代がすぐに声をかけようと駆け寄るが。

「うわあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

それよりも早く、白瀧の叫びがコートに木霊した。

「うおっ。何だ急に？」

「やけになったのか？」

「……いや」

突然の咆哮は観客席にも一部聞こえる程だった。

試合を投げ出そうとしているのかと、葉山達が批判する中、赤司がその意見を否定する。

「——フウツ。すみません。大丈夫です」

一つ大きな息を吐き、白瀧は仲間に無事をアピールする。

「ギリギリだったな。フロアが解けかけた瞬間、強引に声を張り上げて嫌な気持ちを発散させやがった」

「そこら辺は勝負なれしとるのう。ただ、まだ現状を維持できただけやで」

あのままでは間違いなくフローが切れ、絶不調になっていただろう。故にその前に会えて声を荒げる事で流れを完全にそこで途切れさせる事で絶不調にならないようにしたのだと青峰は解説する。

たしかにこれならばまだ希望は繋いだ。

だが、まだ勝利の糸口が見つかったわけではないと今吉は笑みを浮かべて言う。

「あの勢いなら黄瀬君の力で逆転するのも無理ではないで。栃木が勝つには、白瀧君が自分より強い自分に勝つしかない。できなければおそらく、栃木の負けや」

黄瀬に二人以上割くのは得策ではない。神奈川は高精度のスリーを決める二人がいる上にリバウンドも強い。人数を分散させればそこから突破されるだろう。

故に黄瀬を止めなければ一対一で止めるしかない。

だが、今白瀧のバスケスタイルを模倣している黄瀬を止めるのは難しい。

第3Qを追えて(栃木)68対58(神奈川)。リードしているのは栃木。しかし、追い詰めているのは神奈川の方だった。

——黒子のバスケ NG集——

突然の咆哮は観客席にも一部聞こえる程だった。

試合を投げ出そうとしているのかと、葉山達が批判する中、赤司がその意見を否定する。

「——フウツ。やべえ、疲れた」

「逆効果じゃねえか!」

実際大きな声で叫ぶのって結構疲れる。

第百六話 新時代

第3Qを終えて栃木リードで最終Qを迎える神奈川との一戦。しかし黄瀬が見せた大躍進の前に、そのリードはあつてないようなものとなつている。

「現状、白瀧さんのスタイルそのものを模倣した黄瀬さんを封じ込めるような策は、ありません」

休憩となり、選手達が引き上げてきた栃木ベンチ。

真つ先に口を開いた藤代の言葉は、この厳しい状況を改めて選手達に自覚させるものだった。長年栃木の代表を率いてきた者の言葉とあつてその重みは非常に大きい。

「パスまでこなすようになり、第1Qのような動きを読む事も現状では不可能。黄瀬さんを止める事は容易ではない」

「そんな……」

「白瀧、お前何かないのか？ 陽泉戦の時に見せたロングスリーみたいに、まだ隠している大技とか」

「ありません」

何人か悲観に暮れる者が現れる中、勇作が白瀧に何か打開策を持つていないか問うも、彼は即座に首を横に振った。

「下手に希望を持たせないよう先に言っておきますが、あの時のような切り札はもう残っていません。正直、IHから国体までの期間が短すぎた。細かいプレーなら残っていますが、キセキの世代対策になるようなものは残っていません」

彼の言う通り、勝ち目を完全になくさないようにと白瀧はいくつもの手を残してはいる。

だがこの時すでに白瀧はそのすべてが黄瀬涼太には通用しないであろうことを悟っていた。何もかも模倣してしまう黄瀬の前には、どんな手も瞬時に倍返しを食らい、返り討ちにあうと。

「ええ。それはわかっています。ゆえに——3分。この後第4Q最初の3分間を改めて黄瀬さんのプレーの分析、対策に徹底します。私と橙乃さんをはじめ、ベンチから攻略法を探ります」

だからこそ藤代はこの苦境を打破する策を講じようと、最終Qの序盤を分析の時間に当てると告げる。まともに渡り合う術がないならそれを見つげ出す。それしかないという決断だった。

「今神奈川の流れを作っているのは間違いない。黄瀬さんだ。彼を止めない限り、敵の勢いは止まらない」

「確かに神奈川は中外と隙が無い。黄瀬をどこかで止めなければ相手の攻撃を止める事は難しい」

「3分あれば私たちが必ず攻略の糸口を見つけ出します。すみませんが、白瀧さん。それまではあなたが黄瀬さんに挑み続けてください」

黄瀬一人に戦力を割くことは出来ない。相手は他の4人もバランスの良い選手が集う神奈川だ。

だからこの流れを変える為、敵の最大戦力となり、この神奈川ムードを作りだしている黄瀬を止める策を見つけ出して見せると藤代は語気を強めた。

「でも、あんな完璧万能選手を攻略する手口なんてあるんですか？

ついに相手はパスまで完璧にこなすようになって、要の切り札であったフローにまで入れるようになっていっているのに」

「完璧な選手なんて存在しません」

なおも光月が不安を呈する中、そんな感情を一蹴するように藤代が強い口調で訴える。

キセキの世代という最高戦力を相手にしている戦いで、藤代らしくない精神論のような語り方。

確信がない説明だが自然と聞いた者達の目に闘志が宿った。

「——はい」

「うちがリードしている事には変わりないんだ。リードを保ったまま黄瀬の攻略法を見いだせれば、十分勝ち目はある」

「ああ。このまま逃げ切るぞー！」

まだ勝っているという事実に変わりはない。最強の底力による猛追を何としても振り切ろうと意識を1つにした。具体的な打開策はないものの、勝利を掴もうと意志を固くする。

「ええ。ただ、白瀧さん。ここからはあなたにとって厳しい展開にな

ります。何とか堪えてください」

「わかっています。それにただやられるつもりはありません」

選手達が戦意を貫く姿を見て嬉しく思う一方、藤代は一番辛い時間帯を味わう事になるであろう白瀧に謝罪した。

敵が予想以上の進化を遂げている仕方がない現状とはいえ、それは言い訳に過ぎない。

何とか諦めないでくれと願う中、白瀧は問題ないと一足早く立ち上がりコートに向かった。

「俺はあいつに勝つために、ここまで来たんですから」

強い。敵はあまりにも強大に過ぎる。

淡々と自分のバスケスタイルを模倣し、自分以上の力を発揮する黄瀧は、まさしくキセキと謳われるに値する最高のSFだろう。

——ならばこそ俺が超えるしかない。

頂がまさに目の前にそびえ立っているのだ。エースである自分が挑まずにしてどうする。

最高を超えた先にこそ、求めていた理想の景色が広がっているはずなのだから。

己の才覚の限界を悟りながら、それでも彼は進んだ。

願いが成就する未来を信じて。過去の再現を夢見て。

激闘となった栃木対神奈川戦もついに最終Qへ突入した。

第3Qで黄瀧の更なる進化が明らかになったものの、対する栃木の出方に変わりはなかった。選手もマッチアップも変更なし。これといった動きの変化も見られない。

何かしら黄瀧への対策を打ってくるであろうと予測した観客はこの栃木の動きに疑問符を浮かべた。

「栃木は神風特攻って感じですかね？」

「いや、違うな。おそらく探っているんだ。黄瀧を攻略する手段を」

自力での勝負を挑むのか。そう考える者も現れる中、赤司など一部の者はまだ栃木が黄瀬の攻略を諦めていない事を悟る。

まだ時間は10分。キセキの世代の力をもってすれば逆転は十分可能な時間帯だ。

だからこそ栃木は黄瀬を止めるべく、何か手段を模索しているのだと。

「お前らしいな藤代。——ならば見せてやれ黄瀬。どのような策を講じても無意味。すべてを凌駕する力を」

武内もそれを理解した上で、あえて黄瀬重視で組み立てるという方針を貫いた。彼も黄瀬の力を信じている。たとえ敵がどのような策を講じようと、それら全てを打ちのめす才能を持っていると。

「うおおおっ！」

小林から光月、敵の弱点である高さをついたパス。だがボールは光月に渡ることなく、途中で黄瀬によって弾かれた。

「ッ！」

「速い！」

（白瀧の瞬発力か！ しかも黄瀬の方が腕の長さも優れているから、あいつ以上の守備範囲になっていやがる！）

前半戦よりさらに一段と強まったディフェンス力。ワンオンワンだけではない。他のサポートも完全だった。

ボールを森山に拾われ、神奈川が反撃に転じる。

「行くっすよ、白瀧っちー！」

「……黄瀬。止める！」

神奈川の最初のオフエンス。ボールが渡ったのは黄瀬だ。白瀧と黄瀬、フローに入った者同士の戦いが再び始まった。

「やっぱり海常は黄瀬を中心に攻めるのか。となると……」

「誰だつてわかる問題だろ。戦術が同じ選手同士の戦いならば、基本性能スベックがより高い方が勝つ」

どちらも本来の状態よりもさらに運動能力が高まっている。バスケスタイルも同じ。

条件も同じならば勝つのはどちらか。

——考えるまでもないと、葉山や根布谷が結末を察し、冷たく断じた。

白瀧が懸命に腕を伸ばす中、黄瀬はダブルクラッチで彼のブロックをかわし、得点を決める。

「ッ！」

「もらったっス！」

(駄目だ。白瀧の読みも通じない！)

(元々要自身が相手の裏をつくプレイを得意としていたんだ。それを模倣された事で、黄瀬を止める事が難しくなっている！)

運動能力で劣るならば相手の動きに反応して、というのも難しい。元来白瀧が得意とした相手の不意を突く戦術が黄瀬の物になった事で白瀧の強みは半減していた。

やはり黄瀬の活躍著しい戦況で、大仁多の劣勢は変わらない。

何とか小林がうまく攻撃を組み立てて得点を決めていくも、攻撃のリズムは中々作れない。

(行かせねえ！)

光月のシュートがリングに嫌われ、白瀧は何かリバウンドを確保しようとして黄瀬をスクリーンアウトで抑え込む。

「もらっつスよ！」

すると黄瀬は水泳のクロールのような動きで白瀧の腕を払いのけるとあつという間に彼のポジションを奪い返す。

「ぐっ！」

(スィムか！)

またしても自分が得意とする技で反撃を食らうと、そのまま黄瀬にディフェンスリバウンドを許してしまった。

栃木の攻撃は失敗に終わり、再び神奈川にボールが渡る。試合時間が短くなる事に比例して、徐々に神奈川がボールを支配する時間が増えていった。

神奈川の攻撃。小堀から黄瀬にボールが渡るとマークにつく白瀧を笠松がスクリーンで行く手を阻んだ。必死に小林がフォロイーに入ると、笠松がピック&ロールでフリーになり、ボールを受け取る。

「ッ！」

「今までの一対一の能力に加えて、インサイドプレーやパス、コンビプレーも多彩になっている」

「無敵、圧倒的。これが進化する完璧万能選手、黄瀬涼太」

黄瀬を止める事に精一杯になれば、味方を活かす事も得意となった今、他の4人が黙っていない。それを栃木に見せつけるような神奈川のプレーであった。

「このっ。舐めるなっ！」

「うおっ！」

（こいつ！一瞬で立て直しやがった！）

だからと言って黙ってみているわけにはいかない。

白瀧は瞬時に敵の動きを見極めると、笠松のシュートをブロック。その軌道をずらす事に成功した。

「んがあっ！」

「うわっ！」

（やはりオフエンスリバウンドへの反応が早い！一瞬でも遅れると、あつという間に飛び込まれる！）

しかしその後、リバウンドを制したのは早川だ。逸早くボールが外れた事を察すると、光月とのポジション争いに制してボールを手にする。

「早川先輩！」

「おっ！」

すると早川が着地すると同時に、外から走る黄瀬が早川を呼んだ。小林を振り切った黄瀬は早川からパスを受けると、そのままジャンプシュートを撃つ。

「このっ！撃たせるか！」

「させねえ！」

「くっ！」

黄瀬の素早い動き出しに光月と白瀧が反応した。

二人で黄瀬のシュートコースを塞ごうと手を伸ばす。

しかし勢いが余ったのか光月の体が黄瀬に衝突。審判の笛が鳴っ

た。そんな厳しい状況で、黄瀬は力に負けることなくシュートを放つ。

彼が放ったボールは綺麗な放物線を描き、リングを潜った。

「なっ!？」

『デイフェンス！ プッシング、栃木^白13番！ バasketカウント、ワンスロー！』

「そんな。ぶつかったのに……」

ファウルを受けてなお得点を決めた黄瀬に光月は言葉を失う。

光月は栃木一の力を誇っていると云える選手だ。彼のブロックは計り知れない衝撃だろう。おそらく白瀧でさえバランスを失い、シュートを決める事は難しいはずだ。だからこそ、彼のファウルを受けてなお得点する黄瀬の力はより印象に残った。

「黄瀬にダブルチームを当てる事だつて難しい。神奈川には黄瀬以外にも二人外から高確率で沈めるシューターがいる上に、リバウンドも強い」

「まさに隙なしの万能チーム」

見れば見るほど完璧。チームとしても完成している。

それは、かつて白瀧が抱いていた感情と全く同じもの。

勝とうと思えば思うほどに、勝ち目がないという非情な現実を叩きつけられる。

黄瀬がフリースローを確実に決める中、栃木の選手達に不安が脳裏をよぎった。

残り時間6分47秒。(栃木)72対66(神奈川)。ついに神奈川が6点差、スリー二本分まで点差を縮める。

『栃木県、タイムアウトです!』

そして黄瀬のフリースロー成功の直後、藤代が依頼したタイムアウトが宣告された。

選手達がそれぞれベンチに下がっていくも栃木の選手の表情は暗い。

「ハアツ、ハアツ……」

特に白瀧。黄瀬とマッチアップしていた彼は疲労の色が特に強い

ものになっていた。

「要はよくやった。涼太に自分のスタイルを全て模倣され、圧倒される中。それでも一秒も集中力を切らさず、フローを維持して相手の全力を引き出し、情報の収集に努めていた」

「普通なら、つうか前のあいっならとつくに切れていたはずだ。よく持ちこたえたもんだ。あとはベンチワーク次第か」

身体的にも、精神的にも白瀧にとっては辛い時間帯となった三分。赤司や青峰は彼の目立たぬ活躍を認め、その上でここからはこの時間をつかんだ情報によってあるいは流れが変わるかもしれないと両県のベンチを静かに見つめる。

「わかったことは、手は一つだけあります」

「な、何ですか!?!」

時間は1分のみ。選手全員がベンチに戻るや、藤代は分析した結果を選手達に話し始めた。

何か見つかったのかと、神崎は身を乗り出してその言葉に耳を傾ける。

「白瀧さん。あなたの模倣を手にした黄瀬さんを、あなたが真正面から打ち破るしかない」

「ッ!」

「やはり……」

「それしか、ないのか」

だが続けられた説明は彼が求めていた者とは全く異なるもの。

神崎はもちろん、小林でさえ藤代の説明の前にそれ以上言葉を紡ぐ事は出来なかった。

ただ何もわかったわけではないと、藤代の指示を引き継いで、橙乃が口火を切る。

「この3分、私たちが黄瀬君のプレーを観察してわかった事があります。今黄瀬君は白瀧君のバスケスタイルを模倣していますが、それ以外の技は使用していません」

「どういうこと?」

「桐皇戦、青峰さんのバスケスタイルを模倣した時と同じです。つま

り第1Qのように様々な選手の技を模倣するという自由度はなくなつたという事です」

「もちろん白瀧君の戦術を物にしているから、その行動を予測する事は厳しいですけど……」

「だから、白瀧が自分を模倣した敵を倒すしかない、と言つたんですね」

橙乃と藤代、二人の分析を聞き、五人はようやく納得した。

現在の黄瀬は確かに戦力は上昇したように思えるが、第1Qのようにあらゆる選手の技を繰り出しているわけではない。だからこそ藤代は先ほどのような説明をしたのだと。

ただ、橙乃が言うようにそこまでわかつてても基本能力で勝る黄瀬を止める事は非常に困難だ。白瀧の持つ多種多様な技量を手にしたのならば、結局黄瀬の動きを読む事は難しい。真正面から打ち破るしかないのだから。

「先に言っておきますよ、白瀧さん」

「はい？」

皆が表情を硬くする中、一人沈黙を貫いていた白瀧に藤代が語り掛ける。

「あなたのスタイルを模倣した黄瀬さんの事を、自分より強い自分などと考えていませんか？」

「ッ」

まさに的を得た指摘だつた。〃自分より強い自分〃、〃叶えられなかつた理想の体現〃。それが白瀧が考える今の黄瀬なのだから。

心を読まれ、白瀧は何も返す事が出来なかつた。すると藤代はそんな彼と視線を合わせる様にしゃがみこみ、両肩を思いつ切り握って強く訴える。

「見誤つてはなりません。たとえ敵がどれだけ模倣しようとも、極限にあなたに近い敵にすぎない。あなたはあなただ。それを見失わないでください。——私がなぜ、白瀧さんを獲得したと思つているのです？」

「え？」

「ただスコアラーが欲しかっただけならば青峰さん達を獲得したでしょう。それこそ同じポジションの黄瀬さんの将来性を見越してスカウトするという手だっただけであつた。だが私はあなたを選んだんです。忘れないでください。自分の強さを、自分の武器を」

藤代が白瀧を選んだ理由。彼が持つ強さ、武器。それは間違いなくあるのだと。指揮官として、エースの役割を果たせる。今でもそう信じていると語気を強めた。

「——現状の黄瀬さんはパスもさばく事でフリーになる選手が増えてしまっている。これに対処すべくスピードに特化した選手で固めます。神崎さん、ジャンさんに代えて楠さん、勇作さんを投入します。センターのポジションには光月さんが入ってもらい、それにならってマッチアップも変更します」

白瀧を鼓舞すると、藤代は立ち上がり全体への指示へと戻る。

先ほどの攻防では黄瀬がパスもこなす事で神奈川にフリーとなる選手が増えていた。ゆえにそれをカバーする為に速さにも長けた2選手を投入。早川の存在が厄介だが、リバウンド能力は高いも個人技の力は他の選手ほどではないという判断しての事だった。

「わかりました」

「よしっ！」

交代を指示された楠と勇作は即座に立ち上がるとユニフォームに着替え、試合に臨む。

「おい、白瀧」

そして二人は背中越しに白瀧を呼ぶと、彼らなりの声援を送った。

「これ以上、黄瀬を調子に乗らせるなよ」

「このままじゃ俺達の立場がないだろ。即興のモノマネなんか知るか。本物の意地を見せてみる」

「ああ。まあ、つまり俺達言いたい事は一つ」

『俺達に勝つという負けんな』

最後に、二人のスコアラーは言葉を揃えて自分たちを打ち負かした相手に活を入れる。

選手としての意地が籠められた二人の声援に、少しだけ白瀧は心が

軽くなったような感覚を覚えた。

「ま、いつも通りやってくれればいいさ。フォローならいくらでもしてやる」

「うん。僕達もできる限りの事はやってみせる！」

そしてさらに二人。元々のチームメイトである小林と光月が左右から白瀧の肩を叩き、彼を勇気づける。

「——つたく。これじゃあエースの立場がないな」

本来ならばそれは自分の役割だったはずだ。

絶望的な状況手もチームを活気づけ、仲間を奮い立たせる。そうしてみせると誓ったのに。

ただ、それを成せなかった悔しきよりも嬉しさがこみ上がってきた。

「藤代監督」

「はい？」

「もう一度聞いておきたいのですが、今の黄瀬はあくまでも『俺のバスケットを模倣した黄瀬』である。そうですね？」

「ええ」

「そうですね。ありがとうございます。行ってきます」

笑みを浮かべた白瀧は最後に確認しようと藤代と問答し、四人に続く形で立ち上がる。

——ならばまだ勝ち目は消えていない。

白瀧の目はまだ死んでいなかった。勝ち目は非常に薄い。読み通りだとしてもそれを実行に移すのは非常に困難だ。

だが無謀な戦いに挑むつもりは微塵もなかった。

「白瀧君」

「ああ、橙乃。これを頼む」

「待って」

近寄る橙乃にタオルとボトルを預け、コートに向かおうと足を運ぶ。

すると荷物を受け取った橙乃に呼び止められ、白瀧の足は制止を余儀なくされた。

「白瀧君」

「……どうした？」

今一度橙乃が相手の名前を呼ぶ。どこか不安な表情を浮かべている彼女の様子を察し、白瀧もゆっくりと聞き返した。

「ごめんね」

「えっ？」

そんな彼女の突然の謝罪に白瀧は目を丸くする。

「昨日、私があんな理想論を言っていたのに、結局はあなた頼みになっちゃって」

続けられた言葉は昨夜の二人の会話を悔やむものだった。

きつと上手くいくなんて都合の良い事を言っておきながら、最後は白瀧に全てを託すしかない。そんな流れを悔しく思ったのだろう。

「ちよつとだけ、陽泉との試合の事を思い出しちゃった」

そしてもう一つ。

キセキの世代との戦い。劣勢を強いられる試合展開。

この試合の様相から先の敗戦が橙乃の脳裏によりみがえっていた故に。

「あの時もみんなの事を送り出したけど、今みたいにキセキの世代の攻略は最後まで出来なくて。——そして、負けてしまった。やっぱり私には見ていることしかできないけど、でも！」

「何を言っているんだよ」

体を震わせ、無力を訴える橙乃。白瀧は彼女の肩に手を添えて、優しく語り掛ける。

「見ていることしかできない？　そもそも橙乃がいなければ前半戦だって太刀打ちできるかわからなかった。ここまでのどり着けるかどうかさえわからなかったんだ」

事実、橙乃の分析がなければ前半戦の流れも作れなかっただろう。黄瀬を相手にどこまで試合を作れていたかさえ不明だ。

「だから、そんな顔しないでくれ。大丈夫だ。——今度こそ、勝ってくる」

だから謝る必要はない。

白瀧は再び必勝を誓い、戦いの舞台へと戻っていった。

(三度目はない。陽泉の時と同じ結末をたどるわけにはいかない)
戦えない悔しさを叫ぶ声を聞いたのはこれで三度目だ。

中学の時、陽泉との試合、そして今。

今度こそその声に応えて見せると白瀧は自分を奮い立たせる。

「――勝ってー！」

「おうー！」

最後に、橙乃に背中を押されて白瀧はコートに立った。

(何か勝機を見出した、って顔じゃねえな。どちらかと言うと、何か覚悟を決めたような目をしてやがる。ってことはやはり、黄瀬を倒す具体的な策を見つける事は出来なかったか)

厳しい顔つきを浮かべる敵を見て、笠松は栃木が必勝法を見出す事は出来なかった事を悟る。

笠松だけではない。

赤司や青峰をはじめとしたこの試合を見つめる実力者達も、ここから先は選手の底力次第であると理解した。

「栃木は白瀧と一蓮托生か」

「作戦がないのならばここからは黄瀬の動きを封じるとかそういう次元の話じゃねえ。白瀧が勝つか、黄瀬が勝つかの真っ向勝負だ」

この試合の行方は、白瀧と黄瀬。両氏が誇るエースの勝敗によって決まると断言する。

「やっぱり最後はこうなるっスよね。作戦が通じないならば、エースと心中するしかない。でも俺は誰にも負けないっスよ」

「心中？ 馬鹿を言え。死に行くつもりなんてない。勝ちを取りに行く」

その二人はコートで火花を散らし、互いに勝つのは自分であると強く主張した。

(信じたい。まだ俺の力が、武器が通用すると。信じてくれた人の言葉に応えたい。もう目の前で身近な人が悔やむ光景を止めたい)

試合が再開。大仁多ボールで攻撃が再開される中、白瀧は一人心の

内で集中力を高め、没頭状態に入っていく。

それだけではない。フロアに入るだけではなく同時に必ず勝てるようにともう一度考えを巡らせていた。

「勝つぞー！ 絶対に決めるんだー！」

冷静な白瀧の心境とは対照的に試合は苛烈さを増していく。

吼える小林。トップの位置から果敢に切り込むと、外の桶へとパスアウト。彼自慢のスリーが放たれた。

これは森山のプレッシャーの前にリングに弾かれてしまうが、勇作が早川にポジションを奪われながらもチップインを決める。何とか得点へと結びつけた。

「さすがにやるな。が、うちだって譲るつもりはねえぞー！」

笠松も負けじと仕掛けていく。

ドリブルで小林を引き付けると、彼の足元を通すようにバウンドパス。

ゴール下の小堀へとボールを回し、小堀はバックステップからジャンプシュートを撃った。

かろうじて光月が指先で触れて得点とはならなかったが。

「いただきっスー！」

「ッ！」

そこに飛び込んだのは黄瀬だった。

白瀧のブロックも無駄と言わんばかりにダンクシュートを炸裂する。阻もうとした白瀧を吹き飛ばして得点を重ねた。

「くそうっ！」

「大丈夫か、白瀧？ 取り返すぞー！」

膝について悔しがる白瀧に声をかけ、小林がリスタートする。

（勝つんだ！ 今度こそ。そうでなければ、俺は一体何のために——何をこれまでやってきたんだよ！）

白瀧は目をつぶり、唇をぐっと噛み締める。

今まで重ねて来たものを信じたいと自分に必死に言い聞かせて。

再び目を開けた時。白瀧の瞳に白い光が宿った。

「えっ?」

自分でも何が起こったのか理解できない。ただ、今の白瀧には自分がこれまでに得た情報を元に移すべき方策が、活路が明確に見えていた。

「……小林さん」

「ん?」

「次、俺にください」

小林に近寄ると、静かにボールを要求する。

わずかな会話であったが、小林も白瀧の様子が変化した事を察し、頷いてその希望を受け入れた。

大仁多のオフエンス。小林と楠が中外とボールを入れてタイミングを計る中、白瀧は黄瀬に語り掛ける。

(思い出せ。陽泉との、紫原との戦いを。俺のオフエンスはあのディフェンス最強にも通用したんだ)

「認めるよ、黄瀬」

「えっ?」

「俺にはお前のような万能性なんてない。きつとこれから先も、俺が1つ習得しようとするたびに、お前は100を身に着けているのだから」

白瀧ははつきりと自分が求めていた万能選手として黄瀬の方が優れていると認めた。あれだけ負けたくないと思地になって、求めている理想の姿にはなれないと。

「確かにあらゆる技を瞬時に自分の武器とするお前の才能は、キセキそのものだ。きつと、俺は一生お前にはなれない」

「急に何スか? やっぱり諦めたっスか?」

「ならばないものねだりはやめよう」

まさか心変わりでもしたのかと、黄瀬が鼻で笑うも白瀧はそれは違うと話を続ける。

(俺ではすべての技を自分の物にする事なんて出来ない。万能な完璧な選手になんてなれない)

「だけどこれだけは譲れない。極めた一つの技で、俺は全てを突破し

てみせる」

（一つ一つの技で劣っているならば、技を掛け合わせて超えればいい）

「——だから決めた。俺はあの頃に帰る」

「えっ?」

黄瀬の力を認め、敵わないと判断して、それでも勝つと決めた白瀧。

直後、小林から一度光月に入り、また小林に戻ってついにその白瀧へとパスが通った。

（あいつまさか——）

「ハッ。あの野郎。昔に戻るつもりだな」

「青峰君? どういう意味?」

「さつき。お前は当時はまだあまり親交がなかったから知らねえかもしれないねえが、少なくとも帝光入部当時、白瀧は今みたいなオールラウンダーじゃなかったんだよ」

「え?」

ただ一人、観客席で青峰だけがこれから取る白瀧の行動を察し、笑みを浮かべる。

桃井が理解できずに問いかけると、青峰は昔を思い返しながら話しはじめた。

「自分の武器が通用しない可能性を考えて、SFというチーム内の立ち位置を考えて、緑間達からシユートとか色々教わって今のバスケスタイルになったが。少なくとも当時のあいつの武器は一つだった」

当時、まだキセキの世代と呼ばれる前。

前例がない入部即一軍昇格という偉業を達成した白瀧の力は、彼の武器はただ一つだと。

「行くぞ黄瀬」

「ッ!」

（来る!）

黄瀬も白瀧の変貌を肌で感じ、警戒を強めた。

フロアに入った状態の中でも一段と集中力を高める。一点たりとも与えてやるものかと動きを見張った。

絶対に止めて流れを完全に手にする。

そう活きこんでいた黄瀬。

そんな彼の横を、白瀧は瞬く間に突破した。

「なっ!」

「はっやっ!?!」

黄瀬の反応さえ許さなかった白瀧のドリブル。

陽泉戦で紫原を突破した時と同じ、キセキの世代でさえ止める事は難しい彼の切り込みで黄瀬を突破すると、小堀のヘルプが出る前にレイアップシュートを沈める。

「決まった!」

「今のは……」

「別に新技なんかじゃねえよ。緩急をつけて相手を揺さぶり、ダブルクロスオーバーで突破した。しかも二回目の切り返して斜めに沈み込むように切り込んだ。視界から消える様に高速で切り込んでくるドリブル。そう簡単に反応できねえよ」

「じゃあ本当に得意のクロスオーバーだけで突破を?」

「いや。あれはもはや、ただのクロスオーバーじゃねえ」

「えっ?」

皆白瀧が黄瀬を突破した事に驚く最中、青峰が彼の仕組みに気づき解説をしていた。

しかも仕組みだけではない。青峰は彼の技が新たな領域に昇華されている事を理解し、嬉し気に口角を上げる。

(なんて切り返しだ! 俺らもヘルプにでるのが遅れちゃった!)

「落ち着け! まだ逆転できる点差だ! こっちも一本返していくぞ!」

相手のエースが決めた事で勢いがつきかねない場面。笠松は確実に攻めようと仲間に活を入れた。

神奈川の攻撃。

慎重にパスコースを選びながら笠松と森山がパスをさばく。

すると、森山から小堀へとパスが通ろうとしたその時、コースに割って入った白瀧の腕がボールをはたいた。

「なっ!?!」

「白瀧！」

(中央で黄瀬を警戒していたはずなのに、パスを読んでいたのか!?)

「ナイス！」

攻撃が失敗に終わり、選手達に驚愕が広がる。

ボールも楠が確保。攻守が入れ替わり栃木の攻撃が再び始まった。

「小林さん！」

そしてボールは再び白瀧の手に渡る。

黄瀬の厳しいマークがつく中、再び白瀧が切り込んでいく。

(……かつて、183cmというNBA内では小柄な体格でありながら、そのドリブル技術と得点力、アシスト力で活躍したティム・ハーダウェイという選手がいた。その選手が特に得意とした切り込みは、代名詞として世間に広く讃えられた)

今再び発揮されようとする白瀧の技。それはかつてNBA回を席巻した名選手を彷彿させるものであると、青峰はその威力を感じ取った。

(キラークロスオーバー！)

誰も止める事は適わない、殺人的なクロスオーバー『キラークロスオーバー』。

黄瀬も最初のドリブルで重心を動かした為に連続の切り返しに体がついていかず、再び突破され、得点を許してしまった。

(体が、動かない!?)

「一度でも反応してしまえば重心がもう動いてしまっている以上、涼太でも立って直しは不可能だ。フツ。さしずめアンストップパブルドリブラーDF不可能の切り込み屋、と言ったところか」

理解していても止める事は出来ない。赤司は白瀧の力を青峰の呼び名に例えて、彼が自分たちと同じ領域にたどり着こうとしていると確信に至った。

「あるいは、ドリブルに関して言えばあいつは最強に達したかもしれない」

「ハッ？ いやいや、それはありえないけど？ 赤司？」

「ああ、そうだった」

同時にチームメイトの自尊心を煽って赤司は会話を終える。

反論した葉山は殺意のような雰囲気醸し出し、黄瀬を突破した白瀧をにらみつけていた。ドリブルを得意とするものとして、人一倍思うところがあるのだろう。

「――倍返しさせてもらおうつよ」

ただ、白瀧の技に闘争心を滾らせたのは葉山だけではない。

黄瀬も同じだ。しかも彼は今のプレイで白瀧の技を全て目にした。ならば待つていることはただ一つ。

神奈川の反撃が始まる。黄瀬にボールが渡るや、リベンジと言わんばかりに先ほど白瀧が見せたキラークロスオーバーを繰り返した。

「無駄だよ」

「なっ!?!」

だが、二度目の切り返してボールが手に収まるその前に、白瀧がそのボールを弾き飛ばす。

(読まれた!?! なんて!?!)

「アウトオブバウンズ! 神奈川黒ボール!」

幸いにもボールはラインを割り、神奈川の攻撃は続行だ。ただ、前触れもなかった模倣が見切られたことで、黄瀬は動揺を隠せなかった。

「……低さか」

「はい」

一連の攻防を見ていた岡田は、藤代が語っていた白瀧の武器を理解し、答えに思い至る。

「クロスオーバーは相手の目の前で切り返すドリブル。その為より低い位置で切り返さなければ相手に取られてしまう危険性がある。その点、白瀧さんの方が向いているという事ですよ」

それは技を繰り返す選手が白瀧から黄瀬になった事で、あらゆる能力が向上した中で失われた適正だった。

高さが黄瀬の方が分、ボールが手から地面を跳ねる距離が長くなる。その分ステールを受ける危険性も上がっていたのだ。

「だが、それだけでは止める事は難しいだろう! 黄瀬はドリブルを

突く強さだつて上だ！ 決して速さで劣っているとは思えない！」
「ええ。ですから勿論それだけではありません」

しかしそれだけで白瀧が止められるとは思えにくい。力が黄瀬の方が上の分、ボールを突く力も勝っているのだ。

岡田がまだ何か他に理由があるはず、そう訴えると藤代も『当然』と言うようにうなずいた。

(……ッ！ でも黙っていられない！ 白瀧つちが連続得点に成功している今、俺が攻撃失敗のままだなんていられない！)

「先輩！」

先輩達のマークも厳しい中、自分が再び流れを呼び込もうと、森山にパスを要求する黄瀬。

執拗なカットでパスを受け取る事に成功すると、黄瀬はゴールに向けて切り込んだ。

白瀧が厳しいマークを続ける中、シュートフェイクから一転、低く飛ぶギャロップステップからヘリコプターシュートへとつないでいく。

「問題ない。読んでいる」

「なっ!？」

その高速の動きに白瀧のブロックは食らいついていた。彼自慢の瞬発力が発揮され、シュートコースを塞いでいる。

(どう、して!?)

(3分観察して俺もわかった事があった。お前は、同じ技を連続では出さない。その上で一番成功率が高い技を選んでいく。——よかつたよ、お前が黄瀬のままです。)

黄瀬は理解できず、ただ目を見開いた。

藤代たち同様、白瀧も3分間ただ打ち倒されるだけではなかった。黄瀬の動きを分析し、対策を練っていた。そのおかげで先ほども、『相手の技を見たら即やり返す』という性格を思い返し、防ぐことに成功したのだ。

「つうつ、早川先輩！」

このまま撃てば間違いなく防がれる。それを察して黄瀬は近くの

早川を呼ぶ。

「無駄だ」

「ッ！」

だが、早川に渡るはずだったパスはその直前で勇作に防がれた。

「そん、な」

（そのタイミングで咄嗟にパスを出そうとすれば、同じサイドにいる近くの選手に出すしかない。だがあいにく勇作さんの方が敏捷性が上だ）

相手が行動に移す前から練られていた白瀧の行動予測。本気になった黄瀬の猛攻を封殺するという荒業に成功する。

「時に迷い、苦しみ、揺れ惑った。不安定だった心が、ようやく定まりましたか」

（もう一つ。白瀧さんにあつて、黄瀬さんにならないもの。——経験値だ。長い間バスケットに身を削り、魂を打ち込んできた年月の差）

それを成せたのは才能によるものではなかった。

先に藤代が言っていた、白瀧が黄瀬に勝っている武器。愚直なまでに彼がバスケットに取り組んできた戦果が、今彼だけの力となって白瀧の原動力と化する。

——心眼。

誰もが持つて生まれるという、五感を研ぎ澄ます野生とはまた違う。

たゆまぬ鍛錬の先に磨かれた洞察力、多くの戦術をこなしてきた事で身についたバスケットIQ。これらの結果生まれた、自身が置かれた状況と相手の力を冷静に分析し、活路を切り開く道筋を見出す経験則だ。

たとえば黄瀬は技術という結果を模倣することはできても、その過程である経験までは模倣できない。

「白瀧さん。あなたはバスケットの才能ではキセキの世代よりも劣るのかもしれない。だが、そこそがあなたの強さだ。弱さを知り、無力を嘆き、絶望を味わい。それでもなお勝つための手段を模索して一歩でも前へと進む事ができる。策を弄し、技術を磨き、勇敢に挑み続ける。

ならばこそ——あなたの努力はもう報われていい」

諦めずにここまで戦い続けた。今こそ勝利と言う最高の成果を得る時だと、藤代は白瀧を優しい視線で見守った。

「やはりお前は俺とは別物だ」

「白瀧っちー！」

「そこをどけよ、黄瀬！俺が神速を名乗る事を許したのはただ一人だけだ。断じてお前ではない！」

これ以上俺の模倣で好き勝手はさせない。黄瀬にそう宣言し、白瀧は呆然とする黄瀬を尻目に走り出した。

すると、ボールを手にする勇作が小林へとパスをさばき、その小林が長い放物線を描くロングパスを放る。

「決めてこい、白瀧！」

二人の専用パス、タツチダウンパスが再び放たれた。

（負け、た？俺が、負ける？）

「——ッ！あああああ！」

（違う！もう、負けなんていらぬ！）

鋭い送球が空を切る。誰も障害とはなりえないと皆が思う中、黄瀬が喉がはち切れんばかりに叫び、駆け出した。

絶対に止めてやると必死の形相で白瀧の後を追う。

「無理だ。火神だつてこのパスは取れなかつたんだ。スタートが遅れたこの状態では、黄瀬でも間に合わない！」

（間に合わない？ふざけるな！ここで止めて、俺が勝つ！神奈川を、海常の皆を勝たせる！）

だがこのパスは火神でさえ止められなかった。紫原でも反応が遅い中では止められない。いくら黄瀬でも無理だろうとそんな声が飛ぶが、黄瀬は知ったものかと跳躍した。

「うおおおおお!!」

そして黄瀬の執念が、ボールをかすめる。

「なっ!？」

「嘘っ！指先が届いた!？」

「馬鹿な！ありえない！無理やりパスの弾道をずらしただど！」

（白瀧の瞬発力を模倣した、黄瀬のスペック。無理やりボールに触れやがった！）

今度は栃木の選手達が驚かされる番であった。

止められないはずであったロングパス。白瀧のバスケスタイルを模倣した今の黄瀬は、不可能を可能とする。

ただでさえ精密さを要求されるパスは、黄瀬によってタイミングがずれ、軌道も上に変化して――

「ッ!？」

その先に白瀧の姿があった。

「なんで、っスか？俺が触れて弾道も、タイミングだってズレたのに。何で白瀧っちがそこにいるんスか？」

ありえない。黄瀬は空中で落下しながら、どうしてそこにいるんだとベストポジションに構える白瀧に尋ねる。

「当たり前だろ。お前の強さを誰よりも知っているのは、他でもない俺だ。ずっとお前を倒すと決めて戦ってきた。だからこそ、お前ならきつと無理なパスにだって触れてくるだろうと信じていたさ！」

「……アシヤスト適応」

「敵の強さに応じてそのプレイを変えていく、まさに変幻自在。何が万能の選手じゃないだよ。ふざけやがって」

ずっと黄瀬を倒すと、彼の強さを知る白瀧だからこそできた事だった。

きつと誰もが無理であると考える事でも、黄瀬ならばやり遂げるだろうと。

黄瀬の強さに呼応して自分の行動を適応させた。最後の最後で黄瀬を出し抜いたのか、赤司や青峰はこの速攻は白瀧に軍配が上がったと息を吐く。

「ま、て。白瀧っちいつー！」

「待たねえよ」

もはや誰も間に合わなかった。それでも必死な黄瀬の叫びが木霊する中、白瀧のアリウープが炸裂する。

「2年も待ったんだ。もう一秒たりとも待ってなどやるものか」

今、白瀧の中で止まっていた時の針がようやく動き出そうとしていた。

「くっ！」

「神奈川県、タイムアウトです！」

白瀧の連続得点。ここは流れを切らなければならぬと武内がタイムアウトを取る。

選手達がそれぞれのベンチに下がろうと足を向けると、突如観客席からはこの日一番の歓声が湧き上がった。

「えっ？」

突然の声に白瀧は振り返り、観客席へと目を向ける。

「いいぞー白瀧ー！」

「あのキセキの世代相手に押ししてるぞー！」

「頑張れ！ 勝ってくれ！」

発生源は栃木県の応援席だ。

響いた声は別に特別なものではない。何度も耳にした聞きなれた応援であつたはずなのに。

思わず白瀧の目から涙があふれ出す。

——これが、彼がずっと待ち焦がれていた瞬間だったのだ。

「泣くな、白瀧。まだ終わっていない」

肩を震わせる白瀧の姿を見かねて、楠が声をかける。

試合時間は残っている。ここから再び展開が変わる可能性だつて残されているのだから、今はまだ泣くなと。

「わかっています。……でもすみません。今は、泣かせてください」

ただ、それでも白瀧の涙は止まらなかつた。

「この試合が終わった時にはもう泣かないように。笑っていられるように。今出しておきたいんです」

神奈川との、黄瀬との戦いが終わった時に、もう涙せず笑顔でいられるために。貯まった感情を白瀧は吐き出し続ける。

そんな彼の頭を楠は二度三度と軽く叩いて、一緒にベンチへと戻っていた。

「残り時間5分。黄瀬、もう一回戦などと考えている余裕はない。ここが勝負所だ！」

「おそろくここから最後の正念場となるでしょう。白瀧さん、頼みますよ」

第4Qは残り5分。(栃木) 80対72 (神奈川)。点差は8点、先ほど栃木が取ったタイムアウトの時よりも点差は広がっているも、決して安全圏ではない。

しかもここからは黄瀬が最後の手を講じる事を武内は決め、藤代もそれを覚悟していた。

ゆえに最後の勝負時のこの時間帯、両県はエースにその命運を託し、タイムアウトを終える。

そしてタイムアウト明け、神奈川の攻撃。

「まだ勝負は決まっていない！ 勝つのは、俺っス！」

やはり最後のパスを受けたのは黄瀬だった。

白瀧のマークがつくも緩急で彼を揺さぶるとフェイダウェイシュート。

しかも上体をほとんど真後ろに寝かせながら強引にシュートを放つ。

一見無茶苦茶と思えたこのシュートは、しかし綺麗にリングの中心を貫いた。

「くっ！」

「今のシュートはやはり、フォームレス型の無いシュート！」

「キセキの世代、青峰の模倣か！」

緩急のついたドリブルから、予測不可能なシュート。桐皇戦と同じ、黄瀬は青峰のバスケスタイルを模倣し、最後の追い上げを試みる。

「上等だ！ 俺だってオフエンスで負けるつもりはねえ！」

だが攻撃を得意とするのは白瀧も同じだ。

こちららも白瀧がパスを受けると一対一を仕掛けていった。

クロスオーバーを一つ入れて切り返すと、黄瀬が侵入を阻止しようと大きく下がったのを見てジャンピングシュートに切り替える。

出だしの早いこのシュートに黄瀬のブロックは間に合わなかった。

「ちいっ！」

「ドリブルの強みが増したことで、他の技も相対的に威力を増しやがった！」

「負けんな、黄瀬！ とめ（ろ）よ！」

黄瀬に負けじと挑んでくる白瀧。

おそらくはここから先、相手もエースを中心に攻めてくるだろう。

早川が黄瀬に絶対に勝てと叫ぶ。

「当たり前っス！ 俺は、俺が神奈川のエースなんスから！」

その期待に、黄瀬は見事に応えた。

緩急で白瀧を振り切れないと悟ると、横っ飛びに跳んで片腕のみでボールを放る。

もはやシュートとさえ思えない黄瀬の動き。

だが確かに神奈川へ二点をもたらした。

（駄目だ。さすがに青峰の動きまでは予測できない！）

「——だったらこっちだって決めてやる！ 俺が、栃木のエースだ！」

経験則による心眼をもつてしても読む事は不可能な青峰のシュート。

止める事は出来ない。ならばこちらもすべて攻撃を決めてやると白瀧も声高に叫んだ。

一つクロスオーバーを入れた後、ボールを掴むと同時に上体を上げて視線をリングに移す。

またシュートで来るのか。黄瀬が警戒して重心が浮かぶと、白瀧は再びドリブルを突き、黄瀬の足元を突破していく。

「ッ！」

（しまったー！）

（ヘジテーションクロスオーバーか！）

ヘジテーションクロスオーバー。クロスオーバードリブルの途中、

バウンドしたボールを掴む際にシュートをするような動きを入れ、
ディフェンスを引き付けて再びドリブルで抜く技術である。

(別に腕を上げる事だけがシュートフェイクではない。その姿勢を見
せるだけでディフェンスは重心を上げ、そして突破できる可能性は大
きくあがる)

(相手の重心を上げさせ、自分は重心を下げて瞬時に真横を抜き去る。
縦のチェンジオブペースみたいなものだ)

先のジャンピングシュートもあって黄瀬は余計に警戒してしまっ
た。

結果、黄瀬は重心を上げてしまい、重心移動の達人である白瀧にか
わされてしまったのだと赤司は見抜いていた。

青峰も今の白瀧の動きが平面で見せる縦の緩急による駆け引きを
察知し、おそらくはわかっているも止める事は難しいであろうと考え
る。

事実、黄瀬は反応が遅れ、ヘルプに出た小堀の横を通したパスから
光月の得点を許してしまう。

「おおお!!」

「すごい! 両県のエース、一步も譲らず!」

「ノーガードの殴り合いか!?!」

栃木対神奈川。ここまで何度も流れが変わる場面が見られたこの
試合。最終Q残り時間わずかの時間に点の取り合いとなって、観客席
もさらにヒートアップした。

「白瀧っち!」

(くそっ。一点でも縮めたいのに、わかっているも体が反応してしま
う!)

「黄瀬えっ!」

(ちくしょう! 少しでも点差を広げたいのに、全く次の動きが読め
ない!)

実力が拮抗する両名も激しく火花を散らす。

まるでかつての海常と桐皇の試合の時と同じ。キセキの世代同士
がぶつかり合いが繰り広げられている様であった。

さらに二人の対一は苛烈さを増していく。

しかし、時間の経過に反比例して会場は徐々に落ち着きを取り戻し、そして静まり返った。

「……おい」

「一体この二人の戦いは、いつまで続くんだ？」

決して場が白けたわけではない。

誰もが二人の戦いに息を飲んだのだ。

武内が取ったタイムアウトから約4分。二人は対一を繰り広げ、そして交互に得点を重ねていった。

（マジで、二人とも止まらねえ！）

（二人ともフローに入った状態で、全力のぶつかり合い。下手にパス回しをする事も出来ねえ！）

観客だけではなく、コートに立つ他の八人も二人の戦いには驚かされるばかりだった。

フローに入り、守備範囲も向上しているとなれば、無暗に他の4人で攻める事も難しい。

まだ白瀧は黄瀬を突破後にフォローに入った敵を見て空いた味方にパスをさばいたりしているものの、そうでなければ攻撃に参加する事さえはばかられる状態であった。

（勝つ！ 自分の為、仲間の為、神奈川再戦の為！）

（勝つ！ 自分の為、仲間の為、皆誓いの為！）

ゆえに、この試合の決着は二人の勝敗にそのまま左右される。

だが二人の戦いは完全に互角。誰もがこのまま時は流れていくのではないかと考えた。

——そんな時。

決着は突然訪れる。

ボールを受けた黄瀬が切り込み、中央へと侵入しようと切り込んだ瞬間。

白瀧はボールが黄瀬の手に収まるより早く、叩き落とした。

「なっ！」

「止めた!？」

「アウトオブバウンズ！ 神奈川ボール！」

「ああ、惜しい！」

幸いにもボールはラインの外に出て、神奈川の攻撃は続く。

しかし青峰の模倣を手にしてからはまだ一度も黄瀬を止められなかっただけに、このステイルの影響は大きかった。

「……大丈夫だ！ まだうちのボールが続いている！ 攻めるぞ！」

まだいけると笠松は皆を盛り立てる。

お互いに得点を決めている以上、追いかける神奈川は攻撃を決め続ける必要がある。

次は決めると呼びかけてオフENSEを再開した。

そしてまた黄瀬のボールを集めるも、白瀧のマークを前に黄瀬は中へ切り込む事さえできない。

（黄瀬が攻めあぐねている!?!）

（……まさか!）

「こっつ、のおっ！」

（フローの時間制限か!?!）
タイムリミット

息も絶え絶えな黄瀬を見て、笠松達は黄瀬の限界を悟った。

フローは普段よりも力を発揮できる代償として反動も大きくなる。

体に無茶を強いる青峰の模倣と合わさって、黄瀬の限界が早く訪れたのだろう。本来なら五分は持つはずの青峰の模倣が、試合終了よりも一足先に限界に達した。

（でも、白瀧だって長くフローを維持していたんだぞ！ それでも黄瀬の方が早く限界に達するというのか!?!）

「……なるほどな」

「ええ。もう一つありましたね。白瀧さんがもつ武器、すなわち無尽蔵のタフネス」

だが同じフローに入る白瀧とて体力は厳しいはず。その疑問も湧いてくる。

—— 栃木の指導者達以外は。

白瀧の体力消費の効率性。これを最後まで維持できた白瀧と、逆に体力の消費量が大きくなった黄瀬。どちらが先に力尽きるかは火を

見るより明らかだった。

(……まだまだ！ このまま、これで終わるわけにはいかないんすよ！)
ただ、限界に達しても黄瀬は意地で体を動かす。

振り切れないならばと後方に跳んで白瀧との距離を空けると、ゴールへ向けてボールを投げつけた。

『おおお!!』

その黄瀬に負けじと白瀧も全力で挑む。

(俺だって同じだよ、黄瀬。俺だつてとつくに制限なんて越えていた。でも止まらない。勝つ為ならば限界なんて超えてやると、誓ったんだ！ だから！)

「俺は、勝つー！」

白瀧の渾身のブロックが、黄瀬のシュートを叩き落とした。

「ッ！」

「攻めろ！ ここで決めるんだ！」

「止めろ！ 絶対に止めるんだ！」

栃木が今度こそ完璧に黄瀬のオフエンスを防ぎきる。

しかもボールを拾ったのは勇作だ。即座に楠にパスをわたすと、たちまちコートを駆け上がった。

これが決まれば間違いなく試合は決まる。両校のベンチから悲鳴のような声が木霊した。

だが黄瀬も態勢を崩してしまい、間に合うのは笠松のみ。

すると楠はワンドリブルで笠松を引き付けると横を走る小林へとパスをさばく。フリーとなった小林は悠々とレイアップシュートを沈めた。

「ああっ！」

「よっし！」

「やった！」

第4Q——試合時間、残り41秒。(栃木) 100対90 (神奈川)

栃木が得点を3桁に乗せ、神奈川を10点差と引き離す。

『神奈川県、タイムアウトです！』

たまたらず武内はタイムアウトを取った。

流れを失い、黄瀬も限界を迎え、殆ど勝敗は決している。だが最後まで最善を尽くそうと選手達を迎え入れた。

神奈川は黄瀬が満足にプレイできないものの、それでも『白瀧を止められるのは自分だけだ』という彼の意見を聞き、そのまま選手交代はなく最後の決戦に挑む。

もはや青峰の模倣を続ける事はもちろん、フローに入る事も難しい状態だった。

だが黄瀬も体に鞭打ち、フロー状態での青峰の模倣を続行する。

先ほどまでのキレはないもののやはりキセキの世代。その威力は甚大だった。

最後まで諦めない敵の姿勢を見て、栃木も手を抜かずに全力で応えた。

「思えばIHは帝光中時代の再演だった。予選で緑間が敗れる波乱があったものの、結局本戦ではお前達を倒せる高校は現れず。表彰台はキセキの世代が独占し、世間はやはり高校でも勢力図は変わらないと考えた。——だが、それも今日で終わりだ」

残り時間はわずか。

最後の栃木の攻撃。小林から光月に渡った後、ラストパスは白瀧へ。

マークにつく黄瀬をキラークロスオーバーで突破する。すぐに小堀と早川が飛び出す、二人のブロックをギャロップステップで潜り抜ける。

着地後、またしても黄瀬が迫るものの、白瀧の放つヘリコプターシュートは黄瀬の指先をかわし、ボードに当たって軌道を変えてリングを潜り抜けた。

試合終了のブザーが鳴り響く中、白瀧はここに新時代の幕が上げた事を宣言する。

「最強の一角を、倒したぞ！ もう誰にもキセキの世代一強なんて言

わせねえ！ 今度こそ必ず勝ち上がってやる！」

（栃木） 102対90（神奈川）

ついに長年の宿敵・黄瀬涼太を撃破した白瀧。

自らの因縁に終止符を打ち、仲間達と共に新たなステージへと駒を進めた。

——黒子のバスケ NG集——

「2年も待ったんだ。もう一秒たりとも待ってなどやるものか」

今、白瀧の中で止まっていた時の針がようやく動き出そうとしていた。

「くっ！」

「神奈川県、タイムアウトです！」

ついに主人公が前に進もうと決意した直後に時を止める武内監督。マジ外道。

「いや、戦術として正しい行動をとっただけだろう!？」

第一百七話 雲蒸龍変

栃木と神奈川。白瀧と黄瀬。

決勝戦でもおかしくなかった好カードも、ついに終わりの時を迎える。

「試合終了了！」
タイムアップ

「まさに死闘の40分！ 最終スコア102対90！」

「制したのは栃木！ キセキの世代が、黄瀬涼太が、初戦で姿を消した！」

「白瀧が二年越しにリベンジ達成だ！」

ブザーが鳴り響くのと時を同じくして驚愕と歓喜に湧く声が観客席より響く。

キセキの世代が全国で彼ら以外の対戦で敗れたのは、これが初めてだ。

ましてそれがかつて自分とその立ち位置に成り代わった者に敗れたとなれば。一回戦となればなおさらの事だった。

「うおおおおおおおおお！！！！」

そんな声にも負けない声量の叫びをあげたのは白瀧だ。

喉がはち切れんばかりの咆哮は、まさに彼の形容しがたい喜びを表している。

——ようやく、白瀧は自分の抱いていた悔しさから決別する事が出来た。

「よっしー！」

「勝った！ やりました！」

「ああー！」

彼だけではない。

他の選手達も、初めてキセキの世代から白星を挙げた喜びを分かち合っている。

コートでは小林と光月がハイタッチを交わし。

「つしやあー！」

「全国初戦で、初白星だ！」

楠と勇作が拳を重ねた。

コートの外でも藤代が静かに拳を握りしめ、他の選手達もベンチから立ち上がり、歓喜の渦を作っている。

「——ッ」

こうして敵が喜ぶ姿を見て、笠松は一つ大きく息を吐き、そして天を仰いだ。

「あつ、ああつ！ ああつ！」

「……くそっ」

「ぐッ……！」

早川は声にもならない嘆きを吐き出し、森山は静かに俯き、小堀はコートを小さく蹴る。

栃木の選手だけではない。勝ちたかったのは神奈川も同じだ。だからこそ余計に敗北の味は苦いものとなった。

「負け、た？ 嘘っスよね。……ちくしょう！」

特に勝ちたい、勝たせたいという思いが強かった黄瀬の衝撃は大きい。

地面に尻もちをついた黄瀬は力強くコートを殴りつけた。

力のあまり皮膚が割け、血がにじみ出る。

悔しい。ただただ悔しい。もうこんな想いは二度と味わいたくなかったのに。

「——シャキッとしろ！ 整列するまでは試合だ！ 情けない姿を晒してんじやねえ！」

そんな暗い雰囲気を一蹴するように笠松は声を張り上げた。

自分も心の整理はまだついていないというのに、主将としての意地が彼を凜とさせている。

その声に当てられて、他の4人も各々に立ち上がり、そして戦った相手と向き合うように中央へと足を運んだ。栃木の選手達もそれにならって続々と集まり始める。

「……勝てよ、小林。中途半端な結果は許さねえぞ」

「ああ。もちろんだ」

笠松がそう言つて右手を伸ばすと、小林も応じて右手で握りしめ

た。

主将同士の握手をきっかけに他の選手も続き、小堀と光月、森山と楠、早川と勇作。

「白瀧つち……」

「黄瀬……」

そして黄瀬と白瀧と続いていった。

黄瀬は悔しさを醸し出しながら、ゆつくりと言葉を紡いでいく。

「正直、負けるなんて思ってたっス」

「おい」

「いいじゃないっスか愚痴くらい聞いてくれても！……けど、だからこそ俺は負けたのかもしれないっスね」

口をとがらせ、不満を勝者へとぶつける黄瀬。

常の彼らしいふざけた口調で告げて、そして直後に落ち着いた雰囲気です。

「認めているなんて言っても、どこかで白瀧つちの事を甘く見ていたのかもしれない。ま、これで立場は逆転って事で！ 今度は白瀧つちにもリベンジするっスよ！ WCでは絶対に負けないっス！」

そう言つて黄瀬は最後に大きな笑みを作る。

まだ冬が残っているのだ。だからこそもう絶対に負けない。対等の立場として次こそは勝つと宣言した。

「ったく。人のスタイルをあつさり模倣しといてよく言うぜ。そもそも、俺はずっとお前の対策をしてきてようやく太刀打ちできたレベルだったんだぞ」

すると話を聞いていた白瀧も同じように彼に不満をぶつけだす。

やはり色々思うところがあつたのだろう。言葉のあちこちにとげが含まれていた。

されど、そう語る白瀧の表情は不思議と重いものではない。

「だから、次は本当に同じ立場からの戦いだ。これでようやく俺達の勝負は互角という事で。それまでキセキの世代の名はお前に預けておくよ」

白瀧はようやく黄瀬に対する劣等感を消せたのだから。

スタート地点が違う。彼はいつも悩んでいた。だがここからは同じだ。

そしてその対等の立場で、やはり次も勝つ。その上でかつて失った立場を完全に取り戻してやると白瀧は誓った。

「——ああ。やっぱり、白瀧たちはそうなんスね」

「あ？　なんだよ？」

「何でもないっスよ！　……とにかく、俺だつて負けるつもりはないっス。続きは、冬に」

「ああ！」

一つ、『キセキの世代』という名前についてだけ黄瀬は少し言葉を濁した。

白瀧が不思議に思つて問いかけるも、黄瀬はすぐに調子を戻して彼との再戦を約束する。

こうして白瀧と黄瀬。二人の好敵手の戦いはここで終わりを迎えた。

「102対90で栃木県の勝ち！　礼！」

『ありがとうございます！』

最後に戦った選手達が大きく一礼し、激闘の幕引きとなる。

「……神崎」

「中村先輩！」

直後、神奈川のベンチから途中出場した中村が神崎の下へと歩み寄り、彼を呼んだ。

「おめでどう。お前の勝ちだ。チームとしても、選手としても」

「……対戦、ありがとうございます」

「結局お前には最後まで苦汁を飲まされたな。やっぱり強いよ」

「いやそんなことは！」

後輩相手に多少の不満を籠めた愚痴をこぼす。神崎はフォローしようとして反論するが、続いた中村の言葉でそれは遮られた。

「やっぱりお前と競えてよかった。前からお前のその強さを羨ましく思っていたんだから」

「えっ？」

「だからこそこの場でハッキリ敵として戦えてよかったと思う。――勝てよ、神崎」

「……はい！　ありがとうございます！」

自慢の武器を持つ相手を敬っていたのは神崎だけではない。

中村もまた、強力な武器を持ち、自分と競った神崎の事を高く評価していた。

最後に神崎の肩を叩き、中村は自軍の元へと戻っていく。

そんな彼の背中へ神崎は大きく頭を下げ、別れていった。

「ッー」

神奈川の選手達が引き上げていく中、黄瀬は途中で体がふらつきよろめいてしまう。

やはり体力の限界だったのだ。それだけフロー状態でのキセキの世代の模倣、負担が大きかった。

バランスを崩す瞬間、近くにいた笠松や森山が彼に肩を貸す。

「先輩……」

「やせ我慢しやがって」

「ハハッ。バレバレっスか。どつかないでくださいよ？」

「……うるせえ。黙ってる。悪いが、俺も余裕はねえんだから」

「えっ？」

黄瀬はいつものように軽い口調で笑みを浮かべた。

だが、そんな彼に対する笠松の返答は、声は震えていた。

「――ッ」

感情のあまり肩が揺れ、唇が出血する程に噛み締める笠松。

この試合前、笠松は観客が呟いていたある言葉を耳にしていた。

『決勝戦でもおかしくない好カード』という、栃木―神奈川戦の前評判を。

それはすなわち、今年の神奈川が決勝戦に進めるだけの力を持つ、優勝できるだけの戦力を持っているという事を意味している。

その現状で初戦敗退したという結果は、笠松に去年のIH初戦敗退という、彼が抱えていた悔しい想いを彷彿させるものだった。

(先輩……)

「ッ！」

そんな主将の想いを察し、黄瀬は静かに俯く。

もう負けない。冬は絶対に勝利する。自分が海常の仲間を勝たせるのだと、強く胸に刻んだ。

「終わったのう」

「正直、予想外っすね」

「……彼らが競った万能選手オールラウンダーという意味では、最後まで黄瀬君が優位に立っていました。でも」

観客席の一角。東京都代表・桐皇の選手達は試合の余韻にふける。

黄瀬と白瀧の戦い。模倣を持つ黄瀬は序盤から相手の技を模倣し、中盤では白瀧のスタイルそのものを模倣し、白瀧が追い求めていた理想を体現した。

あらゆる技で相手を上回る。無数の可能性を秘めた黄瀬に、本来ならば白瀧の勝機は薄かった。分析においてもそう示している。

「バスケットへの信念というただ一点において。白瀧君がその全てを上回った」

だが、たった一つがその全てを上回ったと桃井は語った。

キラークロスオーバー。心眼。この一戦で手に入れた新たな武器。

一つの技を必殺技へと昇華させた白瀧の直向きな積み重ねが、彼を真の選手たらしめたのだと。

自分の分析さえも超えた勇姿を示した白瀧の背中を、桃井は悔しさと嬉しさが混じりあった複雑な表情で見つめる。

「ハッ。——やるじゃねえか」

一方、青峰は楽しみを見出したように大きな笑みを浮かべ、席から立ち上がった。

「負けんじゃねえぞ白瀧。準決勝セミファイナルで当たるまではよ」

青峰が所属する東京都は、お互いが勝ち進んだならば準決勝で栃木県と衝突する。

もちろん簡単な事ではない。栃木はまだその前に、大きな壁が立ちはだかろうとしていた。

それでも青峰はきつと超えられると考えて、白瀧に今度こそ必ず勝

ち上がって来いと好敵手に告げる。

「神奈川が消えたかー。マジでビックリした」

「ああ。初日でキセキの世代が一人消えるとはな」

「この戦いで消耗したとはいえ、栃木がそう簡単に敗退するとは思えないし。これは一気に有力勢力へと転じたわね」

「ああ。この一勝は大きい。栃木はこの勢いをもって勝ち続けるだろう。だが」

反対側の観客席では京都代表の洛山の選手達がこちらも同様にこの一戦を振り返って嘆息した。

ただ、赤司はまだ栃木の行く先に待つものを理解し、言葉を濁す。

「あいつはもう一つ、過去の因縁を越えなければならない」

栃木が、強いては大仁多の面々が越えなければならない因縁が、残っていると。

それを知ってから知らずか。コートではまだ栃木の選手達が喜びを共有しあっていた。

試合の事を振り返りながらベンチへと戻っていく。白瀧も4人に続く形で歩いていき、そして橙乃と視線が合った。

「お疲れ様」

ただ一言、栃木の中でただ一人40分間戦い抜いたエースを労う。

それを聞いて白瀧は戦意とかけ離れた柔らかな笑みを浮かべた。

（俺は結局、最後まで理想の選手になる事は適わなかったけれど）

「——ああ。勝ったよ、橙乃」

ようやく女の子との約束を守る男にはなれたのだと白瀧は思った。

雌伏の時が終わり。水底に沈む龍が天へと昇り始める。

栃木対神奈川の試合が終わりを迎えたのと時を同じくして。

同時刻に開催されていた別コートでも勝敗を決していた。

多くの県同士の戦いで接戦が繰り広げていた中、やはりキセキの世代を要する県は相手を圧倒していた。

「……む、無失点?」

「かつて優勝した記録を持つ福岡代表を相手に一点も許さない、まさに鉄壁のディフェンス!」

「強すぎる! これがIH3位・陽泉の選手で固められた秋田県代表か!」

(秋田) 81対0 (福岡)

紫原を中心に長身選手が集った秋田県が二回戦進出を決める。

IHよりもさらに磨きを増したディフェンス力は圧倒的だった。

歴代の記録を見ても、無失点という試合はまず見られないだろう。完璧な防御であった。

「お前達、よくやった。さあ引き上げだ!」

そんな選手達を要する荒木は勝利に浮かれる事なく、淡々とコートを後にする。

『勝って当然』というような雰囲気だ。選手達も喜びはそこそこに荷物をまとめると監督の後ろに続いている行った。

コートを去り、控え室へと戻る最中。ある一戦の様子を偵察しにいった部隊と合流する。

「監督、お疲れ様です! 向こうの試合も終了しました!」

「ああ。ご苦労。それで、どうだった? やはり神奈川か?」

荒木は早々に栃木と神奈川の一戦について尋ねた。彼女もエース対決の力を見極め、十中八九神奈川が制すると考えていた。

ゆえに幾ばくかの予想をもって選手に問いを投げたのだが。

「いえ、違います」

「む?」

「勝ったのは栃木です。神奈川を相手に100点ゲーム。12点差をつけて勝利しました」

「何?!?」

だが続けられた報告により荒木の無表情は崩れた。珍しく驚きを露わにする。

それだけ偵察部隊から告げられた結果は驚きのものだった。

「……ほう。黄瀬涼太を負かした、という事じやな」

「つまり、おそらく準々決勝で当たるのは栃木アルナ」

「奇しくもIHと似た形になりやがった」

レギュラー達も其々同じように驚愕するも、同時にキセキの世代を破ったという知らせに感嘆した。

こうなると、このままならば自分たちと栃木は準々決勝で戦う可能性が高い。

——IHと同じように。

数奇な運命の巡り合わせだ。

あの激戦が、再び繰り返される可能性が高まったという事で、皆熱がこもる。

「……マジ？ まさか白ちん、黄瀬ちんに勝ったの？」

ただ一人、紫原を除いては。

彼は常と変わらぬ調子で、どこか気の抜けたような声色でそう呟く。

「そんなに信じられないかい、敦？」

そんな紫原に一人の男が問いかけた。

左目が隠れる程長い前髪、右の眼もとに泣き黒子がある長身？ 軀の美男子。

IHではベンチ入りしていなかったが、国体からメンバー登録され、一回戦でも活躍をした実力者だ。

「まあねー。黄瀬ちんが白ちんに負けたとこなんて見た事なかったし」

「そうか。なら彼は初めてリベンジに成功したというわけだ」

「そうだね。ま、どうでもいいけどさ。室ちんにとってはこの方がよかった感じ？」

紫原に室ちんと呼ばれた男——氷室辰也は心底嬉しそうに笑う。

「ああ。俺はIHに出れなかったからね。彼らとの対戦は、今から楽しみにしているよ」

死闘を演じたIHからさらに新戦力を加えた陽泉、秋田県。果たして再戦はあり得るのか。そして再び相まみえたとして、微笑むのはどちらか。

一回戦が終了した翌日、激戦の熱が冷め切らぬうちに二回戦が始まった。

栃木県は北海道と対戦。

昨日の神奈川との試合での疲労が心配される中、選手達はその不安を一蹴する活躍を示す。

特に活躍著しいのは一年生トリオだった。白瀧・光月・神崎の3人がスターターに名を連ねると、三人とも前半戦のみで二桁得点と好調をキープ、実力を見せつけた。

ルーキーの活躍もあり、栃木は前半終了時（栃木）64対35（北海道）と圧倒。

後半は中澤、細谷、古谷、勇作、黒木の五人に選手交代すると落ちていたプレイでリードを維持。試合終了間際の3分に小林、楠の二人を投入して北海道を突き放す。

最終スコア（栃木）104対77（北海道）。盤石の布陣で3回戦進出を決めた。

さらに次の日、午前中に行われた三回戦。相手は奈良県だ。

この日は一回戦と同じ選手がスターターに名を連ねると、前半戦から圧倒的な攻撃力で奈良県を序盤から突き放す。

試合開始から20分が経過した時、すでに20点差がついていた。

後半戦は細谷のゲームメイクの元、外から楠と古谷、中は光月と黒木が攻めを維持し、奈良を寄せ付けない。

『試合終了！』

「ようしー！」

終わってみれば（栃木）100対71（奈良）という大差で勝利を収めた。

これで栃木県は準々決勝進出を決める。
相手は予想通り——秋田県。

紫原をはじめ、陽泉の選手が集う強豪だ。

その秋田県は一回戦から無失点を維持し、準々決勝まで勝ち上がっていた。

対する栃木県はここまでの試合ですべて100点ゲームというオフェンス力を見せている。

今再び、最強の攻撃チームと最強の守備チームの戦いが始まろうとしている。

3回戦が始まった時から数えて約4時間後。

ついにその時は訪れた。

準々決勝4試合が同時に開催される。

ここままで残った8校全てが凌ぎを削る。

各会場で試合の行方に観客の期待が高まる中、特に注目集まったのは中央体育館だ。

中央体育館では準々決勝のうち二試合が行われる。

一試合は東京都対山梨県。

そしてもう一つは栃木県対秋田県。すなわち、白瀧と紫原が所属する県の試合である。

その注目校の選手達がコートに入場するや、観客席から歓喜の声が上がった。

「来たぞ！ 神奈川、キセキの世代・黄瀬に攻め勝ち、快進撃を続ける超攻撃的チーム、栃木！」

「こつちもだ！ ここまで全試合で前代未聞の無失点勝利、絶対防衛、イージスの盾秋田！」

最強の矛と最強の盾。互いに陣容を変えて、再び激突する。

「……おーおー。やっぱりするこい人気だな、キセキの世代は」

「はしやぐなよ高尾」

「わかってますよって！」

その試合を見守る観客の中に、秀徳の選手達がいた。茶化するような口調の高尾を大坪が注意する。

彼らは東京都チームに入らなかつた。加えて東京都の応援に来たわけでもない。他の観客同様、もう一つの勝敗を読むことが難しい、栃木と秋田の試合を観戦に来たのだ。

「東京都はさすがに負けねえだろうな」

「やっぱり気になるのは白瀧と紫原の方だろ。IHと同じような状況に加え、一回戦で白瀧が黄瀬を倒しているという事もある。この大会で『キセキの世代連続撃破なるか』、って話題になりそうな話だ」

木村と宮地も同じように栃木―秋田の両ベンチへと注目している。

IH準優勝を果たした桐皇・東京が負ける光景は想像できなかった。ただ、栃木対秋田戦はどちらが勝ってもおかしくないと考える。すでにキセキの世代の一人が敗れた。何より秀徳として、借りがあがるライバルが所属する県だ。波乱が起きてもおかしくない。是非ともリベンジを果たしてほしいと願う。

「問題は、それを気にしすぎて選手達が気を張りすぎないかだな。小林あたりは大丈夫であると思うが」

「何も問題などありませんよ」

「むっ？」

ただ、こういった話題を選手が余計に気負いすぎないかと大坪が不安を呈する。

先のIHでも大仁多は第1Qから得点に悩み、苦しい展開を強いられていた。立ち上がりで得点できないと余計な考えをしかねない。

栃木がいかに序盤で自分たちの形を作れるか。大坪が心配する中、それを否定したのは緑間だった。

「少なくとも白瀧がいる限り。その心配はありません」

根拠はない。だが確信を持っていた。

今の白瀧ならばきつとそんな不安を一蹴してくれるだろうと。

「相手は全国でも随一の攻撃力を誇る。加えて神奈川を倒し、IHでのリベンジに燃えて士気も盛んだろう。ならばそれら全てを受け切り、押しつぶせ。うちのディフェンス力を見せつける。——行け！」
「おうー。よしっ。それじゃあ、行くぞー！」

刻一刻と試合開始の時が近づいた。

荒木は最後に選手達に活を入れて5人を送り出す。

そして岡村の一言で締めて全員がコート入りした。

IHからさらに戦力を増した陽泉。この試合でもその堅牢な守備を見せつけるか。

「——いよいよか」

一方、栃木ベンチではユニフォームに着替えた白瀧がコートを一瞥して呟いた。

リラックスした状態で表情も落ち着いている。紫原や再戦の事など意識する事もあるが、熱くなりすぎず冷静さを保っている良い状態だった。

「スタートは頼むぞ、白瀧」

「はい。あいつの前でだらしない姿は見せられないですから」

「あいつ?」

「ええ。ああ、そういえば言ってますね。多分この試合どこかで緑間が秀徳の人達と見に来てますよ」

「えっ、そうなの?! 初耳だけど!」

試合の入りを彼に託すべく、小林が彼に声をかける。

すると白瀧は仲間からの信頼は勿論の事、他にも応えたい相手がいると語った。

彼の口から出てきたのは大仁多の長年にわたるライバル秀徳とそのエース・緑間の名だ。予想外の言葉に偶然聞こえていた神崎は声を荒げながら話に混ざる。

「ああ。一回戦終わった後緑間にラインして、『暇なら見に行つてやつてもいいのだよ』って返答来てさ。そうしたら高尾からも『真ちゃんや先輩たちと応援しに行くぜ。頑張れよ』って連絡来たんだ」

「何お前普通に他校の選手と仲良くなつてんだよ!」

だが言われてみれば確かに練習試合で気兼ねなく話していたなど神崎は春の出来事を思い返した。

まさか彼らが見に来ているとは大仁多の選手達は考えてもいなかった。今国体で勝ち残っている選手達も試合が行われるために有力な選手はあまり見に来ていないかとも思ったのだが。

「ならば情けない姿は見せられないな」

小林の言に、神崎や白瀧が頷く。

相手は強敵だが関係ない。俺達の力を見せつけようと自らを鼓舞した。

「今日もやっぱりお前の活躍は不可欠だ。大丈夫だろうな？ 今日は一連戦だし一番出場時間長いから心配なんだけど」

「問題ないさ。一回戦の後から、夢で起きる事とかなくなったんだ」「だから何だよ!?!」

このチームで一番試合に出ているのが、試合の鉤を握るであろう白瀧だ。

神崎は彼の調子を問うと白瀧は突如夜の睡眠時の夢について話出す。

意味がわからない、そう神崎が叫んだ。

ただ、神崎は理解が出来なかったものの近くで作業をしていた橙乃はその意味を察し、わずかに口角を緩めた。

『どういう事？ いくら何でもそんなに勝負したわけではないんでしょう？』

『したよ！ 毎夜、眠りにつく度に。何度挑んでも、その度に負け続けた！ もう数えるのも馬鹿らしくなるくらい！』

これが意味する事は一つである。白瀧が悪夢により目覚める事がなくなったという事。彼が患っていた心の病から立ち直っているという事だった。

「ま、ようは大丈夫だって事だよ」

白瀧は繰り返し、神崎に調子に影響はないと告げる。

余裕が感じられる笑みを浮かべていて、神崎もそれを目にするとそれ以上の詮索はせずに下がっていった。

「さあ、皆さん時間です」

そして試合開始の時が来る。

藤代が全員を呼び寄せると最後に選手達を励まそうと力強い言葉を発する。

「準々決勝、秋田戦。IH3位の実力者が集う強豪です。そのディフェンス力は計り知れない。ですが相手が防御最強ならば、あなた方は攻撃最強だ。この試合であなたたちの力を全国に轟かせましょう！」

「キセキの世代の一人を破ってここまで勝ち上がったんだ。いまさら勝てない相手なんてない。勝ってこい！」

『おうー！』

藤代、岡田の両指揮官の檄が飛ぶ。

勝てば4強となる大事な試合。選手達も監督達に負けじと声を張り上げた。

「よっし。じゃあ行くぞ」

その後、勇作を先頭に5人の選手がコートへと向かっていく。

「まずは初っ端から全力で行こう。頼むぞ、お前達」

「当前ダ」

「とにかく先制点だ。一回戦とは違う。一気に攻めよう」

「向こうには悪いですが、無失点記録はさつさと破らせてもらいましょう」

「……うん！」

誰もが引き締まった、力強い顔つきだ。ここまで勝ち上がった事で皆自信にあふれていた。しっかりとした足取りでコート中央へと歩いていく。

そして試合開始より一足先に、両校のエースの間に火花が散った。

「ビデオ見て、ビックリしたよ。まさか白ちゃんが勝つなんてね」

「そうか？ ならこの試合でさらに驚かせてやる」

「……途中黄瀬ちゃんに押されて圧倒されたのに。ジタバタして苦しむだけだと思ってたのに、ここまで勝ち上がってきちゃって。知らないよ？ 間違って捻り潰しちやっても」

「やれるものならやってみろ！ あの時とは違う！」

もはや旧交を温める事さえない。鋭い眼光がお互いを射貫いた。

「それではこれより、準々決勝第4試合。栃木県対秋田県の試合を始めます」

「礼！」

『よろしくお願いします！』

栃木県スターティングメンバー

#5 橙乃勇作（三年） PF 189 cm

#7 ジャン・ディア・ムール（三年） C 204 cm

#11 楠ロビン（二年） SG 190 cm

#12 白瀧要（一年） SF 179 cm

#13 光月明（一年） PF 192 cm

秋田県スターティングメンバー

#4 岡村建一（三年） PF 200 cm

#5 福井健介（三年） PG 176 cm

#9 紫原敦（一年） C 208 cm

#11 劉偉（二年） SF 203 cm

#12 氷室辰也（二年） SG 183 cm

（小林がベンチスタート！）

（陽泉の選手を相手にという事でインサイドを重視にしてきたな。対する秋田県も知らない選手が一人いるが……）

（この面子なら司令塔は白瀧になる。やつのゲームメイク次第だ）

どちらもIHとは変わった選手が並び、大坪達はどのような試合展開になるのかと緊張感を高める。

そして、ついに試合は始まった。

『試合開始！』

ジャンパーである紫原とジャンが勢いよく跳躍する。

制したのは背丈で勝る紫原だった。彼の右腕がボールを叩き、福井の手元へと向かう。

「させない！」

「ッ！」

だが福井がボールを手にするより早く、楠が伸ばした手がボールを手繰り寄せた。

「よしっ！ 行くぞー！」

するとすかさず栃木の選手達が駆け上がる。

試合開始の速攻だ。そうはさせまいと秋田の選手達も素早くディフェンスへと移行した。

「いや、違うか。——行け！」

「なにっ!？」

すると楠はドリブルを仕掛けると見せかけ、一步下がると真横へとパスをさばく。

そこには後ろから走り込む白瀧の姿があった。

(体が、軽い。一度負けた相手だというのに、不思議と勝てるって気がする)

「容赦はなしだ。最初から行かせてもらう！」

「まさか！ 試合開始からいきなり!？」

楠からのボールを受けると白瀧は両足で着地し、そして勢いそのままに跳躍し、ボールをリング目掛けて打ち出した。

「同じ相手に負けてなるものか!？」

彼の気迫が籠ったようなキレの良さだった。コート中央という長距離から放たれた白瀧のシュートは、キレイにリングの中央を射貫く。

「うっ、おおっ！」

「決まった！ いきなり白瀧のロングスリー！」

「秋田の無失点記録が、わずか6秒で途絶えた！」

開始からまだ10秒も経過していない中、白瀧が先制点を挙げた。

司令塔のポジションからスタートするという事で秋田も最初は慎重に試合を組み立てると考えていたのだろう。だが白瀧はそのような甘い考えをしていなかった。

「すげっ。大仁多はIHでは最終Qまでリードを奪えなかったのに、こんなにもあっさり」と！

「当然なのだよ」

高尾も突然の奇襲攻撃に驚く中、自分の教えが発揮された故か緑間は得意げに語る。

「黄瀬に勝った事で、一皮むけたのだろう。切り込み隊長の本領発揮だ」

かつて敗れた相手に勝った事で失った自信を取り戻し、変化を遂げた。キセキの世代との戦いで化けた白瀧は、もはや別人のようだと言はう。

「捻り潰す？ 笑わせるなよ紫原。触れられない速さならばどんな力だつて通じない。止められるものならば、止めてみる！」

「白ちん……」

事実、紫原を相手に力強く宣言する白瀧の姿は、キセキの世代と呼ばれる彼らと遜色ないものだった。

先制点を獲得した敵を、紫原は複雑な表情で睨み返す。白瀧も彼の圧に負けることなく、凜と姿勢を正した。

白の龍と紫の魔神の戦い。今ここに開戦する。

——黒子のバスケ NG集——

すると楠はドリブルを仕掛けると見せかけ、一步下がると真横へとパスをさばく。

そこには後ろから走り込む白瀧の姿があった。

（体が、軽い。一度負けた相手だというのに、不思議と勝てるって気がしてくる。——もう何も怖くない！）

この直後に紫原にひねりつぶされそう。

第百八話 誇り高き勇者

試合開始直後の奇襲攻撃が功を制した。白瀧のロングスリーにより栃木が幸先よく先制する。

これまで無失点を誇り、鉄壁と呼ばれていた秋田から先制点をもぎ取ったのだ。この攻撃は非常に大きなものとなる。

「……白ちゃん」

されど宿敵とも呼べる敵のオフエンスを見ても紫原は自陣深くより動く事はしなかった。白瀧の愛称を苦々しく呼ぶにとどまり、福井にスローインをするとその場で立ち尽くす。

「大丈夫だ、敦。問題ない」

直後、すぐ近くにいた新しい同僚である氷室が紫原へと声をかけた。

「俺もあのシュートには驚きはしたが、わかっていた事だ。問題はな。敦は予定通り控えていてくれ。オフエンスは——俺が点を取ってくる」

「うん。よろしく。ミスはしないですよ」

「わかっているさ」

緊張感や気負いはなく、当たり前のような声色で二人は会話を終える。栃木を相手にするにあたり、4人でオフエンスを組み立てるという事がどれだけ困難な事かはわかっているはずなのに。

「大丈夫だ。今の俺なら一人でも勝てる」

氷室は非常に落ち着きを払っており、紫原も不安や心配といった感情はもっていないかった。

(少なくとも前半戦、俺達は敦抜きで攻撃をしなければならぬ)

福井と共にボールを運びながら、氷室は脳内で試合前の監督との作戦会議を思い返す。

『この試合は前半戦、少なくとも第1Qまでは紫原抜きで攻撃を行う』『いいのですか？ 確かにこれまでの試合では問題ありませんでしたが、栃木を相手にするとなるとさすがに……』

『わかっている。夏の戦いで大仁多の戦力は理解しているし、新しく

加わったメンバーも粒ぞろいだ。だがどうだとしても相手に白瀧がいる以上、紫原を最初からオフセンスに参加させては後半戦が保たなくなる』

相手の戦力がいかに強力かは荒木も十分理解していた。その上で紫原という戦力は必要不可欠であるという事も。今までの試合のように紫原がディフェンスだけ参加しても勝てるという敵ではないだろう。

だが同時に、その紫原と白瀧の相性を考慮した結果、荒木は紫原を温存しなければならぬと結論を出していた。

岡村達が反論を述べる中、荒木はさらに解説を続ける。

『白瀧がどのポジションで来るとしても、隙があればロングスリーを打ってくるだろう。厄介な速攻も絡めてな。そうなるかどうかでもカウンターを防ぐためには走力が必要となる。問題はここだ。うちでの速さに対抗できるのは紫原くらいだが、最初から守ろうとすればこちらが先にガス欠になりかねない。神奈川・海常の黄瀬のように』

荒木が思い浮かべていたのは栃木対神奈川の一戦の事だ。

あの試合でもエースの白瀧と黄瀬が一騎打ちを繰り広げていたが、最後まで全力で戦えたのは白瀧の方だった。彼が持つ自慢のスタミナ。これを攻略するには最初から最後まで敵に合わせてはならない。事実、IHで大仁多と戦った時に紫原も今までの試合を超えた跳躍の連続で多くの消耗を強いられた。結果として最後まで試合に出続けることは難しくなっていた事を考えると今回もそうなる可能性が非常に高い。紫原のような巨体が全力を出せる時間は他の選手よりも限られてしまう故に猶更だ。

ゆえに荒木は多少のリスクは承知の上で、紫原を前半戦は体力の消耗を抑えるという作戦を考えていた。

『よって最初のオフセンスは岡村と劉のインサイドと外の氷室。この二つで攻める。紫原がいなくても、夏よりも上がった攻撃力。栃木の、強いては大仁多の面々に見せつけてやれ』

荒木の声には自信に満ちている。紫原が不在でも攻撃は成功する

という確信を抱いていた。

「おう！」

「いつも通りやるだけアル」

「はい。任せてください」

その監督に応じる様に、選手達も力強く頷いた。

紫原だけではない。

かつて大仁多に守り勝ったIH3位の實力者達、アイジスの盾絶対防御いざ出陣。

宿敵との戦いを経て彼はかつて失った物を取り戻した。ならばこそ、次に彼が求めるのは――

「ディフェンス集中！ シュートまで行かせるな！」

4人で攻め寄せる秋田に対し、栃木は福井・氷室に白瀧と楠をマークマンにつけ、真ん中に光月、右にジャン、左に勇作を配置するゾーンを展開するトライアングルツォーを展開している。紫原が自陣から出てこないのを見て、急遽変更したディフェンスだ。

まずは前線の白瀧・楠の二人がボールの供給元である福井・氷室に各々プレッシャーをかけていた。

（紫原が出てこないと言うのならば！）

（この前半戦で陽泉を、秋田を突き放す！）

『敵の切り札が出てこないならばその間に試合を決めてやる』と選手の士気は高い。激しい圧を前線から仕掛けていく。

「――ッ！ このっ！」

（この前は小林。そして今日はお前かよ！ くそっ！）

白瀧のマークを前に、福井はボールを保持するのが精一杯の状態だった。一瞬でも隙を見せればボールを奪われかねないという厳しい戦況。悪態をつきたくなくなるのも仕方のないことだろう。

（だけど！）

「そう簡単に新人にやられるわけにはいかねえ！」

だが易々とボールを奪わせやしない。前後の揺さぶりであるロツカーモーションで一瞬白瀧を引き付けると即座に氷室へバウンドパスをさばいた。

「さすが」

「ナイスパス！」

白瀧、そしてボールを受けた氷室が賛辞の声を上げる。小林や笠村と言った選手達と比べれば福井は個人技の力では劣るだろう。だがドリブルによるフェイクやパス技術は一級品だ。伊達に秋田最強チームの司令塔を任されてはいない。

そのパスを受けた氷室は一度両腕を下ろしてトリプルスレットに入った。

マークマンである楠の姿を見て、タイミングを図る。すると突然氷室の視線がリングに向かうや否や、彼は両腕を上げて飛び上がる。

「ッ!？」

(いきなりシュートか！)

ノーフェイクでのアウトサイドシュート。そうはさせないと楠も大きく跳躍した。

しかし飛び上がった後で、楠は氷室が地面を蹴る寸前で制止していた事に気づく。

「いや、フェイクだ！」

「巧い！」

(くそつ。全く気づけなかった！)

(いや、今のは仕方がない。視線の動きからすべてがシュートするようにはしか見えなかった！)

「ヘルプ！」

切り返して楠を躲した氷室がゴールへ切り込んでいく。呆気ない攻防の決着だったが楠を攻めることは出来ない。今の氷室のオフエンスは白瀧でさえシュートであるのだまされ、反応が遅れてしまったのだから。

「させるか！」

「止める！」

だからと言って好き勝手にさせる選手ではない。

白瀧と光月がいち早く立ち直ると氷室の前に立ちはだかり、挟み撃ちで彼の行く手を阻んだ。

「悪いが、俺は止める事は出来ないよ」

そんな二人の反応を見ても氷室は焦り一つ抱かない。彼らのディフェンスに捕まる前に、氷室はドライブを中断。そのまま流れるような無駄のない動きでジャンプシュートを放った。

『――』

彼の一連のプレイは真に洗練されたスムーズな動きであり、思わず白瀧も光月も氷室のプレイに見とれてしまい、その場から動くことさえ出来ない。

結果、フリーとなった氷室のジャンプシュートはノータッチでリングを潜り抜けた。

「なっ」

「鮮やかに決まった！ 秋田も即座に反撃！」

「白瀧と光月、栃木の大型新人が揃って棒立ち、反応さえできない！」
あくまでも基本に忠実なプレイにすぎない。しかしあまりの有名ならかな動きに観客席から歓喜の声が沸き上がった。

「チツ。ぼさつとしてんな！ 再開だ！」

「オ、オウ！」

「お前らもだ！ あんな普通のプレイに引っかけかかってんじゃねえよ！」

「すみません」

「返す言葉もない」

ゴール下、勇作がジャンに声をかけて反撃を開始するように指示を出す。同時に氷室の動きに惑わされた三人に怒声をぶつけた。もつともな言葉に光月と楠は申し訳なさそうに表情をゆがめるのだが。

「――すごい。完璧だ」

一人、白瀧だけは氷室から視線を動かす事が出来なかった。

彼も様々な技術を磨き、鍛錬を重ねて来た身である。だからこそ彼の目にはより衝撃的に映ったのかもしれない。

(なんとという選手だ。この人、技術だけなら俺や黄瀬は勿論の事。ひよつとしたらキセキの世代全員をも超えているかもしれない)

そんな白瀧をもってしても、氷室があるいは天才と呼ばれた選手達をも超える技量を持っているという思いを抱かせた。今のオフエンスはそれほど彼には強く印象に残ったのである。

(まさか陽泉にこれ程の選手がまだ残っていたとは。紫原に次ぐ得点源と考えた方がよさそうだ)

氷室の脅威を理解して白瀧は彼の警戒度を上げてボール運びに移った。楠とボールを回しながら前線に運んでいく。

(こうなったら余計にこちらの攻撃は外せない!)

敵の戦力を把握した以上、栃木のオフエンス成功は必須だ。楠からボールが帰るや、白瀧はスリーを警戒する福井をヘジテーションクロスオーバーで突破した。紫原の守備範囲内へと侵入する。

「ぐっ!」

(やっぱりこいつのドリブルは速すぎる!)

「今度は決めさせないよ」

「紫原!」

当然すぐに紫原が前に出た。白瀧の切り込みもシュートも許さないと立ちほだかる。

「そうかよ。なら、行くぞ!」

序盤からいきなりエースが真っ向からぶつかり合う。ここで紫原を突破出来れば栃木は一気に波に乗ることが出来るだろう。それを理解し、白瀧は初めから全力で挑む事を決意した。

(キラークロスオーバー!)

黄瀬との戦いを経てさらに切れ味が増した彼の必殺技が炸裂する。夏の戦いより進化した彼のドライブ。常人ならば反応する事さえ難しい動き。

「——ッ! させないし!」

「なっ!」

その動きに紫原はついてきていた。

まだ前に立ち続ける紫原を見て白瀧は驚愕する。攻撃を止めない

為、フロントチェンジを行いボールを左手に移し——そして続いて体の後ろにボールを通すビハインドザバックパスをさばいた。

「おっ」

「ナイスパス！」

「光月！」

紫原からボールを隠す動きであった為にステイールは敵わない。ボールはゴール下の光月へ。

『これで決めてやる』と光月がダंकシュートを狙って飛び上がる。「忘れたの？ そんなんで決まるわけないじゃん！」

「うあっ！」

すると岡村に続き紫原まで光月のシュートブロックに出現し、ボールを叩き落とした。零れ落ちたボールは劉の手に収まる。

攻撃を決める事が必至な栃木であったが、紫原の守備を前にリングを揺らす事は出来なかった。

「こいつっ！」

「やはり守りは堅いか！」

夏の戦いで陽泉から多くの得点を奪った二人が止められる。この衝撃は大きなものであった。

「嘘だろ。白瀧の新技がこうもあっさりと？」

「……おそらく、神奈川戦の時程動きにキレがないのでしょうか」「えっ？」

「あの時白瀧さんが技を披露していたのは彼が全ての力を出し切っている時でしたからね」

勿論この影響はベンチにも波及している。小林でさえ紫原のディフェンスに冷や汗を浮かべていた。

新たな力が防がれるという信じがたい状況。だが、この時藤代は白瀧が防がれた原因をしつかり分析し、答えを出していた。

神奈川戦。白瀧のキラークロスオーバーは確かに黄瀬を打ち破った。

しかしそれは彼が限界を超えるフローの状態に入っただけの事。その条件を満たしていないならば当然の事だが技の出力は低下している。

その結果、最強の守備力を誇る紫原に止められたのだろうと。

(だからと言って、まさか第一Qから彼の全てを出し切るわけにはいかない。やはり簡単には上手くいきそうにないですね)

勿論フローに入る事が出来たならば彼の力は紫原にも通じるはずだ。夏の戦いでも白瀧は紫原と互角以上に戦えた実績がある。

もつとも、そんな事をしてしまえば白瀧が先に力尽きてしまうのは明白だ。紫原がオフェンスに参加していないのだから余計に無理をさせるわけにはいかない。

やはり今回も厳しい戦いになるだろうと藤代は改めて秋田の脅威を再認識した。

「よしっ。反撃だー!」

ボールを手にした秋田が攻撃に移る。

こちらも福井、氷室がボールを運んでいった。外、中とパスをさばき、そして再び氷室にボールが渡る。

「楠先輩!」

楠が氷室のドリブルを警戒している中、白瀧から声が響いた。するといつの間にか福井が側まで来ており、スクリーンで楠の動きを阻む。氷室が再び中へと侵入を果たした。

(スクリーン!)

「スイッチ!」

「このっ!」

(二度も連続で決めさせるか!)

今度は確実に止めてやると白瀧が素早く対応する。フェイントには引つかからないよう氷室の動きをしっかりと観察し。

「やあ。どうやら弟が随分と世話になったようだね」

「えっ?」

(弟?)

すると氷室が突然白瀧に声をかけてきた。話の意図が読めない中、氷室は先ほどと同様にドリブルを中断するとノーフェイクでジャンプシュートを放つ。

(これはフェイクじゃない!)

「舐めるな！」

動きが本物であると見極めた白瀧がブロックを試みた。同じ流れで決めさせるわけにはいかない。

白瀧のブロックは完全にシュートコースを塞いでいた。

「陽炎シュート」
ミラーシュ

「はっ!?!」

だが、彼の腕がボールに触れる事はなかった。

氷室のシュートはブロックをすり抜けてリングを潜り抜ける。

連続得点が決まり、秋田が逆転に成功した。

「ナッ！」

(白瀧が二回もディフェンスに失敗!?)

(いや、今重要なのはそこじゃない)

(まさかボールが腕をすり抜けた?)

「……馬鹿な」

呆然とする栃木の選手達。白瀧も例外ではない。

そして経験豊富な白瀧の目をもつてしても、氷室のシュートを分析する事は出来なかった。未知のシュートを前には心眼でさえ読み取る事は適わない。

「火神大我の事だよ。あいつは僕の弟分のようなものなんだ」

「火神!?!」

(火神が弟分って事は、この人も本場仕込みか!?)
アメリカ

まだ衝撃が残る白瀧に氷室が先ほどの言葉の意味を告げた。

かつてIHで大仁多と争った誠凛のエースである火神大我。彼は氷室の弟のような存在だと語る。

「あいつを抑えた君との勝負は非常に楽しみだった。君の真価、試させてもらうよ」

「なるほど。非常に厄介な兄弟ですね」

そう言って氷室は得意げに笑みを浮かべた。黙っていても駄目だと白瀧も口角を上げるも、予断を許さない戦況が続く。

「まずいな栃木。これ、完全にひっくり返されただろ」

「ああ。もはや流れは秋田にある」

攻守の中身を見て、感染していた高尾が厳しい意見を言うと緑間も彼に追従した。

三点を先制した栃木だったが追加点を奪う事が出来ないまま逆転を許してしまい、新戦力である氷室の攻略は難しい現状。このままでは第一Qは落としてしまうと二人は考えた。

そして二人の言葉通り、戦況は好転しない。

反撃を試みた栃木だったがジャンと勇作のゴール下からのオフエンスが失敗に終わり、リバウンドを岡村に奪われると秋田は劉のオフエンスリバウンドから得点し、追加点を奪った。

瞬く間に得点は(栃木)3対6(秋田)。先制点を挙げた後は栃木の無得点時間が続く。

「栃木県タイムアウトです!」

すると藤代は第1Qから早くもタイムアウトを選択した。選手達をベンチに戻し、中心物である白瀧に問いかける。

「紫原さんはどうですか? 白瀧さん」

「いつかは止められるかなとは思っていましたが。まさか初見で見抜かれるとは思っていませんでした。また無策で挑んでも対応されるでしょうね」

「やはり、ですか」

「白瀧君……」

まずは秋田の最大戦力である紫原の事だ。

質問に対して白瀧はあくまでも冷静に分析した事を話した。あっさりと負けを認める事は彼にとって苦しいものだろう。心配になった橙乃が何か声をかけようと歩み寄る。

「やばい。本当に——面白い」

「えっ?」

続いた言葉に橙乃は足を止めた。タオルで顔を拭いた後、露になった白瀧は笑みを浮かべている。この勝負を楽しんでいるようであった。

(なんかこいつ、神奈川戦あたりからちよつと変わったか?)

(さすがにここまで好戦的なやつではなかった気がしたが)

彼の変貌を見て他の選手達は驚愕している。今までならばどうしたものかと、真剣に悩みこそすれ窮地を楽しむようなことは少なかっただろう。

中学時代の白瀧を見ていない彼らは知らない。白瀧が変わったのではなく、戻りつつあるという事に。

「楽しむのはいいが、どうやって立ち向かう？ 奥の手などはもうないのだろうか？」

「そんなの決まってるいでしょ」

ただ、彼の心境を考えている時間は多くない。楠が単刀直入に対抗策の有無を聞くと、白瀧は迷うことなく返答した。

「不利な方が取る手は——全掛^{オールイン}け。そうするしかない」

勝つためにここで全てを賭ける。白瀧の目に闘志が宿った。まだ試合は始まったばかりだ。

「考えがあるのでですね。ならば紫原さん対策は任せます」

「ありがとうございます」

「となると問題は氷室ですね。あのオフエンスは厄介です」

「それについてはマークを交代しましょう。白瀧さん、楠さん、マークチェンジです。白瀧さんに氷室さんのマークについてももらいます」

後先考えていない様子ではなかった。この様子ならば信じて大丈夫だろうと藤代は新たな手を打たずにこの話は終わりを迎える。

続いて話題はディフェンス、氷室の対策へ移った。

新たな新戦力は情報も少なく対処が難しい。そんな状況で藤代はその氷室に白瀧をぶつける事を選択する。

「わかりました。いざという時はすぐにヘルプに出れるようにします」

「了解です。次は絶対に止めます！」

氷室を再警戒しての判断だ。二人は揃って頷き、強い意志を指揮官に示した。

「いえ。別に止めてもらわなくても構いません」

「はっ？」

「むしろ白瀧さんのブロックを潜り抜けたシュート。あれをできるだ

け撃たせてください」

「——はっ？」

だが、続けられた説明に選手達は目を丸くする。

どういうことだ。仕組みもわかっていないあの技を撃たせては止めるのは難しいだろう。

それにも関わらずその技を許すという監督の発言に皆理解が追いつかなかった。

「お前達、よくやった。先制点を許したものの栃木の攻撃をその3点に抑え込んだのは上出来だ」

一方、秋田ベンチでは荒木が選手達をほめたたえ褒め称えていた。

攻撃力に優れた相手の得点を最初の攻撃だけしか許さない。秋田の強みであるディフェンス力を見せた上に、新加入した氷室の個人技とゴール下の強さを示す事が出来た。栃木には多大なプレッシャーとなっただろう。

「おそらく氷室にはダブルチームあるいは白瀧がマークにつくことが考えられる。だがどちらにせよ試合序盤でお前の動きの真偽に対応するには時間がかかるだろう。どんどん仕掛けていけ」

「はい。任せてください」

「ゴール下もこのまま攻め続けろ。数の不利はあるが力と高さで勝っている以上押し切れる。ディフェンスは白瀧のスリーに注意しろ。あれはいつ撃つてきてもおかしくない。だがあれさえ封じてしまえば栃木の攻め手は限られる。このまま栃木の攻撃を封じ込め！」

『おうー！』

こちらは特に大きな変更点はない。むしろ流れを維持する為に今までの動きを強める様にと指示を出した。

紫原という切り札を攻撃に出さずとも有利に試合を進めている秋田。この鉄壁を崩すのは容易ではない。

『試合再開です!』

タイムアウト明け、栃木のスローインから試合は再開された。

両チームとも選手の変更はない。第1Q同様に白瀧と楠がボールを運んだ。

ハーフコートオフエンスに移行すると栃木は慎重にパスをさばく。中外にとボールを回し、簡単には攻め込まない。

「中々攻めないっすね。栃木は大仁多時代から時間をかけない速攻が主流のはずっすけど」

「タイムアウト直後のオフエンスが慎重になるのは当然だろう。得点できていない時間が続いているのだからなおさらだ」

「それに、おそらく栃木は狙っていますね」

絶対に決めたいこの攻撃。きつと栃木は白瀧の突破を図っているのだろうと緑間はこの動きの意図を読んでいた。

残り10秒。栃木のボールを保持できる時間制限が迫る中、ついに白瀧が動き出す。

(ここだ!)

パスフェイクによりできた一瞬の間隙をついた。福井の横をクロスオーバーで突破する。

(うっ。わかっていたはずなのに!)

「しっこいね。ジタバタしても無駄だって言ったのに。——捻り潰す!」

切り返しに注意していても福井は止められなかった。

そして先ほどと同様に紫原が白瀧を止める為に前進する。

何度来ても無駄だと両手を伸ばした。

「……いいや。やっぱりジタバタさせてもらうよ、紫原!」

その紫原を見た白瀧の笑みが深くなる。

発言の直後、突然ドリブルを続ける彼の体が小刻みに揺れ動いた。

「ッ!? うっ、おっ!」

縦横無尽に変化する白瀧のオフエンス。紫原は無意識下でその動

きに体が勝手に反応してしまい、彼に追いつくことが出来なかった。白瀧の切り込みを許してしまい、フォローや立て直しが来る前にティアドロップを放つ。シュートは綺麗に決まった。久しぶりに栃木の得点が記録される。

「ぐうっ！」

「決まった！ エースの一発！」

「栃木がようやく追加点！」

失点に紫原が表情をゆがめる中、観客席は歓喜に湧いた。

これまで無失点だった秋田から二回目の得点。当然の反応だろう。

一方で、今のオフエンスの間に彼が起こした連続技に秀徳の選手達は驚愕を隠せなかった。

「今あいつ何回変化してた？ 真ちゃん、わかった？」

「……3いやおそらく4種類。夏よりさらに上体の動きが上手くなっているようだ」

かろうじて緑間が白瀧の技を目で終えたが、だからこそ余計に強く印象に残っている。

今白瀧がやっていたのはこれまで通りチェンジオブペースとチェンジオブディレクションの繰り返しによる翻弄。そしてディフェンスでも使用されるステップだった。

ハーキーステップ。幾度も細かい足踏みを繰り返すステップだ。さらに白瀧はこれにドリブルと連動してショルダーフェイクを加え、肩の動きで紫原の重心をずらし続けた。

「反射神経。本当に厄介だよな。——優れすぎて、気づく前にあつと
いう間に反応してしまふんだから」

「白ちゃん！」

「お前達を倒すのに新たな切り札なんていらぬ。俺は俺が持っている全てをもって、お前達を倒す！」

得点を決めた白瀧が紫原に話しかける。

白瀧は紫原の反射神経を強みであり、同時に弱点でもあると対応策を考えていた。

切欠はIH、紫原との最後の攻防だ。あの戦いで白瀧は紫原が自分

の動きを見抜いているのではなく、こちらの出方に反射で対応していると知る。

それなら対抗策もある。早すぎるが故に、数々のフェイントには体が間に合わないだろうと。すでに重心が動いてしまったならばその逆をつかれてしまえば体は動かない。

今までならば白瀧はこれ程技を連続で繰り出す事は出来なかっただろう。しかし、白瀧はIH以降徹底的に上半身を鍛え続けた。彼も気づかぬうちに筋力は大幅に増加し、今まで以上のプレイが可能になったのである。

「また、小癩な真似を」

「待て敦」

「室ちゃん……」

ヒートアップし、白瀧を睨みつける紫原を氷室が落ち着かせた。まだ第1Qだ。ここで彼を暴走させるわけにはいかない。

「お前が出るのはまだ早い。相手の速攻を防ぐという点でも敦がここで守っているというのは効率が良いんだ。大丈夫、俺が取り返してやる」

「ふん。しくじらないですよ」

鼻を鳴らして味方を見送る紫原。

今度は秋田の攻撃が始まった。ゆっくりと攻撃を組み立てていると、栃木の方針が変わった事に気づく。マークが変わり、福井に楠が、氷室には白瀧がついた。

（監督の言う通りになったか！）

「ッ！」

ここまでは荒木の想像通り。しかし白瀧の警戒が少し予想と異なる動きだった。ボール保持者から氷室へのマークが甘く、彼との距離も開いている状態で、パスがしやすい上体だ。しかし一度氷室にボールが通れば一気に距離を詰め、シュートを撃たせまいと厳しいチェックが行われる。

（これは！）

（他三人のオフェンスに対するケアと氷室のスリーを最優先に潰す動

きだ。だが)

(連続で点を決められたというのに、ドリブルへの警戒が薄い?)

白瀧の動きは氷室の切り込みを誘導するようなものだった。今の秋田にとっては得点の期待が高い攻撃方法だけに疑問が残る。

「…………ふうっ」

一つ息を吐き、突如氷室がシュート体勢に入った。

するとこれをフェイクに斜めに切り込む氷室。この動きに白瀧も食らいつく。

(読まれたか。だがここからだ!)

本物と遜色ない動きを読み切ったのはさすがと言えるだろう。だが本命はここからだ。

氷室の陽炎ミラーージュシュートが再び放たれた。白瀧の手はボールに触れる事はなく、氷室の得点に。秋田もそう簡単に点差を締めさせない。

(——頼みますよ監督。皆)

得点を決められた白瀧だが、彼は悔しがる素振りは見せず、視線を栃木のベンチに移した。失点は出来れば防ぎたいがチームの方針だ。

白瀧は先ほどの藤代の指示をもう一度思い出していた。

『あのシュートは何かカラクリがあるはず。本当に万能ならばスリートを狙えば良いはずなのにそれもしない。ですが彼は出場試合数も少なくデータがない。ならばわざと撃たせてこの試合の間に対策を練ります』

『ですがそんな余裕があるのですか？ 紫原も出てこない今、確実に失点を防ぐ手を考えた方が』

『だからこそです。紫原さんも出てきてしまっただけでは対策を考える時間がない。ならば間に合わなくなる前に情報分析を終わらせ後半戦につなげます』

秋田は今紫原がオフエンスに参加していない。だからこそ今の間にも少しでも失点を防ぐべきと言う考えもある。だがそれでは紫原が本格的に参戦した時に対処できなくなってしまう。故に藤代は相手の攻撃が整いきる前に対策を打つ方が最善だと考えたのだ。

『しかしそうになると、秋田の得点が伸びる可能性が高いですが』

『それなら、そういう事でしよう』

『えっ?』

なおも楠などが抗論する中、白瀧など大仁多の面々は藤代の先の言葉を理解し、彼の作戦を受け入れた。

『取られた分、取り返す。単純な事ですよ』

『行くぞ!』

栃木は秋田に対し、自分たちが得意とする点の取り合いに持ち込む事を選ぶ。

転じて栃木の攻撃。やはり攻撃の起点は白瀧だ。

今度はスクリーンをかけて福井を突破すると出て来た紫原のマークをジャブステップからギャロップステップで潜り抜けた。

「ぐっ!」

(また誘導された!)

「こんのおっ!」

揺さぶりに引っかけたのは腹ただしいが、だが立ち止まればかりではいられない。紫原はその場から飛び上がり、跳躍力と手の長さのみで白瀧のシュートコースを塞いだ。

「ああ。お前ならまだ来るだろうな。だけど」

すると白瀧はリングではなく、斜め方向へとボールを山形に放る。

(シュートじゃない。パスか!)

視線を移せば、いつの間にか退がっていた光月が助走をつけて走り込んでいた。先ほどの再現と言わんばかりに光月は再び空中でボールを手にする。

(今度こそ!)

(光月? 白ちんからのパスが来ると信じて?)

「——ッ。何度やったって、無駄だ!」

岡村、さらに紫原も着地するやすぐ斜め後方へ飛び光月のシュートコースを塞いだ。常人離れた反射神経と脚力があってこそその動き。さすがの対応だ。

「いいや、今度は大丈夫だよ」

もう一度止めると紫原が意地になるも、白瀧はこの攻防の結末を察

し穏やかな口調でそう呟いた。

「たしかに速さも加わったお前の運動エネルギーは最強なんだろう。だがそれは真っ向からぶつかった時の話だ。俺の動きにつられて後ろに跳ぶしかなかったお前と、助走で勢いが増した明のダンク。どっちが上かなんて、お前ならわかるだろう」

「——まさか!」

体勢を崩し、万全の状態では迎撃出来ない紫原に対し、光月は助走により勢いがついていている。こうなれば優劣は明らかだ。紫原も相手の総力を理解し、悔し気に表情をゆがめた。

「光月、白ちん!!」

「そうだ。この勝負は、俺達の勝ちだ!」

「うおおおおお!!!!」

そして光月のアリウープが炸裂する。

その強さは計り知れず、岡村と紫原二人の巨漢を吹き飛ばした。

「うおっ!」

「ちいっ!」

二人が地面に叩きつけられる。走る痛みを堪えて上体を起こした紫原。そして彼は目の前で得点を決めた二人が拳をかわす光景を目にした。

「よしっ!」

「ナイス!」

その笑顔は紫原にはまぶしすぎた。

（——どうして）

紫原が抱いた疑問は口から出る事はなく、彼の中で燻り続ける。

こうしてこの後、両校の攻防はさらに激しさを増していった。

「邪魔アル!」

「グウツ!」

「ナイスダンクじゃ、劉!」

秋田はやはり岡村と劉のゴール下、氷室の個人技で点を取り。時にリバウンドを取る事で相手の攻撃の芽を摘む。

「甘えよ!」

「ぐっ！」

(ステイール！)

「さすが勇作さん！」

「よっしゃ。反撃だ！」

対する栃木は機動力に長けた白瀧・楠・勇作達がステイールを積極的に狙っていった。白瀧を起点にパス回しとドリブルで敵を切り崩す。

お互い全力の臨む中、数で勝る大仁多が少しずつ点差を縮めていた。

「遅いぞ、紫原！」

白瀧の攻撃。

クロスオーバーからバックロールターンで切り返す。

紫原が食らいつき彼を追った。すると紫原は動いた先で、彼の手元からボールが離れていく光景を目にする。

(ボールが。ターンの途中でパスを?)

「ナイス！」

「くっ！」

そのパスの先はミドルの楠へ。氷室が必至にブロックを試みるが、彼のジャンピングシュートを止めるには至らなかった。楠がこの試合初めての得点を記録する。

「さすが元祖！」

「お前に言われるのは少し照れ臭いな」

(氷室もよくやっているが、平面での身体能力勝負ではあの男に軍配が上がるか)

荒木の握りこぶしに力が籠った。攻撃の要である氷室は守備でもよく動いてくれている。しかし相手の楠は身体能力が高くシュートの技術も高い。止める事は簡単なものではなかった。

第1Qの終了が迫る中、秋田はゴール下の岡村が積極的にポストプレーを仕掛けていき、最後は強引に得点へとつなげた。

対して栃木も最後に得点を決めようと攻撃を仕掛ける。

インサイドのジャンからラストパスが白瀧にさばかれた。

(黄瀬との戦いで取り戻したものが確かにある。それは自信でありプライドだ。今までは心の底のどこかで本当に敵ううのだろうか不安があった。けどもう違う。俺は確かに過去を乗り越えた。ならば次こそは――)

息を整え、タイミングを図ると白瀧は仕掛けていく。

福井はチェンジオブペースでかわした。続いて最後まで待ち構えていたのは紫原だ。

「――白ちん」

(どう来る？ またパスか。切り込んでくるか。それとも遠くからレイアップか?)

さすがにいくつか見当をつけておかねば間に合わない判断したのだろうか。紫原の顔色には迷いが映っている。

「迷ったな紫原？ なら、お前の負けだ」

相手の心境を切り裂くかのように白瀧が切り返した。キラークロスオーバーがついに紫原を置き去りにし、ゴールへ迫る。

「ッ！」

(もはやあいつは紫原でさえ止めきれんのか！)

(高速で連続技を繰り出す変幻自在なドリブラー。止められねえ！)

(それでも！)

「これ以上は」

「行かせないアル！」

確かにもう彼には隠している必殺技はなかった。だが、それを必殺技たらしめる技ならいくつもある。

黄瀬を破ったのはまぐれではなかった。シュートを狙う白瀧を岡村、劉が必至にブロックする。

「白ちん!!」

さらに紫原も背後からボールを狙った。三人の高いブロックがシュート阻む。

「邪魔だ！」

それでも白瀧は止まらない。

ダブルクラッチで持ち手を変えると、白瀧は指先でボールをコント

ロールするフィンガーロールで彼らのブロックをかわしきった。

「ぐっ！」

(次こそは必ず勝利し、今度こそ守り抜く。かつて失い、そして取り戻した俺のちっぽけな誇りを！)

「うおおおおおおお!!!」

最後の得点が栃木に記録される。

第1Q終了のブザーが鳴り響く中、白瀧が力の限り吼えた。

(栃木) 16対16 (秋田)。キセキの世代、そして新たな強敵と互角の戦いを演じ、試合は勝負の第2Qへ。

——黒子のバスケ NG集——

「よしっ！」

「ナイス！」

その笑顔は紫原にはまぶしすぎた。

(——どうして)

紫原が抱いた疑問は口から出る事はなく、彼の中で燻り続ける。

(どうして自分をぶっ殺した相手と仲良くできる?)

「だからそれ誤解だっ！」

※第六十二話NG集参照

第百九話 超攻撃型

「同、点」

「ここまでの全試合で無失点だった秋田代表を相手に栃木代表が互角の戦いを演じてる！」

「すげえ！ これは本当に神奈川戦に続いて『キセキ越え』が起こるのか!？」

16対16。一時は秋田に逆転を許したものの、栃木が中盤から盛り返し、第1Q内で試合を振り出しに戻した。

圧倒的な才能を誇る『キセキの世代』を相手にここまで戦う事は並大抵の事ではない。栃木の健闘を称えようと観客席からの声援はより一層の熱が籠った。

「これは本当にわかんねえな」

「ああ。このまま行けるのならばな」

「なんだよ真ちゃん。含みのある言い方をして」

高尾も他の観客と同様にまだ試合の行方はわからないだろうと思っている。しかし彼の横で試合を眺めていた緑間は楽観視できず、不穏な空気を感じ取っていた。

「いや、緑間の言う通りだ」

「えっ?」

「確かに第1Qの展開は互角と呼べるだろう。ただ、どちらにより余裕があるかと問われれば間違いなく秋田だ」

それは大坪も同意見である。高尾をいさめる様に、冷静な意見を淡々と語るのだった。

難攻不落と呼ばれる最強の盾。魔神を擁する難敵に、攻撃最強が今一度猛攻を仕掛けていく。

秋田高校ベンチ。

選手達が引き上げてくると荒木は落ち着いた声で第1Qを振り返り、第2Qの指針を示す。

「問題はない。16失点は予想を超えるものだったが、同じ展開は続かないだろう。引き続き作戦を続行する」

秋田はこの試合で初の失点を喫したものの、荒木はそれを嘆くことはしなかった。そもそも神奈川を倒して勝ち上がったってきた相手がこれまでの敵と同じように抑えられるとは思っていない。

あくまでも平然と努め、その上でまだ自軍の優位は続いていると選手達に語った。

「なぜなら栃木は現状彼らが持ちうる限りのインサイド最強の布陣を敷きながら、うちのゴール下を攻略する事は出来ていないからだ」

理由は栃木の出場選手である。

栃木は主将である小林を下げてまでパワーと身長タツバに長けた選手で固めながらゴール下では押されていた。リバウンドも秋田が多く獲得し、チャンスをものにしている。元々陽泉の選手達が得意とする展開で十分押し切れていたのだ。

リバウンドを取れない戦況は非常に厳しいものである。単純に考えてシュートチャンスを確実にしなければならぬ為、選手達に掛かるプレッシャーは相当なものとなっていた。

「いずれボロが出る。加えて氷室の攻略が出来ていない上にうちは紫原が控えている」

この状況は長くは続かない。加えて氷室のシュート、紫原の攻撃参加というオプションが秋田にはある中、優位は揺るがないものだった。

「このままインサイドと氷室の個人技で押し付け。そうすれば自然と点差は広がるだろう」

「はいー」

その為秋田は引き続き第1Qと同じ方針を継続する事を決める。

皆異論はなかった。そこそが自分たちが得意とするものだと理解している。このまま攻撃最強をねじ伏せようと声に力を籠めるのだった。

一方、栃木ベンチ。

こちらは対照的に指揮官である藤代が大きな賭けに出ようとしていた。

「——このままではじり貧になる可能性があります」

秋田ベンチで荒木が告げた説明とまったく同じことを選手達に告げる。

藤代も理解していた。栃木が持ちうる限り最強の面子で固めても真っ向から打ち勝つのは難しい。

「二つ手を考えています。一つは、このまま現状維持。これでも決して押し負けるとは言いません。ですが徐々に厳しくなる可能性もある。もう一つは博打となります。上手く行けば一気に押し勝てる。しかし失敗すれば逆にこちらが不利に陥りかねない危険な手です」

慎重な物言いに選手達は息を飲んだ。

どちらも一長一短があつて明確な答えはない。非常に難しい問題だった。

「そんなの、考えるまでもないだろ」

そんな中真っ先に口を開いたのは勇作だ。

「このまま押される可能性があるなら、勝機がある方に賭けたい。賭けるべきだ」

「同ジク一票」

「俺も攻めるべきだと思います。手を打つなら先手を取った方が良い」

彼に続きジャン、楠の二人も賭けに出るべきだと意志を示した。栃木はオフエンス能力に長けた選手が集う。その力を活かすためにも攻勢に出るべきという考えは間違つてはいない。

「白瀧さん、光月さん。お二人の意見はどうです？」

藤代はここで彼ら3人と同じく試合に出ている二人へ意見を求めた。

「お二人にとって、大仁多の選手にとっては酷な選択だとは思いますが」

「どういう意味です?」

あまり教え子達に聞くべきではないと知りながら藤代は問う。

その口調に楠達が首をかしげるものの、その理由は単純かつ明白なものだった。

「そう簡単な話ではないんだ。彼らは……」

「私達大仁多は、その賭けに乗って陽泉に敗れたんですよ。夏のIHで」

「ッ!」

「……そうか」

かつて大仁多は陽泉を相手に全てを賭けて挑み、そして力尽きていく。しかも白瀧と光月の二人はまさにその賭けの途中で戦線離脱を余儀なくされた選手であった。何も感じないわけがない。

「勿論これが正しいなんて言う事はできません。ですが——」

「大丈夫ですよ、監督」

彼らの心中を察する藤代。しかし白瀧はそんな指揮官の声を遮り、強い瞳で訴えた。

「俺達は大丈夫です。もう負けない。その為にここまで来たんです」

黄瀬に勝った今、もはや敗北を恐れる事はしない。白瀧の目に迷いはなかった。

「……僕も、同じ気持ちです。やりましょう」

「俺達は攻め続けるべきです」

光月も彼の声に続く。

自分たちはここまでどんな相手に対しても攻めの姿勢を崩さなかった。だから今回もその気持ちを切らすべきではないと話を続ける。

「——そうですね。では、これより作戦を告げます」

皆気持ちは同じであった。

教え子たちがここまで勝利を、自分たちの力を信じている以上、指揮官が退くわけにはいかない。

藤代は柔らかい笑みを浮かべて第二Qの指針を告げた。

『これより第二Qを始めます!』

「よしっ!」

「行くぞ!」

第二Q開始の合図が響き、両県の選手達がベンチから飛び出していった。どちらも選手交代はなく先ほどと同じ10人の選手が再び相対する事となる。

「ああそうだ。橙乃、どうだ? 氷室先輩のシュートを見て、何か分かった事はあるか?」

白瀧も他の4人に続こうと立ち上がって、先にマネージャーである橙乃に頼んでいた事を思い出して振り返った。

対黄瀬戦の時にも攻略のヒントを与えてくれた彼女である。今回も何か見出してくれただろうかと期待の眼差しを向けて――

「遅い」

彼女の短く、強い言葉に打ちのめされた。

「あつ。うん、ごめん。もっと早くに聞くべきだった」

「え? 違うよ、そうじゃなくて」

「へっ?」

「耳を貸して」

また橙乃を怒らせてしまったのだろうかとエースが委縮する。そんな縮こまった彼を見かねて、橙乃は助け船を出すのだった。

「……なるほど。了解、試してみるよ」

「うん。頑張って」

橙乃が手短かに要件をささやくと、その趣旨を理解した白瀧が今度こそコートへ戻っていく。

「さあ、行くぞ!」

そして試合が再開された。

氷室のスローインから始まり、ボールを受けた福井が運んでいく。

敵陣に迫るやすぐに敵の出方を確認したが、マークの変更などには見られなかった。

(栃木も作戦続行か?)

「ならー!」

同点で第1Qを終えたのだ。決して不思議な展開ではない。

福井はワンドリブルで楠を引っかけると氷室へとパスをさばいた。

「よしー!」

「……来いー!」

再び氷室と白瀧の戦いの火蓋が切つて落とされる。

「残念だが、俺のシュートは止められない!」

「ッ!」

そう語るや氷室はすぐさまに飛び上がった。相手に動きを読ませる暇も与えぬようにノーフェイクでシュートを放つ。

(陽炎シュート!)

「ッ、アアッ!!」

「むっ!?!」

対して白瀧のブロックも早かった。加えてより高く、氷室のシュートコースを阻むように手を伸ばし続ける。

(氷室さんのシュート、最初の頃と比べて放つてからリングを潜るまでの時間が長かった。決まる時間が遅かったの)

(……つまり滞空時間が長いという事か?)

(多分そうだと思う。ボールがすり抜けるなんてありえないもの。ひよつとしたら緑間君のような高軌道のシュートを撃っているのかも)

白瀧が考えていたのはタイムアウト直後、橙乃から得たヒントの事だ。彼女の話によると、氷室の陽炎シュートミラーシュは本来のシュートと比べてボールがリングを潜り抜けるまでの時間が長くなっているという事だった。

氷室は基本的に忠実な選手である。

これらの事から総合して、白瀧は陽炎シュートミラーシュが高弾道の放物線を描くシュートであり、その為ブロックが難しいのではないかと結論

付けた。

(なら答えは簡単だ。止めるのではなく、ボールに触れてシュートを
ずらす！)

氷室よりも背丈で劣るも、白瀧の瞬発力をもってすればシュート
コースを塞ぐことは可能である。

今度こそ止めた。

白瀧はブロックを確信する。

「ああ。やはり君は諦める事はしなかったんだね」

「なっ!?」

「だが無駄だ」

しかし白瀧の懸命なブロックがボールに触れる事はなかった。

氷室の台詞の直後、ボールは綺麗にリングの中央を射貫く。再び陽
泉の得点が記録された。

「これでも、駄目か!」

「白瀧君だったね。あえて言っておくが、俺のシュートと君の力は相
性が最悪なんだよ。君では、俺を止める事は出来ない」

「……ッ!」

策を講じても届かない。まるで中学時代、黄瀬との戦いを彷彿させ
るような展開だった。

「白瀧、大丈夫か?」

「問題ないですよ。そもそも全部を止められるなんて思ってもいない
ですから」

「そうか。なら——」

「はい。行きましょう!」

それでも白瀧は今さら怯んだりはしない。楠の声に応じ、彼と共に
反撃へ転じて行った。

「取られたら取り返す!」

「行くぞ! 走れ!」

「一気に攻め寄せろ!」

白瀧と楠を中心に栃木の選手達が高速でボールを運んでいく。
コートの上を越えるときさらに5人全員が細かいパスで繋いでいき、

敵陣に切り込んでいった。

「むうっ!？」

(第1Qよりもさらに速い攻撃! 格段にテンポが上がっている!)

「栃木はラン&ガンのスピードバスケットを仕掛けてきたか!」

秋田の選手達や荒木は栃木の意図を一瞬で理解する。選手全員の総力とパスワークで攻撃を仕掛けるチームバスケット。あくまでも栃木は守るのではなく、点を取ろうと挑んでいるのだと。

あつという間に敵ディフェンスの合間を縫ったパスは勇作からジャンへとつながり、レイアップシュートへと流れるように進んでいく。

「今さらそんなのさせないし!」

だがここでずつと自陣で守っていた最強の盾が立ちはだかった。紫原の高いブロックがジャンのシュートを阻む。

「——チツ。オラー!」

するとジャンはシュートを中断。手首を返して逆側へとパスをさばいた。

ボールは彼の手から離れてゴール下へと駆け込む楠へ。

「ナイスパス!」

無事にボールを手にした楠が今度こそレイアップシュートを放つた。

「させんぞ!」

「ぐっ!」

だがこの間に戻っていた岡村のディフェンスに捕まってしまう。

得点が決まる事はなく、ボールはリングに弾かれてコートへと戻っていった。

「あいにくとこういう手には慣れてるアル!」

「ちいっ!」

劉が勇作との争いに勝ちリバウンドを取り、栃木の攻撃は失敗に終わる。やはりブロックを潜り抜けなければ栃木が得点する事は難しかった。

「さあ反撃だ!」

「わかつただろう藤代。リバウンドを取れぬ以上、お前達がこのまま安定して点を取る事などできない」

再び攻撃の機会を得て秋田の選手達は活気が湧く。

この流れを見て荒木は一人、藤代へ向けて小さく呟いた。

第1Qは上手くいったものの長くは続かない。得意の速攻も紫原が時間を稼ぐ間に他の選手が戻ることで出来たのだ。

栃木が易々と勝利をつかむ事は出来ないのだと。

改めてそれを教える様に、陽泉の選手達はゴール下から攻撃を仕掛けていった。劉がパウードリブルでジャンを押し込んでいく。その後、ロールターンからジャンプシュート。かろうじてジャンの指がボールに触れるも、やはり勝負は秋田が得意とするリバウンドに託された。

「——ええ。そうでしょうね。だから、ここから勝負と行きましょうか」

ならば栃木が何もしないわけがない。

藤代が深い笑みを浮かべた。

「むっ!？」

「何っ!？」

彼の視線の先で、光月・ジャン・勇作の三人に加えて楠までがポジション争いに加わり、二対一の体制を二つ作る事で栃木が優位に立っていた。

「はあっ!？ シューターの選手までリバウンドに参加!？」

「これでは秋田にリバウンドを取られればパスアウトで容易に失点しかねない!？」

「……いえ、おそらく白瀧に全てを託しているのでしょうか」

高尾も大坪もこの栃木の戦術に驚愕を隠せない。楠までパワー勝負に向かつてしまったのは外ががら空きだ。取れる可能性は上がるかもしれないが、もしもボールを奪えなければ失点につながりやすいもろ刃の剣。

しかしそれらを全て白瀧がカバーするつもりなのだろうと緑間は察する。彼の守備範囲を信じて、栃木の選手達はボールを取る事に全

力を注いでいた。

「取ったぞー！」

「ぐっ！」

そしてこの戦術が実を結ぶ。無事に勇作がディフェンスリバウンドを獲得し、秋田の攻撃を防いだのだ。

「よっしー！」

「さあ、今度こそ反撃だー！」

ようやくリバウンドを確保し、栃木が活路を見出す。今まで秋田に負けてばかりであった分野で勝てたのは大きかった。今度こそ得点を決めようと選手達は一目散に走りだす。

「——どいつもこいつも。結局は『みんなやれば勝てる』とか言うんですよ。舐めんな!!」

だが、紫原という天才を突破する事は容易ではなかった。

白瀧から勇作へとパスが繋がったものの、劉のプレッシャーに当てられてボールはリングに弾かれる。

先ほどと同様に楠もリバウンド争いに加わるのだが、紫原が光月・ジャンの二人を背中で封じ込め、彼らを外へと押しやっていった。

「馬鹿ナ！」

「……ッ!？」

(なんだ、この規格外の力は！ まだ全力じゃないのか!?)

「あんたらなら、多少力を入れても壊れないでしょ？」

まるで今までは手加減をしていたかのような紫原の口調。二人がかり、しかも栃木が誇るパワープレイヤーたちが相手であるというのに、紫原は真っ向からねじ伏せている。

「これで、またこっちのものじゃ！」

「ちいっ！」

「ゴール下でいつまでも好き勝手はさせないアル！」

「ぐっっ！」

こうなると栃木は手も足も出なかった。勇作は劉に、楠はジャンに押しやられてポジションを奪われてしまう。

「もらったぞー！」

そしてボールは岡村の方へと跳ねた。勇作に奪われまいと確実に両手をボールへ伸ばす。

「ええ。だから言ったはずですよ。勝負に出ると」

「……ッ!？」

「ゴール下であなた方に勝つためです。こちらもすべての力で挑ませてもらいます」

瞬間、一人の選手が猛スピードで駆け出した。

藤代の瞳に栃木のエースがボールの方角へと一直線に突き進んでいく光景が映る。

「岡村！ 気をつけろ！ 下だ！」

「らああっ！」

そして白瀧の飛び込みリバウンドが決まった。福井の注意を呼び掛ける声が響く中、岡村の両手よりも早く、白瀧の左腕がボールを搔っ攫う。

「なっ！」

「白瀧!？」

（——なんで、白ちんまで!？）

思わぬ伏兵の登場に誰もが目を疑った。

白瀧は栃木にとって外の攻守を担う最後の砦であったはずだ。彼まで飛び出してしまえば、もしも秋田の速攻を受けてしまえば失点は免れないものであるはずだというのに。

「まさか自分の速さなら間に合うとみこしての、ノーガード戦術か？」

「アツハツハ！ なんだそりゃ！ 攻めることしか考えてねえ！」

「……あいつらならやりかねないのだよ」

これを見て、歴戦の王者と呼ばれる大坪達も肝を冷やしていた。高尾が語るようにオフセンスに特化した行動だ。だが彼らなら考え、そして実行する事を厭わないだろうと緑間は心のどこかで納得する。

「ちいっ！」

「止めるー！」

着地した岡村、そして紫原は即座にブロックへと移行した。

「遅いよ」

だが一手届かない。白瀧も着地と同時に飛び上がったおり、彼のジャンピングシュートは敵に阻まれる事なくリングを射貫いた。

「……くっ！」

「よっしやあー！」

「よくやったー！」

勇作達が白瀧の頭を軽く叩く。

——いける。

これなら秋田を相手にリバウンドを取ることだって不可能ではない。選手達は希望を見出していた。

(……さすがにうちまで全員がリバウンドに行くわけにはいかない。ガード陣の身体能力は向こうが上である以上は紫原達に託すしかない)

秋田も栃木と同様の手を打つても効果は薄い。楠、白瀧という身体能力に長けた選手達がいるからこそ栃木はこのような大掛かりな手を打てたのだ。福井と氷室も優秀な選手だがパワーや高さという点では彼らに劣る。

ここは自慢のフロントラインに託そうと荒木は三人の巨漢達へ視線を移した。

(あるいは、この第2Qでうちも勝負をしかけるしかない、か)

万が一の場合はこちらも切り札を切ろう。そのタイミングを計っていた。

「ああああー！」

「ナイス劉ー！」

そう簡単にリバウンドを取らせるわけにはいかない秋田の選手達が奮起する。数的不利な立場ありながら、その長い手を活かして劉がデイフェンスリバウンドを手にした。

「よっしっ！」

「よっせー！」

こうなると誰もセーフティがない栃木は弱い。ステイールが決まる前に氷室へとパスをつながれると、そこから福井へと渡り、速攻が始まった。福井が無人のコートを駆け上がったいく。

「もらったー！」

福井が跳躍した。ゴール下でせめぎ合っていた選手達は間に合わない。

「行かせ、ねえー！」

「うおっ！」

ただ一人、白瀧を除いては。レイアップシュートが決まる寸前でボールを叩き落とした。

(これはラインを割る)

とはいえ掌を離れたボールはコートを転々とし、横線の外へと向かっていく。

さすがの白瀧もこれを再び確保する事は出来ないだろう。氷室はこれを見送ろうとスピードを緩めた。

「どけっ！」

「ッ！」

その横を高速で楠が走り抜ける。

トップスピードを維持した彼の走りにより、ボールが線を越える寸前で彼の手が間に合い、コートへとボールをはたいた。

(速い！)

「さすが楠先輩ー！」

そしてこぼれ球を確保したのは白瀧だ。彼は笑顔でこの楠の奮闘を讃える。

「――速攻は俺が死んでも止める！ だから全員、後ろを構うな！
どンドン攻めていけ！」

そしてチームメイト全員へ向けて声を張り上げた。

ノーガード？ 否、白瀧要という速攻のスペシャリストがいる以上、速攻は絶対に許さない。

だから思う存分向かっていく様にと指揮を飛ばした。味方を鼓舞するというだけではなく、小林^{主将}が不在の今、自分こそが栃木の精神的

支柱であると語っているようだった。

(マズいな。やはり彼が活躍すると栃木の勢いは増すばかりだ)

そんな彼の勇姿を目にし、荒木は短く舌を打つ。

白瀧の奮起により栃木の攻め手は勢いを増すばかりだ。

ついに第2Q残り4分の所で栃木は6点のリードを手に入れる。もはや予断を許さない状況となっていた。

『秋田県タイムアウトですー!』

ここで荒木はタイムアウトを選択する。選手達が引き上げると、ついに荒木はここで切り札の投入を決断した。

「紫原。これ以上敵に好き勝手させるわけにはいかない。お前もそろそろ目障りに思っているだろう。——暴れてこい」

すなわち、紫原の攻撃参加。オウエンス

夏のIHでも大仁多を相手に猛威を振るった力の化身が、攻守にわたって栃木に立ちほだかる。

「……おそらく、そろそろ紫原さんが出てくるのが予測されます。皆さん、気を抜かないように」

藤代もまた、紫原の登場を予見していた。あの力を前には生半可な戦力では太刀打ちする事さえ難しい。それを理解して今一度選手達へ指示を飛ばす。

「はあ。面倒だけど。——そこまで捻り潰されたいなら仕方ないよね」

そしてタイムアウト後、さっそく怪物と称された男の蹂躪が始まった。

「ならお望み通り、捻り潰してやるよ!」

「ッ!」

(二人で挑んでいるのに、止まらねえ!)

光月と勇作が必至に力を振り絞る中、彼らの奮闘をあざ笑うようなパワードリブルでゴールへと迫っていく。リングが視界に入ると、今度はその場で回転しながら跳躍。ボールをもつ両手を振りかざした。

「邪魔だ!」

「うわっ!」

「ちいっ！」

「——ッ！」

紫原の得意技、破壊の鉄槌トールハンマーがヘルプに出たジャンを含む三人のブロックを吹き飛ばす。藤代がダブルチームを選択したものの、紫原の前には時間稼ぎにもならなかった。

「させねえ！」

「ッ！」

（ステイル！）

そして栃木のラン&ガンも徐々に陽泉のディフェンスに捕まり始める。楠から光月のパスは福井のステイルに阻まれ、秋田の反撃に移った。

今度は紫原のマークの為に手薄となった岡村へとパスが通る。ケアしようとして白瀧が飛び出すと、今度は外の氷室へパスアウト。

「ッ！」

（くそっ。駄目だ、紫原が加入したせいでマークが間に合わない！）

「ナイスパス！」

「撃たせるか！」

代わりに楠が飛び上がりシュートを阻む。だがやはり氷室の動きはシュートフェイクだった。上げた腕を振り下ろし、中央へと切り込んでいく。

（——ッ。分かっているけど、反応してしまう！）

「この野郎！」

ならばとヘルプに出たのは勇作だった。フェイクに引つかからないようにと氷室の一挙一動に目を配る。

「敦ばかりに負けていられない。俺も決める！」

直後、氷室は動いた。レッグスルーを1つ入れ、視線をゴールへと向けて上体を浮かす。この幾重のフェイクに勇作の体が硬直した瞬間、氷室は飛び上がった。

「ぐう。こ、んのおっ！」

「ッ！」

（これでも食らいつくのか！）

「見事。だが！」

フェイクにつられたにも関わらず、まだ食らいつく勇作に氷室は感心する。

しかしあくまでも勝負とは別物だ。反応できたところで無駄だと言わんばかりに、氷室は陽炎シュートミラーシュを放った。

「行かせるか！」

「なっ！」

すると、さらにもう一人の選手が飛び出す。

白瀧だ。

逆側のフォローに向かっていた彼がいつの間にか接近し、勇作に遅れてブロックに跳んだ。とはいえさすがに距離があった為に普段のような完璧なブロックは敵わない。あくまでも氷室に少しでもプレッシャーをかける事を狙いとした跳躍だった。

「あっ」

「えっ？」

しかし、その白瀧の指がボールに触れる。衝撃により軌道が逸れたボールはリングに弾かれた。

「うおおっ！」

そのボールはいち早く反応した岡村が強引に押し込み、秋田の得点となる。

こうして栃木の失点となってしまったが、ようやく陽炎シュートミラーシュに触れたという一点は栃木に大きなヒントを与えるのだった。

（触れた。今のはタイミングが遅れていたはずなのに。——つまり、陽炎シュートミラーシュは軌道が高いんじゃないやなくて、シュートを撃つタイミングをずらしているのか？）

白瀧は一つの結論に至る。ひよっとしたら、陽炎シュートミラーシュの攻略する可能性が出てきたと希望を見出した。

その後も両県の激しい攻防が繰り広げられた。

紫原の攻撃参加後、攻守でリズムを取り戻した秋田が優位に試合を進める。

第2Q残り1分40秒。ついに秋田は同点に追いついた。その後も藤代の策を力で打ち負かしジリジリと追い込んでいく。

『第2Q終了です。これより休憩に入ります。後半戦第3Q開始は10分後です』

前半戦が終了。

得点は(栃木)33対41(秋田)。秋田が8点をリードして後半戦へと臨むことになった。

「……8点差」

「決して絶望的な点差ではない。むしろキセキの世代が相手であることを考慮すればよく奮起したと呼べる試合運びだろう。だが」

「ええ。紫原と氷室。未だに完全な攻略が出来ていない二人がいる中、このビハインドは栃木に大きいのしかかるでしょう」

得点以上に厳しい現実を悟り、秀徳の選手達の表情が曇る。

白瀧は氷室のマークに専念する事を余儀なくされ、他の選手達は紫原に蹴散らされ、そこをカバーしようとして隙を突かれてしまっていた。

途中までは藤代の作戦が嵌り、優勢に立っていたものの紫原の登場で全てが一変。やはりキセキの世代の力はそう簡単に乗り越えられるものではないという現実を突きつけられる。

(一体どうするのだ栃木？　そして、白瀧)

果たしてこの窮地を栃木は覆す事が出来るのか。決して簡単ではないと知りながら、緑間は旧友が今回も何か逆転の手立てを見出すだろうと予見していた。

「後半戦も引き続き紫原には出てもらうぞ。お前を中心に攻撃を組み立てる」

「ん。了解」

秋田の控室では荒木がいつも通り作戦を選手達へ伝えていた。今回は紫原も相手の事を理解しているからだろうか、短く肯定の意を伝える。

「紫原の攻撃により栃木はマークを割かざるをえない状況だ。まず紫原にボールを集めて敵の動向を探る。基本的には紫原と氷室の二枚看板で攻めるぞ」

そう言つて荒木は紫原に次いで氷室へと視線を移した。栃木がどのような手を打とうとも紫原と氷室の攻撃を止める事は難しい。とはいえ氷室の個人技は仕掛けがある以上、いずれは攻略される危険性もあつた。その為まずは紫原を起点として攻める様に指示を出す。

「氷室、念のため白瀧のディフェンスには注意しろ。何かをつかんだ可能性もある」

「勿論です。ですが心配はいりません。俺のシュートは止めさせませんよ」

名指しで呼ばれた氷室は強い視線、強い口調でそう答えた。自信に満ち溢れた言動に荒木も満足げに頷く。これならば気負う事なくやってくれるだろう。

「ディフェンスは引き続き2―3ゾーンを展開する。白瀧のスリーは常に警戒しろ。後半戦は光月が積極的に仕掛けてくる可能性が高い。くれぐれも油断するな」

「はい」

前半同様に敵が早い展開を仕掛けてくれば柔軟に対応するも、基本的には陽泉の得意とする布陣2―3ゾーンディフェンスで対応するという結論に落ち着いた。

問題はない。選手達の士気も上々。栃木の選手達は攻略で精一杯であるはずだ。

敵がどのような手を打とうとも彼らならば全て跳ね除け、押しつぶすだけ。勝利は確実に近づいていると荒木は確信していた。

「――以上です」

「なるほど。わかりました」

一方、栃木の控室では白瀧が藤代を含むすべての関係者に氷室の幻影シユートミラーシユに関する仮説を話していた。

「それならば確かに理屈はわかります。うまく行けば止められるかもしれない」

「……とはいえ、氷室を止めるだけでは足りません。やはり紫原の存在は脅威です。あいつを止めなければ得点を縮める事は無理でしょう」

「ええ。そこが問題です」

白瀧の話す事が真実ならば、氷室の攻略が現実身を帯びる。

ただ、秋田を倒すのならばそれだけでは足りなかった。小林が紫原の名前を挙げると藤代は勿論皆の表情が苦悩に満ちる。

「……どうするんだ、藤代。何か手はあるのか？」

紫原の力を目の当たりにして、確実な作戦などないと理解した上で、岡田は藤代へと質問を投げかけた。

予想以上に紫原の才能は突出している。栃木が誇るインサイドプレイヤーたちを蹴散らした彼の力は尋常ではなかった。おそらくこの先彼を超える逸材は出てこないと思ってしまうほどの選手だ。

その敵を前に、藤代はどのような策を講じるのかと旧敵をじっと見つめるのだった。

「まず最初に、私が考えている方針を皆さんに伝えます」

「何ですか？」

「ですがすみません。これにはおそらく、私の私情が幾分か含まれているでしょう」

「はっ？」

どういう意味だと、藤代の語る言葉の真意を理解できない選手達が首をかしげる。

そんな彼らに藤代はまず後半戦に臨む選手達の名前を一人一人読み上げていった。

その5人の名前が出そろった時、皆指揮官が胸に抱いている想いを悟る。

——ここから本当の秋田県代表と栃木県代表の戦いが始まろうと
していた。

『休憩終了です。これより後半戦第3Qを始めます』
インターバル

前半戦の終了から10分が経過し、第3Qすなわち後半戦の始まりが宣言された。

アナウンスが終わると同時に選手達10人がコートに集う。

秋田県の面々は皆前半と同様であった。彼らは一足先にコート入りすると、現れた栃木県代表の選手の顔ぶれを見て、目を丸くした。

「……おいおい」

「なるほど。そう来たか」

「あくまでも、俺達にリベンジする気アルか」

「ハハッ！ 栃木の監督は粋な計らいをするのう！」

驚きと、疑念、歓喜の声がかコートと観客席から湧き上がる。

「本気なの？ わざわざ色んな高校から集めたのに、夏に負けた選手だけで固めるなんてさ」

紫原は苛立ちを含んだ声色を白瀧達へと向けた。

コートに入った栃木の選手は4番、9番、12番、13番、14番の番号を与えられた5人。すなわち小林・黒木・白瀧・光月・神崎である。

今年の夏のIH、陽泉を相手に苦汁を味あわされた大仁多の選手達がコートに入場していた。

「すみませんね皆さん。後半戦は緊急事態を除き選手交代はしません。——これはおそらく私の我儘です」

「何を言っている」

「そうですよ。あいつらがベストメンバーであることは間違っていない。栃木代表なんですから」

「大仁多の選手以上に、この戦いにふさわしい選手はいない」

改めてベンチで藤代が謝罪する。しかし岡田を始め、楠や勇作はその声を笑って流すのだった。

栃木県代表を最初に勝ち取ったのは大仁多高校である。だから彼らがこの国体で揃うのも決しておかしくない話だ。だからそんな事を言わないでくれと指揮官を宥める。

「行くぞ。夏の借りをここで返す！」

小林の中で闘志が高まった。

再び主将の任を任されたこの大会は彼にとっても二度とない機会である。自分以外の同級生は皆涙を流して部を去った。彼らの無念はここでしか晴らせない。

多くの仲間の顔を思い浮かべ、必勝を胸に誓った。

「もう、途中で倒れたりほししない」

黒木は静かに自分の意志を告げる。

彼は夏の試合、最後まで試合を見届ける事さえ許されなかった。

あんな想いは二度としたくない。

この試合は必ず最後まで戦い抜き、勝利を収めると決意を固めた。

(……山本先輩)

「よしっ！ オツケー！」

神崎が両の頬を自ら力強く叩き、気合を入れ直す。

彼は5人の中で唯一夏の試合でスターターに入れなかった。

山本に代わって選ばれたSGのポジションである。

彼の後任として恥じないプレーをしようと声を張り上げた。

「——今度は、守り切る！」

息を整えた光月は力強い声を張り上げる。

おそらく彼はIHと国体を通じて陽泉の選手と最も多くの時間ゴール下でポジション争いを繰り広げた。

故に彼らの強さは人一倍理解している。

その上で、もう恐怖に負けない、友と勝利を手に入れるのだと自分を鼓舞した。

「本気に決まっているだろう紫原。——俺達は一秒たりともあの悔し

さを忘れた事はない」

白瀧が紫原をにらみつけてその疑問に答える。

彼も自分の限界に挑み続け、最後まで戦う事は出来ずに力尽きた。

コートで試合終了の時を迎え、共に涙を流す事も出来ない。あの時の表しようもない感情を忘れるわけがなかった。

「俺達は勝つ！ その為にここまでやってきたんだ！」

だからここで本当の決着をつける。

こうして栃木県対秋田県の戦いは、大仁多対陽泉の様相を呈して後半戦を迎えるのだった。

——黒子のバスケ NG集——

「耳を貸して」

また橙乃を怒らせてしまったのだろうかとエースが委縮する。そんな縮こまった彼を見かねて、橙乃は助け船を出すのだった。

「フ——ッ」

「!!??」

特に理由のない吐息が白瀧の耳を襲う。

「ッ!!??」

耐え切れず白瀧がその場に崩れ落ちる。

「白瀧が死んだ！」

「何をやってんだよ！ 橙乃!!」

「だってあまりにも無防備だったからつい」

「自分で呼んだのに!?!」

スキだらけの白瀧を無視できなかつたと後に彼女は語った。

第一百十話 夏の延長戦

「本当に大丈夫なのか、白瀧」

休憩時間中の事。

藤代主導による栃木県の作戦会議が終え、各自がそれぞれのルーティンを行い試合に向けて集中力高めの中。楠が一人瞑想する白瀧へと声をかけた。

「……ええ。あなたが言いたい事はわかります」

『一体何が』と聞き返す必要はない。

先の作戦会議を振り返れば、彼が一体何を案じているのかはすぐ理解できた。

そしてそれは声に出さずとも楠以外にも同様に考えている者がいるだろう。特に前半戦でコートに出ていた選手ほど秋田県——陽泉の、紫原や氷室をはじめとした敵の力を知るからこそ、思いが強いはずだ。

わざわざドリムチームのメリットを捨ててまで、大仁多の選手だけでキセキの世代を擁するチームに挑むなど。

「俺とてわかっていますよ。紫原はおそらくキセキの世代の中でもトップクラスの才能を持つ。おそらくこの先も高校バスケット界であるほどのスペックを誇る選手など現れないでしょう。たとえば他のキセキの世代であろうとあいつから点を挙げる事は容易ではないと思います」

高く、速く、早く、強い。

バスケットに求められるありとあらゆる能力が抜きんでている紫原。彼が目標としている選手でさえも得点をする事は難しいと考えられる。しかもこの試合ではすでに攻撃にも参加しているのだ。とてもではないが、彼を止める事は簡単な話ではなかった。ただ勝つ可能性を上げるならば、前半戦同様に全戦力で挑むべきだろう。

「ですが、もうそういう話じゃないんです。今この時を逃せば俺達が俺達の誇りを取り戻す機会は来ないかもしれない」

だが、勝機よりも大切なものがあるのだと白瀧は語った。大仁多が

栃木県の王者として臨んだIHの敗戦。陽泉との試合で失った王者のプライドは、勝利でしか取り返せない。

「だから、絶対に勝ちます。死んでも勝つ。絶対に」

「——そうか。愚問だったな」

ゆえに挑むのだと気迫の籠った姿勢を貫く後輩の姿を見て、楠もそれ以上言葉を続ける事はしなかった。

神奈川・黄瀬との戦いに続き、この一戦も彼にとっては過去を清算する戦いだ。

ここで乗り切らなければ先へと進めない。白瀧は必勝を誓い、再び強敵との戦いに身を投じていく。

「さあ試合再開だー！」

「秋田のリードは8点。これ以上離されると栃木は厳しいぞー！」

栃木の選手が大きく入れ替わった事で大きく変化した戦力の下、後半戦が始まった。

わずかに選手の違いはあるものの、ほとんどIHの準々決勝と似たような形となり、観客の視線はより熱を増す。

果たしてこのまま秋田が突き放すのか、それとも栃木が意地を見せるのか。

「行くぞ、白瀧ー！」

観客たちの注目を知ってか知らずか、早速ボールが小林から白瀧へと渡る。

秋田の2―3ゾーンを崩すように神崎のスクリーンで氷室を足止めすると、スリーポイントラインの外、ノーマークという最高の条件でボールを手にした。

「ナイスパスー！」

「させないしー！」

試合開始直後と同じようなシチュエーション。ならば当然相手も警戒をしていないはずがない。

先ほどまでゴール下にいたはずの紫原が瞬く間に距離を詰めると、ノーフェイクでシュートを撃とうとした白瀧の前に立ちはだかった。

(早——いや、速い！)

(さっきまで光月とポジション争いをしていたはずなのに！)

直前までゴール下にいたはずの選手がスリーのブロックに跳んだとなつて神崎や小林の顔に冷や汗が浮かぶ。

まるで白瀧の動きを読んでいたような動きだ。おそらくIHと前半戦の経験から予測していたのだろう。彼の早打ちでも間に合わないほど完璧なタイミングで、コースをふさぐ鉄壁だった。

「——えっ？」

だが、その鉄壁の封鎖が完全に終わるよりも早く、紫原の指の先をボールが通過していく。

ボールは何人たりとも触れる事さえ許さず、静かにリングへ吸い込まれていった

「なっ！」

「紫原が読んでいたのに、間に合わなかった!？」

「後半戦も先制点は栃木！ またしてもこの男が決めた!！」

(栃木) 36対41 (秋田)。

後半戦も白瀧の一撃が炸裂し、栃木が幸先よくスタートを切る。しかも今回は紫原のブロックを潜り抜けたという事もあつて観客席の歓声は増すばかりであった。

(……: どういう事だ？ 敦が不意を突かれたというのならわかる。でも、今敦は彼がパスを受け取るよりも早くに動いていた)

(しかも前半戦であいつのタイミングはわかっていたはずだろ)

(今までよりも動きの早さが増しているのか? ……まさか!)

同時にこの1プレイは秋田の選手にとっては脅威に映る。

どのような敵であろうとも、真つ向勝負で紫原が負ける可能性は非常に低いと考えていた。しかも白瀧が最も得意とするドリブル勝負ではなく、揺さぶりのないノーフェイクのシュートで、紫原は助走の分スピードも高さも出ていたはずなのに。

信じられない気持ちで浮かぶ一方で、岡村はIHで彼が見せた真の力を思い返し、目を見開いた。

「他の『キセキの世代』でさえ紫原から得点を決める事は難しい。確かに俺はそう言った。——だが！　すでに『キセキの世代』の一角・黄瀬涼太を倒した今ならば！」

驚く敵を他所に、白瀧は味方を鼓舞すべく声を張り上げる。

着地し、顔をあげた彼の体からは身の毛がよだつほどの凄まじい気迫があふれ出していた。

すなわち、今までの集中力とは比べ物にならないほどの没頭状態——フローに突入している。

『キセキの世代』最高、何するものぞ！　この試合で、二人目のキセキを超えてやる！」

たとえ相手がどれだけの力を誇ろうとも、恐るるに足らず。『仲間を奮い立たせる』という彼が信じる理想のエース像を体現していた。かつて一度は屈した絶望に真っ向から立ち向かっていく。

「……白ちん。正気？」

第三Qから人の全力をも超えるフローの開放。

とてもまともな考えとは思えずに紫原が問いかけると、白瀧は旧友に好戦的な笑みを浮かべて答えるのだった。

「当たり前だろう。——これで5点差。お前達陽泉ボールからのリスタート。さあ、あの時の続きと行こうじゃないか、陽泉！」

「……ッ!？」

夏「IHの延長戦だ。今度こそ勝たせてもらおう！」

これで得点差はかつてのタイムアップ時と全く同じものとなる。

——あの日手にすることができなかった勝利をこの手に。

白瀧の凄みが留まる事はなかった。

(……まさか、こつとも早く手を打ってくるとはな)

敵エースのあふれんばかりの闘志を目撃し、荒木も白瀧がフローに

突入した事を察していた。

だが、それを理解しながらも彼女はタイムアウトはおろか新たな指示を出そうとすらしらない。悠然とベンチに腰掛け、選手たちの動向を見守るのだった。

(これが彼の独断によるものなのか、あるいは藤代の指示によるものなのかは不明だが、今はこちらまで動く必要はない。向こうが消耗戦を挑むのならばこちらは守りに徹するまで。さすがにあの状態のまま第3Qを乗り切るような事はないだろう)

理由としてかつての大仁多戦において、白瀧のあの状態は長くもたなかったためだ。神奈川戦でもフローに入った兆候は見られたが、それも長い時間ではなく、彼にも限界はあると考えられる。

ゆえにディフェンスに特化した秋田は守りに入れば時期に有利となる、そう考えたのだ。

「さて、どうすつか」

ボールを運びながら福井は攻め方を思案する。

栃木は前半戦から大きくメンバーが入れ替わったためにその出方を警戒する必要があった。

白瀧がフローに入った今、より慎重を要する必要がある。

まずは相手の出方を観察しようと、マークマンの小林を警戒しつつ秋田自慢のゴール下へと目を向けて――

「――チッ。やっぱりか」

栃木の警戒網の厚さに思わず舌打ちした。

「結局、こうなっちゃうんだね」

「紫原――」

「止める――」

秋田のエース・紫原には白瀧と光月のダブルチームが体を張って守り、後は岡村に黒木、氷室に神崎、福井に小林がそれぞれマンツーマンでついている。

(やっぱり紫原のマークが一番厳しい。小林がマークについてるから余計にパスを回すのは厳しい。ここはフリーの劉を起点に攻めさせ

るか……)

やはり主力選手のチェックが強く、攻めるのは容易ではなかった。その分ダブルチームによって自由な身である劉を使うという手段がおそらくは最も決まる可能性が高いだろう。

「――よこせー!」

「……まったく。そんな急かさなくてもくれてやるつての!」

しかし、可能性と選手の意気はまた異なるものだ。

ゴール下で片手を高々と掲げ、声を張り上げる紫原。彼も先ほどの挑発を受け、これ以上白瀧を調子づかせるのはマズいと考えたのだろう。

敵のエースが決めたのだ。ならばこちらもエースで行くべきか。

そう決断すると、福井は劉にチラツと合図を送る。このアイコンタクトはきちんと通じ、劉はドリブルする福井を追おうとした小林をスクリーンで封じる。

「チツ! 行ったぞー!」

「おらっ!」

小林をかわすとすぐさま福井がパスをさばいた。

白瀧や光月でも届かない、紫原だけが取れる高さのあるパス。これならばたとえダブルチームであろうと関係ない――

「――そこか!」

そのはずだった。

福井が小林を突破するとみるや、白瀧は福井がパスをさばく瞬間に大きく前進。彼がさばいたパスへと突っ込んでいき、そして跳び上がった。

(突撃! 白瀧、紫原とのボール争いでは勝てないと判断して、ステイルにきやがった!)

横ではなく縦の、それもマークマンから離れてまで敢行したステイル。

これが功を制してボールは紫原に届く前に白瀧の腕に衝突し、リングに叩き落とされる。

「くっ!」

だがボールを奪うまでには至らず、氷室がボールを胸元へと手繰りよせた。

すかさず神崎がチェックに入るものの彼のフェイクを警戒してか深く迫ろうとはしない。

「やあ。今度の相手は君か」

「どうも。新参者同士、仲良くやりますか」

「……ふっ。俺を止めるつもりか？」

「もちろん」

夏の大会では両者ともスターティングメンバーには名前を連ねなかった者同士のマッチアップとなった。

軽い調子で氷室が神崎に問いかけると、事もなげに頷く。彼もこの試合に対する意識が高いのだろう。

「そうか。——なめられたものだな」

「ッー」

とはいえ前半戦で白瀧からも得点を挙げた氷室は簡単な話ではない。

自信満々な神崎の姿を目にした氷室の様子は突如変貌、怒りがにじみ出ているような気迫を放った。

来るのか。動き出しを警戒し、神崎が一段と腰を低く落として相手を睨みつける。

その直後、氷室の上半体が両腕から一気に上がり、シュートモーションに入った。

(シュートか！)

少なくとも、神崎にはそう映った。

だからこそ即座に神崎はブロックすべく跳び上がったものの、彼は空中で氷室の体が全く動いていない事に気づく。

「——やべっー」

「悪いが君では力不足だ」

本物にしか見えないシュートフェイク。気づいたときには時すでに遅し。神崎を置き去りにした氷室が敵陣へ切り込んでいった。

「十分だ、勇」

「ッ！」

「後は任せろ」

その氷室に対し、またしても飛び出したのは白瀧だ。極限まで集中力が高まった白瀧が再び秋田の前に立ちはだかる。

（確実に決めたい後半戦の最初の攻撃。彼を引き付けてパスをさばくか？ あるいは、陽炎シュートを撃つか？）

氷室にとつては初めてフローに突入したエースとの対峙だ。

後半戦が始まって最初の攻撃だけあって氷室としても確実に決めたい場面だ。パスをさばいても、シュートを撃つても問題ないこの局面。

（——迷うな。俺の陽炎シュートは止められない！）

ゆえに、氷室は一对一の勝負を選択した。

秋田——陽泉は氷室の加入に伴い、紫原と氷室のダブルエース態勢となっている。それだけ監督が氷室のオフエンス能力を買っているという事であり、彼自身も自分の強さに絶対的な自信を持っていた。だからこそエースが逃げるわけにはいかない。

ここで決めて、相手の士気をくじくべく氷室は白瀧へと挑んでいった。

（陽炎シュート！）

今度はフェイクではない。本物のシュートの動きだ。

これまで何度も披露された氷室の得意技の動きを目にし、選手たちの注目が彼に集まった。

「——氷室先輩。残念だが、あなたの技の仕組みはもうわかっているんだ」

「なにっ!？」

白瀧も同じように氷室を見て、そして口角を挙げる。彼はすでに氷室の必殺技のからくりを見抜いていたのだ。

（陽炎シュートの正体。それは——空中でボールを二回りリリースすること。一回目はわざと真上に放り、それを空中でキャッチしてもう一度撃っているんだろう）

氷室はシュートと見せかけ、スナップをきかせて自分の真上にボー

ルを打ち上げていた。そのボールを再び掴んでもう一度シュートを放つ。それがカラクリであった。

(常人離れた技量を持つあなただからこそ、一度目のリリースが二度目のシュートを隠す陽炎となる。あなただけの専用技)

普通のフェイクでさえ本物と錯覚してしまうほどの技量を持つ氷室だからこそ成し得た技。一度目のタイミングでブロックしようとした相手は二回目のボールに対応ができない。

「だから、勇にはあなたの外のシュートだけを警戒させた。あなたが中に切り込んできて、そこからジャンプシュートを撃とうとするならば。――助走をつけた俺ならば、たとえそのシュートが本物であろうと二回目への備えであろうとも両方のコースに跳びつける！」

しかし、跳躍しながら二回リリースするという一件無茶な動きであるからこそ、リリースするポイントは極限に制限された。

ならばここまでの前半戦で何度もその技を目の前で繰り広げられ、橙乃や藤代をはじめとしたサポートを受けた彼が、その二つの動き両方を止める跳躍コースを分析するのも必然だった。

「らああああっ!!!」

前進しながら跳躍した白瀧の腕が、氷室がリリースしたボールを叩き落とす。偶然ではなく、狙い通り氷室の必殺技を封殺した。

「なっ……!?!」

「ばかな！」

「ありえない、アル」

「氷室の陽炎シュートが止められたじゃと?!」

並外れた瞬発力、そして相手の動きを読み切る心眼があったからこそ成し得たブロックだ。この攻撃失敗は秋田に多くの衝撃をもたらす事となった。

「でも誇つていい。俺がキセキの世代以外の選手を相手にこれほど得点を許したのは、あなたの弟^神以来だ」

「……ッ！」

驚き、呆然とする氷室にそう言い残し、白瀧はコートを駆け上がる。

自慢の技を止められた氷室は切り替えるのが遅れ、他の選手たちも

勢いがついていていた彼を止める事ができず、彼の速攻を許してしまつた。

(栃木) 38対41 (秋田)。

その点差、わずか3点。後半開始早々に、栃木が試合の流れをつかむ事に成功する。

「——よしっ！」

「ナイス要！」

「やっばお前すげえよ！」

得点を決めた白瀧が拳を突き上げ、その功労者を仲間が称え、栃木の勢いは増すばかりであった。

スリー、ステイール、ブロック、速攻。しかも秋田が擁する二大エースから決めたのだ、当然の反応だろう。面目躍如の奮闘は目にする者を魅了した。

「……ヤバイな」

「ああ。俺もあいつがどう出るのかと読めない点があつたが、不要な心配というわけなのだよ」

それは観客も同じ事。高尾の意識外のつぶやきに、緑間も素直に同調する。

「少なくとも今は白瀧がこの試合を支配しようとしている」

もはや彼の影響力はキセキの世代と同等だと言っても過言ではない。そう大坪は語った。

「うおおおー！」

「ッ！ こいつ！」

紫原や氷室へのマークが厳しいとみるや、秋田は方針を変えて岡村と劉、比較的栃木のマークが薄くそれでいて秋田の有利なゴール下から攻めていく。

しかし劉のジャンプシュートがヘルプに出た黒木の指先に振れ、リングにはじかれた。

「邪魔だし！」

「チツ！」

「うわっ！」

リバウンドを紫原が掴むや、再び跳躍してダンクシュートを叩きこむ。光月と白瀧の二人を力で蹴散らして得点を決めた。

やはり高さでパワー、安定性で勝っているのは変わらず秋田の方だ。ゴール下の勝負では優位を保っている。

「リスタート！ 急げ！」

一方で爆発力では栃木の方が上だった。

小林が声を張り上げると、倒れていた光月が中腰のまま即座に主将へとボールを回す。

基本的に栃木の速攻は二種類。白瀧のワンマン速攻か、彼が動けない時は小林と神崎の二人が同時に攻め上がるツーマン速攻。

「くそっ！」

両者とも攻撃力が高く、しかも小林は高さがあるため福井一人では止める事は難しい。

「——ひねりつぶす！」

「チツ。神崎！」

そのために紫原も走る事を余儀なくされていた。

さすがの小林も単独で彼に挑む事は避け、シュートを中断して神崎へとパスをさばく。

そして二人で態勢を立て直す間に他の三人が上がってくるとハーフコートオフセンスに切り替えた。

「くれ！」

秋田デیفセンスは白瀧に劉と福井、神崎に氷室がつき、岡村と紫原の二人が中を広くケアしている。

白瀧と神崎、外に対する意識が強いとなれば他の選手も黙っていない。栃木は何度かパスを經由し、白瀧を介して黒木へとボールが渡った。

「しつこいなー。無駄だって言ってるのに」

「——やってみなければ、わからん」

紫原が即座に反応する中、黒木が積極的に仕掛ける。

まずは紫原へとパウードリブルを使って力をかけ、彼の意識を引き付けるとゴール側へターンアラウンド。一瞬で反対側へと躍り出るもののこの動きにも紫原がついてきた。

ならばと、そこからさらに黒木は左足を軸に右足をゴールへ伸ばして地面につけ、両足を踏み切るステップイン。今度こそシュートを狙って、それでもマークは振り切れない。

「ッ！」

「終わりだよ」

「つつ、ああっ！」

だが、黒木も粘った。

紫原の非情な宣告には耳も課さず、ボールを体の後ろ側へと回すと、自身の体を壁にするベビーフックを放つ。強引にブロックとの距離を生むと、ボールは山なりにリングへと向かって行き——

「チッ。無駄なあがきだつての！」

すんでのことで紫原のブロックが彼の得点を阻んだ。

「くそっ！」

「惜しい！ ドンマイです！」

悔しがる黒木を神崎がボールを確保しながら諭す。

事実、紫原を相手に積極的に仕掛けていくという姿勢は非常に良いものだった。ひるまずに仕掛けていく事で敵の意識は徐々に拡散していくというもの。

「勇！」

だからこそ彼も挑んでいく。光月が強くパスを要求すると、神崎のバウンドパスにより望み通り彼の下へとボールが渡った。

「光月！」

「紫原！」

何度か苦い目に会ったためか、紫原の集中力も高まる。

そんな敵の変化を知ってか知らずか紫原の背中越しにボールを受けた光月もパウードリブルで紫原へと力を籠めた。

「ッ！」

やはり光月の力はけた違いであり、さすがの紫原も大きく崩れこせないが彼の表情から余裕が消え去る。十分な距離まで近づけた事を確認して光月は大きく跳び上がった。

「白ちん抜きで二対一なんて、馬鹿にしてんのかよ！」

フェイクではなく、前半戦と違って白瀧のヘルプがあるわけでもない。

そんな状況下で負けるわけにはいかないのだと、紫原も負けじと跳躍したのだった。

「馬鹿になんてしてないさ。でも！」

絶対的な存在が立ちほだかるも、光月はひるまない。

彼とて敗戦から何も学んでいないわかではなかったのだから。

光月は両手ダンクから一転、ボールから左手をはなし、ゴールに対して半身の態勢をとると右手でボールを山形に放った。

（——こいつもフックシュートを!?!）

ダンクシュートは囷。本命は黒木も得意とするこのフックシュートだった。

わずかとはいえ押されていた紫原は無警戒であった事も災いし、このシュートを防ぐことができず、失点を記録してしまう。

「栃木の、大仁多のゴール下のテクニクが増している……！」

先ほどの黒木の動き、今の光月の動きは夏の試合よりも洗練された、新たに習得されたものだ。この短期間で自慢の教え子たちと渡り合えるほどにまで腕を磨いた敵の成長に、荒木は背筋を伝う感覚に冷や汗を浮かべた。

「これで良いのです」

対して藤代は攻撃の成長に満足し、柔らかな笑みを浮かべる。

夏の敗戦後、藤代は白瀧にフィジカルを鍛えさせる一方で黒木と光月の二人にはより技術を磨くように指導していた。特に光月は彼の強みを伸ばすために、念入りに。

「光月さんは紫原さんよりも重さがある分、身体が安定している。その分空中での立て直しも容易だ。駆け引きを覚える事で、地上戦の強

みがさらに活きる事となる」

地上では力で相手を崩し、空中ではそのまま力で捻じ込んでもよし。技で相手をかわしてもよし。

彼一人でも更なる高みに昇れるように。そんな指揮官の目論見が今完全なものになろうとしていた。

「ゴール下でも栃木が互角になり始めたか？」

「こうなれば、栃木のオフエンスは止まらない。今や栃木の攻撃オプションは無数にある。ミドルから外にかけては白瀧はもちろん、神崎がいる。小林もいる……！」

中でも失点が出始めれば秋田ディフェンスにも綻びが生じはじめてもおかしくない。

秋田の反撃直後、光月が紫原を引き付けている間に、小林のスクリーンで氷室をかわした神崎がステップバックフェイダウェイシュートを岡村のマークが来るより早く、確実に沈めた。

続く秋田の攻撃を劉に強引に押し込まれるも――

「――なっ！」

「えっ」

「……おお」

そんな失点など問題ないと言わんばかりの小林のスリーが炸裂する。

予想外の得点に敵味方の両選手たちが驚愕の色に染まった。

「さすがに無警戒の中でもスリーを決められない様では、主将のメンツが立たないんでな」

得点を重ねた小林が冷静に語る。秋田ディフェンスを完全に混乱させかねない一撃を受け、ついに荒木はタイムアウトを使う事を余儀なくされる。

「たまらず秋田はタイムアウトを使ったか」

「無理もないでしょう。小林のスリーが大きい。もはや栃木に弱点は消えた。確かにリバウンドでこそいまだに秋田が優位ですが、それ以外の面では栃木が勝る」

これは仕方がないだろうと大坪が頷いた。

緑間も同意見のようで、事実数字の面からも多くの分野で栃木が押しているのが現状だ。

「しかも、なんつうか、栃木の選手が滅茶苦茶気合いが入ってるしな」
「ああ。やはり勝者と敗者では同じ試合でも意気込みが全く違う」

要因は選手たちの力もあるだろうが、それ以上に気持ちの面も強い。高尾の言葉に大坪も同調した。

夏の借りを返す。この思いは栃木にあつて秋田にはないものだ。

一度の敗戦は負けたもの達に勝利への飢えを与える。それが栃木の選手たちには大きな力となっていた。

「――この第三Qは栃木にやっても構わん。だが、ただで終わるわけにはいかない。このまま相手を勢いづかせるな。氷室、お前が決めてこい」

「ありがとうございます。ええ。必ずやりベンジしてきます」

選手たちが戻って来た秋田ベンチでは荒木が声を振り絞って命令を下す。

苦しいチーム状況を示したものだだった。

結局相手の速攻を防ぐために紫原の消耗を最低限に抑える事は出来ず、ゴール下は白瀧も近くにいとあつてそう簡単に得点できない。

ならばここで氷室にエースの敗北を取り返させるために勝負に出ようと決断を下した。

期待された氷室は力強く頷く。

彼もこのまま終わるわけにはいかなかった。

「このまま攻めます。まだ満足してはなりません。皆さん、この勢いをさらに加速させ、第4Qへつなぎますよ」

『おおー』

一方の栃木ベンチは藤代の指示に五人が揃って力強い声で応えた。疲労の色は強いが士気は高い。それでいて驕る様子は一切ない、良い状態だった。

ここまで連続無失点を記録していた秋田を相手に5人全員が得点を記録。夏よりも成長した姿を示した。ディフェンスでも敵の得意

パターンを時折封じて反撃につないでいる。

タイムアウト後も得点を重ねることが出来たのならば、第4Qへの弾みとなる事は間違いなかった。

再び一丸となって秋田に挑んでいく。

「氷室ー！」

「はいー！」

秋田の攻撃は予定通りに福井から氷室へと託された。

ワンフェイクで神崎を引っかけると、やはり瞬く間に彼のマークをかわし、切り込んでいく。

「……ッ。要ー！」

「わかっているー！」

たまらず名前を呼べば、頼れる男が即座に飛び出した。再び白瀧対氷室、チームの命運を双肩に託された男たちが激突する。

「……俺は、火神とは違うー！」

「トドメを刺すー！」

ここでの勝敗は最終Qにも影響しかねない、そんな思いが両名の気持をより確固たるものとした。

敵が徐々に迫りくる中、やはり氷室は対一を仕掛ける。彼が詰めるよりいち早く、氷室の体が宙に浮かんだ。

やはり陽炎シュートか。

すぐに白瀧も反応して――

「なっ!？」

思わず小林が、神崎が、栃木の面々が驚愕に目を見開く。

誰もが跳んだと思った動きは、氷室のシュートフェイク。彼が最も得意とする陽炎シュートさえもフェイクとした彼の高度テクニクだった。

(ここにきてフェイク!? どんだけ冷静だよ!)

エース同士の戦いで、最も得意とする武器を引っかけに使った氷室。その度胸に皆不意を突かれてしまう。

「やはり、そう来ましたか」

「——えっ」

ただ一人、白瀧を除いて。

今度は氷室が驚かされる場面だった。

ブロックに跳んだと思われるいた白瀧の足が、地面から離れていない。紫原のマークから駆け付けた分勢いもあつたはずなのに。そのスピードさえも殺して氷室の動きについてきていた。

「……何故？」

「確実に決めたい場面、そしてエースとして自分で決めたいというシチュエーションで、冷静なあなたが無策で同じ手を繰り返すとは思えなかった。ならば、きつと自分の得意な技術を組み合わせて勝負に来るだろうと」

驚く氷室の耳に冷静な声が響く。

状況や性格、相手の技量。あらゆる情報から次の手を読み切ったからこそ、白瀧は氷室の動きにも何なくついていけたのだ。

「……白瀧さん。あなたの心眼は、相手の心理さえも読み取つてしまうというのか」

その鍛え上げられた洞察力、バスケIQは指揮官さえも驚愕させる。

氷室の動きを読み切った白瀧は氷室の手からボールを叩き落とし、またしても秋田オフエンスを封じ込めたのだった。

この機会を逃すことなく、小林がボールを拾い上げると神崎がミドルシュートを沈め、さらに二得点が記録される。

氷室を防ぎ、第3Qの残り時間もわずか。タイムアウト後も栃木ムードが止まらない中、攻撃の手は緩むことがなかった。

「引くなー、ここぞで攻め倒すー」

小林の力強い叫びがコートに木霊する。

彼を先頭に、中央左右に神崎・白瀧、その後ろに光月、最後尾を黒木が守る1―2―1―1ゾーンプレスが展開された。

「なっ!?!」

「うおおおっ!」

「ここでゾーンプレスか！」

積極的にプレッシャーをかけ、チエックに行く栃木の選手たちに、秋田は面を食らった。

わずかな時間でさらに得点しようという賭けとあり、凄まじい圧力である。

「……やっぱりあくまでも攻め続けるんだ」

「——ああ。俺には、攻めるしか道はない」

もはや呆れを含んだ声色の紫原に、白瀧はそう断言した。

何とかボールが劉から福井へと通るがそれより先へ進めない。栃木のプレッシャーがボールを奪おうと襲い掛かった。

「まだ、攻めるのかよ」

「……攻め続けるだろう。少なくとも、白瀧は」

彼らの姿勢は直接戦っていないはずの高尾まで悪寒を感じさせる。

ここは守りに入っても、手を緩めても良い場面のはずなのに。

その一方、緑間はわかっていただけなのか変わらぬ調子でそう言った。

（残された体力や疲労に反して攻勢が強まっていく。その身を捧げて力を得ているかのように）

フロアに入っている今、白瀧はいつ壊れてもおかしくない瓦礫の山を歩いているような状態のはずなのに、没頭状態が途切れる様子はなく全く勢いが衰えない。むしろ強まる一方だ。

（守ったら、ダメだ。なんでもできる相手に、守りに入ったらダメだ）

白瀧の心中に強い意志が宿る。

圧倒的な身体能力という黄瀬とはまた違う、自分の持っていないあらゆるものを持っている相手だからこそ、受け身ではじり貧になってしまう。ここで完全に打ちのめすのだと。

暗い瞳が紫原を射抜いた。

（良いだろう。お前たちには、他にもあるんだから）

多芸多才の赤司、すでにこれまで多くの分野で活躍したという黄瀬は言うまでもなく。

完璧な運動能力を持つ紫原、型にはまらない才器の青峰、繊細な指先の感覚を持つ緑間。

体格もよい者ばかりで、たとえバスケット以外の場面でも活躍できるだろう。

——俺は違う。

いくら速いと言っても専門分野の相手には勝てないし、すでにバスケットの動きに適応させすぎってしまった武術は他の競技に活かそうにも時間がかかりすぎる。さらに肩に刻まれた傷が、あらゆる制限を産み出す。

俺にはバスケットしかない。

これで、バスケットまで勝てなかったら、不平等というものだろう。

だから。

バスケットだけでいい。

バスケットだけでいいから、俺が勝つ。

だから。

バスケットだけでいい。

バスケットだけでいいから、俺と向き合え。

だから。

バスケットだけでいい。

バスケットだけでいいから——

『ああ、じゃあな』

『馬鹿なことやってんじゃねえ。そんな余裕ねえよ』

——俺を見る。

いまだ試合にすら出ていないという旧友に見せつけるように、誇示するようには。

白瀧のバックファイアが、紫原の背後からボールをはじき出した。

「なっ!？」

「常人離れの反射神経と言っても、見えない場所からのスティールなら関係ないだろう?。」

突破を阻止された紫原をさらに揺さぶるように、白瀧がつぶやく。こぼれ球を光月が確保し、再び栃木の攻撃の時間となった。

次々とパスとスクリーンで敵陣をかき回し、ついに白瀧がフリーの状態でボールを手にする。

ジャンピングシュートを警戒し、紫原も飛び出したが――
「どけよ、紫原」

白瀧のキラークロスオーバーの前に、紫原の反応が遅れてしまった。ついに紫原まで突破され、岡村が精一杯ブロックを試みるも白瀧はここで冷静に横の光月へパスを出す。彼の力強いダンクシュートがリングを揺らした。

「やったー！」

「ナイス！」

栃木の攻撃が止むことはない。

ルーキー二人のコンビネーションを止める事は秋田でさえ難しかった。

さらにそんな秋田を追い詰めるゾーンプレスが容赦なく襲い掛かる。

「――ッ！」

次々と攻め寄せてくる攻撃の波が、止まらなかった。

(……ヤバイ)

疲労とは別の要因が、心臓の鼓動を速める。

紫原は、背筋が凍る感覚を覚えた。

(これが、白ちんがほかのやつらに慕われていた理由だっていうの?)
ちらりと、ボールを持つ敵に向かって行く白瀧へと視線を送る。
凄みのある、と言えるような彼のプレッシャーは普通ではなかった。

そんな姿を見て彼が中学時代に仲間の憧れとなった理由に納得する。確かに試合のたびに文字通り死に物狂いで挑める人間は当然強い。すべてを注げる姿勢は人の注目を集める事だろう。

だが、それは正常ではない。

そんな事をしていては身体が、心がもつわけがないのだから。

そして、そんな相手と直接戦えば気後れしてしまう。
あまりにも自分と差がありすぎる熱意の差に押されてしまう。
心の底のどこかで目の前の相手を尊敬する感情が芽生えはじめる。
この時、紫原は初めて他人をすごいと、心の底から思ったのだった。

「第3Q終了ー!」

栃木のゾーンプレスが始まってからおよそ一分後、試合の中断を告げるブザーが鳴り響く。激しい猛攻により栃木がさらに4点を記録し、後は第4Qを残すのみとなった。

得点は（栃木）64対55（秋田）。

栃木が後半開始から戦局をひっくり返し、リードを保って最終Qへ突入する。

——黒子のバスケ NG集——

良いだろう。お前たちには、他にもあるんだから。

多芸多才の赤司、すでにこれまで多くの分野で活躍したという黄瀬は言うまでもなく。

完璧な運動能力を持つ紫原、型にはまらない才器の青峰、そしておは朝占いの緑間。

「俺だけ答えがおかしいのだよ!」

「……えっ!? 緑間!? 何で心の声が!」

白瀧の中でおは朝占いのイメージが強すぎた。

第百十一話 到達

(栃木) 64対55 (秋田)

第三Qを終えた時点で栃木が9点のリードを保っている。試合が佳境を迎えようとしている中、キセキの世代を擁する相手との一戦でここまでの善戦を一体誰が予想していただろうか。

なにせ秋田県は準々決勝以前の試合の全てで完封勝利という前代未聞の大勝で勝ち上がって来ている優勝候補の一角。

加えて対する栃木はチームの中核を担う大仁多の選手が夏に同じ相手に敗れており、リベンジを迎え撃つ秋田県には氷室という新たなエースも加わっている。こういった事情から前評判では秋田県が圧倒的に優位と見られていた事もあり、この予想を裏切る試合展開に、誰もが最終Qはどのような結末を迎えるのか注目していた。

「問題は、白瀧の状態か」

それは観戦席で見守るキセキの世代も同じこと。

緑間は両校のベンチへ視線を向けたまま静かな声色でそつと呟いた。

「白瀧の状態って、なんか不安要素でもあるのかよ？ 後半戦は氷室さんの攻略も含め獅子奮迅の活躍だったじゃん」

「そこが問題なのだよ」

彼の呟きを拾って聞き返す高尾。確かに白瀧はこの試合を通じて対紫原だけではなく、原理が不明であった氷室の必殺技を攻略するなど攻守にわたって活躍していた。

栃木が逆転に至ったのは彼の存在があつてこそと言っても過言ではない。

しかし、それこそが問題なのだ。緑間は続けた。

「あいつは後半戦、一度も休むことなくフローの状態を維持していた。これほどの長時間、限界を突破し続けるなど、やつでもまだ未知の領域のはずだ」

白瀧の奮戦を可能としたフローの突入。

かつての陽泉戦でもみせた際には、第三Qの終了直前から使いはじ

め、そして試合終了を待たずして力尽きた。神奈川戦でも10分間全ての時間で使用していたのは最終Qのみ。

一方で今日の試合ではすでに第三Qの10分全てで発揮している。普通に考えればいくら体力自慢の彼でも厳しい話だ。そうでなくても今日は二試合目、過密日程も重なって疲労が蓄積していてもおかしくなかった。

「試合展開は勿論のこと、あいつの状態を考慮してもここが正念場であることは間違いないのだよ」

だからこそこの試合の最後まで心身がもつのか、下手すればベンチに下げざるをえないほどの消耗ではないのか。緑間の不安は尽きなかった。

一方その頃、まさに話題の中心である栃木ベンチでは――

「死にそう」

椅子に深く腰掛け、顔に冷たいタオルを覆い被せ、手足を力なくぶらつかせた状態の白瀧が一人口ずさんだ。

「大丈夫か、白瀧？」

「大丈夫、と言いたいところなんですけどね。やはり、体は重いです」

「無理に強がらなくて良い。休め」

「そうします」

楠や勇作の声かけに軽く返すに止まる。

息も絶え絶え、疲労がピークに達している姿から発する彼の声はチームメイトにこの試合の激戦ぶりを伝えるには十分すぎるものであった。

それこそIHで陽泉と戦っていた時に匹敵する消耗ぶり。

皆が「当然の事だ」と、むしろ出来すぎなくらいだと白瀧の疲れきった様子を案ずる中で。

(でも、全然前の試合とは違う。同じ疲労具合でも、白瀧君……なんだか楽しそう)

まるでキセキの世代という強敵との戦いを心待ちにしているかのように。

彼の両足のアイシングを担っていた橙乃は、白瀧の声色の違いを明白に感じ取っていた。

「もちろん、キセキの世代が敵である以上はあなたの存在は不可欠だ。しかし同時に途中で離脱するような事になっても困る。また夏の二の舞となるわけにはなりません」

彼の力を、そして敵の力を考慮して藤代は冷静に述べた。

リードが栃木にあるとは言え、氷室と紫原のダブルエースを擁する秋田を相手にセーフティリードなど存在しない。

かといってIHのように捨て身の特攻をするといえのも点差を考慮すれば下策であろう。

「白瀧さんのフロアに頼りきるだけではない。ここは冷静に行きますよ」

ゆえに試合展開から藤代は策を講じた。

エースの限界を考慮しつつ、確実に敵を制するために。

一方、追う展開を強いられた秋田ベンチは――

「さすがにこの展開は予想していなかった。過小評価したつもりは無いが、お前たちも改めて肝に銘じろ。お前達が戦う相手は攻撃力ならば全国でも最強だ」

椅子に腰かける選手達と目を合わせるようにしやがみこみ、真剣な顔立ちでそう告げた。

第三Qのみで栃木はこの試合の総得点の半数に当たる31得点と爆発的な攻撃力を知らしめた。しかもディフェンス最強と名高い紫原と対峙して、だ。

この結果はさすがに荒木にとっても予想外の事であり、しかも白瀧が一度もベンチに下がらないどころかフロアを解除しなかったこと。それが彼女に甚大な衝撃を与えていた。

「最終Q、栃木はどう来ますかね？ 神奈川との戦いでは終盤も選手交代を頻繁に行っていました。今日は後半戦はまだ一度もしていませんが……」

「おそろく、このメンバーのまま最後まで来るつもりだろう」

とにかく今は善後策を講じるべきだろう。

まず敵の陣容を明らかにすべく岡村が問えと、荒木は冷静に考えを述べた。

「あの男は作戦については冷静に物事を判断するが、それでいて選手の気持ちを汲む傾向がある。出ている顔ぶれを見るに大仁多の選手でリベンジを成し遂げたいはずだ。ならばここで選手交代はしないはずだ」

荒木の予想通り、藤代はこの試合をインターハイの雪辱に燃える教員達で乗り切ろうと考えている。そうなると、栃木のベンチで残る大仁多の選手は中澤のみだ。よって変えるならば白瀧あるいは小林の二択となり、チームの総合力が大きく落ちることとなる。

よってこのような交代はしないと結論付けた。

「じゃあ、白瀧君彼のフローについてはどう思いますか？」

「そちらについては、正直未知数としか言えん」

ならばもうひとつの大きなキーポイント。

敵の切り札について氷室が意見を求めると荒木は途端に苦虫を噛み潰したように表情を歪めた。

「本来ならば第三Qで力尽きていても不思議ではない。むしろ最後までもつていた方が異常なんだ。もう限界のはずだが、あれがこの先は発揮されないと断言することは危険すぎる」

夏の終盤、ギリギリの展開まで追い詰められた嫌な経験が荒木の判断を鈍らせる。

遅れを取っている苦しい状況。動きたいところではあるが、敵の読みにくい消耗度合いが積極性を奪っていた。

「とはいえ、さすがに攻守の両面で奮闘し続けるのは困難なはずだ。そこでオフエンスは有利な所をつく。——氷室」

「はい」

ゆえにより確実な局面で勝利を取りに行こうと荒木はエースの方を呼んだ。

「お前が突破口を切り開け。あまり敵の中央、白瀧のヘルプが予想さ

れる敵陣深くまでは切り込むな。マークさえ外れてしまえば、お前のシュートは止められない」

「わかりました。必ずや期待に応えます」

白瀧のリベンジに燃える気持ちが無いわけではないが、負けている今は我儘を言う場面ではない。氷室は即座に指揮官の命令に力強く頷いた。

「あとは紫原のマークが厳しい今、岡村と劉のどちらかはマークが緩いはずだ。各自局面を見てボールを供給しろ。ゾーンプレスはさすがにそう連発しないはずだが、来た場合は即座に氷室に回せ。フェイクで惑わし、それでも突破できなければ迷わずロングパス一択だ。それが一番可能性が高い」

「了解」

「ディフェンスは敵の動きがないならばこのまま2―3ゾーンを維持だ。スリーには要注意しろ」

他の攻防に関する指示は続投とし、荒木は大まかな説明に区切りをつける。

あとはある意味最も大きな問題、もう一人のエースである紫原へと厳しい視線を向けた。

「――紫原。お前は引き続きゾーンの中央で守ってもらおうぞ。先ほどから黙り込んでいるが、疲れたなどとは言わないだろうな？」

調子の波が激しい彼の事だ。先の白瀧の奮戦もあってフラストレーションは貯まっているだろう。大丈夫だろうか、にわかに不安を抱いたまま、荒木は紫原へ問いかけた。

「……別に。そんなことはないけど。でも……」

「でもっ…」

彼らしくない歯切れの悪い口調である。

やはり本来の調子ではないのだろうかと皆の注目が集まるなか、紫原はひとつ間をおいて続けた。

「ようやく、これが試合なんだなってハッキリしたよ」

「……は、ああ？」

「紫原！ お前、ふざけとるのか!?! 今まで一体なんだと思っておつ

たんじゃ！」

「寝ぼけているなら引つ込めアル！ こっちまでやる気が下がるアル！」

とても試合の最中であるとは考えられないような発言に福井や岡村、劉から非難の声飛び出す。当然他の者達からも冷たい視線がルーキーへと突き刺さる一方。

「……敦？」

「紫原？」

氷室と荒木だけは、紫原がむしろ常よりも真剣な表情を浮かべている事を見抜いていた。

「さあ、試合再開だ！ 準決勝に進むのはどっちだ！」

「泣いても笑っても、これで全てが決まる最終Q！ 栃木がリベンジを果たすのか、秋田が意地を見せるか！」

様々な思惑が行き交う中、ついに第4Qがはじまった。

両校共に選手の交代はない。10人の選手たちに両県の期待が託された。

まずは秋田ボールから攻撃が始まる。

福井が敵味方の動きをしっかりと見極めながらボールを運び――

「ちっ！」

「ぐうっ！」

紫原にダブルチームについている白瀧、光月の二人が必死に食らいつく姿を見て、違和感に気づいた。

（白瀧のフローが解けてる……？）

もっと正確に言えば、中断により自らやめたであろうフローの状態にもう一度入っていない。

突入すれば攻守で紫原に対抗できる貴重な切り札。それを使わない理由に、先ほどのミーティングを思い返し、答えに至った。

「なるほど。やはり先の第三Qは無理をしていたな。ならば、氷室！」
それは荒木も同じこと。

敵の中心人物が疲労のピークに達しているならば、一気に攻め寄せ

復活する前に点差を縮めていくべき。彼女は予定通り二人目のエースに指示を出すと、狙いどおり福井から劉のスクリーンを介して氷室にボールがわたる。

「行かせるか！」

「……君相手に、止められるわけにはいかないな」

マッチアップの神崎が必死に抑えようと試みるなか、氷室の静かな声が場を支配した。

直後、シユートフェイクで硬直した神崎のわずかな隙を逃さずに氷室が中央へ切り込む。

負けじと神崎が遅れながらも横からブロックを試みるもの――

「白瀧君以外に、陽炎シユートは触れられないさー！」

「……っ！」

一回目のシユートに飛び付いてしまった神崎は、二回目のシユートを防ぎきれなかった。

奮闘むなしく、秋田に二点が記録される。

(栃木) 64対57 (秋田)

栃木の逃げきりを阻む、エースの得意技が炸裂した。

「いきなり来たな。七点差か……」

「すみません。これ、多分ここから氷室さん中心で来ますね。あの、キャプテン」

「ん？」

「相談があるんですけど……」

再開から14秒。陽泉にしては珍しい早い立ち上がりには、小林はこれから始まるであろう厳しい局面を想定して息を吐いた。

神崎も同様であり、それを打破するために、彼は小林へあることを耳打ちする。

「……なるほど。わかった。だがまずは攻撃だな。頼むぞ、白瀧」

「はい。わかっています。あまりやらない展開ですが、しっかりやりますよ」

その提案に頷きつつ、いずれにせよ攻撃をしなければ始まらないと小林は白瀧へと声をかけた。

主将に託されたエースはやり遂げてみせると決意を露にする。

小林のスローインからボールを受け取り、ボールを運ぶのだが、しかし――

「……………ん？」

「遅い？」

「なんだ、得意の速攻じゃないにしても、やけにボール運びが遅いな」
秋田の選手たち、さらに高尾をはじめとした観客が揃って首を傾げた。

今までよりも白瀧をはじめとした栃木の選手たちが攻め上がってくる時間がゆつくりなのである。

フロントコートに入ってから、なかなか切り込もうとはせず、白瀧はドリブルを続けながら選手たちの動向を観察するに留まっていた。

（仕掛けてこない……………？）

（なぜじゃ。速いパス回しと突破で相手を崩すのがお前たちの常套手段じゃろ!?!）

これまでの栃木とは正反対の遅攻。

自慢の速攻を捨ててまで始めたこの戦術に福井や岡村が疑問符を浮かべる。

「……………まさか！」

だが、荒木がいち早くこの動きのメリットに気づき、席から立ち上がった。

「福井！ 前に出ろ！ ボールを獲りに行け！」

「えっ？」

「早くしろー！」

突然耳に響いた叫びに、福井も駆られるように飛び出す。

「甘いな」

しかし。

たとえフローに入らずとも、相手はこれまでキセキの世代と渡り合ってきた猛者。一対一で不意を突かれようとボールを簡単に奪われるはずもなかった。

福井が伸ばす手を白瀧はバックチェンジでかわすと、まえがかりになつていた敵の横を呆気なく突破。ミドルへと侵入を果たし、「外に二人、ゴール下に二人、こつちも同数。なら、白ちんが一番好きなのはここでしょう」

「なっ?!?!」

次の手を打とうとした彼の前に、紫原が立ちはだかった。

（ばかな。反射神経にしても早すぎる！ いや、今の発言……まさか！）

あまりにも早い相手の飛び出しに、白瀧も冷や汗を浮かべる。

「チイツ！ 勇！」

たちまち白瀧は外の神崎へとボールを回した。

中は先ほどよりも厳しい、ゆえに外から仕掛ける。

ボールを預けた白瀧はトップポジションに戻る、と見せかけて方向変換のフェイク後、神崎と同じ左サイドの0度の位置へと駆け込んだ。

「いや、真ん中にはまだディフェンスがいる。こつちの方が、狙いやすい！」

その動きさえも、紫原に完璧に読みきられてしまう。

神崎から白瀧のリターンパスが紫原の右手に叩き落とされた。

「なっ！」

「嘘だろ！」

「アウトオブバウンズ！ 栃木ボール！」

間一髪でボールはラインを割り、再び栃木が攻撃権を持つ。

しかし終盤に来てさらに動きが良くなったような紫原の存在に、二人は衝撃を覚えていた。

「……だが、勇！」

「えっ？」

「リスタートだ。急げ！」

だからと言って黙っているような男でもなく、白瀧はすぐに神崎を呼ぶと、すぐさまボールを投入させる。

「まさか！」

そして手にすると同時に白瀧はジャンピングシュートを放った。

一度ゴール下に戻ろうとした紫原も急いで飛び付いたものの、この奇襲には僅かに届かない。それでもプレッシャーのためか、軌道がリングにそれているように見えるものの。

「問題ない。お前さえゴール下から引きずり出せたならば。明なら、秋田相手にリバウンドを奪える！」

白瀧は微塵も心配していなかった。

何故ならばこの試合は栃木のパワー自慢の選手が健在だからこそ。

光月が岡村を相手に優位にポジション争いを繰り返していた。

「うおおおっ！」

「こいつっ！」

そしてリングに弾かれたボールを光月が手にする。

「よくやった光月！」

「ナイスガッツ！ 頼りになる！」

「はい！」

すぐさま外の小林へとパスをさばき、再び栃木はゆつくりボールを回し始めたのだった。

「こいつらまさか……！」

「なるほどアル」

「そう来たか。たしかにこの点差ならばあり得る話だ」

ボールがリングに衝突したことにより、カウントがリセットされたタイムマーを目にし、敵の思惑を理解した。

「藤代め。白瀧は交代せずに、こうして少しずつ時間を潰させて、タイムアップまで持ち込む気か……！」

栃木の監督の顔を思い浮かべた荒木がギリツと歯を食い縛る。

当然ながら負けている秋田にとっては失点することは勿論、試合が膠着したまま時間が潰れてしまうことが痛手であった。相手が攻めてきてくれれば守る機会も増え、ボールを奪取する機会も訪れる。

しかしこうして相手が中々攻めてこない間は簡単にはボールを奪えない。

「しかも主にボールをキープしているのは白瀧だ。あいつが持ってい

る状態で、単独で真つ向からステイルできたのは黒子と、あいつのバスケスタイル自体をコピーした黄瀬くらいだろう」

「パスの途中で獲ったり、シュートをブロックすることは結構あるけど、たしかにあいつ自身がボールロストする機会ってほとんど見ねえしな」

さらに緑間がこの戦術の意図に気づき、そう語った。ドリブル能力がよく印象に残る彼だが、その分ボール保持能力も長けているのだ。そんな白瀧からボールを奪うのは困難。高尾もこれまでのデータを思い返し、苦笑するしかなかった。

「……ただ」

「ん？ どうした、真ちゃん？」

「紫原も、このまま終わるつもりはないらしい」

同時に、緑間は紫原の変化に気づき、試合はまだわからないと談じる。

（紫原のやつ、これまでの反射だけじゃなくて、予測で動いている……！）

白瀧も紫原の変化の原理に気づき、正解に辿り着いた。

「まだ攻めてこない。……多分動くなら白ちゃんに戻して、20秒前後」
今も紫原は光月をマークしながら辺りを見回し、敵の動きを見極めている。

面倒くさがりの彼ならば信じられない行動であった。

（反射神経に加え、俺達の動きを読んだことでさらに動き出しが一步早くなっている。俺がドリブルしてシュートに移行するための体勢を立て直す間に、余裕で距離を詰めてくる）

元々紫原は頭もよかった。

消極的な姿勢のために勘違いされがちだが、青峰や黄瀬と違って勉強も優秀。ただ、これまでは考えずとも相手の動きに反応するだけで勝ってこれたからこそ必要もなかった。

「めんどくさ。こんなのいっつもやってたの、赤ちんとか、白ちんって」

それでも、今、対峙している敵は違う。

初めて心の底から尊敬する相手を見つけたことで、彼の意欲も変わった。

「でも、負ける方が、もっと嫌なんだよね」

「っ……っ！」

光月の体を完璧に抑えた上で周囲の出だしを分析し、備える。

今まで以上の守備範囲と集中力を放つ紫原が、ゴール下に君臨していた。

「……ハハッ！ そうこなくっちゃな！」

ならばこそ、と。

白瀧の闘志もたぎる。こんなところで終わるようでは拍子抜けというものだ。

むしろディフェンス最強に自分のオフENSEが通用するかどうかを試すには。

「そっちが」一歩早めてくるっていうなら

本気を出してくる相手を倒してこそ、戦う意味があるのだから。

「こつちも一歩、速く行くか！」

「っ！」

残り四秒。

24秒ルールの制限が迫る中、白瀧が仕掛けた。

斜めに沈みこむようなクロスオーバーで一閃。あつという間に福井のマークを振り切る。

「やっぱり、でもそうはさせないって」

白瀧の姿が僅かに揺れた瞬間、紫原も駆け出した。

完璧なタイミングでの飛び出した。

パスもシュートも簡単ではない、ベストな瞬間。

「っ!？」

「あつ!？」

しかし。

わずかに早いタイミングで左サイドから中央へと駆け込んだ神崎、そして彼を追った氷室の二人が紫原の行く手を阻む。

「このっ！ でもー！」

それでもまだ間に合うと、紫原はターンで二人をかわし、白瀧に突撃を仕掛けた。

「いや、一手遅いよ。天才」

その直後。

ドリブルからわずか一步のステップで踏み切った白瀧の体がすでに宙に浮いているのを、紫原はまだ距離がある状態で目撃した。

「そんな……！」

急いで飛び上がるも、間に合わない。

白瀧のティアドロップシュートがリングを撃ち抜いた。

(栃木) 66対57 (秋田)

攻撃が遅くなっても、手が緩むことはない。

「最悪だ……！」

40秒以上の時間を稼がれた上で得点を許した。

敵の作戦通りの展開に荒木は思わず両手で膝を叩く。

「……どこまで単純なんだ、あいつは」

一方で呆れたような口調でそう発したのは緑間だ。

「フロー時のスピードを維持できない以上、さらに早さを増した紫原から得点を挙げるのは難しいと判断するや否や、あいつは跳ぶタイミングを早めた。突破が難しいならば紫原が接近する前に決めてしまおうとは」

ワンストップティアドロップ、といった所だろう。

従来の遠い距離から放つレイアップ・ティアドロップシュートをさらに遠い距離から、ドリブルから踏み切りの歩数を従来の二歩から一步に減らし、最小限のボール保持に留めた。

さらに紫原を突破できた原因はそれだけではないと緑間は続ける。「神崎が中央に走る姿を利用した。紫原が一步で詰められないように。神崎と氷室の二人をスクリーンとして、紫原の最短距離での接近を不可能にしたんだ」

紫原は一步で詰めるだけの長い足を持ち合わせるが、その分身軽さという点では白瀧達より劣る。体が大きい分壁にはまってしまうのだらう。

「自分も動きながら味方の行動を読み、そして実行に移す。優れた動体視力と思考の瞬発力がなければできないプレイだ」

動く相手の動きを読みきる視力。そして敵の動きに対する幾重もの対策の中からベストな答えを瞬時に判断し、実行に移す思考を反射的に行う。この能力があつてこそ。

たったワンプレイであつたが、その中から白瀧の隠された力が見出だせたような感覚を覚え、緑間の頬を冷や汗が伝った。

「やはり厄介な存在だな、君は。ならば！」

両者のエースが更なる真価を発揮する。

ならば俺も黙ってはいないと、再び氷室が気を吐いた。

福井、岡村とゴール下にボールが渡り、そこから氷室へとパスがさばかれる。

「ふざけんな！」

「もう一度、決める！」

完全に自身のマークを狙った攻撃。神崎が咆哮を挙げた。対する氷室も氣迫をむき出しにし、そしてまた彼の上体がゴールを狙って浮き上がる。

(まだ。跳ばない……！)

今度は紛れもないシュートの動作だが、神崎は跳ばなかった。

白瀧から予め氷室の必殺技のクラクリを聞いていたからこそできた対策だった。

(ここから一度リリースして空中でキャッチ、そこからもう一度シュートを撃つ。なら、俺にはあいつみたいに両方に共通するコースを見つけることも飛び込むこともできないけど、二回目のシュートに反応するだけならできる！)

一度目のシュートを完全に無視し、そして二回目に焦点を合わせてブロックを狙う。仕組みをよく理解した彼の行動に。

「無駄だよ。それでは止められない」

氷室は即座に対応した。

陽炎シュートはたしかに二回のリリースポイントを設定することで真価を発揮する。しかしこうして対策を打ってタイミングをずら

した相手の不意を突き、一回目のリリースでそのままシュートを撃つこともできるのだ。

「よしっ！ 撃て、氷室！」

味方もそれを理解し、得点を確信する。

「つて、やっぱりそう来ますよね」

「っ！」

だが、神崎は小さく笑った。

「たしかに俺には二回目に飛び付くしか思い付かなかった。でも……陽炎シュートは二回リリースするため、どうしても一度目のリリースポイントは低くなってしまおう。だから、うちのもう一人の頼れる人に託したんですよ」

自分一人では勝てない。

それを理解した上で、チームとして勝つために手を打っていた。

「忘れましたか？ 今このコートに立っているなかで、ガード陣で最長の身長と、高い運動能力を持った選手がいることを！」

その言葉が呼び出したかのように、氷室の死角である真横から大きな影が飛び上がった。

その影が、まさに氷室がシュートを放った瞬間、ボールへと手を伸ばす。

「うおおおっ！」

小林のブロックショットが炸裂。

氷室の陽炎シュートを防ぎきった。

「なっ……」

「こ、小林！」

「そうだ、栃木にはまだこいつがいる……！」

188センチ、長身の氷室よりもさらに背丈がある彼のディフェンス。

主将がみせた気迫のプレイが秋田の選手たちに多大なプレッシャーを与えた。

「さすがキャプテン！」

「ナイスコンビネーション！」

しかもボールは黒木が奪い取る。

攻守が入れ替わったことで更に栃木の熱は高まった。

「……っ！ 止めろ！ 時間を使わせるな！ 奪うんだ！」

エースで得点に失敗した直後だ。これ以上時間を使わせることも失点することも致命傷になりかねない。荒木が必死に声を振り絞った。

「させるかよ」

しかし白瀧が完全にボールをキープする。

福井のステイールを距離を保ちながらかわし、最大限時間を使って、そしてダブルクロスオーバーで突破した。

またしても紫原がヘルプにでるが。

「俺達は、絶対に勝つ！」

今度はジノビリステップで紫原のシュートブロックをかわした。

さらに劉を引き付けた上で黒木にラストパス。そうして黒木がベビーフックシュートを放つ。

「そんなの、こつちだって同じだし！」

完全にフリーになったシュートだったが、またしても紫原のブロックが炸裂した。

リバウンドを劉が確保し、また攻守が逆転する中、パスを出す寸前で黒木がボールを叩く。

「アウトオブバウンズ！ 秋田^黒ボール！」

奪うことこそできなかったものの、確実に敵の速攻を防ぐことに成功した。

「秋田県、タイムアウトです」

そして、ここで荒木が作戦変更のために試合を中断する。

栃木の予想外の戦略、そして氷室が早々に白瀧以外の選手に攻撃を止められた事が大きいのかかかっていた。

「ゾーンを少し変更する。紫原、お前は通常より前に出る。 2――1――

2ゾーンデイフェンスだ。前にでて、白瀧や小林などボールの供給源を抑えろ。今のお前ならばできるはずだ。少しでもやつらのオフエンスの時間を減らせ」

荒木が指示したのは得意な2―3ゾーンの亜種、皮肉にも敵の藤代達が得意とする陣形であった。

多少ゴール下の警戒は薄くなるが、今の紫原ならば問題ない。それよりも敵が時間を潰すほうが厄介であるという判断であった。

「やはり白瀧の体力は余裕がないのだろう。ならばこそ、前からプレッシャーをかけていけ。これ以上相手を付け上がらせるな」

敵のエースに余力はない。それは相手の戦略が雄弁に語っている。故に紫原を本来のポジションよりも前に配置し、少しでもボール奪取の機会を増やそうと試みた。

「攻撃は……岡村、劉、紫原の三人を主体に行く。氷室、異存はないか？」

「……はい」

一方オフエンスは秋田自慢のフロントラインに一任することに。話を降られた氷室も渋々ながら頷いた。

仕掛けを完全に理解され、エース以外の相手にまでブロックを許した。このダメージは大きなものだった。

「よし。だが、だからといって気を抜くなよ？ シュートだけではなく、お前はドリブルで敵を突破する役割もある。敵のマークがインサイドに集まったら、頃合いを見てパスをさばけ」

「はい」

とはいえさすがにエースが完全に沈黙してもらっても困る。

見極めを行うよう福井に指示を出し、選手たちに補給を済ませるように声をかけて時間は過ぎていった。

対する栃木ベンチは。

「順調、と言えるでしょう。見事な立ち上がりでした」

最後のオフエンスこそ止められたものの、氷室のシュートを止めた。これは大きな戦果だと藤代は選手たちを褒め称えた。

「おそらくですがここからは前線にマークが集中するはずだ。黒木さ

ん、光月さんはスクリーンに撤し、神崎さんも加えた三人で試合を組み立てましょう」

「はいー」

「了解！」

「紫原が前に出てきたのまじで怖かったんだけどまた来るかな……？」

「頑張ろうぜ」

「知ってた」

さらに敵の動きを予測し、多少はゴール下が薄くなっても外、ミドルの層を強めようと指示を改めた。

活気よい返事が飛び出す中、神崎は先の紫原の積極的ディフェンスを思い返しておそろおそろと、白瀧が短い声援を送る。予想できていた事とあって神崎は諦めるように息を吐くのがあった。

「ディフェンスもできるだけ前線からプレッシャーを与えるように。時間がなくなればそれだけ敵は焦るはず。そして焦りは思考を狭めていくはずだ。そこが狙いどころです」

「……はい」

さらにディフェンスも小林、神崎を中心に相手を自由にさせないようにと命令する。

得点、残り時間、こういつた要素は試合の経過と比例して栃木に有利になるだろう。そう考えて。

「白瀧さん」

「はい」

「最後の一手はこちらから合図します。見逃さないように」
「わかりました」

この試合を決定づけるであろう切り札について白瀧と確認を済ませ、タイムアウトを終えるのだった。

程なくしてタイムアウトが終わりを告げる。

まずは秋田の攻撃が始まった。

「このまま押しきるぞ！」

「応！ 言われずとも！」

福井、氷室がまずは外からボールを回して様子を見る中、小林、神崎がそれぞれ厳しいチェックに入る。

少しでも油断すればボールを奪う、そんな厳しいプレッシャーが襲いかかった。

「そうは行くか！」

「こちらにも意地がある！」

対する福井、氷室も相手のハンスアツプをかわし、氷室のシュートフェイクで引き付けると、マークを突破した。

さらにヘルプが出る前に氷室から紫原へとパスが通る。

「ひねり潰す!!」

「ぐうおっ!?!」

「がああっ！」

そして彼の回転によつて産み出される力を利用した一撃、ツールハンマーが炸裂した。

試合終盤になつても衰えを知らないその威力は白瀧、光月の二人を呆気なく吹き飛ばす。

「白瀧！ 光月！」

「だ、大丈夫です」

「……さすがの、一撃だな」

文字通り巨人と相対していると錯覚するような衝撃だった。

やはり尋常ではないパワーに戦慄を覚えながらも、二人はチームメイトの肩を借りて立ち上がった。

「次はこっちだ」

そして今度は栃木の攻撃が始まる。

白瀧、小林、神崎が三人でボールを回し、反撃に転じる。

「おっとおー！」

「神崎！」

途中、神崎が氷室、紫原のマークに捕まり危機に陥るも、黒木のス

クリーンで氷室を引き剥がし、なおも追いつがる紫原の目の前で白瀧にボールを手渡した。

するとそのままワンドリブルで切り返し、スリーポイントシュートを放つ。

「甘いってのー！」

「っ！」

だが、紫原の指先がわずかにボールに触れた。

ボールはリングに衝突し、得点には至らない。

「もらったわい！」

「ぐっ……！」

するとここで劉のスクリーンでマークが入れ替わっていた岡村が黒木とのリバウンド争いを制し、ボールを手にした。

「キャプテン！」

「よし、速攻！」

時間を無駄にするわけにはいかない。

すぐに岡村が駆け出した氷室へとロングパスをさばいた。

「言ったはずだ。俺の前で、速攻は許さないと！」

だが、このロングパスは白瀧によって阻まれる。

敵のパスを叩き落とし、ボールはラインの外へ。

奪い返すまでは至らなかったが、これで味方がディフェンスに戻る時間を稼ぐことができた。

「ちいっ！ やはりあいつがいると、どうしても攻守共に時間をかけさせられてしまうか……！」

速攻のスペシャリストとあって、こちらの速攻に対しても敏感に反応してくる。

的確に反撃の芽を詰んでくるエースの存在は、たとえ全力ではない状態でも荒木の目には驚異に映った。

その後も両者一步も譲らぬ攻防が続いていく。

確実に秋田がインサイドから攻め立て、得点をあげていき、栃木も時間を使いながら仕掛けていった。

ただ、こうなると守備範囲が広い紫原が前に出た事でパス回しもよ

り困難となった栃木の点数が伸び悩む事となる。

(栃木) 70対65 (秋田)

残り六分を切った時点で秋田が五点差まで追い上げていた。

「……行けるー。このペースなら逆転できるー!」

まだ逆転には至っていないが、荒木は勝機を見出だし、口角を上げる。

エースの体力を案じ、彼らに無理をさせずかつ確実に勝つための手段だったのだろう。

だが、ここにきて堅実性で有利な秋田にも勝ち筋が現れた。

ここでさらに一本止め、カウンターを決められれば、間違いなく秋田に流れが来るだろう。

「……どうするつもりだ。本当にこのまま逃げ切るつもりか? あいつらしくない!」

対して試合を見ていた緑間も得点推移からこのまま続行すれば栃木が不利なことを察して疑問を呈した。

何より白瀧の性分を考えればこのまま引き気味に逃げ切るとは到底思えない。それこそ第三Qのように攻め勝つ、その方が彼らしく思える。

だが現にこうして彼は率先して時間潰しを行つた。時間がなくなる事で何か栃木に優位になることなどないはず。

「……いや、まさか!」

否、ひとつある。

まさか自分は、自分達はとんでもない誤解をしていたのではないか。

そんな風に緑間が考えている最中。

「――」

白瀧の視線は栃木のベンチに、強いて言えばマネージャーの橙乃に向けられていた。

何やらハンドサインのような動きを数回繰り返し、それが終わるとそつと両手を膝の上に戻す。

(……作戦、決行、六、全て)

橙乃と二人で決めた合図。これから白瀧は藤代の意図を理解し、彼はニヤリと得意気に笑うのだった。

「待ちわびましたよ、監督」

残り時間六分。ここからは監督も問題ないと信じてくれている。ならばやるだけだと白瀧は信頼に応えるべく集中力を高めた。

「お前ら、死守するぞ！ このまま逆転まで行く！」

「おおっ！」

迎え撃つ秋田の士気は最高潮だ。

福井の指示に全員が力強い声を返した。

時間は少ないが、このままならば逆転できる。

今一度福井と紫原がボールを持つ白瀧へと圧をかけていった。

だが。

「——遅い」

静かな、それでいてヒリつくような鋭い声が耳朶を打つ。

油断は、これっぽっちもなかった。

まだシュート制限の24秒まで時間は残っていたものの、少しでもチャンスがあれば奪ってしまおうと敵の動きをしつかり観察していた。

それでも、気がついた時には福井の横を白瀧が通りすぎていた。

「……………えっ？」

「っ……………！」

誰も反応できなかった。

かろうじて紫原がいち早く立ち直ったものの、白瀧のジャンピングシュートを止めることはできなかった。

(栃木) 72対65 (秋田)

秋田の反撃ムードをかきけすような、白瀧の得点が記録される。

「速すぎる、アル……………！」

「まさか……………いや、でも！ 彼の体力は限界のはず！」

「だから栃木は時間を潰して逃げきりを図っていたんじゃないのかよ！」

「だが今のは間違いなく……………」

突然の出来事に劉も、氷室も、福井も、岡村も驚愕を隠せなかった。ありえない、しかしそれ以外に考えられないと目の前の衝撃に思考を奪われる。

「まさか、また……いや、まだ入れるなんて思ってたよ。限界なのは、嘘じゃないはずなのに」

紫原も胸の高鳴りを抑えながら、極限状態へと突入したかつての旧友へと声をかけた。

「当たり前だ。俺は、自分の意志でここに戻ってきたんだ。俺がいる場所は、コートにしかない。必ずや頂点キセキに辿り着くまで走り続けると！ だから！」

その領域——フロアに入った白瀧はゆっくり振り返り、そして敵には最大の脅威を、味方には最高の安堵を与えるように、声を張り上げた。

「キセキを越えると誓った男が、今さら自分の限界を越えることを恐れるものか！」

彼の声が、コートに立つ全てのものに響き渡り、その場を支配する。

ようやく秋田にも好機が訪れたと思われたタイミングでのこの奮闘は、計り知れない影響力を及ぼした。

「……して、やられた」

白瀧のフロアを目にし、荒木は自身の失策を悟った。

彼の、否、指揮している藤代の計略に気づけなかった自身の浅慮を悔やんでいた。

「逃げきりところちに思わせ、時間を潰したのは、あいつのフロアの間制限を考慮して。そのためにあえて遅攻を仕掛けたというのか」

もう白瀧にフロアに入る体力はないと誤認させ、秋田の油断を誘った。

案の定、秋田は突然の強襲に不意をつかれる事となり、精神的にも大きなダメージを追う事となってしまふ。

その影響なのか、反撃の秋田の攻撃も氷室から紫原のパスを白瀧に奪われてしまい、決定機を逃してしまう。

「っ。……氷室！ お前も白瀧につけ！ 紫原は中央で周囲をケアしろ！ なんとしても守りきれ！ やつとて不死身ではあるまい！」
それでもまだ諦めないと、荒木は白瀧へのダブルチームを指示し、機会を待った。

フロアの状態は予想外だが、最後までもつわけがない。紫原の語る通り、ここまでの戦いで白瀧の状態が万全でないのは間違いないのだから。

ゆえに白瀧の徹底的なマークで彼を消耗させつつ、逆転の好機を待つ。そう方針を決め、荒木はその時を待った。

事実、たとえこの場に分析のスペシャリストである桃井がいたとしても、荒木と同じ結論を下した事だろう。

すでに白瀧は神奈川戦から始まった連戦に次ぐ連戦、キセキの世代のプレッシャー、一回り以上大きな相手とのせめぎあいなどで心身ともに大きな負担を強いられていた。

たとえフロアがもったとしても三分、うまくごまかして四分もつかどうかという圧倒的に厳しい状況の中。

「……バカな。ありえん。動けるはずがない。なのに！」

彼は試合終了のブザーがなるまでの実に5分以上の時間、限界を越え続け、戦いぬいた。

「何だ、こいつは!!」

数値ではとつくに倒れているはず。

しかし。

才能や技術、経験、あらゆるステータスをはねのける体力を己が想いで補強して、白瀧はコートに君臨する。

もはや理屈ではない目の前の現実、今まで数多くの試合を経験してきた荒木でさえ目を疑った。

「どうして、まだ戦えるっ..」

「どうしてだど？ 決まっているだろ、まだ何ひとつ、終わってないからだ！」

紫原もすでに息絶え絶え、今にも倒れそうな白瀧を信じられないというような目で見て、再度問いかける。

もうフラフラの状態だが、白瀧の意志は強く、揺らがない。

「俺は、エースなんだ。エースが消えること、それが一体チームにどんな影響を及ぼすのか……俺は、誰よりも知っている」

帝光時代、そして夏の陽泉戦の光景が白瀧の記憶に強く刻まれている。

自分の不在から起こってしまったあの惨状。

今でも誰よりも後悔している彼だからこそ。

「だったら、最後の最後まで、俺が倒れるわけにはいかねえだろ。なめるんじゃねえよ！」

同じ相手を前にして、ここで立ち止まるわけにはいかなかったのだ。

「俺は、俺が、神速だあ！」

この試合の勝敗を決定づける白瀧のキラークロスオーバーが炸裂する。

疾風が吹き荒れたような速度は紫原も反応が追い付かなかった。

それでも必死に反応して岡村と共にブロックを試みるも、白瀧のヘリコプターシュートが綺麗にリングを潜り抜けた。

「……負け、た」

ボールが地に落ちる音を聞きながら、紫原はポツリと呟く。

久しく抱いていなかった感情を覚えながらも、彼の胸中はなぜか中学時代と違い心穏やかだった。

彼は最後の瞬間まで戦い抜いた。

ライバルに追い付けず、新鋭に誇りを奪われ、友と袂をわかち、苦

難の道を選ぼうとも。

悲鳴を上げる体に鞭打ち、戦うことをやめなかった。

心に宿る暗い想いを封じ、仲間に焦燥を隠して、ひたすらに駆け抜けた。

そして今。

彼は再び二つ目の因縁を、キセキを乗り越えた。

何度も夢見た決戦の場で、なりやまぬ歓声の中。

これまでの鬱憤をはらすように、声援に応えるように、彼は高々と右手を突き上げる。

もはや彼の、彼らの行く道を阻む者はいない。

「これで、借りは、返したぜ、陽泉。紫原」

(栃木) 84対71 (秋田)

栃木が、大仁多の選手たちが夏の雪辱を果たし、勝利を手にしたのだった。

これで栃木はインターハイでは果たせなかったベスト4、準決勝進出を決める。

つまり。

『また昔みたいに、お前が皆と共に笑えるバスケットをできるように、強くなってやるよ』

「覚えているか？ あの日から二年もかかったが……やつと、ここまです、追い付いたぞ。なあ————青峰」

この先に待つであろう、始まりにして最大の因縁、約束を誓ったかつての好敵手と戦う権利を手にしたのだ。

彼に向けて捧げるように、白瀧は屈託のない笑顔を浮かべたのだ。

「白瀧の視線は栃木のベンチに、強いて言えばマネージャーの橙乃に向けられていた。」

何やらハンドサインのような動きを数回繰り返し、それが終わるとそつと両手を膝の上に戻す。

「……ヤバイ。あのサイン、なんだっけ？」

「嘘だろお前!？」

「よりもよってこの大事な場面で!？」

バッドコミュニケーション。

多分この後橙乃にお置きさされる。

第一百十二話 四強

「……やりやがった！」

「まさか、神奈川に続いてまたしてもキセキの世代が、姿を消した！」

「絶対防衛イージスの盾の神話を打ち崩して、栃木が準決勝進出だ！」

試合終了の時を知らせるブザーが木霊した。

インターハイ準々決勝の再現のような形となった栃木と秋田の一戦。

短くも長くも感じられたこの戦いに決着がつき、見守っていた観客は驚愕や衝撃、歓喜、様々な感情に溢れた声を吐き出した。

「見ているか、皆？ ……勝ったぞ」

その歓声を聞いて、小林が声を震わせる。

彼の心のうちにはつい先日まで共にコートで戦っていたチームメイトたちの姿があった。

共に勝利の喜びを分かち合うことはできなかった。だが、それでもこの歓喜の感情が、声が少しでも皆に伝わっていれば言いなど、小林は胸を撫で下ろす。

その頃、大仁多高校の図書室。

「勝った、か」

「すげえ。大金星だな」

「……どうやら小林たちはきちんと成し遂げたようだな」

「おっ、佐々木。来たか」

「もう面接の練習は良いのか？ お前はもう試験が近いんだろ？」

スマホの中継を見ていた山本や松平をはじめとする引退した三年生たちが、栃木の勝利に静かに湧いていた。

少し遅れて面接試験に備えて教員と練習をこなしていた佐々木も彼らと共に歓喜の渦に加わる。

「ああ。先生方も配慮してくれたんだ。……本当によかった。これで

俺たちも少し気が楽になった」

「そうね。圭介くんたちも背負っていたものが軽くなったはず。帰ってきたら、改めて皆でお祝いしましょう」

「だな。ま、まだ先のことになりそうだが」

「それは良いな」と東雲の提案に皆が揃って頷いた。

同じ場所で戦うことはできなかつたけれど、抱いた気持ちは皆同じである。

栃木が果たしたりベンジはその場にいる者にも、いない者にも、等しく救われたような感情を抱かせたのだった。

「本当に、あのメンバーで乗り越えたか」

勝利に酔いしれる大仁多に所属する選手たちの姿を目にして、岡田は淡々と彼らを称賛した。

作戦を聞いた際には白瀧の状態を案じて不安が消えなかつたが、最後まで彼らは攻めの姿勢を崩さなかつた。

選手を信じた藤代、その期待に応えた生徒達。彼らの強い信頼関係があつてこそなしかつた快挙だ。本当に末恐ろしいとその頼もしさに息を飲む。

「敵とすれば厄介だが、やはり味方となると心強い」

「ええ。俺もあいつの背中をこうしてベンチで見ていると同じ気持ちでした」

勇作や楠は声援に応えて手を振る白瀧の背中を見てそう呟いた。体力自慢の彼でもまともに動けないほど消耗して、それでも敵を圧倒し続ける。

一回りも二回りも大きい敵を前に一步も引かない姿勢は、いつそ感動さえ覚えた。

「これでまた一つ壁を乗り越えました。よくやってくれましたよ」

「はい。本当に。これで後は……」

簡単なことではないが、必ず果たさなければ真の意味では前に進め

ない障害。それがこの試合の位置付けだった。

それを期待どおりの、それ以上の力を発揮し、見事に越えていった教え子達。

そんな彼らを藤代は温かい目で見守り。

橙乃は同時にこの結果によって産まれたもう一つの試練を考え、小さく息を吐いた。

「よく守り続けた、光月」

「はい！ やりましたね。今度は最後まで戦えた……！」

「ああ。最高の結果だ」

黒木と光月が力強く手を交わす。

両者共に夏は悔しい思いでコートを去ることになったゴール下の要だ。

しかし今日は違う。

今度は最後までゴール下で体を張り、チームを守り続けた。勝利によって産まれた自信、喜びは人一倍大きなものである。

「おしっ！ 勝った！ これで準決！ やったな！」

「ああ。お前も、よく決めてくれたよ。これで先輩たちに報告できる」
「……おうっ！」

その場で飛び上がる勢いで歓喜を現す神崎。

彼とハイタッチを決めて、白瀧もニヤリと口角をあげた。

夏のリベンジを果たしての準決勝進出。きつとこの場にはいない者達も自分のことのように喜んでくれるだろう。記憶に新しい先輩たちのことを思い浮かべ、二人は揃って表情を緩めた。

「……フーツ」

栃木の選手達が喜びの声をあげる中。

彼らの姿を見て、岡村が大きく息を吐いた。

悔しさはある。主将としてチームを勝利に導けなかった、その無念は人一倍大きかった。

だが、だからこそ自分が感情を爆発させるわけにはいかない。

「整列じゃ、行くぞ」

最後まで選手の姿勢を貫こうと、岡村は苛立ちを握りこぶしに込め

て、真つ先にコートの中へと歩みだした。

「……ちくしょう」

「わかっているアル。まだ、終わった訳じゃないアル」

普段は彼をおちよくなる事が多い福井、劉も彼の心中を察して静かに彼の後ろを追った。

耐えきれず溢れた涙を振り払って背筋を伸ばす。

まだ秋の国体が終わっただけ。今度は彼らが借りを返す機会、冬のウィンターカップも残されているのだから。

「まさか、あいつと戦う前にここまで打ちのめされるとはな」

一方、氷室は胸中にある人物——彼が弟と語る火神の顔を思い浮かべて苦笑した。

しかも相手は火神も夏に真つ向から戦い、敗れたという相手だ。一体何の因果なのだろうかと、考えても意味のない事を考えざるをえなかった。そういう思考をしなければ自制心を耐えられないほど、この敗北は大きなものだったから。

「負け、た。そっか。……これが、負けなんだ」

そして秋田の誇るエース、紫原はその場に立ち尽くし、呆然としたままそう呟く。

彼は試合に負けた記憶はほとんどない。中学時代は無双状態であったし、高校でも不出場だった洛山戦を除けば圧勝の連続だった。

ゆえに紫原にとってはこれが公式戦で味わう初めての敗北の味。

それを知って、だが、紫原は何故か中学時代に同僚から味合わされたような苛立ちを覚えることはなく。

ただ視線を落とし、淡々とチームメイトの元に歩み寄っていった。

「84対71で栃木県の勝ち。礼！」

「ありがとうございます!!」

最後にコートに立っていた10人の選手が集ったことを見届け、審判が試合を締めくくる。

両県の選手達は決まり文句を告げるとどちらからともなく相手の選手へと歩み寄った。

「……借りを返されてしまったのう。もう一つ貸しを作っておきた

「かつたんじゃが、負けたわい」

「あまり引き摺つてもいられないからな。……強かったよ。また、やろう」

「そうじゃな。お前さんとは近いうちに大学でもやるかもしれないが、その前にまた機会があれば、冬に今度はこちらからリベンジさせてもらうぞ。——まずは次、頑張れよ」

「……ああ。お前たちの分まで。次もおそらくは大きな試練が待っているからな」

岡村と小林が力強く握手を交わす。

チームを代表する二人の会話とあつて落ち着きがあり、互いの心境を配慮した受け答えだった。

冬の再戦を願い、そして栃木の次戦へのエールを贈り、活躍を誓つて二人は別れた。

神崎や黒木に光月、福井や劉などのメンバーも互いの健闘を称え合い、仲を深めていく。

「やあ。今日はとてもためになる試合だったよ。冬の大会を前に、君たちと戦えてよかった」

そして氷室も後ろに紫原を連れ添つて白瀧へ声をかけていた。

「ありがとうございます。氷室さん。……夏のデータがない上にキセキの世代にも匹敵するあなたの技量。戦う身としては非常に厄介な相手でしたが、同時に一選手として正直に言つてその洗練さに感動しました」

手を差し伸べられた白瀧はその手を取り、試合中に抱いていた感情をそっくりそのまま吐き出す。

普通に受けとれば最高の賛辞であるこの発言。だが、彼の言葉に氷室の眉がピクリと動いたのを白瀧は見逃さなかった。

「俺としてもあなたを知れたこと、実際に戦えた事、嬉しく思います」
「お世辞がうまいんだな、君は」

「いいえ。本心です。——氷室さん、あなたが何を考えているのか、どのような目標があるのかは俺は知らない。ですが、他人と比べて自分を卑下する必要はない。俺はそう思います」

一度戦っただけで白瀧は氷室のことをよく知らない。

それでも試合中と今の発言、そして態度から氷室という男が生真面目で一途な人間であると考えた白瀧はそう語りかけた。

「……ずいぶんと知ったような口を利くね」

勝者であり年下でもある相手からの気遣い。これが氷室のプライドに触れたのか、挑発のように続ける。

「はい。俺がそうでしたから」

「――」

「だから同じ思いをあまりしてほしくない」

だが白瀧は凜とした姿勢を崩さずにそう答えを返した。

彼は氷室の姿に、考え方に自分の存在を重ねていたのだ。

白瀧もつい先日まで黄瀬という強大な敵に嫉妬さえ抱き、届かぬ理想を前に自己嫌悪を覚えていた。

だからこそ、これ程の技量を持つ選手が同じような思いをいつまでも抱え込んでほしくない。氷室の身を心から案じていた。

「参ったな。完敗だ。……ありがとう。改めてもう一度、君と会えてよかった」

「（こちらこそ）」

その考えが伝わったのか、氷室は大きく息を吐くと、柔らかな笑みを浮かべて白瀧との会話を終える。

「……終わったー？ 相変わらず試合のあとまで二人とも真面目だねー」

「敦」

「紫原か。――またお前と戦えてよかった。ディフェンス最強と戦うことで、俺も自信がつけた。礼を言うぞ」

「何それイヤミ？ ……ま、別にいいけど。」

「……？」

前髪を右手で掻き揚げ、紫原がわざとらしく大きなため息を吐いた。

誰よりも負けず嫌いな彼とは思えないような落ち着いた振る舞いに白瀧が違和感を抱いていると、紫原は試合を振り返って話を続け

た。

「二回も戦って、まあ理解はできたよ。俺も思うところがないわけではなかったし。でも——同情も共感もしてない、かな」

「はっ？ どういう意味だ」

「敦？ 何の話だ？」

的を射ない発言に白瀧と氷室が揃って聞き返す。

「……いいよ。今のわからないなら、余計なことだからわからない方がいいだろうし。そんなことよりも、せいぜい頑張りなよ。白ちんにとつてはまだこれからが本番なんだろうからさ」

しかし紫原はこれ以上は語る必要はないと言葉を濁し、次に待ち構える難敵たちを指してそう告げた。

最後まで彼の意図は不明であったが、ここまで避けられてはどうしようもない。

「——ああ。そうだ、その通りだ」

旧友と最後にもう一度挨拶を交わし、白瀧は紫原たちと別れた。

かつて最も長い時間を共にした親友、そして今でも想い焦がれている少女の顔を思い浮かべて、次の舞台へと進んでいく。

「やったな。こうも早くリベンジを果たすとは」

「俺らもうかうかしてられないっすね」

「ああ」

コートから引き上げていく両校の選手に拍手を送りながら、大坪は静かに闘志を滾らせていた。

彼らもインターハイ予選で大仁多の選手たちと同様に苦渋を飲まされた身だ。いつまでも負けたままではいられない。

ライバルの勝利から意欲をもらい、「冬は俺たちも」と高尾も釣られるように不適な笑みを浮かべた。

「……その前に、もう一つの大戦の行く末が気になります」

そんな中、緑間だけは冷静にこの次の試合を見据え、冷静に呟く。

まだ正式には決まっていないが、十中八九間違いないだろう準決勝の組み合わせ。

最強の矛と最強の矛。

この準決勝とは対極の戦い。間違いない点の取り合いになるであろう未来を想像して、緑間は目を細めた。

栃木対秋田の試合終了を皮切りに、他会場で行われていた試合も決着を迎えていた。

大多数の観客が想定していたように、京都府と東京都のキセキの世代を擁する県は彼らが試合に出ることすらなく無事に決勝進出を果たす。

準決勝の組み合わせが決まり、一方は最多優勝を誇る京都府が圧倒的に優勢と見られるなかで。

もう一つの試合、東京都対栃木県、関東勢の試合は前評判でも意見が別れていた。

インターハイ準優勝を果たし、キセキの世代のエースが控える東京都か。

キセキの世代を連続撃破し、一躍今大会の台風の目と化した栃木県か。

決戦までの時間がなくなっていく事に反比例して、期待ばかりが高まっていく。

そんな中、東京都の関係者たちは――

「……驚きましたね。陽泉、いや秋田まで倒してしまうとは」

宿舎に戻り、試合のビデオを見返した監督・原澤が感想を述べた。

それは他の選手達も同様のようで勝利した栃木の姿を半信半疑で観察している。

「せやなあ。紫原君がもうおらんのはうちとしては助かったけども、これまた大きな獲物が食らいついたもんやで」

「キセキの世代が二人も敗れたんだ。もはや同格と呼んでも誰も疑わない」

フロアの状態に入った白瀧のプレーから、今吉や諏佐は彼があのだ敵と同じ場所に立ったことを悟った。

並大抵の相手ではない。

それこそ紫原以上の強敵と判断しなければ痛い目にあうのはこちらだろうと。

「しかもどうなってるんだよこいつの底力は？ 桃井のデータではまた夏みたい途中で力尽きるはずだったんじゃないかねえのか？」

「だからこそ、試合は七対三で秋田が優位って話でしたよね」

一方でマネージャーの分析を思い返して疑問を唱えたのは若松だ。消耗が激しいためにこの試合も最後まで保つ可能性は殆どゼロであり、そうなれば栃木は厳しい。ゆえに秋田が勝ち上がってくるだろうと試合前に桃井の展望を聞いていた。

桜井も同意であり彼の意見に追従すると。

「はい。正直、私も驚いています」

発言の主である桃井は率直に自身の分析の誤りを認めた。彼女にとっても栃木の勝利は意外な事であったのだ。

「今でもその時の分析通りの結果だと考えます。あまりこういう言い方は好きではないんですが。……今日の試合の白瀧君は、データを超越している」

もはや数値や常識では語れない。別次元の話であると、彼の気迫を感じ取って桃井はそう告げた。

彼女の正確無比な予想をこうも力づくで覆された事が悔しくて、そして少しだけ嬉しく思う。

「……ハッ」

彼女の発言に誰もが肝を冷やす中。

ここまで一言も口にくることなくじっと試合のビデオを眺めていた東京都の絶対的エース、青峰が鼻をならす。

「良いじゃねえか。大体、そんなの今さらだろ？ あんたらがあいつを取らなかつた時点でこうなる可能性は十分にあつたんだからよ」

「……まあ、そうですね」

「逃した魚があまりにもデカくなりすぎてもうたなあ」

白瀧と東京都、否、桐皇学園との因縁を知る原澤と今吉がこの発言に苦い表情を浮かべた。

次の試合、準決勝は白瀧にとってあまりにも大きく、多くの因縁が絡んでいるのである。

同時刻、栃木県の関係者が宿泊しているホテルの一室。

白瀧、光月、神崎の三人が割り振られている部屋に橙乃が訪れ、白瀧のマッサージを行っていた。

「ぐっ、ぎっ、がっあああああああ!!?」

「——はい、おしまい」

「つううっ!」

絶えず全身から襲いかかる激痛に思わず悲鳴が口からこぼれ出す。

十分ほど全身の筋肉を揉みほぐした後、ようやく解放された白瀧は息を整えベッドから体を起こすのだった。

「生きてるか要?」

「ああ、大丈夫。大分楽になった。橙乃、ありがとうな」

「うん。これで明日に向けての助けになれば良いんだけど」

「十分だ。助かった」

グルグルと肩を回し、調子をたしかめる。

秋田戦の疲労は尋常ではなかった。とはいえ試合が明日も行われる以上は蓄積するわけにはいかない。

——これならば明日も戦える。

次戦を見据える白瀧の表情は今から闘志が滾っているようだった。

「じゃあこの後はゆっくり休んでね。皆も疲れているだろうから騒いだりはしないだろうけど」

「まあ俺達も結構ヤバかったしな」

「同じく」

橙乃に話を振られた神崎、光月は揃って苦笑いを浮かべる。

秋田二人目のエースである氷室とのマッチアップ、全国屈指のゴール下でのポジション争いを繰り広げた二人の疲労も白瀧ほどではないものの、やはり普段よりも疲れの色が強く伺え、試合の厳しさを物

語っていた。

「じゃ、今日は少し早いけど温泉に行っておくか？ 寝る前にもう一度入りに行ってもいいし」

「そうだね。初日は要も満足に入れてなかったらゆつくりしよう」

「あの時はまあ、うん。お前らにも迷惑かけたよ……」

二人の提案に白瀧が口ごもる。当時は黄瀬のことで頭がいっぱいだったために弁解の余地もなかった。

「気にすんなって。じゃ、俺達はお風呂に行ってくるよ」

「わかった。私も西條先輩を誘ってみようかな」

そう言って三人は橙乃と別れ、荷物を纏めるとフロアを移動して温泉へと向かう。

ちょうど他のメンバーと鉢合ひ、「それならば」と気づけば栃木の選手たちが続々と集結して。

「はあー。体が楽ー」

「湯に髪の毛着けるなよ」

「あーい」

「すっかり気が抜けてるな……」

「あの凄まじい殺気が嘘のようだ」

気づけば全員が銭湯に集結していた。

プカプカと湯に浮かぶ白瀧を小林が注意して、そんな光景を勇作や楠が面白げに見守っている。

「ゆつくり浸かれば良いだろうに、回復も速いのか？ いっそ呆れるわ」

「いや、疲れてるのは間違いないんですけどね」

中澤の問いに、白瀧は一泊置いて続けた。

「……疲れはしたけど、でもそれ以上にまだ熱が収まらないですよ。正直、今すぐにも試合をしたいくらいです」

まるで子供のように目を耀かせる白瀧。好戦的な姿勢は非常に頼もしく見え、これからインターハイ準優勝の相手と戦うとは到底考えられない程だった。

「よしっ、ちよつと俺向こうの温泉も入ってきます。今の時間で全部

制覇してきますよ」

「……本当に元氣だ」

ウキウキという表現が聞こえてきそうな程のハイテンションで次の湯へと向かっていく。

普段の気負った真面目な姿からは想像できない無邪気な様子。

こうみるとようやく彼が先日入学したばかりの一年生であると言うことが実感できた。

「やっぱり、準決の相手が原因か？」

「おそらくは。——青峰大輝ですよ」

その理由は本人に聞かずとも皆が想像できていた。

細谷の呟きに反応し、古谷が最強と呼ばれるスコアラーを思い返して名を挙げる。

「俺も聞いたことがあるな。当時は白瀧と青峰の二人でよく得点を競いあったライバル関係だったと」

「そのライバルとの久しぶりに戦うと慣ればなー」

「いや、それだけじゃないですよ」

「えっ？」

一年の頃から競いあっていたかつての好敵手との対戦だ。そう考えればここまで陽気になるのも無理もない、と多くの者が納得する中。

神崎が他にも理由はあるのだと指摘する。

「それだけじゃないって、他になにかあるのか？」

「要は、というかあいつと西村は二人とも元々、桐皇学園に進学する予定だったんですよ」

「……………ええええっ?!?!」

考えもつかない話に皆が揃って驚愕を露にした。

本人たちから直接聞かなければ知るよしもない事だ。無理もない反応であるのだが。

「……知らなかった。大仁多には推薦で入ったとは聞いていたけど、その他にもそんな事情があったのか」

「えっ? 待てよ。てことは一歩間違えれば、白瀧と青峰が高校でも

組んでた可能性もあったってことか？ ヤバすぎだろ」

「それは確かに……！」

存在しなかったifの話にまで発展して、そうならなかった現実がいかに恵まれたものであるかを理解する。

いずれにせよ、これで彼らも理解した。

次の戦いは白瀧にとってはかつてのライバルとの戦いであり、そして彼を取らなかつた桐皇を見返す場でもあるのだと。

(まあ、実際はもう一つ深い理由があるけど)

(さすがに僕達が他の人に言うのは、ね)

それを口にするのは野暮というもの。

神崎も光月も、あえて最後の理由について語ることはしなかつた。

ある意味では白瀧が中学時代に最も強く闘志を燃やした想い人の存在。

「待ってるよ。東京都、いや桐皇、青峰。そして——桃井さん」

そんな事など知るよしもなく。

白瀧はひとり温泉の浮力に身を任せ、満喫しながら、懐かしい仲間たちの顔を思い返して、小さく笑うのだった。

「はあー。この時間が一番癒されるね」
「そうですねー」

その頃、フロアは変わり女性専用となっている女湯では西條と橙乃がゆったりくつろいでいた。

こちらは二人だけということもあって静かに時間が流れている。

「長くてもあと二日か。まあ、ここまで残れるとは思っていなかったけど。こうなったら最後まで皆には勝ってほしいね」

「ですね。今日のみんなの調子なら大丈夫ですよ」

なら良いけど、と西條がクスリと笑う。

国体が終わるまであと二日。

確かに一回戦を乗り越えるかどうかさえわからなかつた最初の頃

を思い返せばここまで残れたことがすでに奇跡と呼べるだろう。

だが、ここまで来たならばいつ最後まで歓喜を味わってほしいもの。優勝という最高の結果を手にして。

「よし。私はちよつと髪を洗ってくるね。茜ちゃんはゆっくりしてて」

「はい」

そう言うと西條は立ち上がり、タオルを手にしてゆっくりと洗い場へ向かう。

「んーっ。……あと二日、か」

一人になった橙乃は両の手足を伸ばし、物思いに耽った。

忘れてしまいたいそうだがこのチームはあと二日で解散となる。そうなればまた元のチームに戻ることに、今手を組んでる人達とも敵になるのだ。

そんな当たり前の事を言われるまで忘れていて、少しだけ寂しく感じた。

「——すみません、隣良いですか？」

「あつ、はいどうぞ」

ふと彼女の背後より声がかかる。

透き通るような若い女性の声だ。橙乃は姿勢を正し、声の主を確認して、

「えっ？」

その相手を理解して、目を疑った。

長い桃色の髪を綺麗に結った、スタイル抜群の女性。

桐皇の、今は東京都のマネージャーを任せられ、かつてはキセキの世代もサポートした実績も持つ実力者。

「あなたは桐皇学園のマネージャーの、桃井さん？」

「ご存知でしたか？ はい、はじめまして。桃井と言います。大仁多高校マネージャーの橙乃さん、ですよね？」

橙乃の質問にハッキリと肯定で返し、桃井は確信をもって尋ね返した。

「そうですけど……」

頷きつつ、橙乃はじつと桃井を観察しはじめた。

(この人が帝光、そして桐皇の頭脳というマネージャー。しかも……)
次戦の相手との予期せぬ邂逅。

偶然なのか故意なのかは不明だ。しかしそんな事よりも気になる
ことが一つあった。

(本当に大きいし……！)

視線が肩より少し下に向くと、橙乃はそのスタイルに戦慄する。

橙乃も同年代の女性と比較すると素晴らしい発達なのだ。そんな彼女をもつてしても大きいと感じるほどに桃井のプロポーションは
ずば抜けていた。少し話を聞いていたが、確かに白瀧が魅了される
のも無理はないと理解できるほどに。

「不機嫌なようですけど、どうしました?」

「いえ別に」

露骨に気分を害した相手を察して桃井が声をかけるも、橙乃はとり
つく島もない態度を貫く。

「それより、どうしてここへ? 東京都がこここのホテルに泊まってる
とは聞いていませんでしたか」

それでも相手の出方を伺うべく、問いかけた。

これまでも東京都の関係者が出入りする姿をみたことはなかった。
だからこそ桃井がこうしてこの温泉にいること事態が不思議な事
である。

「そうです。私達は違うホテルに泊まっていますね。でもせっかく遠出
をしているし、この温泉は有名だったので一晩だけ日帰りという形で
来ちゃいました」

その問いに桃井はあっさりと答えた。

温泉が有名なホテルは確かに宿泊せずとも温泉に入れるような体
制を取る施設もある。別に矛盾があるわけではないが、本当にそれで
このような形で偶然鉢合わせるものなのか。

「少し、あなたと話したいこともありましてし
否。

じつと橙乃を見つめて桃井は続ける。

やはりそんなことはなかった。桃井はわざわざ橙乃と話す機会を設けるためにこの場にやって来ていた。

「白ちや、いえ白瀧君と高校で親しいという話を聞いたので。戦う前に、話したいことがあるんです」

「……そうですか」

栃木のエースを愛称で呼び掛け、そして呼び直した彼女の様子からは本当に親しい関係であったことが伺える。

そんな事を思いながら。

「ですが、こちらが先です」

橙乃は先手を取るべく、身を乗り出して桃井へ近づく。

「あなたと会ったら聞きたいことがあります。中学時代について、いくつか教えてください」

「……私が話せることでしたら」

有無を言わさぬ態度の橙乃。

おそらく彼女の疑問を解消しなければこちらの話は始まらないだろう。

桃井は静かに、橙乃の言葉を待った。

——黒子のバスケ NG集——

いつの間にか橙乃の中で白瀧が桃井に惚れた理由が巨乳に惹かれたからになっている件。

「納得いかないんだけど!? おい、どうなってるんだよ! これじゃまるで俺が胸に誘惑されたみたいじゃん! 俺の純粋な想いが!」

「じゃあ桃井さんの胸は嫌いなのか?」

「なんでそうなるのか? ちよつとその理屈は意味わからない。それとこれとは全く違う話だろ」

……はい。

第百十三話 ニアミス

桃井の声を遮り、橙乃は先んじて話を展開した。

相手のペースに飲まれないように、という彼女の意思もあったのだが、それ以上にどうしても確かめておきたいことがあったから。

「白瀧君からあなたたちの中学時代の話を少し聞きました。ただ、その中で納得できない事がありました」

「なんででしょう？」

「あなたは選手の現時点でのデータ分析だけでなくその先の成長予測までできると聞きました。——なのに、どうして二年前に白瀧君が無理を押し練習に復帰するのを止めなかったんですか？」

それは夏のインターハイ、陽泉戦で明らかになった白瀧の過去に関する話だ。

「あなたの力があれば、白瀧君がここまで苦しむことはなかったんじゃないんですか？ あなたならば、止められたんじゃないんですか？」

かつて彼は医師から勧められたリハビリを断ってまでチームの練習に復帰し、結果的に筋力の面で大きく遅れを取ることを余儀なくされた。

この話は近くで見ていた、選手の成長を予測できるという桃井ならば理解し、止められたはず。それなのに何故そうしなかったのか。橙乃は話を聞いていた時から疑問を抱いていたのである。

「……少し誤解があります」

当時の話は桃井にとっても苦しい思い出だ。

過去を思い返して顔をしかめつつ、桃井は橙乃の話に訂正を加える。

「まず、私のデータ分析も昔から正確だったわけではありません。赤司君からアドバイスを貰ってから少しずつ分析力に磨きをかけました。今のよう選手に成長を見抜けるようになったのはしばらく経ってからです。だからあの時はそこまで見抜くことはできませんでした」

見過ごしたのではなく、単純にそこまで読めなかったのだと。

桃井の分析力もキセキの世代と同様に最初から今ほど並外れていたわけではなかった。研鑽に研鑽を重ねて進化してきたもの。ゆえに白瀧の一件も当時はこうなるとは思ってもいなかったのである。

「……そうでしたか」

「はい。ただ、もしわかっていたとしても、ひよつとしたら止めなかったかもしれない」

「えっ？」

しかしたとえ当時から桃井が予測できたとしても、白瀧を止めたかどうかはまた別の話だと桃井は語る。

「私としても嬉しかったですから。自分だって苦しいはずなのに、それでも私の手を取って、挑み続ける彼の姿は」

自然と声が柔らかくなっていった。

彼女の幼馴染をはじめとしたレギュラーたちが離れていき。

次から次へとチームメイトが姿を消し。

桃井の想い人さえもが約束を忘れてしまった中で。

彼の戦い続けるという姿勢は桃井の胸中にも大きな存在であったのだ。

「……なるほど」

「他にも何かありますか？」

「それでは、もう一つ」

僅かに頬が緩む桃井の姿に若干の不満を抱きつつ、橙乃はさらに問いを重ねる。

「中学時代から好きな人がいたらいいですけど、付き合っているんですか？」

「へっ!？」

小細工などなく直球で核心を突くと、さすがに意表を突かれた桃井が慌ただしく表情を二転三転とさせた。

「なんで、白ちゃんから聞いたんですか!？」 別に私はテツ君とはそんな、付き合ってなんて!」

「……そうですか。わかりました。大丈夫です」

彼女の必死に取り繕おうという姿勢は本物だった。紛れもなくこれが桃井の本心なのだろう。

この反応で知りたい事をはつきりと理解できた。それ以上は深く切り込む事なく、橙乃はあっさり引き下がる。

「本当ですか？」

「はい。私の方からはもう大丈夫です。——それで？ 桃井さんから話とは、一体何でしょう？」

そして今度こそ桃井が本題を打ち明ける番となった。

橙乃に促されると、桃井は一瞬だけどこか迷ったような表情を浮かべた後、ゆつくりと言葉を紡ぎはじめた。

「正直、話すべきなのか、話した方が良いのか迷いました。でも、このまま私の胸の内に留めておくにはなれなかったのだから」

そう前置きを置いて、桃井は語りはじめた。

彼女の言葉に、橙乃の目が大きく見開かれる。その反応をみて、桃井は寂しげに視線を落とすのだった。

「……どうして、それを私に？」

「大仁多高校に入ってから白瀧君の内情まで詳しく知ることができません。ですから高校に入るよりも前から彼を知っていて、今も信頼されているあなたに、白瀧君に話しておくべきか、話さないべきなのかを判断していただきたくて」

その情報を伝えるのは橙乃次第だと、桃井は言う。

「きつと知っても知らなくても、後悔する話ですから。——では」

用件を終えた桃井は一足先にお湯から上がり、その場を後にした。

再び一人になった橙乃はしばし西條が戻ってくるまでの間、じつと物思いにふける。

はたしてどちらの選択肢が望ましいのか。

正解のない問題は、最後まで答えが出ることにはなかった。

橙乃と桃井の遭遇から約一時間後。

栃木の選手たちは次戦の試合前の最後の打ち合わせをするべく栃木県の名義で借りた会議室へと向かっていた。

「……そういえば、白瀧君」

「うん？ どうした？」

その道中、光月と神崎のルームメイト達と一緒に部屋に向かっていた白瀧は橙乃と鉢合わせる。

他愛もない話に花を咲かせる中、ふと何かを思い出したように橙乃は話を切り出した。

「さつき温泉で桃井さんと会ったよ。桐皇のマネージャーさん」

「えっ？ 桐皇のって、帝光のマネージャーだったっていう？」

「たしか国体にも参加しているって聞いたけど」

「そう」

「……マジで!？」

神崎や光月も反応を示すなか、白瀧が桃井の名を耳にした途端、身を投げ出すほどの勢いで飛び付いた。

「なんで呼んでくれなかったの!?! 久々に話せる機会だったのに!」

「温泉で会ったのに?」

「いや、そこはお風呂から上がった後でとか!」

「でもすぐに帰っちゃったから……」

「……そっか。残念。まあ、いいか」

中学時代から想い焦がれていた相手だ。高校に入ってから夏は夏の栃木県予選が終わった直後からずっと顔を見れていない。

ゆえに会いたかったのは本心だが、かといって我儘を言い続ける事はなく、白瀧は呆気なく引き下がる。

「あまり試合前に敵と話すのもなんだしな。話は終わってから、だ」
そう口にしてすぐに表情を引き締めた。

彼の表情からは好意を抱いている相手との戦いが目前に迫っているとは想像できないほど割りきっているような気構えが感じ取れる。

「……お前のその落差、すごいよな」

「好きな相手との試合で抵抗を感じるとかまったくなさそうだし」

神崎や光月はこの姿勢に驚嘆とも感心とも取れる言葉を漏らす。

「そうか？」

対して白瀧は屈託なく笑い、言った。

「好きな相手であることと倒す敵であるってことは、別に何も矛盾しないだろ」

あつさりと、事も無げに。

迷いをまったく抱かせない様子は清々しさしえ感じられた。

『彼は行動する時に迷いが無い。おそらくは自分の進む道の先が危険だとしても間違いだとしても、目的のためならば進める、いや進む人間なのだろう』

ふと、光月は父親が口にした白瀧に対する評価を思い返した。

心を寄せる相手でも戦える。

結果的に仲間を守るためならば自らが傷つける事も厭わない。

あまりにも達観した彼の決意を改めて知り、光月は眩しげに目を細めた。

「ちなみに二人はどんな話をしてたんだ？ 桃井さん、何か言ってたか？」

「えっ……」

白瀧の問いかけに橙乃が口ごもる。

自分の中で問答すること数秒。

何か言葉を紡ごうとして口を開いて、しかしすぐに言葉を飲み込み、ようやく答えを告げた。

「……内緒」

「えっ。なんで？ ……何の話してたの？」

「さあ。想像してみたら？」

「本当になんて!? 言えないこと!？」

追求を続ける白瀧をかわし、橙乃が逸早く部屋へと入っていく。

最後まで白瀧が納得する返事を聞くことはなく、悶々とした胸中のままミーティングは始まったのだった。

ビデオにはインターハイ、そして国体のこれまでの桐皇、東京都代表のビデオが流れている。

その動きは全国準優勝校にふさわしい洗練されたものであり、次から次へと得点を重ねる光景は栃木の選手達の目に驚異に映った。

「やはり凄まじい破壊力だな」

「ああ。これでまだ青峰がいるっていうんだから馬鹿げた話だ」

細谷の呟きに勇作が呼応する。

ここまでの試合、東京都は全ての試合で100点ゲーム、つまり三桁得点で勝ち上がっている。

つまり先の陽泉、秋田県の超防御的チームとは真逆の超攻撃的チーム。

しかもこれでキセキの世代のエースと名高い青峰がさらに加わるというのだから底が知れない。

「それに、攻撃だけじゃない。守備も相手の動きを見切って積極的にボールを奪いに来る」

「……桃井マネージャーの分析か」

さらにディフェンスも侮れないと呟いたのは楠だ。

中澤も白瀧の報告を思い出して原動力である少女の名を挙げる。

敵選手の力量を見極め、その成長予測まで見抜いてしまうという桃井の分析力は味方にとっては頼もしいが敵にとっては厄介極まりない。オフエンス重視の東京都の弱点を補って余りある貢献だ。

「……白瀧さん。青峰さん、桃井さんのお二人を一番よく知るのとはあなただ。何か更に補足することはありますか？」

ビデオを見終えると藤代は映像を閉じて視線を白瀧へと移す。

「そうですね……」

敵の主力を中学時代からよく知っているのは彼だ。どんな些細な事でも良いと話を振られ、白瀧はしばし思案に暮れる。

「……大前提として、明日うちが勝つには逃げきるしかないと思います」

数秒の沈黙の後、白瀧がいつも以上に厳しい表情を浮かべてそう答

えた。

「やはり終盤になればジリ貧になると?」

「そうですね。青峰の性質的にもそうなる傾向になると思います。……あいつはよく言えば尻上がりに調子を上げる、悪く言えば立ち上がりに難があるスロースターターです。インターハイ、黄瀬との試合でも中盤以降から動きのキレが増していました。桃井さんの分析も試合が進むほど精度が増すでしょう」

栃木が初戦で苦戦を強いられた黄瀬を真っ向から打ち負かした試合を示されると、自然と緊張は強まった。

誰もが息を飲む。

わかりきっていた事だが、やはり簡単な相手ではない。

「……どう見る、藤代?」

「おそらくは次戦はさすがに青峰さんもスターターに名を連ねるでしょう。そうなる苦戦は必至ですが、しかし今の話を聞いた以上は先手必勝しか道はない、でしょうね」

岡田に話を振られた藤代は沈痛な面持ちでつげる。

青峰を擁する相手に簡単な話ではなかったが、されしか手はなかった。

「はい。それに――」

「それに?」

白瀧はそこで一度話を区切り、一呼吸置いて、更に続ける。

「青峰は、まだ何か余裕を残している。そんな気がします」

「……は、あつ!?!」

「黄瀬との試合も全力ではなかったと言うのか!?!」

「確信はありません。しかしあいつの才能は本物。そう考えておいた方が良いと思います」

チームメイトから驚愕の声が続く中、白瀧は自分の意見を締め括った。

白瀧が死闘を演じ、やっとの思いで突破した黄瀬。そんな彼に夏の試合で勝利している青峰が未だ力を残しているとは考えたくない話だ。

だが、白瀧の言葉には有無を言わさぬ強さがあつた。誰もがその最悪の予想を思い浮かべ、身を震わせる。

「……わかりました。その話を踏まえた上で作戦を建てましょう。まずは明日のスターターについて、今ここで発表します」

そんな暗い雰囲気を破って藤代が明日の展望を話し始めた。

一人ずつ選手の名前を挙げ、作戦を説明していく。

どんな困難な相手であろうと、これまでも幾度も死線を乗り越えてきた。

彼らならば次も行けるはずだと、そう教え子達を信じて。

一方その頃、東京都も今一度栃木戦を控えて作戦会議を行っていた。

「明日は、この大会では一番の難関になるでしょうね」

「……はい。間違いなく」

原澤のそう呟くと桃井が大きく首を縦に振る。

「超オフェンス型チームと超オフェンス型チーム。最強の矛同士の激突や。得点がオモロイことになりそうやで」

「笑えんぞ、それ」

満面の笑顔を浮かべる今吉に諏佐が忠告する。

おそらくはインターハイの神奈川戦と同等、それ以上の点の取り合いになることは必至であろう。

「あれ？ そういえば青峰は？」

「それが、『もう寝る』と言ってミーティング序盤で部屋に戻りました」「ハアッ!？」

「あのクソガキ!」と言葉を荒げる若松、そんな彼にひたすら謝り続ける桜井。

元凶である青峰は原澤が明日のスターターの発表を告げた後、すぐに苛立ちを隠すことなく部屋を後にしていたのだ。

ゆえに原因が不在である今、二人のやり取りは今吉が仲裁に入るま

で続く。

「まあ、大丈夫やろ。何時ものように桃井の分析もあるし。なあ？」

「はい」

今にも若松の怒りが爆発しかねない光景を見かねて、今吉が桃井に語りかける。

彼女は落ち着いた、冷たい瞳で、

「問題ありません。栃木の選手達は全員、白瀧君の分析も終えています。——彼の弱点も含めて」

淡々とそう口にしたのだった。

見知った相手であろうと容赦はしないのは桃井も同じ。

夏よりも筋力を向上させ、個人技も磨きあげた。

それでもなお残る弱点がまだであると、桃井は冷静に敵エースの力を見抜いていたのだ。

『——回国民体育大会三日目。少年男子は三回戦と準々決勝が行われましたが、波乱の展開が待っていました。準々決勝第三試合、インターハイでも顔を合わせた秋田県対栃木県』

「キタキター！」

「本当にニュースに流れた！」

「これで残るは四校になったしな」

その日の夜。

部屋に設置されたテレビのニュースに自分達の試合が流れ、神崎、光月、白瀧の三人揃ってじっと画面を見つめる。

『先制は栃木県でしたが、圧倒的なディフェンス力を擁する秋田県の前に、苦戦を強いられる栃木県。キセキの世代最強のセンターにインサイドを支配される中、前半戦を八点ビハインドで折り返します』

「うわっ、僕映ったけど止められてるところだ…」

…」

「こう見るとマジでデカかったよな、秋田」

「しつかり橙乃や西条さんが映ってるの、カメラマン絶対確信犯だろ」
白瀧や紫原は勿論、光月なども画面に表示されて三人とも機嫌を良くした。

皆が様々な反応を呈するなか、ついにその時が訪れる。

『すると後半戦、栃木県は思いきった選手交代を実行します。ここで出場選手をインターハイにも出場した大仁多選手のみで固める陣容に。夏の悔しさを張らすと言わんばかりの采配でした』

「うおー！ 俺も出てる！ テレビに出てる！」

「絶対これが理由で注目されただろうな」

「キセキの世代撃破よりもこっちの方が意味合いが強かったかもね」

大仁多の選手が揃う姿を目にして盛り上がりは最高潮。緊張をキレイさっぱり忘れるほどの衝撃だった。

『負けられない展開に、エースが奮起しました。ここまで今大会最多得点を記録中のSF白瀧選手がこの試合も躍動。秋田県のエースC紫原選手と互角以上の死闘を演じて勝利を呼び込みました』

「おおつ。やつぱり要の割合がデケエ。……やつぱりこの二人の戦いに割って入りたくねえ……」

「言うな。俺だって何度もやりたくはないよ。次は死ぬかもしれないし」

「二度ぶつかる度に死に物狂いになってたからなあ……」

再びキセキの世代との激突がアップで映り、肝を冷やす三人。

今でこそ笑いながら見ていられる。この何気ない時間が非常に心地よかった。

『神奈川県、秋田県と『キセキの世代』と呼ばれる選手達を倒してきた栃木県は明日、やはりこちらも『キセキの世代』を擁する東京都と激突します。攻撃力に定評のある強豪ですが、勢いに乗っている栃木県は食らいついて欲しいところです』

「おおい!? 俺達が格下みたいない方じゃねえか!? ふざけんな！」

「仕方ないだろ。相手はインターハイ準優勝だぞ。ここまでも万全の勝ち上がりだし前評判が東京都優勢なのは当然だ」

「たしかにこっちは初戦から苦戦してたけど、冷静すぎないか……？」
最後の準決勝に関する総評でアナウンサーの言い方に神崎が意義を唱える。

東京都有利と言う下馬評に、しかし白瀧は平然と受け止めて神崎を諭した。

ある意味人一倍キセキの世代との戦いで気にしているはずの彼のこの様子に、光月は心配げに声をかけると。

「慣れたもんさ。俺達は口喧嘩しに来たわけじゃない。言わせたいやつには言わせておけばいいさ。どっちが強いかは、コートで示せば良いだけだ」

戦うことでしか真の価値は測れない。

白瀧は好戦的な笑みを浮かべて、握りこぶしを作った。

「……ああ」

「また明日、乗り越えよう」

「正念場続きだが、また明日も良いニュースを見られるようにな」

その言葉で締めくくり、テレビの電源を消す。

苦戦は免れないだろう試合が迫るなか、選手達に焦りの色は見られなかった。

キセキの世代との激闘を二つも乗り越えてきたという実績は選手達に自信を与えている。

「……明日こそ、あの日の続きだ」

特に白瀧には大きな余裕をもたらした。

この時は、まだ。

好敵手との戦いを夢見て。

今度こそ、もう一度昔のように。

また全力をぶつけ合えると。

そう、信じていた。

しかし。

翌日、大会四日目。

ついに残り四校にまで絞られた国体、準決勝の当日。

一試合目は京都府が赤司を温存しつつも無難に勝利を収め、一足先に決勝戦へと駒を進めた。

その約二時間後。

王者・京都府への挑戦権を賭けて東京都と栃木県の戦いの時が訪れた。

多くの選手、観客が見守る中、キセキの世代のエース・青峰とキセキの世代を打ち破ってきた白瀧、かつてのチームメイト達の激突に注目が集まる中。

「……………えっ?」

「なんで?」

人々はコートに集った顔ぶれを目にして、困惑を隠せなかった。

「……………嘘だろ?」

「一体どういうつもりだ?」

「さすがに、今日の試合はこれまでとは違うだろうって話だったのに」「舐メラレタ物だな」

それは栃木の選手も同じこと。

小林、楠、光月、ジャンが各々納得できず不満の声を挙げた。

彼らの眼前には対峙する東京都、桐皇の選手達が整列している。だが。

そこに天才スコアラ―・青峰の姿はなかった。

「チッ!」

青峰が東京都のベンチで乱雑に足を組み、舌を打つ。

これまでの試合同様、青峰が試合開始から出場することはなかった。

「……………そうか。それが、お前の答えなのか、青峰」

コートではなくベンチに居座る青峰を、白瀧の暗い目が射抜く。

インターハイ、黄瀬との戦いでは最初から一対一の激闘を繰り広げていたのに。

まだ、足りないというのか。

白瀧の嫉妬の炎が燃え上がった。

「……………」

こうして二人が静かに火花を散らす光景を、桃井と橙乃は悲しげに見つめていた。

——黒子のバスケ NG集——

「…………内緒」

「えっ。なんで？ ……何の話してたの？」

「さあ。想像してみたら？」

「本当になんで…………二人がお風呂で話している所を想像して良いと!?」

「会話の内容だけを想像すれば良いと思うんだけど」

この後白瀧は原因不明の鼻鼻部からの出血多量により無事死亡した。